



近世語彙

序

私は四歳の時に父を失ひ、母の手で教育をされた。私の母の兄に舊和歌山藩士近藤正純といふ人があつて、われわれを東京へ引取つて萬端の世話を燒いてくれた。この伯父は舊幕時代には浮世繪を好んで習ひ、御維新後には武人の籍を離れて洋畫の先生になつて、陸軍教導團に勤めて教鞭を執つてゐた。この伯父が繪畫の趣味を持つてゐたからでもあらうが、芝居が非常に好きで、續いて稗史小說なども頗る好きであつた。さういふ點から、始終伯父の家に出入する私は十歲前後から芝居見物のお供をするやうになり、又貸本屋の貸本は大抵讀み盡すやうになつた。附加へて申し置くが、私の母も私同樣にかういふ趣味をば深く味つた人である。私は當時大學豫備門に入つて、甚だ忙しい學科の下に勉强したが、學問の傍はかういふ趣味の方に深入りした。從つて或年の如きは當時の團菊左の芝居に熱中して、一度落第させられた事もある。まだ幼稚であつた日本の文壇は、一方には坪內逍遙先生が出られて、小說神髓や當世書生氣質で文壇の改革をされようとする時期、一方には矢野龍溪先生や末廣鐵腸居士、東海散士などが政治小說を著はして、文壇の新潮流を作らうとした時期、さういふ時期に際會して、私も文壇に立つて仕事をしようといふ考を抱いたのである。當時の同志の一人たる齋藤綠雨は、中學校にも入らずに文壇に飛出した。然し私は一通りの素養を着けて文壇に出ようと覺悟を極めた。そこで明治十八年に大學の和漢文學科に入つ

に行つて見たらよからうとの話が出た。其の時の大學總長は故加藤弘之先生で、先生は明治十四五年頃から、博言學を學んだ人に國語研究をさせねばならぬとの議論であつた。この總長と外山先生とが相談されて、私にこの重任を引受けないかとお話があつたものと察しる。そこで私は深く考慮した結果、多年の自分の希望を抛棄して、日本語學の爲に盡力しようとの考となり、歐米四年間の留學も多くは博言學や國語研究の上に費した。然し私の子供の時に抱いた希望は其の後も時々胸裡に浮ぶので、例へば近松・馬琴の研究なども時間さへあれば續けて見たいと思つて居た。殊に歐洲で西洋文學の一般を視察中に、英國のシエークスピヤ全集に對してシエークスピヤレキシコンといふものがあるのを見て、かやうな物が日本の近松・馬琴などにあつて欲しいと考へた。抑も大文豪に關する研究基礎には、大文豪の抱ける思想、其の思想を構成する單語の根本的研究の必要なるは申すまでもないこと。西洋にかかる研究あるのに日本には未だない。日本で文學上の研究といへば、近代では先づ近松や馬琴などの文豪の上に想を着くべきであらう。殊に日本のシエークスピヤといはれる近松の著作物からこの研究を創めて見ようとの考は常に持つて居たが、然し考のみで公私事務多端の爲に決行する時機がなかつた。所が幸にも私はここに其の研究者を求め得た。それは實に樋口慶千代君である。樋口君は福山市の人で、明治三十五年東京帝國大學文科大學に附設され、私が主任であつた第一教員養成所の第一期生であつて、卒業後郷里福山中學教諭となつて教鞭を執られ、其の後東京帝國大學附屬圖書館

て、先づ東洋文學の大體を學習しようと心懸けた。

然しここに私の一生涯に於ての一つの變動が起つた。それは日本國語學界の爲に身を犧牲にしようとの機會が湧いたのである。

當時故森文部大臣が日本の教育制度を改良され、國民教育を擴張されるに當り、日本の國語國文の教育が今後の教育の基礎たるべきを感ぜられ、續いては國語國文の教育方針及び方法改良の必要を認められて、英國人チャンバレン氏を大學教師として任命され、チャンバレン氏が日本の國語文法を教授するやうに定められた。私は日本の學生でありながらチャンバレン氏から日本文法を教はつた第一の學生である。日本人が西洋人から日本文法を教はるといふことは極めて不思議な現象ではあるが、又內心では如何なる教育をするかといふに就いて疑問を持つてゐたが、さて授業を受けると其の講義指導方針共に、日本の老先生たちより受ける所とは全く變つて面白くもあり、且有益なものであつた。私は其の時に今後の國語教育はかかる方針で改良すべきであると深く感じ、隨つてこの學科には非常に興味を感じ、常に先生の許に往來して色々の指導を受けた。家庭で教を受けるに就いても、和漢學の先生が塾生を取扱ふとは變り、極めて懇篤なる待遇に感泣したことも屢であつた。

かかる次第で大學を卒業してから、日本の語學を調べる考で大學院にも入つた。然るに明治二十三年と記憶するが、其の年に故外山正一先生が私を呼ばれて、日本語研究の爲に博言學（フィロロジー）研究に西洋

凡　例

一　本書は近松巣林子の著作物全部に亙つて解釋を施したものである。

一　語詞の排列は五十音順に從ひ、イ・ヰ、エ・ヱ、オ・ヲ等の類音を區別した。漢語の字音に於ても亦然り。

一　假名遣は一般に語法上正しい式に據つたれども、古來慣用久しうして巣林子も之に據れるものは敢て改めないこととした。

一　同一語句の用重覆數度に及ぶものは、其の語の上に符號＊を附し、一二用例を擧げて其の出處を示し、他は省略に從うたれども、其の他のものは繁を厭はず悉く列擧した。

一　巣林子の文の典據、及彼の構想作文に關して前人の未だ嘗て着手されなかつた諸種の研究は、之を類別して附錄した。

本書の撰述に關しては、恩師上田博士の命を奉じて專ら指導を仰ぎ、專念從事十五星霜を閱して漸く竣成を告げた。故に本書にあらはれた新研究の權威は、上田先生の深邃該博なる學識に負へるものである。今や其の成れるを喜んで由來を記し、謹んで恩師に捧ぐ。（樋口慶千代申す）

題簽　上田萬年　　裝畫　小村雪岱　（背の竹本座は竹豊故事の挿畫、紋所は門左・筑後・治兵衛・きさなどの紋。蘆に鷺の裾模様もさんの衣裳に見えて女用訓蒙圖彙の挿畫。また見返畫は竹本筑後掾直傳七行本の山崎與次兵衛壽の門松の見返畫に據る。）

司書として和漢書部を擔任され、大正十三年以來東洋文庫研究室に在つて岩崎男爵家の和漢書取調を擔任されて居る。此の樋口君に十五年に亙る長い間種々な研究をしてもらつて、君のこの方面に於ける豐富なる學識と絕大なる精力とによつて、この本が出來ることになつた。この度これを公刊することを得るのは全く樋口君の力によつたもので、共著として名を掲げるが實際は樋口君一人の仕事であると申して差支ない。私は多年の希望が遂に成就したのを喜ぶと同時に、其の望が樋口君を竢つてでなければ遂げられなかつたことを公言するものである。

なほ終に、かかる著書を喜んで出版してくれる富山房の好意を深く謝して置く。

昭和五年三月一日

上田萬年

略語表

(生玉)	嘉平次おさが生玉心中
(今宮)	二郎兵衛おきさ今宮心中
(以呂波)	以呂波物語
(潤色)	あとおひ心中卯月の潤色
(浦島)	浦島年代記
(大磯虎)	大磯虎稚物語
(大掛物)	源頼義平師氏大掛物十幅一對
(大原問答)	大原問答青葉笛
(賀古教信)	賀古教信七墓廻
(娥)	娥歌がるた
(鎌田)	鎌田兵衛名所盃
(關八州)	關八州繋馬
(懸物揃)	傾城懸物揃
(蛙合戰)	傾城島原蛙合戰
(酒呑童子)	傾城酒呑童子
(反魂香)	傾城反魂香
(吉岡染)	傾城吉岡染
(兼好)	兼好法師見車
(十二段)	源氏十二段長生島臺
(冷泉節)	源氏冷泉節
(烏帽子折)	源氏烏帽子折
(弘徽殿)	弘徽殿鵜羽産家
(國性爺)	國性爺合戰
(國性爺後日)	國性爺後日合戰
(歌念佛)	おなつ清十郎五十年忌歌念佛
(碁盤太平記)	兼好法師あとおひ碁盤太平記
(最明寺殿)	最明寺殿百人上﨟
(嵯峨天皇)	嵯峨天皇甘露雨
(千疋犬)	相模入道千疋犬
(佐佐木)	佐佐木先陣
(薩摩歌)	源五兵衛おまん薩摩歌
(聖德太子)	聖德太子繪傳記
(釋迦)	釋迦如來誕生會
(川中島)	信州川中島合戰
(重井筒)	心中重井筒
(天網島)	かみや治兵衛きいの國屋小はる心中天の網島
(二枚繪)	心中二枚繪草紙
(萬年草)	高野山女人堂心中萬年草
(氷朔日)	心中刃は氷の朔日
(宵庚申)	心中宵庚申
(扇八景)	曾我扇八景
(會稽山)	曾我會稽山

總目次

(五人兄弟)……曾我五人兄弟
(虎が磨)……曾我虎が磨
(曾根崎)……曾根崎心中
(大覺)……大覺大僧正御傳記
(大經師)……大經師昔暦
(唐船噺)……唐船噺今國性爺
(小栗判官)……當流小栗判官
(田村)……田村將軍初觀音
(丹波與作)……丹波與作待夜の小室節
(持統天皇)……持統天皇歌軍法
(女夫池)……後太平記四十八卷目津國女夫池
(融)……融大臣
(女腹切)……長町女腹切
(西王母)……日本西王母
(振袖始)……日本振袖始
(博多)……博多小女郎波枕
(卯月艶)……ひぢりめん卯月の艶
(隅田川)……雙生隅田川
(㯮静)……㯮静胎內捃
(女護島)……平家女護島
(三國志)……本朝三國志
(用文章)……本朝用文章

(松風)……松風村雨束帶鑑
(源義經)……源義經將棊經
(冥途飛脚)……忠兵衛梅川冥途の飛脚
(艶狩)……艶狩劒本地
(壽門松)……山崎與次兵衛壽の門松
(日本武尊)……日本武尊吾妻鑑
(鑓權三)……鑓の權三重帷子
(雪女)……雪女五枚羽子板
(夕霧)……夕霧阿波鳴渡
(百合若)……百合若大臣野守鏡
(用明天皇)……用明天皇職人鑑
(女楠)……吉野都女楠
(淀鯉)……淀鯉出世瀧德
(伊豆日記)……頼朝伊豆日記
(井筒)……井筒業平河內通
(女殺)……女殺油地獄

(其の他の物は略しない)

近松語彙

上田萬年
樋口慶千代　共撰

あ

***あいくろし**　あいくろしげにほのめかし、泣いていふさへ戀らし(用明天皇)お茶持ておぢやと待遇は、あいくろがうしの若神子の、口と口とも寄せまほし(卯月紅葉)

あいくろし(愛)の轉。愛嬌ありてかはゆらし。「あいくろがうし」は、あいくろしに黑格子をかけたのである。「黑格子」をも見よ。

***あいさつ**　思懸けなき俄ごと、何の愛想も無い事やとあいさつあれば(扇八景)言はば此方は人でなし、房とあいさつきれぬげな(重井筒)

〔挨拶〕應答。應對。情交。

挨拶切るとは、交際を絶つ、情交を絶つ意。挨拶と云ふ語は、葛長庚の鶴林問道篇に、「昔者天子登封二泰山一、其時士庶挨拶、獨召二一縣尉一行レ轎、而前呼曰、官人來、衆皆靡然」と見え、挨は推、拶は前にあるものを推除けて進む義で、應答の意ではない。釋祖照等編の圓通大應國師語錄に、「塞外將軍令、二老漢等閑一拶一挨、自然風行草偃」と見えてゐる。この一挨一拶といふ禪語が挨拶となつて、普通にいふ應答の意に用ひられることになつたのであらう。

***あいぜん**　不動・愛染・大師樣(歌念佛)衆人愛敬愛染の威德も見えて賴もしし(氷朔日)それまでは愛染樣へ參らうと儘なれども(氷朔日)

〔愛染〕愛染明王の略。愛染明王は佛說八大明王の一で愛慾を司る。愛慾は梵語の羅誐(ラーガ)Raga の譯である。羅誐は親愛・染色等の義であるから、愛染と譯されたのであらう。三目六臂で忿怒の形相をした神である。金剛法經に、「身色如二日暉一、住二於熾盛輪一、三目威怒視、首髻師子冠、利毛忿怒形、亦鈎安在二於師子頂一、五色華鬘垂天帶覆」。「愛染樣へ參らう」は、「勝鬘(しようまん)まゐり」をも見よ。

***あいたしこ**　「いたしこ」を見よ。

***あいだてなし**　一つの我が命二人の子供に引分けて、讓ると思うて死する身が、生きたからうか惜しからうか、あいだてなしとも狂氣とも、笑はば笑へ(用明天皇)

あひだちなし(間斷無)が音便で「あいだちなし」となり、更に轉じて「あいだてなし」となる。分別がない。理に外れてある。本朝俚諺(正德四年序)に、「あひだてなし。今は不相應の事をあいだてなしと云」。

***あいべつりく**　(蟬丸)

〔哀別離苦〕哀別離苦は八苦の一で、涅槃經に說く所である。宇宙の萬有は因緣假に和合して成れるものであるから、その因緣はまた盡きる時がある。今ここに會すと雖も、また必ず別離の哀しみがあり、離散の苦しみがある。栴玄記に、「常所二親愛一之人、乖違離散、不レ得二共處一、是爲二哀別離苦一」。

あいみんじきんのみきん　(用明天皇)

「哀愍自護之砌」の訛。「謹請(きんぜい)東方青龍清淨云々」を見よ。

あいもきやう　「まんざい」を見よ。

あいろ　物のあいろも見えざれば、松明出せと呼ばはる聲(百日曾我)

あやいろ(文色)の略。あやめ。差別。和訓栞に、「あいろ。文色の義なるべし、あいろの見えぬなどいへり」。

あうあう　學ばずして石公孫吳の兵術に通達し、その名あうあうとして隱れなく(川中島)

〔央央〕鮮明なる狀にいふ。詩經卷九に、「出車彭彭、旂旐央央」とありて、毛傳註に、「央央鮮明也」。

***あうむがへし**　笑止に存ずる大臣と、鸚鵡返しのあて言(浦島)あら者どうしの鸚鵡返し(扇八景)

〔鸚鵡返〕鸚鵡は人の言ふことを其儘眞似て言ふより、他人の言行をその儘仕返すにいふ。俚言集覽に、「鸚鵡の人の言葉をまぬるに似たるによりていへり」。

***あうん**　物には阿吽ある故に(卯月紅葉)阿吽の息も消え消えと、のつつかへしつ苦しむ聲(萬年草)サアこいやつと踏んだる足は阿吽の二天、飛ぶが如くに駈けて行く(川中島)綱は鞘を持ちながら塀の上に突立つて、睨合うたる顔魂、阿吽の二王に異らず(酒呑童子)煙草の息に阿呍の輪を吹き(虎が磨)

〔阿吽〕阿呍とも書けど、要するに漢字を配したもの。梵語で𑖀(阿)は字母の初韻、𑖮𑖳𑖽(吽)は閉口の終聲であるので、この二字は法界萬有を舉げてこれを攝し、法界二面の兩極の各一を示すのである。これを氣息に配して、阿吽を呼吸の義とし、阿吽の息(いき)ともいひ、また寺門の兩側に立ちて、一は口を開き一は口を閉ぢた金剛力士に配して阿吽の二王といひ、金剛力士は天部に屬する神なるを以て、阿吽の二天ともいひ、口鼻より出る煙草の烟の輪となるを阿吽の輪といふ。阿吽については祕密佛教で詳說するのである。

あおり　縛の音ははりりんりん、あ

あけられる(明)の「けら」の「か」と約つた語。

あかん 乳母侍女阿監役役の官女附添ひて(國性爺)

〔阿監〕宮女取締役の女官。白居易の長恨歌に、「椒房阿監靑娥老」。

＊**秋ざれば** 秋ざれば月のさはりと泣き歎きつる(蟬丸)

「秋にしあれば」の「にしあ」が約つて「ざ」となり、「秋ざれば」といふのである。秋になればの意。(「秋されば」ともいふが、これは「秋しあれば」の「しあ」が約つて「さ」になつた。

あきつみち 實相中道の佛の敎、神の法、皆一筋の秋津道、傳はる種や和歌の文字(用明天皇)

〔秋津道〕秋津島の道。敷島の道。秋津島はもと大和の葛城室の地の名で、孝安天皇の皇居以來「秋津島夜麻登」の稱があり、後遂に我が國號として用ひる事になつた。

＊**あきなすび** 揉瓜になれなれ茄子秋茄子、嫁を譏る姑はなし(卯月潤色)

〔秋茄子〕秋茄子嫁に食はすなといふ諺によつたのである。秋茄子は核少く好味であるから、姑は嫁を憎んで秋茄子は食はすなといふ意。一說に、秋茄子は核が少いから、嫁に食はして子が少うてはならぬといふ、この說に從はぬ。こゝの文は「瓜の蔓に茄子はならね」といふ諺を逆用して、「揉瓜になれなれ茄子秋茄子」と面白らいうたのである。

＊**あきなひみやうり** 今は粉屋の孫右衞門商冥利、女房限つてこの文見せず(天網島) 沙汰して私德もなし、商冥利隱密なり(歌念佛)

〔商冥利〕商人としてこの身が僞らば、佛神が隱密の間に下し給ふ利益をはづれて蒙らぬぞ、といふ意で自警の詞である。「けいせいみやうが」の條をも見よ。

あぎよよ 高砂やこの浦船に帆をあぎよよ(天鼓)

「あげ(揚)ようよ」のつまつたのである。揚げようなあ。「高砂やこの浦船云々」を見よ。

あきをさめ 女子の身で代官所を秋納まで請合うて(丹波與作)

〔秋納〕農家で秋の收穫をいふ。秋のとりいれ。以呂波字類抄に、「西收」。

德川時代田租の制は、御領と私領、關東と關西とで相違し、各藩でも各制度取立法の名稱を異にし、一藩内一郡内に於ても區々になつてゐるのもあつて、要する領主・代官が思ひ思ひにやつてゐたのである。概して田租の取立は檢見取と定免とあつて、一二の例外を除くの外は皆玄米納である。この正税の他に小物成・浮役等の雜税があり、村高に課せられた義務税もあつて、臨時取立てるのもあつた。小萬の親は納税滯納處分に行はれたので、小萬は親の爲に保證に立つて、秋の取入れ時までの延期を願ひ、それで執行猶豫されたのである。

＊**あく** こゝに平家の一族惡七兵衞景淸(出世景淸) 御供には嫡子惡源太義平(十二段)

〔惡〕其人の意趣の惡强い、意地强い意にいふ。(景淸は伯父大日坊を殺し、義平は叔父義賢を斬つたから、惡を添へて惡人の意にいふとの說はよくない。)人の實名や稱呼の上に惡の字を冠したのは、十の九まで當人在世の間に得たものを其死後まで持越す例である。

あくごふむじん 惡業無盡の罪人(孕常盤)

〔惡業無盡〕罪惡のありたけを爲盡すこと。

あぐしのたかまる 伯耆の國の大山にて愛宕高雄の天狗ども、あぐしのたか丸に傳へし所の兵法を型の如く奥儀を極めて候(大掛物)

田村の草子(室町時代の小說)に、「このくれにはあふみの國にあぐしのたか丸出て世のさまたげをなすべし云々」とありて、坂上田村麿に退治された鬼の名である。

＊**あくしやう** 女房は夫の惡性おしつつみ(重井筒) いやここも小よしの惡性で、つい押せばはなれる(丹波與作) 旦那の惡性銀を十四貫目横取りして(淀鯉)

〔惡性〕惡しき性質の義、よつて放蕩、淫奔、好色の意にいふ。「惡性銀」とは妓樓で遊興に遣ふ銀のこと。

また惡所を延べて「あくしやう」(正しくは「あくしよう」)ともいふ。傾城佛の原に、「三國のわけある里へあくしやう通ひの面憎や」と見え、冥途の飛脚に、「惡しやうぐるひも出で來ろぞと父御前の思案」と見えてゐる。

「惡所」とは遊里をいふ。「惡所通ひ」「惡所狂ひ」は遊里に足繁く通うて遊女にうつゝを拔かすことをいふのである。また女殺油地獄に、「世間の義理を缺いでも金借つて惡性所の拂して」と見えてゐる。惡性所は惡所の念入過ぎた語である。川柳の句にも、「惡所とは罰のあたつた言葉なり」と見えて、惡所は遊里のことである。

(序云、「金借つて惡性所の拂して」とある「借つて」は言ふまでもなく「借りて」の音便である。關西地方では「借りて」を「借つて」といひ、「買つて」を「買うて」というたもので、巢林子の文を讀むにはこれらのことにも注意すべきである)。

＊**あくしゆ** 三途八難の惡趣に墮す(反魂香)

〔惡趣〕趣は往到の義で、善惡の業因によつて趣くべき所。阿毗達磨俱舍論・世間品に、「惡趣謂所往」。地獄・畜生・餓鬼の三惡道を三惡趣と云ふ。

＊**あくしよ** (天網島)

「あくしやう」を見よ。

＊**あくせのえん** 時の坐興の深戲も、過去の惡世の緣ならめ(鑓権三)

〔惡世の緣〕惡い宿世の緣。前世より惡い因緣をもつて生れて來てゐること。

あくち 相宿の關札誰に憚ることあらん、主從共にあくちもきれぬ小忰ども、もとの如くに札立て直せ(嫗山姥)

幼少の者の口邊に生じるぶつ〳〵した小さい腫物をいふ。思ふに「あくち」は惡血で、胎毒によつて生じると思はれた名であらう。「あくちも切れぬ小忰」とは、口頭にあくちが斷絕しないで、まだ生じてゐる小童といふ意。今樣二十四孝(寶永六年刊)卷之三に、「總じて近き世の人の振舞、あくちもきれぬ分として古老先輩を乘越し、鼻のさき智惠をしたり顏にのゝしり云々」、蘆屋道滿大内鑑・第五に、「晴明とやらあくちもきれぬ小忰、陰陽道の祕術、こは事をかしき奏聞」。

あぐちだか 斷惡修善の臑當をあぐち高にしつかと穿き(女護島)

「あぐち」は「あきくち」(明口)の略。臑當・足袋など穿入れる口をあぐちといふ。あぐち高とは、あぐちを上に高くすることゝ。高館(幸若舞曲)に「熊の皮のもみ足袋、しろがねにてへりかねわたし、あぐち高にふんごうだり」。

あくのや 勅使あくのやに入り給ひ、神官樂人に對面あり(三世相)

〔帷舍〕國喪或は大祭など行ふ時、新に假屋を設けて齋場となす建物。

おりの音ばたばたばた（鑓權三）

あふり（障泥）の訛。その條を見よ。

***あか** 佛の閼伽と碎かれて（酒呑童子）袈裟御前の遺骨に土砂振注ぐ閼伽の水（一心五戒魂）枝折戸の外の閼伽棚傾きて（三世相）

閼伽また阿伽とも書き、水を云ふ。この語蓋し梵語アルグハ（Argha）の訛であらう。Argha は祭供又は供物の意であつて、印度では神佛に物を供へるに必ず水を添へる習慣があるによつて、それより轉じて水を云ふことになつたのであらう。名義集二に「阿伽此云レ水」。閼伽の水といふこと重語のやうなれども、古來用例多く、佛書にも見えてゐる。大日經疏十一に、「閼伽水、此即香花之水」。閼伽棚とは、佛を供養する水・香花など載せる棚。

***あか** こちの人、娘が垢をぬがつしやれ、うろたへて娘一人捨てさつしやるな（萬年草）

〔垢〕「垢を脱ぐ」は汚物を取去る義。汚名をすゝぐ。寃を雪ぐ。

***あかいわし** 長か赤鰯の小鐺がくさの、俺どもが脇腹さなへ當るが最期（博多）

〔赤鰯〕鹽漬鰯・乾鰯を赤鰯といへば、夫の如くに赤錆となれる鈍刀。「長か」は長いの長崎訛。

***あかう** 殿ハナ小皷のや得手物、あかうの胴に加賀革くれ紅（くれなゐ）の調（雪女）

正しくは「あこう」で「あこ」の延びた語。初代阿古は東山時代皷筒作の名工。此流に吉道、長兵衞、友房などの名工がある。阿古長兵衞は寛永頃京都高辻御幸町住。詳しくは鼓筒之鑑定（大正六年刊）を見よ。

あかがねさかやき 岩木忠太兵衞六十八でも生得堅氣、銅月代剃立て（鑓權三）

〔銅月代〕月代を剃つた頭の銅色に光ること。藥鑵頭。

あかがねのふきや 〔銅の吹屋〕「ふきや」（吹屋）を見よ。

***あがく** 刺されて馬は跳上り、あがきを打つて立つ程に（釋迦）早く寢させて疾く起し、蜚あがかせたが萬病圓（鑓權三）

〔足掻〕馬が前足で地を掻きにじる。兒童がいたづらしてはね廻る。「あがき」は轉成名詞。

あかさかやつこ こりや大名のお通りだ、先のけろ、振込めさ赤坂やつこひげ奴（隅田川）

〔赤坂奴〕江戸時代、挾箱・槍などを持つて供する若黨小者をいひ、多く江戸赤坂邊に住んでゐたのでこの名がある。

あかしちぢみ 心ざし行く須磨の浦、明石縮のちりちりと、上る朝日の東山（松風）

〔明石縮〕播州明石より産出する縮で、夏衣に仕立つ。ここの文は、須磨の浦から隣地の明石につづけ、明石縮のちりちりちぢんでゐるので、ちりちりの語につづけたのである。（明石縮は巣林子作の佐佐木先陣、まつよひしぐれ道行の中にも「波のちぢみの明石縞」と見えてゐる。越後の本場では、京都人の明石次郎が文政年間に越後の小千谷に移住して、京風の織方を傳へて絹縮を始めたのが明石縮の元祖だといはれてゐる）。

あかしのきみ 名を縮合とつけたるも、空蟬・夕顔・若紫・明石の君におしつづき、ならびなしとの心かや（千疋犬）

〔明石の君〕源氏物語中に出る美女である。詳しくは明石の巻について見よ。ここの文は、源氏物語に縮合といふ巻があるので、それより源氏物語に見える美女の名を引いて來たのである。

***あかぞめのゑもん** 供御は赤小豆に赤染の右衞門、けだかきだいり雛（本領曾我）

〔赤染右衞門〕内裡雛の一として赤染右衞門を擧げたのである。赤染右衞門は赤染右衞門尉時用の養女となり、宮掖に出入し、藤原道長の妻倫子に仕へ、後に大江匡衡の妻となる。三十六歌仙の一人。

あがためしのぢもく 縣召の除目は吉日に任せ（百合若）

〔縣召の除目〕諸國の國司を任ずる儀で、毎年正月十一日から三日間に行はれ、專ら地方の官を任ずるが故に外官の除目ともいひ、春季に行はれるが故に春の除目とも云ふ。除目とは官に除し目錄に記す意。

***あかねさす** 東の山に茜さし、はや月代ぞあがりける（用明天皇）

〔茜差〕茜色の差出る義で、日光また月光の地平線上に反射し初めるをいふ。茜の差出る義から、日・紫などの枕詞とすることもある。

赤松梅龍（あかまつばいりゆう） 見ろかげ細き釣行燈、太平記講釋赤松梅龍と記せしは、玉が爲には伯父ながら（大經師）

元祿十年刊の諸藝目利咄に、「軍の講釋に名を轟かせしは、浪花に梅龍、江戸の青龍軒は勝り劣らぬ能辯にして、聞く人を感ぜしむ」とあれば、赤松梅龍は大阪に實在の人であつた、それを岡崎村住にしたのは、岡崎村には豆商の別莊多く、貧民の陋屋その間に點在し、太平記讀（よみ）などの住居地にもふさはしかつたからであらう。「をかざきむら」を見よ。

***あかまへだれ** 泊り泊りの赤前垂にしやらくら致さないやうに（丹波與作）

〔赤前垂〕京阪地方の色茶屋の仲居や、東海道五十三次などにて、料理屋・茶屋・旅籠屋などの客に接する下女は、皆赤前垂をしてゐた。都繪馬鑑・卷之五に、「女の赤き前垂をしたるは古代の樣なり、……近世まで茶屋料理屋遊女屋の下女は皆これをせしが、今は色々の染模樣或は緋縮緬に變ず」とあり。丹波與作の中に、「君待受けて、解く前垂の赤坂や」とも見えてゐる。

あがまへる 樣に樣をつけあがまへた（會稽山）

あがめる（崇）の「め」を「まへ」と延した語。

あがりの衆 上りの衆ならば土產召せ召せ（百合若）

〔上りの衆〕田舍から上方（京阪地方）へ上り來た人々。

あかりも 牛膝（ごしつ）・あかりも・二十日草（用明天皇） あかりもとは燈心草（用明天皇）

〔明藻〕細藺の異名、その心を燈心となすより燈心草とも云ふ。

***あがる** 脈があがつた死病も（大經師）伯母さへ死ぬれば科は一人に極つて、脇差は上り物、外に御詮議は殘るまい（女腹切）謀反の輩の上り屋敷の明地多し（最明寺殿）

〔上〕「脈があがる」とは脈搏無くなるをいふ。「上り物」とは廢物。「上り屋敷」とは、江戸時代、犯罪人から官に沒收した宅地をいふ。

あかれる どう因果の夕立や、目も鼻もあかれぬ（女楠）

の地より產出する食盥を赤穗盥といふ。和漢三才圖會・播磨國土產の條に「盥、赤穗」。

*あこめ 唐織・唐綾・衵・練衣（曾我五人兄弟）

〔衵〕昔の衣服の名で、綾又は平絹などで作り、表着 唐衣などの下に着たのである。小袖のゑりの如くたりくびにゑりをさして大くびなく、左右の腋を縫合せず、袖は廣袖で、たけは踝までとゞく。安齋隨筆・卷五に、「此衣（衵）は表着・唐衣などの下に着るものなり、衵は俗字なり、男の衵は女のとは裁縫違ひたり、衵は正字なり、玉篇に衵は女秩切近レ身衣也、日々所レ著衣也と註せり、此方の衵は肌に直ちに近づけては着ざれども、男女共に裝束の下に着る衣なれば、身に近しといふ義に違はざるか、肌には白小袖を着るなり、小袖と云ふは丸袖に縫ひたるを云ふなり、小袖の上に衵を着るなり、初は男女共に四角なる廣袖なり」。近松のここの文、衵は衣服の名であるのを誤つて、縠と混同したのであらう。縠は羅の目のやうに細くちぢれて、透き通るやうに薄い絹織物である。

あこめのこばかま 金紋紗の肩衣・あこめの小袴裾くくみ（井筒）

〔衵の小袴〕安齋隨筆・卷五に、「女の袴・女の扇を衵袴・衵扇といふは、衵を着る時に用ふる故なり云云」。

*あごんぎやう それ六字の名號といつぱ、華嚴經にて南の字をあらはし、阿含經にて無の字を接し（百日曾我） 華嚴經にて中戶に口說き、阿含經にてむらさき見そめ（扇八景）

〔阿含經〕大藏經中に收まれる小乘部經典の總稱で、增一阿含經・長阿含經・中阿含經・雜阿含經を四阿含と稱し、小乘經の根本經典である。「けごんぎやう」の條をも見よ。

*あざ さんまあざがけしのぎつつ（大織冠） かるたの繪のつく祈禱に、あざぶの明神釋迦牟尼佛（女殺）

博奕のめくりかるた四十八枚ある中の札の名。博奕仕方風聞書に、「壹枚をあざと唱へ、金泥にて彩色、此札數五十に相成」。「あざぶの明神」とは、あざ札に麻布（かるた札はもと麻布で造つたにより）をいひかけ、これに明神を添へて、神樣の名のやうに物體ぶつたのである。かくかるたに明神を添へていへる例は、五箇の津餘情男（元祿十五年刊）卷之一に「この事僞ならばかるた大明神の御罰を蒙り云々」と見えてゐる。大矢數（延寶九年刊）卷二に、「かるたはあざ打出す風涼しくて（大坂）」。「うんすん」の條をも見よ。

あさがほ 瑠璃びいどろの朝顏で、味淋酒飲んでましますは、古郡殿の奧樣ぞや（本領曾我）

〔朝顏〕朝顏茶碗の略で、上方に開き下方窄んだ茶碗。男色大鑑・七に「朝顏燒の天目出し」。

あさきど 既に今年の酉もたち、戌の顏見世、朝木戶を曙深く提燈の（二枚繪）

〔朝木戶〕木戶とは劇場の入口をいふ。竹豐故事（寶曆六年刊）に、「櫓と云城戶と云は、城廓に準じて大切なる名目なり、後世城の字を恐れ木戶と稱す」。昔時芝居は概して拂曉から開場したれば、朝木戶というたのである。この文に「酉」とあるは寶永二年乙酉をいふ、「戌の顏見世」はその條を見よ。

あさぐつ 髻を取つて引伏せ、履いたる淺沓碎けてのけと、腰のつがひをさんざんに踏付け（松風）

〔淺沓〕裝束着用の時に履く沓で、桐を彫つて作り、外部を漆にて塗り、內に絹布などを張る。

あさくらや 朝倉屋から青山椒、內にはきれる返事に困つた（宵庚申）

〔朝倉屋〕但馬國出石郡宿南村を朝倉といひて、山椒の名產地である緣によつて、朝倉の屋號を用ゐて、青山椒と書き連ねたのである。

*あさごみ 出舟の今日の名殘の床、明日のあさごみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より、なほ辛く（夕霧） かの初雪の朝込に、寢衣ながら送られし、大門口の薄雪も（冥途飛脚） 有明の月の夜床も更けぬれば、雪の朝込遲しとて、揚屋の恨み心せき（三世相）

〔朝込〕朝込入る義で、戰に用ゐる語なるを、遊廓に朝込入る事に轉用された語であつて、遊冶郎が未明から遊里に出懸け、大門の開くを待つて入り、馴染の遊女を呼んでちよつと床入するをいふ。蓋し遊女は、片時も傍を離さないで何時までも吸附いたやうにする野暮客に揚げられるのも多いので、それに氣を腐らし、それよりか互に思合うた馴染男とちよつと顏を合し、軈て用事を濟して別れるのを氣晴しとしたのである。朝込といふこともこのわけである。西鶴撰の胸算用・卷之二、尤も始末の意見の條に、「紙子頭巾深々と被り、山椒の粉胡椒の粉を賣り廻りて悲しき年を取り、心浮々と丹波口まで行く中に、夜は明け方になりぬ、世にある時の朝込思出してぞ歸りし」とあれば、朝込は夜の明け方頃にしたものであることが知れる。好色伊勢物語（貞享三年刊）に、「朝ごみ。朝來見と書けり、あした來てまみゆと詠めり、凡そ島原の一番門といふ事あり、此町七つの鐘のなるなり、初めてよるの門を開く、宵に首尾なき男此一番門に來りて夜の明くるまで枕ならぶことをあさごみといふとぞ」。吞舟軒箕山編の色道大鏡・卷之一に「朝込。公用親兄弟の勤に故障有て、前暮行く事かなはず、あした廓門のあくるを待受けて入る事なり、いまだ明けはなれぬ內に行く事なれば、夜込といふ名目なれども、誤つて朝込といへり、夜會にはあらで夜籠の茶湯といふも夜を籠めてあしたに行くなり、夜込と書いては道にかなはず、朝込入る心にて朝込と書くべし」。夕霧阿波鳴渡のこゝの文は、「枕より跡より云々」を見よ。

あさじまゐり 御堂の朝じ參り（今宮）

〔晨朝參〕眞宗寺院晨朝（六時の一）の勤行に參詣する事。「あさじ」は朝時であつて、普通に晨朝と書き、眞宗で平日每朝の勤式の名。

*あさち 庭の淺茅に放飼ひ（小栗判官） 風ばうばうたる淺茅生の、尾花も我を招くかと（三世相）

〔淺茅〕茅の疎らに生ひたのをいふ。淺茅生。茅はちがやで、花をつばなといふ。

*あさなぎ 藤江の里の朝凪に、燒くや藻汐の阿古の浦（浦島）

〔朝凪〕太陽の光線を受けて、海は陸よりも溫まることが遲く、また冷えることも遲いので、海陸の溫度が平均する時が朝に一回夕に一回ある。この時無風となる。その朝なるを朝凪といひ、夕なるを夕凪といひ、直接海の影響を受ける地方にある。新勅撰和歌集・戀三の部、權中納言定家の歌に、「來ぬ人をまつ帆の浦の夕なぎに、燒くや藻しほの身も焦れつつ」

あさのよる おぢやれの身には何がなる、朝の夜から見世ざらし（丹波與作）

〔朝の夜〕朝ではあつても未だ夜中。未明。この文、朝早立ちの客があるから、かくいうたのである。

あくべなし　年明くまでの月日をあくへなう思召されてか、但は世を見限つての遁世か（吉岡染）
飽く方なしの義。滿足されない。もどかしう退屈な。

あくめ　今朝曉の鷄・鐘も一つ枕に聞いた仲、何をあくめに離別とは（會稽山）　貧しき曾我の惡目が、今日といふ今日見えそめしか（會稽山）
〔惡目〕惡く見えること。落目。

あくらい　龍象の波を蹴立つる四足の働き、惡來が多力にも止めつべうは見えざりけり（關八州）
〔惡來〕殷の紂王の臣で多力であつた。史記・殷紀に「飛廉生二惡來一、惡來有レ力、飛廉善走、父子俱以二材力一事二紂一」。晏子春秋に「惡來手裂二虎兕一」。

*__あけ__　先御馬はあけ七歳・八寸八分に立伸びて（大磯虎）
〔明〕年明ける義。あけ七歳とは、年明けて七歳になる馬。

*__あけ__　眉間肩先斬下げられ、あけにそみてよろよろ（扇八景）
〔朱〕あか（赤）の轉。赤。鮮血。

*__あけ__　よれ樣達もこちの揚で參らせましたか（氷朔日）
〔揚〕遊女が置屋（遊女を抱へ置ける家）から揚屋（遊女を招きて遊ぶ家）に遊女を呼寄せること

あげき　山鳥一羽のし來り、栗の梢にあげきして、翼をすくめとまりけり（虎が磨）
〔揚木〕枝葉を押上げてもぐりこむこと。鶉鷄類が逃げ隱れるときにはこの習性がある。

*__あげく__　あげくにかかる大事なしだす（二枚繪）
〔揚句〕擧句とも書き、連歌・連俳の始めの句を發句といふに對して、最後の七七の二句を揚句といふたのが轉じて、終末の意にいふ。

あけすけ　籠輿になりとも、嫁入の輿になりとも、あけすけの返事したがよい（娥）
「あけすき」（明透）の義であらう。物を包み隱さぬこと。心底を隱さないで打明けること。助六心中丼せみのぬけがら（古淨瑠璃）に「よろづ屋の助六とて、男自慢にのぼされて、今はしんだいすつきりすけ六」とある「すけ」も、透いてゐる意を助六の名にいひかけたものである。

あけずの門　かけ廻つても奧方の勝手は知らず、中口のあけずの門碎けてのけと扉を叩き（反魂香）
〔不開門〕非常の場合の外は開けぬ門。

*__あげせん__　九月からの揚錢萬事十五兩程と覺えた（冥途飛脚）　九軒のおろせが、揚錢の殘りも今日はすつきり取つて、九兩二分の銀（二枚繪）　扨は揚錢入らずか、（扇八景）
〔揚錢〕遊女の揚代。妓女を呼寄せて侍らした費用。「おろせが揚錢の殘りも……」とあるは「おろせ」の條を見よ。「九兩二分」は「呉れう」をかけていうた語。

*__あげはのてふ__　幾夜も幾夜も揚羽の蝶（賀古教信）
〔揚羽蝶〕紋所の名。こゝの文は、揚ぐを揚羽蝶にかけたのである。


〔ふてのはげあ〕

*__あげまき__　繼信が着たりける鎧の胸板押付あげまき（凱陣八島）　賴朝の揚卷取つて引立て（鎌田）
〔揚卷〕總角とも書いてある。鎧の押付の板の次にある板（肩の稍下方）を逆板また揚卷付の板といひ、この板に鐶を打つて揚卷といひ、揚卷の總を附ける。「押付」の條をも見よ。

*__あげまり__　天晴今日の曲鞠に、子供が名をもあげ鞠と、莞爾と笑ひし老の顏（持統天皇）
〔上鞠〕蹴鞠に上鞠と云ふがあつて、成通卿口傳日記及び遊庭秘錄などに委しう記してある。こゝの文は上鞠に名を揚げるをかけたのである。

*__あげや__　親代代の刀屋を太鼓持にするのみか、座敷を揚屋に仕くさつた（女腹切）　揚屋の届も無沙汰になり（淀鯉）　この銀をこの儘置けば揚屋の庭錢（壽門松）
〔揚屋〕遊女を招寄せて遊ぶ家。「揚屋の届」とは揚屋への附届け。「揚屋の庭錢」とは揚屋への祝儀に贈る錢をいふ。異本洞房語園、上に、「京都の揚屋に庭せんといふ事あり、正月・三月・五月・七月・九月、此五節句を約束のときは客人より出レ之、太夫は十三貫、天神は五貫、圍は三貫文」。元祿太平記・五に、「都の手替り定た禮儀あり、其わけは太夫正月節句庭錢十六貫文、祝儀は女郎へ一分を二三十粒、宿へ三歩、あるひは一はい、やり手へ二角」。女重寶記・二に、「道具をつかはす次第（婚禮の際女の方より）はまづ一ばんに庭錢、但し青さしにつなぎ、次に長持云々」と見えてゐる。揚屋で遊女を一夜妻とすることも、男より揚屋へ婿入するに當れば、庭錢を出したのであらう。又太夫から揚屋家内にやる祝儀をも庭錢と云つた。「にはせん」をも見よ。

*__あご__　網引すとあごととのふる網舟の（三國志）
〔網子〕網ひく漁夫。萬葉集・卷三、雜歌部に「大宮のうちまで聞ゆ網引すと網子とゝのふる海人の呼聲」。「網子とゝのふ」とは、網をひかうとして多くの漁人を呼集めるをいふ。

あご　下部どもあご取持たせ（松風）
「あぐ」（網具）の轉。

あこう　「あかう」を見よ。

*__あこぎ__　阿漕の海士のあこぎにも、過ぎにしかたを思ひ出て（丹波與作）　忝い御情、この上はあこぎながらとてもの事に、今ここでちよつとちよつと縋りしを（堀川波鼓）　お侍のあこぎな申し事なれど、私に抱付いて下されませ（夕霧）　阿漕が浦の脱け舟も、度重なりし通路の（雪女）
〔阿漕〕事の度重なるにいひ、轉じて、厚かましう貪つてあくこと知らぬにいふ。阿漕は伊勢國安濃津郡の地名であるが、古今六帖・四に、「あふことを阿漕が島に引くあみの度重ならば人も知りなむ」の歌によつていひ出た語である。謠曲・阿漕に、「伊勢の國阿漕か浦に引く網も、度重なればあらはれにけり」。「阿漕が浦の脱け舟」とは、度々脱け忍びて密會する意。（傳說に往昔漁人阿漕平治といふ者が、海魚やがらを獲て母の病を治せうとして夜陰に網を殺生禁制の阿漕の海に投じたことが露顯して、簀卷にされて海に棄てられたのに由來するものであるといふ）。

あこじほ　おのれが私商ひにあこ鹽買うて損をして（歌念佛）
〔赤穗鹽〕播磨國赤穗は古來鹽の名産地で、こ

足の爪先を内方に向けて歩むことで、女の歩む足つき。これを内八文字ともいひ、男の歩む足つきを外八文字といふ。「はちもんじ」をも見よ。

***あしのまろや** あしのまろ屋のはなれ庵(一心五戒魂)

〔蘆の丸屋〕蘆などで假初に葺きて作れる家。小屋の屋根を四方から一樣に葺いて、頂上で一所に葺寄せれば屋根の形が丸く見えるから丸屋といふ。

***あしびきの** 二度難波の故郷へは踏み返さじと、あしびきの大和の國平群谷(卯月潤色)

〔足曳の〕山は足卽ち山麓を曳けば、足曳の山と云うて山にかゝる枕詞とし、山を大和にかけて大和の枕詞としたのである。足曳の山鳥などゝ云ふもこの類である。

あしふいご 地鐵は後で算用と、橫座に直つて足鞴(氷朔日)

〔足鞴〕柄を足指に挾み、足を屈伸して風を起さす鞴。

あしぶね 知らずや、人の世を渡る一生の危きこと、この蘆舟に劣らんや(聖德太子)

〔蘆舟〕蘆葉に乘るを蘆舟に乘るといふ。こゝの文の鉢開き坊主は實に達磨の化身で、蘆舟云々は達磨蘆葉に乘つて江を渡つた故事によつたのである。達磨三朝傳(中二)に、「爾時祖與二武帝一知二其機緣不一レ契、潛折二蘆一枝一、渡二楊子江一而去レ梁、北趨二魏境一」。

あしもとのねばいは三河者(丹波與作)

脚强くして步行に容易に疲れぬを、足元が粘いといふ。こゝの文は、三河に膠をかけて、「足元の粘いは三河者」というたのである。膠は粘着力が强いから、かくいひかけたのである。烏丸光廣の狂歌に、「にかわの國といふべかりけり」と云ふ句もある。

***あしやう** 亞相笏取直し(女夫池)

〔亞相〕大納言の唐名。亞は次の義で、宰相に次ぐ意。

あしやがま 今は團扇の繪、葦屋釜の下繪に露命をつなぎ(反魂香)

〔葦屋釜〕筑前葦屋の里で鑄た釜。黑川道祐撰の雍州府志・卷七、土産門下に、「釜。煮レ湯之具也、中古於二筑前葦屋里一所レ鑄、號二葦屋釜一、其所レ畫之紋畫、倚雪舟之所レ圖者間有レ之、…倭俗暖レ酒之鐵器謂二間鍋一、今有二狩野探幽井永眞等之下畫一也」。葦屋釜は土佐光信が都の亂を避けて筑前國蘆屋の里に下り住んだ時、其里人の製造する釜の下繪を描いて、その模樣を入れて燒かしたものである。蘆屋釜の下繪を蒐集したものに「蘆屋のけふり」と云ふ本があつて嘉永五年頃に出版されてゐる。

***あじやせたいし** しゆりはんどくの阿房でも、あじやせ太子の鬼子でも(女殺)

〔阿闍世太子〕釋尊在世の當時、印度摩揭陀國にゐた人で、釋尊の法敵で惡行多く、父王の頻婆娑羅を弑し、母后の韋提希夫人を幽閉した程の大惡人であつたが、終に釋尊の感化によつて佛敎に歸依し、佛敎の爲に貢獻する所が多かつた。詳しくは觀無量壽經などを見よ。持統天皇歌軍法に、「昔五天竺の主、頻婆娑羅王の御子、阿闍世太子は過去生よりの惡人にて、御母韋提希夫人を鐵の牢に押込め、無慚の苦患を見せたまふ」。

あしゆらわう 阿修羅王が加勢して神變通力をふるまふとも(鎌田)

〔阿修羅王〕阿修羅は梵語「アスラ」Asura で、非天と譯し、印度鬼神の一種である。諸阿修羅の長を阿修羅王といひ、梵天・帝釋と闘爭する魔神である。

あしよわぐるま 打てどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、御所の此方に駒を控へて見渡せば(最明寺殿) 親の輪廻の足弱車、狂ひ巡りて佇めば(隅田川)

〔足弱車〕輪の弱い車をいふ。馬の脚の弱いに喩ふ。謠曲・鉢の木に、「うてどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乘力なければ追ひかけたり」。

***足を空** 日が暮れると、足を空に立歸り(冥途飛脚)

足が空を飛ぶやうに、夢中になつて急ぎ歩くをいふ。源氏物語・葵の卷に、「足を空にてたれもたれもまかで給ひぬ」。

あしをなが 黃絲の腹卷赤銅作の打太刀、足緖長に結下げ(艳狩)

〔足緖長〕太刀の帶取を足緖といふ。太刀の足緖の長いこと。

あそぎごふ 此善根を以て、まさに無量阿僧祇劫に於て自在の王となり(聖德太子)

〔阿僧祇劫〕梵語阿僧祇耶劫 Asamkhya Kalpa の略。阿は無、僧祇耶は數の義、劫は極めて長大の時間をいふ。阿僧祇劫とは數ふべからざる極めて長大の時間をいふ。「佛勝鬘夫人に記を授けて曰く云々」を見よ。

あそびげ 髮より多きあそび毛を、襟引締めて隱せども(日本武尊)

〔遊毛〕結び漏れた髮、また領脚の邊に生ぜる短き髮。

あそふのまつわか

「あさふのまつわか」を見よ。

***あた** あた仔細らしい おどしだて(大經師) あた聞きともない、通りや(反魂香) 奥樣はうつそり鼻明けてしまはんしよ、小むやくしいあたぶのわるい(夕霧)

嫌忌の意をなす語。「あた分の惡い」とは、いやに割が惡いと云ふ意。

***あだ** 人の願ひも我が如く、誰をか戀の祈ぞと、あだの悋氣や法海寺(曾根崎) 通ひ車は小町があだの情に乘せられ(歌念佛) 南無阿彌豆腐なまいだ、ああなむあいだ、あだくち念佛(孕常盤) 朝の露に生殘る、それよりもなほあだくらべ(三枚繪) あしたの雲ゆふべの霜、あだしが浦のうつぼ舟(重井筒) あだしが原の道の霜(曾根崎) あだしけぶりの梅田の火屋(賀古敎信) 何をか後世のみやげとも、いさしら露のあだし野や(夕霧) うかれぞめきのあだ淨瑠璃(天網島) あだし世に生きて物を思はんより(凱陣八島) その豫言もいつしかに、あだ寢の夢の博勞町(今宮) 我も色賣る身はあだ花の、花に價の高下があれば(生玉) それを知らずにあだ惚して、この長作は捨てられた(生玉) あだ矢もなく雨の如くに射かくれば(蟬丸)

〔徒〕いたづら。むだ。かりそめ。はかないこと。

「あだ」はまた他語と複合語をなしてそれぞれの意をなす。

あざばね　つんばれあざばれ、にぎりのそろでぞ勝つたりけり(大織冠)

「つんばね」を見よ。

＊**あさひな**　朝比奈ならねば門破り詮方盡きて立ち居たり(今宮)

〔朝比奈〕この文は、朝比奈三郎義秀は建保元年五月和田合戰の時鎌倉御所の南門を破つたが、二郎兵衞は義秀とは違つて彼の力量なければ、詮方なう立つてゐたとの意。

あさぶさ　二人の子供が朝ぶさ前忘れず、必ず桑山呑ませて下され(天網島)

「あさぶち」(朝物)を俗に「あさぶさ」と云うた。朝食より前に間食すること。俚言集覽に「夏山雜談、御朝物は、餅粽菓子の類を年中毎朝河端(喜道)といふ御菓子師より調進すとなり、民間にても、朝食より前に何か喰ふ事を朝物といふはこの餘風なるべし、今俗に女子の詞に朝ぶさといふ是なり」。

あさふのまつわか　先づ當國の名木は西行が汐越の松、あさふの松若が物見の松(反魂香)

〔麻生の松若〕麻生は淺生とも書く。越前國足羽郡麻生津郷をいひ、松若の屋敷跡がある。松若は盜賊の名である。歸雁記に「淺水里に松若といひし盜賊の住所なりしといふ跡あり」。謠曲・熊坂に、「さて北國には越前の淺生の松若・三國九郎、加賀には熊坂の此長範を始めとして」。

あざぶのみやうじん　「あざ」「かるたの繪のつく云々」を併せ見よ。

あさみぐさ　根は戀草の深見草、あさみ草とは思はじと(十二段)

(朝見草)松の異名。二條良基撰・藏玉集に「朝見草＝松。夜にあまる月をや山の朝見草、すごきを殘す秋の曙」。ここの文は草の名寄であつて、淺く見るを朝見草にいひかけたのである。

＊**あさもよひ**　家家ごとに朝もよひ、よろづに心もみ瓜を、きざむ音さへ比叡の山(堀川波鼓)

〔朝催〕朝飯の支度をすること、またはその時分。今昔物語・卷三十に、「あさもよひとは、朝めて物食ふ時を云ふ也」。

あさやま　昨日の朝山敵祐經尾越す鹿に目を付け(會稽山)

〔朝山〕朝の山狩。

あざらけし　此宮遂に人間の乳を呑まず、あざらけき魚を好んで、魚の脂にそだち候ゆゑ(松風)

〔鮮〕あたらしい。仁徳紀に、「鮮魚」。

＊**淺利與市**　これを射ん者昔ならば鳥の海彌三郎、當代は淺利の與市殿(會稽山)

淺利義遠、通稱與市といひ、源氏の臣で義清の子、弓矢の名人で、壇浦の戰に仁井親清の胸を射通した人。

＊**あし**　四兩あしもござるかと(冰朔日)　三百文のあしを捨て(今川了俊)

〔脚〕中古、錢を要脚といひ、女言葉に「おあし」といひ、それより俗に錢を「あし」といふ。要脚は腰脚である。易林本節用集に。「要脚、錢也」。白玉蟾詩に、「腰下有レ錢三百足」。「おあし」をも見よ。

＊**あじ**　殺さば殺せと目を塞ぎ、阿字觀に入り給へば(一心五戒魂)　わけて給はる骨肉を、一つにかへす阿字本不生、阿字の一刀これなりと(萬年草)　阿字の殿上には自性の月高く晴れ(嵯峨天皇)

〔阿字〕阿は梵語の第一字母で、その字形𑖀である。眞言密教ではこの字母につきて特殊の玄理を說く。萬有は不生である、不生であるが故に不滅である。阿は本來不生の理を表はして、阿字本不生といふ。智證大師の阿字祕訣に、「從二妙法一終、至二而去一、無レ非二阿字本不生一」と見えてゐる。法華實相の妙理即ち𑖀字本不生を觀じるを、阿字觀の大事を了語すといふ。阿字觀の功力は萬有本來の不生不滅の妙理を悟らしめて、一切の煩惱束縛を斷絕するにより、これを利刀に喩へて阿字の一刀といふ。眞言妙法の殿上を阿字の殿上といひ、自は本來、性は不改の義で、自性は眞性また眞如の意である。

あしあらひざぶらひ　なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)

〔足洗侍〕外樣侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。諺に賤業を廢して正業に就くを足を洗ふといふ。

＊**あじか**　手手にあじかを携へて、山また深く入り給ふ(十二段)

〔簣〕籄とも書く。形笊の如く、葦・竹又は藁などで作り、土などを運ぶ器。

あしかがわん　辨當合子の足利椀(冷泉節)

〔足利椀〕下野國足利郡足利から產出する蓋ある塗物椀で、日光椀の類であらう。但足利が椀の產地たるを未だ嘗て聞かない。

あしがせ・てかせ　繩は恩、足枷手枷にかかつても(國性爺)

〔械・杻〕足枷・手枷とも書き、共に刑具である。手足に加へて自由を束縛する具で、木又は鐵で造り、足にはめるを足枷、手にはめるを手枷といふ。箋註和名類聚抄に、「械阿之賀之、穿レ木加レ足也」「杻、新撰字鏡、枷訓二手加志一、按天加之、今俗手錠此類也」。

＊**あしがる**　昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石になるもあり(女楠)

〔足輕〕足が輕くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は門を衞り、驅使・雜役に服し、戰時には軍陣の步卒となる。

＊**あしく**　彌陀・藥師・彌勒・あしく(卯月潤色)　足の病は阿閦佛(女殺)

〔阿閦〕梵語アクショーブフヤ(阿閦婆耶)aksobhyaの略。この佛は無冠で寂定相、膚は黃金色又は赤白色で、降魔の印を結び、蓮華座の上に坐してゐられる。名義集・一に、「阿閦。淨名經云、有レ國名二妙喜一、佛號二無動一、疏云、阿之言レ無、閦之言レ動」。女殺油地獄のこゝの文は足の同韻より阿閦佛を引いたのである。

あしじろのたち　萌黃絨の鎧着て、足白の太刀を佩き(加增曾我)

〔足白太刀〕太刀の總體の附屬金具が金や赤銅で、二つの足ばかり銀で作つたのをいふ。足とは鞘に二つ揃つて附き、帶取を附ける金具。

あしだま　頭玉・手玉・足玉の緒の緤返し(振袖始)

〔足玉〕足の飾につける玉。日本書紀・神代に、「足玉も手玉もゆらにはなおる云々。」

あしつく　惡うろたへ足つくなと、八方を睨め廻し(今川了俊)　やれやれ山の芋で足ついたと、どつと笑へば(宵庚申)　籠の底なる山の芋で、びつくり足つく革袋(蛙合戰)

〔足突〕足突き躓く義。失策す。やりそこなふ。「山の芋で足つく」をも見よ。

＊**足の八文字**　眉の八字はかくせども、隱れぬ足の八文字(虎が磨)

（生玉）、新七が言譯なく、身のあつさに斬つたと、皆手前のふみかぶり（淀鯉）

***あつかは**　井筒がままに業平の、といてかけたる常陸帶、あつかは女の二重三重、帶はとくとも心とかせじ（井筒）　惚れたとは厚皮な（浦島）　おやまやら總嫁やら、厚かはづらな晝日中（女腹切）

〔熱〕悶熱の義より轉じて苦しい意にいふ。

〔厚皮〕皮厚うして感じの鈍いことで、恥を恥とも深く感ぜぬこと。鐵面皮。

***あつかひ**　喧嘩して濱納屋の下で、組んづ轉んづして居たをいくはなか見て來た。扱ひになりしやら、錢をついたもたしかに見た（歌念佛）

〔扱〕仲裁。大下馬（題簽、西鶴諸國ばなし）卷二、神鳴の病中の條に、「この一腰は藤六に渡せと、いろいろに申せど弟は更に合點をせず、兄は是非に取らねば肯かず、何れもあつかひに日を暮しぬ」。念佛往生記（古淨瑠璃）第二に、「様子を聞てあつかはん爲、して先何事ぞ」とある。あつかふは仲裁する意。

あづきおりのべんがらじま（淀鯉）

〔小豆織の榜葛剌縞〕小豆織とは赤と藍との絲で織つた小さい格子縞の織物。榜葛剌縞とは緯が木綿絲・經が絹絲で織り、多くは立縞である。萬金産業袋・五、衣服門に、「赤藍の小格子。あづき島といふ」。和漢三才圖會に、「榜葛刺紬、按榜葛刺・天竺國名、出二於此一紬、緯木綿・經絲似レ莩而脆、多縱柳條也」。

あづきながみつ　重代のあづき長光二尺五寸に手をかけ給ふを（川中島）

〔小豆長光〕備前長船の初代、長光作の刀をいふ。小豆が切れたと云ふ俗說でこの名がある。川中島の戰に、上杉謙信が敵の本陣に突入し、武田信玄を斫付けた刀は小豆長光であつた。

小豆の飯の相伴（國性爺）

昔から狐を稻荷明神の使と心得て、小豆飯・油揚を供するより、狐になぶられ魅されれば、それを幸に小豆飯の相伴にありつかれるといふ意。稻荷明神の使に狐をすることは、大御食津神の「けつ」が「きつ」（狐）に聯想されて起つたのであらう。

***あづさみこ**　黑格子のあづさみこ參られたりと申しける（三世相）

〔梓巫〕梓神子とも書いてある。梓の弓を鳴して神おろしをする巫女。「黑格子」を見よ。

***あづさゆみ**　過ぐる月日は梓弓、ひくにとまらぬ世の中の（百日曾我）　梓弓大和島根はおしなべて（百合若）

〔梓弓〕上古弓は梓で作つてゐたので、弓のことを梓弓といふ。弓は引くより、引くにつづけ、また梓弓矢の「や」（矢）から、大和につづけた枕詞である。

***あつた**　椽先にあげ足して、やれやれやれ、あり様だちはあつたぼこしゆもない（丹波與作）

「あつた」は、嫌忌の意をなす「あた」といふ語に、音便で促音の加はつたもの。（「ぼこしゆもない」はその條を見よ）。

***あつたら**　髮の結樣ばかりで、あつたら此身が埋れ木ぢや（鑓權三）　あつたら肝をつぶした（博多）　何でもない奴等に逢ひ、あつたら汗を流せし（蟬丸）

「あたら」（可惜）に音便で促音の加はつた語。

***あづち**　小栗もあわてて、的場の射垜に立隱れてぞおはしける（小栗判官）

〔安土〕射垜また堋とも書く。弓を射習ふとき、砂又は芝などで小丘を築いて、的を懸ける場。

あつちのもの　次第次第に病も重り、金の鎖で繫いでもこの度はあつちのものと、醫者樣だちのお咄（酒呑童子）

〔彼方者〕彼の世へ行く者。黃泉の客。

有つて過ぎた事　內儀樣の譯もない、それはあつて過ぎたこと（重井筒）

嘗てはさう云ふ事もあつたが、それは過去つた昔の事で、今はさう云ふ事はないといふ意。ずつと以前にあつた事。

***あづまからげ**　今若はおとなしく、あづまからげに脚絆締め（烏帽子折）　いとし男にぬぎかけさせて、あづまからげに佐保川押させ（吉野忠信）

〔東絡〕衣服の背縫の裾より七八寸上を摘み、之を帶の結目の下に折り込むこと。ぢんぢんばしより（ぢぢばしより卽ち爺端折の音便）。

***あて**　艷色あてなる二人の遊女、左右に別れ見えたるぞや（反魂香）　あてに氣高きまなじりにてはつたと睨み（烏帽子折）

高貴。品の高いこと。眞名伊勢物語に「高貴を「あて」とよんである。「ああ妙」と嘆美した語であらう。〔「たへ」の反「て」である。〔一說に上手であるとも云ふ。「うは」の反「あ」である〕

***あてみ**　やはらあてみを稽古して（大經師）

〔當身〕柔術で、拳を相手の急所に突當てて、一時絕息さすこと。

跡老松　君を慕ひて太宰府へ、たつた一飛び梅田橋、跡老松の綠橋（天網島）

「おいまつ」を見よ。梅は菅公を慕うて太宰府に飛んだのに、松ばかりは跡に殘つて綠を綠橋にかけ、老松に老松町（大阪西天滿と曾根崎との間）をかけたのである。「綠橋」「いつしゆの歌」の條をも見よ。

あとおひ　あとおひ負ひたる高野聖（碁盤太平記）

〔後負〕笈は後に負ふから後負ともいふ。「おひ」を見よ。

あとがやとや　八つの太鼓がでんでんでんぼ、あとがやとやのいたみへいけだ（氷朔日）

こゝの文、「八つ時の太鼓」に、太鼓・鉦で探すことをきかせ（「たいこ・かね」の條を見よ）、その太鼓の音「でんでんでん」に傳法をいひかけ、「跡がやがやとやとや」と騷ぐと云ふことゝ、「跡が宿屋の傷み」（逃げて死なれては揚屋の損である故）をいひかけ、「傷み」に「伊丹」をいひかけ、「伊丹へ行けだ」に「池田」をいひかけたので、さても自由な筆かな。傳法・伊丹・池田は大阪附近の地名で、こゝの前の文に、「死なぬ先連れて北野」に「來た」をいひかけ、「死んだら體を梅田」に「埋めだ」をいひかけ、「御無心ながら」に「長柄」をいひかけた、北野・梅田・長柄も大阪及びその附近の地名で、これ等探す方面の地を擧げたのである。

***あとぐすり**　後藥とは申しながら、江南の橘江北に植うれば枳となるとかや、所もかへて育て給はば、大智惠者ともなり給はん（釋迦）

〔後藥〕手後の意にいふ。後れぱせに手當すること。

***あどけなし**　わりなき涙のあどけなさを、男いよいよをかしがり（十

「あだの悋氣」とは、己に關係もないに起すいたづら悋氣。法界悋氣の意より法海寺につゞけたのである。

「あだの情」とはかりそめの情。

〔徒口念佛〕いたづら念佛。でたらめ念佛。

〔徒競〕もろくはかなさを競べること。

〔徒しが浦〕「あだしが原」などといへば、徒しが浦とも云うたのである。「し」は語意を強める助詞。

〔徒しが原〕無常の原。墓原などにいふ。

〔徒し煙〕無常の煙。火葬の煙などにいふ。

〔徒し野〕無常野。墓地などにいふ。徒然草に、「あだし野の露消ゆる時なく云々。」

〔徒淨瑠璃〕いたづら淨瑠璃。でたらめ淨瑠璃。

〔徒し世〕無常の世。はかなき世。

〔徒寢〕男女離れて空しく寢ること。ひとりね

〔徒花〕咲いても實を結ばぬ花。

〔徒戀〕遂げ得ぬ戀。

〔徒矢〕むだ矢。中らぬ矢。

＊あだ　梅が枝の匂ひに移るあだ心（室町千疊敷）　しんきしんきの空悋氣、終に我身のあだし草（鑓權三）

つくらふ影ぞあだ人に、かくともつげよ黄楊の櫛（艶狩）

前條の語意か轉じて、うはき。なまめいた風情。婀娜。「あだしぐさ」とは、浮氣の身の仇となる種の義にいうたのである。易林本・節用集に、「婀娜」

あた・あた　ただ身が焼ける、あたあたとばかり御意なされ、お熱のさす折からは、あたり四五間の熱さ（女護島）

「あいた、あいた」、嗚呼痛・嗚呼痛）の略。平家物語・入道逝去の事の條に、「身の中の熱きことは火を焚くが如し。臥し給へる所四五間が内へ入る者は熱さ堪難し。たゞ宣ふことゝては、あたあたとばかりなり」。

あたごちまき　あたご粽も皮を取らねば旨味は知れぬ（三國志）

〔愛宕粽〕山城國葛野郡愛宕山なる愛宕權現に參詣し、歸路家苞に買ふ粽を愛宕粽と云ふ。黒川道祐撰・日次紀事（延寶年中成）六月二十四日の條に、「愛宕詣。今日愛宕詣當二千日之千度一、俗謂二千日詣一、男女混雜不レ可二擧數一、或供二百味一、又獻二米錢一、而寺僧六坊之中入下常所二相知一之坊上而休憩、坊人饗二酒食一、是謂二坊着一、則買二火札一、歸路求二樒枝著レ粽、肩レ之歸爲二苞苴一」。

＊あたご・はくさん　茶が拜受の御馬半分づつ切取るとは、愛宕白山指もささば勘忍せぬとつめかくる（百日曾我）　嘘でないよの愛宕白山、八幡太郎義家に五代の後胤（雪女）

〔愛宕白山〕自誓の詞で、愛宕・白山の權現も照覽ありの意。

＊あたたかな　あたたかな事言はれなと聲をとがらし申しける（文武五人男）あたたかな、賴むとは何の口で、ちと利口振出さぬかい（孕常盤）

〔暖〕ぬるい。づうづうしい。づぶとい。

＊あたたまる　二里の間を一貫四百、七百づつあたたまつたと（大經師）

〔暖〕懷が暖まる意。儲ける

あだて　およぎつくやうに存じましても、身請をすべきあだてはなし（吉岡染）　女子の身で代官所を秋納めまで請合うて、牢を出しは出したれども、何をあだてに何とせう（丹波與作）　こちと夫婦は當惑して、樣樣思案して見ても、今で請出すあだてはなし（氷朔日）

もくろみ。あてど。立案。按じるにこの語案立を「あだこ」と訓んだもので、「だて」は「こだて」の「だて」と同じ語か。（「あてど」を「あどて」と倒さになつて轉訛したものとの說はいかが）。商人職人懷日記（正德三年刊）卷四に「このしんしやう一貫目が物はあるなし、今更誰か一錢取替ゆべきあだてもなく」。太平記忠臣講釋・第七に「何をたつきに世を渡らうあだてもなし」。

あたまがち　弟と思ひ甘やかす情が却つてあたまがちになりけるよと、あきれて立ちし垣越しに（雪女）　若し擂粉木などはまゐらぬか（今宮）　右の脈があたまがちなは、

〔頭勝〕たかぶること。うはつぴやうし。うきうきしておちつかぬこと。傾城太太神樂（寶永二年刊）卷二に、「一匁どり（一匁取りの遊女）は鑑の如し、中間鑓もち茶船さしのむすこ、鍛冶屋の三蔵ぐらゐのあたまがちなるもののくふ物にきはまりぬ」。近代長者鑑（正德四年刊）卷之二に、「足手をさかさまにしてばらばら鳥と同道、暮には星をいたゞいてあたまがちなるすぎはひ云々」。俚言集覽に、「あたまがち。此はさしてもなき人の、初對面より倨傲にいかつがましきを云、又うはづりなるを云」。

あたまのかかり　七本松から跡先にこれまで伺ひ參りしが、あたまのかかりがどうもなく、思はず慮外致せしなり（反魂香）

〔頭の懸〕端緒。言葉の言ひ出しのかかり。

あたまはり　小半切のけんどん酒、あたまはりに十文出し、びくにん呼んで念佛講（吉岡染）

〔頭張〕各人同額の錢をだしあはすこと。頭割っ「張」は博奕で錢など賭けることをいふ語の用ひられたのである。「はる」を參照せよ。

＊あぢ　跡から行くは連合か、夫婦あぢぢやと、さし合の惡口（唐船噺）　忍び佇む女夫の姿、夜見世戻りが氣を付けて、ヤアこつてりとあぢなこと（淀鯉）　親仁が手前をあぢにして、末長う出よう爲少しの銀を延引した（二枚繪）　心安い朋友なれども、申し憎いがあぢな氣質で、むざと物の言はれぬ人（鑓權三）

〔味〕うまいこと。よいこと。てぎはよいこと。轉じて、風變りなこと。異なこと。俚言集覽に、「あぢな・あぢなこと・あぢなこゝろもちなど言ひて、常に異る義なり。もと味より出でたる詞なるべし。」「親仁が手前をあぢにして」とは、親仁の見る前をうまく繕うての意。

＊あぢきなし　あぢきなき世を捨て、道心の身と罷成り（五人兄弟）

〔味氣無〕趣味ない。無趣味である。

あぢくつ　ムムこな男あぢくつな連れがある、まだ十九か二十ばかり、むまかものの根元（傑群）

うまくこつてりとしたこと。「あぢ」は味で、うまいこと。「くつ」は「つうくつ」などいふ「くつ」で、或種の語に添はつて語意を深うする語で、「りくつ」（理窟）・「へんくつ」（偏窟）などいふ「くつ」が、聯想上からこんな語にも添はつたのであらう。

＊あつい　内の勝手は知つて居る、必ず用心さつしやれ、身があつければ、どのよな事しようも知れぬ

(阿那婆達多また阿那陀答多)で、無熱惱池また清涼池と譯し、贍部洲の中地にあたり、香山の南・大雪山の北にあつて、周囲八百里あるとぞ。こゝの文は、大阪の四天王寺に龜井水といふがあるので、かく書いたのである。

***あのくたらさんみやくさんぼだい** 阿耨多羅三藐三菩提の五枚兜、大とうれんの降魔の利劔(大織冠)

〔阿耨多羅三藐三菩提〕梵語アヌツタラサムヤクサムボードヒ Anuttara-Samyak-Sambodhi の音寫で、無上正偏智と譯す。佛陀の智德を讃美した一名號で、諸佛最上の妙道である。金剛經に無上正偏智の註に、「無者無₂諸垢染₁、上者三界無₂能比₁、正者正見也、偏者一切智也、智者知₂一切有情皆有₂佛性₁、但能修行盡得₂成佛₁」。

***あのくぼだい** 阿耨菩提の腹卷に、隨求陀羅尼の籠手を差し(女護島)

「あのくたらさんみやくさんぼだい」の略。その條を見よ。

あのものの おまんは中にうろうろと、情なや疎ましや、あのものののが喧しい(薩摩歌) あのものの夜がふけろ、口說はお床でお床でと、むりにお寢間へおしやれば(井筒) あのものの臺詞なし、ひつたりと抱付きて、一度手並を見せ給はば(釋迦)

「彼のもの此のものの」の略。何のかの。かれこれ。

***あはう** 周利槃特のあはうでも(女殺) あはう力の曾我の五郎時致といふかつゐ浪人(會稽山)

ばか。ばかもの。おろか。愚人。

「あはう」は阿傍羅刹(その條を見よ)と云ふ獄卒から起つた語であらう。阿傍は阿防・阿坊などとも書いてあつて、五苦章句經などにも見えてゐる。俚言集覽に引かれてゐる狂歌に、「鼻毛にてとんぼをつりし罪科は、あはうらせつのせめやうくらん」と見え、和訓栞に、「あはう。俗に痴人をかくいへるは、法苑珠林に、閻羅王の事に、百萬之衆諸阿傍是也と見ゆ。或は阿防羅刹より事起りたるにや」と見えてゐる。(阿房は始皇が阿房宮を造りて國を亡せし故事であると云ふ諺草などの說は、こじつけ說であらう)。あはう力といふも度外ればかり力を云ふので、阿傍羅刹の大力からいはれたのであらう。「あはうらせつ」をも見よ。

***あはうばらひ** よい仕合で御改易、阿房拂か切腹か(夕霧)

〔阿房拂〕德川時代に行はれた刑罰で、武士の腰に佩べる兩刀を奪うて追放すること。傾城佛原に「いそぎ町人の見せしめに、刀を奪ひ取り阿房拂に致すべし」。

***あはうらせつ** 牛頭馬頭のあはうらせつ(孕常盤)

〔阿傍羅刹〕梵語 Avoraksas 阿傍は地獄で罪人を呵責する獄卒の名、羅刹は食人鬼と譯す。牛頭や馬頭で人と同じ手をなし、兩脚は牛蹄で、山を排する大力で、三股の鋼鐵叉を持ち、罪人數百千萬を一叉で鑊中に入れるといふ。

あはざののらがらす 九軒阿波座ののら烏、月夜はなほか闇の夜も、瓢箪町を腰付けに(淀鯉)

〔阿波座の野ら烏〕大阪新町の遊廓をぞめいて步く者をいふ。阿波座は大阪新町遊廓內の町名である。新町遊廓の眞中の筋を瓢箪町といひ、瓢箪町の北隣の筋を阿波座筋といふ。「野ら」はなまけものをいふ。烏は「かをかを」と鳴く、そのやうに錢を持たずに遊女を「買を」「買を」と言つて、ぞめいて步く野ら者を「野ら烏」というたのである。伊達髮五人男(寶永四年刊)かりがね文七三かつぶしの條に、「夜の目さの目も阿波座の烏、啼いて明かさぬ夜半もなし」。柳亭筆記に、「新町をぞめく者をあはざ烏といふとぞ」。西澤文庫・皇都午睡に、「阿波座烏は錢も持たず、新町へうせて買う買うと鳴くとの俗謠云々」。攝陽落穗集に、「阿波座烏が新町に行つて、かねも持たずにかをかをといへる事人口に殘れり」と見えてゐる。巢林子のここの文に「月夜はなほか闇の夜も」とあるは、狂言・花子に情人互の贈答の小唄「月夜烏はいつも鳴く」とあるを應用したのである。

あはぬだぶつ 杉が袖から報謝の錢たつた一錢二錢で、三千里を隔てたる大明國への長旅は、あはぬだ佛(天網島)

引き合はぬの合はぬに、阿彌陀佛をいひかけたのである。

あはは 鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはは(浦島)

幼兒の開いた口に掌を當てゝ、輕く叩きながら、聲を出さしめた時の音聲。

あはよい 義貞の目の前、この具足着て働き、あはよくば義貞をしてやらうと思ふ氣はないか(女楠)

機會が好い。運が好い。「あは」は「あはひ」(間)の略であらう。序にいふが、運の好い惡いを、「まがよい」「まがわるい」「まんがよい」「まんがわるい」といふ。この「ま」「まん」も間の字であらう。「まん」を見よ。俚言集覽の增補に、「あはよくば。俗語なり、あはひよくばの義なるべし」。

***あひ** 扨はあひぢやの、サアそなたから錢せう(女楠)

〔相〕合の意、「あひけん」ともいふ。相仲間、同類。ぐる。和訓栞に、「あひ。相をよめり、たすくるとよむより轉じて互に合ふの意なり」。

***あひ** ここは母がおさへまし、あひを致してあげませんと、又引受けてついとほし(堀川波鼓) 皆皆參つてあひをせよ、酒宴に慮外といふことなく、主人下人の隔もなし(鎌田)

〔間〕酒の間をすること。他の者同士が酒を飲合うてゐる間に入つて、盃を受けて又差すこと。

***あび** 阿鼻に墮して苦を受くる(百日曾我) 閻魔の廳に詣でなば、阿鼻獄中に落ちんこと、手を返すより早かるべし(賀古敎信) 阿鼻大焦の猛火の火焔燃上り(釋迦)

〔阿鼻〕梵語アブキーチ Avici で、無間と譯す。現世で罪障深い者が冥途に行つて苦痛を受ける地獄で、此獄に墮落した者は、呵責の器具の總てが間斷なく出で來て、墮獄者の上に加へられ、その身は一日一夜に萬死し萬生して、晝夜間斷なく苦痛を受けるが故に、無間また無間地獄といふ。「阿鼻大焦」とは無間大焦熱地獄のこと。

***あひおひ** 涙の絲の結び松、棕櫚の一木の相生を、連理の契になぞらへ(曾根崎)

〔相生〕同じ箇所から諸共に生ひ出てゐること。「棕櫚の一木の相生」をも見よ。

***あひおもひぐさ** 空に消えてはこ

二段）

無邪氣な。當座許で深い思慮がない。「あど」は相人の略で、和伎者氣無の意か。和訓栞に、「あど。伎人の相手をいふ。宗鏡錄に、如二樗伽緹偶一云、心爲二工伎兒一、意如二和伎者一と見えたり、……新撰字鏡に讃議を訓ぜり、彼此之心相知貌と註せり、小兒などの慮智なくて事をなすを、あどないといふも同義なるべし、一説にあぢなしの轉訛と云」。猿樂狂言に、わきともあどとも云ふ「あど」も相人の意であらう。

***あとじようり** 茶でも所望にござらぬかと、表へ出づれば嘉平次は、あとじようりして入替り、もう休んで下されい（生玉）

「あとじより」ともいひ、「あとにし寄り」の訛語で、「にし」が「じ」に約り、「より」が「ようり」と延びたもの。後へ退ること。あとずさり。

あとじより いとしかはいと、言はんした言の葉は嘘かいな、オオしんき、あとじよりさんすは早あき風か（女楠）

「あとじさり」（後退）に同じ（前條を見よ）。「さんす」は「せられます」の訛略された語である。「あとじよりさんす」はあとじさりせられますの意。

***あとつけ** 與作は荷物も跡附もそこそこになげおろし（丹波與作）

〔後附〕道中馬にて乘客の後に附けた荷物。

***あとづれ** あとづれの子の花次郎（賀古教信）

〔後連〕後妻。

***あどなし** おれにも大きな太夫買うて下されと、あどなき言葉に腰元ども氣の毒がり（夕霧） 急な所に取りまぜし、女郎はあどなきならはしなり（百日曾我）

「あどけなし」に同じ、この條を見よ。狂言記、こんくわいに、「さてもさても人間といふものはあどない者ぢや」。

跡にこがるゝ櫻橋

「別れを歎き悲しみて跡にこがるゝ櫻橋」を見よ。

***あとへん** あゝこれも跡へん、今言うて返らぬ事（生玉） 何言うてもあとへんでは返らぬ（天網島）

〔足偏〕「跡」の字は足偏なればいふ。跡。跡事。運歩色葉に、「足へん」。

***あな** 洛中の今朝のあなかまと、心亂るばかりなり（堀川波鼓）

感動詞あゝ。「あなかま」はあゝかしましい、あゝやかましいの意。源氏物語・御法の巻に、「女房のあるかぎり騒ぎまどふを、あなかま暫しとしづめ給ひて」。

***あないち** 糠袋はおれに下され、巾着にしてあないちのつぶ入れます（萬年草）

〔穴一〕「あなうち」（穴打）の訛であらう。意錢のことで、小兒の遊戯である。地に線を畫し、錢を打つて勝負するもの、近代は錢を用ひないで骰子を用ひた。

和漢三才圖會・十七に、「意錢。俗云二穴伊知一、穴擊之訛乎、……今俾兒多弄レ之、二人或三人錢出合、互更擊レ之、橫引二筋於地一撒レ錢、一錢有レ掌（此名レ主）、以レ之擊二敵所レ指錢一、中則爲レ勝、如誤中二他錢一則（此名二倍留一）爲レ負、初撒時誤出二筋外一則（此名二太禮留一）爲レ負、一種地掘レ穴、大可レ容レ錢、而覘レ穴擲レ錢、入レ穴者爲二自得一取レ之、穴外錢任二敵請一擊レ之中則爲レ勝、其餘如二上法一云々」。日次紀事・十一月の條に、「自二此節一兒童掘レ地爲二小穴一、各以レ錢投レ穴、以二其近レ穴爲二一二次第一、其後每二一人一、出二錢或二錢或三錢一、各集レ錢一手掘レ之、則投二前一穴邊一、然各指二點所レ撒之內一文錢一請レ之、使下二其撒レ錢人一擊上レ之、其人以二別錢一枚一擊レ之、其中下所二散在一錢上者爲レ勝、悉取納下所二擊投一之錢上、是稱二穴一一、不レ中レ錢者爲レ負、不レ能レ納二取之一、而與二奪其一二之次人一、又如レ此、是後京極攝政良經公御記、所謂意錢、而中華擊壤之類也」。

***あなうら** 非道のあなうら大地をつんざき（女護島） 文覺の頂上よりあなうらまで撫下し（一心五戒魂）

〔蹠〕足裏。和名類聚抄に、「說文云跖（音尺、字亦作レ蹠、阿奈宇良）足下也」。

あなかま

「あな」の條を見よ。

***あなばたつたりゆうわう** （松風）

〔阿那婆達多龍王〕阿那婆達多は、梵語「アナバトフタ」（阿那婆策多）で、阿耨達池のことである。この池に棲息してゐる龍王の名で、八大龍王の一。「あのくだつち」をも見よ。

あなりつそんじや （一心五戒魂）

〔阿奈律尊者〕梵名 Aniruddha. 如意尊者と譯し、佛十大弟子の一人。

***あなん** 釋迦如來の御弟子阿難・迦葉（綵靜）

〔阿難〕阿難陀（Ananda）の略で、釋尊十大弟子の一。提婆の弟で釋尊の從弟である。釋尊五十五歲の時から二十餘年間侍者となりて、東西の化導に隨行し、多聞强記を以て知られた人である。

***あにじやびと** 兄じや人、弟死ぬにも死なれぬ口惜しやと（扇八景）

〔兄者人〕もとは「兄ぢや人」であるが、古くから「兄者人」「兄じや人」と書いてある。兄にてある人。兄上。この語武士・町人間に用ゐられてゐる。

あにぢやう 康頼樣は兄ぢやう、俊寛樣は父樣と拜みたい（女護島）

〔兄丈〕兄上。兄樣。丈は丈人の丈で、年長者に對する尊稱である。周易・師の卦の條に、「師、貞、丈人吉、无レ咎」とあつて、王弼註に、「丈人、嚴莊之稱也」。伊藤長胤の通解に、「丈人者老成之稱」と見えてゐる。序云、劇場や相撲場の前に立並べた花客から贈つた大幟に、「何某丈江」と書いたのがあるが、この丈もここにいふ丈である。

あぬまい 只今かやうにせめ念佛にあふことも、出家の身にはあぬまいと、あぬまいあぬまい、アアぬまいだとぞ語りける（女楠）

「あるまい」を態と訛つた語で、「アアぬまいだ」（アア南無阿彌陀の訛）の音に似せたのである。

***あねざと** 嵐が雪をもつて北山・東山、西に姉里・戀廓（雪女）

〔姉里〕姉廓とも書く。遊里。遊廓。

***あねじやびと** 彼の菅笠着て來る女房、鹽町の姉じや人、日の惡い角前髪は弟の幾松（生玉）

〔姉者人〕姉にてある人。姉上。「あにじやびと」をも見よ。

***あねぢよらう** 朋輩といひ姉女郎、ほんの姉さん妹と姉妹の契約して、あねさん便りに勤めたに（生玉）

〔姉女郎〕姉分の女郎。姉として敬ふ女郎。

***あのくだつち** つがひの鴛のすむ水は、あのくだつちの流れと知れ（聖德太子）

〔阿耨達池〕梵語アナバトフタ Anavadapta

陀〳〵〳〵」。巣林子作中に見えるのは作り替へられてはあれども、二三を記せば、夕霧阿波鳴渡に、「ゆふべあしたの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし、野邊より彼方の友とては、血脈一つに珠數一れん、これが冥土の友となる」。傾城反魂香に見えてゐるのもこれと同じである。生玉心中に、「花は散りても根にかへる、人は歸らぬ死出の山」。三世相に、「ゆふべあしたの薄霧も、消えてかへらぬ死出の山」など見えてゐる。閒の山は物哀れな節であるので、長う流行せずに廢つたのである。今も淨瑠璃に閒の山の音節があるは、この手の殘つてゐるのである。「おすぎ」をも見よ。


〔亂曲揃（天和元年刊）所載〕

あひやけ 梶田治部右衛門は、あひやけの聟を思ふも娘の爲（壽門松）
〔相親家〕聟と嫁の雙方の舅同士の稱。倭字通例書に、「あひやけ。相舅」

***あひよみ** 人を害ふ工面とは鏡にかけて知つたれど、相よみなければ是非もなし（歌念佛）
〔相讀〕語共に讀んでゐる者。證人。

あふぎいか 吹かぬ風もつ扇いか（氷朔日）
〔扇凧〕扇の形をした紙鳶。

あふぎうり 煙管・團扇・煙草入、役者評判・扇賣（今宮）
〔扇賣〕箱に扇を入れたのを幾つも重ね持つて賣り歩いたもので、正德頃最も多かつた。


〔天和長久四季あそび（天和頃刊）所載〕


〔傾城禁短氣巻三所載〕

あふぎぐるま 唐團扇・扇車・水車、油煙につれてくるくる廻燈籠（嫗山姥）
〔扇車〕紋所の扇車の狀に作つた風車で、廻燈籠の上に附けたもの。

あふぎながし 扇流の瀧つ波、たぎつて落つる水の綾錦渦卷く如くにて（本領曾我）
〔扇流〕昔時大堰川で遊興に扇を流したことをいふ。黑川道祐撰、雍州府志・九・古蹟門下（葛野郡）に、「扇流。在二大井川一、中古高貴遊覽時、浮二金銀扇於斯川一、而遣レ興、倭俗以二金銀箔一飾二扇面一」。

扇の影 因果の車めぐり來て、遊女の身とは生れしぞ、親里を振りすて扇のかげに宮仕へ。左手も他人右手も他人（三世相）扇のかげや庭寶、妹女郎朋輩衆、唐の鏡を鴛鴦の、相の枕に渡してたべ（三世相）破れ車でわが惡いとはいひながら、扇の蔭の立烏帽子、舅といひ元は伯父、跡嗣の約束なれば、今では親子ぢやないかいの（卯月紅葉）
梓巫女が口寄にいふ語である。己が御蔭に預り主人として立仰ぐ者をいふ。「扇のかげ」とは、御蔭に預る者をいひ、「立烏帽子」とは立仰ぐ意にいうたので、立仰ぐといふ立に、立烏帽子といふ烏帽子があるのでそれをかけたまでゞ、烏帽子に何も意味があるのではない。卯月潤色に、「出船は遠く、入船の親しうなるは世の習、烏帽子寶の親仁樣」とある、烏帽子も單に附添へたまでゝあつて、梓巫女が物々しげに言ふ言方であらう。三世相にある「扇の蔭」は、扇屋の庇護をきかせたのである。

扇の女 今は我名をつつみても、何か其かひなつ果つる、扇の女の物狂ひ（歌念佛）
班婕妤の故事。「秋の扇」を見よ。

あふぎぶろ わしがまへかた扇風呂にゐた時からの近付ゆゑ（生玉）
〔扇風呂〕湯女風呂屋の屋號。「風呂屋」の條をも見よ。道しるべ（延寶六年刊）に、「天滿五丁目・扇風呂五郎右衛門、湯女三人」と見え、元祿曾我（元祿十四年刊？）卷三に、「扇風呂の荻、みなとやの近を取寄せけるに、……扇風呂の荻の上風はつとほのめかす空燒、あけぼの模樣の地白に茶綸子のしごき帶、緋縮緬の内衣云云」と見えてゐる、この扇風呂のことであらう。湯女荻の衣裝を見ても立派であるやうに、おさがが述懷にある如く、彼女が扇風呂の湯女として全盛を張つた當時は、伏見坂町あたりの遊女よりも勢力があつたことが知れる。

***あふぎをり** 御影堂の扇をり、ほれ身を碎き稼げども（百日曾我）
〔扇折〕扇を作ること、又その人。「みえいだう」をも見よ。

***あふこ** 朸おつ取り振上ぐれば（女殺）
〔朸〕物を懸けて荷ふ棒。てんびんぼう。和訓栞に「負木の義にや、今の俗おごといへり、……野人てんびん棒ともいへり」。

あふさかのゆふつけどり （反魂香）
〔逢坂の木綿附鳥〕昔、逢坂は平安城東方の關、四境の一なれば、木綿附鳥を放されたことがあつたので、木綿附鳥と云うたので、こゝの文、「逢坂の」は「ゆふつけ鳥の文飾に用ゐたまで。「あふさかのゆふつけどり」といふこと古歌にも見えてゐる。「ゆふつけどり」をも見よ。

れもまた、行方も知らぬあひ思草(曾根崎)

〔相思草〕煙草の異名。「空に消えては云々」を見よ。「おもひぐさ」をも見よ。

***あびき**　網引すとあごととのふる網船の(三國志)

〔網引〕網を引くこと。「あご」をも見よ。

***あひくち**　見苦しいお侍、あひくち一本ささぬ町人、手むかひは致さぬ(大經師)　されば先御懷胎とも申されぬ、然らば御脈と合口ぬぎ、揉手をして(冷泉節)

〔合口〕鍔なくして、鯉口と柄の縁と合ふやうに作つた短刀。「合口脱ぐ」とは、差いてゐる合口を脱して置くので、そして脈搏を診察したのである。序にいふが、合口を脱いだのはその時の都合によつたので、診察するときには必ずしも合口を脱ぐのではないことは、人倫訓蒙圖彙巻二に、醫師が刀を差いた儘で病人の脈搏を診察してゐる畫などがあるので知れる。醫師の風采につきては、新可笑記(元祿元年刊)巻三に、「醫學も一年足らずして俄剃りの天窓を振り、長羽織に小脇指、藥箱丁寧に拵へ云々」。

あひけん　奥様のあひけんにて、お袖の下より金いただき(艶狩)　お蘭が來たも皆あひけん(薩摩歌)　本人の行方隱すはあひけんにて落せしな(川中島)

〔相見〕相見識る義。互に知り合ひづく。馴合ひづくの詐僞。共謀。ぐる。

***あひことは**　味方討すな、同士討すな、あひ詞も三度に替へ(碁盤太平記)

〔合詞〕豫め何と言へば何と答へるやうに詞を合せ置き、暗中などで敵味方の區別つかぬ時に、互に言合ふ詞。

あひざし　行司聲かけ、御相撲見えた、勝負ない、あひざし・あひ投げ・とたんのわれ、勝負なしと引分くれば(井筒)

〔相差〕相撲の手の名。互に敵の脇へ手を差込むこと。

***あひしやう**　お爲を思ふ新七がさほどお氣に入らぬは、水と火との相性か、あまりといへば曲がない(淀鯉)　相性よしの水と金(賀古教信)

〔相性〕人の生れた年の干支の五行(木火土金水)を其人の生れつきとし、木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、水は木を生ずとし、これを相生といひ、木は土に剋ち、水は火に剋ち、火は金に剋ち、金は木に剋つとしこれを相剋といふ。相生・相剋の關係によつて、男女主從朋友などの間柄の吉凶を占ふを相性を見るといふ。相生は吉で、相剋は凶である。水と火は相剋なるによつて凶である。

一世相小鏡に、「男水・女金、大きによし、子七人あり、裕福のことあり、富貴なり、氏神を祭りてよし、眷族多し、歌に、この世にてかかるたのしくめでたさよ、昔の神の誓なるらむ」「男金・女水、大きによし、子五人、富貴にして命長し、田畑多し、よくよく氏神を祭りてよし、心のまゝなるべし、歌に、いにしへも今も昔もこの頃も、きのふもけふもたのしかりけり」。

***あひずみ**　相住の道心は二三日以前より石山參りの留守なれば(卯月潤色)

〔相住〕同住。同居し。

***あひずり**　科人は惣兵衞一味のあひずり十人あまり、粟田口にて獄門にかかる筈(淀鯉)

〔相掏摸〕諸共に掏摸などする惡漢仲間。「すり」は摩で、人の物を摩り掠めるよりいふ。

***あひたてなし**　子を寵愛のあひたてなく(鑓權三)

分別ない。わけもない。諺草に、「俗に恩愛の心なきを愛立なしと云」とあれど、間斷無しの義であらう。「あひたてなし」は「あひたちなし」の轉。

あひづらふそく　與兵衞せくな、女郎と詰開いて男立てい、會津蠟燭が光りだてしたら、此方二人が心切つて踏消してくれる(女殺)

〔會津蠟燭〕岩代國會津地方から出る蠟燭で、花模樣など描いてあつて會津の名物である。こゝの文は、會津客を會津蠟燭と嘲弄したのである。雍州府志・土産門下、服器部に、「蠟燭。凡蠟燭自二越後一來者爲レ上、蠟色潔白而燭光明、陸奥會津・越前福井次レ之」。

***あひてだい**　惣兵衞といふ相手代、若い旦那の氣をつめさせ(淀鯉)

〔相手代〕同じ商家の主人に仕へてゐる手代。

***あひどの**　相殿に在す鏡の威光におされたり(振袖始)

〔相殿〕同じ社殿に二柱以上奉祀してあること。

***あひのまくら**　なう懷しのあひの枕や(卯月紅葉)　心に殘るは鴛鴦の、あひの枕の我夫よ(三世相)　戀しきはあひの枕、いとしきは唐の鏡(三世相)

〔相の枕〕梓巫女が口寄にいふ語である。夫婦は同一の長枕をして寢たので、これを相の枕といひ、轉じて妻から夫のことをいひ、また夫から妻のことをいふこともある。

***あひのやま**(夕霧)(反魂香)(三世相)(生玉)

〔間の山〕間の山節の略で、人生の無常をうたうた俗曲である。寬文・延寶頃、伊勢國尾上坂及び浦田坂の間の山で、簓を摩り三味線を彈いて、間の山を唄ひ、往來の人から錢などを貰ふ袖乞の一種の者がゐた。京阪地方にも間の山を唄ふ物貰が居つて、三味線の代りに胡弓を用ひたのがゐた。生玉心中・下之巻に「萬歳があいきやうある間の山」とあつて、間の山の唱歌の流行しては萬歳も謠うたものである。神都名勝誌・四に、「間の山節。往古僧行基の兩宮に參詣せし時、世人に無常を示さんとて唱歌數首を綴り、比丘尼にうたはせしが初なり、寬文・延寶の頃に、兩間の山の路傍に小屋を作り、女は紗綾縮緬を纏ひ、三絃を彈き、男は編笠を被り簓をすり、子兒を踊らせ錢を乞ひき、其謳ふ歌いと哀れにして、文句も能く聞分けられたるよし。」井原西鶴撰の日本永代藏巻四、仕合せの種を蒔錢の條に、「相の山袖乞までも心ながく、道者の機嫌を取りて饑ゑず寒からず、身に絹布をかざり、連れ引きの三味線に乘せて、あさましや心一つといふ一節、いつ聞きてもかはらず」。間の山の歌詞は一樣でないが、その本調子の一を記せば、「ゆふべあしたの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし、花は散りても春は咲く、鳥は古巣へ歸れども、行きて歸らぬ死出の旅、野邊より彼方の友とては、金剛界の曼陀羅と、胎藏界の曼陀羅に、血脈一つに珠數一連、これが冥土の友となる」。落葉集(元祿十七年刊)巻七、間之山念佛に、「憂き事を思へばいとゞ胸の火の、消え易き身といひながら、輪廻のきづなに繫がれて、南無阿彌陀〳〵〳〵〳〵。夢のうちなる夢の世を、さとらぬ事のはかなさよ、南無阿彌陀〳〵〳〵、野邊よりあなたの友とては、胎藏界の曼陀羅と、血脈一つに珠數一連、南無阿彌

レ乘之船一而坐レ之、故號ニ神集之形狀一」と見えてゐる。

あまかわさんごじゆ 御物蒔繪の印籠・あまかわ珊瑚珠はさもなくて（反魂香）
〔阿媽港珊瑚珠〕阿媽港から渡來した珊瑚珠。阿媽港は卽ち支那の澳門である。長崎蟲眼鏡（元祿十七年刊）下卷、日本渡海御停止國國の條に、「阿瑪港」とありて「あまかわ」と傍訓してある。（澳門は「アウムン」の音である。土人阿媽港と呼べるを、蘭人聞傳へて「マカヲ」というた。蓋し阿媽港の名は、此半島にアマと稱する一神祠があつたより起つたもので、アマノ瀨戶(le detroit d' Ama)の意だといふ。現今もなほバラ塔下の神として祀られてゐる)。

あまきる 天きる雪はばうばうばう。寒氣しきりにさつさつさつと（雪女）深草山あまきる雪に雲暗く、まだ朝あけの心地して（烏帽子折）
〔天霧〕天の曇りあふをいふ。「あまきる」は奈良時代に多く見える語で、「あまきらし」「あまきらふ」などともいうてある。

あまくに 將軍樣の御重代、天國・小鍛冶・義光、其外名に負ふ銘の物（雪女）
〔天國〕天國作の刀。天國は大寶頃の刀匠で、大和國宇多郡に住し、平家の寶刀小烏丸を作つた人である。

雨乞の小野の小町（會稽山）
「天の下咎めて陳ねし云々」を見よ。

*＊***あまさかさま** あまさかさまの事にても、主に踏まれて恨みはない（淀鯉）
〔天逆樣〕眞逆樣 平治物語に、「いかなるあま逆さまの仰せなりとも、違ふまじとこそ存ずれども」。

*＊***あまさかる** 雲井をここにあまさかる、九州二島の浦浦まで（日本武尊）
〔天離〕遙に遠く離れる。「さかる」は離れる意を示す「さく」といふ語に對する自動詞である。巢林子作の心中二枚繪草紙に、「あまさがり」としてあるのは、正しくは「あまさかり」または「あまざかり」とすべきである。

あまちや 昔より宇治茶・近江茶、又は唐茶・甘茶などとはいへど（大織冠）
〔甘茶〕土常山又は絞股藍の葉を蒸し、揉みて綠汁を去り、これを乾したものを湯に入れて煎じたもの。

あまつかとり 天津かとりの妙色衣御腰に纏はれて（釋迦）
〔天津縑〕美しい縑絹。縑は固織の義。目を細く固く織つた絹布。

あまつかなぎ 晴明右近に近付き、りつかうりくていの祕文を唱へ、天津金木・天津すがそをちくらの沖戶におきたらはして（酒呑童子）
「あまつかのき（天津握之木）」の略轉。「つかのき」とは小木の枝。大祓詞後釋に、「天津とはその本天つ神事なれば尊みていへり、……金木は……握之木といふかたなり、大きならで手に取るばかりなる木のよしなり」。

あまつすがそ あまつかなぎ・あまつすがそ（酒呑童子）
〔天津菅麻〕よき菅麻をいひ、秡の時神に供するもの。 延喜式・卷八、大祓詞に、「大中臣天津金木乎本打切末乎斷氐千座置座爾置足波志氐天津菅曾乎本苅斷末苅切氐」。

あまつふとのつと 神鏡抱き奉り頭に捧げ、口には天津太祝詞、惡女が眉間に差向け差當て（振袖始）
〔天津太祝詞〕いかめしい祝詞。「あま」は美稱、神事なれば尊みていふ。「つ」は助詞。「ふと」はいかめしい義。「のつと」は祝詞で、神に告申す詞。

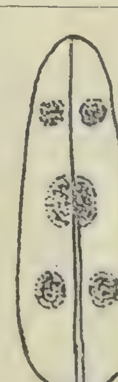
あまつふり あまつふりかざつふきには、いきだかだあ、しんだかだあと、おとひやつてたもり申す（加增曾我）
雨つ降り、卽ち雨の降る意。こゝ文は、雨の降り風の吹く時には、生存してあるかなあ、死んだかなあと、お尋ね下さつて給はりたいとの意。

あまのいはくすぶね 天の石樟葺分けの、手ぐりぐりぐりぐり船に乘せ奉り（烏帽子折） 三歲足立ち給はねば天のいはくす釣船の、下すやる釣の絲櫻（賀古敎信）
〔天磐櫲樟船〕櫲樟で造つた船。「天」は美稱。「いは」は堅牢の義。伊弉諾尊、その御子の蛭兒三歲脚立ち給はねば、天の磐櫲樟船に乘せて放ち給はれたといふ。神代紀・上に、「次生ニ蛭兒一雖ニ已三歲一脚猶不レ立、故載ニ之於天磐櫲樟船一、而順風放棄」。

あまのいはくら 尊怒りの御聲高く、天のいはくらにして天照神、吾が孫子は瑞穗の國の君たるべし（日本武尊）
〔天磐座〕「天」は美稱、神事なれば尊みていふ。「いは」は堅牢の義。「くら」は御座所。神代紀に、「皇孫乃離ニ天磐座一」。

*＊***あまのうきはし** 天の浮橋いつの間に、我が爲辛き途絕して（振袖始）
〔天浮橋〕古事記傳に、「天の浮橋は、天と地との間を神たちの昇降り通ひ給ふ道にかゝれる故に、浮橋とはいふならん」。

あまのおもて 朝比奈は御旅、あまの面に節遠き、塗籠のひられば二十四立（五人兄弟）
〔安麻面〕安麻の舞の時に、顏面にあてる紙に文がある、それのやうに文ある羽をあまのおもての羽といひ、この羽ではいだ矢を、あまの面ではいだ矢といふ。



あまのかごゆみ 忝くも天照大神、天のかご弓・羽羽矢を以て惡神をしづめおはします（枕狩）
〔天鹿兒弓〕天の香山の櫨木で作つた弓で、香と鹿兒と訓が同じ、故にいふとぞ。また一說に、鹿を射る弓といふを、誤つて鹿兒としたのだといふ。 日本書紀神代・下に、「高皇産靈尊賜ニ天稚彥天鹿兒弓及天羽羽矢一以遣レ之」。釋日本紀に、「私記曰、問、此矢弓具體如何、答、具義未レ詳、但或說云、採ニ天香山之櫨木一造レ弓、故謂ニ之天鹿兒弓一」。日本紀纂疏に、「天鹿兒弓一名天櫨弓、舊說云、採ニ天香山之櫨木一爲レ之、故命曰ニ鹿兒一、與ニ香字一其訓同矣、一說射レ鹿之弓也、誤分作ニ鹿兒一」。

あまのさかてをうつ 夜半の鐘の物すごき、心にこもる願事に、あまのさかてをうつてうけへば（蟬丸）
手を後にまはして拍つので、人を呪詛するわざである。彥火火出見尊が兄の火照命の釣道具を借りて釣をされ、釣針を失はれたのを、兄の命になんでも釣針を返せと責めら

***あふち**　お吉を迎ひに冥途の夜風、はためく門の幟の音、あふちに賣場の火も消えて(女殺)　蚊帳打上ぐるあふち風(薩摩歌)　火炎は却つて薬隠れたる敵の上に燃掛り、一騎も遁れぬあふち死(日本武尊)

〔煽〕あふちかぜ(煽風)。吹卷くる風。あふち死とは、風にあふられた火炎で燒死すること。

***あぶなもの**　いひすてて歸るそそくさ坊主、未來頼むはあぶなもの(宵庚申)　心々變る時は兄弟ながら敵對なり、同道はあぶなもの(持統天皇)

〔危いもの〕の略。あぶないもの。

あふみ　時にあふみや世に出雲(用明天皇)

時に逢ふに近江をかけたのである。近江とは初代竹田出雲の後名、是時五十七歳。用明天皇職人鑑の上演は、外題年鑑に寶永二年二月とあれども、操年代記に寶永二年十一月とせるに從ふべきである。この時竹本筑後椽は病氣の故を以て退隱してゐたので、竹田出雲代つて座元(時に十五歳)となる。近江は子の出雲淸定の後見にて初上演故、近松が近江父子の將來を祝した詞である。「いぬのかほみせ」をも見よ。

あふみ　江戸のあふみが繼棹で、朝酒見事杯の(懸物揃)

〔近江〕江戸總鹿子卷七、諸職名匠諸商人の條に、「琴三味線師＝京橋北壹町め石村近江」と見えてゐる。

***あぶらぐち**　とろりとだます油口(聖徳太子)　底意の惡を座興になし、言ひすべらする油口(浦島)

〔油口〕油のやうに口滑りのよい義。しぶらずに能くしやべる口。

あぶらずみ　お供の奴の髭にぬる油墨などのお尋ねもあるべきに(反魂香)

〔油墨〕油をまぜた墨汁。

***あぶらつぼ**　油壺から出す様な男・しんとんとろりと見惚れる男(鑓權三)

〔油壺〕つやつやしう美しい男を形容して、油壺から出す樣な男といふ。元祿曾我物語卷一に、「御姿を見申すに油壺から出す樣な男、愛相らしき御詞に頭から惚れまして」。

***油鼠**　野狐が油鼠の餌に釣らるゝ類(女夫池)

〔油鼠〕油で揚げた鼠。油鼠は狐の好物であるが故に、狐を釣る餌に用ひる。

***あぶらのぢごく**　お吉が身をさく劍の山、目前油の地獄の苦(女殺)

〔油地獄〕沸立つ油の中に入れられて焦熱地獄の苦しみを受けることをいふ。(兇賊石川五右衞門の釜煎は沸立つ油の中に入れられたのだといふ)。こゝはお吉が油を賣る場で劒難斷末魔の苦患をかくいうたのである。

***油屋の九平次**　よう見覺えた、取も直さず油屋の九平次(生玉)

曾根崎心中(巣林子作)に見える人物である。人名部「九平次」を見よ。

***あふり**　馬の皆具には泥のかゝるもの故に、あふりといふ字は泥をへだつと書く(女殺)　渡邊があふりずりをしつかと抱く(関八州)

〔泥障〕障泥とも書く。馬の腸腹を覆ひ、泥の跳上るを防ぐもの、毛皮又は革で製す。和名抄に、「阿布利、鞍飾也」。貞丈雜記に「泥障は、もとは雨天に衣服にはねつく泥を障る爲のものなり、後には晴天にもこれをさして飾とするなり、武用にはいらぬもの故、軍陣騎射などに用ひる事はなし」。「あふりずり」とは、泥障が鐙に擦れる所をいふ。

あぶりこ　てつきう・あぶりこ・鐵火箸(氷朔日)

〔炙子〕餅などを燒くに用ひる鐵の網又は棒。

***あふりやうし**　我々はこの國の押領使横山殿の御内の者(小栗判官)　必定村上が領分へ馬を入れ、信濃一國押領の威勢をあらはす爲な(川中島)

〔押領使〕姦人盜賊などを討平する役で、土地の豪族や國司・郡司の武藝に長じた者が任ぜられる。「押領」は「押領使」の略。

***あふる**　畠につかふ野飼の馬、うてどもあふれども、飼はねば痩せて足立たず(女楠)　前脚かいて高嘶き、打てどもあふれども、尻込みしてははね廻る(持統天皇)　東國の馬は鞍そばえ・躍上つて高嘶き、あふつつ打つ十四五間(日本武尊)

〔煽〕馬を進ましめる爲、馬上で兩鐙を動かして馬腹を蹴立てるをいふ。「あふつゝ」は「あふりつゝ」の略。

あふれつはもの　頼義を御宿し、御馳走の體にて討取らんと、あふれつはもの七百騎隱し置きて待つところに(文武五人男)

〔溢兵〕手にあまるつはものゝ義。荒武者。

***あふれもの**　所々に立てる高札を背きしは、敵のあふれ者か、但盜賊か(女楠)　前代未聞のあふれ者、搦取つて此處の探題へ引けや(西王母)

〔溢者〕手にもてあまるあまし者。無法者。無頼漢。狭衣・四の中に、「今にさやうなるあふれもの、いでくまじげなる世にこそと、打ちさざめくもありけり」

あべかこ　「べかこ」「しんすけ」を見よ。

***あへなし**　扨は我ゆゑ自らゆゑと、あへなき首の髮をなで、聲も惜まず泣き給ふ(井筒)　あへなき聲にて、目には見ゆれど形はなく(天神記)　父長兵衞は一人子を敢なくなせしその悔み(卯月潤色)

〔敢無〕詮ない。はりあひない。「敢無くなす」とは、はかなくなす。死なす。

***あべのせいめい**　頼光の代官として渡邊の綱、安倍の晴明を誘引し(酒呑童子)

〔安倍晴明〕花山天皇時代の人、算暦天文卜筮に熟達し、陰陽學の大家である。花山天皇が帝位をおり給はれたことを天文を見て知り、また古淨瑠璃信田森に、安倍保名が狐の命を助けた恩返しに、その狐が或は僧となり、或は美女にばけて保名を保護し、保名と契つて安倍童子(晴明)を産みて、葛の葉の子別れとなることなどは、人のよく知るところである。

あぼのおんかみ　出雲の國におはします阿菩の御神これを救ひ止めんと(會稽山)

〔阿菩御神〕萬葉和歌集卷一、中大兄三山歌の仙覺註に、「播磨風土記云、出雲國阿菩大明神聞二大和國畝火香山耳梨三山相鬪一、以二此歌一諫レ山上來之時、到二於此處一乃聞二鬪止一、覆二其所

璃平家物語(寛永七年刊)巻五に、「和泉木綿をはな色に、しろき絹の手のちらし形云々」とありて、この挿繪が入つてゐる。夜討曾我(寛永古活字版)に、「あみの手はすがいたう」とありて、この紋繪が載せてある。

*あめうし　こちのあめ牛に牛の魂が出るとて(嵯峨天皇)
〔黄牛〕飴色の毛の牛。箋注和名類聚抄に、「黄牛。辨色立成云、阿女宇之」。

あめだうし　れつそりの牛盗人、ちよろい工のあめだ牛(關八州)
「あめうし」(黄牛)を「あめだうし」とも毛色によつていふのである。丹生山田青海剱繪盡(刊本)の序文に、「敷島のうらゝかなる源氏物語巻々のいや高きに、山田の長がつかひこみしあめだ牛にすきかへし上げし大操云々」。大内裏大友眞鳥・第四に、「ヤイ助八、此春のあめだ牛博勞から何程で買つた」。

*あめのあし　死に後れじとたどれども、子供の足に雨の脚(賀古教信)
〔雨の脚〕雨が地面に落ちて散る状、脚あつて飛んでゐるやうに見えるによつて云ふ。雨。この語古くから用ゐられ、源氏物語・夕顔の巻に「内よりの御使、雨の脚よりもげにしげし」。蜻蛉日記に「雨の脚いとのどかにてあはれなり」など見えてゐる。

あめのかごゆみ　「あまのかごゆみ」を見よ。

あめのしたの御寶　「百姓と書きて云々」を見よ。

あめのぶちごま　「あまのぶちごま」を見よ。

天の御門　天の御門の御廟野よ(蟬丸)
天智天皇をさす。

*あめやさめ　涙は車軸雨やさめ(井筒)
〔雨やさめ〕「さめ」といふも雨のことである。小雨を「こざめ」、春雨を「はるざめ」といふ類の「さめ」である。「雨やさめ」とは雨の甚しいことで、甚しく流涕するに喩ふ。桂川連理柵(淨瑠璃)帶屋の段に、「抱起して顔つくづく見る目もあかれぬ雨やさめ、長右衞門もこの世の別れ」。

*あも　このあもは正月の、在所へやらうと思へども(歌念佛)　今宵はお寢間でしつぽりと、お二人のあもつき(關八州)
「あんも」ともいひ、甘の義、餅をいふ。和訓栞に、「あも。兒女子の語に餅をいふ、甘き義なり」。「浪花方言に、「あも。餅なり、江戸でいふあんも」。「あもつき」は餅搗で、房事にいひなしたのである。魂膽色遊懷男、大臣紋日をくゝり枕の條に、「これから餅搗く一段ちやと」とあるのも、男女交接の意。

あもとふもと　さりながらあもとふもとも御存じなく、夫婦とは誠しからず(天鼓)　跡な奴が國處、あもとふもとの赤松を、打割り松の油煙髭(薩摩歌)
足元踏元の義。身許。俚言集覽に、「あもとふもともしれぬといふ俗語あり、おぼつかなき心なるべし」。薩摩歌のこゝの文は、恰も地名のやうにあもと麓にきかせ、麓の縁で赤松といひつゞけたのである。

*あやかりもの　果報者め金持め、あやかり者めと騷ぎける(淀鯉)　與次兵衞殿はあやかりもの(壽門松)
似てありたいもの。「あや」は「あえもの」などいふ「あえ」と同じもので、「あゆ」(肖)の轉訛語である。

*あやす　勿體なくも此寺に、血をあやす奇怪さよ(出世景清)
血または汗などを流す。したゝりもらす。「あやす」は、つめて「あゆ」とも云ふ。うつぼ物語に、「たぶさの血をさしあやして」。古事談に、「血あゆ」。

*あやすげがさ　横笛はあやすげ笠にて顔隱し(娥)
綾藺笠をいふ、藺を編んで作つた笠であつて、菅笠ではない。後三年合戰繪巻には、この笠を烏帽子の上に被つてゐるのがある。田樂法師や山伏も被つた。貞丈雜記に、「今の編笠也、但今の編笠は深し、あやゐ笠は深からず、一名ひでり笠ともいふ」。修驗抄に、「修驗所レ具班蓋者、佛界薩埵天蓋、慈悲覆護形相也、凡天蓋者、一切衆生住ニ悲母胎内ニ、戴ニ袍衣ニ義表也、其形圓形者、表ニ五位圓滿之相ニ、圓形金界月輪也、白綾裹レ之八葉胎藏也云々」。謠曲拾葉抄巻十二、安宅の「あや菅笠にて顔をかくし」の註に、「菅の笠に非ず、修驗抄に班蓋と書て、あやいがさとよめり」。

*あやつり　操の御評判とぞなりにける(堀川波鼓)
〔操〕操人形を淨瑠璃に合せて演じる操芝居の略。

*あやは　狛の伶人舞樂を奏し、くれはあやはの二人の織姫きたりんりんず(栬狩)
「あやはどり」(漢織)の略。漢國から來た織工を漢織と云ひ、吳國から來た織工を吳織と云ふ。日本書紀に、應神天皇三十七年春二月、阿知使主をして縫工女を求めしめた、四十一年二月に漢織吳織等を得て歸つた、また雄略天皇十四年正月、身狹村主青・檜隈民博徳等を吳に遣はし、手末・才伎・漢織・吳織及び衣縫の兄媛・弟媛等を率ゐて歸つたことが見えてゐる。本居宣長は漢織は吳織で、卽ち一つものだといつてゐる。

あやふにち　何の科なきそなたまで、あれ不義者とあやふ日、終に命のほろぶ日(大經師)
〔危日〕古暦中の語。大雜書(寛永十一年刊)に、「あやぶむとは險厄の日なり、萬事不用」。こゝの文は、身を危くするを危日にかけたのである。

*あやむ　人をあやめし科によつて人が(博多)　人をあやめ法を背いた科(歌念佛)
「あやぶ」(危)の義。「む」と「ぶ」と通じたので、「かぶろ」(禿)を「かむろ」と云ふ類である。危害を加へる。殺す。

*あやめ　待つにつれなき時鳥、人やあやめの門の內、奥を遙に見入しに(虎が磨)　親子兄弟菖蒲の盃するとて・今日の節句は嘉平次の顔が見えぬと(生玉)　今日の菖蒲の節句にも(生玉)　澤邊の眞菰かきつばた、菖蒲は軒の祝ひ草(扇八景)
〔菖蒲〕菖蒲は惡氣を除くとて五月五日(端午)の節句の祝草として用ゐる。菖蒲を軒端に挿しもしたので「あやめの門」「菖蒲は軒の祝ひ草」ともいひ、端午の酒宴には、菖蒲を細く刻んで酒に入れた菖蒲酒を用ゐる。荊楚歲時記に、菖蒲酒は瘟疫を碎くと見えてゐる。菖蒲の節句とは端午「五月五日」の節句をいふ。

あやめぐさ　憂ひ臺詞のあやめ草、露の音しも御身と我が・積る涙の雫かや(重井筒)
〔菖蒲草〕歌舞伎役者芳澤菖蒲に菖蒲草をいひかけて、あやめ草におく露とつゞけたのであ

れて、困られてゐたところを海神の敎によつて尋ね得、様々の呪どもを言ひつゞけて、後手で釣針を兄に投げ與へられた故事。詳しくは記・紀を見よ)によつて、人を呪ふに手を後方にやつて拍くことを、あまのさかてを拍つといふ。伊勢物語に「かの男はあまの逆手を拍ちてなんのろひをるなる」。「さかてをうつ」をも見よ。

あまのじやこ　折がな折がな、さあここぢやと思へば傍にきつとあまのじやこ、面倒な、あまのじやこのない時節を(聖德太子)

人の妨げをする邪戀な者をいふ。「あまのじやこ」は「あまんじやく」ともいひ、「あまのさぐめ」(天探女)の「め」を略して轉訛した語である。多聞天が踏締めてゐる鬼女形の者を天邪鬼(また海若とも書く)といふも、天探女から來た名であつて、正しい道に立つ多聞天の威力を示す爲に作られたものである。雜語考に、「神代紀に、天探女、此云二阿麻能太愚謎一とあるた、口決に、天探女從レ神護女也といひ、又一說に、探女探二他心一、多二邪思一也といへる……今の世の嘗にも、さる女をさして天之邪古、また天之自夜久などもいへり」櫻陰腐談一に、「羅山子說、多聞天王所レ踏二鬼、名二耐薬一或有二典據一、我無レ所レ檢」

あまのたくみ　泊瀨の皇子即位あり、雄略天皇と申し奉り、天のたくみを享けつぎ(浦島)

〔天工〕庶官治める所の事、もとこれ上天の工事である。人君天に代つて治めること。尙書・皇陶謨に、「天工人其代レ之」。

天の戸の明く　思出づれなつかしや、君に逢ふ夜は天の戸の、あくるを恨み語らひし(井筒)

天照大神、素戔嗚尊の暴戾を憤り給ひ、天の岩屋に入つて出で給はれぬ爲に、天地暗くなつた。それで群臣愁ひ迷うて大神出迎の策を講じ、天の石屋戸の前で歌ひ舞ふ。大神怪みて、石戸を開いてこれを窺ひ給ふ時、手力男神强いて引出し申した。そこで世が明くなつたといふ故事を用ひて、夜の明けるのにいうたのである。

あまのとぶくろ　大黑舞と囃されて、天のとぶくろだんぶくろ、くわつと開けた初日の色(雪女)

〔天の戶袋〕天の石屋戸の變の故事(前條を見よ)を用ゐて、舞と囃される天の戶にいひなし、雨戸を入れる所を戶袋と云ふから、戶袋にいひなし、だんぶくろと同韻語をつゞけて、大黑天の負ふ袋をきかせ、袋の緣から開くといひ、群臣また光明を仰ぐことを得た緣から、初日の色といひつゞけたのである。

あまのはぎり

「あまのはへきり」を見よ。

あまのはへきり　荒神の天蠅斬拔きそばめ(振袖始)　蘆原大日本神代三振の寶劍あり、一つは天のはぎりとも、または十握の劍とも申し(艶狩)

〔天蠅斬〕「あまのはゝきり」とも「あまのはぎり」ともいふ。素戔嗚尊が八岐大蛇を斬り給はれたといふ上古の寶劍の名。日本書紀・神代上に「素戔嗚尊乃以二天蠅斫之劍一、斬二彼大蛇一時、斬二蛇尾一而刄缺、即擘而視レ之、尾中有二一神劍一」。武家名目抄・刀劍部に、「蠅の和名波閇なるゆゑ、たゞ字訓を假て蠅の字を用ゐしなり、古語拾遺に、天羽々斬、古語大蛇謂二之羽々一、言レ斬レ蛇也とあるによれば、波閇も大蛇のことにぞあるべき、このものおのが身を引はへ行なれば、波閇といひしを、轉りて羽々ともいひしにやあらん」。

あまのぶちごま　足下にしつかと踏へしは、天の斑駒、素戔嗚尊の神力(國性爺)　素戔嗚尊御身の長八尺……天斑駒白泡嚙ませゆらりと召せば、馬の背も撓むばかりの御骨柄(振袖始)

〔天斑駒〕神代に素戔嗚尊、天の斑馬を逆剝された。古事記に、「天照大御神坐二忌服屋一、而令レ織二神御衣一之時、穿二其服屋之頂一、逆二剝天斑馬一剝、而所二墮入一時、天衣織女見驚、而於レ梭衝二陰上一而死」。

海人の戀　海人の戀とは大織冠・行平も、磯にみるめの汐馴衣(女護島)

大織冠鎌足が海人と戀仲であつたことは謠曲・海人や舞の本にも見え、巢林子の大織冠の中にも作り込まれ、在原行平が海人と戀仲となつたことは謠曲・松風に見え、巢林子の松風村雨束帶鑑の中にも作り込まれてゐる。

あまもの　御臺所の御身さへ、こぼれかゝれる當り月、淸瀧が懷にはやめ藥やあま物や(女夫也)

〔甘物〕甘葛を煎じた汁で、嬰兒に飮ますもの。若風俗に「すり粉あまものにて人間育てたるためし數多あり」。女重寶記に「子生れおつるとそのまま、甘草一匁黃連二分粉にして振出し綿にしたし飮ましむべし、五香湯もよし」。

***あまもよひ**　かくまで近き雨もよひ、月も暈召す朧かげ(十二段)

〔雨催〕雨の將に降出さうとする樣子。雨模樣。

網島の心中　網島の心中もござんする、徒然・平家物語、なう父樣何の本がよからうぞ(宵庚申)

(紙屋治兵衞・紀の國屋小春)心中天網島(巢林子作)の院本をいふ。梗概は人名部を見よ。

あみだ　傾げて急ぐ阿彌陀笠(冥途飛脚)　阿彌陀の四十八、割碎きて釜の下(蛙合戰)　町方にはやるあみだの光といふ事して(女腹切)

梵語 Amita. 阿彌陀佛。「阿彌陀笠」とは、後頂にずらして被つた笠。嬉遊笑覽・二、器用部に「あみだ笠は笠の名にはあらず、笠を仰いで後方へ着たるが佛の後光めく故にいふ」。「阿彌陀の四十八」とは、阿彌陀の誓願四十八(「四十八枚彌陀の願」を見よ)を四十八に割碎く事にいひかけたのである。「阿彌陀の光」とは、蜘蛛巢のやうな後光ある阿彌陀を書き、其後光の各端に金額の多寡を記した延紙を引裂いて採籤とし、各人其籤に當つた錢高を出しあひ佛書の籤に當つた者が物を買ひに行くことが中卷の本文に見えてゐる。

あみのて　いたら貝は岩永黨、網の手は須貝黨、大洲ながしは安田の三郎(五人兄弟)　いたら貝は岩崎樣、網の手は菅原殿(會稽山)　波は立つ波かたな波、靑海波に網の手や、紫苑・龍膽・女郎花(吉岡染)

〔網の手〕「手」は「鉤の手」「箕の手」などいふ「手」で、形といふ程の意。網の形の模樣。寬



〔夜討曾我（寬永古活字版）所載〕



〔あみのて〕



（寬闊平家物語所載）

だと手習の、一字一字の讀み聲（釋迦） おのれはこのあらはしやならだ手本たつた一行、文字なら七字（釋迦）
梵字、阿羅婆（或は阿）遮那羅陀の七字をいうたので、この字連續して別に意義があるのではない。

あらひかはのよろひ 幕の内より比企の能員洗革の鎧、同じ毛の兜を高紐に掛け（蛙合戰）
〔洗革鎧〕洗革で威した鎧。洗革は貞丈雜記に、薄紅に染めたものとあれども、春田永年が澀古叢彙に、阿良加波と讀むべきで、洗とは水に浸し釋してつくるからで、白滑革のことであると見えてゐる。但純白の革ではなくて、いさゝか黃ばみある革だといふ。

***あらひぐつわ** 馬に鞍置く隙もなく、洗轡にはだせ馬（兼好）
〔洗轡〕苧繩を附けただけの簡單な轡。岡本記に、「洗轡にて馬乘る事あるべし、此時は兩方の手綱の端を手綱程に結び合せて乘るべし、これ洗轡にて馬の乘りやうなり」。頼朝濱出（古淨瑠璃）に、「この馬天の與へぞと、端綱腹掛引ちぎり洗轡をがんじとはませ、獨兎候へ本多殿とひらりと乘れば」。

***あらひとがみ** さて兄弟はあら人神の神領に三百町、老母が後家領三百町（扇八景）
〔現人神〕人の形を現はして居られる天皇のことをいひ、または人でありながら神に祭られてゐる者で、威靈あるによつていふ。

あらみさき 三韓退治の神功皇后、艫舳に立ちしあらみさきを今見る如き勢なり（國性爺）
〔荒先鋒・荒魂〕荒神。日本書紀・卷之九、氣長足姫尊（神功皇后）の條に、「既而則撝ニ荒魂ニ爲ニ軍先鋒ニ」。源平盛衰記・四十三、神功攻ニ新羅ニの條に、「皇后・異賊を攻むべき旨、天照大神に申され、謹みて慎ること勿れとて、二人の荒みさきを差し副へ給へり」。

***あらせんにん** 我は大通智勝佛、劫成世界の契を違へず、阿羅邏仙人と現じ來れり（釋迦）
〔阿羅邏仙人〕梵語 Ālāra kālāma. 釋尊出家後暫く師事された老哲學者で、印度王舍城の北彌樓山に住んでゐた。巢林子は、この仙人を大通智勝佛の權化としてゐる。

あららやりて 十二より賣られ來て、女郎さん達の手入れにてあらゝ遣手に宮仕へ（戀物揃）
阿羅邏仙人（前條を見よ）の阿羅邏に、荒々しい遣手をいひかけたのである。この前文に「出山の釋迦頭」といふたその緣でかく洒落た。「遣手」に就いてはその條を見よ。

***あられがま** ちやせん髮、いひ甲斐もなき身なれども、武道をみがく霰釜、たぎる心は運次第（鑓椎三）
〔霰釜〕茶の湯に用ひる釜の一種で、霰の形を表面に出したもの。雅筵醉狂集・冬に、「人の來りけれど、折ふし酒なければ茶をたてゝ、霰鑄茶當レ酒」。

***あられぬさま** 心根も聞かん爲、お歯黑落しつあられぬ樣で（夕霧）
〔有られぬ樣〕あり得べくもない奇異な姿。

あればしり あればしりの沓音も、春めき渡り寒からず（百合若）
〔阿良禮走〕「たふかのせちゑ」を見よ。

***あられもない** あられもない裸身に、海鰻がぬらつき、鰡がこそぐる（女護島）
〔有られも無い〕あり得られさうにもない變な樣なるをいふ。

***ありあけ** 有明の火も消えた、起きてとぼせと起されて（曾根崎） 枕の刀おつ取つて、ありあけしめし出でければ（松風）
〔有明〕有明行燈の略。夜明まで點して置く燈火。「つりあんどう」を見よ。

***ありあけ** 何か歎きは有明の、月さへ同じ月なれど（國性爺）
〔有明〕陰曆十六日以後は、殘月天にあつて夜が明ければいふ。

ありいありや 鞠は最中、ありいありやと聲々の、八人詰と覺ゆるに（持統天皇）
遊庭祕鈔・下、乞事の條に、「我蹴侍らんと思ふ時、聲を出して鞠を乞なり、此上に樣々の乞樣あり、或はやくわ、或はありくわ、又をと乞ふ、式云、ありくわの聲・やくわの聲は宿德の人の乞聲なり」とあれば、「ありいありや」も鞠を乞ふ聲であらう。「くれ」をも見よ。

ありきやう 德若に御萬歲と、御代も榮えます、ありきやうあるあら玉や、年立返るあしたより（大經師） 德若に御萬歲、當御殿榮えます、ありけうあり新玉の、年立返るあしたより（天鼓）
「あいきやう」（愛敬）を、萬歲唄では「ありきやう」「ありけう」と訛つて言うたのである。萬歲唄は何れも文句多少異つてゐる。こゝの文はその萬歲唄によつたのである。生玉心中・下之卷に「萬歲があいもきやうある間の山」とある「あいもきやう」は、「萬歲」の條に就いて見よ。

***ありさま** あり樣はこりや何事ぢや、いや氣遣ひな事ではない（丹波與作） やれ〳〵ありさまだちはあつたぼこしゆもない（丹波與作）
「われさま」（我樣）の訛で、對稱の代名詞に用ひたのである。おまへ樣。貴方。西鶴置土産・卷之一、大釜の拔き殘しの條に、「既にありさまの甚になる筈を、首尾せいでお仕合せ」。傾城禁短氣・二に、「あり樣達も指いたゞいた衆か、身どもは是が高い物についてござる」。

ありじゆし 枯木のふしに頭を打あて、えいやえいやと打ちければ、微塵になつて失せけるは、たゞありじゆしの如くなり（用明天皇）
〔阿梨樹枝〕印度に生ずる蘭香といふ植物の稱。大孔雀咒王經・上に、「天龍及鬼神若有レ違ニ此大明神咒越界法ニ者、頭破作ニ七分ニ猶レ如ニ蘭香稍ニ」と見えて、注に、「梵云ニ頞杜迦曼折利ニ、頞杜迦蘭香也、曼折利稍頭也、舊云ニ阿梨樹枝ニ者、既不レ善ニ本音ニ、復不レ識ニ其事ニ、故到ニ久迷ニ、然聞西方元無ニ阿梨樹ニ也」。

***ありそ** ありそ海よりなほ深き龍女が戀の誠の玉（松風） 逢ふ夜ありその磯鮑（松風）
「あらいそ」（荒磯）のつまつた語で、「らい」の反「り」である。荒浪の打寄する磯。合類節用集に、「有曾海。只海云」。

***ありたけ** 與作といふ博打打のぬす人めに、ありたけこたけしあげて（丹波與作） ありたけこたけ引出しても、繼切一尺あらばこそ（天網島） 酒も鮨もありたけはだけ買うてやる（女楠）
〔有丈〕ありぎり。ある限り。「ありたけこたけ」

ろ。芳澤菖蒲に就いては名人忌辰録に、「齋藤某の子、始め色子なりしが、歌舞伎へ出て若衆形より立役となり、後若女形となる、元祿十六年には女形の卷頭、正德六年には三ケ津總卷頭、享保二年には古今無類と評判記に記載せり、自姓を橘屋權七、享保十四年七月十五日歿、歳五十七」。「七つの芝居」をも見よ。

あよぶ　隣が町の會所、サアサアあよびやとわめけども（博多）

「あゆむ」（歩）に同じ。和訓栞、「あよご」の條に「宇治拾遺に鬼はあよびかへりぬと見えたるはあゆみとかよふなるべし」。

あらうなは　すがれば離れ、寄ればのき、堰（ゐせき）にかゝるあらう繩、縺（もつ）れまつはれしどろなる（女夫池）

〔荒抑繩〕馴れぬ鵜を使ふ繩。

あらうみのしやうじ　明日對面對面と、荒海の障子押明けて奥に入れば（酒呑童子枕言葉）

〔荒海障子〕中古清涼殿弘廂の北にあつた障子で、表裏共に繪があつて、表に面して右方に、荒磯の樹下の巖上に蓬髮の男箕踞して、長い左手は魚を掴み、長い右手は海中に入れて居り、左方には海中の巖上に蓬髮の足長き男が、長い左手を伸べた蓬髮の男を肩車して起立せるを描いてあり、また裏に面して右方に、網代木のある川の中の假屋に男一人坐し、左方に水の上に架せる橋が描いてある。禁祕抄に「弘廂杦九枚、北有荒海障子、南方手長足長、北面障子、宇治網代畫繪也」。古今著聞集に「萩の戸の前なる布障子を荒海の障子と名づけて、手長足長など書きたり、その北裏は宇治の網代をかけり」。枕草紙に「清涼殿の丑寅の隅の北の隔てなる御障子は、荒海のかた生きたる物どもの恐ろしげなる手長足長などをぞ書かれたる」、と見えてゐる。巣林子のこゝの文は、謠曲・大江山に「鬼の間に入り、荒海の障子押明けて、夜の臥處に入りにけり」とあるに據つたもので、手長足長の恐ろしげな畫のさまが、鬼の部屋に似合はしければかくいうたのである。

***あらがねの**　引いつ留（とま）つゝ人力魔力、暫し勝負はあらがねの、土を離れて引上げしは、釣瓶を釣つたる如くなり（振袖始）　なほも動かぬあらがれの、金輪際より生拔きし大盤石の如くなり（五人兄弟）

〔粗金の〕鑛（あらがね）は土中にあるものなれば、あらがねの土とつゞけて、土の枕詞とす。「あらがねの金輪際」とは大地の底のはてをいふ。倶舍論十一に、「安㆓立器世間㆒風輪最居㆑下、其量廣無數厚十六落叉（落叉は數量の名）、次上水輪深十億二萬、下八落叉水、餘凝結爲㆑金、……於㆓金輪上㆒有㆓九大山㆒、妙高山王（須彌山のこと）處㆑中而住」。

※**あらかん**

「六神通（ろくじんつう）の阿羅漢（あらかん）」を見よ。

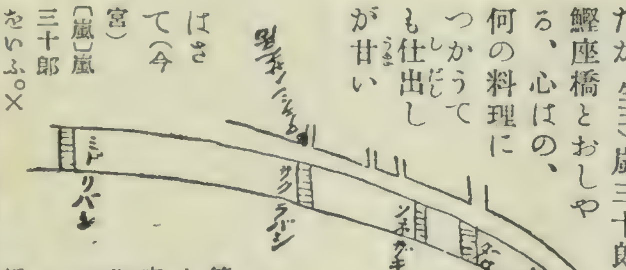
***あらけなし**　あらけなき聲々にて、サアこゝより追放す（𩹉鯉）　はやばや言はれよ腹立ちやと、あらけなく咎められ（凱陣八島）

「あらけ」は荒氣、「なし」は「はしたなし」「いらなし」などの「なし」と同じもので、意を强める語助である。荒々しい。

あらし　西に嵐の吹き靡れて、空はさえても我々は、戀慕の闇に暗がりに（重井筒）　三代續く奴風（やつこふう）、嵐が振（ふり）を譬ふれば、其の江戸堀を思出す（今宮）　この間がよからうと、脇指拔いて切破る、音も嵐の三右衞門、替り〳〵と打つ太鼓に、隱れて條所には知れざりけり（卯月紅葉）

〔嵐〕道頓堀歌舞伎芝居嵐座の嵐三右衞門をいふ。六方（ろつぱう）（江戸の丹前（たんぜん））を家藝としてゐた。「三代續く奴風」とは、元祖三右衞門からこの當時の三代目の三右衞門をいふ。初代三右衞門が江戸に下つて小夜嵐と云ふ狂言に六法の内の「花に嵐」といふ臺詞を演じて藝名を博した。これより六方は彼の家の藝となり、二世三右衞門も六方の藝風を繼ぎ、三世三右衞門も亦江戸傳來の丹前六方を演じるので、江戸をきかせた名の「江戸堀を思出す」と云うたのである。三世三右衞門は寶永元年八歳で座元となつたと云ふから、今宮心中の上演された寶永七年は十四歳である。（序に云、六方は亂暴といふ語から出た語である）。

***あらし**　さつきに言うてお越（こ）したたか、蜆川の嵐の芝居へ便宜（びんぎ）して下んしたか、（生玉）嵐三十郎、鰹座橋とおしやる、心はの、何の料理につかうても仕出（しだ）しが甘（うま）いはさて（今宮）



〔嵐〕嵐三十郎をいふ。×

×當時の名優で、生玉情死のあつた正德五年に於ける三十郎の藝評については、役者反魂香（正德五年刊）大阪之卷、立役之部に、「上々吉、嵐三十郎、座本。先以打つづいて座本おてがら、少もいやみなき藝を仕出し、折々めづらしき口あひいはるゝは、俳諧を心がけ給ふ故、一作あつこせりふをかし、誠にいにしへ都万太夫座へ上られ、顔みせに六法をふられし事を思へば、おびたゞしき藝のあがり、今この堀にてやつしかたの總大將、おそらくはつゞく人はあるまい云々」。今宮心中のここの文は、嵐三十郎の藝は甘味あつていやみなき藝を仕出すので、鰹をきかせた名の鰹座橋といひ、何の料理に用ひても仕出しが甘（うま）いといふのである。

***あらしやうりやう**　つよきおきめに粟田口、けあげの水に名を流す、おさん茂兵衞が新精靈（大經師）　盆には我も新精靈、親子の盃みぞはぎの、露の手向と引かへて（氷朔日）

〔新精靈〕新佛（しんぼとけ）。精靈は聖靈とも書き、死者の亡靈をいふ。

***あらたへ**　和栲の御衣廣さ一尺五寸、粗栲の御衣廣さ一尺六寸（振袖始）

〔粗栲〕荒妙とも書き、織目の粗なる布で、多くは栲（かぢ）の木の樹皮の纖維で織つたもの。「あらたへ」は「にきたへ」の對語。「天照大神（あまてるおほんかみ）に奉る云々」をも見よ。

***あらたま**　新玉や年端（としは）も往かぬ子持ぶり（松風）

新玉また璞玉など書き、年（とし）の枕詞である。本居宣長は、「あらたま」はあたらあたらま（新新間）のつゞまつた語で、年月の移り行く義で、それより「とし」「つき」「よ」「春」などにかけていふ枕詞だといつてゐる。異說もあれどくだくだしいから略す。

***あらち**　三十五日の新精靈、あら血の上で死したる人（卯月潤色）　如何なる人の何故に、刄の上の往生か、産のあら血か（薩摩歌）

〔新血〕鮮血。

あらはしやならだ　あらはしやなら

族の家に奉仕する女にも稱することになり、今は廣く妻女の通稱となつたのである。

***あをのこま** (雪女)

〔青駒〕白馬のことなれども、普通には黒みを帶びた駒をいふ。萬葉集に、「青駒のあがきをはやみ」「青旗の小旗のうへを」とある青も白の義である。白をあを(青)といふ例は宋詩にも白梅を碧梅とも作られてゐる。蓋し春の始なれば青といつたのであらう。

***あをひとぐさ** 我が國あを人草のいろを守るぞや(西王母)

〔青人草〕蒼生に同じ。草のやうに多ければいふ。萬民。

あをやぎのいつつぎぬ 誠や花とみつしほの、つまくれなゐの檜扇を、船のせがいに挾み立て、水の綠も青柳の五衣のそば取つて(加増曾我)

〔青柳五衣〕青柳とは表白く裏青きをいふ、夏季はこれを卯の花といふ。五衣は女官などの衣の五枚重ねたやうにしたもので、その重ね方に櫻がさね・梅がさねなどの名目がある、また五重ねでなくとも、多く重ねたのを五衣といふこともある。「いつゝぎぬ」を見よ。巣林子のこゝの文は、平家物語卷十一、那須の與一の事の條に、「年の齡十八九許なる女房の、柳の五衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを船のせがいに挾みたて」、とあるに據つたのである。

あをる

「あふる」を見よ。

あん じつとしめられ現をぬかし、こりやあんたる因果骨、めつきめつき致す御免あれ(女護島)

「なん」(何)の子音の脱落した訛語。「あんたる」は「何たる」といふ事。「あんだ」を併せ見よ。

***あんぎや** 西國行脚とこゝろざし此處まで參りしが(吉野忠信)

行脚の宋音。道心修業の爲名師善友を訪うて諸國を遊歷すること。轉じて、徒歩で諸國を遍歷すること。祖庭事苑・八に、「行脚者、謂下遠二離鄕曲一、脚中行天下上、脫レ情捐レ累、尋二訪師友一、求レ法證レ悟也、所以學無二常師一、徧歷爲レ尙」。

***あんごう** これ祐經、あんごうらしく出拔かれ、月夜にかまぼこ不覺の至り(加増曾我)

暗愚が訛つて延びた語。暗愚。馬鹿。馬鹿者。

***あんじやう** 世尊安祥として、止みれ止みれ須達長者(釋迦) 端嚴美麗の御僧あんじやうと出現あり(賀古敎信)

〔安詳〕安祥とも書く。從容自得の貌。悠々として迫らぬ貌。法華科註・卷一之下に、「爾時世尊從二三昧一安詳而起、告二舍利弗一云々」と見えて、註に、「安詳。知音云、從容自得不二急遽一貌」。

あんじゆ (井筒)

〔安壽〕「さんしやうだいふ」を見よ。

あんぜん 若き賤の男產兒を抱き、あんぜんとして佇めり(松風)

〔黯然〕傷む貌。江淹の別賦に、「黯然銷魂者、惟別而已矣」。

あんだ 韃靼人怖うない、今日の大將此錦舍、日本のあんだ辨慶すつすつすと、小首振つてぞ勇みける(國性爺後日) おらが若い時や腕に生傷絕えなんだ、今でも二つや五つはあんだ樊噲だ張良だ(關八州)

「なん(何)だ」を訛つた小兒語である。甲子祭(天和四年刊、淨瑠璃・加賀掾正本)第一に、「この辨慶がかういふからは父上の御敵平家一統討滅し、名を後代に揚げんこと恰も踵をめぐらすべからず、あんだ辨慶これまでと剃刀打振り踊出でける」。「あんだ辨慶」とは辨慶何ぞの義、轉じて何でもないと競ふ意にいふ。關八州繫馬のここに擧げた文は、小歌吾嬬久爲志に載れる正保頃流行した奴踊歌「おらが若い時は蠑螺殼でもつんのんだ、今も一つ二つやあんだ辨慶」の改作である。

あんだら あんだらめには拳一つ當てずほたえさせ、萬事に遠慮が皆身の仇(女殺) 今を最期の石川眼をくわつと見開き、やいあんだらの大馬鹿ども、この子を下に敷いたるとて命生きる五右衛門か(吉岡染)

「彼のどろ」の轉訛であらう。「どろ」の條をも見よ。痴。愚鈍。越谷秀眞編・物類稱呼・五に、「おろかにあさましきを京大阪にてアンダまたアンダラとも云、伊勢にてアンガウまたセイフと云」。增補俚言集覽に、「あんだら。あんけら、あんごう、痴をいふ」。永代節用集に、「暗惰懶。無能」。和訓栞に、「あんだら、鄙俗の語なり、あだを強くいふ語なるべし、あだ口をきく事をあんだら口をたゝくなどいへり」。

***あんど** 安堵の所領三百貫、子孫に傳ふる弓矢の道(川中島) 吉田の家皆松若に勅許なると、安堵の綸旨渡さるれば(隅田川)

〔安堵〕武家時代に、土地の所有權を承認するを云つた語。時勢が變つても、なほ普通りに父祖の所領を知行し、或は久しく中絕してゐた所領を返し與へることを本領安堵といふ。本領安堵のときは、其證として敎書または下文・奉書などを下し與へる、その文書を安堵または安堵下文、安堵御判ともいふ。

***安東入道** 安東入道が理窟をこねるもかくやあらん(大經師)

安東左衛門入道聖秀を云ふ。北條高時に仕へた人で、北條氏の滅びる時に、鎌倉の焦址で自害せうとした際、義貞の妻書を送つて降服を勸めた。聖秀曰く、「栴檀の林に入る者は染めざるに衣自ら香しと聞く。武士の妻ともある者はけなげな心を持つて、其家をも繼ぎ子孫の名をもあらはすべきであるとて、王陵の故事を引き、事の急な場合に臨んで、降人となるは恥を知る武士のせざる所である」と言放ち、使者の面前で、書を刀と共に握つて自刄した。詳しいことは太平記・第十、安東入道自害事付漢王陵事の條を見よ。

***あんない** 上手と聞きし神子の門、あゝ申しちと口寄せを賴みませうとぞあんないける(卯月紅葉)

案内を動詞連用形のやうに用ゐたのである。

***あんばい** 只今山の草刈に借つた鎌の鹽梅見よと(百合若) 蒟蒻豆腐の鹽梅よし鹽梅よしとぞ賣り歩く(孕常盤)

〔按排〕味のかげん。ぐあひ。やうす。「鹽梅」とも書けども、「鹽」は「えん」(yen)で「あん」の音ではないが、意義が合ふので慣用されるのであらう。「えんばい」を見よ。節用集(易林本・饅頭屋本)に、「按排」。俚言集覽に、「あんばいは按排の音にて、五味を調和するをいふ、後世鹽梅の字を用ゐるは附會なり、またあんばいは按排の音より出で、味をいひ、轉じて物のありあひ樣子のことにいへり、ヨイアンハイ・アンバイガワルイなどの類なり」。

***あんばいよし** 何でも今夜はあんばいよしでもぶちくらつて、小半切のけんどん酒あたまわりに十文

「ありたけはだけ」の「こたけ」「はだけ」は粉拂けの義で、「ありたけ」と同韻脚によつて續けられた語で、粉迄拂いて殘らずの意であらう。

***ありのみ**　命もなしやありのみの、谷川ふりに身を投げう（宵庚申）

〔有實〕無し。梨の訓「なし」は無しに聞えるので、これを忌みて梨を「ありのみ」といふ。山家集にも、「花のなりかしはにつゝむしなの梨、一つなれどもありのみと見ゆ」とある。「ありのみ」は梨であるから、「梨」を「無し」に通はして、「ありのみ」を「無し」の意にいうたのである。

ありべかかり　それ煙草盆お盃と・ありべかゝりに立騷ぐ（曾根崎）　女子ども屏風ひけ、ちとお休みとありべかゝり、花車は二階な下りにけり（三國志）

普通なみの所作。形の通りすること。ありの通りといふ意である。手島堵庵の著に「ありべかゝり」といふ本がある、人としてあつて然るべき修養法を記したので、かくいふ書名にしたのである。

諸分店颪（この書もと浪花鉦と稱し、延寶八年頃に作られた書である）松之部に「とかくなじみては何事も苦しからぬなれど、かたからの戀じやれはいや、たゞあたまからあるべきかゝりにして、いつともなしに實もわる口も言ふは、うれしうもあり憎うもあり、戀みにも張合にもなりますれども」とあつて、「ありべかゝり」は「あるべきかゝり」ともいはれてゐる。今樣二十四孝（寶永六年刊）卷之一、世の人の鏡山の條に「人の親を養ふことありべかゝりにて、さのみ孝行とはいひ難し」。現今も福山市あたりにて「ありのまゝをいふ」といふことを「ありべ通りをいふ」といふ。ありべ通りのありべも、ありべかゝりのありべも同じ語である。

ありまふで　「ゆな」の條を見よ。

あるき　双方の庄屋月行司、村のあるきは棒突並べ（女夫池）

〔步〕江戶時代、村役場に雇はれて驅使に供せられる者の稱。

あるじやう　「でう」を見よ。

あれます　忝しや、天地と共にあれます御神體（國性爺後日）

生れ給ふ。「あれ」は、神代紀に「所生」または「生」をよんである。

あれん　あれんあれんと聲立てゝ、紙帳のうちへ逃げて入る（兼好）

あれ。「あれん」の「ん」は他音の下に加はつた撥音で、「ゆゑ」（所以）が「ゆゑん」となる類である。

***あわもり**　ちんだ泡盛、藥と汲むや玉の井が（酒呑童子）

〔泡盛〕燒酎の一種で、琉球國より產出す。

あゐずり　藍ずりの狩衣烏帽子取出して（娥）

〔藍摺〕藍または青草で布或は紙に模樣を摺つけたもの。

あを　加番見れどもあをもなく、上りも知らぬひらよみに（大職冠）　こなたは加番にあをのぼん樣（女楠）

〔青〕うんすんかるた四十八枚の内、青く彩色した札をいふ。うんすんかるたは四枚づゝ十二に別ち、其第二から第十二までに青と稱する札各一枚づゝあつて、其中第十の青の札を釋迦、第十一の青の札を青馬、第十二の青の札を青きりと云ふ。「あをのぼん樣」とは第十の青の札をいふ、この札を釋迦と云ふによつて坊樣と云うたのである。「うんすん」の條を併せ見よ。

あをあみがさ　青編笠の紅葉して、炭火ほのめく夕まで（冥途飛脚）

〔青編笠〕青くて新しい編笠、遊客が編笠を被て遊女町に行くは當時の風俗である。「はし」の條の繪を見よ。巢林子のこゝの文は、新町遊廓の夜見世に焚く炭火（その條を見よ）が遊客の青編笠に映じて紅葉色になる意で、青に對して紅葉と受けたのである。

あをうまのせちゑ　程なく御卽位ましまして、白馬の節會に叡覽あり（大磯虎）

〔白馬節會〕昔時、正月七日左右の馬寮から白馬を庭上に牽出すを、天皇紫宸殿に出御して御覽ぜられ、後宴を賜ふ儀である。蓋しこの日白馬を見れば、年中の邪氣を除くといふによる。詳しくは公事根源などを見よ。「あをのこま」をも見よ。

靑貝柄に切立鞘　青貝柄に切立鞘・信濃の松代（薩摩歌）

螺鈿の柄に切立鞘の槍標。（信濃國松代城主・眞田伊豆守信房の槍標）。



〔きつたて鞘〕

あをさいろく　青才六めら、それ踏殺せ（艳狩）

〔青才六〕人を罵る語で、下才六また青二才といふに同じ。「青」は未熟の義。「才六」は、理齋隨筆に「面の青きを俗語に才六といふ」と見えてゐる。

***あをざぶらひ**　繩を擲かんと取付く腕元、ずんど立つてはたと踏み、慮外なり青侍（女護島）

〔青侍〕未熟な侍。生侍南嶺遺稿に「青侍＝官位せざる未熟の侍」。

***靑道心**　炮碌頭巾の青道心、墨の衣の玉襷（天網島）

佛道に入りながら、その教理を會得してゐない初心者の稱。「青」は未熟の義。「道心」は菩提心の義で、年十五以上で佛道に入つた者。

あをち　「あふち」を見よ。

あをつゞら　まさきのかづら青葛、くる人ありとも知り給はず（蟬丸）

〔青葛〕漢名・木防巳と稱し、山野に自生する葛生植物で、葉は互生して心臟形をなし、淡綠色の小形花を開く。蟬丸のこゝの文、青葛繰るを來るにかけたのである。平家物語・灌頂卷、小原御幸の條に「まさきのかづら青つゞら、來る人稀なる所なり」。



〔あをつゞら〕

あをにぎて　波の白木綿青幣、かゝる遠國波濤にも（女護島）

〔青幣〕榊に麻苧を長く附けたのを幣といひ、青幣は春にかたどり、白幣は秋にかたどる。二季の祭に用ゐる。「にぎて」といふは、右の手で祭る故に「みぎて」といふを轉訛した語である。古語拾遺に「種レ麻以爲二青和幣一」。

***あをにようばう**　況んや甲斐なき青女房（艳狩）

〔青女房〕未熟な女房。「青」は青侍などいふ青である。女房とは、もと女の後宮に部屋を持つてゐるを稱するより起つた語である。もと尙侍より以下、禁中の女中に稱したのが、貴

付くろ(國性爺)

〔如何な〕如何なことでも(聽入れぬ)。どうしても(承引せぬ)。

***いがむ**　獅子頭と狛犬のいがみあひともいひつべし(三國志)　吹く風と共に荒れたる猛虎の形、藤根に頬を摩付け摩付け、岩角に爪研立て、二人を目懸けいがみかかるを事ともせず(國性爺)

〔啀〕獸が怒り嗥えて嚙みつかうとするをいふ。　法華經に「啀喍」、童蒙頌韻に「猜」、饅頭屋本・節用集に「嗥」、易林本・節用集に「啀」をいがむ」とよんである。

いかりふ　でんもくらいゐの眼の光、怒毛怒斑怒爪、千里も駈けん勢なり(反魂香)

〔怒斑〕怒つて逆立つ虎の斑毛。

いかるが　猿の三叫び斑鳩の聲(釋迦)

〔斑鳩〕鳩鴿類に屬し、大きさ家鳩位で、頸に白い羽毛環生し、足は赤色で短い。

***いき**　男盜人いき傾城と言ひざま取つて投付くれば(嫗山姥)　半七のいき掏摸め、ようもようも親方を踏付けたな(女腹切)　生畜生の死畜生と、所存極めし涙の體(今宮)　嘉平次のいき盜人、出あへ出あへと呼ばはつて、闇に紛れて逃げ失せたり(生玉)　祕密といへば何言はうと儘、大騙の生賣僧、あれ追拂へ引縛れ(浦島)　いき女郎め、ぬかすまいと誓文立てて口がため、惡いほほげた(女殺)　いき勸進・諸商人(冥途飛脚)

〔生〕人を叱り又は罵るときに、その言葉を強める爲に、「生」又は「死」の語を相手を指す詞の上に添へていふ。こゝには「生」の添はつてゐるのを擧げたのである。　安原貞室撰、かた言(慶安三年刊)に、「人を叱り罵るときに、己が腹の立つまゝに息まき赤面して、せめて畜生とも言はで、いきづくしやう(生畜生)め、しにづくしやう(死畜生)め、いきだはけ、しにだはけ、がつき(餓鬼)め、あはうめ、ふんちうめなど、いとさもしくすさまじう言ふ事勿れとぞ。總て生・死・めの三字を附けて、人を罵り侍ること淺ましうすごう侍るものなり」。

***いき**　五十貫目か百貫目の銀は取替へて、親御の息が掛らずとも、物の見事に取立てましよ(博多)

〔息〕聲。

いきいし　活石なしの目は白黑との占(百合若)

〔活石〕圍碁にて、死なぬ石。

***いきかた**　暇を遣つた、廓を連れてお出なされと、切れ離れたる意氣方は、さすが土地に住めばなり(夕霧)　武家のいきかた、なづまぬ御馬、足を早めて急がるる(女殺)

〔意氣方〕意氣は氣性また心立て。心立てのさつぱりしてゐること。氣性のさわやかなこと。

***生口**　生口か死口か(卯月紅葉)　して先づ御用の事ありとは

生きてゐる人の口寄。

***いきすぢはる**　姫宮ぐるひ及ばぬこと、息筋張るな歸れ歸れ(日本武尊)　畚ほどな樣で、親ほどな者に息筋張らする不敵者(隅田川)

〔息筋張〕息張り筋を張る義。骨を折つて物事をするにいふ。息勢張る。

***いきせ**　母樣いきせの折ならば、あれらに口をきかせうか(卯月紅葉)

〔生世〕世に生きてあること。在世。存命。

***いきせいはる**　息せい張つて喉が渇く(女腹切)　息勢張つて揚句に息杖まで戴いて(百合若)

〔息勢張〕息を張り氣勢を張る義。氣力を盡す。息筋張る。

***息杖**　お駕籠待つて下されと引留むれば、駕籠の者、ヤアこりや狼藉して息杖の胸打くらふかと振上ぐる(淀鯉)

駕籠舁または天秤棒で物を擔ふ者が、暫し荷を支へて肩を休め息をつぐ杖。

いきどし　必ず死んでたもるなと、泣き口説き勞はれば、涙を浮め手を合せ、いきどしげなる聲細く(隅田川)

〔息疾〕呼吸疾くしてせつない。氣息奄々。

***いきね**　だまれ女め、いきれ立てば許さぬぞ(日本武尊)

〔息音〕音聲。聲。

***いきは**　四百日は何にしたい、いきはを聞かう(重井筒)

〔行端〕行き處。用途。

***いきぼね**　口へ砂でも頰張らせ、いきぼれを揚げさすな(鑓權三)　腕かなはずは、などいきぼれでも立てざるぞ(出世景清)　それそれと引起し、口に込み藥、いきぼれ立たすな(百日曾我)

〔息骨〕音聲。息は聲の意。「いき」を見よ。「ほね」は、「おとぼね」などの「ぼね」と同じもので、語意を強めるまで。

いきみたま　父樣今年は丁七十の賀の祝儀、一門衆の振舞もてもじ下りを待受けて、生御魂の祝一所にと、盆迄延すと書かれしが(氷朔日)

〔生御魂〕生見玉、生身魂などとも書く。七月八日から十三日までの間に、吉日を擇んで兩親を饗し、その壽命長久を祝ふことを生御魂の祝といふ。盂蘭盆經發願の文によれば、「願くは現在の父母をして壽命百年、病無く一切苦惱の患なからしむ」とあつて、盂蘭盆會は生ける二親を供養し、兼ねて過世七世尊親の菩提を祈るものであつたのが、いつの程よりか盂蘭盆會は過去精靈の菩提を祈り、生ける兩親を供養することとは別になつて生御魂の祝をした。親元日記に、「寛正六年七月十一日新造御生見玉、文明五年七月十一日公方御生見玉御祝也」と見え、日次紀事(貞享二年の序あり)七月の條に、「此月公武兩家各被饗二尊親一、是謂二生身魄一、或稱二生盆一、地下良賤亦然」。

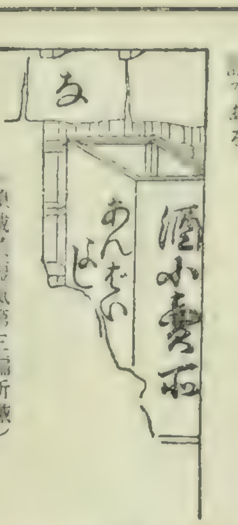
いきやく　我が身上の滅却あり、いきやくも交り行き通ふ(女殺)

「ゐきやく」(違却)で、違背却走の意か。こゝの文、「もつきやく」「めつきやく」「いきやく」と、同じ脚韵をふませて文を修飾したのである。

***いきる**　こちやげんなりとなる程八めはいきつて(丹波與作)　手かけはいきつて、科もない傳三郎にいひかぶせしやるなと、たけりかかつて怒りける(卯月紅葉)　御吉左右の早飛脚いきり立つて案内す(淀

出し(吉岡染)

〔按排好〕「鹽梅好し」とも書く。田樂豆腐をいふ。元祿・正德頃上方では田樂を賣るに、「蒟蒻豆腐の鹽梅よし」と聲立てゝ賣り歩いたので、前條を見よ。自(おのづ)とこの物の名になつたのである。「あんばいよしでもぶちくらふ」とは、田樂豆腐でも食ふといふ意。「ぶち」は「うち」(打)の訛で接頭語めきた語である。丹波與作に「ごきの實(み)をぶちあげ」とある「ぶち」と同じ語である。



(傾城禁短氣第三編所載)

あんばくもの　打砕く程なればおのれは賴まぬ、あんばく者め、又捻餅くひたいか(會稽山)

「わらは」(童)が音便で「わつぱ」とつまり、「わんぱく」と子音を增加して訛り、「あんばく」と子音の脱落した訛語であつて、「あんばく者」は即ち「わんぱく者」「いたづら者」といふことで、小兒にいふ。

あんぺら　鬼とも組むべき男ども、あんぺら取つて敷かすやら(博多)　奥な掃いて拭うて、新しいあんぺる敷け(國性爺後日)

南洋地方に産する貝多羅(はいたら)(アンペラ屬の多年生草本植物)の莖を竪に細く裂いて編んだ蓆。「あんぺら」は「あんぺる」ともいつた。

あんもらか　五十餘級の衆徒の首、光明に照されて累累と連りしは、梢に實る佛前の、あんもらかとも謂つつべく(女護島)

〔菴摩羅迦〕阿摩落迦とも書き、略して菴羅といひ、印度菴羅園精舍に多く繁茂してゐる樹で、我國では大和國多武峯談山神社域内に一株生茂し、その實は林檎に似てゐる。西域紀・八に、「阿摩落迦、印度藥果之名也」。

***あんやう**　安養極樂世界(薩摩歌)　安養世界(反魂香)　安養無垢世界(蟬丸)　安養寶國(賀古敎信)

〔安養〕アンニヨウと發音し、西方極樂淨土の異稱。

***あんらくこく**　安樂國(賀古敎信)

〔安樂國〕阿彌陀佛が四十八箇條の大願を起し、長時修行された結果、建設された西方極樂淨土の稱。無量壽經に、「無レ有二三途苦難之名一、但有二自然快樂之音一、是故其國名曰二安樂一」。

***あんらくせかい**　げにや安樂世界より今この娑婆に示現して、我等が爲の觀世音(曾根崎)

〔安樂世界〕前條に述べた「安樂國」に同じ。「げにや安樂世界より云々」をも見よ。

い

いういう

「蒿食(よもぎは)み呦呦(いういう)として云々」を見よ。

いうかん　いうかん大度の御臺所(關八州)

〔幽閒〕幽閑とも書く。女子が貞靜の德を具へるをいふ。窈窕。詩經・周南關雎篇に「窈窕淑女、君子好逑」とあつて、毛傳に「窈窕、幽閒也」とある。

***いうくん**　元の根ざしは豐後の國濱の市の遊君なりしが(百合若)

〔遊君〕略して君(きみ)ともいふ。遊女の稱。傾城。

***いうし**　右近と申す侍女三の君に似たる由、すなはち高房猶子となし、御徒然をいさめん爲(酒呑童子)

〔猶子〕兄弟親族または他人の子を養うて己の子とすること。養子。禮記・檀弓篇に、「兄弟之子猶レ子也」。

***いうしよく**　和歌の道・文の道、有職等にも暗からず(大磯虎)

〔有職〕物知りの義。故實。「いうしよく」は「いうそく」ともいひ、もと有識と書いて有智識の義である、それが識と職と字形の似てゐるので誤り、讀方も轉じたのである、易林本・節用集に、「有識(いうしよく)」。

***いうひつ**　墨つき筆勢・御家中の右筆衆にも少い程の器用人(川中島)　誰知らぬ者もない傾城の右筆(嫗山姥)

〔右筆〕文筆に長じた者。武家の書き役。また元祿頃には、嫗山姥のここの文にある荻野屋の八重桐のやうに、遊女町にも女祐筆が居り、また好色一代女(井原西鶴撰)卷之二。諸禮女祐筆の條に、「京に女祐筆とて上つ方よろづにつけて年中の諸禮覺え、……、門柱に女筆指南の張紙して、一間なる小座敷見よげに住みなし、山出しの下女ひとりつかひて、人の息女をあづかること大方ならずと、毎日怠らず淸書をあらため、女に入る程の所作を敎へ、」とある、かうやうな祐筆も居たのである。

***いうひつ**　干戈戚揚相挾み、左輔右弼列を引く(國性爺)　左輔右弼の旗を立て(唐船噺)

〔右弼〕「さほいうひつ」を見よ。

***いうめん**　宥免するも事による、曾我は君の御仇、不吟味にはなり難し(百日曾我)

〔宥免〕罪科をなだめゆるすこと。北魏郭祚傳に、「不レ問二輕重一、皆蒙二宥免一」。

***いかい**　まめで御下向羨ましい、今にいかい參りか(卯月潤色)　和女はいかい物識(ものしり)ぢや(釋迦)　明日お日に懸らう、いかう睡たい寢まする(生玉)　はていかうりんすりんすといふ女子ぢや(女腹切)

〔嚴〕きつい。夥しい。甚しい。「いかう」は「いかい」の副詞形。

***いがき**　いがき越えしも戀の罪(丹波與作)

〔忌垣〕「いみがき」(齋籬)の略。神のゐます所なれば、けがれなど忌み隔てる垣の義。神社の周圍に設けた垣。

***いかけぢ**　白鞍・塗鞍・鏡鞍・金覆輪・銀覆輪・梨地・いかけぢ・らでん・かなかひ美を盡し(源義經)

〔沃懸地〕漆塗の上に、金粉または銀粉をひまなく沃(そゝ)ぎかけたもの。

***いかつ**　客は一(ひと)きはいかつげに、駕籠(かご)を飛ばする揚屋客(女殺)　お徒(かち)足輕いかつ聲・こりやこりやお犬のお通り、乘物据ゑて下馬致せ(千疋犬)　侍畜生大たはけと、いかつ吐いてぞ申しける(出世景淸)

〔嚴〕いかつしいこと。いかめしいこと。威あつておごそか。

***いかな**　馬よ聽いたか聽いたかと言へども、いかな馬の耳、風に嘶くばかりなり(鑓權三)　さもない內はいかなこと、ならぬならぬと睨

引かせず、乘るも乘らせず石子詰、一騎も殘らず打みしやがれ（蛙合戰）

〔石子詰〕罪人を坑中に入れ、砂石で埋め殺す刑。（增補）俚言集覽に、「いしこづめ。小石にて人を生きながら埋る刑なり、中古邊土にて往々ありし事なり」。

***いしだたみ**　石疊は信濃の國の住人根井の太夫大彌太（五人兄弟）


〔みただしい〕

〔石疊〕紋の名。舞の本・夜討曾我（古活字版）に、「いしだゝみは信濃の國の住人ねんゐの太夫大彌太」とありて、この紋繪が載せてある。

いしなどり　的場の庭の雨の後、いしなどりして遊ばんと（小栗判官）

〔石投取〕石を投げて取る義。若干の小石を撒き、その中の一つを空に投げて、その石の落ち來ぬ間に、撒いた石と共に攫み取る女兒の遊戲。易林本・節用集に、「投石」。

いしのおび　下女下部ども立掛り、引觧く玉の石の帶（日本武尊）

〔石帶〕束帶の時に着用した革製の帶である。石玉を飾りにしてあるから石帶または玉帶といふ。その製は、黑い革帶の後にあたる所に方或は圓形な玉また石角の類を十個ほど綴付け、左の端に鉸具で締めるやうにしてある。方或は圓形な玉また石角の類は、人品身分の尊卑によつて違つてゐる。昔の帶は唯一筋のものを一重廻はして、鉸具に通して締めてゐたのであつたが、後には背の方にのみ石の附いた革帶になして、その兩端に組糸を附け、それを前に廻して結ぶやうにした。別に上手と云うて革紐を革帶の一端に附けて、一筋の長い革帶を引廻したのが餘つてゐる形に見せた。

***いしびや**　江戸屋勝二郎と云うては、石火矢でも崩れまい（淀鯉）

〔石火矢〕昔の大砲。和漢三才圖會（正德三年刊）に、「中華從來雖レ有レ之未レ精、至二大明一盛行、以爲二第一兵器一、凡砲石之玉、自二四五百目一至二四五貫目一、以二機巧一放出、謂二之石火矢一也」。

***いしべきんきち**　しやらくさ津の三介三藏石部金吉泊りなら泊めたも（丹波與作）

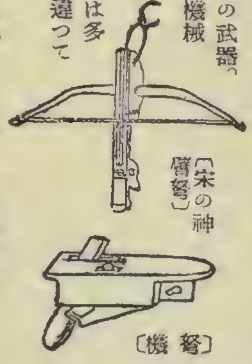
〔石部金吉〕石の如く金の如しといふを人名のやうに云うたので、律義者をいふ。三教色に、「堅屋の石部金吉郎も兜を脫いで降參」。

***いしゆ**　浮世の戀に身を碎くも、命懸けるは同じこと、例へば酒のいしゆある中、二日心か公用か、醉うてはならぬ首尾もある（會稽山）

〔意趣〕遺恨。「意趣」はもと心意の趣向の義で、法華經・方便品に、「隨レ宜所レ說、意趣難レ解」とある。遺恨の意に云ふはその義を轉じたのである。

***いしゆみ**　矢窓に弩隙間なく（國性爺）

〔弩〕古代の武器。石を彈く機械で、日本のと支那のとは多少その製違つてゐる。


〔宋の神臂弩〕
〔機弩〕

いしらまかす　搦手の軍味方拔群いしらまかされ、片岡太郎備前の平四郎討死を遂げ候（源義經）

〔射白負かす〕射戰に氣乘もなう負かす。射しらます。

いしんぢよ　父御樣は隱れもないいしんぢよなり（壽門松）

「いしぢやう」（石丈）の訛。石のやうに堅氣な丈人。石の如く律義な爺。瑠璃天狗・三に、「いしんじよは石丈と書いて、石の如く堅き人といふことなり。丈は丈夫といふことにて、男の通稱なり」。

いす　馬屋の總五いす割木おつ取りのべ、源八が眞甲欺打ち（酒呑童子）

〔柞〕「ひよんのき」とも云ふ。本邦暖地に自生する常綠樹で高さ二丈五尺に達す、葉は長橢形をなして互生し、花は小形で花冠なく、綠色の萼・赤色の雄蘂及び有毛の雌蘂を具ふ、本材は薪とし又は建築器具の料となす、觀賞用として庭園にも栽培す。


〔すい〕

***いすかのはし**　ここが大事の堪忍と手を懷へ幾度か、兎やせん角やしようげ鳥、鶍の嘴のくひちがふ心を知らぬぞ是非もなき（冥途飛脚）


〔かすい〕

〔鶍嘴〕鶍は嘴が交叉せる鳥なれば、以て物事のくひちがうて思ふやうにならぬことにいふ。

夷齊（いせい）　夷齊が武王を憤り、終に首陽に飢ゑたるものを（聖德太子）

伯夷と叔齊の兄弟をいふ。支那上古・殷時代の義士である。周武王が殷紂王を討つ時その非を諫め、後に周の世となるや、周の粟を食ふを潔しとせずして首陽山で餓死した。史記・伯夷列傳に、「西伯卒、武王載二木主一號爲二文王一、東伐レ紂、伯夷叔齊叩レ馬而諫曰、父死不レ葬、爰及二干戈一、可レ謂レ孝乎、以レ臣弑レ君、可レ謂レ仁乎、左右欲レ兵レ之、太公曰、此義人也、扶而去レ之、武王已平二殷亂一、天下宗レ周、而伯夷叔齊恥レ之、義不レ食二周粟一、隱二於首陽山一、采レ薇而食レ之、及二餓且死一作レ歌、其辭曰、登二彼西山一兮采二其薇一矣、以レ暴易レ暴兮不レ知二其非一矣、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮命之衰矣、遂餓二死於首陽山一」。

いせかう　上鹽町へ伊勢講にて只今歸るが（曾根崎）

〔伊勢講〕同志の組合を作り、時々會合して酒食をなし、各金錢を出しあはせて醵金し、他日伊勢參宮の費用にあてるもの。日次紀事（延寶頃の著）正月元日の條に「伊勢講。俗間三人或五人常合レ心、約二其日一聚二其家一謀二其事一謂レ講、其日多用二三首日及十六日一、今月今日其所レ聚家稱二頭人一、是首長之謂也、頭人輪轉設二酒食一饗二講中之人一、毎二其講日一各出二銀或錢一聚斂而置レ之、爲二他日參宮之路費一」。

***いせざくら**　出雲八重垣八重櫻、さてはさてはさては神明伊勢櫻（賀古敎信）

鯉)

〔勢〕勢を張る。勢込む。伊呂波字類に、「勢」。

***いくさがみ**　軍神の手向ぐさ、それ突殺して切入れ(蟬丸)

〔軍神〕武運を守る神。戰勝を祈る神。軍神は何神とも定まつてはゐない。武勳顯著な者を軍神と仰ぎ、又北斗七星中の破軍星を云ふこともある。軍用記・第七に、「軍神は天照大神、經津主神、武甕槌神、大物主神、事代主神、神武天皇、日本武尊、神功皇后、八幡大神なり、これ皆日本の軍神なり、摩利支天、不動明王、十二神將などの類は天竺の神なり、佛法にある事なり」。

***いくせ**　足も冷えて鐵釘を、胸に打たるいくせの思ひ(重井筒)

〔幾瀬〕幾何の瀬の義から轉じて、思ひの彌增して胸を波立たしいためること。

いくはな　濱納屋の下で組んづ轉んづしてゐたを、いくはなか見て來た(歌念佛)　皆皆科に落さん爲、跡から親王・長歌がいくはな出ようも知れまいぞ(持統天皇)

〔幾端〕幾細。

池田炭　火斗は焦るる紅葉ばを、盛つたる如き池田炭、遠慮もない儀が火燵に移し(重井筒)

一庫炭とも云ふ。攝陽群談・十六に、「一庫炭。河邊郡一庫村の山中に炭竈を造り、山林の櫟木を伐り採り、竈に入れ口を閉塞で、以レ土塗レ之、日を經て開レ之、市店に送るの始、先づ池田市に立つを以て、世に池田炭と稱す、今近郷に習ニ得之一、所々に竈を設けり、此炭自然と香甚美にして、火氣強く和也、因て茶爐に置けり」。巣林子がこのあたりの着想は、謠曲・紅葉狩によつたものである。謠曲・紅葉狩に「人は知らじとうちとけて、ひとり眺むる紅葉ばの、色見えけるか如何にせん」。

***いけづき**　いけづき・磨墨・大黑・小黑失せしこのかた(大磯虎)

〔生唼〕長門本・平家物語、摺墨・いけづきの條に、「この馬をいけづきといひける事は、馬をも人をもくらふ馬なり、八寸の馬とぞきこえし」。佐々木四郎が宇治川の先陣したときはこの馬に乘つてゐた。

***いけどうずり**　女房子供の身の皮をはぎ、その銀でおやま狂ひ、いけどうずりめ(天網島)

「いけ」は「いき」の轉、「いき」生の條を見よ。「どうずり」はその條につきて見よ。人をいたく罵る詞で、大盜人といふ程の意。

***いけどしより**　いけ年寄の推參者、捻り殺すは易けれど(大織冠)

〔生年寄〕「いけ」は「いき」(生)の轉、「いき」の條を見よ。役立たずの老朽といふ程の意。

***いざ**　重ねて不覺を取らんより、いざさせ給へと馬引寄せ(國性爺)　いざうれ房若、いざ給へ母上(栬狩)　仔細は靜に承らん、いざさせ給へといふ所へ(蟬丸)

誘ひ立てる時に發しる感動詞。「いざさせ給へ」の「させ給へ」は、たゞ「給へ」ともいひ、出で立たせ給への略。

***いざうれ**　いざうれ乙若君、一生の御台戰よそに聞いてあるべきや(源義經)　いざうれ房若、いざ給へ母上(栬狩)

誘ひ立てる時に發する感動詞。さあさあ。平家物語・卷九、一二のかけの條に、「いざうれ、土肥が承りて向ひたる西の手へ寄せて、一の谷の眞先かけんといひければ」。

***いさかふ**　油斷はせぬと、棒振廻しいさかふ聲(反魂香)　我が家に歸れば、家の內女の聲聲、いさかひは何事やらん(大織冠)　いさかひ過ぎての棒ちぎり木、後の廣言腹の皮(烏帽子折)

〔諍〕「いひさかふ」(言逆)の約つた語。爭論す。饅頭屋本・節用集に、「鬪諍」。

いさざ　いさざ小海老の連れ諸子(以呂波)

〔鰖〕細小の義。淡水魚で體の長さ一寸許り。

***いささがは**　藪のそとものいささ川、流れ漲る樋の上を最期所と着きにける(天網島)

〔細小川〕小川。

***いざさせたまへ**　「いざ」を見よ。

***いさめる**　御徒然を諫めの爲(反魂香)

〔諫〕諫言する意より轉じて、慰める。

***いさりび**　海人のいさり火ちらちらと、星か螢か影うすく(天神記)

〔漁火〕「いさり」は「いそあさり」(磯探)の略。魚貝などを取る時に焚く炬火。

***いし**　業平悅び、おおいしくも申せし、汝供奉仕れ(井筒)　郡司打首背き、おおいしくも申せし三郎と(小栗判官)

〔美〕「よし」(良)の轉訛語か。旨い。神妙な。けなげな。「いしく」は「いし」(美)の副詞形。

いし　身代もいしくなつて、わんぼ一枚にはなつたれども(加增曾我)

前條の「いし」(美)の逆用語。惡い。「いしく」は「いし」の副詞形。物類稱呼・卷五に、「わるいといふ事を上總下總にてイシイといふ」。

***いしうち**　祝言の夜の石打は、打かためるとてめでたけれども(井筒)　吉きさが嫁入の談合に石打とは、左右めでたうござる(今宮)

〔石打〕石を投付けること。石投げ。昔は婚禮の祝をしてゐる時、夜陰に乘じて他から石を投付ける惡戲が流行してゐた。元祿頃はそれが盛に行はれたと見えて、元祿二年の布達に石打を禁ずることを記し、祕錄百箇條中の七十二の所に、「婚禮石打御仕置の事。石打狼藉頭取百日手鎖、同類五十日手鎖」とある。

いしうりかか　今の石賣嬶どもが、馬の沓が打たれぬ、打たずに引いて歸れとは、いかにしても氣懸りなり(堀川波鼓)

〔石賣嬶〕京の白川あたりから、馬に石を負はせて、都に出て賣る女。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷三に、「石賣女。所の法にて一日に一駄の外はゆるさずとかや」とありて、石賣女が石を負はせた馬の口をとつてゐる畫が載せてある。「しらかはいし」をも見よ。

いしうるし　とんと吸付いて離れぬ股ぐらの鮑、石漆石漆(浦島)

〔石漆〕漆喰。

いしぐるま　先は男振り、それが好いとて一心の下り坂、石車に乘つて徒惚れするは、男の屑の葛餅(松風)

〔石車〕圓い小石を踏付けたとき、その石の轉るよりいふ。圓い小石を踏付けて轉倒するを、石車に乘るといふ。

いしごき　石御器に一二抔、肝の束へ諸白をいつかけた薩摩二才(博多)

〔石御器〕茶碗。

***いしこづめ**　砂をまきかけ引くも

〔一見〕初會。初會客を一見客といふ。浪花方言に、「いちげん。一見たり、遊里の言葉、町にてもいふ」。

***いちご** 一期男持たずにゐやるか(反魂香) 一期と思ふ女房を我が物顏のみにくさに、苛つは戀の癖なれども(二枚繪) ああ有難い、これぞ我が一期の灌頂、未來の血脈疑ひなう成佛します(唐船噺)

〔一期〕一生。一生涯。一期は一生死間を云ふのであるが、轉じて死期のことにも云ふ。「一期の灌頂」とは臨終際の灌頂(灌頂はその條を見よ)。

***いちこつてう** 覺えがなうて大將になるものかと、壹越調をかすり上げ(振袖始)

〔壹越調〕十二律の一。黃鐘調。宮音。

いちごんはうおん 憲法に兵法の師弟の契約親切にて、一言はうおんの下人となり(吉岡染)

〔一言芳恩〕一言の恩に感じて主として從ふこと。太平記・卷十、三浦大多和合戰意見の條に、「其外譜代奉公の郞從、一言芳恩の軍勢ども、三百餘人引返し討死しける間に」。

いちざあそび 一座遊は如法めく(女殺)

〔一座遊〕その一座だけの遊。この文意は、始めて、遊女を揚げて、その一座だけの顏合せでは、遠慮しこ柔和らしいとの意。

***いちざながれ** 大事の男な唆かしての心中は、さすが一座流れの勤めの者、義理知らず僞り者と(天網島) 宮城野と申す傾城を人に誘はれ、二三度は一座ながれの御遊び、四度馴染めば五つめは、はや睦じさ彌增り(賀古敎信)

〔一座流〕その席だけにての知合ひ。對座した時だけの懇意。

***いちじ** これより修行をかへ、一字半錢の頭陀をため(賀古敎信) いかやうとも仕送つて一錢一じ損かけまじ(冥途飛脚)

〔一字〕一文。文と字とはもと別義で、說文序に、「依レ類象レ形謂二之文一、形聲相益謂二之字一」。宋鄭樵の說に、「獨文爲レ文、合文爲レ字」。元戴侗の說に、「獨體爲レ文、合體爲レ字」と見えてゐれども、こゝには文も字も同じものと見て、一字は一文で、一文は錢一文の意である。「じ」をも見よ。

いちじがき 光は暗き門行燈、大和屋傳兵衞を一字書、眠りがちなる拍子木に(天網島)

〔一字書〕字をくづして一筆のやうに書き下すこと。ひとふでがき。虛實柳巷方言(寬政六年刊)揚屋井桃灯しるし(浪華)の條に、挑灯じるし十二種を書き、何れにも屋號などあつて、それが字をくづし續けた一字書になつてゐる、これは後世のものなれども、近松の當時を想見するに足る。

いちじきんりん 七佛藥師・一字金りん(嵯峨天皇) 守敏は一字金輪のほふ我劣らじとせめかけらる(以呂波) 冥道供・一字金輪の法(弘徽殿)

〔一字金輪〕一字輪王佛頂ともいひ、本體は大日如來で、この如來が一切最勝三摩地の定に入つて說かれた兕文を人格化したもので、一字とは其兕文「南莫三曼多勃䭾南勃嚕唵」の中の「勃嚕唵(brom)」字をいふ。一字金輪の修法を一字金輪法(一字金輪佛頂法の略)といひ、息災の爲に修して祕法たる由、要略抄に見えてゐる。

***一七夜** 轟の御坊にて一七夜は通夜申し(出世景淸)

人死して七日間をいふ。この間は每夜僧來つて死者の爲に讀經す。それより二七日・三七日・四七日・五七日・六七日・七七日・百日目に供養す。

いちじふさんさい お使に一汁三菜との御意なれども、大阪藏屋敷留守居方の振舞でも、隨分輕いが二汁五菜(宵庚申)

〔一汁三菜〕汁物一碗に菜三皿の膳立。

***いちぜんもり** どうした事やら此頃は一膳盛の客さへない(丹波與作)

〔一膳盛〕一膳飯。一碗幾らと價を定めて賣るもの。一膳盛の客とは、ちよつと立寄つて一膳盛を食うて行き過ぎる客のこと。

一代敎主 「末世一代敎主の如來」を見よ。

***いちだん** 明日から八專土用前、一段とようござろ(今宮) 扨はおかちが祈禱なさるるか一段一段(女殺) 先づ御無事にて一段、淸十郞も息災で(歌念佛)

〔一段〕ひときは。「一段とよい」などいふを略して「一段」とばかり云ふことがある。謠曲・鞍馬天狗に、「當年は一段と見事にて候」。「一段」の用例は狂言にも多い。

***いちぢやう** 未來でたしかに逢ふ事は三世の諸佛の請合にて、こればかりは一定と、淚をつつむ思ひの色(虎が磨)

〔一定〕確に定まつてゐること。必定。

***いちにん** 一人とは天子帝の御事(國性爺)

〔一人〕天子。大寶職員令に、「師範一人儀二表四海一、(朱曰一人者天子也)」。

***一念化生** 心は昔にかはらざれども、一念化生の鬼女とや(嫗山姥)

一心に思込んだ執念によつて生れかはつたもの。謠曲・山姥に、「一念化生の鬼女とや」。

一念三千の機 比叡山の西塔にて天台四觀の旨を開き、一念三千の機を顯して三千人の敵の首、數度の軍に討取つて(大磯虎)

一念とは瞬時に起る心。三千は森羅萬象を總括した名。地獄界より佛界に至る十界は、一界每に十界を有して百界となり、百界は一界每に十如是を有して千如是となり、而して五蘊・衆生・國土の三種世間は各千如是を具有して界如三千の法をなす。この三千の諸法は吾人の一心に具有するが故に三千の機といふ。苟も一念存すれば、そこに必ず三千の法を具有すと說く。これを一念三千といひ、天台宗にて立てる根本敎義である。

一念信解 不輕菩薩は打擲せられ憎まれながら妙覺の佛の位に至り給ふ、皆これ一念信解の德(百日曾我)

〔一念信解〕一心に佛の敎を聽いて信仰し、その義理を了解すること。

一念の角 一念の角聳ち、眼に光る邪正一如と見る時は(嫗山姥)

〔一念の角〕一心に思込んだ執念によつて、惡鬼と現じ角を生じたこと。

***一念發起** 德兵衞一念發起して(重井筒)

菩提に向ふ廻心懺悔の思を發し起した義で、惡を悔んで善に向ふ心の起つたこと。

〔伊勢櫻〕櫻の一種。花八重で淡紅紅色である、遲く咲きて花終りに近い、終と尾張と調通じ、尾張に近いは伊勢であるとて、この名があると云ふ。

いせのおし　御祓配りの伊勢のお師(碁盤太平記)
〔伊勢御師〕伊勢太神宮の身分卑い神官で、毎年太神宮の御祓札を諸國に配る者。

伊勢の御緣日　明日は伊勢の御緣日、今宵の月に蹴殺され(重井筒)
伊勢講で會合する十六日(伊勢講を見よ)を伊勢の御緣日と云ふ。

***伊勢の濱荻**　伊勢の濱荻・難波の蘆、よしといふも同じ草か(佐々木)
「物の名も所によりて變るよなう」を見よ。

***いせを**　いせをの海人にあられども、そのはま荻野八重桐(今宮)
「いせ」は伊勢。「を」は感動の助辭で、源氏物語・須磨の卷にも、「うきめかるいせをの海人を思ひやれ」などある。勢陽五鈴遺響(安岡親毅撰)首卷下に、「伊勢雄海士、此國(伊勢)の海濱に居して漁を業とす海民を謂なり」。

いせをどり　小町踊・伊勢踊、見せたい物は都踊のぬき拍子(女護島)
〔伊勢踊〕伊勢音頭で踊るのをいふ。勢陽五鈴遺響(安岡親毅撰)首卷下に、「伊勢踊(或伊勢音頭)。曲調音調一種の舞踏あり、伊勢音節と云も同じ、娼家の歌妓の一曲節なり」。

いそふれ　(振袖始)(源義經)
「いざうれ」を見よ。

いそもじ　數萬人心心の願立に、神の御身さへあいそもじの、まして流れの憂節や(生玉)
〔急文字〕急がしの文字詞。急がし。文字詞については「そもじ」の條を見よ。

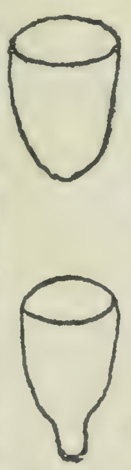
***いたいけ**　孫を持つたも名ばかりで、いたいけらしい顔も見ず(賀古敎信)　門内へ乗入りし振いたいけにおとなし(夕霧)　一子禿の功力によつて濡れしやうごんの里に馴れ、いたいけこよねの愛敬にほれられ給へ(扇八景)
傷い氣の義。傷はしう思はれるほどかはゆげ。甚だかはゆげ。嬉遊笑覽・卷六下に、「いたいけは痛氣なるべし。いと愛む意の深きをいふなり」。「いたいけこよね」は、いたいたしうかはゆい小妓と云ふことである。「よね」の條を見よ。さて「いたいけこよね」は韋提希夫人をもぢつたのである。「韋提希夫人」を見よ。

***いだしぎぬ**　折節陣中御車は出衣の用意なし(聖德太子)
〔出衣〕中古、花麗を競ふ爲に表衣の下に下着の美々しいのを出したのである。直衣狩衣などの表衣の下に下着の裾が出で、袴の外に垂れて表衣の襴の下にも出した。牛車に乗つては、女は簾の下から袖口及び裳裾を出したのである。

***いたしこ**　だきすくめても爪立て、掻つくをあいたしこ、放せば離れてかけ出づる(大經師)　戸をあけ片足踏込めば、内よりあいたあいたしこ、横腹を踏みくさる、何者ぢや(丹波與作)
「こ」は增加した音で、「はん」(判)を「はんこ」、「あり」(蟻)を「ありんこ」などといふと同じ類である。痛い。「あいたしこ」の「あ」は感動詞嗚呼である。

いたち　祕藏の仔猫を馬程な鼠が喰へて駈出すやら、屋根では鼬が躍るやら(嫗山姥)
〔鼬〕肉食類の獸、鼠に似て長さ一尺五寸許、毛は赤黃色、夜間出て鼠・飼禽などを害して生血を吸ふ。「鼬が躍る」は、「猫が鼠捕りや鼬が笑ふ」といふ童謠に據つたものか。「鼬の道切」をも見よ。

いたつきのまとや　本田が矢には家名もなきいたつきの的矢、狩場の法も知らず慮外千萬の鹿論(會稽山)
〔平題箭的矢〕「いたつき」は鏃の一種である。角・木・鉛・鐵などで作り、形小さくして尖らず、平になつてゐるのが多い、射術の練習に用ゐる。饅頭屋本・節用集に、「平頭箭」。的矢は稽古矢で、射手の姓名を記さない。和訓栞に、「倭名鈔に平題箭をいたつきとよめり、板著の義にや、題は頭の如し、今の鏃射箭也といへり」、云々」。


〔きつたい〕

伊丹酒　はや本復の伊丹酒(今宮)
痛みが本復するを伊丹酒にかけたのである。攝陽群談(元祿十四年刊)卷十六、名物土產の部に、「河邊郡伊丹村の市店に造り、神崎の驛に送り諸國の津に出す。香味甚美にして深く酒を好人味レ之、當所の酒を知る事他に勝る故也」。

***いたらがひ**　いたら貝は岩永黨(五人兄弟)


いたら貝

「丸にいたら貝」「三ついたら貝」「離れ三ついたら貝」「三つ頭合いたら貝」「四ついたら貝」「五ついたら貝」「向ひいたら貝」など種種ある。

〔伊多良貝〕伊多良貝の紋所。

いたりぞめ　りんず小袖のいたり染、緞子・天鵞絨・金更紗(蛙合戰)
〔至染〕至り盡した染物。意匠を凝した染物。

いたりふう　朝比奈の三郎同道にて、忍び出掛けのいたり風(虎が磨)
〔至風〕行き届いた振。氣の利いた姿。

***いたんなり**　我こそ一の矢は射たんなれ(會稽山)
「こそあるなれ」を「ござんなれ」と云ふやうに、「射たるなり」の「な」が鼻にかかる音であるので、その上の「る」が撥音「ん」になつた詞。射たのぢや。

***いち**　いち立てて屋財家財のくづし賣(博多)
〔市〕競賣の市。競市。

***いちげ**　一夏に一部夏書せし大慈大悲の普門品(天網島)　いちげくじゆんの大行に、深山深谷讀誦して、廻りけるこそ心切なれ(加增曾我)
〔一夏〕四月十六日(或は十五日)から七月十五日まで、僧徒一堂に會して佛道を修行す。この期間を一夏といひ、その日數九十日あるを以て一夏九旬といふ。蓋しこの期間は印度にては霖雨期なので、爲に釋尊諸弟子を精舍に集めて、各自の修養訓練に勤めしめられたより起つたのである。また夏時は道路に蟲類多ければ、佛道修行者はこれを踏殺すまいと、一夏の間禁足して家に籠る。これを安居といふ。經音疏に、「自二四月十六日一訖安居入制至二七月十五日一、爲二受臘之日一、若二俗歲除日一」。

***いちげん**　一げんながら武士の役、見殺しにはなり難し(天網島)　今日の客は一げんの田舍侍(氷朔日)　あたら肌を柏屋のさがば、大和の一げん客が今日は天滿の社内の茶屋で、酒と出かけて遊ばんと(生玉)

か一夜妻、かりの情を忘れかね、跡まで慕ふはやさしけれども（女楠）

〔一夜妻〕一夜の妻となる義。遊女。賣色女。

*いちやながれ　春立ち行けば色失せて、淋しき梅も捨てられず、これ天職の姿にて、一夜流れの軒端の梅の、あだな袂に香を留めて（生玉）

〔一夜流〕客に揚げられて一夜の添臥をする流れの身。ここの文は、一夜天神と添臥すれば、その色香長く忘れられぬ意。

一里塚（いちりづか）　主の娘と懇（ねんごろ）など駿河の富士と一里塚、及ばぬ事をええあはうな（歌念佛）

昔時街道に一里毎に土を盛り、その上に樹木を栽ゑて里程の目標としたもの。茗話（太田藤右衛門筆記）に、「元龜元年庚午、近江の國安土より都まで一里塚を築き、道のふちに松を植申候、是一里塚の初なり」。本朝世事談・卷五に、「正親院の天正年中一里の行程を定め給ふ、地の三十六禽を表して三十六町を一里とす、諸國に一里塚をつかしむ、標に松杉を植ゆべきやと信長公へ伺ふに、餘の木を植ゆべしとなり、長つて榎を植ゑたり、よの木とゑの木と聞きたがへなりと云ひ傳ふ」とあれども、茗話の說と共に信ずるに足らない。慶長九年台德君が諸士に命じて、東海東山北陸三道に一里塚を築かしめたのがそのはじめであらう。「駿河の富士と一里塚」とは提灯と釣鐘といふ如く、不釣合なるをいふ。

*いちれん　和女（そなた）は母の形見を持つ、我は父の骨の側、夫婦親子一蓮の示しの時刻延されず（萬年草）　父母兄弟一蓮に到るべき御法を授け示してたべ（扇八景）　一蓮一具の骸骨（井筒）　これぞ一蓮托生と、慰めつ又慰みに（冥途飛脚）　雷雲をとつて引立て、持佛堂に打込み、おおよい氣味、生きながらの成佛、未來は一蓮二れんぶつ（持統天皇）

〔一蓮〕極樂淨土で同一蓮華上に生れること。同一蓮臺に往生すること。「一蓮一具の骸骨」とは一蓮華座上に一體の骸骨。「一蓮托生」とは極樂淨土に往生して身を同一蓮華座上に托すること。「一蓮二蓮佛」とは一蓮の佛にまた一蓮の佛が加はつて二蓮の佛となること。

*いちゑん　入道親子仰天し、一圓に心得ず何樣仔細候はん（蟬丸）　島主一圓うてぬ顏（聖德太子）

〔一圓〕全然。井原西鶴撰・武道傳來記・卷四、誰が捨子の仕合の條に、「家老中ひそかに歎度意見加へられしに一圓承引致さず」。

*いつかい　此袴の下には鬼が住んで、いつかい口で嚙みつきます（雪女）　母の胎内にある時よりいつかい世話、頭を地に付け禮をいふは知つたれども（唐船噺）

「いかい」（嚴）に促音「つ」の加つた語。「いかい」を見よ。

*いつかく　けふの女もふさではない、人置の娘を一角で賴うだ（重井筒）　くしやみしても一角（淀鯉）

〔一角〕金壹歩。一步判金は長方形をなせるよりいひ、京阪地方で廣くいはれた。

いつかける　石御器に一二杯、肝（きも）の束（たばね）へ諸白をいつかけた薩摩二歳（博多）

「ひつかける」の「ひ」の子音の脫落した長崎國訛りであつて、この語現今も長崎や鹿兒島地方で用ゐてゐる。ぶつかける。飲む。

*いつかな　さあ梶原殿、目前に家來を討たせて堪忍ならずばお相手に罷成らん、いかにいかにと呼はれば、いつかなこと怪我ござらぬと、後をも見ずして逃失せける（大磯虎）

「いかな」（如何な）に促音「つ」の加つた語。「いかな」を見よ。

***一騎當千**（いつきたうせん）　一騎當千の勇者（百合若）

一騎で千人に當る義。武勇拔群な者をいふ。李陵答二蘇武一書に、「疲兵再戰、一以當レ千」。涅槃經に、「人王有二大力士一、其力當レ千、故此人稱二一人當千一」。北史・唐邕傳に、「强幹一人當レ千」。

***一脚長蛇**（いつきやくちやうだ）　一脚長蛇の備を立て（唐船噺）

中堅と左翼右翼と兵を配り、首尾相應じて互に援け合ふ陣取。

*いつきよう　これは一きよう、この子はいとしうござらぬか（重井筒）

〔一興〕一つの面白いこと。また反語にして奇怪の意にいふ。尺素往來に、「是又時之一興」。

*いつくし　さもいつくしき女性二人悄悄（しをしを）として申すやう（世繼曾我）

「嚴し」（端正なるをいふ）の義。轉じて「うつくし」（美）。

***一刻飲**（いつこくのみ）　探し寄つたる手先に瓢簞大膽者、口から口へ一刻飲み、元の處にそつと置き（川中島）

一息に飲み盡すこと。

*いつさう　さあ埒はあいた塗師屋殿、萬事は國より一さうせん（歌念佛）

〔一左右〕「左右」は「吉左右」などいふ「左右」で、樣子の義。一報。一通知。通知。

*いつさつ　あとの三月二日に暇をやるとの一札、王樣の御綸旨より高直な物握つた（反魂香）

〔一札〕一通の證文。一札のかきもの。

*いつしやうけんめい　サア惡入道が退出を待ち受け、手をすらせんか、但し御前の對決か、藤孝が一生懸命と、駈け出で駈け入り（女夫池）

もとは「いつしよけんめい」（一所懸命）であつて、一所で生命を懸けつなぐ意で、庭訓往來六月七日の文にも、「於二譜代相傳之分領、一所懸命之地一者、不レ可レ有二子細一者哉」と見えてゐる。後に訛つて「いつしやうけんめい」（一生懸命）といひ、その意も轉じて、命（いのち）に懸けて事をする意にいふ。

***一所不住**（いつしよふぢゆう）　一所不住の出家の身（薩摩歌）

居所を定めて住まず、行く雲・流れる水を友とするをいふ。謠曲・鉢の木に、「これは一所不住の沙門にて候」。

***一心三觀**（いつしんさんぐわん）　一心三ぐわんの湯殿には無明の紙燭を照し（扇八景）　一しん三ぐわんの胸の月は圓頓止觀の空にかかる（百日曾我）

天台宗で成佛の祕要とする法門である。一心とは現起の一念の心であつて、これを三種に觀察するを一心三觀といふ。第一に一念の心を觀察するに、己が心にその所在を知悉することが出來ぬによつて空である。この空な心より現はれる萬有乃至何事も皆空である。空であるが故に、自他彼此の別も欲障煩惱も存すべき筈のものでない。これを空觀と云ふ。第二に他面から一念の心を觀察するに、心に現はれる萬有乃至何事もそこに具備して、自他彼此の別も欲障煩惱總て體認される。これを假觀と云ふ。さればとて假觀では本體を尋

一の裏はすごろく　一番勝にかつ色の、花のお江戸に着き給ふ、一の裏はすご六の、さいはひあり喜びあり(丹波與作)

釆(骰子)の目の一の裏面は六なれば、一の裏はすぐ六たすご六(雙六)にかけ、さいはひに釆をきかせたのである。

市の側　漕出て見れば天滿川、市の側なる初甜瓜(今宮)　市の側(天網島)

大阪天神橋北詰上手から龍田町までの濱側を天滿市の側といひ、青物市場があつた。それで初甜瓜とつゞけたのである。

いちのじよう　世の中に絶えて心中なかりせば、二世の頼みもなからまし、誰かしそめしこの契、音に聞きしは生玉の、それが初の第市之丞(氷朔日)

〔市之丞〕天和頃に居た大阪の遊女である。その市之丞と長右衞門と云ふ男とが大阪の生玉で天和三年五月十七日の晩に情死したので、それが直に道頓堀の嵐座、大和屋座、荒木座の芝居に上演されたといふ。これが心中狂言の最初であつたであらうから、心中刄氷朔日のこゝの文に、心中は「それが初の第一」といふに「市之丞」をいひ掛けていうたのである。

一の胴　我我は一の胴二の胴、毛脇提灯八枚目、聟を土壇の試物珍しからん(冷泉節)

人體の上部で兩腋より少し下部。試斬の時、まづ人體を土壇の上に据ゑて、(1)肩の邊(摺付と云ふ)、(2)毛無(腋毛のある上部)、(3)腋毛の生ひてゐる邊、(4)一の胴、(5)二の胴、(6)肋骨八枚目、(7)兩車(腰部をいふ)と順次に斷落して、以て刀の利鈍を試すのである。

***一の人**　一の人の仰せを頼朝直に領掌して、今更變改はなるまじき(佐々木)

攝政關白の稱。職原抄に「執柄者必蒙二一座之宣旨一、故稱二一人一、又云二一所一」。

***一番太鼓**　ほんに厚いつらの皮、其皮を太鼓に張り、あはうの天下一番太鼓、どんどんくさい事見たくない(虎が磨)

江戸時代、芝居顏見世の初日八つ時(今の午前二時)に最初に打つ太鼓。こゝの文は一番太鼓といふことがあるので、それを阿呆の天下一番といふにかけたまで。

いちひめ　一に市姫辨才天女、二は西の宮若惠美壽殿(雪女)

〔市姫〕市を守る女神。金光明辨財天を念ずれば名譽福徳の利益あると傳へられ、辨財天を市姫といふ。

一佛異名同一體　釋迦と阿彌陀とは例へば目といひ眼といふが如くにて、一佛異名同一體(蟬丸)

名こそ異れども、もともど一佛で同一體であるとの義。

***いちぶつじよう**　ああこの駒よこの駒よ、汝は法の道しるべ、鞭打たれし鞭の影までも、一佛乘の緣ぞかし(釋迦)

〔一佛乘〕一切の衆生は皆一樣に成佛するを得る究竟の教法をいふ。乘は運載の義、因人を載せて佛果に運ぶ乘輿といふ意であつて、佛の教道をいふ。法華經に「但以二一佛乘一、爲二衆生一說レ法」。

***いちぶん**　さうしては牛七が一分は立たねども(女腹切)　それでは海野が一分立たず(百日曾我)　今日の御料理隨分切り方に氣を付け、心一ぱいでかせしと一分自慢、御褒美はなされいで存知の外の御叱り(宵庚申)

〔一分〕その身の分際の義。面目。「一分自慢」とは、面目を施したと己一人で自慢氣になること。

***いちまき**　平野屋こかん一まきは語るも聞くも哀れなり(氷朔日)。娘ばかりの豐島屋は、亭主は外の懸一まき(女殺)

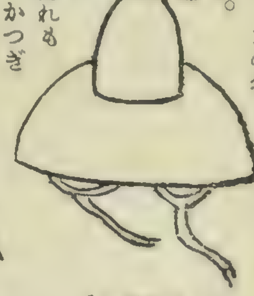
〔一卷〕一部始終。一切。それのみに專心すること。自然居士(古淨瑠璃)第三に「命を限りに尋ね逢ひ、この一まきを言譯し、何とぞわびて連れ歸り」。この語現今も福山市あたりの土着人には往々用ゐられ「義理知らずの慾いちまきの奴」などといふ。

市村玉柏　市村玉柏・梅田橋と見立てたり、それなぜに、はて渡れば色町・滅ゆれば火屋、濡れにも憂ひにもようつる(今宮)

市村玉柏の藝風は梅田橋に見立てられる。そのわけは梅田橋を南に渡れば堂島新地の色所北に越えれば梅田の火葬場で、濡ごとにも憂ひごとにも上手である。役者謀火燧(寶永七年刊)若女形之部に「上々吉、市村玉柏。いづれお上手衆でなければせり合もでけませぬ、むつちりとした御生れ付、物ごしあざやかにしてかはゆらしい風俗云々」。

***いちめがさ**　市女笠きて二人連れ(井筒)

〔市女笠〕古昔婦人の被つたもので、中高な漆塗の笠。もと市に出で、物を賣る賤女が被つたのがはじめで、この名がついたといふ。貞丈雜記に「婦人の笠に市女笠といふ物あり。古畫に見えしは婦人何れも衣をかつぎて、かつぎの上に此笠を被りたる體なり、顏をかくすによし」。



〔いちめがさ〕



〔いちめがさ〕

いちもんがひ　銀こそはなるまいし、判つく程は一門がひ、殊にわしと他人なればなほしも義理は缺かれず(重井筒)

〔一門甲斐〕一門の詮あること。「がひ」は價また値の義。(「言ひたいがひに言ふ」の「がひ」も「一門がひ」の「がひ」と同じ語である)。「かひ」を見よ。

いちやけんげう　ちくらてくらの一夜檢校、終に見馴れぬ出立ちばえ(博多)

〔一夜檢校〕檢校は盲人に授けた最高の官で法印に准じる。盲人が金千兩を上納することによつて檢校になることができたので、さうしてなる檢校、所謂一夜づくりの檢校といふことが、轉じて俄成金のことにいふ。武野燭談に「座頭の司檢校になること、千金だに出し候へば即日檢校になる故、俗にこれを一夜檢校といふ」。東海道名所記に「座頭殿もあはれ一夜檢校になし侍らば、雨氣の鳩の高くふきて、蟷螂が斧のはり臂で有るべきを」。

***いちやづま**　御身は定めて思ひ者

家中一ぱいする人の、世間の沙汰を如何せん(堀川波鼓)
〔一杯爲る人〕殘りなく行きめぐる人。

一百三十六地獄 (冷泉節)(井筒)(弘徽殿)
地獄は梵語奈落(Naraka)の義譯である。大地獄には烱煨増・屍糞増・鋒刄増・烈父増の四地獄四方にあつて合計十六地獄ある。十六地獄にはその各地獄に等活・黒繩・衆合・號叫・大號叫・炎熱・極熱・無間の八地獄あつて合計百二十八地獄ある。これに根本地獄の等活・黒繩・衆合・號叫・大號叫・炎熱・極熱・無間の八地獄を加へて總計一百三十六地獄ある。

***一腹一生**(いつぷくいつしやう) 一腹一生の兄が親の敵を討つと申すに、知らぬ顔をする人間や候ふべき(百日曾我) 一腹一種の御弟(浦島)
一腹一種と同じ。兩親を同じうする者。

***いつぽん** おのれが弟の傳三郎今までおのれら一本と思ひしに、奇特にも傳三めが、天道の恐しさに知らせまするとは告げし故(卯月紕葉)
〔一本〕一味。ぐる。

***いづも** 時にあふみや世に出雲(用明天皇)
〔出雲〕竹田出雲をいふ。用明天皇職人鑑が上演された寶永二年十一月には、竹本筑後掾は退隱してゐたので、竹田出雲が代つて座元となつての最初の上演であるので、世に出づを出雲にかけてその將來を祝した詞である。出雲は淨瑠璃作者ともなり、三好松洛・並木千柳と共に假名手本忠臣藏を著はしたのは人の能く知る所である。寶曆六年六十六歳で歿した。「あふみ」「戌(いぬ)の顔見世(かほみせ)」をも見よ。

いで・そよ いでそよ君が勳功の、文武に富める(五人兄弟)
「いで」は感動詞。「そよ」は「それよ」の約。いやもうそれよ。

いてふのまる 銀杏の丸の駕籠の紋、肥前佐賀の御居城(薩摩歌)
〔銀杏の丸〕紋所の名(佐賀城主、鍋島信濃守綱茂の搶印)


〔銀杏の丸〕

絲櫻(いとざくら) 下すや釣の絲櫻(賀古敎信)
枝垂(しだれ)櫻の稱。大和本草に、「枝長く絲の如くにして下り垂る、花うるはし、彼岸櫻より花稍遲し」。

***いとしぼい** いとしぼいは川樣お一人にとどめた(冥途飛脚) 習はせ給はぬ旅疲れ、よろづさこそと推量られ、御いとしぼく候なり(十二段) 親御達がよく知つていとしぼや(女殺) 額(ひたひ)に毛抜もあてる者が、いとしぼげに女郎しゆ弄(いぢ)つて何(なん)の男(壽門松) いとしぼなげに、紙治さんとわたしが中(なか)さほどにもない事を(天網島)
「いとほしい」(悼)の「ほ」と「し」とが轉換した語で、緣起(えんぎ)を「ぎえん」、茶釜(ちやがま)を「ちやまが」などといふ類である。いたはしい。ふびんな。あはれな。「いとしぼげ」は「いとほしげ」、「いとしぼなげ」は「いとほしなげ」である。

***絲薄**(いとすすき) 心細しや絲薄(用明天皇)
薄の一種で、莖・葉・穗共に細く、穗は紫赤色である。

***絲竹**(いとたけ) 絲竹詩文和歌の道(蟬丸) 絲竹の道暗からず(十二段)
「絲」は、絲を張れる樂器で琴の類、「竹」は笛のこと。管絃。音曲。

***いとなし** のべも亂れて雨と降る涙いとなき風情なり(三世相)
「いとまなし」(隙無)の略。古今集戀歌五の部に、「あはれともうしとも物を思ふとき、などか涙のいとなかるらん」。和訓栞に「いとなし＝無レ暇の義也云々」。

***いとびん** 絲鬢奴の剃立頭(井筒) 提灯を持てる月に絲鬢奴が若白髮(扇八景)
〔絲鬢〕德川時代初期より中頃まで流行した男子の結髮であつて、頭の髮を剃下げて兩の鬢を細く狹く殘し、引詰めて結うたものであることが我衣に見えてゐる。好色一代男・二に、「けんぼふといふ男達(をとこだて)、其頃は捕手居合はやりて、世の風俗も糸鬢にして、くりさげ二すぢ懸の髻(もとゆひ)、上龍殘して袖下九寸にたらず、染分の組帶せかいらげの長脇差」。

***いなおほせどり** いなおほせどりも音をいれて、野邊の刈萱・軒端の荻、馬のまぐさにかひのこす(丹波與作) 鳥のうちにもいなおほせ、妹脊敎へし手習の、戀の墨色あかぬけて(天鼓)
〔稻負鳥〕古今集祕傳に入つてゐる三鳥の一である。巣林子は天鼓に、「鳥のうちにもいなおほせ、妹脊敎へし」と書き、日本振袖始に、「かの鶺鴒を庭來鳴鳥・庭叩鳥・戀敎鳥ともいふぞとよ」と書いてゐるを見れば、鶺鴒のことゝしてゐることは明である。巣林子のやうに鶺鴒とした說は、藤原定家や加茂眞淵などもその說である。(按ずるに、安齋雜考・下卷に、「吳竹抄第十に、近年ある人安藝國にまかれりけるに、はたゝきおりゐてなきけるを、女の有りけるが見て、いなおほせ鳥よといひけるを聞きて、など此鳥をいなおほせ鳥とはいふぞと問ひければ、此鳥來り鳴く時、田より稻を負ひて家々にはこびおけば申すなり云々」と見え、秋に田の畔などで鳴く鳥であらう)。巣林子が丹波與作に「いなおほせどり」と云うたのは、古說にいなおほせどりを馬であらうと云うた其緣によつたものである。

***いなせ** 兄弟富士野へ赴き、けふ二十日に餘れども、兎角いなせのあらざれば、しばしまどろむ隙もなく(世繼曾我) いなせの便りもし給はねば、かれがれ聞きし阿古屋といへる遊女に御親しみ候か(出世景淸) いなせの返事(反魂香)
いやおう(否應)。また轉じて安否。「いな」は否、「せ」は諾の義である。萬葉集代匠記・卷之十六上に、萬葉集の歌句「否藻諾藻」に註して、「日本紀に諾をせとよめり、然ればいなもせもと讀むべし」。錦木(寬文頃の作)卷五に、「いなせ。いやともおうともの義なり」。

***いなづま** 上段下段の太刀捌き、陽炎(かげろふ)稻妻獅子奮迅(國性爺) 家來に乘拔け稻妻走り(會稽山)
〔稻妻〕動作が電光のやうに迅速なこと。謠曲・熊坂に、「おつかけおつゝめ取らんとすれども、陽炎稻妻水の月かや、姿は見れども手に取られず」。「稻妻走り」とは、電光の閃くやうに迅速に走ること。

いなばきむしろ 時宗はいなばき莚引被り、上には菖蒲眞菰草(虎が磨)
〔稻掃席〕稻穀(もみ)を廣げるとき下に敷く莚。

いなぶねの 如何なる武士もいなぶねの、押すに押されぬ此道を止まらせ給へといひければ(女護島)
いなぶねのいなとつゞく序語である。「武士もいなぶねの」は、武士もいなぶ(不肯)をいな船

ねることができず、また空觀では萬有乃至何事も撥認されるを如何せんやである。こゝに於て空觀と假觀の二邊に偏せぬ中道を第三の中觀となす。吾人は假觀を離れて中觀なく、假觀と中觀を離れて空觀なく、中觀と空觀とを離れて假觀なしである。この空・假・中の三觀は一念の心に存在する天眞の性德であつて、能く寂寞照了の智この性の妙諦に透徹すれば、則ち眞如の月の如しで、これを一心三觀の觀法を體得したといふのである。

いつしんづく　このさがと平様とは一心づくで逢うてゐる(生玉)
[一心盡]何事も顧みず我と我が心を盡すこと。他から餘儀なくされるのではなくて一心を盡すこと。

***いつしんふらん**　一心不亂に掛硯の銀に性根を奪はれて(二枚繪)
[一心不亂]專心一意。阿彌陀經に、「執持名號若一日乃至七日一心不亂」とありて、阿彌陀經疏に、「一心不亂者、專注無散也」。

***いつせい**　三つ地・五つ地・一せいの音に紛らす忍路や(酒呑童子)
[一聲]謠曲で一聲の所は一聲にあふやうに謠ふのである。シテ一聲謠はシテ役が舞臺に登場して第一に謠ひ出す一節である。シテ・ツレ一聲謠は、多くシテ役が橋がかりの時又は舞臺に登場して第一に謠ふ。シテ役ツレ役が同時に謠ふ場合もある。

いつせき　身が一せきの臺詞の裏を食はすはしれ者(嫗山姥)
[一跡]跡目一式の義、轉じて自己特有の意にいふ。

***いつそくぜつだん**　終に一そく絶斷の、經絡六脈絶えだえに、息の通ひ路ふつつと切れ(二枚繪)　一息絶斷臨終の嵐に貪慾私慾の火の車(蟬丸)
[一息絶斷]最期の一息で事切れ人命の終ること。止觀・七上に、「一息不レ返、卽名二命終一」。

いつちやうら　黒羽二重のいつちやうら、定紋丸に蔦の葉(天網島)
[いつちやうらふ](一挺蠟)の「ふ」の脱落した語で、點し替なしといふ意が轉用されて、掛替なき最上等の品をいふ。井原西鶴撰・男色大鑑・卷之六、京へ見せいで殘りおほいもの、條に、「三月三日は鐵の槌打二瀧までも、天王寺清水汐干などいうて遊ぶ日なり。まして其上つ方いつちやうらを取出して思ひ思ひに立出で」。寛濶平家物語(寶永七年刊)卷之三、雜波海道くだりの條に、「一丁蠟」とあつて、「蠟」に「ら」と傍訓が附けてある。

***一中節**(いつちゆうぶし)　ふかみどり屋の小丁稚が、一中節の川風に、聲も廣がる扇屋の(女腹切)
都太夫一中が語り始めた淨瑠璃で、曲調悠揚に哀れげな中音で語るところに妙味があると云ふ。都一中はもと本願寺派の僧であつたのが音曲家となつたので、その曲風は伊藤出羽掾から岡本文彌・都越後を經て傳はつたものである。近松と一中とは關係かなり深く、心中天網島の「迷ひ行けども松山云々」や、長町女腹切の「春は梢にいろいろの花さく山に山めぐり云々」など、一中の淨瑠璃を用ひてゐる。

***いつつぎぬ**　(持統天皇)
「五衣」昔時婦人の衣服。もとは袿五つ重ねたのを云つたのであるが、後には一枚で五枚襲に見えるやうに仕立てたのを云ひ、又三四枚襲ねたのも五つ衣と云うた。裝束要領抄後附に、「五衣、これは古の重袿なるべし、或は重ねぬ時もあり、時宜によるべし、こゝにいへる五衣は、表何色にても同じ色なる五つ重ねて、裏は一つ一つ紅の平絹を附けたり、又色變りとて、五つながら別色なるもあり、重ねやう互に色を奪はぬやうに重ぬる事、古來の有識ならひなりと承りぬ、色がはりの時は裏は古儀のならひに隨ふべし、五つながら同じ衣の時は文も皆同じきなり云々」。

***五つ道具**(いつつだうぐ)　引馬に五つ道具、乘物の戸八文字に開かせ、布袋乘に乘つたるは梶原平次景高なり(會稽山)
身分高き武士が供廻を連れて外出する時、列中に槍五本または立傘・打物・槍などの五本を立てること。

いつつぢ　三つ地・五つ地・一せいの音に紛らす忍路や(酒呑童子)
[五地]謠曲で小鼓の手の名。謠ひ方にも五つ地の所は五つ地にあふやうに謠ふのである。

五つのたなつもの　庭に五つのたなつ物積む蓬萊の島田氏(宵庚申)
五穀。「たなつもの」は「たなりつもの」(田成津物)の略であらう。稻を云うたのであるが、また田畑に出來る物をも通稱す。五穀は、楚辭の註に、「稻・稷・麥・豆・麻」、孟子の註に、「黍・稷・菽・麥・稻」、月令に、「黍・稷・麻・麥・豆」素問に、「禾・麻・粟・麥・豆」。

五つの常の道　御狩車のいつつをも、五つの常の道しばや、惠の露に霑きて(蟬丸)
仁・義・禮・智・信の五常。

***五緒の車**(いつつをのくるま)　間の東は玉敷の、御垣にかこふ五緒の車、烏丸兩が室(堀川波鼓)　御狩車のいつつをも、五つの常の道しばや、惠の露に霑きて(蟬丸)
五つ緒のついた車で、網所車のことであるといふ。徒然草・第六十四段に、「車の五緒は必ず人によらず、程につけてきはむるつかさ位に至りぬれば、乘るものなりとぞ或人仰せられし」。堀川波鼓のこゝの文につきては「寺岡幸云々」をも見よ。

***いつてつもの**　春樂もとより一徹者(冷泉節)
[一徹者]一筋に思込んで動かぬ人。

いつてぶね　何にたとへんいつて船、汐風寒く吹通ふ(女楠)
[五手船]五挺立の船をいふのであらう。奥儀抄には、十人にて漕ぐ船であるといひ、八雲御抄には、伊豆國より造出せる船であるといひ、本居宣長は、伊豆國より造出す船としては手の字きこえずと云つてゐる。

***いづな**　何條その小童魔法飯綱を行ふとも、變化鬼神も討てば討つ(孕常盤)　いづなの三郎(三國志)(十二段)
[飯綱]信濃飯綱山の飯綱大明神は俗に狐を祭つたものとされ、中世飯綱山の修驗者が飯綱の法と稱して、人を惑はしてゐた者があつたことから傳播して、狐を使ふ妖術を飯綱といふ。「飯綱三郎」は信濃國飯綱山に住む天狗の名で、飯綱にちなんだもの。謠曲・鞍馬天狗に、「飯綱の三郎・富士太郎」。

***いつぱ**　そもそもこの歌仙といつぱ、中頃四條の大納言公任といひし人えらび置かれし人人なり(百日曾我)　一陽を以て衆陰をすぶるといつぱ、我一身を以て數萬騎の軍兵を從へたもつ大將(國性爺)
「いへば」(言)のつまつた語。「いへば」を「いつぱ」といふ例は謠曲に甚だ多い。

いつぱいする人　京の客今のあらまし聞き給ひ、欺して言ふとはそも知らず、心のさげしみばかりかは、

込む程蹴付けられ(女殺)

罨丸」俗に「男の罨丸、女の乳房」は急所であるといふ。和漢三才圖會卷十二、支體部、陰嚢の條に、「陰嚢中有二二玉一、此與レ結喉一男子命根也」。

*****いのちみやうが** 命冥加の女め、たとひ火を遁れしとて、そもや生けて置くべきか(釋迦) やれやれあぶなや、命冥加な孫どもや(鑓權三)

〔命冥加〕目に見えぬ神佛の加護によつて命の助かること。不思議に助かる壽命。

いはうじ 「いわらじ」を見よ。

いはおこし 身より餘りて涙川、堰きも止めよ岩おこし(生玉)

〔岩粔籹〕おこしごめを岩石の如く飴で固めた菓子。こゝの文は、大和橋下の道頓堀泥の海に踏み迷ふものなれば、「堰き止めよ」に「岩」を道頓堀の名物「岩粔籹」にいひかけたのである。國花萬葉記(元祿十年成)卷五之三、浪花名物寄の條に「岩おこし＝大江橋北つめ、道とんぼり、ひのうへ」。

いはがきもみぢ 來る人稀に奥山の、岩がきもみぢ染め亂れ(川中島)

〔岩垣紅葉〕岩垣の蔭にある紅葉。古今集秋歌下の部に、「奥山のいはがきもみぢ散りぬべし、てる日の光見る時なくて」。

いはくすぶね 「あまのいはくすぶね」を見よ。

いはくにのかみ この十七日岩國の紙のしきりぎんに才覺はしたれども(天網島)

〔岩國紙〕周防國岩國から古來半紙類の紙を産出する、これを岩國紙と云ふ。雍州府志(黑川道祐撰)土産門下・服器部に、「紙。美濃紙關東紙修禪寺紙小杉紙周防安藝諸口片口厚紙五色紙等悉齎二來京師一而賣レ之」。世間仲人氣質・卷四に「他町の使者の行事への祝儀のためが岩國半紙五折に金子百疋云々」。

石清水浴びせません 茨木屋より嫁入とて、婿は八幡のいはし水、あびせませんと井筒屋の亭主は送る(淀鯉)

婿は八幡の者なれば石清水(男山八幡宮)にいひつゞけ、「浴びせません」は浴びせませうといふことで、當時行はれてゐた婚禮の水祝をきかせたのである。 水祝とは水掛祝であつて、始めて妻を迎へた人に水を浴びせるいたづらをして祝としたのである。西鶴撰・武道傳來記・卷之二、身たい破ろ落書の團扇の條に、「此家に入緣の望み數多なり、其中に篠原文助といふ入緣ありて、諸井額母といへる人肝煎られて、極月二十六日に文助戸右衞門方へ入りて祝言の事始め、目出度その年も暮れて明くる正月三日の事なるに、若き者集りていざ文助に水掛祝といひ出づれば、各進みて無用といふ人ひとりもなし」。水祝は天和・元祿頃に盛に行はれたと見えて、天和三年十二月二十四日及び元祿三年正月五日の町觸にこれを禁止することが見えてゐる。

岩代の松 岩代の松に懸れる下り藤、嵐になやむ如くにて(今宮)

紀伊國日高郡岩代の海濱にある結び松のことで、萬葉集その他多くの歌集に詠まれてゐる歌枕である。

いはなし 千代の苔むす岩梨の、岩にも花の松の實や(嵯峨天皇)

〔岩梨〕松林岩石の間に自生し、小灌木でその實の味甘美である。

*****岩橋** かけてぞ通ふ岩橋の、葛城山に着きにける(浦島) 君が忍びの御幸道、打渡したる岩橋も、夜の契の便りかや(弘徽殿) いはばしの夜の契も絶えぬべし、あくろわびしき葛城の神(百日曾我) 葛城の久米の岩橋夜ならで(國性爺)

岩石でなつてゐる橋。昔時役小角といふ行者が葛城山一言主の神を役して、葛城山から金峯山に岩橋を架けようと思うて、まづ大和國久米川に岩橋の工事に取掛つた所、葛城の神己が容貌の醜いを恥ぢて、夜のみ出でゝ工事に從ひしかば、小角怒つて葛城の神を縛したので、工事半ばにして成らなんだといふ。水鏡・文武天皇の條に、「(役行者)大峯と葛城の峯とに岩橋を渡せと、この鬼神どもに言ひしかば、夜々岩をはこびてけづり調て既に渡し始めし程に、行者は心元ながりて、晝たゞ體を顯はして渡せと責めしを、一言主の神我體の醜き事を耻ぢて猶夜々ばかり渡し侍りしかば、行者怒りて神呪をもちて、この一言主の神を縛りて谷底に投入れてんき」。拾遺集・卷十八・雜賀部、藏人左近の歌に、「いはばしの夜のちぎりも絶えぬべし、あくろわびしき葛城の神」。「かつらぎの神」をも見よ。

*****いはひづき** 大事の甥が出世の門、祝月を心懸け愛宕かけてののぼり舟(女腹切)

〔祝月〕正・五・九月をいひ、初一日には多く善事を修し神社に參詣したのである。黑川道祐撰・日次紀事、九月初一日の條に、「祝月。自レ今日至二九日一、武家井地下良賤各著レ袷、今日互相賀、俗曰二祝月一、凡一年中正・五・九月凶月也、故忌レ之却謂二祝月一、各修二善事一、今日神社男女參詣」。按ずるに佛說地藏菩薩發心因緣十王經に、「爾時閻魔法王重告二大衆一、我以二閻浮日月所一レ行正・五・九月長月十齋一、殊向二閻浮一云々」とあれば、これらから起つたのであらう。

いはぶね 風はなけれど蛋小舟天の鳥舟いはぶねの、空走り行く如くにて(國性爺)

「いはくすぶね」をいふ。「あまのいはくすぶね」を見よ。

*****いばゆ** 野飼の駒のやさしくも、古郷の風の北にいばえていななければ(用明天皇)

〔嘶〕「いほゆ」(馬聲叫)の轉。いなゝく。文選・古詩に、「胡馬依二北風一」。

*****いばらぎどうじ** 渡邊綱こそは茨城童子が片腕、只一太刀にうちわも内輪(雪女)

〔茨城童子〕茨木童子とも書く。羅生門で渡邊綱に腕を斷落された鬼神の名であつて、酒呑童子の部下である。この鬼神後に老婆に化けて綱から腕を取返したと云ふ。(茨木童子に茨木屋幸齋の茨木と、酒呑童子の童子とを掛合し、茨木屋幸齋について、その事件を仕組んだ巣林子作・傾城酒呑童子がある)。

いはらじ 「いわらじ」を見よ。

岩井半四郎 去年のおしまの心中の、其の井筒屋にわれが今、重井筒と篠塚に、言はれいはゐの半四郎(重井筒)

二代目の岩井半四郎を云ふ(初代の半四郎は元祿十三年に歿した)。大阪道頓堀歌舞伎芝居の座元となり、若衆・女方に扮して好評を博した名優であつた。役者二挺三味線に、「女方若衆方を勤めすまされ、當顏見世より角前髪似合まして、さぞや古半四郎草の蔭にて御滿足と存ずるは、打續いての座本云々」。

*****いひいれ** 伴之丞樣へたつた一言いひいれでつい御祝言濟む事(鑓權三) いひいれのみつぎを以て姫宮

にかけ、船の緣から押すに押されぬとつゞけたのである。

*いなり　稲荷は五穀のかみ賀茂や（烏帽子折）

稲荷社は大御食津神を奉祀したもので、大御食津神は神代に食物のことを掌れる神である。故に稲荷は五穀の神を上賀茂にかけたのである。俗に稲荷を狐としてゐるのは、大御食津神の食津が狐にその音似てゐるより誤つたのである。

*いにけり　見て參れとの勅なりけ、狩にいにける裝束は（松風）

「いに」は去で、此處を去つて彼處に行つたといふ意。異本・伊勢物語に、「春日の里にしるよしして狩にいにけり」。謠曲・杜若に、「春日の里にしるよしして狩にいにけり」。

*いぬ　我我が出家はいぬめが仕合はせ、とうとう歸れ、（大覺）　大鎌のいぬめらに懲果てて死ぬる身ないはば、面面自害とも心中の外の心中ぞや（卯月潤色）

「うぬ」（輕蔑の意を含む對稱代名詞、汝）の轉。巢林子のこゝの文は犬をきかせていうたのである。

*いぬ　天皇をかくまふ出いぬ入れて聞き知つたり（持統天皇）　この在所は大阪からいぬが入り、代官殿から詮議あり（冥途飛脚）

〔狗〕犬とも書く。まはしもの。しのびもの。間諜。棠陰比事（宋・桂萬榮撰）卷中に、「王蜀時有二驍悍武者一、主二尋事團一、乃軍巡之職也、所レ管百餘人、每レ人各養二私名十餘輩一、呼レ之曰レ狗」。

*いぬおふもの　笠懸・流鏑馬・犬追物（大磯虎）

〔犬追物〕馬上蟇目の矢を用ひ、犬を追射する武技である。馬場は弓杖七十杖、四方に大小繩を張り、ともに輪狀に繞らす、小繩は馬場の正面にあつて徑弓杖一杖、大繩は其外にあつて長さ二十一尋。其周圍に砂を敷く。これを鏑際と云ふ。射手はこの內に馬を乘入れ、大繩の方に向つて矢を射る。その時に犬放の者小繩の內に犬を入れ、檢見の報を待つて犬を放つ。射法は犬が小繩內から出て將に繩を越えんとするを、其繩際にて射るを本儀とする。又犬が鏑際から外に走出れば射手は馬場中を追廻し、犬の傍に近寄つて射る。矢所に弓手・押交・馬手・馬手切等の歎稱ありて賞に差がある。射手は三十六騎で之を三手に分つ。犬は百五十四で、犬の頭・足・尾を射らぬ法である。役人に射手（弓を射る者）、檢見（射手の射樣優劣を定めて賞否を決する者）、喚次（檢見の告を得て其名を唱へて日記付に報ず）、幣振（幣を振つて日記付に知らす者）、日記付（射手の姓名及び矢數を錄する者）、鬮振（鬮を振つて射手の順序を定める者）、犬放（犬を放つ者）、河原者（犬を牽き又雜事に從ふ賤者）などがある。

いぬざくら　打つとも去らじ退くまじ家の犬櫻（井筒）

〔犬櫻〕櫻の一種。松岡玄達撰・櫻品に「犬櫻＝木葉とも常の櫻に似て小花簇生し、穗をなす、花は觀るに足らず、……實六月に熟す、其色黃にして味ひ杏仁に似たり」。

*いぬざむらひ　逃吠の犬侍臆病臆病とぞ笑ひける（烏帽子折）　主の威光を吠え廻る犬侍、棒をくらへと打つてかかる（聖德太子）

〔犬侍〕武士を罵つていふ。

戌の顏見世　既に今年の酉もたち、戌の顏見世朝木戸を、曙深く提灯の、影きらきらと初霜の（二枚繪）

「戌」とは戌の年のことで、即ち寶永三年に當る。「顏見世」は顏見世芝居の略で、上方は十一月一日から始め、次の年の役者の座組はこの狂言で定めた。されば戌の顏見世は即ち寶永二年（酉年）十一月の顏見世であるから、「影きらきらと初霜」と云つたのである。さて寶永二年十一月の顏見世は、用明天皇職人鑑の顏見世芝居であつた。今昔操年代記（享保十二年刊）上之卷に、「其暮（寶永二年）かほみせ淨るりといふをはじめ、用明天皇職人鑑・作者近松門左衛門をかゝへ、太夫竹本筑後掾座本竹田出雲と看板並べ、三段目かね入の出がたり云々」とある。外題年鑑に用明天皇職人鑑を寶永二年三月の上演に書いてあるのは誤である。

*いぬゐ　眉間を橫に薙ぎ据ゑられ、いぬゐにどうどまろびけり（今川了俊）　ざんぶと切つて打落せば、いぬゐにどうど臥したりける（堀川波鼓）

〔犬居〕犬は常に前脚を立て、後肢を折つて蹲踞するものなれば、以てそのやうな坐り方をすることにいふ。平家物語考證（野宮定基編）卷之十一、つぎのぶさいごの條に、「犬居とは左右の膝を前に屈して地に踞するを云」。

いねつむ　槌の子抱いていねつんで、若夷に掛鯛（壽門松）

〔稲積〕いぬ（寢）の正月詞。蓋し正月元日に寢臥すといふは病床などに紛らはしいから、祝ひの言葉には稲にかけていひ、起きるを稲擧ぐといふ。和訓栞、「いね」の條に「正月詞に寢るをいねつむといふは稲積の義也といへり」。

いねのとの　澤邊の螢・いねのとの、影かあらぬか簾の隙に、漏るは卯の花白妙の、雪のな振袖ちらちらとな（卯月潤色）

〔稲殿〕稲妻。電光。俗に稲妻のよく光る年は稲よく實ると云ふ。蓋し農家炎旱の日に雷雨を得て、稲の實ることを思ひ望むより出たもので、實るをはらむとも云ふ。稲妻は稲の夫の義で稲の殿と同義である。昔は夫も妻も「つま」と云つた。續猿蓑・秋部に、「稲妻」の題で一束の句に、「獨り居て留守物凄し稲の殿」とありて、標注七部集（惺庵西馬述）に、この句の頭註に、「稲の殿とは稲妻に同じ」とある。片山松齋撰・北窓雜話に、「萬寶全書云、大暑前後有レ電、早稲薄收、晩稲必大熟云々。稲の實のるをはらむと云ふに付て、電を稲妻とも稲殿とも云へり」。

いのころ　町のいのころ野良犬の雪駄くはへて振る如く（虎が磨）

「えのころ」ともいふ。「いぬころ」（犬兒）の訛。

*命がらり　山城屋といふくつわへ中年四年二百兩、命がらりに身を賣りて（淀鯉）

命をさつぱりと差出すこと。「がらり」は長町女腹切に、「がらり二十兩、ま一年切まし居なりにゐれば借銭もまづ其分」とある「がらり」と同じ語で、物を殘さないでさつぱりと投出すさまにいふ。

いのちげ　白き鹿の命毛を筆に作つて綸を書けば（五人兄弟）　筆は鋭に動くが故に、命毛日を以て數ふといへり（持統天皇）

〔命毛〕筆の鋒毛。筆の穗。「筆はするどに云々」をも見よ。

命のかい　「かひ」を見よ。

命の玉　皆朱が大事の命の玉、縮み

鰻の蒲燒山椒味噌、鉦平とは木曾の御内に今井鮨、酒もりにかくれなき一騎當千の御肴(女楠)

〔今井鮨〕蓼を加味した鮨に此名のものがあつた。大矢數(延寶九年刊)卷四に、「此秋より喰とまつたる今井鮨、さても穗蓼の辛い世中」。こゝの文は、白餠に城持をかけ、深草の緣から鶉に續けて鶉餠、小豆の一種に大納言といふものがあるので小豆餠、唐人唐土に玉蜀黍をかけ、餡に案、今井鮨に鉦平の氏をきかせたのである。「鉦平とは木曾殿の云々」をも見よ。

いみあき 日嗣の玉の男子皇子やす〳〵と降誕あり、……蓬の矢事・七夜の御賀、今日百二十日の御忌明、ことに山王權現に御母方の御願ぞと(松風) 六日だれの忌明の誕生日の食初のと(嵯峨天皇)

〔忌明〕産の穢れの終る日。出産から忌明までの日數につきては、女重寶記(元祿十五年刊)卷之三に、「産のけがれ父七日、母は三十五日なり」と見え、松屋筆記卷十四に、「産忌。黑谷上人語燈錄に、産の忌いくかにて候ぞ、又いみもいくかにて候ぞ、答、佛敎には忌といふことなし、世間には産は七日又三十日と申すげに候、いみも五十日と申す」と見えてゐる。こゝの文に百二十日とあるは、産兒百二十日目に食ぞめすることを忌明にいひなしたのである。女重寶記・卷之三に、「くひぞめのこと百二十日め也」。

いみことば

「さいぐらのいみことば」を見よ。

***いみじ** ひとへに義經が謀いみじきによりてなり(出世景淸)

甚しい。すぐれてゐる。雅言集覽に、「いみじ=善惡とも甚しき所にいへる詞也、たゞ此詞のみいひても前後の文にて知らるゝ也、いみじうられし、いみじうかなし、など上にそへていへるはいふに及はず、下にそへたるもあり」。

いむけのそで 次の幕より八田の知家伏縄目の鎧烏帽子掛して、射向の袖をゆりかけ(蛙合戰)

〔射向袖〕弓を射る時向ける袖の義。鎧の左の袖。

***いもうとぢよらう** 今日突出の妹女郎唐琴を引連れて、揚屋揚屋を顏見世と(蛙合戰) 妹女郎・花車・禿・引舟なんど入替り立替り(大磯虎)

〔妹女郎〕遊女同士で最も睦じい者が互に姉妹約束をして助け合ひ、年長の者を姉女郎とし、年少の者を妹女郎とす。妹分の女郎。

***いもざし** 長柄の槍おつ取り、穗先を揃へてぐつ〳〵と、芋刺串刺滅多突き(室町千疊敷)

〔芋刺〕芋を竹串に突刺したやうに鎗で人を突刺すこと。

***いもせ** そなたは妹脊を忍草、身は兄弟を思草(歌念佛) 祕藏娘の琵琶の姬、右馬の允景久と妹脊の緣のいひなづけ(蛙合戰)

〔妹兄〕妹背とも書く。夫婦。日本書紀・仁賢紀に、「古者不レ言ニ兄弟長幼一、女以レ男稱レ兄、男以レ女稱レ妹」。周禮疏に、「謂ニ夫婦一爲ニ兄弟一也」。

***芋掘坊主** 親より子のよい芋ぼり坊主と、笑ひて輿に入り給ふ(三國志) 扨は刀を奪はん爲の僞な、芋ほり坊主め(娥)

芋を掘るより他に何の藝能もない坊主、卽ち無學文盲の法體の者を貶稱する詞。

***いもゐ** 岩木ならねば若君も心動くばかりなるが、いもゐ許さぬ旅枕、貸すもよしなしもたいなと(十二段)

〔妹居〕妹と居る義。女夫同衾。

***いやなもの** 屛風の上額を出せば、はああ悲しや忌々しい、ちやつとおいて下さんせ、いやな物によう似た(冥途飛脚)

「いや」は否で嫌の義。「いやな物」とは、屛風の上に出した首はさながら獄門にかゝつてゐるに似たからである。

いやはあ こは何とならん身の果、いやはあ、なんと面白い事かと、ひよろひよろ正體なかりけり(淀鯉)

能樂にて鼓打の掛聲である。ヤヲハの間の時に鼓打のイヤハアの掛聲を聽いて、謠手は次の文句を謠出すのである。謠曲・鉦平に「こは何とならん身の果、せんかたもなくあきれはて」の間は息繼であつて、ヤヲハの間ではない、泥醉してイヤハアを出鱈目に言ふ鼓の口調子、更に妙味を覺える。

***いやる** 七左衞門殿もいやらぬ事はあるまい(女殺)

上方詞で、「言はる」の訛。

***いよし** 袖から渡す一結び片假名の、より・五大力・いよしとまではほの見ゆる(三世相) ごまめでござんせの春永に、いよしも變らぬ御けんまで、逢瀨を契る餠は杵(夕霧)

「いよ」(彌)に、語意を强める助詞「し」の附いたもの。(もと「いよ〳〵」を其字形の相似より誤つたものであるともいふ)。いよいよ。ます〳〵。「いよしごけん」をも見よ。

いよし・ごけん いよしも變らぬ御けんまで、逢瀨を契る餠は杵(夕霧) 絆のたいよし御見と書いたるは、ほんに誓文いとしさに、れか花薄、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文、かた樣まゐるはなよりと、思ひまゐらせ候べくの、わけの盃色見えて、わきて泉の思はくは、たゞ逢ひまして逢ひまして、またのごけんをまづかしく(女腹切)

〔彌し御見〕「いよし」は前條を見よ。「ごけん」は御見參の略。いよいよ御目にも懸りましてのうへ。增補松の落葉・卷二、文ことばに、「まことに文はねやの友、いよしごけんと書いたるは、ほだしのたねか花すゝき、ほんに誓文いとしさに、幾夜のゆめを結び文、かた樣まゐる梅よりと、思ひまゐらせそろべくと、わけの盃色めいて、わきて泉の思はくは、たゞ逢ひまして逢ひまして、またのえにしをまづかしく」。

いよ・つろござる 我はしんくの結ぼれ絲の、解けぬ心がつろござる、いよつろござる(百日曾我)

「いよいよつらうござる」(彌辛御座)の訛。

***いらか** 七寶七重の宮殿いらかを磨き(浦島)

〔甍〕屋上の瓦。「いらか」は「いろこ」の轉じた語で、「いろこ」は倭名類聚抄に、「鱗。伊路久都、俗云伊侶古」と見えてゐる。さては屋上の瓦が鱗次たる樣より出た語である。

いらたかじゆず いらたか珠數押もんで(凱陣八島) いで一禱と錫杖振

御迎の爲(日本武尊)

〔言入〕申込み。婚約の申込。

いひおち　申譯致すほど皆言落ちにて候へども(出世景清)

〔言落〕言ふほど非に落ちること。言ふだけ悪くなること。

＊**いひじよ**　親の言ひじよな背くかと叱つても聞き入れず(今宮)

いひでう、言條の訛、言分。「でう」をも見よ。

＊**いひしらく**　銀くれる遣手に水くれるとはわるごうなと、笑ひなしほにいひしらけ、先を拂ひて立歸る(反魂香)　怺へてもこらへられず、言へばいふ程いひしらけ(大織冠)

〔言白〕言葉興醒む。言葉負色になる。

いひたいがいにいふ

「がひ」を見よ。

いふとう　伺候の諸武士いふとうし、俄に式法恭しく(文武五人男)

〔揖頭〕頭を下げて恭しく禮すること。說文に、「揖。讓也、一曰手着ㇾ胸也」。

＊**いぶり**　意見をすればいぶりを出し(卯月紅葉)　心に疵を持つたれば、いぶりもならず拗ねられず(萬年草)　心すわらずぶりしやりのいぶりぶり獨樂(松風)　あゝいぶりさは、いつあを海苔もかたのりと、身のさがらめをなのりそや(出世景清)

〔燻〕けぶたい意より轉じて、氣まづいこと。不興。心に不滿を抱いてぶりしやりとすねること。「いぶりさ」の「さ」は接尾語。出世景清のこゝの文は、氣まづうぶりしやりとするからは、何時逢はうも靑海苔にいひかけ、そして逢はうも難いをかたのりにいひかけたのである。「いぶりぶり獨樂」の「ぶり獨樂」はその條を見よ。

＊**いへづと**　待て暫し、母が追善信玄へのいへづとせん(川中島)　續きて見ゆる八十島を、異國の人の家苞に敎へてたばせ給へよと(國性爺)

〔家苞〕土産物。易林本・節用集に、「家土産」。和訓栞に、「つと。萬葉集に苞の字を訓めり、裹むの義なるべし、山づと・濱づと・道ゆきづと・田舍づとなどは、其處の土産をいひ、手向のつと・家づと・都のつとなどはその土産を持て來んずる所をいへば、共に通へり」。

＊**家の子**　折こそあらめ島上郡高槻の家の子(女殺)

武家の庶子・分家・一族などの者を云ひ、また家隷を云ふこともある。王朝末期豪族各地に起つて兵馬を蓄へ土地を領有する者多く、その大なる者を大名、小なる者を小名などゝ稱し、その民族蕃衍するに從ひ、本家を總領と云ひ、族類を家の子と稱することゝなつた。

家のさだつ

「さだつ」を見よ。

＊**いほはた**　いほはたたてしはたおりや(用明天皇)

〔五百機〕「いほ」は數多きを云ふ。多くの機。萬葉集・卷十に、「たなばたのいほはたたてゝ」。

庵の内に二つ頭　庵の内に二つ頭の提灯は竹の下の孫八左衞門(扇八景)

紋所の名。曾我五人兄弟・小袖紋づくしの條に、「庵の下に雌龍雄龍の二つ頭如意寶珠を守り遊びて、雲を招くや天の帝の末葉の栗、竹の下の孫八左衞門」とあれども、夜討曾我(古活字版)に、「いほりの中にふたつかしらの舞たるは駿河の國の住人てんち天わうの末孫

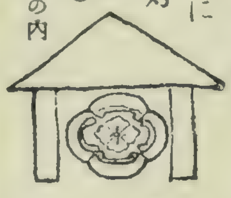


〔庵の内に二つ頭〕

竹の下の孫八左衞門」とありて、この紋絵が載せてある。

＊**いほりもかう**　庵に木瓜附けたる提灯こそ祐經と見しはいかに(百日曾我)

〔庵木瓜〕紋所の名、庵の内に木瓜のあるもの。



〔庵木瓜〕

いまそかり　淸和の帝の御兄四品惟喬親王とて、遁世の皇子いまそかりける(井筒)

おはしましてある。おはします。「いますがあり」の「す」が「そ」に轉じ「あ」が略されて、「いまそがり」となる。伊勢物語に「その帝の皇女にたかい子と申すいまそがりけり」と見えてゐる。昔は濁點を附けずに多く書いたので、「いまそがり」は「いまそかり」となつたのである。「います」はおはしますの意であつて、竹取物語などにも多く見えてゐる。

＊**いまだうしん**　そもじも見れば今道心、さぞつむりが冷えさうな(娥)　俄に剃髪仕り武藏坊辨慶といふ今道心、ちと御法施に御首を入れさせ給へ(吉野忠信)

〔今道心〕今新しう菩提心を發起した者。新しう佛道に歸依した者。

＊**いまは**　母樣の今はの時、縮合が事は父樣が預つた受取つた、心安う往生あれと(千疋犬)

〔今者〕今は限りといふ意。死際。臨終。

いまふるな　何と濡事は軍法智略の根元根本ではあるまいかと、頭を振る舌振る今ふるな、鈴振る樣にいひければ(千疋犬)

〔今富樓那〕現今の富樓那。富樓那は釋尊十六弟子の一人で、說法に巧妙な雄辯の人である。「ふるな」を見よ。

＊**いままゐり**　いままゐりの山路といふ草刈はいづくにある(用明天皇)

〔今參〕新參。新參者。

＊**いまめかし**　心底聞かんとありければ、あゝ今めかし、何事か存ぜねども(嫗山姥)　申し母じや人、今めかしい申し事ながら武士の釜の水で育ちし此半兵衞(宵庚申)

今めくやうな。今更らしい。

いまやう　御馳走の若侍今樣を謠ひ舞ひ(冷泉節)

〔今樣〕當世風の義。當世はやり歌を今樣歌と云ひ、文字の數など定まつたことがなかつたが、後には四つ拍子にのみ謠ふやうになり、七五・七五とつゞけて四句拍子に謠ふ。今樣歌は專ら遊宴の席に謠はれ、遊女白拍子等に堪能な者があつたことは、源平盛衰記・平家物語などに見えてゐる。

いまゐずし　大名とは白餅、深草とは鶉餅、大納言は小豆餅、唐人もろこし分別餡餅、ぬらりころりは

入れ（小栗判官）

〔色〕喪服。運歩色葉に、「喪衣。イロ、中陰之時著也」。

いろ　九月の七日九日は氏神殿の祭、本踊いろ唐子踊いろ見事なことばん（博多）　まだ市五郎・三藏の舟は見えいろ、心元なかばい（博多）　血が走るいろ涙が出るいろ（博多）

「やら」といふ意に用ふ。現今も長崎熊本地方にて用ひられ、「どうしたやらわからぬ」の意に「どうしたいろ知らん」など言ふ。

＊いろ　一座の色、私らも行水して來うと、皆々表に出でにける（氷朔日）　送り迎ひの色駕籠も、暫しとだえは何處にも馴染馴染の寐入りばな（重井筒）　そよとふくさの色風も、今燒香に立つ煙、反魂香と燻ゆるかや（反魂香）　色里に誰が身の樂で身を捨つる人はなけれども（氷朔日）　一世一度の色床は、佛もお氣の通らめと、膝にもたれて宣へば（蟬丸）　上方は色お里は京の色所（蛙合戰）　上方は色どころ、定めて深いわけがあろ（博多）　色爭ひの春の山、幔幕錦おりはへて、八重九重の色人は、物見物見をさしのぞき（十二段）　ここぞ江口の色湊（松風）

〔色〕女。詩・序疏に、「謂二女人一爲レ色矣」。

「色駕籠」とは、遊女の乘つてゐる駕籠。

「色風」とは、なまめいた風。

「色里」とは、遊里。

「色床」とは、男女同衾、房事に關していふ。

「色所」とは、淫美な所。上方は色所と當時能くいはれたものと見えて、津戸三郎その他の物にも見えてゐる。

「色人」とは、なまめかしう美しい人。

「色湊」とは、遊廓のある船着湊。

色直　梅檀女は盃も交さぬ先の色直、嫁入のしるしにうつ石火矢の（國性爺後日）

結婚式をしてから常の色に直すことで、嫁は白衣を脱いで、赤衣などの色ある衣裝を著ること。

＊いろふ　金銀水晶いろへたていろへたる大伽藍（聖德太子）　玉をいろへて造りたる臺（文武五人男）

〔彩〕いろどる。竹取物語に、「うるはしき瑠璃をいろへて造れり」。「いらふ」をも見よ。

いろみぐさ　夢見草より其の外は色見草とてあらばこそ（十二段）

〔色見草〕紅葉の異名。二條良基撰・藻玉集に、「色見草＝紅葉。秋もはやしぐるる頃の色見草、ちらまく惜しき山風ぞ吹く」。こゝの文は草の名寄であつて、色見を色見草にいひかけたのである。

いわうじ　「いわらじ」を見よ。

鰯の頭　柊に鬼も恐るゝ鰯の頭（雪女）

昔節分に豆打をなした後、柊葉に鹽鰯の頭をつけ、竹串に貫いて家の入口に挿し、惡魔拂とした。土佐日記に、「今日（承平五年正月元日）は京のみぞ思ひやらるゝ、九重のかどのしりくめ繩の、なよしのかしら・ひゝら木ら、いかにとぞ言合へる」とあれば、そのもとは遠き昔からあつたのである。日次紀事（延寶年中成）十二月節分の條に、「同夜家々門戶窓欞、挿二鰯魚首并枸骨條一、傳言此二物疫鬼之所レ畏也」。

いわらじ　かかも起きて出や出やと、わめく聲に出女ども、いわらじ諸共表にいづる（丹波與作）

農家の主婦をいふ。按じるに「いへあるじ」（家の内にゐる主の義で、家樣などゝ同じ意）が訛つて「いはらじ」となり、「いわらじ」と書かれたのであらう。井原西鶴撰・日本永代藏卷之五に、「拙者が日那は人にかはり、定まる女房家主なし」とあつて、「家主」に「いはらぢ」と傍訓してある。女重寶記（元祿十五年刊）卷之一、女しなさだめの條に、「大名のおお奧樣といふ、百姓のお御方とも又藺鞋ともいふ、下女には藁鞋をはかするといふ義なり」と見えてゐる。即ち農家の主婦が藺鞋をはくから、それで農家の主婦をいわらじといふとの說であるが、御方といわらじとが同義語であることは明である。（丹波與作のこゝの文に「いわうじ」「いはうじ」と書いた本があるが、これは「ら」と「う」との字が似てゐるより誤つたものであつて、九本七行の古刊本及び八行の古刊本には明に「いわらじ」となつてゐる）。

いをはた　「いほはた」を見よ。

＊印　印をも未だ結ばぬに、病人重たき額を上げ、なう祈もいらぬ（女殺）

印は梵語母陀羅（Mudra）の譯。佛菩薩の內證の本誓や事相の上に表示し、手指にて種々の形象を結ぶことを印を結ぶといふ。印には彌陀の印・觀音の印・不動の印などその種類極めて多い。

いんいんかんかん　立寄り打てば此皷いんいんかんかんと、心耳も妙にこれやこの（天鼓）

（咽咽坎坎）鼓聲。詩經・魯頌有駜篇に、「鼓咽々」と見えて、毛傳に、「咽々、鼓節也。」また詩經・小雅伐木篇に、「坎々鼓レ我、蹲々舞レ我」。

＊いんか　傳授口傳許し印可を請けざれば（鑓權三）　今宵臺子の傳授の書印可の卷物（鑓權三）

〔印可〕印信認可の義。もと佛經の中に見え、佛の眞理として決定し給ふを云ふ。轉じて、師がその弟子に對して其悟了徹底を證して與へる免狀。運步色葉抄に、「印可。信也、許也」。貝原好古編・諺艸に、「印可。小藝を極むるもの、其師褒美の書を與ふるを印可と云、此字佛書に出たり、維摩經曰、若能如レ是宴坐者、佛所二印可一」。

＊いんきよくわどう　癰・疔・腫物の一黨、虛勞・陰虛火動神・腹痛・頭痛の頭神（振袖始）

〔陰虛火動〕病名、精液缺損し熱氣あつて衰弱する病。桂洲著・病名彙解（貞享三年の序あり）卷三に、「陰虛火動。或は腎虛火動と云へり、腎水虛損し相火亢り動くこととなり、虛勞の症なり」。好色三代男卷之四に、「下にこがるゝ思ひ火動となつて勞瘵に身を苦しめ」。

＊いんぐわ　因果と因果が寄合うたなんの阿彌陀になるものか（女腹切）　因果晒め半時も此內に置くことならぬ（女殺）

〔因果〕事物の本源を因とし、それに應じて終に來れるものを果とす。これを狹義に解して業報の意。この世で惡い報を受けるは、前世で惡因を結んだのによると云ふ。「因果人」とは罪業の深い人。「因果晒」とは業晒。

＊いんげん　太兵衞めがいんげんこき、治兵衞身代いきついての、金に詰つてなんどと大阪中を觸廻し（天網島）　向後時致組留めての、曾我の五郎と組んでなどいんげん吐

立て、いらたか珠數さらりさらりと押揉んだり（女殺）

〔いらたか珠數〕修驗道にて、最多角珠數或は最角念珠と書いて、算盤珠のやうに角の立つた扁平な珠よりなる珠數をいふ。「いらたか」は、謠曲名義集・卷七に、珠數を阿喇吒迦と云ふと見え、世事百談に、「いらたか」は「あらたか」の轉で、「あらたか」は念珠の梵名であると見えてゐる。謠曲・葵上に、「赤木の珠數のいらたかを、さらりさらりと押揉んで」、艶廬無伯元祿九年刊卷之二にも、祈禱所の貧靈院の行者が兜巾を被て、いらたかじゆずを押揉んで、美女ゆかりの縁病の祈禱をしたことが見えてゐる。

***いらふ** 手を出し手を引き唐猫の、おきないらふ危さや（今宮）

いらふ〔弄〕の訛。いぢる。もてあそぶ。源氏物語に、「なに事にも目のみまがひいろふ」とあれば、色々に目うつりするといふ意から轉じたのであらう。

***いらへ** 暫しいらへもせざりしが（女腹切）

「いらふ」〔應〕と云ふ動詞の轉成名詞。答。和訓栞に、「いらへ。應答をいへり。よて眞名伊勢物語に報の字を用ゐたり」。

いらむし 蜂やいらむし火取蟲（賀古敎信）

〔苛蟲〕鱗翅類に屬し、長さ五分許、黃色で翅の開張一寸餘。幼蟲は八分許に成長し、體太く黃綠色で、節があつて多くの刺毛を有し、柿・棗・梅などの葉を食ふ。

***いららぐ** 筋骨苛げののしれば（井筒）

〔苛〕いらだち怒る。

***いりあひのかね** 入相の鐘に散りゆく花（賀古敎信） 入相の鐘瞭じき夕（倉稿山）

〔入相の鐘〕太陽將に西の山の端に入らうとする時を入相と云ひ、寺院では此鐘を鳴して日沒時の看經を修するので、この鐘聲を日沒時とも列ねて云うた言葉である。

いりこ 揚屋にいりこ串鮑、幇間相客、宿屋おろせの附屆（雪女） 間夫の忍びに聞いたこと、このいりことやらんいふ物を梯子にせまいか（加増曾我）

〔海蔘〕海鼠の腸を去り、茹でゝ日に乾したもの。雪女五枚羽子板のこゝの文は、揚屋に入りを海蔘にいひかけ、また加増曾我のこゝの文は、海蔘を繩に繋いだものを、結び合せて梯子にせうではないかといふ意であつて、この後の文に、鮟鱇、蒲鉾、鱵、太刀魚をいへると共に料理の品をきかせたものである。

いりざけ こゝへちよくと御いり酒、甘い事ぢやと喚きける（淀鯉）

〔煎酒〕酒に醬油または鰹節を加へて煎じたもので、膾・刺身などに用ゐる。

***いりへ** 德兵衞殿はいりへと聞く、かう致せば後の爲またも用聞かう爲、さあ判をなされよ（重井筒） 總じていりへ入婿に小言のあるはならひなれど（卯月紅葉）

いりえ（入緣）の訛。入聟。武道傳來記卷二、身體破る落書の閘の條に、「此家に入緣ののぞみあまたなり」とあつて、「入緣」に「いりえ」と傍訓してある。（いりへは入家の約ではあるまい）。

***いりまい** 淸十郎といふ子を持つて、老の入まへ暮好き（歌念佛） 妹千代も大阪にれつきとしたる婿とつて、身の入まひは上田の田畠の世話をやきやめば（宵庚申）

〔入米〕訛つて「いりまひ」「いりまへ」といふ。もと米の收入をいうた語なるが、轉じて廣く收入の意。年貢米の四斗俵を計つて四斗一升あつた時、一升でまへがあつたといふ。でまへは出米で入米に對する語で、現今も關西地方で普通にいふ語である。（入前とするは、「いりまへ」に漢字を當てたので、其字義ではない）。

***いりわけ** 顏も泣いた顏ぢや、こりやどうぞいのと、いりわけも言はず知らずに泣きゐたり（萬年草） 內方のいりわけも話で聞いて居ますれば（曾根崎）

〔入譯〕入組んだわけ。成り行きの事情。

***いりゐ** 「いりへ」を見よ。

***いる** 目の前へ連れていて叩き殺して腹をいる（女腹切） 踏込んで一討か、面恥かゝせて腹いよか（天網島） さあ治兵衞踏んで腹いよと（天網島）

〔癒〕他動詞上一段活用にした語。「腹をいる」は腹を癒す。「腹いよか」は腹を癒さうか。「腹いよと」は腹を癒せよとの意である。

***いるさ** いるさの門の障子戸も、あくるあしたの形見かや（冥途飛脚） 入るさの月の影暗く（最明寺殿）

〔入方〕入る方。「さ」は方向をいふ、動詞の終止形に着く接尾語である。

***いれい** 大磯の虎御前・化粧坂の少將とて兄弟が思ひ人、形見を持參し給ふが、母の異例と聞き給ひ斯くいたはらせ候（世繼曾我）

〔異例〕不例。病氣をなだらかにいふ語。

いれこばち 若い女子のざまで入子鉢のやうな面々の子供の世話ばかりやきならず、こさし出たと憎かろが（女殺）

〔入子鉢〕同じやうな形した大小數個を組合せ、大きな鉢の內に小さい鉢が段々に入るやうにした鉢をいふ。

いれこびし 黛を誰が八の字に入子菱、桔梗・かたばみ・まりばさみ（賀古敎信） さて一重菱・いれこ菱・花菱（門出八島）

〔入子菱〕紋の名、入子の中に菱のあるもの。

***いれじやうね** 何の彼のと入性根、お花が一切呑込まぬ（女腹切）

「いれぢゑ」（入智惡）。「いれじやうね」は普通に「入性根」と書けども、「しやうね」はもと「正念」といふ語から起つたもので、「しやうねん」の「ん」が脫落して出來た語であらう。正念の義については其の條を見よ。

***いれたて** しきせの外は身のいれたての定めなり（百日曾我）

〔入立〕費用を自辨すること。自分持ち。

***いればな** 跡へはんなり入花の、茶びんご橋こちこちと（今宮）

〔入花〕花は「出花」などの「花」と同じ語で、はなやかの意である。煎茶にいふ語で、湯の注ぎたてゞ香味はなやかな時分。

***いれぼくろ** 顏に燒鐵入墨（博多）

〔入墨〕いれずみ。黥。

***いろ** 惣左衞門が葬禮にいろを着て供して見せ（博多） 然つし處へ色を着して十四五人、棺を寺內へ舁

稱する辭なりといへり、ウとは得也、イは活用語也、又キとも活用す、得は能の義にて能くし得たりと美る詞なり」。

ういらう 「うゐらう」を見よ。

うがたま おがたま・稻魂・鏡の宮(國性爺) 蛇は宇賀の御魂、四郎が邪法は蛙の術(蛙合戰)

(倉稻魂)稻魂また宇賀魂とも書く、五穀を司る神である。合類大節用集(享保二年刊)神祇門に、「倉稻魂。主二五穀一之神、出二日本紀一」。宇賀の神體を蛇形に作ることがある。鹽尻・七に、「宇賀神とて、頭は老人の顏にし、體は蛇形に作り、蛙を押へたる樣して、神社に安置し祭る時には、一器に水を盛り彼の像を入れ、天の眞名井の水などいふ文を唱へて其像を浴す、像或は金銅又は磁器なり」。

***うかべるくも** 驕る平家の行末を浮べる雲と賴みなく、思ひ積りて雪折れの小松殿の御所勞(孕常盤)

〔浮雲〕大空に浮いてゐる雲のやうに輕きをいふ。論語・述而篇に、「不義而富且貴、於レ我如二浮雲一」。

浮む瀬 うかむ瀬と音に聞く大貝の硨磲盃に、一つ乾して娘にずんど差しければ(鎌田)

大阪新清水寺の北坂にある浮む瀬といふ有名な料理屋に珍藏されてある大盃の名であつて、鮑貝で作つた七合半入りの大盃である。其角の類柑子に、「僧專吟、難波あたりの空瀬鮑を浮む瀬と名付けて奇物とせしは、身をすててこその戲より出でて遠き境にも知る人尠からず」。曉鐘成撰・攝津名所圖會大成・卷之五に、「浮瀬奇杯＝此浮瀬と銘せしは貝鮑にて、鮑貝の十一穴あるを塞ぎて器とせしなり、是に酒を盛れば七合半に及ぶと云……、我戀は千尋の底の鮑貝身を捨ててこそ浮む瀬もあれ」。

***うきあし** 玉藻水草を搔分けて、拔手浮足撓みなく(隅田川)

〔浮足〕水泳術の語で、足を浮けて泳ぐこと。

うきふね 空もとどろに浮舟の、けうとく立ちし宮柱(蟬丸)

〔浮舟〕宇治川の附近なる浮舟の杜か。按じるに宮柱とあるからには、宇治橋の西にあつて姬太神を祀れると傳へる橋姬社の祭神を、源氏物語にある浮舟の君と誤つたのであらう。

うきもん うきもんの小袴(天神記)

〔浮文〕貞丈雜記に、綾の絲を浮かせて織つた物だと云ひ、桃花蘂葉に、浮文は繁くすべしとある。

***うきよぐるひ** 悋氣するでは無けれども、うき世ぐるひも齡による(出世景清)

〔浮世狂〕浮世とは無常の現世をいふ。衆生が煩惱の離れ難きも浮世のならひで、好色をいひ、女色に狂奔するなど總て浮世狂ひである。 西鶴撰・武道傳來記・卷四、太夫格子に立名の男の條に、「青柳十藏・榎坂專左衞門、この兩人供をも連れず竊に浮世狂にみだりありき」。浮世と書けど、もとは憂世の義である。

うきよござ 内は裏なき浮世蓙、心を延ぶる種ならし(會稽山)

〔浮世蓙〕石疊の地紋になつてゐる上敷。和漢三才圖會に、「單席(宇波之木) 俗云絪蓙也、以レ莞織成、文如レ甃者名二浮世絪蓙一、暑月褥上鋪レ之、故稱二上鋪一、出二於江州舟木一者爲レ上、備前瀨尾次レ之、丹波爲レ下」。

うきよのつる 南無阿彌陀佛の一息を、引きも返さぬ梓弓、浮世の弦は切れ果てたり(隅田川)

〔浮世の弦〕この世の壽命。「梓弓」の緣から壽命を「弦」というたのである。

うぐひすごま さながら梅の鶯獨樂(松風)

〔鶯獨樂〕中空にして外部に穴ある獨樂であつて、廻轉するときによく鳴るによつてこの名がある。序にいふが、和漢三才圖會にも見えてゐるやうに、元祿の世は獨樂遊びが流行してゐたので、「當世獨樂盡し」の一節も入れられたのである。

うぐひすそで 其身は下女の姿になり、鶯袖のゆきあはぬ夫を尋ぬる(大覺)

(鶯袖)切匙(切匙を女詞に鶯といふ)の形に袖をそぎて、腋を縫はないでやつくちにしたものと見えて、女重寶記・新やまとことばの條に「うぐひすそでとはわきあけのこと」とある。

***うぐひすちや** (壽門松)

〔鶯茶〕染色の名、鶯の羽色のやうに盛に茶色がかつたもの。「春知り顏に七つ屋の云々」をも見よ。

うぐふ ひねり艾の生火傷、あともうぐはず痛みなし(祀狩)

「うごふ」(瑱)の義、腫れて脹れ上る。いぼふ。

***うけ** 控の柏・梅擬のうけ(聖德太子)

〔請〕立花の法式の名、心になつてゐる枝を請ける枝。立花時勢粧・八に、「立花祕傳抄之五―請は神前にては影向の枝といひ、佛前にては手向といふ、必ず時の珍花を用ひ、出生上へきおひたるものを用ゆ、副のしだれたるものとの取合せなり、出し所は副と長枝とを見合せ、其眞中程より出すなり、左へ出づるもの請より長く出づるものなし、是花形の左の上を能くまもる道具なり」。「しやうじん」の條の畫を見よ。

***うけこむ** 主人はなけれど咲く花や、後家のおかめが請込んで、客の替名は蠟九とて(女殺) お勝の方へ妹樣を請込み給へ(吉野忠信)

〔請込〕引受ける。

うけなは 蜑のうけなは請人や(松風)

〔浮繩〕釣糸の附いた繩又は魚網に附いてゐる繩に浮木を附けたもの。

うけへる あまのさかてをうつてうけへば(蟬丸)

呪咀するをいふ。日本紀に、誓の字を「うけへ」と訓んである。伊勢物語に、「罪もなき人を呪咀へば忘れ草、己が上にぞ生ふと言ふなる」。

***うげん** 有驗の高僧貴僧に仰せ、大法祕法を修せらるれども(關八州)

〔有驗〕祈禱の効驗有ること。平家物語・卷三、赦文の條に、「入道相國、有驗の高僧貴僧に仰せて大法祕法を修し」。

うげんだ よたれそつれなと吟じかへせば、それぞれその次のらむうげんだとぞ答へけゑ(重井筒) あはう三太をらむうげんだでやまけふづくる内儀の心(丹波與作)

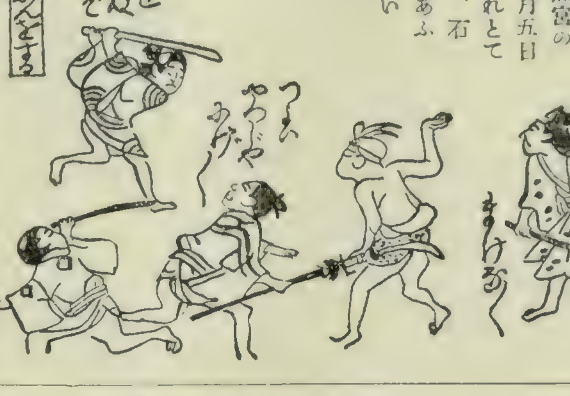
おやま形の俳優山下右源太のことであらう。魂膽色遊懷男・卷一、奧樣は機嫌のよい榮花枕の條に、「近日初狂言見せにやらうが、どの芝居がよからうぞ、今からきはめておけとあれば、……おやまの宇源太が見たいといふ」。心中重井筒のこの前の文に三太の詞に、「よそよそのおやまが一つ買うて見たい云云」とあるおやまは、お山形(女形)の意にいうたのを、德兵衞は勘違へしてお山を遊女の意に合點したのであらう。「らむうげんだ」の「らむ」は全く意味なく、只句調をととのへる爲と、いろはの緣とで冠らせたものであらう。かや

かば、草葉の蔭よりえら骨踏裂かん(兒が曆)
高慢。豪氣振ること。按ずるに、「いんげん」は「いげん」の變つた語であらう。「いげん」は威嚴で、正しくは「ゐげん」また「ゐんげん」と書くべきである。「ゐげん」に「ん」が增加した爲に(「ん」の增加については「わんざん」の條を見よ)「ゐんげん」となつたのである。さて「い」と「ゐ」との假名遣については論ずるまでもなく、當時假名遣はやかましういはなかつた時代である、巢林子撰・水木辰之助餞振舞に、「わしは存じませぬが、養子の親が名人で弟子の二三百もござつた、道閑樣いげんは仰せらるれど、私が親の草履取も彼程は蹴ましたとあはうを言へば」と見え、淀鯉出世瀧德に、「へうたん町をこしづけに、いけんふろ手のゐんろうの」と見えて、「い」「ゐ」の假名遣の違つてゐるのが明かに知れる。そして「いげん」が威嚴で、「いんげん」と同意語であり、同じものなることも悟られるのである。

いんじゆ 代々に傳はる御國讓り御卽位のしるしの印綬、御肌に懸けられたり(國性爺)
〔印綬〕印と綬。綬は印の環を承繫ぐ組紐。印綬は支那では帝王の證據物とも云ふべき物である。漢官儀に、「綬長一尺二寸法十二月、寶三尺法天地人」。

いんぜふ 極樂へ引接せん(津戸三郎)　輪藏・多寶塔・引接堂(聖德太子)
〔引接〕佛菩薩が念佛の行者を引受けて極樂淨土へ導き入れ給ふこと。「引接堂」は如來を本尊とせる佛堂で、大阪四天王寺にあるは引聲堂とも書かれ、本尊は五智如來、脇士は月增姬・日增姬・玉照姬の三尼の像を安置してある。序に云ふが、引接と引聲は別義である。

***いんぢ** 去年松川いんぢの場、朋猫打たせし意趣晴し(十二段)　彼奴めはないないいんぢの意趣、われわれどもが仲間にて見付け次第に殺す筈(十二段)
「いんぢ打(うち)」「いんぢん」ともいひ、「印地」の字を書けども、「いんぢ」は「いしうち」(石打)の約轉であらう。昔五月五日河原などに出て小石を投げ、或は手に物を持つて敲合ふ少年の遊戲。德川實紀附錄・東照宮の條に、「五月五日兒童の戲れとて隊を分ち、石もて打ちあふを俚諺にいんぢうちといふ」。



〔天和長久四季あそび〕(天和頃刊所載)

黑川道祐撰・日次紀事、五月初五日の條に、「以柳木作大小之刀、是謂菖蒲刀、男兒橫之於腰、著頭巾、倣山伏體、及晚出鴨河邊、左右分列擲礫而相戰、是謂印地、又稱[illegible](いんし)、云々」。

いんでんや 西國橋の印傳屋の長作(生玉)
「いんでん」は「印度」(India)の訛。「いんでん屋」は印度等より舶來した革(なめしがは)で造れる袋物の類を商ふ店屋。越谷秀眞編・雅言俗語翌檜(安永八年刊)唐革の部に、「印帝亞(いんでんあ)。俗印傳と云、鼠革・あづき革等あり」。

***いんのこ** ちやつと劒を袖に入れ、いんの子いんの子と撫摩り(日本武尊)　寐(ね)んねこせ、音せでおよれいんのこいんのこ、目だに覺めたら背にきつと背負うて、神樣(ののさま)へ參らう參らう、のゝさまの土產には、でんでん太皷に簫の笛、お山人形に花おり着せて、打着せて着せて、雉子のめん鳥ほろりとおといて、しよのしよの、おいとしよの(天神記)
「いぬのこ」(犬の兒)の訛。小兒を眠らさうとする時にいふ語、故に小兒を眠らさうとしていふ唄の中に出るのが多い。貞丈雜記に、「小兒を抱きて夜中他行するに、紅指を以て小兒の額に犬といふ字を書く、之をいんのこといふ、犬の子といふ事なり、此の如くすれば魔除になり、狐狸類小兒をおびやかすことなしといふ」。

いんはたでん 朝拜殿に尊あればいんはた殿に惡鬼あり、いんはた殿に駈入り給へば新甞殿に惡鬼あり(振袖始)
〔齋服殿〕齋き清めた殿にて、神衣を織る所。神代紀上に、「又見天照大神方織神衣居齋服殿」。「朝拜殿に尊あれば云々」をも見よ。

***いんま** 定めしいんまに來う程に、まそつとしてから來て下され(重井筒)
「いま」(今)に撥音「ん」の增加した語で、「まな」(眞字)を「まんな」、「ごばう」(牛蒡)を「ごんばう」といふ類である。

いんもつ 樽肴黃金時服さまざま*音物持たせ、將監に對面あり(反魂香)　この音物お氣に入らずば、其方より使者を以て返辨あれ(川中島)
〔音物〕音信の贈物。進物。

いんやうのむら 抑も馬に七個の祕事、三個の手綱・五個の鞍、陰陽の策(むち)・朝嵐・大(おほ)おろし(小栗判官)
〔陰陽の策〕策の仕立樣の名。本朝弓馬要覽に、「策の仕立樣品々あり、天地の策・陰陽の策・六眞の策云々」。

いんろう 瓢箪町を腰附けに、いけんふろ手の印籠の、すびからの、烟に油烟たなびきて(淀鯉)
〔印籠〕昔腰に佩びた小匣で三重または五重に作り、兩端を緒紐で貫き、匣の内にはもと印判を入れたのが、後には藥を入れたのである。安齋隨筆・卷十一、印籠藥籠の條に詳しう述べてある。「ながといんろう」を見よ。

いんゐ 十方三世の佛菩薩、衆生を助けんとの誓願因位の時は願人ならずや(一心五戒魂)
〔因位〕因は果に對する語、位は地位。佛果を得て佛となる前に修業の地位にあるを因位といふ。正信偈に、「法藏菩薩因位時」。

う

***うい** うい若い者でかしたでかした(三國志)　うい奴けな奴きみよい奴だてな奴が花摺衣(隅田川)
かはゆらしい。けなげな。狂言・烏帽子折に、「一段うい奴ぢや」。俚言集覽に、「下﨟のケナゲなるをほむるにウイ奴など云、ウイは能を

うすびたひ　（日本武尊）〔薄額〕磯（冠の緣をいふ）の薄き（低いこと）冠。飾抄に、「年少之人用二薄額一、近代依レ有二事煩一、不レ依二年齒一用二厚額一辟事也」。

***うずむし**　やあ寄るまい寄るまいうず蟲めら（娵）　三郎目にかどを立て、おのれ何處のうず蟲め（小栗判官）「うじむし」（蛆蟲）の訛、人を罵つていふ語。菅原傳授手習鑑・車曳の段に、「はれ命冥加な蛆蟲めらと、あたりを睨んで進み行く」。「うずむし」は「うづむし」とも書いてあるので、渦蟲（まひまひ蟲を云ふ）かとも思つたが、人を罵るにいふもいかが、且その例も見當らぬので、蛆蟲と斷じたのである。「じ」を「ず」に・「ず」を「じ」に訛る例は、「じつなし」（術無し）を「づ（ず）つなし」、「すずめ」（雀）を「しじみ」と云ふやうに其例少くない。

うせ　德兵衞めがうせまつかいさまに言うても、必ず誠にしやるなや（曾根崎）「うそ」（嘘）の訛。「うせまつかいさま」は「うそまつかへさま」（嘘眞返樣）の訛で、眞實を裏返して嘘を言ふこと。

***うせうべん**　皆待賢門に伺候し、右少辨介長を以て軍の次第を奏聞し（鎌田）〔右少辨〕太政官の右辨官局の役名で、右大・中辨と共に兵部・刑部・大藏・宮内の四省を支配し、庶事を上からうけて下につげ、詔勅の草する役であるから、儒者や文章生がこの役に任じてゐる。

***うせる**　きりきりうせう、杤がくらひたらぬかと、振上げこすり出されて（女殺）　どこへうせた（女腹切）〔失〕見えぬやうになる。無くなる。逃失せる。

***うせる**　うらには底に熬付いた苦い所を頂かせ、まだ其の上に殼ればりにうせたか（大織冠）「わせる」（その條を見よ）の更に訛つた語。ござる。來る。

***うそ**　忠兵衞はうそ腹の立ちわづらひて居る所に（冥途飛脚）　うそ汚れた八丈縞に花色の羽織（二枚繪）　うそ汚るは過ぎし夜の（百日曾我）　遂に見ぬ金の間をうそうそと覗き廻れど（丹波與作）　花車も下女もうろたへ、小菊を圍うてうそ顫ふ（女殺）　汚れし綿衣に着せ換ゆれば、さしも美形の淸十郎、山田の案山子とうそぶるひ（歌念佛）「うすし」（薄）の語根「うす」の轉訛。深うない。烈しうない。ほのか。

***うだいべん**　右大辨早廣（蟬丸）〔右大辨〕太政官の右辨官局の長官で、兵部・刑部・大藏・宮内の四省を支配し、庶事を上から下へうけつぎ、太政官内の事を糺し、管轄せる役所の宿直を監する役。

***うたかた**　返らぬ水のうたかたに初歌謠ふ初蛙（烏帽子折）　寄邊定めぬうたかたの安房の國龍が崎にて（世繼曾我）　うたかた人も我が身も（持統天皇）「うつかた」（空形）の轉か。泡沫。水泡。また「うたかた」は泡であるから、泡を安房に取つて、うたかたの安房とつづけていふ。「うたかた人」とは、水泡のはかなきが如くはかない人。

***うたくち**　袱紗に歌口滑めんとし給ふを（孕常盤）　干五上勺中六丁口八つの歌口打濕し（孕常盤）〔歌口〕口をあてて吹く笛の孔。笛の孔。「かんごじやうさく云云」をも見よ。總ての笛の孔をも歌口と云うたもので、十二段草子に「八つの歌口花の露をふき濕し」と見えてゐる。

***うたざいもん**　我が噂も明日よりは、歌祭文を身の上に、坂町邊のな通り筋（生玉）〔歌祭文〕「さいもん」（祭文）を見よ。

***うたてい**　うたてい事言うて下さんする、兵吉殿を殺せとは僞り、ふすまごしから私に鐵砲打たせ、それに中つて御前が死なうといふこと（三國志）　ここに一つのうたてい難題（蛙合戰）　熟柿臭い、又飲み食うたな、うたてやな一滴もならぬ奴（浦島）〔轉〕轉り進んで甚しうなる義。忌み嫉はしい。甚しい。

***うたねんぶつ**　人をすすめの歌念佛、修業の僧に身をやつし（井筒）〔歌念佛〕俗曲の一種、鉦を打鳴し念佛の節で歌ふもので、元祿から享保にかけて流行した。これを歌ふ者は僧衣を着た男または歌比丘尼の類であつた。「うたびくに」の條をも見よ。五十年忌歌念佛に、「觀ずれば夢の世や、寢て溫めし懷子、何時の間にかは浮れそめ、三界をただ家として、袖笠雨の宿りにも、心とどめぬ假枕」とあるは、歌念佛の唱歌の一つである。人倫訓蒙圖彙・巻七に、「夫れ念佛といふは萬德圓滿の佛號なり、然るをそれに節をつけて歌ふべきやうはなけれども、末世愚鈍の者を導き、せめて耳になりともふれさせべきとの權者の方便ならん、それをなほ誤りて色色の唱歌を作り、これを鉦に合せてはやし淨瑠璃にせずといふことなし」。「山桝太夫」をも見よ。



〔歌　念　佛〕（人倫訓蒙圖彙所載）

うだのくにゆき　金はなけれど一腰の、宇多の國行二尺許のだんびらもの（壽門松）〔宇多國行〕當麻の祖、正應年間大和國に居つた刀工。この人作の刀。

***うたひかう**　今宵丸屋のうたひ講に往つたれば（二枚繪）〔謠講〕謠連中の寄合。後はむかし物語に、「京の丸山の貸座敷などに謠講といふ事あり、元素人にて謠を好む人いひ合せて番組を作り、座敷を借りて謠ふ、蔭の一間或は緣がはにもあれ番組をはり、何シテ誰ワキ誰など張出し置きて蔭にて謠ふに、謠をすきける人、けふは丸山に謠講ありといふ、行て聞かんとてすきの人と言合せ、辨當などこしらへて、一間蔭或は緣がはにて、其素謠を六番も七番も聞きて歸ると也」。

***うたびくに**　節は哀れに身はだてに、歌は念佛の歌比丘尼（歌念佛）　幕に立つたる歌比丘尼、舞ひ舞ひ・物眞似さまざまの賑ふ中に、編笠

うに「らむ」を用ひた例は、菅原傳授手習鑑（浄瑠璃）寺小屋の條にも「あすの夜たれか添乳せん、らむうい目見る親心」と見えてゐる。

うこぎ 向の藪のしのべ竹、うこぎ交りの籬や（蝶夢）



「うこぎ」

〔五加木〕高さ一間餘ほど成長する灌木で、葉は掌狀複葉をな×して鋸齒がある、莖に刺がある、人家に植ゑて生垣となす。

うごろもち 水ぬきの接樋（つぎひ）をはふはふくぐるうごろもち（三國志）

〔鼹鼠〕鼹鼠とも書き、「うごらもち」、墳持ノの義、「むぐらもち」の古名。箋注倭名類聚抄に、「鼹鼠。宇古路毛知、陶弘景曰、鼴鼠形如レ鼠大而無レ尾、黒色、長鼻甚強、恒穿ニ耕地中一行、討掘即得」。

＊**うこん** 紺に鬱金に薄染淺黄（壽門松）

〔鬱金〕鬱金草から採つた染料で染めた色、黄。

＊**右近の橘**（うこんのたちばな） （酒呑童子）

平安内裏紫宸殿の坤にある橘樹で、南階の右にあるを以て右近の橘と云ふ。

うざいがき 無用の忠節仁義だてに咽（のど）をほす汝等、冥途ではうざいがき、その刀抜かば抜いて見よ（井筒）

〔有財餓鬼〕「うんざい」を見よ。

＊**うさぎ** 櫻島人打ち群れて、サンサ沖に網引き釣垂るる波の雄波を、かき分けかき分け走る兎の名所ぞや（薩摩歌）

〔兎〕玉兎卽ち月。走る兎とは月影海面に浮動するをいふ。僧自休の竹生島詣の詩句に「清波月落兎奔レ浪」。謡曲・竹生島に「月海上に浮んでは兎も波を走るか」。櫻島が月の名所たることは、冷泉大納言爲村の歌にも、「月雪のながめのみかは櫻島、浪の花さくゆふべ明ぼの」と見えてゐる。

＊**うさん** うさんらしく吉田屋の内をのぞいて、喜左衞門やどにか（夕霧） 何もお道具揃うてうさんなことござらぬ（薩摩歌）

疑ひ怪しむこと。合類大節用集（享保二年刊）言辭下の部に、「烏散（うさん）」。按じるに支那の小說に胡散とある語が我が常用語となつたので、廣東音を傳へたのであらう。

うしおき 牛若君のうしおきに、淨瑠璃玻璃は寶の玉、福女房の御祝言末繁昌のはじめなる（孕常盤）

〔丑起〕丑の尅、卽ち午前二時頃に起きること。朝早く起きれば家富む意より、「牛若君の牛起」と同韵語につづけ、「末繁昌」の語につづけたので、博多小女郎波枕中の長者經の文に、「こけても土をつかんで起きるは七つ起」と見えてゐる「七つ起」も、朝早く起きれば家富むことにいうたのである。

うしおに 猪は巖に身をふせて、飛びかからんとする氣色、ただ牛鬼ともいつつべし（百日曾我）

〔牛鬼〕牛のやうな大きな妖物。太平記卷三十二、鬼丸鬼切の事の條に、長（たけ）二丈ばかりなる牛鬼が、額光の鬼切の刀で斬り殺されたことが出てゐる。

＊**うしざき** 法に背く慮外ばば、車裂牛裂にもと嘸無念御立腹（川中島）

〔牛裂〕罪人を兩牛に括付け、牛をして人體を裂かしめる酷刑。土津靈神言行錄・下に、「一會津先太守蒲生氏（秀行）之世、令下罪人跨ニ兩牛一以ニ燒松一入中兩牛之間上、則牛各驚怒而走左右開辟、謂ニ之牛裂一」。

＊**うしてんじん** 虎が涙も引きかへて丑天神の野邊の露、消ゆる間近き命なり（氷朔日）

〔丑天神〕牛は天神の使といふ俗說から天神のことを丑天神といふ。ここの文は曾根崎天神（露の天神ともいひ、今の曾根崎新道電車交叉點の東）を指す。虎、牛、虎が涙（雨）、露、露の命、これ等緣語によつて飾つた文である。

うしのした 牛若殺してうしのした、大判小判つかみ取り（烏帽子折）

〔牛舌〕「したびらめ」（鞋底魚）の異名で、「くつぞこ」とも云ふ。體扁平で舌狀をなし、背面は濃き橙色に黒色の小點散布し、腹面は白色である。この文は、牛若と牛舌と同頭韵を用ひ、牛舌の形が大判小判に似たるによつて、大判小判の語につづけたのである。

うしのたまぼこ 牛のたまぼこ遲くとも（蟬丸）

〔牛の玉鉾〕牛の歩行（あゆみ）。「玉鉾」は玉鉾の身（み）から道（みち）にかかつて、道の枕詞であるが、道を略して「玉鉾」だけで道の意に用ゐたのである。

＊**うしのときまゐり** ああものうしの時參り、仇と情と怨念と、三つの鐵輪に燃ゆる火に（蟬丸）

〔丑刻參〕丑の剋は夜丑三つの剋で、卽ち午前二時頃である、この時は夜の最も更（ふ）けた時である。人を詛（のろ）ふ者はその姿を人に見咎められまいとして、丑の剋參りをして願（ぐわん）をかけたのである。太平記に、或公卿の息女が貴船の社に籠りて人を呪うたのも、謠曲・鐵輪に、嫉妬の念に驅られた女が他の女を呪ふにも、これ等みな丑の剋參りをしてゐる。

＊**うしみつ** 人も音せぬ丑三つの空、十五夜の月冴えて光は暗き門行燈（天網島）

〔丑三〕丑の時の第三刻。深更。「とき」を見よ。

うじやくのはし （聖德太子）

〔烏鵲の橋〕「かささぎのはし」を見よ。

うじやくわう

〔右鵜王〕「こまがたごんげん」を見よ。

＊**うしろめたし** 誠なき舅の心後めたし（國性爺後日） 盗みをするも命の惜しさ、あら恐しや一先と、うしろめたくも引きけるが（十二段）

「うしろめいたし」（後目痛）の義。うしろぐらい。不安心な。謡曲・熊坂に、「盗みも命のありてこそ、あらしようや引かんとて、長刀杖につきうしろめたくも引きけるが」。

＊**うすがき** この世の緣は薄柿の帷子染、やぼてりがきかうすがきか子高く捻褰（ねぢから）げ（鑓權三） 京の吉岡紙（重井筒）

〔薄柿〕柿澁（かきしぶ）の汁で染めた澁色の薄い色。

＊**うずざくら** 鞍馬の山のうず櫻（賀古敎信）

〔雲珠櫻〕單瓣薄紅色の花を開き、蘂長き櫻。袖中抄に、「鞍馬の雲珠櫻。唐鞍の雲珠に似たれば鞍馬の緣にいふなり」。

＊**うすて** 千手太郎薄手少少受けながら大汗になつて走り歸り（蟬丸）

〔薄手〕薄手疵の略。輕傷。

うすばた 鐵のうすばたに七つ道具は拔身の刄（聖德太子）

〔薄端〕金屬製の花瓶で、緣を薄くして淺うに水を入れるやうにしたもの。

〔うちかへす〕(打反)の訛。

*うちしき 大慈大悲の繪像をおろし打敷に擴げ奉れば(蛙合戰)

〔打敷〕佛壇の臺上に敷く布帛。

*うちでのこづち 帳面ばかり合に合槌。いかな打出の小槌なりとも續くべき樣なかりけり(氷朔日) 天下太平民長久のうちでの小槌とは是なんめり(今川了俊)

〔打出小槌〕思ふ儘に財寶を打出されると云ふ槌であつて、大黑天の手に持つてゐられる槌は卽ち打出の小槌である。寶物集・一に、「されば人の寶には打出の小槌といふ物こそ能き寶にて侍りけれ、鷹野に出てゐよからん家や、面白からん妻男や、遣能からん從者、馬牛食物衣物なんど口に任て打出してあらんこそ云云」。

*うちと 方方の贈物もの、うちとの者の手は足らず(重井筒) 其間にうちとの者一獻酌めや(萬年草) 現在弟に殿樣付けうちとの者に追從するも母の無い姪子ども可愛がらせう爲ばつかり(卯月潤色)

內。家內。家內の人人。「內と」の「と」は、「外」であつたのが、外の意味が失せて、かく用ひるやうになつた、卽ち「うちと」は內外の轉義であらう。(或は「宗徒の者」の「徒」と同じ語で、「とある」の義か)。

うちのさだつ 「さだつ」を見よ。

*氏の長者 きやつを帝都に訴へ、氏の長者の御成敗にまかせ(三世相)

その氏族に於ける宗家總領をいふ。後には特に長者の宣旨を給はりてこれを稱することとなつた。室町時代に及んでは藤原氏の攝關・源氏の征夷大將軍となる者のみが之を稱した。南都の社人樂人は氏の長者の管轄であつて其犯罪は氏の長者に糺彈させたものである

うちも聞いた 「うち」を見よ。

*うちもの 打物閃いて切つてかかれば・(鑓權三)

〔打物〕太刀・薙刀の類、打ち鍛へて作るよりいふ。(人を擊つの物なるよりいふとの說は非)。

*うちやうてん 面目なしと戾りかね、心は有頂天王寺、神子町に迷ひ來りしが(卯月紅葉)

〔有頂天〕無色界の第四天、非想・非非想天の稱で、三界(欲界・色界・無色界)の最高所にある。有頂天にのぼりつめる意から轉じて、或る一事を一心に思込んで他事を顧みぬことにいふ。 ここの文は「有頂天」に「天王寺」をかけてつづけたのである。心中宵庚申に「心はうちやうかんてんの、いつわつさびとしもせねば」とあるは、有頂天に寒天(ところてんを晒したもの)をかけた語。

內を走る わざくれやけぢや・ばれて出て忍男の構があるととんと言うて捨てうか、いつそ內を走らうか、いやいや源五兵衞樣も日薩の身(薩摩歌)

家の內を走り出る。出奔す。

*うつ 五度逢ふものを三度逢ひ、二度を一度になす時は、親方も機嫌よく戀に身をうつ事もない(女腹切) 命惜しい程なら高で身をうつ事もない(生玉) 寄つて搦めよとぞよばはれば・兩方門をはたとうち、町町起きて棒すくめ(加增曾我) 町中俄に騷ぎ出し、棒よ熊手よ提灯出せ、大門うてとひしめけば(壽門松) 見事沓もうちまする、此わらんぢもわしが作つた(丹波與作) 祭に行かうと氣がせいて、馬の沓さへ打たなんだ(堀川波鼓) いつやらの紙花も思の外遲なばり面目ない、これも拂と一度に遣ろ、今改めてこりやばつとうちなほすわと、捻ぢて出せし鼻紙のしらごかしこそ笑止なれ(二枚繪) かるたの打ち樣存ぜず(大經師)

〔打〕「身をうつ」とは、身を棄てる。身を亡ぼす。神代紀・上に、「吹棄氣噴之狹霧」を「ふきうつるいぶきのさぎり」とよんである。「身をうつ」をも見よ。

「門を打つ」の「打つ」は「幕をうつ」などいふ「うつ」の類で、閉ぢる意。「おほもんうつ」をも見よ。

「沓をうつ」の「うつ」は、藁を打しなへて沓を作るからいふので、作る意。

金銀また纏頭を露と云ふより(「つゆ」を見よ)それを遣すことを打つといふ。

「かるたを打つ」とは、骨牌札を打出すことで、卽ち骨牌の遊技を行ふをいふ。黑川道祐撰・雍州府志・土產門下、賀留多の條に、「其爲レ戲謂レ打ニ賀留多一」。

「うてず」の條をも見よ。

うづ 舌を拔いて烏頭の葉に包み(懸物揃)

(烏頭)とりかぶと(毛茛科に屬する草)の漢名、山野に自生する多年生草本で、高さ二三尺に達し、地下に多肉の根を有す、葉は互生して掌狀に分裂し光澤がある。花は靑紫色或は白色で烏兜狀をなせる不整齊の萼を有す、この草は猛烈な毒を有し、根を藥用とする。

*うづき (凱陣八島) 卯の花月佛降誕ましまして(賀古敎信)

〔卯月〕卯花月ともいひ、陰曆四月の稱。

*うつけ やいうつけめ、おのれ商人の又しては又しては店を明けて餘所歩き(生玉) 人をうつけにするは醉狂か亂氣か(蛙合戰)

〔空〕失心の義。ぼんやり者。ばか。 易林本節用集に、「虛」。

うつさまみやうわう 俄に觀念を改め護身印を結んで・うつさま明王五大尊の法を責かけ(以呂波)

〔烏芻沙摩明王〕梵名 Ucchushman ウッチフシユマン、密教明王部に屬する神で、不淨金剛・火頭金剛などの別名がある。忿怒の形相をなし、火焰に圍まれ、四臂を有し、劍と寶棒とを頭上にかざし、羂索を持ち鈴を握つてゐる。この神呪を持誦する者は其功德によりて、除病・避難・受福・伏敵等の利益を得るといふ。

うつしくにたま 鬼神も挫ぐ勢は、うつしくにたま・手力雄・健甕槌も斯くやらん(日本武尊)

顯國魂または現國魂など書き、大國主の神をいひ、神代に少名彥大神と力を合せて、天下を經營し給ひ、禁厭・醫藥などの道を敎へられた。

うつしのじやかう 船から船へうつしの麝香四十臍(博多)

「移麝香」和漢三才圖會卷三十八、獸類、麝香の條に、「今所レ渡麝香、雲南者爲レ上、東京者爲レ次、福州南京又次レ之、有ニ眞僞殽品一雜

被て錫杖ふり櫻盡しの歌祭文（賀古教信）

〔歌比丘尼〕もと熊野比丘尼と稱したもので、佛法に歸依し熊野權現の事觸れめいたことをしてゐたのが、時勢の推移につれて隱し白粉薄紅を附けて伊達な姿となり、歌念佛または流行節をうたひ、小歌を便りに色を賣る尼となつた。歌比丘尼は「びくに」「ひくに」「まるた」ともいひ、舟に乘つて色を賣る者もあつた。七枚起請などの誓書に用ゐる牛王の群烏の紙などはこの比丘尼が賣り配つたものである。井原西鶴撰・好色一代男卷三、木綿布子もかりの世の條に、「勸進比丘尼聲を揃へてうたひ來れり、これはと立寄れば、褐染の布子に黑繻子の二つわり前結にして、あたまは何國にても同じ風俗なり、元これはかやうの事をする身にあらねど、いつ頃より御寮猥になして、遊女同前に相手も定めず、百に二人といふこそ可笑し」。西鶴撰・好色一代女卷之三、調謔歌船の條に、「そもそも川口に西國舟の碇下して、我故鄕の嚊思ひやりて淋しき浪の枕を見かけて、其人に濡袖の歌比丘尼とて



〔歌比丘尼〕（百人女郎品定所載）

此津に入り亂れての姿舟、艫に年かまへなる親仁居ながら楫取りて、比丘尼は大方淺黃の本綿布子に龍紋の中幅帶前結にして、黑羽重の頭隱、深江のお七指の加賀笠、うね足袋穿かぬといふ事なし、絹の二布の裾短く、とりなりひとつに拵へ、文臺に入れしは熊野の牛王・酢貝・耳かしましき四つ竹、小比丘尼に定まりての一升柄杓、勸進といふ聲も引切らず、流行節を謠ひ、其に氣を取り外より見るもかまはず元船に乘移り、分立ちて後百繫ぎの錢



人倫訓蒙圖彙所載

伊達髮五人男（寶永四年刊）所載



〔うたびくに〕

を袂へ投入れけるもをかし、あるは又割木を其値に取り、又は刺し鯖にも代へ、同じ流れとはいひながら、これを見ればすぐれてさもしき業なれども、そのかみより此處に目なれてをかしからず」。殘口之記に、「歌比丘尼、昔は脇挾みし文匣に卷物入れて、地獄の繪說きし…年籠りの戻りに烏牛王配りて、熊野權現の事觸れめきたりしが、いつの程よりか隱し白粉薄紅つけて、附鬢帽子に帶幅廣く成りし」。人倫訓蒙圖彙（元祿三年刊）卷七に、「歌比丘尼。もとは淸淨の立流にて、熊野を信じて諸方に勸進しけるが、いつしか衣を略し齒をみがき、頭を仔細に包みて小歌を便りに色を賣るなり。功臈歷たるをば御寮と號し、夫に山伏を持ち、女童の弟子あまたとりてしたつるなり、都鄙にあり、都は建仁寺町藥師の圖子に侍る、皆これ末世の誤なり」。

***うたまくら** 寂蓮法師は歌枕を見ん爲に、去年五月の頃より東の方に下られしが（千載集）

〔歌枕〕名所。寢るに枕をよりどころとするやうに、名所は歌を詠むによりどころとするものなるが故にいふ。

***うち** 女中の連れ衆乘せた駕籠はこれか、うちも聞いた駕籠換よい（博多）

〔打〕或動詞に冠して其意を強める接頭語。「うちも」の「も」は感動の意を示す助詞。ここの文は、女中の連れ衆乘せた駕籠だと聞いて來たとの意に、駕籠舁であるから語氣強く、「うちも聞いた」というたので、食ふを「ぶち食ふ」（その條を見よ）といふの類である。

***うちあはび** 梅干・海月・打鮑（國性爺後日）

〔打鮑〕熨斗鮑は鮑の肉を薄く剝ぎ引延して乾したもので、祝儀に用ゐるが、古くは剝がないで打延して打鮑と云つた。

***うちおび** 繁縫縫うたる打帶の厚さは板の如くなるを、二重ながらむんずと取り（五人兄弟）

〔打帶〕組帶。武家名目抄・衣服部に、「打帶は即ち組帶なり、古へ紐を組むといひ、今はうつといふ」。

***うちかた** うちかたの入譯も咄で聞いてゐますれば（曾根崎）これはまあまあ結構なるお內かた、ついしか御出入申さねば（女腹切）これ內方から志がしたいとある（薩摩歌）

〔內方〕家の內。また人の妻を敬ひていふ、「ないはう」「ないぎ」（內儀）の類。

***うちがひ** 宰領が打がひより、其の三百兩合點（冥途飛脚）腰のうちがひ取出し（氷朔日）

〔打違〕金錢を入れる胴卷の囊。夏山雜談に、「打飼といふものは狩の時犬の食物を入れて、犬牽の腰につくる袋なり、飢ゑたる犬に手して食物を與ふれば手にくひつくもの也、是を地に打つくれば食物の出るやうにしたるもの也、……今商家に錢などを入れて腰につくる袋をうちがひといふは、犬の打飼に似たる故也」とあれど、打飼の義ではなうて、打違ひに帶びるよりの名である。

***うちかぶと** 蘭奢待の名香內兜に焚きしめん（女楠）熊谷取つて押へ內兜を見れば（大原問答）

〔內兜〕兜の內側。

***うちかやす** 解き紐解き打かやし、詮議のあるをじろじろとそもや見てゐられうか（重井筒）

〔鵜殿葦〕攝津國三島郡五領村大字鵜殿の堤に生茂せる葦をいひ、莖太く高さ一丈に達す、葉は狹くして長く、褐色花を開き複總花序をなす。この葦は篳篥の舌によいとて其名高い。

***うとろ** 見かけは骨も太けれど、近年骨うづきにて中がうとろになりました(唐船噺)

「うつろ」(空虚)の轉。

***うどんげ** もう逢ふことは優曇華、こなさんの手に死にたい(氷朔日) 優曇華の咲く時は拜みて枝を折るとかや(百日曾我) 一眼の龜の浮木に値ひ、優曇ばらげの三千年の春に値ひたる心地ぞや(百日曾我)

〔優曇華〕梵語「優曇鉢羅(Udumbara)華」の略。靈瑞華と譯し、天竺にあるといふ樹の華である。この樹は實ありて華なく、三千年毎にはじめて華を開くといふ。若しこの樹に金花ある時は佛世に出ると云ひ、又轉輪聖王世に出ればこの花開くと云ふ。かかる所傳よりして世に稀なこと、珍しいこと、又は望み難いことにいふ。般泥洹經に、「閻浮提内有二尊樹王一、名二優曇鉢一、有レ實無レ華、若金華生者、世乃有レ佛」。

うどんはつげ 一眼の龜の浮木にあひ、優曇はつげの三千年の春にあひたる心地ぞや(百日曾我)

〔優曇鉢華〕優曇華又は優曇婆羅華ともいふ。「うどんげ」を見よ。

***うな** うなよく身を打たせたな覺えて居ろと、胴骨尻骨うんと踏めば(今宮)

「うぬは」の約。おのれ(己)は。汝は。

***うな** 唐琴がうなじ引つまんで投退け(蛙合戰) うな玉・手玉・足玉の緒の繰返し(振袖始)

〔頸〕くび。「うなじ」(項)はえりくび。箋注倭名類聚抄に、「項。宇奈之、今俗呼二衣利久比、又衣利毛止一、頸後也」。「うな玉」は頸の周圍に纏ふ曲玉の類。

***うなぎ** めいよな、鰻といふものは食へば食ふ程お山が食ひたうなつてくる(氷朔日)

〔鰻〕鰻は勢(睾丸のこと)の藥だといふ。好色堪忍破袋(寶永八年刊)巻之三に、「そつと蓋飯あがりませ、げによからうと瀬田鰻、勢の藥と花車が引く」。巣林子のここの文意これにて明である。

うなぎいか 鰻・瓢簞・鯰いか(氷朔日)

〔鰻凧〕「いか」は「いかのぼり」の略。鰻の形をした紙鳶。元祿寶永頃流行した紙鳶で、その形の奇なものが多い。

うなぎわた ぬらりくらりの鰻綿、取上婆の年玉なり(田村)

〔促綿〕鰻綿とも書く。鬱金・淺黄などの染綿で作つた綿帽子。産業袋に、「促綿。うこん・淺黄の染綿にても作る」。

***うなゐをとめ** 生田の川に身を棄てしうなゐ少女が名のしるし(天神記)

〔髫髮少女〕項に髮の垂れてゐる少女。箋注和名類聚抄に、「髫髮。和名宇奈井、俗用二垂髮二字一、按宇奈井蓋項居之義、髮至レ項之謂也、然則宇奈井比二之和良波一稍長、而猶未レ結レ髮也、蓋謂二十三四歲者一」。「生田の川に身を棄てし云云」をも見よ。

うにかうる 彼の唐土のうにかうるといふ獸は、水上の惡毒をおのれが角にてそそぎ消し、國民の命を助くれども、獵師は恩を辨へず、獨角獸を殺して角を取る(女護島)

〔獨角獸〕羅甸語(Unus. 一の義、Cornu. 角の義)unicornu 英語(Unicorn)一角をいふ、哺乳類中の游水類に屬し、海豚に似て、雄は上顎の一門齒大に發育して、甚だ長く前方に突出し、其表面に螺旋狀の淺き溝を有す、藥用に供せらる。本草綱疑・五の九に、「蕃語一をウンといひ、角をカフルといふ、此獸一一角なる故に名とす、犀歐千年にして變じてウンカフルとなり、皆龜甲の如く頭に一角あり。山に砒石ありて毒谷川に流れ出づ、鳥獸此水を呑んで皆死す、一角此川に入て身を洗ひ、水を呑むといへども死せず、鳥獸一角の毒を解することを知りて、同じく水に入て呑み、身を洗ふと云傳ふ」と見えてゐる。もとより妄說なれど昔はかく信ぜられた。



〔ろうかこう〕頁

***うぬ** 今日の節句は嘉平次の顏が見えぬと、うぬがこと悔んで可愛や泣いて歸つた(生玉) 日ごろそなたに心を盡す由兵衞め、どうこけてもうぬが爲よいやうに書いたは定(今宮)

「おの」(己)の轉。おのれ。そち。

***うねめ** 淺くは人を思ふものかはと、陸奧人によみけるは、釆女なりけるゆかりかや(吉野忠信) 浮きもやらぬわぎもこの、釆女が執心侍ふなり(一心五戒魂)

〔釆女〕「うなゐめ」(垂髮女)の義、未婚女を云ふ。昔郡司諸氏から女子の容貌美しく才能ある者を擇んで、禁中に奉れる者を釆女と稱し、上古は天皇の御膳を給仕する女官であつて、主上の御側近う奉仕した。「淺くは人を思ふものかは」をも見よ。

うのはな 緋縅や譽はくちぬ黄金ざね、名ど卯の花にふしなはめ白絲縅 うのはなをどし(文武五人男)

〔卯花〕卯花縅の略。萠黄糸と白糸とで縅る。先づ袖草摺とも、菱縫板から上二段ばかり萠黄糸で縅し、それから上は皆白糸のみで縅す。白は花の色、萠黄は葉の色をかたどつて、しか名づけたのだといふ。「をどし」は緒通の義でなくて、威の義である。

***うば** 高砂の尉と姥が離別して(壽門松)

〔姥〕老嫗。謠曲・高砂に、「この尉は津の國住吉のもの、これなる姥こそ當所の人なれ」。

***うはおび** 上帶草摺脇立にむんずむんずと取付いたり(兼好)

〔上帶〕鎧の腰のあたりに纏ひ附ける帶。

***うはがひ** 膝枕そつと外しは外せしが、うはがひの褄屑に敷かれ(嵯峨天皇)

〔上交〕衽。

うばがもち 乘おくれじとどさくさ津、お姫様よりまづうばが餅(丹波與作)

〔乳母が餅〕乳母は姥・媼とも書いてある。近江國栗太郡草津町の名物である。西鶴織留巻一に「草津の宿の矢看といふ所は姥が餅の名物」。名所圖會に、「名物乳母餅といふを驛中(草津)にて賣る。土人の言、江州佐々木屋形、六角左京大夫義賢といふは永祿十一年織田信長の爲に亡されぬ。其子孫なほ殘りて、寛永の頃まで郷代官の如きものにてありしが、事によりて誅滅せらる。其時幼兒三歲なる者あり、乳母養育の便りなければ、餅を製して往還の

レ明、大抵麝香爲ニ最上一、有ニ皮膜一裹レ之、一箇重自ニ五錢一可ニ八錢一、一種無ニ皮膜一、如ニ煉粉一者、名曰ニ傳染麝香一、共赤黑色云云」。

***うつせ**　手を通されば便なき袖のうつせのうちかけ姿（聖德太子）戀風の身にしじみ川、流れては其うつせ貝現なき（曾根崎）

〔虚〕空虚。「虚貝」は肉の脫けた介殼。

うつせみ　名を綺合と付けたるも、空蟬・夕顏・若紫・明石の君におしつづき、ならびなしとの心かや（千疋犬）

〔空蟬〕源氏物語・空蟬の卷に見えてゐる美女であつて、性質つつましげに情に驅られることなく、理性的の女である。ここにいへる綺合・空蟬・夕顏・若紫・明石は皆源氏物語に見えてゐる美女で、各その名の卷卷に出てゐる。

***うつせみの**　はたと打つやうつせみの、はかなき老の腕力（虎が磨）

「うつせみ」は顯しき身（現身）の意。「うつせみの」といふて、命・身・世などの枕詞とする。

***うつそり**　此うつそりが夢にも知らず（曾根崎）色の上にてたらしこみ、眞の臺子傳授の卷物してやり、權三めにうつそりさせう（鑓權三）

〔空〕空虛の貌。まぬけもの。ほんやり。和訓栞に、「鳥にウソあり云云、ウツソリといふ俗語も亦此鳥に據るべし」。

うつつらわうじ　寶引骨牌をうつつら王子が八千歲（雪女）

〔鬱頭藍王子〕鬱頭藍弗（Udraka Ramaputra）のことで、婆羅門の名。釋尊出家して道を問はれた仙人で、その天壽八萬劫とし、或は八萬歲とし、巢林子は八千歲として居る。名義集・二に、「鬱陀羅羅摩子、亦云ニ鬱頭藍弗一、此云ニ猛喜一、又云ニ極喜一」。寶物集に、「鬱頭生レ天期ニ八萬劫一」。唐糸草子に、「東方朔の九千歲、うつつらの八萬歲、長命居士の一千歲」。巢林子のここの文は、骨牌を打つの打つに鬱頭藍王子をいひかけたのである。

うつぶしいろ　春の名殘の朧染、うつぶし色の御所染（融大臣）

〔空五倍子色〕五倍子の中の虛なるより空五倍子といふ。白膠木の葉に生じた瘤狀の五倍子に少し鐵漿を加へた染料にて染めた薄黑の染色「まづ初春の空色に云云」を見よ。

うつほぐさ　つれだつ道のおそかれと、いのる心のあやにくも、早く射る矢の靫草、浮む瀨もなき水草に（用明天皇）

〔靫草〕草の名。莖は四角形で高さ一尺許に成長し、葉は薄荷に似て對生、六月頃唇形の紫花を開き、穗狀花序をなす。


〔うつぼぐさ〕

うつぼばしら　おのれ引裂いてくれうものと、うつぼ柱に身を隱し（振袖始）　思も寄らぬうつぼ柱の蔭よりもつつと出で（吉岡染）

〔空柱〕禁中殿上の間の隅にある中空の柱であつて、雨水その中を流れ通るやうにしてある。

***うつぼぶね**　あだしが浦のうつぼぶね、みな無きものと知りながら（重井筒）

〔空舟〕大木をくりて中をうつろに造つた舟。

うづみもん　あつと答へて埋門の扉開けば（蛙合戰）

〔埋門〕禁中朔平門あたりの裏小門をいうたのである。石垣土塀などの下方に設けた門。

***うづらごろも**　羅綾の袴・錦繡の襲引替へて、何時の間に鶉衣と綻びて（雪女）同じ思に朽果てし鶉衣に苔深き（女護島）

〔鶉衣〕敝れて短くなれる着物。荀子・大略篇に、「子夏貧、衣若ニ縣鶉一、人曰、子何不レ仕、曰、諸侯之驕レ我者、吾不レ爲レ臣、大夫之驕レ我、吾不ニ復見一」。

うづらもち　深草とは鶉餅（女楠）

〔鶉餅〕皮薄く圓く脹れた饅頭であつて、鶉燒とも云ふ。嬉遊笑覽に、「鶉やきはうす皮の十字（饅頭のこと）のたぐひならん」。「いまゐずし」の條をも見よ。

***うつり**　虎樣や少將樣のうつりといひ、お二人をじよさいに思ふ心でも祐經かばふ心でも誓文くされ無けれども（百日曾我）　せめて御兄弟のうつりにもなれかし（百日曾我）

〔移〕濟合。關係。よしみ。ゆかり。

うでぐるま　小腕むずと摑んで、得手物ヤこれわいな、腕車にどうと投げたりける（酒呑童子）

〔腕車〕腕を摑んでくるくる振廻すこと。

うでこき　黑壁權大夫に腕こきの侍ども相添へ、館の周圍に置くからは仕損ずる事よもあるまじ（弘徽殿）

「うできき」（腕利）の轉か。伎倆のすぐれてゐること。和訓栞に、「うてこき。俠者をいふ、うでだてともいへり、搤腕の意也。」

***うてず**　今日は島屋で彼の田舍のうてずに、せびらかされてつぶりが痛い（冥途飛脚）

「打てず」は動詞と助動詞と合した轉成名詞で、拍子の打てぬこと。間拔け。野暮。巢林子作・聖德太子繪傳記に、「島主一圓うてぬ顏」とあり、また同作・心中天網島に、「小氣味の惡い女郎ぢやと、流石の武士も打てぬ顏、」とある「うてぬ顏」も、拍子拔けた怪訝顏の意。

腕無のふりづんばい　「ふりづんばい」を見よ。

うでぬき　兵庫鏁の丸柄に信玄流の腕拔結び下げ（國性爺後日）

〔腕拔〕鍔又は柄頭から垂れて手首を通す緒紐。

腕引く　長崎には物の堅めに血酒飲むとや、僞でない惣七が心底、腕引いて誓を見せんと（博多）

腕に刀を引いて血を出す意。誓に町人博徒の類が、腕を刺して血を出し、或は酒に生血を滴して飲み、また傾城が情夫の爲に生爪を剝いだりすることが當時行はれた。

***うでぼし**　重れてかかる慮外せば、うでぼし挘いで挘ぎ折らんと（嵯峨天皇）　仔細をぬかせ、ぬかさずば、長刀持つたるうでぼし共に挘折つてくれんずと（堀川波鼓）

「うでぶし」（腕節）の訛。

***うとくにん**　元來長は海道一の有德人、三十餘人の流れの君を持たれしが（小栗判官）

〔有德人〕分限者。富家者。

うどののあし　命ぞせめてたから寺、うどのの葦のほの見ゆる（天神記）

は大海に乘り出すものと、今から屬望されてゐる。

うほうどうじ 日の本照す日の御神も、雨寶童子の御名は普き(會稽山)雨寶童子の御相好、妙なる御聲あざやかに(女楠)

〔雨寶童子〕天照大神をいふ。右手は金剛寶棒に支へ、左手は掌上に寶珠をとりて立ち、頂上五輪塔婆ある姿を、天照大神日向下生の御像としてゐる。合類大節用集(享保二年刊)神祇門に、「雨寶童子。俗云日神垂迹、本地大日」。「雨乞の小野の小町」をも見よ。

うま 南無三この馬落ちた(壽門松)

〔馬〕將棋の語、桂馬の略。

***うまげた** 寢所に通ふ馬下駄に露ふみ分けて、飛石の道を手燭に耀かせ(日本武尊) 忍ぶ夜つらき馬下駄の、ばらを・くくみ緒・總はな緒(加増曾我)

〔馬下駄〕駒下駄ともいひ、昔は庭に穿くにのみ用ひた。

うまざくり

「むまざくり」を見よ。

***うまさし** 問屋馬さし親方へことわつて、海道筋のごきの實をぶちあげ(丹波與作)

〔馬差〕江戸時代宿驛の役人で、人馬を指圖する者。

***うまじるし** 旗標馬標兜の星を輝し(最明寺殿)

〔馬標〕軍中にて將帥の側に立てて、その所在の標とするもの、永祿頃からはじまつたと云ふ。その形は家によりて異り、豐臣氏の千生瓢簞、德川氏の五本骨の金扇など種種ある。

うまだし 所々に數個所の高櫓井樓馬出二重の壕(持統天皇)

〔馬出〕人馬の出入を敵に見せぬ爲に城門前に作れる土手であつて、その作り方には法式がある。甲陽軍鑑に、「山本勘介申上ろ、馬出と申す物は城取の眼にて候、仔細は城をまかれて、城内より備を出すにあぶなげもなく候、又攻手に成申して取よせにくく候」。

***うまつぎ** 馬次までやれやれとせがまるゝ(丹波與作)

〔馬次〕道中にて馬をつぎかへる所、卽ち宿驛。

***うまとり** 馬取中間草履取(鑓權三)

〔馬取〕馬の口取。

***うままはり** 馬廻蹴ちらかし押ならべてむんずと組み(源義經) 政山三五平といふ馬廻(堀川波鼓)

〔馬廻〕主君の馬のまはりに附添ふ侍。人倫訓蒙圖彙・卷之一に、「馬廻。主君騎馬のまはりをかこむの謂なり、平生は使者取次役にはあたらず、番役をなし、諸事奉行役又は郡奉行代官等の職、馬廻の中よりつとむるなり」。

うまもち 馬持が好い故に其月毛も一兩年ぬつきりとよくなつた(鑓權三)

〔馬持〕馬の持扱。馬の飼養。

***うまやろい** きりきり乘らつしやれ、馬やろいとぞつこうどなる(丹波與作)

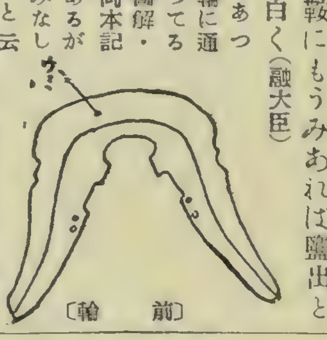
「うまやらう」(馬遣)がつまつて「うまやろ」となり、それに母音「い」の增加した詞である。馬士が馬を追うて客を呼ぶ時の言葉であつて、馬遣らう。馬遣りませう。

うまやをう おのれは馬屋を得たるとや、當分それは入らぬこと、馬に乘るまで牛若が草履直せ(孕常盤)

〔馬屋を得〕馬を扱ふに術を得。

うみ 馬の鞍にもうみあれば鹽出といふも面白く(融大臣)

〔海〕鞍橋にあつて、前輪後輪に通つて高くなつてる線。古兵器圖解・鞍具部に、「岡本記云、鞍は海あるが本なり、うみなしは略儀なりと云へり、海なしの鞍を世に布袋腹と云、其形に付ての名なるべけれど甚俗也、只うみなしと云べきにや」。



〔前輪〕

***うむ** 私仕事に賃苧うみ(丹波與作)上り下りの客達の洗足取つて、苧をうみて裏背戸掃いて(小栗判官)

〔績〕麻苧を細く裂いて、これを繼合して縒る。昔下婢は仕事の隙に苧を績むを內職としてゐたのである。「をごけ」をも見よ。

***うめ** 梅かんばしく松高き、位はよしや引締めて、あはれ深きは見世女郎(冥途飛脚) 名取の松梅二十五人に十八公配膳は、圍の女郎五十人づゝ(扇八景)

〔梅〕遊女の位であつて、天神また天職ともいふ。梅は天神の緣によつた名で、松(太夫のこと)の次に立つ遊女の位である。「てんじん」を見よ。

***うめつぼ** 梨壺梅壺夜の御殿(天神記)

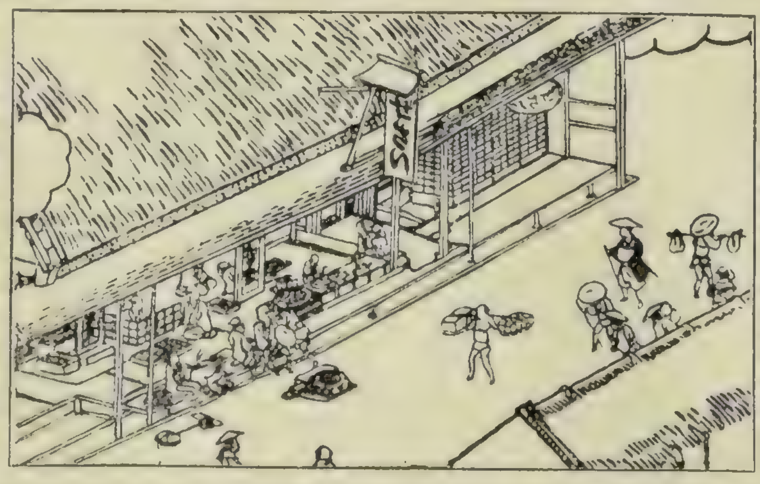
〔梅壺〕禁中五舍の中で西方第二にある、本名を凝花舍と云ひ、中庭に梅樹あるによつて梅壺といふ。「紫宸殿に僧正あれば云云」を見よ。

うめのあめ 見送る中に降る涙、つれなや神の梅の雨(生玉)

〔梅雨〕つゆ。さみだれ。ここの文は、天神の緣ある梅に梅雨をかけたのである。

うめのきのぜさい 梅の木の是齋の辻で身を粉にはたいてやつて見た(丹波與作)

〔梅木是齋〕梅木は近江國草津と石部との間にあつて、本名を六地藏村と云ふ。是齋はこの地で和中散といふ藥を賣る本家の名である。



(東海道名所圖會所載)〔梅の木の是齋の辻〕

秋里籬島編、東海道名所圖會・卷二に、「梅木。本名六地藏村なり、ここに和中散の藥店三軒許あり、是齋を本家といふ、所の名の梅木を氏のやうにおぼえ、家の名の是齋を藥の名とお

道に持出で、大名高家の乘物などにすがり、抱きたる子は由ある子なり、其養ひぐさにとて打歎きければ、自らその情實を感じてこれを買ふ人多く、後遂に小店を開きければ、これを求むること往來の例となり、乳母が餅とぞもてはやしける」。

うはきがらす　浮氣烏とそやされて、月夜も闇もこの里へ、光滿寺といふ坊主客（女腹切）

〔浮氣烏〕浮氣とは心浮薄であつて眞面目でないこと。烏とは色町を求めいて歩く客をいうたもので、遊女を「買を買を」といふを、烏の鳴聲の「かあかあ」に取つて、烏というたのである。（旅する者を旅烏といふは、烏の鳴聲に關係はないが、浮氣烏などの語から聯想されて出來た語であらう。）「阿波座の野良烏」をも見よ。

***うばざくら**　身は百歳の姥櫻（賀古敎信）

〔姥櫻〕彼岸櫻。　羅山拾稿に、「この花（彼岸櫻）繁榮にして殊に上葉なきが如し、老婆多く齒落ちて無し、齒と葉と和訓通ず、故にこれを姥櫻といふ」。

***うはざし**　夷狄征伐の出陣に、上刺の鏑矢を奉つて合戰の勝負を試みしより（五人兄弟）

〔上刺〕箙に二十五矢をさした時に、上刺と中刺の矢をその數の中に入れてさすので、上刺は鏑矢である。五武器談に、「上差の流鏑矢」。箙の上にさすなり、此上ざしの矢取様習ある事なり」。

うはずんべり　上上方はうはずんべり、お心でばかりくよくよくよくよ思の積り（關八州）

「うはずべり」（上滑）に撥音「ん」の增加した語。表面のみ體裁をつくらふこと。

***うばそく**　誠にこの山は葛城菩提と名付け、役の優婆塞精進潔齋し給ひて（吉野忠信）

〔優婆塞〕梵語 Upasaka. 在家にして佛弟子たる男子の稱。　河海抄に（源氏物語・橋姫の卷の條）、「優婆塞は梵語、唐士飜して近事男と云へり、俗ながら佛の道を修行する人なり、佛の四部の弟子のその一なり、賀茂役公小角年三十二にして家をはなれて葛城山に入りて、藤の皮を衣とし松の葉を食として、孔雀明王の呪をみてて、つひに仙術を得て鬼神を從へ侍り、是を役優婆塞と號す、山伏の行は是よりはじまれりとなむ」。

***うばたまの**　烏羽玉の夜の衣を返しては（持統天皇）　さながら邪淫の狂女の如く、戀慕に迷ふうばたまの、髮も亂れ氣も亂れ（天鼓）

〔烏羽玉の〕記・紀・萬葉集皆「ぬばたま」と見え、古今和歌集より「うばたま」とも見えてゐる、「う」は「ぬ」の轉じたものである。「ぬばたま」とは射干の實で、その黑きより總て黑いと聯想される類の「黑」「夜」「闇」「月」「夢」「髮」などの語の上に、「烏羽玉の」を冠らせてその語の枕詞とする。　古今和歌集・戀二の部に、「いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣をかへしてぞきる」。

***うばつか**　うばつか賴朝卿人を捨てさせ給はぬ餘り（加增曾我）　右ばつか賴朝文武に富み（綠靜）

〔右幕下〕右大將をいふ。　百官譜（楠木正虎天正十三年自筆本）に、「大將　唐名羽林大將軍、常云幕府、又云幕下」。易林本・節用節に、「幕下大將軍」。

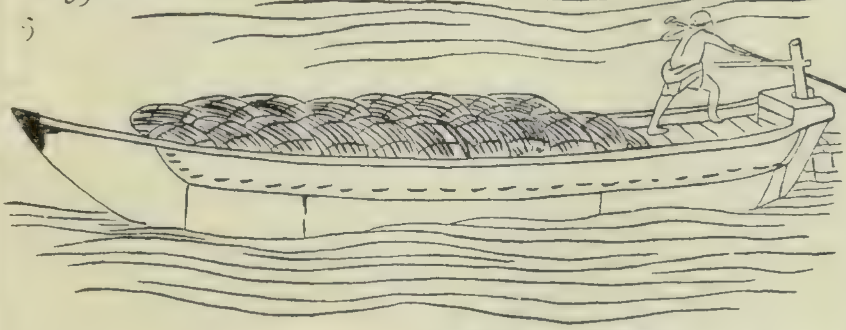
***うはつらりゆうわう**　（松風）

〔優鉢羅龍王〕「優鉢羅」（梵語 Utpala）は青蓮華・紅蓮華・黛色蓮花などと譯す。その池に棲む龍王であつて、八龍王の一。　法華文句・二上に、「漚鉢羅、此云黛色蓮花池、龍依池住、從池得名」。

***うはなり**　間夫のうはなり打つ波の、おゆらは夫太四郎がこづか胸ぐら摑合ひ（酒呑童子）　花のうはなりこれ見よと、櫻の下枝しもとと振上げ（井筒）

「うは」（上）は重なる義、「なり」は「ならび」（並）の約つた語。後妻をいひ、また轉じて、嫉妬の意にいふ。　和名抄に、「和名前妻・古奈美、後妻・宇波奈利」。骨董集に、「嫉妬」と書いて「うはなり」と傍訓してある。昔昔物語に、先妻が後妻の許に打擲に行くを後妻打と云ふと見えてゐる。

うはに　茶舟で下る樽肴、在所嫁御の里歸り、うはにて送る葬禮や（今宮）



〔に　は　う〕（藏所集用船漢和）

〔上荷〕上荷舟。　和漢船用集・卷之五に、「上荷舟。攝州川川に多くありて荷物運送の舟、七村上荷・中船上荷・新舟上荷・堀江上荷と云うこ品あり、ともに二十石積なり、堀江舟には三十石積あり、舟深くして海をも川をも乘るべし、川口より本船の上荷を取るの名なり、又問屋より荷物本船に積むにも此舟を用ゆ、上荷舟所所にあり、播磨上荷・堺上荷・房州上荷、名同じけれども其制異り」。

うはもる　挨拶も何するやら、聲も上漏るばかりなり（生玉）　斬られたら死なう、死んだらどうしよと、心は沈み氣はうはもり（女殺）

〔上漏〕憂悲胸中に橫溢して聲また氣のふらふらする。かみづる。

***うひかうぶり**　われわれは殿上にてうひかうぶりし、終に下樣のわざを知らず（松風）

〔初冠〕元服して初めて冠を着けること。

***うへのきぬ**　禁色の御袴・小葵の上の衣下し賜はる勅宣の御使（虎が磨）

〔上衣〕袍をいひ、束帶の表衣である。文官のを縫腋と云ひ、兩腋を縫うて襴（一幅の絹を橫に付けたもの）がある。武官のを闕腋といひ、兩腋を縫はず襴も無い。

上村吉彌　上村吉彌は伏見堀ちやとおしやる、義理はの、舟板町の舟板の末には沖に乘り出し、帆を十分のしろしとて、今から人やこがるるといふこと（今宮）

寶永・享保頃に於ける大阪の俳優で、女形を勤め、年若うて美貌であつたので、役者顧細解（享保元年刊）に上上の位付となる。ここの文の藝評にも、伏見堀（今の京町堀）と見立て、末

印裏印を印材の兩端に彫り、または別別の印材に彫つたのもあつた。

うらやさん 神子山伏にうらやさんと、うらやさんの道滿までぐるになつて爲すわざ(弘徽殿) おのれが威勢を振はん(嫗山姥)

「占算」の義。書言字考に、占算を「うらやさん」と訓じてある。算木を以て占ふ者。賣卜者。

うらやす よろづやすやす浦安が木のもとにて、正月三日の寅の一天誕生まします(大經師) 忝くも正月元日寅の一天に、伊勢の國豊浦安が木のもとで安安と御誕生あれば(天鼓)

〔浦安〕四海波靜に安らけき義。日本國の美稱。神武紀に、「伊弉諾尊目₂此國₁曰、日本者浦安國、細戈千足國云云」。ここの文は萬歳唄であつて、「浦安が木のもと」とある「木の本」は、「扶木の本」の義で日本のことであらう。淮南子・地形訓に、「扶木在₂陽州₁、日之所レ出」とあつて、註に「扶木、扶桑也」と見えてゐる。「豊浦安」の豊は、豊葦原などいふ豊と同じ語で嘆美の意を表はす。

***うらわ** 須磨の浦わの松の行平立歸り來ば(堀川波鼓)

〔浦曲〕入曲れる渚邊。「あら頼もしの御歌や云云」をも見よ。

賣買高い 賣買高い此の節二貫目近い二十兩(女腹切) 賣買高い世の中でも、金とたばけは澤山な(天網島)

當時は正德元年鑄造の惡質な四寶字銀通用してゐる時代であるから(心中天網島中之巻に「今の治兵衞が四つ三貫匁の才覺打ちみしやいでも何處から出る」とあるは、なほ四寶字銀の通用せるを示してゐる)、金貨との兩替にも、物品の賣買にも、銀の利目が薄い爲に高額を要し、世智辛い世なるをいうたのである。

うりざねがほ 瓜實顏の旦那殿、東寺から出た人さうな(丹波與作)

瓜實顏とは瓜實のやうな形した顏で、美しい顏容をいふ。枕草紙・うつくしき物の條に、「瓜にかきたるちごの顏」と見え、諺にも、「一瓜實に二丸顏」などいふ。東寺は瓜の名物の地であれば(「とうじ」を見よ)、瓜實の縁から、「東寺から出た人さうな」とつづけたのである。

うりへぎ そなたの身を賣らする程ならば、三百兩もしてやつて、うりへぎの百兩も手に持つたがよい筈(淀鯉) 先度の脇指三十二兩に賣拂ひ、銘なしの下坂寸も燒も變らぬを八兩で買替へ、貳兩で銘を彫らせ、拵へ濟して大阪へ下し、その賣へぎの二十兩(女腹切)

〔賣剝〕賣買しての差引儲け。原價を引去つての利得。

***うりようこ** 右龍虎・左龍虎討取つて、難なく過ぐる月日の關や(天網島)

〔右龍虎〕巣林子作・國性爺合戰、九仙山の條に見える人物である。假作人物傳の「うりようこ」及び「樊噲流は珍しからず」を見よ。

***うるしこし** 塵紙屋めがうるしこし程な薄元手(天網島)

〔漆漉〕吉野紙をいふ、漆を漉すに用ひる。

***うれたし** 葎生ひて茂れる宿のうれたきに 假にも鬼のすだくなり(祂狩)

「うれいたし」(憂甚)の義、日本紀に、「慨哉」を訓んである。憂はしい。いやらしい。「むぐら生ひて茂れる云々」をも見よ。

***うろうろ** あつといふより納戸に入り、うろうろしても金はなし(冥途飛脚) 嘆く辟さへ身にしみて、野邊の霜風小夜嵐、丁稚の三太もうろうろ涙(重井筒)

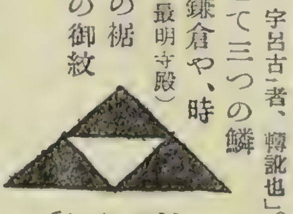
どうせうと途方に暮れてさまよふ貌。「うろうろ涙」とは、途方に暮れ涙の出て目のうるむこと。「おろおろ」をも見よ。

***うろくづ** 山野の鳥獸河海のうろくづまで(嵯峨天皇) 北の方を始めとし、うろくづ好みの若宮に(松風)

〔鱗〕魚類の稱。「うろくづ」は「いろくづ」(色屑)の轉、魚は鱗に諸色あればいふ。箋注倭名類聚抄に、「鱗。唐韻云、鱗音隣、伊路久都、俗云伊呂古、今俗呼₂宇呂古₁者、轉訛也」。

***うろこがた** 合せて三つの鱗形、北條五代の鎌倉や、時の時たる時賴の(最明寺殿)

〔鱗形〕北條氏の紋。



〔たがころう〕

うろこがたのこしがはり 鱗形の腰から下を吉岡の裾黑に鱗形、北條の御紋ぞや(五人兄弟) 鱗形の腰替り白頭の振禿、二本松の城主とかや(薩摩歌)

〔鱗形の腰替〕奧州二本松の城主、丹羽五郎三郎尹重の細籠印。



〔替腰の形鱗〕

***うろぢ** 轟く穢土は假の宿、有漏路無漏路の中休み(卯月潤色) 心一つをいろいろに結ぶは有漏路(薩摩歌)

〔有漏路〕有漏は無漏に對する語で、漏は漏泄の義、煩惱は過を漏泄すること窮りなければこれを有漏と云ふ。有漏路とは煩惱の垢に充ちてゐる生死の旅路と云ふことであつて、娑婆即ち現世をいふ。

***うろん** からだは七十の牛男、みすみすのうろん者、せがれが相手に存じもよらず(井筒) 證據なくてはうろんなり(國性爺)

〔胡亂〕怪しく疑はしいこと。支那では「胡亂」を Hulian と發音して用ゐられ、「胡思亂道」「胡說亂道」など分けても用ひられてゐる、「亂」の客家音 lon である。思ふに昔本邦人が廣東地方に渡航してゐた際傳へた語が廣まつたのであらう。正法眼藏・空華の卷に、「華時の前後を胡亂して有無の戲論あるべからず」。易林本・節用集に、「胡亂」。また釋曹谿の禪家龜鑑にも、「胡亂指注皆不₂外曲₁」と見えてゐる。

***うゐ** 世の有爲無常この伯母とても知つて居る(女腹切) 飛花落葉の風の前には有爲の轉變を悟り(兼好)

〔有爲〕諸種の因緣和合して作爲される諸現象をいふ。法華玄義に、「爲レ有₂起作₁、故名₂有爲₁」。この世は總て因緣によつて假に成れるものなれば、何事も變化して常なきものであるによつて、有爲無常・有爲轉變・有爲生死・有爲の境などいふ。

うゐらう 君にかゝつて一貫五百がうゐらうつんだこの甚藏、弓矢八幡身にくれろ(寄庚申) 間違くば遠目鏡、近くへ寄つて物言はどうゐらうつめと、ざわめきて今や今やと松風や、裾に模様の眞葛原(兼好) 愛甲の三郎と、外郎つんでぞしなだれける(虎が磨)

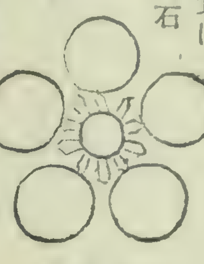
ぼえぬることは、劇場屋或は小田原の外郎のたぐひならんかし」。「わちゆうさん」を見よ。

うめのこよみ　春を以て色香に鳴る梅の暦の根本大經師（大經師）

〔梅暦〕山奥では梅花の開くを見て春を知るとの意から、梅花を云ふ。俳諧歳時記栞草に、「梅暦。梅是山家暦、山中には梅の咲くを見て春を知ると云ふ心にて暦といふなり」。巢林子のここの文は、梅の暦の語に、暦を作る大經師をいひかけたのである。

***うめばち**　加賀に梅鉢百二十萬石（薩摩歌）

〔梅鉢〕紋所の名、梅花の形を正面に見せたもの。



〔うめばち〕

うめぼうし　身揚り分のおどもりも東方朔が九千雨、それで残らず梅ぼうし（雪女）　大事の太夫様に鹽の辛い梅ぼし婆がすゐこなやつと思召そ（壽門松）

「うめぼし」（梅干）に母音「う」の増加した語。長壽を保つて顔面梅干のやうになつたこと。「それで残らず梅ぼうし」とは、身揚り分の借金を残らず濟めるに梅干をかけたのである。

うめもどき　控の柏・梅擬のうけ（聖徳太子）

〔落霜紅〕梅擬とも書く、本邦山地に自生する落葉灌木で、高さ丈餘に達す、葉橢圓形にして尖り細鋸歯を有す、花小にして帶白色である、果實は小球形の核果で赤色、稀に白色なのもある。

***うもれぎ**　埋れ木の何時の盛りに何時の花、何時の時をか待つべきぞ（最明寺殿）　花咲く頃を埋れ木の、みのなる果こそ口惜けれ（十二段）

〔埋木〕木幹が久しう土中に埋沒して化石に變狀したもの。最明寺殿百人上﨟のこのあたりの文は、謠曲・鉢の木を材料とし、十二段のこの文は、平家物語・巻四、源三位頼政の「うもれ木の花咲くこともなかりしに、みのなる果ぞあはれなりける」の歌句により、なほこのあたりの文は、謠曲・鞍馬天狗を材料とした。

***うら**　うらが寝た懷へ盗人が這入つて（堀川波鼓）　うららが父いき世の時は博打好き（嵯峨天皇）　心中が嬉しくてうらなだがこぼるゝと、みづ泣いて見せければ（加増曾我）　貰乳して子をうらゝが苦にして、育てたも五郎介殿を思ふゆゑ（大織冠）

「おのれ」（己）が略されて「おれ」となり、「おら」「うら」と轉訛した語、下俗人のつかふ自稱代名詞。

***うらかく**　矢の根碎けて裏かかず（文武五人男）　裏をかゝすなやれ錣を傾けよ（大原問答）

〔裏缺〕矢または刀槍などが突立つて裏まで貫き通る。

***うらかた**　御典藥よ占かたよと、ひそめく聲々たゞ事ならず（蛙合戰）

〔占方〕占をする人、陰陽師。〔占形〕占に出た象。

***うらがね**　是旦那様、上物の裏金二千足戸棚にあらう（氷朔日）

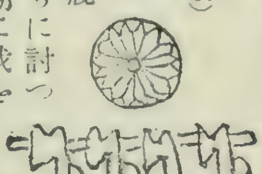
〔裏金〕雪駄の裏に打つける鐵片。（裏金は尻金とも云うたので、伊達髮五人男（寶永四年刊）二の巻に、「かづらきといふ大雪駄、しりかねの厚さを二分三分と極め」と見えてゐる）。

うらかべかやす　ふと頼まれ奉りしさいては置かれず、裏壁かやして跡をつめんと思ひ（用明天皇）

〔裏壁返〕「かやす」は「かへす」の訛。表壁を塗つてあつて、その裏の方を塗り塞ぐをいふ。以て始末をつける意に職人にふさはしい言葉を用ゐたのである。

裏菊の裾に籬（薩摩歌）

仙臺城主、松平陸奥守吉村の駕籠印。



〔裏菊の裾に籬〕

裏釘かやす　我が祕術を働かば返討ちに討つことあらん、最期に我を恨むなよ、やあ間緩い間緩い裏釘かやすな、さあ來い（國性爺）

「かやす」は「かへす」返の訛。裏まで貫き出た釘の尖端を曲げて打返すやうに、念に念を入れるを云ふ。

裏差の笄　床の硯引寄せ、三行半にさらさらさつて去狀、裏さしの笄の印と巻込んで（會稽山）

刀の裏に差す金屬製の笄。昔は笄のみを刀裏に差しもした。（表に笄・裏に小刀を差しもし、其小刀を裏差といへどそれとは別）。

うらしまのみ　下に置かずの可飲や、浦島飲はあける事法度にしての潮干飲（加増曾我）

〔浦島飲〕浦島太郎の玉手箱はあけてはならぬといふ事から、酒盃を玉手箱に擬してあけてはならぬの洒落である。

***うらじろ**　ちよつと祝ひましよ、うら白ゆづり葉（夕霧）

〔裏白〕齒朶のことで、葉の裏白いから云ふ。和漢三才圖會に、「面青背白、四時不レ枯、以飾二元旦嘉祝之物一」。

***うらどふ**　自らは源氏・御身様は平家、若し只今にも義朝のゆかりとならば如何し給はんと、よそながらこそうらどひけれ（烏帽子折）　その心根が聞きたいと、騒がぬ顔で裏問へば（卯月袍）　七左衞門殿は何方へ、定めて懸も寄りましよと、餘所の方からうら問ひける（女殺）

〔裏問〕心中を問ふ。先方の返辭によつてその心底を知らうとして尋ね問ふ。「うら」とは心をいふ、詩に「不レ離二手裏一」と見えてゐる。「うらさびし」「うらがなし」などいふ「うら」は卽ち心の義である。

うらなし　うらなしおつ取つて一ふり振出す手の内に、握り治むる六十餘州（三國志）

〔裏無〕藺草を編んで作り、裏のつかぬ一枚草履をいふ。九州では筵を編んで作れる草履をいふ。越谷秀眞編、物類稱呼・巻四、器用の部に、「江戸にていふかはざうりを九州にてうらなしといふ」。



〔うらなし〕

うらはず　冥土の使繁ければ浮世の名殘これまでと、梓の弓のうらはずに弦走してぞ失せにけり（卯月潤色）

〔上筈〕末弭ともいひ、弓の上端の弦をかける所。

うらはん　いや私は印判持ちませぬ、そんなら父が裏判をと（今宮）

〔裏判〕實印の裏に彫刻した印。昔は實印と、實印の次に位する裏判と云ふのがあつて、實

――内一枚は唇之二と唱へ、唇之形に書き、歐に成不ㇾ申候――内一枚は青二と唱へ、青く彩色、歐五十に相成申候、此二枚は四枚の内、一札に御座候

參の四枚の内　青三と唱へ、青く彩色、歐五十に相成申候、四枚の内上の札に御座候――内一枚赤三と唱へ、赤く書き、歐十に相成申候――内二枚はすべたの三と唱へ、歐に成不ㇾ申候

四の四枚の内　青四と唱へ、青く彩色、歐五十に相成申候、四枚の内上の札に御座候――内一枚赤四と唱へ、赤く書き、歐十に相成申候――内二枚すべたの四と唱へ、歐に入不ㇾ申候

五の四枚の内　青五と唱へ、青く書き、歐五十に相成、四枚の内上の札に御座候――内一枚は赤五と唱へ、歐十に相成申候――内二枚はすべたの五と唱へ、歐に入不ㇾ申候

六の四枚の内　青六と唱へ、金泥等にて彩色、歐六十に相成、四枚の内上の札に御座候――内一枚は赤六と唱へ、歐十に相成申候――内二枚はすべたの六と唱へ、歐に入不ㇾ申候

七の四枚の内　青七と唱へ、歐二十に相成申候――内一枚赤七と唱へ、歐十に相成申候――内二枚はすべたの七と唱へ、歐に入不ㇾ申候

八の四枚の内　青八と唱へ、歐二十に相成申候――内一枚赤八と唱へ、歐十に相成申候――内二枚はすべたと唱へ、歐に入不ㇾ申候

九の四枚の内　青九と唱へ、歐五十に相成申候、四枚之内上の札に御座候――内一枚は赤九と唱へ、歐十に相成申候――内二枚すべたと唱へ、歐に入不ㇾ申候

十の四枚の内　釋迦十と唱へ、歐五十に相成申候、四枚の内上の札に御座候――内一枚をすだれ十と唱へ、歐十に相成申候――内二枚すべたと唱へ、歐に入不ㇾ申候

十一の歐にて　青馬と唱へ、金泥等にて彩色、歐五十に相成申候、四の内上の札に御座候――内一枚は十の馬と唱へ、歐十に相成申候――内二枚すべたと唱へ、歐に入不ㇾ申候

十二の歐にてきり　青きりと唱へ、金泥等にて彩色、歐五十に相成申候、四枚の内上の札に御座候――内一枚は十のきりと唱へ、歐十に相成申候――内二枚すべたと唱へ、歐に入不ㇾ申候

うんたち　生れは長崎國訛、こりやうん達まだ市五郎三藏の船は見えいろ（博多）

「おぬしたち」（御主達）の訛略で、長崎地方の訛語。そなたら。

***うんつく**　自身の押へ手ばまりの上戸なれば、本來無分別無常うんつくとも觀ずべし（扇八景）

人を罵つていふ語で、愚鈍、とんまの意。この語現今も信州北安曇郡小谷（佐野坂以北）地方で用ゐられてゐる。俚言集覽に、「うんつく。運盡れば智惠の鏡もくもるといふ諺あり、因て智惠のなきを卑しめいふなるべし」。宍戸鐵舟撰・風流日本莊子・卷之一に、「うかれ女に魂をとられ、辛き世に持ちにくい金銀を水のやうに遣ひ捨て、それを塵とも思はぬ、大どらともうんつくとも評に及ばぬ次第なり」。都の錦撰、風流源氏物語（元祿十六年刊）の序文に、「運盡」に「うんつく」と傍訓してある。

え

えいえい　空に紫の雲氣たなびき、斗牛の間にえいえいたり（嫗山姥）

〔英英〕雲のたなびく貌。詩經に、「英英白雲露ニ彼菅茅ニ」。

***えいかん**　山彦征伐の勅宣を願ひ奉り候所に、叡感誠に淺からず（用明天皇）　かねて叡聞に達せし府内親王か忠節（百合若）　直ちに叡覽あるべしとて（鎌九）　御退治の叡慮猶豫の由承り（用明天皇）

〔叡感〕叡は明また通の義、通明な智識と云ふことで、天子の御事について云ふ。叡感とは天子の御感じなされること。叡聞とは天子の聞召すこと。叡覽とは天子の御覽なされること。叡慮とは天子の思召。

***えいきよく**　拙き藝の郢曲を御遊覽の爲ぞとて（源義經）

〔郢曲〕俗曲及び催馬樂・朗詠・今樣歌の類をいふ。文選に、「蜀琴抽ニ白雪ニ、郢曲發ニ陽春ニ」とありて、李善註に、「客歌ニ郢中ニ、故曰ニ郢曲ニ也」。

えいじつ　隨分弓矢の稽古精出し申さうぞ、永日永日と暇乞して歸りけり（夕霧）　盃は永日永日、然らば春永末永月永日永、年の壽命も永々と（雪女）

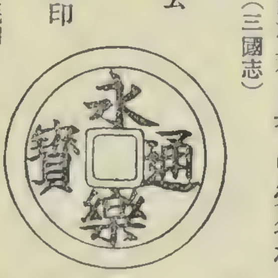
〔永日〕春永と同意語であつて、年の始に三四月頃の日の永き時分をさして云ひ、日永にゆつくりといふ意で、別れる時などの挨拶にいふ語。

***えいめい**　小節を規る者は榮名をなすことなく（三國志）

〔榮名〕榮譽名聞。「小節を規る者は云云」をも見よ。

えいらくせん　永樂錢の駕籠印（薩摩歌）

〔永樂錢〕萩城主、毛利大膳太夫吉廣の駕籠印。



えうえう　「いういう」（呦呦）を見よ。

えうえうじよ　「子の燕居せるとき云云」を見よ。

***えうがい**　金剛山を要害として住吉天王寺に打つて出で（女楠）　備嚴しき其景色鳥も通はぬ要害なり（凱陣八島）

〔要害〕類書纂要に、「地形險固、我に在りては要となり敵に於ては害と爲る」。

えうたう　三十ばかりの亂れ髮、盛り過ぎたる夭桃の、春を傷める姿にて（女護島）

〔夭桃〕夭は若いこと。婦人の年若く盛んなのを桃花に喩へて夭桃と云ふ。太平記、立后事付三位殿御局の條に、「夭桃の春を傷める粧云云」。

えうてう　花の地肌の窈窕と、目元に位備はりて（持統天皇）

〔窈窕〕女のたをやかな貌。詩經・周南關雎に、「窈窕淑女、君子好逑」とありて、集傳に、「窈窕、幽閒之意」。

***えうでう**　寒竹のえうでうを梢の風に音添へり（十二段）

横笛を云ふ。伴蒿蹊撰・閑田耕筆・卷四に、「笛をヨウデウと平家物語などに書きたり、笛の事とは知りても其由をさだかにせる人なし、體源抄は樂家の書なるに、笛の下に腰打といふ字を小書にしたるのみ、腰打とても其義辨へ難きを、おのれ思ひ得たり、是は横笛の字を吳音によめるにて、何の子細もなきこと歟、笛は入聲の字にて、テキに通ひてフと書くべきを、テウと誤るより辨へ難く成りしならん、又笛の字チヤクともよむことは、笙

小田原うゐらう大磯平塚藤澤の（丹波與作）

〔外郎〕元の順宗の朝禮部員外郎であつた陳延祐、元の滅んだので明に仕へるを潔しとせず、日本に歸化して博多に住んだのが我が應安元年である。延祐佛に歸依して臺山宗敬と云つた。宗敬の子の大正宗奇と云ふ者明に往いて透頂香の製法を得て歸る、禮部員外郎の名にちなんでこの藥を「うゐらう」とも云つた。その曾孫藤右衞門周定治・北條早雲の招に應じて、京都から小田原に移住した、これより外郎は小田原の名物となつた。外郎は硬い小粒の丸藥で苦味あり、香氣高く、效能も今の淸心丹や仁丹の類である。雍州府志（貞享三年刊）六、土產門上・藥品部に、「外郎透頂香。禮部員外郎陳宗敬別號。臺山、中華臺州人也、舊爲二大元之老臣一也、至正年中元朝爲二大明一所レ滅、宗敬以爲忠臣不レ事二二君一、遂投二化本朝一、家二筑前博多津一、于レ時本朝應安之始也、宗敬文材博識兼通二占相一、且傳二靈方一調二奇藥一、鹿苑相公聞二其名一、雖レ被レ招レ之不レ應レ命、創二小院於佛之妙樂禪利內一、號二明照一、後入二崇福寺無方和尙之室一受二衣鉢一、行年七十有餘而死、其末裔來二住洛下西洞院一、製二透頂香一而賣レ之、相州小田原透頂香此餘流而斯家之庶流也、大覺禪師來朝在二鎌倉一、傳二斯藥於小田原土人一云、今小田原人來賣二京師一」。「うゐらうつむ」とは卽ち透頂香を撮（つま）むことであつて、すき（透を好の意にとり）頂（いただ）く香（にほひ）の意に取つて、我が物思を先方に知らさうとする初心のわざである。　新竹齋（享保十二年刊）卷四に、「畔にしかくる小田原の、野夫が作の傀物、つんで悅ぶ透頂香、味わきて石地藏」とある。透頂香の味が苦（にが）いのと、透頂香を撮んで悅ぶ我が思を先方では平氣であるを石地藏にかけて云つたのである。　除分五人媳（江島其磧撰、享保二十年刊）四之卷に、「算盤抱へて算用に拔目なき强い親仁ながら、金銀流用し使うて來た平次、外郎（うゐらう）つんで女に物いふやうな未熟な三郎と見透して」。（序云、うゐらう餅といふがあるが、それとは別）。「丸藥つむ」をも參照。

***うんかく**　帝を始め卿相雲客（國性爺）　卿相雲客四十三人（平常盤）

〔雲客〕殿上人をいひ、四位五位及び六位の人の昇殿を許された者の稱。故實拾要に、殿上人を雲にたとへて雲客といふよし見えてゐる。後世堂上といふ、堂上とはもと殿上に供奉する官の總稱であつたが、後には殿上人をのみいふことになつた。殿上人の數は寬平遺誡に、三十人と定められたが、後には增して七八十人乃至百人に及び、院・女院にも殿上人がある。

うんきろん　脈論・運氣論（冷泉節）

〔運氣論〕漢方の醫書、三卷あつて、宋の朝散郞大醫學司業劉溫舒の撰。

うんくわん　運關三百六十輪、天運三千六百周、賴朝卿の武運に和し（會稽山）

〔運關〕運は日月の運行をいひ、關は涉ること。ここの文意は地球の公轉をいうたもので、三百六十輪は周期の旋轉數で、三百六十日に當る。三百六十日を一年とすることは、淮南子・天文訓にも、「天有二十二月一以制二三百六十日一」と見えてゐる。天運三千六百周とは、源賴朝が天運の開けるに至る間の十年をいひ、治承四年高倉の宮の令旨を奉じて伊豆に兵を擧げてより、建久元年入朝して右近衞大將を拜するに至つたのをいふのであらう。

うんげん　阿克將が扮裝はうんげんの赤裝束（國性爺後日）

〔繧繝〕繧繝錦。赤地の錦に色色の絹絲を以て、花形菱形などの模樣を織出せるもの。

***うんざい**　やあかしましいうんざいめら（日本武尊）　やあやかましいうんざいども、音にも聞くらん（女護島）

「うざい」（有財）に撥音「ん」の增加した語で、「いんま」（今）・「たんだ」（只）・「みんな」（皆）・「わんざん」（和讒）など云ふ類である。有財は有財餓鬼の略であつて、以て人を罵つて云ふ語。餓鬼の種類に、無財餓鬼（食無きもの）・小財餓鬼（濃血等を食ふもの）・多財餓鬼（人の遺落の食などを食ふもの）とあつて、小財餓鬼・多財餓鬼を有財餓鬼と云ふ。巢林子作・非筒業平河內通に、「無用の忠節仁義だてに咽（のど）をほす汝等、冥途ではうざいがき」。世間子息氣質（江島其磧撰、正德五年刊）卷三、簡略は世帶藥聞き過ぎた始末形氣の條に、「親父死際に腐つた鯛さへ目に見ること叶はぬ、若し鬼界が島へ流されたともこれよりはまそつと榮耀に暮すべきに、因果な子を持ち此世からの有財餓鬼」。

うんじやう　先年奧州國司の時、金山貢物の運上にて公家一番の金持（隅田川）

〔運上〕運送上納の略。營業交易などに課して其物の一部または若干の金を稅として上納さするものをいひ、卽ち武家時代に率を定めて商工等の營業に課した稅金。

***うんすゐ**　只今名波道愚と申す雲水の身となり（薩摩歌）

〔雲水〕行く雲・流れる水の如く所定めずさまよふ義で、行脚・頭陀などと意同じ。

うんすん　大悲の利劍を親に打つて、うんすんを二目（ふため）飛びをれば（大織冠）　ほるなん五郎、うんすん六郎（國性爺）

「うんすんかるた」と云ふがあるので、それを誠しやかにいひ、また國名のやうにもいうたのである。うんすん骨牌（かるた）はもと阿蘭人が玩んだもので、長崎人これに倣つて遊戲した。一種類の紋樣十二枚あるものが四種あつて總計四十八枚ある。また七十五枚のもある。明和安永頃最も流行し、寬政三年これを玩ぶを嚴禁された。雍州府志（黑川道祐撰、貞享三年刊）七、土產門下に、「賀留多。元阿蘭陀人玩レ之、長崎港土人倣レ之爲レ戲、凡賀留多有二四種紋一、一種各十二枚、通計四十八枚也、一種紋謂二伊須一、蠻國稱レ劍曰二伊須波多一、此紋形似レ劍、自二一數一至レ九、第十畫二法師之形一、是表二僧形一者也、第十一畫二騎レ馬人一、是表レ士者也、第十二畫二踞レ床之人一、是表二庶人一者也、一種稱二波宇一、蠻國稱二青色一曰二波宇一、此紋自二一數一至二九數一、第十第十一第十二同レ前、一種紋謂二古津不一、蠻國酒盃謂二古津不一、是表二酒盃一者也、一種紋謂二於宇留一、蠻國稱レ玉謂二於宇留一、是表レ玉者也、……或又謂二加字一、又謂二比伊幾一、或又謂二宇年須年加留多一」。（序云、伊須は伊須波多（Espada）の略で、劍の義なることは雍州府志に云へる通りであるが、「蠻國稱二青色一曰二波宇一」とあるは誤であつて、波宇はパウ（Pau）の訛で、棍棒の義である。棍棒を青色にしてある繪札であるから青札とも言つたのである。また於宇留も（Oiro）で、金の義である）。

博奕仕方風聞書に次の如く見えてゐる。

めくり博奕仕方

かるた四十八枚（但一より十二迄有之、銘々四枚づつ四十八枚に相成申候。內一より十迄は通例之數に唱へ、十一を馬と唱へ、十二をきりと唱へ申候）

壹の四枚の內　壹枚をあざと唱へ、金泥にて彩色、此札數五十に相成、
四枚之內上の札に御座候　―　內壹枚はぴんと唱へ、數十に相成申候　―
內二枚すべたと唱へ、數に成不レ申候

貳の四枚の內　太鼓二と唱へ、太鼓之形を畫き、金泥等にて彩色、數五十に相成申候
―　內一枚は海老貳と唱へ、えびを赤く畫き、數十に相成申候

ろ、今世京都大阪にて專ら是を作る」。

***えな** りんぼう變じてえなとなり(蟬丸)

〔胞衣〕胎兒を包める膜、及びその胎盤。

***えならず** 奥にはえならぬ絲竹の調、謠にあらず歌にもあらず(源義經)

よう言はれぬ義、一通りならずおもしろい。徒然草・第四十四段に、「笛をえならず吹きすさびたる」。

***えにし** 三世の新造出世の本懷、衆生えにしのよすがなり(扇八景)

「えに」は「えぬ」(緣)の轉、「し」は助詞。緣。ゆかり。後撰集・戀歌五の部にも、「松山の末越す波のえにしあらば……」など見えてゐる。

えにしなきりりんな 徃なうよ戻らうよと言うては妻戸に佇みし、えにしなきりりんな(女楠)

「曉の明星が西へちろり云々」を見よ。

***えのころ** えのころえのころ抱寄せて、手飼に愛らしや(今宮) むかひ殿えのころは未だ目か開かぬ(兼好)

「いぬこ」(犬兒)が「えのこ」と轉訛して「ろ」の增加した語。いぬころ。犬兒。節用集(饅頭屋本)に、「狗」。

***えびぢやう** 貫木蝦錠しつと下し(小栗判官) 蝦錠つかんでえいやつとこじ放し(小栗判官)

〔蝦錠〕鐵棒の海老形に曲つた錠で、門の扉・貫木におろす。

***えびでのにんじん** 海老手の人參五箱で三十斤(博多)

〔海老手人參〕韃靼國に産する人參で、飴色を帶び尾端曲つて海老の形に似たればいふ。人參とはこの草の根の形恰も人の葠る形してゐるよりの名であつて、高貴の藥料である。和漢三才圖會・草類・人參の條に、「蝦手人參ハ白頭山(朝鮮)之産出ニ於韃靼一、蓋韃靼土地水不レ清毒多、故其富豪者常侵二人參於二井中一用二其水一、更採ニ出人參一販レ之、故帶ニ飴色一而尾端曲似ニ蝦形一、所謂湯人參之類乎」。

えびらのうめ (最明寺殿)

〔箙の梅〕謠曲・箙に、「抑もこの生田の森は平家十萬騎の追手なりしに、源氏の方に梶原平三景時同じき源太景季、色ことなる梅花ありしを一枝折つて箙にさす、この花すなはち笠印となつて、氣色あらはに著く功名人に勝れしかば、景季かへつて此花を禮し、すなはち八幡の神木と敬せしより以來、名將の古跡の花なればとて、箙の梅とは申すなり」。

えぼしご

「ゑぼしご」を見よ。

***えもん** そがの入鹿詮方盡き、冠も衣紋も打亂れ(大織冠) 人のしよていは衣紋が大事(井筒) 衣紋繕ひ鬢かきなで(女楠) 荒男俄にたしなむ衣紋つき、鬼が花見る風情なり(博多) 衣紋引繕ふ(雪女)

〔衣紋〕衣服の襲、着用の作法などをいひ、轉じて衣服のことにいふ。

「衣紋付」とは衣服の着ぶりの意。

「衣紋引繕ふ」とは衣服の着樣を正しうに直す意。雪女五枚羽子板のこゝの文に斯波左衛門が、「衣紋引繕ひ御太刀持つて、靜々と廣間に立つこ」と云ひ、藤内などの勇ある雜色を引率したこと、及び斯波左衛門が赤沼を罵つて、「鯨波の聲矢叫びに怯れて馬より落ちて目をまはさんより」といへる、總て平治物語なる光頼卿參内及び待賢門軍の信頼の記事から得たものである。

えもんながし 衣紋ながしの鞠の莽、花の木の間に頻りに上下し(持統天皇) 駒の蹴上げの鞠子川、衣紋流のあゝ曲もなや(會稽山) 御簾に唐猫・烏帽子に鞠、衣紋流の柏木や(吉岡染)

〔衣紋流〕蹴つた鞠の衣紋を傳ひて落すを云ひ、蹴鞠の戯の曲名。

***えら** やいやい勘十郎、廣い世界を己が口から世間手代のならひとは、えらが過ぎて聞きにくい(歌念佛) ちよこさいなげさいろく、えら骨ひつかいでくれべい(女殺) いんげん吐かば草葉の蔭よりえら骨踏裂かん(虎が磨)

「あぎと」(顎)の「顎が過ぎる」とは頤が過ぎるとも云ひ、僭言が過ぎるといふ意。「顎骨」とは頤骨即ち顎骨。

えらつき 刀を拂ひ打落し急所急所をえらつき、手に立つ者もなかりしが(蛙合戰)

〔鰓突〕魚の鰓を突刺すやうに突くこと。

えりおとし 五尺に足らぬ襟落し、狹き浮世は何かせん(薩摩歌)

〔襟落〕落しは裁ち落し、即ち仕立の意。襟は普通四尺八寸前後に仕立てるのであるから、「五尺に足らぬ襟落し」といふたのである。

えりくりえんじよ 手綱搔繰りくるくるくる、えりくりえんじよの馬場の土手、乘上げ乘下げ(小栗判官)

「いりくれえんだう」(入回筵道)が訛つて、「えりくりえん所」に變つたのであらう。入くれてだくぼくした所。徒然草・第百三十五段に、「いりくれんだう」とあるもこのことであらう。靜岡地方にて、子供等が打廻る遊戯に、「いにくりえんじよう」と云ふ名あるも、この語の轉訛である。(棠大門屋舖(寛永二年刊)三之巻に、「かゝは與茂三郎一人を連れ、影繰るん所の松の一村を過ぎて」と見え、和訓栞に、「ゑぐる。鐫ゑりくる轉の義也剜をよむべし、俗語にゑりくり違所などいふは、ゑりくるが如く九折の盤廻したるをいふ也」と見えてゐる。或は「えりくり」は「ゑりくり」の假名で鐫剜の義か)。

***える** 苧繩七筋えり合せ(吉野忠信)

「よる」(縒)の訛であつて、「えのき」(榎)を「よのぎ」・「えな」(胞衣)を「よな」といふ類である。

***えんいん** 三因佛性の中には緣因殊に量りなき、佛の緣やいつとなく(用明天皇)

〔緣因〕「三因佛性」を見よ。

***えんぎ** 長者經とて寺に傳はる緣起の目錄開かせたい(博多)

〔緣起〕因緣起生の義、轉じて神社佛寺の由來を記してある文書。また兆の意にいふ。

えんきよ

〔燕居〕「子の燕居せるとき云々」を見よ。

えんげつ 偃月の鐺鞘外し(大織冠) 偃月の戟會釋もなく振廻し(國性爺)

〔偃月〕偃した月の意で、即ち半月にならぬ細い月をいひ、その形した身の鐺を偃月の鐺といふ。偃月の戟・偃月の刀など推して知れる。

えんす ああ慮外ながら太夫でえんすと申しける(加增曾我)

「あります」が「ありんす」「あんす」「えんす」などに訛略された語。また「ありやんす」「やんす」ともいふ。

笛琴箜篌と連續したる語にて知らる、同じ字を昔よりつならはしにて唱へ得ずるなり」。

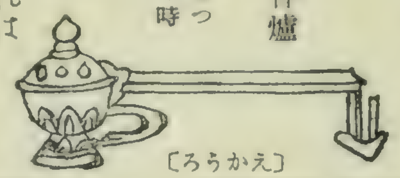
*えうやくじん　一度にぐわらりと投倒し、さあらぬ體にて立つたりしは妖厄神も斯くやらん（吉野忠信）

〔妖厄神〕惡魔。按ずるに、「やうらく」（瓔珞）を「えうらく」、「やうごふ」（永劫）を「えうごふ」など書いてあるので、「えうやくじん」も「やうやくじん」であらう。謠曲・熊坂に、「皆我先にと松明を、投込み投込み亂れ入る、勢は見え、やうやく神も、面を向くべきやうぞなき」と、「やうやくじん」は陽厄神で、惡神のことであらう。されどな疑を存して、「えうやくじん」の假名に從つた。

えうらく　「やうらく」を見よ。

えかうろ　緋の袂に柄香爐を燻らせ（聖德太子）

〔柄香爐〕柄の附いた香爐であつて、金屬で作り、道師勤式の時に手に持つ具。



〔ろうかえ〕

*えぐちのきみ　江口の君が、假の宿に心留むなと申したは、それは色あるやさ法師（最明寺殿）　或人の申せしは、昔の西行法師こそ、誠の菩薩を見んと思はば江口の君を見よとある（賀古教信）

〔江口君〕攝津國西成郡江口の里の遊女。謠曲・江口に、西行法師と江口の君との幽靈物語を記して、西行法師が江口の君に宿を借らうとしたに貸せなかつたので、乃ち歌を詠じて、「世の中を厭ふまでこそかたからめ、假の宿りを惜む君かな」、遊女返歌して、「世を厭ふ人とし聞けば假の宿に、心留むなと思ふばかりぞ」といひ、これでお暇申すとて、忽ち江口の君の姿は普賢菩薩と現じ、船は白象となつて、光とともに白雲に打乘つて、西の空に行つたことが書いてある。　地名部「えぐち」をも見よ。

えぐちのしろめ　傾城とて落しめな、江口の白女・三國のまちといひし女郎は延喜の帝に請出され、歌は古今に入りしぞや（加增曾我）

〔江口白女〕江口は攝津國西成郡江口の里をいふ。白女は、大和物語に源告の女で攝津江口の遊女なる由見えてゐる。古今和歌集・離別部に、「いのちだに心にかなふものならば、何か別れの悲しからまし」の歌は即ち白女の詠である。「延喜の帝に請出され」とあるは、この遊女の歌が延喜の帝の勅撰集（古今集）に入つてゐるからで、即ち歌が請出されたわけである。

*えこ　例の梶原が依怙の沙汰、年月の悲しみ思ひやる（蛙合戰）　我が夫の國性爺殿たゞ一人助けては依怙となり（國性爺後日）

〔依怙〕かたびいき。法華經・譬喩品に、「無レ所ニ依怙ニ」。

えしやぢやうり　「ゑしやぢやうり」を見よ。

*えせ　辨慶といふえせ法師（吉野忠信）　素盞嗚尊といふえせ者の討手を蒙り（振袖始）　傍若無人の繼父えせわらひ（女腹切）

〔似非〕似て非なること。「えせ」は古言・荒賊などの「えし」の轉といひ、或は僻（癖）の轉だともいふ。「えせ法師」とは佛道修業者に似ぬ惡僧。「えせ者」とは曲者。「えせわらひ」とは冷笑。

*えだ　無念なおのれ踏んだか、えだ骨もいでてくれうと立上れば（丹波與作）　日本國中に八百萬の枝社（賀古教信）　太刀風松風吹き治りて、枝を鳴さぬ君子國（小栗判官）　色を見て枝を折り、脉を見て五臟を知る、歌人は居ながら名所を知る（天神記）

〔枝〕本よりわかれ出たもの。

「枝骨」とは肢骨即ち手足の骨。

「枝社」とは支社のこと。

「枝を鳴さぬ」とは、靜穩なるをいひ、泰平の御代を云ふ。謠曲・高砂に、「四海波靜かに、國も治る時つ風、枝を鳴さぬ御代なれや」。王充論衡に、「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條」。

「枝を折る」とは、肢を折ること即ち按摩するを云ふ。孟子・梁惠王上篇に、「爲ニ長者ニ折レ枝」とありて、四書辨疑に、「枝與レ肢通」と見え、趙注に、「折レ枝。案摩折ニ手節ニ解ニ罷枝ニ也」。

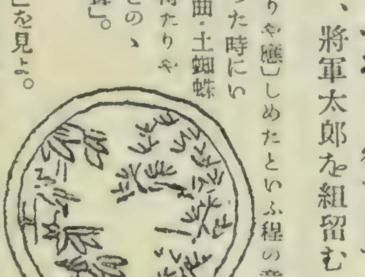
えだうぐ　銀のつく打つたる鐵の棒提げ、これは源氏の大將鎭西八郎爲朝が得道具（孕常盤）

〔得道具〕得意の武器。俚言集覽に「得道具＝得物とも云」。

*えたりやおう　得たりやおうと綱・貞光、將軍太郎を組留むれば（關八州）

〔得たりや應〕しめたといふ程の意であつて、勝誇つた時にいふ。謠曲・土蜘蛛に、「得たりやおうとのゝしる聲」。

えづ　「ゑづ」を見よ。



〔柄附鏡〕

*えつけのかがみ　柄附の鏡差出し、星影映してひらめかし（二枚繪）

〔柄附鏡〕昔の鏡は金屬製にて柄が附いてゐる。

えつさい　鷹はつみ・えつさい・さしば・せう・隼・このり（百日曾我）

〔雀鷂〕「つみ」を見よ。

えつらしよくきん　「ゑつらしよくきん」を見よ。

*えど　（淨瑠璃文中の註記）

〔江戸〕淨瑠璃節の一派なる江戸節をいひ、江戸半太夫の創作である。半太夫は元祖薩摩淨雲の末流で、聲曲類纂卷之三、江戸諸流淨瑠璃語の條に、「江戸半太夫＝幼名半之丞といふ、後江戸半太夫と改む、始は說經祭文の上手なりしを、肥前太夫がすゝむるにまかせ、淨瑠璃にかへて、則肥前太夫に學び、一家をなせり、甚左衞門町に住して境町に操芝居興行の後正德の頃薙髮して坂本梁雲といふ、貞享元祿の頃より世上にもてはやされ、今に江戸節又半太夫節とて廢る事なし、淨雲以後江戸にての名人なりしとかや」。

えどさくら　武藏に神田江戸櫻（賀古教信）

〔江戸櫻〕俳諧歲時記栞草（馬琴編、青藍補）に、「江戸櫻。遲櫻なり、葉少し赤し、花大輪にして莖長く下に垂る、この種關東に多き故に名とすとも云ふ」。

えどさんがい　「さんがい」を見よ。

えどばん　その折しも江戸番（女腹切）

〔江戸番〕諸侯の參勤交代によりて、諸侯及び家來が江戸詰の番にあたつて詰めること。

えどもとゆひ　江戸元結に繻子鬢（女腹切）

〔江戸元結〕嬉遊笑覽・一下に、「好色盛衰記に、烏丸に江戸もとゆひや有と云へり。國花萬葉記・七・武藏國名物類の內、髻結根本江戸に初

の紋章であつて、蛇籠の杭ばかり打つた形である、その初めは蛇籠の目に杭を打つた形のものであつたといふ。但、夜討曾我（寛永古



〔しがなすうお〕

活字版?）には、「おほすながしは安田の三郎とあつて、この紋繪が載つてゐる。巣林子のこの文は夜討曾我に據つたのである。

*おうそれながら　おうそれながら大將軍の仰せとも覺えぬものかな（百日曾我）
「おそれながら」（乍レ恐）の延びた語で、謠曲で多く言はれる語である。憚りながら。

負うた門　いろは茶屋から坂町かけて負うた門は七八軒、銀高僅か一貫目餘り（生玉）
〔負うた門〕已が負財をしてゐる家。

*おうちかた　これはまあまあ結構なるお内かた（女腹切）
〔御内方〕御住居。

*おうつ・まくつつ　四方八面前栽築山、おうつまくつつ隱れつ見えつ業通自在（閉八州）
「おうつまくりつつ」（追うつ捲りつつ）の略。

*おうへ　走り出でんと思へども、おうへには亭主夫婦、上り口には料理人、庭では下女がやくたいの・目が繋ければさもならず（曾根崎）扇屋了空夫婦涙片手に蒲團手づからおうへに敷き（夕霧）お前はおうへに結構な布團敷いて・腰元衆づらりと並べて御見物なされました（大經師）
〔御上〕おうへの間のことで、主婦の居間をいふ。「おうへ」とは主婦をいひ、「おへ」ともいふ。（「おへさま」を見よ）。俚言集覽に、「うへ。いにじへは奥方の事をうへといへり」。可笑記（寛永十九年刊）五に、「若う樣のおうへごのみにお姫樣のおもてごのみ」。

*おかがみ　女子ども供のお神酒お鏡に向ふ心の眞直なる（會稽山）名に負ふ銘の物、今日はお鏡開にて奥の座敷に飾られたり（雪女）
〔御鏡〕鏡餅。日次紀事（黑川道祐撰）十二月の條に、「此月良賤毎レ家舂レ餅、作二圓鏡形一、或作二菱葩形一、供二神佛一又贈二宗親一、是俗謂レ居レ鏡、其圓而大者謂レ鏡、以二其形之相似一稱レ之」。「お鏡開」とは、昔時武家にて、男子は具足に、女子は鏡臺に供へし鏡餅を正月十一日に取下げ、手または槌で割つて食うた儀式。日次紀事・正月十一日の條に、「武家具足鏡餅開。其所レ供二具足一之餅、特以レ刀忌レ截レ之、故以二手或槌一破レ之、缺レ之而賞レ之、是謂二鏡開一云々」。

*おかさま　忠三殿におかか樣はなかつたが、こなたはどれでばしござろぞ（冥途飛脚）　皆おかさまのさしこみと、思ふもじたいこちのむり（重井筒）
「おかかさま」（御嚊樣）の略。中流以下で我が妻を呼ぶに「かか」（嚊）といひ、人の妻を呼ぶに「おかさま」といふ。おかみさま。「かか」をも見よ。

*おかた　庄屋問屋口をそろへ、おかたお聞きやれ、今日の寄合はこの小萬に付いて代官所のお差紙（丹波與作）　浪人めきし旅人、なんとおかた茶はまだあるまい、素湯一つ所望と、床几に腰を掛ければ（孕常盤）
〔御方〕農家にて人の妻を呼ぶ稱。女重寶記（元祿十五年刊）卷之一、女しなさだめの條に、「大名のを奥樣といふ、百姓のを御方とも又鰯糠ともいふ」。（御方樣とは別。「方樣」を見よ）。

*おかめ　道具屋おかめ與兵衛とは、思へば近き町つづき（氷朔日）
〔阿龜〕ひぢりめん卯月艶及びあとおひ心中卯月の潤色の中に見える人物である。假作人名部「かめ」を見よ。

おかもじさま　おかもじさまも悋もじに、先お暇といふ籬（松風）
〔御嚊文字樣〕おかかさま。おかみさま。おかさま。「おかさま」の女詞即ち文字詞である。もじ詞は足利時代の末期、朝廷式微にして供御のもの備はらなかつた爲、女官等その名を呼ぶを忌みて、何もじといふた隱語から起つたと云ふ。

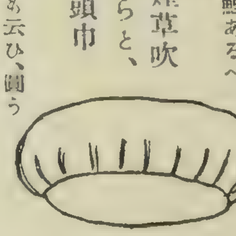
おがんます
「をがんます」を見よ。

*おき　手を出し手を引くから猫の、おきを弄ぶ危さや（今宮）
〔熾〕紅熱せる炭火。和名抄に、「熾。於岐火、猛火也、又盛也」。この語、「お」は接頭語で、「き」に火の義があるので、起火の略ではない。

おきがかり　沖がかりの大船に通路を求め（博多）
〔沖掛〕沖に碇泊してゐること。

おきごひ　饗の膳・置鳥・置鯉・番瓶子の番蝶（國性爺後日）
〔置鯉〕祝宴の席に据置く鯉。松尾筆記・卷百〇五に、「婚禮の時のかざり物に、二重手掛・置鳥・置鯉あるべし」。

*おきづきん　煙草吹きまぜちらちらと、松にも置の置頭巾（室町千疊敷）
〔置頭巾〕丸頭巾とも云ひ、圓う仕立てた頭巾。



〔んきづきお〕

おきつづみ　人に心をおき鼓、横笛が幼名をすぐに付けたる竹の名の（酒呑童子）
〔置鼓〕能樂の囃で一種の鼓の手であつて、持つてゐる小鼓を置くことも、また置かぬこともある、蓋し置は措の義で、止める意であらう。巣林子のここの文は、人に心を置くを能樂の置鼓といふ語にいひかけたまでである。

おきどり　饗の膳・置鳥 置鯉 番瓶子の番蝶（國性爺後日）
〔置鳥〕祝宴の席に据置く鳥。「おきごひ」を見よ。

おきなかつら　翁鬘の白髮に、白髮の總髮添へてあり（吉野忠信）
〔翁鬘〕芝居などにて、翁に扮裝する時に被る鬘。

*おきなぐさ　みさをかしこき冬の日も、雪を頂く翁草（一心五戒魂）　菊には霜のおきな草（佐佐木）
〔翁草〕松また菊の異稱。俳諧歲時記栞草（馬琴編、青藍補）秋之部に、「翁草。菊をも松をもいふ、住吉の里に五位の松とて年ふりたる松あり、かの松の神やありけん、後には化して翁となつて住みけり、常に心をすまして琴を

えんせき　山鷄な鳳凰とし燕石な珠と見て(雪女)

〔燕石〕玉に似て非なる石。韓非子に、「宋之愚人、得二燕石于梧臺之側一、藏レ之以爲二大寶一、周客聞而觀焉、笑曰此燕石也、與二瓦甓一同一」

えんでう

「風緣野に收まつて煙條直し云々」を見よ。

***えんにち**　今日は祝ひ月二十八日御緣日、不動の刄に喉笛を突き通され(氷朔日)　大聖不動の尊像、五月なり緣日なりと(會稽山)

〔緣日〕有緣日の略で、或佛菩薩が娑婆に緣ある日をいひ、又衆生がその佛菩薩に緣を結ぶ日をいふ。不動尊の緣日は毎月三日、八日、十六日、二十八日、及び酉の日であつて、巣林子のこゝの文は二十八日をいうたのである

***えんのぎやうじや**　役の行者ともいはるゝ佛が、若輩らしう何のわきがかりなされう(女殺)

〔役行者〕役小角をいひ、行者は修行者のこと、大和國葛城上郡茅原村の人である、佛法に歸依し咒術を善くす、年三十二で家を捨て葛城山に入籠し、松果を食ひ藤葛を着、鬼神を驅使し、命を用ひぬ者をば咒して之を縛した、文武天皇之を聞かれて、妖術をもつて衆を惑はすものとされ、詔して小角を捕へしめられた、小角空を騰つて亡げ去る、吏捕へることできずしてその母を捕ふ、小角乃ち出でて縛に就く、よつて伊豆に流されたが赦に遇らて還り、後唐に行つたといふ。

えんばい　菅丞相は古今の學者、朝廷鹽梅の臣下なり(天神記)

〔鹽梅〕政事を料り理めること。尙書・說命に、「若作二和羹一、爾惟鹽梅」とありて、蔡傳に、「羹非二鹽梅一不レ和、人君雖レ有二美質一、必得二賢人輔導一、乃能成レ德、作レ羹者、鹽過則鹹、梅過則酸、鹽梅得レ中、然後成レ羹、臣之於レ君、當下以レ柔濟上レ剛、可濟レ否、左右規正、以成二其德一」。

***えんぶ**　思ひぞ出づる檀の浦のその船戰、今も亦閻浮にかへる生死の、海山一同に震動し(津戸三郞)

〔閻浮〕梵語・閻浮提(Jambudvipa)の略、須彌山中の娑婆世界に屬する所の稱、以て娑婆卽ち現世の意にいふ。「けふの修羅の云々」をも見よ。

***えんぶだごん**　閻浮檀金の御佛(賀古敎信)

〔閻浮檀金〕「えんぶだんごん」とも云ふ。閻浮は梵語・閻浮樹(Jambu druma)を云ひ、檀は江の義。閻浮樹下を流れる江にある砂金をいふ。節用集(慶長二年刊)に、「閻浮檀金。須彌之頂有二閻浮樹一、露落成二此金一、故云尒」。

えんりゑど　偏に厭離穢土の安心を勸め(大原問答)

〔厭離穢土〕穢土とは穢汚の世界卽ち現世をいひ、極樂淨土に對する語。現世を厭うて離れること。

お

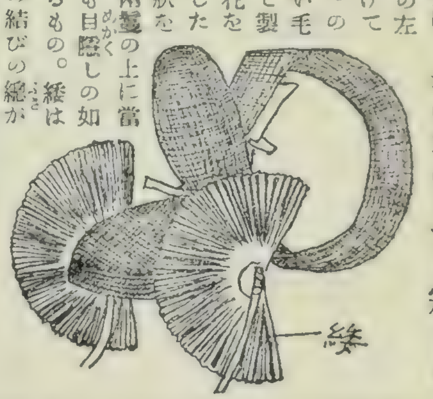
***おあし**　おおしはあるかと問ひければ、金銀はちと用意あり、おあしとては持たねども(松風)

〔御脚〕俗に錢をいふ。「あし」を見よ。ここの文、「おあしとては持たねども」といへる、いかにも上流の女としてふさはしい。

***おいいれ**　今の間に黑緣の乘物に乘せるぞ、老入の榮華まで此頃思案しめて置いた(鑓權)

〔老入〕老後。

***おいかけ**　おいかけしたる冠(松風)



〔緌〕冠の左右に附けてあるもので、剛い毛又は絲で製し、菊花を半切にしたやうな狀をなし、兩鬢の上に當てて恰も目隱しの如くなれるもの。緌はもと纓の結びの緒が派手に變化したものである。

おいがしらのかぶと　信玄床几を去つて老頭の兜かなぐれば(川中島)

〔老頭の兜〕兜の鉢の上に白毛を附けた兜。

***老の繰言**(浦島)

老人はひつこく物を繰返して言ふより云ふ。

***老の寢覺**(百合若)

老人は寢ても早く目の覺めるものなればいふ

おいへりう　兄樣はお家流で柔かな手ぢや(壬生大念佛)

〔御家流〕伏見天皇の皇子靑蓮院尊圓法親王の書體の一流をいふ。文藝類纂に、「伏見天皇第六皇子靑蓮院尊圓法親王上代の書體を改めて、新に豐肌流麗の風を創す、然れども筆力柔脆に流れず上代の風あり、俗に御家流と稱し、古筆家・尊圓流と稱す」。

***おいまつ**　今に傳へて老松の、變らぬ色を賴まん(生玉)

〔老松〕筑前の安樂寺(今の太宰府天神宮の地)にある名木老松(謠曲・老松を見よ)に、大阪西天滿老松町をきかせたのである。老松は追松ともいひ、天神本地(慶安元年刊)に、梅は飛び櫻は枯るる世の中に何とて松のつれなかるらんの歌を菅公が詠まれたので、松も公の跡を追ひ來つたによつて、おひ松の神と申すと見えてゐる(天神本地は北野緣起に據つた作り物語である)。榻鴫曉筆卷十九にも、菅丞相が愛された梅櫻松があつて、配流の後梅は飛んで配所の庭に生え、櫻は枯れければ、菅公乃ち梅は飛び櫻は枯るる世の中に松ばかりこそつれなかりけれと詠じ給はれたので、「さてこそ都の松は御跡を追うて西府には生えたりけれ、追松と申し侍るこれなり」と見えてゐる。巣林子作・心中天網島に「君を慕ひて太宰府へたつた一飛び梅田橋、跡おひ松の緑橋、別れを歎き悲しみて跡にこがるる櫻橋」とあるも、梅は飛びの歌に據つたのである。「あとおいまつ」をも見よ。生玉心中のここの文は天滿天神宮の場をうつすのであるから、謠がかりて莊重に幕を開くのであらう。

***おうげ**　日像上人と申せしは元より佛の應化故、衆生濟度のその爲に(大覺)

〔應化〕應現變化の義。佛菩薩が衆生濟度の爲に其身を變現すること。

おうこ

「あふこ」を見よ。

***おうご**　あとにおうごの神風や、千波萬波を押切つて(國性爺)

〔擁護〕扶けまもる義、神佛の守護。金光明經・一に、「常觀擁二護此閻浮提一」。謠曲・熊野に、「南を遙にながむれば、大悲擁護の薄霞、熊野權現のうつります」。この文は、あとに逢ふを擁護にいひかけ、神佛の守護によつて再會を得るを頷みとし、己等を守護されて神の吹かせ給ふ順風に乘じての意。(序に云、「おうご」を應護とし、感應加護の義としても意通じる)。

おうすながし　おうすながしは保田の三郞(五人兄弟)

〔追洲流〕大洲流と書くは誤であらう。保田氏

話。行事鈔・下三に、「美二其功徳一爲レ讃、讃レ文不レ足、又稱二揚之一爲レ歎」。

***おしいり** さながら袖乞押入もなりがたく(松風)

〔押入〕他人の家に押入つて財物を奪ふ盜賊。

***おしかけ** 黄金の轡珊瑚の鞍おしかけ三懸腹帶ゆり締め(釋迦)

〔押掛〕面懸のことで、馬の頭から轡にかけて結んだ飾紐。貞丈雜記・馬具之部に、「おしかけといふはおもがいの事なり、道照愚草に云く、おしかけともおもがいとも云ふなり云々」。武家名目抄・輿馬部に、「岡本記云、おしかけと申すはわろし、おもかい(面懸)と申すべし」。「さんがい」をも見よ。

おしごと この伯母がおし事したるその告め(女腹切)

「おす」を見よ。

おしだいこ 戰場の進退御陣の押太鼓、萬里を響かす名人故(雪女)

〔押太鼓〕軍勢が押寄せる合圖に打鳴す太鼓。信長記に、「軍勢押太鼓を打つて懸り來れば」。

おしつけ 辨慶が押付をしつかと押へ(孕常盤) 後に乘りたる源太景季が押付を胸板へぐつと射抜いて(最明寺殿) 矢止り金物押付板、發傳高紐上卷付(女楠)



〔おしつけ〕

〔押付〕鎧の背面の肩にあたる板で、普通には染革で包んである。

***おしてるや** おしてるや浪華の春(女殺)

「おそひたてるや」(襲立)の約で、卽ち波の襲立つことで、難波につゞけて其枕詞である。

***おしはだぬぐ** 父樣が人を討つて、其刀でまづこの樣に押肌脫ぎ、逆手に取つて左の脇ぐつと立てて(女腹切) 押肌脫いで太刀を逆手に取直す(門出八島)

〔押肌脫〕肌を押脫ぐ。太平記・大塔宮熊野落の條に、「自害せんと思召して、既に押肌脫がせ給ひたりけるが」。

おじふにどう

「じふにどう」を見よ。

お島の心中 去歲のお島の心中の、その井筒屋に我が今、重井筒と篠塚に、いはれ岩井の半四郎(重井筒)

お島はもと初音と名乘つて京の島原に勤めた時、京の室町御池の邊の吳服商某の次男新八と馴染み、兩人俱に斷落して大宮まで逃げたのを、追手の者に發見されて捕はれ、新八は錢千貫の科料を取られ、初音は浪華の太左衞門橋井筒屋の勤女に賣られてお島と名乘つた。その後新八江戶から下つてこの井筒屋に登りお島と邂逅し、以前の事を思ひ出して互に懷しがり、新八は井筒屋に足繁く通うたが、兩人共に金に窮し、まゝならぬ身を嘆き、遂に談合して正月十六日生玉で情死した。永井正流撰、本朝濱千鳥(寶永四年序)卷之四、都の初音難波の心中、(附たり)死に生玉嚼の條に、「お島は胸をばさすりながら、始めての御客樣に寂しがらすも氣の毒なりと、新八を一間にいざなひ身の有樣を語りければ、新八も我身をあかし、これより深く通初めしが、物日物日のそめ代かさなり、井筒の內の首尾あしければ、お島は廣き大海知らず、男もすゐとの根がすゐならねば、都か難波の住居望めど、かなはぬうき世を恨みかこち、いざ永き末語るべしと、其年正月十六日、二人生玉はちすの臺に救ひ給へと西をば拜し、いさぎよき心中鑑、雲井の外まで物語となりにき」。(序に云、「其年正月十六日」では何年のことかわからないが、この書の序文に寶永四載丁亥初春吉祥日」とあるから、この書の作られつゝあつた寶永三年のことであらう)。

おしもづき 親介右衞門は六十餘、頭に積るお霜月、講中お茶所の冥加錢殘らず此處に持集り(二枚繪)

〔御霜月〕眞宗にて十一月二十二日より二十八日まで報恩講である、此間をお霜月といふ。高橋信雅(其諺)撰・滑稽雜談(正德三年成)卷二十一、十一月部上に、「報恩講。二十二日より二十八日までお霜月といふ」。こゝの文は頭の霜(卽ち白髮)にいひかけたのである。

おしやうじ

「しやうじ」を見よ。

おじやる

「おぢやる」を見よ。

おじやれ

「おぢやれ」を見よ。

***おしやんす** おさん樣いやらしい事おしやんすな(大經師) 眞にこの世の佛ぢやといひければ、あのおしやんす事わいの(薩摩歌)

「おほせ(仰)られます」が「おつしやいます」「おしやます」と轉訛し、更に「おしやんす」となつた語。(「をしやんな」はこれと別、その條を見よ)。

***おしよぼからげ** 大福帳かたげて來るはみやぢやないかといふ所へ、おしよぼからげの忙しげに、皆さんこれにござります(反魂香) 房若は悄悄とおしよぼからげに破笠(艶狩)

「おしをる褄」(押折る褄)を「おしよる褄」「おしよぼ褄」と訛つた語。衣服の背縫の裾より上の所を摘み褄げ帶に挿みて端折ること。あづまがらげ。

***おす** 曆の事はおされぬと、へらず口して歸りけり(大經師) その祟り知つて居ながら、この伯母がおしごとしたる其告め(女腹切)

〔押〕强ひてなす。犯して爲す。

おすぎ 間の山お杉お玉が彈き謠ひ、お杉お玉はつぎ煙管、合うたやうで離れ行く、竹になりたや篠竹の、竹は篩に揉まるる、やれふれふれ殿中頭巾に袖なし羽織、拍子揃へて、殿中ぢや張肱ぢや、やれふれふれ(淀鯉出世瀧德)

〔阿杉〕お杉もお玉も、間の山(伊勢の外宮と內宮との間で、間の山にかゝる)で間の山節の唄を謠うて、三味線・篩の連れ彈きに、童子を踊らせて、道行く旅人から錢を乞うた婦女をいふ。こゝの文に「殿中ぢや張肱ぢや」などゝあるは、童子の踊りながらいふ唄である。好色旅日記(貞享四年刊)卷四、をはたより山田へ一里半の條に、「間の山過てあひの山、お杉お玉が庵、前にくれなゐの網を張り、三味線引て小歌、身に綾羅錦繡をまとひ、伽陵頻の聲音にころりとさせ、紅粉翠黛朱唇玉腕の爪はづれ、どうもいへぬ姿の花、參宮の者がめくれて、尺八程のよだれをふき、錢を打に顏にあたらぬをふしぎがり、

しらべ、又庭に菊を植ゑて愛しけり、翁が歌、我庭はきしの松蔭しかぞ住む、翁が草の花もさかなん、此故事によりて松をも菊をも共に翁草といふ由なり」と見えてゐる。二條良基撰の藏玉和歌集〔群書類從に收めてある〕にこの事が記してある。

おきなのめん 翁の面のにこやかに、始まり呼ぶ聲に引かれて（二枚繪）
〔翁面〕翁の假面を云ひ、所謂三番叟の面である。昔は芝居を始める先最初に、翁の面を被つて翁舞ひをしたものである。

***おきめ** 町人の分でなぜ本繩に縛つた、きつと訴へておきめにする奴なれど（大經師）　强きおきめに粟田口（大經師）
〔置目〕仕置、處刑。

***おきよどころ** 親祖父代代おきよ所へ柴入れた冥加の爲、薪は嫁が續けませう（酒呑童子）
〔御淸所〕故實拾集・卷五に、「御淸所とは御竈所也、但し供御の物を調ふる所を御淸所と云ふ也、御竈といふは其次也」。

***おきわた** まづ頭に置綿や、三平二滿の大日紅（日本武尊）
〔置綿〕綿帽子に同じ。その條を見よ。

***おきをる** 因縁話おきをらう、新七めが意見聽きたうない（淀鯉）　宵から寢させたり休ませた恩德を忘れたな、よい賴まぬおきをれ（氷朔日）
〔置居〕止めて置く。よして貰ふ。また、思ひ置く。覺えて居る。

おくこじやう 「こしやう」を見よ。

***おぐし** まづおぐしでも梳かしやんせ、お齒黑でも召しませい（松風）　おらんと云ふおぐしあげ、髮もほどけてしよたいなく（薩摩歌）
〔御髮〕「ぐし」は「くし」の濁つた語、髮をいふ。和訓栞に、「くし。髮又首をよむは奇の義、ほむる詞なり」。
「おぐしあげ」（御髮上）は髮を結ふこと、また髮結をする人。

おくじま 主も心をおく縞の袴、もと渡りの昆布の皮（大經師）
〔奧縞〕棧留縞のことで、赤絲入りの竪縞である。本奧縞は慶長頃から舶來した棧留縞をいふ。奧は奧南蠻の略稱である。棧留はこの縞の渡來地なる印度の東境の地San Thomasの訛語である。萬金產業袋・四に、「棧留縞（聖多黠）幅三尺九寸、丈三丈二三尺、もやう赤絲入りの立じまを俗に奧島といへり」。和漢三才圖會に、「奧柳條、按三止女、南天竺國名、出二於此一稱二奧柳條一多地蒼色而紺、與レ褐縱柳條、木綿厚美也、算崩 模樣亦有、近年來者稍劣、故以二舊渡之者一爲レ珍云々」。

おくにばら しらべの姫はお國腹（丹波與作）
〔御國腹〕德川時代に、大名などの在國中にできた子。

***おくめつけ** 今日密密祝言ありと、奧目付より聞きたれども（反魂香）
〔奧目付〕江戶時代に、奧勤めの人々を監視する役。

おくらゐさま お位樣の御忌中は月を日にかへて十二月を十二日、我儘なさされやう、すりや三年も名ばかり（聖德太子）
〔御位樣〕お位高い人樣の義。先君子。亡父。

***おくれ** 小枕なしの高島田、一筋懸の隱し結ひ、細疊みの平元結、おくれを憎みて拔揃へ（吉野忠信）
〔後〕後毛の略。婦人の結髮に、おくれて生えた毛の鬢に及ばないで垂れ下れるもの。

***おご** なうここなおご、何故に浮き浮きなされませぬ（嫗山姥）
「おごぜ」（御御前）の略、「おごう」とも云ふ。嫗樣、醍醐笑に、「これのおごは今年二十にこそならるれ」。

おこご あれ皆おこごの時分ぢや（氷朔日）　釋迦樣の開帳の相伴やらおこごやら、はたごやで支度して（女腹切）
「おくご」（御供御）の轉訛。晝飯を云ふ上方語。

おこしかへる 組町引具し、おこしかへつて聲々に（反魂香）
〔起返〕りきみかへる。大いに力む。

おこしやう 「こしやう」を見よ。

おこつ 今日七日の弔ひを兄弟一所に拜まんと、このお骨を持つてあがりしに（萬年草）
〔御骨〕高野山奧院廟の左側に方六尺八角寶形造りの骨堂がある、これ古來貴賤老若の遺骨髮を納める所である。蓋し高野山に遺骨を納めれば、眞言不思議の法力と靈地殊勝の功德力と大師金剛の定力加持によつて、亡魂の得脫疑ひないと信ぜれたもので、弘法大師の言に、「我が山に納むる諸人の遺骨は、我が三密加持力を以て兜率の淨土に往生せしめ、菩薩の位を得て、當來には必らず慈尊說法の聽衆となすべし」といふに因る。

***おこと** おことはこれより故鄕に、父が最期と聞くならば（女楠）　おことは一先御妹を介抱し（國性爺）　おことは都詞、狂女と見えし（隅田川）
〔御事〕「おんこと」即ちあなた樣の御事の意で、對稱代名詞の敬語として用ゐられ、後に親しき同士で足下といふことをおことゝいふ。足下。貴方。和女。

***おこらご** 常陸に鹿島の御社、齋宮・御子良子・淺間が嶽拜み廻れば（國性爺）
〔御子良子〕伊勢太神宮の神饌を調ふる所を子良館と云ひ、そこに奉仕する少女を御子良子といふ。ここの文は、伊勢太神宮子良館を云うたのである。

***おざか** あの子がおざかで彼の男とそばるやうにはなるまいか（氷朔日）　天王寺の東門をおざかの方へ歸りしが（卯月潤色）
「おほさか」（大阪）をつめて「おさか」と云ひ、また濁つて「おざか」とも云ふ。

***おさし** 大上﨟小上﨟おさし抱乳母おちのひと（丹波與作）　大名の若君のおさし奉公と僞り（雪女）
〔御差〕御差乳の略で、武家時代に貴人の子に乳を差上げる女の稱。

***おさへ** さきの押の盃はいつの世に戾ること（女腹切）
〔押〕受けた盃。盃を受けるを「おさへる」といふ。好色盛衰記・卷三、腹からのすゐ大臣の條に、「いつぞの程江戶の勝山が押へますと言ひはじめて飮む由」。

***おさへ** 身はおさへを乘り申す（丹波與作）
〔押〕殿。行列の最後を取締ること。

おさんたん 鎌田村のお道場へ京のお寺のお下り、毎日のおさんたん、先から直にお道場へ參られたも（冥途飛脚）
〔御讚歎〕佛菩薩の功德を述べて稱揚する法

將來」。

***おつすがふ** 逃ぐる敵におつすがひ(蟬丸)
「おひすがる」(追縋)の訛。

おつたてじる 敵は糠味噌おつたて汁(隅田川)
〔追立汁〕これは汁の名ではない。詳しくは「ぼつたてる」の條を見よ。

***おつづらうま** さても美事な、そんれはおつづら馬や(丹波與作)
〔御葛籠馬〕葛籠を脊負うた馬。葛籠はもと青葛の蔓をもて編作つたよりの名、後世は竹または檜の薄板を編んで、上に紙を貼り、衣服を納れるに用ひる籠。「さても見事なそんれは云々」をも見よ。

おつとめ お勤過れば表に出で(二枚繪)
〔御勤〕勤行。佛前で讀經すること。

おつぼろがみ 廣國の一子幸若丸、あけて八つのおつぼろ髪(井筒)
「おぼろがみ」に促音の增加した語で、「お」は接頭語、「ぼろ」は源氏物語・橋姫の巻に、「ほろほろに落ちみだるる木の葉の」などある「ほろ」であらう。亂髪。蓬髪。

***御手上げられい** 此以後はいつまでも心安う御意得ませう、お手上げられいと一禮す(壽門松) 無禮御免と手をつけば、アア堅い堅い、同船致し一つ釜の食事たべるは一門同然、サア御手上げられ(博多)
座に手をついてそんなに慇懃になさらないで、お手を膝に上げて樂にしなさいとの意。風流敗毒散(元祿十六年刊)卷之五、千秋樂の條に、「其身も袴羽織にて立出づれば、かの男首を疊につけて慇懃なり、これはいたみ入たる御ありさま、まづ御手あげられて御對顔あそばされいといへば」。

***おてき** やあよれ様たち歷歷のお寄合、おてき様の待合ひ(淀鯉) むむう殿達は三人、妾がおてきはどれぢやえ(女楠) それやこそおてきと色めいて、毛剃がつれどもうつつをぬかし(博多)
〔御敵〕敵は匹敵の意。遊女などから相手の客をいひ、また客から己が相手の遊女をさしていふ。相方。俚言集覽に、「敵。匹偶を仇と云に義同じ、敵樣とも云」。

おてらこじやう 「こしやう」を見よ。

お寺の長助 ずんぼろ坊主・ねつたい坊主、これがお寺の長助と、笑うてこそは追つ立てける(會稽山)
お寺の長老といへば禪寺の住持又は先輩の稱なれど、長助というては(助は雲助などの助と同じ)お寺の芋掘坊主の意。心中二枚繪草紙に、駕籠昇の長介といふも見え、長介は力役などの者を稱する慣用語。

***おと** 姉が手を引きおとは抱く、中は父親肩車に(女殺) 伊東祐親が乙娘藤の前(冷泉節)
〔乙〕弟の義。幼いこと。末子。「おとむすめ」は末女。

***おとがひ** 踏まれてさへあの頤、人を踏んだらどうあろ(壽門松) 頤の落つる程こつちからもしやべる(栬狩) ずんと焼き立て味噌べつたりのぬくぬく、頤が落ちまする(孕常盤) まだおとがひをきき居るかと、ほほげた三つ四つくらはせて(大經師) 頭養ふ有難しと、鬼が島でも龍宮でも遣る所へなぜ行かぬ(隅田川) はや奥様があるからはおとがひの雫、叶はぬうき世(娥)
〔頤〕和訓栞に「音のつがひの義なるべし」とある。下のあぎと。あご。壽門松に「踏まれてさへあの頤」とあるは、踏まれてもなほあの頤を叩くの意であつて、喧しう惡口するをいふ。栬狩劔本地に「頤の落つる」とあるは、頤のはづれるほど饒舌するをいふ。孕常盤に「頤が落ちまする」とあるは、頤がはづれる程美味なるをいふ。狂言柿山伏に「さてもさてもうまい柿ぢや、おとがひが落つるやうぢや」。大經師昔曆に「頤をきき居るか」とあるは、口を利き、しやべり居るかの意。「頤養ふ」とは口を糊するをいふ。「おとがひの雫」とは、頤の雫口に入らぬといふ諺で、手近にあつても我が物とならぬに譬ふ。

おとぎこじやう 「こしやう」を見よ。

おとぎばふこ 犬張子・入子張子・中張子、おとぎばふこの裸身も(本領曾我)

(女用訓蒙圖彙所載)



〔おとぎばふこ〕

〔御伽婢子〕あまがつの類である。長さ一尺餘り、心に綿を入れ、白い布帛で頭身を包み、黑絲を髪とし左右に分けて胸の前に垂した人形。嬉遊笑覽卷六下、兒戲の部に「はふこ、伽婢子ともいふ、母子の義にてあまがつと同じ類の物なり」。

***おとど** 小松のおとど申上げらるるは(娥)
大殿の義。大臣。和訓栞に「おとど＝大臣をよめり、又殿をよめり、源氏におとどの造りさま、又をばおとどなども見えたれば、殿をもて本とすべし、大臣ならぬ人も其殿といふ意也といへり、御殿の義成べし」。

***おととし** こちのととの長煩ひ、やうやう本復召さつたりや、おととしの大地震、わしは氣癪で床につき(氷朔日)
〔一昨年〕「をととし」の誤、遠ち年の轉。「おととしの大地震」とあるは、寶永四年十一月富士山噴火して、寶永山を生じた時の大地震のことである。その寶永四年を一昨年といへるからには、心中刄氷朔日の上演は寶永六年であつて、また文中に夏の記事があるから夏の頃である。そして平兵衛・小かん 情死は寶永六年六月朔日の夜の出來事である。

***おとな** おとな殿へ申して取かへ渡し(薩摩歌) 家のおとな礒太夫(弘徽殿) 母様いかいお世話、ちとお休みと、差出す薄茶茶碗の音羽山、おとなくれたる振を見て(鑓権三) 袖の襲に包はせて大人くろしき懸烏帽子(最明寺殿)
〔大人〕武家の家老、または譜代の老臣。「おとなくろしき」は、甚だ大人らしいと云ふ意。

おとはじろざ 音羽次郎三を雜喉場とは、鰭があるとの譬かや(今宮)
〔音羽次郎三〕元祿寶永頃の大阪の立役の名優音羽次郎三郎を云ふ。「鰭がある」とは藝に幅があるとの意。役者謀火燵(寶永六年刊)大阪之卷、立役之部に、「音羽次郎三郎。上々吉。音羽はいかい上手でござれども、せりふのあやぎれさつぱりとせず、男付やせ肉故、家老にして大柄な敵役に合せては見場なし、……

百二百文いつのまにかまき散らし、小歩小判を投げうつたはけもあり、あるは七つ八つ十一二歳の童に鉢卷させ、なんちらはおり繻子の裁着、能をうつてうたふ男をなづけば、でんちうぢや張肱ぢやと踊るあり、みそこしもつて錢もらふあり、皆これ北の所の與次郎が御內儀たちむすめこたち也」「あひのやま」をも見よ。

***おすゑ** 某が妹は女院樣のおすゑの奉公仕る（酒呑）京の御所より女嬬かお末か一兩人呼び申さんと申上ぐれば（酒呑童子）

〔御末〕女の飯を調へる所をいひ、內裡に御末といふ所がある。御末に奉仕する女。

***おぞい** そちが今度のおぞい仕樣、魔法でもかなふまい（歌念佛）

「怖ろしい。恐しい程氣强い。宇津保物語に、「內の居いとおぞく心かしこくおはし給ふ」。怖毛を「おぞけ」と訓み、また曲禮上に「知レ好レ禮則志不レ懾」あつて「懾」を「おぞむ」と訓んである。

おそめ 瓦屋橋とや油屋の油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松はいつの時雨の一雫（今宮）

〔阿染〕大阪東堀瓦屋橋通り油屋新五郎の娘で、二歲の時丁稚久松に連れられて川邊に行き、誤つて水死した。それが爲久松は新五郎に叱られて縊死したのを、情死したやうに作り替へられたとの說があれども、思ふにお染・久松情死の事實があつたのであらう。

おそめ 「半九郎おそめ」を見よ。

おだい 小じ樣にとんと打込み、二合半の盛切おだい咽に詰つて、ぎつちぎつちてきないこんでこはりますろ（宵庚申）

〔御臺〕御臺盤（膳）の略、轉じて、飯。大藏流狂言、岡大夫に、「白飯とは白いおだいの事」。

***おたびしよ** 我等が宿は庭かけて七疊半、貧乏神のお旅所といひさうな住居（壽門松）

〔御旅所〕祭禮の時神輿を暫く駐める所。

おたま 「おすぎ」を見よ。

***おち** おちやめのとの辨として、背に子を負ひ寐させて置いて（賀古敎信）おちははつと氣も亂れ（丹波與作）大上﨟・小上﨟・おさし・抱乳母・おちの人（丹波與作）

〔御乳〕「おちのひと」（御乳人）の略。貴人の兒女の養育をなす者。

***おちばぶね** 嵐漕ぎ行く落葉舟、水に皺寄る翁川（振袖始）

〔落葉舟〕落葉を舟に見立てゝいふ語。

おちま 落間にがばと突落せば（女殺）

〔落間〕家の內の床の一段低い室。

おちやしよ 「ちやしよこ」を見よ。

おちやのこ 常住斬つてのはつての、これ程の喧嘩はお茶の子お茶の子茶の子ぞや（反魂香）

〔御茶子〕點心をいひ、轉じて、取上げていふ程でない小事の意にいふ。

***おぢやる** 今にお前の氣に入りの事介がおぢやりましたよ（薩摩歌）本心曲つた釣針に釣らるる勘介ではおぢやらしませぬわいの（川中島）はあ氣に入らぬやら返辭がない、姉おぢや早う參らう（女殺）いきすりめ勝手にせいで置かうか、男ども皆おぢや且那お出なされ（大經師）

「おいである」（御出有）のつまつて拗音化した語。お出でる。御座る。「おぢやらしませぬ」は「おぢやりはしませぬ」の約つた語。「おぢや」は「おぢやれ」の略された語。

***おぢやれ** おぢやれの身には何がなる、朝の夜から見世ざらし（丹波與作）上り下りの旅人の、粹と野暮とに揩れて揉まれて共揩の、招く薄もおぢやれおぢやれが戀を呼ぶ（嫗山姥）


（百人女郞品定所藏西川祐信畫）
〔おぢやれ〕

街道にある旅籠屋の下婢の稱であつて、旅人を泊めて淫をも鬻いだものである。出女。旅籠屋の下婢が門口に立つて、旅人を見ては客引かうとして、おぢやれおぢやれ（おぢやれの義につきては前條を見よ）と呼んだのから起つた名である。おぢやれが赤前垂をして門口に立つて客を招く口上は、丹波與作の中に、「これ泊ぢやないかえ、泊なら泊らんせ泊らんせ、旅籠安うて泊めませう云々」とある。非源西鶴撰・浮世花鳥風月（好色四季ばなしの改題）月影うつす龍宮のすぎやきの條にも、「女房ども赤前垂して緣の端に立出で、泊ぢやないか泊らんせ、此雪は暮方程積ります、日高なりとも泊らんせ、水風呂沸いてござんす、火燵もあり夜着も布團も貸しましよ、寒か抱いて寢ましよ、酒のよい所に先お泊りなされませい、內が綺麗でお內儀樣の美しい所に泊らんせ」と見えてゐる。いかにも往時の悠長な有樣を見るやうである。「でをんな」をも見よ。

***おちる** おのれ落ちずばただ置かうかと、高手小手に縛付け（出世景淸）獻立は三汁九菜、おちた肴を吟味の役人（宵庚申）

〔落〕白狀す。また、死に落ちる。

***おつ** 惣太滅金のやうなる眼をむぎ・乙に入つたる胴聲（隅田川）

〔乙〕低下する音調をいひ、甲に對する語。「乙に入つたる胴聲」とは、音調低うして胴腹から出るやうな聲で、皺枯聲のこと。好色二代男（貞享元年刊）卷之三、一言聞く身の行方の條に、「自然とこゝの小唄は低う、物言ふまでもおつへ入りて物靜なり」。

おつう 今の世のおつうは母の形見ぞや（氷朔日）

〔阿通〕三勝の娘の名。「笠屋三勝」を見よ。

***おつかない** おやおつかない誓紙を書く（二枚繪）女御に上げい、后に立てよなどと申して、おやおつかない僞り、あとからはげるはげ頭（用明天皇）

奧處無の義。物の行先知られぬは危く覺束ないものなれば、それよりして恐しいと云ふ意。萬葉集・卷十二に、「奧香無不知山道乎戀乍可

「おのがじしなる」の誤で、各人心々なるの意であらう。「おのがしなる」としたのもある。

おのし はておのしの御身ばかりか、不便(ふびん)になさるる四郎二郎まで命を助かることなれば(反魂香) えすしな、いなしやんせ、おのし樣には言はぬぞや(伊豆日記)
「おぬし」(御主)の轉。そなた。おまへ。

おはぐろおや お果(はて)なされた母樣のおはぐろ親にならせられ(薩摩歌)
〔御齒黑親〕はじめて鐵漿で齒を黒う染める時、親族または知己の中で福德な女が涅齒してやつた者の稱であつて、鐵漿(かね)親ともいふ。德川時代には涅齒を以て女子元服の徴となし、また結婚の徴とするに至つた。

おばしま おばしま高く軒長き、流れにうつる簗山も(用明天皇) 御階おばしま踏散し、李蹈天が膝元にどうど坐し(國性爺)
「おほはしま」(大階間)の約。欄干。倭名抄に、「軒檻。於波之萬」。

おはつ 遂には兜卒天滿屋のお初も佛なかまかや(氷朔日) 世上に高き天滿屋の、お島といひてかの里に、おはつが跡繼隱れなし(二枚繪) お初樣のかの夜さり二階の梯子を踏外し(二枚繪)
〔阿初〕曾根崎心中に見える人物である。假作人名部「はつ」を見よ。

おはへる 追手(おつて)の聲のあれあれあれ、おはへて妛に北向の、八幡宮の燈明も(生玉) 突除(つきの)け突除けおはへ行くを追拂ひ(蛙合戰) 兄樣とおはへ縺れて追掛くる(賀古敎信)
「おふ」(追)を「おはへる」と延べて、他動詞はたらは行下一段に活(はたら)かした語で、「ゆふ」(結)を「ゆはへる」といふのと同じ類である。また「おはへる」を「おはゆる」と訛つていふことも、「ゆはへる」を「ゆはゆる」といふのと同じ類である。「おはゆる」を見よ。

おはまり 今の尼の話が蘭が噂に似た故に、そこを以ての惡推(わるずゐ)か、いやこれはいかいおはまり(薩摩歌) おお女儀(にようぎ)なれば大抵の梅櫻と同じ事に思するさうなが、それは大きなおはまり(西王母) さてもおはまりおはまりと、お通の君の高笑ひ(三國志)
〔御塡〕誤に陷ること。策略に陷ること。だまされること。御伽名代紙衣(元文三年刊)に、「今世間にたぶらかされし事をおはまりといふ」。

おはもじ こちの人の吃と私がしやべりと入合せたら、よいころな女夫が一組できませう、あああおはもじやと笑ひける(反魂香) 吾妻樣を見そめて、ほほほほほほ親の口からあああおはもじ、戀病みにて煩ひます(壽門松)
「おはづかし」(御恥)のもじ詞。文字詞(もじことば)は、足利時代の末期朝廷式微にして供御の物備はらない爲、女官等その名を呼ぶを忌みて、何もじといふた隱語から起つたといふ。

おはゆる 命をおはゆる鳥の聲(曾根崎)
「おはへる」(追)の訛。「おはへる」を見よ。この文は、命を追迫(おひせま)るやうな心地のする鷄の夜明けを知らす聲との意。

おはらひ 來年のおはらひには必らず下りや(女腹切) 藤の棚のねぢ兵衞はこなた程鐺は振られども、お祓の練衆御番替り、人の氣に入り雇はれて(夕霧)
〔御祓〕大阪の天滿天神御祓祭(おはらへ)(六月二十五日)をさす。「ねりしゆ」をも見よ。

おはり 皆皆お針が縫うたれど、祝うてわれも縫はんとて(歌念佛)
〔御針〕裁縫師。

おひ (凱陣八島)
〔笈〕行脚僧・山伏などが佛具・衣服・食器・書籍など入れて、脊に紐を掛け後(うしろ)に負うて旅行する具。

おひえ そなたの寐間着(ねまき)のおひえも貸して寐替つてたもらぬか(大經師)
〔御卑衣〕木綿の綿入衣。賤長見聞集・三に、「昔綿を多く入れて夜の物とて夜着にする、是をおひえとも北のものとも名付けたり、また異名を布子とも綿入と云ふなり、此詞みな公家より出でたり云々」。

おひかぜ 情模樣の色小袖、追風淺く薫らせて(小栗判官) 若草に妻もこもれり追風の、追手も急に來るべし(蟬丸) 船頭舟子を始めとし、近習外樣の侍まで追風待つ間の高鼾(浦島)
〔追風〕衣に焚染めた香の風につれて薫りくること。後方より吹來る風。順風。

おひかは 誰が聲立てておひかはや(以呂波)
〔追川〕魚の名、アサヂともいひ急流の川に棲む。鮎をも云ふ。この文は魚の名の「追川」に「追ひ」をきかせたものである。

おひき 曆くばる家によつてお引が出る(大經師) 何がなしに三百づつお引をやる合點ぢや(萬年草)
〔御引〕御引出物から出た語で、音物を持つて來てくれた使者に與へる祝儀。心附(こころづ)け。

おびく 金商人のお泊と近鄕殘らず觸をなし、盜人どもをおびき寄せ(十二段)
「おびひく」(帶引)の約。欺き誘ふ。易林本・節用集に、「帶(おびきいだす)出、帶(おびきいる)入」饅頭屋本・節用集に、「僞引(おびく)」。

おひげのちりとり お出入の大小名、追從けいあん按摩取、お髭の塵取(兼好)
〔御髭塵取〕人に媚(こび)諂(へつら)ふ者を云ふ。貝原好古編、諺艸に、「御鬚の塵を取。これは媚諛ひて追從する者を云ふ諺也、事文類聚云、魏萊公爲レ相、丁晉公(丁謂)參ニ知政事一嘗會ニ飲都堂一、糞染ニ公鬚一、謂起拂レ之、公(萊公)正レ色曰、身爲ニ執政一、親爲ニ宰相一拂レ鬚耶、謂慚、この事世話によく叶へり」。好色二代男・卷之三、朱雀の狐禍の條に、「此所の御髭の塵を取りやめて、白川の流の末に萬代を祝ひの水、お龜酒屋となること日頃上戸の娯樂」。

おびし 弓手(ゆんで)の乳の下、馬手(めで)のおびし(源義經)
〔臁〕馬の腰の左右の窪んだ處。箋注倭名類聚抄に、「臁。唐韻云臁苦簟反、上聲、於比之波利、……按於比之波利、帶縛之義、今俗省呼ニ於比之一、或呼ニ與和古之一、腰左右虛肉處也」。

おひずる 肩に笈摺同行二人、誓の舟に任せ行く(嵯峨天皇) 佛前に供へたる順禮の笈摺を廣げて金銀を押包み、やがて頸にぞ懸けにける(賀古敎信)

お江戸上り程あつて、武道にしつかりと實が入りました、……お顔の色の如く白吉、大柄な笹塚殿と引合せ細うても鐵、弱味のない實方云々」。

おとはやき 乾山・音羽燒の皿の鉢の茶碗のと(生玉) 差出す薄茶茶碗の音羽山、おとなくれたる振を見て(鑓權三)

〔音羽燒〕山城國音羽山下に燒いた所の陶磁器。人倫訓蒙圖彙、燒物師の條に、「都に於ても所々にあり、御室・音羽・御菩池・粟田口等にあり」。雍州府志、土産門下・服器部に、「磁器。清水坊・音羽山下・粟田・御泥池、其外窰爐在處々、隨人之嗜好、而造諸品物」。

***おとぼね** やい喧しい音ぼね立てな(艶狩) 音ぼね立つるな女めと、喉笛の鎖をぐつと刺す(女殺)

〔音骨〕音聲。「いきぼね」をも見よ。

***おとまし** 亥夫の中の榮耀遣ひか、エエおとましや身代は得持つまい(重井筒)

うとまし(疎)の轉。忌々しい。

おどもり 身揚り分のおどもりも東方朔が九千兩(雪女) 萬御世話のおどもりならん、何もかまはせ給ふな(加增曾我)

澁滯の義。「とどこほり」(滯)、または「つかへ」(痞)などの意にいふ。「おどもり」は「おどまり」ともいひ、巢林子作の天神記・第三に、「その借錢のおどまりがやうやうこの頃いえ申す」とありて、借錢が拂へないで滯る意に用ゐてある。

***おとや** 鵰鷹みどり丸にて乙矢を矧ぎ(百合若)

〔乙矢〕「はや」(甲矢)の對で、一手二本の矢の中、第二番目に射る矢。

***おどろ** おどろの髮(浦島) おどろの髮(振袖始)

草叢のおどろしう亂れてゐることで荊棘などの字を當てる。「おどろの髮」「おどろの髮」とは、くしやくしやと亂れてゐる鬢また髮。

おないぎ

「ないぎ」を見よ。

おに 御茶菓物等までも試みなき物を參らせたる事候はず……おにをして上げられよといへば(文武五人男) 鬼一口の毒の酒、これより毒のこころみをおにとは名付けそめつらん(酒吞童子枕言葉)

御煮即ち御煮味のことであつて、君公に奉らん爲に食物を毒試すること。試味。俗說に、毒試するには一口食する故、鬼一口より出た語であるといふ、もとより取るに足らぬ說なれども、酒吞童子枕言葉のこの文は、俗說の如く書いてある。

おにぐるみ 肌理の粗いはおにぐるみ(嵯峨天皇)

〔おにぐるみ〕



〔山核桃〕落葉喬木で高さ七丈にも達し、種子は食用となる。

おにしやぐわん 中にも小西のなにがし、加藤の鬼しやぐわんなんどいふ猛將(國性爺後日) 日本の陣中に駈入り、加藤のおにしやぐわん・小西のあら者を討取らん(三國志)

「おにじやうくわん」(鬼上官)の訛である。鬼は鬼のやうに強い義、上官は頭の義で武將また軍將をいふ。大阪獨吟集(延寶三年刊)夕々子由平(前田由平で宗因の弟子)の句に、「その鬼しやぐはんゆるせかよひち」と見え、神田白龍子編・倭漢武家名數(正德六年刊)卷之二に、「鬼左冠。加藤肥後守清正、豐臣秀吉猛將」と見え、竹本筑後掾直傳十一行本、國性爺後日合戰のこゝの文(四枚目の裏十一行目)に、「鬼舍官」と書いてある。「鬼しやぐはん」「鬼左冠」「鬼舍官」、これら皆「おにじやうくわん」(鬼上官)の訛に音寫字を當てたのである。朝鮮で加藤清正を鬼上官(おにじやうくわん、またはきじやうくわん)といふた由清正記などに見えてゐれど、このこと朝鮮人撰述の書に見えぬのみならず、朝鮮人のいふ鬼は日本でいふやうな剛强な者を鬼とは云はないで、非業の死を遂げた者が妄執の雲晴れず、宇宙に迷ひ出て世人に種々の害をするもの、卽ち靈鬼を鬼と云ふのである。されば清正を鬼上官と云ふのも日本で作つた語である。

おにのしこぐさ 千草八千草思ひ草、おそろし鬼のしこ草に、隔つる中の垣根草(二枚繪)(用明天皇)

〔鬼醜草〕紫菀の異稱。奧儀抄に、「おにのしこ草は紫菀なり、これを見れば物忘をせず」と見えてゐる。巢林子のこゝの文は、「恐ろし」といふて「鬼」につづけ、「思ひ草」といふたから物忘れをせぬ「鬼の醜草」にいひつづけたのである。

***おにみそ** 近來弱味噌鬼味噌の汁かけ、鬼食ひ殘す殘念殘念(振袖始) 焰魔王の氣に違へ、地獄追放の鬼味噌を御覽ぜと、扇を拔き扇ぎ立て(文武五人男)

〔鬼味噌〕外見は鬼のやうに強く見えて、內心は臆病なるをいふ。虎皮羊質。

***おにをどり** 呵責恐ろし鬼をどりの、寺の藪垣物凄く(生玉)

〔鬼踊〕生玉社の祭禮の時、赤く染めたはぐまの毛を被き、鬼のやうな服裝をして鬼の面を被き、棒を振つて踊つたものであらう。今も中國地方で氏神社の祭禮の時、かうした鬼が出る行事の殘つてゐる所がある。こゝの文意は、その鬼踊を思ひ出して、獄卒の叱責を聯想し、亡者を葬る寺の藪垣物凄く感じたといふのである。寺とあるだけでは何寺か知れかねるが、いづれ生玉の馬場前持明院あたりをいうたものであらう。日本振袖始に「眷屬どもゝ活々と喜び勇み跳ね廻る、鬼踊ともいつゝべし」とあるも、眷屬の鬼どもが跳ね廻る狀が、恰も祭禮の鬼踊に似てゐるから、かくいうたのである。

おねば 其ちよきちよきで夕飯のおねば刻め(宵庚申)

〔御根葉〕菜大根の二葉の稍大きくなつたもの。まびき菜。おろぬき菜。浪花方言(寫本、文政二年成)に、「おねば。菜大根のかいわりの大きくなりたるなり、葉ばかりにて根は不レ用也」。

***おの** おのも翼をならべながら、人の最期を急ぐなる(宵庚申) そなたの髢亂れずや、いや我よりもおの樣の、鬢撫附けて搔撫でて(卯月潤色) おの樣の女房よ、仕方の惡いことあらば、なぜ殺しなりともなされずして(卯月紅葉)

「おのれ」(己)の略。自稱代名詞、われ。おれ。また對稱代名詞、そのはう。そなた。

おのがしなれる 番匠の棟梁木工の頭修理の頭、おのがしなれる出立(出世景淸)

鑣は烏帽子の皺凸凹粗く岩石の面の如きものにて、立烏帽子・風折等に之を用ゐる。貞丈雜記・卷三、烏帽子之部に、「ゑぼしにさびと云ふ事あり、ゑぼしのしわの事也」。

***おほじやうらう** 大上﨟・小上﨟・おさし・抱乳母（丹波與作）

〔大上﨟〕海人藻芥に、「大上﨟と申すは攝家の御女也」と見えてゐる。轉して幕府及大名に仕へる最高位の女を云ふ。

おほすながし

「おうすながし」を見よ。

おほたか 文箱明くろも戀人に大高の結び文（艳狩） お乳の人はおほたかにお菓子さまざま文匣に盛入れ（丹波與作）小姓衆お硯、御祝儀に一首仕らんと、はや御機嫌におほたかだんし、九十九三の定家やう（三國志）

〔大高〕大高檀紙の略、大形の檀紙を云ふ。古くは檀皮で製したれど、後には楮皮で製し、厚くして白く、面に皺文あつて上品な紙。黑川道祐撰、雍州府志・七、土産門に、「檀紙自二備中一來、其遺レ之人自レ古有二家領一、此紙綸旨口宣懷紙等用レ之、或號二大高小高一、或稱二引合一、又謂レ引、大小高則紙大小之號也」。

おほたてあげのすねあて 金銀にて中黑のしるしをうつて、金札・大立擧の臑當・こがね作の太刀かたな（女楠）

〔大立擧臑當〕總體鐵で製した大臑當であつて、普通の筒立の臑當とは異つてゐる。太平記・第十七卷、山門攻の條に、「龍頭の兜の緒を締め、大立擧の臑當に、三尺八寸の長刀莖短に取りて亂足を踏み」。

おほつぼりう 大坪流の鞍の内、稽古に心染手綱（鎌權三）

〔大坪流〕大坪慶秀の始めた馬術の流を云ふ。慶秀は上總の人、足利義滿及義持に仕へ、馭術を善くし、鞍鐙を作る妙手であつたと云ふ。

おほつゑ 物もえ言はぬ吃めが推參千萬、似合うたやうに大津繪畫いて世を渡れ（反魂香）

〔大津繪〕寛永正保の頃、大谷に近き池の川と云ふ所で繪佛を描いたのを起源とすべく、現存せる大津繪で天和以前のものと推定されるものは阿彌陀佛或は三尊佛なるを以て見れば、大谷の繁昌によつて生じた繪佛が即ち後來の大津繪であつて、大津繪はまた追分（京都・伏見の間）にて鬻賣されたによつて、追分繪とも云ふ。その當時の風俗・遊女等をも畫き、描法粗放にして簡朴である。貞享頃より彌もてはやされたが、享保頃から漸く衰へた。又平のやうにいへるは、巢林子が當時の俗傳に傾城反魂香に、大津繪の最初の筆者を吃又平と據つたものである。

***おほて** いでこれからは大手の敵を一當あてて追散し（國性爺） 六波羅の大手門（女護島）

〔大手〕追手とも書き、搦手に對する語。敵の前面また正面。大手門は城廓の前面の門卽ち表門。

***おほとの** 今川との子と申しては大殿の前がすみませぬ（傾城佛原）

〔大殿〕武家にて當主の父を云ふ。

おほとのごもる 賴みありげの御氣色にて、おほとのごもる御涙（弘徽殿）

大殿籠の義。御寢になる。伊勢物語に、「みこおほとのごもらで明し給ひてけり」。

おほとり 心はさすがおほとりの、千里一翔源氏の運、末賴もしうぞ聞えける（烏帽子折）

〔大鵬〕「だいほう」を見よ。

***おほとりげ** 臺笠・立傘・馬印、これぞと名にしおほとりげ、御召の駒も乘換も（堀川波鼓）

〔大鳥毛〕鷹の羽毛を集めて栗のいがのやうな形に作りて、馬印また槍鞘にしたもの。

***おほなかぐろ** 二十四差いたる大中黑頭高に取つて着け（吉野忠信）

〔大中黑〕鷲の羽の上下白くして、中の黑みの大なるものを云ひ、この羽で矧いだ矢。

おほぶく まづ大ぶくの口明に變つた咄がごんする（壽門松）

〔大服〕大服茶の略、歲旦に年中の惡氣を禳ふ爲とて飮む梅干・山椒・黑豆などを入れた茶湯をいひ、大福の意にとつて歲旦の祝儀とする。（序云、これまでが亭主の言葉である）。

おほぶせり 助右衞門目をさまし、どいつらも大ぶせりと、提げて出でたる行燈の（大經師）

〔大臥〕深く寢入ること。熟睡。

おほみのやり 誰白川は大身の鑓（薩摩歌）

〔大身鑓〕刄の長大な素鑓。（奥州白川の城主松平大和守基矩の鑓標）

***おほめつけ** （虎が磨）（最明寺殿）

〔大目附〕江戸幕府にあつた職名で、監察糺彈を掌るのが本務であつて、服忌方・宗門改方・分限帳・道中方等の分課があり、關所物奉行というて沒收物を賣却する役をもした。

***おほもん** 町中俄に騷出し、棒よ熊手よ提灯出せ、大門打てとひしめけば（壽門松）

〔大門〕遊廓の出入口の門の稱。「大門打つ」の「打つ」は閉ぢる意。「うつ」を見よ。大門の門限については「三番太鼓」の條に述べて置いた。また遊廓内に狼藉者ある時は、それを捕へて詮議する爲に大門を閉ぢて出入を塞いだ。

***おほゆか** いざさせ給へと打笑ひ、一門思ひ思ひに出立ちて、烏帽子引立て赤旗風にひるがへし、大床に伺候する（鎌田）

〔大床〕廣廂の別稱であつて、大廣間を云ふ。武家にて廣廂を大床と云ふこと、家屋雜考に見えてゐる。巢林子作・傾城懸物揃に、「萩の戸の大床に伺候して相待つべし」とあるは、武家に用ゐる大床を淸凉殿内の萩の戸の間に濫用したのである。

おほゆな

「ゆな」を見よ。

***おほよこめ** （國性爺後日）

〔大橫目〕大目附の異稱である。その條を見よ。

***おほよせ** ゆふべゆふべの大寄は豐なる世の續なり（女殺） 一つに張出す大寄に名取の松梅二十五人に十八公（扇八景）

〔大寄〕多人數連立つて妓樓に登り、多數の遊女を揚げて一所に遊興すること。好色二代男卷七に、「越後町扇屋方にて大寄三十九人並べた所面白し」。

おほるり 大るり・小るり・つばくらめ（娥）

〔大瑠璃〕燕雀類に屬し、雄は上面瑠璃色をなし、雌は橄欖色の羽毛をしてゐる。

***おぼろぞめ** 血しほのおぼろ染（重非筒） 春の山邊の朧染（五人兄弟）

〔朧染〕染色の名。菊岡沾凉撰、本朝世事談綺に、「朧染。寛文の頃上京祐乘坊の辻子紺屋新右衞門と云ふ者始めて染むる。此者箕面の富突に詣ず、群集の中にて一の富の札を拾ひ得

〔笈摺〕巡禮者が背に着る一種の衣である。もと笈を負ひて背の摺(すれ)を防ぐ爲に着るより起つた名。羽織に似て袖なく、兩親在る者は兩側を赤地に、中部を白地にし、兩親なき者は兩側を白地に、中部を赤地にした。

***おびとり**　太刀損じては惡しかりなんとするりと拔きて、帶取をふつつと切つて切放し(酒吞童子)

〔帶取〕太刀の足金にからみて腰に纏ふ緒紐。

***おひはぎ**　追剝盜賊の業(女夫池)

〔追剝〕行人を追ひ劫(おびや)かして衣服を剝(は)ぐ者。行劫。

***おひばら**　奏者役番頭千三百石までお取立、追腹ほどの御恩の家(丹波與作)

〔追腹〕主君の死の後を追うて割腹すること。殉死。

***おひやくど**　丹波屋まではお百度ほど詣ぬれど(曾根崎)

〔御百度〕神佛に御願をかけ、往返百度每度神佛を拜すること。黑川道祐編、日次記事、正月二十五日の條に、「男女有二宿願一則詣二本社一百度、每度拜二神前一是謂二御百度一」。

***おひろひ**　元のやうにおひろひと言はれて、詮方なげ首に心も染まぬ歩み振り(日本武尊)かちおひろひもお身ごなし(女夫池)　お乘物にも召しもせず・ようおひろひなされたと、被衣とりどりもてはやす(弘徽殿)

〔御拾〕御步行。步むを「ひろふ」といふ。「ひろふ」を見よ。

おひわけのゐ　(反魂香)

〔追分繪〕「おほつゑ」に同じ。その條を見よ。

おひをうつ

「落人(おちびと)におひを打つ」(諺)を見よ。

おびん　これおびん、旦那がいなれたもう樂(らく)ぢや、謠はうと踊らうと夜中まではこつちのもの、ここへここへと招かれて(女楠)

「おび」(御比)に撥音「ん」の增加した語。「おび」は「おびくに」御比丘尼の略。「うたびくに」を見よ。

***おへきしよ**　おへきしよを背く不義の科(雪女)

〔御壁書〕法令などの張紙。大奧の法度書。

***おへさま**　女は亭主と座を組みて、おへ樣顏してゐたりける(重井筒)　おへ樣にもお目に懸らうと存じ參りました(氷朔日)　かみ樣おへ樣へ賴み上げます御訴訟事(今宮)

この語もと「おうへさま」(御上樣)の略で、中流以下の家庭の主婦をいふ。江戶では上をかみと訓(よ)んで「おかみさま」といふ。巣林子の頃には「おへさま」を「おいへさま」(お家樣)ともいうたもので、彼の作・女殺油地獄に、「よい衆の娘子達やおいへ樣がた」と見えてゐる。浪花方言、寫本、文政二年成)に「お家さん。まづ大體通例此通唱ふ、江戶にてかみさまといふに同じ」と見え、俚言集覽に「おへさん。御家樣也」と見えてゐる。「おうへ」をも見よ。

おほあらめのよろひ　大あらめに篠金物うつたる鎧(鎌田)

〔大荒目鎧〕目は間の義。普通の鎧は割小札(わりこざね)であつて、札の小なるを綴れるものなれども、大荒目の鎧は割小札にせずして橫に長くし、その小札の革を二三枚も重ね、鐵などを交へて札(さね)厚く、縅緖も太くして粗(あら)く綴つた鎧である。この鎧は頗る重いから常人は着ないで、爲朝のやうな剛力な者が着たのである。保元物語・卷一、新院御所門々かため軍評定の條に、「白き唐綾をもて縅したる大あらめの鎧」。

***おほうちがた**　金(かね)の取手は讀み人知らず、大內がたより御穿鑿(淀鯉)

〔大內方〕大內は禁廷。朝廷方。こゝの文、古今和歌集に讀み人知らずの歌多く、且つ歌人は大內方の人が多いから、「讀み人知らず、大內がた」といひつづけた。

おほうちぎり　大內桐おほひかけたる挾箱(丹波與作)

〔大內桐〕五三の桐をいひ、五三の桐を模樣にした名物裂。

***おほかま**　おほかまのいぬめらに懲り果て死ぬる身(潤色)

〔大鎌〕大邪曲。「かま」を見よ。

***おほかりまた**　(松風)

〔大雁股〕雁股(その條を見よ)の大なるもの。

おほきなせんざいさんざんそう　これ又能(のう)の番附、大きなせんざいさんざんそう、脇能身の程をしら髭(酒吞童子)

「翁(おきな)、千歲(せんざい)、三番叟(さんばそう)」をもぢつて、「大きな前栽(せんざい)散々」にきかせたのである。翁とは能樂で翁の假面を被つて行ふ曲の名。千歲とは能樂で侍烏帽子に素袍を着て小刀を佩き、翁に附隨して出て謠ひ舞ふ役。「三番叟」はその條を見よ。翁の曲は能の最初に演じたもので、翁・千歲・三番叟・面箱の四人出る、(但下懸では面箱の役を別に置かない)。

おほぐし　畠山の重忠は馬を負うて一の谷を落し、宇治川にて大串を助けし强力(艷狩)

〔大串〕大串次郎と云ひ、武藏國の住人である源平盛衰記・卷三十五、高綱宇治河を渡る條に、大串次郎が宇治川にて流されたのを、畠山重忠に助けられて岸に投上げられたことが書いてある。

***おほぐち**　赤地の錦の着脊長(きせなが)に美精好の大口・重代の大佩刀(孕常盤)

〔大口〕大口袴を云ひ、昔行はれた袴で裾の口が廣い。赤大口・前張の大口は公家衆裝束に用ゐられた。武家で直垂のとき用ひたのは、能樂の時に用ひる大口のやうで裁縫少しかはつてゐる。

おほぐれ　恰好こそは大ぐれなれ、昨日今日の前髮を姉というても大事ない(今宮)

大塊の義。大柄(おほがら)。體格の巨大なこと。

***おほげさ**　源氏右兵衞佐殿の御手に掛つて成佛せい、さあお慰みに大袈裟を遊ばせ(冷泉節)

〔大袈裟〕左肩から橫腹(胸骨より僅に下部)にかけて斜に、袈裟をかけた如くに斬下げること。試斬に大袈裟・小袈裟の法式があれど、それまで書くには及ぶまい。

おほげば　大下馬の道具止、四尺四面の立石えいやつと引起し(女夫池)

〔大下馬〕下馬の標に置いた大石、また木のもある。

おぼこ　その器量のよさおぼこさ(夕霧)　田舍生れのおぼこにも、父の乘りたる便船の(歌念佛)　彥七なほも心浮れ、其おぼこながなほうまし・そさまを手に入れん爲(女楠)

「うぶこ」(初子)の轉訛で、うぶな子の義。初心、世慣れないで幼いこと。

おほさかじゆんれい　(曾根崎)

〔大阪巡禮〕地名部「おほさかさんじふさんしよ」を見よ。

おほさび　この童(わつぱ)が着ようずる烏帽子は大鏽の額を荒らかに(烏帽子折)

〔大鏽〕「さび」は烏帽子の皺のことである。大

おやぞん　搦手の明けずの門・乘越す壁の塀瓦・踏留め踏締め滑るは足のうら若き、心も親ぞんがにはり者(國性爺後日)　主あしらひの無念さも、それなりけりの親の孫、父川文入道病死あり(聖德太子)　天晴武功の親孫と、母は悦び限りなし(栬狩)

〔親孫〕孫は後繼の意。轉じて嗜好性癖などの遺傳をいふ。親孫とは嗜好性癖など親の遺傳を襲ふこと。「親の孫」とあるは親の後繼たるに恥ぢぬことの意。「そんづく」をも見よ。毛吹草に、「聲よきは親ぞんなれや郭公」。「武功の親孫」とは、武功ある親の名を恥しめない子孫の意。

お八つの太鼓　早明方のお八つの太鼓の聲は高田の寺(丹波與作)

太鼓を打つて八つ時を知らせたので、晝夜二回ある。晝は未の刻(今の午後二時頃)、夜は丑の刻(今の午前二時頃)。

おやつぶ　醒井の親粒もまだ入れてやるまいな(女腹切)

〔親粒〕鮫皮の脊通りの眞中筋を粒所と稱し、粒所の上方(頭の方)の最も大きな粒を一つ粒とも親粒とも云ふ。鮫皮は粒の大きなのを貴ぶので、親粒のない皮には他の鮫の大粒を塡込んだものである。これを親粒を入れる云ふ。その入れ方に二法あつて、糊を附けて塡込むのを入と云ひ、糊で貼らないで絲にて繫入れるのを生入と云ふ。稻葉通龍撰、鮫皮精義に、「この入れ生れの見樣を一概に心得ては見誤る事あるべし。少しにても疑はしき所あらば、功者の人に質して鑑定を精しくすべし。殊に京大阪は沙皮細工人上手にて、各其巧みを競ふが故に、目利者と許さるゝ程の人にても得ては見損ずる事あり。これによりて入れ生れの事は水講合にて求むる程確かなるはなし」

おやま　俗體ながら數度のお山、院號請けたる若手の先達(女殺)

〔御山〕大和の大峰山を云ひ、山上が嶽とも稱し、海拔五千二百餘尺、十津川の東に當り、絶頂に藏王堂ありて藏王權現を安置し、其他峰中幾多の靈場がある。修驗道の山伏が、數度も大峰に峰入し、苦修を積んだ者は何院など院號を請けて法印と稱するのである。

***おやま**　いつそおやまに宗旨をかへ、好色修行と志し(女楠)　田地を賣つて買ふ故に、それでおやまをよれといふ(三枚繪)　今の世までもみめよき女をおやまといふも、此香久山の謂れなるべし(會稽山)　おやまぐるひで酒やら何やら過ぐるゆゑ(女腹切)　それに染みたる風俗は、いかなる家にも走り出で、お山けんじと目をつける(淀鯉)

〔御山〕妓女。寛文以前からみめふりよき女のあだなとして用ひられ、上は松・天職から下は汐・影・月などに至るまで、總て色茶屋の勤女の總稱で、上方詞である。下位の遊女はともあれ、上位の遊女をおやまと呼ぶは、露骨に云ふ意味を含みて賤しめた氣味がある。おやまの名義に就いては諸說ある。本朝世事談綺(菊岡房行撰)卷之三に、「おやま。小山次郎三郎と云ふもの女の人形をよくつかふ、遊女傾城の類をおやまと云ふにより、これをおやま人形といふ」、嬉遊笑覽に、この記事を紛はしい書きやうだと云うて、「思ふに上方にて遊女をおやまといふによりて稱へしならん。(竹豐故事に、おやま次郎三郎此道の達人なり。京都には貞享元祿の頃おやま五郎兵衞・同五郎右衞門大・藏善右衞門などありと云へり、次郎三郎が弟子なるべし)　但し歌舞伎にて女形に云ふは後の事と見えて、そのかみは女形太夫くわんやがたは見ゆれど、おやまの名なし。(おやまは何の義にか。小野蘭風が妻女郎花になりたる故事は男山に名高ければ、艶色の義をとりていふ歟。又さまでもあらず唯女人形の名なるべし。京都賣色に山猫と稱するよりの名にはあらじ)おやまは人形の名なり。一說に思へらく、眉墨を付くること遠山の如くす、これを以て名づく。今妓婦の通稱となるといへり。延寶八年次郎三郎人形上覽あり。おやま二郎三郎なるべし」。

「御山狂」とは、遊女の色香に迷うて、遊興にうつつをぬかすこと。

「御山見じ」とは御山見物、卽ち遊女を見物すること。「見じ」は「けんぞ」の轉であらう。源氏物語・竹河の卷に、「侍從の君けんぞし給ふとて近くさぶらひ給ふに」。古今著聞集・卷十六、興言利口の條に、「孝道入道仁和寺の家にて、ある人と雙六をうちけるを、隣りにある越前房といふ僧來りて、見所すとて樣樣のさかしらをしけるを、にくしにくしと思ひけれども、物もいはでうちゐたりけるに」。俚言集覽に見所を見物と解してある。

***おやまぶ**　なうお山ぶ、世に酒ほどの樂しみなし(酒呑童子枕言葉)

「おやまぶし」(御山伏)の略。修驗道の山伏であつて、護摩を焚き呪文を唱へて祈禱をなす優婆塞で、天台宗に屬する者は有髮、眞言宗のは僧形をしてゐる。鹽藏祕策に、「山伏は役の行者を祖とす、役の行者は小角と號し文武帝の時の人、この道を修驗道と號す、山居して難行苦行するを以て業とす」。

おゆどの　由留木殿のお湯殿子(丹波與作)

〔御湯殿〕松屋筆記卷三十八に、「御湯殿＝禁中の御湯殿は浴殿に限りたる名にあらず、浴殿の外に男末といふ所あり、そは主上の陰の御膳を調る所也、御茶の湯など常に沸したる所なれば御湯殿といふ也」と見えてゐる。大名などにも用ひられた。「お湯殿子」とは、お茶の湯など沸かす間に奉仕する女に手がかつて生れた子である。

***およる**　まだおよりも遊ばさず(壽門松)　案じて一日もおよらず(生玉)

「御夜」を動詞に活かした語。おやすみ(御寢)になる。「おより」は轉成名詞。

***おら**　おららも今日明日は精進ぢや(娥)　おらが若い時や腕になま傷絶えなんだ(關八州)

下俗の自稱代名詞。おれ。狂言・つたふ山伏に、「なんのかのとおつしやれても、おらが晝飯はよそへずい」。

おらんだろ　今度の御船には阿蘭陀艪を立て申すべし(最明寺殿)

〔阿蘭陀艪〕艫邊に艪を立違へ傍舵を入れ、何方へも廻し易くした艪。「おらんだ」は新奇といふ程の意であつて、西鶴を「おらんだ西鶴」といつたのもこの意であらう。

おりいろ　おり色の指貫(三世相)

〔織色〕經緯ともに絲を染めて後に織つた織物の色を云ひ、染色の對。盲縞。喜田川季莊撰、近世風俗志・第十七編・織染に、「織色。盲縞、京坂にて織色と云、江戸にては淺黄を織色といふ、紺をめくら縞と云ふ、紺淺葱ともに經緯とも絲を染めて後に織るを云ふ」。

おりがさね　織重の錦の帶(持統天皇)

〔織重〕二重織。

***おりない**　むさと前垂奉公などに出す物ではおりない(大經師)　火の嫌ひな證據・脊に身柱の痕もおりない(浦島)　すはといはば刄鐵を鳴

たり。歡喜身に餘り宅にかへる折から、初春の月色吉人千金にもかへじといひけんもかかる時なやと、行く行くふと此染を工夫し染出す。世間甚賞して大きに利を得て富貴す云々」

おほわたし　内かけ外かけ大わたし鴫の羽がへし（井筒）

〔大渡〕相撲の手の名。上手に敵手の首を抱へ、差手に力をこめて敵手を引付けながら、腰に力を入れ掩ひ被つて倒す手を云ふ。

***おほわらは**　和藤内もおほ童、虎も半分毛をむしられ（國性爺）三保谷今は叶はじと、大童に戰ひ惱まされ（吉野忠信）女の働甲斐もなく、散散に斬立てられ、吉祥天も大童に戰ひて（釋迦）

〔大童〕大なる童形、卽ち頭髮を振亂したこと。

***おます**　地侍の身の上過分の價は心に任せず、何れもの骨も偸まず、酒手程はおませう（浦島）二人の衆にも酒おませ（博多）

「おまゐらす」（御參）の略。差上げる（進上す。（別に「おあります」の略で、御座りますの意をもなす）。

おむくむく　おきさばかりが女房か、あの様な洒落者よりおむくむくむくの手入らずを抱かせうぞ（今宮）

「お」は接頭語「御」である。「むくむく」は肥えふくらんださま。むつくり。肥えて肉付のよきをいふ。

おむす　おむすが着物(きるもの)にありあはせた緞子三本（博多）

「おむすめ」（御娘）の略。

***おめもじ**　御用とは何ならん、おめもじ様にと夕顔の、庭の飛石すな（嫗山姥）

〔御目文字〕御目(おめ)に懸(か)るの文字詞(もじことば)。文字詞(もじことば)は、足利時代の末期朝廷式微にして供御のもの備はらない爲に、女官等その名を呼ぶを忌みて、何文字(なにもじ)という隱語から起つたと云ふ。

おもうし　今日のおもうしも麁相程御意に入る（宵庚申）

「おもよほし」（御催）の訛略。おもてなし。饗應。

***おもかぢ**　よせくるくる波もよせくる、おもかぢとりかぢ拍子そろへてさ（女楠）おもなげにしておもかぢや、やうやう陸にぞ上りける（小栗判官）

〔面舵〕舵柄を左に取る事。左舵を取れば舳(へさき)右に向く。和漢船用集に、「左舵(おもかぢ)」と書いて「おもかぢ」と傍訓してある。左舵は右舵(とりかぢ)の對。

***おもざし**　見れば面ざし顏のかかり、若年の昔勘當せし我が子の小山田太郎高家に似たり（女楠）

〔面差〕顏容。おもかげ。

***おもだかをどし**　澤瀉縅の腹卷（鎌田）

〔澤瀉縅〕袖や草摺を地と異る色絲、或は種々の色絲をまじへて杉形に縅し、その形が澤瀉の葉のやうになつてゐるより云ふ。

おもちづつ　御持筒の鐵砲大將百五十石取つた人（女腹切）

〔御持筒〕江戶時代に鐵砲組の武士の稱。

***おもづら**　鰐香背の臣一文字に駈來り、轡頭取つて引留め（振袖始）

〔轡頭〕馬の頭から轡にかけて結んだ飾り紐。おもがい。倭名抄に、「唐韻云龓。音籠、漢語抄云、轡頭、於毛都良。轡頭也、羈、音基、馬絡頭也、今案絡頭卽轡頭也」。

おもてこじやう　「こじやう」を見よ。

***おもてぶせ**　若し此里には居ぬことかと尋ねるも面伏せ、聞かれば心落着かず（酒呑童子）

〔面伏〕不面目。

***おもとびと**　内侍命婦のおもとびと（栬狩）

〔御許人〕御許近く仕へる人。侍者。侍女。

***おもひぐさ**　吹きて亂るる薄煙、空に消えてはこれもまた、行方も知らぬ思草（曾根崎）相合ぎせる思草、思ひし甲斐もなつの蟬（丹波與作）

〔思草〕煙草の異名。秉燭譚に、「本草洞詮といふ書新に渡り、その九卷に煙草を出す。曰く、烟草一名相思草、言ニ人食レ之則時々思想不レ能レ離也と、……唐詩紀の内、李白が詩に相思如ニ烟草一、歷亂無ニ冬春一といへり。相思草と名づくるはこれより出づるにや、偶然に符號せるにや。李が詩は本より煙と草とのこと也」。

おもひのたま　ありそ海よりなほ深き、龍女が戀の誠の珠、思ひの珠・奇縁の珠、通ふ心の玉手箱（松風）

〔思珠〕新拾遺集・戀部に、「人知れぬおもひの珠の緒絶えなば、何してあはぬ歎をとらまし」とありて、おもひの珠は念珠を云ふ。こゝの文は、思ひの魂にかけたのである。

***おもひば**　鳥類ながらともなきに泣死せし此羽も、夫婦が中のかたみぞと持ちし片羽は思羽の（用明天皇）雉子の風切思羽や、思の數を一つと二た三い四う（雪女）

〔思羽〕鴛鴦・鴨・雉子などの尾の兩脇にある銀杏葉形の羽。

おもひばか　必らず妻子ある人と末の約束せぬ事ぞ、男の間男(まをとこ)同前にて思ひばかいかぬものぞと（重井筒）

「思ひ」といふ語に、はかどる意の「果(はか)」が附いて、「思ひばか」といふ複合語になつたのである。思ふやうにはかどること。西鶴織留・卷三に、「石車を銀にしてほしやと願ふに、思ひばかゆかずして自然ととまらねばならぬ首尾になつて」。杉楊子（享保五年刊）卷一に、「一生思ひばかもゆかず」。「はか」の條をも見よ。

***おもや**　（酒呑童子）（生玉）

〔母屋〕「おも」は主である。「おも屋」は主室・本屋の義。本家。

***おもゆ**　今朝はおもゆばつかりで、何も喉が通らぬ（氷朔日）

「おものゆ」（御食物湯）の略。飯を炊いだ汁。

おやこ　大身の武家に親子もあるぞいの（夕霧）重れ〳〵の緣者親子中（天網島）

〔親子〕親戚の意。俚言集覽に「武藏の忍のあたり親類を親子といふ、伊勢にてもしかいへり」とあれど、他地方でもいふ。

おやしきやく　此前大阪お屋敷役の時、新町通ひに夕霧と云ふ太夫に馴染(なじみ)をかけ（夕霧）

〔御屋敷役〕藏屋敷の役人。德川時代に諸藩主や幕府麾下の士が大阪に所有してゐた邸宅を藏屋敷といひ、領地の産物を販賣した所で、領主から定詰又は一年交替の役人を置いた、この役人を留守居役と稱した。

***おやじやびと**　耻かかせて意見せよと親じや人の遺言か（淀鯉）

〔親者人〕親にてある人。此語もと「親ぢや人」の義であらう。親を親者人、母を母者人、兄を兄者人などいふこと、封建時代に武士の間に行はれ、町人の間にも用ゐられた。

おんじやる 「おんぢやる」を見よ。

おんぞうゑぐ 「をんぞうゑぐ」を見よ。

おんぞろ 化物ならばおんぞろか、たとひ誠の人間にても手練を見よと、太刀さしかざし(賀古教信) 「おにぞろ」(鬼候)の撥音訛。鬼で候の義。「ぞろ」は「節季ぞろ」「又ぞろ」などの「ぞろ」に同じ。

おんたらし 抑も甚目と申すことは、天竺のおんたらし、我が日の本の天の香具山の黄櫨の木(天鼓) 「おんとらし」(御執)の轉。御弓。萬葉集・巻一に、「夕庭伊緣立之御執乃梓弓之奈加弭乃」。平家物語・巻十一、弓ながしの條に、「御たらしなりと申すとも」。

***おんぢやる** 釣屋形にぶち乘つて、一つ買をもした者でおんぢやり申したさ(加増曾我) 「おぢやる」に撥音「ん」の増加した語。「おぢやる」を見よ。

***おんでもない** 六道の辻にて必ず巡り逢はうぞや、おおおんでもないこと、たとひ畜生界に落ち蟲けらに生るとも、同じ蟲に生れうと思ひつめたが(今宮) もとのやうに懇にかはゆがつて下さろか、おんでもない事、女と緣さへ切つたらば(萬年草) 當然である。勿論である。言ふまでもない。按じるに、「おん」は「恩がまし」「恩がらす」などいふ恩であつて、「おんでもない」は即ち「恩でも無い」の義である。この詞、狂言・笠の下などにも見えてゐる。

おんでん 御領私領隱田押領寺社盜賊等までも、現非を判ち治めんと(佐々木) 〔隱田〕輸租田をごまかしかくして課税を避けた田地。和訓栞に「おんでん=庭訓往來に隱田と見ゆ、田畠を隱し置をいふ」。隱田といふ語は類聚國史、東鑑などにも見えてゐる。

おんと 「をんと」を見よ。

***おんども** おんどもが二十七の年薩摩者と喧嘩した話(博多) 「おれども」の長崎國訛。吾吾。この語現今も長崎地方で用ゐられてゐる。熊本地方では「おどん」、鹿兒島地方では「おいどん」といふ。

***おんぼう** うぬが縕袍、腰に指いた赤鰯も早く此處へまげ出せ(嫗山姥) 〔縕袍〕縕はからむしの綿入を云ひ、袍は衣のなかわたあるものを云ふ。縕袍は即ち綿入の服であつて、衣の賤しきもの。論語・子罕篇に、「衣二敝縕袍一」。

***おんまはす** わり立ておんまはし、火水になれとぞ戰ひける(女楠) 割立ておん廻し、無二無三に斬入れば(國性爺) 蜘蛛手かくなわ十文字、割立ておんまはし、さんざんに斬立てられ(反魂香) 「おひまはす」(追廻)の訛。「ま」が鼻にかゝる音である爲に、その上の「ひ」が鼻聲「ん」になつたのである。

***おんやうけ** 陰陽家には、せんきゆうの蛙息を吐いて虹となると沙汰せり(蛙合戰) 〔陰陽家〕古くは「おんみやうけ」と讀んである。中古陰陽寮に出仕し、天文暦數のことを掌り、陰陽五行の理によつて吉凶を占ひ、災禍などを祈禳する者で、陰陽師ともいふ。

***おんら** おんらが在所はの(博多) 「おれら」(己等)の長崎國訛。「おれども」を「おんども」といふと同じ言方である。

か

***が** お年寄の我が強く(大經師) 親がかくまふと聞えては、さきに我が立つて免したうても免されぬ(大經師) 菜も男の我(曾根崎) おのれ重ねて去られたらば、顏も見るまじ物言ふまじとの我もありしが(宵庚申) 〔我〕我意。意地張。

***かい** 我はすなはち摩訶迦葉戒授け申さん(釋迦) 〔戒〕制禁の義。戒は防非止惡の力あつて、これに止持と作持とある。この二持戒を行ずるについて五戒・八戒・十戒などある。「戒授く」とは、五戒・八戒・十戒等の戒律を佛弟子・信者の境遇に應じて、その何れかを授けるを云

かい 「かひ」を見よ。

がい 諏訪へ踊見がい行く行違ひに(博多) 「がてら」または「に」の意にいふ長崎國訛で、現今も用ゐられてゐる。熊本では「見ぎやあ」といふ。(これと別に「がいに」といふがある。「がいに」を見よ)

***かいえき** 殿樣のお耳に立てばよい仕合で御改易(夕霧) 御機嫌に違ひ、改易仰付けらるるとて御恨み候まじ(反魂香) 〔改易〕徳川時代に武士の受ける刑であつて、族籍を除き家祿を召上げられるもので、切腹よりは輕く蟄居よりは重い。

かいがね おしつけの外れよりかいがねかけて斬込まれ(世繼曾我) 〔胛〕兩脇の背の肩の下に骨の高くなれる所。倭名抄に、「胛。音甲、加以加禰、今俗謂呼二加以加良保禰一肩之下也」。

***がいき** がいきを祈るは風の宮(女殺) 〔咳氣〕風邪。饅頭屋本・節用集に「咳氣」。今も福井縣遠敷郡あたりでは、風邪を「がいき」と云ふ。

***かいぎやう** 此母が戒行の拙きゆゑと(嫗山姥) 妻二人子二人の命を取つて忠孝の道を立つるあさましさ、恩愛慈悲の道缺けて、心に任せぬ戒行やと、顏を見てはわつと泣き(大織冠) 〔戒行〕一旦戒體を發得した者は、能くその戒體に隨順して行ひを正しうすること。翻譯名義集に、「戒行清高、學業優贍」。

***かいぐ** 馬上の武士の袷上下皆具まで(女殺) 小栗御覽じ、遂に召されぬ馬ならば鞍かいぐも候はじ、躶脊に乘つて見せ申さん(小栗判官) 馬鞍皆具の綺羅飾り(百日曾我) 〔皆具〕馬を粧ふ一切の具。

***かいくれ** 朱雀の御所の邊を通れば、貴賤に限らず男たる者かいくれに行方なく、二たび影も見ることなし(女護島) 〔搔暮〕搔き暮れて見えぬ義。下打消に應じる副詞。全く。まるで。

かいげ 百由旬の血の池を鐵のかい

すお歴々にも負けることはおりないさ(鑓權三)
「おありない」(御有無)の略。ありませぬ。ござらぬ。この語は、能狂言や、戯言養氣集(元和年間の古活字版)の中にも見えてゐる。西澤一風撰・伊達髪五人男(寶永四年刊)巻之二に、「これ庄九郎樣、このお客に御用あらばわし承らん。いやこなたに用は何にもおりない」。俚言集覽に、「をりない。御座ないをヲリナイと云、居ないの義なるべし、能狂言によくいふ言也、醒睡笑に見ゆ」。

***おりは** 鯉も瀧へのぼり詰め、今ではどうもおりはがない(淀鯉) 駕籠なはやなりはの乞目さぶ六の十八九なるかほよ花(曾根崎)
〔下端〕おりぎは。曾根崎心中のこゝの文は、駕籠を下端に雙六の折羽をいひかけたのである。「をりは」はその條を見よ。

***おりや** 首の締めやうなほ知らず、おりや如何して死なうぞと、獨言して泣き給ふ(賀古教信)
「おれ(己)は」の訛。

おりやう
「おれう」を見よ。

***おりゐ** 京のつかさは關白殿、おりゐのみかど日のもくだいり(大經師) おりゐの後は例もあり、在位の身にてまさなき事(酒呑童子)
〔下位〕天皇御位を退き給ふこと。

おりゐの衣 乘物をおりゐの衣たち寄つて(會稽山) 梅若御見舞四枚肩、おりゐの衣長羽織(夕霧)
乘物を降り居を織りにいひかけたのである。謠曲・熊野に、「こゝより花車、おりゐの衣はりま潟」。

***おれう** 私は今熊野貞月と申す比丘尼のおれう、二十三四の弟子二人勸進に出で(酒呑童子)
「おれうにん」(御寮人)の略。比丘尼。尼。狂言・比丘貞に、「この御れうを皆おあんおあんと仰せらるゝ程に」。

***おれ・それ** 人のおれそれ世の中の、義理順義を知るが最期貧乏神がのりうつる(酒呑童子) 擔ひし棒のおれそれも、御免を受けて隔てなく(井筒)
〔己・某〕己であるとか某であるとか、彼此善惡の取沙汰。

***おろおろ** おろおろ涙にくれければ(嫗山姥) おろおろ涙の腹立聲(生玉)
朧々の義、うるむ狀にいふ。「おろおろ涙」は涙に目のうるむこと。佛母摩耶山開帳(元祿六年刊脚本)に、「清松はおろおろと歎けば」とあるも、泣いて聲のうるむ狀をいうたのである。「うろ覺え」「おろ覺え」「うろうろ」「おろおろ」などいふ「うろ」「おろ」は同じ意に用ゐてある。

***おろか** 世帶廻り商賣事・何に愚はなけれども(冥途飛脚) あらおろかや、忠信の御事は日の下に於てかくれなし(凱陣八島) 虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎ(國性爺)
「おろそか」(疎)の略。愚と書くは當字である。

おろかしい あゝおろかしい事いふ人ぢや(大經師)
「おろか」(愚)を形容詞にした語。ばからしい。あはうらしい。

おろしあゆみ おろし歩みの道中は、花の立木の其儘に、ぬめり出でたる如くなり(反魂香)
〔下步〕足を踏みおろすやうに、どつしどつしと徐に步むこと。「くりあゆみ」をも見よ。

***おろしぐすり** こはいかに、おろし藥を飲ませしにかへつて平産しけるは(用明天皇)
「こおろしぐすり」(墮胎藥)の略。

***おろせ** おろせ雇うて草鞋がけ(女腹切) 九軒のおろせが揚錢の殘りも今日はすつきりと取つて(二枚繪)
〔卸〕駕籠舁。色町通ひの駕籠舁は、遊女屋とは特別の懇意があつたので、座敷に出て客をとりもつたり、客の遊興費時借の保證人になつたり、置屋や揚屋や遊女などの使となつて用きゝをする場合もあつた。生玉心中に、「これ駕籠の衆頼みます、私は雨氣で頭痛がして休んでゐると間に合せ、盃の相手になつて、日頃の手並にいきつがして下んせ」と見え、心中二枚繪草紙に、「駕籠の長介來り、私が請合の菱屋の花代、津の國屋の料理代、合せて三百四十五匁六分、扨も扨もせがまれます」とあるなどは、これ等の消息を語るものである。駕籠舁を卸といふ名義に就いては詳でない。一目千軒(寶暦七年刊)に、「中頃名高き大盡ありて女郎になづみ通ふこと繁く、これが爲に駕の者三人抱置き日毎に赴く。或時出口にて駕を卸して、是より步行にてお出遊ばせと駕舁言ひければ、大盡大きに氣色を損じ、行けと言はゞ何處までも行くべし、卸せと言はゞ卸せよと言ひしより、駕舁く者を卸と異名するとなり」とあれど、附會の說で信ずるに足らない。嬉遊笑覽に、「おろせの名義いとをかし。按ずるに卸は駕籠に乘るは侈奢の至りなれば、駕籠舁と稱ふることを憚つて異名を呼びしものなり。字書に舍レ車解レ馬脫レ衣解レ甲皆曰レ卸、今舟人出載亦曰レ卸など見えたり。總て積載せたる物を下す事なれば、唯荷物のやうにおぼめかしいへるにこそ」とある說もいかゞ。野良虫(萬治二年刊)の序文に、「芝居終れば東山にともなひ、あんだ乘物に戴せられて、はいはいおろせおろせと勇み進む」と見えてゐれば、おろせは駕籠舁の一種の掛聲であつたのが、駕籠舁をいふことになつたのであらう。

おゑさま
「おへさま」を見よ。

おんくはう 只今某此濱にて鳴の鳥と蛤、稀代の業を見受けしより、軍法のおんくはうを悟り開いて候(國性爺)
「おんこう」を見よ。

おんこう 光照歸朝安平にて、易のおんこうを傳へ探つて末書殘らず取持たせ急ぎ參内申さるゝ(以呂波)
前條の「おんくはう」と同じ語であつて、「うんあう」(蘊奥)を誤つたのであらう。蘊は溫・藴などと字形が似てゐるので、「おん」と讀み誤り、奥は草書淵海に、奥・興の草體相酷似し、饅頭屋本・節用集に、「一興」など見えてゐるやうに、興に似てゐるところから誤つたのであらう。この類の誤は「きんあん」(その條を見よ)でも見られる。さて巣林子作を通じて、「うんあう」(蘊奥)と明記してあるのが見當らぬのも參考になるであらう。(後世の活版本は勝手に改めてゐるから參考にならないのである。)蘊奥はおくふかきこと。玉篇に、「蘊。積也、聚也、蓄也」。

おんざ
「をんざ」を見よ。

おんざうし
「ざうし」を見よ。

頃は尾花なみよる秋の夕暮、とあるによれるにて、直にかひよと呼ぶべきを音便にてかいろと呼びし者なるべし、假初なる事も博く物に渉らざれば辨得る事はなり難きことなるに、況んや經傳の幽賾をや」と見えてゐる。(古今集・雜體部、きのよしひとの歌に、「あきの野に妻なき鹿の年を經てなぞわが戀のかひよとぞなく」とありて、鹿の鳴聲を古くは「かひよ」といつたものである。)

***かいらぎ** 若衆出立のめせき笠、金鰐かいらぎくわんぬきざして(女護島)

〔梅花鮫〕合類節用集に、「梅華皮(かいらぎ)」とある。地粒(ぢつぶ)總てあらき鮫皮をいひ、刀劔の柄を卷くに用ゐる。黑川道祐撰、雍州府志・七、土產門下・服器部に、「凡鮫魚皮、阿蘭人齎ニ來長崎港一、京師二條商賈行買レ之、歸ニ二條店一、浸レ水數日、而纖細割レ竹尺許、以ニ麻苧一結ニ束之一、是稱ニ編竹(ささら)一、以レ是洗ニ鮫皮於水中一、則其色潔白、其礫砢狀大而其粧相齊者粧ニ刀柄一、是謂ニ柄鮫一、又粧間交ニ花點狀一者謂ニ梅花鮫(かいらぎ)一」。

かいろ

「かいらう」を見よ。

かいをつくる

「かひをつくる」を見よ。

かう 親方賭博うち、よみとかうとに屋財家財負けほうけ(大織冠) 斯くてかうの場に至りて座中を見れば(大織冠)

羅句語(Co.) 合の義、加留多(かるた)の繪紋の同類を合すをいふ。黑川道祐撰、雍州府志・七、土產門下・賀留多の條に、「其玩レ之(加留多)之法、其始三人或五人圍坐、其內一人左手取ニ持賀留多一、以ニ裏面一上下混雜不レ見ニ其畫一、配分而置ニ各々之前一、是謂レ切ニ賀留多一、其爲レ戲謂レ打ニ賀留多一、然後人々所レ得之札數ニ一二三次第一、早拂ニ聚所レ待之札一、是爲レ勝、是謂レ讀、倭俗毎專算レ之謂レ讀、又互所レ得之札、合ニ其紋之同者一、其紋無ニ相同者一爲レ負、是謂レ合、言合ニ其紋一之義也、或又謂ニ加宇一」。

***かうい** 女子と生れし此因果は女御更衣になるとても(夕霧)

〔更衣〕昔時後宮の女官にて、天子の御衣を更へることを司つたのであるが、後には御寢に侍したこともある、位は女御の下である。

***かうがいわげ** はれ元結のかうがいわげ二十を頭に十人許り(嵯峨天皇)

〔笄髷〕笄のめぐりに髮を卷付けた結方(ゆひかた)。女用訓蒙圖彙(貞享四年刊)卷三に、「笄髷は、下(さ)げ髮せし奉公人など其勤仕舞、うちうちの局などに入りくつろぎ、又は各自(おのがじし)打寄る頃、下(さ)げ髮は身持むづかしき故に、くるくると廻して笄にて假に締め置きたるなり、其樣面白しとて何時しか常の結ひ振になりたるなり、末の世には下(さ)げ髮せぬ人がらも、なべて笄髷にするなり、昔は遊女が下(さ)げ髮したるとかや」。「撥元結の笄髷」とは、金紙などの中に針金を入れて作つた元結の端の撥上がつた笄髷。


(女用訓蒙圖彙所載)
〔髷 笄〕

***かうかう** 流れにつれてかうかうと、間近く爰に鐘の聲(井筒) あれ寺寺の鐘の聲、かうかう斯(か)うして何時までか(天網島)

〔鏗々〕梵鐘の鳴る音の形容語。禮記・樂記篇に、「鐘聲鏗々以立レ號」。

かうがしやりになる

「かふがしやりになる」を見よ。

がうがわるい

「ごふがわるい」を見よ。

がうき 桛の立木をその儘に枝を打つて、科人のがう木の柱と定めらる(孕常盤)

〔拷木〕拷問するに縛り付ける木。源平盛衰記、成親以下召取らるゝ條に、「松浦太郞高俊拷木にかけて打責め、事の起りを尋ねけり」。

***がうぎ** がうぎがさつを仕つたらば曲事でおぢやんべい(丹波與作)

暴行。按じるに「がうぎ」は嗷議で、大勢を恃んで無理を言ひ張る意なるが、轉じて暴行の意になつたのであらう。自然居士(古淨瑠璃)第四に、「舟を離れぬものならばがうぎを致すが何と何と」。

かうくわう たたみかけて左の肩口、膏肓まですつぱと斬る(浦島)

〔膏肓〕心臟と膈膜との間をいふ。膏は心の下にある微脂を云ひ、肓は胸腹相隔つるところの薄膜を云ふ。左傳・成公十年の條に、「疾不レ可レ爲也、在ニ肓之上、膏之下一、攻レ之不レ可云々」。

***かうけ** 東(あづま)の高家入間殿より御養子分の約束にて(丹波與作)

〔高家〕武家の名族。職掌錄に、「高家。伊勢日光御名代、京都御使、並公家衆參向之節、諸事御用向司レ之」。文道の名家をもいふ。

がうさ がうさの袍(浦島)

〔絳紗〕赤き薄絹。

***がうざむらい** 官軍は鄕侍野武士を集めて御勢三百餘騎(井筒)

〔鄕侍〕土着の武士。

***かうざゑもん** 油のついでに油屋の女房殺、酒屋に仕替へて幸左衛門がするげな(女殺)

〔幸左衛門〕二代竹島幸左衛門をいふ。大阪の名優にして立役を勤め、位付上上吉に昇り、享保四年初春より大阪吉左衛門町(道頓堀)中座の座本となつた。役者金化粧(享保四年刊)立役之部に、「上々吉、竹島幸左衛門(座本)。先以て久振りにての座本、さぞおうれしうござんしよ、取分け顏見世の大當り、ほんに藝をなさるゝ所さへなかつた、おやぢさんの七年に太夫本致すとのお悅の口上、諸見物へよう當りました、拟藝評は皆さん御存知なれば今更いふも古い事、難波のたてもの、外につゞく人がないぞ云々」。

***がうざんぜ** (凱陣八島)

「とうはうにがうざんぜ」を見よ。

***かうし** 格子へお出でなされてより、去年の今日まで(夕霧) かうしへ出でしと聞きし故、よれ振見たう思ひしに(本領曾我) あんまりよそ


(人倫訓蒙圖彙所載)
〔格 子〕

が賑かさに、格子祝(かうしいはひ)に出ましたと言(いひ)すてて、二階へ上る體氣懸りな

げに汲みほせと責めらるる(三世相)　柄杓でもかいげでも泥水でも苦しうない(日本武尊)

〔搔笥〕小桶をいふ。海人藻芥に、「湯を汲み搔笥懸くる所へ添ニ左手ニ手に湯をそへて懸くるなり」。和訓栞に「かいげ＝或は杓をよめり。加賀に片手桶をいふ」。

かいげん　宗味が刻鐘の開眼、麁相な非時致します(寄庚申)　人の來ぬ間にあの蚊帳の開眼をせまいか(歌念佛)

〔開眼〕慧眼を開く義。佛像梵鐘などを調製して、これを奉事しようとする時に高僧を招いて安置の式を行ふ、これを開眼または開眼供養といふ。轉じて新調の器物などの使初をいふ。

***かいざん**　拜み願ふは今參る如來様御開山、佛に嘘はつかぬぞ(冥途飛脚)　大唐四百餘州の美人のかいざん、楊貴妃・虞氏君・西施・李夫人・王昭君も、そこらへそこらへ及びもない事(關八州)

〔開山〕寺院を創建し、または宗派を開いた高僧をいひ、轉じて何にても始めて基を開いたものを云ふ。

***かいしやく**　淡海公も手を放し、介錯申す人もなく、紫宸殿の階段を撫で探り、足をうけやうやうとして堂上ある(大織冠)　とてもの情けに御介錯早う早うと苦しむ(薩摩歌)

〔介錯〕介抱すること。切腹者の傍に侍して首を刎ねてやること。

***かいせいらく**　波の鼓の海せいらく、西の海の青きが原の波間より(加増曾我)

〔海青樂〕黃鐘調の樂。こゝの文は、謠曲・白樂天によつたものである。「山影のうつるか云々」を見よ。

***かいぞへ**　其外かいぞへ衣被、長刀傘、ざんざめいたる供先(栬狩)

〔介添〕附添。附添人。和訓栞に「かいぞへ。搔添の義、後世の詞也」。

***かいだて**　砦砦に垣楯築き、要害嶮岨を帶びたりし(國性爺)

〔垣楯〕楯を築きて垣とせるもの。

***かいぢやうゑ**　あら面白の山水や、峰に戒定惠の梢を並べ(釋迦)

〔戒定惠〕佛者の修むべき持戒・禪定・智惠の三學をいふ。これを三藏に配すれば、律藏は戒學、經藏は定學、論藏は慧學である。砂石集に、「僧といふは戒定惠の三學を宗として」。

***がいぢん**　御味方大きに勝利を得凱陣仕り(蛙合戰)

〔凱陣〕戰に勝つて我が陣營に歸ること。

かいと　こりや祠經、朝比奈が元服祝儀振舞の門に立ち、喚き騷ぐ法知らず、汝はかいとか非人めか(加增曾我)

「かきと」(垣外)の音便。住居なく垣外に起臥する者、即ち乞食をいふ。越谷秀實編、物類稱呼に「物もらひ。京にてバンタといひ、又ヒデンジと云、大坂にて(垣外)カイトと云ふ」。

***かいどり**　步むとすれどかいどりの、身癖顏癖引包む(雪女)

〔搔取〕裃衣。打掛。近古、婦人禮服の一で、帶をした上に打掛けて着る小袖。

***がいに**　がいに目出度い此方の御壽命語るべいなら、鶴と龜とが何打食つて(雪女)　やあ、がいになまぬるつこい番太めと(扇八景)　がいに目がまひさうな(五人兄弟)

甚しう。夥しう。この語現今でも備中小田郡あたりで普通に用ゐられてゐる。俚言集覽に、「がい。又ゲエともいふ、物の多きを云ふ、ガイにつめたいなどいふ、異にと云ふ事歟、然ればゲエの方正に近し」。物類稱呼・五、言語部に、「伊豆駿河邊にはイカイとも又ガンカウとも云ふ、上野に野風と云ふ、陸奥にてデッカイ、仙臺にてオカルと云ふ、又ガイとも云ふ、(關東すべて云ふか)」。

がいに　言ひたいがいに言ひこめて死んでもまだ言ひたらぬか(卯月潤色)

「がひ」を見よ。

かいによさんぜん　界如三千の帆を揚げて諸法實相の追風を得(大覺)

〔界如三千〕天台の一念三千の觀法を云ふ。三千の諸法は十界と十如とよりなり、一界に各十界を具有し、それに各十如を具有し、それに各三種世間を具するが故に其數三千の法を成ず。

***かいびやく**　すはや御法もかいびやくの、ほうげいの聲告げ渡る(釋迦)　都の辰巳思立つ日を吉日とぞかいびやくある(蟬丸)

〔開白〕啓白また表白と同義であつて、法會を執行することを本尊に告白する義である。授戒會には初日に開白の式がある。披露。

がいぶん　涯分先づ鷹巢めを尋出し(栬狩)　法師が多年の修行もかやうの時のためぞかし、がいぶん祈つてかの女人をも助け(用明天皇)

〔涯分〕己が力の及ぶ限り。平治物語に、「涯分武略を廻し、禁闕無異なるやう成敗仕るべし」。謠曲・道成寺に、「あられしや、涯分舞をまひ候べし」。合類大節用集・言辭門に、「涯分。又云二隨分一」。

かいまみ　垣間見の念力や通じけん(松風)

〔垣間見〕のぞき見ること。

かいもちひ　神に供ふるかいもちひ(源義經)　いざ給へ、かいもちひめさせんと(兼好)

〔搔餅〕貞丈雜記に、今の牡丹餅のことだといひ、中島廣足は、そばがきのことだといひ、一說に、田舍の萩の餅のことだともいふ。徒然草・第二百三十六段に、「いざ給へ出雲拜みに、かいもちひめさせむ」。

かいもん　兵藤太が發心の一句のかいもんこれなりと(用明天皇)

〔戒文〕佛教にて戒律を記した文。

***かいらう**　あれ妻戀の牡鹿牝鹿小男鹿が焦れ焦れ、御影の森に鳴く、其かいらうの聲までも、我身の契り何時何時と(松風)　我は秋鹿妻を戀ひ、かいろと鳴くと知らせたや(歌念佛)　暮れぬ間に故鄉へ、かいろかいろと呼ぶ鹿の聲も(五人兄弟)　秋鹿が妻戀ひかねてかいろと鳴く(百合若)

秋は鹿の交尾期で、牡鹿が牝鹿を戀ひて鳴く。その牡鹿の鳴聲いかにもあはれげにカヒイヨの如く聞えるのを、「かいらう」(偕老)または「かいろ」にとりなした語である。「偕老」は五三二頁の條を見よ。燕居雜話・卷之一に、「俳優家にうたふ長唄といへる俚曲八朔梅といふが中に、かいろと啼くは小男鹿の妻に引かるゝ心からといへるを、わからぬまゝにかひよと啼くと唄ふべきを訛など云ふ人あり、僻言なり、こは藏玉集に、武藏野にかひよと鹿の鳴く

ば天上するといふ。

かうりん 「くわうりん」を見よ。

***かか** お淸は六つ中娘、かか樣ぶぶが呑みたい（女殺） 蜆川の天滿屋の初めとやらと腐合ひ、かかが姪を嫉ふよな（曾根崎） かかが出花の相場が何時三百目に極つた（孕常盤） あれは我等にあまえるの、腹立つ所がなほうまし、かか衆二階へ連れておぢや（女腹切）

〔嚊〕小兒が母を呼ぶ語である。轉じて、我妻を呼ぶに嚊といひ、また他家の主婦を親んで呼ぶにも用ゐる、但中流以下に用ゐられる語である。序に云、小兒は舌がよくまはらねば、一語の首音を躍らせて言ふのが多い。母を「かゝ」、父を「てゝ」、水を「ぶゞ」、神を「のゝ」、懷を「ほゝ」、寐を「ねゝ」、衣を「べゞ」、尿を「しゝ」、坐るを「とゞする」などはこの類の語で、これ等皆巢林子の文中に見える語である。

かが 加賀一匹旦那の名だいで買ひかかる（曾根崎）

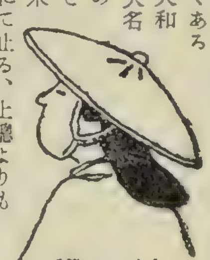
「かがぎぬ」（加賀絹）の略。加賀國から產出する絹で、羽二重の類。增補俚言集覽に「加賀絹＝加賀は古へより好き絹を出す、今も加賀羽二重は名物なり」。

***かかい** 其方の官加階某執奏申すべし（三世相）

〔加階〕位階を加へること。官位昇進。

***かががさ** ああどうかせう何とかが笠、お吉と見るより地獄の地藏（女殺） お墓へちよつと加賀笠に（薩摩歌）

〔加賀笠〕加賀菅笠ともいひ、菅笠の一種である、加賀國から產出したのを珍重したのでこの名がある。足新翁記に、「婦人の菅笠を被りしは延寶の頃より起りしなるべし、當時の人加賀の國より出るものを好みし故に、加賀笠と書けるもの多くある歟」。我衣に、「天和の比より加賀笠大名衆女のかむりものなり、前を竹にて止めたり、寶永末よりふちを針金にて止る、上總よりも出す、天和頃は内を菅にて半分ふきたり、正德より内一ぱいにふく、絹糸ぬひきれいなり」。



〔かゞ笠〕

かがかは あかうの胴にかがかは、くれ紅の調べを千鳥がけにかけさせ（雪女）

〔加賀革〕鼓を張る革で加賀はその名產地である。和漢三才圖會に鼓を云へる條に、「以二馬皮一張レ之、出二於賀州一皮最佳」とある。但し小鼓を張るには鹿皮を佳品とする。

かかずおはず 今は僅に秋の田や、かかずおはずに四人口、昔の烏帽子白丁より（兼好）

〔不缺不負〕事缺くことなく、また負債もせざる意で、何不足ないこと。

***かがすげがさ** びらり帽子に加賀菅笠、大振袖の後帶（卯月潤色）

〔加賀菅笠〕「かがゞさ」を見よ。

***かがせ** 月の入りより降る雨に、かがせの簑笠身に纏ひ（川中島）

「こがし」（焦）の義で、田畑を荒す猪・鹿の來ぬために、それらの獸の嫌ふ肉などを焦し燻べるよりいふ。（一說に鹿驚の義で、猪・鹿の嫌ふ肉などを燻べて令レ駭かしめるより云ふと）。轉じて、鳥獸を防ぐ爲に田畑に簑笠姿の藁人形を立てたものを「かゞせ」または「かゞし」（案山子）といふ。狂言・瓜盜人に、「今夜は某がかゞせになつてとらやう」。

かがぞめ 袂に殘る加賀染の、うつりやつさと散らし紋（融大臣）

〔加賀染〕加賀で染出した友禪のやうな染物。この文は、袂に殘る香を加賀染にいひかけたのである。「まづ初春の空色に云々」を見よ。

***かがち** 眼はかがち（振袖始）

かゞやく義で、ほゝづき（酸漿）の古名。

かかつしところ かかつし所へ百島は宮を奪ひ引返せば（用明天皇）

「かくありし所」が「かゝりし所」「かゝつし所」と變つた語。狂言・朝比奈に、「かゝつし所に御所のつは者に五十嵐の小文次と名乘つて」。

***かかつた** おねまへござる後付、なかしいやら憎いやら、かかつたことではござんせぬ（大經師） かかつた詮議ぢや御座んせん（加增曾我）

言葉に懸つたの略。口にかけて言はれた。

かがにきくざけ 加賀に菊酒、南都にかすりゐ、ゆどの山のつまがくれ、羽黑山の隣しらず、熊野山のほいほい酒、數多の名酒はたべ申したが（酒呑童子枕言葉）

〔加賀に菊酒〕周遊奇談に、「加賀の國金澤城下より一里餘離れてつるぎと云ふ町あり、こゝに加賀國一の宮とて白山の社あり、こゝに米屋といへる酒店にて造る名酒を菊酒と呼ぶなり」と見えてゐる。なほこゝの文に、「かすりゐ」とあるはその條を見よ。そのつぎにある「つまがくれ」は羽州湯殿山の行者がいうた酒の隱語。「隣知らず」は羽州羽黑山の行者が稱した酒の隱語。「ほいほい」もまた紀州熊野行者がいうた酒の隱語で、索引を見よ。

かがのごんぼ よね樣にごんぼはいかが、やあそれも大事か、かがのごんぼといふ事あり（淀鯉）

加賀に嚊をかけて、「加賀の牛蒡」と云うたのである。加賀は牛蒡の名產地で、加賀牛蒡といふ。萬歲歌の文句に、「大根蕪加賀の牛蒡けごんぼ」。「ごんぼ」をも見よ。

***かかへ** かかへを手繰り寄せ（天網島）

〔抱〕抱帶の略。次條を見よ。

***かかへおび** あさましや淺黃染、かかれとてやは抱帶（曾根崎）

〔抱帶〕細く絎けた婦女の腰帶であつて、貞享三四年頃から追々前で結ぶやうになつた。上方地方では抱帶の結びの端を長く垂したり、或は長く垂さない者もあつた。我衣に、「延寶の頃より紫縮緬などのしごきなど用ゐまして、さうして合褄の處をずいと高く引上げまして、其引上げた處が前へ垂れる樣にはしよります、其帶を抱へ帶と申します、成程たくし上げて其下を括りますから、手で抱へて居る樣な形です」。



〔抱帶（前にて結べり）〕



抱帶（後にて結べる）

（好色五人女所載）

***かがみ** それ鏡突抜け、まつかせと踏みつくれば、底も鏡もすつぽりと拔けたるを（鑓權三）

〔鏡〕樽の蓋をいひ、圓形で古鏡に似てゐるよりの名。

れば(重井筒) さもしい金に氣が觸れた見世女郎のあさましさと、世間の唱へ傍輩の掃部殿を始めとして、格子女郎衆の手前もあり(冥途飛脚)

〔格子〕遊里の置屋即ち女郎屋の表作(おもてづくり)は格子になつてゐるにより、女郎屋を格子といふ。「格子祝」とは、遊女が格子の内に出張つてゐても客無き時、客があればよいにと思うて近邊などを散歩すること。南水漫遊に、「倡家の女郎に格子祝といふ事をなすは、馴染の客も知る知らぬ客の呼出しもなくて、淋しき夜は近邊などをちよと歩けば、必ずその夜に客來るとて、往古の女郎はかゝる事をなしたりと見えて云々」。

「格子女郎」とは、格子の内に出張つて客を招く遊女で、太夫・天神よりも下位の者を云ひ、又は天神をいふこともある。西澤與志撰、御前義經記(正德二年刊)卷之一、傾城の因緣の條に、「天神は太夫より少し劣れり、譯名に三尺といふ、和名に梅といふ、唐讀に天職、俗語に中位とも、宗とも、むらとも、格子ともいふ」。

がうしや

「がうさ」(絳紗)を見よ。

がうじや

「ごうしや」(恒沙)を見よ。

かうじゆ・せいきん まうしやうせいしも面を恥ぢ、かうじゆせいきん袂を霑す(伊豆日記)

〔絳樹・青琴〕絳樹も青琴も共に支那上代の美女である。遊仙窟に、「絳樹・青琴對レ之羞死」とありて、註に、「絳樹古美女也、青琴古神女也」。

***かうしん** 一期連添ふ大事の男、すひがらにせまいと本女房さへ懸引する。跡構はずにあた見られぬ、庚申甲子一夜の間日(まび)もある事か、身が燃えかへると泣きわめく(大職冠) 來月の庚申も取越したいとの呟き(薩摩歌)

〔庚申〕この干支(えと)に當る日は房事を忌む、庚申の夜に男女交接して生れる子は盜人となるといふ俗傳がある。東海道名所記に、「庚申の夜に孕みたる子は遊魂の卦にあたる故に、成長(ひととな)りてぬすみをするなりといへり」。江島其磧撰、風流曲三味線(寶永年間刊)二之卷、長老樣の籤引出物の條に、「昔皇帝に素女といふ助州の教へて、庚申・甲子に交りを戒めしより、今に傳へて庚申の夜交り、其夜やどりし子は成人して盜人になるといひ傳へしは、猿猴になぞらへ手の長いといふ緣によりて、盜人に生るゝとは申傳ふれど、さらさらさうでなし、先づ庚申の夜にとまりし子、男子なれば慾の深き幇間と生れ、女なれば風呂屋者になれり、これ申の日に生るゝ故むしやうに掻付きたがる幇間持となり、又風呂屋の猿ほどによいかげんなる了簡、甲子にとまりし子、女子なれば清水坂稻荷前の遊女となりて、人を見かけて鼠鳴を致すか、さなくば寺方に御内儀樣になつて大黑と呼ばれぬ云々」。「かのえさる」をも見よ。

また庚申待の略。庚申の日年に六回あつて、青面金剛の緣日である。黑川道祐編・日次紀事(延寶年間成)・正月の條に、「六庚申夜亦設レ供二酒菓於青面金剛一、入レ夜賜二飲食於殿中男女一、則彼レ催二御遊一、諸家亦多有二斯儀一、俗間亦獻二七種菓一、供二雙瓶酒一而祭レ之、相傳庚申青面金剛之緣日也、故如レ此、朋友相聚、多喫二赤小豆粥一、宴遊到二鷄鳴一而止、是謂二庚申待一、此日詣二粟田口三猿堂及八坂庚申堂一、庚申堂天王寺所レ有爲レ本、凡一年中六庚申日、始終兩度特參詣多」。

かうじん 怒れる涙はらはらと鮫人が玉を貫けり(用明天皇)

〔鮫人〕人魚である。「鮫人が玉を貫く」とは、鮫人が玉の涙を流すをいふ。述異記・卷下に、「南海中有二鮫人室一、水居如レ魚、不レ廢二機織一、其眼泣則出レ珠」。戲曲・合浦に、「鮫人涙に玉をなして」。

かうたう 「こうたう」を見よ。

かうぢのはな びんび酒の麴の花、ちろちろ眼(め)にて立歸り(大經師) 瓢簞傾け注(つ)ぎかくろ、酒にはあらぬ麴の色、花の一歩のからから(生玉)

〔麴の花〕麴の黴(かび)。酒は麴で釀すが故に酒に醉へる顏色を「麴の花」といひ、また麴の花は眞白で、銀色であるから銀貨のことにいうたのである。

***かうのとの** 可憐の有樣や、かうの殿のましまして世が世ならば、供人よ馬よ輿よといふべきに(烏帽子折)

「かみのとの」(頭殿)の音便。源義朝は左馬頭であつたから頭殿といふ。

***かうばり** かうばりが強うていよいよ心が直らぬと(女殺)

正しくは「こうばり」(勾張)又は「かふばり」(甲張)であつて、强張と書くは當字。家などを支へ張る材をいひ轉じて剛愎であつて服從心なきこと。世話盡に「かふ張强うて家を倒す」。

かうばん 奥へ行き香盤の火を取つて來ませうと(一心二河白道)

〔香盤〕灰に數條の連なれる溝を作り、抹香を塡して薫らし置く方形の香爐。

かうぶし 町人參や香ぶし方の奉公は不案内(薩摩歌) 香附子などにて血を開き(冷泉節)


〔しぶうか〕

「香附子」はますげを云ひ、その地下部は藥用になる。大和本草・六・藥に、「香附子。古昔要藥なることを不レ知して不レ用、後世には用レ之て要藥とす」。和漢三才圖會に、「凡氣病之總司、女科之仙藥也、能推レ陳致レ新」。「香ぶし方の奉公」は、香附子に武士をかけていふたのである。

***かうぶんぼく** 抑此梅は唐の帝の御宇、天下文學盛んにして萬民太平を稱へし時、諸木に勝れ花の色香を增したる故好文木と名付け(天神記)

〔好文木〕梅の異名。十訓抄、可レ存二忠信廉直旨一事の條に、「唐國の帝文を好み給ひければ開き、學問怠り給へば散りしをれける梅ありけり、好文木とぞいひける」。人見幽軒の東見記・上卷に、「梅云二好文木一故事、在二晋起居註一、晋武好レ文則梅開、廢レ學則梅不レ開云々」。

かうへる 「こふへる」を見よ。

かうまう 「かうくわう」(膏肓)の誤。その條を見よ。

***かうらん** 后も井筒も心空におそろしく、おづおづ立出で勾欄より見れば(井筒)

〔勾欄〕宮殿・橋・廊下などに作れる欄干をいふ。その端長刀形に反つてゐれば勾欄といふ。勾欄は高欄とも書いてある。

***かうりよう** 鳳凰其樹に巣ひ、蛟龍其池に遊び、麒麟其囿に到る(國性爺後日)

〔蛟龍〕みづち。水中に潛み、雲霧に際會すれ

もの。塙保己一編、武家名目抄稿・職名部附錄十下に、「按、格勤はすなはち宿直勤仕の人をいへり、常に番衆といふが如し、然れどもこの格勤と稱する輩は、庶士の尤下等なるものなれば、番衆といはずして格勤を以て名とせり、後に名を改めて御末衆といへるも、又その末席にあるを以てなり、鎌倉御所にて中居殿原とよばるゝも、士と中間の間に居る士分のものなる故なり、後世にいふ中小姓歩行衆などいふは卽ちこの格勤なり」。

かくしめつけ　賴朝大きに御氣色損じ　住持が訴に限らず、隱目附の者ども脊に耳へ達したり(會稽山)

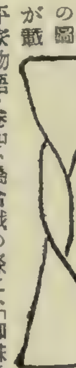
〔隱目附〕目附は、監察のつかさであつて、非常を按察し事狀を具して君長に密告する職掌である。隱目附はもとは、忍目附といはれたもので、忍んで事情を探偵して君長に報ずる役。武家名目抄・職名部三十四上に、「按、忍目附は常に定置かるゝ一職の名にはあらず、なべての目附にもあれ、歩中間小人の目附、又は近臣忍組等の者にもあれ、主家の命を受けて他方に潛行し、其地の形勢を探り得て反告をなす者をいへり、近臣にても此役にさゝるゝことは、主人より直に命ぜらるゝに便あればなるべし、もとより人に悟り得られざるを旨とするが故に、商賈のさまにまねび虛無僧放下の形をもかりなどして他國に赴くならひなり、されば人にも知られたるなべての目附職たる者のこれを役するは少く、大かたは徒立の輩承りしと見えたり、後の世かくし目附又は隱密などいふもの皆此流なり」。

かくちろん　大成論・格致論(冷泉節)

〔格致論〕漢方の醫書である。格致餘論は元・朱震亨撰、日本版のもある。格致要論は明・萬全撰、明版も元祿八年刊の本邦版のもある。

***かくなわ**　蜘手(くもで)かくなわ十文ぎりの茶碗に一ぱい、酒でも餠でもうまい物のせい揃(女楠)　心はくもでかくなわや、十文色もでてくるわ(冥途飛脚)　蜘手(くもで)かくなわ十文字、割立て追廻し(反魂香)

〔結果〕緒など結び、又はひねりたるやうな形をいふ。和名抄に、「結果。形如レ結レ緖、此間亦有レ之、今案加久乃阿和」。近世風俗志(原名、守貞漫稿)下卷・食類の部に、かくなわといふ菓子の圖が載せてある。



〔かくなわ〕

平家物語・卷四、橋合戰の條に、「蜘蛛手かくなわ十文字、蜻蛉返水車、八方透さず斬りたりけり」とある。吉野都女楠・冥途飛脚のこゝの文は、蜘蛛手かくなわ十文字といふ詞があるので、それを「十文ぎり」「十文色」を云ふに用ゐたまでゞある。

***かぐら**　「僣上大盡(せんじやうだいじん)ねやの云々」を見よ。

隱簑(かくれみの)・隱笠(かくれがさ)　天へ昇る梯子はないか、隱簑隱笠があら欲しやと(博多)　何處(どこ)ぞにちよつと隱笠隱簑なき身の置所(生玉)

着れば身を隱すといふ簑及笠。拾遺集・雜賀部に、「隱簑隱笠をも得てしがな、來りと人に知られざるべく」。保元物語・爲朝鬼が島渡りの條に、「汝等は鬼の子孫か、さん候、さては聞ゆる寶あらば取出せよ、見んと宣へば、昔正しく鬼神なりし時は、隱簑隱笠浮履劍などいふ寶あり云々」。

かくれんぼ　こなさんたち騙(だま)して隱れ坊したればつい探し出された(生玉)

「かくればう」(隱坊)の訛。小兒遊戲の名、小兒多く集りてその中の一人を選び、鬼と名づけて目を閉ぢ、他の小兒等が隱れ終へた後、合圖を待つて之を搜索す、最初に搜出されたもの次回の鬼となる。

***かくろふ**　五重の塔の雲水に月の光のかくろひて(大織冠)

「かくる」(隱)の延びた語で、「うつろ」(移)を「うつろふ」といふと同じ類である。

がくわう・ぢよえい　娥皇女英の古も君が別れを悲しみの(吉野忠信)

〔娥皇・女英〕支那帝堯の女で、姉を娥皇、妹を女英といふ。堯この二女を舜に與ふ、舜位に卽くに及び、娥皇を皇后とし、女英を妃とした。舜蒼梧で崩じたので、二妃も亦湘江の間に死んだ。湘君と稱するもの卽ちこの女である。

***かげ**　四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の額、さす汐影(しほかげ)のわけもよき、局局の手拭は濡れぬ隙こそなかりけり(壽門松)

〔影〕下位の遊女であつて、もと勤銀二匁程であつたからの稱で、見世女郎(みせぢよらう)・端傾城(はしけいせい)・端(はし)女郎(ぢよらう)などはこれ等の傾城をいふのである。「しほ」「はしぢよらう」をも見よ。

***かげ**　鹿毛なる馬に打乘つて(松風)

〔鹿毛〕馬の毛色の名、赤褐色で鹿の毛色に似たもの。

かげかすげ　殿の御馬はさび月毛連錢葦毛・鹿毛糟毛(天鼓)

〔鹿毛糟毛〕馬の毛色の名、鹿毛に驪白(くろしろ)の雜毛のあるもの。

***かげぐら**　某は千手太郎とて古は掛鞍にも乘りし者(蟬丸)

〔掛鞍〕馬に掛ける鞍。「掛鞍にも乘りし者」とは、嘗ては馬に鞍置いて乘つた立派な武士であつたとの意。

***かけこくら**　形は枯木の瘦骨(やせぼね)ながら、飛(とび)こくら・駈(かけ)こくら・輕技・早技劣ることはなけれども(唐船噺)

「かけことくらべ」(駈事競)の略。競走。

かけすゞり　懸硯の鍵出し、引出あけて(二枚繪)　猫も直打(ねうち)ににやん匁、五分と飛んで時鳥(ほとゝぎす)、守本尊懸硯、鐵漿壺も罷出で(博多)

〔懸硯〕懸子のある硯箱で、引出の附いてゐるもの。博多小女郎波枕のこゝの文は、飛ぶの緣で時鳥とつゞけ、ほぞんかけたか時鳥(その條を見よ)の句を用ゐて、守本尊懸硯といふたのである。

かけそで　互に心懸袖の、緣により絲括り袖(薩摩歌)

〔懸袖〕袖と袖とを懸け合ふこと。こゝの文は、互に想を懸け、袖と袖とを懸け合うて抱付いたことをいふ。

***かけだい**　若えびすに掛鯛、蜜柑柑子橘(壽門松)

〔掛鯛〕昔時、正月の儀式に二つの鹽鯛を藁繩で結び合せて、門松や竈の上に掛けた、これを掛鯛といふ。日本永代藏・卷二、世界の借屋大將の條に、「掛鯛を六月まで荒神の上に置きけるは」とある。今も上方關西地方で、新年の注連飾りや竈の上に掛鯛を使用する者がある。

***かけぢ**　岩のかけ路をつたひ下り(女護島)

〔懸路〕岩石多い中の細い山路。石山道。

かけづくり　神崎一番の大揚屋、かけ作りの長表(ちやうおもて)まで迎に出で(賀古教信)

〔懸作〕山また崖に持たせ懸け、或は川の上に懸渡して作つた家。

かげどうろう　油煙につれてくるくると廻燈籠・影燈籠、月も更け行く夜嵐に(嫗山姥)

***かがみ** 先づ惠方棚神の棚、鏡とるとろやり手衆の、かほにとり粉の面白いとて(夕霧)
〔鏡〕「おかゞみ」を見よ。

***かがみくら** 馬追蟲にかがみ鞍、鐙踏張り名乘るべき大將軍とぞ見えにける(孕常盤)
〔鏡鞍〕平義器談に、「鞍の前後の輪に、金にても銀にても赤銅にても薄きのべ金をはりて、山形の端に覆輪をかけたるを鏡鞍といふなり」。

かがみのいへ 嫁入先は夫の家、里の住家も親の家、かがみの家の家ならで、家といふものなけれども(女殺)
〔鏡家〕鏡匣をいふ。枕狩剱本地に、「鏡は女の魂、武士の太刀かたな」とある如く、鏡は女の魂で、鏡匣は女の魂のある家と見立てたのである。こゝの文は、女の家と見る鏡匣をのけては我が家といふもの無けれどもの意。

かがみびらき 「おかゞみ」を見よ。

***かかり** 妓の風俗揚屋のかかり、富士も及ばぬ戀の山(女殺) 松はさしもげに、枝をため葉をすかして、かかりあれと植ゑ置きし(最明寺殿) 御詰の人人早早かかりへ參られよ(持統天皇)
〔懸〕構。見ばえ。また庭坪のかゝりの意にいふ。庭坪とは蹴鞠の遊をする場をいふ。かゝりに松櫻楓柳をその四隅に植ゑたのを四本懸りといふ。「かゝりあれと植ゑ置きし」とは、他日蹴坪のかゝりになれと植ゑて置いたとの意。謠曲・鉢の木に、「松はさしもげに、枝をため葉をすかして、かゝりあれと植ゑ置きし」。

かかりゆ すゑふろもしやんしやん、かかり湯取つてかげん見て(丹波與作)
〔掛湯〕風呂から出て、身體に注ぐ爲に設けてある湯。

かぎ 賈誼が長沙に遷され(大織冠)
〔賈誼〕西漢・孝文皇帝時代、雒陽の人、年若うして才學あり、官累進して太中大夫に至る、時に絳灌・東陽侯馮敬の屬に嫉まれて讒にあひ、爲に潭州長沙王の大傅に貶せられた。

***がきあみ** 常陸小萩も夫ゆゑ、身を旅籠屋の水棚の、はしに目鼻のがきあみを、夫とは更にしら絲の、緣はきたなき土車(反魂香) 力は地獄のがきあみ、御壽命は朝顏の日影待つ間の露の身(孕常盤) こりやがきあみも同然ながら、邪法一味の方人等斬盡さんと立ちかかれば(蛙合戰)
〔餓鬼阿彌〕餓鬼阿彌陀佛の略。餓鬼佛。目鼻缺け皮肉もうげて骨露はれ、さながら髑髏の如きをいふ。序に云、千前軒文耕堂合作の小栗判官車街道・第四に、「小栗判官兼氏毒酒にあたりがきやみとなり給ふ」「干鮭のやうながきやみ」とある、「がきやみ」も「がきあみ」に子音の增加した訛語であらう。

***かきだつ** 荷物を船へ積む折柄、乘合の京の奴かきだつより顏差出し(博多)
〔垣立〕船の左右の舷に立つ垣。和漢船用集・十に、「垣立。舟の左右に立垣なり、高垣半垣あり、荷舟檜垣丸垣等あり、……天工開物に曰、倭國海舶兩傍列二櫓手一欄板抵レ水、人在二其中一運レ力、欄杴・かきたつと讀せり」。

***かきつばた** かの紫のゆかり求めて杜若、三河の國に御陣を召され(冷泉節)
〔杜若〕三河國八橋は杜若の名所であつて、伊勢物語・謠曲杜若などにも見えてゐる。されば杜若の名所八橋のある三河の國の意で、「杜若三河の國」といつたのである。

***かきのころも** 先達の裝束借つて着用し、柿の衣に黑脛巾、十二因緣の襞をたたみし兜巾を懸け(一心五戒魂) 妙法坊かき衣をかなぐり棄てつつと飛入り(用文章)
〔柿衣〕柿色即ち澁染の無紋の衣である、山伏の服で正先達の位の者これを着る。

***かきは** 常磐堅磐のまさ木のかづら(鎌田)
〔堅磐〕堅き磐の義で、永久變らないことを祝うていふ語。

かきほ 人麿のかきほの柿、山邊のささ小栗(文武五人男) 垣穗に殘る卯の花(虎が磨)
〔垣ほ〕「垣ほ」の「ほ」は秀の義なれども、「垣ほ」を垣の意にいふ。古今集・戀歌四の部に、「あな戀し今も見てしが山がつの、垣ほに咲けるやまとなでしこ」。

かきまつぶ 施主書したる金銀を殘らず取つて搔抱き、袖より漏るるを搔まつべ(賀古敎信)
搔全統の義。搔攏める。寄せ集める。

かきもち 人の情を掛鯛の、むしり肴と春めかす、そのかき餅の氷より、淚の氷とけやらぬ(氷朔日)
〔缺餅〕雍州府志(貞享三年刊)土産門・上に、「缺餅、凡甲冑有二六具一、悉具足之謂也、其所レ供之鏡餅、以レ刀截二食之一、是稱レ開レ鏡、又謂レ祝二レ鏡、至二甲冑一忌二斬殺之詞一、故以レ手破レ餅、缺二一片一食レ之、故是謂二缺餅一、於レ今一切稱二缺餅一、圓山安養寺并雙林寺 靈山正法寺僧、嚴冬製レ餅、是爲二片團一、乘二半乾一三寸許薄切レ之、陰乾以二文火一還焙レ之、而後納二壺內一、每レ有二賓客一供レ之、凡家々總雖レ有レ之、不レ及二三寺之製一云々」と見えてゐる。缺餅は嚴冬に製するより、大阪及中國地方では氷餅と稱する所がある。大阪の遊廓では、六月朔日は正月納め紋日とて、遊女は天王寺・勝曼參りをなし、また遊客をもてなすに先づ酒と共に缺餅を出したものである。難波鑑(延寶八年刊)に、「勝鬘參井氷餅之事」とあるもこれである。現今でも關西地方の青樓・旅館にて、酒のあしらひに最初に缺餅を出すも餘習である。

***かく** 權三が馬は逸物の、口を切つて角を入れ、ハウツとかけたる聲の內、一さんにかけ出す(鑓權三) 鞭打ちくれてかくを入れ、雲を霞に飛ばせける(百日曾我)
〔鉸具〕角と書くは常字である。貞丈雜記・卷之十三、馬具之部に、「鐙にカクと云ふ所あり、鐙の頭に細きかねありて力革へ差通す、其細き金をサスカともウツオカネとも云ふ、又ヒヂカネとも力金とも云ふ、又カクと云ふなり、カクの事をカコとも云ふ、……カコの事をヒヂヨカネともビドウガネとも云ふなり、扨カコといふ字、鉸具の二字を用ゐ來れり、……本はカグなれども、クとコと五音通ずる故カコとも云ふなり」。「鉸具を入る」とは、馬を進めようとする時、鐙の鉸具で馬の脇腹を蹴るをいふ。なほ鑓權三のこの文に「口を切つて」の切るは放つ義、馬を馳らす時手綱を弛めるをいふ。

かくごん 双方理詰の高聲、雜色格勤鐵棒鳴し、鎭まれ鎭まれ(隅田川)
〔格勤〕宿直勤仕の小侍であつて最も身分卑き

見られないやうに圍ひ隱すものなれば、その縁で十四匁・十五匁女郎を圍といふたのである。貞享・元祿頃では、この遊女の揚代十八匁に上つてゐれども、なほ舊稱の儘に圍と稱するのである。西鶴の好色一代女（貞享三年刊）に、「十五」と書いて「かこひ」と傍訓してあるのもこのわけである。めくり骨牌では十の數は零として數に加へず、九を以て最上の數とする、九でなくても親の札より一つでも多ければ則ち勝ちとする。四以下の數なる時は更に一枚の札を得てその數を多からせうとする。十四また十五の數は十は數に加へぬにより、四または五であるので相手に見せぬやうに圍ひ隱すのである。山崎美成撰・鴨籍散人補、増補博戲犀照に、「柳亭主人云、此キンゴ打つときに、例へば十四の數出づればこれをふせ置くなり、それを其徒の言葉に圍といふ故、十四匁の遊女を其頃カコヒ女郎といへり、後にはカルタの打やう巧者になり、十一にても十二にてもかこふやうになり、遊女も慣高くなりて十五匁になれば、カコヒの名も何のわけやら知れぬやうになり行きしと也」。人倫訓蒙圖彙に、「鹿戀。よろづ天神様より一際飽相に拜まれ給ふ」。御前義經記（正德二年刊）卷一、傾城の因縁の條に、「鹿戀。天神より又一段さがりて、一尺八寸とも、鹿職とも、追帳とも、八寸とも、女の子とも、鹿とも、太夫に附くを引舟とも、つきものとも、太鼓女郎なんどいふはこのたぐひぞかし」。「きんご」をも見よ。

＊**かこひ** 雨の晴間の夕日影、にじり上りの一間よりかこひに入らせ給ひつつ（用文章）

〔圍〕茶道にて數寄屋の稱。足利義政の時、茶道の祖釋珠光が慈照寺に設けた數寄屋を板圍にしたので起つた稱である。

かこひ 燈し油さへ高直の世の中、我が親の脂かこひばさせぬとぼつかくろ（嵯峨天皇）

〔圍〕物を貯藏すること。こゝの文は、燈し油でさへ高價な世の中なるに、まして貴重な親父の脂を盗んで貯藏はさせぬ、戻せ返せと追ひ掛けるとの意。

＊**かごやろ** 茶を煮て旅人を呼掛け、これ申しお茶まゐれ、駕籠やりませう駕籠やろといへども（西王母） 駕籠やろばかり廓は戀の晝中や、駕籠やりませうぞ寢聲なり（淀鯉） 上﨟様、駕籠やろいとぞ申しける（百合若）

〔駕籠遣〕「かごやろい」ともいふ。駕籠遣りませうの意であつて、駕籠舁が駕籠に乘りさうな通行人を見て、駕籠に召されよと勸める掛聲である。

＊**かごゆみ** かご弓に八めの鏑矢取添へ（日本武尊）

「あまのかごゆみ」を見よ。

＊**かさ** 五十兩に足らぬ金、あたかしましう言ふまいと、かさから出れば氣を呑まれ（冥途飛脚） 中にも惣兵衛かさ取つて、なんと何れも旦那の幅を御覽じたか、あれ皆我等がさする事（淀鯉） 村上いよいよ嵩にかかり（川中島） 慮外を吐かば蹴飛ばさんと、かさにかかつてきめ付くる（浦島） 親の敵ぞと、退く敵をかさに乘り、くも手に追立て追返し（蟬丸） いやと言はば踏殺さんと、かさをかけてぞ申しける（蟬丸） 横着者氣隨者と、かさをかけて叱らるる（反魂香）

〔嵩〕重なる義。物の高さ嵩がりをいひ、轉じて威勢の意にいふ。「嵩から出る」とは、威勢よく横柄に出るを云。「嵩取る」とは、はぶりをきかすをいふ。「嵩に掛かる」とは、勢づいて居丈高になるをいふ。「嵩に乘る」とは、威勢にはずむをいふ。「嵩を掛ける」とは、機勢をつけるをいふ。

＊**かさがけ** 笠懸・流鏑馬・犬追物（大磯虎）

〔笠懸〕騎射の式である。庭訓往來諸抄大成に、「伊勢貞丈云、笠懸頼朝の時始にはあらず、遙昔より有しなり、……遠笠懸・小笠懸の別あり、的の制軍器考に見えたり、射法の事武田・小笠原等の家に傳へたり、短紙禿筆に盡し難し」。貞丈雜記に、「笠懸とばかりいふは笠懸の總名なり、小笠懸にまぎれぬ爲に遠の字を付けていふなり、遠笠懸も小笠懸も馬場の長さ的間の程同じ事なり、然るに遠笠懸といふ事は小笠懸よりもはるか遠き昔より始るといふ心なり、……遠笠懸も小笠懸も同じ類なるによりて、二品の總名を笠懸とばかり云ふなり」。四季草に、「小笠懸の的は夾物にて四寸四方なり、遠笠懸の的よりは小なり、されば小笠懸といふなり、遠笠懸の的は一尺八寸、革にて包みたる丸き的なり」。なほ笠懸の的については、軍器考・卷四に委しい。笠懸の稱は、もと笠を懸けて的としたによる。

＊**かさぎ** 角は忽ち蛇身となり、鱗をふるひ焔をふらし、波を蹴立ててまきあがり、鳥居の笠木をくるくるくる（蟬丸） 牛若笠木に兩足かけ、宙に下つて雷玄が眞甲をしたたかに切り給へば（烏帽子折）

〔笠木〕鳥居の上に横に渡せる木。衡木。

かざきり 情も何も鴨の羽雉子の風切思羽や（雪女）

〔風切〕鳥の雨覆の下にある短き羽の名、これを以て風を切つて飛ぶといふ。倭名抄に、「翮。加佐岐利、翮上短羽也」。

がさくさりう がさくさ流の日上書、讀めかぬるは御推量に御らん願ひ奉る（關八州）

がさがさしてゐる流儀。粗笨流。

＊**がざけ** 宵のがざけにほのぼのと（女腹切）

〔我酒〕我意を張つて飲む酒。無理飲みの酒。

＊**かざし** 大將軍は我なりと・名乘もあへぬかざしの梅、誰が袖觸れし梢には（國性爺） かざしの雲をふりわくれば、異香薫じ花降りて（聖徳太子）

〔插頭〕草木の花また枝などを頭髪或は冠に插むこと。頭の上に被ふこと。髻。

＊**かさじるし** 栞も敵の大將義貞兄弟に組まんと、笠標かなぐり棄て（千疋犬）

〔笠標〕昔時、軍隊の目標の爲に笠または冑の鉢の後の環或は袖に付けた標。貞丈雜記・卷十一、武具之部に、「笠じるしと云ふは元來冑に付くる驗なる故、笠印といひたるなり、後には笠驗といふは總て物のしるしのことにいひ習はして、袖に付くるをもかさじるしと云ひしなり」。

＊**かさだか** 手代めがかさだかな返事した（冥途飛脚）

〔嵩高〕重なり高い義。高ぶり横柄なこと。「かさ」をも見よ。

＊**がさつ** がうぎがさつな仕つたらば曲事でおぢやんべい（丹波與作） 遠近の荒土民、例の梶原他領へ入

〔影燈籠〕廻燈籠をいふ。增補俚言集覽に「かげ燈籠＝紙にてはりし燈籠の中に、人形のかたなどきりぬきたるを入れ、廻る樣にしかけて、其影を紙にうつし出して玩物とす、走馬燈なり」。

かけどく　朋輩どもとかけどくに道中雙六打つて、杳の錢ほどしてこませうと思うたに（丹波與作）

「かけろく」（賭祿・懸祿）の訛つた語。博奕などの勝負事に物を賭けること。狂言・鶯に、「かけろくには何をするぞ」。大矢數（題簽に西鶴大矢數）第三十六に、「かけろくなして又行は夜の風」（分里艶行脚（正德六年刊）四之卷に、「勘當させたらば此身も自由にしてやるべしとの賭祿云々」とありて、「賭祿」に「かけどく」と傍訓してある。

かけなげ　（酒呑童子）

〔掛投〕相撲の手の名、掛け手で相手を投倒す手をいふ。

***かげのわづらひ**　比良の嶽にて木を伐つたる天狗の祟、行房には當らず我妹に取付いて影の煩ひ（賜田川）　不思議や赤染衞門、相も變らぬ姿にて二人立入り、…兼盛夫婦呆れはて、これは何たる報ぞや影のやまひといふものか（赤染衞門榮花物語）

〔影煩〕影病ともいふ。一人の者が一は本人、一は變化のわざで、同じ姿の二人となつて見える婦人病。

かけばん　本膳の懸盤に種種の魚鳥（川中島）

〔懸盤〕貴人の膳具に用ゐた物で、後世のは足を作附としたれども、昔のは足と折敷と別々で、四本足の臺上に折敷を載せるやうにしてある。

かけはんがい　知行潰しの米櫃飯櫃かけはんがい、片に足らぬ中は空との明きはんがい（會稽山）

「かけばんだい」（懸盤臺）に「はんがや」（榛谷）をいひかけたのである。懸盤臺は懸盤の折敷を取去つたもの（前條を見よ）。

かけびんかつら　御骨なりとも拾はんと懸鬢蔓に姿を替へ（會稽山）

〔懸鬢蔓〕鬢髮を附けた男髷の鬘を懸ける事。

影も差さず　生駒新五左が瘧も妙藥一服で、影もささず落馬致す（鑓權三）

彿も映らぬ程早い意。この文は瘧があとかたもなく早く癒えたことにいひ、また瘧の癒えるを落ちるといふから、その緣で落馬と書きつづけたのである。

***かげろふ**　上段下段の太刀捌き、陽炎稻妻獅子奮迅（國性爺）

「かげろひ」（陽炎）の轉。うらゝかな春日に燃え立つやうに見える氣即ちいとゆふを云ふ。轉じて、それと姿は見えて捉へられない動作の敏捷なことにいふ。謠曲・熊坂に、「追つかけ追つゝめ取らんとすれども、陽炎稻妻水の月かや、姿は見れども手に取られず」。

***かげろふ**　身はかげろふのうき命うき命、暮るる暮るるや限りなるらん（百日曾我）

〔蜉蝣〕昆蟲類中、脈翅類に屬する小蟲の名。蜉蝣は朝に生れて暮に死すといへば、「暮るゝや限りなるらん」と書いて、曾我兄弟のはかなき命に喩へたのである。箋解古文眞寶後集、前赤壁賦中の蜉蝣の註に、「蜉蝣。小蟲名、渠略、朝生暮死」。

***かけゑぼし**　高き位やかけゑぼし（用明天皇）　腰につけたる懸烏帽子に降來る雨を受溜めて（會稽山）

〔懸烏帽子〕打懸烏帽子のこと。貞丈雜記・卷三に、「古打かけゑぼしと云ふは、折ゑぼしを小結もて、うづかけもかけずして頭におし入れて、後の針ばかりにてとめ置くをいふなり、これ無禮の體なり云々。」

***かご**　さすがのくるわ駕籠されて、雪駄片足の醉潰れ（淀鯉）　そんなら道ぢや駕籠へもちよつと寄つてくれ（重井筒）　これがほんの犬骨折つて、鷹に取られたお侍と、笑うて駕籠細工、有馬の宿へぞ歸りける（百合若）

〔駕籠〕舁籠の義であらう。四季草に、「駕籠はそのもと竹を以て編み作る故の名なるべし、又あんだといふ物あり、あんぽつとも山駕籠ともいふ、それに意巧を加へて駕籠は出來しなるべし」と見えてゐる。（和訓栞に、「駕籠を圍むの義」としたるに從はず）。「駕籠きれ」は駕籠が皆出て無くなつてゐるをいふ。「きれ」は「品切れ」などいふ「切れ」である。「駕籠へもちよつと寄つてくれ」は、「駕籠屋へもちよつと寄つてくれ」の略。「駕籠細工有馬」は、駕籠に籠細工をいひかけ、籠細工は有馬の名物なれば、有馬の宿とつづけたのである。攝陽群談・卷第十六、名物土產の部に、「同（湯山）籠細工。同所（有馬郡有馬湯元）にあり、花生・果盆・煙草入・盆・水漉等、凡て籠を用ゐる器物好て令レ造レ之」。

***かこつ**　此誓紙灰になせとは曲もなやとかこち給へば（蟬丸）

「かりこと」（假言）の義で、かこつけていふことなるが轉じて、歎く。佗言をいふ。

***かごのとり**　籠の鳥なる梅川に、焦れて通ふ里雀（冥途飛脚）

〔籠鳥〕籠の鳥の如くに身の自由ならぬをいひ、遊女は身を抱主に賣つて自由ならねば、昔から籠の鳥に喩ふ。信濃盆踊歌にも、「逢ひたさ見たさは飛びたつばかり、籠の鳥かやうらめしや」。

***かこひ**　一家の太夫・天神・鹿戀・葛城樣さらばや（反魂香）　百に餘りてかこひ・端、二百餘人の玉鬘（酒呑童子）


（百人女郎品定所藏）

〔鹿戀〕（西川祐信畫）

〔圍〕鹿戀と書くは當字である。天神（遊女の位である、その條を見よ）の次位にある遊女であつて、太夫に附隨する者を引舟といふ。圍の名義に就ては、この遊女の揚代十四匁または十五匁であつたからの稱である。當時流行しためくり骨牌にて、十四・十五の數は人に

これを以て宮雀のすきはひとなして、よいかげんにあらぬ事までたくみなして愚夫愚婦をたぶらかすとかや、了簡して聞くべし」。鹿島名勝圖繪下卷に、「事觸＝古は禰宜のうちト部の家あまたありて、年中の吉凶をトひて朝廷に奏聞せしとなり、……かゝるト法は今は
(人倫訓蒙圖彙所載)


〔鹿島事觸〕

絶えてなき古き事なるを、今の世の中に事觸と稱へて年の吉凶をいひ、何くれの虚言などいふは、かの上代の風を僞りまねびたるふるまひなり、この事觸といへるもの鹿島よりはふつに出でず、皆賤しき乞食どものしわざにこそ」。「山路の四段目云々」といへるは、用明天皇職人鑑第四に見えてゐる文である。

***かしましい** 梅龍内よりつこど聲、かしましい何者ぢや(大經師)
〔囂〕かまびすし。喧しい。合類大節用集(享保二年刊)に、「囂」。

かしみづ 韃靼王の臺所につくばひ、かし水でも啜つて命をつげとぞ呼ばはりける(國性爺)
〔炊水〕米また麥など淅いだ水。

***かしやく** 罪業の程思はれて、呵責恐し鬼踊の(生玉) 跡よりやり手の責めくるは、呵責の責よりなほつらく(夕霧)
〔呵責〕地獄にて獄卒より受ける責苦。合類大節用集・(享保二年刊)に、「呵責。獄卒ノ呵責」。

がじゆつ それより心に莪朮を張り、よしや浮世は陳皮の皮(薩摩歌)
〔莪朮〕藥草の名、根は生薑の如く、十月頃採りて癪の藥を製す。こゝの文は、我を張るを藥草の莪朮にいひかけたのである。

かしらがうつ ああ氣が勞れてかしらがうつ、母様のお文も見たし、ちとここで休みたい(氷朔日)
〔頭打〕頭痛がする。

かしらはり 折合ふ兵頭はりに逃足強く、一人も手に立つ者候はず(會稽山)
〔頭張〕最初ばかり强いこと。

***かす** 客衆客衆の揚詰を貸すの貰ふの暇無き(生玉) おてき様の待合ひ、我等が座敷へも少し貸して下されかし(淀鯉) こなさんの顏が見たさに貸しに來たと、入るさの門の障子戸も(冥途飛脚)
〔貸〕妓より揚屋また色茶屋に行くをいひ、又既に揚げられてゐる妓が他の客席に出るをいふ。貸すは身を貸す義である。「貸す」の反對に「借る」といふ語もある、これは遊客をして相方の妓を見立てさす爲、揚屋また色茶屋から妓を招寄すのを妓を借るといふ。俳諧通言・言語の部に、「太夫借。揚屋にて家々の太夫を一組宛呼寄せ、盃をするうち客相方を見立てる、中居帳を扣へ、太夫の名をいうてひとりづつ呼出し盃をする、是を太夫かりと云ふなり」。

***かす** 總じてお鹿島と申すには、上の禰宜が三十三人、中の禰宜が三十三人、糟禰宜が三十三人、合せて九十九人の禰宜(用明天皇) ヤアあたたかなかすわつぱ・それ打殺せとどつと寄る(用明天皇)
〔糟〕屑の義。「糟禰宜」は下等な神職の者。「糟わつぱ」は下劣な童子。

かすが いやこれ大黒は我が寺に傳教大師の作もあり、春日の作も安置せり(松風)
〔春日〕元正の朝の佛工で、南河内郡磯長村春日の地に住んでゐた。その子孫に春日井氏稽文會及其子の稽首勳と云ふ者、共に妙工であつたことが鎌倉志河内志俗說辨に見えてゐる

かすけ 間夫と云うては大人氣なし、客と云うてはかすけなし(賀古教信)
〔糟氣〕否味氣。金錢に吝く否味ある客を糟客といふ。かすけなしとは無邪氣で張合ひなきをいふ。

***かすげ** かすげ馬(扇八景)
〔糟毛〕馬の毛色の名、白黑雜毛のもの。合類大節用集(享保二年刊)肢體門に、「本朝俗謂ニ顋白ー爲ニ糟尾一、今按馬之白黑雜毛者、呼爲ニ糟毛一之類乎」。

***かずやり** かり鉾數槍手に當るを幸に投付け(國性爺)
〔數槍〕步卒等に持たせる數多の槍。

かすりゐ ならざかや、この手かの手の枕の酒、霙霰と隔つれど、とくれば同じかすりゐの、水を假なる戯れも(反魂香) 加賀に菊酒、南都にかすりゐ(酒呑童子)
奈良の名物霙酒は麴が溶けないで混つてゐるから、飛白を微井(その條を見よ)にいひかけたのである。「みそれあられと隔つれど云々」の條をも見よ。

かすを によつと出でたる糟尾の贋僧(大經師)
〔糟尾〕老人の頭髮の黑白半するをいふ。しらがまじり。源平盛衰記に、「木曾打案じて、哀れ武藏の齋藤別當にやあらん、但其は一年少目に見しは白髮の糟尾に生ひたりしかば、今は殊の外に白髮になりぬらん」。合類大節用集(享保二年刊)肢體門に、「本朝俗謂ニ顋白ー爲ニ糟尾一」。

***かせ** 多勢かかつてかせとなり、人にて人をせきふさがれ、同志討友討度を失ひ(女楠) 中へ小菊がかせに入り(女殺)
〔枷〕手足まとひ。邪魔。さゝはり(障)。

***かせぐ** 鎌田に濱田は力拔群劣れども、屛風にかせがれ働かせず(鎌田)
前條の「かせ」(枷)を動詞(加行四段活)にした語。保元物語に、「暫しは矢にかせがれて溜る樣にぞ見えし」。

かせくび いふに甲斐なき此高家がかせ首、義貞公の御手にかかり申すこと(女楠)
〔悴首〕かじけ首。貧弱な首。

***かせじよたい** 夫婦も元は都鳥、あるかなきかのかせ所帶(隅田川) 嫁の崗玉賢女にて家を賄ふかせ世帶(國性爺後日)
〔悴所帶〕かじけ所帶の義。貧乏生計。「かせぜたい」、悴世帶」は「かせじよたい」の轉訛。

つてがさつなさせば一在所の名折れぞと、山刀抜連れて（大磯虎）

がさつしいことを「がさつ」といふたので、いかつしいことを「いかつ」、ぎごつしいことを「ぎごつ」といふ類の語である。粗暴。（莊子に「君子不レ爲二苛察一」とある苛察の義には當らぬ）。

かさねくぎぬき　出羽の米澤は摘鳥毛の唐人笠、ろくしやくけ重釘貫（薩摩歌）

〔重釘貫〕米澤城主・上杉民部太輔吉憲の纏印。「釘貫」をも見よ。



〔重釘貫〕

かさねもりは　重盛羽の大鳥毛、對のお道具突立てて（薩摩歌）



〔重盛羽〕

〔重盛羽〕槍標の名。

***かさねゐづつ**　共に双の諸羽二重、同じ枕にふしつむぎ、重井筒の戀の水（氷朔日）

〔重井筒〕紺屋の徳兵衛は重井筒屋の遊女お房に馴染み、お房の難儀を救はうとして借金し、妻お辰の忠實な心に泣かされて一旦悔悟しかけたけれども、お房の情にほだされて遂に情死した。詳しくは心中重井筒を見よ。

かざはやさいしやう　風早宰相樣の朝茶の湯、いよいよ風を引きそへ、それで得ござらぬ（大經師）

〔風早宰相〕風早で風を引き添へたといふ縁によつた名に宰相（參議の唐名）を附加したのであるが、又中納言風早實種が老人でありながら冷水を多く飲んだので、病になつてはならぬから冷水を飲むなとの實下があつたといふ、その故事をもぢつてかく應用したのである。おほうみのはし（富士谷成章撰）に、「風早中納言（實種寶永七年薨）老ののち、あつき日、内にさぶらひて水を飲ませけるを、帝御覽じて、老いたる人は水飲むこといむなるものをと仰せられければ、取りあへず、あなかしこわが後のよを人とはば、ときより外の水なたむけそ、と勅答申されけり」。

かさぼこざや　白鳥の笠鉾鞘、煤竹羅紗の袋鞘、大雁木打つたる印こそ庄内の主ぞと（薩摩歌）

〔笠鉾鞘〕白鳥の笠鉾鞘は羽州庄内城主・酒井左衛門尉忠直の鎗標。



白鳥ゲ　〔笠鉾鞘〕

がざみ　海鰻がぬらつき、鰡がこそぐろ、がざみがつめる（大織冠）

〔蝤蛑〕「がざめ」とも云ふ。蟹の一種、海に棲息し、甲の左右兩端は刺となつて突出し、體暗綠色である、肉は食用にされ味美である。合類大節用集（享保二年刊）氣形門に、「虎蟳」。

かさやどり　鶯の縫ふてふ旅の笠やどり（百合若）　一念かためて身はかろく、天が下なば笠やどり（蛙合戰）

〔笠宿〕暫時の雨宿りより轉じて、暫時身を寄せること。「鶯の縫ふてふ」の條をも見よ。

***かざをりゑぼし**　（烏帽子折）

〔風折烏帽子〕立烏帽子のさきをすぢかひに折伏せた烏帽子で、風に吹折られたやうなる故、風折と云ふのである。立烏帽を被つて、左の手をあげて右の方へ折伏せたのを右折といひ、右の手をあげて左の方へ折伏せたのを左折といふ。

かし

〔かす〕（貸）を見よ。

***かしこどころ**　掛卷くもかしこ所に駈上り神鏡抱き奉り（振袖始）

〔賢所〕畏所の義。宮中に神鏡を安置してある御殿。内侍所。

***かじち**　下立賣の居屋敷を町衆の加判で、一昨年三十貫目の家質に入れたげな（大經師）七貫五百目上本町の家質の手形（今宮）

〔家質〕家宅を借金の抵當に入れること。

かしどり　（嫗）

〔樫鳥〕鳥の名。燕雀類に屬し、かけすとも云ひ、鳩より稍小で、嘴大に、羽色は背部灰褐色、腹部淡茶色で、能く飼養すれば人語をまねる。秋の末頃群をなして飛ぶ。

かしは　鷄は唐丸・しやむ・かしは・ちやぼ・小こく・色色の（本領曾我）

〔黄鷄〕羽毛茶褐色の鷄。

かしはぎ　柏木の鞠・山路が笛、古今その品かはれども、皆これ戀路の寄せ框（歌念佛）　柏木の衞門は都の内にて鞠を蹴る（隅田川）　御簾に唐猫烏帽子に鞠、衣紋流しの柏木や（吉岡染）

〔柏木〕柏木右衞門督をいひ、源氏物語に見える假作人物である。光源氏の邸宅六條院で蹴鞠の遊あつて、夕霧も柏木も花の蔭に休らへる時、唐猫の飛出たはずみに御簾が開いたので、内に坐せる女三の宮の姿がありありと見えた。これより柏木の君深く女三の宮を戀慕して遂に情を通じた。詳しくは若菜の巻・柏木の巻について見よ。

かしはちる　隣は青し夏山の、かしはちるてふ卯の花や山郭公山あひの（女腹切）

〔柏散〕槲の散るも夏、卯の花も夏のものなれば、「柏ちるてふ卯の花」といふたのである。晋山井四季之詞・夏之部・四月の條に、「柏ちる。貞德說、夏也、又一說秋なり、可レ依レ所レ存」。「いつか都へ歸る山云々」をも見よ。

かしはて　逢ふ瀨を祈る神垣に、拍手ならぬ柏屋の（生玉）

〔拍手〕かしはで（饗宴）に手を拍つより云ふ語。神を拜むに兩掌をうち合して鳴すこと。謠曲・逆矛に、「拍手響く山の雲霧」。

***がしふ**　それは我執候、なう我執我執と、惡口して罵れば（大原問答）

〔我執〕我慢偏執。倶舍論・二十九に、「由二我執力一諸煩惱生」。

かじふらう　嘉十郎が顏付に炭屋町を思出す（今宮）

〔嘉十郎〕大島嘉十郎で道化方の俳優である。顏色が黑かつたので、「炭屋町を思出す」と云つたのである。役者謀火燵（寶永七年刊）に、「此人の道外方之部に大島嘉十郎の名を乘せて、「此人の藝は夜舟で食ふひらかたの奈良茶、直打が上りました、それでみいりがようござる」と見えてゐる。

***かしまことふれ**　是はお鹿島香取より罷出た事觸で、ござりや申す（用明天皇）　山路の四段目、檢非違使が鹿島の事觸、島樣とつくとお聽きなされ（二枚繪）

〔鹿島事觸〕常陸國鹿島の神が其年の豐凶など神託あるを、神主春毎に諸國に觸廻りて知らせたこと。またその觸廻る神主。人倫訓蒙圖彙・七に、「事觸。毎年鹿島の神前にして、行の事あり、神必ず人に託したまひて天下の吉凶を示したまふと、それを日本にあまねく告知らせけること此神官の役なり、然れば末世に

しき者よりなるべし、かゝれば此事浪花より起りしにや」。

かたぐ なまなか告めて、一本かたげ恥かこより、ハテ彼方から見るなら此方からも見て、大様にして居さんせ(二枚繪)

〔擔〕負擔の意より轉じて、負ける、まゐるの意にいふ。大塔宮曦鎧(淨瑠璃)に、「利口だてする齋藤、一本かたげさせて腹いせ本望」。

***かたくま** 子供設けて二人が連れて、お乳がかたくまおててが日傘、肩で風切る山崎に(壽門松) 負うたもいとし、抱いたもいとし、かたくまの小女郎がなほなほいとし(今川了俊) うぶすな詣で好い日を擇び、お乳がかたくま乳人の日傘(西王母) 千貫枝・筆捨枝や久方の、天つ乙女のかたくま枝や(反魂香)

「かたぐるま」(肩車)に同じ。その條を見よ。增補松の落葉(寶永七年刊)卷四、ぞんぞりこ踊に、「負うたもいとし抱いたもいとし、かたくまの小女郎はなほそつこでなほいとし、ぞんぞりこ」。「かたくま枝」は肩車の形をした枝

かたぐるま 姉が手を引き乙は抱く、中は父親かたぐるまに、法の教も一つは遊山(女殺)

〔肩車〕「かたくま」ともいふ。車は乘せるよりいふ、小兒を肩に乘せて首に跨らせて擔ぐこと。

かたけ 帳面は忘れぬ、旅籠か六かたけ酒が四升五合(丹波與作)

〔片食〕一日に三回食事しないで、朝食或は夕食のみなること。一回食ふほどの食事。「六片食」は食事六回分。

***かたさま** かた樣まゐる花より(女腹切) 荻野と申して御方樣の母樣の妹分にて候(三世相)

〔方樣〕對稱の敬稱代名詞。そなた樣。あなたさま。

***かたざむらひ** 馬鹿慇懃のかた侍(雪女)

〔堅侍〕物堅くて融通のつかぬ武士。かたくなゝ侍。

***かたし** 雪踏かたしに下駄かたし、藁履がけで來るもあり(嫗山姥)

對なるものゝ一片をいふ。片。片方。貝殼の一片離れたるをかたし貝といふ。井原西鶴撰・男色大鑑・卷之七、螢も夜は勤めの尻の條に、「草履預けしもそこそこにせられて、歸るさにかたしかたし取集めて」。世間子息氣質(正德五年刊)卷之一に、「形見とて遺ることの嫌ひな親仁なれば、箸かたし外へ散さず」。

***かたしく** 尾花にかたしき女郎花(浦島) 今日は岩間に苔むしろ片敷く袖に御涙(女楠)

〔片敷〕衣の片袖を敷くことで、横臥して獨り寢するをいふ。

かたじゆけなんきんのはちまん 太夫こゝまで送つてか、ええかたじゆけなんきんのはちまん酒には醉はぬ(淀鯉)

「かたじゆけ」は「かたじけ」(忝)の訛。「忝ない」の「ない」を「南京の鉢」にいひつづけ、「鉢」を「八幡」にいひかけたのである。「八幡」は弓矢八幡などいふ八幡で、自誓の詞である。こゝの文は、太夫こゝまで送つてくれたか、さこさて忝い、誓つて(神かけて)酒には醉はないとの意。「なんきんのはち」を見よ。

かたす 先へ急ぐは駕籠の足、せめてかたして留めもせず、戀の重荷に小附して(壽門松) 道は一筋駕籠二丁、二人思を抱乘せて、打見るよりは肩重く、小川ぢや、そこせい、かたせい、まつかせ杖突坂(博多)

〔肩爲〕駕籠の棒を息杖に持たせて肩を休ます

片殺の千木 片殺の千木や内外に曇りなき(會稽山)

〔千木〕は肱木の略、切棟の端の材を棟の角から組合せて空へ出したもので、今神社の屋根にのみ用ゐる。その棺の一角を殺いだのを片殺といふ、伊勢の内宮のは内角を殺ぎ、外宮のは外角を殺いである。この文は「内外」の序に用ゐたのである。風雅集・神祇歌の部に、「片そぎの千木は内外に變れども誓は同じ伊勢の神風」。

***肩だすけ** 隨分稼いで親達の肩助けと(女殺)

〔肩助〕力になること。てだすけ。もと肩の疲れを助ける義で、肩を働かす人から起つた語である。

***かたぢ** かたぢの父の親の手を水離れせぬお龜とは(卯月艶) 堅地の長持嫁に傳はり(卯月潤色)

〔堅地〕堅固な地質。「かたぢの父」は頑固の氣質な父。「堅地の長持」は、長持の地に漆を塗つた布を張り、更に其上に漆を塗つて作つた長持。

***かたでうち** 在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手撃のなされやう(歌念佛)

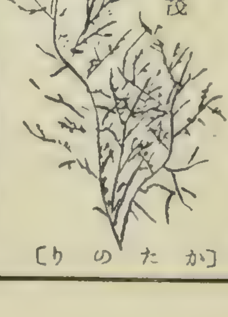
〔片手撃〕偏頗。かたおち。俚言集覽に、「贔負偏頗の沙汰にて、かたかたばかりを制敗するを云、或云堀内流の劍術片手打をきらふより此諺ありと云へり」。

かたなだま 乘損ぜばおろしも立てず、刀玉に上げて斬殺すぞ覺悟せよ(源義經)

〔刀玉〕刀にかけて斬りまた突く目的物。(鐙を以てするを鐙玉といふ)。

かたのり いつ青海苔もかたのりと、身のさがらめなのりそや(出世景清)

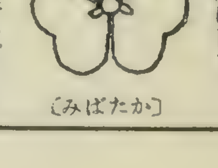
〔堅海苔〕海中に生茂する暗紅色の藻類であつて、體は殆んど絲状で僅に扁壓して質堅く、多數の枝を羽状に出す。「いぶり」をも見よ。



〔かたのり〕

かたばみ 龜甲・酢漿草・毬挾(賀古教信)

〔酢漿草〕小草の名で、地に延ひ生じ、花三瓣である、この形を紋とす。



〔かたばみ〕

かたみぐさ 初見草なる顏佳草・形見草かや(十二段)

〔形見草〕菊の異名。二條良基撰・藏玉集に、「形見草＝菊。めかれせずいつも見まくの形見草、なれしも秋と思ふ名殘に」。こゝの文は草の名寄であつて、形見を形見草にいひかけたのである。

かだむ 小鮎さばしるせゞらぎにかだみて(大磯虎)

〔けだむ〕の轉であつて、氣拗む義、悍る。控へ目にする。松屋筆記・卷九十四に、「古事談六の卷に、此兩人御坐敷之前各けだみて通りけるを、猶坐可レ被二御覽一云々、按ずるに、けだみて通るとは片よりてかたまりて通るさまなり、謠詞に、かだみて魚や云々といへるも通じ

かぜのかみ　やあ彼奴は何者ぢや、風の神か鳥威のやうなざまで、何ぢや喜左衛門に逢はう(夕霧)

〔風神〕昔時風邪流行した時、風の神を追拂ふとて假面を被き太鼓を打つて來る物貰の一種であつて、多く非人のしたわざである。傾城色三味線(元祿十五年刊?)大坂の巻に、「茶碗燒出す高原といふ所に風の神と相住して云々」。世間娘氣質(享保二年刊)巻之六に、「高原といふ茶碗燒くあたりに僅なる賤の家借りて、風の神放下師と合住して隱れ居たりしが」。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)巻七に、「風神拂。世間に風氣時行ぬれば、風の神を追拂ふとて、面をかつぎ太鼓を打つて物を貰ふ、とほれい言うてあしこりかゝつて猶たたく、やかましきに退屈して、一握の米をば取らするなり、諸人の煩を己が身に受取り、世間無病なれば彼が儲なし、何にても時行やまひといへば、聞耳をたつるあさましきわざにて、後世こそは不便なれ」。



(人倫訓蒙圖彙所藏)〔風の神〕

***かせふ**　釋迦如來の御弟子阿難・迦葉(傑靜)

〔迦葉〕摩訶迦葉波(Mahakasyapa マハーカーシヤパ)の略、釋尊十大弟子の一で、釋尊の滅後編纂長となつて王舍城に第一回經典の結集を大成した人である。

***かせん**　歌仙の靈魂現れ出で(蟬丸)

〔歌仙〕和歌を詠むに勝れて妙な人。和歌の大名人。藤原公任の撰んだ三十六歌仙は、柿本人麿、紀貫之、凡河内躬恒、伊勢、大伴家持、山邊赤人、在原業平、遍昭、素性法師、紀友則、猿丸大夫、小野小町、藤原兼輔、藤原朝忠、藤原敦忠、藤原高光、源公忠、壬生忠岑、齋宮女王徽子、祭首頼基、藤原敏行、源信明、源宗于、源順、源清正、源重之、藤原興風、清原元輔、坂上是則、藤原元眞、大中臣能宣、壬生忠見、小大君、藤原仲文、平兼盛、中務。

***かた**　かたの好い者の仕合見よ、盃せぬばかりで二十八貫目拾うた(萬年草)　肩の惡い梅川樣、いとしぼいは川樣おひとりにとどめた(冥途飛脚)　望みて去らるる淺ましさ、男も女も曾我一家の是程かたの惡さはと(會稽山)

〔肩〕運。龍耳(貞享四年成)に、「運のよいわるいといふべきを、肩がよいわるいとはいふべき詞にあらず、肩に棒おく商人・駕籠舁・乘物舁より起りたる詞なり」。好色萬金丹・巻一に、「吉凶は痃癖の如し、二つながら人の肩にあるものから、好き事のみも續かず、又惡い事ばかりもないもの」。風流詫平家・巻一、稻荷山は血汐の薄楓の條に、「貧福は痃癖の如し、是非とも人の肩によるべし」。

***かた**　勝てばむして十六貫何で濟す合點ぢや、かたも無うてはいやぢやといふ(丹波與作)　年季の此玉をたつた三百のかたに張つて、既にどうへ取らるるところを(大職冠)

〔形〕抵當、引當。

かだ　おのれ大分の錢を取りながらかだをして働かず、横着ひろぐゆゑにこそ人人にも怪しまれ(出世景清)　旅の疲れの御惱みを、不精者よかだ者と、威しの爲に撲つ杖の(隅田川)

「くわんたい」(緩怠)の約訛であらう。懶けること。横着。かだ者とは横着者の意。狂言・縄綯に、「手ですることにかだを申せば、また口でいふ事を申付けらるる」。同・あかがりに、「きやつめは常の横道者でござる程に、又例のかだを申すものでござる」。

かだ　散花音樂伽陀の聲、法の功徳ぞ有難き(嵯峨天皇)

〔伽陀〕梵語(Gatha ガートハー)である、譯して頌といひ、偈に同じ。「げ」(偈)を見よ。

かたいき　扨も金は片いきな、ある處にはあるものか(淀鯉)　昔より有る所には鑛の、金銀は寶の最上一切世間の望を叶へ、金に優るもの無けれども、かたいきと云ふ癖あつて、無い處には無かりけり(釋迦)

〔片行〕片方へ行く義。平均を外れて一方へ寄る。片寄る。

***かたうど**　これはかりそめの事でない、外にかたうどあらん(傾城佛原)

〔方人〕荷擔人。徒黨。

かたかなのき　否でも應でも清十郎は片假名の木の空で此樣に手を廣げ(歌念佛)

片假名のきは即ち「キ」で、磔柱を云うたのである。磔柱は長さ二間に五寸角で、上下二ケ所に横木があつて、其形片假名のキの字に似てゐる。

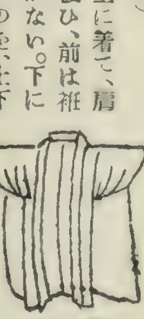


***かたかま**　素槍・片鎌・十文字(堀川波鼓)

〔片鎌〕槍の刄の一方にのみ枝あるものを片鎌といふ。(兩旁に枝あるものを兩鎌と云ふ)。

***かたぎぬ**　茶字の袴に綟肩衣(堀川波鼓)　あの綟の肩衣が孫右衛門樣か(冥途飛脚)

〔肩衣〕衣の上に着て、肩から背のみ被ひ、前は衽ばかりで袖がない。下に半袴を着けたのを、上下といふ。



〔肩衣〕

(肩衣・半袴)合せて上下といふ。嬉遊笑覽・二上に、「古畫を見るに、肩衣ばかり着て帶をしめ、袴を着ざる體あり、賤者の着たるが多し、……一向宗門徒の肩衣も似たることながら、その上はさる事もなかりしと見えて、古き繪草子どもに彼の宗徒の樣を畫けるに、皆常の上下の服にて、肩衣ばかりはおりて着たる體見えず、但延寶三年開板の難波名所を書ける蘆分船に、肩衣ばかり着たるも見えたれど、町人も輕き者のさまにて、さるべき者は皆上下を着たり、思ふに此宗門のならひ、年中佳節も他に異にことそぎて物するなれば、なずらへて肩衣ばかりを用ゐしは、町家にも殊に賤

三國時吳人、字孝先、從二左慈一得二九丹液仙經一、遂得レ仙、號二葛仙翁一」。

***がつそう** にようつと出たる糟尾のがつそう、紙子の廣袖革柄(つか)の大脇指(大經師)

「喝僧」喝食僧の如く總髮なるをいふ。喝食は羅林象器箋に、「今時喝食、分二取額上髮少許一、下二垂額面一、剪二斷其末一、又左右髮抽二取少許一、下二垂左右肩前一」と見えてゐる。(和爾雅には「賢僧＝今俗稱二蓬髮者一爲二賢僧一、言レ似二僧故爾一」とある)。

かつたゐ 青才六(あをさいろく)めらそれ踏殺せ、承ると徒士若黨、とつと寄れば仕丁ども、無法者を相手にするはかつたゐと棒打ち(艶狩)

「かたゐ」(傍居)に促音「つ」の増加した語で、路傍に居て物を乞ふ義。乞食。倭名抄に、「乞兒。今案乞索兒即乞兒也、和名加多井」。「かつたゐと棒打ち」は穢多と喧嘩といふ類で、損恥ぢの意。

***かつふつ** 歩むも老の腰痛や、耳はかつふつ眼は疎し(艶狩) 我等は弓矢打物取つては誰に負けんと存ぜねども、色事かつふつ不得手なり(艶狩)

「都」の字を「かつ」と訓じ、また「ふつ」と訓ず、この二訓を合せた副詞で、下に必ず打消の語に應じる、そのないのは略されたのである。都(すべ)て。全く。萬葉集・卷四に、「都毛不知(かつてもしらぬ)」。神代紀・上に、「求レ之都(ふつに)無レ所レ見」。

かつぽうどり 森の小烏川千鳥、かつぽう鳥も聲さびて(卯月艶)(卯月潤色)

「かつこうどり」(郭公鳥)のことで、鳴聲によつて名づけた鳥の名。攀木類に屬し、深山に棲み、はいだかに似て全身黑文灰黑相雜はり、腹は淡黃で白黑文がある。詳しくは伴信友撰比古婆衣・卷五、喚子鳥の條下に見えてゐる。

かつぽこ お手前は辯舌といひ好いかつぽこにて、淺ましき生活を召さるるは笑止千萬(五人兄弟)

「かつぷく」(恰幅)の轉訛。風采。姿體。

***かつらかつら** 怒れる聲にてかつらかつらと笑ひ(用明天皇) 判官かつらかつらと笑ひ(天鼓)

高笑の聲を形容した副詞。からから。

かつらぎつねよ 葛木常世は江の子島とよ、なぜなぜ、えのころころころ抱寄せて手飼に愛らしや(今宮)

〔葛木常世〕小柄で若女形を勤める俳優であつたので、犬兒(えのころ)にもぢつて江の子島と綽號したのである。役者謀火燵(寶永七年刊)若女形之部に、「中上々。かつらぎ常世。よほど久しいお子ぢやが、藝すわりて氣の毒、目もとすすどく愛敬らすし、所作事不得手云々」。

***かづらぐさ** 亂れあひにし枕にはかづら草をぞ思出す(用明天皇)



〔葛　草〕

〔葛草〕くず(葛)の異稱、春生じ秋の初め梢の葉の間に花穂を出す、その色紫赤である、蔓を以て葛布を作り、根から葛粉を製す。

桂の夫婦(かつらのふうふ) 儼然とかつらの夫婦形を現はし(聖德天子)

月天子と月天女。桂は月の桂とて月のことにいふ。起世經に「佛告二比丘一、月天子宮殿、縱横正等四十九由旬、四面垣牆、七寶所レ成、月天宮殿、純以二天銀天青瑠璃一而相間錯、一分天銀清淨無垢、光甚明徹、餘之一分、天青瑠璃、亦甚清淨、……亦有二大輦一青瑠璃成レ輦、高十六由旬、廣八由旬、月天子、身與二諸天女一住二此輦中一、天子壽五百歲、子孫相承云々。」

***かづらゆひ** ばんざふ大王の後胤、かづらゆひの親王の末孫(用明天皇)

〔葛結〕桶屋。桶職。錦文流撰、傾城八花形に、「昔は正木葛の丞、今は身すぎの葛結ひ」。

***がてん** 年季の三太すつきりと合點せず(重井筒)



〔門行燈〕
(野傾旅葛籠所載)

〔合點〕「がつてん」ともいふ。もと和歌などに點をかけることをいうたのが轉じて、得心。承知。著聞集に、「定家朝臣の許へ點を乞ひにやりたりければ、合點して褒美の詞など書付け侍り」。

***かどあんどう** 心がこころ留むるは門行燈のもじが關、浮かれぞめきのあだ淨瑠璃(天網島)



八棟大島臺(寶永七年刊)所載〔門行燈〕

〔門行燈〕家の入口の所に吊せる行燈。

***かどはかす** この廣廣たる野原より松岡を呼ばん者は覺えず、盲目をかどはかし笑はん爲か(天智天皇) 粟田口の加藤兵衛が娘をかどはかし、鏡山の遊女に賣つたる條紛れなし(酒呑童子)

〔勾引〕誘拐す。小兒女子などを誑んで連れ去る。義經記・卷一に、「かどはかし參らせ、御供して秀衡の見參に入れ」。和訓栞に「かどふ＝新撰字鏡に誑をよめり、折曲也と見えたり、後撰正義に勾引也といへり、今人を勾引するをかどはかすといふ是也」。

***かどび** まあ愛で門火を焚き(鑓權三) 姉なう重れて戻らぬ爲、祝うて内で門火を焚け(宵庚申)

〔門火〕婚儀は再び生家に戻らぬやうに葬禮の儀式に傚ふ、門火を焚くもその一である。女重寶記(元祿十五年刊)二之卷、しうげんの次第の條に、「死したる者は再び歸らぬならひなれば、嫁入しては再び父母の家にかへらぬといふ緣を取りて、輿乘物を蔀(しとみ)より出し門火を焚き、鹽と灰とにて打出すことの死人のまねびをする事、うへうへ方にもある事なり」。源五兵衛おまん・薩摩歌(巣林子作)に、「嫁入する日は死拵姿、葬禮の儀式と聞く」。周禮に、「喪設二門燎一」。顏氏家訓に、「喪出之日門前燃レ火」。

***かとりのきぬ** 鹽燒衣色かへて、かとりの衣の空燒(そらだき)なり(堀川波鼓)

〔縑衣〕縑は堅織(かたおり)の義、細絲で緻密に織つた絹布で作つた衣服。衣服ににほひを留めるには、伏籠の上に縑衣一重をかけ、その上に衣服をかける。「扨も行平三年が程云々」をも見よ。

て聞ゆ、小世繼に、五寸かだみて切候はずと申云々、これは羅城門の高さを一尺切れと仰ありけるを、工がかだみて五寸切たる由なり、かだみはしんしやくする心、又うちばにする心に聞ゆ」。「玉島川にあらねども云々」をも見よ。

＊**かたむくろ**　新七とやらいふ手代、かたむくろに政道し（淀鯉）　かたむくろに脅我を引くおのれは最負の引倒し（會稽山）　かたむくろの親仁殿、疑の念なきやうに誓紙書かすが合點か（天網島）

へんくつ。かたくな。風流曲三味線（寶永七年刊）に、「昨日は田舍侍のかたむくろなる人にも、氣に入相頃より夜更くるまで無理酒に痛み」。「ひとむくろ」をも見よ。

かだめ　かだめ廿海苔春もまた、若布まじりのめざしなす（出世景淸）　有がたかだめの臺引物（宵庚申）

〔加太布〕紀伊國海草郡加太の名產裙帶菜の稱。現今も加太町の名物として賣る。

かたをか　われなこんやのかたなかに、何とか思ひ染川は（重井筒）

〔片岡〕元祿寶永頃に於ける歌舞伎名優片岡仁左衞門を云ふ。元祿太平記（元祿十五年刊）卷之八、道頓堀に吹く嵐かなの條に、「片岡仁左衞門敵役にしては三國無双、第一男振大位にして勿體あり、然し物言じゆつなさうに聞ゆ濡事實事おもはしからず」。名人忌辰錄に、「元藤川伊三郎とて三味線彈なり、中年に俳優となり片岡と改む、享保元申年二月三日歿す歲四十四」。

かたをなみ

「わかの浦にしほ滿ちくればかたをなみ云々」を見よ。

＊**かち**　そりやこそと、お徒衆やには二人なすがりとめ、兩方へ引分くる（丹波與作）

〔徒〕かちざむらひ（徒侍）の略。主君などの供に徒歩で從ふ侍の總稱。馬に乘らないで徒歩で行くを徒歩立といふ。

＊**かぢ**　此法印を賴めば本復はたつた一加持（女殺）　金胎二器の加持香水、王化に潤ふ秋津民（嵯峨天皇）　幸これに奧院の加持土砂を持合せたり（以呂波）　先づ加持の讚をぞ誦せられける（蟬丸）

〔加持〕加は力を與へて加護する義、持は攝持して失はぬ義。眞言要記に、「加者、諸佛大悲來加ニ行者一、持者、行者信心以感ニ佛因ニ」。加持は眞言宗で盛に用ゐる語で、病氣災難を除く爲に、或は獨鈷などを用ゐ、或は印相を結んで、陀羅尼を唱へながら佛の加護を祈る呪法である。

「加持香水」とは、加持の呪法によつて佛力を加へ淨化した香水。

「加持土砂」とは、淨水で洗ひ淸めた土砂を呪文を唱へて加持したもので、これを病者又は亡者に與へて利益を得さすのである。

「加持の讚」とは、加持の時に誦唱する呪文。

鍛冶屋の仁藏　灰まぶれの鍛冶屋の仁藏、身にさへ着にくい緋縮緬に足を四本踏ん込んで、その罰は何とせう（氷朔日）

仁藏は二藏とも書き、鍛冶職の弟子を呼ぶ稱。井原西鶴撰・男色大鑑卷之六、京へ見せいで殘りおほいもの〻條に、「三月三日は鍛の槌打二藏までも、天王寺淸水汐干などいうて遊び日なり」と見えてゐる。（序に云、京都七條通り鍛冶屋の仁藏（駿河企彌の弟子）が、島原の名妓吉野を深く戀慕した。吉野その心を隣んで一夜仁藏に身を任した。仁藏深く喜び、且つ我が身の果敢なきを嘆き、遂に桂川に投身したといふ、仁藏も鍛冶屋の弟子の稱で本名ではない）。巣林子のこ〻の文も、鍛冶屋の弟子の意にいうたまでゞある。

＊**かちゆう**　同じ家中の相役人（堀川波鼓）

〔家中〕大小名の家來の總稱。「同じ家中」は、同藩の武士。

＊**かちん**　かちんの裝束に金襴の籠手をさし（世繼曾我）

〔褐〕搗の意から出た語で、藍を搗ちて染めるから云ひ、濃き紺色をいふ。褐と書くは當字である。勝色の義として緣起を祝つて、武具などに用ひる由平義器談に見えてゐる。昔時播州飾磨の里で此の色の布を染めて賣出したので、飾磨の褐などというてある。

＊**かつがう**　「ゐねうかつがう」を見よ。

かつがつ　二百枚の價では、山の奧でもかつがつに暮されまいものではなし（吉岡染）

「かたつかたつ」（片片）であつて、物の足らぬこと。現今福山市地方で、「節約してどうかかうか生計の立てられる」ことを「かつがつ暮せる」といふ。新古今集に、「秋は來ぬといつしか空の晴れそめて、かつがつ三日の月ぞさやけき」。本朝二十不孝卷四に、「甚七いつとなく人の慈悲を受けかねかつがつになりぬ」。

＊**かづき**　段模樣の染被衣（酒呑童子）

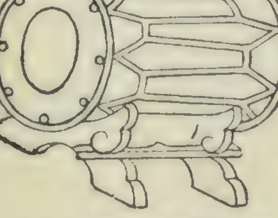
「被衣」昔時婦人外出の時、顏を隱す爲に頭から被つた小袖である。貞丈記・卷之三、小袖類之部に、「古より女はよそへ出づる時はかづきをするなり、今も京大坂などの女は被衣をするなり、古き物語などにきぬかづきの女とあるはこの事なり、古の被衣は白き單の小袖なり、今は色々に染めて裏付けたるあり、模樣をも染めたるもあり、兩袖をさげて被くなり、被衣の裁縫常の小袖に替る事なし、えり形を前へ下げて裁つなり、これは額へ深く掛り顏を隱す爲なり、江戶にては今は被衣する事なし」。

＊**かづく**　かづく苅藻は何何ぞ（出世景淸）　此浦のかづきの海士（最明寺殿）

〔潜〕水をもぐる。和訓栞に、「海人のかづくは潜の字をよめり、被と義通ず」。「がぶる」をも見よ。「かづき」は轉成名詞。

＊**かつこ**　左京が娘春姬女ながらも家傳をつぎ、琵琶琴竹の物の音、太鼓羯鼓に暗からぬ出（三世相）

〔羯鼓〕臺上に載せ二桴を以て撃つ鼓であるが、古來誤つて腰鼓をいふ。曉晴翁撰、雲錦隨筆・卷二に、「世俗に腰に佩て打つ鼓を羯鼓といへり、羯鼓は腰に帶る物にはあらず、腰に佩て撃つは腰鼓と云ひ、和名久禮豆々美と云ふ、既に能狂言にも腰鼓を以て羯鼓とよべり、然れば古くより誤りたること見えたり、羯鼓は臺ありて下に置き、二桴を以て撃つなり、事物紀原に、「羯鼓は本胡戎の樂器なり、羯は乃ち胡戎の號、故に之を名づく。


〔かつこ〕（和漢三才圖會所載）

かつせんわう　かつせんわうが吹目の術、三界を見巡ること半時を過ぎず候（用明天皇）

「かつせんをう」（葛仙翁）の誤。葛仙翁は姓名を葛玄といひ、字は孝先。三國時代吳の琅邪の人である。長生不死の道を慕ひ、左慈に從つて九丹金液仙經を受け、漢の建安中に閣皂山に遊び、嘗て東峯に於て臥雲庵に坐して修煉し、後仙術を得たといふ。辭源に、「葛玄。

今日はあしたのきのえねと、知らであふ夜のその報(大經師)

〔庚申〕「かうしん」を見よ。

***かのこゆひ** 鍼按摩久庵、洗物師の蛇の目後家、かのこゆひのお雪が嗅打連立ちて(蛙合戰)

〔鹿子結〕鹿子の括り染。鹿子絞。

かはく 行違ひ入亂れ食ひつ食はれつ吠ゆる聲、梵天を驚し河伯も住家を跳出で(千疋犬) 海神河伯を祭りても猶一滴も降らざれば(嵯峨天皇)

〔河伯〕水神。かつぱ。抱朴子に、「河伯是華陰人、以二八月上庚日一渡レ河溺死、天帝補署爲二河伯一、故今庚辰日不三治レ舡渡二レ河」。

かはく 「かわく」を見よ。

かはぐくみ 火の用心の爲とて皮ぐくみの道服(虎が磨)

〔皮包〕すつかり皮で造ること。皮包括。

かはくぢら 「さしさば」の條を見よ。

***かはござ** 早天から川御座で參りをつた(女殺)

〔川御座〕川御座船をいひ、屋形船である。御座は、もと貴人の乘つた船を御座船といふに起る。川御座船は町御座船ともいふ。蓋し町中の川を航行するによつて、川とも町とも附いたのである。和漢船用集・五に、「町御座船。本名屋形船、貸を取て借故借御座船と云ふ、惣矢倉にて日覆屋根あり、下裝藏すべし、上坐客すべし、風ある時は用がたし、酒を携へ妓女を載す遊山船とす、大小廂の多寡をいはず、水主鹿子の多少による、一人乘・二人・三人・四人・五人・六人乘と云ふ、則呼で舟の名とす」

***かばざくら** 肌に白無垢・淺黃櫻にかば櫻(賀古教信)

〔樺櫻〕山櫻の一種で花一重である。馬琴編・靑藍補、俳諧歲時記栞草に、「大和本艸、樺櫻は一重櫻なり。多識篇、樺櫻は山櫻の屬、古今に、かにはざくらといへる是なり」。

***かはせ** お禮は爲替に仕る(百日曾我)

〔爲替〕此方より遣りて彼方と取替へにすること。轉じて、互に禮を述べまた物の取遣をすることを申合うて略すること。

かはせうえう 何者なれば川せうえうの水上に土足を踏込み、水を濁すは奇怪千萬(大礒虎)

〔川逍遙〕川遊び。逍遙は「あそぶ」(遊)と訓じ、莊子の逍遙遊の語に出づ。古今集・秋上部に、「秋たつ日うへのをのこども、かもの川原に川せうえうしけるともにまかりてよめる」。

***かはたけ** あるが中にも川竹の、遊女は何の報ぞや(三世相) 妾が昔はうき川竹の傾城、萩野屋の八重桐とて(嫗山姥) 横笛が稚名を直に付けたる竹の名の、身は川竹となるためし(酒呑童子)

〔川竹〕川竹は水邊に生ひたれば流れの身の意にいひ、遊女の身の上を云ふ。「ながれの身」をも見よ。金葉集に、「一夜とはいつか契りし川竹の、流れてとこそ思ひそめしか」。謠曲・班女に、「げにやもとより定めなき世といひながら、うきふししげき川竹の流れの身こそ悲しけれ」。

かはぢさ 根芹深芹かはぢさを摘めば浮藻に連れて寄る(以呂波)

〔川萵〕小川の邊また水田に自生する二年生草本植物で、高さ一尺餘に達し、帶紫白色の小形の花を開き總狀花序をなす、若き莖葉は食用となる。



〔かはぢさ〕

かはづがけ 正しう河津が勝つたる故、今に傳へてかはづがけと云ふ相撲の手あり (五人兄弟)

〔河津掛〕相撲四十八手の一。敵手の差いた方の右手を上げて敵の首を捲き、又其方の足を内から敵の足に搦み、反身になつて後へ捻り倒す手をいふ。昔河津と俣野とすまうた時、俣野は大男で河津を差上げ投げようとしたのを河津この方法によつて俣野を倒したので、この方法を河津掛と名付けたのであると傳ふ。

かばのおんざうし 「がまのおんざうし」を見よ。

***かはらけ** 年の往かぬ娘ぢや、土器を三方に、口取は熨斗昆布(萬年草) 內儀は銚子、娘はかはらけ、牛蒡も身祝ひ(壽門松)

〔土器〕素燒の杯。心中萬年草のこの文は、結婚の饗宴をいふのであるから、素燒の杯を三方に載せて出すをいうたのは勿論であるが、陰毛のない女子の陰部を土器(又はお茶碗)といへば、それをきかせて「年の往かぬ娘ぢや、土器云々」といひ續け、そして本膳料理に搗栗・熨斗・昆布を最初に出したのである。「くちとり」を見よ。又壽門松のこの文も、土器に娘のまだ陰毛なきをきかせ、それに對して毛牛蒡(その條を見よ)をきかせて、牛蒡も身祝ひといひつづけたのである。今宮心中に「土器焙り、艾出して揉まんとするを」とあるのは、土器に入れて焙つた艾を引出して揉まうとする意。永代重寶記(元祿八年刊)に、「艾は古き程がよし、……濕りたるは灸の功うすし、土器に入れて焙り乾かすべし」、と見えてゐる。

***かはらげ** 扨その次はかはらげの、野髮野爪に逞しく、丈拔群に立勝り(大礒虎) 熨斗昆布にかはら毛と祝ひ乘つたるは、さつても伊達なお侍と(雪女)

〔川原毛〕馬の毛色の名、白うて黃赤を帶びたもの。騍。倭名抄に、「騍馬。川原毛」。

變りちんつの國訛 田舍の客に揚げられて、連れてあるじの後家交り、かはりちんつの國訛(女殺)

「ちんつ」は、「ちんつちんつちんちりつこ」などいふ口三味線をいふ。國訛のある一種變つた口三味線。

かばん 加番見れども靑もなく、上りも知らぬひらよみに、そも三枚はいさ知らず、取得ん事はけなしなり(大職冠) こなたは加番に靑のぼん樣、かるたには太この一(女楠)

〔加番〕加留多の遊戲の用語、宇牟須牟加留多をするに、己が番に紋樣の同じものを合さうとして餘所の札を貰ふことを云ふ語であらう

かばん 追付け後より加番として、佐佐木十藏廣綱を遣はさん(最明寺殿)

〔加番〕武家時代、城代の副として留守を衞る番を城番といひ、城番にて番の手足らざる時

*かどんで　入道親子佐藤庄司御かどんでを取行ひ、城外の馬場先に御旗あぐれば(十二段)
「かどで」(門出)に撥音「ん」の增加した語。

かないろ　此のかないろは酒でないか(持統天皇)
〔銚〕眞鍮製の銚子。倭訓栞に「かないろ＝銚をよめり、金器の色よきをもて名くるにや、庭訓にも銚子金色・提と見えたり」。

*かながひ　秋はさやけきかながひの、影を數へて一と二た三い四う(松風)　花橘をかながひに金輪の鞍置かせ(大職冠)
〔金貝〕金で作る螺鈿の義、金・銀・銅・錫の類の薄片を蒔繪に用ゐて嵌入したもの。松風村雨束帶鑑なる金貝は、金貝細工の獨樂を云うたのである。

*かなぎる　うば玉の髮も亂れ氣も亂れ、戀し懷し嫉ましと、空にかなぎる恨みの聲(天鼓)
〔金切〕金屬を切る時に發するやうな音聲の弱くて極めて調子高いをいふ。

かなしばり　走り人竊盜動かせぬは不動のかなしばり(女殺)　彼等かたはしかなしばりにしてくれん(弘徽殿)
〔金縛〕不動明王の縛の繩で結んだものは解くことができないによつてこれを金縛といふ。轉じて、嚴重に縛ること。

かなづちせんべい　北野鐵鎚煎餅三郎兵衞と申す者の女房(氷朔日)　これはとゝの手燒の鐵鎚煎餅(氷朔日)
〔鐵鎚煎餅〕當時上方の煎餅にこの名のものがあつたのを借用したのである。國花萬葉記・浪花名物畧の條に「かなづちせんべい。こんま老松丁」と見え、西澤一風撰の色縮緬百人後家(享保三年刊)卷二に、「花せんべい・色せんべい・かなづちせんべい箱に入れ、あまい手わざの燒賣云々」とありて、その挿畫に扁圓の煎餅が畫いてある。されば鐵鎚煎餅は扁圓で堅く燒いた煎餅である。

かなづちろん　詞をおさへひつしひつしと生木に釘打つ鐵鎚論(隅田川)
〔鐵鎚論〕鐵鎚で釘を打込むやうに、詰かけて無理に押通す論。吾吟我集に、「棠宮にのろひごとして打つ釘は鐵鎚論の悋氣いさかひ」。

*かなぶち　かくし置きたる捕手の者、十手八方かなぶちをぶちたてぶちたてねぢ伏せて(反魂香)　立つまい立つまい先退けと、かなぶち鳴し振廻す(孕常盤)
「かなむち」(鐵鞭)の轉語。鐵棒。歌十編の櫻山臥と云ふ本に載せてある支考の句に、「藤鞭をわすれて遊ぶ寺子共」とありて、藤鞭に「ふぢぶち」と傍訓してある。

*かなぼう　そろそろ用意と帶なほし身拵へする中に、かなぼうの音人足しきりに近付きたり(大經師)
〔金棒〕路次を警める具、地を突いて響を出すやうに頭に四五箇の輪を附けた鐵の棒。

*かなめいし　搖ぐともよもやぬけじの要石、鹿島の事觸あらん限りは(用明天皇)
〔要石〕常陸國鹿島郡鹿島神社の境内にある大石である、大部分は土中に埋まり、地上に出づるはその一小部分に過ぎぬ。俗說に、この石大魚を抑へて搖がしめぬと云ふ。さればこゝの文にも「搖ぐともよもやぬけじの要石」というたのである。鹿島誌(題簽・鹿島名所圖繪)下卷、要石の條に「ゆるぐともよもやぬけじの要石鹿島の神のあらんかぎりは、といへる歌は誰れ人の詠みたりけん、あまねく世俗の口なれし歌なり。常陸國誌に、土人相傳、有二大魚一齧二繞日本一、首尾會二於斯地一、鹿島明神釘二其首尾一以貫レ之、不レ得二動搖一、譬如二扇柄得一レ釘而堅固、此石卽釘也、荒唐可レ笑」。後世の地震諷刺畫に、鯰を要石で押付けた繪あるはこの俗說によつたものである。

*かなわ　仇と情と怨念と、三つの鐵輪に燃ゆる火に(蟬丸)　親旦那と三つがなわでけんほくぼはれて產んで見しよ(酒呑童子)　兩の手に鐵輪、世間で謠ふ親子籠太鼓(酒呑童子)
〔鐵輪〕五德とも云ひ、鐵の輪に三脚あつて、炭火の上に立てゝ鐵瓶などの底を支へる具、昔時、人を詛うて丑の刻參りする時、五德を頭上に冠り、その三本足に火を燭して行つたものである。「親旦那と三つがなわ」は、三人鼎坐の義で、五德の足の如く三方に坐ること。「兩の手に鐵輪」は、謠曲・鐵輪に鐵の輪鎖をきかせたのである。

*かなをか　金岡が筆のすさみの跡絕えず(反魂香)
〔金岡〕巨勢金岡をいふ、光孝・宇多の朝に仕へ、繪畫に秀で障子屛風などに畫いて妙手の譽があつた。「はね馬の障子」の條をも見よ。

*がにはりもの　理を非に曲げて、東路へ歸れといふ程がにはりもの(隅田川)　かにはり者もてあつかひ(關八州)
〔我に張り者〕我意の方に張通する者、剛愎者。俚言集覽に、「がにはりもの。(カカナホシ)我を折らぬ者をがにはりものはいかが、愚按、我を張る意歟」。

*がね　二の宮殿を犂がれとは身に取つての譽と存じ(五人兄弟)　花犂がれに相生の島臺飾る座敷構へ(雪女)
名詞に附いてその者となるべき意を表はす接尾語。伊勢物語に、「このむこがねによみておこせたりける」とある。「后がね」「君がね」「大臣がね」など古書に用ゐてある。「犂がね」は犂となるべき人。

*かねあひ　せきに急きたる手も伸びて、見込のかねあひ外れけん(薩摩歌)
〔兼合〕輕重平均して偏らぬこと。釣合。中心。

かねこ　歌流・金子も難波津へ、さくや此花其花の、噂も戀の種ぞかし(女腹切)
〔金子〕金子吉左衞門をいふ、京都にあつて道外形の名優であつたが、正德三年の春芝居に大阪の三十郎座で立役を勤めた。

*かねごと　そのかねごともいつしかに、徒寢の夢のばくろ町(今宮)　一ふさ折りて參らせし花の情のかね言を・今もみどりの松原や(大原問答)
〔豫言〕かねて言ひ置いたこと。前方から契約した言。「夕顏の花を還る五條わたりの黃昏に云々」をも見よ。

かねぜき　太兵衞めには請出されぬ、若し金ぜきで親方からやるならば物のみごとに死んで見しよと(天網島)
〔金堰〕金錢の力で人の行動を遮斷すること。

*かのえさる　人目盜みてあらはれて、不義ぢやの何のかのえさる、

漫紀巻四、戊子瘟疫の條にも、「餓莩相枕藉令人不敢正視」とある。「孟子梁の恵王に語って曰く云々」をも見よ。

*かへす　卯の色を黄に返して袖標つけたる鎧（最明寺殿）
〔返〕或色に染ってゐるものを他の色の中に入れて染返すをいふ。

*かべそしよう　言よいとて祐經を小栖に取つて壁訴訟、顔には似合はぬさもしいさもしい（扇八景）
〔壁訴訟〕壁に向って訴訟する義。誰に言ふとなく遠廻しのあてこすりを言うて、不平を訴へること。毛吹草に、「きりぎりす秋を告ぐるや壁訴訟」。

*かへな　替名は鯉様、十萬兩遣うてもこちとが百錢落いたとも思はぬ程の身代なれども（淀鯉）
〔替名〕遊里では客の本名を呼んで人に知られるのを氣遣ひ、替名を呼んだものである、多くは姓または名の一字を取れど、その客に緣ある他の物から取つて替名にしたのもある。淀川から産出する鯉を淀鯉と稱するによつて、江戸屋勝次郎の替名を江戸屋と淀と音が似てゐるより鯉とあざなしたのである。嘉平次を平、河内屋與兵衛を河與、名古屋山三春平を平、半七を半などいへるは巣林子の作中に見えて、廓内に於ける替名である。

*返忠　坊門の宰相かへり忠にて、君とらはれとなり給ふを（女楠）
〔返忠〕舊主に反いて新主に忠をなすこと。裏切。内應。

*かへりまうす　これぞ誠に氏神の御山を拜む心地ぞと、かへりまうして眺めやる（十二段）
〔返申〕報賽す。宇津保物語に、「萬の神たちに返申しのみてぐら奉らんとて、河原に出で給ひて」。

歸る柏屋留る柏　どうでこいつら死なうわい、つんと足が進まぬと、歸る柏屋とどまる柏（生玉）
柏屋半兵衛は歸り、嘉平次・おさがは留る。嘉平次・おさがの兩人貸巻になつてゐるを柏餅に見立てゝ柏といつたのである。

かへるまた　こうりやう・かへるまた・榱・うら板・土瓦、ぐわらぐわらどうど地に落つる（關八州）
〔蟇股〕「こうりやう」（虹梁）を見よ。

*かほみせ　何とかほみせ見やつたか、札買やる錢遣らうか（重井筒）
〔顔見世〕顔見世芝居のことで、上方地方では十一月の初めに顔見世を行ひ、明年の役者の座組はこの狂言で定めたものである。「戌の顔見世」をも見よ。黑川道祐撰、日次紀事・十一月の條に、「此月初四條河原狂言、并傀儡棚之役者、入易後各施レ藝、諸人改觀、俗是稱二顔見一、是使下見レ之人知中役者顔面上之義也、到二臘月二十日許一各止レ之、來年正月二日又始レ之」。

*かほよばな　十八九なるかほよ花（曾根崎）　切ればしぼめるかほよ花、誰がそれぞと見知るべき（井筒）
〔顔佳花〕杜若の異名。顔佳花の名より美人にかけていふことが多い。「かほよばな」は「かほばな」とも云ふ。萬葉仙覺抄に、「かほ花とはかきつばた也、かほ鳥の鳴く時に咲けば、かほ花と云也」。八雲御抄に、「かほ花はうつくしき花也」。謠曲・杜若に、「時を忘れぬ花の色、かほよ花とも申すやらん、あら美しの杜若やな」

*かま　さあ母のかまがわせた、何言はるると樞の穴、耳を附けてぞ聽きゐたる（女殺）　そこらなつまらぬかま親仁、オオこりやでかした、イヤよう言うた（生玉）　親仁とかまの今めとが、これも在所へ行く風で（卯月袍）
〔鎌〕鎌は身と柄とが折曲つてゐる故、邪曲の意に喩ふ。邪曲。獰惡人。里村紹巴撰、匠材集（慶安四年刊）に、「かまのさう。おそろ敷體」。

かまく　左様の事にかまけてうろつく幡樂に非ず（蛙合戰）
氣負の義であらう。拘泥する。俚言集覧に「倭訓栞、カマケ、感をよめるは日本紀靈異記などに見えたり、今俗事にうちかゝり居るをカマケてゐると云意近し云々、愚按、關東にてカマケと云所を備後福山あたりにては貪着するといふ、カは詞の上の助語にて、カホソイ・カヨワイのカ、マケは貪なるべし、物に感じ着して貪る也」。

*かまくび　煙管の雁首・細首・元首・捻首・鎌首換へよなら今ぢや（千疋犬）
〔鎌首〕蛇が首を曲げてもち上げてゐるやうな首つき。鎖鎌で搔取る首をもいふ。井蛙抄・第六に、「寂蓮はかまくびをもたてゝいさかひけり」。

*がませんにん　蛙は卽ち蝦蟆仙人が仙術（吉岡染）
〔蝦蟆仙人〕蓬髮洗足で嘻笑しながら蟾を弄んでゐる仙人。桂林漫錄に、「蝦蟆仙人。海蟾、姓は劉、名は喜、渤海の人なり、金に仕へて相位に至る、後印を納めて終南山に入り、道を學びて仙たり、今蓬頭洗足嘻笑の人、手二三足の蟾を持ちて之を弄する形を畫き、劉海戲蟾の圖といふ、直に劉海を以て名とす、世擧つて其名を知る者有ること無しと、碣石剩談に載せたり」。大原問答青葉笛に、「人間の及び難きがま鐵枴が獄なりとも」とある「がま」は、蝦蟇仙人のことで、鐵枴（仙人及山の名に此名の者がある）をいふにつづけ、蝦蟇仙人・鐵枴仙人の妖術を聯想して、かくいうた。

*かまど　追從表裏の佞臣どもが、御尤御尤の輕薄詞に育てられ、我知らずのかまど將軍、御意見申す者なきゆゑ（天智天皇）　一門振舞祝儀の使・竈の霞鱠の雪（大經師）　竈の煙ほのぼのと、戸ざさぬ御代の民百姓（蟬丸）　身代どうもたちかね、既に竈を破るところ（氷朔日）
〔竈〕「竈將軍」は竈のある處での將軍の義、家庭内で大將軍。家庭で權威を振ふ者を云ふ諺。井原西鶴撰・胸算用・巻二に、「茶は寢ながら内儀に持たせ置きて、手も出さずに飲みけれども、面々の竈將軍この内に續く強者なければ、誰が外より尤むる人なく」。「竈の霞」は、竈から立のぼる煙のたなびけるを云ひ、臺所の賑やかな情景にいふ。「竈の煙ほのぼの」は、民の賑はへる有様を云うたので、仁徳天皇の御歌「高き屋に登りて見れば煙立つ、民のかまどは賑はひにけり」の故事によつたのである。「竈を破る」は、其家に住はぬ義で、破産または身代限りをするを云ふ。史記・項羽本紀に、「項羽乃悉引レ兵渡レ河、皆沈レ船破二釜甑一」とあるも、身の破滅を覺悟した行爲である。

かまぬりよし　紅蓮の井戸ほり焦熱の地獄のかまぬりよしなやと、いそがぬ道をいつのまに（大經師）
〔竈塗吉〕曆上の語、竈を塗るによしといふ日。

*がまのおんざうし　蒲の御曹司範賴（大原問答）

は更に副を設く、これを加番といふ。

***かひ** 貝の尾を引き太鼓を打つて　聲はゐいゐい(佐々木)

〔貝〕法螺貝のこと。貝の尾を引くとは法螺貝を吹く聲の長く響くをいふ。(「貝を作る」は諺の條について見よ)

***かひ** 兄御の內の奉公人、躾(しつけ)意見もすべき身が客衆とやらのかひになり、身代の妨げと(重井筒)　長くも添はぬ物ゆゑに、命のかひまでなしたよな、許してたもれ小女郞(博多)　松風は詮方なく、言へば夫の命のかひ、言はねば夫を妹に取らるゝか淺ましや(松風)

〔かひ〕生甲斐があるなどいふ甲斐と同じ語で、價卽ち價値の義である。心中重井筒のこゝの文意は、德兵衞が客衆とやらの價値になつては、備けられないから身代の妨げといふたのである。また博多小女郞のこゝの文意は、長くも添はれぬといふわけで、生命に關する價値のことまでもなしたわいといふのである。なほ巣林子作中に見える「一門かひ」、「死なずがひなき目にあひこと」などの「かひ」も、皆こゝにいへる「かひ」と同じ語である。(「かひ」に害または支障の義はない)。

***がひ** 言ひたいがひに言ひこめて、死んでもまだ言ひたらぬか(卯月潤色)

「かい」とも書いてある。前條の「かひ」の濁つた語。「死なずがひな目」(その條を見よ)などいふがひと同じ語で、「かへ」卽ち價の義である。「言ひたいがひに言ふ」とは、言はれる限り言ふの意である。

***かひおほひ** へんつきはむづかし。貝覆は手もつめたし(娥)

〔貝覆〕貝合(かひあはせ)の遊戲。三百六十個の蛤殼を分配し、各一個づつ出して伏せ並べ、中央の空所にも各一個づつ出して伏せ並べ、前に出合つた貝と後に出合つた貝と相合ふのを多く合せ取つた者を勝とする、その合ふを知る爲に貝殼の裏面に繪など書いてある。

***かひご** やすやすうみの產聲はかひごの中の頻伽鳥、姿は玉の男御子(女夫池)

〔卵子〕たまご。倭名抄に、「卵。加比古、鳥胎也」

かびしやらどり 彼の茅原にほろろうつかびしやらどりがあさりして、雛に餌をかふ(釋迦)

〔迦賓闍羅鳥〕「迦賓闍羅」は梵語、雉子の類。慧琳音義・第二十六に、「迦賓闍羅鳥。古音云、是雉鳥也、引二釋論一云、似二鵲鵐一與二象猴一爲二親友一故知是也」。

かびら 我我は欲界に住居をなすくぎやり外道・かびら外道(釋迦)　毗紐(びちう)天・迦毗羅(かびら)天・倶留(くる)倶佉(そきや)天(用明天皇)

〔迦毗羅〕梵語 Kapila. 婆羅門に屬する古仙人で、黃頭仙人と譯す、數論外道の祖である。慧琳音義・第二十六に、「加比羅、此云二黃頭仙人一」。本行集經・第四十五に、「迦毗羅、隋言二黃赤一、婆羅門名也」。

***がふし** 此處へも少し少しとて、合子茶碗を差出し(酒呑童子枕言葉)　生血を合子に絞り受け(關八州)

〔合子〕碗をいふ、身と蓋(ふた)とを合せる故に名とす。箋注倭名類聚抄に「按、合子有レ蓋(ふた)、故名レ合、猶下謂二香匳一爲二香合一、蛤蜊亦以レ有レ蓋得中蛤名上、則知今俗所レ用漆碗卽是、然今節會所レ用合子無レ蓋、爲二撤食器一、恐非二古義一」。貞丈雜記・卷之七、膳部に、「合子とも合器とも云ふは碗の事なり、身と蓋を合する故の名なり」

***かぶとづきん** み山のやうなる大男、兜頭巾を一樣の、同樣かけて四人連(吉岡染)

(兜頭巾)「わりしころのかぶとづきん」を見よ

かぶとのほし (國性爺)

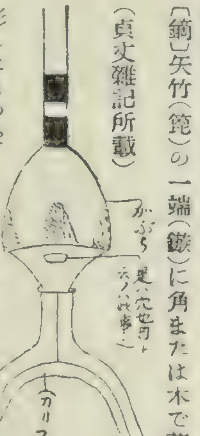
〔兜星〕兜の鉢に星のやうに打付けてある銀鋲

かぶのいへ 昔の株の家(大經師)

〔株家〕官の免許、仲間の申合などで、若干の家に限つて其職業商業を營む事を得るもの。名跡の家。

かぶら 鏑先の大雁股(かりまた)懷中より取出せば(艶狩)　猪熊などを狩出し物頭に熟合(うまあひ)つけ、鏑の遠鳴(とほなり)させざるが殘念なり(冷泉節)

〔鏑〕矢竹(箆)の一端(鏃)に角または木で蕪の形したものを附ける、これを鏑といふ、三つの穴ありて中空である、鏑の先に雁股をさす。鏑矢を射る時は、鏑の孔に空氣振動して鳴響く、これを鏑の遠鳴といふ。



(貞丈雜記所藏)

かぶりのいた 「栴檀(せんだん)の板(いた)」を見よ。

***がふりよく** これが親達の合力か(女殺油地獄)　身こそ貧なれ、一文一錢の合力は受けまいし(卯月潤色)

「合力」力を合せて助ける義。助力。施物。

***かぶる** 唐辛五つ六つかぶつても、こんな熱い淚は出ませぬでごはりまするでごはりまする(宵庚申)　右へ拂へば左へがふり、左を斬れば右を踏込み(博多)

〔被〕かぶせるやうに大口に食ふ。「梨をかぶる」「芋をかぶる」などいふ。また齧るをもいふ。

「左へかぶり」は左へ齧る。「かづく」をも見よ。

***かぶろ** あれを見や、巾から提灯引(ちやうちんひき)舟(これ)まじくら、かぶろが諂うて客送ろ(淀鯉)　龜菊手に汗握りしが、禿の時より善惡の事に揉まれて驚かず(會稽山)　手にかさだかな文持ちて・西の方から來(く)るかぶろ(女殺)

〔禿〕遊女に事(つか)へてその見習をする少女で、將來遊女となるもの。開卷一笑に、「了簡(かぶろ)。妓の幼稚なる者」。禿の躾方については傾城禁短氣・二に、「禿の時は姉女郞につけて歷々の大盡(じん)に至り末社どもが座敷振を見せ、十種香・歌かるた・茶の湯・または歌のよみ方を教へさせ、琴・三味線を彈(ひき)ならはせ、よろづ華奢事の分は銀に飽かせて揉込み、手は太夫職の中の能筆を手本にさせ、稚き時より大奉書を用捨なく書汚さし、不斷行儀強く育つるゆゑに假にもあがり膳に氣をうつさず、夜ふけても居眠る顏を見せず云々」。(「かこひ」「こんじん」の條の畫を參照せよ)。

***かぶろさや** 天目さやに禿鞘(堀川波鼓)

〔禿鞘〕槍鞘の一種、頭圓うて飾のない槍の鞘。

がへう 野にがへうあるは、獸を引いて人を食はしむるの君(千疋犬)

〔餓莩〕餓死者。「餓莩」の語は孟子・梁惠王篇に見えてゐる。按じるに「莩」は「芆」を字形の相似てゐるより傳寫の誤をしたのであらう。「莩」は草の名で、意通じない。「芆」は落の義、諸書考略(萬曆四十三年刊)卷一、人物の條に、「餓芆＝芆殍同、食貨志塗有二餓芆一」と見えてゐる。但し支那でも昔から誤つたもので、秋齋

るやうに、秤竿の尻の上方に撥ねる程秤目を充分にして取る意にいふ。「五箇の津餘情男（元祿十五年刊）の序文に、「世智賢幾商人之算用、詩、歸一倍一之十露盤之粒、秤目之白鷗尻之取方於知給衞登云爾」。風流夢浮橋（元祿十六年刊）卷之三、八坂の茶屋は幸神の引合の條に、「先此うらの振袖はと尋ねれば、あの人は此九月からの勤、お望かとはや茶の下をたき付け、お位は銀三十二匁、九分鷗尻にはねさせねばなりませぬ、それはそれはからき世の末、白人の身もあはぬもの云々」。傾城仕送大臣（元祿十六年刊）卷之五に、「まだ安物は伏見のかゝ山、茶屋へおろして縄手の吉野屋に勤め、器量衣服昔に替らず、是一人にあがノ者巳上九人、十八匁の内にて十五匁下りたれば是大分の掘出し、三匁を鷗尻にはねさすれば、やりばなしの高笑、せんしやうは言勝、僞言はつき次第、何に一つ不自由なし」。以上「鷗尻に取る」と云ふ意はこれで明かであらう。大矢數（延寶九年刊）に、「結目の帶おもひやるかもめ尻、互に起きて雪の明ほの」。萬治・享保にかけて、若衆の髪の髱を出し反らしたのを鷗髱と云うたのも、皆鷗の尻の撥ねてゐる縁によつた言葉である。

かもん　天神太夫の身でもなし、さもしい金に氣が觸れた見世女郎のあさましさと、世間の唱へ傍猩のかもん殿を始めとして格子女郎衆の手前もあり（冥途飛脚）

當時大阪新町に實在の遊女掃部をいうたものか。伽羅女の名寄に、「新町通筋つちや理兵衞内大夫かもん引舟大はし」と見えてゐる。（或は俳優中村歌門をきかせたものか。歌門は正德元年正月都萬太夫座興行の傾城九品淨土の狂言に、梅川に扮した縁によつてかくいうたものか）。

かや　榧・榛・榧（嵯峨天皇）

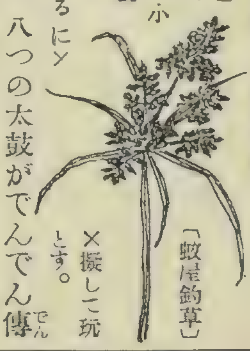
〔榧〕山地に自生する常綠喬木で、高さ七丈に達す、種子は食用とす。「持ちし木の實は何々云々」をも見よ。



〔かや〕

かやつりぐさ　（用明天皇）

〔蚊屋釣草〕この草莖三稜なれば、小兒これを裂きひろげて蚊帳を釣るに擬して玩とす。



〔蚊屋釣草〕

がやとや　八つの太鼓がでんでん傳法、後がやとやの伊丹へいけ田（氷朔日）

がやがやとやとや。多人數の入り來て立ち騷ぐさま。「あとがやとや」をも見よ。

***かよひぐるま**　命の夢の通路を通車のわざくれに、おのが怨の斧をもて妬むかまきりやさしやな（小栗判官）　三夜四夜五夜百夜、通車のしじみ川（二枚繪）　通車は小町があだの情に乘せられ（歌念佛）

〔通車〕深草の四位の少將が小野小町に戀想し、百夜通うたならば戀慕の情を通じろとの約で、通うた夜の數を車の榻に書付けたが、九十九夜まで通うて遂に果されなかつた故事で、謠曲・卒都婆小町などに見えてゐる。「通車のしじみ川」は、通車の榻に蜆川をかけたのである。

からうちのつな　我身は何かからうちの、綱より解けぬ契ぞや（大經師）

〔唐打綱〕唐絲で編んだ綱。源氏物語・若菜上の卷に、「猫はまだよく人にもなつかぬにや、綱いと長くつきたりけるを、物にひきかけまつはれにけるを、逃げんとひこじろふ程に、御簾のそばいとあらはに引上げられたるを云々」とありて、唐猫逃出る時その首綱御簾にかゝり、御簾あがりてその許に坐せる女三の宮の美しい姿が柏木中將の目にとまつた、柏木これより女三の宮を戀慕し、遂に密通して兩人難儀の身となつた。こゝの文はその意をきかせたものである。

からがき　人の心を二重染、倭にあらぬ唐柿や（融大臣）　から柿の裏うつたる薄柑子の革羽織（弘徽殿）

〔唐柿〕染色の名、黄に澁色を帶びたもの。融大臣のこの文は、「まづ初春の空色に云々」を見よ。

***からくむ**　龍馬が原に八町四方に本城をからくみ（國性爺）　あぢなあきなひからくんで（氷朔日）この長が胸一つでかうからくんだ（酒吞童子）

〔絡組〕仕組む。合類大節用集（享保二年刊）に「搩」。炭俵に「戸でからくみし居風呂のやね野波」。女大名丹前能（元祿十五年刊）卷七、方便に情の羅生門の條に、「取り肴いろいろからくみ、どうやらにつこらしき座敷」。

からこわげ　唐子髷には薩摩櫛、島田髷には唐櫛と（國性爺）

〔唐子髷〕「からわ」（唐輪）とも云ふ。その條を見よ。

からこをどり　九月の七日九日は氏神殿の祭、本踊いろ唐子踊いろ見事なことばん（博多）

〔唐子踊〕唐風の衣裝を着け、唐兒に扮粧してをどること。諏訪神社の祭禮は長崎大名物の一で、昔時は九月七日大波止場假屋の御旅所に渡御式あり、年番町の子女綺羅を盡して着飾り鉾幟蓋等の寶物を捧げ夥しい行列である。九日は還御の日である。七日九日は本踊・唐子踊など最も盛んであつた。

からざけ　假令淸十郎引張爪にならうが乾鮭にならうが、世が泥の海に成るとても、一文も銀は無い（歌念佛）

〔乾鮭〕鮭の腸を去つて素乾にしたもの。巣林子のこの文は、張附の意に引張爪といひ、爪を痛にきかせて乾鮭といひ、磔刑に處せられ木の空に曝されて、日乾になることを云ふ。大經師昔暦に「木の空に曝されて、屍を鳶で突かれても」とある。

からさび　銀の心葉鬢づらに取つてつけ、韓鋤の御佩刀太手繈に白木綿かけて（振袖始）

〔韓鋤〕「あからさみ」（明眞身）の約轉。利劒をいふ。日本書紀・神代上に、「蛇醉而睡、素戔嗚尊乃以二蛇韓鋤之劒一、斬レ頭斷レ腹」。武家名目抄・刀劒部に、「按、韓鋤の傍訓からさびとありしか讀むべし、私記に加良須岐と讀みたるはよからず、且其形似レ鋤故名レ之といへるは、字に就て設けたる妄說なり云々、佐比は佐微と同じ語にて、卽眞身也、刀劒の身をいふ、凡ものゝ並ならぬを譽めて、加良てふことを上に置ていふはいと多かるが、その見えたるはこの韓鋤ぞはじめなるべき、上古の物の名後よりたたへしことも多かるべければ、その例なしとて疑ふべきにしもあらず」。

からさを　ぬつと振出すから竿を、二本からげて打くだく（蛙合戰）

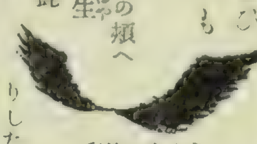
〔殻竿〕農具、竿の先に樞があつて、これに更に竿を附け、回らして稻麥などの穗の籾をこぎたるを打つ具。

***からさんがい**　如何にいたづらす

［蒲御曹司］源範頼をいふ、遠州蒲生御厨に生れたので蒲と云ふ。「曹司」はその條を見よ。

***かまひげ**　糸鬢の鬢かりつけた鎌髭奴（隆達歌）　このかまひげで頰ずりは痛かろもの（女護島）

［鎌髭］鎌形に鼻の下から左右の頰へ續いた髭で、昔時奴などが生したもので、髭の少い者は附髭をしたり、油墨を塗り附けたりした。


〔かまひげ〕

***かまやり**　鎌槍は筑後の久留米（隆達歌）

［鎌槍］槍標。（久留米城主、有馬筑後守頼旨の槍標）。


〔かまやり〕

***がまん**　その頃守敏僧都とて、我慢邪欲の惡僧あり（嵯峨天皇）

［我慢］七慢（慢・過慢・慢過慢・我慢・增上慢・下劣慢・邪慢）の一、傲慢にして他を輕蔑する事。

***かみかぜの**　神風の伊勢のはまをぎ打そよぎ（鎌田）

［神風の］伊勢の枕詞である。冠辭考に、「かんかぜの（いせの國）。こは神風の息といふべきを略きて伊の一語にいひかけたるなり云々」。

***かみこ**　紙子の廣袖・革柄の大脇指（大經師）　勝二郎は約束の時分過ぐると、紙衣に股引すぐに丹波の旅出立にて（淀鯉）　あれ今言うた紙子吉岡、よい所へ見えたなう、いとしや今日は子を負うて（吉岡染）　京の吉岡紙子染（重井筒）

［紙子］紙衣とも書く。澁を引いた紙子紙を揉んで着物に仕立てたもの。黑川道祐撰、雍州府志・土產門下・服器部に、「紙衣、倭俗構ニ合柿油一少許、續ニ白強紙一、然後塗ニ柿油一日乾、如レ此數度其色自赤、爾後晴天一夜露宿則發レ色、於レ是兩手揉ニ和之一、以レ是製ニ衣服一、是謂ニ紙衣一、又稱ニ紙子一、有レ便レ禦ニ寒氣一」。「吉岡紙子染」は「吉岡染」の條を見よ。「仙臺の坊樣」をも見よ。

かみこのひうち　「ひうち」を見よ。

***かみさぶ**　はみ出し鐔もかみさびて、鐺詰りし師走の果（夕霧）

神進の義。舊りて何となら物すごくなれるをいふ。こゝの文、「かみさび」の「さび」に銹をかけたのである。

***かみさま**　隱居の貞法七十三、眼鏡いらず杖つかず、齒は一枚も拔目なき男勝りのかみ樣にて（今宮）

［上樣］上方にて年寄つた人の妻女の敬稱。浪花方言（文政二年成、寫本）に、「かみさん。後室をかくいふ、おかみさんといふはお上樣なり」。浪華の風に、「當地にては、町家の妻などはおしなべておへさんと唱呼す、おかみさんといふは老女の樣になりて、五六十に及ぶ老婆を呼んでおかみさんと唱ふればなり」。

***かみするをなご**　ぬれから起つた喧嘩さうな、大事にはなるまいかと、上する女子下男（博多）　揚屋の上する女子下男（淀鯉）

［上爲る女子］揚屋の座敷の取廻しをする女。仲居。井原西鶴撰、好色一代男・六に、「さる揚屋にいつより早く御出あつて待ち給ふこと嬉しく、上する女に心をあはせ小座敷に入りて語りぬ」。傾城八花形（錦文流撰）に、「廓中をば鳴渡り響渡つて入込めば、主人主婦上する女子定附けの座頭の坊までどきどきと」。序に云、「上する男」といふもある。これは座敷を働いて取廻しをする男をいふ。好色一代女・卷之二、淫婦中位の條に、「上する男お床は二階へと呼び立つれば」。

かみたうじん　表の間借切つた上唐人、船頭が馴染、筑前まで乘せなけりやならぬといふ（博多）

［上唐人］「上」は上方の意、「唐人」は唐國の人、轉じて、遠國で素性の知れない者をいふ。上方の素性の知れぬ人。

***かみはな**　いつやらの紙花も思の外に遲なはり（二枚繪）　一つ飲みやれ肴せんと、ひらり紙花七九寸木枕に打敷きて（夕霧）

［紙花］遊所にて花をやるとて先づ目錄を書いた紙を遣るのを紙花と云ひ、後に紙花に記した物を遣る。「紙花七九寸」は、卽ち紙花に用ゐる延紙（縱七寸・橫九寸）の寸法である。一目千軒（寶曆七年刊）に、「遊所にて花を打つとて紙を出す、これを俗に紙花といふ、昔よりある事なり」。

がむしや　彼の男犬めは、女子をじゆつながらするがむしやな憎い奴ぢや（千疋犬）　口も心もさかさかしく、がむしやな上に氣も早く（虎が磨）　中にも剛韃といふがむしや者（國性爺）

無道に物事を振舞ふこと。又その人。「がむしや」は我武者と書けども、もと「がむさぼり」（我貪）の略訛で、我慢陋劣の義であらう。

冠のこじ　「こじ」（巾子）を見よ。

かめばら　二年餘り誕生なきは何しに先帝の御子、血塊龜腹などの病、宮中に置いては後の禍（浦島）

［龜腹］腹中に一種の凝塊を生じる病。箋注倭名類聚抄に、「按、加女波良、龜腹之義、病源候論有ニ鼈瘕一云、鼈瘕者謂ニ腹中瘕結如ニ鼈狀一是也」。西鶴織留・卷四、諸國の人を見知るは伊勢の條に、「いかなる前世の因果にや、當年十三になりけるが今に足立たずして、然も龜腹とか申して見苦しく」。

龜屋が羊羹　「京の龜屋が羊羹」を見よ。

***かもじ**　御かもじ樣悋もじに、先づお暇といふ鑑（松風）

［喝文字］母の文字詞。文字詞は、足利時代の末期朝廷式微にして供御の物備はらない爲、女官等その物の名を呼ぶを忌んで、何もじという隱語から起つたと云ふ。（この語とは別に「かみ」（髪）のことを「かもじ」といふのも、髪の文字詞で卽ち髪文字である）。

かもふり　水腫脹滿神、串すに及ばぬ鬼の口とつてもかも瓜山牛蒡（振袖始）

［冬瓜］園圃に栽培される一年生の蔓草で、莖は卷鬚によつて他物に纏はり、葉は心臟形で通常掌狀に淺裂し、花は雌花と雄花と同株に生じ花冠黃色である、果實は大形の漿果で、食用に供し、また脹滿などの病を治するに用ひる。巢林子のこゝの文は、取つて嚙むに冬瓜をいひかけたのである。「ふり」は「うり」の古語。

かもめじり　十束の御劍鷗尻に佩きなし（日本武尊）　上り下りの旅人衆も、關の小萬といふ名に恥ぢて、百やる人も二百やる、一匁の貰ひもかもめじりに取りなる（丹波與作）

［鷗尻］鷗といふ水鳥は水に浮んだ時尻の羽が上方に撥ねてゐる。「鷗尻に佩く」とは、鷗の尻の撥ねてゐるやうに、刀劍の尻を上へ反して佩くをいふ。平家物語（長門本）卷二、西光被ニ召取一條に、「こがね作の太刀かもめじりに佩きなして」。「鷗尻に取る」とは、鷗の尻の上方に撥ねてゐ

*かりぎぬ　猶の左京盛光は紅梅の狩衣、織色の指貫ふみしだき(三世相)

〔狩衣〕闕腋を少し簡略にした衣服で武家で着用するものであつたが、後には公家にても野狩遠行などの時に着る略服となり、絹綾を用ひて華美に作られるやうになつた。

*かりくら　この度の狩くらには虎より猛き猪を乘留め(會稽山)

〔狩座〕狩場。和訓栞に「かりくら＝東鑑に狩倉と見えたり、狩場をいへり」。

*がりはり　男の手癖足癖も私らがやうながりはりは嚙付きも仕かねず(關八州)

「がにはり」の「に」が下の「り」に引かれて「り」に訛つた語で、「ふんばり」を「ふりばり」(その條を見よ)といふの類である。「我利張り」の字義ではない。「がにはりもの」を見よ。

かりほこ　かり鉾數槍手に當るを幸に投付け(國性爺)

狩鉾で、狩獵に用ひる鉾といふことであらう。(或は雁股鉾の略で、鉾身が叉になつて開いたものをいふか)。

*かりほのいほ　錦の褥引換へて・かりほの庵の草筵(酒呑童子)

「かりいほのいほ」(假庵の庵)の略、田を守る者の居る番小屋をいふ重詞である。萬葉集には借廬と書いてある。

*かりまた　その大雁股で射殺されましたらば(松風)

〔雁股〕鏃の一種、其形が蛙の股の如くなれるを以て、「かへるまた」の「へ」を略し「る」を「り」に轉じた語である。鏑矢には雁股をさすに定まり(「かぶら」を見よ)、鏑をつけないで直に雁股をさした矢を雁股の矢といふ。

*かりようびんが　遊君の小棲ほらほら、道中にて迦陵頻伽の火の用心、町を廻つてとんとんとん(扇八景)誠ある傾城と迦陵頻の雄鳥は、繪に書いたも見た者ない(夕霧)

〔迦陵頻伽〕梵語(Kalavinka)の音寫、「迦陵」は好の義、「頻伽」は聲の義なるによつて、好聲鳥または妙聲鳥などと譯す。印度のブルブル鳥をいうたのであると云ふ。この鳥雀より稍小で、雀の羽色に似て黑色交り、嘴の赤い鳥で美音に囀る。これを美化して半身は天女、半身は鳳凰のやうな鳥の姿に畫く。これによつて美聲美貌の美女に喩へても云ふ。「迦陵頻」は迦陵頻伽の略。

かりわらは　ゆふべは宿をかり童の(酒呑童子枕言葉)

〔假童〕山伏の異名。修驗者。增補和訓栞に「かりわらは＝假童にて山臥のこと也」。

*かる　これは大將の拂ひ物、大抵では賣るまじきが、但し損料でばしかつたか(女楠)

〔借〕借りる。東京で「かりる」「かりた」(借)といふを、京阪中國地方では「かる」「かつた」といふ。「かす」の條をも見よ。

かるかやどの　ここは古の苅萱殿のしろし茂りし春の草(萬年草)

〔苅萱殿〕苅萱道心繁氏の古趾をさす、高野山内の苅萱堂のある處である。筑紫守加藤左衛門繁氏、仁平三年彌生の末、酒宴の折しも花の莟が盃上に落ちたのを見て世の無常を感じ、妻子を捨てゝ出家し、高野山に登つて苅萱道心と法名した。後に妻の千里と子の石童丸が父を尋ねて高野に來り、千里は病に罹つて山麓の學文路の宿に歿し、石童丸ばかり高野山に登り、苅萱道心に逢うて其弟子となつたと云ふ。

かるさい　かるさい・らんげん・繻子・天鵞絨(博多)

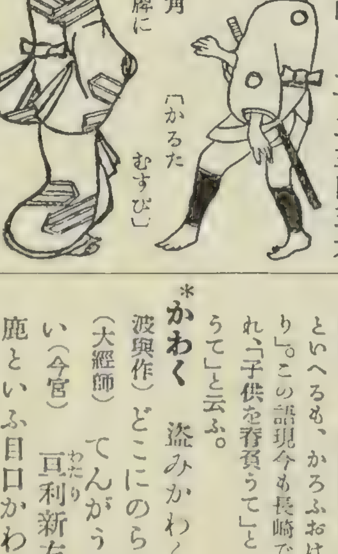
葡萄牙語(Carisea)であつて毛織物の名。和漢三才圖會・二十七に、「波禮以太・倍留止和年・加留左以・須太女年、以上之歐品皆毛織也」

*かるた　かるたの繪の付く祈禱に、あざぶの明神釋迦牟尼佛(女殺)

「かるた」は西班牙語(Carta)である。我國に傳はつたのは、天正八年英吉利船で舶來したのが最初であらう。うんすん加留多の繪札の中に「海馬」「釋迦」の名の繪札がある。聖德太子繪傳記・芹摘の后道行の條に、「かるたの釋迦を握り詰めた世の中」と見え、當世武野俗談に、「下手は海馬を二にも三にも打せ、上手は海馬はあざに打、釋迦は十のかはりに打ず、釋迦の場にて打事なり云々」と見えてゐる。「あざ」「しやか」「うんすん」をも見よ。こゝの文は祈禱といふからに、骨牌札の名の「あざ」、及び骨牌は麻布で作るから、それらをきかせて、それに明神を添へ、又骨牌札の名の「しやか」をきかせて牟尼佛を添へ、以て神佛名のやうにした洒落である。

かるたむすび　碁盤格子の染帶を歌留多結や、年配も二十二三四五六七(薩摩歌)

〔骨牌結〕天和頃から寶暦頃まで流行した帶の結び方で、四角に結び、其形が骨牌に似たるよりこの名がある。歌舞妓事始に、「男の如く四角にするをかるた結といふ」



〔かるたむすび〕

*かるも　肩にかるもの花折りかけて、猪にゐのじが寝た所え(蛙合戰)

枯草。童蒙抄に「かるもとは枯れたる草なり、其草をかき集めて猪はふす也、猪の永居とて七日までふすといへり」。「ゐのじ」をも見よ。

*かるら　阿修羅・迦樓羅・緊那羅(會稽山)

〔迦樓羅〕梵語(Garula)の音寫、金翅鳥といふ、鳥類の王で龍を食となす。慧苑音義上に、「迦樓羅、或曰$_{二}$揭路荼$_{一}$、此云$_{二}$食吐悲苦聲$_{一}$、謂此鳥凡取$_{二}$得龍$_{一}$、先内$_{二}$嗉中$_{一}$、得$_{二}$吐食$_{一}$之云々」。

*かれい　君立坊の始より後宮佳麗多き中に(弘徽殿)

〔佳麗〕美女。白居易の長恨歌に、「後宮佳麗三千人」。

かれうびん

「かりようびんが」を見よ。

がれん

「きり」を見よ。

かろふ　頭抱へて雇人にかろはれ、小宿さなへ往んだがの(博多)

負ふ。越谷秀眞編、物類稱呼・卷五、言語部に、「負ふといふことを東國にてセウといふ、長崎又四國にてカルフと云」。西川忠英撰、町人袋(享保四年刊)卷三に、「かるふ。かろふなり、負をいふ、おはれたしといふ事をかろはれふといへるも、かろふおはれふといふことなり」。この語現今も長崎で下流社會に用ゐられ、「子供を脊負うて」といふを、「子供をかろうて」と云ふ。

*かわく　盜みかわくは何奴ぢや(丹波與作)どこにのらをかわくやら(大經師)てんがうかわくに紛れない(今宮)亘利新左衛門が女房鈴鹿といふ目口かわきのばつさい者(千疋犬)

氣沸く(乾または渇)の義であらう。はしや

ればとて、何時の便宜にから三界、餘りな稼ぢや（國性爺）
〔唐三界〕「さんがい」を見よ。

からしじみ　吸物は殼蜆（寄庚申）
〔殼蜆〕貝殼をつけた儘の蜆。

***からじりうま**　空尻馬も徒歩人も蒸くろ雲に雨を乞ひ（會稽山）
〔空尻馬〕輕尻馬とも云ふ。昔時宿驛で出す馬で、三十六貫を一駄とせるものを本馬と云ふに對して、其半量卽ち十八貫を一駄とせるを空尻馬と云ふ。蓋し十八貫程の荷物を馬の頸の方へ積み、尻の方へ人を乘せるやうにしたので、尻の方は荷物が空なる故に空尻馬というたのである。「さいりやう」（宰領）をも見よ。

***からぜい**　からぜい吐いて急ぎける（女殺）
〔空脅〕贅は贅還の義。口さきばかりの贅言。さもえらさうに言ふこと。

からぜんしやう　えいあた見られぬ、似合はぬ傾城買はえより、貝殼買へやからぜんしやう、此頭のうつけ貝洒落だて置けと（虎が歴）扱異國には珍しい、てれんの神もましますか、からぜんしやうの御神と一體分身なるべしと、笑うて立つや春霞（天神記）
「からせんじやう」（空僭上）の濁音が下に移つた語で、「ぜんさい」（前栽）を「ぜんざい」と云ふ類である。實質無くして身分不相應な振舞をする義、轉じて、口けばひろく人を手管に乘せてたらすわざ、またはその者。

からつゆ　いかに今年のからつゆも、あはれ袂のざみだれに（氷刻日）
〔空梅雨〕梅雨の季節に雨降らぬこと。黑川道祐撰、日次紀事五月の條に、「凡自二立春後一百三十五日以後、三十日之間多レ陰、若不レ雨則謂二加羅津井一」。

からと　唐戸遣戸をはたはた（大織冠）
〔唐戸〕二枚の開戸で、戶の棧が横と竪とに交はつたもの。

***からと**　莚を捲り簀子を破り、からと米櫃灰俵、打返してぞ探しける（冥途飛脚）
「からびつ」（唐櫃）が「からうづ」「からうど」「からと」と轉訛した語。櫃に脚あるもの。和訓栞に「からと＝韓櫃を俗にはからとゝいへり、よて米櫃をからとゝいへり」。

***からぬひ**　ひやう紋の練貫に唐縫したる上重（兼好）ひやう紋の唐衣に唐縫したる柳裏（最明寺殿）
〔唐縫〕縫った絲でかがり縫うたもの。

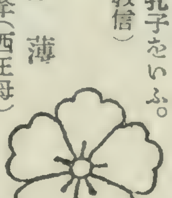
***からねこ**　から猫が男猫呼ぶとて（大經師）
〔韓猫〕猫はもと韓國より渡來したものなるよりいふ。猫。源氏物語・若菜上の巻に「から猫のいと小さくをかしげなるを、少し大なる猫の追ひ續きて」。

***からのかがみ**　からの鏡の我子をば、傾城の娘とて人に笑はせ給ふなとよ（三世相）あゝ戀しきは相枕いとしきはからの鏡（三世相）
「あからのかがみ」（明鏡）の「あ」の略された語。鏡は面影を映す意から、身を分けた我子のことにもいふ。武家義理物語・巻之一、痣子は昔の面影の條に「手馴れし唐の鏡を打碎きて、浮世を捨つる誓文を立てしを聞きて」。猫魔達（淨瑠璃・元祿頃作）に、「江口の君の姿見とて天下に一つのからの鏡」。

からのかしら　素槍片鎌十文字、からのかしらの、紅のきぬば紅梅魚は鯛（堀川波鼓）
〔唐頭〕兜の上に附ける白熊の飾。

からのひじり　六軒町のさよ格子、からのひじりのたまはく（重井筒）
〔唐聖〕支那の聖人孔子をいふ。

からはな　（賀古敎信）
〔唐花〕紋所の名。


〔はならか〕

***からびたるこゑ**　薄雲からびたる聲（西王母）
〔乾びたる聲〕涸り嗄れた聲。しやがれ聲。

からものや　唐物屋衆さへならぬ程にぞべぞべと着飾つて（卯月桅）
〔唐物屋〕舶來品を商ふ店であつて、晏利を占め贅澤をしたものである。人倫訓蒙圖彙（元祿三年刊）に、「唐物屋。器物香具革紙藥墨筆等、よろづ長崎着岸の物を買ひ取りて之を商ふ、所々にあり」。

からもも　瑠璃のからもも・琥珀の梅・珊瑚の葡萄をあさりけり（松風）
〔唐桃〕杏。岸本調和撰、俳諧夕紅（元祿十年刊）下巻に、「罌帽子杏入れて引くゝり志」立とあって、「杏」に「からもゝ」と傍訓してある。

***からもん**　（嫗山姥）（松風）
〔唐門〕唐破風造りの屋根ある門を云ひ、正面の唐破風造りなるを向唐門といひ、兩脇に同じ造りなるを平唐門といふ。「こうりやう」（虹梁）をも見よ。

からよもぎ　菊には霜のおきな草、からよもぎとも御覽ぜよ（佐々木）
〔唐艾〕菊の異稱。新撰字鏡に、「菊花。辛與毛支」。

***からろ**　やつさやつさのからろの音も耳に悲しく遠ざかり（薩摩歌）
〔空艣〕艣で水を淺く漕ぐこと。俳諧後拾遺・芭蕉の句に「夜步行に空艣の音や浦の秋。」俳諧新選・嘯山の句に、「磯邊おす空艣に響く砧かな」。

からわ　この繪馬は、長刀持つたる法師武者唐輪の稚兒に切伏せられ、後傷負うて逃ぐる體（孫栄）
〔唐輪〕唐子髷とも云ふ。昔時未だ元服せざる少年男子の結髮の名。女子も結うた髷である。


〔輪唐〕

からゐしき　門を堅めし堤の彌惣唐居敷に飛んで下り（酒呑童子）から ゐしきに腰を掛け、御城中へ物申さんと、高らかにぞ呼ばはりける（源義經）
〔唐居敷〕唐石敷とも云ふ。門柱の下に敷詰めた石疊。

***がらん**　この大伽藍と申すは、聖武皇帝の御建立（出世景淸）諸人に傷け剩へ大伽藍を滅燼すは、頭を圓め三衣を着す法なるか（孕常盤）
〔伽藍〕梵語・僧伽藍摩（Samgharama）の略、僧伽は衆の義、藍摩は園の義。衆の樂しむ住處の意であつて、寺院をいふ。

かりう　歌流・金子も難波津へ、咲くやこの花その花の、噂も戀の種ぞかし（女腹切）
〔歌流〕袖崎歌流をいふ、京都にあつて女形の名優であつたが、正德三年の春芝居に大阪に下つて三十郞座に勤めた。

介が譽を代代に傳へけり(川中島)

「がんいち」(眼一)の約轉。片目。

***かんだう**　母が嘆くが目出度いか恨めしの心やな、七生までのかんだうぞや(加增曾我)

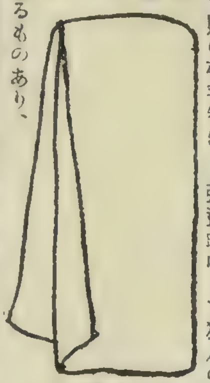
〔勘當〕君・父・師などの目うへの人の心に逆ひ、緣を絕つて逐はれること。勘當はもと罪の輕重を勘へて法に當てる義。唐書に、「軍中不レ暇ニ勘當ニ」。

***がんだう**　すりの・かたりの・がんだうの(女腹切)　晩の泊に寢處(ねどころ)へがんだううつて、やじりきつてくれうぞと(孕常盤)

〔强盜〕唐音(chiang-tao)を傳へた語であらう。「强盜打つ」の打つは打入る意。

がんだうづきん　膽の太き同類二十四人引具し・並木の步み來る如く、一樣のがんだう頭巾・保輔齊明を近付け(關八州)

〔强盜頭巾〕覆面頭巾のこと、顏及び頭を包隱して、目ばかり現はすやうにした頭巾。燕石十種・賤の苧手卷に、「强盜頭巾とて狩人の被る如く縮緬にてこしらへ被るものあり、苧(紺染)などにて組みたるもあり、紐は內へ付る也、尤昔より狩人の被りて步行きたるものなり、賤者の被るものにて、常の人用ゐては甚だ不人柄の物なり」。



〔强盜頭巾〕

***かんづか**　左馬五郎恐れて遁ぐるを、飛掛つてかんづか取つて打伏せ(三國志)　小藤太がかんづか摑んで取つて引伏せ(扇八景)　心得たりとかんづか取り、三間ばかりかつぱと投げ(小栗判官)

「かみづか」(髮束)の音便。髻(たぶさ)。もとどり。自樂撰、地獄樂日記(寶曆五年刊)に、「起しも立てず乘つかゝり、本當なればとどめの刀、命冥加な下郎かなと、かんづか摑んで緣の下へ投落せば」。

***かんづよし**　前脚とつてかんづよく、雪嚙碎く白泡に(鑓權三)

〔馯强〕馬强く性荒くして人を突くやうなのをいふ。貝原好古撰、諺草に、「馯。馬の突也、馬のかんのつよきと云は此字なり」。大磯虎稚物語・第五に、「馯怖(かんお)ぢす」とあるも、馯强くして物に驚怖せぬ意。

***かんなづき**　(國性爺)

舊曆十月の稱。この月新穀を神に奉れば神嘗月の義であらう。「いつはりのなき世なりけり云々」をも見よ。

かんにち　ただ何事もかん日と、聲も淚にかきくろる(大經師)

〔坎日〕舊曆上の語である。大雜書(寬永十一年刊)に、「かん日とは、灸針(きうはり)せず身のあかを洗はず衣裝も洗はぬなり」。延寶四丙辰伊勢曆註に、「かんはよろしからざる日なり、あかをおとさずのりをつけぬはひが事なり。」この文は堪忍(かんにん)の堪に坎日をかけたので、大經師に關係ある曆上の語を用ゐて文をかざつたのである。

かんばう　遠坂舍人かんばうにて年月を送られしが(吉岡染)

〔看坊〕犀囊鈔卷四に、「禪院に在て後見し・又留守する僧を云」と見えてゐる。轉じて後見の意にいふ。

かんばうくづし　なう久作殿、此方一人は何してもゆるりと過ぎかれぬ身をもつて、女房子ゆゑにかんばうくづし憂き苦勞、さりながらまあ四五年、彼の萬虎が十二三になるまでぢや(袍狩)

「かんばう」は「かはばう」(皮坊)の訛で、皮剝を職とする賤人の義、「くづし」は「崩し」で、身を持崩すことであらう。下等人に零落するをいふ。醒睡笑・六、戀のみちの條に、「いかほど逃ぐる處もかがむところもあらうずるに、あのかんばうだふれが山椒の木の根にかがみ事はと叱られ」とある、「かんばうだふれ」は皮坊倒れで、人を罵つた語であらう。現今も羽前國村山郡、南武藏、相模などの地方では、皮坊を「かんばう」といふ。

***かんひ**　韓非申不害が劒術を傳へ(唐船噺)

〔韓非〕秦時代の人で荀卿の門人である、刑名・法術の學を攻めて韓非子二十卷を著す、秦に使して李斯の爲に毒殺された。韓非は劒道家ではない。

がんひ　あら不思議や、がんひの筆の竹の虎の筆勢に少しもまがふ所なし(反魂香)

〔顏輝〕輝は唐音(hui)である、卽ちその音を傳へたものである。易林本・節用集に、「顏輝(がんひ)、元朝人、畫ニ達磨ニ」。顏輝は字を秋月と云ふ、好んで道釋人物を描いた。宛翁家藏集には、鬼を畫くことが妙であつたと見えてゐる。

がんまく　女犬と男犬とが戀なして、その男犬はがんまくなわやく者(千疋犬)

〔岩驀〕輕擧暴動。合類大節用集(享保二年刊)人倫門に、「岩驀(がんまく)。今世謂ニ兒童之猝暴ニ爲ニ岩驀ニ」。

冠(かんむり)の板(いた)　錦革の物の具、同じ毛の袖草摺、冠の板より芝打まで、金具に打つたる忍草(しのぶぐさ)(三國志)

鎧の袖の上部の板をいふ。高館草子に「甲のゆんでの吹返(ふきかへし)・面(おもて)の頰先(ほうさき)、めての冠の板かけてつんど切て落しける」。

かんもん　主(あるじ)の身なれば御機嫌よかれが道理の肝心(かんじん)かんもん、さあはつと飮みかけ、わさわさわつさり賴みます(天網島)　殿樣ほどの名將なれども、奧樣お持ちなされぬゆゑ、かんもんの按排(あんばい)を御存知ないが玉に疵(千疋犬)

〔肝文〕狂言・布施無經などの中にも見えて、肝要の文の義。轉じて肝要の意にいふ。かんじん

***かんもん**　菅家淸家安倍卜部の勘文、善惡の理分明ならず(女夫池)

〔勘文〕「かもん」とも云ふ。昔時陰陽師儒者などが古例や方角や故實などを勘考して意見を記し、朝廷または將軍家に奉つた文書。

***かんやく**　石藥漢藥に毒蟲などの方組は毒藥にては候はぬか(冷泉節)

〔漢藥〕漢方藥。支那朝鮮から傳へた煎藥。

かんりんがくし　翰林學士の書翰の草、御暇の天盃賜びければ(大職冠)

〔翰林學士〕唐玄宗の時、翰林學士院を設け翰林學士と稱して專ら詔勅を掌る。明・淸を經て多少の變遷がある。我國の文章博士といふやうな者である。事物紀原に、「唐太宗時、名儒時々召以草レ制、待詔常於ニ北門ニ候ニ進止ニ號ニ北門學士ニ明皇改曰ニ翰林待詔ニ、開元二十六年乃爲ニ翰林學士ニ」。

き

***きあひ**　ああおとましい事出來ま

ぐ。輕々しう面白がつて行ふ意。「かわき」は轉成名詞。

***かんおうなふじゆ**　八大龍王・天龍八部・感應納受の誓の舟(天神記)

〔感應納受〕感應は感應道交といふこと。衆生の信心力を感といひ、佛菩薩の大悲力及び法力を應といふ。道交とは、この信心力と大悲力・法力とが往來し通じること。衆生と佛菩薩とが感應して納め受けられること。

かんかん　晉の韓幹が馬を寫されし、我又其駒の圖を傳へ覺えて候へば(反魂香)

〔韓幹〕唐時代、大梁の人、善く人物を寫す、特に畫馬に工みで、王維その畫を見て歎賞したといふ。易林本・節用集に、「韓幹(かんかん)。唐朝人、畫二馬形一」。

***がんぎやすり**　がんぎやすり・鮫肌、突くやうで刺すやうで(吉岡染)(振袖始)


〔がんぎやすり〕

〔雁木鑢〕和漢三才圖會・卷二十四、鑢の條に「磨二獸角一者齒鑢、名二之雁岐鑢一」。

かんきゆう　內は裏なき浮世蓙、心を延ぶる種ならし、漢宮の床の上に契りを千年の鶴に譬へ(會稽山)

〔漢宮〕漢の宮殿の義、甘泉宮をいうためので、陝西淳化縣西北山上にあつた宮殿。こゝの文は、內は裏なき浮世蓙も、漢光武皇帝と寵姬李夫人とが甘泉殿で睦じい契りをした、其漢宮と思ひなし、夫婦永久しい契りを鶴齡千年に譬への意である。白氏文集の詩に、「漢武帝初喪二李夫人一……、甘泉殿裏令レ寫レ眞、……」。謠曲・楊貴妃に、「漢宮萬里の粧」。

***かんきん**　あさゆふのかんきんにも其方(そなた)女夫を祈るぞや(卯月艷)　奥には女中の看經の辟辟(聖德太子)ヤイいはれぬ鳴殿、看經もする身でこれが眞の殺生かい(國性爺)

〔看經〕唐音(Kan Kin)・現今の支那音は Kan ching である。もと經文を默讀することであるが、誤つて鉦を鳴し讀經するにいふ。「鳴殿看經もする身」は「しぎ」(しみ)の條を見よ。

かんくてう　身の內まで凍こほり、寒苦鳥の苦しみかや(雪女)

〔寒苦鳥〕天竺の雪山に棲む鳥で、夜になれば寒氣に苦しむといふ。鐵內拾遺・卷五、秋元書に、「寒苦鳥と申鳥。妻鳥は寒苦逼レ身、夜明造レ巢と鳴き、夫鳥は今日不レ知レ死、明日不レ知レ死、何故造二作栖一、安二穩無常身一と鳴く云々」。

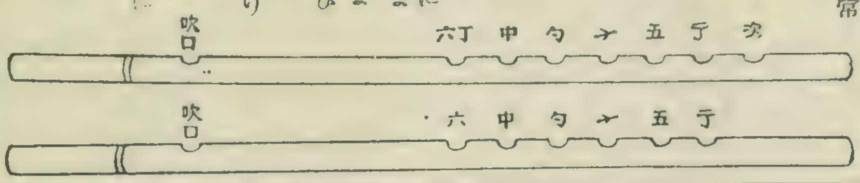
***がんくび**　吸付煙草の煙管(きせる)の雁首、首筋もとからぞつと庄野の六藏でないか(丹波與作)

〔雁首〕煙管の頭部をいひ、古製は長くして雁の首に似てゐるよりの稱。こゝの文は、雁首に首のよい女をきかせ、雁首から同韻の首筋にいひつゞけて、首筋もとのよい出女(でおんな)のもてなしに、心地よくてぞつとせうを庄野にいひかけたのである。

かんこくさい　火の廻り氣を付けよかんこ臭い(碁盤太平記)

〔紙子臭〕紙・綿・絲などの火に焦げて臭ふ。きなくさい。

干五上夕中六丁口(かんごじやうさくちゆうろくげくち)の歌口(うたくち)(孕常盤)



横笛には八つの孔(あな)がある、その孔(あな)の名稱。

かんこどり　疊もあげて閑子鳥、なくにも泣かれず、興醒めはて(博多)谷の梟・閑子鳥、梢を渡る鼯鼠や(蟬丸)

〔閑子鳥〕郭公鳥のことで、「かつぽうどり」とも云ふ。俚言集覽に、「かんこ鳥の啼やう。カンコ鳥の聲はさびしきものなれば喩へいふなり、かんこ鳥がうたふともいふ」。「疊もあげて閑子鳥云々」は、疊も上げて閑寂なるを、閑子鳥鳴くというて、鳴くに泣くをいひかく。

がんざうなます　練味噌かぶる牛蒡どろばう鯛の臺物、飯も汁もがんざう鱠、けんに置いたるめうがの程ぞ恐しき(酒呑童子)

「かちあうなます」(糅韲鱠)の訛である。魚をつくり交ぜ、酢鹽を以て韲(あ)へ、蓼(たで)を加へた料理。嬉遊笑覽・卷十上、飲食部に、「和雜鱠、かざうなます。夏の料理なり、洛陽集、和雜なます、蓼の酢たゝへて藍の如し、永榮料理物語に、かんざうなます、鱚子(きすご)・針魚(さより)・鰈(かれひ)・鱧(えび)・烏賊(いか)など色々つくり交ぜ候事なり、これは酢鹽加減して韲へ、けんばかり置くべきなり」。

***がんじがらみ**　格子の柱にがんじ搦み(天網島)

紐綱の類を打ちゝがへて堅く搦めること。「がんじまき」といふ語もある。蓋し「がんじ」は「がんじやう」(强盛の唐音)の訛であらう。(一說に雁字搦であつて、雁字形に搦めることだといひ、また岩丈搦、岩乘搦、岩疊搦などいふ說もある)。

がんしき　四生六道二十五有、一切含識中有の魂魄、今ここに來現して(嵯峨天皇)

〔含識〕心識を含有する義で、有情卽ち衆生をいふ。行事鈔資持記・上四の一に、「心依二色中一、名爲二含識一、總二攝六道有情之衆一」。

かんしやう

〔干將〕「莫耶(ばくや)」を見よ。

***かんじやう**　其方(そのはう)親子を差加へ、四十七人忠義の武士と末代に名を留(おやこ)むべし、これを冥土の感狀と親父に語り(碁盤太平記)

〔感狀〕軍功を感賞して大將から與へる褒美の書狀。

***かんしん**　韓信は市に股を潛り(雪女)　股をくぐりし韓信が堪忍丈夫も斯くやらん(今川了俊)

〔韓信〕西漢時代の人、未だ職に就かないで家貧であつた時、淮陰の屠中の少年等衆を頼み、信を侮り辱しめて言ふに、汝大きな形(なり)で劍を帶びてゐるが卑怯者だ、勇氣があるならその劍で我を刺せ、それがならぬならば我等の股を潛れと、信つらつら視て俛して股を潛つたので、市中の人皆大にあざけつた。後に信西漢の高祖の將となり、楚の項羽を滅し、功によつて淮陰侯に封ぜられた。詳しくは史記・淮陰侯傳を見よ。

かんすゐらく　胡飲酒酣醉樂など舞樂を奏し(女護島)

〔酣醉樂〕舞樂の名。源氏物語・椎本の卷に、「酣醉樂あそびて、水にのぞみたる廊云々」と見え、花鳥餘情・第二十五に、「村上御記應和元年閏三月十一日藤宴、舟樂奏二酣醉樂一、舞人四人云々、今案酣醉樂は右樂なり、船樂に其例よせあるにや」と見えてゐる。

がんぞうなます

「がんざうなます」を見よ。

がんた　跛の根本がんたの謂れは、これこのこのこの猪を止めたる勘

〔伎樂〕支那呉國より傳へた舞樂。合義解・職員令に、「伎樂謂二呉樂一」。轉じて、音樂をいふ。

きがさもの　箱王の時より五郎は氣がさ者、すはと言へば氣が逸る（會稽山）　難波の次郎氣がさ者、いや變化（へんげ）ばけものは臆病な氣を見隙して業をなす（女護島）

〔氣嵩者〕氣の高く張つた人。勝氣者（かちきもの）。

きかはらげ　小櫻を黄に返したる鎧着て、きかはら毛なる馬に乘り（大原間答）

〔黄川原毛〕馬の毛色の名、川原毛（その條を見よ）の黄はみた色毛。

***きかん**　一家の面目末代の龜鑑、何事かこれに若かん（傾靜）

〔龜鑑〕祖庭事苑に、「龜は疑を決する所以、鑑は物を辨ずる所以なり」とある。轉じて、手本の意。

ききう　源の朝臣義輝公、曩祖尊氏公の箕裘を繼ぎ（女夫池）　不堪（ふかん）の我等僅に父の箕裘を繼いで、櫃日（ひつめ）の五郎が籠つたる鳥の海の城郭を乘崩し（蛙合戰）

〔箕裘〕弓人の子は其父が堅き幹角を矯めて弓を成すを見て、軟かな柳條を曲げて箕を爲（つく）ることを學び、冶工の子は其父が堅き金鐵を鎔して破器を補綴するを見て、軟かな獸皮を補綴して裘を爲ることを學ぶといふ義、よつて父祖の業を繼ぐ意。禮記・學記に、「良冶之子必學レ爲レ裘、良弓之子必學レ爲レ箕」。

ききはつる　師匠の話聞きはつつた儀もあり（鑓權三）

〔聞削〕きゝかじる（聞齧）。

ききやうぞめ　彼處（あそこ）へ桔梗染の腰變り縞繻の帶、しやぢやわいの（女殺）

〔桔梗染〕桔梗の花の色のやうな、卽ち藍色を帶びた薄紫の色染。

きくいただき　（娥）

〔菊戴〕燕雀類に屬する鳥、嘴短小で頂に菊花に似た黄色の羽毛がある。

きくざけ　加賀に菊酒、南都にかすりゐ（酒呑童子枕言葉）

「加賀に菊酒」を見よ。

***菊水の流**（きくすゐのながれ）　七百年生きる仙人の、藥の酒とは菊水の流れ（女護島）　菊の流れもこれなれや、生藥てふ熊野の湯（小栗判官）　きくの水（一心五戒魂）

酈縣の山の菊を浮べて流れ來る水を菊水といふ、之を飲めば七百年の壽を保つと云ふ。謠曲・枕慈童に、「所は酈縣の山のしただり菊水の流れ、泉はもとより酒なれば、酌みては勧めすくひては施し、我身も飲むなり、……元來藥の酒なれば、醉にも犯されず、其身も變らぬ七百歲を保ちぬるも、……」。風俗通に、「南陽酈縣有二甘谷一、谷中水甘美、上有二大菊一、落レ水從レ山流下、得二其滋液一、谷中人家飲二此水一、上壽百二三十、其中百餘歲、云々」。爾雅に菊の異名を擧げた末に、「延年有二紫莖一、氣香而味美者、服レ之可三已レ疾延二年」。

きくぢん　麴塵の守袋御前に差出す（弘徽殿）　入鹿の大臣金巾子の冠麴塵の裝束（大織冠）

〔麴塵〕黄色に青色を帶びた染色。貞丈雜記・巻五、裝束部に、「麴塵といふ色は萠黄がちなる色なり、俗にキチン色といふ」。「麴塵の裝束」は天皇褻の御衣に用ゐられた染色で、桐竹鳳凰または唐草と鳥を紋模樣にしてある。

***きくづき**　（孕常盤）（五人兄弟）

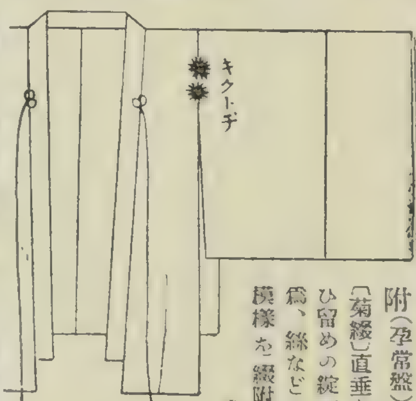
〔菊月〕舊曆九月の異稱。

きくつば　一條の御所樣の菊鍔も九月の御用ぢや合點か（女腹切）

〔菊鍔〕菊の花形の鍔。

***きくとぢ**　十二の菊綴四つの紐附（孕常盤）

〔菊綴〕直垂などの縫ひ留めの綻びを防ぐ爲、絲などで菊形の模樣を綴附けたもの。



***きくのきせわた**　頃は養和元年九月九日、中宮の御方より御祝儀の御使、となせの局が折にあふ菊のきせわた置綿に、白髪まじりの下髪も（娥）

〔菊着綿〕九月九日に菊花に綿を被せて匂を移すこと、またはその綿。源氏物語・幻巻に、「九日綿おほひたる菊を御覽じて」とあるも、これをいうたのである。

***菊の酒**（きくのさけ）　所は山路の菊の酒、何かは苦しかるべき（艶狩）

「菊水の流（きくすゐのながれ）」を見よ。

菊屋が名譽名物（きくやがめいよめいぶつ）　どんな敵（かたき）のあまい奴原（やつはら）、爰へ來い來い、こいと煉（ねり）て人もきく屋が名譽名物、こりやこりやこりやこりや買ふなら今ぢや（千疋犬）

菊屋は元祿時代大阪天滿天神社の前にあつた有名な飴屋である。店には小娘が赤前垂に紅の襷掛け、繻子の帶を羅うて立働き、また賣子は腹卷に肌襦袢　股引菅笠の扮裝で、太鼓を打つて飴を賣り歩いた、これを應用したのである。「こいとねり」をも見よ。

きけいはちみやく　奇經八脈通入し、首の切れめに疵もなく生れついたる如くなり（天智天皇）

〔奇經八脈〕漢方醫では經絡を正經と奇經に分ち、奇經八つの脈卽ち陰維、陽維、陰蹻、陽蹻、衝、任、督、帶をいふ。

***ぎげう**　六十餘州の總追捕使大納言の大將賴朝卿、威嚴四海にぎげうたり（蛙合戰）

〔儀刑（ぎけい）〕儀は象の義、刑は法の義。象（かたど）り法とすること。詩經・大雅に、「儀二刑文王一、萬邦作孚」。

***きこうでん**　折しも七月初七日の夕、きこうでんの音樂あるべしと（天鼓）

〔乞巧奠〕七月七日の夕、牽牛・織女の二星を祭る儀であつて、七夕（たなはた）祭ともいふ。乞巧奠には管絃の催しもあつたので、增鏡・秋のみ山、乞巧奠御遊の條に、「七月七日乞巧奠、いつの年よりも御心とどめて、かねてより人々に歌ども召され、物の音どもゝ試みさせ給ふ、その夜は例の玄象ひかせ給ふ」。公事根源に、「乞巧といふ事も支那より事起れり、七夕祭ともいふなり、香華を供へ供具をとゝのへて、庭上にふみをおきて、箏の端に五色の絲を懸けて一事を祈るに、三年の内に必ず叶ふといへり、この故に乞巧と申也」。

***きこくがき**　枳殼垣にぐんぐつと、葉山繁山繁けれど、茨障らず思ひ入る（鑓權三）

〔枳殼垣〕からたちの生垣。からたちは密柑樹に似た灌木で、刺多く夏時小白花を開く。

***ぎごつなし**　こりやそこなじねんじよめ、諸ひ居らうとぎごつなく、丹波與作　義朝公の奉公人ではないかと、ぎごつなくも言ひ返す（鎌田）　なうぎごつなの人人や、

して、一倍氣合に當りますと、溜息吐いてゐたりけり(今宮) お氣合に構ふとて、初對面はお勤めなされぬも存じながら(夕霧)

〔氣合〕氣分。「氣合に當る」は氣に懸る。「氣合に構ふ」は氣分に障る。

*きいち　天狗に授かる飛行の術、鬼一が傳へし一卷の太刀風さはぐ虎の卷(最明寺殿)

〔鬼一〕鬼一法眼といひ、京の一條堀川にゐた陰陽家である、鞍馬寺の兵書を預り祕藏してゐた。安元年間義經・鬼一の家を訪ひ、その兵書・虎の卷を讀んで兵法の奧儀を知つたといふ。詳しくは異本義經記を見よ。

*きうか　九夏三伏の暑き日(酒呑童子)

〔九夏〕夏時九十日をいふ。書言字考節用集に、「夏九十日云二九夏一」。

きうけい　玉座に續いて大理卿大江の匡房、三公九卿八座七辦席を連ね(隅田川)

〔九卿〕支那では少師・少傅・少保・冢宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空の九卿ある。我國では大中納言十四人・參議八人凡二十餘卿なれども、彼になぞらへてしかいつたのである。

きうけつ　五臟六腑惱亂し九穴より血を咯いて(小栗判官)

〔九穴〕九竅ともいふ。目二、耳二、鼻二、口一、下部二。

*きうご　九五は帝位、上九は師匠の位(天神記)　二度九五の御位、後醍醐の帝と重祚ある(女楠)

〔九五〕天子の位。九は陽、五は天子の位である。乾の卦

上九 一
九五 一
九四 一
九三 一
九二 一
初九 一

易・履卦の疏に「以レ剛處レ中、得二其正位一、居二九五之尊一、是剛中正履二帝位一也」。

*きうこう　きうこうなした若い者ども數多の中ひとつにして、此大阪で物の見事に躾けてやらう(今宮)　舊功の者の悴とて一國をも賜つて(持統天皇)

〔舊功〕嘗て功績を立てたこと。

*きうざ　それ久三挾箱(はさみばこ)、暦配る家によつてお引が出る(大經師)　蠟燭を忘れた、これ久三大儀ながら一走り(今宮)　あれ久三、門にいかう犬が鳴く、何も無いか起きて見や(今宮)

〔久三〕下男を呼ぶ稱。京阪地方では下男を久三というた。俚言集覽に「久三(きうざ)=〔物類稱呼〕京にて久三は一季奉公人をいふ、江戸にてはわたりものをいふ、愚按、凡て下男の事をいふ」。浪花方言(文政二年成、寫本)に「久三。京にて一季奉公人をかくいふ、江戸にてはわたりものといふ」。

*きうせん　渡邊程の武夫が鬼神退治の證據を失ひ、表裏者の名を取らん九泉の恥辱詮方なし(酒呑童子)

〔九泉〕黄泉。冥土。太平記・卷四、備後三郎高德の條に、「父祖の尸を九泉の苔の下に羞かしむる恨あり」。木虛の海賦に、「吹二烱九泉一」とありて註に、「李善曰、地有二九重一故曰二九泉一」。

*きうぞく　戀路を種の發心にて、六親九族を引導せり(娥)

〔九族〕高祖・曾祖・祖・父・己・子・孫・曾孫・玄孫。一說には父族四・母族三・妻族二。

きうちようごしや　九重五舍の后町闢闢と相和らぎ、羽をならぶる水鳥は君子の好きたぐひ(弘徽殿)

〔九重五舍〕禁闕を九天に擬して、天子九門といひ、禁裏を九重といふ。五舍は禁中五つの殿舍卽ち昭陽舍(梨壺)、淑景舍(桐壺)、飛香舍(藤壺)、凝花舍(梅壺)、襲芳舍(雷鳴壺)。

きうてい　周の九鼎唐の三尺皆古幣をもつて貴しとす(天智天皇)

〔九鼎〕夏の禹王の時に九州から金を貢がせて鑄造した九個の鼎であつて、夏・殷・周の三代相傳へて寶としたもの。左傳疏に「昔周代レ殷而取二九鼎一、一鼎九萬人挽レ之、九鼎八十一萬人挽レ之、挽レ鼎人數或是虛言、要知二其鼎有レ九、故稱二九鼎一也」。天智天皇のこの文は、周の九鼎も唐の三尺の劍も、皆古くからたからであると云ふによつて貴いのであるとの意。

*きうてん　願文を捲取つて九天高くぞ昇りける(天神記)

〔九天〕天を九方に分つていふ語。天。淮南子・天文訓に、「天有二九野一、何謂二九野一、中央曰二鈞天一、東方曰二蒼天一、東北曰二變天一、北方曰二玄天一、西北方曰二幽天一、西方曰二皓天一、西南方曰二朱天一、南方曰二炎天一、東南方曰二陽天一」。

*きうば　備前國に安堵して、卽ち入部の行列勇勇しき弓馬のほまれかや(佐々木)

〔弓馬〕武士の意。謠曲・安宅に、「然るに義經弓馬の家に生まれ來て」。

*きうび　鳩尾先(さき)をゑぐつて、金子は彼奴が身體の内、肺の臟に押込んだり(反魂香)　鳩尾さきを背中まで思ふやうにとどめを刺し(歌念佛)　照房が鳩尾さきにどうと打跨(うで)ぎ(ざし)、のどぶえを抉らんとする腕節(持統天皇)

〔鳩尾〕水おち。鳩尾は身體の急所である。節用集大全(延寶八年刊)に、「鳩尾。胸下也」。十四經絡發揮諺解・卷之六に、「鳩尾在二蔽骨之端一、言其骨垂下如二鳩形一、故以爲レ名」とありて註に、「其骨(鳩尾骨)胸前より垂下して鳩の尾さきの狀に似たるが故に此を名づけて鳩尾と云也」。

*きうり　孫右衛門樣はとうに親子のきうりを切り、構はぬとはいひながら(冥途飛脚)

〔舊里〕舊里を切るとは、舊里に寄せ付けぬ義、勘當義絶するをいふ。轉じて舊里を久離また舊離と書いて、勘當の義にいひ、久離を切るとも云ふ。公事方書留(近藤抑・寫本)に、「久離之文字、公裁錄には久離宜よし認有之可糺事、奉行所にては舊離通用致し候」。

*消えてんげり　明け行く空と消えてんげり(蟬丸)

「消えてけり」に撥音「ん」の增加して「け」の濁つた語。「失せてんげり」「行きてんげり」などもこの類である。

*ぎえん　ぎえん直しに酒にせう、毛氈敷けと勇んで見ても(淀鯉)　雷雲腹を立て、ええぎえんの惡い、きりばれつんばれでもあることか(持統天皇)　枕元の守刀となしたる故、家内に何の怪我もないぎえんのよい勝差(生玉)

「えんぎ」(緣起)の倒語。緣起。きざし(兆)。心中二つ腹帶(紀海音作)道行ほしのかずに、「兎ても角ても死神に、引かるゝ緣は辻占の、時のぎえんもなきものと、身を觀じてぞ居たりける」。現今の言葉に、「緣起の好い又は惡い」を「げんの好い又は惡い」といふ、「げん」も「ぎえん」の約りであらう。

ぎがく　法談讀誦管絃の聲、猿樂田樂伎樂を奏し(賀古敎信)

ぎ進むさま。弱法師（淨瑠璃）第二に「ちときそきそなされませ、日が暮るるがと申す」。

きそげ　「きろゐきそげ」を見よ。

きそはじめ　かのきそはじめ引かへて・引かろろ駒のくらびらき（大經師）　湯殿始めきて始め、（雪女）

〔着衣始〕舊暦上の語、新衣を着初めるによいといふ日。大雑書（寛永十一年刊）に、「きそはじめとはきる物をきそむる日なり」。貞享四丙辰山田暦の鼇頭注に、「きそはじめとは新らしき冠裴束衣裴を着するものなり」。こゝの文は暦にある語を以て飾つたまで。

きそをどり　奴踊・木曾踊（女護島）

〔木曾踊〕歌多の人輪になり、手を振つて歩きながら踊るもので、木曾の筑摩あたりで踊始めたよりいふ。狗猧集五・秋下に、「世上木曾踊とてはやり侍りければ。夕よりみな麻衣や木曾をどり作者不知」。井出道貞撰、信濃奇勝録・巻之一、筑摩郡之部に、「木曾踊は六月十二日十三日黒澤の祭の夜、又七月盂蘭盆に踊るを大踊といふ、大道に男女打交りて車輪の如く、若き者は更なり、老人は杖を傍に置きて交り、老婆は孫を負ひ兒童を引連れ來りて其中に入り、夜一夜踊りあかす事也」。

***きたいえん**　めでたき國の御寳天下に弘め給へかしと、きたいえんによつて招き求め候と（用明天皇）

〔希代縁〕世に稀な縁。不思議な縁。

きたうづむ　萬事を夢と飲みあげし、寐覺提重五外樽・坊主持してきたうづむ（女殺）

「北埋む」で、卽ち北に走つて己が身を人込みの中に隠れ埋める意であらう。こゝの文は「來た」に「北」をかけたのである。坊主持を約して自分の番となれば、野崎參詣の人込みの中に逃隠れて巫山戯ることを云うたのである。「來た」に「北」をかけた例は加增曾我にも、「すけとの鱈を祐經と、心に評して一の太刀、報は廻りきた海の、浪の鋤請取れと」と見えてゐる。「北埋む」は「大小くすんだ武士の正眞」（「くすむ」を見よ）と書いてあるやうに甚だしい略筆をしたものであらう。（序に詳說すれば、與兵衞等が坊主持したといふ近松のこの文は、一つ橋（地名部「一つ橋」「岡山」を見よ）あたりで、參詣道の北に通ずる途中で巫山戯る有様をいうたので、己が交替番になれば逃げて、北に行く參詣の人込み中に身をうづめ隠れる意の略筆である。

***きたのかた**　大老執權の北の方を始めとして（會稽山）

〔北方〕貴人の妻をいふ。二判問答に、「室家稱二北方一事、自二大臣一至二殿上人一室家通稱歟」。和訓栞に、「きたのかた。北方と書けり、搢紳の室を稱せり、无住法師の說に、北は陰也、故に女を北方といふといへり、北堂などの意に通へり、北の政所の稱も意同じ」。

***きたむき**　北むきのつまがはが袖を控へて、これ君さん、旅のお人か近付もなさそうな、局へごんせ（酒呑童子）　本膳までは及びなし、北向の五分膳でも相伴したしと笑ひけり（扇八景）　そちにも北向一つは近江八幡が請込んだ（五人兄弟）

〔北向〕勤銀五分ばかりで淫を鬻いだ下等な賣女である。北向とはこの賣女が上方の北方の横町の貧民長屋に住んでゐたからの稱である。人倫訓蒙圖彙（元祿三年刊）に、「北向は北方の横町あたり鳩の小屋の中に住みて、夏冬なしにすゝばなをたらし、無常迅速を觀じ給ふ」。御前義經記（元祿十三年刊）に、「五を五歩とも・わけとも・北むきとも・そろりともいへり」。並木舍五瓶編、誹諧通言・人倫の部に、「北向。あたひ下直の安娼婦なり」。「巣林子作・傾城懸物揃に、「身は北向に下げられて破れ暖簾破れ窓、憂きふししげき呉竹の、煙管くはへてのらのらと立出で見れば油火や、炭火のかげに焦付きしふすぼり顔は恥かしや」とあれば、この哀れな賣春婦の渡世が察せられる。原田光風撰・及瓜漫筆に、「北向一匁、是は天和の頃中堂寺村住吉屋太兵衞と云もの、價下直なる女郎多くかゝへ繁昌しける故、島原よりこれをねがひ、住吉や島原の内へ引けるによつて、今廓内揚屋町の上に中堂寺町といへる一町あり、北向女郎はじめは價五分、後は一匁に て、此住吉屋にはじまるとぞ、享保のはじめ此住吉や太兵衞の家絶えたり、夫より此北向と唱ふるものも絶えて今はなし」と見えてゐるが、北向の稱は住吉屋と消長を同じうしたものではない。北向を買ふ料金がもと五分であつたことは、「北向の五分膳」といひ、又傾城酒呑童子・第三に、北向女郎妻川の詞に「わしが位かえ、極つた通り五分でごんす、安いものぢや這入らんせ」、とあるのでも知れる。また傾城懸物揃のこの文によれば、花の羽利といはれた遊女も、己が手管のいたづらで北向に下げられる者がある事が知れる。



（蝉餘小錄所藏）

きだる　本の樽より結句きだるに醉ひました（大經師）

〔素樽〕酒手。封銀の意に用ゐる。浪華方言（文政二年成・寫本）に、「きだる。進物など何にても品なし代銀にて遣すをいふ、樽ばかりにて酒は代銀にて遣すより出る言葉、素樽のことなるべし」。聽流編はいかい都鳥（寛保元年刊）に、「世は醉り封銀にたれも下戸がない」の句ありて、封銀に「きだる」と傍訓してある。

***きちやう**　御簾も几帳もさゞめき渡り（百合若）

〔几帳〕臺に柱を立てゝ帷をかけ、座側に置き人の見るを遮る具。四尺の几帳も三尺の几帳もある。

きちん　扱旗指はきちんの直垂に、小櫻を黄に返したる鎧着て（大原問答）

「きくぢん」（麴塵）を見よ。

***きちん**　寝道具ようて酒ようて、お茶は上上木賃でなりと、据風呂もしやんしやん（丹波與作）　五條の木賃宿へ行きはせで（女腹切）

〔木賃〕旅人が米を携へ、炊ぐべき薪代のみを旅宿に支拂ふこと。

***きつくわい**　えゝ思へはきつくわい口惜しと、怒れる涙はらはらと（用明天皇）　やあきつくわいなる雜言、おのれこそ赤面の熟柿坊主、踏潰してのけん（女楠）

「きくわい」（奇怪）に促音「つ」の増加した語で、「もはら」（專）を「もつぱら」、「ぜひ」（是非）を「ぜつぴ」、「うたへ」（訴）を「うつたへ」といふの類である。心得難きこと。譬喩に、「奇怪。非事のふるまひするを俗にキツクワイモノと云ふは奇怪者なり」。

***きつさう**　どうぞ無事な吉左右をと、涙ながらに二足三足（冥途飛脚）　旅出立は暇乞と見えた、お出過分、追付吉左右待ち申す（鑓權三）　鎌足様より吉左右の御使、やあ吉左右とはまづめでたし（大職冠）　殺した奴もまだ知れず氣の毒千萬・したが追付知れましょと、我と口から

商賣と云ふ物は賣るにも買ふにも品ぞである(烏帽子折

ぎごつしいことを「ぎごつ」といふたので、いかつしいことを「いかつ」、ふきつしいことを「ふきつ」といふの類である。「なし」は、あらけなし」などいふ「なし」と同じ類で、甚しの意。いたくしなやかでない。無愛想でかどかどしい。「ぎごつ」は動詞として用ひもしたもので、巣林子作・大名なぐさみ曾我(天和二年刊・狂言本)に「又そちへも意見がある、めつたにぎごつて腹を立つる、今から物事ぼんじやりとやわやわとしたがよい」と見えてゐる。

***きごみ**　着込の兵百騎ばかりむら立ち來つて、家家に押入り押入り搜しける(反魂香)

〔着込〕下着に鎖帷子の類を着込んでゐること。

きこらいきこらい、びんくはんたさつ、ぶおんぶおん(國性爺

「きこらい」は陶潛の文に有名な歸去來賦といふがあるから、その歸去來を取り、「びんくはん」は「くわんおん」(觀音)、「たさつ」は「さつた」(薩埵)を轉倒して訛り、それに鐵砲の音「ぶおんぶおん」を添へて、唐音詞らしくいうたまでゞ、意味をなさぬ例の諧謔の筆である。穂積以貫撰・難波土産卷四に、「この淨瑠璃の唐音は前もいふ通り譯もなき事なり、きこらいは歸去來の字を用ひたれども、これも唐音にては歸去來なれば合はず、びんくはんたさつぶおんぶおんも、唐音をもつて文字に合せなば、相應の事もあるべけれども、すべて近松が唐音は皆頓作にて其かゝはりなし」。

きさく　煙草賣の源七はまだ見えぬか、氣さく者の通り者(嫗山姥

氣のさくいこと。氣輕。本朝俚諺に「景迹。源氏物語にところどころ見えたり、今俗にいふきさく、この略語なり」。

きざし　この上は無理と出るきざしと、むずと抱き顔を見て(大覺)

〔氣差〕氣分。心持。「きざし」の「ざし」は「面ざし」の「ざし」と同義の語である。

きざはし　柿はきざはし八王子(嵯峨天皇)

〔木醂〕木にあつて其儘醂す義。熟柹。

***きざみ**　友風病死に極りて葬送のきざみ、賀古川の北の方惡人に害せられ、其魂假に宿つて愚僧に願ひの仔細あり(賀古敎信)

〔刻〕時。際。

きさや　牛繋ぎ置くきさやに入れば(嵯峨天皇)

木室の義、廐をいふ。名義抄に「廐ウマヤ キサヤ」。

***きします**　これ梅の井、お屋形の首尾氣遣ひな。惟茂樣にお目に懸つてか、きしませずと咄しや(栬狩)お側に伏したる冷泉、それ彼の樣が彼の樣が、ちときしまして見さんせと申せば(孕常盤)

軋むやうにさす義。氣分をもどかしく採ますやうにさせる。

***ぎしむ**　投付け投返し、腕まくりしてぎしみ合ふ(冥途飛脚)　初段から切りまで語りぬかせにや堪忍せぬと、ぎしみまはれば(二枚繪)　もう一度言うて見よと、ぎしみかかれば(五人兄弟)

〔軋〕堅い物など軋合うて鳴る音を「ぎしぎし」といふ、「ぎしむ」「きしる」「ぎしめく」「ぎしやばる」などは軋る意を含む語である。「ぎしむ」はその義を轉じて、力を入れる。勢を張る。越谷秀眞編、物類稱呼・卷五、言語部に、「ギシム。畿内の語なり、關東にてリキムと云ふに當る言なり」。

きしめん　伏兎曲の煎餅。饅頭菓子麵筍羊羹(天神記)

〔棊子麵〕小麥粉を水にて固く練つて板の上に薄く伸し、細い竹筒で押切り、それを煮て豆粉を振掛けたもので、その形棊子に似たるよりの名。

***きしやう**　起請を取交はすから僞は申さないと存じ(二枚繪)

〔起請〕請はうけ即ち誓約で、誓約をたつの義であらう。事の由を記して神佛に誓ひ證書とするもの。誓紙。「しちまいきしやう」をも見よ。

きじやく　わしはきじやくで床に就き、身代どうも立ちかね(氷朔日)

〔氣積〕積氣。胸部又は腹部に痙攣を起して烈しく痛む病氣で、婦人に多い。積の字は積聚の積に疒を加へて、積の字の吳音讀にしたもの。病源候論に「積聚＝積者陰氣、五藏所レ生、始發不レ離二其部一、故上下有レ窮也、聚者陽氣、六府所レ成、故無二根本一、上下無レ所二留止一、其痛無レ有二常處一」。

きじやくてん　然るに此度宋朝より耆鵲天と云ふ名醫日本に渡り(孕常盤)

〔耆鵲天〕天竺の名醫耆婆の天と耆と、及び支那の名醫扁鵲の鵲とを取合して作つた名。

***きしゆくにち**　宗旨の年の宿のとて、問ふもなかなか鬼宿日(松風)

〔鬼宿日〕鬼宿は二十八宿の一。鬼星の宿する日で、この日嫁娶には忌めど、その他のことは萬事に吉の日であるといふ。こゝの文、問ふもなかなか奇を鬼宿日にかけ、嫁取には忌む樣をきかせてゐる、

ぎす　ぎすな顏せずしつぼりはいやかいやかとありければ(天皷)

かどだち無愛想。源氏物語・枕草紙などに、柔らかならずつんしやんとしたことを「きすくと云うてある、木强の義。「ぎす」もこれより出た語であらう。(序云、「痩ぎす」の「ぎす」は、

蘚の如く細つこゐることで、これとは別。)

***ぎせい**　さあ手にかからんかからんと、刀抱込み立つたるぎせい(川中島)　互の心を探りあひ、兩眼に血筋を張り、齒を鳴して睨み合ふ、ぎせいの程ぞ賴もしき(烏帽子折)

〔義勢〕擬勢とも書く。勢を張る。りきむこと。和訓栞に、「平家物語・東鑑等に義勢と書けり、今ぎつせいともいへり」。俚言集覽に、「義勢。今いふリキム事」。

***きせなが**　黃金作の太刀かたな、赤色の錦の御きせなが、わらはが取つて着せければ(女楠)　軍慮を廻らす小車の錦の着長、銀の心葉びんづらに取つて附け(振袖始)　赤地の錦の着長(孕常盤)

「着長」鎧。貞丈雜記・卷十一、武具部に、「鎧を着長といふは、鎧は腹卷腹當胴丸などよりも草摺長き故なり、又着脊長とも書く、是は腹卷腹當などは脊の方にて合する故、腹の方より當て着るなり、鎧は脊の方より着る故なり、着長とは大將の鎧をいふ、平士の鎧を云ふも誤にあらず云々」。巣林子が「赤色の錦の御きせなが」などと云へること不適當である。これは着長を鎧直垂と誤つて考へたのである。但し巣林子はいつもさう考へてゐたのではなくて、彼の作・日本武尊吾妻鑑第五、橘姫道行の條に、「日本武こがね札の御着長、天の磐靫脊に負ひ掛け」とあるから、着長は常の鎧であるといふことも知らないのではない。(序云、古淨瑠璃・頼朝濱出に、「波に筏の着長、寄來る敵を引留め」とある着長も、直垂に誤用されてゐるのは、巣林子の作であるからか)。

きそきそ　釆女きそきそ手を引け(天智)

「いそいそ」に同じ。「い」と「き」と通じる。心急

きどくばうし 妬み嫉みも女子氣の、奇特ばうしに額つつみ(女夫池)
〔奇特帽子〕「きどくづきん」を見よ。

きどのあふぎ いたいけな子供に何がな取らせん、これはきどの扇とて都の名物、一本づつと、はらりと散らせば(傑靜) みしはかへらで面影の、なほなつかしみ御影堂、きどのがあふぎ召すまいか(百日曾我)
〔城殿扇〕足利時代の中頃から徳川時代にかけて、京都下長者町の西に城殿と稱して、駒井を氏とする進物の裝飾を調進する家があつた。その家で製する扇殊に勝れたれば、世人これを城殿扇と稱して愛翫した。今はその家傳つてゐない。五條の御影堂扇も城殿に傚つて製し、其他京都の扇は皆その流をくみ、變遷を經たものである。雍州府志(黑川道祐撰)土産門下・服器部に、「扇。元應司通城殿駒井氏製レ之、今良賤常用之扇、小川井所々有レ之、然不レ及二御影堂之製一也」。庭訓往來・四月十一日の文に、「城殿扇」ありて伊勢貞丈の註に、「城殿は職人の氏なり、今も城殿和泉とて京にあり、婦人の假粧の具・扇の類・華美なる物を作るなり。職人盡歌合たゝう紙賣歌に、わすれめや城殿にそむるたゝうかみしなやかなりし人の手さはり」。

***きなか** いかな九文きなかでも堪忍ばしめさるな(歌念佛)
〔寸半〕一寸の半分の義、錢一文は經一寸の定めなれば、その半卽ち錢五分をいふ。

***きなか** 季中に其處を追出し藥(薩摩歌)
〔季中〕一季・半季などのきりめの來ぬうち。

***きにち** 今日はわれらが先妻の忌日(薩摩歌)
〔忌日〕命日。人の死んだ日に當るをいひ、其人を追懷して逸樂を忌み愼めば忌日といふ。釋氏要覽・下に「二月十五日佛涅槃日、天下僧俗有二營會供養一、卽忌日之事也、俗禮君子有二終身之孝一、忌日之謂也、又謂二不樂之日一、不レ欲レ樂故、云々」。

きぬがさ 唐櫃先に舁入れさせ悠悠たる衣笠も、さすが五常軍甘輝と名に負ふ其物體(國性爺) 衣笠の供女中威儀をただせる折しも(源義經)
〔衣笠〕蓋である。絹を以て作つた長柄の傘であつて、貴人などの外出に傍からさしかけて覆ふもの。萬葉集卷・三に、「久堅乃天歸月乎綱爾刺我大王者蓋爾爲有」。

***きぬかづき** その外介添衣被、長刀傘ざんざめいたる供先(艶狩)
〔衣被〕「かづき」を見よ。

***きぬぎぬ** よその待宵きぬぎぬも、思はでつらき鐘の聲(曾根崎) 野寺の鐘の響まで、又待宵にいつ聞かん、これや限りのきぬぎぬならんと、泣く泣く連れてぞ歸りける(百日曾我)
〔衣々〕各自の着物着物を取分けて着ること。轉じて、男女合衾して朝起き別れることをいふ。後朝。和訓栞に「きぬぎぬ＝おのがきぬぎぬ、きぬぎぬのわかれなどいへり、合歡の衾を離れ各々自々の衣を着て別るゝ意也」。

***きね** きれが鼓の調まで萬歲樂とぞよばふなる(三世相) きれが鼓の神樂の鈴(源義經)
〔宜禰〕神職の者。神官。和訓栞に、「禰宜をきねともいふ、祈念の音をもて名くるなるべし」。

きのえね けふは五日宵庚申、きのえねが近い、二股大根のけておけ(宵庚申) 一期連添ふ大事の男、すひがらにせまいと本女房さへ懸引する、跡構はずにあた見られぬ、庚申甲子一夜の間日もある事か(大織冠) 今日はあしたのきのえねと、知らで逢ふ夜のその報、世上の口にうたはれて(大經師)
〔甲子〕甲子の日年に六回ある、その夜子を祭る、これを子祭と云ふ。黑川道祐編、日次紀事・正月の條に、「凡一年中六甲子夜、禁裏被レ祭レ子、……凡毎二甲子一民間買二燈心一、其内以二十一月甲子一爲レ最、……六甲子夜祭レ子、是謂二子祭一」。「ふたまただいこん」をも見よ。甲子及び庚申の夜は房事を忌む。民間年中故事要言(元祿十年刊)卷七、庚申待の條に、「甲子庚申の日に當れば夫妻共に寢ることを忌む」。「かうしん」をも見よ。「けふはあしたのきのえね」は「きのえね」に「きのふ」をかけ、更に甲子に木の上(磔刑)をもきかせたのである。

***きのそら** 道に違うた金儲けを結構な事と思ひ居る、木の空に引張らるるは今の事(博多) どうで木の空で涼ませずばあの根性は直るまい(日本武尊) 木の空にさらされて、かばれな槍で突かれても思ひ置く事ござらぬ(大經師)
〔木の空〕「かたかなのき」を見よ。

***きのどく** そもじ樣に添ひ申さんが、それまでの氣の毒あり(三世相) 可愛らしい顏附で氣の毒がらすはどうぢやいやい(冥途飛脚)
〔氣毒〕我が心の障り。我が心の苦痛。「氣の毒がらす」とは、我が心を苦しまし惱ましめるやうにする意。

***きのとほる** なんとこの雪がやうな悴氣せぬ氣の通つた女房はござんすまい(夕霧) 重井筒ともいはるる身が、氣のとほらぬ、こたつに火を入れなんどとは、さりとてはお笑止な(重井筒) 昔の人も氣のとほるの大臣(曾根崎)
〔氣の通る〕物譯を知つて氣の利く。粹にてある。「氣のとほるの大臣」は、氣の通るに融の大臣をかけたのである。

きのぼり 春早早から獄門の相伴とは、兄者人嬉しうござる、この三郎が相伴するか、賢人の斯波左衛門を木登りさするか今御覽ぜ(雪女)
〔木登〕獄門。首を木の臺上に登せるによつていふ。

***きのまるどの** かりほのいほの假御殿、木の丸殿になぞらへ、卽ち天智天皇と號し給ひつつ(天智天皇)
〔木丸殿〕丸木まゝの黑木で作つた行宮。新古今集・卷十七、天智天皇の御歌に、「あさくらや木の丸殿に我居れば、名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」。「あさくらや云々」をも見よ。

木のもと 浦安が木のもとにて、正月三日の寅の一天誕生まします、若ゑびす商ひ神(大經師)
「うらやす」の條を見よ。翁草に「正月に來る萬歲の唱歌中古の言葉ときこゆ、されども頗る片言にて解し難き事多し」とある。

***きは** 正月まへのきはぎはに、且那殿は外が內(重井筒) 互に忙しいきはの夜さ、爰へは何の用がある(女殺)
〔際〕節季また節句の時をいふ、卽ち支拂取入

むかうの吉左右(女殺)

〔吉左右〕吉報。よきたより。また轉じて、消息。やうす。

切先外れ(きつさきはづれ)　比丘尼が小腕(こがひな)に切先外れにずつぱと立つ(薩摩歌)

この文は、狙つて白刃を投げたのが當つたのならば、切先外れずといふのであるが、狙はなくて當つたのだから、切先的外れにずつぱと立つの意。

きつしくい　ちと夜更けては內證に人に包む障あり、きつしくらしい事言ふも嫉ひなれど、外の人には見せともない(孫靜)

「きしくい」に促音「つ」の増加した語。きしきしして餘裕のない。

きつしよ　わたしが親の未進米、この六日の吉書に立てればもとの水牢(丹波與作)

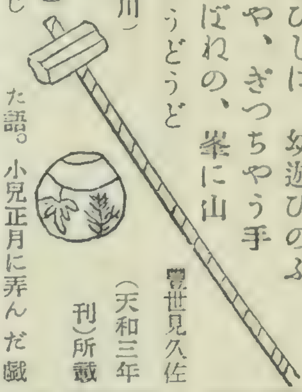
〔吉書〕吉日に覽る書の義。政事始に賦税を怠らないやうに百姓に下し與へる定書で、上納の額を記したもの。庭訓往來・三月十二日の文に、「吉書令レ選二行吉日良辰一、耕作業最中也」。東鑑に「十月六日新造公文所吉書始也」。

*__きつすゐ__　厚恩の主君に忠節を勵むこそ恥を知つたる侍、大丈夫のもののふのきつすゐといふものぞ(丹波與作)　上にも下にも好(す)く風俗、男の上上きつすゐといふは齋藤瀧口賴方(娥)

「きすゐ」(生粹)に促音「つ」の増加した語。純粹。正眞。

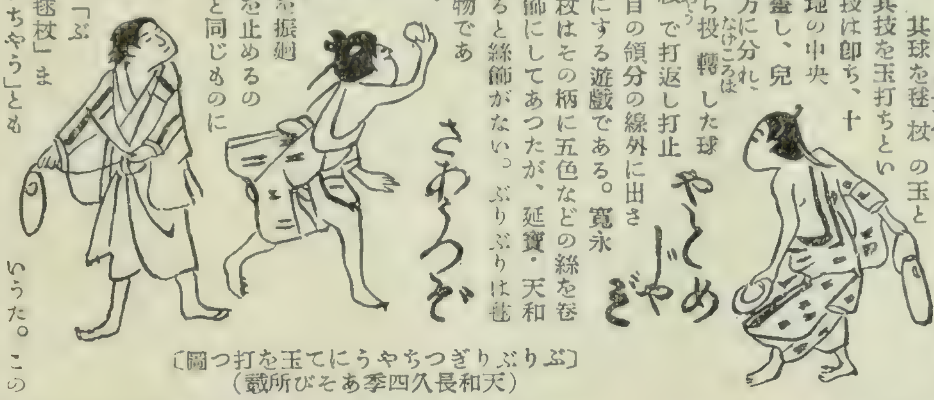
きつたてざや　「青貝柄(あをがひえ)に切立鞘(きつたてざや)」を見よ。

ぎつちやう　戻すぞと投返せば、取つて投掛け投戻し、二三度四五度せり合ひしは、幼遊びのぶりぶりや、ぎつちやう手鞠つくばねの、峯に山彦のどうどうどうどう(隅田川)



豐世見久佐(天和三年刊)所載

「きうぢやう」(毬杖)の轉じた語。小兒正月に弄んだ戲具。槌の形をした杖で、これを以て木製の球を打つ、其球を毬杖(ぎつちやう)の玉と云ひ、其技を玉打ちといふ。競技は卽ち、十間餘の地の中央に線を畫し、兒童等兩方に分れ、一方から投轉(なげころば)した球を毬杖(ぎつちやう)で打返し打止め、各自の領分の線外に出さぬやうにする遊戲である。寛永頃の毬杖はその柄に五色などの絲を卷付けて飾にしてあつたが、延寶・天和頃になると絲飾がない。ぶりぶりは毬杖と別物であつたが、槌のかはりにぶりぶりの紐(ひも)を振廻して玉を止めるので毬杖と同じものになつたのである。これを「ぶりぶり毬杖」また「ぎつちやう」ともいうた。この遊戲は京都で行はれたが、長からずしてすたつた。



〔ぶりぶりぎつちやうにて玉を打つ圖〕
(天和長久四季あそび所載)



*__きつつけ__　轡を引揃へ押並べて渡すとすれば、きつつけ太腹どうどうどう、浪鞍坪に打越して(最明寺殿)

〔切付〕馬具の名、下鞍(したぐら)(革で作り馬の背に當て、鞍の下に敷くもの)をいふ。

*__きづな__　この世のきづなはふつつと思切つたぞや(歌念佛)　凡僧我等が上にさへ、臨終には恩愛のきづなを切る(釋迦)

「ひきづな」(牽綱)の略か。絆。ほだし。離れ難い心のつながれ。

*__きつねび__　男心もとぼとぼと、堤にとぼす狐火を、彼は我が子の人魂よ、結びとめんと手を引きて(賀古敎信)はつと消えては狐火の、我と我が身を迷はする(會稽山)

〔狐火〕狐が動物の骨などを銜(くは)へて叢(くさむら)に逃入る時、その骨から燐光を放つを見ていひだした語であらう。燐火。鬼火。

ぎてい　漢の高祖は義帝を尊んで秦の國を亡す(女楠)

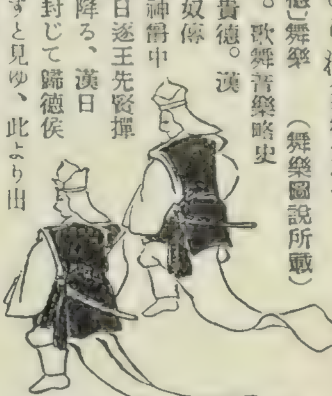
〔義帝〕楚の懷王をいふ。漢の高祖(劉邦)懷王の命を奉じ秦を破る。項羽・義帝を弑す。劉邦乃ち義帝の爲に喪を發し、項羽を討つて遂に之を滅す。

ぎどうさんし　(百日曾我)

〔儀同三司〕儀三公に同じといふ意、卽ち准大臣といふことで、藤原伊周が自稱したのに始まつた語である。(唐六典に、「從一品曰二開府儀同三司一」とあるのとは別義である)。

きとく　爰に貴德樂春鶯囀の鶯に誘引せられ(聖德太子)

〔貴德〕舞樂の名。歌舞音樂略史に、「貴德。漢書匈奴傳に、神爵中匈奴日逐王先賢撣漢に降る、漢日逐を封じて歸德侯と爲すと見ゆ、此より出たる舞か」。



(舞樂圖說所藏)
〔貴　德〕



きどくづきん　女わざにはきどく頭巾、藤の竹刀をおつ取りのべ(反魂香)

〔奇特頭巾〕目のあたりを明けた覆面頭巾である。嬉遊笑覽に、「きどく頭巾は前に＊もなるによつて氣儘ともいひ、又奇妙の意に奇特とも云うたのであらう。(好色一代女所載)

＊覆面をつけたるなり、其後天和貞享頃專ら女の着たる頭巾にて、今時はきどくと呼べり、また氣まゝともいへり」。蓋しこの頭巾は、黑い絹風呂敷やうのものを被るのであるから、どうでもなるによつて氣儘ともいひ、又奇妙の意に奇特とも云うたのであらう。



(日本永代藏卷五所載)
〔奇特頭巾〕　〔奇特頭巾〕

る。蓋し事文類聚に、「交趾有二鬼門關一、其南多二瘴癘一、去者罕レ得二生還一」などとあることから起つたともいはれ、その他異説もある。金神は亘旦大鬼王の精魂である、其所在の地に向つて土木を興し移轉旅行などしてこれを犯すを忌まれてゐる。簠簋内傳に、「金神、亘旦大鬼王之精魂也、七魄遊行殺二人物一、故號二金神七殺一」。こゝの文は河内屋與兵衛卽ち河與の忿怒の相貌の物凄きを、災害を降す鬼門金神に見立てたのである。(俗に頭に角あつて、虎皮の犢鼻褌を纏うた怪物の姿を鬼としてゐるのも、丑寅を鬼門といふからその因みに據つたものである)

***ぎやう**　それはぎやうな食付きやう。そして互に飽かせたら後の爲には珍重(反魂香)　ええこの座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ(丹波與作)

たいさう(大相)。はなはだ。「仰」の字を當てれども、平家物語(長門本)に、「御馬十二疋御劍七腰御衣十二領ひろぶたに入れてまゐられたり、ぎやうぎやうしくぞ見えにける」、とある「ぎやうぎやうし」の「ぎやう」であらう。「ぎやうぎやうし」は「業々し」(假名遣の相違はあれど)であらう。毛詩・大雅・常武篇に、「赫々業々、有二嚴天子一」とありて、朱子集傳に、「業々、大也」と見えてゐる。

ぎやうえこじ　この水上は行叡居士妙なる御法に光を放ち、五色に見えしは楊柳薩埵(田村)

〔行叡居士〕謠曲・田村に、「ある時木津川の川上より金色の光さしゝを尋ね登つて見れば一人の老翁あり。かの翁語つて曰く、我はこれ行叡居士といへり。汝一人の檀那をまち大伽藍を建立すべしとて、東をさして飛去りぬ。されば行叡居士といつぱこれ觀音薩埵の御再誕」と見えてゐる。歴代編年集成に、「于レ時有二白衣居士一、名曰二行叡一、住二此處二二百歳許矣」。

***きやうかたびら**　定めぬ契り提灯の、消ゆる命の夕には、此紋附けて我が中の經帷子と觀念し(冥途飛脚)

〔經帷子〕死者に着せて葬る白帷子で、背に六字の名號また經の文句など記したのもある。

きやうがる　「けうがる」を見よ。

ぎやうぎやう　「ぎょうぎょう」(鳴嗚)を見よ。

ぎやうぎやうし　忍び大むくこよひ小むくと、人につぐみのぎやうぎやうし(娥)

〔行々子〕葦切をいふ。燕雀類に屬し、形鶯に似て尾稍長く腹白い。夏の頃葦原などで喧しう鳴く小鳥。

***きやうこう**　きやうこうこここらへ來るとも(曾根崎)　きやうこう房とはつうろせぬ(重井筒)

〔向後〕此後。將來。易林本・節用集に、「向後」。

***きやうこつ**　はてきやうこつの問ひ事かな、あれこそは袈裟御前(一心五戒魂)

〔輕忽〕粗忽。輕卒。饅頭屋本・節用集、「輕忽」。

きやうさんがい　此度名物のお家の道具京さんがい質に置き(淀鯉)

〔京三界〕「さんがい」を見よ。

***きやうしや**　吃の又平日が傘、さしづめ香車は女房なり(反魂香)

〔香車〕「やりて」を見よ。

***ぎやうじやさま**　大願かけて山上し、行者樣を拜む中(女殺)

〔行者樣〕役小角をいふ。「えんのぎやうじや」を見よ。

ぎやうたい　篠懸や兵具を入れし笈を負ひ、さも行體の姿なれども(酒呑童子枕言葉)

〔行體〕行者の體の義。修行者の姿。謠曲・安達原に、「夫れ捨身抖擻の行體は山伏修行の便りなり」。

***きやうだう**　七千餘卷の經堂に(曾根崎)

〔經堂〕一切經を藏めてある堂。

***ぎやうぢゆうざぐわ**　行住坐臥に稱名は缺かしませぬ(女殺)

〔行住坐臥〕行は歩行また作行するとき、住はとどまるとき、坐は坐するとき、臥はふするときをいひ、總て日常の起居動作をいふ。佛教でこれを四威儀と云ふ。心地觀經に、「行住坐臥受二諸苦惱一」。

きやうとい　「けうとい」を見よ。

京の龜屋が羊羹　京の龜屋が羊羹を揺潰してせいと言へ(酒呑童子)

龜屋は京都寺町三條上る所にありて、饅頭羊羹などを製造する名代の菓子舖である。雍州府志(貞享三年刊)土産門上、造釀部に、「松屋・龜屋・二口屋・寶來屋等互爭競造二饅頭一……此外羊羹・外郎餅・高麗仙秧類亦此等家之製造也」。

きやうはう　然るにこの宮襁褓の内より左の御手を開き給はず(用明天皇)

〔襁褓〕襁は小兒を背に約して負ふ帶、褓は小兒に卷くむつぎ。淮南子・要略訓に、「成王在二襁褓之中一、未レ能レ用レ事」。

***きやうふう**　是はまさしく急驚風(松風)

〔驚風〕小兒の腦膜炎、日本醫學史に「身體壯熱、忽然之間、四肢抽掣、搐搦口噤、謂二之急驚一、云々、主ニ腦膜炎ヲ指スヤ明ナリ」。

***ぎやうぶしやう**　是によつて刑部省に下知をなし、行平が類族見合次第に討棄てとの仰なり(松風)

〔刑部省〕大化改新にも大寶令にも見え、八省の一で贓贖・囚獄の二司あつたが、平城天皇の代に本省に併された。訴訟を裁判し罪人を處刑する役所で、官舍は皇嘉門内右馬寮の東にあつた。

きやうもん　狂文の綾の哭服一重(川中島)

〔狂文〕庭訓往來・七月五日の文に「狂文唐衣」とありて、伊勢貞丈の註に、「狂文とは色々の物の形を取交へたる也、一品ならぬを云ふ、綾の文と云ふなるべし」。

きやうよむとり　七千餘卷の經堂に、經讀む酉の時までとて(曾根崎)

〔經讀鳥〕鶯をいふ。俳諧歳時記栞草に、「經よみ鳥。鶯をいふ、その鳴聲法華經といふが如し、故に此名あり」。こゝの文は、經堂から經讀む鳥といひ、鳥に酉をかけて、酉の刻をいうたので鶯に意味があるのではない。酉の刻は午後六時の頃。

隔生卽忘　これかかれかと見給へども、互に隔生卽忘の、それと知らぬぞ痛はしき(賀古教信)

黄泉の客となつて生を隔てれば、一切前世のことを忘れて記憶しないこと。法華玄義・卷六に「若相似益、隔レ生不レ忘、名字觀行益、隔レ生卽忘、或著有レ不レ忘」。太平記・卷十一、越前の牛原地頭自害の條に「隔生卽忘とは申しながら、又一念五百生・繋念無量劫の業なれば、奈利八萬の底までも、同じ思ひの炎となつて焦れ給ふらん」。賀古教信七墓廻の古院本に「忘」を「はう」と訓んである

の勘定時。

***ぎば**　耆婆でもいかぬ死病、いはれぬ氣骨折らるゝ(女殺)　病氣はどうござります、梅花かぶりを振つて、耆婆扁鵲でもいかな叶はぬ(夕霧)　耆婆が良藥かなはずして(孕常盤)　三世を見通す名醫の耆婆(釋迦)

〔耆婆〕梵語 Jivaka. 天竺の名醫師、生れた時既に藥嚢針筒を持つてゐたと云ふ。德叉尸羅國に醫術を學ぶこと七年、遂に醫術の大家となる。詳しくは翻譯名義集・卷二に出てゐる。

***きはん**　一家の面目末代のきはん、何事かこれにしかん(孫豁)

〔軌範〕法則。手本。孔安國尙書序に、「示二人主一以二軌範一」。

***きひ**　唐の虞氏君・王昭君・貴妃・李夫人をうつすとも(天智天皇)

〔貴妃〕「やうきひ」を見よ。

きびら　御恩生平の目も詰る(薩摩歌)

〔生平〕麻で製した布のよく晒さぬもの。近江國犬上郡高宮より産出するので高宮布ともいふ。

きぶさい　耶輪陀羅女一人引抱へて奪取るは手間も隙も入られねども、附者が氣ぶさいなり(釋迦)　斬かけんずと思へども、氣ぶさけなる澁谷の金王、風呂の口に引添うて御太刀持つて用心す(鎌田)

「きぶさぎ」(氣塞)の義。氣に懸つて心進まぬこと。

***きふじどころ**　其めでたいお座敷の、お茶の給仕をこれ、急爾所をまづこのやうに、お給仕でも致さんと、脇指さして參つたが(薩摩歌)

〔急爾所〕急所。身體の內で傷つければ命にかゝる大切のところ。急爾の爾は死の當字か。

***きふにん**　給人若黨お出入の町人まで(曾庚申)

〔給人〕德川時代、組頭より一段上位にあつた職名で、その職を勤めてゐる侍。

***きぼ**　彼に向ひて勘當といふ詞を出されば、今赦すべき詞もなく、又何を感じてゆるすべき程の規模もなし(川中島)

〔規模〕譽めるべき手柄。俚言集覽に、「俗に手柄なりと譽むやうの所に御規模なりといふ」。謬草に、「規は圓なる物を作るぶんまはしなり、模は形ある物を作るいかた也、何にても標準とする事を規模と云也」。

きほふたきぐち　叔母の息子の競瀧口、源三位賴政の小姓猪隼太とは行合兄弟(雪女)

〔競瀧口〕渡邊源三競瀧口と云ふ人である、源三位賴政の侍で、大力の剛の者である、賴政が高倉の宮の御味方申して兵を擧げた時、競取殘されたのを平宗盛呼寄せて我方へ引入れようとしたが、競遂に三井寺に走つて賴政に從つた。詳しくは平家物語・競の事の條を見よ。

***きまぶり**　こりや父が討死するならば、成人して若宮に忠臣の根繼ぎとなれ、我等が家の木まぶりと振擔げてぞ(國性爺)

「きまもり」(木守)の轉訛。來年も能く實るやうにと樹に一つ二つ採り殘した果をいふ。この文は、我嬰兒を戟の柄に結付けたので木守といひ、以て世繼の意をきかせたのである。

***きみ**　なう小女郞、かうした勤はさまざまあれども、君傾城といふ者はこの類での王樣(丹波與作)

〔君〕傾城。遊女。御前義經記(正德二年刊)一之卷、傾城の因緣の條に、「そもそも傾城といふ事、もろこしにて美しき女をほめたる詞なり、……和國にいたつてこれを遊女の總名とせり、君・浮女または戲女・手弱女・流女といへば、唐土にても色を賣買してあそぶこともつぱらなり」。支那でも王昭君など妾を君というた。古くは增鏡にも橋本の遊女を橋本の君と書いてある。

***きむらごう**　このきむらごうと申すは、三浦の平六兵衞義村の紋なり(五人兄弟)

〔黃紫紅〕黃・紫・紅の三引兩の紋。貞丈雜記・卷三に、「きむらごうと云ふは三浦家の紋の名なり、三浦の紋は三つ引也、三つ引を上は黃色、中は紫、下は紺色に色どる也、されば黃紫紺といふ也(紺をこうと言ふ事、紺屋をこうやと云ふに同じ)」とあれど、紺は紅の誤。

きめん　互に一座も打絕え、貴面ならねば便りも聞かず(天網島)　烏陀夷大汗になつて走り着き、左倍軍が持つたる鉞むんずと摑んで、むむ提婆達多とやらん終に貴面に能はず(釋迦)

〔貴面〕貴面に接することの義。御目に懸ること。面謁。

***きもいり**　こなたやがてかみ樣の肝煎で安堂寺町へ嫁入の時(今宮)　小かん親類衆の肝煎御無用(隅田川)　小かんの肝煎取次のと、此方へも隱したが(氷朔日)　肝煎の老女聲作り、これ申し御內儀樣(雪女)　何と助右衞門男にほしいか、肝いつてやらうか(大經師)　戀があるなら肝煎らうと、なぶり笑へど聞入れず(本領曾我)

〔肝煎〕肝膽を入れることで、身を打込んで世話する義であらう。名詞としても、また四段活用の動詞としてもいふ。周旋。世話。周旋する。世話する。色道大鑑に、「傾城屋の女を抱ゆるに、肝煎といふ者方々に子供を見立置き、告知らせ口入す、何れの道にも肝煮ることはあれども、此媒介に限り肝煮といふ、これ廓中の詞にて外に用ゐざる所なり」とあれど、外に用ゐぬとは言へぬ。「肝煎」の語古くは室町殿日記にも見えてゐる。

***きもせい**　とてもならばお腹召せ、御介錯は私と、引上ぐればくわつと睨付け、言はれぬきもせい、汝が世話は御臺若君の御事ならで日本に用はなし(女夫池)　皆媒人の肝精(薩摩歌)　死なれた母の肝精で、物も書き・縫針・綿もつむ機も織る(生玉)

〔肝精〕肝膽精力を盡す義、丹精。盡力。

***きものたばね**　石御器に一二杯、肝の束へ諸白をいつかけた薩摩二歳(博多)　肝のたばねをぐいぐい抉れば(鑓權三)

〔肝束〕臟腑は束ねたものと思うた語。腹中。

***きもん**　其譯聞かうと理窟ばる、目玉の鬼門金神もなどやかに、河與樣角が取れぬの(女殺)

〔鬼門〕鬼門は東北隅卽ち丑寅の方角をいふ。此方を犯すときは必ず災禍があるとされてゐ

城ぢやと思うて下んすは曲がない情けない(淀鯉)　素人(しろうと)のいふことと一つに聞けば曲がない(重井筒)

〔曲〕曲折の義、などやか。「曲がない」は愛想が無い。すげない。謠曲・鉢の木に、「あら曲もなや、よしなき人を待申して候ものかな」。

きよくすゐのえん　帝・諸卿に曲水の桃花の宴を給ふ折から(西王母)

〔曲水宴〕公事根源・三月三日の條に、「文人どもの水の岸になみ居て、水上より盃を渡してわが前を過ぎざるさきに詩を作りて、その盃をとりて飲みけるなり」と見えてゐる。曲水流觴の宴は支那詩人間に行はれたのが日本に傳來したのである。

ぎよくたふ　龍宮のつつもたせ、三百目の玉塔に(女護島)

〔玉塔〕珠玉で飾つた塔。こゝの文、玉塔に玉代をきかせ、謠曲・海士に、「龍宮に至りて宮中を見れば、その高さ三十丈の玉塔に、かの珠をこめ置き」とあるを改作したものである。

きよくる　南無阿彌陀佛と詞できよくり(關八州)

きよく(曲)をラ行四段活用にした語。などやかにいふ。

ぎよし　早う歸つてぎよしなつたがましでござろとたらせども(今宮)

「ぎよしん」(御寢)の撥音「ん」の略された語。おやすみ。「ん」の略されることにつきては「さだつ」の條に述べておいた。正章貞室撰・かた言(慶安三年刊)に、「御寢あれをぎよしなれ、ぎよしなれなどいふはいかが」。

***きよどころ**　清所の瓜・茄子の類(弘徽殿)

〔清所〕「おきよどころ」を見よ。

***きよらう**　癰・疔・腫物の一黨、虛勞・陰虛火動神(振袖始)

〔虛勞〕元氣衰へ身體弱る病。肺病の類。桂洲著・病名彙解(貞享三年の序あり)卷六に、「虛勞。勞咳(らうがい)の症也、元氣不足により心腎かくることあつて、或は氣血を勞傷し、或は酒色過度にして、漸く眞陰虧損するに至つて相火隨て旺ず、火旺ずるときは眞陰を銷爍して嗽をなし喘をなし痰をなし熱をなし、吐血衄血をなし盜汗遺精をなし、上さかんに下虛することをなし、脚手の心熱し皮焦(かれ)無歇の怪症起ること也、難治の症也」。

***きら**　衣服のきらも世につれて(宵庚申)

〔綺羅〕綺はあやぎぬ、羅はうすきぬのことで、美しい絹布のことにいふ。文中子に、「綺羅錦繡不レ入ニ于室一」。

***きらぼし**　軍兵は雲霞の如く、滿仲の御宗廟多田の社に陣取つてきら星を輝す(文武五人男)

兜の鉢の銀鋲の輝くこと。「きら」は、徒然草に「萬の物のきらかざり」、神皇正統記に、「時のきら並ぶ人なかりしに」などある「きら」で、即ちきらめくことで、綺羅の音ではない。

きり　きりばんどうに隱れない此城へ、ろんじに足(そく)を踏ん込んだらば、息杖の續かん程げんこ微塵にさいなんで、ころりと腰に引つ附け、がれんがれんと一囓(ひとかぶ)に(百合若)　きりがれん、駕籠やろい(西王母)

馬方・駕籠舁の符牒語で、三をいふ。こゝの文にある「ばんどう」も符牒語で、八をいひ、それに坂東をいひかけ、また「ろんじ」は「ろうじ」ともいひ、六の符牒。「そく」は一の符牒で、それに足をいひかけ、「げんこ」は五の符牒で、それに拳固で毆ぐる意をいひかけ、「さいなん」は七の符牒で、それに粉微塵に嘖(さいな)むの嘖をいひかけ、また「ころり」は百文の符牒、「がれん」は五の符牒である。なほこれ等の馬方・駕籠舁の符牒語は兎園小說に見えてゐる。人倫訓蒙圖彙・卷三、駕籠借の條に、「已が同志きり、ばんとう、ぶり、さいなん、ろうぢなど云ことばは定めてわけこそあるらめ、分て下品の業也、相手にすべからず」。

きりうじ　きりうじに同じき汝等、誠ある弓取の詞かはすも汚らはし(千疋犬)

〔切蛆〕蟲の名、暗灰色で圓柱形をなし數多の橫皺がある。地中に棲み植物の根を食ふ。成蟲をきりうじかがんぼと云ひ、蚊に似て大。

きりおうけ　「はやす」の條を見よ。

きりかか　お茶の間のきりかか五十餘(あまり)の厚化粧、三平二滿の口紅(反魂香)

〔切嚊〕年季を切つて奉公する下婢。年増ならば「きりばゞ」(切老婆)ともいふ。田村將軍初觀音(古淨瑠璃)に、「中の間の仲居・お茶の間きりばゞや、お家久しき料理人」。

きりがやつ　惡鬼惡魔(あくきあくま)もすつきりきりきり桐が谷(やつ)、來るまじきは天眼(てんげん)にて緋櫻や(賀古教信)

〔桐谷〕松岡玄達撰の櫻品に、「桐谷=一名八重一重、一名車返(くるまがへし)、花中第一品也、一枝の中に八重と一重と雜り咲く、其中に八重多く一重は少し、江戸に似て色薄し、江戸は皆八重なり、桐谷は八重一重相雜ろ、元此木鎌倉桐谷より出る故名付く、云々」。巢林子のこゝの文は、櫻名を入れて、惡鬼惡魔もすつきり來(きた)るまいことは、天眼通で火を見るよりも明かであるの意に、緋櫻に火をいひかけたのである。

***きりぎりす**　心から實からはつたと思ひきりぎりす(小栗判官)　きりぎりすつづりさせよと鳴く(十二段)

螽蟖ではなく、蟋蟀(こほろぎ)である。市川三升編・父の恩(享保十五年刊)下卷に、「しかみつく里子や牀のきりぎりす。才牛」とありて、蟋蟀の畫を載せてある。古今集・俳諧歌の部に、「秋風にほころびぬらし藤袴、つづりさせてふきりぎりす鳴く」。平家物語卷七、福原落の條に、「千草にすだくしつしゆつのきりぎりす」。

きりこどうろう　軒端軒端にとぼす火は、きりこどうろう色色の、花の繪盡し判じ物(鎗權三)　切子・太鼓のなりもよし(嫗山姥)

〔切子燈籠〕組子の角を切つた燈籠なればこの名がある。わくを切り、四角なる物の角角を同じく角立たせて切つて燈籠としたもので、細く切つた紙など貼り垂して飾とする、盂蘭盆會などに用ゐる。「切子」は切子燈籠の略。

きりなは　踏付け踏付け腕捩(ねぢあ)上げ、はや切繩にぞかけてける(歌念佛)

〔切繩〕斷罪に處すべき罪人を縛する繩のかけ方。即ち繩を適度に切つて別別に縛るのである。

きりのたう　なう又これに候玉琴は、常に御手馴れし定紋のきりのたう(三世相)　彼方にこがるる赤旗の紋は緣切る桐のたう(川中島)



〔桐七五〕



〔桐三五〕

〔桐紋〕桐の葉及び花を紋にしたもの、五七の桐・五三の桐など種種ある。

きりはたりちやう　瞋恚の刃の蟷螂・促機(はたおり)・きりはたりちやう(弘徽殿)

促機蟲の聲である、機織る音に似てゐる。謠

ぎやくじゆ 河津の墓は野面の石。文字も苔に埋れて、母の逆修の朱の色も、露に朽ちてぞ殘りける（扇八景）

〔逆修〕逆は玉篇に、「度也、迎・先ㇾ事豫度之也」とある、死なぬ前にあらかじめ自身の爲に佛事を修め冥福を祈ること。石塔の戒名に、死者には墨を入れ、生者には朱を入れる。

きやくしん 何故駕籠の衆留めやらぬ、よそほかでもあるやうにきやくしんがましい（寄庚申）

〔隔心〕隔意、打解けぬ心。野白内證鑑（寶永七年刊）卷之四、幼謀計の條に、「御隔心」とありて「ごきやくしん」と傍訓してある。

***きやしや** 女小性のその中に玉鶴といふ華奢者の、立花も少し心得て（聖德太子） 三人の子の親でもきやしや骨細い生れつき（鑓權三）

「くわしや」（華奢）の轉。たをやか。風雅。易林本・節用集に、「花奢車作花」。節用集（天正十八年刊）幾部言語進退の條に、「花奢。倭語緻、又花車、又香茶」。また「華奢道具」ともあつて、贅澤の意にもいふ。

***きやたつ** きやたつを踏んで伸上れば（女護島）

〔脚榻〕木で作つた四脚のもので、高處に手を屆かす爲に上る踏臺。

***きやら** 聞けども迷ふ人心、愛し殿御と伽羅の香は、幾夜とめても厭かぬ（五人兄弟） 霧は不斷のきやらを焚き（淀鯉） 大阪の伯母御とは、伽羅細工の甚五郎の内儀か（女腹切） ひとよの情をかけ給へ、吾妻のきやらとぞ申しける（丹常盤） 色こそ黑けれ心は伽羅（女楠） 私が妹にお梅と申して、ずんどきやらめでござれども（萬年草） 床はきやらきやら、沈や麝香の薫まで、今の手向とくゆらする（夕霧）

〔伽羅〕奇南香を伽藍また伽南ともいふので、我國語に音轉して「きやら」といふ。本艸發言に、「奇南香、味辛辣氣溫無ㇾ毒、其生成出處主治功用與₂沈香₁同、但性氣較₂沈香₁稍潤綾耳」。また轉じて材質殊に黑色を呈し光澤あつて上品な沈香をいふ。尤の草紙（慶安二年刊）下四に、「沈香の中には伽羅」。これより轉じて名香のことにいふ。更に轉じて舶來の珍木をいふ。「伽羅細工」は唐木細工である。唐木とは、淸國人の輸入した紫檀・黑檀・鐵刀木・紅木・花櫚・白檀・沈香などの總稱である。また粹とする程の意に、物をほめる洒落詞にいふ。「吾妻のきやら」「ずんどきやら」などは其意である。又頭髮に附ける香油の名に伽羅油といふのもあつた。新井君美自筆の拔萃書に「伽羅油＝唐蠟五十目、胡桃油三十目、油を銅鑑に入れよくせんじ、油けをぬく、樒の葉二枚入れ布にてこし、火氣をさまし、丁子・甘松・龍腦・麝香・白檀、この五種を入る」と見えてゐる。要するに元祿時代に、何にても善い物を稱して「きやら」といふ一種の流行語であつた。

***きやり** さつさつけつけ、ハツア木遣で舂きやれな（夕霧） 木遣に法のひんよえい、聲播磨の大名より、御墓挽くこそ殊勝なれ（萬年草）

〔木遣〕重い物を多人數で音頭を取つて挽くこと、または挽く時に謠ふ唄。木遣音頭は建仁二年僧榮西が人夫に下知して己が名を呼ばしめたに始るといふ。夕霧阿波鳴渡のこゝの文は、木遣音頭で勇ましう舂けの意。心中萬年草のこゝの文は、石塔を八葉蓮臺の高野の靈地に挽くのであるから「法の」といひ「ひんよえい」は木遣音頭である。各國の大名等が各宗派の差別なく、墓石を高野山に据ゑることは古來の風習であつて、精靈が彌勒の出世に逢はれるものと信ぜられたのである。現今なほ高野山奥の院の一の橋から弘法大師御廟まで十八丁の間、右も左も石塔で滿たされてゐる。

***ぎやる** 娘よ妹よ兎せろ角せろとぎやつて、りんによがつてくれ召せかしと（女護島）

「御意ある」の薩摩國訛、仰せらる、おつしやる。この語現今も鹿兒島地方で用ゐられ、「そのやうな事をおつしやつても」の意に「そげんぎやアつてん」といふ。

***きよ** 御衣の裾を引くはじめぞや（松風）

〔裾〕束帶の下襲の裾である。裾は村上天皇の頃では垂れ引くこと親王は一尺五寸、大臣は一尺、納言は八寸、參議は六寸であつたが、漸次華美に流れて後一條天皇の頃では、大臣七尺・納言六尺・參議五尺となり、順德天皇の頃では、大臣一丈・大納言九尺・中納言八尺・參議散三位七尺・四位以下二尺となりて、これ等沿革がある。裾はもと下襲の胴から引續いてあつたのを、後には腰から以下絶ちて別にすることになつた。

***きよう** これそこな者、母上の御詞ぢや興と思ふか（用明天皇） 道ある君が行末は、待つに心の頼みある、心まめしげ在原の、業平朝臣の物語、傳へて今に興じける（井筒）

〔興〕面白いこと。なぐさみ。たのしみ。「興じ」とあるは、興を動詞サ行變格に活用させた語。「興がる」といふのもある、これは「興」に接尾語「がる」（「執念がる」などいふ「がる」と同じもの）が附いたのである。「けう」の條を併せ見よ。

***きよう** 誰に習うて此兵法、きようなことや（國性爺） 細工は器用にて精さへ出せば二人前（氷朔日） ちいさいやつらに能く申付けたるが何とほえば抜さぬかな、いやいや器用者ども、そこは氣遣めさるな（鑓權三） 氣遣しやるな逃げはせぬと、尤もきような白狀（淀鯉）

〔器用〕物の用に立つ義。左傳文公九年に、「不ㇾ以備₂器用₁」とある。轉じて、上手。巧者。また、物の道理を聞分け悟ること。

ぎようぎよう 蠢蠢たる懷生、喁喁たる哨類（釋迦）

〔喁喁〕衆多の口を上に向ける義で、魚類が水面に浮び集つてあぎとふやうなのをいふ。史記日者傳に、「公等喁喁者也、何知₂長者之道₁乎」。「是の如く我聞き云々」を見よ。

去去年つちのえ亥の春 三世の利益は、うらやせどやに罪深く、針櫛箱や珠數袋（女殺）

女殺油地獄の竹本座に上演されたのは享保六年七月であるから、去去年は享保四年即ち己亥の年である。こゝの文に「去去年つちのえ亥の春」とあるは、「去去年つちのと亥の春」とあるべきである。（戊亥といふ年は無い）。またこゝの文に「三年續き」とあるは、享保四年那智觀世音の法會、享保五年法隆寺聖德太子千百年忌法會（推古天皇二十九年に薨ぜられ、享保五年は千百年忌に當る）、享保六年野崎觀音（福聚山慈眼寺）の開帳と、三年間大法會の續いたことをいうたのである。

***きよく** 身の首尾を思ふやうな傾

***きん**　きんにつれたる木魚の聲(聖德太子)

「經」の唐音(Kin)である。看經。經文を讀誦すること。「かんきん」を見よ。

きんあん　「せきあん」(斥鷃)を見よ。

***きんうつ**　誓文のため只今御前で金うたう(會稽山)

〔金打〕「きんちやう」を見よ。

ぎんが　天に銀河・天の川、苗代水にせきくだせ、天降ります神神たり(嵯峨天皇)

〔銀河〕天の川をいふ。李白の望㆓廬山瀑布水㆒詩に、「飛流直下三千尺、疑是銀河落㆓九天㆒」。「あまの川苗代水云々」をも見よ。

***きんかあたま**　ここに誰とは白髮まじり、きんか頭に無用の挑灯(女腹切)　きんか頭に顏色も、繻珍の裁着りりしげに(丹波與作)

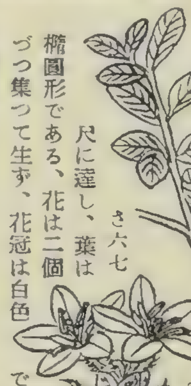
禿頭。「きんか」は「きんかん」ともいひ、きらきら光る體をいふ語。金柑頭と書くは當字。吉原よぶこ鳥(寬文八年刊)序文に、「此きんかの蠅すべり、絲髮にすりこかしほくそ頭巾を引込うて」。世話盡に、「金柑頭の蠅すべり」と漢字に書いてある。近世事物考に、「きんかは金皮の略語にて」とある說に從はぬ。「きんかあたま」のほかに「くねんぼあたま」(その條を見よ)もある。

きんかう　琴高は鯉・商山の白皓は龍の頭に乘る(國性爺後日)

〔琴高〕周時代の趙人である、能く琴を鼓す、仙術を得て冀州涿郡の間に遊び、涿水に入つて龍の子を取らうとして某日に返るべきを約した、弟子等水の旁に待つ、琴高果して鯉に乘つて浮び出たので、觀る者萬餘人あつといふ、高留ること一月、復水に入つて去つたといふことが列仙傳に見えてゐる。

きんぎんくわ　なつてん・りうたん・きんぎんくわ(振袖始)

〔金銀花〕金銀木の花を云ふ。金銀木は山野に自生する灌木で、高さ六七尺に達し、葉は楕圓形である、花は二個づつ集つて生ず、花冠は白色であれど後に黃色となる。



〔金銀花〕

きんく　我が君樣諸大名のお名も姿も人形にまなびうつし候へば、指合禁句は御堪忍(源義經)

〔禁句〕他人の感情を害せぬ爲に言ふを忌む語句。俚言集覽に「禁句=本連歌誹諧より出て俗には忌諱に觸るゝ事に用ゆ」。

きんくわ　垣には金花をかけ、戶には水晶を連ねつつ(蟬丸)

〔金花〕黃金。萬葉集卷十八に、「須賣呂伎能、御代佐可延牟等、阿頭麻奈流、美知能久夜麻爾、金花佐久」。こゝの文は垣も戶も華美を盡してあるを飾つて云うたのである。「古は一夜泊りし宿までも云々」を見よ。

きんご　さつと吹き來る野風戀風、ねやもる風のしらべにも、通ふきんごの寢覺草(本領曾我)

「かこひ女郎」をいふ、「かこひ」は鹿戀また圍とも書いてある。「かこひ」を見よ。「きんご」の名義に就ては、この遊女の揚代もと十四匁であつたからの稱である。その十四を分けて九と五とし、九五を「きんご」と呼んだ名であらう。この遊女の揚代も漸次高くなり、貞享・元祿頃では十八匁に上つてゐれども、なほ舊稱の儘に「きんご」と云つたのである。嬉遊笑覽・卷九、娼妓の條に、「圍をばきんごともいへり、一代男に、新町の夕暮をいふ處、きんごの長持を運びとある是なり、博徒の詞なりとぞ、柳亭子云、きんご、打つ時に例へば十四の數出つればこれをふせ置くなり、其徒の詞にかこひといふ故、十四匁の遊女をその頃かこひ女郎といへり」。「かこひ」をも見よ。

***きんこじ**　入鹿の大臣金巾子の冠・麴塵の裝束(大織冠)

〔金巾子〕巾子は冠の頂の高く隆起せる所をいひ、髻を容れる爲に作り設けたもの。巾子及び纓を金箔を塗つた檀紙で包んだのを金巾子の冠といひ、帝王の冠である。貞丈雜記・卷之五、裝束之部に、「天子の御冠に金巾子の御冠といふ物あり、これは御內內の時めさるゝ也、是も纓をうしろより巾子の上を引越して前にて上へ折返し、又は上へ折返さずうしろへ纓のさきを上へ立てもおく、扨檀紙を合せて兩面ともに金箔にだみて、中を切裂きて巾子を入れて、纓を巾子にはさみ置く也」。

ぎんざ　極印打つて、私儀は銀座に長長使はれ(薩摩歌)

〔銀座〕德川時代に官で銀貨を造る處。

きんさらさ　金更紗の財布共に投出せば(博多)

〔金更紗〕舶來の織物の名、更紗の語などのことは、その條を見よ。昔の金更紗は着色彩紋共に金色で、概して草花蔓草などを歐風に圖に表はしてある。

きんざん　戀風の其あふぎ屋の金山と、名は立昇る夕霧や、秋の末よりぶらぶらと(夕霧)

〔金山〕黃金を掘出す山。以て金をでかす福の神の意にいふ。

金氏(きんし)　「明(みん)の金氏は女なれども云々」を見よ。

きんしうだん　四書・古文・三體詩・錦繡段、此上にあそばされんは五經・文選(最明寺殿)

〔錦繡段〕釋龍澤編、唐宋元代の詩三百餘篇を輯錄した詩集。

***きんじき**　王子は不機嫌返答なく冠もぎすて、禁色の裾はぎ高くまくりあげ(用明天皇)

〔禁色〕禁制の色で、卽ち昔は深紫・深紅などの袍は許しを蒙らねば着用することができなかつた。

きんしや　夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ(重井筒)

〔金紗〕紗に平金絲を縫附けて模樣をしたもののことなれど、俗に誤つて金絲をいふ。

きんたうてん　大の字の金刀點(國性爺)

〔金刀點〕筆法の語。大の字につきていへば、第三畫の右に引く點をいひ、其形刀の身に似てゐるよりの稱。難波土産(穗積以貫撰)卷四に、「筆法に點の名さまざまあり、大の字は三點にて、大の字の一文字を玉案と名づけ、左へひく點を鼠角と名づけ、右へひく點を金刀と名づく、其形刀の身に似たるゆゑなり」。

***きんちやう**　いざきんちやうと、兄弟刀拔き寬ろげ(會稽山)

〔金打〕武士が大小の刀を拔きて打合せることで、誓を立てる時にするわざである。安齋隨筆・卷之六に、「キンチヤウして誓ふ。土佐國儒士箕浦右源治問ひて曰く、武士誓ふにキンチヤウすると云ふ事は如何、貞丈答へて曰く、大小刀を拔きて打ち合せて誓ふ事なり、又問ひて曰く、この事古代よりありや、答へて曰く、古代この事なし、漢土にもなき事なれば可㆑然字もなし、大小の刀を拔きて兩刀を打ち

曲・錦木に、「ひそかに音する物とては、機物の音・秋の蟲の音、聞けば夜寒か、きりはたりちやう・ちやう・きりはたりちやう、……機織・松蟲・きりぎりす」。

きりばね・つんばね　馬率寄せ乘らんとすれば寄せもつけずばねちらす、雷雲腹を立て、えたぎえんの惡い、きりばねつんばねでもあることか、馬ではねては物にならぬ（持統天皇）　お腰元にも女ども四揃花揃・きりばねつんばね二役三役（雪女）

「きりばねつみばね」切羽根摘羽根）の轉じたもの「切羽根」とは、羽子の能く回轉するやうに羽の端を切棄てたもの「つんばね」も切羽子のことである。「つむ」は摘であるが、「茶をつむ」「爪をつむ」などのやうに鋏で切取ることにいうた例は當時の上方詞にも見られるのである。

きりばば　中の間の仲居・お茶の間切老婆(はば)や、お家久しき料理人（田村）

〔切老婆〕「きりかゝ」を見よ。

きりばんどう

「きり」を見よ。

***きりまい**　この角介が僅な切米の内五百五十といふぜれな取替へた（夕霧）　二石二斗は何程ぢや、昔與作が草履取・馬取の切米（丹波與作）

〔切米〕德川幕府の時、萬石以下で領地を有せぬ家人の扶持米を米の時價によつて錢で給したのをいふ。家人の俸祿は春（二月）・夏（五月）・冬（十月）に分つて給し、春と夏には年給額の四分の一づつ、冬には二分の一を給した、春と夏のを借米といひ、冬のを切米と云ふ、また必要に應じ米を數回に分つて渡すをも切米と云うたので、慶安元年十一月の御觸書に、「御旗本切米の面面并徒同心之切米入レ念懸米不レ渡之樣に被二仰出一御藏衆へ此由可二相傳一之旨酒井紀伊守曾根源左衞門に被二申渡一」とある。切米とは年支給額を決濟する義である。

***きりむぎ**　例へば饂飩と切麥、汁は同じ醬油（薩摩歌）

〔切麥〕小麥粉を饂飩のやうに製し、これを極細く切つたもの。ゆでて水に冷したものを冷麥(ひやむぎ)といふ。

きりりんな

「曉(あかつき)の明星が云々」を見よ。

きりゑかう　寺の念佛も切回向、有緣無緣乃至法界平等の聲を限りに（天網島）

〔切回向〕切り卽ち終りの回向の義、唱へる回向文の終りをいふ。こゝの文に「寺」といへるは網島の大長寺（淨土宗）のことで、「有緣無緣乃至法界平等の聲」といへるは、卽ち淨土宗で唱へる切回向の文で、詳しくは回向の終りに、「又願、當寺草創以來、過去帳連名諸精靈、年忌月忌中陰諸靈、及以三界萬靈、有緣無緣、乃至法界、平等利益」、などと唱へるその終りの文句である。「有緣無緣乃至法界平等(うえんむえんないしほふかいびやうどう)」の義についてはその條を見よ。

きるゐきそげ　茶屋者を請出し女房は茶屋へ賣りならう、きるゐきそげに疵付けられぬ間に取返してくれう（天網島）

〔着類着殺〕衣服類一切。「着類」は衣服類。「きそげ」は着物のいたみそげたもの卽ち敝衣である。「そげ」は增補松の落葉（寶永七年刊）卷四、大津追分節踊に、「衣はそげたもをかし」とある「そげ」と同じ語で、「きそげ」は轉成名詞で、「そげた」は動詞に助動詞の附いたまでのこと。「根こそげ」などいふこそげも掠の義。新版歌祭文（淨瑠璃）野崎村の段に、「高の知れた水呑百姓、僅の田地着類着そげ、お光めが櫛笄まで賣代なし」。

きれえだ　きれ枝をれ枝まがひ枝（聖德太子）

〔切枝〕諸藝小鏡（貞享三年刊）、立花法度之事の條に、「よその枝の横へ出たる前へ縱に出し、縱に出たる前へ横に出して、十文字になすべからず、切れとて嫌ふ也」。

きれもの　さてさて當代のきれものは化物(はけもの)とこうなる武士（會稽山）　折も惡うお齒に合ひそな相撲取が、切れ物なりとぞ申しける（國性爺）

〔切物〕品切れ。

***きろくしよ**　畜類を宮と僞る行平が逆心、召捕つて記錄所へ訴へん（松風）

〔記錄所〕臨時に置かれた役所で、その置かれた初めは後三條天皇の時で、專ら莊園のことを司つた。鳥羽天皇の天永二年にも置かれ、後白河天皇保元元年にも、後鳥羽天皇の文治三年にも置かれた。百寮訓要抄によれば、訴訟裁判をする所であつた。又後醍醐天皇の時にも記錄所を再興された、そしてそこで政事をされた。

***きをとほす**　きつう醉うてござんす故、ことわり言うて内からお駕籠に召させます、氣を通して下んせ（淀鯉）　蒲鉾梅干粹な花車、氣を通して立ちければ（生玉）

〔氣を通す〕先方の心を思やつて氣を利かす。粹を利かす。西鶴の武道傳來記・卷一、毒害は箱入の命の條に、「女郎預りの紫竹といへる人氣をとほして、そなたも十九二十になりて大かたならぬ初心を云々」。

ぎをんぐるひ　祇園狂か宮川町か（女腹切）

〔祇園狂〕京都祇園町の遊女に溺れてうつゝをぬかすこと。ここの文に宮川町とあるも京都の町名で、宮川町一町目には西石垣町などあつて遊女の多くゐた所である。

ぎをんせうしやうゐ　稻田姫は祇園少將井、大山祇は三島の明神（振袖始）

〔祇園少將井〕黑川道祐撰、雍州府志・神社門上（愛宕郡）祇園社の條下に、「六月祭禮時、稻田姫神輿旅所在二少將井町一、故稱二少將井一」。

ぎをんばう　髭籠に籠めし祇園坊（酒呑童子）

〔祇園坊〕白柹をいふ京阪地方の詞。現今安藝の產でこの名の柹がある、甲州百目柹に似て丈稍高く、無核なのが多く、品質甚だ佳い。

ぎをんゑのやまぼこ　祇園會の山鉾を見に行くと覺えたり（堀川波鼓）

〔祇園會山鉾〕京都祇園神社祭禮の時に渡す山鉾。黑川道祐撰、日次紀事（延寶年中成）六月初五日の條に、「祇園社。自二今日一致レ齋、爲二七日祭禮一也、今朝山鉾渡始、山鉾之行亦曰レ渡」とありて、初七日の條に、「祇園會。朝巳刻許大鉾六本、各出二四條通東洞院西一、是曰レ渡、六本各有二稱號一、其内長刀鉾不レ及レ取レ鬮、每年爲二魁首一、斯鉾因レ在二四條通東方之先一、而斯鉾不レ行則次鉾不レ能レ過、函谷鉾爲二第二一、洲濱鉾或稱二放下鉾一。在二同西方終一、故此三本不レ及レ取レ鬮、其間鷄鉾・菊水鉾・月鉾三本・船鉾一基、前天神山・飛天神山・占手山・太子山・山伏山・孟宗山或謂筝山・琴破山・白樂天山・郭巨山・蘆刈山・蟷螂山・笠鉾山貳筒・花盜山・木賊刈山・岩戸山・兒鉾、合十七本、凢鉾一本後山三本連行、洲濱鉾之後岩戸山並舟鉾也、故其員數如レ此、昨於二六角堂一因二所レ取レ鬮次第一也、云々」。

だめにて金三十兩に買ひ取りたり」とある。

くき 夕陽くきに程もなく(壽門松)
〔岫〕倭名抄に、「岫。和名久岐」。古文眞寶後集・歸去來辭にある「岫」の註に、「爾雅云、山有レ穴曰レ岫、徐季海云、後世誤以レ岫爲レ峰、去二爾雅一遠」。

くぎしや 姉が公儀しやぢや、好いやうに申上げや(千疋犬)
〔公儀者〕おほやけの場に出て口の利ける者。傍輩仲間の口利。

***くぎぬき** くぎぬき・松かは(五人兄弟)
〔釘子〕紋所の名。(四角形の角を上下左右に向く)。和漢三才圖會・百工具部に、「按千斤方寸半許鐵器、隨透レ穴、別長尺許鐵挺、大應レ穴、嵌レ之如レ鋏、而鐸與レ挺之間挾二舊釘一拔二起之一」。(別に釘貫門といふがある、それは堅木に穴を穿つて横木をくぐらせぬき通した故の名で、釘貫は當字)。

***くきやう** 究竟三昧に入る程の道念何の臆病(女夫池)
〔究竟〕「くつきやう」を見よ。究竟三昧とは、無明の惑を斷盡し、眞如を觀照し、一切法を大悟して、一心不亂の位をいふ。

くぎやりげだう 我我は欲界に住居をなすくぎやり外道(釋迦)
〔倶迦利外道〕倶迦利(梵語 Kokalika)は提婆達多の弟子で佛の法敵である。大寶積經・第二に、「迦葉汝觀二倶迦利比丘・提婆達多比丘・騫荼達羅比丘・云々一。是我給侍、親對二我前一、聞二我說法一、乃至如レ是等人、尙於二我所一不レ生二信樂一、於二步步間一、恒欲レ毀レ我、由レ是步步漸增二其惡一」。

***くくしあげる** 請人に預けてのくくしあげてとひしめけば(六經師)
「くくりあげる」(括上)を云ふ。「くくしおひ」(括帶)・「くくしぞめ」(括染)・「くくしつく」(括附)などいふ「くくし」で、「くくり」の轉訛。

くくたち 「佐野のくくたち」を見よ。

***ぐご** つぎつぎしげに据置きしごは赤小豆に赤染の備門(本領曾我)
〔供御〕主上の御膳。

***くこん** 御嘉例の九獻に醉うて、裏の數寄屋に寢て居られます(大經師)
〔九獻〕酒の異稱。下學集に、「九獻。日本世話酒名也、三三九獻義」。海人藻芥に、「後光嚴院御愛酒にておはしける程に、常に御酒有つて或獻に及ぶ、……其代より獻數加增して、依て近比は五獻七獻九獻まで被二聞召一たり、內裏仙洞には酒の名を九獻とぞ申合ける、內裏仙洞には一切の食物に異名を付けて被レ召事也、一向不レ存知一者當座に迷惑すべきものか、飯を供御、酒は九獻、味噌をばむし云々」。

くさ 長か赤鰯の鐺がくさの、おんどもが脇腹さなへ當るが最期、ひつつまんで壁へ腕摺らうと思うて(博多) 稜のある溝石でくさ、頭の皿が粉微塵に打破れた(博多)
語尾に添へて用ゐる長崎國訛。現今も福岡地方で普通に用ゐられ、「ねえ」また「なあ」といふに用ゐるのが一般である。熊本地方では「くさい」また「くしやあ」といふ。

くさしやる こなたは私に文をくさしやつたか(傾城佛原)
「くださる」(被レ下)の訛。

***くさずり** 御着長の草摺にはつたと射留む(凱陣八島)
〔草摺〕鎧の腰のまはりに垂れたもので、式正の鎧には前・左・後と三つ下りである。

***くさる** 明星が茶屋で飲乾すやうな大ぐさり、借錢の利を一月に二月などる、松坂越えて(丹波與作) 茶屋者と腐れ合ひ、親にも知らせず夫婦になる極めして(生玉) 八百貫目や八千貫は誓文くつされ利なしでやんす(大經師) ごけんの如く二世三世、くされくされと血判をすゑた小舌たるい女子文(萬年草) 其あがり膳が何の嬉しからう、これまあ聞きくされ(傾城佛原)
〔腐〕くづれやぶれるをいふ。「大ぐさり」は甚しく博打に負けて心のくづれめいること。「腐れ合ふ」は男女互に戀ひて惡緣を結ぶを云ふ。「誓文くつされ」は自誓の詞である、その條を見よ。「くされ」は誓文くされなどいふ自誓の詞を略してかく云うたのである。「聞きくされ」の「くされ」も腐または臭の意より轉じて、人(或は物)の動作などを輕蔑していふ。「踏みくさる」「打ちくさる」「爲くさる」など皆この類である。

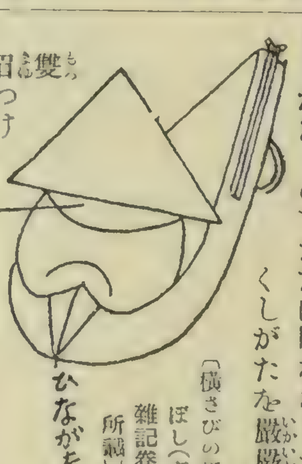
くさわけ 祐經は太腹、本多は草分、六分の勝に候へども(會稽山)
〔草分〕獸類が胸で草を分けるその胸先をいふ。このあたりの文は、曾我物語の梶原・畠山の鹿論を作りかへたのである。

***くじ** 二人連にて在所へ行き、いま兄弟とくじをせん(卯月紅葉) 聞けば大阪にうろたへて、此惣兵衞とくじのみやのとぬかすげな(淀鯉)
〔公事〕訴訟。「くじのみやの」をも見よ。

くじ いで其女を落して見せんと、九字を切掛け咒詛しければ(以呂波)
〔九字〕「くじごしんほふ」を見よ。

***ぐし** 虞氏が顏(三世相) 虞氏が涙(用文章)
〔虞氏〕項羽の愛妾である、常に幸せられて軍中に從つた。「項羽高祖の戰」云々」を見よ。

くしがた ひながたに間をあらせ、くしがたを嚴嚴と雙眉つけて(烏帽子折)



〔櫛形〕烏帽子の名所。〔(横さびの折ゑぼし(貞丈雜記卷三)所載)。

くしがた 最期場は殿上の櫛形、さあ來れと宣ひて(娥)
〔櫛形〕鬼の間の壁、日記御厨子の側にある穴をいふ、その形櫛に似てゐるよりの名。櫛形の穴ある間をもいふ。禁腋祕抄に、「南の壁の西の端、鬼の間のあはひの柱をはさめて櫛形の穴あり・女房のことをここにて見る、云々」。

ぐしぐし でつともせぬ丁稚めが、手柄しさうに見えけれども、ぐしぐしとなりけるは(出世景淸)
〔五四五四〕雙六の賽目の五四である。ここの文は、雙六盤の縁で五四といひ、そして五四に、雙六盤を投付けられて身心共にぐにやぐにやとなるをきかせたのである。

くじごしんほふ おのれは未だ髮こそ剃られ、九字護身法傳授して禮拜加行も勤むれば出家も同前(萬年草)
〔九字護身法〕密敎に行ふもので、九字とは臨兵鬪者皆陣列在前を云ふ。この九字を咒へな

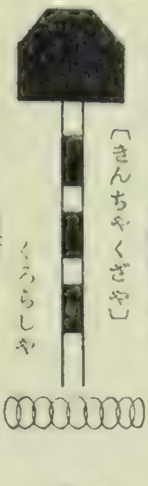
合する事なれば金打と書くなり、金と金とを打ち合すると云ふ義なり、亦問ふ、金打する意は如何、答へて曰く、若し誓約に違はば如此大小刀を打ち一ニ、打ち折り二度大小を帶せざる身と成るべしと誓ふ事なり」。

*きんちやく　筑紫さいふかヨヤヨヤーきんちやくならばハリノ博多小梅を腰附けに（天神記）

〔巾着〕淫賣婦をいふ。俚言集覽に「巾着＝風俗文選・山女說、國國の名目、當世の洒落、菱杓・干瓢・白人・巾着の類」。傾城禁短氣卷三に「巾着山白人寺に弘むる新宗」。天神記のこゝの文は、筑紫宰府に財布をいひかけ、巾着袋に淫賣婦の異稱をいひかけたのである。

きんちやくざや　花色羅紗の巾着鞘・輪違ひの六尺は相州小田原（薩摩歌）

こゝの文は相模小田原城主の嫡大久保傳吉の鎗標と鎗鞘標をいうたのであらうが、これは花色ではなくて黑羅紗である。



〔きんちやくざや〕
〔邊輪〕

きんと　亭主が眼も荒く、まんや玉が頰癖、集禮をきんとにせがまれて、ひしやりほんとこんりはつる（虎が曆）

「きんとう」（均等）の「う」の略された語。左右よく釣合ふ義より轉じて、左に借り右に返すこと。借りた金錢など違へずに早く返すこと。きちやうめん。「集禮をきんとにせがまれて」は、集禮をきんとに拂つて下されとせがまれこの義であつて、謠曲・安宅にある勸進帳の文、「思ひを善途に翻して」とあるを作りかへたのである。「集禮」「それらうか大紋日し二云々」をも見よ。

きんのま　馬方は遂に見ぬ金の間なうそうそとのぞきまはれど（丹波與作）

〔金間〕黃金の箔を貼つめた襖を立てた間。

*きんぴら　公平のやうな男を煩はしたはこの吾妻（壽門松）辨慶や公平がえいやつととのえなどと切合ふを見せませう（丹波與作）

〔公平〕金平とも書き、坂田公時の子である。江戸時代の初期に流行した芝居は、公平剛勇無雙であつて、種種の武功を立て、岩石を碎き人形の首を拔くことなどを演じた。これより殺伐な同型の淨瑠璃を金平淨瑠璃と稱した。京阪では寬文二三年頃盛んであつたが早く廢れ、江戸では戰國時代の餘風を受けて、京阪で廢れた後までも流行した。

*きんぷくりん　（雪女）

〔金覆輪〕黃覆輪とも云ふ。馬の鞍の前後の輪（山形）の上に金で覆輪をかけたもの。

きんほうげ　かへじや千千の金ほうげ（釋迦）

〔金鳳花〕毛茛とも書き、草の名。毛茛屬には一年生または多年生もあつて、葉は互生し單葉である、花は單生または數多攢簇して繖房花序をなし、その色は黃または白である。

きんや　禁野を過ぎて波瀲院（蟬丸）

〔禁野〕天皇遊獵の地で、人民の殺生を禁じてある野の意で、交野（或は片野とも書く）をいひ、河內國北河內郡山田村・牧野村・川越村・牧方町等にわたり、天之川・穗谷川・舟橋川の三川がその間を流れて淀川に注ぎ、低い丘陵が淀川に沿うて起伏してゐる、卽ち古の禁野の地である。

く

*くいのやちたび　緣につるれば唐のもの、悔の八千度繰返す（國性爺）一汗さつと流れかゝりし橋杭の、悔の八千度百度も（振袖始）

〔悔の八千度〕八千度は彌千度の義。幾度も幾度も繰返して悔むこと。古今集・哀傷歌に、「さきだたぬ悔の八千度悲しきは、流るゝ水のかへりこぬなり」。謠曲・櫻川に、「悔の八千たび百千鳥」。

くうふうくわする　空風火水の五輪五行に五大尊（井筒）

〔空風火水〕空は無礙性、風は動性、火は燸性、水は濕性である。これに堅性の地を加へて五大といふ。五大を五形色に表はして五輪と名づく。「五大」「五輪」を見よ。

*くうや　十德頭巾に身を窶せば人もくうやの茶筅賣（關八州）

〔空也〕空也上人の始めた空也念佛僧卽ち鉢叩をいふ。「はちたゝき」を見よ。

くえう　明王部・天童部・九曜・七星・二十八宿・五行の靈、三十六禽を驚かし奉り（弘徽殿鵜羽產家）

〔九曜〕日・月・火・水・木・金・土の七曜に計都星・羅睺星を加へていふ。謠曲・鐵輪に、「大小の神祇・諸菩薩・明王部・天童部・九曜・七星・二十八宿を驚かし奉り」。

*くかい　抑最期の一念によつて善惡の生を引くといへり、九界の間に何か御邊の願なると問ひければ（女楠）

〔九界〕十界の中、佛界を除き、菩薩界より地獄界に至る九界をいふ。これ佛界に對して悉く迷界である。太平記・卷十六、正成兄弟討死の事の條に、「抑最期の一念によりて善惡の生を引くといへり、九界の間に何か御邊の願なると問ひければ」。

*くがい　長へに火宅に遊び、共に苦海に沈む（釋迦）法の敎によらずんば、苦海に沈みし衆生はさて、何時か生死を出小舟（釋迦）まして流れの憂き節や、日每に變る身の勤め、今日も苦海の神詣（生玉）

〔苦海〕娑婆は生死の迷妄憂苦際涯なければ、これを大海の深廣なるに喩へて苦海といふ法華經・壽量品に、「我見諸衆生。沒在於苦海」。

*くがい　三人寄れば公界、忠兵衞が身代の棚下してくれる忝い（冥途飛脚）こりや此處は公界ぢやぞ、誰も人の名はいはず、樣子ばかりちやつと言へ（生玉）遊君はくがい人、貧しき體は十郎が外聞もはづかし（扇八景）短氣は損氣の忠兵衞、傾城はくがい者、五十兩の目腐銀取替へた潛上、若い者に恥かかせ、川が開いたら死にたかろ（冥途飛脚）大磯の長が許へくがい十年足掛け二十年と定め、娘分の傾城に賣り渡し（大磯虎）

〔公界〕世間。傾城は世の中の種種な人と交はる意より公界人といひ、傾城の勤めを公界の勤めといふ。本朝藤陰比事・卷五にも、傾城に十年身を賣ることを述べて、「公界十年のさ

言ひければ(冷泉節)
釋尊の涅槃に入られた時頭を北にされた例にならひ、死者を北枕にし、その着て死んだ衣を北向に懸けることから、藥鍋を北向にするは病死さそうとする呪である。

藥もんぢやく 「もんぢやく」を見よ。

***くすりゆ** 熊野本宮藥の湯を汲み寄せ(小栗判官)
〔藥湯〕溫泉をいふ。宇治拾遺・六に、「信濃國つくまの湯といふ所によろづの人のあみける藥湯あり」。地名部「ゆもと」を見よ。

九寸五分 胸押開けば九寸五分、肝先に切羽まで刺通してぞ居たりける(堀川波鼓) 錆たれども九寸五分、大名でも高家でも胴中を抉つて(兼好)
短刀を云ふ。鎧通。武家名目抄・刀劔部に、「九寸五分。按、是亦腰刀の類にて卽ち鎧通しの事なり、寸をもて其名とせしは劔を三尺といふ類にて、圓融院の頃世に一尺三寸と稱せし懷劔あれば、いと早くさる例いありけり」。

***くせ** これ又くせの大悲の化身(女殺)
〔救世〕法華經・普門品に、「觀音妙智力、能救世間苦」とあるより出で、觀世音菩薩をいふ。

***ぐぜい** 弘誓の海を渡り、涅槃の岸に到るべき(百日曾我) 俊寛が乘るはぐぜいの船、うき世の船には望みなし(女護島)
〔弘誓〕阿彌陀如來が十方の衆生を均しく濟度せうとされる弘大な誓願をいふ。その弘誓の惠みの深廣なるを海に喩へて弘誓の海と云ふ。また佛菩薩が衆生を救濟して、涅槃の彼岸に渡し給ふ弘大な誓願を船に喩へて「弘誓の船」と云ふ。

***くせごと** 旦那の惡性金を十四貫橫取して曲事に逢ふ筈を(淀鯉)
〔曲事〕道また法に違ふ事。惡事をなせば刑罰に處せられるにより、曲事を處罰の意に用ゐる。

***ぐぜつ** 悋氣の嵐手管の雨、無理な口說の霜雪も、騷がず痛まず彌增しに、情の緣はびこりて(生玉) お夏淚を押拭ひ、其方と我身は實事にて、口說などする挨拶か(歌念佛)
〔口說〕言ひ爭ふこと。痴話口論。

くせまひ 獨樂の威德には久しうまふが手柄にて、或は曲舞・歌・くどき(松風)
〔曲舞〕歌舞音樂略史・下卷に(足利の世に曲舞あり、文正元年四月十六日後法興院記に、是日於二千本棧敷一、殿有レ御-見-物二女曲舞一、余同、抑件女曲舞、自二去十月七日一於二千本一舞勸進云々、彼女生年十九云々、容顏尤美麗、凡超二過諸人一、希代事也、舞拍子言語道斷、奇妙之至也、見物雜人四五千人許云々、先男舞露拂、次十四五許兒舞一番、次女一番舞了、兒與レ女立合舞レ之、座者十餘人許也。これにて其大かたを知るべし、又七十一番職人歌合の時代、文安寶德に、白拍子と番ひて「車にて袖うちふりし舞女かかるこひすと人はしりきや」と歌あり、又「月にはつらき小倉山其名はかくれざりけり」と畫の上に記したるは、其うたひ物の中の詞なるべし、此舞を又大頭といへり)と見えてゐる。巢林子のここの文は、曲舞をしてゐる間獨樂の廻ひ續けるをいふ。

***くせもの** さりとても戀はくせものゝ、みな人の地金をへらす燒釘は、敲き直して意見して(氷朔日) 旦那これ御覽なされ、おまへの印判盜出し白紙に捺すくせ者(大經師)
〔曲者〕怪しい者。一くせある者。わるもの。饅頭屋本・節用集に、「怪物」。

***くだかけ** 曉うらむくだかけの、狐はめなでまてしばし(天鼓) 春の夜の夢驚かすくだかけの、其しだり尾の結ぼほれ(淀鯉)
鷄の古名。倭訓栞に、「くだかけ。東國には家をくだといふと云へり、かけは鷄をいふ也、一說に百濟鷄の義、今の唐丸なるべしと云へり、或は鷄を貸して管掛といふ也」。栗本千夏の說に、「くたかけ」は腐鷄の義であつて、「かけ」はその鳴く音によれる名であるといふ。伊勢物語に、「夜もあけなば狐に食めなでくだかけの、まだきに鳴きてせなをやりつる」。淀鯉出世瀧德のここの文は、「春の夜の夢驚かす云々」をも見よ。

くだのれん おういと答へて管暖簾、額差入るれば(蛙合戰)
〔管暖簾〕細い管を緖に貫き連ねて編んで作つた暖簾。往時町の裏通りなどに往往懸けてゐたもので、近世になつては硝子玉を交へて氷屋甘酒屋などに懸けてゐた。管暖簾は軸簾ともいひ、其稱は西鶴の胸算用卷五にも見えてゐる。

***くたばる** さあ牛はくたばつたり、火をしづめよ侍ども(嵯峨天皇) 咽笛つんざきくたばつたるにて候はん(吉野忠信) 其方が今頓死してくたばらうが構はぬぞえ(浦島)
「くたびる」の轉じた語であらう。死ぬ。

くだまく 若し頓死でも致しなば、下された茶が末期の水と、管まく體に紛らかし(二枚繪)
「くだをまく」を見よ。

***くだやり** 言ふも管鑓・人は武士(堀川波鼓)
〔管鑓〕金屬製の管を鑓の柄に通し、刀身に近い所に管を留める鍔がある。左手で管を握り右手で鑓をすごくに便にしたもの。ここの文は、「言ふもくだくだしい」と云ふことを「言ふもくだ」といへば、それを管鑓にいひかけたのである。

***くだをまく** とかく目出たいお目出たいと、管を卷いてぞ歸りける(薩摩歌)
〔管を卷く〕「くだまく」ともいふ(その條を見よ)。酒に醉うてたは言をしやべり立てるをいふ。按ずるに、「言ふもくだ」(前條を見よ)の「くだ」はくだくだしいの略であらうが、「くだをまく」は、機絲の管を卷く音の騷がしいことから出た詞である。寬平御時后宮歌合、よみ人知らずの歌に、「かりがねは風をさむみやはたおりめ、くだまく音のきりきりとする」と見え、また、「雁がねのくだまくおとの夜をさむみ、蟲のおりきる衣をぞきる」と見えてゐる。

***ぐち** 奧を覗き表を見、箱ぐち取つて持上ぐれば、ふるうてどうど打落し(二枚繪) あたご粽も皮を取らねば旨味は知れぬ、粽樣いつそ皮ぐち賞翫と(三國志)
接尾語・「ぐるみ」と云ふに同じ、上方詞である。「箱ぐち」は箱ぐるみ。「皮ぐち」は皮ぐるみ。增補俚言集覽に、「ぐち。大阪詞、菓物など皮とも食ふを皮ぐち食ふといふ」。世間娘氣質(江島其磧撰・享保二年刊)五に、「燒たての蒲鉾に生醬油つけて板ぐちかぶり」、自然居士(古淨瑠璃)に、「堂ぐち此所へ舁いて來て居な

から不動小刀の印を結び、指頭にて空中に四横線を引き、又五縱線を引く法である。三才圖繪に「九字護身法。卌。或加二行字於下一爲二十字一、本出二於道家一、毎密祝レ之則一切横災無レ所レ不レ避、今眞言密家多用爲二祕事一、毎レ字結印、又有二護身法五印一而共爲二九字護身法一、授二其印一者軍中及川渉山行修レ之、今武家其足體誦二前字一。以當二九書一。誦二此九字一亦有レ據」。眞俗佛事編・一に、「九字は密教の法に非ず、道教の入レ山時の祕咒にして六甲祕祝と名く、晉の葛洪仙人山に入る時此を誦せしむ、臨兵鬪者皆陣列前行（私に曰く、世に傳る九字は第八を在に作る）」。

***櫛の齒を引く**　早馬を以ての鎌倉の注進、櫛の齒を引くが如く（蛙合戰）　六波羅の注進櫛の齒を引くと雖も、入道事ともし給はず（千疋犬）

間斷なく續くをいふ。太平記・新田義貞謀叛の條に、「國國の早馬鎌倉へ打重つて、急を告ぐること櫛の齒をひくが如し」。

くじのみやの　聞けば大阪にうろたへて、この惣兵衛とくじのみやのとぬかすげな（淀鯉）

「くじみや」を「くじのみやの」と分けて言うたので、「何か」を「何のかの」といふのと同じ言方である。「くじみや」を見よ。

九十九所の王子

「王子王子は九十九所」を見よ。

くじふくさん

〔九十九三〕「つくもさん云々」を見よ。

***くじふろく**　そのえいかんとはわしが舅、九十六の錢百で一昨年死なれ（酒呑童子）

〔九十六〕舊幕時代錢百緡は普通九十六文しかなくて通用した。巣林子作の心中萬年草にも、「やはり九十六文で、百づつ遣つて置かつしやれ」と見えてゐる。九十六の數は錢百といふのである。錦芥抄に、「九十六文を以て百文とする事は、上杉憲政の家老長尾意玄制を立しより始る、云々」。

くじみや　くじみやしてもおのれらに、がやがや口をきかせうか（卯月潤色）

訴訟。鬮は宮から出ればとて鬮宮といひ、鬮と公事と同音であるので、公事の義に取つて「くじみや」といふて訴訟のことにいふ。「くじ」「くじのみやの」をも見よ。

ぐしや　倶舍唯識維摩の學頭にて（女護島）

〔倶舍〕阿毘達磨倶舍論の略。藏と譯し包含攝持の義である。發智論・六足論等の諸説の義理を包含し、世親菩薩の作である。倶舍論の學頭とは、倶舍論に通達した者に授ける職名である。

くじやうしやうかく　事もおろかや御本地は久成正覺の如來、大悲千體の菩薩なり（孕常盤）

〔久成正覺〕久遠の昔に於て正覺の果を成した佛菩薩の總稱。源平盛衰記に、「久成正覺の如來」。

***ぐしやうじん**　番は閻魔・倶生神（生玉）



〔倶生神〕（佛像圖彙所藏）

〔倶生神〕佛教でいふ神の名、人の善行惡行を注視して記錄する神である。この神に男女の二神ありて、男神を同名といひ、人の左肩にあつて善行を記し、女神を同生といひ、人の右肩にあつて惡行を錄すと云ふ。無量壽經註に、「經曰、人初生時、二人神在二左右肩一、一曰二同生一、一曰二同名一、人不レ見レ神、神見レ人、不レ簡二晝夜一、記二其善惡一、是曰二倶生神一」。

くじやくわうきやう　孔雀王經・七佛藥師（嵯峨天皇）

〔孔雀王經〕密教にて息災を祈る爲に、孔雀明王を本尊として祭壇を設け、佛母大孔雀明王經を讀誦する修法を孔雀王經法といふ。

くずいを　語れば親の恥さらし、言へば詞のくずいをの、よるの衣の我夫の命を助け出家となし（卯月潤色）

〔國栖魚〕「はえ」（鮠）をいふ。國栖魚は吉野の奥・國栖村その名物であるよりの名である。謠曲・國栖に、「我等もこれに國栖魚の候」と見えてゐる。この魚交尾期になれば岩瀨に集り、雌魚は鱗に黄色を帶びる。箋注倭名類聚抄の鮠の條に、「黄而美」とある。謠曲、櫻川に、「花をすくはば若しくず魚やかからまし」とあるも、鮠の黄色を帶びたのが花紅葉に紛れ易ければしか云うたのである。さるを謠曲拾葉抄に、「くず魚は鮎なり」と註したのは誤であらう。ここの文は、詞の寄言ふを國栖魚にいひかけ、國栖魚の寄るを夜にいひかけて、夜の衣とつづけたのである。

くすねる　三百の錢を腰に附け、若しあの玉を取得たらば此錢を投出すべし、其時人人力を添へくすれ給へと約束し（大織冠）

竊に盜む。桂川連理柵・帶屋の段に、「すりや爲替の百兩は、兄貴がかげでくすねたに極まつた」。小栗判官車街道・第四段に「はたご代受取つたら渡せ、煙草の錢くすねまいぞ」。按ずるに、「くすねる」は「くすむ」「くろずむ」「くろめる」と緣ある語であらう。

くずのはのうらみ　庭の掃除の塵や芥や、紙くずの葉のうらみと存じ候まじ（百日曾我）

ここの文は、紙屑に葛をいひかけて「葛の葉」といひ、葛葉は風に飜つて裏見えれば、「裏見」に「恨み」をいひかけたのである。古淨瑠璃・信田妻の歌に、「戀しくば尋ね來て見よ、和泉なる信田の森のうらみ葛の葉」。

くずみづ　信田の森のうらみ葛水、一つ飲ましやとわめきしが（氷朔日）

「信田の森のうらみくずみづ」を見よ。

***くすむ**　大小くすんだ武士（天網島）

〔奇〕沈みがちな眞面目なるをいふ。尤草紙に「くすみたる物の品品、不動の顔、親子の中の物語、下戸の座敷、年寄衆の參會」。倭訓栞に「くすむ＝奇ノ字の意也、枕草紙の抄にくすみて實法なる意也といへり」。巣林子のここの文は、色に酒に歡樂の遊廓では、大小は殺風景でくすんだ物であり、それを佩いてにがりきつた眞面目な武士のきつすゐとの意で、「くすんだ」は大小と武士との兩方にかかる語。

くすりぐひ　愚老の申した通り藥食をなさるゝか（今宮）

〔藥食〕獸類などの肉を身體の藥になるものとして食ふこと。滋養物を攝取すること。

***くすりこ**　はやあら玉の四方拜・節會・藥子・小朝拜（百合若）

〔藥子〕正月元日供御の屠蘇酒を試飲する童女、及びその儀式。公事根源に、「藥子とて少女の未だ嫁せざるを求めて是を用ふる事あり、屠蘇は小兒より飲むといふ本文あれば、その爲に少女を選びてまづ飲ましむるなるべし」。

藥鍋を北向にす　これ姫君の加減のお藥、生薑入れずに藥鍋を北向に、頭煎じばかりを早早上げよと

ては好色伊勢物語(貞享三年刊)に、「女郎の異名を馬といふ心は人を乘せてすぐると云ふ事なりとぞ、此馬を引廻す者くつわといふとぞ」と見えてゐる。女郎を馬に譬へた例は巢林子の文中にも見えてゐれば、この說の如きであらう。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)七に、「久津輪。傾城屋の亭主をくつわと云ふは出所いまだ不レ考、或人のいふは、駒を乘入るをばまづくつわをはますを最初とす、これ乘馬をしたつる第一なり、この如く數多の女子を抱置き、それぞれに仕立つるは傾城屋のわざなり、されば東西も知らぬ女子親の手を離れ、此うきふしのわざは牧おろしの駒の如くなるによりいふとかや」。異本洞房語園には、太閤秀吉の厩付の奉公をしてゐた原三郎左衞門が六條の遊女町を取立てたより起つた名だといひ、嬉遊笑覽には、金銀を贈るを轡をはむるといふに取つた名だと見えてゐる。くつわを亡八と書くは、遊里では仁義禮智忠信孝悌の八德を亡ぶからであるといふ。(「太夫」の條の書をも參照せよ)。

くつわづら 靶捉つたる腕首はたと蹴放し(振袖始)

くつわ。また手綱の古言といふ。倭訓栞に、「くつわづら＝倭名抄に轡をよみ、俗にくつわといふと見えたり、新撰字鏡に勒又靶をもよめり、口論連の義なるべし、今いふ手綱なりといへり」。貞丈隨筆に「くつわづらと云ふは口脇羅なり」。

*__くづをる__ わつとばかり歎きくづをれ見えければ(槍權三) 便り待つ間の待遠く、袖も心もくづをれて、とろりとろりのあだ睡り(津戸三郎) どうでも御身がくづをれる(三國誌)

「くづほる」(頽)の訛。くづる。萬葉集・卷五、雜歌の部、戀男子名古日ノ長歌の句に、「可多知久都保里」。源氏物語・桐壺に、「口をしう思ひくづほるに」。

*__くてい__ 百千くていなゆたごふを經て(大原問答) 娑婆世界の佛種を絕ち、魔界となして俱泥劫の本懷を遂げ給へ(釋迦) げにや一念の瞋恚にて、くてい劫の善根を燒くとこそ承れ(用文章)

〔俱泥〕梵語(Koṭi)である、譯して千萬とも億とも百億とも云ふ。玄應音義・五に、「俱致或云俱胝、此言二千萬或億一、而甚不レ同、故在レ本耳」。俱泥劫の劫はその條を見よ。

くでうのおんしよ 中尊に觀世音五色の絲を御手にかけ、八軸の妙典・九帖の御書、燻る燒香しんしんと(久盛)

〔九帖御書〕善導和尙の觀無量壽經疏を云ひ、九卷ある。平家物語・灌頂卷・小原御幸の條に、「中尊の御手には五色の絲をかけられたり…八軸の妙文・九帖の御書も置かれたり」。

*__九條の袈裟__ 袈裟は九條の名にし負ふ、東寺の塔のいや高き(嵯峨天皇)

布九幅を綴合はした僧衣。袈裟は梵語(Kasaya)である、僧衣のこと。

*__くどき__ (淨瑠璃文中の註記)

〔口說〕謠曲で感慨・述懷・懺悔などの所作をして心中を述べることをいひ、その所作振を淨瑠璃に應用したのである。其他謠曲から出て淨瑠璃に應用されたものに、次第、シテ、ワキ、ツレ、ウタヒ、などがあつて、夫夫註記されてゐる。元來口說は佛家の聲明の曲調で、怨慢哀悒の曲趣であつたのが、淨瑠璃などに應用されては、漸次淫靡なものとなつた。嬉遊笑覽卷六上、音曲に「口說は長歌にあらず、「松の葉」端歌の内にくどきあり、もと平家曲節の名なり、舞なども口說あり」。

くどくち この池こそ自らに菩提をすすむる功德池よ、そなたも數珠を持つてか(女楠)

〔功德池〕「八功德池」を見よ。

*__くどくど__ くどくど思出し、只日頃よの父の子猶ぞ戀し、不義を存じられば勘當は死ぬ、隔つも隔つ二人が事、親子は一世な結びなれど、神や異國の佛、さなきだにしと持たぬ身、下卑な人に疎まれな、父母弟兄は根節なりの愛しい子、可愛子母が形見とよ(聖德太子)

くよくよ。(しつこく、ぶつぶつなどの意にも用ひてある)。ここの文は離れ離れの詞に含む親心の假名文を、假名をその儘に傍訓として漢字交り文にしたのであるから、假名遣の誤を咎め給ふなよ、これで意自ら明であらう。「親子は一世な結」は「親子は一世の緣」を見よ。「根節」は「一つ根節の二股竹」を見よ。

くどんしやみ 瑠璃の御髮剃りこぼし御名をくどんしやみと改め(釋迦)

〔瞿曇沙彌〕梵語(Gautama Sramanera)である、釋尊出家當時の名稱。祖庭事苑に、「瞿曇、正梵語云二瞿答摩一、又云二瞿曇彌一」。沙彌は勤策男と譯す。

くにくづし 舟手には國崩・大砲・小銃・種子島、毒をさしたる鏃を揃へ(國性爺後日)

〔國崩〕昔時用ゐた大砲の名。大友興廢記・十八に、「先年南蠻國より渡りたる國崩といふ大石火矢あり」。

くにとこたちのみこと 神道にては國常立尊と申し奉り、漢儒は天の生民を降すといふ(蟬丸)

〔國常立尊〕天地開闢の時ましました神。古事記・上に、「天地初發之時、……次成神名國之常立神」。

*__くにぶし__ 一づにかたきくにぶしの、咽に淚ぞつまりける(槍權三)

〔國武士〕藩主に陪從して江戸に住む武士に對して、在國の武士を云ふ。

*__くにわき__ 常江戸脇城國脇まで(薩摩歌)

〔國脇〕諸侯の分家。

*__くねる__ 麓に立てる女郎花、りんきしんきとなまめきて、くねる心の男山(淀鯉) 昔の例求塚、これも男と女郎花、それはくねるこれはまた、うねりし松の手を取りて(今宮)

〔曲〕くねくねしてある義。くよくよ物思ひするをいふ。古今集序に、「男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねるにも」。「ふもとに立てるをみなへし云々」をも見よ。「昔の例求塚」とある求塚(その條を見よ)は情死者の塚なれば、「それはくねる」といへるは男女關係で煩悶して身を投げたことの意で、「くねる」と同韻脚の文飾である。「男と女郎花云々」をも見よ。

くねんぼあたま 九年母頭擲つて擲つてばり碎かん(持統天皇)

〔九年母頭〕坊主頭を九年母に譬へて云つた語。きんかん頭を金柑頭(當字なれど)の義に取つて、金柑頭と云ふがあるから、九年母頭もあるべきとてかく洒落た語。

から拜ませ申すべし」。

*くちあけ　まづ大ぶくの口明けに變つた咄がこんするろ（壽門松）

〔口明〕物事の爲始め。最初、巣林子作・曾我五人兄弟に、「女郎狂ひの口明けに旦那へは虎」。壽門松の二二の夊は、新茶の封切りをし二茶會を催すことを口切りとも口明けともいへば、大服茶の縁で口明けといひつづけたのである。「おほぶく」をも見よ。

*くちあひ　鹽の辛い梅干婆婆がすゐこな奴とおぼしめそ、お恥かしやといひければ、おおいや口合をやらるる（壽門松）

〔口合〕詞の縁をはなれず、いひかけなどを用ゐて面白らいひなすこと。

惣七殿には口合家請もある人（博多）肝煎口合ある内に、親もと慥の判を取り（酒呑童子）

〔口合〕口を合せて言うた人、即ち保證人。

*くちいれ　此屋敷相應に三貫目や五十兩は貸して遣つて下さいやせと、棲棲合せる辯舌にくちいれ食うた顏付にて（重井筒）　上町の口入綿屋小兵衛（女殺）

〔口入〕周旋人。金錢など貸借人の間に立ちて世話する者。

くちきき　先なは樽非端の助三郎、これも在所の口きき（冥途飛脚）

〔口利〕談判などに立入つて人の信頼する人。顏役。はばきき。

口切の夜會　霰亂るる夜嵐に口切の夜會を催し（碁盤太平記）

茶壺の口明けの夜間の茶會をいひ、陰暦十月の始め頃に、地爐を開き新茶の封切りをして、夜間茶會を催すこと。

くちごひ　大分禮を取つたとは口ごひにして貰うたか（兼好）

〔口乞〕物を下されと乞ふこと。無心を言うて物を貰ふこと。西鶴織留・卷四、諸國の人を見しるは伊勢の條に、「何程口乞にしてもあの仲間から一文よりは貰はれぬといふ」。西鶴撰・俗つれづれ・卷五に、「金の土用干、伽羅の口乞」。

*くちてんがう　小歌・淨瑠璃・口でんがう（女殺）　申しお姫様、あれは人の口こんがう、花のお江戸は京まさり（丹波與作）

戯謔。巫山戯言。「てんがう」をも見よ。

くちとり　口取は熨斗昆布、肴は鯣車海老、熊野から貰うた鹽貝があらう（萬年草）

〔口取〕本膳料理に最初に出したもので、ここにいへる熨斗・昆布はそれである。四條家法式五三三膳に、「初獻引渡昆布 勝栗 熨斗　二獻雜煮 梅干 イモ串子 餅 箸臺　三獻吸物 五種 クシ貝 平カツラ　鯣 數子 鯛 鮨 箸臺　云々」と見えてゐる。ここにいへる口取は引渡に據つたものであらう。「かはらけ」を見よ。

くちなめづり　相手欲しう思ひしに、平家の大將安盛とや、それこそ網が口舐づり（酒呑童子）

〔口舐〕舌で度度唇をねぶることをいひ、これは好物と舌鼓を打つ意にいうたのである。

*くちば　中宮太夫進朝長は朽葉のひたたれ（鎌田）

「朽葉」黄色に淡藍色を帶びたもの。黄枯茶。

くちまつ　峰の老松口まつや、詞多きは馴染む程朋輩づきも訝しと（松風）

〔口末〕言はないでもよい末末まで口にまかせてしやべり立てること。現今關西殊に福山地方で「まつうまつう言ふ」「口まつう言ふ」などいふ、「まつう」は「まつ」（末）の延びた語である。和訓栞に「くちまめ＝多嘴をいふ、口忠の義也、口まつも同じ」。

*くちよせ　上手と聞きし巫女の門、ああ申しちと口寄を頼みませうとぞあないける（卯月紅葉）

〔口寄〕昔時、巫女が祈禱を以て死人または現存人の靈魂を招寄せ、その靈魂は巫女に憑移つて、その靈魂の思ふところを巫女が口走ることであつて、人の口を巫女が寄せるので口寄といひ、その巫女を口寄巫女といふ。死人の口を寄せるのを死口といひ、現存人の口を寄せるのを生口といふ。黑川道祐撰・日次記事・二月の條に、「請二巫女一、代二死人一使レ說レ所レ思、是謂レ寄レ口也」。「黑格子」をも見よ。

*くつきやう　いんでん屋の長作究竟の者連れて、やあ嘉平次・親五兵衞は爰にぢややげな逢ひたい（生玉）　今朝究竟のことを聞出し候（出世景淸）　後は藥堺賴みにて、障子一重の竹緣、これ究竟と飛上り（嵯峨天皇）

〔究竟〕至極の義。この語佛典の中に見え、成辦修了または決定終窮の義であつて、究は理の極を云ひ、竟は事の極を云ふ。無量壽經に、「究竟靡二所聞一、誓不レ成二正覺一」。三藏法數に、「究竟猶二至極之義一」。

くづだまり　燒物は取沙汰魴鮄・人間のくづだまりかけて（酒呑童子）

人間の屑に、醬油の溜を連ねたのである。溜といふ醬油は、醬油を釀造した中に籠を差入れて、籠の中に汁の溜つたのを取つたもの。

*くつぬぎ　沓脱半分下りられしを（天網島）　中戸の沓脫より忍ばせて（曾根崎）

〔沓脫〕沓脫石または沓脫石のある土間。

くつのこ　持槍小旗高提灯塀の外面に隙間なく、沓の子打つて控へたり（女夫池）

〔沓子〕沓の裏に打つてある鋲。「沓の子打つ」とは多人數が並んだ形に喩ふ。太平記・卷六、關東大勢上洛の條に、「鎧ひたる兵十萬騎兜の星を輝かし、鎧の袖を重ねて沓の子打ちたるが如くに、道五六里が程支へたり」。

くつまき　射る矢は伏木にかつしと當り、沓卷裂けて散つてげり（虎が磨）

〔沓卷〕「くちまき」（口卷）の轉、吾妻鏡には「口卷」とある。箆口を細糸で卷く故に口卷と云ふ。沓卷と書くは音によつた假借字である。



クツマキ

くつわ　身の首尾を思ふやうな傾城ぢやと思うて下んすは曲がない情ない、くつわの譯が立たぬとて二度くるわへ立歸り、身の恥は扨置いて勝二郎樣の恥辱はこれが何と雪がれう（淀鯉）　一年三百六十日、紋日が三日足らぬとてくつわはなげく（女殺）　女郎のお蔭で榮耀するとは、世界中のくつわ屋にせめて長が三分一眞似る者がどこにあろ（酒呑童子）

〔轡〕亡八とも書く。遊女屋（即ち置屋）または遊女屋の主人をいふ。「くつわ」の名義につき

美濃國青野原の小松原に高さ十間許の松樹一株ある、これを熊坂長範が物見の松といふ、長範この松に攀上つて東西四五里が程を見すまし、人馬の足のはこび荷物それぞれの體をさとりて、手下の者に命じ略奪させたこと巽本義經記に見えてゐる。

***くまざさ**　路地ほの暗き燈籠の、火影宿かる隈笹の、露は螢か蛙の聲の(槍權三)

〔隈笹〕笹の一種、長さ五六尺に達し、葉は大にして一枝に五六葉を附け、老葉は葉緣皆白き隈をなす、魚・鮨などに敷くのに多くこの葉を用ゐる。

***くまなし**　月は隈なきをのみ見るものかは(兼好)

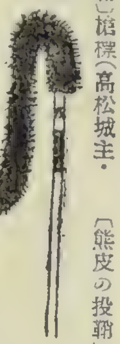
〔隈無〕隅隅まで照り渡るをいふ。「花はさかりに云々」を見よ。

***くまで**　此せいすゐな私を熊鷹の熊手の摑みづらのと異名をつけ、八町まちへ名を立て(卯月紅葉)　熊手よ慾よと言はるるも口惜し(淀鯉)

〔熊手〕熊の手の形に作つて物を掻き寄せる具に熊手と云ふものがある、其に喩へて物を掻き寄せて我物にせうとする慾深い者をいふ。

くまのかはのなげざや　熊の皮の投鞘は讃州高松(薩摩歌)

〔熊皮投鞘〕槍楳(高松城主・松平讃岐守頼常の槍楳)。



〔熊皮の投鞘〕

熊野修行　花の手おほひお手を引かれた、これも熊野の修行かや(歌念佛)

手巾をかけ、熊野牛王村烏を配る歌比丘尼をいふ。「うたびくに」を見よ。「くわんじん」の條の勸進柄杓をも見よ。

***熊野の牛王**　熊野の牛王に硯を添へ御前に差出す(今川了俊)　牛王の裏に誓紙一枚書くたびに、熊野の烏がお山にて三羽づゝ死ぬると昔よりいひ傳へしが(天網島)

「ごわう」を見よ。

くまの・みすぢ　流され人のあの島で、流す卒塔婆も立つ波に、寄り來るくる縒り繰る絲は、くまの三筋が流れちりける、ちんりちりつる三味線の、渡り初めにし國とかや(薩摩歌)

〔熊野・三筋〕熊野は紀州熊野權現をいふ。熊野の山に沈(その條を見よ)の煙が三筋立つを、三味線の絲の三筋にいひかけたのである。(また三筋には三社即ち本宮・新宮・那智をもきかせたものか)。巢林子のここの文は、平康賴等が鬼界が島に流されて、故郷戀しいまに千本の卒塔婆を造り、渡邊に出て熊野權現などを祈念して、その卒塔婆を流した故事(「流され人のあの島で云々」を見よ)に據つたもので、その御利益で赦免の使者の船の寄り來るを、縒り繰る絲にいひかけて、永祿頃三絃が琉球から渡來したことにいひつづけたのである。

くみあゆ　嵯峨の汲鮎は道が遠うて間に合ふまい(嵯峨天皇)

〔汲鮎〕小鮎が群れて流れに泝るを木杓で汲取つた鮎である。嵯峨大井川の汲鮎は名物である。黑川道祐撰・雍州府志(貞享三年刊)六、土產門・諸魚部に「鱗魚。鴨川井嵯峨大井川之產爲二味美一、丹波所レ出次レ之、春末岩水漲處、小鱗群聚泝レ之、以二木杓一酌二取之一、是謂二杓鱗一、至二其大一則鵜井網取レ之、至レ秋則設レ梁大取レ之」と見えてゐる。これによつて汲鮎のことも知るべしである。

***くみがしら**　庄屋・問屋・組がしら、扨扨與作と云ふ奴は存知の外の大食(丹波與作)

〔組頭〕五人組の頭。「くみした」の條をも見よ。

***くみした**　組下の二番ばえ、金田甚藏・岡軍右衛門・大橋逸平(宵庚申)

〔組下〕弓組・鐵砲組など各隊の配下にある者を各組下と云ふ。組には大番・書院番・徒士組・小姓番・進物番などもある、これに皆組頭ありて組の者を統管した。

くみや　室町の絲屋組屋嚻ぎ女に、御影堂の扇折、骨身を碎き稼げども(百日曾我)

〔組屋〕組緒、組紐を業とする家。

くみやうかうたい　「戀しくば尋ね來て見よ法華經の云々」を見よ。

***ぐめん**　武士の喧嘩にぐめんはいらぬ(薩摩歌)　忠兵衞はとぼとぼと、外のぐめん内の首尾、心はくもでかくなわや(冥途飛脚)

〔工面〕物に對し工夫する義であらう。工夫。才覺。「くめん」といふべきを此當時は「ぐめん」というたので、錦文流の傾城八花形にも、「ぐめんごかしに大方はこれより身代歪みつつ」など見えてゐる。

くもあし　花の時節は杉折の、雲脚・蝶形・洲崎形(酒呑童子)

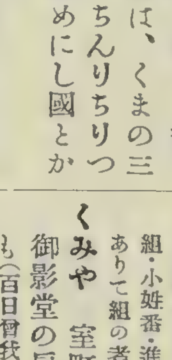
〔雲脚〕雲の垂れたやうな形に作つた杉折。

***くもすけ**　有る名は呼ばで雲助とは、して先それはどうした事ぞ、おう居處が知れぬといふ事(十二段)　雲助同前の身持となり(卯月紅葉)

〔雲助〕雲が風のまにまに定めなきが如く、定まれる居處なき浮浪人をいふ。賤役に從事した宿無し者、また後には宿驛の駕籠舁の稱。和訓栞に、「逃亡無籍の徒所定めず宿もなきものを雲助といふは、雲の定めなき意にいふ也、雲水の義も同じ」。

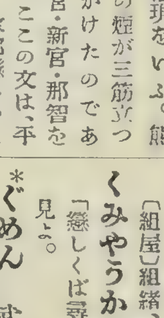
くもたてわき　雲立涌の狩衣(世繼曾我)　たてわきの大口そば取つて(兼好)

〔雲立涌〕「くもたちわき」とも云ふ。雲の立騰るを象つて模樣にしたものである。



〔雲立涌〕

即ち曲線の中ふくれ、兩端窄まつた形を連ねた中に雲の模樣を點出したものを云ふ。雲の模樣の點出して無いのを「立涌」といふ。



〔立涌〕

くもで　外のぐめん内の首尾、心はくもでかくなわや、十文色も出でくるは(冥途飛脚)　嘘と誠とさゝやきの、橋のくもでに物思ふ(夕霧)　水のくもでの橋の上に翁姿の釣の絲、一筋に殺生を心に入れたる風情なり(西王母)

〔蜘手〕蜘蛛の足が八方へ出てゐるやうに物の交叉したることをいふ。千千に物思ふを蜘手に物思ふといふ。「心は蜘手」とあるは色色に物思ひすることで、また刀など縱橫無諍に振廻すを蜘手に切まくるなどいへば、それをか

くは　人里絶えて廣廣たる千里が竹に迷ひ入り、和藤内ほうどくはをぬかし(國性爺)　嘸小辨もしんろかろ、已もくはを拔かした(生玉)　かがせの蓑笠身に纏ひ、目指すも知らぬ黒髪山、上州指して急ぎしが、くはは拔ける泊は遠し(川中島)
鍬であらう、「鍬を拔かす」とは、氣を取られて鍬を手放す義であらう。以て氣拔けする、茫然自失する、當惑するの意にいふ。山本九兵衛版七行正本の生玉心中及び信州川中島合戰のこの文に「くは」を鍬に書いてある。されば「くは」は「くわ」ではなく、また我に取つて我意の義とするは誤であらう。蓋し巣林子作物を通じて、「我」といふ所は「我」または「が」と書いてあるから、「我」を「くは」としたとは思はれない。寛濶平家物語(寶永七年刊)卷三に「物の大將になる人の思案を井のうちの蛙の知る所にあらずとて、畑うつ鍬をかたげて手をはなしける」。風流曲三味線(寶永七年刊)四之卷、萬福長者二代の大臣の條に、「鴫野といへる里の邊より四挺三味線引かけ、芳兵衛心は入江の海よと、梅やしぶのつれ歌にて大踊、目なれぬ百姓は鍬かたげ手放つも道理なり」。好色一代男(天和二年刊)卷之八の終の跋文に「てんがう諺のあるを取集めてあらましに寫して、稲臼を挽く囊鳴に讀みて聞かせ侍るに、娵そしり田より畦上り大笑やまず、鍬をかたけて手放つぞかし」。

くはいろ　(桑色)薄き黄色。(津戸三郎)

くはうでんのうね　「昔は巖窟の洞に籠められて云々」を見よ。

***くはがた**　黒鐵の五枚兜・鍬形うつて龍頭、鍛のついたる烏帽子が所望ぞ(烏帽子折)
〔鍬形〕慈姑の葉の形をしてゐるので「くわゐがた」の義であると云ふ、兜のまびさしの上より角の如く二本聳え立てるものの稱で、左右の角を取はづすやうに作るを本式とし、眞中を角元といひ、兜の額に取付けて作り、左右の角をこの角元に挿込むのである。鍬形の角の中間即ち眞向から龍の張出たのを附けたるを龍頭の兜と云ひ、大將の着用である。

ぐはち　「くわち」を見よ。

くはのゆみ　「よめぎのや」を見よ。

くははうき　小女郎は中に身を捨つる掃溜の鍬帚、持て開いて相手の刄物打落さんと立ち廻る(博多)
〔鍬帚〕鐵製の細杷をいひ、塵芥を掃除する具。好色産毛(元祿年刊)二之卷に「鍬箒持て門掃き云々」と見えてゐる。

くははぬける　「くは」を見よ。

くはびら　母樣少々鍬平で、十六文半ではきつしりと合ひまする(持統天皇)　彼のひがいすな小男を、己れが大きなくはびらで能うも能うも踏居つたな(曾根崎)
〔鍬平〕鍬のやうな形の扁大な足をいふ。

くはぼく　「角はくはぼく云々」を見よ。

くはやま　二人の子供が朝ぶさ前忘れず必らず桑山飲ませて下され(天網島)
〔桑山〕丸藥の名、小兒の胎毒・腹痛その他諸症にきく良藥としてその名高かつた。豐太閤の臣桑山修理太夫が征韓の役に從ひ、彼地から傳へて己が菩提寺の大阪天王寺口繩坂の上、珊瑚寺から賣出した小兒用の丸藥である。桑山と云ふ李名は修理太夫の氏にちなんだものである。攝陽群談・十六に、「桑山小粒藥。東生郡天王寺町珊瑚寺にあり、桑山法印相傳る小兒萬病の良藥也」。雍州府志・六、土産門上・藥品部に、「桑山小粒。其功粗同ニ東山小粒一、今洛下處處賣レ之、是亦專用ニ小兒之諸病一」。

くはをぬかす　「くは」を見よ。

くはんだ　五月蠅なす疫神・邪神・鳩槃陀・夜叉神・藍婆神(振袖始)
〔鳩槃陀〕梵名(Kumbhanda)である、魔魅の類にて増長天の司配下に屬してゐる。圓覺經に、「鳩槃茶食ニ人精血一、其疾如レ風、變化稍多」。

くひ
「人でもくひでもない」を見よ。

踵を旋さず　重忠をさへ打取らば、頼朝を打たんこと踵を旋すべからず(出世景清)
踵を旋さぬ程早き間の義、時日を遷延せぬをいふ。史記・呉起傳に、「其父不レ旋レ踵遂死ニ於敵一」。

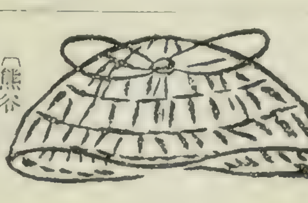
くひぞめ　六日だれの忌明の誕生日の食初のと(嵯峨天皇)
〔食初〕産兒百日を經た時、食膳を据ゑて食初の祝儀を行ふ。元服次第に「生れて百一日といふに善惡をきらはず喰初、男子は男やしなふ也、女子をば女やしなふ也云々」。

くひつみ　ほんだはら・くひつみに土器さすぞ盃ちよつと抑へて(壽門松)
〔食積〕正月元日より十四日まで洲濱やうの物に米を積置いて、十五日の朝その米を小豆粥に煮て食したるよりの名。俗に食積といふは、洲濱やうの物に齒朶・譲葉を敷いて米を盛り、その上に松竹などを立て鶴飾を据ゑ、栗・榧・ほだはら・伊勢海老・柿・柑子・昆布などを盛つたもので、蓬萊とも云ふ、支那で春盤といふのもこれである。

***くびん**　假にも女犯の穢があれば一山暴れて震動し、その身は狗賓に五體を裂かれ(萬年草)
〔狗賓〕天狗の異稱。和訓栞に、「世に天狗のことをかくも名づくるは、頻那(猪頭)夜迦(象鼻)の類なるをもて、天狗の狗と頻那夜迦の類とを合せ呼ぶなるべし。或は狗賓と書きて尊くいへるなりともいふめり」。

***くまがいがさ**　當世の伊達若衆熊谷笠に大小差し(一心二河白道)

(我衣所藏)



〔熊谷笠〕



〔熊谷笠〕

〔熊谷笠〕藺を編んで作つた深編笠。

くまがいざくら　猛き熊谷櫻さへ墨染櫻諸共に、到り到らん彼の岸の(賀古教信)
〔熊谷櫻〕櫻の一種。大和本草に、「熊谷櫻。高さ尺に過ぎずして花咲く、長じて四五尺に過ぎず、彼岸櫻に先立ちて八重の好花開く、櫻の先登なり、花色白くして小紅を帶びたり、按ずるに源平の合戰に熊谷次郎直實攝州一の谷の先登して名を形はすこと平家物語等に記せり、此種餘種の櫻に魁けるを以てこれを熊谷櫻と云」。

熊坂が物見の松　その行方はしら波の、古跡を今に熊坂が、物見の松に行き暮れしが([illegible]靜)

〔藏屋敷〕徳川時代に諸藩主又は麾下の士や、その他大なる寺社では、其領内から廻送した米穀や特産物を貯藏し、これを賣捌く爲に家臣を派して其出納を管せしめた。その屋敷を藏屋敷と稱して、中之島、土佐堀川、江戸堀川などの交通運輸の便利な所にあつて、其屋敷數は百内外もあつた。藏屋敷中には米會所を設けて米穀の取引をなし、米切手を發行し、又は米を擔保として市人に金の調達を命じることもあつた。

***くらゐ**　位を問ふは田舍客、寢て物語る馴染客、太鼓過ぎてと囁くは女郎の手もめの振舞客(女殺)

〔位〕女郎の位。太夫、天神、鹿戀、端、影、汐、月、北向、など總て女郎の位である。また位についての女郎を買ふ料金をもいふ。登樓して女郎の位を問ふは、女郎買の經驗を缺いだ田舍客、野暮のわざである。傾城酒呑童子・第三に、「北向の妻川が袖を控へて、君さん旅のお人か近付きぬ無さゝうな、局へごんせしつぼりと知る人になりんしよ、ヲヲ過分過分客にゐならうが、まづ密かに尋ねたい事があると言はせもあへず、尋ねたい事合點ぢや、わしが位かえ極つた通り五分でごんす、安いものぢや這入らんせ、イヤそんな事ではない」とある、客が密かに尋ねたいと言ふに應じて、我が位を問ふものだと妻川の誤解した早合點する所に、田舍の野暮客は多く位を問ふものなるを知つてゐるからである。

***くらんど**　松が根に幼き者の泣く聲す、藏人を以て召さるればまだ乳離れぬ捨子なり(蟬丸)

〔藏人〕五位藏人と六位藏人とある、大内裡校書殿内の藏を掌る役人であつて、機密の文書や訴訟を掌つたが、後には供御の事から傳宣・進奏・除目・節會の儀式・侍臣名謁・馳使など殿上に於ける一切の事を掌つた。

***くり**　庫裏に各ありけるが(加増曾我)

〔庫裏〕七堂の一。寺院の厨房を云ふ。後には僧房をも云ふ。

くりあゆみ　座敷へくりあゆみ(博多)

〔繰歩〕直立不動の姿勢で徐に足を踏出し歩くこと。繰出し歩み。おろし歩み。繰出しの浮き歩み。

くりからおとし　倶利迦羅落し坂落し(國性爺)

〔倶利迦羅落〕平家物語・卷七、倶利迦羅おとしの條に、木曾義仲の軍が平家の軍勢七萬餘騎を加賀國倶利迦羅谷に攻落したことが見えてゐる、それの如くに谷に敵軍を攻落すこと。

***くりからふどう**　小龍現はれひらりひらりと舞下り、持つたる刃を口に含みくるくると卷きたりしは、くりから不動の如くなり(一心五戒魂)　牙を研いだる其光倶利迦羅不動と謂つべし(嵯峨天皇)

〔倶利迦羅不動〕梵語(Kulkio-Nagaraja)である。不動明王の變相であつて、劔に纏繞せる龍王の形。隨聞記に、「倶力迦者梵語也、此翻云レ龍、纏レ劔故得二倶力迦名一也」。成蓮抄に、「倶力迦龍、智慧大龍猛威大火、燒二滅九十五種外道邪智之相一」。

***くりげ**　栗毛忽ち泥附毛、沛艾鞍もしづまらず(女殺)

〔栗毛〕馬の毛色の名、栗色にて鬣の黑きもの。騮。

***くりしめのしめなは**　懷中よりくりしめの注連繩取出し(蛙合戰)

〔繰締注連繩〕繰締の緒の注連繩になれるもの。繰締の緒は具足の胴の下部にあつたもの。武家名目抄・甲冑部に、「繰締緒、今无」。

ぐりはま　いふ事なす事ぐりはまになり、曾我の運長らへて幾何の憂目をか重ね見ん(會稽山)

「はまぐり」(蛤)の倒さ語、蛤はその合口密なれども、これを倒さにすれば合はぬよりいひ出た語。齟齬すること。太田長孝編・發句きれきれ(元祿十四年刊)卷四・冬の部、粗重の句に、「談合がぐりはまに成る伯父子達」。柳亭種彥編・用捨箱・下卷に、「今ものの齟齬する事をぐりはまといふは、はまぐりをぐりはまといひては聞え難きより出て、言前後なし義をなさざる譬にいひたるが、轉じて彼ものの齟齬ことゝなりしなり」。

くりびん　五十許のくりびん親仁罷出で(嵯峨天皇)

〔繰鬢〕江戸時代男子が鬢髮を剃込んで結髮したもので、中間などはこの結髮をしてゐた。

くりん　痛はしや子を思ふ、恩愛くりんの川波に、生死五蘊の泡消えず(賀古教信)

〔九輪〕塔の棟から突出てゐる柱の周圍に輪形の九つの層あるものをいふ。九輪の下には蓮華の形をした請花があり、九輪の上には水烟といつて、火の燃え上つたやうな形のものがある。「恩愛九輪の川波」とは、恩愛纏綿九輪のやうに渦卷く川波といふ意。

くる　傀儡外道と聞えしは、八萬劫が其間四大海の水を耳の孔に納めて、過去七佛も諸菩薩も水に渇して憂目を見せし(用明天皇)　三目八臂摩醯首羅天毗紐天傀儡僧佉天、一つのしるしを見せ給へと(用明天皇)

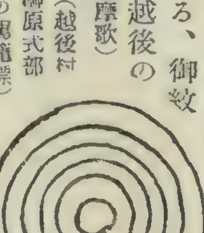
〔鵂鶹〕温露迦(Aulūka)の譯名で勝論外道の開祖である、晝は色聲を避けて山藪に隱れ、夜になつて乞食に出たので、鵂鶹のやうだと云ふところからこの名がある。唯識述記・一に、「成劫末人壽無量、外道出レ世、名二嗢露迦一、此云二鵂鶹一、晝避二色聲一匿二跡山藪一、夜絶二視聽一方行二乞食一、時人謂レ似二鵂鶹一、因以名也」。「鵂鶹僧佉」の僧佉(Samkhya)は數論と譯す、外道である。玄應音義・十に、「僧佉、此語訛也、應レ云二僧企耶一、此云レ數也」。

ぐる　めしろになる此うばばぐるなり、伴之丞様へたつた一言、言入れてつい御祝言濟む事(槍櫨三)

「ぐろぐろ」などの「ぐろ」で輪になる義。一味徒黨。共謀。あひけん。

ぐるぐる　六尺模様はぐる ぐろぐろ、御紋も車は越後の村上(薩摩歌)

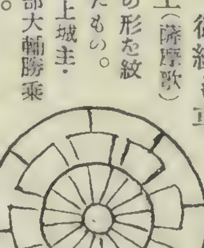
鶉籠標。(越後村上城主・榊原式部大輔勝乗の鶉籠標)



〔ぐるぐろ〕

くるま　御紋も車は越後の村上(薩摩歌)

〔車〕車の形を紋所にしたもの。(越後村上城主・榊原式部大輔勝乗の紋所)。



〔車〕

くるまがかり　武勇の謙信脆く引くべきやうなし、車掛りとて先手より繰引きに引き、旗本と旗本行合ふ樣に備へしは謙信が家の軍法(川中島)

〔車掛〕敵を攻める陣法の名。山鹿素行撰、兵法神武雄備集に、「車かかりといふは、我備をたて切切まはりていくめぐりめに、敵の旗本と我旗本と打合すると積りてかかるを云ふ

け一「蜘手かくなわ」とつづけたのである。「水のくもで」は水の流筋にも分れて流れるのをいふ。伊勢物語に、「水のくも手に流れ分れて、木八つ渡せるによりてなん八橋とはいへる」。後撰集・戀二の部に、「打渡し長き心は八つ橋の、くもでに思ふことは絶えせじ」。平家物語・卷四、橋合戰の條に、「蜘蛛手かくなわ十文字、蜻蛉返水車、八方透さず斬りたりけり」。

くものあし　人忍ぶ草道草に、目も傾きぬ急がんと、又立出づる雲の脚、時雨の松の下寺町に（曾根崎）こなたへ來れと薙刀取つて打かけ、飛ぶが如くに雲の脚、股を滯り（今川了俊）天も凍りて霰散り、雲の脚さへ急潮に（最明寺殿）

〔雲の脚〕雲の往來をいふ。雲の往來は早きよりして、人の足早に急ぐことにもいふ。

***くものい**　梢に巣かく蜘蛛のいを野分の吹きたる如くなり（虎が磨）蜘蛛のいに荒れたる駒はつなぐとも（蟬丸）

蜘蛛の絲。現今關西地方では「くものい」を轉じて「くものえ」といふ。「蜘蛛のいに荒れたる云々」はその條を見よ。和訓栞に「くものい＝蛛の絲也、くものすは蛛網也」。

くものうら　親御に疵でも付いたらば雲の裏でもいひわけはあるまい（振袖始）雲の裏まで尋ねても、（淀鯉）

〔雲の裏〕目に見えぬ外界。目の屆かぬ他界。

くものはたて　「はたて」を見よ。

くもんじよ　八幡公文所の役人數多てんでに割竹大地を敲き（淀鯉）

〔公文所〕鎌倉時代に政治をはかり財政庶事を施行した政所を、その始め公文所と云つた。ここの文は理非を糺し裁判する役所のやうに奮稱を用ゐて公文所と云つたので、實際は八幡公文所といふのはない。

***くやう**　折角お宿申しても供養致さん物もなし（最明寺殿）

〔供養〕亦供資養の義。釋氏要覽に、「大方廣不思議境界經云、供二養佛一者得二大福德一、速成二阿耨菩提一、令二諸衆生皆獲二安樂一、供二養法一者增二長智慧一、證法自在、能了二說諸法實性一、供二養僧一者增二長無量福德資粮一、致レ成二佛道一」。ここの文の供養は僧に食物を施すことを云うたのである。謠曲・鉢の木に、「お宿は申して候へども、何にてお候へ參らせうずる物もなく候はいかに」。

***くらつぼ**　空に知られぬ露の雨、はらはらほろほろ縄目に傳ひ、鞍坪につたふ涙の十方ぐれ（大經師）

〔鞍坪〕鞍の前輪と後輪との間、卽ち人の尻を載す所。

くらつめ　伊豆相模武藏鐙の力革鞍爪かけてしつかと取り（加増曾我）

〔鞍爪〕鞍骨の爪先。平家物語・七、くりからおとしの條に、「鞍置馬十四許おひ入れられたりければ、鞍爪ひたる程にて相違なく向ひの岸にぞ着きにける」。

くらびらき　かの着衣始引替へて、引かるゝ駒のくらびらき（大經師）

〔藏開〕舊曆上の語、年の始に藏を開くによしといふ日。四時堂其諺撰・滑稽雜談（正德三年成）に、「和俗の農工商の類歲始に藏を開き、積蓄の金銀米穀に限らず一切の貨財を取出して用に先て賣買の事を調ぶ、尤其年の始めなれば吉日をえらみて庫藏を開くと云なめり」。巢林子のここの文は、引かるる駒の鞍に、藏開をいひかけた麗麗しである。

くらぶし　膝口よりくらぶしまで、まつくだりにかけ通せば（百日曾我）

「くるぶし」（踝）の轉訛。脛と足首と相繋がる所に高くなれる骨。

くらまのさんしよのかは　折折山へも御出やれ、何も馳走はおりない、昆布に鞍馬の山椒の皮、好い茶をまうそ（堀浦）辛い身過ぎの商ひは山椒の皮、扨は鞍馬の火打石（嵯峨天皇）

〔鞍馬山椒皮〕洛北鞍馬の名物である。黑川道祐撰・雍州府志・六、土產門・菓木部に、「山椒皮。洛北鞍馬土人、山椒木不レ擇二大小一、各三寸許切レ之、入二大釜一煮レ之、而後剝二其皮一、以二葭條一挿レ之賣二市中一、買物法レ串再浸レ水、以レ刀剝二䊁皮一、細剉漬二醬汁一而食レ之、或糟藏亦可也、今細剉日乾贈二遠方一、又出レ自二丹波一者、皮厚而其味爲レ劣」。

くらまのひうちいし　辛い身過ぎの商ひは山椒の皮、扨は鞍馬の火打石（嵯峨天皇）

〔鞍馬火打石〕火打石は火打鎌と打ち合せ、火口に移して火を取るに用ゐる。火打石は鞍馬の名物である。黑川道祐撰・雍州府志・六、土產門上・土石部に、「燧石。處處出、然鞍馬山之產爲レ堪レ發レ火、鞍馬松尾東山腹造二小堂一、一人居二其內一、著二長繩於𦼮蕢一、有二往來之人一則卸二是蕢於往來之路頭一、求二燧石一則多少隨二其心一、入二錢於蕢中一、於レ茲提二舉𦼮蕢一、應二其錢之多少一、而盛二燧石於蕢內一再卸レ之、買者取二得之一而歸、是謂二鞍馬蕢下一」。

***くらもの**　誠にさうぢや、屋敷方か但くらものか（西王母）

〔暗物〕往來の男衒を挑んで色を賣る私娼の一である。「くらや」をも見よ。傾城禁短氣（正德元年刊）三之卷に、「暗者といふは奉公の心懸けもなく、不斷小宿に見世出してゐたまから賣る合點の女、物見遊山の人立のある所へは風俗つくりて、浮氣さうなる男を見かけては、歩く拍子に裾ひろがりて內股の白き所を見せかけ、是にうかれて男詞をかくれば、こはさうなる風をして人なき野邊の方へ行くを、是は釣れさうな物とそろそろついて行きて其身の釣らるる事は知らず、我等がいひまはしではてんと白癡いかな女も釣らぬといふ事ないと言はぬばかりの顏付、是をつなにして度度逢うて大きにしてやる女なり」。次條の「くらや」をも見よ。

くらや　堂島新地蜆川茶屋暗屋賓賣屋で（氷朔日）はしばしのくら屋へ下り、後には濱納屋の蔭（三枚繪）這出のぬくが暗屋を覗く如くにて、肩に手をかけ唄祭文（虎が磨）

〔暗屋〕內證の姪賣屋である。暗屋に居る賣春婦を暗物といふ。「くらもの」を見よ。西鶴の好色一代女・六に、「暗物と云ふは戀の中宿によばれてかりそめの戀を銀二匁、中にも形の見よきに衣類の美しげなるを着せて銀一兩と少し位を附置きぬ、宴にたよる男は面屋渡せし親仁の寺參りにことよせ、養子にきたる人の萬に氣がねこ忍び行くなど、世間恐れぬ人のたよるべき所にはあらず、此自由なる大坂にして詫びてもかかる物好、是を思ふに始末よりおこれり」。年代著聞集・卷之八、元祿十年の條に、「萬年町藤の棚の邊りに闇屋と云へる娼家あり、上中下の品ありて六分・八分・壹匁定る、六分女郎は綿服を着し、八分は器量自慢然もふくたいを着し、壹匁女郎はのつしりとしてよし」。

***くらやしき**　これはこれ信國とや、さる大名の若殿へ藏屋敷から上げらるゝ（女腹切）

也」。ここの文は、花も推して與れるを倶蘭荼花にいひかけたのである。

***くろ**　此處の田の畦彼處のくろ、分入り駈出で搜せども（大礒虎）　山田のくろに落穗を拾ひ（冷泉節）

〔畔〕田の中の堺。あぜ。和名抄に、「畔。和名久路」。

くろがうし　黒格子の梓巫女參られたりと申しける（三世相）　年季の下女を身になして、隱すことをも語りしは黒格子のつじとかや（卯月艶）　あいくろがうしの若巫女の、口と口とも寄せまほし（卯月艶）　冥途の闇の黒格子、つじが許へぞ立寄りける（卯月潤色）　二十二社廻りしまして其ついでに、神子町の黒格子お辻の方へ在所の衆が呼ばしやんして（卯月潤色）

〔黒格子〕大阪の六萬躰といふ地から天王寺寺町へ出る處に東へ通じてゐる狹き町がある、これを以前は神子町と云ひ、梓巫女の住家が多かつた。黒格子と云ふのも此處にあつた梓巫女の家で、格子を黒く塗つてゐたからの名である。ここの文に「つじ」とあるは黒格子の梓巫女の名である。「あいくろし」「あづさみこ」をも見よ。皇都午睡・初編中に、「梓巫子。天王寺のはやし町は梓巫女の住める所にして、二季の彼岸には在所の人のここに來りて、亡き人の口寄するとて、梓弓に其鬼神を招き往事を泣く。殊に二季の彼岸にひとしほ哀れに覺ゆかし、このはやし町に住める巫女の名を昔めきてをかしければ書付く、橘屋小女郎、隱居藤、黒格子の元家、梅檀の木の姉、藪の内の龜、升屋の小女郎、黒格子の万、黒格子の嫁、この餘にも數多ある中に黒格子殊に名高し」。浪華百事談・九・みこ町の條に、「今六萬躰とよべる地より天王寺てら町に出る處に東へ通ずる狹き道路あり、是を明治以前には神子町と呼び、梓巫女の數軒住みける地なり、其家皆格子つくりにて、表の入口の外には長三尺許の三巾暖簾を木綿にて製し、それに大いなる紋を染拔き、假字にてくろがうし何何、やぶのはた何何など巫女の名をも染拔き、入口の上には注連繩を張り、黒格子と云へるは格子を墨にて塗り、家の内の表の間には何か祀りて薄暗くなせり、此に俗人死せる者の口寄せと云へる事を往いて依賴すれば、巫女出て坐し前に小さき箱を置き、弓を手に持ち箱を叩き、まづ神おろしと云へる事をなし、次に亡者の來りて言葉を發することをなすに、さめ哀れに言ひ、其謝儀を請ふ者より受くるなり、彼の東國にある信濃みこと云へると同様の者にて、此は他に出ずして家にこなすものなり、維新の際停止となれり」。



〔梓巫女（人倫訓蒙圖彙所載）〕

***くろき**　大宮人の御竈木や、くろ木召せ召せ柴召されぬか（用文章）

〔黒木〕木を尺餘に切り、土竈の内に入れて黒く蒸したもので、大原八瀬の婦女頭上に載せ、薪として賣り歩く。黒川道祐撰・雍州府志・土産門・竹木部に、「黒木。多出レ自ニ洛北矢背・大原・鞍馬一、土人入レ山伐レ木尺餘、然後作ニ土竈於山中一、竈内四方積ニ所レ伐之木一、其中央燒ニ生薪一、葉乾依レ之、其色黒故謂ニ黒木一、又稱ニ竈木一、或號ニ燒物一、三四日葉後出レ之、……又薪柴并炭、毎日村婦戴ニ頭上一、村夫負ニ肩背一、又牛馬載レ之、來ニ賣京師一」。序に云、黒木・薪を召せと言ふは所謂おはらめ（大原女）である、龍華越あたりの山中の女子黒木・薪などを頭上に載せ、若い女子は紺、老女は小紋の着物裾高うからげて、白脚袢に草鞋をはき、京に出て賣る、花主への土産として春は櫻・夏は山吹・躑躅花・秋は紅葉の枝を薪に添へて行く、古來京都の雅趣である。寛文五年刊、版心「ひやう」（書名未詳）とある本の第二卷に、「水の尾には柴を賣る、是は女の役にして、つれだち出し裝束は、紺の木綿の單物白き木綿のしごき帶、足袋や脚布半をしめはいて、姿は島の爽なり、されども心やさかたに月をもをしみ、花を見て片手に折り持ち添へ、京町中を柴召せと賣りてこそは通りけれ」。

黒熊の片鎌　黒熊の片鎌は高麗までも隱れなき大隅薩摩の御大將（薩摩歌）

槍標」。

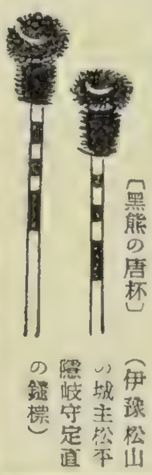

〔黒熊の片鎌〕

（「大隅薩摩の御大將」とあれば、鹿兒島城主・薩摩守島津綱貴の先代光久が大隅守薩摩守であつたので、それによつて云つたのであらうが、但黒熊の片鎌ではなうて、



である。日向佐土原城主・島津惟久の槍標と思違へたのであらう）。

黒熊の唐杯　伊豫の松山は黒熊の唐杯（薩摩歌）


〔黒熊の唐杯〕（伊豫松山の城主松平隱岐守定直の鎗標）

黒熊の如意寶珠　黒熊の如意寶珠、美濃の加賀籠は輪抜に角の棒、納の主なり（薩摩歌）


〔黒熊の如意寶珠〕槍標。（美濃加納城主・戸田丹波守光永の槍標）。

くろしよゐん　「しろしよゐん」を見よ。

くろとのごしよ　約束なれば天皇は助けんと、取つて引立て黒戸の御所に押籠め（大職冠）

〔黒戸御所〕清涼殿の北にある殿舍。拾芥抄に、「黒戸御所。在ニ清涼殿北、瀧口戸西一」。故實拾要に、「黒戸、東西四間、南北五間也、此外に小き間あり」。徒然草に、「黒戸は、小松の御門位に卽かせ給ひて、昔ただ人におはしまし時まさなごとせさせ給ひしを忘れ給はで、常にいとなませ給ひける間なり、御薪にすすけたれば黒戸といふとぞ」。

くろび　せめて未來のくろびをのがれ（大經師）

〔黒日〕舊曆上の語で、萬事凶なる日。大雜書（寛永十一年刊）に、「くろ日。此日よろづわろし」。曆日諺解に、「黒日一名受死日ともいふ、俗に辷日といふなり、諸事に忌むべし、別して病人を吊ひ、藥を服し、或は鍼灸旅行葬禮等には深く忌むべし」。巣林子のここの文は、黒日に苦勞をきかせたのである。

くろぶし　膝口よりくろぶしまで（百日曾我）

「くるぶし」（踝）の轉じた語。足首と脛と相繫がる關節で突起した所。

くろぼし　御屋形へも參らず直に尋ね參りしが、やたけ心の一念のく

也、但人數により地形により口傳云々」。甲陽軍鑑・永祿四年九月十日の條に、「信玄公聞召し、さすが浦野共覺えぬ事を申す物かな、それは車がかりとていくまはりめに、旗本と敵の旗本とうちあはせて一戰する時の軍法これなり」。

***くるまぎり**　因果はめぐる車斬り、二つになつてぞうせてける（十二段）

〔車斷〕胴を横に斷り落すこと。輪切り。

くるまざき　法に背く慮外婆婆、車裂牛裂にもと嘸無念御立腹（川中島）

〔車裂〕廣添壒囊抄・十一に、「車二兩に片足づつ結付けて、兩方へやりのけて裂くなり」と見ゆ。

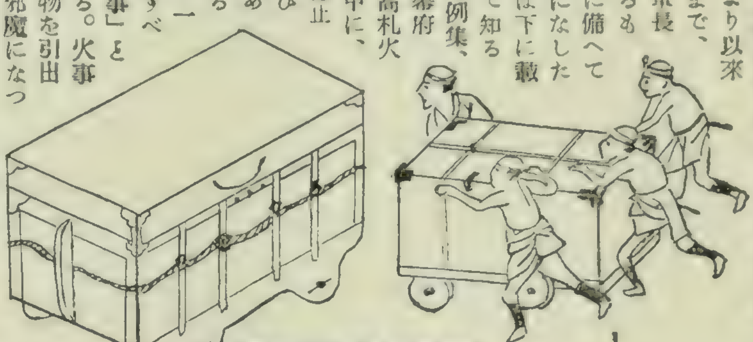
くるまだいまつ　若者どもに腹巻させ、車松明引提げ引提げ、翁がもとに押寄せ門を破つて内に入り（十二段）

〔車松明〕嬉遊笑覽・火燭部に、「義經記・二、油さしたる車だいまつ、是は圓光大師傳・一・夜討の圖に見えたり、束ねたる松明を三つ四つほどを一つにし、中を結て車の如くにして、めぐりに火をつけたるを家内に投入れて明りとするなり、是に油をそそぎたるべし、こは常に用ふべきものならず」。義經記・二、かがみの宿にて吉次宿に强盜入事の條に、「究竟の足輕ども五六人はらまききて、油さしたる車松明五六たひに火をつけて天に差上げければ、外は暗けれども内は日中のやうにこしらへ」。

くるまながもち　走つて近付く車長持。蓋をあけてぞ隱れいる（卯月袍）

なほしも思ひ深草の、榻にかよひし車長持、めぐり逢ひたや語りたや（卯月潤色）

〔車長持〕黑川道祐撰・雍州府志・七に、「長櫃大者、其底兩所施二小車輪一、著レ繩而牽レ之、出入有レ便、是謂二車長持一」。山崎美成撰・麓の花に、「天正より以來明暦の頃まで、都鄙共に車長持といへるものを家家に備へて非常の具になしたり、其形は下に藏するを見て知るべし」。格例集、正德元年幕府奉行より高札火事定書の中に、「車長持停止す、たとひ誂へ候者ありとも造るべからず、二一切に商賣すべからざる事」と見えてゐる。火事にこんな物を引出されては邪魔になつて困るので造ることまで禁じられたのである。されば正德頃から次第に廢つたのである。



〔車長持（麓の花所載）〕

くるまのいつつを

「いつつをのくるま」を見よ。

くるまぶね　和田の岬の車舟、浮世をめぐる例かや（天神記）

〔車舟〕和訓栞に「くるまぶね＝車船の義、左右に車をつけ水を揺て舟をやる也、めぐりきぬわだの御崎の車船くるしき旅の日數なりけり」。

くるりのや　水にくるりの矢の如く馳せ廻れば、追ひ廻し近寄る透間の水放れ（隅田川）

〔猏矢〕矢の先に小さく輕い目無しの鏑を附けて浮子とし、鏃に雁股などを用ひ、水上を射流して水鳥の脚を射る矢。

くるわさんがい

「さんがい」を見よ。

くるわやう　髪の結振小利口に、ひつくるくる廓樣（卯月袍）

〔廓樣〕遊里の風。遊女めいてゐる姿。

***くれ**　靫の鞠の色もよく、聲もあり香の音、くれもしみてぞ聞えける（持統天皇）

蹴ることをいふ。古くは蹴を「くゑ」と訓じ、轉じて「け」の拗音につまり、また轉じて「け」となり、「け」は「く」に通じ。その活用の已然形「くれ」といふ。詳しくは箋注倭名類聚抄・卷二、蹴鞠の條を見よ。この文に、「聲もあり」とあるは、鞠を乞ふ聲である。「ありいありや」を見よ。

***くれたけの**　いとど思に呉竹の、節を習ひし淨瑠璃も（重井筒）

〔呉竹の〕ここの文、「思にくれ」を呉竹にかけ、「呉竹の」は節また世にかかる枕詞である。古今集序に、「呉竹の憂きふしを人にいひ」「呉竹のよよに聞え」。

くれなゐの調　あかうの胴に加賀革、くれくれなゐの調を千鳥がけにかけさせ（雪女）

〔紅の調〕鼓に掛けた紅の紐緒。「くれなゐ」は「くれのあゐ」（呉藍）のつまつたもので、初め呉から來り、染めること藍のやうだとの義で、紅をよんである。「くれくれなゐ」と「くれ」を重ねたのは、「くるくるわやう」（くるわやうを見よ）とあるやうに、語調を面白う飾つたのである。

くれはどり　聞くに心もくれはどり、あやなや昨日今日までも（曾根崎）

〔呉織〕應神天皇の朝、呉國より奉つた織女を呉織漢織といふた。巣林子のここの文は、聞くに心もかきくれを、くれはどりといひなして、漢織のあやから、あやなやにいひつづける序に用ひたもので、呉織漢織の織女に關係ない。難波土産卷一にこの文を解釋して、「應神天王の御時使を呉國へつかはして、綾織る女を求め給ふに、呉國四人の綾織り女を送れり、其中に呉織穴織と名付くるありし故、これよりしてくれはどりといふ詞をうけては、あやとつづる也、我も心のくるるといふをいひかけて、くれはどりといひたる故、あやなやと受けたる古歌の心にかなひておもしろし、古歌にくれはどりあやにこひしくありしかば、ふたむらやまもこえずなりにき」、と見えてゐる。

くれめす　娘よ妹よ兎せろ角せろとぎやつて、りんによがつてくれめせかし（女護島）　りんによぎやあつてくれめすが、身にしみわたると語らるる（女護島）

〔呉召〕「下さる」の意にいふ薩摩國訛である。「召す」は聞召す・思召すなどいふ召すである。

***ぐれん**　ぐれんの井戸掘り焦熱の地獄（大經師）

〔紅蓮〕紅蓮地獄の略、八寒地獄の一なる鉢特摩地獄を云ふ。寒氣激甚なる爲に身體劈裂して恰も紅蓮花瓣の如くなるより云ふ。

くれんだけ　徒の枕の起臥を花も推してくれんだけ（釋迦）

〔倶蘭荼花〕紅蓮華をいふ。玄應音義・第一に、「倶蘭吒花或云二拘蘭荼花一、此譯云二紅色花一」

本阿彌派の體を喜び、遂に一新作意を出して光琳風を創め、茶道及び漆器の描金に巧みである。享保元年六月年五十六で歿した。「光琳風」とは光琳の畫風。「光琳松」とは光琳畫風の松。(序に云、元祿時代に其名高かった光琳は衣類の模樣をも描いたものと見え、好色文傳受(元祿十二年刊)巻五に、「我身進じ申まゐらせ候と中候白繻子、いよいよ墨繪の松光琳に書かせ申候」と見えてゐる)。

くわくきよ 雪の内に筍出で、金の釜を掘出せし、孟宗・郭巨に優っても(百合若)

〔郭巨〕支那二十四孝の一、漢隆慮の人、母に仕へて至孝である。家貧しく母その孫を愛して常に食を分つ、郭巨・妻に語って言ふに、母が餌を分つは子あるが爲である、子は再び得られるであらうが母は得られないとて、その子を埋めようとし、地を掘ること三尺で計らずも黃金の一釜を得た、その上に天・郭巨に賜ふと丹書してあつたと云ふ。

***くわくらん** この暑さでは霍亂して(氷朔日) 弟の四郎くわくらんと云ふ病にて俄に五體を惱まし(大磯虎)

〔霍亂〕夏季激烈な日光直射或は飲食物にあてられて起る劇しい吐瀉病の名。支那にて霍亂の語には傷暑の意がある。卽ち今いふCholera nostras の病症である。

くわくわんふ 南海の火浣布・刺支國の馬肝石(國性爺)

〔火浣布〕支那南荒の外の火山に棲める鼠の毛を織つた布で火に燒けぬと云ふ。思ふに石綿で織つた布のことである。周書に、「火浣布垢、必投二諸火一、布則火色、垢則灰色、出レ火振レ之、皜然疑二乎雪一焉」。

***くわげん** 豫て栢圖の官人どもくわげんの吹物大鼓鉦(大職冠)

「くわんげん」(管絃)の撥音「ん」の略された語。管は笛の類、絃は琴の類。音樂の意にいふ。

***くわげんけい** 唐朝に傳はる花原磬・泗濱石・面向不背の玉、この三つの寶を賴みの引出物にて和國に渡し(大織冠)

〔花原磬〕石で作った樂器の名。謠曲・海人に、「興福寺へ三つの寶をわたさるる、花原磬・泗濱石・面向不背の玉」とありて、謠曲拾葉抄に「或云花原磬は南圓堂の西北正法院にあり、面向不背の玉・泗濱石は西金堂にあり、此二物は人の見る事なし」。舞の本・大織冠に、「花原磬と申は打鳴して其後に聲更に鳴り止まず、とどめんと思ふときには九條の袈裟をおほふなり」。興福寺流記に、「華原磬。抑此磬は何の功能ありてか寶物なるやと僧都に問ふ、答へて曰く、此石は前佛の佛法を後佛の出世に傳ふるの功能あり、故に積善磬と名付く云々、泗濱石は魯國の泗水に浮び流れる石なり、故に浮磬といふ云々、磬聲淸うして法度樂曲に叶ふ、而るに大唐の玄宗皇帝の時、泗水の石を棄てて華原石を以て磬を作るの間天下大に亂る、故に之を判ずるに五音に叶はざるか、云々」。寺社寶物展閱目錄(寬政四年成)三、興福寺の條に「華原磬、泗濱石、此二品之儀に付種種附會の俗說有之候へども、妄誕不レ足レ取儀に候、乍レ去此二品何れも唐物に相違有間敷候、華原磬者尋常之金鼓にて、何方にても法會に用候、品品御座候由、泗濱石且又石にて作候、雲磬にて御座候」。

くわこしちぶつ 「しちぶつ」を見よ。

花山の幕 入來る人や歸るさや、花山の幕か袖續く、貴賤群集は冬ながら、心ぞ彌生となりにける(二枚繪)

貞享寶永頃は花見遊山の人人小袖を脫いで紐にとほし、これを幕のやうに張つて花見の酒宴をした。群衆の美衣の袖を連ねて込合うてゐる有樣は、恰も花見遊山の小袖幕を見るやうなのでかく云うたのだ。西川祐信畫、美人繪本(享保十五年刊)に、櫻樹に幕を張り、其の上に派手模樣の小袖を懸け渡せる畫を載せてある。

***くわしや** くわしやも亭主も氣の毒がり(女腹切) 小菊遠目にはつと驚き、申し花車さん・同じ道ばかり(女殺) 中の島の八右衛門九軒の方より淨瑠璃聞付け、やあ皆聞知つたよれの聲聲、花車内にかとつつと入り(冥途飛脚) 花車が譏く口舌の門、遣手が叩く禿が囀り、皆夢の間の境涯と(壽門松)


〔くわしや (百人女郎品定所載)〕

〔花車〕遊女屋の主婦をいふ。蓋し「くわしや」は火車で、遊女を折檻する惡心の婆婆で、來世は火車地獄に墮ちるとの意よりの稱なるが、火車は聞き苦しい故に花車と書いて風流の名としたのだといふ。一說に遊女を花に喩へて、花を廻はすといふ意であるといふ。女重寶記(元祿十五年刊)巻之一、女品定の條に、「下ざまの(妻)をかかといふ、子あれば子持といふ、揚屋茶屋のを火車といふ、花車にはあらで怖しきといふの名なり」。本朝俚諺に、「京都江府などにて惡心の老婆を火車婆とよぶ、因果經云、今身作二後母一、讒二冠前母兒一者、死墮二火車地獄中一、來世にては必火車地獄に墮すべき婆子(ばば)なりとて、火車となづけたるものなるべし」。異本洞房語園には、花車は花に廻るといふ意かと云ひ、其他にも說あれど記すにも及ぶまい。(「かこひ」「ふたせ」の條の畫をも見よ)。

くわしよのくに 夢中に華胥の國に到り、天下を治め給ひし黃帝は聖人ならずや(天神記)

〔華胥國〕支那上古の黃帝が晝寢して夢に遊んだ歡樂境。列子・黃帝篇に、「(黃帝)晝寢而夢、遊二於華胥之國一、其國無二師長一、自然而已、其民無二嗜欲一、自然而已、不レ知レ樂レ生、不レ知レ惡レ死、故無二夭殤一、不レ知レ親レ己、不レ知レ疏レ物、故無二愛憎一、乘レ空如レ履レ實、寢レ虛若レ處レ牀、雲霧不レ硋二其視一、雷霆不レ亂二其聽一、神行而已、黃帝既寤、怡然自得曰、今知二至道不一レ可二以レ情求一矣、又二十有八年、天下大治、幾若二華胥氏之國一、而帝登假」。

***くわせい** 華麗は唐の華淸を表し(國性爺後日) 華淸の池水も終には涸るる世のおきて(弘徽殿)

〔華淸〕華淸宮は支那驪山下に在つて、もと溫泉宮と云つたが、玄宗皇帝の天寶六年改めて華淸宮と名付け、嘗て楊貴妃と同車してこの宮に遊んだことがある。

くわだ 昔のくわだが仙方を傳へ(薩摩歌)

〔華陀〕支那古代の名醫、字を元化を云ひ、東漢・沛の人である、養性の術を曉り、方藥に精しく、針灸にも妙を得てゐた。詳しくは後漢書・方術傳について見よ。

ゐぼしを見しらせたり(用明天皇)　滿座の人人一統に、これは黑星よき推量(弘徽殿)
〔黑星〕的の正中にある黑點をいふより轉じて、狙ふ所。目當所。

くろほろの矢　くろほろの二十四さいたる箙かき負ひ(最明寺殿)
〔黑保呂の矢〕鳥の兩翼の下に連れる羽を保呂といふ、その保呂の黑き鷹の羽で矧ぎたる矢。平家物語・卷八・山門御幸の條に、「二十四さいたる黑ほろの矢おひ」。

***くろめる**　彼の人の身をもくろめてやりたいの(丹波與作)　一文しやんとくろめて突いて見たれば、悲しやの、八文であつたもの一文はねて七つにして(丹波與作)　旦那な名代に立てばどうくろめうとも自由なこと(淀鯉)
〔黑〕隱蔽す。くらます。ごまかす。あざむく。

黑羅紗の杉形鞘
「杉形鞘」を見よ。

***くろろ**　細目にあいたる藏の戸をあけて内にそつと入り、くろろをはたと落しける(卯月椛)
「くるる」(樞)の轉じた語。おとし戸の錠。

くろんばう　額は煉味噌阿克將、目ばかり光る鍋の底、くろんばうとも謂つつべし(國性爺後日)
〔黑坊〕「くろばう」に撥音「ん」の增加した語で、赤坊を「あかんばう」、立坊を「たちんばう」といふ類であらう。黑色人。一說に崑崙奴であつて、晉書に「孝太后形長而色黑、宮人皆謂二之崑崙一」とあつて、印度錫蘭島の都([illegible])の人は黑色なるを以て、凡て黑人をいふ稱となつたといふ。

***くわ**　槃特が愚痴も文殊が智惠、終に羅漢の果を得たり(釋迦)
〔果〕佛果の略。菩提に同じく、不生不滅な眞如の理を證悟した聖智の義。智。覺。

くわ　「くは」を見よ。

***會稽**　會稽の恥辱を雪ぎ(薩摩歌)　我が運命の車の輪、何時か會稽の峯には廻り上るべき(國性爺)
支那春秋時代、越王勾踐と吳王夫差と戰ひ、勾踐敗れて會稽山に依り降を請うたが、後勾踐の臣范蠡の謀によつて吳を滅して、その恥辱を雪いだ。史記・貨殖傳に、「范蠡既雪二會稽之恥一」。この故事よりして恥辱を受けたものに對して報復することに云ふ。

くわいけい　店一軒の主になり、商ひもしにせて、親方一家を振舞ふとは、此方ともくわいけい其身も手柄(今宮)
古院本「くはいけい」とある。蓋し「くわつけい」(活計で、その條を見よ)の延びた語で、關西言葉にはかく延びていふ語はその類例他にもある。よろこび(歡)。歡樂。

くわいじゆ　抑も和漢大臣の位たる身は、君を諫め國家の龜鑑たるを以て槐樹當職の規模と仕る(天智天皇)
〔槐樹〕槐は「ゑんじゆ」である。周の代朝廷に三槐を植ゑ、三公之に面して坐した故事により、槐樹を大臣の意に用ゐる。

***くわいしよ**　隣が町の會所、さあさあおよびや(博多)　有無の御下知あるまでは外へは落し申されず、會所へ捕つて押込めよと(堀川波鼓)
〔會所〕町人の集會所であつて、町年寄の公事訴訟を取扱ふ所、卽ち町の役所。「町年寄」をも見よ。

くわいせい　「是の如く我云々」を見よ。

***くわいせん**　十四端の廻船に、船頭舟子は褞袍着て(博多)
〔廻船〕北國東國を往來する大船をいふ。和漢三才會圖卷三十四、船橋類、舶の條に「北國東國往來稱二之廻船一、三百斛以上至二千五百斛一」。「たん(端)」をも見よ。

***くわいろく**　松明檜の檜皮に移り、折節山風烈しく、諸堂學寮一宇も殘らず回祿に及び候(孕常盤)
〔回祿〕火災。左傳・昭公十八年の條に、「禳二火于玄冥回祿一」とありて註に、「玄冥・水神、回祿・火神」。

***くわうかうけつ**　紅葉の秋の夕、黃かうけつの林色を含むといへども朝の霜に衰ふ(賀古教信)
〔黃纐纈〕黃色の絞染。ここの文は黃葉した林を見立てた語である。「紅花の春の朝云々」を見よ。

***くわうせきこう**　黃石公が子房に授けし所は未だ學び得ず候へども(大掛物)
〔黃石公〕支那春秋時代の隱士である。下邳の圯上で張良(字は子房)に六韜三略の兵書を授けて、濟北穀城山の黃石は卽ち我であるとて見えずなつたと云ふ。「下邳に授かりし云々」を見よ。

くわうせん　亡君判官がくわうせんの闇を照すべき(碁盤太平記)　上は碧落下黃泉を探せども求めず(孕常盤)
〔黃泉〕地中の泉の義。冥土卽ちよみぢの意にいふ。左傳・隱公元年の條に、「誓レ之曰、不レ及二黃泉一無二相見一也」とありて註に、「地中之泉、故曰二黃泉一也、服虔云、天玄地黃、泉注二地中一、故曰二黃泉一」。

光明遍く云々　「光明遍照」を見よ。

くわうみやうく　四七日は光明供(蟬丸)
〔光明供〕光明眞言(次條を見よ)を唱へて供養すること。

***くわうみやうしんごん**　(伊豆日記)
〔光明眞言〕陀羅尼の名。この陀羅尼を誦すれば佛の光明を得て諸の罪障を除き、西方安樂國土に往くといふによつての名。卽ち「唵阿謨伽毘盧遮那摩訶母怛羅摩尼鉢納摩入嚩羅波羅波利多耶吽」の眞言である。

***廣目**　(天神記)
廣目天王を云ふ。目が廣大であるによつていふ。四天王の一で專ら罰惡を主り、須彌西方の守護神である。

***くわうもん**　黃門公の御使者梅の非殿とは御自分の儀候な(椛狩)
〔黃門〕中納言の唐名。黃門は秦・漢の職名である。宮門の闥黃色であつたので黃門と云ひ、黃闥の内に勤務する者を黃門侍郎と云うた。我國の中納言に相當する。

くわうやき　我はこれ人間の慧命を斷つ欲天のくわうやきなり(西王母)
〔曠野鬼〕曠野神とも云ふ。衆生を殺しその血肉を食つて生活してゐたが、佛・祇園精舍から王舍城に赴く途中、曠野鬼に逢うて之を敎化されたこと、南本涅槃經卷十五に見えてゐる。

くわうりん　光琳風の築山(酒呑童子)　くわうりん松の三保が崎(蛙合戰)
〔光琳〕尾形光琳は京都の人、江戸に行き狩野常信について學び、また土佐の畫法を好み、

くわんいご 呂望・管夷吾再來して三軍の帥を司る(千疋犬)

「くわんちゆう」を見よ。

くわんおんにじふはちぶしゆ 「にじふはちぶしゆ」を見よ。

＊**くわんぎをん** くわんぎをんの花の下、錦華帳の月影に(孕常盤)

〔歡喜苑〕善見大城の北門の外にある大林園であつて、諸天人この林園に入れば歡喜の意自ら生じるによつて名付くと云ふ。起世經に、「善見大城北門之外、經二十由旬有二大林園一、名曰二歡喜一週廻一千由旬」。太平記・卷二十九、師直以下誅せらるる條に、「歡喜苑にさまよふらんもかくやと思ひ知られたり」。

＊**くわんくわつ** 門を早く明けろ番太奴は居らぬか、番太奴番太奴と、くわんくわつ聲にびつくりして(扇八景)

〔寬闊〕伊達驕奢でゆつたりしたこと。合類節用集・卷八・言辭門に、「寬闊」。傾城禁短氣・卷六に、「人も見かへる程の寬闊なる衣裳をかざり」。

＊**くわんくわん** どうど坐してくわんくわんたる聲をあげ(用明天皇)

〔桓桓〕猛く威ある樣をいふ。書經に、「尙桓桓、如レ虎如レ貔如レ熊如レ羆」。

＊**くわんげん** 管絃の道文の道(國性爺) 管絃講を以て水施餓鬼を仰付けられ(天鼓)

〔管絃〕管は笛、絃は琴の類、以て音樂のことにいふ。管絃講は、亡者追善の爲に音樂を奏し佛事を營むこと。謠曲・天鼓に、「天鼓が跡をば管絃講にて御弔ひあるべきとの勅諚なり」。

くわんざし 腰より貫緡なる錢を取出し(傾城佛原)

〔貫緡〕一貫緡。一貫は百文であるが、貫緡はその實九十六文しかない。心中萬年草にも、「矢張九十六文で百づつ遣つて置かつしやれ」と見えてゐる。「くじふろく」を見よ。

くわんじ くわんじと笑める御有樣(十二段)

〔莞爾〕微笑の貌。論語・陽貨篇に、「夫子莞爾而笑曰、割レ鷄焉用二牛刀一」。

＊**くわんじやう** 天津児屋根の御神を假に勸請ありければ(大織冠)

〔勸請〕神また佛菩薩の來臨を求めることを云ふ。祭祀法要の時に先づ神または佛菩薩の影向來臨を請求する誦讀文を用ゐる。廣弘明集・三十四・淨經子に、「勸請者慇懃之至意也」。

＊**くわんじん** 師走の果にこの如くいき勸進・諸商人、春とても無いこと(冥途飛脚) 東大寺建立の勸進と承り候、定めて勸進帳の候べき(凱陣八島) 勸進能の地謠に雇はれ戾る留守の中(松風) 姉様のこれの勸進柄杓の、笑顏好しとて柳が招く(歌念佛)

〔勸進〕勸誘進導の義、轉じて佛寺などに要する金錢を諸方から募集すること、及び募集する者をいふ。「いき勸進」の「いき」は生で、勸進を忌み罵つた語である。「いき」を見よ。「勸進帳」は、勸進の趣意を記してあつて寄進を請ふ帳で、其あとに寄進者の姓名及び寄進の金高などを記すのである。凱陣八島のこのあたりの文は、謠曲・安宅に據つたものである。「勸進能」は、勸進の爲に能樂を催し、見物人から金錢を集めて寄進するのである。「勸進柄杓」は、巡禮者が勸進の爲に人の門前に立ち、報謝を與へられた時差出して受ける柄杓である。熊野修行の類は法衣を纏ひ手甲をかけ、勸進柄杓を持つて諸國を遍歷した。「うたびくに」をも見よ。

くわんじんくわんくわんぼふ さればくわんじんくわんぼふに悟く、敎門恰も滑かなり(大原問答)

〔觀心觀法〕觀心とは心性の妙理を觀ずること、觀法とは觀心の法、卽ち明了に眞理を觀察すること。

＊**くわんす** 色の黑さを喩へて申さば鍋よ茶釜よふすぼりくわんすや(一心二河白道)

〔鑵子〕淸波雜志に、「歐人持二水罐子一」とあり て、水注ぎの具である。我國では湯を沸かすに用ゐる金屬製の具をいふによつて鑵子と書いてある。茶釜。

＊**くわんたい** 祐經えせ笑ひ、緩怠なり忠常、以前は以前今は今(百日曾我) やあおのれは緩怠者、秩父が下郎また者の分としてこの祐經に慮外をなし(百日曾我) 今死ぬるお人にちよつと見舞に往つたとて、科緩怠になるならば殺しなりとどうなりと(酒吞童子)

〔緩怠〕おこたる義、轉じて、橫着。科。過失。無禮。保元物語・爲義最期の條に、「淸盛旣に叔父を誅す、何ぞ緩怠せしめん」。謠曲・正尊に、「身に於ては全く緩怠あらざる趣起請文に書きあらはし唯今御目に懸くべし」。狂言・橫座(大藏流)に、「被官にはちとくわんたいに御座らう」。

＊**くわんちやう** これぞ我が一期の灌頂、未來の血脈疑ひなう成佛します(唐船噺) 高野山に伴ひ灌頂加行を勸めさせ(以呂波)

〔灌頂〕法水を受者の頂に灌ぐ式である。上古印度で金輪聖王・銅輪聖王・鐵輪聖王相繼いで王位に卽いた時皆灌頂の式をしたこと、金剛頂經等五部祕經などに見えてゐる、かく諸王が太子に國を讓るとき、四大海の灑水を金瓶中に入れ、これを太子の頂に灌ぐ例に倣うて行ふに至つたのである。さて灌頂中法を傳へるを傳法灌頂といひ、佛緣を結ぶを結緣灌頂また受明灌頂といふ。ここの文にあるは結緣灌頂をいうたのである。灌頂の法式の準備として豫修する修行を灌頂加行と云ひ、眞言宗で行ふ法式である。

＊**くわんちゆう** 管仲が九度諸侯の會も斯くやらん(國性爺) 伍子胥が夫差に於ける、管仲が桓公に於ける、次忠下忠と謂つべし(虎が磨)

〔管仲〕管夷吾・字は仲、支那春秋の世・齊の桓公の臣である、桓公を助けて諸侯の覇たらしめた。史記・管晏傳に、「管仲旣用任二政於齊、齊桓公以覇、九二合諸侯一二匡天下一、管仲之謀也」。

＊**ぐわんにん** 早廣怒つて、これ願人め、馬上にも用捨せず傘をひらめかし落馬させつる奇怪と(蟬丸) 尤も願人風情の賤しき者の事なればと嘲けられ(川中島) 主を失ひ武士は立つまじ、剃りこぼつて願人坊主・鉢開(伊豆日記)

〔願人〕願人坊主の略。昔時人に代つて願がけの修行・水垢離などせし乞食坊主を云ひ、轉じて、門戶の前に立つて施物を貰ふ坊主。乞食僧。

ぐわんほどき 神神に先づ願ほどきに悅びの幣帛を上げ(淀鯉)

〔願解〕神佛へ祈願をかけて事が成就した時、その禮參りをすること。

ぐわんやくつむ 東面に面痩せて、

***くわたい** すりめ、ぬかせぬかせ、いざ此くわたいに帶解いて裸にせん(娥) 花の都に美女なきやうになしたる、その過怠の一貫文(嵯峨天皇)

〔過怠〕「あやまちおこたり」の義なるが、轉じて過料をいふ。和訓栞に、「くわたい。過怠と書けり、今いふは過怠によりて贖物を出すの類をいへり」。

***くわたく** 何時か火宅を出船(藤摩歟) 長へに火宅に遊び共に苦海に沈む(釋迦) 身を知る秋の哀れさも火宅を出づる緣なれや(千疋犬)

〔火宅〕衆生の五濁八苦を火に喩へ、吾人が流轉せる欲界・色界・無色界の三迷界を宅に喩へて、三界の衆生が五濁八苦の爲に安穩を得ざること、恰も屋宅の火災に罹りて安居する能はざる如きであるとの意。法華經・譬喩品に、「三界無レ安猶如二火宅一」。

ぐわち 花車が轟く口舌の門、遣手が叩く禿が睡り、皆夢の間の境涯と、破ればぐわちもなかりけり(壽門松)

〔月〕見世女郎また端女郎と云ふ類の中でも下位の遊女で、勤銀一匁のもの。「ぐわち」(月)の名義については、この遊女の勤銀一匁であるので、謠曲・松風に、「月は一つ」とあるを取つて云うたのである。「しほ」(汐)の條をも併せ見よ。後には勤銀高くなつてもなほこの稱を用ゐた。御前義經記(正德二年刊)に、「端女郎は鹿戀より下、みせ女郎を云ふなり、替名はけちとも火打とも山家とも局女郎とも端とも小松とも云ふ、位は一(勤銀)を一寸とも月とも云ふ」。「破ればぐわちもなかりけり」とあるは、「月」に「瓦智」をいひかけたのである。次條をも見よ。(「しほ」の條の畫をも見よ)。

***ぐわち** 火入の灰に目もくらみ、粋もぐわちも入らばこそ(虎が磨) えぐわちな・言はでも知れたこと、何程美しうても器量に惚れることではごあらぬ(關八州)

「ぐわんち」(頑癡)の撥音「ん」の脫落した語で、「おんこと」(御事)をおこと、「あんも」(餡餅)を「あも」、「れうけん」(料簡)を「れうげ」、「ぎよしん」(御寢)を「ぎよし」といふの類である。「頑癡」はかたくなでおろかな義。野暮。不粹。蕣塵物詩に、「飲酒耕二頑癡一」。これを瓦智と書くは當字である。色道大鑑・人倫部に、「瓦智。常道不堪のものをいふ」。

ぐわちぎやうじ 月行事から札取らねば大門が出られませぬ(冥途飛脚)

〔月行事〕町人の選擧するものにて、町內の理事にあづかり、官令を傳達することなどを役目とする。大阪舊時の月行事は町內に二人あつて月次遞番であつた。

***ぐわつかい** 天竺の大金持月蓋と名に高き、さつても吝い長者あり(博多) げにや日本のぐわつかいと聞きしはさることぞかし(用明天皇)。須達長者・ぐわつかい長者、五百の長者の寶を一つに集めても(釋迦)

〔月蓋〕印度・毘舍離國の長者の名。佛に歸依し彌陀三尊の像を鑄て祈念し、以て國中の惡疫を除いたこと請觀音經に見えてゐる。請觀音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經に、「時毘舍離大城中有二一長者一、名曰二月蓋一、與二其同類五百長者一、俱詣二佛所一云云」。維摩經・香積佛品に、「於レ是長者主月蓋從二八萬四千人一、來入二維摩詰舍一」。

***くわつけい** 忍熊大王の姑君と仰がれ活計に暮せば(日本武尊) 此世の逗留暫しの間、慰みでも食物でも遠慮なしに好みの物望んで、隨分活計活計と、帷幕の內にぞ入りにける(聖德太子)

〔活計〕くらしむき、またすぎはひの義なるが轉じて、よろこび。歡樂。白氏文集・老戒の詩句に、「老多憂活計」また「處分貧家殘活計」。和訓栞に、「活計はもとすぎはひの事なるを、歡樂する意に太平記にも、左京の大名衆を結んで茶の會を始め、日日寄合ひ活計を盡すと見えたり」。

ぐわつし 「げつしのゐりよう云々」を見よ。

***ぐわつてんし** あの月天子の照覽あり、利生は無下にはよもなるまい(大經師)

〔月天子〕月宮の天子、名を寶吉祥と云ひ、勢至菩薩の化現だといふ。嘉祥法華疏・二に、「大勢至名二寶吉祥一、作二月天子一」。謠曲・羽衣に、「南無歸命月天子、本地大勢至」。

くわでん 綏したる冠に襲の袖も紅の、くわでんの直衣太刀平緒(松風)

「はなだ」(縹)を花田と書いて、これを音讀した語であつて、「をこ」を尾籠と書いて、これを「びろう」と音讀したと同じ類である。「はなだ」を見よ。

窠に霰 時代の金襴鶴菱たすき、花兎窠に霰(丹波與作)

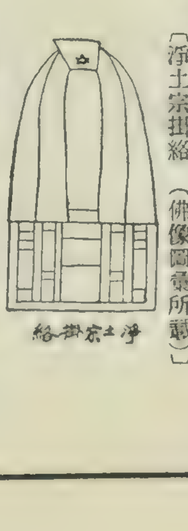
窠紋に霰の散れる時代裂の模樣。窠紋は木瓜ともいひ、瓜を輪切にした面の形を紋にしたもの。𨿸髓斷餘に「上の袴は白綾、浮き紋窠花形のやうなるものぞ霰」。

くわぼんぢごく 目前焦熱大焦熱、火焚地獄の有樣もかくやと覺えて凄まじし(女護島)

〔火焚地獄〕焚或は煩に作る。この地獄に墮した罪人は火に焚燒されるよりの名。焦熱地獄。謠曲・歌占に、「火煩地獄は頭に火焰をいただけば、百節の骨頭より焱焱たる火を出す」。

くわら 寄手の陣より二十餘の若僧鎧の上にくわらをかけ、太刀提げ小躍して大音上げ(聖德太子)

〔掛絡〕掛子とも云ふ。兩肩を通して胸間に掛ける小さき方形の切であつて、淨土宗の僧や禪僧の用ゐるものである。



〔淨土宗掛絡　（佛像圖彙所載）〕



〔禪宗掛絡　（佛像圖彙所載）〕

***ぐわりやく** 微塵に碎け飛ぶ音はぐわりやくを割るが如くにて(孕常盤)

〔瓦礫〕瓦・小石。「りやく」は礫の呉音。運步色葉に「瓦礫グワリヤク」。

くわりん 敵は勇みの鉦太鼓、風輪火輪天地にあふれ、前後を忘じて行き方なく(日本武尊)

〔火輪〕智度論・六に「如二旋火輪一、但惑二人目一」と見え、火を旋轉して輪形をなすものをいひ、轉じて火焰の渦卷くに喩ふ。

くわをぬかす 「くは」を見よ。

俺が見苦しい姿である故をかしいさうなが、この男も傾城づかを握つたなれの果ぢや（傾城佛原） 傾城こまめにたらひが女房、請出したらひの底抜けて、影も宿らぬきぬぎぬの（壽門松）

〔傾城〕美女をいふ。よつて以て遊女をいふ。漢書・外戚傳に、「北方有佳人、絶世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」。この語大江匡房などが既に用ひてゐるから、古くから用ひられたものである。

「傾城代」は傾城を揚げて遊興する費用代金。「傾城柄を握る」とは、傾城通の粋人としてはばをきかすをいふ。「柄」は昔操つた杵柄などいふ柄と同じ意の語である。色道大鑑に、「柄を握るは、當道を好みて道を嗜む心なり」。「傾城こまめにたらひが女房」とは、傾城はよく腰湯を使へばかく云うたのであらう。ここの文に「たらひの底抜けて影も宿らぬ」とあるは、その條を見よ。

「傾城冥加」といふもある、その條に說く。

***けいせいみやうが** 吾妻を見込んで頼むとはいとしらしい老嫗様、傾城冥加聞く氣でごんす（壽門松）

〔傾城冥加〕遊女自誓の詞、傾城の我が申すことが違つたなら神佛の冥加に盡きることもあり、神佛かけて誓ひますとの義。「冥加」は神佛が冥冥の中に加護を垂れ給ふ義。この冥加また冥利を其人の身分また職業の下に附けて、傾城冥加、作冥加、武士冥利、商賣冥利、番屋冥利などと言うて、其人の自誓の詞に用ゐたものである。

けいぜつ 旃檀・鷄舌・沈水香・丁子香・安息香、（釋迦）

〔鷄舌〕鷄舌香である。西陽雜俎に、「一木四香、根曰梅檀、節曰沈香、花曰鷄舌、膠曰薰陸」。名義集・三に、「異物志曰、是草萎可レ合香、婆外國胡人說、衆香共是一木、華爲鷄舌香」。

***けいせん** けいせんといふ者始めて見た、やつぱり常の女子ぢや（夕霧） 我我がなんぼ沙汰を致さずとも、あのけいせんのばしやれ者、それを言はずにゐませうか（夕霧）

「けいせい」（傾城）を「けいせん」と撥音に變じた語。（城をせんといふは支那音（Cheng）から來たといふ說もある）。三島曆（貞享四年刊？）巻之四に、「くるわのけいせんをうけ出し、おく様になさるる様子承り」。安原貞室撰・かた言（慶安三年刊）に、「傾城をけいせい」。當世大和言葉・中に、「傾城をけいせん」。

けいせんくわ 辛氣燃して待つ宵に、似たりや似たりけいせん花（生玉）

〔桂仙花〕草花の名。この文は、傾城に桂仙花をいひかけたのである、そして謠曲・杜若に、「似たりや似たり杜若花菖蒲」とあるを作り替へたのである。



***鼷鼠** 「鳥は高く飛んで矰弋の害をのがれ云々」を見よ。

けいばう 頽光が將軍職を某けいばう仕らん（酒呑童子）

〔覬望〕きそひのぞむこと。增補下學集（寛文九年刊）言辭門に「覬望」。

***けいはく** 先づ當年の御吉けいはくけいあん、めつきり今歳は若うなる（雪女） 身こそ貧なれ、一文一錢合力は受けまいし、何輕薄がいひたからう（卯月潤色） 生みの母の追出すを繼父の我等輕薄らしう留められず（女殺） 面白からぬ輕薄酒に氣がつき果て（扇八景）

〔輕薄〕へつらふこと。諺艸・巻之五に、「輕薄。今俗にかろかろしく德うすき者を輕薄者といふ」。俚言集覽に、「輕薄。俗に諂諛を云ふ」。「輕薄酒」とは、お追從に飲む酒の意。

けいひつ 月卿雲客供奉せしめ、はや警蹕とよばふなる（蟬丸）

〔警蹕〕「出づるに警し入るに蹕す」を見よ。（さきおふこととは別である）。

けいらく 終に一息切斷の、經絡六脈絕え絕えに（三枚繪） 睛に血わたをつられ三寸ばかり脫出でたり、經絡續きて二つの瞳の袖に入るよと見えしが（持統天皇）

〔經絡〕筋肉のつながり。時珍に、「凡人一身有經脈絡脈、直行曰レ經、旁支曰レ絡」。

***けう** けうの駿馬を引かるる段大悅殆んど身に餘れり（十二段）

〔希有〕常には無いと云ふ義。怪しいこと。珍しいこと。徒然草・第百六段に、「口ひきける男あしくひきて聖の馬を堀へ落してけり、聖いと腹あしくとがめて、こは希有の狼藉かな」。龜谷物語（古淨瑠璃）第一に、「かかるけうなる名鳥何方より得てあるぞ」。

***けう** さてもけうがる坊主やと、旅人もどつとぞ笑ひける（本領曾我） ああいづれも、性のよい兄貴にて、年寄られて親仁の苦勞でござるといひければ、それはけうがる今聞いたと、頭を振り顏をしかめける（三枚繪）

〔興〕「きよう」を見よ。「けうがる」は興がるである。滑稽味を帶びて變な面白味のあるをいふ。剽輕であるといふ程の意。謠曲・鉢の木に、「けうがる法師なり」。

げう 「ぎやうを」見よ。

***けうげべつでん** 我等が宗體と申すは教外別傳にして（用文章）

〔教外別傳〕禪宗の他の宗旨は經論の文句によつて教義を說けども、禪宗では言教の外に別に心印を單傳し、以心傳心、師資相承する。教外別傳とは即ち眞理は言語文句では傳へられない、教外に別に傳へるものがあるとの義で、言語文句を離れて直に佛心を以て他心に傳へるといふのである。（但これが爲に經文を等閑にするといふのでは勿論なうて、要は眞理を得るにあるのである）。教外別傳といふ詞は達磨大師の唱へはじめたものだと傳へられてゐる。

けうこう 「きやうこう」を見よ。

***けうしよ** 鬼王・團三郎後見してもり立つべしと、御判の御教書たびければ（加增曾我）

〔教書〕將軍の令する書。中古以來攝政・關白・大臣・等の令する書を教書と稱した。賴朝鎌倉幕府を開き、教書を以て天下に令せしは、蓋しその稱を襲うたのである。教書には御判御教書・御書御教書・洞文御教書・補任御教書・安堵御教書・裁許御教書・召文御教書等がある。

けうず 「きよう」を見よ。

***けうとい** 紀の國屋の杉がけうとい顏付きにて（天網島） けふとや怖や、其樣な目出たい若衆に、ますかけをきり米望み次第ぞや（薩摩歌）

丸薬つんでおはするは河津殿の後家御様(本領曾我)

〔九薬摑〕もぢもぢ羞かむを紛らすわざで、「玉藻拾ふ」の類である。「たまむしひろふ」を見よ。

***くわんれい**　斯波左衛門義將は當家の管領たるによつて(雪女)

〔管領〕將軍輔佐の職で、鎌倉の執權と同じものである。初めは執事と云つたが後に管領と改めた。管領とは統轄の義であつて職名ではなかつたが、後には定まれる名稱となつた。

くゐ

「人でもくひでもない」「男でもくひでもない」を見よ。

くゐにち　何くよくよとくゐ日の、悔むもよしな引寄せて(大經師)

〔凶會日〕舊暦上の語、何事を成すにも凶なる日。大雜書(寛永十一年刊)に、「くゐ日。此日なす事何にても末の遂げにくき日なり、わろし」。暦日講釋に、「あしき事集ると云ふ日なれば一切の事に用ひてあしし、さりながら吉日にはあらねども中の凶日なり」。假名暦註解に、「凶會日。天地の陰陽相會して德を失ふ日なり」。ここの文、大經師に緣ある暦の語を用ゐて文を飾つたまでである。

***くゐまんだら**　九會曼荼羅の痲衣、兜巾・篠懸・法螺の貝(嫁鞍)

〔九會曼荼羅〕「九會」は眞言密教に立てる名目で即ち、(1)一印會・(2)理趣會・(3)降三世會・(4)降三世三昧會・(5)成身會・(6)羯磨會・(7)微細會・(8)供養會・(9)四印會である。「曼荼羅」は梵語(Mandala)、譯して輪圓具足と云ふ。九會を完全に圖示するものを九會曼荼羅また智曼荼羅と云ふ。謠曲・安宅に、「兜巾といつぱ五智の寶冠なり、十二因緣のひだをすゑて戴き、九會曼荼羅の柿の篠懸云々」。

くをんごふ　一心一念の本佛は無心無念の一佛より教を受けて久遠劫、悟あれば迷あり(兼好)

〔久遠劫〕極めて長大の時間をいふ。億萬劫。「こふ」を見よ。

ぐんだりやしや

「とうはうにがうざんぜ云々」を見よ。

ぐんない　羽織も交ぜて郡内の、仕末して着ぬ淺黄裏(天網島)　年は三九のぐんない縞、血しほに染みて紅の(寄庚申)

〔郡内〕甲斐國都留郡を郡内と云ひ、その地より産出する縞絹の名。郡内は貞享初年から元祿享保にわたつて最も流行し、晴の衣裳にしたもので、かの三勝も八百屋お七もその最期に郡内を着てゐた。されば郡内の語に深長の意味がある。「三九の郡内縞」といへるは、二十七歳に算崩の郡内縞をきかせた。

け

***け**　侍衆は皆留守なり、殿は御酒の痲入ばな、けにもはれにも喜三太とみづから(嫁鞍)

〔褻〕なれて常とすること。ふだん着物の義。「褻にも晴にも」とは、ふだんにもよそ行きにも、即ち如何なる場合にもの意。狂言記・舟ふなに、「こなたのことは褻にも晴にも歌一首と申しますが」。

***げ**　一遍の念佛・一偈の經も讀む間なく(井筒)

〔偈〕梵語(Gatha)を伽陀また偈陀と書き、譯して諷頌また頌と云ひ、韻文體の經文をいふ。偈陀を略して偈といひ、また頌を添へて偈頌ともいふ。漢譯のものは四言或は五言などに疊まれて四句にて一偈をなす。

けいあん　まづ當年の御吉けい薄けいあん、めつきり今歳は若うなる(雪女)　お出入の大小名、追從慶安按摩取、お鬚の塵取り百千鳥、口囀るうそ咄し(兼好)　扨も出來た遊ばす遊ばす、米取る能太夫も跣足ぢやと、慶庵とりどり御機嫌何ふ折節(酒呑童子)　祐經諛ひのけいあん侍、大磯邊方方を晝夜徘徊仕ると承る(虎が磨)

〔慶庵〕慶安とも書く。輕薄。機嫌を取りおもねること。好色大鑑(元祿五年刊)に、「輕安は輕薄に同じ」。立羽不角編・(俳諧)水馴棹・兒手柏の巻に、「奉加場に慶安共の團錢」。俚言集覽に、洞房語園を引きて、「承應の頃京橋の邊に慶庵といひし醫者ありしが、療治はかたの如く下手なるが能く人に追從し、時時嘘をつきしとて、誰がいふとなく輕薄がましきものの事をけいあんらしいといひふれて、終にはやり言葉となりしなり」。

けいかい　獨坊主の庵室なれば女人はけいかいけいかいと、ぎごつなげにぞ返答ある(大原問答)

「けつかい」(結界)の延びた語で、「くわつけい」(活計)を「くわいけい」(その條を見よ)といふ類であらう。(序に云、關西言葉ではつまるものが延び、延びるものがつまつていふのが往往ある)。「けつかい」を見よ。

けいくわ　龍猛大師に轉傳し、大くわうちよりけいくわに至り(以呂波)

〔惠果〕西域青龍寺の高僧で第七祖に當る。

けいけいはたはたほろろうち　開き羽番ひ觜嘴にけいけいけいはたはたほろろうち(唐船噺)

「けいけい」は「けんけん」の變つた語で、雉子の鳴聲をうつした語である。「はたはた」は雉子の羽叩きの音。「ほろろ打」は、雉子が翼をこすりてほろほろと鳴し羽叩きすること。(序に云、玉葉集に、「ほろほろと鳴く山鳥の聲きけば」と見え、方丈記に、「山鳥のほろほろと鳴く」と見えてゐるのも、ほろほろはその實鳴く聲ではなうて、翼をこすつて鳴す音をかくいうたのである」。

***けいこく**　爰に傾國好色の遊君(三世相)

〔傾國〕美人をいふ。また以て遊女をいふ。漢書・外戚傳に、「北方有佳人、絶世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」。白居易の長恨歌に、「漢皇重色思傾國」。

げいしや　浪華藝者の風俗を橋橋名所に擬へて書集めたる藻鹽草(今宮)　藝者の盲法師(聖德太子)

〔藝者〕歌舞伎役者。藝人

***けいしやう**　帝を始め卿相雲客大夫諸侯に至るまで(大織冠)

〔卿相〕公卿と同じ。支那では三公九卿といへども、我國では攝政・關白・太政大臣・左右大臣・内大臣を公といひ、大納言・中納言・三位以上の人人を卿といふ、參議は四位にても卿といふ。

***けいせい**　君けいせいといふ者は、此類での王様、それから段段あるうちに、おぢやれの身には何が成る(丹波與作)　母が命が一夜さの傾城代にもなるならば、今でも死んで見せませう(壽門松)　こなた衆の

もならぬこの法師(本領曾我)

「けささはり」(怪障)の略。物怪。變化の障碍。御前義經記(正德二年刊)三之卷、近江の水海の條に、「是は娘が生靈船中を幸にけささをなすと見えたり」。

***袈裟にかけて斬る** 掃部弓手の肩先より袈裟にかけて斬落せば(大磯虎) おまんが左の肩先より、前は乳房を袈裟掛に兩へさつと斬下げられ(薩摩歌)

恰も僧侶の袈裟を掛けたやうに斜に肩から横脇にかけて斬下げるを云ふ。

げしう 見奉ればげしうはあらぬ御有樣、怪しや語りおはしませ(蟬丸) げしう逢はせまいならばここで腹を切らうかと(反魂香)

正しくは「けしう」で「異しく」の音便である。異樣に。惡う。萬葉集・卷十五の歌に、「異情乎安我毛波奈久爾」とありて、「異」を「けしき」と讀んである。伊勢物語に、「むかし男けしうはあらぬ女をおもひけり」。增鏡・おどろの下、宮内卿のことを記した條に、「こたみは皆世にゆりたる古き道の者どもなり、宮内卿はまだしかるべけれどもけしうはあらずと見ゆめればむ、かまへてまろがおもておこすばかりよき歌つかうまつれ」。增鏡むら時雨に、「主なき院の内いと淋しくて、衞士のたく火もかげだに見えず、内にはいつしかけしかるものなど棲みつきて、或時は紅の袴長やかにふみたれて、火ともしたる女見るままに丈は軒と等しくなりて、後にはかきけち失するもあり」。

***けしからず** 門前の人音けしからず、敵の來るござめれ(日本武尊)

「げしう」の引例に擧げた增鏡・むら時雨の中に見える「けしかる」の語を、後には「けしからず」といふやうになつた。怪しい。奇怪である。謠曲・隅田川に、「御出で候あとのけしからず物騷に候は何事にて候ぞ」。謠曲・望月に、「あれに候は此宿にある盲御前にて候が、けしからず面白く謠ふ由を申し候」。

***けしかり** 武家に生れてかほどの事辨へぬ不覺の女、とくとく歸れと、御氣色甚だけしからず(三國志)

景氣ある義。面白い。(思ふに「異しかる」の轉義であらう)。增鏡・おどろの下、水無瀨釣殿の御遊を記した條に、「秦のなにがしとか云ふ御隨身勾欄のもと近く候ひけるが、承りて池の汀なる笹を少ししきて白き米を洗ひて奉れり、ひろはば消えなむとにや、これもけしかるわざかなとて、御衣ぬぎてかづけさせ給ふ」。

***けしとむ** 傘にや怖れけん、早廣が乘つたる馬俄にけしとみ跳ね上り(蟬丸) ときの聲を聞きふれて、百萬人の列卒鼓けしとむ事の候はず(大磯虎)

「けしとぶ」(消飛)の訛で、魂消飛ぶ義であらう。驚き躓く。横笛(古淨瑠璃)第二に、「木の根にけしとみ石塔の陰にかつぱと轉ぶ」。菅原傳授手習鑑(淨瑠璃)に、「奥にはばつたり首討つ音、はつと女房胸を抱き、踏ん込む足もけしとむ内」。

芥子の紅鹿子 憂さをもけしの紅鹿子(壽門松)

芥子實のやうな細小な白の斑點を染出した紅の鹿子絞。ここの文、憂さをも消しに芥子をいひかけたのである。

けしばうず 韃靼頭の芥子坊主(國性爺)

〔芥子坊主〕頭髮を剃つて頂上のみ髮を長う殘したもので、その形罌粟の實に似たれば云ふ。辮髮。

***けしやう** さいた刀はけしやうか伊達か(碁盤太平記) すれば入らぬ假粧わざ(薩摩歌)

〔假粧〕見えをつくること。飾。

***けしやう** 濕生化生はいさ知らず、體を受けて生れし者人間も畜生も出世の門は唯一つ(釋迦) 勝賴きつと見、御身を固め物蔭傳ひに忍寄り、化生すはと尻目に睨み(川中島)

〔化生〕依托する所なく忽焉として生じ現はれる者であつて、卽ち神また變化・妖怪の類。俱舍論・八に、「有情類、生無所托是名化生、如那落迦天中有等、具根無缺、支分頓生、無而欻有、故名爲化」。「ろくだうししやう」をも見よ。

***けじやう** 勳功けじやう望みに任せらるべし(嫗山姥)

「けんしやう」(勸賞)の略訛で、人に善行を勸める爲に賞與する義。褒美。古院本(山本九兵衞版七行本)のここの文に、「勸賞」とあつて「けじやう」と傍訓してある。巢林子作・源義經將棊經の古院本に、「時には汝等道ある勇士の手本ぞと、くん切けでうほまれを取子々孫々云云」とある。「くん切けでう」も「勳功勸賞」の誤である。(この語音は昔賞と書いてもあつて、「くわんしやう」とは讀まなかつた)。

***げじやう** 京のお役所から此處の代官所へ解狀がついて在在を尋ねる(大經師)

〔解狀〕目安書とも云ふ。訴訟文書などをわかり易いやうに箇條書にしたもの。罪人逮捕の下文。

***げしやくばら** げしやく腹の姬君いてふの前(反魂香)

〔外戚腹〕下借腹とも書いてある。妾腹。和訓栞に、「げしやく。俗にげしやくはらなどいふは外借腹の義也といへり、庶孽をいふ也」。

げじゆ 忽ち紺地金泥のげじゆの文と現はれて、光明天に滿ち滿ちたり(聖德太子)

〔偈頌〕偈、頌、諷頌ともいひ、韻文體の經文であつて、四句を以て完備した意を表はし、五字叉は七字等を以て一句とするのを普通とし、多くは佛の功德をたたへまつるもの。

***げしん** 誂物も節季をもどう仕舞はんすことぢややら、下心の惡い旦那殿(重井筒) 下心の惡い悴めと、どこで聞いてかいふ事と、泣いて口說くぞ哀れなる(歌念佛)

〔下心〕心底。心掛。五十年忌歌念佛のここの文意は、「下心の惡い」といふ言葉は多く淨瑠璃に語られる言葉である、その淨瑠璃言葉を田舍者が何處で聞いたものか、かういふ時に言ふことと心得て、泣いて口說くことの哀れだとの意。

けぞくけちえん 本高じやくげの秋の月照さずといふ處なく、化俗結緣の春の花匂はぬといふ袖もなし(百合若)

〔化俗結緣〕世俗の人を敎化して佛緣を結ばしめること。「和光同塵」をも見よ。(「化俗」は「化屬」と書いてもある。化屬は佛菩薩が敎化すべき眷屬の義)。

***けたい** 唐琴を身請とはちつとすしなぞ推參なぞ、ええけたいの惡いと、聞くより富樫くわつとせき上げ(蛙合戰)

〔卦體〕易をたてて卦にあらはれたこと。轉じ

「氣疎い」即ち「人氣疎い」の義。轉じて、氣味わるい。怖い。徒然草・三十段に、「からは氣疎き山の中にをさめて、さるべき日ばかりまうでつつ見れば」。謠曲・伏木曾我に、「草の野原の夜のけしき、風ときどきの夜の雨に、神さへ鳴りてけうとけれども」。

***けうとなげ**　ええけうとなげな、身も顔も泥だらけ(女殺)

形容詞「氣疎なし」の語幹に、事物の形状情態をいふ接尾語「げ」の添はつた轉成名詞。「氣疎なし」の「なし」は、「あらげなし」(その條を見よ)の「なし」と同じ語で、甚だしい意を示す。「けうとい」の條を見よ。

けうまん・がまん　五體を縮め身を顚はし、憍慢我慢の勢絶えて(振袖始)

〔憍慢・我慢〕「憍慢」は、倨傲で己が分を省みずして他に傲ること。倶舍論に、「憍由レ染二自法一、慢對レ他心擧」。「我慢」は、自己を尊大となして他を輕蔑することで、七慢の一である。

***けうやう**　敵を討つて候上は、只父母がけうやうには君御出世の御訴訟こそあらまほしう候(蟬丸)　とりわき五郎が悅びは母の不興を許され、父母けうやうの弓馬の道(五人兄弟)

〔孝養〕孝行。また轉じて、供養。觀無量壽經に、「孝二養父母一、奉二事師長一」。源氏物語・常夏の卷に、「いとけうやうの心深く哀れなりと見給ふ」。平家物語・卷六、入道逝去の條に、「我いかにもなりなん後、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも立つべからず」。

げうよく　六塵の樂欲多しといへども(愛好)

〔樂欲〕ねがひ思ふこと。「あいぢやくの道その根深く云々」を見よ。

げがき　懷中より時宗が夏書しかけし普門品を取出し(百日曾我)　一夏に一部げがきせし、大慈大悲の普門品妙法蓮華きやう橋を(天網島)

〔夏書〕夏季九十日間に經文或は信仰する佛名を記すを云ひ、この事當時は俗間に行はれ、遊女の間にも行はれたのである。黑川道祐撰・日次紀事、四月初八日の條に、「凡男女一夏九旬之間、毎日習二筆法一、又或記二所レ信之神佛名號一、是謂二夏書一」。俳諧通言・書體の部に、「夏書、常に信心ぅる佛の名號を帳に搨書く、卯月八日より七月十六日迄毎日怠らずつとむる」。

げきしゆ　「龍頭鷁首」を見よ。

***けぎやう**　北斗を拜して加行をなせば神通變化心の儘にて候(本領曾我)

〔加行〕修行力を加へる義であつて、灌頂・受戒などの儀式を行ふ前に準備豫修をなすこと。唯識述記・九に、「舊云二方便道一、今云二加行一、顯下與二佛果善行一差別上」。

げきやう　いや醫者でない、身はげきやう、女にずんど懲りた者(天神記)　やれ醫者坊よげきやうよと、呼びにつかへば闘逆へ(天鼓)

〔外經〕字林拾葉に「外經」と書いてある、外科治療。按摩・鍼灸などをいふ。

***げきりん**　賴平朝敵となるその咎逆鱗甚しく(關八州)　下萬民の根、上一人の逆鱗やすからず(千疋犬)

〔逆鱗〕帝王の怒を云ふ。韓非子・說難篇に、「夫龍之爲レ蟲也、柔可二狎而騎一也、然其喉下有二逆鱗徑尺一、若人有二嬰レ之者一必殺レ人、人主亦有二逆鱗一、說者能無レ嬰二人主之逆鱗一則幾矣」。

***けく**　悲しむことも何にもない、けくで浮世が面白いと、笑うて見せて力を付け(淀鯉)　私等に如在はないものを、恨がけくできこえぬと、邊を忍びしくしくと、泣きくどきてぞ語りける(氷朔日)

「けつく」(結句)の促音「つ」の脫落した語で、「がつてん」(合點)を「がてん」といふの類である。つまり。かへつて。結句は詩の末句の稱から起つた語である。

***げけしゆじやう**　「上求菩提下化衆生」を見よ。

げげばな　つつじ・げげばな・つぼすみれ(十二段)

「紫雲英」「げんげばな」「れんげ」「れんげさう」などともいひ、田野に多い越年草本、莖は地を這うて擴がり、夏時長梗を出して蝶形紅紫色(稀に白色)の花を開き、黑き莢に實を結ぶ。

げごこちけんいん　幽靈の額に外五鈷智拳印の祕印を結びかけ給へば(嵯峨天皇)

〔外五鈷智拳印〕外五股智拳印とも書き、外五鈷印と智拳印である。「印」はその條を見よ。五股印は眞言宗にて五智五大を表示する印相である。卽ち兩手を合し、二小指・二中指・二頭指・二拇指にて五鈷を形成し、左右の無名指を交叉して、その指端を掌內に容れるを內五鈷印と云ひ、指端を掌外に出すを外五鈷印と云ふ。智拳印は金剛界大日如來の結び給へる印相である。


〔外五股印相〕


〔智拳印相〕

けこみ　此門一つ押破るは易けれども、跡より寄手の込入るもかしまし、上へそつと持上げて蹴込の下より落し申さん(嫗山姥)

〔蹴込〕家の上り口の沓脫の下、卽ち土臺附の處。但ここの文では門の下端。

***げこん**　それが己が下根ゆゑ、目に見ぬことの覺束ないとは吐したり(國性爺後日)

〔下根〕根は機根の義。根は物の本となる力、機は發動の意。卽ち敎法を聽いて修證される能力をいふ。下根は、機根の劣つた人で、道を修めるに就いて能力の弱小なのを云ふ。

けごんあごんほう　「摩訶般若でも落人のすはらみつ云々」を見よ。

***けごんぼ**　かがのごんぼけごんぼ・からしのこ・山椒の粉(大經師)

「けごばう」(毛牛蒡)の訛。小根の多く附いた牛蒡。

げさいろく　ちよこざいなげさいろく、えら骨ひつかいてくれべいと、くらはす拳を請外してはぶち返し(女殺)

〔下才六〕青二才と云ふ程の意。狡黠な者を罵つていふ。理齋隨筆に、「面の青きを俗語にさいろくといふ」。「さいろく」は丁稚をいふ。南瓜咄に「昔都の側に其の名を得たる武士ありけるが、小者の名をば才六と附けたるなり、いかなる子細ぞと問へば、小者をばでつちといへる義なりと云ふ、よくよく考へて見れば、六の裏は一ぢや程に、さてこそでつちぢやというた」。

けささ　大峰葛城那智熊野でけささ

の夏までは兩袖の下を闕腋の脇明にして、熱を漏し涼しみを受けざれば國と人と相應せず(振袖始)
〔闕腋〕和名抄、に「和岐阿介乃古路毛」とある。四位以下の武官儀仗の日着する服であつて、袖より下兩腋を縫はず襴をも附けずして、後の身を長く仕立つたものである。

けづりまはし 芹摘を隱し置いたる削廻しはおのれよな(聖德太子) 酢の蒟蒻のと品つけて、臆病第一の削廻し、踏殺しておれも死にたい(女夫池)
〔削廻〕小刀で削り廻すこせこせした細工の義より轉じて、小策を弄する者をいふ。

***けづる** 夫は佛法けづるともそつと隱して回向しや(反魂香)
〔削〕削殺の義。誹毀す。そしる。

***けでん** 吾妻はつとけでんして、夢見たやうな事どもやな(淀鯉) 兄弟二度けでんして鞠の無體に行詰り(持統天皇) 町中といふにぎよつとして、とむれつきたるけでん顏(女殺) 明日の貯へ何にせんと、立去らんとし給へば、緇井はあつとけでん顏(孕常盤)
驚きあきれること。普通に「怪顚」と書けども、饅頭屋本節用集に「化轉」と見えてゐる。化轉は四教儀に「化轉物心」とあつて、人を教化して善に轉ぜしめる義なるが、轉じて驚いて心を奪はれる意になつたのであらう。

***げてん** 日夜內典外典に眼をさらし(室町千疊敷)
〔外典〕佛教以外の書。「內典」をも見よ。

***けどる** うぬがここにあるからは横笛も居る筈、けどつて早くも隱せしな(娥) 立花を望めば立捨てにして歸りしは、面面の言合せし某が企けどつたりと覺ゆる(聖德太子)
〔氣取〕樣子を見て早く悟り知る。俚言集覽に、「けどる。けしきとる也」。

***けな** 日頃お側つぎつぎの腰元衆によう思はれ、ああけな人ぢや氣の柔らかな男ぢやと(千疋犬) 調使殿よい所へござつた、鐵の楯ぢやけな人ぢや(聖德太子) どれどれ三吉そこにか、まあまあそちはけな者ぢや(丹波與作) 露よりけなる玉の緒の(大原問答)
〔異な〕殊勝な。塵添壒囊鈔に、「異物(ケナモノ・ケノモノ)。下樣之者を讀むる詞にけの物と云は如何。日本紀に異の字をけとよむ、群に勝れ常に異なる由を讀る詞なれば其心叶へり」。「露よりけなる」とは露よりもまさりてはかなき意。新古今集・秋上部、曾根好忠の歌に、「おきて見んと思ひし程に枯れにけり、露よりけなるあさがほの花」。

けなし そも三枚はいさ知らず、取得んことはけなしなり(大織冠)
〔毛無〕馬(うんすん參照)の惡札不在。道念節・浮世山盡しに「歌留多のかすが山……手から駈出す生駒山たまたまけなしと喜べば」。謠曲海士の「ほとりも知らぬ海底に、そも神變はいさ知らず、取得んことは不定なり」を博奕詞でもぢつた駄洒落。

***けなりい** この蚊帳でしげらしやんしたらば、いかな藪蚊もけなりかろ(歌念佛) こなさんは弟の身でけなりや機嫌がよささうな(二枚繪)
「けなるい」ともいひ、「氣の惡い」の轉訛した語で、心にくいの義。うらやましい(羨)。この語現今備中國小田郡あたりで羨しいの意にいふ。狂言記・ぬけからに、「申し殿樣、身どもに此やうにお氣をつけられまするをば、傍輩どももいかうけなりう思ひまする」。

下馬先をする 御前が近い、競合はず下馬先をして振りませい(薩摩歌)
槍持・草履取などの供奴が下馬すべき所に近づけば、頭を少し屈め手先を上げて手を振り腰をひねり、足取揃へて步くを例としてゐた、これを下馬前をすると云ふ。

けはしい やあ助右殿夜中にけはしい、何の用でござる。(大經師) いつにないけはしい聲、何事かはと出でければ(孕常盤)
〔險〕「けあしい」(氣惡)の轉じた語であらう。物凄うて穩でない。著聞集に、「とまりする湊の風もけあしきに、波高きこの浦はいかにぞ」。拾玉集・卷一に、「沖つ風けあしけれどもこぎ出ぬと、都の人にいかで知らせん」。

けはなし 門のけはなし朱に染み、白洲に生血流れたり(小栗判官)
〔蹴放〕門の內外の區域を分つ溝のない敷居で、とりはづしのできるやうに作つたもの。

けばのうめ 「のけばのうめ」を見よ。

けはらかす 袴の裾けはらかし禮儀をくづして責めかくる(振袖始)
「くゑはららかす」(蹴散)の變つた語である。蹴散す。神代紀・上卷に、「蹴散。此云倶穢簸邏邏箇須」。(新撰字鏡に、「蹴波良介志、又知留」。萬葉集・卷二十に、「あまをふね波良良にうきて」とあるを見ても、「はららかす」は散す義である」。

***けびゐし** かかる處へ檢非違使の某眞先立ち、此處彼處にて召捕つたる海賊ばら、傾城交り繩付ども一度に彼處へ引來る(博多)
〔檢非違使〕司法警察の事を掌り、非法非違の者を檢校糺察する役で、嵯峨天皇の朝既に置かれてあつたが、別に役所がなかつたので、淳和天皇の天長年中に使廳を置かれた、後に諸國にも檢非違使の職を置かれた。ここの文は殊更に平安朝時代の職名を借りて云つたのである。これをまた「大理の廳の官人」とも書いてゐる。「だいり」をも見よ。

***げぼん** 西方淨土に一文字、越ゆるは下品下用櫃(卯月潤色) 下品下生の往生は六道四生の苦患をやや遁るるばかりにて、十二劫が其間蓮華中に孕まれ(大原問答)
〔下品〕極樂淨土に九品の別ありて、其第七より第九までを下品といひ、第七を下品上生、第八を下品中生、第九を下品下生と云ふ。「くほんのじやうせつ」を見よ。觀無量壽經に、「下品下生者、或有衆生作不善業五逆十惡、具諸不善、如此愚人以惡業故、應墮惡道、經歷多劫、受苦無窮、如此愚人、臨命終時、遇善智識、種種安慰、爲說妙法、教令念佛、此人苦逼、不遑念佛、善友告言、汝若不能念者、應稱無量壽佛、如是至心、令聲不絕、具足十念、稱南無阿彌陀佛、稱佛名故、於念念中、除八十億劫生死之罪、命終之時、見金蓮華猶如日輪住其人前、如一念頃、卽得往生極樂世界、於蓮華中滿十二大劫、蓮華方開、觀世音大勢至以大悲音聲、爲其廣說諸法實相除滅罪法、聞已歡喜、應時卽發菩提之心、是名下品下生者」。

けまはし 肩から裾のけまはしま

て縁起。氣持。狂言・居杭（大藏流）に「まづ今日の卦體がとうとこれに當つて居りまする」。色道後日男・卷四に「かかる卦體のわろい時は所をかへてなぐさまんと」。

げだいがくもん　なう書面ばかり聞きはつり・義理を知らねば外題學問これ笑ひぐさ（蛙合戰）

〔外題學問〕書物の內容を精讀研究するのではなくて、題簽を見て書名に能く通じてゐること。本屋學問。

***げだう**　四韋駄と號す外道の書、この法を學ぶ者は因果を撥無し來世を期せず（用明天皇）

〔外道〕佛道の經典を內典といひ、佛道以外の書を外典と云ひその道を外道といふ。恰も儒家が儒以外の道を異端といふの類である。法事讚に「佛書を取らざるを外道と名づけ、因果を撥無するを見て定となす」。

***けたたましい**　ああ心もとないけたたましい、何事が起つた（生玉）　女房ちやくと袂にすがり、けたたましい御顏付、月代も遊ばして、いづ方への御出ぞ（聖德太子）　お暇申すと立出づる、餘りといへばけたたまし・今宵一夜は苦しかるまい（壽門松）　けたたましい提灯金棒ちんからりが面白いか（關八州）

氣立ちておちづかぬ義、あわただしい。ことごとしい。

***げだつ**　戀慕に沈む衆生を救ひ、解脫を示さん爲に二菩薩かりに出世し（三世相）

〔解脫〕無礙・無拘・自在の義。生死の迷界にある者は煩惱に束縛されて自由でない。然るに佛法によつて煩惱無明を斷じ妙諦を得たならば、生死の迷苦を出で無拘自在のものとなる。これを解脫といふ。

***げだん**　上段下段の太刀さばき（國性爺）

〔下段〕劍道の語。太刀を前に低う持つて身がまへまするこそ。

***げぢ**　日本流の軍の下知（國性爺）

〔下知〕令二下知一の意といふ。さしづ。命令。文德實錄に、「宜三早下知一莫レ令二更然一」。

***けちえん**　心あらん者どもは繩に手をかけ結緣せよ（會稽山）　一つは御祈禱且は結緣、出御あるべしと奏すれば（井筒）

〔結緣〕成佛得道すべき因緣を結ぶこと。

***けちぐわん**　七七日の大結願と申すには、姫婦安平子安の法（蟬丸）

〔結願〕佛會・修法或は祈禱をなして、その終末の日に行ふ作法。

***けちみやく**　あなたの友とては血脈一つに數珠一れん、これが冥途の友となる（夕霧）　息の通ふその中に夫婦のしるしを見せ給へ、それを冥途の血脈とも引導とも回向とも思うて（用明天皇）

〔血脈〕法門の相承を身體の血脈相連つて絕えないのに喩へた語である。密宗では相傳口訣を重視し、その血脈を記すに一定の法があつて、付法八祖以下の師資や灌頂の年月日を記す。淨土宗・日蓮宗にも血脈を授ける。そして一宗の要義を傳へたものを法脈といひ、受戒の相承を戒脈といふ。俗人結緣者に授けるには、法門相承の略系譜を記して、その包紙の表面に戒脈或は血脈と書き、三寶または種子印を書いたものを與へる。血脈を受けた人は大切に保存して、死亡の時棺中に納めて葬る。夕霧阿波鳴渡のここの文は間山（あひのやま）の唱歌である。「あひのやま」を見よ。

けぢめ　時平最初にけぢめを取られ大きに急き（せ）（天神記）

分別。「けぢめを取られる」とは分別を取られる義。人に先を制せられて思慮する餘地のなくなつたのをいふ。和訓栞に、「異路（けぢめ）日の義なるべし」。俚言集覽に、「俗に人に逼迫して卑しめ凌ぐやうの事をケヂメを食はすと云、又キヂメルとも云」。

***けつかい**　大師以來結界淸淨の御山、假にも女犯の穢れがあれば一山荒れて震動し（萬年草）

〔結界〕法力によつて惡魔を入れぬ區域の意である。寺院また戒壇を造るに一種の作法を行つて、その區域を定めることを結界と云ひ、その區域を結界地といふ。弘法大師行狀記・十に、「惡神等は皆我結界七里の外に出去」。

***けつかふざ**　心身疲れ果て給ひ、結跏趺坐して眠るが如く、延喜三年二月二十五日御年五十九歲にて左遷の雪と消え給ふ（天神記）

〔結跏趺坐〕圓滿安坐である。足の表を趺といひ、裏を跏といふ。右足を左腿上に置き、左足を右腿上に置く坐相を全跏坐と云ひ、右足を左腿上に置くのみなるを半跏坐といふ。釋氏要覽に、「毗婆沙論云、是相是圓滿安坐義」。

***けつかる**　うそうそ見廻し巫女（みこ）の門、こりや爰にけつかると引出せば（卯月艶）　どうずりめ覺えてけつかれ（丹波與作）　若い女中に立交り、三味線彈いて居けつかり（嫗山姥）

有る又は居るの意にいひ、總て人の所作を卑めていふ語。按じるに「つくばふ」（蹲）を強めて「かつつくばふ」「かつつくばる」といひ、更に轉訛して「けつかる」となり、意味も上述の如く轉じたのであらう。

月桂（けいけい）　「風緣野（かぜりよくや）に收まつて云云」を見よ。

***げつけい・うんかく**　月卿雲客手を合せ、あつと感じて禮せらる（用明天皇）

〔月卿・雲客〕卿相を月に譬へて月卿と云ひ、殿上人を雲に譬へて雲客と云ふ。貞丈雜記に、「公卿又卿相といふなり、又月卿といふ、殿上人をば雲客といふなり」。「けいしやう」「うんかく」を見よ。

けつこく　本懷遂げば闕國二箇國安堵せんと賴まるる（持統天皇）

〔闕國〕「けつしよ」を見よ。

けつしよ　召人伊賀の介が家財闕所、女房はあがりもの此方へ召取つたり（弘徽殿）

〔闕所〕闕所・闕國はもと領主の闕げた土地また國をいひ、室町時代から桃山時代にかけての用語である。罪科や其他の事情によつて幕府に沒收された土地や國は皆闕所・闕國である。江戶時代になつて轉じて、領地を沒收する刑名となつた。

けつちう　桀紂が驕のまなざし人人をきつと見て（酒呑童子枕言葉）

〔桀紂〕支那上古の世、夏の桀王や殷の紂王は共に暴虐驕慢の君で、天下を亡したこと史記に詳しう見えてゐる。

けつちやく　三乘十二部經我心に疑あり、いまだけつちやくする事能はず（以呂波）

〔決擇〕疑を決斷して理を簡擇すること。俱舍論・二十三に、「決謂二決斷一擇謂二簡擇一云云」。

***けつてき**　日本に生るる者は・十六

うよかけん」といひ、「行く」を「行くけん」などといふ。

元亨利貞四德　「乾は元にして亨る云云」を見よ。

げんくわ　生を變へても女の身は天に到ること叶はず、變成男子の法力にて男のげんくわを得させてたばせ給へとよ（天神記）

〔現果〕現在の佛果。現在の佛果菩提。

けんけん　向ひ同士のけんけんともならず、茶屋の內借つて振濯いで進ぜましよ（女殺）私に隱してあの錢を遣つて下さる志、言葉ではけんけんと言うたれど、心で三度戴きし（女殺）

無愛想に撥付けること。素氣無くかどかどしいこと。「けんけん」は慳慳で、慳貪邪慳の意であるが、それに雉子が蛇などを見付けた時に、けんけんと鳴きほろろと羽打つて撥飛ばすことからの意も加はつた語であらう。「けんもほろろにはねつける」などいふ語もこれから起つた語である。和訓栞に、「顯昭の說に、雉子はけいけいと鳴いてほろろと羽をうつといへり、今けんけんと呼べり」。俚言集覽に、「人にとげとげとあたるをケンケンスルと云」。

***げんこ**　息杖の續かん程げんこ微塵にさいなんで、ころりと腰にひつつけ（百合若）　親はなし一文なし、げんことりより小さい首、意氣づくなら取つていけ（丹波與作）

〔拳固〕五の符牒。蓋し五指の握りなればいふのであらう。小野高尙撰・夏山雜談・卷之三に、「五つの數をげんこと云ふ、五の數をげんことといへるは、五は阮古切なればなり」。百合若大臣のこの文は、拳固（握拳）に五の符牒をいひかけたのである。

「拳固取」とは拳固餅をいひ、昔時東海道の道中筋で賣つた一箇五文の餅である。西鶴撰・御前獨狂言（寶永二年刊）卷之二に、「こびんさきはげちぢげちぢにねぶられ、げんこ餅ほどはげたるを手作のなべすみべつたりと云云」。

***けんこん**　支那・天竺にいたるとも、乾坤を出でずんばよしや五年が十年も、命終らば一念の魂殘つて本望遂げ（蟬丸）

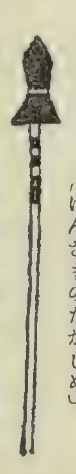
〔乾坤〕天地。易經說卦傳に、「乾爲レ天、坤爲レ地」。

げんさう

「つらつら世間の幻相を觀ずるに云云」を見よ。

けんざきのなかじめ　釼鋩の中締に六尺模樣はぐるぐるぐる、御紋も車は越後の村上（薩摩歌）

〔釼鋩中締〕鎗標。（越後村上城主・榊原式部大輔勝乘の鎗標）。



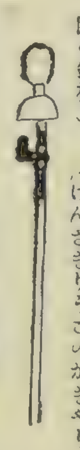
「けんざきのなかじめ」

けんざきぶね　繼子繼嫁孫君も憎や憎やと押出して、詞に尖る釼先舟、家中梶をぞ取りかねける（賀古敎信）

〔釼先舟〕尖聲で釼があるを釼先舟にいひかけたのである。和漢船用集・卷五に、「釼鋒舟。又釼先舟と書く、凡荷物十六駄を載す、大和河內荷物運送の舟なり、古釼先舟在釼先新釼先舟の別あり、是所謂字彙に形如レ刀、故に紉と名付るの類にて、形の似たるを以て名とす、長さ九尋餘深さ一尺四寸、直くして舳先尖り如レ釼、一枚柁にしてよことも也、大船なれども板薄くして能く淺川を行く」。ここの文、釼先舟の緣で「梶をぞ取り」というたのである。

けんざきりうごのかぎやり　釼鋩りうごの鉤鎗は伊賀伊勢の津の御城主（薩摩歌）

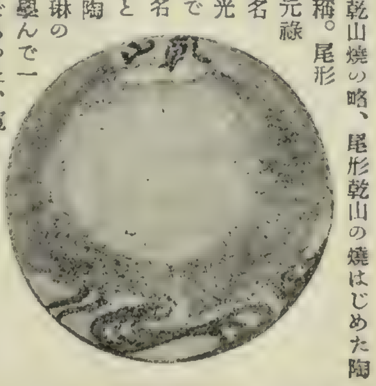
〔釼鋩輪鼓鈎鎗〕鎗標。（津城主・藤堂和泉守高睦の鎗標。）



「けんざきりうごのかぎやり」

けんざん　親仁の店から錦手乾山音羽燒の、皿の鉢の茶碗のと十五六兩が物賣つてくれ（生玉）

〔乾山〕乾山燒の略、尾形乾山の燒はじめた陶磁器の稱。尾形乾山は元祿時代有名な畫師光琳の弟である、名を深省と云ひ、陶工で光琳の畫風を學んで一層自由であつた、寛保六年歲八十一で江戸に歿した。菊岡房行撰・近代世事談に、「乾山燒。尾形深省嵯峨鳴瀧邉の土を以て燒はじむ、鳴瀧山は王城の乾にあたれり、よつて乾山を名とす」。



けんじ　「おやまけんじ」を見よ。

げんじくも　絳絹裏に源氏雲の裾ぐくみ（反魂香）

〔源氏雲〕源氏物語繪卷物に畫いてある洲濱のやうな雲をいふ。それに金箔を押しまたは刺繡にしたもの。嬉遊笑覽・卷三、書畫の條に、「今は彼洲濱のやうなる形を雲と覺えて、是を源氏雲といふはいとをかし、そは源氏物語をかける畫にのみあるものとするか云云」。

***げんじやう**　御身に添ふる物とては玄上の琵琶一面、淸行希世御供にて（蟬丸）　玄上・牧馬の琵琶二面取つて押合せ（源義經）

〔玄上〕琵琶の名である。仁明天皇の承和年間、藤原貞敏遣唐使となつて唐に赴き、彼地より紫檀・紫藤の琵琶各一面を傳來した其一であると云ふ。禁祕御抄に、「玄上。累代寶物也、置二中殿御厨子一、根源㨾人不レ知レ之、掃頭部貞敏渡唐之時、所レ渡琵琶二面其一歟、紫檀直甲也云云」。

けんじやうのしやうじ　紫宸殿に賢聖の障子と名づけ、古の賢人忠臣の姿を繪に畫き給ふとや（五人兄弟）

〔賢聖障子〕紫宸殿の北にたててある障子で、支那三代より唐までの聖賢名臣の肖像を畫いてある。古今著聞集卷十一、畫圖の條に、「南殿の賢聖障子は寛平の御時始めてかかれけるなり、その名臣といふは、馬周、房玄齡、杜如晦、魏徵、（自東一）、諸葛亮、遽伯玉、張良、第五倫、（同二）、管仲、鄧禹、子產、蕭何、（同三）、伊尹、傅說、太公望、仲山甫、（同四）、李勣、虞世南、杜預、張華、（自西一）、羊祜、揚雄、陳寔、班固、（同二）、桓榮、鄭玄、蘇武、倪寬、（同三）、董仲舒、文翁、賈誼、叔孫通、（同四）等也、此人人の影をかかれけり、云云」。

***げんじやうらく**　敵を討つて太平樂、還城樂や還俗樂、菩提の門を引かへて（女夫池）

〔還城樂〕唐土傳來の樂である。唐玄宗皇帝が韋后を誅して京都に還り、この曲を作つたので還城樂と名づけたといふ。拾芥抄に、「還城樂、乞食調矣」。

けんじやく　以ての外の不吉の脇指、寸は一尺四寸五分、けん尺は

で(日本武尊)

〔蹴絅〕袴又はうちかけなどの裾裏の足にかかるところ。

*けまん　華鬘・寶鐸・瓔珞は西吹く風にれいれいと、いとど殊勝さ限りなし(三世相)

〔華鬘〕佛像または堂塔の頂などに吊す飾である。佛像圖彙に、「花鬘、西域女子首飾也」とあれば、もとは西域で女子の首飾に用ゐたものであつた。


(佛像圖彙所載)
〔花鬘〕

けもぢる　此炬燵には狼があるさうなと、蹴もぢるを引倒し(壽門松)

〔蹴捩〕蹴りふみにじりする。

*けもない　其器量の好さおぼこさ、道頓堀の若衆方・女方ひつさらへてもけもないこと、四國西國かくれもない夕霧といふ太夫に近付になりたいとて(夕霧)いやいやけもない堪忍せぬ、放して存分言はしやいの(艶狩)

〔氣無〕氣配も無い。少しも無い。

けもんび　やおけもん日のぞめきの衆も鳴を靜めて聽き給へ(扇八景)

〔褻紋日〕褻はなれて常とすることの義。褻紋日とは平常日と紋日とをいふ。「もんび」はその條を見よ。ここの文は褻紋日に假門をきかせて勿體らしうしたのであらう。方便の教義を假門と云ふ。眞宗では方便の教義に於て、自力の修諸功德を以て往生しようとする法を假門といふ。曾我扇八景のこの文は假門の深い意あつて云うたのではない。

*けやけし　さながら盗賊の所爲もやけき擽板、めつきめつきと切破る(艶狩)

尤異の義。甚だ際立つてある。白氏文集・長恨歌傳に、「尤物」に「けやけきもの」と古訓が附いてゐる。

*けやり　早お立とお供廻が振出す毛鎗(宵庚申)

〔毛鎗〕大名の行列などの時に持ち、鎗先に白熊・羽毛などの毛の附けるもの。

げようびつ　西方淨土に一文字、越ゆるは下品下用櫃(卯月潤色)

〔下用櫃〕日用の雜品を入れる櫃。ここの文は「下品下生」を下用櫃にいひかけて、下品下用櫃というたのである。

*けりやう　人の盛りを捨置いて、けりやう道を守ればこそ、若し氣が反れていたづらしたら、此方樣斬つてすてさんすか(薩摩歌)　今では地頭の名はあれどそれはけりやう、何の守屋に恩は受けず(聖德太子)

〔假令〕かりに。苟且。偶然。

ける程に　ちよつとしたもやもやが互に深うなつて來て、上る程にける程にまんまと京まで上りつめて、散散首尾が違うて、又それから下る程にける程に、飯焚までに成下つた(松風)　此指二本で墮す程にける程に藥研腹と申します(蛙合戰)

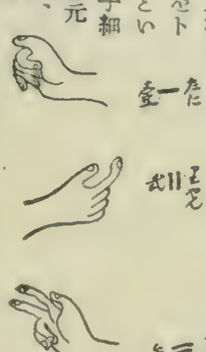
念を推すとき重ねていふ詞を略して、「ける程に」といふ。紀海音撰・心中二つ腹帶に、「言傳へ、聞傳へ、市の側から打明けて參る程にける程に、御門前から押合うて鰐口の緒へ取付くまでゆつくりと三時半」。

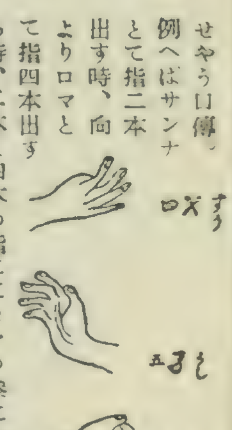
けわき・ちやうちんはちまいめ　我我は一つ胴・二の胴、毛脇・提灯八枚目、雪を土壇の試物珍しからん(冷泉節)

〔毛脇・提灯八枚目〕毛脇は腋毛の生ひたあたり。提灯八枚目は肋骨八枚目である。提灯とは肋骨が提灯に似てゐるからである。毛脇・提灯八枚目は試斷の箇所である。「いちのどう」をも見よ。

*けん　拳の手品の手も撓く、ろませ・さい・とうらい・さんな、同じ事とよ豐川に、磐の高瀨がさす腕には、はま・さん・きう・ごう・りう・すむゐ(冥途飛脚)

〔拳〕支那から傳來した遊戲であつて、本拳・狐拳・虫拳など種種あるが、ここの文にいへるは本拳である。本拳は二人相對して打つもので、互に右手の指を屈伸して早く出すと同時に、彼我の伸した指數の和を言い當てたるを勝とする、但握つた儘出してもよい。勝負は五番勝で終る、若し彼我互に四番勝なる時は、拂と稱して勝負なしとし、更に打直して勝負を決しる。彼我の指數の和の呼聲は一から十まで唐音で言ふ、即ち一をイイ又はタニ、二をルウ又はリヤン、三をサン又はサンナ、四をスウ又はスムヰ、五をゴウ又はウシ、六をロマ又はリウ、七をチエエ又はチマ、八をパマ、九をキウ、十をトウライといふ。甲子細見(延享元年刊)に、「拳の合せやう口傳、例へばサンナとて指二本出す時、向よりロマとて指四本出する時、二本と四本の指にてロマの拳に合ひたる故ロマの方勝なり、サンナ負けて酒呑むべし、又サンナとて指二本出す時、向よりロマとて指三本出せば、ロマにもサンナにも合はぬ故に勝負なし。……大方これにて兎角雨方より出す手の數を合せ、口より掛ける拳に合ひたるが勝なり」。「ろませ云云」をも見よ。





*けん　ひそかに釋尊御一代の經文を披き、つらつら出離の樣を按ずるに、顯につけ密につけ其悟たやすからず(大原問答)

〔顯〕天台をいふ。宋高僧傳に、「顯教者、諸乘經律論也、以二摩騰一爲二始祖一」。

けん　飯も汁もがんざう鱠、けんに置いたるめうがの程ぞ恐しき(酒呑童子)

料理の附合。つま。料理物語・指身の條に、「かきだい。鯛を三枚におろしこそげてかさねもり候、いりざけよし、からしおく、けんはよりがつほ・くねんぼ・みかん・きんかん」。和訓栞に、「鱠にいふは間の字にや、或は景音の轉訛なりといへり」。

*けん　髷がまちつとさがつた、額もけんであいそがない(鑓權三)

〔險〕險相の略。するどくすごみある貌。

けん　上方衆は氣がよかけん、こがいな事はあるまい(博多)

「けに」の「に」が撥音「ん」に變つた語。から。「よかけん」は「よいから」と云ふ意。この語現今も九州一部に用ゐる。「もう宜しい」を「も

んよもなきといへろは此字なり」といひ、その正語の條に、「無二懸念一。思ひ懸けなきなり、けんによもないは誤」と見えてゐる。かた言(慶安三年刊)に、「けんによもない事といふ言葉は如何、すべておもひがけもなき事に言習はせり、若し兼慮の文字か、又は權輿が本說なる由云へり」。權輿は物のはじまりの義であつて、この語意に妥當しないやうである。西鶴撰・好色一代男・卷四、因果の關守の條に、「花の都のぬめり節、長い刀に長脇指をぼつこんで、おせきよいさと唄へど、けんによもない顏してゐる」。錦文流撰・傾城八花形に、「いとし可愛い女房をそもやそも勸めをさせて、其金で身命がどう繫がるものなるぞ、いやはやけうがる一言と、けんにようもない顏付なり」。

けんねじ　傍輩どもがけんねじついて錢儲けする羨しさ(丹波與作)

互に握拳を突出して掌中の物の數を當てて勝負をする戲であつて、博奕の一種である。高田與清撰・松屋筆記・卷六十五、拳を打の條の頭注に、「橘泰が筆のすさび上卷四丁オに、拳をうつ事を漢土にては拇陣と云、又にぎりこぶしにてするけんねじなんこと云ふ戲を猜拳と云、猜はうたがふ事なり、故にはんじものを書きし燈籠を猜籠といふ、明皇雜記に見ゆ云云」。「けんねじ」は「けんねんじ」とも云ふ。享保集成絲綸錄・四十九、慶安元子年二月の條に、「一、前前より被二仰付一候ばくち・はうびき・けんねんじ・かるた、何に而も諸勝負堅仕間敷事」と見えてゐる。「さんまいせい」の條をも見よ。

けんのけ　晴明が祈る川水直に離れず流るるは乾の卦の形、所謂乾道は男と成り(弘徽殿)

〔乾卦〕乾卦 ☰ は陽である。人に當てて男子とす。

***けんばふ**　白無垢一重けんばふに、裾模様ある蘆に鷺(大經師)　本郷に大店借り、吉岡染憲法染と世に流行る根本は、此せがれが父親なり(吉岡染)

〔憲法〕憲法染の略。附子鐵漿を原料とした黑茶染。京雀(寛文五年刊)に、「綾小路下るけんばう町。中頃けんばうの某とかや云ふ者黑茶染を仕出しけり、この故にけんばう染といふとにや、この町に住みければ町の名とす」と見えてゐる。憲法は兼房とも書き、通稱を吉岡仁左衞門といひ、吉岡流劍道の祖と傳へられてゐる。この人の發明した憲法染は明曆から延寶にかけて大に流行した。傾城吉岡染に、石川五右衞門と師弟の關係があつたことに書いてあるは、無論事實ではなうて、全くの他人の間柄である。

「よしをかぞめ」をも見よ。

げんぶくしや　浦島塚とて壽命を守るげんぶく者、參りの絕ゆる事もなし(松風)

〔現福者〕驗に現福者をいひかけたのである。靈驗著く現在に福德を授ける神。

げんぶくよし　我昔の元服よしの日取もよしや蘆に鷺(大經師)

〔元服吉〕舊曆上の語で、元服するに吉といふ日。ここの文は大經師に緣ある曆上の語盡しで飾つた祭文である。なほこの文に「蘆に鷺」とあるは、其裾模樣の着物であつて、當時この模樣流行したので、女用訓蒙圖彙にもこの模樣の衣服が畫いてある。

けんべき　この頃痃癖痛きにちつと摑んで貰ひたし(出世景淸)

〔痃癖〕頸から顏及び肩にかけて筋肉の時時ひきつる病。醫心方に、「痃癖之疾亦不レ專二於一一、痃病者肝之所レ生、癖病者脾之所レ成、云云」とあれば、もともと腹部の病症である。

けんぼう　「けんばふ」を見よ。

けんほがなし　園には玉の梢を連れ、西王母が桃・けんほが梨、不老の櫻爛漫と(松風)

〔縣圃が梨〕縣圃は神仙の住める山の名。その山に生ずる梨。楚辭・天問に、「崑崙縣圃、其尻安在」とありて王逸注に、「崑崙・山名也、在二西北一元氣所レ出、其顛曰二縣圃一、縣圃乃上通二於天一也」。山海經に、「崑崙丘有レ木焉、其狀如レ棠、而黃花赤實、其味如レ李而无レ核、名曰二沙棠一」。

けんぼくぼ　父樣とのかためで嫁入つて來たわしなれば、此腹の子は此方の子、親且那と三つがなわで、けんぼくぼ晴れて産んで見しよ(酒呑童子)

世間を憚らず表立つこと。公然。正章貞室撰・かた言(慶安三年刊)に、「憲法をけんぼ、またけんぼくぼのくぼは公法といふことか」。小柴垣(元祿九年刊)卷之三、晝の夢さめて現の條に、「和尙もよそから持て來る施しばかりを請けてゐらるればよけれども、無用の茶小姓抱へ置き、若衆髮に中剃して刀脇差よこたへさせ、けんぼくぼはれて置かるるは何れ大膽なり」。天正版節用集に「憲法―公道義用レ之」

***げんみ**　兄上のげんみを助け、子孫も繁昌致すべし(賀古敎信)

〔現未〕現在と未來。現當二世。

けんみやく　御病氣見脈に顯はれたり(持統天皇)　さても見脈お見立の奇なるかな(振袖始)　都の善人惡人は某がけんみやくでも一寸遣らず、斬れば斬る助くれば助くる(日本武尊)

〔見脈〕脈搏を檢すること、以て見立の意にいふ。

げんもじ　どうもどうも鬼の娘に御げんもじ(嫗山姥)

〔見文字〕見參の文字詞。見參。文字詞については「そもじ」の條を見よ。

けんもんやみ　六根氣血通はねばけんもんやみに異らず(小栗判官)

〔見聞闇〕目に佛を見、耳に妙法を聞くことが出來ないで、常に迷妄の闇にさまようて、飢餓に泣く餓鬼類をいふ。見聞は見聞成佛、見聞覺知などいふ見聞で、佛典に見える語である。

***けんらうぢしん**　堅牢地神の頂へ駒の蹄は屆くとも(加增曾我)　不孝の上の不孝の科日月の怒を受け、堅牢地神は大地を破り奈落に沈め給ふべし(卯月潤色)　手を出して双親を殺すも同じ不孝人、堅牢地神の頂きに釘を打つとの敎あり(氷朔日)

〔堅牢地神〕大地を堅固ならしめる神である、この神は經典流布の處を常に護りて、形を法座に隱し、說法者の足を頂戴し、聞法者をして甘露を服するが如く身力を增益せしめると云ふ。地藏經に、「佛告二地神一云、閻浮土地悉蒙二汝護一」。舞の本・和田酒盛の條に、「親の不孝と申すは私ならぬ事なり、三千大千世界を戴いてまします御名を堅牢地神と申す、釋尊問ひたまひけるは、三界はいか程重きぞと問ひ給へば、地神答へて宣ふ、須彌の山に燈心を一筋置きたる喩よりもなほ輕く候が、爰に重き物あり、親の不孝を得・主の勘當蒙りたる者の通る時、大地が割れてみがいればあ

災難、これを其儘持つならば三代までは祟る(女腹切)

〔劍尺〕刀劍佛像などを度るに用ひた物差。博物筌に、「劍尺一名玉尺といふ、俗名けん尺と云ふ、吉の字あるは本につくる、凡刀劍佛像のたけ門戸のはばに皆これを用ゐ、當る所の吉凶圖の文字の如し、且八卦の文字を添ゆ、今用ゐるもの皆の寸と違ひあり、今用ゐるたけ、曲尺一尺二寸を八段とし、一段一寸五分に當るなり」。

財	病	離	義	官	刧	害	吉
福徳	遊魂	絶體	遊年	天醫	絶命	禍害	生家

一尺四寸五分は劍尺の遊魂(病)に當り、遊魂は周易・繫辭傳に、「遊魂爲レ變」と見え、形體が散亂して、形體を失ひ變化を來すことであつて一劍の長さの遊魂に當るは、災難あるものとして不吉である。

***げんぞく**　お上が山へ登つたは末は出家の筈なるに、今此山が出たいとは還俗したい心よな(萬年草)

〔還俗〕僧侶が再び俗人生活に還ること。

乾兌離震巽子丑寅　「八卦」を見よ。

げんたうにぜ　現當二世の御祈何事か只これに過ぎんと(根元曾我)

〔現當二世〕現世と當來との二世、

けんたん　鶴岡の濱茶屋でけんたん買へやと、毒口昔口二口三口、一口に言込められ(虎が磨)

〔契短〕間短とも書く。契る間の短い義であつて、夜發また辻君の類である。八文字屋自笑撰・風俗傾性野群談(享保二年刊)五之卷、金銀を蒔散すはお江戸風の條に、「かりにも契短遊びにこま銀をつかひて分知顏は井の内のかはづ」。同書・三之卷、色遊びの一時は千兩の金にやうやうの條に、「たとへば太夫をしびつてみる大盡、天職にかかつてゐれば氣樂なるべし、天職にさはたつてゐる客、鹿戀か端をかふ程ならばよもやへらをつかふまじ、それよりは段段におとり子を比丘尼、白人を茶屋に仕かへ、契短を辻君と思ひかへさば、勘當せらるる息子もなく請人へ預けらるる手代もあるまじに」、とあるによつて見れば、享保頃では同じ下等の賣女でも契短は辻君よりも一段上位であつたのである。後になつては契短も辻君も同じものになつたと見えて、好色節用集(寶曆頃刊)に、「契短といふ、今けんたんといひ誤る、其ありさま挽切りの枕・木綿布團、床に入りてはさてもあわただしき事なり」と見えてゐる。

けんちやう　傔仗兵士輿の前後に兵具を帶し(日本武尊)

〔傔仗〕平安朝時代に鎭守府將軍に隷屬してあつた職で、武器を携へて側勤めの家來。

***けんづく**　この道ばかりはけんづくに押せど押されぬ茨の枝(艶狩)　權づくの緣組存じも寄らず候(一心五戒魂)

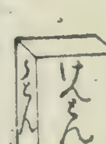
〔權盡〕權柄盡。權勢にまかせて物を強ふること。

***けんづけ**　今度上意を以て權附の祝言、父が心にそまぬ上、姫もはつと驚きて(千疋犬)

〔權附〕權勢をもつて押附けること。浮世親仁氣質に、「銀を貸した古手屋にて、權づけにゆきたけの合はぬ絹物をかりて」。

***けんどん**　それはお前のけんどんと申すもの、先夕霧樣に逢はせましよ、いやとてもけんどんなら夕霧より蕎麥切に致さう(夕霧)　ぢたいの顏がにくていにけんどんに見えるゆゑ(大經師)　或は饂飩けんどんの、そばで聞くさへ笑止なり(二枚繪)　腹の立つたあげくぢや、けんどんを取りにやれ(女腹切)　晦日節季は前垂掛で、裏屋・背戸屋・けんどん屋三界懸取に歩くやうな勤するのも、澤山に逢はう爲(生玉)

〔慳貪〕人の物をほしがり人に物を遣るををしがる義、轉じて、嗔恚強きことをいふ。邪險。「慳貪蕎麥切」といふのがある、慳貪はやさしみなき意で、一碗づつ盛つたるを食ふ人の心に任せて勸めもしない故の名である。ここの文に、「とてもけんどんなら」「饂飩けんどんの」「けんどんを取りにやれ」とあるは、慳貪に慳貪蕎麥切をいひかけたのである。「けんどん屋」は慳貪蕎麥切屋。慳貪蕎麥の起りについては、むかしむかし物語に、「寛文辰年けんどん蕎麥切といふ物出來て下下買食ふ、貴人には食ふ者なし」とあるから、寛文四年頃であらう。其價は一碗盛が六文から八文程であつた。喜田川季莊撰・近世風俗志に、「或書云、寛文四年慳貪蕎麥切始て製レ之、下賤の食とす、價八文云云、又一書に貞享中江戸旅籠町蕎麥切一杯六文無二掛直一云云」と見え、嬉遊笑覽に、「慳貪は唯俗に覺えたるやさしみなき意にて、一碗づつ盛りたるを食ふ人の心に任せて勸めもせざるゆゑなり」と見え、「其呼聲にも一杯六文かけねなし、現金かけねなしといふこと其頃のはやりなり」と見えてゐる。還魂紙料・下之卷に、「慳貪=因果經と云和讃に云、人のものをばほしがるを慳と云ふなり、人に物ををしがるを貪といふ、けんどんぐちとはここぞかし。ここに說く所大むね法華經に見えたる慳貪の意に當れりとぞ、今の俗嗔恚の強き事にいふは誤にて、吝きことなり、されば蕎麥切にもあれ飯にもあれ、盛切つて出しかはりをも勸めざるをけんどんといふなり」と書き、延寶天和頃の京都四條川原畫卷を寫して載せてあるによれば、簷に暖簾を垂れ、店内には*の形の物を置き、俎の側に人が居る。



後には慳貪の意義を轉じて儉約のことに取り、遊女の名にけんどんと云ふのもあれば、また酒にけんどんと云ふものも出來た。傾城吉岡染に、「こなか切のけんどん酒」といふ詞も見えてゐる。

げんなり　こちやげんなりとなる程八めはいきつて、馬を取つたとしがみつく(丹波與作)

「くねり」「くなり」「ぐなり」「ぐんなり」「げんなり」と轉訛した語である。氣力を失うて屈する。うんざり。

けんによもない　手形を顏へ打付け、はつたと睨む顏付はけんによもなげにしらじらし(曾根崎)　犬も歩けばばう風の指身の、けんによもない仕合せと(賀古教信)　二人は左右へ取附いて、そなたとはけんによもなく、人音がするならば此半櫃へ隱れよと(聖德太子)　目の鞘はづす刀の血痕押拭ひ押拭ひ、袖にをさめし顏容、けんによなりふり引繕ひ、物音伺ひ立つたるは(女護島)

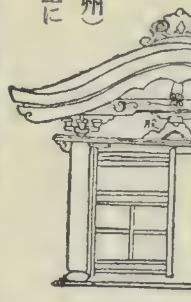
「懸念」を「けねん」また「けんね」といひ、「けんね」を訛つて「けんによ」といふ。「けんによもない」は「懸念も無い」であつて、思ひがけも無いの意。「けんにようもない」ともいふ。貝原好古撰・諺艸(元祿十四年刊)卷之五に、「權輿。今俗に始もなく不圖出來たる事をけ

「こんや」(紺屋)の音便である。「紺屋の型」は厚紙に澁をひいて造つたもので、小紋また紋所などを染出すに用ゐる。「紺屋糊」は紋また模樣などを白拔にする所に塗る糊である。

***紺屋の徳兵衞(こうやのとくべゑ)** 紺屋(こうや)の徳兵衞、房にもとよりこい染込みの(丹波與作)

德兵衞お房も心中重井筒に見える人物である。假作人名部につきて見よ。

こうりやう こうりやう・かへろまた・椽(たるき)・裏板・土・瓦、ぐわらぐわらどうど地に落つる(關八州)



〔虹梁〕

〔虹梁〕墓股の上にある梁。

***こうろくわん** 萬戸將軍誘引にて二度歸洛ましまし、鴻臚館に入り給ひ(大職冠)

〔鴻臚館〕王朝時代外國人を接待する館である。太宰府では博多、攝津の難波、京都の東西市に設けてあつた。鴻臚の名は漢書に、「掌二四方蠻夷一曰二大鴻臚一」とあるより出たのである。

***ごかい** それ五戒といつぱ、殺生・偸盜・邪淫・妄語・飮酒戒とて佛の深く戒められた(天鼓) 此中さるお寺で五戒の割口說き聽聞した(宵庚申)

〔五戒〕殺生戒、偸盜戒、邪淫戒、妄語戒、飮酒戒。

***こがいな** 上方衆は氣がよかけん、こがいな事はあるまい(博多)

「此工合(このぐあひ)な」の訛りつまつた語。九州一部及び岡山縣下でも現今なほ用ゐられ、「このやうな」を「こがいな」、「このやうに」を「こがいに」、「そのやうな」を「そがいな」、「そのやうに」を「そがいに」といふ、また「こがいな」「そがいな」を「こげえな」「そげえな」ともいふ。

ごかいさん 講中が御開山へ奉る御(お)茶所(ちやしよ)の銀(かね)ぢや(二枚繪)

〔御開山〕寺院を創立した人をいふ。「かいさん」を見よ。眞宗では開祖親鸞上人をいふ。

ごかう 五つの香交はつて四河の流れも芬々たり、今の世までも嬰兒の五香の良藥(釋迦)

〔五香〕五種の香、卽ち栴檀・鷄舌香・沈水香・丁子香・安息香。昔は五香を紅絹の切れなどに包んで嬰兒に吸はせたものである。箱留・卷六に、「世盛りの家に出生する子は、……、晝夜に三度の五香を用ひ」。

***ごかう** 既に五更の八聲の鳥、門の戶けはしくとんとんとん(大經師) 夜遊の舞樂の時去つて、五更の一點鐘も鳴り(天鼓)

〔五更〕寅の刻、卽ち夜の七つ時で今の午前四時頃に當る。「とき」を見よ。「五更の一點」は「寅の一點」に同じ。その條を見よ。「夜遊の舞樂の時去つて云云」をも見よ。

***ごかく** 武田信玄・長尾謙信四度の戰牛角にて(川中島)

〔牛角〕相對して優劣なきをいふ。義楚六帖に「表双之義」とある。太平記・卷十七、京都兩度軍の條に、「京勢は又勢に乘り、山門方は力を落して牛角の戰になりにけり」。

こかし 我らが商賣こかしにて、山善平白髮頭(蛙合戰)

「やまこかし」の略。その條を見よ。

こかぢ 將軍樣の御重代天國・小鍛冶・義光、其外名に負ふ銘の物(雪女)

〔小鍛冶〕小鍛冶作の刀。小鍛冶は宗近と云ひ、一條天皇の時京都三條に住んでゐた刀鍛冶の名匠である。伏見稻荷明神の神明を得て勅命の御劍を打つたといふ。

こがねむし やんま・とんばう・こがね蟲(小栗判官)

〔黃金蟲〕昆蟲類・鞘翅類・金龜子科に屬する蟲、體色金光綠色である。花蜜を吸收して害をなす。幼蟲は白色で俗に蠐螬(ぢむし)といひ、田圃にゐて植物の根を害する。漢名は金牛兒、金龜子。

ごがふぶさい 五合ぶさいの下部(しもべ)ども門外につつ立ち、中にも弓削の廣海大音上げ(聖德太子)

〔五合無菜〕一人扶持で菜をも調へ難い下賤な者を云ふ。扶持米の計算に男一人一日の食料米を五合と見積り、これを一人扶持と云ひ、もと瀧川一益の定めたのだといふ。

こがらす 平家重代小烏と云ふ太刀を佩き(鎌田)

〔小烏〕古の名劍。源平盛衰記・維盛出家の條に、「主上南殿に御座て亦天を御拜ありける折節に、八尺の靈烏飛來て大床に侍り、主上御笏を以て被二招き召一けり、烏勅令に依て躍上、御座の御緣に嘴を懸て奏し申さく、我是太神宮より劍の使者に參れりとて、羽刷して罷立けるが、其ふところより一の太刀を御前に落し留めけり、主上御自ら此劍を被レ召て、八尺の大靈烏の中より出たる物なればとて小烏と名付させ給ける、唐皮と共に寶物に執し思し食す、仍て代代は内裏に傳りけるを、貞盛が世に下預て此家に傳て稀代の重寶なり」。

***こぎ** こは恨めしや狐疑の心、鬼神に橫道なけれども、さらば只今御疑をはる秋過ぎし君が代を(本領曾我)

〔狐疑〕狐の性能く物を疑ふ。よつて人の疑心多きをいふ。楚辭に、「心猶豫而狐疑兮」。

ごき 今の間にごきさげて、心からの非人敵討(淀鯉出世瀧德) 天目にごき・しゆせん酒(薩摩歌) ごきさげる瑞相かと、叱つて叱つて追出しても(壽門松) ここな才六め、草履・雪駄・傘・木履は摑奉公する者の御器のみだが、知らないか(加增曾我) ことわつて、海道筋のごきの實(み)をぶちあげ(丹波與作)

〔御器〕椀。空穗物語に、「黃金のごきよきまゐりもの」。「御器さげる」は椀をさげて食を乞ふ意、乞食するを云ふ。「御器の實」は椀に盛る飯のこと。

こぎく 吳服屋の手代半兵衞はかの池田屋の小菊にたんと金入(きんいれ)なれば(氷朔日)

〔小菊〕吳服屋の手代半兵衞と情死した女である。「はんべゑ」を見よ。

ごき・ぜんき そもそも我等が祖師役の行者、ごきぜんきと云ふ鬼神をはごくみ(酒呑童子枕言葉)

〔後鬼・前鬼〕役小角といふ行者が召仕つた二鬼。吉野緣起に、「藏王堂内左右二役行者像、脇士二人其現基覺、廼是前鬼後鬼也」。

***ごぎやう** 身體一つが五つに別れ、五輪五行の苦を受くる(反魂香)

〔五行〕木・火・土・金・水。ここの文の「五輪五行」には、みやが敦賀では還山、三國では勝山、伏見では淺香山、木辻では三つ山、六條

たりの草木枯れ果て、川を渡るにせこえし底のうろくづも生を滅し、地神はかうべに七尺の劍を立つるより堪へ難しと宣へば、釋尊も阿彌陀佛・三世の諸佛たち舌をまいてぞ怖ぢ給ふ」。

けんろ　或時は猨驢に鞭打つて衣を西山の雨に濕し（持統天皇）
〔猨驢〕ちんばの驢馬。楚辭・七諫に、「駕二猨驢一而無レ策兮」とありて註に、「猨、跛也」。

こ

こあげ　四五町か六七町何とぞして舁き給へ、小揚に安う賣付けんと（西王母）
〔小揚〕色道大鏡卷一に、「こあげ＝竹輿乘物を舁く疋夫をさしていふ、田舍の舟着に有て荷物を運ぶ疋夫どもを中衆など云ふ名目あり、是等をこあげとも云、當道にて朝夕廓へ通ふ駕籠舁の類をこあげと云ふなり」。

***ごあんす**　こなさん聞えやせんぞえ、前は再再ごあんして、何が恐（こは）うて逃げさんす（二枚繪）
「ござんす」の子音の脫落した廓詞。

ごいしがしら　碁石頭に白黑の絲毛の鎧（三國志）
〔碁石頭〕この名のもの未だ他書に見當らない。思ふに兜の鉢に碁石のやうな凸形の小點數個あるものか。

こいとねり　こいと煉とて人もきく屋が名譽名物（千疋犬）
〔小絲煉〕地黃の根を加へて煉つた飴、即ち地黃煎である。小絲地黃煎は元祿時代大阪天滿天神社の前にあつて、有名な飴屋の菊屋で賣つてゐた。岡田徯志編・攝陽群談・卷十六、名物土產の部に、「小絲地黃煎。天神社衞門の南にあり、始て所レ作レ之婦人（名曰二小絲一）の家に出、因號レ之、口味甚宜く、諸國の市店に送る」。「菊屋が名譽名物」をも見よ。

***ごいん**　あの障子へ雛を並べた如くにて映る影を見給へと、五音で内へ知らすれば（本領曾我）　口にはいひて目は涙、さすが五音で推量し（氷朔日）　その五音で殺手は知れた知れた（振袖始）
〔五音〕宮・商・角・徵・羽の五音をいひ、轉じて、聲色。言葉つき。

こいんじゅ　胡飲酒酣醉樂など舞樂を奏し（女護島）
〔胡飲酒〕歌舞音樂略史・上卷に、「胡飲酒（壹小）＝一名宴飲樂、或說に胡國の樂なり、胡人酒を飲む時の姿を摸して舞曲とす、即ち舞人持つ所の桴は酒杓なりといへり、一說に、仁明天皇の承和中勅を奉じて、樂は大戶ノ淸上、舞は大戶ノ眞繩作るともいふ、然らば本朝に於て改作るか（教訓抄）」。

こう　大事の姪が死したれば、元もこうも無くなつて御褒美の段でなし（持統天皇）
「こ」（子）を「こう」と延べた語である。「元もこうも」は元利も。

***こう**　さほどのこうの者ならば惜しいこと、侍にして召使ひたし（三國志）　助給打笑ひ、ええこうにも立たぬ悋氣ぢやなう（卯月潤色）　なう鎌田殿、保元平治の合戰に多くの敵に向うても薄手もおはぬ功の武者、運盡きぬればむざむざと（鎌田）　庄司が子供は功の者、おお賴もし賴もし（津戸三郎）
〔功〕いさを。手柄。忠功。殊勝。

***こうけん**　親のこうけん是非なうて、どうなりともと言ひました（萬年草）　そこが男のこうけん、貴人高位の娘でも夫が去るに何と申すぞ（宵庚申）　是非とも親のこうけんに在所の男持てならば、己や死ぬるが合點か（今宮）
「こうげん」ともいふ、權力、威光の意。蓋し「後見」の轉義であらう。

ごうさらし　「ごふさらし」を見よ。

こうし　「じやうし」を見よ。

***ごうしや**　恆沙の眷屬引連れ（松風）　名號の六字にごうしやの功德備はるなり（大原問答）
〔恆沙〕恆河沙の略。印度の恆河 Ganga の沙數の如く無數なるをいひ、濱の眞砂といふと同じ。華嚴經に、「現在十方佛、其數如二恆沙一」。

***こうた**　三味線小唄も古めかし（女腹切）
〔小唄〕俚曲の一種である。歌曲の長いものを長唄といふに對して、その短いものを小唄または端唄といふ。松の葉（元祿十六年刊）に端唄を分けて、本調子・二あがり・三さがり及び騷ぎの四種にしてある。この端唄は現今云へる端唄とは別である。

***こうたう**　こうたうな兄御を手本にして、商人といふ物は一文錢もあだにせず（女殺）　所帶じみて氣がこうたう、好い女房にいかい疵（女殺）　器量に似合はぬこうたうな堅くろしい偏窟な生れつき（大經師）　心のたまかさこうたうさ（歌念佛）
〔公道〕はなやかならぬこと。じみ。著實。俚言集覽に、「公道。おとなしきとは物の公道なる心なれば、花やかならぬをいふなるべし」。

***こうたびくに**　紀州熊野にはよき奉公の口ありと、聞くなしるべに立越えしに、それは小歌比丘尼として尼にするよし承り（百日曾我）
〔小歌比丘尼〕熊野勸進比丘尼をいふ。「うたびくに」を見よ。

こうとう　「こうたう」を見よ。

こうにんかくしき　弘仁格式の掟・聖代の古風を仰ぎ、佛法に御歸依あり（嵯峨天皇）
〔弘仁格式〕三十卷ある。嵯峨天皇の勅を奉じし藤原冬嗣等の編輯したもので、朝廷官府の格式規定故事舊例等を錄してある。

ごうのはかり　「ごふのはかり」を見よ。

こうばい　紅梅・竹河・橋姬（淀鯉）
〔紅梅〕源氏物語・五十四帖の一。

***こうめい**　幼心に孔明が昔を耳にふれつらん（女楠）
〔孔明〕諸葛亮孔明は支那三國時代瑯琊陽都の人である、軍略に長じ、蜀の昭烈帝に仕へて丞相となり、武鄉侯に封ぜられた。嘗て後主に奉つた前後の出師表は人のよく知る所である。

***こうや**　あづち町のこうやへよつて錢とりやや（曾根崎）　代代傳はるこう屋のかたと共に禿げたる頭（かしら）をおろし（重井筒）　口を止めたるこうやのり、德樣早うと出でにけり（重井筒）

ごけざや 身ばかり買うて去なれたは後家鞘に極まつた（女腹切）

〔後家鞘〕刀身なくして鞘ばかりあるもの。

***こけざる** 美しい黒髪を此様にそりさげて、手足は山のこけざるぢや（丹波與作）

瘦せ細つた猿。「こけ」は「瘦せこける」「頰がこける」などいふ「こけ」と同じ語で、肉落ち細つたるをいふ。狂言・花子に、「人の妻見て吾が妻見れば、み山の奥のこけ猿めが、雨にしよぼぬれて、ついつくばうたにさも似た」。（和訓栞に「こけざる＝漏猿の義にや、群猿の中にはねだされて獨りになりたるをいふ」、とある說に從はない）。

こけのたもと 頭陀乞食に身をなして、苔の袂も恥ならず（大磯虎）

〔苔袂〕蘿薜の衣といふことで、隱者の服である。よつて以て僧衣に通はせて用ゐる。古今集・哀傷部、僧正遍昭の歌に、「みな人は花の衣になりぬなり、苔の袂よ乾きだにせよ」。

***こけらぶき** あぶなや轉びこけらぶき（蛙合戰） 又この上に盗人と名をやうづまんこけら葺、昨日の雨のかはかぬに（大經師）

木削屑葺の義。檜または槙などの薄板を以て葺いた屋根。

ごけん 君は右大臣の左大將馬寮の御けん、尤も馬を御覽ある御位にて候（融大臣）

〔御監〕「ごげん」とよみ、又「馬のつかさ」ともいひ、馬寮の長官で左右各一人、近衛大將が兼帶し、御厩の事を總裁する職。

***ごけん** またのごけんをまづかしく（女腹切） 恩ひまゐらせ候べく候、御見の如く二世三世、くされくされと血判をするた小舌たろい女子文（萬年草） いよしもかはらぬごけんまで、逢瀨を契る餅は杵（夕霧） 季武進み出で、ようようどうもどうも鬼の娘に御けんもじ（嫗山姥）

〔御見〕御見參の略、おめみえ。「ごけん」は女の手紙文に多く用ゐられた。「御見もじ」は御見參の文字詞である。文字詞は足利時代の末期朝廷式微にして供御の物備はらなつかたので、女官等その名を呼ぶを忌みて何文字といふた隱語から起つたと云ふ。

こご 「おこご」を見よ。

ごこ 萬民五袴の悅に耽り（嵯峨天皇）

〔五袴〕五袴も蓄へてゐるといふことで、民の富めるをいふ。後漢書廉范傳に、「范字叔度、…、建初中遷二蜀郡太守一、…、成都民物豐盛、邑宇逼側、舊制禁二民夜作一、以防二火災一、而更相隱蔽、燒者日屬、范乃毀二削先令一、但嚴使レ儲レ水而已、百姓爲レ便、乃歌レ之曰、廉叔度來何暮、不レ禁レ火、民安レ作、平生無レ襦、今五絝」と見えてゐる。絝は袴と同じ。七行の古院本に「五誇」とあるは、袴と誇と字形の相似より誤つたのである。

ごこ 髭と髪とは香爐の雪、五湖の波また面の皺（唐船噺） 實に古も五湖に浮べる船の內、それは功成り名遂げ身退きての樂しみを羨むばかり（大覺）

〔五湖〕群書拾唾には、「太湖、謝陽湖、洞庭湖、丹陽湖、宮亭湖」をいふと見え、張勃吳錄には、「五湖者太湖之別名、以三其周行五百里三萬六千頃一故名二五湖一矣」と見えてゐる。「五湖の波」とは面の皺多きを形容したのである。大覺大僧正御傳記のここの文は、陶朱公（范蠡）の樂しみの故事をいうたのである。謠曲・船辨慶に、「勾踐は二度代をとり會稽の恥を雪ぎしも陶朱功を成すとかや、されば越の臣下にて政を身に任せ、功名富み貴く心の如くなるべきを、功成り名遂げて身退くは天の道と心得て、小船に掉さして五湖の遠島を樂しむ」。

***ごこ** 仁義五常の五鈷の形（蟬丸）

〔五鈷〕金剛杵の一種、兩端五股より成り、密教の修法に用ゐる器。金剛杵は印度古代の武器で、能く物を碎破するが故に、密家では煩惱を碎破する菩提心の表徵となし、金屬で作つてある。

***ここう** 賴む股肱の郎等、別府の鄕武者雲足（百合若）

〔股肱〕股や肱の如くに賴みとする者。書經・益稷に、「帝曰、臣作二股肱耳目一」。左傳に、「君之卿佐、是謂二股肱一」。

***ここう** 某は虎口の讒言にさへられ流浪の身となり候へども（三世相） さがなきここうの讒言によつて、鎌倉殿と御兄弟御中不和の（源義經）

〔虎口〕史記・酈食其傳に、「欲三以徑入二强秦一、此所謂探二虎口一者也」とありて、極めて危險の義、轉じて、身の成敗の分れる所の意にいふ。恐怖すべきこと。「こくち」をも併せ見よ。

***ごこく** 民繁昌の惠によつて、五穀豐饒に打續き、萬萬年とぞ祝ひける（國性爺）

〔五穀〕楚辭註に、「稻・稷・麥・豆・麻」を云ひ、孟子註に、「黍・稷・菽・麥・稻」を云ひ、禮記・月令に「黍・稷・麻・麥・豆」を云つてある。轉じて、廣く穀物をいふ。

ごさん 七五三、五五三、山陰中納言の家の切りかた、料理一通りは承り傳へしゆゑ（宵庚申）

〔五五三〕五五三の羹膳。七五三（その條を見よ）の羹膳を略して、飯にても湯づけにても五の膳まで出す。

五五八八（ごごはちはち） 「ちしご」を見よ。

こころえたろべのばばさま そんなら道ぢや駕籠へもちよつと寄つて、くれ、心得太郎べのばば樣と、喚いて使は歸りけり（重井筒）

「心得た」を「太郎兵衛の婆樣」にいひかけた口合である。「太郎兵衛の婆樣」に意味があるのではない。これと同じやうな言ひ方に、「庄兵衛のばばさま」といふ詞が役者丸はだか（延寶二年刊）及び御前義經記（元祿十三年刊）に見え、巣林子作の今宮心中に、「灸（やいと）のばば」といふ詞も見えてゐる。「何のばばさま」「何のばば」といふこと、當時口合に添加へられた流行詞である。現今も福山市あたりで、「さういふことは知らない」といふ意に「そんなことは知らぬねこばば」といふも、この類の詞である。また「心得太郎兵衛」といふことが、心得たといふことの口合である。長町女腹切・中卷に、「それ男ども追出（いだ）せ、心得太郎兵衛・長兵衛・五助」と見えてゐる。曾我扇八景・中卷に、「それ申し付けよといひければ、心得たんぼ」といひ、心中刃氷朔日に、「內衆酒の燗しやれ、……、といひければ、心得たんぼを濱生姜」、とある、「この心得たんぼ」は、心得太郎兵衛をたんぼにいひかけたのである。

***心にくし**（こころにくし） 淸盛が軍慮心にくきことも候はず（鎌田） 守屋が弓矢何程の事かある、心にくきは川勝一人（聖德太子）

〔心憎〕憎う思ふほどえらい。奥ゆかしい。保元物語・爲朝軍評定の條に、「主上の御方心にくくも候はず」。

***心の駒**（こころのこま） 心の駒の諸手綱、ふさが思ひの通ふかや（重井筒）

情意の制し難いを馬の馳せ狂うて制し難いのに譬へた詞。本朝俚諺に、「古歌に、ひかれな

三筋町上林が内ではみやと、五度所を變へ五度替名して流寓したことをきかせたのであつて哀れが深い。

***ときやかう**　西の海へさらりさらりさつさこきやかう(雪女)

鷄の鳴聲を眞似た語で、厄拂の祝詞の終末に附ける。「やくばらひ」を見よ。

こきりこ　こきりこは放下に揉まる(用文章)

〔小切子〕放下僧が持つて藝をする筑子である。竹で作つて其形四つ竹の如く、赤小豆などを入れて鳴し、また手玉に使つた。もとは兩端に切子の形を作つてあつたのでこの名がある。「面白の花の都や云云」をも見よ。

こくうざう　こくう藏六字かりん(嵯峨天皇)

〔虚空藏〕梵名 Akasagarbha と云ひ、大悲利生智慧無礙にして、恰も虚空の物を藏して限りなきが如きものだとて此名がある。虚空藏菩薩を本尊とする修法を虚空藏法といふ。

こくがね　宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時致します(寄庚申)

〔刻鐘〕鐘を撞いて時刻を報じるより鐘を刻鐘といふ。和漢三才圖會・樂器類に、「洪鐘今多浮圖用レ之、必建二鐘樓一鉤二懸之一、撞以報二時候一、示二日暮無常一矣」。ここの文は、熊野屋の權右衞門が宗味をして寄進の鐘を作らしめたのが出來たので、その開眼供養をする爲に、旦那寺の住持や講中の者どもを招いたのである。

ごくげつ　極月中旬而も大雪切る程寒き寒天に(冷泉節)

〔極月〕十二月の異稱。和漢名數・十二月名の條に「極月」に「シハス」と傍訓し、「十二月」と註記してある。

こくしやう　お汁は家鴨の油揚、豚のこくしやう・羊の漬燒(國性爺)

〔濃漿〕肉類を煮つめた味噌汁。

こくしん不死　西王母が園の桃を食ひ、こくしん不死の仙術を得(西王母)

〔谷神不死〕虚にして無象、無終なるをいひ、老子虚無の說である。老子に「谷神不レ死、是謂二玄牝一、玄牝之門、是謂二天地根一、綿綿若レ存、用レ之不レ勤」とある。巢林子この文の意は措き、語をとつて谷神不死の仙術と、さもかかる仙術ある如くいうたのであらう。

國性爺の道行念佛　それおいて國性爺の道行念佛が所望ぢや(天網島)

國性爺の稱は、鄭成功が永明王を立てて淸に抗し、忠孝伯征討大將軍罪臣國姓爺と云うたのに據つたもので、國性の性は正しくは姓であるべきだが、原本(古院本)に「國性」となつてゐるので敢て改めないで置く。「性」を「せん」と訓ましたのは「性」の支那音(hsing)を轉じて「せん」といひ、それに上方詞に「傾城」を「けいせん」と撥ねるやうな訛を利用したのである。巢林子のここにいへるは國性爺合戰の道行の文を念佛節で謠ふことを所望したのである。總じて淨瑠璃の道行の所は最も太夫が喉をきかすので、色色の節が取込めてある。素人が音曲を眞似するにも多くは道行を唸つたものである。それ故に丸本には道行文だけを卷頭或は卷末に取出してあるものすらある。ここに道行を所望したのもそのわけである。

***こぐそく**　本田の次郎近經小具足に身なかため(會稽山)

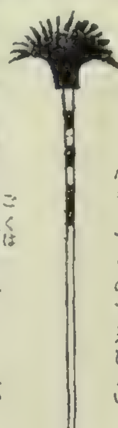
〔小具足〕鎧に具したる小具足の義。軍用記に、「小具足といふは、鎧をば着ずして腹當に籠手・臑當を着するなり」と見えてゐる。

こくち　晦日前物際は武士の軍のこくちぞい(生玉)

〔虎口〕を「ここう」とも「こくち」また「こぐち」とも讀んだものである。生玉心中の古版七行正本のここの文に、「虎口」とあつて、「こくち」と振假名がしてある。貝原好古編・諺艸にも「虎口」とあつて、「ここう」「こぐち」と兩樣の振假名を附けてあり、又白石自筆の拔抄(岩崎文庫所藏)第三にも、「虎口。莊子盜跖篇孔子曰疾走料二虎頭一編二虎鬚一幾不レ脫二虎口一哉、今俗に危場に臨を虎口に望といふ云云」と見えてゐる。「虎口」は史記・酈食其傳にも、「欲三以徑入二強秦一、此所謂探二虎口一者也」とありて、極めて危險なことをいふ。轉じて、成敗の分れる大切な所の意にいふ。

こくてうのすゑひろ　黑鳥の末廣は周防長門の萩の殿(薩摩歌)

〔黑鳥の末廣〕槍標。(萩城主・毛利大膳太夫吉廣の槍標)。



〔こくてうのすゑひろ〕

ごくは　萬民五誇の悦びに耽り、國土安穩ならん(嵯峨天皇)

山本九兵衞版・七行本に「五誇」に「ごくは」と傍訓してあれど、五誇では意通じない、思ふに字形の相似から「五綺」の誤である。「ごこ」を見よ。

黑白の鼠　「火刑に陷ちし罪人の云云」を見よ。

***こくも**　安德天皇の國母として建禮門院と號し奉る(娥)

〔國母〕天皇の御生母をいふ。有職袖中抄に、「天子の御母なり、唐名・在殿・殿里・滑陽・國母仙院、母儀仙門・云云」。

こくもち　御紋も黑餅まんまろ、鳥毛は筑前福岡の御城主(薩摩歌)

〔黑餅〕石持とも書き、眞圓の紋をいひ、中古武士が矢口の祭事の黑餅に象つたのに始まるといふ。(福岡城主・黑田肥前守綱政の紋所)。

***ごくもん**　科人は惣兵衞一味のあひずり十人あまり、粟田口にて獄門にかかる筈(淀鯉)　あれ又ここに獄門が、あさましや此首のその名は誰と白露の(大經師)

〔獄門〕江戶時代大罪を犯した者に科する酷刑である。先づ刑場で斬首し、首を洗つて苞に包み、罪狀處刑などを略記した高札を持つて前行し、その場に送つてこれを梟す。刑罪大祕錄に、「一、獄門首晒日數三日二夜。但三日目掛り町奉行所へ彈左衞門伺レ之上取捨。右晒中近邊徊成、其外違之儀有レ之候得は町奉行より申付取捨。一、捨札は三十日建取捨。右同斷の節は取除け置、殘日數建レ之」。

ごくわ　五穀五果を實らせ給へ(嵯峨天皇)

〔五果〕李・杏・棗・桃・栗。

ごくわ　「ごこ」(五綺)を見よ。

ごぐんのあや　吳郡の綾の元渡り(孕常盤)　吳郡の綾の帶が欲しい心得た(唐船噺)

〔吳郡の綾〕支那吳國から渡來した綾絹をいひ、上品として珍重した。

***ごけい**　惡逆無道の朝敵菅丞相一家の奴原五刑の罪科に行はるべし(天神記)

〔五刑〕尙書に、墨(黥である、先其面に刻し墨で之を塗る)、劓(鼻を截る)、剕(足を斷つ)、宮(男は勢を割き女子は幽閉す)、大辟(死刑である)とあれども、後世は笞・杖・徒・流・死をいふ。

現じ(釋迦) 鳥類畜類五十二類涅槃の庭に泣沈み(釋迦)

〔五十二類〕一切の有情を五十二種に分類して、大般涅槃經・序品に說いてある。五十二類は一切の有情をいふ。謠曲・鵺に、「有情非情皆共成佛道、頼むべし頼むべしや、五十二類も我同性の涅槃に引かれて」。

***こしやう** 蒲團張りして小姓衆を乘せて(堀川波鼓) 御家の若旦那殿様よりお小姓に召出され(薩摩歌) かかはもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓、互にわかきの戀風に(丹波與作) お寺小姓のちご櫻(萬年草) お伽小姓の頑是なし十二三なが手を揃へ(丹波與作) 表小姓の數數の中にも笹野權三とて(鑓權三) 傍輩は皆小小姓の額を赤めて挨拶せず(萬年草) 通はせ文を御次に落し、小姓日付に拾はれ(丹波與作)

〔小姓〕貴人の側に給仕し、煙草盆・お茶・お手水など總て膝許の用を辨じるもので、年配十三四歳の者がこの役に多い。

「奥小姓」は奥勤めをする小姓。

「お寺小姓」は寺院に仕へてゐる小姓。

「御伽小姓」は將軍・大名或は世子などの幼い頃、その側にあつて徒然の折の相手となる小姓。

「表小姓」は表勤めをする小姓。

「小小姓」は年少の小姓。

「小姓目付」は小姓衆を監督する役。

***ごしやう** 五障の雲に埋るる女人堂にぞ着きにける(萬年草) 女は五障三從の重きがうへの憂き思ひ(女護島)

〔五障〕女人は罪業深くして五つの障害を有すといふ。即ち一に梵天王、二に帝釋天王、三に魔王、四に轉輪聖王、五に佛身と成ることを得ない。これを雲に喩へて「五障の雲」と云ふ。女人はこの五障ある上になほ三從とて自由を制するものがある。即ち一に幼にしては親に從ひ、二に長じては夫に從ひ、三に老いては子に從ふ、これを「五障三從」と云ふ。謠曲・三井寺に、「我も五障の雲はれて」。平家物語・灌頂卷に、「忝くも彌陀の本願に乘じて五障三從の苦を遁れ」。

***ごじやう** 孔孟教を垂れ給ひ、五常五倫の道今に盛んなり(國性爺) 日本五常の寶を奪ひ我威を振はんと欲し(松風)

〔五常〕仁・義・禮・智・信をいふ。白虎通に、「五常者何、謂仁義禮智信也」。また劍は五常の德を具備するといふ意より、日の御座の寶劍を「五常の寶」といふ。

こしやる まあまあ下女の竹でもこしやらいで、お腹に胎兒を宿しては寢起き立居がなほ大事(三國志)

「越しある」の訛。「あ」が「や」に訛るは、「きりあひ」(切合)を「きりやひ」、「いりあひ」(入相)を「いりやひ」といふの類である。「こしやらいで」は「こしあらで」即ち「よこさないで」の意である。

ごしゆいん 「しゆいん」を見よ。

五乘(ごじよう) 三乘五乘七方便四種八部二十五有、普く利益の甘露を嘗め(釋迦)

乘は運載の義。因人を載せて證果に運ぶ乘輿といふ意であつて、佛の教道をいふ。五乘とは聲聞・緣覺・菩薩・人間・天上の五乘を云ひ、よつて以てこれ等の果を得べき五種の衆生をさす。

こじよく やい若い者ども此處な小じよくめを知つたか、終に仲間で見なれぬ奴(孕常盤) やいこじよく今度はこれを食ふかと、杵振上ぐれば(栬狩)

「こしよく」(小職)の訛、見習弟子の義。こわつぱ(小童)。こめらは(小女童)。浮世床・一上に、「あとから小ぢよくは供をしながら、振かへりて熊にからかふ」。俚言集覽に、「こじよく。女兒を云、これ大かたは娼家の詞也」。

***ごしよぞめ** 京羽二重の御所染・三栖屋針・手縫箔(浦島)

〔御所染〕染色の名。上品な散し模樣を染出したもの。菊岡沾凉撰・本朝世事談綺・卷一、衣服品の條に、「寛永の頃女院の御所にて好ませられ、多くの絹を染めさせられ宮女下つ方までに賜はる、此染京田舍にはやりて御所染と云ふ」。三宅也來撰・萬金産業袋・四、夏物の條に、「平御所染。地白にして總地はな色、かたにてり柿・黑柿・萠黄などの小色を所所に入れ染る、ひがきに菊、龍田川等の形、これを上方にては地白染と云ふ、又右の小色なしに染るもあり、或は形を鼠・白茶・黄茶等の一色にて染るもあり、又地染り・名物あふぎ染の類もあり、是等は近代の出來事なり」。融大臣・第二に「春の名殘の朧染、うつぶし色の御所染」とあれば、薄黑い染色のもあつた。

ごしよのひんぬき 段模樣の染被衣、供の女が頬冠り、御所のひんぬき二人が中へ怖氣もなくしやんと分入る(酒呑童子)

〔御所の引拔〕御所風即ち貴族風のきつすゐ。「ひんぬき」はその條を見よ。被衣などは御所めいて人目立つたのである。

(女用訓蒙圖彙所載)



〔御所風〕

***こじり** 琥珀の欄干・瑪瑙の璫(松風) 中が赤鰯の鐺がくさの(博多)

小後の義。垂木の端をいひ、そこにある飾。また刀劍の鞘の尻即ちいしづき。

こしをれうた 公家ならば公家のやうに、柿本の流をくみ腰折歌でもよまずして(女楠) 先を急がぬ旅ならば、この浦山の名所をば、訪うて眺めて道の記に、腰折歌の一首をも詠まば(蛙合戰) 抱上げても腰折の、三十一期の憂き思ひ(丹波與作)

〔腰折歌〕歌の上の句と下の句と意の相合はぬ拙惡な歌を云ふ、以て自作の歌の謙稱にも用ゐる。「腰折の三十一期」は、腰の拔けたことに腰折歌をいひかけ、その三十一文字に三十一歳をいひかけたのである。

ごしんいん 俄に觀念を改め護身印を結んで、うつさま明王五大尊の法を責めかけ(以呂波)

〔護身印〕眞言宗にて行ふもの、行者の身心を堅固に守護し、一切の惡魔を退ける爲に結ぶ印契であつて、その陀羅尼や觀念には口傳がある。

こしんぼち 「しんぼち」を見よ。

ごすで 赤繪呉洲手の錦皿下し賜はつてこれで食ふ(會稽山)

〔呉洲手〕藍色に黑みある支那製の陶磁器。嬉遊笑覽・二下・器用部に、「呉洲手。萬寶全書、染付の惡しきを名付けたり、手のよきを子昻といふ、其うらなればごすでといふとぞ、新安手前にも、ごすでは子昻を打返しこ手の惡しきを申すことと申候、是等も京都將軍の世の俗語と聞え候とあり、さることもあるべけれど、畫燒青をごすと云ふ、磁器の青繪なり」。

ばあしき道にも入りぬべし、心の駒に手綱ゆるすな」とあつて、諺にいふ「心の駒に手綱ゆるすな」の應用。

***ござうろつぷ**　律義な我身の奉公にしてお爲にならうと存ずる一念、五臓六腑に染込んでお主を大事に存じまする(淀鯉)　五臓六腑を吐出し、鐵の熱湯が咽を通る苦しみより(鎗權三)

〔五臓六腑〕五臓は肝・心・脾・肺・腎を云ひ、六腑は膽・胃・大腸・小腸・膀胱・三焦をいふ。轉じて、廣く「はらわた」をいふ。

***こざくらおどし**　白糸縅しらしらと東雲いそぐ小櫻の、盛りの春ぞたのもしき(用明天皇)　小櫻を黄に返したる鎧(大原問答)

〔小櫻縅〕縅は緒通とも威の義とも云ふ。藍地に白く小櫻の花形を染出した革を小櫻革といひ、その革で縅した鎧を小櫻縅の鎧と云ふ。小櫻革を黄に染返したもので縅したものを「小櫻を黄に返したる鎧」といひ、地色は萠黄に似、櫻は黄になつてゐる。

ござござふね　「ござふね」を見よ。

こざね　「さね」を見よ。

***ござふね**　お二人まめで中好うて、隨分無事でござ船で、迎に參る男山(淀鯉)　男女がござござ船に。秋涼しき川風は、秋といひても嘘でないよの(今宮)

〔御座船〕「川御座」をいふ。その條を見よ。「ござござ船」は混雜混雜に御座船をいひかけたのである。

***ござめれ**　額を見れば是は扱鐵漿黑に色白し、まさしう平家の御公達ござめれ(千載集)　これこそ天晴聞き及ぶ淨瑠璃御前ござめれ、何卒すかして宿を借り(源義經)　よい敵ござめり(會稽山)

「こそあるめれ」のつまつたものである。されば「ござめり」は「ござめれ」とあるべきである。(序に云、「こそ」は係結につきて、その末を結ぶに第五活用の終止法を用ゐるのであるが、そのはじめは條件文に用ゐられて接續の助詞の略されたのが、自然第五活用を以て結ぶものとなつたのであらう)。「めり」は「やうに見える」といふ程の意で、現在の推量を示す助動詞である。

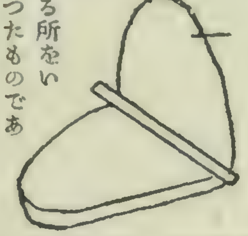
***ござりんす**　こりや旦那さんで御座りんすか、内方に居さんす半七殿にちよつと逢ひたう御座りんす(女腹切)

「御座ります」を訛つて「ござりんす」また「ござんす」ともいふ、廓詞である。「りんす」をも見よ。

***ござんなれ**　これはなかうどいらずの新枕ござんなれ、互の初戀おもはゆからん(用明天皇)　あれは敵盛綱の居間ござんなれ、幸爰に弓矢もあり(佐佐木)　げに屈竟の時節ござんなれ、かまへて人に悟られ給ふな(出世景淸)　扱こそ變化ござんなれ、いで物見せんと(振袖始)

「こそあるなれ」のつまつたものである。

***こじ**　御冠の巾子を傾けて(井筒)



〔巾子〕

〔巾子〕冠の高く突上れる所をいふ。髻を容れる爲に作つたものである。「きんこじ」をも見よ。

ごじ　一條院いまだ七歳の幼主として、五事七政を秋津洲に施し給ふぞ有難き(關八州)

〔五事〕貌・言・視・聽・思をいふ。蓋し五事は修身の要である、人君敬み其身を修めんと欲するに五事を用ゐる。書經・洪範に、「敬用二五事一」。

ごじ　そも華嚴寂滅だうぢやうに始り法華涅槃に書き終る、其中間五時八教(百日曾我)

〔五時〕釋尊一代の說教を五時に分つ、卽ち華嚴經に三七日、阿含經に十二年、方等經に十六年、般若經に十四年、法華經に八年を費されたと云ふ。「華嚴經にて中戶に口說き云云」をも見よ。

こしがはり　あれあれあそこの桔梗染の腰變り縞繻の帶、しやぢやわいの(女殺)　駕籠の紋は松皮菱、鱗形の腰變り(薩摩歌)

〔腰變〕腰のあたりにて染分けた着物。

***ごししよ**　伍子胥が吳王を諫めたる金言よりなほ重し(嫗山姥)　李踏天が眼を抉りしは伍子胥が餘風(國性爺)

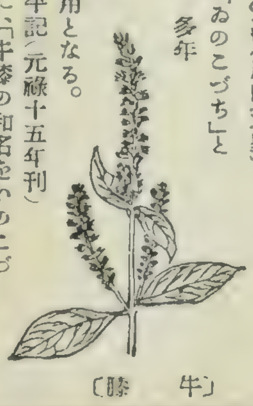
〔伍子胥〕吳王夫差の臣である。周の敬王二十六年吳王夫差が越王勾踐の軍を夫椒に破る、勾踐餘兵を以て會稽山に棲み降を請ふ、子胥乃ち吳王に勾踐を殺すべきを建白して用ゐられなかつた、大宰嚭・子胥を讒したので、夫差・子胥に屬鏤の劍を賜うて切腹を命じた、子胥その家人に告げて言ふに、必ず我墓地に檟樹を植ゑよ、吳王が勾踐と戰敗れて死なれた時の棺材になるであらう、吾目を抉つて東門に懸けよ、越兵が吳を滅すのを見るであらうと、言ひ終つて自刎した、かくて伍子胥の言の如く越遂に吳を滅した。

***こじたるい**　くされくされと血判を据ゑたこじたたるい女子文(萬年草)　下地がにやこい旦那樣、こじたたるうしかけたらぼつかりと食附いて、田もやらう畦もやらうで(夕霧)　ええいやらしいこじたたるい(壽門松)

〔小舌懈〕でれでれしい。惚氣らしい。

***ごしつ**　牛膝・あかりも・二十日草・鼠尾花・末摘花　この草を取つて滿月の夜の露を搾つて與ふるに、形碎けて消ゆるとは見えたれども(用明天皇)

〔牛膝〕「ゐのこづち」ともいひ、多年生草本、根は藥用となる。元祿太平記(元祿十五年刊)卷之一に、「牛膝の和名をいのこづちといへば」。民間年中故事要言(元祿十年刊)卷四、草合井園子鹹の條に、「牛膝は胎を傷り、瀉漆重藥は毒藥なるが故なり。」



〔牛膝〕

こしはう　精進落つるこれ見よと、小四方引寄せ昆布に添うたる熨斗ひつつかみ(娥)

〔小四方〕足打折敷をいひ、四方に孔あるからの稱。書言字考節用集に、「小四方。小盤也、俗云足打」。

ごじふさうでん　「ごぢゆうさうでん」を見よ。

***ごじふにるゐ**　五十二類も佛果を

程も食物を出してもてなすを幾こんと云ふなり、是古の詞なり」。

***こちと**　こちとが百錢落いたとも思はぬ程の身代なれども(淀鯉)　こちと夫婦は當惑して(氷朔日)

「こちびと」(此方人)の略か。自分ども。われら

***ごぢゆうさうでん**　まんまと法然上人が彼方の十念授かり、諸分けの五重相傳受け、四十八夜の常念佛互に忍び忍ばれて(薩摩歌)

〔五重相傳〕浄土宗で行ふ法儀で、第一重・選擇集、第二重・授手印、第三重・領解鈔、第四重・決答疑問鈔、第五重・論註の要文の口傳を師から受けるを云ひ、この宗で祕傳とする所である。ここの文にあるはから云ふ義ではなくて、五重相傳は浄土宗の祕傳であるによつて、以て男女情事即ち色道宗門の祕傳をいうたのである。傾城禁短氣にも「女郎買五重相傳」などの詞が見えてゐる。

***こぢよく**　「こじよく」を見よ。

***ごぢよく**　宮も藁屋もおしなべて、假の宿を何時までも、五濁に迷ふ水泡の、轉た迷を導きて(釋迦)

〔五濁〕刧濁・煩惱濁・衆生濁・見濁・命濁の五種の渾濁不淨を云ふ。法華經・方便品に、「諸佛出於五濁惡世、所謂刧濁・煩惱濁・衆生濁・見濁・命濁」。

ごちんざ　「ちんざ」を見よ。

ごつい　ごつい客の癖に、揚げの日は半時も側に置かれば損のやうに吸附いてゐたさうな(生玉)

ごつごつしい。かどかどしい。武骨しい。綫窻方言考に、「上方にてかどかどしきをごついといへば云云」。現今も紀州東牟婁郡あたりにて、武骨しいを「ごつい」といふ。

***こづか**　權柄になさるるなと、もぎ放せばこづかを取り引伏せ(卯月柁)　互にこづかを取つては投げつ投げられつ(丹波與作)　おゆらは夫太四郎がこづか胸座掴み合ひ(酒呑童子)　こづかを取つて引ほどき叩附け食附きし、齒ぐきの血しほ血の涙(用明天皇)　頰輔をはたと打ち、こづかを掴み引釜り(吉岡染)

「もとどり」(髻)をいふ。「かみづか」(髮束)を「かんづが」「からづか」といひ、「こづか」と轉訛したので、「かみより」(紙縒)を「かうより」といひ、「こより」といふのと同じ類である。安原貞室撰・かた言(慶安三年刊)に、「からづかをこづか」。

***こつがら**　面體骨柄寸分相違なき上に(最明寺殿)

〔骨柄〕ほねぐみのやうす。容姿。

こつきやつこう　西の海へ打投げろこつきやつこう(雪女)

「こきやから」ともいふ。その條を見よ。

こつくい　さてもお目利今極め、こつくい打つて私儀は銀座に長長使はれ(薩摩歌)

「こくいん」(極印)の音便訛。金銀貨幣に發行所・量目などの文字、標目等を打込んで證とする、これを極印といふ。

***こつちやう**　嘉平次様といふ人は嘘つきの骨張(生玉)

〔骨張〕骨子張本の義。最上、第一の意にいひ、多くは惡いことにいふ。源平盛衰記・爾巻第四、白山神輿登山の條に、「中宮の大衆の中に智積・覺明・佛光等の骨張の輩六人云云」。傾城太太神樂(寶永二年刊)卷一、心中兩手繩の條に、「坊主の四郎兵衞・春駒の善七などいづれも馬鹿の骨張」。

***こつていうし**　こつてい牛の二匹連(振袖始)　今宵は猪の七年物、こつていうし程なをしてやつて(持統天皇)

「ことひうし」(特牛)の音便訛。牡牛をいふ。「ことひ」とは物を負ふに強い義。箋注倭名類聚抄・卷七に、「特牛。弁色立成云特牛(俗語云三古止比一、萬葉集、牡牛訓三己止比宇之一、又事負乃牛亦是、本居氏曰、古止比・殊負也、謂三負物殊多一)」。貝原好古編・諺艸に、「特牛。こつていのうしは誤」。

***ごづてんわう**　强きを破り剛きを割り硬きを碎く牛頭天王、末世の惡魔疫神を防ぐ神威ぞ有難き(振袖始)

〔牛頭天王〕素盞嗚尊をいふ。印度の忿怒鬼神Gavagriva(譯して牛頭)を素盞嗚尊に附會したものだといふ。(或はまた日本書紀に、素盞嗚尊韓土曾尸茂梨に赴き給ふとあるによつて、牛頭は韓國の地名「ソシマリ」であるともいふ)。京都の八坂神社はこの神を祀つたものである。

***こつぱふ**　靫胡簶に的矢一手入るは侍所瀧口の骨法(會稽山)

〔骨法〕禮儀作法の筋道。源平盛衰記・和卷第十三、高倉宮信連戰の條に、「衞府の宮をけがす侍に繩附けんなど申し行ひつる事無下に骨法を不レ知けり」。

***こつぽとけ**　常常氣立が結構で、お宮とは言はず佛佛と申したに、可惜佛をやくたいもない骨佛にして除けた(反魂香)

〔骨佛〕人の死體の肉脫落して白骨となつたもの。死體を火葬にした骨灰。

こづめやくしや　藏屋敷の役人と小詰役者の眞似をして、痴を盡したこの刀(天網島)

〔小詰役者〕小部屋に詰込んで居る端役者をいふのが轉じて、下廻りの役者(俳優)をいふ。人倫訓蒙圖彙・七に、「小詰。歩者・若黨をはじめ、一切人につきて自身役をせざるをいふ」。

***こて**　高手籠手に縛付け(出世景清)　高手の繩ふつつふつつと喰ひ切れば、小手の繩もゆるまりて(蛙合戰)

〔小手〕高手に對する語で、手先をいふ。

***ごでうけさ**　下は墨染五條袈裟(會稽山)

〔五條袈裟〕三衣の一、安陀會の法衣。

ごてうし　序破急の三段に五調子をしらべ(三世相)

〔五調子〕壹越(宮)、平調(商)、雙調(角)、黃鐘(徵)、盤渉(羽)。

こてうはい　早新玉の四方拜・節會・藥子・小朝拜(百合若)

(小朝拜)正月元日淸凉殿の東庭で殿上人のみ拜賀の禮を行ふをいふ。

胡敵の一足　枯木の枝によろよろよろと、今は胡敵の一足と、かこちしも俊寛が身に白雪の(女護島)

「昔は巖窟の洞に籠められて云云」を見よ。

こてまり　樅・南天に小手毬に、いとし男と射干の(生玉)

〔小手毬〕庭園に栽培される灌木で高さ三四尺に達す、葉は長橢圓形で鋸齒を有し互生す、花は小形白形で撒房花序に排列す。

ごてんやく　「てんやく」を見よ。

よく製法して釉をかき、釉水かくれば青色となれども、もと色黑きもの故、釉水かからぬ處は其色黑し、故に藍色の黑みある陶器なればごす手といひしを、誤の名のやうに取なしたるもの歟」。

ごすもじ　「すもじ」を見よ。

***ごするゐ**　その天人の五衰より人間に八苦あり（松狩）　身に任せれば天上の五衰の花も散るとかや（持統天皇）　天上の五衰より北州の千年も（弘徽殿）

〔五衰〕天上は快樂極りなけれども、これも永遠のものにあらずして五衰とて果報滅盡の相がある。往生要集に「如二彼忉利天一、雖二快樂無一レ極、臨二命終時一五衰相現、一・頭上花鬘忽萎、二・天衣塵垢所レ著、三・腋下汗出、四・兩目數眴、五・不レ樂二本居一、是相現時天女眷屬皆悉遠離棄レ之、如レ草偃二臥林間一悲泣哭」。謠曲・羽衣に「涙の露の玉鬘、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も目の前に見えてあさましや」。「天上の五衰より北州の千年云云」は「過去をんをんの昔云云」をも見よ。

***こすゐりゆう**　小水龍といふ名管を上より預け下さるる、そも此笛は天曆の帝の御寶物、國に怪しみある時は吹かぬに已れと音を出す神妙あり（雪女）　小水龍といふ御笛、天曆の帝勅筆の銘ありて（雪女）

〔小水龍〕横笛の名。拾芥抄に、「小水龍。江記曰、天曆御字寶物」。

***ごぜ**　お肴にごぜ殿一節賴むといひければ（今宮）

〔御前〕盲御前の略、瞽女をいふ。三味線などを彈き唄を謠うて錢を乞ふ盲女。人倫訓蒙圖彙（元祿三年刊）二に、「瞽前（ごぜ）。光孝天皇の御子雨夜の前にはじまるといふ說あり、これも歷歷の奥方へも出入、又はいとけなき娘子に琴・三味線を教へ侍れば、身持きやしやにありたきものなり」。

こせあふみ　巨勢あふみが書きたりし淺さは水の杜若（大掛物）

〔巨勢相覽〕畫師にして巨勢金岡の子。和漢音釋書言字考節用集に、「金岡（宇多朝人）。巨勢氏、從五位下采女、工二畫圖一、其三子・相覽・公忠・公望共承レ業佳聲」とありて、相覽に「アフミ」と傍訓してある。

***ごせつけ**　禁裏・院中・親王・五攝家・淸華の御方（大經師）

〔五攝家〕近衞・九條・二條・一條・鷹司の五家であつて、攝政關白に任ぜられるを得た家筋。

***こそだい**　强吳忽に亡びて姑蘇臺の露荊棘にうつる（千載集）

〔姑蘇臺〕支那春秋戰國時代、吳王夫差が美女西施を寵して姑蘇臺を築き、その上で遊宴したが、後に越の爲に亡され、この臺も燒かれた。江蘇省吳縣の西南に姑蘇臺の遺跡があると云ふ。史記・吳世家に「吳王夫差破レ越、越進二西施一請レ退レ軍、吳王許レ之、既得二西施一甚寵レ之、爲築二姑蘇臺一、高三百丈、游二宴其上一」。

こそばあ　乳のあたりへ手をやれば、ああこそばあ、またしてはまたしては抱付いたり手をしめたり（大經師）

「こそばゆい」（羞痒）の「ば」を延べて「ゆい」を略した語。くすぐつたい。

***ごだい**　五體の涙しめよせて（二枚繪）　おのれが五體どこを不足に生付けた、人間の根性なぜさげぬ（女殺）

〔五體〕筋・脈・肉・骨・皮毛、或は頭・兩足・兩手を云ふ。轉じて全身をいふ。

***ごだいそん**　五輪五行に五大尊（筒井）

〔五大尊〕五大明王（ごだいみやうわう）を云ふ。次條を見よ。

***ごだいみやうわう**　内にこめたる五大明王・六觀音・七佛藥師の御座の守（女夫池）

〔五大明王〕降三世明王・軍荼利夜叉明王・金剛夜叉明王・大威德明王・大日大聖不動明王の五大尊をいふ。「とうはうにがうざんぜ云云」をも見よ。

ごだいりき　袖から渡す一結び、片假名の、より・五大力・いよし・とまではほの見ゆる（三世相）

〔五大力〕貞享から元文頃にかけて、手紙の封に「五大力」又は「五大力菩薩」と書くことが流行した。五大力は金剛吼・龍王吼・無畏十力吼・雷電吼・無畏力吼の五菩薩力であつて、これを執金剛神または住吉奥の院天部の神に當てられてもある。傾城屋や遊女の輩は密敎信仰者が多いので、緘緘に五大力または五大力菩薩と書いたのである。蓋し五大力菩薩の力で結んだものは、その封が解けぬと云ふ呪であつて親展を意味するのである。（後世になつては、これが轉用されて煙管・簪・小刀のやうな物に五大力と刻込むやうになつた）。西鶴撰・日本永代藏（貞享五年刊）卷一に、「封じ文一通拾上げしを取りて見れば、花川様まゐる・二三より・と裏書き、そくひ附けながら念を入れて印判捺したる上に、五大力菩薩とそめぞめと筆をうごかせける」。立身大福帳（元祿十六年刊）卷之五に、「封じたる狀を一通拾上げ、うは書を見れば大阪の商人より京の商人へ急用をいひ遣すと見えて、裏に五大力菩薩として卽ち時附あり」。伊達髮五人男（寶永四年刊）卷二に、「又逢ひたいと書きまゐらせ候の反古染、五大力菩薩のうは繪もにくからぬ命毛」。傳奇作者拾遺に、「五大力とは神か佛とかの名にして、既に住吉神宮等に在て、其頭のはやり神なり、狀の緘じ目に五大力と書て送る時は、他見を忌て滯りなく達するとて其頭專ら流行しけり」。

ごだうし　異國には吳道子が繪、主の僧をなやませし（關八州）

〔吳道子〕吳道玄・字は道子、唐玄宗皇帝時代の人である、書法妙を得、曾て寺僧を訪ふ、僧禮しなかつたので道玄壁に驢を畫く、夜その驢動き出して僧具を蹈み毀したといふ俗傳がある。

五道の冥官（ごだうのみやうくわん）　上は梵天帝釋、下は四天王閻魔法五道のみやうくわん（用文章）

人目には見えねども、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五道の衆生を常に照覽する神。佛說地藏菩薩發心因緣十王經に、「取二於罪人一置二秤盤上一、秤目如レ故、亡人閉レ口造レ惡變レ面、訪羅下レ之傳二勘錄舍一、赤紫冥官令レ點二秤書一」。

火燵開けた祝儀（こたつあけたしうぎ）　一昨年（をとどし）の十月中の亥の子に火燵明けた祝儀とて、まあ爰で枕並べた此かた（天網島）

火燵は十月玄猪（ゐのこ）の日に開け、内祝をしたものである。滑稽雜談（正德三年成）十月の部に「火燵切（亥日）和俗の爐を開き火燵を切るに亥日を用ふる事、これ火災を除るの謂なり、亥は極陰のものなり方なり、此日玄猪を賀し愛宕を以て祭るなども、彼神は陰神にて亥の方に鎭座す、……故に亥の子に火燵を開くなり」。

ごだん　其日もやうやう併食のごだんの吸物はや盃も滿潮の（五人兄弟）

〔後段〕客のもてなしに、飯の後に麪類（めんるゐ）にても何にても出すを云ふ。貞丈雜記・卷六・飲食之部に、「客のもてなしに、飯の後に麪類にても何にても出すを、今の世には後段と云ふ、古はなき詞なり、飯の後にも又は前にも、いか

なして槍葉に類し掌を立てたるがやうである、その葉の表裏殆んど同じければ、二面（ふたおもて）といふ語につづけていふ。

*このはむしや　木葉武者五十百斬つたるとて何の益かある（會稽山）

〔木葉武者〕雜兵。木葉の風にはらはらと散るやうに輕くして重みの無いのを云うたので、曾我虎が磨に、「徒士足輕の吹けば散る木葉侍が高名して」、文武五人男に、「やれ額めこつぱ武者どもゝ」とある、「木葉侍」「こつぱ武者」や、その他「木葉天狗」「木葉坊主」など總て身分の輕く卑い者を云ふのである。

このり　さて御鷹は・つみ・えつさい・さしば・せう・隼・このり（百日曾我）

〔兄鷂〕「はいだか」（鷂）の雄。和漢三才圖會に、「兄鷂。和名古能里、鷂之雄也、脚極細而易レ折、能捉二鶉已下小鳥一、最俊者捉レ鴿」。

近衞流　謠の本は近衞流、野郎帽子は若紫、惡所狂ひの身の果は、斯くなり行くと定まりし（天網島）

近衞信尹（のぶただ）の書流をいひ、謠曲本の字は此の書流である。信尹は本名を信基・謚號を三藐院といひ、弘法大師の書風を學んだ能書家で、近衞流の祖である。左大臣となり、慶長十年七月關白氏長者となり、十九年正月薨ず、享年五十。本阿彌光悦、角倉與一も信尹に書を學んで謠曲などを書寫し刊行した、これを嵯峨様といひ、近衞流派である。巢林子のこの文は、謠曲本の字は近衞の書流にきまつたもの、野郎歌舞伎の俳優の被れるものは若紫の帽子にきまつたもの、遊里に入りびたり遊女狂ひする者は、終に金と義理人情に窮して身の破滅となるにきまつてゐるとの意。今様二十四孝（寶永六年刊）巻三に、「謠の本は近衞流、野郎の帽子は紫云々」と見えてゐる。

ごばく　「天（てん）の五漢（ごくわう）に火、帝入（くわていい）れば云云」を見よ。

*こはばる　降參すれば命を助くる、こはばらば手本はこれと內へ投入れ（關八州）

〔强張〕强情を張る。

*こはひ　いやいや微塵こはひになればとて（會稽山）

〔粉灰〕「こつぱひ」ともいひ、細かく碎けること。大矢數・第二七に、「微塵粉灰に碎かれて」。

小林　衞士の焚く火と品變る、かの小林が舞扇、これも浮世の形見こそ、今はあだなれ松風や（生玉）

小林は正德頃有名な辻能役者であつて、誓願寺遊行念佛（富松薩摩正本）中巻に、「サアよいついで小林が辻能見て來まいか、これはよかろと、早足に走り行く」と見えてゐる。巢林子のここの文は、小指の血汐を血判に捺（お）して戀に心をみがきを「みかきもり衞士の焚く火」（その條を見よ）の古歌にいひかけ、それとは品變るかの辻能役者小林が松風の舞扇、起請誓紙も浮世の形見に殘るを、謠曲・松風の「形見こそ今は仇なれ」の文にいひかけてつづけたのである。

ごばんがうし　碁盤格子の染帶を（薩摩歌）

〔碁盤格子〕碁盤の目の如き縱橫の縞。碁盤縞。

ごび　國家の政道四惡を退け、洛陽二條室町に殿造り、五美を尊み給ひけり（女夫池）

〔五美〕政に從ふに五つ美事がある、卽ち惠を民に施すにも民の利を謀るやうにし、必ずしも己の財を費すを要せぬ、これ一つの美事、民が悅服して用をなすやうにすれば勞しても怨みられることがない、これ二つの美事、仁政を施して風俗敦厚とならばこの上に貪るものはない、これ三つの美事、泰然自得しても驕慢の心を生じない、これ四つの美事、威儀儼然として自重しても猛（たけ）く厲しくはなく、人をして畏敬の心を起さしめる、これが五つの美事である。論語・堯日篇に、「子曰、尊二五美一屛二四惡一、斯可三以從二政矣、子張曰、何謂二五美一、子曰、君子惠而不レ費、勞而不レ怨、欲而不レ貪、泰而不レ驕、威而不レ猛、子張曰、何謂二惠而不一レ費、子曰、因二民之所一レ利而利レ之、斯不二亦惠而不一レ費乎、擇二可レ勞而勞一レ之、又誰怨、欲レ仁而得レ仁、又焉貪、君子無二衆寡一、無二小大一、無二敢慢一、斯不二亦泰而不一レ驕乎、君子正二其衣冠一、尊二其瞻視一、儼然人望而畏レ之、斯不二亦威而不一レ猛乎」。

*こひぐち　鯉口・鍔に握り添へ（酒呑童子）

〔鯉口〕刀の鞘口で鍔と相合ふ所。

*こひめ　おりはのこひ目三六の、十八九なるかほよ花（曾根崎）

〔乞目〕雙六にて己の欲する賽の目。ここの文は乞目に戀目をいひかけ、賽の乞目三六といひて三と六との倍數十八を十八九とつゞけて、お初の色盛りの年齢にいひかけたのである。

*こびやう　源氏の大將義經に見參のしるしに、小兵ながら中差を參らせん（津戸三郎）

〔小兵〕弓勢の弱きこと。謠曲・八島に、「この弓を敵に取られ、義經は小兵なりといはれんは無念の次第なるべし」。

五百八十の餅（ごひやくはちじふのもち）　今日は五日め、五百八十の餅を搗いて、里歸りといふこと緣邊の式法なれども（反魂香）

婦人が嫁して後三日或は五日目に父母の家に至る儀式を里歸りといひ、五百八十個或は五百八十七個の餅を歸寧の土產とするを式法とされてゐた。五百八十又は五百八十七は幾久しきを祝福する數である。武道傳來記・巻八、行水で知る人の身の程の條に、「高砂丹兵衞横手を拍ちて、茂七郎殿の長生き、鳥をまゐらぬ人人は五百八十年も生き殘りて見給へ」。貞丈雜記・巻一、祝儀之部に、「今世上に婚禮の三つめの日、聟舅共に餅をつかせて五百八十七に丸めて、菰のむしろにてかますといふ物を作りて、それに彼の餅を入れて使に持たせやりて、途中にて出であひ互に餅を受取り渡して祝ふ事、當世江戸にて專らはやる也、京都將軍時代の故實には左樣の事はなし、三つめの日餅をつき祝ふ事はある事也、餅の數定まりたる事なし」。

*こびる　二人などうと引敷いて、やあこび過ぎたる奴等かな。斯波左衞門が家來藤內太郎家治ぞ知つつらん（雪女）　藤內四郎取つて返し、矢面に駈塞つて、やあこりやなまこび過ぎたる奴原（やつはら）かな（雪女）

〔媚〕追從しお世事（せじ）の上手な意より轉じて、こぶれる。こましやくれる。「こびる」をこましやくれるの意に今も備後あたりでは用ゐてゐる所がある。

*こひをしへどり　さてこそ彼の鶺鴒を庭來鳴鳥・庭叩鳥・戀敎鳥ともいふぞとよ（振袖始）

〔戀敎鳥〕鶺鴒の異名。日本書紀・神代上に、「遂將二合交一而不レ知二其術一、時有二鶺鴒一、飛來搖二其首尾一、二神見而學レ之、卽得二交道一」。太平記・巻二十五、伊勢より寶劒をまゐる條に、「二神（伊弉諾・伊弉册）夫婦となりて住み給ふといへども、未だ陰陽和合の道を知り給はず、時に鶺鴒といふ鳥の尾を土に敲きけるを見給ひて、始めて嫁ぐことを習ひて」。

*こふ　千年こふへたる古狐の骨張（天鼓）　文覺暫く觀念し、甚だこふ

ごど 目前の勝利にごどの天罰受けんより疾く歸れと呼はりける(松風) すぐに城をや乘るべき、陣を堅めてごどの勝をや待つべきと(聖德太子) 其女房は何者とごどをつかるる念の爲、今ここで私と夫婦のかための盃して、とつと前から藤袴と契約ありと申さば(反魂香)

〔後度〕後後。「後度を突く」は後を突返して問ふをいふ。合類大節用集(享保二年刊)卷九・言辭門に、「後度。又云後途」。

***こどく** 人の命を取ること鴆毒・蠱毒より速かにて(國八州)

〔蠱毒〕毒物である。左傳疏に、「以二毒藥一藥レ人、令三人不二自知一者、謂二之蠱毒一」。合類大節用集(享保二年刊)卷六下・服食門に、「蠱毒。時珍云、以二百蟲一置二皿中一、令二相啖食一、取二其存者一爲レ蠱」。

ことぢ 鐵杷・刺股・もぢり・琴柱(國八州)

〔琴柱〕琴柱棒のことで、尖端が琴柱を逆にした形であるから云ひ、刺股の別名である。

ことのくみ お大名のみやづかへ、琴の組でも謠はいで、誰に習うてはでな歌、姫樣などに敎やんな(丹波與作)

〔琴の組〕琴の組歌の略。嬉遊笑覽に、「組といふことは三絃の曲より出、おなじ趣の小歌をよせ聚めたるを組といふなり、……三絃の組に傚ひて組歌につくりたるは八橋に始れり」とある。八橋檢校・名は城談(また城秀)、琴曲の名手、貞享二年七十二歳で歿す、表組七曲・裏組六曲を定めた人である。

***琴の音** 我は澄渡る此海面の松風の琴の音に眼を覺し(浦島)

松籟をいふ。拾遺集に、「松風入二夜琴一」の題にて齋宮女御の歌に、「琴の音に峰の松風通ふらし、何れのをより調べそめけむ」と見えてゐる。琴の音を松籟にいふことこれらから出た詞である。

***ことばつがふ** 節季に寄らぬ銀の過ぎて寄つた例は無い、今日暮れてから渡さうと言葉つがうた(女殺)

〔言葉番〕言葉を合はす。口約する。

ごとみそ 毎晩五斗味噌肴に天目酒、そのあとへ打入飯六ヒづつ、珍しいお腹でないか(持統天皇)

〔五斗味噌〕唯樂軒撰・立身大福帳(元祿十六年刊)卷六に、「五斗味噌。大豆一斗、糀一斗、ぬか一斗、粕六貫匁、醬油粕六貫匁、鹽五升、右の通にすべし、久しくなるる程よし、但しぬかをむしてもするなり」。俚言集覽に、「五斗味噌。米の糠五斗、大豆一斗、米麹三升、鹽五升、右擣合せて三十日過て用うべし、一名ササヂンといふ」。按ずるに製法は一定してゐないが、五斗味噌の稱は、豆二斗・糠二斗・鹽一斗、以上合計五斗を搗き合はせて造る故に云ふといふ。

ことんび 唐の物かけて取る道中の小鳶、重ねて爰へうせうかと、荒き風にも當らぬ身を握拳七つ八つ、うんといふ程敲かれて(艶狩)

〔小鳶〕人目をしのびて物を盜み行く小盜を、鳶が鷄の雛などを捉つて去るに喩へた語。晝間他人の財物をさらひ行く盜人を晝鳶といふもこの類の語である。

ごないしよう 「ないしよう」を見よ。

***子なかなす** 尤も家も商賣も私の物とは申しながら、子中なしたなかなれば、もう今では屋財家財皆主の物でござりまする(重井筒) 子なかなしてもつひに見ぬかためごと(天網島)

間に子までまうけろ。子をこしらへた程の間柄である。狂言・もらひむこに、「子中をなしたるなかを、でるぞひくぞといふ事はあるまい」。

***こなから** 袖から出す小半入の德利に餘る親心(壽門松) こなから切のけんどん酒、頭張に十文出し(吉岡染)

〔小半〕酒一升の半のその半分、即ち二合五勺程をいふ。

***こなさ** 煎藥と練藥と鍼と按摩でやうやうと命繫いで、たまさかに逢うてこなさに甘えうと(夕霧) 桑の木とも榎の木とも、こなさあに似合うたあはうの木とも見さんせ(反魂香)

「こなさあ」「こなさん」「こなさま」ともいひ、「こなたさま」(此方樣)の略であつて、對稱代名詞の敬語として用ひる女詞。

粉にはたく 「はたく」を見よ。

ごにんぐみ 借つた金は二百匁、明日になれば手形の通り一貫匁で返す約束、それよりも悲しいは親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ先樣からことわる筈(女殺)

〔五人組〕五戸を一組とした隣保的團結である。五人組の名稱は何時代から始まつたか詳ならねども、天文頃に既にこの稱があつた。盜賊・掏摸・辻斬などが頻にあつたので、治安維持の方法として五人組合團結の制を定め、組合相警めて罪惡を犯さぬやうにし、若し罪惡を敢てする者があつたならば、其組合から告發せしめたものである。かくて五人組は德川時代治安擔保の機關として完備した發達をした、そして切支丹の禁止や浪人取締上に重きを置いてゐた。序に云、長町女腹切に、「あれは懸僧が五人組、萬年寺の同宿忍び戀路のつかみどり」とある「五人組」は、遊興仲間の五人連中のことで、ここにいふ五人組と別であるはいふまでもない。

このしろ このしろといふ魚を以て火葬を欺き(薩摩歌)

〔鰶〕鰶魚を炙く臭氣は人の屍體を火葬する臭氣に似てゐればいふ。本草に、「鰶。魚中之下品、其臭如レ屍」。和漢三才圖會に、「鰶魚、炙レ之甚臭如二屍氣一」。日本釋名に、「鰶＝もとは此魚の名をつなしと云、此魚をやけば其臭き事人を燒くに似たり、昔或人後妻にまよひ、讒を信じて其前妻の生める子を其家の奴に命じて殺さしむ、奴其罪なき事を知りて、窃に其子を隱しつかはし、其子の代りにつなしを多く燒きて、子を殺して火葬したるよしを其父に告げける、それよりして此魚の名を子の代とぞいひける」。

***このてがしは** うら懷しき女肌・男女の二面、このてがしはや此手振れ(雪女)

〔見手柏〕常綠灌木、高さ一丈餘に達し、葉は小形の鱗狀を

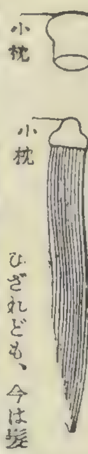


〔はしがてのこ〕

に本尊を安置し、火爐を設け、檀木・乳木と云ふ長短二種の薪を用ひ、香・五穀・蘇油等諸種の供養物を捧げて行法を修す。蓋し智慧の火を以て煩悩の薪を焼き、眞理の性火を以て魔害を蕩すの標幟とする。大日經疏・十五に、「護摩是焼義也、由二護摩一能焼二除諸業一」。

こまくら 髱・小枕取つて棄て地髪ばかりを鉢巻し(百日曾我) 挿櫛・笄・紺小枕(薩摩歌) 別れの涙亂れ髪共に落來る膝の上、小枕棄てて丈長も捻元結に大髻(雪女)

〔小枕〕髷の根を高くし髻の締よい爲に、中剃の上に押當てて入れるもので、はじめは附木などを輪にして用ゐたか、紙を堅く束ね又は黄楊などで作り、其上を紺紙または紫絹で包むやうになつた。嬉遊笑覽・一の下・容儀に、「小枕は町方にて文化の初頃よりすたれて用ひざれども、今は髪少き者多く小枕付の入髪をば用るなり、小枕もはじめは附木などを輪にして用ひたり」。



こまざらへ 聖秀ごときの武士はこまさらへにて掃く程あるべし(千疋犬)

「こまざらひ」(細杷)の轉。木の葉など掻集めるさらひ。このはがき。

こましやくれる 經正殿もこましやくれて十四の春から醉がばり(娥)

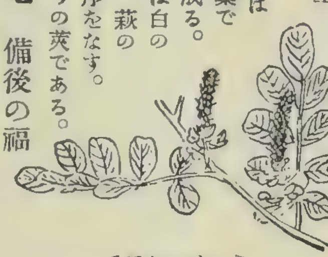
こまさくれるともいふ。老成ぶる。年の程よりおとなびてゐる。俚言集覽に、「こましやくれる。コは助語、シヤ反サ也、マサは長の義。クレルは重クレルのクレルにてクレの反ケ也、長氣の義なるべし」。浮世花鳥風月・花之部、花笠は忍びの種の條に、「妓の口元は宛然定家流のへの字の如く、すこしこまさくれしを好ける人もあればなり」。

こまちをどり ややこ踊・木曾踊・小町踊・伊勢踊(女護島)

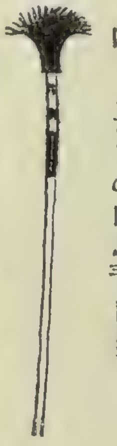
〔小町踊〕小娘が美衣を着・襷を掛け・造花を挿み、小大鼓を打囃し、輪になつて歌ひながら踊る、その踊の名。好色一代女・巻一、舞曲の遊興の條に、「萬上京と下京の違ひありと耳功者なる人のいへり、浴衣染の花の色も移りて小町踊を見しに、里の總角なる振袖に太鼓の拍子、四條通りまでは靜かにゆたかに、いかさま都めきたり、それより下は、町筋かぎりて騒せはしく、足音ばたつき、かくも變るものぞかし」。

こまつなぎ 駒繫の草蔭(用明天皇)

〔駒繫〕山野に自生する草で、高さ一二尺に達す。葉は互生し、羽狀複葉で數多の小葉より成る。花は紅紫色または白の蝶形花冠を有し、萩の花に似て總狀花序をなす。果實は六分ばかりの莢である。

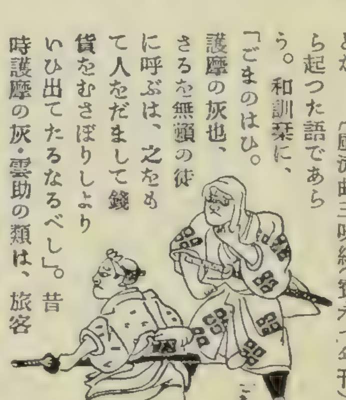

〔こまつなぎ〕

獨樂形の白鳥毛 備後の福山こまなりの白鳥毛(薩摩歌)


(備後福山の城主松平下總守忠雅の鑓標)

ごまのはひ 或は騙り・鳩のかひ・追剝・押入・ごまのはひのねだり取り(娥) 往還の護摩の灰か・とろばうか(用明天皇)

〔護摩の灰〕騙者。旅人を欺いて掠奪する無頼漢。これと同意義の語に「とつこ」また「とつこのかは」(「とつこ」を見よ)といふがある。眞言宗で行法に用ゐる護摩または獨鈷をもつて、人を騙して財貨をむさぼる者をいうたことから起つた語であらう。和訓栞に、「ごまのはひ。護摩の灰也、さるを無頼の徒に呼ぶは、之をもて人をだまして錢貨をむさぼりしよりいひ出てたるなるべし」。昔時護摩の灰・雲助の類は、旅客の財貨を掠奪し・金錢を强請し・傳舍に亂入し・什器を破壞するなど、最も旅人を苦しめるものであつた。鶴峯戊申撰・海西漫錄巻一に、「色黒く眼ざし一癖あるべく、年は三十七八とも見ゆる大兵腰に長脇差さし、背に何やらん風品敷に包みたるを負ひ、煙草をくゆらせながら大足に歩み來るなり、是ぞ所謂道中にある護摩の灰とかいふ者ならん」と見えてゐる。


(風流曲三味線(寶永七年刊)所藏)

こまひ 珊瑚樹のこまひをひつしと打つたる臺には(出世景清)

〔梁〕梶。垂木の端にあつて軒に貫く木。

こまひきぜに 延喜の帝・陸平永寶・駒曳錢を鑄させて(反魂香)

〔駒引錢〕大様にして圖象特に大きく、右向の馬首長く延びて穿下に達し、頭巾を被つた人立つて手綱を曳いてゐる畫錢である。此錢一文を常に財布に入置いて金錢の殖えるまじなひにしたので、書方軒撰・心中大鑑・巻二に、「藥袋の金入には駒曳錢一文、晩の旅籠代にも足らず」と見えてゐる。

ごまめ ごまめでござんせの春永に(夕霧阿波鳴渡) 茄子汁に虹豆の浸物・焼豆腐の煮物、ごまめ一疋すゑぬはお齋か非時か(嵯峨天皇)

〔鱓〕鯷を素乾にしたもの。たつくり。鱓を御健全に寄せて祝の物とするので、「ごまめでござんせ」とあるのも、鱓と御健全をいひかけたのである。黒川道祐撰・日次紀事・正月の條に、「呉麻米魚曰二田作一」。

こまよせ ししえの長刀ふりかたげ駒寄近くぞ進みける(三國志)

〔駒寄〕門前などに設けて馬の奔放を防ぐ柵。

***こむやくしい** 奥様はうつそり鼻明けてしまはんしよ、小むやくしいあたぶの惡い(夕霧)

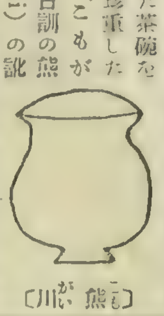
〔小無益しい〕やくにも立たない。つまらない。「小無益しい」の「小」は、「小面倒な」などいふ「小」と同じ語で、嫉忌の意を示す語。「おやくしい」を見よ。

***こめろ** そなたが娘お花がこと、そもそも小めろの時分から、手形の表まる十年(女腹切) ふぢ様は三十六文、小めろのりんは十文(女腹切)

〔小女郎〕「こめらは」(小女童)が「こめらう」「こめろ」と訛つた語。色茶屋の小婢。俳諧通言に、女郎屋茶屋に遣ふ小女をこめろといふと見えてゐる。

***こもがい** この茶碗は高麗のこもがいな(三國志)

〔熊川〕朝鮮國慶尙南道にある熊川(朝鮮音でUng-chhyon と云ひ、釜山の西に當る)地方から産出した茶碗をいひ、茶人の珍重したものである。「こもがい」は朝鮮の古訓の熊川(Kom-Kai)の訛で、川上久國撰・高麗陣中作圖には熊川と書い


〔熊川〕

歷る野干ござめり(本領曾我)　人の手にある中は萬劫經ても世界の寶(今川了俊)

〔刧〕梵語・刧簸(Kalpa)の略、大時分また分別時節と譯し、極めて長大な時間の意にいふ。

*こふ　國も御代も打かへて手な盡したるこふもあり(國性爺)

切に功をいひかけたのである。「刧」は圍碁上の語で脅の義、互に取らうと爭ふ石を、互に一手間置かねば取られないので、他方にて敵を脅す石を打ち敵がこれを防ぐ間にその石を奪ひ取る。

*こぶ　主も心なおく縞の袴、もとわたりの昆布の皮、こはばつたる顏付にて(大經師)　花に鶯、紅葉に鹿、こぶに山椒、戀に酒(艶狩)　獅子に牡丹、昆布に山椒([illegible]女)

「こんぶ」(昆布)をいふ。「昆布の皮」とは、舊渡來の奧縞の袴の地質の厚いのを、昆布の皮に喩へた詞。「昆布に山椒」とは、昆布で造つたみづからといふ菓子は山椒を入れてあつたによつて、以て配合せの譬にいふ。嬉遊笑覽卷十上、飲食の部に「京難波にて(菓子に)昆布を用るは古風なり、其内山椒を包みたるを菓子とす、これをみづからといふ、(懷子)おもひ出る人まづ前に歎寄心、むせぶもられし昆布に山椒」。

*ごふ　死んでやみなん二つの命、隔て疑ふ因果と因果、定まる業と力なき(二枚繪)　御果報の花枯れて業因の霜に衰へ給ふ(大磯虎)　時宗を討たせしさへ、國法とはいひながら餘程業がわいてゐる(加增曾我)　昔は昔・今は今、主面ひろぐごふがわるい、面面の立身づく義理も仁義も入るものか(艶狩)　海上太郎業くさらかし居たりしが(女夫池)　死したる千鳥が軀より現はれ出づる瞋恚の業火、淸盛の頭の上車輪の如く舞ひくるめき(女護島)　業さらしめ・だいばめ、如何な下人下郎でも蹈むの蹴るのはせぬこと(女殺)　四方八面前栽築山追うつ捲くつつ、隱れつ見えつ業通自在(關八州)　こちとはいかい業人と、顏な見合せ泣居たり(丹波與作)　流れの罪なかけて見る業のばかりの錘には(反魂香)　ごふなわかして睨む顏、巴御前きつと見て(會稽山)

〔業〕梵語(Karma)の譯、造作の義。身・口・意に善惡種種な事を造作するをいふ。法華經に、「善惡業緣」。

「定まる業」とは、善惡種種な業緣によつて遁れ難き運命をいふ。

「業因」とは、善業或は惡業はその人の未來に善惡の果を受ける因種なればいふ。

「業が沸く」「業が惡い」「業腐らす」「業を沸かす」は、意に緩急の差があるのみで殆んど同類の詞である。業腹を煮す。瞋恚の焰に燃える。愛想を盡かす。氣をいらだたす。

「業火」とは、瞋恚の焰。地獄の猛火。

「業晒」は造作した罪業を現世に晒す義、恥晒し。

「業通」は宿業によつて自然に得た神通力をいふ。倶舍論・九に、「一切通中、業通最疾、凌レ空自在、是謂二通義一、通由二業得一、名爲二業通一」。

「業人」は因果の理によつて苦患を受ける人。因果人。

「業秤」は閻魔の廳にある。前世に於て造作した罪業の輕重を量りて地獄を墮すといふ。佛說地藏菩薩發心因緣十王經に、「業匠構巧、懸二七秤一、量二身口七罪一、爲二糺輕重一」。

ごふう　是程醫者の出入やら巫女のごふうのと、屋内がもてかやいて(夕霧)

「ごふ」(護符)の延びた語。佛神の加護のこもれる祕符である。紙に眞言種子または兕文を書いたもので、壁間に貼り、または肌身に附け、或は水に浮けて呑みなどするもの。よつて以て佛神の利益を蒙り、災難を免れ病を治されると信じられてゐる。

ごふく　人間の五福を備へ(浦島)

〔五福〕壽、富、康寧、攸レ好德、考二終命一。書經・周書・洪範に、「次九日、嚮用二五福一、……一日壽、二日富、三日康寧、四日攸レ好德、五日考二終命一」とありて蔡沈註に、「人有レ壽而後能享二諸福一、故壽先レ之、富者有二廩祿一也、康寧者無二患難一也、攸レ好德者樂二其道一也、考二終命一者順受二其正一也、以二福之急緩一爲二先後一」。

こぶくろ　お馴染の疝氣の神、……近頃慮外な小袋に屆みまするとしかめ(振袖始)

〔小袋〕睾丸。「せんき」の條を見よ。

ごぶくわんちやう　心も澄める谿の水、五部灌頂の瀧つ波(以呂波)

〔五部灌頂〕密敎にて行ふ佛部・蓮華部・金剛部・寶生部・羯磨部の灌頂の儀式。「灌頂」はその條を見よ。

劫成世界　「だいつうちしようぶつ」を見よ。

ごふのや　殊に的矢は業の矢とて、敵な射る故實あれども鹿な射る法はなし(會稽山)

〔業矢〕業因の矢。但し巣林子は、曾我會稽山のこのあたりの文に、「的矢を業の矢といへばとて惡業の業と心得、親の敵を射ることと故實を一偏に覺えしな、これ常に射馴れて矢業よき故、わざの字の聲にて業の矢といふ義なり」と、殊更に曲解して場面を面白うしてゐる。

*こぶら　すりちがひに小腕な取りこぶらを蹴返し(丹波與作)　こぶら高股ちよつとちやつりちよつと斬り(國性爺後日)

「こむら」(腓)。「む」「ぶ」通じたので、「さぶらひ」「さむらひ」「かたぶく」「かたむく」と云ふの類である。脛の背面の脹れて肉多き處をいひ、急所の一である。

*ごへん　親にも恐れぬ不道人、御邊に言負け給ふべきか(持統天皇)

〔御邊〕對稱代名詞で同輩に用ゐる。そのもと。貴殿。

こぼくぜめ　やれこぼく責にせよやとて、細首に繩を附け松の枝に打懸けて、えいやえいやと引上ぐる(出世景淸)

〔古木責〕罪人を古木に吊して責めること。

こほりのぢごく　「はちかんぢごく」を見よ。

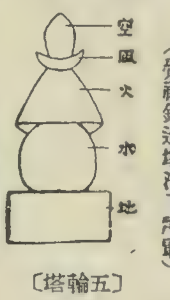
こほりやまぞめ　家内はしみこほり山染になるわいの(重井筒)

〔郡山染〕大和國生駒郡の郡山から産出する染物か。郡山は古來郡山繰綿・郡山木綿の産地であつた。郡山染と稱するものもあつたであらう、但しこの名のものを未だ嘗て聞かない。心中重井筒のこの文は、「凍みこほり」に「郡山染」をいひかけたのである。

*ごま　一萬座の護摩をたかせ(出世景淸)

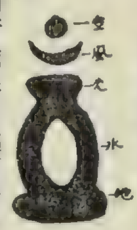
〔護摩〕梵語 Homa 燒の義。眞言宗では道場

この五大法性の德を具足圓滿すれば輪と云ひ、世界を以て五輪の所成とする。大日經疏・十四に、「一切世界皆是五輪之所ニ依持一、世界成時、先從ニ空中一而起レ風、風上起レ火、火上起レ水、水上起レ地」。地・水・火・風・空を方・圓・三角・半月・團形の五形を以て表はし、その形相を配して塔を造る、これを五輪塔といふ。「五輪まで立てたもの」とあるは、即ち五輪塔まで立てたといふのである。



(覺禪鈔造塔法下所藏)

〔五輪塔〕



(修驗祕奧鈔所藏)

地・水・火・風・空の五大は物質的元素で、頭・兩手・兩足の五體は吾人の肉體を構成するものである、よつて以て「五輪五體」を吾人の肉體の意にいふ。

***こる**　山姥は山路にて薪木をこらせ給ひける(隅田川)

〔樵〕伐る。「こる」(伐)「きる」(切)・「かる」(刈)など同じ語源から出た語である。「山姥は山路にて云云」をも見よ。

***ごれう**　天の惠か降る雨に御寮の御立は延引す(會稽山)　御寮のその日の御賞翫(會稽山)

〔御寮〕貴人の敬稱。御寮を貴人の敬稱に用ゐたのは源平盛衰記・義經記などにも見えてゐる。

***ころう**　其方達はしゆろう・ころうに上つて、すはといはば鐘・太鼓一度に打つて打立てよ(加增曾我)

〔鼓樓〕太鼓を置き時を報じる樓で、鐘樓と相對して講堂の傍にあつたものである。

ころぶ　立つて手向ひするにこそ、ころびました御免あれ(蛙合戰)

〔轉〕切支丹宗から改宗するをいふ。倭訓栞に「ころび＝耶蘇の外道に入りたる者の佛道に歸したるをもいへり、轉の義なるべし、一說に刑に行はるべき者多ければ俵に入れ積み置けり、頭のみを出したるに、歸服せし者をば俵をころばしのけたるよりいふともいへり」。巢林子のここの語は、轉び倒れるをいひかけたのである。

***ころもで**　かかが手織の衣手に(兼好)　我が衣手は露にぬれつつ(天智天皇)

〔衣手〕袖。「我が衣手は云云」は「秋の田の云云」をも見よ。

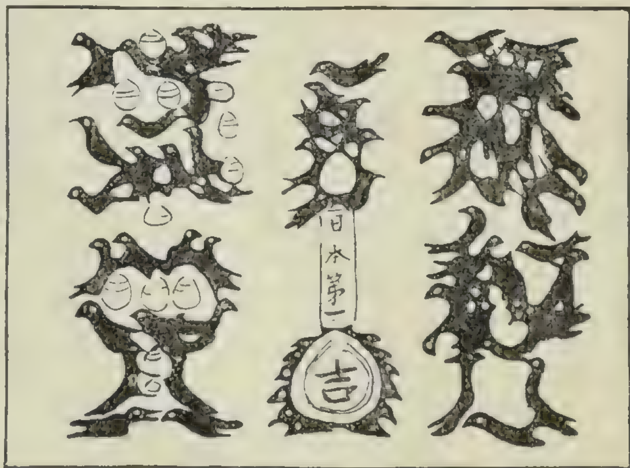
ころり　げんこ微塵にさいなんで、ころりと腰に引つ附け(百合若)　一人に百文宛こそ取らせけれ、ころりはしたぞと悅びて(今川了俊)……駕籠賃ころり、ころりは知らぬ、知らずば錢百(博多)

錢百文の符牒であつて、駕籠舁などの者のいふ語。「きり」をも見よ。

***ごわう**　三日に三枚七日に七枚、起請誓紙の牛王のうらなく、灰に燒きつつ互に飮んだる水も漏さぬ中に(歌念佛)　熊野の牛王の村烏、比翼の誓紙引かへ、今は天罰起請文(天網島)　牛王の裏に誓紙一枚書くたびに、熊野の烏がお山にて三羽づつ死ぬると昔よりいひ傳へしが(天網島)

〔牛王〕佛寺または佛敎・修驗道に關係深い神社から出す符印の一種であつて、牛王寶印或は牛王寶命と記し、此紙の裏面には起請文を書くに用ゐたのである。牛王の義につきては古來諸說あれども、按ずるにもと牛玉を誤つたのであらう。牛玉は牛膽から得る最も貴重な藥で、之を印色として符の上に印するより牛王寶印と云うたのであらう。牛玉加持などのあることから考へて見ても、密敎には牛黃の靈藥を儀軌に收用し、一種の加持を作成

〔熊野の誓紙牛王の群烏〕



したことから、牛王寶印も起つたのであらう。紀州熊野權現から出す牛王の起請紙には、烏が七十五羽あつて五個の梵字形をなし、其間に寶珠の玉が點在し、もと牛王寶印と捺してあつた、蓋し烏は八咫烏の故事から起つて、熊野權現



〔風流誮平家〕(正德五年刊所藏)

の神使とされ、熊野三神は妄語破禁の罪を糺されるものと信ぜられてゐるのである。(牛王については谷響集・博物筌・和漢三才圖會などに其說が載つてゐれども、くだくだしいから總て略す)。熊野の牛王の誓紙は熊野比丘尼などが賣り步いたものである。「うたびくに」「きしやう」をも見よ。西澤與志撰・色縮緬百人後家(享保三年刊)一之卷に、「互に交す誓紙を牛王の裏に書き」。「しだい」をも見よ。

***こわつぱ**　小わつぱふぜいにとめられしは、母が勘當氣にかかり氣おくれしたる故ぞかし(扇八景)

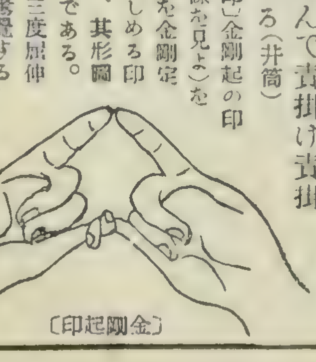
「こわらは」(小童)のつまつた語。豎子。

***こゑやま**　聲山立てて町へ聞え、下で濟まぬ詮議になれば如何なるおきめにあふとか思ふ(卯月栬)

〔聲山〕大聲。俳諧誘心集(寬文十三年刊)賀近の句に、「はやし引や聲山立つる祇園の會」。井原西鶴撰・日本永代藏・卷五、三匁五分曙のかねの條に、「彼の娌(よめ)約束の如く悋氣しだし聲山立つれば」。

こんがうあんりふのいん　金剛安立の印を結んで責掛け責掛け祈誓ある(井筒)

〔金剛安立印〕金剛起の印(「印」は其條を見よ)を云ふ。諸佛を金剛定より安立せしめる印契であつて、其形圖に示す如しである。人差指をば三度屈伸して諸佛を驚覺する。



〔金剛起印〕

***こんがうがつしやう**　金剛合掌施甘露法繰掛け責掛け祈誓ある(嵯峨天皇)

〔金剛合掌〕十二合掌の第七で歸命合掌と云

て「コムテン」と傍訓してある、熊川地方には今も陶磁器を燒いた古跡が殘つてゐると云ふ。和漢三才圖會・卷三十一・庖廚具に、「熊川卽朝鮮咸鏡道地名、大抵高麗裏不ㇾ藥染ㇾ所ㇾ圖繪(器緣也)反形也、高麗與ㇾ井戸ㇾ同時物、希有ㇾ之重器也」。地名部「こもがい」をも見よ。

***こもかぶり**　無賴漢の大將こもかぶりの下地(女腹切)
〔薦被〕非業の死を遂げて薦を被る義。死刑囚。

ごもく　似合うたやうに鎌倉のごもく淩へのもつこうがまし(扇八景)親の內で働けば、炭俵背負うてもごもく淩へ擔うても、天の下に手なつき頭な下げる相手がない(唐船噺)
「ごみおく」(芥置)の約つた語、芥溜。

***こもぞう**　おつつけ且那樣がこもぞうとなつて此處へござらう(傾城佛原)
「こむそう」(虛無僧)の訛。「こもんそう」とも云ふ。深編笠を被り尺八を吹き、門前に立つて米錢などの施與を乞ふ者。

こもちすぢ　大目付は宿谷の左衞門が女房おつげの前、これも二人の子持すぢに鶴龜染めたる素袍袴(最明寺殿)　今日五日目の脈上下、雜煮の黑餠・子持筋(反魂香)
〔子持筋〕織物の文の名。太き筋と細き筋と並行したもので、嫁入などの時に著て祝ひのものとする。

こもちむしろ　自らは子持莚のうらぶれて、見る目にいやとおぼすれども、子に絆されて御出か(田世景淸)
〔子持莚〕子と共に寢るやうにした幅の廣い莚をいふ。子持ち妻に喩ふ。堀川狂歌集・旅戀の歌に、「旅寢して思ひ出づれば故鄕の、子持莚にしくものぞなき」。

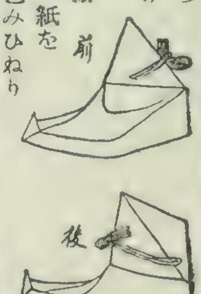
***ごもつ**　御物上りの若者(雪女)　御物蒔繪の印籠(反魂香)
〔御物〕貴人の御藏品。「御物上り」とは、主君から寵愛を受けた小姓あがり。「御物蒔繪」とは、貴人の御藏品にふさはしい蒔繪。

こもりくの　身は墨染の櫻咲く、初瀨にあらぬ隱口の、子守奉公(松風)
〔隱口の〕籠りたる國の義。初瀨は山間に籠つた地なれば初瀨の枕詞として用ゐる。ここの文は初瀨をいうて隱口を出し、隱口に子守苦をいひかけて、同韻語の子守奉公につづけたのである。

こやど　夜步き日步きとぼしたて、歸れば小宿で衣裳をしかへ(三枚繪)　頭抱へて雇人にかろはれ、小宿さなへ去んだがの(博多)　禿は遣手を怖がる、げにまこと中戸小宿でちよつきり一寸間夫を切らるる乘替の、女郎の恨の夜夜を重ねて附廻したる恐し(女夫池)
〔小宿〕男女の密會所卽ち色遊の宿をいふ。元祿頃はこんな戀の仲立をする宿が公然の祕密的に所所にあつた、之を小宿といふ。傾城色三味線(元祿十四年刊)に、「傾城買は申すに及ばず、茶屋狂ひ小宿狂ひ」。好色一代女・卷四に、「小宿の嚊が繼嫌取に心つくるもをかし」。

こやの者　小屋の者十手引提げ(博多)
〔小屋者〕非人(その條を見よ)。

***こゆひ**　螺鈿の手箱にやうでう一管・小結の烏帽子(孕常盤)　左折に小結をゆひ、御烏帽子出來たり(烏帽子折)
〔小結〕貞丈雜記・卷三・烏帽子之部に、「小結は組緒二筋を以て結ぶ也、色は何色とも不定、又紙捻にて小結する事布衣記に見えたり、これは少し行儀を正す時の事なり。……小結の仕樣は緒一尺計二筋をそろへて髻にかけ一結結びて、その餘りの緒の先を揃へ、紙を細く裁ちて包みひねりて烏帽子の內より外へ引出して、まねぎにかけてかたわなに結び置く也、わなはその主の左へなし、緒の端は右へなる也」。



〔小結〕(貞丈雜記所藏)

***子故の闇**　明けて出行く先も闇、跡も子ゆゑの闇の夜に、迷ふ親こそ悲しけれ(萬年草)　子ゆゑの闇に迷はされ盜みして顯はれた(女殺)
「子を思ふ心の闇」を見よ。

ごようにん　「ようにん」を見よ。

***ごよく**　五欲七情種種の罪(嫗山姥)
〔五欲〕色・聲・香・味・觸は人の欲心を起すものなればいふ。釋氏要覽・下に、「五欲謂ㇾ色・聲・香・味・觸ㇾ也」。

***ごよざ**　眠りがちなる拍子木に、番太が足取千鳥足、ごよざごよざも聲更けたり(天網島)　くるくるたぐる風の夜は、せきせき廻る火用心、ごよざごよざごよざも人忍ぶ(天網島)
「ごようじんさふらへ」(御用心候)の略で、「んさ」がつまつて鼻にかかり「ざ」となつたので、夜廻番太郎の呼聲である。

***こよね**　いたいけこよれのあいきやうに惚れられ給へ(扇八景)
「よね」を見よ。

***こらや**　喜之介ほろりと淚ぐみ、おおやまつたこらやこらや(嫗山姥)
「こらへや」の略。堪忍してくれよ。

***こり**　朝每垢離を取る時は總身の骨は凍れども(大經師)
〔垢離〕淸水を浴びて身の垢を離落することゝ。神に祈る時などに身體を淸淨にする爲にする。

ごり　「ごんごり」の條を見よ。

ごりやう　「ごれう」を見よ。

ごりゆうじん　五大明王五龍神の祕法を行ひ給ひける(用明天皇)
〔五龍神〕烏龍、蛇龍、蝦蟆龍、馬龍、魚龍。

***ごりん**　子弟主從父子夫婦五倫の親しみ何れおろかは無き中に(卯月潤色)　儒道を學んで五倫の道を守り、正直柔和の君子國と傳へ聞く(大職冠)
〔五倫〕父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五つの道。孟子・滕文公上篇に、「使ㇾ契爲ㇾ司徒ㇾ敎以ㇾ人倫ㇾ、父子有ㇾ親、君臣有ㇾ義、夫婦有ㇾ別、長幼有ㇾ序、朋友有ㇾ信」。

***ごりん**　禿どもが灰寄せ、五輪まで立てたもの、何の僞り申しませう(反魂香)　男も女も五輪五體に違うたる處は三寸四方、魂に違ひはない(釋迦)
〔五輪〕地・水・火・風・空の五大を五輪となす。

とて、權大乘の一部往生極樂の法要たり（扇八景）

〔權大乘〕實大乘に對する語。佛果の大涅槃を求める道を大乘と云ひ、大乘教中未だ眞實義をあらはさない教義を權大乘といふ。

こんたいりやうぶ 只今懇切る上は金胎兩部の大日も御照覽ましませ（萬年草）

〔金胎兩部〕金剛界・胎藏界の兩部をいふ。大日如來の理智の二德であつて、金剛は煩惱を摧破する智の堅利なこと金剛の如く、胎藏は理の諸法を攝持すること恰も腹中に子を胎藏するが如しとの意で、金剛頂經及び大日經に說く所である。

こんだう 金堂に講堂や萬燈院にともす火は（曾根崎）

〔金堂〕寺院の本堂を云ふ。本尊を安置して柱などに黃金の箔を塗りつめたればいふ。

こんぢく 其聲は坤軸も折れ碎け（釋迦）

〔坤軸〕坤は地、軸は車の心木の義。坤軸は地の中心をいふ。大地。

こんぢやないず ぬしが樣な切先の錆びた錆遣手に廻さるるこんぢやないず（吉岡染）

「ことにてはないとす」の訛。ことではないのだ。

こんづ 天の甘露仙家のこんづ（會稽山） 數千人の官女達、天のこんづ・光貝の杯・千顆萬顆の寶を捧げ（釋迦）

「こみづ」（濃漿）の音便。

ごんづわらぢ 「ごんずわらぢ」を見よ。

こんでい 金泥の御經（扇八景）

〔金泥〕金箔を粉末にして膠液に溶かしたもの。紺色の紙に金泥を以て書いた經文を紺紙金泥の經卷といふ。

こんていうし 「こつていうし」を見よ。

こんでいごま 佛も元は若草の、馬草刈飼ふ犍陟駒の、舍人が涙主從の、盡きぬ名殘は中中に（百合若） 車匿やある、犍陟駒に鞍おいて牽ゐて來れと忍びやかに宣旨ある（釋迦）

〔金泥駒〕梵語Kanthaka. 犍陟また犍䮶など書く。悉達太子が出家の時乘つて宮殿を出られた白馬の名である。「しやのく」の條をも見よ。

こんとん 形に取つては混沌未分（蟬丸）

〔混沌〕「こんこんとん」を見よ。三五曆紀に、「未ㇾ有二天地一之時、混沌如二鷄子一」。蟬丸のこのあたり文は甲子祭（天和四年刊、淨瑠璃・加賀掾正本）第五にある文と大同小異である。

紺に香の圖 お駕籠は紺に香の圖なり（薩摩歌）

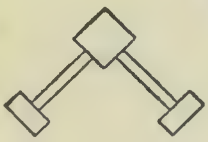


〔紺に香の圖〕

駕籠標。（高知城主、山內土佐守豐房の駕籠標）。

紺にちぎりの染抜（薩摩歌）

（備後福山の城主松平下總守忠雅の駕籠標）



〔紺にちぎりの染抜〕

こんのけ 御分が祈る川水、中切れて兩方へ分るるはこれ坤の卦の形（弘徽殿）

〔坤卦〕坤卦☷は陰、中切れて兩方に分る、人に當てれば女子とする。

こんのだいなし かくては果てじと、紺のだいなし生薑一片、腰に一本藥研鎊（薩摩歌）

〔紺代無〕紺無地の着物。筠庭雜錄に、「紺は卑しき色にして、昔より奴僕など多く紺の無地を着す、俗に紺のだいなしといふ是なり」。

こんののうれん 紺の暖簾、古への繻子縮緬も由なしと（加增曾我）

〔紺暖簾〕元祿頃の髮結床には大方紺染の暖簾を懸けてゐた。加增曾我にある髮結床は、當時にあつた男髮結床を應用した巢林子の創案であるが、表口に紺染の暖簾を懸け、內に月代の湯に用ゐる爲に火鉢に藥罐を掛けてゐるなどは、當時の男髮結床がさういふ狀態であつたのであらう。

こんはんにや アア胴慾なこんはんにや、うんすんすんとひれ伏して、聲も惜まず泣き居たり（國性爺後日）

蘭語 Companhia で、仲間の義。この語は文祿元年天草版 Doctrina christan（ドチリイナキリシタン）の扉紙にも NIPPON-NOIESVS no Companhia no Superi-or とあつて、古くから傳はつた語である。浮世床初編中卷に「じやがたらのこんぱんやは和蘭の出張りにござい」とある「こんぱんや」もこの語で仲間の義である。

こんへい・あるへい・はなぼうる・かすてら・かるめら・やうかんかん（大職冠）

菓子の名を言立てて唐音らしう見せたのである。「こんへい」は金米糖で、もと葡萄牙語 Confeitos である。「あるへい」は有平糖で、もと葡萄牙語 Alfeloa である。「はなぼうる」は花ぼうるで、「ぼうる」は「ぼうろ」ともいひ、もと葡萄牙語 Bolo である。守貞漫稿に「花ボロの菓子」。「かすてら」は粕底羅で、もと西班牙の Castilla と云ふ地で製出したよりの名である。「かるめら」は泡糖で、もと葡萄牙語 Caramelo である。「やうかん」は羊羹で、唐音の訛であらう。

ごんぼ 今日よりごんぼ樣と申さうか、よれ樣に牛蒡はいかが、やあそれも大事か、かかのごんぼといふ事あり（淀鯉） あの旅人は京の八幡の生れやら、足にごんぼの毛がむくむくぢや（丹波與作）

「ごばう」（牛蒡）の訛。安原貞室撰・かた言（慶安三年刊）に「牛蒡。ごんぼ、ごんぼう」。「ごんぼ樣と申さうか」とあるは、八幡は牛蒡の名產地、勝二郎は八幡の者なればかく云うたのである。雍州府志に、「牛蒡。八幡山東園村之產爲二名產一、專稱二八幡牛蒡一、園村去二八幡一半里許」。牛蒡を食へば男子の精分を增すと云ふ。されど女子にはいかがと云ふ爲、「よね樣に牛蒡はいかが」というたのである。牛蒡を食へば男子の精分を增すと云ふについては、井原西鶴撰・大下馬・卷二、神鳴の病中の條に、「この程は水神鳴ども若氣にて、夜這星に戲れ、あたら水を減して思ひながらの旱なり、各手作の牛蒡を送られたらば、追付け雨を請合ふと申す」と見え、御前義經記・卷五、呂州まるはだかの條に、「八幡牛蒡はいもせの燒付、出家衆のまゐるは氣の通らぬこと」と見えてゐる。「かかのごんぼ」とあるはその條を見よ。「八幡の生れやら足にごんぼの毛かむくむく」とあるは、八幡は牛蒡の名產地なればかくいうたのである。

紺屋のもがり 「もがり」を見よ。

こんらう 左近の軒廊に兩馬鼻を並べしが（日本武尊）

ふ。その形は圖に示す如くである。大日經疏・十三に、「令二十指頭相叉一、皆以二右手指一加二於左手指上一、如二金剛合掌一也、此云二歸命合掌一也」


〔金剛合掌〕

こんがうさつた 昔大毗盧遮那世尊祕密眞言の印を以て金剛薩埵(嵯峨天皇)

〔金剛薩埵(ヴヂラ サットヷ)(Vajra-sattva)〕といひ、大日如來の直弟で眞言密教の元祖である。大日如來は釋尊祕密の大法を金剛薩埵に傳へられた。

こんがうづゑ 吹出す法螺のかひがひしげなる金剛杖、腰に腰當・首に數珠(女殺)

〔金剛杖〕修驗者などが山嶽を登攀跋渉する時に使用する杖であつて、密教用具の金剛杵に由來するものである。白木を八角または四角に作つた杖で長さを行者の身長と等しうする。資持什物器・金剛杖品に、「金剛杖は役優婆塞の三昧耶形・金胎不二の塔婆なり、上の劒頭は金剛の智、下の四角は胎藏の智、四面は常樂我淨の四德を表し、方各一寸五分、都て六寸なるは自性の六大を表す、其長は行者の身量に依る」。

こんがうびやうゑ 重代の金剛兵衞四尺八寸、鐺元くつろげ横へしは(女夫池)

〔金剛兵衞〕金剛兵衞作の刀。金剛兵衞の祖盛高は筑前國秋月の刀工で永仁年間の人といふ。二世三世も共に盛高といひ、金剛兵衞と稱した。

金剛不壞(こんがうふゑ) 金剛不壞の左右の籠手(大織冠)

如何なる強い力を加へても堅固にして破壞されないもの。

金剛夜叉明王(こんがうやしやみやうわう) 「東方に降三世(とうはうにがうさんぜ)云云」を見よ。

こんがうりきし 門を守る金剛力士二王を家來に持つたれば(嫗山姥)

〔金剛力士〕寺門の左右に立つてゐる佛法守護の二王であつて、左を密跡金剛と云ひ、右を那羅延金剛と云ふ。口を開いてゐる金剛力士は阿字の表象であつて、口を締めてゐる金剛力士は吽字の表象である。「あうん」を見よ。

こんかきしもべ 老若男女聲聲に、科人ありと立集ふ、紺かきしもべ高聲に、法を破りし罪科人見せしめなりと呼はる聲、耳にこたへてあさましく(孕常盤)

〔紺掻下部〕紺掻は紺染屋をいへど、ここは紺のだいなしを着た下部をいうたのであらう。「こんのだいなし」を見よ。

＊**こんがら・せいたか** 矜羯羅・制吒迦・觀世音光を放つて飛去り給へば(伊豆日記) 我は大聖不動明王の使人こんがら・せいたか勅を受け、これまで來現せしむるなり(一心五戒魂) 一に矜羯羅二に制吒迦(用文章)

〔矜羯羅・制吒迦〕共に不動明王の脇士である。矜羯羅は左側に立つて、天衣を着け袈裟を掛け、横に一股杵を握る。制吒迦は右側に立つて、天衣を被り左手に金剛、右手に金剛棒を握つてゐる。聖無動尊一字出世八大童子祕要法品に、「法波羅蜜慈心行、所以出現使者名二矜羯羅一、此云二隨順一、業波羅密卽方便心行、所以出生使者名二制多迦一、此云二息災一也、菩薩方便現二瞋形一故也」。平家物語・卷五・文覺の荒行の條に、「我はこれ大聖不動明王の御使に金伽羅・勢多伽といふ二童なり」。本朝用文章のここの文につきては、「台嶺(たいれい)の雲を凌ぎ云云」をも見よ。

＊**ごんぎやう** 吹雪にまじる勤行の鈴の聲をしるべにて(井筒) 日夜の參詣朝暮のごんぎやう(聖德太子)

〔勤行〕勤めて善法を行じ自ら放逸にせぬを云ひ、また定時の回向・誦經・燒香・禮拜等をなすこと。

ごんぐだいほふ ごんぐだいほふの修行には戀しき人もあらざれば、何に名殘の惜しからん(釋迦)

〔欣求大法〕法性の理法を究め、衆生濟度の大法を願ひ求めること。

こんこつ 我其血脈を嗣ぐべき人相、尋常に變りこんこつの生れあり(烏帽子折)

〔金骨〕仙人の骨相の義、非凡の風骨。白氏文集・一、諷諭篇に夢仙の詩句に、「苟無二金骨相一、不レ列二丹臺名一」。

ごんごり ごんごりのこひといふ名は耳に立つ(以呂波)

「ごり」を「ごんごり」と調子づけていうたのである。「ごり」(鮴)は鰍に似、溪流の岩間に住み、長さ六七寸、褐色で暗色の斑點ある魚。「びんびしゆ」の條を併せ見よ。

こんじてう 今日より魔法を行ひ金翅鳥となり、待つて居れ龍神めら、四大海を干潟となし(嵯峨天皇) 鷄が金翅鳥を狙ふとやら、腐に向つて謀反の病を療治せんとは、ざまより膽の太い奴(持統天皇)

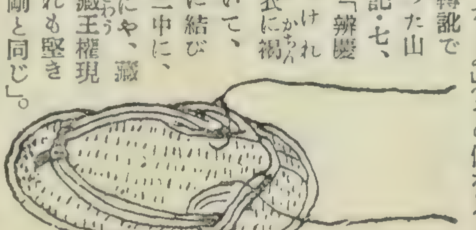
〔金翅鳥〕「かるら」(迦樓羅)を見よ。

＊**こんじん** 今年は爰が金神に當つた、それで是はうだたり(大經師)

〔金神〕陰陽家の稱する金鬼毒殺神で、巨旦大王とも云ふ。その居る方角を惡方位として忌む。金神の方位は年年巡りて定まらぬ。甲巳の歲は午未申酉の方、乙庚の年は辰巳の方、丙辛の年は子丑寅卯午未の方、丁壬の歲は寅卯戌亥の方、戊癸の歲は子丑申酉の方である。また遊行の日春は乙卯より六日東に、夏は丙午より六日南に、秋は辛酉より六日西に、冬は壬子より六日北にある。ここの文に「ほうだたり」とあるは、方祟(はうだたり)に頻祟(ほほだたり)をいひかけたのである。「きもん」をも見よ。

ごんずわらぢ 位に卽くまでは海邊の漁夫、馬乘物もよしなしと、こんずわらぢの旅衣(浦島)

「ごんず」は「がんじがらみ」(その條を見よ)などいふ「がんじ」の轉訛であらう。堅固に作つた山草鞋をいふ。義經記・七、判官北國落の條に、「辨慶は大先達にてありければ、袖短かなる淨衣に褐(かちん)の袴のくくり高らかに結びて、脚半(はばき)にごんず穿(は)いて」。嬉遊笑覽・卷二中に、「こんずとは、金藏にや、藏の字約めてよむは藏王(ざわう)權現などの例なり。これも堅きに喩へたること金剛と同じ」。


〔ごんずわらぢ〕

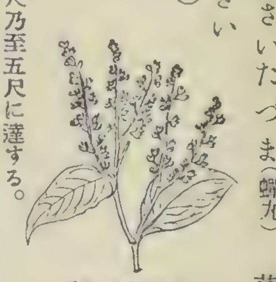
＊**こんだ** かうぢや賴むとささやけば、こんだこんだ預りました(三國志) 內證花車に吹込めば、こんだとばかり、與次兵衞が小袖をかりの難與平(壽門松)

〔込んだ〕呑込んだの略。了承した。

ごんだいじよう 是は淨土の三部經

のゆかりのさいたづま(蟬丸)茅花・杉菜にさいたづま(雪女)

「いたどり」(虎杖)をいふ、山野に自生し、多年生草本にして高さ一二尺乃至五尺に達する。


〔さいたづま〕

西天の獅子王 母を圍うて立つたるは西天の獅子王も恐れつべう見えてけり(國性爺)

西天は印度、獅子王とは獅子は百獸の王なれば云ふ。無量壽經・下に、「如二師子王一無レ所レ畏故」。

さいなん 息杖の續かん程げんこ微塵にさいなんで、ころりと腰に引つ附け(百合若)

馬方・駕籠昇などの符牒語で、七をいひ、江戶では「せいなん」といふ。巢林子のここの文は、七の符牒語の「さいなん」に嘖むをいひかけたのである。「きり」の條をも見よ。

さいなんが妻 異國の崔南が妻の乳にて養ひしそれは姑、是はまんざら他人なり(嵯峨天皇)

〔崔南が妻〕支那二十四孝の一。姑に仕へて孝、姑老いて食するに齒の無いを氣遣ひ、我が乳を以て姑を養うたと云ふ。

***さいのかはら** 又ここに賽の河原とて童男童女の生所あり(賀古敎信) 私も若いに鐵漿つけて、のがれし賽のかはら町(卯月栬)

〔賽河原〕俗說に冥土にある河の名で、無邪氣な幼兒死して此河原に遊び、礫石を積んで塔を作れば獄卒來つて之を蹴散す、この時幼兒は地藏菩薩の御袖下に隱れて身を免るといふ。閑田耕筆に、「賽の河原。紀伊郡(山城)佐比の里にあり、三代實錄・貞觀十三年百姓葬送の地を撰定せらる、其一處紀伊郡十一條下佐比の里とあり、世に佐比の河原を冥途にて小兒の集る所とし、且地藏尊之を化益し給ふといふは、其葬地に小石塔多くありしよりいふならん」。卯月栬のここの文は「賽の河原」に「瓦町」をいひかけたのである。

西方極樂淨瑠璃 南無阿彌陀佛疑ひなき西方極樂淨瑠璃に語りて(女腹切)

西方極樂淨土に西座の淨瑠璃をいひかけたのである。極樂淨土は娑婆世界より西方にあるといふ。阿彌陀經に、「從レ是西方過二十萬億佛土一有二世界一名曰二極樂一」。西座は即ち道頓堀西の芝居で、竹本座である。

さいはひびし 武田の家の紋所、幸菱の幸ひを子孫に受けて(五人兄弟)

〔幸菱〕紋所の名。


〔さいはひびし〕

さいばら 風俗催馬樂朗詠も玉簾ふかき聲もれて(蛙合戰)

〔催馬樂〕もと里巷の謳歌であつたが、これに譜を定めて謠ふやうになつてからは終に高貴の人のもてあそびとなつた。郢曲祕抄・風俗裏書に、「催馬樂、本路頭巷里之謠歌也、然而後好事之士女、取以爲二彈琴歌曲一、故其歌因來甚有二古代一有二中世一、厥后更奏二諸國一、謂二之風俗一、又後代謠謌謂二之今樣一、催馬樂・風俗固是一也、遂既二於宮中一已久矣」。催馬樂の名義につきては、昔神樂の餘興に謠ひ興じたものに前張といふがあつた。催馬樂は「さいばり」から起つた語である。(さるに馬をかり催する歌で、馬士歌であるとの說は甚しい誤である)。

***さいめ** 馬草刈場の領界・さいめの棒木眞中に轉び伏したる女の死骸(女夫池)

「さかひめ」(境目)の約轉。境界。井原西鶴撰・胸算用・卷三に、「東隣へは無理いひかかつてさい目論も濟まぬに、遊山に出るは氣違ひの沙汰なり」。

***さいもん** おおさればいの、せめてきさが居たらば祭文を聞かうものと(今宮) 我噂も明日よりは、歌祭文を身の上に、坂町邊のな通り筋(生玉)

〔祭文〕もと說經から出で、神佛の物體ないことなどを綴り、讀誦して手向としたものであつたが、室町時代の末頃になつては、似非坊主が狂言綺語を交へて語り、その讀癖が發達して歌祭文節となり、萬治前頃には既に山伏めいた乞食坊主が、錫杖振立て門に立ち祭文を語つて錢を乞ひ歩いた。延寶頃には野郎祭文や遊女名寄の祭文や梅また櫻名寄の祭文の類ができ、ついで死刑や情死や好色等の其當時の出來事を綴り、あはれげな聲を張上げて賣り步き、生玉あたりでは葦簀小屋の中で祭文を語つて聞手から錢を集めるものもあつた。素人も慰みに口眞似する者もあつて、一時盛んに流行したのである。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)に、「祭文。此山伏の所作


(人倫訓蒙圖彙所載)
〔祭文〕 〔厄拂〕

祭文とていふを聞けば、神道かと思へば佛道、とかく其本據定かならず、伊勢兩宮の末社に四十末社・百二十末社などといふ事更になきことにて、此事神道問答抄といふものに記せり、……江戶祭文といふは白聲にして、力身を第一として歌淨瑠璃のせずといふ事なし、かかる事を錫杖にのせるはさても悲しく勿體なし」。西鶴撰・御前獨狂言(寶永二年刊)卷之三に、「二十斗のあつびん男二あがりの三味線、十八九の振袖女つれ彈の琴のおと、野良名寄の歌祭文、かたむけたる笠の中能く見れば娘のおはつにまぎれなく云云」とあれば、寶永初年頃は既に三味線・琴の鳴物入で歌祭文を謠つてゐた。聲曲類纂・五に、「祭文は山伏の態なりしを小唄を取交へて作り、後又三味線にさへ合せて歌ひけるなり、今世祭文と號るは中古說經淨瑠璃と號せしものの一變せしものといへり、錫杖を三味線にかへたるも中古よりの事なり」。巢林子の文中に祭文の文句や口調を應用した所がかなり多くある。賀古敎信七墓硘に「そもそも敬まつて花を眺め奉る、上は梵天山櫻云云」とある櫻祭文、心中二枚繪草紙に「おないに云云」とある血死期の道行中の文、吉野忠信に「謹上再拜敬まつて申し奉るの色は、根本太夫職云云」とある女郎名寄の文、丹波與作待夜のこむろぶしに「小萬泣く泣く


〔後家色縮緬(享保三年刊)所載〕

〔軒廊〕紫宸殿の南廂の東端から續ける廊を云ひ、上に屋根あつて下は土間である。

こんりはつる しゆらいなきんとにせがまれて、ひしやりほんとこんりはつる（虎が曆）

困り果つるを「こんりはつる」と云うて、謡曲・安宅にある勸進帳の「思ひを菩提に翻して、盧舎那佛を建てまし」の「建立」に似せたのである。「それらうからか大紋日にして云云」を見よ。

***こんりようのぎよい** 天子の裝束袞龍の御衣もあると（唐船噺）

〔袞龍御衣〕天皇の召される禮服であつて、日月星辰山龍雉粱火等の象を繡うたもの。

***こんりんざい** 其分では此身が金輪際までにえこむともいかな、此處は動かぬと（聖德太子） 金輪際の敵、惡しといふは彼奴が事（鎗樾三） 逢初めし時の誓文を金輪際と思ひ詰め（隆達歌）

〔金輪際〕大地百六十萬由旬の底、卽ち地層の最底に金剛輪がある、その金剛輪の區域を金輪際と云ふ。よつて以て、底の底のどこまでもなどいふ意に用ゐる。「あらがねの」をも見よ。

こんろんのいし 名將の家風かうばしき栴檀の林こんろんの石、玉の光の世世永き武田の家ぞ類なき（川中島）

〔崑崙石〕崑崙山は美石寶玉の産地である。湘山野錄・晏獻公撰二章懿太后神道碑一破題に、「崑山出レ玉、麗水生レ金」。平治物語・卷二、六波羅合戰の條に、「譬へば栴檀の林に餘木なく、崑崙山には土石悉く美玉なるが如く」。

嚴王の邪見云々 「提婆が三逆も云云」を見よ。

さ

***ざ** 女は亭主と座を組みて（重井筒） おつつけ旦那の引拔き牛蒡、めでたい牛蒡と座を持てば（淀鯉）

〔座〕すわる場所。（座は名詞、坐は動詞）。「座を組む」とは、二人以上の者が各座を占めて對しあつてゐるをいふ。「座を持つ」とは、座をもてはやし賑やかす意。座興を添へる。

***ざい** 誰かある討つて出で追散せと、采押取つて下知すれば（雪女） 人馬の息をやすめよと、采振廻し呼ばはり給へば（佐佐木）

〔采〕大將が部下を指揮する爲に持つ具で、厚紙を細く裁ちて束ね、これに柄を附けたもの。采配。貞丈雜記・武具之部に、「ざい（又さいはいとも云ふ）といふ物古は無レ之、源平の戰の比より室町殿の代に至るまでも無レ之、ざいは武田信玄の家にて作り始めしなるべし、上古の法式と云ふ事あるべからず、鷹匠の家にて山鷹（クマタカのこと）を使ふ道具にざいと名付けて、竿の先に細く裁ちたる紙を圓く結付けて、それを振りて鷹を使ふなり、此鷹の道具より思付きて軍のざいを作りたるなるべし」。

***ざい** 時宗やらぬ逃さぬと女子のざいにおんまりな（百日曾我） 嫁入する身に女のざいで只の事とは思はぬ（反魂香） 合點ゆかぬ新艘殿、女のざいに刀さいて二階へ上り、誰に恨んで誰を斬る（蛙合戰）

〔際〕分際の略。身分。

***さいかく** まあ待たんせ先刻の小判どうしての才覺ぞ、詮方なさに怖い事などさんせぬか（女腹切） それば至極の才覺、其金は借るか貰ふか何處から出る（淀鯉）

〔才覺〕もと「才のおほえ」に漢字を當てて音讀したものであるとも、或は才學より出た語であるともいふ。才のよく利くこと。機智。算段。工面。

さいぎやうざくら 和歌を守りの宗匠とて、西行櫻色深き（賀古敎信）

〔西行櫻〕謡曲に西行櫻と云ふ曲名がある。又櫻花彙品（寫本）に、此名の櫻に單瓣のも八重のもあつて花枝の彩色圖が載つてゐる。

齋宮の忌詞 かの齋宮の忌詞、いまはしやとて道もせに、さらすからだを道者にも嫌ひ憎まれ（丹波與作）

齋宮とは未婚の内親王を卜し御杖代に定めて、伊勢大神宮に奉仕せしめられる皇女を云ふ、齋宮は神事に奉仕するものなれば佛に關する語を忌む。延喜式・神祇・齋宮式に、「凡忌詞内七言、佛稱二中子一、經稱二染紙一、塔稱二阿良良岐一、寺稱二瓦葺一、僧稱二髮長一、尼稱二女髮長一、齋稱二片膳一、外七言、死稱二奈保留一、病稱二夜須美一、哭稱二鹽垂一、血稱二阿世一、打稱レ撫、宍稱レ菌、墓稱レ壤、又別忌詞、堂稱二香燃一、優婆塞稱二角筈一」。ここの文は祭文の口調によつたもので、「齋宮の忌詞」は「いまいましや」の同頭韻語にかかる修辭である。

さいくわい 峨峨と聳えし崔嵬の山路に疲れ（國性爺）

〔崔嵬〕土山の石を戴くを云ふ。毛詩・周南・卷耳篇に、「陟二彼崔嵬一、我馬虺隤」とありて毛傳に、「崔嵬、土山之戴レ石者」。

ざいけ 親の敵でも出家は格別、在家となれば見遁し置かれぬ弟の敵（萬年草）

〔在家〕僧を出家と云ふに對し、在俗の人を在家と云ふ。

さいさうらう 「さいしやうらう」を見よ。

***さいしく** 上も下も半死半生、血汐流れて名所繪の屛風さいしく如くなり（鎌田） 家をさいしく繪の具筆（反魂香）

「さいしき」（彩色）を四段活の動詞に用ゐたのである。いろどる。

***さいしやう** 田夫無道の郎等まで、或は中將宰相と官位を免し召遣ふ（百合若）

〔宰相〕參議の唐名。太政大臣を相國と云ひ、左右大臣を丞相と云ふに對し、參議を宰相と云ふ。

***ざいしやう** さここそ恨み憎みしの、これぞ罪障となるぞとて（卯月紅葉）

〔罪障〕造作した罪が往生の障りとなること。

さいしやう柹 うぬは坊門のさいしやう柹（女楠）

宰相に西條柹をいひかけたのである。西條柹は樽柹で伊豫の西條から産出するもの最も佳品で、背高く四條の淺い溝線がある。

さいしやうらう 御伴ひは鳩の杖、麗景殿の孫庇、御沓をひかれしは採桑老の白衣の袖（日本武尊）

〔採桑老〕舞樂の名。老人が白衣を着し、帽後に笹葉を挿むは桑葉に擬したものであらう。鳩の杖をつき行歩に堪へない樣して舞ふ。

さいたづま 紫竹交りの藪の下、春

「さて情なや斯樣の體となりたれば親子のさがたも顯はすかや」。同第五に「浮世のさがの露霜に墨の袂をしぼりしは」。

さかおくび 思うた事言うた事今はあだなる逆衽、三寸落しに裁ち切つて(薩摩歌)

〔逆衽〕四つ身の仕立には、本裁のみごろから衿と衽とを取り、その衽を逆に用ひて幅を廣くするをいひ、肩先から衽先までを三寸に仕立てる。

***さがし** 靈鳥いかんぞ時のさがしきに逢へる(女護島) 繼母といふ姑のさがしき瞋恚の牙にかかり、稚き娘は食殺され(賀古敎信)

嶮しい。和訓栞に「さがし。險をいふ、坂より出でたるにや、新撰字鏡に嵯峨をもよめば、字音をもて訓とせしにや」。

***さかしほ** 禁酒する人がさかしほと名づけても飲む口は同じ酒(蛙合戰) 扨ここな人はこの盃に二十や三十、身が爲には酒しほ(鎌田) 五月四日の夜着し出でたる己れが袷、所所のきは付きこぼり、大理の廳より御不審、只今證跡の實否、己れが命生死二つの境なるぞ、誰かある酒酒、あつといふより銚子燗鍋手ん手に引提げ、さらさらさつとこぼしかけ、……、酒鹽變じて朱の血しほ(女殺)

〔酒鹽〕食物を煮る時に味をよくする爲に加へる酒、またはその酒をいふ。狂言・笠下に「御坊は禁酒にてはござらぬか、いや酒しほとて苦しからぬ」。女殺油地獄のここの文は、與兵衛が五月四日の夜お吉を慘殺し、その血に汚れた與兵衛の袷をそれから三十五日經過して、その汚れに酒を注ぎかけたれば、朱の血汐になつたといふのであるが、思ふに酒が古血の暗黑色になれるを朱の血汐にする能力はないやうである。さればこれは巣林子が文飾に過ぎぬものと見ねばなるまい。元來人類の血液が赤色を呈するは、血液中のオキシヘモグロビンに因るもので、動脈血の鮮紅色なるはこのものの多量にある爲で、靜脈血は炭酸に富む爲に暗靑色を呈し、血液が衣類等に附着して古くなる時は暗黑色に變じ、それを血液として證明する爲には、その小部分にクロール水素の如きものを作用せしめて、一種特有の結晶物即ちヘミン結晶を晶出せしめて、血液たることを證するものであつて、色彩の如何によつては證明されぬものであり、また血液としても人類の血液か他動物の血液かの差異は、赤血球の核の有無、又は赤血球の大さ等によつて區別されるもので、これも色彩の如何によつては區別されぬ。近時は血清學上の基礎の上から種種の檢出方法あれど、これも色彩の濃淡には關係がない。血痕に酒を注ぐといふは、血液の成分をなせる蛋白質にアルコールを作用せしめるといふことになるが、この間の反應は又色彩には關係がない。以上の點よりして巣林子の書けることは、科學的には說明困難である。

さかたきんひら 「きんひら」を見よ。

坂田藤十郎 坂田藤十郎が夕霧をま一度見たいと思うたが(淀鯉)

元祿頃に於ける上方の名優である、濡れ事に長じ傾城買の狂言に妙を得た。延寶六年大阪の荒木與次兵衛座にて夕霧名殘の正月に、藤屋伊左衛門に扮して盛名をとどろかし、寶永六年六十五歲で歿した。彼は屢門左の狂言本を上演して、門左との關係深く、門左もまた彼の藝術によつて啓發されたことが多かつたであらうと信ずる。

さかてざくら 櫻襲の袖飜へし、さかて櫻に白木綿欅ひつかけ(賀古敎信)

〔逆手櫻〕松岡玄達撰の櫻品に、單瓣で色薄赤く、六瓣ある内一瓣よぢれてゐる故、俗に逆手櫻といふと記してある。巣林子のここの文は逆手櫻に「天の逆手を打つ」(その條を見よ)意をいひかけたのである。

さかてをうつ 太刀を口にひつくはへ逆手をうつてぞ泳ぎける(天神記) 餘所にみるめをかづきする海人も逆手を打休み(最明寺殿) 爪は牡蠣貝ばひのふた、あまの逆手を打ちやすみ(女護島)

〔逆手を打つ〕海水中に潜入るときに、逆樣になつて手で水を打つて行くをいふ。野野口立圃編・言葉よせ(刊本)に、「あまのさかて。海に入時波を打て入を云也」。

***さかねだれ** かへつて今の逆ねだれ口惜しや無念やな(曾根崎)

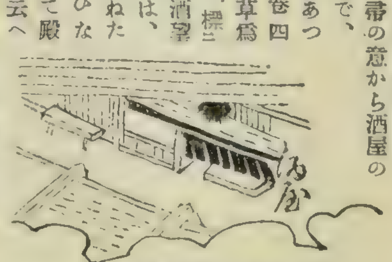
〔逆强請〕此方から問責せうとして却つて彼方からやり込められること。逆捩。

***さがのしやか** それはそれはよい女房、いかにもいかにも嵯峨の釋迦(生玉)

〔嵯峨の釋迦〕嵯峨の里の淸凉寺にある釋迦像をいひ、赤栴檀で作つてあるといふ。新増犬筑波集(寬永二十年刊)に、「佛も物をおひたまふなり、嵯峨の釋迦しやくせんだんと聞くからに」。都案内者(寬文十一年刊)卷四に、「さがの釋迦堂‖ここは嵯峨の天皇の離宮なりしに、奝然法師入唐ありて、びしゆかつまが作りししやくせんだんの佛像を傳へ、歸朝して奏聞をとげ、皇居をあらため寺を作り、すなはち淸凉寺と名付け、尊容を安置せるなり」。「しやくせんだん」「びしゆかつま」をも見よ。

さかばやし 前髮の酒林で殿を醉はせし男傾城(反魂香)

〔酒林〕昔は杉の葉を集め丸めて軒に吊し酒屋の標にした、これを酒林といふ。酒林は愁を掃ふ帚の意から酒屋の看板にしたもので、そのもとは帚であつた。湖亭涉筆・卷四に、「鄕村間以レ草爲レ帚、貫二於竹竿一、標二於大木之上一、曰二酒望子一」。ここの文は、若衆の前髮を束ねたのを酒林に云ひなし、男色によつて殿に取入つたのを云へるにて、「酒林」「醉はせし」は緣語である。



(魂膽色遊懐男所載)

***さかほこ** 葦原や天地人も開けそめ、榮えにけりな逆矛の雫の、玉水のかかる時しも生れ來て(振袖始)

〔逆矛〕諾・册の二神天の浮橋に佇み給うて、瓊矛の石突を上にして逆樣に下し給うた故の名。謠曲・逆矛に、「天の浮橋に二神たたずみ給ひて、この瓊矛を海中にさし下し給ひしより、瓊矛を改めて天の逆矛と名づけそめ云云」。

さがまつたけ 嘉平次は嵯峨をはなれし嵯峨松茸(生玉) 波立の京の水と嵯峨松茸のとりどり、この二色が心に叶はぬ(酒呑童子)

〔嵯峨松茸〕山城國葛野郡嵯峨の松茸は名物である。黑川道祐編・日次紀事(延寶年中成)九月の條に、「凡松蕈洛外所所有レ之、其中龍安寺山・嵯峨山所レ產爲レ美」。「さがをはなれし嵯峨松茸」の松茸には、陰莖をきかせた洒落で

ヨイ申すやう、緣は異なもの其の時に、起請一枚書かねども云云」とある與作小萬夢路の駒中の文、大經師昔暦に「おさん茂兵衛にいふやうは、由なき女の悋氣故、何の科なきそなたまで云云」とある暦論しの文、雙生隅田川に「祓ひ淸め奉るの釋迦は、羅睺羅の親父にて、布袋は唐子のお乳母役云云」とある狂女道行中の文、心中宵庚申に「惡名つけて世の人の、わらびませうが笑止と、悔めば夫はずゐきの涙云云」とある靑物盡しの文などは、皆祭文の利用である。

***さいりやう**　宰領どもとお御立と催すところに(丹波與作)
〔宰領〕荷物を馬に載せて運送する時、之を掌り行く者をいひ、馬四五駄に宰領一人附いて行く。宰領の乘る馬を空尻馬といひ、荷を輕くして宰領も乘る。「からじりうま」をも見よ。

***さいろく**　やいここな才六め(加增曾我)
〔才六〕「げさいろく」を見よ。

さいをうがうま　「人間萬事塞翁が馬」を見よ。

ざいん　市中を離れし坐隱の遊面白し(國性爺)
〔坐隱〕圍碁。世說新語補・卷十六・巧藝に、「王中郎以圍棊是坐隱、支公以圍棊爲手談」。

***さう**　三度飛脚の江戶のさう、待つ夜も漸う更けにけり(冥途飛脚)　面のしるしの大幕打たせ鎌倉のさうを待ちければ(蛙合戰)
〔左右〕通知。音信。倭訓栞に、「さう。俗に消息をさうといふは左右の音也、禁祕抄に不及左右と見え、物にさうなくなど見えたり」。

相鶴經に曰く　「鶴は一百六十年にして云云」を見よ。

さうけつ　文字のはじまりは、蒼頡といひし者眞砂に遊ぶ濱千鳥その足跡を見そめしより、鳥の跡絶えず代代に傳へて寶とす(三世相)
〔蒼頡〕支那黃帝の時の人、鳥の足跡を見て文字を創作したと云ふ。事物原始に、「蒼頡覩鳥迹、因遂滋、則謂之字」。

曹公　「往事渺茫として云云」を見よ。

***さうざうし**　上として民のあはれをしろし召さぬもいとさうざうし(融大臣)
「さびさびし」(淋淋)の音便。ものさびしい。心細い。

***さうし**　閨の小萬も草紙にある繪で見たよりは好い女房(丹波與作)
〔草紙〕繪草紙の略。「ゑざうし」を見よ。

***ざうし**　鈴木の三郎重家は院宣を首に懸け、御曹司の御跡を慕ひて奧へ下りしが(孕常盤)　鎌倉の賴家の御曹司は鳳闕の賢聖の障子をまなび(五人兄弟)
〔曹司〕「つぼね」の義。部屋住の公達を御曹司と云ふ。貞丈雜記・卷十四に、「曹司といふは家を長くつづけて幾仕切にも仕切るなり、曹の字はカギルとよむ、司の字はツカサトルとよむ、役所をしきる心也、今用部屋といふに同じ、又云く、近世未だ家督をとらずして居る部屋住といふは、則ち御曹子と云ふと同じ心なり」。

さうしうもの　床に置かれし一腰の、好き折紙の相州物の、中に取つても出來心(雪女)
〔相州物〕相州鎌倉の刀工岡崎五郎入道正宗の流派の作の刀。正宗は正應嘉曆年間の人、刀冶中興の祖神と稱せられたといふ。

さうじん　一代の勳功騷人の筆を光し(日本武尊)
〔騷人〕詩人をいひ、騷は愁の義。正字通に、「屈原作離騷、言遭憂也、今謂詩人爲騷人」。

***さうなし**　景淸は飛鳥の術を得たれば、左右なく討たれんやうもなく(出世景淸)　小手の繩もゆるまりて、いましめ左右なく解けにけり(蛙合戰)　十二人の主從さうなう關を通してたべと(殘靜)
〔左右無〕躊躇しない。わけない。「さう」をも見よ。

さうふ　穢れを洗ひし水なれば牛にかはじと、牽歸るは昔の巢父許由にも非ず(川中島)
〔巢父〕支那上古・堯時代の隱者である、堯帝が國を許由に讓らうとしたのを聞き、國など欲しくも無い、耳が汚れたとて、潁川で耳を洗つた。巢父これを見、さやうな汚らはしい事を聞いた耳を洗つては、その水も穢らはしいとて、牛に水を飲ますのを止めて牽き歸つたと云ふことが、事文類聚・隱逸部に見え、平治物語・光賴卿參內の條にも見えてゐる。

***さうぶれん**　夫を思ふ想夫戀、みもひも寒しと謠ひけん、昔覺ゆる木枯に吹合せてぞ聞えける(孕常盤)
〔想夫戀〕平調の雅樂名。謠曲・小督に、「夫を想ひて戀ふる名の、想夫戀なるぞうれしき」と見え、淨瑠璃十二段草子に、「女は男を戀ふる樂、男は女をしのぶ樂、想夫戀といふ樂をこそ人目も憚らず云云」と見えてゐれども、徒然草・第二百十四段に、「さうふれんと云ふ樂は女男を戀ふる故の名にはあらず、本は相府蓮、文字のかよへるなり、晉の王儉大臣として家に蓮を植ゑて愛せし時の樂なり」とあれば、もとは相府蓮と書いたのである。孕常盤のここの文の「みもひも寒しと謠ひけん、昔覺ゆる木枯に吹合せ」とあるは、催馬樂歌と謠曲・小督とによつていうたので、謠曲・小督に「木枯に吹合すめる笛の音を」などの文がある。(序云、相府蓮は音樂あつて舞がない。支那の相府の蓮(蓮の名所)を謠つたものだと云ふ)。(「みもひも寒し」をも見よ。)

さうまき　大口の切袴熨斗附、さうまき兵庫鐶の丸柄(國性爺後日)
さやまき(鞘卷)の轉、短刀をいふ。貞丈雜記卷十二、刀劔之部に「刀・さやまき・さうまき・腰の物・腰刀・皆一物にて、古人常にさしたる短刀なり、今の人のわきざしさす如し」。

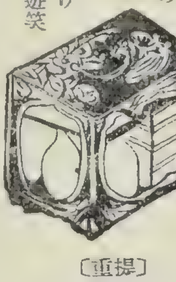
さうらう　天台の敎を學びさうらうに心を寄せ(兼好)
〔莊老〕莊子と老子。老莊の哲學。

***さが**　世を遁れても所から我身のさがの竹がこひ(三世相)　男のさがを顯はすまいと、隨分わしが身をつめ(夕霧)　どうぞなさがの立たぬやうに奪ひ取りやうあるべきと(天鼓)　惡の字をさがと讀む訓あり(嵯峨天皇)
性、ならはしの義より轉じて、惡性、惡、瑕、險難の意に用ゐる。易林本・節用集に「無惡」。和訓栞に「さが=日本紀・祥の字・善の字・性ともに訓ぜり、直をスグとよみ、淸をスガと讀むも皆通ぜり、祥・善・淸・直・本性の德なること知るべし、孝德紀に瑕の字をさがと讀めるは僻也」。十六夜物語(古淨瑠璃)第四に

堊上げて敷きしは(加增曾我)
〔疏〕騎射のとき馬を驅る爲に馬場に掘った溝。安多武久路・仁に、「其場(馬場)の内は一面芝地にて、挟物射習ふさくりは長さ二町ばかり、横に廣さは四五尺ばかり、芝を掘りおこして砂を入るる、又笠懸射習ふ疏は長さ一町ばかり横二尺ばかり、これも芝をおこし砂を入るる」。

***さげあま** 顔も知らぬ夫の爲さげあまの身となり(薩摩歌)
〔下尼〕頭髮を切下げにした尼。そぎあま。垂尼。

***さげぢう** 提重開き幇間ども、(二枚繪)
〔提重〕食物・食器や徳利をも容れ、提げて行かれるやうに作つた重箱で、蒔繪また青貝で粧うたのもあつて、貞享・正徳頃流行した物である。提重の一種に寢覺提重と云ふのもあつた。(「ねざめさげぢう」を見よ)嬉遊笑覽卷二下・に、「さげ重といふ物他に持行くものにて、是も辨當とおな▲じくて品よき方にや、今は坊間などには廢れたる物なれど、五人づめ七人づめの△辨當箱ありて古道具屋に出で、買ふ者もなければ組入たる膳椀重箱一品づつ分ちて賣る、よき蒔繪したるなど往往あり、これ等皆提重なり」。



〔提重〕(女用訓蒙圖彙所載)

酒漬 酒漬に水も盡くかや我宿へ、歸りこん屋の徳兵衞忙しげに立歸り(重井筒)
酒に漬かること、酒漬に水も盡くとは、色茶屋の酒に親しみ漬つてゐては活計が立たぬとの意、水も盡くは、この後の文に「これでは水も呑まれぬ」とあるに應じ、活計が立たぬ意にいうたのである。

***さげもの** 錠前を叩破り提物差換取出せば(歌念佛)
〔提物〕腰に提げる巾着・印籠の類。

さこず 今來る春にさこずよの、面白や有難やとこそ植ゑにけれ(天智天皇)
「咲かうとす」の約。

***ささ** 先お上りなされませ、いかう冷える、ささ一つそれ燗つきやとありければ(重井筒) 母様も叔父様も奥へ御入なされ、ささでもあがりませと(壬生大念佛)
酒。酒を笹といふわけは、古詩に「竹葉清香好、何妨レ飲ニ歡杯ニ」と見え、白居易の詩に「甕頭竹葉經レ春熟」などとあるに本づく。(伊勢貞丈は「ささ」は三三であるとしてゐる。「三三九度の御酒」を見よ)。

***さざいがら** ええなまぬるい旦那様と、たぶさを取つてさざいがら二三十くらはせ(大經師) 内に尻が据らぬとて、さざいがらの五郎介と土地で異名が附いてある(大職冠)
「さざえがら」(蠑螺殼)の訛。「蠑螺殼二三十くらはせ」は握拳で二三十打擲したと云ふのである、蠑螺殼は握拳のことで其形が似てゐるより云ふ。「さざいがらの五郎介」とは、出歩いて我内におちついて居ないから渾名したので、蠑螺殼の尻は螺旋狀になつて尖り、据が惡いからしか名付けたのである。

***さざえ** 嫁菜のひたしに豆腐の煮しめ、さざえでも致しまして(反魂香) 彼奴にさざえの食事を與へ(冷泉節) 折折破子小竹筒を參らせ、戸障子床の敷物まで兎や角まかなひ候(大織冠)
〔小竹筒〕酒入の約であらう。竹筒を細工したもので、酒を入れ又は食物をも容れる器。和訓栞に、「東鑑に小筒をよめり、小竹枝の義なるべし、酒器也、庭訓往來に小竹筒に作る」。和漢音釋書言字考・七に、「小筒又偏提、盛レ酒器」。

さざえがら 「さざいがら」を見よ。

***ささがに** 二階には消ゆるばかりにささがにの、絲に懸れる身の命、露の便りの危さよ(卯月紅葉) 歸る家路を松蟲や、さらば笹原笹蟹の、秋に染絲くり出し(二枚繪) 柳の絲にささがにの蜘蛛の振舞(釋迦)
蜘蛛。ささがには小蟹の義といひ、また笹原に住む蟹の意とも云ふ。もと「ささがにの」と云うて蜘蛛の枕詞であつて、衣通姫の歌にも「我背子が來べき宵なり、ささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」と見えてゐる。さるを「ささがに」を直に蜘蛛にいうたのは、既に古今集・卷十・物名部にも「白露を玉にぬくとやささがにの、花にも葉にも糸をみなへし」と見えてゐる。「柳の絲にささがにの蜘蛛の振舞」とあるは、「ささがにの」を「蜘蛛」の枕詞に用ゐたのである。「我せこが來べき宵なり云云」を見よ。

佐佐木源三 佐佐木源三は二君にも仕へず襤褸の肩を裾に結び、頼朝の御代を待ちしは心の錦(宵庚申)
佐佐木源三秀義は保元の亂に源義朝に從つて白河殿を攻め、平治の亂に源義平に屬して平重盛の軍と戰うた。義朝が死んでからは郷に歸り、平家に屬するを肯じなかつた爲に、所管の地を奪はれて辛苦を嘗め、源頼朝兵を擧げるやこれに應じ、壽永三年平家の臣平田家繼と近江國大原莊に戰つて死んだ、行年七十三。

ささふ 今若は御覽じて、これぞ源氏の氏神に我門出の吉相と御手を合せ給ひければ、兄を見眞似に乙若も牛若も母君の乳房の上に手を合せ、ささふささふと愛らしき(烏帽子折)
「ささふらふ」(左候)の略。さやうに候。「ざふ」をも見よ。

ささぶね ここは古へ業平の、思と戀と兩國に笹舟流す河内路や(三世相) 熊笹ちぎり舟こしらへて、淋しさ流す笹舟の(井筒)
〔笹舟〕竹葉で造つた舟。夫木集に、「うなゐ子が流れに浮ぶるささ舟の、とまりは多の水なりけり」。

***ささへぐち** かげ言中言ささへ口、立つてはふすべ居ては譏り(卯月紅葉) 直に仰せ上げられては某がささへ言申せし樣にて迷惑千萬(虎が磨)
〔支口〕支言に同じ。讒言。俚言集覽に、「ささへ。讒言をササヘと云、擁蔽の義也」。

さざめ 起きつまろびつささめして相撲取草思出す(用明天皇)
〔莎草〕茅に似て茅より小さき草の名。和訓栞に、「藻鹽草に、賤民ささのみといふ、茅の類にて編て蓑とし、又は席とするものなりといへり」。この文は「さざめ」に私語をいひかけ

ある。

さがまんぢゆう いはれぬ愛宕粽よりたべつけた嵯峨饅頭、むつくり捺つて貰はう(三國志)
〔嵯峨饅頭〕山城國葛野郡嵯峨で製造する名物の饅頭。ここの文は小野のお通をかくいうたのである。

さかむかへ 盛長仰を蒙り御さかむかへと聞えける(烏帽子折) 諸國貴賤の人込みも、皆本復で歸るさは、坂むかひ湯や送り酒(百合若)
〔坂迎〕參宮などの知音の者を粟田口に送る、また其歸るとき之を逢坂山に出迎へること。よつてまた、人を途中で待ち受けて饗應することをいふ。和訓栞に「さかむかへ＝坂迎の義京師の人參宮せし者歸路に迎ふるをいふ、其もと東へ下る人の歸りを逢坂まで出迎ふるよりの名なるべし、云云」。「坂迎ひ湯」とあるは、有馬の湯場から本復して歸る人を待ち迎へて饗應すること。蓋し坂迎は酒迎の轉義。

***さかもぎ** 貫の木逆茂木押破り(國性爺)
〔逆茂木〕棘木を逆立てて垣とし、その本を杙に結付けなどして敵の侵入を防ぐもの。武家名目抄に「サカモガリはサカモギの訛りて延びたるなれば、一つのものなるべきを、枝ながらの木を引並べたるを逆木と云ひ、竹を結びわたしたるを逆虎落といふことにはなりたり。

さかもどし 其禮として目くさり金樽代としてよこした、酒戻しはせぬもの故まあ受取つて置いたぢや(壽門松) 飲んだ酒を返せとは法を知らぬ侍殿、酒戻しはせぬもの(川中島)
〔酒戻〕酒戻しは逆戻しと訓相通じるによつて之を忌む。

***さかゆく** 勇んでうたふ鶏の、さかゆく末をぞ祈りける(本領曾我)
〔榮行〕さかえゆく。

さがらめ いつあを海苔もかたのりと、身のさがらめをなのりそや(出世景清)
〔相良和布〕海藻搗和布の別稱であつて、遠州相良の名產なるによつていふ。國花萬葉記卷八・遠州名物の條に、「搗和布かけ川より五里程南海邊さがららと云所より出る」。食用となりまたこの植物を燒いて其灰から沃度を製す。ここの文は、「身のさが」を「さがらめ」にいひかけたのである。

***さかる** 池水を東西にさかつて立別れ(蛙合戰)
〔離〕はなれる。隔てる。和訓栞に「さかる＝萬葉集に離ノ字、放ノ字、日本紀に疎ノ字などをよめり、裂の義、かる反く也」。

さきいき 正しうもない銀を取り、伴ひつきあふ己れがさきいきせうと思ふか(氷朔日)
榮え行くこと。「さきゆき」を見よ。

***さきくさ** さきくさの三つば四つばの殿作り(振袖始) さきくさの三つば四つばの大伽藍(出世景清)
〔三枝〕山百合に似て一莖に三枝づつある草の名。巣林子のここの文は、催馬樂歌に「この殿はむべも富みけりさきくさの、みつばよつばに殿造せり」とあるに據つたもので、この歌は古今集序文にも、六つには祝ひ歌として引かれてゐる。山崎美成の說に「さき草とはさゆり花ならん、かの百合は莖赤く、末に三つ枝に分れて花咲き、葉と葉と相向ひたるに似たればなり、されどその始めは、からの國の福草よりして祝ひ物にする故によみしといふべけれど、この歌を定めてさきくさの三つといはん冠におきたるなるべし」。「三つば四つば」といへるは、三枝の三つばより四つばと數をいひつづけ、三つ軒端四つ軒端にいひかけて三棟四棟をきかせたものである。

先立ち失せし心中 先立ち失せし心中の、戀の移りの香をとめて、梅田橋へと志し、二三町こそ走りけれ(卯月紅葉)
お龜の死より前、卽ち寶永三年の夏以前に梅田で情死した者を云ふのであるが、さて何人であるか詳でない。紀海音撰・彌市梅田心中に、老松町飾間津屋彌市と曾根崎新地萬屋の抱妓お高とが梅田墓所で情死した事を記し、外題年鑑にこの淨瑠璃の上演を寶永三年四月初日としてある。されどこの梅田心中の文中に今宮心中のことが見えてゐる。今宮心中は外題年鑑に寶永六年の出來事を同七年に上演したことになつてゐる。これでは寶永三年四月初日に信を置き難く、從つて彌市・お高の情死を寶永三年四月前とも斷定することができない。(序云、お龜の死を寶永三年の夏以前としたわけは、卯月紅葉の上演が寶永三年夏であるからで、それにつきては「四郎五郎」の條を見よ)。

さきゆき 新七を足にかけて踏んだる罰忽ちあたつて此仕合、身のさきゆきのすることは今生で思切つたぞ(淀鯉)
榮え行くこと。「さき」は榮える義であつて、花に開ノ字咲ノ字を「さく」とよめるも「さかゆ」の義で、「かゆ」反「く」である。

ざぐ 編笠座具に回向して(扇八景)
〔座具〕僧侶が勤をする時に座下に敷く物で、織物で作り、行く時は袈裟の下に携ふ。釋氏要覽に、「五分律云、爲護身護衣護僧牀褥故蓄座具」。ここの文は編笠を座具に代用したといふのである。

索索 「第一第二の絃は云云」を見よ。

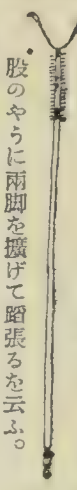
作の佛 女房に持ちながら一つ枕に寢もせぬは、作の佛に利生が無いと思うてたもや頼むぞと(兼好)
佛工作の佛像。作の佛に利生が無いとは、作つただけの佛樣では利益なければありがたいと思はないやうに、折角夫妻となつても、名のみの夫妻で情交なければ面白うないに喩へた。

さくらがり (鑓權三)
〔櫻狩〕「月毛の駒に櫻狩」を見よ。

さくらのり 花にまがひの櫻海苔、天をひたせば雲のりに(出世景清)
「花にまがひの櫻海苔云云」を見よ。

櫻山庄左衞門 櫻山庄左衞門福島ぢやとおしやろ、心はの、小體なれども張詰めて舞臺一ぱい、かさもあり藝に身もある、口中のしよりしたる雀鮨、夫れで蓼穗の何處やらがひりりとするとぞ答へける(今宮)
寶永・正德頃大阪の俳優櫻山庄左衞門を福島の雀鮨(「すずめずし」を見よ)に喩へた藝評である。役者謀火燵(寶永七年刊)立役之部に、「上。櫻山庄左衞門。口上さつぱりと藝手ばしかけれど、肩をぎくぎく顏に皺寄せ、いかさま上手と見せるやうな風當世にすきませぬ。藝にたるみなくさらさらとなされたらよからう」。

さくり こは何とせんあさましやと、馬のさくりに身を投伏し、大



〔さすまた〕

股のやうに兩脚を擴げて踏張るを云ふ。

させいほうせい 牛の角文字急げば急ぐさせいほうせい出せば、野らの荒地も上田と(振袖始)

牛の歩を促すときの掛聲である。續狂言記・牛馬に、「牛博勞させいほうせい」。賴朝濱出(淨瑠璃)第二に、「編笠深く引被り女房を先に立て、牛引立ててさせいほうせい、穗長樑門松を召せ召せとぞ賣りにける」。日本振袖始のここの文は、「させいほうせい」の「せい」に精をいひかけて、「精出せば」とつづけたのである。思ふに「させいほうせい」は、もと「させほせ傘人に貸すな傘」といふ諺を訛つて、精を出す意の言葉になつたのであらう。

***さぜん** 寺僧を召され莊嚴し樣樣作善終つて後、君も香華を手向けつつ(十二段)

〔作善〕善行をなすことを云ふ。佛に種種の物を奉ることも作善である。

さそう 「ささふ」を見よ。

***さそくをふむ** さあ來いと身もかろがるさそくを踏み、目の中鋭く身は凜凜しく(雪女)

〔左足を踏む〕長刀などで突いてかかる時に左足を踏出すをいふ。謠曲・熊坂に、「いらつて熊坂左足を踏み、鐵壁も徹れと突く長刀を」。

さだつ 月に一度しいて二度、三度とは往かれども、家のさだつも見て取つた(卯月潤色) おゆら樣とのもやもやが此耳へは入らぬか、内のさだつが面白いか、惡魔めとてははたと打ち(酒呑童子)

「さんだつ」(簒奪)の撥音「ん」の略された語である。奪ひ取る義より轉じて、ごたごたもめの意にいふ。紛紜。ごたつき。「さんだつ」の撥音「ん」を略したやうな例は、「おんこと」(御事)を「おこと」、「あんも」(餡餅)を「あも」、「ぼんさん」(坊樣)を「ぼさん」、「れうけん」(料簡)を「れうげ」、「ぎよしん」(御寢)を「ぎよし」、「こみぢん」(粉微塵)を「こみぢ」、「こなさん」(此方樣)を「こなさ」などいへる類で、これ等皆巢林子の文中に見える語であるが、其他幾多もある。島順水編・誹諧童子教(元祿七年の序文ある刊本)中卷に、「亡執の雷花の枝さきて(言水)、家のさだつも色よりの春(幸佐)」とありて、花の咲いてゐる樹の上に雷鳴の繪をかき、その側に二人の男と一人の女とが紛擾を起してゐる繪がかいてある。和訓栞には、「さだつ＝俗語なり、小立の義成べし」とある。

さだむ 火に入り水に入ることもさだむ因果とあきらめて(大經師)

〔定む〕暦上の語。大雜書(寛永十一年刊)に、「さだむとは一さい必定の日なり、知行入府定役公事諸奉行人一さいの定め掟に吉日」。ここの文は、定業の定に、大經師に縁ある暦上の語盡しの祭文である。

さちがへ 「山海のさちがへせし神代」を見よ。

ざつしき 「ざふしき」を見よ。

***さつた** これ又救世の大悲の化身、續いて今年此薩埵、櫻過ぎにし山里の、誰訪ふべくもなかりしに(女殺)

〔薩埵〕菩提薩埵(Bodhisattva)を略して薩埵とも菩薩ともいふ。ここの文に「この薩埵」とあるは、北河内郡西條村大字野崎にある野崎觀音をいうたのである。

さつだるまふんだりげ それ世尊一代五千七千の經卷は、華嚴寂滅道場に始り法華涅槃に說き終る、其中間の五時八教、中にもさつだるまふんだりげ、妙法蓮華と飜じたり(百日曾我)

〔薩達磨芬陀利華〕梵語(Saddharmapundarika)である。譯して妙法蓮華と云ふ。

さつつら せめてきやつめがさつつらを踏にじらせ給ひ御腹癒させ給へや(西王母)

「しやつつら」のつまつた語。しやつ(奴)が顏面。

さつまぐし 唐子髷には薩摩櫛、島田髷には唐櫛と、大和・唐土打まぜて(國性爺) 櫛になりたやヤレサテ薩摩の櫛に、諸國娘のヤレサテ手に渡ろ(薩摩歌)

〔薩摩櫛〕薩摩で製出する櫛で阿六櫛に似てゐるといふ。國花萬葉記・卷十四下、西海道薩摩名物の條に、「櫛。世に唐櫛とも薩摩櫛とも云ふ」。

***さつまにさい** 諸白をいつかけた薩摩二才、ふとり男であつたばん(博多) およそ薩摩二才とて九州者は端喧嘩せず(用明天皇)

〔薩摩二才〕現今九州地方で「さつまにせ」といひ、薩摩生れの武骨者の意にいふ。「二才」は健兒といふ程の意。

さつを 手荒き薩夫の無意氣者、死にたくば我宿で撲殺してくれうぞ(薩摩歌)

〔薩夫〕薩摩男。

***さと** みをつくし難波に咲くや此花の、里は三筋に町の名も、佐渡と越後の間の手を(冥途飛脚) 昔のさとの寐覺には伽羅で喫む床の内(淀鯉) 女とこそ生れうずれ傾城とこそ沈まうずれ、おめおめ里へは歸るまいと胸を据ゑて參りしに(扇八景)

〔里〕色里また分里の略。遊廓。

***ざとう** 惡口仲間二三人、ざとうまじくらどつと來り(曾根崎)

〔座頭〕盲人の髮を剃り、三味線を彈き唄を謠つて酒宴の座興を助けたもので、幇間の一種である。錦文流撰・傾城やつはながたに、「廓中をば鳴渡り、響渡つて入込めば、主人夫婦・上する女子・定附けの座頭の坊までどきどきと」。博多小女郎波枕・上之卷に見える「欲市」も座頭の名である。西鶴撰・本朝櫻陰比事(元祿二年刊)卷之五、及び難波鉦(延寶八年刊)松之部、衣かづきの條に、酒宴の席に座頭が三味線を彈ける畫が載つてゐる。

さどしまでんはち 佐渡島傳八はつとしらけて立退けば(淀鯉)

〔佐渡島傳八〕道化方の名優である。三國役者舞臺鏡(元祿十二年刊)に、「大然とあがりたる道外、元來顏付やみらみつちやとし、目耳鼻の附け所違うたやうな、我身ながらも惡いと思はるるやら、又しても一番がけに顏の事を罵らるる、此人よい人の側を去らず何やらをなさるる事上手ぢや、さるによつて寸暇無くして、彼所の此所のと引張太鼓のうはもりなり、それ故御内證あたたか饅頭に替さるる事その隱れなし、先諸藝いやしく、何を言はると思へば食ひ物の事ばかりを大事さうに申さるる」。

さとすずめ 籠の鳥なる梅川に焦れ

たのである。

*ささら　あつと涙の玉ささら、唄ふ聲にも血の涙(夕霧)　あつと涙に摩るささら、鼓弓の絃も細き聲(反魂香)

〔簓〕竹で簓を作り、刻みある木竿と相摩つて音を發せしめるものである。謠曲・自然居士に、「夫れささらの起りを尋ぬるに、東山にある御僧の、扇の上に木の葉のかかりしを、持ちたる數珠にてさらりさらりと拂ひしより、ささらといふ事始まりたり」とあれど、もと支那の古樂器の敔から出たものであらう。間の山(その條を見よ)の唄を謠ひ、または歌祭文や門說經にも簓を用ゐ、三味線または胡弓と合奏してゐた。


〔菱川師宣畫、延寶五年〕

*さし　お袋様とさしで是はいかがなり、あの御座敷へ參らん(堀川波鼓)

「さしむかひ」差向ひの略。ここの文は男女二人ばかり差向つてはいかが、情交があるやうに嫌疑を受けてはと遠慮したのである。

*さしあひ　親方にせかれて逢瀨も絕え、差あひありて今急に請出すことも叶はず(天網島)

〔差合〕差支。

*さしがへ　用意し置きしさしかへに、夫の白き帷子緋縮緬に結び下げ(卯月潤色)

〔差替〕差替の刀。

*さしがみ　これの小萬に就いて代官所のおさし紙(丹波與作)

〔差紙〕「差し」は名を指して呼び出す義。官から人民を呼び出す召狀。

さしぐし　刺櫛我門の律の歌(源義經)

〔刺櫛〕催馬樂の律の刺櫛の歌、「さし櫛はとうまりななつありしかとたけくのぜうの朝にとりようさりとり取りしかば挿櫛もなし」。

※さしこはらす　大斷臘差しこはらし(持統天皇)

さしこはる(差強)の轉。指して堅固に身構す。

*さしこみ　皆おか様のさしこみと、思ふも地體こちの無理(重井筒)

〔差込〕間に立入つて邪魔をすること。干涉。

さしさば　鰺や刺鯖皮鯨(女護島)

〔刺鯖〕鯖を背から切開いて鹽漬にしたのを、二尾一つの串に刺いたものをいひ、越前能登あたりから京阪地方に賣出したのが多い。この文に「皮鯨」とあるは、鯨の皮部にあたる脂肪を鹽漬にしたものであつて、多くは吸物などにして食用に供したのである。

*さしぞへ　さしぞへ拔いて草切り拂ひ(松風)

〔差添〕刀に添へて差す短刀。脇差。

*さしづ　未だ指圖繪圖の卷物、傳授口傳許し印可を請けざれば(鑓權三)

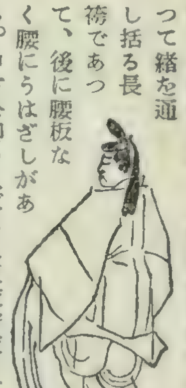
〔指圖〕茶道具の飾附・位置・式法等を示せる圖。

*さしつたり　有風飛掛つて入鹿が眞中刺通さんとする所を、さしつたりと引ぱづし、腕首に縋付くを向へがばと突倒す(大職冠)　打碎かんと敵の勢一度にどつと亂入る、さしつたりと切り拂ひ、込入ればなぐり立て(國性爺)　太刀を逆手に突けども斬れども手答へなし、さしつたりと取直し、切つて放す忍の緒(振袖始)

心得た、おつと承知したといふ時にいふ。また、しまつたといふ時にもいふ。

*さしぬき　金色の指貫裾を曳いて銀笴の眞羽の矢負ひ(松風)

〔指貫〕奴袴とも書く。裾に穴あつて緒を通し括る長袴であつて、後に腰板なく腰にうはざしがある。中古公卿の人だちは直衣狩衣の下に綾織物の奴袴を穿いたものである。


〔直衣に指貫をはいた姿〕
(北野稿草所藏)

さしば　扨御鷹はつみ・えつさい・さしば・せう・隼・このり(百日曾我)

〔鶆鳩〕大さ鳩程な小鷹の一種で隼の屬である。よく鶸やその以下の小鳥を捉ふ。

さしほらす　大太刀前下りに差ほらし、のつさ〳〵と步み來る(酒呑童子)

差惚の轉。差し姿のだらしなきをいふ。

*さしもぐさ　十四の炎に水が湧く盛りの女盛りの男、手を締め身を撫で口を寄せ、誰を忍ばんさしも草、これぞ因果の皮切なる(今宮)

艾をいふ。「さし」はさしつける意より添はつた語。小倉百人一首・藤原實方朝臣の歌に、「かくとだにえやはいぶきのさしもぐさ、さしも知らじな燃ゆるおもひを」。

さじやくわう　「駒形權現」を見よ。

*さす　いや・事介はちとお寺にさすことがある、母様の今・藏にござるまに早う出たい(薩摩歌)

〔障〕差支へる。

*さすが　腰のさすが引拔いて既に小指に押當つれば(壽門松)　出見世へいてさすがでも用意し(生玉)

五寸乃至八寸程な腰刀をいふ。「さす」は刺、「が」は「よすが」など云ふ「が」と同じく、處の義であらう。古くは火打袋の刺柄に著いてゐる小刀を稱した。安齋隨筆・卷十三に、「さすがに二品あり、五六七八寸ばかりの腰刀をさすがと云ふ、是はさすかたなの略語なり、さすかたなは刺刀にて、敵を刺し殺す刀なり」とあれども、「が」を「かたな」の略とすることはいかが。

さすのみこ　これ忠臣のさすの神子、占は違はぬと(浦島年代記)　人の胸中に包むことまで察するに、一點も違はぬさすのみこと承はる(百合若)

〔指神子〕能く物事を言ひ當てるを指すといひ、神子は敬うたのである。陰陽師・占師などの類であつて、靈驗ある豫言者を云ふ。源平盛衰記・四、盲卜の事の條に、「大炊御門堀川に盲の占する入道あり、占を云ふ言時日を違へず、皆人さすの神子と思へり」。和漢音釋書言字考節用集・人倫門に、「指神子。安倍晴明六世、陰陽頭泰親、治承比人、學二天文術數一、言二其雅占一、殆如レ指レ掌、故時人呼云レ爾」。

*さすまた　方一町に垣を結ひ、突棒刺股鐵の棒兵具ひつしと竝べしは、さながら修羅の獄卒が八逆五逆の罪人を苛責にかくる如くなり(出世景淸)　兩方放さず、放しもせず、さす股に踏張つて暫く息をつぎにける(會稽山)

〔刺股〕琴柱のやうな形した鐵製のものに木の長い柄を附けた武器。「刺股に踏張る」は、刺

＊さびいわし 箆同前のさびいわし、反を打つて何とする(加増曾我)

〔錆鰯〕赤鰯ともいひ、錆びた鈍刀のことにいふ。錆刀。

＊さびつきげ 錆月毛の馬にふくみ轡を懸けさせしは(世繼曾我) 錆月毛の馬の尾鬣あくまで縮みたるに(五人兄弟)

〔錆月毛〕馬の毛色の名。赤錆色を帶びた月毛(葦毛の少し赤ばみたもの)。

＊ざふ 武藏の國の住人平山の武者所季重參りざふといふ儘に(大原問答) あつぱれ駿足御馬ざふ、何れの牧よりひかれしぞや(源義經)

「さぶらふ」(候)の約。「さざふ」をも併せ見よ。

さふけつ 歃血の義を結ぶ上は盡未來變ぜぬ魂(關八州)

〔歃血〕支那春秋の世には會盟に牛の血を歃(すす)つて信を結んだ。禮記注疏に、「凡盟者既詛而割二牲左耳一、以二珠盤玉敦一盛レ血、爲二載書一、書成諸侯共歃レ血讀レ書、主レ盟者執二牛耳一、然後掘レ坎埋レ牲、加二載書一而埋レ之、言使下背レ盟者如上レ此牛一也」。和漢三才圖會に、「盟、歃レ血以結レ信也、春秋諸侯會盟、割牲歃レ血云云」。

＊ざふしき 糺(ただす)の森より放埒雜色具したる勇士つつと出で(弘徽殿)

〔雜色〕雜役駈使を勤める者。雜人(ざふにん)。「ざつしき」ともいふ。有位の者は相當の服色あれど、無位の者は定まつた色がない、故に位なくて雜役に從ふ者を雜色といふ。(伊勢貞丈は、色は服色の義でなく、人品の義、雜役を勤める人品をいふといつてゐる)。

＊侍冥利(さぶらひみやうり) 神八幡(しんはちまん)侍冥利他言せまじ(天網島) 敵を討たせ申さん爲召連れ立退き候、侍冥利僞なしと言ひければ(大磯虎)

侍が自誓の詞。「けいせいみやうが」を見よ。

＊さへにん させぬさせぬと割込んで、ひよろつく足を踏みこかされ、さへ人踏んだな堪忍せぬと、相手がどれやらめつた撲ち(生玉) 人山の芋は鰻になる、喧嘩のさへ人聟になる、結ぶ緣こそ不思議なれ(天神記)

〔支人〕支へて裁く人の義、仲裁人。

＊さほひめぎみ 春のつかさの佐保姬君、霞の衣當流仕立(雪女)

〔佐保姬君〕佐保姬とも云ひ、春の神。古事記傳に、「後世秋の歌には立田姬をよみ、春の歌には佐保姬をよむ、是奈良の京の頃より言出でたるべし、立田は京の西にありて立田姬と申す神あるに對し、佐保姬宮は東にあるを以て設けたるならん」と見えてゐる。

＊さま ぎえん直(なほ)しに酒にせう毛氈敷けと、勇んで見てもどこやらさまが明樽(あきだる)の、底の心は澄まざりけり(淀鯉) あれなる櫓のさま蔭に人影の見えたるは駿河の守に極まつたり(今川了俊)

〔狹間〕透間(すきま)。城の櫓や塀に窓を明けて外を望み矢丸を放つその窓をも云ふ。

さまたかへし うたせたけ馬さまた返し、手をくだき心をくだき(井筒)

〔小股返〕相撲の手の名で、掛十二手の一。相手の股間に足を割込み片手を内股へかけ、體と共に吊上げて投出す手。

＊さみす せがれ瀧口・上の御仕置を待たず、遁世させしをさみすると覺えたり(娥)

〔偏〕狭(さ)みすの義。侮蔑す。あなどる。

さむらひみやうり 「さぶらひみやうり」を見よ。

＊さもさうず 早廣も叶はじと散散に落ち失せけり、おおさもさうず是までと(蟬丸)

さもさうとず。まさに然るべきである。

さもじ これは重代の左文字、二千五百貫の折紙あり(反魂香)

〔左文字〕南北朝の頃筑前博多の刀工鍛冶左衞門三郎作の刀をいひ、銘に左の字を刻んである。左衞門三郎は正宗の弟子である。左派の者に元應、安右、吉貞などの名工がある。

＊さもしい 世につれるとはいひながらさもしい心にならんした(丹波與作) ええさもしい騙(かた)め、やい銀(き)がほしくば穢(きたな)い言懸りせうより奇麗(れい)に家尻(やじり)切れいやい(生玉) 母こそは夕霧、父御(ててご)はそれ藤屋伊左衞門、さもしい人と思やるな(夕霧) 義貞程の大將が、さもしい返報受けうとて何(なん)の情(なさけ)をかけられう(女楠)

心根の淋しい義。あさましい。心ぎたない。謠曲・景清に、「さもうしや方方よ、源平互に見る目も恥(はづ)かし」とある、「さもうしや」は「さもしや」を延べた詞である。

さや 下に郡内黑羽二重、縞の羽織に沙綾の帶(天網島) 見世の帳面皆ぬめりんず、らしやも無い事いはしやりんずの、はや人魂(ひとだま)も飛(とび)さやへ拔いて、共に刄の諸(もろ)羽(は)二(ふた)重の(氷朔日)

〔沙綾〕葡萄牙語 Saia (西班牙語 Saya)即ちサアヤの略で、布帛の義である。卍の形をくづして連ねた模樣や其他種種の模樣を現はした絖(ぬめ)地の絹織物。「飛(とび)さや拔いて」とあるは、花文綾(その條を見よ)に鞘をいひかけた。

さやなり 跡のこじりの帳面のつばめ合せと、親方がさや鳴(なり)するぞ道理なり(女腹切)

〔鞘鳴〕刀身が鞘に適合せず振れば音のすること。ここの文は鞘(さや)鳴(なり)に屋鳴(やなり)、即ち家に響渡る程怒鳴散(どなりちら)す)をいひかけたのである。

さゆる まづ言譯を御聽きと、たつてさゆれば姉のお種(たね)、さあ言譯が立たぬからはこの度は命を取る(堀川波鼓)

「さふる」(障)の訛。おさへしづめる。とどめる。堀川波鼓のこの少し前の文に、「取さへてたべ人人」とある「取さへ」も「取障へ」である。「さふる」を「さゆる」といふは、「うろたふる」を「うろたゆる」といへる類である。

さよがうし 六軒町のさよ格子、唐(から)の聖人(ひじり)の宣はく、色の德には隣あり(重井筒) 稍靜まれるさよ格子、市郎右衞門は立歸り軒の下にてしはぶけば、お島はそれぞと二階の窓(二枚繪)

〔小夜格子〕青樓の二階窓の竹格子をいふ。濱松歌國撰・南水漫遊に、「島之内六軒町といふは遊屋町なり、重井筒の戯文中の卷に、月ははやわたりぞめして中橋や六軒町の小夜格子とて、娼家の二階窓の竹格子をいふ」。小夜格子の小夜は、娼家の店は格子作りであつて、夜になつて繁昌するから附け加へられたもので、小夜枕・小夜鳥・小夜蒲團などいふ小夜と

て通ふ里雀、忠兵衞はとぼとぼと(冥途飛脚)

〔里雀〕里をぞめき歩く者を雀に喩へていふ。ここの文は、梅川を籠の鳥と云うた縁で里雀とつづけ、そして雀の鳴聲チユウチユウに忠兵衞をいひかけた、いつもながら輕妙の才筆である。

さな 首尾よからうば筑前さなへ此船廻し(博多小女郎浪枕) 上方さなへ突走る(博多小女郎浪枕) おんどもが脇腹さなへ當るが最期、ひつつまんで壁へ腕摺らうと思うて(博多)

〔さな〕「さま」(樣)の訛。方向を示す助詞「へ」と同じやうに用ゐ、長崎地方の方言である。現今長崎地方では「さな」とは殆んど言はないで「さん」または「さへ」といひ、熊本地方でも用ゐられてゐる。越谷秀賓編・物類稱呼・卷五・言語部に、「東へ西へといふ事を肥前にて、東さなへ西さなへといふ」。

さなか 十何兩とやら昨日渡る筈ぢやげな、請取も往つてあるとのこと、大事無か私に渡さんせ、さながまちつと酒でも飲んで待たんせ(生玉)

「さなくは」のつづまつた詞。さもなければ。なほここの文に「大事無か」とあるも、「大事無くは」のつづまつた詞である。

***さなへづき** 聟と舅の挨拶の中にふし立つ早苗月(卯月紅葉)

〔早苗月〕稻苗を苗代から田に移す頃の月の義。舊暦五月の異稱。

***さね** 吳三桂は札よき鎧、飛來る玉なうけとめうけとめ(國性爺) 木蘭地の直垂白銀の摺小札、白絲にて菱綴したる斑白緘の鎧を着(最明寺殿)

〔札〕鐵または皮で造れる小さい板の如きものの稱で、これを緒または革紐で綴して鎧を作る。

***さねかづら** 我黑髪のされかづら、逢坂山にぞ着き給ふ(蟬丸) され葛人に知られでこいこい(千疋犬)

〔美男葛〕山野に自生し木質常綠の蔓生植物で、葉は楕圓形で光澤あつて厚く、花は帶白色、果實は赤い小球狀漿果の集合より成る、莖には多量の粘液を含む、その粘液を頭髮に塗付ける用となす。ここの文は黑髪のもつれたるを「さねかづら」に響へ、「さね」は小寢に通はして男女相寢る意から逢坂山にいひつづけたのである。

小倉百人一首・三條右大臣定方の歌に、「名にしおはば逢坂山のさねかづら、人に知られで來るよしもがな」。


〔さねかづら〕

さば 二十あまりの若僧行に褻れし姿にて、普供の生飯を盤に捧げ(以呂波)

〔生飯〕梵語 Sattvahara を禪家にて生飯と譯し、宋音に讀んで「さんぱん」と云ひ、略して「さば」と云ひ、出衆生食の語に基く。食事する時にまづ少分の飯粒を分つて鬼界の衆生に施すを云ふ。俗に三度に把つて三寶と不動明王と鬼子母神に供するものとされてゐる。

***さはい** そちが差配で二三日どうぞ頼む(二枚繪) 毛剃が諸色請込んで差配らしげに物體顏(博多) おとご樣の御差配で今の間は我らと夫婦(松風)

〔差配〕世話。とりなし。取捌き。西鶴置土産卷一、四十九日の堪忍の條に、「野秋にはつと出て、見事なさはいしすごし、これも智惠すぎてやむるにはあらず、自然と面白さやみて」。

***ざはい** 挨拶ざはいしとしとと物柔かできつとして(堀川波鼓) 御目見えを致されよと、座配過ぐれば三保谷は横柄なる顏付にて(吉野忠信)

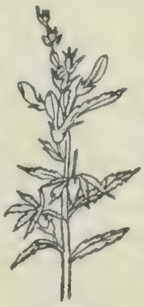
〔座配〕挨拶や身振などの所作を云ふ。應對の座に於ける所作。北條團水撰・日本新永代藏・卷六に、「野郎傾城めさしこ面白き物にあらず、粧ひたてし姿・花車の言葉座配の珍しきを見る故に、我宿の妻とは格別に違ひて魂を奪はるるなり、彼等が内證のふだん姿それはそれは見苦しき事なり」。太平色番匠・卷一に、「大臣も卑劣に遊ばず座配をはづませ、折からにはいたつたかる口」。錦文流撰・傾城八はながたに、「先第一は人に揉まれ、ざはい品よくきれはなれ、しやんとして扱りんとして」。

***さばきがみ** 西橋詰の髪結床よりさばき髪の若い者楊枝くはへて來りしが(堀川波鼓)

〔捌髪〕解き散した髪。小町踊に、「梅が香やとめん柳のさばき髪。元卿」。

さはぎきやう 杜若・根芹・澤瀉・澤桔梗水にまかせて染めしもよし(吉岡染)

〔澤桔梗〕水邊に自生し高さ六七尺に達し、葉は柳葉に似て細鋸齒がある。秋の頃五瓣碧色の花を開く。ここの文は澤桔梗を染模樣にしたのである。


〔澤桔梗〕

さばしる 「玉島川にあらねども云云」を見よ。

***さはち** こりや何したると梶原が睨付ける眼はさはち、皿打落し(會稽山)

〔沙鉢〕易林本・節用集に、「沙鉢」とあつて「玻璃」と註記してある。されば水晶の皿のやうな目玉をむぎだすことを「眼は沙鉢」と云うたのである。和訓栞に、「さはち。磁盆をいふ、沙鉢の義なるべし、凡て淺らなるものを沙といふ、沙羅・沙鍋・沙船の類是也といへり」。合類大節用集(享保二年刊)に「砂鉢。支那所謂磁盆」。

さばへなす さばへなす疫神(振袖始)

〔五月蠅成〕「五月蠅なす疫神」とは、五月蠅のやうに騷ぐ疫神。萬葉集卷三に、「五月蠅成騷舍人者云云」

澤村長十郎 扇屋の仲居のまんが供して通る、あれは澤村長十郎、あつたら男をやがて大阪へ下り船(女腹切)

澤村長十郎は京都宮川町の生れであると云ふ、正德・享保頃の名優である。正德三年の春芝居に京都から大阪に下りて光山座に勤めた。役者座振舞(正德三年成)に長十郎の藝評を記して、「京で俏形この人に續くは無い、久振にて難波津にかへり花、冬ごもりの顏見世いなりの大名に則いなりの介と成」と見えてゐる。序云、この文は長町女腹切の初上演年月を考證する材料となる。

さびあゆ 相模川のさびあゆ漁つて一獻酌まんと(大磯虎)

〔荒鮎〕鮎が秋季產卵期になれば澁色錆色となる。これを荒鮎と云ふ。

さん 死ぬるは二人がかれての覺悟、養ひ親にさんもつかず、在所の親の遺恨もなく(宵庚申)

〔賛〕繪畫の上にその繪畫をほめて評した詩文を賛といひ、轉じて批評また惡評の意にいふ。井原西鶴撰・好色二代男(貞享元年刊)卷之一、親の顏は見ぬ初夢の條に、「出口の茶屋に腰掛けながら、朝歸りの客に賛つくるに一人も違はず、亭主横手を拍つて、いかにも彼は嵯峨の材木屋殿、其次は鳥羽の米屋の手代なり、見立ての如くかこひを買ふ男ぢやと大笑して」。

さんあくしゆ 「しよあしゆらとうこざいだいかいへん」を見よ。

さんいんぶつしやう 三因佛性の中には緣因殊に量りなき、佛の緣やいつとなく(用明天皇)

〔三因佛性〕正因佛性・了因佛性・緣因佛性を云ふ。正因佛性は諸法實相の理體であつて、一切の衆生が悉く具するものである。了因佛性は諸法實相を了知する智慧をいひ、緣因佛性は諸の善根を云ふ。了因佛性と緣因佛性とは人間でなければ成就されない。以上の三佛性を具して成佛得道することができるのである。詳しくは涅槃經・師子吼品を見よ。

***さんえ** 三衣の罰も恐しく(薩摩歌)

上人三衣をあらため既に法事と見えし時(小栗判官)

〔三衣〕佛弟子の着する三種の法衣、卽ち大衣・七條・五條をいふ。釋氏要覽・上に、「蓋法衣有三也、一・僧伽梨(卽大衣也)、二・欝多羅僧(卽七條也)、三・安陀會(卽五條也)」。僧祇律に、「三衣者賢聖沙門之標幟也」。「三衣の罰も恐しく」とは、法衣を着た身にて色情に迷ふやうでは佛罰も恐しいといふ意。

***さんがい** この三界の衆生は皆これ我子と聞く時は(菖井筒) 三界の教主世尊の御事なり 卯月潤色) 三界の捨子となり(博多) 三界を探しても我子というては是ばかり(釋迦) 三界のなほ首枷と(十二段) 我は是より三界坊(女夫池)

〔三界〕欲界・色界・無色界を云ふ。三界はいづれも有漏の迷界なれば、娑婆卽ち現世の意に云ふ。「この三界の衆生は云云」はその條をも見よ。「三界のなほ首枷」は「げにや世世ごとの云云」をも見よ。僧となつて三界に迷へる衆生を救濟善導するを三界坊と云ふ。

***さんがい** 山も見えざるかりそめに、江戸さんがいへ往かんして、何日もどらんす事ぢややら(丹波與作) いかにいたづらすればとて何時の便宜に唐三界、餘りなかせきぢや(國性爺) 名物のお家の道具京さんがい質に置き(淀鯉) 裏屋・背戸屋・慳貪屋さんがい懸取に歩くやうな勤するのも澤山に逢はう篤(生玉)

〔三界〕界隈。邊。三界は多く名詞と複合語となつて用ゐる。(この語蓋し前條の轉義であらう)。「江戸三界」「京三界」「高津三界」「廓三界」「慳貪屋三界」「親許三界」「他國三界」などと用ゐられ、また助詞「の」を挿みて、「嵯峨の三界」などとも見えてゐる。「山も見えざるかりそめに云云」はその條をも見よ。

***さんがい** 黄金の紳・珊瑚の鞍・おしかけ・三懸・腹帶・搖綿め(釋迦)

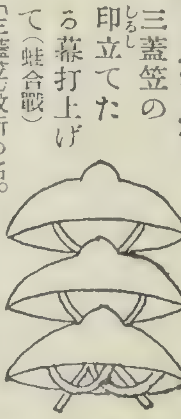
〔三懸〕三繫とも書く。鞅、靷、鞦を合せて三がいと云ふ。「がい」は「かき」(鞿)の音便である。「おもがい」は馬の頭から轡に懸けた緒、「むながい」は馬の胸から鞍橋に懸けた緒、「しりがい」は馬の尾から鞍橋に懸けた緒を云ふ。

***ざんがい** あれ母樣の怖い顏、爪も長うなつた怖い怖いと、泣く聲に母も驚くざんがいの、一念覺めて顏面も柔和の相とぞなりにける(百合若) 男を害し其妻を娶る畜生ざんがいのこのからだ、燒くな埋むな(女夫池)

〔殘害〕「ちくしやうざんがい」を見よ。

***さんがいがさ** 三蓋笠の印立てたる幕打上げて(蛙合戰)

〔三蓋笠〕紋所の名。


〔三蓋笠〕

さんがいびし 此界ばかりか三蓋菱、幾夜も幾夜も揚羽の蝶(賀古教信)

〔三蓋菱〕紋所の名。大中小の菱形を三段に重ねて其外廓を取つたもの。ここの文は、三蓋菱に參會をきかせたのである。

***さんかう** 三綱五常の道踏みたがへぬ足の鞴(唐船噺)

〔三綱〕君臣・父子・夫婦の道をいふ。君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱である。

さんかう よつ引きちやうど放せば過たず、龍馬のさんかうずばと射ぬかれ(閉八州)

〔三髙〕三溝とも書かれてゐる。馬の目から鼻に至る間の溝の如く凹まりたる所の稱。

さんかん 算用算勘存ぜねば(淀鯉)

〔算勘〕算盤勘定。算術。

***さんき** おのれは正しく髮を剃り三歸五戒を授りて、今日新談義の高座の上、色に溺れて還俗とは五郎に優る大惡人(五人兄弟)

〔三歸〕佛・法・僧の三寶に歸依すること。三歸と五戒とは佛道に入る者の最初に受ける戒である。

***ざんぎ** 左程まで姉姬樣殺したいかいの、ええほんに人のざんぎいひたうは無けれども、心と素性を顯すの(井筒) ざんぎざんげ六根罪障(兒の歴)

〔慚愧〕自ら罪を羞ぢるを慚と云ひ、これを人に對して發露するを愧と云ふ。過去の罪惡を羞ぢて後悔するを懺悔と云ふ。慚愧・懺悔は佛道修行上の要素である。大涅槃經に、「慚愧者衆養之衣服」。「人のざんぎいひたうは無けれども」とあるは、人の恥辱を言ひたうはなけれども」の意である。

さんきよ

「嫉妬深きは三去の一つ」を見よ。

さんくわう・ごてい (國性爺)

〔三皇・五帝〕三皇は伏犧・神農・黄帝、または天皇・地皇・人皇を云ふ。五帝は少昊・顓頊・帝嚳・堯・舜、または伏犧・神農・黄帝・堯・舜を云ふ。

さんくわうてん 願かけぬ神もなく、祈らずと云ふ佛もなく、三光天を拜むとて(大經師)

〔三光天〕日天、月天、星天。二中歴に、「日・觀世音稱・寶光、月・得大勢作・名月、星・虚空藏號・普光」。

***さんぐん** 赤旗を眞先に押立て、三軍心を一致にして親が進まば子も

同じ語であつて、蓋し娼家の店格子を小夜格子と稱したまでである。

*さらさうじゆ　祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理り(孕常盤)

〔沙羅雙樹〕沙羅は梵語(Sala)、堅固と譯す。沙羅樹は東印度原產の龍腦香科の喬木である。葉は大形で互生し、卵狀長楕圓形で端尖り、樹皮は青白色で、花は小形淡黃色の花瓣である。古昔拘尸那揭羅城外に沙羅樹林があつて、其中の四株は特に高く、相對して雙をなしてゐたので沙羅雙樹といふ。釋尊其間で遺教を說き遂に涅槃に入られた時、雙樹は垂れ覆うて白色に變じたといふ。華嚴音義に、「沙羅雙樹、譯爲高遠、其林森聳出於餘林」。涅槃經に「爾時世尊沙羅林下寢臥寶牀……、其樹卽時慘然變白猶如白鶴、枝葉花果皮幹悉皆爆裂墮落、漸漸枯悴摧折無餘」。「祇園精舍」を見よ。

さらさかぶろ　さらさ禿がしろべして、橋が架けたや佐渡屋町(冥途飛脚)

〔更紗禿〕徳川初期頃から西洋の貿易商人の手を經て更紗・幾何學的の中形花文ある金巾(かなきん)が我國に渡來し、後には我國にても染出し、正徳頃は遊里の禿(かぶろ)(その條を見よ)などにも更紗の着物が流行した。さらさを更紗と書くは音借字であつて、西洋の貿易商人から我國人に傳はつた語であるが、語原はこの布の製產地なる印度のサラーサ、或はヘラーダであると云ひ、或は瓜哇語のセラサから出た語ではないかとも云ふ。瓜哇語のセラサは撒布の意であつて、花などの模樣を撒布するといふ意から出來た名であらうかともいふ。

*さらし　面も恥も名もさらしの宇治の里(雪女)

〔晒〕面も恥も名も晒すに、宇治の里は晒布の有名な地であるから、「さらしの宇治の里」といひかけたのである。

*さらりん　吹出す烟は沙羅林栴檀の霞と變じ、三寶供養の燒香となつて(歌念佛)　沙羅林の夕の烟消え殘る(用明天皇)

〔沙羅林〕沙羅樹(「さらさうじゆ」を見よ)の林。

*さりようこ　右龍虎・左龍虎討取つて(天網島)

〔左龍虎〕巢林子作・國性爺合戰の九仙山の中に見える人物である。「樊噲流は珍しからず云云」の條、及び假作人名部に就いて見よ。

さるがく　法談讀誦管絃の聲、猿樂田樂伎樂を奏し(賀古教信)　猿樂狂言の笠の下のまなび(源義經)

〔猿樂〕「さるがう」卽ち「さんがく」(散樂)の轉である。猿樂の能は鎌倉將軍の世に起り、足利將軍の世に盛に行はれた。能の間の狂言はこの流れである。觀阿彌・世阿彌の父子從來の猿樂に田樂の能や諸の舞などを折衷綜合して謠曲を起した。「猿樂狂言の笠の下」とあるは「笠の下」の條を見よ。

さるぜ　引摺る雪駄の金(かね)にあかした夜裝付、各・さるぜ・羅紗・すためん・かるさい・らんけん・繻子(しゆす)・天鵞絨(びろうど)(博多)

葡萄牙語 Sarja(英語では Serge)である。舶來の毛織物をいひ、現今はセルと云ふ。

*さるぢゑ　何ぢや女の猿智慧(生玉)

〔猿智慧〕こざかしうて淺はかな智慧を猿の智慧に喩へた語。小才小智。

さるのこしかけ　猿縛(さるしばり)に絡(から)げつけ、猿の腰掛にしてくれんと(松風)

〔猿の腰掛〕猿(さる)の末廣(すゑひろ)とも云ふ。「猿の末廣」を見よ。

さるのことり　豕の燒皮・熊の掌・狸の澤渡・猿の木取(天神記)

〔猿木取〕猿の手足をいふ。庭訓往來・五月の文に、「熊掌・狸澤渡・猿木取・云云」と見えて、永井如瓶の諺解の註に、「熊掌・狸澤渡・猿木取、いづれも皆手足の事也」とある。

さるのすゑひろ　琵琶の撥(ばち)なぞ出しける、山樵ども集りて、すがたは銀杏の葉の形(なり)にて扨も合點のいかぬもの、これは猿の末廣か(蟬丸)

〔猿末廣〕猿の腰掛とも云ひ、菌類であつて樹木に生じ、半圓形の扇狀をなす。

さるのひととび　小鷹の羽おり・猿の一飛・夢枕(井筒)

〔猿一飛〕相撲の手の名で紛(まがひ)十二手の一。「たちがん」を見よ。

さるのほほ　花の三月よけぬれば皆吉日ぞ、その外に忌むは申の日猿の頰(艶狩)

〔猿頰〕俚諺に「猿の頰笑」(自らを知らないで他を笑ふ喩で、日本振袖始の第一段にも、「これこれ誤なしとは猿の頰笑ひ、身の上知らず」とも見えてゐる)といへば、その意を含め、頰に方をいひかけたのである。ここの文に「花の三月よけぬれば」とあるは、花の三月は散る緣とて、婚禮には緣起惡く、また「申の日申の方」は、申(さる)が去(さ)るに通ふから婚禮には忌むのである。

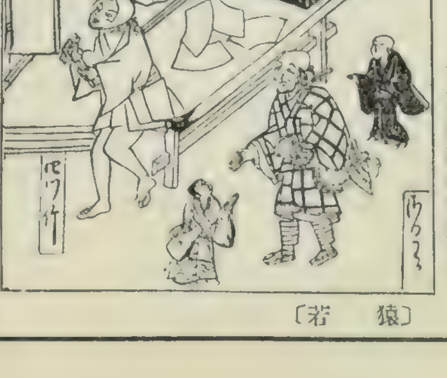
さるぼう　「さるぼほ」を見よ。

さるぼほ　嫁菜・さるぼほ・恥蠣の吸物(酒呑童子)

〔猿頰〕蜊蠣の類、瓣鰓類中の同柱類に屬する貝。殼圓くして厚く、その形あかがひに似て小さい。

*さるわか　曾我兄弟は古今無雙のつはものと御一言が嬉しさに、この蠅のやうな奴等に繩取らせ、五郎丸とやら云ふ猿若に首打たる(虎が磨)

〔猿若〕歌舞伎の猿若(猿若の稱は中村勘三郎の猿若狂言より起つたといふ)の眞似をして錢を貰ふ賤民である。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷七に、「猿若。一人狂言たり、或書に云、滑稽優人と注す、こつけいは人を笑はする事をいふ、今の猿若是なり、云云」。五郎丸は猿若ではなけれども、いやしみて猿若と云うたのである。



(人倫訓蒙圖彙所載)

〔猿　若〕

*されがひ　汐のされ貝・うつせ貝(振袖始)

〔曝貝〕「され」は「されかうべ」(髑髏)などいふ「され」で曝の義。潮水に曝されて肉の脫落した貝殼。

ざをくむ　「ざ」(座)を見よ。

*さをじか　呦呦と鳴くさを鹿の(會稽山)

〔小牡鹿〕「さ」は接頭語、牡鹿。

ざをもつ　「ざ」(座)を見よ。

觀世音菩薩は三十三身の者等を濟度する爲に三十三身に化現されたこと法華經・普門品に見えてゐる。三十三身とは、(1)佛身、(2)辟支佛身、(3)聲聞身、(4)梵王身、(5)帝釋身、(6)自在天身、(7)大自在天身、(8)天大將軍身、(9)毘沙門身、(10)小王身、(11)長者身、(12)居士身、(13)宰官身、(14)婆羅門身、(15)比丘身(16)比丘尼身、(17)優婆塞身、(18)優婆夷身、(19)長者婦身、(20)居士婦女身、(21)宰官婦女身、(22)婆羅門婦女身、(23)童男身、(24)童女身、(25)天龍身、(26)夜叉身、(27)乾闥婆身、(28)阿修羅身、(29)迦樓羅身、(30)緊那羅身、(31)摩睺羅伽身、(32)人非人身、(33)執金剛神身。

三十三天（さんじふさんてん）　(天神記)(持統天皇)

忉利天のこと。金剛經の註に、「須彌山在二四天下之中一、爲二山極大者一、故名二山王一、日月遶レ山而行以爲二晝夜一、由レ此而分二四面一爲二四天下一、其山頂有二四峰一、每レ峰八天、共三十二天、帝釋居レ中以爲二三十三天一」。

三十七尊（さんじふしちそん）　四大薩埵・三十七尊・過去七佛(縹帽)

金剛界の九會曼荼羅の羯磨會上の佛菩薩の中の主要なものを提擧して三十七尊と云ふ。即ち五佛、四波羅密菩薩、十六大菩薩、八供菩薩、四攝菩薩である。

三十二相（さいじふにさう）　外道の元祖提婆達多は如來の三十二相を學び(用明天皇)　思ふ殿御に添はれぬからは三十二相もいらねども(天智天皇)

佛や輪轉聖王はその身に三十二相を有し給ふと云ふ。大藏法數に、「謂如來應化之身具二此三十二相一、以表二法身衆德圓極人天中尊衆聖之王一也」。三十二相は即ち、(1)足安平相、(2)千輻輪相、(3)手指纖長相、(4)手足柔輭相、(5)手足縵網相、(6)足跟滿足相、(7)足趺高好相、(8)腨如鹿王相、(9)手過膝相、(10)馬陰藏相、(11)身縱廣相、(12)毛孔生青色相、(13)身毛上靡相、(14)身金色相、(15)身光面各一丈相、(16)皮膚細滑相、(17)七處平滿相、(18)兩腋滿相、(19)身如師子相、(20)身端直相、(21)肩圓滿相、(22)四十齒相、(23)齒白齊密相、(24)四牙白淨相、(25)頰車如師子相、(26)咽中津液得上味相、(27)廣長舌相、(28)梵音深遠相、(29)眼色如金精相、(30)眼睫如牛王相、(31)眉間白毫相、(32)頂肉髻成相。

三十番神（さんじふばんしん）　恐しや三十番神ましまして(女護島)

法華經守護の神で、每月三十日を每日一神づつ來現して守護し給ふと云ふ。この說もと天台に起つて日蓮宗に傳はる。三十番神は書によつて異同あれど、その一說を擧げれば、朔日、熱田大明神。二日、諏訪大明神(信濃諏訪郡)。三日、廣田大明神(攝津武庫郡)。四日、氣比大明神(越前敦賀郡)。五日、氣多大明神(能登羽咋郡)。六日、鹿島大明神(常陸國鹿島郡)。七日、北野天神。八日、江文大明神(近江)。九日、貴船大明神。十日、伊勢大明神。十一日、八幡大明神。十二日、加茂大明神。十三日、松尾大明神。十四日、大原大明神。十五日、春日大明神。十六日、平野大明神。十七日、大比叡權現。十八日、小比叡權現。十九日、聖眞子權現(近江滋賀郡)。二十日、客人權現(近江滋賀郡)。二十一日、八王子權現(比叡山)。二十二日、稻荷大明神。二十三日、住吉大明神。二十四日、祇園大明神。二十五日、赤山大明神(比叡山西麓)。二十六日、建部大明神(近江滋賀郡)。二十七日、三上大明神。二十八日、兵主大明神(近江野洲郡)。二十九日、苗鹿大明神(近江)。三十日、吉備津大明神。「恐しや三十番神ましまして云々」をも見よ。

さんじふらう　三十郎の初日見て芝居では大酒、戻りは駕籠でむしたてろ(氷朔日)

嵐三十郎をいふ。寶永七年には大阪の岩井座に勤めて、やつし方上白上の俳優である。「あらし」をも見よ。

さんじふろくきん　九曜七星二十八宿五行の靈三十六禽を驚し奉り(弘徽殿)

〔三十六禽〕(1)鼠、(2)狄、(3)牛、(4)蟹、(5)鼈、(6)狸、(7)豹、(8)虎、(9)狐、(10)兎、(11)貉、(12)龍、(13)鮫、(14)魚、(15)蟬、(16)蛆、(17)蛇、(18)鹿、(19)馬、(20)獐、(21)羊、(22)鴈、(23)鷹、(24)狖、(25)猿、(26)猴、(27)烏、(28)鷄、(29)雉、(30)狗、(31)狼、(32)豺、(33)猯、(34)獺、(35)猪、(36)燕。三十六禽の書は佛像圖彙・卷三に見えてゐる。

さんしやう　お厄は我等拾ひ除け、四魔三障の祟(たたり)はなし(雪女)

〔三障〕善心を起す障(さはり)となり正道の妨(さまたげ)となるもの三つある、即ち煩惱障(貪慾瞋恚愚痴等の障)、業障(五逆十惡等の障)、報障(地獄餓鬼畜生等の苦報障)である。諸乘法數に、「三障。煩惱、業障、報障」。

三常（さんじやう）　「周書(しうしよ)に曰く云云」を見よ。

さんじやうこう　おんあぶら屋仲間の山上講、俗體ながら數度のお山(女殺)

〔山上講〕大和國吉野郡金峰山藏王權現に參詣する講中である。往時關西地方では山上樣に參詣すること流行し、同志相集つて山上講を作り、參詣する道すがら法螺貝を吹鳴して咒文を唱へた。ここの文の「おんあぶら屋」は、御油屋に唵阿毘羅(おんあびら)をきかせたのである。「おんあびらうんけん」を見よ。

***さんしやうだいふ**　丹後の國由良の湊山桝太夫が買取つて、渡す道具は何何ぞ(井筒)

〔山桝太夫〕山椒太夫また三庄太夫とも書く。村上天皇の天暦年間奥州の太守判官將氏罪を誣ひられて筑紫に配流された。將氏に二子あつて姉を安壽と云ひ弟を對王丸と云ふ、母子三人父を尋ねて越後の直江津まで到り、賊山岡太夫に捕へられて母は佐渡の二郎に、安壽と對王丸は宮崎の三郎に賣られた。三郎これを由良湊の山桝太夫に賣つた。對王丸は山桝太夫の虐待に堪へずして竊に逃出て、丹後和江村國分寺の住僧に救はれ、清水寺に送られた。かくて後對王丸は上卿梅津院の養子となり、天皇に請うて丹後を得、母を尋ねて佐渡に會し、和江村國分寺を訪うて住僧の恩を謝し、山桝太夫父子を酷刑に處したと云ふ。後世この事を淨瑠璃小說等に仕組んだものが多く、山本角太夫の正本「都志王丸」もその一である。ここの所の文に「林淸」と註記してあるは、日暮(ひぐらし)林淸の創めた歌念佛の節で語ることを示したのである。林淸は日暮八太夫の門人で、說經節から歌念佛を創作した斯道の名人であつた。「是は扨置き對王殿や安壽姫、丹後の國由良の湊山桝太夫が買取つて、渡す道具は何何ぞ、桶と柄杓(ひしやく)と鎌扨、兄弟これを請取つて山と濱とへ泣き別れ、……」は歌念佛の文である、これによつて歌念佛の文が如何なるものであつたかがほぼ知れるであらう。「うたねんぶつ」をも見よ。

さんじゆう

「さんしよう」(三從)である。「こしやう」の條を見よ。

さんじよう　三乘五乘七方便四種八部二十五有、普く利益の甘露を甞め(釋迦)

〔三乘〕乘は運載の義。人を載せて證果に運ぶ乘具をいふ意であつて、佛の敎道を云ふ。三乘とは聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘を云ふ。よつて以て各迷界を乘出る三種の機類(衆生)をさす。

續け（孕常盤）

〔三軍〕大軍を云ふ。支那の古制に天子は六軍、諸侯は三軍を統べた。そして一軍は一萬二千五百の兵士であつた。よつて以て大軍の意にいふ。論語・子罕篇に、「三軍可レ奪レ師也」。

さんげ　散花音樂伽陀の聲、法の功徳ぞ有難き（嵯峨天皇）

〔散華〕佛供養に花を散すこと。無量壽經・下に、「懸レ繒燃レ燈、散レ花燒レ香」。

ざんげ　「ざんぎ」の條を見よ。

***さんこ**　このこの三鈷の形、文殊菩薩の請取なり（蟬丸）

〔三鈷〕金剛杵の一種であつて、兩端三股より成り、密敎の修法に用ゐる佛具。「ごこ」（五鈷）の條をも見よ。

三五（さんご）　奥州が名を忍ぶ客、三五に義理を播磨潟、鹿様よりとほのめかす（酒呑童子）　四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顔、さす汐影のわけもよき（壽門松）

三と五との乘積十五、以て勤銀十五匁であつた鹿戀（かこひ）（その條を見よ）をいふ。酒呑童子のこの文、「奥州」といふたので、陸奥の郡數三十五をきかせ（三五といひ、（延喜式卷二十二、民部省上に陸奥國の下に三十五の郡名が載せてある）、鹿戀（しかま）に義理を張るを「播磨潟」にかけ、播磨潟飾磨と鹿戀との緣によつて鹿様といふた。壽門松のこの文は、鹿戀以上といふに十五夜以上の好き月の顔といふた。「月」は「ぐわち」（その條を見よ）で月女郎をいふ。

***さんこう**　三公九卿八座七辨（關田川）

〔三公〕太政大臣と左右大臣とを云ひ、もと支那で太師・太傅・太保を三公と稱したるを適用したのである。職原抄に、「三公者象三天之三台星一」。

さんこう　浮中沈の三候（冷泉節）

〔三候〕「ふちゆうちん」の條を見よ。

さんこく　病あれは自ら穢（けがれ）なすすぐ川水に、山谷が流れを汲み、起臥し立ち居に孝の道（持統天皇）　東坡・山谷が心淵に逍遙して定家家隆の作意な釣り（今川了俊）

〔山谷〕黄庭堅、字は魯直、號を山谷といひ、宋時代の人、孝心深く、自ら母の便器を洗ふ、又詩文に妙を得、江西の詩派は庭堅その祖である、世に山谷の詩を以て蘇東坡に配して蘇黄といふ。二十四孝（繪入光悦本）に「山谷は宋の代の詩人なり、今に至て詩人の祖師といはるる人なり、あまたつかひ人もおほく、又妻もありといへども、自ら母の大小便の器物を取扱ひて、穢れたる時は手づから是を洗ひて母に與へ、朝夕能くつかへて怠ることなし、されば一を以て萬を知るなれば、其外の孝行推し量られたるとて、此人の孝義天下にあらはれたるとなり、この山谷のことは、よの人にかはりて名の高き人なり」。

***さんごくいち**　三國一の富士の嶽（虎が磨）　麓には三國一の釋迦如來（孕常盤）　この軍用意に取交ぜて、御祝言聞の聲にさし合せ三國一も歌はれまい（千疋犬）

〔三國一〕日本、支那、天竺にも比すべきものなきをいふ。當時は「三國一の何になりすまいた、しやんしやんしやん」といふやうな唄を祝宴の席で多く謠つたものである。西鶴の萬文反古卷四に、「祝言させて、三國一を歌うて仕舞ひ申候」。

さんごしちく　南部北嶺三五七九の宗門等（大原問答）

〔三五七九〕三乘、五乘、七方便、九法界。

さんごのはるあき　明けて三五の春秋な人に戀ひられ偲ばれて（孕常盤）

〔三五の春秋〕十五歳をいふ。「春秋」は「春秋に富む」などいふ春秋と同じく歳の義。

さんこのまつ　（以呂波物語）

〔三鈷松〕高野山御影堂の前にある。俗傳に、唐の元和元年空海明州の濱で、我日本に歸らば大伽藍を建立せうと思ふ、この杵眞言相應の靈地に留れよと誓つて、三鈷を虚空に擲げたれば紫雲たなびき東天に飛入つた。空海歸朝の後高野山に登れば、飛行の三鈷は松梢に懸つて、光明を放つてゐたと云ふ、よつてその松を三鈷の松と云ふ。現今の三鈷の松は植繼いだものである。

さんごふ　一人の聖來つて、只今これに不思議あり、三ごふを靜め妙典を誦し（寐覺）

〔三業〕身・口・意の三業で、即ち身體・言語・心意に於て爲す業をいふ。

さんさい　懷中の祕書取出し、天地に俯仰し三才にくり合せ暫く考へ（關八州）

〔三才〕天・地・人をいふ。才は裁で萬物を裁制するはたらきある義。易經繫辭下傳に、「有二天道一焉、有二人道一焉、有二地道一焉、兼二三才一而兩レ之故六、六者非レ他也、三才之道也」。

さんさがり　よその哀れを身の上に、思ひしらべの絲よりも、心は二あがり三下り、撥もしどろに彈きなせり（女夫池）

〔三下〕三味線の彈き方、本調子よりも三の絲の調子の低いもの。

さんさんく　三三九の勝負にて楊弓を射らるべしと（天神記）

〔三三九〕巢林子は三度に九本の矢を射る義となしてゐる。庭訓往來・正月五日の文に、「三三九手夾」とありて永井如瓶の註に、「的場に出る時、矢二手持出て、一矢をば翫盤に立、殘る三本の矢を手にさしはさみ三度射るなり、三度に九本の矢を射るゆゑに三三九なり」と云ひ、伊勢貞丈は、「三三九の手夾との字を入るは惡し、三三九と手夾とは別なり、三三九とも三尺とも東鑑に見えたり、三尺手夾八的を三流の作物と東鑑に記せり、三三九手夾八的の射儀今世詳ならず」と云つてゐる。

***三三九度の御酒**（さんさんくどのみき）（出世景淸）

貞丈雜記・酒盃部に、「酒をささともくこんともいふは、ささは三三也くこんは九獻なり、酒は三三九度呑むを祝ひとする故なり、九は陽數にてめでたき數ゆゑ、唐土にも九獻といふ事あり、云々」。

さんじ　兄弟國を爭ふは三事を背く不孝と思へば（吉野忠信）

〔三事〕國語に、「民生二於三一、事レ之如レ一、父生レ之、師教レ之、君食（やしなふ）レ之」と見えてゐる。「三事を背く」は君・父・師に背くので、即人倫の道に背くのである。

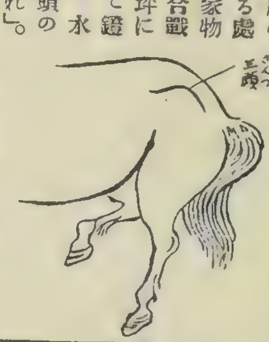
さんじでん　提婆は一先づ本國に立ち歸れと、三時殿に入り給ふ（釋迦）

〔三時殿〕淨飯王が愛子悉達太子（釋尊）の爲に造られた宮殿。佛本行集經・十二桷術爭婚品に、「爾時太子漸向二長成一、至二年十九一時、淨飯王爲二於太子一造二三時殿一、一者暖殿、以擬二隆冬一、第二涼殿、擬二夏暑一、其三殿春秋二時寢息」。

山市の晴嵐（さんしのせいらん）　「瀟湘の夜の雨」を見よ。

***三十三身**（さんじふさんしん）　三十三身かたどりて三十三度の足早く、讀誦の聲も口早に（兼好）

直垂、風のまにまに面影は三づの上に飄颻して乘鎭め(源義經) 太刀を拔いて水底を切拂ひ切拂ひさんづにどうど乘下り(最明寺殿) 三づにひらりと乘移り(鎌田)



〔三頭〕馬の尾の上で腰に當る處を云ふ。平家物語・卷四、橋合戰の條に、鞍坪によく乘定めて鐙を强く踏め、水しとまば三頭の上に乘かかれ」。

***さんづのかは** 今六道の次傳馬、三途の河を打跨ぎ(丹波與作)

〔三途河〕三瀨河とも云ふ。蓋し三惡道を河に喩へ、以て冥土にある河としたのである。佛說地藏菩薩發心因緣十王經・卷二に、「葬頭河曲ニ於初江邊ニ、官廳相連承レ所レ渡、前大河卽是葬頭。見レ渡ニ亡人ニ、名ニ奈河津ニ、所レ渡有レ三、一・山水瀨、二・江深淵、三・有橋渡、官前有ニ大樹ニ、名ニ衣領樹ニ、影住二鬼、一名ニ奪衣婆ニ、二名ニ懸衣翁ニ」。十王讃歎鈔に、「此河に三の渡有レ之、故に三途河と云也、上にある渡をば淺水瀨と名付く、此は淺くして水膝を不レ過、罪淺き者此を渡る也、中にある渡をば橋渡と名付く、此は金銀七寶の橋也、善人のみ此を渡る也、下にある渡をば强深瀨と名付く、此をば惡人のみ渡る也、此渡り流れ早き事矢を射るが如く浪の高き事大山の如し」。

三條小鍛冶(さんでうこかぢ) いかなる猛き武士の、三條小鍛冶が劔にもなう貧苦の敵は防がれず(女楠)

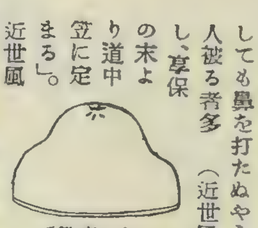
三條小鍛冶宗近は一條天皇の御宇京都三條に住んでゐた刀鍛冶の名匠である。三條小鍛冶のことを作つたものに謡曲・小鍛冶がある。

***さんど** 來月二日出の三度に金子三百兩差上せ(さしのぼせ)申すべく候(冥途飛脚) そちが商賣は三度でないか、身が方へ上つた江戸爲替の五十兩は何として屆けぬ(冥途飛脚)

〔三度〕三度飛脚の略。「さんどがさ」の條を見よ。

さんどがさ 商(あきなひこうしや)巧者駄荷積り、江戸へも上下三度笠(冥途飛脚)

〔三度笠〕深菅笠である。三度飛脚が被つた笠なるによつてこの名稱がある。我衣に、「貞享の頃より三度笠とて、飛脚馬上にて眠り落馬しても鼻を打たぬやうに深くした菅笠、旅人被る者多し、享保の末より道中笠に定まる」。


〔三度笠〕


〔三度笠〕

(近世風俗志所載)

近世風俗志(原名・守貞漫稿)笠の部に、「三度笠。大深とも云、菅笠の一種なり、三度飛脚用レ之故に名とす、深くすることは、誤つて落馬することある時面部を疵せざる備歟。又は四時風を防ぐを要す歟、此笠貞享中始(魂膽色遊懷男所載)めて製レ之、文化以前は旅商人專ら用レ之、文化以來は雷盆形の菅笠を用ゆ、飛脚・宰領は今も三度笠を用ゆ」。冥途飛脚のここの文は三度笠に三度飛脚をきかせたのである。三度飛脚は元和元年より、大阪城の定番の諸侍等が東海道各驛の驛長等と相談して、其家隷を飛脚として毎月三度日數八日を限つて東海道を往復せしめたに起つた。後には大阪飛脚は其出發を毎月二日・十二日・二十二日と定めた。


〔飛脚〕

さんとく 神武智勇の名將三德兼備の威におされ(嫗山姥)

〔三德〕智、仁、勇。和漢名數に「三德＝智、仁、勇」。

***さんどく** この結緣にひかれ繼母の三毒三菩提となり(賀古敎信) 未だ三毒四慢の大虛に出でず(一心五戒魂)

〔三毒〕貪欲・瞋恚・愚癡の三つは吾等の不善行爲の根本となり、善心を害毒するを以て三毒と云ふ。智度論・三十一に「有下利ニ益我ニ者上、生ニ貪欲ニ、違ニ逆我ニ者、而生ニ瞋恚ニ、此結使不ニ從レ智生ニ、從ニ狂惑ニ生、故是名爲レ癡、三毒爲ニ一切煩惱根本ニ」。

さんとらにいによう てれめんていな・ばじりこん・さんとらにいによう・萬能膏と、膏藥を名をいへば(大織冠)

羅甸語 Sanguis Draconis の訛、譯して龍血といひ、昔血止め藥として用ひ、その粉末は鮮紅なるによつて、かく神祕的な名を付けたものである。棕櫚科多年生植物の省藤(とう)の果實の樹脂から精製したもので、棒狀又は球狀をなし、椰子の葉に包んで賣出し、現今は顏料や齒磨製造の色付けなどに用ひられて、麒麟竭(きりんけつ)ともいふ。

***ざんない** 亭主は御前へ丸裸でざんないなりやといひければ(百合若) 木の葉を着たる荒法師雲に乘じ口より虹を吹く繪像、おおざんない佛樣やと、一同に南無阿彌陀佛と唱へける(蛙合戰)

「無慚」の上方詞。見ろに忍びないこと。類柑子(刊本)昌貢の句に、「氣ちがひのざんないところ錠びて」。小栗判官車街道・第四段に、「蚊のくふにざんない裸身で、何の用で誰を呼びにお出でなされた」。和訓栞・「むざん」の條に「ざんないといふ俗語も慚なきなり」。

さんねつ 娑羯羅龍王の威勢に壓(お)され五衰三熱歇む事なし(松風)

〔三熱〕龍蛇の三患を云ふ。卽ち一には熱沙熱風身に著きて苦惱をなし、二には惡風吹いて龍蛇の飾衣居所などを失うて苦惱をなし、三には龍蛇娛樂の時に金翅鳥來つて龍蛇の子を奪ひ食ふ。これによつて龍蛇怖れ且苦惱をなす。この三熱のこと法華文句に委しく載せてある。

さんのづ 裾三のづまでひつからげ(三國志) 鬢かきさげ裾三のづまでひつからげ(吉岡染) 曾根崎へたつた一飛一走(ひととびひとはしり)と、尻三のづまでひつからげ(女殺)

〔三の圖〕三の胴卽ち肋骨三枚目をいふ。圖は胴を云ひ、胴體を圖體といふ圖と同じ。(蓋し圖は胴の訛であらう)。「七のづ」(その條を見よ)といふもある、これは肋骨七枚目のことである。「一(いち)の胴(どう)」をも併せ見よ。巢林子のこの文は、衣服の裾を肋骨三枚目の所までも捲(まく)り上げた意」。

さんばい 死骸のさんばいむづかしと、兩足の骨腕の骨ほつきほつきと押折り(傘齡) 女の時とは格別にみさんばいよし心よし(日本武尊)

「さばき」(捌)の音便「さばい」に「ん」の增加した語である。處分。處置。扱ひ。ゐがらの平太(淨瑠璃)第三に、「只なりとも乘せたけれど、女郎二人乘せ申すこの男一人では、中中さんばいなり申すまじ」。

さんしよごんげん 「熊野三つの御山」を見よ。

さんしよのかは 辛い身過ぎの商は山椒の皮、扨は鞍馬の火打石(嵯峨天皇)
「くらまのさんしよのかは」を見よ。

***さんじん** 此度我等お暇下され世の散人とはなつたれども(鎗權三)
〔散人〕閑散な人。莊子・人間世篇に、「而幾死之散人」とある散人は、世用たらぬ人の義である。

さんすゐ あたりをきよろきよろ見廻して、夏冬なしに涼しさうな山水な住家と、ささやき合ふをほの聞くにも母は悲しさ恥かしさ(扇八景) 引出物は少うても百づつは腰につけたものと思うたに、ええさんすゐな(五人兄弟) 身こそ墨繪の山水男、紙表具の體なりとも(反魂香)
〔山水〕極彩色の畫に比べて墨繪の山水は寂しい意よりして、物淋しくまた身すぼらしいことにいふ。色道大鑑に、「山水。物のさびたる事にいふ、少分なる事にも云ふ、山水を畫きたるはさびしき故斯云る歟」。

三寸繩 「繩三寸に縛上ぐ」を見よ。

***さんぜ** 今宵の月に蹴殺され、三世の諸佛の御罰を受け(重井筒) 助くると云ふ義理は三世に渡る衣の徳(大經師) この前さる人に三世相見てもらひしに、先生で佛前の茶湯の茶碗打割りし報あり(生玉) 三世明鑑理を照し、鏡にかけて說き給へば(最明寺殿)
〔三世〕過去世、現在世、未來世。
「三世相」とは、卜筮の法や、佛敎の因緣說や、五行生剋の理を交へた說で、人の生年月日や人相などから考へて、其人の過去・現在・未來の三世にわたつて因果・吉凶・善惡などを說くことを云ふ。三世相といふ本もある。
「三世明鑑」とは、過去現在未來にわたつて鏡にかけた如く明なること。

さんせう 飼ひに飼うたる月毛の駒、前脚とつてかん強く雪嚙碎く白泡に、さんせうよしや尾は青柳の、しつたりしたりしたしたした、かつしかつしと步まする(鎗權三)
〔三焦〕「三焦善し」とは、馬の口角の色善きをいふ。與擦漢文・雜部「さんせう」を見よ。

***さんぜのおん** 先帝の妹宮栴檀皇女にめぐりあひ三世の恩を報ぜん爲(國性爺)
〔三世の恩〕君恩をいふ。親子は一世の中、夫婦は二世の契、君臣は三世の緣と云ふ。

さんぜん 母常盤亡魂の恨をなだむるものならば、地獄變じて三ぜんの樂となり父が成佛疑なし(蘂醉)
〔三禪〕色界十八天の中なる四禪天の中、第三禪天(少光天・無量光天・極光淨天)を云ふ。これを定生喜樂地と稱し、深妙の禪定より身心の快樂を生じる。涅槃經に、「有二佛世界一、名曰二不動一、若有二衆生一、聞二其華香一、身心安樂、譬如三比丘入二第三禪一」。

***さんぜんせかい** 提婆達多は八萬法藏を讀み覺え、三千世界にあらゆる學問盡すと雖も(釋迦)
〔三千世界〕一切の世界。宇宙間には無數の世界があつて、各須彌山を中央にして四洲四大海日月等を備ふ。これ等の一劃を千集めたものを小千世界と云ひ、小千世界を千集めたものを中千世界と云ひ、更に中千世界を千集めたものを一大三千大千世界と云ひ、略して三千世界と云ふ。

***三族** 三族罪科にかかるべし(國性爺後日)
父母、兄弟、子孫。一說に父族・母族・妻族をいひ、周禮の註には「父・子・孫」と見えてゐる。

さんぞんのらいがう 伊左衞門樣・源之助に妙順樣を並べて、三尊の來迎を拜みたうござんす(夕霧)
〔三尊の來迎〕三尊とは阿彌陀如來と脇士の觀音菩薩・勢至菩薩をいふ。念佛の功を積んだ者は、臨終に三尊影向されて極樂淨土に導き給ふと云ふ。ここの文は三尊を伊左衞門・源之助・妙順にあてたのである。

さんた 馬はさんたする如く、諸任は仰向けにころびを打つて跳返し(祢狩) 所の奴か旅の奴か、慮外致した御免あれと土につくばひさんたしろ(日本武尊) 尾を振つて手をくれられろ、今でも往けばよう來たとさんたして(加增曾我)
犬の後足を屈し前足を擧げることを云ふ。足薪翁記・卷三に、「三太は丁稚又は小僧など云ふ下童の通稱なれば、かの丁稚の狂ひまはるまなびをせよと云ふ事なるべし」とあれども、「さんた」は「さあ立ち」の訛略ではあるまいか。俚言集覽に、「さんた。さんたとは犬の立て前足を擧る藝をする事也」。

さんだいしふ ならの帝の萬葉集を始め三代集、遊女の歌まま見えたり(三世相)
〔三代集〕古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集。

三代續く奴風 「あらし」見よ。

さんたいやう 讃對揚の次第書、懺法回向の祕密の書籍(賀古敎信)
〔讃對揚〕法會に散華の式を行ふ時、散華の偈を終へてから、佛法世法の常住安穩なるを希ふ偈文を擧げて佛德を讃嘆すること。其儀式の次第を書いたものを讃對揚の次第書といふ。

さんだはら 漏さぬ底の心までとんとあけたる棧俵、これ公家樣の御膳米踏むとは罰があたろか(松風)
〔棧俵〕米俵の兩端にある藁の蓋。

***さんたふ** 三塔に隱れなき長刀の達者と(孕常盤)
〔三塔〕比叡山の東塔(根本中堂のある處)、西塔(釋迦堂・法華堂などある處で寶幢院と云ふ)、橫川(楞嚴院・惠心院などのある處)。山門祕訣に、「一山有二三塔一、所謂東塔號二本院一、西塔號二寶幢院一、橫川號二楞嚴院一」。

さんだん 「おさんだん」を見よ。

***さんぢゆう** (淨瑠璃文中の註記)
〔三重〕この名稱もと聲明から出た語で、三絃の調子の高い一種の彈き方である。人の聲音は三絃の三重の調子が出されないので、三重に合せて唄はれない爲に語らないこともあれば、從つてその文句も略されることがある。(四座講式の聲明の書などには、初重、甲二重、二重、三重などと註記してある)。(三重の他に、地、フシ、ヲクリ、詞、舞なども記入してあつて、旋律の大體を知られるが、細かな節章は現今では殆んど其意味を失はれてゐる)。

***さんづ** 父繼信が幽靈白絲縅に白

いひ、五枚なるを五枚兜といふ。ここの文は銀子三枚を三枚兜にいひかけたのである。

さんまいせい 三まいせい七つぢやと二文張りをつた、まつかせとつく程に手の内に殘つたはたしか七文、南無三寶しをつた、一文はれて六文にして、當てて取らうと思うて、一文しやんとくろめて突いて見たれば、悲しやの八文であつたもの、一文はれて七つにして彼奴が壺へあてがうた(丹波與作)

「三枚爲い」であつて、ここの文はかるたの三枚博奕をしたのではなけれど、博奕をするに口走つた掛聲である。本朝藤陰比事（寶永六年刊)巻三に「かるたの三枚と申すなぐさみより、賽と申す博奕にすすめられ」と見えてゐる。丹波與作のここの文は、けんねじ博奕をなしたもので、與作は六文握り、八藏は二文握つて拳を突出し、與作は八藏が空拳を突出したものと思うて六文といひ、八藏は七文というたので、與作思ひなほして八藏は一文握れるものと考へ、己が握れる六文の中一文をごまかし五文にして、互に手を開けば兩人の握れる和七文となつて、八藏の勝ちとなつたが、若し一文與作がくろめなかつたら、八文で勝負なし、與作の負けにはならなかつたと、與作が述懷するをいうたのである。

さんまやかい 三摩耶戒の臑當(大織冠)

〔三摩耶戒〕眞言宗にて行ふ一種の戒法である。「三摩耶戒の臑當」は、佛力の縋つてゐる臑當の意。

さんもんめ 思へばくやし斯うせいでも三匁では、あの頰をうつけた事と思ひやせん(二枚繪)

〔三匁〕「しほ」(その條を見よ)といふ見世女郎を買ふ料金である。好色一代女巻二、分里數女の條に、「まづ三匁取はさのみ賤しからず、客あがればゆたかに内に入、其跡に木綿着物着たる禿が床取る、中紅の布團……、同じ見世の女郎ながら、これにたよる男もむしやうなる野人にはあらず、遣ひ過して揚屋の門を闇に通る男、又は内證のよき人の手代か、武士は中ごしやうの掛るものなり」。巣林子のこの文意は、三匁出しさへすれば立派に見世女郎を買うて、茶屋遊びができるものを、お島が戀し張つて、憎き明石の貞の面當に向をいばかりに馬鹿げた事をしたと、お島から思はれるであらう、思へば殘念なの意である。「頰をうつけ」は頰打(即ち面當)に「うつけ」(痴)をいひかけたのである。

***さんり** 足にさんりのさしもぐさ(曾我扇八景)

身は三里の灸が痛む(持統天皇歌軍法)

おつとまかせと足輕く、走る三里の灸よりも小判の利ぞこたへける(冥途飛脚)

〔三里〕灸穴の名。膝頭の下の外方の凹き處を云ふ。三里の灸は氣分を輕うする效驗があると云ふ。十四經絡發揮・巻中に、「三里在二膝眼下三寸、䯒骨外大筋內宛宛中一」。明堂灸經に、「男子三十已上、不レ可レ不レ灸二三里一、三里所二以下一レ氣也」。徒然草・第百四十八段に、「四十以後の人身に灸を加へて三里をやかざれば上氣の事あり、必ず灸すべし」。



三里

***さんろ** 山路が吹きしは草刈笛(源義經)

柏木の鞠・山路が笛、古今その品かはれども皆これ戀路の寄框(歌念佛)

なんと島樣、今日のさんろの道行は本で語ると直に聞くとは又格別(二枚繪)

〔山路〕用明天皇職人鑑にある人物である。花人親王が玉世姫と戀仲となり、山彦王子の亂を避けて玉世姫の父の豐後眞野の長者の内に養はれ、山路と替名して草刈となり、草刈笛を吹いて一時世を忍ばれた。「山路の道行」は、用明天皇職人鑑にある「山路玉世の姫道行」を云つたのである。假作人名部「花人親王」をも見よ。序云、巣林子が脚色せる山路のことは、烏帽子折の草子に、用明天皇が御身を窶し草刈童となつて、御名を山路といはれ、豐後に下り眞野の長者の内に牛飼となられて、長者の娘と結婚されたことが書いてあるに據つたのであらう。そして山路の名は、紀の齋名が暮春遊覽の賦の序に、「山路日暮滿レ耳者、樵歌牧笛之聲」、などあるに據つた名であらう。

さんろん 法相三論華嚴天台眞言五宗の大聖は左の方に着座ある(大原問答)

〔三論〕中觀論・百論・十二門論を三論といひ、佛一代の諸經を通論せるものである、これ等三部の論を所憑として嘉祥大師の開宗にかかるものを三論宗と云ふ。

***さんゐ** 御外戚のしたしみ散位紀の有常(井筒)

〔散位〕散は閒散の義。文武官の位階だけもつてゐて、別に職務のないもの。

さんゑのあかつき じしけじやうの燈火を挑げて三會の曉の出世を契り給ひける(以呂波)

〔三會の曉〕彌勒菩薩は釋尊の入滅後五十六億七千萬年にして出世されると云ふ菩薩である。彌勒下生經に、彌勒菩薩の說法の會座に三あつて、初會に九十六億人、二會に九十四億人、三會に九十二億人を度される由を記してある。彌勒菩薩出世して三會の說法する時を三會の曉と云うたのである。彌勒下生成佛經に、「初會爲二說法一、廣度二諸聲聞一、九十六億人、令レ出二煩惱障一、第二會說法、廣度二諸聲聞一、九十四億人、令レ渡二無明海一、第三會說法、廣度二諸聲聞一、九十二億人、令二心善調伏一云云」。

し

***じ** 折しも村雨立出でて、これは楊弓雙六の勝負に賭くるおあしならんとありければ、司の前聞き給ひ、いやいやじにて候はず(松風)

〔字〕錢。文と字とを同一に見て、錢を文といへば、よつてまた字を錢のことに云うたのである。「いちじ」をも見よ。(序に云、古昔殿上で殿上人が小弓雙六などの勝負を爭ふ時、その賭物に錢を出すのが故實であつたことが、增鏡・おどろの下・水無瀨釣殿の御遊の條下に見えてゐる)。

しあく 國家の政道四惡を屛け(女夫池)

〔四惡〕虐、暴、賊、有司。論語・堯曰篇に、「子張曰、何謂二四惡一、子曰、不レ教而殺、謂二之虐一、不レ戒視レ成、謂二之暴一、慢レ令致レ期、謂二之賊一、猶二之與一レ人也、出納之吝、謂二之有司一」。

***じあひ** 仕直に遣つたらば多分晩のじあひにならう、歸らぬことは悔まぬもの(氷朔日)

〔時合〕時分。刻限。ころあひ。この語現今も

さんばいくほん　三ばい九品蓮の絲の其曼荼羅はさもあらめ(賀古敎信)
〔三輩九品〕極樂淨土の階級である。無量壽經に極樂淨土の果相を說いて上・中・下に分ち、これを三輩といひ、觀無量壽經にその各輩を上・中・下に分ち、總て九品としてある。「くほんのじやうせつ」を見よ。曇鸞の無量壽經略論に、「無量壽經中唯有二三輩上中下一、無量壽觀經中、一品分爲三上中下一、三三而九、合爲二九品一」。なほ三輩のことは無量壽經・卷下に就いて見よ。

さんばさもどき　鐵漿壺にこけかかり頭からざつと浴び、眼も鼻も眞黑に三ばさもどきな女中を見て、やれ黑坊が出たわなう怖やと(天鼓)
「さんばそうもどき」(三番叟擬)の訛。三番叟まがひ。ここの文は、鐵漿壺にこけかかり顏面鐵漿を浴びて眞黑になり、恰も三番叟・鈴の段の面に似てゐると云ふのである。「三番叟」は次條を見よ。

さんばそう　常住酒で足ひよろつき、三ばそうも高砂も皆猩猩の亂かと思ひます(淀鯉)
〔三番叟〕能樂または演劇などで翁舞・千歲舞の後に舞ふ舞の名である。老人の姿にて三番目に舞ふ故に三番叟と云ふ。三番叟には揉の段と鈴の段とある。鈴の段には黑き面を附け扇と鈴とを持つて舞ふ。

*__さんばんだいこ__　三番太鼓つてんてん、天下は夜中八つ過(淀鯉)　與平は九軒を一足二足、三番太鼓打やみて廓淋しき折こそあれ(壽門松)
〔三番太鼓〕限の太鼓とも云ひ、これを相圖に遊廓の大門を鎖すを法とす。三番太鼓の刻限は時代により遲速あつて一樣でない。寬永末年頃までは夜十時頃の刻限であつたが、その後次第に弛んで寶永五六年頃には午前二時頃となつた。本領曾我・新町太夫づくしの條に「かぞへかぞへてひいふうみい、四つ夜中の太鼓限か、まだ大門のときはとざさで」とあるは、三番太鼓の刻限が四つ時(午後十時頃)なるを示し、淀鯉出世瀧德のここの文に、「天下は夜中八つ過」とあるは、三番太鼓の刻限が八つ時(午前二時頃)過なるを示すものである。攝陽落穗集に、「廓中の大門を〆切事。寬永の末頃までは亥の上刻を以て限の太鼓打ちたりしに、夜まし日ましに繁榮につき自然と深更に移り、何となく亥の下刻・子の上刻と延引せり」。

三百目　「嚊が出花の相場が何時三百目に極つた」を見よ。

さんぶきやう　これは淨土の三部經とて(扇八最)
〔三部經〕無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經を淨土の三部經と云ふ。

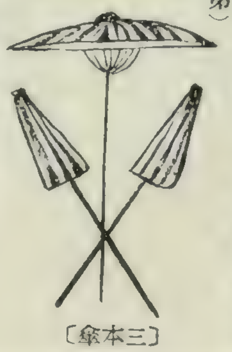
さんぶつじよう　狂言綺語のたはふれも讚佛乘の因緣とはよくこそこれを傳へたれ(百日曾我)
〔讚佛乘〕佛果に達する乘物たる佛法の妙理を稱揚讚嘆するをいひ、その因緣となるものを讚佛乘の因緣といふ。「きやうげんきぎよ」を見よ。

さんぺいじまん　まづ頭に置綿や三平二滿の大口紅(日本武尊)　お茶の間のきりかか五十餘の厚化粧、三平二滿の口紅(反魂香)
〔三平二滿〕額・鼻・頤の三つが平で兩頰が脹らめる義。おたふく。おかめ。橘守部撰・俗語考、おたふくの條に、「古き狂詩に二滿與三平一と作りたるも、兩頰高く鼻低く額と頤と平かなるを云也」。

*__さんぼう__　佛神三寶の守りめも切れ果てた(氷朔日)　いかなる佛罰・三寶の冥加には盡き果てた(鎗權三)　御息は三寶護念の雲とたなびき(嵯峨天皇)
〔三寶〕佛・法・僧をいふ。佛あつてここに法が說かれ、その法は僧によつて傳へられる。この三つのものは佛敎に於て最も貴い寶としてゐる。「三寶護念」は三寶を保護し憶念する義。無量壽經・上に、「無量諸佛、咸共護念」。

*__さんぼだい__　この結緣にひかれ繼母の三毒三菩提となり(賀古敎信)
〔三菩提〕三佛菩提の略。佛果の德相を分てば法佛菩提・報佛菩提・應佛菩提となる。故に佛果を三佛菩提と云ふ。

さんぼんからかさ　三本傘・雪折竹(五人兄弟)
〔三本傘〕紋の名。夜討曾我(寬永古活字版)に「三本からかさ」とありて、この紋繪が載つてゐる。


〔傘本三〕

さんま・あざがけ　そろを脇から二くすじの三馬あざがけ凌ぎつつ(大織冠)
謠曲・海人に、「空は一つに雲の波烟の波を凌ぎつつ」とあるを博奕のことにもぢつたのである。「三馬」は靑馬などの馬の札三枚を云ふ。「あざがけ」はあざ賭である、「あざ」を見よ。

*__さんまい__　洛外の三昧を夜な夜なめぐる道心(娥)　またしてもまたしても火屋三昧に來ることよ(賀古敎信)
〔三昧〕三昧場の略。墓所を云ふ。三昧堂を墓所に建てるやうになつてからは、俗に墓所をも三昧と云ふ。(「さんまい」の義に就いては次條をも見よ)。往生要集・卷中・六道物語・餓鬼道の條に、「また或は餓鬼あり、元より食物を求め得ざれば、常に三昧墓原に至りて燒き焦したる屍を噉ふ」。

*__ざんまい__　棺を枕に抱いて抱かれて念佛三昧(一心二河白道)　そこな馬子めも慮外者、武士の前にてすねざんまいと、さんざんに叱らる(丹波與作)
「さんまい」(三昧)の「さ」の濁つて「ざ」となつたので、梵語 Samadhi に當り、專思寂想の意である。飜譯名義集に、「夫稱二三昧一者何、專思寂想之謂也」。書言字考に智度論を引いて、「善心一處不レ動、是名二三昧一」。轉じて一途に心を傾注することをいふ。念佛三昧、刄物三昧、腕三昧などと云ふ。

さんまい　「さんまいがた」を見よ。

*__さんまいがた__　南無三枚肩見送りて口をあいてぞあきれたり(淀鯉)　民部の省敎房は古乘りし三枚も身は一枚の夏衣(賀古敎信)
〔三枚肩〕駕籠一丁に舁夫三人附くものを云ふ。四人附けは四枚肩と云ふ。ここの文は南無三寶を三枚肩にいひかけたのである。「三枚」は三枚肩の略。

*__さんまいかぶと__　僅銀子三枚兜、拾うて著せてもあきらけき、名大將の賞罰と(吉野都女楠)
〔三枚兜〕鉢付の板(兜の鉢に附ける第一の錏の板)から菱縫の板まで三枚なるを三枚兜と

がきとは、暁には鳴といふ鳥の羽をかくとや」。(「しぎのはがへし」はその條を見よ)。

***じぎ**　何しにお辭儀申しましよ、兩人ながらお茶はえたべませぬ(氷朔日)

〔辭儀〕辭退。ここの文は、辭退は致しませぬといひながら、兩人とも穢多なれば憚つて、お茶はえたべませぬと控目に出たのである。

色界の十八天　(天神記)

色界は三界の一である。この界に在るものは貪欲薄けれども、なほ五蘊(その條を見よ)の色心存するによつて名づく。大藏法數に、「色即色質、謂雖ㇾ離㆓欲界穢汚之色㆒、始從㆓初禪梵天㆒、終至㆓阿迦膩吒天㆒、凡有㆓十八天㆒、並無㆓女形㆒、亦無㆓欲染㆒、皆是化生、尚有㆓色質㆒、故名㆓色界㆒」。色界に十八天ある、即ち、梵衆天、梵輔天、大梵天(以上・初禪天)、少光天、無量光天、光音天(以上・二禪天)、少淨天、無量淨天、遍淨天(以上・三禪天)、無雲天、福生天、廣果天、無想天、無煩天、無熱天、善見天、善現天・色究竟天(以上・四禪天)。

***しきがね**　敷銀する手間取を尋ねられうも知れまい(薩摩歌)　在所に歴と親もあり、敷銀してあの下種めに使はれう筈はない(卯月紅葉)

〔敷銀〕緣づく時の持參金。

しききやう　これ天人の住家にて善現・善見・色究竟(天神記)

〔色究竟〕色界十八天の一(「色界の十八天」を見よ)で、諸塵機微の處に於て究竟せるによつてこの名がある。

***しきし**　色紙短册かけちらし怪しき男伏しており(伊豆日記)

〔色紙〕和歌などを記す料紙である、方形に裁ち模樣を彩りて箔などを施したもの。其大なるは竪六寸四分、横五寸六分、小なるは竪六寸、横五寸六分。

***しきしま**　敷島の和歌の浦曲に(松風)　あらまほしきは學力ぞや、我敷島もその通り目に見えぬ鬼神も三十一字に柔らぐる(虎が磨)

〔敷島〕もと礒城島で、崇神天皇・欽明天皇の都し給はれた大和國にある地名である。よつて敷島の大和と云ひ、大和を日本の意としその枕詞となつた。そしてやまと歌を敷島の道と云ひ、略して敷島とも云ふ。「目に見えぬ云云」とあるはその條を見よ。

しきじやう　四大は空にかへせども、しきじやう天地れいれいとして朽ちせぬものよ(天智天皇)

〔識情〕地・水・火・風・空の五大に識を加へて六大といふ。識は了別の義。心といひ意といひ識といひ、名の差別であつてその實は一心の異名である。情は佛書に意情などとある情と同じである。ここの文に「れいれい」とあるは麗麗で、明らかな意である。「識情天地麗麗として朽ちせぬ」とは、繫念無量劫なるをいふ。

しきしん　色心の當體皆是阿彌陀佛(賀古教信)

〔色心〕色は有形の物質、心は無形の精神。仁王經・上に「色心是衆生根本」。「色心の當體云云」とは、色心森羅萬象の當體皆これ阿彌陀佛の法體であるとの意。

***しきせ**　花車や娘仲居にまでしきせをして取らせうと、約束ばかりでまゐらぬ故(二枚繪)　酒はこぼすとしきせは厭はじ(雪女)

〔仕着爲〕德川幕府から諸役人に四季に應じて被服を支給したもの、それから轉じて、時候に應じて主人から奴婢などに衣服を作り給金を添へて與へるのを云ひ、また客から與へるものをも云うた。曾我物語に「四季をりをりの小袖を給ひ」と見え、鹽眞東征傳に「四季給㆓時服㆒」と見え、鶴峯戊申撰・海西漫錄に「しきせは四季著の約語なるべし」と云うてあれども、四季著また四季施でなくて仕爲ㇾ着であらう。心中刄は氷の朔日に「其代に酒飲ますと、挨拶もおしきせの、袂を戸棚に打覆ふ」とある「しきせ」は、仕着は定まれる給與物であるやうに、挨拶もきまり口上の意にいうたのである。

***しきだい**　奏者番白洲に下りて色代し(加增曾我)　重忠に色代し棟梁座をぞ下りける(出世景淸)　長者夫婦も色代し別れて旅宿に歸りける(振袖始)

〔色代〕式退の義。禮を正し人を先にし我を後にするを云ふ。挨拶。會釋。

***しきつて**　天性名馬の相ありと、伯樂しきつて申すにつき(十二段)

「しきりて」のつまつた語。頻に。

しぎのはがへし　大わたし・鳴のはがへし(井筒)

〔鴫羽返〕相撲四十八手の一。兩手を差し相手の首を胸につけ、差した手で締付けるを云ふ。

***しきみ**　妻のお龜にこやかなる綠の眉・芙蓉の目元わさわさと、さつても熱い事かな・それそこな樒の葉の水一つ下さんせと(卯月潤色)

〔樒〕木蘭科に屬する常綠灌木で、葉は榊に似狹長である、暮春の頃小蓮華に似た淡黃白色の花を開く、枝葉は佛前や墓前に供へる。眞俗佛事編・卷二に、「其(樒)形天竺無熱池の靑蓮華に似たり、故に之を取りて佛に供す」。

***しきもく**　式目を極め四天王の面面この所に會合し(弘徽殿)

〔式目〕式は法式、目は條目の義。武家時代に行はれた法規の稱。

***しきりぎん**　この十七日岩國の紙のしきりぎんに才覺はしたれども(天網島)

〔仕切銀〕「しきりがね」ともいふ。買主が賣主に仕送りさせた品物の價を支拂ふ總金額。取引決算の拂渡金。

しきれい　兩方鐙踏放し馬上に式禮、下下まで列を揃へて蹲へり(川中島)

〔式禮〕色代に同じ。その條を見よ。

***しく**　うけがたき御法を請け、四苦八苦を免れし御恩をも報ぜず(釋迦)　四大の四苦を此身一つに重ね重ねて(反魂香)　斷末魔の四苦八苦(曾根崎)

〔四苦〕生、老、病、死の苦を云ふ。「四苦八苦」は四苦に怨憎會苦、愛別離苦、求不得苦、五陰盛苦を加へたものである。これ吾人が生涯を通して必ず受ける苦痛であつて涅槃經に說いてある。轉じて四苦八苦を至極の苦痛の意にも云ふ。

しく　世尊は雪山童子の古四句の文に身をかへ、鬼神の餌食となつてこそ正覺を成じ給ふなれ(酒呑童子枕言葉)

〔四句〕四句偈である、即ち諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂の文であつて、涅槃經に說いてある。「世尊は雪山童子の古云云」を見よ。

しく　四方に四句の大旛紫磨黃金のまき柱(三世相)

〔四句〕ここの文は四方に吊す四つの大旛に各一句づつ、併せて四句の經文を書けるを云ふ。

堀山市あたりで往往言はれてゐる。舍利（淨瑠璃、加賀掾正本）第二に、「何にじあひになりしかは、先拂ひの燈籠を立て張袴の供奉二三十輿を舁かせ出で來る」。新井君美自筆・拔粹（岩崎文庫藏）に、「時頃」に「じあひ」と傍訓してある。

しい 四夷八蠻を切靡け（嫗山姥）

〔四夷〕東夷、南蠻、西戎、北狄。禮記・王制篇に、「東方曰レ夷、被レ髮文レ身、有下不二火食一者上矣、南方曰レ蠻、雕レ題交レ趾、有下不二火食一者上矣、西方曰レ戎、被レ髮衣レ皮、有下不二粒食一者上矣、北方曰レ狄、衣二羽毛一穴居、有下不二粒食一者上矣」。

しいし 奥に鼓の稽古がある、高い聲さつしやるな、しいししいしを張物に、かいまみ覘く鼓の手に（堀川波鼓）

止止に 彳を いひかけたのである。「止止」は聲を制するときにいふ詞であつて、佛典にその用例が多い。「彳」は布を洗張などするとき其兩緣にさしわたす竹串である。

祝儀の石 二階の酒のしゆんだ頃祝儀の石を打込んで（萬年草）

「いしうち」を見よ。

じうくん 獸君の一靈山野にはびこり、草木を蹈折り（反魂香）

〔獸君〕虎をいふ。格物論に、「虎山獸之君也、狀如レ猫而大如レ牛、黄質黑章云云」。

*__しうちやく__ 甲斐甲斐しくも御かくまへ我身に取つて祝着と、禮儀細かに相述べ（蟬丸）

〔祝著〕よろこび祝ふこと。滿悅。合類大節用集に、「祝著」。

しうぼく 「しゆうぼく」を見よ。

じうまんごぐわん云云 「じゆうまんごぐわん云云」を見よ。

*__しおき__ これを思へば世の中におき仕置の絶えぬも道理（冥途飛脚）

〔仕置〕處刑。倭訓栞に「しおき＝俗語也、爲處の義成べし、しはなしの略、おきは處置をいふ也」と見えてゐる。轉じて處刑をいふ。

*__しか__ 女房先立てながらへあらばそれや犬猫も同じ事、同じ中にも鹿となり鴛鴦と生れて女夫池（二枚繪）

〔鹿〕獸類の中でも鹿は女夫最も睦じきものとされ、古歌にも「妻戀ふる鹿ぞ鳴くなる」など詠まれ、松の葉の唄にも「笛による鹿は妻故に死する、我らもさまにやれ命すてうずよの」など見えてゐる。

*__しが__ ええ無法な主人持つた故思はぬ面目失うたと、主のしがからさきに立つ（川中島） あとのしら波ささなみや、浮世のしがを乘せて行く（嫁静）

〔疵瑕〕雖瘢。人の雖瘢をいうて疵つけること。貝原好古編・諺艸に、「春秋僖公傳云、申侯有レ寵二於楚一、文王曰、予取不二汝疵瑕一也。人に雖をいひて疵つくる事を京童の詞に疵瑕と云也」。ここの文に「しがからさきに」は、「疵瑕から先きに」に「志賀唐崎」をいひかけたのである。「浮世のしが」は「浮世の疵瑕」に、「さざなみや」の緣語「志賀」をいひかけたのである。美景蒔繪の松（寶永五年刊）卷五に、「我は便りのなきをうらみ、御身のしがを聞かん爲芝居見がてらけふの首尾」、とある「しが」も雖瘢の意である。

*__しかけ__ 火繩を筒にさしつくると齊しく、飛んだる亂火の仕掛（國性爺） 高い物を買うたと叱られうかと思うて、錢はしかけで遣りました（堀川波鼓） 額で睨みつ袖引きつ、手の内つまむも一昔、古い仕掛が田舍なり（宵庚申）

〔仕掛〕からくり。たくらみ。「錢はしかけでやる」とは、元祿銀での目方を惡貨の寶字銀で拂ふの意。此種の換算を誤魔化す拂を仕掛拂といふ。「古い仕掛」とは、戀人の掌を抓つて思はせ振に歡心を買ふ仕方は今ではもはやらぬ、昔はやつた古いたくらみだの意。

じがげ 塔前に座を構へ、一心に自我偈を讀みておはします（大覺）

〔自我偈〕法華經・壽量品に「爾時世尊欲レ重二宣此義一、而説レ偈言」と云ひ、「自二我得レ佛來、所レ經諸劫數、無量百千萬、億載阿僧祇」云云」とありて、總て二十五行偈ある、其最初の二字を取つて自我偈といふ。

しかた ああ好い辯舌、楠湊川合戰面白いどう中、仕形で講釋やられた所（大經師） こがいな事はあるまいと仕方まじりの高話（博多）

〔仕形〕身振手眞似。桐淵貞山編・江戶名所（享保十八年刊）人之部に、「仕形噺肩から袖へ谷も出來。貞山」。

しかのまきふで 硯引寄せ墨をすり、鹿のまき筆つまこひ鹿（淀鯉）

〔鹿の卷筆〕鹿の毫で穗を作り、紙または色絲などで軸を卷き附けた筆をいひ、奈良の名物。和漢三才圖會・卷十五、筆の條に「今多所レ用者鹿毛也」。

しからす お馬の湯洗ひ伏せ起し、武家の奉公しからせば糠味噌汁の花散りて（薩摩歌）

〔爲過〕能く慣れて未熟ならぬをいふ。「かる」は、筆跡の熟達してゐるのを筆がかれてゐるなどいふ「かる」と同じ語で、老熟の意である。

*__しがらむ__ 姫君も思ひ川、下行く水とかよへども、さすが人目のしがらみて、哀れはかなき世の中や（十二段）

「柵」「柴搦む」の義か。柵を作りて水流を堰くを云ふ。ここの文は、「下行く水と云つた緣で「しがらみ」と云ひ、人目に塞かれる意にいうたのである。

しかられぬ いかにとしてもお手前が親の敵に身を碎く、ここがどうもしかられぬ、脇差に手もかけまい（薩摩歌）

「然せられぬ」の略。我が身勝手に敢行することができない。

*__しぎ__ ヤアいはれぬ鴫殿、看經もする身で、これがほんの殺生かい（國性爺） 鴫の羽根搔き百羽搔き、毛を逆立ててぞ諍ひける（國性爺）

〔鴫〕鷸などとも書き、涉禽類に屬する鳥、水邊に棲息し、嘴も足も長く、體の大さ中形である。

「鴫殿看經」とは、鴫の靜かに田澤などに佇むさまをいふ。倭訓栞に、「鷸が看經といへる俗諺は、その田澤に居時の閑默なるをもて也、羽搔の反也」。吾吟我集・秋の部に、「羽根かきの歌を所作にや姥鴫の看經をする曉の聲」。

「鴫の羽根搔き百羽搔き」とは、鴫が嘴で度數繁く羽をしごくをいふ。倭訓栞に、「しぎのはねがき＝雖の己が嘴にて羽をしごく音の高く聞ふればいふなり、其數もしげければ、百羽がきとも數搔ともよみ、曉天に必ずかくものなれば、直に曉の事にもいへるなりといへり」。古今集・戀歌・五の部に、「あかつきの鴫の羽根搔き、百羽搔き、君がこぬ夜はわれぞ數かく」。錦木（寛文頃成）卷五に、「しぎのはね

らず、萬に氣をつけて其身一代に二千貫目しこためて行年八十八歳云云」。風流曲三味線(寶永七年刊)に、「色も知らぬ大慾無道の男め、法師と心を合せ其方をたばかり賣りて、金をしこだめたるに疑ひなし」。

しこのき　上三尺の詰牢に、しこの木をもつて蜘蛛手格子に切組んで(出世景清)

「しこ」の「こ」に濁點の落ちたもので「しごのき」即ち「四五の木」の意である。巣林子の出世景清の文は、舞之本かげきよ(下卷末刻記に「萬治二年仲夏吉辰開板」)に據つた所多く、巣林子のここの文も、かげきよの下卷に「うへをば三尺のつめろうにこしらへ、四五の木をとりよせ蜘蛛手格子にきりくんで云云」とあるに據つたものである。(さるをしこの木を醜の木とする說はいかが)。

***しこる**　しこり博打の惡遊び、扨もつれない氣と思へば熱い涙がこぼるる(丹波與作)　奥にはなほも飲みしこり、踊るやら謠ふやら(生玉)

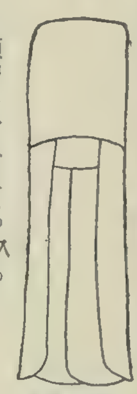
「しきる」(頻)に同じ。しきりにする。こりかたまる。耽る。萬葉集・卷七・譬喩歌の部に、「あきじこりかも」とありて、代匠記に「商じこりとはあきなひをしこりてするなり、しこりはしきりに同じ、こときと通ぜり」と見えてゐる。西鶴置土産・卷之四。戀風は米のあがりの條に、「雨の降りしころ跡は風と定め」。江島其磧撰・咲分五人娘・四之卷。由良三郎は一旦那ぢやと威言を國分寺の條に「客殿に打ちしこつてゐる骨牌打ども肝を潰し」。

***しころ**　兜の錣を取外し(出世景清)

〔錣〕兜の後に垂れて首を掩ふもの。このあたりの文は謠曲・景清に據つたものである。併せ見よ。

しころづきん　錣頭巾に顏隱したる荒男數十人ばらばらと駈集り(天智天皇)

〔錣頭巾〕頭巾の一種。智惠袋(寛文年間刊)に、「甲かや　しころ頭巾をはちびたひ。久光」。



〔錣頭巾〕

しこん　「しまわうごん」を見よ。

じごんじ　何のかのとじごんじは敵討が恐しいな(嵯峨天皇)

〔自言辭〕自分に作つて口上手にいふ言辭。節用集(饅頭屋本)に「自言」。俚言集覽に「自言辭いふ」。

***じざい**　自在の下に焚捨てしほだ押除けて(川中島)

〔自在〕自在鈎の略。鍋などを吊し、自在に上下し得る裝置の鈎。好色一代男卷八、都のすがた人形の條に、「折節初紅葉の陰に自在をおろし金の大燗鍋」。

***しさう**　景清は二相を悟り候へども重忠は四相を悟る(出世景清)　四相を悟る自然智は、我さへいさやしら露を玉と欺く謀(烏帽子折)

〔四相〕我相・人相・衆生相・壽者相を云ふ。四相は迷の根本であつて、これを悟るは智慮の超越した者である。

ししき　僞らば繩をかけ四職衆の白洲に引据ゑ、一家一門の恥を見るか(雪女)

〔四職〕室町時代の職制に侍所の長官を所司といひ、赤松・一色・山名・京極の四氏が交替で勤めてゐたので、これを四職と云うた。「ししよく」をも見よ。

ししぎる　三刀四刀ししぎる引き切る首おし切つて立ち上れば(女護島)　一世の大事と嚙み切り嚙み切りしし切る念力佛力や加はりけん(蛙合戰)

繁切の義であらう。萬葉集に「繁」を「しし」とよんである。切り碎く。

じしげしやう　じしげしやうの燈火をかかげて三會の曉の出世を契り給ひける(以呂波)

〔慈子化生〕彌勒菩薩の化生をいふ。慈子は慈氏で彌勒菩薩をいふ。彌勒菩薩は世尊滅後五十六億七千萬年を經て人間に化生し、龍華樹下に三會の說法を以て一切の人天を敎化し了るといふ。平家物語・卷十、からやのまきの事の條に、「肉身に三昧をぜうじて、慈氏の化生を待つ」。

ししさうしよう　師資相承のこの三衣(娥)

〔師資相承〕師弟相承繼ぐこと。師資は師匠弟子の義である。師は道を以て弟子を教へ、弟子は師を資助するより云ふ。老子に、「善人不善人之師、不善人善人之資」。

獅子の狛　山門には獅子の狛(出世景清)

神社または寺院の樓門の前などに兩側に獅子と狛犬が置いてある。類聚雜要に、「左師子於レ色黃、口開、右胡摩犬於レ色白、不レ開レ口」と見えてゐる。高麗犬と云ふも獅子のことである。巣林子が「獅子の狛」と書いたのも、狛犬即ち獅子であるから斯う云うたのである。蓋し獅子は惡魔を除く靈獸として置かれたもので、佛教と共に傳來したものであらう。獅子を高麗犬と云うたわけは、紫宸殿の賢聖障子の中戸の扉に畫いてあるものなどが獅子と高麗犬であるから、それによつて神社佛閣にあるものをも獅子・狛犬と云ふやうになつたので、其實神社佛閣のとは別物で、宮中のは番犬であつて、其姿が猛しう作られ、普通の犬と違つて強く見えるので高麗犬と稱せられたのであらう。田村將軍初觀音(巣林子作)には、「白銀の獅子狛犬、階は唐木を以て造らすべし」とも書いてある。

四十八串彌陀の誓願　蒟蒻は今夜食はいでも明日までも置かるるが豆腐が廢る、一丁を二十四に切り二丁で四十八串彌陀の誓願、あまり何處ぞに阿彌陀の光はせぬかい(孕常盤)　肌に袷の破れ紙子、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切(夕霧)

ここの文は、豆腐の四十八串を彌陀の四十八誓願にいひかけて「四十八串彌陀云云」といひ、また紙衣は四十八枚の紙で作るといふから、それを彌陀の四十八誓願にいひかけて「四十八枚彌陀の願」というたのである。阿彌陀佛の四十八誓願は佛說無量壽經・卷上に出てゐる、即ち、(1)無三惡趣、(2)不更惡趣、(3)悉皆金色、(4)無有好醜、(5)宿命智通、(6)天眼智通、(7)天耳智通、(8)他心智通、(9)神境智通、(10)速得漏盡、(11)住正定聚、(12)光明無量、(13)壽命無量、(14)聲聞無數、(15)眷屬長壽、(16)離諸不善、(17)諸佛稱揚、(18)念佛往生、(19)來迎引接、(20)係念定生、(21)具足諸相、(22)必至補處、(23)供養諸佛、(24)供具如意、(25)說一切智、(26)得金剛身、(27)萬物嚴淨、(28)見道場樹、(29)得辯才智、(30)智辯無窮、(31)徹見十方、(32)國土嚴飾、(33)觸光柔軟、(34)聞名得忍、(35)轉女成男、(36)常修梵行、(37)人天致敬、(38)衣服隨念、(39)常受快樂、(40)見諸佛土、(41)聞名具根、(42)聞名得定、(43)生尊貴家、(44)具足德本、(45)聞名見佛、(46)隨意聞法、(47)聞名不退、(48)得三法忍。以上四十八の誓願の中にて(18)念佛往生願を根本の誓願とされてゐる。

のである。四句の經文は卽ち、六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上上妙好華を云ふ。この經文の意は、南無阿彌陀佛の六字名號を一遍唱へれば、十界の依報正報悉く同一體に成佛され、總ての念慮を離れて一遍の念佛によつて無上の妙果を證し、人間中の白蓮華に比すべき上上の人となられると云ふのである。

しく　今は布子と襦袢と、たつた二枚の四九なやつて、親方の駄賃の算用も立てぬげな（丹波與作）

〔四九〕めくりかるたで、四の札と九の札と二枚合せて十三を取れば負けとなる。ここの文は、布子と襦袢との二枚に、かるた札の二枚をいひかけ、めくりかるたの博奕に負ける意に、なほ四九・三十六計逃ぐるに若かずの諺をきかせたもので、要するに博奕に負けて布子と襦袢との二枚となり、逃げて親方に拂ふべき駄馬賃の算用も立てないとの意。齊書・王敬則傳に「敬則曰、檀公三十六計、走爲上計」、云云」。

しくさつ　はびこる外道のしくさつの形、邪見風の嵐を吐けば（用明天皇）

「しゆくさつ」（肅殺）であらう。物をそこなひからすを云ふ。歐陽修の秋聲賦に、「常以肅殺而爲心」。

＊**しぐせいぐわん**　庭と上とに四人の願ひ四弘誓願で有難き（會稽山）

〔四弘誓願〕衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成を云ひ、一切の佛菩薩の通願である。ここの文は四人の願を四弘誓願といふて洒落ただけである。

じくねる　金岡あたりな睨めまはし、天命知らずの愚人めら、天皇の御迎に來りたり、じくれたら片つ端海へ突ばめ鯨の餌食となすべきぞ（天智天皇）

「執念くねる」の義か。しつこくねぢけ反抗する。俚言集覽に「じくねる。くねるといふ言あり、くねるとはねたみ恨むることなり、をみなへしの一時をくねると貫之も書けり、按に辨慶が狀に讒者の詞に勅して云云とある、卽ちしくねるの意歟」。

しぐれのまつ　時雨の松の下寺町に、信心深き心光寺（曾根崎）

〔時雨松〕大阪天王寺の西、一心寺にあつた名松の名だといふ。

＊**しくわん**　覺むる期ありや有明の、止觀の窓の月の影、峰の木隱れ雲隱れ常に照すと知る時は（兼好）

〔止觀〕摩訶止觀の略稱で、天台三大部の一である。摩訶止觀を修する道場を止觀の窓と云うたのである。

しげいしや　渡殿よりしげいしやの小庭に暫し身をひそめ（日本武尊）

〔淑景舍〕桐壺とも云ひ、內裏の內にあり、宣耀殿と麗景殿との間の後で嘉陽門の西に當り、女官だちの曹司にあてられてゐた。

しげいと　下緒のふさのしげ絲を火口となしてかちかちかち（生玉）

〔紕絲〕繭の上皮から取つた屑の絹絲。和名抄に「紕絲。漢語抄云、紕絲、之介以度、惡絲也」。

しけうはちけう　されば幼少より學問し四教八教を覺え（一心二河白道）

〔四教八教〕天台宗では釋尊一代の教法を分類して四教八教となす。四教とは(1)藏教、(2)通教、(3)別教、(4)圓教の化法を云ひ、八教とは以上の四教に(5)頓教、(6)漸教、(7)祕密教、(8)不定教の化儀を合したものを云ふ。

しげざう　木木の梢も繁藏と、誰が呼子鳥草履取（薩摩歌）

木木の梢も繁るに、好色の意の「しげる」（その條を見よ）をいひかけて、繁藏といふて好色奴の名に擬したのであつて、強藏とふ類である、そして源五兵衞の情事の伏線である。

＊**しげとう**　引もちぎらぬ持弓の、重籐・塗籠その數は、いさや白木に側黑の（堀川波鼓）

〔重籐〕籐を滋く卷く義。籐を幅一寸ばかり、間を五分ばかり置いて繁く卷いた弓を重籐の弓と云ふ。春草・上に、「籐を重く卷きたるは皆重籐なり、かくすることは唯弓の飾にはあらず、濕にあひてにべの離れぬためなり、又九張弓と名付けて重籐九品の製あり、これも九品のみに限るべからず、重籐の籐は白籐なり、弓をば黑く塗るなり」。重籐には村重籐・本重籐・塗籠重籐などの種類がある。重籐の名の見えるは保元物語・義朝白河殿夜討の條に出てゐるが初めであらう。

しげめゆひ　時に忠信滋目結の直垂に、緋縅の鎧を着、兜の緒を締め（吉野忠信）

〔滋目結〕目結は鹿子絞のことである、絹布を撮み上げて絲にて結び染めれば、その文目のやうになる故にこの名がある。滋く目結染にしたのを滋目結と云ふ。

しげる　こちも盆には在所へ行て粟畑でしげろと、ころりと寢たる音ばかり（今宮）　この蚊帳でしげらしやんとしたらば、いかな藪蚊もけなりかろ、（歌念佛）　喜瀨川の三浦とて年まへの太夫、大彌太殿とは深い中、これも呼寄せられ、しげれ松山羨ましい（會稽山）

〔茂〕こめる（籠）義で、卽ち男女籠ることである。好色盟粟鹿子（元祿七年刊）「身をしる雨」の條に、多作と云ふ遊女に其情夫が情死を迫つたのを多作が諫めた言葉に、「夜の分別と晝とはいから違ふものでござんす、まづともあれ今宵はしげりましよ、こちへ寄らんせ、心細うなるに最早その事おかしやんせ」と見えてゐる。松の葉（元祿十六年刊）卷一・ひらやこまつの唄に、「ここは三條かやれ釜座か、一夜泊りてしげりまいらしよ、云云」と見え、同・しもさほそりの唄に、「……うちとけてゆらゆらとおよれのうさ、まだ夜は夜中よしげれとんと君云云」と見えてゐる。「しげる」はまた「しよげる」とも云ふ。その條をも見よ。「しげれ松山」は、閑吟集（永正十五年刊）に、「しげれ松山しげらうには木蔭にしげれ松山」、とある歌の詞によつたものである。

＊**じげん**　今この娑婆に示現して（曾根崎）

〔示現〕顯示顯現の義。佛・菩薩が御姿を現し給ふこと。御姿を變じて出現し給ふこともある。「げにや安樂世界より云云」を見よ。

＊**しこ**　しこの矢筈下りに負流し（吉野忠信）

〔矢壺〕矢籠とも書く。もと矢を盛る器の總稱であつたが、後には粗末な胡籙を云ふ。

しこだむ　こりや三太郎そちに大事の物遣らう、火をとぼして奧へ來いと言ふより早く、あいあいあいさらばしこだめまゐらうと（重井筒）

頻溜の義であらう。どつさりためる。しこたま。日本永代藏（貞享五年刊）卷一・二代目に破る扇の風の條に、「この男一生の中、草履の鼻緒を踏切らず、釘のかしらに袖をかけて破

語・葵の巻などにも見えてゐる。「結びとめても云々」の條をも見よ。

***したさんずん** 男も女も愼むべきは舌三寸（嫗山姥）
〔舌三寸〕三寸は舌の長さを云うたのである。前漢書・張良傳に、「以二三寸舌一爲二帝王師一」。毛吹草に、「舌三寸のさへづりに五尺の身をはたす」。

したぞめ 地體旦那の下染はの、重井筒屋と云ふ南の茶屋の弟で（重井筒）
〔下染〕紺屋で或色を染上をする前に他の色で染めることを云ふ。ここの文は紺屋に緣ある語をつかひて、生立ち又は素生の意に云うた。

***したたむ** 何れも勝手へ立つてしたためしたため、我も飯食ふ膳を出せ（酒呑童子）
〔認〕食事する。支度する。（序に云、源氏冷泉節に、「六尺どもと呼ばはれども、皆したために歸つて草履取の三平ばかり」、とある「したため」は名詞であつて食事の意）。

***したたるい** 今は手代と埋れ木の、生醬油の袖したたるき、戀の奴に荷はせて（曾根崎） とてもなら連れ立たう、はて見苦しい女夫づれ、我も追付け・まづ先へ、ああそれもさう・したたるさうにもなるまい（鑓田） ああしたたるい、手の隙がない通りや通りや（反魂香）
〔舌怠〕媚めき甘える貌。でれでれしい。曾根崎心中のここの文は、でれでれするに生醬油の袖滴るにかけた。醬油屋の徳兵衞今は手代で埋れ木の如く名も顯はれねども、後にはでれでれする戀の奴となつて浮名を流すといふに、奴に醬油樽を荷はせてをいひかけたのである。

***したながし** 檢非違使勝船が麁相とは舌長し（用明天皇） 身が生國は大日本、風來とは舌長し（國性爺） 耶輸陀羅女を渡せとは、どれどの口で舌の延びたる奴ばら（釋迦）
〔舌長〕「舌の延びた」とも云ひ、言過ぎる者を罵つて云ふ。詩經・大雅に、「婦有二長舌一維亂之階」。菅原傳授手習鑑・佐太村の段に、「やあ畜生とは舌長な」。

***しだら** 子は覺えなき事ながら、言譯もなきしだらとなる（二枚繪） 明け暮れの願ひ事叶はぬのみか、このしだら（生玉） 何としたしだらで何方へ立退きやる（博多）
「しだらうつ」の「しだら」であらう。ほど拍子の義より轉じて、工合、都合、體たらく、の意をなす。（爲たらくなどの略といひ、或は梵語修多羅から出たともいひ、又は自墮落のかはつた語であるとの說もある）。

しだん 愚僧代代師檀の好み故かくまへ置くに憚なし（天鼓） 大海原の王子の師檀となり（嵯峨天皇）
〔師檀〕師匠と檀越（施主）。師弟。說法明眼論に、「一日師檀、百劫結緣」。

じだんだふむ 「ぢだんだふむ」を見よ。

しち 呉竹をしちといひ（釋迦）
「ひつたきや」の條を見よ。

***しぢ** なほしも思ひ深草の、しぢに通ひし車長持（卯月潤色） めぐり車の少將樣、榻の數數百介が（扇八景）
〔榻〕車の轅を置く臺であつて腰掛の狀をしたもの。ここの文は、深草の少將が小野小町に懸想し、百夜まで通ふことを約し、その通うた數を車の榻に刻み附け、九十九夜まで通うて今一夜といふ時になつて死し、遂に思ひを果さなんだと云ふ故事によつて文を飾つたのである。

しちかく 太子は圓智明らけき御顏、七覺を表して七步み（釋迦）
〔七覺〕覺は覺了の義。覺法に七種ある。卽ち(1)擇法覺支、(2)精進覺支、(3)喜覺支、(4)輕安覺支、(5)念覺支、(6)定覺支、(7)行捨覺と云ふ。道を修して思惑を斷ずることはこの七覺の力による。

しちく 紫竹交りの藪の下（蝉丸） 篩の竹も古の紫竹に染むるばかりなり（反魂香）
〔紫竹〕漢竹をいひ、表皮紫色である。傾城反魂香のこの文は、昔時舜帝の二妃（娥皇・女英）が舜帝の死を悲んで、泣いた涙が落ちて竹を紫色に染めたと云ふが、我が篩竹も涙の爲に紫色に染まるばかりであるとの意。續古事談・六に、「この二人（娥皇・女英）舜におくれて歎きける涙そみたる竹なり云云」、と見えてゐる。

七九寸 腰にさいたる七九寸、かたつばしに半切紙（持統天皇）
延紙の大なるものは縱七寸橫九寸あるより、これを七九寸といふ。和漢三才圖會卷十五、紙の條に、「延紙乃倍加美 小杉原也、其大者縱七寸橫九寸。謂二之七九寸一云云」。ここの文は七九寸を一尺六寸の刀にいひかけたのである。（一尺六寸を七九寸といふやうに數をわけていうた例は、丹波與作にも「その七二とは九郎助のことか」、とあるもそれである）。

***しちくどい** やれやれしちくどい、盜んでいらずば、薬ちやいの（丹波與作）
〔執諄〕しつこくくだくだしい。「しち」は「しち面倒」など云ふ「しち」と同じ。

***しちごさん** 相模入道が七五三も天に背けばこの犬の餌に劣つたり（千疋犬） 朝鮮人の饗應御堂へも雇はれ七五三、五五三、山蔭中納言の家の切方料理一通りは承り傳へし故（宵庚申） 男は今日の七五三、嫁入事せし戲れも（反魂香）
〔七五三〕七五三も五五三も膳立の法式である。貞丈雜記に、「七五三の膳と云ふ事。七とは飯にてもあれ湯漬にてもあれ七の膳まで出すなり、五とは初獻（雜煮そへ肴鯉のあつもの）、二獻（まんぢうそへ肴鶉の羽もり）、三獻（鯛のあつもの）、四獻（むし麥そへ肴たちばなやき）、五獻（やうかん又はすいせんかんそへ肴鮒の一こん煮）、三とはきやらの膳也、三の膳まで出す也、料理調樣庖丁人の家に定法あり、右は大草流なり、流によりて替るべし、五五三と云ふは七五三を略して飯にても湯漬にても五の膳まで出すなり」。婚禮の夜の膳部は七五三である。女重寶記卷二、祝言の夜膳部食ひ物の次第の條に、「一番に手かけ、二番に三方、三番に引わたし、其次にわたいりの吸物、その次にうちみ、其次に雜煮、雜煮の餅は切餅にすべし、其次に鰭の吸物（鯛也）、其次にかはいりの吸物（鳥也）、其次に齊膳七五三なり」。一から九に至る奇數を陽の數で芽出度いものとし、其中の七・五・三の數をとつたもので、祝儀に用ゐる數である。

***しちじやう** 五欲七情種種の罪（嫗山姥） 是ぞと名付けん御病氣もなく、只七情に破られ給ひ、お氣の疲れ御心のむすぼふれ（女護島）
〔七情〕釋氏要覽に、喜・怒・憂・懼・愛・憎・欲を

四十八夜 まんまと法然上人が彼方の十念授かり、諸分の五重相傳受け、四十八夜の常念佛互に忍び忍ばれて（薩摩歌）

彌陀の四十八誓願（前條を見よ）に因んで四十八夜間念佛を唱へる法會をいふ。日本永代藏卷三、高野山借錢塚の施主の條に「その跡の金銀御寺へのあがり物、四十八夜を申てから役に立たぬ事なり」。巣林子はこれを男女の情事に云うたのである。好色擥粟鹿子（元祿七年刊）和合の條に、男女の和合に四十八手あるといひ、傾城禁短氣に、四十八夜の夜見世談義と云ふことも見えてゐる。

しじふまつしや 「外宮は四十末社」を見よ。

ししや 幾年ふりし猪の牙は劍の如くなるが、しし矢三つ四つ負ひながら（百日曾我） 革具足竹槍鹿矢かき負ひ（今川了俊）

〔鹿矢〕狩獵に用ゐる矢。

ししやう 「ろくだうししやう」を見よ。

ししゆ 大乘五十年の御法の聲、三乘五乘七方便四しゆ八部二十五有普く利益の甘露を嘗め（釋迦）

〔四衆〕比丘（僧）、比丘尼（尼）、優婆塞（信男）、優婆夷（信女）。法華經・法師品に、「爲二諸菩薩及四衆一、廣說二是法華經一、藥王我於二餘國一遣二化人一、爲レ其集二聽法衆一、亦遣二化比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷一、聽二其說法一」。四衆は四部衆または四部弟子とも云ふ。

四種の馬 「雜阿含經にも四種の馬を說かれ」を見よ。

ししゆのりゆうじん 三界の諸天を驚かし敬ってこの理を啓し、四種の龍神に向ってこの恨みをなす（嵯峨天皇）

〔四種龍神〕日藏經・卷九に「阿奴馱等四龍王、護二池出一河、流無レ竭」と見えてゐる。但し四龍王、四龍神に關することは別に他にもあれば、必らずしもこれに限らない。

自受用卽身成佛 禪師坊が最後に自受用卽身成佛の御法を說いて聞かすべし（百日曾我）

自受用は他受用に對する詞である。自ら佛果を證得しそれを自ら受用して、當身佛果菩提を成就すること。

ししよく 御座の右は四職の棟梁三好長慶入道が嫡子淡路守國長（女夫池）

〔四職〕左京職、右京職、大膳職、修理職。（「しき」をも見よ）。

ししよごきやう 四書五經を宙で讀む女子でも役に立たぬぞや（堀川波鼓）

〔四書五經〕大學、論語、孟子、中庸を四書と云ひ、易經、書經、詩經、春秋、禮記を五經と云ふ。

ししよみやうじん 四所明神の黑木の小祠、雪は白木綿・藤は幣（大織冠）

〔四所明神〕春日社は武甕槌命・齋主命・天兒屋根命・姫御神の四神を祀ってある故に云ふ。

じしんばん 遁れぬ方の自身番見舞ひたう存ずれども（重井筒） 自身番一夜を寢ずに夜明しの、賃も僅に百介が（扇八景）

〔自身番〕江戸時代に町人が一町毎に晝夜非常を警戒する爲に互に交替して番をした。之を自身番と云ひ、その詰所を自身番屋と云ひ、略して自身番とも稱し、自治機關の一であった。

しすゐ 蘭麝の香よこなれてしすゐを流す堀江川（三國志）

〔脂水〕脂粉を洗った水。杜牧の阿房宮賦に、「渭流漲レ膩、棄二脂水一也」。

四睡の虎 「豐干禪師」を見よ。

四寸の身 まつかせと開く四寸の身、鐺と鐺とがかつしと當って（川中島）

敏速に身をかはして、敵の突き來る鋒鋩より四寸の距離に外すこと。

***しそく** さあさあ紙燭が皆になる、何と房樣（重井筒）

〔紙燭〕紙捻に油を塗りて蠟燭の如く火を點すに用ゐたもの。ここの文は、この先の文に「引裂紙のひねり元結で火廻しを」とあれば、引裂紙のひねり元結を紙燭に代用したのである。

しだい 上は梵天帝釋下は四大の文言に佛そろへ神そろへ（天網島）

〔四大〕四大天王の略である。卽ち持國天・廣目天・增長天・多門天の四天王をいふ。「してんわう」を見よ。起請文の書式は何れも大同小異であって、卽ち起請を立てる事柄に就いて違犯せざる由を記し、その末に「梵天帝釋四大天王惣而日本國中大小神祇殊氏神何何大權現八幡大菩薩摩利支尊天可罷蒙御罰者也仍起請如件 年月日 姓名 宛名」と書いてあるのが一般である。この起請文は牛王の誓紙の裏に書いたものである。「ごわう」を見よ。

***しだい** 假にやどりし四大の體をここに殘して見するなり（一心五戒魂） 四大の四苦を此身一つに重れ重れて、空より出でて空に入る（反魂香） 四大は空にかへせども、識情天地麗麗と朽ちせぬものよ（天智天皇）

〔四大〕色法の所依たる四種の法、卽ち四大種の略稱であって、地・水・火・風を云ふ。地・水・火・風は萬物に周遍し一切萬有の四大原素である。これに空を加へて五大（「ごりん」を見よ）と云ひ、更に識を加へて六大と云ふ。四大の性質をいへば、堅にして物を持するは地、濕にして引接するは水、煖にして熟せしめるは火、動きて生長せしめるは風である。

***しだいかい** 四大海は汲干すとも人の心は汲まれぬぞや（松風）

〔四大海〕須彌山の四方をめぐる大海をいふ。謠曲・身延に、「げにや恩愛愛執の涙は四大海より深し」。

***しだいさつた** 五大明王・四大薩埵・三十七尊（蟬丸）

〔四大薩埵〕法華の四大菩薩、卽ち彌勒・文殊・觀音・普賢を云ふ。「さつた」はその條を見よ。

***しだう** 唐土育王山佛照禪師の御寺へ祠堂に御渡し候（孕常盤） 祠堂銀五百枚奉納致され候（萬年草）

〔祠堂〕寺院内にて祖先代代の靈を祀る廟を云ふ。「祠堂銀」は祖先代代供養の爲に菩提寺に寄附する金錢。

したかせい やい男だてはおいてくれ、錢濟いてしたかせい、腕づくならさあ來いと（丹波與作）

「爲度くは爲よ」のつまった言葉である。

***したがひ** 小蛇跳出で松風の下がひに飛入れば（松風） 馴染重ねししたがひの、つま戀しさに參りたり（持統天皇） ちらちらちらちら螢光か、いや兄弟の亡き魂よ、結止めん下がへの褄吹返す夜嵐に（會稽山）

〔下交〕「したがへ」とも云ふ。衣のしたまへ。この語古くは宇津保物語・俊蔭の卷、源氏物

の九界は悉く迷の境界なるによつて、佛界の知見に降伏して顯現せぬとの意。「じふかい云云」をも見よ。

しつきやく 五客六客しつきやく入れず(雪女)

〔濕客〕濕瘡を病める客。ここの文は七客に濕客をいひかけたのである。

じつきん 「ぢつきん」を見よ。

じつごけう 實語教・童子教・和漢朗詠(最明寺殿)

〔實語教〕撰者未詳、儒佛二教の要旨を把り倫理に關する書であつて、五字一句にて總て九十六句より成れる漢文である。

じつごと お夏涙を押拭ひ、そなたと我が身は實事にて口說などする挨拶か(歌念佛) 德兵衞つつと通つて羽織を後へひらりと投げ、實事の格は見覺えたり(重井筒)

〔實事〕歌舞伎の語で、立役を勤める俳優のしぐさにいひ、眞實の態を演じること。「實事の格」の格は仕方の意。

*__じつさう__ 是ぞ實相中道の佛の敎・神の法(用明天皇) 十界一心平等大慧有無の間の中道實相(大織冠) 實相無漏の大海(松風)

〔實相〕眞如また法性に同じ、宇宙萬有の眞相をいふ。實相の妙理は中正の道なれば、これを「實相中道」と云ふ。「實相無漏の大海」とは、煩惱の迷塵を離れ眞如を得たるを云ひ、その法界を蓋して遍在し、萬德を具有するを海に譬へて云うたのである。「無漏」は煩惱の惑根なきをいふ。謠曲・江口に、「實相無漏の大海に五塵六欲の風は吹かねども」。

しつしやう 濕生化生はいさ知らず、體を受けて生れし者、人間も畜生も出生の門は唯一つ(釋迦)

〔濕生〕「ろくだうししやう」を見よ。

*__じつて__ 豫て相圖の小屋の者、十手提げくるくるとおつとり卷き(博多)

〔十手〕昔捕手の用ゐた具。中程に鉤の附いた鐵製の短い棒であつて、犯罪者を捕縛するときこれをもつて擊つ。

しつと 郅都蒼鷹の忠臣の翼も折れ(嫗山姥)

〔郅都〕漢の景帝時代の人、法を行ふに公平で、顯貴の者をも假借しないので、蒼鷹と綽號された、遂に竇太后の忌憚に觸れて殺された。ここの文は、源賴光は忠臣なれども、兇暴者の爲に禍害を受けたことに郅都を引いたのである。史記・酷吏傳に、「郅都者楊人也、……都獨先嚴酷、致レ行レ法不レ避二貴戚一、列侯宗室見レ都側レ目而視、號曰二蒼鷹一、……竇太后乃竟中レ都以二漢法一、景帝曰、都忠臣欲レ釋レ之、竇太后曰、……於レ是遂斬二郅都一」。

*__じつとく__ 十德着ながら火燵にとんと高鼾(大經師)

〔十德〕昔用ゐた服の名。其製素袍に似て腋を縫附け、胸紐を附けたのと附けぬのとある。後世腰から以下に襞を附けて、醫師・大經師の禮服とした。

*__じつぱう__ 私が死ねば十方が濟みます(生玉) 養子になつて十六年このかた十方旦那の機嫌を取り(宵庚申) くらつぼに傳ふ涙の十方ぐれ、泣く泣くひかれ行く姿よその見る目も哀れなり(大經師) 十方旦那の福田宿植德本(井筒)

〔十方〕四方とその間の四隅と上下の義。どこもかしこも。「涙の十方暮」は、涙にくれるに十方暮をいひかけたのである。十方暮は曆上の語で、甲申より癸巳までの十日間をいひ、この間は相談調はぬと云ふ。「十方旦那の福田云々」は「福田宿植德本」を見よ。

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、扨も扨もしつはくなる念佛者や、最早地獄へ歸るなり、行き度い方へつつと行けと(念佛往生記)

〔質朴〕樸直、律義の意に云ふ。「朴」は普通に「ぼく」と讀めども、元祿頃は「はく」とも讀まれてゐる。玉篇(慶長版)に「朴。本也、モト、スナヲ」。質朴に「しつはく」と振假名をした慶長頃の古寫本もある。

*__しつぺい__ 悟つても六十棒悟らいでも六十棒、しつぺいの胸打くはんより早去れ去れといひければ(殘靜)

〔竹篦〕漆篦の音讀である。禪僧が學人接待に用ゐる具で、長さ一尺五寸程の竹篦である。多くは籐を卷いて漆を塗つてゐる。下學集・器財門に、「竹篦。打レ人杖也」。

しつぽり 今の男に遂にしつぽりとした事はござんせぬ(傾城佛が原) 引寄せしつぽりと頬摺して、さあ去れ去れと突出さるる(生玉) 夫婦しつぽりといつ語らひし夜半もなし(堀川波鼓)

男女のなからひのいと濃やかなさまにいふ副詞。しんみり。「しつほ」ともいひ、世繼曾我に、「名に負ふ虎少將しつほと口說くに、二人の者たよたよ」と見え、またこの語を動詞に用ゐたのは、娥歌かるた・第五に、「あの舟借つて沖中で、人目厭はずしつぽつてはなんとあろ」と見えてゐる。和訓栞に「しほるの俗語なり、人の氣象にも物語のしなにも雨氣のふしにもいへり」と見え、由之軒政房撰・好色文傳授(元祿十二年刊)卷四に、「小袖一つに二人寢に見ぬ銘銘鳥の面影、深沈過ぎたるお床ぶり」とあつて、「深沈」に「しつほり」と傍訓してある。

*__しで__ しで切掛けて神よ神、逢にせてたべとねぎごとの(隅田川)

「しだれ」の約。木綿を榊枝に垂したよりの名。笹また注連にも附けて垂した。今は紙を代用する。

*__してう__ 四つ目殺に中手を入れてしてうに掛けて打切つて(國性爺) 枕の碁盤振上げ振上げしてうにかけて追廻れば(五人兄弟)

〔翅鳥〕圍碁にていふ語。相手を包圍し、相手が逃げうとして打つ石の頭を押へつつ、斜に隙間なく進擊すること。征。

*__四鳥の別__ (扇八景)(天神記)(吉岡染)

四羽の雛鳥が親鳥と別れる故事であつて、母子の悲しき離別に云ふ。合類大節用集・言辭門に、「四鳥別離。桓山之鳥生二四子一、羽翼既成將レ分二四海一、其母悲鳴送レ之、爲二是往而不一レ返也、見二孔子家語・說苑一」。

してどの 模樣の時雨色色に品を盡し懸け並べ、染手してどの鹿子結さまざましつらふ(融大臣)

〔仕手殿〕鹿子結などを爲る染物師。松の葉・卷一、端手、京鹿子の唄に「これは京鹿子色も好や、目結手ぎはもよやきよや、あら都戀しやのう、都のしてたち戀しやのう」。

*__しでのたをさ__ げに時鳥は冥途の鳥、死出の田長を鳴くとかや(小栗判官)

「しづのたをさ」(賤田長)の轉で、農業の忙しい初夏の頃に杜鵑盛に鳴くによつて、勸農の爲に鳴くといふ意であらう。格物論に、「杜鵑

いひ、醫書に、喜・怒・憂・思・悲・恐・驚を云ふ。(禮記・禮運篇に「何謂二人情一、喜怒哀懼愛惡欲、七者不レ學而能」)。

しちしよ　合戰勝負の理非を述べたる七書をよくよく御得心あり(最明寺殿)

〔七書〕兵法の七書を云ふ、卽ち(1)孫子、戰國時代齊の孫武の撰、(2)吳子、周時代吳起の撰、(3)司馬法、司馬穰苴及び周の軍官の長が說いたものを編輯したもの、(4)唐太宗李衞公問對、俗に李靖が太宗と兵を談じた筆錄と云へど實は或兵學者の撰であらう、(5)尉繚子、周の尉繚の撰、(6)六韜、俗に周の呂尙の作といへど實は戰國以後の或兵學者の撰である、(7)三略、黃石公の作といへど實は後人の依托である。

しちせい　九曜七星二十八宿五行の靈三十六禽驚し奉り(弘徽殿)

〔七星〕北斗七星を云ふ。「ほくと」を見よ。謠曲・鐵輪に、「九曜七星二十八宿を驚し奉り」。

しちせい　一條院いまだ七歲の幼主として五事七政を秋津洲に施し給ふぞ有難き(關八州)

〔七政〕書經・舜典に、「在二璿璣玉衡一、以齊二七政一」とありて、「吳澄謂、日月五星之運行、各有二限節度數一、如二國家之政一、故謂二之七政一」。

***しちだうがらん**　七堂伽藍御建立の功德はこれにはよもまさらじと泣入り(扇八景)

〔七堂伽藍〕(1)三門、(2)佛殿、(3)法堂、(4)廚、(5)僧堂、(6)浴室、(7)東司を七堂といふ。七堂具備した寺院。「伽藍」はその條を見よ。

しちのづ　紺のだいなし裾七のづまで引つからげ(宵庚申)

「さんのづ」の條を見よ。

しちはうべん　三乘五乘七方便四種八部二十五有普く利益の甘露を嘗め(釋迦)　願くは五乘三乘七方便諸天諸神加被を垂れ(聖德太子)

〔七方便〕佛道修行の位である。卽ち小乘の五停心、別想念處、總想念處の三位、及び煖、頂、忍、世第一法の四善根位を云ふ。これ等の七位は伏惑の位なれば、よつて以て未だ斷惑位にあらざる衆生をさして云ふ。

しちふだ太子　この禿と申すは、じやうびん大王の御子しちふだ太子と申せしが(戀物摘)

質札(質物の預り證として、質屋が質主に渡しておく札)と悉達太子(Siddhārtha 釋尊在俗中の名)とをいひかけたのである。

***しちぶつ**　四大薩埵三十七尊過去七佛實道を請じ驚し奉り(櫟靜)

〔七佛〕藥王經に、毘婆尸佛、尸棄佛、毘舍浮佛、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛を云うてある。

しちぶつやくし　內にこめたる五大明王六觀音七佛藥師の御產の守(女夫池)　七佛藥師一字きんりん(嵯峨天皇)

〔七佛藥師〕(1)善稱名吉祥王、(2)寶月智嚴音自在王、(3)金色寶光妙行成就、(4)無憂最勝吉祥、(5)法海雷音、(6)法海勝慧遊戲神通、(7)藥師瑠璃光、以上の七如來を云ふ、(1)より(6)までは(7)の藥師佛の分身である。七佛藥師の壇を造り、息災または安產などの祈禱をなす修法を七佛藥師法と云ふ。

しちべん　玉座に續いて大理卿大江の匡房、三公九卿八座七辨席を連ね(隅田川)

〔七辨〕左右の大中少の三辨に、權中少辨の一人を加へて云ふ。

***しちほう**　七寶莊嚴の羽車(用明天皇)

〔七寶〕七つの珍重すべき寶を云ふ。無量壽經に、金・銀・瑠璃・頗梨・珊瑚・瑪瑙・硨磲を云ひ、大智度論に、金・銀・瑠璃・頗梨・硨磲・瑪瑙・赤眞珠を云うてある。

***七枚起請**(しちまいきしやう)　變るまいとの七枚起請書いて二人が取交す(とりかは)(生玉)　幾夜幾夜の憂き勤、七枚起請空誓文、日本國の神樣(かみさん)を欺した罪か(女腹切)

起請は誓ひ文である。これを熊野權現または二月堂などから出す牛王の誓紙七枚を繼合せて書く、これを七枚起請文と云ふ。色道大鑑に、二月堂の牛王誓紙七枚に細字に起請文を書くことと見え、好色堪忍破袋(寶永八年刊)卷一に、「惡性な事には人ごとに念が入過ぎて、半枚でも埒の明きさうな物を七枚起請などとくどう書かせて取りたがるもをかし」と見えてゐる。「きじやう」「ごわう」をも見よ。

***じちめ**　諸國に弘め給ふよし幸の結緣、そと聽聞申度く候とじちめらしくいひければ(一心五戒鬼)

〔實目〕眞面目(まじめ)。和訓栞に、「じちめ。俗語也、實面也といへり」。

***しちやう**　入鹿が仕丁五六人ひしひしと打みしやがれ、同じ枕に死してげり(大職冠)

〔仕丁〕貞丈雜記辨に、「仕丁とは人の召使ふ人夫なり、仕はつかふるなり、丁はさかんとよみて年齡壯に強き者を云ふ、……この說非なり、丁は下男と云ふ義なり、仕丁駕輿丁庖丁匠丁などの丁なり、歌によぼろとよむ」。「してう」をも見よ。

しちりけんばい　自ら御威勢衰へ國家の大事となること鼻の先にぶらつけども、諫言申す人は七里けんばい、毛鎗頭の長慶狸大淀狐どれぞ一匹蹈殺さんと存じての狼藉(女夫池)

「七里結界(しちりけつかい)」(結界はその條を見よ)を「しちりけつぱい」と訛り、更に「しちりけんばい」となつたのである。忌はしい事など人の言ふを嫌うてよせつけぬ意にいふ諺。弘法大師行狀記・十に、「惡神等は皆我結界七里の外に出去」。異本卜養狂歌集に、「七里けんばい花によきよ春の風」。

***しづ**　しづも昔は戀をみがき年中廓(くるわ)に入ひたり(淀鯉)　君さへ合點なさるればしづが聟になるちやげな(卯月紅葉)

〔賤〕「下(し)づ」の義。下拙。拙者。(幇間などの用ひた自稱代名詞を粹言葉のやうに用ひたものであらう)。

***じつかい**　一心則十界に遍滿して自在をなすを佛といふ(用明天皇)　一念佛性三世十方に通達し、十界一心平等大慧有無の間の中道實相、上天の事は聲もなく香もなし(大織冠)　見よ見よ十界の內に魔界なし、一界げんぜんたれば九界降伏す(源義經)

〔十界〕地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛。以上の十界は皆吾人一心の所作であつて、その體差別無かるべきである。この平等の理を證し實智を得るを、「十界一心平等大慧」と云ふ。「十界の內に魔界なし云云」とある一界は十界中の佛界を指すものなるべく、「げんぜん」は現前て顯現の意である。地獄界乃至佛界の十界中には魔界なく、佛界が顯現した時には、佛界に對して他

用ゐて文飾したのである。

しなもの さも若若しく結立てて、跡が十七花ざかり、ぼつとりものの しなもの様、おやちよいちよいとぞ譽めにける(井筒) それは兵これ等はしな者通り者、裃襠の裾長廊下・御寢所近く相詰むる(關八州)

〔品者〕嬌態媚容の女をいふ。「しな」は「しなやか」の「しな」と同じ語で、なよなよしい義。好色伊勢物語(貞享三年刊)に、「ぬれもの、いろ好む女をもいひ、すぐれたる姿をもいふ、ぬれもの、しなものといふも同じ詞なり、吉彌といふ女方を譽めていひ出したる詞とぞ」。旅枕(元祿八年刊)に、「さても世にいふなる品ものとはいかなるをかいふぞといへば、風俗しやんとしてべたつかず、物言ひゐすまひ帶のしやう衣裝、文の文言に至るまで細かに心を付けて思はくをかけ、ただ打臥すとても姿優しく、ひとりはとても物の隙間なんどより人のかいまみん事もやと心ひまなくたしなみ、人の心を汲むこと見通しの晴明そこのけにて、やさしきを品者といふ也」。御前義經記(正德二年刊)巻一、傾城の因緣の條に、「前漢書とやらに、李夫人と云ふぼつとりものの品もののほめ詞に、北方有二佳人一、絕世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一」。

***しなん** 御家中の方方へ鼓の指南仕り(堀川波鼓)

〔指南〕藝術などを教導すること。文選・張衡東京賦に、「予習レ非而遂迷也、幸見レ指二南於吾子一」。

***しに** 生畜生の死畜生と、所存極めし涙の體(今宮) しに女郎のふりばりめ竹の鞭をくらうなよ(丹波與作)

〔死〕人を叱り又は罵るときに、その言葉を強める爲に、「生」又は「死」の語を相手を指す詞の上に添へていふ。ここには「死」の添はつてゐるのを擧げたのである。「いき」を見よ。

***しにす** 店一軒の主になり商賣もしにせて、親方一家を振舞ふとは(今宮)

「しにせ」(「爲似」で、父祖の家業を守り繼ぐ老舗の義)を動詞にした語で、商賣を漸次に仕上げて繁榮にするを云ふ。心中天網島中巻に、「商賣は所がらなり、しにせなり」とある「しにせ」はこの語の名詞である。老舗。井原西鶴撰・本朝櫻陰比事・巻一、太鼓の中は知らぬが因果の條に、「僅少四貫目に足らざる借錢、これにて數年のしにせをやむる事あるべきか」。

しにびかり 兄弟の男子に前輿後輿舁かれて、あつぱれ死光やらうと思うたに(女殺)

〔死光〕死後の光榮。死にばえ。井原西鶴撰・日本永代藏・巻五に、「其一身一代は樂といふ事もなく、子孫の爲によき事をして八十八にて空しくなりぬ、死光のして折しも十月十五日」。

***しのぎ** 兄弟今を限りと死ぐるひ、大勢に渡り合ひ鎬を削り戰ひける(聖德太子)

〔鎬〕刀のむねに高く聳えたる所の稱。「鎬を削る」とは刀を打合ふ義であつて、烈しく切合ふを云ふ。曾我物語・祐成討死の條に、「鎬をけづりあひ時を移して戰ひける」。

しのづか われが今重井筒としのづかに、言はれ岩井の半四郎(重井筒) 篠塚次郎左を見るときは、大佛島を思出す(今宮)

〔篠塚〕大阪の歌舞伎役者篠塚次郎左衞門を云ふ。寶永六年頃まで敵役を勤めて後に立役になつた。役者謀火燵(寶永七年刊)立役之部に、「上上白吉。篠塚次郎左衞門。今難波の當り男は篠塚、諸人にかはゆがられ、實悪にして片岡殿よりよいよいとの評判、諸見物手を入れ、なんなく實方になりすまされた、……去年まで實悪で黑吉の御位、當年より立役ゆゑ白吉、やせ肉な音羽殿と引合、大兵なれば引取つて來年は黑吉」。今宮心中のこの文は、篠塚次郎左衞門が大兵なるによつて、奈良の大佛をきかせて大佛島と云うたのである。

***しのび** もとより三保谷折よくば討ち奉らん下心、忍の柄に手をかけ(吉野忠信)

〔忍〕忍刀の略。

***しのびがへし** 大門變じて鐵門の忍がへしは劔の山(用明天皇)

〔忍返〕惡者の忍入るを防ぐ爲に、塀などの上に尖つた竹又は釘などを突出した柵。

しのぶずり 奥州の錦木忍摺、いづれ奥は戀所(源義經) 茶字の袴のしのぶずり、亂れ逢ひし密通の(雪女) この春嫁入つて人中をしのぶもぢずり信夫布、折目正しく着こなせし(最明寺殿)

〔忍摺〕布帛に忍草の莖葉を種種の色に摺附けたものにて、陸奥信夫郡から產出した。忍摺はその文亂髮のやうに捩れるさまなれば、「忍摺亂れ」とも「忍捩摺」とも云ふ。古今集・戀部の歌に、「みちのくの忍捩摺たれゆゑに、亂れそめにしわれならなくに」。

しのべだけ 向の藪のしのべ竹、五加木交りの籬や(藻靜) まばら朽ちたるしのべ竹、踏込む足を踏留めて(博多)

節延竹の義であらう。「しのめだけ」また「めだけ」とも云ひ、節と節との間の長い竹である。生垣に植ゑ、またこれを切つて籬に張る。雍州府志(貞享三年刊)六に、「竹。一種其莖細長、而其葉片大也、是稱二女竹一、又謂二忍竹一、健レ是比並而爲レ垣、又半破レ之縱橫結二束之一、爲二墻壁之骨一、或貼二窓間一」。嬉遊笑覧・一に、「しのべは節延なるべし、江戸などにはしの竹と略呼す」。

しのをつく しのをつくなる吹き降りの雨の足音風の音(加增曾我) しのをつくなる吹き降りに(川中島)

「しの」は篠、「つく」は束ぬの義である。篠を束ねたやうに降る雨の意で、豪雨のさまを形容して云ふ。

しばうち 冠の板より芝打まで、金具に打つたる忍草(三國志)

〔芝打〕草摺の下端・裾をいふ。

しばさき 六義を正す柴崎に思案橋を思出す(今宮)

〔柴崎〕柴崎林左衞門をいふ。大阪の歌舞伎役者で立役を勤め、家老役などを得意としてゐたことが役者謀火燵。(寶永七年刊)に見えてゐる。ここの文は、柴崎が家老役などを勤めて、六義(その條を見よ)を正し思案分別するを、思案橋にいひかけたのである。

四八の相好

「さんじふにさう」を見よ。

しばつなき 雲雀の床の芝繫、とある所に乘しづめひらりと飛んで下り給ひ(小栗判官)

〔芝繫〕芝生に馬を繫ぐには繫法がある、これを芝繫と云ふ。本朝弓馬要覽(齋藤定易撰)に、「芝繫之事。芝繫は芝には馬は繫ぎ難し、繫き

三四月間夜鳴達レ旦、田家侯二其鳴一興二農事一」と見えてゐる。さるを古來「しで」を冥途の死出の山にとつて冥途の鳥とした。山家集に、「この世にて語らひおかん時鳥、しでの山路のしるべともなれ」「時鳥なくなくこそは語らはめ、しでの山路に君しかからば」と詠まれてゐる。「閻魔卒三魂を縛して云云」をも見よ。

當流小栗判官のここの文も、時鳥が冥途の死出の田長を鳴く由に云うたのである。

＊してのやま　閻の土山・死出の山、冥途の旅路通し馬（丹波與作）

〔死出山〕死天山とも書く。冥途にある山で、人死すればこの山を越えて行くと云ふ。佛說地藏菩薩發心因緣十王經に、「閻魔王國堺、死天山南門、亡人重過、兩莖相逼、破レ膚、折レ骨漏レ髓、死而重レ死、故言二死天一」云云」。

＊してん　十神降魔の力を合せ二天四天の勇なかるともこの縛めを何とせん（唐船噺）

〔四天〕四天王を云ふ、須彌山の半腹に世を護り正法を護る天王があつて、東なるを持國天、西なるを廣目天、南なるを增長天、北なるを多聞天と云ふ。同じ社會にてすぐれた四人の者を四天王と渾名することもこの佛說から出た。

＊してんか　御記念の御說法、四天下の人民名殘を惜み（釋迦）

〔四天下〕須彌山の四方にある四大洲を云ふ、東なるを弗婆提、西なるを瞿耶尼、南なるを閻浮提、北なるを鬱單越と云ふ。

してんだう　世間の榮華を樂しむといへども四顚倒の憂ひ少時も離れず（釋迦）

〔四顚倒〕迷界の衆生は明智なき故に正理に對して四種の顚倒せる妄見をなすを云ふ。卽ち(1)世間を常住不變なるが如く觀じ、(2)非樂を樂なるが如く觀じ、(3)一切諸法は我なるが如く觀じ、(4)この肉身の非淨を淨なるが如く觀じること。

してんわう　「してん」を見よ。

しとぎつば　兵庫鐔の柰鍔足緒長に結下げ（三國志）

〔柰鍔〕柰（餅米を蒸して舂き鷄卵の形に造つたもの）の形に似た楕圓形の鍔の名。

＊しどなし　父ははらはら淚に咽び、歸らんといふ嬉しさに、父の病を何とも言はず（鬠庚申）　夫婦いさかひしどもなし（用文章）　思ひに暮れて氣も亂れ、何を言ふやらしどもなし（西王母）　我ながらしどもなや、氣が違うたか南無三寶（二枚繪）

「しづ（靜）なし」の轉か。「しどもなし」「しどけなし」ともいふ。靜に落着きの心がない。心亂れておちつかない。しまりない。和訓栞に「しどなし＝しどけなしの略なるべし、無二仕途一の義」といへるはいかが。横笛（古淨瑠璃）第四に、「あら戀しの父上やと、しどなき言葉も弱弱と、語り歎きて居たりけり」。好色五人女卷三、姿の關守の條に、「髮はいつ櫛の齒を入れしや、しどもなく亂れしを、ついそこそこにからげて」。

しどふに　四土不二隔ても七基は八大地獄と鳴神の、山は鐵城水は淸劔（賀古教信）

〔四土不二〕天台宗では、凡聖同居土、方便土、實報土、常寂光土の四土を立つ。されど圓融の理から觀れば四土總て不二である。ここの文につきては「山は鐵城云云」をも見よ。

＊しどろ　口はろくぢを分けながら胸はしどろの山坂や（反魂香）　足もしどろに行過ぐる（女腹切）　心もしどろに混亂し（國性爺）　しどろになつて追つかくる（百日曾我）　しどろもどろの斑牛引綱取つて引のばし（用明天皇）

「しどろもどろ」とも云ひ、物の亂れる樣に云ふ。宇津保物語・藏開の條に、「中納言しどろもどろに醉ひて」。源氏物語・梅が枝の卷に、「筆にまかせて亂れ書き給へるさま見所かぎりなし、しどろもどろにあいぎやうつきみまほしければ」。謠曲・鳥追船に、「思亂れて心しどろもどろに鳴る鼓の」。

しとんはちべん　四とん八べん流るる如く語り給へば、往來は皆禮して通りけり（蟬丸）

四辯八音を「しべんはつとん」といへば、それを「しとんはちおん」と誤つたのである。「はちおん」（八音）は「はつとん」と轉じるが、「しおん」（四音）は「しとん」とは轉じない。四辯八音は佛の有せる辯舌である。四辯は四無碍辯の略で、卽ち法無碍辯、義無碍辯、辭無碍辯、樂說無碍辯をいふ。八音は極好音、柔輭音、和適音、尊慧音、不女音、不誤音、深遠音、不竭音をいふ。增補松の落葉・首卷、曾我かけ物揃の唄に、「四辯八音よどみなく語り給へば」。（序に云、巢林子は「四辯八音」を知らなかつたのではない。「しべんはちおん」を見よ）。

＊しな　この上は德樣も死なればならぬしなるが、死ぬる覺悟が聞きたいと、獨言になぞらへて足で問へば（曾根崎）

折。場合。「行きしなに」「歸りしなに」「橋を渡りしなに」などいふ「しな」と同じ語である。萬葉集・卷十四・東歌に、「阿抱思太毛安波乃敝思太毛奈爾己曾與佐禮」とある「思太」も、ここに云へる「しな」と同義語である。

＊しなかはおどし　品革縅の絲毛の鎧（川中島）

「しだかはおどし」（齒朶革縅）の訛。藍地に齒朶（裏白のこと）の葉を二枚抱合せにした紋樣を白く染拔いた縅。

死なずがひな目　理窟に詰つて擧句には、死なずがひな目に遭うて一分は廢つた（曾根崎）

死なんとする價な目の義。生命がなくなる程なひどい目。「がひ」は甲斐など書けど、價の義である。「がいに」の條をも併せ見よ。

＊しなだれる　白犬が見知つて尾を振つてしなだれる（淀鯉）　此方も憎かろ筈がないと、しなだれ寄つて手を取れば（生玉）　龍田の藤と云ふしなだれ男纏付き（淀鯉）

「しなへたれる」（撓垂）の義。でれでれともつれつく。

しなのごま　北國立ち・關東立ち・信濃駒・甲斐駒（大磯虎）

〔信濃駒〕信濃から產出する駒。拾芥抄中卷、年中行事部、八月の條に、「十七日牽二甲斐穗坂馬一、二十日牽二武藏小野御馬一、二十三日牽二信濃望月馬一」とありて、信州望月・甲州穗坂などは古來馬の產地である。

しなのつむぎ　死なねばならぬ信濃紬の絲よりも心が細く氣も弱く（生玉）

〔信濃紬〕信州から產出する紬。絹布重寶記に、「信州紬。結城に似て野品なり、然れども器用なる絹なり、深山に織出すなり、幅も狹し染上大分の違なり」。ここの文は、死なねばならぬしなに信濃紬をいひかけ、頭韻語を

じふにいんえん 我朝にては弘法大師十二因緣を表し十二點をそめ給ふ(三世相) 法性隨妄の雲厚く十二因緣の峰にたなびき(一心五戒魂)

〔十二因緣〕無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二に就いて、過去と現在・及び現在と未來に亘つて因果關係を說くこと。

じふにしやう 十二しやうを織物せし袍、着する筋目あつて着る朱一貫(唐船噺)

〔十二章〕支那上代帝王の服章で、十二章は袞衣繡裳の飾である。尙書・虞書・益稷篇に、「予欲下觀二古人之象一、日・月・星辰・山・龍・華蟲・作レ會、宗彝・藻・火・粉米・黼・黻・絺繡、以二五采一彰施二于五色一、作上レ服」。

十二神將 忽ち宮殿かがやきて藥師如來と拜まれ給へば、不思議や左右に立並ぶしろしも十二神將の形を現じ(十二段)

〔十二神將〕(1)毘羯羅、(2)招杜羅、(3)眞達羅、(4)摩虎羅、(5)波夷羅、(6)因達羅、(7)珊底羅、(8)頞你羅、(9)安底羅、(10)迷企羅、(11)伐折羅、(12)宮毘羅の十二の大將を云ひ、藥師守護の神である。十二神將の姿は佛像圖彙・卷四に載つてゐる。

***じふにどう** 社人にばけて初穗賽錢十二どうをしてやられ(娍) 神降致してはお十二どうが一包、御さき祓が百二十(卯月潤色) これこれ軍神の十二どう、今一つ足らざるぞ(今川了俊) 院號受けたる若手の先達、新客まじり十二とう組、吹出す法螺のかひがひしげなる金剛杖(女殺)

〔十二銅〕銅は燈とも書いてある。燈明料として賽錢十二文を白紙に包み、捻りて神佛に捧げる。これをお十二銅と云ふ。十二文は十二ケ月(卽ち一年)に當てたわけである。色里三所世帶(貞享五年成)京の卷に、「然も今年は正月に閏ありて、……淸水寺の子安塔に十二銅の絕ゆる間もなく、當年の包紙十三文づつ、目に見えて一文づつの德云云」と見えてゐる。增補俚言集覽に、「十二銅。秉穗錄に、唐六典に供下修二理佛堂一寫中一切經上、道士女道士僧尼各施二錢十二文一と、今十二銅を賽錢とするに似たり、正章が千句に、ねぎごとをいひてかかぐる十二灯、十二銅はもと十二灯にて、燈明を奉る料なるべし」。「十二とう組」は十二燈組である。組は連中または社中の意である。山伏になるを組入と云ひ、山伏から還俗するを組除と云うた。山伏が新參者を組入れて山上講(その條を見よ)をつくり、道中社社に賽錢をうつて行くによつて、「新客まじり十二燈組」と云うたのである。

十二日 「藥師如來の緣日」を見よ。

じふにのぐわん 我は當寺の本尊瑠璃光佛、衆生の病苦助けん爲この筐谷にかげを殘し、十二の願を滿てんと欲す(十二段)

〔十二願〕藥師瑠璃光如來の十二願を云ふ。卽ち(1)光明照耀願、(2)身如瑠璃願、(3)受用無盡願、(4)大乘安立願、(5)三聚具足願、(6)諸根具足願、(7)衆患悉除願、(8)轉女成男願、(9)安立正見願、(10)繫縛解脫願、(11)饑饉安樂願、(12)衣服嚴具願を云ふ。詳しくは藥師經を見よ。

十二の頭陀 四分律に十二の頭陀を說かれたる(孕常盤)

頭陀は梵語(Dhuta)である、抖擻と譯す。諸の煩惱を抖擻するの義である。頭陀の行法に十二種あること四分律に見えてゐる。佛說十二頭陀經にも、「……形心淸淨行二頭陀法一、行二此法一者有二十二事一、一者在二阿蘭若處一、二者常行二乞食一、三者次第乞食、四者受二一食法一、五者節二量食一、六者中後不レ得レ飮レ漿、七者著二弊納衣一、八者但三衣、九者塚間住、十者樹下止、十一者露地坐、十二者但坐不レ臥、云云」。「づだ」を見よ。

じふにのなげ 十二のひねり十二のなげ(井筒)

〔十二の投〕相撲道にて十二の投手がある、卽ち、投、逆投、負投、搦投、首投、はりま投、掛投、突矢倉、矢倉、下手矢倉、八柄、逆手投。

じふにのひねり 十二のひねり十二のなげ(井筒)

〔十二の拈〕相撲道にて十二の拈手がある、卽ち、上手透、出、叩込、腕拈、ひさご廻、鴫の羽返、爪取、手繩、肩透、まがひ笑出、しきこまた、つつき蹴返。

***じふにひとへ** 十二一重の袖の香も、長柄の銚子女官の酌(百合若)

〔十二一重〕內衣、緋の袴、單、五衣、打衣、表着、唐衣、裳、と襲ねて着たのを云ひ、官女の正裝である。

***じふねん** 百萬遍の御回向より、聞入れたとの御一言、智識長老のお十念を授かる心(脊庚申) 十念過つて一念の、聲諸共にぐつと刺す(脊庚申) 彼方の十念授かり、諸分の五重相傳受け(薩摩歌)

〔十念〕十聲の稱名念佛(南無阿彌陀佛)をいふ。淨土宗にては「令下聲不レ絕具二足十念一稱中南無阿彌陀佛上」の文に依つて、檀徒の者にもお十念を授けることを行ふ。薩摩歌のここの文は、男女の緣結びの添いところを授かつた意にいひなしたのである。

しぶのみでし 太子樣の御慈悲に白髮頭剃りこぼし、四部の御弟子の一分にて後生を助けたべなうと(聖德太子)

〔四部御弟子〕四部衆ともいふ。卽ち、比丘(僧)、比丘尼(尼)、優婆塞(信男)、優婆夷(信女)。

じふはちささぎ 廿い盛りの十八ささぎ、柔かな內を一口食うて(鎗權三)

〔十八大角豆〕ささぎの一種であつて莢が長い。ここの文はお雪の十八歲をいひかけたのである。

***じふはつこう** 松も女松の十八公、その年頃の振袖の(鎗權三) 名取の松梅二十五人に十八公、配膳は鹿戀の女郞五十人づつ(曾我扇)

〔十八公〕松をいふ。太夫(遊女の位)を松とも云へば、從つて十八公とも云ふ。「たいふ」を見よ。十八公は松の字を分解したのである。謠曲・高砂に、「松は萬木にすぐれて十八公のよそほひ」。三國吳志に「丁固仕二孫皓一爲二司徒一、吳書曰、初固爲二尙書一、夢三松樹生二其腹上一、謂レ人曰、松字十八公也、後十八歲吾其爲レ公乎、卒如レ夢焉」。

***じふばんぎり** 隣丁八丁九丁町、十番斬の五月闇、夜討の入りたる如くなり(鎗權三)

〔十番斬〕建久四年五月二十八日の深更、曾我二子(祐成・時致)富士裾野の假屋に亂入して、亡父の仇工藤祐經を斬殺し、賴朝の寢所近く

かねたる芝野にも此教を以て繋ぐべしといふ心にて、芝繋とは古人の名付けたるなり」。

*しばりくび　兄が知れば親が知り、髮を剃さぬ其内に縛首打たるゝ沙汰(薩摩歌)

〔縛首〕麻繩にて罪人を後手に縛り、首を前に引いて斬落すこと。

*じばん　今は布子と襦袢とたつた二枚(丹波與作)

〔襦袢〕葡萄牙語(Gibao)である。訛って「じゆばん」とも云ふ。肌着。

しびとばな　いつそ殺して死人花にして貰ひたい(千疋犬)

〔死人花〕曼珠沙華の異名。物類稱呼卷三、生植の部に「石蒜＝中國及武州にてしびとはな又ゆうかんばな又きつねのかみそり、……、まんじゆしやげと云有種類なり」。山麓堤防などに自生する多年生草本で、地下に水仙に似た鱗莖を有し、秋季一尺許の花軸の頂端に紅色の美花を開き、花蓋は六片、雄雌蕋は長く花外に突出す。

*四百四病　藥の湯元と聞くからに四百四病は消えもせん(反魂香)

人の病を種別して百一の風病、百一の黃病、百一の痰病、百一の總集病、總て四百四病あると云ふ。大智度論に、「四百四病者、四大爲身常相害、云云」。

しひんせき　「くわげんけい」を見よ。

*じふあく　十惡五逆の眠を覺し(歌念佛)

十惡人の北治兵衞死に次第とも捨置かれず、跡から跡まで御厄介(天網島)

〔十惡〕殺生・偸盜・邪淫(以上身業)、妄語・綺語・惡口・兩舌(以上口業)、貪欲・瞋恚・愚癡(以上意業)。

じふかいごく　十界互具の本尊より血を出せし嚴罰立どころに報い來て(大覺)

〔十界互具〕一代大意鈔などにも見えてゐる語で、十界互に十界を具せることで、一念三千の根基の法門をいふ。

じふかいのわか　「じつかいのわか」を見よ。

*しぶく　縮緬は風にしぶき面倒な、重ねておけろ是をくれる(宵庚申)

〔繁吹〕風はげしう吹きつく義。縮緬は風に吹かれてべらべらする意にいうたのである。

しぶく　寢る時は採鬮でしぶいてこい、先それまでは一杯あげてしよげるべい(女楠)　幸ひあたりに人もなし、ちとしぶいて見せませうと(西王母)

「しびく」を「しよびく」といひ、更に「しぶく」と訛つたのである。傍からひく。誘ふ。和訓栞に「そびく＝人をそびくといふは傍牽の義なるべし」とある。蓋し「おびく」(欺き誘ふ意)も帶引くの義なら、「そびく」も衣引くの義であらう。

*じふく　樽肴黃金時服さまざま音物持たせて(反魂香)

〔時服〕その時候に相應する衣服。(この語の用ゐられてゐる古いものには、續日本紀・卷十二、聖武天皇天平八年冬十月の條にも見えてゐる)。

十五は阿彌陀　病付は跡の月十二日、むむ藥師如來の緣日、十五は阿彌陀と、懷中の書籍繰ひろげ(女殺)

釋尊は二月十五日に入滅された。十五日は釋尊の忌日であつて佛樣の日といひ、阿彌陀の緣日である。黑川道祐編・日次紀事(延寶年中成)二月十五日の條に、「佛滅日。洛内外諸寺院掲二涅槃像一、各修二法事一」。風流曲三味線(寶永七年刊)卷三、八百兩が夜ぬけ姿の條に、「今宵は十月十五日願くは佛樣の日死にたや」。

*じふざいにん　我ながら十ざい人、今までもそなたに恥ぢ止めう止めうと思ひしが(重井筒)

〔十罪人〕十惡(その條を見よ)の罪を犯した人。

十三束三伏　十三束みつぶせ暫しかためてひやうと射る(加增曾我)

束は手の握、卽ち指四つ伏の幅である。三伏は指三本並べた幅。普通矢の長さは十二束なれば、十三束三伏の矢は餘程大きな矢である。

じふし　十しも過ぎてこれぞこの、小川通りは三途の川(大經師)

〔十死〕舊曆上の語。大雜書(寬永十一年刊)に、「十しとは大惡日なり、わろし」。ここの文は、大經師に緣ある曆上の語を用ゐて文飾した祭文である。

十四經　公時が細工按摩十四經、ちつと痛いを堪忍せいと、首ぐつと引拔き(關八州)　素問靈樞・十四經(冷泉節)

漢方醫學では、人體内の筋肉のみち十四あるといふ。和漢三才圖會・卷十一、經絡部に、「手有二三陰三陽一、足有二三陰三陽一、共謂二之十二經一、任脈・督脈共爲二十四經一、――共合六百六十穴」。源氏冷泉節にある十四經は、許昌奇伯仁撰述の漢方醫書をいうたのである。また元滑壽撰述の十四經絡發揮は三卷あつて、享保元年の我か版本もある。

じふじよう　九識の窓の前、十乘の床のほとり、瑜伽の法水をたたへて(天神記)

〔十乘〕天台の十乘觀法である。卽ち(1)觀不思議境、(2)眞正發菩提心、(3)善巧安心、(4)破法徧、(5)識通塞、(6)道品調適、(7)對治助開、(8)知位次、(9)能安忍、(10)無法愛。下根の人は十乘を全修して漸く道場に至るを得るのである。この十乘觀法は吾等が心の安住すべき所であるにより、これを床に喩へて「十乘の床」と云ふ。「くしきのまど」をも見よ。

じふしん　十神降魔の力を合せ、二天四天の勇なかるとも、此縛めを何とせん(唐船噺)　十神力をあらはせば一日も百千歲、迷ひの衆生は以如半日(百日曾我)

〔十神〕(1)吐舌相、(2)通身毛孔放光照十方、(3)謦咳、(4)彈指、(5)地六種動、(6)普見大會、(7)空中唱聲、(8)南無釋迦牟尼、(9)遙散諸物雲聚而來、10)十方通同、以上の十神力を云ふ。

*じふぜんのくらゐ　我十善の位に卽かば名虎を攝政關白(井筒)　誠に朕が第四の宮と生れ十善の位をもしろべき身が(蟬丸)

〔十善の位〕天子の位。十惡(その條を見よ)を犯さない者が天子に生れるといふより、十善を天子の意に云ふ。

じふぢのぼさつ　十地の菩薩五百羅漢(釋迦)

〔十地の菩薩〕十地の階位にある菩薩。無明の迷闇を斷じて眞如を證するに、歡喜地、離垢地、發光地、燄慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地の十階がある、これを十地と云ふ。

じふでふ　十帖の名所まで申せば源氏物語枕草紙に似たれども(兼好)

〔十帖〕源氏物語の橋姬、椎本、總角、早蕨、宿木、東屋、浮舟、蜻蛉、手習、夢浮橋の十卷を合せて宇治十帖と云ふ。

部律中から要文を抄出し、四度これを監修した律本であつて六十巻ある。

しべ 鍋の煤煙では細眉作り、しべの切は痿痺の妙薬、水無き井戸は梯子の入物(博多)

「わらしべ」(稭)の略。稲藁の心。歌藥書(古寫本で、奧に「天正五年書レ之」とある)に、「藁本ハカシラノイタタキ疼ミ治シ婦人頭痛ニ殊ニ妙也」と見えてゐる。現今でも老人などが痿痺のきれる時に、疊の藁などを毟つて額に貼付けると癒るとて之を行ふ者がある。

しべんはちおん 弓矢の道は盡きせじと、四べん八おん讀む如く、世に面白き武藝の教訓(五人兄弟)

〔四辯八音〕「しとんはちべん」を見よ。

しほ 四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顏、さす汐影のわけもよき、局局の手拭は、濡れぬ隙こそなかりけれ(壽門松)

〔汐〕勤銀 (百人女郎品定所載西川祐信畫)



〔ちわく〕〔げか〕　〔ほし〕

三匁の見世女郎の稱。勤銀一匁の遊女を月と云ひ、二匁の者を影と云ひ、三匁の者を汐と云ふわけは、謠曲・松風に「月は一つ・影は二つ・みつ汐の」とあるより出たと云ふ。好色大鑑(元祿五年刊)大阪新町由來の條に、「鹽といふは三匁、陰といふは貳匁、月といふは一匁、わけと云ふは五分、此封丁付は松風の謠より出たると覺えたり」。御前義經記(正徳二年刊)に、「端女郎は鹿恋より下みせ女郎をいふなり、……位は一(勤銀一匁)を一寸とも月ともいふ、二(勤銀二匁)は二寸とも影ともいふ、三(勤銀三匁)を三寸とも汐ともいひ」。壽門松のここの文は、愛想を「しほ」(次條を見よ)と云へば、その意をもいひかけたのである。「さんもんめ」をも見よ。

***しほ** 善きも惡しきも空値なし、望み次第に召されよと、しほも無く答ゆるにぞ(烏帽子折) 目元にしほがこぼれる(丹波與作) 尼が崎とは海近く、なぜにそなたはしほがない(歌念佛) 御身が小萩を見るたびに目を細めて訝しい目付が氣に入らぬ、四十五十に餘つてしほの目の時分かえの(小栗判官)

やさしいこと。愛嬌。俚言集覽に、「笑顏のよきをシホと云ふ」。「しほらし」の條をも見よ。

***しほ** 笑ひをしほに言ひしらけ(反魂香) お梅がここへ出るならばそれをしほに和睦して(萬年草) 此度畠山の重忠東大寺再興の奉行に上るを好きしほと、まづ重忠を狙はん爲(出世景清) こりや又龐相御免御免といふをしほ、三人ぐつぐつ起上り(宵庚申) しほあひよきぞ乗取れ(用明天皇)

機會。折。和訓栞に、「物のほどよき時節をしほといふも、潮の指引より出たるなるべし、月のでしほ・入しほ・稻のかりしほ・など是也」。「しほ合」とは時分。程合。

***しほがまざくら** 彼岸櫻の雪と散れ煙となれや鹽釜櫻、汝に恨八重一重(非筒)

〔鹽釜櫻〕俳諧歳時記栞草・春三月の部に、「鹽釜櫻。この花至つて艶色あり、其樹葉殊にうるはし」。松岡玄達撰・櫻品に、「鹽竈櫻＝重瓣にて花と葉と雜り出るなり、小輪にして花形しぼみたる如し、花瓣に皺ある故しぼみたるやうに見ゆ、牡丹の還山といふものに同じ、花少し垂るる也、葉は小さし、はまでよきといふ義に號く」。

***しほくび** 上段に突く汐首もと右手を伸べてしつかと取れば(川中島)

〔汐首〕槍の穂先の柄に接した所。錦文流撰・傾城八花形に、「一つの槍先叔母御前の助骨下にぐさと立ち、しほくび越して裏かけば」。

しほごしのまつ 西行法師が汐越の松(反魂香)

〔汐越松〕越前國坂井郡濱坂の岬を汐越といふ、その處にある松。西行法師の歌に、「夜もすがら嵐に波をはこばせて、月をたれたる汐ごしの松」。

しぼさつ 三寶四菩薩日蓮の御影(大覺)

〔四菩薩〕上行、無邊行、淨行、安立行の四菩薩。

しほじり 「なりはしほじりのやうになん」を見よ。

しほちや 鹽茶を飲んで寐てくれう(淀鯉)

〔鹽茶〕番茶に鹽を少し加へて點てたものをいひ、醉を醒す效がある。

***しほで** 尾筒を左手にから卷けば、下女はしほでをかい摑み(會稽山)

〔鞖〕鞍の前輪と後輪と二箇處づつ附けて鞅と鞦とを止める紐。增補裝束甲冑圖解・下卷に「シホデは和名抄に鞖・之保天とあり、又四方手の義とて鹽手とかくは借字なり、鞍の前橋に左右、後橋に左右、あはせて四所にある金具を云ふ、是れは胸當鞦を接くる用に具ふ」。

鹽の長次郎 手をかう振上げ投げる額で鹽の長次郎、錢は手にとまつた(重井筒)

元祿頃に於ける手品師である。西鶴置土産(元祿六年刊)卷五に、「松風琴之丞年十七人形よくつかひ申候、此ほか口から水を吹いだし、壁に文字を寫し申候、品玉鹽の長次郎まさりに候」。還魂紙料・上に、「鹽屋長次郎は放下師にて、太刀かたなは更なり、牛馬をさへ呑む眼くらましに長たり、難波にて大に流行はれ、元祿の頃江戸に下れり、もと鹽屋九郎右衛門座の歌舞伎者とも、亦鹽を商ひし者ともいへり」。此人の手品は江戸でも名高かつたもので、江戸版の艶虚無僧(元祿九年刊)卷之二にも、「振袖の中へ何やら入れたる手づま、しほや長次も及がたし」と見えてゐる。

潮干る珠 神功皇后と申すみかど、新羅退治の御時潮干る珠・潮滿つ珠をもつて御船を守護し(國性爺)

彦火火出見尊が海神から貰はれた神寶である。日本書紀・神代卷に、「復授二潮滿瓊及潮涸瓊一、而誨レ之曰、漬二潮滿瓊一者則潮忽滿、以レ此沒二溺汝兄一、若兄悔而祈者、還漬二潮涸瓊一則潮自涸、以レ此救レ之」。山口縣豐浦郡の海上にある滿珠干珠の二小島に就いて傳説に、「神功皇后が三韓を征し給ふ爲に豐浦に向はれた時如意珠を得られ、河邊磯良が水中より出現して干潮珠・滿潮珠の祕法を授け奉つた」。(この二珠は彦火火出見命の得させ給うたものと同一

進んで、十人斬をしたこと曾我物語などに見えてゐる。ここの文は、女敵討の有樣が恰も十番斬の修羅場に似てゐれば、かく云うたのである。

十枚乘の附紙臺 若黨三人挾箱對の奴草履取、十枚乘の附紙臺、足打早め敵の門、物まうと言ふも訛聲（堀川波鼓）

銀十枚と書いた包紙を糊で臺に貼附けたもの。貞丈雜記・卷九・進物類の部に、「今時附臺とて黃金一枚・銀子一枚などと書きたる包紙を臺に糊にて貼附けて、金銀をば別に包みて遣る事あり、古は附臺と云ふ事なし、要脚何疋とて鳥目にて遣しけるなり、殿中にて鳥目など遣す御目事はなかりし也、附臺と云ふ物後世し出したる物なり」。巢林子作・薩摩歌に、「大鯛・昆布・柳樽・五色の稻摑・紅眞綿・附紙臺・三荷に擔はせ」とも見えてゐる。

***じふめん** 無念無念もじふ面ばかり一言の返答もなく（川中島） 貞は肘張りじふめんつくり（二枚繪） 德兵衞不義ぢやと早まるきほひ、額はじふ面ぐめんもいらず、羽織ひらりとやつやつ（丹波與作）

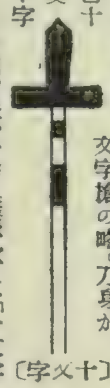
〔澁面〕澁い顏付をすること。顰面。

***じふもん** 昨日も東の横堀で男と女子と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉んづして居たないくはなか見て來た、扱になりしやら錢をついたも慥に見た、大坂の喧嘩は大方相場が極つて十文では事が濟む（歌念佛） 忠兵衞はとぼとぼと、外の工面内の首尾、心は蜘手かくなわや十文色に出て來るは、南無三寳日が暮ると足を空に立歸り（冥途飛脚）

〔十文〕總嫁（その條を見よ）即ち辻君を買うて樂しむ料金である。「十文色」とは、往來の男を見かけて袖を引き、十文にて淫を賣る女の義であつて總嫁を云ふ。好色一代女（貞享三年刊）卷之六、夜發付髮の條に、「在郷人には艷ある若衆、然も可愛らしき風俗して女房珍しさうに、同じ里の野夫と連れて出でしが、彼男あれこれ目利をして、定まりの十文にて格別の掘出しあり、と言ふを其間を待兼ねて、某は此子を好いたと、我にむつれて棚なし舟に引込まれ、自らの浪枕歌歌の首尾」。好色訓蒙圖彙（貞享三年刊）に十文色のことを記して、「暮になりては顏白く彩色き、折わげにひらもとゆひ、紅赤くぬり、鼠色には黑い帶・紺の布子には鼠帶に白襟、これも錢でかり物なり」と見えてゐる。當世娘氣質（享保二年刊）五之卷に總嫁のことを記して、「往來の袖をひかへて十文づつに情の切賣」と見えてゐる。五十年忌歌念佛のここの文意は、土百姓の野夫だけに、總嫁の淫賣行爲を目擊して、男女が喧嘩をしてゐるものと察したのである。冥途飛脚のここの文は、蜘手・かくなわ・十文字といふ劍法上の語を、十文色にいひかへたのである。

***じふもんじ** 手先の供道具、素槍片鎌十文字（堀川波鼓） あれ北から十文字の道具（夕霧）

〔十文字〕十文字槍の略。刀身が縱橫に交叉して十字形をしてゐる槍。巢林子作・薩摩歌に、「十文字は對馬の縣」とあるは、對島縣郡府中（今の嚴原）の城主、宗對馬守義方の鎗標（畫を見よ）。



〔十文字〕

じふもんじ 十文字は隼人の薩男の便きくやとて、船漕廻る島津の紋（五人兄弟）

〔十文字〕島津家（薩州）の紋所。



〔じふもんじ〕

じふもんもり ろくしやくどもも我等も、道中の十文盛搔込んだばかりで（冷泉節） 旅籠が六かたけ・酒が四升五合・十文もりが七十杯（丹波與作）

〔十文盛〕街道筋の煮賣屋で賣つてゐた一杯盛の價十文づつの一膳飯。これを「十文ぎり」ともいひ、吉野都女楠・第四に、「蜘蛛手かくなわ十文ぎりの茶碗に一杯云云」と見えてゐる。

***じふや** 此中おれが憂き苦勞、盆と正月その上に十夜・おはらひ・煤掃を一度にするとも斯うはあるまい（曾根崎） 同じ死ぬる道にも十夜の内に死んだ者は、佛になるといひますが定かいな（天網島）

〔十夜〕十夜念佛の略。御十夜とも云ふ。淨土宗にて行ふ佛事であつて、舊曆十月六日から同十五日まで十夜の間、別時念佛を修することを云ふ。無量壽經に、「於此修善十夜、勝於他方諸佛國土爲善千載」。十夜念佛は淨土宗では重んぜられてゐるので、「十夜の内に死んだ者は佛になる」といふ諺までも出來たのである。難波鑑（延寶八年刊）第六には、「十夜始＝十月七日。今日より十五日まで寺町の淨土宗の諸寺に於て談義念佛等あり、されば無量壽經に千日十夜の語あり、これにもとづきけると也、また鼓音聲經にも本文ありとぞ」と見えてゐる。

***しぶやのこんわう** あれあの繪馬は澁谷の金王が長田の庄司をきめた體（兼好法師）

〔澁谷金王〕源義朝の家來である。義朝に從うて尾張國智多郡長田の庄司をたより身を寄せた。然るに庄司は平家の恩賞に與らうと思つて、義朝の入浴中を襲つて之を殺した。金王乃ち長田の兵と力戰し、敵の馬を奪うて之に乘り、漸く血路を開いて遁れたと云ふ。假作人名部「こんわうまる」をも見よ。

じふらせつ 恐しや三十番神十羅刹守護し給へば、力なく只今は立去るなり（大覺）

〔十羅刹〕法華經・陀羅尼品に、「爾時有羅刹女等、一名藍婆、二名毗藍婆、三名曲齒、四名華齒、五名黑齒、六名多髮、七名無厭足、八名持瓔珞、九名皐帝、十名奪一切衆生精氣、是十羅刹女、與鬼子母幷其子及眷屬俱詣佛所」と見えてゐる。十羅刹は法華已前には惡鬼であつたが、法華已後には法華の持者を擁護して、佛所護念に一如する故に善鬼となつた。

じふわうがしら 十王頭の臑當を、閻魔の廳に步み行く道のしるべと出立ちたり（三國志） 十王頭に筋金入れたる脚絆（弘徽殿）

〔十王頭〕脛巾の立擧の所の稱。新井君美撰・本朝軍器考・卷九に、「古に大立擧臑當といひし物今も猶其制殘りたり、銀の磨付など云ひしも此物を白銀にて飾れるなるべし、騎馬の時此制殊に勝れしものにや、今此制に傚ひて其形小しきなるあり、（毘沙門臑當といふ其立擧の所を十王頭などいふ）」。

しふんりつ 四分律に十二の頭陀を說かれたる（孕常盤）

〔四分律〕釋尊入滅後百年、曇無德羅漢が上座

なり、願主人龍田川の折離御湯の奏拜、遍照院のわたりなど云事有て、院より假屋を立つづけ、雉子一千二百五十六羽、兎百三十四耳、狸百四十二疋足の贄をかけ並べ、公貎のかざり物献菓子などうづたかくもりて規式多し」。

しもつけ 紫菀・岩菲に芥子、繡線菊の花補に、枝垂櫻や糸柳(嫗山姥)

〔繡線花〕山地に自生する落葉灌木で、高さ四・五尺に達す。葉は長卵形をなして尖り、鋸歯を有し二互生す。花は小形であって、の離瓣花冠を紅紫色または白色なし、數多集り生じる。



〔けつもし〕

***しもと** 櫻の下枝しもと振上げ、追立てぼつ立て追廻し(井筒)

枝の繁き若木立をいひ、よつてまた細き枝で作る笞・杖をもいふ。和訓栞に「茂本の義なるべし」とある。

しもはた 布織るしもはた取組みて、庭木の松にもたせかけ(薩摩歌)

〔下機〕機に上機と下機とあつて、上機は多く紬や麻を織るに用ひ、下機は木綿を織るに用ひる。日本永代藏巻五、世渡りには淀鯉のはたらきの條に、「けふと明日との物前、さもいそがはしき片手に、下機に木綿一端これを織り下して」。

しや しやが父に似て父に似ず(壽門松)

「名乘りて過ぐる杜鵑云云」を見よ。

しや あれあれ彼處へ桔梗染の腰變り縞繻の帶、しやぢやわいの(女殺)

「君」「それしや」の「しや」であつて遊女をいふ。三島暦(貞享四年刊?)巻之一に、彌二郎が遊女みちのくの幻を、それとは知らないで其姿を評して、「かまはぬ島田髷・町でなし、……みすみすしやの果なり」。義經千本櫻・第一に「祇王・祇女・佛などといふ白拍子のしやの果が、尼になつて此嵯峨に居る故に、それで所がみだらになつたとこ」。「それしや」をも見よ。

***しや** 擂粉木しやに構へ待つて居ります(女腹切)

〔斜〕ななめ。「斜に構へ」とあるは、手にせる得物を斜に構へる義、用意ありと身構へするをいひ、劍道の語を諧謔にいうたのである。

***しや** 女と女の密通とは、しやそれがどうなるものぞ(三世相) しや堅い事ばかり、毒藥變じて藥となる、袴なりとも解かしやんせ(雪女) 手にも足らぬ雜人ばら、しや何事かあるべき(反魂香)

感動の時發する聲。猫の草子に「しや取つておさへ、あたまより嚙みひしがれ」。

じや どちらへ似ても蛇の子孫(淀鯉)

〔蛇〕蛇之助の略。大酒家を云ふ。底拔けの上戸。萩田似空撰・俳諧蘆籖(延寶五年刊)、三月三日の句に、「蛇之助に下戸や馬繫桃の酒。自休」。豐流撰・俳諧彼岸櫻(貞享二年刊)、天王寺名所の句に「蛇之助こそ執心のこつて花に酒。下也」。柳亭筆記・上の下に、「田中常矩が延寶五年二月の獨吟・二百韻巻頭の句、「蛇之助がうらみの鐘や花の暮」といふをあげて、「蛇之助は今いふ底拔け上戸のことなり」と記してある。

***しやい** 辛氣辛氣で夜の目もろくに、しやいもなき夢の氣がかり祈らんと(島原蛙合戰)

〔差異〕差別。わけへだて。ここの文は、辛氣辛氣で夜もろくに眠られねば、わけもない夢を見て氣懸りとなり、鶴岡八幡宮に祈念せうと出で立つとの意。

***じやいんかい** 佛道には邪淫戒とて、妻ならぬ妻を忌むと聞きしに(用明天皇)

〔邪淫戒〕五戒(その條を見よ)の一である。「じつかいのわか」を見よ。

しやう 虞舜と申せし賢王は、父かたくなに母ひすかしに、象傲れりとて、親兄弟に惡まれ(天智天皇)

〔象〕支那上代五帝の一なる虞舜の弟。史記・五帝本紀に「舜父瞽叟盲、而舜母死、瞽叟更娶レ妻而生レ象、象傲、瞽叟愛二後妻子一、常欲レ殺レ舜、云云」。

***じやうえど** 常江戸・脇城・國脇まで(薩摩歌)

〔常江戸〕常府とも云ふ。常に江戸に居る諸侯。

***しやうがざけ** 生薑酒して待ちませう(重井筒) どうせうかかうしやうが酒、熬附く様に氣がなつて(重井筒) けへんけへんと喘上げて、鉢卷・水鼻・誰やらん、されば候・何がしは暑や寒やの風の神、手療治の生薑酒・敗毒散に追出され(振袖始)

〔生薑酒〕すりおろした生薑に砂糖を加へ、これを燗酒の中に入れたもので、寒氣や風邪を防ぐに效がある。さされ石(古刊本)に、「生姜酒にて直す風」。及幼方巻十三、本草發明に、「生薑辛温無レ毒、歸二五臟一去レ痰下レ氣止二嘔吐一除二風寒濕氣一療二咳逆上氣喘嗽一」。

しやうがちや 今も今さる方で生薑茶をくれたを(重井筒)

「生薑茶」といふものはない。徳兵衛が房に逢ひたいと思ふ心のせつなさに、生薑酒のことから思はず生薑茶と、口をすべらしたしどろもどろの言葉である。

しやうくわう 花に鳴く鶯は醉に笙簧の調を成し(島原蛙合戰)

〔笙簧〕笙の笛の舌。禮記に、「女媧之笙簧」。杜甫の詩句に、「疎松隔レ水奏二笙簧一」。

正月買 正月買の大大盡、太夫様より付屆け(夕霧) 正月買の騷ぎぞめ、かざりの下ではしやみ彈く、梯子のかげでは寶引節分豆まき年男(壽門松) 堺の客は正月を頼まればならぬ人、ひらに遣つて下さんせ(重井筒)

正月は三ケ日を始としてお祝の日多く、遊女は全盛を競ふ折である。されば客が遊女を買うて遊ぶには、正月は多額の祝儀を要するのであるから、遊女の方でも前方から馴染客に頼んで置くのである。「正月を頼まねばならぬ」とあるは、即ちこの正月買のことを云うたものである。傾城禁短氣・巻三に、「白人と云ふは專らしろと風をして衆生をすすむるにあらずや、然るに風俗派手にして道中天職・鹿戀の品に似せ、傾城同前にして近年正月買と云ふことを始め、まづ元三三ケ日の晝夜の花代飯代、白人への祝儀に金五兩、しかも打の出る細金にて宿へ銀子五兩、下の者銀二兩、それにかかる錢とて二百文、寶引錢とて百文、布袋屋のかるた代一匁二分、手鞠代七分五りん、羽子板代が一匁と、様々のかかり物を書立てて大盡にもめをつける、云云」と見えてゐる。これは白人の正月買を云うたのであるが、白人を買ふのですら此費用を要する

物であらう。〔御〕凱旋後滿珠島・干珠島に納め給うた」といふ。

潮滿つ珠　「しほひるたま」を見よ。

***しほらし**　やあ餓鬼も人數、しほらしい事ほざいたり(國性爺)　唐猫が雄猫呼ぶとて薄化粧するはしほらしや(大經師)

やさしらしい。柔和らしい。愛らしい。貝原好古編・諺艸に、「俗に人のみやびやかなるをしほらしといふ、みにくいやしきをぶしほと云ふ、居家必備釋常■云、女人醜陋謂之無鹽、……劉向新序云、齊有婦人極醜無雙、號曰無鹽女、……是故事に據て日本にも無鹽・鹽らしなど云俗語あるにや」と見えてゐる。按じるに、「しほらし」はもと「しをらし」の假名なるべく、「しをる」「しをらし」などいふ語は、撓む意で、折れ曲る、なよなよと弱々しいの意より轉じて、やさしい、愛らしいの意にもいふのである。

しほんかかり　四本かかりの枝垂れて(持統天皇)

〔四本懸〕「かかり」を見よ。

しま　お厄は我等拾ひ除け四魔三障祟りはなし(雪女)　惡魔天魔邪魔心魔四魔の首領の僧正坊、大天狗の所爲なるわと、鼻にあらはれ見えにけり(孕常盤)

〔四魔〕煩惱魔、陰魔(新譯・蘊魔)、死魔、他化自在天子魔(新譯・自在天魔)。

しまいがた　梅花御見舞四枚肩、おりゐの衣長羽織(夕霧)　世にある時は四枚肩、飛鳥の如く虛空をかけり(吉野忠信)

〔四枚肩〕昇夫四人附ける駕籠。

しまじゆ　彼處の桔梗染の腰纏・しまじゆの帶、しやぢやわいの(女殺)

〔縞繻〕縞繻子の略。

***しまだ**　島田亂れてはらはらはら、額にはいつかはんげしやう(大經師)

〔島田〕「しめたわ」(緊手輪)の轉訛であらう。島田髷のこと。嬉遊笑覽・一に、「この曲は古く童子の髮の結樣に似て古書に多し、よりて思ふにしめ手輪の轉語なるべし、しめは緊なり、たわは髮の曲れるをいへり」。(島田の名稱は、駿河國島田驛の遊女の髮の風から起つたと云ひ、或は島田甚吉といふ俳優が結びはじめたからいひ出した名だとの說もある)。

***しまひだいこ**　仕舞太鼓の音まで も寂滅爲樂と響くなり(夕霧)

〔仕舞太鼓〕三番太鼓とも云ふ。その條を見よ

***しまわうごん**　一文不通の衆生まで千手の御手の掴取り、紫磨黃金の御肌に忽ち那智の觀世音(女殺)

〔紫磨黃金〕黃金箔を光線に透せば紫色に見えるによつて、黃金の精なるものに云ふ。ここの文は、貧家文盲の者までも皆喜捨したによつて、觀世音は忽ち紫磨黃金の福滿ちた身にならせられたといふ意であつて、「忽ち」と「那智」と同韻語によつて云ひ續け、去去年那智の觀世音の開帳のあつたことをきかせた。

しみしたたるい　(宵庚申)

しみじみとでれでれしい。

死脈　二人に死脈が打つ(重井筒)

人の將に死なうとする時脈搏急で然も微弱なるを云ふ。ここの文は以て望みの絕えた意に云うたのである。新刊勿聽子俗解八十一難經(元和三年古活字版)に、「一呼六至、一吸六至、爲死脈也、沉細夜死、浮大晝死」。百姓盛衰記(正德三年刊)一之卷に、「只今の御脈體は雀啄と申して雀のつつく樣に覺え奉る、これ死脈なれば耆附獨參にも及ぶまじと申せば」。

しめあけ　襖をそつとしめあけに後に立つても(嫗山姥)

〔締明〕音せぬやうに明けること。人に知れぬやうに聲を立てないで泣くを「しめ泣き」といふ、「しめ泣き」の「しめ」も「しめあけ」の「しめ」も同じ語で、締め抑へる義。

しめいだいし　陶淵明が漉酒巾、四明大師の律衣を着し、儒者佛者とも分き難き老居士(唐船噺)

〔四明大師〕宋の知禮大師を云ふ。四明山に居て天台の正義を弘めければ四明尊者と號した。

***しめす**　枕の刀おつ取つて有明しめし出でければ(松風)　第一は火の用心、螢程の火もしめせ(碁盤太平記)　人人は松明しめし隱れ居る(加增曾我)

〔濕〕水に濕して火を消すを云ふ。轉じて、燈火などを吹消すをも云ふ。この語現今も福山市あたりにては一般に用ゐられてゐる。「しめる」をも併せ見よ。

しめすまい　うらが樣なめら、歌・連歌にべろ都人夢にも見やしめすまい(女護島)

「しますまい」の轉訛。現今も鹿兒島・熊本地方に一般に用ゐられてゐる。「見やしめすまい」は「見はしますまい」の訛。

***しめなき**　女房には苦勞をさせ榮耀が餘つて色狂ひ、聞えぬ人ぢやと、しめなきに恨みくどくぞ不便なる(夕霧)

〔締泣〕堪へ難き悲しみに聲をもえ立てず引締めて、しぼり泣に泣くこと。「しめあけ」の條をも見よ。

しめのかみ　しめの髮を掻掴み、ひらりと乘つてしづしづと步ませ給へば(小栗判官)　三十三に捲立てしのがみ・取がみ・しめのかみ(源義經)

「しゆみのかみ」の訛。その條を見よ。

***しめのはうぐわん**　しめのはうぐわん盛國(孕常盤)

「しゆめのはうぐわん」(主馬の判官)の訛略。主馬署の首で檢非違使尉を兼ねる者を云ふ。

***しめる**　北向の八幡宮の燈明も、おのれとしめり行く先は、罪業の程思はれて(生玉)

〔濕〕燈火衰へて消えるを云ふ。「しめす」を見よ。

じめんづく　勝二郎樣の女房になる程の吾妻ぢや、じめんづくに賴むからは雫もこれに僞無い(淀鯉)

〔自面盡〕本人直に面すること。「盡」は相談盡など云ふ盡と同じ語で、名詞に添へて或限りを盡す意を示す接尾語である。

***しもざか**　銘なしの下阪、寸も燒もかはらぬを(女腹切)

〔下阪〕美濃國關孫六の家筋であつて、天正頃江州下阪鄕に住んでゐた刀匠關八郎左衞門作の刀。

霜月春日の御祭　霜月春日の御祭、兎狸をかけまくも(大職冠)

十一月二十七日から行はれる春日若宮の神事を云ふ。國花萬葉記卷三、大和國添上郡の條に、「霜月の御祭と云は若宮の神事なり、崇德帝保延二年九月十七日に初れり、其後百四代後花園院寬正年中より十一月二十七日に日を轉ぜられたり、凡そ祭禮の儀式退轉なく嚴重

より銀座が始り、遂にその名稱となつた由見えてゐる。關八州繫馬のこの文に「こくい」とあるは「こくいん」（極印）のことで、昔は「ん」を略していひ、極めの印の義であつて、金銀貨に量目、常是などを打込んで證とした印をいふ。公時が煎海老色は卽ち常是の極印同然の證據。（公時時代に常是の極印がある筈がない。これも近松が時代を無視し、元祿の公時である）。

***じやうせつ**　親子諸共九品のじやうせつに往生す（賀古敎信）
〔淨刹〕淨土。「くほんのじやうせつ」を見よ。

じやうぢうしせつぽふ
「しやうじの二法は云云」を見よ。

***しやうつき**　幸ひしやうつき御命日、ただ若君の御跡を弔ひ給へ（隅田川）
〔正月〕祥月とも書き、正忌月の意である。人の死亡した月に當るを云ふ。死亡した每年のその月その日を祥月命日といふ。

***しやうど**　我は狂氣したさうな、方角のわきまへなく何處をしやうどに行くことぞ（艷狩）親の意見は直なれど傍の取りなし橫時雨、どこをしやうどにさして行く笠や（卯月紅葉）下を覗けばとこやみに、何のしやうどは見えねども（大經師）呉服の中將雪枝は堺の濱よりしやうどもなく夜半に紛れてとぼとぼと（天鼓）
目當。當所。古文眞寶後集（永正九年の寫本、岩崎文庫所藏）卷一、漁夫辭に「行吟二澤畔一」とあつて、五山僧の註に「吟ノカタチハ荊ヲ踏ヤウニシヤウドモナイ躊躇歟」と見えてゐる。按じるに「しやうど」は「せうど」で「せんど」（先途）の音便であつて、紺屋を「こうや」といふの類であらう。そして、進み行く先といふ意から、當所の意にもなつたのであらう。

***しやうとく**　六十八でも生得堅氣（鑓權三）表の乘衆小町屋惣七生得慇懃（博多）
〔生得〕うまれつき。本朝俚諺（貝原好古編）に、「倶舍論云、人唯無二生得一。生得とはうまれつきといふ事なり」。

しやうなえのしやうなわしゆ　大磯の虎と申す流れの女、現世こそは苦あらめ未來はせめて、しやうなえのしやうなわしゆと思召し、お袈裟に召され罪を助けてたび給へと（五人兄弟）
〔商那衣の商那和修〕「しやうな」は商那・舍那・奢那・尙那など音寫し、麻に類する草の名である。「商那衣」は商那と云ふ草の皮で作つた衣であつて、麻衣と譯してある。阿毘曇經・下に、「奢那衣者、奢那樹似レ麻、取レ皮以爲レ衣」。「商那和修」は阿羅漢の名で阿難の弟子である、常に商那衣を着てゐたからこの名がある。付法藏傳・二に、「尙那和修、由二願力一故、處二母胎一著二商那衣一」。（この阿羅漢は阿難から法を受けて優婆毱多に傳へた。正法眼藏・袈裟功德卷に、「商那和修尊者、第三付法藏」と見えてゐる）。

***しやうね**　これは如何なる性根ぞと、聲を上げて泣きけれども（二枚繪）正念の床に坐し淨土の道を踏分けて（孕常盤）
「性根」の字を當てれども、もと正念から出た語であらう。「正念」は、信心を發得して失はないことを云ひ、八正道中の一である。「性根」は「こんじやう」（根性）の意に云ふ。

***正八幡大菩薩**　（鎌田）（堀川波鼓）
公事根源に、「八幡大菩薩と申御名は、御託宣に得レ道來、不レ動二法性一、示二八正道一垂二權迹一、皆得レ解二脫苦衆生一、故號二八幡大菩薩一」と見え、安齋隨筆に、「古き軍談の册子等に、武士の誓語に正八幡宮も照覽あれといふ詞あり、八幡の本地は阿彌陀なりとて八幡大菩薩と號するに依りて、神と佛と交り紛らはしき故本地をとりて正眞の正八幡大神宮といふ意たるべし」と見えてゐる。蓋し正八幡の正は、安齋隨筆の說のやうなわけによつて附いたのであらうが、後には正八幡まで神佛混合說にひかれて、正八幡大菩薩と云ふやうになつたのである。

***じやうはりのかがみ**　偖又大地の底に入るとも、一面八丈の淨玻璃の鏡に影の立添ふ如くに（用明天皇）
〔淨玻璃鏡〕玻璃は梵語 Sphatika. 水晶を云ふ。水晶の純粹透明なものを淨玻璃といひ、これで造つた鏡を淨玻璃の鏡といひ、閻魔の廳にあつて、死者が前世で犯した善惡の業報を映出すと云ふ。詳しくは十王經を見よ。

じやうびん　此の禿と申すは、じやうびん大王の御子しち札太子と申せしが（懸物揃）
常貧に、釋尊の父淨飯大王（梵名、Suddhodana Raja）をいひかけたのである。

菖蒲刀　つらや端午の紙幟、神にも世にも捨てられて、菖蒲刀の切先にかかる契りの惡緣と（生玉）軒の菖蒲のさしもげに、千千の病はよくれども、過去の業病遁れえぬ、菖蒲刀に置く露の、魂も亂れて息絶えたり（女殺）
〔菖蒲刀〕端午の節句に柳木を以て刀の形を作り、これに箔を塗つて腰に佩びた、これを菖蒲刀と云うた。井原西鶴撰・胸算用卷一、問屋の寬濶女の條に、「菖蒲刀の箔の色變り」。日次紀事（延寶年中成）五月五日・端午の條に、「以二柳木一作二大小刀一、是謂二菖蒲刀一、男兒橫二之於腰一云云」。ここの文は、折しも端午の節であるによつて、脇差を菖蒲刀にいひなしたのである。

菖蒲革の角十文字　菖蒲革の角十文字・白頭の大禿、これ越前家（薩摩歌）
槍標。（越前福井城主松平兵部大輔昌明の槍標）。


［しやうぶがは］

しやうぶついちによ　今この宗生佛一如の道理をも明さず（大原問答）
〔生佛一如〕生は衆生、佛は佛陀である。生滅ある衆生と常住なる佛陀とは別物のやうなれども、本有の理體より觀れば、二者同一であつて別異なきものである。これを生佛一如と云ふ。

しやうぶづくり　三條小橋の下細工、菖蒲作の拵も五月からの誂、何として出來ぬぞ（女腹切）
〔菖蒲作〕武家名目抄・刀劍部・十七に、「鎬造の橫手の筋なきを菖蒲作と云ふ、太平記に備前長刀の鎬さがりに菖蒲形なるを[illegible]者金村が持たることも見えて、鎬さがりとは鎬より峯の方を普通よりは薄らめて、刃の方とひとしく落したることにて、其樣の菖蒲の葉に似たるが故に菖蒲の名をおほせしたり」。巣林子のこの文は、三條小橋に三條小鍛冶（有名な刀工）をきかせ、童謠の「橋の下の菖蒲は折れども折られず、刈れども刈られず云云」を應用して、「橋の下細工菖蒲作」といひつづけた。

***じやうぶつとくだつ**　母が苦患を

…てあるから、太夫を正月買する爲には上薇の金を要したことが知られる。

正月櫻　道後の湯入り伊達染浴衣、裾に名所の正月櫻(嵯峨天皇)

國花萬葉記卷十四上、伊豫國佛閣の部、五十一番石出寺の條に、「道後より右道山越村、此所に正月十六日櫻とて、毎年此日に咲亂るる花有」。

***しやうご**　肩に刈藻を引掛け首にはしやうごひつかけ(娥)　空さゆ月さゆ千手の前、羯鼓鉦鼓和琴の役(十二段)

〔鉦鼓〕敲鉦を云ふ。念佛に和して之を敲く。

***じやうこ**　しやくり上げたる泣上戸と人目に見せし下心(二枚絵)　下戸衆には奈良饅頭、上戸には奈良諸白(大職冠)

〔上戸〕酒を嗜む者を上戸といひ、酒を飲まぬ者を下戸といふ。酒に醉へば泣く者を泣上戸といふ。餘沖序録に、「人能飲不レ能レ飲、有ニ大小戸之稱一、唐宋酒令詩話言レ之多矣、今人殆相循而云爾、或問此稱定起ニ何時一、吳志孫皓毎レ饗ニ宴人一、以ニ七升一爲レ限、小戸雖レ不レ入レ口、並澆灌取レ盡、是三國以前、事ニ麴蘗一者、已有ニ此品目一也」と見えてゐる。我國では昔時農家の貧富によつて上戸・中戸・下戸と分けてゐた。よつてこれ等の名稱を飲酒の上に轉用するやうになつたのであらう。

正・五・九月　正五九月の神詣、殊にこの頃我親と初元結の我夫、婿と舅の挨拶の(卯月袍)

正月・五月・九月を祝月といひ、神詣にはおもにこの月を選んで參詣したものである。「いはひづき」を見よ。

***しやうごん**　寺僧を召され、しやうごん樣樣作善終つて後(十二段)　隨分稼いで親達の肩助けと心願立てさんせ、脇へは行かぬその身のしやうごん(女殺)　一紙變じて衆寶のしやうごんとなり、半錢かへつて紫磨金色の光明と現はれ(用明天皇)

〔莊嚴〕おごそかに美しい義。おごそかに美しう飾ること。轉じて、飾。榮譽。大無量壽經に、「奇妙珍異、莊嚴校飾」。

じやうざん　兩頭の大蛇が常山の、山の腰きりりきりりと卷締めて頭を並べ引合ふも(酒呑童子)

〔常山〕常山の蛇は兩頭を有し、その一頭に觸れれば他の一頭至り、其中に觸れれば兩頭共に至ると云ふ故事であつて、以て前後左右相應じるに喩ふ。孫子・九地篇に、「善用レ兵者譬如ニ率然一、率然者常山之蛇也、擊ニ其首一則尾至、擊ニ其尾一則首至、擊ニ其中一則首尾倶至」。

商山の四皓　商山の四皓は龍の頭に乘る(國性爺)

西漢高祖皇帝時代の隱士であつて、東園公、綺里季、夏黃公、角里先生の四人を云ふ。秦の世を避けて商に隱れた。この四人皆鬢眉皓白であつたから商山の四皓というた。

***しやうじ**　おしやうじがあるなら、乾燕の齏物が赤いおかさに御座んする(吉岡染)

「しやうじん」(精進)の「ん」の脫落した語である。肉食を避けて素食すること。宇津保物語・國讓の上に、「しやうじ物のいと清らにして」。精進は六度(施・戒・忍・精・定・慧)の一であつて、心を淸うして道に進む義、卽ち善行を勤め身を淨め心を愼み潔齋するを云ふ。上生經疏に、「精謂精純無ニ惡雜一故、進謂昇進不ニ懈怠一故」。轉じて、肉食せぬことを云ふ。

じやうし　秦に太阿上市あつて六國を合す(嫗山姥)

〔上市〕古の支那の名劔の名。越絕書に、「楚王召ニ風湖子一、令下之ニ吳越一見ニ歐冶子干將上、使ニ之爲ニ鐵劍三枚一、一曰ニ龍泉一、二曰ニ太阿一、三曰ニ上市一」。

***じやうじつ**　上日の月卿雲客も皆皆退出せられけり(弘徽殿鵜羽產家)

〔上日〕「つかふるひ」と訓じる。當日出仕の義。貞丈雜記に、「上日の二字ツカフルヒと讀む、仕ふる日なり、今武家にいふ當番なり云云」。

***しやうじや**　婆婆に歸つて精舍を建て、その身の罪を懺悔して(賀古教信)

〔精舍〕精練行者の居舍の義であつて寺院をいふ。慧苑音義・上に、「藝文類曰、精舍者非下以ニ舍之精妙一名爲中精舍上、由ニ其精練行者之所居一、故謂ニ之精舍一也」。

じやうじやう　海水じやうじやうとして、月眞如の光を挑げ(嫗山姥)

〔瀼瀼〕閉合の貌。「一洞空しき谷の聲云云」をも見よ。「じようじよう」をも見よ。

しやうしやうてい　首尾よからうば筑前さなへ此船廻し、柳町のしやうしやうていども請出いて上方さしなへつつ走ろ(博多)

「小女郎體」の義である。ここの文は、博多・柳町の妓女を云うたのである。(柳町は博多の遊女町として其名高かつたが、今は九州大學建設された爲に新柳町に移轉した)。傾性野群談(享保二年刊)卷之二、月影は當世顏の丸山の條に、「小女郎」と書いて「しやうじやう」と傍訓してある。博多方言に孃(小女郎卽ち小孃)を「しやうしやう」と云つたのであらう。

しやうじやうのみだれ　常住酒で足ひよろつき、二番叟も高砂も皆猩猩の亂れかと思ひますとぞ笑ひける(淀鯉)　諸人の中へ亂拍子、踏んづ踏まれつ猩猩の、亂れ立つたる大勢は(吉岡染)

〔猩猩の亂〕能樂にての猩猩の亂れは、猩猩の浪を渡る足つきであつて、足を爪立てて二三歩づつよろめき、謠節も裝束も變り、能樂上の祕傳となつてゐる。ここの文は、猩猩の亂れのやうな足つきをするをかく云うたのである。

正笏一揖　(用明天皇)

禮儀正しいこと。正笏とは笏を正しうすることである。笏とは長さ一尺二寸・幅二寸ばかりの板であつて、儀式の時に公卿・神官などの持つもの。揖は手を胸に著ける禮儀である。

***しやうじん**　南天の心・正心の紫苑・龍膽のあしらひ(聖徳太子)

〔正心〕立花の法式の名。立花時勢粧・七に、「立花秘傳(諸藝小鏡(貞享三年刊)所載)抄之四、七つ枝の事、一、往昔花を指初るに法式あり、所謂心・正心・副・請・見越・流枝・前置、(胴扣抜除レ之)是を七つ枝と名付く、其理に至りては最上の祕傳にして世に知る人稀也」。



じやうぜ　公時が煎海老色はじやうぜがこくい同然(關八州)

〔常是〕江戸時代、銀座をいふ。御府内備考に、慶長中堺の町人大黑屋常是銀吹を命ぜられて

は、五穀を棄てたる罪業は五逆にまさると說きしとかや(天智天皇)

「釋迦牟尼佛」の訛。

***しやく**　亞相笏取直し(女夫池)　金づくめなる身の榮華、金の冠を着ぬばかり、しやくは持病にありとかや(酒呑童子)

〔笏〕笏の音「こつ」(骨の音と相通へば)を忌みて、その長さ一尺許なるより「しやく」といふ。朝臣神官等が正服した時は必ず持つもので、木笏・牙笏等がある。天皇のは上を一文字にし、臣下のは角を取りて圓くす。儀式の順序などをその裏面に貼りて備忘とすることがある。衣服令に「一品以下五位以上牙笏、六位以下初位以上木笏」。和名抄に「笏俗云レ尺、手板長一尺六寸、濶三寸・厚五分也」。「しやくは持病」とあるは、金の冠の緣より笏と云ひ、癪をいひかけたのである。ここの文は橘菴漫筆・巻五に、「或時茨木屋幸齋が奢に超過し、公の御咎を蒙りし後、餘事に托して例の戲文を作れり、芝居主竹田小出雲狂言の筋を思ひついて、門左衞門筆をとる、穗積以貫先生もその席に居られしが、段段作文するうち、金の冠きぬばかりと書きさして筆をやめ、夜も深更に及びぬ、明日の事と、門左衞門は歸れり、跡に以貫子と小出雲一つ蚊幮にふして話に、扨扨門左が例の妙文驚きしなり、併し金の冠きぬばかりとは、町人の事蹟に狂言綺語ながら甚だしきに過ぎたり、明日書き直させ候べしと、小出雲申しけるに、以貫子のいへるは、いかさまけやけき言葉なり、定めて門左了簡あるべしと寐られける、翌日門左衞門來りて、よべのあとを書かんと、金の冠きぬばかり、癪は持病にありとかやと續けたれば、兩人は慨然たりしとかや」とあつて、有名な文である。

じやくくわん　此君弱冠の昔より軍術劔術妙ありて、士卒をなづけ給ふ事(大礒虎)

〔弱冠〕二十歲をいふ。禮記・曲禮に、「人生十年曰レ幼學、二十曰レ弱冠」。

しやくじやうじゆげ　「せきじやうじゆげ」を見よ。

しやくせんだん　むむそれで聞えた、嘉平次のしやくせんだんと打笑ひ(生玉)　好色修行と心ざし通ひ詰めた其擧句(あげく)が、それはいかいしやくせんだんの阿彌陀佛まで質屋へ飛し(女楠)

「赤栴檀(しやくせんだん)」に「借錢」をいひかけたのである。赤栴檀は栴檀木(「せんだん」を見よ)の赤色を帶びたものをいひ、香木である。生玉心中のここの文につきては、「さがのしやか」「びしゆかつま」をも見よ。

しやくなんげ　死骸の兩眼を抉り出し石南花の葉に包み(懸物揃)

〔石南花〕石南科屬の灌木で、葉は橢圓形で、初夏の頃淡紅色の花が枝頭に攢簇す。我國各地の深山に自生し、觀賞用として栽培す。

しやぐはん　「しやぐわん」を見よ。

***しやくる**　治兵衞樣早う出たいと氣をせけば、せく程廻(まは)る車戸の、明くるを人や聞き付けんと、しやくつて明くればしやくつて響き、耳に轟く胸の内(天網島)　浦曲(うらわ)の蜑に馴れたる女、波も藻屑も事ともせず、引き留めんとしやくり引く(浦島)

「せきこむ」の義、激するをいふ。現今も中國地方(福山市等の地方)では、戶などたやすく明かないのをいらだち激(げき)して引くを、しやくる又はしやくつて引くといひ、尖聲(とがりごゑ)をしやくり聲ともいふ。

***しやぐわん**　裴文籍大聲上げ、やあ愚なり時平、菅丞相は唐朝へ從ひ我が國の味方なり、しやぐわんども時平を討取り(天神記)　李蹈天より韃靼王へ獻上の爲狩出したる虎なるぞ、早早渡せ、異議に及ばば打殺さん、しやぐわんしやぐわんと喚きける(國性爺)　諸侯大夫數ならぬしやぐわんでも、劔誂へに來ては何時何日に屹度出來せ・念を入れよ・氣に入られば受取らぬなどと(唐船噺)

「おにしやぐわん」の「おに」を取除けたもので、即ち「じやうくわん」(上官)の變じた語であつて、軍士といふ程の意に用ゐたのである。なほ委しくは「おにしやぐわん」の條について見よ。(難波土産・巻四に、「しやぐはんは射官なるべし」とあれど、射官といふものは日本にも支那にもない。或は「冠者」を倒さにかく云うたのであらう、などの臆說あれど、總ていかが)。

じやじやうま　「ぢやぢやうま」を見よ。

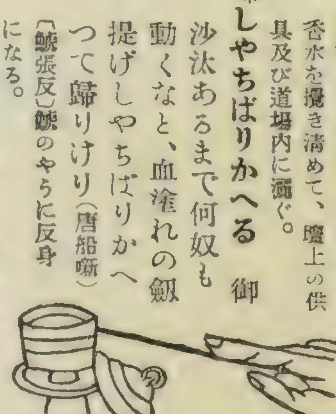
しやしやり　「味(あぢ)もしやしやりも云云」を見よ。

***しやしよく**　宗廟社稷の大小の神祇王法を守護し給ふ故(女楠)

〔社稷〕國家の意。「社」は土の神、「稷」は穀の神である、土・穀の神は何れの國でも祀れるによつて、社稷を以て國家の意にいふ。孝經に、「保二其社稷一、而和二其民人一」。

しやすゐ　御弟子二人に灑水させ壇に上らせ給ひければ(嵯峨天皇)

〔灑水〕眞言の修法に、香水を壇上に灑(そそ)ぐ法であつて、即ち加持香水である。軍荼利明王の咒を誦して香水を加持し、散杖を以て灑水器の香水を攪き清めて、壇上の供具及び道場内に灑ぐ。



〔灑水器と散杖〕

***しやちばりかへる**　御沙汰あるまで何奴も動くなと、血塗れの劔提げしやちばりかへつて歸りけり(唐船噺)

〔鯱張反〕鯱のやうに反身になる。

しやちらごはい　さぞ眞黑なしやちらごはい肌へ、おおむくつけやうろさや(日本武尊)　これが何の藤袴、しやちらごはい皮袴と、どつと笑ひのどやくや紛れ(反魂香)

鯱(しやちこほ)張り硬(かた)い。「しやちら」に就いては次條をも見よ。

しやちらさんぼう　旦那の掛(かけ)も何(なに)も彼(か)もしやちらざんばう、近付中(ちかづきぢゆう)に痛手を負(おほ)せ動かれぬ身になりし故、ちと借錢を輕めん爲あぢな商(あきな)ひからくんで(氷朔日)

やたら。むちやくちや。合類大節用集(享保二年刊)氣形門に、「魚虎(しやちほこ)。頭如レ虎皮如レ猬有レ刺、著レ人如レ蛇咬、老則變爲二鮫魚一」と見え、同書・生植門に、「覇王樹(さはう)(さちら)。如レ掌色翠綠、上多二米點子一、葉生次レ上、稱爲二奇樹一」と見え、猫耳(享保十四年刊)に燧石の跋文に、「列居椿(つらつら)の言の葉しげり、覇王樹(さうらさつほ)のむづかしき編集の姿なれば」と見えてゐる。これらの語から考へれば、「さちら」も「しやちら」も「さつほ」も「さつほう」も、皆刺多く手のつけやうがない

逝れ成佛得脱疑なし(姨山姥) 互に修羅のきづなを離れ、成佛得脱の身となれと(井筒)

〔成佛得脱〕成佛とは衆生が菩提心を發起し修行して、迷妄を斷じ眞理を悟つて、佛果菩提を成就するを云ふ。成佛すれば身心の繋縛苦患を脱するが故に成佛得脱といふ。謠曲・藤戸に「かの岸に到り到りて成佛得脱の身となりぬ」。

章甫の冠 章甫の冠・花紋の沓(國性爺) 章甫の冠を沓に履かれんより首陽山に蕨餅を練り(雪女) 錦の袂・綾の沓・章甫の冠・石の帶(大織冠)

〔章甫の冠〕儒者などの冠つたもの、殷の世に章甫と名づけた。章は明である、丈夫を表明する所以なれば章甫と云ふ。禮記・儒行篇に、「孔子曰、丘長居宋、冠章甫之冠」。莊子に、「宋人資章甫、而適諸越、越人斷髮文身、無所用之」。

***じやうぼん** それから直に奥の所の上品上生に誘はれ參らせ(一心二河白道) 西方淨土に一文字、越ゆるは下品下用横、忽ち上品膳棚に到らんと(卯月潤色)

〔上品〕「くほんのじやうせつ」を見よ。

***しやうもん** 凡そ立花の功德には草木成佛の因緣、花散り葉落つるにも聲聞無常の悟あり(聖德太子)

〔聲聞〕説法の聲を聞いて、眞如の理を悟り世間を出離すること。この聲聞と緣覺とを二乘といひ、菩薩を合せて三乘となす。

***しやうゆやのとくびやうゑ** 蜆川の芝居の曾根崎の狂言見て、醬油屋の德兵衛と我等が思引合せ(生玉)

〔醬油屋德兵衛〕曾根崎心中に見える人物である。假作人名部「とくびやうゑ」を見よ。

***じやうらう** 若い上﨟のおやさしい、年寄と思召し嫁子もならぬ介抱(冥途飛脚)

〔上﨟〕貴人を云ふ。「﨟」は年﨟の義で、僧侶が安居の功を積んだ年を數へる語であつたが、轉じて男女ともに階級の名となり、上﨟・中﨟・下﨟などといふ。

***じやうらくがじやう** 日參の燒香雲に棚引き、しろしの松の夕嵐じやうらくがじやうの聲あれど、昔の夢をや破るらん(今川了俊) 常樂我淨の風吹けば、微妙妙音玲玲と妙法の法を說く(大原問答) 谷には常樂我淨の川波に架れる橋は西東(釋迦)

〔常樂我淨〕法性眞如界は寂靜常住にして何等の苦がない、故に常樂と云ふ。法性眞如の理を證すれば、自在無礙淸淨無垢なるを得るが故にこれを我淨と云ふ。「常樂我淨の聲」は極樂淨土の聲である。「常樂我淨の風」は極樂淨土の德風である。「常樂我淨の川波」は極樂淨土に打つ川波である。

常樂の夢 「一洞空しき谷の聲云云」を見よ。

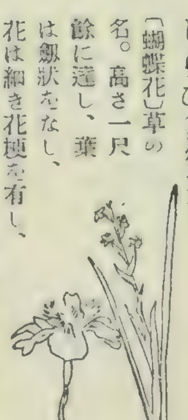
情を情に立つ この上にも我を立て、己が情を情に立て死にたくば戸棚へ入れと、泣きつ威しつさまざまに(今宮)

我が心を心として立て通す。剛情を張通す。

しやか 骨牌の締のつく祈禱にはあざぶの明神・釋迦牟尼佛(女殺) 骨牌の釋迦を握りつめた世の中(聖德太子) 若し青馬の腹へなど生れては行かれぬか・但釋迦になられたか(嵯峨天皇)

〔釋迦〕うんすんかるた(「うんすん」を見よ)に於て、青の札の内の第十の札の一枚に法師の形を畫いてあつた、これを釋迦の繪札と云うた。雍州府志(貞享三年刊)土産門下・服器部に、「凡賀留多有四種紋、……第十畫法師之形、是表僧形者也」。江島其磧撰・商人軍配團・一之卷、貧苦を切替へる骨牌の給書の條に、「長者殿の隣に、一寸外へ出ず打込んで骨牌の繪を書き、一から十迄年中是で女夫が口を過ぎぬ、不斷書いて居る釋迦の十は百あのと聞けど云云」。永田貞竹篇・狂歌机の塵(享保二十年刊)に、「かねはりてかるたの釋迦の教にはあざ萬法や一如なるらん」。「釋迦牟尼佛」・「釋迦になられたか」とあるは、釋尊また佛の意に骨牌の釋迦札をきかせたのである。「かるたのゑのつく云云」をも見よ。

しやが 長う添へとや副下に、まくらかり葉のしやがはれよげのあいしらひ(聖德太子)



〔蝴蝶花〕草の名。高さ一尺餘に達し、葉は劍狀をなし、花は細き花莖を有し、花被は紫色を帶び、花蕊は黃色である。

しやかいのごんしき 沙界の含識平等利益(賀古教信)

〔沙界の含識〕「沙界」は恒沙の世界の義。即ち印度恒河の砂の無數なるがやうに、無數な世界を云ふ。「含識」は心識を含有するもの、即ち生物類をいふ。

じやかご 蛇籠破れて石荒く(三世相)

〔蛇籠〕目粗く細長うに筒に編んだ籠に小石を塡充して、河岸などに積んで水流を塞ぐものであつて、その形遠くから見れば大蛇に似てゐるよりの名。

***しやかつらりゆうわう** 殊更當社の御神はしやかつら龍王の第三の姫宮にて、海上を愛で給ひこの嚴島に足を垂れ衆生を濟度ましますなり(百合若)

〔娑竭羅龍王〕娑竭羅は梵語 Sagara である。鹹海と譯し、八大龍王の一で、海に棲息してゐる。長門本・平家物語に、「嚴島明神と申すはしやかつら龍王の第三の姫宮云云」。謠曲・白樂天に、「安藝の嚴島の明神は娑竭羅龍王の第三の姫宮にて、海上に浮んで海青樂を舞ひ給へば」。

しやかになひ 腰のつがひを水車、水は手負の禁物と知らで手向の南無阿彌陀佛、釋迦擔して通りしは、現世の恥辱はよしやよし(國八景) 子はありながらその甲斐なく、無緣の手にかからうより、いつそ行倒れのしやかになひがましでおぢやるわと(女殺)

〔釋迦擔〕死人を納めた棺を後向に脊負ふこと。元祿・享保頃は、町内に行倒れ人ある時は町奉行之を檢屍し、その死人の在所も親族の者も知れぬ時は、その處に行倒れ人の人相などを記した札を建て置き、非人に命じて死骸を取片付けさせる。非人卽ち死體を棺に納め、後向に脊負うて埋葬地に運んだことは、元祿・享保頃の古代法・行倒人取扱ひをいへる條に記されてゐる。釋迦擔とは佛を擔ふの義である。現今加賀あたりで、小兒を後向に脊負ふことを佛ぶんぶといふ、ぶんぶは脊負ふことをいふ。

しやかもんぶつ 西天の釋迦文佛

ふざける。土佐日記・十二月二十二日の條に、「上中下醉ひすぎていとあやしく潮海のほとりにてあざれあへり」。巣林子作・燦靜胎內捃に、「ざれ深き辨慶一拗すねて」。

しゆいん 田上郡七百町の御朱印を付けられ（反魂香） 御朱印地の社司法印御機嫌に預らんと（千疋犬）
〔朱印〕武家時代に武將が其配下に下す政務上の文書に朱印を捺せるものを云ふ。その朱印狀によつて所有の保證された土地を御朱印地といふ。

從者聟 このさんが從者聟、よい牡猫添はそぞえ（大經師）
供に立つ者の聟。ここの文は、三毛の牝猫はおさんの從者であり、その三毛猫の聟は卽ちおさんの從者聟たるによつて、かくいふたのである。

しゆうぼく しゆうぼくの視る所與兵衛に指さす身の放埓（女殺）
〔衆目〕衆人の目。大學に「十目所レ視、十手所レ指、其嚴乎」とある。「十目所レ視」を「衆目の視る所」と、わかり易く言うたのである。竹本筑後掾正本七行本のここの文に「しうぼく」となつてゐる。

しゆきようさん 「しゆこうさん」を見よ。

しゆきん ちと叔父坊主が死人さばきな見習へと、しゆきんを切つて吊下せば（賀古教信） しゆきんの上帶くろくると、時や移ると石塔の（賀古教信） これは又白縮緬のしゆきん帶、衣の上によからうと氣の付いた伯母様、必す疎略になさるな（卯月潤色）
〔手巾〕長さ五尺ばかりの布帛である。その布帛を絎けて帶にしたものを手巾帶といふ、僧尼が衣の上から纏ひ前で結んだによつて手巾の上帶ともいうた。手巾帶或は手巾の上帶といふを略して手巾とも云うた。紅梅千句に「などりに出さぬうら盆の宿、花染の五尺の布や惜むらん」とある五尺の布は卽ち手巾であつて、踊に用ゐたのである。好色貝合（貞享四年刊）下卷、仕懸比丘尼の條に、「紫縮緬のくけたをしゆきんにしめ、帳一つ持て云云」。分里艶行脚（正德六年刊）五之卷に、「此尼大きに取亂し、薄化粧目に立ち、藤鼠のあはせに繻子の手巾、次第につのりて此庵を立出で云云」。



〔本朝二十不孝（貞享三年刊）所載〕

手巾帶を前にて結べり（好色貝合所載）

しゆくし いでいで平家誅罰の院宣をなすべしと、內侍達の懷中の御硯宿紙にて、宸筆の院宣薄墨に遊ばし（孕常盤）
〔宿紙〕昔時禁中の雜用に召された紙である。この紙京紙の紙屋川邊で御所の反古を漉返した紙であるによつて、紙屋紙とも云ひ、その色薄黑きより水雲紙とも云ふ。雍州府志（貞享三年刊）土產門下・服器部に、「古禁裏院中書捨反古堆盈、或有二艶書繾綣之詞等一、厭二人見一レ之則裂レ之、直使下二紙師一再漉上レ之、漉レ紙者以二故紙屋川水一洗レ之數回、合二登呂呂根汁一而漉レ之、……其浸レ水間經二三五日一、故宿二紙屋川邊一而造レ之、故俗謂二宿紙一、……今造二宿紙一者兩家、在二西洞院西綾小路通西一也」。

しゆくばう 播磨路の大名より御墓引くこそ殊勝なれ、卽ち宿坊吉祥院僧達立合ひ、石塔請取り給ひければ（萬年草）
〔宿坊〕紀州高野山は各宗の差別なく總て參詣し、或は墳墓を設け石塔を建て、各其菩提所卽ち所緣坊がある、これを宿坊と云ふ。始めて登山する人は先づ參詣人所緣坊取調所に到つて國郡町村名を語り、宿坊に案內されて此處に止宿する。宿坊は一種の旅宿屋であつて、小性衆が客を待遇する。

＊**しゆくはつ** 祝髮の後越前の法眼玉川齋永仙と號し（反魂香）
〔祝髮〕「祝」は斷の義。髮を削りて僧となるをいふ。落飾。列子・湯問篇に、「南國人祝髮而裸」。巣林子のこの文にいへる通り、狩野四郎次郎元信は世に古法眼と稱し、剃髮して玉川齋、また永仙と號した。

しゆくむら 大和の宿村が誂物を天の與へ、時の間に合せたく（氷朔日）
〔宿村〕平民以下の階級の者の部落である。宿は夙とも書き、もと守戶卽ち守陵戶より出た稱であるといふ。大和奈良あたりでは、平民以下の階級の賤民或は乞人を宿の者と云ふ。黑川道祐編・日次紀事（延寶年間成）正月の條に、「凡北京南都屠人幷乞人之所二聚居一曰レ宿、其人曰二宿者一」。井原西鶴撰・胸算用（元祿五年刊）卷四、奈良の庭竈の條に、「扨又都の外の宿の者といふ男ども、大乘院門跡の家來因幡といへる者の許にて、例に任せて祝初め、富富富富といひて町中を駈け廻れば、家每に餅に錢添へてとらせける」。

＊**しゆくゆう** 夏の神は炎帝とて、民を養ふ天の河を早苗の水に堰き下し、國を賑し悅び祝ひ給ふ故に、祝融神とも申して南方の天に立ち給ふ（天神記）
〔祝融〕夏の神。火の神。禮記・月令篇に、「孟夏之月、其神祝融」。

＊**しゆくらう** 身請の衆は親方が濟んでから宿老殿で判を消し（冥途飛脚）
〔宿老〕町內の年寄役であつて、その町の取締をしたものである。

＊**しゆご** いで守護職へ引つ立てきつと刑罰に行ふべし（三世相） 此寺は田村將軍この方しゆごふにふの靈地なるに（出世景淸）
〔守護〕室町時代の守護は國內の諸政を執つてゐたもので、大番の進退を監督し、盜賊などを逮捕し、犯罪者を裁判處斷などした。守護の牽制を受けない權門や寺社の領地を守護不入地といふた。

しゆこうさん 彼の白樂天がしゆこうさんの景氣を學び、庭前に酒の泉を湛へ（女護島）
〔酒功讚〕白氏文集・卷七十、酒功讚幷序に、「晉建威將軍劉伯倫、嗜レ酒有二酒德頌一傳二於世一、唐太子賓客白樂天、亦嗜レ酒作二酒功讚一以繼レ之、其詞曰、麥麴之英、米泉之精、作合爲レ酒、孕レ和產レ靈、孕レ和者何、濁醪一樽、霜天雪夜、變レ寒爲レ溫、產レ靈者何、淸醑一酌、離人遷客、轉レ憂爲レ樂、納二諸喉舌之內一、淳淳泄泄、醍醐沆瀣、沃二諸心胸之中一、熙熙融融、膏澤和風、百慮齊息、時乃之德、萬緣皆空、時乃之功、吾嘗終日不レ食、終夜不レ寢、以思無レ益、不レ如二且飮一」。井原西鶴撰・好色一代男・卷八、都の姿人形の條に、「折節初紅葉の蔭に自在を下し、金の大燗鍋、唐の酒功讚を移すとて、遊女三十五人思ひ思ひの扮裝」。

じゆこん 兩人來る上は萬端相談じゆこんもあるべき所（女護島） 義次

意から附いた名で、「しやちらさんぼう」も、手のつけやうがなくやたらの意である。

＊しやてい　抑先日御舍弟豫州判官殿を討ち進ずるに於ては（源義經）
〔舍弟〕家弟。弟。辭源に「舍弟＝對レ人自稱二其弟一也。魏文帝與二鍾大理一書、是以令舍弟子建因二荀仲茂時一從容喩二鄙旨一。宋司馬光書儀答二人慰問狀一云、兄曰二家兄一弟曰二舍弟一」。

＊しやなしやな　それなしろべといひ捨てて、しやなしやなふりてぞ歸りける（娥）　小棲かいとり屈（かが）んだ腰なむりやりに、しやならしやならと行くふりは（非筒）　もとの女でしやならしやなら　と立歸る（蘇摩歌）　安居・生玉清水坂をしやならしやならしやならしやならちよこちよこ走り（生玉）
「しやならしやなら」とも云ふ。しなやかな歩振を云ふ。すならすなら。狂言・釣狐（大藏流）に、「我が古塚へしやならしやならと」。

＊じやのめ　鍼按摩灸庵洗物師の蛇の目後家（島原蛙合戰）
〔蛇目〕蛇の目のやうな慳貪な目付を云ふ。伊賀越道中双六（淨瑠璃）新關所の段に、「この海道を住家とする蛇の目の眼八」、とある蛇の目も慳貪な目付であるによつて渾名（あざな）としたのである。

＊しやば　げにや安樂世界より今この娑婆に示現して（曾根崎）
〔娑婆〕梵語 Saha. 堪忍または忍土と譯し、現世を云ふ。飜譯名義集に、「悲華經云、何名二娑婆一、是諸衆生、忍二受三毒及諸煩惱一、能忍二斯惡一、故名二忍土一」。「げにや安樂世界より云云」を見よ。

しやばくぢうごうしやのほさつ（釋迦）
〔娑婆久住恒沙菩薩〕「娑婆」は現世を云ふ。「恒沙」は恒河沙の略で、恒河の沙の無數無限なことをいふ。娑婆に久しく在住せる無數無限の菩薩。

＊しやばふさげ　おのれ侍ならばなど主の敵長田は討たぬ、五穀つぶしの娑婆塞げ（烏帽子折）　樂しみもない浮世の中、兄めが常常娑婆塞げとぬかすも道理、死んでのけうと（天神記）
〔娑婆塞〕無益に生き長らへて世の中の邪魔者。穀潰（ごくつぶ）しと云ふの類である。

＊しやみ　何の道にも稽古あり、沙彌から長老になる者なし（吉岡染）　沙彌が聞けば長老が聞く（蘇摩歌）
〔沙彌〕梵語 Sramanera. 息慈と譯し、安息して慈悲の地に居る義である。始めて落飾して佛法に入る者の稱。

しやむ　鷄は唐丸・しやむ・かしは・ちやぼ・小こゝ・色色の（本領曾我）
〔暹羅〕鬪鷄である。鶤（しやも）。嬉遊笑覽に、「しやむとはもと暹羅より渡りし鷄なり」と。

しやむろ　しやむろ唐（から）染（ぞめ）色色に（融大臣）
〔暹羅〕更紗染をいふ。本朝世事談綺・衣服の條に、「暹羅は國の名なり、……、此國よりわたりたる染物を摸して日本にて染める、又華布（さらさ）と云ふ」。「まづ初春の空色に云云」を見よ。

＊しやら　しやらな丁稚あがりめ投げてくれん（曾根崎）　ひよこ・ひしこ・ひともじ、えいしやらくさい二瀬（ふたせ）仲居も小さし出（重井筒）　おお此長作が粉にはたかれても取つて見せう、やあしやら臭い常常の嘉平次とは違うた（生玉）　ああしやらくさつの三介三藏（丹波與作）　しやら臭い誰を供に、（會稽山）　しやら聲に上（かみ）する女子の取廻し（酒呑童子）
〔洒落〕生意氣。氣障りな出過ぎたこと。しやれ。「洒落臭い」といふも、生意氣臭い、生意氣めいた、と云ふ意である。「しやらくさつの三介三藏」は「しやらくさい」に「草津」（地名）をいひかけたのである。かく「しやらくさい」と云ふ語の能く用ゐられるのも、蓋し當時の口吻を傳へたものである。可笑記（寶永版）三に、「傾城といへる者は、うはべこそ宜しき小袖を着飾り、油とろとろ鐵漿（かね）黑く薄化粧に花奢めかして、しやらなる風情をおもてにし」。西鶴名殘之友（元祿十二年刊）卷之三、腰ぬけの仙人の條に、「世のはやり言葉に、人にかはりたる風俗を見てしやらくさいといふ事、泉州の堺に藤井德庵といへる俳諧師の名乘を社（しや）樂（らく）といふより、世間のてんがう口になれる始めなり」。怪談諸國物語（享保十一年刊）卷三に、「およばぬ事をするものをしやらくさい事とせわにいひならはせり」。「しやら聲」とは、洒落た聲。あだめいた聲。

＊じやらくら　泊々（とまりとまり）の赤前垂にじやらくら致さないやうに（丹波與作）
でれでれと巫山戲（ふざけ）ること。風流今平家（元祿十六年刊）今樣歌學娘の條に、「殿達の氣に入れば心にかかる憂きこともなく、酒飲んでしやらくらと面白かろといふに」。（按ずるに「じやらくら」も前條の「しやら」の變つた語である。嬉遊笑覽に、「越前の三國あたりにては、遊女のことをシヤラと云ふとあり、今もオシヤラクと云ふ」と見えてゐる。このオシヤラクもここにいへる意味から遊女のことに云ふやうになつたものである。好色三代男・卷之三、聞殘したる北國女の條に、「此所に名高きしやらには幾世花月玉川萬作などと指折りて語るを聞けば」とも見えてゐる）。

しやらさうじゆ　「さらさうじゆ」を見よ。

しやらほどけ　結ぶ心のしやらほどけ、うはべはさらぬ振なれど、下行く水の流し目は、さながら戀をふくみぬる（伊豆日記）
〔洒落解〕さつぱりと解けるをいふ。「しやらどけ」ともいふ。好色五人女卷一、太鼓による獅子舞の條に、「すこしなやむ風情に、袖枕取亂して、帶はしやらほどけをその儘に」。女大名丹前能（元祿十五年刊）卷二、戀結び雛波張良の條に「深い男と口說の花、髮しやらどけに帶しどけなく」。

しやらりん　「さらりん」を見よ。

＊しやりほつ　舍利弗・文殊の智慧にても即座にやは解くべきか（嵯峨天皇）
〔舍利弗〕梵名 Sariputra. 佛十大弟子の一であつて、佛弟子中智慧第一と云はれた。法華經科註に、「增一曰、云我佛法中智慧無窮、決二了諸疑一者舍利弗第一、又曰、暨二年十六一究二盡典籍一無二事不一レ閑、博二覽古今一演二暢幽奧一、十六大國論議無雙、五天竺土最爲二第一一云云」。

＊じやれる　今のは何も皆じやれぢや嘘ぢや嘘ぢやと（堀川波鼓）　じやれてそばえて手毬取れ取れ（大經師）　戀も盛りの顏容はみすみす情あり氣なり、何でもこれにじやれかかれば宿貸しさうなものなりと（持統天皇）
「あざれる」（文語「あざる」）の訛であつて、「ざれる」とも云ふ。人の戯れくつがへるを云ふ。

し(雪女)

〔主旱〕主取に事を缺かすこと。「ひでり」は拂底の意にいふ。男の缺乏を男ひでりといふ語もある。狂歌机の塵(永田貞竹編、享保二十年刊)に「尼寺蟲。尼寺の蟲の音さえて夜もすがら、男ひでりを鳴明すらん」。

じゆふくかく 「野崎參り」を見よ。

しゆぼだい 行ひは須菩提(大原問答)

〔須菩提〕梵語 Subhūti の音寫である。譯して善業尊者といひ、釋尊十大弟子の一人である。舍衞國の富豪で慈善心深く、色色の善事業に盡した。釋尊が祇園精舍で金剛般若波羅蜜多經を說かれた時、その對告衆の代表者となつたのも此尊者である。

しゆみだん 七重八重の須彌壇を屋形の内にしつらひ(本領曾我) 羅生門の東西に七重の須彌壇を構へ(以呂波)

〔須彌壇〕佛像或は佛龕を安置した壇であつて、其形を須彌山に象るによつてこの名がある。

***しゆみのかみ** 袴の裾に風受けて、さざ波寄するしゆみの髮、しつしつしつと乘戻し(鎗權三)

「とりがみ」ともいふ。その條を見よ。武家名目抄輿馬部に、「大坪流馬書云、あかり馬の事。先しゆみのかみを取て、かたかたの鐙をうかしておるなり、有口傳、馬あからば急しゆみのかみに取付給ふべし云云」。

じゆみやうのまつ 野田の片町大和川、ここは名に負ふ壽命の松、御代長久の岡山を歌には忍の岡とも詠み(女殺)

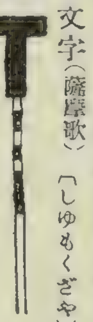
〔壽命松〕河內國北河內郡甲可村字岡山に生茂してゐた老松の名である。地名部「をかやま」「しのびのをか」を見よ。

***しゆむ** 二階に酒のしゆんだ頃祝言の石をぶちこんで(萬年草)

「しむ」(浸)の訛。酒全身に浸潤するをいひ、酒宴の酣なるをいふ。萬葉集・巻三・雜歌部、太宰帥大伴卿讃レ酒歌十三首中の歌句に、「酒壺二成而師鴨・酒二染嘗」。傾城太太神樂(寶永二年刊)巻之三に、「こよひ程話のしゆんだ事もなければ、すぐに居ながれて朝込もをかしかるべし」。富宮笥(寶永四年刊?)に、「扨やうやう酒もしみける折ふし、與介がいづれもへ披露するは云云」。近代長者鑑(正德四年刊)巻之五の挿畫に、大黑舞の繪ありて、「しゆんだはしゆんだは」と註記してゐる、酣であるとの意である。

しゆもくざや 阿波淡路兩國主撞木鞘と丸十文字(薩摩歌) 〔しゆもくざや〕

〔撞木鞘〕槍標。(德島城主、蜂須賀



淡路守綱紀の槍標)。

しゆら 修羅の獄卒(出世景清) 修羅前の御馬の口は蛇に綱つけても引廻し、雜兵の首四つ五つは寢起きになりとも仕らん(孕常盤) 修羅燃すそなたを呼びに來るも彌陀如來(宵庚申) 最勝河原か舟岡へ直に飛ばうと思ふ氣で、私が爲の修羅出立ち(反魂香)

〔修羅〕梵語阿修羅 Asura の略、六道の一。修羅族は惡心強く猜忌嫉妬妄執の念旺盛で、常に鬪爭するによつて、これを戰場に喩へて修羅ともいひ、また人が嫉妬忿懣に悶えるに喩へて、「修羅を燃す」といふ。「修羅出立ち」とは、修羅道に旅立つ義で、冥途に旅立つ姿、卽ち死裝束をいふ。「あしゆら」をも見よ。

しゆらい 泥鰌汁の集禮代、取りきる間は何處までも附きまつはるる(二枚繪) 內衆酒の燗しやれ、一つ飮んで休みたし、集禮も書付あるならば代物遣らん(氷朔日) しゆらいなきんとにせがまれて(虎が磨)

〔集禮〕飮食物などの諸式勘定。もと習禮の字で、禮式を稽古することを云うたので、史記・孔子世家に、「孔子去レ曹適レ宋、與二弟子一習二禮大樹下一」と見えてゐる。轉じて諸禮を稽古する費用をいひ、更に轉じて集禮と書いて、飮食物などの諸式勘定のことをいひ、上方詞である。似我蜂物語・中に、「あげ錢しゆらい錢急に乞ければ、延べることもくつろげる事もならずして、島原の道心者・主人にも親にも勘當せられ」。好色大鑑(元祿五年刊)大阪新町由來の條に、「太夫四十六匁、もらひのしゆらひ外に拾六匁」。好色三代男(貞享三年刊)巻之三、情の淺さ錢の歎ほどの條に、「兎角わざくれをかしき事をして集禮をとへば、花代其外僅かなる諸分、この心やすさ」。攝州難波丸(元祿十年刊)に、「女一人二時を限り、あげ錢七匁・しゆらいは十五匁、其座の趣向次第」。

しゆりけん 丸腰なれどもこれ見よ、手裏劍はいくらも握つたり(日本武尊)

〔手裏劍〕手の裡に持つて敵に投付ける小さな刀であつて、小柄の刀の如くして鐵製の柄が附いてゐる。

しゆりさんまい 六七日は法要のしゆりさんまい(蟬丸)

「りしゆさんまい」(理趣三昧)の誤であらう。專心に理趣經を讀む法會である。法要には一に梵唄とて、法會の初に如來妙色身の偈を諷詠して佛德を讚嘆し、二に散華とて、梵唄の次に願我在道場等の偈を唱へ花を散じて供養し、三に梵音とて、散華の次に十方所有勝妙華等の偈を唱へて供養し、四に梵音の次に手執錫杖の偈を唱へて錫杖を振る。これを四箇法要と云ふ。その二箇法要を行じて、理趣經を讀む勤行式を法要の理趣三昧といふ。

***修理の頭** (出世景清)

宮殿の造營修繕を掌る修理職の長官である。

***しゆりはんどく** しゆりはんどくの阿房でも、あじやせ太子の鬼子でも、母の身で何の憎からう(女殺)

〔周利槃特〕釋尊の弟子となつても資性愚鈍者だによつて、經を讀んでも何一つ覺えることが出來なかつたが、遂に忽然大悟し阿羅漢の果を成就した。委しくは增一阿含經を見よ。

受領職 刀屋石見何某とて諸役御免の受領職(女腹切)

〔受領職〕受領は國守を云ひ、國守を何の守と云ふやうに、刀工をも何の守といふことあれば、刀工を受領職と云うたのである。

しゆれんばう 門破られては生日がない、しゆれんばうで打ち殺せ(唐船噺)

〔手練彈〕手馴れて鍛錬した强弓。

***しゆろう** 其方達はしゆろう鼓樓に上つて・すはといはば鐘太鼓一度に打つて打立てよ(加增曾我)

〔鐘樓〕大鐘を懸ける樓卽ち鐘撞樓である。昔時鐘樓は鼓樓と相對して講堂の傍に建ててあつた。

棕櫚の一木の相生 棕櫚の一木の相生を連理の契になぞらへ(曾根崎)

曾根崎の森を天神の森とも云ひ、この森に一つ根本より二幹の棕櫚が生茂してゐた。地名部「そねざきの森」を見よ。

しゆんあうてん 爰に貴德樂・春鶯

入魂の人人は瀧口と云ふ好色者に伴ひ、浮名を流す左京の進(娥)

〔入魂〕親密。懇意。源平盛衰記・三五、高綱渡ニ宇治川ニの條に「木曾殿の入魂の郎黨にはよもあらじ、一旦附從ひたる人どもにこそあるらめ」。

しゆじけさ　裳なし衣にしゆじ袈裟かけ、六尺ゆたかの大坊主、御首の中より躍出で(女護島)

〔種字袈裟〕輪袈裟をいふ。僧侶の首に懸けるもので、光明眞言等の種子の梵字を書いて内に封じ籠めたよりこの稱がある。聖道衣料編・下・第十一に「夫れ輪袈裟の濫觴何れの代誰の師制したりと云ふことを知らざれども、掛け來ること其の由來已に尙し、世に傳へ云ふ、大衣の左右上下の甲を取り用ゐて著する意なり、是は遠路往來に便宜の能き爲なりと、……又は是を種子袈裟と名付く、光明眞言等の種子の字及び咒眞言の字を書寫して、内に封じ籠めて着するが故なりと、然れども今時商人の賓縁ぐ所の輪袈裟は如レ是にはあらざるもの歟」。

しゆじやう　衆生一生造惡不斷煩惱の塵に交はり(蟬丸)　衆生濟度の說法をこの所にて說き始め(宵庚申)

〔衆生〕一切の生物をいふ。一には衆と共に世に生じ、二には衆多の因緣和合して世に生じ、三には處處に生を受けるによつて衆生といふ。蟬丸のこの文は、衆生はその一生涯始終罪惡を造り、心が物に迷ひ惱んで絕え間なく塵俗に交はるとの意。衆生濟度とは、苦海にさまよへる一切の生物を救濟して、淨土の彼岸に度すことである。卽ち說法して世の迷闇を解き、以て煩惱を除去して悟を開かしめることとて

衆生無邊誓願度(釋迦)

一切の佛菩薩の通願である四弘誓願の一であつて、無量無邊の衆生を濟度せうとの誓願をいふ。「しぐせいぐわん」を見よ。

しゆじよ

「しんのしゆじよが母云云」を見よ。

珠數の百八(じゆず)(曾根崎)

「ひやくはちのむすびめあはす」を見よ。

しゆすびん　兜を脫いで太元結、鬢附繻子鬢天鵞絨脚絆(冷泉節)　ハレよい男の、江戶元結に繻子鬢(女腹切)　新月代の淺翠、翡翠の繻子鬢・蟬折の(五人兄弟)

〔繻子鬢〕兩鬢を張出して毛筋を透さぬ樣に髮を結うたもの。嬉遊笑覽に、「燈籠鬢は兩鬢を張出し毛筋を透したるなり、繻子鬢は毛筋を透さぬなり」。

しゆせんざけ　天目に御器しゆせん酒、一兩二歩の取替を(薩摩歌)

〔集錢酒〕割前を出し合うて飲む酒。好色五人女(貞享三年刊)卷一に、「あたま數よみて呑むのまぬも七文づつの集錢出し、燗鍋もなくて小桶に汁椀入て、飛魚のむしり肴」。萬の文反古(元祿九年刊)卷四、人のしらぬ祖母の埋み金の條に、「謠屋の武太夫殿へ貳匁七分五りん御はらひ、是は集錢出しの割付と御斷り頼み候」。

しゆだ(百日曾我)(平家女護島)(賀古敎信)

〔首陀〕梵語 Sudra. 昔時印度の社會階級に、婆羅門・刹帝利・毘舍・首陀の四種あつて、首陀は田夫野人の類である。慧琳音義・二に、「戍達達古云二首陀羅或首陀一、卽是農夫耕墾之儔也」。謠曲・錦木に、「奈落の底に入りぬれば刹利も首陀もかはらざりけり」。

***しゆだう**　俗も尊む若衆の情、衆道祕密のお山とかや(萬年草)

〔衆道〕若衆道の略。男色の道。

しゆたら　空に轟くしゆたらの聲、修多羅の聲も川風も天に響きて有難し(蟬丸)

〔修多羅〕梵語 Sutra. 經典と意譯し、佛所說の法義を編纂した典籍である。

しゆだん　浮世を離れし手談のわざ(國性爺)

〔手談〕圍碁を云ふ。世說新語補・卷十六・巧藝に、「王中郞以二圍棊是坐隱、支公以二圍棊一爲二手談一」。下學集・態藝門に「圍碁又云二手談一」。

しゆちやうづきん　あれあれ神樂堂の蔭、繪馬の長範によう似た奴、しゆちやう頭巾で顏隱し、此方を見ぬ風にて眼を放さず(孫靜)

〔首丁頭巾〕法師武者が專ら出陣の時被つた頭巾であつて、紺布にて括り後の方を廣くし、中一所ばかり綴ぢたもの。源平盛衰記・卷十二、敎盛夢ニ忠正爲義一事の條に、「或は柿衣に不動袈裟かけたり、或は鶏兜に鎧著たり、或は首丁頭巾に腹卷着たりなんどして」。



〔首丁頭巾〕

***じゆつくわい**　扨も源の賴義はこの師氏を武將に補せられしことを述懷に存じ、只今取かけ申す由承り候(大掛物)

〔述懷〕おもふ所を述べること。轉じて遺恨の意にいふ。平家物語卷十一、腰越の事の條に「事新しき申條述懷に似たりといへども、義經身體髮膚を父母に受け云云」。

しゆつとう　軍の場數は御出頭の工藤殿も及ばず(會稽山)

〔出頭〕武家名目抄・職名部に、「出頭人は請第にもあれ新參にもあれ、登用せられて常に君邊に昵近し、政務に與る者をいふ、……定まれる職名にはあらで、三管領・四職以下奉行人に至るまで、當時の政務にあづかりて、評議の席につらなる事をば、なべて出頭といひしなり」。

***じゆつない**　いかに身が術ないとて不器用な氣になりをつた(生玉)　苦しうござる、じゆつないかと、言ふも淚にかきくれて(博多)　此方(こなた)樣など、とんと凭れしその重さただ磐石の如くなり、民部じゆつなさ一時に命も縮む心地にて(西王母)

〔術無〕せんすべなきをいふ。轉じて、苦痛烈しく胸苦しきをいふ。橘守部撰・俗語考に、「都あたりの詞に、むねのくるしき事をじつないといふは無術にて、せんすべのなき方より轉れる也、東國にては此意をせつないといふ」。

***しゆつり**　是ぞ出離の門出と、譬ふつつと搔切り(大原問答)　出離生死の御營み(孕常盤)

〔出離〕迷界卽ち三界(欲界・色界・無色界)を離れ出る義。世俗を離れて佛門に歸依することを云ふ。出離して迷を轉じて悟を開くときは、卽ち生死の苦輪を遁れることができる、これを「出離生死」(しゆつりしやうじ)といふ。

朱買臣(しゆばいしん)(栬狩)

「紅葉分(もみぢわ)けつつ行けば錦着て云云」を見よ。

***じゆばん**　心得ましたと帶もせず、じゆばん一つの裸身や、百貫町へぞ走りける(今宮)

「じばん」を見よ。

***しゆひでり**　おお主旱はいかず斯波に扶持を受けんとは勿體な

***しよくきん**　越羅蜀錦(國性爺)
〔蜀錦〕「しよくからのにしき」を見よ。

蜀の單福　「たんぷく」を見よ。

***しよけ**　僧は關東の所化、用事あつて昨日京着致せしが(碁盤太平記)　所化の契約なさん爲これまで迎に來りたり(賀古教信)
〔所化〕師に教化される義。佛弟子をいふ。

***しよげ**　抱かれて見たいと抱付けば、さすがの藤内しよげになり、扇の骨で白壁に小坊主書いてぞ居たりける(雪女)　分限者の下屋敷をば兩隣、中に挾まるしよげ鳥の、浪人の巣のとりぶきやれ(大經師)
〔しよげ〕悄氣。悄然として元氣なきをいふ。しよんぼり。悄然たる人をしよんぼりした鳥に喩へて「しよげ鳥」と云ふ。關取千兩幟・猪名川内の段に、「しこ踏み鳴す鐵が獄、こなたは猶もしよげ鳥の、しをしを上る土俵のうへ」。

しよげる　寢るときは採闔でしぶいて來い、まづそれまでは一盃あげてしよげるべい(女楠)　びくにん呼んで念佛講、丸太ぶしんでしよげるべい(吉岡染)
「しげる」の訛。「しげる」を見よ。

***しよざい**　しよざいこそ出女なれ、お大名へも知られた關の小萬(丹波與作)　人の見ぬ間に思ふ程泣くを所在か味氣なや(反魂香)　我等がしよざいひつしやりほん、御法度背きしはいつそてんぽの皮巾着(女楠)
〔所在〕在處の義。轉じて、身分。仕業。

***じよさい**　夫のこと我子のこと、母にじよさいがあるものか(丹波與作)　あの人も氣にじよさいはなささうなが(大經師)　つらやじよさいと怨むらん(三世相)(冥途飛脚)　これではこちもじよさいがならぬ(今宮心中)　祐樣も時樣も一庋じよさい顏も見ず、あつたら男をむざむざと殺したか少將樣(加增曾我)
「如在」で、「ぞんざい」(存在)と等しく、ありの儘といふことで丁寧にせぬ義であらう。疎略。ぬかり。ておち。下學集に、「如在。此二字卽尊敬之義也、然日本之俗書狀云レ不レ存二如在一、大失二正理一也、論語曰、祭如レ在、祭レ神如二神在一云云、可レ思レ之也」、と見えてゐる。以て文安以前既に「如在」を論語に用ゐてある意義に云はなかつたことが知れる。よつてまたこれを論語から出た語だとするはいかがであらう。貝原好古撰・諺艸に、「如在。論語八佾篇に出たり、俗に人に疎略するを如在すると云は頗意義あるなり、云云」。易林本・節用集に、「如在」。

しよちいり　歩き振は家鴨の所知入、物ごしは破れ鍋(振袖始)
〔所知入〕諸侯が知行を領して入國することを云ふ。「家鴨の所知入」とは、家鴨が尻を振つて歩く樣が、諸侯が所知入の行列に、奴が威勢よく腰を振つて行く樣に似てゐるから云うたので、以て腰を振つて歩む異樣な風體に云うた洒落である。

しよつこう　長刀をしよつこうに構へ、群がる敵に割つて入り、紅葉を散して戰ひけり(用文章)
長刀の構方であらうが詳でない。正向の約訛で、眞向の意にいうたものか。

***しよてんさんぼう**　言譯あらば眞直に申せ、道理が立たずば諸天三寶言葉の下に討つてすつるぞ(西王母)
〔諸天三寶〕天部の諸神と佛・法・僧。ここに云へるは、諸天三寶も照覽あるの意で、「佛神三寶」「弓矢八幡」「愛宕白山」などと云ふに等しく、自誓の詞である。

じよはきふ　陰陽のしらべ序破急の三段に五調子をしらべかへ(三世相)
〔序破急〕雅樂の曲體、卽ち節度の稱。序は一曲の最初の部分を指し無拍子のものであり、破は多く中曲の緩吹を指し、急は小曲の早吹を指していふ。この序破急三體の節を合して一樂曲を組織するを普通とすれども、その一體を缺き或はまた一體のみで成れるもある。

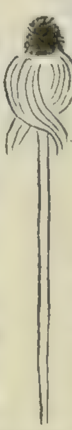
しよや　秋の初夜過ぎ早夜中(薩摩歌)　まづ初夜の太鼓を打つ時は諸客盛んと響くなり(扇八景)
〔初夜〕初更ともいひ、戌の刻卽ち今の午後八時頃である。浪花方言に、「初夜。戌の刻なり、五つとは決していはず、上下男女とも總て初夜と唱ふ」。曾我扇八景のここの文については、「まづ初夜の云々」を見よ。

***しよらう**　小松殿の御所勞良藥醫療の驗もなく(孕常盤)　世上は惟茂所勞と披露し(栬狩)
〔所勞〕有レ所レ勞の略で、いたはる所あるとの義。病氣。(序云、有志などの語は有レ所レ志の所が略されたのである)。

しより　大梯子を五六挺、横に垣楯しよりを付け、四方より締寄せ(千疋犬)
「しをり」(萎)の訛。曲げ撓めること。

***しよゐん**　しよゐんのうらなしおつ取つて、一ふり振出す手の内に、握り治むる六十餘州(三國志)
〔書院〕易林本・節用集に、「書院」。書院は僧侶の勉強する處の稱なるが、後に轉じて武家の表座敷をいふ。

白頭の振禿　白頭の振禿・二本松の城主とかや(薩摩歌)
槍標。奧州二本松の城主丹羽五郎三郎光重の槍標。


〔白頭の振禿〕

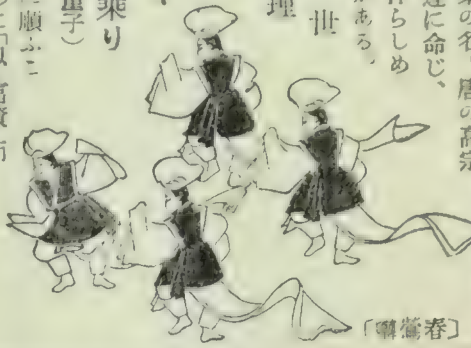
しらかはいし　向より白川石を商ひに、賤の嬶らが馬追ひつれて(堀川波鼓)
〔白川石〕京都の北白川から出る石。その石を馬の背に負はせ、その土地の女などがその馬の口を取つて都に賣りに出たものである。販心ひやう(寛文五年刊)とある本の第二卷に、「白川山の石賣は是も女の役にして、ほいくれなゐの前垂にくろき木綿に置手拭、女子どもがつれたちて京町を馬を引き、石めされよと賣るぞかし」。都名

(百人女郎品定所載、西川祐信畫)


〔白川石賣〕

囀の鶯に誘引せられ、芹摘の后は唯獨り（聖德太子）〔春鶯囀〕舞樂の名。唐の高宗が樂工白明達に命じ、鶯聲を寫し作らしめたといふ說がある。

***じゅんぎ**　世の中の義理じゅんぎを知るが最後、貧乏神が乘り移る（酒呑童子）〔順義〕道義に順ふこと。書經（傳）に「以二富貴一而能順義、則可三以長二年命一矣」。凱陣八島（古淨瑠璃）に、「殊に順義と申し、姉を申し入れて給はれ」。


（舞樂圖說所藏）
〔春鶯囀〕

じゅんさい　私も病者な父様を先へ送るがじゅんさいな、却つて憂目を見せまする（宵庚申）〔蓴菜〕この文は蓴菜に順をいひかけたのである。蓴菜は草の名。水澤に生じその嫩葉は食用となる。


〔じゆんさい〕

じゅんしゅ　唐土の聖代の巡守になぞらへ、交野の御野の櫻狩（蟬丸）〔巡守〕天子諸國を巡るを云ふ。書經・舜典に、「五載一巡守」。孟子・梁惠王下篇に、「天子適二諸侯一曰二巡守一、巡守者巡レ所レ守也」。

じゅんじゅく　親が勘當するとても、たてになりかげになり詫言して、兄弟がじゅんじゅくするこそ家繁昌（源義經）〔順熟〕善く和らぎ睦むこと。平家物語・卷十一、腰越の事の條に、「然れども交契忽に順熟して、平家の一旅追討の爲に上洛せしむる手合に」。

しゅんしゅん　蠢蠢たる懷生喁喁たる哨類（釋迦）〔蠢蠢〕衆多うごめく貌。晉書・天文志に、「庶物蠢蠢、咸得レ繫レ命」。

しゅんやうかん　饅頭・棊子麵・筍羊羹（天神記）〔筍羊羹〕羊羹の一種。尺素往來に、「臚腸羹、筍羊羹、白魚羹」。

***じよう**　高砂の尉と姥が離別したやうな形で（壽門松）この尉も參詣は望みなれども（嵯峨天皇）〔尉〕老翁をいふ。謠曲高砂に「此尉は津の國住吉の者」と見え、又能樂で老翁の面を尉の面といふ。（之と別に白灰をも「じよう」といふ。「ぜう」を見よ）。

***しようきだいじん**　はたと睨む眼色は、さながら鍾馗大臣の惡魔を制する如くなり（大織冠）八方に矛振廻す其勢、鍾馗大臣素盞嗚尊もかくやとすさまじし（天智天皇）〔鍾馗大臣〕もと支那で疫病の鬼を驅る神として畫かれたもので、其形黑冠を被り長靴を穿き拔劔を提げてゐる。委しくは藝林學山（筆叢續編に收む）卷四に見えてゐる。我國では素盞嗚尊を鍾馗大臣といふことがある。これは八束稻府辨正に、「髮當レ作二鬚髮一兮、十握劔斬レ蛇寸寸、素尊威、本朝豈恭二異邦鬼一、莫レ道鍾馗粘二戶扉一」とありて、これ等よりいひだしたものであらう。

しようげどり　兎やせん角やしようげ鳥、鵙の嘴のくひちがふ（冥途飛脚）「しよけどり」の延びた語。「しよけどり」を見よ。

しようじやうでん　御本社のしようじやう殿の階を、降りて下りて待受け悅び給ふとかや（反魂香）〔證誠殿〕紀州熊野本宮の第一殿を證誠殿、第二殿を西御前、第三殿を若宮と稱す。又第一殿二殿三殿を上四社と總稱し、第四殿を中四社と稱し、第五殿を下四社と稱し、これを合せて十二所權現と稱す。十二所權現の稱は三山いづれも同じ。翠簪に、「證誠殿法體、或號二證誠大菩薩一、或號二泉洄子一、稱二地主權現一、本地阿彌陀」。

じようじよう　萬木は欣欣と草茸茸たる中に（十二段）〔茸茸〕草の茂れる貌。皇甫湜の春心文に、「草茸茸兮旣長」。

***しようまんぶにん**　勝鬘夫人は大王の一通の文を得て恒沙の衆生を濟度あり（聖德太子）〔勝曼夫人〕勝鬘夫人とも書く。天竺・舍衞國の波斯匿大王の女で、釋尊在世時の人である。釋尊に歸依して三大願を起し、更に恒沙の願を接する一大願を起し、一佛乘・三種人の法を說いた。勝鬘師子吼一乘大方便方廣經（略して勝鬘經と云ふ）これである。

***しようみやう**　行住坐臥に稱名は缺かしませぬ（女殺）〔稱名〕佛名を稱する義、普通に阿彌陀佛の名を口唱するをいひ、南無阿彌陀佛の念佛を唱へること。

***しよかつこうめい**　諸葛孔明が司馬仲達を欺きし謀（三國志）諸葛孔明は五丈原に死して後、木像に魂を殘し魏の大軍を驚かす（源義經）〔諸葛孔明〕蜀の丞相諸葛孔明が魏將司馬仲達と對陣し、屢戰を挑んでも仲達が戰はうとしないので、孔明乃ち丈夫の志なきを鄙んで巾幗婦人の服を贈つた。本朝三國志のここの文は、巾幗婦人の服を贈つたのは、我を侮つて敵に油斷させる謀にいひなしたのである。源義經將棊經のここの文に就いては、「死せる孔明生ける仲達を走らしむ」の條を見よ。

***しよがゑ**　よね樣の寢姿窓から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、盛りまだしき閨の內、さては野に咲く百合の花、しよがゑ、少くわん（女楠）「しよんがゑ」「しよんがひナ」ともいひ、唄拍子の詞である。晝夜用心記（寶永四年刊）卷一に、「命をしよがひな節につなぎぬる」といひ、「踊の一流に名を得ししよがひなの姿」とあるから、踊歌の拍子詞である。吉野都女楠のこの文は踊歌であつて、それを歌比丘尼が唄うたのであるから、「少くわん」（その條を見よ）と歌の終りに附けたのである。「大工殿より云云」をも併せ見よ。

しよくえつ　大酒食悅おかげを蒙り八十末社、さすがの廓駕籠きれて（淀鯉）〔食悅〕うまい物を食うて悅ぶこと。傾城色三味線（元祿十四年版）鄙之卷に、「同じくはうまい物食はせて置いて、ともかくもして呉れればまづ食悅だけの德なりと、世に連れてさもしき心になりて」。

***しよくかうのにしき**　蜀江の錦でも戴いて召しませうか（夕霧）蜀江の錦が着たうござる（唐船噺）〔蜀江錦〕支那の蜀の成都から產出する錦。山謙の丹陽記に、「歷代尙未レ有レ錦、而成都獨稱レ妙」。和漢三才圖會に、「按有下名二蜀江錦一者上厚而美不レ可レ言、其綱多雲龍也、今稀有レ之」。

伏せ（天神記）

〔尻居〕しりもち。倒れて尻を地につけること。

印付の環　七郎は印付の環をかけて握つたり（蛙合戰）

槍の帶胴金の所にある環であつて、槍標をつけるもの。武家名目抄・刀劍部に、「印付鐶。今无」。

しるしの杉

「三輪のしるしの神杉云云」を見よ。

***しる・しほ**　六十はいつのこと、七十に片足踏込んで　しるしほのある身でもなし（加増曾我）

〔汁・鹽〕潤ひの意にいふ。色氣。汁鹽もないとは、無味乾燥で色氣も艶氣も無きをいふ。

***しるよしす**　横山の郡司信久は伊豆相模をしるよしし、五人の子をもたれしが（小栗判官）　下の醍醐にしるよしして忘れ形見の涙の種（烏帽子折）

「しる」は知行の意、「よし」は由緒の意、「す」は有るの意で、「しるよしす」とは、知行由緒あるの意に用ゐたのである。伊勢物語に「むかし男ありけり、うひかうぶりして、奈良の都春日の里に、しるよしして狩にいにけり」。

しれい　蜂に上下の禮あり、烏に反哺の孝あり、人は四靈の長たるや（聖德太子）

〔四靈〕麟・鳳・龜・龍。靈は神靈の義。以上の四つは皆神靈あつて他動物に異る故に云ふ。禮記・禮運に、「何謂二四靈一、麟・鳳・龜・龍・謂二之四靈一」。

***子路**　異國の子路の勇にもまさる（百日曾我）　闕路にかかる勢は、子路がせきもん・楚の鴻門・閻魔の廳の鐵門も、踏破るべくすさまじし（嫗山姥）

（殊靜）　子路が諍ひし劍の舞（嫗山姥）

仲由・字を子路といふ。孔子の弟子にして勇氣あつた人である。衞の亂の時その難に與り、戈を以て纓を斷たれた。子路言ふやう、君子は死すとも冠を免がぬとて、纓を結んで戰死した。

「子路が石門」とは、子路が石門と云ふ魯城の郭門に宿し、次の朝早く起きて門の開くを待つて出ようとした故事に據つたのである。論語・憲問篇に、「子路宿二於石門一、晨門曰、奚自、子路曰自二孔氏一」。

「子路が諍ひし劍の舞」とあるは、「古の君子云云」を見よ。

白一文字黒一文字　白一文字黒一文字・山の内の紋所（五人兄弟）

紋所の名。夜打曾我（舞の本・寛永古活字版）に、「しろ一文字黒一文字は山のうちのもんなり」。



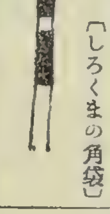
〔白一文字黒一文字〕

しろうとなけいせい　おのればしらう、しろうとな傾城と侮つて我儘言ふな（蛙合戰）

七草四郎の「四郎」に、「白人な傾城」をいひかけたのである。

白熊の角袋　白熊の角袋、杉形の中締は豐前の小倉（薩摩歌）

〔白熊の角袋〕槍標。（小倉城主・小笠原右近將監忠雄の槍標）。



〔しろくまの角袋〕

しろごらう　四郎五郎が不心中、面白いとて笑へども、私や一日泣いてゐた（卯月紅葉）

上方で立役の名優であつた中村四郎五郎を云ふ。寶永三年の夏・道頓堀の岩井半四郎座にてお染・半九郎の心中狂言（卽ち鳥部山心中）を上演した時、四郎五郎が浮氣男の車屋七兵衞に扮し、松と云ふ茶屋女と心にもあらぬ情死を約し、女に引かれていやいやながら心中に出で、無常の山に來て半九郎・お染の情死を見、俄に怖氣が付いて逃出したことを演じて好評を博した。ここの文に「四郎五郎が不心中」とあるはこのことを云うたものである。役者稽古三味線（寶永五年刊）立役之部に、「上上白吉。中村四郎五郎」とありて其藝評に、「津川殿太夫姿道中の時、下男となりて提灯持ちての供、くつわの後家かもん殿密通し、白小袖着て心中せうといはるる時、いやがらるる顏つき、去去年大坂にて鳥べ山の不心中にて大當し給ふ、其うつり故手に入つた藝此所大でけ、只今では諸藝大きに上り、仕殘さるる事なし、其內あら事の武道得物、上上白吉引合、當年の當りを見、來年は御一分に黑吉に成給へ」と見えてゐる。（序に云、寶永五年刊の役者稽古三味線に、「去去年大坂にて鳥べ山の不心中」とあるからには、卯月紅葉の上演も寶永三年であつたことを立證するもので、外題年鑑に寶永四年上演したことに記せるは誤と斷ずべきである）。「はんくらう・おそめ」をも見よ。

しろざ　やつしは甚左衞門・幸左衞門が思案こと、四郎三が憂いこと（女殺）

〔四郎三〕櫻山四郎三郎をいふ。大阪の名優で立役を勤めた。役者金化粧（享保四年刊）難波の卷・立役之部に、「上上白吉。櫻山四郎三郎」とありて其藝評に、「いさみのある藝のしこなし、あつぱれお上手さんちやぞ云云」と見えてゐる。

***白書院**　白書院・黑書院・納戶・帳臺・化粧の間（用明天皇）

書院は僧侶の勉强する處の稱なるが、後に轉じて武家の表座敷をいふ。白書院・黑書院は書院を區別していふ爲の稱。

しろた　うろたへて白たへ潜る畠垣（心中双氷朔日）

白鼠　これは金山白鼠、吉野藏が建ちませう（吉岡染）　後には白鼠の富貴と榮えるを、親鼠が見る嬉しさ何うあらう（壽門松）

〔白田〕畠。

白鼠が家に棲めば福があると云ふ。抱朴子に、「鼠壽三百歲、滿二百歲一則色白、善憑レ人而下、名曰レ仲、能知二一年中吉凶及千里外事一」と見えてゐる。白鼠を福とするのもこんな事からいひだしたのであらう。

しろふくりん　「ふくりん」を見よ。

しろもち　やい大名とはしろもち（女楠）

白餅に城持をいひかけたのである、大名は城主なれば城持というた。

四王・忉利　四王忉利の大伽藍（酒呑童子）　欲界のしわうたうりてん、夫婦枕の夜摩の（五人兄弟）

欲念强き有情の住める世界を欲界と云ふ、欲界に六天ある、その第一天なる四天王と第二天なる忉利天とを云ふ。

しゐ　四尺四面の立石えいやつと引起し、高くさしあげ力に任せえいやうんと投付くれば、四方四維に地響して（女夫池）

〔四維〕艮（東北）、巽（東南）、乾（西北）、坤（西南）。

しゐだ　これはこれ四韋陀と號す外

所図會・三に「北白川の里人は石工を業として、常に山に入り石を切出し、燈籠手水鉢其外さまざまの物を作りて商ふなり」。



（人倫訓蒙図彙所載）

〔白川石賣〕

しらがやくし 老人達の老病には白髭明神白髪薬師（女殺）

〔白髪薬師〕謡曲・白髭（此謡曲は太平記にある本として作られてゐる）に、志賀の浦の辺に釣を垂れてゐる老翁があつて、其老翁は六千歳の昔から比叡山の主として琵琶湖が七度原になつたのを正しく見たと申しました時に、浄瑠璃世界の主薬師忽然として出で、我は二萬歳の昔から此所の主であれど、老翁また我を知らないと申されたことか載つてゐる。この六千歳の老翁を白髭明神と申すのであるから、巣林子はここの文に、二萬歳の薬師を白髪薬師と面白くいひなしたのであらう。そして「老人達の老病には」から、白髭白髪の縁語を神佛の名に取つていひつづけたのである。

しらごかし 今改めてこりやばつと打直すはと、捻ぢて出せし鼻紙の、しらごかしこそ笑止なれ（二枚繪）

〔白轉〕白白しいに、白紙を轉はすをいひかけた語。この「ごかし」を「お為ごかし」「上手ごかし」の「ごかし」と同じとするはいかが。

しらさえび しらさ海老にて煮を釣り、麦飯で鯉を釣るは子供わざ（蛙合戦）

〔白さ海老〕多くは潮水と淡水と交る所に棲息し、薄白き小海老である。

***しらす** 守護職太刀提げ白洲におり立ち大きに怒り（三世相） 外垣を押し通り、御白洲の内垣に犇々と縋り付き（團扇曾我）

〔白洲〕昔は訴訟を審理したり罪人を糺問する場所に、白砂を敷いてあつたから白洲と云ふ。法廷。狂言・右近左近に、「ちと公事がござつて、御白洲へ通りまする」。

しらすげ 小菅・白菅・いはま菅（用明天皇）

〔白菅〕草の名。



〔白菅〕

しらたて

〔白楯〕「八十縫の白楯」を見よ。

***しらなみ** 頼平とはしら波の、直下に見るぞあまりなる（關八州）

〔白波〕盗賊の異稱。後漢書・靈帝紀に、「靈帝中平元年張角反、皇甫嵩討之、角餘賊在西河白波谷、時俗號白波賊」。ここの文は「知らず」に「白波」をいひかけ、白波の縁から「直下に見る」といひつづけたのである。

しらぬひ あぶなき分限波の上、何百里とも知らぬ火の、心づくしを過ぎし身は（博多） 別れ行く船路の末も不知火の、筑紫は雲に埋めども（國性爺）

〔不知火〕「知らぬ」を筑紫の枕詞なる「不知火」にいひかけたのである。不知火は肥前沖に現はれる燐光で、今も陰暦大晦日の夜などに現はれると云ふ。俗に千燈籠ともいふ。

しらひげ 身の程なしら髭・八島のくづれ、諸道具のけばの梅（酒呑童子）

〔白髭〕謡曲名。近江國比良山の麓なる打下といふ處にある白髭明神の縁起を作つたもの。ここの文は白髭に知らぬをきかせたのである。

***しらびやし** 傾城白拍子に身を持崩し、今度の大事にはづれし奴（大織冠） 年月の物思ひ、傾城白拍子の憂き勤もこれ程にはよもあるまじ（孕常盤）

〔白拍子〕昔の舞妓、遊女の稱。（七十二番職人盡歌合所載）白拍子は舞の名で、その舞をなした舞妓をも白拍子と云うた。鳥羽院の頃島の千歳及び和歌の前といふ二人の女の舞始めたもの。水干を着け立烏帽子を被き、白鞘巻をさいて舞うたのであつたが、後には水干ばかり着けて舞うた。



〔白拍子〕

***しらまゆみ** 鎌田はそれともしらま弓（鎌田） 今宵限としら眞弓、引返さじと（世継曾我）

〔白眞弓〕白木の弓。「眞弓」の「眞」は美稱に用ゐた接頭語である。ここの文は「知らず」を白眞弓にいひかけたのである。

しらる こりや長作十六兩ただしられ、夫がそもとに嘉平次がうろたへ始め命沙汰に及んだ（生玉）

「してやらる」の略されたもの。策にかけられて取らる。

しりうたぐ 砂金のまろがせ盤に積み、御階のもとに尻うたげ、是は東八州の大將外の濱の忍熊が執權筑波の長脚といふ者（日本武尊）

「しりうちあぐ」（尻打上）のつまつた語。

***しりがい** 馬のしりがい鞍壺かけて突きければ（蟬丸）

「しりがき」の音便、尻懸の義。馬の尾から鞍にかける組緒。鞦。

じりくちくすい 昨日は雲井の住居して女御后にかしづかれ、じりくちくすい引かへ、蔚山が獄しんしんと（三國志）

穂積以貫撰・難波土産・巻四に、「本朝三國志の大王の道行に、御いたはしや大王はちりくちくすい引かへてあほすの峠のよるの道と書けり、京都のさる俳諧師此ちりくちくすいの語をあんじ煩ひて問ひければ、是は大王夫婦の道行ゆゑ、くちりくちすい引かへてといふ假名を、上下へ置かへて用ひたりと答へしとかや」と見えてゐる。原文とは相違すれども、いづれこのやうな事であらう。

しりくめのしめなは しりくめの注連縄引渡して（振袖始）

和訓栞に、「しりくめなは。神代紀に端出之縄をよめり、倭名抄に注連をしりくべなはとよめり、……葦の尻をこめたる縄也、今のしめ縄郎是也」。

***しりざや** 五尺餘りの大太刀に熊の皮の尻鞘入れ、編笠かたぶけ立つたるは（鎌田）

〔尻鞘〕平義諸談に、「尻鞘は虎豹鹿熊等の毛皮にて袋を作りて鞘にかくるなり、濕にあへば太刀さびるゆゑ雨露を防がんために尻鞘を用ゐるなり」。保元物語・巻一、新院御所門門かためいくさ評定の條に、「三尺五寸の太刀に熊の皮のしりざやいれ」。

***しりゐ** 踝摑んで尻居にどうと突

れ事に長じてゐた名俳優である。役者金化粧（享保四年刊）京都の巻、立役之部の巻頭に、位附上上吉として其藝評を載せてある。

申申如（しんしんじょ） 「子の燕居せるとき云云」を見よ。

じんずゐ 起請誓紙も若翟らし、血酒のじんずゐを飲むまいか（唐船噺）

〔神水〕神に供へた水。太平記・巻二十五、住吉合戦の條に、「一足も引かず討死すべしと、神水を飲みてぞ打立ちける」。

***しんぞ** 色にこがれて死なうなら、しんぞこの身はなりしだい（曾根崎） しんぞいとしさかはゆさは、命も磯の海を越え（津戸三郎） しんぞ一夜はお手枕（生玉） 前髪姿に、しんぞ爪先よりぎりぎりまで打込み、毎日毎日しづ心なき玉章（宵庚申） 空誓文の鶯はしんぞくされの中戸に囀り（扇八景）

〔神ぞ〕「神ぞ照覧ある」の略されたもので、即ち僞を申すに於ては、神の照覧ましますによつて直に神罰を蒙る法もあれとの意で、自誓の詞である。「神ぞ腐れ」の「腐れ」は、「誓文くされ」などいふ「くされ」と同じ語で、即ち僞申すに於ては神罰によつてこの身くさる法もあれの意で、自誓の詞である。要するに僞らぬといふ意にから云ふ言ひ方をしたのである。

***しんだい** 瀧口が身代の敵は義次なりとささやけば（娍）

〔身代〕身上。身の上。

しんたいはつぷ 寳劔返せと身體はつぷに力を入れ（振袖始）

〔身體髪膚〕全身。孝經に、「身體髪膚受之父母」。

***じんでう** 晨朝の響は生滅滅多に入用知れず（博多） 後に響く大長寺の鐘の聲、南無三寶長き夜も夫婦が命短夜と、早明け渡る晨朝に最期は今ぞと引寄せて（天網島）

〔晨朝〕晝夜六時の一。卯の刻（午前六時頃）をいふ。「晨朝の響は生滅滅多」は、晨朝の響は生滅滅已をもぢつたのである。「ぼんなう」の條を見よ。「早明け渡る晨朝」は、寺院で晨朝の勤行に撞く鐘の響を云うたのである。

しんどう ああしんどうと腰掛けて（女腹切） ああしんどうやと腰打掛け（夕霧）

「しんど」「しんろ」「しんどい」などとも云ふ。蓋し「辛勞」の訛であつて、疲勞したことを云ふ。「しんろ」を見よ。

***じんどう** 山猪の眉間の骨を射碎きしは、淺利の與市が神頭の弓勢（會稽山）

「神頭」など書けども、實頭の變じた語である。中を彫ぬかずして中實なる鏃を云ふ。「神頭の弓勢」は、神頭の矢の勢を云ふ。

しんどく 珠數さらさらと押揉んで、眞讀の普門品・千手の陀羅尼をくりかけくりかけ祈らるる（天神記）

〔眞讀〕經卷の全部を讀誦するを眞讀と云ひ、經卷の始の數行を讀誦して後はただ轉廻するを轉讀と云ふ。

しんによのひかり 「一洞空しき谷の聲云云」を見よ。

晋の七賢 晋の七賢が樂しみ重ねて爰に酌めやくめ（艶狩）

竹林の七賢と號し、西晋時代の山濤・嵆康・阮籍・阮咸・劉伶・向秀・王戎・の七人をいふ。皆老莊虛無の學を崇尙し、禮法を輕蔑し、縱酒香酣世事を遺落した放達な者どもである。

***眞の臺子** 御馳走の爲眞の臺子の茶の湯なさるべしとの事（鑓權三）

昔宋朝から博多の聖福寺に贈り、それより紫野の大德寺に傳はつた黑塗の茶棚をいひ、その茶道の法式を傳へたもので、その傳授を得て宗匠となる。されば眞の臺子には最も重要な式法があつて、利休が南坊宗啓に傳へた眞の臺子飾は五十箇條もある。鑓權三重帷子のこの後の文に、「祝言、元服、出陣の臺子、これ御簾の中の茶の湯の圖、誠の眞の臺子とは此の行幸の臺子の圖」とあるは、夫れ夫れ茶の湯の式法あるをいうたものであるが、その中には「行幸の臺子」などいかがはしいものもあつて、巢林子も茶道には未熟であつたのではあるまいか。「だいす」をも見よ。

しんはうしよ 「天定まつて人に勝つ云云」を見よ。

しんばし 子供が爲には親の追善、我夫の弔の矢さきを見せんと、しんばしかためて切つて放せば（源義經） 父が射られし矢壺を外さじものと、しんばし固めひやうと切つて放つ（扇八景）

「しばし」（暫）に撥音「ん」の增加したもので、「いま」（今）を「いんま」、「みな」（皆）を「みんな」と云ふの類である。

***しんはちまん** しん八幡侍冥利他言せまじ、心底殘さず打明けや（天網島）

〔神八幡〕「神八幡も照覧ある」の略されたもので、自誓の詞である。浮世花鳥風月（正德三年刊）鳥之部、鳥の聲も常にかはり物の條に、「今日の御入來神八幡祝着祝着、自今は別してお心安くなどと、物堅う挨拶せられ」。

しんふがい 韓非申不害が劔術を傳へ（唐船噺）

〔申不害〕支那周時代の人で、刑名の學を修め韓の昭侯の相となつた。國治り兵强く、申不害の世を終へるまで韓を侵す國がなかつた。委しくは史記・申不害列傳を見よ。申不害は劔道家ではない。

しんふんどう 「ふんどう」を見よ。

しんべ やりての鍋が藥罐聲、惣えかへつたる顏付して、此方のしんべはここらへは見えぬかと（酒呑童子） この春抱へた廣文が口入のしんべめも、明暮吠え廻れども（酒呑童子）

新部子の略。禿をいふ。嬉遊笑覽巻九下に「歌舞妓事始に、新部子といふは幼少にて藝の至らざるをいふとあり」と見えてゐる。歌舞伎子に限らず、禿をもいうたものである。美景蒔繪の松（寳永五年刊）巻二に、「私も一寸見ましたが、まだ十五六の新部子、旦那の御相手には不足ながら御供申しませう」。

***しんべう** 足の先にて押鎭め抑へ鎭めしんべうさ（曾根崎） 騷騷しい、しんべうにもなることを（天網島）

「しんめう」（神妙）の音便。殊勝。手際のよいこと。おとなしいこと。俚言集覽に「俗語に神妙と云はおとなしき事をいふ」。

しんほうしよ 「しんはうしよ」を見よ。

***しんぼち** 本の和田の新發意を見るやうな（大經師）

〔新發意〕發心して佛道に入つて日まだ淺き者の稱。「和田の新發意」をも見よ。

***じんみらいさい** 盡未來際畜生界を出でやらず（天鼓） 假令死んでも

道の書(用明天皇)

〔四韋陀〕韋陀は婆羅門の傳へる所の經典の名 Veda の音譯であつて、吠陀などとも云ひ、智論または明論と飜してある。韋陀に四種あつて、梨俱吠陀(Rg veda)と云ふは印度アリヤ民族が天然に對して歌つた詩句を集成したもの、娑摩吠陀(Sama veda)と云ふはソーマ祭にての詠歌備用として編纂された詩頌句、夜柔吠陀(Yajur veda)は祭式用の詞文を集めたもの、阿闥婆吠陀(Atharva veda)は招福攘災の咒法を旨とした文を集めてある。世にこれを四韋陀または四吠陀と稱してゐる。諸乘法數に、「四韋陀論＝阿毘陀(醫方等)、殊夜陀(祭祀等)、波摩陀(戰鬪法)、阿達陀(禳災法)」。西域記・第二に、「婆羅門學ニ四吠陀論一(舊曰ニ毗陀一訛也)、一曰レ壽、謂ニ養レ生繕レ性一、二曰レ祠、謂ニ享祭祈禱一、三曰レ平、謂ニ禮儀占卜兵法軍陣一、四曰レ術、謂ニ異能伎數禁呪醫方一」。

四位の少將 「少將」を見よ。

しをらし 「しほらし」を見よ。

***しをり** 槇や柏を押分けて枝が枝折の岨傳ひ(蟬丸)

〔枝折〕道しるべ。西行の歌に、「吉野山こぞの枝折の道かへて、まだ見ぬ方の花をたづねん」と見えてるやうに、昔は山に入る者枝を折つて道しるべとした、故に枝折と書いて案内の意にいふ。

***しんい** このやうな瞋恚の燃る時に念佛申せば、咽にすくすく立つやうな(寄庚申) 魂魄頭にこりかたまつて瞋恚がうせい六根を苦しむ(天智天皇)

〔瞋恚〕人を恨み憎んで忿怒することで、三毒(貪欲・瞋恚・愚癡)の一である。遺教經に、「瞋心甚ニ於猛火一、常當ニ防護無レ令レ得レ入、劫ニ功德ニ賊無レ過ニ瞋恚ニ」。「瞋恚がうせい」は瞋恚強盛であらう。

心印は摩訶迦葉 しんいんは摩訶迦葉、辯舌はふるな尊、品行は須菩提(大原問答)

「心印」は佛心印をいふ。摩訶迦葉(梵名、Mahakasyapa)は釋尊の十大弟子中の隨一である。釋尊が梵天に捧げる蓮華を受けて之を拈るを見て衆その意を知らず、獨り摩訶迦葉その本旨を了悟し微笑して之に應じた。この時釋尊禪法の奧旨を迦葉に授けた。禪宗ではこれを拈華微笑の公案といつてゐる。摩訶迦葉はかくして佛心印を釋尊から最初に授かつた人なれば、「心印は摩訶迦葉」と云うたのである。

***しんえふ** 白銀の心葉に黃金の盃、瑠璃の壺出す(源義經)

〔心葉〕竹本筑後掾正本(八行本に)に、心葉に「しんえう」と傍訓してあれども、「こころば」と讀むべきである。饗膳または贈物などの上に、金・銀・絲などで梅花・松枝などを作つて添へる物の稱。源氏物語・繪合の卷に、「さしぐしの箱のこころばに」。日本振袖始・第一に、「小車の錦の着長銀の心葉角髮に取つて附け」とあるは、この心葉を挿頭にしたのである。

***しんき** 麓に立てる女郎花、りんきしんきとなまめきて(淀鯉) しんき燃して待つ宵に、似たりや似たりけいせん花(生玉) 下地のよい顏がなほ美しうならしやんして、女子でさへ辛氣がわく(鑓權三)

〔辛氣〕「辛氣くさい」ともいふ。心のくさくさして浮立たぬこと。「しんき燃す」「辛氣がわく」の「燃す」「沸く」は「業を煮す」の「煮す」などと同類語であつて、氣を揉み懊惱するをいふ。「麓に立てる女郎花云云」とあるは、その條をも見よ。

しんきやう ただしんきやうの禮を重んじ、すごすご歸る義經が心の內を察し給へ(吉野忠信)

〔親兄〕親兄の義は孝悌の道である。謠曲・船辨慶に、「我君親兄の禮を重んじ給ひ、一先都を御開きあつて」。

***しんきん** 宸襟を安んじ國家の太平を致すべし(用明天皇)

〔宸襟〕天皇の大御心。宸は帝居の義。增韻に、「帝(天帝)居ニ北辰之宮一、故雙レ宀从レ辰」と見えてゐる。この義よりして宸憂、宸翰、宸闕、宸筆、宸慮など天皇について云ふ。

***しんぎん** 小春が命は新銀七百五十匁呑まされば此世に留むる事ならず(天網島)

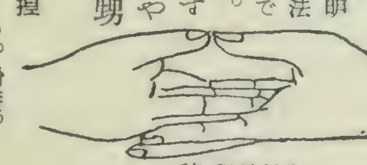
〔新銀〕享保銀貨を云ふ。貨幣の部を見よ。

しんく 皆樣半七の朋輩衆か、しんくな仕事でござりんす(女腹切)

「しんき」(辛氣)の轉訛。「しんくな仕事」とは、緻密で面倒な仕事の意。「しんき」を見よ。

しんぐわちりんのひいん 心月輪の祕印を結び佛眼眞言を唱へ給ふ(嵯峨天皇)

〔心月輪の祕印〕我が心を圓明の月輪と觀じ、本有の法界法門身の功德を觀顯する祕印である。「印を結ぶ」をも見よ。



〔心月輪印相〕

***しんこ** 茶ばかりですむものか、しん粉のやうな物なりと茶の子螆の子(女腹切)

〔糝粉〕粳の粉に水を加へて捏ね、これを蒸して餠としたもの。粉餈。

しんござ 生駒新五左が瘧も(鑓權三)

〔新五左〕武士をいふ武左をいふ冷語。嬉遊笑覽に「新五左は今いふ武左をいふ、又ぶいきともいふ」。俚言集覽に「田舍士をいふ」。

臣五人 「古の聖代に臣五人云云」を見よ。

しんごよみ 昔曆新曆當年未の初春(大經師)

〔新曆〕保井春海の作つた貞享曆を云つたのである。「昔曆」の條をも見よ。

***しんごん** 十一から敎へた經文も眞言も魔道へ棄てたか物體ない(萬年草) 何が日頃法印樣、眞言陀羅尼讀んだ眼で(萬年草) 眞言止觀の妙行・華嚴禪門の宗旨に及ばんや(大原問答)

〔眞言〕大日如來の說かれた如義眞實の語を云ふ。「眞言陀羅尼」の陀羅尼は梵語(Dharani)である。如來眞實の語に名付け、卽ち眞言である、これ諸佛不可思議の密語なるが故に咒とも云ふ。「眞言止觀」とは、眞言密敎と天台顯敎とを併稱したものである。

***しんざう** 山崎與次兵衞樣と申して、新艘の初床より面白いと悲しいと譯のありたけ仕盡して(壽門松)

〔新艘〕新造とも書く。禿から客をとる遊女となつた當時の名である。これになつた時は盛んな內祝をなし、道中姿も着飾つて將來の全盛を見せうとしたものである。並木舍五瓶編・誹諧通言・人倫部に、「新艘。世上に嫁娶を新造と云ふ、夫に表して新艘と書くは新しき舟に祝ひし故なり、都て新艘出しに揚屋にて婚禮の式あり」。

じんざゑもん やつしは甚左衞門・幸左衞門が思案ごと(女殺)

〔甚左衞門〕大和山甚左衞門を云ひ、やつし濡

密（持統天皇）　やあずくにふめ、左様に自由にならば兎狀もお使も詮なし（女護島）　逆臣とはずくにふおのれが事、大海原が手にかけ朝敵坊主しめ殺さんと（嵯峨天皇）　道知らず義も知らぬずくにふめとては丁ど打つ（女夫池）

「づくにう」「づくにふ」と書き、或は漢字を當てて「梟入」「木菟入」など書いたのもあれども、「ぞくにふ」の「ぞ」が「ず」に轉じた語で、即ち「俗入」の義である。「俗入」は「俗入道」の略されたものであつて、法體の者を罵つて云ふ語で、生臭坊主又は蛸坊主と等しい意に云ふ。片山助叟編・京の水（元祿四年刊）に、「今の花洛に腕まくりする俳仙此俗入道に京の水祝舞と與力して」とありて、「俗入道」に「ずくにう」と傍訓してある。增補俚言集覽に、「づく入。法體の者を罵る言辭也、又蛸とも云、（奴俳諧）月花をいけづくにうは詠入り。（増）づくにふ。土佐加賀にてはあたまのことを云、伊勢にては坊主のことなり」。

すくばりかへる　あ痛あ痛の聲高く、身内に動くは口ばかり、すくばりかへつて引くもあり（日本武尊）

「すくばる」は「すくぶ」と同義である。「すくぶ」は「すくむ」（竦）と同じもので、「からむり」（冠）を「かうぶり」と云ふやうに「む」「ぶ」相轉じたのである。「かへる」は「喜びかへる」「めでかへる」などいふ「かへる」と同じ語である。甚しうすくむ。

すけとのたら　魚の中にも骨堅きすけとの鱈を、祐經と心に表して一の太刀（加賀曾我）

〔介黨鱈〕鱈の一種である。本朝食鑑・八・鱈の條に、「一種有下俗稱二介黨一者上、色微黑帶レ白而形小、味亦不レ佳、最為二下品一」。

***すけべゐ**　それ髭のかかりがすけべゐの、べゐの字形に見えますと（祀狩）　あそこの娘を寝言から附込んで、助兵衞の何のと沙汰があるなら妾やいやぢや（嵯峨天皇）

好（好色の意）を「すけ」と轉じ、兵衞を添へて人名の如くいひなした語であつて、好色者を云ふ。俚言集覽に、「助兵衞。婬人を云、移山按、往古のはやり言葉にて、好色をすけす（淫）といふをすけべいと云ひしならん、人名の樣に云ひなしたる流行詞多し、承知之助・浮介・十筋右衛門など云ふ類なるべし」。

すこしくわん　「ちとくわん」を見よ。

すこびる　すこびた餓鬼め待つて居れ（大職冠）　主ある女に抱付くはすこびたるいたづら者、生けては我道立たず（烏帽子折）

いやらしくこましやくれる。すこつぺ。和訓栞に、「すこび。俗語なり、すは發語、夸毗の義なり」。「こび」はこざかしき（小賢）をいふ。東海道名所記（貞享五年刊）、舞坂より船に乘れる條に、「こびた船頭かなと思ふ處に」。

***すさみ**　繪に書く筆のすさみには、京や大阪の上﨟も心で見れば今爰に、吉野初瀨の花も見ろ（鎗權三）

進む義。慰み。俚言集覽・すさむの條に、「ロスサミ手スサミはなぐさむ心也」。

***すし**　戀やさしやすしや（曾根崎）　名さへお梅は氣もすしや（萬年草）　八重姬腹立つ聲音にて、ええすしな・いなしやんせ、おのし樣には言はぬぞや（伊豆日記）　揚屋の二階をふみも習はぬ此道を、ちつとすしなぞ推參なぞ（加增曾我）

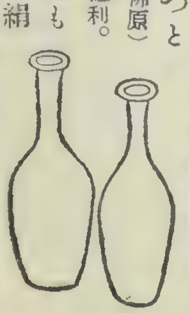
粹師（「すゐ」を見よ）の義であらう。意氣なるをいひ、また轉じて、出過ぎ者のこづら惡きをいふ。生意氣。老子語錄追加に、「今以て世上にて、指出者のこづらの惡きものをすしな奴なりといへり」。色道大鏡（延寶年中成）に、「すし」を解釋して、「こなたにてはさまで思はぬに、先方より馴れ親しみて言ひ寄るを戀みていふ詞」と見えてゐる。好色一代男（天和二年刊）卷之六、食さして袖の橋の條に、「風俗太夫職にそなはつて、衣裳よく着こなし道中たいていに變り、少しすしに見えて帽のなき男は、おそれて逢ふこと希なり」。心中萬年草のここの文は、梅の縁で「酸」に「すし」（粹師）をいひかけたのである。

すず　文藏幸と三方を被りながら、すずを口へ寄せづつと飲み（傾城佛原）

〔錫〕（女用訓蒙圖彙所載）

〔錫〕錫製の德利。

***すずし**　風もすずしの絹袴（堀川波鼓）　萌黄のすずし（歌念佛）



〔生絹〕練らぬ生絲織物。

***すずしい**　恐らくすずしいこの新七に無い難つけて暇出させ（淀鯉）

〔清〕潔白な。

すすだけ　・「やなぎすすだけ」を見よ。

***すすどし**　武士の仕方のすずどさよ（堀川波鼓）　夕霧啼き黑革緘、すすどげに出立ちて（國性爺）　喚鐮一重彼方にはすすどき母の鐘の聲（宵庚申）

するどし（銳）。「すすどさ」「すすどげ」は形容詞「すすどし」の語根に接尾語「さ」「げ」の附いたもの。和訓栞に「すすどき＝平家物語に見ゆ、進疾と書り、されば孟子の其進銳者といへる語によるべければ、此字を用べし」。宇治拾遺十一に「さればこそと思ひ、すすどくあゆみて過ぐるを」。

すずのささはら　すずの篠原さらささらささらつと乘り飛び（鎗權三）

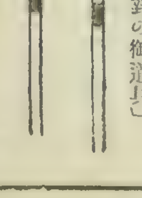
〔篠笹原〕篠笹の生茂してゐる原。「すず」は篠である。

すずめずし　櫻山庄左衛門・福島ちやとおしやろ、心はの・小體なれども張詰めて舞臺一ぱい、かさもあり藝に實もある、口中のしよりしよりしたる雀鮨（今宮）

〔雀鮨〕曾根崎の西南なる福島村の名物である。改正增補日本鹿子（元祿十一年刊）卷三、攝津國中より出る名物の類の條に、「雀鮓。江ふな也、腹に飯を多く入たるが雀のごとくふくるればかく云也」。攝陽群談（元祿十四年刊）卷十六・名物土産部に、「福島雀鮓。西成郡福島村にあり、鮒魚の小を背割にして潮に浸し令レ乾レ之、飯を入れて作レ之、魚の腹脹て形雀に似たるを以つて號レ之」。鮒魚とは洲走をいひ、鯔の小さきもの。

裾服の對の御道具　裾ぶくらの對のお道具・出雲の松江（薩摩歌）

〔裾服の對の御道具〕



槍標。（松江城主・松平出羽守綱近の槍標。

すだく　聲いきどしくすだきながら、コレ公時（關八州）

息のあへぐをいふ。和訓栞に「すだく＝萬葉集に多集をよめり、蟲のよりあつまりて鳴

身體も戻さぬ、じんみらいまで女夫女夫(宵庚申)
〔盡未來際〕未來のある限。未來永遠。地藏本願經に、「盡未來際云云」。

しんらばんざう　善惡邪正森羅萬象、來れば映り去れば去り(大織冠)
〔森羅萬象〕天にある總ての物を萬象といひ、地にある總ての物を森羅と云ふ。法句經に、「森羅及萬象、一法之所ㇾ印」。

*__じんりん__　人倫絕えし深山の奥(浦島)
〔人倫〕人類。「倫」は類の義。

しんろ　さぞ小辨もしんろかろ、己もくわを拔かした(生玉)
「しんどう」「しんど」とも云ふ。「しんどう」を見よ。越谷秀眞編・物類稱呼・五に、「クタビレといふことを畿內にてシンドと云。シンロの轉語にや、シンロは辛勞なり」。

す

ずいえんしんによ
「ずゐえんしんによ」を見よ。

すいけん　唐物町の唐犬扶持、傾城町のすいけん扶持、色里の尨犬扶持(千疋犬)
小野職博撰・本草紀聞に、「多毛曰ㇾ龐と、是はすいけんなり、毛長く獅子の如し、蠻國の產なり、狆の種類なり」。

すいこ　「すゐこ」を見よ。

すうぜう　「すうげう」を見よ。

すうわり　手檜も足もいそいそと、草履も横にすうわりの、腰をよぢらし出でて行く(三國志)
すらりと延びた貌にいふ。浮世風呂・二上に、「ほつそりすうわり柳腰とさへ言ふぢやあねえか」。美景蒔繪の松(寶永五年刊)卷五に、「嚊はおつまを連れて出づれば、傍へはかまが擐つて、飛車角の並んだやうにおつまをかこひ、押へには横へすうわりとした艷女、酒のしやく取る小美女までが居合腰に欋へ」。

*__すがかく__　二十五筋の琴の絲、結び契りし年の數、いざすががきて箱崎の・まつとし聞かば我も急がん(國性爺)

すががき　風のすががき鹿踊(松風)
〔淸搔〕歌なしに琴或は三味線をかきならすこと。狩谷棭之撰・每條千金に「スガは淸字の心なるべし、音のさやかなるを云ふなるべし」。

すかたん　この軍介を東へ遣りほつかりすかたんさせんとな、兎角汝が詞とはもんちに出る合點(隅田川)
「すか」は透卽ち空虛、「たん」は盪の意であらう。鼻をあけること。俚言集覽に、「すかたん雜煮。(俳諧新季寄)元日紫野大德寺にて空椀にて雜煮にすわるとなり」。「すかたん」は「すこたん」ともいふ。嬉遊笑覽卷九下、言語の條に、すこたんとは思ふに透されたるを云ふなりと見えてゐる。

*__すがり__　この吉岡がすがりの花なればこそ、ぬし達に身をぶんまかする(吉岡染)
末枯の義。盛りの過ぎた終りなことをいふ。和訓栞に、「すがる。物の末になりて盡きなんとするをすがるといふ。末枯の義なるべし、縋字をよめるも此義あり」。

すがる　牡鹿の苑の法の導これなれや、互にそれと道芝のすがるばかりの戀草も、めは繁り添ふ母子草千草八千草(用明天皇)(二枚繪)
縋合ふばかりの戀心といふに「すがる」(鹿)をきかせたのである。鹿は殊に女夫睦じいものなればかく云うたのである。(「すがる」は、古今集・離別歌の中に、「すがる鳴く秋の萩原朝たちて、旅行く人をいつとか待たむ」とあり、似我蜂(土蜂)のことである。さるを古今集の舊說や顯注密勘などには、「すがる」を鹿のこととしてある。巢林子が顯注密勘に據つた例は他にもあるので、これも「すがる」を鹿とする說によつたものである)。(ここの文に「牡鹿の苑の法の導」とあるは、その條を見よ)。書言字考節用集・氣形門に、「麢。鹿子」。

*__すぎぢゆう__　やりての杉重に樽の名酒をもり口や(淀鯉)
〔杉重〕杉のへぎ板で造つた重箱、ここの文は遣手の名の杉に杉重をいひかけたのである。

すぎなりさや　黑羅紗の杉形鞘に羽織着て、お駕籠舁くのはこれぱかり(薩摩歌)
〔杉形鞘〕(岩代國若松(會津のこと)城主松平肥後守正信の鑓標)。



杉形の中締　杉形の中締は豐前の小倉(薩摩歌)
〔杉形の中締〕槍標。(小倉城主・小笠原右近將監忠雄の槍標。)



*__すぎはひ__　貧になる尾の裏借屋、はやすぎはひに唐人の行列賣と罷成る(大織冠)
世を過ぐるなりはひの義。渡世に營むわざ。生業。「高砂の尾上の鐘云云」を見よ。

*__すぎはら__　小指の血しほ杉原に、おして心をみかきもり(生玉)
〔杉原〕奉書に似た紙である。雍州府志(貞享三年刊)土產門下・服器部に、「凡加賀奉書越前鳥子、以ㇾ是爲二紙之最一、杉原紙之所ㇾ出也、始謂二杉原紙一、今省二紙字一直稱二杉原一」。

*__すきや__　裏のすきやに寢てゐられます(大經師)
〔數寄屋〕茶室の稱で、離座敷であつて四疊半、四疊、三疊、二疊等の數種ある。數寄屋の片隅に爐を切り、一隅には床があつて、掛物或は花入を具し、また窓があつて明を取つてある。

杉山平八　杉山平八を四つ橋とは是どうぢや、江戸からも京からも四方へ引つり引張つた(今宮)
寶永頃の大阪の歌舞伎役者であつて、その藝上手の方であつた。役者謀火燵(寶永七年刊)大阪の卷に、藝評を「上上」としてある。ここの文は、杉山平八は人氣がよかつたので、江戸からも京都からも引張凧であつたの意。

すぎをり　花の時節は杉折の、雲脚・蝶形・洲崎形(酒呑童子)　持たせし遣手の杉折や、禿が袖の提重の(扇八景)
〔杉折〕杉材で造つた折で、菓子などを盛るもの。

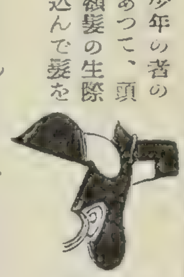
*__すくぜ__　此處にて逢ひ奉るも宿世の御緣(嫗山姥)
「しゆくぜ」(宿世)の約である。過去世。宿緣。

すぐち　呂太后から釣を取る女御の身持、御親父の目にかからぬはすぐちが翳か(浦島)
いぐち。兎脣。俚言集覽に、「すぐち。俗吻字をすぐちと訓めり。(好色一代女)人手代鉦たき短足吻に限らず逢ふを嬉しく思へば」。

ずくにふ　萬九捕つて突退け、こりやずくにふ・知れぬ間は隱すが祕

い(夕霧)

(女用訓蒙圖彙所載)



〔髪前角〕

〔角前髪〕往時少年の者のとつた前髪であつて、頭の頂を剃り、額髪の生際を角ばりて剃込んで髪を結うたもの。

すむゐ はま・さん・きう・ごう・りう・すむゐ(冥途飛脚)

本拳の呼び聲であつて、四を云ふ。拳會角力圖會に「四をスムヰといふは四矣といふことなり」。「けん」(拳)をも見よ。

***すもじ** 待つ身より待たるゝ身の千々の思を御すもじ(孕常盤) 其日は何れも御苦勞すもじ致せしと(娍) 弟御義助様のお心をつくづくとすもじ致すに(千疋犬)

推量の文字詞である。文字詞は、足利時代の末朝廷式微にして供御のもの備はらない爲に、女官等がその物の名をいふを忌んで何もじといふた隱語から起つたものである。御前義經記(正德二年刊)七之卷、別路の文の條に、「まことに過ぎつる頃は恥かしき身の内證を聞かせ参らせ、其折からのせつなさ申さぬとても御すもじあれかしに候」。艷虛無僧(元祿九年刊)卷之一にも、「神慮もすもじされて面白く」。

すもぞいの こな様それでもすもぞいの、私は病になるわいの(曾根崎)

「済むぞいの」の轉訛。

すものぐさ ありしその夜の移り香を、洗ひ落すなすもの草、連立つ道の近かれと(用明天皇)

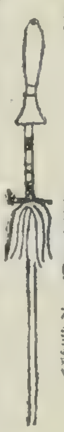
「すいものぐさ」とも云ひ、酢漿草の異名である。

すもり 女房の懐には鬼が住むか蛇が住むか、二年といふもの巣守にして、やうやう母様伯父様のお蔭で睦じい女夫らしい寢物語もせうものと、樂しむ間もなくほんに酷いつれない(天網島)

〔巣守〕物の後に取殘されることを云ふ。源平盛衰記・卷十、丹波少將上洛の條に、「ただ一人島の巣守となり果てゝ、思ひに堪へずはかなくやなりぬらん」。橘守部編・俗語考に、「物の後に取殘さるるを巣守になるといふは、鳥の子のかひわれずして外の巣立し跡に殘るを巣守といふに准へて云也」。

素槍の鍵の枝垂絲 (薩摩歌)

槍標。(奥州森岡城主・南部備後守久信の槍標)。



〔素槍の鍵の枝垂絲〕

***すりこぎ** 右の腕があたまがちなは若し擂粉木などは参らぬか(今宮)

〔擂粉木〕味噌汁。味噌汁は味噌を擂粉木で磨潰して作るよりいふ。諺に「擂粉木を食はぬ者はなし」といふ、擂粉木も味噌汁をいうたものである。

すりばちびん 「はちびん」を見よ。

するがづつみ 紙おしひろげくるくると、駿河づつみに手ばしこく(冥途飛脚)

〔駿河包〕元祿金銀吹替前は江戸・京・駿河・佐渡で小判を造つた。これ等の座で小判を包むに一定の方式があつた。駿河包は駿河小判の包方であつて、即ち紙で小判を卷いて其端を紐で括つたものである。(序に云、駿河小判のことは、大日本貨幣史卷四に「駿河墨判小判金」とありて、德川家康が駿府で鑄造した小判金で、縱二寸五分、横一寸六分五厘、重量四匁二分五厘あつて、後藤・花押等が墨で書いてある)。

***するすみ** 池月・磨墨・大黒・小黒・うせしこのかた(大磯虎)

〔磨墨〕長門本・平家物語、摺墨池月の條に、「する墨はくろき馬のふとく逞しきにてぞありける」。

***すゐ** 所の衆ならすゐであろ(二枚繪) これ半七、伯母は粹ぢや(女腹切) 道頓堀でござんしよの、よいすゐ(氷朔日)

〔推〕推量または推察の義、轉じて、世間で揉まれて、人情に通達し事物に巧者なるをいふ。世態人情を察知通曉すること。花柳社會や藝人間の事情に通じて意氣なこと。この語・大藏流狂言などにも見えてゐる。粹・倅・水など書くは總て當字である。皇都午睡初編中の卷に、「遊里にすゐといふは推量する心にて粹と書き、萬事に委敷人と云ふ義なり、東都にて通といふも、萬事に通達する義なり」と見え、無物庵別世界撰・當世左様候の中に、「通者」と書いて「すゐ」と傍訓してある。

***騅** 矢よりも早し千里の騅(三國志) 鞭をくれてもたじたじ、打つても揉んでも騅逝かず騅逝かずして(持統天皇)

〔騅〕蒼白雜毛の馬。史記・項羽本紀に、「項王乃悲歌忼慨、自爲レ詩曰、力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可二奈何一云云」。

***すゐあて** さあすゐあてに言うて見よ(蟬丸)

〔推當〕推量つて言ひ當てること。當て推量。

***すゐかん** 長は風折水干、後見お出入どやどやと(酒呑童子)

〔水干〕糊を用ゐないで水張にして干した絹の義であつて、これを以て仕立てた狩衣を水干の狩衣と云ひ、略して水干と云ふ。其製狩衣と略同じく、菊綴は總をおしひらめて前に二つ後に八つ附け、紐は丸組の緒で、前の領の上かどに附けて長く、後の紐は領の後の中央に附けて短い。水干の袴は直垂の袴のやうで、地も色も上と同じ。水干は上下一般に用ゐ、童子も着用した。

***ずゐき** 世の人のわらびませうがお笑止と、悔めば夫はずゐきの涙(宵庚申)

〔隨喜〕他人のなす功德善根を見て、これに隨同して喜ぶこと。心から有難いと思ふこと。修懺要旨に、「隨二他修レ善喜二他得一レ成」。巣林子のここの文は隨喜に芋莖をいひかけたのである。

ずゐぐだらに 三年この方隨求陀羅尼百萬遍、この度小松様の御願の爲(孕常盤) なう少將様、何時も此方の里で餌刺が鳥をさす時、隨求陀羅尼を唱へ念佛申せば一つも得ささぬ(虎が磨)

〔隨求陀羅尼〕佛説隨求大自在陀羅尼神咒經の中に説ける陀羅尼である。これ佛菩薩の説かれた詞で、萬德を包藏する咒語である。曾我虎が磨にいへる隨求陀羅尼は、白傘蓋神咒をいうたのである。「だらに」「おんをのり云云」を見よ。

すゐこ 大事の大事の太夫様に、鹽の辛い梅干婆がすゐこな奴と思召そ、お恥かしやといひければ(難波門松)

「すゐきやう」(醉狂)を訛つて「すゐこ」とも云ひ、酒に醉うて氣の狂ふこと。轉じて常人と變つた氣狂ひのやうな言動をなすことを云

しを意にいへり、雪艶の義にや、伊勢物語に鬼のすだくとあり、一本に聞人と言ふは義をもて誤り、兼好集には人のすだくともよめり。俗に息のあへぐをすだくといふも同じ、玉葉集に野もせにすだく白露とも見えたり」。

すたすた坊主　難行苦行のすたすた坊主、すたすた言うてぞ加持しける（鵬田川）

昔寛文頃の時前人に代つて、平素僞を言うて物を貪る罪滅しに、祠に詣でて垢離をとつた乞食坊主であつたが、後には歳末頃裸で鉢巻を締め、注連繩を腰に纏ひ、手に扇と錫杖を持ち、「すたすた坊主の來る時は腰には七九の注連を張り、頭にしつかりわたはめて」、など唱へながら踊つて施物を乞うたもので、京阪では天保頃までもこんな乞食坊主がゐたと云ふ。

すためん　さるぜ・羅紗・すためん（博多）

和蘭語（Stammet）である。和蘭から舶來した毛織物の名。萬金產業袋・四に、「唐人羅紗、これ羅紗の中品なり、地はばかねざし四尺一寸位より三四寸まで、但織耳なし、赤きを次多綿（すためん）といふなり」。

すぢきりふ　筋きりふに塗箆の矢（最明寺殿）

〔筋切文〕鷹の羽の黑白の文（ふ）切れ分れ、筋あつてあざやかなのを云ひ、この羽で矧いだ矢を筋切文の矢と云ふ。

すつてうづきん　「しゆちやうづきん」を見よ。

すつぱのかは　その歌は龍田の川、おのれはすつぱのかはなりと、御戲に伺候の武士ざざめき笑ひ賑ひけり（三國志）　前司が死骸をどつと蹴飛し、ヤイすつばのかはめ談合づくの徒腹（鵬田川）

「すつぱ」は素早（すはや）の義であらう。敵地に入る忍者（しのびもの）の稱であつたのが轉じて、騙者、盜賊、盜賊根性などの意にいふ。「すつぱのかは」の「かは」は、「てんぼのかは」「とつこのかは」など云ふ「かは」がこんな語にも附いたので、意義のないものである。安原貞室撰・かた言（慶安三年刊）に、「盜人（ぬすびと）をすつぱ・すつぱのかはなどといふは如何、又すりといふことは、人の手にもたる物をもすり違ひざまにとるといふやうの事より付そめたる名なるか」。本朝二十不孝（貞享三年刊）巻之三、心を呑まるる蛇の形の條に、「人の物を取る事面白く、此道のすつぱのかはに出合ひ徐徐取上げられ、いつとなく內藏空大名と言立てられ」。狂言・ゐぐひに、「すつぱなら繩かけましよう」。「すつぱのかは」を水波の皮または透波の皮などと書いてあるのは當字である。

***すねざんまい**　そこな馬子めも慮外者、武士の前にて臑ざんまいとさんざんに叱らるる（丹波與作）

〔臑三昧〕足づく。「臑」は足を云うたのである。西澤與志撰・伊達髮五人男（寶永四年刊）三之巻に、「かの侍追駈くる拍子に雷が足につまづき」とありて、雷がこれを咎めた言葉に、「これお客、御自分は我我がすねをしたたか踏み、ことわりなしに行かかるるは男たる者の作法か」とありて、足と臑とを同じことに用ゐてある。鑓權三重帷子（山本九兵衞版・七行本）上之巻に、「まへ脚かいて高いなきし」とあつて、「脚」に「すね」と傍訓してある。「三味」は「腕ざんまい」などいふ「三味」と同じ語である。「ざんまい」を見よ。

ずばいうめ　山梅・野梅・ずばい梅（天神記）

「すはえうめ」（楚梅）の訛。「すはえ」は直生（すぐはへ）の義。「すはえうめ」は細く延んだ梅枝である。

***すはうばかま**　（酒呑童子）

〔素袍袴〕素袍を着て素袍袴を穿くのである。素袍は足利時代以後のもので、直垂の小變したものである。布地に家紋を染出し、菊綴を附ける。素袍袴は長袴であつて、後腰に角な板を入れ、地は素袍と同じもの同じ色を用ゐる。

***すはえ**　うつろふ枝をすはえにかへて互に力を合すべし（國性爺）

〔楚〕直生（すぐはへ）の義。直く細う延びた枝。國性爺合戰のこの文は、風は伏兵、弱き枝は弱兵、莟は勢力、强き花は强兵、うつろふ枝は負ける兵、すはえは新手の兵に喩へたのである。「姫君（ひめぎみ）下知して宣はく云云」を見よ。

すはらみつ　「摩訶般若（まかはんにや）でも落人のすはらみつ云云」を見よ。

ずぼろばう　光明丸が頭をこそげずぼろばうにしたがよい（賀古教信）

「ずんぼろばう」を見よ。

すまき　二人簀巻の妹背川（生玉）　最早科（とが）は極つたり、夜に入つて切戸の沖へ簀巻にして沈めにかけよと（松風）　今ぞ行くらん三瀨川、とどきの淵に着き給ふ、武士前後に立寄りて、竹の簀巻のとりどりに、繩と葛と云ふ處へ（伊豆日記）

〔簀巻〕身體を竹簀で卷くこと。江戸時代に臨時に行つた酷刑に、簀巻とて罪人を竹簀に卷いて川中に沈めるのがあつた。御仕置裁許帳に、天和三年座頭意津一が人の妻と密通してその本夫を殺したので、意津一の處刑を記して、「右之座頭意津一を岩船にて簀巻にいたし、於二佃島之沖一沈レ之」と見えてゐる。

すまた　ええ氣の毒な、旦那の思案とは皆すまたぢや（天鼓）

「すまと」（徒的）の轉であらう。當外れ（あてはづれ）。當違ひ（あてちがひ）。好色盛衰記（元祿元年刊）久七生れながら俄大臣の條に、「知らぬ謠にすまたの手拍子、盃のあひを頼めばもとへ戻さず」。義經千本櫻・第四に、「鬼佐渡ロあんごり、ありや何の事どういふ事、言合せたは皆すまた、覺範はどう思ふぞ」。



〔すまふとり草〕

相撲取草（すまふとりぐさ）（用明天皇）

草の名、菫草の異稱。

すみとりをしき　さあまづろくにと、挨拶も角取なしき、献立は一汁三菜仔細顔（嵯峨天皇）

〔角取折敷〕四すみの角を切つた折敷。貞丈雜記・巻之七・膳部の條に、「角（かど）の折敷とも又角とばかりも云ふは、四すみの角を切りたる折敷の事なり」。

すみび　青編笠が紅葉して、炭火ほのめく夕（ゆふべ）まで、思ひ思ひの戀風や（冥途飛脚）

〔炭火〕並木舍五瓶編・俳諧通言に、「元祿年中まで夜見世に行燈なく、炭火にて顔を見せたり」とあるやうに、日が暮れれば炭火を焚き、其火影で遊女の顔を見せたのである。なほこの文に就ては「あをあみがさ」をも見よ。

***すみびたひ**　頼光に似たれども丸額と角額、この分にては渡されず（嫗山姥）

〔角額〕角前髮（すみまへがみ）に同じ、その條を見よ。

***すみまへがみ**　頭巾でつむりは見えれども、角前髮のお小姓らし

づけたのである。新古今集・夏歌の部、西行法師の歌に、「聞かずとも爰をせにせん杜鵑(ほととぎす)、山田の原の杉のむらたち」とありて、野州の註に、「ここをせにせんとは所詮にせんと也」と見えてゐる。

***ぜい** 此處(ここ)で晩まで日暮しに酒にするぢやとぜい言ひて(曾根崎) あのぜいこきの太兵衛が浮名を立てていひちらし(天網島) ほんにぜいこきの彥さん、然もぶつぶつ醉うた足もと、見咎められてはなほ惡口と(壽門松)
〔贅〕むだ。高慢げなむだごと。贅澤。「ぜいこき」とは贅言。贅を言ふこと。

***せいくわ** あのお子は二位姬樣とて御妹、攝家清華の御方より御望多けれども(西王母)
〔淸華〕攝家に亞ぎ三公・大將に任ぜらるる家柄を云ひ、轉法輪三條、菊亭、大炊御門、花山院、德大寺、西園寺、醍醐、久我、廣幡の九家である。

せいし 「范蠡西施(はんれいせいし)を湖水に沈め」を見よ。「西施乳」は「こうい」の條を見よ。

***せいし** 觀音勢至手を取りて蓮の花に泊らんせ(丹波與作)
梵名を摩訶那鉢(Mahasthamaprapta)と云ひ、譯して勢至と云ふ。觀世音菩薩と共に阿彌陀如來の脇士となり、智慧門を司る菩薩である。

せいじばら 右大辨早廣青侍原に物の具させ(蟬丸)
〔靑侍原〕「原」は殿原など云ふ原で、「だち」の意。「あをざむらひ」を見よ。

せいずゐ これ與兵衛樣、このせいすゐな私を熊鷹の熊手のつかみづらのと異名をつけ(卯月紅葉)
〔淸粹〕まじりのないこと。潔白。增補俚言集覽に「淸萃‖みかけ切て見ごとなり」。

せいせい 木の間に月のもろもろかと、和光晶晶たる中よりも(酒呑童子枕言葉)
山本九兵衛版・八行本のここの文に、「晶晶」に「せいせい」と傍訓してあれども、晶晶は「しやうしやう」である。晶晶は光明な貌。歐陽脩の秋月賦に、「晶晶盈盈」。

***せいたう** 奧樣せいたう强きにや、新七とやらいふ手代かたむくろにせいたうし、一門衆町所まで賴んで藏藏に封を付け(淀鯉) 駿河國(するがのくに)の殿樣より堅くせいたうにて旅人を改め候へば(今川了俊)
〔政道〕公儀から制裁を加へることを云うたのであるが、轉じて禁戒または制裁の意にいふ。俚言集覽に、「政道。禁戒の方にいへり」。

せいだう 淸道の大旗羽旄風に吹き靡かせ(唐船噺)
〔淸道〕天子行幸の前驅。司馬相如の長楊賦に、「且夫淸レ道而後行、中レ路而馳」。夢溪筆談に、「車駕行幸、前驅謂二之隊一、則古之淸道也」。

せいたか 「こんがら・せいたか」を見よ。

靑田(せいでん)の劉伯溫(りうはくうん) 「劉伯溫」を見よ。

***せいばい** この女中に科(とが)あればこそ御成敗、汝が罪汝を責む(娥) ともかくも御せいばいと極まりしを(丹波與作) 他國者に投げられては國へ歸つても成敗、死ぬる命は何處でも一つ(博多)
〔成敗〕「成」は就(な)る、「敗」はやぶる義。政事を取扱ふにいひ、轉じて刑罰を加へる義となり、更に轉じて斬棄てることを云ふ。

せいひ 對の挾箱靑皮の覆ひ(吉岡染) 靑皮の覆ひの挾箱(持統天皇)
〔靑皮〕挾箱等の覆にする厚くて堅い舶來革。

せいふ 玉樓金殿の中には三夫人九嬪二十七人の世婦(國性爺)
〔世婦〕君主の左右に仕侍する女官であつて、嬪の次位である。辭源に、「(禮)「天子有レ后、有二夫人一、有二世婦一」、世婦凡二十七人」。

***せいもんくされ** 祐經かばふ心でも誓文くされなけれども(百日曾我) 誓文くされ明日でも廓を得出でず、居ぐさりにする法もあれ(蛙合戰) 八百貫目や八千貫は誓文くつされ利なしてやんすといひければ(大經師)
〔誓文腐〕「誓文くつされ」とも云ふ。誓文に違ひ僞るに於てはこの身潰れただれもすれの義。自誓の詞で、決して僞らぬと云ふ意にいうたものである。

せいりき 十四貫目横取りして曲事に遭ふ筈を、とかくおれが精力で沙汰なしに事濟んだ(淀鯉)
〔精力〕骨を折ること。盡力。

せいりやう 「井(ゐ)の中(なか)の蛙云云」を見よ。

せいろう 伏繩目の鎧を着、せいろうと云ふ白月毛の馬にぞ乘つたりける(大原問答)
〔西樓〕源平盛衰記・卷三十六、熊谷大手に向ふ條に、「餘に祕藏して假居の西に廐を立て、飼は人目を憚りて夜は引出(ひきいだ)し愛しければ、馬の白きを月に喩へ、西の廐を樓に喩へて西樓とぞ名付けたる」。

***せいろう** 所所に井樓矢切など付けて(用明天皇)
〔井樓〕やぐら(櫓)。人を登らせて敵陣を偵察する望樓。

***西王母(せいわうぼ)** 我子の爲に捨てん命、東方朔・西王母が壽命にもなほ替へはせじ(持統天皇) 西王母が園の桃、百とせ千年の御命(女楠) これぞ誠に三千歲に花咲き實る西王母の園の桃(西王母)
〔西王母〕仙女である。漢の元封元年武帝の宮殿に降り桃實を帝に捧げた。この桃三千年の間に一度花咲きて實を結ぶのみであると云ふ。列仙傳に、「西王母卽龜臺金母也、以二西華至妙之氣一、化而生二於伊川一、姓緱、諱回、字婉姈、一字大虛……、漢元封元年降二武帝殿一、母進二蟠桃七枚於帝一、自食二其二一、帝欲レ留レ核、母曰、此桃非二世間所レ有、三千年一實耳云云」。漢武內傳に、「王母降二漢宮一、侍女以二玉盤一盛二仙桃七顆一、大如二鴨卵一、形圓色靑、母因啗レ二、以二五顆一與レ帝、帝核著レ前、母問、用レ此何、上曰、此種美欲レ植レ之、母笑曰、此桃三千年一實、非二下土所レ植」。

淸和(せいわ)の臺(うてな) 此處に荷も淸和の臺を出で、桃園の御葉末源の牛若丸(孕常盤)
淸和天皇の皇子貞純親王の御子經基に源氏の姓を賜はつた。この系統を淸和源氏と云ふ。義經はその裔であるによつて、「淸和の臺を出で」と云うたのである。

せう 扨御鷹は・つみ・えつさい・さしば・せう・隼・このり(百日曾我)
〔兄鷹〕大鷹の雄を云ふ。和名抄に、「鷹。大者皆名二於保太加一、小者皆名二勢字一、……俗說雄鷹謂二之兄鷹一、雌鷹謂二之大鷹一」。

ぜう そよと物音風音に火鉢のぜう

ふ。醉狂奇態（すゐこけたい）などとも見えてゐる。石曼卿の詩句に「醉狂鶻鵰」。寛闊平家物語（寶永七年刊）卷之四、空燒は比叡の靈鷲の條に、「酒に醉ものはあれども、草子に醉狂する例なし」。

*ずゐさう　色よき娘を人身御供に取らざれば一在所祟をなす、其驗には山うつぎの折枝が鳴渡つて棟木に立ち、家の柱より血しほ流れ出づ、其瑞相には前方に必ず取らるべき娘が熱病を病む知らせあり（振袖始）　道に背く無分別、追付（おつつけ）獄門の相伴せんずる瑞相、ええ笑止な（雪女）

〔瑞相〕吉兆を云ひ、轉じて前兆の意に云ふ。平安城（古淨瑠璃）第一に、「三人の逆臣襲ひ起り、我君を犯すべき瑞相、アア恐ろべし」。

*すゐざん　小倉彦九郎が女房なるぞ、推參な事をして必ず我を恨みやるな（堀川波鼓）　これ淀次郎殿、理非はともあれ、兄御に向つてげらげら笑・推參ではあるまいか（持統天皇）

〔推參〕しひてまゐる義。轉じて無禮の意に云ふ。

すゐしやうりん　水精輪の地をならし（松風）

〔水精輪〕水晶で成れる輪寶。

*ずゐじん　（本領曾我）

〔隨身〕太上天皇攝政關白大臣大中少將等に從ひ警護する者で、これを兵仗とも云ふ。左右近衞府の舍人即ち將曹府生番長近衞等の者これを勤めた。太上天皇の隨身を御隨身と云ふ。攝政關白の隨身は凡十人にして、左右近衞府生各一人近衞各四人を隨身となすが例である。大臣大將は隨身八人で、即ち府生一人番長一人近衞六人である。大納言大將は隨身六人で、即ち番長一人近衞五人である。中納言中將より少將は衞府長一人小隨身四人或は二人である。隨身の裝束は褐して冠・褐衣・狩袴を着け、弓箭を帶し太刀を佩いた。

ずゐむ　不思議の瑞夢を感じて（用明天皇）　この邪法國に起り日月の翼を踏折れば、王法忽ち覆り地に墮つる瑞夢ならずや（蛙合戰）

〔瑞夢〕瑞相（ずゐさう）（その條を見よ）を前兆の意にいふやうに、瑞夢を前兆の夢の意に云ふ。

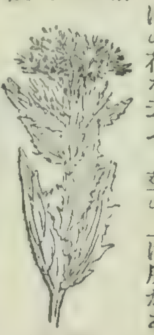
すゐりん　地に水輪あり、星に水曜北方一德の水あり（嵯峨天皇）

〔水輪〕世界地層の下底をなすもので、風輪上に水輪があり、水輪の上に金輪際がある。俱舍論頌に、「安二立器世間一、風輪最居レ下、其量廣無數、厚十六落叉、次上水輪、深十一億二萬、下八落叉、水餘凝結成レ金」。

すゑつむはな　名に立つ末のと言置きし、末摘花の閨の雪（冷泉節）

〔末摘花〕源氏物語中の人物で、常陸宮の女であつて、光源氏と契を結んだ。「名に立つ末のと言置きし云云」を見よ。

すゑつむはな　末摘花は紅の花（用明天皇）　末つむ花の染衣も、心うつらず照手の姫（小栗判官）


〔花摘末〕

〔末摘花〕べにの花を云ふ。莖の上に房があつて、その房の末に小さき花の出るを摘取る故にこの名がある。「末摘花の染衣」は紅色の染衣である。（當流小栗判官のここの文に「すゑすむはな」とあるは誤）。

*すをかふ　そばから喧嘩のすをかふも、これ堪忍のせごしなる（娥）

賺し挑む。いらざる世話をやいて人の氣を損ぜしめる。此方より事をしかけて怒らしめる。按じるに「す」は「賺す」の「す」で、「かふ」は「そびをかふ」（その條を見よ）などいふ「かふ」と同じ語で、挑む意。一說に、論語・公冶長篇に「子曰、孰謂二微生高直一、或乞レ醯焉、乞二諸其鄰一而與レ之」とあるより出た諺であるといふ。鴨長明の歌に「酒しほは味噌が瀨までにさしのぼる、すを過ぎて行く人に乞はばや」とあるは、この微生高が故事に據つたのである）。娥哥かるたのこの文は、醋をかふに取つて「せごし」（その條を見よ）にいひつづけたのである。

すん　二寸より上目なく（女楠）

〔寸〕三枚骨牌にて數を寸といふ。蓋し文（「つきなか」の條を見よ）を寸と書いてすんといふ。

ずん　あの男のおなかの臍のずんに印判捺ゐたがよいわいの（持統天皇）　墨を染め、虎の順（ずん）にさし當て、四五間間（あひだ）をおきながら、筆引く方に從つて（反魂香）　大袋は同國唐津ずん切鞘に銀の笠（薩摩歌）

〔ずん〕「ずゐ」（髓）を訛つて「ずん」とも「ず」ともいふ。髓とは莖幹などの中心なる柔軟な部分をいひ、轉じて物の眞中（まんなか）、胴中（どうなか）をいふ。「瓜のず」の「ず」も、「頭（あたま）のずんぎりが痛む」（中國地方語）などいふ「ずん」も、髓の訛つた語である。この「ずん」を「順」「寸」などと書くは當字である。「臍のずん」とは、臍の中心のこと。「虎の順」とは、虎の胴中（どうなか）のこと。「ずん切鞘」とは、鐺鞘を胴中（どうなか）から切つた形、即ち先（さき）を輪切にした形の鐺鞘をいふ。

すんばく　此寒氣で寸白でも起つたか、どれ其寸白の蟲捻殺して本復させせんと（川中島）

〔寸白〕人體内に蚘蟲發生して惱む病氣であつて、その蚘蟲の長さ一寸ありて色白ければ、これを寸白といふ。箋注和名類聚抄に、「有二寸白蟲候一、云長一寸而色白、形小褊、並云九蟲之一蟲也、……今俗謂二婦人疝病一爲二寸白一者誤」。桂洲著・病名彙解（貞享三年の序がある）卷七に、「病源に云、寸白は九蟲の內の一蟲也、長さ一寸にして色白く形小偏也、腑臟虛弱によつてよく發動す、人の精氣を損し腰脚疼弱す、此蟲生成長一尺なるときは人をして死せしむ」。

すんふくちや菅の笠　（三國志）

濡れてすぶくちやの菅笠といふを、朝鮮語めかした諧謔であらう。

*ずんぼろばう　腕も脚も打落し、ずんぼろばうにしてくれん（三國志）　あのぼいた髮の毛引拔き、ずんぼろばうに仕ると（女夫池）　芥子の花もぐずんぼろ坊主（會稽山）

〔ずんぼろばう〕「ずぼろばう」（その條を見よ）とも云ふ。蓋し「すべりばうず」（滑坊主）の「ず」を略して轉訛した語であらう。つるつる坊主。すつぺら坊主。蘆屋道滿大內鑑・第四に、「耳鼻かけてごそごそ、ずんぼろ坊主にすりこぼち」。花山院都巽（紀海音撰）に、「雀ずしの樣にこれこんな腹になつた時、よい取合せでずんぼろぼん、尼御所への流者」。

せ

せ　戀情（こひなさ）け、愛をせにせん蜆川、流るる水も行き通ふ（天網島）

詮に瀨をいひかけたのである。即ち所詮にせうた、流れる水の瀨にかけて、蜆川といひつ

り(冥途飛脚)

〔節季候〕歳末の頃齒朶の葉を挿した笠を被り、赤布で面を覆うて目のあたりだけを露はし、二人乃至四人連立ちて人の家の庭に入り來て、唄を謠ひ踊つて米錢を乞うた物貰の一種である。日次紀事(延寶年中成)十二月二十二日の條に、「節季候。自二今日一乞人、笠上挿二貫前葉一、以二赤布巾一覆レ面、纔出二兩眼一、二人或四人相共入二人家一、庭上催レ躍乞二米錢一、是謂二節季候一、則告二節季蔵暮一之詞也、倭俗候字代二也字一用レ之、至二二十七八日一而止」。


(人倫訓蒙圖彙所載)

〔節季候〕

せきだい 大盡も目をやり手の玉が、忍ぶ戀路をせき臺の、女蘭は呂州の姿(生玉)

〔石臺〕植木鉢の中に石を載せて、木または草の其石の間から生ひ出てゐるやうにしたもの。女用訓蒙圖彙(元祿元年刊)卷四に、衣服の模樣に「石臺」とあつて、この圖が載せてある。巢林子のここの文は、鴇老の玉が遊客と遊女との忍ぶ戀路を塞きに石臺をいひかけ、石の間から女蘭男蘭の生ひ出てゐる植木鉢の見所あるを呂州の姿と見立てたのである。



〔石臺〕

關の孫六 心もせきに關の孫六一尺七寸拔き放し(天網島)

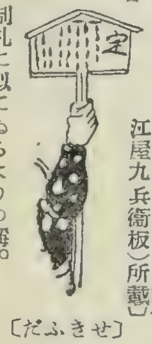
美濃國關の刀匠兼元をいひ、その人の作の刀。兼元は孫六と稱し、赤坂關の一派で、明應永正年間の人であるともいふ。二世兼元も孫六と稱し、初代兼元の子で、美濃赤坂に住し、三世兼元も孫六と稱し、二世兼元の子で、美濃關に住し、天文・永祿年間の人。巢林子の當時は關の孫六流行したものと見え、女大名丹前能(元祿十五年刊)卷七、方便に情の羅生門の條にも、「鉢卷しめて尻からげ、腰にさいたは關の孫六、六尺の棒ひつさげ」とある。

せきひつ 松の荒皮押し削り、腰指の石筆嚙みしめし(振袖始)

〔石筆〕紫黑色の粘土質の石を筆形に作つたもので、これを嚙み濕して書けば字の色濃厚となる。和漢三才圖會(正徳五年刊)卷十五、藝器の條に「石筆=其石紫黑色、削成如二筆形一、嵌二管軸一、而不レ用レ墨書レ字、最易レ滅、唯備二忽忘一耳、廣博物志所レ謂廬山有二石墨一、可レ書者此類矣」。

せきふだ 賴光の關札引拔いて、淸原の右大將殿御とまりと高高と押立て(嫗山姥) 正盛が關札取つて引拔き(嫗山姥)

〔關札〕本陣の宿に、何官職何某殿御泊など と、止宿する旅人の姓名などを記した立札をいひ、その形關所の制札に似てゐるよりの稱。


〔こもちやまうば(近江屋九兵衞板)所藏〕

〔せきふだ〕

せきもん 「子路が石門」を見よ。

せきやく 石藥漢藥に毒蟲などの處方は毒藥にては候はぬか(冷泉節)

〔石藥〕砒石などの鑛物質のもので、漢方醫の用ゐる藥劑。

せきりん 勾踐は石淋を嘗めて會稽の恥を淸め(雪女)

〔石淋〕小便の滯りつまる病の名。下學集上・支體門に「石淋。小便澁也」。太平記・卷四、吳越軍の事の條に、「吳王夫差俄に石淋といふ病を受けて、……(勾踐)潛に石淋を取りて是を嘗めて、其味を醫師に知らせらる」。

せきれいざし 夫が差替三尺二寸の背かいらぎ鶺鴒ざしにぼつこんで(持統天皇)

〔鶺鴒差〕鶺鴒の尾の如く佩刀の長く後方に出たのを云ふ。

せきわく 「せきくわくの屈める云云」を見よ。

***せく** むげなうせくではなけれども、それさへなほ駈引あり(重井筒) 内からは紙屋治兵衞故ぢやとせく程に(天網島)

〔塞〕情交密な男女の逢瀨を塞止めること。邪魔をする。

***せぐる** 言はんとすれどせぐり來る、淚は辭に先立ちて(浦島) 歎けば歎き泣けば泣き、戀にせぐりの玉の緖の、己が思ひにたぐられて(二枚繪)

「塞き苦し」の「き」を略して「せぐるし」(その條を見よ)と云ひ、又「せぐるし」の「るし」を約めて「せぐり」と云ひ、ラ行四段活用語となれるもの。塞き苦しい義であつて、胸の塞がるをいふ。こみあげる。和訓栞に、「せぐる。俗語也、嘔氣をいへり、塞牽の義なるべし、せぐるしともいへり」。心中二枚繪草紙のこの文の「せぐり」は轉成名詞であつて、「せぐり」に「繰り」をいひかけて、「玉の緖」にいひつづけたのである。

***せぐるし** 奧には親のせぐるし辭(宵庚申)

「せぐる」を見よ。

***世間張る** 家質の利息のたし銀に黑谷の和尙樣より借つたれども、世間張つて何にせん、家を町へつき出し(大經師) 勤の身は全盛する程世間がはつて(大經師)

〔世間張〕世間にみえを張る。世間に體裁をかざる。

***せこ** せこの者群り來るその中に、大將とおぼしき者大音上げ(國性爺) 狩裝束に美を盡し、せこの人數は所領の高下、面面持の場所に(百日曾我)

「勢子」の義であらう。(萬葉集には勢子と見えてゐる)。狩獵の時に鳥獸を驅出す夫卒を云ふ。

せごし そばから喧嘩のすをかふも、これ堪忍のせごしなる(娥)

〔瀨越〕度を過すこと。魚の背を割いて醋漬にするをせごしといへば、ここの文はそれをもきかせて、「醋をかふも」といひて、「せごし」の語につづけたのである。「すをかふ」をも見よ。

せこむ いつかに高名したきとて科なき女をせこむること、兄ながらも廣綱は侍には似合はず(佐佐木) お龜女夫を踏付けにせこめまはす

の動くたも、心を配つて守りける(女護島) 三平二滿の大口紅、肌の艶の四十過ぎ、炭にぜうの溜りし如く鹿の子斑の厚化粧(日本武尊) 鍛冶屋の炭のぜうどのや、髭の血筋ぞ隱れなき(唐船噺)

正しくは「じよう」(尉)である。老翁(「じよう」を見よ)をいひ、老翁の白髪の意より轉じて、炭火の時を經て白炭となつたものをいふ。燃燒した後のふはふはした灰。三題噺作者評判記(文久三年刊)春迺屋幾久の序文に、「三笑亭の三題噺は一分線香の煙りと消、誰しら雪の積を積、年を累て絶たりしを」、とありて「燼」に「じやう」と振假名が附けてある。

せうがい 病は少し癒ゆるより起り、孝は少艾より劣る(川中島)

〔少艾〕年若い美女をいふ。孟子・萬章上篇に、「知レ好レ色則慕二少艾一」「孝は少艾より劣る」とは、男子が女色を思ふ年配になると孝心の衰へるものであるとの意。「病(やまひ)は少し癒ゆるより起り云云」をも見よ。

せうくわう 少光少淨無量天(天神記)

〔少光〕色界(しきかい)二禪天の第一天なる少光天をいふ。「色界の十八天」をも見よ。

せうくわん 「ちとくわん」を見よ。

せうげどり 「しよげどり」の條を見よ。

せうごん 「しやうごん」を見よ。

***せうざん** してそれは小產ばし召されての事かといへば(孕常盤) 懷姙五月めに小產し(川中島)

〔小產〕流產。合類大節用集(享保二年刊)に、「小產、或作二消產一、半產(なげき)也」。

***せうし** 不覺の嘆に時移せしが、あら笑止や何處に立寄り一宿せん(女夫池) 親仁殿に非業の金を出さすが笑止さに、こなた贔屓でせつくぞや(女殺)

〔笑止〕興のさめること。轉じて、氣の毒。いたはしいこと。謠曲・鉢の木に「あら笑止や、又雪の降り來つて候」、謠曲・船辨慶に「あら笑止や風が變つて候」。

***せうしやう** 今宵ならずば明日明後日、少將程通うても叶はぬ間は叶はぬなり(雪女) もしもよなら私や小町、お前は四位の少將と、車の榻に抱付く(最明寺殿)

〔少將〕深草四位少將を云ふ。小野小町に懸想して百夜通ふことを約し、その通うた度數を車の榻に刻んだが、九十九夜まで通うて今一夜といふ時になつて死し、遂に思を果すことが出來なかつたと云ふ。このこと謠曲・卒塔婆小町などにも見えてゐる。「深草の少將」をも見よ。

***瀟湘(せうしやう)の夜の雨** 逢窟雨しただりし彼の瀟湘の夜の雨も、これにはいかで勝るべき(百合若)

瀟湘は支那湖南省を流れてゐる二水の名。湘水は洞庭湖に注ぐ九江の一で、永州府の北を過ぎ、瀟水に合流するあたりを瀟湘といひ、清流澄徹風光佳絶である。「瀟湘の夜の雨」は所謂瀟湘八景の一である。夢溪筆談に、「度支部員外郎宋迪巧レ畫、尤善爲二平遠山水一、其得意者、有二平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晩鐘、漁村夕陽一、謂二之八景一、好事者多傳レ之」。

***せうしん** 姉の連合ひ彦九郎殿留守の事なり小身なり(堀川波鼓)

〔小身〕身分卑い武士で秩祿薄き者。

せうすゐこかう 我こそ大草香の臣が成の果と、いふ聲ばかりは彷彿として憔悴枯槁の木の葉衣(浦島)

〔憔悴枯槁〕瘦せ衰へて枯木の如くなれること。屈原の漁父辭に、「顏色憔悴、形容枯槁」。

***せうち** 親兄どもは小知を取り(薩摩歌)

〔小知〕少しの知行。少しの扶持米。

***せうと** この北の方の御せうと右大辨早廣この體をきつと見て(蟬丸)

「せひと」(兄人)の音便。兄。合類大節用集に、「本朝俗、兄弟姉妹相謂爲二背人一」。

せうど 「しやうど」を見よ。

***せうれつてい** 古の照烈帝に關羽の添うたる如くなり(天神記)

〔照烈帝〕支那三國時代蜀の皇帝で、即ち劉備、字は玄德、前漢景帝の後裔である。

せがい つまくれなゐの檜扇を船のせがいに挾みて(加増曾我)

〔背〕船の兩脇の總名である。和漢船用集・卷十に、「セガイ。船の兩脇の惣名也、萬葉集・卷三・雜歌部に、武庫の浦をこぎたむ小舟粟島を背(そがひ)に見つつともしき小舟と讀る、背の字ソガイと讀めり、セ・ソ通音なり、背の字用べし」。平家物語・卷十一、那須與一の事の條に、「皆紅の扇の日出したるを船のせがいに挾み立て」とあるも、兩脇なる船枻でさる。

せかいらぎ 小川通(ぜほり)のせかいらぎ今日明日に持たしてやれ(女腹切) 夫が差替三尺二寸の脊かいらぎ、鶺鴒差しにぼつこんで(持統天皇)

〔脊梅花鮫〕鮫皮精義(天明五年刊)に、「脊(せ)カイラギは脊通りにずらと地(ち)より大きなる粒の頭(かしら)より尾まであるが故に、脊カイラゲといふなり、長さ三尺より六尺許もあるものなり」。柄(つか)に脊梅花鮫を卷いて作つた刀。

***せがむ** 年切增のもがりごと急急にせがむと見えた(長町女腹切) 菱屋の花代、津の國屋の料理代、合せて三百四十五匁、扨も扨もせがまれます(二枚繪)

叱責する。督責する。强請する。和訓栞に、「せがむは俗語なり、責嚙の義、督の字を譯せり、人をせがむといふ事無住の雜談集に見えたり」。

せかんろほふ 施甘露法繰掛け責掛け祈誓ある(嵯峨天皇)

〔施甘露法〕六道の衆生を解脫さす爲に、呪を唱へながら結ぶ印契である。觀自在菩薩隨心呪經に、「施甘露印第十七。以二左手頭指一與二大母指一相捻、餘三指直竪向レ外託、又以二右手一垂背向レ下直舒、五指向レ下垂、作二此施甘露法一、六道衆生悉皆飽滿、離レ苦解脫誦二身呪一」。

***せき** 手詰のせきを勝軍(國性爺)

〔持〕圍碁にて、雙方互にせめ圍んだとき、先そこに石を下す方の不利な場合に、其儘に捨置く場所を云ふ。

***せきこう** 學ばずして石公孫吳の兵術に通達し(川中島) それ柔よく剛を制し、弱よく强を制するとは、張良に石公が傳へし祕法なり(碁盤太平記)

〔石公〕黃石公をいふ。(三略の書は黃石公の撰であるとの說あれども實は僞書である)。「くわうせきこう」を見よ。「石公孫吳」の「孫吳」は孫武と吳起を云ひ、共に支那上代の兵法家である。

せきぞろ 座敷は善哉・庭にはせきぞろ(夕霧) 或は巡禮・古手買・節季候に化けて家家を覗きのからく

單位で、一瞬時よりもなに短小な時間を云ふ。西域記・二に、「時極短者謂二刹那一也」。

***せつぱ** 胸おし開けば九寸五分肝先に切羽まで（堀川波鼓） 勘十郎殿先刻にから切羽鎺する通り、金渡したら御損であらう（歌念佛）

〔切羽〕刀の鍔の兩面に着き、一つは鞘に當り一つは柄に當る所に添へた薄い金具である。「鎺」は鍔元を固める金具の稱。「切羽鎺する」とは詰開きするといふ意の洒落詞である。

せつり （百日曾我）（女護島）（賀古教信）

〔刹利〕刹帝利の略で、梵語 Ksatriya の訛である。印度人族間に於ける四種の階級（婆羅門・刹帝利・毗舍・首陀）中の第二位にあつて、王種及び軍人の階級である。

***せつろく** 伯叔の帝に攝籙の臣として（聖德太子）

〔攝籙〕攝錄とも書いてある。天皇に代つて萬機の政を統べ掌ること。日本書紀・推古記に、「立二廐戸豐聰耳皇子一爲二皇太子一、仍錄二攝政一、以二萬機一悉委焉」。

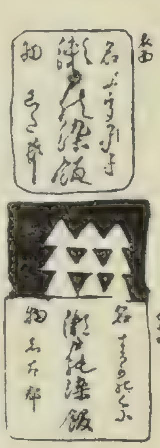
***せと** 止めう止めうと思ひしが、これ程の瀬戸が無うてうかうかと盡した（重井筒）

狹門の義。さしつまつたこと。さしあたつた場合。瀬戸際。

せとのそめいひ さきへさきへと咲かかりたる藤枝・岡邊・瀬戸のそめ飯（丹波與作）

〔瀬戸染飯〕瀬戸は駿河國志太郡にありて、島田町と藤枝町との間にある小邑である。染飯はこの地の名物である。東海道名所記に、「瀬戸の染飯は此所の名物なり、その形小判ほどにして强飯に山梔子をぬりたり、うすきものなり」。東海道名所圖會・四に、「瀬戸。島田より一里許先（東）にあり、……、名物染飯瀬戸村の茶店に賣るなり、强飯を山梔子にて染め

〔昔瀬戸の染飯の袋に捺した印影〕



てそれを摺りつぶし、小判形に薄く干乾して賣るなり」。

せどや 晦日節季は前垂掛で、裏屋・せどや・けんどんや三界懸取に歩くやうな勤するも（生玉）

〔背戸屋〕背戸は家の後口である。背戸屋といふも裏屋のことである。

***せな** 親もない身、大事のせなの友達（女護島）

兄。女より夫を親しんで呼んだ稱。和訓栞に、「せな。萬葉集にみゆ。君長をも夫をもいふなり、兄名の義なるべし、東國の俗今も兄を稱せり」。

ぜにだいこ なう慾市殿その拍子では踊られぬ、錢太鼓の三味線知らずば知らぬと頭から言うたがよい（博多） 私ども二人錢太鼓稽古して居たりや（博多）

〔錢太鼓〕扁圓な小さき太鼓。好色二代男（貞享元年刊）巻一、親の顏は見ぬ初夢の條に、「此所（六角堂）は洛中のお乳の人の集り遊ぶ所なり、錢太鼓・唐人笛の響・竹馬の鈴の音、ものの騷しき中へ」。嬉遊笑覽・卷六下・兒戲に、「錢太鼓・唐人笛＝〔諸艶大鑑〕貞享元年此處は洛中のお乳の人の集りあそぶ所なり。錢太鼓唐人笛のひびき竹馬の鈴の音云云、小きを錢に響へていふは錢龜・錢蓮などの如し、今豆太鼓といふも同義なり」。巣林子のここ の文は、禿二人が錢太鼓の音に合して唐人踊の稽古をしてゐたのを、慾市が三味線を彈いて邪魔をしたのである。

ぜにまた 駕籠賃は山田まで錢股ぢや、御合點でござるか、むむそれは鳥目のことか、鳥目は持たぬ（百合若）

〔錢股〕駕籠昇の輩の符牒語で錢二百文。俚言集覽に「驛路雲助が詞に二をマタと云」。

***ぜね** ぜれの濟むまで是を取れと鐺の柄に縋付き（夕霧） この頃も彼の君がぜれを十六枚つん出いて（加增曾我）

「ぜに」（錢）の訛。

***せびらかす** 節季節季にせびらかし（女腹切） 今日は島屋で彼の田舍のうてずにせびらかされて頭が痛い（冥途飛脚） 守屋が妻にせんと兄の靱負をせびらかす、辛氣な事ばつかり（聖德太子）

ねだれさいなむ。强請し責める。杉楊子（享保五年刊）巻一に、「明くれば水を汲み薪をになひ、鑑の下をせびらかすよりよまひごとして」。現今も佐世保地方で、「せびらかす」又は「せぶらかす」といひ、あざける、からかふ、ひやかすなどの意に用ひる。

せぶる 公時躍出で、女郎せぶつて掴取つた一歩小判の金が罰覺えたかと、こんとくらはす頭の鉢（酒呑童子） 町屋は家並・門並、百姓は頭數にせぶり取り吸取り（唐船噺）

「せびる」の轉訛。せがむ。强請する。商人世帶藥・卷四に、「西方淨土の生ぼとけ、さぞ勝手知らぬ新華臺をせぶり給ふらめ」。

***せまくら** 變る瀬枕・沈む淵、思ひ二つの中町や（二枚繪）

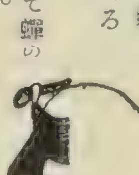
〔瀬枕〕川瀬の高き處をいふ。尾張家苞に、「石ばしる初瀬の川のなみまくら云云」の歌の註に、「この頃の文章に、川のながれの早きを瀬枕打てぞながれけるといへる事あるは、瀬にあたりてわきかへる事と聞えたれば」。和訓栞に、「せまくら打つなど云ふは、速瀬の波の枕をうちかへす如きをいへり」。

***せみをれ** 蟬折の一管と共に形見にたび給ふ（孕常盤） まだ音も慣れぬ蟬折の、一よ重ねしつま琴や（冷泉節）

〔蟬折〕鳥羽院の御時唐土から渡つた笛で、寒竹にて造り、その竹の節恰も蟬に似てゐたのを、高松中納言實平がこの笛を吹いた時蟬を打折つたによつて、蟬折と名付けたと云ふことが源平盛衰記に見えてゐる。

せみをれ 千松齒・五分一・せみをれ・かものはし（加增曾我） 新月代の淺翠、翡翠の髷子鬢、蟬折の優に威ある美男（五人兄弟）

〔蟬折〕髷先を反折して蟬の形をした男子の結髮。



〔折蟬〕

***せめうま** 六十餘州の武士の司、御遊とならば笠懸犬追物責馬などこそあるべきに（千疋犬） 達者を見せてぞせめ馬の、鞍も鐙も汗になり（鑓椎三）

〔責馬〕馬を乘りならすこと。嬉遊笑覽・卷四、武事の條に、「責馬。馬を乘りならすを責めると云ふ」。武道傳來記卷八に、「我が買ひたる馬、……、小松馬場にて責むべし」。

***せりふ** 義理に詰つた女房のせり

と云ふ事を盲目でさへ知つて居る(卯月潤色)

躙迫を加へいぢめる。虐使する。按ずるに「せぐくまる」(跼)を「ぜごこむ」と訛り、更に略されて「せこむ」となつたのであらう。曾我物語巻一、同じく角觝の事の條に、「小首責に責めてせこゝめて」と見えてゐる。

せしめうるし　一番に首をせしめ漆と勇みをなし(百合若)

漆の樹枝から掻取つたまゝの液で、物を接ぐに粘り強い上品な漆で、出羽下野地方から産出する。

***せしや**　此うつ手にはせしやが參り(反魂香)

「せつしや」(拙者)の略。拙者と云ふ語は潘安仁が閑居賦や朱子文集などにも見えてゐる。

せしやう　釋の空海と申せしは讃岐國多度の郡、父のせしやうは佐伯氏、母は僧を夢みてより寶龜五年に誕生あり(以呂波)

〔世姓〕俗姓。元亨釋書・巻一に、「釋空海、世姓佐伯氏、讃州多度郡人、父田公・母阿刀氏、夢ニ梵僧入ニ懷而有レ身、在レ胎十二月、寶龜五年生焉」。

ぜゞがひ　お土産召せ召せ、二見ぜゞ貝・伊勢若布(國性爺後日)


〔貝所膳〕

〔膳所貝〕細螺を云ふ。蝸牛に似て小に、その色淡青である。

ぜゝはん　髭長なぜにぜゝはん、もうゐどあぐるぞ(浦島)

「せゝらぬ」の訛。いぢらぬ。弄ばぬ。

せせらぎ　小鮎さばしるせせらぎにかだみて(大磯虎)

淺い瀬に水のさらさらと音立てゝ流れる所。和訓栞に、「せせらぎ。せせはささと通ず、小の義也、水の淺く流るる所をいへり」。「玉島川にあらねども云云」を見よ。

***せせる**　とろとろと寝ようとすりや後からせせるやら、前からは毛の生えた大きな足を突出すやら(女腹切)　柔かな内を一口食うて、せせりさがして讃かうや(鎗權三)

いぢる。いぢりもてあそぶ。橘守部編・俗語考に、「物を持あつかひ手まさぐるを、京近き國國の詞にせせるともせせくるともいへり」。按じるに、「せせ」は「ささ」と通ひ小なる義、「せせる」はちよこちよこ手出す義。「せせくる」「せせくしや」などは同緣の語である。

せそんじやう　世尊寺様の走り書き(川中島)

〔世尊寺様〕藤原伊尹が嘗てその桃園の第(一條の北、大宮の西)を寺として、世尊寺と名付けてからは、その家筋の稱號となつた。伊尹の孫權大納言行成最も書法に長じ、その書風を世尊寺流と云ふ。「世尊寺様」とは世尊寺流の書風を云うたのである。

***せたぐ**　母の前へも面出しせず、何故姪を水責め、ぬかせぬかせとせたげられ(井筒)

「しへたぐ」(虐)の約。易林本・節用集に、「陵轢」。

せちが　おのれもせちがな奴ぢやもの、銀も見ずにあたたかに請取をせうわいなあ(生玉)

「せちがしこ」(世智賢)の略。こざかしく物事にぬけめなく氣のよく付くこと。小才覺。「世智」は次條を見よ。(「せちがな世の中」などいふは、世智辛い世の中の意)。

***せちべん**　始末算用世智辯も、人にこそよれ品にこそ(女殺)

〔世智辯〕しはきこと。悋惜。世智は處世の才または俗才の意、卽ち儉約なこと。下學集に、「世智辯。世俗悋惜之義也」。譬喩に、「世智便。下學集、世智便・世俗悋惜之義也、沙石集に洛陽に或女房世間さかさかしく世智聰なるあり、此字佛書に出たり、所謂偏‐智權‐智小‐智世‐智便‐聰なり、眞實の智は圓鏡平等觀察成作、これを佛心の四智と云」。

***せちゑ**　早新玉の四方拜・節會・藥子・小朝拜(百合若)

〔節會〕ここに云へる節會は元日の節會であつて、天皇紫宸殿に御して群臣に宴を賜ふを云ふ。その儀式は江次第・公事根源に見えてゐる。

***せつかん**　いや禮儀を存じたる故にこそ、返事を奪取り飛脚にもせつかんを加へ候(源義經)　繼父なればとて親は親、子を折檻するに遠慮はない筈なれど(女殺)

〔折檻〕罪を責め懲すこと。前漢の成帝の元延元年に、朱雲が佞臣の安昌侯張禹を斬るべきを奏上した。成帝大に怒る。御史・雲を將ゐ下らうとしたが、雲殿檻を攀ぢて動かない爲に、檻が折れたと云ふ故事から出たものであるといへど、或は切諫の音讀か。合類大節用集に、「折檻。糺レ罪責レ非之謂、前漢朱雲攀ニ折殿檻ニ之事實、見ニ漢書・日記故事ニ」。和訓栞に「せつかん‖折檻と書けり、朱雲が故事漢書に見えたり、又切諫の義あり」。

***せつき**　無常のせつき身を離れず、煩惱業苦に目を送らせ(釋迦)

〔殺鬼〕一切萬物は生滅變遷して常住でない。この無常の理を喩へて殺鬼といふ。摩訶止觀・七に、「無常殺鬼不レ擇ニ豪賢ニ」。

せつしう　某こそは雪舟の嫡傳として代々の御扶持人(反魂香)

〔雪舟〕小田等揚は號を雪舟と云ひ、備中赤濱の人である。僧となつて禪を相國寺の洪德禪師・建長寺の玉隱永興に學び、畫を如雪・周文に學んだ。寬正年間明國に遊學し、四明山に入つて天童禪寺座一座となる。專ら風景を畫いた。文明元年歸朝し、山口に住して水墨畫を描いた。筆勢雄健で妙を極む。永正三年二月年八十七で歿した。

せつしや　本社は九郎判官の宮、攝社は祐成・時致の三社(加增曾我)

〔攝社〕攝は所攝の義であつて、古くは所攝社とも書いてある。本社の境内にあつて、本社と末社との中位にある社格である。

***せつしよ**　切所難所の六里半(會稽山)

〔切所〕節所とも書いてある。難所を云ふ。下學集に、「節所。難所也」。

***ぜつたいぜつめい**　二人は絶體絶命の擲合ひ組合ひ(女殺)

〔絶體絶命〕體も命もきはまる義。逃げやうも無くどうもかうもならぬこと。合類大節用集に、「絶體。卜筮家所レ言。絶命。同レ上」。

***せつちやう**　餘の女郎どもをせつちやうせいと、酒顚童子も其處除けの茨木童子がつかみつら(酒呑童子)　いやといふとそれ切りと、・振上げ振上げせつちやうす(天神記)

折打で、折檻打擲を略した語であらう。罪を懲す爲に責め打擲すること。いぢめさいなむこと。

***せつな**　一瞬刹那が其間に忽ち安養無垢世界不退快樂の都に到らん(蟬丸)

〔刹那〕梵語 Ksana の譯である。時間の最小

ふ。合類大節用集(享保二年刊)に、「闡提(せんだい)。梵語、唐飜云二不信一、蓋不レ信二佛法一之義」。南本涅槃經に、「一闡名レ信、提名二不信一、信不具故名二一闡提一」。

仙臺(せんだい)の坊様(ぼんさま) 此處(ここ)へ見える坊様はこの暖なに紙子着て、仙臺のぼん様か(丹波與作)

仙臺から産出する紙子を仙臺紙子と稱して仙臺の名物である。ここの文は、紙子から仙臺紙子を思付いて、仙臺の坊様かと聯想したのである。日本山海名物圖繪・卷四に、「仙臺紙子。地紙强く能く揉みぬきてこしらゆる故、柔かにして艶よし、奥州は木綿少き故、中人以下は多く紙子を着る、云云」。

***せんたう** おのれらは心得ぬ、せんたうの湯屋に鎧を着し隱れ居て、違うたとは何が違うた(鎌田)

〔錢湯〕錢を取つて諸人に入浴させる湯屋。往時錢湯の看板には弓矢を軒端に出したものである。蓋し「弓射る」を「湯に入る」にもぢつたわけであらう。鎌田兵衞名所盃に、「末繁昌の築の湯屋、末代までの看板と弓取直し軒口に、はつたと當りの手ごたへし」とあるは、錢湯の看板に弓矢を出すのは、いかにも爲朝に始まつたやうに眞實らしう面白う書いたのである。

ぜんだう 善導か法然の化身であらうと申した(薩摩歌)

〔善導〕隋の大業九年に生れ、道綽禪師に就いて淨土敎を究め、永隆二年六十九歲で遷化した唐時代の高僧である。其著述に觀經疏・法事讚・往生禮讚・觀念法門・般舟讚などがある。我が法然上人の弘められた淨土敎は善導の流を繼承したものである。

***せんだつ** 虎若は日頃懇に語らひし山伏の雲居寺にありけるが、先達の裝束借りて着用し(一心五戒魂) 俗體ながら數度のお山、院號請けたる若手の先達(女殺)

〔先達〕修驗者の勤行を積み、三度の峯入をなして、四度目からは同行衆を先導する者を云ふ。貝原好古編・諺艸に、「文選・庾元規讓二中書令一表、位超二先達一、註、先進之人。今俗山臥の長者を先達と云」。

せんだらげ 我が身はいかに如何なれば、他生の縁も薄紅の濃紅に色見せて、なに栴陀羅華甲斐もなき(釋迦)

栴陀羅は梵語(Candala)である、屠者と譯す。飜譯名義集に、「此云二屠者一、正言二栴荼羅一」。ここの文は、「何せん」に栴駝羅をいひかけ、それに「華」を添へて、いかにも此名の花があるやうに云うたまでで、屠者の意に云うたものではない。「はらみつげ」(その條を見よ)など云へるも、花の名らしう見せたまでである。

***せんだん** 吹出す烟は沙羅林栴檀の霞と變じ(歌念佛) 五蘊離散して栴檀の烟に伴ふ(賀古敎信)

〔栴檀〕栴檀樹を焚いて釋尊を荼毘に附した故事によつて、火葬の煙を栴檀の霞または栴檀の煙と云ふ。栴檀樹は印度半島の雨量少い丘陵地に産し、高さ二丈五尺に達す。その色年を經るに從つて白色より赤色を帶びて香氣愈高くなる。故に白栴檀・赤栴檀などの稱がある。

***せんだんのいた** その出立(いでたち)は紫末濃・せんだんの板・かむりの板(女楠)

〔栴檀板〕鎧の右の綿上(わたがみ)(胴を釣るため肩にあたる所)に懸け結うて、高紐(胴のつり)を切られぬ爲にこれを蔽ふ具である。その形も制も袖を小さくしたやうなものである。上なるを冠板と云ひ、次の細きを化粧の板、裾なるを菱縫の板と云ふ。

***ぜんちしき** 二人に枕を交はすまいと思ひそめたが善知識、髮容つくつてさへ高の知れた姿が嫖緻、衣を墨に頭を圓め(薩摩歌)

〔善智識〕人を敎へて善道に導く大導師をいひ、よつて僧または尼をいふ。摩訶般若經に、「能說二空・無相・無作・無滅法・及一切種智一、令下人心入中歡喜信樂上、是名二善智識一」。涅槃經に、「善知識者如レ法而說、如レ法而行、自不二殺生一、敎レ人不二殺生一、……行二正見一、敎二人正見一、若能如レ是、則得三名爲二眞善知識一」。法華經に、「善智識者是大因緣、所レ謂化導令レ得レ見レ佛、發二阿耨多羅三藐三菩提心一」。

***ぜんぢやう** 禪定觀念(用明天皇) やや暫し禪定三昧に入り給ひ(釋迦)

〔禪定〕「禪」は梵語(Dhyana)の訛略であつて定と譯す。「禪定」は梵漢合成語である。安靜に眞理を思惟し、專心に散亂せしめないことを云ふ。「禪定觀念」とは專心に眞理を觀察想念することを云ふ。「禪定三昧」の三昧は、專らその物に沒頭し耽る義である。無量壽經に、「得二深禪定一、諸通明慧」。智度論に、「善心一處不レ動、是名二三昧一」。

***せんど** 受けつ開いつ火花を散してここをせんどと勵みしが(今川了俊) 切先を揃へてここをせんどと戰ひける(佐佐木) 文盲不仁の惡黨ゆゑ先途の官職にも進まず(松風)

〔先途〕行先の極みの義であつて、最も大切の場などの意にいふ。「先途の官職」とは、何家筋の者は何官職まで昇進される限をいふ。

***せんとう** (三國志)(女護島)(烏帽子折)

〔仙洞〕白居易の春題二華陽觀一の詩句に、「空留二仙洞一號二華陽一」とありて、仙人の居所を云ひ、轉じて上皇の宮殿または太上皇のことにも云ふ。

***善(ぜん)の綱(つな)** 佛の御手の善の綱、二條三條これとかや(丞常盤) 石塔蹴放しひらりと飛べば、十三歳の短夜や息を引取る善の綱(賀古敎信)

開扉などの時に佛菩薩の御手に絲を引かしめることをする、この絲を善の綱と云ふ。これ來世に往生の因緣を結ばしめる趣意から出たものである。また送葬の時に棺に繋ぐ赤白の綱を善の綱と云ふこともある。

***せんばい** あれが此處(ここ)へ出てくれて、今の詞で千ばいちや(萬年草) 恨の雲も晴れ渡り、これで千倍千倍(歌念佛)

〔千倍〕よろづに倍してよきこと。至極滿足。好色二代男(貞享元年刊)卷六、帶は紫の鷹人手を握るの條に、「それは身過に賢い女郎どもと惡口申す片手に、僞にしても是は千倍ぢや、まー盃してやろと色色に紛らかせども」。西鶴置土産・卷二、人に棒振蟲同前に思はれの條に、「互の志は千倍なり、久しぶりに逢ふ事、又重ねて出合ふこともあるまじ」。大智度論に、「百倍千倍百千倍」。

せんひ 鎌倉の御墓所先妣松下禪尼の風を慕ひ(最明寺殿)

〔先妣〕亡母を云ふ。爾雅に、「父曰レ考、母曰レ妣」。禮記に、「生曰二父母一、死曰二考妣一」。

せんふくりん 如來の三十二相を學び、千輻輪に金具をつかひ(用明天皇)

〔千輻輪〕如來三十二相(「さんじふにさう」を見よ)の一で、足下の穀輞輪紋千輻輪の如き相を云ふ。

せんぼふ 懺法回向の秘密の書(しよ)

ふ尤もと胸にこたへしより、房が大事なはつたりと忘れたり(重井筒) おやぢとのせりふなら、何處ぞ外でしたがよい(女腹切) あれあれ悉達太子樣、あののものののせりふなし、ひつたりと抱付いて一度手なみな見せ給はば(釋迦) その井筒屋にわれが今、重井筒と篠塚に、言はれいはゐの半四郎、憂ひせりふのあやめぐさ(重井筒)

「せりいふ」(競言)の約であらう。理窟をいふこと。浪花方言に、「せりふする。一理屈いふこと」。歌舞伎役者が舞臺で互に述べ合ふ詞を「せりふ」と云ふ。臺詞と書くは舞臺詞の略である。「せりふ」の稱は、南都論義のせりふより起り、狂言や芝居にも言はれる語となつたのである。

*__せん__ あれ一錢取らせといひければ(薩摩歌) 童すかしの土産物三錢五錢の商ひに、命も錢も繋ぎしが(反魂香)

〔錢〕匁(一貫の千分の一)。和訓栞に「幾もんめといふは文目の義、錢文より出たり、今匁字をよむは錢の省文なり」。(匁は錢の古體ともいひ、一說に文の字の草書と片假名のメとの合字ともいふ。)

*__善惡不二・邪正一如__ (國性爺後日)

法性の理に順ふを善と云ひ正といふ。法性の理に違ふを惡といひ邪といふ。善惡邪正はその別あるに似たれども、その本體から觀れば何れも法性を出ないのである。即ち不二また一如である。謠曲・山姥に、「いや善惡不二、何をか恨み何をか喜ばんや」。「じやしやういちによ」をも見よ。

__せんかう__ 今日は二十七日先考滿仲の御命日(關八洲)

〔先考〕亡父。禮記に、「生曰父母、死曰考妣」。

*__せんき__ 鰐香背殿の腰の廻り御見舞申せし疝氣の神(振袖始)

〔疝氣〕漢方の病名。男子の大小腸または腰部などの痛む病氣で、その痛み足に下ることもあり、また睾丸が痛み腫れる時は快方に向つたものとされてゐる。治療法として昔は、檳榔や、ふじ(その條を見よ)・三里(その條を見よ)に灸・鍼などを用ひた。

*__せんぎ__ 公卿僉議にも及ばず(國性爺)

〔僉議〕會議。「僉」は廣韻・集韻・韻會・正韻に、「皆也、咸也、衆共言之也」。

*__せんきゆう__ 自體我等はせんきゆう持(薩摩歌)

〔川芎〕藥草の名。繖形科に屬し、高さ一二尺に成長し、葉は芹に似て香氣強い。ここの文は川芎に疝氣をいひかけたのである。

__千金の吟__ 「宣風坊の北云云」を見よ。

__千貫枝__ 慮外千萬千貫枝筆捨枝や(反魂香)

千貫に直する程な姿勢よき松枝を云ふ。蓋し伊勢に千貫松と云ふ名木があるので思付いた語であらう。

__せんげ__ 先年了海和尙衆生濟度の說法を此所にて說き始め、今遷化の跡までも我が親は講中の第一にて(宵庚申)

〔遷化〕他土に敎化を遷す義、僧侶の死去を云ふ。大乘義章に、「菩薩後時遷化他土」。

__せんけん__ うば玉の鬢の黑髮、嬋娟たる鬢も時の間に刈捨て(關八州)

〔嬋娟〕美好。謠曲・卒都婆小町に、「嬋娟たりし兩鬢も」。

__ぜんけん__ これ天人の住家にて善現善見色究竟(天神記)

〔善見〕色界十八天の一で、四禪天の中にある。妙に十方世界を見て、塵垢なきが故に善見と云ふ。

__ぜんげん__ これ天人の住家にて善現善見色究竟(天神記)

〔善現〕色界十八天の一で、四禪天の中にある。空にして障碍なく、精しう現前を見るが故に善現と云ふ。

*__ぜんざい__ ますます全盛座敷はぜんざい、庭にはせきぞろこりや又目出度い(夕霧) 一昨日のお日待に法印樣の相伴で、善哉餅を十三杯(萬年草)

「善哉餅」の略。つぶしあんの汁粉。

*__せんじやう__ そこらの橋の下・新七はゐやらぬかと、口合・わろ口・せんじやうはり、どつと笑うて通りける(捉鯉) 色里でせんじやう言ふことは治兵衞めには叶はれども(天網島) さる程に三千人の責子の者、二三日前から仕過しの、僭上はまつかへさま巾着振ひ底を叩いて、これで御免と詫びるもあり(會稽山) 後夜の太鼓を打つ時は、僭上滅法とそやして(扇八景)

〔僭上〕おもひあがつて口はばひろく高ぶること。畠山箕山撰、色道大鏡に、「せんじやう。仙石少貳と云ふ者奢侈を好みしより起るといへど誤也、孝經曰、賤服貴服謂之僭上、孔安國曰、僭上無禮、國之凶賊なりと有」。「僭上滅法」とあるは「是生滅法」をきかせたのである、「まづ初夜の太鼓云云」を見よ。

__せんじゆせんげん__ 不空羂索・千手千眼、願くは千の眼を顯はし(嵯峨天皇)

〔千手千眼〕千手千眼觀世音菩薩の略。六觀音の一であつて地獄道の能化者である。

__せんしゆのしんごん__ このたび小松樣の御願の爲、千手の眞言十萬遍唱へ込みたる大事の珠數(孕常盤)

〔千手眞言〕「眞言」は陀羅尼 (Dharani) のことである。次條をも見よ。

*__せんしゆのだらに__ 珠數さらさらと押揉んで、眞讀の普門品・千手の陀羅尼を繰掛け繰掛け祈らるる(天神記) たゞ引けや手手に千手の陀羅尼(用明天皇)

〔千手陀羅尼〕千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼の略で、大悲咒とも略稱し、伽梵達磨譯の千手經に說く所であつて、咒語八十二句ある。「だらに」をも見よ。

__せんしよう__ 運の盛り刻限先勝の時到れりと(堀川波鼓)

〔先勝〕陰陽家にて、正・七月の1 7 13 19 25、二・八月の6 12 18 24晦日、三・九月の5 11 17 23 29、四・十月の4 10 16 22 28、五・十一月の3 9 15 21 27、六・十二月の2 8 14 20 26の日を先勝日といひ、急用又は公事沙汰などに適すといふ日。近松のこの文は、時刻に轉用したのである。

__せんぜう__ 「せんじやう」を見よ。

__せんだい__ 外道せんだいの施物を受くれば三惡道に墮つ(釋迦如來)

〔闡提〕一闡提 (梵語 Icchantika) の略、佛法を誹毀して因果の理法を信じない者を云

を奏聞し、また取次などする役である。

そうぞう 先熊野樣の狐つき世間へ知れてはすたります、御經頼み上げまする、これそうぞうの者が拜みます（本領曾我） やあ旦那さん、そうぞうの女郎の心が反れたら五下兩や七千兩の損が見たいまで（酒呑童子）

〔總總〕總て。皆皆。一茶句集にも、「總總に機嫌とらるる蠶かな」。

ぞうちやう* **ぞうちやう 大毘沙門天・持國天・增長・廣目（天神記）

〔增長〕增長天王をいひ、正法諸佛を守護する四天王の一である。本名をViruḍhaka と云ひ、赤肉色の膚で左手に刀を把り右手に矛を持ち、その石突は大地についてゐる。須彌南方の守護神で、自他の威德を增長せしめるといふのでこの名がある。

ぞうちやう 「ぢやうてう」を見よ。

***そうつゐふし** 君と臣との名も高き鎌倉山の谷谷を、數に喩へて八つに八つ、六十餘州の總追捕使と世世に仰ぐも愚なり（虎が磨）

〔總追捕使〕の稱は平安朝時代既にあつて、押領使と殆ど同じものであつた。また源爲朝が九州總追捕使と自稱したこともあつた。源頼朝が天下兵馬の權を握るや、奏請して總追捕使と稱した。

そうでんちや その鶯茶聲あげて、人に春をやそうでん茶（融大臣）

〔宗傳茶〕染色の名。枯茶色をいひ、京都の宗傳と云ふ人が染出したといふ。井原西鶴撰・男色大鑑卷五に、「宗傳から茶の鱟帶」。同卷六に、「祇園林の烏の羽色も宗傳枯茶に見なし」。巣林子のこの文は、春をや添ふを宗傳茶にいひかけたのである。「まづ初春の空色に云々」をも見よ。

***そうぶつもの** 中の島のそう物も昨日限の約束（重井筒）

〔贈物物〕人に贈り物にする品物。浪花方言（文政二年成）に、「そ物。主人より下女下男等へ呉れる物をいふ、四季施をもそ物といふ、贈物か」。

そうよく 「鳥は高く飛んで矰弋の害をのがれ云云」を見よ。

そうらう 「さうらう」を見よ。

そがい 今で思へばむざうらしげに、そがいに爲でも大事なかたん（博多）

「そのぐあひ」（其工合）の訛。そのやう（其樣）。物類稱呼卷五、言語の部に、「そんな」と云ふはそのやうな也、肥前佐賀にて「そがい」と云是なり。

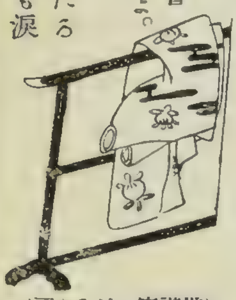
***そがぎく** 家引き起す曾我菊の、花の一本安穩に守り給へ（國扇曾我） 幾年咲かぬ曾我菊も、一味の雨の潤ひに（國扇曾我）

黃菊の異稱。袖中抄卷十二に、「そがぎく。黃菊也、そがとは承和をいひなしたる也、承和の帝黃なる色を好み給ひければ、黃なる色をば承和色といふ、されば黃菊をばそが菊といふ」。巣林子のこの文は、承和菊に曾我をいひかけたのである。

そがどの 「內證は曾我殿」を見よ。

そぎそで 抱締めたるそぎ袖も淚にひたすばかりなり（女腹切）

〔そぎそで〕



（俳諧空つぶて（正德三年刊）所載）

〔殺袖〕角を殺取つて圓くした袖。

***そく** 五人張に十五束からりと番ひ引絞り（津戸三郎）

〔束〕矢竹の長さを計るに握を以て數ふ。「十五束は」十五握の長さの矢である。

そく ろんじに足を踏ん込んだらば、息杖の續かん程げんこ微塵にさいなんで（百合若） そくばんどっに名の高きろうじ六藏（田村）

〔足〕一の符牒。ここの文は一の符牒に足をいひかけたのである。「きり」をも見よ。

***そくいん** 賴平君の惻隱の御心に、纔が爲の正八幡入替り給ひけん（關八州）

〔惻隱〕物をあはれみ痛むことの切なるを云ふ。「惻」は傷の切なるを云ひ、「隱」は痛の深きを云ふ。孟子・公孫丑上に、「今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心」。

ぞくさんへんど かゝる粟散邊土まで佛法流布し（釋迦） 況や粟散邊土の境、十善天子もままならぬ（持統天皇）

〔粟散邊土〕「粟散」は數多の小國の散ばつたるに喩へて云ふ。「邊土」は邊陲を云ふ。楞嚴經に、「粟散即小國、小主散天下如粟多也」。平家物語・卷二、敎訓の事の條に、「さすが我朝は邊地粟散の境とは申しながら」。

***そくしつき** 息をもつかず追掛けしは、足疾鬼と韋駄天の舍利を爭ふ如くなり（鎌田）

〔足疾鬼〕梵語・羅刹（Rakṣasa）の譯名である。俗に足疾鬼が佛舍利を奪うて逃げるを韋駄天が追掛けて奪返したと云ふ。委しくは謠曲・舍利を見よ。

そくぜびるみつごんくきやう この身そくぜびるみつごんくきやうの境こそ、今この御代に時得たれ（以呂波）

〔卽是毘盧密嚴究竟〕「毘盧」は毘盧遮那（梵語Vairocana）の略で、光明遍照の意。「密嚴」は祕密莊嚴といふことで、十住心の第十で、この第十の住心を以て眞に成佛するものとし、眞言密敎に配されてある。委しくは空海撰・十住心論を見よ。

***ぞくたく** 彼等が在所訴人の者は御褒美を下さるべしと、二人が形を圖に表はし、大判十枚の屬託、年寄なれば又五郎が格子の前に立てらるる（吉岡染）

〔屬託〕懸賞を以て罪人をさがすことを云ひ、轉じて懸賞の金銀を云ふ。俚言集覽に、「屬託。譯草に云、漢書尹翁歸傳云、欲屬託邑子、後漢書竇融傳云、屬託郡縣、干亂政事、俗に金銀を賞料に極めて罪人を募求むるを屬託といふ、町の辻に其與ふべき金銀をあらはに掲げおく事あり、これを屬託をかくると云、是は其人に金銀を屬託して罪人を搜し出す也、然るにその金銀の事を屬託といふと俗に思へるはうろさし」。

***ぞくなん** 女の緣に迷ひしと、俗難を憚りしに（國性爺）

〔俗難〕世俗の非難。

そくばんどう 「きり」「そく」を見よ。

そくふ 急難・急病・內損・外損・あかがり・そくふ・黑子の神に至るまで（振袖始）

〔瘜膚〕瘜を云ふ。說文に、「瘜、寄肉也」と見

籍、賀古教信)

〔懺法〕懺悔法で、其法に種種あつて、滅罪生善、後生菩提の爲や、又は鎭護國家、息災延命の爲などに修する。

*せんま　ありや舌鼓うつつなき、せんまの役は飯炊が何時見覺えて取りなり(日本武尊)

「せんまい」(饌米)の略。神に供へる洗ひ米。神に洗ひ米を供へる役を勸める後家を「せんま後家」といふのである。

せんまつわげ　御髮の御用なら大銀杏・中銀杏・立かけ・投かけ・千松髷、加增曾我)

〔千松髷〕男子結髮の名。道甘撰・糸瓜草(寛文初年刊)に、「枝も葉もせん松わげか藤かづら。台認」。

宣命のへん　入鹿……勾欄の角柱えいやつと引き拔き突立てば、萬戶も飛び下り宣命のへんの大石かろがろとひつさげ(大職冠)

「へん」は版である。宣命版は長さ一尺五寸、幅一尺、高さ八寸ばかりの木で造つた宿であつて、公事ある時中務の庭中に置き、宣命使が着座して宣命を讀む場所。江家次第巻三、踏歌の條に、「中務立レ標、並置二宣命版一」。巢林子がここの文に、「宣命の版の大石」といひ、又宮中にあるとしたのも、共に誤つた言ひ方である。

*ぜんもん　御祝儀申納めて後禪門御上げらるるは(十二段)　主人石見は禪門の白い頭に黒眼(女腹切)

〔禪門〕禪定の門に入る義であつて、佛道に入つた人の稱。往時刀工が初老になれば多くは法服を着けたものである、よつてこれをも禪門と稱した。

ぜんらいびく　日益が頂善來比丘と撫で給へば、慧日の影に解けそむる頭の霜の落髮も(聖德太子)

〔善來比丘〕來人を歡迎する佛者の辭である。比丘は梵語 Bhiksu である、乞士などと譯す。增一阿含經・十五に、「諸佛常法、若稱二善來比丘一、便成二沙門一、是時世尊告二迦葉一曰、善來比丘、此法微妙、善修二梵行一、云云」。

ぜんろ　涕泣眼にあらく涙玉を貫く、思をぜんろに飜して(國性爺)

〔善路〕善途に同じ。善根の途。謠曲・安宅に、「涕泣眼に荒く涙玉を貫く、思を善途に飜して」。

そ

*そ　抱き力なき草枕投げそ、枕に科も無や(百日曾我)　乳人とばし思はれそ、御身が爲の姑と思うて杯頂戴あれ(扇八景)

動詞・助動詞の下に附いて禁止の意(即ち「な」「勿れ」の意をなす)を示す助辭である。(序云、「そ」を禁止の意に用ゐた例は、大鏡・巻三、大臣師尹の條に、「さ思召すべきそと制し給ふに」と見え、清少納言の枕草紙・巻十一にも、「今以來けふはと申し給ひそ」と見えてゐる。されば文法上「な……そ」・「な」を禁止の助辭とし、「そ」のみあるは誤であるとの說は餘り酷である)。

*そうか　お山やら總嫁やら、あつかはづらな書日中(女腹切)　總嫁のやうな傾城めにみぢんも心は殘られども(夕霧)

〔總嫁〕辻君・立君・夜發・十文色などとも云うた。夜陰路傍に立つて、作り聲で蚊の鳴くやうに端唄をうたひ、往來人の袖を引いて淫を賣つた私娼の一で、いとも哀れな最下等の女で、貧民窟のどん底生活者である。好色一代女(貞享三年刊)巻之六に夜發の住家を叙して、「町はづれ店なしの小家がちなる、物の淋しく晝さへ蝙蝠の飛ぶ裏貸屋を隱れ住み」と見えてゐる。總嫁になる女は多くは生活難に苦しむ老女で、白粉を厚く塗付け、暗中に乘じて往來人を騙したのである。好色一代女・巻六に夜發が客に其年齡を問はれたことを叙して、「そなたは幾歳ぞと、年紀を問はれし時身にこたへて恥かしく、物靜に作り聲をして十七になりますといへば、さては吾儕と同じ年と嬉しがりぬ。闇の夜なればこそ此形を隱しもすれ、最早五十九になりて十七といふ事は四十二の大騙、世の後は鬼が咎めて舌を拔くべし。これも身を過ぐる種なれば許し給へ」と見えてゐる。但稀には年若い女で總嫁になれるもあつた。その稼ぐに着る衣類も己が物ではなうて損料借の物である。總嫁の稼ぐ場所は浪華では大方濱納屋の陰であつた。世間娘氣質(享保元年刊)五之巻に總嫁のことを叙して、「けふの命をつなぎかね、夜歌うたうて濱側の納屋の陰からそつと出て、往來の袂をひかへて拾文づつに情の切賣」と見えてゐる。總嫁の名義に就いては、嬉遊笑覽に總嫁と書くは非であると見えてゐれども、按ずるに夜發を待つて淫奔を發するから夜發と稱するなら、總嫁の稱も總て招く男に從うて一夜妻となると云ふ義であらう。「じふもん」の條をも見よ。



(傾城禁短氣所藏)

〔惣嫁〕

そうご　世俗に文字謎判じ物など申せども、もと隱語ともそうごとも申し(嵯峨天皇)

〔廋語〕「しうご」といふべきである。廋辭または廋詞ともいひ、隱語即ち謎のこと。國語・晋語・五に「有二秦客廋二辭於朝一」とあつて、韋注に「廋者隱也」とある。通鑑・五代漢隱帝紀に「郭允明以二謟媚一得レ幸、帝好與レ之爲二廋詞一」。

ぞうし　「ざうし」を見よ。

ぞうじやうえん　御身大願を思立ち給ふよし、ぞうじやうえんの功德なり(一心五戒魂)

〔增上緣〕四緣(因緣・等無間緣・所緣緣・增上緣)の一で、他の法を起すに力を與へる緣となるもの。觀經玄義分に、「凡夫得レ生者、莫レ不下皆乘二阿彌陀佛大願業力一爲中增上緣上」。

ぞうじやうがまん　本地釋迦如來毘盧遮那遍一切處の御かたち、增上我慢の惡人を驚したる(聖德太子)

〔增上我慢〕增上慢及び我慢をいひ、共に七慢の一である。我慢とは、自己の力なくして然も己を恃み他を凌ぐをいひ、增上慢とは、自己の未だ得ないものをも既に得たがやうにいひ傲る慢心を云ふ。

*そうしやばん　侍大將奏者番(堀川波鼓)　今日横笛はお奏者番、廣庇に詰めければ(娥)

〔奏者番〕武家時代にあつた職名で、主君に事

を云ふ。「ごりん」を見よ。涅槃經に、「一見ニ卒塔婆一、永離ニ三惡道一、何況造立者、決定生ニ安樂一」。巣林子のここにいへる文は、高野山に石塔にあれ日牌にあれ月牌にあれ、建設する理由の一として古來稱せられたもので、弘法大師が金剛の大定に入り、定惠力を以て、五十六億七千萬歳の後彌勒菩薩出世の曉に至るまで、高野山の人法をして退轉なからしめうと誓はれた靈地で、他の時時に變遷興亡ある梵刹と異り、大師攝化衆生の大願に、一度此山に參詣する者は再び三途に墮さしめないとの誓言によるわけである。

そとはちもんじ 忘れぬものよ見あかぬ君が、外八文字の道中姿、目付で殺す所體になづむ(壽門松)

〔外八文字〕踏付ける足つきの外輪に八の形なること。「足の八文字」を見よ。

そとほりひめ 竹取の翁が拾うた寶娘、衣通姫も跣足で裸で逃げさんしよ(關八州)

〔衣通姫〕日本紀・允恭天皇の條に、「皇后奏言、妾弟名弟姫、容姿絶妙無レ比、其艷色徹レ衣而晃、是以時人號曰ニ衣通郎姫一也」。

そにん おのれ少しの慾にめでてよう訴人し居つたな(大經師)

〔訴人〕太平廣記・張質の條に、「案牘分明、訴人不レ遠」とあつて、訴へ出る人をいひ、また訴人となつて訴へ出ることをいふ。

園の竹 平家にしげる園の竹、入道相國の御娘、中宮御産のあたり月(女護島)

皇族をいひ、竹園の故事に據つたのである。史記世家に「孝王築ニ東苑三百餘里一」とある註に、「在ニ宋州宋城縣東南十里一、俗人言ニ梁孝王竹園一」とある。孝王は漢の文帝の子で竹園に居られたので、竹の園を親王のことにいふ。

そばぐろのゆみ いざやしら木にそば黑の弓に靫に(堀川波鼓)

〔側黑弓〕弓は、削つて外皮を外向にした二本の竹の間に木を挾み、これを膠で結合して作り、その竹を塗らないで、木のみ黑く塗つた弓。

そばつづき 立烏帽子にそばつづき、さながら武將の御出立(女夫池)

〔傍續〕その形小直衣に似たれども、小直衣の襴とは各別である。武家名目抄・衣服部四に、「按、故實拾要に傍續紋色等定れる法なし、織物類なり、裾有レ襴、但小直衣の襴とは各別也、其形似ニ小直衣一也とあり、新野問答に小直衣・狩衣直衣二物同事に候、直衣に襴ある物に候、俗には傍つづきと申候とありて、二說同じからず、今按ずるに、三內口決に內內之衣裳烏帽子直衣大臣着レ之、小直衣大臣着レ之、曾波津津幾親王着レ之とあれば、故實拾要の說を得たりとす、傍續の裁縫寸法深窓祕抄に詳なり」。和訓栞に、「そばつづき。小直衣に似たり小異あり、傍續と書り、大臣大將の服なり」。

そばむ 善次は島が心根の恐しければ、格子の蔭身を引そばめて立聞す(二枚繪)

〔側〕傍へよせる。平治物語・巻一、光頼卿參內の條に、「兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め矢をそばめて通し奉る」。雅言集覽に、「そばむ。打向はずしてそむけて居る心なり、心の上にいふはくねる心なり、物の上にいふは筋かひになす心なり」。

そばゆ じやれてそばえて手まり取れ取れ(大經師) 小猫のそばゆる如くにて疊にいざりつき給ふ(三國志) 虎は勇んで元信の縛を嚙切り、背を差向けてそばえたり(反魂香)

ふざける。戲れる。枕草紙に、「そばえたることねりわらはなどに引取られ泣くもをかし」、とあり、春曙抄に、「そばえはざれほこりたる心なり」と見えてゐる。この語は、「そばふ」「そばえる」と訛つても用ひる。

そびをかふ やあ怪しからぬ空の雨風、鬼殿そびをかはるるな(振袖始)

誘ひ挑む。「そび」は「そびく」の「そび」で、「かふ」は「すをかふ」(その條を見よ)などいふ「かふ」と同じ語で、挑む意。俚言集覽に「人をそびくといふは傍牽の義なるべし、又そびをかふとも云へり、掕字の意也と云へり」。

そぶつち 深田のそぶつち顔突込んで、塗るやら揩るやら頬は煉味噌(國性爺)

汚水たまつて鐵銹のやうに光る土。和訓栞に「そぶ=地澁をいへり、染澁の義なるべし」。

そへ 柳の副前置に寒菊(聖德太子)

〔副〕立花の法式の名。立花時勢粧・八に、「立花祕傳抄之五。副は心かくしの本より物にたよらせてしだれたるもの、又はやはらかなる物を可レ用、心の松のこはこは敷に取合よろしきが爲也、是花形の右の方を守て心をそだてたる物なり、右へ出づる物副より長きは不レ可レ有」。「しやうじん」の條の書を見よ。

そほふね 照す火影のあけのそほ船(井筒)

〔赭船〕「そほふね」の「そほ」は「そほに」(赭土)の「そほ」に同じ、赤塗の船をいふ。萬葉集巻三、雜歌部、高市連黑人羇旅歌八首の中の歌句に、「赤のそほ船沖に漕ぐ見ゆ」。

そみんしやうらい 蘇民將來子孫繁昌、神堅かれと石の華表の二柱、二人の親のいへづとや(烏帽子折) 一つの祕事を傳へんと畔の柳を手折らせ給ひ、これを削り小札となし紅の總をつけ、蘇民將來の子孫なりと書付け、稚き者の襟につけよ、疫病瘧病疱瘡痳疹一切の惡病を免るべし(振袖始)

〔蘇民將來〕「蘇民將來」または「蘇民將來子孫門也」などと書き、疫病を避ける咒語であつて、門戸に貼しまたは稚兒の着物の襟に着けたものである。案內者(中川喜雲撰、寬文二年刊)に「正月十九日、八幡厄神參=小さき木に蘇民將來と書きて小兒の肩に懸くれば、疫病を除くまじないなり、素盞嗚尊の始めさせ給へる事なり」と見えてゐる。この詞古くは釋日本紀・卷七に備後風土記を引用せる文中に見えて、素盞嗚尊と結合せる傳說として知られてゐる。按じるにもと陰陽道から出たものなるべく、簠簋內傳金烏玉兎集にも「天王、巨旦奴婢女、蘇民將來」などの詞見え、また修驗者を「そみかくだ」といふのも、蘇民書く札の約であつて、蘇民將來と書いた符札を人に與へるよりの稱だといふ。

そめいひ 「瀨戶の染飯」を見よ。

そめがは 我を紺屋の片岡に、何とか思ひ染川は、臺詞に泣いてくれよかし(重井筒)

〔染川〕染川重(重或は十に作る)郎兵衛をいふ、寶永頃上方で名高かつた俳優である。熊坂今物語(享保十四年刊)に、「片岡仁左衛門存命の折から、あまたある狂言の中に熊坂今物語、……其年其座につらなりし役者は誰誰にておはしけるぞ、まづ篠塚次郎左衛門・染川重郎兵衛・杉山勘左衛門、女形には袖崎歌流」と見えてゐる。染川重郎兵衛が片岡仁左衛門座に勤めたのは、寶永四年冬から寶永五年に亘つてゐて、心中重井筒の作にそれを當込ん

えてゐる。俚言集覽に、「そくふ。齵をいふ」と見え、漢書註に、「齵。手足折裂也」とあれば、あかぎれをも云うたのである)。

*そぐふ　立交りたる女中の傍、そぐはぬ様にも見えざるはさすが童の一徳と(丹波與作)　殿に退かれて此三歳一本立の木に竹や、そぐはぬ連も便りには(松風)
〔添合ふ〕義。似合ふ。釣合ふ。俚言集覽に、「そぐはぬ。添合ぬ也、グハヌのグハは出クハヌなどのクハに同じ、そひあはざるを云」。

そげたつ　頼平そげたつ顔振上げ、なう詠歌の姫玉垂几帳の外見ずか、戀なればこそ雪霜の寒い冷たい疲もいとはぬ徒跣(關八州)
「そげ」は「しよげ」(その條を見よ)の約訛。悄然たるをいふ。

そこだめ　腹に八月のそこだめも生れぬ前の睦じく(大織冠)
〔底溜〕懷妊。

そこつくに　今は如何なる龍宮界底津國へも屆かんと(大織冠)
〔底津國〕根の國と云ふも同じ。祝詞・六月大祓詞に、「根國底之國仁氣吹放氏」。

底筒男　「かいこそ和田の云云」を見よ。

*そさま　そさまな我が手に入れん爲(女楠)
「そなたさま」(其方樣)の略。

そしぜんぼふ　放下僧は何れの祖師禪法を御傳へ候ぞ(用文章)
〔祖師禪法〕禪法は釋尊から迦葉に傳はつた。達磨大師が支那に渡つて禪法を弘めたのは梁武帝の時であつて、支那に禪宗の始である。日本にては榮西入宋し、歸朝の後臨濟宗を開き、また道元入宋し、歸朝して曹洞宗を開いた。黃檗宗は後西院の御時に起つた。されば「放下僧はいづれの祖師の禪法を御傳へ候ぞ」と尋ねたのである。「歩を運ぶ神垣や云云」をも見よ。

*ぞぞがみ　なう磔刑と聞くもぞぞがみ(博多)　盲鳥の網にかゝる如く不覺の死を遂げんかと思へば、ぞぞがみ盆の窪つかみたて(三國志)
ぞつと身の毛よだつて恐しく思ふこと。寒心。「ぞぞ」は「さむさむ」(寒寒)を訛つて「ぞんぞ」(その條を見よ)といひ、更に「ん」の略された語であらう。

*そそる　御神樂が始まつた、さあ御急ぎとそそれば姫君、ああ待ちや待ちや(蛙合戰)　見るも障るもやれお出でとののめきて、そそりに揚屋に入りぬれば(吉野忠信)　逃しはやらじとすがり止め、女子そそらす惡性鳥、さあま一聲鳴いて聞かしや(天鼓)
いさましく進む意。そそりぞめく。うかれ騷ぐ。和訓栞に「そそる＝俗にいさましく進む意にいへり、源氏にそそかしともそそめくともいふ詞是なり」。

*そだてる　連立つて參らぬも皆こな様のいとしさゆゑ、人にそだてられ唊けられ何ぢやの(女殺)
〔育〕おだて(煽動)て育成する。助長する。平安城(古淨瑠璃)第一に、「早御即位とそだてられ」。

*ぞつこん　今宵の雨は身にかかり、ぞつこん徹つてわぢわぢと物悲しう罷り成る(會稽山)　袴腰にじつと抱付いた其時は春も杵も打忘れ、ぞつこんたへて其嬉しさ(聖德太子)
〔腸根〕眞底。この語現今も「ぞつこん惚込んだ」などと用ゐられ、「きつう惚込んだ」「えらう惚込んだ」と同じ意に用ゐる。

そつと　某は長崎者、九右衞門と申してそつと致いた唐商賣(博多)
「さ(些の義)と」が轉じて「そと」となり、更に促音の增加した語。「そつと致いた」とは、少しばかり致しましたの意。

*そつぱう　割木おつ取つて、てつぺいそつぱう肩骨胴骨頭の鉢、割木限り腕限り打合ひ投合ひ(酒呑童子)　死ぬるも一人死なうかと、そつぱうめつぱふ打立つる(博多)
「そとつはう」(外方)の約。ほかの方。法外。めちや。(和訓栞に「そつはふ＝率法の字庭訓に見えたるは字の誤なるべし、口語にいふは率放にて率爾放埓のつづめ詞にや」とあるはいかが)。

そでかぐら　座摩の御旅に二十二社拜み納むる袖神樂、少女子ならぬ御子町に(卯月紅葉)
〔袖神樂〕神樂に袖を翳して舞ふこと。卯月紅葉のこの少し前の文に、「あをのく額に當る日を、袖でかざしの玉造」と云ひたれば、「拜み納むる袖神樂」とあやなしたのである。

*そでがさ　(蟬丸)
〔袖笠〕袖を頭に上げて笠とすること。「われはまた賤の男が云云」を見よ。

*そでごひ　命の内は袖乞でも、頼みないは後生のこと(大經師)
〔袖乞〕托鉢僧が袖に鉢を載せて米錢を乞ふを云ひ、轉じて、乞食、物貰。好色一代男卷一に、「往來の人に袖乞して」。

そでざくら　「あはれと思へそでざくら云云」を見よ。

袖島源治　袖島源治は新籾ぢやとおしやろ、それはなぜに、驪町のしたたるたる、然も藝には骨があるといの(今宮)
寶永の頃京・阪の名優であつた。ここの文は、袖島源治は目元に愛嬌あつて藝が巧者であるとの謎である。役者稽古三味線(寶永五年刊)若女方之部に、「袖嶋源治。上白上。當二の替りよりお顏のひかる源治樣、お目もとのしほ、むつしりとした風俗、お巧者さまは皆御存知の君」。

袖の下　女中泊りの袖の下、小まんといふ名でほつほつと、鶴のあはれやあさましや(丹波與作)
袖の下にて物をやりとりすることとの意。賄賂をいひ、また內證で物を貰ふこと。丹波與作のここの文は、小萬が泊客から內證に物を乞ひ貰ふことをいうたのである。

そではん　その公家樣のお袖判を爲に似判し(淀鯉)
〔袖判〕鎌倉・室町時代に、公文書に裁可の證として、文書の袖即ち文言の右に捺した判または花押。

そでびやうぶ　權三を圍ふ袖屏風(鑓權三)
〔袖屏風〕袖を以て屏風のやうに顏などを掩ひ隱すこと。

*そとば　それ我が山に卒塔婆一本遺せし人は五十六億七千萬歲の後彌勒の出世に逢はせ給はん御誓願などか疑ひ候べき(萬年草)
〔卒塔婆〕梵語 Stupa. 方墳・圓塚などと譯す。石または木で造り、地・水・火・風・空の五輪塔

ある。吳王闔廬の將となつて西の方・强楚を破り、北の方・齊魯を威し、名を諸侯に顯した。その著述に孫子・十三篇がある。

そんじやう　「そんじよう」を見よ。

***そんじよ**　先先寻ね廓の內、東口にて尋ねしにそんじよそことは敎へしかど(女殺)
「そんじよう」を見よ。

そんじよう　戀の山崎そんじようそこと、人の敎へし家並も、所稀なる家造りの(壽門松)　せめて狩屋は
そんじようそこと風の便もある事か(虎が磨)　只今の詞に賴み人は知れたり、そんじようそれと名をさして白狀せば(女夫池)　每日そんじようそこここと相圖して、甚平一人京橋の夕日影、船どもを見廻し(鎗權三)
「そんじやう」「そんぜう」「そんじよ」などとも書いてある。「そんじようそこ」「そんじようそれ」「そんじよそこ」などいうて、「其處」「其邊」「その者」などの意にいふ。按ずるに「そんちやう」と書いてあるのが正しいので、「そん」は尊、「ぢやう」は丈人の丈である。尊丈と云ふ詞は足利時代に住往京都の僧侶間に用ゐられた詞であつて、老輩より若僧に宛た書簡などに屢見る所である。三益艷詞(續群書類從・文筆部に收めてある)にも「尊丈閣下」「尊丈足下」「尊丈席下」など見えてゐる。會津四家合考にも「尊丈某」と書いて「そんぜうそん」と訓ませてある。「そんちやうそこ」は「尊丈足下」である。牛入獨集(題簽に牛入獨吟集とあり、延寶四年刊)卷上にも「足下」と書いて「そこ」と振假名が附けてある。「そんぢやうそこ」は其義を轉じて「其處」「其邊」の意にいひ、從つて「そんじようそれ」などともいふやうになつたのである。

そんしん　孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風(會稽山)　彼の孫晨が藁一束(天鼓)
〔孫晨〕字を元公といひ、家貧しうて藁一束の中に寢たと云ふ。蒙求に、「三輔決錄、孫晨字元公、家貧織レ席爲レ業、明二詩書一、爲二京兆功曹一、冬月無レ被、有二藁一束一、暮臥朝收」。

ぞんぞ　何と御頭痛の氣味あつて、ぞんぞと寒氣などはまゐらぬか(冷泉節)
「さむさむ」(寒寒)の訛略。じわじわと身に寒さを感じるさまにいふ語。世間子息氣質(正德五年刊)卷之四に、「以前の事を思出せば天柱元がぞんぞとする」とあるも、ぞつとして心を寒うする意にいうたのである。

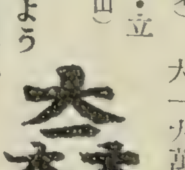
そんつぐ　「そん」を見よ。

***そんなりや**　そんなりやおれがか樣といだきつけば(丹波與作)
「それなれば」の訛。

***ぞんぶり**　田をばぞんぶりぞ(女護島)
水の中などに入る時の水音。水中を歩く時の水音。平家女護島のこのあたりの文は、萬歲の田植唄に據つたものである。「たらゑ」及び「植ゑい植ゑいさ乙女、めでたき君云云」の條を見よ。

た

大一大萬大吉　風折烏帽子・立烏帽子、大一大萬大吉・白一文字黑一文字(五人兄弟)　大一大萬大吉と我を折烏帽子・立烏帽子(會稽山)
紋所の名。


(鎌倉武鑑所載)

だいいちのじよう　「いちのじよう」を見よ。

だいうん　魚の中にも鯔などは大うんの物、かれて無用と申した(今宮)
〔大溫〕大いに溫度を高めることをいうたので ある。當流節用料理大全(正德四年刊)に、諸鳥、魚類、獸物類、干物類の能毒を記すに一一その物の名を擧げて、その下に「へいの物」或は「ひえの物」または「うんの物」「大うんの物」「かんの物」「れいの物」と、それぞれ記してある。「へい」は平、「ひえ」は冷、「うん」は溫、「大うん」は大溫、「かん」は寒、「れい」は冷であつて、これ等總てその物を食ふによつて生じる體溫の關係をいうたものである。今宮心中のここの文は、灸をするときは溫熱が加はるによつて「ひえの物」を食ふべきである。然るに鯔などの大溫の物を食うては、更に溫熱が加はるによつて身體の害になるから、そんな物は食うてはいけないとかねて申しおいたとの意である。

***だいえ**　太子の御身に大衣を着し、緋の袂に柄香爐を燻らせ(聖德太子)　眞如上人大衣を着し門を開かせ出で給へば(賀古敎信)
〔大衣〕僧侶が儀式の時などに着する衣であつて、三衣(大衣・七條・五條)の中で最も重き衣である。

だいかいどうじ　我日の本に昔より住馴れたれば、住吉の大かい童子と申す者(國性爺)
〔大海童子〕住吉の神の名。傾性野群談(享保二年刊)卷之五に、「我此浦に昔より住馴れたれば、住吉の大海童子と申す者」。

***だいがさ**　七つ道具の臺笠・立傘・馬印(堀川波鼓)
〔臺笠〕袋に入れて棒を附けた被笠であつて、昔時貴人の行列の時に持ち行つたもの。

だいがしらのまひ　つれづれ大頭の舞を好き(反魂香)
〔大頭舞〕謠曲の能に似て、扇拍子で舞つたもので大柏の舞と云つた。大柏の名は其家紋に大柏葉相並んだのを用ゐたからで、後世大柏を訛つて大頭と云つたとも云ひ、一說には大頭の名は鼓の拍子の名から出たもので、後に大柏と誤つたものだとも云ふ、醒睡笑に、大頭勸進舞のワキに笠屋、ツレに池淵と云ふ者があつたことが見えてゐる。この笠屋が獨立して乙女舞になり、水干に大口を着て舞を舞つた。その舞の歌が巢林子作中に用ゐられてゐる。心中刄は氷の朔日に「笠屋三勝舞の袖、褄と褄とを引寄せて云云」、心中天網島に「今は結ぶの神無月、せかれて逢はれぬ身となり果て云云」と見えてゐる、これ等の類のものは卽ちそれであらう。

だいがま　大鎌の犬めらに懲り果てて死ぬる身を言はば、面面自害とも、心中の外の心中ぞや(卯月潤色)
〔大鎌〕大邪曲人。「かま」の條を見よ。

だいきやうし　梅の曆の根本大經師以春とて袴いらずの長羽織(大經師)
〔大經師〕現今は表具屋と同義語にいへども、昔は朝廷の御用の工人であつて經卷佛畫を裝潢した。その長は新曆の發行權を有し、每年十一月初めに來年の新曆を弘めたのである。雍州府志(貞享三年刊)土產門下・服器部に、

でかくいうたのである。「ななつのしばゐ」を見よ。

*ぞめく　櫻橋から中町下りぞめいたら（天網島）　ぞめき姿ののら坊主（女腹切）　浮れぞめきのあだ淨瑠璃（天網島）

騷ぐ、騷立てて歩く。沙石集・六上に、「當時のぞめきは、思ふ友をいざなひ此處へわたり彼處へさしかけ、ざわつきめぐる貌をいふ」。入江獅子萓撰・幽遠隨筆・卷上に、「若き人人などの打群れ徘徊するをゾメクといふ。萬葉集に、ますらをは友の騷になぐさむる心ぞあらん我ぞくるしき。騷はさわぐ心かといへり」。

そもさん　坐禪の床に本來の面目を悟る折柄、そもさんがこれ迷の凡夫、悟っても六十棒（傑僧）

〔作麼生〕宋音である。「生」は助辭、「作麼」は何に同じ、禪家に用ゐる語で、支那の俗語である。いかに。いかん。如何せん。雲門錄に、「雲門云、須彌山、作麼生領會」。

*そもじ　家の名を出すそれのみか、そもじと緣が切れうかとこれが第一悲しうて（卯月紅葉）

「そなた」（其方）の文字詞。文字詞は足利時代の末頃朝廷式微にして供御の物備らない爲に、女官等その物の名をいふを忌んで何もじといふた隱語から起つたと云ふ。

ぞもと　十六兩ただしられ、それがぞもとに嘉平次がうろたへ始め、命沙汰に及んだ（生玉）

其本（「ぞ」は其の濁れるもので、萬葉集などにも用ひられてゐる）の義であらう。根源。

素問靈樞　素問靈樞・十四經（冷泉節）

漢方の醫書である。宋史藝文志の素問靈樞集註もあり、清汪昂撰の素問靈樞類纂約註（康熙二十九年刊）もある。

*そや　無間地獄にまつさかさまに墮つること三つ羽の征矢より早し（蟬丸）　千兩にするは三つ羽の征矢（壽門松）

征矢で征戰に用ゐる矢といふことだと云ひ、或はまた素矢で常の矢といふことだと云ふ。思ふに素矢の義であらう。但し征戰に用ゐる矢なること勿論である。「千兩にするは三つ羽の征矢」とは、千兩にするは三つ羽の征矢の飛び行くやうに早い意である。

そらす　親御前が殿樣の御祕藏のお鷹をそらし、お氣に違うて浪人し（氷朔日）

狙を外す義である。鷹は狙を外さぬもの、それが狙を外すは以て鷹の逃げたことに云ふ。にがす。

*そり　そりを打っておどしても割符を取らずに置かうか（博多）　人人驚き反打ち直し、あわてふためき取廻す（吉野忠信）

〔反〕刀の峰の弧形をなせる所。「そりを打つ」とは、刀を拔き放さうとして刀の鞘の反をかへすをいふ。

*そりう　大和源氏のそりうとかや龍門殿と名も高く（吉岡染）　なあ賴平、足下は淸和のそりう桃園親王の苗裔（嗣八州）

庶流。「庶子」を「そし」とも云うてある。弱法師（山本九兵衞版・義太夫正本）第一に、「御世嗣より先立ってそしの燒香珍しや」。

*そりさげ　十歲ばかりの剃下げのちっぽけな馬方が、道中雙六とやら東海道の繪を廣げ（丹波與作）

〔剃下〕頂を剃下げて兩鬢を殘したもの。

そりをうつ　「そり」を見よ。

それしや　何の遠慮もなみゐたる、內裏女郞に揚うてせぬ、何れそれしやと見えにけり（嫗山姥）

〔其者〕遊女。「それしや」を見よ。猫魔達（淨瑠璃、元祿頃作）に、「姬君樣もせめて一日傾城になしましたや、……それしやに成らせ給ひぬと世上に沙汰のあるならば」。「しや」の條をも見よ。

それや　さすがそれやの女房とて、世間話に氣をゆるませ（重井筒）

〔其屋〕遊女屋を「それ屋」といひ、遊女を「それ者」または「しや」といふ。

そろ　そろを脇から二くすじの、三馬あざがけ湊ぎつつ（大織冠）　つんばれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり（大織冠）

〔算〕算盤の算と同じ語、數をいふ。大織冠のこのあたりの文は、謠曲・海士の文を改作したものである。「女房故に捨てん命云云」を見よ。

そろばんばし　終に見ぬ雲梯、必定國姓爺めが日本流のそろばん橋疊橋なんどいふものならん（國性爺）

〔十露盤橋〕周防國岩國の十露盤橋は延寶年中に架設され、構造奇巧堅牢、有名なものであつたから、これを應用してかく云うたのである。十露盤橋は錦帶橋ともいひ、岩國町の西北を流れる岩國川に架し、其構造河中に石を疊んで四個の橋脚を築き、之に半月形の五小橋連續し、支柱なく框を組んで相憑らしめたもので、橋の裏面恰も算盤の連珠に似てゐる。この橋延寶年間領主吉川廣嘉自ら工夫して架設したものであると云ふ。

*そろべくそろ　どうせうかう燒香場を候べく候にやつてすて（女腹切）

「候べく候」行きなり次第の意に云ふ。用捨箱・中に、「昔は行きなり次第にしておけといふ事を候べく候にやつておけといふ者多かりしが、近年は稀なり、適いふ者も其緣故は知らざるめり。これは昔の女の文には候べく候といふ事多くありて、ゆきなり次第に書ても讀めし故、それを書くやうにしておけといふ意なり」。

疎韻　「第一第二の絃は云云」を見よ。

*そん　產みひろめにし人種の、次第次第にそんつぎて、色の道には發明な、町の小娘若嫁の（卯月紅葉）　姉は父御のそんをつぎ、後紐から酒を飲む（堀川波鼓）　親兄弟の兵に似たる方なきそんはづれ（烏帽子折）

〔孫〕苗裔または遺傳の意にいふ。貝原好古編・諺艸に、「孫＝其人の苗裔と云事を其人の孫と俗にいへり」。「孫を繼く」とは血統遺傳を繼ぎ襲ふにいふ。これと反對に血統を引かぬことを「孫外れ」といふ。「おやぞん」をも見よ。

*ぞんざい　煙管取る手もぞんざいに（女腹切）　さてさてぞんざい千萬なる奴めかな（出世景淸）

〔存在〕ありの儘の意より轉じて、粗略の意にいふ。不作法。存外。和訓栞に、「ぞんざい。俗語なり、粗略の意にいふ、存在のままと云ふを略したる語なるべし」。（諺艸に、「存外ぞんざいは誤」、とあれども存外の變つた語ではない）。

*そんし　長年は項羽が勇、正行は孫子が智、母が敎は孟母が仁（女楠）

〔孫子〕孫武と云ひ、周時代齊の人で兵法家で

を大黒と稱するは、寢まつりの義を取るなるべし」。「ねまつり」をも見よ。（一說に、往時僧侶は肉食も妻帶もせず、戒を守つてゐるやうに見せて、內證に妻帶せる者は、表向へ妻を出さぬやうにした、よつて大黒天が多くは厨に祭つてあるのに喩へて、梵妻を大黒といふと）。昨日波今日能物語に、「或寺に名作の大黒のある由を聞及びたる旦那參りて、一目見申したいと所望する。坊主聞きて、中中我らは大黒は持ち候はぬといふ。旦那申すやう、よく存じて候、我等の義はよの人とはかはり候、是非ともと言へば、扨もよく御存じぢや、誠に數年の旦那、苦しからぬこととて呼出すを見たれば、年頃は二十ばかりなる言語道斷のよき女房を呼出す……」。孕常盤に「大黒頼んでどれ取ろぞ」とあるは、寺ではおもに梵妻が閨の世話をしたものであるによつてかく云うたのである。次條をも見よ。

だいこくてん 井戸へ釣られた大黒天も、好い客踏まへた俵子や（雪女）

〔大黒天〕七福神の一。其像は狩衣のやうな服を着て焙烙頭巾を被り、左肩に大袋を負ひ、右手に打出の小槌を持ち、二つの米俵を並べた上に居る。雪女五枚羽子板のこの文は、井戸へ吊されて虐待されたお茶挽遊女も、遂には好い大盡と馴染となつて、金銀を打出してくれる福の神となりすますといふ意をきかせたもので、大黒天の米俵にかけて俵子といひ、俵子は沙噀の正月詞で、沙噀を食へば腹が温まるとて、正月頃に刺身として多く用ゐたものである。當時は遊女の客引きが惡いか、其他抱主の氣に入らぬ時は、抱主から頗る虐待されたもので、「曾我虎が磨（巣林子作）に、遊女龜菊の虐待されたことを記して、「元の起りが龜菊めと樣樣の折檻、このはだか身を縛られ極寒の夜に井の下へ釣下げられし其時は、二度まで息も絶えしなり」と見えてゐる。

だいこくまひ 大黒舞、渡つた渡つたひかる君の渡つた（淀鯉）

〔大黒舞〕大黒天の面を被り頭巾を着、その一人袋を持ち、（或は張貫の槌を持つこともある）、他の一人三味線を持ち、民間の門門に唄ひ舞うて米錢を貰うた物貰の一種であつたが、文政以前既に廢つた。「渡つた渡つたひかる君の渡つた云云」は、源氏物語の帖名などを入れて作つた大黒舞の唄である。大黒舞の歌詞は一定しないけれども、ここに云へるもの、及び淋敷座之慰に載せてある大黒舞の唄に、「御座つた御座つた福の神を先に立て、大黒殿の御座つた、大黒殿の能には、一に俵を踏まへて、二につこり笑つて、三に酒を造つて、四つ世の中良うして、五つ何時もの如くに、六つ無病息災に、七つ何事無うして、八つ屋敷を廣めて、九つ小藏をぶつ立て、十でとうど納まつた、大黒舞を見さいな」、とあるによつて其形式の一般が知れる。浪華井眉菴編・華烏文庫（文政三年刊）に、「大黒舞。大黒の面をかぶり唱歌を門門にうたひ朱錢を貰ふ、これらのことも今は無くなりて、大黒舞の名のみ殘れり」。


〔大黒舞〕（浪花歳時濃鑑所藏）

西鶴撰、胸算用・卷一、長刀はむかしの鞘の條に、「元日より大黒舞に商賣をかへければ、五文の面、張貫の槌一つにて、正月中は口過ぎすれば」。

たいこぢよらう 床勤めずの座敷の花、たいこ女郎の合點で、この子諸共厄介し（吉岡染）

〔幇間女郎〕揚屋・茶屋へ招かれて座敷を取持ち、琴・三味線・胡弓などを彈き、或は女舞なども勤めて、客と床入することはなさなかつたのである。好色一代女・卷之二、分里數女の條に、「酒は皆式うけねども、誰氣を付けて挨拶する人もなく、つい隣りの太鼓女郎にさして日の暮を待ちかね」と見えてゐる。また濁標（寶曆七年刊）に「たいこ女郎といへるものは、揚屋茶屋へよばれ座敷の興を催す爲の者也、琴三味線胡弓はいふも更なり、昔は女舞など勤めしものなり、享保年中より藝子といへるもの出來たり、これは昔のたいこ女郎とは譯ちがひ、三味線を裏に立て裏は色をおもとする也、さるによつて美女は昔のたいこ女郎と違ひ、容儀はすぐれたるあり、勤め方はたいこ女郎と同じさまなり」と見えてゐるやうに、享保頃から三味線を表に立てて色を賣る藝子ができてからは、昔のやうに色を賣らぬ太鼓女郎は漸次なくなつたのである。

太鼓の二 かるたには太鼓の二、杯には太鼓の一（吉野都女楠）

うんすんかるた四十八枚（一より十二まであつて各四枚づつ、合計四十八枚）の中で、二の四枚の内に、太鼓の形を畫き、金泥などで彩色したもの一枚あつて、之を太鼓二と唱へ數五十に當る。「うんすん」をも見よ。

***たいこもち** 親代代の刀屋を太鼓持にするのみか（女腹切） 總兵衛めが計ひにてもがりどもを太鼓に附け（淀鯉） 晩には廓で飲みかけ、我等はたいこ實正明白なり（冥途飛脚）

〔太鼓持〕遊客と遊女との間を幇助して、酒の相手となり座の興をすすめる者。幇間。大盡を音通より大神に寄せて、其太鼓を持つものの義より云うた語であらう。色道大鑑に、「太鼓持といふは傾城買の客に附從ふ者を云ふ、此名目の起りは紀州雜賀踊より始まる、鐘を持たる者は首に懸て踊る、其中に鐘持たぬ者に太鼓を持せる也、是に因て此名目とす」。嬉遊笑覽に、「太鼓もち古くは太鼓衆といへり、其義は誰袖海の能の太鼓打になぞらへ、太夫を心よくのせて廻し、大盡の氣に入やうに拍子たつれば太こといふ」。「だいじん」をも見よ。

胎金兩部の峯 役の行者の後を繼ぎ胎金兩部の峯を分け（蟬丸）

大和國吉野郡大峯を云ふ。胎金兩部の義については「こんたいりやうぶ」を見よ。

だいさい

「鷺はだいさいの方をよけて云云」を見よ。

***たいさんぶくん** 泰山府君の祭をなし、祈り求めし陸奥や捩摺といふ名馬（加增曾我）

〔泰山府君〕和訓栞に、「異邦泰山の神にて、我素盞嗚尊に配合せり、元は道士の祭る神にして釋氏もまた習合せり、古今著聞集に康治二年安陪泰親を召て河原にて太山府君を祭らせて、自ら南庭に向はせ給ひけりと見え、東鑑に院御擬修泰山府君翌日平癒と見えたり」。

たいざんぶくん 唐崎志賀の山櫻、又北國には立山白山たいさんぶくん（賀古教信）

〔泰山府君〕櫻の一種。松岡玄達撰・櫻品に、「泰山府君＝怡顏齋曰、全く虎尾に同じ、但枝曲折ありて、枝に相つらなつて末にいたり疎に花貼く、一枝の間斷續して一所に攢らず、泰山虎尾一種にして分る。活所翁櫻譜曰、千瓣にて少し赤く、大輪にして紅梅の如し、葉は稀々に有。鈍永曰、泰山府君は源平盛衰記に曰く、櫻待中納言此花のさかり數日なき事をかなしみ、泰山府君を祭りて三七日の齡をのべたりとぞ、云云」。

だいしかうのかゆ だいしかうの粥にあらぬ棒食ひ、はつと一度に逃散つたり（川中島）

〔大師講粥〕毎年十一月二十一日より二十四日まで、天台宗の諸寺其開祖智者大師の忌を修す。二十四日（或は二十三日）俗間にて赤小豆

「凡摺二經卷一或製二褾袟一、竝書畫之類橫卷レ之者、俗謂二卷物一悉製レ之、是稱二經師屋一、其内尙長内匠一人謂二大經師一、每年受二南都幸德氏賀茂氏所レ考之新曆一、鏤レ梓而行二于世一、今專謂二大經師曆一」。滑稽雜談（正德三年刊）に、「初曆。禁裏は冬十一月朔日、南都幸德氏の某來年六月まで考へたる曆を大間に書進ず、又六月朔日に十二月迄考へて奏するよし也、民間にも右幸德竝に賀茂氏考ふる所の新曆十一月朔日に進奏するの便、大經師所幸德などより申請て、是を版行して世にひろむ、是を大經師曆と稱す」。

太極（たいきよく）　太極の劍無極の劍（吉岡染）

〔太極〕太極も無極も吉岡憲法流の劍道上の名。易繫辭傳に「易有二太極一、是生二兩儀一」と見え、宋史・周茂叔の中に「自二無極一、而爲二太極一」と見えてゐる。蓋しこれ等より附けた劍法名であらう。

たいきんりきん　赤白二つの牡丹の花房（はなぶさ）、大きんりきんの獅子の勢（以呂波）

「たいこんりき」（大筋力）の訛。強大な筋力。法華經・譬喩品に、「駕以二白牛一、膚色充潔、形體姝好、有二大筋力一、行步平正、其疾如レ風」。謠曲・石橋に、「牡丹の花房にほひ滿ち滿ち、大きんりきんの獅子頭、うてやはやせや牡丹芳」。

大（だい）**くさかもり**　濱の牀几で大く酒盛きりきりと飲みかけまよ（女殺）

〔大工酒盛〕「きりきり（てきぱきの意）と飲み」に、大工道具「錐」・「鑿」をいひかけたので、酒盛を大工酒盛と洒落た。そしてこの歌行後の文に、この語の緣で與兵衞が座敷を增築すべきをいふ。（これを大きく酒盛とよむは非）。

***だいぐれん**　八寒の雪に身を埋み、大紅蓮の氷に閉ぢられ（女夫池）

〔大紅蓮〕大紅蓮地獄の略。八寒地獄の一なる鉢特摩地獄を云ふ。罪人この地獄に墮ちれば、酷寒の爲に身體大破裂して恰も紅蓮花瓣の如くなるよりいふ。

だいくわい　大塊の間同じ緣の窮通かくの如しと知らば（懸物揃）

〔大塊〕天地をいふ。莊子・齊物論に「夫大塊噫氣其名爲レ風」とあつて、莊子因・褚伯秀の註に「按大塊載レ我、地積塊、皆爲二地義一、此似レ指二天地間一」。

だいくわうち　龍猛大師に轉傳し、大廣智より惠果（けいくわ）に至り（以呂波）

〔大廣智〕諱を智藏と云ひ、不空金剛と號し第六祖に當る。兩部大教傳來要文に、「付法傳下云、大廣智不空三藏和上、本諱智藏、號二不空金剛一、梵曰二阿目佉跋日羅一、本西域人也」。

***だいくわんしよ**　京のお役所から此處の代官所へ解狀が附いて（大經師）

〔代官所〕江戶時代に幕府直轄又は藩主の支配下の年貢・公事・入別等を管理する地方官を代官と云ひ、その役所を代官所と稱した。

***だいげき**　中原の大外記執筆にて仰せに從ひ記しける（最明寺殿）

〔大外記〕平安朝時代に太政官に屬した官である。內記の作つた詔書を勘へ正して太政官の奏文を作り、先例に照して臨時及び恒例の儀式を奉行する官で、文筆に長じ儒官を經た者が之に任ぜられた。後には淸原・中原の二氏が代代任ぜられることになつた。此職は六位相當の官であるが、また年功によつて五位になつた者を外記大夫と稱した。

***だいげん**　晴明は大元三種の大祓（弘徽殿）

〔大元〕大元明王をいひ、梵名を阿吒嚩迦（Ā-tavaka）といふ。大元明王を本尊として國家安泰を祈り、または怨敵を降伏する修法を大元法と云ふ。寶物集・卷二に、「大元の法を行うて國母咒詛し給へり」。按じるにこの修法は道教とこぐらがつたものであらう。

たいげんたいそ　形に取つては混沌未分、名に取つては大元大素（蟬丸）

〔大元大素〕甲子祭（天和四年刊、淨瑠璃・加賀掾正本）に、「形にあつては混沌未分、名にあつては大元太始、……これを大素と名付けて形の始理の次なり」と見えてゐる。蟬丸のこのあたりの文は甲子祭・第五に見えてゐるのと大同小異である。按じるに大元大素は道教の說に基づいたものであらう。

***たいこ**　そこの親父ばかりは七十六であの氣性、午の年に當つたら太鼓打ちやろと笑ひける（百合若）　そこに何してぞ、屋內がお前を尋ねて、太鼓鉦がいらうとしたと言ひければ（氷朔日）

〔太鼓〕「太鼓打つ」は「うまがでんでんうつ」の條を見よ。「太鼓・鉦」とは、昔は人の行方が不明となつた時、親族や近隣の者どもが太鼓や鉦を鳴して搜索する風習があつた。井原西鶴撰・胸算用（元祿五年刊）卷五に、「此節季の身ぬけ何とも分別能はず、私には道場へ參れ、其跡にて見えぬと歎き出し、近所の衆を賴み、太鼓・鉦を叩き尋ね、これにて夜を明して濟すべし云云」、とありてこの圖が載せてある。「たいこちよらう」「たいこもち」をも見よ。



（胸算用所載）　〔太鼓・鉦〕

たいこ　骨牌には太鼓の二・杯（女楠）

〔太鼓〕「太鼓の二」を見よ。杯といへるもコツプの畫ある骨牌札をいつたのである。

たいこう　太公伯夷の跡を追ひ（浦島）

〔太公〕太公は卽ち太公望呂尙をいふ、年老いて困窮し、漁釣して周に至つた、西伯（文王）これと逢ひ連歸つて師とした。武王が殷の紂王を討つて天下を定めたのは、多く太公の謀に出たのである。ここの文に伯夷とあるは殷の義士である、殷の紂王が滅んで天下周の世となつたので、伯夷周の粟を食ふを恥ぢて首陽山に餓死した。

たいこうちやう　長袴切袴へいれい白丁退紅丁（最明寺殿）

〔退紅丁〕往時、傘沓などを持つた下司の仕丁の稱である、その着てゐる布の狩衣の色が退紅であつたからこの名がある。花營三代記に、「康曆二年九月二十五日管領御着陣……退紅笠持舍人白張」。

***だいこく**　お寺方の大黑と、書は隱して長持に入れて二股大根や、夜は抱かれて子祭の寢は致すまじ（松風）　南無闇取大明神、短を取らせたび給へ、大黑賴んでどれ取ろぞ（孕常盤）

〔大黑〕僧侶の妻をいふ。和訓栞に、「俗に梵嫂（ぼんさう）

かが」。

***たいてん** 禮幣奉幣退轉なく神慮をすずしめ奉らん(孕常盤)

〔退轉〕修行によつて得た道位を退失して、もとの下位に轉落すること。無量壽經に、「皆悉到二彼國一、自致二不退轉一」。

だいとうれん 阿耨多羅三藐三菩提の五枚兜、大とうれんの降魔の利劍(大職冠) 斷惡修善の腰當をあくち高にしつかと穿き、大とうれん小とうれん二振の劍十文字にさすままに(女護島)

「大とうれん」も「小とうれん」も名劍の名である。舞の本に、「萬戸がその日の裝束は神通ゆけのうでがね、さはんやかんのすねあてし、めう法蓮華のつなぬきはき、忍辱慈悲の鎧を草摺長に着くだして、阿耨多羅三藐三菩提の五枚兜を猪首に着、忍の緒をぞしめたりける。降魔利劍の太刀眞十文字にさすままに、大とうれんといふ劍あしをながに結んでさげ」。田村の草紙に、「此鬼は大とうれん・小とうれん・けんみやうれんとて三つの劍あり、此劍どもを帶する内には日本が寄て攻むるとも討るることはあるまじ」。

***だいなし** 露の命を君にくれべいと、染めしだいなし嫉ひなし、相手えらばず防ぎたり(反魂香) かくては果てじと、紺のだいなし生蠶一へぎ(薩摩歌)

奴僕などの着る紺無地で仕立てた筒袖を紺のだいなしといふ。「だいなし」は代無しで、かはりなしの義か。和訓栞に、「奴僕の事に紺のだいなしといふは無代の義、かはりなき意なるべし」。傾城反魂香のこの文は、紺のだいなしに、臺無し(無茶苦茶で秩序ない意)をいひかけ、薩摩歌のこの文は、紺のだいなし生涯一枚を生蠶一片にいひかけたのである。

***だいにちかくわう** 元より大日覺王の分身なりとさとすればᅳ(一心五戒魂)

〔大日覺王〕大日如來を云ふ。覺王は如來の異稱である。謠曲・逆矛に、「南無や歸命頂禮大日覺王如來、昔伊弉諾・伊弉册の尊」。

大日大聖不動明王 「とうはらにがうざんぜ云云」を見よ。

だいねんぶつは 大和國平群谷大念佛派の庵室(卯月潤色)

〔大念佛派〕攝津國平野町の西北隅、大字馬場にある融通念佛宗の本山・大源山大念佛寺の分派。この宗は天治元年良忍上人の開く所。

***たいのや** (松風)(女夫池)

〔對屋〕主殿に對する稱である。東なるを一の對といひ、西なるを二の對といふ。その大さは主殿と相等しい。堂上の諸家では對の屋といひ、武家では奥の屋と稱した。

***だいば** 業さらしめだいばめ、如何な下人下郎でも踏むの蹴るのはせぬこと(女殺) 釋迦に提婆あり、孔子に盜跖あり(津戸三郎)

〔提婆〕提婆達多(梵名 Devadatta)の略、惡逆の行多く釋尊の法敵であつたが、後遂に改悛して辟支佛となつた。嘗て釋尊の怨敵であつたによつて惡逆なる者に喩ふ。(巣林子の見た提婆達多は釋迦如來誕生會の文中に詳しく書いてゐる)。

***たいはく** 末を見開き都を出でさせ給ひたる御賢德、吳の泰伯の遺風といはるる王子(浦島) 夏仁親王は泰伯仁德の跡を追ひ、兄を越えて位に卽くこと、兄弟序ある道にあらずと(持統天皇)

〔泰伯〕周の太王の長子で、弟に仲雍・季歷があつて、父は位を季歷に讓らうと欲してゐるので、泰伯は父の志を遂げさす爲に、仲雍と共に荊蠻に奔り勾吳と號した。そこで父は季歷を立てて國を讓つた。荊蠻の民は泰伯を義とし、立てて吳の太伯とした。論語・泰伯篇に「子曰、泰伯其可レ謂二至德一也已矣、三以二天下一讓、民無二得而稱一焉」。持統天皇歌軍法のここの文に仁德とあるは仁德天皇のことで、父應神天皇は次子菟道稚郎子を寵して太子に立てられた。されば泰伯も仁德も兄に生れて弟に讓つた人で、巣林子が第二の宮夏仁親王の、第一の宮春彥の尊に位讓りをなされる例に擧げたのは妥當でない。

だいひきもの お盃がかはつて平の蓋、ありがたがための臺引物(宵庚申)

〔臺引物〕饗膳に添へて出すもので、塗物皿などに菓子などを盛つて出すを云ひ、これは客の持ち歸るものである。

***大毘沙門天** (天神記)

多聞天とも云ひ、梵名を Vaisramana と云ふ。四天王の一で、須彌北方の守護神である、甲冑に身を堅め舍利塔を捧げ、鬼形を踏まへ寶鋒を突いてゐられる。

だいびやくこつき 左京の太夫藤孝大びやくこつきの怒をなし、一文字に取つて返し、無二無三に打つて掛かる(女夫池)

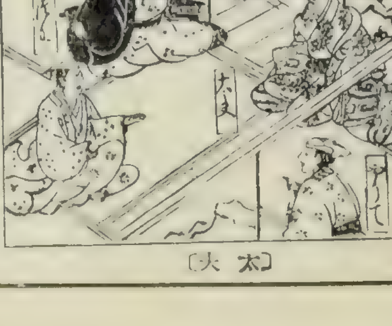
大白黑鬼で、大白鬼・大黑鬼をいふのであらう。餓鬼草紙などにも五色の鬼が見えてゐる。爲愚痴物語卷六にも「五色の鬼どもあつまり、閻魔王の御前にて罪人どもを引出し」とある。

***たいふ** 帝を始め郷相雲客大夫諸侯に至るまで(大織冠)

〔大夫〕五位をいふ。令義解に、「一位已下五位以上、總稱二大夫一」と見え、朝儀・會集の時、姓名をいはないで五位以上を大夫といふたのが、轉じて後には專ら五位の稱となつた。

***たいふ** 天神太夫の身でもなし、さもしい金に氣が觸れた見世女郎のあさましさと(冥途飛脚) 太夫天神に引つり引張られ、それで額がひきつつた西爪のやうな顏なれど(淀鯉)

〔太夫〕松ともいひ、最上位の遊女である。才色すぐれて何不足なき程の者がこの位になるので、極めて威勢のあつたものである。井原西鶴撰・好色二代男(貞享元年刊)卷之七、勤めの身狼の切賣よりはの條に、「遊女も太夫は爪も人に切らせ、髮結ぶまでも二人がかり、眉作るも人任せに、寢間の蚊帳に入るまで、引舟・禿にあげさせ、腰をかがめる事も無く、六七人も前後を守護し奉る」、とあるを見てもその全盛が知れる。太夫の名義に就いては、異本洞房語園上・京都遊女の名目の條に、「太夫。これは藝の上の名なり、慶長年中まで遊女ども亂舞仕舞を習ひ、一年に二三度づつ四條河原に芝居を構へ、能太夫舞太夫皆傾城とも勸めしなり、尤大人歷歷の御方御見物あり、種種の餘情華麗なる事ども多かりしとなり、さるによつて今日の太夫は誰


〔太夫〕
(人倫訓蒙圖彙所藏)

粥を食ひ枯柴を以て箸となす、これを大師講の粥と云ふ。近代世事談に、「大師粥(十一月二十四日)。俗家赤小豆粥を煮、是を大師粥と云、民間いづれの大師ともわきまへざる人多し、此日は天台智者大師の忌日也」。和訓栞に、「十一月二十三日を大師講といひ赤小豆粥を調じ食ふ、天台大師の忌日は二十四日なれど、二十三日滿山の講の終にして、僧侶も早朝紅粥を影前にて食ふより起りたりといへり」。

だいじなかたん　「なかたん」を見よ。

***だいしやう**　大聖五十年の御法の　磔(釋迦)

〔大聖〕釋尊を敬つて云ふ。法華經・方便品に、「惠日大聖尊」と見え、釋尊の尊稱である。

***だいじやうゑ**　天子大甞會の前なれば、死罪は宥め助け置く(酒呑童子)　既に大永七年新帝大甞會、悠紀主基の御屏風を書き(反魂香)

〔大甞會〕天皇位に卽かれて天祖及び天神地祇を祭られる大儀である。古は大甞或は新甞と云うてその別なかつたが、天武天皇の頃より代每に行はれるを大甞とし、年每に行はれるを新甞とし、その日は十一月下卯と定められた。大甞には二國を卜定し、國郡司をして事ら祭事に供奉せしめる、之を悠紀主基と云ふ。其供神の大幣は九月より始めて三月の中に造り了らしめる。故に七月以前位に卽かれれば當年事を行ひ、八月以後は明年事を行ふ。その祭儀は兩國司が行つた。悠紀は天神を祀り、主基は地祇を祭るのである。

***たいしやく**　上は梵天・帝釋、下は四大の文言に(天網島)

〔帝釋〕梵名 Sakra-devanam-Indra. 忉利天の主で善見城に居られ、寶冠を戴き金剛杵を持ち、身に瓔珞を飾り溫良慈悲の形相を備へ、四天王などを配下につれてゐられる。心中天網島のここの文に就いては「しだい」をも見よ。

***だいじよう**　大乘八軸の骨髓(出世景淸)　一引引けば千僧供養、二引引けば萬僧供、大乘慈悲の車の檀那(小栗判官)

〔大乘〕佛果の大涅槃を求める道を大乘と云ふ。乘は運載の義である、因人を載せて證果に運ぶ乘輿といふ意であつて、佛の敎道をいふ。大乘は釋尊の說かれた敎法の中に於て、一切智を求め如來の智見を開き、その力用を以て無量無數の衆生を救濟して安樂を得しめる敎法なるを以て「大乘慈悲」といふ。「大乘八軸」とは法華經をいふ。「八軸」を見よ。

***だいしよくくわん**　(大職冠)

〔大織冠〕標注職原抄校本別記に、「孝德紀の大化三年に制二七色十三階之冠一、一曰織冠、有二大小二階一、以レ織爲レ之、以レ繡裁二冠之緣一、……、天智の三年二月に二十六階とせられたり、大織・小織・云云」と見えてゐる。天智天皇八年藤原鎌足に、人臣で他に類例なき冠位第一なる大織冠を授けられたによつて、後世大織冠といへば鎌足のことと思ふやうになつた。古院本に大織冠を大職冠と書いてあるので、敢て改めないで置いた所もある。

***たいじよだて**　扨こそあの鶺鴒を庭來鳴、庭叩、戀敎鳥ともいふぞとよ、……今捕へて籠に入れ、たいじよだてして放さんと、心詞もしどけなく(振袖始)　今日より左樣の惡戲せばコレ、つめつめするぞとたいじよだて牛若を掻抱き(烏帽子折)

「たいじやうだて」(怠狀立)の訛。謝罪證文を書立てさせること。轉じて諭し懲すこと。梅窓筆記に、「昔怠狀と云は今の過證文也」。

***たいしん**　御身達は大身人手は多し(鑓櫂三)

〔大身〕大祿の身分。位高く封祿多き人。

***だいじん**　大盡樣のお慰み、船の着くまで道行を(二枚繪)　おれらが樣に銀遣ふ大盡は嫌ひさうな(曾根崎)

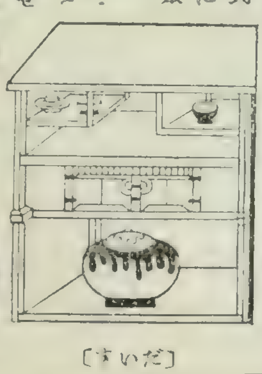
〔大盡〕傾城買の上客を云ふ。蓋し大身(前條を見よ)の轉義であつて、寛濶によそほふ客なるによつて稱したものであらう。色道大鑑に、「大臣。傾城買の上客をさしていふ、それ大臣は天下の三公にして、尤も職重ければ尊敬し、また欺きていふ異名なり」。(大盡を普通より大神によせて、それに附いてまはる者を大鼓持・末社・御幣持などと云ふ)。

***太眞殿**　思ひを善路に飜へして太眞殿を建立す(國性爺)

楊貴妃の魂の住む處。謠曲・楊貴妃に「太眞殿と額のうたれたる宮あり」。白居易の長恨歌に「其中綽約多二仙子一、中有二一人字二太眞一、雪膚花貌參差是」。巢林子のここの文は謠曲安宅の勸進帳の文に、「思ひを善途に飜して盧舍那佛を建立す」とあるを改作したのである。「りんきやうのはうじ」云云をも見よ。

***だいす**　奥の臺子もしかきや(大經師)

〔臺子〕正式の茶の湯に用ゐる四本柱の棚で、風爐・茶碗・茶入・水さし等を載せるもの。「眞の臺子」に就いてはその條を見よ。



〔すいだ〕

(女用訓蒙圖彙所藏)

たいせいろん　大成論・格致論(冷泉節)

〔大成論〕盧陵孫子の撰した漢方の醫書である。

***だいそれる**　ヤアヤア大それた事いひますの、酒どころでござらぬ(生玉)　主の印判盜むとはだいそれた此茂兵衞(大經師)　屋内の鍵を盜取り、このだいそれた言譯がでんどでそもや立つべきか(今宮)　私は身に過ぎてだいそれた望ある者、それさへかなへ下されば(弘徽殿)

〔大逸〕甚しく思はぬ方へ飛び行く義、大いに常軌をはづれる。途轍もない。俚言集覽に、「だいそれた。(毛吹草)大臘はそれぬものなるを、それがそれたるは是あるまじき事の有りたるなり、故に喩へいふと云へり」。

だいだいかぐら　三河の國の町小路、太太神樂珍しと見る人立の賑ひも(日本武尊)

〔太太神樂〕伊勢太神宮で奏する神樂をいへど、もとは他の神社でも奏したものである。日本武尊吾妻鑑のここの文に據ると、皆一樣に花笠を被き、神樂乙女は小忌衣を着て鈴を持ち、其他舞に用ひる獅子頭を容れた唐櫃に白木綿掛けたもの、太鼓、笛、鼓を持ち步いて、それぞれの役を勤め、饌米の役を勤める者もあつて、人から錢を乞ひ受けたものである。人倫訓蒙圖彙卷七に、「代神樂＝伊勢より出づるといへども、伊勢にも限らず、此類は所所にありと見えたり、夫れ神樂といふは神をすずしめの舞樂、乙女が鈴にあはせて陰陽の調子神道の大事にて、別に子細ある事とかや、然るを今勸進の代神樂は舞手の乙女もなく、只鼓太鼓ことやうにたたきたてて、太鼓打のつらつき狂人のやうなるを見てうれしがる、しかのみならず獅子が立つて扇の手をつかひ、一谷節で舞ふ、いと珍しきことどもなり、岡崎女郎といふ鹿をどりなれば神慮はい

ふ。「大理の廳」は検非違使廳を云ふ。拾芥抄・巻中・官位唐名部に、「刑部卿刑部省大理卿秋官大理」。職原抄に、「検非違使＝淳和天皇御宇天長中初置レ之、異朝最重ニ此職一、昔唐虞代皐陶爲レ士、此云ニ大理一、周禮立官之日、大司寇卽此任也、後代置ニ大理寺一、本朝又以ニ刑部省一爲ニ糺判之官一、天長年中准ニ唐朝一置ニ使廳一、蓋是大理寺也、云云」。徳川時代に検非違使廳とはいはないが、殊更に昔の罪人を逮捕糺彈する役所の名を借りていうたのである。

だいろくてん 爾が首第六天の犠牲と、えいやつと捻切り(浦島)

〔第六天〕欲界の第六位にある他化自在天をいふ。他化自在天王は魔王で常に佛道の障礙をなす。三藏法數・十七に、「此魔卽欲界第六天也、若人勤ニ修勝善一、欲レ超ニ越三界生死一、而此天魔爲作ニ障礙一、發ニ起種種擾亂之事一、令下修行人不上レ得レ成ニ就出世善根一、是名ニ天魔一」。

***だいゐとく** 三七日がその間大威徳の法なぞ行ひける(嵯峨天皇) 大威徳明王の咒文を唱へましませば(娥)

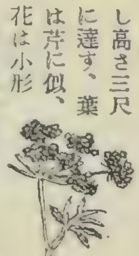
〔大威徳〕大威徳明王は五大明王の一で、西方の守護で六面六臂で劍・鉾・輪・杵を持ち、折伏の印を結び水牛に跨り、火焔を負うてゐる。大日經疏・六に、「降閻魔尊(卽大威徳明王)、是文殊眷族、具ニ大威勢一、其身六面六臂六足、水牛爲レ座、面有ニ三目一、色如ニ玄雲一、作ニ極忿怒之状一」。「大威徳の法」は大威徳明王の御修法である。「大威徳明王の咒文」は卽ち、「南莫三滿多縛日羅赦唵訖利瑟麗力尾訖哩多娜曩吽薩縛設咄嚕娜捨哩薩擔婆野娑發吒莎訶」である。

たうかう 「たふかふ」を見よ。

たうかのせちゑ 「たふかのせちゑ」を見よ。

たうき 同じ處に當歸まで半夏半夏と季を重ね(薩摩歌)

〔當歸〕「やまぜり」とも云ひ、濕地淺水に自生し高さ三尺に達す、葉は芹に似、花は小形白色で複繖形花序に排列す、毒草であるがその根を乾して藥用とする。新撰字鏡に、「當歸、山世利」。ここの文は當歸に當期をいひかけたのである。



〔當歸〕

***たうぎん** 當今甚だ文詞の學に長じ給ひ(用明天皇)

〔當今〕當代の今上天皇。保元物語・新院御謀叛思召立の條に、「當今位に卽かせ給ひて」。

たうぐし 唐子髷には薩摩櫛、島田髷には唐櫛と、大和唐土打交ぜて(國性爺)

〔唐櫛〕齒の細密な梳櫛を云ふ。もと唐土から傳來したによってこの稱がある。薩摩櫛。

だうぐもち 道具持の槌右衞門一人殘つて臺所のぞき(夕霧)

〔道具持〕槍持。嬉遊笑覽に、「(秋草)古代の武士は弓矢を以て働きし故、武士を弓矢取といひしなり。信長秀吉の頃より專ら鎗を以て働き、一番鎗を以て武功の最上とする事になりし故、鎗を稱して道具といふことになりて、かりそめの出行にも身をはなたず鎗を持たする事になりたる也」。

道具屋(だうぐや) 道具屋樊噲流は珍しからず、門を破るは日本の朝比奈流を見よやとて(天網島)

道具屋節の略で、道具屋吉左衞門のはじめた勇ましい調子で語る淨瑠璃の一派である。「はんくわい」の條を見よ。

道具屋お龜・與兵衞(だうぐやおかめ・よへゑ) 道具屋お龜・與兵衞とは思へば近き町つゞき(氷朔日)

ひぢりめん卯月栬及び卯月の潤色に出てゐる人物である。假作人名部「かめ」「よへゑ」を見よ。

たうげん これはまた仙術桃源の延命酒(源義經)

〔桃源〕所謂豐樂郷である。晋の太元中・武陵の漁人がこの豐樂郷に遊んだことが陶潛の桃花源記に見えてゐる。事類統編の註に「桃源山在ニ桃源縣(今の湖南省常德府の中)西南三十里一、有ニ桃花洞一、卽陶潛所レ作ニ桃花源記一者也」。

たうけんびたひ 月額・唐犬額・角額(加增曾我)

〔唐犬額〕承應頃江戸の町奴唐犬權兵衞が前額の髮を廣く拔き、角を拔上げて尖らせてゐたので、そのやうな額をした者を唐犬額と云うた。柳亭筆記・四の巻に、「俠客傳(寶曆甲戌晩翁撰)江戸に唐犬組といふ男達ありし、喧嘩と成ては相手に疵つけずと云ふ事なしとて唐犬組と名付けたり。唐犬組大方男ぶりよく美男なりし、額別して大きく恰好宜しく今稀なり云云とありて、末に頭の名は唐犬十右衞門と見えたり。今は權兵衞といふ、いづれか是云云」。

だうこにち 明日五日は西塞り、六日はだうこ日、七日の卯の刻には必ず必ず一の谷東西の木戸口にて源平の矢合せと(大原問答)

〔道虛日〕故事類苑・方技部に、「黨簒日に道虛日之事。一日・六日・十二日・十八日・二十四日・晦日、右者出行深凶也」。

唐盃(たうさかづき) 「黑熊の唐盃」を見よ。

道成寺の鐘(だうじやうじのかね) さがが素振も見せともなし、何處に隱さん道成寺の鐘はなけれど(生玉)

道成寺は紀伊國日高郡にある古刹である。謠曲・道成寺に、道成寺の梵鐘に恨みある女が白拍子となつて現はれ、鐘の供養に詣でて舞を舞うて見せうとて、番僧の眠れる間に、この鐘恨めしいとて龍頭に手をかけ、引被いて鐘の中に隱れ失たといふが、さてさがを隱したい道成寺の鐘は無けれどもの意である。そして「何處に隱さん道成寺」と頭韻の文飾である。

***だうしやうぼん** 水汲が汲んで擔うて持つやたごの棒、坊主頭を振立てて道正坊の金柄杓、あれあれ撫でて通れば一撫に、はや本腹の伊丹酒(今宮)

〔道正坊〕寺院の製藥を行商する賣僧をいひ、藥の効能を誇大に吹聽し、所望の者には代金を金柄杓にて受けて、その藥を與へたものである。この者もとより破戒僧であるによつて、道者を何樣うにかけて道正坊と稱したのであらう。當時寺院で製藥したことは藥山(その條を見よ)などもその一である。好色染下地(元祿四年刊)卷一、我物貰うて假の聟入の條に、「味噌こちごちと玉子の吸物、道正のげどくに賣のゑひさめて」とあるも、道正坊の賣藥解毒劑を服用して醉の醒めたをいうたのである。鸚鵡が杣の巣林子跋文(狂言當如皐編・佐藤古雅志にも出てゐる)に、「詞は古きを以てさきとす、心は新しきを以て詠ずべしと、その心はいかに心を古風にそめよとこそ、道正坊の說法いひ勝の世の中、口もつていはぬが損」とあるも、道正坊の藥効能說法の誇大なるをいうたものである。商人職人懷日記(正德三年刊)第二卷、京に是沙汰の談議の條に、「談議に參りてなく、鉢の施主どももきえ、夜舟に笛ひきかづいて逃下り、なほ行

が家の何といふ太夫が勸むるなどいひしより、自らよき遊女どもの總名となりけるよし」と見えてゐる。次條をも見よ。（「中戸」「てんじん」の條の畫をも見よ。）

***たいふ**　まづ鉢植の造り松、すんと流しの一枝は太夫の威勢備はりて（生玉）

〔太夫〕漢官儀に、「秦始皇上封二泰山一、逢二疾風暴雨一、賴得レ抱二松樹一、因封二其樹一爲二五太夫一」とある故事によつて「松」を太夫といふ、遊女の最上位の太夫を松とも云ふもこの故事から出たのである。前條及び「まつ」を見よ。

***だいふ**　小松内府所勞によつて致仕し給ひ（女護島）

〔内府〕内大臣の唐名。拾芥抄・卷中・官位唐名部に、「内大臣。内府内丞相」。

だいぶつきせる　佛の手の上に寢腹這うて煙草喫むもの俺一人と、所も名に負ふ大佛煙管（三國志）

〔大佛煙管〕京都大佛殿（方廣寺）の邊で造つてゐた煙管。雍州府志七、土産門下、服器部に、「喜世留＝倭俗良賤好二煙草一、吸レ之筒謂二喜世留一、是朝鮮所謂烟筒也、今處處製レ之、然洛下間町井大佛邊所レ造爲レ本」。

太平記講釋（たいへいきかうしやく）　見るかげ細き釣行燈、太平記講釋赤松梅龍と記せしは（大經師）　茶屋が藥屋の軒續き、竹の柱に節込めし、稽古淨瑠璃太平記、琴の連れ歌引替へて（生玉）

太平記讀（たいへいきよみ）とも云ふ。人倫訓蒙圖彙（元祿三年刊）卷七に、「太平記讀」近世よりはじまれり、太平記よみての物貰ひ」。あはれ昔は疊の上にも暮したればこそつり讀にもすれ、なまなかかくてあれよかし、祇園の涼み糺の森の下などにては莚敷きて座を占め、講釋こそおこりならめ、それを又小首傾けて聞きゐる者もあり」、と云うてあるやうに物貰ひの類の者であつて、人の群集する所に莚を敷いて太平記讀をした者もあつたが、又大經師昔暦に云へる梅龍のやうに、釣行燈を掲げて人を寄せた者もあつた。金銀座色町著に載せてある繪は、生玉社内に葭簀張つた小屋に見臺を置き、手に扇を持つて太平記を讀む者が坐し、その前に聽く人が腰掛に腰を掛け、小屋の軒には看板を懸けて、太平記信長記四十七人評判と書いてある。



（人倫訓蒙圖彙所載）

〔太平記讀〕



（金銀座色町著（正徳三年刊）所載）

（生玉社内）

〔太平記講釋〕

***たいへいらく**（女夫池）

〔太平樂〕大食調の樂で、唐土傳來の樂である、武將破陣樂とも鴻門曲とも稱し、鴻門の會の時に項伯項莊の兩人劍舞した狀を摸したものだと云ふ。

***だいぼんてん**　攝州難波津の四天王寺はこれこの大梵天の伽藍を移し（聖德太子）

〔大梵天〕色界十八天の一であつて、初禪天の第三に位す。大梵天王ここに住して、一切娑婆世界を統御してゐられる。

だいまち　返事眠たき夜なか聲、二十三夜の代待や、門の通りはまだ四つ（今宮）

〔代待〕「だいまつり」（代祭）のつまつた語。代人となつて神佛に參詣し、米錢を乞ふ物貰の一種。二十三夜の月の深更にのぼるを代拜さすを二十三夜の代待と云ふ。日次紀事（延寶年中成）正月の條に、「每月每二神社會一、其身有二故障一、則倩二山伏行人一、令レ詣二其社一、是謂二代參一、或日待月待庚申待之類亦稱二代待一、故到二其時一則代參代待者、高聲呼二街衢一、則入二人家一而請二米錢一」。

だいまんだら　六萬九千三百八十四文字を、ただこの七字にをさまりし、大まんだらやまだら雪（重井筒）

〔大曼荼羅〕曼荼羅は梵語 Mandala. 譯して輪圓具足といひ、一具の法門を圖畫に示したものに名づける。大日經疏に、「曼荼羅是輪圓之義」といひ、また「曼荼羅者名爲二聚集一、今以二如來眞實功德一集在二一處一、……十方世界微塵數差別、智印輪圓輻湊、翼二輔大日心王一、使下一切衆生普門進趣上、是故說爲二曼多羅一也」と見えてゐる。重井筒のここにいへるは日蓮宗の大曼荼羅で、南無妙法蓮華經を中央に書き、その左右に諸菩薩の名、四隅に四天王の名などを書いたもの。重井筒のこの文に「六萬九千三百八十四文字」とあるは法華經の文字の總數、「ただこの七字」とあるは七字題目、即ち南無妙法蓮華經をいふ。

***だいみやうにち**　大明日の鷹揚に、今日は最上吉日と（松風）

〔大明日〕昔暦にある語で、これに當る日は最上吉日である。貞享四辰伊勢暦頭書に、「大明日は古より用ゐ來る吉日也、然れどもあくのさはりあらば用ふべからず」。

***たいめい**　弟泉三郎忠衡不同心によつてたいめいに背き奉る段（源義經）

〔台命〕三公または將軍の命令をいふ。「台」は辭源に、「三台星名、古以比二三公一、故尊人之詞多用レ之、云云」。

だいもく　宗旨をかへて一緒に行かん、今題目を授けてたも（重井筒）

〔題目〕南無妙法蓮華經をいふ。日蓮宗では妙法蓮華經を一宗教義の眼目となすが故に、俗に其宗を題目宗と云ふ。

***大紋**（だいもん）　大紋の露結んで肩にかけ（世繼曾我）

素襖の裁縫と大方同じもので、その異つた點は家の紋の附けやうと、胸紐・菊綴を組緒にしてある。この服は近古以前にはなく、德川家服制によれば、諸大夫これを着用し、地布色定めず、家の紋を染出し、下に熨斗目を着、風折烏帽子を被つたのである。

だいもんじ　「東山の大文字」を見よ。

***たいや**　三十五日お逮夜の志、お同行衆寄集り（女殺）　今宵は父の逮夜ぞと、烏帽子裝束あらためて（孕常盤）

〔逮夜〕禪林象器箋に、「逮二明日茶毘一之夜也」と見えてゐる。俗に佛事を營む忌日の前夜をいふ。

***だいり**　大理卿大江の匡房（隅田川）　檢非違使の別當大りの廳の官人罷出で（蛙合戰）　大りの廳の官人なり（女殺）　大りの廳より御不審、只今證跡の實否、己が命の生死二つの境なるぞ（女殺）

〔大理〕檢非違使の唐名である。「けびゐし」を見よ。禮記・月令の註に、「理・治獄官也」と見え、唐六典の註に、「理謂レ察二理刑獄一也」と見えてゐる。「大理卿」は檢非違使の別當を云

***たかて**　高手籠手に縛付け、六條河原に引出し(出世景清)　とつたとつたと引伏せ引伏せ高手籠手、顔色變ぜず縛られし(大經師)

〔高手〕籠手に對する語。臂より上、肩より下の稱。人を嚴しう縛り上げる狀にいふ。

たかとも

「そびらにちのりのゆぎ云云」を見よ。

***たかひも**　二打ち三打ち打つ太刀に、高紐の外れより草摺三間切落され(世繼曾我)

〔高紐〕肩の所にあつて鎧の引合せの紐。

たかもがり　船屋形に高もがり兵具嚴しき大船を(天智天皇)　船屋形のたかもがりはらりはらりと押破り(天智天皇)

〔高笆〕高き籬。字環に、「笆」を「もがり」と訓じてある。

たからぶね　今宵は如何した夢がな見ろ、此方は誠の寶船、舳先が向いた、飲め勢へと(雪女)

〔寶船〕種種の珍寶と七福神を乘せた船の畫、上に迴文歌「なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな」と記したもので、節分の夜(或云除夜)これを枕の下に敷いて、吉夢を祈り惡夢を水に流す兒とする。日次紀事(黒川道祐編・延寶年中成)十二月の條に、「同(節分)夜禁裏貼二畫船於白紙一、而賜二宮方及語臣一、地下良賤亦畫レ船、以敷二臥蓐之被底一寢、今夜有二吉夢一則來歲得レ福云、若見二惡夢一則翌朝付二於流水一、是謂レ流二惡夢一、倭俗斯船內畫二種種珍寶一、故稱二寶船一、近世是亦鏤レ梓而兒童賣二市中一、大呼二寶船寶船一、是又中華紙船之類乎」。倭訓栞に、「たからふね=寶貨を積たる船をゑがきて歌あり迴文也、全浙兵制にも載て、とをのねふりを十人共レ舟と釋せり、詠歌本紀には長夜の眠の中に十界を流轉する事とす、此を除夜に枕の下にしく、吉夢を見てはつなぐ(ぐ歟)といひ、凶夢を見ては流すといふ也、居家必要に、夢レ乘レ船吉夢二船渡一主二大富貴一と見えたり」。

たかんまん　汝が怨念消除微塵たかんまん、東方に降三世、南方に軍茶利夜叉(伊豆日記)

〔他憾鉛〕不動明王の慈救咒、「南讀三曼多縛曰羅赧戰拏摩訶路灑拏薩破吒也吽怛羅他憾鉛」の中にある梵音である。「怛羅他は堅固、憾鉛は種子である」。

たきぎにはな

「ふつつかならぬ山人の薪に花とはこれならん」を見よ。

たきぎのう　奈良の都の薪の能この時よりぞ始まりける(天智天皇)

〔薪能〕奈良の興福寺南大門の前の芝生で夜分薪を焚いて能樂を興行し、毎年二月七日から七日間續けた。これを薪能と稱へた。日次紀事(黒川道祐編・延寶年中成)二月初七日の條に、「薪能。自二今日一南都興福寺南大門薪能始、元是興福寺夜中法會間、寺僧之奴僕不レ堪二春寒一而於二門前一燒レ火、就二其光一偶爲二俳優一、有下爲二長夜之戲一者上、其後爲下金春觀世保生金剛四座之業上、近世四座之中、兩座在二東武一、南都休暇兩座勤レ之、今七日二座交勤レ之、八日如レ亦是、至二九日一則初日一座告二衆徒一、於二若宮前一施レ藝、其日次座勤二門能一、十日亦次座如レ此、於レ此宮能終、自二十一日一至二十三日一兩座相交勤二門能一、七日間雨降則十四日臨時勤レ之」。

***たきぐち**　靫胡簶に的矢一手入ろは侍所瀧口の骨法(會稽山)

〔瀧口〕淸涼殿の東北にある御溝水の落ちる所に勤仕して、禁中を衞る武士をいひ、藏人所の下司である。禁祕御抄に、「宇多御宇、撰二能射者一合レ候二御所邊一、其所御溝水所二落聚一也、仍號二瀧口一、候二其所一武士稱二瀧口一、後代爲レ名」。

たきつける　こむやくしいあたぶの惡い、こりや御無用にあそばせと、たきつけらろる女心(夕霧)

〔焚附〕おだてる。そそのかす。人を煽動していらだたしめる。元日金蔵越に、「妬み悋氣は女房の常、まして稀にもねる夜なきおさんが日頃の埋火の、たきつけられてくわつと燃え」。

***だぎに**　仙術・幻術・魔法・邪法・茶吉尼の法(蛙合戰)

〔茶吉尼〕梵語(Dakini)である。茶吉尼、駄祇尼、吒儀爾など書くはその音寫である。夜叉を云ふ。其形赤黑色の餓鬼であつて、右手に人の足を持ち口を開いて食ふ勢をなし、左手に人の手を持ち前に死人仰臥してゐる。慧琳音義・三十五に、「茶枳尼、梵語、則鬼之總名、能魅レ人與レ人通者也」と見えてゐる。我が國では茶吉尼を稻荷と混同してゐる。參州豐川稻荷は茶吉尼を祀つたものだといふ。古今著聞集に、「知足院殿は大權坊といふ奇驗の僧に陀祇尼の法を修せられけるに、夢中に狐の生尾を得たり」。鹽尻に、「陀祇尼天は琰魔羅の屬にして其種類一ならず、……人の肝膽氣を噉食す、然るに地藏大士慈悲を以て其相を鬼類に等しくし、之を招して人の爲に惱害を成さざらしめ給ふを本主の陀祇尼天とす、正流の密家に祀る所是なり、其鬼類の實者外相を現ずるに悉伽羅(梵語スリガーラ)野干となる、季世大方此野干を祀りて陀祇尼と稱し、福を求め幸を祈り、或は稻荷と呼で幣帛を捧ぐる族多し」。

たきもとりう　瀧本流の墨色や(碁盤太平記)

〔瀧本流〕瀧本坊昭乘(松花堂と號す)の書流をいふ。昭乘は攝州堺に生れ、男山瀧本坊大阿闍梨實乘の弟子となり、師の寂後その跡を繼いだ。書は近衞前久公より入木道を學び、大師樣を發揮したもので、三藐院近衞信尹公・本阿彌光悅と共に近世初期の三筆に數へられてゐる。寛永十六年九月十八日五十八歲で寂した。文藝類纂に、「山城八幡山瀧本坊に昭乘あり、大師流を摹倣して一流を爲す」とあつて、その筆蹟を載せてある。

***たくしかく**　ヤれそが言傳したぞや、近日一座致したいとたくしかければ(冥途飛脚)　まあとんと主樣に直に逢うたと思はんせ、そして恨の山山お二人になりかはつて、たくしかけたくしかけ難なくこちの利潤にして、追付け迎の乘物お二人ながらお屋形へ、迎取つて抱いて寢て可愛がろとのお返事(椛狩)

「たぐりかく」(手繰掛)を「たくしかく」とも云ひ、「たぐりこむ」(手繰籠)を「たくしこむ」といふ類である。くりかけくりかけする。續けざまにいひかける。「たぐりかく」といふ語は、女殺油地獄に、「與兵衞がたぐりかけ一二打つ泥砂、出合拍子に馬上の武士の袷上下皆具まで、ざつくとかかるも時の運」と見えてゐる。

***だくだく**　お腹の痞だくだくと、胸に躍るを摩り下げ(淀鯉)

心配して心臟の鼓動のだくつくさま。どきどき。(「だくだく」は副詞であるが、堀川波鼓・上卷に、「世間の沙汰を如何せん、胸のだくつき堪へ兼ねて」、とある「だくつき」は動悸の意に用ゐた轉成名詞である)。

たくなは　抱帶を解いて我子を脊にしつかと締附け、海士のたくなは

先め何とあらうぞどうせうの坊」、とある「どうせうの坊」は、何爲うに道正坊をいひかけたのである。巣林子のこの文は、道正坊が坊主頭を振立て一貫藥の効能を吹聽して、金柄杓で臘開業の頭上を撫で廻し、所望者から代金を取集め、病者はその舉では痛の本復を、伊丹にいひかけたものである。柄杓で錢を集めることは、風流夢浮橋(元祿十六年刊)巻之四、呥の多飾萬の乘合の條にも「船頭はさあ銘銘の心祝ひ船主の御初穗と、柄杓ふつてあたまを數よみ、飲むも飲まぬも一とうに七文づつの集錢出し」と見えてゐる。錢を集めるに柄杓を以てした例は往々他にもある。

たうしゆこう
「傳へ聞く陶朱公は勾踐を伴ひ云云」を見よ。

***だうしん**　與兵衛樣の命を助け道心出家させまして(卯月潤色)
〔道心〕菩提心の義。佛道に歸依すること。佛果菩提を求める心を發起した者を道心者といひ、略して道心とも云ふ。

唐人笠
「つみとりげの唐人笠」を見よ。

***たうせき**　孔子に盜跖あり(津戸三郎)
この石川五右衛門がとても盜人になるからは、異國の盜跖・本朝の熊坂に勝つてこそ本望なれ(吉岡染)
〔盜跖〕支那上代の大盜賊である。莊子・第二十九・盜跖篇に詳記してある。

たうたう
「水たらたうとして波いらいらたり云云」を見よ。

***だうぢやう**　鎌田村のお道場へ京のお寺のお下り(冥途飛脚)
〔道場〕佛法・修道の聖場。寺院。釋氏要覽に、「閑宴修道之處、謂之道場、隋煬帝勅遍改僧居名道場」。輔行・二に、「今以供佛之處、名爲道場」。

道中雙六　ちつぽけな馬方が道中雙六とやら、東海道の繪をひろげあぢなことして遊びます(丹波與作)
貞享頃に行はれてゐた淨土雙六にならつて作つたもので、江戸に始まり東海道中五十三驛を渦狀に書き、中央を京都とし、南無諸佛分身の一字づつを六角の各面に彫つた骰子を振つて、一驛から一驛へ進んで行き、早く京都に達した者を勝とする遊戯である。丹波與作のこの文は、姫君の江戸行と云ふのであるから、道中雙六を京都より始めて江戸で終るやうに逆用したのである。

唐の帝の花軍　櫻の吹雪こぼれ梅、胡蝶の伶倫迦陵頻、唐の帝の花軍ここに移せる如くにて(本領曾我)
このことは國性爺合戰第一の文中に巣林子が書いてゐる。「風流陣」を見よ。

***だうふく**　火の用心の爲とて革ぐくみの道服、家子郎等に腰兵糧を附けさせ(會稽山)
〔道服〕道路にて塵埃に衣裳を汚さぬ爲に上に着る服で、廣袖であつて羽織の長いのに似て帶をしない。武家名目抄・衣服部十一、「胴服は又道服とも書き、この物うちはふりて着るが故に、又の名を羽織といふ」とありて、廣袖胴服・唐織胴服・革胴服・木綿胴服・雨胴服など擧げてある。

たうまる　鷄は唐丸・しやむ・かしは・ちやぼ・小こく・色色の(本領曾我)
〔唐丸〕鶤鷄を云ふ。倭訓栞に、「唐丸とよぶは鶤鷄なり。冠の大鋸齒の如きを大鋸と呼べり」。

***だうらく**　北の方をはつたと睨み、やれだうらくめ、うぬめ繼子を憎み樣樣惡事をたくみしを(三世相)
〔道樂〕道を解して自ら樂しむ義。阿育王經・八に、「今已得道樂」と見えてゐる。轉じてよからぬ遊興に耽ることをいひ、放縱または放蕩の意に云ふ。(一説に「だうらく」は「だらく」(墮落)の訛であるといふ)。

***たうりてん**　上る程に忉利天の中二階、夜晝なしの床入に掛鯛樣と異名を受け(嫗山姥)
〔忉利天〕梵語 Trayastrimsah と云ひ、帝釋天王の居所で、欲界の六天の第二にして、地上八萬由旬の高所にある。

***たうろぎ**　食に飢ゑし賊民ども、音に驚きたまりかね、陣屋陣屋を這出づる、足はたうろぎ冬の蠅(蛙合戰)
〔蟷螂〕「たうらう」、または「かまきり」とも云ひ、昆蟲の名。俚言集覽に、「たうろぎのやうに瘦。蜋をロギと呼べるは、愛宕をオタギ・當麻をタキマと云へる類也、蜋・宕・當、皆韻鏡三十一轉の字也」。

***たうわ**　寢て見もせいで嫌はんすかと、じろりと見たる顏付は惚れて欲しそな目元なり、小哂もたうわなく、親達のいひつけには(雪女)　矢の主の詮議詮議とせりかくれば、蒲殿も當話の返答猶豫して見えけるを(會稽山)
〔當話〕當座の談話。當座に答ふべき挨拶。

たうゐそくめう
「妙の名は八卷云云」を見よ。

たうゑ　京烏丸大經師の奧樣よう覺えて居りまする、田植がお好きでござりました、なんと一つ舞ひましよかといへば(大經師)
〔田植〕萬歲(その條を見よ)の田植唄をいふ。この唄は巣林子作の天鼓に、「……上の田も下の田も穗に穗がさいて一粒萬倍、田をばぞんぶりぞ、ぞんぶりぞ、ぞんぶりぞんぶりぞんぶりぞ、ぞんぶりぞと打植ゑて」、とあるは即ちその部分である。田植唄とても何れの萬歲も同一の唄を謠つたものではない。

***たか**　生きらるるだけ添はるるだけ、高は死ぬると覺悟しや(冥途飛脚)　命惜しい程なら高で身をうつことも無い(生玉心中)
〔高〕成り行きの限り。結局。生玉心中のこの文は、命が惜しい程なら命知らずの事もしたいから、つまり破滅する事もないとの意。

***高砂**　江戸の道中二歩では高砂野宮(壽門松)
「高い」に謠曲名の高砂・野宮をいひかけて洒落たのである。

***たかじやうがしら**　父親は播磨で鷹匠頭の奉公人(氷朔日)
〔鷹匠頭〕主君の鷹狩の時に使用する鷹・犬を飼養し、鷹狩に從ふ役で、組頭・御鷹匠の長である。

たかせぶね　二條通の高瀨舟(女腹切)
〔高瀨舟〕和漢船用集・五に、「艜。城州の高瀨舟伏見より京師に入、則高瀨川也、舳高く艫横舳にて低く平なる者なり、備前に有者此類也、又大井川桂川の舟は其制各別なり云云」。

高槻の家の子　島上郡高槻の家の子、お小姓達の出頭小栗八彌(女殺)
高槻は攝州島上郡高槻三萬六千石。當時の城主は永井飛彈守直期である。家の子は家臣である。

〔竹本〕竹本筑後掾をさす。その條を見よ。この文に「この夏」とあるは、寶永五年の夏である。外題年鑑（明和五年刊）寶永五年の條に「夏・竹本座奈良へ行く」とある。

＊竹本頼母（たけもとたのも） 淨瑠璃にせまいか、禿ども一寸往つて竹本頼母樣借つて來い、いや先に鬢附買ふとて聞きましたが、芝居から直に越後町の扇屋へ行かんしたげな（冥途飛脚）

竹本筑後掾の高弟で、美聲を以て聞えた淨瑠璃語りである、正德五年に國性爺合戰の九仙山を語つて好評を博した。其家は大阪新町西の大門口にあつて、鬢附香油などの化粧店を出してゐた。そして彼は竹本座に勤める暇には、揚屋・色茶屋に招かれて淨瑠璃を語つてゐたのであるから、冥途飛脚のここの文に、「竹本頼母樣借つて來い」と云へるも情味深い文である。「鬢附買ふとて聞きましたが」と云ふ文も、竹本頼母の店で買物したことが知れるし、頼母が遊女等と知合が多かつたことも知れる。錦文流撰・當世乙女織（寶永三年刊）卷第四に、「ここに竹本頼母と申す淨瑠璃太夫此里に住居致し候へば、太鼓持ちと申すにはあらねど、あなたこなた御座鋪を相勤め候、淨瑠璃は年來筑後が膝をはなれずゆかを勤むる者にて候へば、ふしは先生がくつさめまでをのがさず、聲に愛あつて淨瑠璃美しう語りなし、どこやら筑後よりうまい所あり、うたよく謳ひ三味線少し仕り、ぞつこん心底奇麗にうまれつき、今の世の座敷持ち、申さう所はなけれども酒のならぬが殘念、然しながら是は淨瑠璃と食とでおして參り申すべし」。

＊竹本筑後掾 （用明天皇職人鑑）

攝津天王寺村の農家に生れ、淨瑠璃を淸水理兵衞に學び、また加賀掾に從ひ、貞享二年大阪道頓堀西の芝居に竹本義太夫と名乘り、幕に糀挾みの内に笹の丸を紋所とし、世繼曾我を語り、嘉太夫節・播磨節・角太夫節・文彌節等の諸流の長所を採つて、特獨の一流を玉成した。貞享三年巢林子の新作・出世景淸を請ひ得て興行した、これぞ巢林子が義太夫の爲に筆を揮つたはじめである。元祿十四年五十一歲の時筑後掾藤原博敎の稱を受領し、その祝儀としての披露興行に蟬丸を語つた。彼が正德四年六十四歲で逝去するまで、その生涯語つたものは大方巢林子の作である。實に義太夫が練磨の美音と門左衞門が神韻縹逸の妙文と相待つて、大阪藝術の權威に立つ。その墓は大阪市南區天王寺大道超願寺内にあつて、元祖竹本義太夫墓と題し、側に正德甲午年九月十日と刻してある。

たけれんじ 「れんじ」を見よ。

だしぎぬ 「いだしぎぬ」を見よ。

＊たじやうごふ それ一河の舟に棹さし、一樹の蔭の相宿りも他生劫の緣と聞く（卯月潤色） 妻と結び君と呼ぶ結緣は他生劫、頼もし嬉し有難や（釋迦） 蚤蚊蟻蠅を殺しても其罪あたかも他生劫と說かせられた（天鼓）

〔他生劫〕「他生」はこの世ならぬ意。「劫」は「こふ」を見よ。「多生劫」とも書いてある。永遠の年月間幾多生死の間に結んだ因緣を云ふ。

たしんつう 千口が間多身通の法を行ひし故、親子の血筋の悲しさは、魔法に引かれ、兩眼兩耳鼻と舌、六人の俤と顯はれ（懸物揃）

六神道の一なる他心通を多身通に轉用して、一身が許多の身に化現する意にいうたもので、通とは作用自在で無礙なるをいふ。（或は十通の中の六に、多身を現ずといふがあれど、藏經の中に見當らない）。

たすき 時代の金襴・鶴菱・たすき、花兎・窠に霰（丹波與作）

〔襷〕斜に線をうちちがひにした時代裂の模樣。

＊たたき つくづく物を按ずるに、タタキ我は劔の金性の刄にかかる約束か（大經師）

〔敲〕敲は乞食のわざであつて、室町時代には、編頭巾を被り餌籠を腰に附けて、何事かしやべりながら手で胸を敲き、人より施物を乞うて步いたものである。元祿頃の敲は正月や彼岸などに、扇子で拍子を取りながら歌を謠ひ、物を貰うて步いたのである。その謠ふ歌は大經師昔曆のここの文に、「つくづく物を按ずるに、我は劔の金性の刄にかかる約束か、わしは土性墓の土云云」と見え、卯月紅葉に、「よしや地獄へ墮つるとも、たとへ佛になるとても、タタキ必ず契りこめ屋町、本町筋の軒深く、思ひしみたる中なれば、埋まば同じ安土

（人倫訓蒙圖彙所載）

町云云」、とあるやうな悲哀の調の歌も謠ひ、また天鼓に、「タタキやんら目出度や千町や萬町の鳥追が參りて、福の神祝ひこめ、白げの米やろ眞白げの米やろ云云」、とあるやうな鳥追歌も謠ひ、或は山崎與次兵衞壽門松に、「タタキ冠は被ねど大黑と、花車が轟く口舌の門、遣手が叩く、禿か睡り、皆夢の間の境界と、破ればぐわちもなかりけり」、とあるやうな駄洒落歌も謠つたのである。



〔きゝた〕

たたまくをし 池の蓮の初開き、水に錦を織榮えて、たたまくをしき花盛り（隅田川）

〔裁惜〕「裁たむ」と「惜し」との二活用語が連つて、複合語をなす時に「たたむ」を「たたまく」と延べたので、「見まくほし」など云ふもこの類である。古今集・雜上部に、「思ふどちまどゐせる夜はから錦、たたまくをしき物にぞありける」。

たたみざん 進ぜうか進ぜまいかと疊算置いて見て（重井筒） 女心のあどなさは涙片手に疊算、あふもあはぬも不思議とは思ひながらも、半ならば九條の町におはせよと（吉野忠信）

〔疊算〕どうせうかと思案して決せぬとき、煙管などを疊の上に投げて疊の目を數へ、その數の丁（偶數）であるか半（奇數）であるかによつて、心の惑をいづれかに定めるのである。伊達髮五人男（西澤與志撰・寶永四年刊）卷二に、「疊算まで幾度も丁にあたるは瀧川が身のひしげざん」。

たちかけのんこ 打揃うたる血氣盛り、立掛（たちかけ）のんこのあたまがち、裾はおろすの勝手見まひ（宵庚申）

立掛髷ののんこ結をいふ。「たちかけ」は「たてかけ」ともいふ。その條を見よ。「のんこ」をも見よ。ここの文は、意氣な結髮で頭ばかりは見事だとの意。

たちがん 十二の捻（ひねり）・十二の投（なげ）、立がん・居がん・强みの腰（まがひ）（井筒）

〔立眼〕相撲道の手の名で、紛十二手の一である。楠力祕要抄に、紛十二手を擧げて立眼（たちがん）・

ゆふ鐸（天神記） 手繰苦しき蜑のたくなは蜑の呼聲（松風）

〔栲繩〕楮の皮をなへる繩であつて、漁人の網に附ける。增補和訓栞に、「たくなは。たくはたへとも云ひて楮といふ木也、今からぞと呼て紙にすく物也、いにしへは其木の皮にて布を織、且繩などにもせし也、網などの繩には今も用うと也、其繩をたぐ繩といへり」。

***たくはつ** 托鉢の道心者はつちはつちと門に立つ（堀川波鼓）

〔托鉢〕鉢を捧げて信者に施惠を乞ふ義。沙門が施物を乞ふこと。正字通に、「托同レ拓、手承レ物也」。

啄木 流に響く御溝水、流泉啄木の曲をあやつるとは斯ることをや（蛙合戰）

〔りうせん〕を見よ。

だくぼく 胸はだくだくだくぼくの坂のしたへとわかれける（丹波與作）

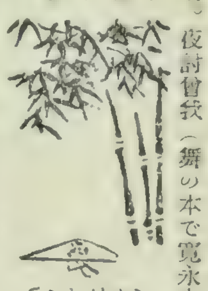
高低でくぼく、現今遠州あたりにて、高低を「たかぼく」と云ふ。和訓栞に、「たくぼく。高低。一說に高卑の轉語なり、細のさま高卑あるをもていふといへり、今も道路のたかびくをたくぼくといふ」。當世大和言葉・上に、「路の高低なる事をだくりぼくり、だくぼくなといふは如何云云」。

***たぐる** 上の町から番太郎がくるくるたぐる風の夜は、せきせき廻る火用心（天網島）

咳をする。しはぶく。現今も福山市地方にて、咳をするを「たぐる」と云ふ。越谷秀眞編・物類稱呼卷之五、言語の部に、「咳をせくと關東にていふを、關西にてせきをせたぐると云ふ、播磨邊にて咳をたぐると云ふ」。按ずるに日本書紀・神代上に「吐」を「たぐる」と讀んである。咳をするを云ふのはその意を轉じたものである。巢林子作・大織冠・第二に、「在天悲しさたまられず、兩眼に淚をたぐり、己れ蹴殺してくれんと噺出づるを」、とある「たぐり」も吐の義から轉じて流し出しの意である。

たけかさ 竹笠は名も高橋の紋所（五人兄弟）

〔竹笠〕紋所の名。夜討曾我（舞の本で寬永古活字版）に、「たけかさはたかはしたう」、とありて次の紋繪が載せてある。



〔さかけた〕

たけがは 紅梅・竹河・橋姬（淀鯉）

〔竹河〕源氏物語五十四帖中の卷の名。

***たけじざいてん** 他化自在天の妹背には額と額とを見るばかり（五人兄弟） 雲にも登れ地にも入れ、非想非非想他化自在六欲天も高からず（日本武尊）

〔他化自在天〕欲界の第六天であつて、他の樂事を假りて自己の樂とするが故にこの名がある。此處に住する天主を魔王と云ふ。

***竹田** 「ここは竹田か云云」を見よ。

竹取の翁が娘 袖の縫物綾錦高燈臺に輝きて、金泥砂子竹取の翁が娘の彩色も光を恥づるばかりなり（會稽山） 竹取の翁が拾うた寶娘（關八州）

竹取の翁が竹の筒の中から拾うて育てた赫耶姬を云ふ。この女光華明彩容姿絕妙にして、多くの人達に戀慕されたが遂に月世界に歸つた。詳しくは竹取物語について見よ。曾我會稽山のここの文は、前文に「竹取の間に出で給へば」とありて、竹取の間とて竹取物語の赫耶姬を畫いてある座敷であるによつて、かくは云うたのである。

***たけなが** 小枕すてて丈長も捻元結に大髻（雪女）

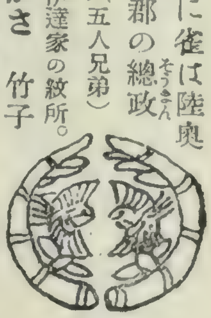
〔丈長〕奉書のやうな厚い紙をたたんで作つたひらもとゆひ。和訓栞に、「たけなが。長長の義、女の髮に用る紙をいへり、即ちひらもとゆひ也」。

丈なる駒 たけなる駒に鞭くれて谷人も連れず唯一騎（振袖始）

馬の丈は四尺を定尺とし、これを馬丈といふ。これより一寸大なるを「一き」といひ、八寸大なるを「八き」といふ。「き」は刻の義である。

竹に雀 竹に雀は陸奧の五十四郡の總政所伊達と（五人兄弟）

奧州の大名伊達家の紋所。



〔雀に竹〕

***たけのこがさ** 竹子笠の紐強く（會稽山）

〔竹子笠〕筍皮を編んで作つた被笠。錦文流撰・傾城八花形に、「太夫が定めて道中が一際すぐれて見事にある、そんならわしは下男、やがて傘をさしかけませうぞと、竹子笠を朸にかけ」。

***竹の園生** 末葉の末も竹の園生、榮ゆる代こそ久しけれ（用明天皇）

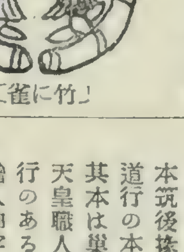
史記・梁孝王世家に、「於レ是孝王築二東苑三百餘里一」とありて註に、「在二宋州宋城縣東南十里一、俗人言二梁孝王竹園一」と見えてゐる、この梁の孝王の竹園の故事から、親王諸王の御事にいふ。徒然草・第一段に、「みかどの御位はいともかしこし、竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんごとなき」。

たけのは 亂をゆるす竹の葉の便りに立寄り給へかし（桃狩）

〔竹葉〕酒の異名。故實名目に、「昔竹葉を三本の木のうつほの雨水に漬して酒を作り出せり、その三本の木は杉の木なり、今酒屋に榻葉を出すは此故なり、又酒をみきといふは三本の木の義なり、竹葉といふも是なり」。尺牘双魚の註に、「釀酒竹葉を以て其中に雜ふ、極めて淸潔なり、故に酒を謂つて竹葉となすと」。

竹の紋付く道行 心やはらか饅頭や、菓子に火繩に番附と、賣る聲にまで節籠る、竹の紋付く道行の、本を召せ召せ目せき笠（二枚繪）

「竹の紋」は竹本筑後掾の紋である。表紙に竹本筑後掾の紋が附いてゐる道行の本を云ふ。さて其本は巢林子作の用明天皇職人鑑の山路の道行のある本であつて、その繪入細字本の表紙にこの紋が附いてゐる。



〔紋の竹〕

たけみつ 好い主取つて立身を致すもの、何をいうても此竹光、いつか此無念さをはるといふは名ばかり、心は未だ師走ぢやと（雪女）

〔竹光〕竹を削つて刀身に代へたもの、即ち竹刀をいふ。蓋し古來の刀工に行光、國光、正光、貞光、兼光などと、光の附いた名の者が多かつたから、その光を取つて竹刀を竹光というたのである。「たけみつ」は轉じて「たけみち」ともいふ。風流御前二代曾我（寶永六年刊）五之卷に、「仔細らしう二腰はさせど恥しながら竹道でござる」とありて、「竹道」に「たけみち」と振假名を附けてある。

***たけもと** この夏此處の芝居へ竹本の弟子が下つて重井筒を語つた（淀鯉）

（前頁より続く）遊楽自慢といひそな男（天網島）　おさゐはさすが茶人の妻、物數寄もよく氣もだてに、三人の子の親でもきやしや骨細の生れ付き（鑓權三）御供の上下殘りなく鎧の上の伊達小袖（冷泉節）　老若男女の花咲きて、足をそらそら空吹く風に散らぬ色香の伊達參り（女殺）　ここぞ浮世のだての大木戸（淀鯉）

「だて」（伊達は音借字）はもと「立」であつて、「伊達をする」「男伊達」などいふ伊達もこの義よりできた語で、「男を立てる」などいふ「立」も同じ語である。「だて」といふ語の古く見えたるは、古今著聞集（建長六年の序がある）に西行法師のことを云へるくだりに、「その心だこだてしく」と見えてゐる。「立」は華奢の意にもなりて、容姿を繕ひまた衣裳を着飾ることにもいふ。傾城富士見る里（狂言本・元祿十四年刊）第一に、「伊達なる傾城をお好きなさるる喜六樣なれば、俺がやうなこうたうな風はお氣に入るまい」とある如く、遊女は華奢な形振をするによつて、伊達風というて遊女姿即ち廓風の意にも用ゐてある。淀鯉出世瀧德に「だての大木戸」とあるは新町遊廓の大門を云うたのである。

たてかけ　御髮の御用なら、大銀杏、中銀杏、立かけ、投かけ、千松髷（加增曾我）　髮は銀杏か立掛かお好き次第の還俗と（五人兄弟）

〔立掛〕「たちかけ」ともいひ、男子結髮の名で、髻の大きな髷。男色十寸鑑（貞享四年成）若衆の事を記せる條に、「髮を油にてすきいれぬれば、おのれと底艷あるものなり、……たてかけの大髻・髱の大きなるは似合たると似合ぬ人あり」。

たてがみかつら　此頽では若衆鬘も似合ふまじ、立髮鬘はなほのこと（吉野忠信）

〔立髮鬘〕芝居などで靑年に扮粧する時被り、前髮を立てて結うた鬘。

*__たてしとみ__　好き時節とたてしとみの蔭により（用明天皇）

〔立蔀〕板塀の類であつて蔀の如く作つたもの。外から室內の見えぬやうに殿舍の簀子の前などに立てておいたものである。源氏物語・野分の卷に、「ひはだ瓦所所の立蔀、透垣などやうのみだりがはしく云云」。

*__たてつく__　鬼神といはれたる王子にたてつく茱が已等に恐れうか（用明天皇）　親が子をたばかれば子は親にたてをつく（雪女）、綸言にたてつくは扱はうぬめは朝敵かといへば（蟬丸）

〔盾突〕張合ふ。對抗す。反抗す。櫻曾我女時宗（享保七年刊）三之卷に、「遊興は外になしこ人を打擲してもとどりを切り、是をなぐさみにして所の迷惑度度なれども、人皆恐れてたてつく者なく、くろわ四筋を一ぱいにありき」。

*__たてゑぼし__　（用明天皇）

〔立烏帽子〕立烏帽子は烏帽子の本體である。折らない烏帽子であつて、竪が八寸の高さなれば橫の廣さも八寸ある。これを被つて前の方を押込んだのであつたが、後世になつては堅く塗固めて作り、前の方を押込んだやうにさび（烏帽子の皺）をも作つてある。

*__たどろたどろ__　だんぶだんぶと汲めば、雫に影落ちて月も袂を上り坂、たどろたどろの御難行（釋迦）

「たどりたどり」の轉。行く道おぼつかなく尋ね迷ふ貌。

たなおろし　忠兵衞が身代の棚卸してくれる（冥途飛脚）

〔棚卸〕正月の初めに商家にて店に陳列してある商品を取卸して調査すること。轉じて、人の弱點までも悉く述べ立てること。滑稽雜談（正德三年成）正月之部上に、「店卸。是又商賣の輩蓄へ置きたる物の員數を多少分際何によらず歲首に改る事也」。

たなつもの　王化に潤ふ秋津民、つきぬ五つのたなつ物、をさまる千代のしるしかや（嵯峨天皇）　庭に五つのたなつ物（曾庚申）

種つ物の義。穀物をいふ。和訓栞に、「たなつもの。神代紀に水田種子をよみ、又穀をよめり、種つものの義なり」。「五つのたなつもの」をも見よ。

たなしふね　心一つぞこがれ行く棚なし舟の、夜となく晝ともわかでおもつがり（扨元曾我）　漕げや漕げたななし小舟、釣人のいさりする狐川（西王母）

〔棚無舟〕舟の兩舷に亘して舟子の踏んで漕ぐところの棚板の無い小さな舟、即ち踏立板の設なき舟。「棚なし舟の」とあるは、棚なし舟の如くにの意。

*__たなばた__　いかさまこれは七夕の、年に一度をこらへかれ、又取越しの天の川（用明天皇）

〔七夕〕初秋の頃に牽牛・織女の二星が銀河の邊に現れる。支那の小說に、每年七月七日の夜の一度のみこの二星が交會すると云ふに據つたもので、織女星を神代の天の棚機姬神に附會し、牽牛星は男なれば彥星と稱したのである。古今集・秋上の部にも「こひこひて逢ふ夜はこよひ天の川、霧たち渡り明けずもあらなむ」など見えてゐる。

たぬきのさわたり　豕の燒皮・熊の掌・狸の澤渡・猿の木取（天神記）

〔狸澤渡〕狸の手足をいふ。庭訓往來・五月の文に、「熊掌・狸澤渡・猿木取云云」、とありて永井如瓶の諺解に、「熊掌・狸澤渡・猿木取、いづれも皆手足の事也」と見えてゐる。

たねがしま　舟手には國崩、大砲、小銃、種子島、毒をさしたる鏃を揃へ（國性爺後日）

〔種子島〕昔時用ゐた小銃の名。和訓栞に、「たねがしま。鐵炮の小きをいふは、南蠻の牟羅叔舍と云ふもの此島に來りて始めて鐵炮の術を傳へたるより此名あるなり」。

たのしめの　佐太の孜賣を見ることも、廓でならぬたのしめ野に（淀鯉）

吾妻が請出されて嫁入する途に、佐太の孜賣を見ることも、これは廓にゐては見られない樂しみに、黠野をいひかけたのである、そして誰の占野の意をもきかせたのである。「佐太」「黠野」は地名部について見よ。

*__たのみ__　今日は內方のおまん樣へ御祝言の賴みが來る（薩摩歌）

〔賴〕女重寶記（元祿十五年刊）二に、「縱組百尾して男の方より女の方へいひ入つかはす事、俗にこれをたのみをつかはすといふ」と見えてゐる。結納のことである。

*__たのもし__　中に賴母子の懸錢七十四文あつたもの、定めて狗賓に掴まれたでござらう、正眞の天狗賴母子ぢやと、ぶつくさ言ふも道理なり（萬年草）　ええ天狗掴まへ賴母子の銀吐出させずもの（隅田川）

賴母子講の略。朋輩同志申合せて講をつく

居眼・猿一飛・夢枕など見えてゐる。

たちぎき　轡のたちぎきむんずと掴んで(會稽山)

貞丈雑記・馬具部に、「たちぎきともおもがいたゝけとも云ふは、轡のかゞみのさきおもがいを通す所のあるかねをいふなり、轡の名所なり。然るに今は其所につくる緒の総をたちぎきともおもがいたすけとも云ふは非なる也。ふさをばたちぎきのふさ、おもがいたすけのふさとも云ふべし。古は無レ之物なり、古書にも古き繪にも見えず、近代用レ之物なり。古き繪にはおもがいの結びあまりのふさ計を書きたり」。

***たちぎみ**　床も定めぬ立君はこれも世渡る習とて(卯月艳)

〔立君〕總嫁をいふ。夜陰路傍に立つて色を賣るからの名である。職人盡歌合三十番に、「宵の間はえりあまさるる立君の、五條わたりの月ひとり見る」、とあるから室町時代頃から起つた語であらう。「そうか」を見よ。

***たちざけ**　今ぞ冥土の門出と、これを限の立酒や、樽屋町にぞ迷ひ行く(重井筒)　つぐも受くるも立酒を、お吉見付けて、そりや何ぞ忌忌しい、子供は頑是がないにもせい、立酒飲んで誰を野送り、ああ氣味わる(女殺)

〔立酒〕葬送の出立の時に立ちながら酒を飲んで行く風習があつた、されば立酒は葬式に聯想してこれを忌むのである。傾城播磨石(寶永四年刊)巻五に、「此一通り聞届け、さつはりと埒さへめさつたら、此斗樽で祝うて通す、ふづまりな行かためさつたら、慮外ながらああ立酒を飲ましてくれう」と見えてゐる。これは殺すことを立酒と婉曲にいうたのである。

たちつけ　きんか頭に顔色も、繻珍のたちつけ凛々しげに(丹波與作)

〔裁着〕おもに旅行の時に着し、股引に似た袴で、その裾は脚半に仕立てたもの。守貞漫稿・第十二編・男服の部に、「裁附。形軽衫と同制にして、背面に小ハゼ五六箇を設けて紐を用ゐず、……近世も武士の旅行火場等に褌衫及立付とも稀に用レ之、又平日も不レ用に非也、市民も火場には稀に用レ之、其他は用ゐず」。書言字考節用集・服食物に、「裁着」。

***たちはき**　楠河内の判官が嫡子帯刀正行(女楠)　故帯刀先生が二男木曾の冠者義仲義兵を起し(女護島)

〔帯刀〕東宮坊の武官である。その長官を帯刀先生と云ふ。木曾義仲の父は帯刀先生義賢である。

***たちばな**　(賀古教信)

〔橘花〕橘花の形を紋にしたもの。



〔なばちた〕

***たちみ**　御目見えの證なうては叶ふまじ、太刀打か鑓か扱は立身か(川中島)

〔立身〕立ちかかつて身がまへすること。

***だつえば**　三途川の奪衣婆の呵責も斯くやとあはれなり(歌念佛)

〔奪衣婆〕人死して冥土に逝き、三途川を渡る時にその川のほとりに奪衣婆と云ふ鬼ありて、亡者の衣を一枚奪ふと云ふ。「三途川」「三瀬川」を見よ。

***たつかゆみ**　仇と情と思羽劔羽皆愛着の矢先となり、悉く身にたつか弓ひかるる苦患は添臥の(井筒)

〔手束弓〕伊勢貞丈随筆に、「たつかゆみといふ事、手束弓と書く也、手束とは手ににぎる事也、只手に取る弓といふ事也」。ここの文は「悉く身に立つ」を手束弓にいひかけたのである。

***たづき**　たづきも知らぬ山高き、峯の藥師の笹谷に(十二段)　また修羅道にをちこちの、たづきは敵雨は矢先(矮帝)

〔手着〕手寄所。とりつき所。古今集・春の部に、「をちこちのたづきも知らぬ山中に、おぼつかなくもよぶこ鳥かな」。「また修羅道にをちこちの云云」はその條を見よ。

だつき　昔唐土に紂王と云ふ大王の后妲己といふ美人、人を殺すことをすき好み、花の旦月の夕、酒宴の上に多くの人を斬りさいなみ、民の歎きも顧みず、忽に國を失ひし(女夫池)

〔妲己〕殷の紂王その后の妲己を寵愛し、その言に皆從うて放縦暴戻の行多かつたが、遂に周の武王の爲に滅されたことゝに云へる通りである。十八史略(この書の我國に傳はつたのは何時代か詳でないけれども、天和元祿の頃は既に盛に行はれてゐた)巻之一に、「紂伐二有蘇氏一、有蘇以二妲己一女焉、有レ寵其言皆從、厚二賦税一、以實二鹿臺之財一、盈二鉅橋之粟一、廣二沙丘苑臺一、以レ酒爲レ池、縣レ肉爲レ林、爲二長夜之飲一、百姓怨望、諸侯有二畔者一、紂乃重二刑辟一、爲二銅柱一以レ膏塗レ之、加二於炭火之上一、使下有レ罪者縁上レ之、足滑跌墜二火中一、與二妲己一觀レ之大樂、名曰二炮烙之刑一、淫虐甚、……發(周武王)立、率二諸侯一伐レ紂、紂敗二于牧野一、衣二寶玉一自焚死殷亡」。

だつくりぼつくり　二條川原は石高く、だつくりぼつくり曲道(艳符)　小石奥の山道だつくりぼつくり、小石まじりの崖道を(嵯峨天皇)

「高くあり低くあり」の義。地の高くなり低く

***だつた**　五逆の達多・八歳の龍女(蟬丸)

提婆達多の略。「だいば」を見よ。

なれるをいふ。「だくぼく」を見よ。

***たつのいつてん**　然らば明日辰の一天に必ずきつと迎取ろ(日本武尊)

〔辰一點〕(つてん)は天とも書いてある)。午前八時頃に當る。「とき」を見よ。

たつぱい　總じて俊寛當家御取立の身にて恩知らずの畜生、女房あづまやが御馳走たつぱい受けながら(女護島)

「たふはい」(答拜)のつまつた語。答拜、また轉じて優遇の意にいふ。和訓栞に、「たつぱい。答拜の義也」。俚言集覽に、「たつぱい。古寫本節用集、答拜、ヲガム、名目抄、答拜、注、尊者來レ家拜之時、降逢共拜を云也」。

だつま　「でし」を見よ。

***たつみあがり**　九兵衞でござると、たつみあがりに言ひければ(女腹切)　身の程知らぬ高聲も、たつみあがりにしはがれて(酒呑童子)

「立ち身上り」の轉で、身立ちあがりの義(肌押し脱ぐを押し肌脱ぐといふの類)であらう。驚いて身立ちあがるやうな大聲。飛び立つやうな高聲。(一説に、辰巳上りの字に從つて、龍蛇の騰るに比して語氣の強きをいふと)。日本永代藏・巻三、煎じやう常とはかはる問樂の條に、「大工・屋根葺おのがひとつれに二百三百人、辰巳あがりなる高咄し」。胸算用・巻三、都の顔見世芝居の條に、「石垣町の二階座敷に切狂言の踊をうつし、王城のたつみあがりなる聲して、叡山へも響き渡る程の騒ぎ」。

***だて**　さても伊達なお侍と(雪女)　のんこに髪結うて野良らしい、伊

の民草の、女子がちなる花鳥の(賀古教信)
〔民草〕人民は草の蒼蒼として衆多なる如ければいふ。蒼生、青人草などいふもこの義である。

*ためしもの 首を斬られ手足をもがれ、ためし物になるとても(大經師)
〔試物〕刀の利鈍を試す爲に斬られる者。「一の胴」の條を見よ。

*たも 好い女郎衆のしやつて足本が輕いの、おいてたも(丹波與作)
なんぞやつてたもといへば(重井筒)
「給はれ」をつめて「たもれ」といひ、略して「たも」といふ。呉れなさい。下され。

たもとゆり 戀草千草思ひ草、眺めらるるも眺むるも、同じ色なる袂百合(生玉)
〔袂百合〕和漢三才圖會卷百〇二、百合の條に、「袂百合＝花正白色、葩厚大而向レ上、或横垂、最可レ愛、本出二琉球深山溪谷間一難レ得レ之、人縋レ繩下、纔一株入レ袂、復縋上、故名二袂百合一珍二重之一」。巣林子のこの文は、袂百合を柏屋さがの美貌に喩ふ。

たもりめす むぞうか者とも思しやつてたもりめすと思へば(女護島)
「たまはり召す」の義。下さる。この言葉は現今も鹿兒島地方で一般に用ゐられてゐる。

*たもん 死出の山には馬となり、多聞・持國に口取られ(孕常盤)
〔多聞〕多聞天をいふ。「四天王」を見よ。

だら 大斷臘指こはらし(持統天皇)
「だんびら」(其條を見よ)の略。斷臘は當字。

太郎冠者 まづ太郎冠者を呼出して申付けうと存ずる(松風)
この文は狂言・靱猿に據つたもので、太郎冠者は猿靱のワキである。

*だらごゑ 奥の客がだら聲にて、こりやさがは何してぢや(生玉)
だらだらと締りのない聲。「だらだらだらつき聲」ともいうてゐる。(心中天網島・上之卷に、「花車樣さらば、後に青菜の浸し物と、口合たらたら立ち歸る」、とある「たらたら」の「たら」も、「だら聲」の「だら」も濁點の有無の相違はあれど、同じ義で、締りのない出放題の口合を言うて立ち歸る意である)。

たらじゆ 「七多羅樹」を見よ。

*たらす 御袋樣も殿樣もたらしつ叱つつ遊ばせども、どうでもいやぢやとおむつがり(丹波與作)
足らしめる義。欲情を滿しめてだます。騙し騙す。俚言集覽に、「たらす＝娼妓の客を詐くを云、令足の義、轉じて詐く事になれるなり、欲情を滿しめて詐くなり」。

*たらち 谷の木の實をあさるとて、たらちの猿の子を引連れて(今川了俊)
たらちめの家苞にこそなすめれと(十二段)
「たらし」(足)の轉である。「たらちめ」は「たらしね」の轉であつて、「ね」は垂根、伊呂泥などの「ね」と同じ語で、美稱である、赤子を育て日月を足らし人となす義で、萬葉頃までは母の枕詞として用ゐられたが、後世は「たらちめ」を母または親の意に用ゐる。

*だらに ただ引けや手手に千手の陀羅尼(用明天皇)
〔陀羅尼〕梵語(Dharani)である。佛菩薩の說かれた咒語であつて、萬德を包藏する眞實の語であるによつて、これを咒または眞言とも云ふ。「千手の陀羅尼」をも見よ。

だらり 團栗の辻を出づれば建仁寺、だらりが鳴るぞだらつくまいぞ(女腹切)
洛東建仁寺の東鐘樓にある梵鐘を百八聲陀羅尼鐘といひ、この鐘の鳴るを世に「建仁寺のだらりが鳴る」というた。「だらり」は陀羅尼鐘のことであるが、「だらに」とは言はないで「だらり」と訛つていうたものである。この鐘を夜中に撞いてゐたのである。好色訓蒙圖彙(貞享三年刊)に、「抑このつとめ建仁寺のだらりにふけ行く夜半をうらみ」と見え、池西言水撰・京日記(貞享四年刊)に、「雪や舞陀羅尼鐘數うつ花卯木」とありて、「陀羅尼鐘」に「だらり」と振假名がしてあり、元祿曾我・卷一に、「建仁寺の夜半鐘と共に」とありて、「夜半鐘」に「だらり」と振假名がしてある。寬濶平家物語(寶永七年刊)卷之二に、「六角の鐘につづき建仁寺のだらりも鳴納まり」と見え、秋里籬島撰・都名所圖會・卷二、東山建仁禪寺の條に、「此鐘每夜子の刻より數九十聲撞くなり、晨朝には十八聲なり、合せて百八撞たり、昔は陀羅尼經を誦して撞きし故、此鐘の音を稱して建仁寺の陀羅尼といふ」と見えてゐる。

だり さすが弓取の言ひも習はぬ駕籠舁詞、なり下りたり・だり・ばんどう、いつかのがれん・きり・がれん、駕籠やろいとぞ涙ぐむ(西王母)
四をいひ、駕籠舁などの者の隱語。兎園小說に、一をソク、二をブリ、三をキリ、四をダリ、五をガレン、六をロンジ、七をサイナン、八をバンドウといふ由見えてゐる。「きり」の條をも見よ。

たりきほんぐわん 源空法然上人他力本願とて口唱念佛を勸め給ひ、普く衆生を御濟度ある(大原問答)
〔他力本願〕他力は自力に對する語で、阿彌陀佛の本願力である。阿彌陀佛の四十八誓願(「四十八串彌陀の誓願」の條を見よ)中の念佛往生願を他力の王本願といふ。法然上人は口唱念佛を以て往生本願とされた。その撰述の選擇本願念佛集に、「彌陀如來不下以二餘行一爲中往生本願上、唯以二念佛一爲二往生本願一」と見えてゐる。

たれる あんまりよい月影に額たれうと思うて(重井筒)
〔垂〕「たる」の訛。剃る。「ひたひたれ」を見よ。

*たをやぐ 神も心をたをやぎて、佛の教に逢坂の(蟬丸)
「たを」は撓む義。しなやかにてある。源氏物語・帚木の卷に、「人がらのたをやぎたるに、強き心をしひてくはへたれば」。

*たん 十四五端の廻船に、船頭舟子は褞袍着て(博多)
〔端〕反また段とも書き、帆の幅を數へる語で、筵一枚の幅卽ち三尺をいふ。ここの文に「十四五端」とあるは、木綿帆の幅が三尺の十四五倍なるをいふ。和漢三才圖會卷三十四、船橋類、帆の條に「按帆昔用二藁筵一、中古用レ茅、近年用二木綿一、以二綾線一刺二縫之一、令レ不二裂敞一、凡木綿三幅爲二一端一云云」。

*だん 三段ばかりは足も立つ、次第次第に波は高し底深し(最明寺殿)
〔段〕今昔物語に載つてゐる話を宇治拾遺物語に記して、今昔物語に「丈」とあるを宇治拾遺物語に「段」と、その時代語に書き換へてあるに據れば、「段」は卽ち「丈」で、「一段」は「一丈」の長さである。(段の長さに就ては古來諸說あれども、いづれも臆說に過ぎぬ)。巣林子作・最明寺殿百人上﨟に、「弓弦をくはへ腹帶を解いて、引締め引締め締むる間に、蠻綱すつと乘拔けて、佐佐木が家の骨法祠兎あれと

り、各人錢を出し合せて、他日これを鬮などで分配し、或は講中の惠み又は合力救濟の費にあてるのである。「たのもし」は頼の義で、即ち合力救濟の意であらう。（一説に「たのもし」は「たのもしろ」田物代）で、貧富を平等に配合せ、百姓互に五人組を作り田物代を出し合せ、その錢を村役場に預置き、貧困に苦しむ者ある時に村役場からその積立錢の中から出して與へた。このこと建武式目の中にも見え、頼母子の稱はこれより起つたといふ）。「頼母子の銀吐出させずもの」は「頼母子の銀を吐出させんとするもの」の義である。「天狗頼母子」をも見よ。

***頼もしし** 正八幡の告ぞかし、頼もしし頼みあり（女護島）
形容詞の終止形「頼もし」を「頼もしし」というたやうな例は昔にも尠くない。基俊集に「家苞にさのみな折りそ櫻花山の思はむこともやさしし」。源平盛衰記に「美しし美しし」。「河豚は食ひたし命は惜しし」などは皆この類である。

***たばね** この心清町一町のたばねなする年寄（博多） おもて手代助右衞門、此家のたばね綿の小紋の羽織（大經師）
〔束〕取締。「たばね綿」は取締の意に束綿をいひかけたのである。

たばねぎ 駕籠は束木・丹後の宮津（藤摩歌）
〔束木〕丹後宮津の城主阿部對馬守正盛の駕籠標。


〔たばねぎ〕

たばふ 只一つある裝束とてたばうて、平素は着給はぬ（大磯虎）
蓄ふ。惜しみ蓄ふ。この語現今福山市あたりでは「たまふ」といひ、着ずに簞笥に蓄へて置くといふを、着ずに簞笥へたまうて置くといふ。和訓栞に「たばふ＝俗語なり、たくはふの略なるべし、海道記に命をたばふしと見え、盛衰記に身をたばへと見えたり、口語にたばひ置などいへり」。

***蹈歌の節會** 我等は蹈歌の節會の役人十六夜と申す舞姫なるが（天神記）
昔時禁中で行はれた公事の一である。正月十五・十六日、京中の男女のよく歌ふ者を召して、年始の祝詞を作つて歌舞を奏せしめる儀式であつて、その歌曲の終毎に必ず重ねて萬年阿良禮・萬年阿良禮と唱へたのによつて、阿良禮走とも云ふ。この日天皇豐樂殿に御して宴を侍從以上に賜はるを以て蹈歌の節會と云ふ。男舞人の奏するは正月十五日で男蹈歌といひ、女舞人の奏するは正月十六日で女蹈歌といふ。後世になつては女蹈歌のみ行はれた。

たふかふ 波たふかふと橋柱ゆするが如く寄せけるにぞ（十二段）
〔匒匌〕波の重なる貌。海賦に「磊匒匌而相豗」。

***たまか** 女子の手業も教込み、心もたまかに育て上げ（生玉） 心のたまかさこうとうさ（歌念佛） 商賣方にも精を出し、心ざまもたまかなゆゑ（曾根崎）
「手細」の義。まめやか。こまかに心を用ゐること。轉じて儉約の意にもいふ。江島其磧撰・風流曲三味線・二之卷に、「びいどろの徳利の中へわくを入れたるたまかな細工などして、世の憂きよりは住みよき今の境界と思ふたばかりにして」。俚言集覽に、「たまか。俗に繊嗇をいふ、凡てこまかに心を用ゐるを云、訓義未詳」。

***たまかづら** 二百餘人の玉蔓、夕に産出すててなし金の攫取り（酒呑童子）
〔玉蔓〕和漢三才圖會に、「玉蔓。其蔓引レ地、葉似ニ忍冬葉一而厚、春開ニ小花一、色青綠可レ愛」、と見えてゐる。玉蔓がこの木かの木に這かかるやうに、夜な夜な客をかへて相手となる遊女を云ふ。古今集・戀歌四の部に、「玉かづら這ふ木あまたになりぬれば、絶えぬ心の嬉しげもなし」と見えてゐる。

たまきはる あの釜で煮殺すは慘や不便と、にえかへる油と共にたまきはる、和國に見なれぬ刑罰なり（唐船噺） こがれ來る涙のたまきはる、我も古郷のゆかしきに（一心五戒魂）
「魂極まる」の義。よつて以て命・内・世などの語にかかる枕詞である。萬葉集・卷十一に、「玉切命者棄」、など見えてゐる。ここの文は魂極まるの義よりして、命の果てる意に云ひなしたのである。

たまぎる 北の方わつとたまぎり手を合せ（賀古教信） 心たまぎりや夜ざとくなつて、身だまんじりともせない（博多） 根太も折れよとどうと蹈み、衣引のくれば兩人は、あつと魂ぎり起上り（用明天皇） 眞逆樣に跳返せば乘つたる老女はこぼれ落ち、あつとばかりに魂ぎる體（虎が磨）
「たまげる」ともいふ。「たまきえる」（魂消）のつまつた語。突然烈しい恐怖に襲はれて心魂の消入るを云ふ。また轉じて驚愕仰天するを云ふ。次條をも見よ。

たまげる 先お獻立を一見と、長長と書付けたる牛讀みさし大きにたまげ、こりやなんぢや（宵庚申）
「たまぎる」を見よ。現今も東京語に驚く意に「たまげる」といひ、佐世保地方では「たまがる」といふ。

たまさで さび鮎とつて一獻酌まんと、夕露のたまさで釣竿打はへて（大磯虎）
攩網叉手であらう。魚をすくひ捕へる具。手許遁り前方廣く網を張つて柄を附けたもの。すくひだま。攩網はタモまたはタマといふ、和訓栞に「たも。顯昭說に魚をくむ物也といへり、攩網をいふ、たまる義なり、よてすくひだまともいへり」。

***たまぼこの** ちんの煙が三筋立つ、四筋に別れ玉鉾の、これより辰巳奈良街道（女殺） 讚岐の浦へと玉鉾の、御有樣こそあはれなれ（大織冠） 草鞋凍り足三里に足らぬ玉鉾も、ここえ（烏帽子折）
「玉鉾の」は、玉鉾の「み」、（身）といふを「みち」（道）にかけていふ枕詞である。萬葉集・卷一に、「玉鉾の道ゆきくらし」など見えてゐる。轉じて、「玉鉾」を道の意にいふ。

玉蟲拾ふ 牛若はけうとくも逃げ入らず、玉蟲拾ひ玉筵の、露を飼うてぞおはします（孕常盤）
じつと居るもきまり惡いによつて、それを紛かす動作である。巢林子作・今川了俊に、「仲秋大きに赤面し、塵を捻つておはせしが」と云ひ、同人作・嫗山姥に、「小糸はそらさぬ顏、鼻唄で座敷取置く玉箒、紙屑拾うて居たりけり」、と云へる「塵を捻る」「紙屑拾ふ」も「玉蟲拾ふ」と同じ類の動作である。

***たみくさ** 治る國や民草の、なほその榮え衰へを（蟬丸） 太平の世

(生玉) 門を明けたは誰ぞ、だんないものと由兵衛上り口までつかつかと(今宮)

「だいじない」(大事無)の訛。差支ない。現今も關西地方で普通に用ゐられ、「だあない」ともいふ。增補俚言集覽に、「だんないは大阪詞、大事ないことなり、改て云へば大事おませんともいふ」。

***たんのう** 園部と緣を切りて下されたれば、心にたんのうなさる程のことは何卒致さう(一心二河白道) 二人一所に居る上はたんのうではあるまいか(淀鯉)

「たんぬ」(足)が轉じて「足んの」となり、「たんのう」と延びた轉成名詞である。(堪能と書くは當字)。滿足、十分。井原西鶴撰・日本永代藏・卷四、仕合の種を蒔鐵の條に、「あまたの講まゐりはあれども、終にこの乞食のたんのする程錢とらせし人なかりき」。

たんばいろ びつくりびつくり唇うろみたんば色、瘧病のやうにわななき聲(千疋犬)

〔膽礬色〕顏色が膽礬のやうに蒼くなつたこと。

だんはう いやそれまでもなし、卽ち我等が檀方なり(融大臣)

〔檀方〕檀家の方の義。一寺院に繋屬して信施を投じる俗家。

***たんばこえ** これぞほんの丹波越と不道化言うて忍び出る、氣の愚かさも育ちから憂き事知らぬしるしかや(淀鯉)

〔丹波越〕もと京都島原の言葉で、亡命する者多くは丹波越をするによつていひだした言葉であるが、遂に廣く亡命の意にいふ語となつた。いたし船(延寶七年刊)西鶴の句に、「弓張の月の行方丹波越」。都風俗鑑(延寶九年刊)三卷に、「女の身として芝居元をするとて大きなるはまりにあひて、わが物は是非なし人の物までおひちらし、女の丹波越いと珍らかなり」。

だんびら ここ見事なだんびら臑、此足にて逃げたらば天竺までも一飛ならん(津戸三郎) 大切先のだんびらもの、身ばかり買うていなれたは後家鞘に極つた(女腹切) 宇多の國行二尺ばかりのだんびら物(壽門松)

「だだびろ」(徒廣)の轉訛である。「だんびら臑」とは平たく廣い臑。「だんびら物」とは幅廣い刀。武家名目抄・刀劍部・十七に、「たひらは卽はたひらのはを略したるにて、刄の幅廣きをたひらひろといひ、狹きをたひらせまといふ。後代だんびら物といふことあるは、たひらひろの略語なり」。

たんふ 「たんふくし」を見よ。

だんぶくろ 天の戸袋だんぶくろ、くわつと開けた初日の色(雪女)

「だにぶくろ」(駄荷袋)の音便。布製の大きな袋。

たんぽ 集禮も書付あるならば代物遣らんと言ひければ、心得たんぽをつけ生薑・鹽貝に花鰹、書出いたし算盤に暫く時こそ移りけれ(氷朔日)

「湯婆」の唐音である。大阪詞に銚釐をいひ、酒を溫める器。俚言集覽に、「たんぽ。大阪詞、酒のちろり也」。氷朔日のこの文は「心得た」に「たんぽ」をいひかけたのである。

***だんまつま** 斷末魔の四苦八苦(曾根崎)

〔斷末魔〕梵語 Marmacchid であらう。Marmacchid は Marman と chid との合字であつて、Marman は支節の義で、chid は切斷する義である。Marman を訛つて末魔と音寫し、chid の義の斷と合して斷末魔となつた語で、この世から氣息を引取る最期、卽ち生から死に移る悶絶の眞際をいふ語である。顯宗論に、「傷二害人心一者、臨終受二斷末魔苦一」。倶舍論・十に、「於二身中一有二異支節一、觸便致レ死、是謂二末魔一」。

だんりん 越後より下總の檀林へ通ふ所化の僧(最明寺殿)

〔檀林〕栴檀林の略。佛敎の學問所を云ふ。寺院。

ち

ちいみ これでそもじを殺すかや、ちいみも今はいつはりと(大經師)

〔血忌〕大雜書(寬永十一年刊)に、「血忌は人馬の血をとらず、針灸にいむ」。曆日講釋に、「物の命をとり針灸治等には至つて惡し」。ここの文は、大經師に緣ある曆上の語を用ゐて文を飾つた曆づくしの祭文である。

ちうげんぜんのかうたい 「ちゆうげんぜんのかうたい」を見よ。

ぢうごふ 撫づとも盡きぬ大石の、住刧の末西域の皇帝、民主王より八萬餘代(釋迦)

〔住劫〕四劫の中の第二の劫で、成劫より壞劫に至る間をいひ、世界の成立し住持される時間である。

ぢうそう 「じふさう」を見よ。

ちえだ・つねのり 我朝のゑかきにてちえだつねのりといひし人、忝くも勅命にて筆を染めしと承る(大掛物)

〔千枝・常則〕源氏物語の中に見える繪師である。源氏物語・須磨の卷に、「この頃の上手にすめる千枝常則など召して、作り繪仕うまつらせばやと心もとながりあへり」、とありて細流に、「千枝常則皆繪師也」と見えてゐる。

***ちかごろ** 近頃面目なけれども人も聞いてたべ(二枚繪)

〔近頃〕近き頃の義。轉じて「まこと(誠)に」といふ程の意にいふ。

***ちかひ** 二人は赦され我一人誓の綱にもれ果てし、菩薩の大慈大悲にも分隔てのありけるか(女護島) 直に成佛得脫の、誓の網島心中と(天網島) 肩に笈揹同行二人、誓の船に任せ行く(嵯峨天皇)

〔誓〕佛菩薩の四弘誓願、卽ち衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無盡誓願學、佛道無上誓願成をいふ。佛菩薩が苦海に沒在せる諸の衆生を救濟維致し給ふこの誓願を綱に喩へて「誓の綱」といひ、また生死の苦海を渡つて涅槃の彼岸に到らしめるを、船に喩へて「誓の船」といふ。謠曲・俊寬に「非常も同じ大赦なるに、一人誓の綱にもれて沈み果てなん事はいかに」。玉葉和歌集・卷十九、釋敎歌の部に「世にこゆる誓の船を頼むかな、苦しき海に身は沈めども」。

ちからがは 切付・馬膚・力革・金の覆輪ふつつと切れ(加增曾我)

いふままに、ざんぶと打入り半町ばかり先に進んで泳がせける」と書いてある。これは源平盛衰記・巻三十五、高綱宇治河を渡る事の條に、「馬を留め鐙踏張り立上り、弓の弦を口に啣へ腹帶を解いて引締め引締め締めける間に、高綱さつと打渡して二段ばかり先立つたり」、とあるに據つたものである。されば巣林子は、「二段ばかり」は「半町ばかり」と心得たので、卽ち一段は十五間程の距離と見たのであらう。

***たんいう**　難波の祖師の名號・探幽の觀世音（三世相）

〔探幽〕狩野探幽は、漢の諸畫家・東山時代の名流の筆蹟・土佐風の畫をも練磨硏學して一新機軸を出し、狩野家中興の祖と稱せられた。其歿したのは延寶二年十月七日で行年七十三。

***だんぎ**　了海坊の談義に打込み（宵庚申）　おれらが談義まゐりして一文投げる鐚錢（びたせん）さへ（重井筒）

〔談義〕對談法義といふことで、佛法を談じて正道を示すをいふ。佛教の法話。說教。「談義參」は佛教の法話を聽聞に參詣すること。

たんきんうんつう　大綱かけて引上げよ、たんきんうんつう（唐船噺）

投惠銀子で、銀錢を與へるの意か、但し支那語に合はねば出鱈目と見るべきであらう。支那人はこの意に給儎銀子（けいにんいんつう）などといふ。

斷金（だんきん）の契（ちぎり）　（雪女）

斷金の交ともいふ。至つて親密な交をいふ。易繫辭上傳に、「二人同レ心、其利斷レ金」。

***たんくわ**　心ばかりは早瀨川、急來る痰火に息切れて（賀古敎信）　せきのぼる痰火は胸に滯り、病症重くぞ見えにける（百合若）

〔痰火〕熱氣ありて痰の烈しく出ること。及びその病。

たんけい　短檠の光も細く更くる夜の、川風寒く霜みてり（天網島）

〔短檠〕燈火臺の丈け低くして二尺ばかりのもの。攝壤集・巻之中に「短檠」と出てゐるから、餘程昔からあつたものである。

***たんご**　つらや端午の紙幟（生玉）

〔端午〕五月五日の節句をいふ。俳諧歲時記栞草に、「端午。五月五日端午の節、端は初なり、午は古へ五字と通用す、しかるときは五月初の五日の謂なり」。

だんこ　「やれゆのだんご云々」を見よ。

***たんせい**　感應これ誠あり、一つの驗を見せ給へと、丹誠を抽んでて若葉を幣の手向山（持統天皇）　丹誠無二のこころざし（國性爺）

〔丹誠〕赤心のまこと。眞心（まごころ）。太平記・巻四、大塔宮熊野落の條に、「一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける、丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に計られたり」。

***たんせい**　丹青の器量古今に長じ（反魂香）

〔丹青〕彩色した畫。繪畫。漢書・蘇武傳に「雖三古竹帛所レ載丹青所ニ畫、何以過三子卿二」。「丹青の器量」とは繪畫の才能をいふ。

***だんせん**　だんせんは兒玉黨（五人兄弟）

〔團扇〕夜討曾我（舞の本で、寛永活古字版）に、「うちはのもんは小玉たう」、とありて次の紋繪が載せてある。


〔んせんだ〕

***たんだ**　主從はたんだ三人なるが、人少（ひとすくな）でも泊めるかといへば（西王母）　瞋恚を燃して直に地獄へたんだ走り（嵯峨天皇）

「ただ」（唯）を音便で延べて「たんだ」といふ。謠曲・攝待に、「如何に繼信、いかにいかにと宣へども、たんだ弱りに弱つて終に空しくなる」。

***たんだい**　我安房の國を巡りし時、彼の者落人となつて隠れしを、房州のたんだいに申付け、成敗を遂げさせたり（最明寺殿）

〔探題〕武家時代に重要な地方を總管せしめる爲に、幕府から補任した要職である。探題の稱は釋家の探題から移つたものである。釋家にて探題といふは、宣旨を蒙つて課試及第の可否を辨じる職掌で、碩學の僧の任ぜられたのである、武家で政務を裁決すること恰も釋家の探題が課試を判斷するに似てゐるによつて、探題の稱が武家のこの重職の名に付けられたのである。探題には九州探題、長門探題（又云、中國探題）、奥州探題、羽州探題、六波羅探題、（執權を探題職とも云うた）があつた。但し房州には探題があつたことを聞かねば、巣林子が「房州のたんだい」といへるは、安房の領主の意であらう。

たんてき　たんてきの奇特を見せんと、算木を奪取り座をならべ（二心五戒魂）　推參ながら山伏の祈念より、妾が家の祕密にて、走り者道切り、たんてき當る梓弓、矢より早く現はし申さん（用文章）　なほたんてきの法を以て帝位に登り、かの姬を後宮に立てん（用明天皇）

〔端的〕覿面。まのあたり。朱子語錄に、「卓然自信、無レ所ニ汚染一、此其所レ見、必有ニ端的處一」。易林本節用集に、「端的（たんてき）」。本朝櫻陰比事（元祿二年刊）巻五、煙に移氣の人の條に、「かの山伏を召され、此度の行力たんてきなる所殊勝千萬に存ずる」。

***たんと**　紙治樣ゆゑ內からたんと吝の吟味にあはんして、何處へもむさとは迯らぬ（天網島）　定めし此喉を切るかたが、たんと痛いでござんしよの（天網島）　何やらわけの惡い事ありて、たんと撲たれさんした（曾根崎）

「たんと」は「足（たり）」の義、「たんと」は「たりぬと」の約であらう。充分に。澤山に。甚だ。（「たんぬ」「たんのう」（充分滿足）も「足りぬ」の轉じた語である）。好色一代男巻八、情のかけろくの條に「たんと氣の毒がる顏つき可笑し」。この語現今も用ゐられてゐる。

***だんな**　給をせうと思ひ堺筋で加賀一疋旦那の名だいで買がかる（曾根崎）　講中皆お揃ひ旦那寺もとうお出で、御夫婦ながら只今と、言捨てて歸るそそくさ坊主（宵庚申）　それに弟の傳三めが旦那まさりにとぼし立て（卯月潤色）　十夜の內に死んだ者は佛に成るといひますが定かいな、それを身が知ることか、旦那坊主にお問なされ（天網島）

旦那、檀那、但那など書く。盖し梵語（Dāna）の音寫である。布施と譯す。布は普、施は捨の義である。普く惠施することをいひ、惠施する人をもいふ。轉じて主人をいふ。「旦那寺」とは菩提寺をいふ。ここの文は、旦那寺の和尙と云ふを略して旦那寺と云うたのである。「旦那勝り」とは主人よりも勝つて憚らぬ動作をなすこと。「旦那坊主」は旦那寺の坊主をいふ。

***だんない**　それそれ此處（ここ）へござんす、こなさん逢うてもだんないか

落來るか(松風)

〔知見〕意識眼識の義。大悟して法相を知得した智力をいふ。法華經・方便品に、「如來知見廣大深遠」。

*ぢこく　死出（しで）の山には馬となり多聞・持國に口取られ、佛土に參りおはしませ(孕常盤)　欲界の六欲天、大毘沙門天・持國天(天神記)

〔持國〕持國天の略。梵名をDhrtarastraといひ、左手は臂を伸べて垂れ刀を把り、右手は臂を屈めて前に向け掌中に寶珠を持つ。四天王(その條を見よ)の一で須彌東方の守護神で、佛國土を護持してゐる佛神である。

ぢごくおとし　これぞこの世の地獄おとし、かかる鼠の如くなり(丹波與作)

〔地獄落〕鼠を捕へる具。一尺許の長方形の匣の上に木材で造つた重き落し蓋を設け絲で釣し、下に餌を置き、鼠が餌を食はうとして匣の中に入れば、釣はづれて蓋落ち壓殺する裝置にした物。

*ちござくら　切戶の文珠現じ給ひて兒櫻、これ佛神の御方便(賀古教信)

〔兒櫻〕山櫻の一種である。俳諧歲時記栞草に、「兒櫻。山櫻の一種なり、又小櫻の類にて別種なりと云、按るに山櫻の中に紅色を含みて美しく愛らしき花あり、故に兒櫻の稱ある歟」。松岡玄達撰・櫻品に「熊谷櫻よりは重薄し、熊谷は花瓣外へ反りて開く、兒櫻は內へ抱へあり、單の小輪白色にして花疎らにつくものなり、洛西仁和寺二王門下東側に一株あり、花小くして能く李花に似たり」。

*ちごもんじゆ　兒文珠の御相傳大師の弘め置き給ひ、俗も尊む若衆のなさけ(萬年草)

〔兒文珠〕文珠菩薩が舍衞國の多羅聚落の梵德婆羅門の家に生れられた童形をいふ。巢林子のこの文は、弘法大師が兒文珠より始まつた若衆の情（なさけ）衆道を相傳を受けてこれを弘めたといふ意。蓋し文珠の具名を文殊師利(Mañjusrī。妙吉祥又は妙德と譯す)といふにより、師利を尻に通はせ、兒尻（ちごしり）を若衆の情（なさけ）の意にしたのである。師利を尻に通はせた例は、犬筑波にも「佛の前でせんずりをかく」といふ句に、「夜もすがらしたくぞ思ふ文珠尻」と見えてゐる。弘法大師が男色を弘めたといふも、蓋し女人禁制から男色が盛んに行はれたので、かくいひなした俗說に據つたのである。和事始に「我朝にて男色を愛する事、空海法師渡唐以來の事也と云ひ傳ふれど、續日本紀に孝謙天皇の御時道祖王ひそかに侍童にかよへりとあれば、猶其前久しき事にや、或人の云く、破戒の比丘の此戲れは弘法以來の事成るべし」。

ちごわげ　力は八十餘人が力、頭は今に兒髷に、足には髭のむくつけき(虎が磨)

〔兒髷〕昔時公家武家の公達が元服以前に結んだ髷であつて、頭上高く兩輪を作る結髮である。後には少女の結ぶ髷となつた。

*ぢざう　お吉と見るより地獄の地藏、お吉樣下向か、わしや今斬らるる助けて下され(女殺)　袖印に地藏の梵字、此世にては勝軍、未來の案內迷ふな(三國志)

「地藏菩薩」の略。梵名をKsitigarbhaと云ふ。堪忍強くして動かないこと大地の如く、靜慮深沈なること祕藏のやうであるから地藏菩薩と云ひ、身を六道に現じて衆生を救濟される。「六地藏」を見よ。「地藏の梵字」は地藏菩薩の種子𑖮をいふ。「地獄の地藏」といへるは、俗說に賽の河原で小兒等石を積んで塔を造れば、鬼來つて之を崩す、小兒等は地藏菩薩の袖に隱れて難を遁れるといふに據つてかくいひ、「此世にては勝軍」といへるは勝軍地藏(延命地藏)の緣によつたのである。勝軍地藏の名は勝軍不動に對したもので、軍神として之を念じる。女殺油地獄に「若衆の病の薦には大慈大悲の地藏菩薩」とあるは、若衆は鷄姦よりして痔疾になる者が多いから、痔に地藏菩薩をいひかけてかくいうたのである。

ちじうやき　ちじう燒の靑磁の壺日の前近く差置いたり(唐船噺)

池州燒か。池州は支那安徽省貴池縣がその舊地で、この所から池州燒と稱して磁器を産出したこと明かでないから、或は「ぢ(正しくは「じ」)しうやき」(磁州燒)の誤か。磁州燒は支那の河南磁州で燒いた磁器で、五雜組・第十二卷・物部に、「今俗語窯器謂二之磁器一者、蓋河南磁州窯最多、故相沿名レ之、如下銀稱二朱提一、墨稱中隃糜上之類也」と見えてゐる。

*ちしき　今出家とはなりたれども、智識智者の身でもなし(卯月潤色)　到り先立つこの人人な、今身の上の智識ぞと、賴む外には菩提なも(氷朔日)

〔智識〕善智識の義。その條を見よ。

*ちしご　苦しむ息も曉の、知死期につれて絕え果てたり(曾根崎)　時も時分も六六に、胸はわけなき五五八八、知死期近づく計りなり(宵庚申)　あれ寺町の鐘の聲、一二九十は七七の、七つの知死期最後も早と來にけらし(氷朔日)

〔知死期〕俗說に人の死ぬる時刻は自ら定まつてゐるもので、概して潮汐の退（ひ）く時刻に於て死ぬといふ。左に世に言傳へてゐる所を記す。されど月に大小あり、行度に遲速あるが故に精細には知り難い。

上旬	一二九十	は九子九午六卯六酉
	三四五	は五辰五戌八丑八未
	六七八	は七寅七申四巳四亥
中旬	一二九十	は五辰五戌八丑八未
	三四五	は七寅七申四巳四亥
	六七八	は九子九午六卯六酉
下旬	一二九十	は七寅七申四巳四亥
	三四五	は九子九午六卯六酉
	六七八	は五辰五戌八丑八未

心中宵庚申のこの文に就いていへば、情死を決心したのは四月五日宵庚申の日で、知死期は五つ時(辰で今の午前八時頃)、五つ時(戌で今の午後八時頃)、八つ時(丑で今の午前二時頃)、八つ時(未で今の午後二時頃)の四つの時に當る。そしてお千代・半兵衞家出の時は暮六つ(今の午後六時頃)なれば、次の知死期は五つ(戌)であつて、死するに間（ま）もないとの意。但し情死したのは五日ではなくて、六日の夜明け時に巢林子は書いてゐる。

*ぢしゆのさくら　まづ王城の地主の櫻に(賀古教信)　落來（おちく）る瀧の音羽の嵐に地主の櫻はちりぢり(女楠)

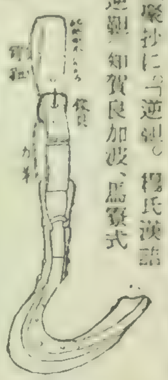
〔地主櫻〕地主權現の櫻をいふ。地主權現は京都淸水寺鎭守の權現であつて寺內にその社がある。「落ちくる瀧の云云」をも見よ。

*地水火風（ちすゐくわふう）　このからだは地水火風、死ぬれば空に歸る(天網島)

四大といふ。佛法にては世界の萬象皆この四大の和合によつてなるといふ。圓覺經に、「我今此身四大和合」。「しだい」「ごりん」をも見よ。

*ちだんだふむ　吉祥女ちだんだ踏み(釋迦如來誕生會)　梅龍つつ立ちぢ

〔力革〕鞍の腹より下の鐙(あぶみ)を釣る革紐。箋注倭名類聚抄に「逆鞆。楊氏漢語抄云、逆鞆、知賀良加波、鳥寰式作レ力革ニ、一云逆



〔力革〕

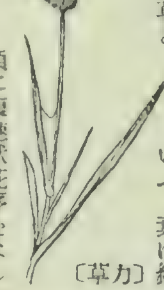
新按、古有ニ鐙頭ニ無レ舌、別有ド鉸具施レ舌以レ革、接ニ續鐙頭ニ以穿ニ鐙鞆(みづな)孔ニ懸レ之者ュ所レ謂力革或是、今俗謂ニ鐙鞆ニ爲ニ力革ニ者似レ誤」。

ちからがみ　門出を祝ふ力紙、拳(こぶし)を固(かた)め四つ辻に、四人さまよひ立ち居たり(堀川波鼓)

〔力紙〕力士が土俵に登る際、水を呑んで口を拭ふ紙を云ふ。ここの文は女敵討の場に臨む時であるによつて、その首途を祝していうた語である。

***ちからぐさ**　隔つる中の垣根草、力草なく泣き交(かは)す心ぞ思ひやられたる(用明天皇)

〔力草〕「をひしば」ともいひ、路上などに自生する一年生草本で、莖の長さ一尺許に達し、強靭なるによつて力草といふ、葉は細長く平行脈を有して互生し、夏季穗を出し、花は花莖の頂に複穗状花序をなし二數個集る。



〔力草〕

***ちぎ**　和光の塵の萱の屋根千木の片反ぎ(國性爺)

〔千木〕「ひぢき」(肱木)の略。上古の家づくりに、切棟の端の材を棟の角から組合せて空へ出したものを云ひ、今は神社の屋根にのみ作る。

***ちぎやう**　もとは知行も取つた筋(女腹切)

〔知行〕知り行ふ地の義。武家時代に武士のあてがはれた領地。封祿。

ちぎやう　不淨を隔つる忍辱の袈裟、知行劣らぬ御弟子達(蟬丸)

〔知行〕知識行力。知は智とも書く。法華玄義・四に、「知目行足、到ニ淸涼地ニ」。

***ちぎりぎ**　隣町隣家の旅籠屋(はたごや)ども棒ちぎり木にて馳付け(丹波與作)　いさかひ過ぎての棒ちぎり木、後の廣言腹の皮(烏帽子折)

〔棒ちぎり木〕兩端少し太く、中を少し細く削つた棒。山本信有編・孝經樓漫筆・卷四に、「棒ちぎり木。機を織る具にちぎりといふ物あり、兩端大きく中細き物なり、其樣なる棒なり、或說にちぎりぎは杖の事なり、杖は乳の通りにて切る故也といふ、非也」。安齋隨筆・卷十三に、「棒ちぎり木。棒といふは兩端も中も同じ太さに削るなり、ちぎり木も棒と同じ樣なれども、是は兩端を少し太く中をば少し細く削るなり、(或說に、ちぎり木といふは杖のことなり、杖は乳の通りにて切る故なりといへり、非なり、杖とちぎり木とは別なり)、如レ斯削れば人を打つ時しなひて中り強きなり云云」。

***ちくえふ**　虎が名に負ふ竹葉の、淺綠といふ柳樽、封を切らんと喜びける(加增曾我)

〔竹葉〕「たけのは」を見よ。ここの文に淺綠とあるは「淺綠をいふ柳樽」を見よ。

ちくご　其萬代も竹の名の筑後の後の末長き(用明天皇)　筑後の川中島の四段目(睿庚申)

〔筑後〕竹本筑後掾をいふ。「たけもとちくごのじやう」を見よ。ここの文に「川中島の四段目」とあるはその條を見よ。

ちくしやうざんがい　終に猫を食殺し、鼬は悅ぶ畜生ざんがい、散散にこそ逃げ失せけれ(大織冠)

〔畜生殘害〕「殘害」はそこなひやぶる義。鳥獸蟲魚が互にくひあふを畜生殘害といふ。徒然草・第百二十八段に、「大かた生ける物を殺し、いためたたかはしめて遊び樂しまん人は畜生殘害の類なり」。

ちくぢやうげだう　佛の弟子神通の目連は竹杖外道に打殺されれ(用明天皇)

〔竹杖外道〕外道の行者であつて、佛法に反抗し、釋尊の十大弟子の一人なる目連を殺したこと、增一阿含經の中に見えてゐる。

***ちくてん**　日月の御旗を渡し、遠き韓國根の國へも逐電あれと(振袖始)

〔逐電〕出奔。かけおち。逐電はもと奔電を逐ふ義で、速力の急なるをいうた語である。揚子に、「九方歅之相レ馬也、雖レ未ニ追レ風逐レ電絕レ塵褁レ影、而迅速之勢已見矣」。王子淵が得臣の頌に、「追ニ奔電ニ逐ニ遺風ニ」。我國でも古書に、急ぎ參內するを逐電と見えてゐる。逐電を逃亡の意にいふはその義を轉じたのである。

***ちぐのえん**　問ひ問はるるもちぐのえん、粗忽に申す事ならねど(振袖始)

〔値遇之緣〕前世の宿緣によつて現世で逢ひ遇ふこと。「値」は說文に「遇也」とある。謠曲・鉢の木に、「げにこれも旅の宿、假初ながら値遇の緣、一樹の蔭のやどりも此世ならぬ契なり」。

ちくら　姿は唐人・身は日本、これやちくらが沖つ波(大織冠)　頭は日本・胴は韓(から)との襟界、ちくらでくらの一夜檢校、終に目馴れぬ出立ちばえ(博多)　唐の姫君相住みを邊(あた)り隣(とな)りも浮名立て、唐と日本の汐境(しほざかひ)、ちくら者かと疑へり(國性爺)

〔舳羅〕韓(から)と日本との潮界を舳羅(ちくら)の澳(おき)と云ふ。按ずるに、韓(から)と對馬との間にある巨濟島を昔は濟盧(とくら)というた。「ちくら」は濟盧(とくら)の轉語であらう。舳羅は韓(から)と日本との潮界にあるによつて、どちらともつかぬことにいふ。和訓栞に、「ちくら。物事のどちらへもつかぬに、ちくら樣ともちくら者ともいふは、對馬の海中にちくらが澳といふ所あり、潮の戶甚だ速し、韓國と日本のしほ堺也といへり、萬葉集に對島の渡わた中に幣とり向けてといへる是にや、よて心體度なく事着落なきをちくらが澳にたとふとはいへる成べし、隋書に舳羅島とも見ゆ云々」。「ちくら手暗(てくら)」「ちくら者」とは、素性の何者とも知れぬ者の意。

ちくりん　舍衞國に鬼を驅つて竹林を建てしこそ、佛法止住の因緣なれ(賀古教信)

〔竹林〕天竺の摩訶陀國王舍城と上茅城との間に竹林があつて、迦蘭陀長者の所有であつたのを釋尊に寄附し、頻婆沙羅王が釋尊の爲にこの竹林に學舍を建立した。これを竹林精舍といひ、天竺五精舍の一である。

竹林(ちくりん)の七賢(しちけん)・七人の樂人に胡飲酒醉樂など舞樂を奏し、竹林の七賢が樂しみを學んではいかがあらん(女護島)

西晉時代に常に竹林の下に集つて飲酒淸談を事とした阮籍等七人の徒を云ふ。世說・任誕篇に、「陳留阮籍、譙國嵆康、河內山濤、沛國劉伶、陳留阮咸、河內向秀、琅邪王戎、七人常集ニ於竹林之下ニ、肆意酣暢、故世謂ニ竹林七賢ニ」。

***ちけん**　知見の目には上十五下十五夜と見つれども、衆生は心亂れ碁の石とや嘸な見るらん(國性爺)　諸神諸佛のちけんの矢只今頭上に

ちやうじやせん 急ぎ長者宣を下し、彼を五逆の罪に沈め（三世相）
〔長者宣〕攝政關白が氏の長者として下す御教書をいふ。綸旨院宣を氏の寺社に下されるには、直接に氏の寺社に下されないで、まづ氏の長者に下し、長者から長者宣を添へて、氏の寺社に送附したものである。（例として次に記せるは弘安六年四月十四日の長者宣である。傳燈法師位乘弁盛緣等宜令奉仕當年研學竪義者長者宣如此楚之謹状 弘安六年四月十四日治部少輔兼仲奉謹上 勅使弁殿）。「氏の長者」をも見よ。

長沙の罪 自ら長沙の罪を避け、此日本に筑紫潟（國性爺）
〔長沙の罪〕漢の文帝の時に賈誼と云ふ賢士があつた。正朔を改め禮樂を興すことを請うたが、侫人絳灌等に毀たれ、出されて長沙王の太傅に貶せられた。この故事によつて流罪の意に云うたのである。

ちやうしゆん 芙蓉、林檎、長春、三白草（振袖始）
〔長春〕薔薇の一種。花は單瓣なるも重瓣なるもあつて四時共に咲く。

***ぢやうじん** 叔父丈人君は五 三 日御寢ならず（國性爺後日）
〔丈人〕長老の稱。長者。易經・師卦に、「師貞、丈人吉」。

***ちやうすけ** 「お寺の長介」を見よ。諸艷大鑑卷一、花の色替て江戸紫の條に「東寺の長と見えてあらがねの土を碎く男に」ともある。

ちやうすなり 出ばなをつけたらばと、茶臼形になるを見て（今宮）
〔茶臼形〕茶臼の形に腰をべつたり据えること。

ちやうそう 凡そ繪の道に六つの法あり、長康・張僧・陸探の三人を異朝の三祖と學び來て（反魂香）
〔張僧〕張僧繇を云ひ、梁時代の人である、天監の初め武陵王國侍郎となる、畫に妙を得、武帝の命によつて寺院の壁に畫いた。嘗て安樂寺で四白龍を畫き、點睛したらその畫龍忽ち雲に騰つて去つたといふ。

ちやうだい 白書院・黑書院・納戸・帳臺・化粧の間（用明天皇） 男は寢取られ、寢間帳臺は見さがされ（重井筒）
〔帳臺〕室内に臺座を設け、帳を四方に垂れたもので、貴人の寢所に用ゐる。委しくは雅亮裝束抄などに就いて見よ。またこれと別に、主人の常に寢る所をもいふ。貞丈雜記に、「帳臺は主人常に寢る所にて云云」。

ぢやうてう 定朝の御作一寸八分の地藏菩薩をこの家の寶とし（傾城壬生大念佛）
〔定朝〕原本には「ぞうちやう」とあれども、定朝の誤られたものであらう。定朝は後一條天皇頃の佛工である。山城國葛野郡朱雀野村壬生なる壬生寺の本尊の地藏菩薩は、定朝が一刀三禮一千日の根精を盡して作つたものであると云ふ。さればそれに緣ある「定朝の御作一寸八分の地藏菩薩」と云うたものであらう。

***ちやうどころ** 一門衆・町所まで賴んで土藏土藏に封を付け（淀鯉） 町所へも斷なく人の留守に蹈込み、疊まで賣拂ひ（博多）
〔町所〕町會所、即ち町年寄の事務所をいふ。

ちやうはんづきん 長範頭巾しよんぼりと（女腹切）
〔長範頭巾〕九頭巾に錏の長う垂れたもの。書言字考節用集・服食門に、「張樊頭巾。傳云、熊坂張樊山賊者棍也、誇ニ任俠一冐ニ張良樊噲之稱一、今所レ制頭巾据ニ其圖形一者」。

***ちやうほん** 我は卜部熊武と申す山賊の張本（嫗山姥）
〔張本〕主眼の意である。箋解古文眞寶後集、前赤壁賦に、「少焉月出ニ於東山之上一」とある註に、「前言ニ清風一、此言ニ月出一、一篇張本在レ此」と見えてゐる。轉じて惡漢の首領をいふ。

ちやうまん 水腫脹滿神、申すに及ばぬ鬼の口、とつてもかも瓜山牛蒡（振袖始）
〔脹滿〕腹中に水が溜つて腹の脹れる一種の病氣である。治療法として昔は冬瓜（その條を見よ）山牛蒡（その條を見よ）などを用ゐた。

***ちやうらう** 沙彌が聞けば長老が聞く（薩摩歌）
〔長老〕智德秀で又は高德老年の僧侶。禪家の住持を長老と云ふ。祖庭事苑に、「今禪宗住持之者、必呼ニ長老一」。

ちやうらかす 猫の子が親猫の取つたる鼠をちやうらかして逃すが如く（弘徽殿） 御臺所が姫君のやうに猫ちやうらかしてござつてもすまぬこと（大經師）
〔ちやうらかす〕侮弄す。「ちやらかす」「ちやかす」「ちよがらかす」「ちよろまかす」などと同類語で、嘲弄を活かしたのが種種にかはつたのであらう。

***張良** あの張良がながれ足、樊噲が門破り（兼好） 張良とやらいひし兵も師匠の沓を取りしぞや（蛙合戰）
〔張良〕張良若年な時に下邳圯上に遊んだ。時に老翁あつて良の所に來て履を落し、良に之を拾へと命じた。良履を取り長跪して老翁に捧げた。老翁足を差出してこれ受けて言ふやう、孺子に教へるものがあるとて、なほ良の忍耐力を試して兵書を授けた。良これより後、漢高祖の師となり、功を立てて留侯に封ぜられた。委しくは史記・留侯世家を見よ。「張良がながれ足」とは、張良長跪して老翁に履を捧げてゐる所をいうたのである。

ぢやうろく 半身丈六達摩の像（聖德太子）
〔丈六〕一丈六尺をいひ、通常化身佛の身長である。坐佛も起立すれば丈け一丈六丈に達するものをも丈六の佛といふ。行事鈔・下に、「明了論云、人長八尺、佛則倍レ之丈六」。日本書紀、推古天皇十三年夏四月の條に、「始造ニ銅繡丈六佛像各一軀一」。

***ちやくたう** 一番に馳せ參じ着到に列つて（最明寺殿） 中にも佐佐木入道が息女今日の着到承り（最明寺殿） はがねを鳴す武夫どもはや道すがら語ひて、今宵これへ集つて着到極め（用明天皇）
〔着到〕出陣以前に諸方から集つた軍勢の名を帳面に書留めるをいふ。軍兵の到着した人名を書く故に着到といふ。謠曲・鉢の木に、「一番に馳せ參じ着到につき」。

***ちやくちやく** 一錢持たれど武士のちやくちやく（薩摩歌）
〔嫡嫡〕正統。正眞。正統を承繼ぐもの。保元物語・新院爲義を召さる條に、「源太がうぶぎぬと膝丸とは嫡嫡に傳ふることなれば」。

ちやこく 枝は木斛我が身はちやこく、うろさき里の勤めぞと（生玉）
〔茶國〕色茶屋の勤め女をいひ、傾城を傾國といふに對して茶國といひ、大阪伏見坂町あたりの遊女をいふ。茶屋者。茶屋女。西澤與志撰の茶傾ひぞり顏（寶永五年刊）といふ本がある、その茶傾の茶も茶國をいうたもので、茶國のことが書かれてゐる。巣林子作・卯月潤

だんだ踏み、ええええはやまつた仕損じた（大經師）

「ぢたたらふむ」（地柄蹈）の訛。身をもがきながらせかせか足蹈みするを云ふ。

ちちくわい　鶉とならんと詠じけん、古歌はちちくわい、我は又父戀しやと音をぞ鳴く（千疋犬）

鶉の鳴聲。和漢三才圖會卷四十二、鶉の條に「其聲如レ曰二知地快一」。ここの文に就いては「夏草の茂りていとど云云」を見よ。

***ぢつきん**　ぢつきん外様の大小名（百日曾我）

〔昵近〕親しみ近づき。なれしたしむこと。北齊書・安德王傳に、「殺二其昵近九人一」。

***ちつぺい**　守屋が是非を糺さんとは慮外千萬ちつぺいめ（聖德太子）　思ひも寄らぬちつぺいめに、あたら骨を折つたよな（國性爺後日）

小なる義。ちつぽい。人を罵る語で、小者またはこわつぱの意にいふ。この語現今も中國地方にて往往用ゐてゐる。善光寺御堂供養（淨瑠璃）に、「幼き者の袖が見ゆる、ムム聞えた善介といふちつぺいめがあると聞いた、さては爰へ隱したな」。

***ちと**　往來の老若男女、芻蕘の者、雉兎の者、柴賣る賤も立とまり（天智天皇）

〔雉兎〕獵夫。孟子・梁惠王下篇に、「芻蕘者往焉、雉兎者往焉」。

***ちとくわん**　少くわん、觀ずれば夢の世や、寢て溫めしほところ子、いつの間にかは浮かれそめ（歌念佛）

〔少勸〕勸は勸進の略。勸進の爲に少しの喜捨を乞ふ意であつて、熊野比丘尼のいふ語。巢林子作・主馬判官盛久の法性覺道行の文中、熊野比丘尼の言葉に、「我我は熊野比丘尼、如何な閻所も御免の者、椰の葉は入りませぬか、ちとくわんくわんとぞ仰せける」と。

地の物眞似　役者物眞似・地の物眞似、小唄・淨瑠璃・口でんがう（女殺）

淨瑠璃など謠ひ物の地の文句を名人の口吻に眞似て謠ふこと。

ちのを　乙はちのをといとほしく、あくがれ尋ね出で給ひ（十二段）

〔血緖〕血緣。ここの文は、末子は殊に血緣深いのでいとほしいとの意。

***ちはこのたま**

「千秋萬歲の千箱の玉」を見よ。

ぢふく　子の五人や十人は地幅さへよければ半年にも出來る事（冷泉節）

〔地幅〕東海道名所記（萬治元年刊）江戶をいへる條に、「砂ほこりは立あがる、されども地幅のよき所と聞えたり」。とありて「地幅」は土質の義である。ここの文は、女の腹を子種を植付ける土質に見做して地幅と云うたのである。

***ぢぶつ**　持佛へ參つても佛の顏が見えなんだ（壽門松）　持佛堂に火を灯せ（堀川波鼓）

〔持佛〕持佛堂の略。朝夕信仰する佛像を安置せる佛間。

ちみどろちんがい　目鼻血みどろちんがいに（生玉）　額に燒鐵入𤎅耳殺ぐ鼻殺ぐ、血みどろちんがい追ひ拂ふ（博多）

「血みどろ」は血緣即ち碧血の義、生血をいひ、「ちんがい」は血が滴即ち流血をいふ。自樂撰・地獄樂日記（寶曆五年刊）に、「かんづか摑んで緣の下へ投げ落せば、丁稚は額を打ち損じ血みどろちんがい、ちんがちんが請人方へ逃げて行く」。

ちやう　二十餘の若侍茶宇の袴にもち肩衣（堀川波鼓）　女が帶の若紫、茶宇の袴の信夫摺（雪女）

〔茶宇〕茶宇縞の略。琥珀織に似た舶來の絹布で、多くは袴地とする。茶宇の名はその產出地の印度のチヤウル（Chaul）の地名から起つたものである。

***ぢやう**　それはぢやうか有難いいふ金暖まる、うまい事であるまいか（大職冠）　あれまたひつしやり鳴き止んだ、どうでも誰ぞあるは定、ちよつと吟味と（鑓權三）　あのお侍様、同じ死ぬる道にも十夜の內に死んだ者は、佛になるといひますが定かいな（天網島）

（淀鯉）　もしそれが定なれば十兩と

〔定〕きつと。必定。古今著聞集・九に、「例のぢやうにしけるに」と見え、平家物語・卷五、富士川の條に、「實盛程射候ふ者は八箇國にはいくらも候、大矢と申す定の者の十五束に劣りて引くは候はず」など見えてゐるから、餘程昔から用ゐた語である。現今中國地方で「ぢやうしき」（定式）と云うて一般に用ゐる。

ぢやういん　定印正しく坐し給ひ（釋迦）

〔定印〕入定の相を標する印契。禪定に入るとき手に結ぶ印である。「印」はその條を見よ。

ちやうかう　凡そ繪の道に六つの法あり、長康・張僧・陸探の三人を異朝の三祖と學び來て（反魂香）

〔長康〕顧愷之の字である。晉の興寧頃の畫師で、その描く所六法兼備はり、生動の勢があつたと云ふ。

***ちやうぎん**　丁銀四百目包の通り（重井筒）

〔丁銀〕銀貨の一種である。重量形狀等は鑄造の年代によつて差違あれども、概して四十三匁內外で、海鼠の形をなし、常是などの極印がある。

ちやうくわらう

「瓢簞より駒を出すは張果老」を見よ。

***ぢやうごふ**　幻や定業の限とは定業と觀ずべし（佐佐木）

（萬年草）　よし何事も前世のこと、

〔定業〕苦樂を感受すべき宿世の決定業。「幻や定業の云云」をも見よ。

ぢやうさい　身を粉藥に御奉公、ぢやうさいなしとぞ答へける（薩摩歌）

〔定齋〕藥の名。雍州府志（貞享三年刊）六、土產門上・藥品部に、「定齋藥。豐臣秀吉公在二大阪城一時、城下藥店有二定齋者一、天性好二俳優一、曾遊聚將軍故公被レ催二猿樂一時定齋作二狂言一、沈惟敬、自二大明國一歷二朝鮮國一來二本朝一時、沈惟敬奉レ授二靈藥方於秀吉公一、公以二斯方一被レ授二定齋一、賚レ之使レ爲二恒產一、此藥治二諸病一、世稱二定齋藥一、其孫來二洛陽一住二東洞院綾小路一、今稱二青木屋一」。ここの文は「定齋」に「じよさい」（その條を見よ）をいひかけたのである。

***ちやうさやようさ**　福の神のお迎、ちやうさやようさや千歲樂萬歲樂（壽門松）　貞の氏無うて玉の輿、內ではろくな味噌漉さへ無かつた、ちやうさやようさになりやつたか（持統天皇）

山車（だんじり）を挽き又は輿を昇くなどの時の囃言葉である。見た京物語に、「きやりなし、ちようさやようさといふ」。浪花方言に、「てうさやようさやてうさやようさや。大阪にて山車（だんじり）を挽き步く時囃子の言葉なり云云」。

け(加増曾我)
〔中間〕侍と小者との間に位してゐる者で、雑兵の一種である。

ちゆうげんぜんのかうたい 浮世を離れし手談のわざ、中間禪の高臺かと、太子を石段に移し參らせ(國性爺)
〔中間禪の高臺〕初禪と二禪との間をいふ。初禪け有尋有伺の天であつて、二禪は無尋無伺の天である、その間にある無尋有伺の禪定を中間禪といふ。梵天王は中間禪をも修されたによつて、梵天王の宮殿を中間禪の高臺と云ふ。平家物語・灌頂卷、六道の沙汰の條に、「喜見城の勝妙の樂、中間禪の高臺の閣、夢のうちの果報」。

*__ちゆうじやうひめ__ 中將姫の再誕が蓮の絲で一重羽織おりやるとて見向(みむき)もする平でない(生玉)
〔中將姫〕右大臣横佩豐成の女であつて天平十九年二月十八日生れた。十五歳の時禁中で箏を奏して叡感に預り、三位に叙し中將の名を賜はつた。寶龜元年脱俗して當麻寺に入り、善心尼と號し後に妙法と改名した。嘗て彌陀佛・觀世音來られて五色の蓮絲を作られ、姫をして曼荼羅布を織らしめられた。世にこれを蓮の曼荼羅といふ。その歿したのは天應元年。

ちゆうだうじつさう 中道實相の車は無二無三の門(かど)に轟き(百日曾我)
〔中道實相〕萬有の實相は本來實有でなく、空にしてまた假有である。空にして假有なるが故に非有非無の中道である。この理を說いた一乘の教法を乘物に喩へて「中道實相の車」と云ふ。

中年四年(ちゆうねんよねん) この遊里(さと)一番名の高き山城屋といふくつわへ、中年四年二百兩命(いのち)がらりに身を賣りて(淀鯉)
「中年」は若年と老年との間の年配である。遊女を勤める年期の契約は十年以內と定められてゐたので、それを勤め終へてなほ後四年の二度の契約をして勤めるを中年四年といふ。

*__ちゆうはばおび__ 十八九なる女房の袖は鹿子の金絲入、後結びの染帶も內裏にはやる中幅や、中色入れて地白染(天神記)
〔中幅帶〕大幅と小幅との間、通例一尺二三寸幅を帶に仕立てたもので、もと內裏に流行したのが後には町家の娘なども用ゐるやうになつた。西鶴撰・好色一代女、卷之一、老女のかくれ家の條にも、「天色(そらいろ)の昔小袖に八重菊鹿の子紋を散し、大內菱の中幅帶前に結びて」と見えてゐる。

中品中生(ちゆうぼんちゆうしやう) 蓮華開けてやや中品に中生す、さつて中品中生こそよに有難き大往生の素懷なれ(大原問答)
淨土には上・中・下の品に各また上・中・下の生があり、合せて九品の別がある。(「くほんのじやうせつ」を見よ)。觀無量壽經に、「中品中生者、若有二衆生一、若一日一夜、受二持八戒齋一、若一日一夜、持二沙彌戒一、若一日一夜、持二具足戒一、威儀無レ缺、以二此功德一、迴向願二求生二極樂國一、戒香熏修、如レ此行者、命欲レ終時、見下阿彌陀佛與二諸眷屬一、放二金色光一持二七寶蓮華一至中行者前上、行者自聞、空中有レ聲讃言、善男子如レ汝善人、隨二順三世諸佛教一故、我來迎レ汝、行者自見、坐二蓮華上一蓮華卽合、生二於西方極樂世界一、在二寶池中一、經二於七日一蓮華乃敷、華既敷已、開レ目合掌、讃二歎世尊一、聞レ法歡喜、得二須陀洹一、經二半劫一已成二阿羅漢一、是名二中品中生者一」。

ちゆうりよ 時に崇禎十七年中呂上旬(國性爺)
〔中呂〕陰曆四月を云ふ。國語に、「三間中呂宣中氣也」、とありて註に、「四月曰二中呂一」。禮記・月令に、「孟夏之月、律中二中呂一」。下學集に、「仲呂(ちゆうりよ)四月」。

*__ちようでふ__ 松風といふ賤しき蜑の色に溺れ、日の御座の御劍を失ひ、罪科重疊によつて勅勘を受け(松風) 御堅固の歸洛重疊千萬(女護島)
〔重疊〕重ね重ねの義。轉じて、至極滿足の意にも云ふ。諺草・貝原好古編・に、「重疊。宋玉が高唐賦に重疊增益、又崔方進傳に出たり、かさねかさぬる也、俗に物の嘉事を重疊よしなどといへり、それをあしく心得て、重疊をよき事とおもへるは誤也」。

ちようどう 目の重瞳、日に向つて瞬きせず、これ大貴人の相(唐船噺)
〔重瞳〕一眼內に二つのひとみあるを云ふ。史記・項羽本紀の太史公賛に、「吾聞二之周生一、曰舜目蓋重瞳子、又聞項羽亦重瞳子」と見えてゐる。これ等に本づいて重瞳を大貴人の相となす。

*__ちようやう__ 取分き今日は重陽の折に幸ひ曾我菊や(百日曾我)
〔重陽〕九月九日の節句を云ふ。下學集に、「重陽。九月九日也、月令云、九月九日月與レ日倶應二陽數一、故云二重陽一、此日採レ菊獻二觀音一則壽命長遠也、起二於彭祖古事一也」。

ちよがらかす 大事の金銀を湯水のやうに川遊び、ちよがらかされにや來申さない(女殺)
だましなぶる。たぶらかす。愛知縣・丹羽郡地方では現今も「だます」を「ちよんがらかす」といふ。「ちやうらかす」を見よ。

*__ちよくかん__ 松風といふ賤しき蜑の色に溺れ、日の御座の御劍を失ひ、罪科重疊によつて勅勘を受け、京都を立去り行方知れず(松風)
〔勅勘〕勅諚によりて勘當される義。天皇の御しかり。

ぢよさい 「じよさい」を見よ。

ぢよだう 「によだう」を見よ。

*__ちよつる__ 氷の劍逆手に持つて、波舊苔の髭をこそげる、頤ちよつる、中切中刈所まだらに(國性爺後日) この春早山崎の與次兵衛めに小鬢先をちよつられた(壽門松)
ちよつとへつる。僅ばかり削り取る。

ちよのう 戴く桶は千代能が、これも昔の跡とめて、水たまらねば月影も、宿定めずいづくにか(吉岡染)
〔千代能〕千代野とも書いてある。景愛と云ふ尼の初名で、號を無外または無著と云ふ、陸奥大守城泰盛の女で、越後守金澤實時に嫁し、夫の歿後は尼となつて京に抵り、資壽精舍を構へてこれに居つた。或日忽然大悟し、「千代能が戴く桶の底ぬけて、水たまらねば月も宿らず」、といふ和歌を詠じた。委しくは龍門夜話・上卷に就いて見よ。

ちよびかは 我が見る前ではちよびかはして、ちよつと立てば早どこへ(宵庚申)
ちよこちよこと敏捷に働く樣をいふ。「ちよびかは」はちよびちよびのちよびで、「かは」は「とつかは」のかはと同じ語であらう。

ちよろい れつそりの牛盜人、ちよろい細工のあめだ牛(關八州)
ぬるつこい。愚鈍な。傾城禁短氣(寶永八年刊)一之卷に、「騷がしい狂言をはじめあかれて暇を取らうとは、そりや前方なる若手の男

色に、「新造の振か黒茶か、但は白の白茶か風呂で焚いた煎茶か」、とある茶も色を賣る女をいうたものである。生玉心中のこの文は、木斛と茶園と韻脚を合せた文飾である。

ちやしよ　帯中お茶所の冥加錢(二枚繪)

〔茶所〕寺城内に設けて茶を接待する所で、參詣人の休憩所である。ここの文はお茶所を維持する爲に寄進する冥加錢をいふ。

ぢやぢやうま　雜賀屋の鉾嚴がひんひん跳ねるぢやぢや馬に乘つて、娘御は金物の乘物に乘らつしやる(萬年草)　舅姑御夫婦も乘物やぢやぢや馬と、乘せてもいかな乘らばこそ(萬年草)

あばれ馬をいふ。俚言集覽に、「ぢやぢや馬。驛馬をいふ、因て唐突雜レ制をぢやぢや馬と云、もと地蹈より出でし詞なるべし」。新好色文枕(正徳元年刊)卷一に、「とかくきびしき意見の關所を据ゑ、西島の道を塞ぐといへども、夜な夜なはねまはるぢやぢや馬の耳に風擧、敗毒散を瘧病やみにもつた程もきかず」。

ぢやぢや蹈む　浮かれ浮かされ大將雜兵そそり立ち、馬もぢやぢやぢや蹈む鹿蹄(三國志)

ぢだんだ蹈む義。跳廻る。前條を見よ。

ちやのきよのきよひよん　この如く形をかへ、ちやのきよのきよひよんで見知らしても、何處ぞが公時臭いやら、盜人どもが寄付かぬ(關八州)

鉢叩の唄拍子である。「鉢叩」を見よ。

*__ちやのこ__　茶ばかりで濟むものか、しん粉のやうな物なりと、茶の子粥の子、のこのこふろまや半七と(女腹切)　もとの拇御の十三年忌、茶の子一つ配る事か(薩摩歌)

〔茶子〕嬉嬉錄に、「今以二早飯前及飯後午前午後一哺前小食一爲二點心一」。日次紀事(黑川道祐撰)二月の條に、「凡京師俗、彼岸中偶逢二親戚之忌日一則供二茶菓一而祭レ之、以二其祭餘之菓一互相贈、或請二親戚朋友一而饗二茶菓一、彼岸中稱二菓子一曰二茶子一」。

ちやひきぐさ　斑女が閨の淋しさは茶引草をも思出し、心細しや絲薄(用明天皇)

〔茶引草〕草の名。雀麥とも云ふ、客無うて隙な遊女をお茶挽といへば、閨の淋しさは茶引草といひつづけたのである。異本洞房語園に、「慶長元和の頃は、歷歷の御方も、兼日約束にて何れの日には誰が來、何といふ太夫が手前にて茶の會に參るなどとて、心易き同志は誘引ありしとなり、今に至るまで傾城のお茶をひくといふも此節よりの詞なり」。

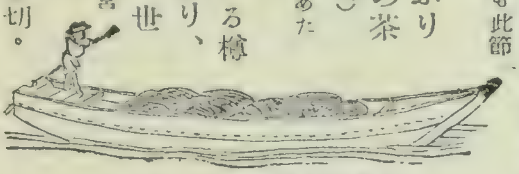


〔茶引草〕

ちやびんあたま　ごぶりごぶりとにえばなの茶瓶頭を振立て(女腹切)

〔茶瓶頭〕禿頭。きんかあたま。

*__ちやぶね__　茶舟で下る樟肴、在所嫁御の里歸り、上荷で送る葬禮や、世の有様の樣樣を(今宮の心中)　そばに茶舟を漕ぎつれて、饂飩・蕎麥切。



〔茶船〕(和漢船用集所載)

きりりきりりと押廻し(鎗權三)

〔茶舟〕和漢船用集・卷五に、「茶船。攝州川川荷物運送の舟拾石積なり、又屋形茶舟あり、其名もと茶を煮て賣りし船なる由、遊山舟の名ともすべし、その製海舟作りにして淺川を行く瀨越舟ともすべし、上荷とは製各別なり、或は江戶茶舟と云ふも、名は同じうして製造異也」。

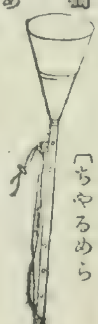
*__ちやや__　茶屋住ひきやろが山衆を買やろが(重井筒)　揚屋揚屋茶屋茶屋にて狙ひ求め給へども(加增曾我)

〔茶屋〕ただ茶屋とのみあるは、多くは水茶屋ではなうて色茶屋を言うたものである。

*__ちやるめら__　なほ奥深く行先に怪しき數萬の人聲、攻鼓・攻太鼓・喇叭・ちやるめら・高音をそらし飄飄とこそ聞えけれ(國性爺)



〔従征圖記(同治六年刊)所藏〕



〔ちやるめら〕

〔太平簫〕葡萄牙語 Charamela である。木製の樂器で頭と末とは銅で作り、七孔ありて喇叭に似てゐる。唐人笛とも云ふ。

ちやんぎりしつきり　世上にぱつと囃立て言渡したる山鉾の、ちやんぎりしつきり斬つたりや(堀川波鼓)

京都の祇園祭禮の時山鉾を挽く時の鐃拍子である。錦文流撰・熊谷女編笠(寶永三年刊)卷五、いさぎよきものの條に、「傳右衞門きふじよを刺されて尻居に伏す所を、お虎が附込んで敵の首をちやんぎりしつきりしつきりや」。

*__ちゆういん__　母におくれて一七日立つや立たずの其内に御添臥もなり難く、中陰滿てぬ其内は免させ給へとありければ(十二段)

〔中陰〕中陰有の略であつて中有とも云ふ。「ちゆうう」を見よ。

*__ちゆうう__　この燈籠を六道の中有の明りに迷を晴れ(鎗權三)　中有の旅の雲霧に見失ふことありとも(今宮)　情無くも死後れ中有の闇に迷はせし(卯月潤色)

〔中有〕中陰有の略であつて中陰とも云ふ。現世から逝去して未來世に生を受ける七七日(卽ち四十九日)間をいふ。瑜伽論に、「人死中有身、若未レ得二生緣一極二七日一住、若有二生緣一卽不レ定、若極二七日一必死而復生、如レ是展轉生死乃至七七日住、自レ此巳後決定得レ生」。人間死して中有の間に前世に於ける業力漸次に熟して、その未來世に生じるべき道すがらを「中有の旅」といふ。妄執によつて中有の旅に迷へるを「中有の闇」と云ふ。

*__ちゆうぐう__　中宮御平産の御祈り(三世相)

〔中宮〕職原抄別記に、「一條天皇の御世より二人の御妻おはしまして、一方をば皇后といひ一方をば中宮といふ事とはなりぬ。……されどもいかに濫なる世なりとても皇后と中宮と一時に立て給へる例はなし、女御の中にてすぐれてやんごとなきが、何時しか御子なども出來ておとなび給へるままに皇后にあがり給へる後、また參り給ふ御方のあるが一の人の姬君などにて、殊にときめき給ふをば女御とのみにてもさしおき難くて中宮とし給ふ。中古の例大かた此の如し」。

*__ちゆうげん__　妹の主人の屋敷より中間來つて(堀川波鼓)　腰掛の中間どもばらりと下つて地に鼻付

の。今多く蜜柑の皮を代用する。陳皮の陳は、陳腐の陳と同じく舊りた義。薩摩歌のここの文は、陳皮は藥種として効用殆んどないから、絲瓜の皮と同意にいうたものである。

ちんぺい 新田左中將義貞・楠判官正成、陳平・張良が肺肝より出でたる如き名大將（女楠）
〔陳平〕陽武の人で、智謀に富み、漢高祖（沛公）を輔佐して天下を定め、官丞相を經て曲逆侯に封ぜられた。

つ

つ 我もそもじと同船して、斑女が色に氣壓（けお）され花蓉に花の色なしと、唐土（もろこし）までもつを引かせん（隅田川）
〔唾〕固唾（かたづ）などいふ唾で、涎の意にいうたのである。「唾を引く」とは、涎の絲を引く、即ち垂涎する意。

***づ** 「づない」を見よ。

***ついぢ** 人人はついぢの隈に逃げ給ふ（蟬丸）
〔築地〕「ついひぢ」（築泥）の略。板を心として泥土を塗り、屋根を瓦葺にした垣。和名抄に「築牆」と當ててある。

つい・なんどり 惡い聲付、同じ物の言ひ様でああ畏つたとついなんどりとお受はならぬ事かはと（會稽）
「つい」は「ちよつと」の意。「なんどり」は「などり」の音便、「なごやか」「おだやか」の意。古事記・上に、「今こそはちどりにあらめ、のちはなどりにあらんを」。

***ついまつのうたがるた** 貝おほひは手もつめたし、いざついまつの歌がるたいかがあらんと宣へば（娍）琴の連彈ついまつの歌かるたも、逢坂山のされかづら、惡い處へ氣を廻して（花狩）
「ついまつ」（松明）といふ歌がるたのことである。女重寶記（元祿十五年刊）卷之一、大和言葉の條に、「歌かるたはついまつ」。女用教訓繪本花の宴に、「ついまつ。歌がるたの事なり」。貞丈雜記・卷八、調度之部に、「歌かるたといふ物は古なし、近代出來たる物なり、本は貝おほひの貝より思ひよりて作りたる故、本名をば歌貝と云ふ也、又伊勢物語に、松明（たいまつの事）の炭にて歌の下句を書きたる事ある故、歌貝も上の句に下の句をとり合する事によりて、ついまつとも名付くる也、歌かるたといふは田舍詞也、かるたといふ物の形に似たる故云ふなるべし」。

つう お梅につうを失ひし久米が心ぞ哀れなる（萬年草）
〔通〕通力。「お梅に通を失ひし云云」を見よ。

つうくつ 惣兵衞とつうくつ致し、茨木屋をば私請合ひ（淀鯉）今宵の中に俵屋とつうくつして、せんよを明日から呼取り（酒呑童子）
〔通窟〕こつてりと談合すること。通は心中を通じ合ふこと。「くつ」は「あぢくつ」の條を見よ。現今も中國地方で、情を通じまたは馴合（なれあ）ふを「つうつうする」「つうくつする」というて往往用ゐてゐる。

つうじ 女房傍（よ）からつうじして、まだこれはお寢りませぬ（反魂香）
〔通事〕吃などで意思を通じられぬ者の間にあって、取次いで話すこと。通辯。

つうづ 女と思ひ怪我するな、並やつうづの女でない（雪女）
通途の字が當ててある。通常。なみ（並）。十人並。念珠略詮、數珠標幟の條に「凡そ念珠に多種あれども、一百八顆を以て通途とす」。和訓栞に「俗に十歲二十歲をつづはたちといへり、文選に十をつづと訓す」と見えてゐる。「つづ」も「つうづ」ももと同じ語であらう。（通途の反對を別途といふ）。

通天（つうてん）の冠（かんむり） （浦島）
後漢書・輿服志に、「通天冠、高九寸正竪、頂少斜卻、乃直下爲鐵卷梁、前有ㇾ山展筩」。


〔通天冠〕

通天（つうてん）の紅葉（もみぢ） 地名部に就いて見よ。

つかうど 「つこうど」を見よ。

つがない 「つがもない」を見よ。

***つかひばん** 心拍子に乘かけは六番かしら使者番（堀川波鼓）
〔使者番〕人倫訓蒙圖彙・一に、「使者役ば公界に出す第一の面道具なれば、其器量をえらび發明にして辯舌あざやかにて、禮式を知り文字を知りて片言をいはざるを上とすべし、奏者又同じ」。

***つがもない** ハアつがもない、私は大坂者（女腹切）アアつがもない、わしは萬歲に近附はないわいの（大經師）アアつがもない、此葦の葉にどう乘られうぞ（聖德太子）恥も哀れも打明けて、つがなくこぼす正月の、涙も顏に憎からず（壽門松）
「つながりもない」の義。緣も無い。とんでもない。わけもない。本朝俚諺（正德五年刊）に、「つきもなし。俗はつがもなしともいふ、不都合といふごとし」。嬉遊笑覽・卷九に、「つがもなき。箕山大鑑に、わけもなきといふなり」。

***つき** 四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顏、さす汐影（しほかげ）のわけもよき（壽門松）
〔月〕この文は、十五夜の月（つき）に月（ぐわち）をかけて、「三五以上の月」というたのである。「ぐわち」を見よ。

つぎかみしも 冷泉造酒之進房平、淺川やうの繼上下かいらぎ作りの長刀、さすが育（そだ）ちも小娃あがり（女夫池）
〔繼上下〕上下の一種、德川時代に士人の着用した服で、肩衣に常の袴を用ひ、肩衣と袴との色合地質の相異つたもの。嬉遊笑覽に「つぎ上下は享保まではその略服にて、暖氣の時など着用し冬は決して用ゐざりし、元文の末御役人平日は染上下に不ㇾ及、つぎ上下小紋縞類取交用候樣、とありてより押並て繼上下着用になりし、天明の今は歷歷も極寒に用ゐる」。

つきがんな 天の川原に橋ばしらしらげたつるや突鉋、雲をそなたにやり鉋（出世景淸）
〔突鉋〕刀幅廣うて兩端に柄をつけ、突出すやうにして木を削る鉋であつて、桶職などの使用するもの。

つきぐさ 月草の光のひまをなかだちに、顏を見合せ目を合せ（用明天皇）
〔月草〕露草の古名。


〔つきくさ〕

***つきげ** 太郎鴇毛次郎鴇毛と申して（大磯虎）二十日の月毛の駒の尾

にして見せられたがよい筈、此古法師はそんなちよろい手をくふ事にあらず」。現今岐阜縣加茂郡東日河村地方で、「ちよろい」を痴鈍の意にいふ。好色一代女卷一、淫婦の美形の條に「女郎の好く問ぐすりを申せど、そんな事などちよろく見え透き」ともある。

ちらしだいこ はや今日のお暇と、散太鼓の下(した)とどろき(二枚繪)
〔散太鼓〕興行終る時に打鳴す太鼓、卽ち跳(はね)の太鼓のことである。この太鼓によつて客散じるより云ふ。

ちりをひねる 仲秋大きに赤面し、塵を捻つておはせしが(今川了俊)
〔捻レ塵〕「玉蟲拾ふ(たまむしひろふ)」を見よ。

***ちろり** 燗して進じやと、立つて戸棚へ德利からちろりへ移せば(女殺)
〔銚釐〕筒形で、注口及び提梁(つる)があつて、酒を煖める金屬製の具。「ちろり」の名は、ちろりと忽に煖まるよりの名であるとも云ひ、或は地爐の熱灰中に埋めて煖めるより地爐裏の義であるとも云ふ。

***ぢわう** 地黃に大根しらがまで斯くては果てじと(薩摩歌) 拵(こしらへ)は何も入らぬ、お手道具より櫛笥より、三百目入の地黃箱五六十も用意なされとの御口上(椛狩)
〔地黃〕多年生草本である。花は黃白色で、紫色を帶びた唇形花冠を有し、總狀花序に排列す。根は强壯藥に用ゐる。地黃と大根または蕪とはさし合で、混食すれば白髮となるといふ。よつて「地黃に大根白髮(しらが)まで」と云うたのである。新增犬筑波集(寬永二十年刊)に、「くうかいの計の蕪をわけにして、地黃園をや飮める養稚」とありて、「ぢわうに大こん蕪さし合なり」と記してある。男も女も地黃を服用すれば精力增進するといひ、支那渡來の藥種である。日本好色名所鑑(元祿五年刊)に、「唐むきの女郎色靑背として常に地黃丸をたやさずとかや、此女郎の腹に宿りし子はかはゆやな。一生大根食ふ事がなるまいと笑へば」。好色赤烏帽子(元祿八年刊)に、「いまだ二十に足らぬ男も、六味八味の地黃丸を用ひて腎水の滿つる事を本とし」。「地黃箱」とあるは、地黃の根を加へてねつた飴を入れた箱である。


〔地黃〕

ちゑのわ 擲羽織の濃柹に智惠の輪の大紋、手振の先供はいはいはい(女殺)
〔智惠の輪〕九つの輪違な模樣。

***ぢん** 愛宕の山にヨエ、ぢんの煙が三筋立つ(女殺) 床は伽羅伽羅(きやらきやら)、ぢんや麝香の薰(かをり)まで(夕霧)
〔沈〕沈香の略。沈香樹は東ヒマラヤ・アサム等の地に產し、喬木にして百尺に達しる。香料は樹幹枝幹等に脂狀を呈し、暗色に凝結して存在し、その重くして水に沈むものを良品とする。樹によつては香料を有せぬものもある。

ぢんがい 仲秋を追放し積惡猛威の振舞、當家のぢんがい武道の糟糠、相從ふ者どもも時の權とはいひながら(今川了俊)
〔塵芥〕ちりあくたの義。無用の者を賤しめていふ。源平盛衰記・卷十四、興福寺返牒の條に、「愛淸盛入道者、平氏之糟糠、武家之塵芥也」。

ぢんかうき 「ぢんこふき」を見よ。

***ちんからり** 又引出してもちんからり、ありたけこたけ引出しても繼切(つぎきれ)一尺あらばこそ(天網島)
內部に何物も無きをいふ。空虛。西鶴撰・好色三代男・卷之三、友なし男戀を釣るらんの條に、「內證は虛(から)に倉の內はちんからりとなりて」。(序云、西鶴撰・好色一代男・卷四に、「小者の一人も見えず、ちんからりに羽釜一つの樂しみ」。同・好色五人女・卷五に、「しづの屋にありしちんからりとやいへる物ひとつに靑き松葉を燒捨て」とある「ちんからり」は焜爐をいふ。この語今も和歌山地方に存してゐる。雍州府志・土產門下・服器部に、「風爐。自二琉球一所レ來之知牟加羅風爐、是亦珍物也」とある。空虛とは別の語である。巢林子作・關八州繫馬に「けたたましい提灯金棒ちんからりが面白いか」、とある「ちんからり」は金棒を引く音の形容語である)。

ぢんこふき 伊勢物語ぢんこふ記、父樣(ととさま)の傍(そば)にあるまい(宵庚申)
〔塵劫記〕吉田光由の撰で三卷より成り、日本算學書である。初版は寬永四年である。塵劫記は當時盛に用ゐたもので、日本好色名所鑑(元祿五年刊)大阪新町由來の條にも、「塵劫記覺えし男め、積りおほせて身の足にはならず云云」と見えてゐる。

***ちんざ** やあ藤樣(ふぢさま)何時(いつ)からここに御鎭座(淀鯉)
〔鎭座〕神靈の其地に鎭(しづ)まりますこと。この文は遊客を廓詞に大盡といふより、大神に通はせて御座(ござ)るを御鎭座としやれた。

***ちんず** いかさまおのれ仔細あるに紛れなし、眞直に白狀すべし、おちんじなば栲問せん(百日曾我) のれ何者ぞ眞直に申せ、少しも陳ぜば曲事と、聲をあらげいひければ(天智天皇)
〔陳〕陳述する義。轉じて虛僞の申立するを云ふ。

ぢんずゐかう 旃檀・鷄舌・沈水香・丁子香・安息香(釋迦)
〔沈水香〕略して沈香とも云ふ。「ぢん」を見よ。

***ちんた** 瑠璃白玉のふらすこにちんた泡盛(酒呑童子)
葡萄牙語 Vinho-tinto(赤酒の義)の略で、往時蘭人によつて舶來した酒の名。

***ちんつ** 行くもちんつ歸るもちんつ、又來る人もちんつちりつて(女殺) やつしは甚左衞門・幸左衞門が思案ごと、四郎三が憂いこと、ちんつちんつちんちりつて(女殺)
口三味線であつて、チンツチンツチンツチリツテチリテツテなどと云ふ。「行くもちんつ云々」はその條を見よ。

***ちんどく** 樣樣の菓子餉酒肴したため、各これに鴆毒を入れ(國性爺)
〔鴆毒〕鴆は毒鳥である。鴆の毒。漢書に「鴆鳥黑身赤目、食二蝮蛇野葛一、以二其羽一畫二酒中一、飮レ之立死」。廣雅に、「鴆長七八寸而食レ蛇、雄名二運日一雌名二陰諧一、以二其尾一歷レ食、食則殺レ人」。

***ぢんのざ** 藤原時平公陣の座をつつと立ち(天神記)
〔陣座〕禁中にて公事ある時諸公卿の參着する所である。拾芥抄・中に、「陣座。左近・南殿東・日華門內、右近・月華門內」。禁中名目抄、著陣の註に、「大臣納言拜任之後、始日著二陣座一、陣は軍陣の陣にあらず、參議の諸官の列座を陣といふ、つらなると云ふ意なり」。

ちんぴ 黑大豆ちんぴ生姜を入れた藥茶でござんす(持統天皇) よしや浮世は陳皮の皮(薩摩歌)
〔陳皮〕熟した柑子の皮を乾して藥用とするも

つくもさん　つくもさんの定家様(三國志)

〔九十九三〕和歌三十一文字を九・十・九・三に切つて書くこと。九十九を「つくも」といふは、伊勢物語の歌、「百年に一年足らぬつくも髮、我を戀ふらし俤に見ゆ」とあるによつたもので、盡百といひかけたものかといふ。

つけがみだい　「じふまいのりのつけがみだい」を見よ。

***つけざ**　人がつけざを望まば、ちよつと啜つて飲ますがよし(浦島)　半分飲んで差しければ、こは珍しいつけざしと、押戴いて飲んだりけり(堀川波鼓)

「つけざし」(附差)の略。飲みさしの盃または煙草の喫しつつあるものを人に取らすこと。井原西鶴撰・大下馬・卷二、殘るものとて金の鍋の條に、「後にはつけざしさまざま、我を覺えず醉出でければ」。

つけじろ　所所に附城築き、兵糧軍兵込め置きて(國性爺)

〔附城〕向城ともいひ、敵城に向つて城を築き、兵糧軍兵を込め置き、敵地に侵入して戰ふに便にしたもの。

***つけだす**　滋賀の里にて早廣を附出し、さあ今ぞ日頃の運試し天の與へ、あら嬉しやとはやれども(蟬丸)

〔附出〕常に心を附けて探し出す。附け出すの附けは、附け狙ふの附けと同じ語。

つけもの　明德の御神樂つけものの事御尋れに預り候(三世相)

〔附物〕聲樂に伴奏する樂器。神樂では和琴が主で、笛・篳篥は附物である。

***つこうど**　はれやれやれやれきり乘らしやれ、馬やろいとぞつこうどなる(丹波與作)　殘物は遣つて仕舞うた、通りやとつこうどなり(博多)　うそうそと覗き佇み、つこうどに大聲上げ(持統天皇)

「つこどごゑ」を見よ。

***つこどごゑ**　梅龍内よりつこど聲、かしましい何者ぢや(大經師)　引ずりに往てお客の前で恥かかさうかと昔作りのつこど聲(女腹切)　あれ親仁殿、熊野屋から呼に來た、はよ往かしやれおりや往かぬ、きりきりさしやれとつこど聲(宵庚申)

「つきごとごゑ」(突言聲)の約訛であらう。「つこど」は「つこうど」とも云ふ。とがりごゑ(尖聲)。腹立げな無愛想聲。語録字義(元祿七年刊、盞吹子の序文がある)に、「鶻突。ヤサシゲモナキコトナリ、俗ニツカフドナルト云是也」。

***つじあんどう**　鐘は幾つ八つか七つか曉風の、辻行燈を吹消して道も心も眞暗くら(歌念佛)

〔辻行燈〕辻番所の行燈。辻辻に番所を設置して町内を警戒したものを辻番所と稱した。天和三年二月の奉行所の觸書に、「辻番之儀、相定人數無二懈怠一晝夜可レ務レ之、夜中たりといふとも戸を明置不寢番を致し、請取之場所切切見二廻之一、若狼藉者又は手負たる輩其外不審成者於レ來は早速出向留二置之一、辻番組合中へ申達可レ得二差圖一事。一、突棒・さすまた・もぢり棒・續松・早繩・提灯・番所に可二差置一、鎗長刀は可レ爲二無用一事」などの箇條が見えてゐる。



〔辻行燈〕

つじうら　「まさしかれ」を見よ。

つじだんぎ　人を導く六道の辻談義こそ殊勝なれ(蟬丸)

〔辻談義〕辻說法とも云ふ。僧衣を著し路傍に立つて往來の人人に向つて佛教の法話をなすことで、信長紀・十四にも、「さも辻談義坊主の倚子に上りていかめしがほに說法し、謗二他法一衒二自法一にも猶超えたりけり」と見えてゐる。辻談義は後に轉じて講談となるのであるが、元祿から享保頃にかけて辻談義はなほ京阪地方で盛に行はれ、人生の無常轉變を說いて人人にあはれを催さしたものである。蟬丸のここの文に、「まことに淺ましいかな歎かしいかな、今日の衆生一生造惡不斷煩惱の塵にまじはり、……忽ち安養無垢世界不退快樂の都に到らん、何疑のあるべき」とあるは、辻談義口上の文である。以てその內容の概略を察知される。

***つじはうか**　若草山の煙草賣、つづら山には辻放下、飛火の野邊の燒豆腐(大職冠)

〔辻放下〕辻に立つて歌舞・輕業・手品などをなす興行を云ひ、田樂の類である。謠曲・放下僧に、「このごろ人のもて遊び候は放下にて候程に」とありて謠曲拾葉抄に、「居士にも此類ありて、或は索の上を走り、刀を吞みなどすること、隋より以前には是を百戲と名づく、日本にて是を田樂或は放下とも云也」と見え、人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷七に、「放下は字訓の意はなちくだす也、禪家に於て諸緣を打捨つるを放下するといふ其心也、たとへば鼻の上に立物をし、枕を重ねて自由に使ひ、山の芋を鰌にするたぐひ、皆これ變化不思議の體をなすこと、萬事の當體を放下して物に滯りなき體にしなす故に放下といふ也、あや折金輪つかひ皆放下たり」と見えてゐる。

つしわう　「さんしやうだいふ」を見よ。

***づだ**　これより修行をかへて一字半錢の頭陀をため(賀古敎信)　この鳥羽の里、日に一遍頭陀の修行なされたきとの御願(孕常盤)　朝な朝なの頭陀の行、はつちはつちも空耳潰し(博多)　頭陀の袋・麻衣・鐵鉢を御手に据え(孕常盤)

〔頭陀〕梵語 Dhuta である。抖擻と譯す。煩惱の塵垢を去り清淨に佛道を修することを云ふ。轉じて行脚の意に云ひ、諸方を行脚して米錢の施與を乞ふを「頭陀の行」と云ふ。行脚の時に三衣及び施與を受けた物を容れる袋を頭陀の袋と云ふ。また死者を葬る時に六道錢などを容れて、胸に掛けさす袋をも頭陀袋と云ふ。「十二の頭陀」をも見よ。

つちけ　早う拜みたいときよろきよろするも土氣なり(乘好)

〔土氣〕土くさい氣。野暮。「土」は土百姓など云ふ土で、賤人を卑しめていふ。

つちのゑ　(女殺油地獄)

「去去年つちのえの春」を見よ。

***つちのこ**　供先打割るつちのこの、鐙持奴が糸鬢も、はり退け突退け割つて乘る(扇八景)　節分豆撒き年男、槌の子抱いて稻積んで(壽門松)　鰯の頭梅が香の、解けそめたる下紐は、心ありげにつちのこまで、春めく御代こそ豐かなれ(雪女)

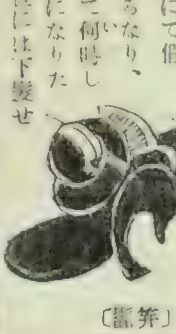
〔槌子〕大槌頭、即ち後腦前額の突出た頭。傾城禁短氣卷二に「大方は針手のきかぬ槌の子はやりてになつて果つるも多し」。都ひながた(正德四年刊)中之卷に「いとさまのかた

髮亂れて(丹波與作)
〔鴾毛〕馬の毛色の名。葦毛の少し赤ばめるもの。（鴾白馬、桃花馬）。丹波與作のこの後の文に、同じ馬のことをいうに「丹波くりげ馬」と書いてゐるが、栗毛は栗色で、鴾の羽の色をいひ、鴾毛とは別であるが、多少色の似た所からかくいうたのである。

*つきしろ　東の山に茜さし、はや月しろぞあがりける(用明天皇)　あれ月白も上つたり(艶狩)
〔月代〕月將に上らうとして東天白み渡る時を云ふ。轉じて月をもいふ。

*つきだし　霞の袂虹の帶、雲の上衣なゆりかけて、新艘突出し出立ばえ(壽門松)　五月十五夜突出し女郎、何處の雲も障り無き(百日曾我)
〔突出〕突出女郎の略。禿育ちでなく初めて客を取る、即ち初見世の妓を云ふ。

突出鬢の下笄　これ其證據と頭巾を取れば突出鬢の下笄、鼈甲差櫛さしもの粹ども呆れて(夕霧)
鬢を突出し笄髷を下げて結んだもの。女用訓蒙圖彙(元祿五年刊)卷三に、「笄髷は下髮せし女公人など其鬢じまひ内々の局などに入くつろぎ、又はおのがじし打寄る時、下髮は身持むづかしき故くるくると廻して笄にて假に縮め置きたるなり、其樣面白しとて何時しか常の結ひ樣になりたるなり。末の世には下髮せぬ際の人柄もなべて笄髷を結ぶなり」し、西鶴撰・浮世花鳥風月、島之部に、「出立常めかぬ末使の女、菊唐草の地なしの小袖に薄紫の中幅帶後結に、裕に、髮は笄髷なる程下へ持つて行きて、跳元結の日に立つ程に折掛け」。


〔髷笄〕

つきともない　もつとも掛は負うたれども、節季でもある事か、つきともない今日に限りこのやうにせがむのは、ムム合點ぢや(三枚繪)
〔月とも無い〕月末でも無いの意。賣掛の集金は節季若しくは月末に行つたものである。(「つき(附)もない」とは別)。

つきのみふね　三五夜中の月額、月の御舟に水棹さし(加增曾我)
〔月御舟〕月の空行く樣を舟の水を渡るに見立てて云うた語。玉葉集・卷八。旅歌の部に、「暮れぬとて泊を急ぐ浦波に、月の御舟ぞ出で代りぬる」。

つきふさがり　思返せば胸塞り月塞りの駒の足(大經師)
〔月塞〕往時陰陽家の云うたもので、正・五・九月は北、二・六・十月は東、三・七・十一月は南、四・八・十二月は西を塞りと稱して、其方角に向つて家造婚姻旅行等をするを忌む。ここの文は大經師に關係ある曆上の語を用ゐて文飾としたる趣しである。

*つぎほうめ　老木の松はつれなくて、初咲櫻つぎほ梅、盛りの花の嫁遂の(會稽山)
〔接穗梅〕接木をするに接がれる幹を臺木と云ひ、接ぐ枝を接穗と云ふ。接穗梅は接木の梅である。

*つきまち　此國の驗者那智の妙法坊と云ふ山伏、月待の歸るさに此所を通られしが(用文章)
〔月待〕往時、三日、十七夜、二十三夜、二十七夜に行はれ、其式は粗日待と同じものである。日待の條を併せ見よ。ここの文は妙法坊が月待の會に請ぜられて行き、その歸途此所を通つたのである。黑川道祐編・日次紀事・正月の條に、「三日・十七夜・二十三夜・二十七夜、有レ待レ月、其式粗同(日待)」。

つきもしほもない　つきもしほも無う半七に何用あつて上られた(女腹切)　父樣つきもしほも無い鐵炮何になさるるぞ(三國志)
「附も無い」は「似つかはしうない」「緣もない」の意。「しほも無い」は「愛想もない」「にべもない」の意。何の緣もゆかりもない。

*つきゆみ　今は力もつき弓の、いる甲斐なさに馳廻り(門出八島)
〔槻弓〕槻樹で造つた弓。ここの文は槻に盡をいひかけたのである。

つく　銀の鈂打つたる鐵の棒提げ(孕常盤)
〔鈂〕もと弓に打つ折釘を云つたものであるが、轉じて鋲に云ふ。五武器談に、「弓のとつか上、矢ずりの處に打つ折釘をいふ、これは矢のこぶしより外れて、矢こぼれせぬ爲に打つなり、但これは人の好にまかせてうつ」と見えてゐる。

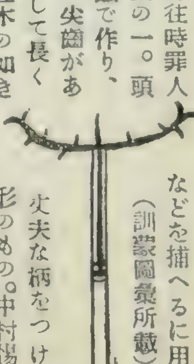
*つく　傍輩どもがけんねじついて錢儲けする羨しさ(丹波與作)　しやんぐしやんぐと鈴鹿で皆ついてゐる、此處へもちよつと出かけてまた六百してやつた(丹波與作)　男と女と喧嘩して、……扱になりしやら錢をついたも慥に見た(歌念佛)
〔突〕突出す。手に錢などを握つて突出す。この語多く博奕に用ゐられてゐる。

*筑紫琴　(三世相)
俗曲を奏する十三絃琴をいひ、後奈良天皇の頃肥前の賢順といふ人これを作り、寛文頃筑後の善導寺の僧法水が關東にあつて其技を傳へたといふので、この名がある。また箏をもいひ、宇多天皇の時筑紫の石川色子といふ人、豐前國彥山で異國人からその技を習ひ傳へたといふので、この名がある。

づくにふ　「ずくにふ」を見よ。

つくね　「つらね」を見よ。

*つくぼう　敵の棄てたる鎗・長刀・つくぼう・さすまた・熊手抑取り打かたげ(最明寺殿)
〔突棒〕往時罪人三道具の一。頭部は鐵で作り、多くの尖齒があり、そして長くて、撞木の如き形のもの。中村惕齋撰・訓蒙圖彙に、「鐵杷。今按俗云つくぼう、鐵鈀同」。


丈夫な柄をつけなどを捕へるに用ゐた
(訓蒙圖彙所藏)
〔うぼくつ〕

つくまのなべずみ　かの髮染むる藥など仰に任せ、腰元達思ひつく摩の鍋墨を油に溶きて採附け(井筒)
〔筑摩鍋墨〕ここの文は、思ひ付くを筑摩にいひかけ、近江國坂田郡筑摩神社の鍋祭を鍋墨にいひつづけたのである。筑摩神社四月八日の祭禮に八乙女が各鍋釜を戴き、神饌を備へるのが古の遺風なる由、文德實錄に見えてゐる。中川喜雲撰・案内者卷二、四月朔日の條に、「江州筑摩祭＝此所の女房は夫をかさねし數ほど、祭の時鍋を被くとなり、昔ある女多くの男にあひける、これを隱さんとて入子鍋をつくり、大なる鍋に入れて唯一つ戴きたるやうにて祭の日渡りしかば、此女道にてころびければ、鍋多くくづれ出でつつあらはかされ侍り、今は祭も絶えて名ばかり殘れり」。

つくもがみ
「百歳に一歳足らぬつくもがみ」を見よ。

若き女被る、紐紅淺ぎなり、ためにぬり内黒ぬりにしたるは老女被る」云云。好色旅日記(貞享四年刊)巻三に「一むかしいぜんはやるつゞらがさ今は見ぐるし」とあるから、この笠寶永頃は甚しく流行後れのものである。

***つどつど**　在所の嫁入をお止めなされ下されと、つどつど語る下心(今宮)　年月の御懇忘れはせぬと、つどつどに賴みます、伯母樣もさらばと(氷朔日)

〔都度都度〕毎毎。その度毎。俚言集覽に「ツドツドは毎毎の如し、湊(つど)ふ義なるべし」。

***づない**　さてさて圖無い大矢(會稽山)　ああづなう草臥た(女護島)　五尺ばかりの山の芋、仲間二人が指荷ひ、料理場の板敷へ菰を放して昇上ぐれば、半兵衞横手を打ち、扨も圖なし、御當地は芋所か一生の見初め(宵庚申)　色里に無い圖な騷ぎ、よれ樣方いかに(女腹切)

〔圖無〕方圖も無い義。圖外れな。法外な。

繋菱(つなぎびし)　六尺はつなぎびし(薩摩歌)



〔つなぎびし〕

〔繋菱〕鶏籠標。(徳島城主・蜂須賀淡路守綱紀の鎗標)。

つなすくみ　畜類ながら性あれば最期を惜む綱すくみかや(丹波與作)

〔綱竦〕手綱を引いても馬のおそれ縮んで動かぬこと。

つなぬき　忍辱(にんにく)慈悲(じひ)のつなぬき(大織冠)

〔貫〕毛皮沓をいふ。貞丈雜記・巻十一に、「䠔つらぬきとも䠔つなぬきとも云ふは大將の䠔沓の事なり、大將ならずとも常の人もつなぬきともつらぬきとも云ふ」。(序に云「つらぬく」(貫)を「つなぬく」ともいふ。信濃源氏木曾物語(淨瑠璃)第三に、「太刀の切先口に銜へ眞逆樣にどうど落ち、つなぬかれて失せければ」)。



〔つなぬき〕

つのもじ　つのもじに、ともじしもじもことわりや(源義經)

〔角文字〕假名の「い」文字をいふ。「うしの角文字」を見よ。ここの文は、ともじは「と」、しもじは「し」であるから、「いとしと思ふもことわりや」の意である。

つはいほう　夥長(ほいちやう)夥長財附(つはいほう)、アア胴慾なこんはんにや(國性爺後日)

〔財附〕西川忠英撰・華夷通商考(寶永五年刊)巻二、唐船役者の條に「財附(つあいふう)——荷物商賣諸事の日記算用を主とる役なり」。今の支那音は tsʻai fu である。

づはちぶん　ないと應へて振出す手先上りの頭八分、腰の捻(ひねり)に足取に(薩摩歌)

〔頭八分〕物を捧げ持つに手を頭より少し高く上げること。(眉と等しい程の高さに捧げるを目八分と云ふ)。

つばな　つばな亂れてみあれのの、櫻ばまだし梅薫る(女夫池)　法(のり)の爲とや糊つけて、張りて乾してはつばなかし(嵯峨天皇)

〔茅花〕「ちがや」(茅)の花穗をいひ、また茅をいふ。綿を茅花の穗のやうに摘み弘げて、ほほけさすを「つばなかす」といふ。

つばめ　櫻咲く彌生(やよひ)は雁(かり)の出代(でかは)りに、新參(しんざ)の燕置きつけて(薩摩歌)

〔燕〕燕は春來つて秋去り、雁は秋來つて春去るものとして、古今集春の部伊勢の歌にも、「春がすみたつを見すてて行く雁は、花なき里に住みやならへる」とある。薩摩歌のここの文は、毎年三月五日奉公人の出代り時に、舊奉公人去つて新奉公人の來るを、雁去つて燕の來るに喩へたのである。

つばめ　跡のこじりの帳面の、つばめ合せと親方が、鞘鳴りするぞ道理なり(女腹切)

「つぼめ」(括)の義。總括。總計。西鶴撰・胸算用巻一、長刀はむかしの鞘の條に、「毎月の胸算用せぬによつて、つばめの合はぬ事ぞかし」。俚言集覽に「算用の都合をツバメと云ふ」。女腹切のこの文は鍔目(鍔際のこと)をいひかけたのである。

***つはり**　靑梅好(す)きやらばつはりでござろ(百日曾我)

〔惡阻〕女が懷妊した當初に起る病で、この時は胸元惡しく酸氣の食物を好む。和名抄に、「辨色立成云、擇食、和名豆波利」。

***つぶ**　打ちみしやいでも粒三文も無いは知つて居る(女腹切)　いつおのれに粒三文も借つた覺えはない(大經師)　糠袋はおれに下されれ、巾着にして穴一(あないち)のつぶ入れます(萬年草)

〔粒〕小さくて圓いものの稱。錢(ぜに)。

つぶしまだ　袖の模樣と大磯の虎が仕出(しだし)のつぶしまだ、右八文字の玉鉾や(五人兄弟)

〔潰島田〕島田髷(「しまだ」を見よ)を扁平に結(ゆ)うたもの。

***つぼいり**　是子供・座敷へ盃持っておぢやと呼ばはれば、禿ども・つぼ入のお客があるといふを聞いて(本領曾我)

〔壺入〕局入。女郎部屋に入ること。女郎部屋で遊興すること。長崎土産に「當所は昔より揚屋はなくて、廓(くるわ)に局入(つぼいり)なれば」。「つぼね」の條をも併せ見よ。

つぼかざり　三幅對三つ具足壺飾の品品(鎗權三)

〔壺飾〕茶道の語。其かこひ(數寄屋)の裝飾。

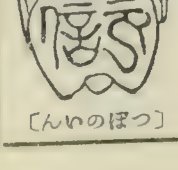
つぼすみれ　躑躅(つつじ)・紫雲英(げんげ)・壺菫(十二段)

〔壺菫〕すみれの異稱。その花の形壺に似たるが故にいふ。

***つぼね**　我娘から穿鑿せん、局はなきか姬をこれへ連れ來れ(冷泉節)　狹き局のありし夜の、逢ふ瀨に似たは似たれども(冥途飛脚)　あれあの鼻の先の數寄屋へ病人めを打込んで置く、皆見舞に行く事無用、禿めら局の奴らでも白妙に水でも食(くら)はしたら棒縛り(酒呑童子)　局女郎に擬へて牡丹畠の名盡しに(生玉)

〔局〕部屋をいふ。部屋を有する侍女。侍女。轉じて遊女の部屋をもいふ。「局女郎」は、色茶屋に行かないで我が局で濟すより云うた名で、下位の遊女即ち端女郎(「はし」を見よ)のことである。「局の奴らでも」とあるは、局女郎の奴らでもの義。「狹き局の」とあるは、見世女郎梅川の狹い部屋を云うたのである。

壺の印(つぼのいん)　その筆先に金銀もわきていづみの壺の印、並(なら)びなつげの狩野(かの)の



〔つぼのいん〕

へ手づから縫ひしとて、指貫の手際皆目の槌の子なり」と、骨我屑八景のここの文は、供先打割る槌に槌の子をいひかけ、誰門松のここの文は、槌の子抱いて寢るに、槌を持ち俵をふまへた大黒天をきかせたのである。木槌頭は恰好が惡いによつて、巣林子作・釋迦如來誕生會に、「梲槌頭 槌頭の報いを聞うて聞きやらぬか」と見えてゐる。

つつ　殿達方はふつとつつに出逢うて、大きな腹を持ちかけられまいものでもない（蛙合戰）

「つつもたせ」の略。「つつもたせ」を見よ。

つづ　つづや二十の黑髮に、變らで澤の附くならば何か寶の惜しからん（井筒）

十九をいふ。十のトをツに通はし、一ツ二ツのツを添へていへるもので、十なるを誤つて十九のことにいふ。

つつお　千兩二千兩はつつおでもあること（淀鯉）

「つつおちまい」（筒落米）の略。米の落こぼれを云ふ。嬉遊笑覽に、「今米さしといひて竹にて作り、俵にさしこみて米を出す筒あり、それより落こぼれたるをつつお米といふ、永代藏に、水揚の折節こぼれすたれたる筒落米をはき集るものを筒落需といふことあり、もとは筒より落ちたるなれど、後には唯落こぼれたるをもいへりと聞ゆ」。

つづき　一昨日の夜からつづきが來て、今宵は猪の七年物、特牛程ななしてやつて（持統天皇）

〔續〕好運が續くこと。

つつくり　母は始終つつくりと、のうお傾城の詰開さはむづかしさうな事や（壽門松）

徒空の義か。つくねん。大藏流狂言・二人大名に、「只つつくりとさへ致いて居れば濟む事でござる」。

つつごかし　つつごかしの顏でつらりと九文十文づつ、百の口を拔いて置けや（心中萬年草）

〔筒轉〕「筒」は錢筒、「ごかし」は上手ごかし、お爲ごかし、などいふ「ごかし」と同じ語。「筒轉しの顏」とは、筒轉しに百文の顏の意、卽ち錢筒で量つたのだから百文あるに間違ないやうな顏つきして誤魔化すこと。

***づつない**　姉も共に勘當ぢやと喚き散してござりました、それで走つて來ました、ああづつなやと息をつぐ（生玉）　づつないかか樣かか樣、かか樣はまだ歸らずか（女殺）　アアづつない苦しい（女殺）

「じつゆない」（術無）の訛。鄙草（元祿十四年刊）に、「無術。づつなきは誤」。「じゆつない」を見よ。

***つつぬけ**　なう聲高い御前へ筒拔け、今横になつてお休み、御目が覺める物靜にといへども聞かずりましぢやもの（雪女）　あいつが見た事聞いた事、其日の中に大阪中に事觸れ、……それであいつが名を筒拔けと附けて置く（生玉）

（三國志）　奧の事は筒拔け、飛脚よ

〔筒拔〕筒の一方の口から他方の口へ物が拔通るやうに話などがその儘に漏洩すること。

つつぱしる　柳町のしやうしやうていども請出いて上方さなへつつぱしろ（博多）

〔突走〕長崎及び薩摩國訛に現今も、走るを「つつぱしる」、倒れるを「つつこくろ」、折れるを「つん折れる」、曲るを「つん曲る」といふ。（薩摩國訛にはかやうな接頭語の添はるものが少くない）。

つつぽり　玉は寢もせず寢所に、只つつぽりと起き居たり（大經師）

蕭然（淋しうわびしいさま）と身を小さくしてゐるさまにいふ。巣林子の文中に、ぽんやりとして平氣な樣をいふに「ぬつぽり」とも「ぬつくり」とも書いてあるやうに、「つつぽり」も「つつくり」も同じやうな語であらう。「つつくり」はかた言に「獨り立ちたるさまにいふ語」と見え、狂言・二人大名（大藏流）に「只つつくりとさへ致いて居れば、濟む事で御座る」と見えてゐる。

***つつまし**　變る姿のつつましや、相見ることもこれ限り（反魂香）

〔愼〕恥かしい。事を愼む義。敬ふをつつしむといふのも、心のあらけず包みこめる義である。よつてまた「はづかしい」の意にいふ。源氏物語・帚木の巻に、「涙をもらしおとしても、いと恥かしくつつましげにまぎらはしかくして」。

つつまもり　日傘さすてふつつまもり、思ひ思ひに携へて御供申し出でにけり（伊豆日記）

〔筒守〕小さい竹筒に鈴を附けて小兒の守とするもの。小笠原傳書に、「筒守の事。嬰兒宮參の輿の先に懸緒を片緒にして引き懸くるなり、その外他へ出で給ふにも同じ事なり」。

つづみぐさ　はやせやはやせつづみ草（十二段）

〔鼓草〕蒲公英の異名。俚言集覽に、「鼓草。たんぽぽ也、（ひそめ草）たんぽぽを鼓草といふ」。ここの文は草の名寄で、つづみにつづみ草をいひかけたのである。

つつもたせ　あらこはや怖しや、これ龍宮のつつもたせ（女護島）

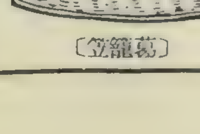
「美人局」など書いてある。夫となれ合の上他人と姦通し、それをかかりに金錢を强請すること。美人局と書くは、通俗編に「武林舊事游手奸黠有ニ所レ謂美人局者一、以ニ娼妓一僞爲ニ妻妾一、引ニ誘少年一爲レ事、有ニ水功德局一以求レ官覓擧、訟獄交易爲レ名、假ニ借聲勢一脫ニ漏財物元典章大德十年禁ニ局騙一條亦言ニ及美人局一」とある故事に據つたのである。風流徒然草に「筒もたせとて、男合點にて女房をうまくこしらへ、すそばりなる者を引こみ、首尾よき時分夫出あひねだりて金銀をとりける」。

つつらい　時に忠信緊目結の直垂に緋縅の鎧を着、兜の緒を締め、淡海公より傳はつたるつつらいの打刀、君より下し賜はつたる黃金作の太刀を佩き（吉野忠信）

刀劍の名、長さ三尺五寸ある。判官物語・忠信吉野山合戰の條に、「忠信はやがて御前にぞ出でたりける、三つ緊目結に白星の兜の緒を締め、淡海公より傳へたるつつらいといふ太刀三尺五寸ありけるを佩いたりける」。

***つづらがさ**　あれへ見ゆるは親父ぢやないか、つづら笠はゐまめぢやわ（卯月紅葉）

〔葛籠笠〕つづら藤を編んで造り、婦人外出の時被つたものである。日次紀事（延寶年中成）正月の條に、「至ニ晴天一　（守貞漫稿所藏）則必賣ニ編笠・葛籠笠及日傘一、編笠男子出行、則障レ日幷覆レ面之具也、葛籠笠婦人遊行之具也、云云」。人倫訓蒙圖彙・六に、「葛籠笠、つづら藤をもつて造る、水口名物なり」。我衣に、「明曆頃よりつづら笠出たり、


〔葛籠笠〕

（今宮）　母は幇間・子は大盡、はつと打つたる露よりも、太夫が情いただいて（壽門松）　駕籠立てさせて暇をやる、あたひのつゆも命さへ、惜しからぬ身は惜しからず（冥途飛脚）　昔は君が打つ露に命を繋ぎし蟋蟀（女夫池）　二腰のその一腰は、道芝の露の價と消え果てて（鑓權三）

〔露〕露の太陽に照らされて消え易きに喩へて、はかなきことにいふ。(1)「露の情」とは、はかない情愛の意。好色三代男（貞享三年刊）卷五に、「草枕結び定めんかたぞなき、ならはぬ野邊の露のなさけに」と見え、「さりともと頼みし野邊の草枕、結ぶともなき露の情を」と見えてゐる。(2)大紋・水干・狩衣などの袖括りの緒の垂れた端を露といふ。(3)わづか、少しばかりの意にいふ。「露塵」「露ほども思はぬ」などの露はこの意である。(4)小粒銀を遣すをいふ。纒頭として遣す金。豆銀（小玉銀）を投出すのが露の光るに似てゐるのでかくいふ。鑓權三のこの文は、道芝に置く露に小玉銀をきかせ、路銀の意にいうたのである。

***つらうち**　嫁を憎んで去りし故、子は面打に自害せしと（宵庚申）

〔面打〕己が恨んでゐる人に對して、これ見よがしの態度を取ること。面當。

つらになべずみ　（薩摩歌）

「ゆえんびげ」を見よ。

***つらね**　よそのつらねも我が命も、一よぎりなる憂きふしや（氷朔日）

「連唄」の略。往時行はれた小唄の一種で、緣語を連ねた文句であるが、今多く傳つてゐない。（ここの原文は、「よそのつつね」とも見えれど、「よそのつらね」とあらねば意義が解し難い。蓋し平假名の字形の相似より誤つたのであらう）。

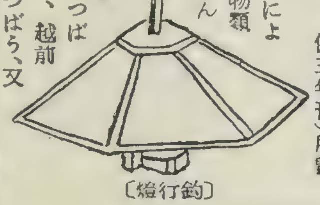
つららふ　鬢もおどろにつららひて昼寒き呼吸の下（冷泉節）

「つらら」（氷柱）を延べて波行四段活の動詞にした語。（「つらら」は「つらつら」（滑滑）の略であつて、古は氷をいうたのであるが、後には氷柱をいふ）。

***つり**　宰相殿の身に取つて露程も誤りなし、賴平に添ふ詠歌の姬、娘のつりとの事ならばこれ一つの申し譯（關八州）

釣または系の義。ちつづき（血統）。葬喪記に「系旗」を「都利波多」と訓ませてある。「引つり引つつて誰の迷惑にならうやら」などいふ「つり」も、ここにいふ「つり」と同じ語である。

つりあんどう　釣行燈の火はあかし、いかがはせんと案ぜしが（曾根崎）



傾城當照君（享保三年刊）所藏

〔釣行燈〕

〔釣行燈〕終夜點火しおくによつて有明行燈とも云ふ。物類稱呼に、「江戸にてはちけんといふものあり、竹をもて輪を作り、菅笠の如くたてに骨を組みて紙にて張り、灯を點じてうつばりなどにかくるものなり、越前にてつりあんどん、又はつばら、又につぽんといふ」。大經師昔曆・上卷に「臺所には有明の、四角行燈六角堂の、鐘こうこうと更くる夜や」とあるは、六角の釣行燈に六角堂をいひかけたのである。また大經師昔曆・中卷に「見る影細き釣行燈、太平記講釋赤松梅龍と記せしは」とある釣行燈は、吊してある門行燈（その條を見よ）をいうたのである。

つりおまへ　鍋・釜・疊・釣おまへ・糠味噌桶まではたけ出し（女楠）

〔釣御前〕佛菩薩の畫幅。胸算用卷一、長刀は昔の鞘の條に、「釣御前に佛の道具添へて」。

***つるかけ**　あの爺はつるかけの藤次兵衞、八十八で一升の飯殘さぬ（冥途飛脚）

〔鉉懸〕鉉懸の桝をいふ。松風村雨束帶鑑・第三に「鉉懸の桝で量る戀路でも、心に惚れたは氣の毒な」と見えてゐる。冥途飛脚のここの文は、米壽の賀に斗格を切つて知人に分つ慣習ある（「ますかけ」を見よ）によせて、鉉懸と渾名のやうにいひなして、八十八で一升といひつづけたのである。

***つるぎのやま**　お吉が身を裂く劍の山（女殺）　劍の山の上に戀しき人は見えたり（堀川波鼓）

〔劍山〕地獄にある劍の林立せる山。倶舍頌疏世品に「等活地獄、謂彼有情雖ㇾ遭ニ種種所刺磨擣一、而彼暫遇ニ涼風一所ㇾ吹尋蘇」。往生要集に「獄卒取ニ地獄人一、置ニ刀葉林一、見ニ彼樹頭一、有ニ好端政嚴飾婦女一、如ㇾ是見已即上ニ彼樹一、樹葉如ㇾ刀割ニ其身肉一、次割ニ其筋一、如ㇾ是劈ニ割一切處ニ云云」。

つるし　松よ又見世のつるし食ふな（宵庚申）

〔吊〕青物屋の店に吊してある果物の類。（つるしは大方吊柿をいへども、ここにいへる陰曆四月に吊柿は賣つてゐない）。

つるのひこ　三百年餘の齡を經て、玄孫鶴の彥を見る（松風）

〔鶴之彥〕鶴の孫に同じ。彥とは孫のこと。和漢三才圖會卷八、人倫、親族の部に、「孫和名無萬古、一云比古」。「つるのまご」を見よ。

つるのまご　某は六代の鶴の孫一子由良太は浦島の七世の孫（松風）

〔鶴之孫〕玄孫。和漢三才圖會卷八、人倫、親族の部に、「孫之子爲ニ曾孫一萬古　俗云比　曾孫之子爲ニ玄孫一之孫　俗云鶴」。

***弦走**　義貞すかさず弦走にのつかかり、首をかかんとし（女楠）

鎧の胸板の下即ち二の板から以下、胴の正面を染革で包み、これを弦走といふ。胴の札を革で包むわけは、弓射る時弦の札に障つて堰かれぬ爲である、よつて弦走と云ふのである。

弦走　梓の弓の末弭に弦走して失せにけり（卯月潤色）

弦音が走るやうな鳴り方をすること。

つるばみのぎよい　又五郎橡の御衣取つて淸瀧に打着せ（弘徽殿）

〔橡の御衣〕薄黑染衣であつて天皇の召し給ふ凶服。橡は團栗の古名、昔團栗の梂を染料とした染色をいふ。

つるびし　時代の金襴・鶴菱・たすき、花兎・窠に霰（丹波與作）

〔鶴菱〕鶴の翼をひろげたのを菱形の紋にした時代裂の模樣。好色二代男卷五に「鶴菱の下著一つ」。

つるべ　四天王は遠卷きにして鐵砲つるべよ（三國志）

「つるべうち」（連發）の略。

***つれ**　常常大頭の舞を好き、わらは諸共つれわきにて舞はれしが（反魂香）

〔伴〕舞などでその曲の主人公たるべき者をシテといひ、シテに對する者をワキと云ふ。シテまたはワキに伴うて出る者をツレと云ふ。

つれづれ　網島の心中もござんする、つれづれ、平家物語、なう父樣何の本がよからうぞ（宵庚申）

筆(反魂香)
狩野元信の印形である。

つぼや　醫者殿は藥師如來の引合せ、壺屋の客と脈を取る(女腹切)
〔壺屋〕醫者の縁から藥師如來(大醫王佛とも云)といひ、この如來は壺を持つた像があるので、壺屋の客といひつづけたのである。

つぼをる　小袖の衣端つぼをつて近く寄れ(源義經)
つぼめ折るの略。衣をつぼめ折りはさむ意で、衣の端をからげるをいふ。

*__つま__　兄兄達を差置きつまの泉に御賴み、何か違背申されん(源義經)
餘所のつまごと羨し(女腹切)
夫婦間に於て、妻は夫を「つま」といひ、夫は妻を「つま」といふ。萬葉古義に「つまは今のつれあひといふ詞に同じ」といへるは稍當つてゐる。「つまごと」は、夫婦の樂事をいうたのである。

つまぎ　財寶は地獄の家產、名聞は焦熱の爪木とも譬へたり(蟬丸)
〔端木〕木の端の義であつて、爪木と書くは假借字である、薪とする爲に折つた細枝。萬葉集・卷七の歌に、「磯上爾爪木折燒云云」。この文は、財寶も名聞も共に五欲の一である、人これに執着する爲に未來世に於て無量の業苦を受けるの意。智度論・十七に、「哀哉衆生常爲二五欲一所レ惱、而求レ之不レ已、此五欲得レ之轉劇、如二火炙一レ疥、……五欲燒レ人如二逆風執一レ炬、……世人愚惑貪二著五欲一至レ死不レ捨、爲レ之後世受二無量苦一」。

*__つまぐし__　人になつげの爪櫛も(蟬丸)
〔爪櫛〕齒の繁くて細い櫛。「ゆつのつまぐし」をも見よ。

つまごひどり　人にはあらで妻戀鳥の、羽音に怖ぢる身となるは(冥途飛脚)
〔妻戀鳥〕雉子をいふ。萬葉集・春の部、雜歌に、「春の野にあさるきぎすの妻戀に、己があたりを人に知れつつ」。巢林子作・松風村雨束帶鑑・第三に、「妻戀ひ雉子音をなきて」。

*__つまど__　妻戶を上り長押を傳ひ(松風)
〔妻戶〕「つま」は物の端をいふ。つま戶は端戶の義。つま戶は板戶を兩開きにしたもので所謂觀音開戶であつて、對の屋や寢殿の四隅にあつたものである。

つまなしがらす　供人少少召具してつまなしがらすうかれ出で(三世相)
〔妻無烏〕やもめ烏をいひ、以て鰥男に譬ふ。源平盛衰記・阿卷三十六、熊谷大手に向ふ條に「やもめ烏のうかれ聲……物哀れにぞ覺えける」と見えてゐる。

つまばらみ　つらや尖りてつまばらみ、安からぬ世にまひまひと、何時まで一人舞ひくらす(松風)
〔爪孕〕指の病名、甲疽をいふ。ここの文は爪孕に妻を思ふをきかせたのである。

詰らぬ銀　いかう詰らぬ銀なれども、今に先から來るわいの(重井筒)
無くては詰りのつかぬ銀。無くてはどうにもならぬ銀。

つみ　さて御鷹はつみ・えつさい・さしば・せう・隼・このり(百日曾我)
〔雀鷂〕小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸二分ある。雌を「つみ」といひ、雄を「えつさい」といふ。

摘鳥毛の唐人笠(薩摩歌)　出羽の米澤は摘鳥槍標。



(米澤城主・上杉民部太輔吉憲の
〔つみとりげのたうじんがさ〕
槍印)。

*__つむ__　男やなんど持ちやんなや、身につみてこそ知られたれ(堀川波鼓)
〔抓〕つめる。つねる。「身につみてこそ知られたれ」は、身を抓みて人の痛さを知るの諺に據つたのである。

*__つむ__　面瘦せて丸藥つんでおはするは河津殿の後家御樣(本領曾我)
一貫五百がうゐらうつんだこの甚藏(脊庚申)　近くへ寄つて物言はば、うゐらうつめとざわめきて(兼好)
縫針・綿もつむ(生玉)
〔撮〕前條の語の轉。つまむ。「うゐらう」の條をも見よ。「綿を摘む」とは、綿を纏ひ引伸すをいふ。人倫訓蒙圖彙・卷六に、「綿摘＝帽子綿小袖中入これをつむ女の業ながらも、老女又は小娘の所作にて云々」。「綿摘み」を見よ。

つむぐ　齒を食締つて口つむぎ、拂ひのくれば後へ廻り(唐船噺)
「つぐむ」(鉗・噤)の「ぐ」と「む」と轉倒した語。口を閉ぢる。この語現今も福山市などの地方で用ひてゐる。

*__つめ__　枕のお伽が御用なら振袖なりとつめなりと(丹波與作)　振袖でもつめでもいつ呼んだ(娥)
〔詰〕詰袖の略。詰袖の衣を着る年增の女。娘の着る振袖に對する語。「ふり」をも見よ。

*__つめひらく__　默つてゐるは怯けた事、あがつて一つ詰開かんと、脇差おつ取り出でんとすれば(二枚繪)　それ程他事無い中で譯の惡い仕方、わしやきつと詰開かうと走り出づるを(博多)　のうお傾城の詰開きはむづかしさうな事や(壽門松)
〔詰開〕是非を糺し理窟をいふ。談判する。「詰開き」は轉成名詞。色道大鏡卷一に、「兵法より出でたる詞也、爰にいふは物の差配・ことわりの是非を糺し、道理を盡す詞也、また詞の外に人人への音信音物などに就いて、そこそこへ氣を配るをつめひらきと云」。

*__つもる__　最早獻もあひました、然らばこれでつもります(扇八景)　とどり廻る御土器、既に女御の御つもりと、取上げ給ふ(浦島)
其酌を限りに納めとするをいふ。「つもり」は轉成名詞。俚言集覽に、「つもり。飮酒の畢りをつもりと云、つもりはつまり也、とまり也、つもり、つまり、とまり、同じ言なるべし」。

*__つもる__　僞多き遊女の習ひ驚くべきにあられども、これ程まで能うも能うも此左近をつもりしな(夕霧)　おらんが來たも皆あひけん、積られただまされた(薩摩歌)
〔積〕人の心を見積つてだますをいふ。みくびりだます。

つやつや　國司の姿をつやつやと打ち眺め(小栗判官)
倩倩。花の名殘(天和四年刊)卷一に、「少人ませ垣の下をのきかねて、つやつや守り居給ひしが」。

*__つゆ__　あだな契もあだにせず、心の底に結び置く、露の情ぞあはれなる(薩摩歌)　火紋の露結んで肩に掛け(世繼曾我)　狩衣の露長長と結び下げ(最明寺殿)　憎みは我が身一つにて、そこは露ちり厭はれども

〔者〕「といへれば」の約。古事記。和銅五年安萬侶朝臣の序に、「撰ニ録稗田阿禮所レ誦之勅語舊辭ニ以獻上、者謹隨ニ詔旨ニ子細採摭」と見ん、東鑑などにも「者」の字を「ていれば」と訓んである。饅頭屋本・節用集に、「者」。者の字を書くは、支那の書に天子の詔勅臣下の奏書に、多く者の字を用ひるに據つたのである。

***てう** 心底が語りたさ傍へ寄れば、ぴかしやかと拗言のあるでう、安堂寺町とは何事ぢや(今宮) 何處ぞに娵が結んであると、辛氣のあるでう、御心がもだつきそめ(千疋犬)

〔條〕段。限り。(古院本には「有じやう」となつてゐる)。(「なんでふ」(その條を見よ)の「でふ」とは別)。

てうかう (孕常盤)(大職冠)

〔趙高〕秦始皇帝の臣である。嘗て諸臣の心を試さうとして、二世皇帝に鹿を獻じて馬だと言うた。二世皇帝笑つて之を劍の臣に問うた。趙高その鹿だと言う者を法に處した。是より群臣皆畏れて敢て言ふ者がない。趙高の專橫極りなく、遂に帝を弑した。嬰位に卽くに及んで趙高を族誅した。委しくは史記・秦本紀などに就いて見よ。

てうすがう 異國の王羲之・趙子昂が石に入り木に入るも、和畫に於て例なし(反魂香)

〔趙子昂〕趙孟頫は號を子昂と云ひ、宋の人である。書を好くし畫に巧みである。殊に山水木石花竹人馬を描くこと尤も精巧緻密であつた。ここの文に「石に入り木に入る」とあるは、「王羲之・趙子昂が石に入り木に入る」を見よ。

てうせんたか 鷲・熊鷹・白鳥捕りの朝鮮鷹(百日曾我)

〔朝鮮鷹〕朝鮮から來る大鷹。倭訓栞・「たか」の條に「大なる者を大鷹と稱す、大鷹は朝鮮より來るとぞ」。

てうぢやう 「ちようでふ」を見よ。

てうはつだいご 超八醍醐の鷲の峯、上なき御法と說かれたり(百日曾我) 日頃信じ奉るてうはつだいごの法華經力(五人兄弟)

〔超八醍醐〕法華涅槃の教は八教に超え勝れ、然も八教を攝合せる醍醐味の教であるの意。「八教」は天台宗で云ふ所で、藏、通、別、圓の化法の教と、頓、漸、祕密、不定の化儀の四教をいふ。「醍醐味」はその條を見よ。

***てうぶく** 味方の祈禱敵調伏と觀念し(國性爺)

〔調伏〕探玄記・四に、「調者調和、伏者制伏、謂調ニ和控ニ御身口意業ニ制ニ伏除ニ滅諸惡行ニ故」」と見えてゐる。眞言宗などでは、祈禱によつて佛力を賴み、法力によつて怨敵を降伏せしめることにいふ。

***てうもく** 御褒美にこの鳥目百足下さる(夕霧)

〔鳥目〕錢をいふ。塵添壒囊抄に、「錢を鳥目鵝眼と云は何の謂ぞ、鳥目鵝眼青鳧なんど皆料足の異名也、鳥の目は圓き故に爾云、鳥の大小同く目の圓なる樣に、錢も其品異れども、其形共に圓きが故也」。

てうらい 「ちやうらい」を見よ。

***てきでん** 市之進一流は東山殿よりてきでん、一子相傳の大事なれば(鑓權三) 雪舟のてきでんとして代代の御扶持人(反魂香)

〔嫡傳〕的傳とも書く。正統の相傳。直傳。合類大節用集(享保二年刊)言辭門に「的傳、又云直傳」。

てきないこむ 二合半の盛切おたい喉に詰つて、ぎつちぎつちてきないこんでごはりまする(宵庚申)

物詰つて苦しい。せつない。じゆつない。越谷秀眞編・物類稱呼・五に、「勞して苦しむことをせつないと云ひ、又じゆつないと云ふを、加賀にてテキナイといふ」。現今も岐阜縣吉城郡袖川村地方では、「苦しい」と云ふ意に「てきない」というてゐる。

***てぐすねひく** そりやそりや來たぞと、三人が手ぐすね引いたる顏色、小菊遠目にはつと驚き(女殺) さあ下馬せうかせまいか、但し引ずり下さうかと、手ぐすね引いてせめつくる(艶狩)

手に藥煉を引く義。力を入れようとする時手に唾して物を取る。轉じて、充分用意して敵の來るを待ち受ける。藥煉とは松脂と油とを煉合せて作つたもので、物を手に取る時之をつければ落ちぬからかくいふ。保元物語に「手ぐすね引いてためらひ見る程に」。

てくら 頭は日本、胴は唐との襟界、ちくらてくらの一夜檢校、終に見馴れぬ出立ばえ(博多) 阿彌陀佛まで質屋へ飛ばし、手ぐらまぐらに調へ(女楠)

「てくろ」とも云ひ、手暗または手黑の義。目當のつかぬこと。當座ごまかし。俚言集覽に、「手くろ。手くらとも云、(毛吹草)雪を花とらすは風の手くろ哉」。「てぐらまぐら」は、手暗目暗で、目前は暗で當座凌ぎをいふ。俚言集覽に、「手暗目暗なり」。西鶴撰の織留(元祿七年刊)卷五、具足甲も質種の條に、「この歐千軒何をかして世を渡るとも見えざりしに、朝夕の煙立てけるは、せめても大川の舟着にて、艫から舳へ身代の楫を取つて、手ぐらまぐらと年浪をわたりける」。江島屋其磧撰・世間手代氣質に、「算用あひを度度聞けば、おのづからてぐらまぐらの銀まはしもならず」。

***てこ** これから並んだ妹背の中、そなたのやうな女房が千人萬人妨げなし、てこを入れても離れはせぬ(薩摩歌) 鍛冶屋のてこの衆、てつからりころり(氷朔日) 大名方の御墓のそば見苦しき素浪人の古塚、てこの者どもこれ跳ね起して棄てよ(扇八景) 小藤太がかんづか摑んで取つて引伏せ、てこのまものに縛り上げ(扇八景)

〔挺子〕槓杆をいふ。木石を引くに下に木橫をくはふ、これを挺といひ、手木の義である。「挺子の衆」または「挺子の者」とは、槓杆をもつて働く人だち、卽ち鍛工、石工、土工の人だちをいふ。「てこのまもの」とは、挺子の者の使用する索をいふ。「まもの」は眞物で、卽ち麻索のこと。「まもの」を見よ。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷三に「挺者。普請の場又は大石大木を引動す役人也、飛口をもつて打立てて引く事もあり、是によつて、飛者といふは飛口者といふ事ならし」。

でこのぼう 堺町・木挽町のてんつくてんつくでこのぼう、辨慶や公平がえいやつととのえなどと斬合を見せませう(丹波與作)

「てぐろぼう」の訛。傀儡をいふ。偶人を唄に合せて舞はせる伎。

てこのまもの 「てこ」を見よ。

てし 千手の眞言十萬遍唱へ込みた

徒然草の略で、吉田兼好の隨筆書である、そのいふ所老莊孔孟の敎を交へ、殊に佛說を主とし、社會萬般の思付の儘を書いたものである。

***つれづれ**　何人(どなた)なればこの樣に愁にして下さると、顏をつれつれながむれば、梅川いとど胸(むね)づはらしく(冥途飛脚)

「つらつら」(熟)。つくづく。

***つゐしゆ**　堆朱の香箱御前に差出せば(孕常盤)

〔堆朱〕朱漆を厚く塗り、山水花鳥などの模樣を堆く彫上げた細工。

***つゐな**　御大將義敎公・赤沼が館に入御あつて追儺の御祝儀行はる(雪女)

〔追儺〕昔宮中で每年十二月晦日に疫鬼を拂ふ爲に行はれた儀式であつて、鬼やらひともいふ。民間でもそれに倣うて、節分に豆を打ち鬼を追拂ふ式をなす。これを鬼やらひとも云ふ。(序に云、朝廷で追儺の式が行はれたのは慶雲三年十二月に行はれたのが最初である)。

***つゐはう**　科は何ぢや知れぬが、勝次郎は追放で八幡ば煮える(淀鯉)

〔追放〕德川時代に行はれた刑法で、役人數多附添うて手手に割竹を持ち、罪人の國籍を削り財產を沒收して領地境まで連出し、それより國外に追拂うたものである。

***つゐぶく**　武門の御身に御信心御孝行の御追福感じ入り候(心中萬年草)

〔追福〕亡者の爲に營む善業をいふ。追善。追善供養。

つを引く　「つ」を見よ。

つんざく　御迎にと存じ候處につんざいての御入り、外聞忝く候(西王母)

突開(つきひらく)で、即ち突然進んで來る意であらう。

づんばい　「うでなしのふりづんばい」を見よ。

つんばね　五したたに打きり、つんばねあざばね握りのそろでぞ勝ちたりけり(大職冠)

〔突撥〕突き返へす。「つんばね・あざばね」は、「つんばね」に韻脚をあはせて「あざばね」というて、めくりかるたの札の名の「あざ」(その條を見よ)をきかせたのである。大職冠のこの文は、謠曲・海士に、「乳の下をかき切り、玉を押しこめ劍を捨ててぞ伏したりける」とあるの改作。「女房故に捨てん命云云」を見よ。

つんふん　我夫(つま)ならで餘の男に笑顏さへ見せぬ身が、如何に智略なればとて敵と二人閨に入り、つんふんともなるまいし(懸物揃)

愛想なくすましこんで腹立ちげなるをいふ。つんつんぷんぷん。

づんぼうむしや　襦袢(じゆばん)一重のづんぼう武者(三國志)

ずんぼろばう武者で、裸武者の義であらう。松屋筆記卷八十四に「つんぼう武者は具足を着て指物をささぬを云」と見えてゐる。

て

てあやまち　屋根へ上れの何(なん)のといふ、手あやまちか氣遣でそれ故に戻つた(氷朔日)

〔手過〕失火を云ふ。平家物語・卷十一、大阪越の條に、「晝にて候へば手過にてはよも候はじ、いかさまにも敵の寄せて火をかけたると覺え候」。

でい　「でゐ」を見よ。

***ていかかづら**　式子の君の浮名立つ、定家葛のはひかかる(兼好)

〔定家葛〕葛の一種。葉は橘の葉に似て小さく、五味子に似、垣または石の上などを這ふ。「しよくしの君の云云」を見よ。

ていかやう　つくもさんの定家樣(三國志)

〔定家樣〕藤原定家の書流を云ひ、豐盈科斗の如く、而も筆力遒勁である、後世冷泉家の人人の相襲いで學んだものである。

***ていきん**　父が庭訓鬼に鐵棒(國性爺)

〔庭訓〕家庭の教訓。論語・季氏篇に、「陳亢問二於伯魚一曰、子亦有二異聞一乎、對曰未也、嘗獨立、鯉趨而過レ庭、曰學レ詩乎、對曰未也、不レ學レ詩無二以言一、鯉退而學レ詩、他日又獨立、鯉趨而過レ庭、曰學レ禮乎、對曰未也、不レ學レ禮無二以立一、鯉退學レ禮、聞二斯二者一矣」とあるより出た語であると云ふ。晉書・孫晟傳に、「盛性方嚴有二軌憲一、雖二子孫班白一而庭訓愈峻」。

庭訓(ていきん)の書(しよ)　今我が朝に庭訓の書を弄ぶ、もとこれ論語季氏の篇よりおもむき(用文章)

庭訓往來の書をいふ。消息文集で、室町以來近代に至るまで民間の敎課用讀本であつた、作者は玄慧法師であると傳ふれども定かでない。南北朝から室町の初頃の作である。庭訓の故事につきては前條を見よ。

***ていくわく**　朝敵の張本なれば鼎鑊の罪に行ふべしと(唐船噺)

〔鼎鑊〕脚のあるを鼎と云ひ、脚のなきを鑊と云ふ、共に鍋の類である。釜煎の刑をいふ。宋・文天祥の正氣歌に、「鼎鑊甘如レ飴」。

ていこ　丁固が夢の常磐木は藐姑射の山に枝な鳴さず(文武五人男)　莊周が蝴蝶・丁固が松、きのふは今日の夢ぞかし(源義經)

〔丁固〕支那三國時代の人で、吳に仕へて司徒となつた、初め丁固が腹上に松の生じたことを夢み、人の語つて言うに、松の字を分解すれば十八公となる。後十八年で公の位に昇るであらうと、遂にその通りになつた。吳錄に、「丁固夢三松樹生二其腹上一、人謂曰、松字十八公也、後十八年其爲レ公乎、遂如レ夢」。

ていめいだう　是(ぜ)に似たる非(ひ)ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戰)

〔程明道〕儒學の大家程顥をいふ。字は伯淳、河南の人、宋の神宗の熙寧中、王安石と新法を議し合はずして職を去る、元豐八年卒した、年五十四。世に明道先生と云ふ。

***でいり**　父樣の出入も、夏の物ども人手に渡し傍輩にも無心いひ、百三十匁とどのへ(丹波與作)　喧嘩といへば彌十郎、出入といへば小西めに投げられたの、いや踏んだ叩いたのと(三國志)　小菊めが歸るを待つて一出入と、話の内から二人のつれ、腕おしもんで力(りき)みかけ(女殺)

〔出入〕紛紜。ごたごたもめ。喧嘩。「父樣の出入も」とあるは、未進米の爲に水牢の訴訟事をさしたのである。

ていれば　文治二年丙午正月十日ていれば勅諚如件、と讀上げ給へば(佐佐木)

奥山のててうちのでんぐりぐり栗の木の、木の根を枕に轉寢(博多)
日次紀事(延寶年中成)九月の條に、「此月處處山林出レ栗、丹波大栗爲二名產一、其中至大者稱レ之謂二出落栗一、土俗誤言、古有二不孝之子一、以二斯栗一投レ父而傷レ之、因號二氏氏宇知栗一、氏氏宇知卽擊レ父謂也」。「おんらが在所はの云云」をも見よ。

ててなしがね　二百餘人の玉葛、夕べ夕べに產出すててなし金の攫取り(酒吞童子)
〔父無金〕元手なしに得る金。勞苦しないで得る金。

てならひ　紅梅、竹川、橋姬に手ならひ(淀鯉)
〔手習〕源氏物語中にある卷名。

＊**手の內**　貧女が一錢手の內の、片搗き麥を御鉢に受け、三寶供養六道の、有緣無緣の御廻向あり(孕常盤)　顏で睨みつ袖引きつ、手の內つまむも一むかし、古い仕掛が田舍なり(宵庚申)
「手の內の片搗き麥」とは、一握の片搗き麥のこと。「手の內つまむ」とは、思ひ人の掌を輕く抓つて、戀情を察しさせるをいふ。

＊**でばな**　何ぢや茄子の淺漬ぢや、一段よからう、それに出花をつけたらばと、茶臼形になるを見て(今宮)　あかゐの茶碗手にすゑて、でばな一つあげましよと差出せば(氷朔日)
〔出花〕煎茶に湯を注いだ初の花やかな香味よきもの。

＊**てはん**　白須賀ちよいと越えて、手はんござるか振袖に、ヤ此この新居・今切、舟に召せ召せ(丹波與作)
〔手判〕往時用ゐた旅行券。舊幕時代旅行するには其所在地の名主五人組の手判を得て、關所の番人にそれを見せて通過を許されたものである。殊に新居の關と箱根の關とは、名主・五人組の旅行手判無くてはどうしても通過を許されなかつたのである。次に記したのは、寶曆年間に書集めた關所留書一件の古寫本中に見える手判である。

二月幾日
幾日渡　箱根　今切　押切印也　何町何丁目誰店　誰
同
幾日渡　根府川　何町家持　誰

てぶりうぐひす　聲せぬ夏の手振鶯(女殺)
〔手振鶯〕囀らぬ手ぶらの鶯。必らずしも鶯は夏に囀らないではないのであるが、三才圖會に「潛山記云、鶯如二鵙鴿一而色蒼、每至二正二月一鳴曰二春起一、至二三月一止レ鳴曰二春去一、採レ茶之候也、呼爲二報春鳥一」と見えてゐる。巢林子のここの文は、森右衞門が與兵衞に言はうと欲する注意も敢て言はないで、馬を促す「はいはいはい」の掛聲で、手振で心を示しつつ立ち別れるを、「聲せぬ夏の手振鶯」というたのである。

てへれば　「ていれば」を見よ。

＊**てへん**　兜のてへんを地に附け申さん(聖德太子)
〔頂邊〕兜の頂天に菊座あつて、その眞中に孔があつて八幡座といふ。この邊を「てへん」(頂邊)といふ。平治物語卷二・待賢門軍の條に、「兜のてへんに熊手を打かけん」。

てまどう　とても弱き平氏の侍、ひとりづつ殺さん事てまどうなり(佐佐木)
「てまどほ」(手間遠)であらう。間怠いこと。面倒。

てまり　(嫗山姥)
〔手毬〕灌木の名。幹の高さ六七尺に成長し、葉は皺あつて圓く、こねうつぎに似てゐる、初夏の頃小花群つて咲き、初は靑色を帶び漸次に純白色に變じる。別に櫻の一種にもこの名のものがある。

てみせきん　傍でお菊は氣を採みて、包む淚も手見せ禁、命手詰と見えにけり(壽門松)
〔手見爲禁〕將棊の通語、己が持駒を相手に見せぬこと。ここの文は、淚を手で隱して見せぬことに、將棊の通語・手みせ禁をいひかけたのである。

てみそ　この世の手みその報で、若し靑馬の腹へなど生れては行かれぬか(嵯峨天皇)　さすが恩愛の手みその癖ぞかなしき、あの親の札にこそ二・三・四やあるらん(大織冠)
「てみそか」(手密)の略。人に見られないやうに隱密にする手わざ、骨牌札をごまかす手業をいふ。

＊**てもめ**　太鼓過ぎてとささやくは、女郎の手もめの振舞客(女殺)
自費で他人を饗應すること。「もめ」を見よ。

てゆふぎり　坂田藤十郎が夕霧を今一度見たいと思うたが、此紙子で手夕霧を仕る(淀鯉)
〔手夕霧〕「手」は「手もめ」(前條を見よ)などいふ「手」で、卽ち自分で夕霧の芝居をすること。巢林子作・夕霧阿波鳴渡に、藤屋伊左衞門零落し、紙子を着て、夕霧を吉田屋喜左衞門方に訪ふ場面がある。江戶屋勝次郎零落し、紙子を着て、吾妻を吉田屋仁三郎方に訪うたのであるから、「此紙子で手夕霧を仕る」というたのである。伊左衞門に藤十郎が扮したといふ「夕霧名殘の正月」といふ本は、傳はつてゐないので何ともいへぬが、恐らく夕霧阿波鳴渡に酷似したものであらう。

てらいり　和子設けて久太郎町と、やがて寺入久寶寺町(今宮)
〔寺入〕寺小屋へ入學すること。「てらこ」を見よ。巢林子のここの文は、和子設けてその名にふさはしい町名の久太郎町にいひかけ、その子のやがて成長して寺入を、寺名に似た久寶寺町にいひつづけ、久太郎町・久寶寺町は二郎兵衞・おきさの道行として擧げたのである。

てらこ　柳の馬場のあこうと申す綿摘教へる寺子取(酒吞童子)　視れば昔の寺友達、義朝の膝元去らず澁谷の金王丸幼顏疑なし(烏帽子折)
〔寺子〕「寺子取」とは、寺子屋から弟子を取つて何業にても教へる者を云ふ。「寺友達」とは、共に寺子屋で學んだ時の友達。寺子屋は江戶時代民間に開かれた私塾で、士分や平民の兒童を教育するを目的とし、讀書習字算術を授けた。鎌倉時代から教育は專ら僧侶の手に移り、江戶時代になつても寺院を私塾に當てたから、寺子屋というたのであるが、中には藩邸・教師の宅・百姓家・浪宅などがあつて、場內には机を並べ、男女席を分ち、教師は側面に位置を占めて監視した。生徒が寺子屋へ入學するを寺入といひ、生徒を寺子といふ。

＊**照手姬**　照手の姬のやつれ草、常陸小萩も夫ゆゑ、身を旅籠屋の水棚の(反魂香)
横山郡司の女である。小栗判官相模の配所にあつて照手姬と馴染み、姬の兄・三郎と隙を生じた。よつて橫山一家のもの判官を毒殺

る大事の數珠物體なくも氣にかかる、水晶と琥珀と半裝飾の紫房、でしとだつまは珊瑚珠ぞや(孕常盤)

〔弟子〕弟子珠をいふ。「でしとだつま」とは、弟子珠と達磨珠とを云ふ。數珠には必ず達磨と稱する母珠と四天王に象れる弟子珠とがある。念珠略詮、數珠標幟の條に、「凡そ念珠に多種あれども一百八顆を以て通途とす云云、母珠は阿彌陀佛なり云云、日本の風俗にて母珠を達磨と云ことは、梵語の達磨をば法と翻す、阿彌陀佛は說法を主り給ふが故に達磨とは云なり、又母珠の下に一の小珠あるは補處の弟子なるべし」。

***てつかい** 形を吹出すていかい仙、蛙を愛せし蝦蟆仙人(蛙合戰) 煙管くはへて吹く息に、鐵枴が皺を延ばしけり(宵庚申)

〔鐵枴〕鐵枴仙人をいふ。支那の仙人で姓を李といひ、其質魁梧にして道術を得、氣を吐いて己が姿を虛空に現出する術を行うたと云ふ。諧言字考節用集に、「鐵枴。(列仙傳)今世往往所レ圖、吐レ氣轉レ象者則是矣」。立原萬著、此君堂後素談に、「鐵枴仙人の我形を吐出せると云ふ事諸書に見えず、されども吾魄は此に在りて、遊魂して華山に赴くとあれば、其遊魂の形を如レ此圖に畫けるものなるべし」。好色一代女・卷二、世間寺大黑の條に、「脇ふさぎを又明けて昔の姿にかへるは、女鐵枴といはれしは小作りなる生れつきの德なり」と見えてゐる。これも鐵枴仙人が氣を吐いて、己が若い姿に象を轉じるといふに據つたのである。

でつかい 花街へむかゐでつかい疵物、臍が出臍大臍のことでなく、腹の上に一番西瓜置いた如く(隅田川) 今日の料理は芋一種、でつかい所を御目に懸くるが御馳走(宵庚申) 目玉剝出し、耳朶でつかく五百八十七曲り(雪女) 信州木曾の山家物、でつかく冷ゆる寒國の(薩摩歌)

「でき」(出來)が轉じて「でかい」となり、更に促音加はつて「でつかい」となつたのである。物の大なるをいふ。度外。現今でも「出來た(できた)」といふことを「でかいた」又は「でけいた」といふ。千葉縣印旛郡地方では、大なる意に「でかい」または「でけい」といふ。

でつかちない 向臑からでつかちない光物が飛んで出て(二枚繪) 此度お鹿島の御寶殿より、でつかちけない光物が筑紫の方へ飛出で(用明天皇)

「でつかちけない」ともいふ。甚大なるをいふ。「でつかい」を參照せよ。「向臑から云云」は「ひざのさら」の條をも見よ。

てつきう てつきう・あぶりこ・鐵火箸(氷朔日)

鐵橋の字音の轉とも、或は鐵弓または鐵炙の義とも云ふ。細き鐵條で格子のやうに造り、肉などを載せて炙り燒く器。

でつく でつくともせぬでつちめが手柄しさうに見えけれども、ぐしぐしとなりけるは誠に愚人夏の蟲(出世景淸)

雙六の賽の目重五(でつく)をいふ。ここの文は重五(でつく)に「でつくり」をきかせ、頭韻語丁稚(でつち)(その條を見よ)にいひつづけたのである。「でつくり」は「でつかり」ともいひ、「しつかり」の意であつて、巢林子作・雪女五枚羽子板にも、「押込め乘込め米俵、でつかり踏まへた大黑」と見えてゐる。重五は⚄⚄、でつちは重一。ぐしは五四で、これら賽の目數(めかず)をいひかけたのである。

***鐵火**(てつくわ) 今の誓文僞りないと見る前で鐵火を握れ、心に誠ある者は氷よりも冷やかなり、少しも僞りある者は腕燒けただれ落ちるといふ(氷朔日)

心に僞つてゐるか僞つてゐないかを試すに熱鐵を握らしたもので、卽ち火起請である。豐臣氏の時德本と云ふ者その弟と訴訟し、北野神社の庭で鐵火を握らせられて、弟は手を燒き兄は平氣であつたといふ。井原西鶴撰・懷硯(貞享四年刊)卷之二、後家になり損ひの條にも、「掛硯は誰が直せしといふに、老母をはじめ知りたる者なし、よしよし鐵火を握らせて穿鑿すべしといふ時、女房赤面して硯を蹴はし、それは私が長持にとしをしをと取出す」。

てつせきしん 我が妻を斬ることを身の悅びになす事は、如何なる運、如何なる時、如何なる惡世の契ぞと思へば、はつたと胸塞り鐵石心の如くなる(鎗權三)

〔鐵石心〕精神鐵石のやうに堅固な義にいふ語なれども、ここの文は無量の感慨に心しびれて、鐵石のやうに固くなつた義にいうたのである。

てつせんくわ やあん鐵線花鐵線花、栴檀・沈丁花(振袖始)

〔鐵線花〕蔓生植物で、葉は對生し、複葉で通常九箇の小葉より成り、花は靑紫色或は白色の花被を有す。



〔てつせんくわ〕

***でつち** やい丁稚、殊の外汗になつた、一走り歸つて着替の袷持つて來い(鑓權三)

丁稚(でつち)の轉語。幼年の奉公人をいふ。春明退朝錄に「吳正肅言、律令有二丁推一、推子不レ通、少壯之意、當二是丁稚一、唐以二大帝諱一避レ之、損二其點畫一云」。(南瓜咄に「小者をばでつちといへる義なりといふ、よくよく考へて見れば、六の裏は一ぢや程に、さてこそでつちぢやというた」、とある、これは「でつち」は重一で、二才の義であるとの洒落である)。

***てづつ** 針道違ひ着にくしと、手づつの浮名は取るまいとよ(薩摩歌) 活花も手づつながら間に合はするも奉公(宵庚申)

〔手筒〕不調法。拙きこと。紫式部日記に、「一といふ文字をだにかきわたし侍らず、いとてづつにあさましく侍り」。貝原好古撰・本朝俚言に、「てづつはふつつかなることをもいふ、又は無藝なるものをもいふ」。

***てつぺい** 兩手に二人がてつぺい押へ(浦島) 拔打に向ふざまてつぺいより太腹まで、ふしぶしこめてから竹割り(女護島)

「てつぺん」(天邊)の訛。頭の頂上。いただき。淺井了意撰・東海道名所記、日坂(につさか)の記事の條に、「明日は又道中だんべいに、てつぺいを枕にぶつさげめされいといふ」。

てづま 妻はてづまの賃仕事(隅田川)

〔手爪〕手先。手先の仕事。「つま」は端の義。男色大鑑・卷三、編笠は重ての恨みの條に、「一生美道に身をなせば、手づまも優(すぐ)れて折柳(をりやなぎ)とて一流結出(ゆひだ)し」。(本朝三國志に、「さらばが手づま御覽に入れん」とある手づまは、手品のことであつてここに云ふとは別)。

***てうちぐり** おんらが在所はの、

「別當それは天氣にて候ひしかばとて赤面せられけり」。

てんきう 典厩の御所に御用あつて遲參せり（碁盤太平記）

〔典厩〕馬寮を唐名に典厩署といひ、左右馬頭を唐名に典厩令といひ、馬助を唐名に典厩少令といひ、馬允を唐名に典厩丞といふ。

***てんぐ** 俄に吹來る天狗風、岩も枯木もどうどうどう（萬年草）　天狗道の三熱の其熱湯ともいひつべし（用明天皇）　これは猿の末廣か、いやいや天狗の笄ならめ（蟬丸）　お二人のお蔭で煙草入を落しました、中に賴母子の懸錢七十四文あつたもの、定めて狗賓に掴まれたでござらう、正眞の天狗賴母子ぢやと（萬年草）　大石小石四方八方はつたはつたと投込み投込み、雨戸障子敷居鴨居打碎き打破り、軒の瓦も碎け散る、天狗礫もかくやらん（井筒）

〔天狗〕俗說に形人の如く、鼻高うて羽翮を有し、神通力を具ふと云ふ。天狗の語の古く見えたるは史記・天官書に、「天狗、狀如二大奔星一、有レ聲其下止レ地類レ犬、所レ墮及二炎火一」。舒明記・九年二月の條に、「大星從レ東流レ西、便有レ聲似レ雷、……僧旻曰、非二流星一是天狗」とある。蓋しこんなことに佛說などが加はつて俗說を作つたものである。

〔天狗風〕は旋風をいふ。往時は不思議のことがあればこれを天狗の行爲のやうに思うたのである。

「天狗道の三熱」とは、巢林子作・孕常盤・第一に、「我朝には天狗の法、我慢高慢の人の心を栖家として、善根を憎み惡行を悅び、夜に三度日に三度鐵の熱湯を飮む苦しみに、天狗道成就し生もなく死もなし」とあるによつて知れる。蓋し佛說に、蛇體に三熱の苦患あるといふ、これを天狗道にも及ぼしたもので、謠曲・葛城には三熱を神に及ぼして、「この山の名にし負ふ蔦かづらにて身を戒めて猶三熱の苦しみあり」と見えてゐる。

「天狗の笄」とは、山家者は琵琶の撥を嘗て見たことも聞いたこともないによつて、さて笄に似た不思議な物だと云ふのでかくいひなしたのである。

「天狗賴母子」は富鐵の一種で、當るも不思議、當らぬも不思議と、これを天狗の行爲になしていうた名である。大矢數（延寶九年刊）卷五に、「錐揉の先より風はくゞりきて（口雀）、はや雲抓む天狗賴母子（井蛙）」。西鶴置土產（元祿六年刊）に、「鼻の高い子供を揃へて、これぞ天狗賴母子、突當次第の遊興」。俗つれづれ（元祿八年刊）に「愛宕の天狗賴母子とて仕合せ次第に取當り」。世間手代氣質（享保十五年刊）卷二、色里の投節死ざ止むまい子息が惡性の條に、「身のなる果は天狗賴母子とて、曲物に一から十五まで木札を入れ、右の手に錐を持ち、往來の人をたらし、息子を相取にこしらへ愚なる人の錢をとりしが、博奕業とて追立てられ」とありて、錐で曲物の中の木札を突當てゐる繪が載せてある。

「天狗礫」とは、誰が投げてゐるか知れないで飛來る礫のことで、天狗の行爲にいひなした語である。

***てんくわう** 涉婆でんくわうのさかひには戀も無情もなかりけり（三世相）　電光石火の影の中には生死の去來を見る（兼好）

〔電光〕電光の間の義で、極めて短い時間をいふ。「電光石火」は、稻妻及び石を打つて出る火は共に極めて迅速で、且つ果敢ないものなるが故に、人生の迅速で果敢なく無常なのに喩ふ。淮南子に、「人生二天地之間一、如二鑿レ石見レ火電光過レ隙」。「しやばでんくわう」「つらつら世間の云云」をも見よ。

てんこ 親子籠太鼓、跡は天鼓微塵（酒呑童子）

〔天鼓〕謠曲名。天鼓と云ふ者が勅に違うたによつて死刑に處せられたのを、朝廷から佛事をされたによつて成佛したことを作つてある。ここの文は謠曲の天鼓に粉微塵をいひかけたのである。

てんごう 「てんがう」を見よ。

てんこつ 今の働き劔術稽古の手練ばかりにあらず、天骨自然の妙處感じ入る（關八州）

〔天骨〕うまれつき。天稟。下學集・態藝門に、「天骨。言二天然之有一骨格一也」。

てんしや 明日は天赦鬼宿日、萬事揃うた大吉日（淀鯉）

〔天赦〕天赦日のこと。天が萬物を養ひ育てて其罪を赦す日で、大吉日であつて、春は戊寅（土・木）の日、夏は甲午（木・火）の日、秋は戊申（土・金）の日、冬は甲子（木・水）の日をいふ。ここの文は天赦日でそれがまた鬼宿日の日をいふのである。（鬼宿日はその條を見よ）。

***てんじやう** 殿上・日御座・夜の御殿（振袖始）

〔殿上〕清涼殿の南廂にある殿上の間。

天上の五衰 「五衰」を見よ。

***てんしよく** 太夫ばかりが五十人、天職が七十四人、鹿戀の端のと二百人に餘つて（酒呑童子）　さびしき梅も捨てられず、これ天職の姿にて（生玉）　梅花油のかをりくる床は天職梅の花（蛙合戰）

〔天職〕天神（遊女の位）をいふ。天神を梅ともいへば、梅の自然に備はれる清楚な姿と云ふ意で稱した名である。「てんじん」を見よ。

てんしよくこく （吉岡染）

「蘇武は片足を切られても云云」を見よ。

***てんじん** 太夫天神に引ずり引張られ（淀鯉）　親は太夫買ひ、子は天神買ふというて笑ひました（夕霧）　天神太夫の身でもなし、さもしい金に氣が觸れた見世女郎のあさましさ（冥途飛脚）

〔天神〕梅または天職とも云ひ、太夫の次に位する遊女の稱。この遊女の揚代はもともと二十五匁であつた。二十五日は北野天神の緣日なれば、二十五の緣によつて天神と云うたものである。貞享・元祿頃は三十匁程に上つたれども、なほ舊によつて冒稱した。御前義經記（正德二年刊）卷一、傾城の因緣の條に、「天神は太夫より少し劣れり、釋名に三尺と云ふ、和名に梅と云ふ、唐韻に天職、俗語に中位とも宗ともむらとも格子とも云ふ、古語に二尺五寸

（百人女郎品定所藏、西川祐信畫）



〔天神〕

し、郎黨鬼王をして姫を相模沖に沈めしめようとした。鬼王は姫を沈める情に堪へないで竊に遁れしめ、照手姫なるが如く見せて石を沈めて三郎を欺いた。照手姫はこれより諸方に漂浪し、遂に美濃青墓の宿・萬屋の長に買はれて、名を常陸小萩と言へ、水仕の荒仕事に驅使された。折しも上野が原の墓所から判官の餓鬼現はれ出たのを、藤澤寺の上人これを車に乘せて、紀州熊野の藥湯に浴せしめた。小萩はその餓鬼が我夫であると知らずして、この供養の車を挽いた。かくて藥湯と小萩の信心によつて蘇生した判官は本領安堵となり、萬屋を訪うて、嘗て車を挽いて呉れた小萩に禮を述べようとして、計ずも我が妻我が夫なので、驚いて其奇遇を喜んだのである。委しくは當流小栗判官などに就いて見よ。

てれふれ　てれふれなしに七百石、すればお前も御手柄(萬年草)

「てりふり」(照降)の轉訛。

てれめんていな　てれめんていなばじりこん、さんとらにいによう萬能膏(大職冠)

〔丁列綿袖〕西班牙語 Terebinthina. てれびん油卽ち松脂油。華夷通商考卷四、阿蘭陀・土産の條に、「油藥＝アゼトウナ、ハルナメ、テレメンテイナ、丁子油、琥珀油ノ類、此外色色外科ノ用ル處盛ハ不ㇾ記、諸人ノ知ル處ナリ」。

***でゐ**　草鞋も脫がず土足の郞等、出居も座敷も蹈立てて奧の間にこそ入りにけれ(孫簡)

〔出居〕客殿または客室をいふ。この語現今も常陸地方で用ゐてゐる。錦文流撰・傾城八花形に「友綱も方方補けと賞ひて、でゐの大庭に下立ち」。和訓栞に、「でゐ」東遊に出居と書けり、愚昧記にも出居廊と見ゆ、內より出で客に對し居る所といふといへり」。橘窓自語に「出居といふは寢殿につづきて客に出逢所なり、今も東國にて出あふ座敷を出居と唱ふは古風の殘れる成べし」。

***でをんな**　出女ども不審を立て(松風)

〔出女〕街道にある旅籠屋の客引き女を云ひ、旅人を泊めて淫をも鬻いだものである。晚に門口に出て、おぢやれおぢやれと旅人を呼んでゐたによつて、出女ともおぢやれとも云うたのである。井原西鶴撰・好色一代女(貞享三年刊)卷六、旅泊人計の條に出女のことを記して、「松坂に行きて旅籠屋の人待女となりて、晝は心まかせの樂寢して、八つ下りより身を拵へ、所柄の伊勢白粉、髮は正直の頭に油を付け、天の岩戶の小闇より出女の顏白白と見せて、講參詣の通し馬を引込み、是播磨の旦那、其は備後の御同伴樣と、其國里を一人も見違へる事なく、其地方言葉をつかひ、嬉しがる濡かけ、はや寄晨の極めもなく、ここに腰を拔かし、眞實はなきたはむれ、女はすけるやうにむつれ、荷物を取込み云云」と見えてゐる。「おぢやれ」をも見よ。

***點**　何不足はなけれども內では誰が點を打つ、大かまの犬めらに懲果て死ぬる身をいはば(卯月潤色)

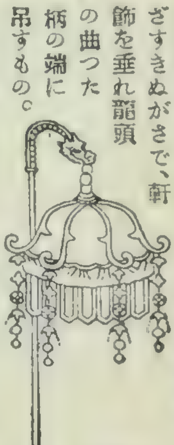
「點を打つ」とは、和歌俳諧などに批點を打つことから出た語であつて、批難するを云ふ。源氏物語・若菜上の卷に、「人に點つかるべき振舞はせじと思ふものを」。

てんいちてんじやう　思へば天一天上の五衰八專間日もなし(大經師)

〔天一天上〕天一神の天に上り居る間の稱で、癸巳の日より天上してその間十六日ある。この神の巡行する方角を塞りとし忌み、天一天上日(十六日間)は八方へ行つても障りなく吉日とする。巢林子のここの文は、天上の五衰(その條を見よ)とて天人の果報の滅盡する相なれば、それを我が果報の滅盡することにきかせ、それに天一を附加して曆上の語を用ゐたまでである。

***てんがい**　幡・天蓋・袈裟の一重も上げはせず(卯月潤色)

〔天蓋〕佛身の上にかざすきぬがさで、軒飾を垂れ龍頭の曲つた柄の端に吊すもの。


(佛像圖彙所載)
〔蓋天〕

***てんがう**　どつと笑ひしてんがうも明日の哀となりにけり(重井筒)

なまいだ坊主がてんがう念佛申して來る(天網島)　てんがうな手形を書き無筆の母を宥めしが(冥途飛脚)

おきさに心ある奴がてんがうかわくに紛れない(今宮)

戲謔。じやうだん。惡戲。いたづら。浪華方言に、「てんがう。江戶でいふじやうだんなり」。按ずるにこの語の古く見えたるは、釋無住撰・沙石集(弘安二年成)卷三上の目錄の條に、「癲狂人之利口事」とありて「癲狂」に「てんがう」と振假名が附けてある。なほ本書の序文に「狂言綺語のあだなる戲を緣として佛乘の妙なる道に入れ」と見え、卽ち癲狂人の利口は狂言綺語のあだなる戲である。なほ令義解に、「癲發時臥ㇾ地吐ニ涎沫一無ㇾ所ㇾ覺、狂或自欲ㇾ走、或自高稱ニ聖賢一也」と見えてゐるやうに、要するに「てんがう」は癲狂の呉音で、もと病名である、それを癲狂の如き言動に喩へた語であらう。又關西地方で、子供などが親の仕事の手傳をせうとして、却つて邪魔をすることを「てごうをする」といふ。「てごう」は手事の義である。この「てごう」と「癲狂」とがこんがらがつて「てんがう」「てんごう」となつて、戲謔の意にいふ語になつたのであらう。〔安原正章の嘉多言(慶安三年刊)にこの語に就いて說を述べてあれど煩はしければ記さない。また「てんがう」を轉業と書くのは當字であらう。一說に「てんがう」は「てんごく」(謡曲)の轉じた語であるとも云ふ。謡曲は法華經に「我慢自矜高、諂曲心不實」と見え、大鏡・卷八、高麗人が貞信公を相したのに對して貞信公の言に、「われをあるが中にざえなく心てんごくなりとかくいふは恥かしきこと」と見えてゐるのであるが、さて「てんごう」の本來を諂曲とするのもいかが。又「てんがう」は佛教に出典があらうとの說もあれど、何れも確でない〕。「てんがう」の上に口・腕・ほで・などの語を添へて、「口てんがう」「腕てんがう」「ほでてんがう」などとも見えてゐる。「てんがう念佛」とは、人を笑はせるふざけ念佛、卽ち道化念佛をいふ。「てんがうな手形」とは、ふざけたことを書いた證文をいふ。「てんがうかわく」とは、ふざけはしやぐ卽ちたはむれ騷ぐをいひ、「かわく」は「のらかわく」などいふ「かわく」と同じ語である。

***でんがく**　猿樂田樂伎樂を奏し(賀古敎信)

〔田樂〕中古田植の時に笛鼓を鳴して舞ひ踊つたのが、後には田植の時ならでもその景狀を摸し、支那傳來の散樂を取交へて發達した一種の舞樂である。

***てんき**　天機ますます麗はしく、五穀豐饒萬民快樂、君も行幸なるべし(松風)　勅使笏取直し、てんきの趣餘の儀にあらず、抑汝代代仁道を尊み物の命を助くる大願怠らぬ由、感じ思召され畢んぬ(松風)

〔天機〕天皇の御機嫌。天皇の御仰。天氣とも書いてある。平治物語・光賴卿參內の條に、

適當な發育を遂げなかつた爲に、食するに堪へないで捨てられる西瓜の果實を「てんぽ西瓜」と云ふ。また放縱無作法な者を、「すてんぽうな奴」とも「すてんぽな奴」ともいうてゐる。されば轉蓬は流轉、放縱、自暴などの意をなすのである。風流敗毒散(元祿十六年刊)卷一、長崎船の條に、「今とは違うて唐物あきなひは千里一はねの事もありし時節なれば、此少元手打込で巨暴に一もみもんで見たればゞ」とありて、「巨暴」に「てんぽ」と振假名が附けてある。「てんぽ止み難く」とあるは、謠曲・安宅にある勸進帳の文に、「縱䝷止み難く」とあるを作りかへたので、「れんぼ」に「てんぽ」をいひかけたのである。「それうからうか大紋日に云云」を見よ。「てんぽ酒」は自暴酒を云ふ。卽ち酒を飮むにも女が侍らでは面白うない、ええ儘よと自暴になつて飮む酒。「てんぽの皮」の皮は、絲瓜の皮、嘘の皮、すつぱの皮など云ふ皮の類である。尤も絲瓜の皮は役に立たぬ物なれば、かかる詞をなしたのであるべけれど、嘘の皮、すつぱの皮、てんぽの皮の皮はそれ等の聯想上から附加した語であらう。

***てんま** 道中の傳馬荷物なんどと(三世相) 臺所荷は次傳馬、御葛籠荷物は通し馬三十駄(丹波與作)

〔傳馬〕宿つぎの馬。(博多小女郎波枕に、「惣七はつと心付き見れば傳馬の中に」とある傳馬は、傳馬船の略、卽ち端舟のことであつて、ここに云へるとは別)。

てんまこみ コリヤ爰に傳馬込にといふ聲に、惣七水棹押取つて狂ひ出で(博多)

〔傳馬込〕船の名所、荷船の表の開口(舳艫の左右にある出入口)の別稱。和漢船用集・卷十、船處名之部に、「開口=明律考水仙門とうのまの門と訓ず、表のかいの口なり、或は涌口と書、舳艫左右にあり、荷舟に二表の開の口傳間込と云、傳間を引込處也」。

***天滿屋お初** 扨六番は曾根崎の、宮の木立も何時頃よりか、名立てがましき天滿屋お初、よそに聞くさへ身にしじみ川(卯月紅葉)

曾根崎心中に見える遊女である。「はつ」(假作人名部)を見よ。

***てんもく** 天目にごき集錢酒は以前覺えつらん(加增曾我) 奴が(薩摩歌) やあ天目頭の糟奴、手並今朝の朝酒の天目鞘に禿鞘(堀川波鼓) 鎌鎗は筑後の久留米、天目鳥毛は同國柳川(薩摩歌)

〔天目〕茶碗の稱。支那浙江・臨安縣の西北で、潛縣と安吉縣との接界に跨れる高山を天目山と云ふ、高さ數千尺に及び東西に兩峯峙立して、絕頂に各一池を湛へ左右相對する狀、恰も目の如くであるによつてこの稱がある。山中佳景に富み寺院堂塔散在して、支那佛教の根本道場と云ふべき處である。我國の僧侶が天目山に遊學して、此處の寺院で使用する茶碗を携へ歸つて天目と云うたのが轉じて、汎く茶碗の稱となつたのである。抑も天目茶碗の産地は主として福建省泉州府德化縣地方であつて、これを建盞(福建省泉州府建安産の盞の義)と稱し、建盞天目の稱もこれによつて起つたのである。(天目の稱は天目山窯で燒いた名ではない。天目山では嘗て陶磁器を燒いたことはない)。和訓栞に、「てんもく。甌をいふ、建安の天目山の名によれり、磁碗の深きをいへり、建盞の名も同じ」。

「天目頭」とは、茶碗の形の頭をいふ。

〔天目鞘〕は鎗鞘の一種で、天目茶碗の形した鎗の鞘。

「天目鳥毛」は天目の形した鳥毛で、柳川城主・立花飛驒守宗昌の鎗印である。



〔天目鳥毛〕

でんもくらいゐ 口にて虎なぞ書きたりける、でんもくらいゐの眼の光、怒毛怒斑怒爪、千里も駈けん勢なり(反魂香)

「電目雷威」である。賓鐘夜話(安永七年刊)の呼吸菴伽山の序文にも、「電目肉翅」と見えてゐる。

***てんやく** 京の御典藥にかへてからめつきりと藥も廻り(宵庚申) 柳原の法師樣、半井の御典藥、幸と和國樣へ對馬の客から參つた朝鮮人參(反魂香)

〔典藥〕幕府の職制に、醫藥のことを司る者を稱した。典藥頭は每年正月屠蘇を禁中に獻じ、御用掛の醫師である。

***てんやもの** わしや店屋者ぢやないぞや(生玉) 君は賣物てんやものの、一膳限の假枕(虎曆)

〔店屋者〕店屋の賣物になる者の義。遊女(茶屋者)は夜な夜なかはる客に色を賣れば店屋者というたのである。易林本節用集に、「店屋」。

***てんりゆうはちぶ** (會稽山)

〔天龍八部〕天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦をいひ、法華經・普門品の中にも見えてゐる。

***てんりんわう** 今宵のお宿は三千年に一度と聞く轉輪王の出世ぞや(國性爺後日) 位は轉輪聖王となるとても(西王母)

〔轉輪王〕轉輪聖王とも云ふ。人壽無量歲より八萬歲までの間に出現し、寶輪を轉じて一切の障礙を征服し、諸佛や佛法に盡されるによつてこの名がある。

天王如來 五逆の提婆は天王如來(重井筒) 迷へば佛敵・悟れば味方、善惡不二のしるしはこれ天王如來の方便力、提婆が惡も觀音の慈悲末世の衆生に蒙れり(釋迦)

五逆罪を犯した大惡人提婆達多も、未來世に於て成佛し天王如來になるといふ、法華經・提婆達多品に、「提婆達多却後過二無量劫一、當得二成佛一號曰二天王如來一」。謠曲・海人に、「五逆の達多は天王記莂を蒙り」。

點を打つ 「點」を見よ。

と

どう 正心の紫菀、龍膽のあしらひ、胴に伊吹木のうつりよさ(聖德太子)

「どうつくり」(胴作)を云ひ、立花法式の名。立花時勢粧・八に、「立花祕傳抄之五。胴作とは心かくしの下より前置の上までを云ふ、これ七つの道具の外にして、花形の中央を守り七つの枝を能く養ひ育つる物也」。

***どう** 瀨多の久三がどうの時、百切はつて見たれば(丹波與作) 年季のこの玉をたつた三百のかたにはつて、既にどうへ取らるゝ處を(大織冠) どうとりの禱は四三五六社大明神(女殺) 我等は博打のどうとり、この頃續く不仕合(女楠)

胴と書けども、枕草紙に「てらばみにどう取

といへり、これ天神の縁日をかたどれり。何時の頃より直上りし一二三尺になりたまひぬ」。貴木洞房語園・上、京都遊女の名目の條に、「天神。勤銀二十五匁なれば、北野の縁日に取りて天神といふ、吉原にては此名なし」。



（人倫訓蒙圖彙所載）

「天神」

てんせん 天仙彩色の錦の帳さつと開け（浦島）

〔天仙〕仙人。抱朴子に、「按仙經云、上士擧レ形昇レ虛、謂二之天仙一」。

***てんだいしくわん** 比叡山の西塔にて天台止觀の旨を開き、一念三千の機を顯はして（大磯虎）

〔天台止觀〕天台大師撰述の摩訶止觀を云ふ。一心三觀の觀法を說き、天台宗の實踐的方面を明にした書である。これが實地の修業を止觀業と云ふ。「天台止觀圓頓」とも見えてゐる。圓頓とは天台敎法の圓融無碍にして化益の頓速なるを云ふたものである。

てんだいにゆうくわ 接待に天台乳菓の茶を煎じ往來の人に施し（百日曾我）

〔天台乳菓〕佛が涅槃經に於て乳等の五味を說かれたのによつて、天台大師が五味を佛所說經の次第に當てて譬へた。この故事によつて天台乳菓を美味の意にきかせたのである。

天竺將來の御袈裟衣 弘法大師は天竺將來の御袈裟衣、御弟子二人に灑水させ（嵯峨天皇）

新律義淨家の三衣をいひ、鐶鈎を用ゐざる袈裟である。「將來」はもち來る義。

てんぢくらうにん かはいげにおきはもほんの天竺浪人（生玉心中）

普通に「天竺浪人」と書けども、逐電浪人を引繰返した語である。寄邊なき風來人をいふ。西澤一鳳撰・脚色餘論・三編下に、「世に天竺浪人と云ふは逐電浪人を轉語して電逐浪人といふ」。近代長者鑑（正德四年刊）卷五に、「世間のつなは切れてかからふ島もなく、沖にもつかず礒にもつかぬ天竺浪人の身となり」。商人軍配記・一之卷に、「其後段段御前の首尾あしくして、御國へ參ること叶はず、ぜひもなき仕合は代代つづきし家をはなれて、一門難波に歷歷としてあればまづ此かたへ引込み、天竺浪人となつて御國の雲行をうかがうてゐられける」。

***てんぢゆ** 庭の松風三味線の、てんぢゆに通ふ細廊下（酒呑童子） 三味線の天柱（反魂香）

「てんじゆ」（轉手）である。天柱と書くは當字なれどその用例も古くからある。三絃又は琵琶の頭部にあつて、絃を卷きつけろ棒をいひ、今では轉軫といふ。

てんつく・てんつく 堺町木挽町のてんつくてんつくでこのばう（丹波與作）

芝居の囃子太鼓の音調を形容した語。また轉じて芝居の意にいふ。手柄岡持撰・後は昔物語に、「てんつくてんの前を通りてなど言ひし、てんつくてんとは芝居の事也、堺町を通りしといふ事也」。

***でんど** かの生玉のでんどにて、額に毛拔も當てろ身が面恥かいて、何として人中へは出られぬ筈（曾根崎） このだいそれた言譯がでんどでそもや立つべきか（今宮） いやこれ親父樣、でんどで披く讓り狀、後の證據に封も解かず持ちたれば（卯月艶） 斯うたくんだ事なれば、でんどへ出てもおれが負け（曾根崎） この惣兵衞とくじのみやのとぬかすげな、あはれでんどへ出やれかし（淀鯉）

「でどころ」（出所）の訛略。人の出る所。公衆の見る所。公界。公儀。法廷。

***てんどう** てんどうの汝等がたとひ須彌山は動かすとも其袋は動くまじ（釋迦） 客は顚倒、花車も下女もうろたへ（女殺）

〔顚倒〕妄想の爲に自ら迷妄して諸法の實相を見ることができないをいふ。法華經・壽量品に、「我常二住於此一、以二諸神通力一、令二顚倒衆生雖レ近而不レ見」。また、驚いて平靜を失ふことにいふ。

***てんどう** 龍燈天燈かかげ添へ（釋迦）

〔天燈〕天女の捧げる神燈。謠曲・白鬚に、「殊更今宵は天燈龍燈神前に來現の時節なれば」。

天人の五衰 「五衰」を見よ。

てんば 此奴はしやべりのてんばめ、見附けられては大事（薩摩歌）

でしやばり女。出過ぎ女。轉婆は當字であらう。按じろにもと傳播より出で、言ひふらす參より、喋、でしやばりの意に轉じたのであらう。蘇轍の爲二兄軾下レ獄上書に「其舊詩已自傳播」。合類大節用集（享保二年刊）言辭門に「轉婆。女兒所レ言」。（天馬であるといひ、または佛敎語であらうとの說あれど、いかがう。また難波みやげ卷之三に、「てんば＝顚婆と書也、顚き婆といふ事なり」とある說もいかが）。

てんぷら てんぷらてんぷら、ははんにやてちやろまひつはらや（唐船噺）

〔天麩羅〕もと葡萄牙語 Temporas である。天主敎徒が金曜日の祭をテンプラと云ひ、この日鳥獸の肉は食はねど魚肉を食ふ。この語我國に傳來し二其義を轉じ、小麥粉を水に融いて魚肉にまぶし胡麻油で揚げた物の稱となつたのである。

***てんぽ** 餘り美しさにてんぽと思うて、その夜一つ買うて抱いて寢たれば（壬生大念佛） ああ恥かし・てんぽ言うて退け（日本武尊） てんぽ止み難く、亭主が眼もあらく（虎が磨） 酒を飮むにも色色がある、色もなう飮むをてんぽ酒（壬生大念佛） そんな事に今まで步いた事なけれども、てんぽの皮往つてのけう（女腹切） 言ひそこなうたら大事か、口に任せてやつて吳れよ、てんぽの皮とぞ出でにける（反魂香） 女房に持つて下されとは、藪から棒の異な物なり、てんぽの皮厚う出ましよと（天神記）

運に任せてどうでも成り次第の意にいふ。自暴。ええままよ。按ずるに「てんぽ」は「轉蓬」の訛略であらう。蓬は蓬萊の蓬で、人の流浪するを、飛轉する蓬に譬へて轉蓬と云ふ。曹植の詩に「轉蓬離二本根一、飄颻隨二長風一」。轉じて、あてもなくすること、運任せ、自暴の意にいふやうになつたのである。現今でも福山市地方で用ゐてゐる語に、鼻に轉つて

魂香）御寢問で井筒樣としつぼりのどうぶくら（井筒業平河内通）家居も京のどうぶくら、諸役御免の門造り（大經師昔暦）

〔胴脹〕兩端細りて中部の脹れたことの義。轉じてただなか。眞最中。俚言集覽に、「（あら野）あけぼのは春のはじめや胴ぶくら　水野」。

とうふのうば 豆腐かと思うたれば、若い豆腐のうばが來た（兼好）

〔豆腐姥〕豆腐滓汁を煮て其面に浮んで凝結したもの。湯葉。本朝食鑑・豆腐の條に、「其滓俗號二岐良須一、取二濁水一復入レ釜煎、其釜中浮レ面凝結如二濕紙一者、是豆腐皮也、俗稱二豆腐媼一」。俚言集覽に、「豆腐のうば。食物」。この文は若い女を豆腐の媼にいひなしたのである。

どうほう お江戸は貴賤群集の中、御同朋を連れらるるは（薩摩歌）其外御馬廻諸旗本、同朋茶道に至るまで（三國志）

〔同朋〕剃髮して殿中で諸侍の雜役に使はれる者で、俗にお坊主といふ。茶事を司る者を茶同朋またはお茶坊主といふ。

どうまる （三國志）（文武五人男）

〔胴丸〕具足の一種で、胴の左につがひなく右の脇で合すやうに作り、胴をかこんだ形まろくして筒に似たればこの稱がある。本朝軍器考・九、甲冑の條に、「筒丸と云ふ物又胴丸とも書く、胴をかこみし形のまろく竹の筒に似たればかくいふ由、下學集には注せり、春日社本談議屋にある楠正成の鎧と云ふ物を見しに卽ち胴丸の制なり、黒革縅なるが縫のべなど云ふ物の如くにして、馬手の方にてあひぬれば脇立を用ゆるに及ばず、草摺八枚なり、障子板弦走の革などもなく、栴檀の板をば杏葉を以て代へたり、袖は今いふ大袖の制なり、云云」。

とうりてん 「たうりてん」を見よ。

どか どか儲すればどか損する（壽門松）藤屋の太夫に貰うた金、直に東に芽を出して人痛めずのどか儲、馬の脊骨も折甲斐あつて此度罷歸る處（壽門松）

普通を外れてゐること。世間子息氣質（正德五年刊）卷之四、末子が智惠は上上箱入の銀持形氣の條に、「千里一はねなる買置き事に當つて、程拍子よく一度に利を得てどか儲せしこと度度なりしが」。現今も福山市地方にて、暴食することをどかぐひするといひ、凸凹多き道をどかどかした道といふ。

***とがしのせき** あけぬば銀の富樫の關（淀鯉）

〔富樫關〕謠曲・安宅に、義經主從が山伏となつて安宅の關を通過せうとした時、富樫介その通過を拒絕せうとしたことが見えてゐる。ここの文はその故事によつて遊廓の大門を富樫の關といひなしたのである。

***とかへり** 十返りの霜には朽ちず、一時の無常の風に枝枯れて、頼みすくなき小松殿（女護島）

〔十返〕松の花は百年に一度咲くといへば、それを十度繰返す間の長年月を云ふ。本朝文粹・後江相公内宴賦に、「松花之色十廻」。

どかまうけ 「どか」を見よ。

***とき**

〔時〕往時は時について正確でない。主として初更より五更までを各更五點に別ち（卽ち一夜は二十五點ある）、子一つ（子の一點）、丑三つ（丑の三點）、寅一つ（寅の一點）など云うた。但し辰の一點などいふこともあれば夜のみについていふとも限らない。子一つ（三更一點）は午前十二時頃。丑三つ（四更三點）は午前二時頃。寅一つ（五更一點）は午前四時頃。辰一つ（辰一點）は午前八時頃。



***とき** 鎗屋町の隱居へ齋に參る約束（重井筒）彼奴が我等を見るたびに齋に參れば抱付き（薩摩歌）

〔齋〕僧家にて午時の食事を齋といひ、午後の食事を非時といふ。齋の稱は蓋し起世因本經に、「受二持齋法一增二長善根一故、佛教以二過中不食一名レ齋」、とあるに基いたものである。轉じて法會を營める午時の食事を齋といふ。

とぎう 斗牛の星の影すみて（井筒）空に紫の雲氣たなびき斗牛の間に英英なり（嫗山姥）

〔斗牛〕北斗星と牽牛星。蘇子瞻の前赤壁賦に、「月出二於東山之上一、徘二徊於斗牛之間一」。斗牛の間は東北に當る。

***ときん** さらば小さき兜巾・篠懸をこしらへて給はれ、山伏道の御供せん（凱陣八島）十二因緣の襞をたたみし兜巾を懸け（一心五戒魂）兜巾頭と大身の鎗は下總の國佐倉の御城主（薩摩歌）

〔兜巾〕頭巾とも書く。山伏が鉢卷をして額に當てるものである。黑色で十二角形をなし、前八分に着す。その黑色なるは最初の無明を表示し、その十二角なるは衆生の具する無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二因緣を表し、著るに前八分なるは不動明王頂上の八葉を示すのである。「兜巾頭」の鎗標は佐倉城主・稻葉丹波守正通の鎗標である。



〔兜巾頭〕

とくこ 「とつこ」を見よ。

とくさいろ やんがて身代は木賊色でおろすやうになつてのけうと笑ひける（重井筒）

〔木賊色〕萌黄に少し黑みある色。ここの文は、物を木賊で磨削るやうに身代が消費されるの意に、染物屋に緣ある木賊色にいひなしたのである。

どくせいけんげんゑほふいん 先生獨淸軒玄惠法印と申せしは後醍醐天皇に御法を示し奉り（用文章）

〔獨淸軒玄惠法印〕玄惠は玄慧とも書き、比叡山の學僧であつたが、後に還俗して京都北小路に寓居し、碩學秀才の聞え高く、後醍醐天皇に召されて侍講となり、宮中に宋の新註を講じたと云ふ。槇島昭武撰・書言字考に、「玄惠自稱二洗心子一、又號二健叟一、初儒士、中頃爲レ僧叙二法印一、後還俗稱二北小路獨淸軒一、觀應元年六月十日卒」と見えてゐる。庭訓往來はこの人の撰であると傳ふれども確ではない。

***とくだつ** 成佛得脫の都卒に生れん嬉しきと（蟬丸）

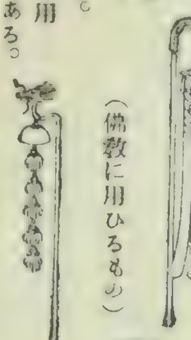
〔得脫〕生死の迷苦を脫して菩提の果を得ること。法華經・信解品に、「得二脫三界苦惱之患一」。

***とくど** （扇八景）

られたる」とある筒で、即ち雙六の骰子を入れた筒を振るより起つた名で、賭博の親をする胴元とも胴取とも胴親ともいひ、略して胴ともいふ。博奕仕方風聞書に、「筒取之者は例へば、六之目出候得者六之張錢殘し置、外目に出請候金錢引取候内にて、六之目に有之候金錢へ四割に拂ひ遣し、殘錢有之か又は不足有之候儀に二勝負いたし申候、廻り筒と申、順々に筒取いたし候節は、右之通四割に相定、筒に極め候得は四割八分に爲レ講申候」と見えてゐる。

***どう** どう因果の夕立や、目も鼻も明かれぬ(女楠) 移り易いどう根性(今宮) どう掏摸めと、馬を倂く手を飛かかり捩上げて(丹波與作) 何を知つて、去れ去れどう山伏おきなれ(女殺) はらはらこぼす血の涙、鬼の泣くのは人よりもどうすげなうて哀なり(日本振袖始) 佛語と熟語となつて其意義を強める接頭語である。(「どうよく」(胴慾)は「どんよく」(貪欲)の轉訛であつて、ここに云へるとは別)。

***どう** 幢の幡・幡の旗、吹拔・立鉾・弓・鐵砲(國性爺) 〔幢〕旌幢牙旗を謂ひ、羽毛又は布帛を垂れたものである。別に佛教で用ゐるものもある。


(佛教に用ひるもの)〔幢〕

とうかいづくり 二十五反のとうかいづくり、金物ずくめに七百餘騎、四十八挺艪を立てて(百合若) 「とかいづくり」(渡海造)の延びた語。遠航に耐へるやうに作り、普通五六反帆乃至十七八反帆の船で、旅客荷物を載せて海洋を航行したもの。和漢船用集卷四に、「渡海＝小早舟と呼、關舟の小早とは各別にて、早舟に次の小早なり、この故に五六端帆より大船は十七八端に至る、いづれも小早と云也、中國九州の堺長州赤間が關豐前門司が關、此渡海の舟小倉渡海と云、惣屋形惣矢倉也、左右に莚ありて艪あり、艫有て垣立なし、近頃艫に垣立を用、此舟豐前周防長門の國に有て小倉舟を名とす、九州の諸士交代の乘船又旅客をのせ二、常に攝州より小倉に往來す、下荷物を積て上の館に衆客妝のすべし、是渡海舟の第一とす、渡海造りといふ者一法也」。

とうかくじんゐ 等覺深位の時鳥は妙覺究竟の峰に鳴き(百日曾我) 〔等覺深位〕將に妙覺の佛果を得ようとして、其智德・妙覺に等似すれば等覺と云ふ。深位は深高の位を云ふ。摩訶止觀・一に、「究竟即菩提者、等覺一轉入于妙覺」。

とうがね 「たうがねの云云」を見よ。

とうかのせちゑ 「たふかのせちゑ」を見よ。

どうかへしのり 胴返の利なればとて、儲けるには方圖がある(博多) 資金と同額の利益。「胴返」はもと劍道の語。

***どうぎやう** お同行衆寄集り、勤も既に終りける(女殺) 〔同行〕町内の者申合せて講を作り、法會・通夜・會葬などに寄集つて行ふ、其講中の人人を同行衆といふ。

とうけい 「にはとりあはせ」を見よ。

とうざい 東西東西、此處から山路の道行(二枚繪) 〔東西〕演劇や淨瑠璃や其他見世物などで、口上をいふ前に衆人の騷がしいのを靜める詞で、東西の人人と注意を促す義である、もと相撲より起つた詞だといふ。

どうさいばう 「これに懲りよどうさいばう」を見よ。

童子教 實語教、童子教、和漢朗詠(最明寺殿) 釋安然撰の教訓讀本で、五字一句にて總て百八十句より成れる漢文である。

***同宿** あれ同宿ども引捕へ剃こぼせ(扇八景) 納所同宿入替り立替り(萬年草) 同じ寺に住む僧。

とうだいぐさ 毒の草なも身の上と知らぬ手元の暗さには燈臺草を思出す(用明天皇) 〔燈臺草〕「すずふりばな」ともいふ。莖の高さ七八寸、葉は倒卵形で、花は普通五つに分れた莖の頂に生じて淡黃色である、我國各地の山野路傍に自生して有毒植物である。


〔燈臺草〕

***どうだう** 今のどやくやに同道めが摑んで走つた(生玉) 「同道者」の略。同伴者。

とうたく 董卓が眼、祿山が髭、放逸無慙の驕り人(嵯峨天皇) 〔董卓〕字を仲穎と云ひ、隴西臨洮の人である。東漢の靈帝の時前將軍となり、性殘忍にして、帝の崩後少帝を廢して獻帝を立て、自ら太師となつて暴橫を極めたが、遂に司徒王允・中郎將呂布等に誅された。

とうだんご 「とをだんご」を見よ。

どうつつて 人の由縁は知れぬもの どれからどれへどうつつて誰が悲しみとならうやら(反魂香) 「どうつづいて」の略。如何なる續合となつて。

***どうてん** 無二無三に斬つてかかれば、先を取られて動轉し(蟬丸) 新聞これに動轉し、これなる長櫃の中へ隱れ入り候を(世繼曾我) この一步置所に動轉して口へ入れたり目へ入れたり(二枚繪) 〔動轉〕物に驚くこと。たまげあわてること。饅頭屋本・節用集に、「動轉」。

***とうとう** とうとう蟬丸・直姬を渡せ(蟬丸) 「とくとく」(疾疾)の音便。すみやかに。

どうとり 「どう」を見よ。

***頭の中將** (三世相) 頭は藏人頭をいふ。藏人の頭にて近衞中將なる人。

***とうばうさく** 通ひも絕えてこれやこの、東方朔が沓の跡、誰炭竈の薄煙(冷泉節) 東方朔が九千兩、それで殘らず梅ぼうし、井戸へ釣られた大黑天も、好い客踏まへた俵子や(雪女) 〔東方朔〕支那前漢時代の人である。西王母が桃實を服して壽命九千歲に及んだと云ふ。謠曲・東方朔に、「これは仙鄕に入つて年久しき東方朔とは我事なり、抑も我西王母が桃實を度度服せしその故に、壽命既に九千歲に及べり」と見えてゐる。「東方朔が九千兩」は九千歲をもぢつたのである。

***どうぶくら** 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない(傾城反

大灌頂光眞言經に、「設衆生具造二十惡五逆四重諸罪一、猶如三微塵滿二斯世界一、身壞命終墮二諸惡道一、以二是眞言一加二持土砂一一百八徧、尸陀林中散二亡者屍骸上一、或散二墓上一、遇皆散レ之、彼所亡者、若地獄中、若餓鬼中、若修羅中、若傍生中、以下一切不空如來不空毘盧遮那如來眞實本願大灌頂光眞言神通威力加二持土砂一之力上、應レ時卽得二光明及一レ身、除二諸罪報一捨二所苦身一、往二彼西方極樂國土一、蓮華化生、乃至二菩提一更不二墮落一」。雍州府志(貞享三年刊)六に、「土砂。處處山有レ之、然自レ古持律僧取二栂尾山之土砂一、淸水洗二滌數過一、然後盛レ壺置二護摩壇上一、七箇日間加二持之一、是謂二土砂加持一、傳言、撒二加持土砂少許於新死之尸一、則其筋骨雖レ歷二數日一不二强直一、有レ便レ納二棺內一也」。

***どしやうぼね**　業人めがどしやうぼねこじ直した(女殺)　隨分母に詑言致し、どしやうぼね入替へ二度內へ戻るやうに(女殺)　武士に劣らぬ五兵衞と今日まで人に笑はれぬ、その倅がどしやうぼね、茶屋の銀負うて逃隱れ、死んでも恥は拔けはせぬ(生玉)　さすが賣物め、どしやうぼれ見違へ魂を奪はれし(天網島)

「ど」は「どう山伏」などいふ「どう」と等しく、語意を强め惡げにいふ時に加はる語である。「しやうぼね」は性骨で、根性の義。根性魂。女大名丹前能(元祿十五年刊)に「仲間入りせんとは近頃やさしいどしやうぼね、このうへからはあかすぞかし」。

***としより**　組中年寄月行事(女腹切)

「町年寄」の略。「まちどしより」を見よ。

としよりこい　年寄來い來い口まめ鳥に(娥)

〔老來〕八幡鳩をいふ。和漢三才圖會卷四十三、斑鳩の條に「八幡鳩 里古伊止之與 形小二於環鳩一、遍身柹白色、項下有二蒼黑輪一、似下懸二數珠一於頸上者上、觜黑脚脛淡赤、其尾本灰白末黑色、常棲二山林一、四時鳴、秋月最甚、其聲高亮、如レ言二老來一也、……、城州八幡山最多、俗以爲二神使一云云」。

***としをとこ**　追儺の御祝儀行はる、年男には熊橋犬二郎滿景(雪女)　豆まき年男つちの子抱いて稻積んで(壽門松)

〔年男〕正月元日に若水を汲み、または節分の夜に豆を打つ者の稱。日次紀事(延寶年中成)正月元日の條に、「歲男。汲二若水一人謂二歲男一、賚二此水一謂二福沸一」。同書・十二月の條に、「(節分夜)然二大豆於二家內一是謂レ打レ豆、或謂レ拍レ豆、凡一家之內執レ事者勤レ之、是稱二歲男一、高聲呼二鬼外福內一、而禳レ疫索レ福」。

***とすぢゑもん**　末は尾上の友白髮、ばばになるまで紅絹裏や、十筋右衞門も鬢附の、梅花油の薰り來る(蛙合戰)

〔十筋右衞門〕頭髮十筋ばかりの右衞門の義で、頭髮の少い人を人名のやうに呼びなした語。好色一代女卷三に「髮の少くかれがれなる事のなげかし、これ見よと引きほどき給へば、かもじも幾つか落ちて、地髮は十筋右衞門」。

***とそつ**　成佛得脫の都率に生れん嬉しきと(蟬丸)　夫婦枕の夜摩天の契は抱合ふと聞く、兜率天には手を取交し(五人兄弟)

〔兜率〕都率とも書き、梵語(Tusita)である。欲界六天の第四天で、夜摩天の上にある天國である。知足と譯し、喜事多く相集つて享樂すと云ふ。曾我五人兄弟・虎少將道行の文に、「夜摩は抱き、ととりらくゑみ、たけは相見る」とあるは、夜摩天の契は抱合ひ、「ととり」は兜取りで、兜率天には手を取交し、「らくゑみ」は樂笑みで、樂變化天には男女互に打笑ふを戀のしるしとし、「たけは相見る」は他化は相見るで、他化自在天の夫妻は顏と顏とを相見るばかりといふ意である。「欲界の四王切利天云々」をも見よ。

とだち　狩場に馴れぬ若鷹の、とだちも知らぬ若草や(雪女)

〔鳥立〕鷹狩の爲に澤または叢を設けて鳥の集るやうにした處。雅言集覽に、「とだち。鳥立の意なれど體の詞にて、狩場に池・草むらなど諸鳥の集るやうしおきて、さてその立つ折に鷹を合する、その所をさしてとだちといへるなるべし」。

どちぐち　信と平となどちぐちに、賴樣賴樣で紛らかし(關八州)

「どちこち」(彼方此方)の訛。彼此取違へ。この語現今も中國地方で用ひられてゐる處がある。

***とちやう**　知らぬが佛の斗帳ぞと、井筒が暖簾撞木杖にてひらりと揚げ(女腹切)

〔斗帳〕帳臺の上又は神佛の龕の上に垂した短小な帳。箋注倭名類聚抄・卷六、帳の條に、「帳臺四面上方有下横一幅帳垂下、如二俗呼一水引一者上、卽斗帳也、其狀如二覆斗一、故有二是名一」。ここの文は、「知らぬが佛」といふ諺を用ひ、佛に遊女お花をきかせ、佛の緣で井筒屋の暖簾を斗帳といひなしたのである。

とつかのつるぎ　まづ葦原大日本神代三振の寶劍あり、一つは天のはぎりとも又は十握の劍とも申し、大和國石上の御神體に立ち給ふ(艶狩)　葦原國の三の寶の其一、十握の寶劍(振袖始)

〔十握劍〕我が國上代の寶劍の名。武家名目抄・刀劍部に、「十握劍。十握を十拳、斗掬など書て、皆並都加とよめり、……上古は凡物の長さをはかるに手につかみて幾つかといひしと見えたり、後代も矢尺を矢束といひ、十何束幾伏といふはその遺風にぞあるべき、十握を柄の長さとせし說あれど身の長さといふが勝れるに似たり」。源平盛衰記に、「神代より三柄の靈劍あり、天十握劍、天叢雲劍、布流劍是也、十握をば羽羽斬劍と名づく、羽羽とは大蛇の名なり、此劍大蛇を斬れば也、又は蠅斷劍といふ、此劍利劍也、其刃の上に居る蠅の自ら斷れぬといふことなし、素盞嗚尊の天より降り給ひけるに帶び給ひたる劍なり、今石上宮に被レ籠たり」。

***とつかは**　知らぬかと言はるる故、とつかはして戾つた(二枚繪)　心そぞろにとつかはと、急ぐ程が谷打過ぎて(隅田川)

急ぎ慌てるさまにいふ。按じろに足を飛び交す義であらう。都の錦撰・御前於伽(元祿十四年刊)卷二、鹽竈の商人船上にて災に逢ふ事の條に、「五兵衞膽を潰し、急周章として船より揚り」とあつて、急周章に「とつかわ」と傍訓してある。俚言集覽に「とツつかは。急遽を云ふ」。「とはかはぐち」の條をも見よ。

***とつこ**　二月めには陰陽の二氣相和して一氣となり、獨鈷の形とあらはるる(蟬丸)

〔獨鈷〕金剛杵の兩端一本で分れざるものを云ひ、銀、銅または鐵鍮などで造り、その三叉なるを三鈷、五叉なるを五鈷と云ふ。もと印度古代の武器で、堅固不壞にして能く物を碎くが故に金剛と云ふ。密宗では凡ての煩惱を

〔得度〕「度」はわたる義。生死の海を度り得て涅槃の彼岸に到るをいふ。轉じて在俗の男女の僧尼となることをいひ、その際行ふ式を得度式といふ。

***とくびやうゑ**　醤油屋の徳兵衛なだました桥を出したらばちと腭をくひちがよう(生玉)　お初・徳兵衛のそのあかつきの、夢も破れてまだ間もないに(二枚繪)

〔徳兵衛〕曾根崎心中に見える人物である。假作人名部について見よ。

***とくりご**　見付さへ好ければ三つ足でも徳利子でも構はぬ(隅田川)　逆子・袋子・徳利子、あとさき脹れて中で詰つた瓢箪子でも(孕常盤)　其腕がぬつとここへ出るが最期、徳利男になるが合點か(三國志)

〔徳利子〕徳利のやうに耳・鼻・目やまたは手足のなき不具の兒。「徳利男」は耳・鼻・目やまたは手足のない不具の男。

***とけい**　はや入相のとけいの聲(懸物揃)

〔斗鷄〕器械時計は足利時代(異說もある)の末頃和蘭人によつて輸入され、支那傳來の時計に應用製作したものが一部の人人に使用された自働的に鐘を打つて時刻を示したから、これを斗鷄と呼び、土圭または時計などの當字を書くやうになつた。

***とけしない**　やうやうと福山の船に乘り、九里の渡も千里の如く、とけしないやら怖いやら(薩摩歌)　この金九千九百九十兩、今十兩で願成就と思ふ間のとけしなさ(隅田川)　急ぐとすれどとけしなき、牛の玉鉾遲くとも(蟬丸)

「解けし無い」にて、「し」は語氣を强める助詞である。打解けて寛たりとしない義。待ちわぶ。もどかしい。井原西鶴撰・武道傳來記・卷六・女の作れる男文字の條に、「雙六・歌がるた・謎かけてとけしなく秋の夜の明方おそく晴れて殘れる月を恨み」。風流御前二代曾我(寶永六年刊)三之卷に、「いかなる宿緣にや、ふと御枕をかはせしより又逢ふまでのとけしなさ、只いつまでもつきぬ緣をまつにかひなく」。

とげんじこと　なりんじ事をば說かず、とげんじ事をば諫めず(娫)

「遂げにしこと」の轉じた語。成し遂げたこと。「成りんじ事をば說かず云々」を見よ。

とこぼえる　次の間でとこぼえるはめらうめか(嵯峨天皇)

〔常吠〕長く泣きつづける。「とこ」は或語に冠して、とこしなへの意を表する語、「ほえる」はその條を見よ。

ところ　此碁盤はところで練つて石より堅く(國性爺)

〔野老〕山野に自生し薯蕷に似てゐる、その塊莖を掘つたものは粘粘して糊のやうである、食用に供す。

***ところてん**　主君と賴む李蹈天とやらところてんとやら、此處へ突出し詑事させい(國性爺)　これぞ聞き及ぶ敵の家來、樣子は聞きたし、ところてんがうする顏でによつと突出す鼻の先(會稽山)　蕎麥切料理に打立てられ、ところてんだう敗亡し(會稽山)

〔石花菜〕石花菜草をよく洗つて晒し、之を煮て滓を去つて冷し固めたものであつて、突出器に入れて細切にし、醤油または酢をかけて食ふ、夏時の食品である、「李蹈天とやらところてんとやら」は、其音の似たのでかく嘲弄的に言ひ、石花菜の縁で「此處へ突出し」とつづけたのである。「ところてんがう」は「ところてん」に「てんがう」(その條を見よ)をいひかけたのである。「ところてんだう」は「ところてん」に轉倒をいひかけたのである。

***とさごま**　國隣の土佐駒牽かせ、乘つた姿は天晴れ平岡左近が世繼(夕霧)

〔土佐駒〕土佐國產の小馬。和訓栞に、「土佐の國より出づる駒也、果下馬也といへり」と見えてゐる。果下馬とは小馬のことである。(塵添壒囊抄に、「明衡往來に馬を指して果下の類と言は何事ぞ。果下とは小馬の異名也、其長け三尺也、仍て是に乘ては果下低枝の下をも過つべし、故に果下と云」)。

どさごゑ　箱王少し嬲らんと思ひ、どさ聲出してウツツそんな事おいやり申すな(加增曾我)

重たげな濁り聲。蠻聲。俚言集覽に、「どさ聲。野人の言語」。

とさばう　鎌倉殿、義經の討手に向くべしと武勇の達者を選ばれし、それは土佐坊(反魂香)

〔土佐坊〕土佐坊昌俊をいふ。賴朝の命を奉じて義經を京都六條堀河館に襲ひ、却つて義經に殺された。

***とざま**　一在所が駈け集り、とざまの詮議ぞ是非もなき(二枚繪)　お前をとざまへ蹲はせてはこの傳三が立ちませぬ(反魂香)　手形の日附をとつと跡の月にして、とざまへは借宅見たてのその間廓に少し逗留分(反魂香)

〔外樣〕外方の義。表向き。公儀。「とざまの詮議」とあるは、內輪に濟されないで、外部に聞えて表沙汰の詮議の意。

***とじ**　內侍所への刀自・采女(百日曾我)　母の刀自泣く泣く又敎訓しけるは(宵庚申)

〔刀自〕內侍所に伺候し、または御厨子所、御膳部などの御用を勤める女官の稱。また老女の稱。書言字考に、「媍〈本字負、顏師古云、老母也、刀自者負字變也〉」。日本釋名に、「刀自＝仙覺が曰、刀自は女を貧する詞也、刀はとめる義、自はあるじの義也、とめる主といふ詞也」。

としばい　賴みましよ、紺屋の徳兵衛殿は此方かと、年ばいなる仁體なり(重井筒)

「としばへ」(年延)の訛。年配などの字が當てである。としごろ。男の分別盛り頃の年齡をいうたのである。

としはつけ　殊に今年は戌の年、犬は土に寢るもの、歲八卦に叶うた(壽門松)

〔歲八卦〕黑川道祐撰・日次紀事(延寶年中成)正月の條に、「市中高聲賣二歲八卦一、凡卜筮家依二其人一以考二其干支一、推二其性氣一、記二年中吉凶一而賣レ之、是謂二歲八卦一」。

どしや　地水火風の風は山、水は谷水・土は又、土砂の功德の眞言祕密(萬年草)

〔土砂〕洗ひ淸めた土砂を光明眞言で加持したもので、土砂加持は眞言宗で修する加持法の一種である。この土砂を病者に與へて病を癒し、又は亡者墓處などに撒布して、滅惡生善の利益を得しめ、殊に死骸の硬ばつて取納め難き時、この土砂を撒布すれば、忽ち功力によつて柔くなるといふ。不空羂索毘盧遮那佛

と、ちよこちよこ走りとはかはぐちにぞ着きにける(歌念佛)

「とはかは」に「川口」をいひかけたのである。「とはかは」は「とつかは」ともいふ。「とつかは」を見よ。「川口」は安治川口の乘船場をいうたのである。

とはく 地下には土伯の三眼角巍巍たり(井筒)

〔土伯〕河神を河伯、風神を風伯といへば、土神を土伯と云うたのである。

とひ 「とゆ」を見よ。

***とびうめ** 御威光四方に飛梅の、天滿の社に手習子供、書いて上げたる龍虎梅竹(卯月紅葉) 道頓堀を天神へ、駕籠も一里を飛梅や、社の廻り浮れ出で(生玉) 貸すお心より借る心御推量遊ばせと、泣く聲よそに飛梅の、神もあはれみ給ふべし(反魂香)

〔飛梅〕菅原道眞が藤原時平等の讒に遭ひ、流罪の身となつて京都を立出られた時、日頃愛された梅樹に對し、「こち吹かば匂おこせよ梅の花、あるじなしとて春な忘れそ」と、わかれの歌を詠まれた。心なき梅も詠歌に感じて筑紫まで飛び行つたといふ。この故事に據つてかくいうたのである。「おいまつ」の條をも見よ。

とびこくら 形は枯木の痩骨ながら、飛こくら・駈(かけ)こくら・輕技・早技劣ることはなけれども(唐船噺)

「とびことくらべ」(飛事競)の略。とびくらべ。

とびさや はや人魂も飛さやぬいて、共に諸羽二重の(氷朔日)

〔飛紗綾〕地紗綾に似て厚く、とびとびに花紋ある織物。和漢三才圖會・二十七に、「花文綾。俗云ニ止比左夜一、地似ニ紗綾一而厚如ニ素紬一、隔レ間有ニ花文一、所謂花文綾是也」。萬金産業袋・四、衣服門・唐物類に、「飛紗綾(絲紬)、幅一尺五寸、丈三尺一二尺、地もんあるをとびさやといひ、無紋なるをぬめとびといふ」。巣林子のこの文は、人魂も飛びに飛紗綾をかけ、紗綾に刀の鞘をいひかけた。「さや」をも見よ。

とひじやう 眞直に白狀せずば此太刀が問ひ狀ぞ(大覺)

〔問狀〕鎌倉室町時代に、原告の訴狀に對し、被告に答辯を命ずる幕府當局の通知書をモンジヤウと云ひ、また俗にトヒジヤウとも云ふ。

とびはちぢやう 篳篙をひらりととび八丈(天網島)

〔鳶八丈〕鳶色(茶褐色)八丈の縞絹。鳶色は元祿頃に流行した染色である。萬金産業袋・四、衣服門に、「本八丈島。八反がけ、黒地、黄島、とび色島、黄、とび色の無地、同菊田すり等なり、……常島の黄、とび色島は世にしられたる物なり」。ここの文は、篳篙をひらりと飛びに鳶八丈をいひかけたのである。

***とひや** 内の旦那が龜山の問屋で聞いて來て(丹波與作)

〔問屋〕問丸ともいひ、宿次(やどつぎ)の傳馬宿のこと。荷物の着否を問合すから問屋と云つたのである。(後世は商品を小賣人に卸賣する商家の稱となつた)。

とひやうむしやう とひやうむしやうの浮氣の花は是生滅法の髮を切る(扇八景)

「とひやう」は途方(とはう)(その條を見よ)の訛で、膝栗毛・二上にも「毎日毎日とひやうもなく風が吹いて」と見えてゐる。「むしやう」は無性で、むやみの意にいふ。ここの文は、「とひやうむしやう」に諸行無常をきかせたのである。巣林子作・百日曾我、三部經の條には、「諸行無常の春の花は是生滅法の嵐に散り」と書いてゐる。

***とほざむらひ** 勝海始め遠侍にぞ逬出しける(聖德太子) 御留守番の大小名遠侍相詰め(會稽山)

〔遠侍〕往時武家の主殿に近く設けた番侍の詰所を内侍と云ひ、遠くして中門の際に設けた番侍の詰所を遠侍と云ふ、其他小侍、東侍、西侍、南侍、北侍など遠近方角によつて名を付けた。そこに詰める番侍の稱にも云ふ。

とほしうま おつづら荷物は通し馬(丹波與作)

〔通馬〕國元から江戸まで道中馬を替へずに通しにする馬。道中屜づめの馬。

とぼす それに弟の傳三めが旦那まさりにとぼし立て(卯月紅葉) 夜歩き日歩きとぼしたて、歸れば小宿で衣裳を仕替へ(二枚繪)

〔點〕男女交接するをいふ。女狂ひする。江家次第に、聟のとぼして來た脂燭と、娶が迎に持つて出た脂燭と、火を一つにしてその寢所にうつすことが故實なる由見えてゐる。「とぼす」を男女交合の意にいふこと、蓋しかかることからいひ出した語か。或はまた陰莖を蠟燭に喩へて、男女の交接を蠟の流れるに擬して「とぼす」というたものか。支那の好色本に男女交接のことを蠟燭倒澆というてある。

***とぼそ** 一味の惡黨引具し後より附けて來りしが、とぼそ蹴破り無二無三に込入りける(津戸三郎) 旅に萎れし風情にて庵のとぼそ叩きつつ(三世相)

〔樞〕戸臍の義。とまらと相合うてぐるるとなり、扉の廻轉の用をなすものを云へど、誤つて扉又は戸のことを云ふ。

***とほみ** 物見・遠見・物頭(用明天皇)

〔遠見〕遠物見とも云ひ、遠所の樣子を伺ふ物見番である。遠所へ潜行して敵地の險易・敵兵の動作を偵察し、または此方にあつて彼方の動靜を察しる、何れも遠物見である。委しくは武家名目抄・職名部卷三十四に見えてゐる。

とほやまどり この戀ばかりはあだになさじと、憂きをも凌ぎましたるに、遠山鳥と隔りて(三世相)

〔遠山鳥〕山鳥は夜夜雌雄が峰をむかひに別れて寢るといふ。六帖の歌にも、「雲のゐる遠山鳥のよそにても、ありとしきけばわびつつぞぬる」など見えてゐる。

***どまぐる** これこれ德兵衛殿、我女房に隱るるとは何事と、聲かけられて失も敗(はい)まう、お吉もどまぐれ挨拶なく(女殺) 木の下闇にどまぐれて、覺えし道も幾度か同じ處にまひ戻る(氷朔日) 童心の楠木が智惠一つに廻(まは)されて、一千餘騎の兵のどまぐれ亂れうろたへし智略の程ぞ恐しき(女楠)

〔度紛〕度を失うて心紛る義。分別を失うて心迷ふ。

***とまりど** 息(いき)のあるだけしやべつて、それでもとまりどあることか(丹波與作)

「とまりうど」(泊人)の略。宿泊人。

***とむねつく** ムウムウとばかり差俯き、とむねつくより詞なし(宵庚申) 油斷したる追手の勢とむねをついて色めく所を(女楠) 町中といふにぎよつとしてとむねつき

破る菩提心の表象としてこれを用ゐる。

***とつこ** 其上代りに身が一門を守つて取らせんとは、大騙のとつこめなり(天鼓) いき騙めと言ひすてて抱へて走るをひつたくり、おのれこそ横取のとつこの皮、杤の胸打いただくかと振上ぐれば(孕常盤)

かたりもの(騙者)又は盜人をいふ。以て人を罵るにも云ふ。越谷秀眞編・物類稱呼・卷一、人倫部に、「かたり。東海道及中國にてごまのはひと云ふ、日光道中にて道中どつこと云」。「とつこの皮」も「とつこ」と同じ意に用ゐる。「かは」は「てんぼのかは」「すつぱのかは」「嘘の皮」などといふ「かは」がこんな語にも附いたので、意義のないものである。「ごまのはひ」の條を見よ。

とつさか 氣のとつさかな姑にせりせりいぢりたでられて、命もなしやありの實の、谷川ふりに身を投げう(脊庚申)

かどかどしい氣質をいふ。ここの文は「とつさか」に八百屋に緣ある「とさかな」(鷄冠菜)をいひかけたのである。鷄冠菜は紅色の藻であつ、「かれきぐさ」「きりんさい」「ふくろつなぎ」はこの種の藻である。

***とつておき** てんてん天氣も照降り雨に、五十餘りの女房の、とつておきをば濡らさじと(氷朔日)

〔取置〕平常着ない爲に取納めて置いた物、即ち秘藏して置いた晴衣。

とつなき 玄關の外繋に繩までかけたを覺えてか(艳狩)

〔外繫〕戸外に馬を繫ぐ柱。よせばしら。

とつぱいがしら とつぱいがしらの黒塗兜猪頸に着(川中島)


(武具訓蒙圖彙所載)
〔とつぱい〕

〔頭盔頭〕兜の鉢の頂の尖れるもの。武具訓蒙圖彙(貞享元年刊)に、「突貝二品あり、後へなびき上へ高き則はつり合惡し、故に口傳あり、又如レ圖烏帽子像前に神樂鈴立物あり心得あり」。

とてつもない 斧にも引かへ途轍もなき無法者(嵯峨天皇)

〔途轍無〕筋道も無い。何事もわけのわからない。慈眼大師傳に、「失二心氣一迷二途轍一」。越谷秀眞編・物類稱呼・卷五、言語の部に、「あとかたもなしといふ事を關西關東共にとてつもないと云」。

***とと** ととでもあがつて力付けての軍立が、ようござんせう(聖德太子)

「とり」(鳥)の「と」を躍らせた語で、鳥または鳥肉をいひ、轉じて魚または魚肉をいふ小兒語。小兒語に就いては「とど」の條を見よ。饅頭屋本・節用集に、「和國兒女呼レ魚曰二斗斗一、類說云、南朝人呼レ食爲レ頭、呼レ魚爲レ斗也」と見えてゐる。

***とと** これはととの手燒の鐵鎚煎餅、さまに進ぜて下さりませ(氷朔日) 雌鷄が時をつくるか、鎌倉殿はととかかやなどと嘲つても(最明寺殿)

「ちち」(父)を轉じて「こご」とも「とと」ともいふ小兒語である。この小兒語をかりて妻より我が夫を呼ぶにもいふ。(小兒語に就いては次條を見よ)。「ととかか」とは、嚊(妻)でありながら夫の權勢を持つをいふ。

とど 夜が短い氣がせく、そこからつげ、あいとは言へどとどしては手も屆かねば立上り、つぐも受くるも立酒を(女殺)

〔止止〕坐止。「とど」は「とどまる」或は「とまる」の首音を重ねた小兒語である。小兒は舌がもとほらねば、一語の首音を躍らせていふは小兒語に多い。例へば尿を「しし」、手を「てこ」、神を「のの」、衣を「べべ」、母を「かか」、寢を「ねね」、懷を「ほほ」といふが如き皆この類である。好色小柴垣(花洛醉狂庵撰・元祿九年刊)卷之一、不思議の牛の條に、「おれが書たる牛はとどした牛なりしに、是は立ちてゐる牛書なほしたにまがひなし」、とある「とど」も坐止の意である。和訓栞に、「とど。俗に坐するをとどといへり、小兒のことばなり」。「とどしては手も屆かねば立上り」は、坐つてゐては手が屆かないから立上つたと云ふ意である。(序云、「とどしては」を拾歳ではと解するのはよくない。「て」が濁音になつてゐないのみならず、娘は拾歳ではなく二九歳である)。

とどく 天竺に獅子といふ獸あり、…腹中にとどくといへる蟲有つて、此蟲毒を吐く故に體を破つて自滅すなり(出世景淸)

〔蠹毒〕物を殘害し、害毒をなすものをいふ。蠹は木中に棲んで其木を食ふ蟲である。巢林子これを獅子身中の蟲の名とした。(別に荼毒といふもある。荼は苦菜のことで菊科屬の毒草である)。

とどし 「とど」を見よ。

ととりらくゐみたけは相見る 「とそつ」を見よ。

***とねり** 佛ももとは若草の、秣刈飼ふ犍陟駒の舍人が涙・主從が盡きぬ名殘はなかなかに、人を導く端となり(百合若)

〔舍人〕貴人の馬の口取、又は牛車の牛飼などの稱。ここの文の舍人は車匿をいうたのである。

***どの** 師匠こそ情なくとも弟子兄弟の情ぢや、この又平を遣つてくれ、殿とも言はぬ、スッすすすつすつす理樣(反魂香)

〔殿〕殿は樣よりも輕いから、殿とは言はないで樣を附けて言ふの意。俚言集覽に、「殿。貴人を殿と云、又人の名の下にいふ時は濁呼す、殿は樣より輕し」。

とのちや 染めて括して、いとしとの茶の着衣はじめ(融大臣)

〔殿茶〕染色の名、赤黑のかちた茶色。ここの文は、いとし殿を殿茶にいひかけたのである。「まづ初春の空色に云云」をも見よ。

***とのもづかさ** 錦の褥引かへて刈穗の庵の草むしろ、主殿司の菖蒲草、葺かれど軒に生茂り(酒呑童子)

「とのもりづかさ」(主殿司)の略。殿庭の掃除、湯沐、薪油等の雜務を司る役所、またはその官人。

***とはう** 口も氣儘のとはうなし(宵庚申) 中將はあきれ果てとはうを失ひおはする所へ(天鼓)

〔途方〕すぢみち。ことわけ。分別。(この語もと「十方」か。十方暮といふ曆日の語もあり、とはうに暮れるなどともいふ。花の名殘(天和四年刊)卷五に「十方にくれて」と書いてある)。

とはかはぐち 日は傾くいざ急がん

を賣りに來て（女腹切）
〔取賣〕道具屋。骨董・古道具などをあきなふ人。增補俚言集覽に、「取賣。貞德が油粕に、是非ともに又もきたらば打ちやせん、こちの道具を望む取賣。東海道名所記（京の島原を記せる條）に、庄屋殿の二番子めしつれらるる大鼓衆には御出入をいたすとり賣云云。取賣、今いふ道具屋なり」。

***とりおひ**　萬歲鳥追とりどりに春は賑ふ折からの、厄神まゐり厄はらひ（烏帽子折）
〔鳥追〕年の始に賤民の婦女等が三味線、胡弓、または鼓などで囃立て、家家を廻つて物を貰ふ者。其謠つた歌は、「やんらめでたや千町や萬町の鳥追が參りて、福の神祝ひこめ、白げの米やろ眞白げの米やろ云云」といふやうなものや、其他傾城や俳優の名寄評判やうなことも謠つたのである。鳥追唄は伴信友編・中古雜唱集にも見えてゐる。謠曲・鳥追船などより察すれば、もと鳥を追ふ動作から變じて出來たものであらう。元祿頃上方では敲（その條を見よ）が鳥追のわざをやつたやうである。


〔追鳥〕

***とりかぢ**　おもかぢ・とりかぢ拍子をそろへてさ（女楠）
〔取舵〕右舵を「とりかぢ」といひ、左舵を「おもかぢ」といふ。右舵を取れば舳左へ向く。

とりかひくりげ　萠黃匂ひの甲冑弓箭、とりかひ栗毛に一鞭當て歩ませしが（關八州）
鳥飼産の栗毛（栗色で鬣の黑いもの）馬であらう。鳥飼は攝津國三島郡の村で、延喜馬寮式に攝津國鳥養牧とある昔の牧野で、淀川に沿ふ、今は開いて田となし、鳥飼村・味生村といふ。

とりがみ　のがみ・とりがみ・しめのかみ（源義經）
〔取髮〕馬の鬣の頸から肩に續く毛の稱。

とりくび　太刀は鳥頸（女楠）
〔鳥頸〕銀作りで螺鈿の鍬の柄頭に鵁鶄の頸を附飾にしたもの。柄頭に鳥の頭の形を飾としたもの。正本新野問答・三に、「鳥頸鍬。鷹飼所レ帶之鍬に候、銀作りにて螺鈿鍬の柄頭に、鵁鶄の頸を造りて付けたるに候、班猪の尻鞘を入候由、見二天永四年師時卿記一候、今の世にも小兒の所レ翫、俗云裝束びななど中候人形の鍬皆柄首鳥頸に候、斯樣の類に候歟」。

とりこ　兄上の不具をとりこにし、嫁御諸共逐出さん（吉岡染）
「取り事」の略。取立ていふ事。言ひぐさ。

とりこ　顏に取粉の面白いとてよれ衆の笑ひ（夕霧）
〔取粉〕餅を延ばし又は圓めなどするとき、そのねばりを防ぐ爲に用ゐる米の粉。

***とりさふ**　これには言譯だんだんあり、とりさへてたべ人人なう（堀川波鼓）
〔取支〕爭を調停する。仲裁する。宇治拾遺物語・卷十に、「伴大納言の出納の家の幼き子と、舍人が小童といさかひをして、出納ののしればいでてとりさへむとするに」。

***とりのあと**　文字は變つて鳥の跡、かけども盡きぬ松の葉と（國性爺）地をかきならし指を筆、……一字遺さぬありの儘、盡きぬ眞砂もよみ盡し、父は驚く鳥の跡（振袖始）
〔鳥跡〕文字をいふ。支那黃帝の時に蒼頡といふ者、鳥の足跡を見て文字を作つたと云ふ俗說によつていふ。事物原始に、「蒼頡觀二鳥迹一因遂滋、則謂二之字一」。

鳥海彌三郎　これを射ん者昔ならば鳥海彌三郎、當代は淺利の與市殿（會稽山）
射術に長じ、鎌倉權五郎景政の右眼を射た人。

***とりぶきやね**　浪人の巢のとりぶき屋根（大經師）　とりぶきやれの雨よりも人目もらぬを賴みにて（井筒）
〔取葺屋根〕嬉遊笑覽に、「そぎ板をならべて押へに石或は木の丸太などを載せ置くなり、今も諸國に此制あり」と見え、和漢三才圖會に、「以二薄曆一葺者名二板屋一、或名二取葺一、上壓二小石一」と見えてゐる。

***とりぶね**　鳥船に風切らせ、かけひき自在に漕廻し（百合若）
〔鳥船〕古昔あつた船の名。飛鳥のやうに疾く走る船の意であるとも云ひ、水鳥のやうな形に見えるよりの意であるとも云ふ。

とりもの　御神樂採物謠物御魂の鏡世を照す（振袖始）
〔採物〕神樂の時舞人が手に採つて舞ふもので、その物毎に古歌を謠ふ。拾芥抄・上末、神樂部に、「採物。榊、幣、杖、篠、弓、劔、鉾、杓、葛、韓神」。

***とりゐだち**　明けよ明けよと貫の木も折るるばかりに蹈敲き、鳥居立にぞ跨つたる（反魂香）
〔鳥居立〕鳥居の立つてゐるやうに兩脚を廣げて立つこと。

***どれい**　玄關に物もう、どれい、どれい、小栗軍兵衞御慶申す（夕霧）　三杯機嫌の朝ぼらけ、物もう、どれい（雪女）
「どれより」の約訛。貞丈雜記・卷十五、言語之部に、「人の許へ行きて物もうといふは物申さうといふ事なり、拟内よりどれいといひて出づるは、どれより御出候ぞといふ事なり」。

***どれる**　さて喧しい、皆あいらはどれさうな、なう虎樣座敷の首尾はどうぞいの（虎が磨）　どれに下地の無意氣力、これはどうぞと引除くる（壽門松）　足はどれても日角は強き、袴肩衣橫筋交、町一ぱいをひよろひよろと、すぐにどれ込む井筒が座敷（壽門松）
「とろける」（盪）の義。だらだらして締なくなる。とろける。好色二代男（貞享元年刊）卷七、庵さがせば思ひ草の條に、「住吉の酒に蛤採らせ、松露を探し落葉集めて、冷酒は飮まれじと、皆皆どれて立騷ぐは」。「どろ」をも見よ。

***どろ**　こちのどろめは山上參りの行者講のと、……十貫近い錢取つて（女殺）　まだこの上にどろめが何を仕出さうやら（女殺）
だらだらして締りのないこと。又その者。「どれる」を參照せよ。（泥醉・如泥などの泥も蟲の名である。康熙字典に「泥＝蟲名、出二東海一、得レ水則活、失レ水則如レ泥、〔杜甫詩〕先拚一飮醉如レ泥」）。

とろく　巖に苔のむすめ樣、奧のとろくの御すまひ、誰がいつの間に粹にして（本領曾我）　奧のとろくにひつかがみ、人怯めする大將に逢はんといふも無骨なり（關八州）
とほおく（遠奧）の約訛か。奧まる遠い所。倭訓栞に「とろく＝俗に山のとろくなどいへり、遠奧のつづまりたる辭なるべし、とほろくと

たるけでん顔(女殺)

「むねをつく」を見よ。

***とめき** 袖のとめきの薫なば庄司が鼻にききとがめ(松風) 袖のときめきも薫り來て、花の物いふ其風情(加增曾我)

留來の義。「袖のとめきの薫」とは、香をたきしめて袖に留來れる薫。(序云、古今集・春下部の歌に「花散れる水のまにまにとめくれば云云」とある「とめくれば」も留來ればで、目を留來ればの義である)。

とめぶろ ヤア傳五平それはまんがち、今夜は身がとめぶろだ。イヤ身が先だとせり合へば(女楠)

〔止風呂〕止は他人の入浴をとめる義。自分のみ浴する風呂。ここの文はそれを房事にきかせたのである。

***ともきりまる** この脇指も其時の切米にて拵へ、これも古主の賜、我家の髭切・膝丸・友切丸とも身を放さず(三國志)

〔友切丸〕源氏重代の名刀の名。曾我物語・箱根別當に逢ふ條に、「兵庫鎖の太刀を別當取出し五郎に與ふ、此太刀は友切丸なり、もとは源頼光異國より渡來のふあく大夫といふ鍛冶にうたせ、其家代代傳へたり、義朝鞍馬へ納め、後義經・毘沙門に願て取り得て後、西國へ出陣の時祈りの爲に箱根へ納められし由」。

***ともし** 照射する火串の影のれらひ獵(曾稽山)

〔照射〕夏時獵夫が松を燃し鹿を寄せてこれを射ること。幽遠齋主人撰・季寄悉註和田津海に、「夏月腰二鐵籠一、焚レ火似二松明一、鹿見レ火太喜、來竟爲二人所一レ殺、謂二之照射一」。

とやおとし 隼が雲井に落すとやおとし、はつしと當ててひらりと蹴立て(扇八景)

〔鳥屋落〕隼が鳥屋から子を落して力を試すこと。

***どやくや** 今のどやくやに同道めが摑んで走つた(生玉) どやくやまぎれに長作は行方なく逃失せたり(生玉) 今のどやくや紛れに太刀も盜取りたるに疑なし(艶狩) どつと笑ひのどやくや紛れ(反魂香)

混雜して騷がしい樣にいふ。どさくさ。

とやざけ いざ酒にしようぢやあるまいか、そのとやざけの御託宣、かみは二階へ上らせ給へ(蛙合戰)

〔鳥屋酒〕遊女を籠の鳥(その條を見よ)に喩へてその局を鳥屋といふ。鳥屋酒は局で飲む酒。傾城禁短氣・三之卷に、「鳥屋といふは、一切の勤女・男の歡に逢へば定まつて濕氣を煩ふ、此病中を鳥屋といへり」とあるも、鳥屋につくを略していうたのである。巣林子のここの文は、鳥屋酒に豐御酒をきかせたのであらう。(「かみは二階云々」をも見よ)。

とゆ 空も雨氣の駕籠の桐油、賣木の花に氣をはらし(生玉) 駕籠の雨どゆ打明けて二人が膝を組合せ(生玉)

「とうゆ」(桐油)の略。桐油合羽をいふ。椎本才麿撰・椎の葉(元祿年版)に、「雨のとほれば桐油まくろ竹輿」とあり、「桐油」に「とゆ」と傍訓してある。「とゆ」は「とひ」とも書いたので、生玉心中の古刊本に「とひ」としてある。傾城歌三味線(享保十七年刊)一之卷、あれあれあれを見やの條にも、「今朝からしつぼりとした雨になりて、とひかけた駕籠二丁云云」と見えてゐる。菊岡房行撰・近代世事談に、「桐油。桐に油桐といふあり、はじめは此實の油にて製したるなり、今は荏の油を用ゆといへども桐油の名あり」。

とゆた 「ゆた」を見よ。

***とよ** お果なされた母樣へ孝行と思ふ故ぞとよ(堀川波鼓) 針道違ひ着憎しと、手づつの浮名は取るまいとよ(薩摩歌) 殺しなりとも爲されずして、何が恨みのあるぞとよ(卯月紅葉)

「と」は意の切れる所を承ける助詞、「よ」は感動を示す助詞。巣林子の文中にこの例の如く「とよ」を用ひた所が多い。「とよ」の「と」は無くてもよけれど、これがあつて言葉なだらかに聞えて、元祿頃の言葉の用方である。

とようらやす 「うらやす」を見よ。

とよはたぐも とよはた雲や伊豆の國、蛭が小島におはします(烏帽子折)

〔豐旗雲〕旗のやうに美しう棚引ける雲。この文は、豐旗雲出づの義から伊豆の序にしたのである。

どよむ 殊に今日は土用の入、それでか跡がきつうどよむ(大經師)

響く義。痛みがぴりぴりと響いて感じるをいふ。和訓栞に、「とよむ。萬葉集に響又動をよめり、……山とよむ・山下とよみ行く水など皆ひびくをいふ也」。誹草(元祿十四年刊)にも、「響」に「どよむ」と振假名が附けてある。

どら 身も昔は長う短うどらをさいて、殿だ大盡だとも言はれ(加增曾我)

「だんびら」の略訛であらう。「だんびら」を見よ。

***とらがいし** これこそは虎が石、……せまりし戀の一念をこの石に留め置き、情知りには動くとも、野暮な無粋な男には千人力でも動くまじと、思ふ餘りの戲れを禿があだの口ずさみ、ゆききの戀のためしぐさ、虎が石とはいふぞかし(扇八景)

〔虎が石〕相模國中郡諸越原の附近にある。東海道名所記に、「もろこしが原、十間坂、やまし田、宿がはら、虎が石とて丸き石あり、好き男あぐればあがり、惡しき男のもつにはあがらずといふ、色好みの石なりと旅人はあざむきかたる、もろこしの望夫石、我朝には大伴の佐手彥が妻松浦佐夜姬の領巾振山の石となれり、虎御前もさだめて此ためしなるらむ、貞女の情はかくこそと、樂阿彌は涙を流して感じけり、但惡しき男の力强き者はやすやすとあげもぞすらん」。

***とらのいつてん** (大經師)(鑓田)(百日曾我)

〔寅一點〕五更の一點に同じ。今の午前四時過ぎに當る。「とき」を見よ。

とらのをざくら 正月一の虎尾櫻、これこそ花の御緣日(賀古敎信)

〔虎尾櫻〕櫻の一種。俳諧歲事記栞草に、「虎尾櫻。此樹の類必ず枝條屈蟠して花の蔕短く、枝上に花と葉と斑にして虎斑の如し、故に虎尾の名あり」。松岡玄達撰・櫻品に、「千瓣にて枝に密りて咲くなり、毬の如し、枝曲折なし、花開く事最も遲し」。

とらはしり 飛鳥のかけり虎はしり、手を盡してぞ戰ひける(三國志)

〔虎走〕兵法の手の名。猛烈敏速な太刀捌をいひ、獅子奮迅または虎亂入の類の語。

とりうり 上方のとりうりが此脇差

令二内教舞ㇾ姫、見ㇾ於二臣下一云々」。百練抄・巻七云、「保元三年五月二十九日、覽二内教坊舞姫一、近代斷絶興二行之一」。

＊**ないし** 内侍・命婦のおもと人(艶狩)

〔内侍〕後宮内侍司の女官に尙侍・典侍・掌侍とあつた。單に内侍とばかり書けるは掌侍のことである。

＊**ないしどころ** 天皇は神璽・寶劍・内侍所を帶し行方知れず(井筒) 禁中樣御内侍所の釘下地(氷朔日)

〔内侍所〕溫明殿をいふ。神鏡を齋き祭れる所で、内侍これを守護するによつて内侍所といふ。よつて又直に神鏡をさしてもいふ。

＊**ないじやくり** せめて在所が聞きたいと、聲を立てねばないじやくり、氣も沈入る時しもあれ(反魂香)

「なきじやくり」(泣噦)の音便。しやくり泣き。

＊**ないしよう** 傳さへあらば内證から申上げんと存ずれども(淀鯉) 頭つきは兩替町、内證は曾我殿(女腹切) 以前は金銀ない大盡、今日參るは内證に樣子も金もある大盡(淀門松) 上には姫樣御誕生、御內證のよしみにてかかが乳を上げまし(丹波與作) 内證理性の光を放ち、虛空に上ると見えけるが(嵯峨天皇)

〔内證〕内密。内輪。表向きならぬこと。「内證から申上げん」とは、勝手向きから申上げようの意。「内證は曾我殿」とは、内輪は曾我兄弟のやうに貧乏であるの意。女大名丹前能(元祿十五年刊)三之巻に、「其くせ男は曾我殿、一日買うて其わけきくこともならぬ身代」。風流御前二代曾我(寶永六年刊)初巻に、「貧なことには曾我殿のやうなと、世話にいはるること近頃無念なれども」と見えてゐる。曾我殿といへば貧乏のことにいはれたものである。「御內證のよしみに」の「御內證」は、人の妻を稱する語。菅原傳授手習鑑・寺小屋の段に、「ムウして其許は何人の御內證」。「內證理性」の內證は、內心に證る眞理をいふ。

＊**ないそん** 急難、急病、內損、外損、胝(振袖始)

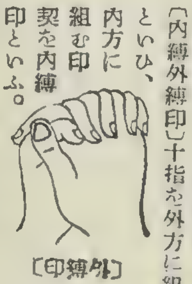
〔內損〕常に酒肴を嗜み二多く飮食し、其毒氣積つて腹中から腐るを俗に內損といひ、また內瘡ともいふ。胃腸などの病。

＊**ないてん** 日夜內典外典に眼をさらし(室町千疊敷)

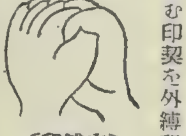
〔內典〕佛教書をいふ。日知錄に、「佛敎之傳寖盛、後之學者遂謂二其書一爲二內典一」。

ないばくげばくのいん 內縛外縛の印を結んでかけ給へば(嵯峨天皇)

〔內縛外縛印〕十指を外方に組む印契を外縛印といひ、內方に組む印契を內縛印といふ。



〔外縛印〕



〔內縛印〕

＊**ないり** 下は泥梨が夕陽の雨の後虹を成せるに異らず(以呂波)

〔泥梨〕梵語(Niraya)である、地獄を云ふ。謠曲・石橋に「下は泥梨もしら波の、………、たとへば夕陽の雨の後に、虹をなせる姿、又弓を引ける形なり」。

＊**なかがさ** 燗せいでも大事ない、肴も盃も入らぬ、中がさ添へて持つて來い(女殺)

〔中盞〕中位の盃子。中形の椀。

＊**なかご** 今日直になかごに添めの鎚目を入れ、銘を刻んで差上げよとの仰せ(唐船噺) 棒鞘の柄引拔きなかごを見れば(女腹)

〔中心〕刀身の柄の中に入つた部分の稱。刀劍略記に、「中心また込とも云ふ、鐔の中へこむる所なれば、中込の下略にてなかごと云ふ、込といふは中込の中を略したるなり」。

＊**なかごと** 陰言・中言・ささへ口、立つてはふすべ居ては譏り(卯月紅葉) 盜みとては致さず、人を殺せし咎もなく、ましてなかごと僞りせず(孕常盤)

〔中言〕兩者の間に入つて一方を惡しざまにいひなすこと。なかぐち。この語古くは萬葉集卷四の歌に、「人のなかごときき こすなゆめ」、と見えてゐる。

長崎の伊左衞門樣 長崎の伊左衞門樣とは違うたもの、もう踊らぬぞや(博多)

大阪新町扇屋の太夫夕霧の馴染客伊左衞門(巣林子作・夕霧阿波鳴渡を見よ)のやうな長崎の粹客をかくいうたのであらう、そして其人は毛剃九右衞門のことであらう。九右衞門の詞に「亭主うすうす見知りがあらう、廓の縱橫十文字、昨日まで端ぜせりした我我」といひ、また太夫小女郎は九右衞門を障子の透より見て、「ありやわしが近付き、まさかの時は心便になりましよと、力を付けてくれた人云云」と言うてゐる。されば九右衞門は太夫などにも知られ、傾城買の粹客で、これを兗が長崎の伊左衞門樣と洒落て言うたものと解することは、巣林子の文としてさるべきことと思ふは非か。

＊**なかざし** 源氏の大將義經に見參のしるしに小兵ながら中差を參らせん(門出八島)

〔中差〕貞丈雜記に、「中ざしといふはとがり矢をかりまたの次に差すなり、上矢のかぶらの次に差す故中差とはいふなり、とがり矢は羽四つ立にて鷹の羽なり、小羽は山鳥の尾なり、こしらへ樣一手の物なり、內むき外むきあり、……」。

＊**ながし** ながしの松は深綠、じつと控の若綠(聖德太子) 笑顏ばかりの梅櫻、ながし控の睨合(孕常盤) まづ鉢植の作り松、すんと流しの一枝は太夫の威勢備はりて(生玉)

〔流〕立花の法式にいふ流枝のこと。「しやうじん」の條の書を見よ。立花時勢粧・八に、「立花秘傳抄之五。流枝は松に限りたるものなり、煙がへしとも香爐のぞきとも名づく、瓶の口二寸ほど上、後角より一文字に出して葉先を香爐の眞中にてとむる也、心すぐに副なき、請きほひたるにより流枝を一文字に指、是上の枝を取合宜しきが爲なり、一瓶の內流枝より低く出す物なく、又水際にて是より長きもの不ㇾ可ㇾ有」。

なかたん そがいにせでも大事なかたん(博多)

長崎國訛、「なかつたに」の意。現今も佐賀・長崎地方で用ゐてゐる。

なかて 四つ目殺しに中手を入れて(國性爺)

〔中手〕圍碁で、敵の目を缺く爲に目の中に石を打込むこと。

＊**なかど** 夢の中戶の假枕(三世相) 夢の中戶の夢枕、月を憎みし夜半もあり(夕霧) 夜半の中戶も引替へて、人目の關にせかれ行く

もいへり」。傾城若紫に「とろくの山家育ち」。

どろく　神佛の罰も思はぬどろく者、友達甲斐に引しめて意見頼みまする（女殺）　此方の其正直な見拔いて、どろく者めがしたい甲斐に踏付ける（女殺）

「どら」とも「どろ」ともいふ。「どろ」の條を見よ。（一說に「墮落」の訛といひ、或は「道樂」の訛といふ。放蕩。放埒。松屋筆記卷五に、「どろばう・どらもの・どうらく＝ドラモノは蕩物也、放蕩にてとりしまらぬ由の名也、ドウラクもトロクルの訛語也、ドロバウも蕩坊也、坊はもと法印をいふより轉りて、ただの人にも某坊などいへり」。物類稱呼卷五、言語の部に、「思ふにだらく變じてだらくといひ、又だらくといふ詞ちぢみてどらとなりたるか」。

***どろばう**　机おつ取り、泥坊めとてははつたと打ち、道知らず義も知らぬつくにふめとては丁ど打つ（女夫池）

「どろ」（その條を見よ）に、寢坊などいふ「坊」の添加した熟語である。放縱者。ならずもの。浮浪者。俚言集覽に、「泥ぼう。江戶にては盜を云、大阪邊にては浮浪子弟を云」。

***とわたる**　いかさま是は七夕の年に一度なこらへかれ、又取越の天の川とわたる舟か（用明天皇）

〔門渡〕「門」は地形の狹くなつて水瀨一つに流れる處を云ふ。門を渡る。古今集・雜上部の歌に、「わが上に露ぞおくなる天の川、とわたる舟の櫂のしづくか」。

とゐきん　梅ありその花七つ八つ九つとゐきん絃十（三國志）

〔斗爲巾〕箏十三絃の中にて、第十一絃を斗、第十二絃を爲、第十三絃を巾といふ。箋注和名類聚抄・卷六、箏の條に、「今案箏譜云、一二三四五六七八九十斗爲巾、是十三絃名也」。

とをだんご　宇津の山邊のとをだんご、所所の名物買うておあしつくつく（丹波與作）

〔十團子〕駿河國安倍郡宇津山の名物である。宗長手記に、「宇津の山に雨宿り、此茶屋昔より名物十だんごと云、一杓子に十づつ必らず女郎などにすくはせ興じ」と見え、東海道名所記（貞享五年刊）宇津山を記せる條に、「坂のあがり口に茅屋四五十家あり、家ごとに十團子を賣る、其大さ赤小豆ばかりにして麻の緖につなぎ、古は十粒を一連にしける故に十團子といふならし、……樂阿彌十團子を見てよめる、小粒なるうつの山べの十團子、しかもかたくて齒にあはぬなり」。風俗文選犬註解（佐保介我撰）卷三に十團子を旅人が食つてゐる繪が載せてある、それによれば普通の大さの團子である。「うつの山」をも見よ。

十とをいひつつ十返　神武十二代の帝景行天皇、十といひつつ十返の春秋を重ねましませば（日本武尊）

十返は千年をいふ（「とかへり」を見よ）。十返の十倍卽ち萬年をいふ。伊勢物語の歌に、「十といひつつ四つは經にけり」、とあるも四十年を經た意である。

とんげう　是心是佛の旨を存ず、これなば頓敎と名付く（大原問答）

〔頓敎〕頓速に成佛する敎法をいふ。華嚴・天台・眞言などの敎法は、一生中に成佛するを說くによつて頓敎である。

***とんしようぼだい**　常陸小萩と云ふ女、上下五日の車の檀那、志は恩ふ人頓證菩提と書き記し（小栗判官）

頓證菩提南無阿彌陀佛（歌年佛）

〔頓證菩提〕頓に迷妄を去り佛道を成就して、佛果を證得すること。謠曲・求塚に、「南無幽靈成等正覺、出離生死頓證菩提」。

***とんせい**　昨日とやらん夕暮に遁世の身となりける山（吉野忠信）

〔遁世〕隱遁して世上の俗事に心を惱さぬこと。出家。

どんちやう　床の緞帳御簾もさつと下りければ（女護島）

〔緞帳〕だんだら筋のある幕。

とんてき　いやさ朝敵にもせよ、とんてきにもせよ、武士の一言綸言より重し（蟬丸）

とんちき。まぬけ。のろま。この文は朝敵ととんてきと、同脚韻の語を用ゐたのである。

どんびやくしやう　身どもは和泉のどん百姓、土ほぜりでおぢやれども（歌念佛）

「どびやくしやう」（土百姓）に撥音「ん」の增加した語。土民の義。土着の農夫。百姓とは庶民の義、轉じて農夫をいふ。

どんぼ　どんぼも續く鮠も續く（浦島）

〔杜父魚〕鰍をいふ。硬鰭類に屬する魚、淡水に產し、沙魚に似て體長三寸ばかり、岩石の下に隱匿してゐる。物類稱呼・卷之二、動物の條に、「杜父魚＝かじか、京大阪にてイシモチ、……、九州にてドンポ、筑前にてネンマル」。

な

な　隨分ぬからしやんすなと、名な引き包むこの屛風、火な吹き消して烏羽玉の、玉は奧にぞ入りにける（大經師）

〔名〕惡名。ここの文は、おさんが後に取る姦通の惡名を引き包むこの屛風の意。

***ない**　馬取ども其間宮へ往て休息せい、ないといふより中間ども休む方には足早く（鑓權三）　こりや岡平、用がある爰へ來いと、にこやかに言ひければ、ないと應へてゐざり寄る（碁盤太平記）　ないと應へて振出す（薩摩歌）

中間・小者・奴などの返答詞で、「はい」といふに同じ。（和訓栞に、「應對の辭に肥前陸奧にナイと云」とあるから、この地方では普通に用ひたものである）

***ないぎ**　こなさんお內儀にならしやんすか（薩摩歌）　親御の國からお內儀呼び（國性爺）

〔內儀〕町人の主婦を呼ぶ稱。女重寶記（元祿十五年刊）卷之一に、「大名のを奧樣といふ、……町人のを內儀といふ、內の義則をさむるといふ義なり」。

***ないがま**　熊手ないがま打入れ打入れさがせしは（源義經）　大長刀大ないがまに九尺の棒（用明天皇）

「なぎがま」（薙鎌）の音便。

ないけうばう　內敎坊の後より嘶き出づる惡馬の相形（關八州）

〔內敎坊〕宮城內・左近衞府と茶園との間にあつて、朝廷にて女樂・樂舞・舞姬を育成する所。江次第抄（七月節會）云、「內敎坊、唐世置之、敎女樂之坊也、又云、樂舞云々、天子

いで編笠の、中の座敷に通りしが(夕霧)

草履を蹈延ばしてその形長刀のやうに反れるをいふ。ここの文は、遣手を鎗にきかせ、長刀の草履と武器の縁語を用ゐた文飾である。

長刀鉾(なぎなたぼこ) (堀川波鼓)

祇園會に長刀鉾の山車を引けばいうたのである。黒川道祐編・日次紀事に、長刀鉾の長刀は三條宗近が作なる由見えてゐる。「ぎをんゑのやまぼこ」を見よ。

梛の葉(なぎのは)

「笠にさいたは梛の葉」を見よ。

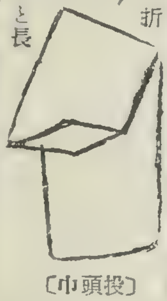
なげざや 「熊の皮の投鞘」を見よ。

***なげし** 妻戸を上り長押を傳ひ(松風)

「ながおし」(長押)の約。鴨柄の上又は敷居の下に横に長く亘せる材。

なげづきん 遺物と歎く投頭巾・鼻紙袋・煙草入(五人兄弟) 落人の身に業平は墨の衣に投頭巾(井筒)

〔投頭巾〕四角に縫うて後方へ折つて被る頭巾。嬉遊笑覽・卷二に、「なげ頭巾。四角に縫たるを後の方へ折てきる頭巾なり(傀儡師人形また今小兒にも着るあり)、又いと長きもあり、難波にて俠客などの着たるも、其始東海道名所盡けんくわ買の奴といふに、投頭巾をやりおとがひ迄引かぶり云云」。


〔投頭巾〕

***なげぶし** 本歌・なげぶし・はやり歌(女夫池) 逢ひた見たさの唱歌をば、投節に唄うつ書いて見つ(吉野忠信)

〔投節〕貞享元祿頃京阪地方で最も流行した小唄節である。往昔投節の稱は歌句の終りをヤンと投げて謠ふよりいひ、その後變遷を經て、明曆頃京都島原の遊女が謠ひ始めた一種の節で輕く切り、聲を投棄てるやうに謠ひ、唄は大方三四・四三・三四・五の形をなし、三絃に合せるものを投節と稱するやうになつた。「逢ひた見たさの唱歌」とあるはその條を見よ。

なごやのむなだかおび 眉は隱せどとりなりの、町でなごやの胸高帶(女殺)

〔名古屋の胸高帶〕名古屋帶といふは、寛永頃以前は丸打の組帶で兩端に總があつたが、貞享・享保頃は絹眞田の平帶が流行した。もと肥前名護屋で唐絲で組んだ帶なるによつてこの稱がある。當時は女も帶を胸まで高くあげて纏ふのを意氣な風として流行した。寛濶平家物語(寶永七年刊)卷四に、「近年は抱帶無しに胸に卷立て、又此頃は三重まはりに幅狹く臍どほりに締付け、はらりと結下げたり、されば女帶古は五尺三寸に極りしが、今は壹丈八尺五寸なくては思ふままならず」。色縮緬百人後家(享保三年刊)三之卷に、「無紋の黑縮緬・淺黃の下着、わたりもふかの中ぐけ帶胸高に結び、加賀笠に紫縮緬のばうし、長長し夜を獨寢せんとは誰か思はん」。萬金產業袋・四・衣服門に、「名古屋織(男女)帶。糸眞田の事なり、女帶は總付幅四寸位、八つかけ・かすり・縞・無地品品、男帶幅二寸五分位、尤糸眞田といふは只一枚に織りたる物、名古屋織といふは袋打なり、此袋打にも二品、横糸の眞ともに絹のより糸にて織りたるあり上品なり、又眞に木綿糸を入れたるありこれ中品、右何れも夏帶地なり」。骨董集・上編中卷に、「名古屋帶。文祿前後より寛永の頃までの古書を見るに、男女ともに絲を絅にし、繩に似たる兩端に總を付けたるを、幾重ともなく廻して帶にしたる體あまた見えたり、其色は白あり紅あり、青黃赤などを交へて彩色したるもあり、按ずるに是は名古屋帶なるべし、昔肥前の名古屋にて唐糸をもて組みたる故に名古屋帶とも又組帶とも云ひしと或人云へり、……扨絅の名古屋帶は便利ならざる故に寛永以後はやや廢れたるにや、貞享より享保の頃の草紙どもに往往見えたる組帶、名古屋織の帶、糸打の平帶、名古屋打の房帶などへるものは、寛永以前の古制の如き丸打にはあらで、平打にて今いふ糸さなだの類なり」。女殺油地獄のここの文は「町(町風)で無い」(即ち傾城風)の「な」を「名古屋」にかけていひつづけたのである。「小笹に露のたまられぬ」をも見よ。

なさか 澤瀉が家の寶、狐の革の鼓をも上げよとの宣旨なるが、これにほうど困つたり、どうぞなさかの立たぬやうに奪ひ取りやうあるべき(天鼓)

「なさが」の濁點を脫したのであらう。名瑕の意。名に疵つくこと。汚名。「さが」を見よ。

なさぬなか 松若殿とても父上の御胤、私も同じこと、なさぬ中にはなほ恥あり(隅田川)

〔不成中〕まま親子の間柄をいふ。「なす」は成で生む義。竹取物語に、「己が成さぬ子なれば」。大祓詞に、「國中に成出武天之益人等」。

***なしうち** 平禮小結梨打や(用明天皇) 梨打烏帽子(世繼曾我)

〔梨打〕「なやしうち」の略。柔かに作つた烏帽子で揉烏帽子の一種である。表ふしがね染の綾で、裏はうすやうを黑漆に塗り縫うて作る。

***なしつぼ** 梨壺梅壺夜の御殿(天神記)

〔梨壺〕溫明殿の北、麗景殿の東にある昭陽舍の別稱である、庭中に梨樹を植ゑてあつたのでこの稱がある。

なじほ 漆漉の紙は見とほし、森彥の尊と一締になつて妹を奪うて、鳥の子とはなじほらしいたくみやな(持統天皇)

〔名鹽〕攝津國有馬郡鹽瀨村大字名鹽より產出する紙を名鹽紙といひ、横一尺四寸縱五寸一分位のもので、多く書信用となす、世に大阪半切といふものこれである。ここの文は「名鹽」に「なあしほらしい」をいひかけたのである。

なしものをけ (用明天皇)

〔鯐鰊桶〕「なしものをけ」(魚鹽物桶)の略。しほから桶。和訓栞に、「なしもの。醢をいふ、鯐鰊も同じ、魚鹽物の義也といへり、新撰字鏡に鯐鰊を魚のわたとよめり、今わたじほからといへり」。

なだ 心中が嬉しくてうらなだがこぼるると泣いて見せければ(加增曾我)

「なんだ」(涙)の撥音の脫落した語。

なつかぐら 京は浪華の景色より、劣るみな月なつ神樂(女殺)

〔夏神樂〕難波鑑(延寶七年刊)に、「六月十七日・御靈夏神樂、同二十一日・博勞町いなり夏神樂」。

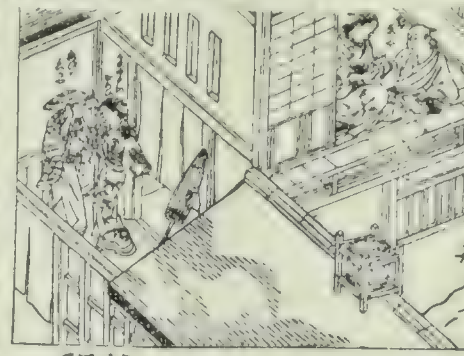
***なつげ** 御帳面の第一の、筆も夏毛の藥は(會稽山) ならびなつ毛の狩野の筆(反魂香)

〔夏毛〕鹿の毛の夏になつて、黃色に白斑の鮮かに出たものをいひ、その毛で作つた筆を夏毛の筆といふ。和漢三才圖會卷十九、筆論、筆の條に、「今多所レ用者鹿毛也、有二白赤二種一、……、夏月徐長俗云二夏毛一、變色微赤而强」。

***なつしよ** 納所同宿入替り立替

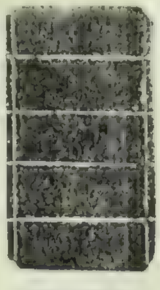
（冥途飛脚）　青梅すきやらば惡阻(つはり)でござろ、めいよな不思議や、中戸のかれ言がはや七月とぞ答へける（百日曾我）

〔中戸〕商家などの店庭から中庭に入る戸口。遊女などが情交の深い男と密會する場所は多く中庭の戸のあたりであつた。故に密會のことをいふに中戸が多く用ゐられてゐる。傾城禁短氣に、遊客と遊女が中戸に密會せる繪を載せて「太夫中戸の出あひ。しゆびはよいかや」と記してある。


（傾城禁短氣六の卷所載）
〔中戸〕

ながといんろう　脇詰めたらしつくりの長門印籠（讓權三）

〔長門印籠〕牛馬の革に黑漆を塗つた印籠で、もと秋月長門守の創案であるといふ。江戸塵拾に、「秋月長門守屋敷より出る、牛皮にて造る印籠なり」。


〔長門印籠〕

なかとみはらひ　中臣祓のお聲の色どうもたまらぬ（關八州）

〔中臣祓〕大祓に同じ。古へ朝廷で中臣氏がこれを掌つたから、大祓を中臣祓ともいふ。神祇令に、「凡六月十二月晦日大祓、……百官男女聚二集祓所一、中臣宣二祓詞一、卜部爲二解除一」。

***なかなか**　こなたの若衆平兵衞殿一寸呼出して下されませ、ハアア中中や（氷朔日）　してそれは必定にて候かと言へば、冠者小聲になつて中中のこと（雪女）

〔中中〕然り、承知したの意にいふこと謠曲・狂言の文に用例が多い。諺草に、「俗言の中中は領承したる詞なり」。

中(なか)の風(ふう)　其處へ縞縮に鹿子(かのこ)の帶、慥に中の風と見た（女殺）

大阪新町遊廓の妓女風。新町遊廓は曾根崎新地遊廓と南堀江遊廓との中間にあれば中(なか)といふ。新町遊廓は江戸の吉原のやうなもので、其の他の遊廓は岡場所的のものである。李秀撰、澪標（寶曆七年刊）新町開基の條に、「新に町となりしより世人新町とよぶ惣名なり、又當津にては中(なか)といふ」と見えてゐる。

なかのゐのこ　「ゐのこ」を見よ。

***なかば**　忘れがたなや刀屋の、なかばと深き妻戀に（女腹切）

〔半〕遊廓では遊客の名を呼ぶに、其姓名に緣ある語に替名して呼んだ。「なかば」は卽ち半七の替名である。其他紙屋治兵衞を紙治樣といひ、河内屋與兵衞を河與樣といひ、名古屋山三郞平を「ひら」といひ、鍛冶屋の弟子平兵衞を「ひら」といへる總てこの類である。この遺風は現今も遊廓内に存してゐる。

なかばらひ　（天網島）

〔中拂〕盆と歲末との中間、十月末の支拂。

なかばん　おんどもが二十七の年(とし)薩摩者と喧嘩した話、嘘ぢやなかばん聞かつしやれ（博多）

「ばん」を見よ。

***なからじに**　無慙や二人はなから死（二枚繪）　なから死して（重井筒）

〔半死〕死にきらぬこと。半死半生。

***ながれ**　それはながれの身のつらさ（夕霧）　ながれの里（扇八景）　此なみと申す娘流れの道に身を沈む（百日曾我）　嫁に勸めなさするは、息子の太四郎は女房に流れを立てさすと惡名を立てられう（酒呑童子）

〔流〕遊女を「流れの身」「流れの君」「流れの人」「流れの者」などと云ふ。往時遊女は多く水邊の地に住し、舟に乘つて客に接したからこの稱があると云ひ、また一說には遊女は身を賣られて諸方に流轉するよりの名であるとも云ふ。按ずるに遊女が水邊に住んで、舟に乘り客に接したことは台記などにも見えて甚だ古ければ、前說の義より遊女をいふやうになつたのであらう。「流れの里」は遊里のこと。「流れの道」は遊女の道卽ち遊女界。

***ながれくわんぢやう**　更に分ちも七流れ、流れ灌頂血の上の、亡者浮ぶる法の水（薩摩歌）

〔流灌頂〕流水中に卒塔婆七本づつを七所、卽ち總て四十九本を周らし、幢や幡をもつてこれを飾り、卒塔婆の各本に諸經の要文・光明眞言・隨求陀羅尼・彌陀の名號などを書き、亡靈魚類等に佛緣を結はしめる供養である。眞俗佛事編・卷之五に、「流灌頂。此法經軌に出づるに非ず、吾朝古德經軌の旨(むね)に依て設けたる也、灌頂と號くることは本(もと)幡を灌頂と名くるに就て、今幡の功德を彰して流灌頂といふ、謂は凡そ此法率都婆を流水の上に建て、造レ幡懸レ之、水此幡に觸れて流れて大海に至り、水中群生永劫沐二斯福一、只魚鱗のみならんや、此流を飲み或は此水に浴する輩皆同じく功德を被り輪王の果報を得、遂に法王太子となつて灌頂を受け果德圓滿するに至る、今因中說レ果流灌頂と云」。今樣かしは本（元祿二年刊・淨瑠璃本）第五に、「抑も流灌頂の濫觴はこま唐土の梁の武帝佛法に御歸依あり三寶佛陀を信じ給ふ。或夜の夢中に老翁來つて宣はく、されば六道四生の衆生無量の苦しみ止むことなし、此苦を遁るる功德をば名付け※



※こ水流會と號す、最も勝れし功德、上は無量の佛菩薩圓覺聲聞明王八部梵天王帝釋婆羅門禪二十八天日月星辰、下は人倫河海の龍神阿修羅冥官地獄餓鬼幽魂胎魂鬼神まで殘らず供養を受くるなり、汝これを施せと靈夢を世世に傳へ來て六趣の闇を照すなり、まづ中陰を表し四十九本の卒塔婆の數、限り知られぬ捧げ物、燈明風に瞬けば花やちりちりちり摘、香の煙は四方に滿ち、五如來の幡を立て、上人禮拜事終り、心耳を澄ます磬の音、鐃を鳴し鈸をつき、施餓鬼の儀式ぞ殊勝なる」と見えてゐる。よつて以て當時の儀法が知られる。

なきさはめのみこと　千早振る神代に啼澤女尊、長鳴の鷄をして天の岩戸の開けしより（本領曾我）

〔啼澤女尊〕伊弉册尊崩御ましました際生れ給へる御子である。日本書紀・神代の卷に、伊弉册尊崩御ましまし、伊弉諾尊御愁傷に沈ませ給へる條に、「其涙墮而爲レ神、是卽畝丘樹下所レ居之神、號二啼澤女命一矣」と見えてゐる。ここの文は、神代の尊の名の啼澤女をいうて、同韻語の長鳴にいひつづけたまでである。

長刀(なぎなた)の草履(ざうり)　昔はやりが迎に出る、今はやうやう長刀の、草履を脫

繩で作つたたはし。藁繩をたばねて結び、物を摩り洗ふもの。この語現今も石川縣能美郡安宅地方で用ひられ、「たはし」を「あらひどら」といひ、繩で作つたものを「なはどら」ともいふ。

なべずみ　「つらになべずみ」を見よ。

なべとりくげ　鍋取公家の子は産めど、後腹病まずの片破れ船（松風）

〔鍋取公家〕武官の公家。「鍋取」とは、武官の被ろ冠の緌（その條を見よ）が恰も藁で作つた鍋取の形に似たればいふ。

***なほし**　（松風）

〔直衣〕ただの服の義であつて、天皇攝家大臣貴人の平常の服である。其製束帶の袍に似、烏帽子指貫で事濟むものとしてある。桃華蘂葉に「童體の時は白浮織物直衣、文小葵、裏濃紫也、元服の後は白志志良綾、文淡線綾丸、裏平絹、染色隨二年齡一、若年之時は紫、次薄色、次淺黃（有二淺深一）、老者用二志良良白綾或平絹一、裏はいづれも平絹也、夏縠、文三重襷、色又隨二年齡一、薄色、淺黃、老者用二張平絹一、或着二用無紋薄物一、烏帽子直衣大納言以上參院之時着レ之、但可レ蒙二敕免一、於レ私者依二便宜一用レ之無二子細一、淺位之人、着二烏帽子直衣一事、大井川逍遙之時、藏人頭著二烏帽子直衣一、其外無レ例」とある。直衣は勅許なくては、天皇の御前にこれを着して出られなかつた。

なま　お島は酒に醉ひくづをれ、ひよろりひよろりとなまになり（二枚繪）

***なまいだばうず**　あれ一丁目からなまいだ坊主がてんがう念佛申して來る（天網島）

〔生〕生醉の略。生醉機嫌。

歌念佛坊主をいふ。「うたねんぶつ」を見よ。上田秋成撰・呵刈葭・後篇に、「南無阿彌陀佛を俗にはただナンマミダ佛と唱へ、又かけ念佛として早く唱るときはナマイダと唱ふ」。心中天網島のこの文にあるやうに、歌念佛坊主が念佛交りの淨瑠璃の眞似をして歩く者もあつた。「なまいだは」南無阿彌陀佛の訛略である。

なまづいか　鰻・瓢簞・鯰凧（氷朔日）

〔鯰凧〕鯰の形をした紙鳶。元祿寶永頃流行した紙鳶には、ここに云へるがやうに奇形な紙鳶が多かつた。


〔かいづまな〕
（寶永七年刊古書所藏）

***生爪**（なまづめ）　私が夫婦になろと生爪放して入れたる文、これが噓か讀んで見よ（堀川波鼓）　伏見撞木町桝屋の高尾に又したたか遣うて、心中に生爪を放してくれた（壽門松）

往時遊女の輩が情交深い男に心中立のしるしに己が指の生爪を放して、これをその男に遣つたのである。生爪を放すにはまづ指を酢に浸し、朋輩女郎を頼んで小刀で挽放してもらつたものである。生爪に限らず、或は髮を切り、または指を切落すこともあつた。

なまづをづくり　妹を奥へ押遣り戶を密と指いたるだんびら物、鯰尾作り引拔いて逆手に提げ（持統天皇）

〔鯰尾作〕菖蒲作の刀をいひ、その形鯰の尾に似てゐるよりの名である。本朝軍器考・卷八に、「刀の形制も亦多し、鎬作、菖蒲作、鵜頸など云ふあり、菖蒲作をば又鯰尾とも云ふにや」。武家名目抄・刀劍部・十七に、「按、鯰尾とは其帽子の鯰の尾に似たるが故の名也、後代菖蒲作といふもの是なりといへり（軍器考）、さもあるべし」。

なまりちらす　徒士若黨も刀の威光、銀拵へも胡散なろ、なまり散らして歸りしが（冥途飛脚）

銀拵へも胡散なる鉛に、國訛を訛散らすをいひかけたのである。

なみがへし　樂は平調波返し、心意も澄みて覺えける（大職冠）

〔波返〕雅樂青海波の曲にある太鼓の打方の祕曲。青海波の曲はもと平調であつたのを、承和の時勅によつて盤涉調に遷された。謠曲・梅枝に「沖も靜かに青海の、青海波の波返し、かへすや袖の折を得て」。

波（なみ）**に山王祭七所**　南蠻ころの大小・對の金鍔、毛彫は波に山王祭七所（反魂香）

刀劍の金具七所、卽ち胄金・目貫・折金（帶留）・栗形・緣・裏瓦・笄に、波に日吉神輿渡御の模樣を細かく毛筋のやうに彫り揃へたものをいひ、意匠をこらした毛彫の刀劍である。日吉神社を山王社と稱するは、僧最澄が唐の天台山國淸寺に山王祠あるに准擬して、比叡山に延曆寺を創建し、古くからあつた日吉神と共に山王と名付けたより起る。祭神は上中下各七庫ある。日吉祭禮は四月中の申日にして、大津の浦に神輿渡御の式がある。巢林子が七所といへるは、刀劍、金具七所のことで、萬金産業袋卷之二に圖解がしてある。

なみのたて　陸には波の楯（加增曾我）

〔波の楯〕波立てるやうに楯を多く並べたるをいふ。「海山一同に震動して云云」を見よ。

なむしよぶつぶんしん　南無諸佛分身と書いた六字を、六角の投子は櫻木（丹波與作）

元祿の世、六角の投子に南無諸佛分身を一字づつ割當てて書き、それを振つて地獄道・畜生道などを經巡り、極樂淨土に到るを以て上りとした。丹波與作のここにいへるは東海道五十三次の道中雙六なれど、投子はなほ淨土雙六のものを用ゐた。還魂紙料上卷を見よ。

***なめ**　さてさてなめ者この所を知らぬか、坊門の宰相樣の御下屋敷（女楠）　さてもなめたりなめたり。この夕霧に足もたすは、こりやちと慮外さうな（夕霧）　いやいやなめすぎた譯かんせ、あれ町の御內儀樣も見てござる（生玉）

無、卽ち無きさまの義。輕、蔑、無禮の意。

***なや**　毎晩ちよこちよこ行く所は市の側の納屋の下（天網島）

〔納屋〕物置小屋。元祿貞享頃大阪の濱納屋邊は夜陰に立君がさまよひて淫を賣る所であつた。「はまなや」を見よ。

なやはうた　役者物眞似・納屋はうた、二階座敷の三味線にひかれて立寄る客もあり（天網島）

〔納屋端唄〕納屋にて遊女または遊客などの謠ふ端唄をいふ。當時傾城屋にては納屋をも離座敷の如くしつらひて遊興所に用ゐた。されば表座敷の差支ある場合、又は氣輕に遊ばうとする遊客は、納屋座敷に馴染の遊女を揚げて遊興したのである。西澤與志撰・伊達髮五人男（寶永四年刊）三之卷に、「近い頃立並びし南堀江の一景、高木や橋の黃昏、納屋のともし火行く水に旆き、障子に映るよねの風、高島田に大振袖、三味線の調子ゆたかにかんばりの聲張上げ、愛はうしねのはまざきむらよ云云」、とあるは卽ち納屋にて遊女が端唄を謠ふ情景を叙したのである。

***なゆたごふ**　那由他劫が其間阿鼻の苦患は受くるとも（碁盤太平記）

り(萬年草)

〔納所〕寺院にて事務を取扱ふ所を云ふ。寺務を執る坊主を納所坊主といひ、略して納所とのみいふ。

なつびき　蚊帳に隱るる夏引の、絲に繋ぎし玉の緒の(女夫池)

〔夏引〕春蠶の夏に上つたのを絲に繰り引くこと。

＊**なでしこ**　種蒔き捨てしなでし子の、花の盛りを餘所に見て(夕霧)

〔撫子〕瞿麥に愛撫する子(ここでは源之介)をいひかけたのである。瞿麥に愛撫子をいひかけたのは古歌にもその例が多い。

＊**なでん**　南殿の御格子(浦島)

〔南殿〕紫宸殿のこと。この殿南面なるよりいふ。

ななくさはやす　なな草囃す間もないか日に見えぬか(夕霧)

〔七草囃〕正月六日の夕七種菜を俎上に載せて叩き刻みながら、「唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに七草たたいてとんとんとん」と囃す。(この唄國によつて何れも大同小異である)。以て翌日の七種菜粥の料とする。平安城(古淨瑠璃)第三に、「五形・はこべら・佛の座・すずな・すずしろ・せり・なづな、賤が門田の初若菜、人は摘まいで白雪が積む、七草なづな搔寄せてほとほとと囃さん、唐土の鳥と日本の鳥とはがひ重ねし御代は萬歳千歳樂と、囃し納めて御粥に調じ」、俳諧歳時記栞草に、「七草齊打=七草は芹・薺・鼠麴・蘩蔞・佛座・菘・蘿蔔なり。……按に事文類聚に歳時記を引て曰く、正月七日多く鬼車鳥渡る。家家門を槌戸を打、灯燭を滅してこれを禳ふと。和俗七草を打つに、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきにと唱ふるは此鬼車を忌む意なり。板を打つは鬼車鳥の止まらざるやうに禳ふなり」。「どこやらの男と云云」をも見よ。

＊**ななつ**　あれ數ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて(曾根崎)　伊左衞門様か、なんと喜三、これは夢か七つか、扨お久しや懷かしや(夕霧)

七つ時をいひ、午前または午後の四時頃。「ときを見よ。「夢か七つか」の「七つ」は、曉の目覺め頃なれば、現の意にいうた粹言葉である。

＊**七つ道具**　七つ道具の臺笠立傘・馬標(堀川波鼓)　私が生國陸奧の國、七つ道具の一通り(薩摩歌)

臺笠、立傘、鎗、長刀の類であつて、大名行列の表道具である。「陸奧の國七つ道具」は、陸奧を六つにきかせて七つ道具とつづけた文飾である。辨慶が衣川で七つ道具を負うて立往生した話は世に名高い、その七つ道具は、鋸、槌、鎌、鉞、熊手、鐵棒、長刀であつたといふ。

七つの芝居　千日寺の鐘も八つか七つの芝居、二人が噂世話狂言の(重井筒)

竹田近江の操座、片岡仁左衞門の歌舞伎座、山本飛驒掾の手妻人形座、篠塚次郎左衞門の歌舞伎座、岩井半四郎の歌舞伎座、嵐三右衞門の歌舞伎座、及び竹本の操座をいふ。重井筒の血汐の朧染のこの所の文中に、「竹田か」「片岡に」「秋の飛驒掾」「篠塚に」「岩井の半四郎」「西に嵐の」「くれ竹の節を習ひし淨瑠璃」とあるは、この七座をきかせたものである。そしてここの文に「二人が噂世話狂言の仕組の種となるならば」といへるは、この七座に座本及び染川十郎兵衞(片岡座)、芳澤菖蒲(岩井座)が揃つて興行してゐた時を當込んだものので、その頃は寶永四年冬から寶永五年に亘り、また重井筒の文中に火燵の段などがあつて、冬のことになつてゐるから、重井筒の作は寶永四年の冬であつたことが知れる。「ここは竹田か云云」をも見よ。

七つの文　軍書は孫子・吳子・三略・六韜の七つの文の道(國性爺後日)

武經七書即ち、孫子、吳子、三略、六韜、司馬法、尉繚子、太宗問對をいふ。

ななつや　春知り顏に七つ屋の、藏の戶出づる鶯茶の(壽門松)

質屋をいふ。質を七に通はせて七つ屋といふたのである。好色三代男(貞享三年刊)卷之四、二三度詣きし好色の種の條に、「道具は須磨の浦さびしく、小袖を帶と皆七つ屋へやりて」。

ななところ　「波に山王祭七所」を見よ。

七の賢き人　古の七の賢き人も皆、竹をかざすは變りなき御代を樂しむ心あり(關八州)

竹林の七賢をいふ。晉の世に竹林の中に遊び、酒を飮んで樂しみ、淸談に耽つた七人の徒。世說・任誕篇に、「陳留阮籍、譙國嵆康、河內山濤、沛國劉伶、陳留阮咸、河內向秀、琅邪王戎、七人常集於竹林之下、肆意酣暢、故世謂竹林七賢」。ここの文は竹林の七賢のことをいうたのであるが、また竹の紋つく竹本座の變りなき御代を樂しむをきかせて、これを祝福した。關八州繫馬は巢林子が淨瑠璃の最後の作で、彼が死の近づいたこの作に、己が藝術の上演される竹本座の安らけく長久なれと祝ふ彼は、常にこの愛着を以て靈腕を揮つてゐたことが、想見されて無量のゆかしさを感じる。

＊**なにがし**　何某は平家の侍惡七兵衞景淸と(出世景淸)

〔何某〕不定稱代名詞を自稱に用ゐたのであろ。自分。このあたりの文は謠曲景淸に據つたのである。

＊**なにはやき**　東の難波燒が坂町通ひ(生玉)

〔難波燒〕嘉平次が難波の陶滋器商であり、そして難波の高津では難波燒を産するから、かく言うたのである。攝陽奇觀卷之六に、「難波燒＝大阪高津邊にて延寶の頃より難波燒物を初て燒に、器物は無量の類ひ多し、茶碗水指水こぼし花生卓香爐挙鍋土釜、其外歐嵜の小道具等歐品あり、土色は鼠淺黃、藥色は淺黃、藥黑きと靑色と薄き緣付の繪あり、花生は牡丹葡萄等色色作り物を用ゆ、陶工のいふ、京都黑谷山の土を用ひて難波に於て燒とぞ」。魂膽色遊懷男、姿は船に搢枕の條に、「其前には爐をきつて、難波燒の土鑵子かけ」。生玉心中のこの文に東の難波といへるは、大和橋に陶器店を出してゐたからかくいうた。

なのりそ　いつ靑海苔もかだのりと、身のさがらめななのりそや(出世景淸)

〔奈乃利曾〕「なのりそ」とも云ひ、神馬藻即ちホンダハラと稱する海藻である　東雅に、「舊說になりそといふは、食する時にはりはりと鳴るがむつかしければ、なのりそと制する意なり」と見えてゐる。ここの文は名乘に奈乃利曾をいひかけたのである。

繩三寸に縛り上ぐ　(女殺)

捕繩を首輪にして胴體に懸け、兩手を背後に廻して縛上げ、手頸と首繩との間を三寸に縮括るをいふ。雪女五枚羽子板に、「三寸繩に括り上げ」、とあるもこの事である。

なはどら　主君の面の汚れ穢れ・洗うても濯いでもなはどら掛けても落ちぬが、眼にはかからぬか(唐船噺)

〔雜經〕漢方の醫書である。王翰林集註、宋王維一撰のものに我が慶安五年の刊本がある。

***なんきん** 南京のばち匁から九匁を、（博多）氷突出す染つけの南京すずし錫の皿（會稽山）

「南京のはち」とあるは、南京の鉢（嬉遊笑覽云「南京燒は慶長年中より渡る」）に八匁をいひかけた。「かたじゆけ云々」の條をも對照せよ。ここの文意は、支那南京燒の鉢は貴重な物なれども、八匁九匁の捨賣にするのである。「南京生絹」は生絹に涼しをきかせ、錫と頭韻の文飾に用ゐたまでである。

なんぜい 惟茂弓矢の法を知らぬとは尤も和主に似合たる難勢（艶狩）善哉善哉よき難勢（大覺）

〔難勢〕むづかしい言掛り。法華文句記・十に、「廣立ニ難勢一、不レ越ニ先規一」、とありて難問する氣勢の義である。

***なんだ** 爰は蛭子の御社、御誕生の折柄に難陀が口よりあつ湯を出し、跋陀が口より溫湯を出し產湯をひかせ（烏帽子折） 難陀跋陀の二龍王雲を淩ぎて天降り、口より溫湯熱湯を吐き產湯を灑ぎ奉る（釋迦）

〔難陀〕梵語 Nanda. 龍王の名である。法華經・序品に、「有ニ八龍王一、難陀龍王、跋難陀龍王云云」、とありて科註に、「難陀此云ニ歡喜一、跋此云レ善、卽兄弟二龍、常護ニ摩竭提一、雨澤以レ時、國無ニ飢年一」。

***なんでふ** 義朝陣頭に進んで、何條弟の八郎め（鎌田） 牛若はつと肝にしみ、なんでふ母を引渡させ罪科に遭はせ置くべきか（孕常盤）

「なにてふ」（何云）の詰つた語で、「何といふ」の義である。多く當字に何條と書けども、何條は「なんでう」で假名遣が違つてゐる。伊勢物語に、「世の憂き事ぞよそになるてふ」、とある「てふ」はここにいふ「でふ」と同じものである。

***なんでやる** 人呼びまはつて何でやる（丹波與作）

「なんである」の訛。何用であるか。

なんでん

〔南殿〕「なでん」とよむのが故實である。「なでん」を見よ。

南天と大蒜 軒を打越す細紐に結下げし水仙一本、行當りびつくりし、コリヤ何ぢや厄病の咒か、但し洛中物騷の盜賊のまじなひか、病除の爲ならば南天と大蒜を吊はず、アア聞えた（關八州）

戶上に南天と大蒜を吊すは病除の咒禁である。夜光璧・中之卷に、「南天と蒜を戶上に懸くるは本草綱目に、大蒜は鬼を殺し邪氣を去るとあればなり。南天燭は筋を強くし氣力を益し、身を輕くし年を長くし老を却くるとありて、其外功能多く德すぐれたるものなれば、蒜にならべてかくると見えたり」。ここの文意は、「病除の爲ならば南天と大蒜を懸けるべきに、水仙一本吊すとは扨何のわけやら」といふのである。

なんどり

「つい・なんどり」を見よ。

なんばらけぬき 一度に群り來る所を引寄せ引寄せ首すつほり、蹈付けてはほんと拔き、南方毛拔釘貫まさりの二人が手さき（關八州）

〔南方毛拔〕名古屋より製出する鑷の稱。諸葛亮の後出師表に、「思ニ惟北征一、宜ニ先入レ南、故五月渡レ瀘、深入ニ不毛一」とある中の「南」と「不毛」とをきかせていうた洒落詞の其名稱となつたのである。本朝世事談綺・器用部に、「尾州名護屋の產也、南方の名は近衞殿のつけさせられしといふ、孔明が出師の表に、深く不毛に入り今南方已定、甲兵足れりの心也と云云」。吉田醫助撰・古渡記に、「鑷南方名物なり、南方尾州產、足利義教公富士御覽之時熱田圓福寺に止宿ありしに、古渡の鍛冶鑷を奉りしが、なんぼうよきけぬきなりと仰せられしより、家號とせしよし」。

難波の祖師 難波の祖師の名號、探幽の觀世音（三世相）

難波御堂の祖師敎如上人のことである。「難波の祖師の名號」は敎如上人自筆の名號（卽ち南無阿彌陀佛）をいふのである。難波御堂は大阪東區北久太郞町四丁目にありて、裏御堂又は南御堂とも稱す、慶長年間大谷本願寺派の敎祖敎如上人本寺を創立し、本尊は安阿彌作の阿彌陀佛であつて、現に同派屈指の名刹である。敎如上人自筆の名號は信徒の尊崇厚く、隨喜の淚を流す物品である。

なんばやき 「なにはやき」を見よ。

なんばん 紅絹裏に源氏雲の裾ぐくみ、南蠻ごろの大小・對の金鍔（反魂香） 本國長崎に黃陳といふ南蠻外科（薩摩歌） この膏藥では手負は癒らず、南蠻流に人の油、うぬめは油がありさうな（松風）

〔南蠻〕往時南洋諸島を經て來航した西洋人、殊に葡萄牙人・西班牙人を稱した。「南蠻ごろ」は南蠻吳羅服連の略、吳羅服連は蘭語 Grof grein. の訛、駱駝の毛織物であつたが、後には羊毛又は綿麻を交へて織り、平織も綾織もある。南蠻渡來の吳羅服連の文に似た鮫鞘をいふ。「南蠻外科」とは西洋外科醫術をいふ。「南蠻流」とは南蠻外科醫の治療法をいふ。黑川道祐撰・雍州府志（貞享三年刊）六に、「凡本朝外科有ニ兩流一、一本朝所ニ傳來一也、一傳ニ西洋耶蘇治療之法一、治ニ癰瘍并金瘡一、是謂ニ南蠻流一、今以ニ斯傳一爲レ良」。

***なんぼ** ただゆかしいは父樣母樣、なんぼ思ひあきらめてもあひたうござる（大經師） よしない手形なんぼう後悔仕る（歌念佛）

「なにほど」（何程）の略轉。延べて「なんぼう」ともいふ。どんなに。いかに。謠曲・隅田川に、「なんぼう世には情なき者の候ぞ」。同・鉢の木に、「なんぼう無念のことざふぞ」。

南面の位 君を南面の位に卽け（非筒）

天子の位をいふ。易繫辭下傳に、「聖人南面而聽ニ天下一、嚮レ明而治」。

に

にあがり よその哀れな身の上に、思ひしらべの絲よりも、心は二あがり三下り、撥もしどろに彈きなせり（女夫池）

〔二上〕三味線の彈き方、本調子よりも二の絲の調子を高くするもの。

***にえる** 念者坊の祐辨樣は蹈殺すとてにえさつしやる（萬年草） 勝次郞は追放で八幡はにえる（淀鯉）

〔煑〕沸立つ義。瞋恚の焰をもやす。騷ぎ立て

百億の寶鐸、那由他の羅網、八萬恒沙の瓔珞華鬘(洒呑童子)

〔那由他〕梵語 Nayuta. 大數の名目であつて、百萬とも一億とも云ひ、極めて大數をいふ。「劫」はその條を見よ。大無量壽經・上卷に、「設我得レ佛、光明有二能限量一、下至下不レ照二百千億那由他諸佛國上者、不レ取二正覺一」。

なよし 生物に取りては大鯛・小鯛になよし・すすき(天鼓)

〔名吉〕鯔の小なるもの稱。和名抄に、「鯔・讀奈與之」。

***奈良團扇** 元の林となら團扇(薩摩歌) ありし昔に奈良團扇、風かろがろと駕籠昇が(卯月潤色)

奈良より産出する團扇。雍州府志(貞享三年刊)卷七に、「自二南都一來者以レ紙貼レ竹、其體製全粹、有レ便レ生レ風、多春日社禰宜製レ之、是稱二奈良團扇一」。後はおかし物語に、「我十歳ばかりまでは、さらさ團扇や奈良團扇、本誰團扇ならうちはとて賣りしなり、……奈良團扇といふは是はふちも白き紙にて繪は板行、彩色は蘇枋と雌黄なり、たまたま吹繪も有、……奈良うちはといふは役者をかきてせりふなど書きたるあり」。

***ならく** 念を殘すが迷となり、たとひ奈落へ沈むとも(丹波與作)

〔奈落〕梵語 Naraka. 地獄の意。

ならざ 奈良座の謠の口拍子(大織冠)

〔奈良座〕大和國奈良の謠の家元、金春・金剛・喜多の三座。又その流。今・金春・金剛を下掛謠と稱ふ、また喜多流は、喜多七太夫といふ者金剛の弟子であつたが、秀吉の寵に入つて家を興し、この流下掛に加はる。

***ならざうり** 雪踏片足に奈良草履(女腹切) 總じて奈良の名物、まづ奈良油煙・奈良團扇・奈良草履(大織冠)

〔奈良草履〕奈良にて製出した細緒の草履である。椀久一世物語(貞享二年刊)下卷、(傾城太夫神樂卷五所載)水は水で果つる身の條に、「とろめんのくつたび、細緒の奈良草履、横ひねりの歩き振云云」。



〔ならざうり〕

***ならざらし** 身を賣りて大阪の埒は明きたれど、又傾城とならざりし、縱横沙汰を聞き觸れて(淀鯉)

〔奈良晒〕奈良名産の晒した麻布。和漢三才圖會・卷二十七、絹布類、曝布の條に「曝布出二於和州奈良一布之上品也」。國花萬葉記、大和國中名物の條に「奈良曝」、西鶴撰・胸算用卷一、伊勢海老は春の紅葉の條に、「奈良晒は毎年盆過ぎて買ひ置き」。「ならそ」を見よ。巢林子のここの文は、成らざりしを奈良晒にいひかけ、とやかくの取沙汰の意に、奈良晒の縱横の線から、縱横沙汰といふたのである。

ならしだけ 今の小町屋惣七は、博多小女郎がならし竹、何時も心に懸けて置く(博多)

〔馴竹〕横にわたして衣服などを懸ける竿。衣架。物類稱呼卷四、器用部に「衣架＝かけざほ(俗稱)、筑紫にてならしと云」。ここの文意は、昔の小野小町は關寺小町に老衰の恥かしい姿の哀を留め、今の小町屋惣七の哀れな末路は、博多小女郎がならしたをならし竹にいひかけ、ならし竹は衣服などを懸ける縁で、心に懸けて置くといひつづけたのである。

***ならそ** 何と奈良苧のうき身ぞや(丹波與作) 奈良苧うんだる子の親が困果晒に奈良晒(大織冠)

〔奈良苧〕奈良は麻苧の製産地である。この地から製出したものを奈良苧といひ、奈良苧を布に織つて晒したものを奈良晒といふ。雍州府志(貞享三年刊)卷七、土産門下・服器部に、「南都之所レ織特擇二苧績一得、後湯加二灰煮一之、數沸而後木臼擣レ之、其後洗二淨清水一、曝二沙場或原上一、如レ此數遍故其色至白、是謂二奈良曝布一」。「何と奈良苧」は、「何とならん」に「奈良苧」をいひかけたのである。「奈良苧うむ」は「まそ」(眞苧)を見よ。

***ならちや** 新米の奈良茶して申請けんと打笑ひ(今川了俊) 豆腐・奈良茶と茶を賣るも、宇治の川水落ち添ひて(鎗權三) されば古歌にも奈良ちやかや、この手盛にて二よそひ(大織冠) 身はならはしよ奈良茶粥(博多)奈良屋が奈良茶、下地は奈良の春日野の、雪の白づきすつくりと、鹿子斑に黑豆散し、さつとかけたる宇治の出花のお茶(大織冠)

〔奈良茶〕奈良茶粥の略。茶飯に大豆・小豆、または粟などを振掛けたものをいふ。もと奈良の東大寺・興福寺などにて炊ぎはじめたによつてこの稱があるといふ。「奈良ちやかや」とあるは「奈良坂や」をもぢつたのである。「古歌にも奈良茶かや」を見よ。

ならゆえん 人の心に花咲けば、實もなら油煙手合せに、朽ちぬ寶や握り墨(用明天皇)

〔奈良油煙〕奈良より製出する墨を奈良油煙墨と稱し、古來良品として其名知られてゐる。雍州府志(貞享三年刊)卷七、土産門下・服器部に、「中世南都興福寺二諦坊取下持佛堂燈火烟之藥二滯屋宇一者上和二牛膠一而製レ之、是南都油煙墨之始也」。

***なりきん** まづ飛車先の歩を突きませう、ヤ此成金して遣らうでの(壽門松)

〔成金〕將棊上の通語で、敵陣地に侵入した歩、香車、桂馬、銀將は總て金將の資格となるが故に成金といふ。(序云、ここの文より察すれば巢林子は將棊の名人ではなくて素人の部類であるらしい)。

なりんじこと なりんじ事をば說かず、遂げんじ事をば諫めず(娥)

「成りにし事」の「に」が鼻にかかつて「成りんじ事」となつたのである。既に成つた事。「遂げにしこと」を「遂げんじこと」といひ、「往にしこと」を「往んじこと」といふも皆この類である。「なりんじ事をば云云」を見よ。

***なれ** やよや待て、なれよ冥土の鳥ならば死出の山路に關据ゑて(會稽山)

汝。萬葉集・卷十一の歌に、「いつしかなれがぬしまちがたき」の「なれ」に汝と書き、古今集・雜歌上部の歌に、「宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ」、とありて古くから用ゐられた語である。

なんがくだいし 太子樣に添うたものさうな、殊に前生は唐土南岳大師と申す大知識の御再誕(聖德太子)

〔南岳大師〕天台の第二祖、南岳(五岳中の衡岳)に住した慧思禪師をいふ。聖德太子の前身は南岳大師であるとの說は、扶桑略記第三、敏達天皇六年の條に、「私云、今案、聖德太子是南岳大師後身也、鑒眞和尙云、聞南岳思禪師遷化之後、託二生倭國王子一、興二隆佛法一濟二度衆生一、倭國王子者聖德太子也」と見えてゐる。

なんきやう 難經・脾胃論(冷泉節)

密迹金剛を執金剛とも金剛夜叉とも稱し、寺院の門の兩側に立てる二王はこの神の像である。

にじようさぶつ 二乘作佛の鶯は無作三身の谷に囀り(百日曾我)

〔二乘作佛〕法華已前は佛の方便說である故、小乘敎の分際なる聲聞と緣覺との二乘の作佛するを說かず、法華の會座に至つて二乘の作佛を說き、これに記莂を與へた。輔行・六に、「遍尋二法華以前諸敎一、實無二二乘作佛之文以明二如來久成之說一、故知並由レ帶二方便一故」。

二字を首に懸く 「二字」を見よ。

***にちる** サア證據を出せとにちければ(萬年草) お取次よいやうに賴み申すとにちかけける(百日曾我)

拗戾の義。ねちる。すねる。强請す。色道大鏡・態藝門に、「にちる。ねちるに同意、五音相通なり、物をねだる心なり」。

につけい 光の中より妙覺の如來の容貌ありありと拜まれ給ふと見えけるが、につけいより電光うつるとひとしく外道の書は皆灰燼と煙りゆき(用明天皇)

〔肉髻〕梵語・烏瑟尼沙(Usnisa)の譯である。頂髻または佛頂ともいひ、佛の三十二相(その條を見よ)の一で、佛の頂上に肉の隆起して髻の如くなれるものをいふ。

につけい 肉桂の香や花の香の、風に目覺ます西湖の八景(唐船噺)

「肉桂」「にくけい」の音便。支那原產の常綠喬木で高さ數丈に達す、葉は互生して長楕圓形で尖り、其質厚く光澤がある、花は小形綠黃色で聚繖花序に排列す、根及び莖の皮に香氣あり、乾かして藥用とす。

***につこらしい** おもだかが惡性故鼓の革を取返さん爲附いたりと・につこらしう口をしやべれ(天鼓) 鼻の先がひこひこにつこらしい、鼻の先がひこひこする、未だに仇を仕足らいで、若君西國にましますを故、此軍介を東へやりほつかりすかたんさせんとな(隅田川) 每年京へ來る得意の萬歲が來て不思議立てたを、につこらしう嘘ついて往なせる事ば往なせたが(大經師)

似付かはしい義。いかにも眞實らしい。さも誠らしい。「につこらしい、鼻の先がひこひこする」とは、「につこらしい嘘わいの、鼻の先がひこひこする」の意である。俚言集覽に「似つこらしい。雅言にニツカハシと云」。

日親樣 宗門なれば日親樣の御門で死なせて下さんせ(重井筒) 疱瘡した時日親樣へ願かけ、代代の念佛捨て百日法華になり(女殺)

日親上人は日蓮宗の高僧で、京都本法寺の開山である。應永年間に立正治國論を著し、將軍足利義敎を諫めて獄に投ぜられ、活火に燒ける鍋を頭に被らされたれども、屈せなかつたによつて冠鍋日親上人といふ。「日親樣の御門」とあるは、大阪生玉中寺町正法寺の門をいふ。「日親樣へ願かけ」とあるは、正法寺の日親堂に願をかけたのである。正法寺は攝陽群談に「法華宗受不施派京本法寺末院ナリ、日親堂境內ニアリ」と見えてゐる。

につぱい 御當山に石碑を建て日牌を供へ申すにつき(萬年草)

〔日牌〕位牌の前に每日物を供へることをいひ、其日牌料。

***日本一** 粟の飯とは日本一の醍醐味、御馳走に預りたし(最明寺殿) お側案じた父樣の御機嫌日本一、お側離れず御介抱申しや(宵庚申)

至極結構といふ程の意。謠曲・鉢の木に、「それこそ日本一のことにて候、賜はり候へ」。同・小袖曾我に、「日本一の御きげんにて候」。巢林子作・丹波與作に、「腰なは何ぞ日本一の大井川」とあるは其條を見よ。

***にてん** 其時二天現はれ出で、薄雲を掻摑んで天上遙にあがりつつ(西王母) 十神降魔の力を合せ、二天四天の勇をかるとも此縛めを何とせん(唐船噺) 禪師坊二天四天の威をかつて組合うたり(會稽山)

〔二天〕梵天と帝釋天とを云ひ、または多聞天と持國天とを云ひ、或は日天と月天とを云ひ、又は多聞天と持國天とを稱することもある。「四天」は、持國・增長・廣目・多聞の四天王をいふ。

二度の月 簷の燈籠二度の月、菊の節句や年の暮(用明天皇)

八月の十五夜と九月十三夜と兩度の月。

にはくなぎどり さてこそかの鶺領を庭くなぎ鳥、庭叩鳥、戀敎鳥ともいふぞとよ(振袖始)

鶺鴒の異名。按ずるに鶺鴒が尾を上下に振るによつて、庭にて陰莖を振る鳥の義に云うた稱である。「くな」は玉莖をいひ、「くなぐ」は房事を云ふ。狩谷望之云、「にはくなぶりはこの鳥庭にありて尾を搖し觸るによりて名づけたるなり、彼が尾を搖すことをなくと云ふなり」。

***にはせん** この銀を此儘置けば揚屋の庭錢、ほこりになつてすたります(壽門松)

〔庭錢〕遊客が妓樓に於て纏頭に遣る錢をいふ。また紋日などに遊女より妓樓の主人などに遣る錢をもいふ。庭錢は略して庭とばかりもいふ。西鶴置土產(元祿六年刊)に、「まづ女郞へ長德寺二百、宿のかかに金子拾兩庭につかはさる」。好色文傳授(元祿十二年刊)卷五に、「揚錢も一つにつかはし申上まゐらせ候」。原田光風撰、及瓜漫筆に「庭錢といふは江戶にて纏花といふたぐひなり、定ありて太夫は百三十目、天神は五十目、端女郞に三十目なり、右庭錢は揚屋へ請取、女郞屋内男女、揚屋內男女、町町の用人、東口西口の門番までそれぞれ配分すと聞けり」。「あげや」の條をも見よ。

にはだから 扇のかげや・庭寶、妹女郞・朋聟衆、からの鏡を鴛鴦のあひの枕に渡してたべ(三世相) 在所へ戾せ去なせとて、額に角も入れた者、丁稚小者をいふ如く、內の手代や庭寶の侮り者になし果てて(卯月紅葉)

〔庭寶〕奴婢夫婦となつて出生して代々其家に仕へる者をいひ、庭子・家子の稱の類。

***にはたたきどり** さてこそかの鶺鴒を庭くなぎ鳥、庭叩鳥、戀敎鳥ともいふぞとよ(振袖始)

〔庭叩鳥〕鶺鴒の異名。庭にて鶺鴒が尾を上下に振つて地を叩くよりの稱である。

***にはたづみ** 例へば日月のにはたづみに映りて光を增すとは妾が事(大織冠)

〔潦〕俄立水の義であらう。雨の降つたたまり水。雨が地上にたまつて流れる水。和名抄に、「唐韻云潦。音老、和名爾波太豆美」と見えてゐる。「潦」は康熙字典に「潦。(禮曲禮)水潦降、又

る。分里艶行脚(正徳六年刊)四之巻に「八兵衛との猫またが出をつたとにえかへる」。

にぎたへ　和栲の御衣(擬神嫁)

〔和栲〕細密な織り布で、多くは楮の木の皮の纖維で織つたもので、「あらたへ」の對語。「天照大神に奉る云々」を見よ。

にくけい　「につけい」を見よ。

にくぞう　この老嫗の鼻の先の走り智恵、惡ぞういひたる舌ただれ(關八州)

憎體(にくらしい事)。にくみきらふこと。惡口。現今熊本地方で「にくじ」「にくじゆう」「にくぞ」「にくぞう」といふて用ゐてゐる。按じるに、憎惡に惡憎というたもので、無慙を懸無い(その條を見よ)といへる類である。

二月堂の牛王　胴の中な空虚にくつて、二月堂の牛王とお伊勢様のお祓入るやうにとの誂へ(薩摩歌)

奈良の東大寺二月堂より配布した牛王(その條を見よ)の守札をいひ、札の面に「南無頂上佛面除疾病　二月堂　南無最上佛面願滿足」と捺印してある。菱河師宣撰・和國名所鑑(元祿九年刊)下巻に、「奈良は昔の京にして古跡多し、ここに二月堂とて、年毎に一度二月におこなひして牛王のまぶりを出す所なり、堂の前に池のあとあり、常に水なし、祈禱の後此池あとに立寄、加持をしてわかさわかさと呼び給へば、そのまま水わき出る、その水にてこの牛王捺し出す、諸國にわたつて遍く災難除きし守となつて、人これをもちゆるなり、さる所に死靈の下女夜な夜な來りて、主人の本妻をねらふ也、然れども此二月堂の牛王を身に離さず守にかけし故、取殺す事能はず、或時女房湯殿に入て湯を浴びしに、彼の下女が死靈來つて、我を殺せし報いに其方が命取りぬとて、飛掛り食殺ししとなり、これ二月堂の牛王を懸けざる故なり、かかるたつとき不思議の牛王を疎かにすべからずとてに、今たつとみし也」。

***にさい**　ヤア二歳め、ぶたれて居ようかと、ぶちかくろ(生玉)

〔二才〕青二才などいふ二才で、未熟の意。よつてもつて人を罵つていふ。弱輩。

***にさう**　景清は二相を悟り候へども、重忠は四相を悟る(出世景清)

〔二相〕我相と人相。

にざう　「鍛冶屋の仁藏」を見よ。

にし　これさにし達、物さ問ひ申すべい(碁盤太平記)

「ぬし」(主)の轉訛。對稱代名詞。あなた。俚言集覽に、「物類稱呼に、他を指して上總にてはニシといふ、移山案、主といふの訛言也」。

***にじ**　二字を首に懸けたる侍の役なれば(今川了俊)　二字を首に懸けたる森右衞門(女殺)

〔二字〕武士をいふ。武士は通稱の外に二字の實名を有すればかくいふ。永井正流撰・本朝濱千鳥(寶永四年刊)一之巻に、「我親里を語りけるは、生國は作州津山何がしとて二字も名乘り、高祿を得られしも我九つの時までなり」。「二字を首に懸く」とは、武士たるを保有してゐるをいふ。能狂言・靫猿に「名字をも首にかけた者が禮までいうた」とあるも、立派な姓名ある者が禮までいうたとの意。

***にしきぎ**　奥州の錦木・しのぶずり、いづれ奥は戀所(源義經)　韓紅の錦木や枝珊瑚樹と燒付きたり(淀鯉)

〔錦木〕陸奥國希婦の里の名物で、五色に彩つた一尺ばかりの木。昔時男が逢はうと思ふ女の家の戸口にこの木を立つ、女が靡けばこの木を取入れる、女が靡かないで取入れぬ時は、男は次々立て加へて千束を限りとして、女の同意を求めるといふ。謠曲・錦木に、「是は錦木とて色どり飾れる木なり、いづれもいづれも當所の名物なり、……陸奥のしのぶもぢずり誰故に、亂れそめにし我からと、……昔より此所の習ひにて、男女の媒には此錦木を作り、女の家の門に立つるしるしの木なれば、美しく色どり飾りて之を錦木と云ふ、さる程に逢ふべき男の錦木をば取入れ、逢ふまじきをば取入れねば、或は百夜三年までも立ちしによつて千束とも讀めり」。

錦手　濃茶茶碗屋嘉平次は嵯峨が情の錦手に染付けられて(生玉)

彩色模様を描いた磁器。ここの文は茶碗屋の緣語錦手をいうて、遊女嵯峨の色たつぷりの手管の意にいひなしたのである。

にじふごう　されば六道四生二十五有のその中に人よりも尊きなく(蟬丸)　三乘五乘七方便四種八部二十五有普く利益の甘露を嘗め(釋迦)

〔二十五有〕二十五有界の略。迷界を總括した名目で、四洲、四惡趣、四禪天、四無色天、六欲天、梵天、無想天、那含天をいふ。これ等の二十五界は因果相續して、果中未來の果を結ぶべき因果を具有するを以て二十五有界といふ。

二十五筋の琴の絲　二十五筋の琴の絲、結び契りし年の數、いざすががきて箱崎の、まつとし聞かば我も急がん(國性爺)

二十五絃琴に二十五歳をかけていうたのである。錢起歸雁詩句に、「二十五絃彈二夜月一、不レ勝二清怨一却飛來」。

***二十五の菩薩**　名香軒に薫ずれば、今日の三絃二十五の菩薩の歌かと疑はる(三世相)

(1)觀世音、(2)大勢至、(3)藥王、(4)藥上、(5)普賢、(6)法自在、(7)師子吼、(8)陀羅尼、(9)虛空藏、(10)德藏、(11)寶藏、(12)金光藏、(13)金剛藏、(14)光明王、(15)山海慧、(16)華嚴王、(17)衆寶王、(18)月光王、(19)日照王、(20)三昧王、(21)定自在王、(22)大自在王、(23)白象王、(24)大威德王、(25)無邊身、以上の二十五の菩薩を云ひ、阿彌陀佛の眷屬である。極樂に往生する者はその臨終に、阿彌陀如來が二十五菩薩を率ゐて來迎されるといふ。十往生經に、「若有衆生、念阿彌陀佛、願往生者、彼佛卽遣二十五菩薩擁護行者、若行若坐若住若臥若晝若夜、一切時一切處、不令惡鬼惡神得其便也」。

二十五の厄の年　「まことに今年は云云」を見よ。

二十三夜　卜庵が見えたら灸をせう、…、今日は二十三夜なれど一向宗はお構ひない(今宮)

二十三日は俗にいふ長病日の一で、灸・鍼などを行ふを忌む日である。

***二十八部衆**　觀音二十八部衆の金剛夜叉ともいひつべし(兼好)

(1)婆藪仙人、(2)大辯才天、(3)那羅延堅固、(4)密迹金剛、(5)大梵天、(6)帝釋天、(7)摩醯首羅、(8)東方天、(9)金色孔雀王、(10)增長天、(11)毘沙門天、(12)廣目天、(13)摩和羅天、(14)滿善車王、(15)神母天、(16)五部淨、(17)難陀龍王、(18)迦樓羅王、(19)緊那羅王、(20)摩睺羅王、(21)阿修羅王、(22)金大王、(23)乾闥婆王、(24)沙迦羅王、(25)金毘羅王、(26)滿仙王、(27)散脂大王、(28)畢婆迦羅王、以上の二十八神をいひ、觀世音菩薩に侍寓するを以て觀音二十八部衆と稱す。其中の

せず、我一人披見して起請共に火に入れる(天網島)

〔女房〕女が宮仕へして房(へや)を持つ者の義、禁中の官女、貴族の侍女をいひ、後世轉じて平人の妻をいふ。「女房限つてこの文見せず」とは、互に隱す所なき妻にも、特にこの文は見せることを及ぼさないで極祕にするとの意。

にようはち 「ねうはち」を見よ。

にようさんのみや 唐猫が……、ころり炬燵にしなだれて、懷くも己が戀ならん、それは昔の女三の宮、これはおさんの當世女(大經師)

〔女三宮〕源氏物語に見える人物であつて、朱雀院の第三皇女である。源氏物語・若菜の卷上に、唐猫が簾の外に飛出る勢に、簾の動いた間から中に居た女三の宮の美貌を柏木の君が一瞥してより、深く戀慕の思に胸を焦し、若菜の卷下では、柏木の君と女三の宮と遂に情交を結び、女三の宮懷妊の身となり、これより悲劇を生むに至るを記してある。

***にょじゅ** 京の御所より女嬬かおまか一兩人呼び申さんと申上ぐれば(酒呑童子)

〔女孺〕往昔内侍司に屬し、掃除・點燈などのことを司つた女官。

***にょだう** はて立派な腰のまはり、衆道女道どちらも好物(關八州)

〔女道〕男色の道を衆道といふに對して、女色の道を女道といふ。好色五人女・卷三に、「衆道女道を晝夜のわかちもなく、さまざま遊興つきて」。

***にょにゃく** 女若二つの戀草を飼に飼うたる月毛の駒(鎗權三)

「女若」女と若衆、卽ち女道と衆道。

***にょふ** 種直は五臟惱亂するやらん、堂の内にてにょふ音さも堪へ難く聞ゆれば(大原問答)

〔呻吟〕うめく。うなる。宇治拾遺・六に「或は死に、或はにょふ聲す」。徒然草・第八十七段に、「具覺坊は梔原ににょひ臥したるを」。現今も福山市地方では、痛みに堪へでうなるを「にょふ」というてゐる。(序云、この語古來「にょぶ」と「ふ」を濁つて書いてもある)。

にょぼく 布衣・如木・隨筆・帶刀・兵仗・弓箭を帶し遠侍に並居たり(本領曾我)

〔如木〕麻布の白張の衣を着、履・傘などを持つて供をする賤者をいふ。如木はもと麻布をこはく張つて木の如くなれる白張衣をいふ。轉じてその衣を着る者の稱になつたのである。貞丈雜記・卷之四、官位之部に、「如木と云ふはいやしき者也、白張を着て公家の供をする者也、履傘などを持つ役也、白張と云ふは白布の狩衣也、如木退紅と云ふ事義敎公御元服記にあり。(白張はこはばりて木の如しといふ心にて如木といふとぞ)」。

にょほふ 菱屋介五郞は如法なる氣も丸額にこやかに(今宮) 一座遊びはにょほふめく(女殺)

〔如法〕尋常の義。轉じて柔和、柔順の意にいふ。源平盛衰記・卷十九、佐佐木馬を取り下向の條に、「曉は守山を立ち野洲の河原に出でぬ、如法曉のことなれば旅人も未だ見ざりけるに」。貞丈雜記・卷十五、言語之部に、「如法といふは尋常と云ふに同じ」。俚言集覽に、「如法。本縮徒の行狀のよきを云、轉じて俗の柔和なるを云」。「女殺油地獄(竹本筑後掾直傳、山本九兵衞版七行本)下之卷のここの文に、「あふぎで忍ぶちや屋のきやく、一座あそびは女方めく、かたでかぜ切からぞめき」とある、女方を女房とするはいかが」。

にれをかむ 野飼の牛むつくと起きて駈(か)け隔(へだ)たり、にれをかみ立て角を振り(用明天皇)

〔齝〕「にげかむ」ともいふ。牛などが食物を嚙みこ嚥下した後に、又口中に吐出し二再び咀嚼するをいふ。反芻する。和名抄に、「齝。爾雅集注云、獸呑レ芻噍、反出而嚼、邇介加无」。

二(に)六(ろく)五(ご)七(しち) 鞍下沓裏口心二六五七の駿(じゅん)馬(め)の相(源義經將棊經)

二六の十二と、五七の三十五とを加へた、馬のたけ四尺七寸をいふか。

にんが 大海原の王子とて生年二十三歲、人我の相面にあらはれ(嵯峨天皇)

〔人我〕他人と自身を相對して人我といふ、人我の見よりして我慢偏執の心もあり、愛欲著心も生じるのである。人身には常一の主宰者あると因執するを人我の相といふ。六祖壇經に、「無二人我貢高貪愛執著一、爲レ離二欲尊一」。

にんぎょ 麒麟の粕漬、薄鹽の人魚、龍門の生鯉まで(大織冠)

〔人魚〕魚身で人面の者。和名抄に、「人魚一名鯪魚、魚身人面者也、山海經注云、聲如二小兒啼一、故名レ之」とありて、箋注倭名類聚抄に、「按源君所レ擧人魚、疑是海人魚、非二陵鯉一又非二鯢魚一也、史記正義又引二異物志一云、人魚似二人形一、長三尺餘、不レ堪レ食、皮利二於鮫魚一、項上有二小穿一、氣從レ中出、出二東海一者蓋是、云云」。

にんくわい 我十善の位に卽かば名虎を攝政關白、有常も任槐(非筒)高房卿も任槐あり、此安盛も鎭守府の將軍(酒呑童子)

〔任槐〕丞相大臣に任ずることを云ふ。周時代に外朝に三槐を栽ゑて三公その下に班列せしにより、三槐又槐位を三公の義とす。周禮・周官に、「面二三槐一三公位焉」。

***にんじん** 人參の百服餘りも飲んだ故(氷朔日)

〔人參〕藥草である。朝鮮人參で人の形せるものは最上の靈藥である。藥用人參の原種は朝鮮の山谷小笹叢中に自生し、その處は虎の出沒するが故に、採掘者は夜間火を焚いて毀損せぬやう丁寧に採收するのである。圖經に、「初生小者一莖兩葉、深生二四椏一、各五葉、狀類レ人、兩莖入レ土如レ脚、兩小莖垂レ下如レ手、中有二一身一、首有二五葉一、象二人有レ髮、故曰二人參一」。「えびでの人參(ももさ)」をも見よ。

にんじん この艾の威德には、時を擇ばず日を嫌はず、思ひ立つ日に人神なし(枕狩)

〔人神〕俚言集覽に「人神」(時憲曆箋釋)逐レ日人神所在、不レ宜二灸針一、注、人神者六氣陰陽之表裏也、忌二灸針一」。

***にんにく** 柔和の相好・忍辱の笑の眉(用明天皇) 忍辱・柔和の天人天女のかんばせありあり(蛙合戰) 御法の聲を聞く時は惡鬼心を和らげ、にんにく慈悲の姿にて(女夫池)

〔忍辱〕毀罵惱害に遭うても安忍して恚恨なきを云ふ。法界次第に、「内心能安二忍外所辱境一、故名二忍辱一」。

にんみやく にんみやく筋を四つ五つ聲をかけて刺し通し(卯月潤色)

〔任脈〕會陰から腹の中央を通る血脈。和漢三才圖會卷十一、經絡部に、「任脈=任之爲レ言姙也、行二腹部中行一、爲二婦人生養之本一、奇經之一也、任脈與二督脈一一源而二岐、(督則由二會陰一而行レ背、任則由二會陰一而行レ腹)、夫人身之有二任督一、猶二天地之有二子午一也」。

路上流水也」と見えてゐる。萬葉集・卷二の歌に、「庭多泉流涙」と見えてゐる。

にはとりあはせ 卯之助と云ふ十一になる友達と鷄合の友達喧嘩（萬年草）　明日酉八條にて鷄合を興行し、熊野が鷄と股野が鷄勝負によつて嫁合すべし（本領曾我）

〔鷄合〕鷄を鬪はせて勝負する遊戯。鬪鷄。「とりあはせ」ともいふ。日次紀事（延寶年中成）三月三日の條に、「禁裏清涼殿南階前有二鬪鷄一、其鷄諸家中雲客被レ出レ之、仙洞獵市預二此事一決二勝負一、是亦稱二行事一」とあれば、禁中でも行はれたものである。



〔天和長久四季あそび（天和頃刊）所載〕

鷄鉾（にはとりぼこ） 長刀鉾の刃先に打かち時の鷄鉾（堀川波鼓）

京都祇園會に鷄鉾の山車を引く。「きをんゑのやまぼこ」を見よ。

＊**にばんばえ** 組下の二番ばえ金田甚藏・岡軍右衞門（寄庚申）

〔二番生〕二番息子。次男。長男は家督を嗣ぎ、平侍の次男どもは弓組・鐵砲組などの組下として仕へる。

＊**にふぢやう** 弘法大師御入定八百年此方の一山の大騷ぎ（萬年草）

〔入定〕禪定に入る義。入寂。心を一處に定めて身口意の三業を止息するを云ふ。

二佛の中間（にぶつのちうげん） 月山の端に二合半、物相頭の奴が聲、なまだはなまみだ南無阿彌陀佛南無阿彌陀、塀を見上げて高念佛、立留りては又念佛、これぞ二佛の中間なり（孕常盤）

釋迦去つて彌勒菩薩未だ世に出ざる五十六億七千萬年の間をいふ。但しここの文は、太刀の空鞘を佩き物相頭の姿は中間と見えれども、稱名念佛を唱へるはなまいだ坊主、これぞ二物を二佛にいひかけて、二佛の中間としやれたのである。俚言集覽に、「（狂歌咄）細川玄旨の召使ひける中間あり、長大に肥りて心は正直なりければ、異名を大佛と喚たまひ、常には庭の塵を拾ひ朝ぎよめしてよくつかはれしが、法師になりて侍らばやと望み申しけるに、許されて髮をそりたるが極めてにげなく見えしを、御前に召してかくぞ聞えける、大佛かしらをそりて又佛、これぞ二佛の中間の果」。謠曲・百萬に、「申すは恐れなれども、二佛の中間、我ら如きの迷ある道あきらめんあるじとて」。

＊**にふぶ** 備前國を安堵して、卽ち入部の行列ゆゆしき弓馬のほまれかや（佐佐木）

〔入部〕諸侯等が知行所へはじめて赴くこと。入國。謠曲・藤戸に、「此浦の御主佐佐木殿の御入部にてあるぞ」。

入門（にふもん） 入門、難經、脾胃論（冷泉節）

醫學入門を云ふ、明李梴撰、漢方の醫書で日本版のものもある。

＊**にへどの** （用明天皇）

〔贄殿〕禁中内膳の中にあつて、諸國から奉れる魚鳥などを納めて料理した所。拾芥抄・中に、「贄殿。在二内膳中一、有二別當藏人・預・納・大窒一及諸國所レ進御贄納、備二供御一給料納、御厨子所也」。

にべる うらがやうな女ら、歌連歌にべる都人夢にも見やしめすまい（女護島）

にべ（鰾膠）を活かした語で、愛着する意であらう。薩摩國訛にこの語らしきものを思ひ當らない。

にほ 鳰の浮巣の浮きながら、下の通ひの絶えぬるも（伊豆日記）

〔鳰〕水鳥の名。短翼類に屬し、鴨に似て小さく、羽毛蒼黑で斑で、腹白く胸黃で紫斑あつて、嘴は堅く尖り、尾は短い。巧に游泳し、又水中に潛む。かいつぶり。かいつむり。むぐり。この鳥は藻や葦の枯葉などを集めて、巣を水上に浮べて作る。世に之を浮巣といふ。夫木集に「唐崎や鳰の浮巣のいかにして、漂ひ渡る世を頼むらむ」。無名抄に「にほの巣をくふには、葦の莖蓄を中にこめて、しかも枯小葉をくつろげてめぐりにくひたれば、潮みてば上へあがり、汐ひれば隨ひ下るなり」。

にほうくわうじん 遂に見馴れぬ二寶荒神乘合は、お供につきて行かひも（田村）

〔二寶荒神〕一馬の脊の兩側に櫓を置きて二人乘ること。この繪は三寶荒神なれども、二寶荒神の圖は尙古造紙插・上卷に載つてゐる。



〔三寶荒神乘〕（好色五人女所載）

鳰照るや（にほてるや） 鳰照るや矢橋の浦の渡舟（孫靜）

古來「にほとり（鳰鳥）や」を誤つたものであるといふ。ここの文はこれを近江の湖水の意に用ゐたのである。古事記に、「邇本杼理能阿布美能宇美邇云云」。

にやこい 下地がにやこい旦那樣、こじたたらう仕掛けたらぼつかりと食付いて、田もやらう畦もやらうで、奥樣はうつそり鼻明けてしまはんしよ（夕霧）

弱氣の義であらう。女などに對して情にもろきをいふ。柔和で情に動かされ易い。「にやける」「にやつく」などはこれと同類語である）。

によい 御手の如意は鞭となり（會稽山）

〔如意〕爪杖の變形したものだともいひ、或は文辭を抄錄して備忘にしたものだともいふ。古來講者僧侶の手に執るもので、竹または木で作り雲形に柄ある物。



〔如意〕

＊**によいくわんおん** 如意觀音と顯はれ光を放つて失せ給ふ（蟬丸）

「如意輪觀世音」の略。六觀音の一で、六臂を有し、右第一手は頰杖を突き、第二手は如意珠を持ち、第三手は數珠を持ち、左第一手は光明山を按し、第二手は蓮を持ち、第三手は輪を持ち、一切衆生の欲望を充たすべく努めてゐられる。

＊**によいほうじゆ** （用明天皇）（釋迦）

〔如意寶珠〕この珠を所持すれば、所願意の如く珠中より實現するよりの名。大智度論に、「如意珠出レ自二佛舍利一、若法沒盡時諸舍利皆變二如意珠一」。「黑照の如意寶珠」をも見よ。

＊**にようご** 女子と生れしこの因果、女御更衣になるとても（淀鯉）

〔女御〕延喜式によれば、夫人の下で待遇は嬪と同樣であつたが、漸次地位高まりて攝關大臣の女を女御として皇后に立たれるやうになつた。また女御でなくても君の寵愛厚きによつて女御と稱したこともあり、また上皇・皇太子の妃を女御と稱したこともある。

＊**にようばう** 女房限つてこの文見

服・京織物類に、「紕光。綟。幅かね尺一尺六寸、丈三丈二三尺、しろ、色いろいろ、しま、とびもん、但唐よりも渡る」。ここの文は「ぬめりんす」(「ぬめ」は「ぬめる」の條を見よ。「りんす」はその條を見よ)に「紕・綟子」をいひかけたのである。

***ぬめる** くろりやくろりやくろりとぬめらしやんすは二人がほかに名取川(宵庚申)

ぬらくらする。易林本・節用集・奴部・言辭に、「忽滑(ぬめる)」。松の葉・一、しもさほそりに、「さてもつれなのきんぎんさまや、きんぎござらざぬめりて𥧄(くら)そ」。巣林子作・嫗山姥に、「小山のやうなる大男まるた舟を漕出す如くぬめくつて歩み寄り」、とある「ぬめくる」も「ぬめる」と同緣の語である。「ぬめる」はぬらくらと痴話狂ひする意にもいふ。

ぬもじ (吉岡染)

「ぬすびと」(盜人)の文字詞(もじことば)。盜人。文字詞については「そもじ」の條を見よ。

***ぬりごめ** 持弓の重籐・塗籠其數は、いさや白木に側黑(そばぐろ)の、弓に靫に矢籠矢箱(堀川波鼓)

〔塗籠〕塗籠籐の弓を云ふ。重籐(しげとう)(その條を見よ)の上を漆にて塗籠めて黑赤色になれる弓である。

ぬるで 耳鼻なそいでぬるでの葉に包み(懸物揃)

〔白膠木〕鹽膚木(ふしのき)ともいひ、漆樹屬の落葉喬木で、葉は鋸齒を有し長卵形の小葉より成り、羽狀複葉をなす、花は小形白色で、果實は扁平で短毛密生してゐる。

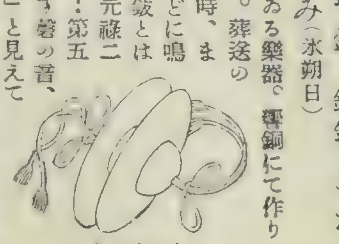
***ぬれる** そんなら桶取といふ狂言は、女に出家がぬれることぢや(壬生大念佛) 若し濡れなどをくはだつるとも、目立たぬやうに物蔭へよつてちよこちよこぬれたがよくおんぢやる(丹波與作) こりや三毛よ惡い男持つなよ、灰毛猫が濡れかけたら一度が大事ふつての け(大經師) 一子禿の功力によつて濡しやうごんの里に馴れ(扇八景) 大和言葉ひんぬき上上の痴話文、見れば見る程我が方へぬれ文(聖德太子) 久米樣の濡文が法印樣のお手に入り(萬年草) 國に名とりの濡者と聞えしもさる事ぞかし(堀川波鼓) とりわけはやるは濡事と、につこと會釋し申しける(蟬丸) 誰かは知らねど此庵の濡坊主、所こそあれ佛壇に女寢させてささめ言(蟬丸)

〔濡〕男女惚れてでれでれするをいふ。惚れる。交接する。色道大鑑に、「ぬれは當世の名目なり、惱(ほれ)たる貌なり、思ひよりたる風情をしなし言ひなす處をさしていふ。又ぬれ者といふ時は滑者(ぬめりもの)の心に通ふ、ぬれとばかりいふ時は心すこしかはれり」。「若し濡れなどをくはだつるとも」とある「濡れ」は、動詞「ぬれる」の轉成名詞である。「ちよこちよこぬれたがよくおんぢやる」とある「濡れ」は交接する意である。書方軒撰・心中大鑑(寶永元年刊)卷四に、「いか程のあやまりにても最早ぬれぬさきこそにて候へ、取返しのならぬ世に御恥かしながらさつと申まゐらせ候」、とある「ぬれ」も交接する意である。「濡れかける」は惚れて色事をしかけるを云ふ。「濡莊嚴」は戀に身を飾立てる遊里を云うたのである。曾我扇八景のここの文は、百日曾我の三部經の條に、「一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟を得」、といへると對照すれば、そのもぢつた文意明かである。「濡文」は艶書、痴話文のこと。「濡者」は好色者のこと。「濡事」は男女間の情事即ち色事のこと。「濡坊主」は好色坊主のこと。

ね

***ねうはち** 太鼓・鉦も鐃鈸もやがて入らうと淚ぐみ(氷朔日)

〔鐃鈸〕寺院にて用ゐる樂器。響銅にて作り二枚打合せて鳴らす。葬送の輿が寺に入來つた時、また引導を渡す時などに鳴らす。(序云、鐃と鈸とは別の物であつて、元祿二年刊・今樣かしは木・第五にも「心耳を澄ます磬の音、鐃を鳴し鈸をつき」と見えてゐる。それが混じて圖に示すやうな樂器の稱となつたのである。


〔ちはらね〕

***ねおびる** 城中の侍ども思ひ寄らざることなれば、鬨の聲にねおびれて慌てふためき度を失ひ(伊豆日記)

寢ほげる。枕草紙に、「辛じてねおびれて起き出でたりしけしき、いらへのはしたなきなど語りて笑ひ給ふ」。

ねがひて 油掛町八百屋伊右衞門淨土宗のねがひて、了海坊の談義に打込み(宵庚申)

〔願手〕後生を願ふ人。

***ねぎ** 禰宜の息子か膏藥賣か(國性爺)

〔禰宜〕神を禰(ね)ぐ人、卽ち神官の稱。また宮司・神主に次ぐ者をいふ。

ねぎどの 祇園林も近ければ、ねぎどのといふ蟲もあり(弘徽殿)

「ねぎそ」とも「ねぎむし」とも云ひ、「ばつた」のことである。和漢三才圖會卷五十三、化生類に「蠜螽(ねぎ)=俗云禰宜、按蠜螽似二螽斯一而小長一寸許、青色尖首兩眼間廣、但螽斯兩眼間狹、以レ之爲レ異耳、其首似下社人著二立烏帽子一狀上、故俗呼曰二禰宜一、云云」。

***ねこじ** ねこじに飾る唐桃を先に押立て(西王母)

〔根掘〕根と共に掘取ること。根びき。古事記・上に、「天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而云云」。

ねこなでごゑ よい雄猫添はそえ、かはゆやと猫なで聲(大經師) かはいものやと猫なで聲(井筒)

〔猫撫聲〕柔和で媚びるやうな聲。

ねこまた 伊駒にあらぬ猫またの化損ひの古婆、白髮齒拔のちよぼ口して(井筒)

〔猫又〕多年月を經た老猫。古來古猫(ふるねこ)は性獰猛で化けるものと思はれてゐた。徒然草・第八十九段に、「奥山に猫又といふものありて、人を食ふなると人のいひけるに」。

ねごろをしき (弱八州)

〔根來折敷〕紀州根來寺及びその邊より製出した折敷の稱。和漢三才圖會に、「昔當寺(紀伊根來寺)及境內作二朱塗飯器一手レ今往往有レ之、稱二根來椀一同折敷、其漆堅無二今似レ之者一」。萬寶全書・八に、「根來物(塗物)。香合・折敷あり、紙をしめしてすりてみれば紙に漆つくな

ぬ

***ぬえこどり**（國性爺）

〔鵼子鳥〕「ぬえ」（鵼また鵺）ともいふ。和名抄に、「唐韻云、鵺怪鳥也、漢語抄云、沼江」、字鏡に、「鵺、奴江」、貝原益信は、「鵺は鬼つぐみといふ、常のつぐみに三倍ほど大なり、星おほし」と云ふ。平家物語巻四・鵺の條に、源三位賴政が怪物を射取つたことを記して、「かしらは猿、むくろは狸、尾はくちなは、手足は虎の如くにて、鳴く聲ぬえにぞ似たりける」、とあるによりて一種の怪物に取扱はれてもゐる。

***ぬかづく**　櫛田の神にぬかづけば（蛙合戰）

額突くの義。叩頭す。禮拜す。

***ぬかみそ**　若衆と糠味噌の味は屋敷に極まりし（宵庚申）　糠味噌汁の御恩にかへたお若衆、ここで死なねば心中が見えまらせぬ（宵庚申）　武家の奉公爲からせば糠味噌汁の花散りて、近年高野に相勤め小姓廻しは致せしが（孺傺歌）　あつちはかうのもの、こつちは糠味噌、切らるるは膳の箸、外に道はあるまいか（聖德太子）

〔糠味噌〕往時武士は粗食に甘んじたもので、殊に舍人・奴の輩は常食に麥飯に糠味噌汁を啜り、奴の給料は二合半の切米である。「糠味噌汁の御恩」とは、武家の主君の御恩の意。遂生雜記・卷上に、「奴加美曾或作糝汱、未詳本說、以米粃和入麹豆鹽造成者也」。

ぬきす　あくれば掬ぶ谷水を心ばかりの湯化粧と、ぬきすをだにも參らせず（十二段）

〔貫簀〕九く削つた竹で編んだ簀で、手洗水の飛散らぬ爲に盥の上に掛置いたもの。伊勢物語・二十六段に、「女の親腹立ちて、手洗ふ所に貫簀をとりて投棄てければ」。

***ぬく**　よつぽどあがけよ其處なぬくめ、見ん事男の數に入りながら、江戸の供さへ得しならず（鑓權三）

〔溫〕ぬく太郎ともいひ、痴漢の意。馬鹿。俚言集覽に「ぬく太郎＝溫暾湯の意也、馬鹿を云」。

ぬくぬく　和藤内が月代首提げて來らんと、廣言吐きし某が、一太刀も合はせず矢の一本も放さず、ぬくぬくと味方せば（國性爺）　ようもようも此母をぬくぬくとだましたな（女殺）

〔溫溫〕づうづうしい。づぶとい。「あたたかな」を參照せよ。

ぬぐひうるし　心はさつぱり拭漆の刀懸（大經師）

〔拭漆〕さつと拭うたやうにかけた漆塗。

ぬくわか　生ぬるいぬくわか、鑓の柄切つて切折れと喚いてかかるを（蛙合戰）

〔溫若〕「ぬく」は其條を見よ。白痴の若者の義であつて、「ぬく太郎」など云ふ類である。痴漢。人を罵つていふ。この語天正頃よりの語であらう。淺井三代記、大橋安藝守生害のことを云へる條に、「我この屋敷にとり籠り、久政のぬくわかに目をさまさすべきは易けれど」。

***ぬけさんぐう**　契りそめしは一昨昨年、拔參宮の道連れに（丹波興作）

〔拔參宮〕「ぬけまゐり」ともいひ、親や主人に祕して、こつそりと伊勢太神宮に參詣するをいふ。拔參宮の最も流行したのは寶永二、三年である。巣林子のここの文に「一昨昨年拔參宮」といへるは、寶永二年の拔參宮を當込んだものであらう。日次紀事（延寶年中成）二月の條に「自二今月一至二四月一伊勢參宮徒多、其間爲二人臣子一者、不レ告二君父一而參詣者、是謂二脫參一」。博多小女郎波枕に「拔參宮の頭字が耳に留まる神心」とある、この文意は、「拔參宮」の頭字「拔」は「拔荷商ひ」（密貿易）の頭字「拔」と同じなるによつて、耳に留まつて氣に懸り、神慮によつて己が犯せる拔荷商ひの罪科の繩目の恥辱を免かれるやう、守護し給へと祈る意。

ぬけぬけ　こな樣はなう侍のぬけぬけとよう嘘をつかしやんす（鑓權三）

〔拔拔〕巧言を以て言ひ拔けする貌。俚言集覽に、「人を欺くをヌクと云、人に欺むかるるをヌカるると云」。

***ぬさ**　この度はぬさもとりあへず手向山（天智天皇）

〔幣〕御幣をいふ。紙・麻・帛・木綿などを切つて神に捧げるもの。古今集・菅公の歌に、「この度はぬさもとりあへず手向山、紅葉の錦神のまにまに」。

ぬし　煙管屋・ぬし屋・檜物屋・指物屋（用明天皇）

「ぬりし」（塗師）の略。下學集・上、人倫門に、「塗師人」。

ぬしづく　この件左衞門に緣邊し、七百町をぬしづかんとあてはめて置いたもの（反魂香）

〔主附〕主たる位置にありつく。持主となる。

ぬすみかやき　盜みかやきの身ではなし（曾根崎）

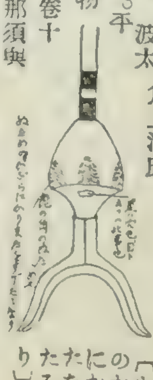
盜み家燒、卽ち盜賊放火犯をいふ。

ぬたうつ　「のたをうつ」を見よ。

ぬための鏑　ぬための鏑差添へて、村重籐の弓持つて（加增曾我）

鹿角にて作つた鏑矢をいふ。「ぬた」は鹿の角の義。和名抄に、「鈔、沼太　波太　角上浪皮也」。平家物語・卷十一、那須與一の條に、「ぬための鏑をぞさし添へたる」。

（貞丈雜記所載）



「ぬためのかぶらにかりまたをすげたるなり」

ぬつけり　ぬつけりとわし等をだまして（蛙合戰）　あのぬつけりとした顏わいの（宵庚申）

よどみなく平氣な樣にいふ。巣林子作・日本振袖始に、「數年ぬつぽりと親を能うだましたなあ」。同・曾根崎心中に、「そなたを見るも恨めしい、あの正直な德兵衞めをば、ぬつぺりとした顏をしてどのやうにだましたやら」。生玉心中に、「除の日に商人の店を捨て、何處へぬつくり這入つてぞ」とある、「ぬつぽり」「ぬつぺり」「ぬつくり」も「ぬつけり」と同緣の語である。

***ぬはい**　六字づめの念佛、それも當世粹になり、それを立つる坊主衆もぬはいぬはいぬはいだぬはいだ、まだ洒落て後にはぬいぬいなどやる世の中（千疋犬）

六字名號の南無阿彌陀佛の約訛。

ぬめ　店の帳面皆ぬめりんず（氷朔日）

〔絖〕光澤ある一種の絹布。萬金產業袋・四、衣

正月子日岳に登るは遠く四方を望み、陰陽の靜氣を得煩惱を除くの術なり」。「千年まで限れる云云」を見よ。

***ねはん**　弘誓の海を渡り涅槃の岸に至るべき（百日曾我）　まだきさらぎの朧夜や、涅槃の雪の名殘の門（歌念佛）　或夜この海底に、涅槃經の四句の文梵音聲にて唱ふると、あらたに靈夢を感じ（用明天皇）

〔涅槃〕梵語 Nirvana. 寂滅などと譯し、生死を超越し不生不滅の眞理を證得し、常樂我淨の理想境をいふ。よつて以て極樂淨土の意にもいひ、聖者の逝去を涅槃に入るともいふ。五十年忌歌念佛のここの文の涅槃は、涅槃會のことである。釋尊は二月十五日に入滅されたにより、後世この日に追善法會を營む、これを涅槃會といふ。諺に「雪の果は涅槃會」とて、雪は涅槃會の頃から降らなくなるといふに據つたのである。

「涅槃經」は大般涅槃經の略。釋尊が入滅の期に臨んで大衆に向つて深理を說かれた經文である。「涅槃經の四句の文」とは、涅槃經に見えてゐる有名な四句偈即ち、「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」の文をいふ。

ねびもの　一萬といひし時よりも兄十郎はねび者にて、麁忽せぬ生付き（會稽山）

「ねび」は年の程よりもおとなびたるを云ふ。老成者。源氏物語・玉葛の卷に、「この君ねびととのひ給ふままに」。同・螂の卷に、「御形もいときよらにねびまさらせ給へるを」。

ねまつり　お寺方の大黑と、晝は隱して長持に入れて二股大根や、夜は抱かれて子祭の寢は致すまじ（松風）

〔子祭〕十一月甲子の日に行ふ大黑天の祭事をいふ。日次紀事（延寶年中成）十一月の條に、「凡諸商此月子日子時祭レ之（大黑天）、盖買賣之間取ニ其利一也、欲レ比ニ鼠子之蕃息一也、云云」。ここの文は「お寺方の大黑」と云うたので、大黑天に緣ある「子祭」と云ふを用ゐたので、その子祭に寢祭をいひかけて、房事をきかせたのである。

ねまる　御荷物積んでなぜ船にねまらないと、北國訛の半髮額（川中島）　軍右衞門がねまり申して手をつかへる、こりやさ拜み申す吳れ申せと（脊庚申）　大星由良之介殿といふは此屋臺にねまりめさるか（碁盤太平記）

すわる（坐）。うづくまる。よつて又「居る」の意にも云ふ。下學集・態藝門に、「踞」。現今も石川縣羽咋郡地方にては「すわる」（坐）を「ねまる」といふ。（序云、淺井了意撰・東海道名所記、日坂の條に、「山かがちのねまり申したるよな、大飯かきとりて腹ぼてるままに、夢にて夜をぶちあかし給ふべいよな」、とある「ねまり」は眠る意に用ゐたのである）。

ねや　杉の梢を目當にして、暫し保つて放つ矢が、一二の枝にはたはたと、根矢の立たる如くなり（五人兄弟）

〔根矢〕矢の根の大きな矢。會津四家合考、高倉合戰の條に、「神殿に参籠して、御手洗へ出でて垢離かかんとしける處に、根矢一手打違て水上より流來れば」。巢林子のこの文は、鏃のない楊弓の矢が、矢の根のあるが如くに立つたとの意。

***ねりいろ**　嫡子惡源太義平は練色のぎようようの直垂（鎌田）

〔練色〕絹でも綾でも練つて柔かにし、地色純白でなくて薄黄ばみを帶びたもの。

***ねりしゆ**　藤の棚のねぢ兵衞は此方ほど鎚は振られども、お祓の練衆御番替り人の氣に入り（夕霧）　人にも知られし粉屋の孫右衞門、祭の練衆か氣違ひか、遂に指さぬ大小ぼつこみ（天網島）

〔練衆〕大阪諸社の夏祭には練物を出す、就中座摩社・天滿宮等の御祓の練物は殊に盛んなもので、鎧兜を着込み大小や旗印等を指した武者の假裝行列などがあつた、これを練衆といふ。難波鑑（一無軒道治撰・延寶八年刊）第三、座摩御祓（六月二十二日）の條に、「ねりもの、母衣掛武者立花砂の物色色のつくり物に美を盡し、今の渡邊筋より本町堺筋へ出で、高麗橋を渡り、大津町の御旅所までねる」、とあつて武者の假裝行列圖を戴せ、又同書・天滿天神御祓（同二十五日）の條に、「御神事ねりもの、引山三方面にして、内に兒或は花笠をきたる子どもに踊らせ、或は異類異形に出で立たせ、さまさまの藝づくし、………、また母衣かけ武者、小具足、いろいろあり、天神橋通をわたりて難波橋の邊まで行く」。

***ねりぬき**　練貫の單きぬ（會稽山）　ひやうもんの練貫にから縫したる上襲（兼好）

〔練貫〕練緯の義。生絲を經とし練絲を緯として織つた絹布。

ねりぬきみづ　練貫水の大津酒（反魂香）

〔練貫水〕原田藏六撰、淡海錄（元祿元年の自序がある）水井池の條に、「大津練貫＝三井の麓に涌泉有、海水井水より目にかけて輕き冷水也、酒をかもし茶を煎ずるには此水を用ゆ、庭訓に云、大津ノ練貫と出す、池邊に禪寺有、大練寺と云」。

ねりものや　いざ屛風屋の小陰にて、君と我とはねり物屋（用明天皇職人鑑）　向ひのねり物屋の灰毛猫は憎らしいぶたうな顏で（大經師昔曆）

〔煉物屋〕諸藥物を煉り固めて珊瑚・寶石などに擬作し、またはこれを商ふ家。

根を掘る竹の伏見町

「産まずの數ならば云云」を見よ。

***ねんじや**　馬追うて一代若衆にならずに生えぬきの念者ぢや（丹波與作）　此道に高下はない、其小一兵衞も呼出し並べて置いて念者に賴む（脊庚申）　念者坊の祐辨樣は蹈殺すとて教えさつしやる（萬年草）

〔念者〕男色關係にて、兄分を念者といひ弟分を若衆と云ふ。丹波與作のここの文は、三吉五歲で馬追となり、若衆髷を結んだことなく、「生えぬきの念者」と言うて平氣な所に感深い。尤も若年の者の言としてはむしけてゐるやうなれども、具さに浮世の辛酸を嘗めた身にはかくも老成ぶつたであらう。

***ねんない**　念無う早かつた（松風）

〔念無〕思ひがけない。この語は猿樂狂言の中に多く見え、本願抄にも、「行方見失ひぬ、念無しとあきれゐたる程に」と見えてゐる。

ねんぶつこう　その振手面白い、我我は名ある鎌倉武士、振るか振らぬか、立替り入替り念佛講の、かれの威光買うて見せん（曾我虎磨）

〔念佛講〕百萬遍ともいひ、婦女を輪姦すること。

り、書寫藻はよく根來に似たれども紙につかず」。

ねざめ　次條を見よ。

ねざめさげぢゆう　萬事を夢と飲上げし寢覺提重・五升樽、坊主持して北うづむ(女殺)

〔寢覺提重〕提重(その條を見よ)の手輕なのをいひ、當座の馳走品や徳利一對を容れて携帶に便にしてある。好色二代男(貞享元年刊)卷三、樂助が猢猻の條に、「幇間持に遣帳を見るに、四年半に七十六兩一歩・襟畝十三、其他鼻紙入二度、寢覺の提重・桐の挾箱云云」と見え、西鶴置土産(元祿六年刊)卷四、江戸の小主水と京の唐士との條に、「四十六匁に差詰りて兎や角物思ふを、爰はと取持つて不思議に殘る寢覺提重を賣拂ひて吉之丞が萬事をしまはせ云云」、とあるより見れば古道具としての寢覺提重の賣價は四十六匁程であつた。浮世花鳥風月(正德三年刊)花之部に、「爰も挾きに短しは明接敷に置けと寢覺提重を預けける、前の黑き鼠に鱓、是は添しと榮華も爰に開き、餚　蒲鉾の切形きやしや過ぎて氣に入らねど禮いふ事なし、先は樂しみ此内に有難しと、錫一對を明らかにしてげり」。寢覺提重を略して寢覺とも云うたことは、江島其磧撰・寬濶役者氣質・下之卷に、「もたせのねざめひらきてさし樽のかんをさせ」と見えてゐる。巢林子作・生玉心中に、「花の紋日をこの床で二人寢覺の小杯」とあるのも、寢覺提重の小杯をいうたのである。

ねずみきど　鼠が食破りし所なれば、此所より人の出入させんとて鼠木戸と名づけ、今の世にいたつて諸芝居の鼠木戸と申す事此時よりも始まれり(非筒)

〔鼠木戸〕芝居小屋の板壁に小さい潜戸二つを設けて入口としたものの稱。雍州府志・古蹟門上・愛宕郡の條に、「芝居。……芝居外門闌上高設床外張幕、其體似城樓故稱櫓、……櫓下板壁設小屋二箇所、是稱鼠戸口、入芝居人屈曲背肩、越門限而入之、如鼠之入竇、鼠戸之傍設床、代札於錢而賣之云云」。劇場訓蒙圖彙・卷二に、「鼠木戸。三馬按ずるに鼠木戸の名は上方より起れるか、京大坂の芝居は角力場の木戸口の如く板壁に小さき戸口二つあり、これを鼠木戸と云、其いはれは芝居へ入る人肩背をかがめて、鼠の穴に入る如き故名付くるものなり、江戸芝居は入口四ケ所あれども、木戸番の左右に小さき入口を鼠木戸と云、一説に不寢見城門と云、尤杜撰論ずるに足らず」。竹豐故事に、「櫓と云城戸と云は城郭に準じて大切なる名目なり、後世城の字を恐れ木戸と稱す、又見物人の木札を改め取、一人宛〆入る體、鼠の小さき穴を潜るに似たる故俗に鼠木戸と云習はせり」。鼠木戸は戰國時代の餘風であるが、元祿以前既に普通の出入口に改造されたのが多い。

***鼠の尾花**　(用明天皇)

溝萩の別稱である。「みぞはぎ」を見よ。

***ねする**　遣ひすてたのげしいたのと、ねすらるゝを苦にしてか、今朝町へ出て暮るゝまで待てども待てども歸らぬ(曾根崎)　あによめごのねすりごと聞づらや聞にくや(重井筒)　仕事は常より精出せども、きさにすねごとねすりごと(今宮)

いやみをいふ。あてこする。「ねすりごと」は、いやみ。あてこすり。倭訓栞、ねすりのころもの條に、「高陽院歌合に旅人のねすりのころもとよめるを、判者難をいはずかたせたるはおぼつかなしとぞ、ねすり言といふも是より出たるにや」。

***ねた**　私をけぶたさうにして、そなたの文を焼いて棄て居つたも見てゐる、それをねたに思うて、針を棒に取りなして此様にしなしため(大經師)　きさと懇致せしを由兵衛めがねたにこみ(今宮)

「ねたし」(妬)の語根を名詞に用ひたもの。宿憤。遺恨。和訓栞に、「ねたむ。娟嫉をいふ、日本紀に妬又慨憤をもよめり、宿痛の義、宿憤の意なるべし」。「ねたにこみ」とは、遺恨に思ひ込みの意。

***ねだれる**　二十五日に落した判を八日に捺されうか、さてはそちが拾うて手形を書いて判を捺ゑ、おれをねだつて銀取らうとは謀判よりも大罪人(曾根崎)　ねだれ者かしらぬ粗相すな(夕霧)

強請する。「ねだれ者」は強請する者。ゆすり者。

ねぢぼう　「よりぼう」を見よ。

ねちみやく　しやんと打ちませうと手をひろげても、イヤまあ打つまい、ハテねちみやくした、そんなら舅御夫婦も乘物やぢやぢや馬と、乘せてもいかな乘らばこそ(萬年草)

ぐづぐづとねつこいこと。執着。今様二十四孝(寶永六年刊)卷之五、目の玉ひつくりかへした因果の條に、「花もさこそと人も見るらん世を、ねばらかたらねちみやくするは、鬼も笑はんあすの事云云」。和訓栞、ねちろの條に、「ねちみやくといへる俗語も熱脈なるべし」。

ねつそり　ヤアねつそりの牛盗人、ちよろい工のあめだ牛、まうまう外に同類ないか(國八州)

愚圖。和訓栞に、「ねそ。俗に重厚簡嘿なる人を謡名す、ねりその略にや、ねつそりともいふめり」。

ねつたい　ねつたい佐佐木殿、功名せうとて不覺ばしし給ふな(最明寺殿)　ずんばろ坊主・ねつたい坊主・鉢坊主、これがお寺の長助と、笑うてこそは追立てける(會稽山)

「ねたし」(妬)の音便。嫉ましい。平家物語卷九、宇治川の條に「ねつたい、さらば景季も盗むべかりけるものを」。「ねつたい坊主」とは、憎い坊主の意。

***ねどひ**　さてもねどひする衆や(釋迦)

〔根問〕根本まで問ひただす義。しつこく問ふこと。饅頭屋本・節用集に、「重問」。

子の年　豐かなる年は子の年、大黑女夫力次第に子孫もわき出る(反魂香)

寶永五、戊子の年を祝うたものであらうから、よつて傾城反魂香の初上演は寶永五年であらねばならぬ。

***子の日**　千年までかぎれる松も今日よりは、君にひかれて萬代や經んと、子の日の松の行末も久しかるべき例ぞと、君を祝ひし名歌なり(百日曾我)

正月初子の日をいふ。この日昔は野山に出て小松をひいたものである。和歌題林抄に、「春の初子の日、野邊に出でて小松をひきつつ、人をも身をも祝ふなるべし」。菅家文章に、「予亦嘗聞子故老、曰上陽子日遊厭老」。拾芥抄に、「正月子日岳に登るは何ぞや、傳云

〔喉鎖〕咽喉は九節から成れるものとしてゐたのでかくいふ。和漢三才圖會・卷十二、支體部に「咽喉、和名乃無止、言呑處也、齒以後至二會厭一、深三寸半、有二九節一」。

のどり 手綱を繰つて乘鎭めん乘廻さんとすれども、野取のかたなづけ高嘶きして尻込みするを(扇八景)

〔野取〕牧から捉へ來てまだ馴れぬ駒。夫木集に、「おくの牧の野取の駒のかたなづけ、ともすればまたあるる君かな」。

***のの** 寢ん寢んねこれ、音せてお寢れののへ參ろ(門出八島)

神、佛、神社、日、月などをさしていふ兒女子の語である。蓋し古書に「祈」または「乞」の字を「のの」と訓じ、これより轉じたものであらう。なほ小兒語のことにつきては「とど」の條を見よ。

***のぶくに** 下人に持たせし風呂敷より棒鞘の一腰を取出し、これはこれ信國とや(女腹切)

〔信國〕來信國作の刀。信國は建武頃山城の刀匠で、初代を了戒といふ。西鶴撰・萬の文反古・卷一、世帯の大事は正月仕舞の條に、「將又信國の小脇差、右に砥屋杢兵衞金子三兩二歩までに付け申し候、是は元來正銘には極まり申さず候」と見えてゐる。長町女腹切中之卷に、半七が信國の棒鞘の脇指を三十二兩に賣拂ひとある。

のふずもの 生若い女の面に似合はぬのふず者・犬扶持持つて來らば、是に置いて帳につけ歸れ歸れといひければ(千疋犬) ヤア扨のふずもの、往還の道に横たはりのさばり伏したは何奴(隅田川)

「のふぞくもの」(野風俗者)の略訛である。圖太く賤しい者。無作法者。現今中國地方にて「のふぞうな奴」などいふ語は蓋しこれである。鄙草(元祿十四年刊)に、「野風俗。いやしきことを野と云、野風俗は風俗のいやしき事也、のふうずと云は誤」。傾城太太神樂(寶永二年刊)卷四、器用のしやうばいの條に、「一門もなき身の心やすさに世をはばからぬ野風俗の友を集め、鷄飯のあばれぐひ云云」、とありて「野風俗」に「のふず」と振假名が附けてある。

***のべ** 膝に凭れてさめざめと、涙はのべを浸しけり(曾根崎) 何時の間にやら大氣になり、延の鼻紙二枚三枚手に當り次第重ねながら鼻かみやる(冥途飛脚) 鼻紙の中から出す延の文(反魂香)

〔延〕延紙の略。和州吉野から產出し、大さ縱七寸横九寸ばかりの小杉原紙である。粹客遊女の輩は常にこの紙を懷中し、鼻涙を拭去るなどに用ゐるによつて鼻紙ともいふ。

***のぼり** 年もひさしの、蓬菖蒲は家毎に、幟の音のざはめくは、男子持の印かや(女殺)

〔幟〕ここの文は五月五日(端午)の節句をいうたもので、男兒ある家には幟を立て、甲冑武器を飾り、陽の相に象り粽を作つて祝ふ。拾芥記に「五月爲二男子祭節句一、嚴二具足甲冑旌綿鑓長太刀等武具一者、男子可下出二軍陣一振二舞武勇一、領二國郡一爲中上功上、故以二出陣威勢之體一爲レ政、云云」。また端午の節句には蓬を軒庇に挿すから、「年も久し」を「庇」にいひかけて「庇の蓬」といひつづけ、菖蒲酒菖蒲刀など菖蒲を用ひるから、「蓬菖蒲」といひつづけたのである。日次紀事・五月初五日の條に、「市中家家挿二菖蒲艾葉於二擔間一、各造レ粽食レ之、……、凡中華謂二菖蒲一者石菖蒲也、本朝以二水菖蒲一爲二菖蒲一、……、又兒童飾二冑鎧長刀胞衣一、旌旗於二門楣一」。

***飲みしこる** 奧にはなほも飲みしこり、踊るやら謠ふやら(生玉)

しきりに飲む。「しこる」の條を見よ。

***呑みや** 島はいかう醉うたさうな、これ往て休みや、お島お島と、茶を汲んで一つ呑みやといひければ(二枚繪)

「呑めよ」といふべきを上方詞では「呑みや」といふ。かく動詞の命令法に連用形を用ゐるものはなほ他にもある。

のめのめ この銀をのめのめと只おのれに取られうか(曾根崎)

滑滑の義か。平然たるさま。ぬらくら。菅原傳授手習鑑・第二に、「恩ある方を流罪させ、のめのめ見ては居られず」。「のめりのめり」ともいひ、雪女五枚羽子板・初春厄拂ひの條に、「鶴と龜めが何うち食らつて、すつ百萬年のめりのめりと、くたばり外れにあやかりなされ」。

***のら** のんこに髮結うて野良らしい、伊達衆自慢といひそな男(天網島) 三五郎只一人のらのらとして立歸る(天網島) 九軒阿波座の野良烏、月夜はなほか闇の夜も(淀鯉) コリヤのらつぽ、今朝卯の刻から内を出て、何時ちやと思ふ晝下り(宵庚申) はや今から野良かわくか(傾城酒呑童子) のらぞんざいの姿が身、氣色もしかしか捗らねど(夕霧) 女房どもはのらのらと、何處にのらをかわいてゐる(冷泉節)

〔野良〕なまけること。のらくら。放蕩。新井君美自筆・拔粹(岩崎文庫所藏)に、「野良者放蕩」。「野良烏」とは、ぞめきてあるく野良者をいふ。「のらつぽ」とは、なまけもの(懶者)をいふ。「あほざののらがらす」を見よ。「野良かわく」とは、なまけ(懶)を盡す意。「かわく」は「こんがうかわく」などいふ「かわく」と同じ語。「のらぞんざい」とは、懶けて放漫なことをいふ。ふしだらで氣儘。「ぞんざい」をも見よ。

***のり** 左右に疊敷き並べ、前に白砂積みたるは、こぼれしのりを清めん爲の用意なり(碁盤太平記)

「ぬら」(滑)の轉。生血。

のりかひ のりかひ物が下あがろがな、とりへて疊んで打盤出して、ちよきちよきと打て(宵庚申)

〔糊交〕糊を交へる義、糊を附けること。糊附けの布などを糊かひ物といふ。關西地方では、布などに糊附けをすることを糊かひをするといひ、糊をかふともいうて、現今も用ひてゐる言葉である。

のんこ その見物の中に、のんこに髮結うて野良らしい、伊達衆自慢といひそな男(天網島) 打揃うたる血氣盛り、立かけのんこのあたまがち(宵庚申) 煙草一服致さうかと、腰打掛くるものんこらし(女殺)

兩鬢を細く狹く殘し、髻を高くする結髮で、伊達を好む若者の間に流行したものである。色縮緬百人後家(享保三年刊)に、「絲鬢づくりのんこあたま」。柳亭筆記・下に、「(產毛)白浮の鼈甲さし梅笄にかぎり、のんこわげの細島田・小つぶがしらの丸髷」。「のんこらし」とは、のんこ髷の伊達風である。

の

***篦**(の)　篦廻り太く矢束も拔群(會稽山)
矢軸を云ふ。和名抄に「の。篦をよむも矢の度(のり)なるべし」。矢竹の長さは普通十二束。

の　今日は蚊帳の祝儀とて、萠黄(もんぎ)の生絹(すずし)六の七の、屋の内祝ひ賑へども(五十年忌歌念佛)　繋馬の幕の紋五(いつ)のがかりに染め込みしは、相馬の家の總領の印(關八州)
〔幅〕布帛の幅を數へるに用ひる接尾語、普通鯨尺八九寸乃至一尺を一幅とす。和訓栞に、「の。日本紀に幅をよめり、絹布の度(のり)也」。

***のうげ**　南無六道能化の地藏菩薩(壬生大念佛)　能化指南も恐れぬあふれ者(孕常盤)
〔能化〕所化に對する語。教法を說いて衆生を化益するを云ふ。「能化指南」は僧侶の師範役である。

のうにんだいし　能仁大師法界をすべて我が智とし、虛空をつくして我が身とし(釋迦)
〔能仁大師〕釋迦如來をいふ。祖庭事苑に、「梵云釋迦、此言能仁」。瑜伽論に、「爲能化導無量衆生、令苦寂滅、又摧滅邪穢外道、出現世間、故號大師」。

***のえふす**　のえふす民こそ目出度けれ(嫗山姥)
うつぶす。靡く。和訓栞に、「のえふす。ぬえふすに同じ、偃をよめり、萎臥の義也」。

***のおくり**　立酒(たちざけ)飲んで誰を野送り、ああ氣味わる(女殺)
〔野送〕亡骸を野に送る義。葬送。

退(の)かぬ身の上　半七も伏し沈み、お花ものかぬ身の上と、語るも聞くも主の內(女腹切)
他人の事として退くことのできない關係深き身の上。好色五人女卷三、小判知らぬ休み茶屋の條に、「我が一子未だ定まる妻とてもなし、そなたも退(の)かぬ中なれば、これにと申しかけられ、さても氣の毒まさりける」。

***のがみ**　畠育ちののがみの馬引つ立て(今川了俊)
〔野髮〕野生ままの鬣(たてがみ)。

のけばのうめ　身の程をしら髭(ひげ)・八島のくづれ、諸道具のけばの梅、雨の手に鐵輪(かなわ)(酒呑童子)
「軒端(のきば)の梅(うめ)」に「除け」(卽ち取拂ひ)をいひかけたのである。軒端梅は謠曲・東北(東北院の梅の名木につきて和泉式部の古を語る事を作つたのである)の古名である。ここの文は、身の程を知らぬに白髭をいひかけ、家財の崩れに八島のくづれをいひかけ、雨の手に鐵輪の手錠を鐵輪にいひかけたのである。白髭も八島も鐵輪も謠曲の題名である。

***のさばる**　なんと亭主久しいのとのさばり上れば(曾根崎)　張合の女郎、近付になつて置きやとのさばり寄れば(天網島)　あげくに妾までのさばりづら、エエ憎や腹立(はらたち)や(大職冠)　のさばりごゑ(嫗山姥)　小菊めが客と連立ちよしよしと下向するも此筋と、のさばり返つてくる道の(女殺)
「のじばる」ともいふ。伸張の義。のしあがる。意氣あがり高ぶる。橫柄である。和訓栞に、「のさ。無名抄に歌を評してのさなる所といへり、のさのさともいふ、のさはのすの義、意氣揚揚の意也、のさばるともいふめり、大諸禮にものさけと見えたり」。

のさもの　まづ太郎冠者を呼出して申付けうと存ずる、のさ者あるかやい(松風)
橫柄者をいふ。「のさばる」の條を見よ。狂言記・あかがりに「のさものを呼びいだし申しつけうと存ずる、あるかやい」。

***のじばる**　うぬが面付ただ者ならず、眞直に白狀せよ、のじばらばしやつ面(つら)をはつてはつてはりまはさん(女楠)　のじばらば幕引斷り宿札打割り引摺出せとののしりける(弘徽殿)
「のしばる」(伸張)の訛。「のさばる」を見よ。また轉じて剛愎な意にいふ。

のしめ　すつすつ素鉾栗毛の馬、のつし熨斗目に麻上下(夕霧)
〔熨斗目〕練絲を經に、生絲を緯にして織つた絹布で、腰のあたりにのみ縞を織出したものをいひ、賀服に作る。和訓栞に、「のしめ。今經は練絲、緯は生絲のきぬの名にいへり、のし鰒の形に目を引て賀服とするなるべし」。ここの文は、馬を歩ます樣を形容した「のつしのつし」を熨斗目にいひつゞけた。

のたうつ　襟引寄せて剃刀の柄までぐつと一刀、突かれてうんと反返(のりかへ)り、のたうつ藍の蟲の息(氷朔日)
「ぬたうつ」「のたれをうつ」「のたをうつ」ともいふ。もがきてうねりころがる。移徙抄(元祿五年、大坂高麗橋雁金屋庄兵衞版)に、「ぬたうつ。ふしまろぶ也」。按じるに「のたうつ」は「ぬたうつ」(沼田打)の轉であらう。沼田に陷り泥濘を打つてもがく體より轉じて、それに似た煩悶の體をいひ、臨終の期に軀を動かして苦しむを云ふ。夫木和歌抄・卷二十七、猪の題下に、俊賴朝臣の歌に、「君戀ふと猪のかるもより寐覺して、あみけるぬたにやつれてぞふる」、同、待賢門院安藝の歌に、「戀をしてふす猪の床はまどろまで、ぬたうちさます夜半の寐覺よ」、とある「ぬた」も沼田である。「ぬた膾(なます)」「ぬた韲(あへ)」「ぬたくる」なども「沼田」から出た語である。

のだめがた　(最明寺殿)
〔篦撓型〕矢竹のそりをためるに用ゐる具。

***のたれをうつ**　うんとばかりにかつぱと伏し、反つ返しつのたれを打ち(卯月潤色)
「のたうつ」を見よ。

***のたをうつ**　橋には死骸のたをうつ(鎗權三)
「のたうつ」を見よ。

後(のち)の葵(あふひ)　後の葵の下簾、賀茂の河原をとどろかす(兼好)
賀茂明神の祭禮は四月中の酉の日であつて葵祭と稱し、軒や簾に葵をさいた。祭過ぎての葵を「後の葵」といふたのである。

のぢばる　「のじばる」を見よ。

のとさば　この上は能登鯖を一口食ふまで(女護島)
〔能登鯖〕能登產の鯖は名物である。國花萬葉記、能州國中名物出所の條に「鯖。世にさしさばと云」。ここの文能登守教經を指す。

のどのくさり　南無阿彌陀佛の聲を力に喉の鎖を一刀、うんとばかり目もくれなゐの(女腹切)

磬。苦定反、俗云方磬、磬音强、○那波本作ニ方磬俗云奉强六字ー、按方磬出ニ西大寺資財帳、及延曆十五年紀ー、見ニ類聚國史音樂部ー、方磬之名於ニ西土書ニ無レ見、疑是方響之誤」。巢林子のこの文、「はうげい」(正しくは「ほうげい」)となつてゐる本もある。按ずるに「はうきやう」とあるは誤であらう。「ほうげい」を見よ。

*はうぐわん 楠河内の判官(女楠)
判官贔屓の世の中、お前の名ほか出ませぬ(宵庚申)

〔判官〕檢非違使尉の異稱である。貞丈雜記に、「檢非違使尉を判官と云ふときは、はうぐわんと云ふ也」。「判官贔屓」とは源九郎判官義經に贔屓することをいふ。謠曲・淨瑠璃などに義經のことをいへるは皆彼に同情の筆をむけてゐるので、世人も義經に同情する者が多い。心中宵庚申のここの文は、姑が嫁を去らせたとあつては、世人が義經に贔屓するそれのやうに、その理由はともあれ直に嫁に同情するとの意。

はうけい 「はうきやう」「ほうげい」を見よ。

はうけふいんだらに 「ほうけふいんだらに」を見よ。

はうじ 臨邛のはうじが末葉諸國を勸進す(國性爺合戰)

〔方士〕方術の士。仙術を行ふ人。道士。「りんきやう」を見よ。

ばう日・けいちよく日 今日はばう日けいちよく日、追付で大風起らん(唐船噺)

〔昴日・鷄直日〕昴は二十八宿の一。月が天球を一週するには二十八日未滿を要する所から、二十八宿を順次に日に當てて昴に當る日。昴は和名「すばる」又は「むつらぼし」(六連星)といひ、牡牛座のb・e・d・n・f・h及び他の一星より成り、七つの星の聚である、古くは火神と稱した。東京附近では一二月頃日暮頃に天頂の附近に見える、肉眼で見えるのは上述の七つの星であるが、望遠鏡で見れば六百箇程の星群である。鷄直日も曆上の語で、鷄の直起せるは天變を豫知せるものとの義で、鷄直に當る日は大風起ることがあるとされてゐる。

はうしや 「ほうしや」を見よ。

*はうじやう 放生第一の靈水にて、捨身思ひも寄らずとあれば(蟬丸)
二七日は放生供(蟬丸)
家來自慢の借上ならば、祇園會か放生會の御輿の供せい(關八州繫馬)

〔放生〕旣に捕はれて殺さるべき魚鳥などの生類を助けて放ちやること。これをなすに法を修し供養するを放生供といふ。「放生第一の靈水」とは、關の清水は生類の命を助ける靈水の意。

「放生會」とは、陰曆八月十五日八幡社祭日に魚鳥を放つ會式をいふ。石清水八幡社の放生會は、神官・社僧・樂人・文武の官人等盛裝して行列をなし、神輿出でて盛大を極めたもので、詳しくは黑川道祐撰の日次紀事八月十五日の條にも載せてある。

*ばうじやくぶじん 旁若無人の繼父えせ笑ひ(女腹切)

〔旁若無人〕眼中に人無き我儘勝手の振舞をなすこと。史記 刺客傳に、「高漸離擊レ筑、荊軻和而歌ニ於市中ー相樂也、已而相泣、旁若ニ無レ人者ー」。

はうしよ 「ほうしよ」を見よ。

ばうずもち 萬事を夢と飮みあげし、寐覺提重五升樽、坊主持して北うづむ(女殺)

〔坊主持〕道連れの友達相約して、坊主に出逢ふまで友達の手荷物を持ち歩き、坊主に出逢へば次の番の者に渡す、かく坊主に行き逢ふ毎に代ること。俚言集覽に、「坊主持。途中にて道連れの持物などを順持に、坊主に行あひたるごとに代るを云」。

*はうすん 天機を安んじ奉らんは、百合若が方寸胸の間に候(百合若)

〔方寸〕心をいふ。列子に「吾見ニ子之心ー矣、方寸之地虛矣幾聖人也」。

はうた 松にはうたのしらべては、風も調子や替へぬらん(大磯虎) 役者物眞似納屋はうた、二階座敷の三味線にひかれて立寄る客もあり(天網島)

〔端唄〕近世俗謠の名稱、破唄の義、當世やうの曲節で謠ふ唄の意である。松の葉(元祿十六年刊)卷之三に端唄を本調子、二上り、三下り、騷ぎ唄の四種に別けて擧げてある中には、長唄よりも長い端唄が少からずある。「なやはうた」はその條を見よ。

はうだたり 今年は爰が金神に當つた、それでこれはう崇り(大經師)

〔方崇〕方角崇り。方角が凶なる爲に崇を受けること。金神の方角に對して物事をなすは、金神向(方崇)とて不吉なりとし、その方角を避けて物事をなすを金神避といふ。西鶴撰・織留卷四、家主殿の鼻ばしらの條に、「此家鬼門角なる事を氣にかけ、殊更當年の金神にあたるといへば、此末世に何の方崇り、こちへまかせ給へと、無理に移らせしに」。巢林子のこの文は、頬桁を撲たれたので、頬崇を金神の方崇にいひかけた洒落である。

*はうぢやう 方丈に案内す、住僧立出で對面ある(會稽山) さればこの方丈の牀をしつらふ事餘の儀にあらず(最明寺殿)

〔方丈〕寺院の長老住持の居室をいふ。方丈はもと維摩居士の石室方一丈であつたのに基くといふ。祖庭事苑に、「今以ニ禪林正寢ー爲ニ方丈ー、蓋取ニ則毗耶離城維摩之室ー、以ニ一丈之室ー能容ニ三萬二千師子之座ー、有ニ不可思議之妙事ー故也」。

はうちやく 「ほうちやく」を見よ。

*はうづ 女を乘せたる船中を見るも大かた方圖がある(二枚繪) 上を見れば方圖がない(博多)

〔方圖〕萬圖引きから出た語。際限。きまり。

はうとうはんにや 「摩訶般若でも落人のすはらみつ云云」を見よ。

*はうびき 節の下では三味彈き、梯子の蔭では寶引(壽門松) はうびき骨牌をうつつら王子が八千歲(雪女)

〔寶引〕室町時代頃では索に金錢を括つてこれを引當てしめる遊戲であつた。江戸時代になつては、緒繩を幾筋も集めて一つに括り、その中の一筋に橙を貫き胴親となる者これを隱して握り、その橙を貫ける緒繩を引當てた者を勝となし賭物を得るのである。これは普通のやり方であるが、この法式を應用して思付きの色色のことをしたものである。本朝町人鑑・卷之三に、「さる大名方に御吉例とて正月三日の夜、大書院にて家久しき者ばかり召寄せられ寶引を仰付けられける。ふすま障子の內より五色の長緒を數百筋投出して、手每に一筋づつ引



〔天和長久四季あそび(天和頃刊)所載〕

との意。

は

はい　五臟の內にも肺は金(反魂香)
〔肺〕肺臟。腹中にある五種の內臟を五行に配して、肝は木、心は火、脾は土、肺は金、腎は水とする。

ばい　まだ市五郎三藏が船は見えいろ、心元なかばい(博多)　門出よかよか、よか便聞かうばい(博多)
思ひきめた意をいふ長崎國訛の感動詞である。この語現今も用ゐられ「間もなく日が暮れるから歸りますよ」といふことを、かの地方では「もう日もくろるけんきやあろうばい」といひ、「宜し」ときまつた意に「よかばい」といふ。

ばい　敵に赴く兵の枚を銜んで進むといひし古人の詞(相模入道千疋犬)
〔枚〕箸の形したもので、兩端に小さい紐が附いてゐる。軍士これを銜んで紐を頭後に繫ぎ、以て言語を發するを禁ずるのである。「金鍐皆鳴る」を見よ。

はいかい　栗毛たちまち泥附毛、はいかい鞍も鎭まらず(女殺)
〔沛艾〕馬の跳躍するをいふ。李尤に、「天馬沛艾、鬣尾布分」。源平盛衰記・卷二十八、宗盛補ニ大臣ニの條に、「馬沛艾して、春日大宮にて高くあがりて走廻りければ」。

***ばいくわ**　油の梅花剃刀も匂を惜む額際(雪女五枚羽子板)　色香揉込む梅花の油(女殺)　燈油二升梅花一合(女殺)　ふと室の津へ出かけ梅花のうつりをかぎそめて、(女楠)
〔梅花〕梅花油の略。蠟、胡麻油などを交へ、梅花(龍腦、麝香、丁子などの混合物)を加へて練り、女が頭髮に塗る香油の名である。梅花の配劑法は、女用訓蒙圖彙卷五、匂袋之方・梅花の條に委しう載せてある。

***はいしよ**　まづ菅丞相をこれへ召せよ、衣冠を剝ぎ直に配所へ送るべし(天神記)　罪なくして配所の月を見んといふ古人(壽門松)(兼好)
〔配所〕配流された地。謫所。「罪なくして配所云云」はその條を見よ。

***ばいた**　さてさて知れたるばいためら、おのれは正しく曾我兄弟が思ひもの(虎が磨)　懷姙なればとて夜な夜なかはる男の數、どれがどれやら何のその夫に覺えのあるものかと、言ひすて歸れば海野太郎、ヤイヤイばいため待ち居らう(百日曾我)　あのばいた髮の毛拔き(女夫池)
賣女。賣春婦。書言字考節用集・人倫門にも、確屬廡北元編・繼栞にも「賣女」に「バイタ」と振假名を附けてある。蓋し端人の轉訛であらう。

***はいだて**　上帶草摺はいだてにむんずむんずと取附いたり(兼好)　草摺つかんではいだて搔上げ(源義經)
〔脛楯〕膝脛に着ける具。和漢三才圖會・卷二十、兵器に、「脛楯所ㇾ著ニ膝脛ニ者、有ニ板脛楯踏込脛楯伊豫脛楯越中脛楯等、大抵鎧之華粧、而騎士著ㇾ之最佳、如ニ步卒ニ不ㇾ用、脛楯呼ニ一箇ニ曰ニ一掛ニ」。

はいで　「はひで」を見よ。

***はいどくさん**　此年まで敗毒散一服飮まぬこの親仁ゆすりはたべぬ(女腹切)　何某は暑や寒やの風の神、手療治の生薑酒。敗毒散に追出され(振袖始)
〔敗毒散〕漢方藥の名。風邪の藥である。もと支那で製した藥であるが、我國にてもその法を傳へてこれを製した。明劉宗厚編・玉機微義(我寬永五年の刊本もある)卷五、雜方の條に、「良方治疫毒痢敗毒散多加ニ人參・甘草・陳皮・姜蚕ニ煎服」。

***ばいにんどみん**　ええ淺ましや、賣人土民の子にてさへ七歲八歲より東西を辨へて、物の道理は知るぞかし(釋迦)　生きとし生ける者命惜まぬものやある、其一命を義によつて捨つるを弓取武士と名付け、惜むを賣人土民といふ(嫗山姥)
〔賣人土民〕商人野夫の輩は武士のやうには義理を辨へぬ者とされてゐたのである。

肺は金　「はい」を見よ。

はいぶき　「はひぶき」を見よ。

***はいまう**　どうぞ助けて助けてと騷げば夫も敗亡し(天網島)　なほも續けて打つ石は、提灯も打破れ由兵衞も敗亡し(今宮)　これこれ德兵衞殿、我女房に隱るるとは何事と、聲かけられて夫も敗亡し(女殺)
〔敗亡〕失敗。閉口。窮すること。

はいよせ　「はひよせ」を見よ。

***ばいろく**　使者貝勒王謹んで、韃靼國と大明國古より威を勵み(國性爺)
〔貝勒〕滿洲語 Beile であつて、淸朝では郡王の次の爵號。

枚を銜む　「ばい」を見よ。

***はいんど**　雜色はいんど 目にだまりませ靜まりませと制すれども賴光親子は見やり給はず(弘徽殿)
〔隼人〕敏捷く猛勇き人の義。大隅薩摩國人の稱である。この國人朝廷に召されて仕へ、永く留りて京の人となれども、子孫までなほ隼人と稱してその職に仕へた。雜色の輩で下官の者である。

はうおんかう　「ほうおんかう」を見よ。

***はうかぞう**　いかに面面、はうかぞうは何れの祖師禪法を御傳へ候ぞ(用文章)
〔放下僧〕羯鼓・ささら等の囃子を用ゐ、歌舞輕業手品などを業とするものをいふ。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷七に、「放下は字訓の意はなちくだす也、禪家に於て諸緣を打捨つるを放下するといふ其心也、たとへば鼻の上に立物をし、枕を重ねて自由につかひ、山の芋を鰌にするたぐひ、皆これ變化不思議の體をなすこと、萬事の當體を放下して物にとどこほりなき體にしなす故に放下といふ也、あや折金輪つかひ皆放下なり」。

はうきばう　四國は大山伯耆坊、飯綱の三郎、富士太郎(十二段)
〔伯耆坊〕伯耆國大山に棲む天狗の名。謠曲・鞍馬天狗に、「四州には白峯の相模坊、大山の伯耆坊、飯綱の三郞、富士太郎」とあるに據つたものであるが、四州は四國のことで白峯にかかる語であるのに、巢林子これを「四國は大山伯耆坊」というては誤と見るより外ない。

はうきやう　御法もかいびやくの、はうきやうの聲告げ渡る(釋迦)
〔方磬〕佛家に用ゐる樂器である。箋注倭名類聚抄・調度部・音樂具に、「方磬。律書樂圖云、

も名殘も心をも(加増曾我) 辻の番太が夢くらふ、ばく勞町をぞ歸りける(淀鯉) 夢をさまさんばくらうの、ここも稻荷の神社(曾根崎)

〔貘〕もと支那で想像の獸名。熊に似て犀目・象鼻・牛尾・虎脚で、惡夢を食ふといふ。白居易の貘屏賛井序に、「貘者象鼻犀目牛尾虎足、生二南方山谷中一云云」。後漢書・禮儀志に、「莫奇食レ夢」、とある莫奇は貘だとの說もある。加增曾我のここの文は、幾何に貘をいひかけ、淀鯉出世瀧德のこの文は、夢食ふ貘に博勞町をいひかけ、曾根崎心中のここの文は、夢を覺さん貘に博勞をいひかけ、博勞町の稻荷の神社にいひつづけたのである。博勞町の稻荷社は古來名高い稻荷社で、日本國花分明集・卷七、攝津名所の部に、「稻荷社。博勞町に有祭神三社、第一平野大明神、第二牛頭天王、第三稻荷大明神」と見えてゐる。

はくい 伯夷が如き賢人も時に遇はねば力なく(大覺)

〔伯夷〕世を遁れ隱れてゐた殷の紂王の世の賢士である。殷滅んで周の世となつたので、周の粟を食ふを恥ぢ首陽山に餓死した。論語・微子篇に、「子曰、不レ降二其志一、不レ辱二其身一、伯夷叔齊與」と評してある。

はくう 「十萬里の波立つて伯禹の跡を殘し」を見よ。

はくがう 「びやくがう」を見よ。

***はくじん** 曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に、天滿の深い大盡が外の客を追ひ退け(天網島)

〔白人〕略して「はく」(その條を見よ)とも云ひ、私娼の一種である。白人は多くは裏借屋に住居してゐた、その生立に就ては、雜喉賣や糴糶屋や日雇取の娘や、或は下女のいたづらから生れた父無し娘の十歲許になつて、容貌の美しい者を親知らず子知らずの契約で錢を出して貰受け・追ひ使や炊事などの荒仕事をさせないで、賃曳の綿絲を引かせなどし、髮を島田髷に結はせ絹の綴れを着せ、兎角顏容の美しうなるやうに磨き立て、十四五歲になれば隣家の噂を賴んで床入の諸分を言聞かせ賃借の絹布を着せて貸座敷に出して客を取らせたのである。彼等は一夜に一座勤めただけでは、損料着の支拂や周旋屋其他のものに差引かれて收得なしになる。二座勤めて少し收得となり、三座勤めて大分の儲けとなるといふ。げに此處彼處に啼いて明かす短夜の杜鵑、聞くも哀れな渡世である。これらの詳しいことは五箇の津餘情男(元祿十五年刊)卷之一、都は色所の條に見えてゐる。稀には浮氣の小娘が自ら好んで遂に白人の苦界に沈む者もあつた。


〔風流曲三味線所載〕

白人の名義に就ては五箇の津餘情男・卷之一、都は名所の條に、「いつの頃より素人と名づけて、傾城にもあらず茶屋女にもあらぬ遊女の出來ぬ。白人といふをすぐに用ひて白人と云ふ」と見え、傾城禁短氣に、「諸方の遊び宿へ還はし、物ごとあどなく初心に作りなしぬ、これ白人一種開闢の時節の風儀なりしが、近年は初心風をすてて、あたまから洒落たるしこなし、悲しいかなや此道末世になりて、白人といふ一種の名に背き黑人粹の風俗となれり」、と見えてゐるやうに、もともと色を賣る女なれども、おぼこに仕立てたことから、しろと卽ち素人を白人と書いて、之を「はくじん」と音讀した名稱であるが、公娼の稱にも用ゐるやうになり、好色敗毒散に「嶋の內にては女郎を總稱して白人といひ、又茶立女ともいへり」と見えてゐる。心中天網島のここの文も、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ公娼を白人というてゐる。白人の勤銀に就いては、好色大鑑(元祿五年刊)第二、白人之由來の條に、「情代金壹步銀三兩乃至拾匁、しゆらいは外也」、と見えてゐる。私娼としての白人は元祿寶永頃京阪に多くゐたのである。(「そうか」の條の畫をも見よ)。

はくたわう 藤九郎盛長はくたわうの怒をなせば(烏帽子折) 躍上り飛上り天も響け地も響け、どうどうどうと蹈んだる足、勢ははくたわう・韋駄天・四天王(天智天皇) きまん國の鬼王、はらな國のはくだわう(鎌田) はくだ王の荒れたる勢(嵯峨天皇)

〔縛多王〕「はくだわう」(白駝王)ともいひ、印度波羅奈國の王で、鬼を搦めた剛勇の神である。源平盛衰記・卷二十七、信濃橫田川原軍の條に、「蒐けては引き引きては蒐け、寄せては返し返しては寄せ、入組み入替へ戰ひける有樣は、胡人が虎狩・縛多王が鬼狩とぞ覺えたる」。夜討曾我(舞の本)に、「かたきの屋形は八千八ながれなり、馬はついぢ人は亂杭、きまん國のきわう、羅せんこくのらわう、鬼を搦めしはくたわう、綱・金時・養由・田村俊仁・餘吾將軍二相をさとる人なり」。安倍宗任松浦答に、「波羅門・白駝・四天王・韋駄天・斑足王・軍多利夜叉・提婆達多」。禁祕抄・上卷に、「鬼間。二間格子也、南開常不レ上、有二簀簾一卷レ之、其內南北行立二御厨子一、置二御膳具一、南壁白澤王切レ鬼繪」、とある白澤王はここにいふ縛多王のことであらう。(白澤を虛堂錄には獅子の別名とし、事物紺珠卷二十八には貘の一名としてある)。

***はくちやう** 昔の烏帽子白丁より嗅が手織の衣手に(兼好)

〔白丁〕神事神葬などの時に物を舁ぎ行く人夫の被る服、または白丁を被る者。

ばくてい 一枚ひねつて額にあて彼のばくていに飛入れば(大織冠)

〔博庭〕賭博の場。ここの文は謠曲・海人に、「一つの利劍を拔きもつてかの海底に飛入れば」とあるをもぢつたのである。「女房故に捨てん命云云」を見よ。

***ばくのなは** 不動明王の縛の繩、手綱に變じ給へやと(曾我山) 戀と思ひに縛られて、情のきづな・縛の繩、不動坂にも差掛かり(萬年草)

〔縛繩〕不動明王の左手に持ち給へる金縛の繩。

はくばのせちゑ 「あをうまのせちゑ」を見よ。

はぐもんとう せんざまちまちばくもんとう、李中にそこを追出し藥(薩摩歌)


〔麥門冬〕

〔麥門冬〕山野の陰地に自生し、小形花を開き淡紫色の花被を有し、穗狀の總狀花序に排列し、果實は黑色である。この草の地下部は藥用となる。薩摩歌のここの文は、麥門冬に閑爭をいひかけたのである。

***ばくや** 莫耶の劍黃金を磨き・唐絹笠さつと差かくれば(國性爺) 土晉の武帝天下を治めて、吳國の方に紫の雲氣立つを怪しみしに、

取り此緒の末に付置かれし物を下させけら、小性引出す繩に桑の木の鐘木枝折りし、家老職の人引出す繩に銀錢一貫文、或は唐織の巻物を引出すもあり、又は御物こしらへの脇指、片端には巻臼のふろきに取當るもあり、提重箱蒔刀印籠巾着日傘硯子の夜着布團より杓子を取るもあり云云」と見えてゐる。

ばうふう　犬も歩けば防風の、刺身のけんにもならない仕合せと（賀古教信）

〔防風〕繖形科の草本、支那の原産で、我が國各地に栽培され、莖は直立して多枝に分れ、葉は有柄で三羽狀裂をなし、各裂片は狭長で先端尖り、葉質硬くて毛なく、刺身のけんなどにして食用に供す。夏秋の候白色五瓣の小花を開く。巣林子のこの文は、諺に「犬も歩けば棒にあたる」を、防風にいひかけたのである。

***はうべん**　そのよな腹の立つ時は念佛を業となや、兎角如來の御方便、修羅燃すそなたを呼びに來るも彌陀如來（脊庚申）

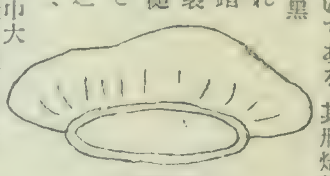
〔方便〕下根の衆生を導く爲に、佛が權智を以て悟り易き樣に工夫して敎へ導くをいふ。淨名疏に、「用二諸方一隨レ機利レ物、故云二方便一」。

***はうめん**　糺の森より放免雜色具したる勇士つつと出で（弘徽殿）

〔放免〕檢非違使廳の下部をいふ。伊呂波字類抄、波部・人倫に、「放免、ハウメン、廷尉下部也」。放免の稱は罪人の放免された者をこの役に使つたからであるといふ。

***はうろくづきん**　炮烙頭巾の醫者殿は藥師如來の引合せ（女腹切）　わか紫のはうろく頭巾（夕霧）

〔焙烙頭巾〕「はうらくづきん」ともいひ、炮烙頭巾、土釜頭巾などとも書いてある。其形焙烙に似た頭巾なればいふ。大黒頭巾。丸頭巾。俗つれづれに「たしかなる親の跡を踏まへ、俵の類裁に積て金袋をかたげさせ、いふ事に槌のきくも、土釜頭巾を被て意見だらだらいはれし親仁の御影云云」。嬉遊笑覧に、「古き繪草子を見るに醫頭巾大かた丸頭巾と見ゆ（もと僧徒の頭巾なれど、とも流行自ら如レ此）、これをほうらく頭巾ともいふ」。



〔炮焙頭巾〕

はうろくびや　日本秘術のはうろくびや打つて放つ（國性爺）

〔炮烙火矢〕銅丸の中に火藥を塡充し、布で包んで漆を塗り、火を點じて敵中に投じ爆發さしたものであるといふ。書言字考節用集・器財門に、「炮碌火矢、又作二炮烙一」。

***はか**　掛乞ひに行く門出にはか行きの立ち酒、この世に殘らぬ〱と（女殺）

〔果〕進捗。「おもひばか」（その條を見よ）の「ばか」もこの語である。この語古くは萬葉集巻十、秋雜歌部にも、「秋の田の吾が刈婆可の過ぎぬれば」などあつて、稲などを植ゑ又は刈るとき、其地面に設けた區劃の義より轉じて功程の意にいふ。女殺油地獄のこの文は、掛錢の取立てのはかどることに墓行きをきかせたのである。

***はかいむざん**　（國性爺）

〔破戒無慚〕佛教の戒律を破り罪業を作つて自ら愧ぢることなきをいふ。平家物語・小松内府重盛諫言の條に「内には破戒無慙の罪を招くのみならず」。

馬鹿信心　神力に咲く花なりとも睨み散して、世の人の馬鹿信心を散ぜん（大職冠）

「馬鹿」は梵語・慕何（Baka）で痴の義。飜譯名義集に、「慕何。此云レ痴」。「馬鹿信心」は馬鹿げた信仰心の意。

***はかせ**　人の心世の有樣、蟲の鳴く音に至るまで、其折折をはかせとして隱遁の情をあらはせば（兼好）

〔博士〕もと官名である。往昔は大學寮に文章博士・明經博士・明法博士・算道博士あり、また音博士あり、陰陽寮に陰陽博士・暦博士・天文博士漏刻博士などがあつて、皆その道道の教官であつた。後には官務なくても碩學宿儒を博士と稱した。（序云、現今の學位の博士は「はくし」といふのである）。兼好法師物見車のこの文の「博士」は手本といふ程の意である。

はかたわう　（烏帽子折）「はくたわう」を見よ。

***はかない**　いとしいはおさん樣どこにどうしてござるやら、常がはかない正直な心知つた私なれば（大經師）

「許無」の義。定なく常なきをいふ。「はかない正直な」は、淡泊で氣の弱く正直なの意。和訓栞に、「はかなし。何の計略もあらぬ意なるべし、俚言のあざとき也、……、わづかにかりそめの意にいふ、……、物語類にはかなくなるといふは死ぬる事也」。

***はがひじめ**　矢來の内に土壇を構へ、高手を許しはがひじめ、北向に引据うるは（歌念佛）　四つ五つはりこかし、羽交締に引縛り（會稽山）

〔羽交締〕背後から兩手の腋下を通し胸元で强く締付けること。

***馬肝石**　南海の火浣布、獅子國の馬肝石（國性爺）

洞冥記に、「元鼎五年郅支國貢二馬肝石一、舂碎以和二九轉之丹一服レ之、彌年不二饑渴一、以レ之拂レ髮白皆黑」。

はきき　世渡る業の習とて、色を磨きし水ぐしの、はききといひし俤も、夏冬なしの上張や（加增曾我）

〔羽利〕鷹飼の語より出たもの。羽振の利くこと。權勢ある人をいふ。ここの文は水櫛の齒を羽利にいひかけたのである。

***萩の戸**　夜每に出でて萩の戸の萩を食ひしも（反魂香）

清涼殿夜の御殿の北にある間の名。庭には萩はもとより色色の秋草を栽ゑられたこと禁祕抄に見えてゐる。「はね馬の障子」をも見よ。

はぎやき　聞くにもさが袖しぼる露の萩燒大皿出し（生玉）

〔萩燒〕長門の萩より製出する陶磁器をいふ。慶長三年朝鮮人の李敬といふ陶工萩に來り、歸化して高麗左衞門といひ、茶碗その他の小器を燒いたのに始まる。雍州府志・土產門下・服器部に、「磁器。傳云、今長門國萩之所レ燒是稱二萩燒一、是亦毛利輝元自二高麗一招下造二陶器一之人上、是號二高麗左衞門一、今造レ之者其末流也」。

***はく**　白と眺めて白牡丹、しやんとしてからいやみなく、しかも色香の深見草（生玉）　それにはあらぬ白のふう、風呂の煙のたちゐまで（卯月紅葉）　但は白の白茶か、風呂で焚いた煎じ茶か（卯月潤色）

〔白〕「白人」の略。「はくじん」を見よ。白人を牡丹になぞらへた例は虛實柳巷・下卷にも、「白人は牡丹の花ならん、はでにしてしやんとして、とりわき花の富貴なるものにして云云」と見えてゐる。

***ばく**　夢を食ふ獸にいくばくの恨

はしぜせり 「はし」を見よ。

***はしたなし** 色好まぬ者は玉の盃の底なき心地と書きながら、このはしたなき振舞は筆に書くは僞りごと(兼好) 若しも螢に光なくば曲事ならんと、はしたなくののしりて皆皆奥へ入り給へば(小栗判官) 望なら捻つて遣ろはしたない女めと(持統天皇)

愛想ない。すげない。無情である。「はした」は半端で、物のそろはぬ義。竹取物語に、「みこはたつもはした、ゐるもはしたにて」、とありて「きまりわるい」の意である。「はしたなし」の「なし」は「あらけなし」などいふ「なし」と同じもので、甚しの意の語助である。「はしたなし」を「すげない」の意にいふは轉じたのである。魂膽色遊懐男、仙女は假寢の雲を枕の條に、「問うて何さつしやると、はしたなくいひはなせば」。

はしぢよう 「はし」を見よ。

はじのにほひ 清盛は紺の直垂、はじの匂の鎧に蝶の裾金物打つて(鎌田)

〔櫨匂〕鎧の縅（革又は絲を以て札を貫き綴ぢたもの）の上部を黃櫨色にし、一段毎に次第に其色を薄くし、終に白くしたもの。黃櫨色とは、黃櫨のもみぢしたやうな色、卽ち紅に黃ばみた色。櫨は和名抄に「波逝之」と見えてゐる。「はじ」は「はにし」の約まつた語で、今俗に「はぜ」といふは「はじ」の轉訛である。匂縅とは、何色に限らず、袖・草摺の上方色濃く、次に中色、次に白と、次第に薄くしたのをいふ。蓋し薫物の香のとりとめなく次第にうすれ行く樣の義の語である。

はしばみ 櫟・欅・榛(嵯峨天皇)

〔榛〕山野に自生する落葉大本で、高さ十尺餘に達し、種子は食用となる。「持ち木の實は何何」を見よ。


〔みばしは〕

***はしひめ** 紅梅・竹川・はしひめにてならひ(淀鯉)

〔橋姫〕源氏物語の卷名で、宇治十帖の一。(別に橋姫社をいへる橋姫もある。そは地名部を見よ)。

ばしやく 在所の衆が養ひてやうやう馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする(丹波與作) 當代は道中筋も吟味強く、馬借問屋へことわられ、惡名が立てばとんとんとすたつて、出入の門も塞がれば(丹波與作)

〔馬借〕宿驛では馬方に馬を貸して其貸料を取つてゐた家があつた。これを馬借といつたのである。易林本・節用集、「馬借」。

ばしやれ 我我がなんぼ沙汰を致さずとも、あの傾城のばしやれ者それをいはずにゐませうか(夕霧) 町方に居る分にいひなした私が身が、ばしやれたなりで逢はれもせず(氷朔日)

「ばしやら」ともいひ、「ばさら」(その條を見よ)の訛。伊達風流。華奢にしてみだりがはしい風情なるをいふ。「ばしやれたなりで」とある「ばしやれ」は動詞に轉成した語である。嬉遊笑覧に、「婆娑の義にて狼藉なるをいふにや。……去來抄に誹諧付合の事をいふに、白粉をぬれども下地黑い顏、役者もやうの袖の葉もの。この前句、今やうばしやらの女とみゆといへり」。

***はじゆん** いかなる天魔波旬なりともたまりつべうはなかりけり(碁盤太平記) 恐くはこの時致天魔波旬に出逢ふとも(會稽山)

〔波旬〕梵語 Papiyas. 魔王の名である。常に惡意を懷き惡法を成就し、人の壽命を斷つといふ。釋尊が菩提樹下で修道された時に妨害を加へた惡魔である。

柱一本の主 朝がけに擒つて洛中を引渡し、何でも柱一本の主にしてくれんもの(雪女)

磔刑に處することをいうたのである。

***はしり** お竹は兄弟の子をはしりの下へ隱し(一心二河白道) こりや半兵衞、はしりの出刄庖丁よう研がして置いたぞや(宵庚申) はしりの竹の子片荷には、獨活・生姜・青山椒・白瓜二つ(宵庚申) 走り書謠の本は近衞流(天網島) 隱れんぼ・走りこぎりや、ころびうつつの花すり衣(用明天皇) 外の駈落走者と違うて、明日尋ねうとは言はれぬ・死にに出た心中なれば(重井筒)

〔走〕「走りの下」「走りの出刄庖丁」の「はしり」は、臺所のたがしをいひ、物を洗つた水を流し走らすよりの稱。

「はしりの竹の子」の「はしり」は、魚鳥野菜などの初物(旬に先立つて出たもの)をいふ。嬉遊笑覽卷十上、飮食部に、「初物を走りといふ、……年の始に走り物（鹿・兎・鳥などの走る物）を用ひし習ひ故、後には何にまれ新しく出來る物を走りといふこととなれり」。

「走り書」とは、筆を走らして草體に書くこと。「走り書き謠の本云云」を見よ。

「走りこぎり」とは、「はしりごとくらひ」(走事競)を略して「はしりごくらひ」といひ、「らひ」約まつて「はしりごくり」といふを「はしりこぎり」と轉じたのである。競走。和訓栞に、「下學集に梵網經の行城をはしりごくらひとよめり、云々」。

「走者」とは出奔者をいふ。

ばじりこん てれめんていな・ばじりこん、さんとらにいによう・萬能膏(大職冠)

羅甸語 Ungentum basilicum. 軟膏の名で、オリーブ油・黃蠟等で造つた吸出膏藥。

***はしる** 舟では割れたといふは忌忌しい、頭の顱骨がはしつた(博多)

〔走〕割れる。罅が入る。中國地方では、桶などに罅の入るを「はしれる」といふ。舟中では水といふを忌んで閼伽といひ、罅の入るを忌んで走るなどいふ。

「走る兎」「内を走る」などはその條に就いて見よ。

***はすぎり** 首討つは常のこと、胴切か立割かはすぎりかとぞ立騷ぐ(冷泉節) 姉御の頰は何に似た、盥口にはすきり鼻、猿眼に鉢額(振袖始)

「はす」は斜をいふ。「はすぎり」は胴體を斜に切下げること。斜斷。「はすきり鼻」は鼻の反つてゐる、卽ち獅子鼻をいふ。和訓栞に、「はすにそぐなどいふは斜をいへり、蓮のまき葉よりいふにや、昂鼻をはすきり鼻などもいへり、又嫌鼻とも見ゆ」。「はすぎり」は「はすはにきる」ともいふ。巣林子作・相模入道千疋犬に、「標附の金物よりはすはに掛けてぞ切折ける」と見えてゐる。

雷煥といふ者天文を考へ、土中を鑿つて干將莫耶の二劍を得たり（嫗山姥） 莫耶を鈍（にぶ）しとし鉛刀を鋭しといひ、周の鼎を棄てて瓢簞を寶とするといひしは（雪女）

〔莫耶〕支那上古の名劍の名である。吳越春秋に、吳の人干將五山の精六金の英を采り、天地を候ひ陰陽を伺ひ百神臨視す、而して金鐵の精未だ流れず、干將その妻莫耶と髮及び爪を剪つて之を鑪中に投ず、金鐵乃ち濡（やは）らぎ遂に二劍を成せり、陽を干將と云ひ、陰を莫耶といふと見えてゐる。荀子・君子篇に、「干將・莫耶、古之良劍也」。嫗山姥に雷煥が干將莫耶の二劍を得たといへるは、龍泉・太阿の二劍と取違へた誤である。「ちやうくわ」の條を見よ。雪女五枚羽子板のここの文は、賢人君子は斥けられて佞人小人の重んぜられるに喩へたもので、古文眞寶・後集、賈誼の弔二屈原一賦に、「莫邪爲レ鈍兮、鉛刀爲レ銛、于嗟默默、生之亡レ故兮、斡二棄周鼎一、寶二康瓠一兮」とあるに據つたのである。

ばくらう　「ばく」を見よ。

はくらく　天性名馬の相ありと伯樂しきつて申すに付き（十二段）　さて伯樂には桐原の權平内承つて、一一に由緒を語つて牽かせたり（大磯虎）

〔伯樂〕馬を相する人。韓退之の雜說に、「世有二伯樂一、然後有二千里馬一」とありて註に、「伯樂姓孫、名陽、善相レ馬、天上有二一星一名二伯樂一、在二天廄星之旁一、人見二孫陽識レ馬、因號レ之曰二伯樂一」。

***はぐん**　さあ破軍が直つた仕濟したと、そぞろに笑うて勇みをなす（堀川波鼓）　はぐんは辰巳に向うたり、東の門より南に附いて乘れや（碁盤太平記）

〔破軍〕「破軍星」の略。北斗（その條を見よ）の第七星にして光芒劍狀をなす。和訓栞、はぐんせいの條に、「毎月運轉して息まず、十二時に隨ひ其處を易ふる也」。陰陽家では破軍星の劍尖に當る方向を萬事に利なしとて忌む。「破軍が直つた」とは、不吉であつたものが吉方になりかはつた意。

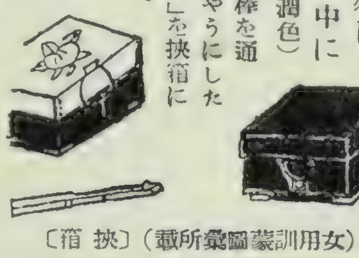
箱（はこ）ぐち　「ぐち」を見よ。

はこやのやま　丁固が夢の常盤木は藐姑射の山に枝を鳴さず（文武五人男）　はこやの山の雪の御賀には甚だ萬歳のしらべを合す（源義經）

〔藐姑射之山〕莊子・逍遙遊に、「藐姑射之山有二神人一居焉、肌膚若二氷雪一、淖約若二處子一」とありて仙人の棲める山の名である。よつて以てまた上皇御所にあてていふ。

***はさみばこ**　未來に情・現世に慈悲、中に憂身を挾箱（卯月潤色）

〔挾箱〕衣服を入れ、棒を通して僕に擔はせ行くやうにした箱。ここの文は「挾み」を挾箱にいひかけたのである。


〔挾箱〕（女用訓蒙圖彙所藏）

***はざむらひ**　足立づれの葉侍が御姫方に口取らせて乘るならば、罰が當つて落馬致すは定のもの（蛙合戰）

〔端侍〕葉侍とも書く。端武者ともいひ、端はハシタの義。卑しき身分の侍。雜兵。

ばさら　思ひ亂るるばさら髮（關八州）　その頃の公家大臣何れもばさらを好み、民のつひえも顧みず（大掛物）

〔婆娑羅〕「婆娑」は文選の註に「婆娑、放逸貌」と見えてゐる、「羅」は接尾語「ら」の音寫か。しどけなきこと、亂れることをいひ、また伊達（だて）・華奢の意にいふ。和訓栞に、「太平記に、ばさら風又そぞろなるばさらにふけり、又扇うち羽のばさら繪など見えたり」。（この語を跋折羅とする說あれどいかが、跋折羅は梵語Vajra. 金剛と譯し、金中の至剛のものでは適合しない）。「ばさら髮」とは亂れ髮をいひ、「ばさらを好み」とは伊達華奢を好むをいふ。「ばしやれ」をも見よ。

***はし**　太夫ばかりが五十人、天職が七十餘人、圍（かこひ）の端のと二百餘人に餘つて、禿（かぶろ）どもさへ百人餘（酒呑童子）　亭主うすうす見知（みしり）があらう、廓の縱横十文字、昨日まで端ぜせりした我我、俄分限は見らるる通り（博多）

〔端〕「端女郎」の略。太夫・天神・圍（かこひ）よりも下位の遊女をいひ、店頭（みせさき）に出張つて客を招くによつて見世女郎ともいふ。汐（しほ）、影（かけ）、月（ぐわち）などいふ遊女は皆端女郎である。風流御前義經記（元祿十三年刊）に、「端女郎は鹿戀（かこひ）より下、みせ女郎をいふなり」。傾城太太神樂（寶永二年刊）巻四、傾國土産に、「爰の難波にては端の女郎も汐・影・月などやさしくいふに云云」。「しほ」「かげ」「ぐわち」「みせぢやう」の各條をも見よ。「端ぜせり」とは端女郎と戯れること、即ち端女郎を揚げて遊興すること。「ぜせり」は「せせる」を見よ。

（人倫蒙圖彙所藏）

〔端女郎〕

***ばし**　こなたは誰でばしござるぞ（冥途飛脚）　煩うてばし下さんすなと（薩摩歌）　人ばし恨みましますな（小栗判官）　御尋ねありたきとは何事にてばし御座候（反魂香）

謠曲・紅葉狩に「夢ばしさまし給ふなよ」、とあるやうに謠曲・狂言など中世のものに多く見える助詞で、意を強める語勢がある。

***はしかい**　御年は十六七までは往（い）くまい、姫君樣には似合ひ頃、十五夜我我にはちとはしかからうといひければ（孕常盤）

「はしこい」の轉。すばやい（敏捷）の義。和訓栞に、「はしかし。速き意にいふ俗語也、よて手疾き事をてはしかきなどいふめり」。孕常盤のここの文は、心いらだつ意、即ち年增（としま）女では挑んでも餘り若い男は心うひうひしうて、こちの心をいらだたす事であらうとの意。

はしかくし　御乳母子海上太郎兼盛はしかくしの遣戸蹴放し躍出で（女夫池）

〔階隱〕階前に二本の柱を立てて屋根を設け、乘輿を寄せる爲に造れるもの。

***はじかみ**　詞の義理にはじかみや、生（うまれ）智者は惑はず勇者は懼れぬ付（つき）（宵庚申）

生薑をいふ。このもの辛味あるによつて齒壓（はしかみ）の義の名となつたのである。ここの文は「恥ぢ」に「はじかみ」をいひかけたのである。

雲の盡きる果の意。

はだれ　はだれ雪間をあさるてふ小鳥狩して遊ばんと(根元曾我)
「はだら」ともいひ、「まだら」(斑)の意。和訓栞に、「はたれ。續後撰集に庭もはたらに雪降りにけりと見ゆ。舊說にまたらと通ずといへり」。

＊はち　出家せんとは上分別、身が門へもはちに出よ、手の内も餘所よりは大摑にさせんずと(加增曾我)
〔鉢〕托鉢の略。「たくはつ」を見よ。

はちいつ　院の御庭に八佾の、たともかくや初春の(天鼓)
〔八佾〕天子の舞である。佾は舞樂の行列である。一佾毎に八人なれば、八佾は六十四人並び立つのである。論語・八佾篇に、「孔子謂二季氏一、八佾舞二於庭一、是可レ忍也、孰不レ可レ忍也」。

＊はちかん　此世から八寒の苦患は我身一つにて(雪女)　私が親の未進米この六日の吉書に立てればこの水牢、この世から八寒の地獄へ墮すわたしが心、苦にかけうではなけれども案じても下んせず(丹波與作)
〔八寒〕「八寒地獄」の略、(1)頞部陀、(2)尼刺部陀、(3)頞哳陀、(4)阿婆婆、(5)虎虎婆、(6)嗢鉢羅、(7)鉢特摩、(8)摩訶鉢特摩、以上八種の寒氣激甚な地獄をいふ。婆沙論に、「南贍部洲下、過二五百由旬一乃有二其獄一、然此地獄有レ大有レ小、大則八寒・八熱云云」。

＊はちぎやく　八逆・五逆・十惡人(國性爺)　佛身より血を出す八逆罪ぞ恐しき(釋迦)
〔八逆〕謀反、謀大逆、謀叛、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義。釋迦如來誕生會のここの文の八逆罪は五逆罪と云うた方がよいやうである。「ごぎやく」を見よ。

はちく　「はつく」を見よ。

はちくどくち　「はつくどくち」を見よ。

はちけう　そも華嚴寂滅道に始り法華涅槃に書き終る、其中間五時八教(百日曾我)
〔八教〕華嚴時から法華般若時の五時に於て說いた化法の四教と化儀の四教とをいひ、台家の立てたものである。

はちげん　この老僧が手足をもいで取らば取れ、渡すことはかなはぬと、はちげん放つて宜へば(碁盤太平記)　義貞にてなき時は獄門の木の下にて腹切つてうすべきと、はちげん放つて申せしはかやうのため(女楠)　甲が舍利になるとても親王を助け奉ると、はち言放つていひければ(持統天皇)
「はつげん」(發言)の轉訛。「はちげん放つ」は言ひ放つを强めていへる言葉である。雁金文七(宇治加賀掾正本)に、「主人へ言譯すべいとて、はちげん放つてわめきける」。

はちごうがしや　もしそれ八恒河沙の水神・龍神・惡僧邪法に惱まされ(嵯峨天皇)
〔八恒河沙〕無數な意にいふ。「ごうがしや」を見よ。大般涅槃經・卷六、大乘經を信解する人の宿福の深廣を明かす文中に、「若有二衆生一、於二八恒河沙等佛所一發二菩提心一、然後乃能於二惡世中一不レ謗二是法一云云」。

はちこくり　三界を家とよ、走り走り巡る鉢こくり(關八州)
鉢叩坊主をいふ。「はちたたき」を見よ。「こくり」は叩きこくりであつて、「頭をはりこくりちらし」を「頭をはりこくり」といふ「こくり」と同じ語であらう。

はちざ　玉座に續いて大理卿大江の匡房・三公九卿八座七辨席を連れ(隅田川)
〔八座〕參議八人を云ふ。職原抄に、「聖武天皇天平三年置二參議一、大同御宇罷二參議一置二五畿七道觀察使一、合八人、弘仁御宇罷二觀察使一皆爲二參議一、……、八人自レ此而始、依レ之有二八座之號一」。

八十八夜　八十八夜は及びなき、年は十九と二十五の、名殘の霜と見上ぐれば(大經師)
立春後八十八日目の日で、陽曆五月一二日頃に當る。巢林子のここの文は曆上の語を以て飾り、八十八夜に八十八歲(米壽)をきかせ、米壽には及びなき年若き十九と二十五のといひ、又春霜の降るは八十八夜の節を限りとするので、「名殘の霜と見上ぐれば」といひつづけたのである。

はちじふまつしや　世界國土を守らせ給ふ末社は八十末社なり(烏帽子折)　大酒食悅おかげを蒙る八十末社、さすがの廓駕籠きされて(淀鯉)
〔八十末社〕松の葉(元祿十六年刊)卷三・さいもんの唄に、「みもすそ川のかげ清く、外宮は四十末社・內宮が八十末社」と見えてゐる。伊勢參宮名所圖會に、「內宮に八十末社といふこと舊記になきこと、何比より云傳へしにや」、とありて末社六十九の社名を擧げてある。淀鯉出世瀧德のこの文は、「八十末社」を數多の幇間の意に用ひたのである。

はちじもんじゆ　六字かりん・八字文殊(嵯峨天皇)
〔八字文殊〕文殊菩薩が衆生を利する爲に、彌身を唵阿尾囉吽欠者洛の八字呪の靈體に變ぜられた。よつてこの八字呪を念じて法を修するを八字文殊法といひ、息災・惡夢などにこの法を修す。

＊はちだいぢごく　(賀古敎信)
〔八大地獄〕八寒地獄または八熱地獄をいふ。「八寒地獄」はその條を見よ。「八熱地獄」は(1)等活、(2)黑繩、(3)衆合、(4)叫喚、(5)大叫喚、(6)焦熱、(7)大焦熱、(8)無間、以上の八地獄をいふ。

はちだいどうじ　八大童子は八識の道を導き(井筒)
〔八大童子〕(1)慧光童子(左手持二蓮月一)、(2)慧喜童子(左手持二寶珠一、右把二三鈷一)、(3)阿耨達童子(左手持レ蓮、右手把二一古杵一)、(4)指德童子(左持二輪寶一、右三古杵一)、(5)烏倶婆誐童子(右手持二杵一、三鈷一)、(6)淸淨比丘(左捧二佛經一、右持二三鈷一)、(7)矜羯羅童子(合定惠、二手掌)、(8)制多伽童子(左手三鈷、右把レ棒)。

＊八大龍神(はちだいりうじん)　(國性爺)
八大龍王ともいふ、卽ち、(1)難陀龍王、(2)跋難陀龍王、(3)沙伽羅龍王、(4)和修吉龍王、(5)德叉迦龍王、(6)阿那婆達多龍王、(7)摩那斯龍王、(8)優鉢羅龍王。

＊はちたたき　鉢叩の仕上げを見いとへらず口(關八州)　背は瓢簞曉はうちとるあたまの鉢叩(關八州)
〔鉢叩〕鷹の羽打ちがへた紋附けた十德を着て茶筅を賣り、瓢を叩いて無常迅速の唱歌を哀れな音調で唄つた勸進物貰ひの類である。蓋し空也上人が頭髮を蓄へ、拍子づけて唄ひ、踊躍しながら念佛を諸國に弘通した遺風を傳へたもので、其昔は鉢を叩いたのであつたが、後に瓢に代へたものだと云ふ。和漢三才

＊はすは　はではすはなる身にそまり、うはの空なる世にならひ(氷朔日)　新御靈に拜み納まるさしも草、草のはすはな世にまじり。三十三に御身をかへ、色で導き情で教へ(曾根崎)　柏屋嵯峨ははすはにござる(生玉)

〔蓮葉〕浮薄なことを蓮の浮葉の風や水にひらつくに譬へた語であらう。なまめいた姿をし行儀わるく、男に戯れて面の皮厚きをいふ。今樣二十四孝(寶永六年刊)卷二、寒のうちの眞桑瓜の條に、「傾城はおもてにつよくはすはなるをもととし、內證はやさしくおろかにして賢たてせぬを上上の出來ものと此道の本阿彌の申されき」。「はすは者」は客に淫を賣る私娼の一種である。好色一代女(貞享三年刊)卷五、濡問屋硯の條に、「萬寶帳難波の浦は日本第一の大湊にして諸國の商人ここに集りぬ、上問屋下問屋數を知らず、客馳走の爲に蓮葉女といふものを拵へ置きぬ、是は飯炊女の見好げなるが、下に薄綿の小袖・上に紺染の無紋に、黑き大幅帶・赤前垂、吹貫の京笄・伽羅の油に堅めて細緒の雪踏、延の鼻紙を見せかけ、其身持それとは隱れなく、隨分面の皮厚うして人中を恐れず尻据ゑてのちよこちよこ歩き、びらしやらするが故に此名をつけぬ、物の宜しからぬを蓮葉ものといふ心なり」。世間娘氣質(享保元年刊)卷五、傍輩の惡性うつりにけりな徒娘の條に、「主なしの思出に毎日のうかれありき、身をぞんざいに持なし、女ながら針持つすべさへ知らず、氣をつめておちめたる奉公はとてもせぬ心なれば、上問屋下問屋へ蓮葉女といふいたづら奉公勤め、諸國の商人の夜の慰みものになつて、果は新地堀江の二瀨に流れわたり」。諺言字考節用集、人倫門に、「蓮葉女。今世遊女之屬有此稱」。

芭蕉布　私やひとり寢の芭蕉布、御恩きびらの目も詰る(薩摩歌)

芭蕉の纖維で織つた布で、沖繩地方から産出す。

ばせん　道理が立たれば暇の狀は受取らぬと馬氈に投付け(會稽山)

〔馬氈〕虎・豹・熊などの毛皮で造つた鞍おほひ。

はそく　道中ようて手がようて信心者で譯知りで、戀一通りのはそくをば拔けて行く程賢うて(本領曾我)

〔把束〕「つがね」の義。束縛。ほだし。本領曾我・新町太夫づくしの條に、「戀のつがねぞくりためて」、とある「つがね」は即ち把束と同じである。(山本九兵衛版・八行本のここの文に、「わそく」とあれども「はそく」と書くが正しい)。

＊はた　幡・天蓋・袈裟の一重も上げはせず(卯月潤色)

〔幡〕菩薩形幡をいふ、寺院の本尊の前に懸るものこれである。

ばだいぎん　太刀折紙の馬代銀、五十目懸の蠟燭の、明けぬ暮れぬと賑ひて(反魂香)

〔馬代銀〕昔時馬に代へて贈つた銀貨をいふ。黃金一片を大馬代、銀一片を小馬代といふ。巢林子のこの文は、折紙附の太刀や、折紙包の馬代銀や、その他方々からの進物をいうたのである。

＊はたがる　立ちはだがつてわめきける(冥途飛脚)

開張の義。手足をひろげる。和訓栞に、「大手をはたけなどいへるは開く義なり」。吉野都女楠・第二に、「糀味噌桶まではたけ出し」とある「はたけ」も擴げる意で、糀味噌桶まで持出してひろげるをいふ。

＊はたく　からだは粉にはたかれても、茂兵衛が口から言分けせぬ(大經師)　仔細のあるこの一歩粉にはたかれてもやることならぬ、おおこの長作が粉にはたかれても取つて見せう(生玉)

打ち碎く。搗き碎く。運歩色葉に「擣ハタク」。和訓栞に、「はたく。身をはたくとも臼にて物をはたくともいふ」。

＊はたご　或は芝居で日を暮し、はたごに命を養ひて(卯月紅葉)

〔旅籠〕旅人宿。「旅籠」は本來旅行の時に食物を容れて行く籠の義、轉じて旅人宿をいふことになつたのである。箋注倭名類聚抄に、「簱、唐韻云簱、當侯反、漢語抄云波太古、俗用旅籠二字、八多籠見萬葉集皇子舍人等作歌、云云、谷川氏曰、當是刷籠之義、按波太古容馬飼之籠、轉爲容旅人食之器、見今昔物語、今俗謂旅館賃食爲波太古、再轉訛耳、說文、簱飲馬器也、王念孫曰、簱猶兜也、今人謂以布盛物曰簱、義與此同」。(序云、謠曲・望月に、「かやうに候者は近江の國守山の宿、甲屋の亭主にて候」と見えてる。甲屋は兜屋をかく書いたものであつて、兜屋は簱屋で即ち旅籠屋である。甲屋というては誤と見るべきで、その昔に兜屋などいふ屋號があつた筈のものでない)。

はたした衆　持のお方が値上したい祈には、強氣に上り高天が原の八百萬神、はたした衆の下りを祈るは、高きお山を時の間に麓に下る嵯峨の釋迦(女殺)

〔把多した衆〕把多は果の義で、米を賣り果すをいひ、よつてまた米を高値に賣り置いて米相場の下落を喜ぶをいひ、米商人間の通用語である。東白著・賣買出世車(通俗經濟文庫卷一に收む)米商賣通用正字の條に、「把多、賣をはたと云、物の多きをとると云ふ心なり」。商人職人懷日記(正德二年刊)卷一に、「米買ひこんで……高相場に賣置きをしてさがるを悅ぶをはたと名付け」。「把多した衆」とは米を賣つた人だちの意。女殺油地獄のここの文は、米を持蓄へて居る人は高値に賣りたいによつて、「値上したい云云」と書きつづけ、米を賣つた人達は米を安價に買戻して置きたいによつて、「下りを祈るは云云」と書きつづけたのである。法印の言にふさはしいやうに、「高天が原の八百萬神」を高値の「高」にいひかけ、「嵯峨の釋迦」を「下る」の頭、頭によつていひつづけ、以て神佛をきかせて物體ぶつたのである。その云ふ所は何を言出すやら滑稽にして、緣語は緣語を生みいつもながらの才筆である。

＊はだせ　馬に鞍置くひまもなく、洗ひ轡にはだせ馬(兼好)　馬のはるびをしめかねてはだせ乘つて驅くるもあり(碁盤太平記)

〔裸脊〕馬に鞍置かぬをいふ。裸馬。

＊はたたがみ　夕立頻るはたたがみ、目刺も知らぬ松蔭に何やら暗うて見えこそ(今宮)

はたたく雷の義。霹靂。神鳴。

＊はたて　跡に入日の影殘る、雲のはたての天つ空(源義經)　雲のはたてのはての天つ空(國性爺後日)

盡の義。果。際涯。「雲のはたて」とは

ろす假粧坂(扇八景)

〔八文字〕女の歩む足つき、即ち内八文字のこと。入江獅子童撰・幽遠隨筆・巻上に、「今遊女の歩むを八文字を踏みてなどいふも、土佐日記に一文字をだに知らぬ者も足は十もじに踏みてぞ遊ぶとあり、是等を思へば興あるにや」。

***ぱちりしやう** かやせかやせの鉦太鼓の、罰利生あり佛法不思議(賀古敎信七墓廻) 罰利生ある親方にて、涙をとどめ、こりや平兵衛いうて居ては果しがない(心中刄氷朔日)

〔罰利生〕佛神の罰または利益の覿面なること。轉じて賞罰を嚴にすること。必罰信賞。

八王子 柿は木淋八王子、初霜寒く置きそめて(嵯峨天皇)

産出地を冠した柿の名。「ふでがき」の條を見よ。

はぢんがく 秦王武周を討つて破陣樂を作り、國七德に化せしとかや(本領曾我)

〔破陣樂〕秦王破陣樂をいふ。唐太宗が秦王であつた時に劉武周を征して功あり、陣中に秦王破陣樂を作つた。帝位に卽いてから宴會に必ずこれを奏し、樂工百二十人をして甲を被り戟を執り來往疾徐擊刺の象をなさしめた。その後に魏徵等に命じて歌詞を改作せしめて七德の舞と稱した。「秦王武周を討つて云々」をも見よ。

はついん かくて萬戶は羽旄の旗鉾八音の管絃を奏し(大職冠)

〔八音〕五經通義に、金(鐘)、石(磬)、絲(絃)、竹(管、簫笛)、匏(笙、竽)、土(塤)、革(鼓)、木(柷、敔)、以上の八種の樂を擧げてある。

***ばつか** 臣錦戶等重ねて源君亞相ばつかの仰を蒙つて(源義經)

「ばくか」(幕下)の促聲に變じた語。「うばつか」の條を見よ。

はつかう どう取の祈は四三五六社大明神、八かう七の社(女殺)

〔八講〕法華八講の略、法華經八卷を八人に分ち、八座に講讃供養する法會である。八座の講は法華經の說時八ケ年に擬するものであるといふ。公事根源集釋に、「八人分法華八卷、四日朝夕二座、各講二一卷一、名曰二法華八講一」と見えてゐる。山王權現社にては法華八講を修することあれば、八講七の社といふたのである。「七の社」はその條を見よ。

はつかぐさ 二十日草とは芍藥(用明天皇)

〔二十日草〕白樂天の牡丹芳の詩に、「花開花落二十日」、とありて牡丹の異稱とす。藏玉和歌集にも、「不加見草。牡丹(此花さく日數二十日也、依廿日草とも號す)」と見えてゐ。二十草を芍藥といへるは牡丹と誤つたのである。

***はつかん** 「はちかん」を見よ。

***はつく** 斷末魔の四苦八苦(曾根崎)

〔八苦〕「しくはつく」を見よ。

***ばつく** 父尊靈の修羅道拔苦、逆修の母の壽命(扇八景)

〔拔苦〕苦患を拔除すること。智度論・二十七に、「大慈與二一切衆生樂一、大悲拔二一切衆生苦一」。

***はつくどくち** この水は極樂の八功德池の水と思ひ(夕霧)

〔八功德池〕極樂淨土にあつて八功德を具有する水である。八功德は俱舍論に、甘、冷、輭、輕、清淨、不臭、飮時不レ損レ喉、飮巳不レ傷レ腹、の八つを擧げてある。

はつけ 間男すればはつけにかゝる(大經師)

「はりつけ」(磔刑)を約めて「はつつけ」といひ、「はつけ」といふ。西鶴撰・萬の文反古巻四、此通りと始末の書付の條に、「枯野の薄ざはざはと曝首の露にぎらつき、八付場こきみわるく」、とある「はつけば」も磔刑場である。

***はつけ** 震ふは震の卦、雷百里を動かすと、八卦やらもつけやら性根のあるはなかりけり(天神記) 殊に今年は戌の年、犬は土に寢るもの、年八卦にかなうた(壽門松)

〔八卦〕易のうらなひの算木の面に現はれる兆象に八つある、即ち乾☰、兌☱、離☲、震☳、巽☴、坎☵、艮☶、坤☷、である。轉じてうらなひの意にいふ。

はつけい 平沙に落つるかりがねの、あるかなきかの有様は、聞きしに優る八景の、筆を盡して見えにけり(大掛物)

〔八景〕瀟湘八景をいふ。「瀟湘の夜の雨」の條を見よ。

はつけん 山伏のはつけん一類(蘇我)

〔法眷〕法中の眷族の義。同じ道を修する者をいひ、また弟子兄弟の意にいふ。禪林象器箋に、「法中眷屬曰二法眷一、或同辦道者總名二法眷一」。饅頭屋本・節用集に、「法眷」。甲子祭(加賀掾古淨瑠璃正本)第三に、「一先づ某がはつけん播州書寫寺に常陸坊海尊とて候へば、御供申し罷り下り彼を頼み申すべし」、とある「はつけん」も法眷である。

ばつさい 亘利新左衞門が女房鈴鹿といふ目口かわきのばつさい者、末座を立つてしやなしやなと(千疋犬)

〔發才〕輕はづみな出過ぎた女をいふ。この語現今も關西地方(福山市あたり)で用ゐてゐる所がある。近世風俗志(原名守貞漫稿)第十九編、娼家上に、「發才といふこと今も京阪婦女の優ならざるを「ばつさい」と云、江戶にオチヤツピイといふ」。

***はつしき** 八大童子は八識の道を導き(井筒)

〔八識〕眼、耳、鼻、舌、身、意、以上の六識と末那識(意識の義)、阿賴耶識(藏識)とをいふ。

はつせん 明日からはつせん土用前、一段とようござろ(今宮) 天一天上の五すゐ、八せんま日もなし(大經師)

〔八專〕十干にも十二支にも五行を配すれば、六十甲子が自ら五行の二氣の組合せとなる、されば是等六十の內で、上下共に同氣の相重なるものが壬子から癸亥までの十二日間に八個あつて、同氣の重ならぬものが四個ある。壬子水水、(癸丑)水土、甲寅木木、乙卯木木、(丙辰)火土、丁巳火火、(戊午)土火、己未土土、庚申金金、辛酉金金、(壬戌)水土、癸亥水水。右の內で同氣重なる八日だけを八專と云ひ、その間に散在する同氣重ならぬ四日だけを間日と云ふ。假名暦註解(山路平主住撰)に「八專＝壬子の日に入りて十二日の間なり、この壬子の日五行にて云は水なり、それより十二日の內は水にえんある故に無もの也、乃この十二日の內に專日にて無き日四日ある、是を間日と云ふ、間日は何に用ひても忌むことなし、專日と云ふは天地の氣專同うなる故專日と云ふなり」。八專は一年に六度ある。

***ばつだ** 難陀が口よりあつ湯を出し、跋陀が口より溫湯を出し、産湯をひかせ奉り(烏帽子折)

國會・山城佛閣・紫雲山極樂院の條に、「鉢敲頭髮與二尋常俗一無レ別、著二褊綴一洛內外往來敲二瓢箪一唱名念佛、又販二茶筌一爲レ業、自二十一月十三日一至二除夜一、毎夜半以後巡二五處戸陀林墳墓一、以爲二三界萬靈廻向一、空也上人法流、……古者敲レ鉢、今代二瓢箪一」。關八州繋馬の文によれば、鉢敲は十德頭巾を被り、その唄ふ歌は、「よき光ぞと蓮頼む、世の光ぞと頼む、ちやのきよのきよひよん、御寺に田螺にきよひよん、……極樂のホホ前に流るる涙川、如何なる淵の瀬になり、天地の恩國王の恩、よしや世の中寢てか覺めてか、只何事も後生なりけりなもうだ、なもうだなもうだ彌陀頼む、彌陀の響を頼む身の、人は雨夜の星なれや、雲晴れねども西へ行く、……大恩教主の秋の月、涅槃の雲に入るとかや……」と見え、呼ぶ者あれば即ち、「御用ならば一本が六文、青竹茶筅でお茶ちやと立てるを召しませい、叩きの一節面白いを添へまする」と見えてゐる。鉢叩の歌は安齋隨筆二十九の卷にも載せてあるから、それに就いても見よ。


(人倫訓蒙圖彙所藏)
〔叩鉢〕


(海録所藏)
〔叩鉢〕

*__はちぢく__　大乘八軸の骨髓信心の行者(出世景淸)　八軸の妙典・九帖の御書、燻る燒香しんしんと(盛久)

〔八軸〕法華經のことで、八卷ある故にいふ。佐佐木先陣に、「經木まじりの八のまき、書いて流してしがらみに」、とある「八の卷」も法華經を云うたのである。

__はちぢやうぼじやり__　八丈ぼじやりの白無垢は平等大慧の床にいとしく(扇八景)

七條袈裟などいふにより、今一際長く八丈にいひなし、長く引ける白無垢衣を形容したのである。「ぼじやり」は「ぼんじやり」ともいふ。その條を見よ。巢林子作・百日曾我に、「一乘菩提の駒は平等大慧の園に嘶ふ」、とあると併せ見て、其もぢつたのを知るべきである。

__はちぢん__　風に目覺す西湖の八景、我八陣、平沙の落雁(唐船噺)

〔八陣〕魚鱗、鶴翼、長蛇、偃月、鋒矢、方向、衡軛、井雁行、以上の八陣をいふ。軍法傳用集・十二に、「水前に流るるを魚鱗としるべし、前のまろきは鶴翼、前のとがりたるは鋒矢、山前にあるは長蛇、山後にあるは方向、山を東に受けたるは偃月、水を東に受けたるを衡軛、山西に當るを井雁行と知るべし」。八陣につきては異說あれども煩はしければ略す。

__はちなん__　三途八難の惡趣に墮す(反魂香)

〔八難〕地獄、畜生、餓鬼、(以上三惡道即ち三途)、盲聾瘖瘂、世智辯聰、佛前佛後、北俱盧洲、長壽天。以上は苦の故に難である。世智辯聰は邪見にして惡を增長し正道に違ふ故に難である。佛前佛後は佛の教導に値はれない故に難である。北俱盧洲、長壽天は樂なるによつて佛法を聽く障りなる故に難である。以上の八難の中三途を以て最も難苦とする。

__はちのまき__　「はちぢく」を見よ。

*__はちばん__　四夷八蠻を切り靡け(嫗山姥)

〔八蠻〕蠻は南夷をいふ。八蠻は爾雅の疏に、「天竺、咳首、焦僥、跂踵、穿胸、儋耳、狗軹、旁春」を擧けてある。一說に「八」は數の多きを云うたのであるといふ。

*__はちひらき__　當所に於て諸勸進鉢ひらき堅く停止せらるる段(三世相)　常體の鉢開同然の挨拶と知らする風の秋の山(孕常盤)

〔鉢開〕「はつちばうず」(鉢坊主)に同じ。尤草紙に、「座敷を廻るは盃、町を廻るは番太郎、門々をめぐるははちひらき」。書言字考節用集・人倫門に、「鉢拔。右提レ錫左持レ鉢、道側而行、局二七家一乞食、是比丘法律云云、今世稱二鉢拔一者類同義異、同レ日不レ可レ談」。俚言集覽に、「上方にて鉢ひらきと云は關東のハツチ坊主也、鉢を持てハチと云ふをハアチと云故に、例の關東詞にハツチと云なり」。「はつち」を見よ。巢林子作・信州川中島合戰に、「剃りこぼつて願人坊主・鉢ひらけと嘲られ」、とある「はちひらけ」は「はちひらき」の轉訛である。(「かしまことふれ」の條の畫をも見よ)。

*__ばちびん__　きみのよいあたまのすり鉢鬢(薩摩歌)

〔撥鬢〕男子結髮の名。鬢を剃込んで髻を結うたもの。我衣に、「淨瑠璃太夫江戸半太夫ばちびんにてはけ長く、たてかけといふ中剃あり、寶永年中」、とあれども、萬金丹(元祿七年刊)に、男伊達のことをいへる條に、「抱鬢・糸鬢」と見えたれば、元祿年間既にあつた結髮であつて、蓋し結髮の鬢の形が三絃の撥に似てゐるよりの稱。

*__はちぶ__　三乘五乘七方便四種八部二十五有(釋迦)

〔八部〕人類以外に生存せるものと想像された八種の生類、即ち天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽をいふ。

__はちまいがた__　乘物やれ參れと傳へて八枚肩、徒歩臑脛やつこらさ(會稽山)

〔八枚肩〕駕籠一挺に昇夫八人附くものをいふ。

*__はちまん__　八幡八幡さうした事で更になし(出世景淸)　何もいはれぬ嬉しい心、八幡我等も心底變らぬ(鑓權三)

〔八幡〕「弓矢八幡」(その條を見よ)などいふに同じく、自誓の詞である。僞るに於ては八幡樣の神罰を受ける法もあるの意である。

__はちまんぐうのおんははご__　自らそれとは恐れながら八幡宮の御母御、鬼界高麗百濟國の荒き夷を攻滅して(兼好)

〔八幡宮の御母御〕神功皇后をいふ。こゝの文は、神功皇后が三韓を征伐されて御凱旋された御姿の繪馬についていうたのである。

*__はちまんぢごく__　身は八裂に切裂かれ八幡地獄に墮つるとも(冷泉節)

〔八萬地獄〕一切衆生に八萬四千の煩惱あつて、種々の惡業を作り惡業によつて苦しみを受ける八萬四千の地獄がある。八萬地獄といふはその大數を擧げたものである。

__はちまんほふざう__　提婆達多は八萬法藏を讀み覺え(釋迦)

〔八萬法藏〕釋尊所說の一切聖教をいひ、八萬は八萬四千の略、法藏の法は佛法、藏は含藏の義。

*__はちもんじ__　眉の八文字は隱せども隱れぬ足の八文字(虎が磨)　しやならしやならの八文字は二王をゆるがす如くなり(女楠)　水際たつて喜瀨川の龜菊が八文字も下に見お

ふ。地藏十輪經・巻七に、「撥二無因果一、斷二滅善根一」。易林本・節用集に、「撥無(はつむ)。思除也」。

***はつめい** 兄政若發明者(聖德太子)

〔發明〕發レ幽明レ闇の義より轉じて、怜悧、敏聰、利發の意にいふ。

はつめいげつ 徒歩(かち)でこれ程行くことも、初めい月やいもあらひ(淀鯉)

〔初名月〕舊暦八月十五夜の月をいひ、九月十三夜の月を名月といふに對する稱である。また九月十三夜の月を豆名月といふに對して、八月十五夜の月を芋名月といふ。こゝの文は初名月や芋明月の芋を一口(いもあらひ)(地名部について見よ)につゞけたのである。日次紀事(延寶年中成)八月十五日の條に、「今夜地下良賤亦賞二明月一、各煮レ芋而食レ之、故俗稱二芋明月一也」。

ばつもくてう 閻魔卒三魂を縛して闕樹下に至る、二鳥棲んで掌る、一を無常鳥、二を拔目鳥と名づく(賀古教信)

〔拔目鳥〕冥土に棲める鳥の名。蓋し鴉をいうたのだといふ。「閻魔卒三魂を縛して云々」を見よ。

***はつもとゆひ** 我が親と初元結の我が夫、聟と舅の挨拶(卯月紅葉) しらべの姫はお國腹、金水引の初元結まだ十三歳の裲襠(うちかけ)も(丹波與作)

〔初元結〕往時元服の時に紫の紐で髻を結んだことをいひ、轉じて元服のことにいひ、漸々しい結髮をいふ。丹波與作のこゝの文は、嫁女に行くについて初めて髮上げしたことをいふ。

***はで** 氏より育ちが恥かしい、はですはなる身に染り(氷朔日) ハテはでな人樣ぢや、わしらがやうな者が乘つた船は目に立つ故、どれに限らず皆見さんす(二枚繪)

「葉出」の義であらう。質素(じみ)の反對。華美。けばけばしく目に立つこと。物好(ものず)き。

***ばとうくわんおん** 馬は馬頭觀音の神通威力ある故に、小栗判官兼氏の自然佛智に感諾し(小栗判官)

〔馬頭觀音〕三面八臂にして蓮臺上に坐し、頭上に馬頭を戴ける觀音である。佛像圖彙に、「馬頭觀音。此尊應用利益の甚深なることは、馬の但(ただ)水草を念して餘は所知無きが如しと云こゝろなり」。

***はとのかひ** 若君のまだ乳吞まう飯食(まま)はうた、義經の再誕とはとのかひの僧正に誑(たぶら)かされ(最明寺殿) 路頭にさまよひ、或は騙(かた)り・鳩のかひ・追剝・押入(おしいり)・ごまのはひのねだりとり(娥) きやつは何處の鳩のかひ、人の妻子に髮切らせて連れ行くは、扨はおのれは間男な(三世相) 宿禰氣色を損じ、これ物(もの)取(とり)・鳩のかひの僞(いつはり)におどされ、さやうの御返事この檢非違使は得申さじ(用明天皇)

〔鳩之飼〕噓(うそ)を吐(つ)いて財貨を貪つて世を渡るもの、即ち詐欺師、妖巫の類である。人倫重寶記(元祿九年刊)巻之五に「鳩の飼とて順禮をうたひて門々をあるき、女ばかりのさびしさうなる所にては茶煙草を所望し、それよりとり入、四國西國をめぐりておそろしき事殊勝なる事とりまぜてかたりて錢銀をとる。……熊野の新宮本宮の事をかたりては、鳩の飼料をしんぜられよとて錢をとりしより、鳩の飼といふ名はつけたり」。和訓栞に、「はとのかひ。妖巫の類をいふ、八幡神に託し鳩の飼料をむさぼる義にや、或は鳩の卵と書けり」。(貞丈雜記・巻十六、神佛類の部に「はとのかいとは法度の害なり。正道なる事をなさず人をたぶらかす故、天下の法度の害に成るなり」とある說は非である)。

***はとのつゑ** (孕常盤)(日本武尊)(嫁靜)

〔鳩杖〕杖の把手に鳩の形を附けたもので、老人の携へる杖である。蓋し鳩は噎ばぬ鳥なるによつて、噎ばない義を取つたものであるといふ。後漢書・禮儀志に、「八十九十有レ加二賜玉杖一。長尺端以二鳩鳥一爲レ飾、鳩者不レ噎之鳥也、欲二老人不一レ噎」。日本振袖始に「齡も今年米麥の、田畑見んとて鳩の杖」とあるは、米壽(八十八歳)を米麥にいひかけて、老人の鳩の杖にいひつゞけたのである。

***はとむね** 頭は赤熊猫脊中、鳩胸に額は猿(薩摩歌)

〔鳩胸〕鳩尾骨肋骨が中高(なかだか)に突出て、鳩の胸の如くなれる胸をいふ。

***はな** 落人置かうとも打破つて棄てうとも、これこの鼻がままにてあり(今川了俊) このこのはなは新酒の醉紛れ、積る恨を申し始め候(壽門松) 蒲團ばりしてナ小姓衆を乘せて、海道百里をはなでやろ(堀川波鼓)

〔鼻〕自分。この鼻がなどゝ、自分の鼻を指して自分のことをいふ。俚言集覽に、「鼻儀。余と云事を自賀してかく云、鼻とばかりも云、自字は古の鼻字なり、余を自(みづから)といへるは鼻といふ俗語にかなへり」。「はなでやる」の「はな」は鼻歌の略で、馬士が小室節などの唄を鼻に掛つた聲で謠ひながら、馬を追ひ遣つて行くをいうたものである。「さても見事なお葛籠馬や云々」を見よ。

花軍(はないくさ)

「いくはな」の條をも見よ。

「唐の帝の花軍」及び「風流陣」の條を見よ。

***はないろ** やりてのすぎが太夫樣へ花色繻子の前巾着(淀鯉) 若しやと目をもはな色の、長範頭巾しよんぼりと(女腹切)

〔花〕「はなだいろ」、淺色に同じ。薄き藍色。和訓栞に、「はなだ。月草にて染るをもて名くるにや、歌にも月草のはなだとこそよめり、今の花色也といへり、はなだ草は月草の異名なり」。

花色羅紗の巾着鞘

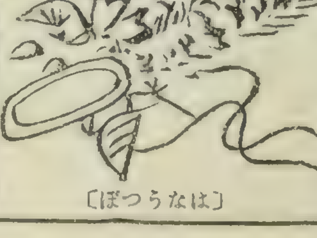
「きんちやくざや」を見よ。

はなうさぎ 時代の金襴・鶴菱・たすき、花兎・窠に霰(丹波與作)

〔花兎〕角の内に兎が花を銜へた紋ある名物裂。

はなうつぼ 縫巾・輪違・花靫(五人兄弟)

〔花靫〕夜討曾我(舞の本)に「はなうつぼ」とあり、こゝの紋縮が識つてゐる。



〔はならつぼ〕

花・お札(はな・ふだ) 愛宕參りの花お札、風呂敷包下人に持たせ(女腹切)

山城國葛野郡の西部にある愛宕山の絕頂愛宕神社に參詣して、持ち歸る樒の花枝と息火災の御札とをいふ。愛宕神社に參詣した歸りに、樒に神符を結び附けたものを土產として近隣に配り、又は我が家の荒神へも供へて火難除けとする。山城名所紀行(正德四年刊)卷十一、愛宕山の條に、「嶮坂五十町、曲岫皆磊砢、老少挽二藤褌一、深喜二利生和一、或懷二回祿札一、

〔跋陀〕跋難陀（梵語 Upananda）の略、龍王の名。法華文句に譯して善歡喜といひ、難陀と兄弟にして常に摩訶陀國を護るといふ。「なんだ」をも見よ。

ばつたくさば　町代夜番が棒ちぎり木、ばつたくさ薬に霜のはかなき命、南無阿彌陀（女腹切）

町内の者の騒ぐを形容したばつたくさに、のたうつばつたくさをきかせ、なほ蓇斯草（はつたくさは）薬をもいひかけたのである。

***はつち**　托鉢の道心者はつちはつちと門に立つ（堀川波鼓）　朝な朝なの頭陀の行、はつちはつちも空耳潰し（博多）　國元では人並に武士の眞似（まね）をして、鉢坊主の手の内程米も取つたこの梅龍（大經師）　愚痴無智のはつち坊主同然の御修行（井筒）

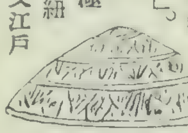
「はち」（鉢）に促聲の增加した語。「はつちはつち」は「はつはつ」（その條を見よ）ともいひ、托鉢坊主が門に立つて「はつちはつち」と言うて施物を乞ふよりいふ。「はちひらき」の條を見よ。「はつち坊主」は托鉢坊主のこと。「鉢坊主の手の内」とは、托鉢坊主の貰ふ一にぎり程の米のことで、以て小祿に譬へたのである。

八町三所　坂を登りに韋駄天走り、八町三所足もためず飛んで來るは加藤虎之介正淸（三國志）

八町を三度に飛ぶ義、走ることの極めて疾きをいふ。

ばつてうがさ　ばつてう笠の簷（のき）深き、小家のありくに異らず（聖德太子）

眞竹（またけ）の篠（たけのかは）にて作り、徑二尺四五寸ばかりの粗製の笠である。この笠もと坂東地方から作りひろまつたによつて坂東笠といふのが訛つたのであらう。現今中國地方でデンパチガサといつてゐる。喜田川季莊撰・守貞漫稿、笠の部に、「眞竹篠を以て造レ之、抑竹も粗也、我衣曰、延寶頃より江戸にて造る眞竹皮笠小形也、抑竹も粗なり、晴雨用也、後大笠雨天のみ用ふ、料も造りたる徑り二尺四五寸甚重し云々、二尺四五寸眞竹篠笠は今名ばつてうがさと云也」。「漁夫釣夫楊（せんどう）人水主等は今も專ニ用之ヽ眞竹ふある下品篠極麁製なるもの也、笋子笠と云、紐も篠繩或はわら繩をつける、又江戸の貨籠界は篠麁製笠を用ふれども、これより形大にして甚淺し、篠ふある麁笠の淺く大形なるを俗にばつてうがさと名づく」。



〔さがうてつば〕

***はつと**　一夜泊も法度なり（堀川波鼓）

〔法度〕法則または制度の義。轉じて禁制の意にいふ。和訓栞に、「はつと。法度の音也、書萘注に法則・制度也と見ゆ」。

ぱつとはづむ　芝居果（はて）に長作が銀持つて來るが、爰へもぱつとはづまうし（生玉）

ぱらりと勢よく纒頭（はな）をまき散すをいふたのである。「はづむ」はその條を見よ。

***はつとり**　目覺草は服部の、八聲も鐘も霞み行く（雪女）　服部煙草煙草入、煙管（きせる）の餘計あるならば（淀鯉）

〔服部〕服部煙草の略。播州島上郡服部村から産出する煙草（たばこ）をいふ。攝陽群談・卷十六に、「服部相思草。島上郡服部村の田圃に作れり、莖細く葉厚く色虎斑の如くにて斑なり、香遠く薫じ香味相共にかうばしくして不レ飽、好で求レ之」。壽門松・下卷に「見つきはきつい服部育ち、煙草盆引寄せて」とあるは、服部煙草をきかせて、服部煙草は香味烈しいによつて、「見つきはきつい」というたのである。

***はつね**　これを御身に贈るぞと、初音といへる鼓に添へ黄金緋布を賜はりて（吉野忠信）

〔初音〕鼓の名。初音の由來につきては吉野忠信の文中に說明してある。

ぱつぱ　ぱつぱの鮫鞘・象眼鍔（夕霧）

刀劍の柄に巻く鮫皮にべたべたと大粒の散在したるを形容した語。鮫皮には大なる粒のあるを貴んだものである。鮫皮精義（天明五年刊）に「パツパ沙（ざめ）皮の形は櫻花の如きものなり、パツパはさながら櫻花の風に散りたる如くなるを以て、パツパと名付けたるならんか」。井原西鶴撰・武道傳來記・卷四、踊の中の似せ姿の條に、「筋天鵞絨のはやり結び、ぱつぱの大小一樣に六人深編笠の目に立ちて」。櫻曾我女時宗（享保七年刊）三之卷、親の異見きかぬ氣な喧嘩大將の條に、「さわぎ仲間の血氣大纛、ぱつぱの大小よしやがかりにさしこなし」。

はつはつ　十善天子の御身にて、我等風情の門に立ち、はつはつと宣旨あり（孕常盤）

「はつち」を見よ。

***はつぴ**　内より土風土煙、はつぴに弓籠手（ゆごて）・狩袴（虎が磨）

「はんぴ」（半臂）の轉。

はつみぐさ　初見草なる顏佳草（十二段）

「初見草」春には松、夏には卯花、秋には萩、また霜降る頃の菊をもいふ。二條良基撰・藏玉集に、「初見草。萩。けふやがて露も色あるはつみ草、きのふの夏の萩と思へば」、「初見草。冬菊。しぐれふる庭にけふしも初見草、花咲きにけり霜やおくらん」。十二段のこの文は草の名譴しであつて、初見を初見草にいひかけたのである。

***はづむ**　芝居果（はて）に長作が銀持つて來るが、爰へもぱつとはづまうし（生玉）　三百兩は亭主にはづむ（壽門松）　油斷召されな、人參用ゐて養生が第一、持合せたはづまうと、蓋を開き（博多）

この語古來「はずむ」とも書かれ、彈（はじ）く義か。勢に乘つて事を行ふ意にいふ。ふるまふ。色道大鑑に、「はづむ。蹴鞠より出でたる語なり、……凡て機に乘ずる所に用ふ」。和訓栞に、「はづむ。極るより轉ぜる詞にや、馬にへる事平家物語に見えたり、常に鞠などにいへり、或は撥をよめり」。

はつむかし　昨日は今日の初昔、世の口に合ふ茶の名所、人はうぢより育ちかや（鎗權三）　互にこひ茶の初昔、私は忘れはしませぬと（卯月潤色）　既に茶の湯も初昔、綠も青き宇治山の（用文章）

〔初昔〕舊曆三月二十一日に摘んだ茶をいふ。安齋隨筆・卷二十八、茶に極そゝりの條に、「初昔・後昔と云ふは、昔の字は廿一日と書くなり、三月廿一日に摘みたるを初昔といひ、廿一日後に摘みたるを後昔と云ふ」。巢林子のこゝの文は、茶に初昔といふがあるので、それをいひかけ、なし二「口に合ふ茶」といひ、茶の名所「宇治」を「氏」にいひかけて、文を飾つたのである。

はつむ　これはこれ四韋駄と號す外道の昔、この法を學ぶ者は因果を撥無し來世を期せず（用明天皇）

〔撥無〕撥は除の義、無いとして除き遣るをい

一萬句の連歌をぞ始めたりける」と見え、菟玖波集序に、「久しく空の上のもてあそび、花のもとのたはふれとなれり」と見え、庭訓往來・二月二十三日の文に、「花下好士」と見えてゐる。（和訓栞に「自然菊宗祇法師連歌をもはら興行し花の本と稱す」、とあれども花下の稱は宗祇に始まつたものではない。宗祇は連歌に於て天下第一と稱せられ、勅を奉じて新筑波集を撰し、朝廷から花の下の號を賜はつた）。

＊はなむけ （三世相）

「馬のはなむけ」の義である。昔旅立つ人を送るには、その人の乘つた馬を行く方へ向けて別れを惜み、物などを贈る習慣であつた。それより轉じて餞別をいふ。土佐日記・十二月二十三日の條に、「これぞ正しきやうにて馬のはなむけしたる」。

はなむらさき 三の君花紫を戴いて、びらりしやらりの町風も、帽子に漏る衣の香の（酒呑童子）

〔花紫〕紫帽子のことにいうたのである。「むらさきばうし」を見よ。

＊はにふ 埴生にかくまひ參らする（反魂香） 蘭も桔梗も刈取つて、賤が埴生の冬籠（松風）

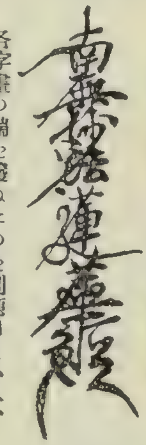
〔埴生〕埴生小屋の略。「埴生」は泥土のある所をいふ。「埴」は和名抄に、「釋名云、土黃而細密曰レ埴」と見えてゐる。「埴生小屋」は荒壁の賤屋をいふ。萬葉集・卷十一の歌に、「たちかたの赤土の小屋にこさめふり云云」。平家物語・卷十の歌に、「旅の空埴生の小屋のいぶせきに、故鄕いかに戀しかるらむ」。

はにやすぢじん 此地の底にまします埴安地神にも見放され參らせしと（振袖始）

〔埴安地神〕土神をいふ。日本書紀・神代紀に、「土神號二埴安神一」。

はねだいもく 法力忽ち金色の刎題目と現はれて雲中に見えけるが（大覺）

〔刎題目〕經名・妙法蓮華經を題目と稱することは日蓮宗に創まり、それに南無を添へて



〔はねだいもく〕

各字畫の端を撥ねたのを刎題目といふ、但法は省せぬとてこの字のみは撥ねてない。

はねもとゆひ 牛をばかけぬ牛の角、はね元結のかうがいわげ・二十を頭に十人許り（嵯峨天皇） 染むればそまる黑髮の、艶は烏のはれ元結（非筒）

〔跳元結〕若盛りの婦女の結髮の飾にかける元結であつて、丈長紙の兩端に針金を附けて、その結んだ端を牛の角のやうに上に反したもの。西鶴織留・一に、「珊瑚珠の前髮押へ、針金入の跳簪を掛けて」。

＊はばかる 身振ばかりは男を磨く、町いつぱいにはばかつてこそ歸りけれ（天網島）

「はびこる」の轉。のびひろがる。濶歩する。藤原俊賴撰・散木棄歌集に、「佛の御舌は廣く長くして、大空になむはばかるといふことをよめる」。卯のとし都萬太夫座役者評判（元祿十二年刊、安樂坊評）錺波千壽を評した文に、「芝居一はいにはばかる程大樣な藝、もつたいよくいやしからず」。

＊はばき はつしはつしと鍔打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見えてけり（會稽山）

刄鐔の轉であらう。脛巾金をいふ。刀劔の鐔元を固める金具の稱。

＊はばき 左の脚に銀の金具にははきを入れ（曾我扇八景）

「はぎはき」（脛穿）の義。脛巾。脚絆。太平記・卷五、大塔宮熊野落の條に、「いつ習はせ給ひたる御事ならねども、あやしげなる單皮脚巾草鞋を召して」。

ははきぎ

「ふせやにおふる帚木の云云」を見よ。

ははぎり 奪はれし寶劍やはか取らで置くべきかと、ははぎりの名劍を渡し給へば（振袖始）

〔羽羽斬〕天羽羽斬をいひ、素盞嗚尊が八岐八蛇を斷り給うた劍の名。古語拾遺に、「素盞嗚神自レ天而降、至二於出雲國簸之川上一。以二天十握劍一（其名天羽羽斬、今在二石上神宮一、古語大蛇謂二之羽々一。言斷レ蛇也）斬二八岐大蛇一」。

ははこぐさ すがるばかりの戀草も、めは繁りそふ母子草千草八千草（用明天皇）（二枚繪）

〔母子草〕菊科に屬する草、原野に自生し、葉はすべりひゆに似て白毛がある、春夏の交に黃色の花を開く。正月の七草粥に用ゐる御形はこの草である。



〔母子草〕

＊ははじやびと なう母じや人この腰骨に覺おり（國性爺）

〔母者人〕「母ぢや人」を古くから「母じや人」と書き、おのれの母を呼ぶ詞。母にてある人。母を母者人、姉を姉者人、兄を兄者人、などといふ。この詞封建時代に武士の間に行はれたが、町人の間にも往往用ゐられたものである。西澤一風撰・伊達髮五人男（寶永四年刊）五之卷に、阿波座堀の染物屋雁金文七が己が母を呼掛けた詞に、「申し母じや人、文七でござる、今頃いづ方へ御出・心元なし」と見えてゐる。

ははみた お姬樣にはお果なされし母上樣の御菩提のためとあつて、ははみたははみたと申す壬生大念佛を修行なさるる（壬生大念佛）

「はらみつた」（波羅密多）に「母見た」をきかせたのである。「はらみつた」はその條を見よ。

ははや 忝くも天照大神天のかご弓羽羽矢を以て惡神をしづめおはします（袍狩）

〔羽羽矢〕鳥の羽ではいだ矢。日本書紀・神代上に、「僉曰、天國玉之子天稚彥是壯士也、宜レ試レ之、於レ是高皇産靈尊賜二天稚彥天鹿兒弓及天羽羽矢一。以遣レ之」。釋日本紀に、「天羽羽矢謂二羽々矢一者、以二鳥羽一波久矢也、加二重點一者言二其羽矢衆多一也」。

ばはん ばはんの海賊乘ふせ、入鹿公の御首はこの有風が討つ約束（大織冠） さては海賊ばはんぶれよな（用明天皇） ばはんとやら馬糞とやら・待て待て遣らぬと跳り出る（唐船噺）

〔八幡〕八幡船の略、海賊船の意にいひ、また「ばはん」を海賊の意にいふ。南海通記・豫州能島氏侵二大明國一記の條に、「この時我國の賊船各八幡宮の幟を立二洋中に出でて、西蕃の商船を侵し掠めてその財產を奪ふ故に、その賊船を稱して八幡船と呼也」と見えてゐる。蓋し鎌倉の初期から室町時代にかけて、我が邦人が支那朝鮮の沿岸を寇略したのを彼の國で倭寇といつた。その衆數十人から數千人に

顧二家門一无レ禍、或持二檻輿一レ榱、欲二郷里作一レ賀、云々」。

はなかいらぎ　花かいらぎと散る花と、ざんざめいたる掃庭の(薩摩歌)　糠味噌汁のはなかいらぎ、柄絲きれて漣や、昔ながらの草履取(三國志)

〔花梅花鮫〕鮫皮の地粒すべてあらき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とす。この花大方櫻の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなくて、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門・鮫皮の條に、「其粒相齊者、粧二刀柄一、是謂二柄鮫一。又粒間交二花點狀一者、謂二梅花鮫(かひらぎ)一」。

はなかつみ　「あさかのぬまのはなかつみ」を見よ。

はなかつを　鹽貝に花鰹、書出出(かきだしいだ)し算盤に、暫らく時こそ移りけれ(氷朔日)

〔花鰹〕鰹節を花瓣のやうに薄く細かに削つたもの。この文は、鰹削(か)きに書出(かきだし)をいひかけたのである。

***はながみぶくろ**　鼻紙袋落して印判ともに失うた(曾根崎)　待ておのれどうすると、鼻紙袋へ文を入れ、ぐるぐるまきし紙撚(こより)より(二枚繪)

〔鼻紙袋〕鼻紙入ともいふ。懷に挾み持つ函迫(はこせこ)のやうなもので、革或は絹を以て片囊を縫ひ、その內に紙、小遣錢、懷中藥、印判、耳爬子(みみかき)など、ちよつとした携帶必用品を入れたものである。雍州府志(貞享三年刊)七、土産門下・服器部・細物(こまもの)の條に、「以二革或絹一縫二片囊一。其內盛二丸散藥一、或藏二耳爬石筆等物一、與二鼻紙一合而懷レ之、是謂二鼻紙袋一、古疊紙之遺風乎、或鼻紙亦有下納二斯袋內一者上、後俗小片紙一帖壓折而懷レ之、或拭二鼻涕一又拭二不淨一、始稱二懷紙一、今專謂二鼻紙一」。西鷺撰・御前獨狂言(寶永二年刊)卷之一、心中立切た剃刀の條に「鼻紙入にふくさ三つ、中一つは空行月のめぐりあふまでと書ちらしてあり、こまがね五粒、中に小馬引錢(こまひきせん)一文あり、外郎(ういらう)一包、一遍上人の名號、芝居のばん付も見え申候」。

はなくやう　卯月八日の花供養、佛法流布の因緣なり(釋迦)

〔花供養〕灌佛會をいふ。釋尊の降誕日即ち四月八日を以て行ふ法會である。種々の草花にて莊嚴せる花御堂を造り、その內に右手は天を指し左手は地を指して、天上天下唯我獨尊と叫ばれた姿の釋尊誕生佛を安置し、甘茶を煎じて佛に灌ぎ、禮拜供養する法會である。日次紀事(延寶年中成)四月八日の條に、「今日灌佛會、古禁裏亦有二此儀一、凡諸寺院修二灌佛會一、以二品花一飾二小堂一、是謂二花堂一、其內安二小釋迦像一、而灌二甘草等香水一也、黃拍山所レ設之花堂殊謂レ美、京俗今朝揷二樒枝井躑躅花於二竿頭一、高建レ之而供レ佛」。

はなじろ　二つ道具に舞鶴の鑓印先に押立て、筋違橋の見附にてはなじろにはたと行逢うたり(扇八景)

〔鼻白〕喫驚して臆したときに鼻のしろじろと見えるによつていふとぞ。俚言集覽に、「鼻白。(夏山雜談)古き軍物語にハナシロにつきあひたりとあるは、敵味方思ひよらず出合て、互にびつくりして臆したることをいふにや、鼻白は臆したる事なり、臆すれば鼻の白くなるなり、源氏物語、おくれがちに鼻白める人多かりと見えたり」。曾我扇八景のこゝにいへるは、思ひがけず折惡く行き逢ふことの意に用ゐたのである。

はなぞろ　花を揃へて花ぞろの、色であかりの夜見世かや(吉岡染)

「はなぞろへ」(花揃)の略。數多の美女が揃つて並ぶこと。

***はなだ**　(松風村雨束帶鑑)

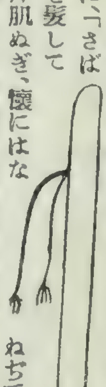
「はないろ」を見よ。

はなぬり　さくらが色に花ぬりの、吉野漆の塗師屋蒔繪屋檜皮屋に(用明天皇)

〔花塗〕複雜な仕上法を施さないで上塗をしただけのもの。俚言集覽に「はなぬり＝上ぬりの事也」。狂言・柱杖に、「扨は花塗になさるゝか」。

***はなねぢ**　荷物に附けしはなねぢ引拔き(堀川波鼓)

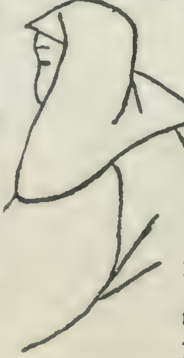
〔鼻捩〕往時馬方が馬の暴れるを制するに鼻をねぢる用具で、長さ一尺五寸ばかりの棒を黑と朱との段々塗にしてある。これを以て人を毆打などもした。武家名目抄・輿馬部に「はねねぢ」。櫻曾我女時宗(享保七年刊)親の異見きかぬ氣な喧嘩大將の條に、「さばき髮して片肌ぬぎ、懷にはなねぢ手に白刄取り、情賣る色町鬪の場となること、さりとは所に似あはぬ風俗となりくだりけると」。



〔はなねぢ〕

***はなのばうし**　積る迷ひも疑ひもひらくるはなの帽子にて、頭つつむも柔和なる(聖德太子)

〔花帽子〕花色帽子で、縹(はなだ)帽子ともいひ、淺葱の少し濃き色の帽子で、その形は衣の袖に似、おもに僧侶僧尼の被つたものである。(後には大阪では一般に年增女の被り物となつて流行した)。武道傳來記卷四、太夫格子に立つ名の男の條に、「惜しや盛りを待つ花の帽子、身は墨染の櫻散る世がたり」。小寺玉晁撰・雜砸爲可話に「花の帽子之事＝此帽子は大昔よりある物にて、本色ふたへ染といふて藍にて二入(ふたしほ)染めたる物也、世に是を花色といふ故、それ故花色の帽子といふ心にて名付けたる物也、今俗に淺葱といふより少し濃きもの也、ふたへにて裏ある狩衣といふ事也など謠の抄にあるは僻言也、二藍(ふたある)と書きてふたへとよむ事、名目抄桃華蘂葉などにて考へ知るべし、眞言天台等の僧侶の襟卷にするも、此花の帽子にて之を裹頭(くわとう)といふ也、法皇御所などにも御花の帽子をはかせさせ給ふとかや、然れば俗體にては着すべきにあらず、剃髮又は髮を切りたる後の被り物なるべし、それとも京都などにては尼になりたる人は是を用ひれども、若き女中の被り步く事かつて之なし、大阪にはいつ頃よりかはやり來りて、高きも賤しきも三四十歲の女これを着するあり、後家か尼かの着する物を夫あるうちに着るやうになりたる故に、色を改めて此色に染めて用ゆ、本法の帽子は七尺五寸のものなれども、今時の女中の用ゆるは短く、其人の脊恰好顏のなりにあはせて製する故、都へくる女中に是を着て步く人あるは、大阪と問はずして知るる也、云々」。



〔花の帽子〕

***はなのもと**　もとより一學やさ男(をとこ)、花の下の門弟にて連歌を好み(女夫池)　とつ樣は一昨日花のもとの連歌の會に夜をふかし(大經師)

〔花下〕連歌師をいふ。蓋し白氏文集・卷三十、春興の詩句に「花下忘レ歸因二美景一」とあるより出で、風流を樂しむ心より連歌師のことにいひなしたのであらう。太平記・卷七、千劔破城軍の條に、「花下(はなのもと)の連歌師どもを呼び下し、

り（夕霧）

濱納屋邊をうろついて辻君を買うて快樂を貪ること。「濱」は「はまなや」を見よ。「せせり」は「せせる」を見よ。

はまち 大鯛・小鯛に名吉・鱸・鯉・鱧・はまち・鰈（天鼓）

〔飯〕關西地方にて鰤の一二尺許のものをいふ。いなだ。

はまなみ 「はま」を見よ。

***はまなや** 男と女子と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉んづしてゐた（歌念佛） はしばしの暗屋へ下り、後には濱の納屋の蔭一本立にて候（二枚繪）

〔濱納屋〕濱邊（河岸）にある物置屋をいふ。貞享から享保の後までも大阪の濱納屋の邊は、辻君が夜陰に乘じ往來人の袖を引き、納屋の蔭に隱れて出稼する所であった。濱納屋の邊をただ濱（その條を見よ）とも云うたものである。「そうか」（總嫁）の條をも見よ。「男と女子と喧嘩して云云」とあるは、辻君が男と猥褻行爲に及んでゐるのを喧嘩と誤認したものである。「濱の納屋の蔭一本立」とあるは、濱納屋の蔭に立って往來人の袖を引き、情を賣る哀れな總嫁の身の上をいうたものである。世間娘氣質（江島其磧撰・享保二年刊）卷之五にも「夫に見はなされて今日の命をつなぎかね、夜歌うたうて濱側の納屋の蔭からそつと出で、往來の袖をひかへて十文づつに情の切賣云云」と見えてゐる。

はまやき 羊の濱燒・牛の蒲鉾（國性爺）

〔濱燒〕獸魚の類を鹽濱の鹽を燒く釜の下にいけて蒸燒にしたもの。

***はまゆか** 青海波と名付けたる一吸九盃の大蚫、濱床に飾らせて既に酒宴ぞ始りけり（用明天皇）

〔濱床〕帳臺の類であって、四面に洲濱の形あるよりの名であるといふ、おもに后宮におまし所として用ひらる。雅亮裝束抄卷一に「きさきの宮などのに濱床あり、高さ二尺許、四つにさし合はせておく、黑塗金物打ちたり、その上にさしみてたる繧繝二帖を北南に敷く、南を枕とするなり」。

***はまる** 人かと思うてはまった、涙がこぼれて口惜しい（生玉） これは扱松かと思うてはまった（反魂香） 三五平樣であらうとは尤も氣のつく筈もなく、妾やはまったは是非もなや（薩摩歌）

〔陷〕被レ食の轉義であらう。いっぱいくはされる。騙される。計略に陷る。心中萬年草・中卷に「京の者をはめだてしたら、返報を食はう用心せい」、とある「はめ立て」も騙す意、蓋しいっぱい食はす義であらう。

はまをき 「物の名も所によりてかはるよなう」を見よ。

はみかへる 曾根崎の手も切れ本人間の上上と、聞けば跡からはみかへる、そも如何なる病ぞや（天網島）

〔瘥〕病再發する。ぶりかへす。和訓栞に「はみかへる・病にいふは食復の義也、字彙に瘥は病重發也と見えたり、新撰字鏡にかへりやみとよめり」。合類大節用集（享保二年刊）肢體門に「瘥＝字彙・病重發也」。

はみだし 二口屋のはみだし・猪熊の革柄（女腹切） はみだし鍔もかみさびて、こじり詰りし師走の果、胡散らしく吉田屋の内を覗いて（夕霧）

〔食出〕食出鍔の略。鞘・柄の上に僅に食出てゐる鍔であって、短刀に限る。「ふたくちや」をも見よ。

***はむしや** 誠に將軍家の御連枝、葉武者なんどの逃ろやうには候まじ（吉野忠信）

〔端武者〕「端侍」に同じ。「はざむらひ」を見よ。

ばもく 「離離たる馬目云云」を見よ。

***はもじ** 横幅廣く結ばれしは此月帶の御祝儀と、言のはもじさつつましさ、袖かき合せ着座ある（最明寺殿） 箱王は初事の傾城に顔見られ、くわっと紅葉のはもじさに（加增曾我）

「はづかし」（恥）の文字詞である。文字詞については「すもじ」の條にも述べて置いた。

はや 雄鷹の香取丸にて甲矢を矧ぎ（百合若）

〔甲矢〕「おとや」（乙矢）の對。初矢の義。一手二本の矢の中初に射る矢。

はやおひ 三條堀川まで早追の通しに來ました（碁盤太平記） 窪田で且那をおろしておっつけ馬を取りに行くと、早追ほどに追うて來る（丹波與作）

〔早追〕馬または昇籠を飛ばして晝夜兼行で急ぐ使者。

はやす 丹後の生鰤上方にもめじろと申してあるげなれど、其美味さが何として、殊に切りおうけのあること、少し薄目にはやせば、片身で六十人のおかずは覺えがござんす（浦島）

〔生〕切るといふを忌んで、反對に「はやす」（生ずる義）といふ。切る。保元物語卷三、新院御經沈の條に、「その後は御爪をもはやさず、御髮をも剃らせ給はで、御姿を逆し」とある、「はやさず」も切り給はずの意。なほ浦島年代記のこの文の「切おうけ」は、切出の意で、「おうけ」は「おほけ」（大）で、大量なことをいふ。

***はやて** 裸身輕く逃足も、はやての風に雲澄は、山に飛入り谷を分け（百合若）

〔疾手〕古くは「はやち」というてある、「ち」は風の義である。俄に烈しう吹く風。

はやみち はや道下げたる袋より漢竹一管取出し（源義經）

〔早道〕財布。艶道通鑑に、「有合せたるぞ幸ひと、速道打ちあけて殘らずとらせける」。俚言集覽に、「早道＝金錢を懷中する袋なり」。

***ばら** 此處彼處にて召捕ったる海賊ばら（博多） 彼奴原それ追拂へ（博多）

人に係る名詞に添へて一人ならぬを示す接尾語。儕。だち。等。

はらか 駿河の國平賀の三郎と名乘って、……、やさしやしほらしや・はらかと聞けば大内の、御垣に立てる巾切り（加增曾我）

〔腹赤〕鱒だといふ。公事根源・元日節會の條に、「腹赤の貢と云ふ魚を筑紫より奉るなり、昔は聽て節會などに供しけるにや、腹赤の食樣とてくいさしたるを皆取渡して食ひたり、景行天皇の御宇筑紫の國宇土の郡長濱にて海人是を釣て奉る、其後聖武天皇の御時天平十五年

及び、約七八百石積の和船に八幡大菩薩の標旗を掲げてゐたによつて、彼國人がこれを八幡船と稱したのである。倭寇は朝鮮沿岸にはじまつて遼東・山東・江蘇・浙江・福建・廣東に及び、支那東海岸は殆ど皆この害を被つた、中にも浙江が最も甚しかつた。倭寇の最も勢力があつたのは明の世宗の嘉靖時代であつて、嘉靖四十二年に明將戚繼光・兪大猷に撃破されてからは勢頓に衰へ、僅に臺灣に據つて餘喘を保ちつつ次第に消滅した。「ばはん」の語の古くは天正十七年の松浦文書の中に見えてゐる。饅頭屋本・節用集・人倫部に番舶としてあるは、「ばはん」を「番舶」の義としたのであらう。巣林子は、「ばはん」を海賊船または海賊の意に用ひたまでである。唐船噺今國性爺のこの文の、「ばはん」「馬糞」は馬府官を音の相似よりもぢつて罵つた語である。

ばひかへす　「ばふ」を見よ。

***はひで**　やい父様はお留守か、ひとり女子がはひでなりや、お客が一人あつてもアア不都合な事ばかり（堀川波鼓）　彼奴がはひでに着てうせた布子があらう（歌念佛）　跡を濁さぬ水の面、はひでの蛙二合半、首にかけたる杜鵑（薩摩歌）　はひでのぬくが暗屋を覗く如くにて、肩に手をかけ唄祭文（虎が磨）

「はひいで」（這出）の約。田舎から這出た義であつて、始めて都會に來た田舎者の意。やまだし（山出）。曾根崎情鵲（寛延三年刊）に、「ふと田舎から上りました時はほんのはひで奉公人」「はひでのぬく」とは田舎から出たばかりの鈍漢の意。

はひぶき　銀座に長長使はれ、駕籠乗物ははいはひ吹（薩摩歌）

〔灰吹〕銀分に富める鉛中から銀を採取する方法を灰吹法といふ。灰吹法によつて銀鑛を吹き分けて混合物を取り去つた銀を灰吹銀といふ。巣林子のここの文は、駕籠乗物の掛聲はいはいに灰吹をいひかけたのである。

はひよせ　南無三寶火が消えた、サア房様の灰寄ぢや（重井筒）

〔灰寄〕死者を火葬して其骨灰を拾ひ集めることをいふ。眞俗佛事編・巻四に、「火葬には必ず灰寄あるべし、古佛是世尊荼毘の遺意なり、涅槃の雙林には七日にして薪盡るが故に、第八日に當て舎利を拾ふを、人間天上及龍宮に分つて塔を建てて供養す、今世俗も傚レ之骨を拾うて靈場に收む」。

はふ　破風を蹴破り黒雲に入りて失せ候（反魂香）

〔破風〕家の兩側面たる屋根の切棟の兩下して山形をなす所。

***ばふ**　折角呼寄せた母様までばうて歸らうとや（川中島）　村村に立つたる高札、何とは知らずばひ取つて參りし（唐船噺）　世繼様もばひ返し、お二方とも私が屋敷に忍ばせ置き參らせしが（栬狩）

「うばふ」（奪）の「う」の略された語。空穂物語・藏開に、「よりあきらかまへてなむばひ取りて侍りと申し給へば」。「ばうて」は奪ひての音便。「ばひ取つて」は奪ひ取りての促音便。「ばひ返し」とは奪ひて取返すをいふ。

はぶく　雲井に羽ぶき羽扇を上げ、招く手風や神風の（源義經）

〔羽振〕羽撃するをいふ。「ふる」（振）を古くは「ふく」と云うた。萬葉集に「山振」と書いて「やまぶき」とよみ、古今集・巻三、夏歌の部にも「五月まつ山ほととぎすうちはぶき、今も鳴かなむ去年のふる聲」と見えてゐる。

***はぶくら**　手先さがりに射損じて、誰が刈積みし稲叢に、はぶくら込めてずばと立ち（蟬丸）　思ふ矢壺を過たず、法眼が胸板はぶくらせめてずばと立つ（吉野忠信）

矢の羽をいふ。東鑑に「羽」を「はぶくら」とよんである。蓋し矢は羽が附いて脹れてゐるから、その羽を羽脹というたのであらう。判官物語・土佐房堀川へ寄する條に、「きさんた左手のたちうちをはぶくらせめてつつと射通し」。北條五代記・昔矢軍の條に、「鈴木左京亮はすぐれたる强弓なり、先登に進み彼が放つ矢はぶくらを飲まずといふことなく、忽ち射殺す所の者多し」。

はふざうびくのじやうるり　「ほふざうびくのじやうるり」を見よ。

はぶし　兩方互に四つ手に組み、はぶしにどうと轉ぶと見えし（井筒）

「はひふし」（這伏）の約。倒れて四つ這となること。現今も中國地方にて、這ふ形に臥せつてゐるを「はぶさる」といふ。

***はぶし**　羽節を張つてばつとたち（國性爺）

〔羽節〕羽の莖。翮。

***はふりこ**　祝子宮奴棒突きちらし（生玉）

〔祝子〕神主をいふ。蓋し災禍をはふりやる人といふ義より出た語であらう。

はへ　手廻りもよく幾はへか庭に五つのたなつ物（宵庚申）

〔擺〕俵などを積むに、正方形に並列して其上に積重ねること。和漢三才圖會・巻十五、倭字大略の條に、「擺。凡材木及米俵積層皆曰レ擺、从レ手从レ竝、俗附會用レ之也」。「はへ」は「はへる」の轉成名詞。

ばぼく　「離離たる馬目云云」を見よ。

***はま**　今までは自らが碁を遊ばせば、お側に居てはま拾うたりつくつたり（千疋犬）　手詰のせきを勝軍、敵のはまを拾ひ上げ（國性爺）

〔濱〕圍碁の語。圍んで殺した石。あげ石。死子。

***はま**　エイ錢取つて濱へ行く様な者ぢや御座せんとてひんとすろ（最明寺殿）　日が暮れると濱ぜせり（夕霧）　小めろのりんは十文、それははまなみさざなみや、志賀様たつた二文か（女腹切）　年とてもまあ二年、下宮島へも身を仕切り、大阪の濱に立つても此方様一人は養うて（冥途飛脚）

〔濱〕大阪の濱側（河岸）にある納屋の陰あたりは總嫁（その條を見よ）の出稼する場所である。「はまなや」を見よ。「濱ぜせり」とは濱邊をうろづいて總嫁を買うて戯れるをいふ。「濱に立つ」とは、惣嫁となつて濱側に立つて往來の男を見かけて袖を引くをいふ。「濱並」とは、濱に立つ總嫁を買ふ料金十文たるにより、それ並の十文をいふ。「じふもんいろ」をも見よ。長町女腹切のこの文は、濱並・さざなみと同韵脚語につづけ、さざなみは滋賀の枕詞なるによつて、志賀様と人の名としていひつづけたのである。

はま　「ろませ・さい・……」「けん」を見よ。

はまぜせり　日が暮れると濱ぜせ

武士の間には言葉に物體(もつたい)をつけて、かかる言ひ方をしたものである。「待て」といふを「待てい」と「い」を響かしていふなどもこの類に屬する言ひ方である。

***ばれる**　サア頼みを取つてはもう遁れぬ、わざくれやけぢやばれて出て忍男の構があると、とんと言うて捨てうか(薩摩歌)
祕密の暴露するをいふ。現今も岐阜縣加茂郡東白川村地方にて、「ばれる」を露顯する意に言ふ。和訓栞に「ばれ＝俗語に事のばれたなどいふは破離の轉訛なりといへり、露顯の意にいふも同じ」。

ばん　嘘ぢやなかばん聞かつしやれ(博多)　九月の七日九日は氏神殿の祭、本踊いろ唐子踊いろ見事なことばん(博多)　諸白(もろはく)をいつかけ薩摩二才、ふとか男であつたばん(博多)
「だ」「ぢや」といふ程の意にいふ。卽ち「なかばん」は「無いのだ」、「ことばん」は「ことだ」、「あつたばん」は「あつたのだ」の意である。この語現今も佐賀長崎地方で用ゐてゐる。蓋し「ばな」の轉訛であらう。

***はんがい**　夏の物は半がいに繻絆手手に背負ふ葛籠・はんがい・錢箱・櫛箱(關八州)
「はんがけ」(半掛)の轉。兩掛(天秤棒の兩端に掛け、衣服などを入れて擔ふ葛籠)の片方をいふ。

はんかうびたひ　北國訛りのはんかうびたひ(川中島)
〔半頭額〕半頭(はんかう)または半頭剃(はんかうぞり)ともいふ。(「かう」は頭と書けど髮(かみ)の音便)。嬉遊笑覧巻一下、容儀の條に、「此男立の惡風俗は室町將軍の時より盛なり、其頃惡徒さまざま異風をして半頭などもあり、これは若き武士も多く有て古畫に見ゆ、常の奴あたまの中程に横に毛を剃殘して俗に是を障子と云、この障子の處まで剃りて、うしろの方は剃らで置く、これ半頭なり、今も武家の輕き者に此障子の髮を鬢と同じ長さにし、結込は常の樣也、是を短く切てはんかうと名付るもの有り、又半から剃とも云」。

はんがくによ　たとへば異國の石龍夫人・我朝の板額女の、力もよしや義秀が母の力を手覺の(五人兄弟)
〔板額女〕城資國の女、强力で射を能くす。建仁元年佐佐木盛綱に攻められ、克く戰つたが終に虜となつて鎌倉に至り、後に淺利義遠の妻となつたといふ。板額女は醜女であつた由傳ふれど、梅園日記には醜女でない由記してある。

***ばんがしら**　この御家中にて番頭伊達の與作(丹波與作)
〔番頭〕近習頭をいふ。主君の側近く勤める者の頭役である。

***ばんき**　東三條兼家公萬機を攝政し(關八州)　五天竺の君として萬機を御心に任せ給へども(釋迦)
〔萬機〕萬端の政務。尙書・皐陶謨に、「兢兢業業、一日萬機」とありて蔡沈の註に、「幾・微也、易曰惟幾也、故能成二天下之務一」。

半九郎(はんくらう)　昨日はわしが氣晴しとて、父樣(とつさま)と半四郎の心中狂言見たれども、餘の事は耳へも入らず、半九郎・お染の最期の臺詞(せりふ)此方(こち)の胸に皆こたへ、二人死ぬなら死にたいが、こな樣死んで下さりよか(卯月紅葉)
半九郎・お染のことが、寶事譜に見聞覺知の所說として記してある梗概を述べれば、若侍菊地半九郎が京都二條城普請奉行の附人として江戶から上り、滯在中に祇園の茶屋娘お染と馴染みを重ね、半九郎公用濟んで江戶に歸らねばならぬことになつたので、兩人互に別れを悲しみ、遂に寬永三年九月二十九日の夜鳥邊山で情死したといふ。但し卯月紅葉のここにいへるは、寶永三年の夏・道頓堀の岩井半四郎座にて上演した半九郎・お染の心中狂言をいうたのである。これは前述の事柄を更に脚色したものである。その狂言の梗概は、半九郎とお染といふ若い男女が情交密であつた。或日半九郎がお染を順禮の女であると僞つて、己が兄の篠塚孫太郎の內に引入れて共に宿つたが、軈て孫太郎は兩人の關係を嗅付けて怒り、お染を戶外に放逐した。半九郎その夜家を忍出で、お染と共に無常の山に行つて情死した。この時浮氣男の車屋七兵衞が茶屋女まつと心にもあらぬ情死を約して無常の山に來て、半九郎・お染の情死を見て俄に怖氣が付いて逃出したといふ仕組である。「しろごらう」をも見よ。

***はんくわい**　樊噲が力は楚兵七十萬の鋒先を挫き(三國志)　母の衣を賜はること樊噲が母衣の因緣、敵を討たん瑞相と(五人兄弟)　樊噲流は珍しからず、門を破るは日本の朝比奈流を見よやとて(天網島)(國性爺)
〔樊噲〕漢高祖の臣である。もと狗を屠るを業とした者で剛勇である。高祖が楚の項羽と鴻門に會した時、項莊劍を拔いて舞ひつつ隙を狙うて高祖を擊殺さうとした。樊噲營外にあつて主君の急を聞き、乃ち鐵盾を持ち營內に入らうとした。門衞の士が噲を止む。噲卽ち衞士を撞倒して入り帳下に立つ。高祖は噲が來てくれた爲に、虎口を免かれて事なきを得た。「楚兵七十萬」は、史記・項羽本紀に、「當二是時一項羽兵四十萬在二新豐鴻門一」と見えてゐる。曾我五人兄弟のここの文は、和漢三才圖會・卷之二十、兵器類、母衣(ほろ)の條に「母衣始二于漢樊噲一。出陣時母脫レ衣爲二餞別一。噲每レ戰被二衣於鎧一。重レ勇殊拔群、其後騎馬武者用レ之」と見えてゐる。
「樊噲流」とは、樊噲が門衞を撞倒して鴻門の營內に入つた勇烈な動作についていうたのである。史記・項羽本紀に、「噲卽帶レ劍擁レ盾入二軍門一、交戟之衞士欲レ止不レ內、樊噲側二其盾一以撞二衞士一仆レ地、噲遂入披レ帷西嚮立、瞋レ目視二項王一、頭髮上指、目眥盡裂」と見えてゐる。心中天網島のここの文は國性爺合戰・甚立軍法(九仙山)に、「樊噲流は珍しからず、門を破るは日本の朝比奈流を見よやとて、……左龍虎・右龍虎討取つて、難なく過ぐる月日の關や」、とあるを道具屋節(「だうぐや」を見よ)で語つたのである。

はんくわん　屋形の廻りを伴奐と立休らひてぞうかがひける(用明天皇)
〔伴奐〕閑あつて樂しむ貌。詩經・大雅に、「伴奐爾游矣、優游爾休矣」。

はんくわん　人に心をつけ顏に、戾られもせず般還と編笠傾けおはせしに(孕常盤)
〔般還〕進み難き貌。盤桓。禮記に、「般還而避」。

***ばんくわん**　ヤア無禮者狼藉者、下れ退れとざわめけば、返答もせず盤桓たり(關八州)
〔盤桓〕進み難き貌。般還。易・屯卦に、「初九盤桓、利レ居レ貞」、とありて本義に、「盤桓、難レ進之貌」と見えてゐる。

正月十四日太宰府より是を奉ける、是よりして年毎の節會に供すべきよし定置れたるなり、腹赤とはますと申魚の事なり」、巣林子のここの文は、「平賀」をもぢつて「はらか」というて、大内の公事に腹赤の贄を獻ずるによつて、「大内の御相伴」といひつづけたのである。

***はらから** 近江の兵衞が卯の花・山吹はらからの美女（天智天皇）

同じ腹の義。同胞、兄弟姉妹。

***はらまき** 斯波左衞門義將は腹卷に小具足固め（雪女）

〔腹卷〕鎧の一種。昔は腹卷の上に大鎧を着けたのであるから、袖無く、草摺も前三枚下り後四枚下りにして、能く身にしなふやうに作り、背で合せたもので、その際へ背板を入れて、後方から來る矢などを防いだ。後世になつては腹卷に鎧の袖をつけて鎧の代用とした。貞丈雜記に、「腹卷は背の方にて合せ、其すき間を背板にて塞ぐなり、背板なきもあり、今背わり具足など云ふなり、腹卷には袖なきものなり、袖付くる時は鎧の袖を取りて付くるものなり。近代は腹卷に袖あるもあり」、平治物語・待賢門の條に「紺の直垂に黑絲縅の腹卷に左右の小手さして」、源平盛衰記・宇治川合戰の條に「萠黃の腹卷に袖付けたり」。太平記・笠置軍の條に「いかさま鎧の下に腹卷か鎖かを重ねて着たれば」と見えてゐる。

はらみく ひよつと變ろな變らじの、其言の葉ではらみくや、連歌師の山様と（百日曾我） 身は憂き身のしなじなな心一つにはらみくの、胎が勇めば力なく、片眼で笑ひ片眼には涙を包む（重井筒）

〔孕句〕詩歌俳諧などの腹案句。百日曾我のこの文は、子を孕むの孕むに孕句をいひかけて、その緣語なる連歌師につづけたのである。心中重井筒のここの文に、思ひを心に含み苦しむといふに孕句をいひかけたのである。

はらみつげ 戀が積りて穗に現はれて、蕾が孕むはらみつげ（釋迦）

〔波羅密華〕波羅密樹の花。波羅密樹は東印度原産の常綠喬木で、高さ三丈餘に達し、葉は倒卵形の全邊葉で互生し、花は小形で數多相集つて楕圓形をなし、楕圓形の果實を結び食用となる。その心材を黃色の染料として僧衣を染めるに使用す。巣林子のこの文、穗・孕む・波羅密華と、Hの頭韻法の文飾である。

***ばらもんわう** 四方を睨付け怒りしは、千里の車に乘つたりし婆羅門王とも謂つべし（嵯峨天皇） 韋駄天・婆羅門天・鍾馗大臣・獅子王の荒れたる姿もかくやらん（門出八島）

〔婆羅門王〕婆羅門天ともいふ。梵語 Brahman. で、天地創造の神で諸神の王様であつたが、佛護神となられて梵天王といふ。「梵天」を見よ。

はらや つげの小櫛の髮水と、涙ははらはらはらやに落す露の身の、最期たしなむ夕化粧（關八州）

みづかねのかす即ち水銀粉に明礬鹽を和して作り、昔の白粉である。日本書紀通證卷三十五に、「水銀粉、和名波良夜、俗云伊勢於志呂伊、出二勢州射和一爲二精品一」。西鶴の胸算用卷一、伊勢海老は春の紅葉の條に、「鰹節一連、はらや一箱、折本の曆」。

ばらを 連立てば目に立つと、三人ばらばらばら緒の雪駄、足音なしにこそこそと（虎が磨）

〔散緒〕細い緒を數條集めて作つた鼻緒。散緒の雪駄は元祿頃流行したもので、好色一代男・卷三にも、「ばら緒の雪駄音高く」と見えてゐる。

***はり** 五人張に十五束からりと番ひ引絞り（津戸三郎）

〔張〕弓に何人張といふはその人數にて張られる强弓をいふ。「五人張」の弓とは、四人がかりで弓を撓め、一人が弦をかけて張る强弓をいふ。

はりくち 天秤針口輕めなし（艶狩）

〔針口〕天秤の中央支柱の上にある針で、輕重の平均を見るに用ひるもの。和漢三才圖會卷十五、藝器部、天平の條に、「天平今云二針口一。法馬今云二分銅一。即權錘之本也、衡之左右設レ盤、而法馬與レ物相二稱輕重一、針口平均不二翩躚一爲レ準、見二法馬員一知二幾等目一」。

はりこくら 腕や膈の力は御侍にも負け申さぬ、はりこくら踏みこくらは此膝骨の碎くるまで（百日曾我）

ぶちあひ（撲合）。「はり」は張で人を打つをいふ。「こくら」は「踏みこくら」「飛びこくら」「かけこくら」などいふ「こくら」であつて、「こくらべ」（事競）の略である。「はりこくら」は張事競で、即ち撲合ふことをいふ。

針ぼうじよ 片時休まぬ商賣でも、見ん事母親養うて、其の間に針ぼうじよ（持統天皇）

〔針幇助〕針仕事（即ち裁縫）の手傳ひ。

はりまなげ 櫓にかけてはりま投げ、あぐる團扇や扇の芝に（雪女）

相撲四十八手の一。敵手に二本差された時、其利手を逆に越して敵手の褌を引き、寄掛かるところで投げを打つをいふ。

***はる** 瀬多の久三がどうの時百切はつて見たれば（丹波與作） 年季のこの玉をたつた三百の抵當に張つて、既にどうへ取らるる處を（大織冠）

〔張〕張行の義。博奕にて物を賭けるをいふ。丹波與作に「三まいせい七つぢやと二文張りをつた」、とある「張りをる」は握つて居る意である。「さんまいせい」を見よ。

***はるなが** 裏白ゆづり葉ごまめでござんせの春永に、いよしもかはらぬ御見まで（夕霧）

〔春永〕春の日の長き頃。永日。俳諧歲時記栞草に、「春永。初春に三春の季の長きをさしていふ」。

***はるび** 冬海は潮疾し、はるびが延びて見えざふぞ、深海になつて鞍かやさんしめ給はぬかと呼はれば（最明寺殿）

「はらおび」（腹帶）を約めて「はろび」と云ひ、轉じて「はるび」といふ。馬の腹にまはして鞍をしめつける帶。和名抄に「纏」を「はらおび」とよみ、新撰字鏡に「鞦」を「はろび」とよみ、易林本・節用集に「腹帶」を「はるび」とよんである。ここの文は佐佐木梶原宇治川先陣を應用したことはいふまでもない。

***はれ** 駕籠が借りたい豐後の國まで乘せてたも、はれとでもない、爰は津の國池田、豐後までは海の上が二百里（百合若）

感動詞。ああ。橘守部編、俗語考「ああ」の條下に、「國によりて今もアア、ハレ、マア、とうち長息ことあり」。「はれとでもない」は、ああとんでもないの意。

はれい ヤアこれなる下郎めは、かかるはれいの庭なるに頬被は緩怠なり（出世景淸）

「はれ」（晴）に「い」の增加した語。元祿時代の

捐篋笥中一。恩情中道絶」と見えてゐる。謠曲・班女に、吉田少將と花子との上に、扇の事を作つてあるのも、班婕妤の秋扇の故事に據つたものである。「閨の扇は班女が云云」を見よ。

***はんぴ** 坂田の公時旅の役、半臂に腹卷・烏帽子懸けし（關八州）

〔半臂〕古昔、束帶の時、袍と下襲との間に着た兩袖のない短い衣。箋注倭名類聚抄に、「半臂。衣名也、按釋名有二半袖一、其袂半纔而施レ袖也、後世半臂殆其遺、事物紀原實錄曰、隋大業中內官多服二半臂一、除二却長袖一也、唐高宗減二其袖一、謂二之半臂一、今背子也」。

はんぷ 髭籠に籠めし祇園坊、はんぷ御贔負、弓も引き方靫の客といふもあり（酒呑童子）

〔半分〕一匁の半分（1/2）の義で、勤銀五分なる下位の遊女をいひ、この賣笑婦を「わけ」とも稱す。「わけ」を見よ。

はんべゑ 吳服屋の手代半兵衞は彼の池田屋の小菊にたんと金入なれば（氷朔日）

〔半兵衞〕傳奇作書附錄中の卷、心中情死人名錄の中に、小菊・半兵衞の名が載せてある。蓋し吳服屋の手代半兵衞は池田屋の遊女小菊と馴染み、主家の吳服物を取出して費用に充て、情交を續けてゐたが身のたちどころなきに至つて、遂に相共に刃に伏して情死した者である。

ぱんや 引かれ惱まされたわいなく、ぱんやの如くなりたるを引起して、兩腕ぐつと引拔き（唐船噺）

〔斑枝花〕熱帶地方に産し、木綿科に屬する木、高さ數丈に達し、若き莖は刺毛を有し、葉は掌狀複葉をなし五個の小葉より成り、花は白色で、長形の果實を結び、その中に絮毛あれど、この絮毛は絲を紡ぐに適しないで、專ら布團の中などに入れる。「ぱんやの如くなる」とは、身體甚しく疲勞して絮毛の如く手ごたへ無くなるをいふ。井原西鶴撰・日本永代藏卷四、祈る印の神の折敷の條に、「奥の寢間に入りて重ね蒲團釣夜着、ぱんやの括枕に身がこそばく」。和訓栞に、「ぱんや。斑枝花をいふ蠻語なり、云云」。

ばんやみやうり 佛神三寶・番屋冥利、何事も隱さず勿論他言致すまい（扇八景）

〔番屋冥利〕番屋者のいふ自誓の詞。「けいせいみやうが」の條を見よ。

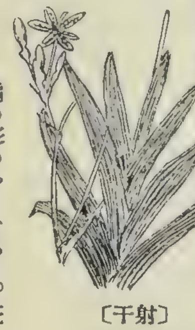
ひ

***ひ** 非の入りさうな事どもを言ひくろめたる情のほど（女腹切） 大概ひの入らぬ程の御用の間には合はせませう（鑓權三） 小松殿さへひを入れ給はぬことを、田夫文盲の和主等が嘲るは何事ぞ（五人兄弟）

〔非〕理ならぬこと。疵。非難。淮南子に、「蘧伯玉五十而知二四十九年非一」。

ひあふぎ 樅・南天に小手鞠に、いとし男とひあふぎの、扇のなりに末廣の（生玉）

〔射干〕草の名。葉は菖蒲に似て並び生じて檜扇の形のやうである。花



〔射干〕

は黄色で濃色の斑點がある。ここの文は「射干」に「日に逢ふ」をいひかけたのである。

ひうち 冬編笠も垢張りて、紙子の火打膝の皿、風吹き淩ぐ忍ぶ草（夕霧）

〔火打〕紙子などの袖の附根の腋下の所に縫ひ附ける火打鎌の形したる布切れをいふ。ここの文は、火打・膝と同じ頭韻語をいひつづけたのである。御伽名題紙衣（元文三年刊）に、「今着てゐる破れ紙子の古火打、うたねど向膝から火がふり」。「膝の皿」をも見よ。

***ひがいす** 彼のひがいすな小男をおのれが大きなくはびらでようも蹈みをつたな（曾根崎）

「ひがへす」「ひがやす」ともいふ。痩せ細つて弱弱しきをいふ。人を其姿によつて蟲または魚などに譬へていふ語が往々ある。「ひがいす」といふ語も痩せて見える魚の名「ひがい」から出たものであらう。山崎美成編・海錄・卷十九に、「ヒガイスと云ふ詞。淡海魚譜云、ヒガイ、漢名未だ詳ならず、鰷魚の類なり云云、（頭書、カマツカ、一名タケヲ、スナ）（フキ、ダンキボウ、漢名鯊魚なり）肉性味鯊魚に同じ、食法も又同じ、其形痩て骨高きを以て、土俗の諺に瘠人をヒガイスと云、この魚譜は渡邊奎輔作なり」。橘守部の俗語考に、「東國にて、ひはづに痩みたる小兒などをヒガイスと云ふ」。

ひがきづくり 沖に何待つ檜垣造り十四五反の廻船に、船頭舟子は襤褸着て（博多）

〔檜垣造〕兩舷に檜垣を組立てた大船をいふ。和漢船用集・卷四に、「檜垣。攝州大坂廻船問屋の仲間船を云、六七百石以上皆大船也、垣立の筋を檜垣にする故の名なり、今檜垣と呼て荷舟の名とす、すべて大廻し荷物を積むといへども、多く酒樽油樽類を積むゆゑ樽舟と云、是又荷舟の一法也」。

***ひかげ** ひかげの師匠を重んじて、半里餘を夫婦づれ夜な夜な見舞ふぞ殊勝なる（反魂香） 日蔭者の曾我が姉御勘氣者の末などと（會稽山）

〔日蔭〕世を憚りしのびて居ること。零落して蟄居すること。ときめくことの反對。

***びかしやか** 氣立の好いびかしやかせぬ太夫を賴む（酒呑童子） 心底が語りたさ傍へ寄れば、びかしやかと拗言のあるでう、安堂寺町とは何事ぢや（今宮） 好い男さへ稀なれば、少しよめなる女房のびかしやかぶるは科ならず（薩摩歌）

ぴんぴんと拗ること。つんつん。按ずるに（書言字考節用集に「閃閃」に「ヒカヒカ」「ヒラヒラ」の兩樣に振假名を附けてあるやうに）、「びかしやか」とも「びらしやら」（その條をも見よ）ともなつた語であらう。

ひがしやまどの 師匠市之進一流は東山殿より嫡傳、一子相傳の大事なれば（鑓權三）

〔東山殿〕足利將軍義政をいふ。義政が茶道に堪能であつたことは人の知る所である。

東山の大文字 毎年七月十六日東山の火もんじ、都では珍しからず（關八州）

毎年七月十六日東山如意か嶽の半腹に大の字形に薪を積み、日沒を待つて之を焚いたものである。黑川道祐撰・日次紀事（延寶年中成）七月十六日の條に、「今夜東山淨土寺山寺以レ新點二大字一、此字畫非二凡筆之所一レ及也、傳云室町家繁榮日爲二遠望之觀一使レ點レ之、故一條通爲二當面一依レ之、云二相國寺横川景三之所一レ筆

はんげ 同じ處に當歸まで、はんげはんげと季を重ね(隣際歌)

〔半夏〕「からすびしやく」ともいひ、畑地に自生する雜草で、地下に球形の塊莖を有し、その塊莖から一二莖を出し、莖頂に三小葉をつく、夏季別に莖を出して、その莖の帶黃紫色苞內に雄花雌花を穗狀に綴る。この種類に屬する「おほはんげ」は有毒草本である。

はんげしやう 芙蓉・林檎・長春・三白草(振袖始)

〔三白草〕「はんげしやう」といふ藥草の名。宿根草本にして高さ二三尺に達し、盛夏の候穗狀花序淡黃色の花を開く。



〔はんげしやう〕

はんげしやう 島川亂れてはらはらはら、額にはいつのはんげしやう、縛られし手の冷たさは(大經師)

〔半夏生〕夏至後十一日目に當る。曆日講釋に「夏の中分にて半夏といへる毒草生ずる節なり、この日までに農夫は田を植治むるなり、この日を過ぎて植うればみのらずといへり」。ここの文は大經師に緣ある曆上の語を用ひ、「いつの半夏生」に「いつもにかはる假粧」の意をいひかけたのである。

***はんごんかう** 今燒香に立つ煙反魂香と燻ゆるかや(反魂香) くゆる煙は反魂香、あしたは雲となる(西王母) 栴檀木や・はんごん樹、常盤の森の初紅葉(松風)

〔反魂香〕亡き人の魂魄を招き反すといふ靈香である。謠曲・花筐に、「李夫人の面影をしばらくここに招くべしとて、九華帳の中にして反魂香を燒き給ふ、夜ふけ人しづまり風すさまじく月秋なるに、それかと思ふ面影の有るか無きかにかげろへば」。「反魂樹」は反魂香を採る樹である。十州記に、「聚窟洲在二西海中州一、此土有二大樹一、似二楓一、名二反魂樹一、伐二取其樹一、於二玉釜中一煮二取汁一、更以二微火一熱、煎レ之如二黑錫一、今可レ丸、名二火聚精香一、亦名二震靈丸一矣」。

はんざふ はんざふ大王の後胤かづらゆひの親王の末孫(用明天皇)

〔半插〕古くは「はにざふ」と云つた。箋注倭名類聚抄に、「匜。波邇佐布、或說云、有レ柄半插二其內一、半在二其外一、故呼爲二半插一也、柄中有レ道、可三以注二水之器一也」と見えてゐる。盥の小なるを半插といふは其物の轉じたのである。齒黑めに用ゐる耳盥。「はんざふ大王」とは、久馬平が桶職なるによつて、桶職に緣ある詼諧な筆をつかつたのである。(范增といふ人名、大王といふ語が史記・項羽本紀の中に多く見えてゐるので、殊に滑稽である)。

***ばんしき** 琵琶取出し盤涉を平調にしらべかへ(蟬丸)

〔盤涉〕十二律の一。ここの文は盤涉調の略。盤涉の音を宮音(西洋音樂のD)として音階を構成するもの。

***ばんしやう** 番匠の棟梁木工の頭修理の頭(出世景清) 番匠箱を押開き、大鑿・手斧・鋸・鐺・鉋・屈竟一の手裏劍と、おつ取り打立つれば(出世景清)

〔番匠〕往時大工または鍛冶は大內へ勤番に出た故に番匠または番鍛冶というた。「番匠箱」は大工の道具箱。

ばんじやう 茶の湯・盤上・打囃子・男の藝一つでも(歌念佛)

〔盤上〕盤の上でなす遊戲、即ち圍碁・將棊・雙六の類をいふ。

***ばんじよう** おのれ萬乘の位を踐み(聖德太子)

〔萬乘〕天子をいふ。乘は兵車をいふ、天子は兵車萬を出すといふ意より天子をいふ。孟子・梁惠王上篇に、「萬乘之國」とありて趙註に、「萬乘。兵車萬乘、謂二天子一也」。

はんしらう 昨日は私が氣晴しとて、父樣と半四郞の心中狂言見たれども(卯月紅葉)

〔半四郞〕岩井半四郞のこと。「いはゐのはんしらう」を見よ。「半四郞の心中狂言」とは、大阪道頓堀・岩井半四郞座で寶永三年夏上演した鳥部山心中狂言をいうたのである。「はんくらう」「しろごらう」を見よ。

はんぞう 「はんざふ」を見よ。

***ばんた** 辻の番犬が夢食ふ、ばく勞町をぞ歸りける(淀鯉) どんと打つたる太鼓の番太(反魂香) 町の番太あわただしく、何事やらん御詮議とて新田殿・海野殿御出なりと觸れありく(百日曾我)

〔番太〕番太郞の略。江戶時代自身番に附屬した小使である。自身番は市中を警戒する爲に町每に一箇所づつの番所を設け、市民をして各番人を出して詰めしめたものである。番太は自身番の雜役に使役されて、夜廻りなどを勤めた非人の類で下賤の者である。

〔新橋姬物語(正德四年刊)所載〕



〔番太〕

はんちよ 「はんによ」を見よ。

***ばんてん** 名をばん天に輝さんと思ふ根性さげもせで(西王母) されば戰場に先をかけ名をばん天にあぐる者(大掛物)

〔萬天〕天下四方。太閤記に、「名を萬天に輝かせと」。

***ばんどう** 弓取の言ひも習はぬ駕籠舁詞、成り下りたり・だり・ばんどう、いつかのがれん・きり・がれん(西王母) そく・ばんどうに名の高きろうじ六藏(田村將軍)

駕籠舁などの符牒語であつて、八をいふ。「きり」「だり」の條を見よ。

ばんにやうめ 「女中のすきい靑梅云云」を見よ。

はんにやじふろくぜんじん(伊豆日記)

〔般若十六善神〕大般若の守護神である。即ち勇猛心地、救護一切、能救諸有、增益、師威猛、離一切怖畏、毘留博叉、能忍、提頭賴吒、歡喜、除一切障難、攝伏諸魔、吠室羅麽、降伏毒害、毘盧勒叉、拔除罪垢、以上十六の善神をいふ。

はんにやのめん まんまと思ひを晴さんと般若の面をかなぐり捨て(根元曾我)

〔般若面〕鬼女の面をいふ。蓋し女人は內心如二夜叉一の意を表したものである。大行寺筆記に、「都般若寺の上人はじめて般若の面を造る、女の心嫉妬深くして恐しとの意を形に寓したるなり、般若寺の上人作るが故に、俗間遂に之を般若の面と呼ぶに至る」といふことが記してある。

***はんによ** 通ひ路遠き獨居の、班女が閨の寂しさは、茶引草をも思ひ出し(用明天皇)(二枚繪) 閨の扇は班女が親骨にせかれ(歌念佛)

〔班女〕班婕妤をいふ。後漢・成帝の宮女であつたが、帝の寵愛衰へたのを悲んで怨歌行を作つた。その詩に、「新裂二齊紈素一、鮮潔如二霜雪一、裁爲二合歡扇一、團團似二明月一、出二入君懷袖一、動搖微風發、常恐秋節至、涼飆奪二炎熱一、棄二

*ひくわん　今は大津松本に旅人を宿す旅籠の營致し家子ひくわんも數多召遣ひ(傑靜)
〔被官〕其人について官職を被る義。附屬の官をいふ。轉じて奴婢をいふ。

ひけい　貴殿の御ひけいにて勅勘をゆるさるるも(反魂香)　空海の御ひけいにて御前を申し直さるると聞き(以呂波)
〔庇惠〕庇護惠恩。庇蔭。おかげ。堀河夜討(舞の本)上卷に「御馬なんどや候らん、御ひけいあれとぞ申しける」。

ひげい　四番には竹の下の孫八、これも同じく雉子の尾の長柄の鑓にて突止めしを、そのまま振らする鑓持の、ひげいしてこそ通りけれ(本領曾我)
辟睨であらう。睥睨と同じ。史記・魏其武安侯傳に、「魏其灌夫辟二睨兩宮間一云云」。

*鬚切膝丸　頼朝が重代ひげきり膝丸にても望めとある(百日曾我)　首を討つ餘りの鋒、風にも散る鬚を切り兩膝かけて落したること日本無雙の名劔、名は體をあらはせば則ち鬚切膝丸と名づくべし(嫗山姥)
源氏重代の名劍である。按ずるに鬚切膝丸につきては古書のいへる所まちまちである、即ち鬚切膝丸を一劍の名とし、或は膝丸を鎧の名とし、または鬚切と膝丸とを二劍の名としてある。嫗山姥の文によれば、巢林子は鬚切膝丸を一劍の名と見たのである。保元物語・卷一、新院爲義を召さるる條に、「過ぐる夜の夢に、重代相傳仕りて候、月かず、日かず、源太がうぶぎぬ、八龍、澤瀉、薄金、たてなし、膝丸と申して八領の鎧候が、辻風に吹かれて四方へ散ると見て侍る間、かたがた憚り存候、……此膝丸と申すは牛千頭が膝の皮を取り縅したりければ、牛の精や入りけむ常に現じて主をきらひけるなり」と見えてゐる。この膝丸は鎧の名である。平治物語・卷一、源氏勢汰の條に、「さて鬚切と申すは、八幡殿・貞任宗任を攻められし時、度度に生捕りもの十人の首を打つに、皆鬚ともに切られければ鬚切とは名づけたり、奥州の住人文壽といふ鍛冶が作なり」。平家物語・劍卷に、「抑日本に多く劍あり、所謂寶劍十柄劍・鬚切・膝丸・小鴉なり、鬚切・膝丸と申す二劍の由來を尋ぬれば、云云」。

*ひげこ　金絲の網をすきかけて鬚籠に籠めし祇園坊(酒呑童子)
〔鬚籠〕竹の端を編み殘して鬚のやうになつてゐる竹籠。源氏物語・浮舟の巻に、「ちひさきひげこを小松につけたる」。和訓栞に、「ひげこ。源氏・枕草紙・大和物語にみゆ、鬚籠なり、竹のかだまをいへり」。

ひげなが　鬚長なぜにぜせはん、もうゐどあぐるぞ(浦島)
〔鬚長〕海老をいふ、二對の觸角長くして鬚の如きによつての稱。

*ひけらかす　眉目のよい京上﨟をひけらかしに來たか(女夫池)
てらひしめす。誇りかに見せつける。好色五人女卷一、太鼓による獅子舞の條に、「色ある娘は母の親ひけらかして、花は見ずに見られに行く」。

ひごずゐき　平野莨蒻、ひしつむぎ、ひらのやゐきやう、肥後ずゐき(重井筒)
〔肥後芋莖〕肥後に產する芋莖をいふ、刺戟性あるを利用して淫桑となす。柳澤里恭撰・比止里禰」下卷、業毒の大事の條に、「ひごずゐき」を擧げて淫桑の名としてある。

ひこづる　今日から三日ひこづる摑んだ(壽門松)
「ひこづらふ」の約。拉しる。つかむ。文選に「擢」を「ひこづらふ」と訓み、名義抄に「攫ヒコヅラフ、ツカム」。巢林子のこの文は、彥介の頭顱語「ひこづる」を用ひ、更に「摑んだ」と異音同義語を重ねて、後の「くるくるりと硘らざ賭ぢや」といふに應じる。(古院本には「ひこずる」の假名になつてゐる)。

*ひごふ　只今非業に死なんとは思ひも寄らず(歌念佛)　親父殿にひごふの金を出さするが笑止さに、こなた贔屓でせつくぞや(女殺)
〔非業〕業因に非ざるをいふ。「非業の金」とは道ならぬ金の意で、與兵衞が放蕩の借金なれば、與兵衞の金で拂へば業因の金なれど、何にも知らぬ親父がこれを拂うては、親父は非業の金を拂ふことになる。

*ひこほでみ　この浦島と神代の彥火火出見の古と二筋かけて釣の緣(浦島)
〔彥火火出見〕瓊瓊杵尊の第三子である。一日兄火照命の釣具を借りて獵に出られたが、一魚も獲ないで釣竿を失はれた。兄の命より釣具を催促されて困り、海邊に彳んでゐられた時、鹽土神來つて尊を舟に乘せ海神の所に至つた。乃ち海神の女豐玉姬を娶られたこと古事記に見えてゐる。

*ひさうひさう　雲にものぼれ地にも入れ、非想非非想他化自在六欲天も高からず(日本武尊)　天に昇らばひさうひひさうてんまで追掛け(用明天皇)
〔非想非非想〕非想非非想天の略。有頂天とも云ひ、無色界の第四天即ち三界の最高所にある。太平記・卷十六、小貳與二菊地一合戰の條に、「其聲天に響きて非想非非想天までも聞えやすらんと夥し」。

*ひさかたの　空にまばゆき久方の光に映る我が影の(曾根崎)
「ひさかた」は「ひさごかた」の義で、太陽の形を喩へた(或は日差す方の義ともいふ)ことから、「ひさかたの」といふて日の枕詞となり、轉じて天、月、雨、雲などの天象の物に冠らせた詞である。「久方の光」はひさかたの日の光といふを略したのである。古今集・春部、紀友則の歌に、「ひさかたの光のどけき春の日に、しづ心なく花の散るらむ」。

ひざくら　因果の焰火櫻の、花の命も盛り一時(井筒)　家櫻伐りくべて火櫻になすぞ悲しき(最明寺殿)
〔緋櫻〕松岡玄達撰・櫻品に、「緋櫻。怡顏齋曰、或は火櫻に作る、緋も火も赤の義なり、千鶴小輪にて蘂長く垂さがる、開かざるときは甚紅也、開て色淡紅也、紫の菊に甚似たり、又是に似て白少し紅暈有ものを楊花園に楊貴妃と云、蓋し一類二種也」。巢林子のこの文は、謠曲・鉢の木に、「家櫻伐りくべて火櫻になすぞ悲しき」。火に緋櫻をいひかけたのである。

ひざくりげうま　これこそ五十三次を居ながら歩むひざ膝栗毛馬(丹波與作)
〔膝栗毛馬〕略して膝栗毛ともいふ、膝を以て栗毛馬に代へる義。長道中を徒歩すること。徒歩旅行。

*ひさつ　己れは最前關東の飛札を讀み(碁盤太平記)
〔飛札〕急報。飛脚に持たせて遣る急用書。

ひざつき　濫茶一服獻上と志し、千

也、又云二弘法大師之所レ書也、斯說近レ是、凡此月六日自レ伐二新木一至二點レ火、預二其事一者有二數千家一、今日申刻各擔下所二伐乾一之新木上、互携レ之登二山上一、凡大文字一畫長百五十間餘、其中間隔二五尺許一積二新木一把一、其數四百八十餘所各積レ薪、後待二日沒一同時點レ火、是亦洛陽之壯觀也、云云」。

***ひかへ** ながしの松は深綠、じつと控の若綠(聖德太子) 笑顔ばかりの梅櫻、流し控の睨合(孕常盤)

〔控〕立花の語。控枝をいふ。立花時勢粧・八に、「立花祕傳抄之五。控枝は七つの枝の外なり、出し所は請と流し枝との眞中より出す、請の方おもき時はおもき物を用ひ、かるき時はかるきを用ゆ、是左右の輕重をはかる物なり」。「しやうじん」の條の圖を見よ。

ひがへす 聞及うだよりひがへすな弱さうな風俗で(弘徽殿)

「ひがいす」を見よ。

ひがやす サアおのれ在所へ駕籠で送らせんと、ひがやすな與兵衞を引立て(卯月紅葉)

「ひがいす」を見よ。

***ひかるげんじ** 光源氏は敷島の歌道の傳授と聞えたる(雪女) 五條わたりの黄昏に光源もじ御げんもじ(大原問答) 雪の下の長明屋敷當代和歌に名を得たる、河內の守光行が光源氏の講釋場(最明寺殿)

〔光源氏〕源氏物語の主人公で、光君ともいひ、桐壺帝の御子であつて、あてやかに此世の人とも見えぬ程であつたによつて、相人めでて光君と名づけた。帝この皇子を源氏となすべくおきて給うたこと同書・桐壺の卷に見えてゐる。よつて源氏物語を光源氏物語ともいふ。

雪女五枚羽子板のこの文は、河海抄卷一、料簡の文中にも、「俊成卿六百番判詞にも、源氏みざる歌よみは遺恨の事なり、……尤も和歌の與造なるものなり」、とあるに據つたのである。

「光源もじ」は、光源氏の文字詞に見文字(「ごけん」を見よ)をいひかけたのである。「夕顔の花を遣る五條わたり云云」をも見よ。

最明寺殿百人上﨟のこの文にある長明は鴨長明のことである。長明は雪の下(その條を見よ)に居たことはないが、後鳥羽上皇に召されて和歌所の寄人となつた人。また河內守光行は、歌人源光行のことで、後鳥羽上皇の寵遇を被り正五位下に叙せられた人で、其著述に源氏物語を註釋した「水源抄」がある。近松がこれ等のことによつて書いた諧謔の筆である。またこの後の文に「佐野の源左衞門常世が屋敷は花ずき者の跡ぞとて」といへるも、謠曲・鉢の木に「某世にありし時は、鉢の木に好き數多木を集め持ちて候ひしを云云」、とあるに據つた諧謔の筆である。

***ひきこなす** 小姑をひきこなした、眼をおいておつしやれとは何ぢやの(持統天皇)

「ひきけなす」(引貶)の轉訛。

***ひきび** 三年を十二兩・一年半は勤める、殘つて半金六兩なれど、ひき日の何のとてつきり七兩は入りませう(氷朔日)

〔引日〕身揚りともいふ。遊女が勤めを休んだ日であつて、その日の揚錢を見積つて抱主への借金中に加へられたものである。「みあがり」を見よ。

***ひきふね** なうあれを見や、中から提灯引舟まじくら、禿が謠うて客送る(淀鯉) 引舟かぶろ遠慮なく、ムム踊歌に謠ふは婆のことか(壽門松) 戀路の闇の一寸先、見えぬ所を傍から見て、買手の御身もすたらず、女郎ものぼさぬやうに舵を取るが引舟(反魂香)

〔引舟〕太夫(遊女の最高位のもの、「たいふ」を見よ)に附隨する鹿戀女郎(「かこひ」を見よ)をいふ。蓋し太夫を大船に喩へ、大船の引つれる舟といふ義よりの名である。引舟は扇屋の夕霧が諸方から客に招かれるので、自分が座に出るまでに鹿戀女郎を揚屋へ遣つて座を持たせたより始つたものだといふ。日本好色名所鑑(元祿五年刊)に、「太夫揚錢五十八匁、外に引舟とてきはまつて鹿戀女郎一人づつ連るる故、此代十八匁合せて七十六匁」。俳諧通言に、「引舟。太夫に付、太夫は大船に表し、繋げる舟の心にて、それを廻す故引舟の名あり、勤はせず內證なり」。

***ひきめ** えたりやおうと矢叫の聲、蟇目は御殿の檜皮にとまり(艶狩)

〔蟇目〕「響きめ」を略した語。朴の木で造り、長さ四寸・太さ五寸まはり程で、中を空虛にし孔を三つまたは五つ穿ち、鏑のやうに鳴り響く鏃である。

ひきわたし 式三獻の本式の、まづ初獻は引渡し、老海鼠・海月・打鮑(國性爺後日)

〔引渡〕和訓栞に「類聚雜要に引渡とみゆ、大諸禮に本膳に盃三つすわりたるを引渡しといふなり、二の膳をうちみといふ、三の膳をわたりといふと見え、又引渡は草なり、眞を式三獻といふ、世におちつきといふ也とも見えたり、又うちみといふは鯉のうち身をつくりてもり、わたをいりといふは小鯉を頭をはなしすきて、わたをいりて上に置て出す也といへり」。

***びくにん** それに何ぢや、よい年して長屋へびくにん引入れ、日が暮れると濱ぜせり(夕霧) あたまわりに十文出し、びくにん呼んで念佛講(吉岡染)

「びくに」(比丘尼)に撥音「ん」の增加した語。安原貞室撰・かた言(慶安三年刊)に、「比丘尼をびくにん」。「うたびくに」を見よ。

***ひぐらし** つづりさせてふきりぎりす、ひぐらし憎や我ならで(弘徽殿)

〔茅蜩〕蟬の一種で、小さく其色靑黑である。夕暮方にカナカナと鳴くによつて「かなかな」ともいふ。和名抄に、「爾雅註云、茅蜩一名蟪、和名比久良之、小靑蟬也」。

ひぐらし 落ち人の身に業平は、墨の衣に投頭巾、見る目忍べば日ぐらしや、人を勸めの歌念佛、修業の僧に身を窶し(井筒)

〔日暮〕日の暮れに、日暮坊をいひかけたのである。說經節の太夫は代代日暮某と名乘るによつて日暮坊といひ、また歌念佛(その條を見よ)は說經節などを語つたものである。井原西鶴撰・日本永代藏(貞享五年刊)卷三、世はぬき取の觀音の眼の條に、「歌念佛の日暮しと云は、むかし伏見の御上代の時、諸大名の御成門軒をならべてかかやき、……、彼京の鉦たたき盂蘭盆の比勸進にまはりしが、……、それに心をとられ、是に目をよろこばし、實秋の日のならひにて、はや暮れておどろき、願以此功德空袋かたげて都に歸るを見て、人申ならはして日暮坊と、其するゐ今に名たかし」。

三年刊)に、「物の賤しく下女しう侍ることをひすましといふ言葉侍るなり、ここのひすいぞ、ひすきぞといふもひすましきの心なるべきか、萬事を我身の爲とのみ欲欲しきは賤しき者のくせなれば、ひすましきにかよひ侍るか」。俚言集覽に、「ひずい。高知にて狡猾なるをいふ」。「ひずい」「ひずかし」「ひずかしま」「ひすらこい」「ひすらい」「ひすまし」など皆同類の語である。

ひずかし 我子の如き仁愛に似ぬ母心ひずかしに、繼子繼嫁孫君も憎や憎やと押出して(賀古教信) 一の宮逆目の王子は人相野人、御心ひずかしに國王の器量ましまされば(天智天皇)

〔醫〕「ひずい」を見よ。

ひずめる かの新七のいきずりめ、お爲顔で旦那をひずめ、家久しい我等を押しのけ(淀鯉) 此三百の錢のらめに遣るのか、常常に身をひずめ儉約して、あいつに遣るは淵へ捨てるも同前(女殺)

〔歪〕ゆがめる義より轉じて、さいなめる。束縛する。不自由を忍び冗費を省いて家計を引締める。

ひすゐ 翡翠のおほづと(國性爺) 翡翠の下髮はつと亂れ(松風)

〔翡翠〕翡はやませみ、燕に似て羽の色青黃である。翠はかはぜみ、羽の色青黑で光澤がある。よつて以て頭髮のつやつやと黑く麗はしきに喩ふ。みどりの黑髮の意である。源平盛衰記・卷四十三、安德天皇御入水の條に、「女院は……翡翠の御髮よりはじめて皆しほたれおはしますぞ御いたはしき」。

びせいかう 赤地の錦の着長に美精好の大口(孕常盤) 水干の衣紋かきつくろひ、びせいかうの長絹(最明寺殿)

〔美精好〕美精好織の略。經緯ともに練絲にし、或は緯を生絲で織つた美しい織物。多く袴地とする。(序云、ここの文に着長とあるは直垂を誤つたものである。「きせなが」を見よ)。

備前清光 刀押取り、アツア是は親の讓りの備前清光(女夫池)

備前清光作の刀。古今鍛冶備考に、初代清光は備前長船の刀匠で嘉吉頃の人なる由見ゆ。

備前國光 市之進が嗜む備前國光、運こそ來れ我妻に、この世の緣はうす柿の(鑓權三)

備前國光作の刀。國光は備前の刀匠で建武以前の人だともいひ、文永頃の人だともいふ。

びそ 下部の賤がびそのなき賤機帶の片結び(天神記)

びさう(美相)の約訛。美しい相好。源氏物語・帚木に「びさうなき家刀自」。運歩色葉に「美相ビサウ」。

ひそうひひそう

「ひさうひひさう」を見よ。

ひぞり 心すわらずぶりしやりの、いぶりぶり獨樂そりやひぞり獨樂、又打合ひて口說獨樂(松風) 此處も情の名にし負ふ里は乳守に幾萬人、びぞり大盡粹な客、夜毎日毎に大騷ぎ(三國志) きさにすれごとれすりごと、ひぞりし直し(今宮)

「乾反」の義。「ひぞる」の轉成名詞。物の乾きて反ること。轉じてすねること。立腹。西澤與志撰・茶傾腹立顏(寶永五年刊)に、「ちやけいひぞりがほ」と振假名が附けてある。近頃河原の達引(淨瑠璃)堀川の段に、「ヤコレコレ猩樣、足で盃をさすは餘りつれない、それでは嫁御樣が戴かんせぬわいなう、ひぞらずとほんまにさしてやらんせ」。「ひぞる」を反る意に用ゐた例は、姫藏大黑柱(脚本・元祿頃刊)に、「人は年が寄れば腰が屈むものぢやけれども、俺は屈む事はならうて後へひぞるやうな」。和訓栞に、「ひぞる。乾反の義、板などにいひしより今は人の事にも云俗語となれり」。

ひたかぶと 直兜五百餘騎(出世景清) 直兜五十騎ばかり引率し(雪女)

〔直兜〕一同甲冑を帶してゐること。

ひたき ゆらぐか玉のをながき鳥、胸のひたきに立つけぶり(娥)

〔鶲〕燕雀類に屬する鳥。雀ほどの大さであつて能く囀る。この鳥背翅赤色に黑斑あるによつて、火燒の義によつた名であるといふ。

ひたたれ 直垂の紐引ちぎり引ちぎりふはと脫いで捨てければ、下に墨染五條の袈裟(兼好)

〔直垂〕もとは無位無官の者の服であつたが、兄利義滿の頃から堂上の者も着るやうになつた。武家のももとは袖括り(後には露ばかり)があり、襟に長い紐が附いて結ぶやうにし、袴は長袴に定まつてゐた。

ひたたれ 赤地の錦の直垂中黑の鎧は敵の大將義貞(女楠) 淸盛は紺の直垂櫨匂の鎧(鎌田)

〔直垂〕鎧直垂の略。鎧の下に着る衣で、常の直垂よりは幅も狹く長も短く簡便につくり、袴も短くし、袴の裾も袖も括るやうにしてある。束帶色目に、「袖と袴の裾を結びてその上に鎧を着す、甲冑の時は錦或は金襴等也」と見えてゐる。

ひだち 一言一句人に非太刀を打たれぬ番長、恥辱の勅諚蒙るは己れ一人の所業(三國志)

〔非太刀〕太刀打の法に外れたこと。「非太刀を打つ」とは不都合を攻撃する、卽ち非難することをいひ、往時武士の間の諺である。傾城難波土產(寶永七年刊)卷二、懸賫の起請文の條に、「われらはその返報なり、さういふひだちは打たれますまいと、鼻を動かさずに申せば」。

ひたちおび 常陸帶の緣定めて鹿島の神の結び給ひし神祕あり(持統天皇) 寄つてかかつて直垂や、常陸帶觧く紐を觧く(孕常盤)

〔常陸帶〕昔正月十四日常陸國鹿島神社の祭禮に男女各意中の人の名を帶に書いて神に供へ、巫覡がこれを結んで願つを受けて婚を占つたといふ。よつて常陸帶を男女の緣わたしにいふ。奧儀抄に、「常陸國鹿島明神の祭の日、彼所の女緣を占はんとて苧を帶にして、一つには懸想する男の名を書き、一つには我名を書きて、神前に祝詞を申して、帶を折返して名をば隱し末を木に結び合するなり、惡かるべき緣なれば離れ離れに結ばれ、善かるべきには掛帶のやうに結びつながる、それを肩にかけて歸るとぞ」。

ひたちこはぎ 照手の姫のやつれぐさ、常陸こはぎも夫ゆゑ、身を旅籠屋の水だなの(反魂香)

〔常陸小萩〕常流小栗判官の中に出てゐる人物である。假作人名部「てるてのひめ」を見よ。

常陸の衆は帶で知る (丹波與作)

常陸帶(その條を見よ)といふがあるによつて云うた洒落である。

ひだのじよう 包む袂のひだの掾、二つ番の手妻にも、かかるなりふ

の利休が手前を頼みこれまで召具し候と、御膝突を奉れば(三國志)

〔膝突〕半疊の薦であつて、膝を突いて坐する敷物。安齋隨筆・卷四に、「膝突。たとへば半疊の如くなる物なり、公事を行はるる日大臣上卿などの假に膝を突きて坐する敷物なり、古書にヒザツキに軾の字を用ゐたり、然れども誤なり、字彙に軾・施職切釋車前横木可レ憑者とあり、此字をヒザツキに用ふるは誤なれども久しく用ひ來れり云云」。

ひざのさら　紙子の火打膝の皿、風吹き淩ぐ忍ぶ草(夕霧)　膝の皿に火がついたらば御しんだいの妨げ(重井筒)

〔膝皿〕膝蓋骨。俚言集覽、膝蓋の條に、「阿波太古、愚案、今膝皿と云、蓋・瓦皆カハラと訓り、即皿の意也」。

ひさまつ　油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松は、いつの時雨の一雫(今宮)

〔久松〕「おそめ」を見よ。

ひざまる　「ひげきりひざまろ」を見よ。

ひし　頼もしだてが身のひしで、騙されさんしたものなれども(曾根崎)　いとしい人の身のひし、一門中の憎しみを受け、そなたを鬼よ蛇よといふ(重井筒)　御馳走が身のひしや、酒盛つて尻蹈まれた(今宮)　切つて誰が爲、遣手には科はなし、腹立つる程我が子のひしと急き立つ心押しづめ(酒呑童子)

ひしぐ(拉・壓)義。碎けること。破滅。河内名所鑑(延寶七年刊)五の卷に、「おのづから子の身のひしと成りぬべし。親はふからの(深野)の池に遊ばば」。伊達娘五人男(寶永四年刊)卷二に、「疊算まで幾度も丁にあたるは瀧川が身のひしげ算」、とある「ひしげ」は「ひし」を活用した語である。「御馳走が身のひしや」とあるは、「ひし(拉)や」に「菱屋」をいひかけたのである。

***ひじ**　何ぞ一種で非時なせい(薩摩歌)　齋にこそ外れたれ、非時を食ふと飛掛り(國性爺)

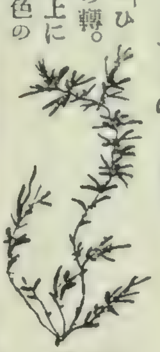
〔非時〕非時食の略。午後に食を取るをいふ。禪林象器箋に、「老學菴筆記云、佛經戒二比丘非時食一、蓋其法過レ午則不レ食也、而蜀僧招レ客草食、謂二之非時一」。國性爺合戰のこの文は、非時を食ふに李海方を殺すをきかせたのである。

ひしぎ　神樂をさまる太鼓の頭、笛のひしぎに若宮は、わつとばかりに御目を見つめ、御息絶え入り給ひけり(松風)

神樂・能樂などで、出端・次第・一聲等の鼓を打ち出す懸りの相圖、または舞の轉換句切の時などに、鋭く吹く笛の音をいふ、蓋しその音強烈なるによつて壓ぐ義の名であらう。「ひしる」をも見よ。俚言集覽に「ひしぎ。笛の音にあり」。(松風松雨束帶鑑のここの文に、「ひしぎ」を「ひびき」(響)とせる本あるは、古院本の字形相似より誤つたものであらう)。

***ひじきも**　かづく刈藻は何何ぞ、歌によまれしひじき藻や、かだめ甘海苔春も又(出世景清)　海人のみるめのひじきもの(大織冠)

〔鹿尾菜〕「ひずきも」の轉。海中の岩上に生じる褐色の藻で食用となる。和名抄に、「鹿尾菜。比須木毛」。伊勢物語の歌に、「思あらば葎の宿にねもしなむ、ひじきものには袖をしつつも」。



〔ひじきも〕

ひしこ　ひよこ、ひしこ、ひともじ(重井筒)

〔鯷魚〕京阪地方にて、小鰯を鹽漬にしたものをいふ。饅頭屋本・節用集に、「鯷魚」。田宮仲宣撰・徒然隨筆に、「京攝にて小さき鰯を鹽に漬したるをひしこと云、東都にては小さき鰯の生なる物をひしこと云、又は鹽ひしこといへるもの古よりある事久し、これは醢の謬訛か、鹽びしこより鰯びしこと轉じ、東都のひしこは干子より轉ぜし名歟」。

ひしつむぎ　平野菎蒻、ひしつむぎ、ひらのやゑきやう、肥後芋莖(重井筒)

〔菱紬〕甲斐國より產出する紬の一種の名。日本鹿子(元祿四年刊)に、甲斐國の產物を擧げたる中に菱細が載せてある。好色伊勢物語(貞享三年刊)に、「好色男ありけり、下女しけるものの許にひしつむぎといふ物をやるとて、思ひあらば六齋宿にねもしなん、ひしつむぎをば袖にしつつも」とありて、「ひしつむぎ。絹なり、さもしき女にはかかる物に限らず、帶、さしぐし、帷子など戀のよすがに送る常の習ひなり」と見えてゐる。

***ひしめく**　請人に預けての括上げてとひしめけば(大經師)　所詮うぬめを搦めて瀬蹈をさせんとひしめけども(佐佐木)

〔犇〕ひしひしと音立てて迫め騷ぐ。書言字考節用集に、「閧」。

びしやもんだち　これ見よ和田の新發意源秀といふ御所柿と、覆面を取つて捨て毘沙門立にすつくと立ち(女楠)

〔毘沙門立〕毘沙門天王の立てる姿勢をいひ、仁王立と同じ類の語である。

びしやらほろみ　萎れ出でさせ給ひける、びしやらほろみぞ哀れなる(三國志)

びつしやり濡れてほろほろと涙こぼれる身といふを、朝鮮語めかした諧謔であらう。

***ひじり**　唐のひじりの宣く、色の德には隣あり(重井筒)　御法の敵と身はなつて、今このひじりも同じ恨みに苦患を見せんと(天神記)

〔聖〕萬葉集に「日知」と書き、日の如く知る義といふ。聖人。聖僧をいひ、轉じて僧をいふ。「唐のひじり」とは支那の聖人孔子をいひ、「色の德云云」はその條を見よ。

ひしる　男ひでりはゆくまいに、扨恥知らずやとひしるにぞ、姫君そぞろに恐ろしく(大覺)

高聲に叫ぶ。(蓋し壓の義であらう)。「ひしぎ」(その條を見よ)の「ひし」も、「ひしる」の「ひし」も同じ語である。散木集・雜上部に、「山に遊びあるきけるに、鹿のひしる聲のしければ、「かせかけてひしる牡鹿の聲聞けば、ねらふわが身ぞ遠ざかりぬる」」。

ひじんさう　(嫗山姥)

〔美人草〕虞美人草の略。麗春ともいひ、「ひなげし」のこと。

ひすい　此ひすい人心、かたりのあるまいものでもなし(稚狩)

〔黠〕心のねぢけたるをいふ。よつてまた狡猾なるをいひ、貪欲鄙劣なるをいふ。和訓栞に、「ひすかしま。黠字をよめり、……今俗ひすしといふ此義なるべし、忞嫪の義といへるはいかが侍らん」。安原貞室撰・かた言(慶安

***ひつしよなし**　口惜涙ひつしよなく、梯子(はしご)とんとん踏鳴し駈下りて(萬年草)　積る思のあら糠をたつた一夜の徒(とほし)にかけて貰ひたい、からうす様と抱付けばひつしよなく振放し(日本武尊)　早乙女ども御前へ参れと呼ばはれば、ひつしよなり振早乙女の手足も土に平伏せり(女護島)

「ひそなし」(鷄無)の訛。和訓栞に「鷄の字は多く謎辭に用ゐたり」と見えてゐる。憚らない。遠慮會釋もない。容赦もない。伊賀越道中雙六、郡山屋舗の段に、「誰ぞ羽織持つて來いと言はぬ先から心得て、勝手覺えし女房の德、氣轉利かして後から著せる羽織をひつしよなく、エエ子供ではないわい、差出女め彼方へ行けと」。現今も福井縣遠敷郡地方では、「ひつしよけない」を容赦ないの意に用ゐてゐる。

躍(ひつ)す　「出(い)づるに譬し云云」を見よ。

ひつそばむ　神佛のあてがひかと戴き戴きひつそばめ、立つて見ても後より又誰ぞ來るやうで(淀鯉)

「ひきそばむ」(引側)の音便。側へ引寄せて隠す。源氏物語・松風の巻に、「ひきそばめて急ぎ書き給ふはかしこへなめり、そばめこまやかに見ゆ」。

ひつたきや　名のみ異る西天竺、呉竹をしちといひ、ひつたきやとは青柳の、翠(みどり)は同じいろはにほへと(釋迦)

梵語 Hitaka, (= A child, the young of any animal) 小兒の義。近松のこの文は、鶵(ひたき)をきかせて、「ひつたきや」が「みどり兒」の義なるによつて、みどりを翠に取つて、「青柳の翠」といひつづけたのである。なほこの文に「呉竹をしちといひ」とある「しち」は、梵語 yashti, (竿の義) の ya の脱落した語であらう。

***ひつたり**　思ふお敵(てき)なれば逃(のが)さじと、飛びかかりひつたりわるじやれ、ごんせと止めたる女景清(天網島)

すき間なく合ふさまにいふ副詞。ここの文は、客に飛びかかりひつたり寄り著き、惡洒落として揚屋へごされと引き止めた意。謠曲・景清の文句を應用して、客を三保谷、仲居を女景清(きよ)といひなしたのである。

備中鍬(びつちゆうぐは)　(國性爺)

熊手鍬に似、三本或は四本の長い鐵齒があつて、土を掘返し水田などに用ゐる。



(備中鍬)

ひつぱりだこ　道具が下れば嫁入がある、嫁入があれば淸十郎は引張凧、何と此處が談合(歌念佛)　たとへ淸十郎引張凧にならうが鹽鮭(からさけ)にならうが、世が泥の海になるとても一文も銀(かね)は無い(歌念佛)

[引張凧]磔刑のこと。その形の引張凧に似てゐるよりいふ。

ひづめる　「ひずめる」を見よ。

***ひとあきびと**　人商人猿島の惣太とて(隅田川)

[人商人]他人の子を奪ひ去つて賣買する惡漢。誘拐人。謠曲・隅田川に、「獨子を人商人に誘はれて」。

***ひとおき**　人置の緣を求め、今日始めてこの里に唐琴といふ浮名を取る(蛙合戰)

[人置]人置嚊(かか)をいひ、遊女奉公の口入を業とする女。嬉遊笑覽或問附錄に「その頃(元祿)人置かかといへる者あり、今いふ女衒なり、これは年よれる女二人してありけるよし也云云」。

ひとかしら　あれへ大名のひとかしら・瓜核顔の旦那殿、東寺から出た人さうな(丹波與作)

[一頭]瓜十個を一頭といふにより、十人ばかり連立つたのを一頭といふて瓜の縁語を用ひ、瓜核顔とかきつづけたのである。雍州府志(貞享三年刊)卷六、土産門上・雜菜部に、「倭俗於レ瓜十個謂二一頭一」。ここの文につきては「とうじ」を見よ。

ひときのまつ　地名部「すまのひときのまつ」を見よ。

***一言主の神(ひとことぬしのかみ)**　この葛城は一言主の神の靈地(浦島)

大和國葛城山葛城神社の祭神である。舊事本紀に、「葛木一言主神座二倭國葛上郡一、是素盞嗚命神子也矣」。

ひとこぶし　さりながら殿には今一こぶしあそばしお入あるど(賽庚申)

[一拳]一度鷹を放つこと。鷹匠の拳から鷹を放つ故に拳といふ。

ひとそばえ　口で言へば人そばえ、先立つて埒あけうと、取付く脇差おし止め(丹波與作)

人の側へ寄付いてあまえること。「そばえ」は側(そば)を活用した語で、側に寄付いて戲れるをいふ。枕草紙に、「えもいはず興ありと思ひたるを、そばえたる小舍人童などに引取られ泣くもをかし」。

***ひとだま**　あれこそは人魂よ、今宵死するは我のみと思ひしに先立つ人もありしよな(曾根崎心中)

[人魂]人の死する時まづ靈魂がその身體から脫出して虚空に飛去るものをいふ。蓋し燐火の空を飛ぶを人魂と信じたものである。和訓栞に、「ひとだま。人魂也、人輪死則魂入二於地一、隨郎掘レ之狀如二甦炭一」。更科日記に、「この曉にいみじくおほきなる人魂のたちて京ざまへなむ來ぬる」。

***ひとつがき**　半切紙に一つ書(がき)、十匁一分五厘、野崎の割付、五月三日とばかりにて(女殺)　臘月にも見違へぬ吾妻が筆、仔細らしい一つがき(壽門松)

[一書]要件のみを一箇條にして書くこと。普通に一つ書といへば一つ何何と箇條書(がき)にすることをいふ。

***ひとつがひ**　一つ買さへ知らぬ身で、及ばぬ雲のかけ橋の、端傾城でも廻さんとは眞に厚い面(つら)の皮(虎が磨)　身も昔は長う短うどらをさいて、殿だ大盡だと言はれても釣屋形にぶち乘つて、一つ買なもした者でおんぢやり申した(加增曾我)

[一買]一粒撰を買ひ占める義、全盛の遊女の一人を買ひ占めること。西澤與志撰・女大名丹前能(元祿十五年刊)五之卷に、「我も花の都で傾城の一つ買もした男、已れ如きの安傾城につもられては一分立たず」。

一(ひと)つ成(な)る口(くち)　添な重ねし雛男(ひなをとこ)、一つ成る口ももの酒(曾根崎)

酒を杯に一杯位は飲める口。ここの文は「一つ」の縁から百(もも)をいひ、「桃の酒にいひかけ

りうつすとも、この思をばよも知らじ（重井筒）

〔飛彈掾〕山本飛彈掾源清賢をいひ、手妻人形操の名人である。棠大門屋舗（寶永二年刊）に、「からくり細工はおやま五郎兵衞其子山本彌三五郎これを傳へて無雙の名人となる、一筋の絲を以て大山を動かせ、小刀一本を以て形ある物を作りてこれをはたらかしむ、別て水學の術を得、水中に入て水中より出るに衣服を濡さず、纔なる挾箱に舟を仕込み川水に浮けて用を達す、此儀叡聞に達し禁庭に於て細工の術を叡覽に備へ、則細工人に仰付けられ山本飛彈掾源清賢と受領し、翌年雨龍の細工を差上げ河内掾に重官任ぜらる」。巣林子のこの文は、袂の襞積に飛騨掾をかけたのである。

***ひたひたれ**　懐より髮剃一挺取出し、これもかか様の額たれとて讓りなり（卯月紅葉）　あんまりよい月影に額たれうと思うてと、紛らかせば打笑ひ（重井筒）

〔額垂〕額を剃る小形な剃刀をいふ。「たれ」は剃の義、剃といふを忌んで垂というたので、元服の時髮をそるといふを忌んで髮をはやすといひ、臍緒をきるといふを忌んで、臍緒をつぐといふの類である。「額たれう」は額剃らうの意。女重寶記（元祿十五年刊）卷一、大和言葉の條に、「かみそりはひたけたれ」。

額に毛抜も當てる者　命を捨つるは世の習ひ、それに悔みは殘られども、額に毛抜もあてる者、見世の前で晝日中、町の衆・道行く人・友朋輩も見るぞかし、丁稚小者をするやうに曲もない打擲き（氷朔日）　生臭い男呼はりおけおけ置いてくれ、額に毛抜も當てる者がいとしぼげに女郎衆いぢつて何の男（壽門松）

額に生ずる毛髮を鑷で拔取つて美容をつくる若者。この當時の若者は額の髮の生際を角張つて剃込み（卽ち角前髮にし）、鑷で髮を拔いて額をつくつたものである。元祿曾我（元祿十五年刊）卷一に、「額にけぬきを當て、鬢に伽羅を引くほどの若者ども打寄り」。（女は眉毛をも鑷で拔取つたものである。分里艷行脚（正德六年刊）五之卷に、「例の夜叉どの笑の眉に鑷もあてず、ならず齒の髮につげの小櫛もささで」と見えてゐる）。

額に角も入れた者　在所へ戻せ去せとて、額に角も入れた者、丁稚小者をいふ如く、内の手代や庭寶の侮り者になしはてて（卯月紅葉）

角前髮の若者をいふ。「額に毛拔もあてる男」「角前髮」を見よ。世間子息氣質（正德五年刊）卷之三、簡略は世帶藥聞き過ぎた始末形氣の條に、「角入れぬ先に暇を出せと、此度は主人方から暇をたまはり」。

びたひらなか　親惣左衛門吟味強く、京大阪ではびたひらなか我物で我儘ならず（博多）

〔鐚片半〕鐚錢の一錢半錢。「もじひらなか」（その條を見よ）ともいふ。「ひらなか」の「ひら」は、片または枚の意で、薄く平たいものをいふ物數稱呼詞。「なか」はなかは卽ち半分をいふ。

***ひだるし**　ひだるくば木の實でも拾うて食へ（浦島）

乾怠の義であらう。饑ゑるをいふ。ひもじ。西鶴撰・本朝二十不孝・卷一、慝改て噺の點取の條に、「一日も食はねば饑し」。和訓栞に、「ひだるし。武備志に肚餓の字を譯せり、腹の乾たる意なるべし」。

びちうてん　毗紐天・加比羅天（用明天皇）　三目八臂摩醯首羅天・

〔毘紐天〕梵語 Visnu. 那羅延天又は自在天ともいひ、智度論・二に、「四臂捉レ貝持レ輪騎二金翅鳥一」と見え、玄應音義・二十三に、「此天有二大威德一、乘二金翅鳥一行、行時有レ輪以爲二前導一、欲レ破則彼無レ有二能當一也」と見えてゐる。

ひぢがさ　「われはまた賤の男が云云」を見よ。

ひちやうばう　費長房は鶴に乘り（國性爺後日）

〔費長房〕東漢時代汝南の人。仙翁に遇うて仙術を學び、辭し去る時に竹杖に乘つて歸つたといふ。下學集に、「費長房。……長房乘レ杖須臾來歸、自謂去レ家適經二旬日一、已十餘年矣、卽以レ杖投レ陂、顧視則龍也」。ここの文に「鶴に乘り」とあるは「杖に乘り」の誤であらう。

ひづ　袂露けくひぢまさる（盛久）　身は村雨に袖ひぢて涙にしぼる頰冠（酒呑童子）

〔漬〕浸す。濡れる。伊勢物語に、「淺みこそ袖は漬らめ……」。古今集・春上の部の歌に、「袖ひぢてむすびし水のこほれるを云云」。

***ひつぎ**　藤氏の御方に日嗣の玉の男子親王やすやす降誕あり（松風）

〔日嗣〕天皇の御位を申し奉る語。蓋しその先は天神より出でて日神とあがめ奉ることなれば、その日神の位を嗣ぎ給ふ意である。「日嗣の玉の男子親王」は儲君のことである。

ひつこき髮　ひつこき髮の二つ折また二つ櫛しどもなく、物體こぼす道中に雪の素足の花蹈むや（三世相）

「ひつこき」は引扱である。ひつこき髮の二つ折とは、梳いた頭髮を髻・髱を出さないでその儘二つ折にした結髮である。これに櫛を二枚挿いたもので、この當時の結髮ぶりである。

ひつしき　牛若が引導にて成佛せよと拜打ち、頭よりひつしきまで左手右手へぞ捌けける（烏帽子折）

〔引敷〕腰當をいひ、敷皮の如く作つた毛皮（虎皮など）に緒を附け、後腰に當てて緒を結ぶもの。

未の初春　昔暦新暦當年未の初春（大經師）

「當年未の初春」とあるは、大經師昔暦の上演された年を云うたものであらう。而るに外題年鑑にこの上演を寶永三年九月としてある。寶永三年は丙戌に當り、未の歳ではない、その前後の未の年は元祿十六年と正德五年とである。大經師昔暦の圓熟せる文章や、またおさん・茂兵衞の三十三年忌が正德五年に當る點より考察して、この作の上演は正德五年と見るべきであらう。

びつしやりぼん　我等がしよざいびつしやりぼん、御法度を背きしはいつそてんぽの皮巾着、お根付衆に告められ括られました（女楠）

「ひしやりほん」ともいひ、叩き附けるさま、又は動きのとれぬさまにいふ。好色一代女・一の卷に、「扇……この頭つきと、びつしやりほんと叩き立ちにして行く」。曾我虎が磨に、「集禮をきんとにせがまれて、ひしやりほんとこんりはつる」。壽門松・上卷に、「頰がまちびつしやりとみしらせ」。巣林子のこの文は、「てんぽの皮」（その條を見よ）に「皮巾着」をいひかけ、皮巾着の緣より「お根付」（墜子）というて、「あ目付」をもぢつたのである。

***ひねりもち** 又捻餅食ひたいか（會稽山） 捻餅の味忘れな（會稽山）

〔捻餅〕捻り抓ることをいふ。蓋し餅を捻るに喩へた語である。

ひのあし まだ日の脚も南へと、駕籠の息杖息つがず、走らせてこそ急ぎけれ（卯月紅葉）

〔日脚〕太陽の運行を脚あつて行くに見立てた語。日。太陽の光。和訓栞に、「蜻蛉日記・源氏物語に日のあしと見えたり、揚用脩が書に諺語に日脚射レ空金樓直ともいへり」。

火の印 覽字の祕文を繰掛け繰掛け、火の印を結んで祈りければ、空に一點の雲もなく（嵯峨天皇）

火を呼ぶ印相である。火は三角形を以て表示す（「五輪」の條を見よ）。印相は手指を以て種種の形象をなすこと（「印を結ぶ」を見よ）。よつて左右の兩指を結んで三角形をなすのである。

樋の上のきりあらめ

「樋の上」を見よ。

ひのぎぬ 火の字、日野絹、房様なんと、わしは獨寢（重井筒） 積重ねたる染地の日野絹、一反解いてくるくるくる（今宮）

〔日野絹〕もと上野の日野より産出した絹を稱したのであるが、轉じて絹の總名。遊野郎は褌襠に日野絹を用ゐたものと見え、好色一代女（貞享三年刊）卷四、墨繪浮氣袖の條に、「如何にしても分里へ木綿褌襠にてはかかられずといふ、さもあるべしとて日野絹の幅廣を中積にして取らせければ、端縫なしにまづかきて心の行くに任せて走り出でける」とある。和漢三才圖會に、「日野絹。按絹總名。日野上野邑名也、今上州安中松井田富岡之絹爲レ上云云」。

***火の車** 火の車業障の雲に轟き（蟬丸）

罪人を乘せて地獄に運ぶに用ゐ、火焰に包まれた車である。智度論・十四に、「於二王舍城中一、地自然破裂、火車來迎、生入二地獄一」。

***晝の御座** 帝よりは晝の御座の寶劔を枕刀に置かれしゆゑ（松風）

天皇晝間に出御なされるとき坐し給ふ御座で、淸凉殿內身舍にある。晝の御座の南端に劍（鞘を東にし、柄を西にして）を備へ置かれた、この劍を晝の御座の寶劍といふ。

脾の臟 脾の臟强き大音にて、こりやびりめ（酒呑童子）

胃の底部の外側に位する內臟。「脾の臟强き大音」とは、丹田に力の入つた大音をいふ。カある腹底から出る大音聲。

***ひのみくら** 殿上晝御座夜の御殿（振袖始）

〔晝御座〕「ひのおまし」と讀むがよい。「ひのござ」を見よ。「朝拜殿に尊あれば云云」を見よ。

ひのもくだいり おり位の帝日のもくだいり、王は十善神は九善（大經師）

「檜の木內裏」の義か。歌曲時習考には「日の本內裏」にしてある。翁草に「正月に來る萬歲の唱歌中古の言葉ときこゆ、されども頗る片言にて解し難き事多し」とある。

***ひばりげ**（雪女）

〔雲雀毛〕馬の毛色の名。黃白の雜毛。和訓栞に、「馬のびばり毛は騂をいへり、又靑ひばり、白ひばり、鹿毛ひばり、葦毛ひばり、月毛ひばり、赤毛ひばり、黑ひばり等の品あり」。

ひばりのとこ 雲雀の床の芝つなぎ、ただある處に乘しづめ（小栗判官）

〔雲雀床〕雲雀の臥處の義。「くさむら」（叢）をいひ、鶉床といふの類である。詞花集・冬の部、曾根好忠の歌に、「楸生ふる澤邊の茅原冬來れば、雲雀の床ぞあらはれにける」。

***ひばりぼね** 妹尾が心は上見ぬ鷲、攫みかかるを俊寛がひばり骨にはつたと蹴られ（女護島） 何面目も七十路に生き過ぎたりや此命、官位を賜はり子孫の名も雲井に揚れひばりぼれ、瘦せたる膝節高襄げ（松風）

〔雲雀骨〕尫弱な骨骼を雲雀の脚の細長いのに喩へた語。巢林子作・天神記に、「雲雀のやうなる腕先に大の男が眞仰に地響打つて打倒され」。

***ひひらぎ** 柊に鬼も恐ろる鰯の頭（雪女） 鬼も來ろなとひひらぎや（重井筒）

〔柊〕木犀科に屬する植物、葉厚く常綠で、末端に針狀をなす大形鋸齒があるによつて、疼木の義によつた名。「鰯の頭」を見よ。

ひぼ 旦那が妣母第七年に當りし故、御當山に石碑を建て（萬年草）

〔妣母〕亡母。妣は亡母の義。禮記・曲禮下篇に、「生曰レ父曰レ母、死曰レ考曰レ妣」。

***ひまぜ** 武士は弓矢に怠らず、日まぜ日まぜのお鷹狩（宵庚申）

〔日交〕隔日。十六夜日記に、「わかわかしきわらはやみにや、日まぜにおこること再びになりぬ」。

***ひまち** 一昨日のお日待に法印様の相伴で善哉餅を十三杯、それから身持になつたやらぼてれんぢや（萬年草） 一昨年の九月庄屋殿の日待に骨牌打ち打ち（嵯峨天皇）

〔日待〕日祭の義。正・五・九月の中の吉日をえらび、夜寢ねずして日の出を待つて拜すること。日次紀事（延寶年中成）正月の條に、「凡良賤正五九月詣二吉日一、主人齋戒沐浴自レ暮至レ朝不二少寢一、其間親戚朋友聚二其家一、雜遊令レ醒二主人睡一、或請二僧侶陰陽師一令レ誦二經咒一、待二朝日出一而獻二供物一祈レ所レ願、是謂二日待一」。同書・五月十四日の條に、「日待。俗間多今夜至二明朝一修二日待一」。心中萬年草のこの文は、法印樣がお日待の讀經に、檀家から招かれて行つたのである。

ひまはし 引裂紙のひねり元結で火まはしを、火の字、日野絹、房様なんと、わしは獨寢（重井筒）

〔火廻〕紙燭に點火し、頭に「ひ」の音ある語を唱へて次へ紙燭を廻せば、次の者も亦かくして次から次へと廻し、言詰つた際紙燭の消えたのを負とする遊戲である。但しこの文は紙燭の代用に引裂紙のひねり元結に點火したのである。蜀山人編・一話一言に、「火廻しといふは冬の夜、埋火の本などに寄合ひ淋しき慰に、紙燭に火をつけ、頭に火といふ唱の物の名をといひて、紙燭を添へて次へ廻せば次もまた送り送りて、いひつまり紙燭の消えたるを負とす」。火廻の遊戲は當時遊女間に流行したもので、諸艶大鑑・新好色文枕（正德元年刊）一之卷、名波屋三七が遊女遊の條にも、「やたけ心も弱弱と引寄するわけ文に、遂にもえぐひ火まはしの、ひどんす、ひむく、ひぢりめんのきやふ、ひたすら通ふ身となりぬ」と見えてゐる。

***ひめはじめ** 新枕せしひめ始（大經師）

たのである。浮世親仁氣質(元文元年刊)巻之三、酒を樂しむ賢人親父の條に、「酒をまゐり習ひて樂しみとなしたまへと、ひとつなる口から酒を讃めたる詩を引出し」。好色孺萬歳・巻之五に「一ばいなるくち」とも見えてゐる。巣林子作の冥途飛脚に「それそれ何と地體一つはなる波瀬樣」とあるは、一つはなるに妓名の鳴渡瀬をいひかけて、鳴渡瀬が一つなる口であるをきかせたのである。

一つ身　參る氏子は二つ三つ、また一つ身の縫上げに(烏帽子折)
常中の布帛で仕立て背に縫目なく、一二歳の稚兒の着物。

一出入　「一でいり」を見よ。

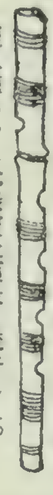
人麿の垣ほの柿　(三國志)(文武五人男)
雨夜物語に、「石見國田村庄小野といふ所に人丸の社あり、社家の園に柿あり、氏姓柿本の根ざしといへり、筆柿なり」と見えてゐる。「拾ふ木の實は何何ぞ」を見よ。

***ひとみごく**　年毎に人身御供を受け給ふ(賀古教信)　この身も今まで勤め、面白からぬ輕薄酒に氣が盡きて、禿を代りに人身ごくやつと外した(扇八景)
〔人身御供〕「ひとみごくう」ともいひ、昔時人身を生贄として神に供へること。またそのもの。犧牲。

ひとむくろ　誰に恐れもなき喚く、女心のひとむくろ思ひやられて哀れなり(女護島)
ひとむき(一向)、いちづ(一途)に。「むくろ」は「かたむくろ」「むくろ腹」などいふ「むくろ」と同じ語で、むくつくことの義であらう。

ひともじ　ひよこ、ひしこ、ひともじ(重井筒)　八百屋萬をひともじに牛兵衛といふ名にも似ず、ただれぶかくも思ひつむ(宵庚申)
〔一文字〕ねぶか。ねぎ。饅頭屋本・節用集に「葱」。日本釋名に、「ひともじはき(葱)の一字ゆゑ也」。

***ひとよぎり**　寒竹の一節切・戀衣といふ手なばおし返してぞ吹かれけろ(三世相)　よそのつられも我が命も・一よぎりなる憂節や(氷朔日)
〔一節切〕竹の節一つこめて切つた笛で、尺八の小形なものである。その長　〔一節切〕



短五種あつて元祿寶永頃最も流行した。

***ひながた**　ひながたに間をあらせ、くしがたを嚴嚴と雙眉つけて(烏帽子折)
「くしがた」の條を見よ。

***ひなは**　せめて煙草のみたやな、煙管火繩は懐中す(卯月梲)　心やはらか饅頭や、菓子に火繩に番附と、賣る聲にまで節籠る(二枚繪)　火繩よ玉よと犇めきける(國性爺)
〔火繩〕檜肌または竹幹の肉を叩き碎き、或は木綿絲を捻つて繩を作り、これに硝石を吸收せしめたもので、火を點じ置いて、火繩筒(鳥銃)の火に用ふ、又煙草を喫するに用ひたものを煙草の火繩と稱した。雍州府志に「鐵炮火繩所所有レ之、多剞二取志濃邊竹篦皮一絢レ之云云」。

ひなをとこ　焦るる胸の平野屋に春を重ねし雛男、一つなる口ももの酒(曾根崎)
〔雛男〕雛人形のやうな美しい男。東海道名所記(萬治元年成)一に、「年のころ二十四五なる男ただ一人、刀わきざしは腰によこたへけれども、けたれてなまぬるき色の白きひな男なり」。

びなんさう　どうでも權三は好い男、謠ひはやらす美男草(鑓權三)
〔美男草〕南五味子とも書き、びなんかづら・とろろ・とろろかづら・などともいふ。常綠蔓性の木本で、葉は厚く平滑で光澤を有し、その形橢圓形鋭尖頭である、七八月頃淡黄白色の五瓣花を開き、果實は小球の集合より成りて紅熟し直徑一寸ばかりある。增補俚言集覽に、「びなんさう。出雲の方言にてところろを云」。巣林子のこの文は、美男を美男草にいひかけて、それらの草を以て「飼ひに飼うたる月毛の駒」と、後の文に續けたのである。

***ひにん**　ハテなんにも無いもの、非人がな通つたか(今宮)　私一人を賴みの母樣南邊に賃仕事して裏家住み、死んだ後では袖乞非人の飢死もなされうかと、これのみ悲しさ(天網島)　たとへば治兵衛乞食非人の身となり(天網島)　非人の女房にはなほならぬ(天網島)
〔非人〕人中に齒せざる人の義か。但し和訓栞には、「ひにん‖俗に乞食をいふ、貧人の義也、非人の義にあらず」と見えてゐる。非人はまた小屋の者ともいひ、乞丐の徒であつて、賤民の一種。江戸時代では非人と穢多とは別で、穢多は獸皮を製するを業とすれども、非人はさることをしないで、乞食または夜廻り路傍の興行などをなして生活し、公役としては捕手の配下に屬して罪人逮捕に助力し、牢番・罪人引廻しの護衞などを勤め、死刑執行の時には其雜役・跡片付等の事に從つた。明治四年八月非人の稱廢されて平民となる。

非人敵討　今の間に御器さげて心からの非人敵討、どこぞでそこらの橋の下新七は居やらぬかと(淀鯉)
元祿頃大阪の名優荒木與次兵衛の當り藝であつた歌舞伎狂言・「非人敵討」(福井彌五左衛門作)をいふ。この狂言は春藤治良右衛門、同新七の兄弟が非人となつて敵を附け狙ふ芝居で、元文元年に文耕堂の作つた敵討襤褸錦はこの非人敵討を淨瑠璃に作つたものである。巣林子のこの文は、非人敵討の芝居は當時名高かつたによつて、これを勝二郎のもとの手代新七に當てて言つたのであつて、「どこぞでそこらの橋の下新七は居やらぬか」は、荒木與次兵衛の口吻を傳へたものである。

***ひぬか**　美濃路まで隱れもないひぬかの八藏、目の荒い男知らぬかい(丹波與作)
〔乾糠〕乾いた麥糠をいふ。巣林子のこの文、麥糠は米糠よりも目が粗いから、八藏の渾名を乾糠にして、「目の荒い男」というたのである。

***ひね**　煮ても燒いてもひねくさい三年米(千疋犬)　飯は赤まじりのひねくさいをすつくりと焚かせ(宵庚申)　ぼんぼり綿もひねくろしく、背中に皺の寄るべなき(女腹切)　額ひねて足らぬ心の花之丞(萬年草)
〔陳〕和名抄に「晩稻、比禰」と見えてゐる。蓋し經稻の義か。古きこと。舊穀を「ひね」といひ、物の舊きを「ひね物」といふ。「ひねくさい」は古臭いの意。古びて臭がある。「ひねくろし」はひねくれた意。古めかしい。遊女らしくないやうにぼんぼり綿を被て、老成ぶるをいうたのである。「顔ひねて」は顔の老成ぶるをいひ、「ひね」を活かした語である。

さ(吉岡染)

「びやくびやくらい」ともいふ。「びやくらい・びやくらい」(白癩白癩)の略。「びやくらい」を見よ。松の落葉(元祿十七年刊)巻一、茶の湯の唄に「びやくびやくらい誰がまことより嬉しからうなん」。

＊ひやくまんべん 百萬遍の御回向より聞入れたとの御一言、智識長老のお十念を授かる心とばかりにて(宵庚申)

〔百萬遍〕信者遶坐し大數珠をつまぐりつつ、百萬遍の稱名念佛を唱へることをいふ。蓋し念佛百萬遍に滿つる者は往生を得るといふによつたものである。伽才淨土論・下に、「念佛一心不亂、得二百萬遍已去一者、定得二往生一」。

＊びやくらい 愛宕白山堪忍せぬ、びやくらいきかぬと聲聲に(加増曾我)

こりやこりや亭主何と奈良茶は食はさぬか、但し人をなぶるかびやくらいきかぬと腹立つる(大織冠)

びやくらい王子とは言はせぬと、ひぢを張つてぞ申しける(天智天皇)

こりや何處へ連れて行き召すぞ、びやくらい返してくれられ(女護島)

〔白癩〕天刑病卽ち癩病である。神佛の冥加に盡きた者がこの病に罹るといふ迷信よりして、僞るに於ては白癩に罹る法もあるの義にて、自誓の詞に用ゐたものである。室町時代の起請文には、白癩黑癩とつづけて書いてあるのが往往ある。令義解(戸)に白癩を註して、「此病有レ蟲食ニ人五臟一、或眉睫墮落、或鼻柱崩壞、或語聲嘶變、或支節解落也、亦能注ニ染於傍人一、故不レ可ニ與レ人同一レ床也、癩或作レ癘也」。四倒八苦事(永祿九年の寫本、奥書云、「此正敎書也釋寳泉寺也」)に、「白癩といふ病は眉の毛ぬけ、鼻柱倒れて親子と雖も近付く者なし」。

ひようじ 曙近きひようじの聲(反魂香)

「ひようじん」(火用心)の略。かく「ん」の略されることに就いては「さだつ」の條に述べて置いた。「ひようじ」は夜廻り番太郎(「ばんた」を見よ)の叫ぶ聲である。

びようもく 「べうもく」を見よ。

＊ひよく 熊野の牛王の群烏・比翼の誓紙引かへ、今は天罰起請文(天網島)

比翼の鳥の片羽がひ(博多)

比翼煙管の薄煙、霧も絶え絶え晴れ渡り(冥途飛脚)

幼な馴染のこち女夫、比翼連理の中はよし何に不足は無けれども(卯月潤色)

比翼の羽子板・木欒子も磨入りては色になる(壽門松)

〔比翼〕翼をならべて飛ぶ鳥の義。以て夫婦の契の親密なるに喩ふ。白居易の長恨歌に、「在レ天願作ニ比翼鳥一、在レ地願爲ニ連理枝一」。

「比翼の誓紙」とは、遊女小春と紙屋治兵衞とが互に夫婦となるを誓うて、誓紙に書いて取かはした證文をいふ。

「比翼の鳥」に就いては旣に述べたが、なほ和漢三才圖會・山禽類・比翼鳥の條に、「三才圖會云、南方有ニ比翼鳥一、不レ比不レ飛、謂ニ之鶼鶼一、似レ鳧而青赤色、一目一翼相得乃飛」とあつて、二鳥合體で飛んでゐる畫が載せてある。

「比翼煙管」とは女夫共用の煙管をいふ。元祿頃に、同一の雁首で吸口が雁首の所から二つに岐れ、女夫二人で同時に喫煙される一つの煙管といふ洒落たものがあつて、大日本史料慶長十年の條にその古煙管の圖が載つてゐる。

「比翼連理」とは夫婦の契の親密なことをいふ。「れんりのちぎり」をも見よ。

「比翼の羽子板」とは、男女の戀愛に緣ある一對の羽子板にとりなして、色町にふさはしういひなしたのである。

＊ひよん 忘れてゐたものひよんな事、母樣ゆかしうござんす(生玉)

ひよんな話を聞きさいて(薩摩歌)

なう太夫樣ひよんな事が出來ました(淀鯉)

死にやるわいの、アアアアひよんな事、サアサアサどうぞ助けて(天網島)

〔凶〕凶な意にいふ。忌忌しい。變。この語は狂言記・拔殼の中にも見えてゐる。現今も岐阜縣加茂郡東白河村地方では、不思議なの意に「ひよんな」といひ、中國地方でも「忌忌しい」の意に「ひよんな」ともいふ。凶變の義である。新井君美の說に、「俗に物の不好事を凡てひよんな事と云ふ、凶字の華音ひよんと云ふよりいひ傳へて常語となれり」。

ひらい 「ひらひ」を見よ。

ひらぎ 目塞ぎ鼻撮み柊屋にこそ入りにける(酒呑童子)

〔柊〕ここの文は、小兒が戲れに柊の葉の尖れるを眼瞼または鼻穴に當てて、目塞ぎ鼻撮みにするから、「目塞ぎ鼻撮み柊」を「柊屋」にかけていうたのである。

ひらきあふぎ 開扇は淺利の與市(五人兄弟)

〔開扇〕夜討曾我(舞の本、古活字版)に、「あふぎはあさりの與市」、とありてこの紋繪が載つてゐる。



〔ぎふあきらひ〕

＊ひらく 心ならずも判官は都を開かせ給ひける(吉野忠信)

〔開〕往時武士詞であつて、「落つ」といふを忌んで「開く」といふ。謠曲・忠信に、「とにかくに我は夜に入り此所を開くべし」。

ひらくにち 我が身のさとりひらく日(大經師)

〔開日〕古曆上の語、開運の日。ここの文は大經師に緣ある曆上の語をいひかけて文飾とした曆盡しの祭文である。

＊ひらくび 手綱取る手も覺えなく平頸に抱附く(最明寺殿)

〔平頸〕馬の首の側面。著聞集・十に、「己が馬の手綱おもがいをおしはづして、平頸をうちてけり」。

びらくら 弟の善次郎は兄に浴せて銀盜み、所所のびらくらを仕舞はんと、この所へ來りしが(三枚繪)

確實な事なくびらびらくらくらして、其場遁れに支拂はないで其儘にしてゐること。「びらくら」は「びらびらくらくら」の意で、右往左往の不締なことをいひ、「びらしやら」「びらりくらり」「びらびらのらくら」などと同類の語である。(ここの文に「浴せ」とあるは、善次郎が盜んだ罪惡を兄にあぷせかけた意である)。

＊ひらさら ひらさら一筆遊ばせと、床の硯の墨すり流し(隅田川)

入らざる世話の燒物口、ひらさら御無用(隅田川)

〔平更〕「まつぴら」(眞平)。「ひらさら御無用」は、平更に平皿をいひかけたのである。

びらしやら いかに男を持つたとて、若い姿してびらしやらと、あんまりほたえさつしやるな(卯月紅葉)

びらびらとしてなまめいた貌。靡きげなあだつぽい貌。「びらりしやらり」ともいふ。女大

古暦上の語である。大經師昔暦のこの文は姫始の義に取つて、房事をなしはじめる日の意にしたのである。鶴峯戊申の海西漫鈔にも房事を行ひはじめる日の意に說いてある。但しこの語義については諸說まちまちである。安齋隨筆・卷之四に、「姫はじめと云ふ事暦にその名出でたるのみにて、何の事と云ふこと古記實錄に見えず、後代の人の書に說說區區にして皆出所なき推量なり」。

*****びもく**　御邊が如き朝敵に出合ひ、首取つてそれを眉目として兄賴光賴信の心を柔らげ(關八州)

〔眉目〕面目。太平記・卷七、新田義貞に綸旨を賜ふ條に、「綸旨の文章、家の眉目に備へつべき綸言なれば、義貞斜ならず悅びて」。

*****ひもの**　指物屋より檜物屋の、曲らぬ木竹捻ぢ曲げて(用明天皇)　塗師屋・檜物屋・指物屋(用明天皇)

〔檜物〕檜材で作つた薄い綰物をいひ、轉して綰物を云ふ。和訓栞に、「ひもの。杯棬をいふ、檜物の義、それをするものを檜物師といふ」。

*****ひや**　息が出ずば火屋へやれ、そんなら火箸で燒いてのけ(重井筒)　渡れば色町、越ゆればひや、濡にも憂にもようつるは扱(今宮)　年六十に餘つて、火屋へ片足踏込んで(歎念佛)

〔火屋〕火葬場。茶毘所。「渡れば色町、越ゆれば火屋」とは、梅田橋を渡れば蜆川の堂島新地遊廓、越えれば梅田の火葬場墓地なればいふ。「火屋へ片足踏込む」とは、壽命のいくらもない意で、棺桶に片足踏込むの類。

*****ひやうごぐさり**　兵庫鏁の白銀作(酒呑童子)　太刀は鳥首兵庫ぐさり、ムムこれは大將の拂物(女楠)

〔兵庫鏁〕禁裏に武器武具を納め置かれる御藏を兵庫といひ、兵庫寮内にある。その兵庫寮に兵具を作る者があつて、その者が作つた帶取に銀の鏁をもつてしたものをいふ。兵庫鏁は切れないといふので珍重した。

*****ひやうぢやう**　右大辨早廣兵杖二三十此處彼處と搜し來り(蟬丸)

〔兵仗〕兵具のことで太刀弓箭の類をいふ。隨身は太刀を佩き弓箭を持つ者だによつて、隨身を兵仗ともいふ。

*****ひやうでう**　琵琶取出し盤涉を平調にしらべかへ(蟬丸)

〔平調〕十二律の一。調の名として用ゐる時はこの音を宮音(卽ち西洋音樂のド)として音階を構成するもの。

*****びやうどうだいゑ**　(百日曾我)(釋迦)

〔平等大慧〕佛の法華經を說かれた實智をいふ。能く平等の理を證し、また衆生等しく智慧を得ればいふ。

ひやうまづく　申し殿樣、女なれども皆御譜代相傳の者の妻、諫言申すがお氣に入らぬかひやうまづいたる御言葉(千疋犬)　兄弟子甲斐に此方から手本を出して見せ申さんと、いふも心のひやうまんづき、これ御覽ぜと走寄り(唐船噺)

「ひやうまんづく」ともいふ。剽悶附の義であらう。おどけづく。剽輕めく。

びやうもく　「べうもく」を見よ。

ひやうもん　ひやうもんの唐衣に唐縫したる柳裏、ひらりと脫いで賜びければ(最明寺殿)　夕紅の緋縅の腹卷ひやうもんの練貫に唐縫したる上重ね(兼好)

〔豹文〕平文などとも書いてある。紋をいろいろに色取りたることをいふ。安齋隨筆・卷二十二に、「ヒヤウモン。衣服の文にヒヤウモンと云ふ事古書にあり、文を三四色にも色色樣樣の色にいろどりたるを云ふ、是は豹の皮はまだらなる故、それに准へて云ふなり」。

*****びやくがう**　出山の釋迦牟尼佛四八の相好八十種好、白毫の光明は山河草木六道四生人の面しろじろじろと見ゆる(釋迦)　觀世音の白毫は籠置きたりと披露せば(大織冠)

〔白毫〕佛菩薩及び轉輪聖王の有する三十二相(その條を見よ)の一であつて、兩眉間に白毫があつて常に光明を放ち、清淨柔輭にして兜羅綿の如きものだといふ。觀無量壽經疏に、「如來眉間有二白毫相一、如二珂雪一、長一丈五尺、毫有レ八、楞周圍五寸、其毫中空右旋、婉轉如二琉璃筒一、從レ此發レ光照二無量國一」。

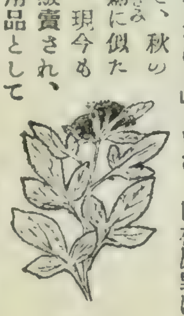
びやくくわりゆうわう　「こまがたごんげん」を見よ。

びやくこれきせつふう　臣が病は白虎歷節風とて(唐船噺)

〔白虎歷節風〕「れきせつふう」「ふうしつ」を見よ。

びやくじゆつ　誓文白朮和中散、身を粉藥に御奉公(薩摩歌)

〔白朮〕古名を「をけら」といひ、山林原野に自生する草本で、秋の頃莖の頂に薊に似た白花を開く。現今も漢藥種店で販賣され、蚊遣粉の代用品として用ひらる。新撰字鏡に、「白朮乎介良」。「誓文白朮」は「誓文白癩」(「びやくらい」を見よ)に、漢藥草の白朮をいひかけたのである。


〔朮白〕

*****百二十里**(ひやくにじふり)　小萬・小女郎・小よしとて百二十里の名取ども、人呼ぶかた手の袖の下(丹波與作)

京都三條大橋から江戶日本橋まで約百二十里ある。以て東海道全程にいふ。「百二十里の名取」とは、東海道にその人ありと世の人に知られた者をいふ。

*****ひやくはち**　腰にしきみの淺綠、みな水晶の百八と、水の白玉光り合ひ(兼好)　手に百八の玉の緒を、泪の玉の繰まぜて、南無あみ島の大長寺(天網島)　道芝の露を繫ぎて、百八の結目合せて總つけて、袂に繰らん法の道(女楠)　百八の菩提樹ならで御身に添ふる物はなし(最明寺殿)　抹香の香きづまりさ、あくびは百八煩惱菩提、いつそお山に宗旨をかへ(女楠)　けたいもなしの金遣ひ、百八紋日の眠りざまし(扇八景)

〔百八〕數珠は百八箇の珠を聯ねて造れるものを正規とす、蓋し百八煩惱を滅盡する爲に擇んだ數である。「百八の菩提樹」は、菩提樹で造つた正規の數珠をいうたのである。「百八煩惱」は、佛法で人心の迷妄の種類を百八の數に分つたもので、卽ち六根(眼、耳、鼻、舌、身、意、)が六塵(色、聲、香、味、觸、法、)に對して三十六の煩惱が生じ、更にこれが過去、現在、未來に亘つて合計百八の煩惱がある。「百八紋日」は、百八煩惱をもぢつたのである。「もんび」はその條を見よ。「まつ初夜の太鼓を打つ時は云云」をも見よ。

びやくびやく　親方殿も聞きなされ、びやくびやく吝はしない

振手(ふりて)の約であらう。羽振(はぶり)。幅(はば)。勢力。今宮心中のこの文の「ひれ」は、幅または羽振の意に鰭をいひかけたのである。
「領巾振山」の領巾は、古へ婦人が項に掛けて飾とした布帛の稱。「ひれふるやま」を見よ。
「位牌のひれ」は、「ゐはい」の條を見よ。

ひれ　戀に心や採烏帽子、平禮小結梨打や(用明天皇)
〔平禮〕風折烏帽子をいふ。總て烏帽子を左か右かに折伏せたるを「ひれ」といふ。「ひれ」は振手(ふりて)の約か。(「ひらめく」も同じ意)。貞丈雜記・烏帽子之部に、「平禮(ひれ)烏帽子といふ物別に替りたる物にはあらず、烏帽子のいただきを折りて被ることを平禮と云ふ也、何の烏帽子にもあれ折りたるは平禮也、古書に平禮とあるを見て、ヘイレイまたヘイライなどとよむは非なり」、とあれども太平記(神田本)卷二、尹大納言師賢卿僞成二主上一被レ登二山門一井坂本合戰の條に、「北面諸司格勤は大略狩衣の下に腹卷を着したるもあり、へい禮に風折して鎧を着したるもあり」、とあるより考へれば、平禮はもと柔なる立帽子をいひ、それがまた折烏帽子の總名となり、風折烏帽子のことになつたものである。

***びろう**　推參なり三保谷、おのれ大將たらん御方へ慮外の振舞(ふるまひ)びろうなり(吉野忠信)　若い女が若い男の帶解いて、さうして跡で紙で拭ふとはびろう至極疑はしい(女殺)
「をこ」を尾籠と書いてそれを音讀した語である。ばかげたことの意。轉じて無禮、不埒の意にもいふ。和訓栞に、「をこ。源氏物語に人違してはをこならんといへり、をこはもと國の名なり、後漢南蠻傳に烏滸ノ人の事委く見えて笑はしき事多かり、尾籠と書は東鑑・釋日本紀に出て、今は尾籠を音にてよべり」。

***ひろそで**　紙衣(かみこ)の廣袖(大經師)
〔廣袖〕袖口の下方を縫合せぬもの。

***ひろふ**　問ふも語るも行く船も徒歩路ひろふも諸共に(女殺)
〔拾〕歩む。和訓栞に、「ひろふ。今ノ俗歩をひろふといふ」。「おひろひ」を見よ。

ひろほこ　千早振袖(ちはやふりそで)廣矛の國平らけくしろしめす(振袖始)
〔廣矛〕古事記に「比比羅木之八尋矛(ひひらきのやひろほこ)」とも云ひ、長き矛の義であつて、大己貴神がこれをもつて國土を平定し、そしてその國土と共に天孫に授け奉つた矛である。日本書紀・神代下卷に、「大己貴神……乃以二平レ國時所杖之廣矛一授二二神一曰、吾以二此矛一卒有二治功一、天孫若用二此矛一治レ國者、必當二平安一、今我當於二百不足之八十隈一將二隱去一矣、言訖遂隱」。

ひわかの子　あさきかのこにひわ鹿子(壽門松)
〔鶸鹿子〕茶を帶びた鶸色(黃綠色)の鹿子絞。

ひわづ　あの子は未だ疱瘡せず、殊に初の子ひわづ者、毒斷して息災に介抱賴み參らする(賀古敎信)
弱弱しきをいふ。尫弱。ひよわ。和訓栞に、「ひわづ。源氏物語に見ゆ、尫弱の意にいへり、或は諺八をひわづひとともいへり」。

脾胃論(ひゐろん)　入門、難經、脾胃論(冷泉節)
漢方の醫書、明版三卷ありて金李杲撰。

***ひを**　太刀も刀も打棄てられ網代の氷魚の如くなるを(加增曾我)
〔氷魚〕宇治川・琵琶湖に多く產し、色潔白の小魚で、白魚に似てゐる。秋末より冬に多く捕へる。和名抄に、「鮊。今按、俗云氷魚是也、白小魚名也、似二鮊魚一長一二寸者也」。

***ひん**　玉樓金殿の中には三夫人九嬪二十七人の世婦(國姓爺)
〔嬪〕君主の左右に侍する女官。(我國では大寶令の制に、妃二員、夫人三員、嬪四員あつて、嬪は五位以上の女をえらばれたのであるが、嬪は文武天皇の御代にあつたばかりである)。

***びんが**　數多の女官同音に勝鬨あぐる頻伽の聲(國性爺)　かひごの頻伽・せんだんの二葉に見ゆる武夫の(本領曾我)
〔頻伽〕「かりようびんが」の略、その條を見よ。美女の聲を形容して頻伽の聲といふ。

***びんかがみ**　(用明天皇)
〔鬢鏡〕手に持つて鬢を映し見る小さき鏡。

びんぎ　氣遣なれど內方の首尾を知られば便宜もならず(曾根崎)　蜆川(しじみがは)の嵐の芝居へ便宜して下んしたか、樣子はどうでござんすぞ(生玉)
〔便宜〕たよりよきこと。たより。史記・蕭相國世家に、「即不レ及二奏上一、輒以二便宜一施行」。

びんごおもて　踏みもならぬ備後表、エエこの座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ(丹波與作)
〔備後表〕備後國福山・尾道地方から產出する疊表をいひ、古來佳品として其名聞えてゐる。雍州府志(貞享三年刊)土產門下・服器部に、「疊。……所謂疊表也、自二備後一來者爲レ良」。

***びんざさら**　笹の小笹のびんざさら、花の手おほひお手を引かれた、これも熊野の修行かや(歌念佛)
〔拍板〕往時用ゐた樂器。長さ五寸・幅二寸ばかりの薄き板を幾枚も重ねて其一端を綴合せ、相擊つて音を發せしめるもの。

ひんしやん　又經樣へもよきやうに心得ましてと言捨てて、ひんしやんとして入りにけり(吉野忠信)　コレお侍樣左の足上げさんせ、ソレソレ又右の足も上げさんせ、オオよう上げさんした、いかい世話のと、なぶつてひんしやん行過ぐる(女殺)
物を意に留めないで氣輕に素早う振舞ふさまにいふ語。ぴんぴんしやんしやん。風流夢浮橋(元祿十六年刊)卷之一、歸花は今樣の紅裏の條に、「腰元ちやくと心付き、そこらはわしがよき樣に取繕ひて中さんと、ひんしやんとして走り込み」。色縮緬百人後家(享保三年刊)三之卷に、「仲居のくめに心を懸け、せいに口またはは風呂上りを口說くといへども、ぴんしやんとしてはかどらぬ戀……」。

ひんづ　拙者は一度死ぬべき身、御情にて今までながらへたるがひんづの命、何處にゆかりかかりもなし、一命を投出しての御奉公(松風)
思ひ設けざること。期待せざること。不慮。傾城太太神樂(寶永二年書林堆波津)卷二、智惠の玉取の條に、伊丹茂兵衞取行、壹步一つづつ錢箱に入置いた銀を其年の大晦日に計算したれば、計らずも六貫九百四拾五匁溜つたことを記して、「此壹步代六貫九百四拾五匁はひんづの延銀(のびぎん)ぞかしと、いよいよ月出たくうれしがる程に」と見えてゐる。「ひんづ」は「ひんず」とも書いてある。此語現今も越前敦賀地方では用ゐて、期待しないことの意にいふ。和訓栞に、「ひんづ。俗語也、千水の義なるべし、ひんづになるともひんづの損などいふめり」。

***びんづら**　びんづら結うたる童(國性爺)
「みづら」(鬟)の音便によつて轉じた語。上古男子の結髮、頭髮を頂から左右に分ちわがねて兩方へ下げたもの。

***ひんとする**　三味線教へたらば我にも一兩ひんとせよ(壬生大念佛)

名丹前能(元祿十五年刊)卷三に、「能書とは見えながら、びらしやらと書きながしたる筆の跡、讀みつけざれば埒あかず」。珍著寶遊林子詠嘉編(元祿九年刊)人に「東來西來」。書言字考節用集・言辭門に「婆娑。東來西來。右行左行」。伊京集覽に「ひらしやら」ヒラリシヤラリともいふ、俗に東來西來、又右行左行を用ふ」。

ひらなか 「なたひらなか」「むじひらなか」を見よ。

ひらのこんにやく 平野蒟蒻、ひし紬、ひらのやゐきやう、肥後芋莖(重井筒)

〔平野蒟蒻〕攝州住吉郡平野から産出する蒟蒻は佳品なるによつてこの名がある。攝陽群談に、「住吉郡平野莊の田圃に作り、則ち當所の市店に於て製し之所所に送る、味他に勝て宜し、因て之を作り商ふ者總て平野蒟蒻といへり」。

ひらのやゐきやう 平野蒟蒻、菱紬、ひらのやゐきやう、肥後芋莖(重井筒)

當時大阪北久太郎町堺筋平野屋に賣つてゐた淫藥の名であつて、房事に快味を促進する女悅散の類のものであらう。「ひらのや」は平野屋であるが、「ゐきやう」は會興の音寫か、或は何か假名を誤つたのであらう。

***ひらばり** 右近の馬場に平張うたせ(天神記)

〔平張〕平に張つて日被ひとする天幕。箋注倭名類聚抄に、「平張[illegible]、比良波利。比良波利平張之義、謂二上平一、不下與二阿計波利之有一レ棟同上也」。

ひらひ 五人が十人でも相手は嫌はぬ、おれが一人でひらひを取る(井筒) ひらひ三番續け勝(井筒業平河内通)

〔拾〕「ひろひ」ともいひ、相手を選はず、來る者は拾つて相撲ふこと。この語動詞としても用ひる。義殘後覺(文祿五年成)に、「世に勝れたる大相撲といへばひろひける程に、世の人是はただ者にあるまじと恐れ慄き、奇代の事と沙汰しけり」。

***びらりしやらり** 花紫を戴いてびらりしやらりの町風も、帽子に漏る衣の香の(酒呑童子) 濡一通の狀文なら、恐らく私が一筆で、叶はぬ戀も假名書き筆、びらりしやらりのかすり墨(嫗山姥)

「びらしやら」に同じ、その條を見よ。傾城酒呑童子のこの文は、「びらり」に「びらり帽子」をきかせ、嫗山姥のこの文は、婉轉嬌治な筆致の形容である。

***びらりばうし** びらり帽子に加賀菅笠、大振袖の後帶(卯月潤色) わしが額よりこなさんの、肌にこれなと風防ぐ、びらり帽子の紫や、色で逢ひしははや昔(冥途飛脚)

「むらさきばうし」(その條を見よ)ともいふ。この帽子は左右に垂れ、びらびらと飜るよりの名で、女が多くは笠の下に被つたものである。「やらうばうし」の條を見よ。

***ひらを** (松風)

〔平緒〕もと太刀の帶で平たく組んだ緒である。後世の平緒は長さ二尺餘・幅三寸許で、捻絲で組んだものに色絲を以て種種の模樣を刺繡し、太刀の帶とは別にして前へ垂したのである。その垂れたる部分を垂といひ、もとは一筋に續いたのを前で結び垂したのであつたが、後には切つて別にしたのである。但し至尊の御料は近世まで續き平緒であつたといふ。

***びらんば** 汝が信心一天下に知らせんと我慢に灯す萬燈なれば、汝が一念らんば・びらんばの惡風となつて萬燈を一時に打消し(釋迦) 前へ走ればらんばふう、後へ戻ればびらんば風、煙は咽に息切れて泣けども聲の出でばこそ(釋迦)

「吹藍婆」または「吹藍婆風」は毘藍風或は隨嵐といひ、もと梵語 Vairambhaka. 迅猛風と譯し、暴風の名。慧苑音義・上に、「毘藍風、正云二吹藍婆一、吹者散也、藍婆者所レ至也、言此風所レ至之處悉皆散壞也、又云毘者不也、藍婆者遲也、謂此風行最極迅急也、舊翻爲二迅猛風一是也」。大智度論に、「八方風不レ能レ動二須彌山一、隨嵐風至碎如二腐草一」。

びり こりやびりめ、この長が日頃の手並を知りながら、今から野太い根性さげ(酒呑童子)

「しり」(後・尻)を「ひり」「びり」と訛つた語か。人を罵るにも、又博奕にも用ひる。松の葉・卷四、草摺引の歌に、「ひり圓太子はかた王」。

ひるがね 兵庫鏁の白銀作り、筋金蛭金鎬の金返り栗形うらがはら(酒呑童子枕言葉)

〔蛭金〕蛭卷の金。なほここの文にある「兵庫鏁」はその條を見よ。「栗形」とは、下緒を附ける爲に、刀の鞘に附ける栗の形をしたもの。木原盾臣編・古兵器圖解・刀劍部に、「栗形=鞘木地ならむには必筒金に附て作る也、ぬり鞘などには牛角などにてもつくること今とおなじ、此を栗形と云よしは其形栗に似たれば也、さて此物をばいかにも放れがたく作るべし」。「裏がはら」は「裏瓦」で、刀の小刀櫃の所に横に入れる角又は金屬製の飾。

ひるがんだう ひるがんだうよ追剝よ出合へ出合へを力にて、皆散り散りにぞ逃げにける(嫗)

〔晝強盜〕強盜は唐音(Chiang-tao)を傳へた語であらう。

***びるしやな** 佛法にては本有の毘盧遮那不動明王の受取り給ひて(蟬丸) 本地釋迦如來毘盧遮那徧一切處の御形(聖德太子)

〔毘盧遮那〕梵語 Vairocana. 譯して光明徧照又は徧一切處或は大日徧照と云ふ。煩惱の暗を照して智慧の光明の法界に徧照する義で、大日覺王如來のことである。

***ひるまき** 身の好いたる細工槍手並を見よと、蛭卷よりかつしと切つてぞ落しける(堀川波鼓)

〔蛭卷〕槍・長刀の柄若くは刀の鞘を金屬又は籐にて間を隔てて卷いたもの。平家物語考證、けうくんの事の條に、「銀のひるまき。補按るに盛衰記にも所々蛭卷したる長刀といふ事あり、銀を以て其柄を飾る蛭の纏へるが如し、よつて云か」。

***ひれ** どこやらひれある骨柄の太刀刀のさしこなし、下に置かれぬ見所あり(源義經) 譏りし人に羨ませ、男にひれを付けうぞと思うたこと(今宮) 音羽二郎三を雜喉場とは、ひれがあるとの譬かや(今宮) 唐土の望夫山・吾朝の領巾振山(國姓爺) 白縮緬の絎帶・これも二人が申し受け、長き形見と身に附けけん、我も受取る受取れと、位牌のひれに結び付け(卯月潤色)

さみ草とは思はじと(十二段)　しかも色香の深見草(生玉)

〔深見草〕牡丹のこと。箋注倭名類聚抄に、「牡丹。是草生二林叢中一、故名二布賀美久佐一」。十二段のこの文中、草の名寄であつて、深く見るを深見草にいひかけ、また生玉心中のこの文は、色香の深いを深見草にいひかけたのである。

ふかみどりや　萬年寺の同宿忍び戀路の摑み取り、ふかみどり屋の小丁稚(女腹切)

〔深綠屋〕「摑み取り」に韻脚を合せて屋號とし、萬年寺の萬年の綠で、松の深翠にきかせたのである。なほここの文は、戀に鯉をいひかけて摑み取りといひ、深翠の濃を小にかけて小丁稚といふたのである。

*__ふかん__　不堪の我等僅に父の箕裘を嗣いで(蛙合戰)

〔不堪〕不堪能。藝に堪能ならぬこと。古今著聞集卷十、馬藝の條に、「久清は上手なり、敦文は不堪のものなりければ」。

豐干禪師(ぶかんぜんし)　豐干禪師が四睡の虎、李將軍は虎を組む(反魂香)　手飼の虎を枕にて親子三人まどろめば、虎も旅寢の夢を見ろ、豐干禪師の四睡かや(國性爺後日)

傳燈錄、宋僧傳などに載れる高僧で、支那天台山國淸寺に住み、弟子に寒山と拾得とある。豐干禪師が四睡とは、豐干と寒山と拾得と虎と皆睡れること。下學集・歐量門に、「四睡。寒山・拾得・豐干・虎、四個相依打睡、其趣可レ愛、後人寫以爲二四睡圖一、三人卽文殊・普賢・彌陀散聖也」。(序云、有名な因陀羅の繪は四睡しないで、豐干禪師念珠を握り、口を開いて饒舌せうとし、虎柔順にその傍にゐる。そして寒山・拾得便便たる腹口を開いて大に笑つてゐる。この繪の寫眞は明治二十五年八月出版の國華第三十五號に載つてゐる)。

ふきのしうとめ　萠ゆる女蔞摘む若菜摘む、茅花・杉菜にさいたづま、妻は誰が妻老いぬれば蕗の姑(雪女五枚羽子板)

〔蕗姑〕蕗の薹をいふ。増補俚言集覽に、「ふきのしうとめ。大和の方言にてふきのたうを云」。

*__ふきびん__　綠のふきびん嬋娟として八字の細眉宛轉たり(天智天皇)

〔吹鬢〕鬢を脹らかにした結髮。井原西鶴撰・俗つれづれ卷四、御所染の袖色ふかしの條に、「ふきまへがみ。くじらのひれのまがりたる物を入てかみのうごかぬやうに」と見えてゐるから、吹鬢も鬢に鯨の鬚を入れて脹らしたものであらう。

ふきや　蒔いても蒔いても育たぬは、已れがどこぞに銅の吹屋が住んださうなと(冷泉節)

〔吹屋〕鞴を以て鑛を鍛錬するを吹くと云ひ、鑛を吹分ける家を吹屋といふ。吹屋のあたりは鑛毒流出して不毛の地となる。源氏冷泉節のこの文、女の孕まぬを鑛毒ある不毛の地に喩へて洒落たのである。

*__ふきやうぼさつ__　(百日曾我)

〔不輕菩薩〕常不輕菩薩の略。もと一比丘であつた時に身に不輕の行をなし、口に不輕の敎を宣べ、謙遜の德を備へて、見る所の人人を悉く禮拜讃歎された。かく人の本性本心の顕きを讃美された德によつて、自身も菩薩になられたのであるが、往昔の威音王如來の時の菩薩であつた徊方だといふ。この菩薩の因緣は法華經・常不經菩薩品に詳說してある。

ふきよせどう　吹寄籐の弓持つて(最明寺殿)

〔吹寄籐〕籐を二所づつ押寄せて卷いた弓であるといふ。貞丈雜記・卷十、弓矢之部に、「曾我物語に云く、鹿こそ三かしら出できたりけれ、これいかにと見る所にかの祐經こそおすかひておとしけれ、その日の裝束はなやかなり、浮線綾の直垂に大斑の行縢に切文の矢負ひ、吹寄籐の弓の眞中とり云云。重籐は籐をしげく卷く故の名なり、ふきよせ籐は籐を二所づつ押寄せ卷きたるなり」。

ふく　行に窶れし姿にて普供のさばを盤に捧げ(以呂波)

〔普供〕普供養の略。無邊の聖衆の供養。肝要鈔・中に、「普供總供也、……普供二養法界道場一切海會聖衆一」。

ふくうけんじやく　ふくうけんじやく・千手千眼願くは千の眼を顯はし(嵯峨天皇)

不空羂索觀音をいひ、七觀音の一である。三面八臂で手に羂索・錫杖・蓮華を持つてゐられ、心念不空の羂索を以て、衆生を菩提の彼岸に濟度されるのである。

ふくぼんしゆ　ちんだ・泡盛・覆盆酒(天神記)

〔覆盆酒〕覆盆子(いちご)を加へて製した藥酒。和漢三才圖會卷百五、造釀類、藥酒の條に、「楊梅酒・雞卵酒・覆盆子酒等不レ枚擧一、用二藥物及沙糖一、漬二燒酎或醇酒一、封二甕口一、候二其熟時一用」。

*__ふくらすずめ__　ふくら雀は竹にもまろる(兼好法師物見車)　ふくら雀の羽を惱み、雪に折伏す篠竹の、篠に一夜の假の宿(烏帽子折)

〔脹雀〕雀の子をいふ。雀の子は親雀よりも羽毛がふはふはして脹らかに見えるからである。兼好法師物見車のここの文に就ては「ほふりんさがのおてら云云」を見よ。

ふくりやう　旦那ふくりやういたされ、せんぎまちまち麥門冬(薩摩歌)

〔茯苓〕松の根に寄生する塊根狀の菌核であつて、藥用となる。ここの文は「茯苓」に「ふくりふ」(腹立)をきかせたのである。立腹を腹立(ふくりふ)といふた例は、西鶴諸國咄(大下馬)卷一、奈良の寺中にありし事の條にも、「腹立して使者の坊主を打擲して歸しける」と見えてゐる。



〔茯苓〕

*__ふくりん__　白覆輪や金覆輪、今は梨子地の鞍鐙(雪女)

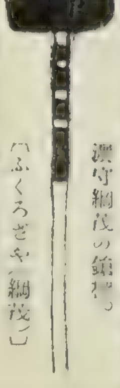
〔覆輪〕馬鞍の前後の輪の山形の上(卽ち緣邊)に銀の覆輪をかけたものを白覆輪といひ、金の覆輪をかけたものを金覆輪といふ。元祿時代は梨子地鞍のが流行した。

*__ふくろご__　逆子・袋子・德利子(孕常盤)　麿が胤・あさましき袋子(浦島)

〔袋子〕胎兒の卵膜に包まれたまま胎盤と共に産まれたもの。

*__ふくろざや__　萠黃羅紗の袋鞘……肥前佐賀の御居城(薩摩歌)　袋鞘は安藝の廣島(薩摩歌)

〔袋鞘〕鎗鞘。萠黃羅紗なるは佐賀城主鍋島信濃守綱茂の鎗標。



〔ふくろざや(綱茂)〕

廣島城主淺野安藝守綱長の鎗標。

*__ふけう__　口惜しや敵を討つて父上へ孝行なせば母のふけう。出家を

錢取つて濱へ行く樣な者ぢやござんせんとてひんとする(最明寺殿)

弛んだ物の張るさまにいふ。氣張る。

*ひんぬき　あれあれあそこへ唄うて來る本小室のひんぬきは、與作與作と小手招き(丹波與作)　段模樣の染被・供の女が頰冠、御所のひんぬき二人が中へ怖氣もなくしやんと分入る(酒呑童子)

「ひきぬき」(引拔)の音便。拔萃。純粹。秀逸。中分無きこと。義經千本櫻・第二に、「夜半には雨もあがり、曉方には朝嵐にかはつて、御出船にはひんぬきの上上日和」。

びんばくわ　アレ頻婆果の唇が動くは人に告ぐる氣か(聖德太子繪傳記)

〔頻婆果〕果樹の梵名、Bimba. 譯して相思といひ、其果林檎に似る。慧苑音義下に、「頻婆果、其果似二此方林檎一、極鮮明赤也」。

びんび　過ぎ逝かれし親父の咄に、鼻紙びんびと遣ふ者は曲者ぢやといはれしが(冥途飛脚)

けちけちしないことにいふ副詞。ぱつぱ。どつさり。

びんびしゆ　茂兵衞は早天より、暦配りて先き先きの、びんび酒の麴の花、ちろちろ目にて立歸り(大經師)

「美酒」を「びんび酒」と調子づけていうたのであつて、「ごり」(鯱)を「ごんごり」(その條を見よ)といへる類である。

びんみづいれ　この櫛箱に燒物の鬢水入、これ氏神と三度いただき(冥途飛脚)

「鬢水入」陶器或は塗物或は竹製もあつて、其形楕圓形で厚さ一寸ばかり(寶曆頃の物は更に大形にして厚い)、小判金を重ねたやうな狀をなす。これに伽羅油を入れ、或は南五味子の莖を細かく削つてこれに浸し置いて、そのねばり汁で毛髮のそそけを理め艶を出したのである。鬢水入をその形の似てゐるより小判に見立てた例は、既に西鶴撰の好色盛衰記・卷二、見ぬ面影に入替大臣の條に、小判を貰つたことを記して、「前窓より手を出して、鬢水入の底のやうなる黃色の物を一枚づつ給はりける」と見え、傾城太鼓神樂(寶永二年刊)卷四に、「小判は鬢水入の底やら、壹歩は瓔珞のちぎれたるのやら、知らぬ顏してゐらるる女郎も云云」と見えてゐる。三島曆卷之三に、「竹のびん水入一、かみそりばこ一、ありまより持參り候」、とあれば竹の鬢水入もあつた。

ひんよえい　時に麓の山どよむ木遣に法のひんよえい(萬年草)　七尺餘の靑目の石かろがろと提げ、肩へ上げてひんよえい(扇八景)

木遣唄の掛聲。(奴が行列道具を振つて練り行くときにもこの掛聲をした。)

ふ

*ぶ　オオ殿樣の御勘當受け、ぶに首打たるる法もあれ(堀川波鼓)　此方も步を以てぶに首を提げらるるが悔みはないか(壽門私)

〔步〕卒。斬首を行ふ獄卒。壽門松のこの文は將棊の駒の步に獄卒をきかせたのである。橘守部撰・俗語考に、「今の世に夫とも人足とも云物は古くは丁といへり」。

ぶいぶい　坂東者のどう強く、何さぶいぶいども人嚇の腕に色色の彫物して、喧嘩に事よせ懷の物取ると聞き及ぶ(女殺)

ぶつくみこ不平をいふさま。ぶつぶついふ愚鈍者。

ふうしつ　臣が病は白虎歷節とて、白き虎の五體節節食ひ切るに譬へ、風しつ骨に入つて痛み堪へ難し(唐船噺)

〔風濕〕風寒濕熱。風寒とは、風氣寒氣の人體に中り、外方より疾病の因をなすものをいひ、また濕熱とは、人體內に發する蒸氣の病因をなすものをいふ。

ふうぞく　月待つ夜半の管絃の御遊・風俗催馬樂朗詠も玉簾ふかき聲もれて(蛙合戰)

〔風俗〕風俗歌の略。國國の歌謠の中にて曲調よきを選んで上下の人々唄うたのである。體源抄に、「鄕教訓抄云、風俗は諸國の古風を集むるなり、故に風俗多在二催馬樂中一……雜藝今樣童謠之詞、皆是風俗之流也」。

*ぶうぶう　人間のぶうぶうを捻り殺すは此公時が好物(酒呑童子)　地體八めはぶうぶうなり、己が胸座しつかと取つて(丹波與作)　人の意見も馬の耳、よそふく風のぶうぶうにて、夜步き日步きとぼし立て(二枚繪)

「ぶいぶい」ともいふ、その條を見よ。「八めはぶうぶう」とは、馬方の名の八に蜂をいひかけ、蜂の羽音のぶうぶうをいひかけたのである「風のぶうぶう」とは、風の音のぶうぶう、卽ち馬耳東風をいひかけたのである。

ふうりうぢん　勝つも負くるも風流陣かかれやかかれと(國性爺)

〔風流陣〕唐玄宗皇帝が楊貴妃と淸華宮に宴し、宮女を兩隊に分ち旗幟をもつて勝負せしめた故事で、これを櫻花と梅花とに見立てて花軍と云つた。天寶遺事に、「明皇酒酣、使三妃子統二宮使百餘人一、帝統二小中貴百餘人一、排二兩陣一爲二風流陣一、巧擊相鬭、敗者罰二巨觥一」。

*ふうりん　敵は勇みの鉦太鼓、風輪火輪天地にあふれ、前後を忘じて行き方なく(日本武尊)　風輪の穉風穩かに(唐船噺)

〔風輪〕大地の四輪の一で、俱舍論十一に「先於二最下一依二止虛空一有二風輪生一、廣無數、厚十六億踰繕那」と見え、虛空卽ち空輪の上に風輪生じ、風輪の上に水輪生じ、水輪の上に金輪生じてゐる。轉じて風をいふ。

*ふえのくさり　三刀四刀刺通し、返す刀に吭のくさりずたずたに切散し(賀古教信)

〔吭鏈〕のどぶえ。和漢三才圖會・卷十二、支體部に、咽喉は九節あつて、「吭有二結喉一、而咽喉管正中故與レ笛同レ訓、至要之器、史記所謂絕レ亢而死者是也」と見えてゐる、咽喉は九節あるによつて鏈というたのである。

*ふかく　堤の彌三が附くからはさまで不覺も取るまじきぞ(酒呑童子)　よい事は無い筈と思はなんだは身の不覺(丹波與作)　鬼の腕を取りかやされ、それが無念な口惜い切腹せうといふやうな不覺人の渡邊に、逢うて何の用もなし(酒呑童子)

〔不覺〕覺悟の確ならぬこと。油斷。不調法。

ふかみぐさ　根は戀草の深見草、あ

ふしよ 貧僧の力に及ばず、願ふらくは多少を論ぜずふしよの思をはげまし給へ(用明天皇)

〔補處〕前佛既に滅して後佛其處を補ふ義。轉じて佛弟子をいふ。觀音玄義・中に、「補處者、前佛既滅、而此菩薩卽補二其處一、故云二補處一」。

***ふしよう** 人を勸めの歌念佛、修行の僧に身を俏しふしようを肩に打懸けて、しんくの紐のかれてより知らぬ拍子はうつつなや(井筒)

〔鳧鐘〕鉦鼓を云ひ、形圓くして皿に似る。懸けて撞木をもて打鳴す。謠曲・隅田川に、「鉦鼓を母に參らすれば、我子の爲と聞けばげに、此身も鳧鐘を取上げて」と見えてゐる、鳧鐘は卽ち鉦鼓である。和漢朗詠集に、「鳧鐘夜鳴、響徹二暗天之聽一」とある、鳧鐘は鐘である。書言故事・卷二に、「鑄レ鐘匠曰二鳧氏一、周禮考工記・鳧氏爲レ鐘」と見えてゐる。鳧氏が鐘を作つたが故に鳧鐘といふのである。

ふじんじやう

「晉の朱序が母云云」を見よ。

***ぶしんぢゆう** 不心中か心中か、誠の心は女房の、其一筆の奧深く(天網島) 小春殿に不心中芥子程もなけれども(天網島) あの不心中者なんの死なう、灸をすゑ藥飮んで命の養生するわいの(天網島)

〔不心中〕人に對して義理を守らず眞實を缺いで薄情。巢林子のこのあたりの文は、小春が治兵衞の妻おさんに、「身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合ひ思ひ切る」と書いて與へた手紙の義理を守り、獨り死ねば萬事濟むと決心せる、そのむごらしい心を治兵衞知る由もなく、小春を不心中者と思ひ込む。おさんは小春の眞實の心を知つて、その死を救はうとするせつなさに、遂に小春と取替はした祕密の手紙の大事を治兵衞に打明けるに至つて、忽ちに離別・情死の悲劇の大團圓を誘致することとなる。

ぶす 愚僧は若い時から犬はぶすでたりやるよ(天鼓)

〔附子〕毒藥の名なるが轉じて、惡み嫌ふものをいふ。下學集に、「附子。毒藥」。和訓栞に、「ぶす。貝原氏の說に蝦夷の人は附子を矢じりに塗て獸を射る、これをぶすといふ、是草烏頭を煎じたる時射罔なるべしといへり、されはぶすは附子の音便なり、世の人好まぬことをぶすといふもこれなるべし、賊盜律以二毒藥一藥レ人の內にも入たり、射罔は本草に見えたり」。釧路地方の言葉に、「シヤモ(和人の義)が來たらブシ矢(毒矢)で殺せ」といふがある。「ブシ」はもとアイヌ語か。狂言に「附子」といふもある。

***ふすべる** 立つてはふすべ居ては讖り(卯月潤色)

〔燻〕火の燼して燃えぬをいふ。轉じて、憤を含んで嫉みをいふこと。喧嘩がましいことばかり言うて、家內の者にいつも不愉快な感じをさすをいふ。

ふす山何 花の下の連歌師や、神祇釋教戀無常、ふす山何かの御挨拶(三國志)

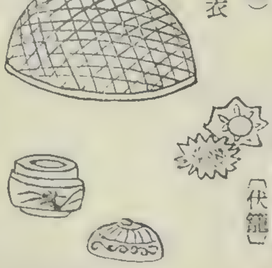
〔賦山何〕連歌の賦物五ケの內である、連歌辨義卷三に「連歌の賦はくばるといふ意なり、百韻五十韻何句毎に其物をくばる故なり云云」、と見えてゐる。(山何、何路、物の名の類なり)連句の中に名物・物語の名・景物の名・調度の名などを讀み込むことを賦物といひ、和歌の物名から轉用されたもので、これに上賦と下賦とあつて、上賦の題は賦山何、下賦の題は賦山何などと記して賦物を定め、何の字に代るべき山と連績した語を句中に讀み込むのである。この法はもとは連句に用ひた言語上の遊戲であつたが、後には發句にのみ試みられるやうになつた。

***ふせ** さらばお布施を包まうと(藤摩歌)

〔布施〕梵語・檀那(Dāna)の譯語、布は普、施は捨の義。一切衆生を愛愍するが故に、一切の物を惜まず惠施すること。轉じて僧尼などに與へる財物をいふ。大乘義章・十一に、「言二布施一者、以二己財事一分布二與他一、名レ之爲レ布、惙レ己惠レ人目レ之爲レ施」。

ふせご まづ横笛は暫しこれに隱れよとふせごに深く忍ばせ(婬)

〔伏籠〕伏せ二上に衣を被ひ、內に香爐を置き、香を焚いて匂を衣に移す籠。



(女用訓蒙圖彙所載)〔伏籠〕

***ふせや** 迎へ給へや導き給へと、唱ふる聲は伏屋に殘つて、形は見えず消えにけり(反魂香)

〔伏屋〕萬葉集に「廬屋」を「ふせや」とよんである。地に伏してゐるやうな賤屋。

ぶぜんばう 筑紫には彥山ぶぜん坊(三國志) 筑紫に於ては彥山豐前坊(十二段)

〔豐前坊〕豐前の彥山に栖んでゐたと云ふ天狗の名。謠曲・鞍馬天狗に、「筑紫には彥山の豐前坊」。

ふせんりよう 浮線綾に紅梅裏の袋を開き(丹波與作)

〔浮線綾〕綾の浮織。貞丈雜記・卷五、裝束之部に、「浮線綾と云ふは綾の名也、線を浮むる綾とよみて、織紋の線を浮べて織りたる綾也、卽ち浮織の綾の總名也」。

ぶた 粗相して後悔すな、手つけぶたぢやといひければ(大職冠) さるにも此儘にぶたで果てなん無念さよと淚ぐみ立ちしが(大職冠)

かるた札の勝負に、敗をいふ一種にこの名のものがある由、獨寢に見えてゐる。「さるにても此儘に云云」は、謠曲・海士に、「さるにても此儘に別れ果てなん悲しさよと淚ぐみて立ちしが」とあるのもぢり。

***ふたい** 六根の罪障消滅し、不退の彼岸に到れよ(會稽山) 佛法不退のお山となる(西王母) 我成道して主從の緣盡きず、不退の友となるべきぞ(釋迦) 淸風に乘じて不退地の雲に遊ぶ(百日曾我) 末世末代不退轉の御回向賴み存じ候(萬年草) 未來の世までも不退轉、寂光淨土の臺とかや(吉野忠信)

〔不退〕不退轉の略。佛道修行の過程に於て得た功德を退失せぬこと。無量壽經に、「皆悉到二彼國一、自致二不退轉一」。「不退地」は阿彌陀佛の極樂淨土をいふ。蓋しこの地に生じる者は再び迷界に退轉することなきが故にこの名がある。「不退の友」は、互に善業を修して親交の退失することなき友。

ぶたう 「ぶとう」を見よ。

ふだうげ これぞほんの丹波越と、不道化言うて忍び出る(泥棚) 葬禮の戾りに祝言の家へ立寄るは、なめ過ぎたふだうげ可笑しうない歸れ歸れ(反魂香)

〔不道化〕戲謔をいふ場合でない時にいふおど

遂げて母の心をなだめんとすれば(加増曾我)

〔不孝〕君父母の勘氣を被ることをいうたのである。「けう」は孝で、孝養を「けうやう」ともよんである。保元物語、新院御所門門かため軍評定の條に、「(爲朝を)身に添へて都に置きなば悪かりなむとて、父ふけうして十三の歳より鎭西の方へ追下すに」、とある「ふけう」も「不孝」である。

***ふげん**　櫻結びの花かつら、繋ぎ留めん普賢象、普賢は流れの身な守り(賀古教信)　八字文殊・普賢延命(嵯峨天皇)　觀音・勢至・普賢菩薩(卯月紅葉)　普賢力をこらし引上げ再興あれと宣へば(用明天皇)

〔普賢〕普賢菩薩をいふ。法體遍滿なるによつて普といひ、最勝妙善なるによつて賢というたのである。この菩薩は三十三身に化現して護法説教されるのであるが、普通の姿は蓮臺上に坐禪して左手に蓮花の莖を持ち、或は白象の上に坐して經卷を開き持つてゐられる。「普賢延命」は、禁祕抄階梯に、「或抄師云、普賢菩薩説二延命眞言一、故名二普賢延命一」と見えてゐる。普賢菩薩を本尊として延命の祈禱をなす修法を普賢延命法といふ。「普賢は流れの身を守り」は、謠曲・江口に、普賢菩薩が江口の遊女に化現して西行法師と歌詠み交したことが見えてゐる(この話、古くは古今著聞集に載つてゐる)。さればこれらのことから普賢は流れの身を守ると云うたのである。「流れの身」とは遊女のこと。「普賢力」は、なほ金剛力・觀音力などと云ふ類で、人力の及ばない偉大の力をいふ。

ぶこう　ハテ物に慣れぬぶこうなり藤孝、只今の詞に賴人は知れたり(女夫池)　目利の通り馬追ふことはぶこうなれど(孕常盤)

〔不巧〕巧者でないこと。

ふさぬ　伊東・河津・宇佐美三箇の所、これをふされて久須美の庄と申すなり(伊豆日記)

〔總〕總括する。和訓栞に、「ふさぬる。日本紀に攝をよめり、總攝の意なり、よこに統ノ字をもよめり」、名義抄に「總フサヌ　攝フサナル」、用明紀に、「總二攝萬機一」。

ふじ　足へさがればふじ三里、灸と鍼とに行方なく(振袖始)

〔風市〕灸穴の名、直立し手を垂下して外股に中指の届く處である。增補下學集(寛文九年刊)支體門に「風市、灸穴」。和漢三才圖會・卷十一、經絡部、足の灸穴をいへる條に、「風市‖奇兪也、在二中瀆上一、令二人正立一、兩手垂下、當二外股中指端届處一、大骨外傍也」。當麻中將姫(淨瑠璃)第二に、「足を撫でさすり、ハアこりや三里の灸もなきさうな、ふじの灸は候か」。(「ふじ三里」の「さんり」はその條を見よ)。

ふしば　擔ひて通ふふし柴の、暫し休らひ立ち給ふ、御有樣こそ殊勝なれ(釋迦)

柴をいふ。「ふし」といふも柴のこと。伏柴など書けるは當字。箋注倭名類聚抄・卷五、調度部・漁釣具の條に、「柴訓二布之一、見二神代紀一」。和訓栞に、「ふししば。柴をふしともしばともよめり、よて合せいふ也」。

***ふじたらう**　飯綱の三郎・富士太郎(十二段)

〔富士太郎〕富士山に棲んでゐたといふ天狗の名。謠曲・鞍馬天狗に、「飯綱の三郎・富士太郎」。富士山第一合目に太郎坊といふ名のあるのも、富士太郎といふ天狗の名に據つたものである。

***ふしづけ**　いとし盛りを情なく松川の水底に伏漬に沈め給ふ(冷泉節)　はやはや鬼神の首を斬り・淀川の伏漬に沈むべし(嫗山姥)

「伏漬」または「臥漬」などと書いてあれども、柴漬の義である。柴を束ねて水中に漬け置くことをいふ、よつて以て人を柴漬のやうにする簀卷(「すまき」を見よ)の刑をいふ。箋注倭名類聚抄・卷五、調度部・漁釣具に、「罧謂二之涔一、布之都介、新撰字鏡云、槮罧同、不志豆介乃木、按布之都介、柴漬之義、柴訓二布之一、見二神代紀一」。源氏冷泉節のこの文は、源賴朝の子千鶴を松川のとどきの淵に伏漬に沈めたと云ふのであるが、賴朝伊豆日記(巣林子作)にこの事を記した文中に、「武士前後に立寄りて竹の簀卷のとりどりに繩よ葛といふ處へ、痛はしや姫君は徒歩や跣足の風情にて人目もわかず駈付けて、若君に抱きつきわつと叫ばせ給ひける」と見えてゐる。この兩文を對照すれば、巣林子も伏漬は即ち簀卷であるとしてゐることが知れる。

***ぶしつけ**　心中などで死ぬるのはお主に對してぶしつけ(二枚繪)

〔不躾〕禮儀作法を缺げること。

ふしつむぎ　共に双の諸羽二重の、同じ枕にふしつむぎ(氷朔日)

〔節紬〕節絲で織つた紬。ここの文は「同じ枕に伏し」に「節紬」をいひかけたのである。

***ふじなはめ**　緋縅や譽は朽ちぬ黄金され、名を卯花にふじなはめ白絲縅(用明天皇)

〔伏繩目〕節繩目とも書く。「ふしなはめ」といふを「ふじなはめ」と濁つたのである。白と淺葱と紺との筋をつづら折に染めた革を細く裁つては、幕の手繩のやうに見えるによつていふ。伏繩目の革絲で縅した鎧を伏繩目の鎧といふ。

ふしはかせ　牛若君と我身の上、人知れぬ忍寢を十二段の物語に作り、みづからこれにふしはかせを附け(源義經)

〔節墨譜〕謠物の文の傍に節の高低長短などを示す墨譜。樂家錄・五十、雜篇に、「凡號レ節譜、唱聲必有二高下一、準二之竹節一故記二節字一也、號二墨譜一者以レ墨圖二高下一、而能計二合之一、故記二墨譜一也、謂二節記一矣」と見えてゐる。蓋しここに云へる如く「ふし」は節であるが、「はかせ」は拍子の轉語であらう。

ふしやう　從六位の府生を給はりける(融大臣)

〔府生〕近衞府、衞門府、兵衞府、檢非違使廳のいづれにも府生があつて、下官である。

***ぶしやう**　與兵衞うろたへ逃損ひ、押割る供先伯父の日にかかる不祥の出合がしら引捉へ捻据ゑ(女殺)　片荷づつて力に足らぬ、相手のふしやう常夏と片手に取つて引寄せ(會稽山)　むざと男の來ぬ所へ來たがふしやう、明日まで待ちや(薩摩歌)　武家に生れたふしやうには大門口で立腹切り(反魂香)　九兵衞ふしやうな調子にて、エエ粗相なお梅樣、文を封じちがへて、久米樣へのぬれ文が法印樣のお手に入る(萬年草)　これは近頃ふしやうなる所へ參りかかりて候ものかな(百日曾我)

〔不祥〕不仕合。不運。因果。祥は「さいはひ」の義。(古刊院本にはこの語に「ふせう」「不肖」と書いたのがある)

ふじやう　「ふぢやう」を見よ。

そ知られ屋の内に、直で立つたる人はなし(卯月潤色)

藤の莖柱は曲りくねる。巣林子のこの文は、藤の莖柱のやうに家内の者は皆邪曲で、「直で立つたる人はなし」と受け、茅屋に降る雨は音せねば、「人こそ知らね」と受けていうたのである。

ふぢのまるのかうやく 血汐變じて濃紫、藤の丸の膏藥にて養生加へて涵りける(扇八景)

〔藤之丸膏藥〕駿河國庵原郡淸見寺の傍なる藤之丸屋といふ藥鋪で賣つてゐた膏藥である。西鶴撰・武道傳來記(貞享四年刊)卷之四に、「それより世上を知るためとて淸見寺の膏藥に遣し、藤の丸屋の見世に置きしに美少なれば旅人の目に立ち」。(但しこの膏藥は京大阪江戸でも賣つてゐた。西鶴撰・胸算用(元祿五年刊)卷二、銀一匁の講中の條に、「諸道具今宮から長町の藤の丸の膏藥屋の門まで續きし」。明和新增京羽二重大全・卷三に、「藤丸膏藥。烏丸通綾小路下八町藤屋權兵衞」。諢話浮世風呂・三編卷之下に、「けふは日本橋から膏藥を買つて來てもらつた、……藤の丸は舊家なり、慶長年中湯島天神の門前に於て創業し、萬治二年日本橋通二町目に開店してより年數凡百五十餘年連綿と相續す云云」)。丹波與作・道中雙六の條に、「膏藥買うて月を吸ひ出せ淸見寺」とある膏藥も、名物淸見寺藤之丸膏藥をいうたものである。「きよみでら」をも見よ。

ふぢばかま (用明天皇)

〔藤袴〕菊科に屬し、秋の七草の一、莖圓く葉は節に對生して形長く鋸齒あり、夏秋の頃淡紫色の小形花枝端に簇生す。


〔藤袴〕

ふちや 鎌田はそれともしら眞弓、ふちや射るとは酒故に氣の付かぬこそ哀なれ(鎌田)

〔扶持矢〕助けの矢。扶持はたすけもつ義。禮記に「出入則或先或後、而敬扶二持之一」。孟子に「疾病相扶持」。ここの文は鎌田はそれとも知らずを白眞弓にいひかけ、白眞弓の緣で扶持矢射るといひ、扶持矢射るとは助けの矢を放つということであつて、即ち鎌田の氣付かぬのを氣付いて、用心さすやうに助言する意にいうたのである。

***ふぢやう** お前の心が不定で外を家になさるる故(生玉) 伏見屋の太兵衞殿心ふぢやうに身體を持崩し、イみもない樣になり果て(宵庚申)

〔不定〕定まらぬこと。たしかならぬこと。うはき(浮氣)。心中宵庚申の古版本(七行四十七丁本)のここの文に、「太兵衞殿心ふじやうに」とあれども、正しくは「ふぢやうに」と書くべきで、當時は假名遣をやかましう言はれなかつたことは申すまでもない。現にここに擧げた生玉心中の文も、正本(七行四十七丁の古刊本)には、「おまへの心が不定で」とあつて、「不定」に「ふじやう」と振假名が附けてある。近松作・本朝三國志第二に「曾呂利が名歌今に限らず、ふじやうを拂ふ妙文たり」、とある「ふじやう」も「ふぢやう」(不定)であつて、不定業即ち前世から定まつてゐる業報でないこととの意。

ふ・ちゆう・ちん さすがの法眼手も顫ひ、浮中沈の三候も、心肝腎も命門も、右にあるやら左やら(冷泉節)

〔浮・中・沈〕漢方醫が人の脈膊を取るにいふ術語、手に關・寸・尺と稱する所があつて、この三部の脈膊の取り方に浮といひ、中といひ、沈といふ取り方がある。「浮中沈の三候」とは、脈膊を浮・中・沈の三種の取り方によつて、病症を候ふ(診察)ことをいふ。明吳崑撰の脈語・卷上、取レ脈入式の條に、「醫家取レ脈常以二平旦之際一、取二手太陰肺經一、掌後高骨名曰レ關、關之前名曰レ寸、關之後名曰レ尺、浮以取レ表、沈以取レ裏、中以取二胃氣一、寸部法レ天、候二胸以上至レ頭之有一レ疾也、關部法レ人、候二膈以下至レ臍之有一レ疾也、尺部法レ地、候二臍以下至レ足之有一レ疾也、左脈候レ左、右脈候レ右、兩手皆然、病者危迫則勿下以二平旦一爲上レ拘、雖二一日三一診レ之」と見え、寸關尺義の條に、「從二魚際一至二高骨一、却行一寸、因名曰レ寸、去二尺澤一一尺、因名曰レ尺、界二乎尺寸之中一、因名曰レ關」と見えてゐる。和漢三才圖會に、手太陰肺經は肺の筋、魚際は「在二手大指本節後內側陷中一、脆橫紋略上、散脈之中、白肉際魚腹之坳」、尺澤は「在二肘中約文上、屈レ肘橫文筋骨罅中動脈一」と見えてゐる。

ふつきさう (松風)

〔富貴草〕牡丹の異稱。周茂叔の愛蓮說に、「牡丹華之富貴者也」。

ふづくる 阿房三太ならむうげんだで、やまけふづくる內儀の心(丹波與作)

謀をもつて人をたぶらかす。たらしすかす。蓋し文作で、色艶をつけて構成する義であらう。女大名丹前能(元祿十五年刊)卷四、思ひの山當世班女の條に「長長しき舟、物言はではすまぬ事、何とぞふづくり我我ばかりくだらん分別あるまいか」。商人軍配團(江島其磧撰)二之卷、商人の刄物目利は大疵の基の條に、研屋から刀二十七腰を銀八貫五百目で求め、本阿彌をして鑑定せしめたれば、三百目の價ほかないというたので、「これはふづくられしと大きに心散亂し」とある。色道大鏡・態藝門に、「當道のふづくるは謀をめて人をたぶらかす事をいふ、究竟是は偶人より出たる詞なり」。和訓栞に「ふづくる‖俗語なり、人をふづくるなどいふはたらしすかす意にいふめり」。

ぶつげんしんごん 心月輪の秘印を結び佛眼眞言を唱へ給ふ(嵯峨天皇)

〔佛眼眞言〕佛眼尊(一切佛眼大金剛吉祥一切佛母心尊の略)の陀羅尼をいひ、瑜祇經金剛吉祥大成就品に見え、この本尊特有の咒文で、「南謨三曼陀勃馱南唵勃馱嚕遮尼娑訶」といふ。

佛生同體の人間 況んや佛性同體の人間子と生れ親となる(兼好)

佛性は佛陀たるべき靈性の意で、各人の具有する眞如法性をいふ。涅槃經に一切衆生は悉く佛性を具有すと說いてある。よつて佛性同體の人間といふのである。「地を走る獸云云」を見よ。

***佛神三寶** 佛神三寶も見捨てさせはし給はじ(大原問答) 佛神三寶番屋冥利何事も隱さず勿論他言致すまい(扇八景)

佛・神と佛・法・僧(三寶を見よ)。また佛神三寶も照覽あるの意で自誓の詞に用ゐる。

佛神水波 ここも稻荷の神社、佛神すゐはのしるしとて(曾根崎)

佛は神の本地にて、神は佛の垂跡なれば、神と佛とは恰も水と波とのやうなものといふ本地垂跡說に據つたのである。謠曲・誓願寺に、「神といひ佛といひ、唯これ水波の隔てなり」。

***ぶつちやうがほ** 藪からばう主の佛頂顔(女腹切) 天窓かく介ぶつちやうづら(夕霧)

〔佛頂顔〕佛頂面ともいふ。脹れ顔。むつとし

け。「だうげ」は「おどけ」の轉換語の訛であつて、「からだ」(身體)を「かだら」、「ちやがま」(茶釜)を「ちやまが」、「えんぎ」(緣起)を「ぎえん」といふの類であらう。

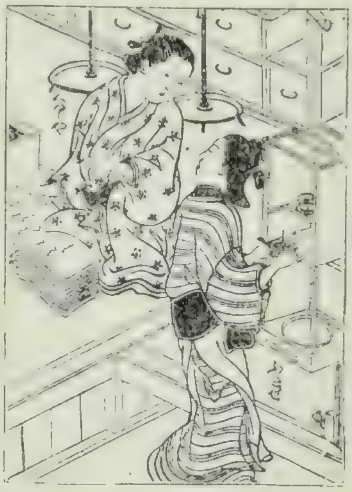
ふたくすじ　一枚ひねつて額に當て彼のばくていに飛入れば、そろを脇から二くすじの三馬あざがけ湊ぎつつ(大織冠)
博奕の語、二枚の札をごまかして盗取ること。

ふたくちや　二口屋のはみ出し、猪熊の革柄、なぜに遲いと毎日二三度使が走る(女腹切)
〔二口屋〕京都室町今出川角にあつた有名な饅頭屋で、二口屋能登といふ。雍州府志(貞享三年刊)土産門上、造醸部に、「饅頭、……松屋・龜屋・二口屋・寶來屋等互爭競造二饅頭一云々」。買物調方三合集覽(元祿五年成)京の菓子所の條に、「室町今出川角、二口屋能登」。長町女腹切のこの文は、二口屋のはみ出し饅頭に、はみ出し(その條を見よ)をいひかけたのである。

＊**ふだしよ**　札所札所の靈地靈佛(曾根崎)
〔札所〕巡禮者が參詣して札をうつ三十三所の觀音堂。「おほさかさんじふさんしよ」を見よ。

ふたせ　エイしやらくさい、二瀬仲居も小差出、飯焚は來て火吹竹(重井筒)
〔二瀬〕下女を勤め、また客にも接する賣春婦の一種である。二瀬といふは陰手向と夜の伽と二瀬にわたつて勤めるからの名である。井原西鶴撰・好色一代女・卷六、旅泊人詐の條に、「食焼下女も見るを見まねに色つくりて、大客の折ふしは次の間に行て御機嫌をとる、是を二瀬とはいふなり」。西澤與志撰・茶傾腹立顏(寶永五年刊)卷三に、「茶屋白というて二瀬あり、内を勤時は小らん・小吉と呼ばれ、白にまはす時はきぬえ・たが野・しめなどと替へ、身一つにて内外の勤、雨降りに傘、日和に草履賣るに等し」。世間娘氣質・五之卷に、「女ながら針持つすべさへ知らず、氣をつめてぢちめなる奉公はとてもせぬ心なれば、上間屋下問屋へ蓮葉女といふいたづら奉公勤め、諸國の商人の夜のなぐさみものになつて、果は新地堀江の二瀬に流れ渡り……」。


(野白内證鏡(寶永七年刊)所藏)
〔ふたせ〕


(百人女郎品定所藏)
〔二瀬〕

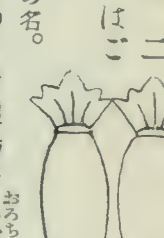
二つ道具　御家中の物頭采配までゆるされ、二つ道具をつかはせし身が、心まで上上の馬方になつたよな(丹波與作)
外出の時に儀衞に立て行く二本の鎗。

＊**ふたつひきりやう**　(女夫池)(川中島)(女楠)


〔二引兩〕

〔二引兩〕足利氏の紋所で、引兩とも二つ引ともいふ。

ふたつへいじ　二つ瓶子はかはごえ(五人兄弟)
〔二瓶子〕紋所の名。


〔二瓶子〕

ぶたふてんじん　素盞嗚の大蛇を斬つて、唐國に武塔天神と名乗り(國性爺後日)
〔武塔天神〕素盞嗚尊の稱。倭漢三才圖會卷七十二、山城國祇園社の祭神を記せる條に、「牛頭天王云素盞嗚尊或云武塔天神」。雍州府志卷二、神社門上、愛宕郡、祇園社の條に、「所謂三座、第一牛頭天王或謂二感神大王一、又稱二武塔神一、是則素盞烏尊也、云云」。

ふたまただいこん　お寺の大黑と書は隱して長持に入れて二股大根や、夜は抱かれてね祭の(松風)　今日は五日宵庚申、甲子が近い二股大根のけておけ(宵庚申)
〔二股大根〕二股になれる大根を俗に福來といひ、福の來るを祈つて、甲子の日の夜に大黑天を祭り、大豆及二股大根を供へる。日次紀事(延寶年中成)十一月の條に、「銀座大黑屋尊二崇子祭一特祝レ之、……凡諸商此月子時祭レ之、蓋買賣之間取二其利一也、欲レ比二鼠子之蕃息一也、凡所レ供レ子之膳食每品加二大豆一、又供二兩股大根一、大豆鼠之所二好食一也、兩股大根俗稱二福來一」。松風村雨束帶鑑のここの文は、長持に入れた蕪を二股大根にいひかけたのである。

ふちがしら　御池の町のふち頭、小川通のせかいらぎ今日明日に持たしてやれ(女腹切)　三年の切米にも叶はぬ大小の鍔ふち頭(蛙合戰)
〔緣頭〕頭は緣の中に嵌り一具の物であつて、刀の柄のさきに附ける金具で、柄頭または冑金といふものである。稻葉通龍撰・裝劍奇賞・卷一に、「緣頭と並稱すること未だ所見なし、但頭といへるもの日本紀に劍柄また劍頭と書きこたかみとよみたるあり、是延喜式に柄頭と云ふものならん、中頃には冑金など云へるよし或說に見えたり」。

ぶちくふ　何でも今夜はあんばいよしでもぶち食つて、小半切のけんどん酒(吉岡染)
〔打食〕「食ふ」を「ぶち食ふ」と强げにいふ奴詞で、「打ち任す」を「ぶち任す」といふの類である。

藤田小平次　この新七めが親は大和の貧乏人、幼少の時藤田小平次と申した狂言役者へ奉公やら養子やらに參つて、女方を致したを(淀鯉)
元祿頃上方にゐた實事立役に堪能の名優である。棠大門屋舖(寶永二年刊)に、「六方は嵐、實事は藤田小平次と、此二役は何れの役者が勤るもこれをぢばんにすといへり、譽なる哉小平次、一生顏を紅粉にぬらず襟にならず、不斷撫付かつらに上下か羽織はづさず、年中姿をかへず、實事をして見物にいやといはれず、思へば思へば上手也」。

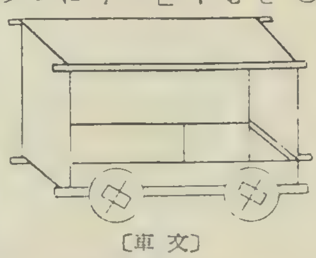
ふぢなはめ　「ふじなはめ」を見よ。

＊**ふぢなみ**　松に懸れる藤波の、空紫の色色も、花一時の世のならひ(持統天皇)
〔藤浪〕藤靡の義。藤の花房。和訓栞に、「ふちなみ。藤並藤波など萬葉集に書り、されど藤靡の義、しなひなびくをいふ」。

藤の木柱　藤の木柱・茅屋の雨、人こ

ふみいか 誰が文凧の一結び(氷朔日)
〔文凧〕結び文の形に作つた紙鳶。

ふみぐるま 萬卷の文車牛に汗して轟かし(用明天皇)
〔文車〕「ふぐるま」ともいひ、書籍を積む車。徒然草・第七十二段に、「文車の文」とあり二壽命院抄の註に、「ふぐるまは今禁中に有、又東寺にもあり、失火などの時早く引出さんための用なり」と見え、大全には左の圖が載せてある。


〔文車〕

ふみこくら 腕や臑の力は御侍にも負け申さぬ、はりこくら踏みこくらは此膝骨の碎くるまで(百日曾我)
「ふみことくらべ」(踏事競)の略。踏み競べ。

***ふみつき** 頃は文月半の空(女護島)
〔文月〕陰曆七月の稱。盖し稻穗の見える月卽ち穗見月の義であらう。

***ふもんぼん** 大慈大悲の普門品、妙法蓮華きやう橋を越ゆれば(天網島)
普門品は妙法蓮華經の中にあつて觀音經ともいふ。「普門」とは觀世音菩薩が普く人を佛道に導き入れ給ふ門戶をいひ、普門品はこの普門の法を明にしたものである。ここの文の「きやうばし」は、妙法蓮華經の「經」に京橋をいひかけたのである。

***ふゆとし** 冬とし一言のことわりもせず、今もまづ身に逢ひたいといふべい所、竹を呼出しくれとはのぶとい者だ(夕霧) 冬としも鶴が橋のおばばへ大きな鏡にめぐろ添へてすゑられた(夕霧)
〔冬年〕前年の暮。

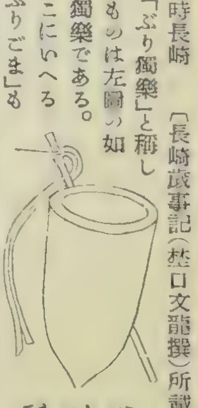
***ふよう** 太刀を拔いて御覽あれば、明明として芙蓉の開くが如く(嫗山姥) 綠の眉・芙蓉の目元わさわさと(卯月潤色) 芙蓉の顏・柳の眉(弘徽殿)
〔芙蓉〕蓮花をいふ。文海披沙に、「芙蓉は蓮花なり、一名は荷、一名は芙蕖、一名は菡萏、根を藕となし、莖を茄となし云云」。芙蓉の目元、芙蓉の顏などといふは、美人の顏容を形容していふ。李白詩に、「美人出二南國一、灼灼芙蓉姿」。白居易の長恨歌に、「芙蓉如レ面柳如レ眉」。

ふらすこ 瑠璃白玉のふらすこにちんだ泡盛(酒呑童子)
葡萄牙語 Frasco. 硝子製の德利。

***ふり** 二月中旬にふりを獻ずる榮華なり(國性爺合戰) 人の面消え消えとふり茄子の形を現じ(弘徽殿鵜羽産家)
「うり」(瓜)をいふ。枕草紙・うつくしきものの條に、「ふりに書きたるちごの顏」。易林本・節用集、幾部・草木に、「胡瓜」。「二月中旬云云」をも見よ。

***ふり** 上着をぬげば右左、ふりとつめとのかたちぐに(歌念佛) 茶屋で此方のまゐる茶は新造のふりかつめ茶か(卯月潤色)
〔振〕振袖の略。夫を持たぬ娘分の間は振袖を着る。「振か詰」とは、振袖を着る若い娘か、詰袖を着る年增女かの意。

ぶりごま 心すわらずぶりしやりのいぶりぶり獨樂(松風)
〔長崎歳事記(梵口文龍撰)所載〕往時長崎で「ぶり獨樂」と稱したものは左圖の如き獨樂である。ここにいへる「ぶりごま」も同種類のものであらう。



〔ぶりごま〕

***ふりづんばい** そのいましめにあひながら、菜を掴まんとは腕なしのふりづんばい、かたはら痛し事なかし(出世景淸) 石塔に耳なく卒塔婆物言はねばとて、拔かぬ太刀の高名腕なしのふりづんばい、草の蔭にてさこそ可笑しく思されん(烏帽子折)
「ふりづんばい」は振飄石と書き、振飛礫をいふ。竿の端に緒を附け、これに礫を掛け、振廻して礫を遠方に飛ばすもの。「腕無しの振飛礫」とは、腕力の無い者が振飛礫を競合ふやうに口先ばかり強いことを言ふのは何の役にも立たぬことの意、卽ち力なくして擬勢張るの無益なるをいふ。風流曲三味線(寶永七年刊)一之卷、一盃食はして乞食にあらふ命の條に、「腕なしの振づんばいと無い袖がどう振られう」。俚言集覽に、「ツムはツムにて圓なり、バイは貝の名、圓貝を礫打に用ゐる故にツムバイといふ」。

ふりばり 死女郎のふりばりめ、竹の鞭を食ふなよ(丹波與作)
「ふんばり」ともいふ。その條を見よ。

ぶりぶり 戾すぞと投返せば、取つては投かけ投戾し、二三度四五度せり合ひしは幼遊のぶりぶりや、ぎつちやう手鞠つくばれの、峯に山彦のどうどうどう(隅田川)
〔振振〕往時京都地方で正月頃に流行した小兒遊技の一である。紐を振つて其はずみのつきたるを以て打つから「ぶりぶり」というたのである。ぶりぶりは毬杖とは別物であつたが、槌の代りにぶりぶりの紐を振廻して球を止める遊となつてからは毬杖と同じ遊戲となつた。「ぎつちやう」を見よ。

ふりやう 黃金の寶鐸、白金のふりやうの聲(聖德太子)
〔鐃鈴〕鐃鐸(その條を見よ)の形の鈴。

ふる 山手には二重三重の柵をふり、海手に數箇所の物見の番(最明寺殿)
〔振〕造る。烏翠堂北峯撰・北國巡杖記(文化三年の跋あり)に、「家を築き石の柵をふり」。和訓栞、「ふる」の條に「柵をつくるをもふるといへり」。

古き都 古き都の所から、花散里の藁圍ひ(蟬丸)
大津をいひ、嘗て天智天皇の帝都であつた。天智天皇は御卽位の六年三月飛鳥岡本宮より近江國滋賀の大津宮に遷り給うたが、その崩御後壬申の亂があつて、天武天皇は飛鳥淨御原に都を奠められたによつて、大津の宮は荒都となつた。

***ふるな** たとひ相手が富樓那の生れ變りでも、ゆがんだ物はゆがんで映る(隅田川) 辯舌はふるな尊(大原問答) 如何なる富樓那の辯舌も何と言拔け遁れうぞ(女夫池)
〔富樓那〕本名を Purna-Maitrayaniputra と云ひ、釋尊十六弟子中の一人で、辯舌巧に說法の名人として衆弟子中第一の尊者であ

た不快な顔付。蓋し佛頂尊の恐しい顔付に喩へた語である。

ぶつつく　茶屋へ來て産所の夜伽する事は、竟に無いづとぶつつけば(天網島)

ぶつぶつと不平をいふ。ぶつくさする。「ぶつつく」の「つく」は、「どくつく」(毒突)などいふ「つく」と同じ語。(この語今も福山市あたりで往々用ひてゐる)。

ふでがき　色づく木練・若避子、その品品は筆柹も書き盡されずと賣りにけり(嫗山姥(天皇))

〔筆柹〕柹の一種。雍州府志・六、土産門上に、「筆柹。柹頭尖立而似₂筆尖₁故稱ㇾ之、熟則其色紅而味甘、洛北村婦盛₂是於平盆₁、戴₂頭上₁賣₂市中₁云云」。

筆捨枝　慮外千萬千貫枝筆捨枝や(反魂香)

紀伊國藤代に筆捨松といふ名木あるによつて、松枝の姿勢佳きをかくいうたのである。

筆捨松　(反魂香)

地名部「ふぢしろ」を見よ。

筆形の中締　栗色のたたき鞘・筆形の中締は江州彦根の御大將(薩摩歌)

鎗標(彦根城主、井伊掃部頭直通の鎗印)。



〔筆形のなかじめ〕

***ふどう**　不動の刄に喉笛を突通され(氷朔日)　不動明王の縛の縄手綱に變じ給へやと(曾根崎山)　不動の慈救の偈・明王の火焰の黑煙立てゝぞ祈りける(用明天皇)　不動の眞言どたくたぐわつたりばつたりだ(女殺)　江戸爲替慥に請取りました、不動參りに待ちまする(冥途飛脚)

〔不動〕不動明王をいふ、詳しくは大聖不動明王といひ、五大明王の一で中央尊となつてゐられる。大日如來の化身で、忿怒破邪の形相を火焰中に現じ、右手に利劍を持ち、左手に羂索を執つて、磐石上に坐してゐられる。

「不動の慈救の偈」は「じく」を見よ。

女殺油地獄のこの文は、法印が與兵衞に引ずり下され、また驅上つて不動の眞言を唱へるやら、法印と與兵衞といがみ合うてどさくさばたばたする意である。不動明王の眞言の「曩莫三曼多(歸命)普遍)縛曰羅赦(金剛)」と、「どたくたぐわつたりばつたり」とが結合してゐるやうである。

「不動參り」は大阪北野稻荷山の南なる不動寺に參詣すること。

ぶとう　練物屋の灰毛猫は、憎らしいぶとうな形で遠慮會釋もなう(大經師)

「ぶたう」、「不當」である。形姿の當を得ないこと。不樣。風流曲三味線(寶永七年刊)一之卷、色より思ひを懸け奉る曼陀羅の條に、「佛壇の下より蒲鉾・車蝦のぶとうに切りし肴を出し」。(序云、源氏物語・浮舟の卷に、「この大將殿の御さうの人人といふものは、いみじきぶたうのものどもにて、一類この里にみちて侍るなり」とあつて、本居宣長の說に、「ぶたうを不道・無道などいふ說いかが、もしは武道にもあらんか」とあるが、この語とは別)。

ふどうくにゆき　武智が眞甲梨割に切れも切れたり不動國行、げに道理とはこれなりけり(三國志)

〔不動國行〕來國行作の刀をいふ、京物で其品稀であつて、刀の列位高きものである。

ふとか男　肝のたばれへ諸白いつかけた薩摩二才、ふとか男であつたばん(博多)

太かる男の義。肥大な男。この語現今も長崎・鹿兒島地方で用ひてゐる。

ふとのおよね　庄野のふとのおよねが俵腰に喰ひ付いて(丹波與作)

〔太阿米〕肥滿のお米(女の名)。「ふとのお米の俵腰」といへるは、庄野の名物燒米俵の緣によつたのである。東海道名所記に「この宿(庄野)の名物は俵の燒米なり、その俵のなりは大さ握拳ほどなり、靑き緒にて強くしめたるは倫子の形に似たり、内に燒米少しあり、家每に並べおきて賣りけり」。「しやうの」をも見よ。

ふとのつと　大江の僧正太祝詞奉り(最明寺殿)

〔太祝詞〕祝詞の美稱。「太」は誠の義。「のつと」は「のりとごと」(宣說言)の略なる「のりと」の約つた語。神に告り申す詞。

ふとまがりのせんべい　砂糖羊羹臚腸羹伏兎曲の煎餅饅頭(天神記)

〔伏兎曲煎餅〕餢飳環餅とも書いてある。粳粉麥粉に砂糖を加へて油であげた煎餅である。

ふなこじり　木瓜鍔の太刀作、九州やうの大反、烏帽子たたきの船鐺(百合若)

〔船鐺〕船底形に反つた刀の鞘の末端の飾の金具。「烏帽子たたきの船鐺」とは、烏帽子形に打つた船鐺の意。

***船靈神**　總じてこの住吉と申すは船路を護りの御神にて、……船靈神とも申すなり(國性爺)

船玉神とも書き、海路の平安を祈る神。主として住吉明神をいふ。和訓栞に、「ふなたま　船靈の義、續日本紀に見えたり、住吉神の和魂を祭る、延喜式に見えたり」。

***ふなばり**　其時鬼王船張に跪き(小栗判官)　氣がくたびれてとろとろと船ばりに手枕して(薩摩歌)

〔船張〕船梁とも書く。船の右舷から左舷に亘せる梁木。和漢船用集に「船張。船の横樑にわたしたる木なり、川船の小舟にてはこの木に居て櫂をあつかふ故に舟張のゐかいと云ふ、海船にては上に現はれたるを櫓床といひ、下にあつて隱れたる横木を舟張といふ」。

ぶば　舞馬鬪鷄に國を失ひし亂國の端不吉とや申さん(千疋犬)

〔舞馬〕舞樂の名。馬上に綵衣を着て舞ふもの。樂府雜錄に、「馬舞、櫳者馬人、著₂采衣₁執₂鞭子₁牀上、舞蹀躞蹄、皆應₂節奏₁也」。

***ふびん**　不便になさるる四郞二郞まで命を助かることなれば(反魂香)

〔不便〕不憫と書くは當字である。憐むべきこと。可愛想なこと。不便は荀子議兵篇に、「汝所ㇾ謂便者、不便之便也」と見えてゐる。「便」は「べん」であるが我國では古くより「びん」と音讀し、不便は便利でない義から轉じてたよりないことに云ひ、更に「かはゆさう」「憐れな」の意にいふ。

ぶぶ　母樣ぶぶが飲みたい(女殺油地獄)

湯又は茶をいふ小兒語。湯又は茶は熱いので、ぶうと吹き冷すから「ぶう」といひ、「ぶう」の頭の一音を躍らせて「ぶぶ」というたのである。また轉じて水をもいふ。小兒語には一音を躍らせていふのが多い、「とど」の條を見よ。

***ふぼん**　一生不犯の願を立て(蟬丸)　某も今日までふぼんたり(酒呑童子枕言葉)

〔不犯〕女子を犯さぬ義。女に肌をふれぬこと。

より、女を罵る稱になつたのであらう。(或は糞尿であつて、糞垂れ小便垂れの意より女を罵る稱になつたものか)。「ふんばり」は「ふりばり」ともいふ、蓋し「ふんばり」の「ん」が末音の「り」に引かれて「ふりばり」と轉訛したので、「がにはり」を「がりはり」といへる類である。俚言集覽に「江戸にて賤しき妓女を罵りてふんば女と言」、とあれども、紅白源氏物語などにもこの語の見えてゐるから、京阪地方でもかなり古くから用ゐた語である。

ぶんぷくちやがま (隅田川)

〔文福茶釜〕上野國館林の茂林寺の僧守鶴の持つてゐた釜で、一度水をさせば數日間ぶんぷくぶんぷくと沸返るといふ。俚言集覽に、「本朝俗談志に、上野國館林茂林寺に狸の化せし守鶴といふ僧、住職七代の間納所せしとき、釜を調せしことを記して曰く、此釜を菴室の圍爐裏にかけ置き、一度水をさせば五七日がほど涌出で、水をさす事なし、常にぶんぷくぶんぷくと沸きける。守鶴生をあらはしければ、此釜のぬしは毛が生たりと人々いひあへり」。

ぶんや (天網島)

〔文彌〕岡本文彌が語り創めた哀婉な調の淨瑠璃節。聲曲類纂に、「大阪・岡本文彌。山本土佐掾が門人と云、天和貞享の頃にや、伊藤出羽掾が芝居に於て一流を語り弘めしかば、文彌節と號して浪花中にもてはやしぬ」。

へ

***へいきん** 源の貞世入道了俊は、往時應安年中に鎮西の探題に補せられ、菊池が餘族をへいきんし武功他に越え(今川了俊)　日本武尊と稱し奉り、九州既に平きんの由帝都に注進ありしより(日本武尊)　この男子唐土に押渡り、大明韃靼を平均し異國本朝に名を揚げし(國性爺)

〔平均〕平定。

へいぐわい どなたも船中平ぐわい御免、よいお近付もとめしと禮儀仕舞へば(博多)

〔平懷〕憚らないで平氣なこと。無遠慮。饅頭屋本・節用集及び易林本・節用集に、「平懷」。和訓栞に、「へいくわい。三代實錄に尋常平懷之時人天眼目に平懷常實と見えたり、敬意なき意にいふも通へり」。

***へいぢもん** へいぢもんに身を寄せて、うかと見入りておはしける(小栗判官)　跡を慕うて門に入り、へいぢ門よりさしのぞけば(用明天皇)

〔屛中門〕表門と母屋との間にある門。中門。

へいれい へいれい白丁退紅白丁(最明寺殿)

〔平禮〕用明天皇職人鑑・職人盡しの條に、「纔に心や採烏帽子、へいらい小結梨子打や」とありて、「へいれい」は「へいらい」ともいひ、また「ひれ」ともいふ。「ひれ」を見よ。

へうたんいか 鰻瓢箪鯰いか(氷朔日)

〔瓢箪凧〕瓢箪の形した紙鳶。元祿寶永頃流行した紙鳶にはかかる奇形の物が多かつた。(序云、瓢と箪とは別物で、瓢はひさご、箪は竹のくみ籠で食物を入れる物であるが、朗詠集に「瓢箪屢空」と見えてゐるより合せ呼んで瓢のことをいふやうになつたといふ)。

べうのゆもと 空を慕ひて鳴く犬の、べうの湯元はあれとかや(二枚繪草紙)(用明天皇)

犬の吠聲「べう」に「べふ」(別府)をいひかけて、「べうの湯元」というたのである。犬の吠える聲を「べう」と云うた例は、狂言記・犬山伏などの中にも見えてゐる。別府は豐後國速見郡にある有名な溫泉地。

べうもく ますらは其儘べうもくとなり(用明天皇)

〔眇目〕すがめ。隻眼。

***べかこ** 千兩道具の娘を二十兩の目くさり金で女房に持たうとや、べかこまあなるまい(女腹切)　手をたたいてほつほらほ、こちや知らぬ、あべかこの新介と、走つて内へ駈込めば(壽門松)

「目赤く」を音便によつて轉じて「めかかう」といひ、更に「べかこ」と訛つた語。現今では「あかんべい」といふ。小兒が下瞼を指で引下げ、裏の赤いのを見せていふ語。小兒ならずとも不承諾の意にいふ。大鏡に「めかかうしてちごをおどせば」。壽門松に「あべかこの新介」とある「あ」は感動詞である。そして東海道の名物に「安倍川の糁粉」といふがあるから、それをもぢつて新介と人名にしてつづけたのである。國花萬葉記・卷八、駿河國中名物出所之部に「餅＝あべ川の茶屋にて往來の旅人に賣る也、風味海道の名物」と見えてゐる。

***へきしよ** 御年寄衆・御小姓の外、召もなきには御座の前參らぬ筈の御壁書(加增曾我)

〔壁書〕張紙にした法令。壁書はもとかべがきの義である。太平廣記・謝自然傳に、「二天神衞二其門屛一、如二今壁書一」。

へきり 間のへきりを小栖にて時分を窺へ、サア來いと(博多)

〔部切〕船内を仕切つた板。和漢船用集卷五に、「部切舟＝艘をいろいろに幾間も仕切あるの名なり、此ゆゑに間船とも云」と見えてゐる。部切の義これで明かである。

べくのみ 押へぬ盃飲まぬ毒、下に置かずのべく飲みや、浦島飲みはあけること法度にしての潮干飲み(加增曾我)

〔可飮〕可の字を助動詞に用ゐる時に漢文では可レ致、可レ被レ下などと書いて、上に置くによつて、注いだ酒盃は下に置かないで直に飲むと云ふ洒落言葉である。またこの要求に應じて作つた可盃といふものもあつた。爲井蘊章(寶永二年刊)(詩繪雛形本)に、可盃を畫きて、「丁形、下に置かぬといふ心に可といふ也」と見え、醒睡笑に「べく盃を戯れに夏菊と名づけてこそ候へ、その故は常(下にいひかく)に置かれねば」と見え、また嬉遊笑覽卷十上に雅筵醉狂集を引いて、「盃の底に細き穴をあけて、指を以てその穴を塞ぎて酒を盛らしむ、仍て飲盡さねば下に置かれぬなり、可字は文章の上に有て下に置かざる字ゆゑ、俗に可杯と名付け用ゆ」と見え、西鶴俗つれづれ卷一にも、「可さかづきの後皆皆氣つよくなりて、男達の咄に云々」と見えてゐる。

へこむ 食込んだかへこんだか、女夫の中の榮耀遣ひか(重井筒)

〔凹〕失敗して損をする。和訓栞に、「へこむ。俗語なり、減縮の義也」。巣林子のこの文、「食込む」と韻脚を合せた文飾である。

べつかつの冠 阿克將が出立は纓緺の赤裝束、べつかつの冠着たり(國性爺後日)

「べつかつ」は靺鞨の誤用であらう。昔靺鞨と

った。

*ふろ　南の風呂の浴衣より今この新地に戀衣(天網島)　夫にはあらぬ白の風、風呂の煙のたちゐまで(卯月紅葉)　白の白茶か風呂で焚いた煎じ茶か(卯月潤色)

〔風呂〕もと風爐の借字である。風爐は席上に置いて湯を沸かす爐である。轉じて浴槽をいふ。當時風呂屋には湯女(ゆな)と稱して、表面は浴客の垢を洗ひ又は垢掻をなし、内實は娼妓同樣の所業をなす賣春婦がゐた。故に風呂屋は遊女屋をも兼ねたやうなものであつた。嬉遊笑覽に「大阪の島の内の娼家は某風呂といふ、さくら風呂・ときは風呂といふ類なり」。近松のここに云へる風呂は湯女（「ろしう」ともいふ）のことをいうたものである。「ろしう」(呂州)をも見よ。

ふろふき　人參の風呂吹を一期の見はじめ(反魂香)

〔風呂吹〕大根を湯煮にし、其熱い間に味噌を塗つて食ふものをいひ、湯氣の中で吹くからの稱。但ここは人參を風呂吹にしたのである。

*ふろや　茶屋風呂屋へも身を賣つて(淀鯉)　かなはぬ心を碎かんより、同じか熊野(ゆや)より風呂屋にせよ(本領曾我)

「風呂屋」「ふろ」をも見よ。

*ぶゐい　抑も斯波の武衞の館と申すは代代左右の兵衞に任ず(雪女)

〔武衞〕兵衞府の唐名。兵衞府は左右あつて、宮門・閤門以外を警衞し、行幸の時前後を警衞する職で、四部官(督、佐、尉、志、)がある。

*ふゑつ　蝦夷退治の斧鉞を給はる條(百合若)

〔斧鉞〕をの・まさかり。連文釋義に、「戚爲レ斧、揚爲レ鉞、斧小二手鉞一、鉞大二手斧一」。

ぶんかふ　大高にお菓子さまざまぶんかふに盛入れ(丹波與作)

〔文匣〕黒川道祐編・雍州府志・七、土産門に、「文匣。以レ紙貼二箱之内外一、塗二漆於其上一、或盛二書册一或藏二雜品紙一、是稱二文匣一」。文匣に大高(その條を見よ)を敷いて、その上に種々な菓子を盛入れたのである。

*ぶんごむめ　國の名も心の花の豐後梅、眞野(まの)の長者の祕藏子の玉世の姫(用明天皇)

〔豐後梅〕梅の一種。松岡玄達選・梅品に「鶴頂梅、和名ブンゴムメ。達按ルニ花八重大輪、ツボミ鮮紅ニシテ開ケバ鶴ノマハリ薄紅、實甚ダ大ニシテ味美ナリ、又單瓣アリ、實黃白ニシテ、紅暈有テ鶴頂ノ紅色ニ似タリ、豐後ヨリ出ルハ京畿ニ多クアルトハ異也、花瓣甚豐カニシテ美シク至テ大輪ナリ」。巣林子のこの文は、國の豐後に豐後梅をいひかけた。

ぶんざう　油のついでに油屋の女房殺、酒屋に仕替へて幸左衞門がするげな、殺手は文藏憎いげな(女殺)

〔文藏〕佐川文藏を云ふ。大阪の俳優で、享保初年から敵役として賣出し、享保三四年頃は位付上上となり、上上吉まで昇進したが、享保八年以後は其名が見えない。役者金化粧(享保四年刊)敵役之部に、「佐川文藏。上上、近年つき出しの惡人、めつたによいよいとの噂も七十五日では止むといへど、いかにもようござんすが少し不精に見えます、お心を付け給へ」。女殺油地獄の登場された享保六年に於ける佐川文藏は、竹島幸左衞門の座本であつた大阪吉左衞門町中座の敵役として勤め、年齡二十七であつた。

ふんざうえ　大の法師ふんざうえの高からげ、鐵鉢ささげ錫杖つき(井筒)

〔糞掃衣〕比丘の被る衣をいふ。衆人の捨棄した弊衣を拾納して作るが故に糞掃衣といふ。四分律に「捨二檀越施衣一、著二糞掃衣一」。

ぶんしん・たほう　ぶん身たほう八十萬億の大菩薩(釋迦)

〔分身・多寶〕分身佛・多寶佛をいふ。分身佛とは、一の佛菩薩の身を分ち形を變じて化現せる佛菩薩をいひ、多寶佛とは、分身せざる佛をいふ。

ぶんせんわう　文宣王は大野に狩して麒麟を得(百日曾我)　文宣王は陽虎なりとて捕はれ(天神記)

〔文宣王〕孔丘(即ち孔子)の諡號である。「文宣王は大野に狩して云云」に就ては、「孔子は魯國の狩に麒麟を得られし」を見よ。天神記のこの文は、魯の陽虎と云ふ者が嘗て匡で惡事をなしたことがあつた、孔子が陳へ適(ゆ)かうとして匡を過ぎる際、匡人が孔子の貌の陽虎に似てゐるので、人誤りをして孔子を拘(とら)へたのである。十八史略・卷之一に、「(孔子)適レ衞將レ適レ陳過レ匡、匡人嘗爲二陽虎所一レ暴、孔子貌類二陽虎一、止レ之」。

*ふんだりげ　芬陀利華・摩訶芬陀利華咲亂れ(釋迦)

〔芬陀利華〕梵語 Pundarika. 白蓮華と譯し、印度最優等の花である。

*ぶんだん　娑婆分段の凡身には、恩あり仇あり貧福あり(百日曾我)

〔分段〕六道の衆生がその業力に隨つて感ずる果報に分限形段がある。卽ち身丈に長短、壽命に長夭あるが如きである。衆生は皆同じ娑婆に住して生死流轉するによつてこれを分段同居といふ。成唯識論に、「分段生死、謂二諸有漏善不善業一、由二煩惱障緣一、助二勢力所一レ感、三界麁異熟果、身命短長隨二因緣力一、有二定齊限一、故名二分段一」。

*ぶんじがる　無體に取つて行くべいと、ふんじがつてぞ立つたりけり(伊豆日記)

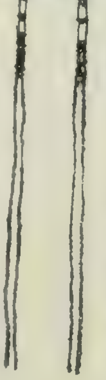
踏反(ふんぞ)り開(はた)がるの義。足を踏開いてうしろへ反る。錦文流撰・傾城八花形に、「伏屋を圍ひ繩切り捨て、ふんじがつたる有樣は勢勝れて恐ろしく」。

ふんどう　京者の正眞、お屋敷方は新分銅、聲になまりは交られど(薩摩歌)　分銅形の一對は備前の岡山(薩摩歌)

〔分銅〕古昔金銀塊を秤の權(おもり)(法馬)形に鑄造し置いて、不時の費用を要する時通貨に改鑄するに充てたもので、豐臣秀吉が黃金の分銅を造つて大阪城に貯へたのに始まるといふ、萬治二年には金分銅銀分銅を造つたが、元祿中には金銀分銅を通貨に改鑄されて、正德頃には既に一枚も存せなかつたといふ。巣林子のここの文は、お屋敷方には新參を分銅にいひかけて新分銅というたのである。

「分銅形の一對」は、備前岡山の城主・池田伊豫守綱政の鎗標。

〔分銅形の一對〕



ぶんない　口狹く奥廣く分内廣大なりとかや(大原問答)

〔分内〕領分内の義。轉じて場處の意にいふ。源平盛衰記・宇治川の先陣の條にも、分内を場處の意に用ゐてある。

*ふんばり　ふんばりめ血迷うて何ぬかす(大經師)　ヤイふんばりめ慮外な、それ何ぬかす(弘徽殿)

女を罵詈していふ。按じるに踏張(ふんばり)で剛愎の義

ほ

ぼいだす 「ぼふ」を見よ。

ほいちやう 都を知らぬ島夷何か泣くやら口說くやら、夥長 夥長 財附、アアどうよくなこんはんにや、うんすんすんとひれ臥して(國性爺後日)
〔夥長〕西川忠英撰・華夷通商考卷二に「夥長＝海上乘方を主とる者也羅經の法を能く知りて日月星を計り天氣を考へ地理を察する役」。現今の支那音は hɪo chang といひ、組長、組合長、組頭の意。

***ほうい** 風折烏帽子に紋紗の布衣(松風)
〔布衣〕「ほい」とも云ひ、狩衣のこと。狩衣はもと布で作つたものであつたによつて布衣と云うた。德川時代になつては布でなくても無紋なるを布衣と云ひ、織紋あるを狩衣と云うた。

ほうおんかう 長柄の市郎右衛門といふ人報恩講の銀を盜み、親の勘當うけて白晝に在所を追拂はれた(二枚繪)
〔報恩講〕眞宗にて、親鸞上人の忌日(親鸞上人は弘長二年十一月二十八日に入滅された)に勤修する法會で、毎年十一月二十二日から同二十八日まで行ふ。これをお霜月ともいふ。(現今は新曆に計算し、或はそのまま新曆の日に行ふ)。ここに報恩講の銀といへるは、本願寺お茶所維持の冥加錢を講中の者から集め、この銀を報恩講の時に奉納するによつてかくいうたのである。

***ほうが** 鎌倉の大名衆方をみつぎの爲、少しづつ奉加を致され集められたる金なれば(百日曾我) これは難波の御坊の御普請の奉加銀今ここに有合せた(冥途飛脚)
〔奉加〕神佛に寄進する財物に我が財物を加へること。神佛の爲に財物を集めることをも云ふ。寄進。

ほうき 守屋が蜂起五畿內なかば同意して、おぼつかなきこれ一つ(聖德太子)
〔蜂起〕數多の蜂が飛起つやうに群り起るをいふ。史記・項羽紀に、「楚蠭起之將皆爭附レ君者、以二君世世楚將一爲三能復立二楚之後一也」と見えてゐる。蠭は蜂の古字である。「守屋が蜂起」は守屋が軍勢蜂起の意。

ほうげい これは天竺祇園精舍のほうげいにして、今この三界に並びもなみの立居に任せ(用明天皇) すはや御法のかいびやくの、ほうげいの聲告げ渡る(釋迦)
〔寶鯨〕貴重な梵鐘。鯨とは梵鐘をいふ。梵鐘の聲を鯨音または吼鯨などといひ、鐘銘集の中にも見える語である。祖庭事苑に「物類感志云、海岸有レ獸曰二蒲牢一、而性畏二鯨魚一、食二於海畔一、鯨或躍蒲牢卽鳴、聲如レ鐘、今人多狀二蒲牢獸形一施二鐘上一、斲レ撞爲レ鯨而擊レ之、鯨本無レ聲、因二鯨躍一而蒲牢鳴、故曰二鯨音一」。

***ほうけつ** 鳳闕の賢聖の障子をまなび(五人兄弟)
〔鳳闕〕禁裡をいふ。兩觀の闕閣くして上に銅の鳳凰を置けるが故にいふ。漢書・郊祀志に、「鳳闕高二十餘丈」。

ほうけふいんだらに 寶篋印だらに神咒を修行せば、人天の善果を受くる必ず疑ふこと勿れと(嵯峨天皇) 寶篋陀羅尼の大鎧(大織冠)
〔寶篋印陀羅尼〕陀羅尼はその條を見よ。陀羅尼の功德を比喩的に表して寶篋印といふ。寶篋印陀羅尼を唱へれば、その功力によつて墮獄の亡者も善果を得るといふ。「寶篋陀羅尼の大鎧」は、大鎧の貴重なるを形容したものである。

***ほうける** 病みほうけて空耳でがなござりましよ(重井筒) よみとかうとに屋財家財負けほうけ(大織冠)
〔惚〕惚くの延びた訛。ぼんやりする。ぼける。

***ほうこ** (松風)
〔布袴〕束帶の裝で表袴の代りに指貫をはき、束帶に次ぐ服裝である。布製の袴のことではない。雅亮裝束抄下卷に、「布袴といふ事あり、衣指貫うるはしく着て、其の上に下襲着て、表の衣(袍)に尻作りて、帶さして笏を持つなり」。桃華蘂葉に、「布袴事。常の袍に著二下襲指貫一、是謂二布袴一、着用の事は可レ隨二先規一也、布袴之時は無文丸鞆帶、野太刀を帶する由云云、又布袴に不レ帶レ劍事も有る也」。

奉公かまひ 奉公構ひの御改易(丹波與作)
〔奉公構〕奉公を差止めて追放の刑に處すること。構とは、追放に處して其地に入るを得しめなかつた刑をいふ。

ぼうざや 下人に持たせし風呂敷より棒鞘の一腰を取出し、これはこれ信國とや(女腹切) たつた今一二の橋にて、棒鞘の刀持つて走つて下へ下つたといふ(雪女)
〔棒鞘〕刀劍の素鞘。桂川連理柵(淨瑠璃)帶屋の段に、「兄長右衛門は棒鞘の一腰にさしつまる」。

***ほうしや** 右大將賴朝公、南都の大佛御再興ましまし既に成就と訴ふれば、供養の報謝に急ぎ大赦を行ふべしと(出世景淸) 俄に剃髮仕り武藏坊辨慶といふ今道心、ちと御ほうしやに御首を入れさせ給へと(吉野忠信) 如何なる御憎しみ御恨みも虎・少將に御ほうしやあり、時致樣を御免あらば(扇八景)
〔報謝〕恩を報じ德を謝する義。喜捨。敎行信證に、「深知二佛恩一、爲報二謝至德一」。

ほうしよ 湯の袞立つもうらやましく心までこそこほりけれ、これぞ寶所の宿りと思ひ(娥)
〔寶所〕珍寶の所の義、以て安樂所の意にいふ。法華經・化城喩品に、「欲下過二此道一至中珍寶所上……若能前至二寶所一亦可レ得レ去」と見え、「寶所在レ近、此城非レ實」とも見えて、無上正覺をいうたのである。

ほうず もとお氣のむすぼほれ、何がな興あるお慰み、御心だにほうじなばお藥も廻らんとのこと故、不調法な歌三味線(關八州)
「飜ず」の音便であらう。ひるがへす。轉じる。

ほうせんくわ (拾袖始)
〔鳳仙花〕一年生草本、高さ一二尺に達す、花は葉腋から生じて紅色、紫色、白色などである。


〔鳳仙花〕

稱したものは清の興起した滿洲の祖先と同人種であるから、清の部將阿克將も靺鞨部族として、「靺鞨の冠」といふべきを「べつかつの冠」と誤用したので、冬帽帽のことであらう。(序云、江戶時代は靺鞨も韃靼も滿洲と同じものと解してゐた。「だつたん」の條を參照)。

べつかん 菓子に取つては饂羹、羊羹、かすてら、ほろてら(天神記)

〔鼈羹〕菓子の名。嬉遊笑覽卷十、飲食の部に、「安齋云、鼈羹は、摺立ての山の芋一升に砂糖一斤、赤小豆のこし粉一升、小麥粉五勺ねり合せ、蒸して龜甲形に切るなり」。

べつきやうさんぶ 汝が家の眞言祕密、三密瑜伽の阿字金胎も別經三部の外を出でず(本領曾我)

〔別經三部〕眞言宗根本經典の三部、卽ち大日經(全七卷、善無畏譯)、金剛頂經(全三卷、不空譯)、蘇悉地經(全三卷、善無畏譯)を云ふ。

べつじのねんぶつ ぼん樣呼びまし越後町の扇がもとにて一夜別時の念佛申し候(三世相)

〔別時念佛〕別時念佛會の略。多く淨土宗寺院にて修する法會であつて、同信の僧俗相會し、一定の時日內(二七日・三七日、或は九十日等)專ら唱名念佛を修するをいふ。

***へつる** 僅か二百目三百目のへつり銀(冥途飛脚)

〔剝〕へぎとる。削り取る。日本紀に「所折」を「へつる」と訓んである。「へつり銀」とは、はつつた銀。

***べべ** とてものことにべべ脫いで、祖母がほほに抱かんと(賀古敎信)

河內屋の與兵衞樣と二人帶解いて、べべも脫いでござんする(女殺)

猿のべべ借つて着しよ(千疋犬)

衣服をいふ小兒語。蓋し着物はべらべらなるもの故、その頭の一音「べ」を疊らした語であらう。小兒語に關しては「とゞ」の條に述べて置いた。「猿のべべ云々」は「あゝさぶこさぶ云云」をも見よ。

べべのこ 我が君を一突とはべべの子のおべかこう、天角地目天罰自滅、牛の最期は立ち所(關八州)

牛の子をいふ。蓋し母牛にべらついて步くから、べらつくの頭音べを疊らした語であらう。物類稱呼卷二に「犢(こうし)を四國にてべべの子といふ」と見え、現今も關西九州地方で用ひてゐる所がある。巢林子のここの文は、幼兒のするあかんべいに、牛をいへる緣でべべのこと云ひかけたのである。これを「べらのこ」とした本があるが、それは字形の相似より「べべのこ」を誤つたのである。

***へやずみ** 私は御存知の如く部屋住のことなれば思ふに甲斐なく(傾城佛原)

〔部屋住〕次三男で家督を相續せぬ部屋住の者。

べらのこ 「べべのこ」を見よ。

***べりたつ** やれお盃持つて來いと、たつた獨(ひと)りでべり立つる(女殺)

「しやべりたつ」(饒舌)の約。べらべらしやべる。

***へりぬり** 亂舞舞うて見せんとてへりぬり取つて打被き(本領曾我)

〔緣塗〕緣塗烏帽子の略。烏帽子の緣をふくらかに中に心(しん)を入れて漆塗にしたもの。類聚名物考に、「これは烏帽子のまはりのへりを漆塗にしたるなり、近頃見しは、常の烏帽子の緣は平きを、これはちとふくらかに蛇ばの如くにして中へしんを入て塗りたるもの也、これ必ずしも古への製にてもあるまじきなれど、かかる事なるべしと思量りて今の烏帽子折の工の作れるものなるべし、その緣(ふち)には鐵を入て武備に用るなどいふも、後世の推量より出たる事なるべし、すべて烏帽子を今の製の如くに漆塗にせし事は近き世のわざにて云云」。

へを (碁盤太平記)

「燒鳥(やきとり)にへを」を見よ。

へんいつさいしよ 「びろしやな」を見よ。

***へんがい** これ親仁、隱居樣へ任せて在所はへんがいしたがよい(今宮)

わらはが事は今の間についへんがいにあはうもの(根元曾我)

〔變改〕變じ改めること。下學集・言辭門に、「變改(へんかい)」。女殺油地獄・下卷に、「女郞はそれ程客に厄介をへんがへに行く客もあり」、とある「へんがへ」に變替の字を當てれど、蓋し「へんがい」の訛であらう。

***べんがらじま** 憂きくろ繻子の祢の切れざる辨柄縞の、愚痴なこらさらさうではないに(博多)

「あづきおりのべんがらじま」を見よ。

***へんげ** 變化と取違へ行房に殺(ころ)されたり(隅田川)

〔變化〕動物が形を怪しく異形に變へること。化物。妖怪。

***べんこう** まばゆからぬ張臂べんこう(曾稽山)

〔辯口〕辯舌。後漢書・曹世叔妻傳に、「婦言不ニ必辯口利辭一也」。

へんざん もとの左兵衞の尉勝賴その爲の烏帽子狩衣と偏衫脫棄て(娥)

〔偏衫〕袈裟の一種。左肩から右掖に懸ける僧尼の上服。書言字考節用集・服食部に、「偏衫、僧尼之上服、事見ニ僧史略一」。

***へんしふ** さては何者ぞ偏執を起し害せしぞ(出世景淸)

橘の諸任我君に將軍を超えられ偏執の上、多年所望の御太刀當家に渡り無念とは思へども(艶狩)

〔偏執〕かたいぢな執念。怨恨。西澤與志撰・風流御前二代曾我(寶永六年刊)一之卷に、「殊に其方病體聊心得ず、察する所何奴(やつ)かへんしふにて兜ふか、さもなければ生靈付てなやますか、二つに一つは外れまじ」。

へんじやく 棕庵頭を振つて耆婆・扁鵲でも叶はぬ(夕霧)

〔扁鵲〕姓は秦、名は越人、支那春秋時代の名醫である。詳しくは史記・扁鵲倉公傳を見よ。

へんつき 雙六の采(さい)の目の心に合はぬもれたましく、へんつきはむづかしし(娥)

〔偏突〕漢字の偏を隱して旁(つくり)ばかり見せて何偏とあてる遊戲である。(旁(つくり)を隱して偏をもつて何といふ字だとあてるのだともいふ)。源氏物語・葵卷に、「碁うちへんつきなどし給ひつつ」。枕草紙・卷四に、「さしつどひてへんをぞつく」。

へんねぢ 追從面の出入の奴か、支(さゝへ)言(こと)か偏ねぢか(兼好)

偏拗の義。俚言集覽に、「へんねち、偏ににちる也」。

***へんべん** 三郞が盃を鉾殿にへんべんとぞ申しける(小栗判官)

〔返辨〕返却辨償。返すこと。

たる身のいき懷へほでをさすは何事と言捨て逃ぐるを(賀古教信) 腕なしの臆病者ほでにもあはぬ太刀ざんまい(根元曾我)

「うで」(腕)をいふ。手。「ほでてんがう」「ほでぼし」(各條を見よ)などといふ「ほで」も手である。義經千本櫻・第三に、「テモ冷いほでぢやと手を引いて女房諸共立歸る」。いろは日蓮記(近松門左衞門作・並木宗輔添削、文政三年刊)に、「東條左四郎景成が念を懸けたる女房、命にかけて奪ひしものやみやみと下種のほでに渡さうか」。

ほてい 布袋は唐子のお媚役(隅田川) 乘物の戸八文字に開かせ、布袋乘に乘りたるは(會稽山)

〔布袋〕支那明州奉化縣の僧、名を契此と云ひ、體軀肥大で便々たる腹垂れ頗る異形である。常に一杖を携へ布囊を負ひ、一切供身の具を囊中に藏し、能く人の吉凶及び時の晴雨を豫知し、彌勒菩薩の化身であるといふ。我國では七福神の一として俗間に祀る。「布袋乘」とは布袋和尚の坐せるやうに悠然として乘ること

***ほてくろし** ああほてしろし放さんせ(薩摩歌) 結構なお若衆の兄樣とは忝い忝い冥加ない、手附に一寸ほてくろしい事御免御免、牛兵衞樣も氣をお通しとべつたり抱附き(宵庚申) 我が物顏にほてくろしい此長文(杵符)

腹黑しの義。腹ぎたなし。みつともない。人目はづかしい。物類稱呼卷一、人倫、腹の條に「ほてくろしと云は、枕双子に腹黑とあるに同じ」。義經千本櫻・第三に「此躮はほてくろしき罪穿鑿、生捕りて面恥と存じたに」。

***ほてつぱら** 剩へほてつぱら・壁に茶壺とやら、今になつてお暇下されとや(娥) 其ほてつぱらくり拔いて遣らんものと(隅田川) ほてつぱらがくれろ(融大臣) すないやいほてつぱらめと振りちぎる(丹波與作) エエどんな、けたいのわるいほてつぱらめと鞭を打ち(西王母)

脹り腹の轉訛で、太つ腹に同じであらう。脹れ腹。人を罵り、又は馬を叱るにもいふ。「ほてつぱらがくねる」とは腹立ちむくむくする意。室町殿日記・九、鹿苑院殿に打手をつかはす條に、「えいといふてひく間に、ほて腹のただ中を彼方へ通れと突き拔きければ」。和訓栞に「ほたえるをほてとも云ふはたえ反てなり、馬子の馬を叱るにほてつぱらと云ふも此意なるべし」。俚言集覽に「ほてつぱら=腹の大なるをいふ、布袋和尚の腹といふことにや」。この語現今も信州北安曇郡小谷(佐野坂以北)地方で、太腹の意に用ゐてゐる。

***ほでてんがう** ほでてんがうの貧乏神、何もかもほつきあげ(丹波與作) 此女中は忝くもうぬが小錢で買ふ樣な賣物でない、ほでてんがうかわかずと通れ通れ(酒呑童子) ほでてんがうおきをれと、二人が刀蹈落し(蛙合戰) 鉦の拍子も出合ごんごん、ほでてんご念佛に仇口嚙交ぜて(天網島)

「ほでてんご」ともいふ「ていたづら」(手惡戲)の義。(「ほで」は手をいふ。「ほで」を見よ。) いたづら。じやうだん。俚言集覽に、「ほでてんがう。いたづらをする事、京にていふ」。

ぼてふり ヤアぼてふりの賣人め、弓取の法は知るまじい(孕常盤)

「ぼうてふり」(棒手振)の「う」の略された語。擔ひ賣する者をいふ。振り賣。井原西鶴撰・本朝二十不孝・卷之五に、「まづ出替時までは棒手振なりとも致されよ」。傾城播磨石(寶永四年刊)卷二、せいのつく物やまのいも牛蒡の條に、「世におちぶれたれば是非もない事、いとしやぼうてふりなどさぞやしともなう御座らうと」。方竟白翁撰・俳諧自娛文艸・商の卷に、「爰に予が隣家に褌販あり、究て貧者なるが鷄眼とやらんを患ひて」。現今千葉縣山武郡地方にて、魚賣人を「ぼてふり」といふのもこの語である。

ほでぼし あた見苦しいほでぼしにて尾籠のはたらき致しなば、片つ端眞甲を打割り捨てんと反を打ち(十二段) 平家方のへろへろ武士理不盡に出でよとて、穢はしきほでぼしにて三衣を破りし故(伊豆日記)

「うでぶし」(腕節)の訛。「ほで」「うでぼし」を見よ。

ぼてれん それから身持になつたやら、ぼてれんぢやと腹さすり(萬年草)

女が子を孕んで腹の脹れたるをいふ。この語現今も往々用ゐてゐる。

***ほとおる** 御日の中は朱をさす如く、額に亂るる汗の玉、ほとおりわなく御惱み(浦島)

「ほとほる」の訛。熱氣立つ。「ほとほる」ともいうてゐる。傾城島原蛙合戰に、「只今蛙の鳴く聲御耳に入ると等しく玉體ほとほり以ての外の御惱み」。

ほとけだふし 島主が眞甲にうらをかかせてはつしと立つ、大事の手なればたまり得ず佛倒しにかつぱと臥す(聖德太子)

〔佛倒〕佛像の倒れるやうに、膝も曲げないで其儘横倒れになること。

佛の三十二相 「さんじふにさう」を見よ。

ほとけのみて 輓けや輓けやこの車、ひくや佛の御手の絲(小栗判官) 柴栗小栗操返し、絲に縋れや佛の手(嵯峨天皇)

〔佛御手〕彌陀如來の御手。「佛の御手の絲」とは、彌陀如來の御手に懸れる絲をひかへて、彌陀に緣を結び引接を乞ふのである。榮花物語に「御堂殿御臨終の時、御手には彌陀如來の御手の絲を引かせ給ひ」。嵯峨天皇甘露雨のこの文は、彌陀如來は御手に絲を垂れ給へるによつて、「絲に縋れや佛の手」といふたので、「佛の手」に佛手柑をきかせたのである。

***ほなが** 内儀はあつと讓葉に穗長折敷く橙・柑子(夕霧) 女子亭主の譯よしが穗長の媒を打拂ひ、人に情を掛鯛のむしり肴と呑めかす(氷朔日)

〔穗長〕齒朶。和訓栞に、「ほなが。絡往草也、穗長の義、正月に用るは瑞穗の長大をいはふ成べし」。

***ほのじ** じつと見かはす顏と顏、互に領く花薄、ほの字を中に籠らせて(振袖始) 晩には梅の木の枝おろそ、ノンヤホノンヤホ、のんやほのじとたはぶるる(西王母)

〔ほの字〕「ほれる」(惚)の頭音を取つて、惚れる意にいうたのである。日本西王母のこの文は「女中のすきの云々」を見よ。「沖に繋路の云々」をも見よ。

＊ほつき 尾上の松の下やどりも石上樹下のいましめと、心とどめず行ひし兵藤太入道が發起心こそゆかしけれ(用明天皇) 誓紙を書いての發起心は樣に渡されしが、まだ御覽なされぬか(天網島) その方も發起して今の誓文立てるからは熱い事はあるまい(氷朔日)

〔發起〕發二起菩提心一の略。證道欣求の志を發起する義。佛道に歸依するをいふ。また轉じて迷を斷じ悔悟の心を起すをいふ。

＊ほつく 彼のやうにほついては、やんがて身代は木賊色でおろすやうになつてのけうと笑ひける(重井筒) ほでて稼ぐほど費ひほつく(女殺) ほでてんがうの貧乏神、何もかもほつきあげ(丹波與作)

「はつく」の轉、脫解盡の義。金錢などを浪費す。つかひ果す。東海道名所記(萬治元年成)に、「馬を賣りてその代をほつきあげ、手と身とになりて戻るもあり」。浮世親仁形氣(享保元年刊)二之卷、酒を樂しむ賢人親父の條に、「親仁が金をほつく故何程儲けても尻も結ばぬ絲にて、針を藏に積んでもたまらぬと云々」

ほつけせんぼふ 五七日には妙なれや法華懺法(蟬丸)

〔法華懺法〕天台宗にて六根の罪を懺悔する爲に法華經を讀誦し供養する法式。

ぼつこしうもない 「ぼこしゆもない」を見よ。

ぼつこしもない 「ぼこしゆもない」を見よ。

ぼつこしゆもない 「ぼこしゆもない」を見よ。

ぼつこむ 「ぼふ」を見よ。

ほつしやう 「ほふしやう」を見よ。

ほつしり おさゐは椽先に家内は寐入り、ほつしりと何を思ふと咎め人の、無きが我が家の取得にて(鑓權三) 欄干に立ちつくして、そなたの空をほつしりと、打咳ぶきて面痩せて(用明天皇)

つくづくと思ひ入るさまにいふ。しみじみ。雅筵醉狂集・冬の部に「木の葉散る草の庵はほつしりと、廬山の昔思ひやられて」

＊ほつしん 御聲はなほ近近と、本有毗盧の法身大日覺王如來の加護(嵯峨天皇)

「ほふしん」(法身)の促音便 法を體とせるものゝ義で、毘盧の法身とは佛陀の靈覺をいふ。

＊ほつしん 筑紫の果まで修業して、發心の因緣は如何した事か知られども(薩摩歌) さる仔細にて發心し(賀古教信)

〔發心〕發菩提心の略。世捨人となつて佛道修業の心を起すこと。

＊法施 あづまの明神に暇の法施をまゐらせ(曾我扇八景) 神慮の御蔭あら有難やと手を合せ、しばらく法施を奉り(根元曾我) 禪師おつつけ本堂にて名殘の法施を奉り、直に罷立ち申さんと(加増曾我)

〔法施〕諸佛妙善の法を以て人の爲に說くこと。轉じて神佛に物を捧げること。大智度論に、「佛說レ施中、法施第一、何以故、財施有レ量、法施無レ量故」。

ほつたい 「ほふたい」を見よ。

＊ぼつたてる 百千の獸をぼつたてぼつたて、くるりくるりと嚴に追ひ上げ追ひ下し(出世景淸) 出家侍・犬畜生餘すまじと、ぼつたてぼつたて叩きたて(女楠) 揃ひも揃うた供廻り…、二行に立つてぼつたてる、承り候と、お先手の手振の衆(國姓爺)

「おつたてる」(追立)の訛。現今も中國其他の地方では「追ふ」を訛つて「ぼふ」ともいふ。「ぼふ」の條見よ。

「二行に立つてぼつたてる」とは、供廻り奴が二列に並立つて、手振り揃へて追つ立て先拂せよとの意。「あかさかやつこ」の條を參照せよ。近松作・雙生隅田川第二に、「敵は糠味噌おつたて汁」とあるのも、糠味噌汁は奴の常食であり(「ぬかみそ」の條を見よ)、また奴は行列作つて、先のけろ振り込めさで主君の供先をするから、「糠味噌汁追つ立て」を「糠味噌おつたて汁」と、例の近松の洒落た筆法(「大工さかもり」「くねんぼあたま」などの條を參照せよ)であつて、「おつたて汁」は、この名の汁があるのではない。

ぼつつむ 「ぼふ」を見よ。

ほつて 矢止り金物・押附の板・發傳・高紐總角附(女楠)

〔發傳〕鎧の胴の背面の最下部を胴尻とも發傳ともいふ。軍用記・附圖、當世具足之圖に、胴の背面の最下部に、「ドウジリホツテトモ」と書いてある。本朝軍器考卷九には、「胴の終りの板をば、古にはいかにや云ひけん未だ見る所あらず、臆病金などいひしは後の終りとぞ聞ゆる、今は前のかたを保犬左幾といひ、後のかたを胴尻といふにや」と見えてゐる。

ぼつとりもの 戀知りの初樣とて、町一番のぼつとり者お目にかけんと縋付く(曾根崎) 君は和國のぼつとり者(薩摩歌) お年を八十取つて除け跡が十七花ざかり、ぼつとり者のしなもの樣おやちよいとぞ譽めにける(井筒)

婉美柔和な女。安原貞室撰・かた言(慶安三年刊)に、「ぼつとり。やはらかにいとほしき形か」。旅枕(元祿八年刊)に、「これは衣裳とてもけばけばしからず、無地の小袖に紋所、扨は兩面の茶などを好み、顏の容態白くけはいなさず、ただ底淸らに拭きたて、物を靜にして聲高からず、あるかなきかに居て歌草紙とてもはでなる物を好まず、物見にいづるとても人より跡に引退き、いとけなき者なんど見てはさも愛らしく、召使ふ人にも睦じきお氣立やと思ふなる、これぼつとり樣なり」。元祿太平記(元祿十五年刊)卷二に、十王の嚊・娘・侍女等に冥官どもがからかうた言葉に、「ぼつとり者やしな者と惡口言うてほめにける」と見えてゐる。御前義經記(正德二年刊)卷一、傾城の因緣の條に、「前漢書とやらに李夫人といふぼつとり者のしなもののほめ詞に、北方有二佳人一、絕世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一云々」。

＊ほて ヤアほてがくれるわい、小行過ぎた前髮め撮み出してくれうと、肱を張れば(孕常盤) 供吟味の奉公人と同じ樣に食はんとは、ほてのくれる奴めがある(加増曾我)

腹をいふ。和訓栞に、「畿內中國四國に腹をほてといふ、東國にはほてといはず」。「ほてがくれる」とは、腹筋が縒れる意、可笑さに堪へぬをいふ。

＊ほで 郎等ども兩方より懷へ手を入る、惡しかりなんと振放し、男

笑ひ、また嬉しがるさまにいふ副詞。平家女護島のこの文は、勿體なさに胸潰れるやうで嬉しう存じますとの意。

*__ほゆ__　これ死にます死にますお助けと、ほゆるも構はず前へかつぱと突き伏せ(女護島)

「ほえる」を見よ。

__ほらどこ__　奥に入れば洞床に香花を供へ(三國志)

〔洞床〕床の間を緣側まで延ばし、緣側の部分の前面を壁で塞ぎ、下地窓をあけて洞の如くしたもの。

*__ほろ__　玉のやうなる上﨟を母衣の如くに負ひなして(兼好)

〔母衣〕鎧の背に負ひ、大袋のやうな物で、矢を防ぐ具。竹を骨とし布を被して圓くし、肩と腰とに紐で結付けるやうにしてある。

__ほろぶにち__　終に命のほろぶ日(大經師)

〔滅日〕「めつにち」ともいふ。大雜書(寬永十一年刊)に、「めつ日とは月のめぐみの不足なる日なり、大惡日よろづにわろし、正日にあらず」。ここの文は大經師に緣ある曆上の語で飾つた曆盡しの祭文である。

__ぼろぼろ__　光明丸が頭をこそげずぼろぼろにしたがよい(賀古教信)　是は上方より奥へ通る行脚のぼろぼろにて候(源義經)

梵論梵論の略か。虛無僧の類である。刀を差し尺八を吹き、深編笠を被り莚を負ひ、人の門に立つて物を乞ひつつ諸國を遍歷したものである。ぼろぼろ草紙に、虛空房といふ者、力強く髮長く、一尺八寸の太刀をさし、同行衆を従へぼろと稱して諸國を巡つたことが書いてある。徒然草・第百十五段に、「ぼろぼろといふ者昔は無かりけるにや、近き世にぼろんじ、梵字、漢字などいひけるもの其はじめなりけるとかや、世を棄てたるに似て我執深く、佛道を願ふに似て闘諍を事とす、放逸無慚のありさまなれども云々」。

*__ほろろ__　雉にほろろの聲あつて、雪はふるとの心あり、讀み下せば高島亡ぶる調伏(反魂香)　彼の茅原にほろろうつ、かびしやら鳥があさりして(釋迦)

ほろろうつなどともいうて雉の羽うつ音である。古今集・卷十九、雜體・誹諧歌に、「春の野のしげき草葉の妻ごひに、飛立つ雉のほろろとぞ鳴く」。傾城反魂香のこの文は、「ほろろ」と雪はふるの「ふる」に續ければ「ほろろふる」(亡)となる故に、讀み下せば……亡ぶるというたのである。

*__ほん__　今日爰へおぢやつたは天神様の御利生、神も佛も馴染がほん、親父の見世の燒物に一文づつでも天神様、お馴染故ぢやと言ひければ(生玉)　人は次第に身を持上げるがほんなれど(生玉)

〔本〕眞實。本當。「馴染がほん」とは、馴染のあるのが本當に賴もしいとの意。西鶴の置土產卷四、江戶の小主水と京の唐土との條に、「何につけても馴染がほんなり」。なほこの文は、そなたが今日天滿天神社内の茶屋に來て私と逢うたのも、思へば親父の店にある價一文のおもちやの天神樣の燒物でも、そのお馴染のあるお蔭による引合はせで、神佛も馴染があるのが眞實賴もしいと言うたればの意。

*__ほんあみ__　これは本阿彌の屋作りと目利したるも理なり(雪女)

〔本阿彌〕刀劍鑑定の家元である。その祖を妙本と云ひ、龜山院の頃京都の人。その子孫に本妙、妙大、妙秀、妙壽、本光等があり、慶長頃の光悅は有名である。

*__ほんう__　本有の月の光かすかにして、いまだ三毒四慢の大虛に出でず(一心五戒魂)　佛法にては本有の毗盧遮那(蟬丸)

〔本有〕本來具有の義。本來固有の性德をいふ。

__ほんけかへり__　年積つて六十一歲、本卦還り未の白髭(大織冠)

〔本卦還〕生れた干支の歲に六十一年で還る故に、六十一歲を本卦還といふ。還曆。

__ほんこむろ__　あれあれあそこへ唄うて來る、本小室のひんぬきは、與作與作と小手招き(丹波與作)

〔本小室〕純粹の小室節。この馬士唄は信州北佐久郡小室宿から唄ひ初めたものだといふ。小室は淺間山麓に近い町で、輕井澤・沓掛・追分の三宿を經て此の町に懸る、古くは小室と書いてコムロともコモロとも稱したが、今は小諸と書いてコモロといふ。小室節の元唄は「小室出て見りや淺間の山に、けさも煙が三筋立つ」といひ、また「小室出て見よ、淺間の山に、けさも煙が三筋立つ、天に昇りて雲となる」といふ。元來馬士唄であるから踊の手は無い。この唄は寬文頃から寶永頃に亙つて最も流行し、馬方などの唄うたものである。傾城金龍橋(近松作狂言本・寶永五年作?)第一に、「老人十二三の小馬子と現じ、小室節で追うて行く」と見え、人倫訓蒙圖彙・三、馬方の條に、「馬方節とて一ふし有は船頭に船歌あるが如し、……、當世は只辰巳あがりの聲して小室節なり、こゑ高にして何事にも先片肌ぬぐは彼等の風俗なり」と見えてゐる。聲曲類纂に、「小室節その始め並に名稱知るべからず、今も諸侯入府の節は御馬前に立ちて謠ふとかや」。續猿蓑集・卷下、雜春の部、山秀の句に「春の日や茶の木の中の小室節」。巣林子のここにいへる本小室は、「扨も見事なソンレハおつづら馬や、七つ蒲團にソンレハ曲彔すゑて」(歌謠部「扨も見事な云々」を見よ)といふ馬士唄を本小室節で謠うたことをいひ、今まで待たれ噂されてゐた主人公丹波與作は、その謠ふ本小室節が聞えて、その姿を現はすのである。

__ぼんじのみやう__　僧正騷がず洒水の印を結んで梵字の明を修し給へば(天神記)

〔梵字の明〕「ばんじのみやう」を見よ。

__盆正月の十六日__　藪入は女夫連れての約束の、盆正月の十六日を待ち樂しみし我我が、哀れ地獄の釜の蓋開くを待つべき罪人と(今宮)

盆、正月の十六日は藪入の日である。この日は人々仕事をやめて休息する日なれば、古來地獄の釜の蓋の明く日だといはれてゐる。傾城吉岡染(巣林子作)にも、「あらかしがまし釜の蓋、いつか明くべき七月の十六日も程遠き」と見えてゐる。日次紀事(延寶年中成)七月十六日の條に、「藪入。洛外洛内男女遊樂、是稱二藪入一、同二于正月十六日一、神社寺院男女參詣、寺僧各修二法事一」。和漢三才圖會、時候部に、「走百病。按正月十六日庶民之子女及奴婢以二此日一爲二間暇一、免二還父母家一自在遊戯或詣二寺院一、近年七月十六日亦然也、蓋此以二于蘭盆一出二於慈愛一、終爲二春秋二度一矣、俗謂二之藪入一、如二孤獨一者無下可二敢依一家上、唯入二藪林中一遊亦隨意、以爲レ樂之謂乎」。

*__ぼんしやくにてん__　梵釋二天に手を引かれ參り(歌念佛)

〔梵釋二天〕梵天と帝釋天。

__ぼんしゆ__　梵衆梵輔大梵天(天神記)

〔梵衆〕梵衆天の略。色界初禪の第三天である。

*ほばしら　焦れ船でも何船でも手前に帆柱持合せず(雪女)　松風を取つて引除け、帆柱立に突立ちしは只木像の如くなり(松風)　前に與兵衞帆柱立ち、跡に二王の張番立ち(女殺)

〔帆柱〕帆柱の如くに突立つことを帆柱立といふ。「帆柱持合せず」とある「帆柱」は陰莖をいうたものである　色里三所世帶(貞享五年刊)大坂の巻に、「一日やとひの船頭も異な所に帆柱を立て」、とある帆柱も陰莖を勃起させたことをいうたのである。

ほひあぐ　「ぼふ」を見よ。

*ぼふ　すれる男をぼつかけて、そこらそこらをずんずと飲ましやる(生玉)　博雅の三位が庵とはこれならめ、ぼつこんで打取れといふ程こそあれ(蟬丸)　どつこい遣らぬとぼつつめ、小藤太がかんづか摑んで取つて引伏せ(扇八景)　ヤイ男ども隣の明屋の二階へぼひ上げ、下にきつと番をせい(大經師)　分別も何もいらぬ、ぼひ出して退けさつしやれ(女殺)

「おふ」(追・逐)の訛「ぼつかけ」は追掛け、「ぼつこむ」は追込む、「ぼつゝめ」は追詰め、「ぼひ上げ」は追上げ、「ぼひだし」は逐出しである。

*ほふいん　異名を白稻荷法印と申す、今の世の流行山伏(女殺)

〔法印〕僧位。與徳兼備の高僧これに任ぜられる。轉じて法印の位でない僧・修驗者を法印といふこともある。釋門事物紀原に、「僧正、僧都・律師・法印・法眼・法橋を僧綱といふ」。

ほふかい　法界ほかゐの御回向偏に頼み奉ろ(卯月潤色)　どうで湯か茶か呑みにであろ、法界の男ぢやと思へば濟むと恨みながら(重井筒)　あれば人の法界恪氣(淀鯉)　法界順逆結緣(娥)

〔法界〕一切衆生色心の本體である。起信論に「心眞如者卽是一法界、大總相法門體」と見えてゐる。故に宇宙一切萬有皆法界内にあつて、悟の見地より萬有の總體を法界といふ。

「法界の回向」とは、法界衆生平等利益の供養をいふ。

「法界の男」とは、内外の差別なく内を外と、平等無差別に浮かれ歩く浮氣男の意。

「法界順逆結緣」とは、十方法界のあらゆる衆生は、その順緣なると逆緣なるとを問はず、皆因緣を結ぶによつて成佛するの意。

「法界悋氣」とは、彼此の差別なく起す悋氣の意、己に何の關係もなきに起す嫉妬心。

ほふざう　提婆達多は八萬法藏を讀み覺え、三千世界にあらゆる學問つくすといへども(釋迦)

〔法藏〕法は佛の敎法、藏は含藏の義である。許多の法門を藏する經典聖敎を總稱して法藏といふ。「八萬法藏」とは、八萬四千の法藏をいひ、八萬はその大數を擧げたのである。法華經・見寶塔品に、「持二八萬四千法藏十二部經一、爲レ人演說」源平盛衰記巻十九、闡性八員を檢する條に、「八十の壽命をたもつて、八萬の法藏を說き給へり」。「法藏比丘の淨瑠璃云々」をも見よ。

*ほふしやう　法性の理體を指して玉と名付け(大織冠)　法性無漏の智惠の火は石にあるか燧にあるか(釋迦)　法性隨妄の雲(一心五戒魂)

〔法性〕諸法の體性、卽ち宇宙の本體の意であつて、眞如または眞理と云ふに同じ。

「法性隨妄の雲」とは、無明迷妄の眞如を掩ふを雲に譬へていうたのである。「眞如廣大なれば云々」を見よ。

ほふせ　「ほつせ」を見よ。

*ほふたい　おことは法體しけろよな(烏帽子折)　親御達は御隱居、髮を下して樂樂と御法體の筈なれども(氷朔日)　元服なりともいつそ又法體なりとも成されませいと(加增曾我)

〔法體〕薙髮して法衣を着け僧侶の姿となること。

ほふだうせんにん　抑も播州法華山觀音寺の開基法道仙人そのかみ異邦にうつり(西王母)

〔法道仙人〕もとは天竺の人、紫雲に乘り支那・朝鮮を經て日本に來り、播州法華山に住して法華經を讀誦した。白雉元年天皇の勅により、法道の爲に法華山に寺院を建立され、法道持する所の觀音の銅像を安置した。後に法道は空中に飛去つたといふ。詳しくは元亨釋書、本朝高僧傳を見よ。

*ほふねん　善導か法然の化身であらうと申した(薩摩歌)

〔法然〕名は源空、崇德天皇長承二年四月美濃國稻岡の莊に生る。九歲の時父故あつて人に殺された爲に源空出家し、十三歲で比叡山に登りて源光に從ひ、十八歲の時黑谷に住して叡空の門下となる。爾後經論を硏鑽し、遂に念佛門に歸して淨土宗を開立した。建曆二年正月八十歲で洛東大谷の禪房に入寂した。元祿十年勅して圓光大師の諡號を賜ふ。

*ほほ　とても事にべべ脱いで祖母がほほに抱かんと(賀古敎信)　初に逢ふ夜のほほの內、嫁御の心ははづかしく生きた思ひも候まじ(一心五戒魂)

「ふところ」(懷)をいふ。「ふところ」を轉訛して「ほところ」といひ、その首音「ほ」を躍らせて「ほほ」というた小兒語である。小兒語につきては「とと」の條を見よ。俚言集覽に、「ほほ。懷をほほと云、江戸鄙俗小兒の言にぼつぼと云」。

ほほぐすり　湯水を求めほほ藥様樣扱ひ給へども(大原問答)

〔重皮藥〕厚朴の樹皮から製した風邪の藥。榮花物語・見はてぬ夢の條に、「絅心地なほ惡しう思さるれば、絅風にやなど思して、ほほなどまゐらすれど、更におこたらせ給はず」。同書・若水の條に「絅風にやとてほほなどきこし召せど、怠らせ給はず」。和名抄に「本草云厚朴一名厚皮　漢語抄云保々加之波乃木。釋藥性云重皮保々乃可波」

*ほほげた　いき女郎め吐すまいと誓文立てて口がため、憎いほほげた(女殺)

〔頰桁〕頰骨をいふ。頰輔。つらかまち。

ほほやく　「ほほぐすり」を見よ。

*ほむら　昔の井筒の女とやらはねたみのほむらに提子の水が湯となつた(大經師)

〔焰〕ほのほ。火燄。和訓栞に、「ほむら。神代紀に火炎をよめり、火叢の義なるべし、靈異記に焰もよめり」。「提子の水が湯となる」をも見よ。

*ほやほや　まだほやほや笑うて居ろやうな(日本武尊)　にこにこほやほや會釋こぼして御機嫌取り(振袖始)　胸つぶつぶしうほやほやしやりめす(女護島)

〔孟母〕孟子(名は軻)の母をいふ。「孟母が仁」は孟母三遷の教をいうたのである。列女傳に、「鄒孟軻母、其舍近レ墓、孟子少好レ遊、爲二墓間之事一、孟母曰、此非三吾所二以居一レ處子一也、乃去舍二市傍一、其嬉戲乃賈人衒賣之事、又曰、此非三吾所二以居一レ處子一也、復徙舍二學官之旁一、其嬉戲乃設二俎豆一、揖讓進退、孟母曰、眞可三以居二吾子一矣、遂居」。

***まうりやう** 魍魎鬼神は穢らはしや(女護島)
〔魍魎〕山水草木などの精をいひ、魔物の類である。說文に、「蛧蜽。山川之精物也矣」。淮南子に、「魍魎狀如二三歲小兒一、赤黒色・赤目・長耳・美髮矣」。「恐しや三十番神ましまして云云」を見よ。

***まかえん** まかえん法身、まかえん法性、まかえん眞如と、三行附屬の祕文を授け(釋迦)
〔摩訶衍〕梵語 Mahayana 大乘と譯す。自利・利他の大心を有する者の乘輿の意であつて、菩薩の機が佛果に至るまでの法門のことである。卽ち佛果の大涅槃を求める道で、華嚴・法華等の高遠な教道を指す。「摩訶衍法身」「摩訶衍法性」「摩訶衍眞如」は同義で、大乘に說く法性常住不變の理體・その妙理をいふ。

まかかせふ 「しんいんはまかかせふ」を見よ。

まがき 夢の中戸の假枕籬が本のつつ寐に、十八の霜月娘子一人產み給ふ(三世相)
〔籬〕落間と店の間との間にある格子戸をいふ

まかさつ 我はこれ六道能化地藏菩薩摩訶薩なり(賀古教信)
〔摩訶薩〕摩訶薩埵(卽ち梵語 Mahasattva)の略。大菩薩の義。

まかたいしやうぎ (源義經)

〔摩訶大將棊〕將棊の品種にこの名のものがあつた。雍州府志(貞享三年刊)土產門下・服器部に、「將棊盤。凡將棊有二小將棊・中將棊・大將棊・大大將棊・摩訶大將棊之品一」。

***まかなふ** 隨分疎略なきやうにまかなふべし(娥) 當座まかなひに金取り欺しの空誓文か(氷朔日)
新撰字鏡に「擬」、藻鹽草に「賄」を訓んである。はからふ。もてなす。取繕ふ。「まかなひ」は轉成名詞。

***まがねふく** まがねふく吉備の中山(振袖始)
〔眞金吹〕「ま」は美稱、「かねふく」は鞴で鑛物を吹くをいふ。吉備には往古から鑛山があつたによつて、「眞金吹く」を吉備の枕詞に用ゐた。催馬樂に「まがねふく吉備の中山」と見え、古今和歌集・卷三十、大歌所御歌の部にも、「眞金吹く吉備の中山帶にせる、ほそ谷川の音のさやけさ」と見えてゐる。

***まかぶら** まかぶらの骨立つて、巖に鏡かけたる如き兩眼にてはつたと睨み(釋迦)
〔眶〕まぶた。瞼。和名抄に、「眶音匡、萬奈加布良、腎心方目匡、同訓」。

***まかふんだりげ** 匂芬芬芬陀利華、摩訶芬陀利華咲亂れ(釋迦)
〔摩訶芬陀利華〕梵語 Mahapundarika 譯して大白蓮華といふ。

***まがまがし** 在天少しなぶらんと、まがまがしき顏付にて(大職冠) 彼のまがまがしい顏わいの(嫗山姥) 助作まがまがしき顏付にて、アア恐ろしい女め、いつおのれに粒三文も借つた覺えはない(大經師) まがまがしいあの噓わいの、まだ尾鰭を附けて言はしやんせ(女殺)
禍々また曲々の義。和訓栞に「源氏にまがまがしき事といへり、禍字の意なるべし、俗に僞る事にかくいへり、まぎまぎともいへり」と見えてゐる。巢林子は「まがまがし」を「まざまざし」卽ち誠らしい、眞實らしいの意に用ひ、心に僞つて言語動作に誠らしうする形容に用ひたのである。(「まざまざしい」の條をも見よ。

まかまんだらげ ある名あし名のいろいろに摩訶曼茶羅華(釋迦)
〔摩訶曼茶羅華〕梵語 Mahamandarava 大適意華・大白華・等と譯し、大白蓮華をいふ。大藏法數に、「梵語曼茶羅華、言二適意一又曰二白華一」。

まがり 藥の釜の煮え立てに捻縮げて捲り入れ、まがりに注ぎ込み(用明天皇)
〔曲〕まげもの。檜・杉などの薄板を圓く縮げて、合はせ目を櫻の皮などで綴ぢた容器。徒然草・第百段に、「久我相國は殿上にて水を召しけるに、主殿司土器を奉りければ、まがりをまゐらせよとて、まがりしてぞ召しける」とあつて、壽命院抄に「まがり＝貝をみがきてこしらへたる水飲む器物也」といひ、季吟の說に「或說に彼貝にてせし水のみの其尻まがれるより名づけて、其後すべてそのたぐひの飲器の名となれり」と見えてゐる。

***まかる** 風の神か鳥威のやうなざまで、何ぢや喜左衛門に逢はう、百貫目もつかふ大盡のいふやうな、棒まかれなといひければ(夕霧)
「まくらる」の約つた語。「棒まかれな」は、棒で打捲くられなで、卽ち棒で打捲くられないやうに用心せよとの意。

まきじた 慇懃に兩手をつき卷舌の挨拶に、梅の井くつくつと失笑し(椛狩) 馬鹿慇懃の頑侍、卷舌の諸禮折目正しき正月言葉(雪女)
〔卷舌〕長つていふ切口上。

まきぞへ おいとしや傳三樣どうぞ首尾して下さんせ、まきぞへが入るならば私が繻子の帶もあろ(反魂香)
〔卷添〕附帶。入質するに要求金額に對する擔保品の足しまへ。

まぎら 重き心を輕口に薄團被つて行く振も、涙くろめしまぎらなり(重井筒)
〔紛〕糊塗。ごまかすこと。紛らかすこと。好色染下地(元祿四年刊)卷一、わが物賣うて假の雜入の條に、「數ある商物を微塵も忘れず、されば手代のまぎらをくはず」。和訓栞に、「まぎらはし。紛字をよめり、目霧合の義成べし、まぎらはし反ひ也、俗に含糊の意をまぎらといふも同じ」。

まく 何卒きやつをまきたしと思ふ所に浴衣浴衣と御說あり(鎌田) 少しも心變られども下下の奴等まかう爲、中間めらが見付けうかと馬に乘る心もせず(鑓椎三)
紛の義か。嫌に思ふ者を事に紛らして離れさす。色道大鑑・態藝門に、「まく。いやなる者をそれと言はずに其座を立たせ、又來べき者を來ぬやうにしかけたる貌いふ」。魂膽色遊懷男、若後家見せかけ跡敵の房付枕の條に、「あの姥めをどうぞまく思案はあるまいか」。

まぐ 「まげる」を見よ。

***まくしだす** 旦那へ吹込みまくしだしてのけたが(淀鯉) 春は早早まくし出しや、あのやうな婿なら二

*ぼんしん　ぼんしんの習ひ日の前の怒止み難く（薩摩歌）　あだとは知らぬ凡夫心、サア今宵こそ早歸つて明日の晝まで緩りと寢よう（生玉）
〔凡心〕凡夫心、卽ち迷妄に捲はれて悟らぬ人心。大乘義章に、「凡は謂く生死凡鄙の法、夫は謂く士大夫凡法を成すが故に凡夫と曰ふ」。

*ほんそう　茶の湯を上手になさるるゆゑ、人の用ひほんそうもある（[illegible]）
〔奔走〕走りまはり世話する義より轉じて、愛しいつくしむこと。昨日波今日能物語（古活字版）に、「今ほど世間に手かがみがはやる、色々さまざまの古筆をあつめてほんそうする中にも、この衞殿の御しゆせきほどみごとなるはあるまいと沙汰する」。

ほんぞんかけた　いで此笛にて時鳥のまねを吹き呼出し見んと横たへて、ほんぞんかけたとかすらせ吹きけし（天鼓）
「ほぞんかけた」ともいふ。その條を見よ。

ほんだはら　祝うて何處も吉野榧かちぐり、噓でござらぬ本俵、春盤に土器、さすぞ盃ちよつと押へて（嫁門松）
〔本俵〕「ほだはら」（穗俵）ともいひ、馬尾藻の別稱で、正月蓬萊飾などに用ゐる。

*ほんぢ　聖德太子の御本地は靈山淨土、三界の教主世尊の御事なり（卯月紅葉）
〔本地〕佛が本有の妙理に契合せる眞實究竟の地位をいひ、垂迹に對する語。

*ほんぢん　江戸へ通しの馬追うて本陣に泊るが（丹波與作）　本陣宿の忙しき、數多の出女下僕（嫗山姥）
〔本陣〕往時大小名其他武家の公用旅舍を本陣と稱した。地方によつては現今もなほこの稱の殘つてゐる旅館がある。本陣とは本營の義で、戰國時代行軍の詞の殘れるもので、貞治二年三月足利義詮上洛の時、その旅舍を本陣と稱して宿札を掲げたるに始まると云ふ。

*ぼんてん　上は梵天帝釋、下は四大の文言に（天網島）
〔梵天〕大梵天王をいふ。色界禪天の第一位の大梵天の君主で、佛教保護の神である。其形相は四面三目四臂を具有し、帝釋天と共に佛像の左右に侍してゐる。「しだい」をも見よ。

*ほんなは　町人の分でなぜ本繩で縛つた、……、只の町人と違うて禁中の役をすれば、本繩にかけても大事ない（大經師）
〔本繩〕罪人を縛るに公の時にする本式の繩の掛け方をいふ。（私の時にする略式な縛り方を假繩といふ。

ぼんのくぼ　三百石から馬追まで成下るぼんのくぼ、よい事はない筈と思はなんだは身の不覺（丹波與作）
〔盆窪〕頸の後面の中央の窪んだ處。和訓栞に「缺盆の穴などよりいへる詞なるべし」と見えてゐる。往時人相見が盆の窪の形によつて其人の運不運を相したによつて、盆の窪を運命の意にいふ。

ぼんぽ　梵衆梵輔大梵天（天神記）
〔梵輔〕梵輔天の略。色界初禪の第二天で、大梵天の輔相である。

ぼんぼりわた　ぼんぼり綿もひれくろしく（女腹切）　妻は渡世の塗桶に、丸綿ぼんぼり額綿（女夫池）
綿帽子の一種。御所女中・武家・町家の婦女の被り物で、丸綿を薄く透した質朴なものである。思ふに「ぼんぼり」はぼんやり卽ち朦朧の義で、丸綿の薄く透いてゐるよりの名であらう。嬉遊笑覽に、「ぼんぼり綿は丸綿の薄く透いたるをいふにや。續山井、うす雲はぼんぼり綿か月の面　之有。又後撰夷曲集、遠山のいただきにあれは面白くぼんぼりと見た雪の綿かな　水滿。天和笑委集・上野花見の女を云内、御所女中は……ぼんぼり丸綿わけよくかぶり……」と見えてゐる。

ぼんまうきやう　梵網經を和らげ、古今集十戒の和歌を引き（兼好）
〔梵網經〕羅什三藏譯、梵網經盧遮那佛說菩薩心地戒品の略稱。二卷より成り大乘律と四十八輕戒を說いてある。

ほんらいいつとく　まづ初月は一氣胎中に孕まれ、其形恰も鷄卵の如し、これ本來一とくの精水、形に取つては混沌未分（蟬丸）
〔本來一德〕本來先天的に備はれる一の德。懷胎十月の由來を述べたる蟬丸のこのあたりの文は、甲子祭（天和四年刊、淨瑠璃・加賀掾正本）の第五に見えてゐる文と大同小異である。

本來の面目　坐禪の床に本來の面目を悟る折柄（嫁靜）
自己の本分などの意であつて、禪門法度の極度を示せる詞である。

ま

*まいあひ　異形は手を伸べ、檢非違使がまいあひを割れて退けと礚と打つ（二枚繪）
「まあひ」ともいふ、眉間卽ち「みけん」である。

まいごみずな　「まひごみずな」を見よ。

*まいす　さてきやつまいす坊主（井筒）　德を飾りて名を求め、名聞まいすの噓つき（兼好）
賣僧の宋音。賣名の俗僧或は商賣して利得をはかる僧の義。僧を罵つていふ。

*まうご　なう死人に妄語は無きぞとよ（卯月潤色）　まうごかい（宵庚申）
（三世相）
〔妄語〕虛妄の言語。「妄語戒」とは虛僞の言語をなしてはならないとの戒で、佛法で五戒の一である。

*まうしゆん　（雪女）
〔孟春〕孟は始の義。春の始卽ち正月をいふ。禮記・月令篇に、「孟春之月、日在レ營」。

まうぜい　めぐりめぐりて輪廻を離れぬまうぜいの雜兵、切拂つた山姥が悴（弘徽殿）
猛勢に妄執をもぢつたのである。妄執は煩惱心深く執つて捨てることのできないこと。

まうそう　雪の内に筍出で、金の釜を掘出せし孟宗郭巨に優つても（百合若）
〔孟宗〕支那二十四孝の一人である。吳の江夏の人。其母病臥して珍しい物を好み冬筍を求めた。宗雪中竹林に赴いて哀泣天に訴ふ。この時筍雪中に生じた。孟宗竹といふ名は之に因すといふ。

まうぼ　正行は孫子が智、母が教は孟母が仁（女楠）

藏より下されし御知行盜の米の罰、桝落にかからうぞと(艶狩)　鼠取の桝落手に持つて(壽門松)

〔桝落〕桝を欹て中に餌を置いて鼠を誘ひ、鼠來つて其端を踏めば、桝忽に倒れて鼠を覆ひかぶせる装置。

ますかがみ　人の悅ぶ日といへば我は歎きのます鏡(用明天皇)　千僧萬僧百萬僧のとひ吊ひにもます鏡、黄泉の曇が晴したやなう(卯月潤色)

「ますみかがみ」(眞澄鏡)の略。こゝの文は「増す」にいひかけたのである。

***ますかけ**　其やうな目出度い若衆に升かけを切米望み次第ぞや(薩摩歌)

「ますかけ」は「ますかき」(斗格)の轉訛。桝に穀類を盛つてこれを桝の緣(ふち)なみに平(なら)すに用ゐる棒である。「ますかけをきる」とは、好運な人の切つた斗格の竹を用ゐれば壽福を得るといふ。蓋しこぼれ幸ひの意に取なしたものである。西鶴撰・日本永代藏・卷一、二代目に破る扇の目の條に、「其身一代に二千貫目しこためて行年八十八歲、世の人あやかりものとてますかきを切らせける」。同書卷六、智惠をはかる八十八の升搔の條に、「爰に京の北山の里、かくれもなき三夫婦とて人を羨む人あり、……この親仁八十八、其つれあひ八十一、男子五十七、その女房四十九、此子二十六、女は十八、一生少しのわづらひなく、殊更何れも挨拶よく、其身代も百姓の願ひの盛に田畠牛馬男女の召使ひ者棟を並べ、作取り同前の世の中、萬を心にまかせ神を祭り佛を信心深く自ら其德備はりて、八十八歲の年の始めに誰か言出して升搔を切らせけるに、すなほなる竹の林も切り絕ゆるばかり、京都の諸商人是を望みけるに、商賣に仕合あつて、いよいよもてはやして、三夫婦の升搔とて俵物量るにこぼれ幸ひあり、上京の長者此升搔にて白銀を量り分けて、三人の子供に渡しけるとなり」と見えてゐる。蓋し米壽の賀に斗格を切つて知人に分つ慣習によつたものである。薩摩歌のこゝの文は、「ますかけを切り」に「切米」をいひかけたのである。

***ますがた**　ますがたの內よりこれ辨慶辨慶、塀の上より武藏坊武藏坊(源義經)　大名小路の升形より、引馬に五つ道具・乘物の戸八文字に開かせ(會稽山)

〔升形〕城門一二の門內の武者屯(だまり)をいふ。武用辨略・卷二、城郭に、「升形。城門一二の門の內の武者屯を云也、軍法家に五八の矩など云習ありとぞ、此門の裏に於て人數を量り出すを以て升形とも又武者屯とも云、城郭の內の廣平の地なり、馬屯と云も亦同じ。是騎卒の屯する所なり」。

ますほのすすき　いとど思ひはますほの薄(すゝき)、殺しくされと抱き付く(娍)

「ますほ」は眞赭(まそほ)の義。赤く色づきたる薄。和訓栞に、「ますほのすすき。眞赭の義、荻の赤く色づきたるをいふ成べし」。こゝの文は、思ひは増すをますほの薄にいひかけたまでゝある。

***ますら**　さてもますらが此目の玉ぐつと脫け出で(二枚繪)

巢林子作・用明天皇職人鑑に見える人物である。人名部を見よ。

***ませる**　盜みかわくは何奴ぢやい、ヤアませの自然薯めか(丹波與作)　顏をませませませの小猿(孕常盤)　ませた餓鬼めと拳三つ四つ食はせ(隅田川)

「まさる」の轉訛。增の義。年齡の程よりは大人(おとな)ぶ。老成す。古今六帖・卷四に、「山賤の垣ほにかこふませ垣の、ませたりとしも見えぬ君かな」。「ませの自然薯」「ませの小猿」の「ませ」は轉成名詞。

***またい**　律義またい半七に惡根性がつき(女腹切)

「またし」全の義。順正、從順などの意にいふ。この語現今も中國地方で用ゐてゐる。

***まだまだ**　井筒樣殺すをまだまだと見ては居ぬ(井筒)　かきたぐる程氣が急ぐもの、まだまだ待つて居られうか(會稽山)　口でまだまだ申さんより、誓文の爲只今御前で金打たう(會稽山)　いやまだまだと阿房らしい、咄さるることでなし(酒呑童子)　口でまだまだ申さんより、我我が心底見せやうはあるまいか(唐船噺)

まだるまだる(間怠間怠)の略。ぐづぐづ(愚圖愚圖)。べんべんだらり。俚言集覽に「まだまだ＝マダラマダラともいふ、(倭訓栞) マダマダ、埒明ぬ意、愚按、間タルキ也、マダルマダルといふなるべし」。

***またもの**　秩父の郞等またものの本多づれ(會稽山)　また者駕籠はいろは付け(丹波與作)

〔又者〕またげらい。陪臣。

まちじやうらふ　御祝言のまなびしたけれども我我は男勝手知らず、待上臈も何もかも萬事そちを賴む(酒呑童子)

〔待上臈〕待女郞といふべきを、法皇樣に關することであるから貴みてかくいうたのである。婚禮の時に新婦に附き添うて世話する侍女。

まちぢよらう　姬君を御供申して御祝言、月代剃(さかやき)つたを幸ひにお輿添へにも女ども、待女郞にも女ども(雪女)

〔待女郞〕「まちじやうらふ」の條を見よ。

***まちどしより**　一門一家町年寄庄屋まで觸れ步いて(淀鯉)　組中年寄月行事(女腹切)

〔町年寄〕略して年寄ともいひ、町內の公用雜事を掌る役である。町內の町人中で德望あり資産ある舊家の者を公選し、總年寄がこれを任命し、其任期は多くは三年で名譽職である。町年寄は何れも本業あれば、實際の町務は町代を置いて之に代らしめた。大阪舊時の町年寄は每町一人で、小町は隣町の年寄が兼務したのである。町年寄はその町の會議をなし、又每月判形と云うて町內に住居せる者に戸籍帳に捺印せしめる時などに出頭する家を每町に設け、これを町會所又は會所と稱した。

***まつ**　梅蘸しく松高き、位はよしや引締めて、哀れ深きは見世女郞(冥途飛脚)　抱の松あり客も待つ(壽門松)　當所敦賀の町に名高き松の御座候(反魂香)　情の緣はびこりて、松の位とたとへられしもにくからず(生玉)

〔松〕太夫をいひ、遊女の最上位の者である。太夫を松といふことは、秦始皇帝が雨を松樹下に避け、其樹を封じて五太夫となしたといふ故事に據つたのである。謠曲・老松にも「さこ松に太夫といふことは、秦の始皇の御狩の時天俄にかき曇り大雨頻に降りしかば、帝雨をしのがんと小松の陰に寄り給ふ、この松俄に大木となり枝を垂れ葉をならべ、木の間す

十人や三十人は今の間に取つて見しよ(重井筒)

まくりだす(捲出)の訛。追ひ出す。「まくりだす」とも云うてある。曾根崎心中に、「あきなひの勘定せよ、まくり出して大坂の地は踏ませぬと怒らるる」。

まくらがへし　枕返しの曲枕おつ取り(反魂香)

〔枕返〕重ねた枕を樣々に弄ぶ曲藝で、野郎白人などの間に多く行はれたものである。野傾旅葛籠(正德五年刊)卷之一に、「淨瑠璃仇口枕がへし」。足薪翁百話に、「昔は箱枕のみおこなはれしかば、手すさびに其枕をうちかさねちなしなどしたるが、後には放下師の業となり、是を枕反しといひならはせり」。

枕定めぬ參宮　枕定めぬ參宮に、寢て居て胸を燒かうより(丹波與作)

伊勢參宮の道中では房事を忌んだによつていふ。これを犯して罰に當つた話は好色旅日記卷四にも見えてゐる。

枕附の供物　死人に供へし枕附の供物松の許に棄ててあり(蟬丸)

死者の枕元に供へる團子の類。

まくりのみ　磯打つ波のまくりのみ(女楠)

〔捲飮〕飮みまくること。こゝの文は謠曲・兼平に「磯打つ波のまくり切り」とあるの改作。「兼平とは木曾殿の云々」を見よ。

***まけいしゆら**　忝くも我君は欲界の魔王摩醯首羅王の再來なり(釋迦)　三目八臂摩醯首羅天、紕紐天、加比羅天、漚樓僧佉天(用明天皇)

〔摩醯首羅〕梵語 Maheśvara. 印度濕婆敎の主神で、三目八臂、白牛に騎り手に三叉戟を執つてゐる。この神後には大自在天と云つて、佛敎守護の天王となつた。智度論・二に、「摩醯首羅天、秦云二大自在一、八臂三眼騎二白牛一」。

まげる　娘のお末が兩面の紅絹の小袖に身を焦す、之をまげては勘太郎が手も綿もない袖なしの羽織(天網島)

〔曲〕質入するをいふ。七の字は第二畫が曲つてゐるによつて七のことに云ひ、七と質と音相通じるによつて質(質入のこと)の意にいふ故に質屋を七屋(その條を見よ)ともいふ。好色旅日記(貞享四年刊)卷一に、「當ぶんいらぬ夏絹羅七て七十兩云々」とありて、「七」に「まげ」と傍訓が附けてある。

まごじやくし　地名部「湯尾峠の云々」を見よ。

まさしかれ　まさしかれと心中に、賴みをかけし辻占の(博多)

「正しくあれ」の約。辻占(辻に居て往來の人の言葉を聞き、それによつて事の吉凶を判斷すること)に唱へる言葉の一句である。こゝの文意は、「辻占の還はないやうに正しくあれ辻占の神と、心中に賴みをかけた辻占の」といふのである。本津草(人見英積撰、享保十三年の自序がある)太古之卜事の條に、「辻占…黃楊の櫛を持ちて、道祖神を念じて四辻に出で、吾が思ふことの叶ふや否やをうらなふ、辻や辻四辻が占の市四辻、占正しかれ辻占の神、かく三返唱へて其の辻へ先に來る人の言葉により吉凶を占ふ」と見えてゐる。

***まさなし**　まさなう候平馬殿何處までと打つ太刀に(世繼曾我)　大將と見奉る、正なう後を見せ給ふ、引返して勝負あれ(女楠)　自ら夢の中にまさなごとばし言ひしよな(關八州)

〔無レ正〕正しうないの義。卑怯などの意にいふ。「まさなごと」は無レ正事で、つまらないこと、とりとめのないことの意にいふ。徒然草・百七十六段に、「昔ただ人におはしましし時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで」。

***まざまざ**　まざまざ側に居るとも知らず(薩摩歌)　軍は二千里を出でて西に利ありといふ事をまざまざと見て候(國性爺)　まざまざ親の手を出して我が子に毒害する同然(持統天皇)

〔正正〕まさしく。ありあり、はつきり。

***まざまざしい**　寐るとも思はぬ其間にまざまざしい夢を見ました(薩摩歌)　あの人のまざまざしい噓わいの(聖德太子)　知らぬとはエエまざまざしい、此姬が見えれば此諸宗が腹を切るも構はぬか(浦島)

〔正正〕まことらしい。眼前に見るやうである。好色二代男・七に、「寔まざまざしき貌して、腹痛むなどと」。色道後日男・卷之五に、「これ太夫さま、そんなまざまざしい事は鼻の下の長い素人お客におつしやつたか」。(巢林子及び當時の用例に、「まざまざし」といふべきを「まがまがし」ともいうて、この二語を混同した所がある。「まがまがし」の條を見よ)。

まし　唐のましも千疋、日本のましも千疋(孕常盤)　やいましよ小猿の時から飼置いて(松風)

「ましら」ともいふ。その條を見よ。

ましくし　傍に臥したる侍ましくしたる頭を持上げ(川中島)

「ましくしや」ともいひ、心よからずむしやくしやするさま。好色小柴垣(元祿九年刊)卷四、旅枕執着の責の條に、「足もぬくもらず目もあはず、ましくしやとしてゐるに」。

まじくら　惡口仲間二三人、座頭まじくらどつと來り(曾根崎)　なうあれを見や、中から提灯引舟まじくら禿が諂うて容送る(淀鯉)　煙草賣の源七は未だ見えぬか、氣さくな者の通り者、今にも來たらお姬樣まじくら迎ひ鬼して遊ぶまいか(嫗山姥)

交り合ひ。まじり。今樣二十四孝(寶永六年刊)卷二、思はず知らずの入聟の條に、「然らば祝言して諸共母人に孝養を盡さんと、果は淚まじくらの笑ひになつて」。和訓栞に、「まじくる＝雜又交をよめり云々、俗語に何まじくらともいへり」。

まじはりはかるのしよく　江文の爲成卿まじはりはかるの職にすすみ(關八州)

參議をいふ。職原抄に、「參議者諸官之中四位已上、有二其才一之人奉レ勅參二議宮中政一之意也」。

まじやうもの　人の氣に入り雇はれてまじやう者と言はれた故(夕霧)　さもしい氣は微塵も無く、まじやう者の孝行者、子も尋常に育てて(鎌權三)

〔眞正者〕眞正直者。

***ましら**　何を恨みてましら鳴く(蟬丸)

「まし」ともいひ、猿のことである。この語は梵語 Markata (猿をいふ)の音譯摩斯吒を誤つて摩斯吒と書いたので、「ましら」と混同附會したのであるともいふ。

ますおとし　鼠とは能う言うた、御

條に、「ああいつも〳〵私が事をきかしやんすほどに、今日はなんの日ぢやまで、をかしいほんに」。

まてばしひ 柑子・金柑・馬手馬椎（嵯峨天皇）

〔馬手楽椎〕常綠喬木で高さ二三丈に達し、種子は食用となる。「持ちたる木の實云々」を見よ。


〔まてばしひ〕

まどし まじやうに紡み合はせ組み合はせ接ぐまどしさも、女仕事の捗りて（唐船噺）

「まどほし」（間遠）の約。まだるい。まどろしい

***まどふ** あれあれ笛がやんだわ、まどうて返しや笛返しや（孕常盤）

物を借りて損じたるを元のやうになほして返すをいふ。賠償する。この語現今も中國地方で用ゐてゐる。和訓栞に、「俗に金銀諸物に就て、借つて損したるを本の如くするをまどふといふも、迷はしたる物を還すよりの詞なるべし、賠償の意なり」。

まとや 的矢は業の矢とて親の敵を射る故實あれども、鹿を射る法はなし（會稽山）

〔的矢〕的を射る稽古矢であつて、矢幹は黑漆で薄く塗り、三節あつて筈を節で作り、切斑の眞鳥羽で矧ぐのが普通なる由、高忠聞書に見えてゐる。

まないた 樋のまないた木にしつかと括る（天網島）

樋小屋にこの名稱あるものを心得ず。よつて按じるに「まないた」は「まなげ板」の略で、「まなげ」は斜目斫をすることをいふ古語である。樋小屋の前面上部に亘せる斫目斫の横木を云うたもので、其中央には小さな木車があつて索を懸け、その索によつて水門の戸を開閉するやうにしてある。

まなご まなご交りの砂利土に四足をかつぱと踏ん込んで（兒が曆）

眞砂子。和訓栞に、「まさごをまなごともいへり、眞砂子の義なり、和名抄に繊砂をよめり」。

まなばし ぶえんの鱠・まなばしいらずの手料理（三國志）

〔眞魚箸〕魚を料理するに用ひる箸。和漢三才圖會に「魚箸以レ鐵作レ之、長六寸柄四寸許。」

***まなぶ** 笠を枝葉の笠となし、ここにてまなび見せ申さん（反魂香） 病死と僞り葬禮をまなび此姿は何事ぞ（賀古敎信） 今宵君の御慰めに女中一人參らるる、御祝言のまなびしたけれども（反魂香）

「まねぶ」（眞似）の轉。眞似る。

***まねぎ** 衣の下の薄氷一尺二寸拔討に、はつと飛退く梶原が烏帽子のまねぎを切落され（會稽山）

烏帽子の前面、ひなさきより上にあつて前方に出てゐる所の名。横さびの烏帽子は、昔は柔らかな烏帽子で、それを折つて三角のまねぎを作つたもので、まねぎは卽ちひれである。

***まののちやうじや** まのの長者同前の大金遣に思はれて（二枚繪）

〔眞野長者〕用明天皇職人鑑に見える人物である。人名部を見よ。

***まば** 銀筈の眞羽の矢負ひ（松風） 弓は重籐・山鳥の眞羽の鏑矢（艶狩）

〔眞羽〕貞丈雜記・弓矢之部に、「矢の羽に眞羽といふは鷲の羽のことなり」と見えてゐる。「山鳥の眞羽」とは、山鳥の尾羽の斑文が鷲の羽に似たれはいふ。

***まはし** ヤアなんぢや廻し者、オオ男ぢやもの廻しなせいでよいものか（歌念佛）

〔廻〕禪。佐治右衞門は前に惣嫁の姪賣行爲を男女の喧嘩と合點し、今また廻し者（間者をいふ）を褌をする者と解した處に律義一片の田舍爺、其愚やあはれむべきである、宜なるかな惡漢の奸計に陷ることも。

***まはす** 男の意地ならば手柄に吾妻を廻して見や（壽門松）

〔廻〕畠山箕山撰・色道大鏡に、「まはす。男の氣にちがはじと女の方より從ふ貌なり、たとへば風車の風にまかせてくるくると廻るやうに男の心に隨ふなるべし」。巣林子作・曾我會稽山に、「かほどに思ふ誼經に廻りやうがさうでない」、とある「廻り」ももてなしぶりの意である。

まはだ まはだ・力革・金の覆輪ふつつと切れ（加增曾我）

〔馬膚〕馬の背膚に敷くもの。武家名目抄・輿馬部に。「弓張記云、鞍計持て出る事、是も切付馬膚ある時は、左の手を兩の馬はだの間へしつ輪の方より入て、右の手にては右の方の馬はだ切付へかけて持て出るなり」。

まはる 「まはす」の條を見よ。

まび 思へば天一天上の五衰八專まびもなし（大經師）

〔間日〕「八專・間日」を見よ。大織冠に「庚申・甲子一夜の間日もあることか」とある「間日」は間引き日の意に用ひたのである。「かうしん」「きのえね」をも見よ。

まひごみずな 藻屑泥土まひごみ砂互に投かけ攫かけ（女殺）

〔舞込砂〕風に吹舞はされた塵埃の水底に沈澱せる土砂。

まひぞこなひ 初生の茄子の蔕のまひぞこなひと見たは僻目か（弘徽殿）

〔舞損〕茄子・瓜などが畸形となつて發育不充分に終ること。できそこなひ。茄子・瓜などが發育不充分に終り、又は畑の野菜類の枯れるを舞ふといふ。

***まひづる** 舞鶴は飯原左衞門（五人兄弟） 朝比奈の三郎が定紋舞鶴、同じ樣に候ては飯原が手柄薄くなるかに候（扇八景） 朝比奈が舞鶴はぎやつと生れし産衣より附き來たる定紋（扇八景）

〔舞鶴〕紋所の名。夜討曾我（舞之本古活版）に、「舞たるつるはゐはら左衞門」とあつて、次の紋繪が載せてある。また朝比奈三郎義秀の定紋は、丸めた舞鶴の紋を附けてゐるのが古書に載つてゐる。


〔舞鶴〕

***まひまひ** 幕に立つたる歌比丘尼・舞ひ舞ひ・物眞似さまざまの賑ふ中に（賀古敎信）

〔舞舞〕烏帽子・直垂・大口を着て、幸若・大頭（その條を見よ）の舞を扇拍子で舞うて、施物を乞ふ一種の物貰ひ。西鶴撰・胸算用卷一、長刀はむかしの鞘の條に、「その東隣には舞舞住みけるが、元日より大黑舞に商賣をかへければ、五文の面、張貫の槌一つにて正月中は口過ぎすれば、この烏帽子・直垂・大口はいらぬ物とて、二匁七分の質に置きてゆるりと年を越しける」。

きまを塞ぎて其雨を漏さざりしかば、帝・太夫といふ御名を贈り給ひしより松を太夫と申すなり」と見えてある。松を太夫といふよりして、遊女の位なる太夫を、松とも松の位ともいうたのである。「太夫」を見よ。

まつかいさま 「まつかへさま」を見よ。

***まつかう** 羅生門にて我が兜のまつかうこそは引いたれとしやくつて引けば（酒呑童子） 己れらまでも同じやうに立騷いで何としなる、まつかうすると摑み附くを取つて投げ（女殺）

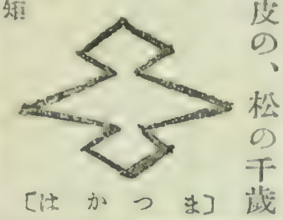
先斯う。錦文流撰傾城八花形に、「昔まつかうさる人の書き傳へたる物語」。傾城酒呑童子のこの文は、先斯に眞向をいひかけたのである。

***まつかぜ** お行水なされておつつけ松風、皆待かれてござります（反魂香） 能見る心もあら磯の、松風もはや過ぎにける（吉岡染）

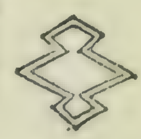
〔松風〕謠曲の名。在原行平が須磨で寵愛した松風・村雨といふ姉妹の海人があつた、其執心の幽靈出でて昔語をなし、僧の回向を望むことを作つてある。この謠曲は俗に熊野・松風米の飯というて、熊野と共に人々の好む謠曲である。

***まつかは** 釘貫・松皮・黄紫紺（五人兄弟） 私が紋の松皮の、松の千歳を祈りしに（冥途飛脚） 誰白河は大身の駕籠の紋は松皮菱（薩摩歌）

〔松皮〕松皮菱の略。奥州白河城主・松平大和守基矩の駕籠の紋は



〔まつかは〕



***まつかへさま** 安藤左衛門光成以下を語らひ合戰の用意事急に候、かたがた御油斷あるべからずとまつかへ様にぞ議しける（最明寺殿） 某先へ駈拔けてまつかへさまに言上し、曾我の根を絶やさんと（會稽山）

「まつかいさま」とも書いてある。眞反様である。あべこべ。正反對。

***まつしや** 柏屋の長がもとへと案内させ、座敷に通ればまつしやども、前後左右に居ながれて（吉野忠信） 長う入らぬは見せかけ大盡、わるがう末社のちよつと借着に食物吸物（雪女）

〔末社〕大盡（傾城買ひの上客）と大神と其音通へば、之に附隨する義で幇間を末社と云ふ。たいこもち。元祿太平記（元祿十五年刊）卷之一に、「女郎の異名を神成と申して天神の位を與へ、買手を大神といひ、太鼓を末社と名付け云々」。

***まつたけ** 嘉平次はさがをはなれし嵯峨松茸、より殘されし風情にて（生玉）

〔松茸〕「さがまつたけ」を見よ。陰莖を松茸に喩へていふことは其例古く、宇治拾遺物語卷一、中納言師時・法師の玉莖檢知の條にも見えてゐる。

***まつばたばこ** 煙草と待つ宵の、松葉たばこの柔らこき、女中仲間ぞ賑はしき（嫗山姥）

〔松葉煙草〕磐城國相馬郡松川から産出する煙草をいひ、品質第三等（中の下）のものなること、煙草錄の煙草の種類を擧げた中に見えてゐる。

***まつばやし** 永享三年正月三日將軍家の御松囃北山の御所にてあるべし（雪女）

〔松囃〕松囃は足利時代の何時はじまつたか明でないが、應永二年正月二日足利將軍義量が營中で松囃あり、謠初めを行ふ。それ以來幕府の謠初は正月二日であつたが、承應三年から正月三日の時もあつた。民間では正月四日に行つたものが多い。大友興廢記・大友家年中儀式の條に、「元日より三日まで府中の町より松囃參る、松囃とは眉はきたる兒あまた裝束を着し、羯鼓にて踊る、笛・鼓・太鼓に拍子あり」と見えてゐる。

***まつべる** 頬冠して日を隱し、沓見まつべて腰に附け（丹波與作） 底意地惡いど根性、諸人の憎み猜むまで引まつべてあやかり給へ（孕常盤）

統べ集める。和訓栞に、「まつめる。俗語なり、全集める義にや、軍場などに人をまつめるなどいへり」。

まつぽふごぢよく さりながらとても此世は假の宿、末法五濁の世の中、釋迦彌勒廣大慈悲の父母もなく（一心五戒魂）

〔末法五濁〕末世の不潔なことにいふ。佛世を去る長遠で、教法の轉た微末な時を末法といふ。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁を五濁といふ。

まつやま 迷ひ行けども松山に似たる人なき浮世ぞと（天網島）

〔松山〕延寶頃大阪新町の遊女である。大阪御堂前の豪商椀屋久右衛門の息子久兵衛・松山に馴染み、巨額の金を浪費したので、親族の者ども久兵衛を擯禁した。爲に久兵衛憂欝の果、遂に發狂して家を出奔したとも、また狂亂して川中に松山が幻を見て飛込み溺死したともいひ、實説詳でない。「迷ひ行けども松山に云々」を見よ。

***まつよひ** 頃しも仲秋十四日まつよひの月更けて（天智天皇）

〔待宵〕陰曆十四日の夜の稱。蓋し十五夜の月を待つ宵の義である。（序云、十五夜を望月、十六夜をいざよひ、十七夜を立待、十八夜を居待、十九夜を臥待とも寢待ともいふ）。曾根崎心中に、「鳥の時ぞとて餘所の待つ宵きぬぎぬも」とある「待つ宵」は、戀人を待つ宵の意。

まつらぶね 逢瀬はいつとまつら舟、こがれこがれて（根元曾我）

〔松浦舟〕筑紫松浦の舟。萬葉集・卷十二に、「松浦舟さわぐ堀江のみを早み、檝取る間なくおもほゆるかも」。こゝの文は、「いつと待つ」に「松浦舟」をいひかけたのである。

まつりのねりしゆ 「ねりしゆ」を見よ。

まつわか 「あそふのまつわか」を見よ。

***まで** 鍋蓋あつても女房が無い、事の缺けぬは不思議ぢやまで（卯月潤色） 知らぬとは小面憎う、打ちたいまでと笑ひける（雪女） ほんぼんにお幾つが定ぢやまでと手を取れば（雪女） よう殿達はあのよにして、生きてゐさんす事ぢやまでと獨語して（雪女） ほんに何處でやら落してのけた、誰ぞ捨たか知らんまで、どこぞ尋ねて來ませうか（天網島）

語尾につけて、念を推し、意を強めるにいふ語。那爾葉鉦（延寶八年刊）松之部一、初冠の

*まりしてん　摩利支天の變化たる義經公(殊勝)

〔摩利支天〕印度の神名 Marici. 譯して陽炎といふ。帝釋天の眷屬で日天子の前驅をなし、國を護り民を護り五穀を養ひ兵戈の難を救ふ役目となし、その形相捕捉されない。我が國では護國護民の軍神とされてゐる。摩利支天經に、「有レ天名二摩利支一、無二人能見一、常行二日前一」と見え、また「若有下知二摩利支天名一常憶念者上、彼人亦不レ可レ見、亦不レ可レ知、亦不レ可レ捉、亦不レ可レ害、亦不レ可二欺誑一、亦不レ爲二人之所一レ責罰一、不レ爲二怨家能得二其便一」云云」。

*まる　まるが心を懸けし女(用明天皇)

「まろ」の轉。「まろ」を見よ。

まるぐち　瓜を二つに割らずに矢張丸ぐちぢや(隅田川)

まるぐるみ。全體。「ぐち」を見よ。

*まるごし　勝手につめたる諸職人立騒げども、丸腰のふるひまはつて埒明かず(用明天皇)　丸腰でなければ奥へ通さぬ御法度とあれば(反魂香)

〔丸腰〕腰の丸い儘でゐる義、刀などの武器を帶びざることをいふ。

まるさやまき　(兼好)

〔丸鞘卷〕金作の太刀の鞘までも一圓に金で包んだものをいひ、下緒を鞘に卷き腰に結付けて携へた鍔無き短刀。

*まるた　ヤイヤイやかましい丸太めら暮に及んで何事ぢや、番所が目に見えぬか(女楠)　びくにん呼んで念佛講、まるた普請でしよげるべい(吉岡染)

〔丸太〕小唄を便りに色を賣る比丘尼をいふ。丸太は卽ち圓木で、俗を「木の端」(その條を見よ)といふより、比丘尼をも圓木の意にとりなした稱である。「うたびくに」を見よ。好色訓蒙圖彙(貞享三年刊、吉田半兵衛撰)上卷に、「比丘尼。丸太」　飯袋子撰・麓之色、卷五に、「比丘尼は女僧なり、……尤三衣を着て佛道を修行すべき身の、いかなれば邪行の戒を破て婬を賣ことを活業とするや、渠も淸女がいひけん木のはしの類なれば丸太と呼ばるるも宜なり」。

まるたぶね　いや御僧とは空目かや、我もこがるる丸太舟(歌念佛)

〔丸太舟〕舟の一種、圓木のやうな形したもの。和漢船用集・五に、「九木船。其形丸木を刳たるが如し、故に丸太船と云、……其舟長く細く深くして、底より兩側板丸くはき上にして棚なし、上のはきをおもきと云、水押も立板に丸くはき、舳は横舳にして大立横上あり、右揖の方にそへ立あり、ろくい高く鐵にて作る、棹櫓を用、帆檣かね用、旅客舟の内に有て外へ見えず云云」。五十年忌歌念佛のこの文は比丘尼を丸太(前條を見よ)といへば、それをいひかけたのである。但しこれはお夏が其夫淸十郎を尋ねる爲熊野比丘尼となつたのを云うたので、賣春婦と見るべきではない。

丸に蔦の葉　駕籠の紋は丸に蔦の葉(薩摩歌)

駕籠の紋である。(松江城主・松平出羽守綱近の駕籠紋)



〔丸に蔦の葉〕

圓に虎の尾ひんと跳ね　備中松山駕籠の紋は圓に虎の尾ひんと跳ねたる備後の福山(薩摩歌)

備中國松山の城主安藤長門守重興の駕籠の紋であつて、圓の中に虎の字の尾端の跳ねたのが書いてある。



まるめろ　花梨、榲桲(嵯峨天皇)

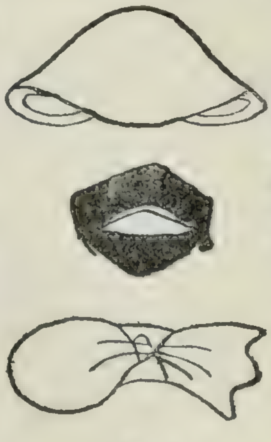
〔榲桲〕葡萄牙語 Marmelo. 南部歐州原產で、我が國では庭園などに培養する落葉果樹、幹の高さ七八尺乃至丈餘に及ぶ、葉は互生で卵形或は楕圓形をなし、裏面に毛茸を密生す、春季枝の頂端に淡紅色五瓣の花を開く、果實は黃色の漿果で直徑二寸餘に達し、外面に凹凸多く、味甘酸で芳香を有し、食用に適する。



〔まるめろ〕

*まるわた　(女夫池)

〔丸綿〕婦人の被る綿帽子である。(女用訓蒙圖彙所載)



〔丸綿〕

*まれびと　今日は邯鄲屋の大事のまれびと大寄とて、今朝よりたびたび召さるるゆゑ(扇八景)

稀人の義、常に家に居ぬ人の義で、賓客をいふ。「まれびと」は音便で「まらうと」ともいふ。「まらうとざね」を見よ。

まれをとこ　吟味に吟味思ひこうだまれ男なればこそ、大事の娘に添はするもの(鑓權三)　國細工には稀男、色のわけ知り里知りて(冥途飛脚)

〔稀男〕稀な好男子。男色大鑑卷六、姿は連理の小櫻の條に、「しら〱と顔見とむる人もあらぬ程にして近代の稀者」、とある稀者も美形の意。

*まろ　其先帝と申すは誰なるぞ、主上を始めまろも貴邊も父ならずや(用明天皇)　まろが思は深けれど、人は情も朝霜に、おきまどはすなと傳へよと(酒呑童子)

〔麿〕「まめ」などと同じ類の語で、眞實の義であらう。自稱代名詞、おのれ。われ。(和訓栞に、「まろ。古人の名も唯まろとのみも又何まろとも多く呼べり、又自稱にもいへり、男子の通稱也といへり、何の爲出ろ事もなきの義あれば才氣あるなかどあるといふにむかへ知るべし、天子より諸臣に至り、或は女子も同じく稱すること物語類に多し、才なく愚なる意なり、今淸算已下の童名に何丸と稱するもまた是也」)。本領曾我(巣林子作)に、「深い非筒のまろがたけ、竹に降る雪積る戀」、とある「まろがたけ」も己が身の丈の義である。伊勢物語の歌に、「つつ井筒井筒にかけしまろがたけ、生ひにけらしな相見ざるまに」。

*まろかせ　砂金のまろかせ盤に積み(日本武尊)　あれあれ水底に金鐵のまろかせきらきらと(唐船噺)

塊をいふ。大塔宮曦鎧(淨瑠璃)に、「黑鐵のまろかせの踏鞴に湯となる如くなり」と見えてゐる。和訓栞に、「まろかせ。俗に金鐵のまろかせといへり、塊をいへり、まろかれと同義にや、鋼炭上居鐵丸など見えたり」。按じるに海膽の殼のやうな扁球を丸甲羸といふもこの語である。

*まろね　まろねがちなる我はただ涙ばかりに明暮れと(伊豆日記)

〔丸寢〕獨りまろまつて寢る義。獨寢。萬葉集にも「草枕旅のまろね」など見えてゐる。

＊まぶ　まぶで逢うたも一昔(女腹切)　げにまこと中戸小宿で、ちよつきりちよつと間夫(まぶ)をきらるゝ(女夫池)　曾我の十郎祐成樣と姉女郎の虎樣とのまぶのなかだちしげしげの(虎が磨)　まぶこそ汐の滿干なれ(反魂香)

〔間夫〕情夫。馴染の間柄。色道大鏡・名目に、「表向の買手にあらずして密通する男をいふ、眞實に思ふ夫といふ事也」。津國女夫池に「間夫を切らるゝ」とあるは、横を切られる意、卽ち遊女が揚げられてゐる客を外して、間夫と密會するをいふ。「面白の花の廓云々」をも見よ。傾城反魂香のこの文は、情夫に逢ふこともさしひきがあるの意。

まぶ　灸して山の腰暖めや、久久まぶが跡切(とぎ)れたにちと山入致さうか(栬狩)

〔間府〕壙(あな)をいふ。「まぶ」の語古くは細川幽齋の九州道の記・四月二十九日(天正十五年)の條に、「まぶよりもほる白銀」とあれば、もとは金山言葉であらう。松永貞德撰・あぶらかすに、「人の情や穴に有らん」の題にて、「かな山のまぶと申かほれ心」と見えてゐる。諸分店颪・松之部一、納戸の條に、「まぶといふことは金山の掘口をまぶといひます」。巣林子のこの文は、壙を女陰にきかせたのである。

＊まぶし　星月夜の紅葉の蔭、まぶしさせて山山の、狩人集め狩りけれども、白き鹿こそなかりけれ(五人兄弟)

〔射翳〕目柴の義であらう。獵夫が鳥獸を射るとき、柴などを折かけて身を隱すもの。箋注和名類聚抄に、「射翳。末布之。所ニ以隱レ射者也。按說文、翳華蓋也、所レ謂羽蓋卽是、故其字从レ羽、轉爲ニ凡隱蔽之稱ニ」。

＊まぶる　女房一人(ひとり)まぶつてゐる男とては無けれども(大經師)　わしが顏阿呆(あはう)らしう見えたやら、まぶられて歸りしぞや(重井筒)

「まもる」(守)を「まぼる」といひ、轉じて「まぶる」といふ。守る。見守る。

＊まぶる　おのれが母は流れの者、空言に身はまぶれても心のたまかさこうたうさ(歌念佛)

「まみる」(塗)の轉訛。泥などにけがされて塗つた如くなるをいふ。汚れに染まる。「泥まぶれ」「血まぶれ」などいふ「まぶれ」もこの語である。

前三後七(まへさんのちしち)　土用八專構ひなし、前三後七愼しみなし、灸した夜でも戀衣(栬狩)

灸點の前三日間及び後七日間。こゝの文意は、灸點の前三日間と後七日間は房事を忌むのであるが、伊吹艾の功能はその構ひなしといふこと。

まへだれ　前垂・鍵は下げまいと親御の事まで思はれて(反魂香)

〔前垂〕遣手は赤前垂で巾着の鍵を下げてゐたによつて、遣手の身の上を云うたものである。「やりて」を見よ。

＊まへびろ　前びろに手形しよう爲に呼びにやつたと語りける(女腹切)　只今にも野心(ねがひ)を飜し御兄弟御和睦、公時が願この上なし、さるによつて鷄(とり)を待たずまへびろに參上致す(關八州)

〔前廣〕前方(まへかた)。前以て。俚言集覽に「前びろ＝演義文に豫先と云」。

まへほろ　大の男の前ほろ摑み、日より高く、ぐつと差上げ(井筒)

〔前母衣〕犢鼻褌(ふんどし)の前方。曾我物語巻一、奥野角觝(すまふ)の條に、「右の腕(かひな)をつゝと延べ、俣野が前ほろを摑んでさしのけ、荒くも働かば手綱(ふんどし)も腰も切れぬべし」。

＊ままし　母上樣がまましくて萬つらくあたり給へば(三世相)

間間の義。隔てあるやうなるをいふ。繼母子の中をまゝしき中といふ。

＊まめいた　これは上物上目利(めきき)と豆板一粒はつとはづみ(重井筒)　これぞ飲んで下されと、二三匁の豆板二つ(大經師)

〔豆板〕豆板銀、銀玉、粒銀、豆銀、小玉銀などともいふ、豆とは圓くて豆の形に似たるよりの稱、江戸時代に行はれた銀貨の一種で極印があり、大小輕重異り、量目によつて通用した。巣林子時代までの豆板は、慶長豆板銀(慶長六年鑄造)＝縱六分・横五分・重さ三匁五分、元祿豆板銀(元祿八年鑄造)＝縱八分・横八分・重さ六匁三分、永字豆板銀(寶永七年鑄造)＝縱五分・横五分五厘・重さ二匁八分、その他寶字豆板銀(寶永三年鑄造)、四寶豆板銀(正德元年鑄造)、三寶豆板銀(寶永七年鑄造)、享保豆板銀(正德四年鑄造)があつた。

＊まめをとこ　在原の中將なりけるまめ男、戀ゆゑ旅を信濃路や(川中島)　お國の御用あら玉の、ここに年とる豆男、阿波の國平岡左近と宿札も、門の飾にときめきて(夕霧)

忠實な男。心のあだあだしからぬ男。「まめ」は實の義、忠實または信實などの字を訓んである。伊勢物語(二段)に、「それをかのまめ男うち物語らひて」。女重寶記・五、新やまと言葉の部に、「まめ男とはしんじつなる男なり」。

＊まもの　難波・瀨尾が無分別、卷轆轤の大綱を兩方四五間引張つて卷いて取らんと犇いたり、ハアア子供遊の綱引か、惡あがきする餓鬼めらこれ見よと片足あげ、やあうんと氣をこんでまものをふつつと踏切れば(女護島)　大釜の形にて重さは磐石、まものの綱に絡め付け(唐船噺)

〔眞物〕麻絲を綯(な)へる綱。苧綱。和漢三才圖會卷二十四、百工具、絙(つな)の條に「絙以レ苧綯レ之、俗曰ニ眞物ニ」。「てこ」の條をも見よ。

まゆねかく　「柳(やなぎ)」を見よ。

まらうとざね　今日は飯原左衞門經景・紋廣めの祝儀振舞、工藤祐經をまらうとざね、相客は昵近の旗本三十餘人(扇八景)

「まらうと」は「まれびと」(稀人)の音便。常に家に居ぬ人の義で、賓客をいふ。「ざね」は「君ざね」「神ざね」などいふ「ざね」で、其者を貴ぶ意に添へていふ接尾語である。和訓栞に、「まらうと。賓客をいふ、稀人の義なり。まらうとざね伊勢物語に見ゆ、上客をいふ也」。

まりかかり　足を早むる毬かかりの蔭(女夫池)　局の御簾を打拔いて毬かかりまで投付けられて、砂まぶれになる程に(天鼓)

〔毬懸〕蹴鞠の庭。「かかり」を見よ。

まりがきのおほあみ　鞠垣の大網をそろりそろりと引延し(雪女)

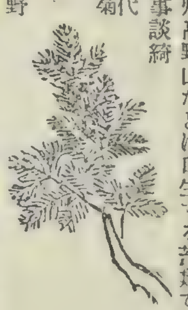
〔鞠垣大網〕鞠の脱出を防ぐ爲に毬懸(まりかかり)の周圍を取卷く大網。

***まんどころ**（最明寺殿）

〔政所〕鎌倉時代職制の一で、幕府の政務を總攝し、御家人の成敗財政に至るまで皆これを總べる政衙である。始はこれを公文所と稱したもので、長官を別當といひ、其他執事・寄人などがあつた。

まんねんぐさ　このお山の萬年草は人の命の生死を示し給ふと申すゆゑ（萬年草）

〔萬年草〕紀州高野山などに自生する苔類である。本朝世事談綺（一名、近代世事談、菊岡沾凉撰）巻二に「萬年草、高野山の御廟にあり、一とせに一度日あつてこれを採ると云、此枯れたる草を水に浮めて他國の人の安否を見るに、存命なるは草水中に活きて生ひたるが如し、亡したるは枯葉そのまゝ也」。



〔まんねんぐさ〕

まんねんごよみ　萬年暦・昔暦・新暦（大經師）

〔萬年暦〕一年限りでない暦で、人の運勢や方角の吉凶などをみる大雜書・三世明鑒の類をいふ。日本永代藏・巻五に、「萬年暦のあふも不思議あはぬもをかし」。

***まんびやうゑん**　早く寢せて疾く起し、晝あがかせたが萬病圓（鑓權三）

〔萬病圓〕雍州府志（貞享三年刊）藥品部の中にも見えて、販路廣かつた萬病解毒圓をいふ。ここの文は萬病の藥といふを萬病圓といふ藥名にいひかけた洒落である。

***まんま**　引倂きし鍵取出し、まんまと明けて鍵は元の紙入に初の如く納め置き（二枚繪）

「うまうま」（旨旨）の約訛。首尾能く。（小兒語に飯などをまんまといふも、うまうまの約訛である）。

***まんろく**　彌陀の六字の名號をマママママンマンまんろくにトトト唱へて死にたいといふ時は皆與兵衞めが惡いぞや（卯月紅葉）

〔まろく〕（圓また眞正）に撥音「ん」の增加した語。公平。完全。十分。現今も鳥取市地方の言葉に、十分または完全の意に「まんろく」といふ。耳塵集に、「褒められんと思はば見物を忘れ、狂言を眞のやうまんろくに致したるがよし」。和訓栞に、「眞をまんとよぶも多し、まん中・まん圓・まんろくの類也」。

み

***みあがり**　今日は小女郎樣の母御の十三年忌追善の爲身あがりして（三世相）　一生身あがり仕暮しても、そなたのやうな意地腐に小判の梃杆でも動く女郎ぢやないぞや（壽門松）

〔身揚〕我が身で我が身を揚げる（「揚げる」は、遊女を呼寄せて遊ぶ意）義。遊女が勤を休むことをいふ。身揚りすればその日の揚錢を見積つて抱主への借金の中に加算されるのである。人倫訓蒙圖彙・七に、「傾城のならひにて勤の内に身あがりすれば、その揚錢親方への借金とつもり、年季あきて此かねを立てねばいださぬなり」。野傾友三味線（寶永五年刊）巻之五、堀江屋の枝川といふ遊女の詞に、「我身を我と買ひたる身あがり代云云」。傾城禁短氣（寶永八年刊）二に、「身あがりとやら云うて、我體を我金出して買はるるやうなむさい意氣は云云」。

***みあれ**　正八幡大菩薩筑紫にみあれの折柄も石上樹下の吉例あり（女夫池）　みあれの注連に引く鈴の、叶はずばよも鳴らじとの、賴みを賀茂の瑞垣に、玉依姬のその昔、別雷の御神を、御産の紐のやすらかに（女夫池）

「御生」または「御形」をよんである。河海抄に、「賀茂祭前日於垂迹石上有神事號御形」。花鳥餘情に、「みあれは玉依姬の別雷を生み給ひし所をいふにや、さて御生とも書く、卽ちかたちをあらはし給へる故に御形とも書けり」。

***みうけ**　餘所へ預けて置いた金、身請の爲に取戻した（冥途飛脚）　身請の衆は親方が濟んでから、宿老殿で判を消し、月行事から札取られば大門が出られませぬ（冥途飛脚）

〔身請〕遊女などの身の代金を拂うて其の商賣から退かすこと。請出。落籍。身請門出には遊女の身の代金を拂うて、親方が濟んでから宿老で判を消し、月行事から札を取つて、自由の身となつて大門を出るのである。そして其際は相應の內祝も行つたものである。巢林子の作中、身請門出祝を書いたものに、その派手なのは淀鯉出世瀧德上巻に淀屋勝二郎が太夫吾妻を請出す條、壽門松・下巻に難與平が太夫吾妻を請出す條、博多小女郎波枕・上巻に毛剃九右衞門が數多の遊女を請出す條などがあり、またその哀れなのには冥途の飛脚・中巻に忠兵衞が梅川を請出す條などがある。これらで略推察できるが、なほ巢林子よりも後の撰述の澪標（寶暦七年刊）に、「身請門出＝身請定まり門出の日、揚屋茶屋親方の親類知音の銘々へ樽肴、或は絹織物等相添へ祝儀となす、又もらひたる方よりもそれぞれの屆事は、其後門出名殘とて家內一門一家寄集り、料理に結構を盡し、盃事ありて揚屋より迎に來る、乘物持たせ來るもあり、かるきは竹輿、被笠さまざまあり、夫より揚屋にて又盃事あり、此時なじみの女郎達思ひ思ひ寄集り、見送の事どもあり、門まで賑々しく見送り、はなやかなりし事どもいふ斗なし、この儀式は大盡の威勢次第にて華美かぎりなし」、とあるも參考とならう。

みえいだう　地名部「みえいだう」を見よ。

見えいろ　「いろ」を見よ。

見がい　「がい」を見よ。

***みかうし**　嬉樂があるからはまだみかうしではない、內へはどれから入ることぞ（聖德太子）　主殿司の宿直守御格子參る（酒呑童子）

〔御格子〕御格子をおろして御寢なる義。御寢。格子は細く木を削つて、碁盤の目の如く組んで黑く塗り、裏に板を張つて上下にあげおろすやうにしたものである。伊勢貞丈は、格子は板なく、蔀は板を張つてあるやうに云へども、松岡行義の後松日記に其誤れるを辯じてある。「御格子參る」は、御格子を下すをいふ。

みがち　時景もとより身がち者、北の方にさしこまれ（天鼓）

〔身勝〕身勝手。利己心強きこと。

みかはもの　これへ見えた飛脚の足本のねばいは三河者に極つたぞ（丹波與作）

「あしもとのねばい」を見よ。

＊まを　御留守の間お種樣眞苧をお績みなさるると、道中すがら家中の沙汰（堀川波鼓）　問い苧桶に角の蓋、眞苧うみためて綯ひ交ぜて、今は我が身の縛り繩（大經師）　我は涙の苧桛繰る、眞苧をくるとや世の噂、手で堰きかぬる川水に（鑓權三）

眞苧に間男（密男）を通はせて、姦通の隱語である。「眞苧を績む」「眞苧を繰る」などいふは姦通する意の隱語である。鑓權三重帷子のこの文は、「眞苧を繰る」に「眞苧贈る」をいひかけたもので、眞苧を贈物にするは姦通を知らす諷刺である。

間を渡す　此子に着せてまを渡したも、私が智惠ではあるまい（重井筒）

急場を取繕うて一時凌ぎをする。間に合はす。

＊まん　なんぼ浪人でも際の日の寶、まんが直ろと差出せば（女殺）　此年越からまんが直つた（雪女）

「ま」（間）に撥音「ん」の增加した語である。調子。運。現今も中國地方で、「運の好い」を「まんが好い」といひ、「運の悪い」を「まんがわるい」といふ。「何とまが悪いでせう」といふ「ま」も間で、卽ち運の意である。

＊まんがち　其方よ此方よとまんがちに路次に駈出で走り入り（天鼓）　出抜いてまんがちに乘出すな（日本武尊）　エエまんがちな卷筆殿（持統天皇）

「まがち」（目勝）に撥音「ん」の增加した語。我勝ち。自分勝手。目勝は神代紀下に、「遣從神往間時、有八十萬神、皆不得目勝相間、故特勅天鈿女曰、汝是目勝於人者、宜往問之」と見えて、人に對して怖れない、憚らないの意。轉じて我勝ち。自分勝手の意にいふ。

＊まんこ　まんこが其日の裝束には阿耨菩提の腹卷に（女護島）　二人はあきれて言葉もなく、まんこが玉を取られし心地（弘徽殿）　この爪音の優しやと覗き給へば、座敷にも聞き失ひて茫然と、まんこが玉の玉琴の調子まばらに狂ひけり（孕常盤）

〔萬戸〕萬戸將軍雲宗をいふ。「萬戸が玉」とは萬戸將軍が唐太宗の勅使となつて持來つた面向不背の玉をいふ。「面向不背の玉」及び假作人名部「うんそう」を見よ。萬戸のことは舞之本・大織冠の中にも見えてゐる。

＊まんごふ　萬劫經るともよも盡きじ（百日曾我）

〔萬劫〕永遠の意。「劫」は「こふ」を見よ。

＊まんざい　たつた今毎年京へ來る得意のまんざいが來て不思議立つたを（大經師）　ここな萬歳傾城、萬歳ならば春おぢや（夕霧）

〔萬歳〕烏帽子素襖を着、年の始に門門に來つて祝詞を唄つて舞ふもので、足利の頃中には正月七日に來たのである。萬歳は蓋し男踏歌の餘風であらう。古くは千秋萬歳と稱したが、それは萬歳唄の中に千秋萬歳の詞のあるを取つて名づけたのである。萬歳唄は一定してはゐないけれども、概して、「德若に御萬歳、當御殿榮えます、ありけうあり新玉の、年立ちかへるあしたより、水も若やぎ木の芽もさしさかえけるは、誠に目出度う侍ひける云云」といふ唄である。日次紀事（延寶年中成）正月五日の條に、「凡千秋萬歳、出自窪田・箸尾兩村、此兩村在南都西南相去三里許、此內有兩流、則窪田・箸尾是也、窪田太夫・箸尾太夫、是准左部右部而稱之、各參攝庭而舞」。人倫訓蒙圖彙（元祿三年刊）七に、「萬歳樂。年の初めでたきためしをいはへば萬歳樂とは聞えた事なり、此流諸國にあり、京に出るは大和より出る、中國へは美濃より出る、東は三河より出るなり」。「萬歳傾城」といふわけは、萬歳唄の句「誠にめでたう候ひける」を「侍蹴る」の意にきかせたからである。なほ夕霧阿波鳴渡のここの文に、「誠に目出度う侍蹴る……悳若に御萬歳や、年立ちかへる足駄にて、誠に目出度う侍蹴る」とあるは、萬歳唄をもぢつたのである。巣林子はその作中、天鼓、松風村雨束帶鑑、大經師昔曆、平家女護島などの中にも萬歳唄を用ゐてゐる。（「たたき」の條の萬を見よ）。巣林子作・生玉心中・下之卷に、「萬歳があいもきやうある間の山、花は散りても根に返る、人は歸らぬ死出の山」とあるは、萬歳が間の山の唄を謡ふのだから、相も興あるといひ、それに萬歳唄の語の「ありきやう」をきかせたものであり、なほ間の山と頭韻を踏ましたのである。

＊まんざいらく　（薩摩歌）（蛙合戰）

〔萬歳樂〕平調樂。「千秋樂は民云云」を見よ。

まんじゆしやげ　摩訶曼茶羅華、曼殊沙華、匂はば匂へ咲かば咲け（釋迦）

〔曼殊沙華〕梵語Manjusaka. 赤蓮華をいふ。飜譯名義集に「曼殊沙此云柔軟、又云赤華」。

まんじり　年寄つても女の留守、寢ても夜の目をまんじりとも明六つ五つ四つになれば（蛙合戰）　心たまぎりや夜ざとくなつて、身だまんじりともせない（博多）

「まじり」に撥音「ん」の增加した語で、「わざん」を「わんざん」といひ、「みな」を「みんな」などといふ類である。まじろきつつ見ること。また、瞬きすること。「まんじりともせない」は瞬きもしないで凝視するをいふ。

まんだら　三翟九品蓮の絲の其曼茶羅はさもあらめ（賀古教信）　初七日には曼茶羅供（蟬丸）

〔曼茶羅〕梵語 Mandala. 輪圓具足と譯し、淨土寶相の圖をいふ。大日經疏・第四に、「曼茶羅是輪圓之義」。「蓮の絲と其曼茶羅」とは中將姫の故事である。「ちゆうじやうひめ」を見よ。「曼茶羅供」は曼茶羅供養をいふ。

まんだらげ　例へば優曇華・曼茶羅華・七重寶珠の花とても（五人兄弟）

〔曼茶羅華〕梵語 Mandarava. 白蓮華をいふ。「まかまんだらげ」を見よ。

＊まんぢゆう　あの後からぬつと出たまんぢゆうの木は何とやらいひますの、ハテここな人、木の名は檜葉（聖德太子）　落雁・かすてら・羊羹より、菓子盆運ぶ腰元の、饅頭肌ぞ懷かしき（反魂香）

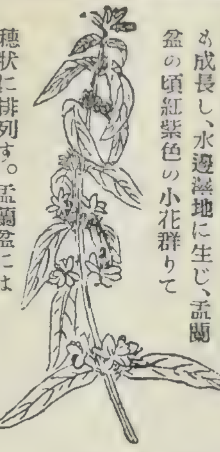
〔饅頭〕字の元代の音か。雍州府志・土產門上に、「饅頭ハ古建仁寺第二世龍山禪師入宋、于時中華人林和靖末裔林淨因執弟子禮、斯人於中華製造饅頭、元順宗至正元年龍山歸本朝日、林淨因相從來、在本朝改氏鹽瀨、始住南都製之、其形狀片圓、是稱奈良饅頭、是本朝饅頭之始也、……外皮貴精白、內杏重甘美、凡饅頭並餅、納砂糖並亦小豆粉於其內、蒸而食之」。「饅頭の木」とは檜葉をいひ、饅頭の下に敷くよりの稱。繪本玉かづら（西川祐信畫）下卷第七枚目裏面の繪に、蒸菓子の下に敷ける枝葉は檜葉のやうである。「饅頭肌」とは饅頭のやうに脹らんで白く柔らかな肌をいふ。

御前義經記（正德二年刊、大阪秋田屋德右衞門板）卷一、傾城の因緣の條に、「端女郎は鹿戀より下、みせ女郎をいふなり」。（「かうし」の條の畫をも見よ）。

みそかすばうず 四十ばかりのみそかす坊主（娍）
〔味噌糟坊主〕味噌擂坊主など云ふと同義。僧を罵る詞。

みそぎ 赤栴檀のみそぎにて五寸の釋迦の尊像玉の中にましまし（大織冠）
〔御衣木〕神佛の像を刻む木をいふ。新古今集・卷十九、神祇歌の部に、「千早振かしひの宮のあや杉は、神のみそぎに立てるなりけり」。

みぞはぎ 盆には我も新精靈、親子の盃溝萩の、露の手向と引かへて（氷朔日）
〔溝萩〕草の名。中國地方で俗に盆花といふ。萩の一種で、莖の高さ二三尺以上も成長し、水邊濕地に生じ、盂蘭盆の頃紅紫色の小花群りて穗狀に排列す。盂蘭盆には折取って佛檀に挿し墓前に手向ける。



〔みぞはぎ〕

***彌陀** 彌陀賴む、人は雨夜の星なれや、雲晴れれども西・西へこそ行け（賀古教信） 一丁を二十四に切り、二丁で四十八串彌陀の誓願、アア何處ぞに彌陀の光はせぬかい（孕常盤） 心には彌陀の名號一筋の、紙鳶の絲よりなほ細く（氷朔日） 阿字の一刀彌陀の利劍を以て煩惱のきづなと觀念せよと（夕霧） 彌陀の六字の名號（川中島）
「阿彌陀」の略稱である。梵語 Amitayus（無量壽と譯す）と梵語 Amitabha（無碍光と譯す）とを合して Amita と通稱するのである。眞宗・淨土宗などはこの佛を本尊として尊崇する。賀古教信七墓廻のこの文は謠曲・百萬に據ったのである。「人は雨夜の星なれや云云」を見よ。「彌陀の誓願」は彌陀慈悲の誓願四十八のことである。「四十八枚彌陀の願」を見よ。「彌陀の名號」は彌陀の六字の名號、卽ち南無阿彌陀佛をいふ。「彌陀の利劍」は「りけんそくぜ」を見よ。

身だ 身だまんじりともせない（博多）
「身どもは」の意にいふ長崎國訛。

***みだいどころ** 御臺所の姬君のやうに（大經師）
〔御臺所〕貴人の內室の敬稱。御臺所は御臺盤所といふを略した語である。內室は臺盤所で食物の世話する意より稱した語である。

みだくわんぜい みだくわんぜいの像を懸け（大原問答）
〔彌陀觀勢〕阿彌陀如來と其左右に隨侍せる觀音・勢至とをいふ。

***みだけ** 此血を染めし指貫なりと思へば心みだけ絲（薩摩歌） むすぼれてなまなかつらきみだけ苧の、おさん・茂兵衞は夢にだに戀せぬ中の戀となり（大經師）
「みだれ」（亂）の轉語である。「みだけ絲」は亂れ絲、「みだけそ」は亂れ苧である。談林十百韻（延寶四年刊）に、「そこのきたまへみだけ錢あり」とある「みだけ錢」も、緡にさしてないばら錢の意。俚言集覽に、「みだけ。ミダケ錢、ミダケ藥など云、亂也、ケとレと通ず、耄ボレをボケ、謚ニレをニゲ是也」。

みちひのたま 住吉の神楫を取り、龍女はみちひの珠を捧げ（栬狩）
〔滿干珠〕「潮干珠」、「潮滿珠」を見よ。

みちもせに いまはしやとて道もせに隱す體を道者にも嫌ひ憎まれ（丹波與作）
道も狹に、卽ち道も狹きまでにの義。但しこは道面の意に用ゐたのである。千載集・春下部の歌に、「吹く風をなこその關と思へども、道もせに散る山櫻かな」。

***みつ** ひそかに釋尊御一代の經文を拔き、つらつら出離の樣を案ずるに、顯につけ密につけ其悟たやすからず（大原問答）
〔密〕眞言をいふ。宋高僧傳に、「密教者伽瑜灌頂五部護摩三密曼拏羅法也、以二金剛智一爲二始祖一」。

みづあげ かぶろが諸の活花の、水あげそめし其日より勤の露に開き初め（本領曾我） 長門樣の才覺にて此度の水揚とやらいふ事をかの吉樣をお賴み故、私に帶も解かせずお主の間をかへ、床の側へも寄付かぬやうになされし故（酒呑童子）
〔水揚〕禿（その條を見よ）が新造（その條を見よ）となるその夜客を取って同衾すること、卽ち妓女の初床をいふ。並木舍五瓶撰・誹諧通言、言語の部に、「梳攏。新造をしたてるに馴染の客にたのむ初床をいふ」。松屋筆記・卷九十七に、「水揚。倡家にて倡女を船にたとへて云ふ詞なり、小女を新造といふは船の新造より云へり、始めて閨中を試るを水揚と云へり、船に積たる物をおろすを水揚といへば、はじめて客にあはしめてその金銀を得るを船荷とたとへて云へるなり云云」。本領曾我のこの文は、生花の切口から水を吸上げることを水揚といへば、それをもいひかけたのである。

みづいはひ 〔水祝〕「石淸水浴びせません」を見よ。

***みつうろこ** 今の世までも三鱗、北條一家の紋なりとは此時よりのためしなり（伊豆日記）
〔三鱗〕北條氏の紋である。「うろこがた」を見よ。

みつがしら 新田は馬上の名人にて、樂天が三つ頭・王良が祕密の鞭、尾筒を手綱にしつかととり（百日曾我）
「さんづ」を三頭と書けば、その訓讀であらう。「さんづ」「樂天が三つ頭云々」を見よ。

みつがなわ さあ讓狀が物を言ふ、三つ鐵輪で讀んで見よと（卯月紅葉） 親旦那と三つがなわでけんほくぼ晴れて産んで見しよ（酒呑童子）
〔三鐵輪〕三人が三本足の鐵輪の形に並び坐すること。鼎坐。傾性野群談（享保二年刊）三之卷、飛行の魂は日本傾國の條に、「この太鼓黑主の茂七が一座したとの證據人、うそとは言はせぬ三つ鐵輪で吟味いたさうと、むづかしういひかかる」。

みづぐき 今更濡す水莖の、露御手には觸れまじと、推量りまゐらせ候へども（吉野忠信）
〔水莖〕筆または筆跡をいふ。玉かつま・一の卷に「消息書をみづぐきといふは、玉づさといふと同じくて、これもみづみづしき木といふことなり、そはまづ上古には、人の許へ使をやるには、梓木に玉をつけたるを持せて、使のしるしとせしなり、玉梓の使とつねにいふは

みきね　丸木柱に萱の屋根、供物はみきれ、宜禰が神樂を參らする（烏帽子折）

〔三作〕神道名目類聚抄に、伊勢神宮の御饌に炊く米は白くこと三杵で、黒米の如しである と見え、鹽尻卷七に、伊勢神宮に奉る黒米の神供は僞た昭にし給ふことなりと見えてゐる。

みぎはまさり　猪熊は軍介にみぎはまさりの大男（隅田川）

〔汀優〕みぎはたつ（水際立）と同じ。目立つて勝れること。曾我物語・卷一、奧野角觝の條に、「角力は力によらず、手だに優ればみぎは優りの相手をも打つものを」。

***みぎり**　賢王のみぎりには松にも花の咲くべき事、この須磨の浦曲に帝王もましまさず、松に花咲けるは、この波の底は龍宮にして、龍王のみぎり疑ひなし（松風）

〔砌〕水限の義。雨滴を受ける軒下などの敷石をいひ、轉じて折。頃。場。居る所。

みぎん　「あいみんじきんのみぎん」を見よ。

***みぐし**　忽ち光明赫奕として千手觀音の御ぐしと變じ給ひける（出世景淸）　一萬座の護摩を焚かせ御ぐしを繼ぎ奉れ（出世景淸）

御首。御髮。神代紀に首又は髮を「ぐし」と訓み、奇で、美める語であるといふ。

みくにのまち　貫之が古今集・三國の町といへるも其時の遊女なりしぞや（三世相）　江口の白女、三國のまちといひし女郎は延喜帝に請出され、歌は古今に入りしぞや（加增曾我）

〔三國町〕三國は氏、町は名、貞朝臣登の母で仁明天皇の更衣である。この人の詠は古今和歌集・卷三、夏の部に、「やよやまて山時鳥言づてむ、われ世の中に住みわびぬとよ」と見えてゐる。往時越前國三國の町は繁華で遊女町があつた故に、それに通はせて如何にも傾城の名らしう見せた洒落輕妙な筆である。さて三國の町が繁華で遊女町があつたことは、傾城反魂香（巣林子作）にみやといふ女の幽靈の言葉に、「三國では勝山」とありて、みやが三國町で勝山と名乘つて遊女を勸めたを見ても推察される。

御車の五緒　「車の五緒」を見よ。

***みこ**　これ程醫者の出入やらみこの御符のと屋内が持てかやいて（夕霧）

神子の義、巫女をいふ。「黑格子」を見よ。

***みこしにふだう**　二王のやうなる法師武者、人か見越入道か（孕常盤）　若き女郎禿ども、見こし入道高入道、戀があるなら肝煎らう（本領曾我）



（和漢三才圖會所藏）

〔見越入道〕

〔見越入道〕巨軀僧形の妖怪。

みこしのえだ　ここな人、木の名は檜葉・後に見えるは見越の枝といふ物（聖德太子）

〔見越枝〕立花法式の語。立花時勢粧・八に、「立花秘傳抄之五、見越は心かくしの後より木高く立のぼせ二請の方へなびかす、見越は心の後を守て心の勢を強くなす物也、後へ出づる物是より長きはあるべからず」。

みさきばらひ　お十二燈が一包、御さきばらひが百二十、お望次第といひければ（卯月潤色）　千早振みさきばらひの道淸め、天淸淨とは水火の淸め、地淸淨とは屋内の淸め（卯月潤色）

〔御先祓〕神靈の降臨する御先を祓ひ淸める義、神降しの祈禱をいふ。ここの文に百二十とあるは、神降しの祈禱の禮錢百二十文なるをいひ、「天淸淨云云」とあるは卽ち御先祓の祈文で、謠曲・葵上に「天淸淨地淸淨、內外淸淨六根淸淨」、とあるに據つたものなるべく、なほこの神降しの祈禱の文に就いては、謠曲・葵上の梓巫子の招魂の文に據つたものと思はれる所が多い。

みさんばい　「さんばい」を見よ。

***みじまひ**　身じまひして百鳥が膝元へつつとより（用明天皇）　さあ身仕舞して早う行きや（重井筒）

〔身仕舞〕身仕度。身繕ひ。

みしやり　忠信殿にも自らにもみしやりぞ不埒な事はなし（吉野忠信）

〔身舍利〕舍利は梵語 Sarira. 骨身と譯す。「身舍利」の舍利は、「甲が舍利になる」などいふ舍利と同じ語である。僞るに於ては神佛の罰によつて身が舍利になることもあるの意で、自誓の詞として用ゐる。當世大和言葉（著者及刊年未詳、但し挿畫等より推測して慶安より寬文頃までの間の撰述であらう）に、「人と雜談しける時、かりそめごとにも佛祖天道神八幡氏神照覽、ゐずくみ、みしやり、此火に茶毘せられうぞなど、恐しき誓言すること甚だよからぬ事といへり」。なほ當時行はれた自誓の詞については「けいせいみやらが」の條を見よ。

みしりこじ　これ業平殿、見知りごしとな思されそ、綸言なれば見遁しにはなり申さぬ（松風）

〔見知越〕かねての知り合ひ。面識。

***みしん**　横田村の父樣二石二斗の未進に詰り六十六で水牢（丹波與作）　私が親の未進米この六日の吉書に立てればもとの水牢（丹波與作）

〔未進〕御領の貢米未納をいふ。黑川道祐撰・日次紀事、十月の條に、「一年之貢米悉收納謂二皆濟一、倭俗每レ物償レ之無二遺失一謂レ濟、不二皆濟一曰二未進一」。

みすやばり　絲もて通すみすや針（用明天皇）　京羽二重の御所染、みすや針手縫箔（浦島）

〔簾屋針〕京都簾屋で賣つた穴圓大で絲の通り易い縫針であつて、京都名物の一。雍州府志（延寶年中成）七、土產門下・服器部に、「鍼。近世三條通河原町東、翠簾屋之所レ磨、是爲レ堪レ用夏夷共求レ之」。

***みせざし**　うかうか話してあれ店ざし時（女腹切）　店ざし身皿とやかくと（生玉）

〔店鎖〕夜に入つて店に戶を鎖す時。「店ざし身」は「店ざし」に「指身」をいひかけたのである。

みせぢよらう　梅馨しく松高き、位はよしや引締めて、哀れ深きは見世女郎（冥途飛脚）　天神太夫の身でもなし、さもしい金に氣が觸れた見世女郎の淺ましさと（冥途飛脚）

〔見世女郎〕太夫、天神、鹿戀といふ遊女よりも以下に位し、店頭の格子內に出張して客を招く遊女で、これを端女郎（「端を」見よ）ともいふ。

みつめがかり　碁盤引寄せ片手ざし、三つ目懸りの大指ひしぎ、腕先試し居たりしが（碁盤太平記）

〔三目懸〕この文は、碁盤を片手に摑んで差上げるに、大指（拇）が碁盤の三つ目に懸る大なる指をいうたのである。碁盤は木の厚さ三寸四分、一目の分七分程だといふから、三つ目懸りになるには餘程の大きな指であらねばならぬ。

三つ山の爭　「中の大兄の御歌」を見よ。

***みづらう**　横田村のとつ様二石二斗の未進につまり六十六で水牢先、打拂ひ切拂ひ水牢に入ること十三度（持統天皇）（丹波與作）　年貢の鉾先未進の矢

〔水牢〕河水の中に牢獄を構へ、年貢を滞納する者を入れて水責にする刑罰である。西鶴撰・懷硯（貞享四年刊）に、「伊賀國久村の右衞門太郎とて田畠五町作德大分なりしも、皆濟時には横に寢て幾度か水牢に打込まれ、未進首丈にも驚かず」。黑川道祐撰・日次紀事（延寶年中成）十月の條に、「一年之貢米悉收納謂二皆濟一、倭俗毎レ物償レ之無二遺失一謂レ濟、不二皆濟一曰二未進一、責二其未進之米穀一是謂二催促一、甚者執二其人一入二獄舍一、又河水中構レ獄使下二其人一入上レ之、是謂二水籠一、倭俗獄舍謂レ籠」。

みつわぐむ　「みつはぐむ」を見よ。

みづをくれる　こりや遣手め、重ねての詮議には水をくれる、用心せよと（反魂香）

數升の水を呑ませ、またこれを噴かせて、水責にして拷問するをいふ。碧山日錄・寬正二年三月二十八日の條に、「獄官多賀某決二南禪二門僧之罪一、以二數升水一、其口噴レ之呑レ之、其苦萬端云云」。

***みてぐら**　（三國志）

「みたむけぐら」（御手向座）の約であるといふ。座は置座の義。神に奉る物の總稱。ぬさ。倭名抄に「帛」をよみ、萬葉集に「帛」をよんである。

みなくちどぢやう　一口二口みな口どぢやう躍越え（丹波與作）

〔水口泥鰌〕近江國甲賀郡水口は泥鰌の名產地である。好色堪忍破袋（寶永八年刊）卷一に、「みな口口に名物の鰌鰍汁もと呼ぶ茶屋に、腰打掛けて一休み云云」と見えてゐる。みな口口とあるは、皆口口に水口をいひかけたのである。

***みなつき**　（兼好）

〔水無月〕炎暑烈しくて田の面に水の無くなる月の義。陰曆六月の異稱。

みなれざを　潮滿ち來れば水馴棹、長き月影もほの曇り（薩摩歌）

〔水馴棹〕水に馴れた棹の義。水棹。

みので　太鼓・鉦をみのてに立て、虎を入鹿にけしかくろ（大織冠）　敵をみの手に引受け、先を廻して切りちらせ（今川了俊）

〔箕手〕箕のやうに左右に張つた形をいふ。俚言集覽に、「箕の手。凡て左右に張たる形を云」

三原　衣類の外は三原の合口・時代の印籠（今宮）

備後國三原の刀匠に名高かつた者が八名あつた。「三原の合口」とは、その始祖正家作の匕首をいうたのである。

三原十太夫　敵は三原十太夫、序にて作りし惡心の、切で報の來る時は、猪喰屋橋思出す（今宮）

寶永頃にゐた大阪の歌舞伎役者である。役者謀火燵（寶永七年刊）若衆方之部に、「上上、敵役、三原十太夫」と見えてゐる。ここの文は敵役の三原十太夫は序幕で巧に惡心の働をするによつて、惡の報によつて大詰では猪喰つた報のやうな嫌味があるの意。

みふしたゆ　あの風は必ず器量自慢して根性が惡いもの、この横笛はみふしだえ嫌ぢや嫌ぢやとありければ（娥）　この横笛は身ふしたえ嫌ぢや嫌ぢやがなほ嫌ぢや（娥）

〔身節絶〕身の關節が絕え離れるやうな氣がしてじつと怺へられぬをいふ。森田吟夕撰・宇津山小蝶物語（寶永三年刊）卷六、而後に又持て參り候の條に、「手を取つてねよかといへば、點頭給ふふりあひのしをらしさ、金輪際身節はなるるやうにて少し酒氣はあり、ばたばたといふも心やすくしかりまはして」。扇の芝（淨瑠璃）に「男盛りの又太郎、東に見馴れぬ御所女見るに身節もたよたよと、何の事も思はれず」。

***みまかる**　淨瑠璃五歲の秋の頃長者殿には身まかり給ふ（十二段）

〔身罷〕死去するをいふ。和訓栞に、「みまかる。死去をいふ、身罷る義、萬事罷去の意なるべし」。

見まつべる　「まつべる」を見よ。

***みまふ**　はて扨見まうた事をいふ人かな、この末長き大河の川下に、人がなあらうとて、御殉を請うて渡る者のあるべきか（大磯虎）

〔見舞〕見廻る。巡視する。ここの文は、はて扨この大河を巡視した如き事をいふ人であるわいの意。

***みみこすり**　某一人の不調法、切腹と覺悟致せし所に、何とやらん見苦しき耳こすり、瀧口も耳あればよつほどあたつて聞にくし（娥）

〔耳擦〕耳さはり。當擦。あてこすること。

***みめ**　客を倒すがみめでは無い、商賣せいでも大事ない（二枚繪）　結構なばかりみめではない、男の性の惡いは皆女房の油斷から（天網島）

〔見目〕東鑑に眉目をよんである。面目。ほまれ。

***みやうが**　これで結句嘉平次が親の冥加も盡きるわいの（生玉）

〔冥加〕吾人の眼には見えねども、神佛などの常に吾人を照覽し給うて加護を被り居る事。この冥加といふ語をその人の職業身分などの下に附けて自警の詞として用ゐる。「けいせいみやうが」を見よ。心中二枚繪草紙に、「講中御茶所の冥加錢」とあるは「ちやしよ」を見よ。

***みやうがう**　難波の祖師の名號（三世相）

〔名號〕彌陀、文殊、普賢など皆これ佛菩薩の名號である。されども單に名號といふ時は彌陀の名號、卽ち南無阿彌陀佛の六字名號をいふ。「難波の祖師の名號」とは、大谷派本願寺別院（難波御堂、裏御堂・または南御堂といふ）を創立した教祖教如上人眞筆の名號をいふ。

***みやうじやう**　月は白みてあかつきの、あれ明星もさしのぼる（二枚繪）

〔明星〕金星をいふ。日沒後他星よりも赤く耀く、これを宵の明星といひ、日出前他星よりも光輝大である、これを曉の明星といふ。丹波與作に「明星が茶屋」とあるは地名部について見よ。

此事なく、それより移りて、消息文をも同じく玉梓といひ、又かの玉つけたる梓をさして、みづみづしき木といふ意にてみづぐきといへるより、これもうつりて書をもしかいへるなり、かくて又うつりては、必らずしも人の許へやる書ならでも、手跡の事をも水ぐきといふこととなれるなり」。巣林子のこの文は、筆跡を水草といひ、みつみづしい筆にきかせて筆にいひつづけた。

みづくさい 必ず必ず物言ふな見ぬ顔せい、かう言へばつれない水臭いやうなれど(大經師)

〔水臭〕情愛薄い。隔心がある。和訓栞に、「みづくさし。俗語に淡しき道にいへり、水臭き義味より氣象に轉じいふは鹽らしきの反也」。

みつぐし ひくや夕なのすき櫛や、亂れ髪櫛人はよも、みづ櫛とこそ思ひしに、たが三つ櫛に名を立てて(用明天皇)

〔三櫛〕梳櫛・鬢櫛・水櫛をいふ。この文は「誰が見つ」を「三櫛」にいひかけたことといふまでもない。

みづぐし 亂れ髪櫛人はよも、みづ櫛とこそ思ひしに(用明天皇)

〔水櫛〕水に浸して使ふ齒の疎なる櫛、卽ち荒櫛をいひ、黄楊などで造る。この文は「人はよも見ず」を「水櫛」にいひかけたのである。

みつぐそく 誠の眞の臺子とはこの行幸の臺子の圖、三幅對・三つ具足・壺飾りの品品(鑓權三)

〔三具足〕香爐・燭臺・花瓶の一揃をいふ。雍州府志・七・佛具の條に、「凡所レ供レ佛之花瓶・香爐・銅燈臺、俗是稱二三具足一、三物具足之謂也」。

***みづくみ** 水汲みが汲んで荷うて持つや桶の棒(今宮)

〔水汲〕當時は水を桶に汲入れて、一荷を三文乃至十文程に大阪市中を賣歩いた者があつた、それをいうたのである。商人職人懐日記(正德三年刊、大坂水谷平四郎版)四之巻に、「流れ行く水を汲みて口すぎにあまる、濱側の家へも三文、それより内へ入れては四五文、七八文十文にも壹荷を賣ふ云云」。

***みづこ** 女房柳歌君みづ子を肌に抱きながら(國性爺)辛しと思ふ胎内の、水子故にうき目に遭ひ(孕常盤)

〔水兒〕「みづ」は弱き意。赤子。嬰兒。胎兒。

みつごんけざう 白雲變じて密嚴華藏、大覺圓明の佛體と現はれ(嵯峨天皇)

〔密嚴華藏〕密嚴國と華藏國である。密嚴國は密嚴經に說けるところで密教に屬し、華嚴國は華嚴經に說けるところで顯教に屬す、共に他受用報土で淨土である。

***みづさかづき** 親子夫婦が水杯、さいつさされつ、汲めども盡きず、飲めども醉はぬ水酒盛(宵庚申)

〔水杯〕水酒盛ともいひ、再會期し難い訣別の時に、肉親の者相寄り酒の代りに水を酌み交すこと。蓋し死別をかねる意で、禮記・喪大記に「疏食水飮」とある故事に據つた風習であらう。心中宵庚申のこの文は、島田平右衞門と千代・半兵衞との親子夫婦の生別は、やがて死別となる伏線である。

***みづし** 下の水仕に追下し十六箇所の釜を焚き(小栗判官)如何なるみづし下女はした身を、鍋釜に相住みしても(松風)

〔御厨子〕御厨子所の女。下女。水仕と書くは當字。落窪物語に、「御手水かゆいかでまゐらむと思ひて、みづしにや語らはましと思へど」

みづせがき 流れ寄邊の水施餓鬼(薩摩歌) 三七日には龍女成佛水施餓鬼(蟬丸)

〔水施餓鬼〕「ながれくわんちやう」を見よ。

***みつせがは** この清水ならば三瀨川、あふせを急ぎ候ぞ(蟬丸)

〔三瀨川〕葬頭川に三つの渡場がある、よつて三瀨川ともいふ。「さんづのかは」「だつえば」を見よ。蜻蛉日記に、「みつせ川淺さの程も知られじと、思ひし我やまづ渡りなむ」と見えたれば、この語も古くからいはれたものである。

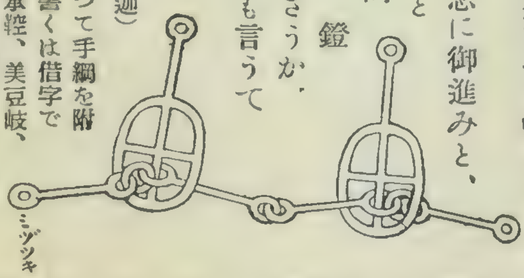
みつぢ (酒呑童子)

〔三地〕謠曲で小鼓の囃に三つ地といふがある。謠方でも三つ地には三つ地に相當するやう謠ふのである。

***みつちや** 色は眞黑に横肥つたるみつちやづら(淀鯉)

「やみらみつちやのかはぶくろ」を見よ。

みづつき 初一念に御進みと、轡の承鞚えいと摑んで、四五間引いて(振袖始) 鐙にかけて蹴散さうか、ぐつとなりとも言うて見よと、乘出す轡の水付しつかと取り(釋迦)



〔承鞚〕轡の端にあつて手綱を附ける金具。水付と書くは借字である。和名抄に、「承鞚、美豆岐、俗云三都都岐」。貞丈雜記・卷十三、馬具部に「みづつきはひつ手のこと、手綱を付るかね也」。

三つづつ十と三つの里 難波津や三つづつ十と三つの里(曾根崎)

三十三所觀音堂のあるを三津の里にいひかけたのである。三津の里は卽ち高津、敷津、難波津のことで大阪である。地名部「大阪三十三所」を見よ。

***みつはぐむ** 七十有餘の老女、頭の雲もみつはぐむ老いさらぼひて出でてける(蟬丸) 齡をのべて海老の腰、みつはぐむまで萬代の、龜の甲なる松竹の(天智天皇)

「みつは」は稚齒、「ぐむ」は萠む義。老人が上下の齒皆落ちた後、更に稚齒萠むをいふ。源氏物語・夕顏の巻に、「惟光が父の朝臣の乳母に侍りし者の、みつはぐみて住み侍るなり」。後撰集・卷十七、雜部の歌に、「年ふれば我黑髮も白川の、みつはぐむまで老いにけるかな」。好色一代女に、「女の盛たけてみつはぐみ髮は霜を梳り」。世間母親容氣(寶曆二年刊)卷之一に、「今の間に百年の齡を經て、家に歸らば腰もみつわぐむやうになり」とあるより見れば、腰の屈まる意に誤つて用ゐたものである。

みつばのそや 「そや」を見よ。

みづひき 水引は神明佛陀の斗帳なり(井筒)

〔水引〕和訓栞に、「みづひき。上に張るを帽額といひ、下に張るを水引といへり、水を引廻したるなりの義にや、幔なりといへり」と見えてゐる。今專ら芝居の舞臺の上方、又は相撲の土俵の周圍の上に張る細長き幕の稱。

みづぶき (宵庚申)

〔水蕗〕水草の名。一名鬼蓮ともいひ、葉は圓形で花瓣は帶紫色である、地下莖、嫩き莖柄、種子は食用となる。

若木やはたち花」。兩吟一日千句に、「長煩ひや養老の瀧、みんつりと叶はぬ戀が叶ひきて、揚屋のたいこもちまる長者」。「わかみんづり」を見よ。

む

むいうじゆ 色香すぐれて咲きたるは無憂樹といふ木にて、文字には憂無しと書く(釋迦)

〔無憂樹〕梵語・阿輸迦 Asoka. の譯名。釋尊はこの樹下に生れられたのである。飜梵語・卷九に、「阿叔迦樹、應レ云二阿輸迦一、譯曰二無憂一」。因果經に、「二月八日夫人(摩耶)往二藍毘尼園一、見二無憂華一、擧二右手一摘、從二右脇一出」。

むいかだれ 六日だれの忌明の誕生日の食初のと、取つて取つて取上婆同前(嵯峨天皇)

〔六日垂〕「むいか」は「むゆか」の轉。橘窓自語六に、「産婦の七夜の六日めを六日たれといふは、出生の小兒のうぶかみを六日めに剃りしよりのことなるべし、髮をそるといふを忌みて髮垂といへりしより、六日髮垂を略して六日垂と稱せしなり」。音信錄に、出産六日に初めて名を呼ぶ、六日だれといふ、平産の披露に知音の方に餠を配る、男子は三つ、女子は二つなる由見えてゐる。

***むいき** 短氣の犬死、無意氣に事を仕損ぜしといはれうが腹が立つ(持統天皇) あまり無意氣な御勘當、つらい親御の心や(持統天皇) どうでもかうでも吾妻殿を奥へ連れてと引立つる、どれに下地の無意氣力(壽門松)

〔無意氣〕頑固で思ひやりのないこと。壽門松のここの文は、辭どれの上に元來意地腐りで、容赦もなく力任せの意。

むかしこよみ 萬年暦昔暦新暦、當年未の初暦(大經師)

〔昔暦〕宣明暦をいふのである。宣明暦は貞觀三年より貞享元年まで久しい間行はれてゐた唐暦である。この暦法は一年を三百六十五日二四四六となすが故に、八百餘年も經過すれば大分違つてくるので、貞享元年に至つて改暦の聲熾に起つて、明の大統暦を採用することになつた。然しこの大統暦も暫くの間で廢止となり、貞享元年十一月の末頃から保井春海の作つた貞享暦を用ゐることになつた。ここに昔暦といつたのは、おさん・茂兵衞の姦通事件が天和三年八九月の出來事であるからである。また新暦の語を用ゐたのは、この作の上演が新暦を用ゐてゐる時であるからである。(序云、この姦通事件を近松が本文中に、「貞享元年甲子の十一月朔日來る丑の初暦」と書いたのは、時日を間違へた筆の誤と見ねばならぬ。若し近松が貞享元年甲子の出來事と思込んでゐたものとすれば、昔暦は大統暦をさすものと見るか、或は單に暦の名を重ねた文飾と見ねばならぬ)。

***むかはぎ** 鏃細き鹿子斑、御行縢の料なるべし(會稽山)

〔行縢〕向脛巾の義。昔時騎馬に用ゐたもので、獸皮で作り、腰に纒うて袴の前面を垂れ掩ふもの。

むかひおに 煙草賣の源七はまだ見えぬか、氣さく者の通り者、今にも來たらお姫様まじくらに迎鬼して遊ぶまいか(嫗山姥)

〔迎鬼〕「むかへぼ」ともいひ、鬼事の遊戲を云ふ。一人鬼となりて衆童を追ひ、その捕へられた者が次回の鬼となる。物類稱呼・卷五に、「鬼わたし。江戸にて鬼わたしと云、京にてつかまへぼと云、大阪にてむかへぼといふ、東國及出雲邊又肥の長崎にて鬼ごとと云」。

むぎあき 晩かあすかの里も賑ふ麥秋の、麥搗歌の噪揃へ(持統天皇)

〔麥秋〕舊暦四月をいふ。禮記・月令篇に、「孟夏之月……靡草死麥秋至」とありて、註に「秋は百穀成熟の期、これ時に於ては夏なりと雖も、麥に於ては卽ち秋なり、故に麥秋といふ」。下學集・時節門に、「麥秋 四月」。

***むくつけし** 足には髭のむくつけき、馬の足かと疑はる(虎が磨) あのむくつけな野暮てんめにそもや一夜も添はれうか(兼好)

〔むくつけし〕「むつかし」「むつかし」などと同じ緣の語である。氣味の惡い意にいふ。源氏物語・若紫の卷に、「我君はいとむくつけういかにするならんとふるはれ給へど」。同・浮舟の卷に、「あなむくつけや、こばた山はいとおそろしかなる山ぞかし」。

むくらんぢ むくらんぢの直垂・波に千鳥の大口(千載集)

「もくらんぢ」(木蘭地)の轉訛。その條を見よ。

***むくろじ** 比翼の羽子板むくろじも、研き入りては色に成る(壽門松)

〔無患子〕喬木で、葉は羽狀複葉をなし、實は黑色で固く圓い。これを羽子につけなどする。無患子の黑き實も研き入りては艶が出るやうに、禿も廓馴れては太夫の艶色にもなるとの意。

むくろばら これは寢る間もあら憎くや憎くや憎くやと、むくろ腹むくむくおきに(用明天皇)

むくむく腹立つこと。むかつぱら。

***むげ** お藥までも下されし志をむげになす(卯月潤色) 向後房とは通路せぬ、今まで心をむげにした(重井筒) あの月天子の照覽あり、利生は無下にはよもなるまい(大經師) むげない言分けして下んす(淀鯉) むげなうせくでは無けれども(重井筒) 人に心を盡させ、むげない心が一つの疵(宵庚申)

〔無下〕踈略。「無下ない」の「ない」は、「あらけない」「はしたない」などの「ない」と同じもので、意を強める語助。他を踈略にして一向または一途なるをいふ。情ない。

***むげん** 地獄の火焔に鞴かけ、無間の底の鐵床にのせられ(氷朔日) 大紅蓮の水を汲み、無間の薪を樵り運ぶ(釋迦) 佐夜の中山無間の鐘撞當てた福福長者(博多) 君に逢ふ夜は天の戸の、あくるを恨み語らひし、今はむげんの釜の蓋、あくるを待つに甲斐も無く(非筒) 娑婆で手馴れし玉がわざ、無間の釜で茶をわかし(大經師)

〔無間〕梵語・阿鼻 Avici の譯語。八大地獄中の第八なる最重苦處であつて、この獄に墮ちた者は呵責苦痛を受けること間斷なきを以ての故にこの名がある。「無間の鐘」は、遠州小夜中山觀音寺にあつた。「さよの中山」を見よ。俗說に、古來この鐘を撞くときは現世で長者となれども、未來は無間地獄に墮すと云ふ。

*みやうぶ　内侍命婦のおもとびと（艶狩）さては伯父御の惡心にて鼓を取らん爲なりしを、みやうぶの御告ならずんば只うかうかと渡しやせん（天鼓）

〔命婦〕後宮女官の位である。周禮・天官の注に、「內命婦、謂二九嬪世婦女御一、外命婦、謂二卿大夫妻一」、春官の注に、「命有二爵命之義一」とあるによつて、大寶令に、五位以上を帶してゐる婦人を内命婦とし、五位以下を帶してゐる婦人を外命婦としてある。それより轉じて後には中臈の女房を命婦と稱してゐる。又狐神を命婦といふ。天鼓にいへる「みやうぶ」は狐神をいうたのである。蓋し狐が美女に化けるといふ白居易の詩などあるよりして、狐を女神とし女官に准じて命婦というたのである。塩嚢抄・一に、「狐を命婦の御前といふは何事ぞ、……狐を祝ふ社女神にてましませば、女官に準じて命婦といふ、呉音にミヤウブと申せるにや、又元來其名ある神の使者なれば云歟、人に可レ被レ尋也」。

*みやうもん　筆持ちながらおほあくび、名聞はなれて住みなせり（兼好）

〔名聞〕名の世上に聞えること。ほまれ。この語涅槃經にも見えてゐる。

*みやうり　男冥利・商冥利虛言ござらぬ（壽門松）

〔冥利〕吾人の眼には見えねども、神佛などの常に吾人を照覽し給うて利益を被り居ることの義。よつて罪業を敢てするに於ては冥利につきる意よりして、自誓の詞に用ゐる。「傾城冥加」の條を見よ。

脈論（みやくろん）　脈論・運氣論（源氏冷泉節）

漢方の醫書である。曲瀨道三撰述のものにこの書名のものがある。また脈論口訣は天和三年の刊で五卷ある。

*みやこづめ　座敷牢へ入らうが都詰にならうが（壽門松）

〔都詰〕玉將を盤面の中央で詰めること。ここの文は將棊上の語をいひかけて文を飾つたのである。

*みやすどころ　今度親王御運をひらき二度都へ入り給ふによつて、姫君の御事御息所に差上げ給はば（用明天皇）

〔御息所〕「みやすむどころ」の略。女御、更衣、寵幸される後宮、及び東宮妃を申した。もと主上の御休息し給ふ便殿の名なるが、その所に伺候する故に名稱となつたのである。

宮の前大根（みやのまへだいこん）　稼ぐ體をば親兄に、これ宮の前大根を擔うて家路に戻りける（二枚繪）

細根の大根である。井原西鶴撰・俗つれつれに、「この樽にて天満宮の前の大根を細漬にして送りたらば、名物にて珍しきものを」。物類稱呼・三之卷に、「大阪天満にてほそね大根といふ、又宮の前の大根といふ。河州守口にて是を以て粕漬とす」。巣林子のこの文は、「これ見よ」を「宮の前」にいひかけたのである。

みよしげた　土産に大阪のみよしげた頼むぞや（博多）

當時三吉下駄といへば、上方で流行の下駄であつたのであらう。但大阪に三吉といふ下駄屋があつたものか、また如何なる形の下駄か知り得ないのは殘念である。

みるくひ　寢もせで一人赤螺の、誰を待てとや人のみるくひ忘貝（國性爺）

〔海松食〕貝の名。蛤に似て長さ三寸許、暗褐色の殼に海松が多く附着してゐる。

みるちや　これへは入婿、乳吞ごもんを持ちながら人のみるちやも構ふにこそ（重井筒）

〔海松茶〕海松色（綠に黑みあるもの）がかれる茶色をいふ。海松茶染は元祿頃に流行した染色であつて、傾城色三味線（元祿十四年刊）に、「しかし素海松茶は今時世間にはやり過ぎて、我らやうな粹仲間の目にしみます」。（日本永代藏・卷二、世界の借屋大將の條に、「一生のうちに絹物とては紬の花色、一つは海松茶染にせしこと、若い時の無分別と二十年もこれを悔しく思ひぬ」と見えてゐる。儉約ひとむきの藤一も海松茶染の流行に誘はれて染めたものの、染めかへしのきかぬので悔んだのである）。巣林子のこの文に「乳吞ごもん」とあるは「乳吞子」に「小紋」をいひかけたのである。

みるふさ　氷の剃刀取出し、みるふさの黑髮を愛想もなく引上げて既に切らんとし給ふ時（小栗判官）

〔海松總〕海松の枝葉のふさ〳〵としたやうに、髮のふさやかなるをいふ。

みわのさうめん　吉野の花も振り捨つる、三輪の素麵食付きて（淀鯉）

〔三輪素麵〕大和國三輪より産出する素麵をいひ、この地の名産である。萬金産業袋・六、酒食門・索麵の部に、「和州三輪は昔よりも素麵の名物、誰人の口ずさみにか、そのみわげのこりし神のすぎむらに、今もかかるやそうめんの絲ともいへり、平そうめん・常そうめんいづる」。（序云、「そうめん」（素麵）は「さうめん」（索麵）と書くを正しとす）。

身を打つ（みをうつ）　命惜しい程なら高で身をうつこともない（生玉）　戀に身をうつこともない（女腹切）　あの平兵衞めは是の見世を任せる程の久しい者、なんぼうでも身をうつて仕損ふ者でない（氷朔日）

身を打滅す義。落魄するをいふ。「うつ」を見よ。近代長者鑑（正德四年刊）卷之二に、「色ぐるひする身は誰とても同じこと、今日あつて明日をもはかり難し、身を打ち給ひしは覺悟の前にてあるべけれども」。役者稽古三味線（寶永五年刊）坂田藤十郎の條に、「傾城買の身を打つことばかりせらるる」。

*身を知る雨（みをしるあめ）　委しき事をも知らずして、一人悲しむ身を知る雨の、晴れぬ思ひや慰むと（凱陣八島）　男も心かき曇り、空は今年の日照にも、袖には誰か雨乞の、身を知る雨ぞ果しなき（鑓權三）

思ひある身を知りて折からに降る雨の義。涙をいふ。古今集・戀歌四の部の歌に、「かずかずに思ひ思はず問ひ難み、身を知る雨は降りぞ增れる」。新板増補女重寶記（元祿十五年刊）五之卷、新やまとことばの條に、「身をしるあめ。なみだをいふ也」。

みをつくし　野中の案山子みをつくしも一人は立たぬ世の中ぞ（津戸三郎）　身をつくし難波に咲くやこの花の（冥途飛脚）

〔澪標〕澪つ串の義。澪を示す標をいふ。難波の枕詞としても用ゐる。和訓栞に、「みをつくし。澪標をよめり、水脈の籤の義なるべし、尺寸を記したる木を立置て水の淺深を量る物也といへり」。



みをつくし

みんづり　若みんづりの井筒屋と、わきて賑賑はへり（壽門松）

若やぎてうるほへる樣にいふ。みづみづしいさま。百俚談に、「水通、きようにうるほひたるさまを云」。紅梅千句に、「みんづりと見ゆる

「無常氣」とは、この世をはかなみて厭世の念の起ること。
「無常鳥」とは、冥土に棲める鳥の名、不如歸をいふのだといふ。「閻魔卒三魂を縛して云々」を見よ。

むしやうにん 韋提希夫人の無生忍にあやかり給へ（百日曾我）
〔無生忍〕不生不滅の理を覺知し安忍して心を動かさぬをいふ。

むしやばしり 射手船には一枚楯つき立てつき立て、武者走を高く上げ船筏を二行に列れ（百合若）
〔武者走〕軍船の胴縁より少し下りて、廣さ三尺許の板縁で、船梁の横木に根太を渡して張り、舳から艫までの通路にしたもの。

***むしやぶりつく** 馬方の子は持たぬと、もぎはなせばむしやぶりつき（丹波與作）
「むさぼりつく」を見よ。

むしやらごゑ 海老腰ヤアえいと立あがり、涙に濁るむしやら聲（關八州）
噎せ遣る聲の轉訛であらう。噎び泣きする聲。

***むしやわらぢ** 十王頭の筋金入れたる脚半、揉皐皮、武者草鞋（弘徽殿） 戰場出陣の折ならで召しも習はぬ武者草鞋（嫗山姥）
〔武者草鞋〕「ごんずわらぢ」をいふ。その條を見よ。

むす こちは八貫出して置く、負ければそれで取遣りなし、勝てばむして十六貫何で濟す合點ぢや（丹波與作）
〔蒸〕蒸返すの略。蒸すことの繰返されるをいふ。倍にふえる。「むす」は神代記に「産」をよんである。蒸といふも生産の義。

むすび 日本では相撲取りをむすびと申すげな（國性爺）
〔結〕組み合ふを結ぶといひ、また相撲にて關脇の次位に小結といふもあれば、相撲取りを結びというた滑稽の語である。

むすぼほる そも一唾の假枕、皆一心のむすぼほれ夢を結びてあり磯海（薩摩歌）
新撰字鏡に「絓」を紲むすぼはるとよんである。轉じて、心鬱結するをいふ。

むぞう 「むざう」を見よ。

***むそく** 死目に逢はでは今までのお情もむそくして、お恨み申すも物體なし（本領曾我） 主をはごくむ下人の心むそくになして太夫狂ひ、ええ曲もない時致殿（扇八景） 貧者の一燈、萬燈もしんどう思へばむそくする（聖德太子） いやいや御邊を島に殘しては、小松殿・能登殿の御情もむそくし、御意を背く越度（女護島）
〔無足〕武士の無祿なことをいひ、轉じて、無效。むだ（徒）。日本永代藏（貞享五年刊）巻六、「或時石清水八幡宮を申しおろしてあんごのとうを執り行はれ、目出度きこと山山なりしに、この行事はその亭主の心持大事なり、萬の義ををしきと思へば忽ちむそくする事なりしに、此家破滅の御告にや、大釜の下より大束の葭燃えしきりしに、あまたの人庭にありながらこれをさしくべる人もなくて、あるじ心に懸けしより幾程なく此家絕えて、其名は踊歌に殘れり」。

***むつがる** 今はこの野のこの草に、養はれぬる身となるは、衍世いかなる報ぞと、ややむつがらせ給ふにぞ（十二段） お袋樣も殿樣もたらしつ叱つつ遊ばせども、どうでもいやぢやとおむつがり（丹波與作）
日本紀に「慣」をよんである。小兒のじれて泣くをいふ。新版増補女重寶記（元祿十五年刊）に、「泣くをむつがるといふ」。

***六の巷** 數は六つの巷の聲に（天鼓） 西にぞ壬生の地藏堂、六つの巷を導きて、慈悲を知邊の錫杖も（孕常盤） 冥土は六つの巷ぞや（二枚繪）
六道に行く分れ道をいふ。六道はその條を見よ。天鼓のここの文に就ては、「夜遊の舞樂の時去つて云云」を見よ。

六の法 凡そ繪の道には六つの法あり（反魂香）
繪の道に、氣韻生動、骨法用筆、應レ物寫レ形、隨レ類傳レ彩、經營位置、傳模移寫、以上六法ある。

むつむさし 七つ道具に六つむさし辨慶はおさへの役（冷泉節）
〔六六指〕一種の遊戲の名。九條の線を盤上に劃し、六個の駒を各三個づつ持ち、其線をたどり早く定めの點に至つて相連ねたのを勝とする。嬉遊笑覽に、「安齋隨筆に、……、江戸にては十六ムサシと云、十六は子馬の數十六あり、親馬を除て云也、……、相州鎌倉の邊にては二ツサと云ふ、二人にて三つづつ石を六つ持なれば、二三といふ心か」。好色一代女・巻三、町人腰元の條に、「入口なる白黒の玉を拾ひて、小供相手に六つむさし、氣を盡す事にもなりぬ」。源氏冷泉節のこの文は、辨慶の七つ道具をきかせて、六指に武藏坊の武藏をいひかけたのである。

***むないた** 繼信が着たりける鎧の胸板・押付・總角（凱陣八島）
〔胸板〕鎧の胸の所をいふ。鬼會または一の板ともいふ。

***むながい** （最明寺殿）
〔鞅〕「むながき」（胸懸）の音便。馬の胸より鞍に懸ける組緒をいふ。

***むながひ** 門の前に兩三人、どつこい捕つたと、胸がひ攫んでねぢすゆる（女殺）
〔胸交〕衣衿の胸先で交る所。「むながひ」の「がひ」は「したがひ」の「がひ」と同じく、卽ち「交」である。

***むなぐら** 胸ぐら取つて引いて行く（二枚繪） 胸ぐら摑み宙に引つ提げ（重井筒）
〔胸座〕座はすべて物置處をいふ。胸座は胸元、着てゐる衣服の胸のあたりをいふ。

むなづはらし 梅川いとどむなづはらしく、ああ我らは旅の者（冥途飛脚）
「むなつまるらし」（胸詰らし）の約訛。胸おしせまるやうである。今樣二十四孝（寶永六年刊）巻之五に、「母人の我にかへてもふびん深く愛し給ふ三毛を殺させては、今宵より物思し給ふを見ぬ内にむなづはらしくなりて、色色に詫ろに魚屋合點せず云云」。

***むねと** 宗徒の御味方八十の眞人武智の郡司（用明天皇）
〔宗徒〕宗とあるものの義。徒は借字。おもだつたもの。和訓栞に、「むねと。俗に宗徒と書り、東鑑には宗人をむねとのひとゝよめり、日本紀に棟梁をむねとるとよめり、其義なるべし、むねとする人など、いふも是なるべし」。

桂公實、寶曆年間撰・秋齋閑語・卷四に、「無間の鐘の事。破した人 平生米を不レ食、飯をひろの如くにおそれ飽食をたべ、其心を以て隨分しまつ儉約すれば、間なく富といふに成るとの事のよし云云」。無間の鐘といふもの實際有らう筈なく、博多小女郎波枕・長者經の文中にも、「無間の鐘とは名ばかりにて」と見え、一九の膝栗毛にも「この寺に無間の鐘もつきなくし、今は晦日にうそつくやらん」と見えてゐる。「無間の釜」とは無間焦熱地獄の釜をいふ。

*むさい　やい鴛籠舁め、むさい姿で侍に抱付く慮外者めと(夕霧)　今朝の遺恨に胎内の悴を殺さうのむさい心底(百日曾我)

穢らはしい。きたない。和訓栞に、「むさし。汚穢の意にいへり、むつかしといふに意通へり、つか反た也、た・さ韵通ず」。

むさいがき　我長者の萬燈は未來の糧に盡果て、來世は極貧無財餓鬼(釋迦)

〔無財餓鬼〕食ふに食無き餓鬼をいふ。「うんざい」の條を見よ。

むざう　今で思へばむざうらしげに、そがいにせでも大事なかたん(博多)　緣あればこそ抱いて寢て、むざうか者とも思しやつてたもりめす(女護島)　むざうか者とりんによぎやアつてくれめせ(女護島)

「むざん」(無慙)の轉。不便。憐れむべきこと。かはゆらしいこと。西川忠英撰・町人袋　享保四年刊)卷三に、「むざう。不便なるをいふ、無慙なるべし、宇治拾遺物語にも見えたり」。この語現今も九州地方で用ひてゐる。鹿兒島地方で「むぜ」といふも無慙の約轉である。「むざう」に「か」を添加して「むざうか」ともいふ。

*むさうさう　阿羅羅仙人の弟子となり無想有想を學ばせ給ふ(釋迦)

〔無想有想〕吾人が五官で感知する所のものに心を寄せ氣を奪はれるを有想といふ。一切萬有の形體乃至善惡正邪等總ての差別を想ふことなく、本來空なるを悟つて吾心空となるを無想といふ。

むささび　谷の梟鬧子鳥、梢を渡る鼯鼠や(蟬丸)

〔鼯鼠〕深山の樹木のうつろに棲み、夜間出で果實を食ふ、その形栗鼠より大にして前後雨肢間に膜がある、能く樹上を飛行す。その聲は小兒の泣聲のやうである。

むささんしん　二乘作佛の鶯は無作三身の谷に囀り(百日曾我)

〔無作三身〕三身とは法身・報身・應身をいふ。天台圓教の佛は三身共に本有自爾の性佛にして、因行の造作にあらざればいふ。

*むさしあぶみ　春の心を問へばいふ、問はれば恨む武藏鐙、かかる姿もあるものか(吉野忠信)

〔武藏鐙〕往時武藏には高麗人を多く置かれたれば、それ等の人の作つた高麗樣の鐙をば武藏鐙と云うて、後世までも產出した名物である。「問へばいふ問はねば恨む武藏鐙」を見よ。

むさしの　君が盃いつも飲みたや武藏野の、月の月の夜すがら戲れ遊べ(女殺)　ながい刀をさすぞさかづき奴の奴の、奴がうけし武藏野の、草花盡し青丹よし(百日曾我)

〔武藏野〕武藏野は「野見盡せぬ」を「飲み盡せぬ」にきかせて大盃の名としたのである。この大盃の繪は曉晴翁撰・雲錦隨筆・卷之一に載せられ、內面に月と草叢の畫が書いてある。

井原西鶴撰・織留・卷之二に、「昔上戸ののみつくさぬとて名を付けし武藏野といふ大盞は無いかといふ」。節用集・大全に、「酒盃大者曰二武藏野一也、言二野見不レ盡之意一也」。「君が盃いつも飲みたや云云」は當時の流行唄に據つたものである。その條を見よ。

*むさと　心易い朋友なれども、申しにくいが味な氣質で、むさと物の言はれぬ仁(鎗權三)　このやうに落馬の流行時、むさと言分などなさるるな、首が落馬致さうぞ(鎗權三)

漫りに。うつかりと。安齋隨筆・卷四に、「俗に漫なる事をムサとい ふ、昔の詞には無左右といへり、左をも右をも思ひ量る事などみだりなるを云ふなり、今は無の字を音に唱へて、無左右と云ふをムサトといふなり。又無左右といふを俗に誤りてムシヤウとも云ふ」。「むさ」の「む」が鼻にかかる音なるによつて、「さ」が濁つて「むざ」ともいふ。

*むさぼりつく　さあしてやつたぬかるなと、ばらばらと立懸り、半兵衞小辨にむさぼりつき(生玉)　むさぼりつくを取つて突退け(女護島)

〔貪附〕さばり附く。この語訛つて「むさばりつく」「むしやぶりつく」ともいふ。

*むざん　無念涙を押包み一禮いうて立出づる、心の內こそ無慙なれ(加增曾我)　身を顫はして歎きしは、心底道理にむざんなり(今宮)

〔無慙〕罪を作りて心に慚ぢる所なき義。轉じて、不便の意にいふ。「ざんない」(その條を見よ)ともいふ。倶舍論・四に、「於二所レ造罪一自觀無レ恥、名曰二無慙一」。

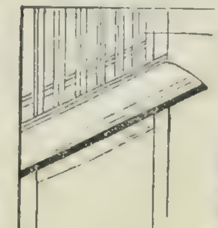
*むし　この聲耳に入る時は、百八煩惱・むしの罪障を消滅す(用明天皇)

あさましや友風、無始の煩惱は雪を削る(賀古敎信)

〔無始〕久遠の昔に遡つて探究してもその始源なきこと。「無始の罪障」は無始以來の罪障のこと。「無始の煩惱」は無始以來の煩惱のこと。

*むしこ　むしこより手を出し軒に立てる鎗おつ取り(堀川波鼓)　むしこをはづし帶結び下げ、傳うて下りん其用意(卯月紅葉)

〔蟲籠〕蟲籠窓の略、蟲籠のやうな組格子なるによつていふ。大屋根と小屋根との間に造れる格子窓をいふ。嬉遊笑覽・卷一、居處の部に、「寬文七年に集めたる續山井に、蛛の巢や二階椿の蟲籠窓(道之)とあるは、細かに子を打たる窓なるべし、今も窓の出格子を蟲籠と呼ぶものあり」。



〔都ひながた〕
(正德四年刊所載)

*むじやう　今夜はじよざいの無常風、沙汰はないこと、葬禮の戾り、ちよつと寄りたし心は急く(女腹切)　い、只無常氣でなかしうない(歌念佛)　彼の蚊屋を生絹の衣にして着た至る、二鳥棲んで掌る、一を無常鳥、二を拔日鳥と名付く(賀古敎信)　閻魔卒三魂を縛して關樹下に

〔無常〕一切萬物の生滅變遷して常住でないことをいふ。死も無常の一である。

「無常風」とは、死を誘ふはかない風。長町女腹切のここの文は、所在無しの死の風が吹いて、死者の葬禮に行つた戾りだから、遊女屋に立寄るのは隱密のことの意。

「無漏無生」の無生とは、現象論の立場から觀れば萬有は生滅無常のものなれども、本體論より視れば本來無生無滅のものであるによつていふ。

***むろ**　吹雪にまじろ勤行の鈴の聲をしるべにて室の戸に案内すれば（井筒）
〔室〕こもる義。房をいふ。庵室。僧房。

***むろ**　燒物はむろの酢煎（脊庚申）　傾城といふものにだまし賣られて、室の津の室君と言はれしを（用明天皇）
〔室〕播磨國揖保郡室津をいふ。「むろの酢煎」は室鰺の酢煎をいふ。和漢三才圖會に、「室鰺。多出二於播州室津一故名レ之、形似レ鰺而略圓、有二白刺一眼大、各月作レ鮓、東海亦多出、味脆不レ佳爲二下品一」。「室君」とは播州室津の遊君即ち遊女をいふ。

むろまちもやう　小袖の縫は將軍の御物好、俗にいふ室町模樣（女夫池）
〔室町模樣〕金銀錦繡を以て服裝を飾り、その模樣派手であつて、室町時代上流間に流行したばさら風なるをいふ。

め

***めいしよく**　池田の宿の俵屋の長が家の名色熊野は京より戻りしとて（本領曾我）
〔名色〕名妓。人に知られた名高い美妓。

***めいどのとり**　やよや待てなれよ冥土の鳥ならば、死出の山路に關据ゑて（會稽山）　げに時鳥は冥途の鳥、しでの田長を啼くとかや（小栗判官）
〔冥土鳥〕不如歸をいふ。「閻魔卒三魂を縛して云云」を見よ。俳諧歳時記栞草に、「冥途の鳥。ほとゝぎすの異名」。生玉心中に「我は初音か時鳥、冥途の友と鳴き連れて」とあるも、時鳥を冥土の鳥といふによつて、時鳥は冥土に行く我が友の意にいうたのである。また本朝三國志に、「君の御供の冥途の鳥、卯の花縅の腹巻に」とあるは、冥途までも君の御供といふに冥土の鳥をいひかけ、不如歸は卯花の咲く卯月の頃より啼けば、卯の花縅にいひつづけたのであつて、俊成の歌にも、「名に立てる時の鳥とやいへしかど、卯月きぬとて初音鳴くらん」と見えてゐる。

名物の鰻　地名部「沼津」を見よ。

***めいめいてう**　一體に二つの頭、餌を爭ひ食ひあふ有様、命々鳥の類かや（女夫池）　赤栴檀の水風呂桶、めいめい鳥の雛、孔子の自筆の論語・大學（大織冠）
〔命命鳥〕一身二頭の鳥の名。延寶版・節用集・幾部、耆婆鳥の註に、「法華には云二命々一、阿彌陀經雜寶藏經等には云二共命一、一身二頭鳥也、耆婆梵語也」。和漢三才圖會・巻四十四、山禽類に、「命命鳥。雜寶藏經云、昔雪山中有二共命鳥一、一身二頭、一頭常食二美果一、欲レ使レ身得二安穩一、一頭便生二嫉妬之心一、而作二是言一、彼常云、何食二好美果一、我不二曾得一、卽取二毒果一食レ之、便二頭俱死、云々」、とありて命命鳥の畫が載せてある。武道傳來記（貞享四年刊）巻八、惜しや前髪箱根山嵐の條に、「いつの程にか色ある兄弟の契約、不斷妹脊の如く姿を二子山にならべ、愚かに命命鳥の宿木に夜を籠め」。

めいもん　鹿毛の駒に縛り乘せ、命門の筋を切つて心の臓をつんざき、刺殺して棄て候へば（佐佐木）　浮中沈の三候も心肝腎も命門も、右にあるやら左やら（冷泉節）
〔命門〕漢方の語。背部正中線の内第三腰椎の棘狀突起の下にあるともいひ、また男にありては右腎をいひ、女にありては左腎をいふともいふ。新刊勿聽子俗解八十一難經（元和十三年古活字版）に、「萬物所レ生必有二其原一、夫人生氣之原者腎間動氣是也、腎之動脈在二足内踝骨上・動脈陷中一、名曰二太谿一、穴是足少陰腎之經也、男子以二右腎一爲二命門一、女子以二左腎一爲二命門一、主二生死之要一、故謂二之命門脈一、此係二生氣之原一、藏府經絡之根本、通二呼吸一之門、作二三焦之原一云云」。傾城太太神樂（寶永二年刊）巻一、風流の目利の條に、「朝顔の花のもろきを見ては、命門の脈をうかがひ、烏鳴のわろきを聞いてはとなりのお婆をあはれむべし」。



（和漢三才圖會所藏）

***めいよ**　たつた今但馬の湯入を乘せて通る駕籠舁がめいよな事を言ひました（大經師）　お山は口へも寄せなんだが、めいよな、鰻といふものは食へば食ふ程お山が食ひたうなつてくる（氷朔日）　青梅好きやらば惡阻でござろ、めいよな不思議や中戸のかれごとが、はや七月とぞ答へける（百日曾我）　三塔に隱れなき長刀の達者と、僧正坊に授かりし打物のめいよと、甲乙分日の戰は、巣立の鷲の若鳥と、深山を出でし荒熊が、野邊に爭ふ如くにて（孕常盤）
奇怪。不思議。按じるに「めいよ」は名譽である。「ほまれ」の義より轉じて、奇妙、かはつたこと、奇怪、不思議の意にいふ。「めいよ」は「めいよう」「めんよう」などと訛つてもいふ。西鶴撰・諸國咄（一名大下馬）巻一、大晦日は合はぬ算用の條に、「小判もまづ御仕舞ひ候へと集むるに、拾兩ありし内一兩足らず、座中居直り袖などふるひ、前後を見れども愈無いにきはまりける、主人の申すは、その内一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覺え違ひといふ、ただ今までたしか拾兩見えしにめいようの事ぞかし、兎角は面面の身晴と上座から帶を解けば」。伊賀越道中双六（淨瑠璃）伏見の段に、「何と畫の洗ひ藥でさつぱりとよからうがの、イヤさしてかはつた事も、ハテめんような、アノ藥でよい筈ぢやが」。「めんよう」を面夭または面妖などと書くは當字である。

めうかくくきやう　等覺深位の時鳥はめうかくくきやうの峰に鳴き（百日曾我）
〔妙覺究竟〕「妙覺」とは佛果の無上正覺をいふ。「究竟」とは事理の至極をいひ、究は理の極、竟は事の極をいふ。

めうたい　一字一字に佛の妙諦そなはりたり（三世相）
〔妙諦〕妙は不思議微妙の義、諦は眞如の義である。

めうらくだいし　妙樂大師の御釋に、諸經所讃多在彌陀緣深厚故と述べ給ふ（百日曾我）
〔妙樂大師〕天台宗第六祖湛然をいふ、支那常州妙樂寺に在住してゐたので妙樂大師といひ、また晉陵荊溪にもゐたので荊溪大師ともいふ、摩訶止觀輔行など撰述頗る多い、唐・興元元年十二月寂す、壽七十一。

***むねもん** (用明天皇)

[棟門]家屋雜考に、「もと櫻門に對して、樓なくして常の屋の棟の如く作れる門をいふなり」と見えてゐる。

***むねわけ**　嵯峨野の草になづむ駒、鞭なくれたる胸分の、尾花かき分け走り來る(松風)

[胸分]「むなわけ」ともいひ、獸類が草を胸で分けること。萬葉集・卷二十、大伴家持の歌に、「さを鹿の胸分け行かん秋の萩原」。

むのじ　手管の上手め見たぞやらぬぞ、ナナいや惡口いふは誰ぞいの、問はれて言ふはむのじながら虎でござんす(會稽山)

[無之字]無念の首音を取つて隱語的に言ふ廓詞であつて、文字詞(「はもじ」の條を見よ)の類である。「ほれる」(惚)を「ほの字」といへるもこの類である。巣林子のこの文は、問はれないうちに此方から名乘らうと思うたに、問はれて言ふは先を取られて無念ながら虎でござんすとの意。

むのじ　車に乘ると見えつろが、無の字の筆畫ありありと、無間の底に沈むべき(女護島)

[無之字]無間(「むげん」を見よ)の無の字。

むはうなんしのだいより　むはうなんしの大用を起し、有相修因より直に無相の樂果に入る(大原問答)

[無方難思の大用]佛菩薩は種種の方法を以て衆生を攝取導化し給ふ力用動作をいふ。大原問答のこのあたりの文は、大原談義聞書鈔に據つたもので、ここの文も、「於二圓圓極極無相無念果一成之上、起二無方難思之大用一、自二有相修因一、直入二無相樂果一、抑二往生見一、令レ體二達無生理一、云云」と見えてゐる。

むへんぎやうぼさつ　元よりも月光君無邊行菩薩の再來ゆゑ自解佛乘の悟を開き(大覺)

[無邊行菩薩]本化の四菩薩(上行、無邊行、淨行、安立行)の一で、日女御前御返事などの中にも見えてゐる菩薩である。

***むほん**　別して御舍兄賴朝公御謀叛思召し立ち給ふにつき(十二段)

[謀叛]背いて兵を擧げること。左傳・文公十四年の條に、「王叛二王孫蘇一」と見え、太平記に、「天皇御謀叛」「新田義貞謀叛事」などと見えたれば、謀叛は下の上にそむくとばかり定められない。又謀反と謀叛とはもと別義であつて、大寶律令に、謀反は八虐中の第一で、謀叛は八虐中の第三である。律疏殘篇に、「(八虐中)一日二謀反一(謂謀レ危二國家一)」とありて註に、「謂臣下將レ圖二逆節一、而有二無レ君之心一、不三敢指二斥尊號一、故託云二國家一」と見え、また同書に、「三日二謀叛一(謂謀二背レ國從一レ僞)」とありて註に、「謂有レ人謀下背二本朝一將レ投二蕃國一、或欲二翻レ城從一レ僞、或欲中以レ地外奔上」。

むまざくり　松が根高き馬ざくり、蹶跌くやら轉ぶやら(虎が磨)　喜三太は旅疲れ、むまざくりに足ふん込みただよふ所を(傾城)

馬小刳の義。馬の脚痕の掘れ窪めるもの。夫木集・二十七、信實の歌に、「數ならぬ身に知られたる馬ざくり、さのみや同じあとを踏むらん」。

むめ　「うめ」を見よ。

むやくしい　なうお袋、姑に酌とらせむやくしいかは知らねども、かう召さつたがよい筈(萬年草)　むやくし顏の色合を見て取りながら、牛兵衞立つも立たれず仔細は知らず(宵庚申)

「無益しい」の義。爲ないで濟むものを爲ねばならない。餘計な。つまらない。ばからしい。好色一代男・卷二、髮きりても捨られぬ世の條に、「萬手代にまかすれば、いつとなく我になつて樣といふ尻聲もなく、大方は機嫌とりてむやくしい事も程すぎて」。

***むらごう**　むらごうの大幕うたせ(出世景清)　むらごうの旗(蛙合戰)

「むらご」(叢濃)の延びた語。染色のむらむらに濃きこと。

紫の雲　罪も消えつつ紫の雲のうてなに法の花(娥)

吉祥のある時にたなびく雲の色であるといふ。往生要集・卷五に、「二十五の菩薩百十の比丘衆諸共に來り給ふや、西の空紫雲たなびき」と見え、山家集に、「西を待つ心に藤をかけてこそ、その紫の雲と思はめ」と見えてゐる。佐佐木先陣に「峯にむらむら紫の雲やきせながのは錦襴に」とある「紫の雲」は、攝津國紫雲山中山寺のある山をいうたのである。「ちゆうざんじ」を見よ。

***むらさきばうし**　紫帽子川水に映らふ影を水汲が(今宮)　深き思をやれ紫ばうし(丹波與作)

[紫帽子]紫縮緬で作り左右に垂れた帽子で、びらびらと飜るが故にびらり帽子(その條を見よ)ともいふ。もと歌舞伎役者(野郎)の被る帽子であつたが、おもに町人の婦女が笠の下に被るものとなつた。役者全書・下に、「紫帽子。歌舞伎にて用ゆ、紫帽子はそのかみ鳥居庄七といふ女形はじむ、是びらりとさげてきせたるよし云々」。西鶴俗つれつれ・卷二、作り七賢は竹の一よにみだれの條に、「川舟にむらさきのばうしかけたる野良あまた乘りて、大和屋座のはやしかたども大かた二階にあがり」。「やらうばうし」をも見よ。丹波與作のこの文は、「そなた樋田の云々」を見よ。

***むらしげとう**　弦をはづせし村重籐(女楠)

[村重籐]籐をむらむらにしげく卷いて作つた弓。貞丈雜記・卷十に、「村重籐の事。弓禮祕傳書に云く、村重籐と云ふは籐をむらむらとちらしてつかひたるを云ふなり、これは重籐の根本とする所、二十八・三十六合せて八八・六十四のつもりに卷くにより、其餘のこしらへ弓はすべてむら重籐と云ふなり、しかれども中頃より村重籐のもやうを定めても卷きたるなり、口傳可レ有レ之云云」。

***むりやう**　むりやうの繻子が十二丸(博多)　被ぐ布團の緞子よりむりやうの事ぞ思はるる(壽門松)

[五絲緞]支那渡來の繻子をいふ。和漢三才圖會・卷二十七、絹布類に、「六絲緞。俗云無里也字、按六絲緞出二於廣東・南京・福建一、似二八絲緞一而絲寡故名、其光滑亦稍劣、比二於滑綾子一則厚軟也、其織端有下織二漢府八絲之四字一者上、不レ知漢府何國之府名乎」。「むりやうの事ぞ思はるる」とあるは、五絲緞に無量をいひかけたのである。

むりやうごふ　臨終の一念無量劫を引くといふ(生玉)

[無量劫]永遠の意。「劫」はその條を見よ。「臨終の一念云云」をも見よ。

***むろ**　それ無漏無生の法界には自他の念更に無し(蟬丸)　轟く穢土は假の宿、有漏路無漏路の中休み(卯月潤色)

[無漏]有漏に對する語で、漏とは膿血のやうに身に漏れ出る煩惱をいふ。煩惱の惑根なきを無漏といひ、汚れなき淨土を無漏路といふ。

＊**めづ**　おのれ少しの慾にめでてよう訴人し居つたな(大經師)

愛の義。ここの文意は愛慾に心を奪はれるの義に云うたのである。

＊**めつかふ**　小判と云ふもの近づきになつておけと、めつかふに投げつくる(女腹切)　めつかふほうど食はする(生玉)

「まつかふ」(眞甲)の轉訛。額の眞中。

めつき・しやつき　犢牛の二匹連れ鐵杖提げ、三熊の分身隱れなき、めつきしやつきといふ早業(振袖始)

〔滅鬼・積鬼〕地獄の鬼卒であつて、牛頭阿旁をいふ。和訓栞に、「めつきしやつきの俗語は牛頭阿旁を譯す」。

＊**めつきやく**　我が身の上のめつきやくあり(女殺油地獄)

〔滅却〕破滅。玉篇・卷五にも「酒家滅却」と見えてゐる。

めつぽふふたい　言ひたいことを言ふ故に、めつぽふふたいの玉と名を取つた女子ぢや(弘徽殿)

面向不背の玉(その條を見よ)と滅法譜代の玉とをいひかけた洒落である。譜代奉公する滅法(めちやくちや)な玉の意。

＊**めて**　しやんとゆんでの腹に突立てめてへくはらりと引廻し(宵庚申)

〔馬手〕「ゆんで」(弓手)に對する語。右手をいひ、馬の手綱を持つ方の手の義であるといふ。

めなご　父等母等に爺嬶息災、めなご小悴産みの儘なる餓鬼十二疋(雪女)

「女の子」の轉。女のわらは。女子。

＊**めなみ**　便りなぎさに立つ女波(薩摩歌)

〔女波〕波の打つに高くなり低くなる、その高き方を男波といひ、低き方を女波といふ。和訓栞に、「めなみをなみ。波のうつに一たびは高く、一たびは卑し、よて男女を分てるなり」。

※**めぬき**　放目貫の性よしも(女腹切)

〔目貫〕刀柄の目釘の邊に嵌める飾金具。(元は目貫・目釘は一物)「放目貫」は武家名目抄・刀劔部に「按、目貫打て其上に卷固むべきを此飾卷かざるを放目貫と云、例式の腰刀は放目貫にて」。儀式用の太刀・七首作りの目貫は柄絲を卷かないで露出するから、其目貫を放目貫といひ、金質彫刻の良いのが多い。

＊**めのと**　百島太夫と申すめのとを具し(用明天皇)

妻の弟の義。妻の弟は子をよく守りくれるより轉じて、總て補佐する人をいふ。傅。守役。

＊**めまぜ**　うろたへ者と睨付け目まぜで知らすれば(女腹切)

〔目交〕めくばせ。眴。

＊**めやす**　この月の三日限りに家渡すか銀立つるか、返事次第に五日には目安上げる(大經師)　目安附けるも構はぬが(大經師)

〔目安〕目で見てすぐ知れ易く箇條書にした文書。目安書の公事訴訟文書。「目安上げる」または「目安附ける」とは、告訴狀を公儀(法廷)に差出すをいふ。

＊**めゆひ**　めゆひの直垂五色の絲にて菊綴し(最明寺殿)

〔目結〕しぼり染。

めら　うらが樣なめら、歌連歌にべる都人夢にも見やしめすまい(女護島)

「めらう」(女郎)の「う」の略された語。現今鹿兒島地方にて女のことを「めら」といふ。「めらう」は女郎と書けども、「めわらは」(女童)の轉語である。

めらん　忍ぶ戀路をせきだいの、女蘭男蘭は呂州の姿(生玉)

〔女蘭〕漢名に漳蘭といひ、蘭の一種である。飯沼長順撰・草木圖說・前篇卷十八に、「メラン(漳蘭)。建蘭に比すれば葉幅微く濶らして柔軟、葉末垂れ易し、花形大異なし」。

＊**めをと**　われと和女はめをと星、必らず添はう(曾根崎)　片潮・諸潮・めをと潮・投げ潮(最明寺殿)

〔女夫〕妻夫。夫婦。「めをと星」とは、織女星と牽牛星。「めをと潮」とは、女波男波の潮。「めをと池」「めをと塚」は地名部を見よ。

＊**めんかうふはい**　中にも面向不背の玉、七寶七重の箱の中、君を始め拜したる者一人も候はず、抑もこの玉と申すは赤栴檀のみそぎにて、五寸の釋迦の尊像玉の中にまします、何方より拜しても同じ面に向ふとは申傳へ候へども、昔より誰ありて箱を開き拜したると申すこと候はず(大織冠)　めんかうふはいの例にまかせ南都興福寺の寶藏にこめらるる(西王母)

〔面向不背〕面向不背の玉をいふ。謠曲・海人に、「花原磬、泗濱石、面向不背の玉」と見え、また「玉中に釋迦の像まします、いづかたより拜み奉れども同じ面なるによつて、おもてをむかふにそむかずと書いて面向不背の珠と申候」と見えてゐる。和訓栞に、「めんかうふはい。面向不背と書きならへり、海人水府に入て玉を取り身を割て藏せしといふは允恭四年記に本づき、唐書に西賈胡得二美珠一剖レ身而藏レ之とあるに據なるべし」。

＊**めんざう**　この上は捜して鼓を取れやとてめんざうに押入りける(天鼓)

〔眠藏〕佛家の寢所をいふ。謠曲・熊坂に、「お休みあれや御僧達、われもまどろまんさらばと、眠藏に入ると見えつるが」。

めんどりば　さて山の手は都勢、垣楯持楯めんどりばに衞並べ(津戸三郎)

〔雌鳥羽〕雌鳥は左翼が右翼を掩ひ重つてゐる、よつて以て右の方から順次に重ね行くことにいふ。和訓栞に、「めとりば。雌鳥羽の義也、鳥之翼右掩レ左雄、左掩レ右雌と見えたり、俗にめんどりばともいへり」。平家物語に、「楯をめんどりばにつき並べ」と見え、好色五人女(貞享三年刊)卷之二に、「秋のはじめの七日織女に借小袖とて、いまだ仕立ててより一度もめしもせぬを色七つめんどりばにかさね」と。

めんないちどり　腰の手拭引絞り、めんない千鳥百千鳥(冥途飛脚)

「めないちどり」(目無千鳥)が音便によつて撥音「ん」の增加した語である。小兒等相集り、其中の一人目がくしをなし、他の者どもを捕へようとして追ふ遊戲である。「目無しどちのきの雀」とも云うた、雀も千鳥も打群れて遊ぶものなるよりいうたものである。浪花聞書に、「めんないちどり。兒戲目かくしなり」。福富草紙に、「みちすがら目無しどちのきの雀、あそぶわらべの手さし指さして笑ふ」。伊賀越道中雙六(淨瑠璃)伏見の段に、「始終聞居ろ林左衞門詞の五音心得ずと伸上つて差覘くを、ちやと兩手でめんない千鳥、アアコリヤコリヤコリヤ何とする目が見えぬわいやい」。冥途飛脚のこの文は、面縛のことに云うたのである。

めかい　「めかひ」を見よ。

めがかり　都の富士を動かさずここに引寄せ、目がかりの里の賤屋も植込みの木の間に見せて(關八州)

〔目懸〕目に懸ること。目障り。

***めがたき**　めがたきといひ家來の敵(三世相)　目前の女敵見逃しにならうか(薩摩歌)　土産を遣はし氣を付けても女敵をも得討たず、きかぬ顔する腰抜の彦九郎(堀川波鼓)

〔女敵〕己が妻と密通した姦夫をいふ。(元祿頃から享保にかけて女敵討が往往あつた。巣林子作の堀川波鼓、鑓權三重帷子はこれを書いたものである。思ふに己が妻が間男したからとて、その姦婦姦夫の行方を搜索して斬棄ててしまふことは、現今の思想から觀ればいかがはしいことでもあり、こんな破綻は昔も身分の高い人には無かつた)。

***めかど**　目かどの強い人ぢやの、毎年の事でもこちはすきと覺えぬ(大經師)　祐經元より目角強く(曾稽山)　足はどれても目角は強き袴肩衣(壽門松)

〔目角〕和訓栞に「めかど。目をよめり、目所記也と注せり」とある。「目角強い」とは、眼識の鋭いをいふ。

めかひ　さりとは慘き殿樣や、目かひの見えぬ女の身、科あらば一思ひに殺しやうもあるべきに(百合若)

〔目價〕即ち目の價値の義、目のはたらき。「かひ」の條を見よ。伊賀越道中雙六(淨瑠璃)伏見の段に「目かひも見えぬ志津馬樣に憎い辛い大惡人、天道樣の明かなお目にはこれがかからぬか」。

めかり　ええ物貰ひでも目かりを利かしや(夕霧)　何程不孝になるとても半時や一時のめかりはない(川中島)　またどんな念佛、こんな時はめかり利かして延ばしたがよいわいの(宵庚申)

「めりかり」の略であらう。「めり」は減で音の下りを云ひ、「かり」は加で音の上りを云ふ、以て音の上下の調子をいひ、轉じてほどあひ・氣轉・氣兼の意にいふ。紀海音撰・八百屋お七・上卷に、「めかりのない、帶解く事も時によろ」。染模樣妹背門松(淨瑠璃)質屋の段に、「今いなすもどうやら氣懸り、今一日二日にめかりもあるまい、春早早迎にござれ」。今樣二十四孝(寶永六年刊)卷之四に、「人中にてつべこべと物さへいへば利發者と覺え、ももじりしてある人にめかりもきかず長口上をこね廻し」。「めかりをきかす」とは、加減を利かす、氣轉をはたらかすの意。

***めぐ**　あたる物を幸ひに、打ちめぐ打ち破る(嫗山姥)

「まぐ」(曲)の轉であらう。毀つ。こはす。(この語現今も中國地方などで用ひられ、他動詞なる時はカ行四段活用、自動詞なる時はカ行下二段活用である)。俚言集覽に、「めぐ。下野、打毀つを云、又へク心にも云、メとへと通ず」。和訓栞に、「めげる。俗語也。曲るの轉ぜるなるべし、又げるノ反ぐ、人をめぐなど俗にいふめり、九州四國にてそこねる意に凡ていへり」。現今東京地方で、負けてへこむを「めげる」といふも曲げる義である。

めぐしひたす　當今甚だぶんしの學に長じ給ひ、民を以て天とすとめぐしひたし給ひければ(用明天皇)

惠み潤す。「めぐし」は神代紀に「憐愛」をよんである、惠むの義である。

めくらぶね　舟後を二行に列ね・めくら船に竹束つけ、貝鉦鳴し攻鼓水底を轟かし(百合若)

〔盲船〕和漢船用集に、「後太平記に盲船竹圍板囊といへり、此舟尤兵家水軍船戰の祕事とす」と見えてゐる。蓋し周圍を板や竹で塞ぎ、進退自由になる裝置をした軍船。

めぐろ　大きな鏡にめぐろそへてすゑられた(夕霧)

〔目黑〕浪花方言(文政二年成、寫本)に、「目黑。小まぐろ魚なり」。(ここの文に「大きな鏡」とあるは、大きな鏡餅のこと)。

めざし　和布まじりのめざしなす、鹽屋が軒に竹見えて(出世景淸)

〔目刺〕鰯など數多、目に藁又は串を通して乾したもの。巣林子のこの文、目刺をして、和布などと共に竹に吊し、鹽屋の軒に乾してある漁村の風景をいうたのである。

めざす　夕立頻る雷神、目ざすも知らぬ松蔭に(今宮)

〔目刺〕目を刺す。ここの文は、人が我が目を刺すも知らぬ、即ち一寸先も見えぬ闇をいふ。太平記卷三、陶山小見山夜討の條に、「其夜は九月晦日のことなれば、目指すとも知らざる暗き夜に、風雨烈しく吹いて、面を向くべきやうもなかりけるに」、とある「目指す」も目を刺す意である。俚言集覽に、「目ざすもしらぬ闇。(太平記評判)目を指もしらぬ闇の夜、(倭訓栞)空めさすもなくくもりてと見ゆ」。

めさましぐさ　一吹ついで燻らする目覺草は服部の、八聲も鐘もかすみ行く(雪女)

〔目覺草〕煙草の異名。

めじろ　丹後の生鰤上方にもめじろと申してあろげなれど(浦島)

〔眼白〕和漢三才圖會卷四十九、魚類、鰤の條に「一尺許著名㆓眼白㆒」。越谷秀眞編・物類稱呼卷二、動物部、鰤の條に「一尺程なるを西國にて目白と云」。

***めせきがさ**　竹の紋つく道行の本を召せ召せ目せき笠(二枚繪)　憚りながらあの輿にめせき編笠、義經がこれ浪人の乘物と(源義經)

〔目狹笠〕「めせき編笠」「めせま笠」ともいひ、藺笠または籐笠の編目狹い笠。松の葉(元祿十六年刊)卷二、こむらさきの唄に、「うきよをしのぶ目せき笠、雨はふらいでこひがふる」。和訓栞に、「めせき。藺笠籐笠などにいへり、目狹の義なり」。

めだう　對の屋の馬道を忍び入りにけり(女夫池)

〔馬道〕橫に厚い板を敷き渡して廊の如く通行するやうにしたもの。必要に應じては奥まで馬を引入れる道とするから馬道といふ。後には長廊下をいふやうになつた。(一說に馬道は「まどほし」(間通)の約で、殿中の多くの間を貫通した板敷の稱であるといふ)。

目叩き膾　目叩き膾人の鮨、からだは水に冷し物(隅田川)

瞬き(目叩きの義)をして食ふ程辛酸のきき過ぎた膾。

めだれがほ　わが戀かなはぬ腹立ちに、めだれ顔のわんざんはいやや人でなし(以呂波)

〔目垂顔〕まだるく見える顔付の意より轉じて、潔くなくぐづぐづしいことにいふ。平家物語・卷一、御輿振に、「山門の大衆は目だりがほしけりなど京童の申さんこと後日の難にや候はんずらん」。謠曲・安宅に、「めだれ顔の振舞は臆病の至りか」。謠曲・烏帽子折に、「盜人よ目だれ顔なる夜討はするとも我には叶はじものを」。扇の芝(古淨瑠璃)第五に、「ここな下郎めがめだれがほは推參なり」。

もさ 言合せし二人の連れつかつかと寄つて、ヤイもさめ、此女郎此方へ貰ふ、置いて歸れ(女殺)

田舍者をいふ。往時東國人の言葉の終りに「まうさ」または「もさ」を添加していうた。(蓋し「申す」の轉訛である)。よつてもつて「もさ」を東國人のことにいひなし、轉じて田舍者の稱となつたのである。現今も京阪地方で田舍者を連れて名所舊蹟を案內する者を「もさ引」といふ。也雲軒宗旦編・野梅(貞享四年刊、京都井筒屋庄兵衞板)宗旦の句に、「古き都に中薩の登りし」と見えてゐる。塵嚢抄に、「坂東まうさ」と見えてゐる。鹿島踊に「おやもさもさ」といふめ、詞の終りに附いて囃す歌の曲である。

もじひらなか 一生夫の錢金もじひらなか違へぬ身が、子故の闇に迷はされ、盗みして顯はれた恥かしうござる(女殺) 商ないひ物ももじひらなか違へたことのあらばこそ(曾根崎)

〔文字片半〕一錢半錢。物類稱呼・卷四、器用部に「ぜに(錢)＝畿內にて表の方をもじと云」と見え、錢をいふ。「びたひらなか」を見よ。

***もしほぐさ** 昔の人と短夜の、雲隱れして世の人の、袂しをるる藻鹽草、書置に名を殘しける(卯月潤色) 書集めたる藻鹽草(今宮)

〔藻鹽草〕藻鹽草は搔集めるより、搔を書の意にかけて、書集めた物の意にいふ。文稿。

もじやくじや 「もぢやくぢや」を見よ。

もじやもじや 「もぢやもぢや」を見よ。

***もだす** 生甲斐も無き身なれども、親伯母の心もだされず、髮剃りこぼし發心遂げ(卯月潤色) さて有難き御心底もだすは如何に候へども(大原問答)

沈默する義。だまつて聞ながしにする。神代記に默を「もだす」とよみ、萬葉集・卷十に「默然」を「もだ」とよんである。

***もたひ** もたひの蓋の開くと見えしが(松風) 酒のもたひ卷絹黃金數の賄賂並べさせ(國性爺後日) 八つのもたひに毒酒を湛へ(振袖始)

〔甕〕持堪の義。かめ。

もち もちのお方が價上げしたい祈には、强氣に上り高天が原の八百萬神(女殺) もちとはたと兩方一度の祈には、高からず安からず中を取つて(女殺)

〔持〕米を持込んで相場の昂るを待つこと。商人職人懷日記(正德三年刊)卷之一に、「米買ひこんで相場のあがるを待つを持といひ。」

***もぢ** 心の內のもぢの蚊帳、色香を外に漏らさじと(歌念佛) 茶宇の袴にもぢ肩衣(堀川波鼓) あの綟の肩衣が孫右衞門様(冥途飛脚)

〔綟〕麻絲もて目を粗く織つた布。節用集(饅頭屋本)に、「戾。布」。

***もちごもる** 我が子を持ごもつて死ぬるを見捨てて(酒呑童子) 持ごもりて死ぬる身の眼を塞ぐと其儘、井筒屋まで知らせて、彼のお人の回向が受けたいわいの(酒呑童子) 産子諸共死したるは持ごもりも同じこと(天神記)

〔持籠〕子を孕むをいひ、子を孕んで死ぬをいふ。「持ごもり」は轉成名詞。

もちせく 不老門前に藥代禮物もちせきて、長生藥ごしらへひまもなく(冷泉節)

持ち塞くで、藥代禮物を持ち來る者が群集して門前を塞ぐ意か。(或は「持せき」即ち「もたせ來」を「もちせき」と古院本(山本九兵衞版八行本)にしたものか)。

***もちはな** 餅花開く餅搗の、賑賑はしや九軒町(夕霧)

〔餅花〕正月餅搗の時に、餅を小さく丸めて樹枝に附け、兒女の弄びとしたもの。日次紀事(延寶年中成)十二月の條に、「此月尾良賤毎レ家舂レ餅、……兒女貼ニ小丸餅於枯枝ニ而玩レ之、是謂ニ餅花ニ」。宗長手記に、「冬の梅は一輪二輪かすかに咲て匂ふこそあはれ深からめ、あまりに正月に竈の餅花つけたるやうに咲きたるをふさはしからず見てのことなり」。



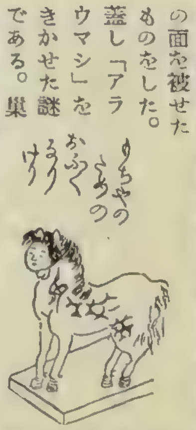
〔天和長久四季あそび(天和頃刊)所載〕

もぢやくぢや 奧様お呼びなさるゝ時のもぢやくぢやもいかがと、お暇を請ひましたれば(淀鯉)

「もんちやくもんちやく」(悶着悶着)の訛略で、「むちやくむちやく」(無着無着)を「むちやくちや」(無茶苦茶と書くは當字)といふの類である。ごたつき。紛紜。

もちやのおふく 姫君は扱置きたとひ餅屋のお福でも、山姥と祝言するとても(反魂香)

〔餅屋阿福〕往時餅屋の看板に、馬の面に阿福の面を被せたものをした。蓋し「アラウマシ」をきかせた謎である。巣林子のこの文は、餅屋の看板の阿福のやうな醜面の女でもの意。



〔用捨箱所載〕

もぢやもぢや 綸合姫とのもぢやもぢやも、すつきり軍法智略の元(千疋犬)

「もぢやくぢや」(その條を見よ)ともいひ、「もんちやくもんちやく」(悶着悶着)の訛略。紛紜。込入つた關係。

もぢり 鐵杷・刺股・もぢり・琴柱(國八州)

〔綟〕昔時罪人などを捕へるに用ゐる三道具の一、長柄の先に多くの鐵叉を附け、これを捕へようとする人の袖に搦ませて引倒す武器。袖搦。

***もつかう** 肩にもつかうかたげても(薩摩歌)

畚に木香をいひかけたのである。木香は藥草の名、南蠻國から渡來し、其形枯骨のやうである。和漢三才圖會・卷九十三、芳草類に、「木香。本綱木香南番諸國皆有、其根形如ニ枯骨一、枯レ牙者爲レ良云云」とあつて、藥草としての效能が擧げてある。

***もつかう** 御恩をになふもつかうの紋も再び榮えける(百日曾我) このもつかうに打添ひて私が紋の松皮の(冥途飛脚)

めんぺき 九年面壁達磨大師の敎を受け(寐靜)

[面壁]壁に面して坐禪するをいふ。達磨大師は嵩山の少林寺に住し、壁に面して坐禪すること九年、その間一語をも發しなかつたといふ。

***めんめん** 俵なかされて面面に樂しうなるこそ目出度けれ(松風) 入子鉢の様なめんめんの子供の世話ばかりやきならず(女殺) 戀のめんめん稼ぢやと、ばらばら立つてぞ入りにけろ(淀鯉) いはばめんめん自害とも、心中の外の心中ぞや(卯月潤色)

[面面]めいめい。各人。各自。「めんめん稼」とは、各人稼ぐこと。「めんめん自害」とは各自謡くの自殺。

も

もうはう 毛寶は龜に乘り(國性爺後日)

[毛寶]蒙求卷中に、「晉毛寶字碩眞、榮陽陽武人、進二征虜將軍豫州刺史一、與二西陽太守樊峻一、以二萬人一守二邾城一、石虎遣二二萬騎一攻レ之、城陷、寶等率二左右一突レ圍出、赴レ江死者六千人、寶亦溺死、初寶在二武昌一、軍人有下於レ市買二得一白龜長四五寸一養上レ之、漸大放二諸江中一、邾城之敗、養レ龜人被レ鎧持レ刀、自投二於水中一、如レ墮二一石上一、視レ之乃先所レ養白龜長五六尺、送至二東岸一、遂得レ免レ惡」。この文に據れば、龜に乘つたのは毛寶ではなくて、一軍人である。

***もかう** 三笠の軒に紅のもかうを張りて御額をかくし(天智天皇)

[帽額]御簾の上に横に張る帛で、水引幕の類であつて、それに窠の紋を散し染めにしてある。(序云、窠の紋繪は窠より出たといふ說と、瓜核より出だといふ說がある。按じるに窠の模様は佛像傳來と共に輸入した模様の變化したのであらう、印度古美術中に窠の模様に似たのがある)。

***もがり** 門の戸明くれば、德兵衞もがりの蔭に隱れしを(重井筒) 紺屋のもがり劔の山、先には死出の大和橋(今宮)

竹の枝を捥いで立て並べたものをいひ、布をその捥ぎ枝に懸けて乾かす。紺屋の物干。蓋し「もがり」は「もぎ」(捥で曲りの義より轉じたもの)の延びた語で、逆茂木を「さかもがり」といふの類である。芓環には「笆」を「もがり」とよんである。嬉遊笑覽に、「もがりは物を懸けて乾しなどする故、烏帽子折などは用あるなり、また家のかこひとす、今は紺かきなどの染物の干場に作るをのみもがりといふ、その造りやう昔と變れるはかこひのかたの用ならねばなり、近くは貞享頃の繪に染物を張りて乾すところの竹もがり、垣の如くたてたる竹に、絹どもは横に幕をひきたるやうに張りて乾したり」。



(人倫訓蒙圖彙所載)
〔もがり〕

***もがり** 人賣と見た、もがりと見た(女腹切) 彥介めさ程の疵ではなけれども、ねだつてかねにするもがりとはかがみにかけたこと(壽門松) 欲面の繼父めが年切增のもがりごと(女腹切)

「まがり」(曲)の轉、曲者の義。おどし又は欺いて金錢を強請ること、又その人、色道大鑑(延寶年中成、寫本)に、「もがりと云は非道を元として言分をこしらへ、利を得るたくみなどする者をかくいふ也」。俚言集覽に、「武藏國府臺の邊四辻の所を四モガリと云、モガリはマガリ也、曲者をモガリ者と云」。この語は動詞(ラ行四段活用)にも用ゐる。壽門松(巢林子作)に、「七十になる淨閑がもがられたといふ外聞わるさ」と見え、卯月潤色(巢林子作)に、「着衣裳までもがり取り家一ぱいに荒鼠」と見えてゐる。

***もぎどう** 彼奴は木で鼻もぎどう者、ただは言ふまじ(冥途飛脚) 佐用姫ははてもぎどうな、討たれまいやら討たれうやら、今一度言葉もかはせぬ夫の心の慘らしや(用明天皇) 敵妙來れと、手を引いて障子引立て入り給へば、扨ももぎどう手ばしかい妹の初戀(日本武尊)

「もぎどり」(捥取。「もぎ」は「まがり」(曲)が「もがり」と轉じて約つた語)の音便か。莫義道、無義道などの字が當ててある。非道。邪慳。不愛想。容赦なく一轍の意にいふ。等躬編・信夫摺(元祿元年刊)、立羽不角の句に、「一哲に秋を惜まぬ野守哉」とあつて、「一哲」に「モギドヲ」と振假名が附けてある。一哲は一轍の音借字である。分里艷行脚(正德六年刊)三之卷に、「かの配分もとらず無義道に立つて行けば」とあつて、「無義道」に「もぎどう」と振假名が附けてある。「もぎどう」の語源には諸說がある。伴信友の說に、「運歩色葉に挑筒とかけり、双六の定に敵の筒を挑ぎとることあるにたとへたる也、今も此俗語をもぎどうと云處もあり。諺草(元祿十四年刊)に、「無義道。もぎだうは誤」。俚言集覽に、「もぎどう、無義道、注・眞字未詳、(倭字通例書)もぎどう、俗言也、愚按文字不穩」。「木で鼻もぎどう者」をも見よ。

もくそはんきやん とくれきの城攻取られ、杜と賴みしもくそはんきやんも行方知らず(三國志)

牧司判官である。朝鮮にて州の長官を牧司と云うた。牧司は我が國では判官のやうな職であるから牧司判官と云うたのである。我が國で牧司と云うたのは朝鮮晋州牧司をのみ云うたものである。

もくば おりや遊びにや來ませぬ、太四郎様からせんよ様へ文持つて來ました、それそれが木馬のもと(酒呑童子) 杜を横に渡して足に石を括付け木馬とやらに乘せられ(酒呑童子)

[木馬]木を馬の背のやうに削つて渡し、人をその上に跨がらせ、兩足に重き石を括下げて拷問呵責する具。十訓抄・中卷、可レ專二思慮一事の條に、伏見修理大夫俊綱が成方といふ笛吹の所持せる笛がほしさに呵責することを記して、「雜色所へくだして木馬に乘せんとする間云云」と見えてゐる。月堂集・十之卷に、「安右衞門。右は當四月(享保三年)國元へ被レ遣候由、大坂にて水ぜめ木馬ぜめ、さまざまのせめにあひ候へ共おち不レ申候由」と見えてゐる。

***もくらんぢ** (最明寺殿)

[木蘭地]「むくらんぢ」ともいふ。黃赤に少し黑みを帶びた色地。梅谷澁。僧尼令の義解に、「木蘭地は黃橡也」。安齋隨筆に、「梅の異名を木蘭といふ、木にて薫よきこと蘭の如くなればなり」。

など、それぞれの者に眞似ろによつて、芝居を物眞似または物眞似芝居と云つた。南水漫遊に、「承應元年六月歌舞伎停止せられ役者雜澁に及ぶにより願を出し、翌二年三月役者物眞似狂言盡といふ名目にて京大阪ともに免許ありしより、芝居の木戸口の上に將棊の駒の如き札に物まねと書記したり、物眞似とは聲色を似するにあらず、老若男女貴賤僧俗それぞれの物を眞に似する事なり」。「やくしやものまね」をも見よ。

***ものみ** 物見遠見物頭(用明天皇)

〔物見〕敵の形勢を窺察して其旨を隊長に報じ、或は戰場の險岨要害等を偵察するなど其專務であるによつて、其役を物見と稱した。委しくは武家名目抄・職名部・卷三十四を見よ。

***ものもう** 物見のすだれ下す間にはや玄關に物もう(夕霧) 三盃機嫌の朝ぼらけ、物もう、どれい(雪女)

「ものまうす」(物申)の訛略。貞丈雜記・卷十五、言語之部に、「人のもとへ行きてものもうと云ふは、物申さうといふ事なり」。(序に云訪問客が「ものもう」というに對して「どれい」と應へる。「どれい」は「どれより」の約である)

もみうり 「もみふり」を見よ。

***もみぢがさ** 紅葉笠屋のな女夫の心中(卯月紅葉) 降り來る雨の揉立て揉立て紅葉笠、差いた許りに手にもたまらず(加增曾我)

〔紅葉傘〕天井ばかりを圓う青にした傘をいふ。萬金產業袋(享保十七年刊)卷一、傘細工の部に、「天井ばかり青を紅葉といひ、ぐるりの靑きを軒青といふ(俗に蛇の目)」。我衣に、「貞享より地のもみぢがさきやしやなり、天上青紙青どさにて細くへりを取り、絹絲しやうぞく・柄籐卷」。卯月紅葉のここの文は、血汐に染まるを紅葉といひなし、笠屋をいひかけて紅葉笠屋とはいうたのである。

もみぢぶくろ もみぢ袋に洗粉に、人に見せじと包みたる紅葉袋の色に出る、こぶら太股いと黒く(薩摩歌) 難行苦行と研ぎ磨き(傾城懸物揃)

〔紅葉袋〕糠袋をいふ。浪花方言に、「もみぢの粉は小麥のから、江戸でいふふすまなり、故にぬか袋をももみぢ袋といふ」。(嬉遊笑覽・器用の部に、「もみぢ袋＝〔空穗隨筆〕空にけふもみぢ袋や月の顏露といへるも、糠袋をいふ也、汁をもみ出してつかふ物なれば、さは名付たるにや、云云」)。

もみぢをがさ 紅葉小傘は名越の紋(五人兄弟)


〔紅葉小傘〕

〔紅葉小傘〕紋所の名。夜討曾我(寬永古活字版)に、「からかさはなごやどの」、とありてこの紋繪が載つてゐる。「もみぢがさ」をも見よ。

もみふり てきてきしやんともみふりに、なれなれ茄子秋茄子、嫁を譏る姑はなし(卯月潤色) もみふりを刻む音さへ比叡の山、峰に響くと傳へたる(堀川波鼓)

〔揉瓜〕「うり」(瓜)を「ふり」といふは古語である。「ふり」を見よ。堀川波鼓のこの文は、京都の朝は閑靜であるによつて、揉瓜を刻む小さな音までも比叡山に響くと言ひ傳へられてゐるの意。

***もみゑぼし** 戀に心や揉烏帽子(用明天皇)

〔揉烏帽子〕兜の下に被るに宜しいやうに揉んだ烏帽子をいふ。揉烏帽子に梨打烏帽子・引立烏帽子・柳さびの折烏帽子の三種がある。

もむ 「もめ」の條を見よ。

もむない 在所の男ぢや大坂の男ぢやとて食ふに二つの味はひなし、一人の娘に親の身でもむない男を食はさうか(今宮)

「うまみない」(旨味無)が「もみない」となり、更に「もむない」と轉訛した語であらう。うまくない。まづい。松木淡淡(半時庵)編・誹諧十七回・下卷に、「若き人來りて、去頃攝陽の會にて、點のかかりし魚はモムナイと云句あり、はげしき俗語なりと云、それこそ我御料の愚味なり、句のよしあしは人人の好むに從ふべし、モミナイと云言葉は中にも由來ありと承り候へ、應神天皇の十九歳冬戊戌朔幸二吉野宮一時、國樔人來朝之赤煮二蝦蟆一爲二上味一、名曰二毛瀰一、これより惡き味を毛瀰無といひならはせり、モムナイとも云べし、ムとミと相通なり」と見えてゐる。

***もめ** こちらに大きなもめが出來て、急に身請をして貰はねばならぬ首尾になつたれど(博多) 野崎參りの入用はおれがもめ、割付も何にも知らぬ(女殺) 地下の若い衆が又二郎にもめさする(嵯峨天皇)

〔揉〕もつれ。悶着。人に物を振舞ふことにもいふ。博多小女郎波枕のこの文の「もめ」は紛擾の意。女殺油地獄のこの文の「もめ」は費用を出してもてなすこと。嵯峨天皇甘露雨のこの文の「もめ」は動詞「もめる」の未定形であつて馳走する意。色道大鏡・言辭門に、「もめる。金銀の沙汰也、物をつかふ貌也」。和訓栞に、「もめる、める反む也、もむに同じ、喧擾の意にいふは乘の字の義なり、野語に人に物をふるまふ事を云ふも乘の意にや」。世上智惠袋に、「上方より渡海の船此島(女御の島)にかかり、島見物にあがる人あれば、その宿へ女どもも打寄り、酒肴もめさせ酒もりして目ずきの男になじめり」。

***ももしき** 道ある御代と百敷や秋豐かに(烏帽子折) 我百敷にありし時は太子とも言はば言へ、身は墨染の山鳥・瞿曇沙彌には妻子もなし(釋迦)

〔百敷〕百石城で、皇城の堅固な義だといふ。(一說に百官の座ある故に百敷の義だともいふ)。禁裏。大宮。傾城島原蛙合戰(巣林子作)に、「百敷や大宮人の袖はえて」、とある「百敷や」は大宮にかかる枕詞である。

ももぞの 淸和のうてなを出で、桃園の御葉末源の牛若丸(孕常盤) 源義經と名乘り給ひし御骨柄、天晴大將ももぞのの後胤とこそ見えにけれ(加增曾我) 橘の匂もふかき桃園や、末葉末葉に千代こめて(十二段) 末葉に茂る桃園や、淸和源氏のちやくちやく嫡流(雪女) そもそもまろは桃園や源氏の正八幡大菩薩と(西王母) なお賴平、足下は淸和の庶流桃園親王の苗裔(關八州)

〔桃園〕貞純親王をいひ、淸和天皇の第六皇子に當り、桃園親王と云ふ、其邸は京都一條の北・大宮通の西で桃園の地にあつた。貞純親王の御子經基(六孫王といふ)に姓を源氏と賜はつた、これ淸和源氏の祖先である。尊卑分脈・卷九、淸和源氏上の部に、「貞純親王。延喜十六(年)五(月)七(日)薨六十四歳、號二桃園親王一、此親王於二一條大宮桃園池一爲レ龍之由、時人多得二夢告一」と見え、其子經基王の條に「天德五(年)六(月)十五(日)始而賜二源朝臣姓一」と見えてゐる。主馬判官盛久(古淨瑠璃)に、「淸和のすめら第六のみこ四品貞純親王桃園と號し奉る、其御子鎭守府將軍經基親王源の姓を給はりし、六孫王これなり」。

「もから」(その條を見よ)に促音「つ」の増加したもので、紋所の名。百日曾我の「もつから」に就いては、「いほりもから」を見よ。冥途飛脚のもつからは忠兵衞の紋所をいうたのである。

***もつけ**　ちと容體お[illegible]れなされといへば、讃海もつけ顏(聖德太子)　森右衞門様からたつた今飛脚の狀に、もつけな事が云うて來ました(女殺)
〔物怪〕思ひ設けぬこと。意外。

もつこく　枝は木こく我が身はちやこく、うろさき里の勤めぞと(生玉心中)
〔木斛〕厚皮香とも書く。山茶科の常綠喬木、庭園に栽培され、樹皮は黑褐色、葉は全邊で其質厚く滑で光澤を有し、夏時葉腋上に黃白色五瓣の花を開き、花後球果を結び紅子を露出する。

***もつさう**　もつさうあたまの奴が群(孕常盤)
〔物相〕二三合の飯を容れる器をいふ。俚言集覽に、「もつさう。(應添壒囊抄)禪家にいふ名目に物相分飯器也とあり、然れば本は禪家の具也」。「もつさうあたま」とは、物相に似た形の頭(あたま)をいふ。

***もつたい**　毛剃が諸色請込んで差配らしげにもつたい顏(博多)　甘輝と名に負ふそのもつたい(國性爺)　勿體なくも此寺に(出世景清)
〔物體〕もののしき體(てい)をいふ。下學集に「勿體」の字を用ゐたれども當字(あてじ)である。「物體無し」とは儼體の滅び無くなる義で、それを惜しむ意から轉じて、畏い、おそれ多いの意になつたのである。

もつてうす　たつた一人の母に繩掛けたは、己れを己れと奉つて味方に賴まん爲なるに、もつてうすれば方圖(はうづ)もない(國性爺)
取りもつ。もてなす。按じるに「もつてうす」は「もつちやうす」と書くべく、持ち賞すの訛であらう。和漢音釋書言字考節用集(享保二年刊)言辭門モ部に「持賞」に「モテナス」と傍訓してある。

もとあら　太刀拔翳し・もとあらの萩も尾花もかいくぐり(源義經)
〔幹疎〕末茂りて幹立の疎疎としたこと。古今集・戀四の部の歌に、「宮城野のもとあらの小萩露を重み、風を待つごと君をこそ待て」。

***もどく**　父が違背申さるとも娘は母が奉る、やあ奉るとは夫をもどく女め、娘やることならぬ(日本武尊)　お心をもどくではなく、歎きをかくるが面白うは無けれども(壽門松)
抵牾す。さからひ難じる。

もとしげとうのゆみ　(最明寺殿)
〔本重籐弓〕本弭(もとはず)の方に籐を重く卷いた弓。

もとはず　教經聽せず拂ふ本弭末弭(うらはず)に、恐しや三十番神ましまして(女護島)
〔本弭〕弓の端の弦を懸ける所を弭といふ。弓を射る時に上になる方をうらはずといひ、下になる方をもとはずといふ。

もとわたり　主も心をおく縞(じま)の袴、もとわたりのこぶのかは(大經師)　二階にはもとわたりの大紋緞子の夜の物(萬年草)　吳郡のあやのもとわたり、山鳩色に薄紅まぜてさつと一刷毛(孕常盤)
〔舊渡〕足利の末期から德川の初期頃にかけて舶來した物をいふ。舊渡の絹布類はその後に渡つた物よりも品質佳良である。「おくじま」の條をも見よ。

ものうち　物打より段段に折れ(持統天皇)　刀の刄は簓(ささら)となり、物打折れて失せければ(千疋犬)　物打より切先まで刄を石にて叩き潰し(會稽山)
〔物打〕太刀などで物を打切る時、その物に最も觸れる所、卽ち切先三寸の所。平家物語卷四、信連合戰の條に、「太刀の鋒三寸ばかり打折つて捨ててけり」とあるも、物打を折つて捨てたのである。

***ものがしら**　以前は御家中の物頭采配まで許され(丹波與作)
〔物頭〕武家名目抄・職名部に、「物頭といへるは一人の職名にあらず、旗鑓の奉行弓鐵炮の頭などを總て云へる名號にて、足輕同心をあづかる職なり、されば足輕頭とも同心頭とも稱す、又足輕大將といへるもこのことなり」。

ものぎは　晦日前(つごもりまへ)物際は、武士の軍のこぐちぞい(生玉心中)
〔物際〕物日(ものび)(その條を見よ)の際の義。月末・節季などの間際をいひ、商家などでは金錢收支等に關して多忙な時である。

***ものごし**　心もとなやあら遲やと、物越も早弱弱と(會稽山)　黃昏照す行燈の、障子に映るを能く見れば、元信はもとの人體にて、女の影は五輪とみやが物ごしばかり(反魂香)　御顏色物ごしまで、ただ當分の物思ひに氣の滯りと存ずれば(冷泉節)
〔物越〕物越(物を隔てたこと)に聞える音聲の義。音聲。小林新太郎撰・一日土堤の自序文に、「やむわりと猫なでこゑの音質は猫にあらず」とありて、「音質」に「ものごし」と振假名が附けてある。和訓栞に、「ものごし。伊勢物語及源氏に見えたるは物を隔てたる義也、又人の聲をいへり、物越にその聲を聞の義なるべし」。

***ものさぶ**　木綿布子も物さびて、御免あれと座敷に入り(淀鯉)
物のふるぶるしうなれるをいふ。「さぶ」は古事記に「踰佐備」、萬葉集・卷一に「神佐備世須登」とある「さぶ」であつて、進むの義より轉じたものである。

ものし　手管に馴れたるものしども、連立てば日に立つと三人ばらばら(虎が磨)　女房はさすが物仕にて詞を和らげ(薩摩歌)
〔物仕〕物馴れて巧者なこと。色道大鑑・名目の條に、「物仕。男によらず女によらず、巧者にして物事指南の約かにととのふる人を指していふ」。

***もののぐ**　藏に入つて物の具せん(用明天皇)　物の具かため軍兵を引率し(鎌田)
〔物具〕兵具の義、鎧をいふ。「物」は物部(もののべ)、もののふなどいふ「もの」で、兵または武の義である。

***ものび**　おれが心を察してたも、ほんにほんに物日なかに瘦せたわいな(反魂香)
〔物日〕音轉で「もんび」ともいふ。「もんび」を見よ。

ものまね　物眞似聞きに(曾根崎)　今の傾城の物眞似芝居御好(す)きの一德(大經師)
〔物眞似〕芝居では老若男女貴賤僧俗武士傾城

く山の向こそ文珠の淨土なるらめ(以呂波)
〔文珠〕文珠師利(Manjusri)の略、智慧門を司る菩薩である。頂に五髻を結び、右手に劍を執り左手に書巻を持ち、獅子に乘り、或は蓮華上に坐してゐられる。蓋し五髻は大日の五智を表し、劍は智慧を表し、獅子は智慧の猛威を表したものである。
「文珠の淨土」とは、文珠菩薩の居處五臺山(清凉山とも云ふ)をいふ。華嚴經・菩薩住處品に、「東北方有二菩薩住處一、名二清凉山一、過去有二菩薩一、常於レ中住彼現有二菩薩一、名二文珠師利一、有二一萬菩薩一、常爲二說法一」。謠曲・石橋に、「向ひは文珠の淨土にて、常に笙歌の花降りて」。「ちごもんじゆ」をも見よ。

もんじゅほうじゅ 平泉の文珠寶壽が千日潔齋して鍛つたる利劍の驗(嫗山姥)
〔文珠寶壽〕圓融天皇の頃陸奥平泉の刀工である。源滿仲の爲に八幡宮に祈り、髭切膝丸の名刀を作つたこと平治物語に見えてゐる。

もんち この軍介を東へ遣りほつかりすかたんさせんとな、兎角汝が言葉とはもんちもんちに出る合點(隅田川) 宵のうつり香燻きしめて、晝まで寢るを作法にて、他と もんちの揚屋町(百日曾我)
〔門地〕門閥の義より門地門地を家家の流儀流儀の意にとりなし、轉じて物のかなたこなたに違ふことにいふ。裏腹。あべこべ。和漢遊女容氣(享保二年刊)四之巻にも、「おつしやるやうにするがお主にすねたりお心に違うたりするのでござんす、ぬし様の思召ともんちにするがとりもなほさずわしがすねるのぢやが合點がゆきませぬか」。

***もんぢやく** 常盤様はお氣合が惡いとて、床も離れず藥もんぢやく、いつ浮き浮きともなされぬに(女護島)
〔捫著〕悶著とも書き、紛爭の義、轉じて親しみ合つて離れぬ意にいひ、「もやもや」(その條を見よ)、「もぢやくぢや」(その條を見よ)と同義又は同緣の語である。

***もんちゆうじよ** (女夫池)
〔問注所〕鎌倉幕府に置かれ、室町幕府にもあつた。詐僞遺失等の審判、領地の境界論、貸借等に關する訴訟を掌る役所であつて、職員に執事・寄人などがあつた。

もんどづかさ (酒呑童子)
〔主水司〕「もひとりつかさ」とよむが故實である。大寶令に、「掌下進二漿水・雜粥一事上」と見えてゐる。

もんぱ 天道知らずのやくたいなし、もんぱちやと呟けば(唐船噺)
「まんぱらう」(孟八郎)の訛略であらう。亂暴な野郎の意。碧巖集・第二十八則著語に、「孟八郎作二什麼一」。(「もんぱ」に似た支那語に忘八(Wang-pa)といふがある。人を罵詈する語で、馬鹿又は馬鹿野郎の意にいふ)。

***もんび** 繁昌の地の紋日さへ、更けて淋しき五月闇(生玉) 二階座敷の三味線に、ひかれて立寄る客もあり、紋日遁れて顏隱し、仕過しせじと忍び風(天網島) 揚屋の餠搗・紋日の長持・お客に太鼓持(夕霧)
〔紋日〕「ものび」(物日)の轉である。紋日と書くはその音によつた當字である。祝のある前日を物前などといふ物で、紋日即ち物日は祝の日をいふ。遊里の紋日は所によつて違へども、概して正月初の數日、二月初午、春秋の彼岸、七月盂蘭盆、十一月煤拂、十二月餠搗節分、庚申日などは、何れの廓でも紋日としたのである。西遷與志撰・茶傾腹立顏(寶永五年刊)二之巻に「紋日年中行事。正月元日・二日・三日・十日・十五日・十六日、二月彼岸入・中日・けちぐわん・十五日・二十二日、三月三日・四日、四月八日、五月五日・六日、六月朔日(愛染)・二十一日(稻荷)・二十二日(座摩)・二十五日(天滿)・二十九日(住吉)、七月十五日・十六日、八月十五日(名月)・彼岸入・中日・けちぐわん、九月九日・十日・十三日(名月)、十月十四日(十夜)、十一月なし、十二月すすとり・十三日ことはじめ、庚申のけて年中の紋日三十三日」と見えてゐる。これは大阪廓の紋日を擧げたものである。遊女は馴染客にねだれて衣裝を作り、紋日に着飾つて全盛を競うたものである。また紋日には遊客から揚屋・遊女などに祝儀を遣つたのである。(色道大鑑(延寶年中成、寫本)時節門に、「紋日。物日の事なり、家家の紋のやうに定まりたる事なるに依て紋日といふ」。異本洞房語園・上に、「紋日。小袖の紋は五所なれば、五節句・祝の日を紋日といふ、吉原にてはもの日といふ、紋日は京の言葉」と見えてゐる。もんびの語義の說いかが)。夕霧阿波鳴渡のこの文に「もん日の長持」とあるは、遊女が揚屋へ招かれた時、女郎屋より長持を持たせやることである。澪標(寶曆七年刊)長持運送並調度通用の條に、「一太夫は大長持、一天神は中長持、一引船は小長持、右大中小三通り有、各女郎屋の定紋をしるし、内には夜具並料紙宮亂箱其外手箱等の物品品入、女郎極まりたる揚屋へ女郎屋より持せやる也、此長持往古より有來る事なりしに、享保九辰年類燒して、今は大風呂敷に包み揚屋へ通ふ也。

や

***やいとぎやう** まそつと遊んでやいとぎやうの相伴せうか(今宮)
〔灸饗〕灸をすゑた時に食ふもので、霰(餠を采目に刻んで炒つたもの)と熬米と熬豆(黑豆を熬つたもの)とを交へ、これに山椒または生薑を加へ、砂糖で固めたものをいふ。關西地方でこれを「おいり」といふ。今宮心中のここの文に、「それ二郎兵衞菓子盆、霰、熬豆、山椒に」、とあるは卽ち灸饗のことを云うたのである。松屋筆記・卷二に、「灸治するとき灸より血出で迸る事あり、これ人神のめぐりにあたれる也、如何なる藥を用ゐても不レ治必ず死す、但干飯と黑豆を煎りたるを嚙みて傅くれば忽ち癒ゆ、實に奇方也、古來より灸饗に豆米煎を用ゆるはこの用意なるべし」。「やいとばし」の條の畫を見よ。

やいとのばば それ二郎兵衞菓子盆・霰、熬豆、山椒に、小蒲團敷けと、・袷くるりと灸のばば、前な後に目は見えず(今宮)
〔灸婆婆〕「やいと」は燒處の義、灸をいふ。「のばば」は附添へたまでで意味があるのではない。「こころえたろべのばばさま」を見よ。

***やいとばし** 前な後に目は見えず、何をせうとも頷いて、くすりくすりの灸箸、痴話の便りの薄煙(今宮)
〔灸箸〕揉艾を挾んで灸する處に附着せしめるに用ゐる箸。


(傾城禁短氣所載)
〔しばといや〕

桃の酒 焦ろる胸のひら野屋に、春な重ねし雛男、一つなる口桃の酒（曾根崎）

三月三日雛祭の節句に供へる酒で、桃花の枝を瓶子に挿す故にいふ。ここの文は雛男といふた縁で桃の酒といひつづけたのである。次條をも見よ。

桃の節句（本朝曾我）

陰暦三月三日の節句、雛祭の日。虚實柳巷方言・卷中、三月の條に、「三日はひなの節句なり、もゝの酒にひしのもち、女子のせつく初め」。

＊ももよ この百夜よなう姿や小町、お前は少將で車の榻にと抱付く（最明寺殿） 百夜通ひ車のしじみ川、變る瀨枕沈む淵（二枚繪）

〔百夜〕深草四位の少將が小野小町に懸想して、百夜通ふを約したといふ故事に據つたのである。「せうしやう」を見よ。「この百夜よなう」は百夜に股をいひかけたのである。「車のしじみ川」は車の榻に蜆川をいひかけたのである。

もやくる 後の月からもやくり出し、おして祝言させうとある（曾根崎）

「もやつく」に同じ。次條を見よ。

もやつく 魂すゑて返事せろともやつく後に小七郎（靑庚申） 吾妻が客を斷つたと町のもやつき（淀鯉）

紛擾の義。ごたつく。次條を見よ。「もやつき」は轉成名詞。

＊もやもや 後日のもやもや喧しし、ちよと親子に手形させ（今宮） 兄御の行平樣とこの我らと、ちよつとしたもやもやが互に深うなつて（松風） 皆に氣を付けられて、はやもやもやと腹が立つ（夕霧） これ太四郎殿、せんよ殿とのもやもや知り拔いて居るぞや、今日も今日此方から門を出て行くと、せんよ殿を呼びに來る（酒呑童子）

紛擾。紛紜。胸氣不爽なること。こそこその情事。（靄を「もや」といふのも霧深くもやもやとしてゐるからであらう）。御前義經記・卷八に「このもやもやは此客から起つたことぢや」。美景蒔繪の松（寶永五年刊）卷五に「二階のもやもやは靜まつたか、さればおまへがたの聲を聞いて、沙汰なしに逃げて行かんした」

もゆら 脫ぎかけ姿玉襷手玉もゆらに染出す（融大臣） 手染の錦手もたゆく、手玉もゆらに染小袖（融大臣）

玉の搖れて鳴る音をいふ。萬葉集卷十九に「小鈴毛由良爾」とあつて、略解に「もゆらは眞ゆら也、もの詞下へ付べし、ゆらはすべて玉の鳴る音をいふ」と見え、雅澄は「小鈴もゆらゆらになり、毛は語辭なり」というてゐる。ここの文は、手を使ふので手飾の玉が搖れて鳴る意。後拾遺集・秋下の部の歌に、「手玉もゆらに衣うつなり」と見えてゐる。（「もえる」（燃）も光ゆらづく義であらう）。神代紀に「瑲瑲」「玲瓏」を共に「もゆら」と訓んである。

＊もらかす この布片があらば、一尺程貰かす事はなるまいか（持統天皇） 乙のおでんめは二つ子、乳が無うては不便に存じ、死んだ翌日金付けて餘所へもらかします（女殺）

〔貰〕貰ふ。遣る。この語もと、貰ふやうにする義で、でかす（出來）、ねかす（寐）、やらかす（遣）などいふの類である。置土產（井原西鶴撰）卷二、憂きは餠屋愁きは碓ふみの條に、「淋し慰みに飼ひける三毛の、男猫を見付け、これさへ餘所へもらかしける」。

＊もらひ 夕の座敷の初對面、今日のもらひを言ひ直す（三世相）

〔貰〕招かれて往く約束。三世相のここの文は、今日揚屋から傾城に來て貰ふやう先約されてゐたのに、昨夕の初對面の客の居續けに其傾城が客を外すことが出來ないで、今日の揚屋との約束を斷らねばならぬとの意。

＊もりひさ 大慈大悲の佛前と、命助くる盛久や（兼好）

〔盛久〕平家の侍主馬判官盛久のこと。平家滅亡後盛久因はれて鎌倉に下り、由比が濱に引かれて仕置の座に就いたが、盛久日頃觀世音を信仰した御利益によつて、斬られようとした太刀段段に折れて遂に放免されたといふ。このこと長門本平家物語及び謠曲・盛久に見えてゐる。兼好法師物見車のこの文は、その有樣を描ける繪馬をいうたのである。

もろこ いささ小海老の連れ諸子、誰が聲立てて追川や（以呂波）

〔諸子〕諸子鮠の略。近江國諸子川に產し、體は紡錘形をなし、背黑く腹白く、體側に三條の黑線ある小魚。

唐土人の孝行 昔にも似ぬ花橘、唐土人の孝行も想ひやらて不便なり（扇八景）

唐土二十四孝の一人なる陸績の孝行をさす。「りくせき」を見よ。

もろたづな 心の駒の諸手綱、ふさが思ひの通ふもや（重井筒）

〔諸手綱〕馬のくつわに附けたる左右の手綱。

＊もろはく 石五器に一二杯、肝のたばれへ諸白ないつかけた薩摩二才（博多）

〔諸白〕麴も米も諸共に精げたのを用ゐて釀すよりの稱。醇酒。和漢三才圖會卷百五、酒の條に「近世所レ釀法亦厚薄有ニ異同一、今以ニ八斛釀六斗五升水之法ニ記ニ于左一、乃醇酒俗云ニ諸白ニ是也、或有下水七斗餘至ニ八斗一者上、乃醨酒俗云ニ片白一」。

もろまゆ もろまゆつけて左折が所望とある（烏帽子折）

〔諸眉〕立烏帽子・風折烏帽子に、前の中とがりたるひだの下に少し高くおし出した所がある、これを眉といふ。左右兩方に眉あるを諸眉といふ。

もろみ 酒はもろみの手作り（酒呑童子）

〔諸味〕釀して未だ漉さぬ酒。濁酒。和訓栞に、「もろみ。和名抄に醪をよめり、醞みの義なり、童蒙頌韵に醞もよめり、今造釀する者の醬の類にも此名をよべり、酒にいふは今俗に濁酒とするもの也」。

＊もんさく 三味線・鼓弓・淨瑠璃・もんさく、のら一卷の諸藝なら（嫗山姥） もんさく系圖（雪女）

〔文作〕即座に可笑しみある文句を作ること。又その文句。好色一代男（天和二年刊）卷之七・末社樂あそびに、「興に乘じてまだ所望所望といふ程に、後は大道に出て文作、何れか腰をよらざるはなし」。西鶴置土產（元祿六年刊）卷之五、女郎がよいといふ野郎がよいといふの條に、「夢川大六・年十五、酒振幾人樣の御相手にもなり申候、文作の三味線能く彈き申候」。「もんさく系圖」とは、座興に作つた滑稽な系譜をいふ。

＊もんじゆ 死ぬるより外文珠の智惠にも能はぬ（女腹切） 文珠菩薩の獅子の駒（會稽山） 文珠は獅子（國性爺後日） 抑愚僧先年入唐渡天、文珠の淨土に至り（嵯峨天皇） たなび

やくしやひやうばん 煙管・團扇・煙草入、役者評判・扇賣(今宮)

〔役者評判〕貞享・享保頃歌舞伎役者の評判を瓦版印刷にして、之を携へて坊間を賣步いた、所謂瓦版讀賣の役者評判記である。其文は簡單で歌謠的に作り、深編笠を被り、二人連節に手拍子を取つて謠ひつつ賣つたものである。「ゑざうし」を見よ。

やくしやものまね うかれぞめきのあだ淨瑠璃、役者物眞似・納屋はうた(天網島) 役者物眞似・地の物眞似、小唄・淨瑠璃・口てんがう(女殺)

〔役者物眞似〕俳優の身振聲色を眞似ることをいふ。元祿享保頃遊冶郎・幇間の類の者どもが役者の物眞似をすることが流行した。井原西鶴撰・胸算用(元祿五年刊)卷之四、亭主の入替の條に、「不斷の下り舟には世間の色ばなし、小唄淨瑠璃は〻物語、謠に舞に役者の眞似、一人も口叩かぬはなかりしに」。寛濶平家物語(寶永七年刊)卷五に、「役者物眞似・惡人形・踊・輕業をみづから仕る大盡を粹かなと覺え」。傾城禁短氣(正德元年刊)卷之六に、「總じて今時の太鼓持は淨瑠璃小歌のはした物をおぼえ、役者の物眞似の少し似移るを元手にいたして御機嫌とりにまはらるる」。(「ものまね」の條をも併せ見よ)。

***やくたい** 降つても照つてもお先手は八つ立ちとのお觸、荷を締めるやら何やらやくたいのあることか(會稽山) やくたいもない氣を持つまいぞ(女腹切) 庭で下女がやくたいの目が繁ければ(曾根崎)

「徭體」であつて、體は無體などいふ體と同じ語であらう。「やくたいもない」を略して「やくたい」とばかりもいひ、「役にも立たない」「らちもない」「益もないのにかれこれと思ひ成す」の意にいふ。(「やくたい」は藥袋だとの說もある。書言字考節用集・言辭門に、「無益藥帶」。和訓栞に、「やくたいなし。醫師にして藥袋なくては人を療すべからず、よて假て所詮なき事にいふといへり」。浪花方言(文政二年成、寫本)に、「やくたい。惡しきことなり、埒もなきことなり」)。

***やくばらひ** 節分の夜厄拂と申して民間には行はれ、上つ方には御存じなし(雪女)

〔厄拂〕災厄を拂ふ義。往時節分の夜、家家を廻りて人人の求めに應じ、厄拂の祝詞を唱へて災厄を禳ひ、錢などを乞うた一種の賤民である。この祝詞は歲々新奇な詞を作り出すので、種々あつて定まつてはゐないが、終りの文句には「西の海へさらり〳〵」といひ、「こきやこう」で終るのが常である。西の海卽ち太陽の歿する方面に災厄を禳ひ去り、こきやこう卽ち鷄鳴は、東天明け方になるを意味し、幸福の來るは太陽の上る方面で、鷄鳴は運の明かるくなるを祝福する詞であつて、禁裏御方違の時にも鷄鳴を唱へて還幸あらせられる例である。巢林子文中の厄拂の祝詞は雪女五枚羽子板に、「やあら目出度や、此方の御壽命申さば鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が八千歲、……福德圓滿、惡魔外道打拂うて西の海へさらりさらりさつさこきやかう」、「お厄拂お厄拂、厄つつ拂ひ申すべい、がいに目出度い此方の御壽命語るべいなら、……惡魔外道打拂つて西の海へ打投げろこつきやつこう」と見え、寬濶平家物語(寶永七年刊)卷之三に厄拂の詞を載せて、「あら目出度や、こなたの御壽命申さば鶴は千年龜は萬年、浦島太郎は八千歲、とうばらさす(東方朔の誤)は九千歲云云」と見えてゐる、よつて以てその詞の大體を知ることができる。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷七に、「厄拂。節分夜にありく、拂を望む者煎大豆に錢包みて取らすれば、壽命長久のすいた事を高らかにわめく只二時ばかり、世上の忙しきことと限なし」。(序云、雪女五枚羽子板のこの文に、「扨また東の果にては斯くこそ厄を拂ひけれ」とありて、厄拂の詞を書いてゐるが、その詞の拙さ、江戸に來たことのない近松には是非もないことである)。「さいもん」の條の書を見よ。

やぐらもちだし (酒呑童子)

〔矢倉持出〕相撲四十八手の一。四身に渡つて上手に敵の褌を取り、上手の方の足を敵の内股へ蹴込む心で體を下手の方へ廻しながら、土俵外に持出す手。

藥王木 「耆婆童子云云」を見よ。

***やぐわん** おのれが王様になつて長歌を后にするとは、何かやぐわんを起したか、叩割るやら打毀くやら(持統天皇) 伯父のやぐわんが來ぬさきに連れて往て下されて(持統天皇) 遣手の鍋が藥鑵聲(酒呑童子)

〔藥鑵〕藥鑵は早く熱して水の沸き立ち易いから、人の癇癪を起して熱し易いのに喩ふ。「藥鑵聲」とは、石原に藥鑵を引く時の音のやうな騷がしい聲、卽ち癇癪聲をいふ。桂川連理柵(淨瑠璃)帶屋の段にも「しをしを歸る我が家の內、見るより母はやくわん聲、五丁か十丁ある屋敷に半日の上かかつて、內の事は何になるぞいの」と見えてゐる。

***やげん** 腰に一本藥研鍔(薩摩歌) 藥研鍔の二尺一寸するりと拔きて(艳狩) 殿樣方はふッとつつに出逢うて、大きな腹を持ちかけられまい物でもない、この指二本でおろす程にける程に、藥研婆と申します(蛙合戰)

〔藥研〕藥料を粉碎する具で、鐵または銅で舟形に造つた器の中に藥料を容れ、別に藥研車(扁圓形で周圍の尖つた鐵又は銅器)を以て粉碎するもの。「藥研鍔」とは、藥研車の形の鍔。「藥研婆」とは、胎兒を揉み墮胎すことと恰も藥研で藥料を粉末におろすがやうな婆との洒落である。

***やごとなし** やごとなき上﨟の(反魂香) ふびんなりと宣ひて、落淚ありし大將の情の程ぞやごとなき(加増曾我)

「やんごとなし」(無止事)の略された語。捨置かれないの義より轉じて、貴い、恐多いの意にいふ。眞名伊勢物語に貴人をやんごとなき人とよんである。

***やごろ** 既にやごろと見えし所へ(百日曾我)

〔矢頃〕矢をはなつ程合。矢を射て目的物に達しる距離內に入ること。

***やこゑのとり** 既に五更の八聲の鳥(大經師) 八聲の鳥も告げ渡れば、さあさあ夜明けに間がない(宵庚申) 鐘も鳴り鳥も八聲に月もはや影傾きて(兼好)

〔八聲鳥〕鷄をいふ。鷄は夜明け方屢鳴くより八聲といふ。八は彌の義、八千代などいふ八と同じ語である。

***やさけび** 鯨波の聲矢叫びに怯れて(雪女)

〔矢叫〕矢答ともいふ。矢を射て目的物にあてて應または嗚呼と聲をあげること。平家物語

*やうがう　さながら神も影向し、佛も來迎あるばかり（酒呑童子）　福神だちの御影向、一に市姫辨財天（雪女）　諸願も成就の神影向の枝とかや、請・副は殘んの菊籬の下に手折りて（聖德太子）

〔影向〕本體あつて、其影をある一面に對向せしめるの義。神佛の影の應現することをいふ。「影向の枝」とは、立花法式の語であつて請をいふ。「うけ」を見よ。

*やうきひ　おれは惡う合點して楊貴妃の幽靈かと思うて怖かつた（國性爺）

〔楊貴妃〕名は太眞、貴妃は女官の名、絶世の美人である。唐玄宗皇帝天寶四年宮に入る、帝・貴妃を寵愛して政務を怠り、遂に安祿山の大亂を誘致して、天寶十五年貴妃馬嵬驛で殺された。

やうきひざくら　異國の美人と名に高き楊貴妃櫻を勸請ある（賀古教信）

〔楊貴妃櫻〕櫻の一種。俳諧歳時記栞草に、「楊貴妃櫻。興福寺の僧玄宗といふもの愛せし故名とす、一說に此花大輪にして紅色を含み海棠に似たり、故に海棠の睡りといへる故事より名とすともいへり」。松岡玄達撰・櫻品に、「楊貴妃、怡顏齋曰、小江戸に似二重瓣中輪也、花瓣の底あかし先白し云云」とあつて、この櫻のことが詳說してある。

やうきやう　二十四孝の楊香は、孝行の德によつて自然と遁れし惡虎の難（國性爺）

〔楊香〕支那二十四孝の一人である。十四歲の時にその父が虎に啣へられたのを、楊香竄進して虎と組み、以て父を救つたといふ。二十四孝（光悅本）に、「楊香はひとりの父を持てり、或時父と共に山中へ行きしに、忽ち荒き虎にあへり、楊香父の命を失はんことを恐れて、虎を追去らんとし侍りけれども叶はざる程に、天の御憐みを頼み、庶幾くは我が命を虎に與へ、父を助けて給へと、志を深くして祈りければ、さすが天もあはれと思ひ給ひけるにや、今まで猛き形にて取食はんとせしに、虎俄に尾をすゑて逃げ退きければ、父子共に虎口の難を免がれ、恙く家に歸り侍となり、是偏に孝行の志深き故にかやうの奇特をあらはせるなるべし」。

*やうきゆう　（五人兄弟）

〔楊弓〕玩具の弓で、長さ三尺ばかり、坐して射るもの、的の距離七間半の定めであるといふ。庭訓往來に永井如瓶の註に、「楊弓。或說云、楊貴妃眷遊用二小弓一人是謂二楊弓一的面四方以二桐木一作也」と見え、伊勢貞丈の說に、「楊弓は唐の楊貴妃より始まるといふ說あれども出所詳ならず、其始を知らず、本は小童の戲に楊の小枝を弓に作てもてあそびとせしより起りたる事などにもやあるらむ」と見えてゐる。

樣子ある夫婦　彥九郎殿とは樣子ある夫婦ゆゑ、嫁入の時の嬉しさは譬へん方もなかりしが（堀川波鼓）

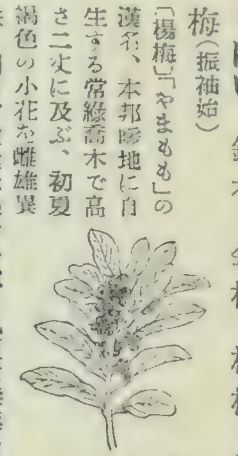
幼馴染の時から纖仲で夫婦となつた者。

*やうでう　螺鈿の手笛にやうでう一管（孕常盤）

「ようでう」とも書いてある。横笛をいふ。蓋し「わうてき」（横笛）は王敵に通じるを忌みて「やうでう」といふたものか。義經記に「松風と名づけたるかん竹のやうでうを持」。鶯鶯記に、「横笛をやうでうと云ふこと、或人云昔朝鮮人對馬に來て横笛をやうでうといひしを、對馬人聞傳へて今にいへるなり」。山田以文撰・錦所談に、「ようでう。わうてき（横笛の音讀）と云へば其音王敵に通ずるを以ての義歟、猶後考を俟」。

やうばい　銀杏・金柑・楊梅・寒梅（振袖始）

〔楊梅〕「やまもも」の漢名、本邦暖地に自生する常綠喬木で高さ二丈に及ぶ、初夏褐色の小花を雌雄異株に開き、秋紫赤色で多數の乳頭狀突起を有する球形の果實を結び、食用に供せられる。



〔やうばい〕

やうらく　硨磲の瓔珞・眞珠の華鬘（松風）　やうらくさいなんの御衣かんばしく（聖德太子繪傳記）

〔瓔珞〕珠玉を連ねて身裝の飾とするもの。西域記に、「在レ頭曰レ瓔、在レ身曰レ珞」。「瓔珞細輭」の細輭は、地の細かくしなやかなもの。謠曲・春日龍神に、「瓔珞細輭の衣を脫ぎ」。

やがらぜめ　少しもあらがはば矢幹責鐵砲拉ぎ（女夫池）

〔矢幹責〕拷問するに矢幹を持つて打擲すること。

*やかん　さもあれ狸野干のわざもあり（反魂香）

〔野干〕狐の異稱。延寶八年刊の節用集大全に、「野干」に「キツネ」と振假名が附けてある。

やき　暫くあつて黑栗毛の其たけやきばかり、電光畫いたる蒔繪の鞍（源義經）　外道月毛・婆羅門栗毛これへこれへ、あつと答へて引出す、其丈八寸餘り（會稽山）

〔八寸〕馬は身長四尺を標準とし、それ以上を何寸といふ。八寸は卽ち身長四尺八寸ある大馬である。

*やぎり　所所の井樓矢切を附けて、横矢繁くぞ構へける（用明天皇）　入道・門の矢切に立つて（雪女）　安宅の關二重の矢切二重の柵、貫の木海老錠しつととおろし（傑靜）

矢切または矢錐など書けども、蓋し屋限の義であらう。塀・門などの上に作り附けた袖垣をいひ、忍返のことである。太閤記・山中の城落去の條に「大杉の本へ走り着き、矢切の上へ勘兵衛尉乘上り、內を見こみ候へば」。關八州古戰錄・小田原勢沼田森下城責の條に「攻寄せ矢錐に火矢を射かけしに、城兵これを消さんとし」。男色大鑑卷二、傘持つてもぬるる身の條に「總八柏の楯矢切を飛越す面影を見付け給ひこ」。

やく　文には嘘を書き習ひ、牀にて人なやき習ひ、ねぶたくとも居睡らず（百日曾我）

〔燒〕人の心にかなひ愛されるやうにする。蓋し燠に入れば燒けるから、燠をお氣の意にとつて、燒くをお氣に入るの隱語としたのである。

*やくしにようらい　おろす駕籠からぬつと出た炮烙頭巾の醫者殿は、藥師如來の引合せつぼ屋の客と脈をとる（女腹切）　十二日ムム藥師如來の緣日（女殺）

〔藥師如來〕藥師瑠璃光如來の略。大醫王佛ともいひ、東方淨瑠璃國の敎主である。立像も坐像もあつて、瑠璃の壺を持ち醫藥のことを掌られてゐる。毎月十二日は藥師如來の緣日である。南留別志に、「八日・十二日を藥師の緣日といふは、やといふ訓の八に通ふと十二神とによりてなり」とありて、十二神は勿論藥師守護の十二神將のことであるが、この說は非であつて、十二日を緣日とするは藥師如來十二の誓願の緣に據つたものであらう。（長町女腹切のこの文に「壺屋の客」といへるは、藥師如來の瑠璃の壺の緣より壺屋といひ、又「脈を取る」とあるも醫者の緣によつたものである）。

方、思ひ思ひの願によつて（五人兄弟）兄祐成。時致は矢立の杉の奇瑞を蒙り（加増曾我）

〔矢立杉〕相州鶴岡八幡宮の神木である。風流御前二代曾我（寶永六年刊）五之卷にも、「相州に矢立の杉とてあり、心中に望みある者又心がけの侍この杉の枝に矢を放し、とまるもの其願成就せぬといふことなし」と見えてゐる。曾我五人兄弟のここの文は、その昔鎌倉武士ども平權頭征伐の出陣に云云とあるべきであらう。

***やたのかがみ** 久方の日の神の御影映りし八咫の鏡、これを見ること吾を見る如くせよとの神勅にて（振袖始）

〔八咫鏡〕三種神器の一。村上天皇の天德以後内裏燒亡したこと數回、神鏡も其災に罹つた時のことを大鏡裏書なる村上天皇天曆御日記に記して、「圓規無虧」と見えてゐる。これは崇神天皇御模造の鏡ではあれども、八咫鏡の圓形であることはこれによつて證される。咫は支那尺八寸の長さをいふ。親指を内にして手を並べた形を八咫と云つたのであらう。八咫鏡を八花形の鏡とするのは誤であらう。天照大神御手に寶鏡を持ち給ひ、皇孫に御授けになつて、「吾兒視二此寶鏡一當レ猶レ視レ吾、可三與同レ床共レ殿以爲二齋鏡一」と宣はれたことは神皇正統記にも見えてゐる。

***やつか** 篦廻り太く矢束も抜群（會稽山）

〔矢束〕矢の長さは束（手のにぎり）によつて計るより、單に矢のことを矢束ともいふ。保元物語・軍評定の條に、「弓手のかひな妻手に四寸のびて、やつかを引くこと世に超えたり」。

やつがしら 今日晝過ぎ八つ頭、鎌倉より二の宮の太郎殿といふ人早打のお使（會稽山）

〔八つ頭〕八つ時（午前または午後の二時）の上刻。「とき」の條を見よ。

八つか七つの芝居

「ここは竹田か云云」を見よ。

やつこあたま 奴あたまを振りながら、母様怖いと泣きゐたり（重井筒）

〔奴頭〕頂額の髪を剃落し、僅に頂後の髪を殘して鬢を短う結うたのをいひ、下部下男などの結髪である。

やつし やつしは甚左衞門・幸左衞門が思案ごと（女殺）

〔俏〕俏形の略。芝居にて遊冶郎又は美男子に扮するものをいふ。

やつぢ 三味線の革八乳にも負けは致しませぬとぞ申しける（松風）なつく八乳の繼三味線、心くらべの連彈に、思ひの色をしのびごま（女腹切）

〔八乳〕三味線に張る猫の革に乳房の痕が八つあるもの、三味線革の良品となす。和漢三才圖會・卷十八、樂器類、三線の條に、「其皮皆以二猫革一、八乳者爲レ良、狗子皮爲レ下」。

***やつまたのおろち** 出雲國簸川上鳥上嶺に億萬劫を隱れ棲む八岐の大蛇と申す一身八頭の大蛇奪取り（振袖始）

〔八岐大蛇〕一身八頭の大蛇。日本書紀・神代卷に、「素戔嗚尊自レ天而降、到二於出雲國簸之川上一、……有二大蛇一頭尾各有二八岐一、眼如二赤酸醤一、松栢生二於背上一、而蔓二延於八丘八谷之間一、及二至得レ酒頭各一槽飲醉而睡、時素戔嗚尊乃拔二所レ帶十握劍一寸二斬其蛇一、至レ尾劍刃少缺、故割二裂其尾一視レ之、中有二一劍一、此所謂草薙劍也」。（序云、太古の世は人智簡單素朴で、草木皆物を言ふなどと、人類を動植物の名などに喩へて呼んだことが多かつた。八岐大蛇は八人組の惡徒をいうたものであらう）。

やつまと 舞樂蹴鞠は珍しからず、笠懸八的などを御覽あるべきか（虎が磨）

〔八的〕八所に的を立てて往來騎射するをいふ。ゑぼし打草子に、「御門には十町の馬場をやつて二町をばのけばばと名付、八所に的を立ててあそばすをば八つ的と名付けて、これは公卿殿上人のわざ、かみのまへは三ちやうに馬場をやつて、三所に的を立ててあそばすをやぶさめと申して云云」。運歩色葉に「八的＝八所立レ的射レ之、高位態也」。

やつめわらんぢ 八つ目わらんぢの徒歩跣足（井筒）頭陀の袋麻衣、鐵鉢を御手に据ゑ、八つ目の草鞋召されれば（孕常盤）

〔八目草鞋〕屠龍工隨筆にも見えて、修驗者などの履く草鞋で、乳が八つあつて、八葉蓮華に象つたものだといふ。

やどちや 十日許り以前に是へ移り、即ち今日宿茶と申して、家主始め相貸家中へ酒をもる約束（蛙合戰）

〔宿茶〕宿で茶を差出す義、轉居した時家主や隣家の人人を招いて饗應すること。引越振舞。

やどまりかなもの 矢止り金物・押附の板・發傳・高紐（女楠）

〔矢止金物〕鎧の胸板の金物をいひ、矢を受け止めるよりの稱。

***やどや** 道中は繰出しの浮き歩み、やど屋入の飛び足、座敷は抜き足靜かに（吉野忠信） あとがやとやいたみへいけ田（氷朔日）

〔宿屋〕「やど」（宿）ともいひ、揚屋（その條を見よ）をいふ。色道大鏡卷一に、「宿屋。同じく揚屋のこと也、をかしき名目なれども、これも揚屋にむかひて用捨の詞也、また揚亭といふ」。心中刃氷朔日のこの文については「あとがやとや」の條を見よ。（序云、宿屋を旅人宿にもいふはいふまでもない）。

***やなぎ** 柳の髪を何故に、浮世恨みて尼が崎（歌念佛） 町の幅さへ細細の、柳腰柳髪、とろりとせいも種油（女殺） 柳の腰は細くとも心は太き女武者（三國志） 僻くや柳の眉かき、はなび紐解け亂るれど、誰かは我を慕ひつつ（小栗判官）

〔柳〕柳のたをやかなるがやうに、みやびやかにしなやかな貌をいふ。「柳の髪」は、女の長く美しい髪を形容していふ。破枕集（寛文三年刊）信之の句に、「松にけふは太夫髪かよ柳がみ」、砂金袋（明暦三年刊）清貞の句に、「風でわくろ柳の髪や吹返し」。「柳の腰」は、ほつそりとした美人の立姿をいふ。溫庭筠の南歌子詞に、「轉盼如レ波眼、娉婷似レ柳腰」。群芳譜に、「細腰婀娜者謂二之柳腰一」。「柳の眉」は、美人の眉を形容していふ。白居易の長恨歌に、「芙蓉如レ面柳如レ眉」。「眉根かく」は眉根を掻くにて、昔から眉根の痒きは人に戀想され、また戀人に逢ふの兆であると思はれた。萬葉集・卷十一に、「眉根削、鼻鳴紐解、待哉、何時見、念吾君」。井原西鶴撰・好色一代女・卷之三、妖孽寛濶女の條に、「今宵は眉根かきぬれば、好きことにあふべきためしぞと」。常流小栗判官のここの文は、美女が眉根を掻き鼻鳴し、下紐解けて思ひに焦れ亂れなどの意。

に、頼政が鵺を射たことを記せる條に、「えたりやおうと矢さけびして」と見え、夫木抄・信實の歌に、「道遠き那須の御狩の矢さけびに、のがれぬ鹿の聲ぞ聞ゆる」と見えてゐる。

***やざま**　やざまに狹隙間なく、（國性爺）
〔矢狹間〕城の櫓またはひめ墻などに設けた窓で、矢丸を放ち又は外を望見する爲のもの。

やし　弓に靫に矢籠矢箱（堀川波鼓）
〔矢籠〕「しこ」と訓み、矢を盛る器。武家名目抄・弓箭部に、「矢籠といふは矢を盛る器の總名にして、今世の尻籠といふ物は後代の製作なること推して知るべきなり」。

やしま　（酒呑童子）
〔八島〕謠曲の題名。源平屋島の合戰を義經の物語にして作つてある。脇修羅三番（田村、箙、八島）の一で祝言能に用ゐる。

***やしや**　女房今まで夜叉の、忽ち愛敬柔和の高笑（薩摩歌）
〔夜叉〕梵語 Yaksa 漢譯して捷疾鬼といふ。言應音義・卷三に、「閱叉或云二夜叉一皆訛也、正言二藥叉一此譯云二能噉鬼一謂食二噉人一也、又云二傷者一謂能傷二害人一也」。法華科註に、「夜叉此云二捷疾鬼一居二海島・空中・天上三處一傳傳相持不レ得レ食レ人、佛初成道、及レ轉二法輪一傳唱上至二梵天一即此鬼也」。

やしやく　抑やしやくは此尾上の松の下蔭に一夏を送る道心なるが（用明天皇）
〔野釋〕僧の自稱、拙僧の意にいふ。釋は釋迦 Sakya の略で、佛弟子の意。

***やしゆだらによ**　佛も元は凡夫にて彼の耶輸陀羅女の妹背の中（五人兄弟）
〔耶輸陀羅女〕「やしゆだら」は梵名 Yasodhara の訛、拘利城主善覺王の女にして、釋尊の妃となつて羅睺羅を生み、釋尊成道五年の時に出家して尼となる。

***やしよく**　其間に小萬といふおやまを夜食に食ひたる（丹波與作）
〔夜食〕夜な夜な情交を温めることの意にいうたもので、男女交合のことにいうた例は色道後日男の中にも見えてゐる。巢林子作娥歌かるたに、「食ひ加減な夜色が來た」とある夜色は淫賣女をさしたものである。

***やしよめ**　やしよめやしよめ京の町のやしよめ（大經師）
「やさめ」の訛。艶しき女といふ義である。この文は萬歲唄に據つたものである。萬歲唄は歲德五葉松（寶曆三年刊）に、「やしよ女やしよ女京の町のやしよめに三千兩、賣つたる物は何何、はまぐりこはまぐりこと、ぐりはまな思案大鯛小鯛のさかな云云」と見えてゐる。「德若に云云」を見よ。

***やじり**　大强盜・小盜かけて家尻・押入・騙・追剝、下七百餘度のはたらき（吉岡染）　此次は段段に巾着切から家尻切（冥途飛脚）　いつそ手をよう巾着か家尻切れとぞ喚きける（女腹切）　待て晩の泊にがんだうつて家尻切つてくれうぞと（孕常盤）
〔家尻〕家後切を略して家後ともいふ。家後を切りそれより闖入して盜賊をはたらくことをいふ。孕常盤のこの文は鷄姦をきかせたものである。

やすらひばな　浮世を忍ぶ柴の戸に・去ぬる彌生やすらひ花一人娘な見失ひ（酒呑童子）　横笛と申す十五歲の我娘、當春賀茂のやすらひばなに參り、それより今に行方知れず（酒呑童子）
「安樂花」鎭花とも書いてある。山城國愛宕郡紫野今宮疫神社の祭禮三月十日に行はれ、上賀茂等の土民笛太鼓で囃し、「やすらにはこよ」と唱へながら踊つた。このこと大寶元年より始まり、春花飛散の時に疫神分散して厲を行ふにより、其鎭遏の爲にこの祭を行つたものだといふ。日次紀事（延寶年中成）三月初十日の條に、「今日安樂花神事辰刻許、上賀茂南上野村土民着二烏帽子素袍一或又爲二異體之粧一而各先聚二一村之總堂一倭俗村里中造二一草堂一常使二僧守一レ之、有レ事則民人聚二斯堂一而謀レ之、是稱二總堂一自レ是先詣二光念寺北上御前社一各異口同音唱二安樂花一太鼓並横笛助二其節一然後往二大源菴社下御前社一各作二踊躍一而後歸二上野村總堂一自レ是於二第一庄屋前一踊躍各歸レ家、……又上賀茂梅辻岡本河上三箇村土民詣二今宮一各作二踊躍一如二上野村一然後各歸二賀茂一則於二社務及每二社司之家一作二踊躍一……傳言春時多疫癘行、今宮疫神也、故作二踊躍一而勸二神靈一祭レ之者也、云云」。安樂花祭に謠ふ唄は、結耗錄（松岡玄達撰）卷之上に出てゐる。

やせかくし　紅段の押懸三繋、虎の皮のやせかくし（源義經）
馬の後鞦の上に覆ふ物。本朝軍器考卷十二、鞍韉類に、「太餧やせかくしなどいふ物の馬の後鞦の上に覆ふ物あり、是も古には聞えず、又文字もさだかならず、昔の物に太於保比といふ物共はありけり、指懸にいふ所は手覆といふ義也、鞍覆の左右の端の垂れたる所をいふは、垂覆の義なるべし、さらば此の物をも垂覆の義を取るべしや、（一說此の物を昔はやせがくしといひし、多於保比山といふに隱れて八瀨の里の見えねば、其の山の名にとりて多於保比ともいふなりと、さもある事にや尋ぬべし）」。

八十縫の白楯　日月の御旗眞先に八十縫の白楯突き立て（振袖始）
八十は楯の數多きをいふ。縫といふたのも縫うて製るからである。楯は釋名に、「狹而長曰二步楯一步兵所レ持也、和名天太天」と見え、兵庫寮式・神楯の註に、「凡長一丈二尺四寸、本闊四尺四寸五分、中闊四尺七寸、末闊三尺九寸、厚二寸、丹波國楯縫氏造」と見えてゐる。白楯は日本書紀・神代下に「又供二造百八十縫之白楯一」とあつて、纂疏に「白木色、大嘗祭時宮門之南立二楯戈一是類也」とあつて、餘り飾なく造れるをいふのであらう。

やだ　日頃やだのある此の嘉平次、さぞ逃げた走つたと評判でござらう（生玉）
よわど（弱所）の約訛であらう。瑕點。缺點。好色擺粟鹿子（元祿七年刊）誰袖の條に、「嘘つくと言はんすれば、ありやうに言うたりとも誠にもさしやんすまいなれど、言はねば身にやだがあるやうで惡うござんす程に言ひます」。綠窓方言考（古寫本）に「やだもの＝これはもと子供のあまえていぢをいふをいふ事より移りたるものなり、まづ上方詞をいはば、これをやんちやといふは、小兒のいぢを言ふ時はいやと言ふをいやんいやんといふなり、仍ていやんぢやいふをやんちやといへり」。

***やたけ**　菜やたけに思うても（反魂香）　心はやたけに存じても（鑓權三）　やたけ心の武夫も親子のあはれな思ひやり（用明天皇）
彌猛の義、彌勇み進むをいふ。和訓栞に、「やたけごころ。彌猛心の義、俗にやたけにおもふともいへり」。

***やたてのすぎ**　抑相州矢立の杉といつぱ八幡宮の神木、その昔平の權頭夷狄征伐の出陣に上指の鏑を奉つて合戰の勝負を試みしより此

やほやおしち　この火繩の火は何にする、やれ罰當りめ、八百屋お七を見ならぬか、嵳山立てて町へ聞え、下で濟まぬ詮議になれば(卯月紅葉)

〔八百屋阿七〕八百屋阿七が戀人吉三に逢はうとして我が家に放火した爲に、酷刑に處せられたことは人のよく知るところである。

やまあゐ　末摘花や山藍の、振出し染むる雲の袖(融大臣)

〔山蒁〕山監とも書く。山蒁といふ多年生草本植物の液汁を以て染めた青色の染色。「まづ初春の空色に云云」をゐ見よ。

***やまうば**　敲き廻りし勢は只山姥の山廻り(薩摩歌)　姫君は扨置き、たとひ餅屋のお福でも山姥と祝言するとても(反魂香)


(和漢三才圖會所載)
〔山　姥〕

〔山姥〕山に棲息する鬼女。謡曲・山姥に委しく記してある。

やまかげちゆうなごん　山陰中納言の家の切方、料理一通りは承り傳へしゆゑ(宵庚申)

〔山陰中納言〕中納言藤原山陰を云ひ、光孝天皇の時の人、四條流料理の方式の祖である。大日本史・列傳に、「藤原山陰。……仁和二年叙ニ從三位一任ニ中納言一兼ニ民部卿一……世傳山陰能割ニ魚鳥一時人稱レ得ニ庖丁術一」。

***やまがつ**　(用明天皇)

山に住む賤しい人即ち樵夫の類をいふ。和訓栞に「やまがつ。山賤とかけり、山縣の人といふ義、つはあづまつのつのごとし」。

やまかづら　時折り折りにはやり行く、山ぞ伊達者の山かづら、引く手かずかず(薩摩歌)

〔山葛〕ひかげのかづら(石松)の異名。ここの文に「山ぞ」といへるは、「源五べどこへ往きやる薩摩の山へ」といふ唄に據つたもので、薩摩の山をいひ、「伊達者の山かづら」といへるは、伊達者源五兵衛の往く薩摩の山を山葛にいひかけ、「引く手かずかず」にいひつづけて、源五兵衛に懸想する女の歔歔の意にいうたのである。

山木が合戰(やまき かつせん)　頼朝はうつぼ木に軍利の工夫を得給ひて、扨こそ山木が合戰に命を免れ給ひしも、このうつぼ木に隱れたる(冷泉節)

源頼朝或夜伊豆の目代平兼隆を山木の塞に攻めて之を斬る、後に大庭景親が頼朝を石橋山に攻めて之を敗る、頼朝逃れて椙山の古木の朽穴に隱れた。

やまこかし　奥州の金山賣つたろ、山賣りの山こかしとはおれがこと(隅田川)

〔山轉〕鑛山・山林などを買うて利を得るやう騙(だま)し、金を出さしめてその金を着服して踏倒すこと。詐欺取財。商人家職訓(享保三年刊)に、「世には金山(かなやま)新田(しんでん)のない事を衒(かたり)ありきて、人をふづくろ山衒(やまこかし)といふえせ者共ありて」。手代袖算盤(享保七年刊)に、「金銀銅の山事をふづくり、材木山を手にとるやうにいひかけて、素人に元手をいれさし、おのれは口をたたいて仕舞ひ、口は身につけ、手足につけてのくを山こかしと申すべきに、何事にてもあれ、だまし取にとりたふすを山こかしといふはいかに、是も理は聞えたり、のぼしかけてつきおとすより、かかる名は出來しとぞ」。

やまごばう　水腫脹滿神、中すに及ばぬ鬼の口とつてかも瓜山牛蒡(振袖始)

〔山牛蒡〕漢名商陸、山野に自生する多年生草本で高さ四五尺に達する、葉は互生し長卵形・長楕圓形或は長倒卵形で大である、花は小形白色で總狀花序に排列し、果實は赤黑色の漿果である、有毒な地下部を漢方にて水腫・脹滿などの藥用に供する。

***やましう**　おみき過して浮浮(うかうか)と、やましうといへば目が見えず(重井筒)　茶屋へいきやろが山しうを買(か)やろが(重井筒)

「山州」または「山衆」と書かれてゐる。お山(その條を見よ)といふに同じ。色茶屋の勤女即ち娼婦をいふ。「しう」は湯女(ゆな)を「呂州」(その條を見よ)、野郎を「野州」などといふ「州」で、「だち」といふ程の意をなす接尾語である。

やましゆ　「やましう」を見よ。

山ぞ伊達者の山かづら　「やまかづら」を見よ。

***やまだち**　幼き身に物具(もののぐ)かため、女も長刀横たへしはムム例のやまだちよな(女楠)

〔山立〕山賊をいふ。徒然草に、「山だちありとののしりければ、……われこそ山だちよといひて、走りかかりつつ斬廻りけるを」。

やまてん　欲界の四王・忉利天(いた)、夫婦枕の夜摩天の契りは抱き合ふと聞く(五人兄弟)

〔夜摩天〕夜摩は梵語(Yama)である。欲界六天の第三天で地上六萬由旬の空處にある。この天光明赫奕として晝夜の別が無いといふ。ここの文は、夜摩天を夫婦枕の夜にいひかけて、夫婦の夜の契りは抱き合ふにいひ續けたのである。「欲界の四王切利天云云」をも見よ。

やまとほのめく　やまとほのめく藝女郎、目錄をこそ讀み上げたり(蛙合戰)

「やまと」は淨瑠璃語り竹本大和太夫の名をきかせたのである。傾城島原蛙合戰のこの所を出語りで勤めた。操年代記に、「竹本大和太夫。竹本座の立物。此人生國は和州田原本の人なり。……今の淨瑠璃を聞くに、おとし一流かはりおもひ入にあてん事を第一となさるる故見物のうけよし、例へ一言はば嵐三右衛門仕たしに同じ、何所やらびらついて又しやんとした所もあり、地ごとふしごと藝に應じ、うれひ事あはれに又たかしき筋あり、是其身其音曲の癖あるものなり、就中世話事よし、云云」。

***やまのかみ**　我も岩木にあらねども、内に殘せし山の神、めつたむしやくしや悋氣する(關八州)

〔山神〕妻を嘲りていふ語。蓋し字鏡集に「魑」を「ヤマノカミ」と訓んである。取り亂した妻が怪物のやうに醜いといふ意で、妻を嘲っていふ稱となつたのであらう。(一説に妻を奥といひ、おくはいろはの内やまけの上にあるによつて、やまの上(かみ)といふはいかが)。狂言・花子に「内のやまのかみをだまして暇(ひま)を貰うた」。

やまばといろ　山鳩色の御衣手づから下し賜はりし(嵯峨天皇)

〔山鳩色〕青味を帶びた黄色の染色を云ひ、藁草・紫草・灰等で染めると云ふ。

***やまぶ**　珍しいお山ぶ、こなたは見知つた稲荷殿、妹が病氣禱の爲か(女楠)

「やまぶし」(山伏)の略。山に臥し野に臥して修行する義。山居の僧を云うたのが後には專ら修驗家一流の稱となつた。天台宗の山伏は

＊やなぎ　關白重ねて勅を蒙り、柳の五衣着たる官女を誘ひ（花筏）

〔柳〕表の白くて裏の青いのをいふ。夏季はこれを「卯の花」といふ。（ここの文に五衣とあるは、女官などの衣の五枚重ねたやうにしたもので、その重ねやうに櫻重ね・梅重ねなどの名目がある、また五重でなくとも多く重ねたのを五衣といふこともある）。

やなぎすすたけ　たよたよと召した姿の柳煤竹藤鼠（融大臣）お内儀は結構者、やなぎすすたけにやつてぢやが（重井筒）

〔柳煤竹〕染色の名、竹の煤けたやうな赤黑色を煤竹といひ、煤竹に青みの加はれる色を柳煤竹といふ。諸藝小鏡（貞享三年刊）萬染物の條に、「すす竹─下地をねずみに染て、上をも皮のせんじ汁にて染る也、色をこくしたき時は下染をこうし、上染をいく度もすべし、ほす時にしぼるべからず、むらに成也」。西鶴の胸算用・卷三に、「おまつお仕着は定めて柳煤竹に亂れ桐の中形でござろ」。融大臣のここの文は、たよたよと柳の姿を、柳煤竹の染色名にいひつづけたもので、染色盡の唄（「まづ初春の空色に云云」を見よ）には、「召した姿の柳染、鱶を煤竹藤鼠」とあつて、柳染と煤竹染とになつてゐる。心中重井筒のここの文は、内儀は夫に反抗しないで柳のやうにうけながし、煤竹のやうに赤黑くなつて働くをきかせたものである。融大臣・重井筒ともにここの文は染物屋の染色盡である。

＊やなぐひ　（扇八景）

〔胡簶〕上古・矢を盛つて帶びる器をいふ。中古・精巧に作つて箙といふ。胡簶を壺の形に作つたものを壺胡簶といひ、平たく作つたものを平胡簶といふ。平胡簶は多く用ゐなかつた。

やばたい　野馬臺とやらん唐土の書に、絲を引いて文字を導き日本の嘗をあらはし、蜘蛛かかつて僥來ると云ふ本文もありと聞く（國八州）古には安倍仲麿渡唐してやばたいの詩をよみ、日本の名を揚げしとかや（以呂波）

〔野馬臺〕撰者詳でない。按じるに本邦僧侶の作であらう。書中に吉備公入唐の時に唐人その才力を試みたことを載せてあるが、この記事も虛構である。この書寬永二十年の刊本は長恨歌・琵琶行と合綴してある。野馬臺は蓋し大和の音借字であらう。漢書・東夷列傳に「大倭王居二耶馬臺國一」と見えてゐる。日本紀に「苔巴」を「と」と用ゐてあるから、「臺」をも「と」に用ゐたのであらう。今の支那音は耶馬臺を「えへまたい」（Yeh-ma-tai）と讀む。「絲を引いて文字を導き云云」をも見よ。

やはたごばう　あの旅人は京の八幡の生れやら、足にごんぼの毛がむくむくぢや（丹波與作）

〔八幡牛蒡〕山城國綴喜郡八幡山の東の園村から産出する牛蒡をいひ、名物である。雍州府志（貞享三年刊）六に、「牛蒡。八幡山東園村産爲二名産一、專稱二八幡牛蒡一、園村去二八幡一半里許、元社家大臣氏之所レ住也、……一說八幡園牛蒡非二園村一、而社人家園之所レ種者也」。西鶴の萬文反古・卷一に「八幡牛蒡三把」。

＊やはら　枠の時よりやはらあてみを稽古して（大經師）

〔柔〕柔術。和訓栞に、「やはら。柔術などいへり云云」。

＊やはんらく　（天鼓）（三國志）

〔夜半樂〕雅樂の一、平調樂の曲名。文獻通考に「明皇自レ州還二京師一、擧レ兵夜半誅二韋后一、故作二夜半樂・還京樂一」。

やぶいり　歸りこんどの藪入は女夫連れでと約束の、盆正月の十六日を待ち樂しみし我我が（今宮）

〔藪入〕奉公人が主家より休暇をもらつて藪澤の故鄕に歸るをいひ、盆・正月の十六日は藪入の日である。日次紀事（延寶年中成）正月十六日の條に、「藪入。今日農工商各遨遊、洛内外男女或到二兩親家一、又往二姻家一、或詣二寺社一、又遊二山林一、各隨レ意、是謂二十六日遊一又稱二藪入一、言無レ所レ往之人、則入二林藪中一而遊樂亦可、一說藪入元宿入之誤也、奴僕請二暇主人一、歸二我宿所一之義也」と見え、七月十六日の條に、「藪入。洛内外男女遊樂、是稱二藪入一、同二正月十六日一……」と見えてゐる。「盆正月の十六日」をも見よ。

やぶかのもちつき　軒に藪蚊の餅搗もその前垂の名殘かと（反魂香）

〔藪蚊の餅搗〕薄暮軒端に蚊（藪蚊とあれども）が群集して、寄りつ放れつわやわや飛びちがふこと。

＊やぶさめ　笠懸・流鏑馬・犬追物（大磯虎）

〔流鏑馬〕矢馳馬の略轉といひ、或は矢伏射馬の義ともいふ。馬に乘つて馳せながら鏑矢を番ふて的を射る射騎の一種である。射手に定數なく、其裝束は水干・綾藺笠などで、鹿の毛皮で脚部を包み、射場に入つて扇を拔いてこれを背後に投げ、弓に矢を番ひ聲を上げて馬を馳せ、第一の的を射て矢を番ひ、又聲を上げ鞭を揚げて第二の的を射、又かくして第三の的を射て畢る。軍器考・卷四に、「流鏑馬の的も方也、其徑り一尺八寸、串は三尺五寸又は五尺二寸にもする、上三寸六分許が間に的を挿みて紙捻にて二所を綴づる也、大やうは小笠懸の的の式の如し。

やぶしわく　須磨の一木の松が枝に五色の花咲出でしと奏聞す、やぶしわかざる惠みのしるし見て參れとの勅を受け（松風）

「藪し分く」の義。「藪」は草深き處をいふ。「し」は指す意ありて力ある助詞。「藪し分かざる惠み」とは、いかに草深い藪原をも分隔てなしに潤し給ふ恩惠の意。古今集・雜上部の歌に、「日の光やぶし分かねば石の上、ふりにし里の花も咲きけり」。

＊やぶすま　一面に矢襖作つて（雪女）

〔矢襖〕弓に矢を番うて襖障の如く立並ぶこと

やぶぢから　汝も我も若者の十七八のやぶぢから（加增曾我）

〔藪力〕藪の竹を引拔く程の大力。鷹筑波・重繼の句に、「若竹や十七はちく藪力」。

やぼてりがき　「京の吉岡紙子染云云」を見よ。

＊やぼてん　あのむくつけな野暮天めにそもや一夜も添はれうか（兼好）　その上音に聞えた振手の女郎、野暮てんの手業に笑止な、ならぬならぬといひければ（虎が磨）

「野暮天」と書いてあるのが多い。不粹。うつけ者。あはう。西澤與志撰・茶傾覆立顏（寶永五年刊）第三卷に、「やぼてんじんなことはいはぬもの」。俚言集覽・やぼの條に、「野暮と書けり、ヤボ助・ヤボテン又同じ、アホウといふ異名なり」と見え、野暮てんの條に、「凡てテンといふ諺は天上といふ事にて至の義也云云」。按じるに「やぼ」は也茂で「てん」は頂天の義であらう。也茂とは笙の笛の也と茂との二簧が、その管のみで音なきより出た語で、轉じて、世情に通じないこと、無意氣、不粹の意をなしたのであらう。鹽尻・卷九十に「我國今の笙は十七管なるは何ぞや、予曰、十七管といへども、茂・也の二簧は其管のみにして音なし、其餘の十五簧を以て甲・乙兩者の十二調とす、云云」。一說に「やぼ」は野夫であるといふ。

***やりじるし**　お馬標・鑓標・お駕籠押の紋標（薩摩歌）

〔鑓標〕もとは鑓に小帛又は白熊などを附けて、一隊毎に分つて目標としたものなれど、徳川時代には各大名毎に異るものを用ゐ、行列の中に立てて之を目標とした。

***やりて**　やりての綱ぢや、羅生門あけてたもといふ（淀鯉）　やりてが腰の鍵までも、今朝の祝儀の口明けと笑ひ賑ひののめけり（賀古敎信）

〔遣手〕鴇老、鴇婦などとも書いてある。禿や遊女の躾をなし且つ監督し、又揚屋で諸事の取持ちをする女で、赤前垂をなし腰に鍵を吊してゐた。遣手は幅の利いた遊女の成下つた者のなつたのが多い。好色一代女（貞享三年刊）卷六、夜發付聲の條に遣手のことを記して、「薄色の前垂、中幅の帶を左の脇に結び萬の鍵を提げ、内懐より手を入れ後を少し引上げて大方は置手拭、足音無しのしのび歩行、不斷作り顔して心の外に恐しがられ、太夫引廻すこと弱き生得をも間もなく賢くなして客の好くやうに持つて參り、隙なく親方の爲によきものとなりぬ、女郎の仔細を知り過ぎて後には遣繰を見咎め、太夫もこれに恐れ客も氣の毒さに節季を待たず二角づつ、鬼に六道錢を取らるる如く思ひぬ」。好色文傳授（元祿十二年刊）卷五、一文字屋の太夫拍子の起證文の中に、「天　職・十五はいふに及ばず、假令局・遣手・飯焚までに下し候とも少しも厭はず」と見えてゐるから、遣手は局女郎や飯焚女ほどに賤しまれたものである。西鶴撰・御前獨狂言（寶永二年刊）卷之一、西國より上る傾城だねの條に、「香車」に「やりて」と振假名を附けてある。異本洞房語園に、「鑓手。古來名を花車といふ、花に廻るといふ意か、然れどもくわしやと呼ては聞え惡しきとて香車と書かへたり、香車は將棊の駒の一つなれば香車と呼ばずしてやりてといひふれたり」。（「たいふ」「てんじん」の條の畫をも見よ。）



〔りぶ結髪の老鴇〕（女用訓蒙圖彙所載）

***やりぶすま**　此處彼處垣を乘越し切破り、四方に起つて鑓ぶすま（三國志）

〔鑓衾〕鑓を數多立並べたのが衾障子の如くなるよりいふ。

***やる**　今まで立てし誓の末なんの其やらうぞ（小栗判官）

破る。日本紀に、「破」を「やる」とよみ、土佐日記に、「とまれかくまれとくやりてん」と見えてゐる。

***やろい**　駕籠やりませう上﨟様・駕籠やろいとぞ申しける（百合若）

「かごやろい」を見よ。

***やんす**　八百貫目や八千貫は誓文くつされ利なしでやんすといひければ（大經師）

「あります」の約訛である。「やす」ともいふ。現今も福山市地方では、「さうであります」を「さうぢやんす」といふ。

やんちや　關東へ往くことはいやぢややいやぢやと、やんちやばかり御意なされ（丹波與作）

小兒の我儘をいうてむつがること。小兒がむつがる時にいやんいやんと言ふ、「やんちや」は「いやんぢや」の約訛である。柳亭種彦撰・用捨箱に、「今小兒の我儘に物などいぶりなるをヤンチヤンと云」。

やんま　やんま・蜻蛉。こがれ蟲（小栗判官）

〔蜻蜓〕蜻蛉の大なるもの。橘守部撰・俗語考に、「蜻蛉をとんぼともやんまとも云、國によりて小なるをとんぼ・大なるをやんまといふ、やんまは八重羽の略、なべて鳥蟲の翼は二つ物なるに、此蜻蛉のみ四つある故に八重羽とはいふ也」。

ゆ

ゆうし　「いうし」を見よ。

ゆうぜんぞめ　赤い天狗に白天狗・ゆうぜんぞめの天狗達（隅田川）

「いうぜんぞめ」（友禪染）と書くが正しい。友禪染は延寶末に端を發し、貞享頃より漸次流行するに至つた。友禪染模樣の特長は、山水花卉などを巧に模樣化して濃艶優雅の趣味に富み形態種々變つた輪廓中に草花などを配して色彩絢爛、圖樣よく消化されて技巧の妙味を發揮してゐる。友禪模樣の開祖宮崎友禪は承應三年能登深江郷に生れ、加州金澤に出で狩野守景に從つて繪事を修め、京都に上つて扇面畫を描き、更に衣裳の地の染色の上へ細密な彩畫を描くを業とし、晩年金澤に歸つて加賀染に從事したといふ。

ゆえんひげ　あもとふもとの赤松を打割り松の油烟髭（薩摩歌）

〔油烟髭〕往時奴は作髭と稱して、油烟をもつていかめしう髭を描いたものである。薩摩歌（巣林子作）に、「頰に鍋墨髭人參、煎じつめたる奉公人」と見え、夕霧阿波鳴渡（巣林子作）に、「鍋釜のすみかくにもこなたの髭に入ると思ひよい所をつけて置く」、とあるも油烟髭についていうたものである。五元集拾遺に、「西瓜くふ奴の髭の流れけり」、とあるも油烟髭の流れたのをいうたのである。

***ゆがけ**　元服を祝はんと肌より弓懸を取出し（加増曾我）　肌の守は忰御前、弓と靫は曾我殿へ、鞭と弓懸は二の宮殿（五人兄弟）

〔弓懸〕和名鈔に、「弽。音攝、和名由美加介」と見えてゐる。「ゆがけ」は「ゆみかけ」の略である。革にて作り弓を射るとき指に掛ける手袋の名。歩射には右弓懸ばかりをさし、騎射には一具弓懸をさしたものだといふ。

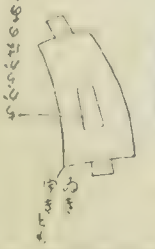
***ゆかり**　いづくはあれど曾根崎の、ゆかりの芝居初様も（繪草紙）

「ゆかり」（縁許）の義。縁。所縁。縁故。（序云、巴太鼓（浄瑠璃・加賀掾正本）第二に、「いかさまこの子がゆかりか、よしゆかりにもせよゆからぬにもせよ」とあるやうに、「ゆかり」を動詞に用ゐた例もある）。「曾根崎のゆかりの芝居」とは、曾根崎に縁故ある芝居、即ちお初・徳兵衞の曾根崎心中狂言をいふ。「はつ」を見よ。

ゆぎ　「そびらにちのりのゆぎ云云」を見よ。

ゆぎ　引出す馬の力革ゆぎさき共にしつかと取り（加増曾我）

床木の義。居木ともいふ。鞍に屬し力革を結付けるところの木の稱。武家名目抄・輿馬部に、「由木（又居木。）大坪道禪鞍鐙記云、由木の長は鞍の作樣に依て少の長短有べし、一樣に不レ可レ有、大概は一尺一分或は一尺五六厘の事也」。



（武家名目抄、輿馬部所載）

有髪、眞言宗の山伏は僧形であつて、咒文を唱へ護摩を焚いて祈禱をなす。鹽藏祕策に、「山伏は役の行者を祖とす、役の行者は小角と號し文武帝の時の人、この道を修驗道と號す、山居して雜行苦行するを以て業とす」。

やまぶき 勇みかかれる有樣は昔の巴・山吹が生變りと謂つべし（雪女）

〔山吹〕源義仲の妾、膂力あり、巴と共に勇戰して戰功を立てたが、遂に礪並山の合戰に死んだ。

***山吹色** 今頃世間に大切な山吹色の重寶に事缺き給ふ身ではなし（吉野忠信） 御用勤めに京住居、京は遊びの山吹の、色の仕過し染過し（松風）

黄金をかくいうたのである。

山邊の笹栗（三國志）

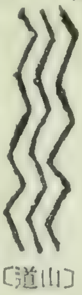
古今榮雅抄に、「赤人は上總國山邊郡の人なり、彼所に廟今にあり、旅客歌を書付くるところなり、此所に笹栗とて長一尺ばかりあるに栗のなるとかの國の人の語りける」と見えてゐる。「拾ふ木の實は何何ぞ云云」を見よ。

やまぼこ（堀川波鼓）

「ぎをんゑのやまぼこ」を見よ。

やまみち 駕籠は淺黄に山道こそ代代肥後の御國主（薩摩歌）

〔山道〕「淺黄に山道」は肥後熊本城主・細川越中守綱利の駕籠標である。



〔山道〕

やまむら 踏ばたがつて山村が、くわつと擴げた兩足は、百間堀を思出す（今宮心中）

當時大阪の立役の俳優山村歌左衞門をいふ。大男であつたによつて百間堀（江の子島東側の川）も一跨といふ意で、「百間堀を思出す」と云うたのである。役者謀火燵（寶永七年刊）立役之部に、「上上。山村殿は京で正木甚左衞門と云はれしこと思へばよほど根生の立役、色白くかつこうなれあいあつぱれ御家老職と芝居初ての見物衆も思ふに、さ樣目に立つ當りなく、上作物を古さびが付いて見分けず、片隅にすてて置くやうな物云云」と見えてゐる。

やみからげ 病みからげの穀盗人（唐船噺）

〔病卷〕病にからまれてゐる義、病身。現今中國地方で、よい年輩でゐての意に、よい年をからげてといふ。

やもじ 初牀の夜のやもじにも、遂に客衆の花散りぬ（賀古教信）

「やりくり」（遣繰）の文字詞であつて、房事をいふ。交合。朱雀しのぶずり（貞享四年刊）の序文に、「螻蟻蚊虻のやからまで、いづれかこの遣繰をせざる」。風流吳竹男に「我國の法師等やりくりを知らず」。色里三所世帶に「この事より外に樂しみなしと思入りのやりくり」。「そもそも水揚の下前髪云云」をも見よ。

やもじ 三番太鼓ほのぼのと、せきてやもじが逢はせぬに、引舟かへる折柄に、袖から落つる隱し文（戀物揃）

遣手の文字詞。「やりて」を見よ。文字詞につきては「はもじ」の條を見よ。

***やや** まだ見ぬややの別れぞと（繪草紙） やや生んだ身も生まぬ身も、胎内潛り一代の（嵯峨天皇）

生兒の叫び聲「やんや」の略、生兒をいふ。

ややこをどり ややこ踊・木曾踊・小町踊・伊勢踊（女護島）

室町時代からあつた少女の踊の一種である。東海道名所記（萬治元年成）六に、「昔昔京に歌舞妓の始りは、出雲神子にお國といへるもの五條の東の橋詰にてやや子踊といふ事を致せり、其後北野の社の東に舞臺を拵へ、念佛踊に歌を交へ、塗笠に紅のこしみをまとひ、鳧鐘を首にかけて、笛鼓に拍子を合せて踊りけり、其時は三味線はなかりき」。

やらうばうし 謠の本は近衞流、野郎帽子は若紫、惡所狂の身の果は、かくなり行くと定まりし（天網島） 野郎帽子の濃紫、揃ふ拍子や形振もよく（鑓權三）

〔野郎帽子〕野郎頭（若衆の前髪を剃落したもの）の俳優の被り物をいふ。承應元年六月若衆歌舞伎が風俗上有害とされて、令を布かれて若衆役者の前髪を剃去るより、若衆歌舞伎は變じて野郎歌舞伎となり、前髪を剃落した沒趣致を隱す爲、綿又は置手拭などを額に當ててゐたのを、鳥居庄七といふ女形役者が創めてびらりと前頭部に垂らす帽子を作り、ついで元祿頃から水木辰之助等の意匠で、紫縮緬で作つた帽子が流行し、また荻野澤之丞が創めた澤之丞帽子、芳澤菖蒲の菖蒲帽子、瀨川菊之丞の瀨川帽子などが行はれて、享保に及んでゐる。嬉遊笑覽・卷二上に、「吉原徒然艸に、澤之丞といふ野良、帽子の左右を垂れて被ぎけり、小娘踊子などの帽子の最初なり、元祿の頃よりひろまりけり、……、八文字屋が歌舞伎故實に、澤之丞帽子元祿の初め澤之丞といふ女形被ぎ初めたり、左右に鉛のおもり付たる由、依ておもり帽子といふ」と見え、喜多村節信撰・筠庭雜考・卷三に、帽子に鉛を付けたのは澤之丞から始まつたのではない由を辨じて、左の畫が載せてある。この紫縮緬の左右を垂した帽子は、町人の婦女にも流行し、びらりと垂れてゐるから、「びらり帽子」ともいひ、又紫帽子ともいうた。



〔やらうばうし〕（筠庭雜考所載）

やらはらだち 女夫喧嘩のやら腹立、男に拗れての家出か（槃齡）

やたらに立腹すること。「やら」は「やたら」の略。（「やたら」は「やたら拍子」より起つた語？）

***やらひ** やらひの内に土壇を構へ（歌念佛）

「鬼やらひ」の「やらひ」と同じ語で遣又は逐の義。闖入する者を防ぎ逐ふよりの名。竹などを縱橫に粗く組んだ垣をいふ。矢來と書くは音借字。

***やり** やりが前垂茜さす、空も醉うたり人も醉ふ（壽門松） 昔はやりが迎に出る、今はやうやう長刀の草履を脫いで（夕霧）

「やりて」の略。「やりて」を見よ。

***やりかんな** 刄物は鑓鉋より外、太刀とやらん刀とやらん手に取つたることもなし（用明天皇） しらげたつるや突鉋、雲をそなたにやり鉋（出世景清）

〔鑓鉋〕桶職などの使用する具。鑓鋒の如くにて木の柄を附けた刄物。雍州府志・卷七、土産門下（服器部）に、「始造二短鎗一以レ木爲レ柄以レ之削レ木、故板面有二高低一而不二平夷一、是謂二鑓加牟奈一」。

は十二坊なりしが、時代經て國穩かに溫湯もいよいよ榮行くままに、婢女を抱ゆる坊一の湯二の湯に十坊づつ二十坊なり、婢女一坊に二人づつ都て四十人、其内に大湯女といふは或は何坊のかかと呼び、小湯女といへるは何坊のまつ・たけ・つるなど呼べり」云云」。(序に云、百合若大臣野守鏡のこの文の少し前に、「土産召せ召せ、竹細工・籠も品品ありま筆」とある、竹細工・籠・有馬筆などは有馬溫泉地の名物土產物である。有馬小鑑(貞享二年刊)有馬名物土產物の條に、「一、木地挽――月は木地つづみがたきやろくろつな。一、人形筆――ひよつとでて一などさみや人形筆。一、鐵細工――有馬鍛冶つちの拍子はとつ天下。一、竹細工――竹細工代々のちぎりか雪のはだ。一、籠細工――これ一ぢやようぬけ申籠ざいく。一、染楊枝――精氣ましきりよく有馬の染楊子。一、糸細工――こきまぜて春や柳のいとさくら」と見えてゐる)。

ゆのこ 朝がけの釜のこげ好む所ぞ、辨慶がゆのことも思はぬと(源義經)

〔湯子〕「おゆのした」ともいひ、炊ぐとき釜の底に焦げつきたる飯をいふ。焦飯。焦飯は底着とて、人にひけを取るものとしてこれを食ふを忌む風習があつた。新板增補女重寶記(元祿十五年刊)卷之一、やまと言葉・食物の條に、「ゆのこ。おゆのした」ともいふと見え、甲子祭(天和四年刊、淨瑠璃・加賀掾正本)第三に、「湯の子とても三寶なり、行者の身は臆病にこもひけを取りても苦しからず、いで我が食べんとて手づから飯匙取廻し、內侍へも義平へも我身も飽くまで食しつつ」と見え、傾城難波みやげ(寶永七年刊)卷之四に、「昔もれきれきの侍・茶道坊主と口論して、坊主扇をもつて侍のあたまをたたきけれど手向せず其まま許しおかれける、これを見し人おほく何とやらすまぬ取沙汰して、まづ湯粉好の侍とそしりける」と見えてゐる。

ゆのだんこ 「やれゆのだんこ云云」を見よ。

ゆびくわはう こぼれざいはひ指果報、あつたら若者を思はず討つて殘念などとは義を知つた武士のいふこと(會稽山) 其外に時の機轉出來不出來ゆびくわはう(聖德太子)

〔指果報〕人の指紋を見て果報を占ふこと。轉じて僥倖の意にいふ。

***ゆふぎり** 私は賴母様の弟子なれば能う似た處を聞かんせ、さあ三味線とゆふ霧の昔を今にひきかけて、傾城に誠なしと世の人申せども(冥途飛脚)

〔夕霧〕寬文延寶頃に於ける名妓。京都の島原から大阪に下つたのが十六歳の時であつたといふ。延寶六年正月六日病歿した。歲二十二。下寺町淨國寺に葬つた。巢林子作の三世相、夕霧阿波鳴渡などはこの名妓に就いて作つたのである。その傳は澪標に委しう載せてある。「傾城に誠なしと世の人云云」を見よ。

***ゆふざれや** 夕ざれや時雨まじりの初霰、御庭の梢落葉して(娥)

「夕にしあれや」の約である。(「ゆふされや」といふもある。これは「夕しあれや」の約である)。

***ゆふしで** なほ行末は源氏の白旗白雪の守神ぞと、木綿四手の雪を散して失せてけり(雪女)

〔木綿四手〕「しで」は「しだれ」(下垂)の義。往時は注連繩又は玉串などに木綿を垂したものである、これをゆふしでといふ。(「木綿」は豐後風土記に、「速水郡柚富鄉……此鄉中栲樹多生、常取二栲皮一以造二木綿一、因曰二柚富鄉一」と見えてゐる)。

ゆぶだすき 神力を添へ給へと六社の宮に我願ひ、かけてぞ賴むゆふだすき(扇八景) 白木綿襷千早振る祝詞をこそは捧げけれ(百合若) 南無や柴大明神と、肝膽碎くゆふだすき(津戶三郎)

〔木綿襷〕木綿の襷をいふ。後世は社人の神に仕へまつるに掛けるもののみにいふ。

***ゆふつけどり** 道も長柄の數鎗の、鞘にかかりしゆふつけ鳥、關より西にかくれなき(堀川波鼓) 只このままにお暇と、ゆふつけのとりがなく、東路さして行く道の(本領曾我)

〔木綿附鳥〕鷄の異名。顯昭の說に、世の中に騷動ある時、四境の祭といふ祓を行ひ、鷄に木綿四手を附けて、京の四境の關に放されたによつて、木綿附鳥といふた由見えてゐる。類聚名物考に、「四境の祭は天智天皇の御宇より始る、相坂、鈴鹿、立田、須磨なり、須磨の御祓は神供を海に入れ、鈴鹿にては鹿に祓を付けて放す、立田にても相坂にても白ゆふつけてと號す、天下の凶事に祭るなり」。本領曾我に、「ゆふつけのとりがなく」とあるは、「木綿附鳥」に「鳥がなく」(その條を見よ)をいひかけたのである。「ただこのままにお暇と云云」を見よ。

***ゆふなぎ** (國性爺)

〔夕凪〕海陸の溫度平均する時に風和らぐ。これを凪といひ、一日に朝夕二回あつて、朝なるを朝凪といひ、夕なるを夕凪といふ。凪は風の省畫と止とを合せた國字。

ゆみがしら お家相傳の弓頭(宵庚申)

〔弓頭〕弓組の頭。

***ゆみとり** 與作も名ある弓取の家に生れし氣質とて(丹波與作) 元來ゆゆしき弓取なるが(蟬丸)

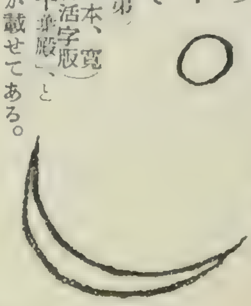
〔弓取〕往時武士は弓矢をもつて功名したればいふ。また鎗をもつて功名する世となりては鎗取ともいうた。

ゆみとりうち 南鐐金の弓鳥打を四寸ばかり白き紙にて卷きたるは(百合若)

〔弓鳥打〕鳥打又は小鳥打ともいひ、末弭(上筈ともいふ)から一尺二三寸の下方にあつて、末鳥打と大鳥打との間で、內方の弓竹に多くは節のある所の稱。平家物語・卷九、河原合戰の條に、「重籐の弓の鳥打の本を、紙をひろさ一寸ばかりにきつて左卷きに卷きたる、これぞ今日の大將軍のしるしとは見えし」。

ゆみはりづき 弓張月を金紋にすかし鹿の子の亂れ星、千葉殿の紋ぞかし、(五人兄弟)

夜討曾我(舞之本、寬永古活字版)に、「月に星は千葉殿」、とありて次の紋が載せてある。



***弓矢八幡** 勘介我に奉公せば、弓矢八幡臑を持たせても堪忍する(川中島合戰) 親の敵があるといふ、弓矢八幡知らぬ事は力なし(薩摩歌)

弓矢の守護神八幡も照覽ある、今いふ詞は決して違へぬといふ意よりして自誓の詞に用ゐる。俚言集覽に、「弓矢八幡。誓言也」。

夢か七つか 「七つ」を見よ。

***ゆめちがへ** 我が夫に怪我あやま

*ゆきあひあね　二歳で別れし姨なれば我等とも行合姉（國性爺）

〔行合姉〕父または母を異にする姉。父または母を異にする兄弟を行合兄弟といふ。雪女五枚羽子板に「猪の隼太とは行合兄弟」。

*ゆぎしやう　疑はしくば湯起請取らせ、敵に脛をとめさするな（日本武尊）

〔湯起請〕「くかだち」「探湯」ともいひ、神に誓ひ、熱湯中に手を入れさせて、爛れないのを正とし、爛れるを邪とし、それによつて眞僞を斷ずること。

ゆき・すき　大嘗會悠紀主基の御屏風を書き（反魂香）

〔悠紀・主基〕天武紀に「齋忌次」と書いてある。大嘗會の時に祭壇を二處に設けられ、東（左方）を悠紀といひ西（右方）を主基といふ。

雪の四つ白　葦毛に雪の四つ白覆輪や（雪女）

馬の四本足の白毛なるをいふ。ここの文は四つ白に白覆輪（銀覆輪のこと）をいひかけたのである

ゆきひら　これも主君より拜領の行平、この大小脇ばさみ物の具固め（女夫池）

〔行平〕行平作の刀をいふ。行平は長徳寛弘頃大和吉市に居た刀匠で、左衞門大夫と稱し、名刀鬼切を作つた人である。

*ゆきをんな　塀の内より白鷺の飛ぶ如く、雪渦卷いて提灯に映ると齊しく女の姿、白衣白髪白妙の雪女とも謂つべし（雪女）

〔雪女〕大雪の時に陰氣凝つて怪しい女人の姿現はれるといふ、これを雪女と稱す。榎本其角の句に、「黒塚のまことをもれり雪女。」谷素外編・繪本多能志美種（刊本で寛政丙辰の序がある）にこの繪が載つてゐる。



〔雪女〕

ゆげた　但馬のゆげた數ふれば（鑓權三）實に湯の山の道づれと人もゆげたの數數に、戻る人あり今來るお客（百合若）

〔湯桁〕湯槽の周圍に設けてある桁。「但馬のゆげた云云」はその條を見よ。

ゆごて　（三國志）

〔弓籠手〕革または絹で作り、弓を射る時に弦彈きを防ぐ爲に左臂につけるもの。

*ゆさん　身ども方へは不屆して遊山どころではあるまいぞ（曾根崎）書は名に負ふ遊山所の貴賤群集の伊達蠢（生玉）

〔遊山〕遊山はもと山に遊ぶことで、櫻狩、茸狩、紅葉狩などを云へるが、轉じて廣く行樂遊觀の意にいふ。川遊するを船遊山といひ、原野に遊ぶを野遊山といひ、その他遊山歩き、遊山茶屋、遊山宿、遊山所などといふ。

*ゆじゅん　鷄足山の三つの峯峨峨たる岩根を踏分けて、帝釋天の窟まで其間十由旬（釋迦）黄金の大床波忽ちの臺の上、一由旬の鏡据ゑられたり（浦島）

〔由旬〕梵語 Yojana 距離を算する名稱である。一由旬は十六里とも三十里とも四十里ともいひ、一定してゐない。西域記に、「夫數量之稱謂二踰繕那一、舊曰二由旬一、又曰二踰闍那一又曰二由延一、皆訛略也、踰繕那者自レ古聖王一日軍行也、舊傳四十里矣、印度國俗乃三十里、聖教所レ載唯十六里云云」。

*ゆするつき　楊子手拭ゆするつき御櫛笥泔坏取並べ、お化粧のこと頼みます（日本武尊）

〔泔坏〕毛髪を洗ふ用水を盛る器。もとは土器であつたが、後には漆器または銀製の器を用ゐ、これを香臺の形した臺上に置く。貞丈雜記・卷之八に、「ゆするつきは泔坏と書く、鬢水入のことなり、其形は茶碗の如し、木にて作り漆にて塗り蒔繪したるもあり、又銀にて作り毛彫をしたるもあり、蓋も茶碗の蓋の如し、臺もゆするつきと對にする、形は茶碗の臺の如し、但臺の中ゆするつきの糸尻を受くる所の穴は明通さずして底あり、又下臺別にあり、これは香臺にも用ふべき樣の形なり云云」。

ゆた　お乳や乳母の癖として、背に子を負ひ寢させて置いて、いんの子いんの子とゆたもなめなかけそ（賀古敎信）

「ゆつた」ともいひ、「言うた」の約訛。女殺油地獄・上卷に、「會津樣ほどいとしい人は大阪中に無いとゆつたぞよ」。七墓廻のこの文は、犬の兒と言うたも宥めかけるなの意。犬兒は能く物を宥めるから、かくいうた小守唄であつて、「な……そ」は禁止の意を示す助詞。「いんの子」はその條を見よ。

*ゆたのたゆた　解くに解かれぬ涙の海の、ゆたのたゆたに漂ふ有樣（松風）

「ゆた」はゆつたりの意。これに接頭語「た」を添加して「たゆた」といふ。されば「ゆた」を重ねた語であつて、ゆつたりゆつたりと搖いで、大やうに迫らぬ貌。萬葉集・卷七に、「吾心ゆたにゆたに浮きぬなは邊にも沖にも寄りがてましを」。古今集・戀歌一に、「いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ」。

*ゆたん　犬狼の荒さぬ爲とやうやく骸を取納め、ゆたん包太刀小袖懷中まはり搔集め（持統天皇）

〔油單〕袱子。包袱。禪林象器箋に、「日本栗水僧稱二袱子一爲二油單一、其實油單以二桐油一塗レ紙造レ之、如二油衣之材一、以防二雨露浸犯一、蓋油單包二袱子一、故呼二袱子一爲二油單一耳」と見えてゐる。現今中國地方で風呂敷を油單といふ。

*ゆづりは　ちよつと祝ひましよ裏白讓葉（夕霧）

〔讓葉〕新年の儀に讓葉を用ゐて父子相續の義に用ゐて祝ふ。和漢三才圖會に、「新葉既生舊葉落、如二父子相讓一、故俗呼曰二讓葉一、都鄙正月鏡餈及門戸之飾用、亦取二相續之義一」。

ゆどのはじめ　湯殿始に身を清め（大經師）

〔湯殿始〕舊暦上段の語。年の始に沐浴して青陽の氣に觸るべしといふ日。ここの文は大經師に緣ある暦上の語を用ゐて文を飾つたのである。「おゆどの」をも見よ。

*ゆな　大湯女小湯女多き中に、分けて名高き松が枝とて、元の根ざしは豐後の國濱の市の遊君なりしが（百合若）

〔湯女〕「ろしう」ともいふ。「ろしう」「ふろ」を見よ。攝津有馬の溫泉では、年長の湯女を大湯女といひ、年若い湯女を小湯女といふ。有馬小鑑抄、湯本坊舍の條に、「仁西上人溫湯再興の時十二坊舍をたて、諸國より集る湯入の次第を彼の十二坊に奉行させられしと也、かかりければ湯入のかたがた跡先を爭ひ、或は湯壺より久しく出やらぬ者ありて、とく出よなどいひ、あがりて鬪諍度々に及びければ、いづれの時よりか婢女をこしらへ、湯入の支配させつつ、今に其わざ皆る事なし、……古

よ

*よう　情知らぬは匹夫のよう（烏帽子折）
「ゆう」（勇）の轉。謠曲八島にも、「智者は惑はず、勇者は懼れず」とあつて、「勇者」を「ようしや」と音讀してある。

ようぎたいはい　忠衡の北の方忍の前は二人の子を敎へ育てて、夫にも仕ふる道の淺からず、ようぎたいはい心ばせ十人並を打超して（源義經）
〔容儀帶佩〕「容儀」は容貌の禮儀にかなふをいふ。「帶佩」は衣服などの着こなしとりなしをいふ、帶は身にとりつけること、佩は腰に帶びること。源氏物語・御法の巻に、「御年のほどようぎたいはい」。

ようござりま　おつつけお下りなされませ、ようござりまもそこそこに、跡は樞をこつとりと（天網島）
「ようござりました」の略。

*ようにん　用人衆まで伺うて其上は緣次第（鑓權三）
〔用人〕有用の義より出た名。もとは才藝あつて役に立つ人を指せる稱呼であつたのが、後には家老職の次に位する重職となつた。されどももと才選の職なるが故に、世家譜第の筋目卑き者も登庸されたのであるといふ。

ようよう　「いういう」を見よ。

よか　門出よかよか、よか便聞かうばい（博多）　上方衆は氣がよかけん、こがいな事はあるまい（博多）
「よい」（宜）といふことを現今も九州地方一般に「よか」といふ。またこれに「ばい」「けん」を添へ加へて「よかばい」（「ばい」を見よ）「よかけん」などといふ。「もうよろしい」を「もうよかけん」といふ。越谷秀眞編・物類稱呼・巻五、言語部に、「ヨイといふことを筑紫にて「ヨカ」といふ」。

*よくかい　欲界の六欲天（天神記）　よくかいの四王・忉利天、夫婦枕の夜摩天の契は抱合ふと聞く（五人兄弟）
〔欲界〕三界（欲界、色界、無色界）の一。財・色・名・食・睡眠等の諸欲の滿足を求める念强き有情の住める物質的世界である。欲界には四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化天の六天がある、故に六欲天といふ。

よくわか　よくわかに御萬歳や、年立ちかへる足駄にて（夕霧）
萬歳唄の「德若」を「慾若」にもぢつたのである。なほここの文は萬歳唄のもぢりである。
萬歳唄は「まんざい」の條を見よ。

*よこざ　八右衞門横座を占めて我が評判（冥途飛脚）
〔横座〕上座。江次第・二十に「新任大臣大饗尊者著二横座一」。俚言集覽に「横座は正面の事也、今田舍にてイロリの正面を横座と云。〔宇治拾遺物語〕むねとあると見ゆる鬼ヨコ座に居たり。横座は上座なり」。

*餘吾將軍　（五人兄弟）
信州戶隱山に鬼神を退治した平の惟茂をいふ。地名部「とがくしやま」を見よ。

*よこめ　所詮横目の武士を選み、京鎌倉の町屋敷に住み諸浪人の詮議せさせん（蛙合戰）
〔横目〕横側から可否を察する義。目附ともいふ。政務の善惡を視、士人の擧動を監視し、非常を按察し事狀を具して君長に密告する職掌である。この職の設けられたのは足利初政の頃所司代の廳に置かれたのがはじめであらう。大横目、總横目、步横目、中間横目、小人横目、忍目附とある。

よこをりふす　愚痴な子に絆されて忠義を忘るる我こそ愚痴よと思切り、横なりふせる松が根に取つて引据ゑ（釋迦）　胸を二つに押隔て横なりふせる甲斐がねの、弱身を見せじと包めども（川中島）
正しくは「よこぼりふす」である。横たはり臥すの意。古今集・大歌所御歌の部、かひうた、「かひがねをさやにも見しがけけれなく、よこぼりふせるさやの中山」とあるを、釋契沖撰・餘材抄に、「よこをりふせる」としてある。

*與作踊　（丹波與作）
近松門左衞門が心中重井筒のお房・德兵衞のことを踊歌に作つたものである。

*夜ざとい　心たまぎりや夜ざとくなつて（博多）　夜ざとに寐やとて出でければ（今宮）
夜敏の義。夜眠れる時に少しの物音にも直ぐ目覺めるをいふ。「夜ざと」の「ざと」は形容詞「さとい」の語根で轉成名詞。

よざにかかる　今宵は夜寒、我等もよざにかかりたし、まづ提重下されよと手をかくれば（燦靜）
和訓栞に、「よざにかかる。俗語なり、餘座に繫るの義、律語より出たる詞なるべし」と見えてゐる。末座に列す。仲間に入る。相伴に預るの意にいふ。

よしはらすずめ　よしはら雀の鳴くやうに息のありたけしやべつて（丹波與作）　待て待てと鳴くよしはら雀、よしみよしみの言の葉に化され渡る狐川（淀鯉）
〔葦原雀〕葦切または行行子とも云ひ、夏の頃葦原の中に居て喧しく鳴く小鳥である。

よしみつ　將軍樣の御重代、天國、小鍛冶、義光、其外名に負ふ銘の物（雪女）
〔義光〕義光作の刀。義光は元亨頃備前長船の刀匠である。

よしみつ　春日の作の兒文珠閻浮提金の御姿、昔はよしみつ、負ふとどうしよとそれは構はぬ（一心二河白道）
〔善光〕物部尾輿の子守屋等が佛像を難波の堀江に投じた。推古天皇の四年これを法興寺に安置す。十年四月信濃の人若麻績東人善光これを負うて、信濃國伊奈郡麻績の里に移し草堂に安置した。今の座光寺これである。この文は、善光が佛像を負うた故事によつて、「負ふとどうしよと」といひつづけたのである。（善光寺はこの本田善光の開基。）

よじやう　豫讓が義にも劣るまじ（扇八景）
〔豫讓〕支那周末戰國時代の人、晉智伯に仕ふ。智伯・趙襄子に滅された。豫讓は主の仇を報いようとして、姓名を變じ刑人となり、七首を挾んで襄子を刺さうとして果さず、身に漆を塗つて癩となり、炭を吞んで啞となり橋下に潜伏す。また襄子に獲られ遂に劍に伏して死んだ。

*よしをかぞめ　京の吉岡紙子染、やぼてり柿か薄柿か（重井筒）　腰から

ちの知らせの夢と、……夢ちがへしつ轉じ變へ、心も波も立騒ぎ（薩摩歌） さぞや夢見が悪からう、明日は占ひ夢ちがへ、違へても祈りても返らぬ後の悔み言（氷朔日）

〔夢違〕凶夢を見た時、災害の來ぬやう咒などすること。和訓栞に、「袋艸帋に吉備大臣夢違誦文の歌あり、今凶夢をさか夢などいふに同じ、あらちをのかるやのさきに立つ鹿も、ちがへをすればちがふとぞ聞く」。

ゆめどの　地名部を見よ。

***夢の浮橋**　夢の浮橋六十帖を渡り詰め（淀鯉） 夢心夢の浮橋長き夜の、唐の眠りの日の本に、覺めやらぬ間の旅衣（國性爺後日） うれりし松に手をとりて、渡るも夢の浮橋や、無明の橋のいと細き（今宮） お客樣お客樣と呼べども夢の浮橋や、鼾はづしそつと入り（百合若）

源氏物語中の卷（帖）名。また夢のことにいひ、轉じて熟睡の意にもいふ。玉勝間卷六に、「夢の浮橋といふは、古き歌に、世の中は夢のわたりのうきはしかうち渡しつつ物をこそ思へ、とあるより出でたることにて、……、吉野川にある夢の和多といふ名所にて、そこに渡せる浮橋なり、……、吉野の名所なるを源氏物語に、卷の名とせるは夢のことにとれるなり、……、後にはひたすら夢のこととなれり」。淀鯉出世瀧德、この文に、「六十帖」とあるは源氏物語の帖數で、現に五十四帖あるが、これは案本で原は六十帖であつたといふ説がある。また「十帖」は宇治の帖數、「夕顏」「浮舟」「蜻蛉」「紅梅」「竹河」「橋姫」「手習」「東屋」は皆源氏物語中の卷（帖）名である。相模入道千疋犬に「現か夢の浮橋の、繪合あこがれ參りたり」とあるも、夢を夢の浮橋というて源氏物語の帖名をきかせ、また姫の名繪合に源氏物語の帖名をきかせて文を飾つたのである。

ゆめまくら　猿の一飛、夢枕（井筒業平）

〔夢枕〕相撲道紛十二手の一。「たちがん」を見よ。

ゆめみぐさ　夢見草よりその外は色見草とてあらばこそ（十二段）

〔夢見草〕櫻の異稱。二條良基撰・藏玉集に、「夢見草。櫻。うへ置きてたとへにやみる夢見草、あすを知らぬ今日の命を」。十二段のこのあたりの文は草の名寄であつて、夢見を夢見草にいひかけたのである。

ゆめわけぶね　源五兵衞・おまん夢分舟（薩摩歌）

〔夢分舟〕夢路を分け行く舟の義。舟航中に夢を見ること。（延寶三年刊で、大阪及大阪附近の名所案内の本に蘆分船といふがある、これも難波の蘆を分け行く船といふ意の書名である）。

***ゆもと**　萬能の藥の湯元と聞くからに、四百四病は消えもせん（反魂香）

〔湯元〕温泉の湧出る所。ここは紀州熊野湯の峰の鑛泉をいうたのである、湯の峰には光明湯、玉湯、小栗湯とある。小栗判官の塚から餓鬼の現はれたのを、上人が餓鬼阿彌と名付けて紀州熊野湯に浴せしめて、蘇生せしめたことは古淨瑠璃・小栗判官にも見えてゐる。

ゆや　三番過ぎて中入の、熊野より直にお行水（酒呑童子）

〔熊野〕謠曲名、この謠曲は俗に熊野・松風米の飯というて人人の好むものである。

湯屋の看板（ゆや かんばん）　末繁昌の藥の湯屋、末代までの看板と弓取直し軒口に、はたと當りの手ごたへし（鎌田）

往時湯屋の看板には弓矢を軒端に出したものである。蓋し「弓射る」を「湯に入る」にとつた謎であらう。このこと源爲朝にはじまつたやうに附會したのである。西川祐信畫・繪本答話鑑（享保十四年刊）卷下にも、湯屋に矢の看板を出してゐる畫が載つてゐる。

***ゆる**　あのさんの勘當がゆりて大阪へいなんしたら（大經師） いやさ愚僧がゆりんと申さばこそ、人の勅勘免すに何かは苦しかるべきぞ（伊豆日記）

緩の義。許（ゆる）（免）す、または許さるの意にいふ。「ゆりん」は「ゆり」に撥音「ん」の増加した訛である。井原西鶴撰・男色大鑑（貞享四年刊）卷五、涙の種は紙見世の條に、「彼の馬鹿者も其後はとがむる事なし、今は心もゆりてこれより衆道の緣となりて互に思を盡し」。

唯一の神道（ゆゐいち）　當社はもと唯一の神道なるに、この頃兩部聚合と名付け、眞言の法にて行ふは如何なる故ぞ（嵯峨天皇甘露雨）

唯一とは兩部に對して純粹の神道をいひ、兩部とは本地垂跡の説にもとづき、神佛二教の旨を合して一派を起したものをいふ。但し唯一神道とてもその實天台の教理儀式に據つたものが多い。また神佛儒の三教の旨を合したのを聚合といふ。

***ゆゐしき**　倶舍唯識維摩の學頭にて（女護島）

〔唯識〕法相宗・瑜伽宗等を唯識宗といふ。唯識宗義に通達した者に唯識の學頭の職を授ける。

***ゆゐしんのじやうど**　己心の彌陀・唯心の淨土なれば、心外無別法・即身成佛（蟬丸） 此處も唯心の淨土と聞けば己心の彌陀、南無阿彌陀佛と十念もおりて里へぞ歸りける（賀古教信）

〔唯心淨土〕己心の彌陀と相對語。極樂淨土はただ我が一心に存すとの意。即ち心の外に佛なく彌陀も己が心中の彌陀である。謠曲・春榮に、「聲清光の彌陀の國の涼しき道ならば唯心の淨土なるべし」。

***ゆゐま**　倶舍唯識維摩の學頭にて（女護島）

〔維摩〕毘耶離城の長者である。識見高邁辯才縱横で大乘の佛法を究め、屢佛弟子並に菩薩等を說破呵斥した。維摩居士が病に罹つた時に文殊菩薩見舞に來り、居士と問答し、進んで佛法の根本義たる不二法門に入るや、居士默して語らず、終に文殊と共に佛の說法してゐられる庵羅樹園に至り、ここに維摩の素性を語つてゐる經文を維摩經といふ。蓋し維摩の口を藉つて、小乘教を斥け、大乘佛經の眞理を提唱せしめたもので、維摩は假名、維摩經は佛滅後五百年頃に作られたものであらう。維摩經の教理に通達せるものに維摩の學頭の職を授ける。

ゆゐゑんそうぢ　法華唯圓總持の功德（本領曾我）

〔唯圓總持〕圓融無碍な唯一法門であつて、萬善の德を持し諸惡害を生ぜしめないをいふ。

***ゆんで**　しやんとゆんでの腹に突立て、めてへくわらりと引廻し（宵庚申）

「ゆみて」（弓手）の音便。弓杖を「ゆんづゑ」といふ類である。弓を持つ方の手即ち左手をいひ、「めて」に對す。

勸候　右の通り御座所遠慮可仕候　一、麻疹看病人并療治致シ候御醫師之儀モ御目通トモ罷出候儀不及遠慮候　右之通達候事　六月御定日數十六日　十二日一番湯　十四日二番湯　十六日三番湯」と見えてゐる。疱瘡の二番湯掛りのことも推知される。博多小女郎波枕のこの文は、醜い顰面に喩へていうたのである。

***よね**　今宵はよね衆の總揚げ見事な事か(女腹切)　若い衆がよれよれといふ程にどうしたことかと思うたが、田地を賣つて買ふ故にそれでお山をよねといふ、今講釋が聞えたと堅い輕口言うて歸れば(絹草紙)　隣のよねや朋輩のちよつと來ては、なう初樣何も聞かんせぬか(曾根崎)　他國から上つてこの大阪で、よねづかをも握る者が通例の男と思ふか(絹草紙)

「おやま」といふに同じ。色茶屋の勸め女をいふ。遊女。井原西鶴撰・俗つれづれ・卷之一、地獄の釜へさか落しの條に、「酒の一滴は菩薩七十粒より出づるを濺捨て、飲んで不善の業を作る」、とありて米のことを菩薩といひ、また江島其磧撰・傾城禁短氣・卷之二に、「女郎は下品下生の局菩薩まで筆のあゆみのあしきはなし」、とありて女郎のことを菩薩といつてゐる。蓋し遊女の顏容が菩薩の如く美しいといふ意よりして、遊女を菩薩と異稱し、また米を菩薩と異稱するより、遊女をよね(米)ともいうたのである。(異說に「よね」は夜寢の義だといひ、またよきね即ち好き女の義だといふはいかが)。

「よねづかをにぎる」とは、遊女を買うて樂しむ、即ち傾城買の猛者なるをいひ、「傾城柄を握る」ともいふ。「つかをにぎる」を見よ。

よねまんぢゆう　あたたか饅頭よね饅頭、そりや淺草にあるげな(吉岡染)

〔米饅頭〕普通の饅頭の皮は小麥製なるに、米饅頭は其皮を米で製したもので、江戸淺草金龍山の麓の名物である。西鶴撰・好色五人女に、「淺草の米まんぢゆう」。江戸鹿子(貞享四年刊)に「米饅頭屋、淺草金龍山ふもとや同所鶴屋」。嬉遊笑覽・飲食の條に、「米饅頭は小麥の饅頭に分つ名なり、米といふより其形をも米粒の形に作りしなるべし、江戸鹿子に、淺草金龍山ふもと屋鶴屋とあり、紫一本に、根本は麓の鶴屋うみぬらん米饅頭は玉子なりけりといへるをみれば、もとは鷄卵の形にしたるか、但しもとより今の形なるを狂歌は鷄子にとりなしたる歟、江戸土產ばなし、爰の山の麓のよねまんぢうは江戸に隱れなき名物なり、一とせの小歌に、金龍山で同道しよ、戻りがひもじか米饅頭と唄へり」。

***よねん**　子の日の松や根引のよれん(雪女)

「よね」(その條を見よ)に撥音「ん」の增加した語で、「びくに」(比丘尼)を「びくにん」(その條を見よ)といふの類である。遊女。

***よばひぼし**　見送る軒と見返る野邊と、中に飛びかふ夜這星(絹草紙)　女松が生えまいならば夜這星でも飛ぶまいか(萬年草)

〔夜這星〕流星。多く夜這ひの意にかけていふ。夫木集に、「うらやまし誰をみそらのよばひ星……」。頭書增補節用集大全(元祿元年刊)に、「流星」。

よひねまどひ　宵寐まどひの小市郎、竹が背中にふらふらと(重井筒)　宵寐まどひの后だち、前後も知らず寐入ばな(釋迦)

〔宵寐惑〕「よひまどひ」に同じ。宵からねむたくなること。

***よへゑ**　道具屋おかめ・與兵衞とは思へば近き町つづき(氷朔日)

〔與兵衞〕巢林子作、「ひぢりめん卯月紅葉」及び「卯月潤色」に見える人物である。假作人名部を見よ。

***よまひごと**　どこぞで病も出ませうと、よまひ言して入りければ(冥途飛脚)

世迷ひ言の義。愚痴。不平をかこつこと。獨り口說。和訓栞に、「よまひごと=獨口說するをいふめり、自訴の意なり」。

よみ　かの親方賭博打ち、よみとかうとに屋財家財負けほうけ(大織冠)　上りもしらぬひらよみに、そも三枚はいさ知らず取得んことはけなしなり(大織冠)

〔讀〕骨牌の遊戲に己が得た札の數値を數へること。雍州府志(貞享三年刊)七・土產門下、賀留多の條に、「其玩レ之法、其始三人或五人圍坐、其內一人左手取二持賀留多一、以二其裏面一上下混雜、不レ見二其畫一配分而置二各各之前一、是謂レ切二賀留多一、其爲レ戲謂レ打二賀留多一、然後人人所レ得之札數二一二三次第一、早拂二盡所レ持之札一是爲レ勝是謂レ讀、倭俗毎事算レ之謂レ讀」。當世武野俗談に、りつと云ふ女の賀留多の上手なるを記せる條に、「さればこのりつと云ふ女の身にて、幼少より賀留多を好き上手にて、所所方方へよみ打にあるきけるが……役のなきあがりの安き方へ打込やうに致をもつて、よみ打の上手と申すべし」。「かう」をも見よ。

よみうり　廓中おし步いて讀賣聽いておはせしが(加增曾我)　この身の果を讀賣に、誰が節附けて田舍まで、唄ひ流さん蜆川(卯月紅葉)

〔讀賣〕「ゑざうし」を見よ。

***よみせ**　夜見世戻りが氣を付けて(淀鯉)　まだ其上に稻荷あたりの裏屋小路をのぞき廻り、あげくにこの頃は夜見世狂も付いたげな(夕霧)

〔夜見世〕遊廓では夜になると品位高からぬ遊女とも格子內に並居て客を招く、これを夜見世といふ。夜見世に行つて遊女をひやかして歸る遊治郞を夜見世戻りといふ。夜見世に行つて遊女にうつつを拔かすを夜見世狂といふ。野傾友三味線(寶永五年刊)卷之五に、「元和年中に此新町にあつまり、承應年中に天滿三間屋の色町も同じくここに軒を並べ、延寶三つのとし彌生中の六日より夜見世といふ事はじまりて、牀閣の雲はれ日月ひかりかがやき云云」。

***よみぢ**　與兵衞が命を繼いで下さる御恩德黃泉の底まで忘れうか(女殺)

〔黃泉〕「やみぢ」(闇路)の義。冥途をいふ。十王經に、「閻魔王國名二無佛世界一、亦名二預彌國一、亦名二閻魔羅國一」。黃泉と書くは、左傳・隱公元年に、「誓レ之曰不レ及二黃泉一無二相見一也」とあるに出づ。

***よむ**　和藤內ちつとも臆せず、よめたりよめたりさては異國の虎狩な(國性爺合戰)　人相骨柄かねて不審に思ひしが、今こそよめたり御尋の夏仁親王よな(持統天皇歌軍法)　懷で錢よむやうにさてさて俯向

下を吉岡の裾黒に鱗形、北條の御紋ぞや(五人兄弟)　紙に染込む吉岡染のよしやよしのの(吉岡染)

〔吉岡染〕けんばふぞめ(「けんばふ」を見よ)ともいひ、黒茶染である。紙衣を吉岡染にしたものを吉岡紙子染といふ。黒川道祐撰・雍州府志(貞享三年刊)七、土産門下・服器部に、「吉岡染。西洞院四條吉岡氏人、始染二黒茶色一、故謂二吉岡染一、倭俗毎事如法行レ之稱二憲法一、斯染家吉岡祖毎事如レ此、故世稱二憲法染一、此人得二劍術一、是稱二吉岡流一而行二于今一也」。鄙事記に、「けんばふ色、下地を濃き花色にして、其上を楊梅(やまもも)の皮を煎じ三返染、又藍にて一返染、又は楊梅にて染むるなり」。心中重井筒のここの文に就いては「京の吉岡紙子染云云」を見よ。

よせがまち　皆これ戀路の寄せ框、根太も根強き門柱(歌念佛)

〔寄框〕商家などの入口の閾框の、晝間は取はづし、夜間は入れて戸を閉ちるやうにしたもの。

***よそひ**　されば古歌にも奈良ちやかや、この手盛にて二よそひ、爺と嚊とが味を御覽ぜ(大織冠)　今朝も粥な中がさに三よそひ(宵庚申)

和訓栞に、「よそふ。俗に飯を椀に盛などをいへり。粧ひの義成べし」と見えてゐる。「よそひ」は「よそふ」の轉成名詞である。大織冠のこの文につきては「ならちやかや」をも見よ。

***よだつ**　式日の御禮は御臺所に與奪あり(香椎山)　鎌倉の御臺所、先妣松下禪尼の風を慕ひ自ら執權の與奪ぞと(最明寺殿)　我中納言を今日一日よだつして朝比奈に貸すぞとよ(虎が磨)

〔與奪〕「與」は相手に物を與へる義、「奪」は相手から物を奪ふ義。よつて人に與へ或は奪ふ主君の權力をいふ。孔子家語の註に、「以レ賢代レ賢謂二之與奪一」と見えてゐる、よつて職權に代ることにもいふ。

四つ三貫匁(よつさんぐわんめ)　今の治兵衛が四つ三貫匁の才覺打みしやいでも何處から出る(天網島)

「四つ」は四寶銀をいひ、正德元年二月改鑄した惡質銀貨で寶字四を刻してある。貨率は凡百分中・銀二十分・銅八十分である。享保小判一兩に新銀(享保銀)五十匁七分替として、新銀七百五十匁は判金十四兩二分餘となる。新銀は四寶銀の四倍の價値あるにより、新銀七百五十匁は四寶銀三貫匁に當る。なほ「貨幣につきて」の部を見よ。

よつじろ　蘆毛に雪のよつじろ、白覆輪や金覆輪(雪女)

〔四白〕馬の四脚が膝より下の毛の白いもの。岡本記に、「馬につまじろといふ事なし、四つじろの馬といふべし」。

四つの馬　四つの馬に法の水、三界流轉の濁江は何時か汲み盡さん(釋迦)

「鞭の影に驚く馬云云」を見よ。

四つの鳥　見返り見返りて別れ別れに行く空の、空に音を鳴く四つの鳥、別れは同じ喩にも引かばこれをや申すべし(西王母)

「四鳥(してう)の別れ」を見よ。

よつのをりから　「第一第二の絃云云」を見よ。

よつはう　主人の銀(かね)四つ寶三貫目あまり引負ひ(女殺)

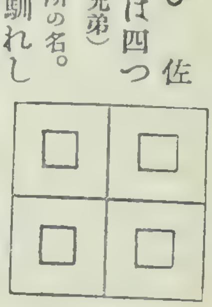
四つ寶即ち四寶銀をいふ。「四つ三貫匁」を見よ。

四つ目殺(よつめごろし)　先手が味方へ廻りくろ四つ目殺に中手を入れて(國性爺)

圍碁上の詞。敵の一碁石を四個の碁石で圍んで殺すこと。

***よつめゆひ**　佐佐木の紋は四つ目結(五人兄弟)

〔四目結〕紋所の名。



〔よつめゆひ〕

よつもん　馴れし衾(ふすま)の夜すがらも四つ門の跡夢もなし(冥途飛脚)

〔四門〕夜の四つ時(亥の上刻、今の午後十時頃)遊廓内を打廻る限(かぎり)の太鼓を合圖に廓の大門を閉鎖し、大門の鍵は町年寄に保管されたのである。往時大坂新町遊廓は夜の四つ時を門限として、内外の交通を遮斷した。門限の時刻となれば、太鼓を打つて瓢箪町より順次に廓内の諸町に廻報して大門を鎖す。廓内に泊らぬ遊廓はこの限の太鼓で廓を出て歸るのである。役者口三味線に、「太夫が今夜のもてなし前後に覺えぬ最中、四つ門うつとて觸るれば名殘惜しきは云云」。また攝陽落穗集に、「廓の大門を締切事。寛永の末迄は亥の上刻を以て限の太鼓打ちたりしに、夜まし日ましに繁榮に付自然と深更に移り、何となく亥の下刻・子の上刻と延引せり」、とあるやうに門限の時刻も次第に弛んだのである。冥途飛脚のここの文は、松の落葉(元祿十七年刊)卷之二、中興當流所作、稻荷塚四つ門、「翠帳紅閨に枕並ぶる床の内、馴れし衾の夜すがらも四つ門の跡夢もなし云云」とある唄に據つたものであつて、正德頃の限の太鼓はその實四つ時ではなくて、子の刻に及んだものである。「さんばんだいこ」をも見よ。

***よどごひ**　跳上りたる淀鯉の瀧の壺より湧出る(淀鯉)　竿振上ぐれば淀鯉の口よりみどり子這出て(西王母)

〔淀鯉〕雍州府志(貞享三年刊)六に、「鯉魚。所所有レ之、其中淀橋下所レ産爲レ勝、是稱二淀鯉一」。

よとみたかかははこいはか(聖德太子)

下から上に讀んで「可愛子母か形見とよ」となる。

***よなべ**　里の夜なべも時過ぎて(萬年草)

夜絢の義であらう。夜業の意にいふ。小野高尚撰・夏山雜談に、「よなべと云ふことは夜絢なり、詩・國風云、晝爾于レ茅、宵爾索レ綯云云、詩の意もあながち索ばかりに限らず」。黒川道祐撰・日次紀事、九月十三日の條に、「夜鍋。凡百工短夜早寢、此月夜漸長、故入レ夜亦作二其事一、是謂二夜鍋一、言及二深更一則以レ鍋煮レ物食レ之、故曰二夜鍋一」。

世並(よなみ)**のわるい疱瘡**　あつたら肝を潰したと、溜息ほつとついたるは、世並のわるい疱瘡に二番湯かけし如くなり(博多)

和漢三才圖會卷十、人倫之用の部、痘瘡(みつちや)の條に、「大概有二日數定格一亦一異也、凡出レ痘始終十二日」とありて、「熱蒸(ほとぼり)三日、出齊(でそろひ)三日、廻漿三日、貫膿(やまあげる)三日、收靨(かせる)三日」と載せてある。痘症の經過かくの如くならないで、惡くなるを世並のわるい疱瘡といふ。疱瘡を收靨(かせ)しめる爲に湯をかけ、一度で效果なくて、二度かけるを二番湯かけるといふ。諸儀定帳(東京帝國大學法學部研究室所藏寫本)に、「文久二戌年六月

麻疹病人看病人差向御廣敷ノ間へ勤左之通

一、麻疹病人者三番湯掛リニ候バ御番等可相

***らいち** 錐を立つべきらい地も無く、人馬みちみち並居たり(最明寺殿百人上﨟) この石塔は此方、隣は河津の墓、らい地せまつて氣の毒といへば(曾我扇八景)

〔畾地〕「畾」は田間の義。「畾地」とは空地、餘地の意にいふ。井原西鶴撰・日本永代藏・卷六、銀のなる木は門口の柊の條に、「一間四方の畾地に柊一本植ゑて見るも、我屋敷と思へば樂む心のかはる事なし」。

***らいばん** 切口より血流れて禮盤長床朱に染み(出世景清)

〔禮盤〕佛像を安置せる正面に置いてある高座をいふ。勤式の時に導師がこの上にのぼつて佛を禮拜する。

らういん 老陰却つて一陽の氣に催され(大織冠)

〔老陰〕陰の極まること。易學啓蒙に、「陰數至レ六而極、故云レ老也」。ここの文は陰氣が極まつてくれば陽氣が兆すにうながされの意。

***らうえい** 月待つ夜半の管絃の御遊、風俗催馬樂朗詠も玉簾深き聲もれて(蛙會戰)

〔朗詠〕聲を長うして高くその情感を諷詠する義。往時縉紳貴媛が嬉・悲・遊興につけ時の感興に伴へる詩歌を朗唱したのが、終に曲節を附けて朗詠と稱する一の謠物となつたのである。朗詠は藤原公任卿以前に起つて日を追うて盛になり、朝廷の儀式御遊にも用ゐられたが、戰國時代に至つて衰微し、德川時代になつて稍復興を見るに至つた。朗詠の樂譜を附けた古い本では、神宮文庫本の文永二年の奥書ある古寫卷子本の朗詠要抄などが現存してゐる。

らうかん 琅玕の臺を設け(浦島)

〔琅玕〕玉に似た美石。書經・禹貢篇に、「雍州厥貢惟球琳琅玕」。

***らうぜき** えい狼藉な、さがとやらぢやござらぬぞ(生玉)

〔狼藉〕狼の草を藉いて臥した跡の紛亂してゐることをいふ。よつてもつて亂れがはしいこと、亂暴の意にいふ。史記・滑稽傳に、「履舃交錯杯盤狼藉」。

***らうたし** それぞれの御作法おとなしくらうたげに、天晴源の世嗣やと(佐々木)

勞甚しの義。あまりに愛して我が心を勞すべき樣に思ふをいふ。かはゆらしい。

らうびつ 詮議にあうて牢びつの繩かかるのといふ恥と(冥途飛脚)

〔牢檻〕牢獄に繫がれることを婉曲にいうたので、臭い飯食ふといふの類である。

らうらう 四郎二郎はらうらうとつかれわびたる如くなり(傾城反魂香)

〔老老〕老衰の貌。きのふはけふの物語(寬永版)上に、「いかにも顏色衰へらうらうとしたる人たけだ法げんへ參り」。

らくがん 八疊敷の落雁二箱、八尺廻りの金米糖一折(大織冠) 落雁かすてら羊羹(傾城反魂香)

〔落雁〕菓子の名。北條團水撰・晝夜用心記(寶永四年刊)卷之一にも落雁・松風などといふ菓子の名が載せてある。書言字考節用集・服食部に、「落雁菓」。類聚名物考・飮食二に、「今らくがんと云菓子有、もと近江八景の平砂の落雁より出でし名なり、白き碎米に黑胡麻を村村とかけ入たり、そのさま雁に似たればなり、形は昔は洲濱のさまなりしが、今は種種の形出來たり、かかる物といへどもその初は故由有しが後はとりうしなへる事多く、その名同じくして物異に變るもの也」。御前菓子祕傳鈔(享保三年刊)に「らくがん＝干飯大小なきやうにそろへ、一勺程づつ平たき鍋に入、焦げ申さぬやうに炒り、氷沙糖一升に水二升入せんじ絹にてこし、其後又一升を五合に成申程せんじつめ、右の干飯にかきまぜ合、木に形をほり、其中へ入れおしかため、少日に干申候」。

***らくきよ** 落居の後はいま兄弟家を追出し申すべし(卯月潤色)

〔落居〕「らつきよ」ともいひ、落着の意。瑠璃天狗・三に、「落去は落着といふに同じ、去の字は宛字にて本字は落居とかく事下學集に見えたり」。

***らくしゆ** 京童の口ずさみ、落首洛外とりどりに其一ふしを繪草紙や(女腹切)

〔落首〕落書の一首の義か。時事人物を諷刺した匿名の狂歌などを、多く人目に觸れ易い場所・事件の發生した處、或は其目的とする人の門前に落し捨てたが故にこの名がある。和訓栞には、「らくしゆ。落書の音轉也といへり」とある。長町女腹切のこの文は、落首に類似音の語洛中をきかせて、洛外といひつづけたのである。

***らくへんげてん** 兜率天には手を取交し、らくへんげ天の戀衣、夫と妻とが忍ぶ夜は互につつと打笑ひ(五人兄弟)

〔樂變化天〕略して化樂天また化天ともいふ。欲界六天の第五天であつて、兜率天の上三十二萬由旬の所で、その壽八千歲であるといふ。「欲界の四王切利天云々」を見よ。

ら・けい 眼の光は羅・計・火星(關八州)

〔羅計〕羅睺と計都との二星をいふ。星命家は羅睺をもつて天首の星となし、計都を天尾の星となす。

らごら 釋迦は羅睺羅の親仁にて(隅田川)

〔羅睺羅〕梵名 Rahula. 釋尊の嫡子で母は耶輸陀羅である。佛道修業に志し、その行の密なること八萬四千の衆徒中第一であつたといふ。

***らじやうもん** 遣手のつなぢや、羅生門あけてたもといふ(淀鯉)

〔羅生門〕羅城門とも書く。京都平安城外郭の南門で、朱雀大路九條にあつたと云ふ。渡邊綱が羅生門で鬼の腕を切取つたことは謠曲・羅生門にも見えてゐる。ここの文は、遣手の名が綱であるから渡邊綱に思ひよせて、遊廓の大門を羅生門と洒落れていうたのである。

***らち** 德兵衞忙しげに立歸り、これ庄介喜兵衞埒があかぬの(重井筒) 一人ころ身に引纏ひ寢て見ても、一人ころりはエエらちがない、(重井筒)

〔埒〕垣。「埒が明く」とは仕事のはかどることにいふ。賀茂の競馬の時に見物人が馬場の柵の明くのを待くたびれていひ出したに起るといふ。(藻草に、埒明くといふ詞は、春日社祭禮の時金春氏の猿樂埒を開いて祝言を謠む、これより諸人共に入ることから起つたとある。)「埒が無い」とはきまりがつかない、物足らない、つまらないの意にいふ。(「らちがない」を﨟次が無いの音便とするはいかが、俚言集覽に、「埒もない。埒口もないとも云、又﨟次ないとも書けり、倭訓栞、らつし﨟次と書けり、愚按、俗語は無埒の義に似たり」。

らつきよ 「らくきよ」を見よ。

臘月(最明寺殿)

十二月の稱。唐書に、「以二十二月一爲二臘月一」。下學集に、「臘月。支那十二月之祭名レ臘、故云二臘月一也」。

いてばかり（心中天網島）
〔讀〕わかる。合點す。推知す。數へる。萬葉集に、「月日を數みて」と見えてゐる。「よみ」をも見よ。

*よめ　好い男さへ稀なれば、少しよめなる女房のびかしやかぶるは科ならず（薩摩歌）
「よめ」は弱女の義、たをやめ。優麗な女。倭訓栞に、「よめ。婦をいふ、弱女の義也、手弱女人といへる意也」。

よめのふし　骨あひ肉なみよめの節（源義經）
〔夜眼節〕馬の前脚の膝關節。都會節用百家通に馬形之名所の圖説を載せ、馬の前脚の膝關節の少し上に夜眼と記してある。倭訓栞に、「よめ。倭名抄に夜眼をよめり、馬の前脚に有、或は音によべり、其形蟬の如し、よて附蟬ともいふ、よめの節は屈の節といふ是也」。「あつぱれ御馬候や云云」をも見よ。

よもぎのや　産屋の儀式桑の弓、蓬の矢事七夜の御賀（松風）
〔蓬矢〕蓬の葉で羽を矧いだ矢をいひ、男子出産の時、これを桑の弓につがへて四方を射、以てその子の將來の雄飛を祝福したものである。蓋し禮記・射義に、「男子生、桑弧六、蓬矢六、以射二天地四方一、天地四方者、男子之所レ有レ事也」と見えて、支那上代の故事にもとづいたのである。太平記・卷二十五、醫師評定の條に、「六月八日の朝生産容易くして、然も男子にてぞおはしける、蓬矢の慶賀天下に聞えしかば」。

*よりおや　寄親の勘十郎に打明けて（歌念佛）　中間頭寄親の四十平下見をして（薩摩歌）
〔寄親〕親方。倭訓栞に、「よりおや。寄親の義、寄は寄寓の謂、親は親方の如し、事文類聚の舉主也といへり、よりこも寄子にて、よりおやの對稱也」。

*よりかぜ　末は淀のや男山、麓に立てる夫婦塚、その二道により風の、悋氣爭ひ理をもちて、霜にふけたる女郎花（松風）
〔頽風〕「めをとづか」を見よ。

*よりにんぎやう　これ摩耶夫人調伏のより人形、生れ年御名を書き（釋迦）
〔寄人形〕靈を寄らせる人形の義、咒詛しようとする人に似寄せて作れる人形。

*よりぼう　よりぼう・杖よ簓よと（堀川波鼓）　すは盜人よ、より棒よ提灯と、若い者ども駈出る音（生玉）
〔寄棒〕捕手などが用ゐる五六尺の圓い棒。捍棒。

*よるのおとど　殿上・晝御座・夜の御殿（振袖始）
〔夜御殿〕淸凉殿内晝御座（ひのおまし）の北の妻戸の内の室の稱。「朝拜殿（てうはいでん）に尊（みこと）あれば云云」を見よ。

よるのとの　これ夜の殿、我は微塵もたくまぬこと、皆親爺の無分別より起つた（天鼓）
〔夜殿〕夜の狐をいふ。越谷秀實編・物類稱呼・卷二、動物に、「きつね。關西にて晝はきつね、夜はよるのとのと呼ぶ、西國にてはよるのひととぞいふ、又關西にてすべてけつねとよぶなり」。

*よろこぶ　夕霧殿の假（かり）の情連合ひ子を誕生とて、此方へ請取り言はば我がよろこぶ子（夕霧）　わらは後づれ久太郎をよろこび・殿にも後れ兄弟ながら後家親の養育にて（吉岡染）　何の因果にかよろこびしてもう三年、今宵の乳の張ることよ（大織冠）　牢輿の上臈悦びの氣がついて、うめき苦しみ給ふ聲（磔靜）
〔悦〕出産の悦の義より轉じて分娩するをいふ。生む。「悦びしてもう三年」の悦びは名詞。出産。「悦びの氣」とは産氣をいふ。

よろひぐさ　千草の錦色色の、鎧草とて小手さし原（千疋犬）
〔鎧草〕牡丹の異稱。刺（とげ）あるによつていうた名であらう。俳諧歳時記栞草・夏の部に、「よろひ草。牡丹の一名なり、名義未レ詳、夜白艸の略言にや」。

よろひづき　金物の音に目や覺めん、鎧づきすな足音すな（酒呑童子枕言葉）
〔鎧付〕絶えず鎧を搖上げて隙の無いやうにすること。平家物語・卷九、一二のかけの條に、「鎧付を常にせよ、裏かかすな錣を傾けよ」。

よろひどほし　革籠の中より氷のやうなる鎧通おつ取り腹にぐつと突立て（嫗山姥）
〔鎧通〕太刀脇差の他に別に佩びる刺刀であつて、敵と組合うた時に鎧の上から刺殺すに用ゐる。

よろひむし　やたけ心のよろひ蟲（小栗判官）
〔甲蟲〕脊に堅い甲殼ある蟲の總稱。

よんじりよめご
「だうがねのよんじりよめご」を見よ。

ら

らいぎ　頼朝が世にこの仙鳥の出づる事來儀の鳳凰これならん（扇八景）
〔來儀〕鳥の來り舞うて容儀あること。書經・益稷篇に、「簫韶九成、鳳凰來儀」、とありて註に、「來儀、像舞而有二容儀一也」。

らいくわん　私は雷煥が子孫雷同と申す鍛冶（唐船噺）　雷煥といふ者天文を考へ、土中を鑿つて干將莫邪の二劔を得たり（嫗山姥）
〔雷煥〕晋時代豫章の人、緯象に通じ、武帝の時斗牛の間に紫氣あるを判して、豫章豊城縣の獄屋の基を掘つて、龍泉・太阿の二寶劒を得た。詳しくは晋書及び蒙求に出てゐる。「ちやうくわ」「ばくや」を見よ。

らいさん　持經禮讃つくろはず（蟬丸）
〔禮讃〕善導大師の撰・往生禮讃の略し、阿彌陀佛の淨土に往生せうと願ふ者の晝夜六時に禮拜讃歎するに用ゐる讃歌である。

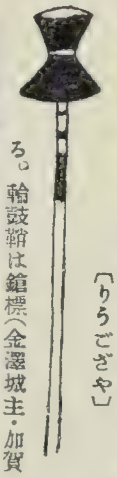
*らいじやうどうのゆみ　御供の武士には渡邊の綱調度掛として雷上動の御弓、坂田の公時箙の役（關八州）
雷上動の弓或は賴政勝の弓といへど定かでない。伊勢貞丈撰の四季草・春上、及び貞丈雜記・卷十・弓矢の部にもこの弓のこと知れぬ由記してある。源平盛衰記・十六、三位入道安藝等の條に、「十六さしたる大中黒の矢の表に、水破兵破と云鏑矢二を指、雷上動と云弓をもたせたり」。

りうくわゑん 夜半樂の梅が香に柳花苑もなつかし(三國志)

〔柳花苑〕雙調の樂名。謠曲・咸陽宮に、「花の春の雩曲は花風樂に柳花苑、柳花苑の鶯は同じ曲の囀り」。

りうご 橋立が雨の腕首りうごになれとしつかと括り(持統天皇) 黑羅紗のりうご鞘、同じく桔梗十文字、紺に無紋の六尺は加賀に梅鉢百二十萬石(薩摩歌)

〔輪鼓〕鼓の胴をいひ、中の括られた形である。輪鼓鞘は鎗標(金澤城主・加賀宰相前田綱紀)である。



〔りうござや〕

りうこしや 「りゆうこしや」を見よ。

りうせん 流れに響く御溝水、流泉啄木の曲をあやつるとはかかる事なや(反魂香)

〔流泉〕流泉も啄木も琵琶の曲名である。仁明天皇の御代掃部頭貞敏といふ人入唐して、廉承武といふ琵琶の名手から傳授された祕曲であるといふ。詳しくは源平盛衰記・第十二巻及び三十一巻に見えてゐる。

りうてい 「りゆうてい」を見よ。

りうはくうん 我は先祖高皇帝、我は靑田の劉伯溫(國性爺)

〔劉伯溫〕劉基字を伯溫といひ、靑田の人である。明太祖金陵に下るに及び謁して時務を陳した。これより常に帷幕に參し佐命の功があつた。

*__りうはくりん__ 面白や劉伯倫がもてあそび、今ここに酌めやくめ(袉狩)

〔劉伯倫〕劉伶字を伯倫といひ、西晋時代沛國の人で、竹林七賢の一人である。放情肆志形骸を土木となし、常に宇宙を納め萬物を齊しうするを以て心となす。最も酒を嗜み縱酒放達裸體で屋中に居る。人之を譏れば伶答へて、我は天地を以て棟宇となし屋室を以て褌衣となす。諸君何すれど我褌中に入ると言つたといふ。

*__りうん__ なう悲しや父様(とつさま)、身にあやまりあればこそ段々のわび言、あんまりりうん過ぎました(天網島)

〔利運〕運の利にかなふことの義、轉じて主張の正しく有利なるを立(たて)にとること。合類大節用集・言辭門に、「利運(りうん)」。

*__りきしや__ 折しも上人りきしやどもに張輿舁かせ御歸寺あろ(小栗判官)

〔力者〕力役の者の義。駕籠舁、輿舁、人足の類をいふ。

*__りきむ__ 見やうが惡いと兎さぬと、臀をなまつてりきみける(二枚繪) よい年の兼房血が枯れて智慧も枯れたるか、りきんでよくば去年の春なぜ腰越より歸りしぞ(殘靜)

「りきみ」(力身)を動詞マ行四段に活用させた語であらう。身に力をいれる。勢を張る。

*__りぎよ__ 孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き(歌念佛)

〔鯉魚〕名は鯉、字は伯魚、孔子の子である。「傳(つた)へ聞(き)く孔子は鯉魚に別れ云云」を見よ。

*__りくぎ__ 善惡二つを嚙分けて、六義を正す柴崎に思案橋を思ひ出す(今宮) 物の筋道りくぎを立て(生玉)

〔六義〕周禮・地官に、「保氏養₂國子₁以ㇾ道、敎₂之六義₁、一日祭祀之容、二日賓客之容、三日朝廷之容、四日喪紀之容、五日軍旅之容、六日車馬之容」と見えてゐる。轉じて六義を道理・義理の意にいふ。今宮心中のここの文については「柴崎」をも見よ。

りくぎ 我敷島の歌の道もかくやあるべき、六義十體其樣似たりといへども(持統天皇)

〔六義〕古今集の序に、「そもそも歌のさま六つなり」とありて、そへ歌、かぞへ歌、なずらへ歌、たとへ歌、ただごと歌、いはひ歌と見え、眞名序に、「倭歌有₂六義₁、一日ㇾ風、二日ㇾ賦、三日ㇾ比、四日ㇾ興、五日ㇾ雅、六日ㇾ頌」と見えてゐる。(玉勝間・十二に、「歌に六義といふことをやんごとなき事にするはいと愚なることなり、六義はもろこしの國にて上代の詩にさたせることにこそあれ、歌には更にさせることなし、歌にいふは古今集の序に歌のさま六つなりとて、その六くさを分けてあてたるより起れることとなるを、そはかのもろこしの詩にならひて六くさに分けたれども、更にかなはぬことどもにて云云」)。

りくくわ・りくえふ・しくわ・しえふ 六花六葉四花四葉、これ定まりの花の法度(聖德太子)

〔六花六葉四花四葉〕諸藝小鏡(貞享三年刊)、立花法度之事の條に、「一枝に花三つあれば面へ二つ出すべし、五つあるは三つ也、一葉一花四葉四花六葉六花をきらふ也」。

*__りくげい__ 韓退之・歐陽子が文にも恥ぢず、六藝一つも缺かざること賞しても餘りあり(天神記)

〔六藝〕禮、樂、射、御、書、數。

りくしうせい 陶淵明・りくしうせい、彼此聞ゆる賢聖の(本朝用文章)

〔陸修靜〕支那南北朝時代吳郡の人、文籍に通じ神仙を慕ふ。廬山東林寺に住み、陶淵明・慧遠法師と共に白蓮社を結ぶ。宋の文帝に召されて道を講ず。元徽五年歿す。年七十二。

りくしん 「ろくしん」を見よ。

りくせき 二十四孝の陸績が橘を袖に入れ、氷に臥して魚を得しも、それぱかりを孝行とて異國本朝譽めはせぬ(會稽山)

〔陸績〕二十四孝の一人である。字は公紀、吳の人、六歲の時に袁術の許に行く。術橘を出して績を饗した。績その三個を懷に入れて歸らうとして落した。術曰く陸郞賓客となつて橘を懷にするかと。績曰く橘甘旨きによつて母に遺らうと思ひますと。術その孝心に感じたといふ。

りくたん 凡そ繪の道に六つの法あり、長康・張僧・陸探の三人を異朝の三祖と學び來て(反魂香)

〔陸探〕陸探微をいふ。宋時代吳の人。明帝の侍從となり、畫を以て名を博した。

りくてい 「りつかふ」を見よ。

りくへいえいはう 延喜の帝陸平永寶・駒曳錢を鑄させて(反魂香)

〔陸平永寶〕隆平永寶の誤であらう。隆平永寶の初鑄は桓武天皇の延曆十五年十一月で、經八分八厘から七分六厘程、重量一匁一分三厘乃至七分二厘あつて現存してゐる。延喜の帝の時には、延喜七年十一月に延喜通寶の鑄造あつて、これも現存してゐるか、陸平永寶といふものは古書に見當らない)。

りくりくりん 龍の氣ざしの六六鱗、沸つて落つる水の勢、鰭をたたいて龍門の(會稽山)

〔六六鱗〕鯉をいふ。鯉の兩面に、頭から尾まで、いづれも一列に黑點ある鱗三十六枚列んでゐる。「龍の氣ざしの六六鱗」とは、鯉は後に龍となるといふ俗說によつてかくいうたので

らむうげんだ　「うげんだ」を見よ。

らんけん　さるぜ、らしや、すためん、かるさい、らんけん、繻子、天鵞絨(博多)

和蘭語(Laken)の訛。羅紗をいふ。昆陽漫錄に、ラーケンは和蘭語にて、羅紗のことをいふと見えてゐる。

らんじのひもん　その身も日笠さしかけさせ、らんじの祕文を繰掛け繰掛け(嵯峨天皇)

〔覽字祕文〕火焔の祕文である。「らん」(梵字)は地・水・火・風・空の五大中、火大の種子であつて法界生の火神を表す。祕密眞言觀行要覽に、「(梵字)字法界生火神、卽是毘盧遮那一切智智體也」。

らんじや　「らんじやたい」を見よ。

らんしやう　無間の鐘の濫觴を尋ぬれば(博多)　此鐘の濫觴は龍宮の紫金を取つて、世尊火境三昧の蹈鞴をもつて　用明天皇

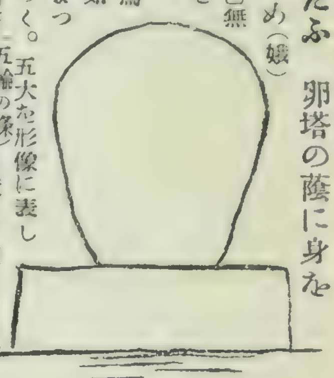
〔濫觴〕原始をいふ。家語・三恕篇に、「江始出二于岷山一、其源可三以濫二觴一」とあるより出づ。

＊**らんじやたい**　帝より給はりし蘭奢待の名香内兜にたきしめん　吉野忠信　御座所は櫓の上らんじやくゆらせ(三國志)　蘭麝の梅が香や(國性爺)

〔蘭奢待〕聖武天皇の御宇に唐朝から奉獻し、奈良の東大寺正倉院勅封御庫に傳來せる名香で、御物となつて現存し本名を黃熟香といふ。末細く下太く胴部の一方は空𡉕である。長さ五尺一寸・重さ三貫五百目あるといふ。蘭奢待は支那にて蘭麝と記し、蘭と麝香の如き芳香ある意。これを蘭奢待と記すは東大寺の名を寓したもので、卽ち蘭の中に東の字、奢の上に大の字、待の右に寺の字を含ましめたものであるといふ。

＊**らんたふ**　卵塔の蔭に身をひそめ(娘)

〔卵塔〕無縫塔をいふ。其形鳥卵の如きによつてこ名づく。五大を形像に表して五輪塔(「五輪」の條を見よ)を造り、更にこれを一印會の大日如來として統一し卵塔を造る。



〔卵　塔〕

らんでんぐさり　大將賴義公はらんでん鏁の御着長着込になされ(大掛物)　らんでん鏁の疊み具足(酒吞童子枕言葉)

細かな鏁の上に紋鏁を入れたもので、八重鎖なる由貞丈の說なれど、詳でない。

らんばこ　下女たる者に持たせたる覽箱開いて一通の文を取出し(今川了俊)　院宣のらん箱は文覺上人開き給へば(伊豆日記)

〔覽箱〕故實要抄に、「覽箱。是節會等の時宣命を入るる筥也」と見えてゐる。覽箱は元來櫛笥の懸子である。宮女が寢に就くとき、櫛笥の懸子を枕邊に置いて垂髮を其箱の中にたわめ入れたによつて亂箱と稱したのが、宣命を入れる箱にもなつて覽箱とも書き、後には一般に文書などを入れて、文匣・手箱と同種類となつたのである。

らんばじん　鳩槃茶夜叉神、藍婆神、この神國に害をなさじと(振袖始)

〔藍婆神〕藍婆鬼ともいひ、正法華經に結縛と翻し、十羅刹女の一である。「くみやうからうたい」の條を見よ。源平盛衰記に、「承曆元年の春藍婆鬼といふ鬼京中にみちみちて、十歲以前の少者十が八九はとり失はれければ」。

＊**らんばふう**　汝が信心一天下に知らせんと我慢に灯す萬燈なれば、汝が一念らんば・びらんばの惡風となつて萬燈を一時に打消し(釋迦如來誕生會)　前へ走ればらんば風、後へ戾ればびらんば風、烟は咽に息切れて(釋迦如來誕生會)

〔藍婆風〕藍婆は遲と譯す。速力の遲い風をいふ。「びらんばふう」を見よ。

＊**らんぶ**　お主の敵は打忘れ盤上亂舞の遊び事(碁盤太平記)

〔亂舞〕能樂にて演戲の間に一さしとて舞ふもの。

らんよ・しよくしや　鸞輿屬車の玉衣の隙間の風もいとひしに(蟬丸)　鸞輿屬車の輦も蔦の錦に織りかへて(國性爺)

〔鸞輿屬車〕鸞輿は天子の乘輿をいふ。鸞は鑾とも書き、鑾鈴を備へたので、鑾鈴は鸞鳥の聲の和するに象つたのである。班固の西都賦に「乘二鑾輿一備二法駕一」。貞觀政要に「鑾輿在レ前、屬車在レ後矣」。屬車は天子の御輿に從うて臣下の乘る車。「古へは一夜とまりし宿までも云云」をも見よ。

らんるてう　「えんまそつさんこんをばくして云云」を見よ。

り

りうえい　すはといはば柳營の御所駈付けんず心懸け(虎が磨)

〔柳營〕將軍の陣屋をいふ。柳營は細柳營の略である。漢書・周勃傳に、「文帝後六年匈奴大入レ邊、以二宗正劉禮一爲二將軍一軍二霸上一、祝茲侯徐厲爲二將軍一軍二棘門一、以二河內守亞夫一爲二將軍一軍二細柳一以備レ胡、上自勞レ軍至二霸上及棘門一直馳入、將以下騎出入送迎、已而之二細柳軍一、軍士吏被レ甲銳二兵刃一彀二弓弩一持レ滿、天子之先驅至不レ得レ入、先驅曰天子且レ至二軍門一、都尉曰軍中聞二將軍令一不レ聞二天子之詔一、有レ頃上至又不レ得レ入、於レ是上使レ使持レ節詔二將軍一曰、吾欲レ勞レ軍、亞夫迺傳言開二壁門一、壁門士請二車騎一曰、將軍約軍中不レ得二驅馳一、於レ是天子迺按レ轡徐行至二中營一、軍將亞父揖曰、介胄之士不レ拜請以二軍禮一見、天子爲動改レ容式レ車使三人稱二謝皇帝敬勞二將軍一成レ禮而去、旣出二軍門一、群臣皆驚、文帝曰嗟乎此眞將軍矣、鄕者霸上棘門如二兒戲一耳、其將固可二襲而虜一也、至二於亞夫一可レ得而犯一耶、稱レ善者久レ之」、とある故事によつて將軍の陣屋を柳營といふ。

りうきうむしろ　蝦夷が千島や朝鮮國、琉球筵敷島のこの日の本の外までも(卯月紅葉)

〔琉球筵〕琉球から產出する筵で、莎草を織つたもので剛靱久しきに耐へる。和漢三才圖會・卷三十二、家飾具の部、筵の條に、「琉球筵(御倉筵)以二莎草一織レ之、剛靱耐レ久、又名二御倉筵一(御倉者琉球島之名)、出二於豐後府內一者、似二琉球筵一而薄、其色微青、故呼曰二青琉球一云々」。巢林子のこの文は、琉球といふに琉球筵をいひかけて、筵は敷く緣から敷島にいひつづけたのである。

りうくわう　りうくわうさうくわう瑪瑙の鞭(小栗判官)

〔流黃〕玉の名。辭源に、「流黃。玉也、(淮南子)流黃出而朱草生」と見えてゐる。

管絃の御遊に浮べられた船である。

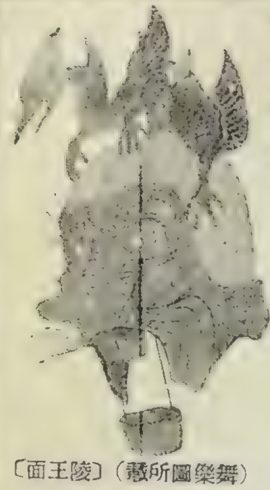
りゆうめ 欲天の阿修羅王龍馬に駕せしもかくやらん(用明天皇) たとひ龍馬千匹萬匹にもせよ(百日曾我)
〔龍馬〕龍蹄といふに同じ。駿馬をいふ。周禮に、「馬八尺以上爲レ龍」。李白の白馬篇に、「龍馬花雪毛、金鞍五陵豪」。

***りゆうもん** しんぞ逢ふ夜の緋縮緬、龍紋の幅廣を戀に併いたる勢なり(戀物揃)
〔龍紋〕綾紋の訛か。地質厚く、綾目斜に高くて、光澤のない絹布。絹布重寶記に、「龍紋＝尺巾、疋もの也」。和漢三才圖會・卷二十七に「素紬(りうもん)＝俗云利宇毛牟、按素紬出二中華及朝鮮一、地似二無紋綾一而厚强、又有二紋素紬一、共不二光澤一」。ここの文は、龍紋に龍門、戀に鯉をいひかけて、龍門の鯉の瀧登りの勢をきかせたのである。

***りようがん** 如何なる折にか龍顔を拜すべき(國性爺後日)
〔龍顏〕天子の御顏の相にいふ。天子の御顏。史記・漢高祖紀に、「高祖爲レ人隆準而龍顏」。

***りようら** 綾羅錦繡を身に纏ひ(夕霧)
〔綾羅〕「綾」はあやぎぬ。「羅」はうすぎぬ。宋史・食貨志に、「東川湖南綾羅紬七萬匹」。張華の輕薄篇に、「婢妾蹈二綾羅一」。

陵王(りやうわう)の樂の面 (浦島)


〔面王陵〕(藏所圖樂舞)

舞樂圖說・舞面の部に、「陵王 左舞(しわげたひ)中面 壁額 眸(どんぐりまなこ)目、綠髮高鼻、開レ口顯レ齒、頭上戴二躍龍嬌(もたげくび)レ首吐レ火者一」。

***りよぐわい** ちよつと飲んでお師匠へ慮外ながらと禮をなす(堀川波鼓) この奴慮外者、お小袖馬具に泥をかけて怪我というては濟まぬ(女殺)
〔慮外〕意外の義より轉じて、不敬、無禮、ぶしつけの意にいふ。貞丈雜記・卷十五に、「慮外といふはおもんぱかりのほかと讀みて思の外といふ詞なり、今江戸にて無禮のことを慮外といふは非なり」。

りよどうびん 呂洞賓は劍に乘る(國性爺後日) 道書にも、呂洞賓が袖の中の靑蛇を抛つて黃龍に乘ぜしは、身の中の蓬萊山を唯心の淨土と表したり(用明天皇)
〔呂洞賓〕名を嵓といひ、唐時代京兆の道士で、神仙の術を學び、俗に八仙の一となす。列仙全傳に、「呂嵓字洞賓、……遇二火龍眞人一傳二天遁劍法一、……洞賓旣得二雲房之道、兼二火龍眞人天遁劍法一、始遊二江淮一、試二靈劍一遂除二蛟害一、隱顯變化四百餘年」。

りよふがせきとめ 異國の呂布が赤兎馬もこれにはいかでまさるべき(源義經)
〔呂布が赤兎馬〕呂布字は奉先、支那後漢末(三國時代)の人、董卓を誅した武功によつて溫侯に封ぜられ、後・魏の曹操と戰ひ敗れて縊殺さる。布嘗て良馬を御す、その馬を赤兎といふ。後漢書・列傳第六十五、呂布傳に「布常御二良馬一、號曰二赤兎一、能馳レ城飛レ塹」。

***りよりつ** 絲竹呂律の聲聲に(天鼓)
〔呂律〕呂も律も音樂十二律の中に屬す。呂は陰に屬する音調で、律は陽に屬する音調である。松田健編・補註樂說紀聞(寫本)に、「呂律のこと和漢の相違あれば委しく辨じ難し、本邦にては呂を春とし律を秋とす、これ和漢の相違なり」と見えてゐる。天鼓のここの文につきては「同じく寶の鼓をする云云」を見よ。

りり 森森たる人品千丈の松の如く、礫礫(りり)として節多く(川中島)
「森森(しんしん)たる人品云々」を見よ。

りんきかう 急な所の悋氣講と、なかしさどうもたまられず(蟬丸)
〔悋氣講〕女相集つて互に我夫の惡性又は其情婦を誹つて語り合ひ、以て悋氣に對する鬱忿を慰めることをいふ。井原西鶴撰・好色一代女・卷之三、妖孽寬濶女の條に、「今宵もまた長蠟燭の立切まで悋氣講あれかし云云」とありて、身分高き女の其召使女等と共に、互に我夫の情婦を惡み誹り合ふことを記してある。俚言集覽に、「悋氣講とは下賤のかか等の寄合ひて今の無盡講の事をするを云ふ、かかの寄合なれば其夫の事を誹る故に悋氣講の名あるなり」。

りんざう りんざう多寶塔引聲堂(聖德太子)
〔輪藏〕大藏經を納め、機輪を設けて運轉するやうにしてある經藏。大阪の四天王寺には輪藏あつて藏經四百八十函を藏してある。

***りんし** 兄義貞鎌倉追討の綸旨を蒙り(千疋犬)
〔綸旨〕天皇の勅旨。「りんげん」と併せ見よ。

***りんす** こりや旦那さんで御座りんすか、內方に居さんす半七殿に一寸逢ひたう御座りんす、親方ぎよつとして、はていかうりんすりんすと言ふ女子ぢや(女腹切) これから直に曾根崎へ叶はぬ用とて御座りんした(女殺)
「あります」の「あ」が略され、「ま」が「ん」になつた語で、「ありんす」ともいひ、京阪地方の廓詞である。嬉遊笑覽に、「吉原遊女の詞一種ありて他に異る樣なり、故に徒流がナンセ、リンス、シンスなどを始めとして餘國に聞かざる言葉多し、奇語と云ふべし」と見えてゐる。蓋しこれも島原言葉の名殘である。川柳の句に、「馬鹿らしうありんす國の面白さ」と詠んだのがあるのも、吉原遊里をありんす國と洒落ていうたのである。

りんせい
〔林淸〕「さんしやうだいふ」の條を見よ。

りんだう 正眞の紫菀・りんだうのあしらひ(聖德太子)
〔龍膽〕りうたん、りうたうともいひ、草の名。葉は卵狀披針形で、秋の頃筒狀紫色の花を開く。和名抄に、「龍膽和名衣夜美久佐(えやみぐさ)、一云邇加奈(にがな)、味甚苦、故以レ膽爲レ名也」。


〔うだんり〕

りんによがる 娘よ妹よ兎せろ角(つ)せろとぎやつて、りんによがつてくれめせかし(女護島) 都人のござんすより、りんによぎやあつてくれめすが身にしみわたる(女護島)
眞によく仰しやるの義。懇におつしやる。薩摩國訛では「し」を「り」にいふことがある、「りんに」は眞にの義。「よがる」は「よぎやある」ともいふ。よくおつしやるの意。「ぎやる」を見よ。

りんばうぶね 先陣にりんばう船を立並べ水彈を湛へ、敵の火矢を防

ある。書言故事に、「水經、鱣鯉出二鞏穴一、三月上渡二龍門一、得レ渡爲レ龍」。

***りこん**　提婆達多利根聰明、御年十二歳とは申せども（釋迦）　さのみ利根に言はぬもの（曾根崎）

〔利根〕利發な根性。利發。鬱草に、「法華經云、正見・邪見・利根・鈍根、今俗の利口といひ利根といふ各意義有べし、利根とは才の發したる人をいふべし」。

***りしやう**　あの月天子も照覽あり、利生は無下（むげ）にはよもなるまい（大經師）

〔利生〕利益衆生（りやくしゆじやう）の義。利益（りやく）。

りしやうぐん　李將軍は虎と組む（反魂香）

〔李將軍〕李廣利をいふ。但し李廣利が虎と組んだことは古書に見當らない。虎と思うて石を射たといふを誤り傳へたのであらう。「りくわう」を見よ。

***りたふてん**　表にいやな李蹈天がゐるわいの（天網島）

〔李蹈天〕國性爺合戰にある人物である。人名部を見よ。ここの文は太兵衛を惡んで李蹈天といふたのである。

***りちぎ**　弟は律義な顏つくり（二枚繪）　この金目丸生付いてりちぎ者（天鼓）　長は元來律義者（小栗判官）

〔律義〕眞面目。正直。德義全うして缺けないことにいふ。圓覺經に、「不レ令三衆生入二不律儀一」。

***りつ**

〔律〕「りよりつ」を見よ。

りつかふ　晴明右近に近づき、りつかふりくていの祕文を唱へ（酒呑童子枕言葉）

〔六甲〕六甲神卽ち甲子神梁丘伸、甲戌神扶永距、甲申神扈西嶽、甲午神司天獄、甲辰神淵泉、甲寅神陵彭間をいひ、六丁の神は丁酉玉女登赴、丁丑玉女月光、丁亥玉女登姑、丁卯玉女開明、丁未玉女浮英、丁巳玉女嬰童をいふ。六甲六丁の祕文は陰陽道にいふもので、新刻萬法歸宗周易內祕丁甲大法にある六丁六甲祭咒に、「朝陽朝陽念動日光叢符吞之、其神來報謹請南斗、六星北斗七星吾奉太上老君急急如律令」と見えてゐる。神仙傳に「左慈學道尤明二六甲一、能役二使鬼神一」。後漢書の註に「六丁謂二六甲中丁神一也、若甲子旬中則丁卯爲レ神、甲寅旬中則丁巳爲レ神之類」。

***りつし**　御仕の弟子裕辨律師を始めとして（萬年草）

〔律師〕僧都の次位の僧官である。僧の戒律を保つもので、主に行狀の勝れた者に任じる。

りどうじしよう　法名つけば死人なり、おもりの石は標の石、手にかけ給ふ理は同じく命たすかることは勝れ、理同事勝の法門にかなはせ給ふ御心（嫗）

〔理同事勝〕其理同じうして其手段のすぐれたこと。

りとうてん　「りたふてん」を見よ。

***りふじん**　かの李夫人のあだし影、消えて果敢なき別れなり（一心五戒魂）

〔李夫人〕「はんごんかう」を見よ。

りやう　幾年の齡を以て何の名聞りやうぞや（大原問答）

〔利養〕利を以て身を養ふをいふ。菩薩戒經に、「爲二利養一故、爲二名聞一故、惡求多求」。著聞集・釋教に、「みだりがはしく名聞利養の識なりといへるこそ云云」。

りやうあん　「父母（ふぼ）の別れには云云」を見よ。

りやうげ　「れうげ」を見よ。

りやうぢんひじやう　梁塵ひじやうの間の聲しならしくも亦心地よし（日本武尊）

〔梁塵飛上〕聲の强く響く故に梁（うつばり）の塵も飛上るとの意。遊仙窟・卷四に、「淸音咣叨、片時則梁上塵飛」と見え、また李善の文選註に、「七略曰、漢興魯人虞公善雅歌、發レ聲盡動二梁上塵一」と見えてゐる。

兩頭（りやうとう）の大蛇　（酒呑童子）

「じやうざん」を見よ。

りやうぶしゆがふ　當社はもと唯一の神道なるに此頃兩部習合と名付け（嵯峨天皇）

〔兩部習合〕「ゆゐいちのしんたう」を見よ。

りやうほうどうじ　兩寶童子の御相好、妙なる御聲あざやかに（女楠）

「うはうどうじ」（雨寶童子）の誤。その條を見よ。

りゆうがん　「りようがん」を見よ。

りゆうがんにく　料理も念入れ龍眼肉の御飯（國性爺）

〔龍眼肉〕龍眼は熱帶地方に産する植物の名。葉は羽狀複葉をなし常綠、果實は圓形で、果皮に茶褐色の細紋がある、中に枇杷のやうな種子があつて肉に包まれてゐる、その肉は食用又は藥用となり龍眼肉といふ。

りゆうこしや　綛る涙のりゆうこしやに、あひの水さへまかすらん（氷朔日）

〔龍骨車〕水を田に注ぐ農具。車輪の狀をなし蹈廻して水を跳上げるやうに仕掛した水車であつて、其形龍の骸骨に似てゐるよりの名であるといふ。

りゆうざう　龍象の波を蹴立つる四足の働き（關八州）

〔龍象〕智度論卷三に「水行中龍力大、陸行中象力大」と見え、また維摩經・不思議品に「譬如二龍象蹴踏非二驢所一レ堪」とあつて、同嘉祥疏に、「此言二龍象一者只是一象耳、如レ好二馬名一龍馬一、好象云二龍象一也」と見えてゐる。

***りゆうじん**　（國性爺）

〔龍神〕「八大龍神」を見よ。

***りゆうてい**　司司の太夫達・諸の仕へ人思ひ思ひの捧げ物、御劔・龍蹄・鳩の杖（日本武尊）

〔龍蹄〕駿馬をいふ。下學集・上卷、氣形の條に、「龍蹄。逸馬異名也」。周禮に、「馬八尺以上爲レ龍」。巣林子作・用明天皇職人鑑に、「宸襟を安んじ國家の太平を致すべしとの宣旨を蒙り、りうていをさしむけらる、命が惜くば陣頭に股を潛つて降參せよ」、とある「りうてい」も龍蹄で、兵馬の意にいうたものである。

***りゆうどう**　りゆうどう天燈かかげ添へ（釋迦）　宮居貴く神さびて龍燈の光增し（傑節）

〔龍燈〕龍神の捧げる神燈である。蓋し海中の燐火時として燈火の如く連り光るのをかくいうたのであらう。（「りゆどう天燈」とある天燈は、天女の捧げる神燈をいふ）。謠曲・白鬚に、「殊更今宵は天燈龍燈神前に來現の時節なれば」。

龍頭（りゆうとう）・鷁首（げきしゆ）　引舟は扨置き假令龍頭鷁首でも容もせずに取らうとは（吉岡染）　やんれ龍頭鷁首の黃金の枻やア玉の棹（女護島）

龍頭は龍に象つた船、鷁首は鷁といふ水鳥に象つた船である。龍は水を待つもの、鷁は水鳥なれば、その緣よりして船首に之を象つたのである。淮南子に、「龍舟鷁首云云」とあり高誘註に、「鷁、水鳥也、畫二其象一著二船首一以禦二水患一」と見えてゐる。往古朝廷の詩歌

今選化の跡までも、我が親は講中の第一（宵庚申）

〔了海〕正德四年大阪町中を勸進し、貧窮人救恤に盡した高僧である。濱松歌國撰・攝陽奇覩・卷二十四下、正德四年の條に、「十一月十五日より十二月十日迄了海和尚町中を勸進して、堀江あみだ池和光寺にて貧窮人へ白米二合づつ施行、凡米碓二十斗りを以て毎日踏出せり、群集夥し、是より町家富人も米錢或は白かゆを施すもの所々にあり。今年秋作五穀高直に付、米一石代貳百三十目餘也、了海和尚和光寺に而施行米凡人數三十四萬人餘、此米代銀百二十貫目餘」。

*れうげ　ちつとしたれうげ違(ちがひ)で物思はせたいとしやの（宵庚申）

「れうけん」（料簡）の約(つづま)つた語。「れうけん」を見よ。昨日渡今日能物語に、大黑を梵妻と思違へたことを記して、「或寺に名作の大黑のあるよしを聞及びたる檀那參りて、一目見たいと所望する、……御存知の上ぢや程に御目に懸けうとて、これんならちとお出(で)やと呼出すを見れば、年ごろ十六か十七ばかりの未だわきの下のふくろびたる、みめ形はいはう所もない美人なり、此樣なるりやうげちがひはあるまい」と見えてゐる、「りやうげ」は「れうげ」である。

*れうけん　聲高に言はずともれうけんづくがよいわいの（丹波與作）

〔料簡〕「れうげ」とも云ふ。思案。勘辨。大部輔註・四に、「料者理也量也、簡揀同、大傳云簡二車馬一也、卽量裁選擇之義」。書言字考節用集に、「集覽、料・度也、簡・選也、出二後漢書一」。

*れうじ　れうじな事をいひかけ後悔するな（曾根崎）　やい九右衞門聊爾すな、割符渡す言分あるまい（博多）

〔聊爾〕率爾。粗忽。書言字考節用集・言辭門に、「聊爾(れうじ)。率爾義同」。

*れうそく　れうそくも持合はせ候（今川了俊）　北白河の廣文と申す者より料足五十貫文に買取ると聞く（酒呑童子）

〔料足〕料金。「足」は錢をいふ。「あし」を見よ。

れうたつ　二世了達の守曼陀羅參らせん（大甞）

〔了達〕事理を了悟し通達すること。法華經・提婆品に「深入二禪定一了二達諸法一」。

れきこふ　「りやくこふ」を見よ。

*れきせつふう　身體痛み苦しむこと、白虎骨を嚙み拉ぐ歷節風ともいひつべく（嵯峨天皇）

〔歷節風〕關節僂痳質斯を指す。關節の疼痛激甚な病氣であつて、その病狀恰も白虎に咬まれるやうに疼むものを白虎歷節風といふ。聚載萬安方・二に、「歷節風者由二血氣衰弱一、爲二風寒所一レ侵、血氣凝澀不レ得二流通一、關節諸筋無二以滋養一、眞邪相薄、所レ歷之節悉皆痛疼、故謂二歷節風一也、痛甚則使二人短氣汗出一、肢節不レ可二屈伸一」。

れそ　いかう酒臭い、過(すご)しやるな過しやるな、明日(あす)は早早(さうさう)人遣らう、ヤれそが言傳したぞや、近日一座一致したいと（冥途飛脚）

「それ」（其）の倒さ詞。「それ」を「れそ」といひ、「これ」を「れこ」と隱語的に倒さ詞を用ゐる。蓋し或物について其名を明かに言はないでも、「れそ」「れこ」と言へば話相手の者に其意通じるときに用ゐる粹言葉である。冥途飛脚のこゝの文の「れそ」は、八右衞門の知合ひの遊女をいうたのである。一谷嫩軍記・第二に、「人足廻しの茂次兵衞所にかゝつて居て、歩荷持(かつにもち)しても儲けにくい物はれそぢや、それに毎日飯代を拂はにやならず」、とある「れそ」は錢をいうたのである。新版歌祭文・野崎村の段に、「和泉國石津の御家中・相良丈太夫樣といふれこさの息子殿、聊の事で家が潰れこから」。

*れんか　うらがやうなめら、歌れんかにべる都人夢にも見やしめすまい（女護島）

〔連歌〕和歌の上の句（五・七・五）を第一人が詠めば、第二人はその下の句（七・七）を詠み、第三人は第二人が詠んだそのまた上の句を詠み、かくして續けるを連歌といふ。故に連歌は全歌を通じては意味なく、下の句が兩方の上の句に共通するまでゞ、長歌と違つて文學上餘り價値の無いものである。

れんかうのはかりごと　唐土には秦の始皇六國を呑んだる連衡の謀（國性爺）

〔連衡之謀〕支那春秋戰國の世、蘇秦が韓・魏・趙・燕・楚・齊の六國を合從して秦に當ることを說いたが、張儀出でて專ら連衡の謀を說き、六國を連ねて秦に事ふべきを說いた。衡は橫と通じ東西をいふ。卽ち六國相互の交を絕つて、西の方秦に向つて事へしめるをいふ。

れんげろう　唐土晉の慧遠法師蓮華漏を刻み（用文章）

〔蓮華漏〕時を計る具。翻譯名義集に、「廬山遠公（慧遠）之門、有二僧慧要者一、患三山中無二刻漏一、乃於二水上一立二十二葉芙蕖一、因レ波而輪以定二十二時一、晷景無レ差、今日二遠公蓮華漏一是也」。

*れんし　いづれも御連枝の御なかといひ（用明天皇）　太夫樣には經樣とて源氏の御連枝判官樣に逆上(のぼり)姿（吉野忠信）

〔連枝〕兄弟の意。歷々の人の兄弟をいふ。蘇武の詩に、「況我連枝樹、與レ子同一身」。

*れんじ　民彌は姬を見失ひ、太夫はどこへ行つたと座敷の連子に取付き（壬生大念佛）　細字をつらつらと南明(みなみあかり)の橫櫺子、影唇を動かせば無筆といひし空言も（碁盤太平記）　西受の竹櫺子、反故障子を細目に明けて（冥途飛脚）

〔櫺子〕連子とも書く。窗格子。

れんしやがう　いで戒名に蓮社號譽號附け、引導して弔はん（娥）

〔蓮社號〕淨土宗では諡號に蓮社または譽の字を入れる慣例がある。蓋し僧史略下に「雷次宗・宗炳・詮張・劉遺民・周續之等、共結二白蓮華社一、立二彌陀像一、求三願往二生安養國一、謂二之蓮社一」とあるに出たものであらう。譽號は五重相傳を受けた者に與へる。

れんじやく　おもたくとも此葛籠負うて御歸り候へと、連じやくかけてしつかと負はせ（西王母）　小わつぱの姿に出立ち、肩にれんじやく腰に鎌（佐々木）

〔連弱〕連着(れんちやく)とも書く。繩を平たく幅廣く組み葛籠などに附ける紐。續近世畸人傳・四に、「柳骨折の比よきにれんじやくをかけて笈の如く仕立つるものを用ゐし」。和訓栞に、「れんじやく。商人の肩に掛ろ物をいふは一書に斂債とかけり、連着より出でたるなるべし」。

れんじやく　くればのとりどりに聲のあやなす連雀や、思ふ中には名もつらき（娥）

〔連雀〕燕雀類に屬する鳥。雀よりも大きく全身鴾色(ときいろ)、嘴扁側で、頭上に羽冠がある。

*れんじよ　御舍弟式部の冠者時定

がせ（百合若）

按じるに輪寶船といふことで、船に輪寶（次條を見よ）形の水を彈く裝置した船のことであらう。和漢船用集に、「輪舫」後太平記に輪舫には急輪の水彈火生輪を用と見えたり、從軍詩に連舫踰萬艘、注に六韜に曰、武王紂を伐時河に出呂尙右將たり、四十七艘の舫を以て河を踰と見えたり」とある。

*りんぼう　因果の小車の輪の輪寶に刻みつけ（蟬丸）りんぼうの岩を割り隣家の荒れたる勢（國性爺後日）

〔輪寶〕轉輪聖王の感得せる寶器の一。旋轉・廢導・威伏の一切の諸德を具有し、聖王遊行する時輪寶自ら轉進して、土地を平坦にし障碍を破碎すといふ。

*りんもじ　御かもじ樣りんもじにまづお暇といふ離、閑ひ置かれし下邸（松風）品よく慕へ慕ふとて誰かりんもじ輪丁花（釋迦）

〔悋文字〕悋氣の文字詞。悋氣。文字詞は足利時代の末期、朝廷式微にして供御のもの備はらない爲に、女官等その名を呼ぶを忌んで何もじと言うた隱語より起つたといふ。釋迦如來誕生會のこの文に「輪丁花」とあるは、ぢんちやうげ（沈丁花）を訛つて「悋文字りん丁花」と同音を踏ませたのである。

*りんゑ　輪廻の座の置古し（卯月潤色）輪廻を離れぬまうぜいの雜兵（弘徽殿）過ぎし事を輪廻深く言ふ氣はさらさら無いものを（薩摩歌）十藏袂を振切つて、エエ輪廻したる女かな（出世景淸）戀しゆかしは迷のはじめ、逢ひた見たさは輪廻の業（三世相）

〔輪廻〕衆生は此處に死し彼處に生じ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に輪轉すること車輪のめぐるが如きによつていふ。よつてまた輪廻妄執といひ、輪廻を妄執、執念の意にいふ。弘徽殿鵜羽葺家のこの文につきては、「春は梢に咲くかと待ちし云云」をも見よ。

る

*るふ　道犬親子は世間流布の重罪、上を犯すといひ只今の始末諸人の見せしめ（反魂香）賴平殿の今宵討たれ給ふとは、世間のるふに隱れなし（國八州）

〔流布〕世に弘まることを、水の諸方に流れ布くに喩へた語。世評。うはさ。

るりいろ　（三世相）

〔瑠璃色〕瑠璃の如き色、卽ち紫色に似た紺色。

るゐえふ　淸和天皇の後胤足利の類葉斯波左衞門尉源義將（雪女）

〔類葉〕親類の末葉。

るゐせつ　縲絏にいましめずんば忽ち國のやぶれとなる（浦島）御繼母持統天皇を押籠め縲絏に苦しめ奉れば（持統天皇）

〔縲絏〕縲は黑索、絏は擊の義。支那では往古獄中に黑索で罪人を拘攣したによつていふ。論語・公治長篇に、「雖レ在二縲絏之中一非二其罪一也」。

るゐせん　鬼界が島の流人歸洛の船はいづくまで參りしぞ、るゐせんなどはなされずか（平家女護島）

〔類船〕同類の船。共に連れ立つ船。鷹筑波に「類船か一やうに散る川柳」とある類船も、水面に一樣に散り浮ぶ川柳の歐葉を連れ立つてゐる船にいひなしたのである。

れ

れいぎよ　唐土の聖代にも囹圄と名づけて國を治むるそなへとする（浦島）

〔囹圄〕牢獄。風俗通に、「周曰二囹圄一、囹令也、圄與也、言レ令二人幽閉思愆、改レ惡爲レ善」。

*れいし　（用明天皇）

〔令旨〕「りやうじ」と訓むべきである。東宮・中宮・親王の御詞を文書に認めるをいふ。太平記大全・六に、「令旨。リヤウシ、シの字は濁りてよむ、文選・三十六注云、秦法皇后太子稱レ令、命令也と、又通鑑綱目・第三曰、張晏曰太子稱レ家、故曰レ令、又三十八云、太子之命謂二之令一」。

*れいじん　（聖德太子）（三世相）

〔伶人〕舞樂を掌る人。樂人。左傳・成公九年の條に「伶人」とありて、左氏會箋に「冷氏世掌二樂官一而善レ之、故後世名二號樂官一爲二冷官一、釋文云、依レ字作レ伶、……呂氏春秋・古樂篇、昔黃帝令三伶倫作二爲律一、……」。書言字考節用集・人倫門に、「千字文註、伶倫伐レ竹造レ管吹レ之、因號二樂人一云レ爾」。

れいぜい　（淨瑠璃文中の註記）

〔冷泉〕淨瑠璃節の一なる冷泉節をいふ。世事百談に「淨瑠璃の節に冷泉また三重などいふ名目くさぐさあり、そは皆よりどころある事にて三河國矢矧の長が淨瑠璃姬に、牛若丸の戀せし事を十二段に作りし物語に、節附をして語りけるに、かの物語の更科・冷泉諸共にといへる、侍女の立ち出づるところの、冷泉といふ文句の節を、冷泉といふ節の名となれり」。

*れいならず　行房朝臣の御臺所御心地例ならず（隅田川）

〔不例〕違例に同じ。病氣をいふ。源氏物語・空蟬の卷に、「例ならぬ人侍りて」など見えてゐる。

*れいみん　上一人より公卿大夫、下黎民に至るまで（嵯峨天皇）

〔黎民〕黎は黑の義。民の首皆黑いが故に黎民といふ。庶民に同じ。書經・堯典に、「黎民於變時雍」。

れいりん　れいりん舞樂の聲ならで、耳にも觸れず目にも見ぬ賤女山樵の戲歌（持統天皇）

〔伶倫〕伶人（その條を見よ）に同じ。樂人をいふ。伶倫はもと支那古代の樂人の名。呂氏春秋・古樂に「昔黃帝令三伶倫作二爲律一云々」。

*れいれい　華鬘寶鐸瓔珞は西吹く風にれいれいと、いとど殊勝さ限りなし（三世相）識情天地れいれいとして朽ちせぬものよ（天智天皇）

〔麗麗〕はなやかな貌。明らかな貌。俚言集覽に、「れいれい。明らかなる意なり、レイレイたり、又レイレイとして居るなどいふ」。

れいろう　八面玲瓏と明かに（用明天皇）

〔玲瓏〕光のすきとほる貌。白居易の詩に、「樓閣玲瓏五雲起」。

れうかい　油掛町八百屋伊右衞門淨土宗の願ひ人、了海坊の談義に打込み（宵庚申）先年了海和尙衆生濟度の說法を此の所にて說き始め、

***ろくざん** 董卓が眼・祿山が髭、放逸無慙の驕り人(嵯峨天皇)

〔祿山〕安祿山をいふ。胡人で性狡黠で多智。唐玄宗皇帝の寵姫楊貴妃及び其左右に結託して帝の信任を得、平盧范陽河東の節度使を兼ね陰に異志を懷く。天寶十四年遂に反して兵を范陽に擧げ、南向して闕を犯す。玄宗皇帝蜀に奔る。祿山僭號一年餘で、其長子安慶緒の爲に弑せられた。

***ろくじ** 臨終の耳に聞くことはすすむる六字に劣るまじ(島原蛙合戰)

愚痴の凡夫は六字を誦して極樂に往生す(百日曾我)

〔六字〕南無阿彌陀佛の六字名號をいふ。

ろくじかりん 六字かりん・八字文珠(嵯峨天皇)

〔六字河臨〕六字河臨法をいふ。調伏と息災とを祈り、六觀音(その條を見よ)を本尊とし、船を河に浮べて檀を構へ、六字咒を念じて法を修することをいふ。この法もと東寺の祕法であつたが、後には天台にも傳へて修する。

ろくじさんまい 唐土晋の慧遠法師蓮華漏を刻み、六時三昧の徒然と(用文章)

〔六時三昧〕晝夜六時に專心佛事を勤めること。「六時」とは晨朝(卯の時)、日中(正午)、日沒(酉の時)、初夜(戌の時)、中夜(子丑の時)、後夜(寅の時)をいふ。六時に禮讃偈を讀誦するを六時禮讃といふ。

ろくじのかね 四天王寺の六時の鐘初夜を知らせて更けにけり(三世相)

〔六時鐘〕大阪四天王寺の鐘(六時堂の前)は古來有名である。徒然草に、「いはゆる六時堂の前の鐘なり、其聲黃鐘調のこもれるなり」。

六十四部の諸論(ろくじふしぶのしよろん) 傳へずして六十四部の諸論に通じ(釋迦如來誕生會)

往昔印度に行はれた天文、醫藥、文學、博物等の六十四部の諸論をいふ。その書目は佛本行經に見えてゐる。

ろくじふろくぶ 六十六部の納經者(碁盤太平記)

〔六十六部〕法華經六十六部を日本六十六ケ國の靈場に一部づつ納める行脚僧をいふ。行裝は天蓋を被り白衣を着、笈を負ひ錫杖を携へ、國分寺又は一の宮に奉納したものである。その始は室町時代に起り、江戸時代になつては僧俗ともに之を行ふ。轉じて諸國の神社佛閣を巡禮する遍歷僧をいひ、六十六部は略して六部ともいひ、厨子を負ひ鉦鈴を鳴らし、經文を讀誦しつつ家毎に布施を乞ひ歩いたものである。

***ろくしやく** 晩にはこちらから送らせましよ、六尺どもいなしやや(大經師) よしお屋敷へ伺候して、ろくしやくどもが手にかかり、ぶち殺されうば殺されう(淀鯉)

駕籠昇夫をいふ。駕籠昇夫は矮軀の者ではいけないで、大男なのがよい。故に古來大名などは駕籠を昇く者に骨骼逞しく身長六尺もあるやうな大男を選んだことから、駕籠昇夫を六尺と稱するに至つたのであらう。(北愼言撰・梅園日記・卷四に、「ろくしやくは力者(りきしや)を訛れる也、力者の輿昇事は長谷寺觀音驗記、杉原本保元物語、法然上人繪詞、類聚大補任等に出でたり云々」とあれども、「ろくしやく」を「りきしや」(力者)の轉訛とするは如何にや。また史記・秦始皇本紀に、「數以レ六爲レ紀、符法冠皆六寸、而輿六尺云々」と見えてゐることから、輿の長さ六尺の故事から、駕籠昇夫を六尺と云ふに至つたとの說も牽强であらう)。

ろくしやだいみやうじん どう取の祈は四三五六社大明神(女殺)

〔六社大明神〕山城國葛野郡にある六所神社を云うたのであらう。雍州府志、神社門下・葛野郡の條に、「六所神社‖或作二六講一、在二衣笠山東麓鹿苑寺南一、未レ知レ祭二何神一也、一說伊勢・石清水・賀茂・松尾・平野・稻荷・春日、以上七社之中、除二近隣平野社一、而其外勸二請六社一者也」。(或は又平野社を六所宮とも云ふ由なれば、それのことか)。こゝの文の四・三・五・六は雙六の采目の數をきかせたものであつて、そして六社にいひかけたのである。

ろくしゆう これ等は六宗に名を得し惡僧(女護島)

〔六宗〕三論、法相、華嚴、律、俱舍、成實の六宗。

ろくしゆきん 陶淵明が漉酒巾・四明大師の律衣を着し、儒者佛者とも分き難き老居士(唐船噺)

〔漉酒巾〕酒を漉す布を頭巾にしたものである。これは陶淵明が酒を愛したによつてかくしたもので、一般に用ゐたものではない。晉書・陶潛傳に、「潛字淵明、毎二酒熟一取二頭上角巾一、漉レ酒畢復著レ之」。

***六親**(ろくしん) 六親を地獄に落す大惡僧(烏帽子折) その一心の不所存ゆゑ六親眷屬地獄に墮し給ふよな(賀古教信)

老子の注に、父・子・兄・弟・夫・婦をいひ、前漢書註に父・母・兄・弟・妻・子をいうてある。

***ろくじんづう** 源氏の御代の腰押は六神通の文覺が隨ひ守る神と、君久しき國こそ樂しけれ(女護島) 六神通の阿羅漢(雪女)

〔六神通〕天眼通(六道衆生の苦樂の形相及び一切世間の種々の形相を見ること自在なるをいふ)、天耳通(六道衆生の苦樂の音聲及び一切世間の種々の音聲を聞くこと自在なるをいふ)、他心通(六道衆生が心に思ふことを知ること自在なるをいふ)、宿命通(自他の身の宿命所作を知ること自在なるをいふ)、神足通(飛行の術を得て動作自在なるをいふ)、漏盡通(有漏の煩惱を滅盡して三界生死の苦を離れるをいふ)。以上の六神通は阿羅漢の得る通力である。阿羅漢とは佛道修行者が悟了到達する最終の地位である。

***ろくそんわう** 六孫王このかた滿仲公に相續き、古今の名將と呼ばるる頼光(弘徽殿)

〔六孫王〕源經基をいふ。淸和天皇の第六皇子貞純親王の御子で、姓を源氏と賜はり臣下に列せられた。これ淸和源氏の祖先である。

***ろくだう** 生死の悟を得ざる故、六道の苦輪を廻つて地獄に落つると承る(孕常盤) 横に切れ行く道筋の、これ六道の新道と、花屋が辻にしよんぼりと(生玉) 内外六根淸淨とは世に亡き魂の道しるべ、六道四生の淨めぞかし(卯月潤色) 二人手を組む生死の巷、命の境四斗樽に、六道四生、ぎつと詰つて動かれず(鑓權三) 六道能化の地藏菩薩導く玉の數數に(嵯峨天皇) 六道の辻(氷朔日)

〔六道〕六道とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六趣をいふ。「六道四生」とは、六道と六道の衆生に屬する胎生・卵生・濕生・化生をいふ。胎生とは人間や獸類の如く母體の胎内で適當の發育を遂げて生れるものをいふ。卵生とは魚鳥の如く卵で生れるものをいふ。濕生とは蛆蟲の如く濕地で生れるものをいふ。化生とは神などの忽焉として生れ現はれるをいふ。「四斗樽に六道四生」とあるは、六道四

二十三歳、その外れんじよ昵近の歷歷法華堂に群參あり(最明寺殿)いかに天女丸、來春よりは汝をも政道の連署に加ふべし(最明寺殿)

〔連署〕鎌倉幕府職制の一。執權と共に公文書に署判する役なればこの稱がある。北條家の一族で重望ある者これに任ぜられた。

＊**れんぜんあしげ**　殿の御馬はさび月毛、連錢葦毛、鹿毛糟毛(天鼓)

〔連錢葦毛〕白毛に黑い差毛のある葦毛といひ、葦毛に淡濃灰色の圓い斑文の錢を連ねたやうになれる馬の毛色をいふ。

＊**れんちゆう**　さては簾治殿の簾中か(兼好法師)

〔簾中〕公卿・大名の正妻の敬稱。

れんによ　箱に入れしは蓮如樣の名號(今宮)

〔蓮如〕諱は兼壽、應永二十二年二月に生れ、明應八年三月齡八十五で遷化し、山城本願寺第八代の高僧である。深識篤學で敎行信證、六要鈔には殊に造詣深く、眞宗中興の人と稱せらる。畿內北越地方で描いた佛祖多く、自筆の名號は信徒の深く尊崇する所である。明治十五年慧燈大師の諡號を賜はる。

れんふくわいもん　蓮府槐門の位に上り、上見ぬ鷲と時めきしも(琛驛)

「蓮府槐門」大臣三公をいふ。「蓮府」は徒然草第二百十四段に、「晉の王儉大臣として家には ちすをうゑて愛せし時の樂なり、これより大臣を蓮府といふ」。「槐門」は周の世に三槐を外朝に植ゑて三公その下に班列した。槐は懷で人を懷ける義、轉じて三公の意にいふ。

＊**れんり**　機棚の一木の相生を連理の契に擬へ(曾根崎)　連理の枕・比翼の床、かたしく人も諸共になき世の中の習(津國女夫池)

〔連理〕二樹相對し脈理を連接して生じること。よつて以て夫婦の契を連理の契といふ。白居易の長恨歌に、「七月七日長生殿、夜半無レ人私語時、在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一、天長地久有レ時盡、此恨綿綿無二絕期一」。「機棚の一木の相生」は「そねざき」の條の圖を見よ。

ろ

ろうこく　はや漏刻も夜半過ぎ(弘徽殿)

〔漏刻〕往昔用ゐた時計である。貞丈雜記・卷十六に、「古禁中に漏刻といふ物あり、銅の壺に水を入れて、壺の下に穴ありて水の滴漏るやうに作りて、其壺の水の中に箭を立つるなり、其壺を漏壺といひ其水を漏水といひ其箭を漏箭といふ、其箭に刻めを付け置くを漏刻といふ、其刻めの數は四十八刻むなり、一時の間を四刻四刻に定めたる物なり、此箭を水の中へ立置く時、水漏りて水の嵩減るに隨ひて箭の刻め段々に見ゆるなり、子の時に刻め一つ見ゆるは子の一つと云ひ、二つ見ゆるは子の二つといふ、以下これに准じ知るべし云々」。

ろうじ　そくばんどうに名の高きろうじ六藏が御供は、げに賴もしき働きなり(田村)

「ろんじ」ともいひ、六の符牒。こゝの文の「そくばんどう」の「そく」は一の符牒、「ばんどう」は八の符牒であつて(「きり」の條を見よ)、これを足の强いこと坂東に名の高き儱人(和漢三才圖會卷七、人倫部に「圉人。儱人音籠、和名久知止利、今云馬子、又云無萬加太)六藏にいひかけたのである。六藏又は八藏は馬方の通稱である。

＊**ろうせん**　(大織冠)

〔樓船〕屋形船。類書纂要に、「大船上に樓を施すを號して樓船といふ」。

ろうだいこ　雨の手に金輪、世間で謠ふ親子籠太鼓、跡は天鼓微塵(酒呑童子)

〔籠太鼓〕謠曲名。こゝの文は籠太鼓に入牢の牢をいひかけたのである。

＊**ろく**　三五郞守するならろくにしやと喚き歸れば(天網島)　おでんをろくに寢させて、母樣もちとおやすみと言ひければ(女殺)　どれどれもかげずにようこそ、サア先ろくにと挨拶も(嵯峨天皇)　おのれなら尤もろくで果てまい奴ぢやと常に言うたが違うたか(丹波與作)

正、または平の義。平安。完全。正圓を「まろく」といひ、陸地を「ろくぢ」といふ「ろく」もこれである。

ろくかくのつつざや

「ろつかくのつつざや」を見よ。

ろくぐ　重き六具に五體を釣られ、かつぱと臥して足立たねば、鎧を着てさへその臆病、鯨波聞いたら目がまはう(川中島)

〔六具〕和漢名數に、「六具(鎧ノ)。甲、冑、頰當、鉀、佩楯、脚當」と見え。單騎要略・五に、鎧の六具は頰當、鉢卷、湩懸、佩盾、臑當、小手をいふ。和訓栞に、「ろくぐ＝俗に六具を占といふは甲をかためるより出たる詞也、僧家の六物などいふ事に倣ひたるにやといへり、六具は身甲・鉀甲・肩甲・脇盾・脛盾・髓盾是也といへり、されど此を鎧の六具とす、云云」とあつて、必らずしも一定してゐない。

ろくくわんおん　(女夫池)

〔六觀音〕千手觀音、馬頭觀音、十一面觀音、聖觀音、如意輪觀音、准胝觀音をいふ。或は准胝觀音の代りに不空羂索觀音を加へてもいふ。

ろくげのびやくざう　守本尊普賢薩埵・寶威德上王佛の御國を出で、六牙の白象に鞭うつて(五人兄弟)

〔六牙白象〕普賢菩薩は六牙の白象に乘つてゐる。蓋し象の深沈で强大な力を持つてゐるやうに、よく定力を以て諸行を攝取することを具體化したものである。因果經・一に、「爾時菩薩(普賢)觀二降胎時至一、卽乘二六牙白象一發二兜率宮一云々」。

＊**ろくこく**　秦の始皇六國を呑んだる連衡の謀(國性爺)

〔六國〕支那春秋戰國時代の六國、卽ち韓・魏・趙・齊・楚・燕をいふ。

＊**ろくこん**　人間の念慮限りなく、息の通ふ間は六根の樂欲にひかれ(丹波與作)　打つ杖は師の心法、打たるる弟子の六根淨、御目も眩み御息もはや絕え絕えに見えければ(釋迦)　天淸淨、地淸淨、內外淸淨、六根淸淨(卯月紅葉)

〔六根〕眼・耳・鼻・舌・身・意の六根をいふ。「根」は草木の根の如く、增上の義で强き作用を與へるものの謂である。六根によつて作る罪障を斷除して得る所の力用淸淨無礙なるを六根淨、六根淸淨または六根自在といふ。六根によつて作る罪を六根罪障といひ、その罪障を懺悔して再び罪を犯さぬやうにするを六根懺悔といふ。

を六方衆と云うた。蓋し六方衆は亂暴衆の義である。

路頭に立つ　其方が家を見捨てては後家も子供も路頭に立つ(女殺)

乞食となるをいふ。

ろませ、さい、とうらい、さんな、同じ事とよ豐川に、聲の高瀨がさす腕には、はま、さん、きう、ごう、りう、すむゐ　(冥途飛脚)

「ろませ」は六、「さい」は掛聲、「とうらい」は十、「さんな」は三、「はま」は八、「さん」は三、「きう」は九、「ごう」は五、「りう」は六、「すむゐ」は四であつて、本拳にいふ唐音又はその訛である。「けん」を見よ。「同じ事とよ云々」は、拳の手同じことゝよのとよに同韻語豐川をいひつづけ、川の緣より高瀨がさす濱にいひかけて八歷といひ、拳の勝負にはずんで高聲となり腕を突出すをいひかけて、聲の高瀨がさすかひなといふたのである。豐川、高瀨は遊女の名である。

ろんじ

「きり」「ろうじ」を見よ。

わ

わいかぢ　艫舳に櫓をたてちがへわいかぢを入れ(最明寺殿)

〔脇楫〕「わきかぢ」の音便。船の雨桅に附ける櫓。和漢船用集・卷十一、用具之部、偏舵の條に、「軍舊等わいかぢと云は脇楫にてろのことおいへり」、「艫舳に櫓を立て云々」を見よ。

***わいだて**　上帶草摺わいだてにむんずむんずと取付いたり(兼好)

〔脇立〕鎧を着る前に右の脇にあてる具である。札の上を染革で包む。草摺一枚下りである。これを脇立の草摺又は右手の草摺と云ふ。

***わいら**　體自慢に人らしい扱とははんの男の出入、わいらが知るこつちやない(酒呑童子)　わいらが居ればやかましい、とつとと行け(博多)

「われら」(我等)の音便。汝等の意にもいふ。

わうえん　第二番の懸物は晋のわうえんが筆の跡に、龍門の瀧の流れを鯉の登る勢なり(大掛物)

「わうゑん」(王淵)であらう。但し晋ではなうて元代の畫家である。古今和漢萬寶全書に、「王淵・字は若水と云、澹軒と號す杭人なり、幼にして丹青をならふ、趙文敏おほくこれに指教す、故に畫く所皆古人を師とす、一筆院體なし、山水は郭熙を師とす、花鳥は黃筌を師とす、人物は唐畫を師とす、一一精妙なり、尤墨花鳥竹名にくはし、當代の絕藝也。」

わうぎし　異國の王羲之・趙子昂が石に入り木に入るも和畫に於て例なし(反魂香)

〔王羲之〕支那晋の人、字は逸少、草隸に妙を極め、丹青も亦非凡。「王羲之・趙子昂が石に入り木に入る」を見よ。

わうきやう　玄雪の冬の夜はわが身を以て衾を暖め、三伏の暑き日は枕を拂ふ扇に黃香が遺風をあふぎ(持統天皇)

〔黃香〕字を文强といひ、後漢安陸の人。九歲で母を失うて父に事へ、夏月には枕席を扇ぎ、冬には身を以て溫被して孝養を盡した。博く經典に通じ文章を能くし、官尙書令に至つた。蒙求・卷下に「後漢黃香字文强、江夏安陸人、博學二經典一、究二精道術一、能二文草一、京師號曰、天下無雙江夏黃童、官至二尙書令魏郡太守一、陶淵明曰、香九歲失レ母、思慕骨立、事レ父竭レ力致レ養、冬無二被袴一、而盡二滋味一、暑則扇二床枕一、寒則以レ身溫レ席、和帝嘉レ之特加二異賜一」。

***わうくわん**　市之進殿の差料に刻まれ骸を往還に曝す法もあれ(鑓権三)　石の物言ひ壁に耳、殊更ここは往還ぞや(源義經)

〔往還〕街道。

***わうじやうずくめ**　又五郎義長ばわうじやうずくめの坂田の公時、後下りの懸烏帽子(弘徽殿)　目の前にて書かせしと申すからは、わうじやうずくめ如何なる難題書かせしも知れず(井筒)

正しくは「あふじやうずくめ」(厭狀盡)である。人を無理におしつくること。無理厭狀。增補俚言集覽に「あふじやう=おして人にかかする文なり。〔盛衰記二十三〕人のもてる物を心の外にすかしとり、人をおどしておもふ樣の文をかかせんと仕るをば乞索厭狀と申」と見え、又「あふじやうずくめ=むりあふじやう。人を無理におしつくるをいふ、もと厭狀より出たる詞なり」と見えてゐる。和訓栞に「わうじやう=口語にいふは往生にて淨土門の詞也、よて往生ずくめ・往生ごかしなどの俗語あり、文字に据たる也」とある說はいかが)。

王子王子は九十九所　飛鳥の宮・濱の宮・王子王子は九十九社(反魂香)　抑も當社はこれ三熊野の、九十九所の王子王子、若市王子とたたせ給ふ(孕常盤)

王子とは、熊野行幸の時御休所每に、時に臨んで熊野本社を移し奉つた地で、熊野街道には王子社が九十九あるといふ。蓋し九十九は大數をいうたもの。和漢三才圖會に、「凡熊野王子權現社、自二攝州東生郡一至二熊野地一、有二九十九所一」。

***わうせうくん**　唐の虞氏君・王昭君・貴妃・李夫人をうつすとも此上はよもあらじ(天智天皇)

〔王昭君〕漢元帝の後宮にあつて極めて美人であつたが、匈奴に送られて藥を飮んで胡地に死んだ。

***わうだう**　(用明天皇)(振袖始)

〔王道〕覇道に對する稱。仁義を以て天下を治めることをいふ。

わうだん　疑もなき黃疸神、汝の手では判の色も違ふべし(振袖始)

〔黃疸〕膽汁色素によつて皮膚粘膜等黃色となる病氣で、皮膚の黃染と同時に瘙痒を感じ、尿・汗・唾液・膿汁・炎性滲出液は黃染する。療法として昔は吸物殊に蜆の味噌汁を多量に攝取した。

わうばん　曆なければ當年の吉方は知られども、わうばんも年德も本國こそは惠方なれと(百合若)

〔黃幡〕陰陽家の祭る八將神の一。軍陣の守護神である。和漢三才圖會・卷五、曆占類・黃幡の條に、「按黃幡以二未辰丑戌四方一順二巡之一、如二子年一辰方・丑年丑方・寅年戌方・卯年未・以下亦次第如レ此、曆家云、向二此方一弓射初宜」。

わうまうにち　この世からかかる苦患に往亡日、島田亂れてはらはらはら、大經師昔曆)

〔往亡日〕大雜書(寬永十一年刊)に「わうまう

生に六斗四升をきかせて面白う云うたのである。「六道能化」とは、佛菩薩が衆生を化益する爲に普く種々に身を示現して六道に入り、以て衆生を濟度し給ふをいふ。地藏尊や觀世音などは六道能化の菩薩である。「六道の辻」とは、六道の分岐道の義、冥途に通ふ道の意にいふ。

***ろくぢ**　險岨にかかつては蹄に草の葉を踏んでも、ろくぢを行くよりなほ易し（十二段）　心はろくぢを歩むと思へども逆様に見えけるかや（反魂香）

〔陸地〕平地。「ろく」を見よ。

ろくちく　牛馬六畜に野山をかけらせ（根元曾我）

〔六畜〕馬、牛、羊、豕、犬、鷄。

ろくぢざう　（非筒）

〔六地藏〕地藏菩薩は衆生救濟の爲に御身を六體に別つて六道（その條を見よ）に顯現し給ふ。即ち金剛願地藏は左手に閻魔幢を持ち右手に成辦印を結ひ、地獄道を濟度される。金剛寶地藏は左手に寶珠を持ち右手に甘露印を結び、餓鬼道を濟度される。金剛悲地藏は左手に錫杖を持ち右手に引接印を結ひ、畜生道を濟度される。金剛幢地藏は左手に金剛幢を持ち右手に施無畏印を結び、修羅道を濟度される、放光王地藏は左手に錫杖を持ち右手に與願印を結び、人間道を濟度される。預天賀地藏は左手に如意珠を持ち右手に說法印を結び、天上道を化導される。

ろくつう　六通自在の神足に（釋迦）

〔六通〕六神通の略。その條を見よ。

ろくど　「菩薩の六度」を見よ。

ろくはらみつ　六波羅蜜の功德にて、畜類なれども菩薩の行（聖德太子）

〔六波羅蜜〕波羅蜜は梵語・波羅蜜多（Para-mita）の略。到彼岸または度と譯す。生死の岸より涅槃の彼岸に到る義である。波羅蜜多は菩薩の大行で、これに布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六種がある。よつて六波羅蜜といふ。

ろくばんがしら　乘掛は六番がしら・使番・侍大將・奏者番・旗大將の後先に（堀川波鼓）

〔六番頭〕大名に奉使する雜役人を六番に分ち、その番頭。（舊くは豐臣秀吉が近習の侍を六番に分けたことは別所長治記に見えてゐる）。

ろくみやく　聲を聞いて六脈を察し、一粒一匕の藥を與へ（孕常盤）　目を塞ぎ六脈靜に考ふれば、浮大にして活活と溢れたり（冷泉節）　一息切斷の經絡六脈絕え絕えに、息の通ひ路ふつつと切れ（綸草紙）

〔六脈〕新刊勿聽子俗解八十一難經（元和三年木活字版）に、浮・沈・長・短・滑・濇の六脈を擧げて詳說してある。貝原益軒編・和漢名數、六脈の條に、「心脈寸口　肝脈關上　腎脈尺中以上ハ左手　肺脈寸口　脾脈關上　命門尺中以上ハ右手　又浮・沈・遲・數・滑・濇」。六脈浮大で活々と溢れるは懷妊の兆候である。

***ろくよくてん**　雲にも昇れ地にも入れ、非想非非想他化自在六欲天も高からず（日本武尊）

〔六欲天〕欲界の六天、即ち四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化天をいふ。

ろさい　いぬめらは人の門戸に立ちて一紙半錢をろさいする乞食坊主（一心五戒魂）

〔囉齋〕施與を乞ふこと。饅頭屋本・節用集に、「囉齋」。貝原好古編・和爾雅、言語門に、「囉齋。佛氏出レ外而乞レ食謂二之囉齋一」。

ろしう　忍ぶ戀路をせきだいの、女蘭男蘭は呂州の姿（生玉）

〔呂州〕風呂州（即ち風呂衆）の略で、湯女をいふ。伽羅女に「大阪中の茶屋・白人・呂衆」と見え、野白內證鑑（寶永七年刊）五之巻に、「總て呂州は色茶屋の女よりは綺麗にして、風俗しやんと小取まはしはしなり、身持は手の物にて日毎に洗ひ、首筋淸らに髮は定まつて大島田、象牙の櫛のまな板ほどなるをさし、暮方より人の思ひつかす顏なれば、白粉濃く口紅用捨なくぬりくり、蕎麥切色の絹の下紐をしやんと裾短く、ばつとしたる模樣の浴衣云々」と見えて、呂州は即ち湯女をいうたものであるが、後には呂州を白人（その條を見よ）と混同し、百花評林に「素人一名呂州」と見えてゐる。攝州難波丸（元祿十年刊）に呂州のことを記すに、「女一人二時を限り揚代七匁・集禮代は十五匁、其座の趣向次第、籠代・送り迎ひ一町二町にても一匁、橋を越ゆれば二分高し、お望ならば道頓堀あじろ天滿甲斐塚秋田、これ此中宿にして自由をなす所」と見え、御前義經記（正德二年刊）に「それつらつら呂州の色をかんがみるに、日まし月ましいたりをきはめ、陸地を踏むこと更になし、おぼろ染につかみ鹿子、日野羽二重は一昔、見る目にかくることもなく、もみうらともに身をふかし、一つ二つ逢ふ客は秋の木の葉と餘所にのみ、涅槃の床に入る事なし」と見えて、全盛を張つたものである。延寶から享保にわたつて、大阪には扇風呂・額風呂などといふがあつた。生玉心中のさがは、嘗て天滿五丁目五郎右衞門の扇風呂の湯女を勤めて全盛を張り、伏見坂町の低級な遊女よりも羽振を利かした者である。「ふろ」（風呂）をも見よ。（「くわしや」の條の畫をも見よ）。

（人倫訓蒙圖彙所載）



「女湯」

ろちやうかん　菓子に取つては……かすてら・ぼろてら・砂糖・羊羹・驢腸羹（天神記）

〔驢腸羹〕菓子の名。書言字考・服食門に「驢腸羹」。

六角の筒鞘　六角の筒鞘の二本道具は若狹の小濱（薩摩歌）

鎗標。（若狹小濱城主・酒井靱負佐忠囿の鎗標）。



〔六角の筒鞘〕

ろつぱうことば　何ぢや褒人もない六法詞（一心五戒魂）

往時流行した一種の遊冶遊俠の風俗を六法といひ、その者の遣ふ語氣強き言葉（食ふをぶち食ふなどといふ）を六法言葉といふ。俚言集覽に、「六方は無法者と云ふことなり、奴と云に同じ云々、劇場にて兩手を擴げてりきみふる姿を六法といふ」。按じるに六法と書くは當字であつて、「らんばう」（亂暴）の轉じた語で、亂舞を「らつぷ」。亂破（盜人をいふ）を「らつぱ」といふの類である。平安朝の末葉以降僧徒であつて武裝をなし、武器を執つて戰に從事した僧兵（衆徒と號した）

わきじろ 常江戸、脇城、國脇まで（薩摩歌）
〔脇城〕支城の義。出城をいひ、藩主の一族の者又は家老を以てその城主にあてる。

わきせき 二人の女のわきせきと、重忠の召されたる馬のおもづらしつかと取り（蛙合戰）
「あくさく」（齷齪）の轉訛。「わくせき」ともいふ。せはしくこせづくこと。せせかしう思ふこと。

わきたむ この人世に出で申されば、千兩が萬兩もきつとわきため申すべし（西王母）
別の義。分辨す。辨償す。和訓栞に、「わいだめ。日本紀に別字をよめり、又無分或は無節をわいだめなしとよみ、別をわきためともよむ、今もわきためるといへるは分辨の意なり」。今樣二十四孝（寶永六年刊）卷之五に、「不足金をたとへ身どもわきためて出してなりとも、すむことならば濟ませせうず」。

わきつぼ 惡くのしばるものならば、山朸のやきとがし脇壺へ刺込んで、血わたを取らんと喚きけり（伊豆日記） 續いて逃ぐる八幡が肩骨脇つぼまで切り下げられ（會稽山）
〔脇壺〕腋下のくぼめる所をいふ。

*__わくせき__ 胸も心もわくせきして（薩摩歌） 藤屋吾妻がわくせきの思を乘せて在所駕籠（壽門松） 側へ寄りたい抱付きたい言ひたい事のわくせきも、主人が見る目憚りて他人向なる折からに（生玉） 心のわくせきする故か、鐘は四つやら夜中やら聞捨て數へもせず（薩摩歌）
「わきせき」ともいふ。その條を見よ。

わぐたむ ばつと亂れし髮髭は、金銀の針線をわぐため亂せし如くなり（釋迦）
曲嬌の義。綰げ撓む。わがね曲げる。

わくらば 玄關の戸をとんとんと、叩くかへでのわくらばに、應ふる者も無かりける（夕霧）
病葉（うらがれて赤くなつた葉）に邂逅（たまさかの意）をいひかけたのである。古今集・雜下部、在原行平の歌に、「わくらばにとふ人あらば須磨の浦に、藻鹽たれつつわぶと答へよ」。なほここの文に「かへで」といへるは小兒の手をいうたもので、それに楓葉は赤いから「わくらば」にいひつづけたものである。

わくわうどうほね 和光どうほねきらひなく、千早振る棒八方無隅（聖德太子）
〔和光胴骨〕和光同塵に胴骨をいひかけたのである。和光同塵とは、智の光を隱して、之を顯さないで塵俗の中に混じ居るをいふ。

*__わけ__ 四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顏、さす汐影のわけもよき、局局の手拭は、濡れぬ隙こそなかりけれ（壽門松）
〔分〕一匁の半分（$\frac{1}{2}$）の義、半分（その條を見よ）ともいひ、勁銀五分ほどな下位の遊女の稱で、端女郎の一。「和氣」などと書いてあるのは當字である。西澤與志撰・御前義經記（正德二年刊）に、「端女郎は鹿戀より下・みせ女郎をいふなり、替名はけちとも火打とも山家とも局女郎とも端とも小松ともいふ、位は一（勁銀一匁）を一寸とも月ともいふ、二（勁銀二匁）は二寸とも影ともいふ、三（勁銀三匁）を三寸とも汐ともいひ、又五（勁銀五分）を五步ともわけとも北向ともそろりともいへり」。日本好色名所鑑（藤木盛庸撰元祿五年刊）大坂新町由來の條に、「まづ鹽といふは三匁、陰といふは二匁、月といふは一匁、分といふは五分、此符丁付は松風の謠より出でたると覺えたり、月はひとつ、影は二つ、三つ鹽とある故に右の如く定めしか、三匁貳匁取は大方格子ある故にそれしやは位を問はでも知るなり」。壽門松のここの文は「分」に次條の意の「わけ」をもいひかけたのである。

*__わけ__ 德樣は何やら譯の惡いことありて、たんとぶたれさんした（曾根崎） 心利發で道中ようて・戀知りわけ知り（夕霧） 色もなく戀もなく、大事の女郎に立入りし御物語、さぞ譯知らずと思されん（酒呑童子） 上方は色所、定めて深いわけがある（博多） 旅の鄙人・地の思ひ人、心心の譯の道、知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と賑はしし（曾根崎）
〔譯〕分とも書く。すぢみち。仔細。また轉じて、戀のいきさつ。色道をよく辨へたること。戀の道。粹。色道大鏡に「わけしり。粹といふまでの詞なり、當道の味をよくわきまへたるといふ心なり、これより出で分を立つるとも諸分をただすともいふ」。「わけ知り」とは粹なこと。「譯の道」とは色道卽ち戀の道。「わけの杯」（＝戀のこもる杯）、「わけ里」（＝遊里）などとも見えてゐる。

*__わげさ__ （隅田川）
〔輪袈裟〕袈裟の一種である。昔時は廣い袈裟をたたんで、細く圓うして首から胸に懸けたものであるが、今は幅二寸許にして輪に作り、頸に懸けて胸に垂らす。

*__わこ__ 憂き事知らぬわこ樣の、氣を奪はれ性根を取られ、起きつ轉んづ足立たず（淀鯉） お通わこの子誕生、城之介春忠公の若君に紛れなし（三國志）
〔和子〕貴人の子を親しんでいふ。坊樣。「わこの子」とは男の御子。若樣。「和」の義については「わじやう」の條を見よ。

*__わごぜ__ わごぜが常常あの男に心をかくるなりそぶり（用明天皇） 扱わごぜだちは情の强い男を持つた故（聖德太子）
我御前の義。親しんでいふ對稱人代名詞で多く婦人に用ひる。

わごりよ わごりよだち若しもの事があつたりとも（歌念佛） これ親父まづわごりよは誰なれば、よい年をして京の町の作法知らぬか（博多） さてもさてもわごれうは誰人の子なれば（伊豆日記）
「わごれう」ともいふ。我御料の義。「わごぜ」に同じく對稱人代名詞で男女に通じていふ。

わざくれ さあ賴みを取つてはもう遁れぬ、わざくれやけぢや（薩摩歌） 繼母がかりのわざくれに惡性狂も出來るぞと（冥途飛脚）
いつそのことの意。轉じて自暴自棄の意にいふ。井原西鶴撰・日本永代藏・卷四、心を盡み込む古筆屛風の條に、「はかどらぬ算用捨てて わざくれ心になりて、丸山の遊女町に行きて

びとは出行わたまし祝言にわろし」と見え、曆日善解に「往亡は立春より七日目と、啓蟄より十四日目と、小寒より三十日目なり、出陣追軍旅行出船等に凶なり」と見え、和漢三才圖會に往亡日を擧げて、「正月七日、二月十四日、三月二十一日、四月八日、五月十六日、六月二十七日、七月無、八月十八日、九月二十七日、十月一日、十一月二十日、十二月晦日」としてある。巣林子のこの文は、曆日上の語を用ひて文飾したのである。遭ふに往亡日をいひかけて、大經師に緣ある

王良（わうりやう）　樂天が三つ頭、王良が祕密の鞭、尾筒を手綱にしつかと取り(百日曾我)

孟子・滕文公下篇中に見える人物で、趙注に「王良善ㇾ御者也」と見えてゐる。韓愈の送二石處士一序に、「若下駟馬駕二輕車一就二熟路一、而王良造父爲中之先後上也」と見えて、王良は馬を善く御する者で、周の穆王の御者であるといふ。

わかえびす　「わかゑびす」を見よ。

わかさんしん　この度後撰集の書成つて奏覽、御賀事ゆゑなく叡感に預ること和歌三神の擁護なり(西王母)

〔和歌三神〕老牛餘喘・初編上に、「歌道の三神と申すは住吉神社に祭る所の三神にて、底筒男命、中筒男命、表筒男命、三柱を申すなり、今俗に人丸、住吉、衣通姬をいふは誤なり」。

*__わかしゅ__　お寺小姓の兒櫻、兒文珠の御相傳、大師の弘め置き給ひ俗も尊む若衆の情(萬年草)　頤は憎けれど若衆が好い、堪忍せい(孕常盤)　年は今年十一、五つの年から馬追うて一代若衆にならずにはえぬきの念者ぢや(丹波與作)　若衆鬘(吉野忠信)

〔若衆〕「わかしゆう」とも云ふ。往時男子十二三歲になれば前髮を立てて髮を結うた。これを若衆髷と云ひ、若衆髷を結べる者を若衆と稱した。歌舞伎子をも若衆といひ、よつて又男色關係して美少年をいひ、若衆の兄分を念者といふ。俗に弘法大師は男色の開山といふ。風流呉竹男(寶永五年刊)卷之五に、「傳敎・弘法歸朝し給ひて、稚兒と名付けてかの色(男色)を弘め給ふも、學ろうをやめ女色を禁ぜんが爲、それさへ深くこれに馴染まば女色にどうじなんと、高野大師の叱り給ふ所なり」と見えてゐる。「若衆鬘」は芝居などにて美少年に扮粧する時に被る鬘をいふ。


(女用訓蒙圖彙所載)
〔若衆鬘〕

*__わかたう__　若黨下人彌增して(堀川波鼓)

〔若黨〕主の身邊に仕へる若年の家來。貞丈雜記・卷二、人品之部に、「若黨と云ふはわかき侍どもと云ふ事也」。

*__わがたつそま__　あれ東に聳えて見えたるは我が立杣の比叡山(三國志)　我が立杣や都の富士、西坂本にぞ入り給ふ(女楠)

〔我立杣〕比叡山の開祖傳敎大師の歌に、「阿耨多羅三藐三菩提心の佛だち、わがたつ杣に冥加あらせ給へ」とありて、我が居る山の意なるが轉じて比叡山をいふ。

わかどころ　藤原の伊尹を和歌所の別當として(西王母)

〔和歌所〕和歌を撰集する所をいふ。後撰集を撰集された時梨壺に和歌所を置き、藤原伊尹を別當に任ぜられたことがその始である。增鏡・おどろのしたの條に、「一條攝政殿(伊尹)いまだ藏人の少將など聞えける頃和歌所の別當とかやにて、梨壺(昭陽舍)の五人に仰せられて後撰集は集められけるとぞ」。

わかみどり　松若綠梅時節、やりが前垂茜さす、空も醉うたり人も醉ふ(壽門松)

〔若綠〕禿(その條を見よ)は將來太夫(その條を見よ)即ち松たるべき見習で、年若ければ禿のことを若綠といふたのである。

わかみんづり　わかみんづりの井筒屋と、わきてにぎにぎ賑はへり(壽門松)

若くみづみづしいさまをいふ。瑞瑞しいさまを「みんづり」といふこと、花やかなさまを「はんなり」といふの類である。俚言集覽に、「みんづり。みづみづしき也、(百俚談)水通きようにうるほひたるさまを云、(紅梅千句)花可みんづりと見ゆる若木やはたち頬」。壽門松のこの文は、若みんづりに若水釣りをいひかけ、若水(歲旦に初めて汲む水をいひ、之を飲めばその年の邪氣を除くといふ)釣り上げる井筒に井筒屋をいひかけて、殊きに湧きをいひかけたのである。

わかむらさき　名を縮合とつけたるも、空蟬・夕顏・若紫・明石の君におしつづき、ならびなしとの心かや(千疋犬)

〔若紫〕源氏物語中の美女。性溫和容貌秀絕で源氏の君の好配である。

*__別れの櫛__（わかれのくし）　投櫛は別れの櫛とて忌むことを、口には言はず氣に懸る(女殺)

「ゆつのつまぐし」を見よ。

わかゑびす　正月三日の寅の一天誕生まします若惠美須、商ひ神と現はれ給ひて(大經師)

〔若惠美須〕往時正月元日及び三日の晩、京都の市中を若惠美須と稱して惠美須神の札を賣つた。民間これを買求めて其年の福を祈つた。日次紀事(延寶年中成)正月元日の條に、「弱惠美須。今曉街衢賣二弱惠美須幷毘沙門天之札一、民間新年先買ㇾ之則其年爲ㇾ得ㇾ福」。俳諧歲時記栞草・正月の條に、「若夷。京師街頭に鞍馬毘沙門天の紙符並に若惠美須等の福神の簡を賣る、四民これを買ひ門戸に貼し或は歲德棚に供じ、元日是を拜し福を祈り祚を求む、南都の市中毎年吉野より來りて守り福神の札を賣る、二日の曉又毘沙門天を迎ふべしといひて毘沙門天の札を賣る、三日の曉又惠比須を迎ふべしといふ、なほ京師にて元日の曉天に若惠美須の札を賣るが如し」。

*__わき__　常常大頭の舞を好き、わらは諸共つれわきにて舞はれしが(反魂香)　能の脇師を手いけにして(淀鯉)

〔脇〕能樂或は他の舞でその曲の主人公となるものを「シテ」といひ、「シテ」に對するものを「ワキ」といひ、「シテ」「ワキ」に伴つて出るものを「ツレ」といふ。「ワキ」を勤める者を脇師といふ。

*__わきあけ__　兩袖の下を闕腋の脇明にして熱を漏し(振袖始)

〔脇明〕腋の下を縫はないで仕立てた裾なき袍をいふ。「けつてき」を見よ。また幼兒・女子などの衣服の腋の下を縫はないもので、「やつくち」ともいふ。

朱の借錢負うて(丹波與作)　誓文白朮和中散、身を粉藥に御奉公(薩摩歌)　往きか戻りに顏見よと、濱側を用ありげに往つつ戻つつ、入りもせぬ和中散買うたり、ところてん屋の水からくりも、さうさうは見てゐられず(生玉)

〔和中散〕腹痛などに效能ある賣藥の名である。元祖を津田宗左衞門藤原是齋といふ。後に代代織田彥十郎と稱した。藥は元和頃から賣始め、次第に販路ひろまり諸國に及んだ。增補松の落葉(寶永七年刊)卷四、梅の木踊の唄に、「昔より賣りはじめ候梅の木村の和中散、君の病は思ひか戀か、よその藥はじよさいでござる、こちの家にはじよさいとてはござらぬ、じんじやくむねむしこはりはら、酒の二日醉にはよねや若衆のやととんとんと、ねがほでのまんせの、のまんせののまんせの、萬のむしに第一の藥ぢや」。秋里籬島編、東海道名所圖會・卷二に、「梅木。本名六地藏村なり、ここに和中散の藥店三軒許あり、是齋を本家といふ、……ここに元和の頃梅の木ありて、其木蔭にて和中散を製し旅人に賣ふ、本家をぜさいといふ、其初は織田氏と號して、元和元年醫師半井卜養が女を娶て、和中散小兒藥の奇妙丸等の藥方を授かり永く此家に傳ふ」。好色旅日記(貞享四年刊)卷三に、「梅の木村の和中散ちかき比より名物になれり」。「うめのきのぜさい」をも見よ。

***わつぱ**　古鄉の妹よ弟よなんどと、わつぱやめらうを連れて來る(用明天皇)　彼奴音に聞く不敵のわつぱよな(關八州)

「わらは」(童)の促音便。

***わどの**　わどの屋島にて功名の様子語つて聞かせ給へ(出世景清)　わどのは敵を切拂へ(弘徽殿)

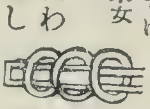
〔和殿〕對稱人代名詞で敬稱に用ゐる。貴殿。「わ」は和御前、和御料、和上﨟、和僧などの和と同じ語で、「わが」の義である。「わじやう」の條を見よ。

***わにぐち**　天滿に年經る千早振る神にはあらぬ紙様と、世の鰐口にのるばかり(天網島)　やれやかましい、其外おさん鰐の口、口のついでに口口と顏をよすれば(大經師)

〔鰐口〕徙口を吐くことを惡んでいふ。また神社や佛堂の前簷に懸け、銅製で扁圓中空で下方に横に長き口あるものを鰐口といふ。鰐口の前に布を糾へる繩を吊下ぐ。參詣人その繩をとつて打鳴す。鰐口の名は其形狀が鰐の口に似たるよりの俗稱で、其製は伏鉦鼓を二つ合せたものから起つたもので、鎌倉時代の中頃から出來たものであらう。心中天網島のこの文は、「年經る」「千早振る」の同韻語を連ね、神に天滿宮、紙に紙屋治兵衞をきかせ、神の緣から鰐口をいひかけたもので、いつもながら老練輕妙の筆である。

輪抜に角の棒　駕籠は輪抜に角の棒、美濃の加納の主なり(薩摩歌)

〔これは美濃加納の主の駕籠標ではなくて、美濃大垣の城主戶田釆女正氏定の駕籠標〕。



〔輪抜に角の棒〕

***わもじ**　物部の守屋とはわもじの事か、珍しい對面しますの(聖德太子)

「わどの」(和殿)・「わぬし」(和主)の文字詞である。貴君。そなた。文字詞は、足利時代の末期朝廷式微にして供御の物が備はらなかつた爲に、女官等その物の名を呼ぶを忌みて何文字といふた隱語から起つたといふ。

***わや**　既にどうへ取らるる處を我等仕懸けてわやをいひ(大織冠)　この歎きを見るからは情も料簡もあるべきこと、此上はわやにする、取戾いでくれんずと駈出づる(雪女)　さほど澤山な一歩を戾すまいとはそりやわやぢや(生玉)　ひこひこするない、わやにしてもさせぬさせぬ(生玉)

無茶苦茶(あと無著無着の訛つてできた語)。(この語「わやく」(その條を見よ)などと同じ緣の語であらう)。小柴垣(元祿九年刊)卷之二、かんたんの枕の條に、「はやしに一倍の金をせたげられわやにもならず云云」。「わや」は現今も中國地方でここにいへる意に用ゐてゐる。岐阜縣加茂郡東白河村地方では無分別の意にいふ。藍染川(古淨瑠璃)第四に、「例のわやもの大きに怒り」とある「わやもの」も無分別者・亂暴者の意である。

***わやく**　女犬と男犬とが戀をして、その男犬はがんまくなわやくもの(千疋犬)　扨扨いづれもわやく人かな(西王母)

「わうわく」(枉惑または誑惑)の約訛。無道。むちや。いたづら。易林本・節用集に「枉惑。無道義」と見え、諺草(元祿十四年刊)に、「枉惑。俗に人を欺き誑かしなどする者をわやく者と云此字也」と見えてゐる。和訓栞に、「わわく。明慧上人の傳にみゆ、俗にわやくといふに同じ、誑惑の音を和語とせるなるべしといへり」。巣林子作・傾城江戶櫻に「汝がわやくな故、內に居る妹と喧嘩ばかりする故、妹は氣のある奴で京へ上つた」。

わらうだ　勅使わらうだに着き給へば(天智天皇)

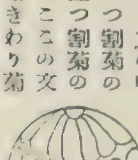
「わらふた」(藁蓋)の音便。圓座をいふ。和名抄に圓座を訓み、眞字伊勢物語に蒲を訓んである。蒲葉を圓く平く組み、徑二尺ばかり・厚さ二寸あまりある敷物で、後世のは綾綿などにて包んで作つてある。

わらびもち　さあ日坂のわらびもち(丹波與作)

〔蕨餅〕遠州日坂の名物である。日坂は東海道五十三次の一で、道中の客はこの驛で蕨餅を賞玩して通つたものである。その古きは天文十三年の宗牧の東國紀行にも、「年たけて又くふべしと思ひきや、蕨もちゐも命なりけり」と見えてゐる。東海道名所記(萬治元年成)に、「日坂はわらび餅の名物なり、葛の粉にてつくり豆の粉をまぶして旅人にすすむるに、往來の人ひだるさまぎれに蕨餅なりと思ひて、遂に葛餅なりとは知らずかし」。

わりぎくのもん　分けてわりなき割菊の紋の風呂敷引き包み(今宮)

〔割菊紋〕菊花を割つて紋にしたものを云ひ、菊花の半分を二つ、丸の中に畫いたものを二つ割菊の紋といひ、其他三つ割菊の紋など種種ある。ここの文は、わけてわりなきわり菊と同じ頭韻によつて文を飾り、「わりなき」は別無で、親しうて隔てなき意。



〔三ツ割菊〕

***わりご**　折折破子小竹筒を參らせ(大織冠)

〔破子〕破籠の義、一種の辨當箱で內に隔があつて半割せるが如きによつていふ。徒然草・第五十四段に「風流の破子やうの物云云」とありて、林道春の註に「破子とも破籠とも書けり、飲食を入る具也、和名云樏子、今俗所レ云破子是也、以レ餉送レ人也」と見えてゐる。

全盛の時に見知りし太夫を、今宵ばかりを一生のをさめと以前の便を求め、花鳥といへるに逢初めしより」。

***わざもの**　刀は業物研ぎたてなれど、遂に女に試して見ず(女夫池)

〔業物〕名士の鍛へ作つた切味の鋭い打物。利刀。

わざをぎ　彼處に芝居を構へ狂言師を集め、某も立ちまじりわざをぎの狂言を仕り(松風)

態招で、神憑の態をして神を招く義であるといふ。轉じて能狂言、歌舞伎役者等をいふ。俳優。

わさん　後生願の親方の、宵にや和讚夜中にや念佛(今宮)

〔和讚〕多くは七五調を操返した今様の歌體で、佛徳を讃嘆せる文である。今宮心中のここにいへるは親鸞聖人の三帖和讚をいうたものである。

***わじやう**　なうなうわじやう、物申さんと呼掛くる(嵯峨天皇)

〔和上〕和上﨟の略。對稱人代名詞で敬稱に用ゐる。「わ」は和殿、和御前、和御料などの和と同じ語で、「吾が」の義で、鎌倉時代の會話に多い。すべて親しい意の時には「わ」を用ひ、侮蔑の意には「な」を用ひる。

***わすれがひ**　この世も忘れ貝、浦の蜑貝うつせ貝(松風)　憂きこと暫しわすれ草、いざわすれがひ拾はんと(天智天皇)

〔忘貝〕軟體動物・斧足類に屬し、殼は扁平で厚く、前方少し尖り後方圓く、淡紫色で裏面は白い。色々の貝を拾うて憂さを忘れるといふ意から、貝を忘貝といひ、必らずしも一種の貝名に限らない。萬葉集・巻一に、「大伴のみつの濱なるわすれがひ、家なる妹を忘れて念へや」。和訓栞に、「わすれがひ。是をもて心をなぐさめて憂さを忘るるよりいひて一種には限らざるべし、よて人わすれ貝・旅わすれ貝などもよめり」。

***わせる**　さあ母のかまがわせた、何いはるるとくるるの穴耳をつけてぞ聞きゐたる(女殺)　親父がここへいつわせた事がある、用があらば明日なりと明後日なりと松屋町へいて逢へ(生玉)　それ向ひの出店から旦那のわせる、見えぬかと(今宮)　今頃は豚の腹へ生れてわせるであらうまで(嵯峨天皇)

「おはせる」(御座)の約つた語。ござる。來られる。井原西鶴撰・胸算用・巻一、伊勢海老は春の紅葉の條に、「世間は兎もあれ、婿が始めて禮にわせて、伊勢海老なしの蓬萊が出さるる物か」。

わそく　「はそく」を見よ。

わたい　表の乘衆呼うてわたい、話どもして紛らさん(博多)

「あたへよ」(與)の約訛。くれられよ。下さい。この語現今も長崎地方の漁夫などは往往用ゐてゐる。

わだかまる　一旦主人の金をわだかまり、清十郎親子に無實を言ひ掛け(歌念佛)

私曲の意。私かに着服する。横領する。和訓栞に、「わだかまる。蟠字又蟠をよめり、曲屈の義なるべし、まるノ反む也、よて俗に私曲の意にもいへり」。

***わたかみ**　安西が綿嚙摑んで、ええ畜生劣りの惡人(津戸三郎)　わたかみ取つて着せんとす(女楠)

綿嚙または綿上とも書いてある、蓋し肩上の子音の轉じた語であらう、鎧の胴を釣る爲肩にある所をいひ、元は革で造つたもので、この名稱古くは太平記などにも見えてゐる。

わたくり　流行目の顔すれど、日は綿繰で繰るやうで、響いて物も言はれぬ(生玉)

〔綿繰〕綿花を轆轤子の間にかませ、これを廻轉して綿花の纖維のみ通過せしめ、その種子を分離せしめる車仕掛。攪車。(序云、ここの文に流行目といへるは、流行性結膜炎のこと)。

わたぐるま　庄屋に並ぶ茅屋根も、内證に下女並んで紡ぐ綿車(宵庚申)

〔綿車〕綿繰車又は糸引車をいふ。

わたつみ　柳の馬場のあこうと申す綿つみ教へる寺子取(酒呑童子)

〔綿摘〕「つむ」の條を見よ。

***わたどの**　(用明天皇)(蟬丸)

〔渡殿〕細殿ともいふ。殿から殿へ渡る廊、卽ち長廊架のこと。

***和田の新發意**　仕方で講釋やられた所、ほんの和田の新發意を見るやうな(大經師)

和田賢秀をいひ、剛直な勤王家である。薙髪して新發意といふ。楠木正行に従つて四條畷に戰ひ、敵に混じて師直を狙つて殺された。新發意は新に發心した義。發心とは發菩提心の略で、佛道に歸依することをいふ。

和田のそこづつを

「かいこそ和田の云云」を見よ。

***わたばうし**　色眞黑なる老女大綿帽子の額より皿のやうなる目を見出し(孕常盤)　表の叔母御通らしやれ、ここへここへといはるるにぞ、綿帽子取つてしとやかに(女腹切)

〔綿帽子〕眞綿を摘みひろげて作り、年增女や老婆の被つたもの。雍州府志(貞享三年刊)十巻門下に、「婦人以レ手摘二白綿一、爲レ片而造二被綿一、其狀形有二大小之異一、然總稱二綿帽子一、老女多蒙レ頭」。賤のをだ巻に、「昔は女の帽子と云ふものを被りたて歩行たり、綿帽子は年季三四十已上の町の女のかぶるものにして、若き女は白に紅のうらを付て被りたり、扨其ばうしをとむる針を銀にて物好に拵ひ、晶屓の歌舞伎役者の紋所などをうたせてさしたり」。

わたもち　たとひわたもちの釋迦阿彌陀が出たるとて(用明天皇)　わたもちの大黒殿ちと拜み奉らんと、其手を取つて引出し(蟬丸)

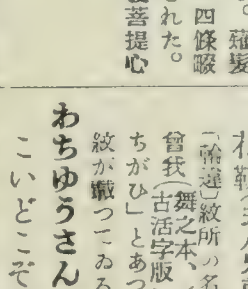
〔腸持〕腸を持つて生きてゐる者の義。生身。

わたんりやうけ　和丹兩家の典藥配劑醫藥を盡せども(女護島)

〔和丹兩家〕醫道の家柄なる和氣と丹波との兩氏。和漢三才圖會巻七、人倫類に、「典藥頭‖醫道有二和氣丹波兩氏一、而和氣氏絕二於堂上一、而今稱二半井一官醫其末孫也、丹波氏爲二典藥頭一、每歲奉レ調二進屠蘇白散一」。

わちがひ　龜甲輪違花轂(五人兄弟)

〔輪違〕紋所の名。夜討曾我(舞之本、古活字版)に「わちがひ」とあつてこの紋が織つてゐる。


〔ひがちわ〕

わちゆうさん　こいどこぞで此損なうめの木の是齋の辻で、身を粉にはたいてやつて見た、和中散でもきくにこそ、金に直いて一歩二

袍」とある。「緼」はからむしの綿入(哀箸)、「袍」は衣のなかわた(著)あるものをいふ。川柳の句にも「わんばうで背中かくなと女衒いひ」など見えてゐる。

わんぼ 兩人共にわんぼを脱げ、我我が酒手にする(十二段) 身代もいしくなつてわんぼ一枚にはなつたれど(加增曾我)

「わんばう」ともいふ。「をんばう」(緼袍)の訛。「わんばう」を見よ。

ゐ

***ゐあひ** ひらりと拔いたる居合の早業、神木の松を相手取り木刀翳し、跳上つて聲をかけ(國性爺) 兩方りきむ居合腰、太刀の柄も摧けよと握りひしぎ(烏帽子折)

〔居合〕居ながら敏速自在に刀を拔差し、敵と立合ふ劍術の一派。合類大節用集・言辭門に、「居合=劍術、林崎重信末派也、又謂₂之利方₁」。人倫訓蒙圖彙・卷二に、「居合は太刀討の根元なり、兵法といふは敵に向つて太刀をあはするは腰より拔出しての上也、拔かずして兵法あるべからず、然れば拔くを第一とす、長短の打物によつて拔きやう品々あり、又は所の廣狹地形の高下と坐したると立ちたるとあり、敵に其色をさとらせず柄に手をかくるより、拔出す遲速によつて勝負の二道こゝにあれば、いかでか學ばずしてあらんや、諸流多き中に關口流其名高し」とありて、坐して右膝を立てて長刀を拔いてゐる繪が載せてある。

「居合腰」とは、坐して右膝を立てて居合の身構へする腰付をいふ。

ゐがん 十二の捻、十二の投、立がん、居がん、强みの腰(井筒)

〔居眼〕相撲にて紛十二手の一である。「たちがん」を見よ。

***ゐぎやう** 天上に現はれ出で、異形は手を伸べ撿非違使が眉合を割れて退けとはたと打つ(二枚繪)

〔異形〕人と異れる形の義。鬼または妖怪の類をいふ。

***ゐきやく** いらぬ化粧業、何ともゐきやく千萬といへば(薩摩歌)

〔違格〕不都合。書言字考節用集に、「違格。格則格式也、見₂職原抄₁、又用₂違却字₁」。和訓栞に、「ゐきやく。違格といへり官府語なり、違却にあらず、違格の字海東諸國記に見ゆ」。

ゐくびにきる とつぱい頭の黑塗兜猪頸に着なす(川中島)

〔着₂猪頸₁〕兜を仰きて戴くやうに被るをいふ。猪頸は猪の如く縮頸の義。

ゐげん 「いんげん」を見よ。

ゐずくみ かういへば忠兵衛を憎みそれむやうなれど、ゐずくみぞあの男が身のなる果がかはい い(冥途飛脚)

〔居竦〕儼るに於ては神佛の冥罰を蒙つて、忽ち身動きもならず居竦みとなることもあるの意で、自誓の詞である。當世大和言葉(著者及び刊年詳ならねど寶安から寛文頃の間の作か)に、「人と雜談しける時かりそめごとにも、佛祖、天道、神八幡、氏神照覽、ゐずくみ、みしやり、此火に荼毘せられうぞ、などおそろ敷誓言する事はなはだよからぬ事といへり云云」。

***ゐだいけぶにん** 一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟を得、ゐだいけぶにんの無上恩にあやかり給へ母上樣(百日曾我)

〔韋提希夫人〕梵名 Vaidehi. 譯して勝妙身などといひ、摩訶陀國・頻婆娑羅王の后で阿闍世太子の母である。太子の爲に牢獄に幽閉されて佛法を求む。釋尊乃ち親臨されて夫人の爲に說法された、觀無量壽經これである。委しくは觀無量壽經について見よ。

***ゐだてん** 黑谷の東岸和尙衣の袖をまくりあげ、韋駄天の如く飛來り(大經師)

〔韋駄天〕梵名 Veda. 韋天將軍ともいひ、略して天神ともいふ。甲冑を着して直立し、兩手で寶劍を捧持してゐる。淨行を修して佛法を外護し、利生化益を主として群生を濟ひ給ふ。嘗て足疾鬼が佛舍利を奪うて逃走した時、これを追及して取戾したといふので、疾走の神として世に知られてゐる。

ゐづつのまろがたけ (本領曾我)

「まろがたけ」を見よ。

ゐづつのをんな 昔の井筒の女とやらは、妬のほむらに提子の水が湯となつた(大經師)

〔井筒女〕「ひさげの水が湯となる」を見よ。

ゐで 樋の口の井手の水草のみなぎつて(卯月紅葉)

〔井手〕堰手の義。杭を打つて水を塞き止める所。堰。

***ゐでん** 大織冠といふ冠を脫がせ、位田の所領を取上げ(大織冠)

〔位田〕一品から四品まで正一位から從五位に至る、その位の者に給せられた田をいふ。大寶令によれば、一品八十町、二品六十町、三品五十町、四品四十町、正一位八十町、從一位七十四町、正二位六十町、從二位五十四町、正三位四十町、從三位三十四町、正四位二十四町、從四位二十町、正五位十二町、從五位八町と見えてゐる。これ等は時代によつて變遷がある。

井戸へつられた大黑天 (雪女)

「だいこくてん」を見よ。

***ゐねうかつがう** 皆南無阿彌陀佛とひれ伏してゐねうかつがう申しけり(井筒)

〔圍繞渴仰〕「圍繞」はとりかこむこと、「渴仰」は佛法に對して信仰欣慕の念を起すこと。法華經・壽量品に、「心懷₂戀慕₁、渴₂仰於佛₁」。書言字考節用集に、「圍繞渴仰」義楚六帖、周回曰レ圍、坐遍曰レ繞」。

ゐのきばかけ 橫に薙ぐる切先・金吾か膝節猪の牙かけ、これも尻居にどうど居て(井筒)

「猪牙掛」猪の牙に掛つて跳ね飛ばされたやうな負傷の意にいうたのである。

***ゐのこ** やがてゐのこや五六里、十死も過ぎて(大經師) 一昨年の十月中の亥子に火燵明けた祝儀とて(天網島)

〔亥子〕亥猪とも書き、十月亥の日の稱、古來北斗の斗柄が亥に向ふといふによつてこの稱がある。上の亥の日の亥の刻に亥子餠を食ひ、又火燵を明けるなどの慣習がある。俚言集覽に、「初亥は順集に十月初の亥の日右大臣女御の火桶にもちひをもとりて內裏の女房につかはすと見えたり、禁中にて嚴重の餠といひ、俗に玄猪と稱すと年中行事にいへり、愚案今俗十月初亥に火燵を開くも是より起る歟」。巢林子は火燵の明け初めを十月初亥日

わりしころのかぶとづきん 割錣のかぶとづきんぽつこみぽつこみ日ばかり光る面魂、夕立霽るる雲間より星のきらめく如くなり(弘徽殿)

〔割錣兜頭巾〕錣の割れた兜頭巾である。兜頭巾は江戸時代に武士が火事裝束の際被つたもので、其形兜に似て、錣は羅紗で作り彩糸をもつて華麗に繡してある。


〔わりしころの兜頭布〕

***わりなし** 子とも聟ともかしづき給ふ心ざしこそわりなけれ(出世景淸) この灘を越す樣あらばどうぞ指南はあるまいか、わりないことよと宣へば(最明寺殿)

詮方ない。別無し、また理無しの義。親しう一隔のない。分別のない。

***わるごう** 銀くれる遣手に水くれるとはわるごうなと、笑をしほにいひしらけ(反魂香) ここは傾城町と申して、諸萬人の立合わるごうの寄合(五人兄弟) 長ういらぬは見せかけ大盡、わるごう末社のちよつと借着に(雪女) やあ例の龜井片岡がわるごうするなどいふ處へ(源義經)

「わるごと」(惡事)の轉。いたづら(惡謔)。わるてんごう(「てんごう」は「てん」(がう)の條を見よ)。錦文流撰・傾城八花形(淨瑠璃)に、「惡洒落やわるこう仲間なんどとて、よねを打こみ幫間(たいこ)をいぢり」。

***わるずゐ** 尼の話が南が噂に似た故に、そこを以てわるずゐか、イヤこれはいかいおはまり(薩摩歌)

〔邪推〕惡い推量。邪推。

***われから** 藻にすむ蟲のわれからと(國性爺)

蟲の名である。海藻中に棲息して藻に似てゐる蟲なればしかいふ。色青く體八寸餘ありて至つて細く、手足長き蟲である。景樹云、「因幡わたりにて、海布に小蝦の如きいとささやかなる蟲のつきたるをいふ」。「藻にすむ蟲のわれから」を見よ。

われならなくに 我ならなくに我心弘徽殿と入替り(酒吞童子)

我ならぬに。「なく」は「ぬ」の延語。古今集・戀四部の歌に、「陸奥のしのぶもぢずり誰(たれ)故に、亂れむと思ふ我ならなくに」。

われもかう 桔梗白菊たはれ草・引く手を取りてわれもかう、はや歸らんと夕顏や(大覺)

〔吾木香〕薔薇科に屬する草で、莖の高さ三四尺に達し、葉は藤に似て羽狀複葉をなす。秋の頃莖頂に紫色または紅白色の小さき花簇生して穗狀に排列す。ここの文は吾木香に吾をいひかけたのである。

***わろ** 佛にさへ油斷させず責め使ふわろぢやもの、衆生を責めるは道理ぢや(薩摩歌) 阿波座からうろさいわろが見えるぞえ、ほんにほんにぜいこきの彦さん、しかもずぶぶ醉うた足元(壽門松) ここなわろは如何に事觸とて見通ではあるまいし(弘徽殿)

「わらは」(童)の約訛であらう。わつぱ。人を罵つていふ。和訓栞に、「わろ。萬葉集に我といふ意にいへり、俗語にはわろうともいふ、わらはの訛なるべし」。

***わわし** 得たり顏にかやうにわわしく振舞ひ給へば(一心五戒魂)

名義集に「輕」を訓んである。みだりがはしい。口やかましい。心くねくねしい。增鏡・秋のみ山の條に「行列を爭ひて、隨身どもわわしくののしれば」。狂言・花子(大藏流)に「あのおかみ樣はよのおかみ樣と違ひまして、殊の外わわしう御ざります」。巣林子作・百夜小町に「母樣何をわわしう仰せらるる、まづ入らせ給へ」。同・今源氏六十帖に「母樣は心わわしうて、兄鳴尾之介樣は繼子(ままこ)ぢやといふて國を逐出し」。

***わわる** 所詮恨みは父めにあり、蹈殺して埒明けんと飛びかかる、妹の小梅わわりつき、ええ畜生め食付いて吳れうものとしがみつく(天神記) つつ立ち入らんとするを五百機驚きわわり付き、餘りな無理無體、穢(きたな)い慾心持たうより(振袖始)

わいわい騷ぐ。騷しう聲立てる。わめく。魂膽色遊懷男、大名戻り小判でつらをはり枕の條に、「そなたどこの人ぢや、家持なら町へことわるとわわり出せば下女は笑止がり」。藍染川(古淨瑠璃)第一に「邪魔をなすは推參なりとわわりかかつてののしれば」。

わんぎり 雜煮の上置わんぎり大根(雪女) 身は切賣の西瓜面(づら)、蓮花割(わり)かわんぎりか、太刀刀にも及ばばこそ(弘徽殿)

「わぎり」(輪切)に撥音「ん」の增加した語で、「いま」(今)を「いんま」、「みな」(皆)を「みんな」、「よね」を「よねん」(その條を見よ)、「びくに」(比丘尼)を「びくにん」(その條を見よ)、「ただ」(只)を「たんだ」、「ゆゑ」(所以)を「ゆゑん」、「まな」(眞字)を「まんな」などといふの類である。

***わんざん** 大學聞き、これはわんざんなること仰せられます(壬生大念佛) なう我が腹の立つままにさりとてはわんざんな(大織冠) 惚れて進ぜる男はなし滅多腹が立つてのわんざん、何方の御意見でも聞入れのある氣質でない(振袖歌) 常わんざんとは事かはり、道理至極に返答なく(薩摩歌) たつて申せば繼母のわんざんなどと名を立て(伊豆日記)

「わざん」(和讒)に撥音「ん」の增加した語。さかしらの意。(かく「ん」の增加することに就いては「わんぎり」の條に述べておいた)。保元物語に、「これは清盛がわざんにこそあるらめ」。曾我物語・卷八、畠山歌にて訪はれし事の條に、「今にはじめぬ梶原がわんざんとは言ひながら」。易林本・節用集に、「和讒」とありて「サカシラ」と振假名が附けてある。

わんづか 女郎儀(めらうぎ)はこの丁稚(でつち)とわんづかばかり言ひ交し、露の命も捨小舟(加增曾我)

「わづか」(僅)に撥音「ん」の增加した語。「わんづかばかり言ひ交し」とは、互に少しばかり語らひ合うた馴染の者であるとの意。

***わんばう** このわんばうは兵吉に貴殿よりの御しきせ、箱に納め月月の朔日毎に頂戴す(三國志) 金銀衣類はいふに及ばず、身に纏ひし古わんばう、腰にさいたもはやはや拔いて渡せ(嫗山姥)

「をんぱう」(縕袍)の訛り。「わんぼ」ともいひ、綿入服である。論語・子罕篇に、「衣ニ敝縕

本鏡(享保三年刊)に、「御評判の三勝心中上下六文」と見え、不審紙(享保九年刊)に、「世に心中とて刺違へ死するものは一冊が三文、上下で六文に賣渡され」と見えてゐる。現存せる繪草紙で最も古いものは、元和元年大阪夏の陣を書いた「大坂卯年圖」及び「大阪阿部之合戰之圖」である。元祿時代になつては淫美の風潮にともなつて、心中沙汰多く、好色本流行すると共に讀賣も盛んになつた。讀賣の文章も瓦版彫刻もこれを賣歩く者も皆同人であつて、文字の覺ある浪人や、放蕩に身をもちくづした食詰連のなした業であることは既に前に述べた。繪草紙の流行するにつれて弊害も生じたので、貞享元年十一月にはこれを禁止する布令が出た。元祿十一年二月にも同樣の布令が出てゐる。これが爲に元祿十五年頃には繪草紙の流行も頓挫したものと見え、元祿曾我物語(元祿十五年刊)に、「遊女の心中、三勝が時分は珍しさのまま狂言にも作りぬ、次第に類多くなりて、今は古めかしとて辻賣の繪草子に戳せず」と見えてゐる。寶永頃になれば更に頭を擡げ、歌祭文に移變りつつ復興の氣運に進んだ。巣林子作物中にも心中二枚繪草紙(寶永三年三月上演)に、「扨こそ世上にこの男死んだ風說死なぬ沙汰、生死二枚の繪草紙に戀路の回向を受けにける」と見え、今宮心中(寶永七年正月上演)に、「浪華藝者の風俗を橋橋名所に擬へて書集めたる藻鹽草、云云」と見え、生玉心中(正德五年八月上演)に、「我疵付けて我と我が名をや流さん恥かしの、我噂も明日よりは歌祭文を身の上に云云」、とあるも當時繪草紙の變遷を語るものである。序に一言すべきは繪草紙の版にする所謂瓦版のことである。瓦版といふは粘土を平滑にしそれに彫刻し、瓦に燒いて版にしたからの名であるとの言傳へであるが、實際らのとは見えない、矢張櫻木版である。心中天網島・名殘の橋づくしの條に、「櫻木にねほりはほりを繪草紙の、版摺る紙の其中に」とあるは、繪草紙が櫻木版印刷であることを語るものである。瓦版の名稱古くは見當らないで、文化頃からいはれたのであらう。其彫刻の粗惡さが恰も瓦に彫つたやうであるから、かくいはれたのであらう。其粗惡なわけも彫刻者が素人であり、且は早く賣らうとして印刷を急いだのに歸因する。


(人倫訓蒙圖彙所載)
〔繪草紙賣〕

ゑじかりまた 大太刀に腰がつられて歩めばゑじかり又五郎、もし正眞の公時に出逢はばれぢ殺さるるは定のもの(弘徽殿)

坐りて兩股の左右に開くこと。開き股。「ゑじかり」は「ゐじかり」の轉で、すわるの意。和訓栞・すわるの條に、「畿内にゐじかる、關東にへたばる、伊豆にきがる、但馬にへこたれる、長崎におらす、土州にゐざりといふ」。醒睡笑・五に、「行きしなにつぼうだ花が來しなにはゑじかつたりや桶とぢの花」。東海道名所記に、「足はくたびれたり、ゑじかりたり、ゑじかりまたになりて宿を通る」。「ゑじかり又五郎」はゑじかりに衞士をいひかけ、股に又五郎をいひかけたのである。

ゑしやうりやうりんのひのくるま 「えしやう兩輪の火の車」を見よ。

ゑしんぶつ さて中尊は惠心佛(三世相)

〔惠心佛〕釋源信作の佛像をいふ。源信は比叡山惠心院に居たので惠心と云ひ、日本天台惠心流の祖で、殊に念佛弘通の先達である。佛書に秀で、また著述にも往生要集、彌陀經疏、一乘要訣等殆十種に及んでゐる。寛仁元年六月壽七十六で入寂した。

越後衆か明石か 越後衆か明石か、髮がちつくり縮んだ(丹波與作)

髮が縮んでゐるので、越後縮・明石縮に縁をとつて越後衆か明石の衆かといふたのである。

越前布・越前綿 この北國にてお尋ねあらうならば越前布・越前綿、若しは實盛の生國なればお供の奴の髭に塗る油墨などのお尋ねもあるべきに(反魂香)

國花萬葉記卷十二、越前國中名物出所の條に、「牛頭布、崎布、割織布、……、肱綿」と見えてゐる。(近松のこの文に「實盛の生國なれば云々」とあるは、謠曲・實盛にも「實盛生國は越前の者にて候ひしが」と見え、齋藤別當實盛が老武者として敵に侮られるを厭ひ、鬢髭に墨を塗つて篠原の戰に討死した縁によつてかくいうたのである)。

ゑづ あの死骸の傍へ出ることか、ああゑづ、さりながらいやといふも仔細らし(反魂香)

餌衝く(嘔吐)義であらう。氣味惡い。恐しい。恐怖い。俚言集覽増補に、「ゑずい＝筑前にて恐怖の形狀ことば」と云ひ、物類稱呼に、「おそろし、こはしを西國にてゑづいといふ」と見えてゐる。

越中の國の人 越中の國の人と見た、何で見たれば、この下紐を解いて一夜は泊らんせ(丹波與作)

越中褌には紐が附いてゐるから、その縁でかくいうたのである。

***笑壺に入る** 由兵術殆んど笑壺に入り、ヤア有難い忝い(今宮) 時景親子笑壺に入り、オオでかしたでかした(天鼓) 願ふ所と笑壺に入り(國性爺)

悅んで笑ふべく面白い所にはまつた意。保元物語に、「龍顏頗にゑつぼに入らせおはします」。

ゑつらしよくきん 産衣に越羅蜀錦を裁ち(國性爺)

〔越羅蜀錦〕支那の越の國の羅、蜀の國の錦は共に名産である。杜甫の詩句に、「越羅蜀錦金粟尺」。

ゑてんらく 越天樂の調は琴柱に落つる雁がね(三國志)

「越天樂」雅樂平調の曲名。「琴柱に落つる雁がね」とは、琴柱を十三絃に並べ立てたのは雁行に似たればかくいひ、謠曲咸陽宮にもある。

***ゑど** これも因果の車長持、轟くゑどは假の宿(卯月潤色) アアさらりと穢土の苦が脫けた(宵庚申)

〔穢土〕佛のまします清淨な國土を淨土といふに對して、煩惱の業苦で滿たされてゐる濁惡なこの世を穢土といふ。現世。娑婆。

ゑど 髭長なぜにぜせはん、もうゑどあぐるぞ(浦島)

餌。ゑさ。醒睡笑・五に「何をがな鷹のゑどにせうやれ」。

ゑな 「えな」を見よ。

ゑなが ゑなが・ささいにまつむしり(娥)

〔纖雀〕正しくは「えなが」。燕雀類に屬する鳥の名。形四十雀に似て纖嫋矮小である。

ゑにしなきりりんな 「えにしなきりりんな」を見よ。

***ゑにち** 慧日に照す大恩教主(釋迦)

でなくて中の亥日にせるは、その作・傾城戀物揃にも「承平二年十月中の亥の日、民間には亥の子と名付け、大内にはお玄猪の御祝儀とて云云」と書いてゐる。大經師昔暦のこの文は「亥の子」に「いのこ」(往來)卽ち道程をいひかけたのである。

ゐのじ 肩にかゝるもの花折りかけて、裾にゐのじが寢た所え(蛙合戰)

〔猪字〕猪をいふ。猪を猪の字といふことは、ほれろ(惚)をほのじといふの類である。「ほのじ」を併せ見よ。巣林子のここの文は、「かるも」(その條を見よ)というて「ゐのじ」とうけたので、枯草に猪は古歌にも多く詠まれ、後拾遺集戀四の部、和泉式部の歌にも「かるも掻き臥す猪の床のいをやすみ、さこそ寢ざらめかからずもがな」と見えてゐる。「肩にかゝるもの花云々」をも見よ。

***ゐのはやた** 源三位賴政とは小性立、猪隼太とは行合兄弟(雪女)

〔猪隼太〕名を高直(或云廣直)といひ、源三位賴政の郎等である。賴政御殿の上なる鵺を射落し、猪早太これを刺殺した。

***ゐはい** 忠孝にことよせて位牌知行に膝を屈むる臆病者(雪女) 白縮緬の紵帶、これも二人が申し受け、長き形見と身に附けん、我も受取る受取れと、位牌のひれに結び付け(卯月潤色)

〔位牌〕死者の戒名などを記した木牌。和漢三才圖會卷十九、佛供器の條に、「靈牌書二釋氏戒名一、安二佛龕傍一者、俗謂二之位牌一」。「位牌知行」とは、親讓りの俸祿をいふ。西鶴撰・日本永代藏(貞享五年刊)卷四、祈る印の神の折敷の條に、「木末の侍親の位牌知行を取り、樂樂と其通りに世を送る事本意にあらず」。「位牌のひれ」とは、俗に位牌の袖ともいひ、位牌の戒名を記してある面の兩側を少し前に折つて飾彫りしたものをいふ。和漢三才圖會卷十九、佛供器の部、靈牌の條に位牌のひれある畫が載せてある。「ひれ」に就いてはその條を見よ。

***ゐもり** 井守といふ蟲は夫婦の契り深き蟲、女たる身は手具足に持ちぬれば、思ふ戀が叶うてよい殿持つと承る(三世相)

昔は守宮(古くいへるは蜥蜴のことである)を「いもり」といひ、守宮を飼ふに丹砂を以てし其體の赤くなつた時、これを搗いて女の身に塗り、交接のことあればその塗つたのが剝脱するといふ故事を、後に守宮を井守(井泉池沼に棲む蟲で、やもりに似て腹が赤い)と誤り、巣林子の時代既に井守を惚藥に用ゐたものである。增補下學集(寬文九年刊)氣形門に、「守宮。本名は蜥蜴也、取二蜥蜴一飼以二丹砂一、體盡赤時搗レ之塗二宮女之臂一若有二姪犯一則其血消滅、故守宮也、古詩曰、臂上守宮何日消、鹿葱華落淚如レ雨、鹿葱宜男艸也」。齋藤彥麿撰・傍廂・後編に、「今世男女の中のことにつきて、水中のゐもりを黑燒に製するよしいへるは據たがへるなるべし。陶弘景云「蝘蜓喜緣二籬壁間一、以レ朱飼レ之、滿二三斤一殺乾末以塗二女人身一、有二交接事一便脫、不レ爾如二赤誌一、故名二守宮一云云」。

***ゐやひごし** 仲間へ入つて下されと、詞は下げてもゐやひごし、いやと言はば切りかけんず氣色面に見え透いたり(博多)

「ゐあひごし」(居合腰)の訛。「ゐあひ」を見よ。

***ゐらん** 傾城は賣物、直段極まる上からは名古屋山三が妨言うても叶はぬ筈、然るをゐらんに及ぶとは、うぬらがもがりと覺えたり(反魂香) 娘おかめ銲與兵衞夫婦に讓り申候、外よりゐらん少しもなし如件(卯月紅葉)

〔違亂〕法に違ひ亂す義。轉じて苦情を陳述することをいふ。書言字考節用集に、「違亂」。

ゐりよう 「月支の遺龍」を見よ。

ゐわらぢ 「いわらじ」を見よ。

ゐんげん 「いんげん」を見よ。

***ゐんのちやう** (松風)

〔院廳〕太上天皇及び女院に奉仕する役人を院司といひ、その役所を院の廳といふ。

ゑ

ゑぐ 萠ゆるゑぐ摘む若菜摘む(雪女) 妻は手足も土大根、蕪・ゑぐなも摘み持ちて(最明寺殿)

「ゑぐな」ともいひ、野菜の名。和訓栞に、「ゑぐ。萬葉集に惠具と書けり、野菜の名なり、蘞き義成べし、ゑぐの若菜・ゑぐの若葉・ゑぐの若立・ゑぐ摘むなどよめり、顯昭說に花はすはまに咲きて水邊に在り、芹に似たる草也といへり、今東國にてゑぐはへといふ、上總の人はよごともいへりとぞ。俊頼はゑごとよめるを、仲實の返しには芹とよめり、新六帖に半夏又女萎をよめれどいぶかし、今東國にて黑ぐわゐをゑごといふともいへり」。

***ゑざうし** 京童の口ずさみ落首洛外とりどりに、其一ふしを繪草紙や、下立賣を堀河へ引廻したる角屋敷(女腹切) サア繪草紙ゑ、よその口の端ア餘所ごとに買求めては慰みしこの身の果を讀賣に、誰が節つけて田舍まで唄ひ流さん蜆川(卯月紅葉)

〔繪草紙〕觸賣とも讀賣とも稱した。天災地變や敵討・葛藤の類や役者評判・情死・罪人仕置など、總てその當時起つた世上の珍聞異事を拙劣な繪畫に描き、小割書をした所謂瓦版印刷物で、僅一二枚の粗惡な小册子である。これを坊間に鬻ぎ步いた者が卽ち繪草紙賣である。繪草紙賣は大方は放蕩の果の落魄者で、力役勞働もならず、往時の華奢に引替へて見窄らしう公衆に面を曝すことも恥かしくして、深編笠を被り二人連節に其文句を唄つて之を賣つた。彼等が全盛のその時は粉白黛綠の美女を侍らしてたはけの限を盡し、浮世の榮華を樂んで底拔けの大騷ぎに學習した俗謠を、今は生活難の爲に其美聲を元手に節面白う可惜得意の咽をうならせ、幾多往來の人人を面白がらしたことであらう。井原西鶴撰の好色二代男(貞享元年刊)卷之二、大盡北國落の條に、「金屋の七様八様お兄弟は家も質に流れて、それより松屋町とやらに引込み、夜さへ編笠を着て連節の讀賣、うはがれ聲のかくれないと聞いて來た人もあり」と見え、人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷之四に、「繪双紙賣。世上にあらゆるかはつたる沙汰、人の身の上の惡事、萬人のさし合をかへりみず、小歌につくり淨瑠璃に節つけて、つれぶしにて讀賣るなり、愚なる男女老若の分なく、たつみあがりのそそり者、是を買取つて樂しみとなす、誠に遊民のしわざ、無きに事かかぬ商人なり」とあるも、彼等が身の上の消息を語るものである。繪草紙の賣價は享保頃に一枚物で六文程であつた。亂脛三

〔袁天綱〕唐太宗時代の人、人相を見てその人の運命吉凶を判斷する術に長じてゐた。萬姓統譜に、「袁天綱。成都人、有ニ風鑑一應驗不レ可ニ勝紀一、太宗召見曰、古有ニ君平一、朕今得レ爾如何、對曰彼不レ逢レ時臣固勝レ之、子客師亦傳ニ其術一無レ不ニ奇中一」。

ゑんとんしくわん 一心三觀の胸の月は圓頓止觀のそらにかかる（百日曾我）

〔圓頓止觀〕一乘教の圓融無碍見在にして化益の頓速なるを圓頓といひ、妄念を靜止して眞智の通達を止觀といひ、天台の說くところである。

ゑんぶ 「えんぶ」を見よ。

ゑんゑんごくごく ゑんゑんごくごく無相無念の上に於て、むはうなんしの大用を起し（大原問答）

〔圓圓極極〕法身・報身・應身を具足して圓、大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智圓妙であつて、菩提を極め涅槃を極めることをいふ。大原談義聞書鈔（延寶五年刊）に、「於ニ圓圓極極無相無念果成之上一、起ニ無方難思之大用一」。「我遁世の昔より云云」を見よ。

を

＊を 昨日の朝山敵祐經尾越す鹿に目を付け（會稽山）

〔尾〕峰通りから麓まで長く引きはへた處をいふ。古今集・卷一、春上の部の歌に、「山櫻わが見にくれば春霞峰にも尾にもたちかくしつつ」。太平記・千劍破城の戰の條に、「谷を隔て尾を隔てたる道なれば」。

をかざきづきん エイソリヤひかれて來れば名も立たぬ、岡崎づきん羅綾の袂（三國志）

〔岡崎頭巾〕嬉遊笑覽・卷二上、服飾部に、「をかざき頭巾。九頭巾に錣付けたるを熊坂頭巾と云、もしこれにや、短きも長きもあるべし、長きを熊坂頭巾といふ」。

をがせ 戀に心をひねり麻の、ながせ亂いた胸の中（丹波與作）

〔苧桛〕苧を撚り繋いだものに縒をかけて絲とし、これを桛籰にかけて輪となせるもの。往時は苧を績むを女藝の一に數へ、殊に下婢などは苧を績むを內職としたのである。

＊をがみ はつる二十日の月毛の駒の、尾髮亂れて置く露に、袖の涙をあらそひし（丹波與作） 二人が額を打合せくどき焦れて泣く涙、馬の尾がみや浸すらん（大經師）

〔尾髮〕馬の尻尾。太平記・卷十二、公家一統政道の條に、「白瓦毛なる馬の、尾髮あくまで足つて太く逞しきに、沃懸地の鞍置いて」。

をかめ 碁によそへたる我身の上、包む心の奥の手はをかめも見えて哀れなり（千疋犬）

〔岡目〕脇目即ち側から見る目をいふ。傍觀。和訓栞に、「をかめ。陸目の義、海中の事を陸より觀て計るをいふ、旁觀の意也」。碁戰を傍觀して居れば能く其得失がわかるを諺に岡目八目または脇目八目といふ。（序云、近世江戶の內で吉原以外の遊女屋のあつた場所を岡場所と稱した。この岡も脇の義で、吉原を本場所と云ふに對して稱せられた語である）。

をがらづきん 苧糟頭巾ひつ込うて大斷臘指しこはらし（持統天皇）

〔苧糟頭巾〕紺染の苧屑を組んで作つた強盜頭巾（その條を見よ）。苧屑頭巾。物類稱呼卷四、衣食部・頭巾の條に、「江戶にてからむしづきん、又がんだうづきんと云を北國にこぼうしと云、又をくそづきん、をくづづきんと云」。

＊をがんます 笑ひ顏見せて下んせながんます（夕霧）

「拜みます」の訛。

＊をぎのやへぎり いせをの海人にあられども、其はま荻野八重桐を、龜井橋ぢやとおしやる、心はの、さきはおたびの神かけて後先に又續く者がないは扨（今宮）

〔荻野八重桐〕寶永から正德頃にかけて大阪で女形の名優である。役者謀火燵（寶永七年刊）大坂の卷、若女形の部に萩野八重桐とあつて其藝評が書いてある。嫗山姥（巢林子作、正德二年七月竹本座上演）に、「私が昔はうき河竹の傾城萩野屋の八重桐とて、太夫仲間の立て者と言はれし程の全盛の」と見えて、荻野八重桐でなくて萩野八重桐になつてゐる。今宮心中（寶永七年正月竹本座上演）のここの文は、濱荻に荻野をいひかけたのであるから、荻野八重桐でなければならぬ。按ずるに同時代に荻野八重桐とも萩野八重桐ともいうたものである。今宮心中のここの文は、龜井橋を西に渡れば天神のお旅所であつて、お旅所に行くには龜井橋より外には後先に續く橋がないを、絕世の名優である意にいひかけたのである。

をぐり この將監は禁中の繪所小栗と筆の爭にて、勅勘の身となつたるぞ（反魂香）

〔小栗〕狩野元信の初の師小栗宗丹を借りてかくいうたのであらう。宗丹名は助重、大德寺に住し、畫を周文に學び、後に牧溪、正澗、夏珪、馬遠の畫風を追慕し、研究してその深趣を得、寬正五年正月六十七歲で歿した。

をけがはどう 具足も拙者が細工した桶がは胴とはこれなるぞ（用明天皇）

〔桶側胴〕具足の一種。豐臣家譜に、「尾張國所レ用之甲冑者何哉、對曰有ニ胴丸者一、其制異ニ於桶皮筒一也、於ニ右脇一結レ之屈伸自由也」と見え、また本朝軍器考・頭書九下に、「桶皮胴とは打のべにしたるかな胴なり、今世に桶皮胴といふ鐵は、古の桶皮胴といふかな胴に草ずりを附たる也」と見えてゐるから、桶皮胴とも書いて、金胴の左脇蝶番にて屈伸するやうに作つたものであらう。巢林子のこの文は、久馬平が桶結ひであるから、その緣語の桶側胴というたのである。

をけとり そんなら桶取といふ狂言は、女に出家が濡れる事ぢや（壬生大念佛）

〔桶取〕壬生寺（寶幢寺）で每年三月十四日から二十四日まで大念佛修行の間、狂言の催あり、これを壬生狂言といひ、番組二十五番あつて、桶取はその一である。小唄打聞（寬政二年成、俗謠等を集む）、壬生狂言の歌、桶とりの歌に、「ささげぬる水にもうつるおぼろ月、影はづかしきうしろ髮、したひ寄るべの常陸帶、結びとめたき心根を、しらず姿のナ踊りの手、ちぎりおほせて、古君のうらみを汲か桶とり、恨をくむか桶とりよ。是は壬生狂言のうたとなん、寬政元年の春の頃京攝の間に專ら流行せしといふ、ふるき唱歌とは見え侍る」。

＊をこ 御政道晴しとは天晴おのれはをこの者（酒呑童子） 大王の御敵日本武尊當國に忍びある由聞召され、さしも猛威の聞えある八十の梟帥を、女に形を扮し討取る程の

〔慧日〕佛陀の智慧朗かなるを日に譬へていふ。法華經に、「智慧光明、如二日之照一」。謠曲・身延に、「有難や業罪如霜露慧日の光に消えて卽身成佛たり」。

ゑのころ　「えのころ」を見よ。

***ゑはう**　この浪華津の惠方神（淀鯉）　まづ惠方棚・神の棚（夕霧）　この身になつて惠方參りどころか（大經師）

〔惠方〕曆の上で大將軍（八將神の一）の居る方を塞の方といひ、其反對の方を司る神を歳德神といひ、歳德神の居る方を明の方とも惠方とも稱して、百事に福ありとして祭る。「惠方神」とは惠方に當る神。「惠方棚」とは歳德神を祭れる棚で、歳德棚ともいふ。「惠方參」とは年の始にその年の惠方に當る神社佛閣に參詣すること。日次紀事（延寶年中成）正月の條に、「凡其歳吉兆方必在二幾處惠・加農惠等惠方一、向二此方一而爲レ事則必吉、俗以レ惠爲二得之字一、德レ事欲レ得レ之也」。同書・十二月晦日の條に、「得方。陰陽家因二來歳之支干一、而四方間考二吉兆之方一、是稱二得方一、俗間每レ家向二其方一高張レ棚、飾二華藥一建二松竹一、獻二供物幷燈火一而祭レ之、是謂二歳德棚一、凡新年出納物・飲食類必先獻レ之」。淀鯉出世瀧德に「幣帛を上げ神樂を上げ、參り納むる八幡山、この浪華津の惠方神、民安全こそめでたけれ」とあるは、八幡山が浪華津の東北にあつて、惠方に當るをいうたもので、寶永頃では寶永六年が己丑でそれに當る。そして寶永六年の曆は前年末に調製され、それに據つたとも考へられるので、淀鯉出世瀧德の初上演は寶永五年末か或は六年であつたであらう。

ゑふご　狩人のゑふごに小鳥を詰むるが如く（女護島）

〔餌畚〕鷹の餌を入れる畚の義。狩人の小鳥などの獲物を入れるもので餌袋ともいふ。貞丈雜記・卷之十五に、「餌袋といへども袋にあらず、竹籠なり・ゑふごの事なり」。

***ゑぼし**　親左近右衞門が烏帽子子、與作といふ名を付けたれば（丹波與作）　烏帽子寶の親仁樣内のいまめに廻されて（卯月潤色）　侍は衣紋繕ひ、烏帽子のひながた引揃へ、我も我もと並居し（佐々木）　烏帽子折の上手を召し、位々の烏帽子冠をいひつくれば（烏帽子折）

〔烏帽子〕上古の烏帽子は禮冠の下に被つた頭巾であつたのが、延喜の頃から冠と帽と別になり、冠は正服以上に用ひ、帽は平服に用ひる習となり、無位無官の者も朝夕常に帽を被つたのである。烏帽子も初めは黑絹で袋の如く縫うた柔らかなものであつたのを、鳥羽院の頃より剛く作られ、それより後、漆を塗り緣を附けなどすることとなり、立烏帽子・さび烏帽子・風折烏帽子・侍烏帽子・細烏帽子・揉烏帽子など諸種の品ができた。「烏帽子子」＝元服の時に烏帽子を被らせ名を付ける人を烏帽子親又は名付親といひ、その子を烏帽子子と云ふ。「烏帽子寶」＝口寄巫女の用ひる語、頭に被つて親しむ烏帽子のやうに、親又は子として寶のやうに慈愛する者をいふ。浮世床・二編卷上に、「いとし可愛と思ひ子の烏帽子寶ではなアけれど、軒を離れぬ寵愛の秘藏烏帽子が來たわいの」。「烏帽子の雛形」＝雛形の稱は烏帽子名所の中に見えない。按ずるに烏帽子の諸式の意で、大小名侍など夥多の者どもが各大小諸種の烏帽子を被つて並居る有樣は、宛然烏帽子の諸式雛形を引揃へた如くなるによつてかく云うたのであらう。「烏帽子折」＝烏帽子を造ること、又は造る者。雍州府志・卷七、土產門下・服器部、烏帽子の條に、「凡造二烏帽子一謂レ折、出レ自二風折烏帽子一之詞、而屈折之謂也」。

ゑぼしざくら　烏帽子櫻の片分けて、枝を諍ふ如くなり（持統天皇）

〔烏帽子櫻〕櫻の名。謠曲・烏帽子折に、「世變り時來り、折知る烏帽子櫻の花、咲かん頃を待ち給へ」。

***ゑま**　あれあの繪馬は澁谷の金王が長田の庄司をきめた體（兼好）

〔繪馬〕神社佛閣に奉納せる額をいふ。神前に繪馬を奉納するは神馬を奉納する略式である。されば馬の繪を奉るが本義であるのが轉じて、武者などの種種の繪を奉るやうになつたのである。日本書紀通證に、「神社率二神馬一懸二繪馬一者、神之所二愛翫一也」と見え、また建曆年中伊豆三島の神社に八幡太郎の陸奧合戰の繪馬があつたことが舊記に見えてゐるから、遠き昔より繪馬があつたのである。兼好法師物見車に、「田村丸鈴鹿鬼神退治の繪馬」とあるは、京都清水寺にある有名な繪馬で、明曆三年に海北道暉（友雪）の描いたものである。

ゑみやう　我はこれ人間の慧命を斷つ欲天のくわうやきなり（西王母）

〔慧命〕智惠は法身の壽命なれば慧命といふ。太平記・卷一に、「絕えなんとする慧命をつがんこと只此門主の御時なるべし」。資持記・下三之二に、「慧命謂二博聞强識一、以レ慧爲レ命也」。

ゑむしろ　それ女どもゑむしろ薄緣敷けやとて（西王母）

〔繪席〕雍州府志（貞享三年刊）七・土產門に、「繪席。倭俗彩席謂二繪席一、依レ有二雜品之文彩一也、元來レ自二長崎港一、今四條通幷三條畷大和橋北編レ之」。

ゑりくりゑんじよ　「えりくりえんじよ」を見よ。

***ゑをんほふし**　慧遠法師がその昔廬山に結ぶ交りは白き蓮の露の玉（隅田川）

〔慧遠法師〕晉時代・廬山東林寺の高僧である。幼にして學を好み、博く六經を綜べ、尤も老莊を善くす、二十一歳出家し、釋道安を師として大乘の奧旨に達す、太元中錫を廬山東林寺に杖く、遠の道譽を聞いて來り從ふ者多く、慧永・宗炳等と白蓮社を結び、無量壽佛の像前で淨業を修し、卜居三十餘年、足山を出でず、客を送るに虎溪を以て界と爲す、晉の義熙十二年歿、年八十三。

ゑんさう　鍬おつ取つてゑんさうなし（兼好）

〔圓相〕禪宗にて手、拂子、或は如意などをもつて空中または地上に圓圏を畫く法式で、心性の周偏平等なるを示し、本來の面目を顯はす意である。傳燈錄・五に、「師見二僧來一以レ手作二圓相一云云」。ここの文は、鍬を以て圓圏を畫いて引導の式をなしたのである。

ゑんしやうすけさだ　叶はぬ時はゑん正すけさだ、あつちへ遣るかこつちへ取るか首がけの博打（反魂香）

永昌・介定のことであらう。永昌は山城國の刀鍛工で、介定は永昌の弟子である。菊本賢保編・古今和漢萬寶全書、古今銘盡合類大全・山城國綾小路物系圖秘談の條に、「永昌―介定（永昌が弟子）」と見えてゐる。

ゑんせき　「えんせき」を見よ。

ゑんでん　綠のふきびん嬋娟として八字の細眉ゑんでんたり（天智天皇）

〔宛轉〕しとやかに美しい貌。白居易の長恨歌に、「六軍不レ發無二奈何一、宛轉蛾眉馬前死」。

ゑんてんかう　我古のゑんてんかうが人相の祕書を授かり、普く人間一生の吉凶禍福をさすに毫釐も違はず（唐船噺）

〔小忌袖〕小忌衣の袖の略。「をみごろも」を見よ。

をらん 忍ぶ戀路をせきだいの、女蘭男蘭は呂州の姿(生玉)

〔男蘭〕漢名建蘭といひ、蘭の一種。飯沼長順撰・草木圖說・前篇卷十八に、「ヲラン(建蘭)。此品幽姿淸韻衆草に卓絕し、眞に盆種の最上他に比すべきなし」。飯沼長順のこの評は以て呂州の姿に當て、更に湯女であつたさがに思ひ及ぼすとき、ここの文その意深長で感深きを覺える。「戀路をせきだい」は、戀路を塞(せ)きに石臺をいひかけたのである。(「せきだい」(石臺)はその條に述べたれど、花壇地錦抄(元祿八年刊)草木植作樣之卷、蘭の條に「先持樣はせきだい又は鉢に植る」と見え、長生花林抄(享保十八年刊)卷五、さし木の條に、挿木用の長方形木製箱の圖を載せて、「さしきせきたいの圖」と記してあるから、かやうな器物をも稱したものである。按じるに石臺は盆石を載せる臺の義であらう。轉じて植木鉢・植木箱をもいふ。

をり 左五郎をりを舁かせ登山し(三國志)

〔折〕折詰の略。饗應の飲食物を容れた折詰。

をりかけがき

〔折掛垣〕竹などを折曲げて作れる垣。「見じといふ人こそうけれ云云」を見よ。

***をりがみ** この差料五千兩の折紙あれば(加增曾我) 代物問へば三百貫の折紙(女腹切) 刀屋石見何某とて諸役御免の受領職、折紙太刀の御用まで(女腹切)

〔折紙〕黃金五枚以上の價値ある刀劍鑑定の證書で、橫に折つてあるによつて折紙といふ。現存せる折紙の最古いものは豐臣時代の本阿彌の折紙である。折紙の紙質は光溫(本阿彌十一代)時代までは區區で定まつてゐない。光常(本阿彌十二代)になつて厚い奉書の折紙を用ゐるやうに定まつた。折紙の書方に就いては若し正宗作の刀なる時は、「正宗正眞長さ何尺何寸何分磨上銘表裏樋有之代金子何百何拾枚」とありて、末の方に年號月日を記し、其下に「本阿」の二字の花押をなし、其花押の裏の方に豐太閤から拜領した[本]の形の銅印を黑肉で捺してある。雍州府志(貞享三年刊)七・土產門下(服器部)に、「相傳足利尊氏卿之時相州鎌倉有二妙本阿彌者一、專相二刀劍之新舊眞贋一井事二磨礪一、尊氏卿入洛日從レ後而來遂住二京師一、元松田氏也、然始妙本嫡流一人以二本阿彌一爲二稱號一、……凡擇二刀刄之新舊眞贋一、則嫡流本阿彌某宅聚二一族一相共撰二擇之一、定二眞贋一井莖(なかご)無二治工之名一、則擇二其所レ作之巧一、謂二何國誰某之所レ作也、倭俗是謂二目利(めきき)一、於レ茲本家嫡流一人出二折紙一、其法白紙橫折レ之、其中央書二鍛工誰某作而價幾何一也、其終貼レ印、凡價黃金五枚以上稱二折紙一、自二黃金一枚一至二四枚一、謂二之札物一、白紙細切レ之、其表記二誰氏作・代幾何一也」。

***をりは** 暑くろしとて駕籠をはや、をりはの乞目(こひめ)さぶ六の十八九なるかほよ花(曾根崎)

〔折羽〕雙六の類、十二箇づつの駒を用ひ、二箇の采を竹筒に入れて振つて出たる采の目ほどの敵を取合ひ、駒が盤面に無くなつた時その駒を計算して、敵を多く取つた者を勝とする。嬉遊笑覽・卷四に、「今をりはといへるものは、攝壤集に雙六下貽重𠸤、又尺素往來に圍碁將碁下貽、この下貽といへるものなるべし」と見えてゐる。「こひめ」は、雙六にてこの目出でよとの乞目に戀目をいひかけ、雙六の目數三・六に年齡十八をいひかけて文飾としたのである。

をりはふ 交野の御野の櫻狩、今日の紅葉とをりはへて月卿雲客供奉せしめ(蟬丸) 花にをりはへ行く雁も、此處の景色を忘れかた田におちかへり(艶狩)

折延の義。時の引續くをいふ。古今集・夏の部の歌に、「あしびきの山時鳥をりはへて、たれかまさると音(ね)をのみぞ鳴く」。但し巢林子は「ふりはへ」を「をりはへ」に誤つたのであらう。「ふりはへ」はわざわざ、または殊更の意にいふ。

***をりめ** 卷舌の諸禮、折目正しき正月言葉(雪女)

〔折目〕物を折つたきはをいひ、轉じて言語動作、行儀作法。

をりゐのどう 我らがこの鼓を調べしに、御存知の折居の胴打つて見れは、ぼとぼとと桶の底叩く樣なり(酒呑童子)

〔折居胴〕鼓作りの名工折居作の胴。雍州府志、土產門下・服器部に、「大小鼓筒多以二櫻木一造レ之、……、古於二和州多武峯一有下造レ之者上、則稱二談峯一、又折居者稱二傑作一也、爾後代々以二折居一稱レ之、其祖先所レ造謂二古折居一、又一代巧手、老後爲レ聾、此人所レ作謂二盲折居一、近世彌助筒是又爲レ良」。鼓筒の名工折居の系統などは鼓筒之鑑定(大正六年刊)に詳說してある。

をんあぶらとろり

「おんあぶらとろり」を見よ。

をんぞろ 「おんぞろ」を見よ。

をんでもない 「おんでもない」を見よ。

をんと 亭主に連れて立廻る、女郎も田舍はをんとなり(博多)

「をんたう」(穩當)の約訛。人の性の溫順なるをいふ。律義一遍。役者色系圖(正德四年刊)大阪之卷、男色と女色と兩替の評判の條に、「愚堅な大盡を廻(まは)するの自由なるより一座も我がものとなれば」とあつて、愚堅に「をんとう」と傍訓してある。

をんをのり云々

「おんをのり云々」を見よ。

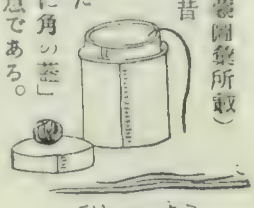
(終)

をこの者(日本武尊)

痴。愚。ばか。後漢の頃南蠻に烏滸といふ國があつて、その風俗に理非を顚倒して笑ふべきことが多かつたので、その語暗合して後には混淆したのだといふ。日本武尊吾妻鑑のここにいへる「をこ」は非凡の意にいうたのである。「をこ」を尾籠と書き、これを音讀して「びろう」ともいふ。

＊をごけ 圓いをごけに角の蓋(大經師) 片手の袖の下をごけの懸子、底意には心をひねりその(丹波與作)

〔麻小笥〕績麻(女用訓蒙圖彙所載)を容れる檜のわげもの。昔は麻を績むを女藝の一に數へたれば、麻小笥がかかる所にも云はれたのである。「圓い麻小笥に角の蓋」は圓鑿方枘相容れざる意である。



〔をごけ〕

＊をさあい 愚筆を染め散したをさあい方への御慰に差上げ(伊豆日記)

「をさない」(幼)の子音の脱落した訛で、「なんだ」を「あんだ」(その條を見よ)といふの類である。義經記(寛永十二年刊)卷一、義朝都落の條に、「成人の子どもをば引具して、おさあいをば都にすてて落ちられける」。巴太鼓(淨瑠璃・加賀掾正本)第二に、「聞きわけもなきをさあいに向ひ、御身は信濃の國の住人木曾左馬頭義仲とて朝日將軍の御子ぞや」。

をさむるて 「さすかひな云云」を見よ。

をさめすぎる 夜中にけはしい何の用でござると言へば、何の用とはをさめ過ぎた(大經師)

「をさまりすぎる」(治過)の意にいふ。落着過ぎる。

＊をし 女房先立てながらへあらばそれや犬猫も同じ事、同じ中にも鹿となり鴛鴦と生れて女夫池(二枚繪)

〔鴛鴦〕鳥類の中でも鴛鴦は女夫最も睦じきものとされてゐる。遊仙窟鈔の註に、「崔豹古今注曰、鴛鴦水鳥類也、雌雄未嘗相離、人得其一則其一思而死、故謂之疋鳥。陳云、鴛鴦者不相離之鳥、雄曰鴛、雌曰鴦」。

をしごと 「おしごと」を見よ。

をしやんな 誰に習うてはでな歌、姫様などにをしやんな必ずおいてもらはう(丹波與作)

「敎へやるな」の訛。

をたけび 「そびらにはちのり云云」を見よ。

をだまき 女姿と三輪の神、そのをだまきを繰返し(三世相)

〔苧環〕績麻を中空に外圓く卷いたもの。「女姿と三輪の神」を見よ。

をだやむ 五月雨の一しきりをだやみて、空さりげなく霽々と、北斗の光鮮かに晴れ渡れば(會稽山)

「をやむ」(小止)に「だ」の增加した訛語であつて、「あめ牛」を「あめだ牛」(その條を見よ)といふの類である。止む。(ここの文に「をだゆみ」とした本もあれど、「をだやみ」が正しい)。武家義理物語卷六、表向は夫婦の中垣の條に、「神鳴も落ち方しれずをさまり、雨もをだやみて」。「五月雨の一しきり云々」をも見よ。

をだれ をだれより這上つて拔討に丁ど斬る(堀川波鼓)

〔尾垂〕屋根廂をいふ。現今も關西地方で一般に用ゐてゐる。巣林子のこの文意は、屋根廂から二階に這上つたのである。

＊をづつ 虎……四足を縮め怖れ戰き岩洞に隱れ入る、尾筒を掴んで跳返し(國性爺) 尾筒を取つて引戻し(百日曾我)

〔尾筒〕尾の根が筒の樣に圓く膨れた處の稱。

＊をとこ たまたま持つたる子供さへ香花とるべき者もなく、おことをとこにしたるさへ如何ばかり悔しきに(大磯虎)

〔男〕元服することを男になるといふ。

をとどしの大地震 「おとどし」の條を見よ。

をどもり 「おどもり」を見よ。

をどる 我等が僅の商の元手も利食の月をどる、泥鰌汁のしゆらい代とりきる間はどこまでも(二枚繪) 借錢の利を一月に二月をどる松坂越えて(丹波與作)

〔跳〕二倍の利息を取られるをいふ。「一月に二月をどる」とは一月に二月分の利を取られるをいひ、「二ケ月に一度づつをどる」とは二ケ月毎に三ケ月分の利を取られるをいふ。世間娘氣質(享保元年刊)卷之一、百の錢よみかぬる歌ずきの娘の條に、「元此銀は百五十匁にて、四割半の利息を五節句に一度づつをどり、七年このかたになつたと申され」。心中二枚繪草紙のここの文の「をどる」は、泥鰌汁を踊子汁ともいへば、それをいひかけて「をどる泥鰌汁」といひつづけたのである。狂歌浪速の梅に、「酒に田樂・串肴・すつぽんの吸物或は踊子汁うまうまと食ひ」。丹波與作のここの文は、伊勢音頭の踊唄の「松坂越え」の文句を「をどる」の緣よりいひつづけたのである。

＊をなみ 波の雄波をかきわけ(薩摩歌)

〔雄波〕「めなみ」(雌波)の對。波濤の高くなれる方を雄波といひ、低くくぼめる方を女波といふ。

をばなうつぼ 明暮殺生を樂しみ、尾花靫に弓取添へ今日も狩場へ出でにける(鎌丸)

〔尾花靫〕箙形の靫はその形尾花に似たればいふ。

をひのとの やい女房ども、甥のとのにかかつてこの甚五郎が身代破滅(女腹切) やい甥のとの姉者人、最前に來て内證言ふは一門だけの贔屓分、最早手詰になつて來た(持統天皇)

〔甥之殿〕甥に殿を附けて甥の殿と敬つて呼ぶは輕蔑を意味し、甥の奴といふべきを反語的にいふ詞。

＊をみごろも 邪神を祈る小忌衣(賀古教信)

「をいみごろも」(小忌衣)の略。大嘗會・新嘗會などに行ふ潔齋、小忌の際に着る衣である。祭事の時に裝束又は袍の上に着る。白布青摺で形狩衣に似、右肩に二筋の赤の打紐を附け、兩袖の中央に紙捻を垂れる。紋樣は青摺で春草又は小鳥を山藍もて摺り、祭官・樂人などの着る服である。

をみなめし 忽に柑子は蒸せる粟の餅、鼠も所の男山をみなめしとぞなりにける(弘徽殿)

御菜飯に女郎花をいひかけたのである。「鼠も所の男山云云」を見よ。

＊をみのそで 神樂乙女のをみの袖、白木綿かけし唐櫃に(日本武尊)

附録

附録

典據目錄

此の部は巣林子作中(義太夫本)の文句に就き、其の典據を考證し、次の類別に從つて收錄したものである。同じ文句が古今集にも謠曲にも流行唄にもあるといふ類のものは、その何れかに收錄し、また隨時語釋地名等の部にもその文句の出典を記して置いた。

謠曲に據れるもの

巣林子の浄瑠璃文中に註記してある、クドキ、次第、シテ、ワキ、ツレ、ウタヒなどは何れも謠曲から出て、浄瑠璃に應用されたもので、これ等は語釋部に就いて見よ。

【阿　漕】

物の名も所によりてかはる　伊勢の濱荻・難波の蘆、よしといふも同じ草か、…げにやものの名も所によりてかはるよなう（佐佐木）

阿漕に、「物の名も所によりてかはりけり、難波の蘆の浦風も、ここに伊勢の濱荻の音をかへて聞き給へ」と見えてゐる、これらに據つたのである。「はまをぎ」はその條を見よ。

【蘆　刈】

雨に着る田蓑の島　あめに着る田蓑の島の寡鶴（生玉）雨に着る田蓑の島もあるなれば、露もますげの笠はなどかなからん、難波津の春なれや、名に負ふ梅の花笠、縫ふてふ鳥の翼には、鵲もあり有明の、月のかさに袖さすは、天つ少女のきぬ笠、それは少女、これはまた難波女の、難波女の、かづく袖笠ひぢ笠の、あめのあしべも亂るるかたを波、あなたへざらり、こなたへざらり、ざらりざらりざらざらざと、風のあげたる古簾、つれづれもなく心おもしろ（佐佐木）

雨に着る蓑を、田蓑の島にかけたのである。田蓑島は攝津國西成郡にある。なほここの文についていへば、雨に著る田蓑の島の名もあれば、笠もあるであらう。露も增すに眞菅の笠をかけ、鶯の木傳ひあるくを縫ふといふより、笠も縫ふものなれば、梅の花笠縫ふてふ鳥の翼とつづけ、鶯よりして鵲もありというて、鵲に笠をきかせ、鵲もありから有明の同音語をつづけた。月のかさは月の暈である。かづく袖笠とは、俄雨の時に袖を翳すこと。肱笠とは肱を頭上に翳すにて、雨を凌ぐ時などにすること。雨の脚に蘆邊をかけ、蘆は風に亂れるより、亂るるかたを波とつづけた。「かたを波」はその條を見よ。あなたへざらり云云は、蘆の浪風に打たれて亂れる樣をいふ。つれづれもなく心面白とは、蘆刈の身は笠と波とを友として、物淋しいこともなく面白いとの意。蘆刈に、「雨に着る田蓑の島もあるなれば、露もますげの笠はなどかなからん、難波津の春なれや、名に負ふ梅の花笠、縫ふてふ鳥の翼には、鵲も有明の、月のかさに袖さすは天つ少女の絹笠、それは少女、これはまた難波女の、難波女の、かづく袖笠ひぢ笠の、雨のあし邊も亂るるかたを波、あなたへざらりこなたへざらり、ざらりざらりざらざらざつと、風のあげたる古簾、つれづれもなき心面白や」。生玉心中のここの文は、嘉平次が愛人さがと別れて、一人しよんぼりと雨中に桐油を拾うて着る狀をいうたのである。

われはまた賤の男が賤の男が、かづく袖笠肱笠の、雨に木の葉も亂るる初時雨、あなたへ走り此方へ走りざらりざらりざらざらざつと（蟬丸）

「肱笠」とは、肱を頭に上げて笠とすること。「袖笠」はその條を見よ。蘆刈に、「是はまた難波女の、かづく袖笠ひぢ笠の、雨のあしべも亂るるかたを波、あなたへざらり此方へざらりざらりざらりざらざらざつと」とあるに據つたのである。

【安　宅】

安宅の關守欺きし　文治の昔武藏坊辨慶が、安宅の關守欺きし例を引くや梓弓（國性爺）

安宅は加賀國能美郡にあつて、當時の關址は今は海中に陷つてゐるといふ。義經等主從十二人修驗者に粉粧して奧州に下る途中、安宅の關で關守富樫に疑はれ、關の通過を拒まれたので、辨慶乃ち勸進帳と稱して白紙を取出し、天にも響けと讀上げ、關守を欺いて無事に通過したことは、謠曲・安宅にも見えてゐる。

***きみやう　歸命稽首敬つて白す**（凱陣八島）

〔歸命〕梵語・南無（Namas）の譯。佛の命令に歸順し、信順の極をあらはす語。このあたりの文は安宅に據つたのである。

ごちのほうくわん　挿櫛といつぱ五智の寶冠なり（兒が淵）

〔五智の寶冠〕黃色五角の寶冠をいふ。五智とは法界體性智・大圓鏡智・妙觀察智・平等性智・成所作智であつて、大日如來の成就し給へる心相である。これを寶冠の五角に當てたのである。ここの文は安宅に、「頭巾といつぱ五智の寶冠なり」とあるを作りかへたのである。

これなる山水の落ちて巖にかかることそ、鳴るは瀧の水（孫静）

安宅に、「これなる山水の落ちて巖に響くこそ、鳴るは瀧の水」。謠曲拾葉抄に、「當世酒宴に三國一ぢやといふが如く、昔は酒宴每に鳴るは瀧の水をうたひし也」。「鳴るは瀧の水」をも見よ。

***園生に植ゑても紅**　宗淸手を拍ち、流石なる御園生に植ゑても紅の、

(備考)以上は集林子の據つた書に就いて選んだので、一般の出典とは別である。
また集林子の一戲曲に於ける構想作文が、平家物語・御伽草紙・古淨瑠璃等の換骨奪胎で、殆んど全般に亘れるものは、列擧するにも及ぶまいと思うて省略したのもある。

ろ。羅刹の住する國を羅刹國といふ。嫗山姥のこのあたりの文は安達原にもとづいたものである。

【敦　盛】

淡路潟通ふ千鳥の聲聞けば、寐覺も須磨の關守は誰そ、いかに蓮生、敦盛こそ待受けて候へ（大原問答）

敦盛に、「淡路潟かよふ千鳥の聲きけば、寐覺も須磨の關守は誰そ、いかに蓮生、敦盛こそ參りて候へ」。

一念彌陀佛卽滅無量罪（賀古敎信）

一念彌陀佛卽滅無量の罪障を晴さん稱名の、法事を絶えせず弔ふ功力に（大原問答）

心意を散亂せずして一念に阿彌陀佛を念誦する時は、如何に許多の罪障も忽ち消滅す。寶王論に、「一念彌陀佛、卽滅二無量罪一矣」。觀經に、「稱二佛名一故、於二念念中一、除二八十億劫生死之罪一矣」。敦盛に、「一念彌陀佛、卽滅無量の罪障を晴さん稱名の、法事を絶えせず弔ふ功力に」。

*しようみやう　一念彌陀佛・卽滅無量の罪障を晴さん稱名の、法事を絶えせず弔ふ功力に（大原問答）

〔稱名〕南無阿彌陀佛の名號を稱すること。敦盛に、「うたてやな一念彌陀佛・卽滅無量の罪障を晴さん稱名の、法事を絶えせず弔ふ功力に、何の因果はあり磯海の」。

詮方なみに駒を控へ呆れ果ててぞおはしける、かかりける所に後より熊谷の次郎直實遁さじと追駈けたり、敦盛も馬引返して、波の打物抜いて二打三打は打つぞと見えしが、馬の上にて引組んで波打際に落ち重なり（大原問答）

敦盛に、「詮方なみに駒を控へ呆れ果てたる有樣なり、かかりける所に後より熊谷の次郎直實遁さじと追駈けたり、敦盛も馬引返し、波の打物拔いて二打三打は打つぞと見えしが、馬の上にて引組んで波打際に落ち重なつて終に討たれて失せし身の」。

【葵　上】

昨日の花は今日の夢、身に驚かぬ恨めしやな、世の憂さに人の辛さのなほ添ひて、浮かみもやらぬ妄執の（弘徽殿）

葵上に、「昨日の花は今日の夢と、驚かぬこそ愚なれ、身の憂きに人の恨みのなほ添ひて、忘れもやらぬ我が思ひ」。

くしきのまど　西坂本の別業に、九識の窓の前、十乘の床のほとり、瑜伽の法水をたたへて、三密の月はさせども（天神記）

〔九識の窓〕華嚴宗・天台宗などでは九識を立つ、卽ち眼・耳・鼻・舌・身・意の六識と、末那（譯して思量）・阿頼耶（譯して藏と云ひ、六識の根本である）・菴摩羅（眞また淸淨と譯し、眞如の理體に名づく）の三識とを加へていふ。「九識の窓」とは、靜坐して九識を修行觀法する深窓をいふ。葵上に、「九識の窓の前、十乘の床のほとりに、瑜伽の法水をたたへ、三密の月を澄す所に」。

さんみつ　九識の窓の前・十乘の床のほとり、瑜伽の法水をたたへて三密の月は指せども、軒の戶を敲くべき人も覺えぬに（天神記）　汝が家の眞言祕密、三密ゆがの阿字金胎も別經三部の外を出でず（本領曾我）

〔三密〕如來の身密・口密・意密の三種作用を云ふ。密は祕密の密の義である。如來は神通を現じまたは法を說き或は思惟されても。佛の間に見知されるのみであつて、因人の思議することができないによつて三密と云ふ。「三密の月」は、眞言三密の行法の妙なのを月に喩へて云つたのである。葵上に、「九識の窓の前、十乘の床のほとりに瑜伽の法水をたたへ、三密の月を澄す所に」。「三密瑜伽」の瑜伽は梵語（Yoga）であろ、相應と譯す。行者の三密が如來の三密と相應じて、卽身成佛の義を成ずるを云ふので、眞言密敎のいふ所である。

*しやばでんくわうのさかひ　娑婆でんくわうの境には戀も無常もなかりけり（三世相）　夫れ娑婆電光の境には恨むべき人もなく悲しむべき身にもあらざるに（女夫池）

〔娑婆電光境〕現世は假の住居であつて、軈て逝かねばならぬ境界なるが故に云ふ。葵上に、「夫れ娑婆電光の境には恨むべき人もなく悲しむべき身にもあらざるに、いつ扨うかれそめつらん」で

天清淨地清淨、內外清淨、六根清淨（卯月紅葉）

葵上にも、「天清淨地清淨、內外清淨、六根清淨、より人は今ぞ寄りくる云々」、とありて神子の唱へる文である。

ゆがのほふすゐ　九識の窗の前、十乘の床のほとり、瑜伽の法水をたたへて、三密の月はさせども軒の戶を叩くべき人も覺えぬに（天神記）

〔瑜伽法水〕瑜伽は梵語（Yoga）である、譯して相應といふ。普通に眞言三密の觀行を瑜伽といふ。この觀行の法力は微妙にして、卽身成佛の利益・衆生一切の願望を滿足せしめるが故に、水の萬物を潤すに喩へて瑜伽の法水といふ。ここの文は葵上に、「九識の窓の前、十乘の床のほとりに瑜伽の法水をたたへ三密の月を澄す所に」とあるに據つたのである。

【海　士】

鎌足の大臣玉を取る思案ばつかり（大經師）

唐土から贈れる珠玉を讚州志度の浦にて龍宮へ奪ひ去られた、鎌足これを取戾さうとしてその浦に下り、卑しき海女と契り、その海女を龍宮に遣つた、海女乃ち利劍を以て龍宮に飛入り、珠玉を取戾したこと、海士や巢林子作の大織冠に詳しい。

擧動、全く君を討ち奉る心ならず(烏帽子折)

園生に植ゑても紅の、色にもそれとしろしめせ(袍狩)

紅は「べにの花」を云ふ。人に勝れたものは必ず世に顯はれるとの喩。安宅に、「げにや紅は園生に植ゑても隱れなし、強力にはよも目を懸けじ」。

それうかうか大もん日して、大恩讓りの古金の月は、……當來にてはいとし御見の床に入らん、歸命傾城敬つて白す(虎が磨)

安宅の勸進帳の文を作りかへたのである。「それつらつらおもんみれば」を見よ。

それつらつら惟ん見れば 夫つらつらおもんみれば、大盡客衆の秋の月は小判の雲に光り、小傳呼びましや長返辭、驚かすべき夜半もなし(淀鯉)それつらつらおもんみれば、……歸命稽首敬つて白す(國性爺)

ここの文は安宅の勸進帳を作りかへたのである。安宅の勸進帳の文に、「それつらつら惟ん見れば、大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隱れ、生死長夜の長き夢驚かすべき人もなし、爰に中頃帝おはします、御名をば聖武皇帝と名付け奉り、最愛の夫人に別れ戀慕やみ難く、涕泣眼に荒く涙玉を貫く、思を善途に翻して盧舍那佛を建立す、かほどの靈場の絶えなんことを悲しみて、俊乘坊重源諸國を勸進す、一紙半錢の奉財の輩は此世にては無比の樂にほこり、當來にては數千蓮華の上に坐せん、歸命稽首敬つて白す」。

大恩教主 大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隱れ(凱陣八島)

釋尊を云ふ。一切衆生が煩惱を斷絕して生死の境を出離されるのは釋尊教化の賜である、故に釋尊を大恩教主と云ふ。このあたりの文は安宅の勸進帳に據つたのである。「それつらつらおもんみれば」の條を見よ。

旅の衣は篠懸の、露けき袖やしぼるらん(殘靜)

篠懸(その條を見よ)の袖には露(袖括りの緒の垂れた端の稱)と云ふもの附いてゐるから、その露に雨露の露をいひかけて、「露けき袖やしぼるらん」とつづけたのである。安宅に、「旅の衣は篠懸の、露けき袖やしぼるらん」。殘靜胎內捃のこのあたりの文に、伊勢の三郎義盛、駿河の次郎淸重、片岡八郎經春などの名あるは、皆謠曲・安宅に出てゐる人物である。

とうとうと鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずとうとう面白や(源義經)

「とうとう」は擧擧で、水音の鼓の音のやうに鳴るを形容した語である。安宅に、「鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずとうたり、絶えずとうたりとくとく立てや」、とありて往時酒宴の席で謠うた歌である。「鳴るは瀧の水」をも見よ。

毒蛇の口、虎の尾を踏む (井筒)

心に危懼を抱くをいふ。危險を冒すに喩ふ。安宅に、「虎の尾を踏み、毒蛇の口をのがれたる心地して」。「虎の尾を踏む」をも見よ。

りんきやうのはうじが末葉諸國を勸進す(國性爺)

「りんきやう」は臨邛で、蜀の臨邛郡をいふ。「はうじ」は方士で、仙術を得た道士をいひ、白居易の長恨歌に「臨邛道士鴻都客」とあつて、鴻都の仙客楊通幽のことである。楊貴妃死んで玄宗皇帝悲しみのあまり、臨邛の方士楊通幽をして貴妃の魂の所在を尋ねさせた、方士乃ち太眞殿と額を打つてある處に行つて貴妃に逢うたといふ。巢林子のこの所の文の「それつらつらおもんみれば、轗軻逆徒の秋の月は、…………、天も響けと讀み上げたり」までは、安宅の勸進帳の文をもぢつたものであつて、ここにいへる文も、勸進帳の文に「俊乘坊澄源諸國を勸進す」とあるを改作したのである。

***るしやなぶつ** 思ひを善路に飜して盧舍那佛を建立す(凱陣八島)

〔盧舍那佛〕盧舍那は梵語毘盧舍那(Vairocana)の略、光明照の義。華嚴宗・天台宗では釋迦牟尼佛の內證たる靈體佛の特稱となし、眞言宗では大日如來の梵名としてゐる。凱陣八島のここの文は安宅に見えてゐる。

遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に責められ埋る御身の果(殘靜)

雲東南に起つて西北に行けば天氣不順となる。東南は吉野落、西北は北國落をいうたもので、義經の身置所なく諸國を流浪することをいうたのである。安宅に、「讒臣は彌増に世にありて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に責められ埋る憂き身をことわり給ふべきなるに」。

***わうらい** 元來勸進帳あらばこそ、往來の卷物取出し勸進帳と名づけ(凱陣八島)

〔往來〕手紙の送答文を書集めたものをいふ、庭訓往來などは人のよく知る所である。安宅に、「笈の中より往來の卷物一卷とりいだし勸進帳と名づけつつ」。

【安達原】

東方に降三世、南方に軍荼利夜叉、西方に大威德、北方に金剛夜叉、中央に大日大聖不動明王(凱陣八島)

五大明王を勸請して祈禱する詞である。降三世、軍荼利夜叉、大威德、金剛夜叉、大日大聖不動の五明王を五大尊と稱す、五大尊の修法には五壇を設け、東壇に降三世明王、南壇に軍荼利夜叉明王、西壇に大威德明王、北壇に金剛夜叉明王、中央壇に大日大聖不動明王を勸請して祈るのである。安達原に、「東方に降三世明王、南方に軍荼利夜叉明王、西方に大威德明王、北方に金剛夜叉明王、中央に大日大聖不動明王、唵呼嚕呼嚕旋茶利摩登枳云云」。巢林子作・一心五戒魂に、「東方に降魔の劍、西方に大音上げおめいてかかれば、南方は眞下りに遁げて行く、北方金剛力を出し、中央大日不動の利劍振立て」、とあるは五大尊を祈る詞を作りかへたのである。

***らせつ** 知らず我羅刹國に來れるかと、身の毛よだつばかりなり(嫗山姥)

〔羅刹〕梵語(Raksasa)である。食人鬼または速疾鬼と譯す、毘沙門に奉仕する惡魔であ

や（用明天皇）
遁れ難いに交野をいひかけたのである。交野は河内國交野郡（今は北河内郡に入る）で、續日本紀に「桓武天皇延暦二年行二幸交野一、放二鷹遊獵一」とありて、往時の狩獵地である。猛火の羽風追立て引立て行かうとするによつて空恐しやといふたのである。善知鳥に、「遁れかた野の狩場の吹雪に空恐しや地を走る」。

【采　女】

猿澤の池の面に水滔滔として波また悠悠たりとかや（天智天皇）
猿澤の池は地名部を見よ。采女に、「猿澤の池の面に水滔滔として波また悠悠たりとかや」。

花開け香殘りで佛法流布の神の山、菩提樹の木蔭とは、藤の鳥居に藤咲きて松にも花をかすが山、長閑けき影は靈山の淨土の春に劣らめや（天智天皇）
采女に、「花開け香殘りて佛法流布の種久し、昔は靈鷲山にして妙法華經を說き給ふ、今は衆生を度せんとて大明神と顯はれ此山に住み給へば、鷲の高嶺とも三笠の山を御覽ぜよ、扨菩提樹の木蔭とも、盛なる藤咲きて松にも花をかすが山、長閑けき影は靈山の淨土の春に劣らめや」とあるに據つたのである。

【梅　枝】

捨ててもめぐる世の中は、心の隔てなりけり（女夫池）
世捨て人となつたれど、なほ廻國修行するは、全く出離し難くて自他の隔てあるからであるわいの意。梅枝に、「捨ててもめぐる世の中は、心の隔てなりけり」。

【浦　島】

あけて悔しき玉手箱（松風）
浦島に、「身に白露の玉手箱、明けて悔しき心かな」。

【江　口】

歌へや歌へ泡沫の（歌念佛）
江口に「歌へや歌へうたかたの、あはれ昔の戀しさを」。棠林子かく謠曲の文を引用して、直ちに「小舟作りてお夏を乗せて云々」と、小唄の調子に碎け、いつもながら變化の妙を極めてゐる。

面白や實相無漏の硯の海に、五塵六欲の涙はたたねども、隨緣眞如の筆を染めぬ日はなし（賀古敎信）
「實相無漏」「五塵六欲」「隨緣眞如」はその條を見よ。江口に、「面白や實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、隨緣眞如の波の立たぬ日もなし」。

河舟をとめて逢ふ瀨の波枕（賀古敎信）
江口に出てゐる文である。逢ふことを逢瀨といへば、それを河の瀨にいひかけたのである。波枕は舟中に寐ること。

紅花の春の朝、紅錦繡の山、粧ひなすと見えしも夕の風に誘はれ、紅葉の秋の夕、黃纐纈の林、色を含むといへども朝の霜に衰ふ、松風蘿月に言葉をかはす賓客も去つて來ることなし、翠帳紅閨に枕を並べし妹背も、いつの間にかは隔つらん（賀古敎信）
この文は江口に出てゐる。但し「朝の霜に衰ふ」は「朝の霜にうつろふ」となつてゐる。春の頃紅花咲き亂れ、山紅錦繡の如く見えるが、それもやがて風に散つて美しかつた風景跡もなく、秋の頃樹林黃葉し恰も黃色のしぼり染したやうに見えれども、やがて霜の爲に衰へて落ちる、人間の盛衰も亦斯の如きである。松吹く風・葛蘿を照す月の景色に誘はれて、訪ひ來る客もただ一時であつて終には來ない、翠の帳・紅の閨に枕を並べて妹脊を契るといへども、それとても一時のことであつて、何時の間にか互に隔り終るとの意。

***ごぢんろくよく**　實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども（松風）　實相無漏の硯の海に、五塵六欲の涙は立たれども（賀古敎信）
〔五塵六欲〕色・聲・香・味・觸の五つのものは人の心を汚染すること、恰も塵の如くなるが故に五塵といふ。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根より起る欲情を六欲といふ。五塵六欲の熾盛なのを風に喩へて、五塵六欲の風と云ふ。江口に、「實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども」。

***さんづ**　三途八難の惡趣に墮す（反魂香）
〔三途〕地獄・畜生・餓鬼の三惡道を云ふ、これをまた三惡趣ともいふ。江口に、「三途八難の惡趣に墮して」。

***ずゐえんしんによ**　面白や實相無漏の硯の海に、五塵六欲の涙は立たれども、隨緣眞如の筆を染めぬ日はなし（賀古敎信）　前に法性無漏の海、隨緣眞如の波は打つとも騷がば騷げ（聖德太子）　隨緣眞如の初潮（百日曾我）
〔隨緣眞如〕眞如は萬有の本體で眞實如常のものなれども、諸緣に隨應して一切の相を變現するによつて隨緣眞如と云ふ。眞如が諸緣に隨應して差別の相を變現するを、彼方此方に形を變へ每日文を書くことに喩へて隨緣眞如の筆と云ひ、初潮が千波萬波をあげるに喩へて隨緣眞如の初潮と云ひ、海の波立つに喩へて隨緣眞如の波といふたのである。江口に、「面白や實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、隨緣眞如の波の立たぬ日もなし」。

***らげつ**　松風蘿月に詞を交す賓客も去つて來ることなし（賀古敎信）
〔蘿月〕つたかづらに照る月。ここの文は江口にある文を引用したのである。「紅花の春の朝云々」を見よ。李白の贈二嵩山焦鍊師一詩に、「蘿月挂二朝鏡一、松風鳴二夜弦一」。

***ろくぢん**　生死の廓に生れ來て、六塵の境に迷ひ六根の罪を作ることも（賀古敎信）　六塵の樂欲多しといへどもただこの惑ぞやめ難き（兼好）

その外おさん鰐の口（大經師）

海士に、「その外悲魚鰐の口」の作り替。

南無や志度寺の觀音薩埵の力を合せてたび給へと、大悲の利劒婆婆の緣（大織冠）

海士に、「南無や志度寺の觀音薩埵の力を合せてたび給へとて、大悲の利劒を額にあて」、と見えてゐる。なほこのあたりの文は海士に據つたものである。「女房故に捨てん命云々」を見よ。また「志度寺」「大悲の利劒」はその條を見よ。

女房故に捨てん命露ほども惜しからずと、……、約束の錢緡動かせば、てらをよみ立て繋がれたりけり、餘の玉は知らず（大織冠）

海士に、「我が子故に捨てん命露ほども惜しからじと、………、約束の繩を動かせば、人々よろこび引きあげたりけり、玉は知らず」、とあるを改作したもので、謠曲では玉の段と稱する所である。

一つの利劒を拔き持つて彼の海底に飛入るぞ（大經師）

海士に、「一つの利劒を拔き持つて彼の海底に飛入れば」とあるに據つたもので、利劒に男根をきかせ、海底に女の閨房をきかせたのである。男根を利劒にいひなした例は西澤與志撰の新色五卷書（元祿十一年刊）にも見えてゐる。

【藍　染　川】

神は二階へあがらせ給へ（鮭合戰）

揚屋の亭主が遊女更科らに二階に上られよといふに、藍染川に「唯これ當社の神恩ぞと、よろこびの祝詞を奉れば、神はあがらせ給ひけり」、とあるを應用して洒落たのである。

【一角仙人】

瓶には谷漣一滴の水を納め、鼎には靑山數片の雲を煎ず、曲終へて人見えず、靑かりし梢も今は紅の、秋の氣色は面白や（浦島）

瓶には谷水の點滴を汲入れ、酒に代へてこれを飲み、鼎には靑山に懸れる白雲を入れ、これを煎じて湯に用ふ。琴など歌曲を彈じ終へても、山中寂寞として語る友もない。何時か靑山は紅葉と變つて、秋の風景あはれに面白いわいとの意で、仙家の樣を敍したのである。一角仙人に、「瓶には谷漣一滴の水を納め、鼎には靑山數片の雲を煎ず、曲終へて人見えず、江上數峯靑かりし梢も今は紅の、秋の氣色は面白や」。（山本九兵衞版・七行本に、「雲を直す曲を得て」とあるは「雲を煎ず曲終へて」の誤）。

【鵜　飼】

玉島川にあらねども　玉島川にあらねども、小鮎すなどる如くなり（源義經）　玉島川にあらねども、小鮎さばしるせぜらぎにかだみて魚はよもためじ（大磯虎）

肥前の國の玉島川は古來鮎の名所である。昔神功皇后この川で鮎を釣り給ひ、また其國人も鮎を釣ると云ふ。貝原好古撰・八幡宮本紀に、「この玉島川の年魚は他所の年魚にかはり、脂多く吻黃にして味甚美也」と見えてゐる。鵜飼に、「玉島川にあらねども、小鮎さばしるせぜらぎに、かだみて魚はよもためじ」。「せぜらき」「かだむ」はその條な見よ。

傳へ聞く、遊子伯陽は月に誓つて契をこめ、二つ夫婦の星となり（川中島）

昔夫婦の者あつて夫を遊子といひ、妻を伯陽というたが、死して夫婦の二星となつたことと鵜鷺記に見えてゐる。鵜飼に、「傳へ聞く、遊子伯陽は月に誓つて契をなし、夫婦二つの星となる」。

【善　知　鳥】

銅の爪をとぎ立て鐵の齒を鳴らし　其時靑き鬼角を怒らし、銅の爪をとぎ立て、鐵の齒を鳴らし（大原問答）

善知鳥に、「鐵の嘴を鳴し羽をたたき、銅の爪を磨立てては」。

うたふ聲にも血の淚、子はやすかたの囀りや（夕霧）

伊左衞門、源之介を連れて間の山の唱歌を唄はうとして、千萬無量の淚に暮れるその情を、謠曲・善知鳥の文句を取つて書いたのである。善知鳥に、「平砂に子を生みて落雁の、はかなや親は隱すとすれど、うとふと呼ばれ子はやすかたと答へけり、扨ぞ取られやすかた、うとふ、親は空にて血の淚を降らせば云々」。新撰歌枕に、「そとの濱といふ所にうたふやすかたと云ふ鳥の侍るが、此濱の砂子の中にかくして子を生みおけるを、獵師母のうたふがまねをしてうとふうとふと呼べば、やすかたとて這出づるを取るぞと申す、其時母鳥來りて彼方此方へ付きありき鳴くなり、其淚の血の濃き紅なるが雨の如く降るなり云々」。善知鳥は烏頭とも書く、鷗に似た水鳥で、淡黑色で腹白く、嘴長く、津輕海邊に棲んでゐる海鳥である。

***うとふやすかた**　道さへ知らず連もなく、あら心うとふやすかたと鳴く鳥を見よ（源義經）　年ばへも磯部のうとふやすかたの子を後見て身を捨てず（最明寺殿）

〔善知鳥安方〕善知鳥といふ鳥は、その親鳥がうとふと鳴けばその子鳥はやすかたと鳴くといふ。「うたふ聲にも血の淚云々」を見よ。善知鳥に、「あら心うとふやすかた、安き隙なき身の苦しみを」。

鹿を追ふ獵師は山を見ず（氷朔日）

情に驅られて道理を忘れる喩。善知鳥に、「鹿を追ふ獵師は山を見ず」。

士農工商の家にも生れず、又は琴碁書畫を事とする身にもあらず（三世相）

善知鳥に、「士農工商の家にも生れず、又は琴碁書畫をたしなむ身ともならず」。

遁れかた野の狩場の吹雪に空恐し

摑んで引寄さうとし、三保の谷は逃げようとして、雙方弱力であつたので兜の錣がちぎれたといふ。景清に、「なにがしは平家の侍惡七兵衞景清と名乘かけ、手取にせんとて追うて行く、三保の谷が着たりける冑のしころを取はづし取はづし、二三度逃げのびたれども思ふ敵なれば遁さじと、飛かかり冑をおつとりえいやと引く程に錣はきれて此方にとまれば、主はさきへ逃げのびぬ」。

さもしやかたがたよ、源平互に見る目も恥かし、一人をとめん事は案のうち物、小脇にかいこんで何某は平家の侍惡七兵衞景清と名乘かけ名乘かけ、手取にせんと追うて行く、三保の谷が着たりける兜の錣を取外し取外し、二三度は逃げ延びたれども思ふ敵なれば飛かかり、兜をおつとりえいやつと引く程に、錣は切れて此方に留れば、主は先へ逃げよ逃げよはや落ちられよと（西王母）

景清に、「さもうしや方方よ、源平互に見る目も恥かし、一人を留めん事は案のうち物、小脇にかいこんで、何某の平家の侍惡七兵衞景清と名乘かけ名乘かけ、手取にせんと追うて行く、三保の谷が着たりける兜の錣を取はづし取はづし、二三度逃げ延びたれども思ふ敵なれば遁さじと飛かかり、兜をおつとりえいやと引く程に、錣は切れて此方に留れば、主は先へ逃げのびぬ」。

三保の谷が着たりける頭巾の錣を取外し取外し、二三度逃げ延びたれども思ふおてきなれば遁さじと、飛懸りひつたり惡洒落、どんせを止めたる女景清、錣と頭巾（天網島）

「三保の谷」は源氏の臣三保の谷四郎である。三保の谷が逃げ延びようとするを遊客に當て、又惡七兵衞景清を仲居のきよに當て、遊客を戲れて取押へるをいうたのである。ここの文は景清に、「三保の谷が着たりける冑のしころを取外し、二三度逃げ延びたれども思ふ敵なれば遁さじと、飛懸り兜をおつとりえいやと引く程に、錣は切れて此方にとまれば云云」とあるに據つたのである。

【柏　崎】

こしんのみだ　心といひ意識といひ善となり惡となる、己心の彌陀とも說かれたり（津戸三郎）　己心の彌陀・唯心の淨土（百日曾我）

〔己心の彌陀〕萬法唯一心なれば、心の外に佛もなく淨土もない、彌陀も己が心中の彌陀であつて、淨土も我心中の淨土である、故にこれを唯心の淨土ともいふ。佛說觀無量壽經に、「阿彌陀佛去レ此不レ遠」とありて、合讚の註に、「言極樂不レ遠、彌陀在二己心一」。柏崎に、「心外無別法、心佛及衆生と聞く時は、是三無差別なに疑のあるべきや。己身の彌陀如來、唯心の淨土なるべくは、云云」。

つらつら世間の幻相を觀ずるに、飛花落葉の風の前には有爲轉變を悟り、電光石火の影の中には生死の去來を見る（兼好）

熟熟人間界の無常の有様を觀じ悟つて見るに、春に花の咲いて散り秋に葉の落ちるを見ても轉變の世を思ひ知り、稻妻や石打つ火の忽焉として消えるを見ては、死しては生れ・生れては死ぬる身のはかなさを知るとの意。この文は柏崎に出てゐる。

【葛　城】

よそにのみ見し白雲の高間山、高嶺天に横たはり（浦島）

葛城（喜多流）に、「餘所にのみ見し白雲や高間山の」。「高嶺天に横たはり云云」はその條を見よ。

我には辛き葛城の、神隱れして遣りすごし（天網島）

人目を忍ぶ治兵衞には、人に見付けられては辛く、蔭の方に隱れて番太郎を通り過ぎさせといふ意に、葛城の神が人に見られるのを辛がられた故事を引用してかくいうたのである。葛城に「明くるわびしき葛城の、……、神かくれにぞなりにける」。拾遺集・卷十八、左近の歌に「岩橋のよるの契も絶えぬべし、明くる佗しき葛城の神」。

【鐵　輪】

恐しや幣帛に三十番神ましまして、魍魎鬼神は穢らはし、出でよ出でよと責め給ふぞや、……（弘徽殿）

恐しや三十番神ましまして、魍魎鬼神は穢らはしや、出でよ出でよと責め給ふぞや、腹立ちや思ふ人をば取らで、剰へ神神の責を受くるか（女護島）

「三十番神」「魍魎」はその條を見よ。鐵輪に、「恐しや幣帛に三十番神ましまして、魍魎鬼神は穢らはしや、出でよ出でよと責め給ふぞや、腹立ちや思ふ妻をば取らで、剰へ神の責を蒙る惡鬼の神通云云」。

蜘蛛の絲に荒れたる駒はつなぐとも、二道かくるあだ人を思ふはつらし（蟬丸）

蜘蛛網で荒馬を繫ぐことは不可能な事だが、よしやそれは出來るとしても、それよりも二人の女に心を懸けるあだあだしい男を思ふは侍つらいとの意。鐵輪に、「げにや蜘蛛のいに荒れたる駒は繫ぐとも、二道かくるあだ人を賴まじとこそ思ひしに」。謠曲拾葉抄・鐵輪に、「蜘蛛のいにあれたる駒はつなぐとも二道かくる人は賴まじ。これは古くよりいひ傳へたる古歌なれども、よみ人定かならず、何れの集にも見及ばず、藻鹽草にこの歌の上句ありて下句なし」。

てんどうぶ　宗廟社稷の天神・地神・明王部・天童部・九曜・七星・二十八宿・五行の靈・三十六禽驚し奉り（弘徽殿）

〔天童部〕天人または護法の鬼神等が童子の形相をなして人界に出現するものを天童といひ、その部屬を天童部といふ、十六童子など

〔六塵〕色、聲、香、味、觸、法の六つは人の心を穢すものなればこれを六塵といふ。賀古教信七墓廻のここの文は、江口に「貧にや皆人は六塵の境に迷ひ六根の罪を作ることも、見る事聞く事に迷ふ心なるべし」とあるに據つたのである。兼好法師物見車のここの文については、「あいぢやくの道云々」を見よ。

【大江山】

赤きは酒の科ぞかし、鬼とな思し召されそよ、我もそなたの御姿打見には恐ろしげなれど、馴れてつぼいは山伏なう、夜も更けぬお休みあれ、我もまどろまんいざさらば、明日對面と、荒海の障子押し明けて奥に入れば(酒呑童子枕言葉)

「つぼい」はその條を見よ。「荒海の障子」とは清涼殿の東北の方にある障子で、手長足長の荒海の中に立てる繪ありて、氣味わるきさまが鬼の部屋に似合はしいから用ゐたのである。大江山(觀世流)に、「赤きは酒のとがぞ、鬼となおぼしそよ、恐れ給はで我になれなれ給はば、けうがる友と思し召せ、我もそなたの御姿、打見には恐ろしげなれど、馴れてつぼいは山伏、なほなほめぐる杯の、たび重なれば有明の、天ぬ花に醉へりや、足本はよろよろと、ただよふかいざよふか、雲折り敷きて其まま、目に見えぬ鬼の間に入り、荒海の障子おし明けて、夜の伏處に入りにけり」。

秋風の音にたぐへて西川や、雲も行くなり大江山、・・・・(酒呑童子枕言葉)

秋風は西より吹くものなれば、西川にかけていふ。たぐへてはまじりてといふ程の意。西川は京都の西なる大堰川の筋をいふ。雲も行くなりとは、我出立する方向に雲も行くのぢやの意。丹波國大江山へは西川を渡つて行くのである。

ここの文は大江山によつたものである。併せて見よ。

***鬼神に横道なし**(振袖始)

大江山に、「鬼神に横道なきものを」。徒然草に、「鬼神によこしまなし」。

つぼい　打見るは恐ろしげなれど、なれてつぼいは山伏なう、夜も更けぬおやすみあれ(酒呑童子枕言葉)

可愛らしい。本朝俚諺(貝原好古撰)に、「つぼい。東國にて可愛らしきといふ詞なり」。物類稱呼・卷五、言語部に、「かはいらしいと云ふ詞のかはりに下總又信濃にてつぼいと云ふ」。大江山に、「打見には恐しげなれど、馴れてつぼいは山伏、なほなほめぐる盃の」。

【女郎花】

邪婬の惡鬼は身を責めて、劒の山の上に戀しき人は見えたり、嬉しやとて攀ぢ登れば、劒は身をとほし磐石は骨を摧く、こはそも如何に怖しや(三世相)(堀川波鼓)

女郎花に、「邪婬の惡鬼は身を責めて、其念力の道も嶮しき劒の山の上に戀しき人は見えたり、うれしやとて行き登れば、劒は身をとほし磐石は骨を摧く、こはそもいかに怖しや」。

【杜若】

木津や難波の海面に立つ波を見て、・・・打眺め行けば、河內なる生駒の嶽なれや、・・・末はるばるの旅衣(三國志)

杜若に、「伊勢や尾張の海面に立つ波を見て、……打眺め行けば、信濃なる淺間の嶽なれや、……なほはるばるの旅衣」。

***すきびたひ**　初冠の透額春日の里にぬぎ置きて(天智天皇)

〔透額〕冠の甲の上に月形の穴を設け、これに羅を張つて透したもの。杜若に、「春日の祭の勅使として透額の冠を許さる、君の惠みの深き故、殿上にての元服のこと當時その例稀なる故に、初冠とは申すとかや」。

***似たりや似たり**　似たりや似たり杜若・花あやめとて、澤邊にさきし盛りにもいづれあやめと引まがふ(井筒)　澤邊の菖蒲・杜若、似たりや似たり二子山(加增曾我)　似たりや似たり杜若花菖蒲、菖蒲革の角十文字(薩摩歌)　似たりや似たり燕子花・紫帽子(今宮)

杜若に、「似たりや似たり杜若・花菖蒲」とある。杜若と花菖蒲は能く似てゐるよりいうたのである。巣林子この文をとつて種種に應用したのである。(序云、「かきつばた」は燕子花と書くべく、杜若は「やぶめうが」の誤用字であるといへど、杜若を「かきつばた」と讀んである例はかなり古い)。

仁明天皇の御宇かとよ(松風)

杜若の文である。

一度は榮え一度は衰ふる理の、誠なりける世の習、住み所求むとて東の方に(淀鯉)

杜若に、「一度は榮え一度は衰ふる理の、誠なりける身のゆくへ、住み所求むとて東の方に行く雲の」とあるに據つたのである。

【景清】

いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、・・・・笑つて左右へ退きにける、昔忘れぬ物語(出世景清)

景清にある文である。

景清これを見て、物物しやと、夕日影に打物ひらめかいて、切つて懸ればこらへずして、双向いたる兵は四方へばつとぞ逃げにける(鎗權三)　**景清これを見て、物物しやと、夕日影に打物閃めかいて切つてかかれば**(出世景清)

景清に出てゐる文である。

***景清と三保の谷の錣**　かの景清と三保の谷の、錣は磯よ荒磯に、繋ぎし舟の纜を、切つてははなすもかくやらん(扇八景)

壽永三年三月下旬源平屋島の合戰に、平家の將惡七兵衞景清が源氏の家來三保の谷の錣を

町塔も山城國紀伊郡伏見墨染井南願成寺にあつたによつてかく云うたのである。

百夜も同じつれなさの、小町が名のみ古塚を、小野とはいひて薄生ふ市原野(閑八州)

深草四位の少將が小野小町を戀慕し、百夜通ふことを約し、九十九夜通うて遂に思ひを果されなかつたことは、通小町にも見え、また通小町に、「或る人市原野を通りしに、薄一叢生ひたる蔭よりも、秋風の吹くに付けてもあなめあなめ、おのとはいはじ薄生ひけりとあり、是れ小野の小町の歌なり云云」と見えてゐる。

小野とはいひて薄生ふ市原野(閑八州)

「百夜も同じつれなさの云云」を見よ。

【邯鄲】

浮世の旅に迷ひ來て　うき世の旅に迷ひ來て、身の果いつと定めん(西王母)　うき世の旅に迷ひ來て、夢路をいつと定めん(西王母)

邯鄲に、「浮世の旅に迷ひ來て、夢路をいつと定めん」。

きけんじやう　棟門多く立て並べ出入る人までも、寂光の都喜見城もかくやと思ふばかりの景色なり(用明天皇)　庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸を出入る人までも光を飾る粧ひは、誠や名に聞きし寂光の都喜見城の樂しみも、斯くやと思ふばかりの氣色かな(女夫池)

〔喜見城〕喜見宮とも云ふ、天上の宮城で帝釋天王の住む處。邯鄲に、「庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸を出入る人までも光を飾る粧ひは、誠や名に聞きし寂光の都喜見城の樂しみも、斯くやと思ふばかりの氣色かな」。

寂光の豆腐・茶碗酒の樂しみも、かくやと思ふばかりの鱠かな(嫗山姥)

「寂光」は寂光土卽ち佛の住める處である。この文は邯鄲に、「寂光の都・喜見城の樂しみも、かくやと思ふばかりの氣色かな」、とあるを作りかへたのである。「寂光の豆腐」は深い意味があるわけではない、孕常盤に「南無阿彌豆腐」といへる類と同じやうないひ方である。

庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸を出入る人までも光を飾る粧ひは、誠や名に聞きし寂光の都・喜見城の樂しみも、斯くやと思ふばかりの景色かな(女夫池)

邯鄲にある文である。

夜かと思へば日はまだ高し、梅花開けば菊の花咲けり、秋かと見れば雪も降りて、四季折々の榮華の御所の上﨟達も、宮殿樓閣皆消え消えと失せ果てて、ありつる礎の枕の上に眠りの夢は覺めにけり(女夫池)

邯鄲に、「夜かと思へば晝になり、晝かと思へば月又さやけし、春の花咲けば紅葉の色も濃く、夏かと思へば雪も降りて、四季折々は目の前にて、……五十年の榮華も盡きて、誠は夢の中なれば、皆消え消えと失せ果てて、ありつる邯鄲の枕の上に眠りの夢は覺めにけり」。

【咸陽宮】

敵に心をとらかせし咸陽宮の琴の音を思し召し出され、琴柱を律に立替へて、七尺の屏風を越えし唐桃(三國志)

咸陽宮に、「花陽夫人が咸陽宮で琴の祕曲を奏して、刺客荊軻を恍惚たらしめ、以て始皇帝の危難を救うたこと見え、其文中の琴歌に、「七尺の屏風は躍らば越えつべし云云」と見えてゐる。

【清經】

***しゆら**　私が爲のしゆらでたち(反魂香)　とかく如來の御方便、修羅もやす和女が呼びに來るも彌陀如來(宵庚申)　修羅道に遠近のたづきは敵、土は清劍・山は鐵城(千載集)

〔修羅〕梵語(Asura)で、六道の一である。冥途の旅仕度卽ち死裝束を「修羅出立」と云ふ。修羅族は嫉妬猜忌の心盛んで鬪爭を事とするが故に、猜忌に胸を焦すを「修羅燃す」と云ひ、殺戮鬪爭の場を「修羅道」といふ。千載集のここの文は清經に出てゐる文である。

また修羅道にをちこちの、たづきは敵・雨は矢先、土は清劍山は鐵城、憍慢の劍をそろへ、打つは波・引くは潮、西海四海の因果はここに、これまでなりやこれまでぞと(殘靜)

修羅道では遠近の便りと頼む者は皆敵となり、降る雨は矢となつて我に當り、土を踏めば研ぎ澄した劍となつて我を斬り、山へ登れば鐵城となつて我を防ぎ、憍慢の劍をそろへて恐しい世界となる云云。「西海四海」は檀浦や屋島の合戰を云うたのである。清經に、「さて修羅道にをちこちの、たづきは敵・雨は矢先、土は清劍・山は鐵城、雲のはたてをついて、憍慢の劍をそろへ邪見の眼の光、愛欲貪恚痴痛患道場、無明も法性もみだるる敵、打つは波・引くは潮、西海四海の因果を見せて、これまでなりや」とあるに據つたのである。

山は鐵城・水は清劍、修羅の鼓・惡鬼の怒り(賀古敎信)

清經に、「土は清劍・山は鐵城、雲の旗手をついて憍慢の劍をそろへ、邪見の眼の光」とあるを作りかへたのであらう。

【熊坂】

いらつて熊坂左足を踏み、鐵壁も通れと突く長刀を、はつしと打つて弓手へ越せば、追つ懸けすかさずこむ長刀に、ひらりと乘れば又向になし、しさつて引けば右手へ越

即ちこれである。鐵輪に、「大小の神祇・諸佛菩薩・明王部・天童部・九曜・七星・二十八宿を驚し奉り」。

***二十八宿**　九曜、七星、二十八宿、五行の靈、三十六禽を驚し奉り(弘徽殿)

東西南北に各七宿星あつて合せて二十八宿ある。二十八宿の名稱及びその圖は佛像圖彙卷三に見えてゐる。春秋傳に、「二十八宿分在四方、方有七宿共成一象」。鐵輪に、「九曜、七星、二十八宿を驚し奉り」。

***みやうわう**　ここに僧正遍昭は明王の御告あり(松風)　宗廟社稷の天神、地神、明王部、天童部、九曜、七星、二十八宿、五行の靈、三十六禽驚し奉り(弘徽殿)

〔明王〕大日如來の眷族で惡魔降伏佛法守護神で、愛染明王などもその一で眞言宗に說ける諸尊である。「明王部」は五大明王をいふ、その條を見よ。弘徽殿鵜羽產家のここの文は鐵輪に、「大小の神祇、諸佛菩薩。明王部、天童部、九曜、七星、二十八宿を驚し奉り」とあるを應用したのである。

【兼　平】

兼平とは木曾殿の御內に今井鮨、酒盛にかくれなき一騎當千の御肴、磯打つ波のまくりのみ、蜘蛛手かくなわ十文ぎり(女楠)

兼平に、「木曾殿の御內に今井の四郎兼平と名乘りかけて、大勢に割つて入れば、もとより一騎當千の祕術を顯はし、大勢を粟津の汀に追つつめて、磯打つ波のまくり切り、蜘蛛手十文字に打破り」。「今井鮨」「まくりのみ」などはその條を見よ。

すゑしら雪の薄氷、深田に馬をかけおとし、引けどもあがらず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ、こは何とならん身の果(淀鯉)

兼平に、「すゑしら雪の薄氷、深田に馬をかけ落し、引けどもあがらず打てども行かぬ望月の。駒の頭も見えばこそ、こは何とならん身の果」とありて、木曾義仲が戰破れて粟津が原の深田に馬を駈落した一節である。

はるめきながらかりこして、末白雲の買がかり、首たけ積る借錢の、深田に馬を駈落致し(薩摩歌)

「はる」は春に張(博奕にて物を賭けること。その條を見よ)をいひかけたのである。「かりこし」は雁越しに借越しをいひかけたのである。兼平に、「春めきながらさえかへり、比叡の山風の雲行く空も吳織、あやしや通路の末白雪の薄氷、深田に馬を駈落し」。

深田に馬を駈落し、引けども上らず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ(嫁門松)

兼平にある文である、それを應用して相手に桂馬を取られることにいひなしたのである。

序云「深田に馬を駈落し」は、木曾義仲が粟津原の深田に馬を駈落したのをいふ。「望月の駒」は、昔時信濃國望月の里から朝廷に馬を奉ることがあつたにより、その緣によつたのである。

深田に馬を駈け落し、引けども上らず、打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ、こは何とならん淺ましと(融大臣)

兼平に、「深田に馬を駈け落し、引けども上らず、打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ、こは何とならん身の果」。

我が立つ杣の比叡山、……、唐土の四明の洞を移し、一念三千の機を顯はして、三千人の衆徒を置き、王城の鬼門を守り、惡魔を拂ふ利劔かや(三國志)

兼平に、「抑あの比叡山は、……、王城の鬼門を守り、惡魔を拂ふのみならず、……、震旦の四明の洞を移せり、……、我が立つ杣と詠じ給ひし、……、一念三千の機を顯はして、三千の衆徒を置き」。

【通　小　町】

拾ふ木の實は何何ぞ　拾ふ木の實は何何ぞ、いちひ・かしひ・馬手葉椎・大小柑子・窓の梅・園の桃・人丸がかきほの柿・山の邊のささささ栗くりくりかへす(三國志)　拾ふ木の實は何何ぞ、櫟・大葉櫟・馬手葉椎・榛・榧・大小柑子・窓の梅・園の桃・人麿のかきほの柿・山邊のささ小栗おりおりかへす(文武五人男)

通小町に、「拾ふ木の實は何何ぞ、古見馴れし車に似たるは嵐にもろき落椎、歌人の家の木の實には人丸の垣ほの柿、山の邊の笹栗、窓の梅・園の桃、花に名ある櫻麻の生の浦梨、猶もあり櫟・榧・まてばしひ・大小柑子・金柑、あはれ昔の戀しきは花橘の一枝」とあるに據つたのである。

***ふかくさのせうしやう**　夜每にはなほしも思ひ深草の、榻に通ひし車長持、巡り逢ひたや語りたや(卯月紅葉)　かの深草の少將の雨の降る夜も降らぬ夜も(大掛物十幅一對)　これや深草の少將棊木幡の里か、馬はあれど明日の軍にはかちと見えしは誰やらん(源義經)　そなたの空も薄霞、かの深草の少將のその名ばかりやアア殘るらむ(娥)

〔深草少將〕卯月紅葉のこの文は、思ひ深きを深草にいひかけ、深草の少將が小野小町に懸想して百夜通ふことを約し、雨の降る夜も降らぬ夜も毎日通うた度數を車の榻に刻んだといふ故事に據つたのである。「せうしやう」を見よ。

源義經將棊經のこの文は、深草の少將を將棊にいひかけて少將棊といひ、深草少將の緣から通小町に、「木幡の里に馬はあれども、君を思へば徒步跣走」とある文を應用し、馬に桂馬をきかせ、徒步に勝をいひかけて、徒步と見えしは誰やらんの文飾としたのである。

娥歌加留多のこの文は、深草少將塔も小野小

それとは見えず梓弓(五人兄弟)　千載集・卷十六、雜上の部の歌に、「人知れぬ大内山の山守は、木隱れてのみ月を見るかな」とあるを應用して、人知れず紛入つて富士裾野の番人にも見咎められぬ意にいうたのである。この文は小袖曾我に、「人知れぬ大内山の山守も、木隱れてそれとは見えじ梓弓、矢ごろにならば」とあるに據つたのである。「時しも頃は建久四年云云」を見よ。

【櫻　川】

あたら櫻の科は、散るぞうらみなる(兼好)　「あたら」は可惜である。櫻花散らずにあれよと思ふを、散つて人に惜まれ恨まれるは櫻の罪ぢやの意。ここの文は櫻川にある。「木花開耶姫の御神木云云」を見よ。

岸花紅に水を照し、とうじゆ綠に風を含む、山花開けて錦に似たり、澗水たたへて藍の如し(西王母)　〔岸花紅照レ水、洞樹翠含レ風、山花開似レ錦、澗水湛如レ藍〕櫻川に見えてゐる文である。「岸花紅照レ水、洞樹翠含レ風」は杜子美が詩句で、「山花開似レ錦、澗水湛如レ藍」は碧巖錄・卷九に出てゐる詩句である。

木花開耶姫の御神木の花なれば、風もよぎて吹けや吹け、あたら櫻のとがは散るぞ恨なる、よし恨むまじ歎くまじ、泣くまい泣くまい啼かぬ鳥の聲きけば、生れぬ先の我子戀しき(兼好)　木花開耶姫の御神體は櫻木にてまします、されば櫻は木花開耶姫の御神木の花なれば、風も避けて障らぬやうに吹けとの意。「あたら櫻のとが云云」はその條を見よ。六道輪廻の說によれば、我子となつて生れる者は前世にあつては鳥かも知れぬ、さう思へば鳥の聲を聞きても生れぬ先の我子戀しいとの意。櫻川に、「木花開耶姫の御神木の花なれば、風もよぎて吹き水も影を濁すなと、……あたら櫻のとがは散るぞ恨なる、…　我尋ぬる櫻子ぞ戀しき」。

【實　盛】

＊**故郷に錦**　故郷にかざる唐錦(最明寺殿)　故郷へ歸る唐錦(國性爺)　故郷へは錦を着て歸るといへる本文あり(大磯虎)　漢書に、「富貴不レ歸二故郷一、如二衣レ錦夜行一」。魏志に、「太祖謂レ既曰、還二君本州一、可レ謂二衣レ錦晝行一矣」。南史・劉之隣傳に、「隣叙二南郡太守一、武帝謂曰、令二卿衣レ錦還一レ郷」。實盛に、「故郷へは錦を着て歸るといへる本文あり」。

さねもりぢや　それでは一年五兩か、いかにもいかにも近年五兩取りまする、すれば其方は實盛ぢや、道理で女中の氣に入つた(薩摩歌)　〔實盛ぢや〕齋藤實盛御領につけられた故事により、御領と五兩と音相通じるによつて、「實盛ぢや」といひ、實盛の「さね」を陰核に通はせて、「道理で女中の氣に入つた」と洒落たのである。實盛に、「實盛生國は越前の者にて候ひしが、近年御領につけられて武藏の長井に居住仕り候ひき」。松の落葉・卷五に、「實盛ならば鬢鬚の白髮たるべきが黑きこそ不思議なり、是は都の本阿彌に目ききをさせんと申されたる、本阿彌に見せたればたしか作は越前者なり、近年五兩につけられたり」。巣林子作・平家女護島にも實盛のことを述べて、「拙者生國越前、近年御領につけられ」と見えてゐる。

盲龜も浮木に逢ふ(以呂波)　「一眼の龜の浮木に値ふ」を見よ。實盛に、「此稱名の時節にあふ事、盲龜の浮木・優曇華の花待ち得たる心地して」。

老武者の悲しさは、風にちぢめる枯木の力も折れて(西王母)　實盛に、「老武者の悲しさは軍には仕疲れたり、風にちぢめる枯木の力も折れて」。

【自然居士】

＊**しいう**　黄帝革を以て鞠を作らせ蚩尤が首を表し、諸人の足にかけさせ調伏あり(持統天皇)　蚩尤といひし朝敵蔓り、烏江の海を隔て亡すべき樣なかりしに(持統天皇)　〔蚩尤〕支那上古の人、黄帝と涿鹿の戰ひ敗れて擒にされた。自然居士に、「蚩尤といへる逆臣あり、彼を亡さんとし給ふに、烏江と云ふ海を隔てて攻むべき樣もなかりしに」。「黄帝革を以て鞠を作らせ云云」をも見よ。

然れば船のせんの字を君にすすむと書きたり(今宮)　自然居士(喜多流)に、「然れば船のせんの字を君にすすむと書きたり」。謠曲拾葉抄にこれを註して、「說文曰、前本作レ歬、不レ行而進謂二之歬一、从レ止在二舟上一、徐曰、坐而至者舟也、私云、前の字又歬とも云也、舟のせんの字と云は歬の字を云也、すすむとよめり、君にすすむとは君は添字也、すすむとつづけんが爲に君の字を一字加へて云なるべし」。和漢音釋書言字考・言辭部に、「歬。音錢、(韻會)前ノ本字、先也進也」。

じねんこじ　此裝束で直に愛で自然居士を見せうかの、わきの人買が櫓櫂を持つて散散に打つ(酒呑童子)　〔自然居士〕自然居士を云ふ。自然居士は東山雲居寺の住僧である。居士が說法の場に諷誦を上げに來た女兒があつた、この女兒が人商人に捕へられて連れ行かれるを、自然居士が力を盡して遂に女兒を助返したことを作つてある。自然居士に、「(自然居士)舟に離れて叶はじと簑裾を波にひたしつつ、舟ばたに取付き引留む、(人商人)あら腹立や、さりながら衣に恐れてえは打たず、是も汝(女兒)が科をとて、櫓櫂を持つて散散に打つ、打たれて聲の出でざるは若し空しくやなりつらん、何しに空しくなるべきと引立て見れば、身には繩・口には綿の轡をはめ、泣けども聲が出でばこそ」。

身には繩・口には綿の轡をはめ、泣けども聲の出でばこそ(酒呑童子)　自然居士にある文である。

ずを、おつとり直してちやうど斬り（橋弁慶）

「左足を踏み」とは、まづ左足を踏出すをいふ。「こむ長刀」とは突込む長刀、「しさつて引けば」は、あとしさりして長刀を引寄せればといふこと。このあたりの文は、熊坂に見えてゐる。

***こらんにふ**　**太刀風さわぐ虎の巻、獅子奮迅虎亂入、前をはらへば後にあり**（最明寺殿）

〔虎亂入〕劒道の手の名、刀を揮つてまつしぐらに突入ること。熊坂に、「牛若子少し恐るるけしきなく、小太刀を拔いて渡り合ひ、獅子奮迅虎亂入、飛鳥の翔の手をくだき」。

***ししふんじん**　**太刀風さばく虎の巻、獅子奮迅・虎亂入、前を拂へば後にあり**（最明寺殿）　**上段下段の太刀捌き、陽炎・稻妻・獅子奮迅**（國性爺）

〔獅子奮迅〕兵法の手の名、獅子奮迅のやうな勢あること。熊坂に、「小太刀を拔いてわたり合ひ、獅子奮迅・虎亂入・飛鳥のかけりの手をくだき」。

西北に風起り、東南に向ふ空の足、梢木の間もはらはら（壽門松）

熊坂に「東南に風立つて、西北に雲靜かならず、夕闇の夜風烈しき山陰に、梢木の間や騷ぐらん」。

東南に雲起つて西北に風靜ならず、夕闇の空も轟く雪の夜の、あら物凄の景色やな（雪女）

雲が東南の空に起つて西北に行けば天候荒れる。熊坂に、「東南に風立つて西北に雲靜ならず、夕闇の夜風烈しき山陰に、梢木の間やさわぐらん」。安宅に、「遊遠東南の雲を起し、西北の雪霜に責められ、埋る憂き身をことわり給ふべきなるに」。

薙刀彼處へからりと棄て、手取にせんと大手をひろげ、ここの面廊彼處の詰り、追掛け追詰め取らんとすれど、陽炎稻妻月の影、姿は見れども手に入らず（十二段）

熊坂に、「打物わざにて叶ふまじ、手取にせんとて長刀投捨て、大手をひろげて爰の面廊かしこの詰りに、おつかけおつつめ取らんとすれども、陽炎稻妻水の月かや、姿は見れども手に取られず」。「面廊」はその條を見よ。

***ひてうのかけり**　**飛鳥の翔り虎走り、手を盡してぞ戰ひける**（三國志）　**上段下段に斬結び、飛鳥の翔りの手を碎き弓手馬手へ切散し**（振袖始）

〔飛鳥の翔〕劒道の手の名、飛鳥の如く迅速な太刀捌をいふ。熊坂に、「獅子奮迅・虎亂入・飛鳥のかけりの手をくだき」。

***めんらう**　**後藤左衞門長刀横たへ驅來り、一人も餘さじと眞中に押取込め、此處のめんらう彼處のつまり打伏せ斬伏せ**（小栗判官）　**ここの面廊かしこのつまり追掛け追詰め取らんとすれど**（十二段）

〔面廊〕座敷に行く廊下をいふ。熊坂に、「ここの面廊かしこのつまりに、おつかけおつつめ取らんとすれども」。

【鞍馬天狗】

貴賤と親疎を論ぜぬを花の習ひと聞く（十二段）

和漢朗詠集・春の部、白樂天の詩に、「遙見二人家一花便入、不レ論二貴賤與二親疎一」。鞍馬天狗に、「遙に人家を見て花あれば便ち入る、論ぜず貴賤と親疎とをわきまへぬをこそ春の習ひと聞くものを」。

げにや花の下の半日の客、それさへよしみあるものを（十二段）

鞍馬天狗に、「げにや花の下の半日の客、月の前の一夜の友、それさへ好みあるものを」。

花あれば便ち入る　**花あれば便ち入る科は櫻に御免あり**（本領曾我）

花の美しう咲いてゐるを見ては、それが何者の庭であらうとも花を愛でて立寄るの意。鞍馬天狗に、「遙に人家を見て花あれば便ち入る、論ぜず貴賤と親疎とをわきまへぬをこそ春の習と聞くものを」。和漢朗詠集・白居易の詩に、「遙見二人家一花便入、不レ論二貴賤與二親疎一」。

花もやうやう景色立つ、花見の使早馬に、鞍馬の山の雲珠櫻（兼好）

「うずざくら」はその條を見よ。ここの文は鞍馬天狗に、「花咲かば告げんといひし山里の、使は來り馬に鞍、鞍馬の山の雲珠櫻」とあるに據つたのである。

【花　月】

花踏み散らす鶯を打たんといひし人もあり（艶狩）

花月に「鶯の花踏み散らす細脛を、大長刀もあらばこそ、花月が身にかたきのなければ、太刀かたなは持たず、弓は的射んがため、又かかる落花狼藉の小鳥をも、射て落さんが爲ぞかし」。古歌に「鶯の花踏み散らす細脛を、大長刀にかけて切らばや」。

【源氏供養】

そもそも水揚の下前髮のなよやかに、好色の雲をかざし、初牀の夜のやもじにも、終に客衆の花散りぬ、過ぎし御見の夕顏の、露の黃昏身にしみじみと（賀古教信）

源氏供養に、「そもそも桐壺の夕べの煙すみやかに、法性の空に至り、箒木の夜の言の葉は、終に覺樹の花散りぬ、空蟬の空し此世を厭ひては、夕顏の露の命を觀じ」とあるを改作したのである。「やもじ」はその條を見よ。

【小袖曾我】

時しも頃は建久四年五月半の富士の雪、……よしそれとても數ならぬ身には中中恐れなし（五人兄弟）

小袖曾我（觀世流）に出てゐる文である。

人知れぬ大内山の山守も、木隠れて

【隅田川】

和女は都詞狂女と見えし、面白う狂うて見せずば舟に乘せじとありし故、うたてやな隅田川の渡守ならば、日もはや暮れぬ舟に乘れとはいひもせで、舟に乘るなと仰あるは名にも似ず、おお野暮らし（隅田川）

謠曲・隅田川（喜多流）に、「都の人なりとも見れば狂女なる程に、面白う狂ひ候へ、狂はずは舟には乘すまじいぞ、うたてやな隅田川の渡守にてましまさば、日も暮るる舟に乘れとこそ仰あるべきに、かたの如くも都の者を舟に乘るなと承るは、隅田川の渡守とも覺えぬ事なのたまひそ」。「隅田川の渡守ならば云々」をも見よ。

隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乘れ、とは言ひもせで舟に乘るなと仰せあるは名にも似ず（隅田川）

伊勢物語に、「武藏の國と下總の國との中にいと大なる河あり、それを隅田川と云ふ、……渡守・はや舟に乘れ日も暮れなむといふに、乘りて渡らんとす」、とあるによつてかく云うたのである。但ここの文は謠曲・隅田川に據つたのである。「おことは都詞云々」を見よ。

南無西方極樂世界三十六萬億、同號同名阿彌陀佛南無阿彌陀（隅田川）

南無や西方極樂世界には三十六萬億の世界ありて、それに各同號同名の阿彌陀佛まします の意。この文は淨土念佛宗の要文であつて、謠曲・隅田川にも出てゐる。

都の人の足手影のなつかしと、これを最期の記念の詞轉寐の夢と消え給ふ、土中に突込み柳を植ゑし頃御遺言（隅田川）

謠曲・隅田川に、「都の人の足手影もなつかしう候へば、此道の邊りにつき籠めて、しるしに柳を植ゑて賜はれとおとなしやかに申し云々」とあるに據つたのである。

【善　界】

大びえや横川の杉の梢に棲みて、…………横川の杉の嵐に立紛れてぞ失せにける（天神記）

善界に、「大比叡や横川の杉の梢より、南に續く如意が嶽鷲の御山の、雲や霞も嵐と共に失せにけり」。

若作障碍卽有一佛魔境　（天神記）（田村）（用文章）

觀法を修する時、若しも惡魔來つて障碍をなすとも、悟を開いて觀れば本來魔も佛もその隔なく、同一體のものなれば敢て恐れるに足らないの意。善界に、「それ若作障碍卽有一佛魔境と說けり」。

【關寺小町】

古は一夜とまりし宿までも、錦の裀綾の床、垣に金花をかけ戸には水晶を連ねつつ、鸞輿屬車の玉衣の、隙間の風もいとひしに、斯くあさましき苔莚、敷くともしかじ世の中よ（蟬丸）

關寺小町に、「古は一夜泊りし宿までも玳瑁を飾り、垣に金花を懸け戸には水晶を連ねつつ、鸞輿屬車の玉衣の、色を飾りて數妙の、枕つくつまやの內にしては、花の錦の裀の起き臥しなりし身なれども、今は埴生のこや玉を敷きし床ならん」。「金花」「鸞輿屬車」はその條につきて見よ。

關寺に身の衰への恥かしき今の小町屋惣七（博多）

心の急くに關寺をいひかけ、關寺小町に、小野小町が關寺のほとりに住みて、身の衰へたのを恥かしがつたことが見えてゐるに據つて、今の小町屋にいひつづけたのである。

【攝　待】

***岩木を分けぬ人心**　眞黑に焦げるまであたつてお歸りなされかしと、いへどもさすが一言も、いはれ木をわけぬ人心、奧の一間に入りにけり**（重井筒）　岩木を結ばぬ義經なれば、泣く泣く膝に抱き取る**（凱陣八島）

「岩木を結ばぬ」ともいふ。人は木石をわけて生れたものでないから、その心には情があるとの意の諺。行路難に云、「心非二石木一、豈無レ感」。凱陣八島のこのあたりの文は、攝待によつたものである、

***うつぼ**　馬に鞍置き弓靫おこせ、君の御供申さんに（凱陣八島）

〔靫〕矢を入れて背負ふ具。矢を雨などに濡さぬやうに、又物に觸れて損ぜぬ爲に納め置くもので、中空であつて外に毛皮をかけたのが多い、その形粟の穗に似てゐるから「うつぼ」（空穗）と云ふのである。凱陣八島のこのあたりの文は攝待によつたのである、併せて見よ。

かけずたまらず　繼信が着たりける鎧の胸板押付總角、かけずたまらずつつと射通し（凱陣八島）

ここの文は攝待にある文である。但謠曲・改正本には、「總角かけてつつと射通し」となつてゐる。

舊里を出でし鶴の子の松に歸らぬ淋しさよ　凱陣八島）

このあたりの文は攝待に據つたのである。漢時代の人、遼東の丁令威が仙を靈虛山に學ぶ、化して鶴となつて遼に歸り、「有鳥有鳥丁令威、去レ家千年今始歸、城郭如レ故人民非、何不レ學レ仙塚纍纍」と言つたといふ。

***ごしやう**　わしや今斬らるる助けて下され、大阪へ連れていて下され、後生でござると泣き拜む（女殺）現世の祈の爲にもあらず、後生善所とも思はず（凱陣八島）

〔後生〕後生善所の略。現世で善事をなす者は未來世に於て善き所に生れるといふ。凱陣八島のここの文は攝待によつたものである。

秋の夜の盃、影も傾く入江に枯れ立つ、足もとはよろよろと（吉岡染）
この文は猩猩に出てゐる。

老いせぬや藥の名をも　老いせぬや藥の名をも菊の水、盃も浮み出で（一心五飛魂）　老いせぬや藥の名をも菊の酒（女夫池）
「老いせぬ」は年寄らぬの意。「菊の酒」をも見よ。猩猩に、「老いせぬや藥の名をも菊の水、盃も浮出でて」。

酌めども盡きず　酌めども盡きず、飮めどもかはらぬ（浦島）　酌めども盡きず、飮めども醉はぬ（宵庚申）
猩猩に、「酌めども盡きず、飮めども變らぬ秋の夜の盃」。

【正　尊】

***さがなし**　身の役なれば、君達をさがなくせいて逢はせれば（三世相）　岩戸に籠り給ひけん例さがなき嵯峨の山（嵯峨天皇）　あはれ人の口はさがなきもの、御兄弟の中いづれか主にてましまさずや（榛轄）
神代紀に「惡」「不祥」「不良」などの字が訓んである。詞きたなくいひそしるをもいふ。榛靜胎内捃のここの文は、正尊に、「さはあるまじきと申されてこそ、御兄弟の御中に物いひさがなきことあるまじけれ」とあるに據つたものである。

みやうだう　五大明王、四大薩陀、三十七尊、過去七佛、冥道を請じ驚かし奉り（榛靜）　道滿は冥道供一字金輪の法を修す（弘徽殿）
〔冥道〕幽冥界にまします神佛を總稱する詞である。「冥道供」とは閻魔王及び其眷族等を供養すること。榛靜胎内捃のこの所の文は正尊に、「上は梵天・帝釋・四大天王・閻魔法王、五道の冥官、泰山府君、下界の地には伊勢天照大神を始め奉り、伊豆・箱根・富士・淺間・熊野三所、金峯山、王城の鎭守、稻荷・祇園・加茂・貴船・八幡三所、松の尾・平野、總じて日本國の大小神祇・冥道請じ驚かし奉る」とあるを作りかへたのである。「冥道供一字金輪の法」とある「一字金輪」はその條を見よ。

【石　橋】

謬つては半日の客　谿の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし、げに謬つては半日の客たりしも、今身の上に白雲の（以呂波）
石橋に、「谿の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし、げにや誤つて半日の客たりしも、今身の上に知られたり」。和漢朗詠集・卷下、雜部、後江相公の詩に、「謬入₂仙家₁、雖レ爲₂半日之客₁、恐歸₂舊里₁、纔逢₂七世之孫₁」とある句によつたのである。劉晨阮肇が天台山に入り、道に迷うて美女に逢ひ、これと半日遊んで家に歸れば、既に七世を經てゐたと云ふ、續齊諧記に載せてある話によつて、かく作つたのである。

【俊　寛】

七百年生きる仙人の藥の酒とは菊水の流れ（女護島）
俊寛に「酒と申すことはもと是藥の水なれば、靈酒にてなど無かるべき、……、彭祖が七百歳を經しも、心を汲みえし深谷の水、飮むからにげにも藥と菊水の」。

纜に取り付きて、言ひ殘せし事のあり、暫くのうと引止むる、エエ聞き分けなしと引切つて、船を深みに漕ぎ出せば、詮方波に身を浸し、只手を上げて、船よのう船よと、呼べど出船の（國性爺）
俊寛に、「纜に取り付き引止むる、舟人ともづな押切つて、船を深みに押出だす、詮方波にゆられながら、只手を合はせて、船よのう船よと、いへど乘せざれば」。

もとよりも此島は鬼界が島と聞くなれば、鬼ある所にて今生よりの冥途なり、たとひ如何なる鬼神なりと此哀れなどか知らざらん（女護島）
俊寛にある文である。「鬼界が島」は地名部「きかい」を見よ。

らいし　もしやとらいしを尋ねても、僧都とも俊寛とも書きたる文字のあらばこそ（女護島）
〔禮紙〕書狀の本紙（近松のこの文では赦文の書いてある）の外に同質の白紙で一枚卷き重ねてあるものをいひ、その內容を重んずる爲のもので、その名もその意味で付けられた。貞丈雜記・書札之部に、「書狀にらいしと云ふは、文字を書殘したる白き所をらいしと云ふ人あり誤なり、らいしとは禮紙と書きて、狀の上を白紙にて卷く事なり、扨其上を上卷とて別の紙にて包みて宛所を書くなり、これひねり文の事なり、壓文にも禮紙あるなり、書札雜雜聞書に云、禮紙にて在之ば立文は杉原一枚に書きて其上一枚禮紙、扨上卷橫に卷きて上下をひねり候也、又こし文の禮紙は三つ一つほど切りて卷きて扨上卷たるべく候云云」。俊寛に、「もしも禮紙にやあるらむと、卷きかへして見れども僧都とも俊寛とも書ける文字は更になし」。

【鐘　旭】

しちたらじゆ　恐れて虛空に飛上り其高さ七多羅樹（振袖始）
〔七多羅樹〕四十九仭ほどの高さをいふ「多羅樹は印度に生茂し椶櫚の如き樹である、この樹の高さの七倍なるを七多羅樹と云ふ。翻譯名義集に、「舊云₂貝多₁、此翻レ岸、形如₂此方椶櫚₁直而高、極高長八九十尺、華如₂黃米子₁、有レ人云、一多羅樹高七仭、七尺曰レ仭、是則樹高四十九尺」。鐘旭に、「傳へ聞く、佛在世の淨藏淨眼の如くに其高さ七多羅樹、虛空に上りては坐せしめ」。

百年經ねど衰へは、今身の上に小町屋惣七(博多)
卒都婆小町に「うれしからぬ月日身に積つて、百年の姥となりて候」とあるに據つたのである。

【道成寺】

鐘の供養に參るらむ(用明天皇)
道成寺に、「つくりし罪も消えぬべし、鐘の供養に參らむ」。なほこのあたりの文は、道成寺の翻案である。

謹請東方靑龍清淨、謹請西方白體白龍、謹請中央黄體黄龍、一大三千大千世界の恒沙の龍王哀愍納受、哀愍自謹のみぎんなれば、いづくに恨みのあるべきぞと、祈り祈られかつぱとまろぶと見えけるが(用明天皇)
あらゆる龍王に祈る文である。「恒沙」はその條を見よ。「哀愍自謹のみぎん」は哀愍自謹の砌で、卽ちあはれみ給はれて自ら謹まれる時節との意。道成寺に、「謹請東方靑龍清淨、謹請西方白體白龍、謹請中央黄體黄龍、一大三千大千世界の恒沙の龍王哀愍納受。哀愍自謹のみぎんなれば、いづくに大蛇のあるべきぞと、祈り祈られかつぱとまろぶが又おきあがつて」。

これはこの國の傍に下種奉公の勤を致す飯焚の女にて候(用明天皇)
道成寺に、「これはこの國の傍に住む白拍子にて候」。

***言語道斷**　**言語道斷この上は何をか隱し申すべき**(凱陣八島)　**言語道斷かやうの事を思ひてこそ女人禁制とは申しつれ、總じて鐘の供養に女人をいましむる因緣は**(用明天皇)
言語に述べる道の斷えた義、沙汰の限り。道成寺に、「言語道斷かやうの義を存じてこそ固く女人禁制の由申して候に、……此鐘に付きて女人禁制と申しつるいはれの候を御存じ候か、……」。感山雲臥紀談の序文中にも「言語道斷」といふことが見えてゐるから、もと佛書から出た詞である。

さる程に尾上の鐘の、月落ち鳥啼いて霜雪天に滿ちじほ程なく、この浦波の江村の漁火愁に對して人人眠ればよき隙ぞと、立舞ふやうにて狙ひ寄つて撞かんとせしが、思へば鐘さへ恨しやとて、龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見えし、引かづきてぞ失せにける(用明天皇)
道成寺に、「さろ程に寺寺の鐘、月落ち鳥啼いて霜雪天にみちじほ程なく、日高の寺の江村の漁火愁に對して人人眠ればよき隙ぞと、立舞ふやうにて狙ひ寄りて撞かんとせしが、思へばこの鐘恨しやとて、龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見えし、引かづきてぞ失せにける」。「月落ち鳥啼いて」はその條を見よ。「龍頭」は鐘の釣つてある所に龍頭の形の金物が附いてゐるよりの稱。

月落ち鳥啼いて霜天に、滿ちじほ程なく此浦の、江村の漁火、愁に對して人人眠れば(用明天皇)
道成寺に據つたものである。「さろほどに尾上の鐘の云々」を見よ。三體詩・唐張繼の詩に、「月落烏啼霜滿レ天、江楓漁火對ニ愁眠一、枯蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到ニ客船一」。

月は程なく入しほの、煙みちくる小松原(用明天皇)
道成寺に、「月は程なく入しほの、煙みちくる小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ」。

つくりし罪も消えぬべし(用明天皇)
道成寺に、「つくりし罪も消えぬべし、鐘の供養に參らん」。

なまくさまんたばさらだせんだまかろしやなそはたやうんたらあんだらども(女護島)　**なまくさんまんたばさらだせんだまかるしやなそはたやうんたらたかんまん、ちやうがせつしやとくだいちゑ、ちがしんしやそくしんじやうぶつ**(用明天皇)
不動明王の慈救咒、「南謨(歸命の義)三曼多(普遍の義)縛日羅赧(諸金剛の義)戰拏(暴惡の義)摩訶路灑拏(大忿怒の義)薩破吒也(破壞の義)吽(恐怖の義)怛羅他(堅固の義)憾𤚥(種子の義)」である。平家女護島のここの文は、この慈救咒の末を「あんだら」(その條を見よ)にいひなしたのである。用明天皇職人鑑のここの文は、慈救咒から「聽ニ我說一者得ニ大智惠一、知ニ我身一者卽身成佛」、といふ經文につづけたので、道成寺の文に據つたものである。

花の外には松ばかり(用明天皇)
道成寺に、「花の外には松ばかり、暮れそめて鐘やひびくらん」。

焰を降らし火炎を吹きかけ釣鐘を奪ひ失ふと傳へたり、なんぼう恐しき事にてはなきかと語り給へば、人人は身の毛を立ててぞ怖れける(用明天皇)
道成寺に、「焰を出し尾をもつてたたけば、鐘はすなはち湯となつて山伏をとり終はんぬ、なんぼう恐しき物語にて候ぞ、言語同斷かかろ恐しき御物語こそ候はね」とあるに據つたのである。なほこのあたりの文は道成寺に據つたのである。

【高砂】

かけども盡きぬ松の葉(國性爺後日)
高砂に、「搔けども落葉の盡きせぬは、まことなり松の葉の」。

木の下陰の落葉かくなるまで夫婦長らへて、子供の末を高砂の、松の榮えや祈るらん(鑓權三)
高砂に「所は高砂の尾上の松も年ふりて、老の波も寄りくるや、木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて」。

草木心なしと申せども、花實の時を違へず、げに陽春の德利(雪女)
高砂に、「草木心なしとは申せども、花實の時

***すずかけ** さらば小さき兜巾篠懸なこしらへて給はれ、山伏道の御供せん(凱陣八島) 旅の衣は篠懸の、露けき袖やしぼるらん(蔠蘭)

〔篠懸〕山伏の上衣に着る法衣である、麻で作り絲縮または金縮を着く。山伏の峯入する時に篠の露を防ぐ爲に着たもので、もとは鈴を附けてあつたが、後には威儀を保つ爲に着る物となつた。凱陣八島のここの文は、攝待に、「さあらば思出したり、小さき兜巾篠懸をとく拵へてただ給へ、山伏道の御供せん」、とあるに據つたものである。蔠蘭胎内搊のここの文は、安宅の文に據つたものである。「旅の衣は篠懸の云々」を見よ。

***せつたい** これに高札の立ててあり、何何佐藤の館にて山伏接待と候(凱陣八島)

〔接待〕客をもてなすこと。追善の爲に人に施しをすること。「山伏接待」とは、山伏に物を施與しもてなすこと。凱陣八島のこのあたりの文は攝待に據つたものである、併せ見よ。

***やつぼ** 矢壺をさしてひやうと放つ(凱陣八島)

〔矢壺〕矢を射立つねらひの所。「壺」は思ふ壺などといふ壺で要所の意。凱陣八島のこのあたりの文は、攝待に據つたものである。

【蟬　丸】

あふ坂の知るも知らぬも かかるうき世に逢坂の、知るも知らぬもこれ見よや(蟬丸)

逢坂は京都と大津との間にあつて滋賀郡に屬し、街道に蟬丸祠があり、昔は關所かあつた。後撰集・雜部、蟬丸の歌に、「これやこの行くも歸るも別れては、知るも知らぬもあふ坂の關」。なほこの邊の文は、謠曲・蟬丸によつたものである。

雨による田蓑の島 これは雨による田蓑の島と詠ぜし蓑か(蟬丸)

謠曲・蟬丸に、「これは雨による田蓑の島と詠み置きつる、蓑と云ふ物か」。巣林子のこのあたりの文は、謠曲・蟬丸によつたものである。古今集・雜上部、紀貫之の歌に、「雨によりたみのの島をけふ行けば、なには隱れぬ物にぞありける」。

一粒の花の種は地中に朽ちず、終に千林の梢に上る(國性爺)

蟬丸に、「夫れ花の種は地に埋つて千林の梢に上り、月の影は天に懸つて萬水の底に沈む」。

御雨眼盲ひさせ給ひ、蒼天に月日の光なく、暗夜に燈火かげくらき(蟬丸)

謠曲・蟬丸に、「雨眼盲ひましまして、蒼天に月日の光なく、闇夜に燈暗うして」。

宣旨默止難くこれまで供奉せしめ候へども、何處に棄て申すべき、……王子は跡に唯一人琵琶を抱きて竹の杖、伏し轉び、さらばさらば聲のばかり(蟬丸)

謠曲・蟬丸に、「宣旨にて候ほどにこれまで御供申して候へども、……琵琶を抱きて杖を持ち、伏し轉びてぞ泣き給ふ」、とありてここの文總て謠曲の文と大同小異である。

***栴檀は二葉より香し** (吉野都女楠)(曾我五人兄弟)(千載集)

栴檀は既に嫩の時から香氣がある、賢者と仰がれるべき人物はその幼少な時から既に凡庸でない。謠曲・蟬丸に、「それ栴檀は二葉より香しと云へり」。觀佛三昧經に、「栴檀根芽漸漸生長、纔欲レ成レ樹、香氣昌盛」。

第一第二の絃は索索として、秋の風松を拂つて疎韻落つ、第三第四の宮は、我蟬丸の調も四つのをりからなりける村雨かな(蟬丸)

「索索」は物の消え盡きようとする貌。「疎韻」とは絕え絕えにして物淋しい響を云ふ。「四つの緒」は四絃のことで卽ち琵琶を云ふ、そして一緒を「折から」の「を」にいひかけたのである。「村雨」は叢雨であつて、一叢づつ强く降る雨卽ち白雨を云ふ。謠曲・蟬丸に、「第一第二の絃は索索として、秋の風松を拂つて疎韻落つ、第三第四の宮は、我蟬丸が調め四つのをりからなりける村雨かな」。和漢朗詠集・雜下部に、「第三第四絃冷冷」。

みさぶらひみかさ これは御侍御笠とよみし物よなう(蟬丸)

〔御侍御笠〕古今集・大歌所御歌の部に、「みさぶらひ御笠とまをせ宮城野の、木の下露は雨にまされり」と見えてゐる。「みさぶらひ御笠と申せ」とは、侍臣よ御笠を召し給へと申せの意である。蟬丸のこのあたりの文は謠曲・蟬丸に據つたのである。

世の中は兎にも角にも假の宿、傘一本に起き臥すも(蟬丸)

謠曲・蟬丸に、「世の中は兎にも角にもありぬべし、宮も藁屋も果てしなければ」。

わくや ここは所も逢坂山、關のわくやの竹杜、かかる浮世にあふ坂の(蟬丸)

山本九兵衛版七行本のここの文に「わくや」とあれど「わらや」(藁屋)の誤である。謠曲・蟬丸に、「ここは所も逢坂の、關の戸ざしの藁屋の竹の杖柱とも頼みつる父帝には捨てられて、かかるうき世にあふ坂の」と見えてゐる。巣林子この謠曲の文に據つたのである。

【千　手】

森の下風木の葉の雫、落人の身となり給ふ(嫗山姥)

千手に、「森の下風木の葉の露、おとされけるこそあはれなれ」。

【卒塔婆小町】

乞ひ得ぬ時は惡心また狂亂の心つきて、のう物給べのうお侍(西王母)

卒都婆小町に、「乞ひ得ぬ時は惡心また狂亂の心つきて、聲かはりけしからず、のう物給べのう御僧のう」。

これにつけても後の世を願ふぞ誠なりける、砂を塔と重ねて黄金の膚こまやかに、花を佛に手向けつつ悟の道に入らうよ(釋迦)

卒都婆小町に出てゐる文である。

三十三夂が質置いて心は鬼神と出たれども、土山の田村堂でつい平げてのけらるる（丹波與作）

謠曲・田村に、坂上田村丸が觀世音の擁護によつて勢州鈴鹿の鬼神を平げたことを作つてある。ここの文の「三十三夂」は觀世音の三十三身をもぢり、「心は鬼神と出たれども土山の田村堂でつい平げてのけらるる」は、田村丸が土山で鬼神を平げた緣によつて云うたので、「三十三身」「田村堂」「鬼神は殘らず討たれにけり」など田村にある文句である。

鈴鹿の鬼神退治　坂上田村麿勇力といひ神力の、念彼觀音の力によつて譽れ古今に鳴渡る、鈴鹿の鬼神退治の時雲を攀ぢたる旗の上・千手觀音の光を放つて・千千の矢先のかけまくも畏き御代の固めとなる（五人兄弟）

田村に、坂上田村麿が鈴鹿山の鬼神を退治することを記して、「あれを見よ不思議やな、味方の軍兵の旗の上に千手觀音の光を放つて虚空に飛行し、千の御手毎に大悲の弓には智慧の矢をはめて、一度に放せば千の矢先、雨霰と降りかかつて鬼神の上に亂れ落つれば、悉く矢先にかかつて鬼神は殘らず討たれにけり云云」と見えてゐる。

千手觀音の光を放つて、一度放せば千の矢さき、雨霰と降りかかつて、敵は殘らず討たれにけり、有難し有難しやこれ觀音の御引合せ（乘好）

田村に、「千手觀音の光を放つて、……一度放せば千の矢先、雨霰と降りかかつて、……鬼神は殘らず討たれにけり、有難し有難しや、……これ觀音の佛力なり」。

大慈大悲の春の花十惡の里に香しく、三十三身の秋の月五濁の水に影淸し（田村）

大慈大悲の觀世音菩薩が衆生を救ひ萬物を榮えしめるを春の花に喩へ、十惡の罪を犯せる人里をも濟度し給ふを花の香り渡るに喩へ、そして三十三身（その條を見よ）に化現し給ふ觀世音の光明を秋の夜の澄める月に喩へ、その光明が五濁（その條を見よ）の水に映つて衆生の濁りを澄し給ふの意であつて、この文は謠曲・田村に見えてゐる。

大悲の弓・智惠の矢　こ理をさして神通の鏑矢と號し、佛道にては大悲の弓智惠の矢とさとるなり（枹狩）

大悲とは一切の衆生をいたはりあはれんで、苦惱を滅除せうとされる佛菩薩の心を云ふ。大悲心のよく衆生の煩惱卽ち惡魔を降伏するを弓に喩へて大悲の弓といひ、佛菩薩の大智惠を矢に喩へて智惠の矢といふ。田村に、「大悲の弓には智惠の矢をはめて、一度放せば千の矢先」。

ちかた　千方といひし逆臣に仕へし鬼も、王位を背く天罰にて（田村）

〔千方〕天智天皇の時代に居つた反臣であると云ふ。謠曲・田村に、「千方といひし逆臣に仕へし鬼も、王位をそむく天罰にて」、とありて謠曲拾葉抄に、「世傳千方者、天智帝之叛臣也、千方役二使四鬼一、所レ謂金鬼風鬼水鬼隱鬼、在二伊賀伊勢之間一不レ順二王命一、於レ是勅二紀友雄一討二千方一、友雄乃往詠二和歌一送レ之、草も木も我大君の國なれば、いづくか鬼のすみかなるべき、諸鬼讀レ之、感而散去、千方失レ勢、友雄終討二滅之一」。

【壇　風】

台嶺の雲を凌ぎ、年功を積むこと一千餘箇日、屢身命を捨て熊野權現に賴みを掛けば、などか驗のなかるべき、一に矜羯羅二に制咤迦、三に倶利迦羅七大八大金剛童子（用文章）

「台嶺」は支那の天台山をいへど、ここは修驗者の峯入する深山を云つたもので、熊野の山を云つたのである。「矜羯羅制咤迦」はその條を見よ。「七大八大」は七大童子八大童子のことであつて、いづれも不動明王の眷族である。「倶利迦羅」はその條を見よ。ここの文は壇風に見えてゐる。

【竹　生　島】

月の輪も浮んで薄の波走る番兎の登り坂（會稽山）

熊の喉下にある新月形の白毛を月の輪と云へば、それに月輪をいひかけたのである。月下番兎が薄の生ひた坂を登るを云うたので、竹生島に、「月海上に浮んでは兎も波を走るか」、とあるを作りかへたのである。

走る兎　波の雄波をかきわけかきわけ走る兎の名所ぞや（薩摩歌）

月光海波に映じて金龍の躍るが如きをいふ。兎は玉兎卽ち月のことである。釋自休が竹生島に詣でた詩句に、「淸波月落兎奔レ浪」。竹生島に、「月海上に浮んでは兎も波を走るか」。

【土　蜘　蛛】

浮きたる雲の行方をば、風の心に任すらん（關八州）

土蜘蛛（喜多流）に、「浮きたつ雲の行方をば、風の心にまかすらん」。なほこのあたりの著想は土蜘蛛によつたものである。

愚かの人の有樣や、惱みをかくるも我がせこが、來べき宵なりささがにの、蜘蛛のふるまひかねてより、我がなす業としら絲の、くるや千筋の絲筋に、五體を搦め苦しめて（關八州）

土蜘蛛に、「愚かの仰せ候や、惱み給ふも我がせこが、來べき宵なりささがにの、蜘蛛のふるまひかねてより、知らぬといふに猶ちかづく、姿は蜘蛛の如くなるが、かくるや千筋の絲筋に、五體をつづめ身を苦しむる」。「我がせこが來べき宵なり云云」をも見よ。

是は院の御所に仕へ申す命婦にて候、扨も內侍例ならざる由聞し召し、唐の大和の妙藥を賜はり、自ら持つて參りしなり（關八州）

土蜘蛛に、「是は賴光の御內に仕へ申す小蝶と

を違へず、陽春の徳をそなへて南枝花はじめて開く」。

さすかひなには壽福の枝、をさむる手には不老の枝（反魂香）

手を伸べるを「さす」といひ、手を引くを「をさむる」といふ。共に舞の手の名。「かひな」は腕。「壽福」も「不老」も舞の語を以て枝を形容したのである。高砂に、「さすかひなには惡魔を拂ひ、をさむる手には壽福をいだき」。

しかいなみ　これ祝言の盃と一つ受けて元信に、妻の盃いただく作法儀式は堅うと、四海波腰元中が謠ひつれ（反魂香）　四海波靜にて國も治る時つ風（門出八島）

〔四海波〕高砂の四海波の段をさす、即ち、「四海波しづかにて國も治まる時つ風、枝を鳴さぬ御代なれや、あひに相生の松こそめでたかりけれ、げにや仰ぎても事もおろかや斯る世に、住める民とてゆたかなる、君のめぐみぞありがたき」をいふ。此の謠は婚禮などの祝宴の席で謠つたものである。門出八島のこの文は高砂の四海波の段の文に據つたのである。

住吉に立歸り歸朝を待ち申さんと、夕波の汀なる蜑の小舟を漕ぎ戻し、追風に任せつつ沖の方に出でにけりや、沖の方へぞ（國性爺）

高砂に、「住吉にまづ行きてあれにて待ち申さんと、夕波の汀なる海人の小舟に打乗りて、追風に任せつつ沖の方に出でにけりや、沖の方にいでにけり」。

＊せんしうらく　千秋樂を謠うて日出度う御立ち候へ（雜好）　千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延べ、げに相生の松の風枝をならさぬ御世なれや（根元曾我）　千秋樂は民榮え、萬歳樂には命を延ぶ、相生の松風颯颯の聲ぞ日出度けれ（蛙合戰）　千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ、相生の松風さつさつ（薩摩歌）

〔千秋樂〕盤渉調の雅樂の曲名。萬歳樂は平調の樂である。高砂に、「千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ、相生の松風颯颯の聲ぞ樂しむ」。

高砂の尾上の金も皆になり、また借錢に帆を上げて、波の淡路や見る影なき、貧になる尾の裏借屋、はやすぎはひに唐人の行列賣と罷成る（大職冠）

高砂に、「高砂の尾上の鐘の音すなり、……此浦船に帆をあげて、……波の淡路の島陰や、遠くなる尾の沖過ぎて、はや住の江に着きにけり」、とあるを作りかへたのである。

高砂や此浦船に帆をあぎよよ、月諸共に出舟や、はや住の江の（大鼓）

高砂に、「高砂や此浦船に帆をあげて、月諸共に出でしほの、……はや住の江に着きにけり」、とあるを作りかへたのである。「あぎよよ」はその條を見よ。

【竹　雪】

吳山にあらねども笠の雪の重さよ（女夫池）

吳の地を通る時は寒天雪を降らして、笠の重くなるまで積つたと云ふことがあるが、此處は吳山ではなけれども、笠に降り積る雪の重きことよの意。竹雪に、「吳山にあらねども笠の雪の重さよ」。葛城に、「笠は重し吳山の雪」。詩人玉屑に、「是山皆有レ寺、何所不レ爲レ家、笠重吳天雪、鞋香楚地花」。（蘇省あたりが吳地で、湖廣あたりが楚地で、兩地相接してゐたのである）。

【忠　度】

あまよのものがたり　心は古にまよふ雨夜の物語申さん爲に、魂魄にうつりかはりて來りたり（千載集）

〔雨夜の物語〕雨夜は消暗くして踏迷へば、迷ふ雨夜といふたのである。雨夜の物語とは、源氏物語・帚木の卷に、光源氏と馬頭との女品定めの名高い文あれば、それでいうたので、雨は添へたまで。忠度に、「覺むる心は古に、迷ふ雨夜の物語申さん爲に、魂魄にうつりかはりて來りたり」。

花をも憂しと捨つる身の、月にも雲は厭はじ（持統天皇）

花をも憂しと捨てて心を留めぬ身は、月に雲がかかつて光を掩ふも厭ふ心もないと、更に執着なき淡き遁世の身をいうたのである。この文は忠度に出てゐる。

蘭菊の狐川　心の花か蘭菊の狐川にぞ着き給ふ（千載集）

白氏文集・第一。凶宅詩に、「梟鳴二松桂枝一、狐藏二蘭菊叢一矣」とあるを應用して狐に狐川をいひかけたのである。狐川は京都の下海印寺村との間を流れて水垂村の南で淀川に落ちる川の名。忠度に、「心の花か蘭菊の狐川より引返し」。

【田　村】

げにや安樂世界より、今この娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、仰ぐも高し（曾根崎）

「安樂世界」「娑婆」「示現」はその條を見よ。田村に、「げにや安樂世界より、今この娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、仰ぐもおろかなるべしや」。

げんぢやくおほんにん　兩足摑んで二つにさつと摑み裂き、雲井遙に入り給ひ、終にげんぢやくおほんにんの敵は亡び失せにけり（天神記）

〔還著於本人〕法華經・普門品（觀音經）に、「咒詛諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音力、還著於本人」とありて、人を咒詛し、また諸毒藥を以て害せうとする者あつても、觀世音を祈念すればその功力によつて、其禍は還つて人を咒詛したり諸毒藥を以て害せうとする本人の身の上に及ぶとの意。田村に、「誠に咒詛諸毒藥、念彼觀音の力をあはせて、すなはち還著於本人の敵は亡びにけり」。

り來る東が白む、五更の一點鳥もばらばら鐘も鳴る、數は六つの衢の聲聲、又立寄つて門の戸を、現か夢かあけやらぬ、恨みを殘して歸りけり（女夫池）

天鼓に、「夜も更けて夜半樂にもはやなりぬ、人間の水は南、星は北にたんだくの、……、五更の一點鐘も鳴り、鳥は八聲のほのぼのと、夜も明け白む時の鼓、數は六つの衢の聲に、又打ち寄りて現か夢か、……、幻とこそなりにけれ」。

【東　北】

かんていのまつのかぜ 澗底の松の風、讀誦の經におとづれて猶も殊勝ぞまさりける（大職冠）

〔澗底の松の風〕谷底を吹き渡る松風、東北に、「澗底の松の風、一聲の秋を催して」。

櫻花散りても終に根に歸る（嫗山姥）

落花土となつて終に根に歸る。東北に、「花は根に鳥は舊巣に歸るぞとて」。

【融】

げにや古へも、月には千賀の鹽竈の、浦曲の景色眺めん（融大臣）

融に「げにや古へも、月には千賀の鹽竈の、浦曲の秋も半にて、松風も立つなりや」。なほこのあたりの文は謠曲・融の改作である。

是は東國方より出でたる僧にて候、我いまだ都を見ず候程に、此度思ひ立ち都に上り候、ゆふべを重ね朝毎の〱宿の名殘も重なりて、都に早く着きにけり（融大臣）

融に、「是は東國方より出でたる僧にて候、我いまだ都を見ず候程に、此度思ひ立ち都に上り候、……、夕べを重ね朝毎の、宿の名殘も重なりて、都に早く着きにけり」。

融の大臣の君が鹽釜の浦を都に堀江こぐ（曾根崎）

河原左大臣融の君が京の六條河原に邸を造り、池を掘り水を湛へ、毎月潮水三十石許を運び入れて、陸奥國鹽釜の浦の景を移し、海人の鹽竈に煙を立てて慰んだと云ふ故事を引いて、「堀江漕ぐ」に書きつづけたのである。融大臣のこの故事は謠曲・融にも見えてゐる。「大融寺」をも見よ。

また水中の遊魚は釣針と疑へり、雲上の飛鳥は弓の影とも驚けり、一輪も下らず萬水とても昇らねば（國性爺）

三日月は其形釣針の如く、また弓の如ければ、遊魚は釣針かと疑うて怖れ、飛鳥は弓の影かと見て驚く。月影は地に影を投ずれども、月そのものは下るにあらず、水蒸氣は天に昇れども、水そのものは昇るのではないの意。一輪といひ萬水といふも一と萬とを對していうた文飾で、月と水とのことである。融に、「又水中の遊魚は鈎と疑ふ、雲上の飛鳥は弓の影とも驚く、一輪も降らず萬水も昇らず」とあるに據つたのである。

見え渡る山山は皆名所にてぞ候らん、御教へ候へかし、……、月の都に入り給ふ御粧ひこそめでたけれ（融大臣）

謠曲・融に「見え渡りたる山山は皆名所にてぞ候らん、御教へ候へ、……、月の都に入り給ふ粧ひ、あら名殘惜しの面影や」とある文を添削したのである。併せ見よ、

三日月なりの目元の釣針（關八州）

融に、「蛾眉の色に三日月の、影を舟にも譬へたり、又水中の遊魚は釣と疑ふ」。

持つや田子の棒 汲んで擔うて持つや田子の棒（今宮）

融に「汐を汲まんとて持つや田子の浦、東からげの汐衣」とある文句に據り、田子に擔桶をいひかけたのである。

【難　波】

千秋萬歲の千箱の玉 御門の門はたとさす音笑ふ音、奧は千秋萬歲の千箱の玉とぞ謠ひける（女夫池）

難波に、「いやましに運ぶ御寶の、千秋萬歲の千箱の玉を奉る」。

唐土人の褒め言葉、咲くや此花今はとて（卯月紅葉）

「唐土人」とは王仁をいうたのである。王仁が仁德天皇の聖德を頌して、「難波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花」と詠じたといふ。難波に、「今ぞ顯はす難波津に、咲くやこの花と詠じつつ、位をすすめ申せし百濟國の王仁なれや」。

【二　度　掛】

虎嘯けば風起る（國性爺） 龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風騷ぐ（小栗判官）

二度掛に、「龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風となる」。「龍吟ずれば云々」をも見よ。

龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風騷ぐ（小栗判官）（國性爺後日）

二度掛に、「龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風となる」。易の文言に、「雲從レ龍、風從レ虎」。古樂府に、「虎嘯谷風起、龍興景雲浮」。淮南子に、「虎嘯而谷風至、龍擧而景雲屬」。

【野　守】

有難し慈悲萬行の春の花は、三笠の山の白雲、五重唯識の紅葉葉は、春日の里の唐錦、神のまにまに影賴む（天智天皇）

野守に、「有難や慈悲萬行の春の色、三笠の山に長閑にて、五重唯識の秋の風、春日の里に音づれて、誠に道も直なるや、神のまにまに行きかへり、運ぶ歩みも積る老の、榮行く御影仰ぐなり（仰ぐなりは喜多流には賴むなりとある）とあるに據つたのである。

慈悲萬行とは春日明神の菩薩號である。奈良名所八重櫻（延寶六年刊）卷五、春日四所明神の條にも、「異說に、春日の祠初めは山上に有て、參詣のたよりあしきゆゑ、仁皇五十代桓

中す女にて候、扨も穎光例ならず惱ませ給ふにより、典藥の頭より御藥を持ち、只今穎光の御所へ參り候」。なほこのあたりの文は土蜘蛛に據つてゐる所が多い。

七尺餘の蜘蛛の形千筋の絲を繰懸け（賀古敎信）

土蜘蛛に、「七尺許の蜘蛛となつて我に千筋の絲を繰懸けしを」。

土も木も大君の國なれば、いづくか鬼のやどりなる（闔八州）

土蜘蛛にある歌である。太平記には、「草も木も我大君の國なれば、いづくか鬼のやどりなる」と見えてゐる。

汝知らずや我そのかみ、南閻浮州に蟠り、葛城山に年を經る土蜘蛛の精靈なり、大日本を橫領し魔界になさんと（闔八州）

土蜘蛛に「汝知らずや我むかし、葛城山に年を經し土蜘蛛の精魂なり、なほ君が代に障りをなさんと」。

わがせこが來べき宵なりささがにの、蜘蛛のふるまひかねてより（闔八州）

「わがせこ」は吾夫子の義、我兄の君ともいふ。「ささがに」はその條を見よ。往昔蜘蛛の振舞を見て待つ人の來べき占をした。ここの文は土蜘蛛に、「我せこが來べき宵なりさざがにの、蜘蛛のふるまひかねてより云云」とあるに據つたのである。

【定家】

式子の君の浮名立つ、定家葛の這ひかかる（兼好）

定家に、「式子内親王始は賀茂の齋の宮に備はり給ひしが、程なく下り居させ給ひしを、定家の卿忍び忍びの御契淺からず、其後式子内親王程なく空しくなり給ひしに、定家の執心葛となつて御墓にはひまとひ、互の苦しみ離れやらず」と見えてゐる。

【天鼓】

同じく寶の鼓をすゑ、絲竹呂律の聲に、法事をなして管絃講、御弔ぞ有難き、頃は初秋の空なれば、はや三伏の夏たけ、風一聲の秋の空、夕月の色も照り添ひて、見ぬ唐も（天鼓）

謠曲・天鼓に、「同じく天の鼓をすゑ、絲竹呂律の聲聲に、法事をなして亡き跡を、御弔ぞ有難き、頃は初秋の空なれば、早三伏の夏たけ、風一聲の秋の空、夕月の色も照り添ひて、水滔滔として」。

けしたるもの　不思議やな、はや更け過ぐる宵月にけしたる者の見えたるは、如何なる者ぞ名を名のれ（天鼓）

怪しくてあるもの。妖怪。謠曲・天鼓に、「不思議やな、はや更け過ぐる水の面にけしたる人の見えたるは、如何なるものぞ名を名のれ」。

たんだく　人界の南に流れ行く水の、星は北にたんだくの天の海づら（天鼓）

「ていだく」（手抱）の轉である。兩手を前に合せて拜すること、即ち拱するをいふ。廣韻に、「拱、手抱也矣」。增韻に、「兩手合持曰レ拱矣」。ここの文は、人間界の水は南に向つて流れ行き、衆星は皆北極星の方に向つて拱する意である。謠曲・天鼓に、「人間の水は南、星は北にたんだくの、天の海づら雲の波立添ふや」。

地を走る獸・空をかける翼まで、親子のあはれ知らざるや、況んや佛性同體の人間、子と生れ親となる（兼好）

天鼓に、「地を走る獸・空を翔る翼まで、親子のあはれ知らざるや、況んや佛性同體の人間、此生に此身を浮べずは」。「佛性同體」はその條を見よ。

傳へ聞く、孔子は鯉魚に別れ、思の火をば胸に焚き、白居易は又我子を先立てて枕に殘る藥恨む（歌念佛）

天鼓に、「傳へ聞く、孔子は鯉魚に別れて、思の火を胸に焚き、白居易は子を先立てて枕に殘る藥を恨む」。史記・孔子世家に、「伯魚年五十、先二孔子一矣」。

***はくきよい**　白居易に泣かせたき（聖德太子）　白居易は又我子を先立てて枕に殘る藥恨む　歌念佛）

〔白居易〕字は樂天、香山居士と號す、唐宣宗の大中元年に七十五歲で卒した有名な詩人である。その詩文は自然の風致を備へ、溫厚和平である。聖德太子繪傳記のここの文につては、「しらべ合せし三つの緖云云」を見よ。五十年忌歌念佛のここの文は天鼓に據つたもので、「傳へ聞く孔子は鯉魚云云」を見よ。

水滔滔として波悠悠たり、あら有難の御弔ひやな、勅を背きし天罰にて又に伏したる身にしあれば、後の世までも苦しみの海に沈み波に打たれて、呵責の責もひまなかりしに、思はざる外の御弔に浮び出でたる有難さよ（天鼓）

謠曲・天鼓に、「水滔滔として波悠悠たり、あら有難の御弔やな、勅を背きし天罰にて瀘水に沈みし身にしあれば、後の世までも苦しみの海に沈み波に打たれて、呵責の責もひまなかりしに、思はざる外の御弔に浮び出でたる瀘水の上」とあるに據つたのである。

夜遊の舞樂も時去つて、五更の一點鐘も鳴り、鳥は八聲のほのぼのと、夜も明け白む時の鼓、數は六つの巷の聲に、また打寄りて現か夢まぼろしならぬ姿を見よ（天鼓）

夜遊の舞樂も時移つて、午前四時頃となり曉方の鐘も鳴り、鷄鳴夜明けを告げて東天明け白み、六つ時を報ずる鼓の所に進み、六道の分れ路にその形夢幻でない姿を見よの意。この文は謠曲・天鼓に見えてゐる。

夜も更け星も流るる、御溝の水は南、我は北へと行く月も、西に入

雲帶に似て山の腰をめぐる（國性爺）

このあたりの文は白樂天に據つたものである。江談抄・卷四、都在中の詩に、「白雲似レ帶圍二山腰一、青苔如レ衣負二巖肩一、年年別思驚二秋雁一、夜夜幽聲到二曉鷄一」。

東海の波路遙に行く舟の、跡に入り日の影殘る、雲の旗手の天つ空、月又出づるそなたより、山見えそめて程もなく、蝦夷が千島に着きにけり（源義經）

白樂天に、「東海の波路遙に行く舟の、跡に入り日の影殘る、雲の旗手の天つ空、月又出づる其方より、山見えそめて程もなく、日本の地にも着きにけり」。

西の海青きが原の波間より顯はれ出でし住吉の神（加増曾我）

白樂天の文である。「山影のうつるか云々」を見よ。續古今集・第七・神祇部の歌に、「西の海やあをきが原の汐路より、顯はれ出でし住吉の神」。

山影のうつるか水も青き海の、……

鹿島三島諏訪（加増曾我）

白樂天にある文である。

***らくてん**　速に浦の波立ち歸り給へ樂天、住吉現じ給へば（加増曾我）

〔樂天〕唐の白樂天をいふ。ここの文は、唐の詩人白樂天が我國に渡らうとした際、住吉明神現じ給うて白樂天を逐返したことを作れる謠曲・白樂天中の文である。「山影のうつるか水も云々」を見よ。

【羽　衣】

天の羽衣まれに來て、撫づとも盡きぬ大石の（釋迦）

天の羽衣の柔いものでたまたま來て撫でても、更に盡きる期なき大石のといふ意。奥儀抄に、「經曰、四十里四方の岩を三年に一度梵天より下りて、三銖の衣にて撫でつくしたるを一劫といへり」。羽衣に、「君が代はあまの羽衣まれに來て、撫づとも盡きぬ巖ぞと」。拾遺集・卷五、賀の部、題知らず・よみ人しらずの歌に、「君が代は天の羽衣まれに來て、撫づとも盡きぬ巖ならなむ」。

***たまかつら**　かの天人の憂き思ひ、羽なき鳥の如くにて、天上せんにも羽衣なし、地にまた住めば下界なり、とやせんかくや詮方も、涙の露のたまかつら・かざしの花もしをしをと（枹狩）

〔玉鬘〕玉を飾つた鬘。「涙の露のたまかつら」は、涙の露の玉に玉鬘をいひかけたのである。ここの文は羽衣に、「今はさながら天人も羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界なり、とやあらんかくやあらんと悲しめど、はくれう衣を返さねば、力及ばす詮方も涙の露の玉かつら、かざしの花もしをしをと」、とあるに據つたのである。

なうなう其太刀な取り給ひそ、それはいはれの候ぞや（枹狩）

羽衣に、「なうその衣はこなたのにて候、何しに召され候ぞ」、とあるを作りかへたのである。

枹狩剱本地のこの後の文にも羽衣から出た所が多い。

撫づとも盡きぬさざれ石　七度返す小忌衣、撫づとも盡きぬさざれ石、巖となりて松高き、今に傳ふる源氏の御代（津戸三郎）

衣で石を撫でても永刧盡きることがないといふ故事で、萬代を祝ふ詞である。瓔珞經に、「譬如三一里石乃至十里石一、方正等以二淨居三銖衣一、三年一拂二盡此石一、名二一小劫一矣」。羽衣に、「君が代は天の羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌」。

三保の松原に天の羽衣盜まれし彼の天人の憂き思ひ（枹狩）

三保の松原で天女が漁夫に羽衣を奪はれて悲んだことが羽衣に見えてゐる。枹狩剱本地のこのあたりの文は羽衣に據つたのである。

【鉢 の 木】

ああ降つたる雪かな、いかに世にある人のさぞ面白う見給ふらん、……あら面白からずの雪の日やな（最明寺殿）

世にある人とは、世に用ひられて時めける人をいふ。

この文は、鉢の木にあるを引用したのである。

上野や佐野の船橋取放れし（最明寺殿）

船橋は、船を繫ぎ上に板を並べて架した橋、船橋は取放されるにより、「取放れし」の序に用ゐたのである。萬葉集・卷十四、「かみつけぬ佐野の舟橋取放し、おやはさくれどわはさかれがへ」。このあたりの文は鉢の木に據つたのである、併せて見よ。

***くばう**　自然鎌倉に御上りあらばお尋ねあれ、甲斐甲斐しくはなけれども公方の緣になり申さん（最明寺殿）

〔公方〕公家の方といふを略した語で、古くは朝廷をいうたのが轉じて將軍家の別稱となつた。武家の權勢熾なにつれて、鎌倉武士は北條氏を尊び僭して公方と稱した。太平記・鹽飽入道自害の條に、「されば御邊は末私の普族にて公方の御恩をも蒙らねば」とあるは、北條家を指して公方といふたのである。下りて足利義詮以後になつては將軍を公方樣と稱するのである。鉢の木に、「自然鎌倉に御上りあらばお尋ねあれ、けうがる法師なり、かひがひしくはなけれども公方の緣になり申さん」。

こしかた　行方定めぬ道なれば、こしかたも何處ならまし（最明寺殿）

普通には過ぎ來し方の義なれども、ここの文はこれからこして行くべき先先の道を云うたのである。鉢の木に、「行方定めぬ道なれば、こしかたも何處ならまし」。

駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮（最明寺殿）

このあたりの文は鉢の木を作替へたものである。新古今集・冬部に、「百首歌奉りし時、藤原定家朝臣」としてこの歌が載つてゐる。

佐野の舟橋　かみつけや佐野の舟橋とりはなれし本領に安堵して歸る

武天皇延暦二十三年に空海和尚今の所へ改めうつし、慈悲萬行大菩薩と號し奉る」と見えてゐる。

五重唯識とは法相宗興福寺の根本教義をいうたものである。法相宗の根本教義は唯識中道の妙理を論せしめるにある。この妙理を要じるに、遣虚存實識、捨濫留純識、攝末歸本識、隱劣顯勝識、遣相證性識、以上の五重がある。

【放下僧】

歩を運ぶ神垣や、隔てぬ願頼まん、……月の爲には浮雲の、種と心やなりぬらん(用文章)

放下僧によつたのである。

落ちくる瀧の音羽の嵐に、地主の櫻はちりちり(女楠)(用文章)

放下僧にある文である。「地主の櫻」はその條を見よ。

面白の花の廓や、世界の色のうはもり、出口には柳招いて、入り來る客の揚屋の騒ぎに、素いお客はちりぢり、西の洞院中の堂寺、ぞめかばぞめけ上の下の、町中の町の家並、可愛ごかしに粋が身を食ふ、根引身請は金がはばする、口舌諸譯は幇間請込む、年增の妓は紋日に追はるる、禿は遣手を怖がる、げに誠中戸小宿でちよつきりちよつと、間夫を切らるる、乘換への女郎の恨みの、夜夜を重ねて附け廻したる(女夫池)

放下僧に、「面白の花の都や、筆に書くとも及ばじ、東には祇園清水、落ち來る瀧の音羽の嵐に、地主の櫻はちりぢり、西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ水車の輪の、りせんせきの川波、川柳は水にもまるる、しだり柳は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる、都の牛は車に揉まるる、茶臼は挽木に揉まるる、げに誠忘れたりとよ、こきりこは放下に揉まるる、こきりこの二つの竹の、世世を重ねて、うち治まりたる御代かな」、とあるの作り替である。「西の洞院」も「中の堂寺」も共に京都島原遊廓の町名。「間夫をきらるる」は「まぶ」の條を見よ。

面白の花の都や、筆に書くとも盡きぜし、東には祇園清水落ち來る瀧の、音羽の嵐に地主の櫻はちりぢり、西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ水車の輪の、井堰井堰の川波川柳は水に揉まるる、野邊の薄は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる、都の牛は車に揉まるる、茶臼は挽木挽木に揉まるる、げにまこと忘れたりとよ、こきりこは放下に揉まるる、こきりこの二つの竹の、よよを重ねて打治まりたる御代かな(用文章)

「地主の櫻」は京の清水境内地主權現社のある所で、櫻の名所である。「法輪」は西山の法輪寺。「嵯峨の御寺」は嵯峨の清涼寺。「ふくら雀」「こきりこ」「放下」はその條を見よ。「よよ」は節節に世世をかけたのである。ここの文は放下僧(喜多流)の文である。但「盡きせじ」は「及ばじ」となり、「野邊の薄は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる」は「ふくら雀は竹に揉まるる、野邊の薄は風に揉まるる」となつてゐる。

茶道は挽木にもまるる、實にまこと忘れたりとよ門の盛砂、小者は箒にもまるる(脊庚申)

放下僧に、「茶臼は挽木にもまるる、實にまこと忘れたりとよ、こきりこは放下にもまるる」とあるを作替へたのである。

法輪嵯峨の御寺、まはらばまはれ水車の輪の、りせん石の川波、川柳は水に揉まるる．しだり柳は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる、都の牛はくるくる車に、茶臼は挽木に揉まるる(兼好)

「ほふりん」「さがのおてら」(以上地名部)「りせんせき」「ふくらすずめ」の各條を見よ。放下僧に、「西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ水車の輪の、りせんせきの川波、川柳は水に揉まるる、しだり柳は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる、都の牛は車に揉まるる、茶臼は挽木に揉まるる」。

りせんせき　**水車の輪の、りせんせきの川波・川柳は水にもまるる**(兼好)

「りんせんゐせき」(臨川堰)の略。ここの文は放下僧に出てゐる。謠曲拾葉抄に、「りせん石。嵯峨に臨川寺とて有、夢窓國師の開基なり、此所水石の景象他に勝れたり、今臨川寺の前に石堰あり、臨川石堰といふを略してりせんせきとはいふなり、ゐせきといふは山川にくひを打て石を積重ね水をせくをいふなり」。「ほふりんさがのおてら云々」を見よ。

【白樂天】

靑きが原の涙間より顯はれ出でし(天智天皇)(加増曾我)

白樂天に出てゐる文である。

巖の肩の苔衣(融大臣)

白樂天に、「靑苔衣を帶びて巖の肩にかかり」。

花月がはらの波間よりあらはれ出でし此悴、浮名はぱつと高砂の尾上のかねも皆になり(大織冠)

白樂天に、「靑きが原の波間より顯はれ出でし住吉の神」とある作り替である。「高砂の尾上云々」はその條を見よ。

苔衣着たる巖はさもなくて、衣着ぬ山の帶をするかな(國性爺)

苔を衣に着てゐる巖は帶を纏はないで、却つて衣着てゐない裸山が白雲の帶をしてゐるわいの意。この歌は白樂天に見えてゐる。なほこのあたりの文は謠曲・白樂天によつたものである。併せ見よ。(江談抄卷四・都在中の歌に、「苔衣着たる巖はまろびけん、衣着ぬ山の帶するはなぞ」。日本風土記に、「苔衣着たる巖は寒からで、衣着ぬ山に帶をするかな」)。

靑苔衣を負ひて巖の肩にかかり、白

りは」、とある歌を鉢木に引用して、「ただ頼め我世の中にあらんほど」としてある。巣林子もこれに據つたのである。一首の意は、天下の民草は我が世の中にあらう限は深く我を頼みにせよ、必ず成佛を得さすであらうとの意。非同業平河内通のここの文に「千手の誓」とあるは、清水寺の觀世音は千手觀世音なればしかいうたのである。雍州府志・寺院門上（愛宕郡）に、「清水寺。寶龜十一年坂上田村丸草二創伽藍一、安二置八尺千手觀音一」と見えてゐる。

【芭　蕉】

風吹きしのぐ忍草、しのぶとすれど古への、花はあらしの頤に、今日の寒さをくひしばる（夕霧）

芭蕉に、「身は古寺の軒の草、忍ぶとすれど古へも、花はあらしの音にのみ、芭蕉葉の云云」。

芭蕉に落ちて松の聲　痛はしとや思しけん、姫君我を忘れつつ、芭蕉に落ちて松の聲、あらおいとしやと宣へば（伊豆日記）

芭蕉に、「芭蕉に落ちて松の聲、あだにや風の破るらむ」とあるに據つたのである。松を吹き渡る風芭蕉を吹散して徒に其葉を破るを、須朝の身の上に引合せ同情してかくいうたのである。

芭蕉葉の夢

「よしや思へば定めなき云云」を見よ。

恥かしや故郷の道もさやかに照る月の影はさながら庭の面、よしなき芭蕉の偽れる姿見えし上からはうかうか戻る所でなし（伊豆日記）

芭蕉に、「恥かしや歸るさの道さやかにも照る月の、影はさながら庭の面の雪の中の、芭蕉の偽れる姿の誠を見えば如何ならんと思へば鐘の聲」。

水に近き樓臺はまづ月を得るなり、……置き所なき身の果や（伊豆日記）

芭蕉に出てゐる文である。但し芭蕉にこの末文「置き所なき蟲の音の」となつてゐる。事文前集・薦舉門、蘇麟の詩に、「近レ水樓臺先得レ月、向レ陽花木易レ爲レ春」。水邊の樓臺は月影早く見られ、南面なる木は花早く開けて春となり易いとの意である。

夢現とも分かざるに、女性の月に見え給ふは如何なる人にてましますぞ（伊豆日記

芭蕉にある文である。但し芭蕉には「女性」は「女人」となつてゐる。

よしや思へば定めなき世は芭蕉葉の夢の中に、牡鹿の鳴く音は聞きながら驚きあへぬ人心、思ひいるさの山はあれど（伊豆日記）

芭蕉に出てゐる文である。とても轉變無常のこの世はさながら芭蕉葉の夢の如くで、秋に鳴く牡鹿の音の哀れなるを聞きながらもなほ無常を悟らねば敢て驚きもせず、執着の念にとらはれるものもあれどの意。「芭蕉葉の夢」は列子に出てゐる故事である。列子・穆王篇に、「鄭人有下薪二于野一者上、遇二駭鹿一撃而斃レ之、恐二人見一レ之也、藏二諸隍中一覆レ之以レ蕉、僞而失二其處一、遂以爲レ夢、順レ途而詠二其事一、傍有二聞者一取レ之歸、告二室人一曰、薪者夢得レ鹿不レ知二其處一、吾今得レ之、彼直眞夢者矣」。「思ひいるさの山」とは、思入るに分入る山をいひかけたので、古歌の句である。金葉集・卷七、戀上部の歌に、「こひわびて思ひいるさの山のはに、出づる月日の積りぬるかな」。

【班　女】

秋よりさきに必ずと、夕の數はかさなれど、來ぬ夜つもりの恨めしや（女楠）

秋の來ぬ以前に必ずお訪ねすると語らうと別れたに、その後幾多の日を經過すれども、遂に訪ひ來る夜なく恨めしいわいの意。班女に、「秋より先に必ずと、ゆふべの數は重れど、あだし言葉の人心」。

うたてやなあれ御覽ぜよ　うたてやなあれ御覽ぜよ、今まではゆるがぬ梢と見えつれども、風の誘へばこそ一葉も散るなり、たまたま心すぐなるを、狂へ狂へと笑ふ人こそ、風狂じたる秋の葉の、心もともに亂れ戀の（西王母）　うたてやなこれ御覽ぜよ、今まで搖がず折つてかたげし此柳、風の誘へばこそ一葉も散るなれ、たまたま心すぐなるを、戀こそ我をくる狂はすれ、風狂じたる秋の葉の（女楠）

班女に、「うたてやなあれ御覽ぜよ、今まではゆるがぬ梢と見えつれども、風のさそへば一葉も散るなり、たまたま心すぐなるを、狂へと仰せある人こそ、風狂じたる秋の葉の、心も共に亂れ戀の」。

けいろうのやま　逢初めし夜のむつごとも語りつくさぬ鐘のこゑ、けいろうの山に響きて森の小鳥八こゑの鳥（女楠）

「雞籠山」曉の山の意。本朝文粹・八に、「雞籠之山欲レ曉」と見えて、雞籠は欲曉の語から出たのである。班女に、「さびしき夜半の鐘の音、雞籠の山に響きつつ、明けなんとして別れを催し」。

翠帳紅閨に枕並べし閨の内、馴れしふすまの夜すがらも、四つ門の跡夢もなし、さるにても我夫の、秋より先に必ずと、あだし情の世を頼み（冥途飛脚）

「翠帳紅閨」は、翠の帳を掛け紅のしきねを敷いた美麗な閨をいふ。「四つ門」はその條を見よ。落葉集（題簽・松の落葉、元祿十七年刊）卷二、稻荷塚四つ門の唄に、「翠帳紅閨に枕並ぶる床の内、馴れしねまきの夜すがらも、四つ門の跡夢もなし、さるにても我つまの、秋より先に必ずと、あだし言葉の人心、……」。班女に、「翠帳紅閨に枕並ぶる床の上、馴れしふすまの夜すがらも、同穴のあと夢もなし」。

そなたこそ狂人よ、我は固より氣違の零さぬ水のあはれを知らば（女楠）

ぞ嬉しかりける（最明寺殿）

佐野では舟を繋いで上に板を敷並べて橋にしたのがある、この橋はいつにても取離されるにより、「取離れし」の序に置いたのである、今まで我手を離れて他人の領地となつてゐたのを云ふ。このあたりの文は鉢の木に據つたのである、鉢の木の文と併せ見よ。

＊**しやもん**　これは一所不住の沙門にて候（最明寺殿）

〔沙門〕梵語（Sramana）である、勤息と譯す、善を勤め惡を息める義である。佛道を修める者の稱である。出家して…。阿含經に、「捨二離恩愛一、出家修レ道攝二御諸根一、不レ染二外欲一、慈心一切無レ所二傷害一、遇レ樂不レ忻逢レ苦不レ戚、能忍如レ地、故號二沙門一」。鉢木に、「これは一所不住の沙門にて候」。なほこのあたりの文は、鉢木に據つたものである。

＊**すのこ**　今日の大雪前へも後へも參り難し、簀子の端にただ一夜頼みまする（最明寺殿）

〔簀子〕すがきで造れる緣。ここの文は、鉢の木に、「餘りの大雪に前後を忘じて候ほどに、一夜の宿を御かし候へ」とあるを作りかへたのである。

だいごみ　粟の飯とは日本一のだいごみ、御馳走に預りたし（最明寺殿）

指添拔いて橫四五寸ずつと切つて口に入れ・だいごだいごとほめ給へば（酒呑童子枕言葉）

〔醍醐味〕酪を精製したものを蘇といひ、蘇を精製したものを熟蘇といひ、熟蘇を更に精製したものを醍醐と云ふ、以て極上の味の意に云ふ。俚言集覽に、「醍醐味。大王膳とも云、牛酪にて製したる極上の膳を醍醐と云ふ」。「醍醐醍醐」とあるは醍醐味醍醐味の略である。最明寺殿百人上﨟のこのあたりの文は、鉢の木を作りかへたものである、併せて見よ。

＊**たじやうのえん**　私も其下に暫しが程の雨やどり、こなさんも其通り、其雨どひを一樹の陰、他生の緣でござんす（生玉）

〔他生緣〕この世ならぬ因緣の義、幾多生死の間に結んだ因緣を云ふ。諺に、袖振合ふも他生の緣と云ふ。鉢の木に、「假初ながら値遇の緣、一樹の蔭のやどりも此世ならぬ契なり、それは雨の木蔭」。說法明眼論に、「宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻、……皆是先世結緣」。

ただ頼め我世の中にあらん限は（最明寺殿）

このあたりの文は鉢の木に據つたのである、併せて見よ。新古今集・卷二十に、「淸水觀世音の御歌となむいひ傳へたる」と詞書ありて、「なほ頼めしめぢが原のさしもぐさ、われ世の中にあらんかぎりは」。

＊**はやうち**　今度の早打に上り集る兵（最明寺殿）

〔早打〕上の命令を傳へる早飛脚。このあたりの文は鉢の木に據つたのである。

ほそぬのごろも　袂も朽ちて袖狹き細布衣陸奧の、けふの寒さを如何にせん（最明寺殿）

狹布の里（今陸中國鹿角郡の內にあつた里の名）から産出する袖狹き布衣を著て、寒さに凍えるあさましさをどうしたらよい事であらうの意。狹布に今日をいひかけたのである。このあたりの文は鉢の木に據つたものである。

＊**ほんりやう**　まづまづ沙汰の始めには、常世が本領佐野の莊三十餘鄕返し與ふるところなり（最明寺殿）

〔本領〕鎌倉時代開發した私領、卽ち古くから持ち傳へた領地。本知。舊封。沙汰未練書に、「本領者爲二開發領主一、給二代代武家御下文一、所領田畠等事也」で、最明寺殿百人上﨟のこのあたりの文は鉢の木に據つたのである。

松はもとより烟にて（最明寺殿）

松は花粉風に吹かれて烟のやうに見えて散亂するよりいふ。或はまた松は脂多くして薪松明などに用ひ、燃え易き木なる故にかくいふともいふ。このあたりの文は鉢の木に據つたのである。

窓の梅の北面は雪封じて寒きにも（最明寺殿）

北方は日蔭だによつて雪消えず、窓前の梅樹も雪に封ぜられて春暖を覺えない。和漢朗詠集・春部、藤原篤茂の詩に、「池凍東頭風度解、窓梅北面雪封寒」。このあたりの文は鉢の木に據つたものである。

見じといふ人こそ憂けれ山里の折かけ垣の梅（最明寺殿）

山里の賤屋に枝折り曲げて作つた垣の中にでも、梅花あらば美しいによつて立とどまつて眺めたいものだ、それを見まいとする人こそ風流心の無い憂い人だの意。菅家後集に、「山里の折かけ垣の梅の花、いかなる人の見じといふらむ」。最明寺殿百人上﨟のこのあたりの文は、鉢の木に據つたのである。

雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を被て立つて徘徊す（最明寺殿）

「鵞毛」は鵞鳥の羽毛である。「鶴氅」は鶴の羽毛を織込んだ衣である。氅は字典に、「氅折レ羽爲二裘衣之屬一」とある。最明寺殿百人上﨟のこのあたりの文は鉢の木に據つたものである。白氏文集に、「雪似二鵞毛一飛散亂、人被二鶴氅一立徘徊」。

行方定めぬ道なれば來し方も何處ならまし、これは一所不住の沙門にて候、我この程は信濃國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづ此度は鎌倉に上り坐禪に籠り、春になり修行に出でばやと思ひ候（最明寺殿）

「來し方」はこれからこして行くべき先先の道をいふ。「一所不住の沙門」とは、所定めず行雲流水を友として諸國を遍歷する僧をいふ。「沙門」はその條を見よ。最明寺殿百人上﨟のここの文は鉢の木に據つたのである。但し「坐禪に籠り」は附加へられたものである。

＊**われ世の中にあらん限はただ頼めの誓、我世の中にあらん限はただ頼めとの御誓願**（井筒）

餘の佛菩薩千體に勝り給ふ千手の誓、我世の中にあらん限はただ頼めとの御誓願（井筒）

新古今集・卷二十に、「淸水觀世音の御歌となむいひ傳へたる」と詞書ありて、「なほ頼めしめぢが原のさしも草、われ世の中にあらむ限

富士太鼓にある「持ちたる撥をば劍と定め云云」の改作である。「そも修羅の敵は誰そ、大森彥七云云」を見よ。

【二人靜】

花を踏んで同じく惜しむ色もあり（國性爺）
二人靜に、「花を踏んでは同じく惜しむ少年の」と見えてゐる。和漢朗詠集春部、白居易の春夜の詩句に、「踏レ花同惜少年春」。

見渡せば松の葉白き石橋山、幾世凍りし雪ならん（冷泉節）
二人靜に、「見渡せば松の葉白き吉野山、幾世積りし雪ならん」とあるを作かへたのである。

【藤戸】

憂しや思ひ出でじ、忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思なれ、さるにても身はあだ波の定めなくとも、科によるべの水にこそ、濁る心の罪あらば、重き罪科もあるべきに、よしなかりける海路のしるべ、思へば三途の瀨踏なり（佐佐木）
藤戸に見えてゐる文である。「科によるべの水云云」はその條をも見よ。

佐佐木が藤戸の浦人を殺せしも深き軍法（女夫池）
佐佐木三郎盛綱が備前國兒島に平家を攻めた時、藤戸の浦の漁夫に海の淺瀨を案内させた、さて下郎は筋なき者にて又もや人に語るだらうと思ひ、その恩になつた漁夫を刺殺した。詳しくは藤戸にも見えてゐる。

月頭には東にあり　寄來る波のわかれこそ、川瀨のやうに淺くして、月頭には東にあり、月の末には西にありありありそ海（佐佐木）
月頭は月の初をいふ。川瀨のやうに淺い處が月の初には東にあり、月末には西にある。藤戸に、「川瀨のやうなる所の候、月頭には東にあり、月の末には西にあると申す」。

科によるべの水にこそ、濁る心の罪あらば、重き罪科もあるべきに（佐佐木）
「よるべ」は緣の意。無心の水は正邪を正直に映すやうに、公明な裁判によつて若し邪心あつて罪科を犯してゐるならば、その緣由によつて重罪に處せられても然るべきであるのにの意。「憂しや思ひ出でじ云云」を見よ。

【船辨慶】

惡風吹掛け眼もくらみ、前後を忘ずるばかりなり（脊庚中）
船辨慶に、「惡風を吹きかけ、眼もくらみ、心も亂れて、前後を忘ずるばかりなり」とあるを引用し、口中の臭氣に利かせたのである。

あらめづらや、いかに義經、思ひもよらぬ滿涙の、……眼もくらみ心も亂れて、前後を忘ずるばかりなり（西王母）
船辨慶に出てゐる文である。

思ひぞ出づる浦波の　思ひぞ出づる浦波の、聲をしるべに出船の、知盛が沈みしその有樣を知らずや（殊靜）　思ひぞ出づる浦波の、聲をしるべに出船の、知盛が沈みしその有樣に、眼もくらみ心も亂れて、前後を忘ずるばかりなり（吉岡染）
船辨慶に、「思ひも寄らぬ浦波の、聲をしるべに出船の、知盛が沈みし其有樣に、……眼もくらみ心も亂れて、前後を忘ずるはかりなり」。

桓武天皇無體の後胤　忝くも桓武天皇無體の後胤、攝州津の國服部の住人薬屋の彥介（壽門松）
薬屋彥介は桓武天皇とは緣のあらう筈がない、故に無體の後胤である。ここの文は船辨慶に、「抑是は桓武天皇九代の後胤平の知盛幽靈なり」とあるを作替へたもので、知盛の幽靈が義經を目掛けて怨恨を晴さうとするのと、彥介が吾妻を捕へて暴力に及ばうとするのと、何となう似通うこの一句に妙味を覺える。

立舞ふべくもあらぬ身の　立舞ふべくもあらぬ身の、名もうとましき舞樂の前（吉岡染）
船辨慶に、「立舞ふべくもあらぬ身の、袖うちふるも恥かしや」。

傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種種の智略をめぐらし、終に呉を滅して勾踐の本意を達すとかや（國性爺）
陶朱公は支那春秋戰國時代越國の忠臣范蠡のことである。勾踐は范蠡が臣事した越國の王である。「會稽の恥辱を雪ぐ」を見よ。船辨慶に、「傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種種の智略をめぐらし、終に呉王を滅して勾踐の本意を達すとかや」。

知盛が沈みしその有樣に……
「船辨慶にあらねども……」を見よ。

ともゑなみのもん
「あらめづらしやかいに義經……」を見よ。

***ひら**　大門口の與右衞門の門番には二代の後胤、平の供して口輕く（反魂香）
〔平〕名古屋山三春平の平を取つていうた替名。「なかば」の條を併せ見よ。「二代の後胤平の供」は船辨慶に、「桓武天皇九代の後胤平の知盛」とあるを應用した輕妙の筆である。

船辨慶にあらねども、知盛が沈みし其有樣に　……（今宮）
船辨慶に、「知盛が沈みし其有樣に、又義經をも海に沈めんと、夕浪に浮べる長刀執り直し、巴浪の紋あたりを拂ひ潮を蹴立て、惡風を吹きかけ眼もくらみ、心も亂れて前後を忘ずるばかりなり」。

辨慶おし隔て、打物わざにて叶ふまじと數珠さらさら押揉んで、東方に降三世明王、南方に軍荼利夜叉、西方に大威德、北方金剛夜叉明王、中央大日大聖不動明王（西王母）

班女に、「たまたま心すぐなるを、狂へと仰せある人人こそ、風狂じたる秋の葉の」、とある文の換骨奪胎である。「氣違の零さぬ水」とは、氣違とてもたまたま心すぐなることある意の諺である。なほここの文に「あはれ」とあるは、泡に哀れをいひかけたのである。

楚王宮裏の柳の眉　病も自ら誠の病と御所住居、楚王宮裏の柳の眉、浮かぬ日元の重たきも隠して少し打笑ひ（本領曾我）

楚王宮裏とは、楚の襄王が宋玉と共に遊んだといふ雲夢の臺を云ふ。柳の眉とは、柳葉のやうに細い美女の眉をいふ。和漢朗詠集・冬の部に、「楚王臺上夜琴聲」。班女に、「楚王の臺の上には夜の琴の聲」。ここの文は、平宗盛の御所に於ける熊野の美貌を形容してかくいうたのである。

だんせつの扇雪なれど、消えても殘る世の中に（百日曾我）

班女に、「團雪の扇も雪なれば、名をきくもすさましくて」。本朝文粹・大江匡衡の對二水石一詩序に、「班婕妤團雪之扇代二岸風一兮長忘云云」。

閨の扇は班女が親骨にせかれ（歌念佛）

美濃國野上宿の長の娘花子が吉田少將と契つた。少將扇を取替へて東に下つた。花子は少將を慕ふ餘り取替へた扇を眺入りて、閨より外へ出なかつたので長怒つて花子を追出した。花子遂に狂女となつて班女と呼ばれたことが謠曲・班女に見えてゐる。ここの文はそれに據つたのである。

我が夫の雲井を出でしは卯月の空、秋より先に必らずと、夕の數は重なれど、來ぬ夜積りの恨めしや（女楠）

班女に、「我が夫の秋より先に必らずと、夕のかずは重なれど、あだし言葉の人心、頼めて來ぬ夜はつもれども」「秋より先に云々」を見よ。

【檜　垣】

風緑野に收まつて煙條直し、雲岸頭に定まつて月桂圓かなり（三世相）

「煙條」は楊柳の霞み渡れること。月桂は月のこと。檜垣に、「あら有難の弔ひやな、風緑野に收まつて煙條直し、雲岸頭に定まつて月桂圓かなり」。

貧しき家には故人疎く（會稽山）

家貧乏なときは故舊の人も訪はねば疎遠となる。本朝文粹・橘在列詩に、「家貧親知少、身賤故人疎」。檜垣に、「貧家には親知少く、賤しきは故人疎し」。

【百　萬】

げにや世世ごとの親子の道、憂き身一つに限らねど、子故の闇の晴れやらぬ、暗きうき世の暗きより、暗きに迷ふ三界の、なほ首枷とひく舟を（十二段）

百萬に、「げにや世世ごとの、親子の道にまとはりて、なほ子の闇を晴れやらぬ、朧月の薄雲、僅に澄める世になほ三界の首枷や」。

子は三界の首枷　河津殿ましまさばかほどにはあるまじき、母の親とて侮づるか、子は三界の首枷よ、恨しの心やと（大磯虎）

子は現世の手足まとひといふ意。欲界・色界・無色界の三界は何れも有漏の迷界なれば娑婆即ち現世の義にいふ。「首枷」は罪人の首をしばる具。百萬に、「げにや世世ごとの親子の道にまとはりて、なほ子の闇を晴れやらぬ、朧月の薄雲り、わづかに澄める世に、なほ三界の首枷や」。

***なまうだ**　雲晴れねども西、西へこそ行け、なまうだなまうだと（賀古敎信）

南無阿彌陀佛の訛略。百萬に、「彌陀頼む、人は雨夜の月なれや、雲晴れねども西へ行く、あみだぶやなまうだと」。

***ならざかや**　今は名のみに奈良坂や、この手かの手の枕の酒（反魂香）

楢の葉が兒の手に似てゐるより、楢を奈良にいひなして「奈良坂やこの手」といひ續けた例は昔にも多い。萬葉集・卷十六、謗二佞人一歌に、「奈良山のこのてがしはの云云」。百萬に、「奈良坂やこのてがしはのふた面」。

輓けや輓けや此車　婆を物に狂はせて、輓けや輓けや此車えいさらさらさら（反魂香）　ひけやひけやひけやこの車、ひくや佛の御手の絲（小栗判官）

百萬に、「亂れ心か戀草の力車に七車、積むとも盡きじおそくとも、輓けやえいさらえいさと、……輓けや輓けや此車」。

***びしゆかつま**　いかにも嵯峨の釋迦、毘首羯磨の御作といふてもだんないと（生玉）

〔毘首羯磨〕梵語（Visvakarman）で、印度美術の神名である。「毘首羯磨の御作」とは、天竺佛工の御作の意。ここの文は百萬に、「嵯峨野の寺に參りつつ、……毘首羯磨が作りし赤栴檀の尊容」、とあるを應用した洒落である。但しこの洒落は新增犬筑波集に既に見えてゐる。「さがのしやか」「しやくせんだん」をも見よ。

人は雨夜の星なれや　人は雨夜の星なれや、雲晴れれども西へ行く（關八州）　人は雨夜の月星なれや、雲晴れれども西、西へこそ行け、なまうだなまうだ（賀古敎信）

煩惱に迷ふ身でありながら、彌陀の佛力によつて西方極樂世界に導かれるを、雨夜の星が雲に隱れながら西へ行くに譬へたのである。百萬に、「南無阿彌陀佛・みだ頼む、人は雨夜の月なれや、雲晴れねども西へ行く、あみだぶやなまうだと」。

彌陀頼む、彌陀の誓を頼む身の、人は雨夜の星なれや、雲晴れねども西へ行く（關八州）

百萬に、「彌陀頼む、人は雨夜の月なれや、雲晴れねども西へゆく」。

【富士太鼓】

持ちたる柳を劍と定め云云（女楠）

申して歸る波の音の、須磨の浦かけて吹くや後の山おろし、關路の鳥も聲聲に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きしも今朝見れば、松風はかりや殘るらむ」とあるを作りかへたのである。

關路の鳥 御代の關路の鳥もこの曉な、今しばし忍べや我も忍ぶぞと(雪女) 關路の鳥も聲聲に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん(酒呑童子)

支那春秋戰國の世齊の孟嘗君秦から逃げて夜半に函谷關に至る。この關の掟に鷄の鳴かぬ中は關門を開けないので、孟嘗君困つた時幸に孟嘗君の食客に鷄鳴の眞似をよくする者があつて、近隣の鷄盡くそれに和して鳴いた爲、乃ち無事に關を出ることが出來たと云ふ故事によつたのである。この故事の委しいことは史記について見よ。傾城酒呑童子のここの文は松風にある文である。

關吹き越ゆる 關吹き越ゆる秋の風(國性爺) 海は少し遠けれども、關吹き越ゆると眺め給ふ、浦曲の波の夜夜は(松風) 關吹き越ゆると詠じけん須磨の鹽屋(天神記)

續古今集・羇旅の部、中納言行平の歌に、「旅人の袂すずしくなりにけり、關吹き越ゆる須磨の浦風」。源氏物語・須磨の卷に、「行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけん浦波よるよるは」。松風村雨束帶鑑のここの文につきては、「汐汲車僅なる浮世に云云」を見よ。

※**そなれまつ** 須磨の浦曲の松の行平、立歸りこば我も小蔭にいざ立寄りて、そなれ松の懷しや(堀川波鼓)

「いそなれまつ」(礒馴松)の「い」の脱略された語である。ここの文は松風に據つたものである。「あら頼もしの云云」をも見よ。

そらだき かとりの衣のそらだきなり(堀川波鼓)

〔空燻〕種種の薫物を藥研で碎いて粉末となし、蜂蜜の類を加へて煉り丸め、これを乾固めたものを細き煙の立昇る程の火に入れて燻べ薫じること。堀川波鼓のここの文は松風に據つたものである。

立別れ因幡の山の峰におふるまつとしきかば今歸り來ん(堀川波鼓)

我汝と別れ因幡の國に往くが、其國の稻葉山に生ふる松の名のやうに、汝が我を待つと聞かば直に歸り來うとの意。稻葉山は因幡國法美郡にある。この歌は古今集・離別部に中納言行平の詠として出てゐる。但し堀川波鼓のこのあたりの文は松風に據つたのである、併せ見よ。

月は一つ影は二つ、みつ汐に寄來る波の(佐佐木)

「みつ」は滿つに三つをいひかけ、「寄來る」のよに四をいひかけた文飾である。松風に、「うれしや是にも月あり、月は一つ影は二つ、みつ汐の夜の車に月を載せて」とあるを應用したのである。

三瀬川絶えぬ涙の浮瀬にも、……憂いとも思はぬ假寢かなや(松風)

謠曲・松風に、「三瀬川絶えぬ涙のうき瀬にも、亂るる戀の淵はありけり、あらうれしやあれに行平の御立あるが松風と召されさむらふぞや、いで參らう、あさましやその御心故にこそ執心の罪にも沈み給へ、娑婆にての妄執をなほ忘れ給はぬぞや、あはれ松にてこそ候へ、行平は御入もさむらはぬものを、うたての人の言ひごとや、あの松こそは行平よ、たとひ暫しは別るるとも、まつとし聞かば歸り來んと連ね給ひし言の葉は如何に、實にならう忘れて候ぞや、たとひ暫しは別るるとも、待たば來んとの言の葉をこなたは忘れず松風の、立歸り來む御音信」、「人にや誰もつげの櫛、さしくる汐を汲分けて見れば月こそ桶にあれ、これにも月の入りたるや、うれしやこれも月あり、月は一つ影は二つみつ汐の、よるの車に月を載せて、憂しとも思はぬ汐路かなや」とあるに據つたのである。

身にも及ばぬ戀をさへ、須磨のあまりに罪深し(酒呑童子)

「須磨」に「爲る」をいひかけ、「餘り」に「海人」をいひかけたのである。この文は松風に見えてゐる。

宵宵に脱ぎて我寐る狩衣かけてぞ賴む同じ世に、住む甲斐あらばこそ忘れ形見もよしなしと、捨てても置かれず取るもねたまし腹立寐入り(吉岡染)

松風に出てゐる文である。但し「取るもねたまし腹立寐入り」は、松風には「取れば面影に立ち增り」となつてゐる。吉岡が憲法から貰つた衣を取捨てはしたもののさのみにても置かれず、されば取上げるもねたましく腹立ち寐入りの意に用ゐたのである。

我も木蔭にいざ立寄りて 出來た出來た殊に舞の內、我も木蔭にいざ立寄りての思入れ、息がはずむと(酒呑童子)

松風に、「須磨の浦わの松の行平立歸りこば、我も木蔭にいざ立寄りて礒馴松のなつかしや」。

【松山鏡】

往時渺茫として夢に似たり、人生寂然として泉に歸す、これを現といはんとすれば、武帝の漢女を慕ひし煙、幻と見れば、さうこうが淵を求めし父の骸、皆一心によるとかや(非筒)

「渺茫」ははるかな貌。「泉に歸す」は黃泉に歸す、即ち死して地に入るをいふ。「武帝の漢女を慕ひし煙」とは、漢武帝深く寵姬李夫人の死を悼み、反魂香を焚いたその煙の中に、李夫人の姿が出現したといふ。松山鏡に「漢の武帝の后李夫人なくならせ給ひて後、帝后の御別れを悲しみ給ひ、御姿を甘泉殿に寫し、朝暮叡覽ありしかども、もとより繪に書ける形なれば、物言はず笑はず、なかなか慰みを增さる、……、月の夜の隈なきに反魂香を焚き給へば、煙の內に后の御姿まみえ給ひしためしもあり」。同・松山鏡に「往事渺茫として都て夢に似たり、舊友零落してなかば泉に歸す、これを水といはんとすれば、即ち漢

辨慶が武器で對つては叶はないとて、數珠を揉んで五大尊を勸請して祈禱したのである。五大尊は眞言密教の立つる神で何れも忿怒破邪の相を備へてゐられる。船辨慶に、「辨慶は押隔て、打物わざにて叶ふまじと數珠さらさらと押揉んで、東方降三世、南方軍荼利夜叉、西方大威德、北方金剛夜叉明王、中央大聖不動明王」。

辨慶鵜婦　辨慶鵜婦がいそがしさ、口舌い中を押隔て、打物わざにて叶ふまじと口に幾度のわび言やら（反魂香）

謠曲辨慶に、義經主從大物の浦より出船の後、平知盛の幽靈に襲はれ、辨慶が義經を保護しつつ五大尊を祈つて幽靈を追拂つた急遽な動作を記してある。鵜婦（その鵜婦を見よ）みやが妓女と客との間を取扱ふ忙しさを、辨慶のその動作に擬して辨慶鵜婦と洒落たのである。ここの文に、「辨慶、押隔て打物わざにて叶ふまじ」とあるは、謠曲・船辨慶の文を引用したのである。前條を見よ。

【松　風】

あきかぜ越ゆるは須磨の關（酒呑童子）

松風に「心づくしの秋風に、海は少し遠けれども、彼の行平の中納言、關吹き越ゆると詠め給ふ」。續古今集に、「旅人の袂すずしくなりにけり、關吹き越ゆる須磨の浦風」。源氏物語・須磨の巻に、「心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の關吹き越ゆるといひけん浦波」。

あら頼もしの御歌や、……いざ立寄りて、磯馴松のなつかしや、松に吹き來る風も狂じて（堀川波鼓）

松風にある文である。「磯馴松」とは枝幹地に傾きて生ひ茂つた松。

かたみこそ今はあだなれ　形見こそ今は仇なれ松風や（生玉）　形見こそ今は仇なれ、これなくば忘るるひまもありなんと、詠みしも理りや、なほ思ひこそは深けれ（堀川波鼓）

戀しい人の殘し置いたその形見が、今は却つて我が爲にかたきだ。若しもこの形見がなかつたならば、少しは忘れる時もあるであらうものを、この形見があるによつて見ては昔を思出して、忘れることができないとの心を古人が歌に詠んだのも道理だわい。形見の爲に慕ひ悲しむ情が一層深いとの意。古今集・戀四部に、「かたみこそ今は仇なれこれなくば、忘るる時もあらましものを」。ここの文は松風に出てゐる文である。

形見の烏帽子　見ぬ顏したるつらい男め、形見の烏帽子狩衣を出して恥をかかせうか　いやいや包む間は頼みあり（松風）　形見の烏帽子は行平の言被り（歌念佛）

謠曲・松風に、中納言在原行平が松風・村雨の二女と契り、形見に烏帽子狩衣を殘置いたのを、松風が眺めては戀佗びることを記してある。それを業林子は、行平が忘れない爲にと置いた形見は實はそれにかこつけて、二女に情が薄らいで御免を蒙つたことにしたのである。

これを見るたびにいやましの思ひぐさ、葉末に結ぶ露の間も、忘られぱこそあぢきなや、形見こそ今はあだなれこれ無くば、忘るる隙もありなんと（酒呑童子）

この文は松風に出てゐる。この形見がある爲に行平を思ふ情は益つのり片時も忘れられない、さてもこの形見無益ぢやわい、いつそ我を苦しめる仇ぢや、若しも形見が無かつたならば、思出すこともなく少しは忘れる時もあらうものをとの意。

扨も行平三年が程、御徒然の御舟遊び、月に心は須磨の濱、夜汐を運ぶ海人少女に、妹姉選ばれ參らせつつ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴るる須磨の海人の、鹽燒衣色かへて、縑の衣の空燒なり（堀川波鼓）

松風に見えてゐる文である。

汐汲車わづかなる浮世を廻るはかなさよ、心盡しの秋風に、海は少し遠けれども、關吹き越ゆると眺め給ふ、浦曲の波のよるよるは、實に音近き海士の家、里離れなる通路の、月より外は友もなし（松風）

「汐汲車」は汐を汲入れた桶を載す車。「わづか」には僅に輪をいひかけた。「心盡し」は千千に物思ひすること。謠曲・松風に、「汐汲車わづかなる浮世に廻るはかなさよ、波ここもとや須磨の浦、月さへ濡らす袂かな、心盡しの秋風に、海は少し遠けれども、彼行平の中納言、關吹き越ゆると詠め給ふ、浦曲の波の夜夜は、げに音近き海士の家、里離れなる通路の、月より外は友もなし」。源氏物語・須磨の巻に、「須磨にはいとど心盡しの秋風に、海は少し遠けれど、行平中納言の關吹き越ゆるといひけん浦波、夜夜はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり」。

しほやきごろも　月にも馴るる須磨の海人の、鹽燒衣色かへて（堀川波鼓）

〔鹽燒衣〕藻鹽燒く海人の着る衣。このあたりの文は松風にある。「扨も行平云云」を見よ。

捨てても置かれず、取れば面影に立ちまさる、起臥わかで枕より、跡より戀の責め來れば（西王母）（酒呑童子）

松風に、「捨てても置かれず、取れば面影に立ちまさり、起臥わかで枕より、跡より戀の責め來れば、せんかた涙に伏し沈む事ぞ悲しき」。

須磨の高波はげしき夜半の、夢に取りたる劍の刃、渡るも深き戀の道、傳はる國の御寶の、お供申して歸る波の、須磨の浦かけて吹くや後の山おろし、關路の鷄も聲聲に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん（松風）

松風に、「須磨の高波はげしき夜すがら、妄執の夢に見ゆるなり、我跡弔ひてたび給へ、暇

集といふ本がある、その序文中に枯杭集に「かつくいしう」と傍訓してある。紅葉狩に、「角はかぼく眼は日月、面を向くべきやうぞなき」。

處は山路の菊の酒何かは苦しかるべき（五人兄弟）

紅葉狩にある文である。地名部「とがくしやま」を見よ。

*__むみやう__　法界無緣の勸進所無明能化の門前に、念佛を便り辿り寄る（脊庚申）障子に移る苛責の相、無明の業火黑煙りふすぼり渡つて其身を燒く（女夫池）無明の酒の醉さませ（生玉）あらあさましや我ながら無明の酒の醉心、うつつともなき變化の形（紅葉狩）門の戸さつと押開き伴ふ母は生死の境、菩提門を引かへてこれはうき世の無明門（國性爺）

〔無明〕煩惱に迷うて眞理・理法を如實に知ること能はざるをいふ。大藏法數に、「過去世煩惱之惑覆ニ於本性一、無レ所ニ明了一故曰ニ無明一」。

「無明能化」とは、煩惱の暗に迷ふ愚昧の者を能く敎化する義。

「無明の業火」とは、無明による業火の義、煩惱に迷うて惡業を作り、その罪業によつて自身を苦しめることを火に燒かれるに喩へていふ。

「無明の酒」とは、無明を毒酒に醉うて失心するに喩へていうたのである。妙法聖念經・第七卷に、「勿レ飲ニ無明酒一」。紅葉狩本地のこの文は、紅葉狩に、「あらあさましや我ながら無明の酒の醉心、まどろむひまもなきうちに」とあるを作かへたのである。

「無明門」とは娑婆に踏入る意にいうたのである。

よし誰にもせよ上臈の、深山隱れの紅葉狩、かたがた推參叶ふまじと（紅葉狩）

紅葉狩に、「よし誰にてもあれ上臈の、道のほとりの紅葉狩、ことさら酒宴のなかばなれば、かたがた推參叶ふまじと」、なほこの前後の文も紅葉狩に據つたのである。

【盛　久】

昔在靈山の御名は法華一乘、我等が爲の觀世音三世の利益（盛久）

昔釋尊は天竺の靈鷲山に於て法華一乘（法華經は一佛乘敎を說示された經なるが故に云ふ）を說示されたが、今この娑婆に觀世音と示現され、過去現在未來の三世にわたつて衆生を濟度し給ふ同一同體の佛であるとの意。謠曲・盛久に、「昔在靈山の御名は法華一佛、今西方の主、また娑婆示現し給ひて我等が爲の觀世音、三世の利益同じくは刑戮に近き身の」。

主馬の判官盛久は去年北山の茸狩に一曲一奏は出來たれども（娥）

盛久に「一年小松殿北山にて茸狩の遊路の御酒宴に於て、主馬の盛久一曲一奏の事關東までも隱れなし」。

【楊　貴　妃】

漢王二星の契を學び、天にあらば願はくは比翼の鳥とならん、地にあらば願はくは連理の枝とならばと、誓ひしささめごと（西王母）

「二星」は牽牛星と織女星をさす。唐の玄宗皇帝が寵姫楊貴妃と、七月七日牽牛星と織女星と相逢ふの夕、ささやき誓つて言ふに、若し天に上らば二人同體の比翼鳥とならう、若し地にあらば枝を連ねる樹とならうと。楊貴妃に、「その初秋の七日の夜、二星に誓ひし言の葉にも、天に在らば願はくは比翼の鳥とならん、地に在らば願はくは連理の枝とならんと、誓ひし言を密に傳へよや、私語なれども今洩れ初むる涙かな」。白居易の長恨歌に、「臨レ別殷勤重寄レ詞、詞中有レ誓兩心知、七月七日長生殿、夜半無レ人私語時、在レ天願作ニ比翼鳥一、在レ地願爲ニ連理枝一、天長地久有レ時盡、此恨綿綿無ニ絕期一」。

きうくわちやう　太眞殿の九華帳、玉妃押退け出でたるもかくやらん（西王母）何とて爰まで來れるぞと、九華の帳を押退けて（弘徽殿）

〔九華〕花の紋樣を縫うた垂帛を九つ重ねた帳。ここの文に「玉妃」とあるは楊貴妃をいふ。楊貴妃に、「唐の天子の勅の使、方士是まで參りたり、玉妃は内にましますか、何唐帝の使とは、何しに爰に來れるぞと、九華の帳を押退けて、玉の簾をかかげつつ立ち出で給ふ御姿云云」。

過去遠遠の昔を思へば、いつを衆生の始めと知らず、未來永永の流轉更に生死の終りもなし、天上の五衰より北州の千年も皆まぼろし戲れと（弘徽殿）

「天上の五衰」「北州の千年」はその條を見よ。楊貴妃に、「それ過去遠遠の昔を思へば、いつを衆生の始めと知らや、未來永永の流轉更に生死の終りもなし、然るに二十五有の内何れか生者必滅の理に洩れん、先天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北州の千年つひに朽ちぬ」。

たいえき　楊貴妃が行水姿、太液の芙蓉に勝りしと（雙生隅田川）たいえきの芙蓉のくれなゐ（西王母）

〔太液〕唐の玄宗皇帝の時に禁裡にあつた池の名。楊貴妃に、「太液の芙蓉の紅、未央の柳の緑もこれにはいかで優るべき」。白氏文集・長恨歌に、「太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉」、とありて楊貴妃の美を形容したのである。「梨花一枝春の雨を帶ぶ」をも見よ。

唐の帝は楊貴妃の別れを慕ひ、方士といつし道士に仰せて楊貴妃の魂の在所を尋ねられしに（弘徽殿）

「唐の帝」は唐の玄宗皇帝を云うたのである。ここに書いてあることは楊貴妃の中にも見えてゐる。

へきらく　上は碧落下黃泉の底までも女御の魂のありかを尋ね（弘徽殿）秦の始皇は不老不死の藥を得んと、上は碧落下は黃泉を探せども

女が粉を添ふる鏡清澄たり」。和漢朗詠集・雑部、白居易の詩に「往時渺茫都似レ夢、舊遊零落半歸レ泉」。「さうこうが淵を求めし父の骸」をも見よ。ここの文の大意は、死したる者がありありと生前の姿を出現することがある、ああ生死は何れが現で何れが幻か、要するに一心の作用によるとかいふことだとの意。

【三輪】

歸る處を知らんとて、苧環に針をつけ、裳裾にこれを綴付けて跡を控へて慕ひ行く、まだ青柳の絲長く、結ぶや早玉の、おのが力にささがにの、絲くりかへし（傾城吉岡染）　この文は三輪に出てゐる。「早玉」「ささがに」はその條を見よ。

女姿と三輪の神　女姿と三輪の神、其おだまきを繰返し戀しき人のもすそに附けて（三世相）

三輪に、「人心や女姿と三輪の神、千早掛帶ひきかへて」とあるに據つたのである。なほ三輪に、大和國に年久しく女の許に通ふ者があつて、夜來て晝來ないので、女不審に思ひ夫の住家を知らうとして、苧環に針をつけ衣の裾に縫附けて、その跡をひかへ慕ひ行きければ、其絲は三わげ殘つて山本の神垣杉の下枝に止つたことを記してある。

【三井寺】

初瀬も遠し難波寺、名所多き鐘の聲、つきぬや法の聲ならん、山里の春の夕暮來て見れば（曾根崎）

「初瀬」は大和國の名所。「難波寺」は大阪の四天王寺をいふ。ここの文は「ヤアお初」より同頭の「初瀬」を出し、以て謠曲の文を引き來り、「夕暮來て見れば」に德兵衛來て見ればをきかせたのである。三井寺に、「初瀬も遠し難波寺、名所多き鐘の音、盡きぬや法の聲ならん、山寺の春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける」。

花のふぶきと詠じけん志賀の山路（娥）

三井寺に、「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪と詠じけん志賀の山越うち過ぎて」。古歌に、「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山越」（山家集・上に、「春風の花の吹雪に埋れて、ゆきもやられぬ志賀の山道」）。

まづ初夜の　まづ初夜の鐘を撞く時は諸行無常に惜しや惜しやと響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生滅法な事と響くなり、晨朝の響きは生滅滅多に入用知れず、寂滅いらざる鐘の聲、一文吝みの百八煩惱、この鐘の音を聞く人は現世に於ては分限の金持（博多）　まづ初夜の太鼓を打つ時は諸客盛んと響くなり、後夜の太鼓を打つ時は借上滅法とそやして、曉方の醉醒めの分別別に御思案も寂滅いらずと打立て、懈怠もなしの金遣ひ百八紋日の眠覺し（扇八景）

三井寺に、「まづ初夜の鐘を撞く時は諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生滅法と響くなり、晨朝の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響きて菩提の道の鐘の聲、月も數添ひて百八煩惱の眠の驚く夢の世の、迷もはや盡きたりや」とあるをもぢつたのである。諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂は、涅槃經に出てゐる四句偈であつて、佛教の大道を簡述せるものである。梵鐘の響にこの意があるといふ。「初夜」「後夜」「借上滅法」「寂滅入らず」はその各條を見よ。

雪ならで涙に袖を拂へとや、志賀の山越え末遠き（三國志）

古歌に、「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山越」、とある歌によつてかくいうたのである。「花のふぶきと詠じけん云云」を見よ。

【紅葉狩】

***かんやうきゆう**　咸陽宮の烟の中に、顔も手足も紅の、房は目ばかりじろじろと（重井筒）

〔咸陽宮〕秦始皇帝が住んだ宮殿である。楚の項羽の兵燹にかかつて三ケ月間も燒けたといふ。

心中重井筒のこのあたりの着想は紅葉狩に據つたのである。紅葉狩に、「或は巖に火焰を放し、または虛空に炎を降らし、咸陽宮の煙の中に、七尺の屛風の上になほあまりて、其たけ一丈の鬼神の云云」。枹狩劍本地（巢林子作）に、「咸陽宮の烟の中に、不思議や今までありつる女云云」とあるも、紅葉狩によつたものである。

虎溪を出でし賢人　げになう虎溪を出でし賢人も、情は捨てぬ盃をいかで見捨て給はんと（枹狩）

虎溪は支那廬山の麓にある。大明一統志・卷五十二に、「九江府虎溪在二府城南一、晉僧惠遠送レ客過レ此、虎輙號鳴、因名、道書以二虎溪山一爲二七十二福地之一一矣」。晉の高僧惠遠が白蓮社を結んで廬山に住むこと三十餘年、この山麓に橋がある、常に安居禁足とてこの橋より外へ出でなかつたが、或時陶淵明・陸修靜の二人廬山の麓に來る、惠遠書を以て二人をお招きしに、陶淵明これに答へて、當山は禁酒である、我酒を好む、酒を飲むことを許し給はば行きますと言ひしかば、惠遠乃ち飲酒を許し、扨この二人の歸るを送つて互に物語しながら興に乘じて覺えず虎溪を出たといふ故事であつて、このこと廬山記及び潯陽記に出てゐる。紅葉狩に、「げにや虎溪を出でし古も、志をば捨て難き、人の情の盃の、深き契のためしとかや」。

堪へず紅葉青苔の地（枹狩）

紅葉青苔のうるはしい地は踏むに堪へない。紅葉狩に、「堪へず紅葉青苔の地」。白氏文集・卷十三、秋雨中贈二元九一詩に、「不レ堪紅葉青苔地、又是凉風暮雨天矣」。「花を踏んで云云」をも見よ。

角はくはぼく眼は明鏡、面を向くべきやうもなし（以呂波物語）

「くはぼく」は枯木である。寛文八年刊の枯杌

の境にかへること。謠曲・八島（喜多流）に「今日の修羅の敵は誰そ、なに能登の守教經とや、あらものものし手並は知りぬ、思ひぞ出づる壇の浦の、其船軍今ははや、閻浮にかへる生死の、海山一同に震動して」。

そも修羅の敵は誰そ、大森彥七盛長とや、妻の敵いざ討たん、持ちたる柳を劍と定め、瞋恚の焰は焦るる紅葉（女楠）
八島に、「今日の修羅の敵は誰そ、なに能登守教經とや」。富士太鼓に、「持ちたる撥をば劍と定め、瞋恚の焰は太鼓の烽火の」。

***智者は惑はず勇者は懼れず**（聖德太子）（寄庚申）
智者は理に明なるが故に能く理非曲直を辨じて心を惑はさない、勇者は道義を立てて守る所あるが故に事に臨んで懼れない。論語・子罕篇に、「子曰、知者不レ惑、仁者不レ憂、勇者不レ懼」。八島に、「智者は惑はず勇者は懼れず」。

船よりは鬨の聲、……浦風なりけり高松に、高松に木隱れて見えずなりにけり（女夫池）
八島にある文である。但し末の文は、「浦風なりけり高松の、あさ嵐とぞなりにける」となつてゐる。

水や空、空行くもまた雲の波の、波の鼓の海靜樂（天鼓）
八島に、「水やそら、空行くもまた雲の波のうちあひ」。

むらさきすそご、赤地の錦の直垂、紫末濃の御着長（津戸三郎）
〔紫末濃〕紫染にて下を色濃くし、上方に向つて次第に色薄くし、遂に白くなせるもの。津戸三郎のこの文は、八島に、「赤地の錦の直垂に紫末濃の御着長」とあるに據つたのである。

落花枝に歸らず（關八州）
八島に「落花枝に歸らず、破鏡ふたたび照さず」。傳燈錄に「落花難レ上レ枝、破鏡不ニ重照一」。

【山姥】

一洞空しき谷の聲、山高うして海近く、谷深うして水遠し、前には海水瀼瀼として、月眞如の光を挑げ、後には嶺松巍巍として、風常樂の夢を破る、刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る、諫鼓苔深うして鳥驚かず（嫗山姥）
「一洞空しき谷の聲」とは、一洞空虛の中に谷音の反響するをいふ。「瀼瀼」は海の開合うた貌。「眞如の光」は吾人迷妄の闇を打破する眞諦光。「常樂の夢」とは、世間總て空なるを有と思うて常に樂しいと迷へる心。「刑鞭朽ちて云々」はその條を見よ。山姥に、「一洞空しき谷の聲、梢に響く山彥の、無聲音を聞くたよりとなり、聲に響かぬ谷もがなと、望みしゐげにかくやらん、ことに我住む山家の氣色、山高うして海近く、谷深うして水遠し、前には海水瀼瀼として、月眞如の光をかかげ、後には嶺松巍巍として、風常樂の夢を破る、刑鞭蒲朽ちて螢むなしく去る、諫鼓苔深うして、鳥驚かずともいひつべし」。

暇申して歸る山の……山また山に山廻りして、行方も知らずなりにけり（嫗山姥）
山姥に、「暇申して歸る山の、春は梢に咲くかと待ちし花を尋ねて山めぐり、秋はさやけき影を尋ねて、月見る方にと山めぐり、冬はさえ行く時雨の雲の、雪をさそひて山めぐり、めぐりめぐりて輪廻を離れぬ妄執の雲の、塵積つて山姥となれる鬼女が有樣みるやみるやと峯にかけり、谷に響きて今までここに、あるよと見えしが山また山に山めぐりして、行方も知らずなりにけり」。

きぬた　世を空蟬の唐衣、千聲萬聲の砧に聲のしつていしつてい、しつていからころ砧の音（嫗山姥）
「きぬいた」（衣板）の略。擣盤の上に衣を載せて槌で擣つこと。倭名抄に、「砧。亦作レ碪、岐沼伊太、今俗呼ニ岐奴多一、擣レ衣石也」。このあたりの文は山姥によつたものである、併せて見よ。

***じやしやういちによ**　**邪正一如と觀る時は鬼にもあらず人にもあらず**（嫗山姥）
〔邪正一如〕理に順ずる正行も、理に違ふ邪行も、何れも理體より見れば眞如の體を離れず、邪も正も卽ち一である。大藏法數に、「如來所說一切煩惱妄惑邪行之法、雖ニ是邪妄一不レ離ニ眞如之體一」と見えてゐる。山姥に、「假に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて目前に來れども、邪正一如と觀る時は色則是空そのままに」。

***伐木たうたうとして山更に幽なり**
先に立つて行く程に、伐木たうたうとして山更に幽なる、鳥の鳴く音も嵐吹く（嵯峨天皇）
「丁丁」は木を伐る音である。山姥に、「おぼつかなくも呼子鳥の、聲すごき折折に、伐木丁丁として山更に幽なり」。杜子美の詩に、「春山無レ伴獨相求、伐木丁丁山更幽」。

花を尋ねて山廻り、最期の寒風又ここに、え返りたる雪氣の雲の雪を誘ひて山廻り、めぐりめぐりて輪廻の恨み思ひ知れやと、入道親子を引立て引立て、……雪を散して失せてけり（雪女）
山姥に、「花を尋ねて山廻り、……冬は冴え行く時雨の雲の雪を誘ひて山廻り、めぐりめぐりて輪廻を離れぬ妄執の雲の、……行方も知らずなりにけり」。

春は梢に咲くかと待ちし花の梢をえいやつとねぢ折つて山廻り、秋は清瀧敵を捜して首してやろと山廻り、夫婦が眼に遮る奴ばら小鬢をちよつつて山廻り、めぐりめぐりて輪廻を離れぬまうぜいの、雜兵切拂つた山姥が悴（弘徽殿）
山姥に、「春は梢に咲くかと待ちし花を尋ねて山めぐり、秋はさやけき影を尋ねて月見る方にと山めぐり、冬はさえ行く時雨の雲の雪をさそひて山めぐり、廻り廻りて輪廻を離れぬ妄執の、雲の塵つもつて山姥となれる」、とあ

求めず(孕常盤)

〔碧落〕大空をいふ。黄庭堅の詩に、「心似二蛛絲一遊二碧落一」、弘徽殿鵜羽産家のこの文は、楊貴妃に「上碧落下黄泉まで尋ね申せども云云」とあるを作りかへたのである。

ほくしうのせんねん　先天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北州の千年終に朽ちぬ(西王母)　北州の千年も皆まぼろしのたはむれ(弘徽殿鵜羽産家)

〔北州之千年〕須彌山の北・鬱單越州(鬱丹越とも書く)に住してゐる者は壽一千歳に滿つといふ。西域記に、「云二北俱盧洲一、舊曰二鬱丹越一、於二四洲中一有情所貸皆最勝、故亦云二高上一、出二餘三方一、故形如二方座一、四面量等、長三十二肘、壽滿二一千歳一矣」。日本西王母のここの文は、楊貴妃に、「先天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北州の千年つひに朽ちぬ」とあるに據つたのである。弘徽殿鵜羽産家のここの文につきては、「過去をんをんの昔を思へば云云」を見よ。

蓬が島つ鳥　君にはこの世逢見んこともよもぎがしまつどり、又たちかへれば(西王母)　さるにても君にはこの世逢見んこともよもぎが島つ鳥、うき世なれども戀しや昔はかなや別れの、ここ世はここぞと伏轉びてぞ入り給ふ(弘徽殿)

蓬が島は蓬萊島をいふ。島つ鳥とは鵜をいふ、絶島に棲める鳥なればしかいふ。この二つをいひつづけて、蓬見んこともよもあらじにいひかけたのである。楊貴妃に、「さるにても君にはこの世逢見んことも蓬が島つ鳥、浮世なれども戀しや昔はかなや別れの、ここ世の臺に伏沈みてぞ留まりける」とあるに據つたのである。

梨花一枝春の雨を帶ぶ　(弘徽殿)　雲の鬢づら花の顔、寂寞たる兩眼に涙を浮べて見えたるは、梨花一枝春の雨を帶び、太液の芙蓉の紅・未央の柳たをやかに、ただしなしとたたずめば(西王母)

美女の顔に憂愁の涙を帶びて寂しげな姿は、喩へば一枝の梨花の春の雨を帶びたやうであるの意。日本西王母のここの文は楊貴妃に、「雲の鬢づら花の顔ばせ、寂寞たる御眼の内に涙を浮べさせ給へば、梨花一枝雨を帶びたる粧ひの、太液の芙蓉の紅・未央の柳の緑もこれにはいかで優るべき」とあるに據つたのである。白居易の長恨歌に、「雲鬢花顔金歩搖、……太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉、……玉容寂寞涙闌干、梨花一枝春帶レ雨、含レ情凝レ睇謝二君王一」。弘徽殿鵜羽産家のここの文については「和國の天子の勅の使云云」を見よ。

和國の天子の勅の使晴明これまで參りたり、女御は内にましますか、何我帝の御使とて何とて爰まで來れるぞと、九華の帳を押のけて玉の簾をかかげつつ立出で給ふ御姿、雲の鬢づらあたらもの切つて捨てたる柳髮、昔の花の色はなけれども匂殘りし御顔ばせ、寂寞たる目の内に涙をうかめ給ひしは何に喩へん、梨花一枝春の雨を帶び、風にしたがふ海棠の(弘徽殿)

楊貴妃に、「唐の天子の勅の使方士これまで參りたり、玉妃は内にましますか、何唐帝の使とは何しに爰に來れるぞと、九華の帳を押のけて玉の簾をかかげつつ立出で給ふ御姿、雲の鬢づら花の顔ばせ、寂寞たる御眼の内に涙をうかべさせ給へば、梨花一枝雨を帶びたる粧の、太液の芙蓉の紅」とあるに據つたのである。

【養　老】

行く水の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず(大原問答)

養老に、「行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にはあらず」。鴨長明撰・方丈記に、「行く川の流れは絶えずして元の水にあらず」。

【八　島】

いちゐん　鐙踏張り鞍笠につつ立ち上り、一院の御使源氏の大將檢非違使五位の尉(門出八島)

〔一院〕後白河上皇をさしたのである。八島に、「鐙踏張り鞍笠につつ立ちあがり、一院の御使源氏の大將檢非違使五位の尉」。

海山一同に震動して、船よりは鬨の聲、陸には波の楯　月に白むは劍の光、汐に映るは兜の星の影、水や空空行くもまた雲の波の、打合ひ刺違ふる船軍のかけひき、浮き沈むとせし程に、立つ春の今年も明けて、敵や寄せ來る又この浦に、鬨の聲を誘ひしは、浦風なりけり高松の、讃岐の屋島に立籠る(加增伴我)

八島に、「海山一同に震動して、船よりは鬨の聲、陸には波の楯、月に白むは劍の光、汐に映るは兜の星の影、水や空空行くもまた雲の波の、打合ひ刺違ふる船軍のかけひき、浮き沈むとせし程に、春の夜の浪より明けて、敵と見えしは群れゐる鷗、鬨の聲と聞えしは、浦風なりけり高松の、浦風なりけり」。

***くらかさ**　鐙踏張り鞍笠につつ立ちあがり(津戸三郎)

〔鞍笠〕鞍坪に同じ。「くらつぼ」を見よ。八島に、「鐙踏張り鞍笠につつ立ちあがり」。

今日の修羅の敵は誰そ、おお能登守教經よ、あらものものし手並は知りぬ(門出八島)　今日の修羅の敵は誰そ、おお能登守教經よ、あら物物し手並は知りぬ、その一念の恨みの矢先、思ひぞ出づる壇の浦の、其船軍今もまた、閻浮にかへる生死の、海山一同に震動し(津戸三郎)

「物物し」は物體らしいの義。もと相手を物らしくありと、その價値を認める義であつたのが轉じて、たいさうらしい、をこがましいの意にいふ。「閻浮にかへる生死」は、娑婆生死

熊野にある文である。但し「東に歸る嬉しさよ」は、熊野には「東に歸る名殘かな」となつてゐる。

***鳥が啼く**　ゆふつけの鳥が鳴くあづま路さして飛ぶ鳥の(烏帽子折)

吾妻にかかる枕詞である。鷄は夜の明時に鳴く故に、「あけ」の「あ」より「あづま」にいひかけたのである。熊野に、「御いとまと、ゆふつけの鳥が鳴くあづま路さして行く道の」。

花を見捨つる雁がねのそれは越路、われもまた戀路に埋む(今川了俊)

雁は春霞立つ頃去るものなれば、「花を見捨つる雁がね」といふたのである。「雁がね」は雁が音の義、轉じて雁のことにいふ。ここの文は熊野に、「花を見捨つる雁がねのそれは越路、われはまた東に歸る」、とあるを作りかへたのである。

末世一代教主の如來　老少不定の境會者定離の掟、末世一代教主の如來も免かれ難しと思召せ(卯月潤色)

末世に出て現世一代を教化する如來の義、釋迦如來をいふ。熊野に、「末世一代教主の如來も生死の掟をば遁れ給はず」。

南を遙に眺むれば、稻荷の山の薄紅葉、靑かりしよりとよみ給ふ(娥)

熊野に、「南を遙に眺むれば、……、稻荷の山の薄紅葉の、靑かりし葉の秋又、花の春は清水の」。古今著聞集の歌に、「時雨する稻荷の山の紅葉ばは、靑かりしより思ひそめてき」。

山靑く山白くして雲來去す　山靑く山白くして雲來去す、人榮え人衰ふ(本領曾我)　山靑く山白くして雲來去す、人樂しみ人愁ふ、世上の變化力なく(三國志)

目前變化の境界感想を述べたのである。熊野に、「山靑く山白くして雲來去す、人樂しみ人愁ふこれ皆世上の有樣なり」。百聯抄解詩に、「山靑山白雲來去、人樂人愁酒有無矣」。

夢の間惜しき春なれや、咲く頃花を尋ねん、花前に蝶舞ふ紛紛たる雪、柳上に鶯飛ぶ片片たる金、花は流水にしたがつて香の來ること速し、鐘は閑雲を隔てて聲もたよりも遠江(本領曾我)

熊野にある文である。但し「聲もたよりも云々」は「聲の至ること遲し」となつてゐる。春は年中の好時節なれば夢の間も惜しく、花咲く頃は花見に出でよう、花の前に蝶の戲れるは恰も雪の紛紛と舞へるが如く、柳上に鶯が枝から枝へと飛交ふ樣は金のひらひらと飛ぶに似てゐる。花は流水にしたがつて香氣を送り來ること速く、鐘聲は閑に浮べる雲に隔てられて其聲の至ること遲くして遠方に聞えるを遠江にいひかけたのである。

***ゆやのまへ**　ここは、古熊野の前、母のいたはり身にかへて、花を見すつる雁がねの(今川了俊)

〔熊野前〕平宗盛の妾である。熊野に、遠江國池田宿に熊野の母の病めるを聞き、宗盛に暇を請へども許されないで花見に伴ひ、落花の歌より宗盛も無常を感じて、熊野を東へ歸らしたことを作つてある。ここの文に「花を見すつる雁がね云々」とあるは謠曲・熊野に據つたのである。「花を見すつる云々」を見よ。

【頼　政】

月こそ出づれ朝日島(融大臣)

頼政に、「名にも似ず、月こそ出づれ朝日山」。

姫君下知して宣はく、柳渦巻く木蔭には風ありと知るべし、弱き枝には蕊をもたせ、強きに花を開かせよ、うつろふ枝を楉にかへて、互に力を合はすべし(國性爺)

頼政に、「忠綱兵を下知していはく、水の逆巻く所をば岩ありと知るべし、弱き馬をば下手に立てて、強きに水を防がせよ、流れん武者には弓弭を取らせ、互に力を合はすべし」とあるを作り替へたのである。

【弱　法　師】

佛日西天に隱れて異耀東北にかがやく、獅子吼の金言あやまたず佛法流布は王道の盛んのはじめと成りにける(用明天皇)

「佛日西天に隱れ」は、釋尊涅槃に入られたのを日輪西天に沒したるに譬へたのである。「獅子吼」「王道」はその條を見よ。弱法師に、「夫れ佛日西天の雲に隱れ、……ここによつて上宮太子國家をあらため萬民を教へ、佛法流布の世となして普く惠みを弘め給ふ」。

【雷　電】

秋に後るる老葉は風なきに散り易く、愁を弔ふ涙は問はざる袖に先づ膨く落ちて流れて(天神記)

雷電に、「秋におくるる老葉は風なきに散り易く、愁を弔ふ涙は問はざるに先づ落つ」。

紫宸殿に僧正あれば弘徽殿に神鳴する、弘徽殿に移り給へば淸涼殿に雷鳴る、淸涼殿に移り給へば梨壺・梅壺・夜の御殿・臺の御座行違ひ行巡り(天神記)

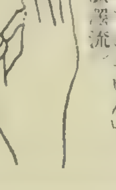
雷電に、「紫宸殿に僧正あれば弘徽殿に神鳴する、弘徽殿に移り給へば淸涼殿にいかづち鳴る、淸涼殿に移り給へば梨壺・梅壺・貫・間・夜のおとどを行違ひ廻りあひて」。なほこのあたりの文は雷電に據つたものである。

しやすゐのいん　僧正騷がず灑水の印を結んでばんじの明を修し給へば(天神記)

〔灑水印〕灑水を標する印相であつて、水をもつて火を消す法である。



〔しやすゐのいん〕
（三寶印流）



〔しやすゐのいん〕
（廣澤流）

雷電に、「僧正御覺じて騷ぐ氣色もましまさず、灑水の印を結んで鑁字の明を唱へ給へば」。なほ天神記のこのあたりの文は雷電より得たものである。

ろを作かへたのである。「まうぜい」は妄執を猛勢にもぢつたのである。「輪廻」はその條を見よ。

春は三吉野・初瀬山・高間の山の白妙に、擬ふ霞もそれかとて花を尋ねて山廻り、秋はさやけき空の色かはらぬ影も更科や、姥捨山の名に愛でて月見る方にと山廻り、冬はさえ行く比良が嶽・越の白山、時雨行く雲を起して雲に乘り雪を誘ひて山廻り、廻り廻りて我君に（嫗山姥）

山姥に、「春は梢に咲くかと待ちし花を尋ねて山めぐり、秋はさやけき影を尋ねて月見る方にと山めぐり、冬は冴え行く時雨の雲の雪をさそひて山めぐり、めぐりめぐりて輪廻を」、とあるを作かへたのである。

萬箇目前の境界、懸河渺渺として巖峨峨たり、山復山何れの工か靑巖の形を削りなせる、水復水誰が家にか碧潭の色を染出せし（振袖始）

萬事目前の有樣、瀧水ひろびろと落ち巖石高く聳え、山岳重疊して靑苔のむした巖の削つたやうなのは如何なる名匠の作であらう。滝の水渺渺として靑き淵の色は如何なる名家の染出したものであらうの意。この文は山姥に出てゐる。和漢朗詠集に、「山復山、何工削成靑巖之形、水復水、誰家染出碧潭之色」

***ぼんなう**　煩惱・菩提となるぞ頼もし（重井筒）　煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もなどかは無からざるべき（嫗山姥）　責められ責むる煩惱の犬も泣く泣く引かれ行く（千疋犬）　煩惱の夢をさますや法の聲も靜に、まづ初夜の鐘を撞く、時は諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生滅法と響くなり、晨朝の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響きて、菩提の道も暗からず（蟬丸）

（煩惱）一切衆生を迷はし惱ますもの、即ち無明貪欲の惑をいふ。

心中重井筒のこの文は、摩訶止觀に「煩惱即菩提」とあるに據つたのである。

嫗山姥のこの文は、謠曲・山姥に「煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり」とあるに據つたのである。

「煩惱の犬」とは執心の離れ難き犬。寶物集に「煩惱は家の犬打てども去らず」。謠曲・通小町に「さらば煩惱の犬となつて打たるるとも離れじ」。蟬丸のこの文は謠曲・三井寺にある文である。但し末句は三井寺には「菩提の道の鐘の聲」と見えてゐる。「しよや」「しよぎやうむじやう」「ごやのかね」「ぜしやうめつぽふ」「じんでう」「しやうめつめつい」「いりあひ」「じやくめつゐらく」「ぼだい」は各條に就いて見よ。

山姥は山路にて薪木を樵らせ給ひける（隅田川）

「山姥」は其條を見よ。山姥に、「衆生あれば山姥もあり、……扨人間に遊ぶことある時は、山賤の樵路に通ふ花の陰、やすむ重荷に肩を借し、月もろともに山を出で里まで送るをりもあり」。

***山また山に山めぐり**　まはるはまはるは山姥が山また山に山めぐり（壽門松）　君を慕ひて八幡山、山また山に山廻り、實に山姥が子孫ぞと（文武五人男）

山姥に「今までここにあるよと見えしが、山また山に山めぐりして行方も知らずなりにけり」とあるを應用したのである。

世をうつぜみの唐衣（嫗山姥）

世を憂を空蟬にいひかけ、空蟬の殼を唐衣にいひかけたのである。「唐衣」はその條を見よ。山姥に、「世を空蟬の唐衣、拂はぬ袖におく霜は夜寒むの月に埋れ、打すさむ人の絕間にも千聲萬聲の砧の聲のしでうつは」。

【熊　野】

あら心なの村雨やな、春雨の降るは涙か……櫻花、散るを惜まぬ人やある（本領曾我）

この文は熊野に出てゐる。古今集・春歌下部に、「春雨のふるは涙か櫻花、散るを惜まぬ人しなければ」。

思内にあれば色外に顯はる（冥途飛脚）

心に思ふことあれば、物思ひの有樣が顏色に現はれる。熊野及び松風に、「げにや思内にあれば色ほかにあらはる」、心中天網島上之卷に「色外に顯はる」とあるも、この諺に據つた。

閑雲鐘を隔つ　九つの鐘を何として か聞洩せる、閑雲鐘を隔つといふ事を忘れしか（會稽山）

閑雲に遮られれば鐘の音の至ること遲く且微になつて聞えにくいとの意。熊野に、「花は流水に隨つて香の來ること疾し、鐘は閑雲を隔てて聲の至ること遲し」。

草木の雨露の惠みに長ずる如く（國性爺）

熊野に「草木は雨露の惠み、養ひ得ては花の父母たり」。和漢朗詠集、紀長谷雄の詩句に「養得自爲花父母、洗來寧辨葉君臣」。

しかまのかちぢ　しかまのかちぢ清水の、堂もゆるげと踏すゐて（兼好）

播磨國飾磨郡から「かちん」（褐）と云ふ染物を産出するによつて、飾磨の褐を徒歩路ともぢつたのである。

ここの文は熊野に、「しかまのかちぢ清水の」とあるを應用したので、「しかまのかちぢ」は清水にかけていうたまでである。

四條五條の橋の上、老若男女貴賤に（孕常盤）

熊野に、「四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙」。

ただこの儘にお暇と、ゆふつけの鷄が鳴く、東路さしてゆく道の、やがてやすらふ逢坂の、關の戶ざしも心して、明けゆく跡の山見えて、國を見捨つる雁がねの、それは越路我はまた、東に歸る嬉しさよ（本領曾我）

と直して下されと、笠差出せば淨瑠璃姬、出來た出來た、是は猿樂狂言の笠の下のまなびか（源義經）

「笠の下」笠の下といふ狂言は、旅僧或在處に立寄り、宿を借して下されと言へば主人、旅僧を宿するは禁制でありますとて斷る。僧よつてこの笠を預けまする程に、座敷の眞中に置いて下され。主人、笠を預るは差支ありませぬと承諾した。旅僧、然らば拙僧は笠に宿を借りましたとて、座敷の眞中に笠を被て讀經を始める。かくて遂に宿を借り、主人から酒を勸められて舞を舞ひ、夜を明すことが作つてある。ここの文、笠の下といふ語に鈴木重家を宿らせようとする語氣見えて、然も婉曲に詩趣深い。

【小　舞】

曉の明星が、西へちろり東へちろり、ちろりちろりとする時は、扇おつ取り刀さいて、往なうよ戻らうよと、いうては妻戸にたたずみし、えにしなきりりんな（女楠）

小舞の小唄に、「曉の明星が、西へちろり東へちろり、ちろりちろりとする時は、扇おつ取り刀さいて、太刀の柄に手打掛けて、往なうよ戻らうよと、いうては袂に取附いた、往なうとも戻らうとも、何ともそなたの御計らひと、いうては小腰にだきついた、いとしにはきりんなら、きりんなら、限りんなうきりなう」とあるに據つたのである。錦文流撰・傾城八花形に、「曉の明星が、西へちろり東へちろり、ちろりちろりとする時に、扇おつ取り刀さいて、太刀の下緒に手うちかけて、行かうよ急がうよと、いうては小腰に抱附いた、いとしかやきりりんない、きりりんきりりんか、きりりんないても刀もない物を」と見えてゐる。

【こんくわい】

こんくわい　眷族どもが敵一討打つて食うてのけう、我には晴るる胸の煙こんくわいの涙なるらん（天鼓）

〔叫嘁〕狐の鳴聲。和訓栞に、「こんくわい。狐釣の狂言にいへり、和語連珠に叫嘁の文字を塡めたり、狐の鳴聲をもて稱するなり」。こんくわいに、「我には晴るる胸の煙こんくわいの涙なるぞ悲しき」。

*はんそくたいし　狐は世の常の獸にかり、天竺にては斑足太子の塚の神（天鼓）　提婆逹多・阿闍世王・斑足王の日の本に再來したる如くにて（持統天皇）

〔斑足太子〕斑足王ともいふ、印度千の小國の王の子である。父王が山を巡つて獅子に逢ひ、その牝獅子と交つた、その獅子殿上に來つて子を産んだ、其子の足上斑駁があつたによつて斑足太子といふ。太子位に卽き好んで人肉を食つたが、須陀須摩王から四無常偈を聽いて、空平等地の證悟を得たといふ。天鼓のこのあたりの文は狂言・こんくわいに據つたのである。こんくわいに、「抑狐と申すは皆神にておはします、天竺にては斑足太子の塚の神、大唐にては幽王の后と現じ、我朝にては稻荷五社の大明神にておはします」。

【茶　壺】

*ざざんざ　お墓の花も枯れ次第、持佛堂の香も消え次第、ざざんざどころぢやござんすまい（薩摩歌）　こちの出見世の仕舞は少しも取る懸もある、貳百目あればざさんざ（生玉）　二の宮の姉がくれたる小褄をも心で結ぶ蝶花形、母は持佛の前に寢て河津殿の位牌諸共にざざんざの辭聞かせてたも（會稽山）

酒宴の座でよく謠つた「三國一ぢや、濱松の音はざざんざ、酒になりすまいたしやんしやん」といふ小唄の囃で、卽ち浮れ騷ぐ意にいふ。茶壺に、「ざざんざ、濱松の音はざざんざ、ああいから醉うたことかな」。竹齋物語に、「またざざんざなど謠ふ所もあり」。井原西鶴撰・好色一代男、越後寺泊りの條に、「この頃上方よりざざんざと申す小歌がはやり來り、ここもとの若い衆いろいろ稽古いたせども、聲がそろはぬと申しはべる」。「三國一ぢや」をも見よ。

【對島祭】

*はんまちどり　沖の鷗・磯千鳥、はんまちどりがちりやちりちり（佐佐木）　はんま千鳥も友を呼ぶ（淀鯉）　はんまちどりの友呼ぶ聲はちりちりやちりちり、ちり縮緬・紗綾や緞子の（吉岡染）

「はまちどり」（濱千鳥）の音便によつて撥音「ん」の増加した語。對島祭に、「はんまちどりの友呼ぶ聲は、ちりちりやちりちり、ちいりちりやちりちり」。

【つんぼ座頭】

笠に挿いたは梛の葉、腰に挿いたも梛の葉（歌念佛）

つんぼ座頭の小歌に、「此處通る熊野道者の、手に持つたも梛の葉、笠に挿いたも梛の葉、これはどなたのお聖樣ぞ、笠の内がおゆかし、大津坂本のお聖ぢや、ああ熊野聖ぢや」。西澤與志撰、野傾友三味線（寳永五年刊）卷二に、「ここを通る熊野道者、手にもつたも梛の葉、笠に挿いたも梛の葉といふ歌を、今の目から見れば云々」。梛は那木の合字で、漢名竹柏といひ、松柏科の樹で高さ二三丈に達す、その葉は竹に似て厚い。熊野緣起に、「大神當國（紀伊）に垂跡の初め、先づ切目の玉名木の淵に現はれ給ふ」とありて、卽ち梛は切目王子の神木である。熊野比丘尼は梛の葉をもち賣つたもので、巣林子作・主馬判官盛久の法性覺道行の文中、熊野比丘尼の言葉に、「我我は熊野比丘尼、如何な關所も御免の者、梛の葉は入りませぬか、ちよくわんくわんと召仰せける」と見えてゐる。嬉遊笑覽卷六上、音曲の條に色競馬の唄を擧げて、「爰を通る熊野道者、手に持つたも梛の葉、笠に挿いたも梛の

内裏も虚空に邁るかと(振袖始)

雷電に、「内裏は紅蓮の闇の如く、山も崩れ内裏は虚空に廻るかと、震動ひまなく鳴神の」。

朝拜殿(てうはいでん)に尊(みこと)あればいんはた殿に惡鬼あり、いんはた殿に駈入り給へば新嘗殿に惡鬼あり、新嘗殿を追詰め給へば、殿上・日御座・夜の御殿を行違ひ追廻し(振袖始)

雷電に、「紫宸殿に僧正あれば弘徽殿に神鳴する、弘徽殿に移り給へば清涼殿に雷鳴る、清涼殿に移り給へば、梨壺・梅壺・晝の間・夜の御殿を行違ひ廻り合ひて」、とあるを作かへたのである。「いんはた殿」はその條を見よ。

ばんじのみやう　僧正騒がず灑水の印を結んでばん字の明を修し給へば(天神記)

[鑁字の明]「鑁」は梵字(Vam)であつて、金剛界大日如來智海の種子であり、水大(地・水・火・風の四大の一)の種子である。「明」は眞言と同じである。三種悉地軌に、「鑁字即大日如來智海、水大種子、神通自在法、智慧智法身」。「鑁字の明」とは、唵縛日羅駄都鑁(Om Vajra-dhatu Vam)の眞言をいふ。雷電に、「僧正御覽じて騒ぐ氣色もましまさず、灑水の印を結んで鑁字の明を稱へ給へば」。なほ天神記のこのあたりの文は雷電に據つたものである。

【羅生門】

*つはもののまじはり　盃取つては天晴なつはものの交り、頼みある兵(つはもの)の交りなかの酒宴かな(堀川波鼓)
り今ぞ名殘の酒宴なる(關八州)

「つはもの」は、もと刀鋒の總名であつたのが轉じて武器を執る人、戰に出る兵士をいひ、更に強(つよ)に聯想して剛者・勇士をいふ。羅生門に、「勇士(つはもの)の交り、頼みあるなかの酒宴かな」。

隔てぬ中の政事(まつりごと)・頼もしや諸共に、近く居寄りて語るべし(弘徽殿)

羅生門に、「隔てぬ中の戲れは、面白や諸共に、近く居寄りて語らん」。

【井筒】

女(をんな)とも見えず男なりけり　本町や新物店の若衆は女とも見えず男なりけり(今宮)

女の如く美しい男子をいひ、在原業平の故事に據つたのであつて、井筒にも、「冠直衣は女とも見えず男なりけり業平の面影」と見えてゐる。今宮心中のこの文に「新物店」とある新物は、古着物に對する語で、新物店とは新しい衣服を仕立てて賣る店をいふ。

(備考)

巣林子が謡曲を脚色して取入れたものでは、嫗山姥には安達原・山姥。大職冠には海士。酒呑童子枕言葉には大江山。源氏十二段長生島臺には熊坂。孕常盤には鞍馬天狗。蟬丸には逆髮・鐵輪・芭蕉。平家女護島には俊寛。雙生隅田川には隅田川。出世景清には大佛供養・景清。用明天皇職人鑑には道成寺。最明寺殿百人上﨟には鉢の木。松風村雨束帶鑑には松風、などはその主なるものである。

狂言に據れるもの

【相合袴】

橋がなければ渡りがない(鑓權三)

手段が無ければ目的に達せられぬ。相合袴に「橋が無うて渡りがない」。

【靭猿】

門田(かど)の早苗よ、なぜなぜ、しよんぼりしよぼりと植ゑたもの、今くる秋に刈ろずよの(兼好)

靭猿(鷺流)に、「新田(しんでん)の構田の若苗を、いやいやいや、しよんぼりしよんぼりと植ゑたもの、いやいやいやいや、今來る娘が刈らうずよの」。

さるひき　罷出たる者は此邊の猿引でござる(松風)

[猿引]猿まはし。このあたりの文は靭猿に據つたものである。

八幡大名(はちまんだいみやう)　八幡大名飢は箙に納め、弓は袋に藏まるといふ(松風)

靭猿のシテ(主人公)である。ここの文は狂言・靭猿を書いたのである。

やいましよ、小猿の時から飼ひ置いて(松風)

「やい」は呼掛の感動詞。「まし」とは猿をいふ。ここの文は靭猿に據つたものである。

【御田】

植ゑい植ゑい植ゑいさ乙女、笠買うて取らせん、笠買うてたもるならば、なほも田をば植ゆべし(兼好)

御田に、「おりたちて、田植ゑい早乙女、笠買うて着せうぞ、笠買うて給ふならば、〳〵、なほも田をば植ゑうよ」。

植ゑい植ゑいさ乙女、めでたき君がお田植、苗代におり立つて田を植ゑば、笠買うて着せうぞ、笠買うてたもるならば、なほも田をば植ゑうよ(女護島)

御田の文を所所改作したものである。前條を見よ。なほ平家女護島のこのあたりの文は、狂言御田の調子に據つて作つたものである。

【笠の下】

かさのした　旅の空では親とも主とも大事にかける此菅笠、一夜預け申したし、是を座敷の眞中にきつ

だわいとの意。この歌は伊勢物語及び古今集・雑下部に出て、「ひとり行くらむ」は「ひとり越ゆらむ」となつてゐる。六帖・新撰和歌集・金玉集・謡曲井筒などには、ここにあるやうに「ひとり行くらむ」となつてゐる。

鹿子斑と詠じけん富士（大磯虎）
鹿子斑とは、牡鹿の背の毛が赤黄色に白い斑があるのでそのやうなのをいふ。斑は梵語・曼荼羅（Mandala）を雑色の意にとつた語であると云ふ。伊勢物語・在原業平の歌に、「時しらぬ山は富士のね、いつとてかかのこまだらに雪の降るらむ」。

神はうけずやいやいやましの・思ひは罰か因果かや（融大臣）
伊勢物語に、「祓へけるままに、いとどかなしきことかずまさりて、ありしよりけに戀しくおぼえければ、戀せじとみたらし川にせしみそぎ、神は受けずもなりにけるかな」。

韓くれなゐの水くくる（唐船噺）
「韓紅」は韓國から傳はつた紅の義で、紅染色の美しいのを稱美していふ。「水くくる」は、水をくくり染めにする意。伊勢物語、在五中將業平朝臣の歌に、「ちはやぶる神代もきかずたつ田川、からくれなゐに水くくるとは」。

からころもきつつ から衣きつつなれつつきららざか（三世相） からころもきつつなれにしつましあれば、在所住居もめづらしく（井筒） から衣我も昔は木綿物着つつ馴れにし緣あれば、今日の錦の旅をしぞ思ふ（三國志）

（「韓衣着つつ」）韓衣は美しい衣の意、着つつの枕詞ともなる。着つつに來つつをかけ、また褄に妻をかけて云うたのである。伊勢物語・在原業平の歌に、「から衣きつつなれにしつましあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」。

信濃路や淺間の嶽 在原の中將なりける男、戀ゆゑ旅をしなの路や、淺間の嶽とつられける山の烟も（川中島）
伊勢物語に昔男（在原業平）の詠める歌、「信濃なる淺間の嶽に立つ烟、をちこち人の見やは咎めぬ」。

忍びて出づる春日野や若紫の摺衣（大織冠）
伊勢物語に、「春日野の若紫の摺衣、しのぶのみだれかぎりしられず」。

しらたまか何ぞ 抱取りたるしら玉か何ぞと問はば、魂も消ゆるばかりの心地なり（加增曾我） 后は夢ともしら玉か何ぞと咎む犬の聲、露と答へて消えぬべく、姿しをれて出で給ふ（井筒）
伊勢物語に、「白玉か何ぞと人の問ひしとき、露と答へて消なましものを」とある歌を引用したのである。傾城島原蛙合戰に、「誘ひ出せし白玉男ぞと、とへば芥川」とあるも、伊勢物語のこの歌に據つたのである。

背くとて雲にも乘らぬものなれば、心ぞ緣に引かれ行く（女夫池）
世を背くとて、仙人などのやうに雲に乘つて飛行するものならねば、心も世を背く緣に引かれて自ら世と遠ざかり行くとの意。伊勢物語の歌に、「背くとて雲には乘らぬものなれど、世の憂きことぞよそになるてふ」。

たつたや沖つ白波のたいこも連れず（淀鯉）
伊勢物語に、「風吹けば沖つ白波たつ田山、よはにや君がひとり越ゆらむ」とある歌の詞を用ゐたのである。「白波」を白波綠林（盜賊）の意として、幇間が金を貪り取るより「白波のたいこ」といひ續けたので、「立つ」に「太鼓」をいひかけたのである。（序に云、伊勢物語なるこの歌の白波には白波綠林をいひかけたのではないが、これをいひかけたと說いた古註もある）。

誰かあぐべきつくも髮 色黑く背高くたれかあぐべきつくも髮、花のあたりの深山木と（天智天皇）
伊勢物語に、「くらべ來し振分髮も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき」、「ももとせに一年たらぬつくも髮我を戀ふらしおもかげに見ゆ」（その條を見よ）。

千代もと祈る子 善惡ともに親のならひ、千代もと祈る子を殺し、たとひ老母が嘆かずとも（井筒）
伊勢物語に、「世の中にさらぬ別のなくもがな、千代もと祈る人の子の爲」とある歌の句に據つたのである。

千夜を一夜に百夜さも、語り明しつ寢明して、飽かぬぞ色の道しある（三國志）
伊勢物語の歌に、「秋の夜の千夜を一夜になずらへて、八千夜し寢ばや飽くときのあらむ」。

月やあらぬ
「わがみはもとの身なれども云云」を見よ。

***つましあれば** 誰が名を立てて虎が石、身の戀衣つましあれば、古鄕へ返せから錦、もろこしが原にぞ着きにける（扇八景） しゆらの旅路につましあれば、はるばるきぬるから衣三河の澤（源義經）
「つま」は妻と褄とをいひかけ、「し」は意を强める助辭であつて、妻（褄）あれはの意。伊勢物語に、「から衣きつつなれにしつましあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」。

つまも籠れり若草に、けふはな燒きそ武藏坊（雪女五枚羽子板）
伊勢物語に、「武藏野は今日はな燒きそ若草の、つまも籠れり我も籠れり」とある歌を作りかへたのである。

手には取られぬ桂男（出世景清）
桂男とは月のことにいひ（「桂の夫婦」を見よ）、そして月の如き君の意をふくめたのである。伊勢物語の歌に、「目には見て手には取られぬ月のうちの、桂の如き君にぞありける」。

飛ぶ螢雲の上までいぬべくは、秋風吹くと歎きしも（弘徽殿
伊勢物語に、「時は水無月のつごもり、いとあつきころほひに宵は遊び居りて、夜更けてやや涼しき風吹きけり、螢高く飛上る、此男ふせりて、飛ぶ螢雲の上までいぬべくは、秋風吹くと雁に告げこせ」と見えてゐる。螢よ、天上まで飛行くならば、世界は既に涼しい秋

葉といふ歌云々」と見えてゐる。

【花　子】

深山のその奥山のこけ猿小猿が雨にそほ濡れて、ひひつくばうてかいつくばうて　凱陣八島。

花子に、「深山の奥のこけ猿めが雨にしよぼ濡れて、つくつくばうたにさも似た」。「こけざる」の義に就いては語解部を見よ。

【枕　物　狂】

枕物にや狂ふらん（隅田川）

枕物狂の文に、「枕物にや狂ふらん、ぬるも寝られず起きもせず」とあるに據つたのである。

【その他の小歌】

磯邊の千鳥、ちんりちりちりと友鳴く聲との、島陰より櫓の音がからりころり（鬮扇曾我）

狂言唄・宇治のさらしに、「鴫の洲崎に立つ浪つけて、はんま千鳥の友呼ぶ聲は、ちりちりやちりちり、ちりちりやちりちりと友呼ぶ處に、嶋陰よりも櫓の音がからりころり、からりころりと漕ぎだいて」。

七つになる子がいたいけな事言うた、殿がほしと唄うた（賀古教信）

これは狂言謠の小歌に據つたもので、この小歌は日本歌謠類聚・上卷にも「七つになる子」といふ題で出てゐる。巣林子作・國八州繋馬には「七つになる子がいたいけな事言うて、殿がほしいと謡うた」と見えてゐる。

森の下浮かれ烏の告げ渡り（大職冠）

狂言小唄に「ここは山陰、森の下森の下、月夜烏はいつも啼く」。

吉野初瀬の花よりも紅葉よりも、戀しき母が見たいものぢや（三世相）

これは狂言小歌に據つたもので、この小歌は日本歌謠類聚・上卷にも「七つになる子」といふ題で出てゐる。

伊勢物語に據れるもの

淺間の嶽に立つ煙　淺間の嶽に立つ煙、その一筋をさまざまに、霞にえいじ雲に見て、歌人は思ひをのぶるとかや（最明寺殿）

伊勢物語に、「信濃なる淺間が嶽に立つ煙、をちこち人の見やはとがめぬ」。謠曲・鉢の木に、「信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く」。

在原の中将なりしまめ男、かのこまだらと詠じけん富士（大礒虎）

「在原の中將」とは在原業平のこと。「まめ男」「かのこまだらと詠じけん富士」を見よ。

在原の優男　かの在原の優男、はるばるきぬるつまかはに（加増曾我）

在原業平は美男であつたのでいふ。ここの文は、業平が三河國八橋で、「から衣きつつなれにしつましあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」と詠んだ歌の語句によつたのである。この歌は伊勢物語にも古今集にも見えてゐる。「妻川」は遊女の名。

色に身代宇津の山、高安、齋宮、西の對、二條の后の俤に、似たつきもなき戀の闇。さそひ出せし白玉を、どこぞと問へば芥川、しばしは露の置き所、伊勢物語の模様もあり（蛙合戰）

伊勢物語にあることを模様にした着物雛形を、伊勢物語中の語を引用して記したのである。色に身代をうち無くするといふに宇津の山をいひかけ、「宇津の山」「高安」「齋宮」「西の對」は皆伊勢物語に見え、「二條の后云々」も伊勢物語に、「二條のきさきに忍びて參りけるを、世の聞えありければ、せうとたちの守らせ給ひけるとぞ」、「昔男ありけり、女のえ逢ふまじかりけるを、年を經てよはひわたりけるを、からうじて女の心をあはせて盗み出で、いと暗きに率てゆきけり、芥川といふ川をいきければ、草の上におきたりける露を、かれは何ぞとなむ男に問ひけるを、ゆくさきはいと遠く夜もふけにければ、云云、白玉かなにぞと人のとひしとき、露とこたへてけなましものを」と見えてゐる。

鶉とならんと詠じけん古歌

「野とならば鶉とならん云云」を見よ。

***おほぬさの**　大ぬさの引く手數多のうき節や（大礒虎稚物語）　ああ大幣のこの蒲團、小六も寝つろ、小夜も寝つらん、房も寝よう、引く手數多に何處の誰めと寝くさつた（重井筒）

〔大幣の〕「大」は美稱、「幣」は麻で作るが故に麻をぬさとも訓む、「の」はの如くの意、大幣は祓する時に用ゐる串にさした四手である。祓果つれば各引寄せて撫でる物なれば、引く手數多とつゞけていふのである。以て彼方此方の數多の人人から引張られて靡くことにいふ。伊勢物語に、「大幣の引く手あまたに聞ゆれば、思へどえこそ頼まざりけれ」と見え、古今集には第三句「なりぬれば」となつてゐる。

春日の里も近ければ若紫の色深く（非筒）

伊勢物語の歌に、「春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れ限り知られず」。

風吹けば沖つ白浪たつた山、夜半にや君がひとりゆくらむ　井筒。

「立田山」は大和國平群郡大和川の上流に沿うた龜瀬越である。この歌は業平が河内國高安の里の女の許に通ひ、夜中に歸るのを女が氣遣うた歌で、風が吹けば沖に白波が立つことであるが、その立つと云ふ名の立田山を、時もあらうに夜半に君が獨り行かれることであらうか、さてさて御身の上が案ぜられること

む（井筒）

流れ行く水と過ぎ行く年と散る花といづれ遲速もあることだから、時節を待てといふことを聞いてゐるだらう、さればあながち悲觀すべきものでなく時節の到來を待つべきであるの意。この歌は伊勢物語に「行く水に數かくよりもはかなきは云云」の歌の次に出てゐる、但し異本にはこの歌が載せて無い。

行く水に數かく 行く水に數書くよりもはかなきは、思はぬ人を思ふなりけり（井筒） 行く水に數かくよりもはかなきは、思はぬ人を思ひ川（關八州） 行く水に數かくよりもたよりなき（嫁諍）

伊勢物語の歌に「行く水に數かくよりもはかなきは、思はぬ人を思ふなりけり」とあるに據つたのである。この歌は古今集戀歌一の部にも出てゐる。一首の意は、流水に一二三の數字を書いても、忽ち消えてはかなきものであるが、それよりもまさつてはかなきは、我を思うてくれぬ人を我ばかり思ふことぢやわい、それは更に何のしるしも見えぬからの意である。

わが門に千尋あるかげと詠ぜしも（女護島）

伊勢物語の歌に「わが門にちひろある竹を植ゑつれば、夏冬たれかかくれざるべき」とあるに據つたのである。一首の意は、我門のあたりに千尋もある竹を栽ゑたればその蔭も廣くして、我一門の者皆この蔭にかくれて夏には凉み冬には霜雪をおほひて暖であらうの意で、一族に皇子御生れ給へば、この皇子の御蔭によつて一門の者ども皆御惠みを蒙ることであらうの意を含めたのである。

***若草につまも籠れり**（生玉） **若草の妻もこもれる駕籠の中**（生玉）

伊勢物語の歌に「武藏野は今日はな燒きそ若草の、つまもこもれり我も籠れり」とあるに據つたのである。

我身はもとの身なれども契りし人のなき故に、月やあらぬとかこちしはげに理と（弘徽殿）

伊勢物語に「昔東の五條に大后の宮おはしましける西の對に住む人ありけり、それを本意にはあらで往きとぶらふ人志深かりけるを、睦月の十日ばかりにほかに隱れにけり、在處は聞けど人の往き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなんありける、又の年の睦月に梅の花盛りに、去年を思出でてかの西の對に往きて、立ちて見・居て見・見れど去年に似るべくもあらず、打歎きてあばらなる板敷に月の傾くまで臥せりて、去年を戀ひてよめる、月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つはもとの身にして」とあるに據つたのである。

大鏡に據れるもの

こち吹かばにほひおこせよ梅の花、あるじなしとて春な忘れそ（天神記）

この歌は大鏡・左大臣時平の條に出で、菅公が左遷されて京都を出られる時に前栽の梅花を御覽じて詠まれたのである。春風が吹く頃になつたら、梅の花よき匂を筑紫のはてまでもおくりよこしてくれよ、我身は配流されて今からは家主人なくなることとなれども、必ず主人がないとて春を忘れること勿れと、心なき梅花に對して名殘を惜まれたのである。

東風吹く風に飛梅の 筑紫の旅を菅原や、現人神も故郷の、春を慕へば慕はれて、東風吹く風に飛梅の（國性爺後日）

大鏡・左大臣時平の條に、右大臣菅原道眞のことを記して、「右大臣の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月二十九日太宰權帥になし奉りて流され給ふ、梅の花を御覽じて、東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ」と詠まれたること見え、この梅後に配所に飛んで行つたといふ。「とびうめ」を見よ。

筑紫の旅を菅原や、現人神も故郷の、春を慕へば慕はれて、東風吹く風に飛梅の（國性爺後日）

「東風吹く風に飛梅の」を見よ。

流れ行く筏は波に沈むとも、君しがらみとなりてとどめよ（天神記）

大鏡・左大臣時平の條に菅公の歌、「流れ行くわれはみくづとなりはてぬ、君しがらみとなりてとどめ」よと見えてゐる。「筏」は「みくづ」とあるべきである。我は流れ行く水屑となつて筑紫へ左遷される身となつた、願くは君御となならせ給うて、水屑即ち左遷される我を赦されるやうに計らはせ給への意。

金葉集に據れるもの

あまの川苗代水にせきくだせ、天降ります神神たり（嵯峨天皇）

「苗代水」とは、苗代田にそそぎかける水、「苗代」は早苗を仕立てる田。「天降ります神」とは、高天原から天降りましたことを、雨降りの意に取做したのである。金葉集・巻十・雜部下に、「天の川苗代水にせきくだせ、あま降ります神ならば神」も。この歌は古今著聞集・卷五にも出て、能因法師雨乞の歌である。

通ふ千鳥の淡路町 佐渡と越後の間の手な、通ふ千鳥の淡路町、絲屋の世繼忠兵衞（冥途飛脚）

風吹いてゐると雁に傳言して吳れよの意であつて、雁にことよせて亡魂に歸つて來よといふ意を含めて歎いたのである。

問へば言ふ問はねば恨む武藏鐙(吉野忠信)

問うて心を打明ければうるさいといふ、さればとて問はねばつらいと恨む、どうとせんよい策が無い意。「武藏鐙」はその條を見よ。伊勢物語の歌に、「問へば言ふ問はねば恨む武藏鐙、かかるをりにや人は死ぬらむ」。

鳥の子を十づつ十は重ぬとも、思はぬ人に身をこがす(井筒)

「鳥の子」は鷄卵である。「十づつ十」は百である。鷄卵を百累ねるは至難のわざなれども、なほ累ね得る術もあらう、されど我を思うてくれない人に、我を思うてくれるやうよりとめん術なく、我ばかりひとり思ひ焦れるの意。伊勢物語の歌に、「鳥の子を十づつ十はかさぬとも、思はぬ人を思ふものかは」。

名にし負はばいざ言問はん都鳥、わが思ふ人はありやなしやと(隅田川)

都鳥よ、汝は都といふ名を負うてゐるならば都のことも知つてゐるであらう、どれ聞いて見よう、我思ふ都の人は今も無事でゐるや如何にの意。この歌は在原業平の詠であつて、伊勢物語、古今集、謠曲・隅田川などにも見えてゐる。

形は鹽尻のやうになん 代代の歌人の眺めの種、形は鹽尻のやうになんと傳へしも(三國志)

伊勢物語に、「その山(富士山)はここにたとへば、ひえの山をはたちばかり重ねあげたらん程して、形は鹽尻のやうになむありける」、とあるに據つたのである。「鹽尻」は鹽後で、鹽後の砂の義である。鹽濱では砂に潮水を撒きて日光に乾かした後、其鹽砂を搔集めて塚の如く圓く高くせるものを鹽尻と云ふ。またこの鹽砂を濾過中に入れ、海水を灌ぎて砂に附着せる鹽分を濾過採集した後の砂は、大笊に入れて適宜の所に棄てる、その形擂鉢を伏せたやうである。これをも鹽尻といふ。

野とならば鶉とならんと詠じけん古歌(千疋犬)

伊勢物語に、「野とならば鶉となりて鳴き居らむ、狩にだにやは君は來ざらむ」、とある歌をさす。

二十重ねて駿河なる富士にたとへし比叡山(兼好)

「むかし男のこの山を云云」を見よ。

二十ばかりの富士の雪、消えてはかなくなりにけり(三國志)

伊勢物語に、「富士の山を見れば、……雪いと白う降れり、……その山はここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ね上げたらん程して」とあるに據つて、お通が二十歲で死ぬをかくいうたのである。

はるばるきぬるつまかはに

「在原の優男」を見よ。

富士を擧びし鹽尻や(融大臣)

「鹽尻」はその條を見よ。伊勢物語に「富士の山は……形は鹽尻のやうになむありける」。

***ふりわけがみ** 振分髮の頃よりも井筒にたけをくらべこし、互にかげを水鏡(井筒) 振分髮を競べ來し井筒燈籠井戸屋形(嫗山姥)

〔振分髮〕童男童女が髮を結ばないで、生ひたる儘に左右に分けて垂れたるをいふ。伊勢物語に、男から女に贈つた歌に、「筒井筒井筒にかけしまろがたけ、おひにけらしな相見ざる間に」、またその返歌に、「くらべこし振分髮もかた過ぎぬ、君ならずして誰かあぐべき」。

***みやこどり** 夫婦も元は都鳥、あるかなきかのかせ所帶(隅田川)

〔都鳥〕小鷗をいふ、嘴赤く腹白く背鼠色である。ここの文は、夫婦も元は都の者なるが、今は有るか無きかの貧乏所帶といふを、伊勢物語にある「名にし負はばいざこととはん都鳥、我思ふ人はありやなしやと」、とある歌の句によつて飾つたのである。

昔男の芥川、ちりも厭はぬ露の身を、草におくてふ白玉か、問へど答へず消えもせず(關八州)

伊勢物語にある文に據つてかくいうたのである。「色に身代宇津の山云云」の條に、ここにいへる伊勢物語の文を擧げておいた。

昔男の、この山を二十重ねて駿河なる富士にたとへし比叡山(兼好)

「昔男」とは在原業平をいふ。伊勢物語に、「不二の山を見れば五月のつごもりに雪いと白う降れり。時しらぬ山は富士の嶺、いつとてかかのこまだらに雪の降るらむ。その山はここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ね上げたらん形して、なりは鹽尻のやうになむありける」とあるに據つたのである。

葎生ひて茂れる宿のうれたきに、假にも鬼のすだくなりとは、昔男のこはざれに女を鬼との捨言葉(袍狩)

伊勢物語に、「昔男田からすとて見をりけるに、女どもこの男を見て、いみじきすきもののしはざやと戲れ言ひつつ集り入り來りければ、一日は男恥ぢて隱れたれど、女ども戲れ歌よみてそこに居れば、男も負けじ心起りてよみたる返歌に、葎生ひてあれたる宿のうれたきは、かりにも鬼のすだくなりけり」と見えてゐる。一首の意は、葎生ひ茂つて荒れ果てた宿のいやらしきは、かりそめにも怖しい鬼の集ることであるわいといふのであつて、女どもの集り入り來たのを言葉ざれに、女を鬼と見立てた捨言葉である。

武藏野や我ぞ籠れる若草に(五人兄弟)

伊勢物語の歌に、「むさし野はけふはな燒きそわかくさの、つまも籠れり我も籠れり」。

百年に一年足らぬつくも髮(蟬丸)(井筒)

「九十九」を「つくも」とよんである。「つくも髮」とは老人の頭髮の白く短きをいふ、恰も江浦草(ふとゐと云ふ)といふ水草の花が短き毛のやうな柄を有してゐる。それに似てゐるからの稱である。和名抄に、「辨色立成云、江浦草、和名豆久毛」。伊勢物語の歌に、「ももとせに一年足らぬつくも髮、我を戀ふらしおもかげに見ゆ」。

行く水と過ぐるよはひと散る花と、いづれまててふことを聞くら

らの深山木なり」。

ははきぎのまき 自(みづか)らこれにて琴を調べて合せんに、如何にと咎むる人あらば帚木の巻と答ふべし（孕常盤）

〔帚木巻〕帚木の巻に、ある殿上人・女の門近き廊の簀子だつものに腰かけて、暫く月を見る風情にて笛を吹く、家の内には女が琴を取出して、笛の音に合すことを記し、また同巻・空蟬の歌に、「數ならぬ伏屋におふる名のうさに、あるにもあらず消ゆる帚木」と見えてゐる。この二者を取合せて、「帚木の巻と答ふべし」というた謎である。

***ひとだまひ** 人人轅(ながえ)に取附きつつ、人だまひの奥に押遣られて物見車の力も無き、身の程を思ひ知らすべし（弘徽殿） 思出でたりその昔賀茂の祭の車あらそひ、車の前後にばつとよりて人人轅に取附きつつ、人だまひの奥にオオ押遣られて物見車の力も無き（蛙合戰）

〔人給〕人に給うて乘らしめる車の義。供の女房の出車。副車。葵の巻に、賀茂禊の日に葵の上と六條御息所とが車爭ひのことを記して、「遂に御車ども立て續けつればひとだまひの奥に押遣られて、物も見えず心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるがいみじう妬きこと限なし」と見えてゐる。巢林子のここの文はこれに據つたのである。

巢林子作・本領曾我に、「翼はあけに染めなされ、人だまひにぞ逃げ入つたり」とある「人だまひ」は人溜りの意に誤解し、人の集合する控所の意に用ひたのであらう。

ひろはば消(き)えん玉篠(たまざさ)の霰(あられ) ひろはば消えん玉篠の霰の手にも取られぬ面影（西王母） ひろはば消えん玉篠の霰と譬へたは光源氏（千疋犬）

帚木の巻に、「御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾(ひろ)はば消えなむと見ゆる玉篠の上の霰などの、艶(えん)にあえかなる好(す)き好(ず)きしさのみこそをかしくおぼさるらめ」、とある中の文によつたのである。

ほのぼののほの暗き黄昏(たそがれ) かのほのぼののほの暗き、黄昏早く寢し時は、蚊屋(かや)釣草(つりぐさ)を思ひ出し（用明天皇）

（二枚繪）

夕顔の巻の歌に、「よりてこそそれかとも見め黄昏に、ほのぼの見つる花の夕顔」とあるに據つたのである。「かの」は卽ち源氏物語・夕顔の巻のこの歌をさしたのである。

松(まつ)の雪(ゆき)暖(あたた)かげなる 白妙匂ふ空の色、朝日夕日の影までも共に凍りて松の雪、暖かげなると書きたるもこれならん（冷泉節）

末摘花の巻に、「いとあはれに淋しう荒れ惑へるに、松の雪のみ暖げに降り積める、山里の心地して物あはれなるを」とあるに據つたのである。

紫(むらさき)も色の名 紫も色の名、あかしといふも色の名、藤壺に末摘花散里ぞゆかしき（源義經）

紫の上も色ある女の名だとの意。ここの文の明石、藤壺の女御、末摘花、花散里、これ等總て源氏物語に見えてゐる女である。箏曲・中組の須磨に「須磨といふも浦の名、明石といふも浦の名、更科の月共に眺めていざやあかさん」。

藻鹽草いせをの海人(あま)にあらねども（今宮）

「藻鹽草」はその條を見よ。須磨の巻の歌に、「うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれ、藻鹽たるてふ須磨の浦にて」、とあるによつて、「藻鹽草伊勢をの海人」とつづけたのである。

***ゆふがほ** さながら鬼神と夕顔の五條の橋の橋板をとどろとどろと蹈鳴し（孕常盤） はらしてほしやと夕顔の黄昏照す行燈の障子にうつろをよく見れば（反魂香） 過ぎにし御見の夕顔の露の黄昏、身にしみじみと我魂に封じ文（賀古教信）夕顔の黄昏たどる覺束なさ、先(さき)にも見付けて編笠の（氷朔日） 夕顔のそれにはあらぬ小家の軒（最明寺殿） 夕顔の花をやる五條わたりの黄昏に、光源もじ御げんもじ、白き扇の伊達なるに一ふさ折りて參らせし、花の情のかれ言を今もみどりの松原や（大原問答）

〔夕顔〕夕顔の巻に、光源氏の君が乳母の大貳の病を見舞に五條に行かれ、門前に立つて大路の樣を見れば、乳母の家の傍に板圍ありて、夕顔這上つて白い花美しう咲いてゐるので、光源氏の君が隨身に命じてその花を折らせにやつたれは、圍の内より童が白扇を持出て、これに夕顔の花を載せて持つて歸れといふ、こんな事から光源氏の君と夕顔の女が契を結ぶことになつたことを記してある。孕常盤に「夕顔の五條」とあるは、夕顔の巻の故事によつて、「五條」の上に「夕顔の」を添加へたまでである。謠曲・橋辨慶にも、「夕顔の花の色、五條の橋の橋板をとどろとどろと踏鳴し」と見えてゐる。巢林子この文に據つたのである。

「夕顔の黄昏」は、夕顔女に夕方薄暗い顔をきかせたので、夕顔の女は光源氏と契つたが薄命であつた。ここの文もそのはかなき契、つれなき戀、新愁離恨の悲哀を含んでゐる。

「夕顔のそれにはあらぬ小屋」とあるは、源氏物語に、夕顔の家は五條にある破屋で、賤者と軒近く話し聲や臼・砧の音なども枕上に響いたとあるやうに、佐野源左衛門常世の破屋の狀は夕顔の陋屋のそれに似てゐればかくいうたのである。

折(を)らば落(お)ちなん萩の上の露、拾(ひろ)はば消えなん玉篠の霰と譬へたは光源氏 千疋犬

帚木の巻に、「御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、ひろはば消えなむと見ゆる玉篠の上の霰などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそをかしくおぼさるらめ、今さりとも七年あまりの程に思し知り侍りなむ」、と見えて馬頭が光源氏及び頭中將に語つた言葉であつて、光源氏の言葉ではない。

忠兵衛が新町遊廓なる佐渡屋町・越後屋と淡路町との間を通ふことを、「淡路島かよふ千鳥の鳴く聲に、いくよねざめぬ須磨の關守」の歌句によつたのである。この歌は金葉集冬部また小倉百人一首中に出で、源兼昌の詠である。淡路町は忠兵衛の住居せる町名である。「ゐちご」をも見よ。

指櫛の蒔繪に似たる松原(卯月紅葉)

指櫛は櫛中などで作り蒔繪などあつて頭髮の飾にさす櫛。金葉集・雜部上、大中臣輔弘の歌に、「玉櫛笥二見の浦のかひしげみ、蒔繪にみゆる松のむら立」。

誰が文も見ぬ戀の道(天網島)

金葉集卷九、雜部上、小式部内侍の歌に、「大江山いく野の道の遠ければまだ文もみずあまの橋立」。

文も見ぬいくのの道や大江山(賀古教信)

金葉集・雜部上、小式部内侍の歌に、「大江山いくのの道のとほければ、まだ文も見ず天の橋立」の「生野」は但馬國朝來郡、「大江山」は丹後國與謝郡にある。

もろともにあはれと思へ山櫻　もろともにあはれと思へ山櫻、花より外に知る人もなし(娥)　もろともにあはれと思へ山櫻、花に心をそみかくだの(凱陣八島)

金葉集・雜部、前大僧正行尊の歌に、「もろともにあはれと思へ山櫻、花より外に知る人もなし」とあるに據つたのである。この歌は小倉百人一首中にも見えてゐる。一首の意は、山櫻よ相互にあはれと思ひくれよ、この山中にては花より外には更に知合ひもなければとの意である。

源氏物語に據れるもの

命がつらき老後の恥(大經師)

桐壺の卷に、「命長さのいとつらう思う給へ知らるるに」。徒然草第七段に、「命長ければ恥多し」。

源氏は明石の鯛を釣る(隅田川)

明石の卷に、源氏の君が明石の浦に侘住居したことがあるによつて、かく云うたのである。

五條あたりの軒の端、白く咲けるといひし物語の風情(三國志)

夕顏の卷に、「五條わたりなる家たづねておはしたり、……かの白く咲けるをなむ夕顏と申し侍る、……むねむねしからぬ軒のつまごとに這ひ纒はれたるを」と見えてゐる。源氏の君が大貳の乳母が重く煩うて尼となつたを見舞ふ爲、五條あたりなる家を尋ねて行かれ、大貳の乳母の隣家の垣に白い花の咲亂れてゐるを見給ひ、隨身を召してあれは何の花ぞ一ふさ折つて參れと宣へば、夕顏と申しますと答へて折りに行き、夕顏の君を見そめて、やがて源氏の君がこれと契を結ぶことが記してある。

小萩がもとを思ふにも、我が宮城野が遣瀬なさ(賀古教信)

桐壺の卷に、「宮城野の露吹き結ぶ風の音に、小萩がもとを思ひこそやれ」。

***たそがれ**　彼のほのぼののほの暗き、たそがれ早く寢し時は(用明天皇)(二枚繪)

〔黃昏〕誰そ彼の義であつて、誰か彼か見分難き頃、即ち夕暮をいふ。淮南子・天文訓に、「日至二虞淵一、是謂二黃昏一」。ここの文は夕顏の卷に、「よりてこそそれかとも見めたそがれに、ほのぼの見つる夕顏の花」、とある歌の詞によつたのである。

橘の木の埋れし御隨身召して拂はせ給へば、羨しげに松の木のおのれとひとり起き返り、さつとこぼるる其氣色花とも波とも眺むべし(融大臣)

末摘花の卷に、「橘の木の埋れたる、御隨身召して拂はせ給ふ、羨み顏に松の木のおのれと起きかへりて、さとこぼるる雪も、名に立つ末のと見ゆるなど云云」と見え、名に立つ末のとは、後撰集に「我が袖は名に立つ末の松山か空より波の越えぬまぞなき」とある。

尋ね行く幻もがな傳にても、魂のありかは其處としも、しら露分けて(弘徽殿)

桐壺の卷の歌に、「尋ね行く幻もがなつてにても、魂のありかをそこと知るべく」。

名に立つ末のといひ置きし　名に立つ末のといひ置きし、末摘花の園の雪、花に擬へて吉野山(冷泉節)

末摘花の卷に、光源氏の君が末摘花といふ女の内に宿りて、朝早く歸らうとしてあたりの景色を眺める文に、「さとこぼるる雪も名に立つ末のと見ゆるなどを、いと深からずとものだらかなる程にあへしらはむ人もがなと見給ふ」、とあるに據つたものである。さて源氏物語に、「名に立つ末の」といへるは、雪の樣が空より波の越える如く見える景色の面白きを云うたので、後撰集・卷十、土左の歌に、「我が袖は名に立つ末の松山か、空より波の越えぬ日はなし」、とあるに據つたものである。

俄に持たせし提灯の吹消すやうに消えてけり(雪女)

夕顏の卷に夕顏の死を敍した條に、「物におそはるる心地して驚き給へれば火も消えにけり、……渡殿の火も消えにけり、風少しうち吹きたるに人は少くて」などとあるより得た着想であらう。凡そ巢林子が幽靈のあはれを書けるは、傾城反魂香、卯月潤色などの諸篇に見えて、何れも神韻飄逸凄氣人に逼るを覺えしめる。

花のあたりのみやま木　誰かあぐべきつくも髮、花のあたりの深山木と、各どつとぞ笑はるる(天智天皇)

紅葉賀の卷に、「源氏の中將は青海波をぞ舞ひ給ひける、片手には大殿の頭中將、かたち用意人には異なるを、たち並びては花のかたは

えてゐる。巣林子も蘆の類と思うてゐたことはこの文によつて知れる。古今集戀歌四の部に「みちのくのあさかの沼のはなかつみ、かつみる人に戀ひやわたらむ」。

あさみどりといふ柳樽 虎が名に負ふ竹葉の、あさみどりといふ柳樽、封を切らんと悦びける（加増曾我）

近松のここの文は、俚諺に「竹に虎」「虎は千里の藪に棲む」などいふによつて、虎が名に負ふ竹を竹葉（その條を見よ）にいひかけ、清酒の銘を淺綠というて、古今集春歌上の部に、「あさみどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」とある歌によつて、柳樽にいひかけたのである。

飛鳥川の人心 これぞ娘の靜と名乘らんとせしが、いやいやいや飛鳥川の人心と、そしらぬ顔にて（綠靜）

飛鳥川淵は瀨となる人心（聖德太子）

飛鳥川は淵瀨常なきより、人心の變り易きに喩ふ。古今和歌集・雜歌下部、よみ人しらずの歌に、「世の中は何か常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀨になる」。飛鳥川は明日香川とも書き、大和國高市郡にあつて、山川なれば淵瀨變り易いと云ふ。

あだなりと名にこそ立てれ櫻花（嫗山姥）

櫻花は散り易く、頼み難いものぢやと、評判になつてゐるがさての意。古今集・春上部、讀人しらずの歌に、「あだなりと名にこそ立てれ櫻花、年に稀なる人も待ちけり」。

逢はずは何を玉の緒 逢はずは何を玉の緒も、絶えなば絶えれと伏し沈み（卯月紅葉）

古今集戀歌一の部、よみ人知らずの歌に、「片糸をこなたかなたに縒りかけて、逢はずば何を玉の緒にせむ」。玉の緒は玉を貫く緒である。命をも魂の緒というて玉の緒に通はせたのである。「玉の緒」をも見よ。

天地を動かし、鬼神を感ぜしめやかに、妹脊も猛き武夫も、心柔か饅頭や（二枚繪）

古今和歌集の序に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をもやはらげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり」とあるをもぢつたのである。

***あやなし** 闇はあやなし梅澤村（會稽山）

〔文無〕布帛の文の無いから出た詞で、理の立たぬ、わけの分らぬなどやうの意。古今集・春歌上部に、「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくるる」。

在原のかの中將の詠歌の如く、唐紅の水くくる（唐船噺）

在原の中將は在原業平のことで、在五中將と稱した人。「からくれなゐ」とは、韓國から傳はつたくれなゐで、韓は染色のよきに附けていひ、後には唐衣などと廣く美稱に用ゐる。「くれなゐ」は吳の藍の義で、染めかた藍の如きより名づけた語で、紅色をいふ。「水くくる」とは、水をくくり染即ち絞染にするをいふ。古今集・秋の下部、業平朝臣の歌に、「ちはやぶる神代もきかず龍田川、からくれなゐに水くくるとは」と見え、この歌小倉百人一首にも見えてゐる。

荒れたる宿 躑躅げげばな壺菫、荒れたる宿と詠みけるは、今の我身にくらべつつ、眺めやるさへ哀れなり（十二段）

古今集・秋上部、兼覽王の歌に、「女郎花うしろめたくも見ゆるかな、荒れたる宿にひとり立てれば」と見えてゐる。この歌の意は、この荒れてゐる宿に女郎花ただ一人生ひ立つて居れば、あの女郎花はさても淒慘たる宿によくもゐることぢやと、不安心に思はれることよと、荒れたる宿の女主人を女郎花に喩へて詠んだのである。また堀河院百首、藤原公實の歌に、「昔見し妹が垣根は荒れにけり茅花まじりの菫のみして」といふもある。

いそのかみ 年經てここにいそのかみ、古道具屋のふる格な、かたちの父の親の手を（卯月紅葉）

〔石上〕大和國山邊郡にある地名で、その石上には布留といふ所がある。古今集・夏の部に、「いそのかみふるき都の時鳥、聲ばかりこそ昔なりけれ」。ここの文はこの歌句を取つて、「ふるき都」を「ふる道具」にかへて云うたまでである。

いとせめて戀しき時は烏羽玉の、夜の衣を身に重ね（吉岡染）

古今集・卷十二、戀歌二の部に、「いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣を反してぞ着る」。「戀しき時はうば玉の云云」をも見よ。

絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳と、つらねたる西の大寺是かとよ（大織冠）

古今集・春上の部、「西大寺のほとりの柳をよめる」の題で、僧正遍昭の歌に、「淺みどり絲よりかけて白露を、玉にもぬける春の柳か」。「西の大寺」をも見よ。

色こそいはね山吹の十兩ばかり一包（蔭門松）

口にこそいはねども山吹の花の色（黃金）十兩ばかりといふ意で、古今集卷十九、誹諧歌の部、素性法師の歌い「山吹のはな色衣ぬしやたれ、問へど答へず口なしにして」とあるに據る。

色こそ見えね河與が悅喜（女殺）

古今集・春上部の歌、「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくるる」の下の句の、香を河與（河内屋與兵衞の略稱）にかけていひ續けたのである。

浮世の淵瀨常ならぬ（嫗山姥）

古今集・雜下部、讀人知らずの歌に、「世の中は何か常なるあすか川、昨日の淵ぞ今日は瀨になる」によつたのである。

鶯の縫ふてふ 鶯の縫ふてふ旅の笠（百合若） 鶯の縫ふてふ花の名にし負ふ葛西（蛙合戰）

「てふ」は「といふ」のつまつた語。鶯が笠を縫ふといふ古歌によつたもので、古今集・卷二十、かへしものの歌に、「青柳をかた絲によりて鶯の、縫ふてふ笠は梅の花がさ」。「花の名にし負ふ葛西」は、笠に葛西をかけたのである。

右近の橘の昔の契りは忘れじも

源平盛衰記に據れるもの

いしだがくび 巴が馬上の女武者、石よりかたき石田が首、鞍の前輪に押付けて捩切り（兼好）

「石田が首」内田の首の誤である。内田三郎家吉は六十人力ある剛の者であつたが、關寺の合戰に木曾義仲の妾巴御前と格闘し、巴御前の鞍の前輪に組敷かれて首を搔取られた。源平盛衰記・卷三十五、巴關東下向の條に、「やをれ家吉よ、日本一と聞えたる木曾の山里に住みたる者なり、我をば軍の師と憑めとて、弓手の肘を指出し、甲の鉢甲取詰めて、鞍の前輪に攻付けつつ、内甲に手を入れて、七寸五分の腰刀を拔出し、引あをのけて首を搔く」とある。石田爲久は粟津が原で木曾義仲を討取つた人である、それを巣林子が思違したのであらう。ここの文は、巴が内田の首を搔取つてゐる繪馬をいふのである。

孝は百行の始（持統天皇）

源平盛衰記・卷十七に、「孝は百行の源」。

耆婆が良藥かなはずして、跋提河の涅槃に入り給ふ、病者は佛體、醫師は耆婆、定業の天命藥によらば釋尊入滅あるべきか（孕常盤）

「耆婆」「涅槃」「定業」「入滅」はその條を見よ。

源平盛衰記に、「彼の耆婆が醫術及ばずして、釋尊涅槃に入り給ひき、これ即ち定業の病癒えざることを示さんが爲なり、治するは佛體なり、療するは耆婆なり、定業なほ醫術にかかはるべくは、豈釋尊入滅あらんや」。

才力を以て人に勝つ者は亡び、徳を以て人に勝つ者は强し（源義經）

源平盛衰記・卷三、小松大臣入道教訓の條に、「以レ徳勝レ人者昌、以レ力勝レ人者亡といふ事あり」。

日月は一人の爲に其明を暗まさず、明王は一人の爲に其法を枉げず（本領曾我）

參考盛衰記・卷十一に、「倩愚按を廻らすに、明王爲二一人一不レ枉二其法一、日月爲二一物一不レ暗二其明一」。

白河の法皇、祇王・祇女・佛・刀自が法名を過去帳にとめさせ給ひたる其例（三世相）

後白河法皇が祇王・祇女・佛・刀自の節操あつたを聞召されて、六條の長講堂の過去帳にこれらの女の名を書留められたことが源平盛衰記卷十七、祇王祇女佛の前の條に見えてゐる。「ぎわう・ぎぢよ・ほとけごぜん」をも見よ。

仙宮の蛙息を吐いて虹となる（蛙合戰）

白氏文集・蝦蟇の詩に、「常恐飛上レ天、跳躍隨二姮娥一、往往蝕二明月一」。南浦文集に、「我日本之諺有レ之曰、蝦蟇之嘆息、其氣昇レ天」。源平盛衰記・大地震の事の條に、「昔も今も怨靈は恐しきことなり、蟇の息天へ上るといふこともあるぞかし」。これらから云つたものであらう。

細谷川の丸木橋ふみ返れとぞ祈りける（萬年草）

飛脚の九兵衞が心細くなるを細谷川にいひかけ、そして源平盛衰記なる平通盛の歌、「我戀は細谷川の丸木橋、ふみかへされてぬるる袖かな」に據つたもので、踏みかへさるるを文返さるるにきかせたのである。

昔は巖窟の洞に籠められて三春の愁歎を送り、今はくはうでんのうねに捨てられて故敵の一ぞくと恨みしも、雁に古鄕の便あり（百合若）

「くはうでん」は曠田か。（或は曠田又は旱天の誤か）。「胡敵の一ぞく」は「胡敵の一足」の誤である。巣林子作・平家女護島（紙屋與右衞門版七行本二十六枚目の裏二行目）に、「今は胡狄の一足とかこちしも」と見えてゐる。「胡敵の一足」とは、胡敵の中にありて一本足の不自由極まる者の義である。慶長活字版・源平盛衰記・智卷第八、漢朝蘇武の事の條に、漢の蘇武匈奴に使し、捕はれて北海の邊に放ち棄てられ、羊を飼はせられたこと十九年、一日雁の翼に文を結付けて之を放つた、其文に、「昔籠二巖穴之洞一、徒送二三春之愁歎一、今放二曠田之畝一、空同二胡敵之一足一、設身留二永朽於胡國一、必神還再仕二于漢君一」と書いたと見えてゐる。平家物語・卷二、蘇武の事の條に、「昔は巖窟の洞に籠められて三春の愁歎を送り、今は旱天のうねに捨てられて胡敵の一足となれり」。

明王は一人の爲にその法を枉げずとかや（百日曾我）

參考盛衰記・卷十一に、「倩愚按を廻らすに、明王爲二一人一不レ枉二其法一、日月爲二一物一不レ暗二其明一」。

古今和歌集に據れるもの

あさかのぬまのはなかつみ みちのくのあさかの沼のはなかつみ、さまざま名あると聞きたるに、伊勢の濱荻・難波の蘆、よしといふも同じ草か（佐佐木）

「安積沼の花かつみ」あさかの沼は岩代國安積郡にありて、日和田の里・東勝寺の跡の田圃がその舊跡だといふ。「はなかつみ」には諸說あれども、「はな」は花で、「かつみ」は菰をいふのであらう。能因の歌枕に、「かつみは菰をいふ、菰花を花かつみといふか」と見え、釋契沖などこの說に從うてゐる。屋代弘賢のかつみ考に、「今陸奥の人にきけば、安積沼にまさしくかつみあり、今は轉訛してかつき又はかつごとよぶ也、他國のまこもに違ふことなし」と見

昨日といひ今日と暮してあすか川流れの里（女腹切）

古今集・巻六、冬部、春道列樹の歌、「昨日といひ今日と暮してあすか川、流れて早き月日なりけり」の句を取りて、流れの里につづけたのである。「流れの里」は遊里をいふ。

昨日まで早苗とりしが、いつの間に稲葉そよぎて秋の野や（小栗判官）

「さなへ」は早苗と書けど、「さ」は「さ月」「さ夜」「さをとめ」などの「さ」と同じく接頭語である。昨日あたり苗をとつて植付をしたばかりのやうに思はれるに、月日の經つは早いものぢやわい、何時の間にか稲葉延び、それに秋風がそよそよと動いて、秋の野となつたことやとの意。古今集・秋上部、よみ人知らずの歌に、「昨日こそさなへとりしか、いつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く」。

君が代千代に八千代に巖に（兼好）

我大君の御代は千年も萬年も、そして小石が巖石となるまでもの意。古今集・賀歌の部、題しらず、よみ人しらずの歌に、「わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔の蒸すまで」。和漢朗詠集・雜の部に、「君が代は千代に八千代に、さざれ石のいはほとなりて苔のむすまで」。

君と我が寢る床夏の花（千疋犬）

古今集巻三、夏歌の部、躬恒の歌に、「塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我がぬる床夏の花」。

心あてに折らばや折らん（本領曾我）

推量りに折つたならば或は折られるであらうの意。古今集・秋の部、凡河内躬恒の歌に、「こころあてに折らばや折らん、初霜のおきまどはせる白菊の花」。

心を種として和歌に和らぐ日の本（酒呑童子）

古今集序文に、「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける、……男女の中をも和らげ、たけき武夫の心をも慰むるは歌なり」と見えてゐる。

戀しき時は烏羽玉の夜の衣を反せ（吉野忠信）

烏羽玉は夜にかかれる枕詞である、「うばたま」を見よ。寢卷を裏反して着て寢れば、戀しい人を夢に見るといふ迷信があつた。古今集・巻十二、戀歌二の部に、「いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣を反してぞ着る」。「いとせめて戀しき時は云云」をも見よ。

聲帆にあげて（以呂波）

聲を高くあげるをいふ。古今集・秋上部、藤原菅根の歌に、「秋風に聲を帆にあげてくる舟は天の門渡る雁にぞありける」。

酒屋のしるしに我宿も杉立てる門（天智天皇）

「三輪のしるしの神杉云云」を見よ。

さざれ石巖とならん八千歳（日本武尊）

古今集巻七、賀歌の部、題しらず、讀人しらずの歌に、「我が君は千世に八千世にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」。

さそふみづ 身を浮魚の寄邊を頼む、誘ふ水はそもじ樣、いざ拜殿へも一緒にと（川中島）

〔誘ふ水〕水の行方へ浮草の誘はれるやうに誘ひくれる人。古今集・雜下部、小野小町の歌に、「わびぬれば身をうき草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」。

しかぞ住む世をうぢ川を堰き入れて（赤染衞門榮花物語）

古今集・雜歌上の部、喜撰法師の歌に、「わが庵は都のたつみ然ぞ住む、世をうぢ山と人はいふなり」。

***しがらみ** しがらみは流れもあへぬ紅葉ばと（賀古敎信）

〔柵〕水流を堰く爲に杭を連ね立てて横に竹柴などを搦附けたのを云ふ。古今集・秋歌下部に、「山川に風のかけたる柵は・流れもあへぬ紅葉なりけり」。

締めてまつはれ藤の棚（曾根崎）

締めてまつはれ藤の花を、藤の棚の地名にいひかけたのである。古今集春歌下の部、僧正遍照の歌に、「よそに見て歸らむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも」。「藤の棚」は地名部を見よ。

霜のたて露を貫く 茶宇の單衣の霜のたて、露をつらぬく袖の數珠くる乘物をそれと見て（源義經）

「たて」は經糸のこと。古今集・秋歌下の部、關雄の歌に、「霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦のおればかつ散る」。

白き蓮の露の玉、濁に染まぬ心もて（隅田川）

「白き蓮」は白蓮社の故事をいひかけたのである。「ゑをんほふし」を見よ。古今集・夏部、僧正遍昭の歌に、「はちすばのにごりにしまぬ心もて、何かは露を玉とあざむく」。

すぎたつる 幕の外面は數數の商ふなかに夫婦づれ、男茶を賣る女は酒屋、杉立つるとのしるしかや（十二段）

〔杉立〕昔は酒屋に酒ばやし（杉葉を集め圓めて酒屋の看板にしたもの）があつた。ここの文は酒ばやしの緣を以て、「酒屋杉立つる」といひ、それに古今集・雜歌下の中に、「わが庵は三輪の山本戀しくは、とぶらひきませ杉立てる門」とある歌をきかせて、戀の意を含めたのである。

住吉の岸の姫松幾千歳絶えぬ（大織冠）

古今集・雜歌上の部に、「われ見ても久しくなりぬ住のえの、岸の姫松幾世へぬらむ」。

住吉の松を秋風吹くからに、聲うちそふる沖つ白波（百日曾我）

住吉の松を秋風がどうどうと吹くにつけて、沖の白波がどうどうと聲を打添へ和することよとの意。古今集・賀の部、秋の題にて躬恒の歌に、「すみの江の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つ白波」。

末の松山波越ゆる幾世を見ん（鎌大臣）

末の松山は奥州にあつて、海岸に遠い地なれば、波の越えることはあるまいが、その末の松山を波が越える時のあるまで、我が心の變ることなく幾久しう契らうとの意。古今集・陸奥歌に、「君を置きてあだし心を我が持たば、末の松山波も越えなむ」。

僧正遍照が女郎花といふ草花の罰當りて落馬して

「我落ちにきと」を見よ。

の(酒呑童子)

右近の名に紫宸殿前の右近の橘をいひかけ、花橘の香を嗅げば、今に忘られぬ昔馴染の人の袖の香がするといふに據つたのである。古今集・夏歌の部に、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」。

歌に六義あり

「りくぎ」を見よ。

歌人の評判つけ置きし、よき衣着たる商人も(二枚繪)

古今和歌集、紀貫之の序文に、文屋康秀の歌を評して、「文屋の康秀は詞はたくみにてそのさま身におはず、いはば商人よき衣着たらむが如し」とあるによつたのである。遊女はよき衣着るにより、天滿屋お島に當てていうたのである。

歌よむ蛙(小栗判官)

古今和歌集の序に、「花に啼く鶯、水に棲むかはづの聲をきけば、生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける」。

打渡すをちかた人に物申す、あれその其所に白く咲けるは何の花ぞもや(用文章)

古今集・卷十九、旋頭歌の部、題知らず、よみ人知らずの歌に、「うち渡す遠方人に物まをすわれ、そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも」。巣林子作・今川了俊に、「打渡す遠方人の假名は誰ぞ」、とあるもこの歌に據つたのである。

映りにけりないたづら書め(國性爺後日)

古今集・春の部、小野小町の歌に「花の色は移りにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに」。

沖つ白波立つ　世界の男の命の山賊、沖つ白波立つ名もわざくれ(関八州)

古今集雜歌下、よみ人しらずの歌に、「風吹けばおきつ白波たつ田山、よはにや君がひとり越ゆらむ」。白波を白波綠林の意とした古説もあれば、「山賊」より「沖つ白波立つ」の文句につづけたのである。

沖つ白波立田越、夜半にや君が一しぐれ(女楠)

沖の白波立つを立田越にかけて序としたのである。立田越は、大和國平群郡大和川の上流に沿うた龜瀬越のことである。こゝの文は、古今集・雜歌下、題しらず・よみ人しらず、「風吹けばおきつ白波立田山、よはにや君がひとり越ゆらむ」とある歌によつたのである。

おきまどはせると詠みけるも(伊豆日記)

「おきまどはせる」とは、初霜が置きてまぎらはしう見するを云ふ。古今集・秋歌下部に、凡河内躬恒、「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」。この歌は小倉百首中にも出てゐる。

音羽山、關のこなたと詠みたれど(融大臣)

古今集・卷十一、戀一の部、在原元方の歌に、「音羽山音にききつつ逢坂の、關のこなたに年を經るかな」。音羽山は清水寺のある山「見え渡る山山は云云」を見よ。

かきのもと島屋をちよつと島隠れ　身のうきしほで梅川も、此處な思ひの定宿と、餘所の勤もかきのもと、島屋をちよつと島隠れ、申し淸さん、今日は島屋で彼の田舍のうてずにせびらかされて頭が痛い(冥途飛脚)

「かきのもと」の語には、勤も缺きの「缺き」と「垣の本」と柿本人麿の「柿本」の三つをかけたのである。「島屋をちよつと島隠れ」と、島の同韻語を用ひ、梅川が田舍客に招かれて島屋に揚げられてゐながら、忠兵衞を戀ひ慕うて中途で暇を取つて越後屋に來たことを、柿本人麿の歌、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に、島隠れ行く舟をしぞ思ふ」の中の句を用ひて文飾したのである。(序云、この歌は古今集羇旅歌の中に出で、その左註に「この歌は或人の曰く柿本の人麿がなり」とあるによつて、人麿の歌といはれるのであるが、その實左註は後人記入の竄入したので、人麿の詠ではないことは申すまでもない)。

歌人の家のことぐさは、千千の心を種として、よろづの言の葉もしげり(女夫池)

古今集假名序に、「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」。

風の掛けたる柵　青葉交りの花筏、流れ柵川。川風の、風のかけたる柵も、かかる憂き身はよも留めじ(加增曾我)

風のこしらへた柵い 柵は流れ水を堰く爲に杭を連ね立てて、横に竹や柴を搦め附けたもの。古今集・秋部、春道列樹の歌に、「山川に風の掛けたるしがらみは、流れもあへぬもみぢなりけり」。

片絲の絲よりかけて白露を、玉にもぬける春の柳(大織冠)

古今和歌集・春上部、「西大寺のほとりの柳をよめる」の題で、僧正遍昭の歌に、「淺みどり絲よりかけてしら露を、玉にもぬける春の柳か」。

神鳴も思ふ中をばよもさけぬ(今宮)

「さけぬ」は遠放けないの意であつて、雷も打拆かないに寄せたのである。古今集卷十四・戀歌四の部の歌に、「天の原ふみとどろかし鳴神も、思ふなかをばさくるものかは」。

かやはかくるる　借屋の路次へも廻されず、押入には夜着蒲團、どこへかくさんかやはかくるる、帷子入れて夏過ぎし(女腹切)

ここの文、「どこへかくさんかや」の「かや」に蚊帳をかけ、「蚊帳はかくるる」と云うて、下の「夏過ぎし」の句に應じ、しかも古今集・春上部、「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくるる」の歌句によつたものである。

からくれなゐの水くくる

「ありはらのかの中將云云」を見よ。

雁よ新町の花を見捨てて蜆川(女殺)

古今集・卷一、春の部、伊勢の歌に「春霞立つを見捨てて行く雁は、花なき里に住みやならへる」。

鳴き捨てて何方行くらん、やよや待てなれよ冥途の鳥ならば（會稽山）

古今集・巻三、夏歌の部、紀友則の歌に「五月雨に物思ひをれば時鳥、夜ふかく鳴きていづち行くらん」。「やよや待てなれよ云云」をも見よ。

夏草の茂りていとど野とならば、鶉とならんと詠じけん（千疋犬）

古今集雜歌の下、業平朝臣の歌、「年を經て住みこし里をいでていなばいとど深草野とやなりなむ」。かへし、よみ人知らずの歌、「野とならば鶉と鳴きて年はへむ狩にだにやは君はこざらむ」。

名にめでてをれるばかりぞ女郎花、我落ちにきと人に語るな（松風）

この歌は古今集・秋の部に、題しらず、僧正遍照の詠として出てゐる。女郎花と云ふからにその名なつかしく、心とまりて手折つたばかりの事なるぞ。されば女郎花よ、我が女犯の罪に落ちたと人に噂すなの意。但し巣林子は「をれる（折）ばかりぞ」を「おれる（下）ばかりぞ」に說きて、馬より下りたまでである、落馬したといふ匆れの意にとつたのである。

なまめき立てる女郎花、男山からこいこいと（千疋犬）

古今集・巻十九、僧正遍照の歌に、「秋の野になまめき立てる女郎花、あなかしがまし花も一時」。古今集・秋上部の歌に、「女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる、男山にし立てりと思へば」。謠曲・女郎花に、「この男山の女郎花は古歌にもよまれたる名草なり」。ここの文は蓋しこれ等のものに據つたのである。

涙のをすげて風やひくらん

「みやこまで響き通へる云云」を見よ。

ならのはの　楢の葉の帝の御日には、龍田川の秋の夕べ錦とも御覽あり、渡らば中や絶えなんと惜み給ひし御製もあり（杷狩）　ならのはの賢き天皇萬葉を撰ばれ（西王母）

「楢の葉の帝の御目には云云」とあるは、古今集の序文に、「秋の夕べ立田川に流るる紅葉をば、帝の御目には錦と見給ひ」、とあるに據れるものにて、これは同書・秋歌下部に、題しらず・よみ人しらずの歌、「たつ田川紅葉みだれて流るめり、渡らば錦中や絶えなむ」の左註に、「この歌はある人ならの御門の御歌なりとなむ申す」と見えてゐる。「ならの帝」は舊說に、文武帝といひ或は聖武帝といひ或は平城帝といふ、按ずるに平城帝と見るべきである、巣林子も亦しか信じたものである。「わたらば中や云云」の條を併せ見よ。

「ならの葉の賢き天皇萬葉を撰ばれ」といへるは、古今集・雜歌下部に、「貞觀の御時萬葉集はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければ詠みて奉りける、文屋のありすゑ、神無月時雨ふりおける楢の葉の、名におふ宮のふることぞこれ」と見え、增鏡・おどろのしたの條にも、「大かたいにしへならの御門の御代に、始めて左大臣橘の朝臣勅をうけたまはりて萬葉集を撰びしよりこのかた云云」、とあるに據つたのである。卽ち賢明の君主平城天皇が萬葉集を撰集し給うたといふのである。（序云、萬葉集は實は平城天皇以前橘諸兄が編纂したものを大伴家持等が補修したのであつて、勅撰集ではない。さるを古來勅撰集と心得られ、巣林子も亦古來の說によつてしか信じたものである）。

鼠も所の男山をみなめしとぞなりにける（弘徽殿）

御菜飯に女郎花をいひかけたのである。古今集・秋歌上部に、「女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる男山にし立てりと思へば」。謠曲・女郎花に、「この男山の女郎花は古歌にもよまれたる名草なり」、などあるによつて「鼠も御菜飯とぞなりにける」といふにかくいひなしたのである。

はぎのつゆ　疵なき玉の盃の、酒もよい酒、假名文書き手の萩の露、ころび寢し夜の睦言は（歌念佛）

〔萩の露〕假名文字筆蹟の目もあやなるに譬ふ。蓋し古今集巻四、秋歌上の部に、「をりてみば落ちぞしぬべき秋萩の、枝もたわわにおける白露」と見え、また小野道風筆蹟の假名書歌帖に安幾破起帖といふがあるによつて、かくいうたのである。そして安義破起帖の首に古今集の歌、「秋萩の下葉色づく今よりや獨りある人の寢ねがてにする」が載つてゐるにより、「寢ねがてにする」を「ころび寢し夜の」と改作したのである。

初霜に折らばや折らん花の宴（蟬丸）

「折らばや折らん」は折らば折られようかの意。但しここの文は、古今集・秋部、凡河内躬恒の歌に、「心あてに折らばや折らむ初霜の、おきまどはせる白菊の花」とあるを用ゐたまでである。

はなたちばな　花橘の袖の香に昔男（歌念佛）　むかはり待たぬ花橘、昔の人と短夜の、雲隱れして人の世の（卯月潤色）

〔花橘〕四・五月の交、橘の花の咲く時につけていふ、また柑橘類の一種に勝れて花の美しく香の高きものをいふ。ここの文は古今集・夏歌の部に、「五月待つ花橘の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする」とありて、懷しう匂ふ花橘の香に、昔の人の袖の香を聯想するといふに據つたものである。

花に鳴く鶯・水にすむ蛙の聲、何れか歌を詠まざるや（百日曾我）

古今和歌集・假名序に、「花に鳴く鶯・水にすむ蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもののいづれか歌を詠まざりける」。

花の色移りにけりないたづらの、風も形も好き女の惱める形とすさみしも（本領曾我）

古今集・春歌の部、題知らず、小野小町の歌に、「花の色は移りにけりないたづらに、わが身世にふるながめせしまに」と見え、また同書・假名序に小野小町の歌を評して、「をののの小町は……あはれなるやうにてつよからず、いはば好き女の惱めるところあるに似たり」、とあるに據つたのである。

***はふらす**　代代民間に下れども心をだにもはふらさず（西王母）

放ち捨てる。振捨てる。物を投棄てるをハウル又はホルといふも「はふる」である。古今集・巻十九、雜體の部、興風の歌に、「身は捨てつ心をだにもはふらさじ、遂にはいかがなると知るべく」。

薪を負へる山人も 薪を負へる山人も、立寄る花の景清も、常に清水寺の觀世音を信じ奉り（出世景清）
薪を負へる山樵も花の蔭には宿るとかや（主馬判官盛久）

ここの文は、古今集序文中に、「薪を負へる山人の花の蔭にやすめるが如し」と見え、謠曲・飛雲にも「薪を負へる山人の花の木蔭に休むけしき」、とあるに據つたのである。「立寄る花の景清」は、立寄る花の蔭を景清にいひかけたのである。

猛き武士の心をも和らぐる歌（女護島）

古今集・紀貫之の序文に、「男女の中をも和らげ、猛きもののふの心をなぐさむるは歌の道なり

龍田川の秋の夕べ

「ならのはの」の條を見よ。「龍田川」は地名部について見よ。

龍田山神代もきかずと詠じけん（三世相）

龍田山は大和國平群郡にある山の名。古今集・秋部、在原業平朝臣の歌に、「ちばやぶる神代もきかず龍田川、からくれなゐに水くくるとは」。

玉と欺く白露の濟み濁る世（蛙合戰）

古今集巻三、夏歌の部、僧正遍昭が蓮の露を見てよめる歌に、「はちす葉の濁りにしまぬ心もて、何かは露を玉と欺く」。

誰脱ぎかけし秋の野 庭には千草にうつり合ひ、たれぬぎかけし秋の野の、花摺衣も露照りて（五人兄弟）

古今集巻四、秋歌上の部、素性法師の歌に、「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に、たが脱ぎかけし藤袴ぞも」。

誰をかも知る人にせんこの廓の松と（反魂香）

誰をかまあ知人として交をせうぞ、この廓に賣られて太夫となつたものの意。「松」は太夫の異稱である。「まつ」を見よ。古今集・雜部、藤原興風の歌に、「誰をかも知る人にせん、高砂の松も昔の友ならなくに」。

千千の心を種として萬の言の葉もしげり（女夫池）（室町千疊敷）

古今和歌集・假名の序に、「やまと歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける」。

千歳の坂 千歳の坂と詠ぜしも、耳にはふれて手にふれぬ憂き節しげき竹の杖（女楠） げにげにこれもつくからに千歳の坂も越えなんと、彼の遍照が詠みし杖か、それは千歳のさか行く杖、ここは所も逢坂山（蟬丸）

古今集・賀歌の部、僧正遍照の歌に、「千早ぶる神のきりけむ、つくからに千歳の坂も越えぬべらなり」、とあるに據つたのである。この歌の意は、この杖はありふれた杖とは見えませぬ、大かた神樣が御切りなされた杖でござらう、さればこの杖を衝くからには、越えにくい千歳の坂でさへも越えられさうだわいの意である。「宣旨默止難く云云」をも見よ。

***ちはやふる** 天の岩戸にあらねども、ここにもかみの貸家札、殘らぬ千早ふる道具（博多） ちはやふる神代も聞かぬ紙袋、から藏にして米つめるとは（三國志）

「千早」は逸早の義、「ぶる」は「び」の延音で形容の語なれば、荒ぶる意である。强き勢の緣によつて神または人などの枕詞とする。博多小女郎波枕のここの文は、「紙の貸家札」のかみを神にいひかけて、神の枕詞なる「ちはやぶる」に古をいひかけて、古道具につづけたのである。本朝三國志のこの狂歌は古今集秋歌下の部、業平朝臣の歌「ちはやふる神代もきかず立田川、から紅に水くくるとは」をもぢつたのであるから、久吉が評して「其歌は立田川」といひ、剽竊したのだから「おのれはすつぱの皮なり」といひ、「立田の川」と「すつぱの皮」（その條を見よ）と語呂を合した地口である。曾呂利の米袋の話は甲子夜話などにも見えてゐる。

千代にやちよをさざれ石の

「齢久しきためしには千代にやちよを云云」を見よ。

つくからに千歳の坂も越えなん

「千歳の坂」「宣旨默止難く云云」を見よ。

つづりさせてふ蟲の音（女護島）

つづりさせというて鳴く蟲の音。「つづりさせ」は綴り刺せで、蛬（きりぎりすのこと）の鳴聲を形容した語である。古今集・巻十九、誹諧歌に、「秋風に綻びぬらし藤袴、つづりさせてふきりぎりす鳴く」。

つひにゆく 乘る人も乘せたる駒も、つひに行く道とは知れど、最期日の今日か明日かの我身には、我のみ消ゆる心地して（大經師） 名殘も緣もつひに行く道ならばいざ伴はん（反魂香） 今行く道もつひに行く賽の河原いつとても（會稽山）

〔卒行〕死の道は誰も何時ぞは必ず行く道であるによつて、死ぬることを卒に行くと云うたのである。古今集・哀傷の部、業平朝臣の歌に、「つひに行く道とはかねて聞きしかど、昨日今日とは思はざりしを」。

終によるせはありてふもの 常に御手馴れし定紋の桐の臺、終に寄る瀨はありてふものと、手づから蒔繪にかかせ給ひ（三世相）

古今集・戀四の部、業平朝臣の、「大ぬさと名にこそ立てれ流れても終に寄る瀨はありてふものを」の歌句である。我は引く手數多の大幣であると世評にされたれど、その大幣も川に流れてなあ果には流れ寄る瀨はあるといふものを、我とても末にはいづれ寄るべがあらうよとの歌意である。

年の内に春は來にけり一日に（夕霧）

古今集・春上部、在原元方の歌に、「年の内に春は來にけり一とせを、こぞとやいはむことしとやいはむ」。

とぶひの野守出てて見よ、今幾日して又此處に（大織冠）

「飛火野」は地名部を見よ。古今集・春上部の歌に、「春日野のとぶひの野守いでて見よ、今幾日ありて若菜摘みてむ」。

流れもあへぬ紅葉は

「しがらみ」を見よ。

捨てられた身なれば、年經とも私を戀しう思うて訪ひ來る人もありますまいと思へば、三輪山でどうして待たうか、さてさて待ちやうもなく物悲しい身の上だとの意。

梅に年取る鶯の翼は雪に疊まれて（烏帽子折）

古今集・春上の部、題しらず、よみ人知らずの歌に、「うめが枝に來ゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ」。

***むらさき**　びらり帽子の紫や、色で逢ひしはばや昔（冥途飛脚）　かの紫の由緣求めて杜若、三河の國に御陣を召され（冷泉節）　これも誰ゆゑ紫の一もとの緣ぞや（世繼曾我）

〔紫〕古今集・雜上部の歌に、「紫の一本ゆゑに武藏野の、草はみながらあはれとぞ見る」とあるによつて、紫のひともと、又は紫のゆかりというて、紫を由緣の意にいふ。

目に見えぬ鬼神も三十一文字に柔らぐる（虎が磨）

「三十一文字」は歌をいふ。古今和歌集・假名序に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬおに神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をも柔らげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり」とあるに據つたのである。

藻鹽たれつつ侘ぶといふ蜑の仕業（融大臣）

古今集・卷十八、雜歌下、在原行平朝臣の歌に、「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に、藻鹽垂れつつわぶと答へよ」。

藻に棲む蟲のわれから　妻も同じ海士の業、藻に棲む蟲の我からと、媒人なしの手枕に括枕と締合はし（國性爺）　藻に棲む蟲のわれと我心ひかるる後髮（浦島）

古今集・戀五の部、藤原直子の歌に、「あまの刈る藻に棲む蟲のわれからと、音をこそ泣かめ世をば恨みじ」とあるに據つたのである。一心五戒魂（巣林子作）に、「我からと藻にすむ蟲の音を絶えこ」とあるも、この歌に據つたのである。「われから」はその條を見よ。

紅葉蹈分け鳴く鹿の聲　さらさらさつと踏立て蹴立て踏散し、紅葉踏分け鳴く鹿の聲も、互の身の上と連れて假屋に歸りけり（娵）

古今集・秋部、猿丸太夫の歌に、「おく山に紅葉踏分け鳴く鹿の、聲聞く時ぞ秋はかなしき」とあるを應用したのである。

柳櫻もこきまぜて　縈り合ひたる袖摺り松、柳櫻もこきまぜて（小栗判官）

古今集・春歌上の部、素性法師、「見渡せば柳さくらをこきまぜて、都ぞ春の錦なりける」の歌句に據つたもので、「こきまぜて」は入れ交ぜてといふ程の意で、「こき」は輕く添へたまでの詞である。なほ近松のこの文に「袖摺り松」とあるは、馬場に植ゑて袖が觸れて摺れる程の小松をいひ、近松作・鑓權三重帷子にも「乘戻し引廻し乘る、袖摺りの松も女松の十八公」と見えてゐる。「柳・櫻」も馬場に植ゑてある樹木である。大坪本流馬道祕書・禮術の條に、「馬場に木を植る事、櫻・柳・楓・松也、外の木は植ざる者也」とある。

***柳櫻をこきまぜて**　柳櫻をこきまぜて、錦小路の中納言冬通卿（艳狩）　柳櫻をこきまぜて錦につつむ（國性爺）　柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦革（文武五人男）

古今集・春部・素性法師の歌に、「見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける」とあるを應用したのである。

大和歌は天地を動かし佛神も感應あり（西王母）

古今集序文に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬおに神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をも和らげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり」とあるに據つたのである。

山人の薪に花

「ふつつかならぬ山人の薪に花云云」を見よ。

闇のうつつ……（曾根崎）（堀川波鼓）

古今集・戀三の部、題知らず・讀人知らずの歌に、「ぬば玉の闇のうつつは定かなる、夢にいくらもまさらざりけり」。

闇はあやなし梅　闇はあやなし梅澤村（會稽山）　闇はあやなし梅の花、梅の梢にゆかしき人の（吉岡染）

「あやなし」は文無の義、文目もわかぬ意。古今集・春上部の歌に、「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくるる」。

やよや待てなれよ冥途の鳥ならば（會稽山）

古今集卷三、夏歌の部、みくにのまちの歌に「やよやまて山時鳥言づてむ、われ世の中に住みわびぬとよ」。

よききぬきたるあきびと

「うたびとの評判云云」を見よ。

好き女のなやめる形

「花の色移りにけりないたづらの云云」を見よ。

よしのの川のよしや云々

「みよしののよしのの云云」を見よ。

よそに見て歸らん人に藤の花、はひまつはれよまとへと詠みし言の葉（弘徽殿）

古今集・春下部に、「志賀より歸りける女どもの花山に入りて、藤の花のもとに立寄りて歸りけるによみておくりける」、と詞書ありて僧正遍昭、「よそに見て歸らむ人に藤の花、はひまつはれよ枝は折るとも」。一首の意は、ここに立寄りながらよそよそしう見て歸らうとする人に、藤の花よ這ひ纏附いて必ず引留めるやうにせよ、それが爲には枝が折れても構はないの意。

世の中に絶えて　世の中に絶えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし（百日曾我）　世の中に絶えて心中なかりせば、二世の賴みもなからまし（氷朔日）

古今集・春上部の歌に、「なぎさの院にて櫻を見てよめる」と詞書ありて、在原業平、「よの中に絶えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし」と見えてゐる。心中刄氷朔日のこの文はここにいへる歌の改作である。一首の意は、若しも世の中に櫻が無いものであるな

濱の眞砂と敷島や彼の貫之の言の葉（十二段）
古今集、紀貫之の序に、「山した水の絶えず、濱の眞砂かず多くつもりぬれば、今は飛鳥川の瀬になるうらみも聞えず、さざれ石のいはほとなる喜びのみぞあるべき」とあるを指す。

***ひとく　擔端に來鳴く鶯の、ひとくひとくの囀なひと夜ひと夜と聞きなして**（浦島）
鶯の切聲に淚く啼く聲を形容して、人の來るを厭うて人來人來と鳴くといひなした語。古今集・誹諧歌の部、題しらず、よみ人しらずの歌に、「梅の花見にこそ來つれ鶯の、ひとくひとくと厭ひしもをる」と。

一夜に變る淵瀬こそ大和にあると聞きけるが（冷泉節）
大和國高市郡なる飛鳥川を云うたのである。古今集・雜歌下の部、題しらず、よみ人知らずの歌に、「世の中は何か常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀬になる」。

風も形も好き女のなやめる形云云
「花の色移りにけりな云云」を見よ。

ふつつかならぬ山人の薪に花とはこれならん（嫗山姥）
古今集序に大友黑主の歌を評して、「心はをかしくてそのさまいやし、いはば薪を負へる山人の花の蔭に休めるが如し」、とあるを應用して山人の姿の賤しきを薪に喩へ、不束ならぬ優しい女の心を花に喩へていうたのである。

麓に立てる女郎花、りんきしんきとなまめきてくねる心の男山（淀鯉）
古今和歌集・序に、「男山の昔を思出で女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞ慰めける」。同書・誹諧歌に、「秋の野になまめき立てる女郎花、あなかしがまし花も一時」。「くねる」はその條を見よ。

ふるは淚か春雨の、萎るる花世（嵯峨天皇）
古今集・卷二、春歌下の部、大伴黑主の歌に、「春雨の降るは淚か櫻花、散るを惜まぬ人しなければ」。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に（天神記）（百日曾我）
古今集・羇旅部、よみ人しらずの歌に、「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に、島隱れ行く舟をしぞ思ふ」とありて、添書に「この歌は或る人のいはく柿本人麿がなり」と見えてゐる。歌の意は、ほんのりと夜明けて來る明石の浦の朝霧に漕出して、向の島蔭に隱れて見えぬやうになつて行く舟をあはれと思ふといふのである。百日曾我にこの歌意を殊更に曲解して、「人間生死の有樣を浦漕ぐ舟になぞらへ、弘誓の海を渡り涅槃の岸に至るべき、其行末を思ひやる深き心を詠まれしなり」というてゐる。

ほのぼのと明石の客の乘る舟に、お島も隱れ島隱れ（二枚繪）
明石の客の貞と天滿屋の遊女お島の乘れる舟の次第に遠ざかり行くことを、古今集・羇旅の部の歌、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に、島隱れゆく舟をしぞ思ふ」を應用したのである。

まくらより跡よりやり手の責めくれば（夕霧）
古今集・卷一九、誹諧歌に、「枕より跡より戀のせめくればせん方なみぞ床なかにをる」。

みかさと申せ三笠山（三世相）
古今集・大歌所御歌の部の、「みさぶらひ御笠とまをせ宮城野の木の下露は雨にまされり」の歌句を取りて、同音語の三笠山につづけたのである。

陸奥の信夫捩摺誰れ故に、亂れんと思ふ我ならなくに（融大臣）
古今集・戀部、河原左大臣源融の歌に、「みちのくのしのぶ捩摺たれ故に、亂れそめにし我ならなくに」。「しのぶ捩摺」はしのぶずりともいひ、布帛に忍草の忍葉を種種の色に摺つたもので、其文亂髮のやうに捩れれば捩摺ともいふ、陸奥の信夫郡にかけていうたのである。「我ならなくに」は我にあらぬにの意。一首の意は、君をのみ戀ひわびて、それ故にかやうに心亂れそめた我なるものをの意。

都まで響き通へる唐琴は、浪の緒すげて風や彈くらん（浦島）
都までも名の響き聞えた唐琴の浦は、どうしてさやうに遠くまでも響けるものかと見れば、さてこそ浪の緒附けて風の彈くのだらうの意。「唐琴」は備前國にある泊である。古今集・雜上部、しんせい法師の歌に、「都までひびき通へる唐琴は、波の緒すげて風ぞひきける」。

みよしのの吉野の川の、よしや世の中に落つるや妹背山（以呂波）
古今集・戀五の部の歌に、「流れては妹背の山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中」。「妹背山」は地名部について見よ。

見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦小路（大原問答）
古今集・春部、素性法師の歌に、「見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける」。

三輪のしるしの神杉をかたどり、酒の標に我宿も杉立てる門をしるべにて（天智天皇）
三輪は大和國城上郡にありて、山麓に大三輪神社がある、三輪の神山は杉檜蓊蒼としたれば、三輪に標の杉立てる門などと古歌にも詠まれてゐる。昔時酒屋の軒に杉葉を集め丸めて標とした。「さかばやし」を見よ。古今集・雜歌下の部の歌に、「わが庵は三輪の山本こひしくば、とぶらひきませ杉立てる門」。謠曲・三輪に、「杉立てる門をしるしにて尋ね給へといひ捨てて」。瓦礫雜考・卷二に、「うまざけの三輪とつづけたれば、三輪に印の杉立てる門などとよめる古歌多し、件の杉の葉は之によりて旨き酒ありとの標にはしたるなるべし」。

三輪の山いかに待ちみん年經とも、尋ぬる人もあらじと思へば（百日曾我）
古今集・戀五の部に、「なかひらの朝臣あひしりて侍りけるを、かれがたになりにければ、父が大和の守に侍りける許へまかるとて、よみてつかはしける。伊勢」、とありてこの歌が載つてゐる。一首の意は、私は貴方に見捨てられて都住居も面白くありませぬによつて、三輪山の方へ下ります。古歌に、「わが庵は三輪の山もとこひしくば、とぶらひきませ杉立てる門」と詠んであれども、私は既に見

程にて時雨のしけるに、いかがすべきと思ひけるに、田刈りける童のあをと云ふ物をかりに來てまゐりにけり、下向の程に晴れにければ、このあををかへし取らせてけり、さて次日式部はしの方を見いだしてゐたりけるに、大やかなる童の文持ちて佇みければ、あれは何者ぞといへば、此御文まゐらせ候はんといひてさし置きたるを、ひろげて見れば、時雨するいなりの山のもみぢばは、あをかりしより思ひそめてき、と書きたりけり、式部あはれと思ひて此童を呼びて、奥へといひて呼入けるとなん」。

金岡の大納言が書きたる馬、夜毎に出でて萩の戸の萩を食ひ荒し(關八州)

金岡、姓は巨勢、人物又は馬を畫くに妙を得、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に歷仕して、大納言に昇進した。金岡が畫いた跳馬の障子の繪夜毎に出でて、萩の戸の萩を食ひ荒した由古今著聞集卷十一に見えてゐる。「清涼殿に立てられし跳馬云云」を見よ。

苗代水にせき下せ、天くだります神ならば神(會稽山)

古今著聞集・卷五に、「能因入道・伊豫守實綱に伴ひて彼國に下りけるに、夏のはじめ日久しく照りて民のなげき淺からざるに、神は和歌をめでさせ給ふものなり、試みによみて三島に奉るべき由を國司しきりにすすめければ、あまの川苗代水にせきくだせ、天くだります神ならば神、と詠めるをみてぐらに書きて神司して申上げたりければ、炎旱の天俄に曇りわたりて大なる雨降りて、枯れたる稻葉おしなへて綠にかへりにけり」と見えてゐる。能因法師は攝津國古曾部に居つたによつて古曾部入道ともいふ。

跳馬の障子　跳馬の障子の繪夜毎に出でて萩の戸の萩を食ひしも、金岡が筆のすさみの跡たえず(反魂香)

清涼殿にある馬形の障子をいふ。古今著聞集・卷十一に、「昔かの馬形の障子を金岡が書きたりける、夜夜はなれて萩の戸の萩を食ひければ、勅諚ありて其馬を繫ぎたる體を書きなされたりける時、はなれず成りにけりと申傳へ侍るは誠なりける事にや」。

まだき時雨の秋なれば、紅葉も青き稻荷山(融大臣)

時雨もまだ降らぬ秋なれば、紅葉しないで青葉である伏見の稻荷山の意。古今著聞集・和泉式部の歌に、「時雨する稻荷の山のもみぢ葉は、青かりしより思ひそめてき」。「見え渡る山山は云云」を見よ。

古事記に據れるもの

鵜の羽を茅にふき合はせずの尊の嘉例をひきまゐらせ(弘徽殿)

彥火火出見尊が海神國に至り、豐玉姫と婚す、後姫日向に來り、彥瀲建鵜茅葺不合尊を生まれた、時にいまだ産家を葺くに及ばずして生れた故事。古事記・神代下に、「於レ是海神之女豐玉毘賣命、自參出白之、妾已妊身、今臨二産時一此念、天神之御子不レ可レ生二海原一、故參出到也、爾卽於二其海邊波限一、以二鵜羽一爲二葺草一造二産殿一、於レ是其産殿未二葺合一、不レ忍二御腹之急一故、入二坐産殿一、爾將二方産一之時、白二其日子一言、凡佗人國者、臨二産時一、以二本國之形一産生、故妾今以二本身一爲レ産、願勿レ見レ妾、於レ是思レ奇二其言一、竊伺二其方産一者、化二八尋和邇一而匍匐委蛇、卽見驚畏而遁退、爾豐玉姫毘賣命知二其伺見之事一、以爲二心耻一、乃生二置其御子一而白、妾恒通二海道一欲二往來一、然伺二見吾形一、是甚作之、即塞二海坂一而返入、是以名二其所レ産之御子一、謂二天津日高日子波限建鵜茅葺不合命一」。

かいこそ和田のそこづつを　かいこそ和田のそこづつを傳へ傳へし秋津御代、君たるかな齊明天皇惠みも廣きさざなみや(天智天皇)

海こそ海の底筒男であらう。底筒男は底土の義であって、伊弉諾尊が日向の橘小門の阿波岐原に出でまして禊祓ひ給うた時、海底から生れ給うた命の名。古事記・神代上卷に「於二水底一滌時、所レ成神名二底津綿津見神一、次底筒之男命」云云」。巣林子がここに海神底筒男命をいへるは、琵琶のうみ迹や志賀の都をいふ縁である。

神のみことの御産家、鵜の羽を茅にふき合はせず

「鵜の羽を茅にふき合せず云云」を見よ。

僭上大盡寢屋のとぼそに引籠り、常闇の夜見世となりけるを、八百萬の末社達おろせが宿にてこれを歎き、神樂を以て文作袖を飜へせば、又常闇の氣も晴れて、燈ぺ光り輝けり(吉野忠信)

古事記・上卷・神代の條、神代紀・上卷、古語拾遺などに見えてゐる天石窟戸變を改作したものである。「大盡」「末社」「おろせ」「もんさく」はその條に就いて見よ。

「神樂」とは、神事に奏する舞樂なるは勿論であるが、巣林子のこの文にいへるは、神樂の眞似をする諸謠をいふのである。諸艶大鑑・卷一、親の顏は見ぬ初夢の條に、「或時顚西の彌七・神樂の庄左・鸚鵡の吉兵衛・亂酒の與左衛門まじりに、揚屋町を立破りて出口の茶屋に腰掛ながら、朝がへりの客に贊付るに獨も違はず」と見え、日本永代藏・卷六、見立て養子が利發の條に、「茶の湯は利休がながれをくみ、文作には神樂顚齋もはだしでにげ」と見えて、庄左・顚齋などは文作・神樂の名人であった。

そびらに千箭の靫と五百箭の靫を負ひ、たたむきに稜威の高鞆をはき、弓彇を振立て堅庭を踏んで淡雪の如く蹴はらかし、稜威の雄誥(百合若)

らば、櫻狩などと心浮き立つて彼此と忙しう思ふこともなく、春の長閑な心持でゐるものを、櫻がある爲に心浮き浮きして忙しう思ふことよと、深く櫻を愛する情を反言したものである。

齡久しきためしには、千代に八千代をさざれ石の巖となりて苔のむすまで（十二段）

古今集・賀部、題知らず・よみ人知らずの歌に、「わが君は千代にやちよにさざれ石の、巖となりて苔のむすまで」。

＊**よぶこどり**　木木の梢も繁藏と、誰が呼子鳥草履取（蹉蹶歌）　呼子鳥覺束なくも行燈の影（天網島）

〔呼子鳥〕古今集・春上部の歌に、「をちこちのたづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥かな」、とあり、郭公であるとの說に據つたものである。（よぶこ鳥に就いては安齋雜考・三鳥三木考を見よ）。この文は、呼ぶを呼子鳥にいひかけたのである。

＊**よみ人知らず**　金の取手はよみ人しらず大内方より御詮索（女殺）

詠者の知れない者を「よみ人知らず」と書いて、古今集などの歌書に多く見えてゐる。近松がここの文は洒落てその詞を借り、金の取手は知らずにきかせ、歌人は多く大宮人であつたから、大内方と緣語をつづけたのである。

夜の衣を反す　まろねがちなる我はただ、夜の衣を反しつつ夢のただちに逢ふことを玉緖になして（伊豆日記）

寢卷を反して着て寢れば戀人を夢に見るといふ。古今集・戀二の部の歌に、「いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣をかへしてぞ着る」。

和歌は天地を動かし鬼神も感ず（川中島）

古今集の序文に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこをんなの中をも和らげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり」。

若紫の武藏野や草の莚に（隅田川）

古今集・雜上部の歌に、「紫のひともとゆゑに武藏野の、草はみながらあはれとぞ思ふ」とあるを應用したのである。「若紫」は淡紫である。

渡らば中や絕えなんと惜しみ給ひし御製もあり（栬狩）

古今集・秋下部、題知らず、よみ人知らずの歌に、「たつた川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦なかや絕えなん」とあり、左註に、「この歌はある人ならの御門の御歌なりとなむ申す」とあるに據つたのである。一首の意は、立田川の錦を織つてゐるやうに見事なのは、紅葉散亂れて流れる樣子であるよ、今渡るならばあつたら錦の中が斷たれることであらうの意。「ならの御門」は平城天皇のことである。「ならのはの」の條を併せ見よ。

わびぬれば身をうき草のねをたえて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ（百日曾我）

この歌は古今集雜下部に出で小野小町の歌で、詞書に「文屋の康秀が三河のぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりけるかへりごとによめる」とある。一首の意は、妾は難儀にくらして身を憂く思つてゐますが故に、恰も浮草の根の切れて水の流れる方に流され行く如くに、妾を誘ふ人があるならば何處へでも從つて參りませうと思ひますとの意。

＊**われおちにきと**　かの僧正遍照が女郎花といふ草花の罰當りて落馬して、我落ちにきと人に語るなと詠ぜし歌を聞くにつけ（蛙合戰）

古今集・秋上部、題しらず、僧正遍照の歌に、「名にめでてをれるばかりぞ女郎花、われおちにきと人に語るな」とあるに據つたのである。「名にめでてをれるばかりぞ云云」を見よ。

をちこちのたづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥かな（百日曾我）

この歌は古今集・春上部の歌に、題知らず、讀人知らずとして出てゐる。一首の意は、あちやこちやの取付き所も知らぬ山の中で、ぼんやりした聲で誰を呼ぶのやら、來よ來よと呼掛ける呼子鳥だわいの意。「よぶこどり」はその條を見よ。

男と女郎花、それはくねる（今宮）

男と女が戀の爲にくよくよ物思ひにくれるを、古今集序文に「男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねる」、とあるに據つてかくいうたのである。「くねる」をも見よ。

男山さかゆく　げに九重もはるばると跡に名殘の男山、さかゆく事もありこしに今のうきめを三津の浦（女楠）

古今集・雜上部の歌に、「今こそあれわれも昔は男山、さかゆく時もありこしものを」とあるに據つたのである。男山は山城國久世郡石淸水八幡宮のある山である。

男山をみなめし

「鼠も所の男山をみなめし云云」を見よ。

男女の中を和らぐる和歌（川中島）

古今集・序文に、「をとこをんなの中をも和らげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり」とあるに據つたのである。國性爺合戰に、「日本で歌といふげなが、男女を和らぐとや」、とあるも古今集・序文に據つたのである。

古今著聞集に據れるもの

稲荷の山の薄紅葉、あをかりしよりとよみ給ふ和泉式部のながめある（娥）

よみ給ふとあるから、稲荷の山の薄紅葉云云の歌を和泉式部が詠んだやうであるが、さうではない。古今著聞集・卷五、和歌第六に、「和泉式部忍びて稲荷へ參りけるに、田中明神の

はばかりのせきたぐ　人目の中にはばかりのせきたぐろこそ哀れなれ(夕霧)

人目を憚るを憚関にいひかけ、関を咳いひかけて、せきたぐるといひつづけたのである。憚関は陸前國柴田郡にあつた関所だといふ。後拾遺集・戀二の部の歌に、「しろらめや身こそ人目をはばかりの、せきに涙はとまらざりけり」。奥之荒海に、「あぶくま川を渡ろ、野越え山越え行けば、やがて憚の関をも越ゆ」。「咳たぐ」は咳あげるをいふ。

一本松を二木とも三木ともつらねし言の葉(反魂香)

後拾遺集・雑四の部、橘季通の歌に、「武隈の松はふた木を都人、いかがと問はばみきとこたへむ」。ここの文は「三木」に「見き」をいひかけたのである。

ほさぬ袖だにあるものを戀に朽葉や(融大臣)

後拾遺集・戀部、相模の歌に「恨みわびほさぬ袖だにあるものを、戀に朽ちなむ名こそ惜しけれ」。この歌は小倉百人一首にも出てゐる。

物思ふ心の闇に迷ふ身は、明石の浦もかひ無かりけり(大職冠)

後拾遺集巻九、羈旅の部に、「筑紫に下り侍りけるに、明石といふ所にてよみ侍りける。帥前内大臣。物思ふ心の闇しくらければ、明石の浦もかひ無かりけり」と見えてゐる。この歌は伊周公が長徳二年四月に左遷された時の詠である。

後撰集に據れるもの

親心闇にはあらで子に迷ひ(賀古教信)

後撰集・雑部、藤原兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。

かかれとてこそ撫でずやありけん

「黒髪もかかれとてこそ云云」を見よ。

かかれとてこそ我が父母も撫でつらめ

「我が黒髪の髻際云云」を見よ。

***かつらぎのかみ**　あの葛城の神ならで、晝の通路つつましく、身を忍ぶ道戀の道(冥途飛脚)　人忍ぶ我には辛き葛城の、神隠れして遣り過し(天網島)　葛城の久米の岩橋夜ならで(國性爺)　かつらぎや久米路にかけし岩橋の、渡しもやらで中中に(百日曾我)

〔葛城神〕葛城山一言主の神、已が貌の醜きを恥ぢて、晝は人目を忍び、夜のみ出て岩橋の工事に従つたといふ故事によつたのである。後撰集・巻十三、戀五の部に、「葛城や久米路にわたす岩橋の、なかなかにてもかへりぬるかな」。「いはばし」(岩橋)をも見よ。

君とならびの池にこそ、身を投げつと詠み置きし古歌(女夫池)

後撰和歌集・巻十二、戀歌四に、「まだあはず侍りける女の許に死ぬべしといへりければ、返事にはや死ねかしといへりければ、又遣しける。同じくは君とならびの池にこそ、身を投げつとも人に聞かせめ」。

黒髪もかかれとてこそ撫でずやありけんと、彼の遍昭が連ねしも(用文章)

我が親が我が頭の黒髪を撫でて下さつたことも、いづれは髪を剃つてつるつる坊主になるものだとは思うて撫でられなかつたことであらうとの意。後撰集・巻十八・雑歌三の部に、「はじめて頭おろし侍りける時物に書付け侍りける」と、詞書ありて遍昭の歌に、「たらちめはかかれとてしも烏羽玉の、我黒髪を撫でずやありけん」。

心は闇にあらねども子を思ふ闇(大磯虎)

後撰集・巻十五、藤原兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。

戀ぞつもりてみなの川、さそふ水とて(百日曾我)

戀しいと思ふその思ひ積つて、みなの川の如く深くなり、誘うてくれる人とての意。「みなの川」は筑波山中にある川の名。後撰集・戀部　陽成院の御歌に、「筑波嶺の峯より落つるみなの川、戀ぞつもりて淵となりぬる」。古今集・雑歌下部・小野小町の歌に、「わびぬれば身をうき草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」。

***子を思ふ心の闇**(五人兄弟)

後撰集・巻十五・藤原兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。

三世の御佛に花奉る

「三世の御佛に花奉る」を見よ。

筑波川つもる戀しさ(蟬丸)

後撰集・戀部、陽成院の御歌に、「筑波嶺の峰より落つるみなの川、戀ぞ積りて淵となりぬる」とあるに據つたのである。

筑波嶺の峰より落つる　筑波嶺の峯より落つる源の(雪女)　筑波嶺の峯より落つるみなの川、いまだ介にはあられども(鎌田)　筑波嶺の峯より落つる瀧の白玉(壽門松)(烏帽子折)　筑波嶺の峯より落つる瀧つ流れ(融大臣)

後撰集・戀部、陽成院の御歌に、「筑波嶺の峯より落つるみなの川、戀ぞつもりて淵となりぬる」、とあるに據つたものである。筑波山は常陸にある。「筑波嶺の峯より落つる瀧の白玉」は、前述の歌となほ古今集・賀部にある、「瀧のたの山の岩根をとめておつる、瀧の白玉千世の数かも」、の歌句とを取合せたのである。

天智天皇のわが衣手の御製(融大臣)

後撰集・秋部、天智天皇の「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、わがころも手は露にぬれつ

「そびら」は脊のこと。「靫」は矢を盛る器である。「たたむき」は臂である。「稜威」は嚴めしい威勢の義、「高鞆」は高く鳴り響く鞆の義、鞆とは古昔弓を射るとき左臂に着けた圓き革製の物で、革紐にて臂に結んだものである、もと弦の臂に觸れるを防ぐ爲の物で、また弦の觸れて音をなし威容を示すものである。「弓彇」は弓を云うたのである。「堅庭」は堅い庭土の義である。古事記・神代上に、「曾毘良邇者負千入之靫、比良邇者附五百入之靫、亦所取佩伊都之竹鞆而、弓腹振立而、堅庭者於向股踏那豆美、如沫雪蹶散而、伊都之男建踏建而」日本書紀・卷一に、「背負千箭之靫與五百箭之靫、臂著稜威之高鞆、振起弓彇、急握劒柄、踏堅庭而陷股、若沫雪以蹴散、奮稜威之雄誥」云云」。

後拾遺集に據れるもの

あこがれいづる玉の緒 心は跡に殘るぞと、あこがれ出づる玉の緒の、互に眼には見えねども（二枚繪）

思あまりて身から離れ出た魂。「玉の緒」は魂の緒で、いのちをいふ、後拾遺集・神祇部、和泉式部の歌に、「物思へば澤の螢もわが身より、あくがれ出づる魂かとぞ見る」。

跡なくなりし 奥州武隈の松と云ふ名木は、いにしへ能因法師さへ跡なくなりしと詠みたれば（反魂香）

「たけくまの松」を見よ。

ありまやまゐなの小笹の粽の節句（賀古敎信）

「有馬山ゐなのささ原風吹けば、いでそよ人を忘れやはする」といふ古歌の語句によつたのである。そして小笹の粽の節句と續けたのである。粽の節句は、陰曆五月五日（端午）の節。有馬山は攝津國有馬郡有馬山をいひ、猪名の笹原は攝津國河邊郡猪名野の笹原のことで、有馬山と猪名野笹原とは遠く隔つてゐる地である。それを有馬山ゐなの笹原と詠んだのは、その土地が隔つてゐることを知らなかつたのであらう。この歌は大貳三位の詠で、後拾遺集戀部に出で、（小倉）百人一首の中にも見えてゐる。

えやはいぶきの艾屋（艶狩）

後拾遺集・戀部、藤原實方の歌、「かくとだにえやはいぶきのさしも草、さしもしらじな燃ゆる思ひを」の文句を取つて艾屋につづけたのである。さてこの歌につきて、「えやはいふ」を山名の「伊吹」にいひかけたので、「え」は副詞で下の反語「やは」に應じ、ようの義。近江の伊吹山は艾の産地で伊吹艾の名があるが、この歌の伊吹はそれではなうて下野の伊吹山である。

かくとだにえやはいぶきのさしも草、さしも知らじな燃ゆる思ひを（娵）

「えやはいぶき」は、心に思ふことを口にいふにもよう言はれねばの意で、「いふ」を山の名の伊吹にいひかけたのである。伊吹山は近江國にあるのではなうて、下野國のをさしたのである。「さしも草」は艾の事で、「さし」はさしつける意より添つた語である。さて一首の意は、かやうかやうとでも言へばよけれども、それもよう言ひ得ねば、ただ胸の中に艾の燃えるやうに思焦れる身を、我思へる人はそれとも思ひ知るまいなあといふこと。この歌は後拾遺集・戀部に、「女に始めていひ遣しける。藤原實方朝臣」として出てゐる。（小倉）百人一首の中にも出てゐる。

草に窶るる白露を、あこがれ出づる魂かとて（生玉）

後拾遺集第二十、神祇部、和泉式部の歌に、「物思へば澤の螢も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」。

心ある人に見せばや津の國の難波のあしの（佐佐木）

後拾遺集・春上部、能因法師の歌に、「心あらん人に見せばや津の國の、難波わたりの春の景色を」。

戀に朽ち果てん名こそ惜しけれ（蟬丸）

戀の爲に世に噂が立つて朽ちてしまうであらう我名が惜しいことであるとの意。後拾遺集・戀部・相模の歌に、「恨みわびほさぬ袖だにあるものを、戀に朽ちなん名こそ惜しけれ」。

澤の螢とあこがれて、……明けて見せたる……魂よばひ、（井筒）

後拾遺集卷二十、神祇部、和泉式部の歌に、「物思へば澤の螢も我が身より、あくがれ出づる魂かとぞみる」。

末の松山浪の涙、上越す人もなかりしに（歌念佛）

後拾遺集・戀の部に、「契りきなかたみに袖をしぼりつつ、末の松山浪越さじとは」、とある歌によつて文をなしたもので、契約を違へなんだにの意にいうたのである。

武隈の松 奥州武隈の松といふ名木は、いにしへ能因法師さへ跡なくなりしと詠みたれば（反魂香）

後拾遺集・第十八・雜四に、能因法師の歌に、「みちのくに再び下りて後のたび、武隈の松も侍らざりければよみ侍りける」、と詞書ありて、「武隈の松はこの度跡もなし、千年を經てや我は來つらむ」。

はかなの戀に朽果てん名こそ惜しけれ（蟬丸）

あだ戀で身も朽果てることであらうと思へば、この名それが惜しう思はれるわいの意・後拾遺集・戀部、相模の歌に、「恨みわびほさぬ袖だにあるものを、戀に朽ちなむ名こそ惜しけれ」。

萩の錦 古歌の詞を考ふれば萩の錦と詠じたり（懸物揃）

後拾遺集・秋上部、御製歌にも「かひもなき心地こそすれさを鹿の、たつ聲もせぬ萩の錦は」と見えてゐる。

なだにも花と見る(十二段)

〔物見草〕松の異稱。藏玉集に、「物見草。松。ものみぐさ袖にかざさん折折に、涙をだにも花とおもへば」。

ゆふみぐさ　夕見草月や今宵の花となるらんとは詠みたれど(十二段)

〔夕見草〕松の異稱。藏玉集に、「夕見草。松。まつにふれことによせつつ夕見草、月や今宵の花とみゆらん」。

をりみぐさ　折見草枝もやあらん事にふれ、なぐさみ多き夕ぐれと書きしも浮世の人心(十二段)

〔折見草〕松の異稱。藏玉集に、「折見草。松。折見草枝もやあらん事によせ、なぐさみおほき今日の夕暮」。

詞花集に據れるもの

あしかれと思はぬ山の嶺にだに、なげきおふなりなげきおふなり、人の歎きはおふなりとよ(弘徽殿)

詞花集・巻九、雜上部に、男をうらみてよめるといふ題で、和泉式部の歌に、「あしかれと思はぬ山の峰にだに、おふなるものを人の歎きは」。惡かれと思はぬ所でも、人の歎きはおふものを、まして善かれと思ひ給はねば、歎くことぢやわいと恨みる意で、なげきのきに木をかけたのである、この歌謠曲・鐵輪にも引用されてゐる。

古の奈良の都の八重櫻、いま九重に移されし(大原問答)

詞花集・春の部に、伊勢大輔の歌、「いにしへの奈良の都の八重櫻、けふ九重ににほひぬるかな」。小倉百首中にも出てゐる。古の帝都奈良にて咲出た八重櫻が、二度時を得て今日宮中に移されて、えもいはぬ美しい花の色をあらはしたことだわい。

岩に砕けてわれても末にあふ隈川(融大臣)

逢ふを阿武隈川にいひかけ、詞花集・戀部、崇徳院の歌、「瀬をはやみ岩にせかるる瀧川の、われても末にあはむとぞ思ふ」の語句に據つたのである。

つのぐむ　淀野の澤の眞菰草つのぐみ渡る折しもは(鎌田)

角萌む義、角の如く芽を出すを云ふ。詞花集・巻一、春部、俊惠法師の歌に、「眞菰草つのぐみ渡る澤邊には、つながぬ駒もはなれざりけり」。

***みかきもり衞士の焚く火　御垣守衞士の焚く火の夜は燃え、晝は消えつつ物をこそ思へ**(娥)　**今ぞみかきもり衞士の焚く火の夜は燃え、晝も思ひに結ぼふる烟**(西王母)

詞花集・巻七・戀部、題知らず、大中臣能宣朝臣の歌に、「御垣守衞士の焚く火の夜は燃え、晝は消えつつ物をこそ思へ」とあるに據つたのである。この歌は(小倉)百人一首にも見えてゐる。一首の意は、禁裏を警固する衞士どもが焚く篝火のやうに、胸の思焦れる火は盛んに燃え、晝は思に消入りながら物思のみすることだわいといふのである。最明寺殿寺殿百人上﨟(巢林子作)に、「みかきもり衞士の焚く火はお爲なり」とあるは、謠曲・鉢の木に據つたものである。

昔のきやうの八重櫻、九重かをる小紫(淀鯉)

詞花集・春部、伊勢大輔の歌に、「古の奈良の都の八重櫻、今日九重ににほひぬるかな」。

むねに焚く火の夜は燃え、晝は消えつつ物思ひ(十二段)

詞花集・巻七、大中臣能宣の歌に、「御垣守衞士のたく火の夜はもえ、晝は消えつつ物をこそ思へ」とあるに據つたのである。この歌は(小倉)百人一首の中にも見えてゐる。

拾遺集に據れるもの

明くるわびしき葛城や(吉野忠信)

葛城山の神が夜の明けるをなやまれた故事。拾遺和歌集巻十九・雜戀部、春宮女藏人左近の歌に、「岩橋の夜の契も絶えぬべし、明くる佗しきかつらぎの神」。吉野金峯山と葛城山との間に通路を作らうとして、岩橋を架する工事に、葛城の神は形の醜いのを恥ぢて、夜のみ工事に從うたと云ふ。

うぐひすの聲なかりせば、雪消えぬ山里いかで春を知らまし(百日曾我)

深山幽谷の里では春になつても未だ寒く、雪消えぬにより、若しも鶯が鳴かずにあつたならば、どうして春が來たことが知れうや知られぬことぢやに、鶯が鳴くに心づきて、春となつたことが知れるとの意。この歌は拾遺集・巻一、春の部に、「天暦十年三月二十九日内裏歌合に、中納言朝忠」の題で出てゐる。朝忠は異本には中務としてある。

馬はあれどもこの身には、徒歩路越え行く木幡山(雪女)

拾遺集巻十九、雜戀の部、柿本人麿の題しらずの歌に、「山科の木幡の里に馬はあれど、かちよりぞ來る君を思へば」。

暗きより暗き道にぞ出でらるる(大原問答)

拾遺集・巻二十、哀傷部の歌に、「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙に照せ山の端の月」。

暮れてゆく秋の形見におく物は、我もとゆひの霜にぞありけ

つ」の歌をさす。この歌小倉百人一首にも出てゐる。

波の花咲く櫻川、彼の貫之の言の葉にかけし昔の面影も(鐵田)

「櫻川」は地名の條を見よ。後撰集・春下部に、櫻川といふ所ありとききて、題にて貫之の歌に、「常よりも春べになれば櫻川、波の花こそまなく寄すらめ」。謠曲・櫻川に、「常陸の國に名も櫻川ありと聞きて、常よりも春べになれば櫻川、波の花こそまなく寄すらめとよみたれば、花の雪も貫之も、ふるき名のみ殘る世の」。

人の親の心は闇にあらねども子故に迷ふ(大原問答)

後撰集・巻十五、藤原兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。

程もなく誰も後れぬ世なれども、とまれば行くを先立つと見る(西王母)

後撰集・巻二十、哀傷部・伊勢の歌に、「程もなく誰も後れぬ世なれども、とまるは行くを悲しとぞ見る」とあるに據つたのである。

三世の御佛に花奉る(兼平)

後撰和歌集春歌下の部、僧正遍昭の歌に、「折りつれば手ぶさにけがる、立てながら三世の佛に花奉る」とある歌句を引用したのである。遍昭の歌の意は、折りつれば手に汚れるから、折らないで其儘に過去現在未來に出現する諸佛に花を供するといふのである。

紅葉分けつつ行けば錦着て家に歸ると人や見るらん(紅葉狩)

後撰集・巻七、秋歌下部の歌に、「紅葉ばを分けつつ行けば錦着て、家に歸ると人や見るらむ」とあるに據つたのである。

我が黒髪の髻際用意の錐刀ふつつりと切る、……、かかれとてこそ我が父母も撫でつらめ(唐船噺)

後撰集巻十七、雜歌三の部、「はじめて頭おろし侍りける時物にかきつけ侍りける」と詞書ありて、僧正遍昭の歌に、「垂乳めはかかれとてしもらば玉の我が黒髪を撫でずやありけん」。

催馬樂に據れるもの

田中の井戸　田中の井戸に力なき蝦の聲も呂の歌(源義經)

催馬樂の呂の田中井戸の歌、「田中の井戸に光れる田水葱摘め摘め吾子女子吾子女たらりらり田中の子女子女」。

力なき蝦　田中の井戸に力なき蝦の聲も呂の歌(源義經)

催馬樂の呂の無力蝦の歌、「力無い蝦骨無い蚯蚓」。

みつばよつばのとのづくり(大原問答)

三棟四棟と殿屋の棟の數多造られたのをいふ。催馬樂に、「この殿はむべも富みけりさきくさの、みつばよつばに殿造りせり」。「さきくさ」をも見よ。

みもひも寒し　夫を思ふ想夫戀、みもひも寒しと謠ひけん(孕常盤)

井水もひややかでよいの意。「みもひ」は水をいふ。もと水を盛る器を毛比といふより、轉じて冷泉の飲むべきものをいふとぞ。催馬樂、飛鳥井の歌に、「飛鳥井に宿りはすべし、陰もよし、みもひも寒し、みま草もよし」。

***むべも富みけり**　宜も富みけりさきくさの三つば四つばの大伽藍(出世景清)　むべも富みけりさきくさの三つば四つばの殿造り(振袖始)

催馬樂に、「この殿は宜も富みけりさきくさの、三つば四つばに殿造りせり」とあるに據つたのである。「さきくさ」「伽藍」はその各條を見よ。

わがかど　刺櫛わが門の律の歌(源義經)

〔我門〕催馬樂の律の中に、「我門爾」と「我門乎」との二歌がある。

藏玉集に據れるもの

刈るならば千束もあらん戀草の云云　「戀草」を見よ。

***こひぐさ**　刈るならば千束もあらん戀草の、種とは袖の涙なり(十二段)

〔戀草〕松の異名。二條良基撰・藏玉集に、「戀草(松)。刈るならば千束やあらん戀草の、種とは袖のなみだなりけり」。ここの文は草の名寄であつて、戀を戀草にいひかけたのである。

ときみぐさ　なかなかに花とは見えぬ時見草(十二段)

〔時見草〕藏玉集に、「時見草。松。ながめても花とは見えず時見草、たよりの雲を惜しと思へば」、とありて松の異名である。

ねざめぐさ　何咲かで種とはならん寢覺草、心の外に枝も葉もなしと連れし歌はいかに(十二段)

〔寢覺草〕松の異稱。藏玉集に、「寢覺草。松。何をさて種となすらむ寢覺草、心の外に葉も枝もなし」。

ものみぐさ　實に實にそれは物見草、袖にかざさんたりたりは、涙

拾遺集・戀部、柿本人麿の歌に、「あしびきの山鳥の尾の下垂尾の、長長し夜を獨りかも寢む」(萬葉集卷十一には作者未詳としてある)とあるに據つたので、「山鳥の尾のしだり尾の」は「長」にかかる序詞である。

ゆふづけ鳥・關より西に隱れなき、名をもち月の引馬や(堀川波鼓)

木綿付鷄(その條を見よ)關とつづけて逢坂關を意味し、關西に隱れなき名を持ちた「望月」(その條を見よ)にいひかけ、拾遺集卷三・秋部、貫之の歌「逢坂の關の清水にかげ見えて今や引くらん望月の駒」に據つて、かくいうたのである。

淨瑠璃に據れるもの

巢林子の淨瑠璃文中に註記してある、江戸、文彌、一中、冷泉、道具屋などは何れも淨瑠璃節の一派で、これ等は語釋部に就いて見よ。

いつか都へ歸る山云云

「春は梢にいろいろの云云」を見よ。

いよし御見と書いたるは、絆の種か花薄、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文、方樣まゐる花よりと、思ひ參らせ候べくの、譯の盃色見えて、湧きて泉の思はくは、只逢ひまして逢ひまして、またの御見をまづかしく(女腹切)

半太夫節の文詞に據つたもので、「花より」「またの御見を」とある所が、半太夫節の文詞には「梅より」「またのえにしを」となつてゐる。

沖に戀路の戀路の、またいろは船、…風も昔に吹きかへれ(二枚繪)

巢林子作・用明天皇職人鑑、山路玉世の姬道行の中にある文である。

川中島の四段目　このたび生玉大寶寺の開帳に築山を飾られたも、筑後の川中島の四段目から出た事ぢやげな(宵庚申)

巢林子作・信州川中島合戰の第四段目を竹本座で演じたのは享保六年八月で、天目山の作物に張りぬきの本山を用ゐた。曉晴翁撰、雲錦隨筆・卷之四に、「享保六年辛丑八月信州川中島合戰(竹本座にて興行)、此時山籬を張ぬきの本山に作り始む(是迄はすべて山の段は、すだれに山を畫きたるを用ゆるなり)」。

蒲原宿の約束　駿河國蒲原宿の約束が伊豆の伊東へ洩れ聞え(冷泉節)

蒲原宿は駿河國庵原郡にある、蒲原宿の北に七難坂があり、その右を吹上濱と云ふ。淨瑠璃十二段草紙に、牛若が三河國矢矧宿某長者の娘淨瑠璃姬と契り、奥州に下らうとして七難坂まで來て重病に罹つた、淨瑠璃は神の告によつて之を知り、來つて看病に盡したので漸く平癒した。牛若乃ち明年は奥州の秀衡の大軍を率ゐて平家追討の爲上洛するによつて、その時の再會を約束して別れたことが記してある。この文は即ちその事をさすのである。

京の吉岡紙子染、やぼてり柿か云云(重井筒)

「やぼてりがき」を見よ。

***傾城に誠なしと世の人申せども、…つらや如在と恨むらん**(冥途飛脚)

三世相(巢林子作)に出てゐる文で、遊女夕霧の妹女郎荻野の戀物語である。梅川が荻野のこの戀物語を竹本賴母の節で淨瑠璃に語るのである。

***けんびゐし**　某は親王の執權檢非違使勝舟と申す者(用明天皇)　すなはち山路の四段目、檢非違使が鹿島の事觸、島樣とつくとお聽きなされ(二枚繪)　異形は手を伸べ、けんびゐしが眉間を割れて退けとはたと打つ(二枚繪)

〔檢非違使〕「けびゐし」を見よ。心中二枚繪草紙のこのあたりの文は、用明天皇職人鑑・第四にある檢非違使勝舟が鹿島の事觸に變裝して入込んだところの文を應用したのである。

此世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、…手にかけて殺しておいて行かんせな、放ちはやらじと泣きければ(曾根崎)

巢林子作・唐崎八景屛風(狂言本)の中にある「からさき心中道行(蔦山小歌)」の文は曾根崎心中道行文の添削であり、唐崎八景屛風は三勝七回忌狂言の狂言の句あれど、元祿十六年の上演であらう。「まことに今年は此方樣も云云」をも見よ。

小萬泣く泣く申すやう　小萬泣く泣く申すやう、緣は異なもの其時に、起請一枚書かねども、雲津のかはせ二世三世、指切してのいひかはせ(丹波與作)

音曲色酒盛・八百屋お七の祭文に、「お七泣く泣く申すやう、いつぞや類火にあひし時、……逢うて語らん嬉しやと、思ひ定めて夕暮に、一わの藁に火を包み、ほほり上げたるばかりにて云云」。「雲津のかはせ」は地名部を見よ。

扨も其後和田義盛九十三騎の人人は、山下宿河原長者の宿所に集つて、…虎御前の思ひざし誰になりともさし給へ、朝比奈お酌候(兼好)

古淨瑠璃・和田義盛に據つた文である。

しのだの森のうらみくず水(氷朔日)

る（百日曾我）
秋の暮れて行く形見として殘し置く物は、老の歎きを我が頭に霜を置いたやうに白髮となることだわいとの意。この歌は拾遺集・卷三・秋の部に、「くれの秋重之が消息して侍りけるかへりごとに。平兼盛」として出てゐる。

ここの木の下彼所の木蔭、濡れても寢んと詠ぜしは（蟬丸）
拾遺集・春の部、題しらず・よみ人しらずの歌に、「櫻狩雨は降りきぬ、同じくは濡るとも花のかげに隱れむ」とあるをときくだいたのであらう。

木幡の里か馬はあれど、明日の軍にはかちと見えしは誰やらん（源義經）
拾遺集卷十九、雜戀の部、人麿の題しらずの歌に、「山科の木幡の里に馬はあれど、かちよりぞくる君を思へば」。

さくら散る木の下風は寒からで、空にしられぬ雪ぞ降りける（百日曾我）
春風櫻に吹いて落花繽紛たる狀を雪と見立てて詠んだ歌である。拾遺集・卷一・春部に、「亭子院の歌合に。紀貫之」としてこの歌が載つてゐる。

五月五日の一夜さを女の家といふ（女殺）
五月五日（端午）は菖蒲の祝儀、男子の節句はじめで、此日は世間一般に祝日の挨拶（禮と云ふ）に廻り遊興に日を暮し、女が留守居する場合が多いからいうた詞。
拾遺和歌集・卷二・夏部・大中臣能宣の端午の歌に、「昨日までよそに思ひし菖蒲草、今日わが宿の妻とみるかな」。内藤文草撰・ねころび草にも、「菖蒲ふく一夜は女の宿なるものを

と、獨言する云々」。

すきまの風も寒かりし身は習はしと身を捨てて（烏帽子折）
拾遺集・卷十四、戀四の部の歌に、「手枕のすき間の風も寒かりき身は習はしの物にぞありける」。

空に知られぬ白雪 今日まで黑髮の一夜の中にかくぞとは、空に知られぬ白雲と紛ふばかりになり給ふ（加增曾我）
黑髮が一夜の中に白髮となつたことを、拾遺集・卷一・春の部、貫之の「櫻散る木の下風は空からで、空に知られぬ雪ぞ降りける」の歌句を應用したのである。

千年まで限れる松も今日よりは、君にひかれて萬代や經ん（百日曾我）
松は千年と云はれて、松の壽命は千年と限あれども、式部卿の宮の御壽命は萬歲なるべければ、今日からは松もそれに引かれて共に萬代を經ることであらう。この歌は拾遺集・卷一、春の部に、「入道式部卿のみこの子日し侍る時。大中臣能宣」の歌として出てゐる。

寺寺の鐘の聲、けふも暮れぬと聞ふれば（百合若）
拾遺集卷二十、哀傷の部、よみ人しらずの歌に、「山寺の入相の鐘の聲ごとに、けふも暮れぬと聞くぞ悲しき」。

友まどはせる小夜千鳥 友まどはせる小夜千鳥、驚く潟の人足や（最明寺殿）
友をうしなひ惑うてゐる夜の千鳥の驚く干潟の人の足音といふに、次の歌の句を引用したのである。拾遺集卷四、冬の部、紀友則の歌に、「夕さればさほの川原の川霧に、友まどはせる千鳥鳴くなり」。

濡れても寢ん ここの木の下彼處の木蔭、濡れても寢んと詠ぜしは、花に戯れし歌の體（蟬丸）
拾遺和歌集卷一、春の部、題しらず、よみ人しらずの歌に、「櫻がり雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花のかげに隱れむ」。

初子の日 まづ新町のはつねの日、松澤山に深翠、千代も根引きは絕えすまじ（壽門松）
初子に初寢をいひかけたのである。遊女となつて客と初寢の床に入る日より、それ等の歡の相談絕えず起るであらうの意。昔時正月初子の日に野邊に出て小松を引いて祝とした古例がある。巢林子のこの文は拾遺集・春部、忠岑の歌に、「子の日する野邊にこまつのなかりせば、千代の例に何をひかまし」、とあるに據つて文をなしたのである。「深翠」は謠曲・高砂にも、「松が枝の葉色は同じ深みどり」と見えてゐる。

春の野にあさる雉子のつまごひに、おのがありかを人に知られつつ（百日曾我）
春の野の草葉の中に沒して餌を尋求める雉子の、妻戀ひかねて、鳴くによつて己が居る所を人に知られて身を危うすることよの意。この歌は拾遺集・春の部に、題しらず、中納言家持として出てゐる。

松の響か琴 夢の駒は大淀の松の響か琴にも膝枕（女夫池）
松は太夫を云ふ（「まつ」を見よ）、太夫大淀の駒を松の響といひなして、「松の響か琴」といひつづけたのである。松籟琴音に似るといふことは、拾遺集・八、齋宮女御の歌に、「琴の音に峯の松風かよふらし、いづれの緒よりしらべそめけむ」と見えてゐる。

峯の松風琴の音に通ひ（孕常盤）
松籟琴音に似てゐるといふに據つたのである。拾遺集・卷八、雜上部の歌に、「琴の音に峯の松風通ふらし、何れの緒より調べそめけむ」。平家物語・卷六、小督の條に、「峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か」。

身は習はしの汐風や（百合若）
拾遺集卷十四、戀四の部、よみ人しらずの歌に、「手枕の透間の風も寒かりき、身は習はしの物にぞありける」。

***みるめ** みるめかる尼が崎（卯月紅葉）
〔海松布〕綠色藻の一種、多歧の管狀をしてゐる。ここの文は「みるめかる海人」に「尼が崎」をいひかけたのである。拾遺集・戀二の部に、「みるめかるあまとはなしに君戀ふる、わが衣手の乾く時なき」。

山鳥の尾のしだり尾 山鳥の尾のしだり尾の長長し夜を（扇八景）、山鳥の尾のしだり尾の長袖なりと（艶狩）、山鳥の尾のしだり尾の長居（烏帽子折）

新古今集に據れるもの

あかぬ別れの曉の鐘（會稽山）　まだ夜中と思うてゐたに、曉の鐘の音を聞いて、最早夜が明けたかと、飽足らずして別れるといふことで、待宵小侍從の故事。新古今和歌集・戀三の部、小侍從の歌に、「待つ宵にふけ行く鐘の聲きけば、あかぬ別れの鳥はものかは」。

あかぬわかれの鳥はものかは　佛法最初の法隆寺、寂滅爲樂の鐘の聲、あかぬ別れのとりは物かは、それはなさけの恨みのたれ（三世相）　前條に述べた小侍從の歌句によつたのである、小侍從のこの歌の意は、曉鷄鳴きて夜明けを告ければ、飽足らずして別れることの悲しいものと思うてゐたが、人待つ宵の更け行き、鐘の音の初夜後夜と響き渡るときの悲しさに較べては、物にもあらずといふこと。

あき篠や外山の松よこと問はん（壽門松）　新古今集・冬の部、西行法師の題しらずの歌に、「秋しのや外山の里やしぐるらむ生駒の嶽に雲のかかれる」。

あさくらやきのまるどの（天神記）　新古今和歌集・雜歌部に、天智天皇御歌、「朝倉や木の丸殿にわれ居れば、名乘をしつつゆくは誰が子ぞ」。朝倉は今筑前の朝倉郡朝倉村である。木の丸殿とは木を削らないで丸太で造つた御殿をいふ。十訓抄・上卷第一、可レ定ニ心操振舞ニ事の條に、「天智天皇世につつしみ給ふ事ありて、筑前國上座郡朝倉といふ所の山中に、黑木の屋を造りておはしけるを木の丸殿といふ、丸木にて造る故なり云云」。

蘆の節の間も待つ命こそ短かけれ（女夫池）　新古今集・戀部の歌、「難波潟みじかき蘆の節の間も、逢はでこのよを過ぐしてよとや」、とある語句に據る。「節の間も」とは、いささかの間もの義、蘆の節の間は短いものなればいふ。

ありとは見えてその原や、伏屋に立てる我妻の、位牌に隱れ消えにけり（卯月潤色）　新古今集・卷十一、戀一の部、坂上是則の、「そのはらや伏屋におふるははきぎの、ありとは見えてあはぬ君かな」の歌句によつたのである。「そのはらや」の條をも見よ。

いづくの松も染めかねぬ模樣の時雨（融大臣）　新古今集・戀歌一の部、前大僧正慈圓の歌に、「わが戀は松をしぐれの染めかねて、眞葛が原に風騷ぐなり」。

いつはりのなきを糺の神路山（用文章）　新古今集・卷十三、戀歌三の部、平定文の歌に、「僞りをただすの森のゆふだすきかけつつ誓へ我を思はば」。

薄霧の籬の萩の朝濕り、秋は夕と誰がいひて（千疋犬）　新古今集卷四、秋歌上の部、藤原清輔朝臣の歌、「うす霧の籬の花の朝濕り、秋は夕と誰かいひけん」。

うつり行く心の花のあだ人を、思ひくち木と身はなりにけり（今川了俊）　心の移變るあだ人を思焦れて、わが身は朽木のやうに朽ち果てたことぢやわい。新古今集・卷十四、戀四の部に、「さりともと待ちし月日ぞ移り行く、心の花のいろにまかせて」とある歌と、同じやうな意の歌である。

重きが上の小夜衣　「さよごろも」を見よ。

かささぎのはし　新町橋をかささぎの橋と語りて行く人も、絶えて其夜も更けにけり（淀鯉）　星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも（曾根崎）　かささぎの渡せるはしにおく霜の（娥）　牽子が緣の橋渡し、此樽も橋渡し、橋にて祝ふ鵲の、身も紅に染るとも、世に謠はるる端ならん（鑓權三）〔鵲橋〕鵲は鳥の名、本草に、「綠背白腹尾翮黒白駁雜」とある。七月七日の夜、鵲群をなし天空を塡めて橋をなし、以て織女（星の名）を牽牛（星の名）の處に渡すといふ、この故事によつて、鵲の橋を男女契りの橋渡しの意にいふ。

娥歌加留多のここの文は、新古今集・冬部、中納言家持の歌、「鵲の渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜ぞふけにける」とあるによつたのである、この歌は小倉百人一首中にも出てゐる。さて一首の意は、大空を見渡せばさえ渡りて、天の川の鵲橋に霜眞白に降つてゐる光景なれば、夜は既に更けてゐるわいといふこと。

鑓權三重帷子のここの文は、橋渡しをして祝ふおさいの身を鵲の身とはいうたのである。

春日野や若紫の摺衣（大職冠）　新古今集卷十一、戀歌一の部、在原業平の歌に、「春日野の若紫の摺衣、しのぶの亂れ限りしられず」。

交野のみ野の櫻狩（蟬丸）　「交野」は河内國交野郡（今は北河内郡）にあつて櫻の名所。「櫻狩」は櫻見物。新古今集・春部、藤原俊成の歌に、「またや見む交野のみ野の櫻狩、花の雪散る春のあけぼの」。

君が代の年の數をば白妙の濱の眞砂と、敷島やかの貫之の言の葉（十二段）　新古今和歌集・賀部、題しらず・紀貫之の歌に、「君が代の年の數をば、白妙の濱の眞砂にたれかしきけむ」。

古今集十戒の和歌（兼好）　「じつかいのわか」を見よ。

御祕藏の常世の松は枯れにけり、おのが千歳を君に讓りて（三國志）　新古今集・冬歌の部、源重之の歌に、「夏かりの荻の古枝は枯れにけり云々」と見え、また榮花物語・松のえだの卷の歌に、「……松の千歳は

信太森は和泉國泉北郡信太村にある名所である、巨楠樹下に葛の葉の社がある。ここの文は、古淨瑠璃・信田妻に、「こひしくば尋ね來て見よ、和泉なる信太の森のうらみくずの葉」とある歌句をとりて、葛水にいひかけて一文の序としたのである。心中刃氷朔日のここの文は、三十郎の初日見て、芝居では大酒、戻りは濡れて蒸し立てる、暑い暑い事、此暑さで寝倒して、信太の森のうらみ葛水云云」とあつて、卽ち嵐三十郎の初日芝居は信田妻を演したので、かくいうたのである。

新町橋を鵲の橋 又義太夫が口の端に、新町橋を鵲の橋と語りて行く人も（淀鯉）

巢林子作・曾根崎心中道行に、「梅田の橋を鵲の橋と契りて」、とあるを新町橋（新七夫妻が新町橋をわたつくによつて）にいひ替へた。

大將職に腰を掛け、……嗅達いかにと宣へば（百合若）

巢林子作・酒呑童子枕言葉、賴光山人の條に「賴光職に腰を掛け、……方方いかにと宣へば」とあるの改作。

***はなひとしんわう** ますらがこの日干ぐつと脱出で、花人親王の蜆川の御所の體とつくと見屆け候へば（二枚繪）

〔花人親王〕用明天皇職人鑑の中に見える人物である。假作人名部に就いて見よ。ここの文は花人親王をお島にきかせて蜆川の御所というたのである。卽ち用明天皇職人鑑に、「ますら橫手を丁と打つて、花人親王の御所のさまをよつく見屆け候が」、とある所に當る。

春は梢にいろいろの、花咲く山にと山巡り、隣りは靑し夏山の、柏散るてふ卯の花や、山時鳥山間の、景色の花に顏つくる、笠を傾け山巡り、……、山又山や峰白し、雲を誘うて山巡り、巡り巡りて山姬の、山衆交りの淨瑠璃も、夕限りの口ぐせや（女腹切）

都一中の淨瑠璃、「姬ケ瀧四季山めぐり」の文に據つたもので、「山衆交りの淨瑠璃も」といへるも、遊女どもが交つて語つた、一中節・姬ケ瀧四季山めぐりの淨瑠璃を言つたのである。都一中のこの文は、謠曲・山姥にある文（「いとま申して歸る山の云云」を見よ）に據つたものである。

火打が禁物ぢや 消えてもこちは火は打たぬ、おれには火打が禁物ぢや、打つ音聞いてもぞつとする（二枚繪）

以前この天滿屋の抱妓お初が燧火の音に紛らして戶を明けて脫出し、德兵衞と曾根崎の森で情死した。今またお島の情死を氣遣うてかく言うたのである。曾根崎心中に、お初が死を決して天滿屋を逃出る文に、「門口までそつと出で、鐶は外せしが、車戶の音いぶかしく明けかねし折柄、下女は火打をはたはたと、打つ音に紛らかし丁ど打てばそつと明け、かちかち打てばそろそろ明け、合せ合せて身を縮め袖と袖とを橫の戶や、虎の尾を蹈む心地して二人續いてつつと出で、顏を見合せアア嬉しと、死にに行く身を喜びしあはれさつらさあさましや、跡に火打の石の火の、命の末こそ短けれ」と見えてゐる。

一引が千僧供養、二引が萬人の物笑ひ（會稽山）

當流小栗判官第四に、藤澤寺の上人が小栗判官の死骸を車に乘せて挽かしめる條に、「一引ひけば千僧供養、二引ひけば萬僧供養」、とあるに據つた洒落である。

法藏比丘の淨瑠璃 そもそも法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と藥師は御夫婦と云云（女殺）

法藏比丘と云ふ題名の淨瑠璃をさす。（此書佐渡七太夫豐孝の說經章指淨瑠璃本は六段物、八乃至九行の刊本で、享保三年初春の序がある、販元總兵衞である）その大意は、せんじやう太子があしゆく夫人と契つて二子を擧げたが、あしゆく夫人の歿後せんじやう太子は法藏比丘と改名して佛道修行に志し、難行六十願を立て、其中十二願はあしゆく夫人の爲に、他の四十八願は一切衆生を遍く救ふ爲の願である。かくて佛道成就の時あしゆく夫人は藥師如來となつて其姿を蓮華中に現じ、御手に八萬四千の藥味を入れた壺を持つて淨瑠璃世界に飛去り給ひ、せんじやう太子は阿彌陀佛とならせ給ひ、二子は觀音・勢至となり給うたことを作つてある。巢林子これを引いて「阿彌陀と藥師は御夫婦と云云」というたのである。（序云、傾城色三味線・鄙之卷、高洲ちもりに茂る繼草の條に、「旅芝居の人形役者を招き、只かはつた思付きの趣向をのみ相談すれど道具少く役者足らず、まづ人數不足にて今日いうて今日になる操り法藏比丘がましといふ。それは好い太夫ども已前より度度してとり、今は阿彌陀でも錢の光が梨の木の花、素い見物も其樣には食ふまし云云」と見えてゐる。されば法藏比丘は元祿頃盛興行されたもので、巢林子もこれに思付いてかくはいうたのである。

やぼてりがき 京の吉岡紙子染・やぼてり柿かうす柿か、正月前のはぎはに旦那殿は外が內（重井筒）

「やほてん」（その條を見よ）に「ほてりがき」（火照柿卽ち熟柿で、染物屋に緣ある熟柿色染をきかせて）をいひかけたのである。ここの文は、蟬のぬけがら（延寶六年成、山本九兵衞販、一中正本、巢林子の作であらう）大坂萬屋介六道行の文に、「京の吉田の神帳に入つた神かや入らぬのか、わけめ情めわきまへぬやぼてへ神かうつじんか、正五九月の月日もうぶすなどのの緣日」、とあるを作かへて用ゐたのである。

をじかのその 笛に誘はれ妻戀ふる、牡鹿の苑の法の導、これなれや（用明天皇）（二枚繪）

「牡鹿苑」「妻戀ふる牡鹿」に「鹿苑」をいひかけて、「法の導」といひつづけたのである。鹿苑は Mrgadava といひ、中印度波羅奈斯城の北東に當り、現今の Sarnath の地である。法華科註序に、「婆羅痆尚都城東北有ㇾ河、同名婆羅痆河、河東北十餘里至ㇾ鹿野伽藍、其側大林名ㇾ施鹿林、亦名ㇾ鹿苑ㇾ」と見えてゐる。釋尊成道して佛陀伽耶の道場を離れて、最初に說法された靈跡の地である。法藏比丘の淨瑠璃（その條を見よ）に、せんじやう太子が妃のあしゆく夫人と鹿苑の地で死別し、太子無常を感じて法藏比丘と名乘つて佛道修行に志したことが記してある。「牡鹿の苑の法の導云云」は晶しこれに據つたのである。

高き屋に登りて 高き屋に登りて見れば煙立つ(三國志) 高き屋に登りて民の賑を契り置きてし難波津や(曾根崎)

仁德天皇が難波の高津宮にましまして、民の竈から煙の立昇るを見られて、「高き屋に登りて見れば煙立つ、民のかまどは賑ひにけり」、と詠じ給はれたと俗にいふ歌に據つたのである。この歌は新古今集・卷七・賀部に出てゐる。「契り置きてし」と云へるは、後文の靈佛にかかりて、彌陀の誓願にきかせたのである。

***たまのを** 長らへつらき玉の緒の、玉よといふもうつつにて(三世相) 玉の緒の絶えなば絶えれ(大原問答) 玉の緒も絶えなば絶えれ(卯月紅葉)

魂の緒の義であつて、命を云ふ。「玉の緒の絶えなば絶えね」は、我命の絶えるなら絶えよの意。新古今集・戀部、式子內親王の歌に、「玉の緒よ絶えねば絶えね、長らへばしのぶることのよわりもぞする」。卯月紅葉のこの文は、「逢はずは何を玉の緒」をも見よ。

民の竈も富の小路(大原問答)

新古今集卷七・賀部に、「みつぎもの免されて國富めるを御覽じて、仁德天皇御歌」と詞書ありて、「高き屋に登りて見れば煙立つ、民の竈は賑ひにけり」、とある歌句を取つて京都なる富の小路にいひつづけたのである。

露霜の白きを見れば夜も更けて(大經師)

新古今集・冬部、題しらず、中納言家持の歌に、「かささぎの渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜ぞふけにける」、とある句に據つた文飾であつて、涙は露の如くに玉をなし、霜となつて凍るといふに、夜更けるに從つて寒さ加はり、露の霜となつて地上に白く凍るにいひかく。

取る手もゆらぐ玉の緒 手首をしかと取る手もゆらぐ玉の緒に、まだ力あるものごしにて(會稽山)

病身の老母が二子の手首を握る手も顫ひ、餘命も聢と定らぬの意で、新古今集卷七、賀歌の部、讀人知らずの歌に、「初春の初子のけふの玉はは き手に取るからに搖ぐ玉の緒」とある下の句に據つたのである。「玉の緒」はその條を見よ。

なにはづのうた 吉田屋の庭の竈は難波津の、歌の心よ蒸籠の湯氣の大杵(夕霧)

〔難波津の歌〕仁德天皇の御歌、「高き屋にのぼりて見れば煙立つ、民の竈は賑ひにけり」をいうたのである。この歌は新古今集にも見えてゐる。ここの文に、「庭の竈」といひ、「蒸籠の湯氣」とあるは、「煙立つ民の竈は賑ひ」の心をいうたものである。

はし鷹の野守の鏡(百合若)

「はし鷹」は倭訓栞に「鷂をいふ、和名抄に見ゆ、このりの雌なり、はいたかともいふ、本は速鷹の義、轉じていとなり、又しとなる也」と見えてゐる。「野守の鏡」は倭訓栞に「野中の水に影のうつるをいふ也といへり」と見え、俊頼口傳に「昔帝野邊に出て鷹狩せられけるに、御鷹それて失せけるを、野守を召して索めよと仰せられければ、畏りてうつぶして土を守りてありけるが、御鷹は松の木にありと申す、いかでかくいふぞと問ひ給へば、芝の上に溜れる水を鏡として鷹のありかを知れりと申す、これより野に溜れる水を野守の鏡とはいふなり」と見えてゐる。新古今集卷十五、戀歌五の部、よみ人知らずの歌に、「はし鷹の野守の鏡えてしがな、思ひ思はずよそながらみむ」。

葉山繁山繁けれど、茨障らず思入る(鑓權三)

新古今集・卷十一、戀歌一の部に、「筑波山葉山しげ山繁けれど、思入るには障らざりけり」、とある歌を應用して、枳殼垣繁つて入り難けれども、四斗樽の鏡を拔いて突込んだれば、茨に障らないで入ることができる意にいうたのである。

春過ぎて夏來にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香具山(持統天皇)

最早春が過ぎて夏が來たやうである、天の香具山に白妙の夏衣を乾して里人どもが夏の用意をすると侍臣どもが申すといふ意である。新古今集・卷三、夏部にある持統天皇の御歌に、「春過ぎて夏來にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香具山」。萬葉集・卷一、藤原宮御宇天皇御製歌に、「春過ぎて夏來るらし白妙の、衣乾したり天の香來山」。

吹きて亂るる薄煙、空に消えてはこれも亦、行く方も知らぬ相思ひ草(曾根崎)

新古今集卷十七、雜歌中の部、西行法師の歌「風になびく富士の煙の空に消えて、行くへも知らぬ我が思ひかな」に據つたもので、「これも亦」といへるは、富士の煙もさうであるが煙草の煙も亦さうであるの意。「相思ひ草」は煙草をいふ。その條を見よ。

富士の煙の上もなき 天窓の鉢に立つ湯氣は、富士の煙の上もなき、ほとび過ぎたる湯上りの(酒呑童子)

新古今集卷十二、戀歌二の部、家隆朝臣の歌に、「富士の嶺の煙もなほぞ立ち昇る、うへなきものは思ひなりけり」。

まくず原誰が染めかねし 裾に模様の眞葛原、誰が染めかねし染浴衣(兼好)

新古今集・卷十一、戀歌一の部、慈圓の歌、「わが戀は松をしぐれの染めかねて、眞葛が原に風騷ぐなり」、に據つたものであつて、つれない戀に思ひ焦れる意。(この歌意は、松を人の無情に喩へ、時雨を我が懸想するに喩へて詠んだもので、松を時雨が染めかねるが如く、懸想しても先方は無情で色も變らねば、恨みる計りである。眞葛が原とは葛の多い原、また名所にもある。騷ぐといへるは、恨みる心の強く切なるをいはう爲である)。ここの文に染浴衣といへるは、太平記・卷二十一に高師直が鹽谷の室の湯上り姿を見て、戀ひ焦れるに至つたといふその緣によつた語である。

待つ夜の鐘も別れの鳥の聲聲(反魂香)

新古今集・戀部三、小侍從の歌に、「待つ宵にふけゆく鐘の聲きけば、あかぬ別れの鳥はものかは」。

みかの原わきて流るるいづみ

君に讓れり」と見えてゐる。これ等から思ひついた狂歌である。

越ゆる小夜の中山年たけぬ、…命なりけり世なりけり(日本武尊)
新古今集卷十、羇旅歌の部、西行法師の歌に、「年たけて又越ゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山」。

***さしもぐさ** 拜み納まるさしもぐさ、草のはすはな世にまじり(曾根崎) 命にかけてさしも草、賴み甲斐なき觀世音(一心五戒魂) このさし傘をさしも草、觀世紙捻の觀世音(賀古敎信)
さしも多くの民草。衆生。新古今集・卷二に、「淸水觀世音の御歌となむいひ傳へたる」とありて、「なほ賴めしめぢが原のさしも草、われ世の中にあらん限りは」。「命かけてさしも草」は命かけてさしもに、この歌句をきかせたのである。「このさし傘をさしも草」は、この差傘をさしにこの歌句をきかせ、觀世紙捻の觀世音と同韻語によつた文飾である。

五月雨の一しきりをだやみて、空さりげなく霽々と、北斗の光鮮かに晴れ渡れば(會稽山)
「をだやむ」はその條を見よ。「空さりげなく」は、空さりげなくの意で、空を擬人したところ面白く、あわただしい雨の一過後、洗ひ去られた天地の淸さを思はしめる。尤も巢林子のこの文は、新古今集卷三・夏歌の部・從三位賴政の歌に、「庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄める月かな」、とあるに據つたのである。

佐夜の中山年たけぬ…命なりけり(日本武尊)
新古今集・卷十、西行法師の歌に、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや、命なりけり佐夜の中山」。佐夜中山は小夜中山また佐益中山とも書く、遠江國小笠郡日坂の東なる坂嶺をいふ。掛川志稿に、「その道兩山に夾まれて左右の谷間甚だ狹し、佐夜は狹谷なるべし、その中間の山なれば狹谷の中山と名づけたるなるべし」。

***さよごろも** 恨も仇も外になし、憎いもつらいも唯獨り、重きが上の小夜衣よなう(卯月椛) 扨その次はさよ衣、我つまならぬ邪淫戒(盛久) 彼女の手にも觸れず小夜衣とて投返す(兼好) 今まで輕き上﨟の俄に重き小夜衣、我妻ならぬ念力か(女楠)
「小夜衣」新古今集・卷二十・釋敎部に、「さらぬだに重きが上のさよ衣、わがつまならぬつまな重ねそ」とある歌によつて、「小夜衣」を邪淫の意に用ゐる。「じつかいのわか」を見よ。

***しぎたつさは** 鳴立澤に氣をとめし西行法師(千疋犬) 鳴立澤の秋の暮、心なき身もあはれ知れ(虎が磨)
鳴立澤は相模國中郡大磯より小磯に至る間にある叢林である。ここの文は新古今集・卷四・秋上部に、西行法師の歌、「心なき身にもあはれは知られけり、鳴立澤の秋の夕暮」とあるに據つたのである。「心なき身」とは、世俗の名利を離れて行雲流水を友とする僧の身を云ふ。

滴る水の柳蔭、暫しとてこそ旅人の立寄る所(會稽山)
新古今集・夏の部、題知らず、西行法師の歌に、「道のべに淸水流るる柳蔭、しばしとてこそ立ちとまりつれ」。

じつかいのわか 古今集・十戒の和歌を引き、女の罪を驚し貞女の道の敎訓をこまごま書いて迯りしかば、彼の女手にも觸れず小夜衣とて投返す(兼好)
「十戒の和歌」ここの文に「古今集」といへるは「新古今集」の誤である。新古今集・卷二十、釋敎歌の部に「十戒の歌よみ侍りけるに」と詞書ある歌の中に、「不邪淫戒」といふ題にて、「さらぬだに重きがうへのさよ衣、わがつまならぬつまな重ねそ」とある歌をさす。一首の意は、一人の妻を持つだに佛法に對して罪であるのに、まして他人の妻など犯すことは尤もあるまじきことだといふのである。この歌を邪淫の戒の意に用ゐる。

しづはたおび 賤機帶のかた結、人目を包む朝霞(天神記)
「賤機帶」賤女の機織るとき結べる帶。新古今集・卷十三・戀歌三の部に、「あしのやのしづ機帶のかたむすび、心やすくもうちとくるかな」。ここの文は、賤女が機織るときに帶をゆるく片結にしてゐるそれのやうに、菅公の御臺所が帶しどけなう窶れてゐるを云うたのである。

末の露本の雫や世の中の、おくれ先立つためしなるらむ(百日曾我)
葉末に宿る露も葉本にたまる雫も、落ちるに遲速こそあれ何れも遂には落ちるやうに、人の壽命に於ても亦かくの如しであるとの意。この歌は新古今集哀傷の部に、「題知らず。僧正遍照」として出てゐる。

袖打拂ふ蔭もなし 佐野のわたりもさのみやは(雪女)
新古今集・冬部、藤原定家の歌に、「駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮」。

***園原や** ありとは見えてその原や、伏屋に立てる我妻の、位牌に隱れ消えにけり(卯月潤色) 一日見てさへなれし夜の、面影だにもまがはぬ物、よくよく見れば園原や、ありとも知らぬ死顏に(女楠)
「園原や伏屋に生ふる箒木の、ありとは見えて逢はぬ君かな」の歌に據つたものである。この歌は新古今集・卷十一、戀歌一の部に出てゐる。「箒木」は美濃・信濃兩國の界なる園原と云ふ處に生ふる樹である。遠方から見れば帚を立てたやうな形に見えれども、近寄つて見ればそれに似た樹も無い。さるによつてありとは見れど逢はれぬものに喩ふ。(蓋し箒木は縱の樹の秀でたのが箒草の如く見えるのだといふ)。「ありとは見えてその原や云云」をも見よ。

空に消えてはこれも亦云云
「吹きて亂るる薄煙云云」を見よ。

の歌に、「名にし負はば常は動の森にしもいかでか鷺のいはやすくぬる」。

さざなみや　さざなみや志賀の浦にぞ着き給ふ、古き都の所から(蟬丸)
漣波や昔ながらの草履取(三國志)

琵琶湖面に漣波が立つより、そのほとりなる志賀の地にかけて枕詞とする。ここの文は千載集に載つて平忠度の詠と云ふ歌、「さざなみや志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かな」の詞によつたのである。

長柄の橋も名のみにて(天神記)

千載集卷十七、源俊頼朝臣の歌、「行末を思へばかなし津の國の長柄の橋も名は殘りけり」。

はげしかれとは山おろし　一昨日の夜半の頃、山賊の手に掛り上の小袖と諸共に、はげしかれとは山おろし、あるにもあらぬ憂き身の果(持統天皇)

「剝がる」を「烈し」にいひかけて、源俊頼の歌の「うかりける人をはつせの山おろし、烈しかれとは祈らぬものを」の句にいひつづけたのである。この歌は千載集・戀部に出づ。(小倉)百人一首中にも出てゐる。

道こそなけれ思入る、山の奥にて鳴く鹿(五人兄弟)

千載集・雜部、皇太后宮大夫俊成の歌に、「世の中よ道こそなけれ思ひいる、山の奥にも鹿ぞなくなる」とあるに據つたのである。この歌は小倉百人一首中にも出てゐる。

山の奥にも鹿ぞ鳴くなる(女夫池)

人住まぬ奥山に分入るとても、そこにはまた鹿が物悲しう鳴くわいの意。千載集・雜部、皇太后宮大夫俊成の歌に、「世の中よ道こそなけれ思ひいる、山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」。

小笹に露のたまられぬ　町で名護屋の胸高帶は、小笹に露のたまられぬ(女殺)

千載集卷十四、戀歌四の部、藤原伊經の歌、「分けきつる小笹が露の繁ければ、逢ふ道にさへ濡るる袖かな」の下の句をきかせたのである。ここの文は、町風でないを名護屋帶にいひかけ、小菊が伊達な帶を胸高に纒うてゐる遊女風は、道で逢ふ人人のそれ者と見て、濡れかけること(痴話ごと)の詮方ないの意。

曾我物語に據れるもの

哀しみを含んで七日を餓ゑず(加増曾我)

正本屋九兵衛板、繪入十七行亟本に、「あはれみをふくんで七日をうへず」とあるは意淺い。心に悲哀を感ずること强ければ、胸つまりて七日間も食せないでも腹へらぬとの意。曾我物語・卷二、酒の事の條に、「美酒一度口に含めば七日飯を忘るる德あり」とあるを改作したのである。

きよりくりう　養由が術きよりくりうが神變も、かなふべしとは見えざりけり(百日曾我)

曾我物語・卷八、仁田猪にのる條に、「たとへば養由が術きよりくりうがじんべんも及ぶべしとは見えざりけり」と見え、古活字版・曾我物語には、「養由が術きよりくわう」となつてゐる。百日曾我のこの文は曾我物語に據つたのであるが、「きよりくりう」は如何なる人かどうしても知れぬ。按ずるに十訓抄・可應幾才能藝業事の條にも、「養由が藝をつぎ李廣が跡をつたふる外云云」とあるやうに、養由と李廣とは並び稱される事が多いによつて、李廣のことを云つたものであらう。「養由が術きよ、李廣が神變」といふのであらう。前漢書・李廣傳に、「李廣爲レ人長ニ猨臂一、其善射亦天性、雖ニ子孫一他人學者莫ニ能及一、李廣出獵、見ニ草中石一、以爲レ虎而射レ之、中レ石没レ矢、視レ之石也、他日射レ之、終不レ能レ入矣」。

しえんはりうじゆ云云　少將莞爾と打笑みて、しえんはりう樹の枝に戲れ、禿は梯子の下に唾る(虎が歴)

曾我物語・卷九、十番斬の條に、「紫燕は柳樹の枝に戲れ、白鷺は蓼花の蔭に遊ぶ」とあるを作りかへたのである。

せんだんどうの弓　梅檀籐の弓に征矢取添へ(關八州繫馬)　梅檀籐の弓の眞中取り(五人兄弟)

〔梅檀籐弓〕弓法私書に、「弓のせんだ卷の事。こしらへ樣は下をしげく、卷目五歩間を五歩ばかりおきて絲にて卷て、其上を漆にてぬりこめたるをせんだ卷と申也」と見えてゐる。曾我物語・かはつうたれし條に「せんだん籐の弓の眞中とり」。

ちやうさいわうが害に遭ひしも伴ることを知らでなり(伊豆日記)

この文は曾我物語・賴朝伊東を出で給ふことの條に出てゐる。「ちやうさいわう」は趙遷王のことか。趙遷王は秦の反間に欺かれて秦兵に捕はれ、これより趙國亡びるに至つた。

波にゆらるる沖つ船、しるべの磯はこなたぞと(會稽山)

道に迷へる曾我兄弟を船に譬へ、道案内する者我だとの意を寓したのである。曾我物語・卷九に、「波にゆらるる沖つ船、しるべの山はこなたぞと、いひすててこそ忍びけれ」。

ふくみぐつわ　連着鞦の山吹色なるを懸け、ふくみ轡に紺の手綱を入れてぞ乘つたりける(五人兄弟)

〔含轡〕轡の一種。曾我物語・河津討たれし條に、「れんぢやく鞦の山吹色なるを懸け、ふくみくつわに紺のかた綱を入れてぞ乘つたりける」、とあるに據つたのである。

蛇は一寸にして兆あらはれ、頻伽は卵の中にて其聲諸鳥にすぐる(曾我)

異本曾我物語に、「蛇は一寸を出して其大小を知り、人は一言を以て其賢愚を知る」。太平記卷十八、越前府の軍幷金崎後攻の條に、「頻伽羅は卵の中にありて聲衆鳥に勝れたり」。

川(井筒)
「みかの原」は山城國相樂郡瓶原村をいふ。新古今集・戀部、題知らず、中納言兼輔の歌に、「みかの原湧きて流るるいつみ川、いつみきとてか戀しかるらむ」とあるに據つたのである。この歌は(小倉)百人一首の中にも見えてゐる。

短き蘆の難波潟(女腹切)
新古今集・戀歌二の部、伊勢の歌に、「難波潟短き蘆のふしの間も、逢はでこのよを過してよとや」とあるに據つたのである。

道のべの淸水が店に暫しとて(生玉)
新古今集・夏部、題しらず、西行法師の歌に、「道の邊に淸水流るる柳蔭、しばしとてこそ立とまりつれ」、とあるを取つて「淸水が店」にいひかけたのである。

みやましげやましげくとも、思ひいるには障りなき(本領曾我)
新古今集・卷十一、戀一の部、源重之の歌に、「筑波山はやましげ山しげけれど、思ひいるにはさはらざりけり」。

村雨の露 村雨の露もまだひぬ槇の戸よなう、げに扨は秋の夕に立のぼる霧樣にてましますな(三世相)
むら雨のまだひぬ露もまだひぬよやア霧は(泥鰹)
村雨は驟雨で、一雙つつ強く降過ぎる雨即ちにはか雨をいふ。ここの文は、新古今集・秋部、寂蓮法師の歌に、「むら雨の露もまだひぬまきの葉に、霧立のぼる秋の夕暮」とあるに據つたのである。この歌は小倉百人一首中にも出てゐる。

山寺の春の 山寺の春の夕暮來て見れば(曾根崎)
山里の春の夕を來て見れば入相の鐘荻の聲(碁盤太平記)
山寺や春の夕を來て見れば、入相の鐘に花や散るらむ(用明天皇)
新古今集・春下部、能因法師の歌に、「山寺の春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける」とあるに據つたのである。この歌は謠曲・道成寺に、「山寺のや春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける」となつてゐる。曾根崎心中のここの文は、「初瀨も遠し難波寺云云」をも見よ。

夕立の空さりげなく澄む月に(蛙合戰)
新古今集・卷三、夏歌の部、從三位賴政の歌に、「庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなく澄める月かな」。「さみだれの一しきり云云」をも見よ。

よそにのみ見し白雲の高間山(浦島)
新古今集・卷十一、戀歌一の部に、題しらず、讀人知らずの歌に、「よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山の峯の白雲」。

餘所に見て高間の山 山杜鵑餘所に見て、高間の山をや過ぎぬらん(國性爺後日)
大和國葛上郡葛城山の第一の峯を高間山といふ。新古今集卷十一、戀歌一の部、讀人しらずの歌に、「よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山の峯の白雲」。

夜の涙なそへそほととぎす 器物ふためとだにもみじか夜の、涙な添へそ時鳥(井筒)
この文は、器物蓋に二目をいひかけ、短夜に見じ(見られず)をいひかけ、新古今集・夏歌の部、皇太后宮大夫俊成の、「昔思ふ草の庵の夜の雨に、涙な添へそ山ほととぎす」、の歌句に據つたのである。

世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと言捨の言の葉(西王母)
新古今集・羈旅の部、遊女妙の歌に、「世を厭ふ人とし聞けばかりの宿に、心とむなと思ふばかりぞ」と見えてゐる。この歌は西行法師の歌の、「世の中を厭ふまでこそかたからめ、かりのやどりを惜む君かな」の返歌である。一首の意は、世を厭ひ給ふ人と聞及ぶからには、かやうの所に宿つて心をとめ給はれるもあぢきないことと思うて、宿を貸し申さぬまでであつて、宿を惜むのではありませぬの意。

千載集に據れるもの

あらはれ渡る 無筆といひしそら言も、あらはれ渡るあじろ木や、うぢうぢとして隱しかれ(碁盤太平記)
あらはれ渡る川霧や、宇治の網代に寄る氷魚の(文武五人男)
千載集・冬、權中納言定賴の歌に、「朝ぼらけ宇治の川霧絶え絶えに、あらはれ渡る瀨瀨の網代木」とある語句を用ひたのである。この歌は小倉百人一首にも出てゐる。

うき世の民に覆ふかな 始終菩提の道にもあらず、うき世の民におほふかな、おほへど漏るる竹の笠(最明寺殿)
天下萬民が安全であるやうにと、法師の身として祈り居るを、竹の笠もて覆ひ慈むにかけて云うたのである。千載集・雜部に前大僧正慈圓の歌に、「おほけなくうき世の民におほふかな、わがたつ杣に墨染の袖」。この歌は小倉百首中にも出てゐる。

宇治の川霧絶え絶えに、あらはれ渡る網代木の(泥鰹)
「たえだえ」はきれぎれ。「あじろ木」とは、川瀨に數多の竹木を編んで列ね、網に代へて魚を捕るものである。宇治川は冬日氷魚を捕るに有名である。千載集・冬の部、宇治にまかりて侍りける時よめる、權中納言定賴、「あさぼらけ宇治の川霧たえだえに、あらはれ渡る瀨瀨のあじろ木」。この歌は(小倉)百人一首にも出てゐる。

笠置山ゆるぎの森も近ければ、いかで笠置の寢はやすく寢る夜なくとも(持統天皇)
千載集・釋教歌の部、登蓮法師の笠置の岩屋

「是ぞ此霓裳一曲の聲の中に漁陽の鞞鼓地を動かして來り、烽火萬里の詐りの後に戎翟の旌旗天を掠めて到りけん」。

*ごうん　痛はしや、子を思ふ恩愛九輪の川波に生死五蘊の泡消えず(賀古教信)　いで空海が四大五蘊の結縁して得さすべし(嵯峨天皇)　五蘊假に形を成し、四大今空に歸す、首を將つて白刃に當て、截斷す一陣の風(用文章)

〔五蘊〕蘊は蘊集の義。各人個體の屬性を蘊集分類すれば色・受・想・行・識となる、これを五蘊と云ふ。祖庭事苑に、「變礙曰レ色、領納曰レ受、取像曰レ想、造作曰レ行、了知曰レ識、亦名二五蘊一、蘊以二積聚一爲レ義、陰以レ言二其覆蔽一也」。五蘊假に集合して形體を成すものなれば、これを五蘊假成レ形とも五蘊假和合とも云ふ。本朝用文章のこの文は、色・受・想・行・識の五蘊假に集合して形體を成し、地・水・火・風の四大の原素結合して一身を成せども、今や本來の空に歸する、首を差出して白刃に當て、截斷されること風一しきり颯と吹く程の我身と觀じるとの意。太平記・卷二、阿新殿の事の條に、資朝卿辭世の頌を載せて、「五蘊假成レ形、四大今歸レ空、將レ首當二白刃一、截斷一陣風」。

子を見る事父に如かず(嫗山姥)(鎌田)　左傳に、「擇レ子莫レ如レ父、擇レ臣莫レ如レ君」。管子に、「知レ子莫レ若レ父、知レ臣莫レ若レ君」。太平記・卷十、三浦大多和合戰意見の條に、「子を見ること父に如かず」。

さほいうひつ　左輔右弼の旗を立て(唐船噺)　干戈戚揚相挾み、左輔右弼列を引く、行幸は昨日の昔にて(國性爺)

〔左輔右弼〕「さふいうひつ」ともいふ。輔弼の臣を左右に分ち、左方を左輔、右方を右弼といふ。太平記卷十一、還幸の條に、「干戈戚揚相挾み、左輔右弼列を引き、六軍次を守り」。

*すゐじやくわくわう　垂跡和光の方便にや、名所名所宮立まで現はれ動き見えければ(反魂香)　佛法擁護の本地の月、垂跡和光の影清く、再び朝廷あきらかに四海を照させ給へやと、丹誠無二の御祈、神慮も暗に計られて(女楠)

〔垂跡和光〕「垂跡」は足迹を垂れる義、即ち佛菩薩が衆生利益の爲に其本體本地より娑婆に化現し給ふを云ふ。「和光」とは、佛菩薩が其本體本地の光を和らげて娑婆に應同し給ふを云ふ、即ち垂跡のことである。太平記・卷五、大塔宮熊野落の條に、「垂跡和光の月明に分段同居の闇を照し、逆臣忽に滅びて朝廷再び耀くことを得しめ給へ、……丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に計られたり」。

せいげつ　二十二歳一睡の夢を拂つて、せいげつ己が眉間に施し、今月今日髮剃の刃に滅し畢んぬ(卯月潤色)　見上ぐれば萬仭のせいげつ鎬を削り、見下せば千丈の碧潭藍に染みたり(酒呑童子枕言葉)

〔清月〕曇りなき利刀を清月の青白い光に喩へて云うたのであつて、なほ秋水と云ふが如きである。酒呑童子枕言葉のここの文は、太平記・卷五、大塔宮熊野落の條に、「見上ぐれば萬仭の青壁刀に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり」、とあるに據つたものである。蓋し利刀を清月といふことは巣林子の造語であらう。遊仙窟に、「高嶺橫レ天、刀削崗巒之勢、……向上則有二青壁萬尋一、直下則有二碧潭千仭一」。

小敵を見ては畏ると云へり(弘徽殿)　太平記・卷六、楠天王寺に出張の條に、「されば大敵を見ては欺き、小勢を見ては畏れよと申すこと是なり」。

せんさんごをくだく一兩曲　手を盡し給へばせんさんごをくだく一兩曲、氷玉盤に落ちて千萬聲(源義經)

〔纖碎珊瑚一兩曲〕音樂の一兩曲恰も珊瑚を纖碎する響のそれに似て、妙音を極むとの意である。太平記・卷十八、春宮還御の事附一宮御息所の事の條に、「年の程二八ばかりなる女房のいふばかりなくあてやかなるが、秋の別れを慕ふ琵琶を彈ずるにてぞありける、纖珊瑚を碎く一兩曲、氷玉盤に落ちて千萬聲、かきならしたる其聲は庭の落葉に紛れつつ」。白氏文集・第三卷、五絃彈の詩中の句に、「鐵擊二珊瑚一一兩曲、水瀉二玉盤一千萬聲」」とある。これを太平記に語を換へて用ひ、そして巣林子はその太平記の文に據つたのである。

千仭の碧潭藍に染み(文武五人男)　仭は「ひろ」とも訓み、曲尺六尺ばかりである。太平記・卷五、大塔宮熊野落の條に、「直下せば千丈の碧潭藍に染めり」。遊仙窟に、「向上則有二青壁萬尋一、直下則有二碧潭千仭一」。

栴檀の林に入る者は染めざるにその衣香しと云へり(千疋犬)

「栴檀」はその條を見よ。このあたりの文は總て太平記・卷十、安道入道自害の條にある文に據つたのである、併せて見よ。

抑　最期の一念によつて善惡の生を引くといへり、九界の間に何か御邊の願なると問ひければ(女楠)　太平記卷十六に出てゐる文である。「九界」を見よ。

千劍破の城の寄手は前の勢八十萬騎に、赤坂吉野の勢馳せ加はつて百萬騎に餘りければ、……、楯の板を微塵に打碎いて、漂ふ所を差詰め差詰め射ける間、手負ひ死人一日が中に五六千人に及びけり(國性爺後日)　太平記卷七、千劍破城軍の條にある文と大同小異である。

東魚來つて四海を呑み、西鳥來つて東魚を食ひ、海内既に一に歸し(女楠)　太平記・卷六、正成天王寺未來記披見の條に、大權聖者の未來記の文を記して、「當二人王九十五代一、天下一亂而主不レ安、此時東魚來呑二四海一、日沒二西天一、百七十餘箇日、西鳥來食二東魚一、其後海內歸レ一、云云」とありて、「東魚來りて呑二四海一」とは、逆臣相模入道の一類な

松浦潟領巾麾山の石よりも積る思ひはなほ重き（嫗山姥）

「まつらさよひめが石となり」を見よ。

まつらさよひめが石となり（天神記）

かの松浦さよ姫は夫を焦れて石となる（西王母）

松浦佐用姫が夫の大伴佐提比古と別れるを嘆き、高嶺に登り離去の船を望んで領巾を脱いで麾いた。「ひれふるやま」を見よ。これを夫を慕うて石となつたといふ望夫山の故事（「ばうふざん」を見よ）と混同して、松浦佐用姫が石となつたとしたもので、曾我物語・巻四に佐用姫が石となつたことが見えてゐるから、その頃既に望夫石の故事と混同してゐる。東海道名所記（萬治元年成）虎が石のことを記せる條に、「もろこしの望夫石、我朝には大伴の佐手彦が妻松浦狹夜姫も領巾振山の石となれり」

むしの罪障を消滅す（用明天皇）

曾我物語・巻八、箱根にて暇乞の條に「無始の罪障消滅すと覺えたり」。「むし」を見よ。

樂天が三つ頭、王良が祕密の鞭（百日曾我）

曾我物語・巻八に「樂天が傳へし三頭、王良が祕めし手綱」とあるに據つたのである。「樂天は伯樂の誤であらう。伯樂はハクラウともいひ、もと星の名。石氏星經に「伯樂天星名、主レ典二天馬一」。古昔孫陽といふ人能く馬を相したので、人稱して伯樂というた。轉じて馬のことに明かな人をいふ。「三つ頭」はさんづであらう。その條を見よ。王良は孟子に見えて、馬を御する名人。「わうりやう」を見よ。

れんぢやくしりがい 梨地にまきたる白覆輪の鞍、連着鞦の山吹色なるを懸け（五人兄弟）

〔連着鞦〕總をいくつもならべ連ねた鞦。「しりがい」は「しりがき」（尻懸）の音便、馬の尾から鞍へかける組緒をいふ。貞丈雜記・馬具之部に、「れんぢやく鞦と云ふは大ぶさ小ぶさの總名なり、……連着の二字をれんぢやくと讀みて總をいくつもならべつらねて着くるなり、此連着に大ぶさ小ぶさの兩品あり、大ぶさを厚ぶさとも云ふなり、螃抄に曰く古鞦小さく總短し、近代鞦甚だ大く總長し云云、然らば上古は小總にて、其後大總は出來たる物なり」。曾我物語に、「梨地にまきたる白覆輪の鞍に、れんぢやく鞦の山吹色なるをかけ云云」。

太平記に據れるもの

雨をふくめる孤村の樹 雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ（女楠）

この文、太平記・巻五、大塔宮熊野落の條下に出てゐる。三體詩・唐盧綸の與二從弟一同下第出レ關の詩句に、「孤村樹色昏二殘雨一、遠寺鐘聲帶二夕陽一」。

一念無量劫繫念無量罪 修行者横手を打つて、一念無量劫繫念無量罪疑ひなく候よ（樂靜）

一念の妄想を浮べても何億萬無量の年に亘つてその報を受けるべく、情念の繫着は無量の罪報を受ける因となるので、妄想怨恨の執着恐るべきをいふ。太平記・巻十一、越前牛原地頭自害の條に、「陽生則忘とは申しながら、また一念五百生繫念無量劫の業なれば、奈利八萬の底までも同じ思の炎となつて」。

きしん 討手向はゞ一命を養由が矢先にかけ、義を紀信が忠烈にくらべ攻め戰ひ（女楠）

〔紀信〕西漢の高祖劉邦の臣である、滎陽の戰に高祖の身代りとなり、項羽の爲に燒殺された。史記・高祖本紀に、「前漢紀信爲二將軍一、項羽圍二漢王於滎陽一、信曰事急矣、臣請誑レ楚可二以間出一、信乃乘二王車一、黃屋左纛、曰、食盡漢王降レ楚、楚皆呼二萬歲一、之二城東一觀、以レ故漢王得下與二數十騎一出二西門一遁上、羽見レ信問二漢王安在一、曰、已出去矣、羽燒二殺信一」。太平記・巻十六、正成兵庫に下向の條に、「敵寄せ來らば命を養由が矢先にかけ、義を紀信が忠に比すべし」。

漁陽の鼙鼓地を動かし（千疋犬）

「霓裳羽衣の一曲に云云」を見よ。

くわうき 今須くくわうきを護るべしと、宣ふ息は金色に南無天滿大自在天神と九字の文字に顯はれ（天神記）

〔皇基〕皇室の基礎。ここの文は、太平記・巻十二、大内裏造營附聖廟の御事の條に、「昨爲二北闕蒙レ悲士一、今作二西都雪レ恥尸一、生恨死歡其我奈、今須三望足護二皇基一」とある詩句を和譯したのである。

くわけんきやうしや 華軒香車の外を出でさせ給はぬも、いつしか馴れぬ單皮脚半（女都）

〔華軒香車〕「軒」は左傳・閔公二年の條に、「鶴有二乘レ軒者一」とありて註に、「軒、大夫車」とある。「華軒」も「香車」も華美な車のこと。太平記・巻五、大塔宮熊野落の條に、「華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば」。

霓裳羽衣の一曲に漁陽の鼙鼓地を動かし、烽火萬里の詐りの後に戎翟の旌旗天を掠む（千疋犬）

「霓裳羽衣の曲」は、玄宗皇帝或夜夢心地に天上月宮殿に遊び、天人の音樂を聽き、これに擬して作つた曲であるといふ。「漁陽」は唐の天寶十四年安祿山反して兵を擧げた地である。「鼙鼓」は攻め太鼓。唐の玄宗皇帝が寵姫楊貴妃と共に霓裳羽衣の一曲を奏して樂しんでゐた時、突如として漁陽に安祿山反して兵を擧げ、その攻太鼓の音は地も震動する程で大亂に及んだ。また周の幽王の寵姫褒似は笑ふことを好まないので、幽王これを笑はせようとして故なく烽火を擧げた、諸侯は事變の起つたことと思うて悉く至つたが何事も起つてゐない、褒似大いに笑つた、後に申侯が犬戎を率ゐ大擧して幽王を攻む、王烽火を擧げて兵を徵したけれども、諸侯は以前の詐りに懲りて至らなかつた爲に、犬戎遂に王を驪山下に弑した。太平記・巻十・鎌倉合戰の條に、

徒然草に據れるもの

愛着の道その根深く源遠し、六塵の樂欲多しといへども、ただこの惑ぞやめ難き、才能は煩惱の增長、學んで知るは智にあらず、可不可は一條なり(兼好)

吾人がねがひ思ふ六塵は、心の持ちやうによつては皆いとひはなれる事ができれども、かはゆいと思込んだ執念は、恰も木の根の深く土中にさし入り、水の源遠くして流れのつきぬが如く、遂に斷念することができぬ。才能とても煩惱の增長したものである、學んで後に知るは眞の智ではない、可といひ不可といふとも畢竟ただ一つで、善惡不二である。「愛着」「六塵」「樂欲」「煩惱」は、その條について見よ。

ここの文は、兼好撰の徒然草第九段に、「愛着の道その根深く源遠し。六塵の樂欲多しといへども皆厭離しつべし、その中にただかの惑の一つ止め難きのみぞ、老いたるも若きも智あるも愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる」。第三十八段に、「才能は煩惱の增長せるなり。傳へて聞き學びて知るは誠の智にあらず。如何なるをか智といふべき。可不可は一條なり」とあるを引用したのである。

あかざのあつもの・かみふすま(卯月潤色)(女夫池)

〔藜羹・紙衾〕藜といふ草の吸物、紙で作った夜具であつて、世捨人の極めて質素な衣食なるをいうたのである。第五十八段に、「紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけあかざのあつもの、いくばくか人の費えをなさむ」。

あしだの笛に寄來る寄來る鹿も寄來る(賀古教信)

第九段に、「女のはける足駄にてつくれる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞいひ傳へ侍る」。

あだし野の露消ゆる時なく鳥邊山の煙立去らで(兼好)

第七段に、「あだし野の露消ゆる時なく、鳥邊山の煙立去らでのみ住みはつるならひならば」。

蟻の如くに集りて何事をか營む、昨日は嘆き今日は笑み、朝に怒り夕に哀しみ、實につながれ名にからまれ、露の命を危ぶむ(兼好)

第七十四段に、「蟻の如くに集りて……營む所何事ぞや、……名利におぼれて、先途の近き事を顧みねばなり」。

蟻のすさみの浮世のさま(西王母)

第七十四段に、「蟻の如くに集りて、東西にいそぎ南北に走る、高きあり賤しきあり、老いたるあり若きあり、行く處あり歸る家あり、夕にいねて朝に起く、營む所何事ぞや、生を貪り利を求めてやむ時なし」とあるによりて、義自ら明かである。

命長ければ恥多し(女楠)

命長きは恥多し(扇八景)

第七段に、「命長ければ恥多し」、莊子・天地篇に、「壽則多レ辱」。

言はねば腹ふくるるわざ(兼好)

思うたこと言はずにゐると氣詰りがしたやうに、腹がふくれるわざであるとの意。ここの文は第十九段に、「いひつづくれば皆源氏物語枕草紙などにことふりにたれど、同じことまた今更に言はじとにもあらず、おぼしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば」、とあるに據つたのである。

牛の角文字 牛の角文字急げば急ぐさせいほう精出せば(振袖始)

「い」の假字をいふ、牛の角の對立せるに似てゐるからである。ここの文は「急げ」の「い」にかかる序に用ゐたのである。第六十二段に、「延政門院いときなくおはしましける時、院へまゐる人にことづてとて申させ給ひける御歌、ふたつもじ牛のつのもじすぐなもじ、ゆがみもじとぞ君はおぼゆる、こひしく思ひまゐらせ給ふとなり」とありて、崇命院抄に、「牛の角文字。い」と見えてゐる。

牛若君の角文字に、ともじしもじもことわりや

「つのもじ」を見よ。

お梅に通を失ひし久米が心ぞあはれなる(萬年草)

高野山・吉祥院の寺小姓成田久米之助が、神谷の宿・雜貨屋興六右衛門の娘お梅と密通してゐるのが露見して、山を放逐されるを、同じ名の久米の仙人が物洗ふ女の脛の白いのを空から見て、忽ち心迷うて通力を失ひ墜落したのをかけていうたのである。「久米の山遊の仙人云云」をも見よ。

愚に描き人も時に遇ひぬれば、高き司位に登るとは、古人の傳へし詞とかや(今川了俊)

第三十八段に、「おろかに描き人も家に生れ時に遇へば、高位にのぼりおごりをきはむるもあり」。

重ね文字・牛の角文字・すぐな文字(千疋犬)

重ね文字は「こ」、牛の角文字は「い」、すぐな文字は「し」であつて、即ち「こひし」(戀)の意である。「ふたつもじ牛の角もじすぐなもじ」をも見よ。

雁鳴きて萩の下葉も色づきて、わさ田刈りほすなんどこそ、野分のあしたをかしけれ(兼好)

「わさ田」「のわき」はその條を見よ。徒然草・第十九段に、「雁鳴きてくる頃萩の下葉色づくほど、わさ田刈乾すなど、とりあつめたる事は秋のみぞおほかる、又野分のあしたこそをかしけれ」。

疵なき玉の巵 男の藝に一つでも、疵なき玉の巵の、酒もよい酒(歌念佛)

第三段に、「萬にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうざうしく、玉の巵の底なき心地ぞすべき」とあるによりて、酒はよい物のあはれを知つて缺點なき男に譬ふ。

ろべし、西鳥食東魚」とあるは、關東を滅す人あるべし云云」と見えてゐる。

***虎の尾を踏む** 善惡千里の虎の尾を踏む心地して顏隱し(賀古教信)

「氷を踏み御尾を見云云」を見よ。ここの文は、惡事千里といふ故語を善惡千里にいひ、その千里を千里の虎につづけたのである。

にたにたしき首どもをまさしげにもかけたりと落書を立てられ(女楠)

「にた」は「似た」に「新田」(新田義貞)をいひかけ、「まさしげ」は「正しげ」(まことしげ)に「正成」(楠正成)をいひかけた洒落である。太平記・卷十五、將軍都落の事の條に、律僧等が京勢の者どもを欺いて、新田義貞、楠正成等の討死した尸骸を尋ね求める由を語つたので、京勢どもがこれを眞と思うて、新田や楠に似た首を曝したから、或者が其曝首の札の側に、「これはにた首なり、まさしげにも書きける虛事かな」と、秀句をして書き添へて見せたことが見えてゐる。

烽火萬里の詐の後に……(千正犬)

「寵愛羽衣の一曲に……」を見よ。

ほんかうじやくげ ほんかうじやくげの秋の月照さずといふ處なく(百合若)

〔本高迹下〕本地は高けれども權に下位のものに身を現ずるをいふ。太平記・卷三十六に、「和光同塵の跡を垂れしより以來、本高迹下の秋の月照さずといふ處もなく、化俗結緣の春の花……」。「わくわうどうぢん」をも見よ。

まうしやう まうしやう・せいしも面を恥ぢ、かうじゆせいきん袂を翳す(伊豆日記)

〔毛嬙〕支那上代に居た美女である。莊子に、「毛嬙麗姫、人之所美也云云」。太平記・卷一、立后の事附三位殿御局の條に、「毛嬙西施も面を恥ぢ、絳樹青琴も鏡を掩ふ程なれば」。

見上ぐれば萬仞のせいげつ鍔を削り、見下ぜば千丈の碧潭藍に染みたり(酒呑童子枕言葉)

「せいげつ」はその條を見よ。太平記・卷五、大塔宮熊野落の條に、「見上ぐれば萬仞の青壁刀に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり」。遊仙窟に、「向上則有二青壁萬尋一、直下則有二碧潭千仭一」。

***みけんじやく** 眉間尺が古は首に留まる念力の仇を報じて其譽れ(大織冠) 昔干將莫耶夫婦の鍛冶勅諚の劍を惜み、一子眉間尺が取つて深山に隱れしを探出し、親子が首切つて熱湯に投じ、煮れども焚けども七日七夜爛れず盪けず怒るが如く、鉾を帝に吐きかけ仇を報ぜし形をうつし、女童の言の葉まで巴の紋の濫觴と末代長き譽を殘す(唐船噺)

〔眉間尺〕干將の子、眉間一尺あつたのでこの名がある。干將が楚王に殺されたので、眉間尺父の仇を報じようとして死し、その口に含んだ劍楚王の首を斬落したといふ。太平記に、「客・眉間尺が首を取りて則ち楚王に獻る、楚王大いに喜びてこれを獄門に懸けられたるに、三月まで其頭爛れず、……是を鼎の中に入れ七日七夜までぞ煮られける、……楚王自ら鼎の蓋をあけさせてこれを見給ひける時、此頭口に含みたる劍の鋒を楚王にはつと吹き懸け奉る、劍の鋒誤らず楚王の頭の骨を切りければ、楚王の頭忽に落ちて鼎の中へ入りにけり」。

***やういう** 討手向はば一命を養由が矢先にかけ、義を紀信が忠烈にくらべ攻め戰ひ(女楠) 養由が矢に啼く猴も親子の思ひ焦るる火繩(三國志)

〔養由〕上古支那にて弓射る術に妙を得た人である。淮南子に、「養由基・楚將善射、去二楊葉一百步射レ之百發百中」。吉野都女楠のこのあたりの文は、太平記・正成下二向兵庫一事の條に見えてゐる。

夕を送る遠寺の鐘(女楠)

「雨をふくめる孤村の樹」を見よ。

夢は如夢幻泡影とて定め難き物にてあり、某が心體をも御存知なく、夢に任せて大事の國を預けんとは近頃粗相千萬なり。夢に任せて國を治め給はば、若し某を引出して討つて捨てよとの夢を御覽ぜば、科なき五郎をせられんか、エエ事可笑し頼もしからず(今川了俊)

太平記卷三十五、青砥左衞門が事の條に、青砥左衞門の言葉に、「物の定相なき喩にも如夢幻泡影如露亦如電とこそ金剛經にも說かれて候へ、若し某が首を刎ねよといふ夢を御覽ぜられ候はば、科なくとも夢の如く行はれ候はんずるか、云云」。「如夢幻泡影」はその條を見よ。

りやうゑん 御いたはしや先帝は梁園の昔の御遊、くわけんきやうしやの外を出でさせ給はぬも(女楠)

〔梁園〕梁の孝王が宮室苑囿の遊を好んだ故事によつて宮室苑囿をいふ。杜甫の寄二李白一詩に、「醉舞梁園夜、行歌泗水春」。ここの文は太平記・卷十八、先帝芳野へ潛幸の條に、「梁園の昔の御遊に御涙を催さる」とあるに據つたのである。

***わくわうどうぢん** かかる靈地に垂跡し和光同塵ましまして、ほんかうじやくげの秋の月照さずといふ處なく、化俗結緣の春の花匂はぬといふ袖もなし(百合若)

〔和光同塵〕佛菩薩が人間界を超越せる威徳の光を和げて、世俗の塵埃に同じ種種の身に示現するをいふ。止觀・六之二に、「和光同塵結緣之始、八相成道以論二其終一」。ここの文は太平記・卷三十六、太神宮御託宣の條に、「我本覺眞如の都を出で和光同塵の跡を垂れしより以來、本高迹下の秋の月照さずといふ處もなく、化俗結緣の春の花薫せずといふ袖もなし」とあるに據つたものである。「げぞくけちえん」「ほんかうじやくげ」はその條を見よ。

――(•)――

(備考)

巢林子が太平記から脚色して取入れたものでけ、吉野都女楠などはその主なものである。

習よ（兼好）

退屈なのにまかせて終日硯に對して、それからそれと思ひ浮んで來るたわいもない感想を書くことよの意。徒然草の冒頭に、「つれづれなる儘に日ぐらし硯にむかひて、心に移行くよしなしごとをそこはかとなく書付くれば」。

友とするに惡しき友七つ、善き友三つあり、一つには物くるる友、二つには醫師、智ある友こそ益者なれ（兼好）

第百十七段に、「友とするにわろき者七あり、……善き友三あり、一には物くるる友、二には醫師、三には智惠ある友」。

夏の蟬春秋を知らぬ（百日曾我）

（丹波與作）

第七段に、「夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし」。莊子に、「蟪蛄不レ知二春秋一」。

＊のわき　野分のあしたこそをかしけれ（兼好）

「野分」野を吹分ける義。秋の末頃（二百十日頃）に荒れる暴風をいふ。第十九段に、「また野分のあしたこそをかしけれ」。

花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは、雨にむかひて月を戀ひ、垂れ籠めて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し、咲きぬべき程の梢、散り萎れたる庭なんどこそ見どころ多けれ、男女の情もひとへに相見るをばいふものかは、逢はでやみにし憂さを思ひ、

あだなる契をかこち、淺茅が宿に昔しのぶ（兼好）

この文は第百三十七段にある文であつて、物は總て始め終りこそをかしいもので、その十分な時よりも、却つてこれを待つのと、これを思出にしてしのぶのと、その二つの上にあはれは更に深いといふ兼好法師の趣味論である。

春秋知らぬ夏の蟬（弘徽殿）

「夏の蟬春秋を知っぬ」を見よ。

美人と呼ばるる女の履ける云云

「女の履けるあしだ云云」を見よ。

百丈の木に登つて一丈の枝より落つるとはここの事（碁盤太平記）

第百九段に、「高名の木のぼりといひし男、人を掟てて高き木にのぼせて梢を切らせしに、いとあやふく見えし程に言ふことも無くて、下るる時に軒だけばかりになりて、あやまちすな心して下りよと言葉を掛け侍りしを、かばかりになりては飛下るとも下りなむ、いかにかくはいふぞと申し侍りしかば、その事に候、目くるめき枝あやふき程は己れが恐れ侍れば申さず、過ちは易き所になりて必ず仕ることに候といふ」、とある文に據つた改作である。

笛による鹿・妻戀ふ鹿（戀物揃）

第九段にも、「女のはけるあしだにてつくれる笛には、秋の鹿必ずよるとぞいひ傳へ侍る」と見えてゐる。葉林子作・心中二枚繪草紙上巻に、「笛に誘はれ妻戀ふる牡鹿のその法の導きこれなりや」とも書いてある。「をじかのその」をも見よ。

ふげんざう　櫻結びの花かつら、繫ぎ留めん普賢象（賀古教信）

「普賢象」櫻の一種で、花白く大なるもの。俳諧歲時記栞草に、「普賢象櫻。和訓鼻と花と音同じ、花の白くしてかつ大なるもの、菩薩の乘る所の白象の如し云云」。ここの文にある「繫き留めん」は「象」にかかる文句で、第九段に、「女のかみすぢをよれる綱には大象もよくつながれ」とあるに據つたのである。

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじ（川中島）

「二つ文字」は「こ」、「牛の角文字」は「い」、「すぐな文字は「し」。「こい（「ひ」の假名違）し」（戀）の義。第六十二段に、「ふたつもじ牛の角文字すぐなもじゆがみ文字とぞ君はおぼゆる、こひしく思ひ參らせ給ふとなり」。

豕でも鹿でも一疋生取り、髷菊が髮筋にて繫いで見たし（會稽山）

第九段に、「されば女の髮筋をよれる綱には大象もよくつながれ」、とあるに據つた着想である。

佛といつぱ何者が佛にはなる、サア何が佛になるやらん、愚の仰候や、佛に別の種はなし、佛の敎に隨ひて人が佛になるぞとよ、佛の敎によるならば敎へし佛は何故に佛にはなり給ひしぞ、それこそはその先の佛の敎へ候、さてその先の佛は、又その先の佛の敎、又その先の先の敎へはじめし第一の師の佛とはいかにいかに、ハアア天より降つたか地より湧いたか（兼好）

第二百四十三段に、「八になりし年父に問ひて曰く、佛は如何なるものにか候らんといふ、父が曰く佛には人がなりたるなりと、又問ふ人は何として佛にはなり候やらむと、父また佛の敎によりてなるなりと答ふ、又問ふ敎へ候ひける佛をば何が敎へ候ひけると、又答ふそれも又さきの佛の敎によりてなり給ふなりと、又問ふその敎へはじめ候ひける第一の佛はいかなる佛にか候ひけるといふ時、父空よりや降りけん土よりや湧きけんといひて笑ふ」。

ほとほと叩く水鷄の鳥、六月祓またをかし（兼好）

「六月祓」とは六月晦日に行はれる大祓をいふ。十九段に、「水鷄のたたくなど心細からぬかは、……六月祓またをかし」。

學んで知るは智にあらず（小栗判官）

第三十八段に、「傳へて聞き學びて知るは誠の智にあらず」。

無常の急に來ること瀧の水よりなほ速し。すは其時に至つて老いたる親・いとしき子・君の恩・妻のなさけ、棄て難しとていかがせん、萬事は皆非なり言ふに足らず願ふに足らず（兼好）

第五十九段に、「無常の來ることは水火の責むるよりも速に逃れ難きものを、その時老いたる親・いときなき子・君の恩・人の情、棄て難しとて棄てざらんや」。第三十八段に、「萬事

男はいとさうざうしく、玉の巵の當なき心地ぞする」、とあるに據つてかくいうたのである。

吉凶は人に由つて日によらず（國性爺）

第九十一段に、「吉日に凶をなすに必ず凶なり、悪日に善を行ふに必ず吉なりといへり、吉凶は人によりて日によらず」。事文類聚に、「吉凶由レ人、焉繫二時日一」。漢書敍傳に、「窮達有レ命、吉凶由レ人」。

久米の山邊の仙人だにも、袖のぬれぎぬ洗ひし女、雪の肌のかの白妙を裾のひまびまほの見そめつつ、雲の通ひ路通力失せて（天智天皇）

第八段に、「久米の仙人のもの洗ふ女の脛の白きを見て通を失ひけんは、まことに手足はだへなどのきよらに肥えあぶらづきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし」。

黑髪のめでたからんこそ女はめやすかるべけれ（槍權三）

「めやすかる」は目易くあるにて、見苦しからぬをいふ。第九段に、「女は髪のめでたからんこそ、人のめだつべかめれ」。

君子あれば仁義あり、家あれば鼠あり（兼好）

第九十七段に、「其物につきて其物を費しそこなふ物かずを知らずあり、身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり」。

金は山に捨て玉は淵になぐべし（井筒）

第三十八段に、「金は山に捨て玉は淵になぐべし、利にまどふはすぐれて愚かなる人なり」。莊子・天地篇に、「藏二金於山一、藏二珠於淵一、不レ利二貨財一、不レ近二富貴一」。

才能は煩惱の增長、學んで知るは智にあらず、可不可は一條なり（兼好）

第三十八段に、「才智は煩惱の增長せるなり、傳へ聞き學びて知るはまことの智にあらず、いかなるをか智といふべき、可不可は一條なり」。「愛著の道云云」を見よ。

作文和歌管絃の道好色にいきかたの、手なんど拙からず走り書、聲をかしくて拍子とり、いたましうするものから下戸ならぬこそ女子はよけれ（兼好）

「作文」は詩賦を作ること。「管絃」は絲竹の音樂。「いたましうするものから」は、いたみ入るやうに辭退するものの。「下戸」は酒を嗜まぬ者。第一段に、「ありたき事はまことしき文の道、作文和歌管絃の道、また有職に公事のかた、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ、手など拙からず走りがき、聲をかくして拍子とり、いたましうするものから下戸ならぬこそ男子はよけれ」。

去る者は日日に疎し 忘れうとは思はねど去る者は日日に疎し、月日の經つも名殘あり（聖德太子）

第三十段に、「年月へてもつゆ忘るるにはあらねど、去る者は日日に疎しといへることなれば」。文選・卷二十九・古詩に、「去者日已疎、來者日已親」。

***しひしば** 今身の上に引替へて、乾かぬ袖は椎柴の、小柴掃部勝重は（大磯虎）

〔椎柴〕椎樹を云ふ。柴は楢柴などいふ類で雜木の義。ここの文は、椎柴の葉はぬれてゐるやうなつやがあるによつて、「乾かぬ」の縁より椎柴をいひ、同類語小柴にいひつづけて文飾としたのである。第百三十七段に、「椎柴白樫などの濡れたるやうなる葉のうへに」。

盛親僧都の芋頭（兼好）

第六十段に、眞乘院に盛親僧都と云ふ僧が居つて、好んで多く芋頭を食うたことが見えてゐる。

食は人の天 食は人の天なれば、下人下女の掘ゆるにも、膳に向へば禮儀あり（川中島）

食は人の命をつなぐものである故にいふ。第百二十二段に、「食は人の天なり、よく味を調へ知れる人大なる德とすべし」。書經・帝範に、「夫食爲二人天一、農爲二政本一」。

大事を思立つ者が小事に拘る事勿れ（碁盤太平記）

第五十九段に、「大事を思ひたらん人は、さりがたき心にかからん事のほいをとげずして、さながら捨つべきなり」。

***多能は君子の耻づる所**（本領曾我）

第百二十二段に、「多能は君子の恥づる所なり」。論語・子罕篇に、「君子多乎哉、不レ多也」。

たまのさかづき 茶の湯盤上打囃子男の藝に一つでも、瑕なき玉の盃の、酒もよい酒（歌念佛） 注げども雫さへ湛らぬ玉の盃の、底の抜けたる如くなり（松風）

〔玉盃〕玉でこしらへた盃、以て何不足なき好い男に喩ふ。第三段に、「よろづにいみじくとも色好まざらむ男はいとさうざうしく、玉の盃の底無きここちぞすべき」。文選・三都府序に、「夫玉巵無レ當、雖レ寶非レ用」。

***つちおほね** 只今の働きは畠に生へた土大根の精靈大根の者（兼好）

〔土大根〕今いふ大根のことである。第六十八段に、「筑紫に某の押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根をよろづにいみじき藥とて、朝毎に二つづつ燒きて食ひけること年久しくなりぬ。或時館の中に人も無かりける隙をはかりて、敵襲ひ來りて圍み攻めけるに、館の中に兵二人出で來て命を惜まず戰ひて皆追返してけり、いと不思議におぼえて、日頃ここにものし給ふとも見えぬ人人の、かく戰し給ふは如何なる人ぞといひければ、年ごろ頼みて朝な朝なめしつる土大根に候といひて失せにけり、深く信をいたしぬればかかる德もありけるにこそ」、とあるに據つたのである。

罪なくして配所の月を見んといふ古人（壽門松）（兼好）

都離れた閑寂な侘しい流罪地に罪を得て流されたのでは物思ひのみ增すことであるが、罪なき自由の身で配所の月を眺めるのは物のあはれも深いことであらうと言うた昔の人。第五段に、「顯基中納言のいひけん、配所の月罪なくて見むこと、さもおぼえぬべし」。

徒然なるままに日ぐらし硯にむかひて、心に移行くよしなしごとの手

蜘蛛のふるまひかねてしるしも」となつてゐる。

百姓と書きて天が下の御寶と日本紀には讀ませたり(今川了俊)

日本紀に百姓を「あめのしたのおほんたから」と訓ぜることここにいへる通りである。日本三代實錄卷一(天安二年九月七日の條)に、「率土黔黎」と書いて「あめのしたおほんたから」と訓んである。貞丈雜記・卷二、人品之部に、「百姓と云ふはあまねく天下の諸人をさして云ふ也、今は農民の事ばかりを百姓と云ふ事になりたり」。

八雲立つ出雲八重垣妻籠に、八重垣つくる其八重垣を、これこそ三十一文字の歌の始めや(振袖始)

素盞嗚尊が稲田姫と住み給はうとして宮造りし給はれたところ、雲のそこから立昇つたのでこの歌を詠まれたといふ。この歌は日本書紀卷一に見えてゐる。古今集序文にも謠曲・大蛇にもこの歌を和歌の始めとしてある。源氏烏帽子折(巣林子作)に、「此方は素盞嗚の及びなき、八雲立つとの御歌は、大きに和らぐ日の本の和歌のはじめの御神にて」とも書いてゐる。

やへがきつくる 素盞嗚大社、八重垣造る玉垣は和歌を護りの神(國性爺後日)

〔八重垣造〕素盞嗚尊の御製歌、「八雲立つ出雲八重垣つまごめに、八重垣造る其八重垣を」は詠歌の始めであるとの說によつて、和歌を護りの神と云うたのである。

ゆづのつまぐし 何事無かれ撫附けて、髪引くゆづのつまぐしの齒の、はあ悲し一枚折れた、あきれてとんと投櫛は別れの櫛とて忌むことを、口には言はず氣にかかる(女殺)

〔湯津爪櫛〕「ゆつ」は五百箇の義、齒の繁多なるをもていふ。「つまぐし」は齒の間のつまり迫つた櫛の義。古來夜櫛を投げるは不吉として忌んだものである。神代紀上に、「伊弉諾尊不レ聽、陰取二湯津爪櫛一、牽二折其雄柱一、以爲二秉炬一而見レ之者則膿沸蟲流、今世人夜忌二一片之火一、又夜忌二擲櫛一、此其緣也」。風俗文選に、「櫛の齒缺くれば子に別るる」といひ、また東鑑・建長二年六月二十四日の條に、「罪白地下二向田舍一訖、窺二其隙一有下通二艶言於息女一事上、息女殊周章、敢不レ能二許容一、而令レ投レ櫛之時、取者骨肉皆變二他人一之由稱レ之、彼父潛到二于女子居所一、自二屏風之上一投二入櫛一、彼息女不意而取レ之、仍父已準二他人一欲レ遂レ志、于レ時不レ圖而罪自二田舍一歸著、入二來其砌一之間、忽以下不レ堪レ悲及二自害一」とある。櫛の齒の折れ、又は投櫛は不吉の前兆として忌む。

りやうけと書きてまひとと讀む、これ日本紀の初見たり(融大臣)

「りやうけ」は良家、「まひと」は眞人である。天武天皇十三年十月の條に「詔曰、更改二諸氏之族姓一、作二八色之姓一、以混二天下萬姓一、一曰眞人、二曰朝臣、云云」とあつて、通釋に「眞人は美稱にて、天皇の御名にさへ申奉れるなれば、貴きこともとよりなり、されど此まではかかる姓あることとなし、姓氏錄序に眞人是皇別之上氏也とあり」と見えてゐる。巣林子は眞人を其義によつて良家といひ、そして眞人を馬人に附會して馬に乘る人の意としたのである。

(小倉)百人一首に據れるもの

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、我衣手は露にぬれつつ(天智天皇)

鳥獸などに荒させまいと、朕が番をしてゐる秋の田の、假庵の庵の苫が粗いが故に、朕が袖は苫の編目を洩れる露に濡れ濡れて、難儀なことよとの意で、民の辛苦を勞はり給うた天智天皇の御詠である。この歌は、百人一首にも後撰集・秋部に題しらずとしても、また古今六帖にも借廬の歌中に出てゐる。巣林子作・蟬丸の文中に、「あきの田のかりほの薹屋……我が袂の乾くまも」とあるも、この歌句を取つたのである。

あはれと思へ袖櫻、知る人にせん花衣(三世相)

袖櫻とは、袖に櫻模樣のあるをいうたのである。袖櫻よ、我は汝をあはれ懷かしいと思ふによつて、汝も我をあはれ懷かしいと思うてくれよ、我は袖櫻なる汝を知人とせうとの意。この文は、前大僧正行尊の歌に、「諸共にあはれと思へ山櫻、花よりほかに知る人もなし」とあるによつたのである。

あはれともいふべき人は思ほえて、身のいたづらになるまいぞ(娥)

我戀死すとも、それをあはれと言うてくれる人とも思はれずして、徒死してはなるまいぞとの意。謙德公の歌に、「あはれとも言ふべき人はおもほえで、身のいたづらになりぬべきかな」。

逢坂山のさねかづら人は知らじと通ひしも(娥)

逢ふことを人は知るまいと思うて通ひたれどもの義に、「名にし負はば逢坂山のさねかづら、人に知られで來るよしもがな」の古歌の句を引いたのである。さてこの古歌は、後撰集・戀部、百人一首などに出で、三條右大臣の詠である。(序に歌意は、逢坂山は逢ふといふ名を負ひ、また逢坂山にあるさねかづらは、小寢といふ名を負うてゐるからには、人に知られぬやうに我が思ふ女の我が許に來るやうにして、寢るすべもあつたらよいわいなあとの意)。「さねかづら」はその條を見よ。

天つ風雲の通路吹閉ぢて、天地を動かす(酒呑童子)

僧正遍昭の歌に、「天つ風雲の通路ふきとぢよ、乙少のすがたしばしとどめむ」。

色よき紅葉を踏散す鹿(艶狩)

「猿丸太夫が悲しみし云云」を見よ。

おくしもや、白きを見ればよめ遠

皆非なり、いふに足らず願ふに足らず」とあるに據つたのである。

冥途の使、誰をかも雨の晴れ間と竢すべき（賀古教信）

第百八十八段に「人の命は雨の晴れ間をも待つものかは」。

ものぐるほし くさめくさめも我ながら物狂ほしと書きたるはこれかや（兼好）

物狂ほしの義、物狂めく、狂氣のやうである。徒然草冒頭の文に、「心に移りゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつづくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」、とあるに據つた洒落である。

兩刃の劍にて人を切るに、振上げさまに我まづ切らるるといふ譬あり（雪女）

第百二十五段に、「人に酒すすむるとて、おのれまづたべて人に強ひ奉らむとするは、劍にて人を斬らんとするに似たることなり、二方に刄つきたるものなれば、もたぐる時まづ我頭を斬る故に、人をばえ斬らぬなり、おのれまづ醉ひふしなば人はよもめさじと申しき」とあるに據つたのである。

柳原の法印樣 枕あがらず次第に重つて來る程に、お客衆のひきびきで柳原の法印樣・半井の御典藥（反魂香）

近松の當時柳原（京都室町上御靈前の筋下る所の地名）に有名な法印が居たのではなくて、第四十六段に「柳原の邊に強盜法印と號する僧ありけり、たびたび強盜にあひたる故にこの名をつけにけるとぞ」、とあるに據つていうたものである。（また「半井の御典藥」は、雍州府志・土産門上・藥品部・龍腦丸の條に、「醫家和氣氏祖廣世清丸之長子也、……廣世之子時雨自二幼年一學二醫術一、承平三年秋七月被レ試賜二醫博士號一、又稱二鍼博士一、遂任二典藥頭一、自レ是後世爲二典藥頭一、今半井家此裔也、半井宅元在二烏丸正親町北今施藥院地一、家有二大井一、隔二其中間一、半用二製藥之料一、半充二雜用一、依レ之有二半井之號一」と見えてゐる）。

よろづにいみじくとも、色好まぬ者は玉の盃の底なき心地（兼好）

萬の諸藝に堪能であつても、戀知らずの男は恰も玉で作つた盃の底の無いやうなもので、男子としての價値なき心地がする。第三段に、「よろづにいみじくとも、色好まざらん男はいとさうざうしく、玉の盃の底なき心地ぞすべき」。

兩刃の劍にて人を切る云云

「もろはの劍にて人を切るに云云」を見よ。

籠鳥の雲を戀ふ（戯）

第百二十一段に、「飛鳥は翅を切り籠に入れられて雲を戀ひ」。

わが國の扇に歎く古も、げにもと思ひしら雲に（以呂波）

第八十四段に、「法顯三藏の天竺に渡りて故郷の扇を見ては悲み、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける」。

女の履ける足駄にて作れる笛には秋の鹿必ず寄る（五人兄弟）

第九段に「女のはけるあしだにて作れる笛には秋の鹿かならずよるとぞいひ傳へ侍る」、とあるに據つたのである。

日本書紀に據れるもの

あなにゑや 聟は心の浮橋に、嫁入御簾のあなにゑや、うまし雜煮の味甘の、逆鉾逆鉾と賑へり（蛙合戰）

「あな」は感動詞、「ゑや」も感動の意を示す助辭。「に」は憙（悅）、研（麗、美好）の意。神代上卷に「憙哉」または「研哉」と書いて「阿那而惠夜」と訓んである。棠林子のここの文は、心の浮くに天の浮橋をいひかけ、味甘の榮ふ（榮ゆの訛）に天の逆鉾をいひかけ、神代紀にある語を以て文飾とした。

いかしほこ 嚴矛の本末をかたぶけず、中柄ふる人中臣といへり（用明天皇）

〔嚴矛〕いかめしいほこ。舒明天皇の條に、「群卿者、從求如二嚴矛一取レ中事而奏請人等也」。

＊かぐつち されば伊弉諾尊、かぐつちといふ火の神を御誕生ありし時、そのかぐつちが火焰に燒かれて神さりませしも、内に大熱の火を包みし故なり（振袖始）

〔軻遇突智〕伊弉諾尊・伊弉册尊の二神、火の神軻遇突智を産み給はれたが、伊弉册尊は軻遇突智の爲に燒かれて崩御された。神代上に、「次生二火神軻遇突智一、時伊弉册尊爲二軻遇突智一所焦而終」。

こんこんとんとん それ世界未だ開けざる始めは渾渾沌沌として鷄の卵の如く、重く濁れる者は淹き塊りて國となり、輕く清める者は薄靡き上つて天となり（天神記）

〔渾渾沌沌〕元氣未だ分れないでむらがれたること。神代上に、「古天地未レ剖、陰陽不レ分、渾沌如二鷄子一、溟涬而含レ牙、及下其清陽者、薄靡而爲レ天、重濁者淹滯而爲上レ地、精妙之合搏易、重濁之凝場難、故天先成而地後定」。

玉津島神詠 戀ひわぶる賴信公とこの小蝶が緣の絲を結合せて、玉津島神詠のしるしを見せよ、急急如律令と懷にかくし入れ（關八州）

玉津島明神は紀伊國海草郡和歌浦にある。祭神は世俗に衣通姫と云はれてゐる。「玉津島神詠」とは、衣通姫が允恭天皇を戀ひて詠まれた御歌、「わがせこが來べき宵なり、ささがにの蜘蛛の行ひ今宵しるしも」をさす。この歌は日本書紀の允恭紀に見えてゐる。古今集には、「わがせこが來べき宵なり、ささがにの

修驗者が蘇民將來（その條を見よ）符を書いて配るによつて修驗者の稱となつたといふ。山伏。前大僧正行尊の歌に、「もろともにあはれと思へ山櫻、花より外に知る人もなし」。この歌千載集・雜部にも出てゐる。

絶えなば絶えね玉の緒　命長きは恥の種、絶えなば絶えれ玉の緒よとはいひながら（天智天皇）

「玉の緒」は魂の緒であつて生命のこと。生命よ絶えるなら絶えよの意。式子内親王の歌に、「玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば、しのぶることのよわりもぞする」。

とも船も戀の道かや楫緒絶え、行方しら羽の矢走に渡る（袍狩）

曾根好忠の歌に、「由良の門をわたる船人楫緒絶え、ゆくへも知らぬ戀の道かな」。

歎きつつひとりぬる夜の明くるまは、いかに久しきものとかは知る（娥）

右大將道綱母の歌である。待人の來ぬを歎きながら一人で寢る夜の明ける間は、どんなに待遠いものであると思ひ給ふかの意。

夏來にけらし　今日ぞ廓の衣更へ、夏來にけらし染めけらし（賀古教信）

夏が來たらしい。持統天皇の御歌に、「春過ぎこ夏來にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香具山」。

難波潟短き蘆の節の間も、世世の報を晴さんと（吉岡染）

「節の間」とは、蘆の節の間の短いのを短時間に喩へたのである。「短き蘆の節の間」は蘆の短き節の間の意。伊勢の歌に、「難波潟短き蘆の節の間も、逢はでこの世を過してよとや」。

奈良の都の八重櫻、けふ九重の梅が香（女護島）

伊勢大輔の歌に、「いにしへの奈良の都の八重櫻、けふ九重ににほひぬるかな」。

泊瀬の山颪　お姫様の其美しいお顔の莞爾ほやほやを見せたらば、いかな泊瀬の山颪でも轉りとさせ連れ歸るは定の物（浦島）

泊瀬皇子の如何につれないとても の意に、源俊頼朝臣の歌、「うかりける人をはつせの山おろし、はげしかれとは祈らぬものを」の句を取つて面白くいうたのである。

人こそ知らね沖の石、涙を袖におし隱し（一心五戒魂）

二條院讃岐の歌に、「わが袖は汐干に見えぬ沖の石の、人こそ知らねかわく間もなし」とあるに據つたのである。

緋無垢干すてふ天の香具山（天智天皇）

龍田の山の初錦、紅に照る日の雲染めてゐるを緋無垢に喩へて、持統天皇の歌「春過ぎて夏來にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山」の下の句の作り替。この歌は新古今集卷三、夏歌の部に出てゐる。

***ふりさけみる**　やせ大原ふりさけみれば、北に鞍馬やみぞろ池（三國志）

「ふり」は「ふりあふぐ」「ふりかへる」などの「ふり」で接頭語、「さけ」は離れの意で、「さかる」といふ語に對する他動詞である。遠く目を放ち見る。安倍仲麻呂の歌に、「あまの原ふりさけみれば春日なる、三笠の山に出でし月かも」。

まだ文も見ぬ橋立や（松風）

小式部内侍の歌に、「大江山いくのの道の遠ければ、まだ文も見ず天の橋立」。

まつとしきかば歸り來む（松風）

中納言行平の歌に、「立別れいなばの山の峯におふる、まつとし聞かば今かへりこむ」。この歌の意は、我は汝と別れて因幡國に行くが、その國の法美郡稻葉山の峯に生ひてゐる松の名の如く、汝が我を待つと聞くならば直に歸つて來ようの意。

八重櫻今日九重の京雪駄奈良草履（兼好）

伊勢大輔の歌に、「いにしへの奈良の都の八重櫻、今日九重ににほひぬるかな」とあるに據つたのである。

やへむぐら茂れる宿におしおしこめられて（弘徽殿）

「八重葎」とは葎の幾重も繁り生ひたるをいふ。葎は蔓草で刺がある。惠慶法師の歌に、「八重葎茂れる宿の寂しきに、人こそ見えね秋は來にけり」。

行くも歸るも別れては知るも知らぬも大幣の（國性爺後日）

蟬丸の歌に、「これやこの行くも歸るもわかれては、知るも知らぬもあふ坂の關」とあるに據つたのである。

わがころもでと諸共に濡れつつ袖のみやづかへ（娥）

天智天皇の御詠に、「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、我衣手は露にぬれつつ」とある句を應用して、思ひに沈みくれて涙に袖を濡しながら官仕する意にいうたのである。

衞士の焚く火は顔に燃え、身は消えつつ玉の汗（女夫池）

赤顔して汗を出すことを、大中臣能宣の歌、「御垣守衞士の焚く火のよるは燃え、ひるは消えつつ物をこそ思へ」の歌にいひかけたのである。この歌は詞花集に出てゐる。

夫木集に據れるもの

あきのほたる　川水の果て埋れ澤、秋の螢と古歌にも連れ（小栗判官）

〔秋螢〕夫木和歌抄・雜秋部、忠峯の歌に、「おく露に朽ち行く野邊の草の葉や、秋の螢となりわたるらむ」に據つたものか。（「川水の果て埋れ澤秋の螢」といふ古歌あるか、なほ考ふべきである）。

谷の笹原　鑓の權三が古身の鑓、疵も古疵・咄も古し、歌も昔の古歌なれど、谷の笹原一夜さ話、其鑓の

目(非筒)

中納言家持の歌、「かささぎの渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜ぞふけにける」の歌句と、「よめ遠目笠の中」と云ふ諺とを併せ用ひて、白粉附けた顔見れば、夜目(嫁をきかせ)また遠目から見るが好いといふ意。

奥山に紅葉踏分け鳴く鹿の、心は哀れと思はずや(川中島)

猿丸太夫の歌、「おく山に紅葉踏分け鳴く鹿の、聲聞くときぞ秋はかなしき」の上の句によつたのである。

風そよぐならの小川の夕暮は、禊ぞ夏のしるしなる(弘徽殿)

「ならの小川」は山城國葛野郡にある。「禊」は身の穢や罪を祓ふ爲に、川で身を濯ぐ儀式で、六月晦日・十二月晦日に行うたものである。ここにいへるは六月晦日の禊である。風そよそよと楢の葉に吹くならの小川の夕暮は、いかにも涼しいので秋と思はれれども、禊をすることが夏の證據ぢやとの意。新勅撰集・夏部、從二位家隆の歌に、「風そよぐならの小川の夕暮は、みそぎぞ夏のしるしなりける」。この歌は百人一首中にも出てゐる。

岸打つ浪のおのれのみ、砕けて物を思へとや(天神記)

岸邊に打寄せる波濤が砕けて散るやうに、自身ばかりがいろいろに物思ひにくれよとやの意、源重之の歌に、「風をいたみ岩打つ浪のおのれのみ、くだけて物を思ふころかな」。

君がため惜しからざりし命さへ、長くもがなと春を待つ(吉野忠信)

君の爲ならば惜しいとも思はなかつた命まで、春にならば君に逢はれると思へば待遠しさに、命の長くもあれよと思ふことよとの意。藤原義孝の歌に、「君がため惜しからざりし命さへ、長くもがなと思ひけるかな」。

雲の通路吹きとぢて、天つ乙女の鹿の子の小袖(文武五人男)

僧正遍昭の歌、「あまつ風雲の通路ふきとぢよ、少女のすがたしばしとどめむ」とある語句をとりて、鹿の子の小袖にいひつづけたのである。

來ぬ人をまつほ　來ぬ人をまつほの浦の夕凪に、燒くや藻汐の身を焦す、それは吾妻の物語(卯月艶)

新勅撰集・戀部に、建保六年内裏歌合の題にて藤原定家の歌に、「來ぬ人をまつほの浦の夕なぎに、燒くや藻鹽の身もこがれつつ」とありて、この歌百人一首にも出づ。來ない人を待つ辛さは、松帆の浦の夕凪に燒く藻鹽のやうに、我が身も焦れてわびしいとの意。松帆の浦は淡路國津名郡にある。近松のここの文に、「それは吾妻の物語」とあるは、江戸で八百屋お七が戀の爲に放火して、火炙の酷刑に處せられたのをさす。

このたびは幣とりあへず手向山(天智天皇)

菅公の歌に、「この度はぬさもとりあへず手向山、紅葉の錦神のまにまに」。「ぬさ」はその條を見よ。

これやこの行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關(蟬丸)(娥)

この歌は百人一首の中に出てゐる。後撰集・雜部には、上句の「別れては」が「別れつつ」になつてゐる。田舍へ出て行く人も京へ歸來る人も、知る人も知らぬ人も、此處にて別れ別れて又此處で逢ふと云ふ名の、これが逢坂の關であるかとの意。巣林子は「行くも歸るも」に流轉の意を含み、「逢坂の關」に萬法遂に一に歸する意を含ましめ、以て會者常離哀別離苦と、また萬法遂に一に歸する佛法の理を含ましめたのである。

櫻も八重の奈良草履、今日九重の鼻緒(隅田川)

伊勢大輔の歌、「いにしへの奈良の都の八重櫻、けふ九重ににほひぬるかな」の語句を取つたのである。「奈良草履」はその條を見よ。

さぞな憐れむ山櫻、花よりほかに知られじと(殊靜)

前大僧正行尊の歌に、「諸共にあはれと思へ山櫻、花より外に知る人もなし」とあるを作替へたのである。

猿丸太夫が悲しみし色よき紅葉を蹈散す鹿(艶狩)

猿丸太夫の歌に、「奥山に紅葉踏分け鳴く鹿の、聲聞く時ぞ秋は悲しき」、とあるによつてかく云うたのである。さてこの一首の意は、秋はいつも物のあはれを感じるが、就中奥山に散り布く紅葉を蹈分けて鳴く鹿の聲を聞く頃が一しほ悲しう感じると云ふのである。さるを鹿が色よき紅葉を蹈散すのを惜み悲しむことにいひなしたのである。

住の江の岸による波よるさへや、ひるは人目に木がくれし(天智天皇)

「住の江」は攝津國住吉郡にあつて今は住吉と云ふ。「住の江の岸による波」は「よるさへや」の「よる」の同韻を引起す序詞である。藤原敏行朝臣の歌に、「住の江の岸に寄る波よるさへや、ゆめのかよひ路人めよくらむ」。

瀨を早み岩にせかるる瀧川のわれても末にあふ(娥)

瀧川は瀨が早いが故に岩に堰かれて砕けれども、その末は一所に會する如くに、人目にせかれて逢はずに別れてゐても、行末は必ず逢ふとの意。崇德院の御歌に、「瀨をはやみ岩にせかるる瀧川の、われても末にあはむとぞ思ふ」。

曾我殿の刈穗の屋根の苫足らず、我とも葺きてよねに濡れつつ(扇八景)

天智天皇の御歌に、「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、わがころも手は露に濡れつつ」、とあるをもぢつたのである。「よね」は妓女をいふ、その條を見よ。「百人衆ほど働けども、屋根葺く苫の足らぬ故、一首の歌にかくばかり」、とあつてこの歌を書いてある。百人衆は百人首をきかせたのである。

***そみかくだ**　諸共にあはれと思へ山櫻、花に心をそみかくだの、姿にかふる人人の御有樣こそ悼しけれ(凱陣八島)　さぞな憐む山櫻、花よりほかに知られじと、御身を變ふるそみかくだ、御供の人人は(殊靜)

「そみかくだ」(蘇民書札)の約であつて、

よ・組んで還すなどの義とする說に從はない。平家物語・卷七、實盛最期の條に、「あつぱれおのれは日本一の剛の者とくんでうづよなうれとて、我が乘りたりける鞍の前輪に押付けて」。謠曲・實盛に、「あつぱれおのれは日本一の剛の者とくんでうづよとて、鞍の前輪に押付けて」。

沙頭に印を刻む鷗、沖洲にすだく浦千鳥(國性爺)

「印を刻む」は足跡をつけるをいふ。「すだく」は集るをいふ。平家物語・卷三、有王島くだりの條に、「沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく浦千鳥」。和漢朗詠集・大江朝綱の詩に、「沙頭刻レ印鷗遊處、水底摸レ書雁度時」。

じく 不動明王の縛の繩手綱に變じ給へやと、慈救の偈を繰りかけ(會稽山) 不動の慈救の偈・明王の火焰の黒煙立ててぞ祈りける(用明天皇) 我この瀧壺に三七日打たれ、じくの三洛叉を滿てうと思ふ大願あるに(一心五戒魂)

〔慈救〕不動明王は大慈悲心をもて衆生を救護される。「慈救の偈」は不動明王慈救の眞言である、大日經に、「曩莫三曼多縛日羅二合赧怛羅吒阿謨伽戰拏摩訶路灑拏娑破吒也吽引怛羅麼也吽怛羅吒唅漫」とあるもの即ちこれである。「慈救の三洛叉云云」の洛叉は梵語 (Laksa) で十萬または一億の義である、即ち慈救の眞言を誦念すること三億または三十萬度を滿たさうと思ふ大願を立てたのである。平家物語・卷五、文覺の荒行の條に、「我この瀧壺に三七日打たれて、慈救の三洛叉を滿てうと思ふ大願あり」。

四生の苦輪 痛ましきかな、二度三途の火坑に歸つて、永く四生の苦輪を廻らんことを心に深く思ひとり(一心五戒魂)

「四生」は「六道四生」の條を見よ。一切の衆生は四生から出て以て迷界生死の苦を嘗め、彼此に輪轉することをいふ。平家物語・卷五、勸進帳に、「痛ましきかな、ふたたび三途の火坑に歸りて、永く四生の苦輪を廻らんことを云云」。

***しまん** 本有の月の光かすかにして、未だ三毒四慢の大虛に出ず(一心五戒魂)

〔四慢〕己を恃みて他を凌ぐを慢と云ふ、これに(1)慢、(2)過慢、(3)慢過慢、(4)我慢、(5)增上慢、(6)下劣慢、(7)邪慢、の七慢ある、その中の四つを取つて四慢と云ふ。平家物語・卷五、勸進帳に、「本有心蓮の月の光幽にして、未だ三毒四慢の大虛に顯はれず」。

しやうぶつのけみやう 生佛の假名を立つるといへども、法性隨妄の雲厚く十二因緣の峯にたなびき(一心五戒魂)

〔生佛の假名〕生佛一如(その條を見よ)なれども、假にその相につきて衆生と佛陀との名をつける、これを生佛の假名といふ。平家物語・卷五、勸進帳の條に、「夫れ惟れば眞如廣大なり、生佛の假名を立つといへども、法性隨妄の雲厚く覆ひて、十二因緣の峯にたなびきしより以來云云」。

じやうみやうこじ 淨名居士の方丈に三萬二千の座を並べ、諸佛を請じ給ひしも斯くやと殊勝に渙し(盛久)

〔淨名居士〕維摩居士を云ふ。維摩經・不思議品に、「於レ是長者維摩詰現二神通力一、即時彼佛遣二三萬二千師子之座一、高廣嚴淨來入二維摩詰室一、諸菩薩大弟子釋梵四天王等、昔所レ未レ見、其室廣博悉苞二容三萬二千師子之座一、無レ所二妨閡一」。平家物語・灌頂卷、小原御幸の條に、「かの淨名居士の方丈の室の内に三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけんもかくやとぞ覺えける」。

諸阿修羅等故在大海邊 諸阿修羅とうこざい大かいへん、そも三惡四趣は深山海づらにありと御說に說かれしが(女護島)

諸阿修羅等はもともと大海邊に在住してゐるとの意で、この文句は報世經にあると云ふ。「三惡」は地獄・餓鬼・畜生を云ひ、これに修羅を加へて「四趣」と云ふ、趣は趣き住む義で、即ち衆生が自己の業に引かれて趣き住む故に云ふ。平家物語・有王が島下りの條に、「諸阿修羅等故在大海邊とて、修羅の三惡四趣は深山大海の邊にありと、佛の說き置き給ひたれば」

***すだく** 沖洲にすだく浦千鳥(國性爺)

集る。平家物語・卷三・有王が島下りに、「沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく浦千鳥」。

近き甲斐なき千賀の鹽竈身を焦す(重井筒)

尋ね人の近き所に居るも知らねば詮方なく、どうせうかと悶える意で、平家物語卷六、小督の事の條に、冷泉大納言隆房の歌、「思ひかね心はそらにみちのくの千賀の鹽竈近き甲斐なし」に據つたのである。

月常住の御燈をかかげ、霧不斷の香を焚き(大織冠)

月光は眞如常住の御燈をかかげたやうで、霧の朦朧せるは斷えず香を焚いてゐるやうである。平家物語・灌頂卷・小原御幸の條に、「甍破れて霧不斷の香を焚き、樞落ちて月常住の燈をかかぐ」。

艫舳に櫓を立てちがへ脇楫を入れ、いづ方へも廻し易いやうにと、言はせもあへず(最明寺殿)

平家物語・卷十一、逆櫓の條に、「艫舳に櫓を立てちがへ脇楫を入れて、どなたへも廻し易きやうにし候はばやと申しければ」と見え、なほ巢林子のこのつぎに書き續ける文も、平家物語・逆櫓の文の改作である。「わいかぢ」はその條を見よ。

流され人の彼の島で流す卒塔婆(薩摩歌)

俊寛僧都、平康頼、藤原成經の三人薩摩の鬼界島に流されて赦免なきより、深く歎いた中にも康頼はあまりに都を戀しがり、「薩摩がたの沖の小島に我ありと、親には告げよ八重のしほかぜ」「思ひやれ暫しと思ふ旅だにも、なほふるさとの戀しきものを」、といふ二首の歌を

柄も永き世の、御評判とぞなりにける(鶴様三)

夫木和歌抄・巻二十八、篠の部、安嘉門院四條の歌に、「ながめやるたかねは春の日かげにて、谷の笹生に消えぬ白雲」とあるをとりて、世語りとなりて消えぬ意にいうたのである。

どやどや通りのむやむやの關(女殺)

夫木抄・巻二十一、雑部・関、よみ人知らずの歌に、「もののふの出づさ入るさにしをりする、とやとやとほりのむやむやの關」とあるに據つたのである。色葉集には「もののふの出づさ入るさに枝折する、とやとやとりの無耶無耶の關」とありて、「出さ入るさとは出さま入さまなり、枝折とは歸らん道のしるしに木の枝を折かけて行くなり、しるしに折るといふ事なり、みちの國と出羽國との中に行通ふ山あり、常に人もありかずして、木茂きに枝折なしつつありくなり、さればとやとやとりとはとやとやとほりと云ふなり、むやむやの關とは、その山の陸奥國と出羽國方にある關をいふなり、又もやもやともいへり」と見え、秋田の假殿と云ふ本には、昔この山(秋田と山形との境界に近く、海に迫れる處の山で無耶無耶の關のある處)に手長足長といふ毒蛇棲みて往來の人を害せし故、諸天萬神これを憐みて、梢に怪鳥を棲ましめて、毒蛇居れば有耶といひ、居らねば無耶と言はしめたといふ傳說を載せてある。兵家茶話六之巻に、「出羽國飽海郡うやむやの關は、庄内境由利郡境關村といふ所舊跡也といふ、此地山を東に海を西にうけて、關所といふべき所也」と見えてゐる。さればこの關は、むやむやの關とも、もやもやの關とも、うやむやの關ともいうたやうである。巣林子のここの文は、立腹してむやむやするに古歌をいひかけたのである。

平家物語に據れるもの

あづさ弓取傳へたるもののふの(源義經)

平家物語巻九、二度のかけの條、梶原平次の歌に、「もののふの取傳へたる梓弓ひいては人のかへすものかは」。

伊勢武者は皆緋縅の鎧着て、宇治の網代にかかる例(文武五人男)

平家物語・巻四、宮の御最期の條に、「緋縅の鎧着たる武者三人網代に流れかかりて、浮きぬ沈みぬゆられけるを伊豆の守見給ひて、かくぞ詠じ給ひける。伊勢武者は皆緋縅の鎧着て、宇治の網代にかかりぬるかな。是等は皆伊勢の國の住人なり云云」。

霧は不斷の伽羅を焚き、晝にもまさる燈火は、月常住の夜見世かや(淀鯉)

燻べる伽羅の香煙はいつも霧のさまよふ如く、門行燈列つて其光晝を欺く夜見世の有様は不夜城といふべきであらうよと、浪華遊女町の繁華熱閙をたたへたのである。「伽羅」はその條を見よ。平家物語・灌頂巻、大原御幸の條に、「甍破れては霧不斷の香を焚き、扉おちては月もまた常住の燈火をかかぐ」。謠曲・大原御幸にも出てゐる。「くるわずまひ云云」をも見よ。

祇王が段　姉が讀みさいた平家物語祇王が段を聽かう(宵庚申)

平家物語・巻一、「祇王の事」とある條をいふ。祇王は白拍子刀自の女である、入道平清盛に再び召されてその命に從はないので、母の刀自が祇王を教訓して清盛の命に從はせること が書いてある。心中宵庚申のここのあとの文に、「母の刀自泣く泣く又教訓しけるは、……世に定めなきものは男女のならひなり」とあるは、平家物語巻一、祇王の事の條に、「母刀自泣く泣く又教訓しけるは、天が下に住まんにはともかうも入道殿の仰をば背くまじきことにてあるぞ、その上わごぜは男女の緣宿世今にはじめぬことぞかし、千年萬年とは契れどもやがて別るる中もあり、あからさまとは思へども長らへはつることもあり、世に定めなきものは男女のならひなり」とあるに據つたのである。

***きをんしやうじや**(用明天皇)　祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理り、驕る者久しからず、遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高・唐の祿山、近く本朝を窺ふに、天慶の純友・承平の將門、間近くは六波羅入道前の太政大臣平の朝臣清盛公の有様こそ、心も詞も及ばれね(孕常盤)

「祇園精舍」祇園は祇樹給孤獨園の略である。祇樹は逝多林とも云ひ、波斯匿王の太子逝多の苑林の義、給孤獨は舍衛城の長者須達の異稱である。精舍卽ち佛堂の地は逝多太子の所有地であつたのを、須達が買つて精舍を建て二佛及び僧衆に獻じた、これによつて逝多が施・所、須達の買ふ所の精舍の義で、兩人の名を冠した語である。この故事からして祇園精舍を寺院の意に用ゐる。孕常盤のここの文は平家物語に據つたもので、卽ちその巻一、祇園精舍の事の條に、「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現はす、驕れる者久しからず、……遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高・漢の王莽・梁の周伊・唐の祿山、……近く本朝を窺ふに、承平の將門・天慶の純友、……間近くは六波羅の入道前の太政大臣平朝臣清盛公と申しし人の有様、傳へ承るこそ心も詞も及ばれね」。「諸行無常」「沙羅双樹」「趙高」「祿山」などはその條を見よ。

ぐんでうづよ　あつぱれおのれは日本一の剛の者をぐんでうづよと、手をまはすを高手小手に搦み付け(百日曾我)

「ん」が鼻にかかる爲に「く」まで鼻にかかつて「くん」が「ぐん」となつたので、「かに」(蟹)を「がに」といふの類である。「ぐんでうづよ」は組んで討つよの訛りで、卽ち組んで討取らうとするよの義である。組んで失すよ・軍上手

枕草紙に據れるもの

逢坂の鷄の空音か、太鼓の空音(扇八景)

仕舞太鼓の時でないのに仕舞太鼓を打つたのを、清少納言が孟嘗君の函谷關の故事を引いて詠んだ歌、「夜をこめてとりの空音をはかるともよにあふ坂の關はゆるさじ」とあるをきかせて、面白う書いたのである。

***きのはし**　あたら姿を慘たらしい、木の端と寠さいでも(薩摩歌)　炭の折か木の端かといふやうなこの坊主(最明寺殿)

〔木の端〕役に立たぬ義、僧侶のことにいふ。枕草紙に、「おもはん子を法師になしたらんこそはいと心苦しけれ、さるはいとたのもしきわざを、ただ木のはしなどのやうに思ひたらんこそいとほしけれ」。徒然草に、「法師ばかりうらやましからぬものはあらじ、人には木の端のやうに思はるるよと、清少納言が書けるもげにさることぞかし」。

鳥の空音ははかるとも　鳥の空音ははかるとも、許す方なく云云(文武五人男)(國性爺)　鳥の空音ははかられど、佛神の感應にや判官安宅の關を越え([illegible])

清少納言の歌に、「夜をこめて鳥の空音ははかるとも、よに逢坂の關はゆるさじ」、とあるに據つたのである。この歌の意は、「夜明けに先立つて鷄のまだ鳴きもせぬに、その虚鳴に函谷關の守衛は欺かれ通すとも、其方と我と逢ふといふ逢坂の關では、さやうな僞では通しませぬが、眞實のお心だから通しますと云ふのであつて、昔孟嘗君が秦を遁れて函谷關を夜陰に出ようとしたが門が鎖してあつた、そこで孟嘗君の食客の中に能く鷄鳴をなす者があつた爲に、遁れることが出來たと云ふ故事を引用したのである。

鷄の鳴く音を二聲三聲、かけいこうかけいこうと空音をはかる人の聲(關八州)

清少納言の歌、「夜をこめて鷄の空音ははかるとも、よにあふさかの關はゆるさじ」とある中の語句を應用したのである。この歌は枕草紙、後拾遺集雜部、(小倉)百人一首に出てゐる。

法師はもとより木の端　「きのはし」を見よ。

舞之本に據れるもの

あつぱれ御馬候や、爪髪の切り樣は鎌倉樣候な、追つ樣向ふ横端張、尾口相當爪根のくさり、骨合ひ肉並夜眼の節、作つくり付けたる如くなり(源義經)

舞之本、堀河夜討上巻に、「あつぱれ御むま候や、爪髪の切りやうは鎌倉やう候な、おつさま向ふ横はたはり、をくちさうたう爪根のくさり、ししあひ骨なみよめのふし、あうつくり付けたるごとくなり」。「よめのふし」はその條を見よ。

***三部經**(百日曾我)

百日曾我に、禪師坊が三部經を說いた文は、舞之本・十番切に、曾我五郎時致が斷罪に處せられる際、淨土の三部經を說いた文を添削したものである。今この兩文を書きならべるも長長しいから略した。

***しひんせき**　泗濱石の硯には、水なくして墨の色心のまゝに候こと、いづれも度度御覽あり(大織冠)

〔泗濱石〕舞の本に、「しひん石は硯、かの硯のとくゆうは水なくして墨をすつて、心のままにつかふなり」。謠曲・海人に、「花原磬、泗濱石、面向不背の玉」とありて、謠曲拾葉抄に、「私云、世に泗濱石は硯なりといへり、然らば泗濱石にて作たる硯歟」。

まはれば三里曾我中村、山道なれど直に打てば十八町(扇八景)

舞之本・和田酒盛に、「廻れば三里、すぐに打てば五十町、廻らば時刻もうつりなんと思ひ、曾我中村にさしかかり」。

萬戸が其日の裝束には、阿耨菩提の腹巻に隨求陀羅尼の籠手をさし云云(女護島)

幸若舞大織冠に據つたものである。大織冠(舞之本)に、「萬戸が其日の裝束に、神通ゆびのうでかね、さはんやかんの臑當し、妙法蓮華のつなぬきはき、忍辱慈悲の鎧を草摺長に著くだして、阿耨多羅三藐三菩提の五枚兜を猪頸に着、忍びの緒をしめたりける、降魔利劍の大がたな、十文字にさすままに、大たうれんといふ劍あしを長に結んで下げ、云云」。

萬戸このよし聞くよりも、云云(女護島)

「萬戸このよし聞くよりも」は大織冠(舞之本)にある文であるが、その後の文は巣林子が改作してゐる。

——(・)——

(備　考)

巣林子が舞の本から脚色して取入れたものでは、出世景清には景清、大織冠には大織冠、賴朝伊豆日記の初段には文覺、百合若大臣野守鏡には百合若大臣、用明天皇職人鑑の山路のことには烏帽子折、などはその主なるものである。

千本ノ卒都婆に書いて海に流したこと、平家物語・巻二・卒都婆ながしの條に見えてゐる。

花咲く頃を埋れ木のみのなる果こそ口惜しけれ（十二段）

平家物語・巻四、宮の御最期の事の條、源三位頼政の歌に、「埋れ木の花咲くこともなかりしにみのなる果ぞ悲しかりける」。

*まさきのかづら　**まさきのかづら、青つづら、くる人ありとも知り給はず**（蟬丸）

〔正木葛〕「つるまさき」ともいふ、山野に自生する常綠の葛である、葉は對生し楕圓形で鋸齒がある、黄綠色の小形花聚り咲く。平家物語・灌頂巻、小原御幸の條に、「正木のかづら青つづら、くる人稀なる所なり」。本草綱目に、正木葛は四時凋まず厚葉堅強なるもので、花咲かないで實を結ぶ由を記し、常綠なものなれば眞幸の意であらうといふ、同じ名の葛に南天に似て黒みあり、冬の初に紅葉して美しいものがある、眞析に析きて鬘とするよりの名であるといふ。古今集・神あそびの歌に、「深山にはあられふるらし外山なる、正木のかづら色づきにけり」とあるは、即ちこの眞析葛のことである。巣林子は常綠葛をいうたのであらう。鎌田兵衛名所盃にも、「常磐堅磐の正木のかづら、絶えず盡きせず萬萬年」と云うてゐる。



〔正木葛〕

丸木橋ふみ返しては落ちそめて（加増曾我）

平家物語巻九、小宰相の條、女院の歌に、「ただたのめ細谷川のまろき橋、ふみかへしては落ちざらめやは」。

屋島院宣の請文に、頼朝昔の厚恩を忘れ、狼藉の身を以て猥りに蜂起の亂を致す（傑静）

平家物語巻十、屋島院宣の請文の條に、「然るに昔の洪恩を忘れて芳意を存ぜず、忽ちに狼藉の身を以て妄りに蜂起の亂をなす」。

ゆがみ　**經景さもとや思ひけん、手綱を鞍のゆがみに捨て、左右の鐙を踏みすかし弓弦をくはへ**（最明寺殿）

「ゆりがみ」（搖髪）の略。「鞍のゆがみ」とあるは「馬のゆがみ」の誤である。平家物語・巻九、宇治川の事の條に、「梶原さもあらんとや思ひけん、手綱を馬のゆがみに捨て、左右の鐙を踏みすかし腹帶を解きてぞしめたりける」。

頼朝昔の厚恩を忘れ云々

「屋島院宣の請文に云云」を見よ。

（備考）

——（・）——

巣林子が平家物語から脚色して取入れたものでは、娥歌かるた、平家女護島などはその主なものである。

平治物語に據れるもの

海底の魚は深けれども釣すべく、雲上の鳥は高けれども射つべし、計り難きは人心（鎌田兵衛）

平治物語、義朝野間下向并忠致心替の條に、「されば白氏文集に、天をも度りつべく、地をもはかりつべし、ただ人のみ防ぐべからず、海底の魚も天上の鳥も、高けれども射つべし、深けれども釣すべし、獨の心の相迎へる時、咫尺の間もはかること能はず」。

ぎよりよう　**惡源太義平は練色のぎよりようの直垂**（鎌田兵衛）

平治物語に、「義平は生年十九歳、ねり色魚綾のひたたれ」と見えてゐる。ここの文は平治物語に據つたのであるが、魚綾はななこ（魚子の轉）地のことで、魚のはらごのやうな綾の義との説もあれど明でない。貞丈雜記・巻五に、「魚陵は織物の名なるべし。扨如何なる織紋ぞと云ふに詳ならず、知らざるを知らざるとするにはしかじ」。

そなたは異國の范蠡をやらるるの

「はんれい」を見よ。

*はんれい　**これ比丘尼殿、そなたは異國の范蠡をやらるるの**（女楠）　**范蠡・西施を湖水に沈め**（艶狩）

〔范蠡〕支那春秋戰國時代・越王勾踐の忠臣である。勾踐が呉王夫差と會稽山に戰ひ敗れて捕へられた時、范蠡智謀を盡して之を救ひ、後に勾踐をして夫差を滅さしめた。

吉野都女楠のここの文は、平治物語巻三に、越王勾踐が呉王夫差と會稽山に戰ひ敗れて捕へられ、呉國の姑蘇城の獄に投ぜられた。勾踐の忠臣范蠡身を窶し、魚籃を荷ひ魚商人となつて呉國を廻り、姑蘇城の獄に近寄り、一通の書を魚腹に入れて獄内に投じた、勾踐之を拾ひ魚腹より書を取出せば其文に、「西伯囚羑里、重耳奔于翟、皆以爲覇王、莫死於許敵」、とあるを讀んで自重したといふことが載せてある、それに據つたのである。即ち小山田太郎高家の妻が比丘尼に扮し、魚腹に一通の書を入れて投込んだ樣子を見て、後醍醐天皇に忠勤を盡す志を察して言うた謎である。

艶狩劍本地のここの文は、西施は越國の美女である、勾踐この女を呉王夫差に贈つた、夫差喜んで姑蘇臺を造り、西施と酒色に耽つて政治を顧みなかつた爲に遂に勾踐に滅された、勾踐・西施を取返して愛した、范蠡かくては國の爲によくないと思ひ、西施を誘うて小舟に乗せ、石湖に沈めたことを云つたのである。このことは通俗呉越軍談・范蠡扁舟歸五湖の條に委しく見えてゐる。

つて、男女相愛の意を含めてかくいうたのである。

春秋の眺を爭ふ 位爭ひ歌爭ひ春秋の眺を爭ひし雲の上人の風骨にも劣るまじ(會稽山)

萬葉集・卷一に、「天皇詔二內大臣藤原朝臣一、競二憐春山萬花之艷秋山千葉之彩一時、額田王以レ歌判レ之歌」と詞書ありて春山の美景と秋山の美景を擧げて、秋山の方が更に好いと詠んである。蓋しこの歌によつていうたのである。

***ひれふるやま** 足を爪立て伸上り、見送る影も遠ざかる、唐土の望夫山、我朝の領巾麾山、今の我身の我思ひ、石ともなれ山ともなれ、動かじ去らじとかき口說き(國性爺)

〔領巾麾山〕肥前國松浦郡濱崎村の西南、鏡村の東嶺をいふ。欽明天皇の朝大伴狹手彥朝命を奉じて三韓に渡る時、その妻別を惜み山に登つて領巾を脫して振つたによつて、その山を領巾麾山と稱することになつたといふ。萬葉集・卷五に、「大伴佐提比古郞子特被二朝命一、奉二使藩國一、艤レ棹言歸稍赴二蒼波一、妾也松浦佐用嬪面嗟二此別易一、歎二彼會難一、卽登二高山之嶺一、遙望二離去之船一、悵然斷レ肝、黯然鎖レ魂、遂脫二領巾一麾レ之、傍者莫レ不レ流レ涕、因號二此山一曰二領巾麾之嶺一也」。「まつらさよひめが石となる」を見よ。

松のをの千代もと結ぶ 名もよしみれと聞くからに賴みて暫し松のをの、千代もと結びしかれごとのあだになり行く朝顏の(娥)

松は千年も經るものなれば、松の枝を結んで我も壽命久しかれと齡を契るのである。古昔無事を祈り翼ふ咒に草木を結んだもので、萬葉集・卷二に、「磐白乃、濱松之枝乎、引結、眞幸有者、亦還見武」。同書・卷六に、「靈剋、壽者不知、松之枝、結情者、長等曾念」。漢土では別に臨んで柳を結んだ。「離別河邊綰二柳條一、千山萬水玉人遙」の詩は卽ちこれを示す。

眉根かきはなひ紐解け亂るれど(小栗判官)

「やなぎ」の條を見よ。

陸奧の黃金の花ぞ咲きにける(蛙合戰)

萬葉集・卷十八、大伴宿禰家持の詠める歌に、「須賣呂伎能、御代佐可延牟等、阿頭麻奈流、美知能久夜麻爾、金花佐久」とあるに據つたのである。

水莖の岡の葛原風騷ぎ恨みつわびつ(津戶三郞)

水莖は瑞莖の若しの意で、その若を音通にて岡にいひかけた枕詞。葛葉は風に飜つて裏反り勝なれば、裏見を恨みにいひかけたのである。萬葉集・卷十二、讀人知らずの歌に、「水莖の岡のくず葉を吹きかへし云云」。古淨瑠璃・信田妻にある歌に、「戀しくは尋ね來て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」。

紫野ゆき標野行き、行く道筋は多けれど(娥)

萬葉集卷一、額田王の歌に、「あかねさす紫野ゆき標野ゆき、野守は見ずや君が袖振る」。

大和物語に據れるもの

大和國天の香久山といふは女山云々(會稽山)

「中の大兄の御歌」を見よ。

わかの浦にしほ滿ちくればかたを波、あしべをさして田鶴鳴きわたる(百日曾我)

この歌は萬葉集・卷六、雜歌部に山部宿禰赤人の詠として出てゐる。「かたをなみ」は潟を無みで、潟が無い故にの意である。一首の意は、和歌の浦に潮が滿ちて來れば干潟が無くなる故に、鶴は岸の蘆邊をさして寄來つて鳴き渡ることよの意である。巢林子は「かたをなみ」を片男波の義に曲解して、この下の文に「實にこの浦のならひとて、女浪は立たで片男波云云」といつてゐる。

生田の川に身を棄てし、うなゐ少女が名のしるしとへば(天神記)

生田川は攝津國武庫郡にある川で、摩耶山の陰から流出て布引の瀧となる。大和物語に、昔津の國に住む女があつて、二人の男より戀慕され、どちらの男へも嫁せられないで思ひわづらひ、「住みわびぬわが身投げてむ津の國の、生田の川は名のみなりけり」と、辭世の歌を詠んで生田川に身を投げたことが見えてゐる。「うなゐをとめ」はその條を見よ。

***ねくたれがみ** 引いて留むる寢くたれ髮を、底の玉藻と見るめ和布に(松風)

〔寢腐髮〕寢亂れ髮。大和物語の歌に、「吾妹子が寢くたれ髮を猿澤の、池の玉藻と見るぞかなしき」。

はもり 梼折敷く青楓、楢の葉もりのたたりなし(會稽山)

〔葉守〕葉守の神をいふ、饌を守る神であらう。蓋し大和物語の歌に、「かしは木に葉守の神のましけるを、しらでぞ折りしたたりなさるな」とありて、葉守の神はかしは木を守る神、かしはの葉は古代に食物を盛つたよりして食器の稱にもいふによつて、葉守の神を饌を守る神としたものであらう。枕草紙に、「かしは木いとをかし、はもりの神のますらんもいとかしこし」と見え、和訓栞に、「はもりのかみこ葉盛の神の義にして、實は御饌津の神を申すにや」と見えてゐる。

わぎもこ 我はもとより此池の底の玉藻と、黑髮の亂れ心の戀路より執着の罪深く、浮きもやらぬわぎもこの采女が執心侍ふなり(一心五戒魂)

わぎもこがねくたれ髮を猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しき(天智天皇)

萬葉集に據れるもの

いほはた立てて山姫の、手織の錦誰れに着よ（酒呑童子枕言葉）

萬葉集巻十の歌に、「棚機の五百機たてて織る布の、秋より衣誰かとりみむ」。

鶯の子で子にならぬ時鳥（扇八景）

鶯の巣で育てられ、子で子にならぬ時鳥、（青庚申）**鶯の卵の中の時鳥、しやが父に似て父に似ず**（兼好）

時鳥は巣を作らずして卵を鶯の巣の中に産み、鶯はそれとは知らずしてぬくめて孵化さすといふ。萬葉集・巻九、詠二霍公鳥一一首并短歌の題にて、「うぐひすの生卵の中に霍公鳥、獨生れて己が父に似ては鳴かず、己が母に似ては鳴かず、云云」。

着馴れし衣逆様に返して召すは魂結び（持統天皇）

衣を返し着て寢る時は思ふ人を夢に見、魂通ふといふことは萬葉集にも古今集にも見えてゐる。萬葉集・巻十二に、「白妙布之袖折返戀者香妹之容儀乃夢二四三湯流」。古今集・戀部二に、「いとせめて戀しきときはうば玉の、夜のころもをかへしてぞきる」。

古歌にも奈良茶かや　されば古歌にも奈良茶かや、この手盛にて二よそひ（大織冠）

萬葉集巻・十六、有由縁井雜歌部に、「奈良山の兒手柏の兩面に、かにもかくにも佞人の友」とあるを、謠曲・百萬（喜多流）に引用して、「奈良坂や兒手柏の二表、兎にも角にも佞人の云云」と見えてゐるので、巣林子これを取つて古歌にもといひ、「奈良坂や」を「奈良茶かや」にもぢり、「このてがしはの二表」を「このてもりにて二よそひ」ともぢつたのである。「ならちや」をも見よ。

戀草の力くらべ　男子に女子の勝ちはただ二つ、やや産むことと戀草の、力くらべの石の名や虎（虎が磨）

ここの文は、萬葉集・巻四、相聞、廣河女王の歌に、「戀草を力車に七車、積みて戀ふらく吾が心から」、とあるに據り、男子に女子が勝つのは子を産むことと、戀する力との二つであるとの意に、戀の力競べの「虎が石」（その條を見よ）をいひかけたのである。

七珍萬寶より子程の寶よもあらじ（融大臣）

萬葉集、山上憶良の思二子等一歌の反歌に、「銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」と見え、愛兒古日の夭折を歎いた歌に、「世の人の貴み願ふ七種の寶も我は何せんに」。

旅にしあれば椎の葉に盛る（最明寺殿）

萬葉集・巻二、挽歌の部に、「家にあれば笥に盛る飯を、草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」。

月の御舟　月の御舟に水棹さし、天のとよ川（加増曾我）

月の空行くさまを、舟の水をわたるに見たてていへる句、古歌に多く見えてゐる。其古いものには萬葉集巻七、雜歌の部、詠レ天の題で、「天海丹雲之波立月船星之林丹榜隱所見」。序にここの文に、「天のとよ川」とあるは、天の川とわたるに豐川をいひかけたもので、豐川は遊女の名。

黄楊の小櫛も取る間なく　あまの逆手を打ち休み、黄楊の小櫛も取る間なく（女護島）

萬葉集巻三、雜歌の部、石川少郎の歌に「しかの海人はめかり鹽燒き暇無み、髪梳の小櫛取りも見なくに」。伊勢物語の歌に「蘆の屋のなだの鹽燒き暇無み、黄楊の小櫛もささず來にけり」。

中大兄の御歌　この三つの山の爭ひ、中の大兄の御歌を萬葉集には載せられたり（會稽山）

中大兄は後に天智天皇と申す。萬葉集・巻一、中大兄三山歌一首に、「高山波、雲根火雄男志等、耳梨與、相諍競伎、神代從、如此爾有良之、古昔母、然爾有許曾、虛蟬毛、嬬乎相格良思吉」。及び反歌に、「高山與、耳梨山與、相之時、立見爾來之、伊奈美國波良」。

難波の今朝は珍しき妻子引具し（夕霧）

ここの文意は、昔仁徳帝の都であつた難波の延寶六の年の始めの今朝は、昨日に引きかへ珍しいここちがするに、我が妻は珍しいをいひかけたものであつて、萬葉集巻十一の歌、「難波人葦火焚く屋の煤したれど、己が妻こそ常珍しき」に據つたのである。

名乘りて過ぐる杜鵑、しやが父に似て父に似ず、子は色里に初音ふる（壽門松）

萬葉集巻九に、「詠二霍公鳥一一首并短歌」の題で、「鶯之、生卵乃中爾、霍公鳥、獨所生而、己父爾、似而者不鳴、己母爾、似而者不鳴、宇能花乃、開有野邊從、飛翻、來鳴令響、云云」とあつて、反歌に「掻霧之、雨零夜乎、霍公鳥、鳴而去成、何怜其鳥」とあるに據つたのである。「己」は「し」と訓めど「しや」と訓んでもあるので、巣林子は「しや」というたので、「おのれ」といふこと。倭訓栞に「萬葉集の己父己母をしやがちちしやがははとよめる事、俊頼朝臣の抄物に見えたり」と見えてゐる。壽門松のここの文は、與次兵衛を杜鵑に喩へ、與次兵衛が父の眞面目なのに似ないで、放蕩で色里で羽振を利かす意にいふ。

はつをのかがみ　夫を思ふ山鳥の、はつをのかがみ嫁鏡（持統天皇）

〔極尾の鏡〕「はつを」は「ほつを」（秀つ尾）の轉で、尾の中の長き尾、しだり尾をいふ。ここの文は萬葉集・巻十四、相聞の部に、「山鳥のをろのはつをにかがみかけ、となふべみこそなによそりけめ」、とある歌の古註に、山鳥を飼へども鳴かなかつたが、尾の方に鏡を置いたれば友を戀ひてよく鳴いたといふ説によ

「別れを歎き悲しみて跡にこがるる櫻橋」をも見よ。

僞のなき世なりけり いつはりのなき世なりけり神無月時雨れて(國性爺) 僞のなき世なりけりむら時雨(最明寺殿)

續後拾遺集・冬部、前中納言定家の歌に、「いつはりのなき世なりけり神無月、誰が誠よりしぐれそめけん」。

古の鎧にかはる紙衣さへ風の射る矢は通さざりけり(大原問答)

熊谷蓮生坊の歌に、「古の鎧にまさる紙衣風の射る矢も通らざりけり」とあるに據つたのである。

祈らずとても神や守らんとの御歌(簾簸)

金玉抄・菅公の歌に、「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん」。謠曲・班女にも出てゐる。

歌に詠むてふ文字が關 長門の秋の夕暮は、歌に詠むてふ文字が關(博多)

文字が關は古歌に詠まれた歌枕なるによつていふ。新勅撰集卷十九、雜歌四の部、入道前太政大臣の歌にも「春秋の雲居の雁もとどまらず、たが玉章の文字の關守」。文字は門司とも書き、國花萬葉記卷十三、長門國の條に「門司關＝赤間と門司昔は……長門路につづきて一つなり、……、門司今は豐前の內になれり」と見えてゐる。

馬に七箇の祕事、三箇の手綱五箇の鞍、陰陽の鞭、朝嵐・大風・小風・運び・延べ足・千鳥足・霰流し(小栗判官)

大坪流馬術の祕傳をいうたものである。船田和先(多喜治)撰・鞭之傳(寫本)に「陰陽の策の事＝陰陽の鞭は一體にして陰は意也、陽は業働て動く象也、用ろ鞭に意を添へて、用ろ所の事理一體をいふ義なり、陰中の陽、陽中の陰是也、又陰は靜にして鞭を用ひざるの意あり」と見えてゐる。朝嵐・大風・小風・運び足・延べ足・千鳥足・霰流は、何れも曲乘の足並の稱。此文落葉集卷五、競馬女踊に引用さろ。

おきもせず寢もせで露のたまたまも(壽門松)

新後撰集・卷四、秋歌上の部、宗尊親王の歌に、「小萩原夜寒の露のおきもせずねもせで鹿や妻を戀ふらむ」。

おもひたつ木曾の麻衣あさくのみ、染めてやむべき袖の色かは(兼好)

遁世を思立つて木曾路をたどり行くこの身は、墨染衣の袖淺く染めて止められぬやうに、深く思ひそめたことぢやとの意。風雅集・卷十七、雜下部に、「世を遁れて木曾路といふ所を過ぐるとて。兼好法師」とありて、この歌が載せてある。

かかれとてこそ生れけめ

「よしやよしかかれとてこそ云云」を見よ。

餓鬼は水を火と見るとや(娍)

和名抄・天地部・神靈類に「餓鬼＝內典云餓鬼、其喉如レ釘、不レ得レ飮レ水、見レ水則變成レ火」。

懸くる佛の御手の絲(曾根崎)

彌陀如來は衆生濟度の手引に御手に絲を懸けてゐられる。榮花物語に、「御堂殿御臨終の時、御手には彌陀如來の御手の絲を引かせ給ひ」。平家物語・小原御幸の條に、「一間には來迎の三尊おはします、中尊の御手には五色の絲を懸けられたり」。

景清はかく魚の鱗を眼に張り、賴朝を欺きたり(千疋犬)

鹽尻卷十九に、「世謂惡七兵衞景淸頼朝をはからんが爲に、………、眼に魚鱗を設ひ盲人の形となりて幕下を伺ひしといへり、按に……………、鱗を眼にあてはかりしは上總五郎兵衞尉なり(東鑑十二)、これらの古事世に出ざりし時、誤りつたへて皆景淸とせり」。ここの文に「斯く魚の鱗を眼に張り」とあるから、名張八郎爲勝が魚の鱗を眼に張り、盲目をよそほひ座頭となり、鶴還と變名したものであつて、鶴還とは竹本筑後掾の脇三味線彈き響者鶴澤三二の姓を利用したものであらう。

片削ぎの千木や内外に曇りなき(會稽山)

「片削の千木」はその條を見よ。風雅集卷十九、神祇歌の部、度會朝棟の歌に、「片削ぎの千木は內外に變れども、誓は同じ伊勢の神風」。

神は人の敬ふによつて威を增し、人は神の德によつて運を添ふ(烏帽子折)(百合若)

御成敗式目に、「神者依二人之敬一增レ威、人者依二神之德一添レ運矣」。謠曲・白髭に、「神は人の敬ふによつて威を增す」。

かんざきのたへ 建仁三年五月十三日に神崎の妙といへる傾城大內に參る由、定家卿の明月記に載せられたり(三世相)

〔神崎妙〕藤原定家撰、明月記に、「建仁三年五月十三日。雨降時時止、巳時參上御二向殿一、小時還御、遊女者座、神崎の妙すべりて顚仆、云云」。

聞きに北野の時鳥 聞きに北野の時鳥、初音を鳴きしその昔(反魂香) 聞きに北野の監畠(氷朔日)

聞きに來たに北野をいひかけたもので、「鳴け聞かん聞きにきた野の時鳥」といふ句に據つたのである。この句は傳說に、「鳴くかとて聞きにきた野の時鳥」としたところ、鳴くかとては疑の詞であるとて時鳥鳴かないので、「鳴け聞かん聞きにきた野の時鳥」としたら、忽ち鳴いたといふ。傾城反魂香のここの文に北野といへる語には、後に天滿天神の告をいひ出す伏線である。心中刄は氷の朔日に、きた野の藍畑といへるは、神明官(その條を見よ)附近は當時藍畑であつたからである。

衣笠山に白布引きはへ、夏の雪を御覽ぜし帝もあり(關八州)

衣笠山は山城國葛野郡衣笠村の西にある。寬平法皇仁和寺に御座します時、夏の雪景色を御覽なさらうとして、この山に白絹を張らされたと云ふ俗說がある。

金の冠を被ぬばかり、しやくは持病にありとかや(酒呑童子)

金の冠は金巾子の冠であつて天皇の御冠。「しやく」は笏を病の癪にいひかけて、世話に碎

「わがいもこ（吾妹子）の約、女を親んでいふ。ここの文は大和物語に、「昔ならの帝に仕うまつる采女ありけり、顔かたちいみじう淸らにて、人人よばひ殿上人などもよばひけれど逢はざりけり、そのあはぬ心は帝を限なくめでたきものになむ思ひ奉りける、帝召してけり、さて後又も召さざりければ限なく心憂しと思ひけり、よるひる心にかかりて覺え給ひつつ戀しく佗しくおぼえ給ひけり、帝は召しかど事ともおぼさず、さすがに常にはみえ奉る、猶世に經まじきここちしければ、夜みそかに出でて猿澤の池に身を投げてけり、かく投げつとも帝は得しろしめさざりけるを、事のついでありて、人の奏しければ聞召してけり、いといたうあはれがり給うて池のほとりにおほみゆきし給うて人人に歌よませ給ふ、柿の本の人麿、わぎもこがねくたれ髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞかなしき、とよめる時に帝、猿澤の池もつらしなわぎもこが、玉藻かづかば水ぞひなまし、とよみ給ひけり、さてこの池に墓せさせ給うてなむ歸らせおはしましけるとなむ」とあるに據つたのである。

雜（其の他の諸書）

引用の少きものを集林子の文の片假名順に收錄した。

秋風に鱸釣る松江の港　日の本出でし秋風の、立ちもかはらずその儘の、末だ秋風に鱸釣る松江の港に着きにけり（國性爺）

雅有卿集に、「世の中は唯あき風に鱸釣る、浦の苫屋を住みよかりける」。松江は鱸の名産地である。東坡の後赤壁賦に、「擧レ網得レ魚、巨口細鱗、狀如二松江之鱸一」。大明一統志卷九に、「松江在二（松江）府城北七十二里一、一名二吳淞江一、源出二大湖一、東注二于海一」。

あさくは人を思ふものかは（吉野忠信）

今昔物語・卷三十に、内舍人が大納言の娘の美貌を見て思ひ焦れ、遂にその女を奪うて馬に乘せ、奧州安積郡安積山に逃げ行きて住居してゐたが、女は容貌の衰へたのを恥ぢて、「あさか山かげさへ見ゆる山の井の、淺くは人を思ふものかは」と詠み、心細さに堪へないで、思ひ死にに死んだことが書いてある。

あしたたぬ神の昔の西の宮（西王母）

蛭子は生れて三年脚が立たなんだといふ。「あまのいはくすぶね」を見よ。西の宮は攝津國武庫郡西の宮町にある西の宮惠美須神社。

阿波の鳴門の波風も、渡りくらべて世の中を、目出度く悟る（兼好）

兼好法師の詠と傳ふ歌に、「世の中を渡りくらべて今ぞ知る、阿波の鳴門は波風もなし」。

天照大神に奉る四月九月の神御衣は、和妙の御衣廣さ一尺五寸、荒妙の御衣廣さ一尺六寸、長各四丈（振袖始）

本居宣長撰・玉かつま第十三卷、遠江國より太神宮に神御衣を織て奉る事の條に、「遠江國人内山眞龍がいへるは、かの國の濱名郡神戸鄕岡本村といふに機殿有て、年毎に四月と九月と神御衣を織りて伊勢内宮に奉る、その機殿はかの村に神氏日大夫といふ者、世世相傳へて年毎に新しく造る、萱葺の屋なり、神庫もあり、ふるめきたる造りざまなり、神御衣は年毎に三河國の大野村といふより、生絲を此岡本村に送り奉るを件の機殿にて織て奉る、和たへなりと云き」と見えてゐるから、巢林子當時もかくあつたのであらう。「にきたへ」「あらたへ」はその條を見よ。

天の下咎めて陳ねし大和歌、例もふりし雨乞の小野の小町（會稽山）

俗に小野小町の雨乞の歌と傳へられてゐる、「理や日の本なれば照りもしつさりとては又天が下とは」。とある詠に據つたものである。この歌は正保慶安頃の小野小町が雨乞の繪卷の中にも載り、新撰狂歌集（元和頃成）には、「日でりの年さる人のまゐる」。としてこの歌が載つてゐる。

雨降らば降れ風吹かば吹け（蟬丸）

一休の歌に、「有漏路より無漏路へ歸る一休み、雨降らば降れ風吹かば吹け」。

ありのすさみにくかりし（佐佐木）

「ある時はありのすさみに憎かりきなくてぞ人は戀しかりける」の古歌に據る。

あればある世の命（天神記）

新千載集卷十八、前大納言良冬の歌、「うきながらあればある世の習こそ今は我が身に思ひ知られ」。

異國のしんじが螺中より龍女を得たる其例（西王母）

「しんじ」は「じんし」（任氏）の誤。（南大門秋彼岸には任氏となつてゐる）。窻惡隨筆（延寶元年刊、伊有隣編）に、「見二閩越記一、其の略に云く、任氏の子あり、家貧しうして孝を以て稱せらる、釣りして一つの巨螺を得たり、中に一つの女子あり、既に將れて歸る、善く布を織る、識者ありて曰く、これは龍須布なり、重價を倍與す、任益々喜びて且つ以て親を養ふに足れり、或人の曰く、これ必らず龍女ならん、領下必らず明珠あらん、殺して取るべし。何ぞ止だ龍布の直のみならんや、任歸りて謀らんとす、女遂に龍に化して去る、今閩中に有二螺江一是れなり」とあつて、もと閩越記に載れる故事である。

急げば廻る瀨田鰻（反魂香）

古歌に、「もののふの矢橋の船は早くとも、急げば廻れ瀨田の長橋」とある句から、瀨田鰻へつづけたのである。「瀨田鰻」をも見よ。

一年三百六十日、紋日が三日云云

「三百六十日紋日が三日云云」を見よ。

一首の歌　君を慕ひて太宰府へ、たつた一飛梅田橋、跡老松の綠橋、別れを歎き悲しみて、跡にこがるる櫻橋、今に話を聞き渡る、一首の歌の御威德（天網島）

菅原道眞の詠歌、「梅は飛び櫻は枯るる世の中に、松ばかりこそつれなかりけれ」とあるをさす。この歌は榻鴫隨筆にも出てゐる。ここの文については、「飛梅」「あと老松の綠橋」

の世界は皆各自が其心識から造出するもので、實に吾人の心識を離れて他の諸法があるわけではない、悟の道も吾人の心識を離れて他に求むべきものでない、さるを悟の道をば吾人の心識を離れて外から求めようとするこそ誤れるもので、これぞ卽ち迷の始であらうと云ふのである。

さののくたち 佐野のくたち肴にて强ひ止めん、と詠み置きし古歌を吟じて凌げども（最明寺殿）

〔佐野の莖〕「くたち」は莖立で、菜の薹をいひ、おもに菘の薹をいふ。箋注倭名類聚抄に、「莖。久久太知、俗用莖立二字、蕓薹苗也」。夫木集に、「篠原や佐野のくたち肴にて、旅行く人を强ひとどめばや」。

澤水に上るも下る妻雲雀（殘靜）

新後拾遺集卷七、權大納言忠光の雲雀をよめる歌に、「影うつす野澤の水の底見ればあがるも沈む夕ひばりかな」。

さりともと昔は末も賴まれき、老は憂き身の限りぞと（鎗權三）

續古今集・雜下部、道圓法師の歌に、「さりともと昔は末も賴まれき、老ぞうき身の限りなりける」。

三百六十日、紋日が三日足らぬとて忘八は嘆く、女郎はそれ程客に厄介を變替に行く客もあり（女殺）

貞享曆は一年の日數三百六十日である。大阪遊廓の紋日は一年に庚申日を除いても三十三日（「もんび」を見よ）あつて、一ケ月平均約三日ある。女殺油地獄の上演された享保六年は七月に閏があつて、閏月の紋日は略されるので一ケ月の平均數の三日少いことになつて、その祝儀を得られぬを嘆き、又遊女は紋日が多い程多くの入費の厄介を客にかけ、客は遊女に賴まれて應諾しながら、費用の嵩む爲に約束を變改する者もあるとの意。

志賀の山越え頭は雪 顏の皺はささなみや、志賀の山越え頭は雪（雪女）

白髮の老人を云ふに、古歌「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山越」の句に據つたのである。ここの文は、顏に皺の多きを漣に喩へ、「志賀」にいひつづけたので、「ささなみや」は志賀の枕詞である。（序云、「雪ならば云云」の古歌は「花の吹雪云云」を見よ）。

しづのをだ卷繰返しくりかへし歸れや（天智天皇）

苧を績みて卷いたものを苧環と云ふ、賤の女の取扱ふものなれば、しづのをだ卷と云うたのである。ここの文は靜御前の歌「しづやしづ賤のをだまき繰返し、昔を今になすよしもがな」の句を應用したので、「繰返し歸れや」の序に云うたまでである。（序に云、靜御前のこの歌は義經記に載つてゐる。蓋し古歌に「古のしづのをだ卷繰返し、昔を今になすよしもがな」とあるを、我名にもぢつて作替へたのである）。

師弟となつて七足去る（聖德太子）

諺草に、「藝を習ふ人はまづ師匠をうやまひおそるべし、弟子は七尺去つて師の影をも踏むべからずとなり」。

正八幡大菩薩筑紫に御生の折からも、石上樹下の吉例あり（女夫池）

正八幡大菩薩とは譽田天皇（卽ち應神天皇）をいうたもので、應神天皇は筑紫の石上樹下（その條を見よ）で御生れ給はれた吉例がある、というのである。日本書紀・神功皇后紀に「皇后從新羅還之、十二月戊戌朔辛亥生譽田天皇於筑紫、故時人號其産處曰宇瀰也」。宇佐緣起に「十二月被定置之御産所、被造內裏、同十四日辛卯被懸御手於彼槐枝之時、王子御誕生」。貝原氏說に「宇瀰社在糟屋郡宇瀰村、所祭之神一座、八幡大神相殿四座、乃大神之産土也」。「石上樹下」を見よ。

白雪かへつて黑し 物識顏なる文字の講釋、理を付けていふならば白雪却つて黑しとも云ふ義あり（國性爺）

公孫龍の唱へた堅白異同の詭辯などに思付いたのであらう。綾錦・德元の俳句に、「何と見ても雪ほど黑きものはなし」。

しんじがら中より云云

「異國のしんじが螺中より云云」を見よ。

石上樹下 されば佛は石上樹下とて、石の上・樹の下蔭の宿も厭ひ給はねば（薩摩歌） 尼上の松の下やどりも石上樹下のいましめと、心とどめず行ひ（用明天皇） 正八幡大菩薩筑紫に御生の折からも、石上樹下の吉例あり（女夫池）

屋外の石の上または樹木の下に坐臥するをいふ。この句は漢文の佛典中に見當らない。雜談集・上に「盛年の頃樹下石上にしても修行して、因行を熟すべかりけりと、後悔すれども益なし」。明德記・下に「兄弟ながら出家して樹下石上の宿りをもなし」。「正八幡大菩薩筑紫に云云」はその條を見よ。

鶺鴒の鳥に習ひし妹背の道（娥）

「こひをしへどり」（戀教鳥）を見よ。

せたの長橋をとんどろとどろ、とどろとどろと蹈鳴し（懸物揃）

風雅集・卷二十、賀歌の部、兼盛の歌に「みつぎ物たえずそなふる東路の、勢田の長橋音もとどろに」とあるに據つたのである。

雪中の藁沓逆樣に履きたる例

「武藏坊辨慶が雪中の藁沓云云」を見よ。

先佛すでに去り、後佛はいまだ世に出でず（嵯峨天皇）

「先佛」は釋尊のこと。「後佛」は彌勒菩薩（「みろく」を見よ）のこと。

その名は言はじ名を問へば、父は長柄の田地持（二枚繪）

「物言はじ父はながらの橋柱、鳴かずば雉子も射られざらまし」の歌を應用したのである。この歌は攝津名所圖會・豐島郡雉子畷の條にも見えてゐる。播陽群談・卷八、野の部・雉子畷の條に、この歌を光照の詠としてある。狂言・禁野に、「父は長柄の人柱、鳴かずば雉子も射られまじきにと云ふ歌もあり」。

そも時は今五月の空云云

「時は今五月の空云云」を見よ。

そらに消えてはこれもまた、行方も

けた文である。此文句は橘庵漫筆卷五に、「芝居主竹田小田雲狂言の筋を思ひついて、門左衞門筆をとる、穗積以貫先生もその席に居られしが、段段作文するうち、金の冠被ぬばかりと書きさして筆をやめ、夜も深更に及びぬ、明日のことゝ門左衞門は歸れり、跡に以貫子と小田雲一つ蚊幬に臥して話に、扨扨門左が例の妙文筆をさしたり、併し金の冠被ぬばかりとは、町人の事蹟に狂言綺語ながら甚だしきに過ぎたり、明日書き直させ候べしと、小田雲申しけるに、以貫子のいへるは、いかさまけやけき言葉なり、定めて門左了簡あるべしと寐られける、翌日門左來りて、よべのあとを書かんと、金の冠被ぬばかり、しやくは持病にありとかやと續けたれば、兩人は慨然たりしとかや」とあつて、有名な文句である。

藏の戸出づる鶯

「春知り顏に七つ屋の云云」を見よ。

くれみぐさ 扨また月と花なくば何なかさしてくれみ草、山の外にといひけるも心につれて夕見草(十二段)

心をいふ。源俊賴撰・眞傳抄に、「花と月となくば何をかくれみぐさ、山の外にも雲のあらじを」。

黄帝革を以て鞠を作らせ蚩尤が首を表し、諸人の足にかけさせ調伏あり(持統天皇)

蹴鞠九十九箇條・蹴鞠之起之事の條に、「大唐にて鞠を始、黄帝の御敵蚩尤が頭也、其故は悪魔の大將災難の家主なり、上天之爲に敵國をまで人民の命を失、其身鐵にして却て矢太刀たたず思ひのままふるまふ、黄帝退治の術を失ひ給ひて天に祈り給ひしかば、無雙の相人出來て占ひて云、蚩尤が頭と象り物をあそばし給へと、大皇王の滅び給ふ樣を悉く申上間、彼博士申ごとくに鞠を拵て翫給ふ、程なく涿鹿の野にて蚩尤と合戰ありしかば、天のせめを象て鐵の身皆とけて、調伏の故に其處にて討たれ滅失せ畢云云」。

ぐわつしのゐりよう

「けつしのゐりよう」を見よ。

月支の遺龍 月支の遺龍といつし人、妙法蓮華經卷第一乃至八の卷までの經文の外題を書き給ふ(賀古教信)

ここに月支とあるは天竺を云うたのである。西域記に、「天竺此云レ月」。異朝法華傳記・卷八に、遺龍は并州人と書いてある。十訓抄・中卷第六、可レ存二忠直一事の條に、「天竺に烏龍といふ手書・佛法をそむく者にて、多くの物を書くといへども佛法の方には一文字をも書かずしてやみにけり、其子遺龍と云ふ者相繼いで、いみじき手書なりけるを、烏龍死ぬる時、汝あなかしこ、我が如く佛法の方の物といはん一字も書くなと言ひて失せにけり、かかる不善の者なれば、惡道に落ちて大苦惱を受けたりけり、遺龍父の遺命に從ひて深く佛法を背くといへども、國王の勅宣によりて心ならず法華經の外題六十四字を書く間に、其字六十四體の佛となりて、烏龍が落つる所の地獄に行きて苦患を救ひ給ふによりて、父得道のよし遺龍夢の告げを見たりけり」。

外面似菩薩、内心如夜叉(蟬丸)(鬮八州)

女人が紅粉を粧ひ、温順の相をしてゐるを見れば恰も菩薩のやうなれども、その内心は邪惡を藏して、夜叉の如く暴惡であるとの意。「夜叉」はその條を見よ。寶物集に、「華嚴經に曰く」として「外面似二菩薩一内心如二夜叉二」と見えてゐる。

勾踐は石淋を嘗め、會稽の恥を淸めし例(雪女)

支那春秋戰國時代、越王勾踐は吳王夫差と會稽山に戰ひ敗れて吳に捕へられ、吳王の石淋病の便を嘗めて吳王の機嫌を取つたが、後遂に吳王の軍を敗つて會稽の恥を雪いだ。「せきりん」をも見よ。

腰なは何ぞ日本一の大井川(丹波與作)

赤本・桃太郎に、「お腰の物は何ぞ日本一の黍團子」とある。巢林子は黍團子を大井川にかへたのである。

子は子なりけり鶯の(嫁䡮)

今鏡、村上の源氏、うちぎきの條、讀人知らずの歌に、「親の親ぞ今はゆかしき時鳥はや鶯の子は子なりけり」。

木幡山 雲に架橋・霞に千鳥、木幡山にあられども、こちや口無しとて音もせず(孕常盤)

山城國紀伊郡木幡山には山梔樹多く生茂したれば。以て口無しに言ひかけて答無き謎とする。新撰六帖・知家の歌に、「木幡山あるはさがなし口なしの、宿かるとても答へやはせん」。伏見常盤(寬永本)に、「木幡の里のことなれば、皆くちなしとて音もせず」。

戀しくは尋ね來て見よ法華經の、八卷が奥の九みやうかうたい(大覺)

「八卷が奥」とは、法華經・八卷ある其第八卷の陀羅尼品を云うたのである。「九みやうかうたい」は九第二皐諦一(諦また帝に作る)であつて、陀羅尼品の中の十羅刹女のことをいうてある條に見え、第九の羅刹女を皐諦と名づけ、譯して何所といふ。この羅刹女は天上人間來往自在であり、若し歸佛の後に從はば則ち諸法皆空無染にして、住着する所なきによつて何所というたのである。其他この歌の意明かである。(さてこの歌は、安倍晴明の生母といふ信太森の白狐が詠んだ歌の「戀しくは尋ね來て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」と構想同じうして別趣をそなへ、人のよく知れる歌である)。

戀せずば人は心のなかるべし、物のあはれこれよりぞ知る(三世相)

戀知らずの男はまことに落莫なもので、人としての生命がないといふべきである、物事にあはれを感じるも、この情緖あつてからこそ起るものであるとの意。藤原俊成の歌に、「戀せずば人は心もなかるべし、物のあはれもこれよりぞ知る」。

悟とて外に求むる心こそ 傳教大師の御歌に、悟とて外に求むる心こそ、迷ひそめけるはじめなるらん(蟬丸)

新後撰和歌集・卷九・釋教歌の部に、「悟とてほかに求むる心こそ迷ひそめけむ始めなるらめ」とありて、慈道法親王の御詠となつてゐる、これを傳教大師の歌としたのは思違ひである。さて一首の意は、吾人が認識する一切

や（百合若）

新千載集巻十八、雜歌下の部、前大納言良冬の歌に、「憂きながらあればある世の習ひこそ、今は我身に思ひ知らるれ」。

天子に父母なし 王子からからと笑ひ、孝行とは誰への事、天子に父母なしといへり（天智天皇） **島一箇所の天子は此大碓、天子に父母なし、むづかしい都より親持たぬ島がましと**（日本武尊）

天子は天地を父母とすれば、其他には父母はないの意。增鏡・草まくらの條に、「天子には父母なしと申すなれど、十善の床をふみ給ふも賤しき身の宮づかへなりき」。北史に、「清河王曰、天子無レ父」。

時は今五月の空、天が下しる瑞相ぞと（三國志）

白石祕書などに、明智光秀が愛宕山で、「時は今天が下しる五月かな」、といふ發句を詠んだことが見えてゐる。

所も萩の唐錦、故郷の空に飜す（國性爺後日）

元輔集にある歌に「秋の野の萩の錦を故郷に、鹿の音ながら移してしがな」。巣林子のこの文によつて、彼の出生地を長州萩と推定するは牽强である。

年ある御代のしるしには野にも山にも積る白雪と古歌を吟じて（關八州）

新勅撰和歌集・巻六・冬の部、内大臣の歌に、「あらはれて年ある御代のしるしにや、野にも山にも積る白雪」。

なかぬ烏の聲聞けば產れぬさきの我子戀しき（兼好）

六道輪廻の說によれば、我子に生れる者も烏の生れかはりかとも思はれ、闇夜に啼く烏の聲にその慕はしさを催するの意。道歌に、「闇の夜になかぬ烏の聲聞けば、生れぬさきの父ぞ戀しき」、とあるに據つたのである。

ながらのはしばしら 淚ながら餘所ながら、見置きながらの橋柱朽ち行く身こそ（二枚繪）

攝津國西成郡長柄の橋は古今和歌集にも見えて、古から歌枕となつてゐる。この文は宇治拾遺物語に、「朽ちにける長柄の橋の橋柱、のりのためにも渡しつるかな」、玉葉和歌集・巻十五・定家の歌に、「莫遮名のみながらの橋柱、朽ちずば今の人もしのばし」、などとあるこれらの歌句に據つたのである。

亡き魂よ結びとめんと下がへの褄（會稽山）

「結びとめてもとまらぬは云云」を見よ。

夏來ては錦にまさる麻の小衣

「何事もただ時ぞ云云」を見よ。

夏果つる扇の女 今は我名をつつみても、夏果つる扇の女の物狂ひ（歌念佛）

班女の故事で、男に見捨てられた女の意に、我名のお夏をきかせたのである。「あきのあふぎ」を見よ。

何事もただ時ぞと思へ夏來ては、錦にまさる麻の小衣（關八州）

この道歌は虛白齋撰・目の前・下巻にも、「何事も時ぞと思へ夏來ては、錦にまさる麻の狹衣」として引かれてゐる。

難波津の冬籠、今を春べの（二枚繪）

難波津の冬籠の季なれども、心は今を浮立つ春べのの意に、「難波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花」の古歌を用ゐたのである。（序云、この古歌を王仁の詠として謠曲・難波にも見えてゐれど、その實王仁の詠でなく、王仁よりも後人の詠であらう）。

難波に咲くやこの花（冥途飛脚）

難波をいふに、前條に擧げた古歌、「難波津に咲くやこの花云云」に據つたので、「この花」に遊女の名の梅川をきかせたものである。

汝月明かなり 兩眼は暗くとも汝月明かなり、和歌の妙を授けん爲（蟬丸）

藤原定家撰・明月記に、「去んぬる元久の頃住吉參籠の時、汝月明かなりと、冥の靈夢を感じ侍りしによりて云云」。

任氏が中より云云

任氏は「じんし」と讀むべく、「異國のしんじが螺中より云云」を見よ。

盜人を捕へて見れば我兒なり（二枚繪）

犬筑波、山崎宗鑑の句に、「盜人を捕へて見れば我兒なり」。

念力岩を通す（蟬丸）

李廣が叢中の岩を虎と思込んで射た矢は其岩に立込んだといふ故事で、深く思込んだ念力はよく岩をも貫くの意。

橋柱朽ちゆく身こそ（二枚繪）

宇治拾遺物語の歌に、「朽ちにける長柄の橋の橋柱、のりのためにも渡しつるかな」とあるに據つたのであらう。

花にまがひの櫻海苔、天をひたせば雲海苔に、月を包みて刈るとはすれど（出世景淸）

櫻花にまがふ色の櫻海苔の生えてゐる海に天を映じ浸せば、映る雲に乘つて刈る海苔に、海中の月影を包んで刈るとはすれどの意。新千載集巻二、春歌下の部、從二位成實の歌に、「櫻花空さへ匂ふ山風に、うつろふ雲の跡もさだめず」。近松のこの文は、櫻・雲（櫻花爛漫たるは雲に似る）・天・月の緣語を以て飾り、雲乘りの乘りに海苔をいひかけた海苔盡しであつて、雲海苔といふ名の海苔のあることは未だ聞かない。「櫻海苔」は紅藻類の海藻で、長崎・大分・土佐・遠江・駿河・相模・安房・志摩・上總地方に産し、體は下部扁壓、莖を有し、扁平で扇狀に叉狀をなし、枝は幅廣く楔形で光澤がある。

花の上漕ぐ舟と詠み置きし（隅田川）

西行法師の歌に、「象潟の櫻は波に埋もれて、花の上漕ぐ海人の釣舟」。

花の盛りは冬至より百五十日、又は彼岸の後七日などとは云へど、立春より七十五日大樣は違はず（賀古教信）

この文は、貝原篤信撰の大和めぐりの記、吉野山の條に出てゐる。蓋し出典は漢書であらうが思ひ當らない。

花ふみちらす鶯をうたんといひし人

知らぬ思ひ草（曾根崎）
西行法師の歌に、「風になびく富士の煙の空に消えて、行方も知らぬわが思ひかな」。

それ日本は神國たり（大掛物）
神皇正統記、冒頭の文にも、「大日本は神國なり」と見えてゐる。

大地世界を以て一面の碁盤となすといへる本文あり、‥‥三百六十目、一日に一日を送る（國性爺）
桔杌集（寛文八年刊）卷一、圍碁の條に、「橫川禪師の碁の記にいはく、……凡盤のうへは娑婆世界なり、……黑白の石は晝夜なり、三百六十目は一年の日數、云云」。晉書・天文志に「蓋天如二圍棊一、地方如二棊局一」。

誰が狩すとはなけれども、落ちくる肉（宵庚申）
誰も狩してゐるのではないのに、逃げ落ちて來る鹿に、平右衞門の病衰して瘦せ落ちる肉をいひかけたのである。

高天が原に神留まりまします（關八州）
延喜式卷八に、「今年六月晦之大祓爾祓給比淸給事乎諸聞食止宣、高天原爾神留坐皇親神漏岐云云」とあつて、大祓詞の中の文句である。

高御産日・生産日・事代主の八神殿（日本武尊）
延喜式　神祇官の八神、卽ち神御産日・高御産日・玉積産日・生産日・足産日・大宮賣・御食津・事代主の中の三神を擧げてかくいうた。

***たたく**　あさ江の水鷄よもすがら、叩かば叩け叩くとも、待人二人持たぬ身は（五人兄弟）
〔叩〕水鷄の鳴く聲は物を叩くやうに聞えるによつて、水鷄の鳴くをたたくと云ふ。紫式部日記に、道長が紫式部に心ありて夜訪れて逢はれなんだ翌朝の歌に、「夜もすがら水鷄よりけになくなくぞ、まきの戶口にたたきわびつる」。

妙の名は八卷ばかりにかぎらじな、松竹櫻當位卽妙（大覺）
この歌は和泉式部の詠であつて人のよく知るところである。「當位卽妙」とは、何物でも其位のままに妙であつて、卽ち毒でも毒は其ままに妙であるとの意。

玉すだれ小町が歌（隅田川）
小野小町が詠といはれる歌に、「雲の上はありし昔に變らねど、見し珠簾の內ぞゆかしき」。

盥の底拔けて影も宿らぬ　傾城こまめにたらひが女房、請出したらひの底ぬけて、影も宿らぬきぬぎぬの、親を悲しみ妻を戀ひ（壽門松）
盥の底拔けて水たまらねば月影も宿らぬやうに、請出さうとしたことの空しくなつたことを、千代能の歌、「千代能が戴く桶の底ぬけて、水たまらねば月も宿らず」に據つたのである。「ちよのう」をも見よ。

たんふく　唐土蜀のたんふくが古事など常常に聞きながら、うかうかと書散らす故に似せられ（川中島）
〔單福〕徐庶を云ふ、潁上の人で字を元直といひ、單福はその替名である。蜀主劉玄德に仕へて軍師となつたが、魏主曹操が單福の賢なるを聞いて己が臣たらしめようとして、まづ程昱の謀を用ゐて單福の母を呼寄せ、而して後單福の母の筆蹟に似せて、若し汝が魏に降るならば母は死を免かれる由を記して單福に送つた。單福これを讀んで母が差出したものと信じ、その手紙を玄德に見せて言ふやう、予もと御君樣と事を圖らうと思うてゐましたが、今は老母の危急を救はうとして心が亂れました、何卒御暇を下されませよと、遂に奔つて魏に至つた。詳しくは通俗三國志・三編卷之五、徐庶定レ計取二樊城一、及び卷之六、徐庶薦二諸葛孔明一の條を見よ。（序云、山本九兵衞版七行本のこの所に單富となつてゐるのは單福の誤であらねばならぬ）。

千座の置戶に置足はし（酒吞童子）
許多のあまつかなぎを祓物を戴す案の上に置き滿しの意。延喜式・卷八・大祓詞に、「大中臣天津金木乎本打切末打斷氏千座置座爾置足波志氏天津菅曾乎本苅斷末苅切氏」。日本書紀・卷一に、「卽科二素戔嗚尊千座置戶之解除一、以二手爪一爲二吉爪棄物一云云」。

月毛の駒に櫻狩（鑓權三）
「月毛」は葦毛の稍赤みた馬の毛色。「櫻狩」は近松作・當流小栗判官、小栗鬼鹿毛曲乘の段にも「明けの空行く月に鞭を揚げ、二千里刹那の駿馬の曲、之を名付けて櫻狩、父母の手綱といふとかや」と見えて、馬の息遣ひを知つて疾走さす鞭の打方で、馬術に於ける鞭祕傳の一。船田和先（多喜治）撰・鞭之傳（寫本）に「櫻狩の鞭＝しさり馬の下頭を鐙にて蹴ると有大相違也、櫻狩とは要名也、息合を知る事也」。なほこの次の文に「左右に輪をかけ違へ」とあるは、競馬の時合圖と同時に馬が馳出すやうに、互に左右より輪狀に乘廻し運動をつけおくをいひ、これも馬術の法である。

月にたれ寢て見よとてや伏見とは、舟に寄せたる里の名の（鑓權三）
伏見舟は臥し見舟の名に負ふが、さて月の下に誰と共にその夜舟に寢て見よとて、かく名付けたものか、その舟の名に寄せた里の名の伏見の意。伏見京橋のほとりは、大阪に往復する舟着場で、夜の舟・晝の舟或は都に通ふ高瀨舟、宇治川下る柴舟數數集り、川邊の家には旅客を留め三絃の聲も喧しかつた。

月の都の宮人の、亂や此の世に降る露（國性爺）
竹取物語に、かぐや姬の詞に、「おのが身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり、それを昔の契ありけるによりてなん、この世界にはまうできたりける」。「月の都」は、起世經に「佛告二比丘一、月天子宮殿、縱橫正等四十九由旬、四面垣牆、七寶所レ成、月天宮殿、純以二天銀天靑瑠璃一、而相間錯、一分天銀淸淨無垢、光甚明曜、餘之一分、天靑瑠璃、亦甚淸淨、……、亦有二大輦一、靑瑠璃成レ輦、高十六由旬、廣八由旬、月天子身與二諸天女一、住二此輦中一、天子壽五百歲、子孫相承、皆於レ彼云云」。

月も日も庭より出て庭に入る、廓の內の武藏野や（酒吞童子）
古歌に、「武藏野は月の入るべき山もなし、草より出でて草にこそ入れ」とあるを文にくだいたのである。

茅花交りの菫草（國性爺後日）
藤原公實の歌に「昔見し妹が垣根は荒れにけり、茅花まじりの菫のみして」。

露の身もあればある世の習ひか

三上山の百足を滅し(五人兄弟)

往昔三上山に大蜈蚣がゐて勢多の龍宮城に寇したによつて、田原藤太秀卿が之を射殺したこと溫故錄に見えてゐる。

霙霰と隔つれど、とくれば同じかすりゐの水(反魂香)

一休の道歌「雨あられ雪や氷と隔つらむ、とくれば同じ谷川の水」(この歌・古活字版みづかがみに載つてゐる)に據つたものである。そして「霙霰」に、奈良の名物霙酒霰酒をきかせ、酒の中に麴が溶けないで混つてゐるから、飛白を微井(その條を見よ)にいひかけたのである。

水たまらねば月影も宿定めず(吉岡染)

語釋部「ちよのう」を見よ。

みねうつ浪は三熊野の、那智のお山の南無觀世音大菩薩(嫁靜)

西國巡禮第一番の詠歌、「普陀落や岸打つ浪は三熊野の、那智の御山に響く瀧つ瀨」とあるに據つたのである。「みねうつ浪」とは、峰に打つ浪の響の意か、或は「岸打つ浪」の誤であらう。「ふだらくや云云」をも見よ。

みののを山の夕時雨、つれなき松も二葉より(吉岡染)

身のを美濃にいひかけて、續後撰集卷十七、正三位知家の歌、「いかなりしみののを山の岩根松ひとりつれなき年を經ぬらむ」の句に據つたのである。

***身をすててこそ浮む瀨もあれ**(振袖始)

空也上人繪詞傳・卷上の歌に、「山川の末に流るる橡殼も、身をすててこそ浮む瀨もあれ」。

むあくぜん 無惡善といふ三字大筆にて書きたる額御階にさしあげ(嵯峨天皇)

この後の文に、空海が無惡善をさがなくばよからんと讀んで、御代を呪詛した君調伏の證し詞云云と云うてゐるが、これは宇治拾遺物語卷三、小野篁廣才の條に、「今は昔小野篁といふ人おはしけり、嵯峨の帝の御時に内裏に札を立てたりけるに、無惡善と書きたりけり、帝・篁に讀めと仰せられたりければ、讀みは讀み侍ひなん、されど畏れにて候へば、え申し候はじと奏しければ、唯申せと度々仰せられければ、さがなくてよからんと申して候ぞ、されば君を呪ひ參らせて候なりと申しければ、云云」とあるの改作である。

武藏野の草より草に出て入る月(融大臣)

古歌に「武藏野は月の入るべき山もなし、草より出でて草にこそ入れ」。

武藏坊辨慶が雪中の藁沓逆樣に履きたる例(川中島)

義經記卷五、吉野法師判官を追かけ奉る事の條に、義經主從が吉野法師に追擊された時、辨慶が「たれも命惜しくは沓を逆樣に履きて落ち給へや」と言うたので、義經主從沓を逆樣に履いて逃去る跡をくらましつつ、吉野山の雪の中を落ち行くことが記してある。

結びとめ繫ぎとめん(曾根崎)

次條を見よ。

結びとめても留まらぬはあしが人魂(生玉)

拾芥抄上卷に、「魂は見つ主は誰とも知らねども、結びとどめつしたがへのつま、誦二此歌一結二所レ着衣妻一」、とあつて、人魂を見た時に呪ふ歌とされてゐる、それを應用したのである。なほこの歌に據つたものは、曾根崎心中・道行の文に、「二つ連れ飛ぶ人魂をよその上と思ふかや、……常ならば結びとめ繫ぎとめんと歎かまし」と見え、また曾我會稽山・第四・とら少將みち行の文に、「いや兄弟の亡き魂よ、結びとめんと下がへの、褄吹き返す夜嵐に」と見えてゐる。

胸のほむらは夜に三度、涙くらべん淺茅ヶ原(西王母)

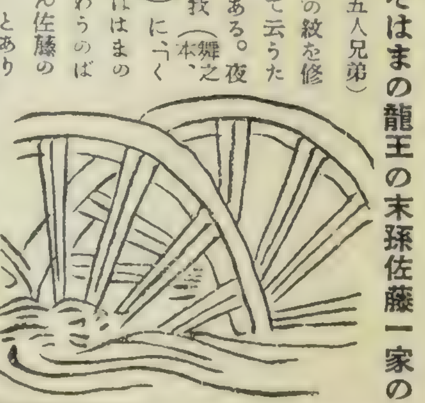
このあたりの文は傾城淺間ヶ嶽に應用されて、「恨みも戀も殘らねど、若しや心の變りやせんと思ふ疑ひ晴さん爲の誓詞をばなぜに煙となし給ふ、恨めしや胸の焰は夜に三度、こちの思ひは日に三度、烟くらべん淺間山、あれ御覽ぜよあさましや、邪淫の惡鬼は身を責めて、ナウ劒の山の上に戀しき人は見えたり、云云」と見えてゐる。傾城淺間ヶ嶽は元祿十一年作の狂言本で、日本西王母の作の方が古いから、ここに擧げるは不當であるが參考までに記した。

巡り見る浮世の波に比ぶれば、阿波の鳴門は磯小舟(賀古教信)

阿波の鳴門は海の難所と云はれてゐるけれども、これを渡世の艱難に比べたならば、淺磯を小舟で渡る程の易いものであるとの意。古歌(兼好法師の詠と云)に、「世の中を渡り比べて今ぞ知る、阿波の鳴門は浪風もなし」。

めぐりめぐりて行く水の、月をも共に汲入れて、筧に流す水車、これこそはまの龍王の末孫佐藤一家の紋(五人兄弟)

水車の紋を修飾して云うた文である。夜討曾我(舞之本、古活字版)に、「くるまははまのれうわうのばつそん佐藤のもむ」とありて、この繪が載せてある。近松の此文の「はまの龍王」は「破魔の陵王」であらねばならぬ。



物の名も所によりてかはる(佐佐木)

筑波集に、「物の名も所によりて變りけり難波の葦は伊勢の濱荻」。

山海のさちがへせし神代 かの山海のさちがへせし神代を今に見ることは、再び賴朝が秋津島の海山を手に握るべき兆ぞと(冷泉節)

彥火火出見尊は山の幸あり、兄の火照尊は海の幸あり。一日相約して弓矢と鉤竿とを交換して獵を試みられた故事をいふ。「ひこほほでみ」を見よ。

山田守らねど世にあきし僧都が身こそ悲しけれ(女護島)

續古今集・雜歌上の部、備中國湯川といふ寺にて、僧都玄賓の歌に、「山田もる僧都の身こ

もある（艶狩）・

古今六帖、紀友則の歌に、「わが宿の花ふみちらすとりうたむ、野はなければや此處にしもくる」。古今集・物名の部にこの歌を擧げて、「花ふみちらす」を「花ふみしだく」になつてゐる。

花や主 硯短冊取出し、花やあるじの詠歌を書き（千載集）

平忠度の歌、「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花やこよひの主ならまし」をさす。「旅宿の花云云」を見よ。

花より白む嶺の雲（國性爺後日）

秋篠月清集・二、（南海漁夫百首）春十五首ノ内、「初瀬山尾の上の鐘のあけがたに、花より白む横雲の空」。

花より外に知られじと

「さぞな儚む山櫻云云」を見よ。

濱の眞砂は盡くるとも彼等が涙はよも盡きじ（佐佐木）

石川五右衛門の辭世の歌、「石川や濱の眞砂は盡くるとも世に盗人の種は盡きせじ」をいひかへたのである。石川五右衛門のこの辭世の歌は巣林作の傾城吉岡染・下之卷の中にも用ゐてゐる。

はやだま まだ青柳の絲長く、結ぶや早玉の、おのが力にささがにの（吉岡染）

〔速玉〕熊野三所の内なる速玉男神をいふ。この文は寧師寺公義集の歌に、「君を守る神をあがむる契のみ、絕えずや代代に結ぶ早玉」とある詞によつたものであつて、「糸」から「結ぶ」といふ緣語を出し、「結ぶや早玉」と歌にある詞を用ゐ、「玉」に「玉の緒」にいひかけ、「緒」を「己が」にいひかけた文飾であつて、速玉男神に意味があるのではない。「歸る所を知らん云云」を見よ。

春知り顔に七つ屋の、藏の戸出づる鶯茶の布子（壽門松）

「七つ屋」は質屋である、質を七に書いて「ななつ」と訓んだのである。春着にとて質屋の藏より請出した鶯茶の布子といふに、玉葉集・春上部にある「年ふれど變らぬものは鶯の、春知りそむる聲にぞありける」、及び續後拾遺集・賀部にある「君がため谷の戸出づる鶯は、幾萬代の春を告ぐらん」、とある以上二歌の詞を取つて文をなしたのである。

引き寄せて結べば露の命にて、とくればもとの道芝に（大經師）

おさん・茂兵衛引き寄せて縛に就けば、最早露の消える間のもろき命にて、共にもとの京に引かれるといふ意に、道歌「引き寄せて結べば柴の庵にて、とくればもとの野原なりけり」に據つてかくいうたのである。

日の本の王孫も御母方は龍女にて、鱗のありし帝もあり（百合若）

このこと塵添壒囊鈔に見え、また巣林子作・松風村雨束帶鑑第一にも、「忝くも神武天皇の御母玉依姫は龍神の娘、我が國の皇統御母方は龍女ぞや」とあつて、荒唐無稽な說である。

ふしきのゆみ 二十四差いたる大中黑・頭高に取つて靠け、ふしきの弓のほこ短く射よげに見ゆるを左手に持ち（吉野忠信）

〔節木弓〕節ある丸木弓。判官物語、忠信吉野山合戰の條に、「節木の弓のほこ短を射よげなるを持ちたりけり」。

***ふだらく** 大阪順禮胸に木札の、ふだらくや大江の岸に打つ波にしらむ夜明けの、とりも二番に長福寺（曾根崎）

〔補陀落〕梵語 Potalaka である、印度西南方にある處の名で、觀自在菩薩の住所であるといふ。華嚴經に、「善男子、於二此南方一有レ山、名二補怛洛迦一、彼有二菩薩一名二觀自在一云云」。曾根崎心中のこの文は、西國巡禮歌・第一番に、「補陀落や岸打つ波は三熊野の、那智のお山に響く瀧つ瀬」の歌に據つたのである。次條をも見よ。

ふだらくや岸打つ浪は紀三井寺、人人それに違ひしとどつと笑へば（文武五人男）

西國三十三所順禮御札所第一番は紀伊國那智山靑岸渡寺（東牟婁郡那智村にある）で、本尊は如意輪觀世音である。順禮の詠歌は、「補陀落や岸打つ浪は三熊野の、那智の御山に響く瀧つ瀬」といふ。さるを第二番の紀三井寺とごたまぜて、「ふだらくや岸打つ浪は紀三井寺」と言うたから、人人それに違つたと哄笑したのである。

文月半の空、都方には亡き魂を迎へて歸る槇の露（女護島）

文月は陰曆七月をいふ、蓋し穗見月で、稻穗の見え初める月の義であらう。都方では七月の盆に寺に參詣して精靈を迎へて歸り、精靈は槇の葉に乘つて來るといふ。日次記事（黑川道祐撰）七月初九日の條に、「東山六道地藏詣、男女撞レ鐘而迎二聖靈一、各買二槇枝一而携歸、俗傳今月今日聖靈乘二槇枝一而來矣、云云」。

星の妹脊の天の川 雲心なき水の面、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも（曾根崎）

「星の妹背」は織女星と彥星との夫婦星をいふ。この二星は天の川の兩側に分れて、七月七日の夜のみ相逢ふといふ。「たなはた」を見よ。

菩提は山の小男鹿の、招けど更にこん泉寺（嵯峨天皇）

正覺を求める心の失ひ易きは、恰も山の小男鹿の招いても來ぬが如くに、金泉寺（阿波國板野郡板西村大字大寺にあつて四國遍路第三番）をいひかけたのである。寶物集中に「菩提は山のかせぎ繫げども留らず」。

時鳥聞きにきた野

「聞きにきた野の時鳥云云」を見よ。

紛はぬ花 げにも榮えある景色やな、紛はぬ花と詠ぜしは、咲かぬ梢もありつべし、槇も檜原もおしなべて、咲きも殘さぬ花の雪（冷泉節）

續拾遺集・卷十九、禪空上人の歌に、「夕日影さすかと見えて雲間より、紛はぬ花の色ぞ近づく」。

い（振袖始）
何の味も甘味もござるまいの意。「しやしやり」は「しやりしやり」であつて、歯切れよく、脆味なるを形容した語であらう。和訓栞に「俗語にあぢもしやしやりもなしといふは、味より轉じて阿字も砂舍利もなしといふ也、眞言家に阿字を銅にて鑄て觀ず、砂は土砂也といへり」とある説はいかが。巣林子作・傾城懸物揃には、「膠もしややりもなう」と書いてある。

預る物は半分の主 妬み悋氣の心なく、預るものは半分の、主は忘れてゐさんすか（壽門松）
預つた物は半分此方のものといふ諺によつたのである。この諺は毛吹草にも見えてゐる。

後は野となれ大和路（冥途飛脚）
「後は野となれ山となれ」といふ諺を「大和路」にかけたのである。

跡を濁さぬ水の面 新參の燕置付けて、跡を濁さぬ水の面、這出の蛙二合半（薩摩歌）
ここの文は、奉公人の出替りに新參の奉公人を燕に譬へ、立つ鳥跡を濁さずといふ諺を應用して、水の面といふて、這出の蛙といひつづけ、蛙に奴をきかせて、奴の給料は定まりの二合半の意にいうたのである。

あひえんきえん 猫にも人にも合縁奇縁（大經師） 不孝第一の茱を勘當不興もし給はず、如何なる合縁奇縁にや、親も及ばぬ御鴻恩（卯月潤色） 人には合縁奇縁、血を分けた親子でも中の惡いがあるもの（宵庚申）
〔合縁奇縁〕合ふも縁、奇なるも縁の義。心のあはぬ筈の者が其實合縁で、いとしう思うたり、心のあふ筈の者が其實不縁で、惡合うたりして、縁は不可思議なものとの諺。縁次第。佛典中に愛縁・機縁といふ語があつて、愛縁は恩愛の縁、機縁は衆生に善根の機あつて、教化を受ける縁の義であるが、これから轉じて出來た諺であらう。

尼御の血を狂はすは蛸藥師の出家衆か（傑靜）
俗説に蛸は女の血を狂はすといふによつて、蛸藥師とつづけ、蛸藥師は京都四條圓福寺をいひ、その坊様衆かというたのである。

網の目にさへ戀風が溜る 流れ渡りの情であろと、網の目にさへ戀風が、たまる荻の、荻の上風身にしみじみと（女腹切）
網の目にさへ風が溜るとの諺があるやうに、夜な夜な替はる客を相手とする遊女の身にも、なほ溜る戀があるとの意。毛吹草に、「網の目に風もたまるや春霞」。古今夷曲集に、「九重も春の霞の網の目に、風たまりてや今日のどかなる」。

洗物師の蛇の目後家 洗物師の蛇の目後家、鹿子結のお雪（蛙合戰）
眼光の鋭いを、諺に「蛇の目を灰汁で洗つたやう」といふ、その諺によつてかく名づけたのである。（なほここの文に「鹿子結のお雪」とあるも、伊勢物語の歌に「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子斑に雪の降るらむ」とあるに據つた名。またこの後の文に「森宗以」といへる醫者の名も、藥の盛り相違をきかせたのである）。

蟻は五日の雨を知る 蟻は五日の雨を知り、名將は百里の敵をはかるとかや（傑靜）
蟻は五日後の雨天を豫知す。新語園に蟻を記して、「よく雨を知り、また水脈を知りて集り居す」と見えてゐる。

生身に餌食 生身に餌食、天道人を殺さず（生玉心中） 生身に餌食あり、人間一人生るれば、乳房といふ天道の御扶持方（博多）
生きてゐる身には、餌食がついてまはると云ふ意の諺。天道様と米の飯はつきもの。

生身は死身 八年拜まぬ親の顏見たうなうて何とせう、生身は死身、若しひよつと死病受けたりとも（氷朔日）
生きてゐる者は必ずいつかは死ぬる身。生者必滅。

いざ鎌倉勢 辨慶を始め、何れも心底を定め、いざ鎌倉勢をここに引受け（凱陣八島）
ここの文は、「いざ鎌倉」といふ諺あるを、かけて云うたのである。この諺は一旦緩急の場合の意に用ひ、もと謠曲・鉢の木に、「これは只今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも此具足取つて投げかけ」とあるより出たのである。

石龜もぢだんだ 鯉鮒が蓮の花笠、しやんと着て踊る振かしほらし、石龜もぢだんだ、鰻鯰は不形なものよ（隅田川）
身分を知らないで、妄に他人の爲るを眞似るをいふ。毛吹草に「雁が飛べば石龜もぢだんだ」。後撰夷曲集に「元信、雁が飛べばぢだんだを踏む石龜の、こふはつむとも羽ははえじな」。

石に謎かける（女殺）
感應なきをいふ諺。

石を抱き淵に入鹿（大職冠）
石を抱き淵に入るを入鹿大臣にいひかけたのである。太平記卷一、賴員回忠の條に「今の世にかやうの事思ひ企て給はんは、偏に石を抱きて淵に入るものにて候ふべし」。韓詩外傳に「抱レ石而沈ニ于河一」。

急げば廻る（會稽山）
「急がば廻れ」ともいふ。

鼬の道切 鳥啼・鳶啼・雀の小踊・鼬の道切（百合若）
旅立に不吉として忌む。和訓栞に、「鼬の道を切るといふは、旅發などの時に忌める諺なり、往斷といふ義に取るなるべし」。羅盤祭擇・通故要略（享保七年刊）卷二に、「道行人の鼬の道きるを嫌ふ事。古書云、横きるは惡しと云ひ傳ふれども、左へきるは不レ苦、右へ通らは其道不レ可レ行」。

一か八か 若しあを馬の腹へなど生れては行かれぬか、但釋迦になられたか、一かばちかが知りた

を哀れなれ秋果てぬれば訪ふ人もなし」。

山の井の水は濁れる時しあれど、濁らで澄むや住む人の心(國性爺後日)

山の井は淺いから、汲めば濁り易い。新拾遺集卷十七、釋教部の歌に「法の水汲みてや見まし山の井の、濁りやすきは心なれども」。

病除の爲ならば南天と大蒜(關八州)

「南天と大蒜」を見よ。

ゆるぎの森も近ければ、いかでか鷺の寢を安く、寢る夜なくとも(持統天皇)

古今六帖の歌に「高島やゆるぎの森の鷺すらも、ひとりは寢じと爭ふものを」とあるに據つたのである。

よしやよしかかれとてこそ生れけめ、理知らぬ心やと(大原問答)

増鏡、承久の亂を記せる條に土御門天皇の御製歌、「浮世にはかかれとてこそ生れけめ、ことわり知らぬわが涙かな」。

夜夜は我もこがれて人戀ふる衞士の又五郎(弘徽殿)

續千載集・卷十二、戀歌二の部、寄二禁中一戀といふことをの題にて、權中納言爲藤の歌に、「夜夜は衞士の焚く火の焦れても人を雲居に思ふ頃かな」。

羅城門の變化が渡邊の伯母に化け、取られし腕取返せし(關八州)

渡邊綱が羅城門で鬼の腕を斬取り、これを祕藏してゐたが、鬼は伯母に化けて綱の宅を訪ひ、鬼の腕を見せられたきを懇請し、遂にその腕を奪つて飛び去つたといふ俗說に據つたのである。攝陽群談卷十に「渡邊綱出生古跡　川邊郡武庫庄村にあり、土俗此所出生の舊地と云へり、洛陽東寺の門に於て鬼神の腕を斬り、第宅に歸り戶を塞いで之を愼む、綱養育の伯母爰に來つて、其恐ろしき腕を見んと請ふ、綱不レ應レ之、伯母養育の昔を語り之を恨む、終に令レ見レ之、卽鬼女と成つて搏風を破り逃れ去る」と見えてゐる。ここに洛陽東寺の門とあれど、謠曲・羅生門には、羅生門で鬼の腕を斷つたことになつてゐる。

別を天外に求むれば蜀山の雲綠に隔り、魂を地下に尋ぬれば巴陵の水轉た流れて留らぬ(隅田川)

別離の悲しさに天を望めば雲烟茫漠として求めるに由なく、魂魄を地に尋ねれば流水滾滾として愁人の爲に留まること少時もしないの意。蜀は山國で雲霧重れば蜀山の雲といひ、巴陵郡は洞庭湖のある所なれば巴陵の水というて文飾としたのである。

別れを歎き悲しみて、跡にこがるる櫻橋(天網島)

菅公と別れを歎き悲しみ、跡にこがれて枯るる櫻に櫻橋をかけたのである。「櫻橋」「一首の歌」をも見よ。

小野とはいひて薄生ふ市原野(關八州)

袖中抄、十六にある歌、「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とはならじ薄生ひけり」に據つたのである。「あなめ」は、あやにく又はあなにくの意。この歌の上句は小野小町の幽靈の詠で、下句は在原業平の詠であるといふ。

(備考)　巢林子がその他の國書から脚色して取入れたものでは、賀古教信七墓廻には今昔物語の播磨國賀古驛教信往生語、源氏十二段長生島臺及孕常盤には十二段草紙、鎌田兵衞名所盃上卷には保元物語、吉野忠信には義經記、などはその主なものである。

(・)

諺に據れるもの

巢林子の文中に引用されてゐる俚諺は頗る多い。それ等はここに擧げた外に、隨時他の部類中にも說き、又通俗平易で述べるに及ばないものは省いた。

あがる雲雀の影を追うて水底に沈む(虎が磨)

衰運の者好運の者を狙ふことは、却つて身を滅すとの喩。

明けて悔しき浦島の(天網島)

「明けて悔しき玉手箱」、浦島太郎の故事)の諺によつたもので、豫想のはづれたのをいふ。

あさはらのぐわんやく　未だ敵の五百や三百は朝腹の丸藥、金平が病氣には敵の首こそ藥なれ(文武五人男)

〔朝腹の丸藥〕朝の空腹に丸藥を服んだやうに腹の足にならぬ義で、無造作にやつつける意にいふ諺。

足の裏の疵にこたゆる小笹原(博多)

諺に「脛に疵持てば笹原が歩かれぬ」といふに據つたもので、身に後暗い事ある者は、風に鳴る笹原の音にも心臆してたじろくとの意。

***足元を見る**　六百兩と言ひかけしに、無得心の長めに足元見られ、千兩無くては暇くれまいと、言募つて埒明かず(酒呑童子)

足元のあやふやを見ることで、卽ち心中に弱みのあるを察して、それに乘ずるをいふ。蓋し駕籠舁などが客の弱點を察して賃錢を强請したことから起つた諺である。

當つて碎くる男(壽門松)

諺に「男は當つて碎けぢや」といふに據る。近松作・丹波與作に「男は當つて碎けよぢや」。

味もしやしやりもおぢやるま

これは若駒道に迷ふの意。この古諺は平家物語巻九に「老いたる馬ぞ道は知るといふためしもあり」と見え、なほこの古諺と類似の文は、韓非子・和漢古諺・源平盛衰記などに見えてゐる。

生れた後の早め藥（會稽山）
生れた後には分娩を早める藥は不用なやうに、過ぎ去つた後の策は何の用もなさぬ喩の諺。

えてにほ 奥には得手にほふかいりんき（鑓權三） 冷泉は得手に帆・戀の追風便りよく（十二段）
〔得手に帆〕好機會に遇うて之を利用するに喩へた諺。鑓權三重帷子のこの文は、帆に法界悋氣（その條を見よ）をいひかけたのである。

襟に附く 京の小四郎といふ種がはりの大惡人、慾に耽り襟に附き、敵祐經が家の子同然に身を寄せ（會稽山）
懐の温かなのに附く義、富貴權勢ある者に阿附する意の諺。平假名盛衰記に「大名客の襟に附き、御勿體ですかえ、我等がやうなかびた襟には附かれまい」。

縁につるれば唐の物くいの八千度（國性爺）
「縁につるれば唐の物食ふ」といふ諺に、悔いの八千度をいひかけたのである。この諺の意は、何かの縁で疎遠な人の厄介になるといふことで、唐は遠の義の轉じたものである。毛吹草に、「縁につるれば唐の物をくふ」。

御釜を打起す やれやれお釜を打起した、これ程嬉しいことはなし（十二段）
好運にて家を興すこと。郭巨家貧にして母に充分の孝養を盡すことが出來ない爲に、我子を埋めようとして地を掘ること三尺、計らずも黄金の釜を掘り出したといふ故事に基いた諺であらう。東海道膝栗毛・二に、「成程さう行けばあいつめはお釜を起す話だが」。俚言集覽に、「お釜を興す。家を興す事、此釜は竈のことなり、竈をかまとよむなり」。

奥を聞かうより口聞け それそれ奥を聞かうより口聞け、どこに心が直つた（女殺）
兎角心にある事は自から口に漏れるものであるから、人の心の奥を聞かうとするよりも、口に語る事を聞けば眞相がわかるとの諺。

遲牛も淀、早牛もめぐる報の車牛（嵯峨天皇）
「遲牛も淀、早牛も淀」といふ諺に據つたもので、遲かれ早かれ遂には同じ果報の車牛との意。狂言・牛馬に「おそ牛もよど、はや牛もよどといふ、明日の今時分には追付かうぞ」。

鬼に鐵鎚煎餅屋 茶屋中・組中・駕籠の衆、國の侍交りしは鬼に鐵鎚煎餅屋の、伯母は小橋へ急ぎける（氷朔日）
國の侍即ち武士の交つてゐるのは「鬼に鐵棒」であるといふ諺をきかせて、鐵棒を鐵鎚煎餅屋にいひかけたのである。「かなづちせんべい」を見よ。「鬼に鐵棒」或は「鬼に鐵杖」といふ諺は、古くは可笑記にも、「況んや藝能あつて文武に志深からば鬼に鐵杖なるべし」と見えてゐる。國性爺合戰に「父の庭訓鬼に鐵棒」。

鬼に衣 彼の世話に申す鬼に衣といふ事は、この山から起つたげな（枕狩）
鬼が忍辱慈悲の僧衣を着けた意で、外形は柔和に見えて内心怖るべきを云ふ諺。本朝町人鑑に、「形は出家になれども、なかなか内心は皆鬼に衣なり」。

重荷に小附 戀の重荷に小附して、親子のあはれ打乗せて（壽門松）
負擔の更に増加する譬。後撰集・賀部の歌に「年の歎つむとするなる重荷には、いとどこづけをこりも添へなん」 吾吟我集に「思ひあまり外の人目も包むこそ、戀の重荷に小附なりけれ」。

***親子は一世**（氷朔日）（田村）
親子は一世の縁で、この世だけの睦びと云ふ。保元物語に、「親子は一世の契と申せども」。謠曲・熊野に、「親子は一世のなかなるに」。

親の涙は火炎となり其の子の功德を燒くとかや（隅田川）
愛着の道は菩提の妨となるを極言した諺。維摩經・問疾品に「於二諸衆生一、若起二愛見大悲一、即應二捨離一」。

恩の死はせねども、義理の死はする（大職冠）
命を捨ててまでも恩を報じようとはしないが、義理人情の爲には死ぬ者が多いとの意。毛吹草に「恩の死はせねども、情の死をする」。

かうにきる 「かふにきる」を見よ。

かうやろくじふ・なちはちじふ 近年高野に相勤め小姓廻しは致せしが、高野六十那智八十、きんか頭の若衆にて（薩摩歌）
〔高野六十・那智八十〕高野山では六十歳の老人がなほ若衆を勤め、那智山では八十歳の老齢でなほ若衆となつてゐるとの諺であつて、男色關係をいつたものである。犬子集に、「六十になれど心は若やきて、高野も今は戀の最中」。鷹筑波集に、「八十になる年ははづかし、那智邊にさもこそ戀のはやるらめ」。傾城禁短氣（寶永八年刊）二之卷に、「男色の至つて面白きは年行きの若衆なり、高野六十那智八十といふ事を知らずや」。嬉遊笑覽附錄に、「或說に、高野の紙屋谷と云ふ處より漉出る紙は一帖六十枚なり、今浪花に專ら傘を張る紙なり、又熊野牟婁郡小塚村より漉出せる紙は一帖八十枚なり、よつてかくいへりとあり、思ふに此語四十しまだの類にて、男色のことにはあらざるか」。

嚊が出花の相場が何時三百目に極つた（孕常盤）
出花とは茶の出花で、嚊が出花とは、茶の出花のやうに風味の好い所の意。當時京阪地方にて、間男の科料三百目といふ諺があつたので、かくは云うたのである。金銀座色町奢（正德三年刊）卷之六、齢はながく生玉の萬歲の條に、「密男は家ぬし借屋の男、親屋を取ても堪忍は致さぬと、只今御前へゆくになつての身ごしらへ、首打の知れた三百目であつかへば濟む事ながら、無いかねはほつても出ず云

い（嵯峨天皇）

もと博奕から起つた語で、半か丁かといふ程の意。兩方面のどちらか。

一子出家すれば九族天に生る（鳥帽子折）

一子出家すれば、その功德によつて九族の者天に生れるとの諺。尤草紙（慶安二年刊）上、うかぶものしなじなの條に、「一子出家、九族生レ天」。群玉集に、「法語云、一子出家、九族登レ天」。

一寸先は暗（會稽山）　一寸先は闇の夜（壽門松）

犬が食ふ　阿古屋も心打解けて、思ふあまりの小爭ひ、犬が食ふとやこれならん（出世景清）

俚諺に、「女夫爭ひ犬も食はず」といふを轉用したのである。

戌で丁六十、うろたへ歩いて棒にあはぬ先に、長吹せずと往にましよ（鑓權三）

諺に「犬もあるけば棒にあたる」といふに據る。

犬の長啼き（百合若）

俗說に、犬の長啼きは不祥の兆といふ。

犬も傍輩鷹も傍輩（賀古）

身分は違つてゐても互に友だちであるといふことで、往時大名の家に犬と鷹とを飼養したことから起つた諺。

＊**命を棒に振る**　熊の棗には棒を振る、己れは命を棒に振りたいな（隅田川）

命を失ふことをかまはぬ意。漢文の「捧ニ身命ニ」の「捧」を棒と誤り、棒だから振るを附けて出來た諺であらう。

憂き鹽ふむ

「しほをふむ」の條を見よ。

後指を指さる　無念千萬此の如く後指をさゝるとは知らなんだ（酒吞童子）

陰から批難される。義經記・八に、「父ともに劣れる者とて、傍輩たちに笑はれんぞ後指され家の疵なるべし」。

うすからきね　汗水流して組合ふとて何やら噺き呟いて、互に因果を晒屋の臼から杵とは此事（薩摩歌）

〔臼から杵〕臼は玉門、杵は玉莖で、その形などから喩へたもので、「臼から杵」とは、女より男を挑むこと。

氏無うて玉の輿（持統天皇）（日本武尊）

女子は家系卑い下賤な者の子でも美人に生れて貴人の寵を得たならば、玉の輿に乘り高貴の身となることがあるとの諺。

＊**氏より育ち**　人は氏より育ちかや（鑓權三）　手足は山のこけざるぢや、ほんに氏より育ちぞと、又さめざめと泣きけるが（丹波與作）　口と心が皆違うた、氏より育ちが恥かしい（氷朔日）

人の賢愚また人品の高卑などは、家柄筋目よりも躾方の如何によりて如何樣にもなるとの諺。古今夷曲集に、「給はりし栂尾の茶はすぐれたり、これやうぢより育ちなるらん」。

打つたり舞うたり　内の仕舞と小拂と、油うつたり舞うたりに、三人の娘の世話（女殺）　半兵衛料理に心は急く、打つたり舞うたり身は一つ（宵庚申）

一人して鼓も打てば舞もする義であつて、一人で種々の事を引受けて爲し働くをいふ。女殺油地獄のこの文は、油賣つたりに、打つたり舞うたりをいひかけたのである。

＊**うのめたかのめ**　欒特が事問はんとすれど、朋輩の鵜の目鷹の目（釋迦）

〔鵜の目鷹の目〕鵜・鷹は目鋭く物を凝視する、そのやうに或者の行爲を他から凝視してゐる者があるとの諺。根無草に、「何がな珍しき物見出さんと、鵜の目鷹の目にて探し求むれば」。

うはらたつもも　灸もすゑたし、卯はら辰もも背中に腹、商賣にはかへられず（反魂香）

〔卯腹辰股〕灸の忌日で、卯の日には腹に灸をすゑず、辰の日には股に灸をすゑず。諺に灸の忌日をいふに、「卯腹辰股酉背未頭申尻」といふ、もと給事から出た詞であらう。灸すゑ曾我に、「如月や二日はよき日ぞと曆開けば、成る日とや、なるとはならずと思ひたつ卯腹辰股、とらが背中といひ笑み顏の」。

馬が合ふ　小身なりとも侍に緣組みたい、なんぼう分限者金持でも、町人とはうまが合ふまいと（壽門松）　猪熊などを狩出し、物頭にうまあひつけ、鏑の遠鳴させざるが殘念なり（冷泉節）

意氣投合する。うまく話が合ふ。この諺はもと馭者の心に馬の氣分が投合する意で、馬術詞より出たものであらう。傾城禁短氣（寶永八年刊）卷之二に、「もの堅き話は根がつづかず、氣をかへて京大阪の色話、いづくの者もうまが合うて、今まであくびしたる人人一所へこぞりよりて」。

＊**馬が太鼓打つ**　そこの親仁ばかりは七十六であの氣性、午の年に當つたら太鼓打ちやろと笑ひける（百合若）

牡馬がさかつて陰莖を勃起させ、腹に打上げ當てるをいふ。「馬や太鼓打て、よい女房よんでやろ」と云ふ俚謠もある。

馬がでんでん打つ　あれ馬がでんでん打つわいの、ああ怖やとぞ逃げにける（雪女）

前條に同じ。「でんでん」は太鼓の音を云ふ語。

産まずの數ならば、根を掘る竹の伏見町（卯月紅葉）（卯月潤色）

俗說に石女（子を産まぬ女）死ぬれば、冥土にて羅刹に爪を拔がれて、竹の根を掘らされると云ふ。竹の節に伏見町をかけたのである。

馬に任する道しるべ、これは若駒（會稽山）

古諺に「老いたる馬ぞ道は知る」といふが、

闖入嚴しき御門を忍び、築地を越え垣を越え放埒のしかた、剰へほてつぱら壁に茶壺とやら、今になつてお暇下されとや（娍）

〔壁に茶壺〕女の懷姙して腹脹れてゐるの喩。ぼてれん。

壁に耳 二階には梅川が、心をすます壁に耳、漏るるぞ仇の始めなる（冥途飛脚） 常盤夢とも辨へず、なう恐しや壁に耳、弓手も馬手も平家方（烏帽子折）

壁に耳が附いてゐるやら知れぬとの義で、何人がどこで聞いてゐるやら知れぬとの喩。平治物語・光頼卿參内の條に、「壁に耳・天に口といふ事あり」。詩經・小雅に、「君子無㆓易由㆒言、耳屬㆓于垣㆒」。

かややのあめ 佛法と萱屋の雨は出て聞けと（宵庚申） 藤の木柱萱屋の雨、人こそ知られ屋の内に、直で立つたる人はなし（卯月潤色）

〔萱屋雨〕萱屋に降る雨は屋内では雨の音が聞えない。「佛法と萱屋の雨は出て聞け」「藤の木柱」をも見よ。

***からすなき** 烏啼・鳶啼・雀の小踊・鼬の道切り（百合若） あはれあはれの烏啼き、心に懸る横雲の、立休ひつ立戻り（賀古教信）

〔烏啼〕烏が頻に鳴くは凶事を報ずるものとして忌んだものである。諺草に、「烏鳴。俗に烏の鳴くを凶事として忌事とす、容齋隨筆云、北人以㆓烏聲㆒爲㆑喜、鵲聲爲㆑悲、南人聞㆓鵲噪㆒則善、聞㆓烏聲㆒則唾而逐㆑之、至㆓於弦㆑弩挾㆑彈擊使㆓遠去㆒」。「鳴く烏人の末期を知らす」をも見よ。

唐へ投金 「唐へ投金」を見よ。

借る時の地藏菩薩 借る時の地藏菩薩に捨てられ、返す時の閻魔の廳、どう言うて脱れうと（反魂香）

借る時の地藏顏、濟す時の閻魔面と云ふ諺を應用したのである。狂言・胸突に、「誰と申す者に金銀のあまた取替へてござるが、再再催促致せども今におこしませぬ、今日は某が自身參り是非とも算用致させうと存ずる、まづ急いで參らう、いや誠に世話に申す借る時の地藏顏、濟す時の閻魔面とはよう言うた物でござる」。

雁一疋さへ矢は三錢 民の世話に雁一疋さへ矢は三錢の喩（蛙合戰）

毛吹草に、「雁は八百矢は三文」。

***木から落つ** 思ひがけなき男心、木から落ちたる如くにて（天網島）

「木から落ちた猿」の諺をきかせたのである。この諺は文選に出で、吾吟我集などにも見えてゐる。生玉心中に、「私や木から落ちた猿、親方さん頼みます」。

鬼神に横道なし（振袖始）

鬼神は條理正當に缺けたことを爲さない。この諺は謠曲・鏡旭にも出てゐる。

氣違の零さぬ水（女楠）

「そなたこそ狂人よ云云」を見よ。

きてはなこくる 行きつ戻りつやすらへば、番の者ども聲聲に、立つまい立つまいお通りやれ、お通りなされと寄付けず、木ではなこくる男ども、梅ばかりこそ色香なれ（井筒）

〔木で鼻こくる〕「こくる」は「踏みこくる」「張りこくる」「言ひこくる」などいふこくるで、「木で鼻かみこくる」の義。木で鼻をかんでは紙とはちがつてしなへやうがないやうに、我關せずでさつぱり情愛のないのをいふ。俚言集覽に、「木で鼻をこくつたやう。さつぱりした事」。

きてはなもぐ 彼奴は木て鼻もぎどう者、ただは言ふまじ、濡れかけてだまして問はんと思案する間に（冥途飛脚）

〔木で鼻捥ぐ〕前條を見よ。ここの文、「もぐ」に「もぎどう者」をかけたのである。「もぎどう」はその條を見よ。

衣は紅梅・魚は鯛・・・・・・・・人は武士（堀川波鼓）

尤の草紙、物のかしらの品々の條、一休和尚の狂歌に「人は武士・柱は檜・魚は鯛・小袖は紅梅・花はみ吉野」。

杵で當り杓子で當る お心に從はぬ怨みを杵で當り杓子で當るお仕方か（淀鯉）

杵でも杓子でも有放題の物で當る義、何につけかにつけ腹立ちがましう當ることにいふ諺。俚言集覽に、「杵にあたり棒にあたり。（演義文）提㆑鷄罵㆑狗」とあるも、言ひやうを違へた同義の詞である。

巾着の風 一尺五寸の手拭さへ買ひかれる此身代、巾着のいかのぼり、思へば無念千萬なり（賀古教信）

巾着が輕くて、紙鳶のやうに風にまひあがるとの譬であつて、財嚢の空虚なるをいふ諺。野郎蟲（萬治二年刊か）村山久米之助を評せる條に、「あづまが座敷つきを此人にあたへたらば、洛中のへうきんの巾着は皆いかのぼりなるべし」。

口が上る これ仁三樣たんと口があがつたの、あんまり鯉鯉と言はんすな（淀鯉）

しやべり方が上手になる。惡口などが巧みになる。

口に針 口に針ある苦い顏（天網島）

言語の中に險惡な意を含めるをいふ。

口を聞こより奧 おろせが返る大門や、口をきこより奧樣の、深きなさけや立歸る（夕霧）

「奧聞からより口をきけ」といふ諺を逆にいひ。奧樣にいひかけて文を飾つたのである。この諺は毛吹草にも見えて、人の心の奧を聞かうとしたとて語るものでないから、その言ふところを聞いて察せよとの意。

***苦は色變ゆる松の風**（薩摩歌）

苦は松籟を聞く世捨て人にもあつて、ただ苦の品が變つてゐるばかりで、苦の無い者は無いとの意の諺。持統天皇歌軍法に、「苦は色變ゆる松が嶋」とあるは、風を嶋にもぢつたの

云」。女敵高麗茶碗・上に、「重きが上の小夜衣、これさへ三百目とは誰がいひそめし折紙ぞ、近頃沙汰の限りなる了簡なり」。亂脛三本鑓・享保[illegible]年刊・六之卷、娘子の男だての條に、「京大阪の間男さへ三百目ぞかし」。近松作・平家女護島・第三に、「龍宮の美人局(つつもたせ)三百目の玉章」とあるのも、間男の過料三百目をきかせてかく云うたのである。

餓鬼も人數　やあ餓鬼も人數、したらしい事ほざいたり(國性爺)

毛吹草・卷第二、世話の題下に、「がきもにんじゆ」とあつて諺である。故事要言に、「物の數にもならぬものと雖も、時ありては便となる事ありといふ心なり」と見えてゐる。餓鬼は餓ゑた亡者をいふ。

＊籠の鳥(かご)　悲しいことになり果てて、籠の鳥になりました(丹波與作)　籠の鳥なる梅川に、焦れて通ふ里(さと)雀(すずめ)(冥途飛脚)

身の自由ならぬに譬ふ。また遊女に譬ふ、蓋し抱主に拘束されて自由の身ならぬに由る。朱雀遺日鏡(延寶九年の序がある)上卷、藁の條に「籠の鳥かやうらめしやと相見まほしく、通ふおてきの心中げにことわりなり」。

歌人は居ながら諸國の手配り(かじん)(女夫池)

諺に「歌人は居ながら名所を知る」。この諺は名所和歌物語の序にも見えてゐる。

稼ぐに追ひ付く貧乏なし(かせ)(振袖始)

能く勤勞すれば貧乏と遠ざかるとの意の諺で、博多小女郎浪枕にも「稼ぐに追ひ付く貧はなし」と書いてゐる。左傳・宣公十二年、「箴レ之曰、民生在レ勤、勤則不レ匱」。

＊かぜくふ　背の中には酒飲んで、風くはろるな覺られな(松風)　はや風を食うて、天皇は神璽寶劍内侍所を帶し行方知れず(非箇)

「風を食(くら)ふ」ともいふ。様子(やうす)また素振(そぶり)を味ひ知る意。物の様子や素振によつて密事などの露顯したことを豫知するをいふ。蘆屋道滿大内鑑にも、「それかと疑ふ手がかりも候はず、察する所風をくらひ當地を去りしに疑なし」。

＊かたがいかる　びらり帽子に加賀菅笠、大振袖の後帶、どんな者でも見返りて、お供に附いた我等までほんに肩がいかつたに(卯月潤色)

〔肩が怒る〕肩が稜起する義。肩身廣く思ふ。「肩が怒る」の反對の詞を「肩がすぼる」といふ。博多小女郎浪枕に、「戀しき風の吹立つる柳町には來(きた)れども。金銀なければ肩すぼり、おのれと心おく田屋の」。

肩でかぜきる　肩で風切る空(から)ぞめき、位を問ふは田舍客(女殺)

〔肩で風切る〕肩身廣く風切る義で、威勢よきをいふ。好色二代男(貞享元年刊)卷之一、心を入れて釘附の枕の條に、「薄雲様の御迎に御紋附の傘角助がさしかけ、肩で風切つて散しぬる粧は玉雨枝無き白梅落つと詩人などの詠むべき所なり」。

肩(かた)も怒(いか)る　是でこそ女房の肩も怒るわいの(夕霧)

「かたがいかる」を見よ。

鐘打(かねう)つ　野上(のがみ)通ひを悋氣せまいと、そこで鐘打て、鐘を打たいの(隅田川)

爲慣れたわざを止める意にいふ諺。俚言集覽、鐘打の條に、「〔夏山雜談〕何にても仕馴れたる業をふつと止むる事を鐘打つと云ふ諺あり、御八講などの論議の時詳義師鐘といへば、威儀師磬を打鳴らせばはたと論義を止むるなり、此意なるべし、源氏花鳥餘情にも此意見えたり」。

かはかみか　ええこなたは皮か身か合點が往(い)かぬと、顏䫌(かほしかめ)め立つて入るを引留(ひきとど)め、それは親父廻氣(おやぢまはりぎ)な(歌念佛)

〔皮か身か〕皮は皮相の意、身は内心の意。うはべの親切か或は内心から出た親切か。

かはだち　まことに川だちは川にて果つる、首の強きは首ゆゑ果つるとどつと笑ふ(吉野忠信)

〔川立〕川邊に生ひ立つこと。川邊に育つた人。「川だちは川にて果つる」は諺である。俚言集覽に、「川だちは山立の立なり、ソダチの義にて產の字の意なりといへり」。毛吹草に、「川たちは川にて果つる」。淮南子・原道訓に、「夫善游者溺、善騎者墮、各以ニ其所レ好、反自爲レ禍」。

川流れであらうが瓢簞であらうが(吉岡染)

輕くうきうきした風來の身に喩ふ。蓋し瓢簞の川流れといふ諺によつたのである。毛吹草に「あつき日や瓢簞しばしば川流れ。徳元」。

＊かふがしやりになる　首は首・胴は胴、甲が舍利になるとても(薩摩歌)　かふが舍利になるとても、親王を助け奉ると(持統天皇)

〔甲が舍利に成る〕「甲」は頭の甲卽ち頭蓋骨。「舍利」は梵語(Sarira シャリーラ)の音寫、靈骨或は骨身と譯す、俗に人を火葬して骨灰の中に殘る米粒の如きものを云ふ。頭蓋骨が碎けて舍利ほどに成る。

かひをつくる　房若も悲しさうにつくづく見て、おりや樊噲ぢやといふ顏に貝を作るぞ哀れなる(栬狩)

〔貝を作る〕泣顏をする。泣く時には口が蛤貝のやうにへの字形になるより云ふ。源氏物語・明石の卷に、「今日の御送につかうまつらぬことなど申して、かひつくるもいとほしながら」。

＊かふにきる　御使をかふに被て慮外をする事侍の法なるか(大磯虎)　當家に敵對我が威光に恐れぬは、佛をかふにきる故(女護島)

〔甲に被る〕かさにきるともいふ。威勢ある者を頼みとしその威をかりて勢づく。

かべにうまのりかける　壁に馬乘掛けし今日のお成(宵庚申)　壁に馬の乘りかけては明くべき埒も明かぬもの(女腹切)　壁に馬乘かけ、誰を斯(か)うとの智慧もなし(井筒)

〔壁に馬乘掛ける〕豫想してゐない突然な事にでくはして當惑するに喩ふ。唐劉禹錫文に、「其難如ニ頓策レ驚進ニ壁面一」。

かべにちやつぼ　奉公の身をもつて

は我が戀ゆゑ（薩摩歌）

坊主が憎ければ袈裟まで憎いといふ諺によつたのである。毛吹草に、「坊主が憎ければ袈裟まで憎し」。北條時頼記に、「法師憎めば袈裟まで憎い」。

下駄を預く とても叶ふまじと御覽じ、奉公せよ召使はんなどと下駄を預け給ひしが（天智天皇）

かかりあひをつける。我が利益の爲には氣に入らぬ者にも緣をつけて誘引するをいふ。

***けらはらたつ** 百連公に奉らば百連は鶫の喜び、少將はけら腹立ち、そのほてつぱらくり拔いてやらんものと（隅田川）

〔螻蛄腹立〕螻蛄は鶫の好物である、螻蛄が腹を立てば鶫が喜ぶといふ諺によつたのである。狂言記・富士松に、「螻蛄腹立つりや鶫喜ぶ」。

毛を吹いて疵を求む（源義經）

藪をつついて蛇を出すと同じ意の諺。韓非子に、「不三吹レ毛而求二小疵一、不三洗レ垢而察レ難レ知」。

***ごくに立たぬ** 肝心の時には念佛といふものも何のごくに立ちませぬ（反魂香） えゝごくに立たぬ根性と、涙をうかめ齒ぎしみし（氷朔日） かこぐにもたたぬ父めを持つて、はいや冷いめをするな（天網島） おばば垣を結ひ圍ひして何時までの住家、ごくに立たぬ事する人と（蛙合戰）

何の額にならぬ。役に立たぬ。蓋し「ごく」は語句で、言句に立たぬ義か。和訓栞「ごくたふ」の條に「ごくにたたずといふは不レ堪二言句一の義なるべし、言語道斷といふが如し」。（俚言集覽には「穀につかず、穀にたたずとも云」と見えてゐる）。

五月五日の一夜さを女の家といふ

拾遺和歌集の部、「さつきいつかの一夜さ云云」を見よ。

轉けても土を摑かんで起きる（博多）

轉けても徒手では起きぬ意で、慾心深きをいふ。日本永代藏卷二、借家大將の條に「躓く處で燧石を拾ひて袂に入れける」とあるのと同意。

こじりがつまる 方方の屆金が不埒になり、あたる所が嘘八百、いかうこじりが詰つて來た（冥途飛脚） さげたる油の二升入、一しやう差さぬ脇指も、こよひこじりの詰りの分別（女殺）

〔小尻が詰る〕身動きができぬと云ふことで、おもに金錢の融通のつかぬことに云ふ。京童・六に、「昔の劍は今の菜刀にていよいよ鏽び衰へ、はがねを鳴すことあらねば誰に身をとはるるよすがもなく、小尻詰りぬれば浮世をしのぎ難く」。

こしをよぢらすとも

「さまがみやげの菅笠云云」を見よ。

碁勢弓力は格別（千疋犬）

智者必らずしも碁に强いわけでなく、强力の者必らずしも强弓をひくわけでなく、別才別力によるとの諺。野語述說に「棊勢弓力、言下棊者不レ係二於知之有無一、而別有二此知一也、弓亦不レ關二於力之强弱一、而殊有中此力上也」。

牛蒡も身祝ひ 娘は土器・牛蒡も身祝ひ、太夫樣も御全盛（壽門松）

娘は土器（その條を見よ）の緣で、毛牛蒡を聯想して、「御坊も身祝ひ」の諺にいひかけ、そして牛蒡は男の勢を增すといふ意より、太夫樣も御全盛というたのである。

これに懲りよどうさいばう これに懲りよどうさいばう、ほんに孫子に傳へても、主の娘と懇ろなど駿河の富士と一里塚（歌念佛）

撮棒に打たれて懲りよの義。懲りよの意にいふ諺。「どう」は「どう山伏」「どう掏摸」などの「どう」と同じもので、語氣の强まる時に冠する語、撮棒は木又は鐵で作つた棒で、棒を坊に通はして、「どうさいばう」と擬人名にしたのであらう。地方によつては「これに懲りよ嘲齋坊」といふ所もある。

牛王の裏に誓紙一枚書く度に、熊野の烏がお山にて三羽づつ死ぬると、昔より言ひ傳へしが（天網島）

この迷信はかなり昔から傳はつたもので、明和頃の川柳にも、「熊野では今日も落ちたと埋めてやり」といふのがある。この川柳の意も、熊野牛王の誓紙に誓約を書く者が多いので、今日もその爲に熊野の烏が落ちて死んだから埋めてやりといふのである。「ごわう」をも見よ。

子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪はなし（大礒虎） 子を棄つる藪に夫婦の二股竹（天網島）

困窮しては最愛の子でも藪に棄てるべけれども、己が身を棄てることは出來ないとの諺。御前義經記（正德二年刊）に、「折柄ならぬ貧しさ、子を棄つる藪はあれど身は棄て難くして、手形の印に金子五兩請取り奉公にやりぬ」。

蒟蒻の錢ぢやとて砂にして（丹波與作）

「蒟蒻は睪丸の砂拂」といふ諺をきかして云つたのである。（蒟蒻が睪丸の砂を取るわけではないが、蒟蒻玉を煮て搗攪ぜ、水を加へ踏んで糊とすることからから云ふ諺ができたのであらう）。江戶・深川蒟蒻島のことを書ける南鐐堂一片撰の書に、「すなはらひ」（安永四年刊）といふのがあるも、蒟蒻が砂拂になると云ふ諺から取つた書名である。

細工はりうりう仕上を見よ（加增曾我）

今も用ゐられてゐる諺である。俚言集覽に、「細工は流流しあげを見やれ。（北條時分諺留）細工は流流仕上げを見よ」。

さいたらばたけ 未來は地獄も極樂も、さいたら畠へ遣らうとも、お心一つの情ぞと（五人兄弟） 神道けがれの生首、佛道には五體不具、どちらつかずのさいたらばたけと打笑ひ（聖德太子） 鵺といひし獸の帝を惱し奉る、賴政勅諚蒙つてたんだ一矢にころころころ、落つる所を猪の隼太九刀でさいたら畠、

である。毛吹草に「苦は色をかゆるや花に雨と風」。また古歌にも「波の音きかじと入りし山の奥に、苦は色かへて松風ぞ吹く」。

桑名の衆 めでたや今の湯上りは長長の中風病み、なほるも道理桑名の衆（百合若）

伊勢國桑名の人。ここの文は、桑で造つた物をつかへば中風痒に罹らぬといふ俗説を應用して、かくいうたのである。諺に「桑の木の杯で酒を飲むと中風に罹らぬ」といふ。

くはばら 耳を塞げば電光眼に燒鐵さす如く、聲を力に桑原桑原、雲雷鼓聲電念彼觀音、臍を隱せと泣喚く（天神記） 御殿も搖ぐ雷聲、わつとひれふし女房達、世直し世直し桑原と、生きたる心地はなかりけり（振袖始）

〔桑原〕雷鳴の時に落雷の災禍を避ける爲に唱へる咒語。菅公の靈を火雷神とし、菅公のしろしめした桑原には落雷なく、よつて雷は桑を忌むといふ俗傳によつたものである。和訓栞に、「くはばら。雷鳴に必ずかくいふは、堂上の桑原は菅家なるを以てなり、菅神を火雷神とするよりの事といへり」。皇都午睡（西澤文庫）三編上卷、雷除桑原の條に、「桑原といふ處は昔菅原のしろし召たる所也、延喜の霹靂その後度度雷の落たりしに、此桑原には一度も落ちず、雷の災なかりしとかや、故に京中の兒女子雷鳴時は桑原桑原と云て咒しけると也」。日本振袖始に、「さしも猛しき素戔嗚も、雲を放れし雷公の桑の立木に挾まれて苦しむ形もかくやらん、しをしをとして詞なく」。

首に懸けたか時鳥 這出の蛙二合半、首に懸けたか時鳥（薩摩歌）

時鳥の啼聲「ほぞんかけたか」をもぢつて、「首に懸けたか」というたので、「首にかける」とは、保有する意にいふ。「にじ」（二字）、「跡を濁さぬ水の面」をも見よ。俚言集覽に「ほぞんかけた＝子規聲、〔犬筑波〕佛壇にホゾンカケタ歟ほととぎす」。

凹い處に水溜る 人は詞の義に逼り、言うて勝たれぬ相手ゆゑ、凹い處に水溜ろ、掻破つてさへ痛い身を慘らしうも切裂かせ、まだその上に足らぬとや（釋迦）

凹い處には衆くの水流込み、穢物などをも多く流込むやうに、惡事の萬むを云ふ。論語・子張篇に「君子惡レ居二下流一、天下之惡皆歸焉」。

雲に汁ができる いやこれ雲に汁ができた、どうした緣やら三吉めが與作といふ名にほれて常に己を大事にする（丹波與作）

雲にとざされてゐたのが雨となつてきたやうに、今まで思案してゐた事件の樣子が變つて期待の生じろに喩ふ。（青雲の中に一片の白雲の現はれるはやてとは別）。西鶴置土産・卷之四、穢風は米のあがりの條に、「雲に汁が出來て、雨の降りしころ跡は風と定め、てんほに手を打ち思入の米買ひ、一時あまりに立續き、日ふる間に二匁あがれば」。金銀座色町著（正德三年刊）卷之六、願は成就の蒔錢の條に、「此度は平戸の船頭が肝煎、五島の鵜屋の息子首尾なりさうで、先は大阪見物がてらに女房も見てからとの事、然れば雲に汁が付いたと是故の御參宮」。亂脛三本鑓（享保三年刊）三之卷に、「おしゆんも今は合點し、思ひは何れかはらぬ思ひ、誰やらが片思ひなればわしは片破れ月、になはば中や絶えなんと、どうやら雲に汁が出るや、東の方もしらしらと明くれば」。紀海音撰、吳越軍談・第三に、「伯嚭爺が勇みだし、雲に汁が乘つて來た、きほひ口には聞及ぶ音曲如何と奏すれば」。

暗がりより引出す牛（振袖始）

ぐづつき曖昧なるに喩ふ。出家形氣に「日用の受答さへ只ぐづぐづと、惡皆暗がりから牛引出すやうになりしかば」。歌謠部其二、「戀慕の闇のくらがりに」の條をも見よ。

勸學院の雀 智略はお家、勸學院の雀任せておけと小躍して（女楠）

勸學院の雀蒙求を囀ると云ふ諺によつたので、感化受けて眞似ろをいふ。この諺の起りについては、藤原冬嗣が天長三年三條の北・壬生の西に勸學院を建て藤原氏の人人の學問所とした、その遺址を雀林といふ、學問盛に行はれて僕隷までも蒙求を囀つたと云ふより出たのであらう。但・北愼言の梅園日記・卷三には、「勸學院雀囀二蒙求一といへること寶物・八幡愚童訓等に出でたり、富樫の辨・賴政の謠にもいへり、曾我物語にも勸學院の雀とかや申しければなどあれば、久しき諺なり、今考ふるに、蒙求の開卷に載せたる李良が薦二蒙求一表に、李瀚撰二古人狀跡一編二成音韻一、名曰二蒙求一、瀚家兒童三歲者、皆善諷誦とあり、瀚家兒童云云をつづめて、瀚が家の兒童は蒙求をさへづるとふるき諺にいひしならるべし、唐人などの物言ふをばさへづるといへればなり、さるを後に瀚が家を勸學院と誤り、さへづるといへるより兒童を雀と誤りたるなり、又宋の方岳が詩に、黃鸝を教得て書を讀むことを解せしめ、能く蒙求中の一句を記せしむといへる句などをも混じたるにや」と見えてゐる。

外宮は四十末社 さてまた外宮の御社は此神の第一王子、あひに相殿大神宮、末社は四十末社なり（冷泉節）

人倫訓蒙圖彙（元祿三年刊）七に、「山伏の所作祭文とていふを聞けば、神道かと思へば佛道、とかく其本據定かならず、伊勢兩宮の末社に四十末社百二十末社などいふこと更になきことにて、このこと神道問答抄といふものに記せり」。伊勢參宮名所圖會に、「俗に外宮は四十末社・內宮は八十末社と云ふこと舊記になきこと、何頃よりいひ傳へしにや」。松の葉（元祿十六年刊）卷三・さいもんの唄に、「……みもすそ川のかげ清く、外宮は四十末社・內宮が八十末社云云」。

下戸はなくとも妖物はある世なり（關八州）

諺に「下戸と化物はない」といふを改作した洒落である。俚言集覽に「下戸と化物はない＝〔毛吹草〕〔犬子集〕思ふが中は下戸ぞかし治まれる世には化物なかりけり 友雲〕又下戸と鬼とはないとも云〔鶉衣節分庵記〕」。

袈裟まで憎い 袈裟まで憎い世の譬、今日は年忌の佛まで憎まする

と腹が立つ(夕霧)
磁石に針が吸附くやうに、或事をなせと言はんばかりに仕向けることの喩。

死する時節は人魂飛んで其身の影の無きと聞く(二枚絵)
昔からの諺に、「人の死ぬる前には影が無い」といふ。蓋し人の生氣の衰へ盡きたのを形容したものである。また人の死ぬる時は魂魄まづ其身を離れて飛ぶと想像されたもので、曾根崎心中にも「アア怖、今のは何といふものやらん、オオあれこそは人魂よ、今宵死するは我のみとこそ思ひしに先立つ人もありしよな」と見えてゐる。

***したをまく** これ禍の初めなりとて皆舌をまかぬはなかりけり(天鼓)　命にかけがへあらばこそと、舌を巻いてぞかぶり振る(用明天皇)
〔巻レ舌〕甚しく恐れるをいふ。漢書・揚雄傳に、「禮官博士巻ニ其舌ニ而不レ談」。太平記・巻一・御告文の條に、「告文讀みたりし利行俄に血を吐いて死したりけるに、諸人皆舌を巻き口を閉づ」。

七月の十六日 あらかしがまし釜の蓋、いつか明くべき七月の十六日も程遠き(吉岡染)
舊暦七月十六日は俗に地獄の釜の蓋が開く日であると云ふ。「ぢごくのかまのふた」「盆正月の十六日」を見よ。

七度結びて兄となり、六度契りて弟となると傳へ聞く(會稽山)
兄弟の縁の厚きを云うたものである。頼朝濱出(淨瑠璃)第五に、「七度契りて兄となり、六度結びて弟となる」と見え、曾我姿富士には、「七度契りて親子となり、三度結びて兄弟と生る」と見え、大磯虎稚物語には、「七度契りて親となり、三度結びて兄弟と生るる」と見えてゐる。

七人の子はなすとも女に心許すな(雪女)
女は根性邪惡なものなれば、よしや七人の子までも生んだ中であつてもなほ男の心を許してはならないとの諺。毛吹草(萬治二年刊)巻二・世話の條に、「七人の子はなすとも女に心ゆるすな」。

忍の緒 勝つて兜の忍の緒、心の紐をしかと締めて(持統天皇)
もと兜の内に忍ばせて髮に括附けたよりの名、兜に附け頤で結ぶ紐。ここの文は諺に「勝つて兜の緒をしめよ」と云ふを應用したのである。醒睡笑(寛永頃刊)二に、「勝つて兜の緒をしめて候よ」。

しはすあぶら 世にひろがりしあだし名をよそに謠ひし言の葉や、其油屋の一節も師走油が身の上にかかる涙とこぼれそひ(今宮)
〔師走油〕殃禍の意にいふ。師走(舊暦十二月の稱)に油をこぼせば火に祟ると云ふ。醒睡笑・一に、「この水が油ならばそもそもよい物か、師走油はかからぬ事といふなるに」。世の是沙汰(寶永三年刊)巻之一、鼠鳴はそれぞれのいはれの條に、「師走に油こぼせば火にたたるとて水あびせること、此月に限り忌む故いぶかし、此心は月月おしつまり人の心もいそがしく、一入始末心も出來るなり、袖をそまつにする人寒き頃つめたき水をあびせ、是にて知れと心を付くるなるべし」。ここの文は、お染・久松が戀に死んで世に謠はれるそれのやうに、我身も謠はれることであらうと泣く意に、お染・久松が油屋である縁よりして、師走油にいひかけ、師走油をこぼせば水を浴びてまじなふより、「涙」に水をきかせたのである。

師走坊主 ああ紙子觸りが荒い荒い、これ引けば破れる摑めば跡にしはす坊主師走浪人(夕霧)
師走坊主師走浪人ともいふ。窶れて便なげな者をいふ。蓋し盆には僧に物をくれるけれども、師走には盆のやうにくれぬによつて、僧の便なげなことから出た諺である。井原西鶴撰・胸算用(元祿五年刊)巻一、長刀はむかしの鞘の條に、「人の後世信心にかかはる事はなきに、衣を著たる朝は米五合ももられ、衣なしには二合も勸進なし、殊に師走坊主とて、此月は忙しきに取紛れ、親の命日も忘れくれねば、是非もなく錢八文にて年を越しける」。同・巻五、平太郎殿の條に、「浮世に住むから師走坊主も暇のない事ぞかし」。柳亭種彦編・用捨箱・中巻に、夕霧阿波鳴渡のここの文を引きて「窶やつやつしく便なげなる者をさして師走坊主師走浪人と云ふ諺の昔ありし故に、かくつづけて書きたるなり、盆には僧の物もらふ事常なれども、歳暮にはさることもなきをいふ」。

十四の灸に水が湧く
「水が湧く」を見よ。

しほをふむ 江戸長崎へも逐下ししほを踏ませて人にしや(卯月艶)
〔鹽を踏む〕からき目をする。辛い目に遭ふ。東海道名所記に、「諸國をめぐりて、うきもつらきもしほを踏みてかけまはり」。本朝俚諺(貝原好古編)に、「しほをつくる。俗間からき目を見すると云も又同じ」。近松作・淀鯉出世瀧徳上巻に、「憂き鹽うんだは身のやいと」とある、これは「踏んだ」を類似音「うんだ」(いぼうた意)といふて、「身の灸」といひつづけたのであらう。但九行古院本には「ふんだ」となつてゐる。「うきしほ踏む」といふ詞は近松作博多小女郎波枕中之卷などにも見えてゐる。

上戸の腹の石橋山 若侍の血氣酒、上戸の腹の石橋山、頼朝はうつぼ木に軍理の工夫を得給ひて(冷泉節)
上戸の腹の燒石が飛び出る(上戸の腹中には燒石があつて酒を吸ふので、酒が慾しくてならない意にいふ)の諺を石橋山にいひかけた。石橋山は相模國足柄下郡石橋村にあつて、治承四年八月源頼朝が大庭景親と戰ひ敗れ、臥木の中に隱れて逃れた所である。

正直の頭に宿る神風 正直の頭に宿る神風は、船中何の氣遣なし(國性爺)
正直の頭に神宿ると云ふ諺を神風にいひかけてその序にしたのである。倭姫命世記に、「日月廻ニ四州一、雖レ照ニ六合一、須レ照ニ正直頂一」。

釋迦に經 所の人に敎へるは釋迦に經か知れれども(薩摩歌)　母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鐵

畠山重忠も(雪女)

さいたら畠といふ諺には二種の意義がある。その一は、才太郎畠と書いて、小才の利いたことをいひ、また小才の利いて間が抜け、智とも愚ともどちらつかずをいふ。徒に世話をやき骨を折つて益なきことをするを、諺に「さいたら畠に何をする」といふ。その二は、さいたら畠は大阪千日の墓所の傍のあざ名であつたので、よつて以て三昧所のことにいひ、また冥土のことにいふ。巣林子の用ひたのは



(南水漫遊所藏)〔さいたら畠〕

その一の意義であるが、その二の冥土行きの意をも含んだのがあるやうである。「さいたら畠」は「さいたろばたけ」「せいたらばたけ」ともいふ。なほ用例を擧げれば、甲陽軍鑑・四に、「利根の過ぎたる大將は、下劣の噺にさいたら畠と申す如く、本圖にてましまさねば、物を習へど不通らず、半分知ては然も開山にならんと思召」。乞童人炭翁撰・諸俳染糸(寶永元年刊)に、「亦見立と云句有。青くしてもあるべきものを唐からし芭蕉。自然と形よろしく近年の上手也、此味をよく合點して仕るべし、されども初心の人・氣を高く持過ぎたらば、俗にいふさいたらばたけへ走るべし、智惠才覺利口ありとて上手にはならず、骨を折り魂を碎て考有べし」。故事因緣集・三に、「神國に生るる人が現世の神明を捨て、未來の佛を信仰するは才太郎畠へ走り過ろ」とある。これ等はその一の意義である。また、松の落葉(元祿十七年刊)卷五、三勝心中の唄に、「いざや最期を急がうと言うて、火屋の東のさいたら畠、露か時雨か身を知る雨か」。(序云、三勝・半七は元祿八年十二月六日の夜千日の墓所で情死した)。續小夜嵐・卷上に、「地獄を攻めらるるとも冥途は極めてあし立惡しき所なり、その上兵糧はさいたら畠よりつづけ侍れば、たやすく討つこと叶ふまじ」。紀海音撰・心中二つ腹帶・道行ほしのかずに、「捨つる身の上もそぞろに心細げにて、三途の川は目の前の、麥吹く風のささ浪や、空淋しくも名乘るてふ、死出の田長を友がねに、さいたら畠の案山子かと、見るにつけ聞くにふれ、あの世にたぐふぞあぢきなき」とある。これ等はその二の意義である。

相場が惡い 九平次も氣味惡く、相場が惡いおぢやいの、ここなよれ衆は異な事で、おれらがやうに銀遣ふ大盡は嫌ひさうな(曾根崎)

樣子が惡うて氣が乘らない。

酒戻しはせぬもの 飲んだ酒をかへせとは、法を知らぬ侍、酒戻しはせぬもの(川中島) 其禮とて目腐り金樽代として越した、酒もどしはせぬもの故、まあ受取つて置いたぢや(壽門松)

目出度い酒の返禮はせぬもの。蓋し逆戻し(酒戻しと通じ)になるを忌む。

酒盛つて尻切らる これ帶刀殿、世話に申す如く酒盛つて尻切らるるとは茲でござる(傾城佛原) 此方は物入振舞うてあげくにしたたか踏まれた、向後振舞致すまい、御馳走が身のひしや酒盛つて尻ふまれたと、獨言して歸りけり(今宮) えどんな所へ給仕に來て、酒盛つて尻踏まれた(宵庚申)

「酒盛つて尻踏まれる」ともいふ。恩を施し却つて仇で報いられる喩にいふ諺。

申の日 花の三月よけぬれば皆吉日ぞ、その外に忌むは申の日猿の類、おして嫁入の御乘物(艶狩)

俗に申の日には嫁入せぬものといふ。蓋し申と去との音通を忌むのである。ここの文に「花の三月よけぬれば」とあるのも、俗に三月に結婚するは花の咲いて散るやうに離散し易いとて忌むのである。諺に三月は去られ月ともいふ。

さをなぐるま さをなぐるまの世の業も、子故の闇と哀れなれ(百合若)

〔梭投間〕光陰の移り易く、歲月の早く過ぎるに喩ふ。梭は「ひ」をいひ、正韻に「梭何切、織杼之屬、所二以行一レ緯」。陳造の詩句に「病忩レ還レ家可二奈愁一、客中日月急二梭投一」。和訓栞に「さをなぐるま＝擲レ梭之間也といへど箭を投るの義、萬葉集に投箭をなぐるさともよめりともいへり、光陰の移り易きに喩ふるなり」。

三人寄れば公界 三人寄ればくがい、忠兵衛が身代の店おろしてくれる忝い(冥途飛脚)

三人寄集れば公衆の中と見做すべきであるとの意の諺。薩摩守忠度(古淨瑠璃)銘づくしの條にも、「三人よればくがい、御前にていふ事こそあれ忠度を六彌太が討つたるとはいかに」。

四十二の二つ子 大阪のさる人の四十二の二つ子にて產家より貰ひ守育て(二枚繪) 此子は父御の四十二の二つ子にて祖母がお捨と付けたが(鑓權三)

親が四十一歲で産んだ子は、親が四十二歲の時は子は二歲になるによつて、四十二は四二即ち死に通ひ、四十二と二と加へた四十四即ち四四は死に通ふとてこれを忌み、假にその子を棄てて他人に拾はしめ、そしてそれを貰受けて育てる風習があつた。貝原好古編・本朝俚諺に、「四十二のふたつ子。世俗男の四十二歲を厄と云ふ、四十二を略すれば四二なり、これ死に通ずといひ、四十二歲にて二歲の子あれば、父子の歲を合せて四十四、略すれば四四なり、これ死に通ずといひて子を棄つる者あり」。

磁石に針 盜人に藏の番・磁石に針、皆に氣を付けられてはやもやもや

*船頭馬方御乳の人 扨扨利口な野郎ぢや、船頭馬方お乳の人、こちもそちらと同じこと、して年は幾つ(丹波與作)

根性悪であつて口さがない同類の者として並べて言はれた諺である。西鶴織留(元祿七年刊)巻六、子を思ふ親仁の條に、「心だての悪しき者を馬追・船頭・お乳の人と申せど」。亂脛三本鑓(享保三年刊)四之巻に、「口のさがなきを馬追・船頭・お乳の人と云ふ」。

ぜんのはし あつちはかうのもの、こつちは糠味噌、切らるるは膳の箸、外に道はあるまいか(聖徳太子)

〔膳箸〕膳の上に箸は附き物の意よりして、物の定まつてゐることにいふ。「膳の箸は違つてもこれは違はぬ」などいふ詞もある。

せんみつ 白き鹿の命毛を筆に作つて縮を書けば、其縮即ち物言ふよし、何と其縮は出來申さぬか、但例の千みつか、いかに如何にといひければ(五人兄弟)

〔千三〕千言ふ中に三つも眞實の事が無いとの義で、嘘言の意に云ふ。本朝櫻陰比事(元祿二年刊)巻之五、名は聞えて見ぬ人の顔の條に、「今は千いふ事三つも眞實はなしとて、千三といふ男あり」。

*袖にあしらふ 内には見馴れぬ風俗のうさんらしげな大小に、さすが袖にもあしらはず、亭主太郎揉手をして(酒呑童子) 我夫を袖にしての不義ではなし(堀川波鼓) 商賣は袖にして、小路隠れの家出のと聞くたびごとに、此伯母が胸には釘を打つ如く(卯月紅葉) その兄分を袖になし志をむげにした(萬年草) 親子一門妻子まで袖になし、身代の手もつれも、小春といふ屋尻切にたらされ後悔千萬(天網島)

粗略にもてなすを袖にあしらふと云ひ、心を留め丁寧にもてなすを身にあしらふと云ふ、蓋し袖は身に附屬してゐるからである。「袖にする」「袖になす」と云ふも疏外にする意。

大海を手で堰く 此末長き大河の川下に、人がなあらうとて御免を請うて渡る者のあるべきか、ええ堰せばし夫は小人の、大海を手で堰くとは御分がこと(大磯虎)

成し得べからざることに喩ふ。後漢書・張儉傳に、「儉以二區區一掌一、而欲三獨堙二江河一」。

大魚は小水に棲むことなし(持統天皇)

古今諺に「井水無二大魚一、新林無二長木一」。

唐人の寐言(大織冠)

理解できぬ言語又はつまらぬ理屈を口説くを嘲つていふ諺。

唐へ投げ金 目前日本の寶を、見えもせぬ後世の爲、異國へ渡すうつけ者、それこそ唐へなげがれといふもの(孕常盤)

「唐へ投げ金」ともいひ、大儲を僥倖として、或は元も子も損失するやも知れぬ事に投ずる金。投機金。(この諺もと寛永十三年徳川幕府が日本商船の海外渡航を禁じた以前、日本貿易船に托して見もせぬ品物に投資したことをいふ經濟用語である。後世轉じて、溝の中に金を棄てるといふに同じく、無益な事の喩諺に用ひる)。

鷹は死ねども穂はつまぬ 鷹は死れども穂はつまぬと、人は讃めても悪業は、落穂を拾ふ群雀に劣つてつらく淺ましや(百合若)

鷹は死んでも穂を啄むやうなことはせぬの意であつて、義の爲には饑餓に迫つても敢て不義の財祿は受けぬ喩に云ふ諺である。毛吹草に、「鷹は死すれど穂をつまず」。

寶は身の指合 大國二ケ國三ケ國の價ともなる名劔、寶は身の指合せ、代なして和女が身の代と(酒呑童子)

寶は有合はすれば身を救ふといふ意の諺。胸算用(元祿五年刊)巻五・つまりての夜市の條に、「過ぎつる暑さを凌ぎし編笠、未だ青青として損ねもやらずありけるを、これ來年の夏までは久しきことなり、寶は身の指合せ、これを賣りて當座の用に立つること外なしと」。

寶は涌き物(博多)

寶はこれを得ようとすれば自然得られるもの

ただとる山の時鳥 ただ取る山の時鳥、しかも番を引懸けた、かけたかけたと謡ひ寄る(大原問答) 先へ廻つて池へおつぱめ、何の手もなく殺しなば、ただとる山の時鳥、ほととうつてはこれ因果め(三世相)

手數なしに只取る意に云ふ諺である。醒睡笑(元和年中成)に、「ある者山路へ行き、不思議に白鳥を拾うたり、更に鳥の名を知らず、人に向つて語る、聞者それは郭公であらうずと云、いや大なる鳥なり、中中小鳥ではない、さりとて時鳥にすくうたただとる山の郭鳥とて時鳥からあることよ」。大原問答青葉笛のこの文は、元手いらずに姉弟の兒を取得たのを、「ただとる山の時鳥」の諺を隠用し、「かけた」に時鳥の啼聲の「ほぞんかけたか」をきかせたのである。

蓼は利根草 蓼は利根草・茗荷は鈍根草(懸物揃)

この俗説は初音草咄大鑑にも「蓼を好いて食へば利根になると古よりいふが、十日あまり食して見れどもかはりた分別も出ず」と見えてゐる。

短氣は損氣(冥途飛脚)

短氣といふ氣は損な氣といふことである。損氣といふ氣はなけれども韻脚を合せたのである。氣みじかでは何事も成功せず結局身の損となる。

地獄の釜の蓋開く 盆正月の十六日を待ち樂しみし我我が、あはれ地獄の釜の蓋開くを待つべき罪人と(今宮)

俗に盆・正月の十六日は地獄の釜の蓋が開く日であると云ふ。俺久米の松山(都太夫一中直正本)上巻に、「あくるあしたは十六日、地獄の釜の蓋さへあき、餓鬼もたしなむ男ぶり、三途の川原をぞめくとかや」。(盆・正月の

棒（國性爺）
熟知せるものにむかつてなほ敎へることにいふ諺。「釋迦に說法」ともいふ。

じやくはあめ 荒金の刑部山國惡事を工む天罰にて、寂は雨にて討たるるなり（田村） 女夫は母の機嫌顏見ればこの世の本望と思へども、じやくは雨とふる淚隱すぞあはれなる（嵜庚申）
〔寂は雨〕死滅するをいふ。釋尊の涅槃繪に、釋尊入寂の場に生類皆寄集つて泣いてゐるによつて、寂は雨と云ふ諺が出來たのではあるまいか。立羽不角編・千代見草・上の卷、虎毛の句に、「辻占に寂はと斗聞かする」と見えてゐる。「寂は」は「寂は雨」を略したのである。

親は泣寄り 泣くな泣くなといひつつも傳ふ淚の血筋とて、しんは泣寄りあはれさよ（嵜庚申） しんは泣寄り親子なり（冥途飛脚） 野にも山にも欲しきは兄弟、親は泣寄りと世話にいふも道理ぞや（五人兄弟）
骨肉の親は不幸を悲しんだり悲しみに同情したりして寄集るとの諺である。毛吹草に、「廣き野も親は泣寄りの雉子かな」。

雀の巢もくふにたまる（女殺）
僅少な物も積れば遂に大となる意にいふ喩。「くふ」は「すくふ」（巢をかまふ）である。

雀の千聲鶴の一聲（蛙合戰）
この諺は和漢古諺にも出で、雀の千聲よりも鶴の一聲が優つてゐるとの意。

髓に蓼 蜈蚣に唾、髓に蓼、皆夫夫の敵藥あり（關八州）
髓は蓼を嫌ふによつていふ諺。普世俗談卷四に、「蛭に鹽、髓に蓼、月に叢雲、花に嵐、鯉に胡椒は指合なり」。

酢でさいて吞む 女夫の衆が此いまな酢でさいて吞むやうに言ひたいがひに言籠めて、死んでもまだ言ひ足らぬか（卯月潤色）
醬油に酢を加へたものに浸しいためて吞む義、よつて以て奇酷なるに喩へる。「さく」は割で、卽ち醬油を酢で割るを云ふ。寬濶平家物語（寶永七年刊）卷之一に、「淺はなだなる男めやと、酢でさいて吞むやうに修羅をもやしける」。

酢につけ粉につけ コレ親父、其方はお花が繼父、酢につけ粉につけ悄いも理り（女腹切）
なににつけかににつけ。なにかにつけ。按ずるに、酢に漬け粉に漬けは料理の詞の如く思はるれども、もともと「四につけ五につけ」の類音に據つた洒落であらう。次條を見よ。

酢の蒟蒻の 小間物屋の・煙草屋の、紙屋で候・吳服屋で候の、酢の蒟蒻のと借錢が今の金で七八兩（女腹切） そなたが請に立つた玉が事につき用があるといへども、酢の蒟蒻のと我儘いうて顏出しもせぬ請人がどこの國にあること（大經師） 此中文を進じても返事もござらず、使なやれば酢の蒟蒻のと、いつ屆けさつしやるぞ（冥途飛脚）
「何の彼の」といふを諺に「四の五の」と云ふ、その「し」（四）を「す」（酢）に云ひ、「ご」を「蒟蒻」にいひなして、臺所に用ひる物品の類音に據つた洒落であらう。「酢につけ粉につけ」（前條を見よ）といふ諺もこれと同じ意に用ひる。（狂言・酢薑に、酢を賣る男が「すこん」と呼ばはつて賣歩くといふがあるが、これから洒落た諺との說もある。また俚言集覽に「酢の蒟蒻の引の山の＝〔俗訓栞〕祇園會に山ぼこあり、山ほこを出町に枝町ありて年貢をはかる佳例に其日にあたりて持參す、その時酒をもる甚急がしきをもてかくいふとぞ」）。

すゑるぜん 下地は好きに据ゑる膳、甘い首尾とぞなりにける（女腹切）
〔据膳〕膳を据ゑてさあ食へと言はぬばかりに仕向けること、以て欲する儘にせよと言はぬばかりに仕向けることに喩ふ。女の方から男に情を通じようとして挑むを諺に据膳といふもこの意である。

すんぜんしやくま ええ邪魔な奴、名もとがとがしい富樫め、寸善尺魔むれの癪（蛙合戰） さあ寸善尺魔いかがはせんと狼狽ゆる（生玉）
〔寸善尺魔〕善は寸ほどありて惡魔は尺ほどあるとの義、卽ち兎角善なことは少く惡魔は多いとの意。諺草にも、「寸善に尺魔といふ事あれば、善事は末へ延ばしては必ず邪魔入り、其事遂げ難きものなり」。

世帶佛法腹念佛 世帶佛法腹念佛、口に食ふが一大事（今宮）
佛法よりも世帶、念佛よりも腹ふくれるが大切である、卽ち生計の道に心配なくして佛法に志すべく、食足つて後に念佛を唱ふべきであるとの意の諺である。西澤與志撰・風流今平家（元祿十六年刊）今樣妾狐の條に、「明暮十露盤はぢき、寺道場は東やら西やら知らぬが佛、世帶佛法腹念佛とわるい世話を聞き、あたら年月を只欲にのみ暮し」。

背中に腹 藤が臥したる北枕、いとしや科もない人をと恐しながら背中に腹、胸先に打跨ぎ切先差當てどうと乘る（捉鯉） 卯腹辰股背中に腹、商賣には換へられず（反魂香）
「背中に腹は換へられぬ」と云ふ諺であつて、何は扨置きまづ我身のことが大切な意にいふ。鷹筑波に、「背中に腹はかへられもせず、降る雪を負ひても鳥は餌を拾ひ。安信」。

前車に懲りず後車の罪業 如何ぞ汝王地を犯す冥罰神罰、身を亡せし前車に懲りず、後車の罪業生生はてなき惡毒蟲、羈絆を切らん（關八州）
「前車の覆るは後車の戒め」といふ諺あるによつて、かくいうた。晏子春秋に「諺曰、前車覆後車戒也」。童子敎に「前車之見レ覆、後車之爲レ誡」。なほ巢林子のここの文は、謠曲・土蜘蛛に、「汝王地に住みながら、君を惱ます其の天罰の、劍にあたつて惱むのみかは、命魂をたたん」とあるの改作である。

なりけん」。

手活にする 能の脇師を手活にして九軒で主の座敷能(淀鯉)
手づから花を活けるを云ふ、轉じて己一人の愛翫者にするを云ふ。

手も足も釘になる(天網島)
手足冷え凍えたのに喩へていふ。

寺から里(娗)
寺では檀家から物を貰ふものなるに、寺から里へ物を呉れるとは物の反對なるをいふ諺である。毛吹草・卷二、世話の題下に、「てらからさと」。

てんかくちもく 天角地目天罰自滅、牛の最期は立處、首捻切つて棄てたりけり(國八州)
〔天角地目〕善い牛はその角天を衝きその目地を見る。俚言集覽に、「天を衝き地を眄つつ乖れて一黑陸頭耳小齒牾‖此は相牛の法なり、天を衝くとは、角の上を衝くをいふ、一黑とは純黑をいふ、陸頭とは頂の平なるを善しとす、耳小とは耳の小なるを善しとす、齒牾とは牙の牴牾せるを善しとす、量歐になずらへて一石六斗二升八合といふ也」。

天に口なし 天に口なしと申せども、人の口即ち天の口なり(天神記)
げに天に口なし、人を以て言はしむとかや(百合若)
文德實錄に、「天無レ口、假二人口一」。平家物語・淸水炎上の條に、「天に口なし、人を以ていはせよと申す」。

貂に成り兎に成る うぬめ繼子を憎み様様惡事をたくみしを、貂に成り兎に成り我身に引請け苦勞せしは、おのれに執心の故ならずや(三世相)
貂のやうな邪險な者とも成り、或は兎のやうな柔和な者とも成つて、種種な手段を盡す諺である。

どうさいばう
「これに懲りよどうさいばう」を見よ。

鳶が産んだる鷹 和泉の國水間の里の佐治右衛門、畠作りの田烏や、鳶が産んだるたか給取の手代は、主の代りをも清十郎といふ子を持つて(歌念佛)
竹の子はなほ親優り、鳶が産んだる鷹の羽の、羽がひの下に立返り、奉公させん大人になれ(艶狩)
醜き親が美しき子を生んだことに喩へていふ諺である。色里三所世帶(貞享五年刊)江戸の卷に、「又さる太夫樣は當年十九は花よ、それはそれは容自然の美君、麴町の鳥屋の娘とかや、鳶が鷹を生んだとはこれなるべし」。善惡身持扇に、「誠にかかる惡女の腹から美形の娘を生み出し、榮華の身となりしは正眞の鳶が鷹ぢやと羨みける」。「たか給取」は鷹に高給取をいひかけたのである。

飛ぶ鳥までも落つ 平家の御代にて候はば誰かあらう景淸と、飛ぶ鳥までも落ちし身が今この御代にて候へばこそ、數ならぬ我我を頼みて御入り候ものを(出世景淸)
權勢盛なるに喩ふ。平治物語に、「信西が權威も彌威を振ひて、飛ぶ鳥も落ち草木も靡くばかりなり」。

問ふには落ちず語るに落ちる それそれ問ふには落ちず語るに落ちると、利口さうにそれが信心の觀音參りか(女殺)
人に問はれては胸の祕密を洩さないやうに注意すれども、何心なく語る時は知らず知らず胸中の祕密を暴露するといふ諺。毛吹草に、「問ふに落ちぬは語るに落つる」。

***とらがなみた** 虎が涙の兆が見えて空が曇つた五月二十八日、雨が三つぶでも降られればおかぬ(氷朔日)
さいて出でたる傘や、とらが涙も引かへて、丑天神の野邊の露、消ゆる間近き命なり(氷朔日)
されば五月二十八日に今の世までも降る雨を、虎が涙や少將の夜の雨とも名に高き(會稽山)
〔虎が涙〕五月二十八日に降る雨をいふ。日次紀事(延寶年中成)五月二十八日の條に、「虎御前忌。每年今日多雨、俗謂今日大磯虎娘與二曾我祐成一相別、淚變爲レ雨、故今雨虎御前淚也」。

飛んで火に入る夏の蟲(國性爺)
自ら求めて禍を取る喩。法苑珠林に「如二飛蛾見レ火投一」。

鳶がかけた南無三(女殺)
「鳶がかけた」とは、鳶に油揚を攫去られた意、以て呆氣にとられたことに喩ふ。「南無三」は南無三寶の略で、圖らずも失態した時に云ふ。「なむさんばう」を見よ。

とんびなき 烏鳴、鳶鳴、雀の小踊、鼬の道切り(百合若)
〔鳶鳴〕鳶がたびたび鳴けば風吹くといふ。諺草(元祿十四年刊)に、「曲禮曰、前有二塵埃一則載二鳴鳶一。註云、鳶鳴則將レ風」。

泣上戸 「じやうこ」を見よ。

鳴く烏人の末期を知らす(丹波與作)
和漢三才圖會に、「自レ古相傳云、烏者熊野之神使也、凡病人將レ死之前、群鳴以爲二凶兆一、大忌レ之」。「からすなき」をも見よ。

啼く音血を吐く(宵庚申)
杜鵑の啼聲は咯血する音に似たれば、血に啼く杜鵑など云ひ、また啼血をほととぎすとも訓む。

歎きの中の悦び(女夫池)
悲歎にくれる中にも悦ぶことのあるをいふ。平家物語卷十、ふぢとの事の條に、「熊野へ參らせ給ひて、後世の御事よくよく申させ給ひて、那智の沖とかやにて御身を投げましましさぶらふことこそ、歎きの中の御よろこびにては候へ」。

投櫛は別れの櫛とて忌む(女殺)
「ゆづのつまぐし」を見よ。

なしも礫も打たぬ 此頃はなしも礫も打たんせぬ、氣遣なれど内方の首尾を知らねば便宜もならず(曾根崎)
なしも礫もうつとりと煙草のんでも(反魂香) それからな

十六日は奉公人の藪入の日でもある。「盆正月の十六日」を見よ)。

智は萬代の寶 智は萬代の寶とかや、大職冠鎌足公明智を以て三國を祭し(大織冠)

智の貴きをいうたもので、紀海音撰・四民乘合船(正徳四年刊)にも「智は萬代の寶と實語教に見えしもさることぞかし」。

***提燈に釣鐘** 提燈に釣鐘と主ある我袖褄引き(卯月潤色)

不釣合なことに譬へる諺である。井原西鶴撰・織留・卷之一に、「聟は目下なるをとつてよし娌も又我より輕き方より迎へてよし、提燈に釣鐘かけあはぬ事すれば、內證の火消ゆるに極近し」。この諺は曾我會稽山にも見えてゐる。

***ちやうらい** こりやどうぢや、さてもなれば成る物か、ちやうらい柑子が鼠になると、あきれ果てて居たりしが(弘徽殿) 其方へ伊丹・此方へ池田、稚き者に强意見、ちやうらい高じて尼が崎(賀古敎信)

「頂禮」歸命頂禮の頂禮で、印度古來の最敬禮である。信順歸依が餘り過ぎれば尼になる、度を越せば意外な物となる意の諺に、「頂禮かうじて尼になる」といふ。「かうじる」は高の字音を活かした語で、嵩じるなどの字をも充つ、かさむ、增長す、つのるの義である。「ちやうらい柑子」は、高じに柑子をいひかけ、「高じて尼が崎」は、尼を尼が崎の地名にいひかけたので、共に上述の諺に據つたものである。次條をも見よ。

頂禮高じて尼が崎(賀古敎信)

頂禮高じて尼になるの諺に、尼が崎の地名をいひかけたのである。この諺は、佛を禮拜歸依することも增長して度を過ぎれば、世を捨てて尼になるの意であるが、蓋し寵愛高じて尼になるの諺から轉訛したものであらう。當世誰が身の上に、「寵愛高じて尼になるとの諺、昔の佛前に限らずと、聞く人申しあへり」と見え、毛吹草に、「寵愛高じて尼になす」と見えてゐる。前條をも見よ。

***ちんぷんかん** 彼方の餞別此方の門出、上官中官下唐人、ちんぷんかんするちんだの酒盛(大織冠)

わけのわからぬことを云ふ。もと儒生のいふ漢語を世俗の聞いてまねた語であると云ふ。

月夜に釜 ほんにだまされた拔かれてのけたと氣も拔けて、人人とほんと月夜に釜のふたたび恨む後より、爰に爰にと勅諚の(振袖始) これ祐經あんごうらしく出拔かれ、月夜にかまぼこ不覺の至り(加增曾我)

月明の夜に釜を盜まれるは迂濶千萬の意であつて、迂濶にして出し拔かれるに喩へていふ諺である。西鶴撰・織留に、「その合點はして居ながら身の一大事を忘れ、いつも月夜に釜を拔かれ、借錢乞と無理の口論」。

月をうかがふ猿 有明の月をうかがふ猿よりは、なほあだならん我が心(大覺)

及ばぬ望に心を勞する意に喩へていふ。謠曲・善界に「我等如きの類として、たやすく窺ひたまはんこと、蟷螂が斧とかや、猿猴が月に相同じ」。

***つちでにははく** 花車も亭主も槌で庭はく人呼びに(女腹切) 非筒が許へ乘懸の客は八幡の難與平、威勢美美しく飛下るれば、亭主迎の槌で庭、はくまい九郎左見忘れか(壽門松)

〔槌で庭掃く〕鄭重に人をあしらはうとして狼狽するをいふ諺である。豐世見久佐(天和三年刊)に、「槌で庭金銀の砂大黑舞」、とありて大黑天の扮裝で槌を持てる畫が載せてある。本朝櫻陰比事(元祿二年刊)卷五、名は聞えて見ぬ人の顏の條に、「此盜は果てぬと言うて三度首を下げて忝き顏付、槌で庭掃くと云ふ御馳走古し、新しき御機嫌取の咄に夜をあかし」。寬濶平家物語(寶永七年刊)卷之五、彝這す金の蔓の條に、「槌で庭をたたき箒で座敷を掃て請じける」。「橫槌で庭はく」とも言つたので、世間娘氣質(享保二年刊)の中にその言葉が見えてゐる。なほ此諺に類する詞に、好色旅日記(貞享四年刊)卷一に、「ぐわつたりと揚屋入、亭主箒取て庭を掃くはや太夫が影向なる」といふのもある。長町女腹切に「槌で庭はく人」とあるは、庭掃くに白人をいひかけたのである。(「白人」につきてはその條を見よ)。

頭痛八百 この喜左衞門頭痛八百、一寸なりとも呼びましたいと願ふ折から(夕霧)

頭痛を强めて言うたので、俚諺の「頭痛鉢卷」と「嘘八百」とを取合せた言葉である。

蕾む花出づる月 蕾む花出づる月、玉のやうなる若い者若い女(卯月紅葉)

出づる日蕾む花といふ諺(將に盛にならうとするにいひ、毛吹草の世話の部にも出てゐる)の日を月にかへて用ひ、お龜・與兵衞の若年なるに喩へたのである。

つるのあは 口に飯食を啜つて溜めたるは、鶴の粟・蟻の塔をくむ如く、十年以來の塵積つてこの金九千九百九十兩(隅田川) 私仕事に賃苧うみ、女中とまりの袖の下、小萬といふ名でぽつぽつと、鶴のあはれやあさましや(丹波與作)

〔鶴の粟〕鶴が長い嘴で粟粒を拾ふやうに零細な物を辛抱强く積上げること。「鶴のあはれ」とあるは、鶴の粟に哀れをいひかけたのである。東海道名所記に、「少しづつ受けたるもの鶴の粟・蟻の塔、細細につもれば都に上り官を望み」。

つをひかせん 班女が色に氣壓され、芙蓉の花に色なしと、唐土までもつをひかせん(隅田川)

涎を引かせんであつて、涎を垂させんといふに同じ。羨望させよう。杜甫飮中八仙歌に、「道逢二麴車一口流レ涎、恨不三移レ封向二酒泉一」とあつて、飮食物を見て欲しがるより出た諺。江戸名所記卷三、角田川の條の歌に「梅若ときくから口はすみだ川、涎をひく程によき子

鋸商にして、十年たたぬうちに千貫目餘の分限とはなりぬ」。

咽元過ぎて熱さ忘るる（冷泉節）

日蓮鈔外書に、「世俗の譬に喉過ぎぬれば熱さ忘れ、病癒えぬれば醫師忘るといふらん譬」。

のみとりまなこ そよと波音船影に心を付ける蚤取眼、物案じ顏も頬すいたる中に頭の毛剃九右衛門（博多）

〔蚤取眼〕ちよつとした事をも見逃すまいと凝視することを、蚤を探して捕へる目付に譬へた語。荒御靈新田神德に、「うそうそ窺ふ提灯のあかりにきよろつく蚤取眼、かくと見るよりつつと寄り」。

のらがらす

「あはざののらがらす」を見よ。

疱瘡に二番湯かく

「世並のわるい疱瘡に二番湯かく」を見よ。

坊主憎さに袈裟まで憎き世の譬（川中島）

「坊主が憎ければ袈裟まで憎い」といふ諺に據つたもので、この諺は毛吹草にも見え、其人の憎さに其人に關聯してゐるものまで憎いの意。

ばうふう 犬も歩けばばう風の、指身のけんによもない仕合せ（賀古敎信）

〔防風〕高さ三尺許も成長する草で、葉は芹に似、夏時に小形白色の花を開く。この草中風を防ぐ功あるによつて名づくといふ。防風の葉を切つて指身のけんにすることがある。この文は、「犬も歩けば棒にあたる」といふ諺を取つて、棒を防風にいひかけ、防風の縁で「けん」（その條を見よ）をきかせて「けんによ」の語につづけたのである。

裸百貫 襦袢一つの裸身や、百貫町へぞ走りける（今宮）

「男は裸百貫」（男は無一物の裸でも百貫の價があるの意）の諺を應用して百貫町へいひかけたのである。夕霧阿波鳴渡に、「譬の裸百疋を直に男にやり持に」、とあるも裸百貫の諺を百疋にかへていうたのである。

蜂に上下の禮あり（聖德太子）

關尹子に、「聖人師㆑蜂立㆓君臣㆒」と見えてゐる。

鳩に三枝の禮儀あり（百合若）

鳩は親鳥よりも三枝下にとまるといふ。學友抄に、「烏有㆓返哺食㆒、鳩有㆓三枝禮㆒」。

鼻毛をよまれ（宵庚申） 鼻毛がよまるる（酒呑童子）

女が己にほれてゐる男の心を知つて翻弄し、又は弱點に乘ずることを、諺に鼻毛をよむといふ。

齒に衣着す あのばいた髮の毛引拔きずんぼろばうに仕ると、諸人の輕薄裸にして齒に衣着せずぞ申しける（女夫池）

飾り繕うて婉曲にいふ意の喩。

***はらすぢ** 保昌大聲上げてからからと笑ひ、やれ腹筋や腹の皮、鬼の腕を切つたるが何程の高名ぞ（酒呑童子） 甚平からからと笑ひ、アア腹筋な、然らば足下の女敵何故討たぬ（鑓權三）

〔腹筋〕腹筋を捻る義。可笑しさに堪へぬをいふ。抱腹。「腹の皮」または「腹の皮を捻る」ともいふ。源氏烏帽子折に、「いさかひ過ぎての棒ちぎり木、後の廣言腹の皮、迯吠の犬侍、臆病臆病とぞ笑ひける」。

萬能一心云云

「まんのういつしん云云」を見よ。

贔屓の引倒し（會稽山）

贔屓をして却つて其人の迷惑となることをいふ。

冷えにも熱氣にもならぬ 鳥が淨瑠璃善かれ惡かれ、おのれが冷えにも熱氣にもなる事か、どうでも外に樣子があらう（二枚繪）

冷えもせねば熱しもせぬ、卽ち身に何の關係もない。

***ひざのさら** 平にそれは火の用心と申し、膝の皿に火が附いたらば御身代の妨げと、いへども兄は懲しめと思ひ（重井筒） 扨は鞍馬の火打石、膝の皿から火が出ると語り散して通りけり（嵯峨天皇） 冬編笠も垢ばりて、紙衣の火打膝の皿、風吹きしのぐ忍草（夕霧）

〔膝皿〕膝蓋骨をいふ。ここに擧げた文は「膝の皿から火が出る」といふ諺を應用したのである。この諺は零落して苦しむ意にいふ。「火が出る」「火がふる」「火が附く」「火が雨」など、いづれも困窮する意にいふ。俚言集覽に「火が雨＝貧を云、火の車とも云、火の雨がふるとも云、〔倭訓栞〕貧家の譬に火がふると云は詩に云飢火也、〔鷹筑波〕火をふるや貧者の家に飛ぶ螢」。夕霧阿波鳴渡のこの文は、「火打」（その條を見よ）「膝の皿」と頭韻語を用ひて、この諺を利かしたのである。「向臑から云云」をも見よ。

祕事は睫 傳授許しは請けれども、祕事は睫何でもないこと（鑓權三）

諺草に、「睫は目の側にあれば見えざる如く、世に祕傳といふ事も、聞きては安きことながら習はざれば知り得ずといふ意なり、韓非子曰、知如㆑睫也、能見㆓百步之外㆒、而不㆑自見㆓其睫㆒、是諺と語勢相似たり」と見えてゐる。

ひだりあふぎ 盞なかへての雪見酒、寒風却つて春風と、左扇の歡樂に暫く御座なぞ召されける（冷泉節）

〔左扇〕「ひだりうちは」（左團扇）ともいふ。安樂閑散の境遇をいふ。毛吹草・卷二、世話の條に、「ひだりあふぎをつかふ」。

***ひだりなは** そも如何なる運命ぞや、成すこと爲ること左繩（關八州繫） 理は非に落ちる左繩、ゆびがひもなき身なれども（卯月紅葉） かう左繩になるからは父樣のことも埒あかぬ（丹波與作）

〔左繩〕繩は右へ廻して綯ふが習ひなるに、それを左へ廻して綯ふとは物の反對になるを云ふ、以㆓齟齬㆒または不運に喩ふ。

しも礫もせず（鎗椎三）

礫を打つて合圖するより出た言葉で、音沙汰無きを「無しも礫も打たぬ」といふ。礫を打つことも無いの義である。（「なし」を梨と書いてもあれど、もと無の義）。

***なむさん**　ハアア南無三この馬落ちた（壽門松）　市之進・女を見失ひ、南無三寶と北へ走り南へ戻り（鎗椎三）　後を見れば小提灯、河といふ小文字は此方の親父。南無三寶と鎖いたる店に平蜘蛛の、ひつたり身を付け身を忍ぶ（女殺）

〔南無三〕南無三寶の略。「南無」は梵語 Namas の連聲體 Namo の音譯で、歸命す、頂禮すなどの意で、佛を祈るときにいふ語。「三寶」は梵語 Triratna の譯で、佛、法、僧を尊んでいふ。事の心とたがつて辛い時に、佛の救助を乞はうとして南無三寶と祈るより轉じて、失敗した、しまつたと思ふ時に發する語となつた。

態に似せて巻子を巻く（關八州）

巻子とは績み絲を跡のやうに巻いたもの。この諺は、形態性癖によつてそれぞれ異同あるに喩ふ。巣林子はこの諺を、蜘蛛は腹が大いから子袋も大きい意に用ひた。

***二合半**　這出の蛙二合半、首にかけたか時鳥（薩摩歌）　小七様にとんと打込み、二合半のもりきりおたい咽に詰つて、ぎつちぎつちてきないこんでごはりまする（宵庚申）

物相に容れる飯の量である。轉じて奴または草履取のやうな輕き士人を卑めていふこと、なほ今の世に小吏を腰辨といふの類の語である。俚言集覽に、「俗に二合半入の盛相ともいふ物に飯を入るを云、因て轉じて輕き士人を卑めて二合半と云」。

憎い者は生けて見よ　内に惡魔のある事も、憎い者は生けて見よ、これも世上のふしやうぞかし（卯月紅葉）

世上のことは兎角思ふやうにならぬものなれば、我憎いと思ふ者も生けて見るがよいとの意の諺である。毛吹草・巻二、世話の題下に、「にくきものはいけてみよ」。貝原好古編・諺艸に、「にくきものは生けて見よ」。

にそくさんもん　涙片手に道具屋集め、二足三文に賣捨て（博多）

〔二足三文〕二束三文とも書く。もと金剛草鞋の價より出た詞であつて、高價な品も草鞋の價程に安く賣捨てる意よりして、捨賣の意にいふ諺。昨日波今日能物語に、「聚樂にて金剛大夫勸進能に芝居錢三十文づつ取りければ、金剛は二足三文する物を三十とるはせきだ大夫か」。西鶴の織留に、「奈良草履屋を二足三文にしまひて大坂を離れ」。

***にちやうのゆみ**　戀慕はれし二張の弓の本弭の、放さぬ先に弦切れて（鎗椎三）　女の操を守つて二張の弓をひくまじとは、弓取の義にも劣らぬ魂（女護島）　二張の弓の引く手あだなるしのび寢に、浮名やはつと立田山（三世相）

〔二張弓〕二張の弓をひくは二心を抱くのである、以て女の一夫を持てるになほ他の男に想を懸けるにいふ。間男する。紙子仕立兩面鑑に、「二張の弓はひかぬと、女の道を立てるそち」。

にべもしやりもない　生中意見だてして何のにべもしやりもなう一討にしてやらるるは定の物（懸物揃）

蕩久松山千代の若緑には、「にべもしやしやりもない有様」とある。蓋し「にべ（次條を見よ）もしやりしやりもない」の略訛で、粘氣もなくしやりしやりした所もなく無味無愛想なるをいふ。「味もしやしやりも云云」をも見よ。

にべもない　ハハアにべもなう埒明いた、如何にしても上つ方へ左様な慮外申されまじ（雪女）　連合五左衞門はにべもない昔人（天網島）

「にべ」は鮸の鰾から製する膠を云ひ、粘着力頗る強い。「鰾膠も無い」とは柔和な粘氣の無い、卽ち同情の心の缺けて愛想無きをいふ。

盗人におひをうつ　さては旦那を縛つたか、熊坂の長範の盗人におひを打つたと、皆散散に遁げ失せけり（[illegible]靜）

既に取られた上に更に鐖などを遣らねばならぬ意にいふ諺。「追を打つ」は追錢を打つの略。また略して「盗人に追」ともいふ。

盗みする子は憎からで、繩かくる人が恨めしい（冥途飛脚）

曾我物語に、「人の親の習ひ、盗みする子は憎からで、繩つくる者を恨むるは、常の親の習ひにて候ぞや」。

鼠算用　お慈悲な鼠算用、なる程私が逃がしませう（壽門松）

この諺世話盡にも出てゐる。金錢に利を利が生んで増加して行くを鼠の繁殖の甚しきに喩へたもの。但しここの文は鼠に緣ある言葉を用ひて考案といふ程の意に云うたのである。

涅槃の名殘の雪（吉岡染）

雪は涅槃會（陰暦二月十五日）の頃から降らなくなるといふに據る。毛吹草に「雪の果は涅槃」。

寢耳に水（國性爺）（鎗椎三）（博多）

不意に事起つて驚くに喩ふ。和漢古諺に「寢耳に水の入る如し」。

念力の矢に當つたからくり的ぢや（關八州）

念力岩を通すといふ諺あるに據り、思ひ込んだ一念思ふ壺に當つて、兄の妻たるべき詠歌姫が我が妻となつた意にかくいうたのである。繰的とは、吹矢などの的に中るとき、種種の人形などの躍出るやうに仕掛けたもの。

のこぎりあきなひ　兩方で物を摑み居る、彼奴は鋸あきなひと鋸屑の言ひ甲斐なき（重井筒）　揚屋女郎屋親子して鋸商、金銀は鋸屑と溜りける（酒呑童子）

〔鋸商〕鋸は材木を切るに押しても切れ引いても切れる故に、兩方から利得するに譬へる諺。井原西鶴撰・日本永代藏・巻四、祈る印の神の折敷の條に、「さす手引く手に油斷なく、

佛法不思議王對座（加增曾我）　昔時は階級制度が嚴であつた故に、如何程才智があつても地下人が堂上に昇るなどは極めて六ケ敷いことで、平忠盛が昇殿を許されたそれすら堂上人は大騷ぎをした程であつた。唯僧侶のみは其才能によつては帝王の前にも出られたので、青雲の志ある者は僧侶になつた者か多かつた。佛法不思議王對座の諺もかゝることから出來たのである。

瓢簞より駒を出すは張果老（三國志）　鹽尻に、「瓢より駒を出す繪あり、是は月江錄、張果老蹈ニ破胡盧一と云ふこと、又張果が紙を以て驢馬とせしとを取合せて描けるにや」と見えてゐる。張果が紙を以て驢馬としたことは太平廣記に見えてゐる。

臍がお茶をひく　九郎右衞門吹出し、いやはや臍がお茶を挽く、わごりよが親仁は村一番下拔きの名人（嵯峨天皇）

「臍で茶をわかす」ともいふ。可笑しさに堪へぬにいふ諺。

篦を使ふ　上は立派な鞘口に篦を使うて別れける（雪女）

塗つたり剝がしたりする義。ごまかしをいふ。傾城難波みやげ（寶永七年刊）卷之四、太夫の初陣の條に、「大じんも犢をきりたがるばかりにて、たのむ紋日にへらをつかひ」。風俗傾性野群談（享保二年刊）三之卷、色遊びの一時は千兩の金にやうやうの條に、「天職にされたつてゐる客、鹿戀か端を買ふ程ならばよもや篦をつかふまじ」。和訓栞に、「俗語にへらを使ふといふ、含糊といふが如し」。

***へんてつもない**　その子を封じられ御產なくては何のへんてつもないこと（浦島）　お目が疎うて花も柳もへんてつもないこと（天神記）

偏綴無の義であらう。何の面白味も無くつまらない。爲愚痴物語に、「貪瞋痴の三毒に嚙みまぜて申す念佛題目は、何のへんてつもなき小歌にも劣れる事なるべし」。

ほうはつら　「ほほはつら」を見よ。

佛の顏も三度　又騙されし正直の、親の心や佛の顏も三度飛脚の江戸の左右（冥途飛脚）

諺に「佛の顏も三度撫づれば腹立てる」といふを取つて、三度親を騙したると、騙されて知らぬ親の佛顏と、三度飛脚（その條を見よ）とをいひかけたのである。

ほほはつら　ちと借錢を輕めん爲あぢな商からくんで、三兩餘りは今日明日に請取る筈の約束、はてほほはつら此銀を請取次第遣りませう（氷朔日）

〔頰は面〕頰といひ面といふも同じく顏といふ意よりして、名は違つても物は同じといふ意にいふ諺であつて、頰は顏ともいふ。洗朱（元祿十一年刊）追加百韻の條に、「頰は面ぢやとつぶやいて立」。毛吹草・夏部・杜若の題下に、「杜若といふやほほを顏よ花。弘永」と見えてゐる。心中刄氷朔日のこの文は、貸してゐるも我金なれば、所持してゐるも同じことの意にいうたのである。

枕を割る　茱も餘りに殘念枕を割りし一手段、短氣を鎭め無念を押ゆる御合點ならば密密申上ぐべし（川中島）

肝膽を碎くの意にいふ。思をこらす。蓋し故事に「邯鄲の枕」といふがある、その枕の邯鄲に取なして「邯鄲」を「肝膽」に通はせ、「割る」を「碎く」に通はせた隱語である。世間娘氣質（享保元年刊）卷之二、哀れなる淨瑠璃に節のない材木屋の娘の條に、「總じて婦人には氣鬱よりして醫書にもないさまざまの異病をわづらひ、醫者に枕をわらす事なり」と見えてゐる。この隱語は寬文・享保頃の草子に往往見えてゐる。

まげる　娘のお末が兩面の紅絹の小袖に身を焦す、これを曲げては勘太郞が手も綿もない袖なしの羽織も交ぜて（天網島）

質におくをいふ。質と七と音相通じ、七は第二畫の曲れる字なるより、曲るを質にいひなした隱語である。呑舟軒箕山編・色道大鏡に、「まぐる。何によらず質におく事をいふ、質屋へ物を預くるを七つ屋へやるといふは昔の詞にて初心なれば、質を七に取なして、又七の字の曲りたるを見立てよべるとはいへり」。風流夢浮橋（元祿十六年刊）卷四に、「京に居る内夢にも知らぬ質物といふことを覺え、今は巧者になつてまげるといふ異名までを習ひ」。

睫毛よまれる　賢女ごかしの拜み倒しに遇うて、吾妻殿に睫毛よまれゐるわいの（壽門松）

人に輕蔑されて自身これを知らない意にいふ。蓋し我が睫は我が身に見えぬによつていふ。和訓栞に「睫毛を數へらるるといふは、身にありながらえ見ぬ故なり」。

まつたけ　これを祝の始にて、なほ打續く松竹の齡も盡きず世もつきず、佛神應護の此所繁昌にこそ榮えけれ（用明天皇）

〔松竹〕諺に「松は千年、竹は萬年」といふによつて、「松竹の齡」というたので、松に近松、竹に竹田と竹本とを利かして祝福の意をかけたのである。「これを祝の始にて」といへるも、竹本座の新座主竹田出雲掾を祝うこの初興行といふ心である。

***まゆをひらく**　正しく御位を讓らんとの綸言、スハ時こそと眉を開くところ（浦島）

〔眉開〕嬉しい時には顰めた眉を見開けばいふ。謠曲・鉢の木に、「常世は喜びの眉を開きつつ」。眉開くといふことは白氏文集、源氏物語の中にも見えてゐる。

眞綿で首を締めらる（酒呑童子）

婉曲に責めさいなまれるに喩へた諺。

萬能一連物　とかく萬能一れん物、鐵槌應へぬ糟釘で（氷朔日）

萬能一心と云ふ諺に據り、萬能といふ鋤（三四寸の幅平たく尖れる齒杯より成る鎌に柄を嵌めたもの）をきかせ、一心を一連物にいひつづけたのである。一連物とは幾箇かを連ねて一組とする物をいふ。

萬能一心の家業なし（酒呑童子）

ひだりまへ 忘形見に禪師様を見んと思ひて遙遙と來たる甲斐なき旅衣、左前なる世の中や(百日曾我)
「左前」左衽の義、衣の襟は右前に合す習ひなるに、それを左前に合すは習ひに背くものである、よつて以て、事の思うたことに背いて兎角不運で思ふやうにならぬことに喩ふ。

飛鳥懷に入る時は狩人もこれを取らぬ(釋迦)
舊唐書・長孫無忌傳に、「太宗目ニ無忌一曰、褚遂良學問稍長、性亦堅正、既竭ニ忠誠一甚親ニ附於朕一、譬如ニ飛鳥依レ人自加ニ憐愛一」。

人事言はば筵敷け(重井筒)
人の噂をしてゐると偶然其人がそこに來るものだによつて、まづ席を設けて置いて人の噂をせよの意で、「人事言はば目代置け」といふ諺の轉訛した諺である。

一つ穴の狐 なま見られぬ一つ穴の狐、悪しく寄つて怪我まくるな(以呂波)
同じ穴の狐とも、一つ穴の貉ともいひ、同類といふ意の諺。漢書・楊惲傳に、「古與レ今如ニ一丘之貉一」とありて、註に「師古曰、言ニ其同類一也」。

人でもくゐでも無い いかに鎌足、六位七位八位を下れば人でもくゐでもなし、禁中には穢らはし(大織冠)
人間の資格無しの意にいふ諺である。按ずるに「くゐ」は「くひ」(杌又は杙)であつて、狂言に「人か杌か」とあるこれらから出た諺であらう、それを「くゐ」(九位)に取なしたものである。大寶令が撰定されて後世長くこれによつた位階に、諸臣三十階あれども九位といふは無い、よつて人以下の者・無位以下の者の義に取なしたのである。貞享節用集・世話詞に、「無人九位、ヒトデモクヰデモナイ」。菅原傳授手習鑑(淨瑠璃)第一に、「九位でもない無位無官に着せた裝束、この冠穢れた同然云云」。この諺はまた「男でもくひでもない」(その條を見よ)とも云ふ。

***人橋を架ける** 御臺所より人橋を架けらるれども、酔臥して御正氣もなしとの便(女夫池) 傳を尋ね便宜を求め、人橋かけて志戸の浦、毎日事をぞ窺ひける(大職冠)
俚言集覽に、「人橋をかける。(毛吹草)、事をいそぐとき數人使のものを出すをいふ」。

人は素性が恥かしい(出世景淸)
「人は筋目が恥かしい」を見よ。

人は筋目が恥かしい 常體の者の子が七つ八つでかうあらうか、人は筋目が恥かしい、流石父様のお子程ある(夕霧) 人は筋目が恥かしいもの(嫗山姥)
人の筋目(素性)は包まれぬもので、育ちの善悪はやがてその者の言動に顯はれるの意の諺。

***丙午の女** 總じて丙午の女は夫にたたるといひ傳へ、賤の妹背も忌むことござめり(佐佐木) 丙でないぞや身は丙午、また房様のいまいまし(重井筒)
丙午の年に生れた女は男を殺すというて忌んだものである。蓋し「丙」は正字通に「陽火也」と見えてゐる、「午」も陽である、男は陽で女は陰たるべきに、女が陽の重つた丙午の年に生れれば男を凌ぐと云ふ意から出た俗說である。男色大鑑(貞享四年刊)に、「丙午の女は必ず男を食へると世に傳へしが」。

百貫に編笠 表具計も百貫に、編笠提灯南京の、八匁から九匁を(博多)
ここの文は、表具だけでも百貫を費したといふに、「百貫の抵當に編笠一蓋」の諺をいひかけ、南京の鉢に八匁をいひかけたのである。

百日法華 可愛さは實子一倍、疱瘡した時日進様へ願かけ、代代の念佛捨て百日法華になる、これ程萬面倒見て(女殺)
一時日蓮宗信徒になること。増補俚言集覽に、「百日法華。他宗の者病など祈るが爲に一時日蓮宗になるを云」。

百樣知つて一樣知らぬ(會稽山)
博識の人でも知らぬ事もあるとの意の諺。烏帽子折(舞の本)に「百様を知りたりとも一様を知らずば、爭ふこと勿れと申す譬のあるぞよ」。毛吹草・世話に「百様を知るとも一様を爭ふこと勿れ」。

貧女の一燈 現世貧女の一燈も未來にては如意寶珠(釋迦)
諺に「長者の萬燈貧女の一燈」といふ。捧げる物は薄くとも、志厚ければ神佛の御利益を得る意であつて、蓋し貧女難陀が佛に歸依し、一燈を挑げた功德によつて遂に佛果を得たといふ故事である。委しくは賢愚經・貧女難陀品及び阿闍世王受決經に就いて見よ。巣林子作釋迦如來誕生會に、瑠璃仙女といふ貧女が、釋尊頭陀の道に一燈を挑げた功德によつて遂に佛果を得たことが記してある。

貧は諸道の妨げ(女楠)
この諺は曾我物語にも見えてゐる。

福德の三方論議(壽門松)
「福德の三年目」(福德の神は三年目に來り、好運に際會する意)の諺の轉用である。

降つて湧く 降つて湧いたる忙しさ、お成座敷の替へ疊(宵庚申)
天より降り、地より湧いたやうな、意外なるをいふ諺。本朝二十四孝にも、「勝頼様の御身の上降つて湧いたる御災難」。

佛法と萱屋の雨は出て聞け 世話にも申す如く佛法と萱屋の雨は出て聞け、廣く見るにしくはなし(女夫池) そんなら先へ行く、跡からおぢや、佛法と萱屋の雨は出て聞けと、外へ出づれば又有難い事も聞く(宵庚申)
家の内にのみゐては佛法の有難い教も知れぬ、寺院に參詣して其教を聽いてこそ感謝歸依の心を發しる。又萱屋の雨は屋内では其音が聞えない、外へ出てこそ雨の音が知れるの義。よつて見聞を新にして始めて妙味を感知されるの意の諺である。

えてゐる。世説故事苑(寶永七年の自序がある)に、茗荷を食へば物忘れするといふ俗説は、蘘荷と生薑と言葉相似てゐるが故に生薑を誤つたのであらうと、東坡志林を引いて述べてある。

目が黒い かたりごとは古い古い、その爲の遣手、これ目が黒い見ておきや(壽門松)

物事を見分けるに熟練してゐるをいふ。眼識がある。

めくさりがね 千兩道具の娘を二十兩の目腐金で女房に持たうやべかこ(女腹切)

〔目腐金〕俚言集覽に、「目腐金。もの惜みする人の所持金などをいふ」。物惜みする少しばかり金といふ意に卑しめていふ。

めしろ 此利右衛門が目しろにて弟子手間取なども引廻す(氷朔日) お雪様の父御様母御様は御座らず、目代になるこの乳母はぐるなり(鑓權三) 人ごと言はば目代置け(五人兄弟)(千疋犬)

〔目代〕往時國守が代理を遣つて任國を治めしめた、これを「もくだい」(目代)と云つたのが轉じて、目代を「めしろ」とよんで監督、見張の意にいうたのである。

「人ごと言はば目代置け」とは、人の噂をする際は偶然噂されてゐる人の來るものなれば、人の噂するには見張を置けとの諺である。この諺は訛つて「人ごと言はば莚敷け」(その條を見よ)ともいふ。

めだか これ大臣殿、神道に事寄せ世を奪ふ逆臣とは目高がとつくに見付けたり(聖德太子) さればこそ冷泉は目高にてありけるよ(源義經)

〔目高〕見識の高きことをいふ。目に見て何物であるとよく推知すること。野傾旅葛籠(正德五年刊)巻四に、「旦那は大きに目高ぢや、その女郎に京の島原で高尾様と申した結構な太夫様なれど」。

目の鞘外す 目の鞘はづすが遣手の役、大事にかける證據には世間に心中十あれば廓に一つあるかなし(反魂香) さあ討てさあ來いと柄に手を懸け睨み合ふ、目の鞘外しの下鋼・身は竹刀抜きかれて(雪女) あたりに目を付け目の鞘はづす刀の血痕押拭ひ(女護島)

〔目の鞘〕目の鞘はづすは瞼を張明けて目玉をきよろきよろ光らして見るをいふ。犬子集・德元の句に、「夕立や目の鞘はづすいなびかり」。吾吟集・九に、「ぬくとても我目の鞘はづさずば何の用にか太刀のきつさき」。可吟編・浮世の北(刊本)、支考の句に、「市人の目の鞘はづすあられかな」。續蕘集・巻下、鳥附雜の部、傘下の句に、「駒鳥の目のさやはづす高ねかな」。井原西鶴撰・懐硯(貞享四年刊)巻之五、俤の似せ男の條に、「小平太もとより無筆にて、此時目のさやはづれし男ありて、これに氣をつけて與太夫にあらぬことを見出すに、女房合點せず」。

目恥かしい 侍町人の歴歴につきあうて、心も至り目恥かしい、粗相して笑はれな(夕霧)

人の見る目も恥かしの意。諺に「大人は目恥かし下種は口恥かし」。なほここの文意は夕霧は物の道理も辨へ行き届いた女であるから、我等をどう見てさげしむかを思うて恥ぢ愼まねばならぬといふこと。

目元にしほがこぼれる(丹波與作)

目元愛嬌たつぷりなるをいふ。「しほのめ」を見よ。江島其磧撰・風流曲三味線(寶永七年刊)二之巻、横槌見て樂しむ後家の條に、「お笑ひなさるる時目もとにしほがこぼれかかれば」。「同じねをなく云云」をも見よ。

***めをぬく** 河内屋の與兵衛めと帶解いて裸體になつてちや、ええ口惜しい目を抜かれた(女殺)

〔目を抜く〕人目をくらまし出抜くをいふ。新猿樂記に、「以ㇾ謀抜二人目一」。

もちまるちやうじや たとひ持丸長者でも金に詰るはあるならひ(冥途飛脚)

〔持丸長者〕圓は丸とも書き、錢をいふ。金錢を多額に持てる長者。富貴の者。

物に尾鰭が附く 我夫をさしおいて手代にいふは何事と、結句物に尾鰭が附く(大經師)

複雜になる意。事が面倒になる。物が事實よりも誇大になる。遊君三世相にも「かうした素振を見聞きなば、尾鰭を附けていか様にか申すべき」と見えてゐる。

燒鳥に攣 燒鳥に攣・用心にあきはない。拍子木たやさずかはりがはりに寢ずの番(碁盤太平記)

「攣」は紲緒の義、狩獵の時に鷹の足に繋ぐ紐をいふ。「燒鳥に攣」とは、用心の上に用心して油斷せぬことにいふ諺である。毛吹草に、「燒鳥に捉緒をつけよ」。

疫病の神で讐を取る(田村)

諺て己が讐と思へる人に疫病神が取附いて殺してくれる、己が手を下さないでも彼自身の災難によつて己が目的を達するをいふ。この諺は尤草紙にも見えてゐる。

***やすだいじ** 申してもやす大事、拙者は他言致すまいが、錐は袋と外よりの取沙汰は存ぜぬ(堀川波鼓) かりそめながらやす大事、何を見てさはいふぞ證據を出せ(堀川波鼓)

〔易大事〕何でもない易いことのやうなれども、取方によつては大事件となることをいふ。平家物語・巻七、木曾山門牒状の條に、「これこそさすが安大事よ、如何せんと宣へば」。

藪から棒 女房に持つて下されとは藪から棒の異なものなり(天神記) 藪からばう主の佛頂顔(女腹切) 引つ削ぎ竹槍・猪突槍・垣越のめつた突、目鼻の先をぬんぬつと藪から棒に仕込んだる眞魚箸槍の鼠突、頭の上・足の股・前後左右にずんずつと、避けん方なく身を冷す(三國志)

唐突な言行に喩へていふ諺。「藪からばう主」は、藪から棒を坊主にいひかけたのである。又本朝三國志のこの文に就いては、土寇が光

「萬能一心」の諺に據つたもので、家業に萬の藝能も一心の善なければ無用の者であるとの意。俚言集覽に「〔世話盡、説苑〕詩云尸鳩在桑其子七兮、淑人君子其儀一兮、傳云尸鳩之所以養二七子一者一心也、君子之所以理二萬物一者一儀也、俗諺本此意に同じ、萬の藝能も唯一心よりすると云事也、然るに今の諺を説くもの。萬の藝能ありとも一の心不善なれば無用の人となるといふ事に用う、「竹馬抄」心の誠なからん人は、何事につけても人眼の侍るまじきなり、萬能一心など申すも、かやうのことをや申すらんとあれば、俗説の如く義を取ること久し、原來佛事萬法一心の語より出たるなるべし」。

***みくだりはん**　厭かぬ夫婦の中をさへ三行半の生別れ(娼山姥)　いひごと一つせぬ中の一言二言いひあがり、三くだり半の筆の鞘割れてのくこそ哀れなれ(義經)

〔三行半〕離緣狀。去狀は俗制に三行半に書き終へるよりいふ。高野紀行に、「歸る雁三行半を名殘にて宗因」。

***水入らず**　殊にお龜と我等こと從弟同士の水入らず(卯月潤色)　湯を沸して水入らずの親の内で盜みをする(二枚繪)

肉親の間柄をいふ。俚言集覽に、「水いらず。此は親しき者の中に疎き者の間雜するを油に水のまじりたる如しといふ、それにうち反して親しき者ばかりの集會をかくいふ」。「湯を沸して水に入る(徒勞をする意の諺)を水入らずにいひかけた。

水が湧く　十四の灸に水が湧く盛りの女盛りの男(今宮)

生氣あつて血氣盛んなるに喩ふ。今宮心中のここの文は、背中の灸點十四ケ所に灸をすれば、熱氣を覺えて汗が水の湧く如くにじみ出る意に、血氣盛りの男女をいひかけたのである。血氣盛りの若者を「水の出ばなの若者」といふ諺もある。(近松作・淀鯉出世瀧德・上卷に「身を鹽らんだは身のやいと、十四の冬より今年まで」とある、これも灸の緣で十四の灸點をきかせて十四歲の意にいひつづけた。

水の流れと身の行方(冥途飛脚)

俚言集覽に「水の行方と人の行方は知れぬ」。

身に金が入るとて斬らるるが上夢(薩摩歌)

山東京傳撰・盧生夢魂其前日(寬政三年刊)にも「人に切らるる夢に逆夢というて、身に金の這入ることとあり。」

見ぬが佛聞かぬが花(烏帽子折)

「見ぬが佛」は「知らぬが佛」ともいひ、見もせず知りもせねば瞋恚も起らぬを、佛の忍辱柔和なのに譬へていふ諺。「聞かぬが花」は「見ぬが花」ともいひ、見も聞きもしないで想像する方が却つて心ゆかしいを、花の美しいのに譬へていふ諺。

身の蜂拂ふ　彼奴も身の蜂拂ひかね、お暇申しすて駈落致す(鑓權三)

身邊に飛ぶ蜂を追拂ふ義、よつて以て困つた身の處置をつけるに喩ふ。晉書・劉毅傳に、「蜂蠆作二於懷袖一、勇夫爲レ之驚駭」。

身を棄つる藪　共に命の棄場ぞと大佛殿の勸進所、身を棄つる藪となりにけり(重井筒)

窮し果てて我身を棄てるに至つたといふを、「子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪なし」といふ諺に據つてかく云うたのである。

蜈蚣に唾　蜈蚣に唾、蛞に蔘、皆夫夫の敵藥あり(關八州)

蜈蚣は唾を嫌ふによつていふ諺。

向臑からでつかちない光物が飛んで出る(二枚繪)

「向臑から火が出る」「向臑から火が降る」などいふ諺を鹿島事觸(その條を見よ)の口調に似せて言うたのである。破産して困窮する意にいふ。「でつかちない」はその條を見よ。「火が出る」「火が降る」は貧家の喩にいふ。風流曲三味線(寶永七年刊)に、「萬事大氣に出て高なしの酒きげん、おつつけ向臑から火性の大盡」。元祿太平記(元祿十五年刊)卷之三に、「つぎのあたりし古帷子一つ召して、すねから火を取る此西鶴同前の御有樣」。御伽名代紙衣(元文三年刊)に、「今着てゐる破れ紙衣の古火打、うたねど向脛から火がふり」。「かみこのひち」「ひざのさら」をも見よ。

むくりこくり　娘を持つたお方は御用心なされ、むくりこくりが以ての外勢が强う成つて、此界へ渡つて或時は美しい稚子若衆と成つてたぶらかし(用明天皇)　神國に生れて神沙汰を停止とは正眞のむ、、りこくり、御笑止な國の作法(日本武尊)　親里の合力なんどと申して、厄介しつかいむくりこくりの上手ごかしに(二枚繪)

蒙古高勾麗の轉訛であつて、蒙古高勾麗鬼の意である。「むくりこくり」は昔は鬼の意にいうたのであるが、現今この語なほ筑前地方に殘つて、その意を轉じて頑固の意にいふ。嬉遊笑覽・卷六下に、「籠耳といふ草子に、小兒の啼を止る時むくりこくり鬼が來ると云ふこと、後宇多院弘安四年北條時宗が執權の時、元の世祖攻來る、元は蒙古なれは鬼が來るとは夷賊をいふなり、蒙古國栗といふことのいひ誤なり。筠庭云、此說わろし、蒙古高勾麗の二賊をいふなり」。心中二枚繪草紙のこの文は、市郎右衛門が鹿島事觸(その條を見よ)の口上をもぢつていうたのである。

***胸を衝く**　三五兵衛は詞なく手持無沙汰に赤面する、源五兵衛も胸衝きしが(薩摩歌)　先は正直喜んではや談合が極まつたか、さても胸をついた事、誰にどう談合せん(淀鯉)　早う逃げたい逃げたいと肝を冷しておはします、烏陀夷もむれを衝きけるが(釋迦)

意外なるに驚愕するをいふ。「とむねつく」ともといふ。胸ごたへして事の

茗荷は鈍根草　蔘は利根草・茗荷は鈍根草(懸物揃)

この俗說は狂言・鈍根草にも、「いとど鈍な奴めが茗荷を食ひ、いよいよ鈍になつて」と見

自笑撰・分里艶行脚（正徳六年刊）五之巻に、「總領のお琴もさしつぎのお哥も、尼おちのおみきも父なし子のおとめも、行さき的を立つるが如く、いつしか五人の姉妹此里に身をはめ五人女と名に立ち、此つとめ上方の白人の如し」。西澤一風撰・色縮緬百人後家（享保三年刊）二之巻に、「暫くして惣八、それがし過分のおごりより身をもちくづし、一度江戸へ下りしが阿波に吹く風は讃岐とやら、行くさきざき的を立つるが如し、これ兩親の罰なり」。

湯の山の道連れ　げに湯の山の道連れと、人もゆげたの數數に（百合若）

この諺世話盡にも出で、湯の山は攝津有馬をいふ。湯の山の道連れにはろくな者はゐないとの意。

夢に見てさへ一富士の、直に拜みて願ひ事（三國志）

瑞夢の次第をいふ諺に、「一富士二鷹三茄子」といふ、夢に富士を見るさへ瑞夢であるに、まして直に富士を拜んでの願ひ事は、必らず靈驗あるべきにの意。

夢は一富士、似たかよ蔦の山（隅田川）

瑞夢の次第をいふに、一富士二鷹三茄子といふ諺に據つた。この諺は嬉遊笑覽巻八、方術の部に「世によき夢とて、一富士二鷹三茄子といふは何の故とも辨へ難し、駿河などの國の諺とは見えたり、其國の名物をいふにや、昔は初茄子駿河より出、鷹は聞えざれども、古への鷹術は雉小鳥を取るのみなり、鶴雁などの大鳥をとることは東國より始りしにや、さらばそれらの事にてもあるべし、云云」。雙生隅田川のここの文、伊勢物語の歌に、「駿河なる宇都の山邊のうつにも、夢にも人にあはぬなりけり」とあるによつて、「宇都の山邊の」といひて、「夢は一富士云云」と續けたのである。

好い中の垣　愍の中・手形もいらぬとぬかしたれど、好い中の垣と預り證文してやつた（生玉）

親しき中に垣せよともいふ。親睦に狎れて禮を瀆すこと勿れとの意の諺。

***よこぐるま**　いやはやここな横車、口が過ぎるといひ返せば（十二段）　横車とはナいかずというて、おのれがやうな女の唐名よ（十二段）　雜人の唾は上一人の面汚し、臣が病の根元と諫めてもなほ横車（唐船噺）

〔横車〕車は横には轉げ行かないにより、以て我慢偏執の者に喩ふ。この語は赤染衞門榮花物語（巣林子作、延寶八年刊）及び男色大鑑（井原西鶴撰、貞享四年刊）巻之五、涙の種は紙見世の條にも見えてゐる。

よめとほめ　夜目遠目といふ事あり、紅粉でも丹でも塗散し、澁面作つて目を見出し（弘徽殿）　年經る顔におく霜の白きを見れば夜目遠目、九十過とは人知らじ（井筒）

〔夜目遠目〕夜目遠目笠の中といふ諺を應用したのである。晝見るよりも夜に見、近う見るよりも遠くに見、あらはに見るよりも笠の中なるを見るがおくゆかしうて宜しいの意。「年經る顔におく霜云云」は、新古今集・冬部、中納言家持の歌、「かささぎの渡せる橋におく霜の、白さを見れば夜ぞふけにける」とあるを用ゐたのである。

夜の鶴　父は子を呼ぶ夜の鶴（歌念佛）

燒野の雉子夜の鶴というて、鶴は深く子を思ふものである。詞花集・雜上部の歌に、「夜の鶴都の内にこめられて、子を戀ひつつもなき明かすかな」。白氏文集に、「夜鶴憶レ子籠中鳴」。

***りんげん**（蟬丸）　綸言汗の如し（鎌田）

〔綸言〕王言。詔。禮記・緇衣篇に、「子曰王言如レ絲、其出如レ綸、王言如レ綸、其出如レ綍」。王言は出でては取消のないこと恰も汗が身體から出でもとにかへらぬやうなものだによつて、諺に「綸言汗の如し」といふ。

王は十善・神は九善（千疋犬）

前世に十善（その條を見よ）の徳を積んだ人はその果報によつて現世に生れて帝王となり、前世に九善の徳を積んだ人はその果報によつて現世に生れて神となるといふ意の諺である。（されば十善の帝王は九善の神よりも果報の勝れたもので、神よりも帝王の尊きを表はした國民思想の面白い諺であるが、この諺はあまり古い書には見當らない。三社託宣由來（加賀掾淨瑠璃・延寶六年刊）四段目の中に見え、後のものには菅原傳授手習鑑の中にも見えてゐる。

轍の鮒の水をこふ憂きめ（女護島）

轍に水の溜つた中に居る鮒のやうに困窮するに喩ふ。莊子・外物篇に、「車轍中有二鮒魚一焉、曰我東海之波臣也、君豈有二斗升之水一而活レ我哉」。

わらをたく　娘にも疵がつく、さあ男のある證據を出せ、何處ぞでわらを焚かれて銀が惜しうなつたか（萬年草）　島屋の客に賄賂取つて梅川に藁を焚き、あちらへ遣らうといふ事かおいてくれ（冥途飛脚）

〔焚レ藁〕難癖をつけて貶すをいふ。俚言集覽に、「藁を焚く。むだ口をいふこと、又古道具を買ふに色色惡しく言つて直ぎるをいふ」と見えてゐる　蓋し藁を焚附ける義よりしておだてるの意にいはれ、よつて又俚言集覽にいへる如き意の諺となつたのであらう。

井の中の蛙、夏の蟲にせいれうとや（大原問答）

「せいれう」は「せいれい」（蜻蛉）である、風鈴を「ふりよう」とあるの類である。見る所の小なるに喩ふ。莊子・秋水篇に、「井蛙不レ可三以語二於海一者、拘二於虚一（虚は一本墟に作る、居の義で居る處をいふ）也、夏蟲不レ可三以語二於氷一者、篤二（固の義で固陋の義）於時一也、曲士不レ可三以語二於道一者、束二於教一也」。

伯父が甥の草を刈る　我了俊の弟と生れながら、仲秋が世を嗣がば、伯父が甥の草を刈ると世話にいふ如く無念たぐひあるべからず（今川了俊）

和漢古諺などにも見えて、目上の者が目下の者に使はれる意にいふ諺。

男でもくひでもない　お二人の葬禮に立派な乘物に乘せうといふ氣がなければ男でもくひでもない（女殺）

藪を路に要し藪中から竹槍で右脇を刺したのであるから、この諺を用ひて「藪から棒に仕込んだる眞魚箸槍」といひなし、そして棒に仕込んだ眞魚箸槍をその形より「鼠突」といふたのである。眞魚箸槍も鼠突も同物異名で、槍その物にあらぬを形容した語である。近松作・堀川波鼓に「广九四郎を笑ひ、何の己れが鼠突、鋏の鬪こそ望るとも槍の柄握る習ひは知らじ」、とある「鼠突」もこの意である。眞魚箸は和漢三才圖會卷三十一、庖厨具の條に「魚箸以鐵作之、長六寸柄四寸許、而左挾肉抑持也」とあつて、鼠を突くにもこの物適してゐる。

やぶにこうのもの 一僕連れぬ我我でもやぶにこうの者、いかな大病でも仰付けられ、活すか殺すか何方へぞ驗は見せうと自慢する(冷泉節)

三國志に、孔明が司馬懿に巾幗を贈つて戰を挑んだ條に、「豈知野夫有功者也」と見えてゐる。蓋し「野夫に功の者」といふを、藪醫(庸醫)にも巧の者があるの意にとりなした諺となつたのであらう。この諺古くは十訓抄・第三、不可侮人倫事の條に、「藪にからの物といへる兒女子のたとへむねをたがへざりけり」と見えてゐる。毛吹草に「やぶに剛のもの」と書いてある。色葉集に萱津正法寺の緣起を引用して、「尾州阿波手杜は甚目寺の此方法界門の橋を渡り、左の方堤の上を萱津の方に行くに、また右の方堤の下に近く杜あり、天神とてほこらありて四方は藪なり、萱津の村の入口正法寺の筋違合也、藪に香物といふ事、ふるき者のいへるは、昔は正法寺大地にして住持は唐僧東巖禪師といへり、其比瓜茄子大根小角豆蓼やうのものも商へる人、此杜の前を過る時必ず一つ二つ此神にささげて通りけるを、禪師ただに捨置くべきにあらずと、甕に入れ鹽を交ぜて漬置きしより始まると也、大方日本香物の始めなるべし」と見えてゐれども、牽強の說であらう。(序云、正法寺は天平勝寶八年唐僧東巖禪師の創建であるといふ)。

山賣りの山こかし 主人の供して奧州の金山賣つたる、山賣りの山こかしとは汝が事(隅田川)

姦黠の者をいふ。俚言集覽に「山師。山コカシとも云」と見え、また同書・山の條に「山師(詭計子)は金山を鑑定する者を云、本來は姦惡の者をいふにあらず、然るを山師の名を假て徼幸する者あり、是にても山師と云、又山をすると云より、山師は姦黠の者の稱とす」と見えてゐる。近松のこの文は、山を賣つたから山賣りといひ、山師即ち姦黠者と罵つたのである。「やまこかし」をも見よ。

山の芋が鰻になる 山の芋が鰻になり、喧嘩のさへ人聟になり、結ぶ緣こそ不思議なれ(天神記) 今日は殿の御成り旦那の御出世、追付け山の芋から鰻にお成りなされう(宵庚申) 豆腐や蒟蒻を鯛や鱧ぢやと思うて食へ、山の芋を鰻と思へ(萬年草)

山の芋も鰻も精力を強うする食物なれば、山の芋が鰻に變化するやうにいひなされた諺であらう(山の芋が精力の藥になるといふことは、井原西鶴撰・好色一代女・卷之二、諸禮女祐筆の條にも、「晝夜の分ちもなくたはふれかけて、弱れば鰌汁・卵・山の芋を仕掛け、案の如く此男次第にたたまれて云云」と見えてゐる。また鰻が精力の藥になることは、「うなぎ」の條に述べて置いた)。俚言集覽に、「魚も龍にこそ、或は蛇の鰻になるとも、山の芋の鰻に成とも云事あり。(續狂言記・成上りもの)また山の芋が鰻になるとも一定でござる」。世話支那草(寬文四年刊)下卷に、「薯蕷の鰻になるといふ事=日本の俗薯蕷の鰻鱺に化する事をいへり、しかれどもやつがれいまだ其據をしらず、定て左あらん、且田鼠の鴽となり、雀の蛤に化するためしもあれば、にやしゆべからず、或人の語りしは本草綱目に據ありけるとなむ、今かんがうるにおよばず」。

山の芋で足突く あやまり申した、其方が言分眞直に御前へ申すが又御馳走、やれやれやれやれ山の芋で足突いたとどつと笑へば(宵庚申) 籠の底なる山の芋でびつくり足つく革袋(蛙合戰)

思ひ懸けないひよつとした事で失策するに喩へていふ諺。俚言集覽に、「山のいもで足をつく。長芋で足をつくとも云」。

やまのかみ 我も岩木にあらねども、内に殘せし山の神めつたむしやくしや悋氣する(關八州)

〔山神〕己が妻を惡口する詞である。猿樂能花子といふ曲に、山神が夫の花子の許へ通ふを嫉妬して狂氣の如くすることあるより出た詞だといふ。(平假名四十七字の內、「やま」の上は「おく」(奧即ち妻女にとりなし)なるよりいふとの說は非)。

やみらみつちやのかはぶくろ 心の内はむしやくしやとやみらみつちやの皮袋(曾根崎)

暗ら密沙の革袋の義であらう、何が何やらくちやくちやの意にいふ。天然痘に罹つた人の顏面くづれて菊石のやうになつてゐるを「みつちやづら」といふ。また八文字屋本などに「何のへちまの皮袋」などといふが見えてゐる、かかる皮袋か聯想上みつちやにも添加されたものである。鷹筑波集に、「月の顏木の下やみらみつちやかな」。艶道通鑑に、「それでも罰があたらずば佛も神もうその皮、やみらみつちやの貌ながら云云」。藤木盛庸撰・日本好色名所鑑(元祿五年刊)大坂新町由來の條に、「遊女ども多く集り髮を結ぶ、夙に起ては身を嚬み、暮にはやみらみつちやの高低見えぬばかりに白粉をぬり」。

病む目より見る目(嵯峨天皇)

この諺毛吹草にも出で、「病む身より見る目が辛い」の義であつて、身を目に訛り、が辛いを略したもの。

行先に的が立つ この罰たつた一つでも行先に的が立つ、斯くては家も立つまじ(天網島)

行く先に罰の的が立つて、罰の矢の通る道筋を步まねばならぬといふ義であつて、將來罰が當つてろくなことはないとの意。八文字屋

エ云々」。
「さいふ」に宰府と財布をいひかく。「巾着」はその條を見よ。小梅は白太夫の娘の名。
（近松のこのあたりの文、小梅が親の白太夫を牛に乘せ、角に小竹筒の瓢簞をぶら下げ、春風駘蕩として左に箱崎の松原、右に安樂寺の塔を櫻花の中に望む筑紫の浦曲を、牛牽歌を謠うて牛を牽き行く、閑雅な情景を寫して餘蘊なし）。

臼踏歌

日本武尊・吾妻鑑第三に、「君はわさ米わりや碓よ、こぬかこぬかはふみで見ろトツカラコ、トツカラコ」。

歌祭文（祭文）

賀古教信七墓廻・第二、櫻祭文に、「そもそも敬つて花を眺め奉る、上は梵天山櫻、下は次第に咲く櫻、忝くも此の國の開き初めたる初櫻、………、又煩惱の犬櫻、惡事災難只りんりんそもそこ、祟りをなすとも只今の、御方便の功力を以て繁昌の御酒宴」。
大經師昔曆・下之卷、おさん茂兵衞曆歌に、「おさん茂兵衞にいふやうは、由なき女の悋氣故、なんの咎なきそなたまで、あれ不義者と危日、遂に命のほろぶ日、湯殿始に身を清め、新枕せし姫始、かの着衣始引きかへて、ひかへろ駒のくら開、云云」。
生玉心中、嘉平次おさが道行に、「坂町邊のな通り筋、柏屋内におさがとて、年は二十のヨイ花盛り、客衆客衆の揚詰を、貸すの貰ふの暇なき、辛い勤の中に捉、深い願ひは一つ屋の、嘉平次故に身をはめて、かはるまいとの七枚起請、書いて二人が取りかはす、云云」。
吉野忠信・第四、女郎宮寄に、「謹上再拜敬つて申し奉るの色は、根本太夫職投は天職姿なり、まづ江口の始より、君といふ字を書き初めて、世世の末にはよねと讀み替へ、僭上大盡閨の橋に引き籠り、常闇の夜店となりけるを、云云」。
雙生隅田川・第四、狂女道行に、「祓ひ清め奉るの釋迦は羅睺羅の親仁にて、布袋は唐子のお媼役、閻魔は鬼の旦那なり、云云」。
「うたさいもん」及「歌謠その二」の中に就いても見よ。

歌說經（說經）

傾城反魂香・下之卷、みくまのかげろふ姿に、「姿を物に狂はせて、曳けや曳けやヨヤこの車、ゑいさらさらさら、笹の葉に死出の旅路の後世の友、云云」。

歌念佛

五十年忌歌念佛、下之卷、お夏笠物狂に、「少くわん、覩ずれば夢の世や、寢て溫めし櫻子、いつの間にかは浮かれそめ、三界を只家として、袖笠雨のやどりにも、心止めぬ假枕、流れにあらぬ川竹の、云云」。
井筒業平河内通・第二、業平歌念佛道行の中にも見えてゐる。「さんしやうだいふ」の條を見よ。

海老釣歌（西國訛節）

浦島年代記・第一に、「海老遣らう遣らうり鱅や、鬚長なぜにぜせはん、もう餌上ぐるぞ、もう海老よ上ぐるぞ、上げての後にかいらうが、戻ろがための餌遣ろ、どんぼぬ續く、鯥も續く、續き腹が立つならば、親重代の熊手を持つて追ひ拂ひ召せ召せ」。

鹿島事觸

用明天皇職人鑑・第四に、「これや此方へ御免ならう、これはお鹿島香取より罷り出でた事觸れでござりや申す、御神詫の通り一言僞りはござない、無い事もあるやうに、足らぬ所は取りつけ引つ付け、國國所所を觸れて通る事觸れで御座りや申す、總じてお鹿島と申すには、上の禰宜が三十三人、中の禰宜が三十三人、稍禰宜が三十三人、合せて九十九人の禰宜が正月七日に神前に於て、おやおつかない起請を書く、その起請の文言に、嘘をつくまい慾をせまい呉れぬ物は取るまい、又呉れる物なら辭儀もせまい、なんぼなりとも貰はうと申す誓紙を書いて、六十六國を觸れて通ろから僞りは御座りやない、この度お鹿島の御寶殿より、でつかちけない光り物が筑紫の方へ飛び出で、お前の扉が八文字に開け、神前の白洲が八角に割れ、神馬のお馬の四足に土を附けて大汗をかいて御座る、さるによつて禰宜神主これを歎き、神馬のお馬に三石六斗の豆を食はせて、神樂の太鼓を打たせ、御湯を捧げて七座の物忌み、七日のおこたれとござある、時にお鹿島大明神氏子を不便と思召して御託宣がござやり申す、當年は乙酉春から今まで氏子繁昌、ゆるりくわんと乙の梢に酉の年の萬の鳥が羽を休める如く、十分の世の中なれども爰に一つの大事がある、娘を持つたるお方は御用心なされ、蒙古高勾麗が以ての外勢が強うなつて、この界へ渡つて或時は美しい稚兒若衆となつて誑かし、或時は貴人高人の執權御使なんどと僞つて、女御に上げい后に立てよなどと申しておやおつかない僞り、跡からはげる化け頭、親はこれを誠と思ひ娘を手放すものならば、あつたら娘も身代もむくりこくり取られん事不便なりとの御託宣、嘘も飾りも申さないお疑やり申すな、出るまま八百萬神の御剣のすわつた事觸れ、無上神靈神道加持」。

木遣音頭

夕霧阿波鳴渡・上之卷に、「やあゑい、さツやあゑいさツ、云云」。

木割歌

日本武尊吾妻鑑・第三に、「さまの心はあさ木の伽羅に、ふしのあるのは我がわる木トツカラコ」。

獨樂廻し歌

松風村雨束帶鑑・當世獨樂廻しの條に、「うぐろぐや〳〵、うぐろぐつとも、鳴つたるは苗代小田の蛙こ、云云」。

子守歌

賀古教信七墓廻・第一に、「犬の子犬の子とゆたもなめなかけそ、ここな子はいくつ十三七つ、七つになる子がいたいけな事いうた、殿がほしと歌うた」。
天神記・第一に、「寢んねこせ寢んねこせ、寢んねこ寢んねこ寢んねこせ、音せでおよれ犬の子犬の子、目だに覺めたら背にきつと背負うて、神樣へ參らう參らう、神樣の土産にはでんでん太鼓に笙の笛、お山人形に花織りきせて打ちきせて、きせて雉子のめん鳥、ほろりツとおといて、しよのしよのおいとしよの」。

猿廻し歌

門出八島・第四、早姫道行に、「猿は山王まさろめでたき、云云」。

巡禮歌

心中刄は氷の朔日、平兵衞小かん夜の朝顏に、「補陀落や大慈大悲の誓にて、云云」。
嵯峨天皇甘露雨・第四、四國遍路に、「眺むれ

「ひとでもくゐでもない」ともいふ、その條を見よ。

男は當つて碎けいぢや(丹波與作)

男は男らしう强く攻勢に出るべく、負けねばならぬ場になつては潔く負けるべしだとの意の諺。

男は裸百貫 男は裸百官の、上に立てば女御様(酒呑童子) 裸花鉧百貫、〻わんくわんくわんともなるは夜明の鐘(雪女)

男は裸にしてもなほ百貫の價値があるとの諺、傾城酒呑童子のここの文は「百貫」に「百官」をいひかけたのである。

一昨日來い(關八州)

蜘蛛に來てくれなといふ諺で、この諺は現今も福山市あたりでは、蜘蛛を取り棄て或は殺す時に往往言うてゐる。

***をばうちからす** さながら雪の一筆烏、尾羽うちかれし修業の旅(最明寺殿) 昔の劔さび浪人、ひがむ心は上見ぬ鷲、尾羽打からし旅出立ち(三國志)

「尾羽打枯し」鷹の尾羽の損じてみすぼらしくなれるをいふより出た諺で、人の窶れて貧相なるにいふ。俚言集覽に、「をばうちからす。浪人者などの窶れたる貌を云、尾羽をからすとも云、是詞元來鷹より出でたるなるべし、(建武年中八月二條河原落書)尾羽をれゆがむゐせ小鷹、手ごとに誰もすゑたれど鳥とることは更になし」。「をばをからす」をも見よ。(最明寺殿百人上﨟のこの文に「雪の一筆烏」とあるは、銀世界の中に墨染の衣を着た僧のゐるのは、宛然雪景色の畫に烏を一筆書きせるに似たればかく云うた)。

をばをからす 某は尾羽をからせし鎌倉の浪人者にて候が(出世景清)

「尾羽枯」「をばうちからす」ともいふ、その條をも見よ。錦文流撰・傾城八花形(淨瑠璃)に、「もとより用意なき身の上、長長の眼病に尾羽をからして深山木の、見る影もなき身となれど」。

***をひれ** 事が延びれば尾鰭が附く(薩摩歌) まがまがしいあの嘘わいの、まだ尾鰭附けて言はしやんせ(女殺)

「尾鰭」ことごとしう複雜にすることを尾鰭を附くといふ。和訓栞に、「をひれ。古事記に口太之尾翼鱸と見えたり、世俗の諺にをひれをつくるといへり」。「物に尾鰭か附く」をも見よ。

尾を見せる この様に身代の尾も見せず暮すは小かんの孝行ゆゑ(氷朔日) それは兄御と談合して商賣の尾は見せぬ(天網島)

狐が化け損うて尾を見せるより出た諺で、正體を知られる意にいふ。榮花咄卷五に、「次第次第に見苦しう。包む世間に尾が見えて、稻荷の前つぼつぼかまかま作り賣り、これも土佛の水遊び」。日本永代藏卷五、世渡りには淀鯉のはたらきの條に、「世間に尾を見せず、狐よりは化けすまして世をわたる事、人の才覺なり」。

をんざ これはをんざの秋茄子娵に食はさぬ志(千疋犬)

「をんざん」(遺殘)の「ん」の略された語、果物などのその盛り時を過ぎたるものをいふ。諸國心中女(貞享三年刊)卷之五に、「其夜しめ遺殘の秋の十三夜」とありて、遺殘に「おんざ」と振名假が附けてある。ここの文は、「をんざの秋茄子娵に食はすな」といふ諺に據つたのである。

女さかしうして牛賣らぬ あの景清はな大宮司が娘おのの姬に最愛し、御身が事は當座の花後悔するとも叶ふまじ、女さかしくて牛賣らぬとは御分が事ぞ(出世景清)

女さかしうして牛賣り損ふともいふ。女の怜悧なるは却つて事を仕損ずる意にいふ諺。

女に家なし(女殺)

世俀支那草(寬文四年刊)に、「女に家なしと云事＝大智度論に、女子は幼にして父母にしたがひ壯にしては夫に從ひ、老ては子にしたがふとぞ、家なき故也」。

女の猿智惠(生玉)

女の智惠の淺きを猿に喩へた諺。

女は相見互ひ 女は相見互ひ事、切られぬ所を思切り夫の命を賴む賴むと(天網島)

女どうしは相互に同情して助合ふ意にいふ諺。西澤與志撰・風流今平家(元祿十六年刊)今祇王嫉妬の紅葉の條に、「女はあひ見互ひなりき、我もそなたも忍妻、何れに隔てはあらねど云云」。

女は氏なうて玉の輿(日本武尊)

女は家系卑しうても、貴人の寵を得て富貴の身となることがあるとの意の諺。毛吹草に「女は氏なうて玉の輿に乘る」。

歌謠 その一

巢林子は彼が作中に許多の歌謠を引用し、それ等が彼の時代に謠はれたものが多い。これ等の歌謠は總て彼の文に適應するやうに多少添削されてゐるのであるが、それでも歌調曲節はよつて以て味ふことが出來る。吾人は近松硏究に於て、國民精神生活の反映であり、文化史料としても貴重なる歌謠の一面をも知るを得て、更に元祿情調に深みを加へるを覺える。今それ等歌謠の重なるものを列擧すれば、

間の山節

「あひのやま」及「歌謠その二」の中に就いて見よ。

牛臺歌

天神記・第三に、「筑紫さいふかヨヤヨヤヨ、巾着ならばハリノ、博多小梅を腰附けにトヨ

しよめ、京の町のやしよめ其所をば打過ぎ、側の棚見たりや、側の棚見たりや、豆に小豆、大根蕪、加賀の牛蒡、毛牛蒡、辛子の粉山椒の粉、辛い胡椒名さいの、やしよめやしよめ、京の町のやしよめと賣りためこ千貫、つなぎ立てて萬貫、惠方の御藏づつしり納めて、家の福福爺様媼様父様母様、和子様姫御前達みならべて福福福福」。語釋部「たうゑ」をも見よ。

麥搗歌

持統天皇歌軍法・第五に、「一夜なれなれ帶買うこやろぞ、帶ぢや名が立つ生でたもれ、ソレソレ姫入さしよとて長持買ひに、柱磨が百度出る晩かあすかの」。

厄拂

雪女五枚羽子板・上之卷、初春厄拂に、「やあら目出度や此方の御壽命申さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が八千歳、東方朔が九千歳、西王母が桃の核、猿豆小豆、鋼もまめどり雛鳥のはがひ重ねに寶は集る、家は治まる持丸長者の、四方に四萬の藏の戸前の明け行く年から、福神達の御影向、一に市姫辨財天女、二は西の宮若惠比壽殿、三は三面大黒頭巾の襞の、歐歐十二箇月は、無病息災その身は鐵槌打出の小槌、打つて打出す金錢、銀錢、福德圓滿惡魔外道、打拂うて西の海へさらりさらりさつさつこきやこう」。

以上、これ等の他に、踊歌、小唄、長唄、投節、芝居唄、丹前(出端)唄、江戸節(半太夫節)、隆達節、文彌節、一中節、冷泉節、道具屋節、海老屋節、林淸節、狂言小唄、童謠などが、情緒纏綿の文飾となつて織り出されてゐる。

歌謠 その二（考證）

ああさぶこさぶ、猿の衣服借つて着しよ（千疋犬）

童謠に、「おほさぶ小寒、猿のじんべ借つて來い」。

愛宕花見に袖を引かれた（三國志）

松の落葉（寶永七年刊）大津追分繪踊の唄に、「……、愛宕參りに袖を引かれた、……」。

愛宕參りに袖を引かれた（女腹切）（大覺）

大津追分繪踊の唄の文句を引用したのである。增補松の落葉（寶永七年刊）卷四、大津追分繪踊に、「上り下りに目につく姿、露の命を君にくれべい、追分の達磨繪、心鬼に衣はそげたもをかし、座頭はしりゐに、犬が吠附く、猫が三味彈く、酒飮む奴、愛宕參りに袖を引かれた、伊達な若衆が鷹手に据ゑて、ふれやれ〳〵大とりげ〳〵、云云」。愛宕參りとは、山城國葛野郡嵯峨村西北にある山上、愛宕權現社に參詣するをいふ。每年六月二十四日詣づれば、千日の參詣に匹敵すと稱し、參詣者群をなす、これを千日詣と云ふ。

吾妻請出す　吾妻請出す、山崎見ゆる（淀鯉）　吾妻請出せ山崎與次兵衛、請出せ請出せ山崎與次兵衛、いつか思ひのナ下紐とけて、昔思へば憂やつらや、憂やつらや、憂やつらや、忍ぶ昔もうやつらや（壽門松）

この文は寛文頃の山崎與次兵衛踊の流行唄によつたのである。落葉集（題簽に松の落葉とあつて元祿十七年刊）卷四に、「東妻請出す山崎與次兵衛、うけだす請出す山崎與次兵衛、今は思ひの下ひも解けて、くろわすまひの憂さつらさをば、聞くも中中恨めしや、聞くも中中恨めしや、恨めしや、せうがのせうがの、これこれこれこれ、しましよかの、そつこで請出せ三百兩、二口合せて六百兩、すつとしよこんぴんはり口ちんからり」。みをつくしに、「寛文年中此家の抱へに吾妻といへる太夫ありて、……。大盡山本村與次右衛門を世に山崎與次兵衛とぞいひかへたり。其頃にも珍しき事にてありしにや、歌を作り、吾妻請出せ山崎與次兵衛、請出せ請出せ山崎與次兵衛、そつこで請出せ三百兩と謳ひしなり云云」。

逢ひた見たさの唱歌　逢ひた見たさの唱歌をば投節に唄うつ書いて見つ、朱雀の野邊の枯るるほど歎き暮らさせ給ひしを（吉野忠信）

新町なげぶし（書名）の唄に、「逢ひたい見たさは、とびたつなアばかり、籠の鳥かや、ヤアなううらめしやん、とりかやなア籠の、籠の鳥かやなアうらめしやん」。（傾城佛の原（元祿十二年春上演、巢林子作）傾城奥州嫉妬の歌に、「……人こそ知らね振分髮も、其方ならでは誰にか見せんこの黑髮を、今は仇なる亂れ心かああ、あああ逢ひたい見たさに來たぞやれ、つらやつらやと思ひはすれどまだ捨てられぬ、……」。秀松軒撰・松の葉（元祿十六年刊）卷三、二あがり・みだれがみの唄に、「……人こそ知らね振分髮を、其方ならでは誰にか見せんこの黑髮を、今は仇なる亂れ髮亂れ心や、あああ逢ひたい見たさに來たぞかし、つらやつらやと思ひはすれどまだ捨てられぬ、……」。語釋部「かごのとり」の條を見よ。

油壺から出すよな　どうでもさがは濡者ぢや、油壺から出すよな女房、しんとろどろりと見惚れる女房（生玉）　鑓の權三は伊達者でござる、油壺から出すやうな男（鑓權三）

艶艶して美しい形容にいふ。この文は當時の流行唄に加筆したものである。「鑓の權三は伊達者」を見よ。元祿曾我（元祿十四年刊?）卷一に、「御姿を見申すに、油壺から出すやうな男、あいそらしき御詞に頭からほれまして云云」。「柏屋さが云云」をも見よ。

雨にはあらでヤこれのこのこの、この木の葉がはらりほろり（蟬丸）

糸竹初心集・吉野山の唄に、「吉野の山を雪かと見れば、雪にはあらで、ヤアこれの花のふぶきよの」とあるの改作。

有馬の湯のだんこ　これこそほんの忝け有馬の湯のだんこ、やれゆのだんこゆのだんこ、今は有馬のゆのだんこ、しよんがえ（女腹切）

松の葉卷三、門柱の歌「晝はたんこ〳〵な、桶の輪をさ締めやるさ、のほんへ・夜さりやせんま女の腰締みやろ、しやらがへ」の中の語を取つて、談合を「だんこ」といひ、「しやらがへ」を「しよんがゑ」といひ、近松のこの文、氣遣ありを有馬（攝津有馬溫泉）にいひかけ、言ふな言ふなを湯女湯女にきかせた。

有馬山、松になりたや（百合若）

有馬の湯女お藤を歌つた唄に、「松になりたや有馬の松に、藤にまかれてねとござろ、云云」。この唄、增補松の落葉・卷三、古今ぶしの

ば月白妙の夜半なれや、只黒谷に黒染の袖、云云」。

節季候歌

夕霧阿波鳴渡・上之卷に、「大大盡、太夫樣より附屆、門に賣る齒山草や、ちよつと祝ひましよ喜白、樽、ごまめで御座んせの春、永に、いよしもかはらぬ御見まで、逢瀬に契る竹け杵、ついて馴れぬお客を祝ひ、云云」。

大黒舞歌

淀鯉出世瀧德・あづま勝二郎初木綿に、「わたつたわたつた光る君の渡つた、夢の浮橋六十帖を渡りつめ十帖と詠じた、一に一夜のお情の夕顔の若生え、二に匂たきしめて浮舟にかげろふ、紅梅・竹川・橋姫に手習、我が名ゆかしき東屋でこれさまの忍び寢」。

敲

語釋部「たたき」の條に述べておいた。

手鞠歌

大經師昔曆・上卷に、「……、手鞠とれとれま一つ二つ、三つ四つ五つ六つ七つる八つる九ほんほとをんゑ、ゑいころころころ」。

鳥追歌

天鼓・第一、萬歲に、「やんら目出度や千町や萬町の鳥追が參りて、福の神祝ひこめ、白げの米やろ眞白げの米やろ、よねやらうがぢやうには、福と德と參りて、人目忍びて便せうと申す、心通はば伴れてのき候」。

語釋部「とりおひ」をも見よ。

七草粥の囃

今宮心中・中之卷に、「何處やらの男と他處他所の女と、渡らぬ先にとんとんとん」。

語釋部「ななくさはやす」をも見よ。

鉢敲歌

賀古教信七墓廻・鉢たたきに、「めぐり見ろ、浮世の渡に比ぶれば、阿波の鳴渡は礒小舟、賀古の教信叔父甥の、連れ道心と七墓を、夜な夜な分くろ露の間も、亡き人送らぬ夜半とては、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀、南無といふ聲の中より霧晴れて、五色の雲に、乘るぞ嬉しき南無阿彌陀、南無阿彌陀佛南無阿彌陀、阿の字には、朝夕の云云」。蛾歌がるた第二に、「此處に消ゆれば向ふには、今燃えそむる、無常の煙、昨日後れし其人も今日は又、明日の人に先立つ身とぞなりにける、ハア思へば嬉しくも、かかる姿となりしよと思ふも佛の御誓、攝取不捨と鉦打鳴らし、南無阿彌陀南無阿彌陀、南無阿彌陀佛、顧以此功德平等施一切同發菩提心」。

關八州繫馬・第一に、「よき光ぞとかげ賴む、世の光ぞと、賴む茶のきよのきよひよん、御寺に田螺にきよひよん、ヲヲ井の澤の、澤の寒きさんやに、ていと打鳴らす、三界を家とよ走り走り廻る鉢こくりが、ヲヲヲヲ五郎三郎、田舍へお下りあろならば、この程なぐり情に瓢をなりとも置いて行け、小瓢をなりとも置いて行け、それはや女郎、易き間の事なりとよ諸國をでつるで、づでんど叩かうずるにも、瓢ならてはお笑止、極樂のホホ、前に流るる涙川、いかなる淵の、瀬になり天地の恩、國土の恩、よしや世の中寐てか寤めてか只何事も、後生なりけりなもうだ、なもだなもだ」。

比丘尼歌

主馬判官盛久・比丘尼地獄の繪ときに、「そもそも往生極樂の、雲の臺に法の花上品蓮に浮ぶ事、この世のこの身この儘に取りも直さず成佛す、去此不遠とは說かれたり、かばかり近き極樂も、作りし罪が鬼となり、心の劍身を責むる、一百三十六地獄、無間叫喚阿鼻永沈、この世の色はあだ花の情の涙流れても、焦熱の火は消えやらず、連理の衾暖かに、比翼の床を重ねても紅蓮の氷は解け難し、そもや人間一人は三世の諸佛苦しみて、造り立てんとし給ふを、十月に足らで墮し見の、諸佛一度に御聲を揚げ、歎かせ給ふ御涙、流れて灘つ血の地獄、火焰となつて身を焦す、さてその次は小夜衣、わが妻ならぬ邪淫戒、嫉妬の煙妬の焰、僧を落せし女の罰、比丘尼を犯せし男の罪、無明の馬の毛をふるひ、愚鈍の牛が角を振り立て、六道四生をくるりくるりと因果はここにめぐり車の我からと、かひも涙に伏し據む、是は又生まずの地獄、竹の林に簇へて、影もよろよろたよたよと、辿りよろばふ哀れさや、千筋の燈心たぐりもて、心の闇にくれ竹の、竹の根を掘る篠竹の、杖に縋りて泣くばかり、暗しやつらし冥闇城、そもこの苦患と申すは、娑婆にて人の目をくらまし、科なき人を牢に入れ、又關の戸の關守よ、往來を惱ますその報、四方は石の閂に五體を責められ、五色の鬼が夜に三度日に三度、時こそ來れと呵責をなす、土は精劍山は鐵城、五百生生盡きせぬ因果弓取とても留らず、力ありとて賴まれず、疑ひ給ふな人人」。

吉野都女楠・第四に、「よさ樣の寢姿窓から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、盛りまだしき閨の內、さては野に咲く百合の花しよがゑ、少くわん少くわん」。

舟歌

浦島年代記・第四、浦島太郎入部の鑑に、「亂れ小柳亂れそ柳ナ、共に心も亂るるにそもじ、戀にはのエイソリヤしな、ゆきて、エイエイよしな、のゑいゑいおれゑ、濱千鳥が寄せ來る、寄せ來る寄せ來る小浪に搖られて揉まれてちどろもどろ、たどろもん、ちりはになりてききなくようとり、よなくまいかまたのゑいよほん、ほほほんほんとおりおりはんはんゑいゑい」。

平家女護島・第四、舟路の道行に、「やんれ龍頭鷁首の金の、楫やア玉の棹綾や、錦を帆に上げてやらんやら、お目出たい釣る鱸釣る」。

馬子歌

歌謠その二、「さても見事な、云云」の條を見よ。

萬歲歌

天鼓・第一に、「德若に御萬歲當御殿榮えまします、ありけうあり新玉の、年立ち返るあしたより、水も若やぎ木の芽もさしさかえけるは、誠に目出度う候ひき、云云」。大經師昔曆・下之卷に、「德若に御萬歲と御代も榮えましますありきやうありあら玉や、年たちかへる朝より、水も若やぎ木の芽もさし榮えけるは、誠にめでたう候ひし、京の司は關白殿、退位の御門日のもく內裏、王は十善神は九善、萬やすやす、浦安が木の下にて、正月三日の寅の一點誕生まします、若夷子商ひ神と、現はれ給ひて商ひ繁昌守らせ給ふは誠に目出度う候ひける、やしよめやしよめ、京の町のやしよめ賣つたる物はやしよめ、賣つたる物は何何、大鯛小鯛鰤の大魚鮑榮螺、蛤こ、蛤こ、蛤こうと賣つたる物はや

ち栗」（出落栗）の訛。この唄は俗謠「ててらちは子供のチヨツチヨツ、でんぐりはかいぐり、かいぐりなり」の改作であらう。

笠がよく似た菅笠の

「向ひ通るは淸十郎ぢやないか云云」を見よ。

かさやさんかつ　大和の國や三笠山、笠屋三勝舞の袖、つまとつまとを引寄せて、結ぶ無常の薄煙（氷朔日）

（笠屋三勝）元祿頃大阪の女舞の妓である、勝還半七と馴染み、遂に愛兒おつうを殘して、元祿八年十二月六日の夜、千日墓所の南さいたら畠（その條を見よ）で情死した。西澤與志撰・新色五卷書（元祿十一年版）に、「大坂女舞の三勝芝居興行の立札所には、珍しく見る人やるせなく立塞がり、海道塞げて人を通さず、あなたこなたより人橋かけて世渡りの女舞云云」とあれば、當時全盛の舞妓であつた。この文に、「舞の袖」とあるは三勝が舞妓であつたのでしか云ひ、「つまとつまとを引寄せて」とあるは、松の落葉・五、三勝心中の文句に、「つまとつまとをしつかと括り」とあるに據つたのである。

柏屋さがははすはにござる、戀の意地酒ヤトントン、手もてかかる押へてかかる、どうでもさがは濡者ぢや、油壺から出すよな女房、しんとろとろりと見惚れる女房（生玉）

鎧摧三男踊歌を改作したものである。この調子に似たものは傾城八花形（錦文流作）の中にも、「なりも形も男でござる、ヤツトントン最中で、ヤなさけもあつてはすはに見えて、どうでも男のなりふりぢや、足の運びもしなよや姿、サンノトンとろりと見惚れる姿云云」と見えてゐる。「鎧の權三は伊達者」を見よ。

「はすは」は語釋部について見よ。

柏屋通れば二階からちよいと招く、のつこれ何としよ（生玉）

柏屋は遊女おさがを抱へてゐる置屋號である。ここの文は松の落葉（元祿十七年刊）卷七、吉田小女郎の題で、「よし田通れば二階からちよいと招く、しかも鹿子のずんど振袖が、なんきみちよいとしよ」、とある當時の俗謠をもぢつたのである。

（序云、この吉田小女郎の俗謠は、もとは三州吉田驛（豐橋）の遊女を唄つたものであらうが、後には吉田御殿を唄つたものとされた。吉田御殿の俗說は巢林子作・平家女護島・第三、朱雀の御所で常盤御前の淫行に脚色されてゐるから、その俗說を述べよう。德川家康の孫で、秀忠の長女である千姫が豐臣秀賴に嫁し、元和元年大阪落城の時、家康之を殺すに忍びず、坂崎出羽守政友に命じて千姫を救はしめ、姫を與へるを約した、政友乃ち炎煙を冒し奮戰して敵城に闖入し、千姫を負うて出た、然るに千姫は政友の容貌醜惡なるを以て之と婚するを拒み、他に嫁しようとする由を政友聞いて憤死するに至つた、かくて元和三年九月千姫は本鄕森川町本多美濃守忠朝に嫁したが、三年にして美濃守死し、姫は家老吉田修理介の三番町の邸に館を建てて居ることになつた、世人呼んでこれを吉田御殿といふ、姫高臺に出ては自ら往來の人を見、美少年を見れば卽ち招き入れて、姫と共に長夜の飲をなし、そして一度招き入れた者はこの館から出たことがない、蓋し醜聲の洩れるを恐れて之を殺したものであるといふ、寬文六年二月姫も遂に自殺したとの說であるが、眞僞詳でない、千姫の墓は小石川傳通院にあつて天壽院殿といふ）。

肩にかるもの花折りかけて、裾にゐの字が寢た處ゑ、ゑいゑい（蛙合戰）

「戀といふ字を金紗で縫はせ、裾に淸十郎と寢た處ゑ」といふ唄の作り替。「よさ戀といふ字を云云」を見よ。「かるも」「ゐの字」はその條を見よ。

門に立つたは忍びの夫かえ、野風身の毒こち這入らしやんせえ（冥途飛脚）

松の葉（元祿十六年刊）卷一、端手組の唄に、「門に立ちたは八もじ樣か、夜風身の毒うちござれ」。冥途飛脚のこの文に、「十七八が門に立つたは云云」とあつて、唄に「八もじさまか」とあるので、「八が」といふてこの唄につづけたのである。

鐵の鳥居のきざはしを、雲かと見れば加賀菅笠のヤコレノ、紅絹の絎紐のや（三國志）

糸竹初心集、吉野の山の唄に「吉野のお山を雪かと見いれば雪ではああああらでんんやあこれのを、花あの吹雪よのんんやあこれの」。

鴉がな鴉がな、浮氣鴉が月夜も闇も首尾を求めてあはうあはうとさ（冥途飛脚）

「鴉」、「浮氣鴉」は遊郭をぞめく客に當てて云うたのである。此文は巢林子が當時の流行唄に筆を加へたものであらう。これに似た調子のものは伊達髮五人男の中にも見えてゐる。

君が盃いつも飲みたや、武藏野の、月の月の夜すがら戲れ遊べ（女殺）

「武藏野」はその條を見よ。若みどり（寶永三年刊）卷四、てる月の歌に、「月は武藏野よびだしのぢよろを、……いざよひ月に戲れ遊べ、えいえい遊べ、えいえいえい……」とあるを作替へたのである。

君は早稻米我や唐臼よ、こぬかこぬかはふみで見るトツカラコ〱。樣の心はあさ木の伽羅に、節のあるのは我がわるきトツカラコ云々（日本武尊）

春歌と木割歌である。「こぬか」は、來ぬかに小糠をいひかけ、「ふみ」は文に踏みをいひかけたのである。「あさ木」は淺木の義、粗惡な材木をいふ。千載集卷十三、戀歌三の部、前齋院新肥前の歌に、「あづま屋のあさ木の柱我ながら、いつふし馴れて戀しかるらん」。「わるき」は惡きに割木をいひかけたのである。

君を待つ夜はよやよやよ、西も東も南もいやよ、とかく待つ夜は北がよい（女殺）

松の落葉（元祿十七年刊）卷七、「おもやこそ」の唄に、「君を待つ夜は、のほんほほんにほんにさ、西も東も南もいやよ、ほんにさ、とかく待つ夜はきたがよい、のほんほほんにほんにさ」。

係に出てゐる。

言うて歸らぬ死出の旅(氷朔日)

間の山(その條を見よ)の文句に、「鳥は古巣にかへれども、行きてかへらぬ死出の道」。

伊勢衆でないか

「同じねを啼く鶯の春は云云」を見よ。

いとし男と隔てて住めばの、烏鳴くさへわしや氣にかかる(持統天皇)

山家鳥蟲歌に「いとし殿御を遠くに置けば、烏鳴くさへ氣にかかる」。

絲屋の小絲、姉は十三妹は十二、殿御欲しさに宿願かけてえ(卯月紅葉)

手鞠唄、「本町二丁目の絲屋の娘、姉は二十一妹ははたち、妹欲しさに宿願かけて、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕樣へは月參り」。この歌もとは木遣節であつたが、松の落葉卷四、踊歌の中には改作して載せてある。

岩木さへ引く手に寄り來る、心を今ぞつくし琴エイソリヤ、引かれて來れば名も立たぬ(三國志)

糸竹初心集(寛文四年刊)廳踊の唄に、「裏裏の堰のヲヲ清水ウはアア夜每に落つれエどヲ名もヲヲアアアぬウウユイソリヤ」。

いひきにてすいちやゐんちや・・・(博多)

増補松の落葉・卷四、唐人踊の唄に、「いきにていきにてすいちやゐんちやすいちやすいふうちやういさらこわいめさはんやさそうわらわううちたるまたひさらきこいさらこわめさはんやさそうつうつらあうあう」。この唐人踊の唄は支那の俗謠・醉胡蝶から出たものである、唐音和解・醉胡蝶の唄に、「一更裡天月照紗窓人未眠云云」。

いよこの　橋のいよこの橋の上にて賣る聲は(今宮)

拍子を附けて謠ふ時の拍子聲。増補松の落葉・卷五、五尺手拭の唄に、「橋をいよこのかきよやれはしをかきよやれ船橋を橋のいよこの下には鵜の鳥が」。

いよしごけんと書いたるは、ほだしの種か花薄、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文、方樣まゐる花よりと、思ひまゐらせ候べくの、わけの杯色見えて、わきて泉の思はくは、只逢ひまして逢ひまして、又の御見をまづかしく(女腹切)

「いよしごけん」を見よ。この唄江戸半太夫節に謠ふ。

おいゑんきや、しさんすゐんとうつゑうりやうへん、なんほはきんざんすゐんのすい、さんとんろてほうはなんすい、くはんとんのてい、くわんすいひんちやうのふうけん(唐船噺)

唐音和解(正徳六年成、寛延三年刊)坤卷に、「十三省の歌を擧げて、「爲寃家、十三省都走了遍、南北京山陝西、山東路的河南内、關東地、關西行、胡福建」。寃家の爲に十三省都て走了て遍れり、南京北京・山西陝西、山東の路・河南の内、關東の地、關西より行いて福建に朝す。

負うたもいとし抱いたもいとし、かたくまの小女郎がなほなほいとし(今川了俊)

増補松の落葉(寶永七年刊)卷四、ぞんぞりこ踊に、「負うたもいとし抱いたもいとし、かたくまの小女郎はなほそつこでなほいとし、ぞんぞりこ」。

沖つ白波さばけて忍べ(卯月艶)

「中よい月に戯れ遊べ云云」を見よ。

沖に戀路の戀路のまだいろは船、惚れてほの字の帆が見ゆる(用明天皇)

(二枚繪)

戀の初心の意にいうたもので、流行唄「沖に見ゆるは丸屋の船か、丸にやの字の帆が見ゆる」の改作である。「ほのじ」をも見よ。

落ちて三途の川となる　名をや藻屑に埋まんと、又ひたすらのうき涙、落ちて三途の川となる(二枚繪)

「三途」はその條を見よ。この文は間の山の歌詞「これが冥土の友となる」の句調によつて、それをきかせたのである。「間の山」をも併せて見よ。

同じねを鳴く鶯の、春はござれの伊勢衆でないか、目もとにしほがこぼるる(丹波與作)

旅宿賃は何處でも「同じ直」と云ふに、「同じ音を鳴く」とかけて「鶯の」とつづけ、鶯の縁から「春はござれの伊勢衆」とつづけ、「伊勢衆でないか、目元にしほがこぼるる」と、當時の流行唄を引いて來たのである。この流行唄は糸竹初心集(寛文四年刊)に、「伊勢をどりのうた。あの君樣ぁはあ、伊勢のはまあそだあち、目元にしほがやれ、こぼれかかる」と見えてゐる。「しほ」は「しほのめ」を見よ。ここの文、出女の聲を聞くやうな氣がして、殊に婉曲に流行唄を交へたこと、いつもながら靈腕の妙を極めてゐる。「春はござれの伊勢衆」をも見よ。

お名をばえ申すまいよのしやんしやん(今宮)

由兵衛が戀人の名を問はれて、その戀人の名は申しませぬといふを、當時の流行歌の文句で洒落れたのである。その流行歌は松の葉(元祿十六年刊)卷二、長歌の部に花見の題で、「………、卯月に卯月、卯月八日の花よりだ、いいいいいいいい、お名をばえ申すまいよのしやんしやん、しやんとさいたるなが刀、花か蝶かとうちむれて、……」と見えてゐる。

大君きませ聟にせん(五人兄弟)

催馬樂、我家の歌に、「我家はとばり帳をも垂れたるを、大君來ませ聟にせん、み肴に何よけん、あはびさだえか、かぜよけん」。

思ひきれとは死ねとのことか、生きて添はれぬうき世なら、いつそ煙になりたやな(生玉)

江戸半太夫節の唄である。近松が江戸節を用ひたもの他に「いよしごけん云云」(その條を見よ)などがある。江戸節の詞章は古雅流麗であるが力弱いものが多い。

おんらが在所はの、奧山のてうちの、でんぐりぐり栗の木の(博多)

「おんら」は「おれら」(俺等)の訛。「てうち」は「ててうち栗」の略、「ててうち栗」は「でてお

して用ひたのである。「そなた檻田の眞中ほどで云云」を見よ。

戀は曲者(氷朔日)

曲者とはわるもの、又はあやしいものの意。閑吟集に「こしかたより今の世までも、絶えせぬものは戀といへる曲者、げに戀は曲者くせものかな、身はさらさらさらさらさら更に戀こそねられね」。謡曲・花月に「戀は曲者」。

紺に鬱金に薄染淺黄、織物縫物染物盡し(壽門松)

松の葉(元祿十六年刊)巻二、長歌・花見に、「紺に鬱金に淺黄に鹿の子、地紅や地紫けんたい郡内云々」。

咲いた櫻になぜ駒繋ぐヨノ、勇めば駒が、駒が勇めば天にも上る雲雀毛や(雪女)

諸國盆踊唱歌(寛文頃後水尾院の御編集になつたといふ)伊賀の部に、「咲いた櫻になぜ駒繋ぐ、駒が勇めば花が散る」。松の落葉(元祿十七年刊)巻七に、「咲いた櫻になぜ駒繋ぐ、のほんへ、駒が勇めば、のほほんのほほん、ほんほのんいよいよ、花が散る散る」。この唄の意は、美人も嫁すればその身が兼れるに至るとて、年頃になつた娘に良人を持たすことを惜んだのである。巣林子この唄を取つて、「花が散る」を作替へて「天にも上る云云」とつづけたのでる。蓋し「天馬空を翔る」などいふ詞があるので、かく書いたのである、そしてそれがまた雲雀にかかつてゐる。

***坂は照る照る** 坂は照る照る 鈴鹿は曇る(千載集) 坂は照る照る鈴鹿は曇る、土山・間の、間の土山雨が降る(丹波與作)

松の落葉(元祿十七年刊)巻四・馬士踊に、「坂は照る照る鈴鹿は曇る、さきはいというてはいどうし、間の土山雨が降る」。

月代剃つて髮結ひし蜈蚣を流す(懸物揃)

童謡に、「京都鼠をとらまへて月代剃つて髮結つて云云」。

櫻花かや散り散り(夕霧)

「更科や姨捨云々」を見よ。

酒には濱松 門には門松、酒には濱松、肥えたは肥松(反魂香)

當時酒宴の座でよく謡つた「三國一ぢや、濱松の音はざざんざ、酒になりすまいたしやんしやん」(「ざざんざ」「三國一ぢや」を見よ)の唄によつてかく云うたのである。

定めなき世に捨てられて‥‥これが寐覺の友となる(反魂香)

「あひのやま」を見よ。

五月雨 五月雨ほど戀ひ慕はれて、今はあき田の落し水(宵庚申) 五月雨よほど戀ひ慕はれて、終になあきたのよ落し水(萬年草)

ここの文は諸國盆踊唱歌(寛文頃後水尾院の御編集と云ふ)河内の部に、「五月雨ほど戀ひしのばれて、いまはあき田の落し水」とある唄によつたのである。「五月雨よ」「終にな」「あきたのよ」の「よ」「な」「よ」は唄の拍子詞である。

薩摩や三が國に霧雨が降らばよな、それぞ立つ名のうき雲の(薩摩歌)

三が國とは薩摩・大隅・日向をいふ。御船唄留に「鹿兒島薩摩三が國霧雨が降らばよの、しづが思ひと思召せ」。

さても命はナあるもの 扨も命はナあるものと、うたひ給ひし寐覺の調子耳にとどまり(三世相)

新町なげぶし(書名)の唄に、「歎きながらも月日を送る、さても命はあるものを」と見えてゐる。好色一代男巻七、その俤は初音の條に、「世之介に引かせて膝枕して、さても命はと投節、聞いてゐられぬ所ぞと」、とあるもこの投節の唄である。野傾友三味線巻二、寶の山を手ふりて踊る男の條に、「近代投節といふは、なぎぶしのかはりにて、籠の鳥かやうらめしやと、好色大鑑の作者が作り替へたる證歌の根元なり」と見えてゐる。

さても見事な、そんれはお葛籠馬や、七つ蒲團にそんれは曲彔するゑて(丹波與作) **さても見事なおつづら馬や、七つ蒲團に曲彔するゑて、蒲團ばりしてナ小姓衆を乘せて、海道百里をはなでやる**(堀川波鼓)

「おつづら馬」の唄に據つた小室節である。若みどり(寶永三年刊)巻四・おつづら馬の唄に、「さても見事のお葛籠馬よの、上にやせんしき唐縞の布團、布團はりして小姓衆を乘せて、そなた下りかおりや今上る、文を遣ろにも傳言しよにも此處は箱根の山中なれば、筆にや事缺く硯墨は持たず、若しも水口お泊ならば、札の辻から四五軒目の茶屋で、馬も息災その身も無事で、やがて上ろと言うてたもれ、ゑいこのさんさ」。

扨も見事な、ソンレハ馬子衆の振や、繻子の股引天鵞絨の脚絆、手綱帶して(國性爺後日)

前條を見よ。

さまが土産の菅笠と、踊に踊りし笠よなう、それは吾妻の花嫁御(淀鯉)

松の落葉(元祿十七年刊)巻四・菅笠踊に、「東からくる花嫁うれし、うれし、ほんにうれしお供にとつづく伊達助が、よぢらすよぢらす、やれこりやよぢらすどつこいよぢらすよぢらす、腰をよぢらす紅葉笠、まん丸こうてきようて、さまが菅笠百萬貫」。なほここの文の「獨鶴の衆の仲間から三尺手拭抱帶とて進上す、……これは吾妻が身の果」までは、謡曲・蟬丸に「御衣給つて簑をまゐらせ候はん、……ここは處も逢坂山」とあるを世話に碎いた文である。

更科や姨捨て・親捨て身を捨てて、櫻花かや散り散り(夕霧)

古今集雜歌上の部の歌に、「我が心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」。姨捨山は信州更科郡にある。松の葉巻三、二あがり、さつまぶしの唄に「親は他國に子は島原に、櫻花かやちりぢりに」。

***さんごくいち** この軍川意に取交ぜて御祝言、関の聲にさし合せ三國一も歌はれまい(千疋犬) 三國一ぢや我は佛になりすます、しやん

櫛になりたやヤレサテ薩摩の櫛に、諸國娘のヤレサテ手に渡ろ（薩摩歌）

松の葉卷三、ありまの唄に「露になりたや袂の露に、消えぬらきみのかこちぐさ云云」と見え、増補松の落葉卷三、有馬の松の唄に「松になりたやな有馬の松に、藤にまかれてねよござる云云」と見えてゐる。蓋しこれらの唄の調子に據つた作り替である。

廓住居は時雨の雨よ、降つつ降られつ村村雨の、まだ干ぬ露もまだ干ぬやよや（淀鯉）

廓住居の遊女の身は、男を嫌ひ或は男に嫌はれて、打思ひに泣き暮らし、その涙の露は今だに乾かぬことよの意であつて、當時の流行唄によつたものである。世繼曾我に、「廓住居は時雨の雨よ、降つつ濡しつ村村雨の、まだ干ぬ露もまだ干ぬやよや」。紀海音撰・曾我姿富士（正德四年成）に、「廓住居は時雨の雨よ、降つつ降らしつ村村雨の、まだ干ぬ露もまだ干ぬやよや」。この唄の次に、「ああ霧は」とつづけたるは、小倉百人一首にある寂蓮法師の、「むら雨の露もまだ干ぬ眞木の葉に、霧立ちのぼる秋の夕暮」の歌に思ひよせたのである。「霧は不斷の云云」をも見よ。

傾城こまめにたらひが女房（壽門松）

小唄の文句に據つたもので、傾城は日に幾度も化粧をし脉湯をつかひ、こまめに盥に親しみ、盥は傾城の女房役といふ意であらう。そして與次兵衞か吾妻を請出さうと思ひたくみたことも失敗しての意に、「請出したらひの底ぬけて」といふたのである。「たらひの底ぬけて云云」を見よ。

けけらほ云云　唐の木遣は、けけらほ、けけらほにほう…ほにほう（唐船噺）

唐の木遣唄とあれども、其實唐音らしう見せたでたらめであらう。穗積以貫撰・難波土産卷之四に、「唐船噺今國性爺の口に唐の木遣あり、其文句に「ららがときろくほにやふたうにやくこんもつきんと」と云ふ事あり、これは昔の東國歌に、「うらが齋坊にや豆腐こんにやくきんもつだ」と云ふを、假名を上下へ置代へて用ひたるなり、此類にて埒もなき事を知るべし」。

ここな子は幾つ、十三七つ（賀古教信）

子守唄に據つたのである。童謠集（近世文藝叢書に收む）子守唄に、「お月さまいくつ、十三七つ、まだとしやわかいな云云」。

ここは竹田か夜は何時ぞ、五つ六つ四つ千日寺の、鐘も八つか七つの芝居（重井筒）

「竹田」は竹田近江の水繰り芝居を云ひ、道頓堀の濱側にあつた。「五つ六つ四つ」は時を云つたのである、「とき」を見よ。「千日寺」は法善寺のことである。「八つか七つの芝居」とは、當時芝居の一番太鼓は夜明方から打鳴したので、八つ七つはその拂曉の時刻を云つたのであらう。そして「七つの芝居」はその條を見よ。ここの文は松の落葉（元祿十七年刊）卷五、三勝心中の唄に、「念佛を踏のかずとりに、夫婦一所に千日寺の、鐘の響に夜は何時ぞ、八つでもあろか、いつもおつうが目をあく時分」とあるを作り替へたのである。

五尺いよこの手拭　これはかの五尺いよこの手拭と、歌に唄ひし手拭か（淀鯉）

松の落葉（元祿十七年刊）卷七、五尺手拭の唄に、「五尺いよこの手ぬぐい五尺手ぬぐいなかそめて、おれにいよこのくりよより、おれにくりよよりやどにおけ」。「五尺」は手巾の長さである、「しゆきん」をも併せ見よ。

この世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、………、風しんしんたる曾根崎の、森にぞたどり着きにける（曾根崎）

此道行文は後に唐崎八景屛風の「からさき心中道行（篤山小歌）に少し添削して用ひ、「此世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそあはれなり、あれ數ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて、殘る一つは今生の、鐘の響の聞き納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見あぐれば、北斗はさえて影映ろ、星の妹背の天の川、渡せる橋を鵲の、橋と契りていつまでも、俺とそなたは女夫星、必らず添はうと縋り寄り、二人が中にふる涙、川の水嵩もまさるべし、道行く人の聲高く、京大坂の心中の、ことの葉草のとりどりを、聞くに心もくれはとり、あやなや昨日今日までも、よそに言ひしが明日よりは、われも噂の數に入り、世に謳はれん謳はば謳へ、どうしたことの緣ぢややら、忘るる隙もないわいの、放ちはやらじと泣く涙、夜の雨かや唐崎の、松の木蔭に着き給ふ」と見え、松の落葉（元祿十七年刊）第七卷、古來中興當流はやり歌の條にも、この辛崎心中の道行が載せてある。この曾根崎心中の道行は、物徂徠がこれを讀んで、七つの鐘が六つ鳴りて、殘る一つが今生の、鐘の響の聞き納めといふに至り、近松が妙文この中にあり、外を問ふに及ばずと歎賞したことが大田南畝の一話一言に見え、また巣林子がこの文を作るに、死にに行く身の道の霜、一足づつに消えて行く、といふ所まで作つて案じ果て、伊勢の俳諧師涼菟に敎へられて、夢の夢こそはかなけれ、と書き續けたことが南畝の俗耳鼓吹に見えてゐる。果してさうであつたかは疑はしいけれど、かういふことでこの道行文が益よ有名になつたのである。

戀路の闇の暗り　行燈を踏倒し、戀路の闇の暗りと、謠ふはものかこれも亦、よしなき事の迷ひなり（堀川波鼓）

八百屋お七が戀人と逢はれようかと淺はかな心から放火したので、天和三年三月二十九日火刑に處せられた。上方ではこの事を歌祭文に作つた。「戀路の闇の暗り」はその歌祭文の中にある文句である。紀海音撰・八百屋お七（寶永元年二月上演）の中の八百屋お七江戸櫻（歌祭文）に、「呼子鳥、哀れなるかなお七こそ、戀路の闇のくらがりに、よしなきことをしいだして云云」とあるは、その頃謠はれたお七の歌祭文に據つたものであらう。

戀の櫛田の眞中中で深き思ひをやれ紫帽子（國性爺後日）

「紫帽子」はその條を見よ。「櫛田」は地名部を見よ。當時の流行唄、「伊勢の櫛田の眞中ほどで、深き思ひのやれ紫帽子」とあるを、改作

大工殿よりナウ鍛冶が憎い、閨の掛鑓鍛冶がうつシヨンガエ、なう鍛冶がうつ、閨の掛鑓鍛冶がうつシヨンガエ（鎗權三）

若みどり（寶永三年刊）卷四、しよがえふしの唄に、「大工殿より鍛冶屋が憎い、閨のかきがね鍛冶がうつセウガエ」。

たうがねのよんぢりよめごは好い嫁御（薩摩歌）

唐金の茂右衞門が女房はよぢり腰の好い嫁御と云ふ意。柴崎勘六の唄に、「唐金の茂右衞門が女房は好い嫁御云云」と見え、けいせい筑波山に、「唐金の茂右衞門よめごは好い女房」とある。唐金は東金で上總の地名。東金の茂右衞門と詠んだ歌千葉縣の民謠に多い。

高い山から谷底見れば 高い山から谷底見れば、おまん可愛やな布晒す（酒呑童子） 高い山から谷底見れば、布を晒すは夏こそよけれ（薩摩歌）

松の落葉（元祿十七年刊）卷四・源五兵衞踊の唄に、「高い山から谷底見れば、さつま源五兵衞はめにたつ男、のほんほんにほ、しやれたびんつき茶筅髮、云云」。諸國盆踊唱歌（寛文頃・後水尾院の御編集と云）甲斐の部に、「高い山から谷底見れば、おまんかはいやぬの晒す」。これら當時の流行唄に據つたものである。

但馬の湯桁數ふれば我とそもじは五つと七つ（鎗權三）

源氏物語・空蟬に、「伊豫のゆげたもたどたどしかるまじと見ゆ」、とありて花鳥餘情に、「いよの湯桁の數は左八つ右は九つ中は十六」、とあるを作りかへたのである。

戲れ遊べやあこれの（懸物揃）

この當時流行した「てる月」の唄の文句に據つたのである。「中よい月に戲れ遊べ云云」を見よ。

だんじり打つて囃した、だんじり打つた見さいな、藤内太郎アリヤコリヤとのはな笛吹のヤ家で（雪女）

樂車は「だいにじり」（臺躙）の義であらう。祭禮の時に引廻す飾物を云ふ。現今も和歌山縣有田郡湯淺顯國神社の秋祭に、太鼓・小鼓・笛で囃す一隊を「だんじり」というてゐる。ここの文は「藤内だんじり」の踊歌に據つたのである。松の落葉（元祿十七年刊）卷三、藤内だんじり出端の唄に、「だんじり打つて囃した、だんじり打つた見さいな。藤内三郎殿は小鼓の名人で云云」とも見え、「藤内次郎殿わいの笛吹のや役で云云」とも見えてゐる。

***ちとくわん** 少くわん觀ずれば夢の世や（歌念佛） 絑の帽子の伊勢比丘尼、ここな小比丘尼がちとくわん、今の目許はなる目許エ（國性爺後日）

〔少勸〕（少勸は「ちとくわん」と訓むべきである）少勸進の略、少し寄進を乞ふ意で、歌比丘尼が比丘尼唄にいふ。

女中のすきの靑梅か、ばんにや梅の木の枝おろそ、ノンヤホ（西王母）

婦人惡阻の時は胸元穩しく吐氣を催し、酸氣ある靑梅の類を好むによつて、「女中のすきの靑梅か」と云うて、靑梅の緣から當時流行した「のんやほ節」の端唄「晩にや梅の木の云云」にいひつづけたのである。秀松軒編・松の葉（元祿十六年刊）卷三、のんやほぶしの端唄に、「晩にござらばひごなたさいて、ござれござれ、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほのんやほのんやほ、ひごなたさいてござれ、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほ」。

沈や麝香は持たねども、におうて來るは焚き物（融大臣）

「沈」は沈香。「におう」は匂に荷負をかけたのである。御船唄留・都あたりの唄に、「八瀨や小原の賤しき者は、沈や麝香は持たねども、にほうて來るは焚き物よ」。

蔦の葉の退きも退かれも 黑羽二重の定紋丸に蔦の葉の、退きも退かれもせぬ仲は（天網島）

ここの文、「定紋丸に蔦の葉の」というて、增補松の落葉卷五、蔦の葉の唄「落ちよ落ちよと落して置いて、壁に蔦の葉退き心、蔦の葉蔦の葉壁に、壁に蔦の葉退き心」の句に據つて、「退きも退かれも」といひ、離別できぬ夫婦仲の意にいひつづけたのである。

筒井筒 筒井筒、井筒の水は濁られど、今は涙に掻濁す、月も袂に掻曇る（重井筒） 筒井筒、井筒の水は濁られど、交せし人は朧月、入る方もなき我が思ひ（井筒）

松の落葉（元祿十七年刊）卷二、中興當流所作唄、傾城善の綱に、「筒井筒、井筒の水は濁らねど、交せし人は朧月、いる方もなき我が思ひ、ただ變らじと一筋に、寐ても覺めてもいとしさの、あまりてもれて憎うなる、云云」。

露の命を君にくれべい（反魂香）

增補松の落葉（寶永七年刊）卷四、古來中興踊歌、大津追分綿踊に、「のぼりくだりに日につく姿、露の命を君にくれべい、追分のだるまゐごころ、おにに衣はそげたもをかし云云」とあるに據つたのである。

露の笹原ヤットントン、連れ立ち走る踏み分け走る、磯の千鳥をおつかけて、鏢摑んでずんずと延ばしやる（鑓權三）

流行唄に據つたもので、此の唄に似たものは、生玉心中・上に「戀の窪地酒ヤトントン、捕ね手もとでかかる押へてかかる、………、捕ねる男をぼつかけて、そこらをずんずと飮ましやる」と見えてゐる。鑓權三重帷子のここの文は、「我を追ひ來る追手かと」あつて、脛に劍持てば笹原走るといふ意から「露の笹原云云」のこの唄にいひつづけたのである。

つよきおきめに粟田口、けあげの水に名を流す、おさん茂兵衞が新精靈、恥かしながら手向草、同じ罪科の下女が名の、玉は冥土に通へども、魂魄此世に留りて（大經師）

松の落葉（元祿十七年刊）卷五、踊音頭之部、おさん茂兵衞の唄に、「つよきうきめに粟田口、けあげの水に名を流す、おさん茂兵衞が新精靈、恥かしながら來りたり、今一人の下女が名は、玉は冥土へ通へども、魂魄ここにとどまりて」。

と左手の腹に突立て（寄庚申）　兄が祝儀の一節も餘所な憚る聲低く、三國一ぢや薬茶に成濟いた（持統天皇）　聲高砂や住吉の濱松の音はざざんざ、三國一ぢや酒になり濟いたしやんしやん（國性爺後日）

〔三國一〕「三國一ぢや何何になり濟いたしやん〳〵」といふ小唄かこの當時酒宴の席などで流行した。元祿太平記（元祿十五年刊）卷之四に、薄女らてなか吹上大盡に請出される祝宴の席で、一座の女郎・禿等が「三國一ぢや奧になりすまいたしやんしやん」と唄ひ、同書・卷八に中村七三郎の藝評をせる文中にも、「三國一ぢや藝になりすまいたしやんしやんとした男」と見えてゐる。

「濱松の音はざざんざ」といふ小歌は、室町期から德川期にかけて流行した。淸水濱臣の說に、「足利義教公富士見に下向の時、ここ（遠州濱松）の松のもとにて、濱松の音はざざんざと謠ひ酒宴し給ひしより、名付けて今も颯松とて野口村の田中にありとぞ」とある。

***さんさ**　さんさ如才はござらぬえ（酒呑童子）　さんさ思ひの種かいの、根からいやなら添ふ氣ぢやないに（生玉）

俗謠の囃の掛聲。近松のこの文は、當時流行せる端歌「さんさぶし」に據つたのである。「さんさぶし」は若みどり卷三に、「心づくしに書きたる文を誰をたよりにさんさ待つよしなの思ひ」などの端唄が載せてある。

さん上・ばつからふんごろ・のつころ・ちよつころ・ふんごろで、まてとつころ・わつから・ゆつくる〱たが、笠をわんがらんがらす、空がくんぐる〱も、れんげれんげれ・ばつからふんごろ（大綱島）

「山上」とは天人常に充滿せる靈山淨土、「笠」とは天人のかざせる羅蓋、「空がくんぐろ」とは虛空熏じる、「れんげ」は蓮華で、その他の語句は淨土の法味樂の拍子を形容したものであつて、要するに法華經・如來壽量品の偈文中にある衆生所遊樂の安養世界をいふ片言であらう。そして菩薩（妓）集れる享樂界（遊里）をきかせたものである。

仕合よして今はお江戸の刀ざしぢや、しやんと一筆ふみ馬ごめん（丹波與作）

松の落葉（元祿十七年刊）卷四、與作踊の唄に、「與作丹波の仕合よしのふみ馬御免あづま入、馬かたなれどいまはお江戸の刀さしぢや、しやんとさせよさ與作へ、云云」。

しげれ松山　喜瀨川の三浦とて年まへの太夫、大彌太殿とは深い中、これも狩場へ呼び寄せられ、しげれ松山羨ましい（會稽山）

「しげれ松山しげらうには、木かげにしげれ松山」といふ唄の句に據つたもので、この唄は閑吟集に載せてある。ここの文は、太夫三浦と大彌太との房事をいうたものである。「しげろ」を見よ。

白妙の晒布ほすてふ槇の島（淀鯉）

槇の島は宇治橋の西北にあたつた島で今は地續きとなつてゐる、この島昔から布を晒す地であつた。夫木集に、「槇の島さらしかけたる手作に、見えまがふまで鷺ぞむれゐる」。松の葉（元祿十六年刊）卷二、さらしの唄に、「槇の島には晒す麻布しづが仕業は宇治川の波か雪かと白妙にいざ立出でて布晒そ云云」。

すこしくわん　「ちとくわん」を見よ。

すててんある　物思ふ流れのうき身をすててんあるある（團扇曾我）

流行唄の句「すててんある」を用ひて、棄てたるをいひかけたのである。用捨箱上に、「元祿寶永の頃吉原にて、捨ててあるといふ歌の流行せしことあり、……すててん節と名付けしとぞ、福德男（寶永三年刊）に、聞けば聞く程聲やさしく、さん谷土手下にぬしのない子がすててんあると歌ふ」と見えてゐる。

淸十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思をさしよよりも、思を生きて、生きて思をさしよよりもえ（歌念佛）

「向ひ通るは淸十郎ぢやないか云云」を見よ。

せうくわん

「ちとくわん」を見よ。

關のお地藏は親よりまし　關のお地藏は親よりましぢや、似合ひ似合ひの妻たもろ（田村）　關のお地藏は親よりましと聞くなれど（博多）

「關の地藏」は地名部につきて見よ。松の落葉（元祿十七年刊）卷四、馬子踊の唄に、「關のお地藏は親よりましぢや、親も定めぬ妻を持つよの、……」。「坂は照る照る」の條をも見よ。丹波與作に「色こそ道の關の地藏」とあるも、この馬子踊の唄に據つてかくいうたのである。

そなた櫛田の眞中ほどで、深き思をやれ紫ばうし、ほんに口說いたその眞實が、關の地藏を誓にかけて、戀の重荷の馬追ふとても足もかるがる（丹波與作）

「櫛田」（地名部）・「紫帽子」・「關の地藏」（地名部）はその條を見よ。松の落葉（元祿十七年刊）卷七、伊勢之櫛田の唄に、「伊勢の櫛田の眞中ほどで、深き思のやれ紫ばうし、ほんに口說くかそりや眞實か、ごちの如來の惠もあろと、戀の重荷を乘りかけ馬に、はなれがたなき我思」。

其また女房は太鼓に張つて候、あんまり打つとて打破つて候（扇八景）

童謠に、「お月樣幾つ、十三七つ、七つなり著せて、お萬はどこいた、油買ひに酢買ひに、油屋のかどで油一升こぼして、其油どうした、犬が舐つて候、其犬どうした、太鼓に張つて候、其太鼓どうした、あんまり叩いて破れ候」。

それはあづまの花よめご

「さまがみやげの菅笠云云」を見よ。

それは若草身をうらみ草、何のそなたに飽いたではなし、飽きも飽かれもせぬ中の（淀鯉）

增補松の落葉（寶永七年刊）卷六、淀川所作の唄に、「……それは若草身をうらみ草、何のそなたに飽いたではなし、飽きも飽かれもせぬ中なれど、諦出すかねのつるにはなれて……」。

***鳴るは瀧の水**(祭旬)(女楠)
鎌倉時代既に亂舞の歌であつた。「うれしや水、鳴るは瀧の水」、と謠ふこと長門本平家物語・源平盛衰記にも見えてゐる。「これなる山水の落ちて」「とうとうと鳴るは瀧の水云云」をも見よ。

なれなれなすび秋茄子、嫁をそしる姑はなし(卯月潤色)
御船留歌に、「なれなれ茄子せどやの茄子、ならねば嫁の、あただ名のたつに」。吉原流行小唄惣まくりに、「なれなれ茄子せどやの茄子、ならねば嫁の、コレノ嫁の名の立つにコレノ」。「あきなすび」をも見よ。

***野邊より彼方の友**　野邊よりあなたの友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥土の友となる(反魂香)
(夕霧)
相の山の唄の文である。「あひのやま」を見よ。

のぼればさつさ・下ればさつさ、さつさ三六十八番(卯月紅葉)
若みどり(寶永三年刊)卷四、こころすずしの唄に、「……あがればさんさん、もどればさんさん、なんひんさんさつさ三六十八番、ほかのおきやくはいやらしう……」。

箱根八里は歌でも越すが、越すに越されぬ死出の旅(加增曾我)
俚言集覽に「箱根八里―箱根八里は馬でもこすが、こすにこされぬ大井川、是れ馬士蜘介などのうたふ道中うたといふものなり」とある、この道中歌の作りかへである。

はしがかけたや佐渡屋町、越後は女の主人とて(冥途飛脚)
佐渡屋町は新町遊廓の町筋なる佐渡島町をいひ、越後はその町内にある揚屋の屋號。この文は、松の落葉(元祿十七年刊)卷七、五尺手拭のはやり唄に、「佐渡といよこの越後は佐渡と、越後はすぢむかひ。はしをいよこのかきよやれ、橋をかきよやれ舟橋を」とあるに據つたのである。

橋のいよこの　「いよこの」を見よ。

花の吹雪よの吉野山(虎が磨)
糸竹初心集(寛文四年刊)下卷、三味線唄・吉野の山に、「吉野のお山を雪かと見いれば、雪ではあああらでん、やあこれのを、花あの吹雪よのんやあこれの」。

花は散りても根に返る、人は歸らぬ死出の山(生玉)
間の山(その條を見よ)の唱歌である。新投節の夕霧間の山節に、「花は散りても春咲きて、鳥は古巣に歸れども、行きて歸らぬ死出の山」。

花聟と名にこそ立てれ下草や(卯月紅葉)
花聟といへば名はよけれども、實際家の中心は娘なれば、聟は下草のやうなものだの意。增補松の落葉(寶永七年刊)首卷、江戸半太夫ぶし、櫻づくしの文句に、「あの君を花の心に立て置いて、我下草とぞなりにける」、とあるに據つたのである。

***はまぐりこ**　大鯛・小鯛・鰤の大魚・鮑・榮螺・はまぐりこ・はまぐりこ・はまぐりこうとうつたる物はやしよめ(大經師)
蛤をいふ。「はまぐりこ」の「こ」は「はん」(判)を「はんこ」といふと同じ類の「こ」で、增加した音である。またこの「こ」を延べて「はまぐりこう」ともいひ、「こ」を撥ねて「はまぐりこん」ともいうてある。巢林子作・天鼓に、「鮑・榮螺・はまぐりこん、こんとうつたる物はやしよめ」。ここの文は萬歳唄の文である。

濱松の音はざざんざ　「三國一」を見よ。

濱松のねほれてほれて(小栗判官)
御船歌留に、「大坂出てから住吉さまへ、松にねほれて顯はるる」。

流行小歌も時につれ、時の昔と何處へ行く、寛文の頃かとよ(薩摩歌)
おまん・源五兵衛の情話は寛文三年頃で、流行小歌にも「源五兵どこへ往きやる」云云」といふたのも昔となつたとの意。この流行小歌は薩摩歌・源五兵衛おまん夢分船の冒頭にも引用されてゐる。

春の夜の夢おどろかすくだかけの、其垂尾のむすぼほれ、解くる思は何時かはと、言はで心にかこちぐさ、根引にせんと言ひかはす、身は捨草の捨てもせで、浮名は流れの淀川や、何をたよりに水鳥の、波に搖らるる世の習(淀鯉)
增補松の落葉・卷六、中興當流所作、淀川所作唄に、「春の夜の夢おどろかすくだかけの、其きぬぎぬの物思ひ、又逢ふことも何時かはと、深き心にかこちぐさ。根引にせんと言ひかはす、身は捨草の捨てられて、流れしこの身は淀川の、何をたよりに浮草の、波に搖らるるうたかたの、あはぬは君が情なや云云」。

春はござれの伊勢　同じねを啼く鶯の、春はござれの伊勢參でないか(丹波與作)
春季には伊勢參宮する人人が最も多いによつて「伊勢」の上に「春はござれの」と附けていふことが流行言葉となつてゐた。寛濶平家物語(寶永七年刊)卷二に「小町踊も一さかり、春はござれのいせ踊、坂は照る照る鈴鹿山」。野傾旅葛籠(正德五年刊)卷二に「冬氣は此里に逗留し、春はござれの伊勢路にかかり、正月から仕合をしたなせと」。近松作・田村將軍初觀音・岩戸の前道行の文に、「春はござんせの伊勢參り、拔參宮と僞りの、心を照せ天つ神」。「同じねを啼く云云」を見よ。

ひいふうみいよう　ちよつと立見の手鞠の曲は、ひいふうみいよう、いつむなな八よこころ、とんとはずむも可愛らし(卯月紅葉)
增補松の落葉(寶永七年刊)卷三、梅楠不切の唄に、「とんととんとんとはずんだ手毬梅、ひいふみよ、五つむなんなや、ことはことはしととんとん」。

ひえの山の檜の枝に云云　「ひよどりひえの山の云云」を見よ。

提子の水が湯となる　昔の井筒の女とやらは、妬みの焰に提子の水が湯となつた(大經師)　惡しやう通ひの面憎や、提子の水は湯となれど

蝶蝶とまれ、この枝にとまれ（女夫池）

童謠唄に、「てふてふとまれ、菜の葉にとまれ、菜の葉がいやなら手にとまれ」。

照る照る月、月照る照る云云

「中よい月に戲れ遊べ云云」を見よ。

天一天上 思へば天一天上の、五衰八專間日もなし（大經師）

暦中段の語、天一神の天に上りゐる間の稱である。天一神の巡る方角を天一神の障ありとて物忌する。故に天一天上の日は何れの方角も忌まないのである。大雜書（寛永十一年刊）に、「天一天上とは、此日天一神八方を四十四日巡り終り、天へあがり給ふ日を天一天上といふなり、此日より十六日の間は八方へ行きても天一神のさはりなし」。ここの文は大經師に緣ある暦盡しの祭文である。かかる名寄せ（または物盡し）の類は祭文を應用したもので、大經師おさん歌祭文に、「君を戀路に思ひねの、つもる天一天上の、五衰八せんまびもなし、かかる心の中日を云云」と見えてゐる。

殿中ぢや張肱ぢや（國性爺後日）

「おすぎ」「あひのやま」を見よ。

どうで女房にや持ちやさんすまい、いらぬものぢやと思へども、云云（曾根崎）

どうで女房にや持たれぬ中の、死ぬる生くるは愚の沙汰よ（卯月紅葉）

心中江戸三界の小唄に據つたのである。「山も見えざるかりそめに云云」を見よ。

とくわか とくわかにごまんざいと、……產みならべて福福福福（大經師） 德若に御萬歲、當御殿榮えましますと、……（天鼓）

「德若」萬歲唄の語で、德若に常若をきかせたものである。「常若」はとことはに若きことで、卽ちいつも若うてあること。「德若」は張州府志に、「無住國師所レ作樂稱二萬歲樂一、使下三小奴德若一謳上レ之、以爲二賀正一、至レ今春初稱二萬歲二者、師之遺愛也」、と見えてゐる。卽ち德若は小奴の名であつて、これを己が謳ふ萬歲唄の中に常若にきかせて謳つたのが傳はつたのである。萬歲唄はいづれも大同小異で一定してゐない。ここに擧げたのは巢林子作中に見えてゐる萬歲唄である。

どこへ行く

「流行小歌も時につれ云云」を見よ。

どこやらの男とよそよその女と渡らぬ先にとんとんとんとん（今宮）

往時正月七日の七草粥にする七草を叩き刻む時の囃唄、「唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先に七草叩いてとんとんとん」など作かへたものである。七草の囃唄は古くは定家の桐火桶にも見え、近き世まで一般に行はれ、國所によつてその囃唄にいづれも大同小異であつた。「七草囃す」をも見よ。

鳥威しさりとは鳥威し、粟の鶉や澤の田鶴、ひよひよと鳴くは鵯、小池にすむは鴛鴦、鴛鴦のしかも鰥の夫の留守守（鑓權三）

松の葉（元祿十六年刊）卷三、二あがり、ひよどりの唄に、「ひよひよと鳴くはひよとり、小池にすむは鴛鴦、をしどりのしかも孀におふやの留守守、さらばえひやとな、なえいさらえいえいえいえいえいえいえいえい、しかも月の夜か闇の夜にえいさらえい」、とあるに據つたのである。

ないそないそ 我は袂の乾く間もないそないそ、澤邊の蛙かかる思ひはよも知らじ（蟬丸）

泣く勿れ泣く勿れの意。元祿九年頃京都で、「ないそないそ、五月にや戻る、遲くて六月中頃に」といふ小歌が流行して、三つ四つの子供までも謠うたといひ、松の落葉（元祿十七年刊）卷七、さけはさかやの唄の中にも見え、若みどり卷四、なる川の唄の中にも見えてゐる。巢林子この小唄の句を用ゐて、「泣い」に「無い」をいひかけたのである。

中よい月に戲れ遊べええいええい……（卯月紅葉）

若綠（寶永三年刊）卷四、てる月の歌に、「いざよひ月にたはむれ遊べええいええい、遊べええいええいえいいえいえい、照る照る月、照る照る照る照る月を見たらば、なんとよござるまいかの照る照る照る月、照る照る月のおもかげ月を見あかしのみあかす」、とあるを作かへたのである。

なげそ枕にとがもなや

「枕なげそ云云」を見よ。

七八十四五すつとんとんと打ちたいが……（歌念佛）

若みどり（寶永三年刊）卷五、かろかやの唄の文句に、「七八十四五すつとんとんと打こむ色里」。

難波江の蘆のかり寢の一夜さへ、長き契りと結びはすれど、許さぬ戀の關の戸や、いつそやま邊と思へども、一期さる丸との誓詞のあれば、天智天皇罰おそろしく、親の菅家もそこはかとなく、餘所の人丸賴まれずして、直に大江の千里を越えて、凄き深養父中押し分けて、たんだふれふれな爰で切れさ（鑓權三）

この百人一首名盡しの踊口說唄は、流行音頭牛九郎節に據つた拔萃であつて、その全文は音曲色巢籠、百人一首踊歌、「牛九郎口傳くどき」の題下にも收めてある。「難波江の蘆の云云」は、（小倉）百人一首、皇嘉門院別當の歌に、「難波江の蘆のかりねの一夜ゆへ、みをつくしてや戀ひ渡るべき」とあるに據つたのである。この歌の意は、難波の地で一夜の旅寢の情がどうも忘れ難くて、終身戀ひて月日を暮すことであらうか、と云ふのである。「いつそやま邊」は、いつそ止めに山邊（山邊赤人）をいひかけ、「一期さるまる」は、一期去（離別）るまいに猿丸（猿丸太夫）をいひかけ、「親の菅家」は、親の勘氣に菅家（菅原道眞）をいひかけ、「餘所の人丸」は、餘所の人に人麿（柿本人麿）をいひかけ、「直に大江の千里」は、直に逢ふに大江千里をいひかけ、「凄きふかやぶ中」は、凄き深藪中に深養父をいひかけ、「たんだ振れ振れ」は踊の囃詞であつて、松の葉卷三、端歌・三さがり、門はしらの唄の中に「たんだふれ〱」と見え、また踊づくしの唄の中に「ゑいこの振れ〱」と見えてゐる。なほ山邊、猿丸、天智天皇、菅家、人麿、大江千里、深養父は（小倉）百人一首に載れる歌人。

ふうかい、よてへまんことんやんのはい、ひはりふひやふはいほふはいほ(三國志)

逍遙軒編・唐音和解(享保元年自序 寛延三年刊)坤卷、笛譜・相思曲に、「風常來雨常來、書信不(曾)來、(春去愁不去)花開悶不開、(珠淚)落的(流了流了)、(寃家)迯滿東洋ノ海」と見えてゐる。この相思曲に據つたもので、( )の中の語句は省かれ、且つ「はかいろてめんふうかい」は花開落的悶不開になつて前後し、更に誤つたものである。「ひはりふひやふはいほふはいほ」は笛の音譜を寫したものである。相思曲の歌の意は、風常に來り雨常に來れども書信は曾て來ない、春去れども愁は去らない、花開けども悶は開けない、珠の淚落ちてそそぎ了る、寃家にそぞぎ了つて、迯東洋の海に滿ちたといふのである。

枕なげそ枕に科もなや　拋力なき草

枕なげそ枕に科もなや(百日曾我)

「投げそ」は投げるなの意、「そ」は禁止の意を示す助詞。「そ」を見よ。隆達節の歌に、「手に手をしめてほとほと叩く、我はそなたの小鼓か、悋氣心に枕な投げそ、投げそ枕にとがはよもあらじ、云云」。

まことに今年は此方樣も二十五の厄の年、……數珠の百八に泪の玉の數そひて(曾根崎)

松の落葉(元祿十七年刊)卷七、辛崎心中の唄に、「まことに今年は此方樣も二十五の厄の年、わしも十九の厄なれば、思ひあうたる厄祟り、緣の深さのしろしかや、神や佛に懸けおきし現世の願を今ここで未來へ回向し、後の世も猶し一つ蓮ぞとつまぐる數珠の百八に、淚の玉の數そひて……」。序云、この辛崎心中道行唄も巣林子作であつて、曾根崎心中道行文を取つたものである。

松は平らか追手馬場先繫ぎ馬、がいに冷たき今朝の雪、殿の御馬は鏽月毛、連錢葦毛鹿毛糟毛、しとしと打ちては驅けあふり、お江戸育ちのしげしげ男、お馬の口をばしつかとさ、つりりん〳〵、髭男〳〵、つりりん〳〵〳〵りんと跳ねたる髭男、繫ぎ留めたよ戀の關札(天鼓)

松の落葉卷四、古來中興當流踊歌、馬場先踊の唄、「松はゆたかに追手馬場先繫ぎ馬、がいに冷たい今朝の雪、殿の御馬は鏽月毛、連錢葦毛鹿毛糟毛、しとしと打ては驅けあふり、お江戸育ちのひげひげ男、おん馬の口をしつかとさ、つりりん〳〵髭男、つりりん〳〵髭男、つりりん〳〵〳〵つりりん〳〵りん〳〵りん〳〵りんと跳ねたる髭男、繫ぎ留めたよ戀の關札」。巣林子が「松は平らか」といへるは、松平の姓をきかせる爲、「しげ男」といへるは髭男の「ひ」を「し」にいふ江戸訛を應用したのである。

まづ初春の空色に、咲くや花色花に鳴く、……、戀の染絹たつ田姫、手染の錦手もたゆく(融大臣)

增補松の落葉卷二、土佐少掾の染色盡の唄に、「まづ初春の染色に、咲くや花色花に鳴く、鶯染の聲あげて、人に春をやゆつり染、風にしなへてたよたよと、召した姿の柳染、こひを媒竹藤鼠、袂に殘る香染の、うつりやさつと散らし紋、染めし鶸茶の着衣はじめ、我が黃枯茶は變らねど、人の心の二重染、倭にあらぬ唐柿や、朱を奪ふと名を立てて、唐土人はそねめども、彼の一本のはつゆかり、憲法黑茶に難波江の、よし吉岡に紅檜皮、干さね袖だにあるものを、戀に朽葉や身はされ柿の、あはぬえにしは蕈柿や、いつ紺瑠璃の卵色、空にこがるる紅葉はの、紅鶸鹿子結ひ立つる、戀をする身の袖の露、絞り千草の妻こめめ、寢よげに見ゆる木賊色、我が魂もあくがれて、ゆかしき空に鳶色や、桔梗玉蟲まがひ染、鬱金黃鬱金紅鬱金、水色淺葱淺くとも、せめて一夜は濃淺葱、染入れ鹿子しめ寄せて、幾夜重ねし手枕に、野邊の小薄穗に出でて、打出し鹿子やしほ鹿子、しくものもなき朧染、うつぶし色の御所染は、皆思はくの歌の文字、散らし小紋地浮世染、暹羅唐染色の、千千の思ひや桃色に、深き心を染入れて、君が膚の山吹や、染紅梅は足利の、東國の絹に劣らじと、末摘花や山藍の、振出し染むる雲の袖、戀の染衣たつ田姫、手染めの錦色深く、こゑあやをなし染めたりしは、面白かりける次第なり」とあつて、巣林子のここの文と大同小異である。染色に就いては、その各條を見よ。

幻や定業の限とはいかに如何なる娑婆ならむ(萬年草)

人生は幻の如く、必ず生死の苦果を受けるべき定まる業因があるとは、いかにもはかない現世ではないかの意。これは歌說經の文句であらう。歌說經は享保末年には衰微してしまひ、余が見た現存せる歌說經にこの文句が見當らない。

迷ひ行けども松山に似たる人なき浮世ぞと、泣いつエヱワハワハワハ笑うつ狂亂の身の果何とあさましやと、芝を褥に臥しけるは目もあてられぬ風情(天網島)

椀久末の松山(都太夫一中直正本)下之卷、椀久狂亂道行の文に、「雜喉場・安治川・福島に迷ひ行けども松山に似たる人なき浮世ぞと、泣いつ笑うつ狂亂の身の果何とあさましやと、芝を褥に臥しけるは目もあてられぬ風情なり」と見えてゐる。これを文彌節で語つたのである。「まつやま」はその條を見よ。

向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよく似た菅笠がよく似た、笠が笠がよく似た菅笠がえ(歌念佛)

貞享頃流行した唄に據つたのである。好色五人女(貞享三年刊)卷之一に、「里の童子袖引連れて、清十郎殺さばお夏も殺せ、とうたひけるを聞けば心に懸りて、お夏育てし姥に尋ねければ返事しかねて淚をこぼす、さてはと狂亂になつて、生きて思ひをさしやうよりもと、子供の中に交はり音頭取つてうたひける、皆皆これを悲しくさまざまとめてもやみ難く、間もなく淚雨ふりて、向ひ通るは清十郎でないか、笠がよく似た菅笠が、やはんはははのけらけら笑ひ、うるはしき姿をいつとなく取亂して」。

物に譬へて得申すまいよの(隅田川)

まださめやらぬ我思ひ、辛し姤ましあら腹立ちと縋附いては泣くばかり(傾城佛原)

夜な夜なのうき名を包むも戀しき君ゆゑ、ひさげの水の焰となり身は陽炎のあるかなき(弘徽殿)

煩惱の情熱に苦しむことを火に燒かれるに喩へ、その熱火で提子の水が湯となるといふのである。「提子」は酒を盛つて盃に注ぐ器で鉉のあるもの。ここの文は玉川千之丞(寛文頃女形の名優)の高安通ひの唄に、「いつのまにかは高安に、……胸のほむらをさますにぞ、提子の水は湯となれどまださめやらぬ我思ひ……」、とあるに據つたのである。「井筒の女」とは、昔河内國高安の里に住み、業平がその許に通うて、「つつゐつつ井筒にかけしまろがたけ云云」の歌を贈つた女のことであつて、この事は伊勢物語に出てゐる。

鵯・比叡の山の檜の枝にそりや鳥さしか、とりでないぞや(重井筒)

當時の流行唄に據つたものである。紀海音撰・花山院都諍に、「鳥をさいた見さいなさい、鳥さいた見さいな、ひとひの日は又、ひとつひよどり比叡の山の檜の枝に、人は知らじと囊牒する鳥をさいてくりよと思うて思つて、ちよつとさいておつ捕つた、鳥をさいた見さいな」と見えてゐる。大黒舞の詞であらう。

ひよひよと鳴くは鵯……

「鳥威さりとは云云」を見よ。

船は新造の乘り心サヨイヨエ、君と我と我と君とは、圖に乘つた乘つて來た、しつとんとんとんしととんとん、しつとと逢瀨の涙枕(女殺)

松の落葉(元祿十七年刊)卷四、君はしんぞ踊の唄に、「君はしんぞののり心さよいよゑいゑい、君とわれと我と君と引寄せてはよろよろさ、男は花の都入り圖に乘つた乘つて來た來た船のや、……」。同・卷四、しととん踊の唄に、「……須磨や明石の月をみしよ、しつとんとん、しつとんとんしつとんしととんとんとんとんとん、とうからから櫓の音がした、……」。

船を出しやらば夜深に出しやれ、帆影見るさへ氣にかかる(博多)

若みどり(寶永三年序)卷四、夜ふか船の唄に、「船を出しやらば夜ふかに出しやれ、帆影見ゆればなつかしや」。

文が遣りたや室町筋へ、取り違へて餘の人に遣るな、花のかの樣の云云(賀古敎信)

松の落葉(元祿十七年刊)卷一、古來十六番舞唱歌の第二番、文がやりたやの歌に、「文が遣りたや室町筋へ、取りも違ひて餘の人に遣るな、花のかの樣の手に渡せ」。

振り振り鼓に笙の笛、猿の木登り欲しいか欲しいか、紅絹の附紐いたいけさまに、何が月花勝ろかの(源義經)

子守唄に據つたものであらう。「猿の木登り」とは、彈くやうに裝置した小猿の形の玩具。現今廣く行はれる小守唄は「……里のおみやに何もろた、でんでん太鼓に笙の笛、おきあがり小法師にふり鼓、もつと欲しけりや風車」。

ふろか信濃の信濃のハツア冷たいな、げに雪國で身を寒晒(薩摩歌)

當時流行した「さんがらが節」の唄に據つたのである。紙鳶(元祿十二年刊)さんがらが節の唄に、「あらい風にもよふやよほいほ、あてまいさまをやろか信濃の雪國へ、さあささんがらが、かわじやざんざらやなきがよいやさ、しろねがしろねが、よいてがよいてが、こまのひざぶしんがらが、信濃へやろかやろか信濃のゆきぐにへ、さあささんがらが」。松の落葉・卷四、さんがらが踊の唄に、「やろか信濃の雪國へ、さあささんがらが」。巢林子が「ふろか」といへるは、お供先振ろにいひかけたのである。

文武の花も榮えた、初花咲いた見さいな、……辛いかつつてん(雪女)

松の落葉(元祿十七年刊)卷之三、藤内だんじり出端の唄に、「藤内五郎殿わいな太鼓打の役で、大まいの太鼓をあそこらもとに置かせて、きんの桴を手にもちつくつくつくつく、つてんこんこれつくにはづんでんどん、これつくつくつつこんてん、とんからつとんとうつ惚れた、なるかならぬか戀の中の町なかの、中の町を通りたうはなけれど、なまだこつかんだあたまを見たか、熊野小びくにんがちとくわんくわんくわんくわんともなるは、夜明けの鐘はつんつん、辛いかづんでんとうから櫓太鼓の音によりくる」。

平家平家と千種も靡く、扨は居よいか任みよいか(女護島)

山家鳥蟲歌に、「江戸へ江戸へと木草も靡く、江戸には花咲く實もなりて」、の歌謠に據つたものである。

ぼんじやり咲いて匂うた梅の花がた見さいな、藤内二郎アリヤコリヤ、殿ハナ小鼓のヤえてもの、あかうの胴にかがはくれ、紅の調を千鳥がけにかけさせ、合せ打つたるはさつても打つた小鼓と、上の町下の町とつとほめて通した、ほんのり明けて唄うた鳥の掛聲聞きやいな、藤内三郎殿大鼓の上手で、しつたんにしつたんたん(雪女)

松の落葉(元祿十七年刊)卷之三、中興當流丹前出端、藤内だんじりの唄に、「だんじり打つてはやしただんじり打つた見さいな、藤内三郎殿は小鼓の名人で、あかうの胴にかがはくれ、紅の調をちん鳥かけにかけさせ、ちちつちちふつほ……、合せ打つたるはさつても打つた小鼓と、わつと褒めて通した、たんじり打つた見さいな……、藤内四郎殿わいの太鼓の役で、しつたんにしつたんたんたん……、上の町下の町どつと褒めて通した云云」とあるに據つたのである。「ぼんじやり」は五十念忌歌念佛(巢林子作)にも「ぼんじやりとしてきつとして」と見えて、愛嬌ある貌をいふ。「あかう」「かがは」などはその條を見よ。

ほんちやんのらい……　野飼の牛をひきつれて樵歌牧笛かすかなる、杖つくづくと聲きけば、ほんちやんのらいいひちやんのらい、きいちんこふうらい、はかいろてめん

川、如何なる淵の瀬になり・天地の恩國王の恩、よしや世の中寐てか、覺めてか只何事も後生なりけりなもうだ、なもだ〳〵（閑八州）

鉢敲の歌に據つたのである。小唄打聞（寛政二年成、俗謠等を集む）鉢敲の歌に、「よき光ぞと影頼む、頼む頼むちやのキヨモ佛のキヨヒヨン、あひづのさとにキヨむつのくにけりキヨヒヨン、ひやうたん瓢に緒を附て、折々風の吹く時はヒヨヨラヨンヒヨン、しほぜの風の寒き山野に丁と打鳴らし、三界を家と定り廻る鉢敲めが、せい〳〵ここにかけて後生を願はば、などか佛にならざらんキヨヒヨンノウ、五郎三郎それハツ女郎わししワイ、なんどとこうとんづろヤウ、しやうこうくらうずテンヅンヅヂン、とたたこうづるには、瓢ならではおほせうし、よしや只寐てぬ覺めてぬ忘るるなよ、唯一念は念佛なりけり、急いで淨土を願ふべし、南無うみはろうだ、ハウハイドウ茶筌〳〵」。「よき光云云」は、謠曲・山姥にも、「よき光ぞと影たのむ、佛の御寺尋ねん」。「キヨヒヨン」は瓢を叩く音の形容の囃詞

與作思へば照る日も曇る、關の小萬が涙雨か（丹波與作）

諸國盆踊唱歌（寛文頃の編集か）但馬の部に、「與作思へば照る日も曇る、關の小萬が涙の雨か」、とある流行唄に據つたものである。

與作丹波の馬追なれど、今は野末の放れ駒ぢや、しやんとさせ與作（丹波與作）

諸國盆踊唱歌（寛文頃の編集か）但馬の部に、「與作丹波の馬追なれど、今はお江戸のかたなさし」。松の落葉（元祿十七年刊）卷四、古來中興當流踊歌の部、與作踊の歌に、「與作丹波の仕合せよしのふみ馬御免、あづま入馬方なれど、今はお江戸の刀さしぢや、しやんとさせ與作云云」。丹波與作下の卷に「與作丹波の伊達男と、歌に謠ふはあの人か」、といへるもこの踊歌によつてかくいうたのである。

夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に淸十郎と寢たところ（歌念佛）（重井筒）

流行歌を引用したのである。五十年忌歌念佛・下之卷、お夏笠物狂の條の「夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、……神の力もかなはぬかと、笠も髢もかなぐりすて、狂ひ歎くぞあはれなる」までは、明曆萬治小歌集（岩崎文庫所藏、萬治三年書寫？）笠ものくるひの歌に「戀といふ字をきんしやで縫はせ、……神のちからもかなはぬかと、笠もかもじもかなぐりすて、ものにくるふぞあはれなり」とあるのと大同小異である。紀海音撰・花山院都巽、れんぼの辻占に「よさ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾におてきと寢たところ、裾におてきと寢たところ」と見えてゐる。されば、この歌は既に寬文頃に唄はれて後世までも流行し、巢林子や紀海音の文に應用された。

よさこいの玉章翼にかけて、裾に刈り田の秋の雁（吉岡染）

前條に擧げた俗謠「よさこいといふ字を金紗で縫はせ、裾に淸十郎と寢たところ」の作り替。

よしののやま　吉野の山の連彈も、昨日の昔今は又、吉野煙草の刻み賣（嫗山姥）

絲竹初心集（寛文四年刊）下卷、三味線唄・吉野の山に、「吉野のお山を雪かと見いれば、雪ではあああらでん、やあこれのを、花あの吹雪よのんやあこれの」、と見えてゐる。但嫗山姥のこの後の文に、作り出せし替唱歌とあるから、上述の唄を多少改作したものである。

夜は何時ぞ、五つ六つ四つ、千日寺の鐘も八つか（重井筒）

「ここは竹田か夜は何時ぞ云々」を見よ。

戀慕の闇に暗がりによしなきことを爲出して東の果に名を流す、それに劣らぬ歎ぞと（重井筒）

増補松の落葉（寶永七年刊）卷二、中興當流淨瑠璃、四條河原凉八景に、「色のさかりは東なる八百屋の娘お七こそ、戀路の闇の暗がりによしなきことを爲出して、罪は死罪に極りてすぐにひきだす哀れさよ……」とあつて、八百屋お七歌祭文に據つた。「それに劣らぬ嘆」とは、八百屋お七に劣らぬ嘆といふ意。紀海音作・蟬丸に「戀慕の闇の暗がりに牽出す牛」とあるは、暗がりから牛を牽出すといふ諺を應用し、又三世相に「戀慕の闇に迷ふやと、暗峠名もつらし」とあるは、戀慕の闇のくらがりを暗峠（地名部を見よ）にいひかけた。

渡つた渡つた光る君の渡つた、夢の浮橋六十帖を渡り詰十帖と詠じた、一に一夜のお情の夕顏の若ばえ、二に匂炷きしめて浮舟に蜻蛉紅梅竹河橋姫に手習、我名ゆかしきあづま屋でこれ樣の忍び寢（淀鯉）

巢林子作の大黑舞（その條を見よ）の唄である。光る君は源氏物語の主人公。源氏物語は桐壺卷に始まつて夢の浮橋の卷に終る、總て五十四帖ある（天台六十卷に準へ「源氏六十帖」と云）。詰十帖は橋姫以下十帖あるによつていうたのである。夢の浮橋、夕顏、若紫、匂宮、浮舟、蜻蛉、紅梅、竹河、橋姫、手習、東屋は皆源氏物語の卷名。

我が戀路は絲なき三味よ……オオそれ二人と二人が名取川（宵庚申）

紀海音作・心中二つ腹帶（淨瑠璃）道行ほしのかずにも、「われが戀路は絲なき三味よ、何のねもせで泣明す、見れば思ひの雲の帶、扨も短夜心のせくにござんせ、いやとおしやろともうさうさんせ、二人が中に名取川」と見えて、當時の流行唄に筆を加へたものである。

ゑいゑい鴉がな云云

「鴉がな鴉がな云云」を見よ。

ゑいゑい山崎山崎、八幡山崎難與平のお祖母、ヤアこの誠に金を出させ（壽門松）

この盆踊歌は、松の落葉（元祿十七年刊）卷四、山崎與次兵衞踊の唄の中の文句、「與次兵衞請出す請出す、山崎與次兵衞そつこで請出せ三百兩」の改作海老屋節。（壽門松のこの次の文に「盆にござれ」といへるは、盆踊歌の緣によつたもので、今時にはあはぬ立去れといふ意の洒落である。

ゑいゑいゑいゑいゑい、紺屋の德兵衞・房にもとよりこい染込の、內の身代灰汁でも剝げず、なまみだ（天網島）

花見の唄の句に、お花をは寿申すさいよの」（その條を見よ）の作り替である。花見の唄は松の葉（元祿十六年刊）卷二、長歌の部にある。

やあんやうりうしやうりうしなつてんりうたん（日本振袖始）
植物の名盡し唄である。「やあん」は唄の拍子、「やうりうし」は楊柳枝、「なつてん」は南天、「りうたん」は龍膽である。龍膽は「りんだう」とも「りうたん」ともいうた。荒木田麗子撰・富士の岩屋・下卷に、「龍膽」の字に「りうたん」と振仮名が附けてある。

破れ車でわが惡い　**わが善きに人の惡しきがあらばこそ、破れ車でわが惡いとはいひながら**（卯月紅葉）
破れ車で輪が惡いを「我が惡い」にいひかけた小唄の文句を應用したのである。諸國盆踊唱歌（寛文頃の編）和泉の部に、「人はわるない我身が惡い、破れ車でわが惡い」。隆達節の唄に「人はよいものとにかくに、破れ車よわが惡い、明日をも知らぬ露の身を、せめて言葉をうらやかに云々」。句袋（享保年間刊）に、「古き小歌にうたたるを聞けば、君にとがなやうらみはすまじ、やぶれ車でわがわるい」。卯月紅葉のこのあたりの文は謠曲・葵の上から得たものである。葵の上に「枕に立てる破れ車、打乘せ隱れ行からよ」とある。

山田畠の鳥威し、さりとは鳥威し、粟の鶉や澤の田鶴、ひよひよと鳴くは鵜云云（鑓權三）
「とりおどしさりとはとりおどし云云」を見よ。

山も見えざるかりそめに、江戸三界へ行かんしていつもどらんす事ぢややら、殺しておいて往かんせの、放ちはやらじと泣きければ（丹波與作）
心中江戸三界といふ當時の流行唄を引用したのである。「江戸三界」は「さんがい」を見よ。松の落葉（元祿十七年刊）卷七、古來中興當流はやり歌、心中江戸三界に、「……江戸三界へ行かんしていつもどらんす事ぢややら、山も見えざるかりそめに、つい馴れ馴染みわしを扱どうせ女房に持ちやさんすまい、いらぬ番ぢやと思へどもどうした事の緣ぢややら忘るるひまもないわいな、それを振棄て行かうとは遣りはしませんぞ、手にかけて殺しておいて行かんせな、はなちはやらじと泣きければ、……」。

鑓の權三は伊達者　**鑓の權三は伊達者の、どうでも權三は好い男、謠ひはやらす美男草**（鑓權三）　**鑓の權三は伊達者でござる、油壺から出す樣な男、しんとんとろりと見とれる男、どうでも權三は好い男**（鑓權三）
松の落葉（元祿十七年刊）卷五、鑓權三男踊の歌に、「そりや〱そりや〱、槍の權三ははすはにござる、谷のやつとんと笹やこ、やああそろゑにかかる、撓へてかかる、どうでも權三は濡者だ、油壺から出す樣な男、しつとんとろりと見とれる男、………どうでも權三によつどつこい好い男え」。

やれ湯のだんこだんこ云々「有馬の湯のだんこ」を見よ。

雪を踏んでは花かと惜む岨かげの、谷水も靜かならで騷がしき木枯の、……野邊のいぶせき東屋も、昔の玉の臺かと、立寄り憩らひ給ひける（川中島）
この衞門姫道行の文は、明曆萬治小歌集（奥書別筆に、「此小歌は萬治三庚年正月よし原三うらや高尾筆」とあつて、紙質墨色などいかにも萬治三年の古寫本かとも思はる。（岩崎男爵所藏本）に「ききやうかはら」と云ふ題で載つてゐる文と大同小異である。されば巣林子のこの文は既にあつた文を引用したものか。（或は明曆萬治小歌集といふ名も、奥書の文も共に僞であるか、疑ひを存して置く）。

行くもちんつ歸るもちんつ、又來る人もちんつちりつて、チリテツテ（女殺）
山崎通ひの唄（次條を見よ）の文句、「行くも山みち戻るも山みち、心のとまるも山崎」とある「山みち」「山崎」を、浮かれて口三味線「ちんつ」「ちんつちりつて、チリテツテ」に言うたのである。多田院開帳（淨瑠璃）第三、たちばな姫道行の條に、「行くも山崎歸るも山崎、又行く先も山崎の」とあるも、山崎通ひの唄の文句である。

行くも山崎歸るも山崎（壽門松）
この唄は多田院開帳（前條を見よ）にも引用されてゐる。松の落葉（元祿十七年刊）卷三、中興當流丹前出端、山崎通ひの唄に、「おもしろの山崎通ひや、行くも山みち戻るも山みち、心のとまるも山崎、かの里のちよろと一夜寢たれば云云」、とある。

夕あしたの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞きてナ驚く人もなし、間の手　**野邊よりあなたの友とては、血脈一つに珠數一連、是が冥途の友となる**（夕霧）
間の山（その條を見よ）の唱歌である。新投節の夕霧間の山節に、「ゆふべ朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞きてナ驚く人もなし、間の手、野邊より彼方の友とては、胎藏界の曼荼羅と、血脈一つに珠數一連、是が冥途の友となる、間の手」。（巣林子は夕霧阿波鳴渡に、「ゆふべあしたの憂き勤め、花一時の眺めとは、知れども迷ふ歡歡の」。また三世相に、「夕べあしたの薄霧も、……」などとも書いてゐる）。

よき光ぞと影たのむ、世の光ぞと、賴む茶のきよのきよひよん、御寺にたつぶにきよひよん、ヲヲ井の澤の、澤の寒き山野に丁と打鳴らす、三界を家とよ、走り〱廻る鉢こくりが、ヲヲ〱五郎三郎、田舍へお下りあろならば、此程のたぐり情に、瓢をなりとも置いてゆけ、小瓢をなりとも置いて行け、それはや女郎、易き間の事なりとよ、諸國を出つるでづでんど、敲かうずるにも瓢なうてはお笑止、極樂のホホ前に流るる涙

孝經に據れるもの

家に争ふ子なければ 家に争ふ子なければ家治らず(基盤太平記) 家に争ふ子なければ家正しからず(女護島)

孝經・諫爭章に、「父有二爭子一則不レ陷二於不義一」。

上に居て驕らず、下として亂れず、醜にあつて能く讓る、これ孝經の本文(吉野忠信)

君主の尊に居ても驕ることなく、臣下となつて敢て亂をなさず、醜類も心を改めて善をなし能く謙讓して忿爭せぬとの意。孝經に、「居レ上不レ驕、爲レ下不レ亂、在レ醜不レ爭」。

君君たらずとも、臣以て臣たるべし(百合若) 君君たらずとも臣臣たるは弓矢取(懸物揃)

古文孝經・孔安國序に、「君雖レ不レ君、臣不レ可三以不二レ臣」。君は君たる道を盡さないでも、臣は臣たる分を盡すべきである。

しうにあつてよく讓る 上に居て驕らず下として亂れず、しうにあつてよく讓る(吉野忠信)

〔在レ醜能讓〕「上に居て驕らず」を見よ。

漢書に據れるもの

雁がねの翼の文 古語に傳へし雁がれの、翼の文を目の前に今見ることの不思議さよと(用明天皇) 霧深うして山もなく、雁のつてだにあら磯の、岩角削る波の音(伊豆日記) あはれ雁の翼もがなと、焦れても言寄らん便なく(女夫池)

「雁がね」は雁が音、轉じて雁をいふ。「雁の翼」「雁の傳」といふも消息の便を云ふことで、漢の蘇武の故事である。漢の蘇武が匈奴に使して拘留され、彼地に居ること十九年、時に漢の孝昭帝上林中に狩して雁を獲た、その足に帛書を結付けてあつて、蘇武が大澤中に在ることが記してある、これによつて漢・匈奴と談判して蘇武漢に歸ることを得た。詳しくは漢書・蘇武傳を見よ。

勸善懲惡は國政の始めとかや(娥)

善を勸め惡を懲し戒めるは國政の始本とか聞いてゐるとの意。漢書・賈誼傳に、「慶賞以勸レ善、刑罰以懲レ惡」。漢書・韓延壽傳に、「以爲賞罰、所二以勸一レ善禁レ惡、政之本也」。

蘇武は片足を切られても典屬國といふ位に上り大國の主となる(吉岡染)

前漢書・蘇武傳に「昭帝卽位數年、匈奴與レ漢和親、……、由レ是得レ還、拜爲二典屬國一、秩中二千石一、賜二錢二百萬公田二頃宅一區一」。「蘇武は片足を切られ」とあるは、源平盛衰記智巻、漢朝の蘇武の條に、「空同二胡敵之一足一」とあるのをかくいひなしたのである。

大千世界 大千世界を壺中に入れ、四大海を呑盡す仙術もまた一心(持統天皇)

一切の世界の意。「三千世界」を見よ。ここの文は漢書・方術傳に、「費長房者汝南人也、曾爲二市椽一、市中有二老翁一賣レ藥、懸二一壺於肆頭一、及二市罷一輒跳入二壺中一、市人莫二之見一、唯長房於二樓上一覩レ之異焉、因往再拜、翁乃與俱入二壺中一、唯見二玉堂嚴麗一、旨酒甘肴盈二衍其中一、共飮畢而出」、とあるに據つたのであらう。

たうのさんせき 周の九鼎たうの三尺皆古幣を以て貴しとす(天智天皇)

唐の三尺であらう。唐とは支那のことで、支那漢の高祖三尺の劍を提げて天下を取つたといふ故事によつていうたのであらう。漢書高帝紀に「吾以二布衣一提二三尺一取二天下一」。和漢朗詠集の部「三尺の斷蛇」をも見よ。

寗成乳虎の牙にかかる(嫗山姥)

寗成は漢の景帝武帝時代の酷吏である。子を乳養せる虎は最も兇暴である。ここの文は寗成・乳虎を淸原右大將・平政盛に喩へて、その兇暴者の爲に源賴光が災害を受けたことに云うたのである。漢書・寗成傳に、「寧見二乳虎一、無レ値二寗成之怒一、其暴如レ此」。

水は石が鐵にあらずして、泰山の霤巖を穿ち、索は木が鋸にあらずして、單極の綆幹を斷る(國八州)

霤は雨滴。單極は一深の義で、井の轆轤をいふ。綆は統と同字で、つるべなはをいふ。幹は井上の四交の幹、卽ち井桁のこと。「雨滴石を穿ち、釣瓶繩井桁を切る如く、些細のことでも數重なれば終に大事となる。前漢書・枚乘傳に、「泰山之霤穿レ石、單極之統斷レ幹、水非二石之鑽一、索非二木之鋸一、漸靡二使之然一也」。

老陰かへつて一陽の氣に催され寒天に諸木花咲く(大織冠)

「老陰」は極陰をいふ。「らうやう」の條を見よ。漢書・翼奉傳に、「極陰生レ陽」と見えてゐる。

りよくりん 綠林め大掏摸ども、この水が酒ならば食ひ乾すを見るやうなと(唐船噺)

〔綠林〕盜賊の異稱。綠林は荊州當陽縣にある地名である、この地に賊徒等起つて兵を擧げたによつて、この輩を稱して綠林というたに起るといふ。漢書・王莽傳に、「南郡張霸、江夏羊牧、王匡等起二雲杜綠林一、號曰二下江之兵一」。

巣林子作、丹波與作の與作踊の冒頭に見える文である。蓋し海老屋節踊歌の改作であらう。荒木與次兵衛狂言記・日本女護島の唄は、「よい〳〵〳〵仕合せ與次兵衛云云」とあつて、「よいノ〳〵〳〵」になつてゐる。

ゑいゑい〳〵〳〵、紙屋の治兵衛、小春狂ひが杉原紙で、一分小判紙ちりちり紙で、内の身代すきやれ紙の、鼻もかまれぬ紙屑治兵衛、なまみだ佛なまいだ（天網島）

小春狂ひが過ぎた杉原紙（治兵衛が紙屋の縁で）にいひかけ、一分小判を小半紙にいひかけ、身代透き破れを漉破紙にいひかけたのである。この唄は丹波與作待夜の小室節の與作踊に、「ゑい〳〵〳〵、紺屋の徳兵衛、房に元よりこひ染めこみの、内の身代灰汁でも剝げず、口入頼みて銀四百目を云云」、とあると同じやうな構想で、共に踊唄のもぢりである。

酔うたとさ酔うたとさ、足や千鳥足、はめた谷底殺した山の手、沙汰なし合點ぢや（十二段）

増補松の落葉（寶永七年刊）巻四、山谷土手路踊の唄に、「……三谷土手みちな酔うたとさ酔うたとさ、足や千鳥足、西は田のあぜ、あぶない合點ぢや……」。（源五兵衛・おまん）薩摩歌に、「酔うたとさ酔うたとさ、とさとさとさ」とあるも、この三谷土手路踊の唄に據つたのである。

をかざきぢよろしゆ　岡崎女郎しゆ岡崎女郎しゆ、岡崎女郎衆と（丹波與作）

絲竹初心集（寛文四年刊）下巻に、「をかざき女郎しゆ岡崎衆、岡崎女郎衆はえいぢよろしゆ」、と見えてゐる流行唄に據つたものである。この唄は寶永頃にも廣く行はれたもので、寛濶平家物語（寶永七年刊）巻之一にも、「熱田鳴海の景氣も目の前に、岡崎女郎衆はよい女郎衆、いつもの比丘尼もうたひつれ云云」と見えてゐる。

小笹に露のたまられぬ　名古屋の胸高帯は、小笹に露のたまられぬ、始末算用世智辨も（女殺）

松の葉・巻五、投節の唄に、「花におく露小笹の露、こぼれ易きは我が涙」。ここの文は、妓女小菊が名古屋の胸高帯の美貌は、それに見惚れて倹約物惜しみも人・品にこそよれ、花の露小笹の露の如く粒銀をこぼし散じたうなるとの意。「なごやのむなだかおび」をも見よ。

女嫌やる高野の山になぜに女松は生ゆるぞや（萬年草）

當時の流行唄に據つたものであらう。女人は五障深きによつて往時は女人堂までは行かれても、これより高野の靈地に入るを許されなんだのである。その許されたのは明治五年四月以後である。

遊仙窟に據れるもの

（漢文之部）

高嶺天に横はり、刀して削りなすかうらんのいきほひ、鑿して穿つかいがんの形（浦島）

「かうらん」は崗巒。「かいがん」は崖岸で、水崖の高き處。高嶺雲漢に聳えて、恰も刀にて崗巒を削り成した勢がある。深谷地に横はりて、恰も鑿で崖岸を穿ち成した形があるとの意。唐・張文成撰、遊仙窟に、「深谷帶レ地鑿二穿崖岸之形一、高嶺横レ天刀二削崗巒之勢一」。

刀して削りなすかうらんのいきほひ

「高嶺天に横はり云云」を見よ。

十萬里の波立つて伯禹の縦を遺し、二千年の石橋となりんだり（酒呑童子枕言葉）

十萬里も遠く川波立てて流れ、恰も夏の禹王が大洪水を治めて之を河川に落した縦の殘つてゐるがやうである、石橋は苔滑にして二千年を經たものであるとの意。夏の禹王は初め夏伯に封ぜられたによつて「伯禹」と云ふ。「石橋」は謠曲・石橋に、「此石橋と申すは人間の渡せる橋にあらず、おのれと出現してつづける橋なれば石橋と名を名付けたり、其面僅に尺よりは狹うして苔甚だ滑なり、其長さ三丈餘、谷のそくばく深き事千丈餘に及べり」と見えてゐる。「なりんだり」は、「なりにたり」の變つたものである。遊仙窟に、「十萬里之波濤、伯禹遺レ縦、二千年之坂隥、深谷帶地云云」。

千度見れば千千の思きびし、一度見るに一つの面白いこと深しとは、張文成が仙女に契りし詞（酒呑童子）

張文成が仙女と情交を結んだ時の樂しかつたことを云うたもので、遊仙窟・巻五に、「千看千意密、一見一憐深、但當レ把二手子一寸斬亦甘心」、とあるに據つたのである。

はんあんじん　風雅なる御本性・艶なる御貌、潘安仁が母方の甥にも譬ふべかんめれ（酒呑童子）

〔潘安仁〕姿容極めて美であつた人。遊仙窟・巻一に、「崔女郎何人也、女子答曰、博陵王之苗裔、清河公之舊族也、容貌似レ舅、潘安仁之外甥」とあるに據つたのである。今川了俊に、「潘安仁が西征賦に云云」とあるは、「貞松は年の寒きに云云」を見よ。

日日に衣寛び朝な朝なに帯緩ぶ、愁しみの腸寸寸に斷つとは、文成が仙女に別れし恨み（酒呑童子）

纏綿の情の切なさに、日毎に痩せ衰へて衣も寛んでひろくなり、朝毎に帶も緩くなつた、離別の愁の爲に腹が寸斷したやうな堪へ難いせつなさを感じるの意。この文は遊仙窟に出で、張文成が仙女の十娘と契り、その別れるを悲んだ文である、その文に、「日日衣寛、朝朝帶緩、口上唇裂、胸間氣滿、涙臉千行、愁腸寸斷」。

臣は君と艱難生死を共にするの意。國語・越語に、「范蠡曰、爲二人臣一者、君憂臣勞、君辱臣死」。

國を療治の流行醫者 國を療治の流行醫者、法眼が藥を飮む人は長生不老門前に、藥代禮物持たせ來て(冷泉節)

國語・晉語・七に、「晉平公有レ疾、秦伯使三醫和視レ之、文子曰、醫及二國家一乎、對曰、上醫醫レ國、其次救レ人、固醫官也」。

天の與ふるを取らざれば反つて其咎を受け、時到つて行はざれば其殃を受くとかや(伊豆日記) 天の與を取らざれば反つて其罪を受け、時到るを行はざれば反つて其殃を受くるといふ(弘徽殿)

國語・卷二十一、越語下に、「越王勾踐興レ師伐レ吳、吳人出挑レ戰、一日五反、王弗レ忍欲レ許レ之、范蠡進諫曰、王姑勿レ許也、臣聞、得レ時無レ怠、時不二再來一、天予不レ取反爲二之災一」。説苑に、「天與不レ取反受二其咎一、時至不レ迎反受二其殃一」。

古文眞寶に據れるもの

秋の風さつさつせうせうとして金鐵皆鳴る(千疋犬)

ここの文は歐陽永叔の秋聲賦の中の文に據つたもので、秋聲賦に「淅瀝以蕭颯」とある蕭颯を颯颯蕭蕭としたのである。颯颯は風の音、蕭蕭は風の音のざわざわして物凄い形容。「金鐵皆鳴る」の條を見よ。

一藝に名ある者は庸ひられずといふことなし(雪女)(三世相)

古文眞寶後集、韓退之の進學解に、「占二小善一者率以錄、名二一藝一者無レ不レ庸云云」。

歸去來とて古郷へ遁れしは、彼の天命を樂みて祿を捨てたる古人の心(花月)

「古人」は陶淵明のこと。陶淵明彭澤縣令の職を辭して鄕里に歸去し、歸去來辭を作つて其志を述べた。「歸去來」はいざかへりなんの義。歸去來辭は古文眞寶後集にも出てゐる。

牛溲馬勃敗鼓の皮 天下に抛つ纔が一命は、牛溲馬勃敗鼓の皮惜ししとは存ぜれども(關八州)

「牛溲」は牛の尿、「馬勃」は馬屁菌。韓退之の進學解に、「牛溲馬勃敗鼓之皮、倶收並蓄、待レ用無レ遺者、醫師之良也」とありて、注に、「牛溲・牛溺、馬勃・馬屁菌也、生二濕地及腐木上一、如レ菰而圓且輕」。

菊籬のもとに手折りては、悠悠として南山を見しは唐土(聖德太子)

「殘んの菊云云」を見よ。

金鐵皆鳴る 秋の風颯颯蕭蕭として金鐵皆鳴る、敵に赴く兵の枚を銜んで進むといつし古人の詞(千疋犬) 備へ行列貝太鼓、しやうしやう整整として金鐵皆鳴る御陣(津戸三郎)

甲冑などのすれて鳴る音で、秋風にさやうな音がする。古文眞寶後集・卷之一、秋聲賦に、「歐陽子方レ夜讀レ書、聞下有二聲自二西南一來者上、悚然而聽レ之曰、異哉初淅瀝以蕭颯、忽奔騰而砰湃、如二波濤夜驚、風雨驟至一、其觸二於物一也、鏦鏦錚錚、金鐵皆鳴、又如下赴レ敵之兵銜レ枚疾走上、不レ聞二號令一、但聞二人馬之行聲一、予謂二童子一、此何聲也、汝出視レ之、童子曰、星月皎潔、明河在レ天、四無二人聲一、聲在二樹間一、予曰、噫嘻悲哉、此秋聲也」。鏦音窻、錚音琤

雲心無き水の面 雲心なき水の面、北斗はさえて影映ろ、星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りていつ迄も、我とそなたは女夫星、必らず添ふと縋り寄り、ふたりが中にふる涙、川の水嵩もまさるべし(曾根崎)

陶淵明の歸去來の辭に「雲無レ心以出レ岫」。この文は難波土産卷一に、「陶淵明が歸去來の辭に、雲無心以出レ岫といふ語あり、その外詩人の詞に、雲の心なきを人情の憂き思ひの胸に塞がる目より見て、うらやむ心多し、ここも其心にて書きなせり、我我は憂き思ひにかきくれしに、うらやましや雲は心もなく、何の苦もなく見ゆると也、それより水の面とうつりて蜆川の景色をいひしも、彼の空は一つに雲の波といへる心もちに書きなし、空の景色と今目前の川邊の景色とを打ち混じて、上と下とでいひたる甚だめづらか也、空の北斗は心よくさえて、其影水に映りて輝くも、我が胸のくもりたるには事かはりてうらやまれ、わきて羨しきことは、七夕の星の妹背の契りをこめ給ふ天の川もありありと、さぞな二星は千歳をかけて盡きぬ契りを結ぶらん、さらば我我もあやかりて、今渡る梅田の橋を鵲の橋と契り、必らず添はんと縋り寄る有樣、其景其情其態いづれもさもあるべし、鵲の橋は、牽牛織女の二星落ち合ひ給ふ夜、鵲の來りて羽をのし、天の川を渡すとのいひ傳へなり、扨降る雨よりいひかけて、川の水嵩とうつりたるも、筆の歩み心よく面白し、水嵩は水の嵩なり、水の嵩高くなるを水嵩もまさるべしとはいへり」と見えてゐる。

畫棟朝に飛ぶ南浦の雲(大鼓)

彩色した棟高く聳えて、ここより南浦の雲の飛ぶを見るとの意。古文眞寶・後集、王勃の滕王閣の詩に、「畫棟朝飛南浦雲、朱簾暮捲西山雨」。この詩句を用ひて天王寺の塔の崇高なるを形容したのである。「朝」は「暮」に對する語で、ここはただ文飾に用ゐたのである。滕王閣の詩は唐詩選・卷二にも出でゐる。

今日は漢宮の人にして明朝胡地の妾となる(聖德太子)

王昭君は漢の元帝の後宮にあつて絕世の美女であつた。呼韓邪單于來朝して漢に婿となることを求めた。そこで帝は畫工毛延壽に命じて宮女等の貌を畫かしめ、その中で醜い宮女を單于に遣らうとした。宮女爭つて毛延壽に

菅家詩文集に據れるもの

一榮一落春秋　一榮一落はるあきと移りかはれる定めなき（凱陣八島）

菅原道眞の詩に、「驛長無レ驚時變改、一榮一落是春秋」。

昨日は北闕に悲しみを蒙る士となり、今日は西都に恥を濡むる尸となり（天神記）

菅原道眞の詩に「昨爲二北闕被レ悲客一、今作二西都雪レ恥屍一、生恨死歡其奈レ我、今須三望足護二皇基一」。北闕とは天子宮殿の北の正門をいふ。太平記卷十二、大内裏造營の事附聖廟の御事の條に「勅使安樂寺に下りて詔書を讀み上げける時、天に聲ありて一首の詩聞えたり、昨爲二北闕蒙レ悲士一、今作二西都雪レ恥尸一、生恨死歡其我奈、今須三望足護二皇基一」。

今日は西都に恥を濡むる屍となる

「昨日は北闕に悲しみを蒙る士となり云云」を見よ。

宣風坊の北あらたに栽ゆる處、千金の吟二葉より馨しく、仁壽殿の西曲宴の時、王佐の文一天に輝き（天神記）

「宣風坊」は地名部に就いて見よ。「千金の吟」とは千金の價値ある梅花の吟詠を云ふ。「仁壽殿」は紫宸殿と承香殿との間にある御殿の名である。「王佐」は帝王の補佐の義であつて、菅原道眞を云うたのである。菅家後集・梅花の詩に、「宣風坊北新栽處、仁壽殿西内宴時、人是同人梅異レ樹、知二花獨笑我多一レ悲」。

孔子家語に據れるもの

古の君子これをもつて自ら衞ると、子路が謠ひし劍の舞（嫗山姥）

子路は孔子の弟子である。「子路」を見よ。孔子家語・觀周篇に、「子路戎服見二孔子一、拔レ劍而舞レ之曰、古之君子因以レ劍自衞乎」。

芝蘭の園に入る人はとめねど袖に薰あり（關八州）

孔子家語・四に、「如レ入二芝蘭之室一、久而不レ聞二其香一」とあるを作替へたもので、名族からは忠烈賢臣の出るに喩へたのである。

忠言耳に逆ひ良藥口に苦し（唐船噺）

孔子家語六本篇に、「孔子曰、良藥苦二於口一而利二於病一、忠言逆二於耳一而利二於行一」。

良藥は口に苦く、忠言耳に逆ふ（主馬判官盛久）

孔子家語六本篇に、「良藥苦二於口一而利二於病一、忠言逆二於耳一而利二於行一」。

後漢書に據れるもの

孝は百行の始め（持統天皇）

後漢書に「孝百行之本、衆善之始也」。古文孝經の序に「孝百行之本」。

君を擇んで事ふ　爰に雲南の萬禮武者修行成就し、君を擇んで事ふると云ふ本語に任せ、傳手を求めて當春より此家に奉公し（國性爺後日）

後漢書・馬援傳に、「馬援曰、當今非二但君擇一レ臣、臣亦擇レ君」。

嫦娥藥を盜む　げにや思ひしら雲に月を隱して懷に、じやうが藥をぬすみけん昔を今になすらへて（以呂波）

嫦娥は羿の妻である。竊に羿の藏せる不死の藥を盜んで月中に出奔したと云ふ。後漢書・天文志に、「嫦娥竊二羿不死藥一奔レ月、及レ之爲二蟾蜍一」。

忠臣は孝子の家より出づる（鎌田）

後漢書・韋彪傳に、「國以レ簡レ賢爲レ務、賢以二孝行一爲レ首、求二忠臣一必於二孝子之門一」

天知る地知る　かりにも惡事はせまいもの、天知る地知ると云ふ本文を忘れし故（酒呑童子枕言葉）　天知る地知るで、こつちこそ見知られ（大經師）

後漢書・楊震傳に、「震曰、天知、地知、神知、子知、我知、何謂レ無レ知」。罵意經に、「人所レ作善惡、有二四神知一レ之、一者地神、二者天神、三者旁人、四者自意」。

國語に據れるもの

君辱かしめらるる時んば臣死す（大織冠）（井筒）

中とうじ外直にして蔓あらず枝あらず(以呂波)

古文眞寶・後集、周茂叔の愛蓮說に、「蓮之出㆓淤泥㆒而不㆑染、濯㆓清漣㆒而不㆑妖、中通外直、不㆑蔓不㆑枝」。「中とうじ」は「なかつらじ」(中通)の誤であらう。

霽れざるに何の虹 八十間の長廊下・十六間の欄干を寛ぎ歩ませ給ひしは、霽れざるに何の虹、花を吐くかとあやまたる(小栗判官)

長廊下の虹に似たればいふ。杜牧之の阿房宮賦に、「長橋臥㆑波、未㆑雲何龍、複道行㆑空、不㆑霽何虹、高低冥迷、不㆑知㆓西東㆒」、とあるに據つたのである。

筆は鋭に動くが故に命毛日を以て計ふといへり(持統天皇)

古文眞寶・巻之五、古硯銘に、「筆之壽以㆑日計、墨之壽以㆑月計、硯之壽以㆑世計、其故何也、其爲㆑體也、筆最銳、墨次㆑之、硯鈍者也、豈非㆓鈍者壽而銳者夭㆒乎、其爲㆑用也、筆最動、墨次㆑之、硯靜者也、豈非㆓靜者壽而動者夭㆒乎」。

紅白粉やもろこしの渭流を袖に湛へたり(聖德太子)

杜牧之の阿房宮賦に、「渭流漲㆑膩、棄㆓脂水㆒也」。とあるによつてかく云うたのである。阿房宮賦のこの句は、渭水の流にあぶらの泛ぶは、宮女が化粧の水を棄てるからであるとの意。「ゐりう」はその條を見よ。

豆を煑て豆の萁を燃く(最明寺殿)

兄弟相害ふをいふ故事である。魏の文帝嘗て弟の東阿王をして七步に詩を作らしめ、成らなければ當に法に行ふべしというたので、東阿王卽ち聲に應じて詩を作り、「煑㆑豆持作㆑羹、漉㆑豉以爲㆑汁、萁在㆓釜底㆒然、豆在㆓釜中㆒泣、本是同根生、相煎何太急」というたこと世說に見えてゐる。古文眞寶前集、曹子建の七步詩に、「煑㆑豆燃㆓豆萁㆒、豆在㆓釜中㆒泣、本是同根生、相煎何太急」。

盈ちては缺くる影あれば、缺けても盈つる月を見よ(國性爺)

蘇東坡の前赤壁賦に、「知㆓夫水與㆑月乎、……盈虛者如㆑彼而卒莫㆓消長㆒也」。

棟木を負ふの柱をして南畝の農夫よりも多く、梁に架するの椽は機上の工女よりも多く、釘頭の磷磷たるは庾に在るの粟粒よりも多く、旦暮の說法讀誦の聲は市人の言語よりも多からしむ(出世景淸)

棟を負ひ支へる柱數は南畝に耕作する農夫の數よりも多く、梁に架した椽の數は織機の女工の數よりも多く、釘の頭のばらばらと見えるのは米倉にある米穀の粒よりも多く、朝暮の說法誦經の聲は巷に喧しい市人の言語よりも多いとの意。「磷磷」は水淸うして石の見はれてゐる貌。「庾」は米倉をいふ。杜牧之の阿房宮賦に、「使㆘負㆑棟之柱、多㆓於南畝之農夫㆒、架㆑梁之椽、多㆓於機上之工女㆒、釘頭磷磷、多㆓於在㆑庾之粟粒㆒、瓦縫參差、多㆓於周身之帛縷㆒、直欄橫檻、多㆓於九土之城郭㆒、管絃嘔啞、多㆗於市人之言語㆖」、とあるに據つたのである。

門設けたりと雖も常にとざせり(女夫池)

古文眞寶後集巻一、陶淵明の歸去來辭に、「園日涉以成㆑趣、門雖㆑設而常閉」。

麟は仁獸にして、生けるを食はず生草を踐まず(百日曾我)

箋解古文眞寶後集・巻二、韓退之の獲麟解の註に、「麟、仁獸……不㆑食㆓生物㆒不㆑踐㆓生草㆒」。

麟は德を以てして形を以てせず 韓退之が獲麟の解に曰く、麟は德を以てして形を以てせずと(百日曾我)

麟の靈獸たる所以はその德高きを以ていふのである。形の怪異なるは問ふ所でない。古文眞寶後集・巻二、韓退之の獲麟解に、「麟之所㆓以爲㆑麟者、以㆑德不㆑以㆑形」。

荘子に據れるもの

鉤を竊む者は誅せられ、國を竊む者は侯となる(三國志)

荘子・胠篋篇に、「彼竊㆑鉤者誅、竊㆑國者爲㆓諸侯㆒」。史記・游俠傳に、「竊㆑鉤者誅、竊㆑國者侯」。(山本九兵衛版七行古院本のここの文に、「釣」とあるは「鉤」の誤)。

鷽鳩の小鳥が、九萬里の空を飛ぶ鵬の大鳥を笑ふ(關八州)

「鷽鳩」は小鳩である。鵬はその背幾千里か知れない程大きく、その翼は垂天の雲の如く、つむじ風に搏つて九萬里に上るといふ想像の鳥である。「だいほう」をも見よ。木の間を飛ぶ小鳩は需める所小であるによつて、九萬里の空を飛ぶ鵬の需める所大なる心を知らずしてこれを笑ふ。凡て小に安んずる者は大を知らぬとの喩。荘子・逍遙遊に、「風之積也不㆑厚、則其負㆓大翼㆒(鵬の大翼)也無㆑力、故九萬里則風斯在㆑下矣、而後乃今培㆑風、背負㆓靑天㆒、而莫㆓之夭閼㆒者、而後乃今將㆑圖㆑南、蜩與㆓鷽鳩㆒笑㆑之曰、我決起而飛搶㆓楡枋㆒、時則不㆑至、而控㆓於地㆒而已矣、奚以㆓之九萬里㆒而南爲、適㆓莽蒼㆒者、三飡而反、腹猶果然、適㆓百里㆒者、宿舂㆑糧、適㆓千里㆒者、三月聚㆑糧、之二蟲又何知、小知不㆑及㆓大知㆒、小年不㆑及㆓大年㆒、奚以知㆓其然㆒也、朝菌不㆑知㆓晦朔㆒、蟪蛄不㆑知㆓春秋㆒、此小年也」。

きんあん

「せきあん」を見よ。

車の轍に彼の三升の水に渇ゑし小鮒雜魚(女夫池)

さしせまつた難儀をいふ喩。荘子・外物篇に、「荘周家貧、故往貸㆓粟於監河侯㆒、監河侯曰諾、我將㆑得㆓邑金㆒、將㆑貸㆓子三百金㆒可乎、荘周忿然作㆑色曰、周昨來有㆓中道而呼者㆒、周顧視車轍中有㆓鮒魚㆒焉、周問㆑之曰、鮒魚來、子何爲者耶、對曰、我東海之波臣也、君豈有㆓斗升之水㆒而活㆑我哉、周曰諾、我且㆘南遊㆓吳越之王㆒、激㆓西江之水㆒而迎㆖㆑子可乎、鮒魚忿然作

賂したが、王昭君は賂しなかつたにより、醜く書かれた爲に匈奴に嫁することとなつた。王昭君匈奴に至り、憤怨に堪へずして毒を飲んで死んだ。ここの文は王昭君の故事を引いて、守屋に捕はれた公卿達の北の方に當てて云うたのである。古文眞寶・前集、李白の王昭君の詩に、「昭君拂二玉鞍一、上レ馬啼紅頰、今日漢宮人、明朝胡地妾」。

聲細細と怨むが如く慕ふが如く泣く如く（吉岡染）

古文眞寶後集卷之一、蘇東坡の前赤壁賦に、「聲嗚嗚然、如レ怨如レ慕、如レ泣如レ訴」。

子を養つて敎へざるは父の過なり、敎へて學びざるは子の過と見えたれども（加增曾我）

古文眞寶前集・卷一、司馬溫公・勸學歌に、「養レ子不レ敎父之過也、訓導不レ嚴師之惰」。同書・柳屯田・勸學文に、「父母敎而不レ學、是子不レ愛二其身一也」。

魂魄結んで天高く、鬼神聚つて雲を覆ふ、蓬斷え草枯れて、霜の晨か物凄や（國性爺後日）

「魂魄」は禮記・郊特牲に「魂氣歸二于天一、形魄歸二于地一」と見え、人間の靈魂をいふ。「結ぶ」は鬱結するを云ふ。古文眞寶後集・李華の弔二古戰場一文に、「蓬斷草枯、凜若二霜晨一、……魂魄結兮天沈沈、鬼神聚兮雲冪冪、……」とありて、戰場の跡悽慘の情を述べたのである。

酒に醉うて世を見れば、萬事は水の浮草、兵も似我蜂、浮世の人は飛蟲と、劉伯倫が金言（酒呑童子枕言葉）

古文眞寶・後集、劉伯倫の酒德頌に、「兀然而醉、……、俯觀二萬物擾擾焉一、如二江漢之浮萍一、二豪侍レ側焉、如二蜾蠃之與二螟蛉一」。

種樹郭橐駝が名言（浦島）

郭橐駝は唐時代に長安の西の豐樂鄉に居つた植樹師の渾名である。僂を病んで背部が隆起し伏行したによつてこの渾名を得たと云ふ。人あつて種樹のことを橐駝に尋ねた。橐駝答へて、素人は餘り樹を愛する心にいぢりちらして枯らしてしまふ。その樹の性情に適するやうに栽置いた後は放任して置けばよい。政治もやかましう言立てられて繁雜に過ぎては、民はこれが爲に病み且怠つてしまふ。されば政治も樹を養ふ術に類してゐるやうであると言うた。委しくは柳子厚の種樹郭橐駝傳（古文眞寶後集にも出てゐる）に就いて見よ。

臣命を受けし日より、寢ぬれども席を安んぜず、食すれども味を甘んぜずと言ひし孔明（懸物揃）

古文眞寶後集・卷之八、諸葛亮孔明の後出師表に、「臣受レ命之日、寢不レ安レ席、食不レ甘レ味、思二惟北征一」。

硯の命は靜に動かぬを以て世と共に永く、筆は銳に動くが故に命毛日を以て計ふといへり（持統天皇）

古文眞寶後集・卷之五、古硯銘に、「筆之壽以レ日計、墨之壽以レ月計、硯之壽以レ世計、其故何也、其爲レ體也、筆最銳、墨次レ之、硯鈍者也、豈非二鈍者壽而銳者夭一乎」。

そしせん雨によつて喜雨亭を作る（三國志）

蘇軾字を子瞻と云ひ、宋時代の文人である。旱魃に雨の降つたのを喜び、亭を喜雨亭と名づけて喜雨亭記を作つた。その文は古文眞寶後集・卷四にも出てゐる。

楚人の一炬に焦土となんぬ咸陽宮（國性爺）（女夫池）

「楚人」は項羽を云ふ。「咸陽宮」は秦始皇帝の造つた宮殿である。「かんやうきゆう」を見よ。古文眞寶・後集卷之一、杜牧之の阿房宮賦に、「楚人一炬可レ憐焦土」。阿房宮は驪山の北から起つて西に折れ、直に咸陽に連つて咸陽宮となつてゐた。

茶を受け手向けをなし、一杯に咽を潤し、二杯に暗き心を明らめ、三杯に枯れたる魂をさぐり、四杯に輕き汗をおこして平生不平の氣を散じ、五杯に肌をいさぎよく、六杯には自づから仙靈に通達し、七椀喫する其中に淸風に乘じて不退地の雲に遊ぶ（百日曾我）

古文眞寶・前集、盧同謝レ寄二新茶一歌に、「一椀喉吻潤、二椀破二孤悶一、三椀搜二枯腸一、惟有二文字五千卷一、四椀發二輕汗一、平生不平事、盡向二毛孔一散、五椀肌骨淸、六椀通二仙靈一、七椀喫不レ得也、惟覺二兩腋習習淸風生一、蓬萊山在二何處一、云云」とあるに據つたのである。

泥より出でて色染まぬ蓮は花の君（隅田川）

周茂叔の愛蓮說に、「蓮之出二淤泥一而不レ染、濯二淸漣一而不レ妖、……蓮華之君子者也」。

敵に赴く兵の枚を銜んで進むと云ひし古人の詞

「金鐵皆鳴る」の條を見よ。

洞口より一筋の雲無心にして靉けば（國性爺）

陶淵明の歸去來辭に、「雲無心以出レ岫」。

泥より出でて泥に染まぬ蓮（女殺）

古文眞寶・卷二、周茂叔の愛蓮說に、「予獨愛、蓮之出二淤泥一而不レ染云云」。

なかとうじ　蓮は淤泥より出て淤泥に染まず、中とうじ外直にして蔓あらず枝あらず（以呂波）

「なかつうじ」（中通）の誤であらう。「蓮は淤泥云云」を見よ。

南畝の農夫よりも多く

「棟木を負ふの柱をして云云」を見よ。

殘んの菊籬のもとに手折りて、悠悠として南山を見しは唐土（聖德太子）

古文眞寶・前集、晉の陶淵明の詩に、「結レ盧在二人境一、而無二車馬喧一、問レ君何能爾、心遠地自偏、採二菊東籬下一、悠然見二南山一、山氣月夕佳、飛鳥相與還、此中有二眞意一、欲レ辯已忘レ言」とある中の二句に據つたのである。「南山」はその條を見よ。

莫邪を鈍しとし鉛刀を銳しといひ、周の鼎を棄てて瓢簞を寶とする（雪女）

古文眞寶・後集、賈誼の弔二屈原一賦に、「莫邪爲レ鈍兮、鉛刀爲レ銛、于嗟默默、生之亡レ故兮、斡二棄周鼎一、寶二康瓠一兮」。

蓮は淤泥より出でて淤泥に染まず、

奚適一也、此小大之辨也」とあるに據つたのである。

夢の中に胡蝶となる 莊子といふ唐土の博識さへ夢の中に胡蝶と成りしと承る(閑八州)

このこと莊子・齊物論に見えてゐる。「莊子が夢中に無我有の里に遊び云云」を見よ。

夢の夢こそあはれなれ(曾根崎)

人世のことは皆夢なるに、その夢の間にまた夢みる心理哀れであるとの意。莊子・齊物論に「方二其夢一也、不レ知二其夢一也、夢之中又占二其夢一焉」。難波土產卷一に巣林子のこの文を解釋して、「うき世は夢なるに、又我身の今死ににゆくはかなさ、さながら夢の内に又夢を見し心地なれと也、此世を夢といふ事は佛說に多き中に、唯識論に云、いまだ眞覺を得ざれば常に夢中に處す、故に佛說いて生死の長夜とすといへり、金剛經にも一切有爲の法は夢幻の如しともいへり、又詩にも人間一夢中などと作りて、浮世のあだなるを夢に譬へたる、これらの語をふみて書きたる文句なり」。俗耳鼓吹に、巣林子が「死にに行く身の道の霜、一足づつに消えて行く」、といふ所まで書いて、案じ煩うた時に、伊勢の俳諧師涼菟に教へられて、「夢の夢こそはかなけれ」、と書きつづけたといふ話が載つてゐるが、事實ではあるまい。

隆車にむかふ蟷螂が斧(唐船噺)

「たうらうがをの」を見よ。

左傳に據れるもの

孔子は魯國の狩に麒麟を獲られし(會稽山)

左傳・哀公十四年の條に、「十有餘年春西狩獲レ麟」と見えてゐる。麒麟は仁獸で聖人世にある時に出るといふ。孔子春秋を書いてゐた際、哀公狩して麒麟を得られたと聞き、我運命も盡きたと嘆いたといふ。孔子が狩に出て麒麟を獲たのではない。

末の大いなるは必ず折る、尾の大いなるは必ず動かし難しとかや(吉野忠信)

枝葉大なれば本幹その重さに堪へで必ず折れ、尾大なれば其體の動作自由になり難き義、以て支族大なれば本宗を倒すに喩ふ。左傳・昭公十一年の條に、「末大必折、尾大不レ掉」。

大義には親を殺す(雪女)

君臣の大義を全うする爲には父子の私親をも殺す。左傳・隱公四年の條に、「君子曰、石碏純臣也、惡二州吁一而厚與焉、大義滅レ親、其是之謂乎」。

暴逆を禁め、兵戈を戢め、大を保ち、功を定め、民を安んじ、衆を和し、財を豐にす、七つの德(日本武尊)

左傳・宣公十二年の條に、「夫武禁レ暴、戢レ兵、保レ大、定レ功、安レ民、和レ衆、豐レ財者也」。

三國志に據れるもの

魚と水 名も水に棲む鯔すずき、魚と水との如くなり(孕常盤)

交の極めて親密なるを云ふ喩。三國志・蜀志・諸葛亮傳に、「先主與二諸葛亮一計レ事善レ之、情好日密、關羽・張飛等不レ悅、先主曰、孤之有二孔明一猶二魚之有一レ水、願勿二復言一」。

三度諫めて用ひざれば身を奉じて去る(雪女)

小學・內篇・稽古・明倫に、「人臣三諫而不レ聽、則其義可二以去一矣」。三國志 吳書に、「夫臣レ人者、三諫不レ從、則奉レ身而退」。

良禽は木を相て棲み、忠臣は君を擇んで事ふ(聖德太子)

三國志・蜀志に、「良禽相レ木而棲、賢臣擇レ主而事」。

三體詩に據れるもの

羅の扇に撲つは秋の螢火(閑八州)

三體詩・卷一、王建の宮詞に、「銀燭秋光冷二畫屛一、輕羅小扇撲二流螢一、玉堦夜色涼如レ水、臥看牽牛織女星」。

瓜を献ずる榮花

「二月中旬にふりを献ずる榮花」を見よ。

きうぜんのやうりう

「きゆうぜんのやうりう云云」を見よ。

宮前の楊柳寺前の花(國性爺)

寺は尚書御史の役所。三體詩・王建の詩に、「酒幔高樓一百家、宮前楊柳寺前花、內園分二得溫泉水一、二月中旬既進レ瓜」。

五天到る日頭白かるべし

「十萬里程多少難」を見よ。

十萬里程多少難、五天到る日頭白かるべしと、渡天の人を嘆美せし、月は落つる長安半夜の鐘(嵯峨天皇)

宋周弼編、三體詩・卷一、李洞が送二三藏一(玄奘)

レ也曰、吾失二我常與一、我無レ所レ處、吾得二斗升之水一然活耳、君乃言レ此、曾不レ如三早索二我於枯魚之肆一。

胡蝶となつて牡丹花に戯る（天神記）

「莊子が夢中に無我有の里に遊び云云」を見よ。

莊周が胡蝶云云（源義經）

莊子名は周、夢に胡蝶となつたといふ故事である、次條を見よ。

莊子が夢中に無我有の里に遊び、胡蝶となつて牡丹花に戯る（天神記）

莊子・齊物論に、「昔者莊周夢爲二胡蝶一、栩栩然胡蝶也、自喩適レ志與不レ知レ周也、俄然覺則蘧蘧然周也、不レ知下周之夢爲二胡蝶一與、胡蝶之夢爲レ周與上、周與二胡蝶一則必有レ分矣、此之謂二物化一。」

鷺は洗はずして其色白く、染めずして烏は黑し（大織冠）

莊子・天運篇に「鵠不二日浴一而白、烏不二日黔一而黑」。

三千年に一度搏つて九萬里の雲に飛ぶ大鵬（國性爺後日）

鵬は莫大な鳥の名、蓋し龍卷をいうたものであらう（大鵬を見よ）。莊子・逍遙遊に、「鵬之徙二於南冥一也、水撃三千里、搏二扶搖一而上者九萬里、去以二六月一息者也」とある、三千里を三千年といひなしたのである。

深山に茂る諸木の中、歪まず直に立つたる木は杣人先是を伐つて板柱とし、歪みすぢりし節木を伐殘すといふ古人のたとへ（弘徽殿）

莊子・逍遙遊に、「惠子謂二莊子一曰、吾有二大樹一、人謂二之樗一、其大本擁腫而不レ中二繩墨一、其小枝卷曲而不レ中二規矩一、立二之塗一匠者不レ顧」。

せきあん　せきあんはいとまなくして飛ぶこと數仞に過ぎず（佐佐木）

〔斥鴳〕「斥」は小澤、「鴳」は斑のない鶉をいふ。莊子・逍遙遊に、「斥鴳笑レ之曰、彼（鵬のこと）且二奚適一也、我騰躍而上、不レ過二數仞一」。序云、佐佐木先陣（八行本）の古刊本に、「きんあん」と假名で書き、また盛染川（宇治加賀掾の古淨瑠璃で、これも巣林子の作であらう）第五にも、「きんあんがほうゑんこうが月」、と原本に見えてゐる。これも「斥鴳が鵬猿猴が月」である。蓋し「斥」と「斤」との字形が酷似してゐるので誤り、それが假名で書かれた誤である。

だいほう　三千年に一度はうつつて九萬里の雲に飛ぶ大鵬（國性爺後日）　唐高麗も羽がひの下、三千年に搏つて飛ぶ末代の大鵬、この君と古今に翅を殘しけり（三國志）

〔大鵬〕極めて大なる想像の鳥である。莊子・逍遙遊に、「北冥有レ魚、其名爲レ鯤、鯤之大不レ知二其幾千里一也、化而爲レ鳥、其名爲レ鵬、鵬之背不レ知二其幾千里一也、怒而飛其翼若二垂天之雲一、云云」、とあり、實は龍卷を鵬と云ふ鳥にいひなしたのであらう。「三千年に一度はうつつ云云」を見よ。

＊**蟷螂が斧**　大炊介めば痩腕にて赤沼父子を討たんとは、誠に蟷螂が斧なれば（雪女）　やさしき愚人めが智略だて、腕にも智惠にも此鎌氏を討たんとは蟷螂が斧ござんなれ（小栗判官）

「蟷螂」はかまきりと云ふ昆蟲。蟷螂が前の兩足を擧げれば斧を執る象の如ければ蟷螂が斧と云ひ、以て己が力量をはからないで妄進するに喩ふ。莊子・天地篇に、「猶三蟷螂之怒レ臂、以當二車轍一、則必不レ勝レ任矣」。文選に、「欲下以二蟷螂之斧一禦中隆車之隧上」。

椿壽八千春　槿花一日椿壽八千春、天地と共にして百萬代も限なき（懸物揃）

莊子・逍遙遊篇に、「上古有二大椿樹一、以二八千歳一爲レ春、八千歳爲レ秋」とあるに據つたもので、これを御代長久の目出度い意にとつて、「天地と共にして云云」の文につづけたのである。

釣をぬすむものは誅せられ云云

「鉤を竊むものは誅せられ云云」を見よ。

鳥は高く飛んで矰弋の害をのがれ、鼷鼠神丘の下に穴掘つて人の薰ぶる患を免るとかや（島原蛙合戰）

「矰弋」は「いぐるみ」である。矢に繩又は絲を附けて鳥を射ること。「鼷鼠」は「はつかねずみ」のこと。莊子・應帝王篇に、「鳥高飛以避二矰弋之害一、鼷鼠深穴二乎神丘之下一以避二熏鑿之患一」。

飛鳥にあらざれば飛鳥の心を知らず

牝牡同じ毛色は彼奴も兄弟、飛鳥にあらざれば飛鳥の心を知らずとはそれは人間（女夫池）

莊子・秋水篇に、「非レ魚安知二魚之樂一」とあると同巧。なほこの文は、飛鳥でなければ飛鳥の心は知れぬとは、人間から飛鳥を見ていふ言葉であつて、畜類同志は互にその氣を知り合うてゐるとの意。

鵬鳥は三千年に一度搏つて南冥に至り、きんあんは暇なくして飛ぶこと數仞に過ぎず（佐佐木）

莊子・逍遙遊に據つたのである。「きんあん」は斥鴳を斤鴳と誤つてよんだのである。「きんあん」「だいほう」「みそさんざい云云」を見よ。

牡丹の胡蝶　牡丹の胡蝶芭蕉の鹿、いづれを指して現とも覺めたる我を知らざれば、夢路を夢と誰か知るべき（國性爺後日）

夢か眞實か、覺めたる我を知らざれば、その定め難いをいふ。莊子夢に胡蝶となつて牡丹花に戯れたといふ故事で、莊子・齊物篇に、「昔者莊周夢爲二胡蝶一、栩栩然胡蝶也、自喩適レ志與、不レ知レ周也、俄然覺、則蘧蘧然周也、不レ知下周之夢爲二胡蝶一與、胡蝶之夢爲レ周與上。周與二胡蝶一則必有レ分矣、此之謂二物化一」。

みそさんざいの分として鵬鳥を嘲弄す（相模入道千疋犬）

「みそさんざい」は鷦鷯（斥鴳とも書く）である。鷦鷯の小鳥が鵬の大鳥の所爲を嘲弄するは、恰も小人が大人の行爲を嘲弄するやうなものである。莊子・逍遙遊に、「有レ鳥焉、其名爲レ鵬、背若二泰山一、翼若二垂天之雲一、搏二扶搖羊角一而上者九萬里、絕二雲氣一負二青天一、然後圖レ南、且レ適二南冥一也、斥鴳笑レ之曰、彼且二奚適一也、我騰躍而上、不レ過二數仞一而下、翱二翔蓬蒿之間一、此亦飛之至也、而彼且二

の中にも出てゐる。

乾に乾を累ぬるは亢龍悔あり（弘徽殿）
乾は乾卦☰をいふ。周易・乾卦に、「亢龍有レ悔」。史記・蔡澤傳に、「易曰、亢龍有レ悔、此言下上而不レ能レ下、信而不レ能レ詘、往而不上レ能ニ自返一也」。「亢龍悔あり」の條をも見よ。

乾は元にして亨る貞に利ありと（天神記）
周易・乾卦に、「乾元亨利貞」とありて、傳に「元亨利貞は之を四德といふ、元は萬物の始め、亨は萬物の長、利は萬物の遂、貞は萬物の成なり、惟だ乾坤に此の四德あり」。

蹇は東北に利あらず西南に利あり（弘徽殿）
周易・蹇卦䷦に、「蹇、利ニ西南一不レ利ニ東北一」。「前に嶮しき岨云云」をも見よ。

坤上坎下の卦體（國性爺）
「師の卦」をいふ。その條を見よ。

師の卦　我等が本卦師の卦に當つて、師は軍の義なり、坤上坎下の卦體、一陽を以て衆陰をすぶるといつぱ（國性爺）　判官殿は丁丑の生れ、本卦師の卦に當つて軍術の妙を得（最明寺殿）
䷆坎レ下坤レ上の卦體である。周易經翼通解・卷之三に、「師者衆也、古者陳法五人曰レ伍、積至ニ二千五百人一謂ニ之師一、故軍旅之事通謂ニ之師一、此卦內坎而外坤、卦體九二、以ニ一陽一統ニ衆陰一而在レ下、將帥之象、故名レ卦曰レ師」。

順を以て正しきとするは妾婦の道（浦島）
順は貞順の義。周易・恒の卦に、「六五、恒ニ其德一貞、婦人吉、夫子凶。象曰、婦人貞吉、從レ一而終也」と見え、周易經翼通解に、「婦人之道、以レ順爲レ正」と見えてゐる。

震の卦・雷百里を動かす（天神記）
震の卦は☳である。周易に、「震驚ニ百里一」と見え、周易經翼通解・卷十四に、「震者動也、一陽動ニ于二陰之下一、奮發而欲レ上、故爲レ震、其象爲レ雷、其德爲レ動」と見えてゐる。

震の卦を下にし・離の卦を上にす
「噬嗑の卦」を見よ。

しんぶふさつ　しんぶふさつの威におされ（聖德太子）　それ弓矢といつば神武不殺の威德を表し、物に疵付け殺さねども（栬狩）　神武不殺は聖王の德（佐佐木）
〔神武不殺〕神明の武德を備へて物を殺さぬを云ふ。易經・繫辭上傳に、「古之聰明叡知、神武而不殺者夫」。

帥の卦
「師の卦」の誤。「師の卦」を見よ。

噬嗑の卦　震の卦を下にし、離の卦を上にす、噬嗑の卦と申すに當つて候、易に曰く、頤の中に物あり、噬嗑せて而して後に亨ると（關八州）
䷔震下離上の卦である（噬は齧、嗑は合である。上卦は離、下卦は震、初と上とは陽爻にて頤の象である、四爻目に一陽爻入り、口中に物を含み、噬みてその礙物を去り、頤を嗑さうとする象である。周易に、「噬嗑、亨、利レ用レ獄、彖曰、頤中有レ物曰ニ噬嗑一噬嗑而亨」。

小善は益なしとして爲ざるが故に、善積まずして名を成すことなく、小惡は害なしとして去らざる故に、惡積つて身を滅す（蛙合戰）
周易・繫辭に、「善不レ積不レ足ニ以成レ名、惡不レ積不ニ以足レ滅レ身、小人以ニ小善一爲レ无レ益而弗レ爲也、以ニ小惡一爲レ无レ傷而弗レ去也、故惡積而不レ可レ掩、云云」。

尺蠖の屈めるは信びんが爲、龍蛇の蟄するは身を保つを以てなり（國性爺後日）
「尺蠖」は尺取蟲である。「蟄」は冬籠りすること。人間の艱苦に耐へるのは將來立身出世の來たるに喩へたのである。易繫辭に、「尺蠖之屈、以求レ信也、龍蛇之蟄、以存レ身也」。

聖人の書に世の中の女たる身は取り分けて二道かけて思ふなと（唐船噺）
「二道」とは二人の男に心を懸けるをいひ、謠曲・鐵輪にも「二道かくるあだ人を頼まじとこそ思ひしに」と見え、易經・恒卦の條に「象曰、婦人貞吉、從レ一而終也」と見えてゐる。然るに巣林子これを、「二人の親を情なく昨日は冥土へ送る道、今日は一人の兄上の身の行く先を思ふ道、かりそめならぬ二道」といひつづけたのである。

前に險しき岨・後に高き山あり、進まずして止まると申す易の面（弘徽殿）
周易・蹇の卦䷦。「象曰、蹇難也、險在レ前也、見レ險而能止、知矣哉」。

史記に據れるもの

いしやうのくわい　共に下居の床几の上、いしやうのくわいとも言ひつべし（川中島）
〔圯上之會〕黃石公と張良とが圯上に會した故事であつて、沈着な武田信玄を黃石公に比し、血氣な上杉輝虎を張良に比してかくいうたのである。圯は橋である、楚人・橋を圯といふ。留侯世家に、「良嘗間從容步游ニ下邳圯上一、有ニ一老父一衣レ褐、至ニ良所一直墮ニ其履圯下一、顧謂レ良曰、孺子下取レ履、云々」。

出づるに警し入るに蹕す　出づるに警し入るに蹕す、天子を眞似る守屋が驕（聖德太子）
「警」は戒め肅ましめるを云ひ、「蹕」は行人を止め道を淸めるを云ふので、天子出入の儀である。梁孝王世家に、「擬ニ於天子一、出言レ蹕、

歸二西域一の詩に、「十萬里程多少難、沙中彈レ舌授二降龍一、五天到日應二頭白一、月落長安半夜鐘」とあるに據つたものである。この詩の意は、支那の長安の都から天竺の迦毘羅城までは道程十萬里もあることであるから、その旅行中には必らず多少の難險に遭はれることでござらう、されども弉公が沙漠の中に立ち舌を動かして梵經を念誦なされれば、降龍もその功力に懾伏して敢て害を加へることもござりますまい、道中に長い月日を費されることでありませうから、天竺に到達される時には白髪頭になられてゐるでありませう、お別れ申しては又いつお會ひ申されることやら、生別また死別を兼ねることだと思うて、かうしてお別れするのを惜んでゐる間に、最早月は西山の彼方に落ち、長安の寺で撞出す半夜の鐘聲を聽く頃となりました、と云ふのである。五天は五天竺の略である、昔時印度はその地勢によつて東・西・南・北・中の五部に分たれてゐたから、印度を五天竺と稱した。「渡天の人」とは、印度に渡らうとする玄弉三藏のことである。

人家煙道絶えて　雲凝つて磐石頭にそばだてり、人家煙道絶えて朝來一片の霞を飲む、とはかかる處の山居にや(非筒)

仙人は炊煮のことをせぬによつて烟火なく、朝霞を飲んでゐると云ふ。三體詩・卷一、秦系の題二張道士山居一の詩に、「磐石垂蘿只是家、回レ頭猶有五株華、松間寂寂無二烟火一、應レ服二朝來一片霞一」。

月は落つる長安半夜の鐘

「十萬里程たせうなん云云」を見よ。

朝來一片の霞を飲む

「人家煙道絶えて」を見よ。

二月中旬にふりを獻ずる榮華なり(國性爺)

「ふり」は瓜である。「ふり」を見よ。瓜は夏時のものなるに時ならぬ二月中旬既に瓜を獻ずるとは、榮華を極めたことを意味するのである。三體詩・華清宮、王建の詩に、「酒幔高樓一百家、宮前楊柳寺前花、內園分得溫湯水、二月中旬既進レ瓜」。

華飛び蝶駭けども人愁へず、水殿雲廊別に春を置く、曉日粧ひなす千騎の女(國性爺)

花飛散し蝶驚いて春去るとても人は愁へるに足らない、その愁へぬわけは水殿雲廊に慰んで別に人の春がある、曉日紅唇翠黛の容色盛粧をこらした千騎の美女を交へたるは、これ春の華・春の蝶と見えるの意。三體詩・卷之一、鄴宮の題で陸龜蒙の詩に、「華飛蝶駭不レ愁レ人、水殿雲廊別置レ春、曉日靚粧千騎女、白櫻桃下紫綸巾」。

三略に據れるもの

一行失すれば百行共に傾くとや(源義經)

三略・卷下に、「廢二一善一則衆善衰」。

軍讖に曰く、良將の軍を綜ぶるや、人を治め惠を推し恩を施し、士力日日に新にして、戰ふこと風の發するが如く、攻むること河のさくるが如くにて(鎌田)

軍讖は兵書である。黃石公三略・上略に、「軍讖曰、良將之綜レ軍也、恕レ己而治レ人、推レ惠施レ恩、士力日新、戰如二風發一、攻如二河決一、故其衆可レ望而不レ可レ當」。

柔能く剛を制し弱能く強を制す(川中島)(碁盤太平記)

三略に、「柔能制レ剛、弱能制レ强」。(序に云、黃石公三略は後人の依託したもので、其本旨は老子から來てゐる 書中にある「柔能制レ剛、弱能制レ强」も老子に「柔勝レ剛、弱勝レ强」とあるに據つたものである)。

將の謀泄るる時は軍利なし、外內を闚ふ時は禍制せずとや(女楠)

黃石公の三略・卷上に、「將謀泄則軍無レ勢、外闚レ內則禍不レ制」。

良將の軍を綜ぶるや云云

「軍讖に曰く良將の軍を綜ぶるや云云」を見よ。

周易に據れるもの

***亢龍悔あり**　易に曰く亢龍悔あり、滿つれば缺ぐ(烏帽子折)

亢龍とは高く上りつめたる龍をいふ。高く上りつめた龍は下るより外道なければ、亢龍悔ありと云ふ。周易・卷一、上經・乾の條に、「上九、亢龍有レ悔」。徒然草に、「亢龍の悔ありとかやいふこと侍るなり、月滿ちては缺げ」。

君子其室に居て言葉を出すこと善なる時んば千里の外に應ずとかや(國性爺後日)

周易・繫辭上に、「君子居二其室一出二其言一、善則千里之外應レ之、況其邇者乎」と見え、明文鈔

南大門秋彼岸（初版は八行刊本で日本西王母と殆んど同文である。奥に「右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開版者也」加賀掾印。二條通寺町西へ入町山本九兵衛刊印とある）にこの通りの文があつて、「せいのそしん」を「齊の蘇秦」と書いてある。また八文字屋自笑撰・善惡兩面常盤染の序文に、「唐土の齊國蘇秦と云者忠毒の仇になり、終に其身を罰せられし」と、漢字を當てて書いてある。蘇秦は東周雒陽の人である、齊に仕へ鬼谷先生に學んだ、其術權變に長じ、六國を約して從親させ、以て秦に對抗せうとしたが、忽ち從親破綻に及んだ、蘇秦は後に齊の宣王の客卿となつたが、遂に刺客の爲に殺された。蘇秦が齊に仕へ齊で學んだによつて齊の蘇秦といひ、その權變を以て六國に說したやうで其實六國を瞞着したから、忠に似て忠を毒する仇といひ、刺客の爲に刺されたから、天是を罰すといふたのである。

小節を規る者は榮名をなす事なく、小しき恥を惡む者は大功を立つる事能はず（三國志）

小なる節義を規つたり、小恥を惡んだりする度量の狹小な者は、榮名を成したり、大功を立てたりする事は出來ないとの意。魯仲連列傳に、「規小節者不能成榮名、惡小恥者不能立大功」。

千里の馬の尾に止まれば蠅も千里を行くとかや（三國志）

伯夷傳に「顏淵雖篤學、附驥尾而行益顯」とあつて、「索隱云、蒼蠅附驥尾而致千里」云云」と見えてある。

楚王・虞氏を伴ひ百萬騎を追散し（千疋犬）

「楚王」は楚の項王を云ふ。「虞氏」は項羽の寵姬である。項羽本紀に、「項王軍壁垓下、兵少食盡、漢軍及諸侯兵圍之數重、夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎、是何楚人之多也、項王則夜起飲帳中、有美人名虞、常幸從、駿馬名騅、常騎之、……項王乃上馬騎、麾下壯士騎從者八百餘人、直夜潰圍、南出馳走云云」（序云、山本九兵衛版の七行本及び七行本ともに、「そ王ぎしをともなひ」とある、「ぎし」は「ぐし」（虞氏）の誤である。）

大行は細謹を顧みず

「大功は細瑾を顧みず」を見よ。

大功は細瑾を顧みず（三國志）（盛常盤）

「功」或は「行」に作り、「瑾」或は「謹」に作る。史記・項羽紀に、「樊噲曰、大行不顧細謹」。漢書・陳湯傳に、「論大功者不錄小過、擧大美者不疵細瑕」。

大丈夫死すれども冠を捨てずとかや（嫗山姥）

孔子の弟子・子路が衞の亂に與り、戈を以てその纓を斷れた。子路言うやう、君子は死すとも冠を免がずとて、纓を結んで討死した。仲尼弟子列傳に、「子路曰、君子死而冠不免、遂結纓而死」。

たうり物を言はずして女中を招くも花の宴（西王母）

桃李は物を言はねども、その花を慕うて女も集れば、女中を招くも花の宴と云うたのである。蓋し李將軍傳に、「諺曰、桃李不言、下自成蹊」と見え、謠曲・西王母に、「桃李物言はず、下自ら市をなし」、とあるを作りかへたのである。

民を以て天とす　當今甚だ文詞の學に長じ給ひ、民を以て天とすとめぐしひたし給ひければ（用明天皇）

酈食其傳に、「王者以民爲天、而民以食爲天」。

忠臣は天下の爲門を過ぐるに我家に入らず（百合若）

禹が舜帝の命を奉じて洪水を治め、十三年間家門を過ぎても入らなかつたといふ。夏本紀に、「舜登用攝行天子之政、巡狩行視鯀之治水無狀、……於是舜擧鯀子禹、而使續鯀之業、……乃勞身焦思、居外十三年、過家門不敢入」云云」。

貞女兩夫に見えず（主馬判官盛久）（酒呑童子）

田單傳に、「忠臣不事二君、貞女不更二夫」。

天定つて人に勝ち、人定つて天に勝つとはしんはうしよが詞（唐船噺）

伍子胥傳に、「申包胥亡於山中、使人謂子胥曰、子之報讎其以甚乎、吾聞之、人衆者勝天、天定亦能勝人」。

天の五潢に火帝入れば、天下大いに旱すといへり（浦島）

「天の五潢」は咸池をいふ、即ち日の浴する天池である。「火帝」は熒惑星。即ち火星である。天官書に、「西宮咸池、曰天五潢、五潢五帝車舍、火入旱」。浦島年代記・七行本（竹本筑後掾正本 山本九兵衛板）に、「天の五濊に火帝入れば云云」とあれど、五濊は五潢の誤であらねばならぬ。

時に利あらず騅逝かず、騅逝かずして虞氏が涙（以呂波）

楚項羽が漢沛公と戰ひ敗れて漢兵の爲に垓下に圍まれた。是に於て項羽其美人虞美人等と訣別の宴を張り、「時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何」、と謠うたので一座皆泣いたことが史記・項羽本紀に見えてゐる。この故事を以呂波の前の身の上に當てたのである。「騅」は蒼白雜毛なるをいふ、其毛色を以て馬の名としたのである。

※鎖さぬ御代（吉野忠信）（蟬丸）

聖代の時は天下泰平であるが故に鎖さずに寢ても惡漢の闖入の恐がない意で、聖代のことにいふ。循吏傳に、「以子産爲相、……三年門不夜閉、道不拾遺」。

籌策を帷幄の中に運らし、勝つことを千里の外にあらはす籌策にて候と子房が祕藏（女楠）

「帷幄」は幕である。史記・高祖本紀に、「高祖曰、夫運籌策帷幄之中、決勝於千里之外、吾不如子房」。

范蠡が趣　吳三桂が遠き慮りは范蠡が趣あり（國性爺）

春秋戰國の世、范蠡・越王勾踐に事へ忠節を盡し、勾踐・吳王夫差を伐つて之に勝つや、夫差姑蘇に上り成を越に請ふ、范蠡承引しないので、夫差幎冒を爲つて死んだ。吳三桂が貝勒王の請を拒絕したのは、恰も越の忠臣范蠡が夫差の成を請うたのを赦さなかつた趣があるとの意。

ひかん　比干は紂王を諫めて胸を裂

入二於壇一」とあり、索隱註に、「漢官儀云、皇帝輦動、稱レ警出レ殿、則傳レ蹕、止レ人清レ道、言レ出入レ者互文耳、出亦有レ蹕」古今註に、「警蹕は秦の制、出づるに警、入るに蹕、出入皆止するを謂ふなり。」

古の德ある君は、非情の松もしだりて降る雨を覆ひしとや（國性爺後日）
古へ德ある君とは、秦始皇帝をいふ。始皇帝が泰山に上つた時俄に風雨に遭つたので、松樹の下に避けた。秦始皇本紀に、「二十八年始皇東行二郡縣一、上二鄒嶧山一、立レ石與二魯諸儒生一議、刻レ石頌二秦德一、議二封禪望祭山川之事一、乃遂上二泰山一、立レ石封祠、祀下風雨暴至、休二於樹下一、因封二其樹一爲二五大夫一」。

狗は獸を追うて殺し、人は其處を指示す、今諸君の功犬なり、蕭何が如き勝つ處を指示すは、功人なりとの故事（會稽山）
蕭相國世家に、「高帝曰、夫獵、追二殺獸兎一者狗也、而發蹤指二示獸處一者人也、今諸君徒能得二走獸一耳、功狗也、至レ如二蕭何一、發蹤指示、功人也」

項羽高祖の戰に、虞氏が淚の袖の露、かかる事にやありつらん（用文章）
楚の項羽と漢の高祖（沛公）との戰に、項羽が高祖の爲に垓下に圍まれ、其妾虞美人と共に泣いて訣別した。項羽本紀に、「項王（項羽）軍壁二垓下一、兵少食盡、漢軍及諸侯兵圍レ之數重、夜聞二漢軍四面皆楚歌一、項王乃大驚曰、漢皆已得レ楚乎、是何楚人之多也、項王則夜起飮二帳中一、有二美人一名虞、常幸從、駿馬名騅、常騎レ之、於レ是項王乃悲歌忼慨、自爲レ詩曰、力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可二奈何一、虞兮虞兮奈二若何一、歌數闋、美人和レ之、項王泣數行下、左右皆泣、莫二能仰視一」

項羽が山を拔く　項羽が山を拔く勢（女夫池）　項羽が山を拔く、勇力（鎌田）　項羽が山を劈き（五人兄弟）
楚の項羽が漢王（沛公）の爲に垓下に圍まれて、その妾虞美人と訣別した時の詩句に、「力拔山兮云云」とあるによつたのである、前條を見よ。

下邳に授かりし黃石公が奧儀（唐船噺）
張良が秦始皇帝を狙撃して失敗し、下邳に亡匿してゐた際、黃石公と云ふ老人から兵法の奧儀を授かつたといふ。俗に黃石公が張良に授けた兵法は六韜三略の書となすは恐らく後人の假託であらう。なほ詳しくは留侯世家について見よ。

顏回は早く夭して終に四十の花を見ず、盜跖は命長うして旣に八十の霜を踏む、生死不定の理は上智博識も辨ずべからずとや（女護島）
伯夷傳に、「七十子之徒、仲尼獨薦二顏淵一爲レ好レ學、然回也屢空、糟糠不レ厭而卒蚤夭、天之報二施善人一其何如哉、盜跖日殺二不辜一、肝二人之肉一、暴戾恣睢、聚レ黨數千人、橫二行天下一、竟以二壽終一、是遵二何德一哉」。

漢の高祖は紀信が命をすててこそ、その圍をば遁れ給ふ（嫁靜）
「きしん」（紀信）を見よ。

漢の高祖は義帝を尊んで秦の國を亡す（女楠）
漢高祖は西漢の劉邦（沛公）を云ふ。楚の懷王（義帝）を戴き、その命を奉じて秦を破り、關に入つて秦王子嬰を降し秦を討平した。詳しくは高祖本紀を見よ。

錐は囊　拙者は他言致すまいが、錐は囊と外よりの取沙汰は存ぜぬ（堀川波鼓）
錐が囊にあれば其尖端が見はれるやうに、賢者はその賢たる所が自ら言行にあらはれるとの喩。轉じて掩へども祕密は自ら漏洩する喩にいふ。平原君傳に、「平原君曰、夫賢士之處レ世也、譬若二錐之處二囊中一、其末立見」。

怪は德に勝たず（關八州）
不祥事も德を修めてゐる者には害を加へられない。殷本紀に、「伊陟曰、臣聞妖不レ勝レ德」。

吳起が妻を害す　吳起が妻を害せしも勇者の道を重んずべき道とかや（袍狩）
吳起は支那春秋戰國時代の名將で能く兵を用ゐた。孫子吳起傳に、「吳起者衞人也、好レ用レ兵、嘗學二於曾子一、事二魯君一、齊人攻レ魯、魯欲レ將二吳起一、吳起取二齊女一爲レ妻、而魯疑レ之、吳起於レ是欲レ就レ名、遂殺二其妻一以明レ不レ與レ齊也、魯卒以爲レ將、將而攻レ齊大破レ之」。

伍子胥が餘風　李踏天が眼を抉りしは伍子胥が餘風（國性爺）
春秋戰國の世、伍子胥・吳王夫差に事へ、越王勾踐を生かし置くの不可を奏請したが用ひられず、夫差・子胥に屬鏤の劍を賜うて自害を迫したので、子胥その家人に告げて言ふに、必ず吾が墓に檟を樹ゑよ、その檟が棺材となる頃には吳は亡びるであらう、吾が目を抉つて東門に懸けよ、以て越兵の吳を滅すを觀ようとて自刎した。李踏天が眼を抉つたのは、伍子胥が目を抉れと言うた餘風があるとの意。

細謹を顧みぬ大丈夫（川中島）
項羽本紀に、「大行不レ顧二細謹一」。

先んずる時は人を制す（國性爺後日）
項羽本紀に、「先卽制レ人、後則爲二人所一レ制」。

衆口金を消し積毀骨を流す（吉野忠信）
魯仲連鄒陽列傳に、「衆口鑠レ金、積毀銷レ骨也」。衆口の惡む所は堅い金であつても亦之が爲に消亡し、讒人幾度も罪惡を揑造して毀る時は、遂に父兄も相誅戮し骨肉之が爲に流亡するとの義であつて、讒言の甚だ恐るべきを云うたのである。

首陽山に蕨餠（雪女）
周の武王が殷の紂王を滅して天下周の世となる。伯夷・叔齊は殷の義士である、周の粟を食ふを恥辱と思ひ、首陽山に隱れて蕨を食ひ遂に餓死した。この文は蕨を餠蕨にいひなしたのである。

諸君の功犬なり（會稽山）
「狗は獸を追うて殺し」云云を見よ。

食は人の天（川中島）
人命を保つ食物は天の恩惠で、人命の本である。酈食其傳に「王者以レ民爲レ天、而民以レ食爲レ天」。

せいのそしんがちうどくのあだ、はからざるに天これを罰すとかや（女夫池）（西王母）

古へより此事をいひ傳へたると見えて、衣通姫の歌に、わがせこが來べきよひなり笹蟹のくものふるまひかねてしるしも、(毛詩陸疏廣要)云、蠨蛸亦名二長脚一、此蟲來著二人衣一、當下有二親客至一有上レ喜也、注云、荊州河内之人謂二之喜母一、陸賈曰、蜘蛛集百事喜とあり」と見えてゐる。

彝を秉れば性に本づき、智に導かれて化するものは其正しきを失ふ(日本武尊)

人の執る所常道がある、常道は常性に本づく美德であるが、智には偏することあれば、智に從ひ化せらるれば正道を失ふ時があるとの意。大雅蕩、烝民の章に、「天生二烝民一、有レ物有レ則、民之秉レ彝、好二是懿德一」。韓非子・喩老篇に、「智如レ目也、能見二百歩之外一、而不レ能三自見二其睫一」。

***薄氷を履む**(加增眘我)

危險を冒すに喩ふ。小雅・小旻に、「戰戰兢兢如レ臨二深淵一、如レ履二薄氷一」。

***普天の下・率土の濱**

普天の下率土の濱、空飛ぶ鳥蟲螻まで皆朕がまにてある(嵯峨天皇)

天の徧く覆ふところの下、地の長く續けるところまで天下總ての意。小雅北山篇に、「普天之下、莫レ非二王土一、率土之濱、莫レ非二王臣一」。

雪は五穀の精たりと、唐人も豐年を祝ふ兆のあれ(最明寺殿)

小雅信南山篇に「上天同レ雲、雨レ雪雰雰」とありて、毛傳に「雰雰雪貌、豐年之冬必有二積雪一」。

雪は豐年の御つぎ物の世なるかな(融大臣)

雪は豐年の前兆といふに據る。小雅・信南山篇に「上天同レ雲、雨レ雪雰雰」とあつて、毛傳に「雰雰雪貌、豐年之冬必有二積雪一」と見え、孔疏に「謂明年將レ豐、今冬積雪爲二宿澤一也」と見えてゐる。

蒿食み呦呦として鳴く小牡鹿(會稽山)

小雅鹿鳴の章に、「呦呦鹿鳴、食二野之蒿一」。山本九兵衞版七行古詑本のここの文に、「呦呦」に「よふよふ」と傍訓してあれど、正しくは「いういう」であつて、鹿の鳴き聲をいひ、毛傳に「呦呦然鳴而呼應」と見えてゐる。

女を娶る時必ず父母に申すと唐の文にも候(今川了俊)

國風・南山之篇に、「取レ妻如レ之何、必告二父母一」。白虎通に、「男不二自專娶一、女不二自專嫁一、必由二父母一」。

十八史略に據れるもの

この書は早く我が國に傳はり、覆刻の五山版のものも現存し、德川期に入つては既に天和元祿頃盛んに行はれてゐる。

賢者を得たる渭水の狩(花狩)

賢者は呂尙を云うたのである。周の西伯(文王)狩して渭水の陽に至り、呂尙(太公望)に遇ひ與に語つて大いに悅び、載せて倶に歸り立てて師となした。十八史略卷之一に、「有二呂尙者一、東海上人、窮困年老、漁釣至レ周、西伯將レ獵、卜レ之曰、非レ龍非レ彲非レ熊非レ羆非レ虎非レ貔、所レ獲霸王之輔、果遇二呂尙於渭水之陽一、與語大悅曰、自二吾先君太公一曰、當下有二聖人一適上レ周、周因以興、子眞是耶、吾太公望レ子久矣、故號レ之曰二太公望一、載與倶歸、立爲レ師、謂二之師尙父一」。

周の武王は木主を作つて殷の世を傾け(女楠)

「木主」は神主である、位牌をいふ。殷の紂王過ちを悛めないによつて、周の武王乃ち紂を伐ち、西伯(文王)の木主を載せて行き殷を滅して天子となつた。十八史略卷一に、「紂不レ悛、王(武王)乃伐レ紂、載二西伯木主一以行、……王既滅レ殷爲二天子一」。

周の武王は渭濱の獵に太公望と云ふ賢臣を生擒り(會稽山)

太公望は呂尙のことで東海上の人である、窮困して年老い漁釣して周に至つた、文王獵に出で渭水の陽で呂尙に遇ひ、與に語つて大いに悅び載せて倶に歸つた、これより呂尙は文王の子の武王を助けて天下を定めた。太公望を連れて歸つたのは文王であつて武王ではない。十八史略卷一に、「有二呂尙者一、東海上人、窮困年老、漁釣至レ周、西伯將レ獵、卜レ之曰……所レ獲霸王之輔、果遇二呂尙於渭水之陽一、與語大悅曰、自二吾先君太公一曰、當下有二聖人一適上レ周、周因以興、子眞是耶、吾太公望レ子久矣、故號レ之曰二太公望一、載與倶歸、立爲レ師謂二之師尙父一」。

周の文王は羑里の獄屋に入り給ふ(天神記)

殷の紂王が九侯を殺さうとしたので鄂侯が之を諫めて止めようとした。紂王怒つて鄂侯を九侯と共に殺して其肉を腊乾にした。文王これを聞いて歎息した。紂王そこで文王を羑里の獄に投じた。十八史略卷一に、「紂殺二九侯一、鄂侯爭、幷脯レ之、昌(文王)聞而歎息、紂囚二昌羑里一」。

死せる孔明生ける仲達を走らしむ(雪女)

孔明は蜀の丞相・諸葛亮の字である、仲達は魏の將軍・司馬懿の字である、孔明が仲達と對陣し軍中に卒した、仲達は孔明がまだ生きてゐるのではないかと思うて敢て逼らず、軍を斂めて退いた、百姓等これを見て、死んだ孔明が生ける仲達を走らしめたと諺した。十八史略卷三 三國の條に、「亮卒、長史楊儀整レ軍還、百姓奔告レ懿、懿追レ之、姜維令二儀反レ旗

かれ（聖德太子）

〔比干〕殷紂王の賢臣である。紂王の暴戾を强諫した爲に怒に觸れて胸を裂かれた。殷本紀に、「比干曰、爲二人臣一者不レ得レ不二以レ死爭一、迺强諫レ紂、紂怒曰、吾聞聖人心有二七竅一、剖二比干一觀二其心一」。

隙行く駒　隙行く、駒の世のたとへ、八十八夜は及びなき、年は十九と二十五の名殘の霜と見上ぐれば大佛のはや二十二年の光陰、思へば隙行く駒なりし（女夫池）

光陰の過ぎ行くこと疾きをいふ故事である。魏豹傳に「人生一世間一如二白駒過一レ隙耳」とあり、索隱註に、「莊子云、無レ異二騏驥馳過一レ隙、則謂レ馬也、小顏曰、白駒謂二日影一也、隙・壁隙也、以言二速疾若二日影過一レ壁隙一也」。

漂母が惠みし韓信が餉は漢家四百年の民を賑はす（三國志）

初め淮陰の韓信家貧しうして城下に釣してゐた。門に洗濯してゐる老女があつて、信の饑ゑてゐるを見て飯を與へた。後に信は沛公を助けて項羽を滅し、功によつて淮陰侯に封ぜられた。詳しくは淮陰侯韓信傳を見よ。

へきやうこう　異國には漢王の后呂太后。辟陽侯に密通し（浦島）

〔辟陽侯〕審食其を云ふ。西漢高祖の后の呂太后に幸せられた人。呂后本紀に、「以二辟陽侯審食其一爲二左丞相一、左丞相不レ治レ事、令レ監二宮中一如二郎中令一、食其故得レ幸二太后一常用レ事、公卿皆因而決レ事」と見えてゐる。

門を破る樊噲（曾我五人兄弟）

「はんくわい」を見よ。

＊**りくわう**　漢の李廣は石虎を射る（百日曾我）

〔李廣〕李廣は漢時代の人、射に巧みである。李將軍傳に、「廣出獵、見二草中石一以爲レ虎而射レ之、中レ石沒レ鏃、視レ之石也、因復更射レ之、終不レ能二復入一レ石矣」。

渭濱に釣せし太公望　渭濱に釣せし太公望同車に乘せし帝を學び（川中島）

太公望は呂尚である、窮困して年老い渭水の濱に釣してゐたが、周文王に登用されて其師となつた。渭水は渭州渭源縣鳥鼠山に出で同州馮翊縣に至つて河に流入る。周本紀に、「有二呂尚者一、東海上人、窮困年老、漁釣至レ周、西伯將レ獵卜レ之曰、非レ龍非レ彲非レ熊非レ羆非レ虎非レ貔、所レ獲霸王之輔、果遇二呂尚於渭水之陽一、與語大悅曰、自二吾先君太公一曰、當レ有二聖人一適上レ周、周因以興、子眞是耶、吾太公望レ子久矣、故號レ之曰二太公望一、載與俱歸、立爲レ師謂二之師尚父一」。

詩經に據れるもの

落つる物梅あり、その花七つ八つ（三國志）

召南・國風に「摽有レ梅、其實七兮、求レ我庶士、迨二其吉一兮」とあつて、毛傳に「摽、落也」とある。

かいらうどうけつ　里歸りには小宿をこしらへ、偕老同穴は磯千鳥、比翼連理の契りの中（天鼓）　契りは偕老同穴と、一つ棺に一つ穴（鑓の權三）

〔偕老同穴〕生きては偕に老い、死しては穴を同じうして葬られる義で、夫婦の契りをいふ。邶風に、「與レ子偕老」。同・王風に、「穀則異レ室、死則同レ穴」。

柯を伐り柯を伐る、其則遠からず（國性爺後日）

柯は斧の柄である。斧の柄を執り持つて、木を伐つて以て斧の柄とするに、今伐つて作らうとする斧の柄の長短の手本は其持てる斧の柄にある、卽ち手本は目前にあるとの意。豳風伐柯篇に、「伐レ柯伐レ柯、其則不レ遠」。

かんくわせきやう　かんくわせきやう相挾み、左輔右弼列を引く（國性爺後日）　太平の御代に干戈を動かし、御旗下を騷すあやまり、國制據なく切腹仰付けらる（碁盤太平記）

〔干戈戚揚〕干は盾、戈は矛、戚は斧、揚は鉞であつて、皆兵器である。大雅公劉篇に、「弓矢斯張、干戈戚揚、爰方啓レ行」。

甘棠伐ること勿れ　實に盛んなる甘棠伐ること勿れと、慕ひし聖代の仁政を移され（隅田川）

召南に、「蔽芾甘棠、勿レ翦勿レ伐、召伯所レ茇」とある。蔽芾は盛んな貌。甘棠は杜黎である。翦は枝葉を切る義、伐は條幹を切る義。召伯は周の太保召公で、伯は方伯の義。茇は草舍で、宿るをいふ。周の太保召公が西方を治め郷邑を巡行し、以て文王の政の布いた時甘棠の下に宿つた。後人召公の德を慕ひ、その樹を愛して傷けるに忍びず、故に翦伐することと勿れと謠つたのである。

關關たる雎鳩のみさごは河の洲に在り、窈窕とたをやかなる淑女のよきむすめは君子の好逑なり（三世相）　關關と相和らぎ羽をならぶる水鳥は君子のよきたぐひ（弘徽殿）

「關關」は和聲。「雎鳩」はみさごといふ水鳥。「逑」は匹。關雎の章に、「關關雎鳩、在二河之洲一、窈窕淑女、君子好逑」。雎鳩は雌雄情意至つて然も情に亂れず、正しうして別ある鳥である。文王が西伯であつた時、后妃關雎の德ありて淑德高く、よき君子のたぐひであると譽めた詩である。巢林子この詩を應用したのである。

蜘蛛かかつて云云　「蜘蛛かかつて喜來る云云」を見よ。

蜘蛛かかつて喜來ると云ふ本文もあり（關八州）

俚言集覽に「〔廣益俗說辨〕俗間家內に蜘さがれば、婦女よろこびありとて祝ふ、今按ずるに

谿に入らざれば地の厚きを知らず、聖賢の語を聞かざれば道の大成を知らず（弘徽殿）

勸學篇に、「不レ登二高山一不レ知二天之高一、不レ臨二深谿一不レ知二地之厚一也、不レ聞二先王之遺言一不レ知二學問之大一也」。

書經に據れるもの

木は繩を以て直にし、君は諫めを以て正すとかや（虎が磨）

説命上篇に、「木從レ繩則正、后從レ諫則聖」。説苑に、「木受レ繩則直、人受レ諫則聖」。

この日いつか喪びん、予汝と皆に亡びんと、夏の桀王を誹りし如く（唐船噺）

この日卽ち桀王はいつ滅びるであらうぞ、若し滅びるならば、我これと共に滅びてもいいとひはせぬから、桀王の早く滅びてくれよと、民が夏の桀王を惡み誹つたのである。湯誓に、「夏王率遏二衆力一、率割二夏邑一、有衆率怠弗レ協曰、時日曷喪、予及レ汝皆亡、夏德若レ玆」。

氷を歩む御差足、虎の尾を蹈む心地にて（釋迦）

周書・君牙篇に、「心之憂苦、若下蹈二虎尾一、涉中于春冰上」とありて、蔡沈註に「若レ蹈二虎尾一畏二其噬一、若レ涉二春冰一畏二其陷一、言憂危之至」。

四端を具し萬善を備ふ 夫れ人は四端を具し萬善を備ふとは周書泰誓の詞なるをや（加增曾我）

人は四端を具し萬善を備へて、萬物の靈長たるを云ふ。「四端」とは惻隱・羞惡・辭讓・是非の心をいふ、惻隱の心は仁の端である、羞惡の心は義の端である、辭讓の心は禮の端である、是非の心は智の端である、故にこれを四端と云ふ。周書・泰誓に「惟人萬物之靈」とありて、宋蔡沈の註に、「惟人得二其秀一而靈、具二四端一備二萬善一、知覺獨異二於物一」。

虎の尾 心も勇む虎の尾の酒の燗、めでたいめでたい（持統天皇）

虎穴に入るのであるから、「虎の尾を踏む」（「氷を歩む御差足云々」の條を見よ）をきかせて、生別はやがて死別となる酒盛を張る意にいうたのである。白氏詩文集部「虎の尾の酒」をも見よ。

罰の疑はしきを輕くせよといへり（國性爺後日）

虞書大禹謨に、「罪疑惟輕、功疑惟重」。

牝鷄晨をつくる 牝鷄晨をつくるとかや、女主のはびこるは鷄の雌の時をうたふに譬へて、家を破り身を害ふ兆と申す（持統天皇）

牝鷄晨を告げ鳴くは、陰陽常に反して家道衰へると云ふ。牧誓に、「武王曰、古人有レ言曰、牝鷄無レ晨、牝鷄之晨、惟家之索、今商王受、惟婦言是用」。

父母の別れには王憂へて亮陰三年（聖德太子）

亮陰は天子の喪にこもりおはします時をいふ。説命上に、「王宅二憂亮陰一三祀」とありて、蔡傳註に「亮龍張反、陰烏含反。亮亦作レ諒、陰古作レ闇、按二喪服四制一、高宗諒陰三年」。

牧野に戈を倒まにすと傳へし先言（嵯峨天皇）

牧野は支那河南淇縣の南にあつて、殷の都のあつた所。殷の紂王軍旅を率領し、周の武王と牧野に會戰したが、紂王の兵多けれども皆離心離德、前列の徒都て戈を倒まにして内向し、反つて自ら其の後にある衆を攻め、以て奔北し、紂王は寶玉を衣て自ら焚死した。武成篇に、「受（紂王の名）率二其旅一若レ林、會二于牧野一、罔レ有レ敵二于我師一、前徒倒レ戈、攻二于後一以北、血流漂レ杵」。

牝鷄が時をつくる 牝鷄が時をつくるか、鎌倉殿はとかくかぢやなどと嘲つて（最明寺殿）

妻が夫の權を奪ふに喩へていふ。牧誓に、「武王曰、古人有レ言曰、牝鷄無レ晨、牝鷄之晨、惟家之索」。

晉書に據れるもの

若蘭が織りし錦の歌、百花散亂すといへども、夫を思ふ心重き事山の如し（聖德太子）

若蘭は竇滔の妻蘇氏、聰明で文を善くした。夫が流沙に遷された時、若蘭夫を思ふの情に堪へないで、錦を織り廻文旋圖詩を爲つて夫に贈つた。晉書卷九十六、烈女傳に「竇滔妻蘇氏始平人也、名蕙字若蘭、善屬レ文、滔・苻堅時爲二秦州刺史一、被レ徙二流沙一、蘇氏思レ之織レ錦、爲二廻文旋圖詩一以贈レ滔、宛轉循環以讀レ之詞甚悽惋、凡八百四十字、文多不レ錄」と見えてゐる。「題二織錦畫一」の廻文詩は「春晩落花餘二碧草一、夜凉低月半二枯桐一、人隨二遠雁一邊城暮、雨映二疎簾一繡閣空」といふ東韻の詩であるが、この文を廻し下より逆に讀み上げると、「空閣繡簾疎映レ雨、暮城邊雁遠隨レ人、桐枯半月低二凉夜一、草碧餘花落二晩春一」といふ眞韻の詩となる。巣林子の文に「百花散亂す」といへるは、「餘花落二晩春一」とあるを譯したのである。若蘭の廻文旋圖詩の故事に採つて巣林子が、後の文に月益獨前が二子を思ふ情の切な廻文の手紙をいはうとする伏線である。

森森たる人品千丈の松の如し、磥々として節多く、砢々として目高しと雖も、大厦に施す時んば、棟梁の功用大いなるかな（川中島）

鳴レ鼓若レ將レ向レ敵、懿不三敢逼一、百姓爲レ之諺曰、死諸葛走二生仲達一」とある。もと晋書・宣帝紀に見えてゐる。

秦王武周を討つて破陣樂を作り、國七德に化せしとかや（本領曾我）

秦王は唐太宗文武皇帝で名を世民といふ。武周は定陽の劉武周で、隋の大業十三年僭號してより三年にして秦王世民に滅された。十八史略卷五に「唐秦王世民擊二定陽將宋金剛一破レ之、定陽可汗劉武周及金剛皆走死」と見え、「七年春宴二玄武門一、奏二七德九功舞一」云云」とあつて、註に「七德＝通鑑注、太宗爲二秦王一時、破二劉武周一、軍中相與作二秦王破陣樂曲一、及レ卽レ位宴會必奏レ之、以二百二十八人一、被二銀甲一執レ戟而舞、凡三變、每レ變爲二四陣一、象二擊刺往來一、後更名二七德舞一、七德者、謂下取二禁レ暴、戢レ兵、保レ大、定レ功、安レ民、和レ衆、豐レ財之義上也」と見えてゐる。

盤古王の御代に當つて、四季不順して五穀熟せず、蒼天の坤ひつじさる傾き、女媧といふ聖君赤白の金石を鍛ひ柱とし、傾く天を捧げしより（唐船噺）

「盤古王」とは天地開闢の初めに出た王をいふ。列氏・湯問篇に「昔者女媧氏練二五色石一、以補二其闕一、斷二鼇之足一以立二四極一、其後共工氏與二顓頊一爭レ爲レ帝、怒而觸二不周之山一、折二天柱一絕二地維一、故天傾二西北一」。十八史略卷一、太昊伏羲氏の條に、「諸侯有二共工氏一、與二祝融一戰、不レ勝而怒、乃頭觸二不周山一崩、天柱折地維缺、女媧乃錬二五色石一以補レ天、斷二鼇足一以立二四極一、……、於レ是地平天成」。巣林子これ等によつて鍛冶の鑪鞴に附會したもの

て、「坤」西南の間」は西北とすべきであらう。

文王は羑里に囚はれ（出世景清）

周の文王、名は昌、聖人であつたが殷の紂王の爲に羑里に囚せられた。十八史略卷一に、「紂殺二九侯一、鄂侯爭、幷脯レ之、昌聞而歎息、紂囚二昌羑里一」。

唐土の大祖皇帝は韓王堂に一人行幸の例もあり（最明寺殿）

大祖皇帝は太祖皇帝とすべきである。宋の太祖皇帝が或る大雪の夕微行して趙普の宅を訪うたことをいふ。趙普は薊人、宋の太祖・太宗の兩朝に歷仕し、卒して韓王に封ぜられ忠獻と謚した。十八史略卷之六、宋太祖皇帝の條に、「上自レ卽レ位、或微行幸二功臣之家一、不レ可レ測、趙普每レ退レ朝、不三敢脫二衣冠一、一夕大雪、普意上不二復出一矣、久レ之聞二叩レ門聲一、趨出則上立二雪中一、普惶恐迎拜、卽二普堂一、設二重裀一地坐、熾レ炭燒レ肉、普妻行レ酒、上以レ嫂呼レ之、普從容問曰、夜久寒甚、陛下何以出、上曰吾睡不レ能レ著、一榻之外皆他人家也、故來見レ卿云云」。

事文類聚に據れるもの

***あくじせんり** 包むとすれど惡事千里（弘徽殿）

〔惡事千里〕惡事は忽に露はれて、千里の遠方までも傳るとの意。事文類聚に、「好事不レ出レ門、惡事傳二千里一」。

漢の武帝元鼎五年蛙鬪つて北狄起り（蛙合戰）

このこと事文類聚に見えてゐる。漢書志に「武帝元鼎五年秋、蛙與二蝦蟇一群鬪・是歲四將軍衆十萬征二南越一開二九郡一」。

流ながれに耳みみを洗ふ 人も賴まぬ高名立、知行欲しげに無益のことと流に耳たゞ洗ひ樂しむ所（女夫池）

許由の故事である。許由は箕山の隱者である。堯これに國を讓らうとした。許由これを聞いて耳が汚れたとて、穎川の水で耳を洗つたと云ふこと、事文類聚・隱逸部に見えてゐる。

荀子に據れるもの

麻あさに連添つれそふ蓬よもぎ 麻につれそふ蓬の矢、弓取の妻なれや（源義經）

蓬ほくねつて、直すぐくなるものではなけれども、麻の中に生ずれば、自然に麻に挾まつて直くなる。それの如く夫が正義の武士なれば、その妻も感化をうけて正義の心がある。勸學篇に、「蓬生二麻中一、不レ扶而直」。

藍あゐより出でて藍より靑し 伯母樣の近くで死したらば、緣に引かれて後の世は、親にも逢ひに藍出、藍より出でて藍より靑く、罪より罪の重からん（氷朔日）

勸學篇に、「學不レ可二以已一、靑出二於藍一而靑二於藍一、冰水爲レ之而寒二於水一」とある故事で、弟子などの師よりも勝るに喩へていふを取つて、犯した罪よりも罪の重い意に用ゐたのである。序にいふが、この當時大阪神明宮附近は、藍畑が多かつたことがここの文でも知れる。

一を以て萬を知る（持統天皇）

非相篇に「以レ近知レ遠、以レ一知レ萬、以レ微知レ明」。

氷こほりは水みづより出でて水よりも寒く、靑き事藍より出でて藍より深し（三世相）

勸學篇に、「君子曰、學不レ可二以已一、靑出二於藍一、而靑二於藍一、冰水爲レ之、而寒二於水一」と見え、弟子が師よりも優るに喩へた文であるが、巣林子はこれを以て、生前傾城の業苦の死後更に業苦を增す意に用ゐたのである。三世相のこの文の、「氷は水より……今の苦しみ去りもせで」までは謠曲・檜垣に出てゐる。

山やまに登のぼらざれば天の高きを知らず、

戰國策に據れるもの

鷸蚌の闘戰 信玄・輝虎中違はせ、かの鷸蚌の闘戰にて兩國を摑まんと（川中島）

鷸は「かはぜみ」といふ鳥、蚌は「はまぐり」といふ貝。鷸と蚌と相爭うて兩ながら漁夫に獲られたといふ故事で、兩者互に利を爭うて他の者に橫取されるに喩ふ。戰國策・燕策に、「趙且レ伐レ燕、蘇代謂二惠王一曰、今日臣來過二易水一、蚌方出曝、而鷸啄二其肉一、蚌合而箝二其喙一、鷸曰、今日不レ雨明日不レ雨、即有二死蚌一、蚌亦謂レ鷸曰、今日不レ出明日不レ出、即有二死鷸一、兩者不レ肯二相舍一、漁者得而並擒レ之」。この鷸蚌の爭の故事は、國性爺合戰第二にも、鴫と蛤との爭ふことにして書いてゐる。「鴫蛤の爭」を見よ。

狐虎の威を假つて百獸を從へ（隅田川）

戰國策に、「楚王問二群臣一、北方畏二昭奚恤一何如、江乙曰、虎求二百獸一而食レ之、得レ狐、狐曰子無二敢食一レ我也、天帝使三我長二百獸一、今子食レ我、是逆二天帝命一也、子以レ我爲二不信一、吾爲レ子先行、子隨二我後一觀、百獸之見レ我而敢不レ走乎、以爲レ然、故遂與レ之行、獸見レ之皆走、虎不レ知三獸畏レ己而走一也、以爲レ畏レ狐、今北方非レ畏二昭奚恤一、實畏二王甲兵一也」。

荊の宣王に江乙が答へ

「狐、虎の威を假つて云云」を見よ。

鴫蛤の爭（國性爺）

ここの文は鷸と蚌と相爭うて共に漁者に獲られたと云ふ故事に據つたのである。戰國策・燕策に、「趙且レ伐レ燕、蘇代謂二惠王一曰、今日臣來過二易水一、蚌方出曝、而鷸啄二其肉一、蚌合而箝二其喙一、鷸曰、今日不レ雨明日不レ雨即有二死蚌一、蚌亦謂レ鷸曰、今日不レ出明日不レ出即有二死鷸一、兩者不レ肯二相舍一、漁者得而并擒レ之」。「鷸蚌の闘戰」をも見よ。

しんし 大明韃靼向後唇齒の因なし（國性爺）

〔唇齒〕唇亡びれば齒が寒い。以て相互に輔佐することに云ふ。戰國策に、「趙之於二齊楚一也隱蔽也、猶二齒之有一レ唇也、唇亡則齒寒」。

唇と齒の如く唇なければ齒寒し（聖德太子）

戰國策に、「趙之於二齊楚一也隱蔽也、猶二齒之有一レ唇也、唇亡則齒寒、今日亡レ趙、則明日及二齊楚一」。

太山は土壤を讓らず、故に積つて高き事をなし、河海は細き流れを擇ばず、故につもつて深きをなせり、人君としては能くもろもろを卻けず、故にその德を末葉に照す（五人兄弟）

戰國策・李斯逐客上書に、「太山不レ讓二土壤一、故能成二其大一、河海不レ擇二細流一、故能就二其深一、王者不レ卻二衆庶一、故能明二其德一」。

白虹日を貫く 朝日夕日に不思議の光現じ、白虹日を貫くことなめならず（嵯峨天皇）

白虹は兵象である、日は君である。白色の虹が日を貫くは國に事變起る兆である。戰國策・魏策に、「唐雎曰、專諸之刺二王僚一也、彗星襲レ天、聶政之刺二韓傀一也、白虹貫レ日」。

大學に據れるもの

一家仁あれば一國仁を興し、一人貪戾なれば一國亂を起す（國性爺）

齊家治國章に、「一家仁一國興レ仁、一家讓一國興レ讓、一人貪戾一國作レ亂、其機如レ此」。

きよれいふまい 八咫の鏡をさしむけたり、あら恐しやきよれいふまいの德に照され、內心如夜叉の相あらはれ（振袖始）

〔虛靈不昧〕明かなこと。大學に、「大學之道在レ明二明德一、在レ親レ民」とありて、朱註に、「明德者人之所レ得二乎天一、而虛靈不昧、以具二衆理一而應二萬事一者也」と見え、明の義を虛靈不昧と解釋してある。

大學の道、明德を明かに生民を受けし天女丸（最明寺殿）

大學は治民爲政の道を敎へる所である。治民爲政の道を修めて光明の德を身に得て、更に天下に章顯し民を親愛し、治民爲政者として天の命を受けた天女丸。大學に、「大學之道在レ明二明德一、在レ親レ民」。

人の父としては慈にとどまり、人の子としては孝にとどまる（壽門松）

人の父となつては慈に止まり、一家を敎養して慈愛でなければならぬ、人の子となつては孝に止まり、親に事へて至孝でなければならぬ。大學に、「爲二人臣一止二於敬一、爲二人子一止二於孝一、爲二人父一止二於慈一」。

緡蠻たる黃鳥丘隅に止る、人として止る所に止まらずんば鳥に如かざるべしとかや（國性爺）

緡蠻（鳥の鳴聲）と鳴く鶯は樹木蔚葱たる丘隅の地に止る、鶯の如きものだに能く止る所を得てゐる、況んや人として至善を擇んで止ることができないならば鳥にすら及ばないであらうの意。大學に、「詩云、緡蠻黃鳥止二于丘隅一、子曰、於レ止知二其所一レ止、可下以レ人而不上レ如レ鳥乎」。

晉書・卷四十五、和嶠傳に、「嶠森森如二千丈松一、雖二磥砢多二節目一、施二之大廈一、有二棟梁之用一」とあるに據つたのである。西遷九葉軒等版・七行本に、「磥々」に「りり」と傍訓し、「砢々」に「かか」と傍訓してあれども、磥々は磊々と同じで「らいらい」と訓むべく、石の重なる貌。砢々も「らら」と訓むべく、ごろごろと石の重なる貌。以て卓出する千丈の松の錯節多きをいふ。

しんのしゆじよが母千餘人の女武者を領じて、襄陽に城を築き賊敵を防ぎ夫人城と名づけしは、上代異朝の賢婦ぞかし(最明寺殿)

晉の朱序が襄陽を鎭めてゐた時、苻堅の將苻丕來り攻む。序の母城中の婦女を集め、城を築いて敵軍を防いだ、よつて其城を夫人城と云うた。晉書・朱序傳に、「序母韓自登レ城履行謂、西北角當二先受一レ弊、遂領二百餘婢幷城中女丁一、於二其角一斜築レ城二十餘丈、賊攻二西北角一、果潰、衆便固二新築城一、丕遂引退、襄陽人謂二此城一爲二夫人城一」。

螢を聚む　螢を聚め雪を積み壁を穿ちし古も(國性爺後日)

車胤が苦學して學者となつた故事である。晉書に、車胤幼時家貧にして油を買ふことができない爲に、夏月練囊に數十の螢を入れ、螢火によつて書を讀み、後に尙書郎となつたことが見えてゐる。晉書・車胤傳に、「胤字武子、幼恭勤博覽、貧不二常得一レ油、夏月以二練囊一盛二數十螢火一、照レ書讀レ之以レ夜繼レ日、後官至二尙書郎一」。

雪を積む　螢を聚め雪を積み壁を穿ちし古も(國性爺後日)

孫康家貧にして油を買はれない爲に、冬月雪を積みその光によつて苦學して學者となつたといふ故事である。晉書・孫康傳に、孫康少くして淸介、交游雜ならず、家貧にして油なし、冬月嘗て雪に映じて書を讀み、後に御史大夫に至りたる由を載せてある。

說苑に據れるもの

打たるる杖もゆかしい　あれやうやうと忘れてゐたもの、親のこと又言出して泣かさしやんす、打たるる杖もゆかしいといふものを、拳一つ當てられず可愛がられた現在の親(氷朔日)

韓伯兪の故事に據つたものである。「はくゆ」を見よ。

莊王冠の緒を切らせ兵を助けし(吉野忠信)

「烏帽子の掛緒を切る」を見よ。

賞の疑はしきを重くし罰の疑はしきを輕くせよ(三世相)

說苑に、「明君之制、賞從レ重、罰從レ輕」。「罰の疑はしき云々」をも見よ。

前車に懲りず後車の罪業(關八州)

以前惡業を爲して禍に罹つたにも懲りず、なほ後にも罪業を積むとの意。善說篇に、「前車覆、後車戒」とあるを作りかへたのである。

伯牙が琴も鍾子期にあらざれば名を知る者なし(關八州)

伯牙も鍾子期も支那戰國時代の初の人なるも生死の年月詳でない。說苑に、「伯牙鼓レ琴、意在二高山一、鍾子期曰、善哉巍巍乎若二泰山一、俄而志在二流水一、子期曰、善哉洋洋乎若二流水一、子期死、伯牙破レ琴絕レ絃、終レ身不二復鼓一レ琴、以爲世無二知レ音者一」。

はくゆ　二十四孝の伯俞が父の杖に弱りしを歎きしは孝行(關八州)

〔伯兪〕韓伯兪(兪或は逾に作る)は漢時代梁の人である、過をなして母に杖で打たれても痛まないので、母の力の衰へたのを哀しみて泣いたといふ。建本篇に「伯兪有レ過、其母笞レ之、泣、其母曰、他日笞子未二嘗見一レ泣、今泣何也、對曰、他日兪得レ罪笞嘗痛、今母之力不レ能レ使レ痛、是以泣、云云」。巢林子が「父の杖」といへるは、「母の杖」といふべきを思ひ誤つたのである。

***美女は惡女の敵**　さても昔よりよくもよくも傳へたり(西王母)

尊賢篇に、「美女者醜婦之仇也、盛德之士亂世所レ疏也」。

病は少し癒ゆるより起り、孝は少艾より劣る(川中島)

「少艾」はその條を見よ。說苑に、「病加二於少癒一、禍生二於懈怠一、孝衰二於妻子一」。

烏帽子の懸緒を切る(關八州)

小蝶が暗中に箕田二郎纜の烏帽子懸緒を切り、纜が源賴平の恩に感じて賴平の爲に死するは、楚の莊王の故事を脚色したものである。復恩篇に、「楚莊王賜二羣臣酒一、日暮酒酣燈燭滅、乃有下人引二美人之衣一者上、美人援二絕其冠纓一、告レ王曰、今者燭滅有下引二妾衣一者上、妾援二得其冠纓一持レ之、趣レ火來上、視二絕レ纓者一、王曰、賜二人酒一使二醉失一レ禮、奈何欲レ顯二婦人之節一而辱レ士乎、乃命二左右一曰、今日與二寡人一飲、不レ絕二冠纓一者不レ懽、群臣百餘人皆絕二去其冠纓一而上レ火、卒盡レ懽而罷、居三年晉與レ楚戰、有二一臣一常在レ前、五合五獲レ首却レ敵、卒得レ勝レ之、莊王怪而問曰、寡人德薄、又未二嘗異一レ子、子何故出レ死不レ疑如レ是、對曰、臣當レ死、往者醉失レ禮、王隱忍不レ加レ誅也、臣終不下敢以二蔭蔽之德一而不中顯報上レ王也、常願下肝腦塗レ地用二頸血一湔上レ敵久矣、臣乃夜絕レ纓者也、遂破二晉軍一、楚得二以强一、此有二陰德一者必有二陽報一也」。この話は蒙求、唐物語、下學集などにも見えてゐる。

杜甫詩に據れるもの

こらいまれ 齡は七十、古來稀なる堅親父(浦島)

〔古來稀〕七十歲をいふ、人生は短くして七十歲まで生きる人は古來稀であるとの意よりいふ。杜甫の曲江の詩句に、「人生七十古來稀」。

***水魚の因**(國性爺後日)

親密なこと魚の水に於けるが如きを云ふ。杜甫の詩句に、「稍令二社稷安一、自契魚水親」。

伐木丁丁として山更に幽かなり(嵯峨天皇)

杜甫の題二張氏隱居一詩に、「春山無レ伴獨相求、伐木丁丁山更幽、澗道餘寒歷二氷雪一、云云」。

頻繁として三度顧るは天下の謀計とかや(川中島)

しげしげに三度までも顧み訪うて賢士を得ようとするは、蓋し天下を開濟する謀計の爲であるとやの意であつて、蜀主劉備が三度も諸葛亮の草廬を訪問して其出廬を懇望した故事に據る。杜甫の蜀相の詩句に、「隔葉黃鸝空好音、三顧頻繁天下計、兩朝開濟老臣心」。

白氏詩文集に據れるもの

朝政し給はず 色に耽り酒宴に誇り、朝政し給はぬ御意見の種にもと(國性爺)帝不覺の御歎き、朝政し給はず(酒呑童子)

長恨歌に、「春宵苦レ短日高起、從此君王不二早朝一」。源氏物語・桐壺の巻に、「思し出づるにも猶朝まつりごとは怠らせ給ひぬべかめり」。謠曲・楊貴妃に、「扨も后宮世にましまし時だにも、朝政は怠り給ひぬ」。

江南離別の夕の雨 江南離別の夕の雨、驪山宮の朝の霜、とくとく落ちて谷川の、流れ別るる谷や(千疋犬)

江南は楊子江南の地、ここでは潯陽江頭をいふ。支那長安の女が商人の妻となつて潯陽に往き、夫に見棄てられて愁歎にくれ、琵琶を彈じてゐたのを白居易等聽いて、其音調あはれに人をして物寂しい感を起さしめ、座中の人皆淚を流したこと、琵琶行に見えてゐる。

かうろのゆき 髭と髮とは香爐の雪、五湖の波また面の皺(唐船噺)香爐峯の心なんめり、簾を捲けばお肴に嵐が雪をもつて(雪女)

〔香爐雪〕香爐峰は廬山の一峰である。白氏文集・卷四十三、草堂記に、「匡廬奇秀甲二天下山一、山北峯曰二香爐峰一」と見えてゐる。白氏文集・卷十六に、「香爐峯雪撥レ簾看」の詩句がある。この詩句によつて、髭・髮の白いことを香爐の雪と云ひ、簾を捲けば雪を香爐峯の心なんめりと云うたのである。

彼の白居易に泣かせたき烏に反哺の孝あり(百合若)(聖德太子)

「調べ合せし三つの緒云々」を見よ。

烏は親の恩を忘れず、成長の後は親に哺反すといふ。張華注、禽經に、「慈烏曰二孝烏一、長則反二哺其母一」。白居易の慈烏夜啼の詩に、「慈烏失二其母一、啞啞吐二哀音一、晝夜不二飛去一、經年守二故林一、夜夜夜半啼、聞者爲沾レ襟、聲中如二告訴一、未レ盡二反哺心一、云云」。

狐蘭菊にかくれすむ

「梟松桂の枝云々」を見よ。

君が一日の情に妾が百年の命を失ひ(娥)

白氏文集・非底引二銀瓶一の詩句に、「爲二君一日恩一、誤二妾百年身一」。

きやうげんきぎよ 狂言綺語のたはぶれも讃佛乘の因とは、よくこそこれを傳へたれ(百日曾我)

〔狂言綺語〕文飾した詞、卽ち小說などをいふ。香山寺白氏洛中集記に、「願以二今生世俗文字之業、狂言綺語之過一、轉爲二將來世世讃佛乘之因、轉法輪之緣一」。

桐の葉落ちて飛ぶ螢、思ひ悄然たる深更に、廊下の障子に影うつり(弘徽殿)

長恨歌に、「秋雨梧桐葉落時、　　、夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未レ成レ眠」。

琴詩酒の三つの友 琴詩酒の三つの友な離れ、巷を打つて勝負を爭ひ給ふこと、別に樂しむ所ばし候か(國性爺)

北窗三友の詩に、「欣然得二三友一、三友者爲レ誰、琴罷輙擧レ酒、酒罷輙吟レ詩、三友遞相引、循環無二已時一、云云」。

車を摧く岩よりも人の心はさかしくて、舟をうかぶる淵よりも深きは人の心(孕常盤)

太行路の詩に、「太行之路能摧レ車、若比二人心一是坦途、巫峽之水能覆レ舟、若比二人心一是安流」。

爰な塚はと引留め問へば、爰は古への刈萱殿の、墓標繁りし春の草(萬年草)

白氏文集卷二、諷諭二の部にある詩句に、「古墓何代人、不レ知姓與レ名、化作二路傍土一、年年春草生」。

三千の戀草も色香を失ふためしにて(天智天皇)

唐玄宗皇帝の後宮の美女三千人も、絕世の美人楊貴妃に比べては氣壓されて色香を失うたと云ふ故事に據つたのである。長恨歌に、「楊家有レ女初長成、養在二深閨一人未レ識、天生麗

貞觀政要に據れるもの

古を以て鑑とすれば興替を知り、人を以て鑑とすれば得失を明らむ（五人兄弟）

貞觀政要に、「唐太宗曰、以レ古爲レ鑑可三以知二興替一、以レ人爲レ鑑可三以明二得失一」。

魚は廣きを愛し、鳥は深きを樂しむといへり（源義經）

貞觀政要・卷五に、「林深則鳥棲、水廣則魚游」

漢の光武帝は一日に千里の馬を得たりつる（小栗判官）

貞觀政要・第二納諫篇に、「光武有下獻二千里馬及寶劍一者上」、太平記・卷十三、龍馬進奏の條に、「後漢の光武の時、千里の馬と寶劍とを獻ずる者あり」。

中庸に據れるもの

けんけんふくよう　渡す烏帽子を、公時が首の用意に持たせたる三方によそほひのせ、拳拳服膺敬ひ捧げ、お暇申す抖禪尼と（關八州）

〔拳拳服膺〕奉持して胸に著けること。中庸に云、子曰、「回之爲レ人也、擇二乎中庸一、得二一善一則拳拳服膺、而弗レ失レ之矣」で

鳶飛んで天に戻れば魚淵に躍る教も上下の道察らけき（雪女）

「戻」は至の義。「察」は著の義。鳶が飛んで天に至るのは道が上天に著はれたもの、魚が淵に躍るのは道が下地に著はれたもので、いづれも道の作用によるものである。かく作用の廣大な上下の道の教も分明なるといふ意。中庸・第十二章に、「詩云、鳶飛戻レ天、魚躍二于淵一、言二其上下察一也」。

禮儀三百威儀三千備つたる唐土（國性爺後日）

禮儀はなほ禮制といふが如く、禮の大綱たるものを云ひ、威儀は曲禮で、禮の細目たるものを云ふ。中庸に「禮儀三百、威儀三千、待二其人一然後行」。

東坡詩文集に據れるもの

***直千金の春べ**　治まる御代の名に、直千金のはるべかな（賀古教信）

蘇軾が春夜の詩に、「春宵一刻直千金、花有二清香一月有レ陰、歌管樓臺聲細細、鞦韆院落夜沈沈」。

ういへんせん　羽衣へんせんたる仙人形を現じ、帝を拜し再拜して白さく（國性爺後日）

〔羽衣翩躚〕羽衣は仙人天女などの著る羽衣。翩躚はひらひらとする貌。翩は經擧、躚は舞ふ貌。蘇軾の後赤壁賦に、「夢二一道士、羽衣翩躚、過二臨皐之下一、揖レ予而言曰云云」。

愁を掃ふ玉箒、詩を釣る釣針　およそ酒には威徳あり、愁を掃ふ玉箒、詩を釣る釣針、思ふ事なく折る事なし（艶狩）

蘇東坡の飲酒の詩に、「應レ呼二釣レ詩鉤一、亦號二掃レ愁箒一」。

强將の下には弱兵なし（源義經）

（碁盤太平記）

强い將軍の部下には弱い兵卒はゐない。蘇軾の題二連公壁一文に、「俗諺云、强將下無二弱兵一」。

酒ば愁の玉箒　酒は愁の玉箒、千金春宵一刻飲み（女夫池）

「愁を掃ふ玉箒云々」を見よ。

しゆんしやうまきゑ　本膳は春正蒔繪の價千金（酒呑童子）

〔春正蒔繪〕山本春正の蒔繪をいふ。春正は通稱次郎三郎と云ひ、法橋に叙せられ、春正蒔繪の祖で、天和二年九月歿した、年七十三。この文は、宋の蘇軾の春夜の詩句の「春宵一刻直千金」を、「春正蒔繪の價千金」にもぢつて文をなしたものである。

***春宵一刻千金**（國性爺後日）

春の宵は花に清香あり、月に陰あつて、一刻千金の價値があるとの意。宋の蘇軾の春夜の詩に、「春宵一刻直千金、花有二清香一月有レ陰、歌管樓臺聲細細、鞦韆院落夜沈沈」。

千金春宵一刻飲み（女夫池）

「春宵一刻直千金」の詩句を作りかへたのである。蘇軾の春夜の詩に、「春宵一刻直千金、花有二清香一月有レ陰、歌管樓臺聲細細、鞦韆院落夜沈沈」。

白露江に横はり水光天にまじはる（振袖始）

蘇軾の前赤壁賦に、「白露横レ江、水光接レ天」。

***花に清香・月に陰**（女夫池）

春の宵は花には清香あり月には陰がある。宋の蘇軾の春夜の詩に、「春宵一刻直千金、花有二清香一月有レ陰、歌管樓臺聲細細、鞦韆院落夜沈沈」。

ば埋まじ（五人兄弟）

屍骸は龍門原上の土中に埋沒されて空しくなつても、名は朽ちないで世に留ることだらう。「龍門」は輿地紀勝・卷三十、江州の條に、「龍門山在二徳化縣西南五十里一、與二落施山一相對如レ門、瑞昌所レ出盆水自二此二山間一過至二大江一」と見えてゐる。白氏文集・卷五十一、白樂天が元居敬の文集に題した詩に、「遺文三十軸、軸軸金玉聲、龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名」。

林間に酒を煖めて紅葉を燒く（西王母）（栬狩）

白氏文集・卷十四に、「林間煖レ酒燒二紅葉一、石上題レ詩拂二綠苔一矣」。この詩句は平家物語・卷六、紅葉の事、及び謠曲・紅葉狩、和漢朗詠集などにも引用されてゐる、

遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聽く、香爐峯の雪は簾を撥げて見る（凱陣八島）

白氏文集・卷十六に見えてゐる「遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥レ簾看」の詩句であつて、和漢朗詠集にも出てゐる。遺愛寺の入相の鐘聲をば枕から耳をもたげてこれを聽き、香爐峰に雪の降れる朝は簾をかかげて眺め、更に俗事にかかづらはないの意。遺愛寺、香爐峯は白氏文集・卷四十三、草堂記に、「匡廬奇秀甲二天下山一、山北峯曰二香爐峯一、峯北寺曰二遺愛寺一、介二峯寺間一其境勝絶又甲二廬山一、云云」と見えてゐる。

百聯抄に據れるもの

朝一片の雲に咽び、谷には瀑川石流れて、夜孤輪の月を碎く（天神記）

百聯抄に、「山頭夜戴二孤輪月一、洞口朝吐二一片雲一」。

風破窓を射て燈火消え易く、月疎屋を穿ちて夢成り難し（釋迦）

百聯抄解に、「風射二破窓一燈易レ滅、月穿二疎屋一夢難レ成」。

山影門に入つて推せども出でず、月光地に鋪いて拂へども還生ず（天神記）

百聯抄に「山影入レ門推不レ出、月光鋪レ地拂還生」。

孟子に據れるもの

飽くまでに食ひ、煖かに着て、……畜類同然（國性爺）

滕文公上篇に、「飽食煖衣、逸居而無レ然、則近二於禽獸一」。

嫂水に溺るるとき手をもつてせず（關八州）　**嫂水に溺るるとも手を取つて上げぬは外典の戒め**（五人兄弟）

男女の間は嫌疑を受けぬやうに互に愼まねばならぬので、物のやりとりでも直接にせぬが禮である。離婁上篇に、「淳于髡曰、男女授受不レ親禮與、孟子曰、禮也、曰、嫂溺則援レ之以レ手乎、曰、嫂溺不レ援是豺狼也、男女授受不レ親禮也、嫂溺援レ之以レ手者權也」。

一遊一豫　斐たる君子の一遊一豫、國を靡かす旗棹の、直なる掟樂しめり（百日曾我）

〔一遊一豫〕豫は樂である。王者の一遊一豫は恩惠民に及ぶ。梁惠王下篇に、「夏諺曰、吾王不レ遊吾何以休、吾王不レ豫吾何以助、一遊一豫爲二諸侯度一」。

うくわく　烏獲が腕先・孫呉が術、兼備へたる血氣の勇者（關八州）

〔烏獲〕秦武王時代の力士で、能く千鈞の鼎を擧げたと云ふ。告子下篇に、「然則擧二烏獲之任一、是亦爲二烏獲一而已矣」とありて、趙注に、「烏獲古之有レ力人也、能移二擧千鈞一」。史記・秦本紀に、「武王有レ力好レ戲、力士任鄙烏獲孟說、皆至二大官一」。

内に怨の女なく外に曠しき夫なく（嫗物揃）（本領曾我）

曠は空である。嫁かれないで怨を抱く女もなく、また外にはたらけども家に歸つて妻なくて單獨を悲しむ男なく、男女各配偶を得て安んじるをいふ。梁惠王下篇に、「内無二怨女一、外無二曠夫一」。

うばう　羽旄の美欣欣然と喜びて、君が御狩を待ち顔に（蟬丸）　明王の佃獵には、百姓車馬の聲を聞き羽旄の美を見て（五人兄弟）

〔羽旄〕鳥の羽・牛の尾を竿頭につけたはたほこ。梁惠王下篇に、「今王田二獵於此一、百姓聞二王車馬之音一、見二羽旄之美一、擧欣欣然有二喜色一」とありて集疏に、「析羽爲レ旌、爾雅釋天云、注二旄首一曰レ旌、李巡云、旄牛尾注二于首一」。

窮民を養ふは古の道（蟬丸）

梁惠王下篇に、「老而無レ妻曰レ鰥、老而無レ夫曰レ寡、老而無レ子曰レ獨、幼而無レ父曰レ孤、此四者天下之窮民、而無レ告者、文王發レ政施レ仁、必先二斯四者一」。

***庖に肥えたる肉有り**（千疋犬）

「孟子 梁の惠王に語つて曰く云云」を見よ。

くわんくわこどく　仰の如く衆は鰥寡孤獨の浪人者（松風）

〔鰥寡孤獨〕よるべなき窮民。梁惠王下篇に、「老

質難二自棄一、一朝選在二君王側一、回レ眸一笑百媚生、六宮粉黛無二顔色一、……後宮佳麗三千人、三千寵愛在二一身一、……」。

三千の寵愛唯一人（酒呑童子）
楊貴妃が後宮の美女三千人の中にひとり寵愛を得た故事（前條を見よ）をとりて、恒子姫一人寵愛を得給うたことに云うたのである。

三千の容色　凡三千の容色顔を悦ばしめ（國性爺）
長恨歌に、「後宮佳麗三千人」とあるに據つた。

しらべ合せし三つの緒を何にたとへん、軒の急雨ささめごと、彼の白居易に泣かせたき（聖德太子）
琵琶行に、「……大絃嘈嘈如二急雨一、小絃切切如二私語一、……却坐促レ絃絃轉急、凄凄不レ似向前聲、滿座重聞皆掩レ泣、就レ中泣下誰最多、江州司馬靑衫濕」とあるに據つたのである。白居易が元和十年江州の司馬に左遷され、翌年秋潯浦口に客を送つた時、夜船中に婦人が琵琶を彈ずるを聞き、其音に京師の調あるを怪しみ婦人の身元を問ひしに、もと長安の倡女で琵琶を學び、色衰へるに及んで商人の妻となつて此地に居る者であつた。遂に酒を命じて歌曲を彈ぜしめた所、その音のあはれなにつれて急に遷客たる感を起して泣き、琵琶行の詩を作つて婦人に贈つたのである。「三つの緒」はその條を見よ。

唐の帝の三千宮、蝶の宿のささめ言（女夫池）
「唐の帝」は唐の玄宗皇帝のこと。「三千宮」は三千の宮女のこと。「蝶の宿の私言」とは、玄宗皇帝の後宮に美女の輕裾風に飄り、玄宗帝と楊貴妃と私言するを云うたのである。長恨歌に、「後宮佳麗三千人、……風吹二仙袂一飄颻擧、猶似二霓裳羽衣舞一、……臨レ別殷勤重寄レ詞、詞中有レ誓兩心知、七月七日長生殿、夜半無レ人私語時、……」。

女郎狐のばけをして男ばかすと、樂天が詞も思ひやられたり（非筒）
白氏文集・卷四、古塚狐の詩に、「古塚狐妖且老化爲二婦人一、顔色好頭變二雲鬟一面變レ粧、大尾曳作二長紅裳一、徐徐行傍、荒村路日欲レ暮時、人靜處或歌或舞或悲啼、翠眉不レ擧花鈿低、忽然一笑千萬態、見者十人八九迷、假色迷レ人猶若レ是、眞色迷レ人應レ過レ此」。

燈に背向けた顏のあの瘦せたことわい（天網島）
白居易の詩句に、「映映殘燈背レ壁影」。

とらのをの酒　心も勇む虎の尾の酒の燗々、めでたいめでたい（持統天皇）
竹本出雲掾淸定正本・山本九兵衞版・七行本に「虎の尾の酒」とあれども、按ずるに他藍尾酒の誤であらう。容齋四筆に「白樂天元日對レ酒詩云、三杯藍尾酒、一楪膠牙餳、又云、老過占二他藍尾酒一、病餘收得到頭身、云々」とあつて、藍尾酒とは最後に飮む酒杯の意、藍は婪或は闌の音借字と云ふ。書經部「虎の尾」をも見よ。

軒の急雨ささめごと、彼の白居易に泣かせたき
「調べ合せし三つの緒云々」を見よ。

花を蹈んでは同じく惜む花紅葉、堪へず紅葉靑苔の地（栬狩）
「花を蹈んで云云」は、白氏文集・卷十三、春中與二盧四周諒一華陽觀同居の題の律詩中の句、「蹈レ花同惜少年春」を作かへたのである。この詩句は和漢朗詠集・春の部にも出てゐる。「堪へず紅葉靑苔の地」はその條を見よ。

びあうのやなぎ
「びようのやなぎ」を見よ。

***びようのやなぎ**　びようの柳よわよわと、御髮おもげの御息つぎ（關八州）
〔未央柳〕未央は「びあう」と讀むが、昔は「びよう」と讀んだもので、都の錦撰、風流源氏物語（元祿十六年刊）卷三に、「未央の柳は眉に似たり」とあつて、「未央」に「びよう」と傍訓してある。唐玄宗皇帝の未央宮に濃かに粧を凝らせる柳の如き眉。長恨歌に、「太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉」とあつて、楊貴妃の眉を形容した句を應用したのである。

深く交はせし睦言は、翼をならぶる鳥にだに劣らじとこそ契りしに（融大臣）
長恨歌の句に、「夜半無レ人私語時、在レ天願作二比翼鳥一」。

梟松桂の枝に鳴き、狐蘭菊に藏れ栖む（雪女）
白氏文集・卷一、凶宅詩に、「梟鳴二松桂枝一、狐藏二蘭菊叢一矣」。

よしみよしみの言の葉に化され渡る狐川（淀鯉）
狐が美女に化けるといふ故事（「女郎狐のばけをして云々」を見よ）に據つて、勝二郎が傾城の甘言に現をぬかした事を、狐川（その條を見よ）を渡るにいひかけたのである。「よしみ」（好）は親交の意。

***らんかん**　雲の黛寂寞として眼元にしほの闌干たり（小栗判官）　誰まつ蟲のりんりんりんりんとして愁の涙闌干たり（弘徽殿）
〔闌干〕涙の溢れ流れる貌。長恨歌に、「玉容寂寞涙闌干」。

六宮の粉黛も色を失ふ　三千人の寵愛唯一人、六宮の粉黛も色を失ふ日蔭草、其嫉み草身に生ひて（酒呑童子）
「六宮」は後宮をいふ。「粉黛」は白粉眉墨を以て粧へる宮女をいふ。長恨歌に、「回レ眸一笑百媚生、六宮粉黛無二顔色一、……後宮佳麗三千人、三千寵愛在二一身一」とあるに據つたのである。そして恒子姫の美貌にいひなしたのである。

驪山宮長生殿のささめごと（反魂香）
驪山宮も長生殿も唐玄宗皇帝が楊貴妃と共に睦言私語の歡樂に耽つた宮殿である。長恨歌に、「七月七日長生殿、夜半無レ人私語時、在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一」。

驪山の春の匂ひ水、膚の艶の溫かに、夜半の初床引しめて（天智天皇）
長恨歌に、「春寒賜レ浴華淸池、溫泉水滑洗二凝脂一、侍兒扶起嬌無レ力、始是新承二恩澤一時」とあるを譯したのである。

龍門原上の土に骨は埋むとも名を

えるところである。梁惠王下篇に、「簞食壺漿以迎二王師一」。

手の舞ひ足の蹈みども知らず（隅田川）

歡喜極って覺えず舞蹈するをいふ。離婁上篇に、「不レ知二足之蹈レ之、手之舞レ之」とありて、集疏に「其心歡喜、若下聽二音樂一者手舞足蹈、應二曲節一而不中自知上也」と見えてゐる。

天に順ふ者は存し、天に逆ふる者は亡ぶとかや（百合若）

離婁上篇に、「順レ天者存、逆レ天者亡」。

天に二つの日なし　天に二つの日なし、地に二人の王なし（女楠）　天に二つの日なし、地に二人の殿御なし（雪女）　我が唐土の道として天に二つの日なしとて、二人の帝を一時に拜したる例なし（大織冠）

萬章上篇に、「孔子曰、天無二二日一、民無二二王一」。禮記に、「天無二二日一、土無二二王一」。

天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず（國性爺）　**天の時到り地の利に合へる名將**（雪女）

「天の時」とは、時日干支方位等をいひ、「地の利」とは、險阻城池の要害をいふ。公孫丑下篇に、「天時不レ如二地利一、地利不レ如二人和一」。

父子兄弟の間は善を責めず、善を責むる時んば離る、離る時んば不祥これより大なるはなし（大磯虎）

父子兄弟の間で相責めるに善を以てすれば、父子の恩兄弟の義を傷けるに至るからである。離婁上篇に、「古者易レ子而教レ之、父子之間不レ責レ善、責レ善則離、離則不祥莫レ大レ焉」。巢林子が父子兄弟と兄弟を加へたのは、孟子のこの文を用ゐて賴朝・義經の兄弟の間柄に及したからである。

文王のかこみは方七十里、民なほこれを狹しとす（千疋犬）

梁惠王下篇に、「齊宣王問曰、文王之囿方七十里有レ諸、孟子對曰於レ傳有レ之、曰若レ是其大乎、曰民猶以爲レ小也」。

文王の靈臺は民悅んで造る（國性爺後日）

「靈臺」を見よ。

朋友信あるの道（聖德太子）

信を以て交はるは朋友の道である。滕文公上篇に、「使三契爲二司徒一、教以二人倫一、父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ敍、朋友有レ信」。

ほくきゆういう　北宮黝が勇にも超え、孟施舍が義にも優る（國性爺後日）　よしまた桀、北宮黝が勇力・孫子吳子が智略あるにもせよ（千疋犬）

〔北宮黝〕北宮は姓、黝は名、支那上代に於ける勇氣を養うた猪武者である。公孫丑上篇に、「北宮黝之養レ勇也、不二膚橈一不二目逃一、思下以二一毫一挫中於人上、若レ撻二之於市朝一、不レ受二於褐寬博一、亦不レ受二於萬乘之君一、視レ刺二萬乘之君一、若レ刺二褐夫一、無二嚴諸侯一、惡聲至必反レ之」。

まうししや　北宮黝が勇にも超え、孟施舍が義にも優る（國性爺後日）

〔孟施舍〕支那上代にゐた義を養うて懼れなかった勇者である。公孫丑上に、「孟施舍之所レ養レ勇也、曰視レ不レ勝猶レ勝也、量レ敵而後進、慮レ勝而後會、是畏二三軍一者也、舍豈能爲二必勝一哉、能無レ懼而已矣」。

孟子・梁の惠王に語って曰く、庖に肥えたる肉有り、野に餓莩あるは、獸を率いて人を食はしむるの君、民いづくんぞくみせん、刑罰を省き、稅斂を薄くし、仁政を施さば、民進んで堅甲利兵をも碎きつべし（千疋犬）

「餓莩」はその條を見よ。梁惠王上篇に、「梁惠王曰、寡人願安承レ教、……（孟子）曰庖有二肥肉一、廐有二肥馬一、民有二飢色一、野有二餓莩一、此率レ獸而食レ人也、獸相食且人惡レ之、爲二民父母一行レ政、不レ免下於率レ獸而食上レ人、惡在二其爲二民父母一也」。また同篇に、「王如施二仁政於民一、省二刑罰一、薄二稅斂一、深耕易耨、壯者以二暇日一、脩二其孝悌忠信一、入以事二其父兄一、出以事二其長上一、可レ使三制レ梃以撻二秦楚之堅甲利兵一矣」。

明王の佃獵には云云（五人兄弟）

「うばう」を見よ。

敝れたる藁沓を脫ぎ棄つ　明朝の封祿は、敝れたる藁沓を脫ぎ棄てたりと顧みず（國性爺後日）

惜しげなく棄てるさまに譬ふ。盡心上篇に、「舜視レ棄二天下一、猶レ棄二敝蹝一」。

れいたい　文王の靈臺は民悅んで造ると云ふ（國性爺後日）

梁惠王上篇に、「文王以二民力一爲レ臺爲レ沼、而民歡二樂之一、謂二其臺一曰二靈臺一」。

女に餘んの布あり、男に餘んの粟あり（國性爺後日）

滕文公下篇に「農有二餘粟一、女有二餘布一」。

文選に據れるもの

己が古鄕の北風に勇んで嘶ふ勢や（堀川波鼓）

巻二十九・古詩に、「胡馬依二北風一、越鳥巢二南枝一」。

籠の中の鸚鵡檻に順って俯し仰ぎ、戶牖を闚って羽づくろひす、紺の趾丹き嘴、綠の衣翠き衿、金精の妙質火德の明輝、辯才聰明にして能く物言ふ、靈鳥いかんぞ時の險しきに遭へる（女護島）

巻七、賦庚、禰正平の鸚鵡賦に、「惟西域之靈鳥、挺二自然之奇姿一、體二金精之妙質一、含二火德之明輝一、性辯慧而能言兮、才聰明以識レ機、……、紺趾丹觜、綠衣翠衿、……、奚遭二時之險巇一、……、順二籠檻一以俯仰、闚二戶牖一以踟躕、……」。

而無レ妻曰レ鰥、老而無レ夫曰レ寡、老而無レ子曰レ獨、幼而無レ父曰レ孤、此四者天下之窮民而無レ告者」。

＊くわんやく 管籥の聲・羽旄の美、欣欣然と喜びて君が御狩を待ち顔に（蟬丸）

〔管籥〕管も籥も笛である。梁惠王下篇に、「今王鼓二樂於此一、百姓聞二王鐘鼓之聲、管籥之音一、擧欣欣然有二喜色一」。趙註に、「管笙・籥簫、或曰、籥若レ笛而短有二三孔一」。段玉裁云、凡竹爲者皆曰レ管」。

狗彘人の食を食へども制することと能はずといふ聖人の詞當れるかな（千疋犬）

狗は犬、彘は豬である。聖人は孟子をさしたのである。梁惠王上篇に、「狗彘食二人食一而不レ知レ檢、塗有二餓莩一而不レ知レ發、人死則曰、非レ我也歲也、是何異下於刺レ人而殺レ之、曰中非レ我也兵上也」。

五十步を以て百步を笑ふ（枕狩）

五十步敗走したのも百步敗走したのも其步に差こそあれ、にげたことに於て同一である、それに五十步にげたからとて百步にげた者を笑ふは、恰も啞者が聾者を笑ふの類である。梁惠王上篇に、「孟子對曰、王好レ戰、請以レ戰喩、塡然鼓レ之、兵刃既接、棄レ甲曳レ兵而走、或百步而後止、或五十步而後止、以二五十步一笑二百步一則何如、曰、不可、直不二百步一耳、是亦走也」。

滄浪に冠を濯ひ口すすぐ 世の時を見て滄浪に冠を濯ひ口すすぐ秦の川勝といふ武士あり（聖德太子）

世俗に染まず身を潔くする意。滄浪は禹貢に、「嶓冢導レ漾東流して漾となり、又東して滄浪の水となる」と見えてゐる。離婁上篇に、「有二孺子一歌曰、滄浪之水淸兮、可三以濯二我纓一、滄浪之水濁兮、可三以濯二我足一、孔子曰、小子聽レ之、淸斯濯レ纓、濁斯濯レ足矣、自取レ之也」。

怵惕惻隱は仁の端（賀古敎信）

「怵惕」は驚懼の貌、「惻」は傷の切なのをいひ、「隱」は痛の深きを云ふ。公孫丑上篇に、「今人乍見二孺子將一レ入二於井一、皆有二怵惕惻隱之心一、非三所三以內二交於孺子之父母一也、非レ所三以要二譽於鄕黨朋友一也、非下惡二其聲一而然上也、由レ是觀レ之、無二惻隱之心一非レ人也、無二羞惡之心一非レ人也、無二辭讓之心一非レ人也、無二是非之心一非レ人也、惻隱之心仁之端也」。

須彌山を挾んで大海を飛び越ゆ（關八州）

梁惠王上篇に、「挾二太山一以超二北海一」とあるを改作したもの。

すうげう 往來の老若男女・すうげうの者・雉兎の者・柴賣る賤も立どまり（天智天皇）刄物を堅く禁制は民を憐む明王の、芻蕘の者雉兎の者、悦ありや此の所（吉岡染）

〔芻蕘〕傾城吉岡染（山本九兵衛版・八行本）のここの文に、「芻蕘」に「すうげう」と假名が附けてある。蓋し「芻蕘」を「すうげう」「すうぜう」の兩樣に讀まれたもので、下學集にも、「芻蕘」芻刈レ草者也、蕘取レ柴者、毛詩詢二于芻蕘一」とありて、「蕘」に「ぜう」「げう」の兩樣の振假名がしてある。（慶長十一年寫本の下學集には、「芻蕘」に「すうぎよう」と傍訓してある）。「芻」は草を取るもの即ち草刈を云ひ、「蕘」は薪を取るもの即ち樵夫を云ふ。孟子・梁惠王下篇に、「芻蕘者往焉、雉兎者往焉」。

性は善なる涙なり（生玉）

人の性はもともと善なるものである。放蕩な蕩平次も目前に親の慈悲心の深いのを見ては、忽に本性の善に歸つて落涙したのである。人性は善であるとの說は孟子の極論したところである、委しくは公孫丑上篇、四端の章について見よ。

是に似たる非あり 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな（蛙合戰）

眞の非は人も能く知つて惑ふことなけれども、一見善なるやうに見えてその實非なるものがある、これは人を最も惑はすものである。程明道の詞とあれども何に見えてゐるか見當らない。盡心下篇に、「惡二鄕原一恐三其亂レ德也」とありて、朱熹集註に、「尹子曰、爲三其似レ是而非、惑二人之深一也」と見えてゐる。朱熹も尹焞も程子に就いて學んだ人であるから、程明道の詞にいひなしたのであらう。程明道は程顥のことで宋時代の大儒である。

太山をわきはさんで北海を超ゆることは能はず、王の王たるは能はざるにあらずとかや（國性爺）

梁惠王篇に、「挾二太山一以超二北海一、語レ人曰我不レ能、是誠不レ能也、爲二長者一折レ枝、語レ人曰我不レ能、是不レ爲也、非レ不レ能也、故王之不レ王、非下挾二太山一以超二北海一之類上也、王之不レ王是折レ枝之類也」。唐船噺今國性爺に、「太山をわきはさんで北海は飛超ゆるとも、不道を以て代を奪はんとは能はぬ事」とあるのも、孟子に據つたもので、太山をわきはさんで北海を飛超えることは勿論不可能のことであるが、よしや可能のこととしても、不道を行つて天下を奪はうとは到底出來得べきものでないの意。

大舜天下を棄つるを視る事敝れたる蹤を脫ぐが如し、唯父母に隨うて愁を解くとかや（浦島）

舜帝は天下を棄てて惜まないこと、恰も破れた草履を脫棄てて更に惜まない如きである。唯父母と居れば欣然と樂んで愁を解くのである。盡心上篇に、「舜視レ棄二天下一、猶レ棄二敝蹝一也、竊負而逃、遵二海濱一而處、終身訢然、樂而忘二天下一」。

大人は非禮の禮にかかはらず、かるが故に義によつて其親しきを滅すとかや（非同）

大德の人は禮に似て禮にあらざることは爲ない、故に義理を全うせう爲には父子兄弟の私親をも滅すと云ふ。離婁下篇に、「孟子曰、非禮之禮、非義之義、大人弗レ爲」。左傳・隱公四年の條に、「大義滅レ親」。

たんしこしやう 降參の者どもはつと簞食壺漿して、大御酒茸物御前に列れ（日本武尊）御知行の百姓は簞食壺漿とやらでお迎に出で（千疋犬）

〔簞食壺漿〕簞は竹器、食は飯である。飯を竹器に盛り漿を壺に容れたるをいひ。行旅の携

ぐふたいてんのかたき 俱不戴天の敵を討ち（會稽山）

〔俱不戴天の敵〕俱に天を戴かぬ敵卽ち君父の讐をいふ。曲禮に、「父讐弗二與共戴一レ天」。

君子ここに心を盡す 一國を領し一郡を治むる者心を盡すは刑罰の一事、一人を殺すさへいかばかり心を用ゆるとか思ふ、故に君子ここに心を盡すと禮記と云ふ書に見えたり（國性爺後日）

王制篇に、「凡作二刑罰一輕無レ赦、刑者侀也、侀者成也、一成而不レ可レ變、故君子盡レ心レ焉」。

刑罪極まつて三度奏す 刑罪極まつて三度奏するなどとは天下一統の代の政（國性爺）

王制篇に、「成二獄辭一、史以二獄成一告二於正一、正聽レ之、正以二獄成一告二于大司寇一、大司寇聽二之棘木之下一、大司寇以二獄之成一告二於王一、王命二三公一參二聽レ之、三公以二獄之成一告二於王一、王三又然後制レ刑、云云」。

左道を執つて政を亂り、僞を行ひて衆を疑はしむるを殺すといふ（國性爺後日）

左道は邪道である、人道右を尙ぶを貴となす、故に正之術に非ざるを左道と云ふ。王制篇に、「執二左道一以亂レ政殺、作二淫聲異服奇技奇器一、以疑レ衆殺、行僞而堅、言僞而辯、學レ非而博、順レ非而澤、以疑レ衆殺、云云」。

臣憂ふる時は君ともに憂ふ（井筒）

緇衣篇に、「君以レ民爲レ體」。韓非子に、「上下相與同レ憂久矣」。

父の讐俱に戴く天の罰（加増會我）

曲禮に、「父讐弗二與共戴一レ天」、とあるを作りかへたのである。

佞人の詞は甘き事蜜の如く、人を損ふこと刄よりなほ速なり（嫗山姥）

勉めて顏色を和げて人の氣に入らうとし、人の意を迎へて巧みに飾りていふねぢけ人の詞は、蜜のやうに甘けれども、忽にこれが爲に身を危殆に導くこと、なほ刄で身を害するよりも速である。表記篇に、「君子淡以成、小人甘以壞」。莊子・山木篇に、「小人之交甘如レ醴」。

娶る時は必ず父母に申すと、禮記とかやにもありと聞く（會稽山）

卷三十、坊記篇に、「取レ妻如レ之何、必告二父母一」。

老子に據れるもの

矜は愚人の病にして禍その身に及ぶと云へり（雙生隅田川）

老子・第二十五章に、「自矜者不レ長」。

千里も一歩に始まれり（吉岡染）

老子第六十四章に「九層之臺、起二於累土一、千里之行、始二於足下一」。白居易の續座右銘に「千里始二足下一高山起二微塵一」。

大國を治むるは小鮮を煮るが如く、雜喉小鮒を煮るにいらひ過せば、鱗も鰭も一つに崩れその魚の形を失ふ、云々（關八州）

小鮮は小魚である。老子に、「治二大國一若レ烹二小鮮一、以レ道莅二天下一其鬼不レ神、云々」とありて、王注に「若レ烹二小鮮一者不レ擾也、躁則多レ害、……以レ道莅二天下一、則其鬼不レ神也、神不レ害二自然一也、物守二自然一則神無レ所レ加、云々」。

天長地久 源氏の御代は裏釘返し、天長地久なるべきに口惜しや淺ましや（源義經）

天の長く地の久しきが如く、萬萬歲を經ても變らぬこと。老子に、「天長地久、天地所二以能長且久一者、以三其不二自生一、故能長生」。

***天の網** 我我は天の網、とてものがれぬ命のうち、親達に逢ふからは、かばれた鎗で突かれても（大經師） 此處まで迷ひ來て天の網・地の縄に搦められし此惣七（博多）

天の網は廣大で、その目疎なるがやうなれども、一人も漏すことなく、善をなした者には必ず善報があり、惡をなした者に必ず惡報がある。老子に、「天網恢恢疎而不レ失」。「心中天の網島」といふ外題も、天の網に網島（五八五頁を見よ）をいひかけたものである。

列子に據れるもの

榮啓期が三樂を歌ひしにも、女人に生れざるを一樂とすと捨てたり（大覺）

天瑞篇に、「榮啓期鹿裘帶索鼓レ琴而歌、孔子問曰、先生樂何也、期曰、天生二萬物一、惟人爲レ貴、吾既得レ爲レ人、是一樂也、男女之別、男尊女卑、吾得レ爲レ男矣、是二樂也、人生有下不レ免二襁褓一者上、吾行年九十矣、是三樂也」。

えんし 唐土の偃師といふ者人形を作つて、手足を働き物を言はする機械にて敵をはかりし例あり（懸物揃）

〔偃師〕周穆王時代に居た傀儡師である。湯問篇に、「周穆王西巡狩、道有二獻レ工人一名二偃師一、王問曰若有二何能一、曰臣有レ所レ造、願王觀レ之、翌日謁二見王一、王曰若與偕來者何人、對曰臣之所レ造能倡者、王觀レ之趣步俯仰信人也、巧夫鎭二其頤一則歌合レ律、捧二其手一則舞應

「おぼしま」は樊檻であらうか、巢林子は樊檻をかく訓み、鳥籠のことである。戸牖は鳥籠の窓。鸚鵡は西域に産する靈鳥なるによつて金に西方の金となす、精の妙質といひ、容を翡なるによつて一に火、南方の火となす、徳の明輝といふ。險しきは險難の意。

渇しても盜泉の水を飲まず（雪女）

渇しても盜泉の水は飲まず（國性爺後日）

よし困難に遭つても、ここ不義はしないとの喩。陸機の猛虎行に、「渇不レ飲二盜泉水一」。

金精の妙質火德の明輝

前項の中の鸚鵡賦云云」を見よ。

古郷の北風に勇んて嘶ふ 堀川波鼓）

胡馬は北風吹けば勇んで嘶く、そのやうに故郷はなつかしいものである。卷二十九・古詩に、「胡馬依二北風一、越鳥巢二南枝一」。

※**胡馬北風に嘶ふ**（會稽山）

胡馬は生國北方なれば、北風に依望し故國を慕うて嘶くと云ふ。卷二十九・古詩に、「胡馬依二北風一、越鳥巢二南枝一」。玉篇に、「嘶、音西、馴以藏山、俗云以奈奈久、馬鳴也」。「嘶ふ」は「いはゆ」ともいふ、和名抄に「嘶」。

仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず、慈ある父も益なき子は愛する事能はず（國性爺合戰）

卷十九・曹植求自試表に、「慈父不レ能レ愛二無レ益之子一、仁君不レ能レ畜二無用之臣一」。

蓼の蟲の葷葵を去るは、苦きに馴れて苦きを知らず（天神記）

放歌行に、「蓼蟲避二葵藿一、習レ苦不レ言レ非、小人自嫌醜、安知二曠士懷一」。

貞松は年の寒きに彰はれ、忠臣は國の危きに見ゆ（今川了俊）

卷五・潘岳（字は安仁、晉時代の人）の西征賦に、「勁松彰二於歳寒一、貞臣見二於國危一」。

鳥は古巢を慕ひ、北國の馬は北風に嘶く（氷朔日）

禽獸すら故鄕を懷しく思ふの意。卷二十九・古詩に、「胡馬依二北風一、越鳥巢二南枝一」。謠曲・東北に、「鳥は古巢に歸るぞと」。

野飼の駒の優しくも古鄕の風の北にいばえて嘶けば（用明天皇）（二枚繪）

卷二十九・古詩に、「胡馬依二北風一」。

はうび白髮 はうび白髮の老翁二人石上に碁盤を据ゑ（國性爺）

〔龐眉白髮〕老人の大なる眉で白髮なること。卷八・張平子の思玄賦に「尉龐（一本彪に作る、彪は蒼の義）眉云云」とあつて、註に「龐眉皓髮云云」とある。

林にすぐれて高き木の青砥五郎が出頭を故參の侍猜みたて（今川了俊）

卷二十七、李蕭遠の運命論に、「獨立之負二於俗一、理勢然也、故木秀二於林一、風必摧レ之」。

貧家には古人疎し（大織冠）

家貧なるときは故舊の人ゐ疎遠にして訪問せぬ。卷八、晉の曹顏遠の感舊詩に、「貧賤親戚離」。

不孝の子は慈ある父も養はずといふ 川中島）

曹植求自試表に「慈父不レ能レ愛二無レ益之子一」。

巫山の神女雲となり雨となり好し（小栗判官）

常陸小萩の美容をいふに巫山の神女が旦に朝雲となり暮に行雨となるといふ故事に據つたのである。「雨となり好し」は、「雨と爲り」の「爲り」に「容姿好し」をいひかけたのである。卷十・宋玉の高唐賦に、「昔者先王嘗游二高唐一、怠而晝寢、夢見二一婦人一、曰妾巫山之女也、爲二高唐之客一、聞君游二高唐一、願薦二枕席一、王因幸レ之、去而辭曰、妾在二巫山之陽高丘之岨一、旦爲二朝雲一、暮爲二行雨一、朝朝暮暮陽臺之下、旦朝視レ之如レ言、故爲立レ廟、號曰二朝雲一」。（序云、巫山は四川省夔州府巫山縣の東に在る。高唐賦のこの文は、先王が夢に巫山の神女と契つたが、その神女は實は雲であつたといふので、あるが、これと別に巫山の神女のことが「弘徽殿鵜羽産家」にも見えてゐる。「秦の始皇の御顏に云云」（五五五頁）を見よ）。

揚雄が甘泉の賦を作り、文章に案じ勞れ寢し夜の夢に五六腑を吐くを見て、その朝より心神疲れ果てしとかや（蛙合戰）

揚雄、字を子雲といひ漢時代の學者である。重訂文選集評・卷二、揚子雲甘泉賦の題下の註に、「桓譚新論」雄作二甘泉賦一首一始成、夢二腸出收而入レ內、明日遂卒」とあるに據つたのである。

越鳥南枝に巢をかけ、胡馬北風に嘶ふ（國性爺）

越に支那南方の國である、その越から來た鳥は南枝に巢をつくり、また胡は北狄である、その胡から來た馬は北風に嘶くといふことで、故鄕を慕ふに喩ふ。卷二十九・古詩に、「胡馬依二北風一、越鳥巢二南枝一」。

禮記に據れるもの

汗の如き綸言 汗の如き綸言、かへつて爲義御助け候はば（鎌田）

綸言は王言の意。天子の言は一たび出づれば反らざること、恰も汗が體内に反らざるが如きによつていふ。緇衣篇に、「子曰、王言如レ絲、其出如レ綸、王言如レ綸、其出如レ綍」。文心彫龍に、「其出如レ綍、不レ反若レ汗」。

狐は死して岡部の六彌太（會稽山）

狐は死ぬる時、首を住んでゐた丘の方に向けるといふ故事によつて、狐は死して丘を岡部の姓にかけたのである。檀弓篇に、「古之人有レ言、曰、狐死正丘レ首仁也」。

國に杖つき九九に餘りしことぶきの（今川了俊）

國都を歩くに杖を用ひ八十一歳を超えた壽の意。王制篇に「五十杖レ於レ家、六十杖レ於レ鄕、七十杖レ於レ國、八十杖レ於レ朝、云云」。

君は禮を以て使ひ、臣は忠を以て君に事ふ（傾城八花形）

八佾篇に、「君使レ臣以レ禮、臣事レ君以レ忠」。

義を見て爲ざるは勇無し（鎌田）（川中島）（源義經）

義まさに爲すべきを見ながら、なほ逡巡して敢て爲さざるは勇氣が無いものである。爲政篇に、「子曰、非二其鬼一而祭レ之諂也、見レ義不レ爲無レ勇也」。

朽ちたる木をば雕るべからず 聖人の詞は違ひなし、朽ちたる木をば彫るべからずとは、今こそ思ひ知られたれ（西王母）

公冶長篇に、「宰予晝寢、子曰、朽木不レ可レ雕、糞土之牆不レ可レ杇也、於レ予與何誅」。

關雎は樂しんで淫せず（娍）

詩經・周南の首篇にある關雎の詩は、后妃の美德に出でて其辭も正しい、故にこの詩を謠つて樂しんでも、樂しみの度に過ぎて淫靡になるやうなことはないとの意。八佾篇に、「關雎樂而不レ淫」。「いうえんくわんしよ」「關關たる雎鳩云々」をも見よ。

君子は宿鳥を射ずといふ（用文章）

君子は寢鳥の不意を襲うて之を射るやうな罪なことは、爲すに忍びないによつて爲さないといふ。述而篇に、「子釣而不レ綱、弋不レ射レ宿」。

君子は日に三たび吾身を省るといへり（天智天皇）

學而篇に、「曾子曰、吾日三省二吾身一、爲レ人謀而不レ忠乎、與二朋友一交而不レ信乎、傳レ不レ習乎」。

賢に易へて色を重んじ（一心五戒魂）

學而篇に、「賢レ賢易レ色」とあるを作りかへたのである。

孔子も怪力亂神を誡めらる（虎が磨）

孔子も物怪の事や匹夫の勇力や悖逆の事は敎化に益なく、神の事は人智の及ばない所として、これ等の事は語つたり行つたりせぬやうに誡められた。述而篇に、「子曰、不レ語二怪力亂神一」。

孔子も道行はれずといへり（井筒）

「道行はれず」を見よ。

公冶長は刑戮にかかる 文王は羑里に囚はれ、公冶長は刑戮にかかれり（出世景淸）

公冶は姓、長は名である、孔子の弟子で賢者なりしかども、無實の罪を受けて獄に投ぜられたことがある。公冶長篇に、「子謂二公冶長一、可レ妻也、雖レ在二縲絏之中一、非二其罪一也、以二其子一妻レ之」。

心のゆくところ志 御行方の知れざれば、よしよし心のゆく所志ともいふなればと、思ひ込みつつ大津道（西王母）

心の之く所これを志といふ。爲政篇に、「子曰、吾十有五而志二於學一」とありて、朱註に「心之所レ之謂二之志一」と見えてゐる。

これをも忍ぶべくんば孰れをか忍ばざらん（天神記）

なほ能く忍んでこれを爲すならば、如何なる非行でもまた能く忍んで爲されるであらう。八佾篇に、「孔子謂二季氏一、八佾舞二於庭一、是可レ忍也、孰不レ可レ忍也」。

三年父の道を改めずとは儒敎の敎（用明天皇）

三年は父死して其喪にある間である、父の行つてゐた事はよしや少少の不都合があつても、子たる者は三年間は改めないで其儘に行ふことが孝の道である。里仁篇に、「子曰、三年無レ改二於父之道一可レ謂レ孝矣」。

子の燕居せるとき申申如たり夭夭如たり（蘂靜）

孔子が閒暇無事で家に居る時は、其容貌寛舒で和悅である、蓋し德內にあるによつて、その德が容貌顏色に現はれてゐるのである。述而篇に、「子之燕居、申申如也、夭夭如也」。

思無邪の三字は神拜の元本、毋不敬の三字は祭典の至用、神を祭ること神の在すが如くずべしといへり（天智天皇）

「思無レ邪」は正に歸す、卽ち誠である。「毋レ不レ敬」は敬に歸す。思無邪の三字卽ち誠は神拜の元本である。毋不敬の三字卽ち敬は祭典の至用である。神を祭る事は神が來り在すものと思うて誠敬を盡すべきであると云うてあるとの意。爲政篇に、「詩三百、一言以蔽レ之、曰思無レ邪」、とありて朱注に、「程子曰、思無レ邪者誠也、……經禮三百・曲禮三千、亦可二以一言以蔽一レ之、曰毋レ不レ敬」。八佾篇に、「祭レ神如二神在一」。

上知と下愚とは移らず（大礒虎）

常人は習慣の善惡によつて或は賢ともなり愚ともなる、されども上知の者と下愚の者とは一定して、習では移されぬものである。陽貨篇に、「子曰、唯上知與二下愚一不レ移」。

松柏の凋むに後るるとや（孕常盤）

歲大いに寒うして萬木凋落する後に至つて、獨り松柏挺然として其操を變へぬ、以て君子は一旦事變に遭遇してもその節挺然として見るべきものあるに喩ふ。子罕篇に、「子曰、歲寒然後知二松柏之後一レ凋」。

素きを後 素きを後と花の雪、野山や春を描くらん（反魂香）

繪畫はまづ彩色を施し、後に白粉を以てその間に分布し、以て彩色を引立つやうにする。ここの文は、八佾篇に、「繪事後レ素」とあるを引用して、「花の雪」にいひつづけ、素と雪との縁によつて文を飾つたのである。傾城反魂香は繪師に關する淨瑠璃であるによつて、冒頭から繪に關する故事を用ゐたのである。

浸潤の譖・膚受の愬 浸潤の譖・膚受の愬行はれざる明王の御代傳はりて六十六代（關八州）

「浸潤」は水の紙などを漸漸浸し潤すを云ひ、「譖」は人の行爲を毀るをいふ。「膚受」は肌に受ける所の利害の身に切なるを云ひ、「愬」は己が寃を訴へるをいふ。人を毀るに漸を追うて巧に言ひ廻すこと、恰も水の紙を浸し潤すがやうにして急がないときは、聽く者知らず知らず之を信ずることとなる。又己が寃を訴へることが急で、身に切に片時も忍ぶことが出來ないやうに告げて來るときは、遂に聽く者その言に動かされて、委しう調べないで之に雌ずる者である。この浸潤の譖と膚受の愬とは人の察知し難く、情に引かれて判斷を誤

レ節、千變萬化唯意所レ適、王以爲二實人一也、與二盛姫內御一竝觀レ之、技將レ終、倡者瞬二其目一而招二王之左右侍妾一、王怒欲レ誅二偃師一、偃師立剖二散倡者一以示レ王、皆傅二會革木一、膠漆白黑丹靑之所レ爲」。

ぢよくわ 女媧と云ふ聖君、赤白の金石を鍛へ柱とし、傾く天をささげしより(唐船噺)

〔女媧〕支那太古の女帝であつて、伏羲の妹であるといふ。湯問篇に、「昔者女媧氏、錬二五色石一以補レ天、斷二鼇足一以立二四極一」。

芭蕉の鹿 牡丹の胡蝶芭蕉の鹿、いづれを指して現とも覺めたる我を知らざれば、夢路を夢と誰か知るべき(國性爺後日)

樵夫鹿を獲、之を隍中に隱し芭蕉でその上を覆うて置いて、其の處を忘れて鹿を獲たのは夢であつたと思うたといふことで、覺夢の辨じ難きをいふ。周穆王篇に、「鄭人有下薪二於野一者上、遇二駭鹿一御而擊レ之斃レ之、恐二人見一レ之也、遽而藏二諸隍中一、覆レ之以レ蕉、不レ勝二其喜一、俄而遺二其所レ藏之處一、遂以爲レ夢焉、順レ塗而詠二其事一、傍人有二聞者一、用二其言一而取レ之、既歸告二其室人一曰、向薪者夢得レ鹿而不レ知二其處一、吾今得レ之、彼直眞夢者矣、云云」。

もろこしのえんし 「えんし」を見よ。

論語に據れるもの

朱を奪ひし紫 朱を奪ひし紫の、色爭ひも疑ひも、又は妬みも嵐吹く(吉野忠信) あけて奪ふも紫袂紗、印判そつと取出し(大經師)

陽貨篇に、「惡二紫之奪一レ朱也」。この意は、紫は間色(まぜあはせの色)なれども、艶美なるによつて人人その色を好み、朱の正色を奪ひ取つてこれに代るを惡む、佞人が君に忠實らしう媚びへつらうて、終に國家を傾け敗るに至るを惡むといふのであるが、ここの文はそれまでの意ではなうて、文飾に故事を引用したまでである。「あけて奪ふも紫袂紗」は、紫袂紗を明けて奪ふである。

朱を奪ふ名を立てて、唐土人は惡めども、かの一本の初ゆかりゆかしなつかし(融大臣)

陽貨篇に、「子曰、惡二紫之奪一レ朱也」。古今集卷十七、雜歌上、業平朝臣の歌に「紫の一本故に武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」。

過つては改むるに憚ること勿れ(田村將軍)

人は思はないで理に違ふことを爲ることがあるものである。そのやうな過失をした時は畏れ憚らないで速に悔い改めるべきである。學而篇に、「過則勿レ憚レ改」。

いうえんくわんしよ 優艷關雎の樂しみ、君穩に民安く(女夫池)

〔優艷關雎〕優艷は和らぎみやびやかなこと。關雎は詩經・周南の首篇で、文王と后妃とが琴瑟和合して、后妃の德を頌した詩である。即ち夫妻相和せし德の爲に、下民其感化によりて、夫婦の道正しくなつた。八佾篇に、「子曰、關雎樂而不レ淫、哀而不レ傷」。

一簞の食一瓢の飲これ顏回が樂しみ(川中島)

平生食ふところのものは一簞の飯、飲むところのものは一瓢の水漿に過ぎぬ。この窮境にあつても泰然として顏回は學を好んで道を樂しんだ。雍也篇に、「子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飮、在二陋巷一人不レ堪二其憂一、回也不レ改二其樂一、賢哉回也」。朱註に、「簞、竹器食飯也、瓢、瓠也」。

古の聖代に臣五人あつて天下大いに治るとや(天神記)

泰伯篇に、「舜有二臣五人一而天下治」。臣五人とは帝舜の臣五人のことで、即ち禹・稷・契・皐陶・伯益を云ふ。昔帝舜はこの賢臣五人あり、相輔けて天下大いに治つた。

色の德には隣あり(重井筒)

里仁篇に、「德不レ孤必有レ隣」とあるをもぢつたのである。

浮世の富貴は浮べる雲(浦島)

「うかべるくも」を見よ。

牛を割くに雞の刀を用ゐんとや(國性爺後日)

大小相適せぬをいふ。陽貨篇に、「夫子莞爾而笑曰、割レ雞焉用二牛刀一」の逆用である。

奪ふも紫 「あけを奪ひし紫」(五四六頁)を見よ。

えきしやさんいう(娥)

〔益者三友〕己に益ある友に三樣ある。季氏篇に、「孔子曰、益者三友、損者三友、友レ直友レ諒友二多聞一益矣、友二便辟一友二善柔一友二便佞一損矣」。

夏は殷の昔、殷は周の昔、その昔の禮に因りて損益する所を知らば、百萬代の末かけて(井筒)

夏・殷・周と世は變り、時勢に隨つて禮の細目を或は損し、或は益したことは、その時代の典籍によつて知らるべく、禮の大綱は百萬代の末かけて決して變改あることはない。爲政篇に、「子曰、殷因二於夏禮一、所二損益一可レ知也、周因二於殷禮一、所二損益一可レ知也、其或繼レ周者、雖二百世一可レ知也」。

かぶん 我何ぞ下聞を恥ぢんと宣ふ所へ(酒呑童子)

〔下聞〕己より下位または己れより年少な目下の者に問ひ聞くこと。公冶長篇に、「敏而好レ學、不レ恥二下問一」。

君君たれば臣もまた臣(堀川波鼓)

(文武五人男)

君は君たる道を盡し、臣もまた臣たる道を盡すこと。顏淵篇に、「齊景公問二政於孔子一、孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子」。

て非を責めるは之を暴といふ。堯曰篇に、「子曰、不レ教而殺、謂二之虐一、不レ戒視レ成、謂二之暴一」。

和漢朗詠集に據れるもの

曉梁王の園に入らざれども、雪群山に滿つ、夜庾公が樓に登らねども、月千里に明なり（冷泉節）

「梁王の園」とは、梁の孝王の兎園をいふ。五臺山・終布山等の名高い山の形を築いて、その雪景色を眺め觀望の趣を極めたといふ故事。「庾公が樓」とは、晉の庾亮が南樓に上つた故事。

和漢朗詠集・冬部、謝觀の詩に、「曉入二梁王之苑一、雪滿二群山一、夜登二庾公之樓一、月明二千里一」。

遊子なほ殘月に行く（弘徽殿）

「佳人盡く晨粧を飾り云云」を見よ。

***一張の弓の勢　御代萬歲の御目見え、一張の弓の勢たり**（日本武尊）

將軍の威勢をいふ。和漢朗詠集に將軍の題にて、「三尺劍光氷在レ手、一張弓勢月當レ心」。

瑤臺霜滿てり、一聲の玄鶴天に啼く、巴峽秋深し、五夜の哀猿月に叫ぶ（孀山姥）

瑤臺は「たまのうてな」であつて仙人の居る所。玄鶴は黑鶴である、鶴二千歲を經れば羽色黑に變ずと云ふ。巴峽は支那荊州にある。五夜は夜の五更（午前四時頃）をいふ。仙家の瑤臺に霜滿ちて、玄鶴一聲高空に鳴き、巴峽秋深うして、五更の月下に猿の哀聲を聞くは、實に淸淒の感に打たれることぢや。和漢朗詠集・雜部、謝觀淸賦に、「瑤臺霜滿、一聲之玄鶴唳レ天、巴峽秋深、五夜之哀猿叫レ月」。

同じく惜む春なれや、花を踏んだる駿足（融大臣）

和漢朗詠集・卷上、白居易の春夜の詩に「背レ燭共憐深夜月、踏レ花同惜少年春」。この全詩は白氏文集卷十三に出てゐる。

耿耿たる燈火も共にあはれむ深夜の月（天智天皇）

耿耿は光のあきらかなるをいふ。和漢朗詠集・春夜、白居易の詩に、「背レ燭共憐深夜月、踏レ花同惜少年春」。

柑子は蒸せる粟の餠、鼠も所の男山女郎花とぞなりにける（弘徽殿）

和漢朗詠集・秋の部、源順の詠二女郎花一の詩句に、「花色如二蒸粟一、俗呼爲二女郎一」とあるのと、古今集の序に、「男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねるにも」とあるとに據つたのである。

佳人盡く晨粧をかざり、魏宮鐘動いて、遊子猶殘月に行く（弘徽殿）

和漢朗詠集・雜部、賈島の曉賦に、「佳人盡飾二於晨粧一、魏宮鐘動、遊子猶行二於殘月一、函谷鷄鳴」とあるに據つたのである。魏王宮中の美女が曉こめて化粧する頃、曉の鐘鳴り響き、出遊する旅客が函谷關を殘月に行く頃、鷄鳴いて朝を告げるとの意。（序云、曉賦の魏宮は齊國宮中のことを誤つたものであらう。淵鑑類函・居處部に、「齊書曰、置二鐘于景陽樓上一、令二宮人聞二鐘聲一、早起妝飾」と見えてゐる）。

嘉辰令月歡び極りなし、萬歲千秋樂しみ未だ盡きず（大掛物）

嘉辰令月とは、元三・上己・端午などの目出度よろこばしい時節をいふ。辰は時また日の義、令は善の義。泰平の聖代、嘉辰令月に當つて極りない歡がある、千秋萬歲を經べき御世であるによつて、今の樂しみはまだまだで、盡きないのであるとの意。和漢朗詠集・雜部、謝偃の雜言詩に、「嘉辰令月歡無レ極、萬歲千秋樂未レ央」。

風新柳の髮は梳る　風新柳の髮は梳れども、手にも取られぬつくも髮おどろの髮（浦島）

頭髮風に吹かれてはらはらすることを、和漢朗詠集・春之部、都良香の春暖の詩、「氣霽風梳二新柳髮一、氷消浪洗二舊苔鬚一」の句に據つたのである。

諫鼓苔深うして鳥驚かず、刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る（蟬丸）

「諫鼓」は昔時臣下の者が主君に諫言を上る時に打つた鼓である。「刑鞭」は罪人を打懲す鞭で、蒲で作つたもの。君王の德高く天下泰平なるによつて、臣下諫言を上るものなく諫鼓を打たねば、その下に苔深く生じ鳥も鼓の音に驚かず、また罪を犯す者なきによつて刑鞭を用ゐないので、徒に朽ちて螢に化して飛去るとの意。和漢朗詠集・江相公の詩に、「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不レ驚」。

岸の平砂を白波に照せば云々

「平砂を白波に云云」を見よ。

槿花一日　槿花一日椿壽八千春、天地と共にして百萬代も限なき（曉物揃）

槿花一日の榮（蟬丸）

和漢朗詠集・秋の部に、「槿花一日自爲レ榮」とある句に據つたのである。槿はムクゲのことでアサガホともいふ、ムクゲは木槿の字音を轉じたのである。槿花は朝に開いて夕に凋めども、一日の榮のおのづから足つてゐるとの意。また短き間の榮華の意にいふ。

***雲行客の跡を埋む　是より奧には人住む體もなく、雲行客の跡を埋み、初山櫻二ふさ三ふさ、ちりちり水の谷川や**（盛久）

和漢朗詠集・雜部、紀齊名が愁賦の詩に、「山遠雲埋二行客跡一、松寒風破二旅人夢一」。謠曲・一角仙人に、「山遠うしては雲行客の跡を埋み」。

蝸牛の角　蝸牛の角の上に何事をか爭ふ、石火の光のうちに此身を寄す（大掛物）　海野小太郎行氏・新田と武功の爭ひ、蝸牛の角のつのめ立ち、いどみはげむといへども（百日曾我）　今南京韃靼蝸牛の角

り易いものであるが、克くこれを察知してこの二者行はれざる明王の御代と云うたのである、顏淵篇に、「子曰、浸潤之譖・膚受之愬、不レ行焉可レ謂レ明也已矣」。

神を祭ること神の在すが如くす

「思ひ草の三字云云」を見よ。

小人の過は必ず文るといへり（田村寫蕈）

小人の過は改めようと思ふことは扨置き、過を取繕つてごまかさうとする。子張篇に、「子夏曰、小人過也必文」。

せつせつしし 今菅丞相が無實の罪に沈んで、恨の念力切切偲偲として切るが如く刺すが如し（天神記）

〔切切偲偲〕「切切」は懇到の意、「偲偲」は詳勉の意である。子路篇に、「子曰、切切偲偲怡怡如也、可レ謂レ士矣」。

父父たれば子も子たり（鐔丸）

顏淵篇に、「齊景公問二政於孔子一、孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子」。

父の道を改めぬは孝の一つ（聖德太子）

學而篇に「三年無レ改二於父之道一、可レ謂レ孝矣」。

罪を天に獲たれば祈るべき天も無し（天神記）

八佾篇に、「獲二罪於天一、無レ所レ禱也」。

德孤ならず 德孤ならず、尹の大納言師賢の猶子（用文章）

人の德ある者は孤立することなく、必ず類あつて之に從ひ親しむ。里仁篇に、「德不レ孤、必有レ鄰」。心中重井筒に「色の德には鄰あり」といへるも、論語にあるこの文を滑稽に作かへたのである。

鷄を割くに焉ぞ牛の刀を用ひん（川中島）

陽貨篇に、「子之二武城一、聞二弦歌之聲一、夫子莞爾而笑曰、割レ雞焉用二牛刀一」。

成りんじ事をば說かず、遂げんじ事をば諫めず、既に往んじを咎めず（娥）

八佾篇に「成事不レ說、遂事不レ諫、既往不レ咎」。「成りんじ」は「成りにし」、「遂げんじ」は「遂げにし」、「往んじ」は「往にし」の撥音化。

暴虎馮河して死するも厭はぬ大將には從はずと孔子も戒め（關八州）

「暴虎」とは虎を徒手にて搏つこと。「馮河」の馮は陵の義、河を徒渉すること。身命を輕んじて無謀なことをする者には從はないと孔子が子路の血氣の勇を戒められた。述而篇に、「子路曰、子行二三軍一則誰與、子曰、暴虎馮河死而無レ悔者吾不レ與也、必也臨レ事而懼、好レ謀而成者也」。

久しうして敬す 互の默禮慇懃に、久しうして敬すとはかかる事をや謂つべし（今川了俊）

人初めて交る時は相敬すれども、久しうなれば狎れて遠慮せず、遂に嫌隙を生じるに至るものである、然るに人と交はること久しうして愈これを敬ふは篤行の人である。公冶長篇に、「子曰、晏平仲善與レ人交、久而人敬レ之」。

匵に納めてかくさんか、價を求めて沽らんかと、論語は何と讀んだるぞ（國性爺後日）

子罕篇に「子貢曰、有二美玉於斯一、韞レ匵而藏レ諸、求二善賈一而沽レ諸、子曰、沽レ之哉、沽レ之哉、我待レ賈者也」。

ひつぷ 急ぎ匹夫が首取つて神慮なすずしめ（用明天皇職人鑑）

匹夫匹婦も志を奪はず（女護島）

〔匹夫〕一夫、または賤しい男の意にいふ。平家物語のこの文意は、匹夫匹婦といへども其守る所の志苟も堅ければ、其身は死んでも其志は奪はれない、蓋し其守る所已にあつて人の與る所でないからである。子罕篇に、「子曰、三軍可レ奪レ帥也、匹夫不レ可レ奪レ志也」。

非を改むるに憚なし（賀古教信）

學而篇に、「過則勿レ憚レ改」。

富貴は浮べる雲

「浮世の富貴は浮べる雲」を見よ。

膚受の愬

「浸潤の譖云云」を見よ。

父母います時は遠く遊ばず（大磯虎）

人の子たる者は父母の生存中は遠方へ出て遊んではならぬ、遠方へ出て遊ぶ時は定省溫凊を缺ぐばかりでなく、父母をして己の身の上を思ひ憂へしめるからである。里仁篇に、「子曰父母在不二遠游一、游必有レ方」。

道行はれず 既に孔子も道行はれずといへり（井筒）

公冶長篇に、「子曰道不レ行、乘レ桴浮二于海一」と見えてゐる。孔子が天下に賢君無く、人倫道德の道の行はれないのを歎じたのである。

＊**むらさき** 主人以春の巾着を明けて奪ふも紫袱紗、印判そつと取出し（大經師）

〔紫〕陽貨篇に、「子曰惡二紫之奪レ朱也」」とあるによつて、「明けて奪ふも紫」を「紫袱紗」にいひかけたのである。論語のこの文意は、紫は間色なれども艶美なるが故に、朱の正色を奪うて之に代るを惡むとの意。

物食ふ時んば物言はずと論語に書きしも理かな（賀古教信）

鄕黨篇に、「食不レ語、寢不レ言」。

弓矢の藝その爭は君子なりと、孔子もこれを譽め給ふ（會稽山）

八佾篇に、「子曰君子無レ所レ爭、必也射乎、揖讓而升下而飮、其爭也君子」。

夢にだも周公を見ず（天神記）

述而篇に、「子曰甚矣吾衰也、久矣吾不二復夢見二周公一」。

繪の事は素きを後 古語にも繪の事はしろきを後とゆふ波の（天智天皇）

繪畫はまづ種種の彩色を施し、最後に白粉の類を以て其間に分ち布いて、分采の引立つて美しう見えるやうにする。八佾篇に、「子曰、繪事後レ素」。傾城反魂香に、「素きを後と花の雪、野山や春をゑがくらん」とあるも、論語のこの文に據つたのである。

教へずして殺すを虐といひ、戒めずして成るを視る、之を暴といふ（扇八景）

豫め教へることをせず民の向ふ所を知らさないで、惡事をなしたからとて直に殺すは殘酷不仁の甚しいもので、之を民を虐ぐといふ、豫め戒め勵さないで、遽にその成功を檢視し

帳下、廬山雨夜草庵中」とあるに據つたのである。さてこの詩の意は、嘗ては尙書省にあつて花時三春の候は、錦帳の下に侍して共に盃を交したこともあつた、今は悲しい身となつて廬山下に草の庵を結び、獨わび住居して淚が雨のやうにふるとの意。「蘭省」は尙書省をいふ。「廬山」は匡廬山をいふ、周の時仙人匡裕がこの山に廬してゐたが故にこの名がある。

露菊の新花一半黃なり 露をふくみてうなづくは、露菊の新花一半黃なりけるとかや（伊豆日記）

露を帶びた黃菊の花既に半分だけは咲きそめたとの意。和漢朗詠集・秋部、菊、「霜蓬老鬢三分白、露菊新花一半黃」。

淮南子に據れるもの

江南の橘江北に植うれば枳となる（釋迦）（國性爺後日）

楊子江南の橘を楊子江北の地に植ゑれば枳に變じるやうに、人はその境遇によつて變化するとの喩。爾雅に、「江南種レ橘、江北爲レ枳」。淮南子に、「橘樹二之江北一、則化而爲レ枳」。

五星の天度十二周天二十八宿、北方の天に立ち給ふは、牛・女・危・室・虛・辰星、南天には翼・軫・鬼・柳・井・張・星、西方には奎・婁・胃・畢・太白星、東方の天に顯はれ給ふは、心・尾・氐・房・熒惑星・北辰・南極・七曜・九曜・破軍星（唐船噺）

淮南子・天官書に據れば、五星は木星（歲星）、火星（熒惑星）、土星（鎭星）、金星（太白星）、水星（辰星）をいふ。辰星は北方水德の精を乘り、二十八宿中の斗、牛、女、虛、危、室、壁の七星を主る。熒惑星は南方火德の精を乘り、二十八宿中の翼、軫、鬼、柳、井、張、星の七星を主る。太白星は西方金德の精を乘り、二十八宿中の奎、婁、胃、畢、昴、觜、參の七星を主る。歲星は東方木德の精を乘り、二十八宿中の心、尾、氐、房、角、亢、箕の七星を主る。また七曜は日、月、五星をいひ、九曜は七曜に計都星、羅睺星を加へていひ、破軍星は北斗第七星であつて、劍の狀をなすによつていふ。

廬山の雨の世捨人 助給一人前に心も細き鐘の聲、廬山の雨の世捨人、捨てても捨てぬ面影は（卯月潤色）

白居易が廬山の草庵に住んで雨の夜物淋しう感じた故事を、山寺に雨降つて物淋しい出家の身に引いて云うたのである。和漢朗詠集・白居易の詩に、「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」。巢林子作・弘徽殿鵜羽產家に、「蘭省の花の時ともに交せし盃も、廬山の雨とふる淚」と見えてゐる。「蘭省の花の時云云」を見よ。

小智は大道の妨げ（關八州）

淮南子に、「小快害レ義、小慧害レ道、小辯害レ治」。說苑に、「小快害レ義、小惠害レ道」。

人間萬事塞翁が馬（雪女）

人間の禍福は定め難きをいふ故事である。淮南子・人間訓に、「夫禍福之轉相生、其變難レ見也、近二塞上一之人有二善レ術者一、馬無レ故亡而入レ胡、人皆吊レ之、其父曰、此何知二遽不一レ爲レ福乎、居數月其馬將二胡駿馬一而歸、人皆賀レ之、其父曰、此何知二遽不一レ爲レ禍乎、家富二良馬一、其子好レ騎、墮而折二其髀一、人皆弔レ之、其父曰、此何知二遽不一レ爲レ福乎、居一年故人大入レ塞、丁壯者引レ弦而戰、近レ塞之人死者十九、此獨以二跛之故一父子相保、故福之爲レ禍禍之爲レ福、化不レ可レ極、深不レ可レ測也」。

墨子が白絲 止めても押へても聞入なければ詮方なき、染めてかへらぬ墨子が白絲、もつれの末こそうたてけれ（關八州）

墨子名は翟、白絲を見て染めやうによつては黃絲にもなり黑絲にもなる、その本が同じうして末の異るを悯み泣いたといふ。淮南子・說林訓に、「墨子見二練絲一而泣レ之、爲下其可二以黃一可中以黑上」。

養由が矢に啼く猿（三國志）

淮南子・說山訓に、「楚王有二白蝯一、王自射レ之、則搏レ矢而熙、使二養由基射一レ之、始調レ弓矯レ矢、未レ發而蝯擁レ柱號哭、有二先中一中者也」。

王者は愛を以て政を私せずとかや（兒が層）

淮南子・主術訓に、「人主之於レ用レ法無二私好憎一。

圓機活法に據れるもの

ちやうくわ 唐土の張華が名劍を得たる例、疑もなくこの邊に天下の重寶となるべき名劍埋れあるに極つたり（嫗山姥）

〔張華〕圓機活法・卷十六、器用門・劍の條に「龍泉太阿＝斗牛之間常有二紫氣一、張華聞二雷煥一、煥曰寶劍之精、上徹二於天一耳、華卽補レ煥爲二豐城令一、煥掘二獄屋基一得二一石函一、中有二寶劍二一、並刻レ題、一曰二龍泉一、一曰二太阿一、是夕斗牛間氣不二復見一焉、煥以二南昌西山下土一、以拭レ之光芒艷發、遣レ使送レ一與レ華、留レ一自佩」。

蝶の翅の白粉を、草に翻して梢には、鶴の霜毛を脫きかくる（最明寺殿）

雪を蝶の粉翅及び鶴の羽毛に見立てて面白くいうたのである。圓機活法、天文門・雪部、石曼卿の詩に、「蝶遺二粉翅一輕難レ拾、鶴墜二霜

の國爭ひ（國性爺後日）
人人が名利を爭ひ合ふは恰も蝸牛の角上に相爭鬪するやうなもので、眞に愚のわざである、その身命幾ばくもないのは、電光石火の閒しやどりするものの如く、はかなきものであるのにとの意。白居易の詩に、「蝸牛角上爭二何事一、石火光中寄二此身一」。この詩は和漢朗詠集・卷下・雜部にも出てゐる。

＊刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る、諫鼓苔深うして鳥驚かず（嫗山姥）
「諫鼓苔深うして云云」（五四九頁）及び「一洞むなしき谷の聲云云」（四二五頁）を見よ。

＊げんとうそせつ　玄冬素雪の寒き夜（酒呑童子）
〔玄冬素雪〕玄は黒の義、冬は五行配當の色にとるときは黒に當るが故に玄冬といふ。素雪は白雪。和漢朗詠集・雜部、源順の河原院賦の句に、「玄冬素雪之寒朝」。

さんじやくの斬蛇　漢に三尺の斬蛇あつて四百年の基を起し（嫗山姥）
「三尺」は和漢朗詠集・雜部にも「漢高三尺之劍、坐制二諸侯一」と見えて劍をいふ。劉季（後に漢太祖高皇帝となる）夜小道に從つて澤中を過ぎる際、大蛇あつて徑に當る、劉季劍を拔いてこれを斬つた。老嫗あつて哭して言ふやう、吾子は白帝の子である、今は赤帝の子がこれを斬ると、因て忽に姿が消えたといふ、蓋し白帝子は秦、赤帝子は漢をさせるにて、漢當に秦を滅すべきを云うたものである。

三尺の劍の光は秋の霜、腰の間に横へたり（大原問答）（五人兄弟）
和漢朗詠集・雜部、將軍の題にて源順の詩に、「雄劍在レ腰、拔則秋霜三尺」。同・雜部、將軍の題にて陸將軍の詩に、「三尺劍光氷在レ手、一張弓勢月當レ心」。

三伏の夏たけ風一聲の秋の空（天鼓）
夏至の後第三の庚の日を初伏といひ、第四の庚の日を中伏といひ、立秋後の初庚の日を末伏または後伏といひ、之を合して三伏と云ふ、暑氣最も盛な頃である。和漢朗詠集・夏部、源英明の詩に、「池冷水無二三伏夏一、松高風有二一聲秋一」。「同じく響の鼓をする云云」をも見よ。

じせんりの外故人の心　振さけ見れば西の海渺渺としてはかりなき、じせんりの外散人の心ゆたのたゆたにあこがるる（文武五人男）
二千里外の故舊の友の心を思遣るとの意。和漢朗詠集・卷上・秋の部、白居易の詩に、「三五夜中新月色、二千里外故人心」。

松根に倚つて腰つきも千年の翠うつす（反魂香）
和漢朗詠集に、「倚二松根一而摩レ腰、千年之翠滿レ手」。

天も醉うたり　やりが前垂茜さす、天も醉うたり人も醉ふ、初盃の內祝ひ（壽門松）
和漢朗詠集・春の部、菅丞相の花時天似レ醉序に「春之暮月、月之三朝、天醉二于花一、桃李盛也、云云」。

大底四時心惣てねんごろなり、中に就いて膓を斷つ是秋の天（小栗判官）
憂多い身は春夏秋冬のその間總て苦慮に滿ちてゐるのであるが、就中尤も斷膓の思あるは秋の天である。和漢朗詠集・秋部、白居易の暮立の詩に、「大底四時心惣苦、就中膓斷是秋天。」この詩は白氏文集・卷十四に見えてゐる。

ただ一文字に頭に挿せば、二月の雪と散るもあり（國性爺合戰）
和漢朗詠集・上、春部、橘在列の詩に、「倚二松根一而摩レ腰、千年之翠滿レ手、折二梅花一而挿レ頭、二月之雪落レ衣」。

手まづ遮る杯　然らば文六殿よりといへども、さすが酒好み、手まづ遮る杯の、母がひに私から（堀川波鼓）
和漢朗詠集・春の部、菅原雅規の禁レ流迭二羽觴一の詩に、「巖レ石遲來心竊待、牽レ流遄過手先遮」。

天も花にや醉ひ心地　雛のお御酒の桃の酒、天も花にや醉ひ心地（本領曾我）
ここの文は雛祭をして桃酒を酌む三月三日の頃は、桃李の花盛りの時なれば、天も紅を潮して恰も醉へる心地であるとの意。和漢朗詠集卷上、春の部、菅公の花時天似レ醉序に、「春之暮月、月之三朝、天醉二于花一、桃李盛也、云云」。

天も醉うたり
「天も醉うたり」を見よ。

浪舊苔の鬚をこそげる　顏を映すも氷の劍逆手に持つて、浪舊苔の鬚をこそげる顋ちよつつろ（國性爺後日）
和漢朗詠集・春に、「氷消浪洗二舊苔鬚一」とあるを作りかへたのである。

南枝花はじめて開く（雪女）
日當りよき南枝は暖なるによつて花まづ開く。和漢朗詠集に、菅原文時の梅をよんだ詩に、「誰言春色從レ東到、露暖南枝花始開」。

二月の雪と散る
「唯一文字に云々」を見よ。

二千里の外故人の心、三五夜中にあらねども（國性爺）
「二千里の外」は地の遙なるをいふ。「三五夜中」は十五夜中のこと。和漢朗詠集・卷上、秋の部、白居易の詩に、「三五夜中新月色、二千里外故人心」、とあるに據つたのである。この詩の意は、八月十五夜に東方より新にさし出た月光の隈なく照すに對して、遠方に居る故舊の友の心を思ひやるとなり。

年年歲歲花相似たり、人同じからずとかや（源義經）
和漢朗詠集・雜部に、「年年歲歲花相似、歲歲年年人不レ同」とありて、全詩に古文眞寶前集・卷上に見え、宋之問の作ではなくて劉希夷の詩であるといふ。

巴峽秋深し五夜の哀猿月に叫ぶ
「瑤臺霜滿てり云々」を見よ。

平砂を白波に照せば、今も夏の夜の下立賣のほのぼの（堀川波鼓）
和漢朗詠集・夏夜の詩句に、「月照二平砂一夏夜霜」とあるを碎いた文である。

蘭省の花の時　蘭省の花の時錦帳の下、姫君樣とかしづかれし昔忍ぶの軒の下（吉岡染）　蘭省の花の時ともに交せし盃も、廬山の雨とふる涙（弘徽殿）
和漢朗詠集・雜部、白居易の詩、「蘭省花時錦

かんたんのまくら 一丈餘の四面の大石、根からむ蔦の唐錦、邯鄲の枕邯鄲の枕と、寢るより早く高鼾（隅田川）

〔邯鄲枕〕「かんたんのゆめ」を見よ。

***かんたんのゆめ** 金銀降らす邯鄲の、夢の間の榮耀なり（冥途飛脚）

〔邯鄲夢〕邯鄲の枕とも云ふ。短き夢の間の榮華をいふ。書言故事大全・七に、「異聞集云、呂翁經二邯鄲道上一、邸舍中有二少年盧生一、自嘆二貧困一、言訖思レ睡、主方炊二黃粱一、翁探二夢中一枕一、以授レ生曰、枕レ之即榮適如レ意、生枕レ之、夢自二枕竅一入二其家一、身歷二富貴一五十年、老病而卒、欠伸而寤、顧呂翁在レ傍、主人炊二黃粱一猶未レ熟、生謝曰、先生以レ此窒二吾之欲一」。

漢の武帝の時昆明池といふ池に朝夕魚を釣る人あり、或る時鯉を釣り得しに絲切れて魚は波に入り、命を免れ去つたれども針や鰓に殘りけん、武帝の夢に一人の老翁我が咽に釣鉤あり、苦しむ事堪へ難し取つてたべと歎きしかば、帝手づから針を取り苦しみを助け給ひしに、珠一雙を奉り我昆明池に住む者なり、君が寶祚を守らんと其の儘鯉の形となり、去ると夢見し枕の上夜光の珠のありたり（隅田川）

昆明池は支那南方にある池。太平廣記卷百十八に「昆明池、漢武帝鑿レ之、習二水戰一、中有二靈沼神池一云、堯時洪水、停二船此池一、池通二白鹿原一、人釣二魚於原一、綸絶而去、魚夢二於武帝一、求レ去二其鉤一、明日帝遊二戲於池一、見二大魚銜一レ索、帝曰、豈非二昨所レ夢乎、取レ魚去レ鉤而放レ之、帝後得二明珠一」。

かんりんほくばう 濱の平沙は忽にかんりんほくばうの衢となり（國性爺後日）

〔寒林北邙〕邙山は洛陽の北にある、故に北邙といひ、漢以來墳墓の地である。「寒林北邙の衢」とは、悽愴たる墓地の意。馬存の岳王墓の詩に、「鷺鵝斜日叫二寒林一、可レ怜一片西湖土」。沈佺期の邙山の詩に、「北邙山上列二墳塋一、萬古千秋對二洛城一」。

歸雁列を亂るなる、隱し勢と心得（女楠）

寛治元年九月義家金澤柵を攻めた時、遥に雁行の亂れるを見て伏兵あるを知り、兵士をしてこれを偵はしめたら果して伏兵が居たので、撃つて之を殲したといふ故事を應用したのである。孫子・行軍篇に、「鳥起者伏也」。

きよいう 斯樣の時の用意の酒、許由が捨てし瓢簞も、我等が爲の夜着蒲團と、腰に附けたる水呑に（川中島）

〔許由〕支那上古の隱者である。高士傳に、「許由隱二箕山一、以レ手捧レ水飲レ之、人遺二一瓢一、得以取飲、飲訖掛二樹上一、風吹瀝瀝作レ聲、尚以爲レ煩、遂去レ之」。

金冠木 「らうやう金冠木云云」を見よ。

錦上花を敷く 紅錦繡の山・黃纐纈の林、錦上に花を敷くとはかやうの事をや申しつらん（枹狩）

美しい上に美しさを添へること。王安石の即事詩に、「麗唱仍添二錦上花一」。

國に弓箭動き兵亂のしるしには、陰陽の氣まづ亂れて草木に金銀の異形の花咲くと、鶴林玉露に見えたり（蛙合戰）

鶴林玉露・人集卷之四に、「宋開禧兵興之先、江西草木秋冬生レ花、有下山礬而生二梔子花一、桃樹而生二李實一者上、村落鐵釜生二金花或神佛像一、此天地之氣先亂也」。

***くものおび** 伊達の郡の峯の松、後に見なせばこれもまた、後結びの雲の帶、しやんと締めたよ關の戸は（源義經）

〔雲帶〕白雲帶に似て山の腰を圍むことをいふ。後中書王・文藻の詩句に、「白雲似レ帶圍二山腰一」。巢林子が他の所に「山は夕の雲の帶、腰の廻りを御用心」と書いてゐるのも、後中書王のこの詩句を碎いたのである。

蜘蛛の昔は柳の葉 逆卷き落つる山川に、絲もて引くやささがにの、蜘蛛の昔は柳の葉、蘆は陸地を行く如く（聖德太子）

支那上代・黃帝の臣貨狄が、柳葉に蜘蛛が乘つて水に浮べるを見て、舟を作つたといふ故事に據つてかくいうた。ここの文に「蘆は陸地を行く如く」といへるも、達磨が蘆葉に乘つたといふ故事を轉用したものである。

げうふうゆるく吹いてとう日おごそかに輝き、しゆん雨ななめに注いでせいゑん花を粧ひす（烏帽子折）

「堯風緩吹、東日嚴輝、舜雨斜注、西園花粧」。堯風・舜雨は、泰平の世風雨の時に順ふを堯帝・舜帝の德の天下に遍く行渡れるに喩へて云うたのである。東日・西園は日と云ひ園と云ふに東・西の語を冠らせて文飾としたのである。其他は說くまでもない。

げんたんの法 虛空に向つて大玄谷神の咒を唱へげんたんの法を行ひしが（用明天皇）

〔還丹之法〕還丹は仙藥で、還丹之法は仙術で即ち外道の法である。抱朴子・內篇卷之一・金丹の條に、「余考二覽養性之書一、鳩二集久視之方一、曾所二披涉一篇卷以レ千計矣、莫レ不下皆以二還丹金液一爲中大要上者上焉、然則此二事蓋僊道之極也、服レ此而不レ僊則古來無レ僊矣」。

こうい 海中に鯸鮐といふ毒魚あり、味の甘きこと西施乳とて美女の乳房に譬へながら、其肝腹中に入つて人を害す事博物志に記せり、背青く腹白く無鱗にして見憎しとあり、我が朝の河豚なるべし（松風）

〔鯸鮐〕河豚。劉逵の吳都賦注に「鯸鮐魚狀如二科斗一、大者尺餘、腹下白背上青黑、有二黃文一、性有レ毒、……蒸煮餤レ之肥美」。辭源に「鯸鮐、河豚之屬、腹部尤膨大、亦有レ毒」。西施

毛一散末レ搏」。巣林子のこの文は、南水漫遊に「元法皇叡感ましまし、「かかる才智を以て和歌を詠じなば秀逸數多ありぬべし」と賞はせ給うた由を記し、また神澤其蜩も評して、「老杜が對句をも壓すべし」と、いうたといふ有名な文である。

離離たる馬目、連連たる雁行(國性爺)　碁石が盤上に離れ離れに三角形をなして散布し、またはすかひに續けるをいふ。圍碁活法、馬融の圍棋賦に、「離離馬目、連連雁行、踔度間置、徘二徊中央一」。

雜（其の他の諸書）

***あきのあふぎ**　その黑髪の移り香も、何故我にあきの扇と捨てられて(女夫池)

〔秋の扇〕秋に飽をかけたのである。秋凉の候となれば、扇は不用となるやうに、寵愛の衰へたことに喩ふ。班婕妤が扇の詩に、「新裂二齊紈素一、皎潔如二霜雪一、裁爲二合歡扇一、團團似二明月一、出二入君懷袖一、搖動微風發、常恐秋節至、凉風奪二炎熱一、棄二捐篋笥中一、恩情中道絶」。

恠しきを見て恠しまされば、恠かへつて壞るとかや(關八州)

恠物を見ても心に懸けぬときは、恠物却つて消滅す。夷堅志に、「姜七以レ養二母豬一爲レ業、有二客宿二其家一、聞二豬爲二人言一、客以說二七、七不レ聽、謂見二恠不一レ恠、其恠自壞」。〔徒然草(古凉閣藏)第一にも、「あやしみを見てあやしまざれば、あやしみかへつてやぶる」と書いてある〕。

蟻の穴から堤も崩れる(丹波與作)

小事終に大事を起すに喩ふ。韓非子に、「千丈之堤以二螻蟻之穴一潰」。

五十年の榮華　いそぢの榮華一夜の酒の、夢もよき邯鄲屋にこそ入りにけれ(扇八景)

邯鄲の夢の故事である。「邯鄲の夢」を見よ。加増曾我に、「いそぢの床の樂しみも、覺めての後の悔しさは」とあるも、邯鄲の夢の故事によつたのである。

一犬吠ゆれば、萬犬の聲聲しきりに(井筒)

朝野僉載に、「一犬吠レ形、千犬吠レ聲」。

絲を引いて文字を導き　野馬臺とやらん唐土の書に、絲を引いて文字を導き日本の譽をあらはし、蜘蛛かかつて悦來るといふ本文もありと聞く(關八州)

野馬臺序文に、「中古聖武皇帝朝、吉備公入レ唐、唐人以二其本國之讖一、出二野馬臺詩一使二之讀一、爲レ試二其知力一、文字交錯平直不レ書レ之、非二神助一則不レ可レ讀レ之、於レ是吉備公默然祈二佛天乃本國之神祇一、俄而有二蜘蛛一、墮二其紙上一、漸步曳レ絲、遂認二其跡一讀レ之、不レ謬二一字一、唐人稱二美之一」。野馬臺之記に、「殊公(吉備公)平常信二長谷寺觀音一、時觀音垂二大悲一、分身化二現蜘蛛一救二彼命處一、卽明日於二殿上一被レ授二此書一、文字紛亂義理全難レ知、意既惱愁時有二一蜘蛛一、來落二東字上一、引レ絲依二行跡一、讀焉忽然開明也、故不レ殺却無二相違一、歸朝君致二堯舜一、民救二塗炭一、從レ爾已來於二本朝一、以二蜘蛛一爲二善瑞一矣」。「野馬臺」をも見よ。

兎死すれば狐これを悲しむ(會稽山)

同類の者に禍の及ぶであらうと思うて悲しむのである。通俗編に、「兎死狐悲」。

牛に汗す　萬卷の文車牛に汗して轟かし(用明天皇)　牛に汗する金銀(國性爺後日)

藏書の多きをいひ、また物の多きをいふ。柳文の陸文通墓表に、「其爲レ書、處則充二棟宇一、出則汗二牛馬一」。

内に土木の氣を養ひて外靑黃の色なく

「鶴は一百六十年にして云云」を見よ。

葉公龍を好んで云云

「葉公龍を好んで云云」を見よ。

風は虎の嘯くに從ひ、雲は龍の昇るに廻る(釋迦)

古樂府に、「虎嘯谷風起、龍興景雲浮」。淮南子に、「虎嘯而谷風至、龍擧而景雲屬」。

金にして數は九つ　柏子木の調子金にして數は九つ、らうやう金尅木火尅金、自滅の相現はれたり(恭盤太平記)

拍子木の音寒天に冱えて響き渡るを以て金聲ありとし、これを金と占うたのである。その打つ音は九つ、九は陽の數である。「らうやう金尅木云云」を見よ。

かべをうがつ　螢を聚め雪を積み、壁を穿ちし古も(國性爺後日)

〔壁を穿つ〕前漢の匡衡家貧しく、油を買ふことができぬので、壁を穿つて隣家の燈光を引いて苦學したと云ふ故事。西京雜記に、「匡衡勤レ學無レ燭、鄰舍有レ燭而不レ逮、衡乃穿レ壁、引二其光一而讀レ之云云」。

釜の鳴る聲、薪のさつしよ、豆腐のぐつ煮、萁のばらばら(百合若)

「釜の鳴る聲」は、捨芥抄・卷上、釜鳴恠部に「子日愁事、丑日喪事、寅日官事凶、卯日家喪事、辰日家亡、巳日中吉來、午日鬼神來、未日口舌事、申日同上、酉日同上、戌日大凶、亥日小吉」とあつて、釜の鳴る日によつて兆かはれども大かたは凶事である。

近松のこの文は、「釜の鳴る聲」の緣から「薪のさつしよ」といひつづけたので、「さつしよ」は殺傷の約訛であらう。そして更に「豆腐のぐつ煮(ぐつぐつと音立てて煮えること)、萁のばらばら」と說明して、世說新語・文學篇にある東阿王(卽ち曹植)七步之詩、「煑レ豆持作レ羹、漉レ豉以爲レ汁、萁在二釜下一燃、豆在二釜中一泣、云云」に據つてかくいうたのであらう。

狩の文字を四季に書きわけ(扇八景)

爾雅に、「春獵爲レ蒐、夏獵爲レ苗、秋獵爲レ獮、冬獵爲レ狩」。

「尾似二流星一須二散細一」とあつて、良馬の相である。

周書に曰く、國を治むるに三常あり(最明寺殿)
佩文韻府に、「三常。(汲冢周書)國有二三常一」。周書にこの文見當らない。なほ考ふべきである。

周の穆王法の爲八匹の龍馬に乘じ萬里を刹那に至る(百日曾我)
「龍馬」は駿馬のこと。「刹那」は瞬間の其際である。「せつな」を見よ。祖庭事苑に、「王子年拾遺記曰、周穆王卽位三十二年巡二行天下一、取二八龍之駿一、一名二絶地一足不レ踐レ土、二名二翻羽一行越二飛禽一、三名二奔宵一夜行二萬里一、四名二越影一逐レ日而行、五名二踰輝一毛色炳燿、六名二超光一一形十影、七名二騰霧一乘レ雲趨、八名二挾翼一身有二肉翅一、徧而翔焉」。

頻に敲く月下の門(天神記)
湘素雜記・賈島の詩に、「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」。

嫉妬深きは三去の一つ、娶ること勿れといふ本文あり(松風)
小學・明倫に「婦有二七去一、不レ順二父母一去、無レ子去、淫去、妬去、有二惡疾一去、多言去、竊盜去」とあつて、高愈の纂註に「妬則亂レ家、……故皆去レ之」と見えてゐる。三去は七去の中の重きを歐へたのであらう。(異本に三去を三女としたのがある)。

死は輕くして易し、生は重くして難し(出世景清)
近思錄・卷十に、「伊川先生曰、感慨殺レ身者易、從容就レ義者難」。

十萬貫を腰に附け千歳の鶴に乘り揚州の都に樂しむ(關八州)
一人にて多くの快樂を享けるを云ふ。事類全書に、「有レ客相從各言レ所レ志、或願レ爲二揚州刺史一、或願レ多二貲財一、或願二騎レ鶴上昇一、其一人曰、腰纒二十萬貫一、騎レ鶴上二揚州一、欲レ兼二三者一」。

笙歌遙に聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前(三世相)
念佛者が命終の時には紫雲たなびき異香薫じ、笙歌の音樂虛空に聞え、佛菩薩だち淨土へ迎へる爲に降下し給ふとの意であつて、極樂往生の状をいうたものである。大江定基入道寂照法師の詩に、「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」。この詩は謠曲・實盛、及誓願寺にも引かれてゐる。

商山の秋の夕は芝蘭を刈る(國性爺)
商山の四皓(その條を見よ)が採芝の歌、「漠漠高山、深谷逶迤、曄曄紫芝、可二以療一レ饑」を歌うた故事によつてかく云うた。

順の字に變の義あり あの順の字に變の義あり、これ大明破滅の現證なり(國性爺後日)
康熙字典・變の字の條に、「變、古文彭」と見えてゐる。順と彭と字形相似てゐる。そして近松はこの續きの文に分解して說明した。

蜀山の日を迎へ 唐犬和犬數千疋、蜀山の日を迎へ、梢に吠ゆる聲喧しく(千疋犬)
「蜀犬日に吠ゆ」と云ふ故事によつたのである。蜀は山國なれば常に霧深く、日を見ること稀なるによつて、犬が日を見れば怪んで吠えると云ふ。韓退之の文に、「蜀中山高霧重、見レ日時少、每レ至二日出一、則群犬疑而吠レ之也」。

白雪却つて黑し 理を付けて云ふならば、白雪却つて黑しとも云ふ義あり(國性爺)
公孫龍一家の堅白同異の詭辯に據つてかくいうたのである。唐の尉遲匡の詩に、「夜夜月爲二靑冢鏡一、年年雪作黑山花」と云ひ、俳諧の句に「よく見れば雪ほど黑き物はなし」といへるも、白雪を黑くいひあしらふに興をもたさうとしたものである。

銀に翼あるが如くなり(冥途飛脚)
魯褒の錢神論に、「無レ翼而飛無レ足而足」。

しんし 孔雀鳳凰しんしが鶴、松と竹とに舞ひ遊べば(松風)
〔晉子〕周の靈王の太子であつて、白鶴に乘つた人である。列仙傳に、「周靈王太子晉、七月七日乘二白鶴一駐二山巓一、謝二時人一而飛升」。

しんしん 南方には蝮蛇蓁蓁として人を呑む(井筒)
〔蓁蓁〕群り集る貌。楚辭に、「蝮蛇蓁蓁」。

じんせいぎうばふういましんぬすゐりのあわしんせいともにてんにきす(天智天皇)
山本九兵衞版七行本に、「じんせいぎうばふういましんぬすいりのあはしんせいともにてんにきす」と見えてゐる。蓋し、「人生牛馬風、今知水裏泡、動靜倶歸レ天」といふ辭世の文であらう。「牛馬風」とは、左傳・僖公四年の條の杜預の註に、「牛馬風逸、蓋末界之微事」、とあるからこれを取つたのであらう。人世は蓋し末界の微事で、これまではさうも思はなかつたが今に及んでそのはかない事恰も水裡の泡の如きであるを知つた。それ泡はふるへ動いたり或は靜に保つたりしてゐても、それも暫時の間でやがて天空に向つてぱつと散つて消去る。人生も亦その如しであるとの意であらう。

秦の始皇の御顏に巫山の神女が吐きかけし唾のはなの徒心(弘徽殿)
水經注に、「麗山西北有二溫水一、俗云始皇爲二神女所一レ唾生レ瘡、始皇謝レ之、神女爲出二溫水一、後人因以浣二洗瘡一」と見えてゐる。

秦王武周を討つて破陣樂を作り、國七德に化せしとかや(本領曾我)
唐書、禮樂志に、「七德(一云二七德舞一)者本名二破陣樂一、太宗爲二秦王一破二劉武周一、軍中相作二樂曲一、及レ卽レ位宴會必奏レ之、七德者蓋取二禁レ暴・戢レ兵・保レ大・定レ功・安レ民・和レ衆・豐レ財之義一也」。「破陣樂」はその條を見よ。

雀の角・鼠の牙の禍(室町千疊敷)
埤雅に、「雀物之淫者、鼠物之貪者、故詩言、雀角鼠牙以譬二强暴一」。ここの文は、些少な禍害に喩へていうたのである。

靑帝 初春の神姿、靑帝と號して東方の天に立ち給ふ(天神記)
春の神。尚書緯に「春爲二東帝一、又爲二靑帝一」。なほ天神記のこれに續ける文に、「夏の神は炎帝……祝融神とも申し」とあるは、禮記・月令篇に「季夏之月……其帝炎帝、其神祝融」と見え、また「秋は少皡西天の御神」とあるは、禮記・月令篇に「孟秋之月……其日庚辛、其帝

乳だ、事文類聚後集、河豚をいへる文に「呉人珍レ之、目二其腹腴一爲二西施乳一」と見え、また養ひ草（元祿二年刊）卷二下に「河豚魚とは世に云ふぐとうといひて、人の命にかへて好み喰ある魚なり、物の異名ある内に此魚を西施乳と名付く、西施はいくれなき美人の聞えありといへども國家を傾亂をなせるものなれば、味よけれども毒あるに譬へたり」と見えてゐる。（序云、近松はこの文に「博物志に記せり」というてゐれども、現今流布せる晉張華撰の博物志には該當いこの記事見當らない）。

紅葉の稀に逢ふ瀬　斬られても猶身を引かぬ最期の身振り、橋はさながら紅葉の、稀に逢ふ瀬の敵と敵（鑓權三）

血染めを紅葉といひなし、稀に逢ふ瀬といひつづけて、紅葉の媒の故事を應用してかくいうたのである。太平廣記に、唐の禧宗の時、于祐御溝の下に遊んで紅葉に詩を書けるを拾ふ、其詩に流水何甚急、深宮盡日閑、慇懃謝二紅葉一、好去到二人間一、とあつたので、于祐他の紅葉に、曾聞葉上題二紅怨一、葉上題レ詩寄二阿誰一、と題してこれを御溝の水上に流す、宮女韓夫人之を拾ひ、後に夫婦となつた時、韓夫人詩を作つて、一聯佳句隨二流水一、十載幽思滿二素懷一、今日卻成二鸞鳳友一、方知紅葉是良媒、というたことが見えてゐる。

呉道子が繪主の僧を惱ませし（關八州）

呉道玄、字を道子と云ひ、唐時代陽翟の人、丹青の妙を窮め、畫聖と稱せられた。呉道子嘗て僧を訪うた時、僧が無愛想であつたので、呉道子壁に驢を畫いたら、其驢夜暴れて僧房の家具を踏み碎き、僧を惱ませたといふ。盧氏雜說に、「呉道子嘗訪レ僧、僧不レ禮、遂於二壁上一畫二驢一頭一、一夜僧房家具盡踏破、僧亂不レ堪、僧知レ是、道子爲レ之懇謝、卻畫、乃已」。

氷に臥して魚を得　二十四孝の陸績が橘を袖に入れ、氷に臥して魚を得しも、それぱかりを孝行とて異國本朝譽めはせぬ（扇八景）

王祥の故事である。王祥は字を休徵といひ、晉時代瑯琊臨沂の人で至孝である。冬日母病んで生魚を欲した。祥乃ち水結せる川上に臥し、その體溫で氷解け、雙鯉躍出たのを獲て母に與へたといふ。世說新語補に「王祥事二後母朱夫人一甚謹」とあつて、註に「方二盛寒冰凍一、母欲二生魚一、祥解レ衣、將二剖レ冰求一レ之、會有二堅冰小解一、魚出」。

小湊口の梅林に舟を乘り捨て　東寧島へ押寄する、數萬の軍兵小湊口の梅林に船を乘り捨て（國性爺後日）

東寧島というたので、箋註陶淵明集・卷五、桃花源記に、「忽逢二桃花林一、夾レ岸、數百步中無二雜樹一、芳華鮮美、落英繽紛、漁人甚異レ之、復前行欲レ窮二其林一、林盡二水源一得二一山一、山有二小口一、髣髴若レ有レ光、便捨レ船從レ口入」とあるを應用したのである。

曆なき山住　げに曆なき山住みも彌生ばかりは隱れなや（十二段）

唐詩選、五言絕句、太上隱者の答レ人の詩に、「偶來二松樹下一、高レ枕石頭眠、山中無二曆日一、寒盡不レ知レ年」。

子を持つて知る父母の恩（嵯峨天皇）

明心寶鑑・孝行篇に「養レ子方知二父母恩一」。徒然草に「孝養の心なきものも、子を持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ」。

昆吾溪の寶劍　昆吾溪の寶劍は人を照すこと水を照すが如しとかや（松風）

昆吾は西方戎の國で安定山谷の間にある地で、切玉といふ寶劍を產出した。黃眉故事に、「周穆王有二昆吾劍一、削レ鐵如レ泥」。

さうこうが淵を求めし父の骸（井筒）

「さうこう」は曹公で曹娥をいふ、東漢上虞の人で至孝の女である、父江に溺死して屍を得ず、時に娥十四歲、江を眺めて號哭すること旬有七日、遂に江に投じて死んだが、五日を經て父の尸を抱いて出たといふ。會稽典錄、曹娥碑文に「孝女曹娥者、上虞曹盱之女也、其先與レ周同レ祖、末冑荒流、爰茲適居、盱能撫レ節按レ歌、婆娑樂レ神、以二漢安二年五月一、時迎二伍君一、逆レ濤而上、爲二水所一レ淹、不レ得二其尸一、時娥年十四、號慕二思盱一、哀二吟澤畔一、旬有七日、遂自投レ江死、經二五日一抱二父尸一出、云云」。「往事渺茫として夢に似たり云云」をも見よ。

逆樣に開き扇を見るやう　富士の面影は、……、水に映れば逆樣に開き扇を見るやうに（三國志）

石川丈山の富士山の詩句に、「白扇倒懸東海天」とあると同巧である。

鷺はだいさいの方をよけて巣をひらき（加增曾我）

大歲は陰陽家にて祭る八將神の一である。曆林問答集・上卷に、「曆例云、大歲者歲星之精、降二天地之間一、觀二察萬物一、臨二見八方一、故名二歲之君一、愼レ之者保、逆レ之者亡、巡二行於十二支一也、子歲在二正北一、丑歲在レ丑、餘方皆爾、十有二年運終而復始、其方主レ歲、故爲二一年之君一」と見え、假名曆略註に、「大歲神とは本年の太歲にして、年中諸事の善惡を司る神なるゆゑに歲の君といふ、此方に向て木竹を伐らず、井家作・修造・土を動し・家移其外百事に是を犯し用ゆべからず」とあるから、鷺もそのことわけを知つて、大歲の方をよけて巢をひらくと云うたのであらうか、さりとは餘りにこじつけた氣がする。按ずるに鷺は鵲の思違ひであらう。博物志・卷四に、「鵲巢門戶背二太歲一、得二非才智一也」と見え、酉陽雜俎・卷十六に、「鵲巢背二太歲一、燕伏二戊巳一」と見えてゐる。

三元三行三妙加持（日本武尊）

佛經の語を假りた道家の變形咒であつて、道家天地水を以て三元となす、三行三妙加持は佛語であらうと思はれるが、出所など詳でない。

さんせう　雪嚙み碎く白泡に、さんせうよしや尾は青柳のしつたりしたり（鑓權三）

〔三焦〕漢方にて六腑の一、水分の排泄をつかさどるといふ。「三焦善し」とは、馬の口角の色善きをいふ、即ち口角の鮮明光潤桃色を呈し、强健なるをいふ。明・馬師問編・馬經大全・春集、帝問二馬師皇一脈色論に、「口角應二三焦一也、……凡口中之色鮮明光潤如二桃色一者平」と見えてゐる。巢林子のこの文に、「尾は青柳のしつたりしたり」とあるも、尾は青柳のやうに垂り垂りを「しつたりしたり」にいひかけたもので、馬經大全・春集、相馬寶金歌に、

レ表二於外一、是以行必依二洲渚一止、不レ集二林木一、……百六十年雌雄相視、目睛不レ轉而孕、千六百年飲而不レ食、胎化産、鸞鳳同爲レ羣、聖人在レ位、則與二鳳凰一翔二於甸一、云云」。

天は文人の才の盡きん事を恐れて、常に零落して蓬生に居らしむ（千疋犬）

天は文人の才を振はしめる爲に困窮の地位に居らしめて自ら力めしめるとの意。三輔決錄註に、「張中蔚扶風人也、少與二同郡魏景卿一隱レ身不レ在、所レ居蓬蒿沒レ人」。（韓退之の柳子厚墓誌銘に、「子厚斥不レ久、窮不レ極、雖レ有レ出二於人一、其文學辭章必不レ能下自力以致二必傳二於後一如中今無上レ疑也」とも見えてゐる）。

東西海の聖人此心を同じうし此理を同じうす、南北海の聖人も亦同じ（用明天皇）

宋史・陸子靜（諱は九淵）の言に、「又嘗曰、東海有二聖人出一焉、此心同也、此理同也、至二西海南海北海一、有二聖人出一亦莫レ不レ然」。

どかい三尺ばうしきらず げに古の木の丸殿をなぞらへて、どかい三尺ばうしきらずと聞えしな（烏帽子折）

〔土堦三尺茅茨不レ剪〕堦は階である。土の階段の高さ僅に三尺、茅茨を以て屋を覆ひたるにて、宮殿の極めて質素なるをいふ。墨子に、「堯堂高三尺、土堦三等、茅茨不レ剪、采椽不レ刊」。

飛ぶ鳥懷に入る時は狩人も助くるとよ（出世景清）

窮鳥懷に入る時は獵夫も憐んで捕へないやうに、人窮困し來つて倚る時はこれを助けるに喩ふ。顏氏家訓に、「窮鳥入レ懷、仁人所レ憫」。

南浦の雲 袂を南浦の雲に片敷き、……、衣を西山の雨に濕し（持統天皇）

ここの文に南浦の雲といひ、西山の雨といへるは、王勃の滕王閣詩に「畫棟朝飛南浦雲、珠簾暮捲西山雨」とある句に據つたのであらう。

人間の私語天の聞くこと雷の如く、暗室の虧心神の見ること電の如し（大織冠）

本朝俚諺（正德五年刊）卷二、かくすことはあらはるるの條に、「玄宗垂訓云、人間私語、天聞如レ雷、暗室虧心、神目如レ電」とあつて、明心寶鑑に見えてゐる文である。（序云、菅專助作、融大臣鹽竈櫻花の冒頭の文に、「人間の私語天の聞く事雷の如く、闇室の鬼神見ること電の如し」、とあるはこの文を誤つたのである。

***ばうげんれい** 唐土の房玄齡は片目潰れし妻をだに、心にめでし情の淵、深き思ひに引替へて（西王母）

〔房玄齡〕字を喬孫と云ひ、唐太宗時代の賢相である。古今閨範・卷二に、「唐房玄齡時疾幾危、謂二妻盧氏一曰、吾病亟、君年少不レ可二寡居一、善事二後人一、盧泣入レ帷剔二一目一以示レ信、會玄齡疾瘉、未レ幾爲レ相、與二盧氏一相敬如レ賓、終身不レ衰」。

***はうそ** 彭祖が保つ七百歲（浦島）

〔彭祖〕堯帝の臣で、彭城に封ぜられた。虞夏の世を經て商の世に至り、年齡七百歲を越えたといふ。列仙傳に、「彭祖諱鏗、帝顓頊玄孫、至二殷之末世一、年巳七百餘歲而不レ衰」。

ばうふざん 足を爪立て伸上り、見送る影も遠ざかる、唐土の望夫山、我が朝の領巾麾山、今の我が身の我が思ひ、石ともなれ山ともなれ、動かじ去らじとかき口說き（國性爺）

〔望夫山〕支那湖北省武昌の北方にある山。往昔貞婦がこの山に登つて夫の遠征の途に上るを望み、深く別を惜んで遂に化して石となつたといふ。幽明錄に、「武昌北山上有二望夫石一、狀若二人立一、古傳云、昔有二貞夫一、其夫從レ役遠赴二國難一、携二弱子一餞二送此山一、立望レ夫而化爲二立石一、因以爲レ名焉」。十訓抄・第六・可レ存二忠臣廉直旨一事の條に、「昔夫婦相思ひて住みけり、夫軍にしたがひて遠く行くに、其妻小き子を具して武昌の北まで送る、夫の行くを見て悲しび立てり、夫還らずなりぬ、妻その子を負ひて立ちながら死ぬるに化して石となれり、その姿人の子を負ひて立てるが如し、これに因りてこの山を望夫山と名づけ、其石を望夫石といへり」。

はつさい 凡人ならぬ公の人相、眉の八彩・目の重瞳、日に向つて瞬きせず（唐船噺）

〔八彩〕支那上古の聖人堯帝の眉が八彩を有してゐたといふ。よつて以て聖人の相にいふ。春秋元命包に、「堯眉八彩、舜目重瞳」。

八歲より小學に入り云云 「人生れて八歲より小學に入り云云」を見よ。

蛤能く氣を吐いて樓臺をなす（國性爺）

彙苑に、「蛤一名蜃、能吐レ氣爲二樓臺一」とあるに據つたものである。卽ち蜃氣樓のことであつて、蓋し水蒸氣と光線の作用によつて海邊の景色の海上に映じ現はれるのを云うたものである。ここの文に就いては穗積以貫撰・難波土産・卷四に、「蚌・蛤・蜃・皆はまぐりと訓ず、蚌と蛤とは常のはまぐり也、蜃には二種あり、一種は大蛤也と注して一名を車螯といふ、これは貝の類なれども樓臺をなすものにあらず、よく氣を吐て樓臺をなすといふ蜃は、はまぐりと訓じても其形蛟に似て龍の類なる物なり、本草綱目に、其形蛇に似て大なり、角ありて龍の形の如し、紅の鬣あり、よく氣を吐て樓臺城郭の形をなす、將に雨降らんとして見ゆ、これを蜃樓と名付け又海市ともいふと云り、又唐詩訓解の注にも、蜃は蛟の類にて、氣を吐き樓臺人物の形の如しと云へり、然るを近松は鷸蚌のはまぐりと思へるは麁末の至りにあらずや」と見えてゐる。

春に育つも花誘ふ・蝶は菜種の味知らず（壽門松）

蝶は春陽に出でて菜種の花盛り頃に飛び交へど、菜種の實る時には既に死すればかくいうたのである。于濆の感レ事詩の起承二句に、「花開蝶滿レ枝、花謝蝶還稀」、とあるは似て別意である。

萬事無心なり一釣竿、三公にも換へず此江山（女夫池）

少皞」と見え、少皞は金天氏、金德の王であろう。また「冬の神は……玄英神と申すとかや」とあるは、和漢三才圖會・時候類に「冬…玄英、安寧、玄冬、三冬、九冬」と見えてゐる。

精衞海を塡めし例もあり（佐佐木）

精衞は小鳥の名である。西山の木石を取つて東海を塡めたと云ふ。山海經に、「發鳩之山有レ鳥、曰二精衞一、是炎帝之女、往遊二于東海一、溺而不レ反、是故精衞常取二西山之木石一、以塡二東海一」。

せうらん　陰陽の頭晴明、唐土の紹蘭夫婦が中立の昔を引き、紙を以て燕を作り祕文を封じ放せば（弘徽殿）

〔紹蘭〕郭紹蘭は唐時代長安の人で、任宗の妻である。任宗商用にて湘に行き、歸らないこと數年何の音信もなかつた。或日紹蘭雙燕の梁上に戲れるを見て之に憂悶を語り、詩を書して其足に繫いだ。燕飛鳴して去り任宗の所に至つた。任宗妻の書を讀んで感泣し、家に歸來つたと云ふ。天寶遺事に、「郭紹蘭‖長安郭紹蘭嫁二任宗一、宗客二湘中一數年、音問不レ達、紹蘭語二梁間雙燕一、欲下憑寄二書於壻一、燕子遂飛泊二膝上一、蘭寄詩曰、我壻去二重湖一、臨レ窓泣血書、殷勤憑二燕翼一、寄二與薄情夫一、宗得レ詩感泣而歸、張說傳二其事一」。

葉公龍を好んで畫き刻めども、眞の天龍を見て魂を失ふ、これ龍を好むにあらず、龍に似て龍にあらざるものを好むといはん（川中島）

劉向新序卷五に「葉公子高好レ龍、鉤以寫レ龍、鑿以寫レ龍、屋室雕文以寫レ龍、於レ是夫龍聞而下レ之、窺二頭於牖一、拖二尾於堂一、葉公見レ之棄而還走、失二其魂魄一、五色無レ主、是葉公非レ好レ龍也、好二夫似レ龍而非レ龍者一也云云」。

仙家の日月本長閑なり、臘を送り春を逐ふ豈又然らんや、聖皇自ら長生殿にましませば、蓬萊王母が家になんなんたらず（松風村雨束帶鑑）

仙人の居處は日月もともと長閑であつて變じることなければ、從つて俗家のやうに臘月（陰曆十二月）を送り春月を迎へるやうなことは無い。英明な今上皇帝は長生殿と申す壽命長久を祝うて名付けた宮殿にましますことであるから、何も蓬萊山に西王母が家を訪うて不老不死を願ふを要しないとの意であつて、今上帝の德をほめた詩である。唐の楊衡が詩に、「仙家日月本長閑、送レ臘逐レ春豈又然、聖皇自在二長生殿一、不レ向二蓬萊王母家一」。

たいあ　秦に太阿上市あつて六國を合す（嫗山姥）

〔太阿〕支那古代の名刀の名である。越絕書に、「楚王召二風湖子一、令下之二吳越一見中歐冶子干將上、使三之爲二鐵劍三枚一、一曰二龍泉一、二曰二太阿一、三曰二上市一」と見え、また同書に「太阿劍其色如二秋水一」と見えてゐる。（「太阿」は地名より附いた名であるべく思はるれども、禹域全土何れの處にも太阿といふ地名が見當らない。よつて按じるに、太阿は或は大冶を誤り傳へたのではあるまいか。大冶鐵山は東洋屈指の鐵山で、現今我國の八幡製鐵所も大冶鐵鑛に負ふ所が頗る大なのである）。

橘　唐土人の孝行（扇八景）

「りくせき」（陸績）を見よ。

珠ある淵は岸破れず、龍棲む池は水涸れず（國性爺）

大戴禮・勸學篇に、「玉居レ山而木潤、淵生レ珠而岸不レ枯」。韓詩外傳・卷五に、「水淵深廣、則龍魚生レ之」。ここの文は、日本は珠淵龍池の國であるとほめたのである。

***長生殿　長生殿の內に秋ふけず、不老門の前には日も傾かず**（女夫池）

法眼が藥飲む人は長生不老門前に藥代禮物持たせ來て（冷泉節）

長生殿は唐の宮殿の名、不老門は唐の宮殿の門の名で、共に長久を祝うた名である。淮國女夫池のこの文は、慶滋保胤の天子萬年の詩に、「長生殿裏春秋留、不老門前日月長」、とあるを國譯したのである。源氏冷泉節のこの文は、病者を治療する法眼の宅をいふに長生殿不老門の語を借り、やがて急轉してそれが毒を盛らねばならぬ伏線である。

仲尼は炊水を受けて衞の國を去り給ふ（雪女）

仲尼は孔子の字である。孔子家語に「顏氏禱二於尼丘一而孔子生、故字曰二仲尼一」。衞は支那春秋時代の國名で、今の直隸省舊大名府開州から以西河南省の衞輝・懷慶に至るまで衞の地であつた。孔子が衞に行つた第一回は、脅かされて十ケ月で去り、第二回には南子の要求に應じて拜謁をし、車の次乘といふので、「吾未レ見三好レ德如二好レ色者一也」と歎じて去り、第三回には論語・衞靈公篇に、「衞靈公問二陳於孔子一、孔子對曰、俎豆之事則嘗聞レ之矣、軍旅之事未二之學一也、明日遂行」とあつて、仲尼が米の淅水を貰つて衞國を去つたとは書いてないが、蓋し失意落魄の有樣をかくいうたのである。

中流に舟を失へば一瓠も千金なるとかや（吉野忠信）

瓠は價安い物なれども、中流に難船する時は瓠によつて身を浮べ、人命を濟ふことができる、故に瓠も千金に價する。鶡冠子・學問篇に、「中流失レ船、一壺千金」、とありて宋陸佃解に、「壺、瓠也、佩レ之可二以濟涉一、南人謂二之腰舟一」。

盡くることなき身の內の寶の玉（大職冠）

實語敎に「庫中財有レ朽、身中財無レ朽」。

繫犬柱を廻るに異ならず（弘徽殿）

童子敎に「順二惡人一不レ避、繫犬如レ廻レ柱」。

燕はつちのえつちのとに巢をくひ始む（加增曾我）

「巢をくふ」とは巢を營むをいふ。抱朴子・內篇卷之一、至理の條に、「燕知二戊巳一、而未二必達二於他事一」。北愼言撰・梅園日記・卷之一、燕巢の條に、「抱朴子云、燕知二戊巳一者、其日巢をつくりそむるにや」。「鷺はだいさいの方云云」をも見よ。

鶴は一百六十年にして雌雄相視て孕み、一千六百年に胎化して產むといへり、又曰く、內に土木の氣を養ひて外靑黃の色なく、天壽自ら量りなく、聖人位にある時んば鳳凰にともなつて甸に遊ぶ（扇八景）

宋浮丘公撰・相鶴經に、「（鶴）生大壽不レ可レ量、所三以體無二靑黃二色一者、木土之氣內養、故不

ら觀察して五行相尅に配したのである。卽ち木は土に尅ち、土は水に尅ち、水は火に尅ち、火は金に尅ち、金は木に尅つ。鹽谷高貞(實は淺野長矩)は木工頭であつたから木と占ひ、高師直(實は吉良義央)の拍子木の數は九つ。調子は金聲に響くによつて老陽金と占ひ、四十七義士は火事裝束なるによつてこれを火と占ひ、五行相尅によつて、金は木に尅てども然も火には尅つことができぬ。故に自滅の相顯はれたと占うたのである。「金にして數は九つ」をも見よ。

らんのかぢ 入部の船の蘭の枻、故鄕へ歸る唐衣(浦島) 錦の纜蘭のかぢ、桂の櫂の船歌に(天神記)

〔蘭枻〕楚辭・九歌湘君篇に、「桂櫂兮蘭枻」とありて朱註に、「櫂楫也、枻船旁板也、桂蘭取ニ其香一也」と見えてゐる。蘇子瞻の前赤壁賦に、「桂櫂兮蘭槳」。

りくせき 二十四孝の陸績が橘を袖に入れ(扇八景)

〔陸績〕字は公紀、呉の人。六歲の時袁術から貰つた橘を懷に入れて歸り、母に贈らうとした孝心篤き人なること呉志に見えてゐる。蒙求・卷之上、陸績懷レ橘の條に「呉志、陸績字公紀、呉人、年六歲、於ニ九江一見ニ袁術一、術出レ橘、績懷ニ三枚一、去拜辭墮レ地、術謂曰、陸郞作ニ賓客一而懷レ橘乎、績跪曰、欲ニ歸遺レ母、術大奇レ之、云々」。

りようもん 龍のきざしの六六鱗、沸つて落つる水の勢、鰭をたたいて龍門の瀧登りとも謂つべく(會稽山) 龍門に跳る魚も時あれば漁人の手に落つるとかや(大織冠)

〔龍門〕黃河の上流にあるといふ。鯉などこれまで登れば化して龍となるといふ。三秦記に、「江海魚集ニ龍門下一、登者化レ龍」。書言故事に、「水經、鱣鯉出ニ鞏穴一、三月上渡ニ龍門一、得レ渡爲レ龍、否則點レ額而還」。

呂洞賓が袖の中の靑蛇を抛つて黃龍に乘ぜし(用明天皇)

呂嵒字は洞賓、京兆の人で、俗傳八仙の一である。巢林子のここにいへること道敎の書に見當らない。聯珠詩格に(呂洞賓)朝遊ニ北海一暮蒼梧、袖裏靑蛇膽氣粗、三入ニ嶽陽一人不レ識、朗吟飛過ニ洞庭湖一」と見えてゐる。

六種の夢 周禮の占夢に六種の夢をあげて占ふ旨を記せしが(蛙合戰)

周禮に正夢、噩夢、思夢、寤夢、喜夢、懼夢の六夢を擧げてある。正夢とは感動する所なうして平安自ら夢むこと。噩夢とは驚愕して夢むこと。思夢とは覺時思ふ所之を念うて夢むこと。寤夢とは覺時之を道うて夢むこと。喜夢とは喜悅して夢むこと。懼夢とは恐懼して夢むこと。

盧生が見し榮華の夢(最明寺殿)

「邯鄲の枕」の故事である。その條を見よ。

王羲之・趙子昂が石に入り木に入る(反魂香)

晉の王羲之(その條を見よ)の書いた墨痕深く木に入つたといふ。書斷に「王羲之、晉帝時祭ニ北郊一更ニ祝版一、工人削レ之、筆入レ木三分」と見え、また事類賦に「逸少爲ニ入木之七分一」とありて、註に「晉世北郊祭文、帝命ニ王羲之一更寫レ之、工人削レ之、羲之筆巳入レ木七分」と見えてゐる。墨痕の石に入つた故事は思ひ當らないが、元の趙子昂が至大元年に書いた赤壁賦の石刻などは有名であるから、近松がこれ等のことによつてかくいうたのである。

別を天外に求むれば蜀山の雲慾に隔り、魂を地下に尋ぬれば巴陵の水轉た流れて留らぬ(隅田川)

若君と別れて、その行方を天外に求めれば、雲霧隔て茫漠として答へるもの更に無く、魂を地下に尋ねれば、何心なき水轉た流れて愁人の爲に留ること暫くもしないとの意。蜀山は四面山高き地。韓退之の書に「蜀中高霧重、見レ日時少」とある。また巴陵は洞庭湖などあつて水多き地。故にこれ等の地をいうて文飾としたのである。

夫を慕ひ石になつたる女もある(會稽山)

望夫山の故事をさす。五五七頁を見よ。

斧の柯も自らとや朽ちぬべし(國性爺)

晉の王質が仙人の碁を圍むを見ながら、さほどの時間でもないと思うてゐたに、携へてゐた斧の柯が朽ちた程長時間であつたといふ故事によつたのである。述異記に、「晉王質伐レ木至ニ信安郡石室山一、見ニ數童子圍レ碁、與ニ質一物一、如ニ棗核一含レ之不レ飢、局未レ終斧柯爛盡、既歸無ニ復時人一」。

因果經に據れるもの

——(佛書之部)——

過去も未來も現世で知る(丹波與作)

過去現在因果經に、「欲レ知ニ過去因一、見ニ其現在果一、欲レ知ニ未來果一、見ニ其現在因一」。

現在の果を見て過去未來を知るとかや(今川了俊)

過去現在因果經に、「欲レ知ニ過去因一、見ニ現在果一、欲レ知ニ未來果一、見ニ其現在因一」。

ししく 獅子吼の金言あやまたず、佛法流布は王道の盛りのはじめとなりにける(用明天皇) 太子は圓智明けき御顏、七覺を衣して七步み雙の御手を獅子吼して、天地を指さし微妙の御聲、天上天下唯我獨尊、無量の生死今に於て盡せりと(釋迦)

〔獅子吼〕佛陀の說法は恰も獅子王が咆吼して群獸恐怖する如き威勢あるとの意でいふ。釋尊出生の時周行七步にして止り、右手は天を指し左手は地を指して、我は一切天人の中で最尊最勝であると宣はれた。世にこれを天上天下唯我獨尊の獅子吼と云ふ。因果經・一に、「菩薩卽便墮ニ蓮花上一、無ニ扶持者一自行七步、擧ニ其右手一而獅子吼、我於ニ一切天人之中一最尊最勝、無量生死於レ今盡矣、其生利ニ益一切人天一」。

錦繡段、魏復古の釣臺の詩に、「萬事無心一釣竿、三公不レ換此江山、平生悞レ識二劉文叔一、惹二起虚名一満二世間一」。

瓢頴川に口漱きしもかくやと思ひしらま弓（大覺）

堯帝の世の隱士許由山中に隱れ、所持せるものとては一瓢のみで、これをもつて水を飲み畢れば樹枝に懸けてゐたといふ。高士傳に、「許由隱二箕山一、以レ手捧レ水飲レ之、人遺二一瓢一、得以取飲、飲訖掛二樹上一、風吹歴歴作レ聲、由以爲レ煩遂去レ之」。また事文類聚・隱逸部に、箕山の隱者許由は堯帝が己に國を讓らうとすることを聞いて、耳の汚れとして穎川で耳を洗つたと見えてゐる。ここの文は兒島三郎高則が清貧の士であつたことは、恰も許由の如くであつたであらうと、思ひ知られるを白眞弓にいひかけたのである。

人生れて八歳より小學に入り、十有五にして大學に至る古の法なり（用文章）

白虎通に、「八歳入二小學一、十五入二大學一」。

船端に刻を付けて刀を尋ねる（用明天皇）

舊法を固守するの愚なるを云ふ故事。呂氏春秋に、「楚人有二渉レ江者一、其劍自二舟中一墜二于水一、遽刻二其舟一曰、是吾劍所二從墜一也、舟止從二其所レ刻處一入レ水求レ之、舟已行矣、而劍不レ行、求レ劍若レ此、不二亦惑一乎」。

べんくわ　卞和が三度足切られ（雪女五枚羽子板）

卞和が楚山に足切られ（大織冠）

忠孝仁義の武士も、卞和が璧の埋れてゐて光なきこそ是非なけれ（川中島）

〔卞和〕支那春秋戰國時代楚の卞邑の人である、玉璞を楚山中に得て之を厲王に獻じた。然るにこれは玉でなく石だ、王を誑したものとして卞和の左足を削つた。武王の時卞和またその璧を獻じた。この時も石だとして卞和の右足を削つた。文王の世となつた時卞和其璞を抱いて楚山の下で哭したといふ。韓非子・卞和篇に、「楚人和氏得二玉璞楚山中一、奉而獻二之厲王一、厲王使二玉人相一レ之、玉人曰石也、王以レ和爲レ誑、而削二其左足一、及二厲王薨武王即一レ位、和又奉二其璞一而獻二之武王一、武王使二玉人相一レ之、又曰石也、王又以レ和爲レ誑、而削二其右足一、武王薨文王即レ位、和乃抱二其璞一而哭二於楚山之下一三日三夜、涙盡而繼レ之以レ血、王聞レ之使三人問二其故一、和曰吾非レ悲レ削也、悲二夫寶玉而題一レ之以レ石、貞士而名レ之以レ誑、此吾所二以悲一也、王乃使三玉人理二其璞一、而得レ寶焉、遂命曰二和氏之璧一」。

岷江の水上觴をうかぶるも、楚に入つて千尋の風波をあぐるとかや（三國志）

支那岷山から流れ出る岷江も其源は觴をうかべる程のささやかなものなれども、楚に入つて渺漫たる楊子江となつてゐる。黃山谷の次韻答二荊敦夫一詩句に、「岷江初濫レ觴、入レ楚乃無レ底」。孔子家語・三恕篇に、「江（楊子江）始出二岷山一、其源可二以濫一レ觴、及三其至二江津一也、不レ舫レ舟不レ避レ風、則不レ可二以渉一」。

明の金氏は女なれども猛虎を撲つて夫を助く（百日曾我）

明時代安東の人・金氏は我が夫を攫み行く虎を撲つて、夫の命を助けたといふ。明黃希周等編・新續烈女傳・卷之下、國朝の部に、「安東金氏＝金氏安東人、適二散員俞天桂一、洪武辛巳天桂當レ行レ戍、謂二其妻一曰、今日吉、吾將レ出二宿於外一、其妻曰、吾亦出宿矣、遂入室裝レ糧、夜半忽有二人驚呼聲一、婢僕皆縮レ頸、金挺レ身出、虎已攫レ夫去、金把二木弓一呼呼而前、左手執レ夫右手撲レ虎、幾至二六十步許一、虎委レ之而去、夫氣絕、金負而歸レ家、黎明夫甦、其夜虎又至、唐突大吼、金又開レ門荷レ杖語レ虎曰、爾亦含レ靈之物、何若レ是之甚乎、虎齧二舍傍梨樹一而去、樹乃枯」。

百度戰つて百度勝つは善の善なるものといへり（川中島）

孫子・謀攻篇に、「百戰百勝非二善之善者一也、不レ戰而屈二人之兵一善之善者也」。

唐土春秋の會盟、牛の血をすすつて金鐵の誓の法（關八州）

「さふけつ」（歃血）を見よ。

唐土の聖王は八人の王子をはぶき、賤しき土民の孝行に感じ大舜を擧げて四百餘州を讓り給ふ（持統天皇）

「聖王」とは堯帝を云うたのである。堯帝が舜の孝行に感じ、畎畝の中から擧げて帝位を讓つた。孟子・萬章上篇に、堯帝に九男二女あつたことが見えてゐれど、呂氏春秋・去私篇には、「堯有二子十人一、不レ與レ其而授レ舜」と見えてゐる。

唐土の紹蘭夫婦が中立の昔を引き

「せうらん」を見よ。

野に伏兵あれば歸雁つらを亂ると云へり（源義經）

「歸雁つらを亂るなる云云」を見よ。

夢路は六つ　夢路は六つに變れども、思は一つ魂の胸の鏡に映り來る（國性爺後日）

周禮に、正夢、噩夢、思夢、寤夢、喜夢、懼夢、以上六種の夢を載せてある。「六種の夢」をも見よ。

世擧つて皆濁れり、衆人皆醉へりと屈原が詞（浦島）

屈原の漁父辭に、「屈原既放遊二於江潭一、行吟二澤畔一、顏色憔悴、形容枯槁、漁父見而問レ之曰、子非二三閭大夫一與、何故至二於斯一、屈原曰、擧レ世皆濁、我獨清、衆人皆醉、我獨醒、是以見レ放」。

老聃は漢の武帝に玉の枝を得て七百歲汗せずとかや（西王母）

老聃は老子である。周末春秋戰國時代の人で孔子と時を同じうし、漢武帝とは時代が違ふ。巣林子のこの文は、漢文内傳に「得二西那國玉枝一賜二近臣一、年高者病則枝汗」とあるを誤つたのである。

老陽金尅木火尅金　拍子木の調子金にして數は九つ、らうやう金尅木火尅金、自滅の相顯はれたり（碁盤太平記）

九を「老陽」といふ。易疏に、「老陽數九、老陰數六、老陰老陽皆變云云」。易學啓蒙に、「陽數至レ九而極、陰數至レ六而極、故云レ老也」。「金尅木云云」は、敵と我とこれを相性の上か

乘齊しく通入す」とは、聲聞・緣覺・菩薩・人間・天上の五類の人人が、平等に極樂樂土に往生するをいふ。蓋し淨土門の往生は、阿彌陀如來の他力攝取によるのであるから、如何なる者もただ信ずるのみで淨土に往生することができる。「圓圓極極無相無念の上に於て、無方難思の大用を起し」とは、三身（法身、報身、應身）已に圓で、四智（大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智）復圓であるによつて圓圓といひ、菩提既に極め、涅槃復極るが故に極極といふ。有無・善惡・邪正を超越してこれ等の想念なき上に於て、力用動作方位なく不可思議にして、臨機應變能くその功を奏するをいふ。「有相修因より直に無相の樂果に入る」とは、妍醜・有情・非情などの姿勢形體や、善惡の因を修することや、それ等の執着感果を解脱して菩提の果に入るの意。なほ巢林子のここの文は、次の文に據つたものである。大原談義聞書鈔（延寶五年刊）に、「上人曰、予自二遁世之當初一、至二衰老之中比一、竊披二一代之教文一、倩案二出離之要義一、付レ顯付レ密開悟不二容易一、云レ事云レ理修行難二成就一、……、然間量二涯分一願二淨土一、憑二他力一稱二名號一、……、有智無智誰人不レ歸哉、而諸宗行人以爲、口稱念佛偏被二愚鈍機一、全不レ及二眞言止觀之妙行一、更難レ勝二華嚴禪門之宗旨一、於二一文不通頑魯一者、……、不レ制二止罪業一者、縱雖レ稱二名號一不レ可二往生一、……、然於二彌陀名號一者、極善最上法也、雖二造罪凡夫一、修レ之得二往生一、……、永辨問曰、罪業妄念任佗、自專稱念必許レ可二往生一者、人皆任二惡見一不レ恐二惡業一、好作二衆罪一起二妄念一、還可レ墮二惡趣一也、然一往先以二制レ惡息一レ妄、爲二安心之面一、可レ令レ恐二羸強之罪一如何、上人答曰、諸惡莫作諸善奉行、諸佛通誡也、然造罪凡夫念佛往生云義、全非レ云下好造二惡業一起中妄念上、……、愚癡凡夫更難レ制二止妄念惡業一、此事歎而有レ餘、可レ恐可レ恐、爰彌陀本願、爲レ救二如レ此凡愚一、以二易レ行易レ修名號一、令レ點二犯罪咎一、得二此意一之輩何寄二事於他力本願一、好可レ造二大罪一哉」、と見え、「萬善妙體即二名號六字一、恒沙功德備二口稱一行一」、と見え、「智海問曰、明二大乘眞實理一、是名二實教一、存二是心是佛旨一、是名二頓教一、今此宗不レ明二生佛一如之道理一、而偏勸二厭離穢土之安心一、不レ述二寂滅無生之實義一、而僅談二欣求淨土之起行一、專附二傍機門漸教之法門一、全不レ順二圓實頓速之宗義一」、と見え、「然他力大道、廣弘五乘齊通入、於二圓圓極極無相無念果成之上一、起二無方難思之大用一、自二有相修因一、直入二無相樂果一」、と見え、「此上人口出二光明一、末代念佛祖師誰致背レ之哉、上人行道時、或人夢見下勢至菩薩行道上、夢覺貫奉レ見、即上人行道也」と見えてゐる。

義楚六帖に據れるもの

小乗四諦の名ばかりを囀りし鸚鵡さへ天に生じ（大覺）

「乘」は因人を載せて證果に運ぶ乘輿の義で、佛の教道をいふ。聲聞緣覺の小涅槃を求むる法門を「小乘」といふ。「四諦」とは苦・集・滅・道をいひ、小機を誘引する善巧で、何れも審諦不虛の道理であるによつて諦といふ。鸚鵡が佛を誦じて林中に法を說かしめて、後に天に生じたといふことは、義楚六帖にも見てゐる。

めいかい　唐の明解と云ふ僧は地獄にて詩を作る程の學匠なれども、出家を落ちたる科によつて八萬地獄へ落ちしと聞く（賀古教信）

〔明解〕支那・京の普光寺の詩僧であつた、明解殺して其親知の夢に、明解が地獄に墮して詩を作り供養を賴むを見たといふ。義楚六帖（或云釋氏六帖）第十一、神通化物第十六の題下に、「明解賦詩」とありて其註に、「姓姚、住二京普光寺一、有二才學一善二琴詩一、以二知解一自大、不レ敬二長幼一、所レ食如レ俗、龍朔中徵二三教貢一策一、因登レ第歸二人道一、不レ久明卒、後有二明之親知一、夢見二手執而泣言一、在二苦處一乞造二功德一、詩曰、握レ手不レ能レ別、撫レ膺聊自傷、痛矣時陰短、悲哉泉路長、野風驚二曉吹一、荒壟落二寒霜一、留情何所レ贈、惟思二內典章一」と見えてゐる。續高僧傳・卷二十五をも參照せよ。

觀無量壽經に據れるもの

親を殺せし惡人は一萬八千人

「觀經とやらん申す御經」五六二頁を見よ。

くほんのじやうせつ　親子諸共九品のじやうせつに往生す（賀古教信）　九品の淨刹に往生し、半蓮を分けて待つて居や（夕霧）

〔九品淨刹〕極樂淨土。「九品」は觀無量壽經に說ける極樂往生の等階であつて、生前の起行信心の如何によつてこの差を生じる、即ち上品上生・上品中生・上品下生・中品上生・中品中生・中品下生・下品上生・下品中生・下品下生これである。「淨刹」は淨土の義。刹は梵語（Ksetra）である、國土の義。

***光明遍照**　光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨（寶庚申）　光明遍照の天蓋は十方世界の雲に覆ひ、念佛衆生の幡の脚攝取不捨の風に靡かせ、欲生我國の提灯に不取正覺の輿を照して、中山寺へ送りしは（賀古教信）　光明遍く十方の世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨て給はず（隅田川）

觀無量壽經に、「無量壽佛光明、遍照二十方世界、念佛衆生攝取不レ捨」。その意は、無量壽佛の光明はあまねく十方の世界を照覽し給

無量の生死今に於て盡せり(釋迦)

因果經・一に出てゐる文である。「獅子吼」を見よ。

盂蘭盆經に據れるもの

充滿吾願如清涼地(歌念佛)

この文は盂蘭盆經に見えてゐる。吾が願を滿足に果して心は涅槃佛のやうだとの意。

目連七月の供養も専ら青提女の苦を救ふ(大覺)

目連は即ち大目犍連(Mahamaudgalyayana)の略で、釋尊十大弟子の一である。母青提女が餓鬼道に墮ちて倒懸の苦を受くるを見て哀慟し、これを救ふ法を釋尊に問うて、毎年七月十五日に百種の供物を三寶に奉ることを敎へられ、その加護によつて母の苦患を救うたと云ふ。これ盂蘭盆會の起源であつて、詳しくは盂蘭盆經に就いて見よ。

によしやうりやうち(女護島)

〔如清涼池〕「じゆうまんごぐわん云云」を見よ。

大原談義聞書鈔に據れるもの

我遁世の昔より衰老の今に至つて、竊に釋尊御一代の敎文を披き、倩ら出離の要を案ずるに、顯に付け密に付け其悟り容易からず。事といひ理といひ修行やはか成り難し。只淨土を願ひ他力を憑み、名號を稱ずるに如くはなし。有智無智の輩、誰の人か歸せざらん。……。顯眞座主問うて曰く、口稱念佛は偏に愚鈍の機を被るのみ、全く眞言止觀の妙行華嚴禪門の宗旨に及ばんや、一文不通の頑魯者に、罪業を制せずして何程名號を勸むるとも、いかでか往生を遂げんや。いかにいかにとありければ、上人答へて、いやいや口稱念佛は極善最上の大法なれば、如何なる極重惡人なりとも、彌陀の名號を稱へ奉らば、其他力念佛に無量の罪障悉滅し、決定往生何の疑ひかあらん。但ありやありやと仰せける。永辨難じて曰く、罪業妄念はさもあらばあれ、自專稱念して必ず往生すべきことを許さば、人皆惡見に任して惡業を恐れず、好んで衆罪を作り、妄念を起し、還つて惡趣に墮すべきなり。然らば一往まづ惡を制し、妄を息るを以て安心の面とし、麤强の罪を恐れしむべけんや。上人答へて曰く、諸惡莫作諸善奉行、是佛の常の誡なり。然るに造惡の凡夫も、念佛往生するとて、全く惡業を造り妄念を起せと云ふにはあらず。愚癡の凡夫更に惡業止め難き事歎きても餘あり、アア恐るべし恐るべし。爰に彌陀の本願此の如くの凡夫を救はん爲、行ひ易き名號を以て衆罪を黜ぜしむるの輩、事を他力に寄せ好んで大罪を造るべけんや。忝くも念佛は、至極の大乘にして萬善の妙體なれば、名號の六字に恒沙の功德備はるなり。……。智海居丈高になつて曰く、凡そ大乘眞實の理を明らむる是を實敎と名づく。又是心是佛の旨を存ず、是をば頓敎と名づく。今此宗生佛一如の道理をも明かさず、偏に厭離穢土の安心を勸め、寂滅無生の實義をも述べずして、僅に欣求淨土の行ひを至極の大乘とは心得ず。……忝くも他力の大道は、廣大にして五乘齊しく通入す。圓圓極極無相無念の上に於て、無方難思の大用を起し、有相修因より直に無相の樂果に入る。是廣大の念佛大乘にあらずやと、……、凡そ此上人は凡人にあらず、勢至薩埵の化現と覺えたり(大原問答)

「顯」とは顯敎即ち眞言宗以外の宗旨をいひ、「密」とは密敎即ち眞言宗をいふ。「他力」とは佛の本願力加被力をいふ。「名號」とは彌陀の名號即ち南無阿彌陀佛をいふ。「愚鈍の機を被るのみ」とは、愚鈍の機に被らしめるのみの意。「決定往生」とは、往生すること決定であつて動くことなきをいふ。「自專稱念」とは、自ら專ら念佛を稱へての意。「惡趣」とは、衆生が惡業の因を以て趣くべき所で、即ち地獄・餓鬼・畜生を三惡趣といひ、これに修羅を加へて四惡趣といふ。「諸惡莫作、諸善奉行」の諸善は衆善ともいひ、七佛通戒偈の二句である。「衆罪を黜ぜしむる」とは、多くの犯した罪の咎を改めしめるの意。「生佛一如」とは、迷へる衆生と悟れる佛陀と無差別である、即ち理體に於て迷悟不二の意。「無生」とは、無生無滅・不生不滅の義。生滅流轉の諸法も、その實相を達觀すれば本來無生のものである。「五

景德傳燈錄に據れるもの

しんずゐばんきやうでん なうお千代、しんずゐばんきやうでんと聞く時は、心は境界に隨つて轉じ變る(心中宵庚申)

〔**心隨萬境轉**〕この句は祖師の道へる五言四句偈中の一句である。景德傳燈錄・卷二に、「心隨二萬境一轉、轉處實能幽、隨レ流認二得性一、無レ喜復無レ憂」。

雪折竹に本來の面目を悟り、肱を切りて祖師の西來意の輪を開きしも尤かな(國性爺)

景德傳燈錄卷三、第二十八祖菩提達磨の條に載つてゐる故事である。穗積以貫撰・難波土産・卷之四に、「初祖に神光といふ僧來り參するに、祖は唯端坐して敎の詞なければ、かの僧庭に立ちけるに大雪降りて竹を折れども退かず、夜明くるまで立ち居たりしかば、初祖憐みて汝何事を求めんためにか雪中にありやと問ひ給ふに、かの僧涙を流し師ただ願はくは敎へ給へといふ、初祖の曰く諸佛無上の妙道は汝がごとき小智小德の慢心をもつて得べきにあらずと、かの僧聞くやいなや刀を以て左の肱を切り祖師の前に置きて云く、諸佛の法印聞く事を得べしや、祖の曰く諸佛の法印は己が心にあり他より求むべけんや、かの僧の曰く我心未だ安からず、師願はくは我が爲に我が心を安んぜよ、祖の云く汝が心を我が前へ持來れ、かの僧心を求むるにとらへ得べからず、祖の云く今汝が爲に心を安んぜりと、かの僧遂に悟を開けり」と見えてゐる。

「祖師の西來意」とは、禪の始祖達磨が西天より來つて、此の土に禪法を傳へる究竟の意思のいかなるかを究めることであつて、この意思を究めるは、佛祖の心印を究めるのである。「輪」は禪門で悟の對照として出す一圓相である。

華嚴經に據れるもの

けごんじやくめつだうぢやう それ世尊一代五千七千の經卷は、そも華嚴寂滅だうぢやうに始り法華涅槃に書き終る(百日曾我)

〔**華嚴寂滅道場**〕釋尊華嚴時に說かれた經典を大方廣佛華嚴經(略して華嚴經)と云ひ、その第一卷に、「一時佛在二摩揭陀國寂滅道場一、始成二正覺一」と見えてゐる。

心外無別法、卽心成佛(蟬丸)

この文は大覺禪師坐禪論の中にも見えてゐる。吾人が認識する一切の世界は皆各自の心から作出すもので、衆生の心を離れて諸法の存在するものではなく、佛も法も皆心の所作であつて、心と云ひ佛と云ふも畢竟一佛であつて、卽ち心は成佛であるとの意。華嚴經・十地品に、「三界所有唯是一心」。華嚴經・夜摩天宮菩薩說偈品に、「心如二工畫師一、畫二種種五陰一、一切世界中、無二法而不一レ造、如レ心佛亦爾、如レ佛衆生然、心・佛及衆生、是三無差別」。

にやくじんよくれうち云云

「にやくにんよくれうち云云」を見よ。

にやくにんよくれうち三世一切佛、おうくわん法界生一切唯一心(女夫池)

華嚴經(六十卷)に、「若人欲レ了二知三世一切佛一、應レ觀二法界生一切唯一心一」とありて、世にこれを破地獄の祕文といふ。若し人過去現在未來の一切諸佛は如何なるものなるか、また如何にして佛と成つたものかを了知せんと欲せば、宇宙間の森羅萬象悉く一心の造作なれば、諸佛も亦然るべきは自ら明白なるにより、己の心を觀察すれば諸佛を了知することが出來る、さればこれを自心の外に求むべきにあらず、心の外に佛なしとの意。

如是我聞心佛及衆生是三無差別(天智天皇)

華嚴經・夜摩天宮品に出てゐる文である。是の如きことを我聞いた、卽ち佛と衆生とは因果の相違がある、心は因果を通じて佛及び衆生に對する能變の體である、故に因果不二、能變所變一如なれば是三無差別である。

わうくわんしゆぢく こゝに別腹の御弟豐日花人親王は、黃卷朱軸の經典を七寶莊嚴の羽車に盛り積んで(用明天皇)

〔**黃卷朱軸**〕大藏經卷をいふ。華嚴演義章に、「言二黃卷赤軸一者、今大藏經卷是也」。俗說に後漢の明帝の永平十四年佛敎の經典を燒いた時、その紙黃色となりその軸赤色に變じたのみで燒けなかつたとて黃卷朱軸の起りであるといふ。黃卷赤軸は蓋し蠹魚を防ぐ爲にかくしたものである。

雜阿含經に據れるもの

雜阿含經にも四種の馬を說かれ(聖德太子)

雜阿含經に、敏・不敏によつて人の命に順ふに四種類の馬があるとの喩を以て說いてある。

ひ、稱名念佛を唱へる衆生をば悉く佛の光明中に攝（をさ）め取つて捨て給はず、皆彌陀淨土に往生せしめ給ふといふのである。念佛宗では「光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨」の經文を攝益偈（せふやくげ）と稱して最も唱へられてゐる。賀古教信七墓廻のここの文に「欲生我國（よくしやうがこく）云々」（五七四頁）とあるは其條を見よ。

*願以此功德（ぐわんいしくどく）　願以此功德氣の毒な（薩摩歌）　願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國（女殺）　願以此功德、平等施一切、……後に回向の句を繼ぎて、發菩提心往生安樂國、南無阿彌陀佛（賀古）

「願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國」の文は、唐・善導撰の觀無量壽經註疏玄義分の最初に歸三寶偈ありて、その結末に出でて利他廻向を表白した文である。願くは觀經・製疏の功德を以て、怨親平等一切衆生に施し、同じやうに信心を發起し、諸共に阿彌陀佛の淨土に往生せしめ給へとの意。この文は念佛宗にて總回向文として讀誦されるものである。女殺油地獄のこの念佛宗でいふ總回向文の次に「釋妙意三十五日逮夜の志」とあるは、總回向文につづけていふ釋妙意（お吉の戒名）五七日逮夜の別回向文である。薩摩歌のは、總廻向中の文句を引き、氣の毒と同韻脚の文飾で、勿論廻向の意はない。（化城喩品にある「願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道」（五七二頁）とは別）

觀經（くわんぎやう）とやらん申す御經　觀經とやらん申す御經には、此娑婆始りて十惡五逆の罪人其數無量といへども、親を殺せし惡人は一萬八千人と說かれしとかや（鎌田）

觀經は卽ち觀無量壽經をいふ。淨土三部經の一である。觀無量壽經に、「劫初以來、有二諸惡王一、貪二國位一故、殺二其父一一萬八千人云云」。

こしふをん　此世の此身此儘にとりもなほさず成佛す、こしふをんとは說かれたり（盛久）　幽幽たる谷に下りてはこしふをんの水を荷ひ、盤盤たる山路に薪を拾ひては十萬億土の月を攀ぢ（卯月潤色）

〔去此不遠〕淨土をいふ。極樂淨土は西方十萬億土にあるけれども、法味觀念の上から見れば此（ここ）を去ること遠くないとの意。佛說觀無量壽經に、「爾時世尊告二韋提希一、汝今知不、阿彌陀佛去レ此不レ遠、汝當下繫レ念諦觀中彼國上淨業成者」。

この娑婆（しやば）はじまりて云云　「觀經（くわんぎやう）とやらん申す御經」を見よ。

*せつしゆふしや　攝取不捨と鉦打鳴し（娵）　光明遍照の天蓋は十方世界の雲に覆ひ、念佛衆生の幡（はた）の脚攝取不捨の風に靡かせ（賀古教信）

〔攝取不捨〕攝め取つて捨てぬこと。觀無量壽經に、「無量壽佛光明、遍照二十方世界一、念佛衆生攝取不レ捨」。「光明遍照（くわうみやうへんぜう）」の條を見よ。

罪を作れば死して地獄に落つるとや（聖德太子）

地獄は罪惡の衆生死して赴くべき處なれば、地獄趣または地獄道といふ。觀無量壽經に、「如レ是罪人以二惡業一故、應レ墮二地獄一、命欲レ終時、地獄猛火一時俱至」。

*二河白道（にがびやくだう）　三三九度は二河白道、うづまく炎みなぎる白波（關八州）

水河と火河との二河の間に白道がある。蓋し二河を貪欲と瞋恚に喩へ、白道を阿彌陀佛の信仰心に喩へたものである。觀經散善義に、「譬如三有レ人欲二向レ西行一、百千之里忽然中路見レ有二二河一、一是火河在レ南、二是水河在レ北、二河各闊百步、各深無レ底、南北無レ邊、正水火中間有二一白河一、可二闊四五寸許一、此道從二東岸一至二西岸一、亦百步、其水波浪交過濕レ道、其火焔亦來燒レ道、水火相交、常無二休息一」。

*びやうどうせいつさい　肌に給の破紙子（やれかみこ）、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、どう願ふこそ哀れなれ（夕霧）

〔平等施一切〕ここの文は、紙子の四十八枚繼合せを彌陀の誓願四十八（「四十八串（ぐし）彌陀の誓願」を見よ）にいひかけ、彌陀の緣より觀無量壽經にある「願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國」（「願以此功德」の條を見よ）の中の文句を取り、同發菩提心の「同」を「嗔願ふ」にいひかけたのである。

頻婆沙羅王の御子阿闍世太子は、過去世よりの惡人にて、御母韋提希夫人を鐵（くろがね）の牢に押込め、無數（むしゆ）の苦患を見せ給ふ、釋尊大悲の光明を放ち、牢の內に來臨あり、權（かり）に西方淨土を現じ示し給へば、則ち安樂往生の悲願を念じ、夫人は牢屋の苦を忽ち遁れ給ふとかや（持統天皇）

觀無量壽經に、「阿闍世聞二此語一、巳怒二其母一曰、……、敕二語內官一、閉二置深宮一、不レ令二復出一、時韋提希被二幽閉一已、愁憂憔悴、遙向二耆闍崛山一、爲レ佛作レ禮、……、見下世尊釋迦牟尼佛、身紫金色坐二百寶蓮華一、目連侍レ左、阿難在レ右、釋梵護世諸天在二虛空中一、普雨二天華一、持用供養上、……、韋提希與二五百侍女一、聞二佛所說一、應レ時卽見二極樂世界廣長之相一、得レ見二佛身及菩薩一、心生二歡喜一、歎二未曾有一、廓然大悟得二無生忍一、云云」。

みけんびやくがう　如來の三十二相を學び千輻輪の金具をつかひ、眉間白毫に螢の光借りしぞよ（用明天皇）

〔眉間白毫〕如來三十二相（「三十二相」を見よ）の一である。眉間に白毫あつて珂雪の如く光明を放つ。觀無量壽經疏に、「如來眉間有二白毫相一、如二珂雪一長一丈五尺、毫有二八楞周圍五寸、其毫中空右旋、婉轉如二琉璃筒一、從レ此發レ光照二無量國一云云」。

臨終（りんじゆう）の一念に攝取の光明を期し、十念の枕の上に聖衆の來迎を待つ（會稽山）

絕命に際して一聲の稱名念佛によつて、佛の心光の中に念佛の衆生をさめ取られるを期し、十聲の稱名念佛によつて、枕上に聖者の群集して來迎し給ふを待つの意。觀無量壽經に、「無量壽佛光明、遍照二十方世界一、念佛衆生攝取不レ捨」。選擇集に、「彌陀光明不レ照二餘行者一、唯攝二取念佛行者一」。

來無量の功德を讚歎する一書を得て歡喜し、偈を說いて釋尊降臨の下に三大願を起し、また恒沙の願を攝する一大願を起し、一佛乘・三種人の法を說き、恒沙の衆生を濟度されたこと、勝鬘師子吼一乘大方便方廣經に見えてゐる。

佛・勝鬘夫人に記を授けて曰く、汝・如來の眞實の功德を歎ず、此善根を以て當に無量阿僧祇劫に於て自在の王となり、現前に讚歎せんこと今の如くにして異ることなかるべけんと(聖德太子)

勝鬘師子吼經に、「佛於二衆中一卽爲受記、汝歎二如來眞實功德一、以二此善根一、當下於二無量阿僧祇劫一天人之中爲二自在王一、一切生處常得レ見レ我、現前讚歎如レ今無上レ異」。「阿僧祇劫」はその條を見よ。

說法明眼論に據れるもの

***一河の流れも他生の緣**(嫗山姥)

「他生」は「多生」である。同じ河流の水をくむも此世ならぬ契で、前世からの因緣であるとの意。說法明眼論に、「宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻、……皆是先世結緣」。

***一樹の緣** 一樹の緣の假枕(五人兄弟)

一樹の蔭一河の流れを汲む酒も緣(祂狩) 一樹の宿も他生の緣(蟬丸)

同じ一樹の蔭に宿るも此世ならぬ契で、前世からの因緣であるとの意。「一河の流れも他生の緣」をも見よ。

むすぶ 一河をしばしむすぶだにこれぞ他生の緣深き(西王母)

日本紀に「掬」をよんである。掌を窪めてすくひ汲む。說法明眼論に、「或處二一村一、宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻、皆是先世結緣」。

千手陀羅尼經に據れるもの

枯れたる木とて火花咲く(島原蛙合戰)

千手陀羅尼經に「念二彼觀音一力、枯木華更開」。

***枯れたる木にも咲く花** 枯れたる木にも咲く花の、千手の誓ぞ有難き(出世景清)

千手陀羅尼經に、「念二彼觀音一力、枯木華更開」。古今著聞集・六に、「いづれの佛の願より千手の誓ぞたのもしき、枯れたる草木も忽ちに花咲き實ると說きたれば」。「觀音薩埵の誓」をも見よ。

觀音薩埵の誓 觀音薩埵の誓には枯れたる木にも花がさ(歌念佛)

千手觀世音菩薩の誓、卽ち「枯木華更開」とあるをさす。「觀音」は梵語(Avalokites' vara)の舊譯、「薩埵」は菩提薩埵(Bodhisattva)の略で、菩薩とも云ふ。「枯れたる木にも咲く花」をも見よ。

なむきやらちよんのふとらやあ(國性爺)

千手陀羅尼經に「南無喝囉怛那哆囉夜耶、南無阿唎耶、云云」とある、この大悲心陀羅尼をもぢつたもので、この後の文に「ありや何といふお經ぢや」といへる、「ありや」に「阿唎耶」をきかせて「何といふお經ぢや」と詐した諧謔、運用驅使の妙を極め、巣林子の靈腕をいつもながら感嘆せざるを得ない。

南無千手千眼生生世世、一聞名號滅重罪(出世景清)

「南無」は歸命頂禮の義。「千手千眼」は千手千眼觀世音菩薩の略。千手千眼觀世音菩薩の御名を一たび聞くもなほ三世にわたつての重罪を消滅すとの義で、功力の廣大なるをいふ。

智度論に據れるもの

***いつさいしゆち** 一切種智の光明に、蠢蠢たる懷生喁喁たる喘類(釋迦)

「一切種智」萬有の眞體は唯一にして不動なることを大悟すると同時に、萬有各個の差別を知つて遺すことなき、釋尊所有の智慧をいふ。智度論・二十七に、「一切智是聲聞辟支佛事、道智是菩薩事、一切種智是佛事」。雜部「如是我聞き云々」を見よ。

最期の一念によつて善惡の生を引く(女楠)

「臨終の一念は無量劫を引く」を見よ。

鳩の秤にかかる智惠 人人悅び、オオ槃特できたできた、一生の智惠はじめ鳩の秤にかかる智惠、ためしたし類なし申すばかりはなつかりけり(釋迦)

槃特が鳩を殺したのを俱伴婆羅に責められて、其贖として鳩の重量だけの己が肉を裂き、秤にかけ二俱伴婆羅に與へたことを詐したもので、これは智度論・卷三十五に、釋尊因位に尸毗王であつた時、帝釋天が尸毗王の智惠を

雜阿含經・卷三十三に、「如レ是我聞、一時佛住二王舍城迦蘭陀竹園一、爾時世尊告二諸比丘一曰、世有二四種良馬一、有二良馬一駕以二平乘一、顧二其鞭影一馳駛善能觀二察御者形勢一、遲速左右隨二御者心一、是名二比丘世間良馬第一之德一、復次比丘世間良馬、不レ能レ顧二影而自驚察一、然以二鞭杖一觸二其毛尾一、則能驚速察二御者心一遲速左右、是名二世間第二良馬一、復次比丘世間良馬、不レ能下顧二鞭影一及觸二皮毛一能隨中人心上、而以二鞭杖一小侵二皮肉一、則能驚察隨二御者心一遲速左右、是名二比丘第三良馬一、復次比丘世間良馬、不レ能下顧二其鞭影一及觸二皮毛一、小侵二膚肉一能隨中人心上、乃以二鐵錐一刺レ身徹レ膚傷レ骨、然後方驚、牽レ車著レ路、隨二御者心一遲速左右、是名二世間第四良馬一、云云」。「鞭の影に驚く馬云云」をも見よ。

止觀に據れるもの

しよきやうしよさんたざいみだ 妙樂大師の御釋に、しよきやうしよさんたざいみだ緣深厚故と、述べ給ふも深き心や有明の（百日曾我）

〔諸經所讚多在彌陀〕常坐三昧の正向の方を明かにせる止觀の文を解釋した止觀補行の文である。止觀・二に「隨二一佛方面一端坐兩向」とありて、止觀補行、（湛然卽ち妙樂大師撰）に、「隨二一佛方面等一者、隨向之方必須二正面一、若障起念佛所向便故、住雖レ不下局合上レ向二西方一、障起既令二專稱二一佛一、諸經所讚多在二彌陀一、故以二西方一而爲二一准一」。

ほつしやみだら 五天竺の堂塔を一日に滅却し、八萬四千の僧尼を殺せしほつしやみだらが惡逆を末世の今に見る事よ（女護島）

〔沸沙密多羅〕阿育王の子であつて、佛法を破却し八萬四千の佛塔を壞り比丘を殺した人。雜阿含經・卷第二十五に、「時沸沙密多羅問二諸臣一曰、我當下作二何等事一、令乙我名德久存甲於世上……中有二惡臣一、不二信向一者啓レ王曰、世間二種法傳レ世不レ滅、一者作レ善、二者作レ惡、大王阿育作二諸善行一、今當下行二惡行一、打中壞八萬四千塔上、時王用二佞臣語一卽與二四兵衆一、往二詣寺舍一、壞二諸塔寺一云云」。

月を招きし扇 今は上なき雲の峯、月を招きし扇にも、見しはかへらで面影の（百日曾我）

摩訶止觀・第一に、「如月隱二重山一、擧レ扇類レ之」、とある故事に據つたのである。

魔佛一如 魔佛一如にして緣によつて魔界卽佛界（源義經） 元より魔佛一如にて、死生淸淨天然と心動かぬ武士は、忠に止まり義に止まる（隅田川）

魔は梵語魔羅（Mara）の略、人を誘惑賊害する惡者、佛陀は衆生を濟度する極善の者であるが、緣によつては魔界と現じ佛界と現ずれども、その本體に於ては兩者相異らず、順理と逆理との差こそあれ、唯一無差別、一體不二のものである。止觀・五に「首楞嚴云、魔界如、佛界如、一如無二二如一」。同・八に「魔界卽佛界、而衆生不レ知、迷二於佛界一、橫起二魔界一、於二菩提中一、而生二煩惱一」。

十王經に據れるもの

閻魔卒三魂を縛して關樹下に至る、二鳥栖んで掌る、一を無常鳥、二を拔目鳥と名づく、我汝が舊里に於て鶡鷄鳥と化して、別都頓宜壽と鳴く（賀古敎信）

三魂の受苦は意業の三毒より出る。關は門關で、娑婆と幽冥との境であつて、惡處の初門中有の始途である。鶡鷄鳥は玉篇に、「今之郭公」と見えてゐる。十王經に、「閻魔法王遣二閻魔卒一、一名二奪魂鬼一、二名二奪精鬼一、三名二縛魄鬼一、卽縛二三魂一至二門關樹下一、樹有二荊棘一、宛如二鋒刃一、二鳥栖掌、一名二無常鳥一、二名二拔目鳥一、我於二汝舊里一、化成二鶡鷄一、示二恠語一鳴二別都頓宜壽一」。

視る目嗅ぐ鼻（酒吞童子）

閻魔王廳の門側の左右にあつて、常に人を視察してゐる人頭幢のことで、左神は人の惡事を記し、右神は人の善事を記すといふ。十王經に、「大城（閻魔王廳）四面周圍鐵墻、四方開二鐵門一、左右有二檀荼幢一、上安二人頭形一、人能見二人間一、如レ見二掌中菴羅果一、右黑闇天女幢、左太山府君幢、……、左神記レ惡、形如二羅刹一、常隨不レ離、悉記二小惡一、右神記レ善、形如二吉祥一、常隨不レ離、皆錄二微善一、總名二雙童一、……、其王以レ簿推二問亡人一、算二計所作一、隨レ惡隨レ善、而斷二分之一」。同書に「雙童子形狀偈曰、證二明善一童子、時不レ離如レ影、低レ耳聞レ修レ善、無レ不レ記二微善一、證二明惡一童子、如二響應二聲體一、留レ目見レ造レ惡、無レ不レ錄二小惡一、云云」。

勝鬘經に據れるもの

勝鬘夫人は大王の一遍の文を得て、恒沙の衆生を濟度あり（聖德太子）

大王とは勝鬘夫人の父、舍衞國の波斯匿大王をいふ。勝鬘夫人は父の大王及び末利より如

般若心經に據れるもの

掲諦掲諦波羅掲諦波羅僧掲諦(女殺)(天鼓)(以呂波)

般若心經の咒文である。「掲諦」は去るまた度る義、邪見妄執を去つて生死の苦海を度ること、卽ち成佛の義である。重ねていふは自ら度するばかりでなく他をも度する意で、其多きを知らしめるのである。「波羅」は彼岸の義、其度して到る處、卽ち深般若の大果をいふ。「僧」は普また總の義、「波羅僧掲諦」は自他普く度し、總て彼岸に到るの意。

***色則是空** 色則是空、空則是色、本有一佛の因緣たり(天智天皇) 死出の山路の山彥は、答へず問はず色則是空、空にたゆたふ赤旗の(千疋犬)

有形を色と云ひ、無形を空と云ふ、有形の萬物は因緣所生のものなれば本來實有でない、故に色は則ちこれ空である、さやうに有形の萬物は空であるとはいへども、他方から見れば萬物各其形體を存してゐる、故に空は則ちこれ色であるともいはれる。般若心經に、「色不レ異レ空、空不レ異レ色、色則是空、空則是色、受想行識、亦復如レ是」。

はらそうぎやてい 讀んではらそうぎやていを立て(萬年草)

般若心經の眞言咒「波羅僧掲諦」(「ぎやてい云云」を見よ)に腹をかかせ、腹を立てたといふに「はらそうぎやていを立て」といふたのである。高野山の法師としてふさはしい滑稽輕妙の才筆である。

はらみつた 神慮も疑ふ惡念を、心に深くはらみつた、般若坂にぞ着きにける(大織冠)

「波羅密多」この文は、惡念を心に深く孕む(含む意)に波羅密多をいひかけ、般若波羅密多心經の語を取つて般若坂につづけたのである。(序云、波羅密多は梵語である、度と譯し、生死の岸から涅槃の彼岸に度る意である。但しここに用ゐたのはかかる意にいうたものではない)。

ふくふじやうふぞうふげん ふくふじやうふぞうふげんと下なる姬を招かせ給へば(以呂波)

〔不垢不淨不增不減〕般若心經に、「諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減」とあるに據つたのである。四大色身五蘊の諸法皆元來有無を離れて空なるが故に、初より生じもせず死にもせず、穢れもせず淸まりもせず、增しもせず減じもせず、虛空の形なきが如きであるとの意。

ぼじそあかなる顏付 何が日頃法印樣眞言陀羅尼讀んだ目で、くどくは御見忍ひまゐらせ候と、讀んではらそう掲諦を立て、ぼじそあかなる顏付(萬年草)

般若心經・呪文句、「菩提娑婆訶」に「赤なる顏付」(怒つて顏色赤くなる)をいひかけたのである。(序云、「菩提」は覺と譯し、「娑婆訶」は成就の意)。

***ほんらいくう** 持佛に燈明香立て給も、本來空の故鄕へ歸る旅立ちせんと(蛙合戰) 昔の罪障消滅して、本來空の都路に皆立歸る友達ぞや(釋迦) 殊にかやうの酒肴本來空の人間(酒呑童子枕言葉)。

〔本來空〕萬象は皆假有で、本來實有でない。本來空といふことは般若經に說く歸著點である。

摩訶般若でも落人のすはらみつ何ともないと言はせもあへず、オオ其腮を此足でけごんあごんほうと蹴返すはうどう般若が手並を見よ(井筒)

般若といふ名だとて逃亡人のする事何も恐れるに足らないと大炊の介が罵り終へぬ中、般若は大炊の介の顋をほうと蹴返し、般若が手練を見よとの意を、般若心經の文の「摩訶般若波羅密華嚴阿含方等涅槃」にいひかけて面白く云うたのである。

譬喩經に據れるもの

火刑に陥ちし罪人の取付く葛を黒白の鼠嚙つて、惡龍舌を振ふといふ苦界の譬に異らず(最明寺殿)

佛說譬喩經にある譬であつて、葛を人命に、黒白の鼠を晝夜に、惡龍を死に喩へたのである。佛說譬喩經に、「世尊於二大衆中一告二勝光王一曰、大王・我今爲レ王略二說譬喩一、諸有生死味二著過患一、王今諦聽善思二念之一、乃往過去於二無量劫一、時有二一人一、遊二於曠野一、爲二惡象一所レ逐、怖走無レ依、見二一空井一、傍有二樹根一、卽尋レ根下潜二身井中一、有二黒白二鼠一、互齧二樹根一、於二井四邊一、有二四毒蛇一、欲レ螫二其人一、下有二毒龍一、心畏二龍蛇一、恐二樹根斷一、樹根蜂蜜五滴墮レ口、樹搖散レ蜂、下螫二斯人一、野火復來燒二然此樹一、王曰、是人云何受二無量苦一、貪二彼少味一、爾時世尊告言、大王、曠野者喩二於無明長夜曠遠一、言二彼人一者、喩二於異生一、象喩二無常一、井喩二生死一、險岸樹根喩レ命、黒白二鼠以喩二晝夜一、齧二樹根一者、喩二念念滅一、其四毒蛇喩二於四大一、蜜喩二五欲一、蜂喩二邪思一、火喩二老病一、毒龍喩レ死、是故大王當レ知二生老病死甚可二怖畏一、常應二思念一、勿レ被二五欲之所一レ呑迫一」。

身亡びんとするときは災害ならび至るとかや(女護島)

譬喩經に「隨二人衰劣一而作二怪祟一」と見え、その意稍似てゐる。

試さうとして自ら鷹に變じ、毘首羯磨は鴿に變じて尸毘王の腋下に逃入つたのを、鷹追ひ來つて王に鴿を返せと迫るので、王は己が肉を裂き乃至身を擧て秤に上り、以て鴿の命に代へたとある故事の飜案である。

涅槃經に據れるもの

佛法は海の如し、ただ信を以て能く入る（大覺）

この詞は華嚴經にもあれど、智度論・巻一にも「佛法大海、信爲二能入一」と見えてゐる。

臨終の一念は無量劫を引くといふ（生玉）

恩怨共に臨終の一念は無量劫の間相離れないのである、以て執念の恐るべきをいふ。「無量劫」はその條につきて見よ。大智度論に、「一念五百生、繫念無量劫」とありて、太平記にも出てゐる。

有明の月をうかがふ猿 有明の月をうかがふ猿よりはなほあだならん（大覺）

到底得られない徒なる喩にいうたもので、涅槃經・巻九に、「喩如二獼猴捉二水中月一」とあるを轉用したのであらう。

***一見卒塔婆永離三惡道**（反魂香）

「卒塔婆」は梵語（スツーパ・Stupa）で、略して塔といひ、方墳・圓塚などと譯し、佛骨を安置する所である。一たび卒塔婆を見れば、永く地獄・餓鬼・畜生の三惡道を離れることができると、卒塔婆の功德を說いたのである。涅槃經に、「一見二卒塔婆一、永離二三惡道一、何況造立者、決定生二安樂一」。

くじふごしゆのげだう この響には九十五種の外道通力失せて、地に落ちたるとの緣起なり（用明天皇）

〔九十五種の外道〕外道の總數である。南本涅槃經・十に、「世尊常說、一切外學九十五種、皆趣二惡道一、聲聞弟子、皆向二正路一」。

***しやうめつめつ** 後夜の鐘生滅滅と響きくる（大經師） 生滅滅已の口說の時雨は寂滅身受の紅葉を染む（扇八景） 晨朝の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響きて（蟬丸）

〔生滅滅〕生ける者は死滅するとの義で、「生滅滅已」は涅槃經に出でたる四句偈文の一句である。「生滅滅己」は生滅滅已をもぢつたものである。「後夜」及び「煩惱の夢をさますや云云」及び「四二〇頁」をも見よ。

***じやくめつゐらく** 鐘の響の聞きさめ、寂滅爲樂と響くなり（曾根崎） はや黑谷の後夜の鐘生滅滅と響き來る、果は寂滅爲樂ぞと（大經師） 別に御恩も寂滅いらずと打立ちて（扇八景） 仕舞大鼓の音までも寂滅爲樂と響くなり（夕霧）

〔寂滅爲樂〕眞理に冥合すれば、諸惑の煩擾た寂し、生死の業苦を滅して、眞の樂たるの意であつて、涅槃經にある四句の偈文、卽ち「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」の中の一句で、梵鐘の響にこの偈文の聲があると云ふ。「まづ初夜の太鼓を打つ云云」を見よ。「寂滅いらず」は「寂滅爲樂」を「寂滅入らず」にもぢつたのである。

***諸行無常** まづ初夜の鐘を撞く時は、諸行無常に惜しや惜しやと響くなり（博多）

一切の萬物は因緣所成のものなれば、常住不變のものでないとの義で、涅槃經に出てゐる四句偈文の一句である。「じやくめつゐらく」の條を見よ。謠曲・三井寺に、「まづ初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり」。

***ぜしやうめつぽふ** 後夜の鐘を撞く時は是生滅法な事と響くなり（博多）

〔是生滅法〕「ごや」を見よ。

世尊は雪山童子の古、四句の文に身をかへ鬼神の餌食となつてこそ正覺を成じ給ふなれ（酒呑童子枕言葉）

「世尊」は釋尊卽ち釋迦牟尼佛を云ふ。「雪山」は地名部を見よ。「四句の文」は四句偈のことである、「しく」を見よ。釋尊・雪山にて苦行して雪山童子と云うた時、四句偈を聽かうとして身を羅刹（食人鬼）に投じて怖れず、遂に大悟して正覺を成じ給うたこと、南本涅槃經・聖行品に見えてゐる。

菩提は山の小牡鹿の、招けど更にこん泉寺、煩惱は家に飼ふ犬伏村（嵯峨天皇）

煩惱を解脫して無上正覺に到達し難きは、恰も山の小牡鹿の招いても來ぬが如く、情慾の迷妄は飼犬の如くに附き纏はつて離れないとの意であつて、來ぬに金泉寺をいひかけ、煩惱の犬に犬伏村をいひかけたのである。涅槃經巻十四に「煩惱堅硬亦復如レ是、雖二一日夜繫一レ心不レ散、雖レ可二調伏一、又如下家犬不レ畏二於人一、山林野鹿見レ人怖走上、瞋恚難レ去如二守レ家狗一、慈心易レ失如二彼野鹿一、是故此心難レ可二調伏一」。

やうりさんあくだうそとば はつと驚き額隱し、親にもやうり三惡道卒塔婆の蔭にぞ隱れける（扇八景）

〔永離三惡道卒塔婆〕卒塔婆功德の經文に、「一見卒塔婆永離三惡道」とあるに據つたのである。「一見卒塔婆云云」を見よ。

ゑしやぢやうり 佛書・雜部を見よ。

をんぞうゑく 夕は戰ぐ荻の風、をんぞうゑくの夢を破り（女夫池）

〔怨憎會苦〕人間八苦の一、怨み憎む人にも忌み嫌ふ事物にも會せねばならないをいふ。涅槃經に、「怨憎會苦所レ不レ愛者共聚集」。

城喩品に曰く大通智勝佛十劫坐道場(蟬丸)

妙法蓮華經第三卷第七品これである。「大通智勝佛云云」をも見よ。

げんばいによしよく

「げんまいによしよく」を見よ。

げんまいによしよく 汝人の虛言にたぶらかされ、衒賣女色に身を觸れ、偸盜邪淫の破戒の罪(賀古教信)

天竺佛の御國には衒賣女色と名づけ、唐の帝の女好み、手活の魚と水深き、妹脊の國も傾きて、名を傾國と今の世も人の心を和ぐる(用明天皇)

〔衒賣女色〕賣春婦。安樂行品に、「販レ肉自活、衒ニ賣女色一、如レ是之人、皆勿ニ親近一」とありて、法華經音義に「賣」を「マイ」と讀んでである。

國城妻子 經文の通り國城妻子が所望(井筒)

提婆達多品に出てゐる。「頭目髓腦」をも見よ。

この三界の衆生は皆是吾子と聞くときは、親諸共に到るなりけり(重井筒)

この欲界・色界・無色界の迷の境界の衆生は悉く是吾子と、佛の宣はれたを聞くときは、佛も我も諸共に涅槃の彼岸に到るのだわいの意であつて、日蓮宗信者の謝恩に唱へる重き詞である。譬喩品に釋尊の詞に、「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」。

こんしさんがいかいぜがうきちゆうしゆじやうしつぜごし(五人兄弟)

〔今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子〕「この三界の衆生は云云」を見よ。譬喩品に、「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、而今此處、多ニ諸患難一、唯我一人、能爲ニ救護一」。

さいくわきふすゐ 只徒なる鉢の木を御身の爲に焚くならば、これぞ採果汲水の法の薪と思召せ(最明寺殿)

〔採果汲水〕提婆達多品に、「隨ニ仙人一供ニ給所須一、採レ果汲レ水、拾レ薪設レ食、乃至以レ身、而作ニ牀座一、身心無レ倦、于レ時奉事、經ニ於千歲一、爲ニ於法一故、精勤給侍、令レ無レ所レ乏」とありて、大法を求めんが爲に果實を採り水を汲んで難行する故事である。此邊の文は謠曲・鉢の木の作替へである。鉢の木に、「只徒なる鉢の木を御身の爲に焚くならば、これぞ誠に難行の法の薪と思召せ」。

三界の衆生は皆是我子

「この三界の衆生は云云」を見よ。

さんがいむあんゆによくわたく(西王母)

〔三界無レ安猶如ニ火宅一〕有漏の迷界は平安なることなく、火焔につつまれた居宅であるとの意。「三界」「火宅」はその條を見よ。譬喩品に、「三界無レ安、猶如ニ火宅一、衆苦充滿、甚可ニ怖畏一、常有ニ生老病死憂患一、如レ是等火、燃然不レ息」。

慈意妙大雲、澍甘露法雨、怖畏軍陣中、念彼觀音力(會稽山)

「慈意妙大雲、澍甘露法雨」とは、觀世音の慈悲心の妙なるは恰も大雲が萬象を掩へるがやうであつて、甘露の法雨をそそいで衆生を惠み給はれるとの意。普門品に、「慈意妙大雲、澍甘露法雨、滅除煩惱焔、諍訟經官處、怖畏軍陣中、念彼觀音力、衆怨悉退散、云云」。

自我偈 塔前に座を構へ一心に自我偈を讀みておはします(大覺)

如來壽量品に、「爾時世尊欲ニ重宣ニ此義一而說レ偈言」とありて、「自ニ我得レ佛來、所レ經諸劫數、無量百千萬、億載阿僧祇、云云」とある偈をいふ。卽ち初の二字を取つて自我偈と名付け、別に之を讀誦する習ひがある。

***じげんじしゆじやう** 慈眼視衆生、福聚海無量(嫗山姥) 無量無邊の聚福閣、慈眼視衆生、念彼觀音、身得どうしや(女殺)

〔慈眼視衆生〕ここの文は普門品の中にある文句である。「慈眼視衆生、福聚海無量」は、觀世音は慈悲の眼を以て普く一切の衆生を視、福を聚集すること恰も海の水を容れて無量なる如くであるとの意。「念彼觀音」は念彼觀音力の略、彼の觀世音の佛力を心念すればの意。「身得度者」は、觀世音は三十三身に化現して以て衆生を濟度し、生死の海を渡つて涅槃の彼岸に到らしめるとの意である。女殺油地獄のこの文は、慈眼寺の觀音堂を福聚閣(「のざき」を見よ)といへば、普門品の文句の「慈眼視」に慈眼寺をきかせ、「福聚海」を聚福閣にいひなして福聚閣をきかせ、「無量」を無量無邊といひなしたのである。

自證無上道大乘平等法 若し小乘を以て化する事乃至一人に於てもせば我則ち慳貪に墮せん(文覺)

自ら最勝道大乘平等法を證悟し、決して小乘を以て乃至一人をも教化せざるべく、若し大乘法を惜んで教へないならば佛自ら慳貪の罪に墮すとの意。方便品に、「佛自住ニ大乘一、如ニ其所得法一、定慧力莊嚴、以レ此度ニ衆生一、自證ニ無上道、大乘平等法一、若以ニ小乘一化、乃至於ニ一人一、我則墮ニ慳貪一、此事爲ニ不可一」。

七難卽滅(本朝三國志)

普門品に、(1)火難、(2)水難、(3)羅刹難、(4)刀杖難、(5)鬼難、(6)枷鎖難、(7)怨賊難を云ひ、觀音力を祈念すればこれ等の七難を消除卽滅されると說いてある。

十界皆成佛の妙經(大覺)

法華經を稱讚した語である。法華經の迹門の中に十界(地獄、餓鬼、畜生、人間、修羅、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛)の衆生皆成佛することを述べてある。故に方便品に、「若有レ聞レ法者、無ニ一不ニ成佛一」と見え、安樂行品に、「此法華經、能令ニ衆生至ニ一切智一」と見えてゐる。

此妙法蓮華經者、本地甚深之奧藏也、三世如來之所證得也(大覺)

法華玄義序の文に、「此妙法蓮華經者、本地甚深之奧藏也、文云、是法不レ可レ示、世間相常住、三世如來之所ニ證得一也」。妙法蓮華經は諸佛出世の本懷として、佛と佛とのみ證知し、三世如來の證得された甚深祕妙の眞理なるによつて、之を奧藏というたのである。法華經・安樂行品にも、「此法華經諸佛如來祕密之藏、於ニ諸經中一最在ニ其上一」と見えてゐる。

妙法蓮華經に據れるもの

一眼の龜の浮木に値ふ　誦經沈醉高枕、前後も知らぬ其有樣、一眼の龜の浮木に値ひ、優曇鉢羅華の三千年の春にあひたる心地ぞや（百日曾我）　義助樣なればこそ踏破つてお歸りは、一眼の龜の浮木に値ひ、海月の骨にあふ例（千疋犬）

値ひ難く得難き機會の喩にいふ。大海に龜がゐて、腹に一眼がある。浮游してゐる中に孔のある大木に値うて之に取付く。偶風が吹いてこの大木を覆す。龜仰向になると同時に、腹の一眼がたまに浮木の孔に當つて日月の光を見るといふ。莊嚴王品に、「佛難レ得レ値、如二優曇波羅華一、又如三一眼之龜値二浮木孔一」。寶物集に、「人界に生を享けたることは爪の上の土の如し、佛法にあへることは一眼の龜浮木に乘るが如し」。

一しやふとくさぼんでん、二しやたいしやく、三しやまわう、四しやてんりんじやうわう、五しやぶつしん、うんがによしんそくしんじやうぶつ（十二段）

女人の五障を述べたもので提婆達多品にある文である。即ち「女人身猶有二五障一、一者不レ得レ作二梵天一、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身、云何女身速得二成佛一」。梵天王は色界初禪天の主。帝釋は忉利天の主。魔王は欲界の第六天主他化自在天である。轉輪聖王は天より輪寶を感得して四方を威伏する聖主である。近松は「速得」を「速身」としてゐる。

一心稱名觀世音菩薩卽時觀其音聲（蛙合戰）

一心に觀世音菩薩の名號を稱へて念ずれば、觀世音は卽時に衆生が名號を稱へる音聲を觀念し給うて。この文は普門品に出てゐる。それを讀上げたのである。

***浮木の龜**　珍しや夏仁、浮木の龜とばかりにて、御衣をしぼらせましませば（持統天皇歌軍法）　浮木にあへる盲龜（基盛太平記）

「一眼の龜の浮木に値ふ」を見よ。

雲雷鼓掣電念彼觀音　聲を力に桑原桑原、雲雷鼓掣電念彼觀音、臍を隱せと泣きわめく（天神記）

普門品（觀音經）の中にある文句である。雲雷はためき電光閃いて物凄き時でも、觀世音を念じる功力によつて消散すべきであるの意。諺に「雷が臍を取る」といふによつたものである。菅茶山の筆のすさびに、「雷の臍を取るといひて小兒などを警むるは、雷のときは俯伏する者は死せず、仰伏する者は必ず死するによつてなり」と見えてゐる。

捐捨國位僕從妻子（井筒）

提婆達多品に出てゐる文である。「づもくずゐなう」の條を見よ。

おせつなきやうほつぼだいしん　この浦の名に寄せ、房前の大臣と名乘らせん、於刹那頃發菩提心、變成男子と合掌あり（大職冠）

「於二刹那頃一發二菩提心一」この文も「變二成男子一」も共に提婆達多品に出てゐる。「於刹那頃」は卽刻の意。「菩提心」はその條を見よ。

提婆達多品に、「深入二禪定一了二達諸法一、於二刹那頃一發二菩提心一、得二不退轉一」。

***かんろほふう**　此水は觀音の甘露法雨と覺えたり（出世景淸）　羅生門の東西に七重の須彌壇を構へ、甘露法雨ゆれいの法を行はる（以呂波）

「甘露法雨」甘露は諸神の飮料で美味喩へん方なく、これを味へば死ぬることなしといふ。釋尊の敎法は、衆生これを味へば無上の利益功德が得られるので、これを甘露の法雨といふ。普門品に、「澍甘露法雨、滅除煩惱焰」。「甘露法雨ゆれい」は甘露法雨癒癘であらう、甘露の法雨惡氣を癒すの意。

經には頭目髓腦と說き云云

「づもくずゐなう」を見よ。

きんなら　普門品の天龍八部、阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅（會稽山）

「緊那羅」梵語（Kimnara）である、人非人また疑神などと譯す、人に似て一角あり、八部衆の一で、帝釋天の法樂を奏する神。普門品に、「天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等」。法華文句に、「緊那羅亦云二眞陀羅一、此云二疑神一、以レ人而有二一角一、故號二人非人一、天帝法樂神、居二十寶山一」。

具一切功德、慈眼視衆生、福聚海無量、是故應頂禮（田村將軍）

觀世音菩薩は一切の功德を具有し、慈悲の眼で普く衆生を視、福を聚集すること恰め海の無量なる如くである。故に觀世音を頂禮せよと、供養を勸め禮拜すべきを頌したものであつて、この文は普門品（觀音經）に見えてゐる。

***くわきやうへんじやう**　太子・日天子に向つて三寶の御名を唱へ合掌あれば、忽ち火坑變成の五色の光明御簾を照し（聖德太子）　火坑變成池（蛙合戰）

〔火坑變成〕假令害意を興して大火坑に落ちるとも、觀音を念じれば其功力によつて火坑變じて池となる。普門品に、「假使興害意、推落大火坑、念彼觀音力、火坑變成池」。

化一切衆生皆令入佛道　自解佛乘の悟を開き、化一切衆生皆令入佛道の願に適はせ給ひけり（大寶）

一切衆生を敎化して、惡を轉じて善を作さしめ、悉皆佛道に入らしめる意。方便品に、「如二我昔所一レ願、今者已滿足、化二一切衆生一、皆令レ入二佛道一」とありて、釋尊の本懷滿足を述べた偈文である。

***化城喩品**　法華經の三の卷けじやうゆぼんを拜せよと（聖德太子）　化

で(一心五戒魂) 車の兩輪兩角の、大白牛車の力足(加增曾我) 網代の輿より乘物より、大白牛車こそ乘りよけれ(吉岡染)

〔大白牛車〕譬喩品に說ける三車の一であつて、白牛の牽く大車である。法華の妙法を車に譬へて大白牛車といふ。譬喩品に、「爾時長者、各賜二諸子等一大車一、其車高廣、衆寶莊校、周币欄楯、四面懸レ鈴、又於二其上一、張二設幰蓋一、亦以二珍奇雜寶一、而嚴二飾之一、寶繩交絡、垂二諸華纓一、重二敷婉綖一、安二置丹枕一、駕以二白牛一、膚色充潔、形體姝好、有二大筋力一、行步平正、其疾如レ風、云云」。

たうじんだんだんゐ 爰に神木の大銀杏に怪しき鳥の羽を休め、刀尋段段壞とぞ囀りける(主馬判官盛久)

〔刀尋段段壞〕觀世音を祈念する功力によつて、今斬られうとする刀も段段に折れ壞れて、其難を免かれることができる。普門品に、「若復有レ人、臨レ當レ被レ害、稱二觀世音菩薩名一者、彼所レ執刀尋段段壞、而得二解脫一」。

たうまちくゐ 賊兵數多討取れども稻麻竹葦と取圍み(唐船噺)

〔稻麻竹葦〕稻麻竹葦は簇生するものなれば、そのやうに人などの群集するに喩ふ。方便品に、「了二達諸義趣一、又能善說レ法、如二稻麻竹葦一、充二滿十方刹一」。

谷の水・峯の薪 谷の水峯の薪の道ならで、浮世に迷ふ墨の袖(大織冠)

釋尊大法を得んが爲に、仙人に從つて谷に下りて水を汲み、山に登つて薪を樵りて難行をされた。されば「谷の水・峯の薪の道」とは佛道修行の意に云。「さいくわきふすゐ」を見よ。

ちやうじやくうし 今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、長者くうしの譬とて世に有難き御經なり(五人兄弟)

〔長者窮子〕長者窮子の譬は信解品に出てゐる。其大意は、兒幼にして父の許を去つて他國に困窮流浪すること五十年、漸く本國に歸り我父と知らずして其雇人となつた。然るに其家富豪で且主人の威あるを恐れて脫走した。是に於て父賤人の裝をして之を近付け、親子なるを告げてその財產を讓つたので、子は計らずも富豪となつたといふ譬で、これは衆生が妄想邪念に驅られて自知せず、迷界にさまよふのを佛陀が憐んで、方便を以て敎化されたのである。

ついしやうごうしはう 「つゐしようごうしはう」を見よ。

頭破作七分、如阿梨樹枝(大覺)

陀羅尼品に、「若不レ順二我呪一、惱二亂說法者一、頭破作二七分一、如二阿梨樹枝一」と見えてゐる。阿梨樹枝は義疏に此樹の枝地に墮ちれば破れて七分となると見えてゐる。巢林子作・曾我五人兄弟に、「八の卷は護法善神、づはさしちふんの力勇を與へて加護し給へや」、とある「づはさしちふん」も法華經のここの文句によつたもので、即ち頭骨七分に破碎すること。

づもくずゐなう 金銀珠玉は今生一世の寶、却つて人を迷はす地獄の導とはこの事、されば經には頭目髓腦と說き(井筒)

〔頭目髓腦〕「髓」は骨中の脂である。「腦」は頭腦である。佛は無上菩提を求めようとして、頭目髓腦その他悋惜する所がなかつた。提婆達多品に、「爾時佛告二諸菩薩及天人四衆一、吾於二過去無量劫中一、求二法華經一無レ有二懈倦一、於二多劫中一常作二國王一、發レ願求二於無上菩提一、心不二退轉一、爲レ欲レ滿二足六波羅密一、勤二行布施一、心無レ悋二惜象馬七珍、國土妻子、奴婢僕從、頭目髓腦、身肉手足一、不レ惜二軀命一、時世人民壽命無量、爲二於法一故、捐二捨國位一、委二政太子一、擊レ鼓宣二令四方一求レ法、誰能爲レ我說二大乘一者、吾當二終レ身供給走使一、云云」。

つゐしようごうしはう 釋尊前生この鐘を鳴して大法を得給ふによつて、つゐしようごうしはうと御經にも說かれたり(用明天皇)

〔椎鐘告四方〕鐘を椎つて四方に告ぐ。提婆達多品に、「爾時世尊欲三重二宣此義一、而說レ偈言、我念二過去劫一、爲レ求二大法一故、雖レ作二世國王一、不レ貪二五欲樂一、椎レ鐘告二四方一、誰有二大法一者、若爲レ我解說、身當レ爲二奴僕一」。

***てがせ** 括られて格子手がせにもがけば締り(天網島) 杻・枷・鐵の鎖もきれちぎるるとの經文(井筒)

〔手械〕「てがし」の轉、囚人の兩手を括つて動けぬやうにする刑具。井筒業平河內通のここの文は普門品に、「設復有レ人、若有レ罪若無レ罪、杻械枷鎖檢二繫其身一、稱二觀世音菩薩名一者、皆悉斷壞、即得二解脫一」、とあるに據つたのである。

とうほふう 第一の卷序品より一心不亂に讀誦あり、第三等雨法雨の文に至り給ふ時(大覺)

〔等雨法雨〕藥草喩品に、「正見邪見、利根鈍根、等雨二法雨一、而無二懈倦一」。

得入無上道、速成就佛身(大覺)

壽量品の偈文の最終の句であつて、衆生をして無上道に證得悟入せしめ、速に圓滿の佛身を成就することを得させようとの意。

***なむいうれい** 南無幽靈出離生死、一しやふとくさぼんでん、二しや帝釋、三しや魔王、四者轉輪聖王、五者佛身、うんがによしん即身成佛(十二段) 南無いうれい、そくわうなんばうむくせかい、ざほうれんげ、じやうとうしやうかく(兼好)

源氏十二段魔生島靈のこの文は提婆達多品に、「南無幽靈出二離生死一、一者不レ得レ作二梵天王一、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身一、云何女身速得レ成レ佛」、とあるに據つたのである。「南無」は歸命頂禮の義、自己の頭を下げて佛菩薩の足を禮拜することで、信仰歸依の至極をあらはす最敬禮である。「幽靈」は亡靈である。人は皆三界に迷ひ、貪慾嗔恚愚癡の煩惱に驅られて、此に死し彼に生じ流轉して止む時がない。されど佛道を修めて迷妄を轉じ悟を開くを得ば、則ち生死を超越してその苦輪を免ろることを得る、これを「出離生死」といふ。女人は罪業深き身なれば五障を有す、即ち一には梵天となるを得ず、二には帝釋となるを得ず、三には魔王となるを得ず、四には轉輪聖王となるを得ず、五には佛

しやうれんげのまなこ いかに人が無ければとて青蓮華の眼より盗食し居るとは、佛の御覽も面目なし(聖德太子)

〔青蓮華の眼〕青蓮華は蓮華の一種である。その葉廣くして長く、青白分明なれば佛菩薩の眼に形容して云ふ。妙音菩薩品に、「是菩薩目如㆓廣大青蓮華葉㆒」。

釋尊のこの法華經を說かせ給ふ時、六種震動し多寶如來現れ出て、今世尊の說法は皆是眞實なりと末世の證據に立ち給ふ(大覺)

見寶塔品に、「爾時寶塔中、出㆓大音聲㆒歎言、善哉善哉釋迦牟尼世尊、能以㆓平等大慧教菩薩法、佛所護念妙法華經㆒、爲㆓大衆㆒說如㆑是如㆑是、釋迦牟尼世尊如㆓所說㆒者皆是眞實」。「六種震動」はその條を見よ。

しゆくじきとくほん 十方檀那の福田宿植德本の沙門に齋料(井筒)

〔宿植德本〕前世・過去世即ち宿世に德の根本を植ゑること。普門品に、「設欲求女、便生端正有相之女、宿植德本、衆人愛敬」。

種種重罪五逆消滅自他平等、妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五、爾時無盡意菩薩即從座起、偏袒右肩合掌向佛而作是言、世尊觀世音菩薩以何因緣名觀世音、佛告無盡意菩薩(蛙合戰)

觀世音菩薩は種種の重罪五逆の大惡人も善心に立返れば其大罪科をも消滅して、衆生に皆等して大慈悲を蒙らせ給はれる。妙法蓮華經以下の文は觀音經に見えてゐる。釋尊は大乘妙法蓮華經を說くこと二十四座から將に二十五座に及び、時に聽聞衆の中から無盡意菩薩が其座より起立して、偏に右の肩を現はして最勝の敬禮をなし、掌を合して至心を表明しながら佛に向ひ、世尊は觀世音菩薩を何の因緣によつて觀世音と名づくるかと問うた、この間に應じて佛は無盡意菩薩に告げるにの意である。巢林子のこの文は、觀音經を讀上げたことを記したまでである。

呪詛諸毒藥 念彼觀音力、則還著於本人(田村將軍)

普門品に出てゐる文である。呪詛或は毒藥を以て害されうとして身に危害が及ぶとき、彼の觀世音の力を祈念すれば、害者還つて自らその呪詛に斃れ、毒藥に苦しむに至るとの意。

衆怨悉退散 大師木蔭に立寄り、衆怨悉退散・急急如律令と繰返し(嵯峨天皇)

怨念を藏する衆多の敵悉く退散するとの意。普門品に、「念彼觀音力、衆怨悉退散」。

諸經中王最爲第一 この經は諸經中王最爲第一、法華一部の肝要は至う首題に止まれり(大覺)

法師品に、「我所㆑說諸經、而於㆓此經中㆒、法華最第一」。

諸法從本來常自寂滅相、十方佛土中唯有一乘法無二亦無三(釋迦)

方便品に出てゐる文である。「佛土」は佛の住める國土である。「乘」は運載の義、因人を載せて證果に運ぶ乘輿と云ふ意であつて、佛の教道を云ふ。諸法は本來吾人の見るやうな差別の相を有するものではない、其本體は寂滅淸淨にして常住不變のものである。十方佛土中に於て唯一絕對の教道あるのみで、二もなければ三もない。

諸餘怨敵皆悉摧滅(大覺)

藥王菩薩本事品に、「汝今已能破㆓諸魔賊㆒、壞㆓生死軍㆒、諸餘怨敵、皆悉摧滅、善男子、百千諸佛、以㆓神通力㆒、共守㆓護汝㆒」。

しんたつざいふくさう 深達罪福相紫磨黃金の光明と(釋迦)

〔深達罪福相〕深く罪業迷悟の根源に達し、福德を具備して聖者たるを云ふ。提婆品に、「深達㆓罪福相㆒、徧照㆓於十方㆒」。

是人於佛道、決定無有疑(大覺)

神力品の偈文の最終の句であつて、法華經を持する人は自ら成佛得道されるといふ決定心を得るとの意。

そくげんふによしんゐせつぽふ 誠にそくげんふによしんゐせつぽふの濟度方便のあたり、老若男女諸國順禮手を合しつつ禮したり(一心五戒魂)

「即現婦女身而爲說法」の「而」の脫落したのである。婦女身は觀世音三十三身の一であつて、自在に大法を演說し衆生を化導される爲には、觀世音は婦人身にも化現されるのである。普門品に、「應㆘以㆓長者居士宰官婆羅門婦女身㆒得度㆖者、即現㆓婦女身㆒而爲說㆑法」。

大通智勝佛 我は大通智勝佛、劫成世界の契を違へず阿羅邏仙人と現じ來れり(釋迦) 大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道(蟬丸)

梵名をMahabhijnajnanabhibhuと云ひ法華經の創造者である。この佛は十小劫の永い間道場に結跏趺坐して、身心不動であつても佛法が吾前にあるやうに心中に現はれて來らない。それで十小劫更にまた十小劫と絕えず修業の功を積んで遂に佛法を成就し、法華經を講じて後入定すること八萬四千劫に及んだ。「劫成世界の契」とは、八萬四千劫のその間入定されて、この世界に出現されることを云うたのである。化城喩品に、「大通智勝佛、十劫坐㆓道場㆒、佛法不㆓現前㆒、不㆑得㆑成㆓佛道㆒、……過㆓十小劫㆒已、乃得㆑成㆓佛道㆒、……彼佛說㆑經已、靜室入㆓禪定㆒、一心一處坐、八萬四千劫、……」。

***だいばぼん** 女人成佛の提婆品高らかに遊ばし(冷泉節)

〔提婆品〕提婆達多品を云ふ。其文中に、「當時衆會、皆見㆘龍女忽然之間變㆓成男子㆒、具㆓菩薩行㆒、即往㆓南方無垢世界㆒、坐㆓寶蓮華㆒、成㆓等正覺㆒、三十二相八十種好、普爲㆓十方一切衆生㆒演㆗說妙法㆖」、とあつて八歲の龍女も成佛したことが說いてある。

提婆品に法華修行の輩に以上五つの功力を擧げ給ふ(大覺)

「一つには三惡道に墮ちず云云」を見よ。

たいびやくごしや 大白牛車に打乘りて、今身より佛身に至るま

平等大惠眞淨大妙法（大覺）

法華經を稱讚した語である。見寶塔品に、「爾時寶塔中、出ニ大音聲一歎言、善哉善哉、釋迦牟尼世尊能以ニ平等大惠、教菩薩法、佛所護念、妙法華經一、爲ニ大衆一說、如レ是如レ是、釋迦牟尼世尊如ニ所說一者、皆是眞實」と見え、如來神力品に、「爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩、從レ地涌出者、皆於ニ佛前一、一心合掌、瞻ニ仰尊顏一、而白レ佛言、世尊、……我等亦自欲レ得ニ是眞淨大法一、受持讀誦解說書寫而供ニ養之一」と見えてゐる。

ふくじゆかいむりやう 日本住吉大明神福聚海無量と、丹精無二の志（國性爺）

〔福聚海無量〕福を聚集すること恰も海の無量なる如くであるの意、觀世音の功德を讚歎した言葉である、それを用ゐたのである。普門品に、「具ニ一切功德一、慈眼視ニ衆生一、福聚海無量、是故應頂禮」。

ふくでんしゆくじきとくほん（井筒）

〔福田宿植德本〕福田に德の根本を植ゑ置くの意。普門品に、「設欲求女、便生端正有相之女、宿植德本、衆人愛敬」。

＊佛種は緣より生ずとかや（娥）

佛果を生じる種子は緣より起生するといふ。方便品に、「佛種從レ緣起、是故說ニ一乘一」。太平記・卷二十九、藥師寺遁世の條に、「佛種は緣より起ることなれば」。

ほうゐとくじやうわうぶつのみくに 守本尊普賢薩埵、ほうゐとく上王佛の御國を出で六牙の白象に鞭打つて（五人兄弟）

〔寶威德上王佛國〕普賢菩薩の居給ふ國土である。普賢菩薩品に、「白レ佛言、世尊我於ニ寶威德上王佛國一、遙聞ニ此娑婆世界說ニ法華經一、與ニ無量無邊百千萬億諸菩薩衆一、共來聽受」。

まごら 普門品の天龍八部、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅、其外南海下界の龍神（會稽山）

〔摩睺羅〕梵語 Makara である。地龍をいふ、或は腹行の大蟒であるともいふ。普門品（觀音經）に、「應以天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等身得度者卽現之而爲說法」。

御佛も衆生の爲の親なれば（曾根崎）

譬喩品に釋尊の詞に、「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」。

無盡意菩薩無量百千萬億 娘では無い無盡意菩薩、無量百千萬億に思を碎く夫婦の歎き（蛙合戰）

「娘では無い」の「無い」から「無」をいひ出し、觀音經（普門品）の文の、「佛告無盡意菩薩善男子若有無量百千萬億衆生云云」にいひつづけて、思ひを碎く意にいひなしたのである。

むにむさん 中道實相の車は無二無三のかどに轟き（百日曾我）

〔無二無三〕方便品に、「十方佛土中、唯有ニ一乘法一、無二亦無三云云」とあるに據つたのである。

めうしやうごん 一子出家の功力によつてめうしやうごんの悟を得（百日曾我） 名もうとましき舞樂の前、めうしやうごんの跡追ひて母も勸むる法の道（吉岡染）

〔妙莊嚴〕妙莊嚴王をいふ、王は初め外道婆羅門を信じて佛を尊奉しなかつたが、妃の淨德及び二子淨藏・淨眼の誘導によつて雲雷音華智佛の所に至つて法華經を聽き、遂に佛に歸依して法華の行旨を行ずること八萬四千歲、嚴淨三昧を得たといふ。委しくは妙莊嚴王本事品に見えてゐる。

妙法の經力にて卽身成佛（大覺）

提婆達多品に、「佛告ニ諸比丘一、未來世中、若有ニ善男子善女人一、聞ニ妙法華經提婆達多品一、淨心信敬不レ生ニ疑惑一者、不レ墮ニ地獄餓鬼畜生一、生ニ十方佛前一、云云」とありて、龍女も妙法の經力にて卽身成佛してゐる。

＊妙法蓮華經 妙法蓮華經・觀世音菩薩普門品第二十五（出世景淸） 妙法蓮華經・觀世音菩薩普門品第二十五、爾レ時無盡意菩薩卽從レ座起、偏袒右肩合掌向レ佛而作ニ是言一、世尊觀世音菩薩以ニ何因緣一名ニ觀世音菩薩一（堀川波鼓）（兼好）

大乘經典の一で、鳩摩羅什の漢譯本最も行はれ、八卷二十八品ある。普門品卽ち觀音經はその第二十五品に當る。ここに見えてゐる文は觀音經の冒頭の文である。加增曾我に「南無平等大慧・妙法華中の諸天善神」とある「妙法華」は、妙法蓮華經の略である。

文珠菩薩・釋尊の御法を受け、龍宮界に至り龍女を始め無量不可思議の魚鱗を濟度し給へども（大織冠）

提婆達多品・第十二に、「知積菩薩問ニ文珠師利一、仁往ニ龍宮一所レ化衆生其數幾何、文珠師利言、其數無量不レ可ニ稱計一、非ニ口所レ宣、非ニ心所レ測、且待ニ須臾一自當ニ證知一、所レ言未レ竟無數菩薩坐ニ寶蓮華一從レ海涌出、詣ニ靈鷲山一住ニ在虛空一」。

らごゐちやうし 然るに教主釋尊も羅睺ゐちやうしと說き給へり、石の火の光の間なだにもなどやそひもせぬ（虎が磨）

〔羅睺爲長子〕釋尊が悉達太子であつた時、羅睺羅を長子となされた。羅睺は卽ち羅睺羅（その條を見よ）で釋尊の長子である。授學無學人記品に、「我爲ニ太子一時、羅睺爲ニ長子一、我今成ニ佛道一、受レ法爲ニ法子一」。謠曲・百萬に、「忝くも此御佛も羅睺爲長子と說き給へば」。

＊りやくこふふしぎ 忽ち光明赫奕として千手觀音の御首と變じ給ひける、歷劫不思議ぞ有難し（出世景淸） 忍辱慈悲の觀世音、歷劫不思議の尊容（蛙合戰）

〔歷劫不思議〕如何に久遠た時間を經るまで思量しても、微妙で更に思議することができないの意で、妙法を頌する詞である。普門品に、「弘誓深如海、歷劫不思議、侍多千億佛、發大淸淨願」。（巢林子作・本領曾我古版八行本に、「よしよし如何なる惡狐なりとも歷劫修行つくべきかと」とありて、「歷劫修行」に「れきごうしゆぎやう」と振假名を附けてあれども、「歷劫」は「りやくこふ」と讀むべきである）。

龍畜蛇身の女人の身の南方無垢世

身となるを得ず、何んぞ五障の女人が速に成佛を得ようやの意。

兼好法師物見車のこの文は、提婆達多品に、「龍女忽然之間、變二成男子一、具二菩薩行一、即往二南方無垢世界一、坐二寶蓮華一、成二等正覺一」とあるに據つたのである。南方無垢世界に往き、寶蓮華上に坐し、成佛し給ふの意。「無垢世界」は沙竭羅龍王の女なる八歳の龍女が男子と變じて成佛したる世界を云ふ。「正覺」とは、妄を斷盡し歸眞寂靜なる妙覺の佛果を證するを云ふ。

南無釋迦牟尼佛、南無阿彌陀佛、願以此功德、普及於一切、我等與衆生、願皆共成佛道(唐船噺)

古院本(山本九兵衛版、七行本)には傍訓の通りの假名で書いてあるのを、漢字を以て記した。この假名文はこの漢文の北京音に酷似してゐるから、巣林子は未熟ながらも唐音をも知つてゐた其の該博な智識に驚嘆せざるを得ない。「願以二此功德一、普及二於一切一、我等與二衆生一、皆共成二佛道一」(巣林子の文には「ゑん」(願)が増加してゐる)は、化城喩品の偈文中の文で、梵天王が佛を供養し、その功德を一切衆生に廻旋するを願ふ文であつて、佛教各宗で法事の終に必らず之を唱へ、廻向文といふ。(念佛宗の廻向文は五六二頁を見よ)。

入於大海假使黑風吹其船舫飄墮羅刹鬼國其中若有乃至一人稱觀世音(伊豆日記)

普門品(觀音經)にある文である。若し諸の衆生が七寶珍寶を求めようとして大海に入る時、一天かき曇り業風吹いて、その乘れる船舫は惡魔直人鬼の國に吹寄せられ、遁れがたき場合にもその中に唯一人にても觀世音の御名を稱へる者あらば、同行の諸人は皆この大難から解脱せん、と說いてある經文の一節。

如却關鑰開大城門 寶塔にさし向ひ、如却關鑰開大城門と唱へさせ給ふ時、扉ばつと開け如來の尊影儼然たり(大覺)

「却」は卻の俗字であつて除の義。「關鑰」は門のくわんぬきとぢやうのことにて門のしまりをいふ。關鑰を却けて大城門を開くが如し。見寶塔品に、「釋迦牟尼佛以二右指一開二七寶塔戸一、出二大音聲一如下却二關鑰一開中大城門上」。

如劫關鑰云云

「劫」は「却」の誤。「によかくけんやく云云」を見よ。

によせそんちよくたうぐぶぎやう 如世尊ちよくたうぐぶぎやうの誓をば過たず、日頃信じ奉る超八醍醐の法華經力(五人兄弟)

「如世尊勅當具奉行」世尊の勅の如くに當に具に教命を奉承し行持すとの意。囑累品に、「時諸菩薩摩訶薩、聞二佛作二是說一、已皆大歡喜、徧滿二其身一、益加二恭敬一、曲レ躬低レ頭、合掌向レ佛、俱發レ聲言、如二世尊勅一當二具奉行一云云」。

***によどとくせん** 弘法の爲入唐の大望あり、げに御經にもによどとくせん、偏に賴むとありければ(以呂波)

「如渡得船」衆生が佛に逢うて濟度されるを、渡しに船を得たのに喩へたのである。藥王品に、「如二子得一レ母、如二渡得一レ船、如二病得一レ醫、如二闇得一レ灯」。

***ねびくわんおん** 同音にねび觀音大慈大悲と合掌し(西王母)

「ねんひくわんおん」(念彼觀音)の約。彼の觀世音の神力を心念すればの意。「念彼觀音力」の文句は普門品の中に多く見えてゐる。從つてここも觀音經(卽ち普門品)を念誦したのである。「ねんぴくわんおんりき云々」をも見よ。

ねんぴくわんおんりき、りやくこふふしぎ 念彼觀音力、歷劫不思議の御緣なり(兼好)

「念彼觀音力、歷劫不思議」念彼觀音力とは彼の觀世音の神力を心念すればの意。歷劫不思議とは思議すべからざる長大の時間をいふ。以上の二句共に普門品にある文句である。この文は不思議といふことを言はんが爲に、觀音經の文句をかりたまでで別に經文の意義によつたものではない。

方便の僞は罪にあらずと、佛さへも虛妄の御法を說き給ふ(酒呑童子)

方は方法、便は便宜の義、佛權智を以て善巧工夫して、下根の衆生を眞實に入らしめるてだてを方便といふ。法華經假名新注抄・方便品に、「常に人の思ふは、權方便とて僞をいふを方便とこころう」と見え、諺にも「うそも方便」といへば、巣林子これらに據つてかくいうたのである。

***はちじふしゆかう** あの御姿がすぐに佛の三十二相、八十種好も外にない、ああ御殊勝や有難やと(井筒)

出山の釋迦牟尼佛・四八の相好・八十種好(釋迦)

「八十種好」圓滿微妙な八十種の形相をいひ、釋尊の妙好である。提婆達多品に、「微妙淨法身、具レ相三十二、以二八十種好一、用莊二嚴法身一」。

八歲の龍女南方無垢の成道(大織冠)

沙竭羅龍王の女八歲にして佛道を成就し、忽ち男子に變成して南方無垢世界に成佛したといふ。提婆達多品に、「有二娑竭羅龍王女一、年始八歲、……當時衆會皆、見下龍女忽然之間變二成男子一、具二菩薩行一卽往二南方無垢世界一、坐二寶蓮華一成二等正覺一、三十二相八十種好、普爲二十方一切衆生一演中說妙法上」。

ひくしよせん・ひしんしよそく この玉は本佛の悟り、甚深祕密の一大事、非口所宣非心所測とて、口にも說かれず心にも測られず(大織冠)

「非口所宣非心所測」提婆達多品にある文である。口に宣べ盡されず、心に測り盡されぬの意。「もんじゆ云云」の條を見よ。

一つには三惡道に墮ちず、二つには十方の佛前に生れ、三つには所生の處に常に此經を聞き、四つには若し人天の中に生れて勝妙の樂を受け、五つには佛前に在つては蓮華より化生せん(大覺)

提婆品に、「聞二妙法華經提婆達多品一、淨心信敬不レ生二疑惑一者、不レ墮二地獄餓鬼畜生一、生二十方佛前一、所生之處常聞二此經一、若生二人天中一受二勝妙樂一、若在二佛前一蓮華化生」。

生れようと欲へといへる佛の誓願を信ずる者は、淨土に往生するを得るが故に、佛の誓願を無明の冥闇を照す提灯に喩へて、欲生我國の提灯といふたのである。「欲生我國」は佛說無量壽經に阿彌陀佛の四十八誓願を明す中の第十八・十九・二十の願文に見えてゐる。即ち「設我得㆑佛、十方衆生、至心信樂、欲㆑生㆓我國㆒、乃至十念、若不㆑生者、不㆑取㆓正覺㆒、唯除㆓五逆、誹謗正法㆒。設我得㆑佛、十方衆生、發㆓菩提心㆒、修㆓諸功德㆒、至心發願、欲㆑生㆓我國㆒、臨㆓壽終時㆒、假令不㆘與㆓大衆㆒圍繞、現㆗其人前㆖者、不㆑取㆓正覺㆒、設我得㆑佛、十方衆生、聞㆓我名號㆒、係㆓念我國㆒、植㆓諸德本㆒、至心迴向、欲㆑生㆓我國㆒、不㆓果遂㆒者、不㆑取㆓正覺㆒」とある。

往生要集に據れるもの

阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖經、一念無量劫、即滅無量罪（三世相）

この文は往生要集に見えてゐる。阿字には十方三世の諸佛を包含し、彌字には一切の諸菩薩を包含し、陀字には八萬の諸聖經典を包含す。即ち阿彌陀の三字には萬善萬行の一切の功德利益を悉く包含するが故に、心を散亂せずして專心に阿彌陀を念ずれば、無量劫の功德を得て、無量の罪業を即滅す。

***上求菩提・下化衆生**　一聲の松の風、池水に映る月影も、上求菩提下化衆生、皆觀念の便りぞと（釋迦）

上は眞如の理を證悟する聖智を求め、下は一切の衆生を濟度攝化するを云ふ。往生要集に、「總論㆓之願作佛心㆒、亦名㆓上求菩提下化衆生心㆒」。

雜（其の他の諸書）

あつきにふごしん（隅田川）

〔惡鬼入其心〕惡魔の魅入るをいふ。維摩經註に、「十頭羅刹入㆓一王體㆒」などと見えてゐる。

勇む心の生駒山（文武五人男）

勇む心の駒を生駒山にかけたのである。安樂集に、「諸凡夫、心如㆓野馬㆒、識劇㆓猿猴㆒、馳㆓騁六塵㆒、何曾停息」。

いせといへる文字をば父母と讀ませて、金胎兩部に表したり（以呂波）

「いせ」の「い」の字は相對する二點であるから、其一點を父とし他の一點を母とし、また之を金剛界曼荼羅・胎藏界曼荼羅の兩部によせてかく云うたのである。以呂波物語のこの後の文に、「先づいの字の二點をば父母過去未來にも喩へたり、又は日月金胎兩部の大日如來、其外一字一點にも皆佛體を表はすとかや」と、あるによりて意自ら明である。「いせ」の「せ」は世の義に取つたのである。

一一文文是眞佛　げにや一一文文ぜしんぶつと聞くときは、一字の文字も佛の尊容なるものを（賀古敎信）

月支の遺龍が法華經の外題六十四字を書く間に、其字六十四體の佛となつたと云ふ故事によつたのである。「月支の遺龍」を見よ。

一念の佛性三世十方に遍達し（大織冠）

有情非情のもの皆佛陀たるべき種性即ち佛性を具有すれども、佛敎を聽かぬ時はこの佛性の存在を知ることができぬ。故に佛敎を聽いて一心に佛果を求めようと發起して自己の佛性を自覺す。この佛性は眞如なるが故に三世を貫き十方に涉るよりいふ。

一心頂禮萬德圓滿釋迦如來信心舍利（萬年草）

世尊舍利禮の咒中に出てゐる。謠曲・舍利には、「一心頂禮萬德圓滿釋迦如來」。「萬德圓滿」はその條を見よ。

五つの塵六つの欲　人間五つの塵六つの欲、しばし心は濁り江に、沈みて死すべき身なりしを（西王母）

「ごぢんろくよく」（五塵六欲）を見よ。

いろはにほへどちりぬるを、わがよたれぞつねならむ、うゐのおくやまけふこえて、あさきゆめみしゑひもせず（以呂波）

いろは歌は弘法大師の作と傳へ、舊說いろはの讚歌の詞に涅槃經の四句を當て、即ち色葉雖艷散去留還（諸行無常之義）、我世誰曾將常在（是生滅法之義）、有爲乃奧山今日越天（生滅滅已之義）、淺夢不見醉毛不爲（寂滅爲樂之義）であるとしてある。

有緣無緣乃至法界平等（天網島）

佛を信じて佛と緣ある者、或は信じないで緣なき者、乃至宇宙萬有一切衆生が佛菩薩の平等の利益を享受するの意。淨土宗・別迴向文「三界萬靈、六道衆生、有緣無緣、乃至法界、平等利益」の中の文句であつて、迴向の終にこの文を唱へ、十念を唱へ、念佛を唱へて迴向を終るによつて、この別迴向を「切迴向」（その條を見よ）といふ。

***うんたらたかんまん**　うんたらたかんまん何しに罰が當らうぞ（一心五戒魂）

〔吽（恐怖）怛羅吒（叱呵）憾（摧破）𤚥（種子）〕不動明王咒中の文句である。

えさうふぼくのたましひ　袈裟御前すごすごと佇みて、ナウ爲若、御身年頃我を慕ひ、これまで來る愛着に、えさうふぼくの精靈の假に

界に成道を遂ぐ（大覺）
提婆達多品に、「龍女忽然之間變二成男子一、具二菩薩行一即往二南方無垢世界一、坐二寶蓮華一成二等正覺一」。

***りゅうによ　龍女も成佛する時は煩惱菩提となるぞ賴もし**（重井筒）
〔龍女〕娑竭羅龍王の女が八歲で正覺を得て成佛したといふ。提婆達多品に、「有二娑竭羅龍王女一、年始八歲、智惠利根善知二衆生諸根行業一、……龍女忽然之間變二成男子一、具二菩薩行一即往二南方無垢世界一、坐二寶蓮華一成二等正覺一」。謠曲・海士に、「八歲の龍女は南方無垢世界に生を受くる」。

***ろくしゅしんどう　時に六種震動して行くも來るも本地の娑婆**（賀古敎信）
山鳴り谷應へ天地六種に震動して、大地も裂くる如くなり（津戸三郎）
〔六種震動〕天地が動、涌、震、擊、吼、爆の六種に震動すること。序品に、「普佛世界六種震動」とありて科註に、「六種者謂二動・起・踊・震・吼・覺一也」と見えてゐる。これは舊譯である。

摩耶經に據れるもの

釋尊は母の御爲忉利天に昇り、一夏九旬摩耶報恩經を說き給ふ（大覺）
釋尊・忉利天（「たうりてん」を見よ）に昇り一夏九旬（四月十六日より七月十五日まで其日數九十日間）の間母摩耶夫人の爲に法を說いて證果を得させられた。その經を佛昇忉利天爲母說法經と云ひ、摩訶摩耶經とも摩耶報恩經とも云ひ、齊の曇景譯のもの二卷ある。

それ釋尊は母の御爲云云
「釋尊は母の御爲忉利天に昇り云云」を見よ。

月月の守神守佛ある故（胎內の子には）、**その月に當る佛神の御怒り太刀取に當つて、或は惡病或は劍難にかかり、忽ち命終ること周期を待たずといふ事、摩耶夫人經に說かれたり**（娥）
此の出所摩耶夫人經にこの儘に出ない。

***屠所におもむく羊**（吉野忠信）
屠所の羊の歩みより、先に近付く人の世と顧みざるぞ愚なる（國性爺後日合戰）
「羊の歩み」を見よ。

***羊の歩　既に時刻も午の刻、未の歩近付きて**（碁盤太平記）
今日は最期の羊の步、足に任せて（宵庚申）
摩耶經の偈に、「譬如下旃陀羅（屠者のこと）驅レ羊就二屠所一、歩歩近中死地上、人命亦如レ是」、とあるより出た故事で、人命の時時刻刻死に近づくに譬ふ。

一足づつに消えて行く（曾根崎）
歩歩死地に近づくの意譯である。摩訶摩耶經の偈に、「譬如下旃陀羅（屠者をいふ）驅レ羊就二屠所一、歩歩近中死地上、人命亦如レ是」。

無量壽經に據れるもの

あしなじゅ　尼連禪河のあしなじゅと、押分け掻分け過ぎ給ふ（以呂波）
〔阿斯那樹〕尼連禪河の岸に生ぜる樹の名。佛說無量壽經・卷上に、「沐二浴金流一、天按二樹枝一、得二攀出レ池」とありて、釋嶮諦撰の佛說無量壽經科解・卷第二に註して、「池邊有レ樹、名二阿斯那一、樹神按レ枝令レ低、菩薩攀レ枝、得レ上二池岸一」と見えてゐる。「にれんぜんが」をも見よ。

うかんろほふうみんしゅじやうこの水は極樂の八功德池の水と思ひ、うかんろほふうみんしゅじやうこときく時は、これを飮んで心身を潤し（夕霧）
〔雨甘露法雨愍衆生故〕「みん」（愍）は潤の誤か。大空より降る甘露の雨の遍く萬物を潤すが如く、佛の敎法は衆生に大慈悲化益を與へ給ふ。無量壽經・下に、「猶如二大雨一、雨二甘露法一、潤二衆生一故」。

ひやくみ　十萬億土馬次なしの西は百味の旅籠屋に、觀音勢至手を取りて（丹波與作）
〔百味〕許多の好味。百は大數を示したもので許多の意。無量壽經・卷上に「如レ是諸佛隨意而至、百味飮食自然盈滿」。近松のこの文に「十萬億土」といひ「西は」といへるは、淨土極樂は西方十萬億土の彼方にあるとの佛說に據つたのである。

ふしゅしやうがく　欲生我國の提灯に不取正覺の輿を照して（賀古敎信）
〔不取正覺〕彌陀の誓詞である。大無量壽經に彌陀の四十八誓願を擧げ、各誓願にいづれも「不取正覺」の誓詞が記してある。阿彌陀佛の誓願に成就しないならば正覺の果位に入らないぞとの御誓は、衆生の爲にむなしからず、この慈悲の誓願に乘じる者、悉く安養寶國に到ることを乘物に喩へて、不取正覺の輿と云うたのである。往生禮讚に、「若我成レ佛、十方衆生稱二我名號一下至二十聲一、若不レ生者不レ取二正覺一、彼佛今現在成佛、當レ知二本誓重願不レ虛、衆生稱念必得二往生一」。

よくしやうがこく　欲生我國の提灯に不取正覺の輿を照して（賀古敎信）
〔欲生我國〕「我國」は阿彌陀佛の西方極樂淨土をいふ。十方の衆生が佛道に歸依して淨土に

「耆婆」「五臟」はその條を見よ。捺女耆域因緣經に、「逢二一小兒擔レ樵、耆域望視、悉見二此兒五臟腸胃一、縷悉分明、耆域心念、本草經說、有二藥王樹一、從レ外照レ內、見二人腹臟一、此兒樵中得レ無レ有二藥王一耶」とあるに據つたのであらう。

*きふきふによりつりやう　鈴錫杖たちりんがらがら、急急如律令と責めかくる（女殺）

〔急急如律令〕速に去つて滯ふるを得ざる義であると云ふ。もと道教で用ゐたもので事文類聚にも見えてゐる、我國でも古くは長秋記・大治五年五月五日の條に見えてゐる。靈符類に用ゐられ、修驗者僧侶等が咒文の後に唱へる詞であつたが、常人も咒詛（まじなひ）に用ゐるやうになつた。大元帥儀軌・加持鬼病法に、「不レ須二人語一、行者但云二急急文一」。資暇錄に、「符祝之類末句急急如律令者、以爲如二飲酒之律令一、速去不レ得レ滯也云云」。眞俗佛事編・一に、「此火災を伏し、病を癒しむる咒術語なり」。

くわきやうざんまい　此鐘の濫觴は龍宮の紫金を取つて、世尊火きやうざんまいの蹈鞴（たたら）を以て鑄たて給ひし鐘の聲（用明天皇）

〔火坑三昧〕大火坑の中に禪定に入ること。本行集經・四十に、「如來爾時亦入二如レ是火坑三昧一、身出二大火一」。

*げきふさんづきかつはうまん　これぞ出家の役と觀じ、器物（うつはもの）に水を入れ、げきふさんづきかつはうまん南無阿彌陀佛と差出し（蟬丸）

〔下給三途・飢渴飽滿〕施食作法にて唱へる四句偈中の二句である。「じやうこんさんぼうちゆうぶしおん云云」を見よ。

華嚴經（けごんきやう）にて中戸（なかど）に口說き、阿含經（あごんきやう）にて紫（むらさき）見初（みそ）め、方等經（はうとうきやう）にて吾妻（あづま）を摑（つか）み、大般若（だいはんにや）にて三橋になづみ、法華經（ほけきやう）を以（もつ）て高尾（たかを）にのぼり、南無阿彌陀佛と申すなり（扇八景）

天台宗では釋尊一代の說教を五時に分ち、淺きより深きに漸次に誘導されたのだとしてゐる、卽ち第一・華嚴時には華嚴經の如き佛自證の境界を說き、第二・阿含時には阿含經の如き小乘を說き、第三・方等時には維摩經・楞伽經の如きを說き、第四・般若時には般若經の如き衆生執着心の打破を說き、第五・法華時には法華經を說きて、一切衆生悉皆成佛の本意を了せしめられたものとしてゐる。巢林子はこれを南無阿彌陀佛に配して、「百日曾我・三部經の條に、「それ六字の名稱といつぱ、華嚴經にて南の字をあらはし、阿含經にて無の字を攝し、方等經にて阿の字をひらき、大般若にて彌の字をつづめ、法華經を以て陀の字を皆會し、南無阿彌陀佛と申すなり」とも書いてゐる。ここの文は遊客と遊女との馴染合ふ關係をきかせたのである、卽ち「中戸に口說き」は中戸の密會を意味し（「なかど」の條を見よ）、「紫」はゆかりを意味し（「むらさき」の條を見よ）、吾妻は吾が妻とするを意味し、「み橋になづみ」は、三橋を戀慕する情にひかされて其の緣にかかづらふ意（橋を緣の橋渡しにきかせたのである）、「高尾にのぼり」は高尾山に登るを、精神その女にのぼりつめる意にいうたのである。「中戸」「紫」「吾妻」「三橋」「高尾」の各語の上部の一音を取つて綴合せれば「なむあみた」となる、故に「南無阿彌陀佛と申すなり」と云うたのである。然も「紫」「吾妻」「三橋」「高尾」は元祿頃大阪新町にゐた遊女の源氏名であつて、この名悉く好色絲惡鹿子（元祿七年刊）及び加增曾我・第二段・新町天神づくしの條に見えてゐる。さても巢林子自由の筆かな。

けどさんせつ　今示す所の妙法は諸教中王の御法にて功一期に高く、化度三說にすぐれたれば餘經の及ぶ所にあらず（大覺）

〔化度三說〕化度とは衆生を敎化濟度することである。法華初心成佛鈔（縮刷・日蓮聖人御遺文・一六七三頁）に、「已今當の三說の中に、佛になる道は法華經に及ぶ經なしと云ふ事は正しき佛の金言なり」と見え、持妙法華問答鈔（縮刷・日蓮聖人御遺文・四六八頁）にも、「唯法華經計りこそ最後の極說なるが故に、已今當の中に此經獨り勝れたりと說かれて候へ」と見えてゐる。

*ごぎやく　出家に棒をあてたらば五逆罪（大經師）　佛身より血を出すは五逆罪の惡僧よ（賀古敎信）　親殺しは五逆の第一、五天竺の王位に立つべきか（釋迦）

〔五逆〕佛教で說ける五つの大逆罪、卽ち殺レ父、殺レ母、害二阿羅漢一、破二和合僧一、出二佛身血一にして、この罪を犯す者は必ず無間地獄に墮ちると云ふ、よつて五無間業とも云ふ。法華綱目には、殺二父母一、破二和合僧一、出二佛身血一、殺二阿羅漢一、破二羯磨僧一と見えてゐる。

五穀を棄てたる罪業は五逆にまさる（天智天皇）

近松は釋迦文（もん）佛（釋尊）の說かれた詞というてゐれども、佛經中に見當らない。思ふに米を菩薩ともいへば（「よね」の條を見よ）、佛菩薩を五穀にとりなしてかくいうたのであらう。「五逆」はその條を見よ。玉貨津萬・卷十四に「穀物をおろそかにすまじきよしをいふ時に、米粒などを佛法といひ、東國にては菩薩といふ」。

こしきげんらいけうわうきやう　名虎が魂魄呼子鳥、鳴くを知るべに招魂の法、去識還來敎王經、歸り來れ歸り來れ（井筒）

〔去識還來敎王經〕「去識還來」は死者の魂魄を呼返す、卽ち招魂の義、「敎王經」は佛敎の經典の名である。眞言宗にては呼子鳥の鳴く時、去識還來敎王經を唱へて印相を結び、招魂の祕法を修す。谷響集・第九に、「招魂名本出二儒書一、經名二去識還來一、……敎王經第十四、名二去識還來一、並說二印眞言一、今略而不レ出レ之」。徒然草・第二百十段に、「ある眞言書の中に、よぶこ鳥鳴く時招魂の法をば行ふ次第あり、云云」。

*ごや　やや更け渡る野寺の後夜、八聲の鷄も鳴かはず（卯月潤色）　ごやの鐘生滅と響き來る、果は寂滅爲樂ぞと（大經師）

〔後夜〕寅の刻卽ち午前四時頃をいふ。「野寺の後夜」とあるは野寺の後夜の鐘といふを略したのである。「後夜の鐘」は夜明け方の勤

現はれ見えしなり（一心五戒魂）

〔依草附木精靈〕「えさうふもくのたましひ」。草木に依附せる精靈をいひ、人の精靈に對していふ。一心五戒魂の二つ文は、草木の蔭による袈裟掛前の精靈をいうたのである。無門關（宋釋慧開撰）に、「參禪須レ透二祖師關一、妙悟要レ窮二心路一絶。祖關不レ透、心路不レ絶、盡是依草附木精靈」。

えしやう兩輪の火の車

雲中に轟けば　えしやう（女護島）

〔依正兩輪火車〕依は依報であつて、山川土地衣服飲食など衆生の依る所の果報をいふ。正は正報であつて、衆生の精神肉體をいふ。依正は自己の業因によつて受けた果報である。依正兩報を依正兩輪といひなして火の車につづけたのである。火の車は罪業深い者を載せる火焔の車である。

應無所住而生其心邪正一如（聖德太子）

金剛般若經に出てゐる文である。無所住なるべくして絶對實理なる動靜不二の立脚地にあつて、活潑自在の妙用を現ずるを「而生其心」といふ。邪と正との二を離れて一如である。維摩經・入不二法門品に、「珠頂王菩薩曰、正道邪道爲レ二、住二正道一者、則不レ分二別是邪是正一、離二此二一者、是爲レ入二不二法門一」。

おんあびらうんけん　女殺二、嵯峨天皇）

熊野權現の御罰を當らんことと立所に於て疑あるべからず、おんあぶらとろりとおどしてもなほ合點せず（曾我虎が磨）

〔唵阿毘羅吽欠〕胎藏界大日如來の眞言で、大日經・三に見えてゐる。唵は眞言の始めに冠せるもの多く、この一字を誦念すれば無上菩提を得られると云ふ。阿毘羅吽欠は四魔を降す呪句である。「おんあぶらとろり」は、油口とろりに唵阿毘羅吽欠をきかせた語である。

おんあぼきやべいろしやのまかもだらまにはんどまじんばらはらはりたやうん（萬年草）

光明眞言呪である。光明眞言經に、「卽說レ呪曰、唵阿謨伽尾盧遮那摩訶母陀羅摩尼鉢頭摩入嚩攞鉢羅韈哆野吽、此萬億無數諸佛如來、心中祕密呪云云」。この眞言を誦するときは、佛の光明を得て諸の罪障を除かれるといふ。

***おんころころせんだりまとうぎ**（女殺）（弘徽殿）

〔唵呼嚧呼嚧旋荼利摩登祇〕藥師如來眞言小呪で、藥師如來觀行儀軌法の中に見えてゐる。

おんをのりびしやちい、びしやほじやらとり、ほどほどみ、ほじやらほにほん（虎が磨）

この陀羅尼を白傘蓋心呪と云ひ、禪宗で葬儀の燒香中などによく唱へられる呪である。智嚴編、密呪圓因往生集に、大佛頂白傘蓋心呪を載せて、「唵啊捺令覓折嚩、覓囉末唎囉除哈、末嗪末嗪禰、末唎囉鉢禰癹、吽㗶隆癹泮訶」。

かいりやうまんぞく　なう諸願は成就かいりやう滿足と、うやまつてぞ植ゑにける（天智天皇）　諸願成就皆令滿足と、敬つてこそ歸りけれ（兼好）

〔皆令滿足〕神佛の庇護によつて求める所を悉く滿足せしめる意。藥師經に、「鼓樂衆伎、隨二心所一レ翫、皆令二滿足一」。

如是我聞き、九土まちまちに別れ、四生俗を殊にす、長へに火宅に遊び、倶に苦海に淪む、故に能仁大師法界をすべて我が身とし、虛空を盡して我が智とし、一切種智の光明に、蠢々たる懷生、喝々たる哨類、草木國土悉皆成佛の記を與へ、六通自在の神足に魔軍莚の如く捲いて（釋迦）

「如是我聞」＝佛の諸經は釋尊入滅後阿難の編集なれば、經中の所說を是の如く我聞いたといふ。「九土」＝三界を區分して、欲界五趣地、色界の四地（離生喜樂地－初禪天、定生喜樂地－二禪天、離喜妙樂地－三禪天、捨念清淨地－四禪天）、無色界の四地（空無邊處地－第一天、識無邊處地－第二天、無所有處地－第三天、非想非非想處地－第四天）とした稱。「蠢蠢」＝衆多の貌。「懷生」＝生きたく懷ふ庶類。「哨類」＝噍食の類をいふ。法苑珠林・卷十三、千佛篇第五之一、七佛部・述意に「蓋聞、九土區分、四生殊レ俗、昏波易レ染、惡業難レ基」。同書・卷十七、千佛篇第五之五、厭苦部・述意に「共遊二火宅一、倶淪二欲海一、蠢々懷生、喝々哨類、所以法王當二洲渚之運一云々」とあつて、音釋に「喝＝魚容切、喝々衆口向レ上也」「哨＝正作レ噍、戈笑切、噍類謂二噍食之類一也」とある。「魔軍莚の如く捲く」＝法華經・提婆達多品の科註に、「行二六波羅密一、破二魔軍衆及諸煩惱一、得二一切智一以成二佛道一」と見えてゐる。「四生」「火宅」「能仁大師」「一切種智」「喝々」「六通自在」「三千世界」「三世」「大恩教主」などはその各條を見よ。

***きおんにふむゐ**　棄恩入無爲とは申せども、野山の末まで御供と（吉岡染）　棄恩入無爲、眞實報恩者（扇八景）

〔棄恩入無爲〕淸信士度人經にある、「流二轉三界中一、恩愛不レ能レ斷、棄レ恩入二無爲一、眞實報レ恩者」といふ四句一偈中の句である。この偈の意は、恩愛の情は親子夫婦共に有漏の迷界に流轉する羈である、されば此恩愛を斷棄して無爲眞如の道に入る時は、一切の衆生を濟度する身となり、父母妻子をも救ふべき地位に達し、眞實に恩を報ずるものといふべきであるとの意。序に云、この偈は薙髮出家する時または棺前でよく唱へられる。

狐の奉り御名にしおふ利劍の鎌　その時鎌足公、いにしへ狐の奉り、御名にしおふ利劍の鎌錦の袋より取出し（大職冠）

鹿王禪院如意寶珠記・三に、「鎌足大臣誕生時、野干含レ鎌來置二枕上一、化二野干一來是鹿島明神、化レ鎌來是大津兒屋根尊也」擧の本・入鹿に、「いづくからとも知らざるに一つの狐來り、鎌を口にくはへ、幼子（鎌足）の枕上に置き、かき消すやうに失せければ、父母いそぎ立寄り、鎌をとりて見給ふに、氷の手のうちにかがやくやうな鎌であり、若しも寶になろやとて、この子に添へてぞ育てらる」。

耆婆童子は藥王木を得て五臟を照し（西王母）

釋尊は娑婆世界に過去久遠の昔から幾千度も出世された、梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品に、「吾(釋尊)今來二此世界一八千返、爲二此娑婆世界一坐二金剛華光王座一」。

諸惡莫作・衆善奉行(釋迦)(大原問答)

七佛通誡偈卽ち「諸惡莫レ作、衆善奉行、自淨二其意一、是諸佛敎」の中の二句である。諸惡莫レ作は消極的に惡を制し、衆善奉行は積極的に善を勸めたもの。なほ委しくは正法眼藏・諸惡莫作の章に就いて見よ。

稱我名號下至十聲 稱我名號下至十聲の其功德、端嚴美麗の御僧安祥と出現あり(賀古敎信)

南無阿彌陀佛の名號を十聲唱へること。「下至」とは選擇集に、「上盡二一形一、下至二十聲一聲一」と見えてゐる。往生禮讃に、「若我成レ佛、十方衆生稱二我名號一下至二十聲一、若不レ生者不レ取二正覺一、云云」。

しよろいじん しよろいじんの大阿羅漢神通力を試さんと(酒呑童子)

〔諸漏已盡〕諸の煩惱滅盡して眞智の果を得たること。金剛經注に、「諸漏已盡、復無二煩惱一名二阿羅漢一」。

眞如常住・實相中道 雲井はろけき高天が原にましますは、眞如常住じつさうちゆうだうの御神體、天の御中主の尊と申し奉り(天神記)

眞如は一切萬法の依るところの實體實性にして、永久不變な眞理を云ふ。萬有の實相は有に非ず空に非ず、非有非空の中道である。「天の御中主の尊」とあるは、古事記に見えて、開闢の時高天原に生れられた元始の神である。

じんばらはらはりたやうん 眞言の行者に力を添へ給へ、じんばらはらはりたやうんと、責めかけ責めかけ祈りければ(嵯峨天皇)

光明眞言の中の文句である。「おんあぼきやべい云云」を見よ。

そだまにすだくわうあかだせつていろ 博士も我身空恐しく、料紙四枚の札に認め、蘇多末尼主多光阿揭多設羝嚕と書き記し、これぞ祕密の御守、御座の四方におし給はば雷の怖れ候はず(天神記)

〔蘇多末尼・主多光・阿揭多・設羝嚕〕四方の光明電王の名である。室內の北方に蘇多末尼、西方に主多光、東方に阿揭多、南方に設羝嚕と書いた札を揭げる時は、雷電の怖れなく其災が無いと云ふ。最勝王經・如意寶珠品に、「世尊於二大衆中一、告二阿難陀一曰、汝等當レ知、有二陀羅尼一、名二如意寶珠一、遠二離一切災厄一、亦能遮二止諸惡雷電一、乃至於二此東方一、有二光明電王一、名二阿揭多一、南方有二光明電王一、名二設羝嚕一西方有二光明電王一、名二主多光一、北方有二光明電王一、名二蘇多末尼一、乃至若於二住處一、書二此四方電王名一者、於二所住處一、無二雷電怖一、亦無二災厄及諸障惱一」。

それ法華修行の肝心は信心を以て根本とす(大覺)

成佛記に、「夫法華修行の第一には只信心を以て本とす」。

それ六字の名號といつば「華嚴經にて云云」を見よ。

大聖人の御書に提婆が三逆も云云(大覺)

「大聖人」とは日蓮上人をいうたのである。「提婆が三逆云云」を見よ。

提婆が三逆も羅睺羅が二百五十戒も同じく佛に成る、嚴王の邪見も舍利弗の正見も同じく授記を蒙れり、ここをもつて大惡をも歎くことなかれ、一乘を修業せば提婆が跡を繼ぎなん、これ等は皆無一不成佛の經文空しからざる故と遊ばされて候(大覺)

「提婆」は三逆罪(殺父、殺母、殺阿羅漢)を犯した惡人で釋尊の法敵である。「羅睺羅」は釋尊の嫡子であつて、その行の密なこと八萬四千の衆徒中第一であつた。「嚴王」は卽ち妙莊嚴王のことで、外道婆羅門の法を信じて佛法を信じなかつたが、夫人淨德及び二子淨藏・淨眼の諫によつて遂に佛法に歸依して菩薩の果を得た。詳しくは法華經・妙莊嚴王本事品を見よ。「舍利弗」のことは其條を見よ。授記は法華經科註に、「授記亦云二受記・受決・受莂一、授是與義、受是得義、記是記事、決是決定、莂是了莂也」と見えてゐる。阿佛房鈔(縮刷・日蓮聖人御遺文・第一九五四頁)に、「提婆が三逆も羅睺羅が二百五十戒も同じく佛に成りぬ。妙莊嚴王の邪見も舍利弗が正見も同じく授記をかをほれり。此卽無一不成佛のゆゑぞかし。四十餘年の內の阿彌陀經等には舍利弗が七日の百萬反大善根をとかれしかども、未顯眞實ときらはれしかば、七日湯をわかして大海になげたるが如し。韋提希が觀經を讀みて無生忍を得しかども、正直捨方便とすてられしかば、法華經を信せずば返て本の女人なり。大善を用ゆることなし。法華經に値はざればなにかせん。大惡をも歎くことなかれ。一乘を修業せば提婆が跡をもつぎなん。此等皆無一不成佛の經文の空しからざるゆゑぞかし」。

寶の山に入る この食物に眼くれ、寶の山に入りたりと、軍將雜兵我先にと摑食はん事必定(國性爺)

天台止觀に、「往生徒死無レ可レ得、如下入二寶山中一空手而歸上」。

***だんあくしゆぜん** 佛法擁護のつばり、だんあくしゆぜんの四足なつきかため(聖德太子) 天竺には佛因果を說いて斷惡修善の道あり(國性爺)

〔斷惡修善〕惡業を斷除して善業を修し善道に修入すること。大聖不動明王金縛祕法に、「見二我身一者、發二菩提心一、聞二我名一者、斷レ惡修レ善」。

づほくめんさいうけふぐわ 頭北面西右脇臥、御年八十一歲にて二月十五日涅槃の雲に隱れ給ふ(釋迦) 頭北面西右脇臥に羽織打着せ死骸を縛ひ(天網島)

〔頭北面西右脇臥〕頭を北方に、顏面を西方に向けて臥し、右脇を牀席につけ、口と目を閉ぢ、兩脚を累ね、左手を身上に順へて舒ぶ。

行、卽ち晨朝の鐘の響をいふ。晝夜の梵鐘の音は諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅爲樂の四句偈に響くといふ。祇園經に、「鐘卽自鳴、音中亦說諸行無常乃至寂滅爲樂」。謠曲・三井寺に、「後夜の鐘を撞く時は是生滅法と響くなり、晨朝の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響きて」「とき」をも見よ。

今身より佛身に至るまで能く保ち奉る、南無妙法蓮華經(重井筒)

日蓮宗信者が受戒の時に唱へる重き詞であつて、現身より佛身に至るまで常に能く戒を保持し奉るとの意。これに唱題目を續けたのである。もと日蓮大師が其兩親及び信者に戒を授ける時かく唱へたるに始まる。いろは日蓮記にも、「日蓮歡喜微笑あり、此御經をたもつ者は、其中衆生悉是吾子とて佛の獨子と說かれたり、今身より佛身に至るまで能く能くたもち奉れと、御經をもつて頭を撫で給へば各一度に聲を上け、南無妙法蓮華經と唱ふる聲暫しは鳴りもしづまらず」と見えてゐる。

妻子珍寶不隨者(天網島)　妻子珍寶及王位臨命終時不隨者(蟬丸)(女護島)(一心五戒魂)

妻子も珍寶も王位も命終に臨んではどうにもならず、身に隨つて冥途に逝く者無しとの意。大集經・偈頌に、「妻子珍寶及王位、臨二命終一時不レ隨者」。法然上人の登山狀に、「屍は終に苔の下に埋れ、魂は獨旅の空に迷ふ、妻子眷族は家にあれどもともなはず、七珍萬寶は藏に滿てれども益もなし」。

三歸ばかりたもちし人大魚の難を遁れたり(大覺)

歸依佛、歸依法、歸依僧を三歸といふ。賈客等海中に入つて寶を採れる際、摩伽羅魚王(鯨)の口を開けるを見て、皆南無佛と唱へたので、苦厄を脫することができた、と云ふことが譬喩經にも見えてゐる。

しきしんのたうたいかいぜあみだぶつ　五蘊離散して栴檀の烟に伴ふ、しきしんの當體かいぜ阿彌陀佛と示し給へば(賀古敎信)

〔色身當體皆是阿彌陀佛〕色身は因緣所生の身を云ふ。衆生の心識を離れて別に阿彌陀佛なく、佛といふも畢竟心識の所變である。されば衆生の當體皆これ阿彌陀佛に外ならぬとの意。なほこのことに就いては「心外無別法云云」をも見よ。

獅子身中の蟲　和御前がやうなる我慢愚痴の猿智慧を、獅子身中の蟲に譬へて佛も戒め給ふぞや(出世景淸)　返忠せし因果は目前、獅子身中の蟲おのれと滅す(用文章)

恩を受けながら其者に仇することに譬ふ。仁王經に、「乃是住持護二三寶一者、轉更滅二破三寶一、如二獅子身中蟲自食二獅子一、非二外道一也」。

しだいこつじき　中にも次第乞食とは長者をも親しまず貧者をも厭はず、次第次第門並を請うて通る法なれば(孕常盤)

〔次第乞食〕頭陀の行法に十二種ありて、次第乞食は其第三種目に當る。佛說十二頭陀經に、「……三者頭陀比丘不レ著二於色一、不レ輕二衆生一、等心憐愍、不レ擇二貧富一、故受二常次第乞食法一」。「十二の頭陀」を見よ。

***十萬億土**　盤盤たる山路に薪を拾ひては十萬億土の月を攀ぢ(卯月潤色)

彌陀の極樂土を云ふ、極樂淨土は娑婆世界を去ること十萬億土の西方にあるといふ。佛說阿彌陀經に、「爾時佛告二長老舍利弗一、從レ是西方、過二十萬億佛土一、有二世界一、名曰二極樂一、其土有レ佛、號二阿彌陀一、今現在說法、舍利弗、彼土何故、名爲二極樂一、其國衆生、無レ有二衆苦一、但受二諸樂一、故名二極樂一」。

上宮太子は夢殿より唐船に法の道、それさへためし七日の夢(國性爺後日)

「夢殿」は地名部につきて見よ。日本往生極樂記・三に、「太子(上宮太子卽聖德太子)宮有二別殿一、號二夢殿一、一月三度沐浴而入、若制二諸經疏一、有レ滯者卽入二此殿一、常有二金人一、至レ自二東方一、告以二妙義一、太子閉レ戶不レ出七日七夜、時人太異」。

じやうこんさんぼうちゆうぶしおんげきふさんづきかつはうまんあびらうんけん(以呂波)

「上獻三寶、中奉四恩、下給三途、飢渴飽滿」は施食作法にて唱へる四句偈文であつて、作法集にも見えてゐる。上は三寶(佛・法・僧)に獻じ、中は四恩(天地・國王・父母・衆生)に奉り、下は三途(地獄・餓鬼・畜生)に給し、飢渴の者までも悉皆飽滿するとの意である。「阿尾羅吽欠」は胎藏界大日如來の眞言句である。

しやうじの二法は一心の妙用、じやうぢうしせつぽふ(釋迦)

〔生死二法一心妙用、常住此說法〕生死は迷界の苦報である、この二者互に相容れざるやうなれども、眞如實相の上よりみれば本來涅槃の悟を開くべき佛性を具有せるものである、この絕對實理を觀ずるは一心の妙用である、故に經文に「生死本來佛性」とも見えてゐる。釋尊はこの絕對實理を說き聽かす爲に、常住不斷の說法を續けるといふのである。この文句は、日蓮の船守彌三郎許御書の中にも、「法華の三千の法門、常住此說法のふるまひなり」と見えてゐる。

昔在靈山名法華、今在西方名阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世の利益三年續き(女殺)

「昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、娑婆示現觀世音、三世利益同一體」、とある四句の偈文であつて、南岳大師の念佛往生安心の偈文として天台宗僧侶間に傳へられてゐる。「三世の利益」からその頭韻語「三年」にいひつづけたのである。偈文の意は、昔釋尊は靈鷲山にて法華經を說示し給ひ、今は西方極樂にありて阿彌陀と申して衆生を濟度し給ふ、觀世音菩薩は娑婆世界に示現して衆生に佛果を得させ給ふ、釋尊・阿彌陀・觀世音の三尊はその名稱こそ異れども、もともと同一體であつて、過世現在未來の三世にわたり衆生に利益を施し給ふと云ふのである。「去去年云々」を見よ。

娑婆往來八千度　娑婆往來八千度釋迦(卯月潤色)　娑婆往來八千度、それは上代、これは末世、其身は佛身、此身は凡夫(天智天皇)

ら（隅田川）
數多の猿が手尾相繋いで井戸の中の月影を取らうとして皆溺死したといふ故事で、以て及ばぬ事に喩ふ。僧祇律に、「佛告二諸比丘一、過去世時波羅奈城有二五百獼猴一、見二樹下有一レ井、井中見レ月、共執二樹枝一、手尾相接、入レ井取レ月、枝折一齊死」。「水の月取る猿」に「猿猴の池」（その條を見よ）をいひかけたのである。

***みろく**　釋迦は去り彌勒は未だ世に出でず（薩摩歌）　高野山は卽身卽佛の靈場、彌勒出世の値遇とかや（嵯峨天皇甘露雨）　それ我山に卒塔婆一本殘せし人は、五十六億七千萬歲の後彌勒の出世に逢はせ給はん御誓願（心中萬年草）
〔彌勒〕梵名 Maitreya といふ、この菩薩は兜率の內院に居給ひ、釋尊の入滅後五十六億七千萬年にして娑婆に出現し、人天を化益し給ふといふ。釋尊入滅後より彌勒菩薩下生の曉までを中間有爲となす。菩薩處胎經・卷二に、「彌勒當レ知、汝復受レ記、五十六億七千萬歲於二此樹王下一、成二無上等正覺一」。

鞭の影に驚く馬、皮を打たれて驚く馬、肉を打たれ、骨を打たれ始めて驚く馬あり（釋迦）
無常に驚くに差別あるを四種の馬に喩へたものである。釋了慧撰、往生拾因私記・卷之下に、「弘決二引二雜阿含一云、佛告二比丘一有二四種馬一、一者見二鞭影一卽驚悚隨二御者意一、二者觸レ毛便能如レ上、三者觸レ肉然後乃驚、四者徹レ骨然後方覺、經合レ喩云、初馬如下聞二他聚落無常一卽能生上レ厭、次馬如下聞二己聚落無常一卽能生上レ厭、三者如下聞二己親無常一卽能生上レ厭、四者猶如下己身病苦方能生上レ厭」。「雜阿含經にも云云」をも見よ。

***もくれん**　佛の弟子目連は竹杖外道に打殺され（用明天皇）
〔目連〕摩訶目犍連（Mahamaudgalyayana）の略、釋尊十大弟子中の一人で、神通第一であつたといふ。この尊者が竹杖外道に殺されたこと增一阿含經に見えてゐる。

もんもんふどう八萬四千、爲滅無明果業因、利劍卽是彌陀號、一聲稱念罪皆除（津戸三郎）
佛陀の法門分れて八萬四千の多きに達すれども、蓋し衆生無明の罪業因及び無明の罪業因から生じる迷苦の果報を滅除する爲には、一聲の稱名念佛（南無阿彌陀佛）を致すべきである、念佛の功德は能く罪業迷苦を斷滅すること、恰も鋭利な劍の物を斷除するやうである。一聲の稱名念佛の功力によつて罪といふ罪は悉く滅除されるとの意である。唐善導大師・禮讃偈に、「門門不同八萬四千、爲レ滅二無明果業因一、利劍卽是彌陀號、一聲稱念罪皆除」。

夜摩天の契りは抱き合ふと聞く（五人兄弟）
「欲界の四王忉利天云云」「とそつ」を見よ。

欲界の四王忉利天、夫婦枕の夜摩天の契りは抱き合ふと聞く、兜率天には手を取り交はし、樂變化天の戀衣、つまとつまとが忍ぶ夜は、互につと打笑ひ笑めるを戀のしるしとは、それが善いやら惡いやら、人界よりは知らねども、これで滿足するとかや、他化自在天の妹背には、顏と顏とを見るばかり（五人兄弟）
欲界とは、食欲・睡眠欲・淫欲の滿足を求める念強き有情の住める世界をいふ。巢林子のこの文は、欲界の六天（四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・樂變化天・他化自在天）の情事をいうたものである。俱舍論卷十一に、「論曰、唯六欲天受二妙欲境一、於レ中初二依レ地居天、形交成レ婬與レ人無レ別、然風氣泄熱惱便除、非下如二人間一有中餘不淨上、夜摩天衆纔抱成レ婬、覩史多天但由レ執レ手、樂變化天唯相向笑、他化自在相視成レ婬」。覩史多天は兜率天ともいふ。「とそつ」をも見よ。

利劍卽是彌陀　利劍卽是と聞く時は死する刄も彌陀の椽（生玉）　利劍卽是彌陀號、一聲稱念罪皆除（娥）
「利劍卽是彌陀號、一聲稱念罪皆除」は般舟讃にある文である。阿彌陀佛名號の功力は無明の煩惱を斷絶すること利劍の物を斷去るやうである、一聲の稱名念佛を唱へれば罪障悉く滅除するの意である。

梁帝が龍を投ぐ　梁帝が龍を投げ、項羽が山を拔く勢（女夫池）
梁の武帝が懺悔法を始め、その法を修して、后妃の死して亘蟒となるを救つたことをいうたのであらう。懺法小序に「梁武帝修二此法一、救三后妃死爲二亘蟒一」。

りやつかう　りやつかう不思議のうき沓はかせ（女護島）
「りやつこふ」の誤。「りやくこふふしぎ」を見よ。

***流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者**（娥）
僧侶が棺前で多くは此文を誦す。欲界・色界・無色界の三界に流轉するは、妻子恩愛の情にほだされて其妄情を斷つことができないからである。その妄情を棄てて證悟の境界に入るは、一切衆生の恩を報ずる者であるとの意。この經文は平家物語・卷十、維盛の出家の條にも引用されてゐる。「きおんにふむゐ」を見よ。

流轉三界中、乃至眞實報恩者（用文章）
前條を見よ。

我が手の内に雀あり、生きたるか死したるか言うて見られよ（川中島）
雀が生きてゐると言はば、手の内で握り殺して見せ、又死んでゐると言はば、其儘手を開いて放つので、これぞ兩刀論法（Dilemma）である。佛果圜悟禪師碧巖錄卷一に「有二一外道一、手握二雀兒一、來問二世尊一云、且道某甲手中雀兒、是死耶是活耶、世尊遂騎二門閫一云、你道我出耶入耶、外道無レ語、遂禮拜」。

***ゑしやぢやうり**（蟬丸）（卯月潤色）
〔會者定離〕宇宙の萬有は因緣假に和合して成れるものである、されば因緣は盡きる時がある、一度會せしものは又必ず離別しなければならぬ。遺教經に、「世皆無常、會者必有レ離」。蟬丸のここの文に、「これやこの行くも歸るも

これ釋尊入涅槃の形である、よつて以て死者に行ふ臥法である。書言字考節用集に、「頭北面西、如來涅槃時坐也、見二長阿含經一」。

天に向つて唾吐す 人を害すと思へども却つて我身を害する事、天に向つて唾吐すと、四十二章經にて說かれたり（最明寺殿）

後漢釋迦葉摩騰等譯、四十二章經に、「惡人欲レ害二賢者一、仰レ天而唾、唾不レ汚レ天、還汚二己面一」。

とくしようどうじ 德勝童子の土の餅の果報めでたき百萬石の國中が打明けて（賀古敎信）

〔德勝童子〕德勝童子が土をもつて麨を爲して遊戲せる時、釋尊に逢うてこれを捧げた利益によつて、後に花氏城に於て正法王と作り阿恕伽と號したと云ふ故事によつたのである。阿育王傳・卷第一、本施土緣に、「爾時世尊與二阿難一在二巷中一、行見二二小兒一、一名二德勝一、是上族姓子、二名二無勝一、是次族姓子、弄レ土而戲以レ土爲レ城、城中復作二舍宅倉儲一、以レ土爲レ麨著二於倉中一、此二小兒見下佛三十二大人之相莊二嚴其身一、放二金色光一照中城内外上、皆作二金色一無レ不二明徹一、見已歡喜、德勝於レ是掬二倉中土名爲レ麨者一、奉二上世尊一、無勝在レ傍合掌隨喜、……佛言我若涅槃百年之後、此小兒者當レ作二轉輪聖王四分之一一、於二花氏城一作二正法王一、號二阿恕伽一」。

＊飛んで火に入る夏の蟲（國性爺）

法苑珠林に、「如下飛蛾見レ火投上」。

によがとうむい 一乘一實の妙法の緣に引かれては如我等無異の佛となる（大覺）

〔如我等無異〕この文句は日妙聖人御書などにも見え、我もと誓願を立てて、一切衆生をして我がやうに等しくして異ることなからしめようとの意。

によにんぢごくしのうだんぶつしゆ（松風）

〔女人地獄使能斷佛種〕女人は罪業深く、五障ありて地獄の使である、能く佛性を斷絕させるものである。寶物集・下に、「華嚴經にいはく、女人地獄使、能斷二佛種子一、外面似二菩薩一、内心如二夜叉一」。寶積經・龍猛大士云「女人地獄使、能斷二佛種子一、外面似二菩薩一、内心如二羅刹一」。

女人は地獄の使、能く佛の種を絕つ（大覺）

寶物集・下卷に、「華嚴經にいはく、女人地獄使、能斷二佛種子一、外面似二菩薩一、内心如二夜叉一」。

＊によむげんはうやう 總じて夢はによむげんはうやうとて、定め難きものにてあり（今川了俊）

〔如夢幻泡影〕夢幻泡影の如くにはかなき意。金剛般若經に、「一切有爲法、如二夢幻泡影一、如レ露如レ電、應レ作二如レ是觀一」。

はうこうだいし

「ほうこうだいし」を見よ。

はりたやうん 突込む切先の膺に當れば反返り、はりたやうんと剳り通す（萬年草）

眞言咒の「婆唎陁耶吽」（「おんあぼきやべい云云」を見よ）に、「腹痛やうん」をいひかけたのである。高野山に緣ある眞言咒を用ゐて文飾としたのである。

百丈野狐の話 禪の百丈野狐の話も寓言虛妄の戲論なり（本領曾我）

百丈禪師は唐代福州長樂の人である、諱・懷海、性は王氏、江西省洪州新吳の界なる大雄山に住んだ、その山巖巒峻極で千尺許なるによつて百丈山といふ。百丈禪師が說法する每に一老人衆に從つて法話を聽く、一日衆皆退去すれども老人獨り退去しないで、師と問答して大悟し拜して言ふやう、某已に野狐心を脫す、山後に住在せん、敢て乞ふ亡僧の津送に依られんことをと、師・維那に命じて大衆を集め、山後の巖下に至り杖を以て一死狐を挑げ出し、法の如く火葬したといふ。

辨財天の寶にも十五童子の子寶は佛も愛し給ふぞや（本領曾我）

辨財天女には十五童子が附隨してゐる。元亨釋書・第十八に、「天女（辨財天女）率二十五童子一降臨」。

變成男子の願を立て、女人成佛誓ひたり（女殺）

親鸞上人の淨土和讃中の文である。女人には五障あつて成佛するを得ないが故に、女人が成佛するには性を變じて男子とならねばならぬ。變成男子の願は卽ち女人成佛を祈る願である。大無量壽經に、「設我得レ佛、十方無量不可思議諸佛世界、其有二女人一、聞二我名字一、歡喜信樂發二菩提心一、厭二惡女身一、壽終之後、復爲二女像一者、不レ取二正覺一」「龍女」を見よ。

ほうこうだいし 寶公大士といふ智者は鷹の巢より生れ出で（百合若）

〔寶公大士〕寶誌大士を云ひ、南宋・泰始時代にゐた僧で、鷹の巢から生れ出たといふ。佛祖通載・第九に、「寶誌大士、於二是年一（南宋泰始三年丁未北魏皇興元年）往二來晥山劍水之下一、髮而徒跣、著二錦袍一、俗呼爲二誌公一、面方而瑩徹如レ鏡、手足皆鳥爪、初金陵東陽民朱氏之婦、上巳日聞二兒啼二鷹巢中一、梯レ樹得レ之、擧以爲レ子、七歲依二鍾山大沙門僧儉一出家、專脩二禪觀一」。碧巖集・第一則中に誌公とあるもこの人である。

まんとくゑんまん 一心頂禮萬德圓滿釋迦如來（萬年草）

〔萬德圓滿〕功德無量無邊で缺損する所なきをいふ。「一心頂禮云云」を見よ。

萬法唯一心、心外無別法（根元曾我）

萬法は總て各自の心から作り出すもので、心を離れて他の諸法の存在するものでない。「心外無別法、卽心成佛」を見よ。

彌陀十劫に正覺を唱へ、始めて三界の衆生を助け誘ひし（聖德太子）

佛說阿彌陀經に「阿彌陀佛、成佛已來於レ今十劫、……、若有二善男子善女人一、聞レ說二阿彌陀佛一、執二持名號一、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂、其人臨二命終時一、阿彌陀佛與二諸聖衆一、現二在其前一、是人終時、心不二顚倒一卽得レ往二生阿彌陀佛極樂國土一」。

＊水の月取る猿 水の月取る猿澤の池に身を投げ（天智天皇） 水の月取る猿猴は及ばぬ事の譬なが

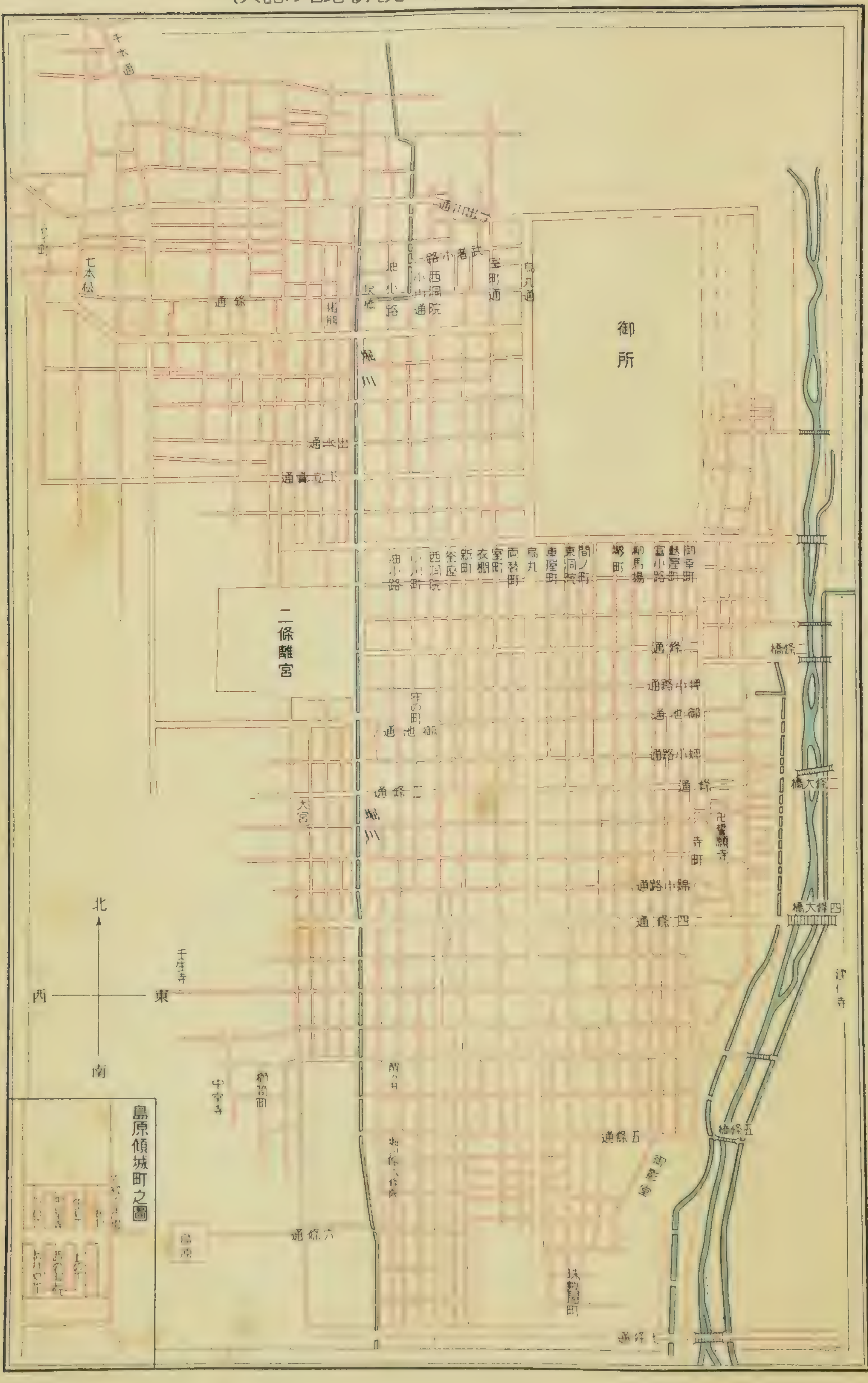
近松當時の大阪圖（近松文中に見えたる名の記入）



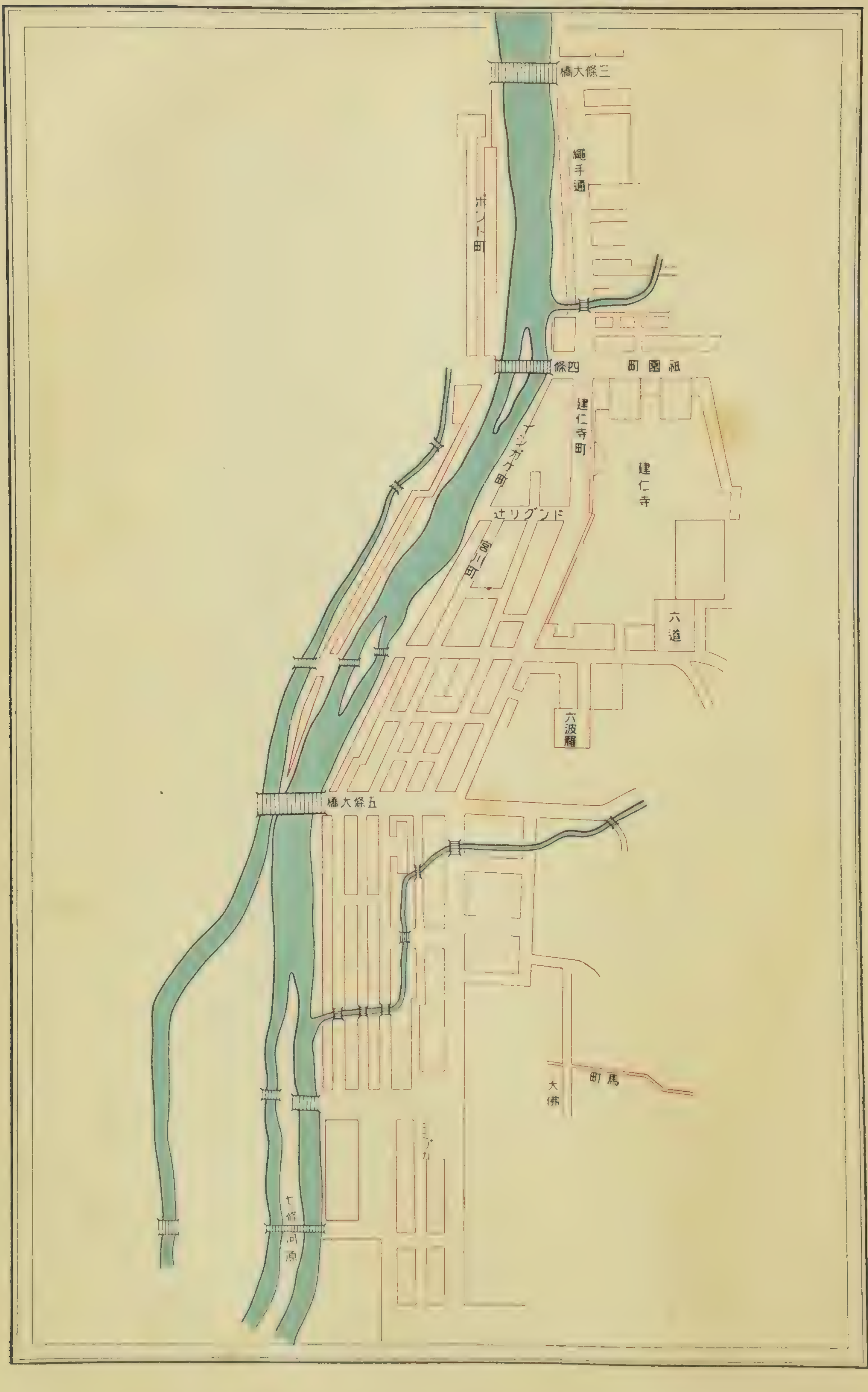
云云」の歌を釋して、「三十一文字の表に旅の意を列ね、裏にはすなはち會者定離愛別離苦の理」と云へるは、百人一首抄に「これやこのとは逢坂の關におちつく五文字なり、而は旅客の往來のしげなるものなり、下の心は會者定離の心なり云云」とあるに據つたのである。

（「會者定離」は太平記にも見え、又これと同義句は涅槃經にもある）。

京都（巣林子文中に見える地名の記入）



京都の一部（集林子文中に見える地名の記入）



地名部

あうがう 唐土黃帝の御代の時蚩尤といひし朝敵はびこり、あうがうの海を隔て（持統天皇）

〔烏江〕「をうごう」とも書いてある、安徽省和州の東北にある。史記、項羽本紀に「項王乃欲二東渡一烏江一」とありて正義に、「括地志云、烏江亭卽和州烏江縣是也、晋初爲レ縣矣」と見えてゐる。「蚩尤」「黃帝革を以て云云」を見よ。

あかさか 二川越えて三河の國、北に夕日の入るかと見れば、はしのてりはや赤坂の、谷の木の實をあさるとて（今川了俊）

〔赤坂〕三河國寶飯郡赤坂町。

あかさか （嫗山姥）

〔赤坂〕美濃國不破郡赤坂村をいふ、垂井の東北一里半。

あかざはやま 奥野の狩の歸るさや、赤澤山の麓にて、工藤左衞門祐經に討たれぬる（伊豆日記）

〔赤澤山〕伊豆國田方郡にある山の名、河津祐泰の殺された處。

秋篠 （井筒）

大和國生駒郡平城村の大字で、歌に外山の里と詠ぜられた地である。

あきのやま （女夫池）

〔秋山〕山城國紀伊郡にある。雍州府志に「秋山＝在二上鳥羽南一、曾鳥羽法皇設二離宮於斯處一、東庭築レ山種二花木一愛二春光一、西庭種二楓樹一賞二秋色一、南方避レ暑、北方見レ雪、各有二其趣一、今悉爲二田疇一、秋山纔殘、其巓有レ寺、淨土專念宗僧守レ之」。

あくたがは （蛙合戰）（閼八州）

〔芥川〕延喜式に攝津の國島下郡に阿久刀神社ありと見えてゐる。芥川は此處にある川であらう。「色に身代宇津の山云云」をも見よ。巢林子が芥川といへるは、伊勢物語に芥川とあるに據つたまでである。

あけろのやま これは信州あけろの山の巓（嫗山姥）

〔上路山〕巢林子は信州あけろの山と云へど、實は越後國西頸城郡市振の東南親不知の嶺を上路山と云ひ、そのあたりを上路村といふ。極めて難所で、多くの谷峯繩を以て橋としてある。謠曲・山姥に「是はあけろの山とて人里遠き所なり」、とあるもこの山である。

あこやのまつ 阿古屋の松の木の間より沖に見えたる津輕が島（鎌田）

〔阿古屋の松〕羽前國南村山郡にある。風土略記に、「今千歲山の頂上にあこやといふ地あり、卽ち阿古屋の松のある所なり云云」。

あさかたが （日本武尊）

〔淺香潟〕攝津國なる淺香浦のことで、この地舊住吉郡にあつたが、地形變じて今其址なく、和泉國泉北郡三寶村の地古くは海濱であつたから、そのあたりであらうといふ。

あさかのみづ 淺香の水の漏れそめて、笹野の露と置きまどひ（鑓權三）

〔淺香水〕淺香沼（安積沼とも書く）は岩代國安積郡にある歌枕で、今、山野井村大字日和田の西にある東勝寺の後の小池であるといふ。ここの文はおさゐが淺香市之進を夫に持ちながら、なほ多情にして笹野權三に露の情をかけたことをいうたのである。

あさかやま 花の名殘のあさか山（門出八島）

〔安積山〕岩代國安積郡にある山名。

あさくまのだけ （丹波與作）

〔朝熊岳〕伊勢國度會郡にあつて、山嶺南北に延び伊勢志摩の分水界をなす。

あさくらはちまんぐう （女夫池）

〔朝倉八幡宮〕國花萬葉集記卷十三、周防國神社之部に、「朝倉八幡宮＝朝倉、祭神八幡宮、人皇五十六代淸和天皇貞觀元年行宮を建て勸二請之一」。

あさひながは 名にし負はば我通ひ路の關の戶も、一夜は破れ朝比奈川、小夜の中山見上ぐれば（今川了俊）

〔朝比奈川〕駿河國志太郡朝比奈村の山中に發し、假宿を經て西南に流れ、瀨戶川に入る。巢林子のここの文、朝比奈三郎義秀の關の戶破りは有名な話なれば、朝比奈川の名により、「名にし負はば」といひ、「關の戶も一夜は破れ」といふたのである。

あさひのしんめい 月讀の旭の神明額つきて（卯月紅葉）

〔朝日神明〕大阪市東區神崎町にある、祭神、天照太神、世に逆櫓社といふ。浪花寺社巡、二十二社廻りの條に「一番、松山町朝日宮」。

あさひやま 朝日山山吹の瀨に影みえて（蟬丸）

〔朝日山〕山城國宇治平等院の附近にある山の名。謠曲・賴政に、「朝日山山吹の瀨に影見えて」。

あしたかやま （會稽山）

〔足高山〕愛鷹山とも書き、駿河國駿東、富士の二郡に跨る山。愛鷹は古訓「はしたか」であるを、訛つて「あしたか」となり足高と書くやうになつた。

あしやがた 草鞋ぶらつく蘆屋潟、ちろりがたつく草分の道（日本武尊）

〔蘆屋潟〕筑前國遠賀郡蘆屋町の海濱をいひ、古來泊舟の地として有名である。往時この地に鑄工あつて、其鑄た釜を蘆屋釜（その條を見よ）といひ、茶人の珍重する物である。巢林子のここの文は、「ぶらつく足」を「蘆屋潟」にいひかけ、この地の名物蘆屋釜をきかせて「銚釐（その條を見よ）形」にいひつづけ、「形」に「がたつく」をいひかけたのである。

あしやのうら 御影・あられの松原・葦屋の浦（西王母）

〔葦屋浦〕攝津國武庫郡打出濱をいふ。

あふさかのせきのしみづ　逢阪の關の清水を汲みあげつ、手にむすびあげ口嗽ぎ（曾根崎）
〔逢阪關清水〕大阪天王寺西門筋逢阪の清水をいふ。攝津名所圖會二に、「相坂清水。一心寺（茶臼山の北）門前の西にあり、此邊七名泉の其一箇なり、小坂清水ともいふ、淸洌にして四時增減なし、此所の用水とす、茶に可なり」。關の清水といふたのは近江國逢坂の關の清水は有名であるから、それをかりて文飾としたのである。

あぶと　あぶと、御手洗、くろく島（女護島）
〔阿武兎〕備後國沼隈郡鞆町の南方約一里の海岸にあつて、絶壁の上に阿武兎觀音堂があつて、海上の眺望絶佳である。

あぶらかけ　今夜はどこに泊らうぞ、ハテ三栖が端(はな)か油掛か（鑓權三）
〔油掛〕山城國伏見町にあつて、京橋の北に當り、東西に通ずる町名。

あぼすたうげ　（三國志）
かかる名のある峠は朝鮮には無い。思ふに出鱈目であらう。

あまなは　甘繩の盛長屋敷（最明寺殿）
〔甘繩〕相州鎌倉長谷・甘繩神明社の前は安達盛長の邸宅があつた。盛長は源頼朝擧兵の時より其謀を助けて大いに親任された。

あまのぐち　あれへ越ゆればあまの口（萬年草）
〔天野口〕高野山上の西端の大門口を下り、矢立を經て天野に至る道筋をいふ。

あみがさじま　編笠島の笹屋の嬶でござんする（二枚繪）
〔編笠島〕曾根崎（大阪）の西端梅田橋附近の地名。

あみじま　南無あみ島の大長寺（天網島）
〔網島〕今大阪市網島町。攝津名所圖會、三に「網島。京橋の北にあり、此所は澱(よど)川の堤にして、漁家列り、鮮魚を多く市に出す、云云」。

あみのみやうじん　（松風）
〔網野明神〕丹後國竹野郡にあつて浦島大明神とも云ひ、浦島太郎の靈を祀る。

あめの帝(みかど)の御廟野　（蟬丸）
天の帝とは天智天皇のことで、卽ち天智天皇の山科の御陵。

あめのみや　西條山は長尾の陣所、下米の宮は武田の備（川中島）
〔下米宮〕信濃國埴科郡雨宮縣村の大字で、千曲川の南岸である。

あめのみや　（烏帽子折）
〔雨の宮〕雍州府志・三、神社門下に、「雨宮明神。在二衣笠山麓西南一、所謂春日社之攝社也」。

あめのもり　（薩摩歌）
〔雨の杜〕國花萬葉記、日向國名所之部に「雨の杜」とある。

あらちのやま　越えても末の泊とは、何處あらちの山高く、歩み惱みし御風情（磔靜）
〔愛發山〕越前國敦賀郡にありて近江の國境に接し、海津より越前に出づる通路に當る。

あらやばし　立賣堀を漕廻し、辨當濟まば椀家具も、釜もちやくちやくあらや橋、跡へはんなり入花の（今宮）
〔荒屋橋〕ちやくちやく洗(あら)やをあら屋橋にかけて斯く云うたのである。あらや橋は西横堀川に架し、唐物町筋（北久太郎町北隣の筋）で備後橋から南四つ目の橋に當り、今の新江達橋あたりにあつた橋。

あられのまつばら　御影・あられの松原・葦屋の浦（西王母）
〔阿良禮松原〕霰松原とも書く。攝津國東成郡住吉村の南にありて今の安立町の濱の名。

あらゐ　このここのあらゐ・今ぎれ（丹波與作）
〔新居〕遠江國にある村邑。白須賀と舞坂との間にあつて、東海道五十三次の一。

ありすがは　（以呂波）（大覺）
〔有栖川〕山城國葛野郡下嵯峨を流れてゐる川。

ありとほしのみやうじん　（百日曾我）
〔蟻通明神〕和泉國泉南郡長瀧村にある社。

あをのがはら　（嫗山姥）
〔青野原〕美濃國不破郡青野が原。

あをばか　（嫗山姥）（當流小栗判官）（磔靜）
〔青墓〕美濃國不破郡にありて今も青墓村といふ、垂井と赤坂との間で青野が原にある。國花萬葉記に、「垂井より五町餘東なる青野原を過ぐれば青墓なり、昔青墓の長者が住みし所とて、道より北の方に其跡あり」。

あをばやま　（門出八島）
〔青葉山〕陸前國宮城郡にある山名。

あんじやうじ　はや安祥寺の入相の音羽の峯に夕づく日（酒呑童子）
〔安祥寺〕山城國宇治郡山科陵の東方にあつて、文德天皇勅願の眞言宗の寺院である。往時は山科陵以東の山野を占めてゐたが、その後衰微し、慶長年中東部大半を割いて毘沙門堂に附し、安祥寺は西偏に移つた。

あんぼん　べんがら・あんぼん・すべいで（國性爺後日）
馬來(まれい)群島中にあつて、セラム島の西南に當り、和蘭語でアンボン（Ambon）、馬來語でアンボン（Ambun）、英語でアムボイナ（Amboyna）といふ島名で、その首都をもアンボンといふ。十六七世紀頃既に我か國人と交商してゐた。新井君美撰、五事略に、「あんぼん。島也、日本を去る事三千九百里程」。

いかほのぬま　（津戸三郎）
〔伊香保沼〕上州榛名湖の古名。

いかるが　富の小川を打越えて斑鳩の御所へぞ參りける（聖德太子）
〔斑鳩〕大和國生駒郡にあり、今の法隆寺東院の地に推古天皇の九年聖德太子が宮を建てられて斑鳩宮と稱した。

いきのまつばら　あればある世の命とて生の松原打過ぐる（天神記）
〔生松原〕筑前國早良郡山門村に屬し、姪濱の西に連り今宿村に至る海岸をいふ。

いくしなだいみやうじん　（千疋犬）
〔生品大明神〕上野國新田郡生品村にある。新田義貞が兵を起す時、この社頭で旗擧けしたといふ。
相摸入道千疋犬のことこの文は道行の巡路を擧

あすかがは 一夜に變る淵瀨こそ大和にあると聞きけるが、何時東路の飛鳥川底意の程の惡さよと(冷泉節)

〔飛鳥川〕大和國高市郡にある山川なれば淵瀨變じ易い。古今集・雜下部の歌に、「世の中は何か常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀨になる」。よつて以て心の變じ易きにいふ。

あすかのやしろ 飛鳥の社・濱の宮・王子王子は九十九所(反魂香)

〔飛鳥社〕紀州熊野山新宮の攝社であつて、新宮の西南(上熊野)にある。和漢三才圖會卷七十六、紀伊の條に、「飛鳥社。在₂新宮坤方₁、祭神未ㇾ詳」。

あたかのせき 傳へ聞く、判官殿御存生の折から東下りの忍路や、安宅の關にて我子の辨慶判官殿を打つたるとや(百日曾我)

〔安宅關〕安宅關のあつた所は加賀國能美郡安宅町附近であつたのであらうが詳でなく、古の關跡は今は海中になつたといふ。義經が陸奧に下らうとして安宅關で富樫介家直に咎められ、辨慶苦計を廻らし勸進帳を讀上げ、且つ主從でないやうに見せる爲に義經を毆打して、漸く虎口を逃れたことは謠曲・安宅に見えてゐる。

あだちがはらのくろづか まことや鬼のこもるは安達が原の黑塚、雜生ひて茂れる宿のうれたきに(艶狩)

謠曲・安達原に、黑塚といふ所に鬼の出たことが見えてゐる。謠曲拾葉抄・卷二十に、「奧州名取郡安達原に黑塚と云有、草村の中に黑塚とて、栢の木の村立て其跡殘れり云云」。拾遺集・雜下に、陸奧國名取郡黑塚と云所に重之が妹あまたありと聞て、いひつかはしける平兼盛歌に、陸奧の安達が原の黑塚に鬼こもれりといふは誠か、大和物語には、此歌の下句きくは誠かと有云云」。按じるに安達が原の黑塚に鬼の棲めるといふことは、平兼盛の歌の有名なるに從ひて、い ひ出したものなるべく、事實鬼の棲めるにてもなく、且つ安達が原に黑塚といふ所もなく、安達が原と黑塚とは別所である。

あつがしやま 阿津賀志山の山城を一採に攻落し(蛙合戰)

〔阿津賀志山〕岩代國伊達郡大木戶村にある山。

あづさがは 梓川原に平張打たせ(振袖始)

〔梓川〕信濃國南安曇郡にある川で、水源を常念嶽と槍ケ岳との峽間に發し、南流約七里で西筑摩郡から來れる黑川を合せ、松本市外の西北に至り、奈良井川を合して犀川となる。

あづまの明神 花は八重咲く梅澤の、里過ぎ行けば朝日さす、影もあづまの明神に暇の法施まゐらせて(扇八景)

〔吾妻明神〕相摸國中郡吾妻村梅澤の里のあたりにある。東海道名所記に、「梅澤。茶屋あり、入口に東の明神とて高き山あり云々」。

あなむしやま 大和河內の境なるあなむし山に着き給ふ(天智天皇)

〔穴虫山〕大和國北葛城郡にあつて、二上村大字關屋より河內に踰える坂路に當り、穴虫越と稱す。

あのくだつち つがひの鴛の棲む水はあのくだつちの流れと知れ(聖德太子)

〔阿耨達池〕梵語である、淸涼地または無熱惱池と譯し、雪山の北にある池だといふ、要するに傳說上の靈池である。西域記原序に、「贍部洲之中地者、阿那婆答多池也(唐曰₂無熱惱₁舊曰₂阿耨達池₁訛也)、在₂香山之南、大雪山之北₁、周八百餘里」。

あののまつばら 此のも彼のもにあののもの、あのの松原しぐれ行く(丹波與作)

〔安濃松原〕伊勢國安濃郡安濃川に沿へる松原をいふか。藤堂元甫編、三國地志卷三十三、伊勢國安濃郡安濃松原ノ條下に、「按、上世藤方・垂水の邊より海涯に松原あり、又乙部村字權現浦に松原あり、是等の遺址なるか云云、安濃村の松原寺の地をさすも一說とすべし、孰れか是なるを知らず」。伊勢參宮名所圖會、鈴鹿郡の條下に、「安濃松原 (此邊の濱手なり今はなし)、明應七年の地震に、城下松原ともに波に沈めり、其以前は津の町と海との間にありし也」。

あはざ (淀鯉)

〔阿波座〕「あはざののら烏」「大阪地圖」を見よ

あはたぐち 親も許さぬ女房とは粟田口へ行きたいか(女腹切)

〔粟田口〕京都の東、今粟田口町といふ、昔刑場のあつた所。

あはぢまち 佐渡と越後の相の手を、通ふ千鳥の淡路町(冥途飛脚)

〔淡路町〕「通ふ千鳥の淡路町」四三三頁を見よ

あはづのはら 揉みに揉んでぞ追ひ追はれ、近江路を一刻にまづ爰までは粟津の原、木曾の昔も氣味惡く(三國志)

〔粟津原〕近江國滋賀郡粟津野をいひ、木曾義仲戰敗れて自刄した所。

あはてのもり 幸ひ當國阿波手の森は人倫離れ、敵もそれとは得知るまじ(日本武尊)

〔阿波手森〕尾張國海部郡甚目村にあつて、名古屋の西。

あひのつちやま 昔の小唄ひきかへて、間の土山死出の山、冥途の旅路通し馬(丹波與作)

〔間土山〕土山は近江國甲賀郡にあつて鈴鹿山の西麓に當り、鈴鹿越の舊驛である。間とは土山が甲賀山(大岡山)と鈴鹿山との間にあるからであらう。

あふぎのしば 扇の芝にはや三番の勝相撲(雪女)

〔扇芝〕山城國宇治平等院內にあつて、源三位賴政の自殺した所。

あふさかのせき (蟬丸)

〔逢坂關〕近江國滋賀郡大津の南、逢坂山にある所謂三關の一。延曆遷都以來重要の地となつた。初め關の廢されたのは延曆十四年であるが、事ある每に兵を關址に備へ、文德天皇の時再興し、その後屢興廢があつた。

いちふり（樂静）
〔市振〕越後國西頸城郡にある。附近に親不知子不知の險道がある。

いづし　わきて出石の山はあれど、戀の病は驗なき（鑑確三）
〔出石〕但馬國出石郡の西境に出石町がある、町の東北に有子山がある。巣林子のここの文は、出石が有名な但馬の城崎溫泉に近いによつて、「戀の病は驗なき」といひつづけたのである。

いづみかは　濁りなき世に泉川（雪女）
〔泉川〕山城國相樂郡瓶原を流れる川の名。

井手の山吹（冥途飛脚）（聖德太子）
山城國綴喜郡井手の里をいふ。山吹の名所である。

いながはじゆく（十二段）
〔稻川宿〕近江國甲賀郡大野村大字今鄉。

いなのささはら
「ゐなのささはら」（猪名野笹原）を見よ。

いなばやま（嫗山姥）
〔稻葉山〕美濃國稻葉郡にありて岐阜の東に屹立する峰巒である。巣林子作、鎌田兵衞名所盃に「旅行く人の立別れ稻葉の山や」とある、稻葉山もこの美濃國なる稻葉山をいへるなり、但この文に引用したる百人一首なる中納言行平の「たち別れいなばの山の峯に生ふる云々」の歌にある稻葉山は、因幡國法美郡稻葉山でこれとは別である。

いなみの　風に宿かるいなみのの、尾花かたしき女郎花（浦島）
〔印南野〕播磨國加古郡・明石郡に跨れる原野の名。

いなむらがしろ　守屋の大臣は稻村が城に立歸り士卒を集め（聖德太子）
〔稻村城〕日本書紀、崇峻天皇の條に、「大連親率二子弟與一奴軍一、築二稻城一而戰」と見え、河內志に、「志紀郡古蹟有二稻城址一、在二弓削村一」と見えてゐる。

いなり　まだ其上に稻荷あたりの裏屋小路をのぞき廻り（夕霧）
〔稻荷〕大阪城の南玉造稻荷社をいふ。此社のあたりの裏屋小路に暗屋（その條を見よ）といふがあつて、娃蜜女の巣窟であつたことは西鶴の好色一代男にも見えてゐる。巣林子作の曾根崎心中に、「夢をさまさんばくらうの、ここも稻荷の神社」とある「稻荷の神社」は「ばく」の條を見よ。

いなりやま（娥）
〔稻荷山〕山城國伏見の稻荷山。

いはくらやま（女夫池）
〔岩倉山〕京都の北、北岩倉にある。

いはせのもり　玉鶴殿への御使と聞くより嬉しさ、口上もろくにいはせの森の蟬、たかいたかいと文引かくす（聖德太子）
〔岩瀨森〕大和國生駒郡奈良志岡の北にある森をいふ。ここの文は、口上もろくに言はせずを岩瀨にかけて、蟬は高聲に鳴けば高い高いに、使者の口上の聲の高い高いをいひかけて制したのである。

いはたがは　業の秤の錘には、それさへ輕き磐石の、岩田川にぞ著きにける（反魂香）
〔岩田川〕紀伊國にある川の名、栗栖川の下流で栗栖川莊北郡村領より岩田鄉鮎川村領に入り、艮から坤に貫き鄉中の枝溪を合せ流れること三里餘、岩崎村境で富田莊に入つて富田川といふ、熊野の古道此川に沿うて登る。

いはまつむら
〔岩松村〕「がんすゐじ」を見よ。

いはやごえ　竹の內峠袖濡れて、岩屋越とて石道や（冥途飛脚）
〔岩屋越〕河內國南河內郡山田村鶯關にて、大和國當麻寺に出る山路に當る。

いまぎれ　ヤ此このあらゐ今ぎれ（丹波與作）
〔今切〕遠州濱名郡にあり、新居と舞坂との間。西辰紀行に、「遠州荒井の濱より奥の山五里ばかり海となりて大舟も出入る、むかしは山につづきたる陸地なりしが、中比山よりほらの貝おびただしくぬけ出て海へ入ける、其跡かくのごとく海となりて今切と名つくるよし、古老いひつたへたり」。

いまつ　はや近江路に打出の濱、今津海津の舟よばひ（源義經）
〔今津〕近江國高島郡にありて、越前路・若狹路の交叉點に當り、琵琶湖に臨む小邑である。

いもあらひ　はつめい月や一口（淀鯉）
〔一口〕一口は山城國久世郡御牧村の北部、巨椋湖の水細流となり淀に向ふ邊をいふ。ここの文は、八月十五夜の月（初明月）を芋明月といふ緣によりて、一口につづけた。

いもせやま（以呂波）
〔妹背山〕紀伊國那賀郡にある山の名。

いるの　さをしかの入野も山も聲聲に（會稽山）
「さをしかのいるの」といふこと古歌に多く見えてゐる故に、巣林子は小牡鹿の居る野の義にとりて用ゐたのである。「居る」は「ゐる」で「いる」の假名ではなけれど、當時は假名遣については論ぜられなかつた。入野は萬葉集・卷十にも、「さをしかの入野のすすき云云」と見えて、山城國乙訓郡入野神社のある處をいふ。

いろはぢやや　いろは茶屋から坂町かけて（生玉）　そんならばいろは茶屋か（重井筒）
〔以呂波茶屋〕大阪道頓堀にあつた茶屋。南水漫遊續篇に、「往古は道頓堀側芝居の近邊とても今の如く寸尺の地を爭ふこともなく建家疎らなる故、炎天或は俄雨の節見物の諸人難澁に及びしにつき、元祿十三年卯十一月立慶町役高二十八役、吉左衞門町役二十役、都合四十八役、右兩町一役に水茶屋一軒づつ御免有之、濱側に於て板圍の內に床几を構へ茶店を出すこととはなりたれども、其頃は萬事手輕きことにて右茶屋四十八軒出來し故、世俗に呼んでいろは茶屋といふ云云」。

いわうがしま
〔硫黃が島〕「流され人の彼の島で流す卒塔婆」を見よ。

いんべ　何をか思ひそめつけの、霞に咽ぶ伊部の濱（佐佐木）
〔伊部〕備前國和氣郡伊部村をいふ、山海の間に挾在す。この地古來陶器を出す、世にこれを伊部燒又は備前燒といふ。

うきよせうぢ　これはこちの大事の

けたのではなく、文飾に諸國の地名などを入れたのである。

いくたま　こだまのひびきはきもつかず皆生玉へとはしりける（重井筒）今日生玉で逢はんして戻してくれとあつたれば（曾根崎）得意を廻りいく玉の社にこそは着きにけれ（曾根崎）

〔生玉〕高津の南一帶の地の總稱で、この地に生國魂神社がある。祭神は生國魂大神・足國魂大神で、社殿の結構善美を盡し、八つ棟造の神殿莊嚴を極め、官幣大社に列す。

いくの　いくのの道や大江山（賀古敎信）

〔生野〕「ふみも見ぬいくのの道云云」を見よ。

いくわうざん　唐土育王山佛照禪師の御寺へ祠堂に御渡し候（孕常盤）

〔育王山〕支那浙江省寧波府にあり、支那五山の一で育王山阿育寺といふ。源平盛衰記に、平重盛が人に托して黃金千三百兩をこの寺に寄進して、菩提を弔はしめたこと見え、また比古婆衣・十六の卷、重盛が育王山黃金施入之狀の返牒の本文に、「當寺禪侶等者謹請二其施物一、令レ祈下日本安穩太平君二世所中仲求上矣、仍佛照禪師所二請取一如レ右、南無日本大將重盛奉レ入二育王山過去帳一畢」と見えてゐる。

いけだのしゆく　遠江池田の宿や東の空（本領神我）

〔池田の宿〕遠江國磐田郡にありて今・池田村といふ、天龍川の東岸に當り東海道の舊驛なりしが今は衰へて荒村となる。平宗盛の時代の池田の宿は天龍川の西岸にあつたのである。

いこまやま　さらばや生駒山あとに見捨てて出で給ふ、心の内こそ哀れなれ（三世相）

〔生駒山〕大和國生駒郡北生駒村の西に聳え、大和・河内の國界をなす。

いさわがは　石和川石に御法を書き留めて、弔ふためしも有栖川（大覺）

〔石和川〕甲斐國東八代郡石和町のあたりを流れる川。石和町はづれの日蓮宗の鵜飼山遠妙寺に、日蓮が鵜飼人を濟度したといふ題目書寫の石を祕藏してゐる。甲陽隨筆中卷、石和鵜飼寺の條に、「石和町は甲州道中馬繼宿にて、村はづれに鵜飼寺と稱する日蓮宗鵜飼山遠妙寺とて、御朱印寺領拾石被下也、往昔日蓮聖人安房國清澄より甲斐國行脚の時、鵜遣ひの亡靈に行逢ひ弔ひ給ひし所のよし、村外より西の方に川あり、笛吹川也、此邊にては石和川とも云、唯今鵜飼川と云ふは、八代郡黑駒村の山澤入より流れ出る川を、上にては金川と云ひ、此邊にては鵜飼川と唱へ候よし、小川也、川瀨の石を拾ひ取り、法華經を書きて波間に沈め弔ひし石も、今以て天然より有之よし、云云」。

いしざき　（振袖始）

備中國阿哲郡の村で、上市村の南なる石蟹郷のことであらう。

いしづちやま　（嵯峨天皇）

〔石槌山〕伊豫國周桑、新居、上浮穴の三郡に跨り、高さ六四〇〇尺の高嶺。

いしのとりゐ　石の鳥居のあなたより女子の泣く聲（重井筒）

〔石鳥居〕大阪高津の宮の石の鳥居。

いしべ　金になほいて一歩二朱の借錢負うて、肩の重たい石部の八藏に請負てもらうた（丹波與作）

〔石部〕近江國にあり、東海道五十三次の一、草津と水口との間。

いしやくし　せきにせきよりかめやまに、たばこ火うちの石やくし（丹波與作）

〔石藥師〕伊勢國にあり、東海道五十三次の一、庄野と四日市との間。

いしやま　さて石山の繁昌京大ざかが打明ける（卯月潤色）

〔石山〕近江國滋賀郡石山村大字石山にある石山寺をいひ、西國巡禮第十三番札所である。ここの文は、石山寺の開扉供養が寶永四年三月七日から六月十八日まで行はれたので、京大阪からの參詣人群集して繁昌を極め、爲に京大阪は虛明きのやうであるとの意。（序云、卯月潤色の中卷に「今は四月十七日觀音樣の御緣日」「今日は卯月の十七日此命日の明けぬ間に」「來月十七日はお龜樣のむかはり」と見えてゐるから、卯月潤色の初上演は寶永四年四月と見るべきである）。

いすずかは　（國性爺）

〔五十鈴川〕伊勢太神宮の傍を流れてゐる川で、御裳須曾川ともいふ。

いそのかみ　我本領にいそのかみ布留のやかたは家さかえ（井筒）

〔石上〕大和國山邊郡にある。石上の内に布留といふ地がある。この地の磯上布留社は有名である。國花萬葉記卷三、大和山邊郡神社の條に、「磯上布留社＝石上に御鎭座は人王十代崇神天皇の御宇に味間見命六世孫伊香色雄命大臣にして天神地祇を定め、八百萬の群神たちを大和國山邊郡石上邑にうつし奉る、往昔十種の瑞寶は高皇産靈尊より饒速日尊に傳り、其子味間見命にあたへ、それより神武天皇に奉りて、後は藏齋て石上の太神と號し、國家にあがめ祭るもの也」。

いたどり　杣山人の板取や、袖に涙の春雨を（碟靜）

〔板取〕越前國南條郡坍村の村邑。

いたはな　（最明寺殿）

〔板鼻〕上野國碓氷川の北岸にあつて今板鼻町といふ。安中の宿へ一里。

いちのがは　漕ぎ出で見れば天滿川、市の側なる初甜瓜（今宮）

〔市之側〕大阪天滿市、即ち天神橋北詰上手より龍田町までの濱側をいふ、靑物などの市場あれば初甜瓜といひつづけたのである。攝陽群談・卷第九、市の部に、「天滿市。西成郡天滿市之町にあり、毎朝所所の商人手是集り、土地の名物竝五畿内及紀州丹波播磨近江等の隣國より出る山林郷河の珍物、菜蔬果蓏九穀等の類、或は器物品品萬物求むるに不足と云ふ事なし、專ら繁榮の處、問屋甍を竝ぶ、世俗市之輪と云へり」。

いちはら　（文武五人男）（關八州）

〔市原〕山城國愛宕郡にあつて鞍馬路に當る。もと曠漠たる原野であつて、普陀落寺の庭上に小野小町及び深草少將の墓と稱するものがある。「をのとはいひて云云」をも見よ。

うへだ 玉水近き山城の、村は上田に家富みて(宵庚申)
〔上田〕山城國綴喜郡玉水附近の村名。

うみのうら (國性爺後日)
〔宇美浦〕筑前國糟屋郡宇美村の海邊。

うめざはむら 闇はあやなし梅澤村(曾我會稽山) 花は八重咲く梅澤の里過ぎ行けば(扇八景)
〔梅澤村〕相模國中郡吾妻村大字山西の舊稱。曾我會稽山のこの文は「やみはあやなし云云」を見よ。

うめだ 加賀に梅田(最明寺殿)
〔梅田〕加賀國河北郡森本村大字梅田。

うめだ やがて梅田へ行くときにどうで入らればかなはぬと(氷朔日)
〔梅田〕大阪の梅田は往時火葬場墓所の地であつた。曾根崎新地圖について見よ。巣林子作の賀古敎信七墓廻に、「あだし畑の梅田の火屋」とも見えてゐる。好色萬金丹・巻二に、「難波津の墓所爰のみにもあらず、小泊瀬・飛田・野枝・曾根崎・梅田・葭原云云」。

うめだつつみ
「むめだつつみ」を見よ。

うめだばし 市村玉柏梅田橋と見立てたり、それなぜに、はて渡れば色町・越ゆれば火屋、濡れにも憂ひにもよううつろはさて(今宮)
〔梅田橋〕硯川に架せる橋の名。「曾根崎新地圖」を見よ。攝陽群談・七に、「梅田橋。下堂島新地裏町にあり、北は西成郡上福島村に渉る處也、此の所茶店南北の岸にあり、初夏より秋に至るまで諸人群をなして都の涼を移す」。

うめつがは 「むめつがは」を見よ。

うめのき 梅の木の是齋の辻で身を粉にはたいてやつて見た(丹波與作)
語釋部「うめのきのぜさい」を見よ。

うめのみや (兼好)
〔梅宮〕山城國葛野郡西梅津にあり、今官幣中社に列す。黒川道祐編・雍州府志・三、神社門下、葛野郡の條に、「梅ノ宮。在二梅津村西一、所レ祭之神四座、酒解神・大若子神・小若子神・酒解子神是也云云」。

うらのみだう (今宮)
〔裏御堂〕大阪東區北久太郎町四丁目にある大谷派本願寺別院を裏御堂または南御堂といふ、本尊は安阿彌作の阿彌陀佛である。

うりふざか 二つに割らば瓜生坂、頂嶺峨峨と冬枯れたり(川中島)
〔瓜生坂〕信州佐久郡にある。木曾路名所圖會・巻之四に、「瓜生坂＝上り坂也、下りを金山坂といふ、布引山への道あり」。

うるさん うろ山が嶽森森と只月獨あこがれて(三國志)
〔蔚山〕朝鮮慶尙南道馬山府にある。豐臣秀吉征韓の役、加藤淸正が明軍に圍れてこれを擊破した地である。

うるま 罪をうろ間の里近き、友にも疎く親しきも(嫗山姥)
〔宇留間〕今は鵜沼(うぬま)村と云ふ、美濃國山縣郡にありて、岐阜の東約六里にして達す。

うんすん うんすん六郎(國性爺)
葡萄牙國から渡來したウンスンガルタの名を取つたもので、その實國名ではない。

うんぜんがだけ 御湯を捧げん靈門山、うんぜんがだけ見上ぐれば、峯に煙の一結び(國性爺後日)
〔雲仙嶽〕溫泉岳とも書く。肥前國南高來郡(島原半島)にある火山。その西方海拔二千四百尺の高地一帶は現今雲仙公園となり、溫泉湧き、周圍は樹木欝蒼として風光佳麗の境である。

うんりんゐん (皷)
〔雲林院〕大德寺の南、舟岡の東にある寺院。

えぐち こがれ寄る邊の江口とて、假の枕は惜しむなよ(本領曾我)
〔江口〕攝津國西成郡中島村の地をいふ、往時は遊女も多く住んで繁昌した地で、遊女妙も此地にゐたのである、されども今は淋しい村となり妙の故居の跡も定かに知られない、妙と西行との歌塚の碑も寂光寺境内に移されてある。「えぐちのきみ」を見よ。

えじり ふちゆう江じりすつとんとん(丹波與作)
〔江尻〕駿河國にありて府中と興津との間で東海道五十三次の一。

えのこじま (今宮)
〔江之子島〕攝陽群談・五に、「江之子島。西成郡にあり、大阪の市中にして江之子島町と稱す、所傳不詳、一說難波江の兒島を以て上略したろかといへり」。

えびすばし 惠比須橋や、惠比須橋越えて、見たや見せたや難波橋(卯月紅葉)
〔惠比須橋〕戎橋とも書く、大阪道頓堀川筋、太左衛門橋と大黒橋との間にある。
攝陽群談巻第七、橋の部に、「戎橋。南は吉左衛門町と九郎右衛門町の間、北は惣右衛門町と久左衛門町の渉り也、此橋始は操(あやつり)橋と稱す、川の南側、操狂言・歌舞伎等の芝居地を以て、今に操橋の名をいふ者あり」。

おいのさか 其使の早駕籠を乘せて、おいの坂のおり口から、二里の間を一貫四百(大經師)
〔老坂〕山城國乙訓郡大江坂をいふ、丹州街道に當る。
釋淨慧撰、山城名跡巡行志、第五、乙訓郡の條下に、「大江坂(或云二老坂一)、坂路二十一町」。又云「大江越(云二老坂越一)丹州街道也、出二桑田郡峠村一國界峠ノ西二町ニアリ云云」。

應天府 (國性爺後日)
支那南京(金陵)。和漢三才圖會巻六十二、南京の條に「按京師稱二應天府一、昔楚威王初置二金陵邑一、因下其地有二王氣一埋レ金以鎭上レ之、故名二金陵一、云云」。華夷通商考・巻一に「應天府－南京の城下也」。

おうとうごえ (非筒)
おとごえ(追夫越)のこと。河内國北高安の里から大和へ越える道路なる十三峠の南の山道

おかたま 雨の宮・風の宮・おかたま・うがたま・鏡の宮(國性爺後日)
〔興玉〕伊勢國度會郡二見浦にある夫婦岩をいひ、何時の頃よりかこの岩に注連繩を張つて、興玉の神の拜所となつた。

おきつ とんとうつたろおきつ波、まつばらはろる脊藥買うて、月を

お客、浮世小路までお歸りちや(淀鯉)　高麗橋の西東、床も定めぬ立君はこれも世渡る習とて、浮世小路の細き路(卯月紅葉)

〔浮世小路〕大阪高麗橋筋と今橋筋との間にある細き小路をいふ、往時大阪四小路の一で、新町通ひの駕籠の立場でもあり、また辻君などの娼賣婦の出没した處であつた。西鶴の好色一代女・卷之五、「濡問屋硯」の條に、「遊女になほ身をぞんざいに持ちなし、旦那の内にしては朱唇萬客に嘗めさせ、浮世小路の小宿に出でては閨中無量の枕を交はし云云」。日本新永代藏に、「抑この浮世小路といふ所は南は高麗橋筋、北は今橋筋の眞中に細き小路ありて、ここぞ手代の隱し宿、又は問屋蓮葉女の身ままになりて、相應より奇麗に住居する譯はといふに奉公人の出合宿なり」。傾城色三味線・大阪の卷に、「我大丈夫なる身代となりて太夫を自由にまはし、大盡と稱美せられ、浮世小路の駕籠に乗らずば云云」。浪花江南筆記に、「寛文貞享の頃は東堀より[illegible]堀の間兩側に揚弓屋・風呂屋あれば、其隣は餅屋質屋・次は三味線法師・謡曲指南の者もあり、或は米屋・油屋と軒を爭ひ、家家建集ひて實に浮世の有様眼前に見わたす故を以て、浮世小路とは唱へたる由なり」。

うこんのばば　地黒地淺黄紅ひはだ、右近の馬場にぞ著き給ふ(反魂香)

〔右近馬場〕京都上京・北野天滿宮に接近して其東南に當り、南北に通ずる街路である。

宇佐八幡宮　(國性爺後日)

豐前國宇佐郡宇佐町の東部龜山にある官幣大社で、祭神三座あつて應神天皇・比咩大神・神功皇后を祀る。

牛が瀬　(孫靜)

越前にある地名とは察せらるれども、燧が城から三國の浦に出る道路にこの名のものは無い。

うしのを　(三國志)

〔牛の尾〕山城國宇治郡山科村大字小山。

うしまど　廻り車の牛窓や室の港に身を寄せて(國性爺後日)

〔牛窓〕備前國邑久郡にあつて今牛窓村といふ。昔は備前海上の一水驛であつたが、現今は寂寞たる漁村である。

うすひたうげ　(川中島)

〔碓氷峠〕上州碓氷郡と信州北佐久郡との境にある峠で、輕井澤の東に當る。

うたつめがは　(小栗判官)

近江國愛知郡の北西に當り、琵琶湖畔の一丘に荒神山と云ふがある。その荒神山の下に架かる橋を歌つめの橋といふ。うたつめ川とはこの橋下の川を云うたのである。原田藏六撰・淡海府志(元祿二年成)卷之四に、「歌つめ橋」荒神山下にかかる橋」。淡海録第二に、「歌つめの橋。荒神山下にかかる」。

うたのなかやま　(蟬丸)

〔歌中山〕京都清水の南、清閑寺の上の山。

うちでのはま　さらばこちから打出の濱、大津へ三里、爰で矢橋のふなちんが(丹波與作)

〔打出の濱〕近江國滋賀郡大津あたりの濱邊をいふ。東海道名所圖會・一に云「京師より逢坂山を越て、初て湖水へ打出る濱をいふなるべし、今の松本の渡口にはあらず」。赤染衛門の家集に「雪いみじく降りたりしに、石山の涅槃會に詣でて、打出の濱にて、いと深く積りたりしに」と端書ありて、「關越えてあふみ路とこそ思ひつれ雪の白濱ここはいづくぞ」の歌を載せ、平家物語、卷九、木曾最期の事の條に、「(兼平)都の方へ上る程に、大津の打出の濱にて木曾殿に行き逢ひ奉る」と見えてゐる。

うぢばしのみやゐ　(蟬丸)

〔宇治橋宮居〕山城國久世郡宇治川に架せる大橋を宇治橋といふ。その橋の東側にある橋姫社は橋守の神である。

内平野町太神宮　伊勢の内外の、内平野町太神宮よと、いろいろの諸願の種を上町の(卯月紅葉)

大阪東區内平野町にあり、祭神・天照太神・八幡宮・春日明神・の三座。浪花寺社巡・二十二社廻りの條に「四番。内平野町、神明宮」。

うつのやま　蔦の細道宇津の山邊の夢は、一富士にたかよつたの山も、外にはすつとんとん走り付き(隅田川)　うつの山邊の十團子、所所の名物買うて(丹波與作)

〔宇都山〕駿河國安倍郡にあつて、岡部と鞠子との間。伊勢物語に「宇津の山にいたりて我いらんとする道はいと暗う細きに蔦楓は茂り、……駿河なる宇津の山邊のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」と見え、また太平記(神田本)俊基朝臣再關東下向の條に「岡邊の眞葛うらかなしき夕暮に、うつの山邊を越え行けば蔦楓いとしげりて道もなし、昔業平中將の住所求むとて東の方へ下るとて夢にも人にあはぬなりけりと、詠みしもかくやと思ひ知られたり」とある。雙生隅田川のこの文に「夢は一富士云々」とあるは、諺に「夢は一富士二鷹三茄子」といふに據つて、かく續けたのである。

宇都の山の名物十團子は、宇都の山の坂を岡部に向つて下る街道筋で賣つてゐたものである。井上通女撰・歸家日記(正德六年刊)中卷、宇都山をいへる條に「坂下るほどに十團子といふ物を家々の軒のつまにかけならべて賣る也、しとぎの小さき丸を十づつ絲につらぬけるは玉をつづりたらんやうなり、旅人買ひもて行きてわらはべにとらするとぞ、はかなげなる物から早くよりすることにて、今に變らぬさまなるもあはれ也」と見えてゐる。以て巣林子當時に於ける宇都山の名物十團子のいかなるものなるかが知られる。「とをだんご」をも見よ。(序云、古來有名な宇津の谷峠は明治九年長百五十間の墜道を通じ、車馬交通の便を開いた。その舊道を蔦の細道といふ)。

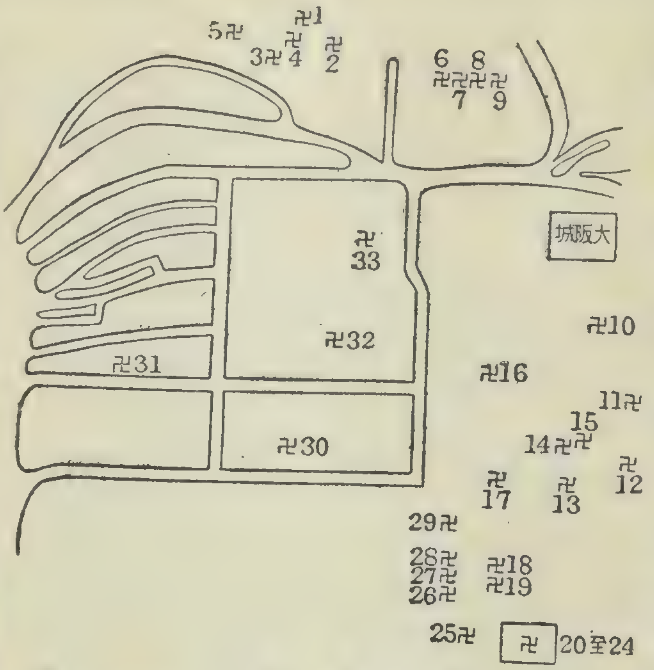
うづまさ　太秦となせ高尾山(兼好)

〔太秦〕山城國葛野郡葛野郷をいふ。

うづみ　うづみ・くずみ・河津の庄、押領は召されうが、高位の交りは及ばぬ事(本領曾我)

この地名伊豆國中に見當らない。本領曾我のここは恐らく宇佐美の誤であらう。曾我物語に河津が領地を記して、「宇佐美・葛見・河津・三箇莊」とある。宇佐美は伊豆國田方郡宇佐美村あたりの古の鄉名。

嵯峨天皇の勅願所にして、承和年中河原大臣源融鐘樓七堂を建立した。（攝陽群談などによる）
第二番札所。長福寺は天滿西寺町にあり、觀音堂あり。本尊は十一面觀世音。（攝陽群談には五番札所となれり）
第三番札所。天滿西寺町の前曾根崎村領の地、神明社内にあり、本尊は十一面觀世音。（攝陽群談などによる）
第四番札所。天滿西寺町法住寺内に觀音堂あり、本尊は十一面觀世音。（攝陽群談による）
第五番札所。天滿西寺町法界寺内に觀音堂あり、本尊は如意輪觀世音。（攝陽群談による）
第六番札所。天滿東寺町大鏡寺内の觀音堂。



（攝陽群談による）
第七番札所。天滿東寺町超泉寺内の觀音堂。（攝陽群談による）
第八番札所。天滿東寺町善導寺内の觀音堂。
第九番札所。天滿東寺町栗東寺内の觀音堂。
第十番札所。大阪城南玉造稻荷社内の觀音堂
第十一番札所。小橋寺町興徳寺内の觀音堂。
第十二番札所。小橋寺町慶傳寺内の觀音堂。
第十三番札所。遍明院は俗に平野の觀音といふ。攝陽群談に、「南平野村の東にあり、境内に大阪巡禮十三番の觀音あり」。
第十四番札所。中寺町西側長安寺内の觀音堂。（攝陽群談による）
第十五番札所。中寺町東側善安寺内の觀音堂。
第十六番札所。觀音堂は大阪の谷町にある。堂前に藤の大樹があつて、花の頃群集す。よつて世俗このあたりを藤の棚といふ。（攝陽群談による）
第十七番札所。谷町筋八丁目寺町重願寺内の觀音堂。（攝陽群談による）
第十八番札所。中寺町本誓寺内の觀音堂。（攝陽群談による）
第十九番札所。中寺町菩提寺内の觀音堂。
第二十番札所。天王寺蓮池前の六時堂。
第二十一番札所。天王寺内の經堂。
第二十二番札所。天王寺の金堂。
第二十三番札所。天王寺金堂の北の講堂。

第二十四番札所。天王寺内の萬燈院。
第二十五番札所。天王寺より西安井の北の新清水。（難波丸綱目による）
第二十六番札所。高津下寺町の心光寺。
第二十七番札所。高津下寺町の大覺寺。
第二十八番札所。高津下寺町の金臺寺。
第二十九番札所。高津下寺町の大蓮寺。
第三十番札所。三津寺は三津寺町にあり、本尊は十一面觀世音にして行基菩薩の作である。
第三十一番札所。白髮町の觀音堂。
第三十二番札所。博勞町稻荷社内の觀音堂。
第三十三番札所。平野町新御靈内の觀音堂。

おほたに　杖突坂・小谷・大谷打過ぎて（博多）
〔大谷〕伊勢國員辨郡梅戸村領南山の谷一里も連りて、これを大谷といふ。

おほつはつちやう　是をいくさの始めとして大津八町で八百まけろ（丹波與作）
〔大津八町〕大津旅籠町をいふ。東海道名所圖會巻一に、「大津旅籠町の名を八町といふ」。近江國輿地志略巻六、志賀郡大津の條に、「上八町下八町。或は南北を以て呼び東西を以て呼び、其町八町あり、世に大津八町といふはこれなり、この邊旅館にして往還の旅人をとどむ、西國の諸侯止宿する家兩軒あり、これを本陣宿といふ」。好色旅日記（貞享四年刊）巻二に、「大津にはたごや町八町あり、故にただ八町とも申さぶらひ侍る」。

おほはらの　（兼好）
〔大原野〕大原野神社は山城國乙訓郡小鹽山の麓大原野にある。黑川道祐編、雍州府志巻三、神社門下・乙訓郡の條に、「春日社。在二西岡大原野一、桓武天皇始先遷三都於二長岡郷一、于レ時遷三春日社四座神於二斯處一云云」。

おぼろのしみづ　あれは御所へ柴入るる朧の清水のお嫁でないか（酒呑童子）
〔朧の清水〕山城國愛宕郡大原村西北の澗・字草生なる寂光院のほとりにある名水。

おほゐがは　いとど悲しさ大堰川、流泉の曲になぞらへて（三世相）
〔大堰川〕山城國嵯峨なる嵐山の下を流るる川。

おむろ　おむろ法輪嵯峨の御寺（兼好）
〔御室〕山城國葛野郡御室仁和寺をいふ。

親不知(おやしらず)・子不知(こしらず)　（琢節）
越後國西頸城郡にあり、外波(となみ)と市振との間約二里の間をいふ、北陸道第一の險阻の道であつて、怒濤打寄せて親は子を見かへるいとまなく、子は親を見かへるいとまがないとてこの名がある。

おやま　お山勤めて有難い（女殺）
〔御山〕「山上講」「山上樣」を見よ。

おらんかい　西天兀良哈な帶とし（國性爺後日）
〔兀良哈〕朝鮮咸鏡道の北邊で、今の間島の地。

かあひむら　おりゐの駕籠の河合村（博多）
〔河合村〕伊勢國阿山郡河合村。

かいだんゐん　戒壇院の富樓那沙彌（女護島）

すひ出せ清見寺(丹波與作)

〔興津〕駿河國にあつて江尻と由井との間。東海道五十三次の一。この町に萬病によいといふ膏薬を賣る店があつた。東海道名所記(萬治元年成)に、「宿の中に萬病によしとて膏薬あり」。

おきのかぶろ　沖のかぶろに言問へば、灘の男波(ななみ)が打寄せて(女護島)

「おきのかむろ」(沖家室(かむろ))をいひ、周防國大島郡家室(にしかた)西方の南にある小島の名。近松のこの文は、家室に売をいひかけたのである。

おくのゐん　深く心なおくの院(萬年草)

〔奥院〕高野山上一の橋(女人堂より十八丁許東)より弘法大師廟まで十八丁の間右も左も墓碑ばかり、總て奥の院の境内である。

おぐらつゞみ　(出世景清)

〔巨椋堤〕山城國久世郡の北部にある巨椋湖畔の堤をいひ、奈良街道に當る。

おこびとちやう　お小人町の久六は此方(こなた)より若い人(夕霧)

〔御小人町〕大阪にある町名であつて、難波雀(延寶七年刊)・諸大名御屋敷付、天滿之分の條に、「蒔田權之佐殿屋敷天滿十一丁目、御小人丁蒔田重大夫」と見えてゐる。

おたが　近江に建部おたが、武藏に氷川鷲の宮、(日本武尊)

〔御多賀〕近江國犬上郡多賀社。國花萬葉記卷十、江州國郡神社之部に、「多賀社=犬上郡。祭神一座、伊弉諾命なり」。

おたぎのてら　(娥)

〔愛宕寺〕京都下京區小松町珍皇寺の稱。色葉字類抄に、「珍皇寺(愛宕寺)。參議小野篁卿建立、土俗云此寺者山城國國分寺、弘法大師幼少之時相ニ從慶俊僧都一久住ニ此寺一給云云」。

おちばやま　夜半の鐘の落葉山(百合若)

〔落葉山〕攝津國有馬郡有馬湯山浴室の西にある、山頂に城郭の古跡あり、因て城山ともいひ、遠寺の晩鐘幽に聞えて、有馬名勝の一。

おとなしがは　疑深き音無川流れの罪なかけて見る(反魂香)

〔音無川〕紀伊國東牟婁郡にありて本宮と新宮との間。

おとはやま　鳥が鳴く音羽の山なあとに見て(娥)

〔音羽山〕山城國宇治郡山科にあり、逢坂山以南の山嶺。

おなりばし　佛の姿に身をなり橋(天網島)

身を成りに御成橋(おなりばし)をいひかけたのである。御成橋は京橋の北の小橋の稱であつて、(延寶頃の大阪地圖に「小はし」と記し、網島と片町との間に架し、今の備前島橋のこと)、この橋金城の通路に當る。大坂町鑑に、「備前島橋、鯰川西の口、世に御成ばしといふ」。

おにとりやま　(井筒)

〔鬼取山〕大和國生駒郡の西端にある山で、河内國中河内郡に跨り生駒嶽の支峰。

おばら　おばらざしにいで立たせ、人目忍びて丹波路や(扇の芝)　おばらざしなる旅出立、馴れにし宿の名殘りには(扇の芝)

〔大原〕丹波國桑田郡にある大原社をいひ、大原社に參詣することを「おばらざし」(大原志)といふ。國花萬葉記・卷十三、丹波國中神社の部に、「大原社=桑田郡に立、祭神一座、(今有三座)、伊弉並尊一座、社家の說に云、當宮は伊勢太神宮の母神伊弉册尊の鎭座也、今伊弉諾・天照太神を以て三座とす、春秋兩度の祭禮には遐近の貴賤群をなす、云云」。

おびとき　帶ときまで來たれば尊様から迎が出て(持統天皇)

〔帶解〕今「おびとけ」といふ。大和國添上郡にあつて、現今鐵路櫻井線に當る驛。

おひわけ　四日市にも程近き追分にこそ着きにける(博多)

〔追分〕伊勢國三重郡日永村の村邑で、東海道より參宮街道の分れる所にて、四日市へ一里半。

おほうちやま　(娥)

〔大内山〕洛西仁和寺の上の山の名。

おほえのきし　大江の岸にうつ波に(曾根崎)

〔大江の岸〕攝津名所圖會・四上に、「むかしは大江の岸大江の浦といひしも、今は京橋筋三丁目四丁目といふ、又八軒の旅舍あれば、土俗八軒屋と地名す」。

おほえばし　丸三年もなじまいで、この災難に大江橋(天網島)

〔大江橋〕大阪中之島と堂島との間、裏川筋に架せる橋。攝陽群談・七に、「同所(中之島の北)の裏川筋堂島新地一丁目にあり、南は上中之島町に涉る處也」。

おほえやま　振上げ見れば源の鬼神退治の大江山、峯は青葉に包まれて(錦繪三)

〔大江山〕丹波國天田郡と丹後國加佐・與謝の二郡に跨れる高嶺をいふ。昔時鬼神(酒呑童子)の栖んでゐたのを源賴光等が退治したことは謠曲大江山に見えてゐる。明法勘狀(九條公爵家所藏、正曆二年の延喜式・卷一の紙背)に、丹波大枝山に於て强盜二十人許出で來ることが記してあるから、この當時既に大江山が魔窟であるかに恐れられたことが知れる。

おほかめだに　ここは所もおほかめ谷、せめて誠の狼が食殺してもくれよかし(嵯峨天皇)

〔狼谷〕山城國紀伊郡深草村の東南にある。黑川道祐編・雍州府志・一、山川門(紀伊郡)の條に、「狼谷。在ニ藤杜東勸修寺村一、此所近ニ宇治一、故多設ニ茶店一、又盛ニ抹茶於小椀或盞器一而賣レ之、旅行者買レ之止レ渴、又充ニ方物一、此處元狼谷也、今誤爲ニ大龜谷一、具見ニ日本紀欽明紀一」。

おほさかさんがう　身こそ貧なれ大阪三鄕隱れもない鐵槌煎餅三郎兵衛(氷朔日)

〔大阪三鄕〕大阪全町をいふ。攝陽落穗集・一に云「大阪三鄕の事、三鄕といへるは北組南組天滿組なれども、大阪は二鄕にして天滿は南中島の内なり、いま當地繁榮にして町續なれども、古き繪圖には今市場迄は家建なし云云」。

大阪三十三所(おほさかさんじふさんしよ)　(曾根崎)

第一番札所。大融寺は天滿の西北北野村にあり、本尊は千手觀世音、弘法大師の開基、

かぜのみや　咳氣を祈るは風の宮(女殺)

〔風宮〕伊勢皇太神宮の域内にある風日祈宮をいふ、弘安年中蒙古襲來の時神威を顯はし給はれたので、正應六年三月二十日宮號宣下ありて別宮に列す。

かせやま　花に悟りの菩提山、衣かせ山梅谷の、移り香とめて端木(つまぎ)とる(持統天皇)

〔鹿脊山〕山城國相樂郡瓶の原の泉川の向ひにある。名勝志に「在二木津里東一里半許一山西南半里許有二鹿脊山村一」と見えてゐる。「衣かせ山」といへるは、古今集巻九、羇旅歌の部の歌に「都いでて今日瓶の原泉川川風寒し衣かせ山」とあるに據つたもので、「衣かせ山」といふ山の名ではない。

かたびらがつじ　(三世相)

〔帷子辻〕山城國葛野郡にありて、上下嵯峨、廣澤、愛宕等の別れ道に當る。黒川道祐撰・雍州府志、古蹟門下(葛野郡)の條に、「帷子辻。傳言檀林皇后任二遺勅一奉二野葬一時所二着御一之帷子殘二斯處一云」。

かたびらやま　淺葱小紋の帷子山(大磯虎)

〔帷子山〕武藏國橘樹郡程ケ谷あたりの山。程ケ谷は昔程ケ谷・新町・帷子とて三宿であつたが、慶長二年に一驛としたといふ。

かたらひやま　いざや旅路のかたらひ山、それさへ跡に三輪が崎(持統天皇)

〔談山〕大和國磯城郡多武峯をいふ、多武と談と音相通じる故に談峯といふ。談峯緣起に、「初鎌足與二天智帝一會二談和州倉橋山藤花下一、謀誅二入鹿一、因號二其地一曰二談峯一」。

かたをかやま　片岡山の飯に飢ゑ行き悩みたる旅の者(聖德太子)

〔片岡山〕大和國北葛城郡王寺村にある小丘。達磨日本に渡來し、片岡山にて飯に飢ゑたこと、古來俗說として傳へられてゐる。日本書紀、推古天皇二十一年の條に、「十二月庚午朔、皇太子(聖德)遊二行於片岡一、時飢者臥二道垂(ほとり)一、仍問二姓名一而不レ言、皇太子視レ之與二飲食一、即脫二衣裳一覆二飢者一而言、安臥也、則歌之曰、斯那提流、箇多烏箇夜摩爾、伊比爾惠弖、許夜勢屢、諸能多比等、阿波禮、於夜那斯爾、那禮奈理雞迷夜、佐須陀氣能、枳彌波夜那祇、伊比爾惠弖、許夜勢留、諸能多比等、阿波禮」。とありて、この片岡山にて飯に飢ゑた旅人を古來達磨として傳へられ、鵜鷺合戰物語巻三にも、「聖德太子菩提達磨にあひ給へる時、飢を憐むに片岡山の歌を以てし云云」と見えてゐる。

かつき　上つら・下つら、ふつ・かつき、浦村里の土民(蛙合戰)

〔香月〕筑前國鞍手郡にあつて、木屋瀬町の北にある村名。

かつてのみや　勝手の宮の拜殿に其夜は休らひ給ひしが(吉野忠信)

〔勝手宮〕吉野山藏王堂の南數丁にあつて、祭神は愛鬘命である。六十四神式に愛鬘命は勝手大明神なる由見えてゐる。文治元年靜御前がこの神前で法樂の舞を奏したといふ。

がつぼう　逃ぐるといふとも唐土天竺へはよも行くまじ、津輕がつぼう筑紫の果、王土の限りは武將の下知(酒呑童子)　津輕がつぼうの邊に住む蝦夷人半分、こけ猿のやうな面付(つらつき)(日本武尊)

〔合浦〕陸奥國津輕郡外濱の地をいふ。

かつまだのいけ　(千疋犬)

〔勝間田池〕大和國生駒郡藥師寺の東なる池の名にもあり、又美作國勝田郡の池の名にもある。相模入道千疋犬のこの道行文は順路を擧げたのではなく、文飾に諸國の地名を入れたのであるから何れでもよい。

かつをざばし　扨又嵐三十郎を鰹座橋とおしやる、心はの、何の料理に遣うても仕出が甘いは扨(今宮)

〔鰹座橋〕大阪長堀川筋に架し、下白髪橋と新玉造橋との間にありて、南北とも白髪町の渉である。

かなや　さいに無の字を打出せば、水の出ばなの八十川の、しまだ・かなやに二日のよどみ(丹波與作)

〔金谷〕遠江國にありて、日坂と島田との間、東海道五十三次の一。

かね金山(きんざん)　桃林・赤壁・かね金山、首陽の蕨手に握り(唐船噺)

謠曲・猩猩に「是は唐土かね金山の麓、揚子の里云云」とあるに據つてかね金山といふた。謠曲拾葉抄に、「かね金山とは唐土に徑山(きんざん)といふもあれば、此きん山は金の字の金山にてあるぞと云事也、大明一統志巻十一云、中都鎭江府金山在二府城西北七里江中一、宋周必大筆錄、此山江環繞、每大風四起、勢若二浮動一、唐有二裴頭陀一、於レ此開レ山得レ金、賜二名金山一矣、私云、一統志を見るに唐土に金山と云所凡十六ケ所有、今爰にうたふ金山は何れ歟是なる」と見えてゐる。

かねのみさき　鐘の岬の波の聲、響の灘とはあれとかや(國性爺後日)　名所は音に響の灘、鐘が岬にあけ渡る(女護島)

〔鐘岬〕筑前國宗像郡の東北に斗出せる岬をいひ、響灘・玄界灘を分つ。

かねのみだけ　斯る處にかねのみだけの方よりも、若武者一騎(雪女)

〔金御嶽〕金峰山をいふ、大和國吉野郡吉野にありて、山下に金峰神社(藏王堂)がある。

かば　平治の亂にも遠州かばに忍び給ひ何の恙もあらざるとや(十二段)

〔蒲〕遠江國濱名郡にありて、今も蒲村といふ。

かはさきの大權現　苗代水に堰きかけて惠めやあまの川崎の大權現を伏拜む(卯月潤色)

〔川崎大權現〕大阪天滿橋の北、今の造幣局の西にあつた東照權現社、華林子いこの文は、天の川に川崎をかけていひ、古今萬葉集巻五、能因法師の歌に、「天の川苗代水にせきくだせ天くだります神ならば神」の語句を取りて書いたのである。

かはなかじま　(川中島)

〔川中島〕信州を流れる犀川と千曲川との間に介在する平野の總稱で、現今は更級郡に屬し、布施、榮、中津、御厨、今里、笹井、稻

〔戒壇院〕天平勝寶七年の建立で、奈良大佛殿の前にあつて、大佛殿の壇法を移したもので三層より成る。

かいづ　今津海津の舟よばひ（源義經）

〔海津〕近江國高島郡にあつて、西近江路に當り琵琶湖北の水驛である。

かうかけやま　七歳の時近郷の國、高懸山の鬼神を手とらまへにして（弘徽殿鵜羽産家）　近江國かうかけ山には惡鬼栖んで（嫗山姥）

〔高懸山〕若狹國遠敷郡三宅村大字神谷にあり、險岨にして攀躋し難い。この山にはもと惡鬼栖んでゐたとの傳說がある。嫗山姥に、高懸山を近江國といへるは當らない。

かうしんだう　賴まば願かのえ申、庚申堂よと伏拜み（冥途飛脚）

〔庚申堂〕大阪四天王寺南大門の南にある。攝陽群談卷第十二、寺院の部に「庚申堂。南門（四天王寺）の南にあり、青面金剛童子・梵天・帝釋・三申・四鬼を正面として、藥師・觀音・地藏を安置す、庚申の日貴賤群を成せり」。

かうだう　こんこん堂にかう堂や（曾根崎）

〔講堂〕攝陽群談・十二に、「四天王寺金堂の後にあり、聖德太子此堂場に於て諸經を講讚あり、因て講堂と號す、大阪順禮第二十三番」。

かうづのみや　世世に高津の坂道を登ればさつさ、下ればさつさささつさ三六十八番、茲も難波の大君を唐人の褒め詞（卯月紅葉）

〔高津宮〕浪花寺社巡・二十二社廻りの條に、「二十二。高津宮、仁德天皇」。攝津名所圖會・四下に、「高津社。西高津にあり、祭神仁德天皇、（中略）此社頭は道頓堀の東にあたりて一堆の丘山なり、遙に眺めば大阪の市街の万戶、川口の歸帆、住よしの里・住吉の浦、敷津・三津の浦まで、一瞬の中にありて難波津の美觀なり」。

かうらみやうじん　いざ先高良明神の廻廊近所を探して見ん（弘徽殿）

〔高良明神〕山城國綴喜郡男山の麓にある末社。雍州府志三、神社門下、綴喜郡の條に、「高良社。在二八幡山下一、自二筑前國高良山一移二斯處一、西一座祭二住吉一、東一座祭二武内一者也、是稱二下高良明神一、武内大臣以二干珠滿珠兩顆一投二于海一、故或號二玉垂命一、凡斯社表二船形一而建レ之者也」。

かがみのしゆく　何故作る姿見の、鏡の宿も引過ぎて（小栗判官）

〔鏡宿〕近江國蒲生郡にあつて、守山から二里。淡海見聞錄卷五十五に、「鏡村＝西横關村の南東にあり、中山道の往還大路なり、今は驛次にはあらざれども、昔の殊に繁昌の地にて、鏡の宿とのみよべり、淫肆もあり、遊女もありけるにや、云云」。

かがみのみや　鏡の宮に影とめて（國性爺）

〔鏡宮〕肥前國東松浦郡鏡村にあり、松浦宮ともいひ神功皇后を奉祀してある。

かぐなみ　音に聞えしかぐなみのこんさんちやにぞ着き給ふ（三國志）

朝鮮では明人または明を江南といふた。このあたりの文の地名は唐音まがひの巣林子頓作の出鱈目語と思はれるものが少くない。朝鮮地理に通じてゐなかつたことも知れる。

かけがは　縞のさいふのふくろゐや、のりかけがはを飛下りて（丹波與作）　葛てふ布を掛川の、宿より末に事まちの、神の御名さへいかめしき（日本武尊）

〔掛川〕遠江國にありて袋井と日坂との間、東海道五十三次の一で葛布はこの地の名產である。國花萬葉記卷八、遠州國內出る名物數品の條に「葛布＝懸川にあり、根本は上はり村と云所にて作る也」。

かげろふのもり　（蟬丸）

〔蜻蛉森〕山城國宇治の里大路方の東、三室戶の左方で、蜻蛉石のある森。

かさいがやつ　葛西が谷の佐々木屋敷（最明寺殿）

〔葛西が谷〕相州鎌倉滑川の向ひに當つて屛風山の山ふところに入り込んだ谷。

かざごえのみね　（最明寺殿）

〔風越峯〕信濃國伊那郡風越山峯をいふ。風越山は木曾山脈の一峯で、今は白山權現を祭りて權現山といふ。

かさとりやま　なき顏かくせ笠取山（淀鯉）

〔笠取山〕山城國宇治郡醍醐山の東に當れる山で高さ三七一米。古今集・秋下部、在原元方の歌に、「雨ふれど露ももらじを笠取の山はいかでか紅葉染めけむ」。

かさぬひのさと　（嫗山姥）

〔笠縫里〕美濃國安八郡にある古驛路で、今北杭瀨村の大字とす。

かしはぎのもり　月に枕のヤ宿かした、宿かしはぎの森ならで、粟津の森にやすらひて（艶容）

〔柏木森〕近江國甲賀郡水口村の西、柏木村の森をいふ。

かしはぎのもり　柏木の森暗きより、今をはじめの旅衣（天智天皇）

〔柏木森〕大和名所圖會卷二、添上郡の條に「柏木社＝柏木村にあり」。

かしま　伊勢・石清水・加茂・春日・鹿島・三島（加增曾我）

〔鹿島〕鹿島明神は常陸國鹿島郡にありて、祭神は武甕槌神である。

かすみのたに　（蟬丸）

〔霞の谷〕山城國紀伊郡深草山の谷。

かすりゐ　この手かの手の枕の酒、霙霰と隔つれど、觧くれば同じかすりゐの、水をかりなる戲れも（反魂香）

〔微井〕奈良、橋本町南側東端にある。大和名所圖會に、弘法大師の掘らしめ給うた四十八井の一であると見えてゐる。日本輿地通志、大和志、添上郡の條に「可須理井＝在二橋本町一、可レ容二一瓶一、霖雨不レ滿、亢旱不レ涸、歐汲不レ竭」。「霙霰（みぞれあられ）と隔つれど云々」をも見よ。

かぜごし　風ごしの峯の吹雪ぞ身にはしむ（最明寺殿）

〔風越〕木曾山脈の一峯であつて、信濃國下伊那郡飯田町の西方、今權現山と云ふ。國花萬葉記卷十一、信濃國州郡名之部に「風こしの山」。

〔苅萱關〕苅萱の關址は筑前國筑紫郡水城村の南大字通古賀（とほのこが）にある。

かれいがは 親を恨みの口は涙、何に生れんかれい川（蹉跎歌）

〔佳例川〕大隅國始良郡を流れる川。ここの文は、親を睨めば鰈になるといふ諺を用ひて、佳例川にいひかけたのである。

かんざき 神崎の町は歌仙が右左、以上三十六格子（賀古教信）

〔神崎〕攝津國河邊郡小田村にある。往時京津間の水驛で、遊女町もあつて繁華であつた。「三十六格子」といへるは、三十六歌仙に置屋三十六軒をきかせていうたのである。

がんするじ 岩松村岩水寺の門前よりお暇受け（宵庚申）

〔岩水寺〕國花萬葉記・卷八、遠州國中諸宗佛閣の條に、「岩水寺、眞言宗、岩松村、寺領四十二石」。

神田の明神（かんだのみやうじん） 武州神田の明神と神に齋（いは）ひ世を祝ひ（戀物揃）

東京神田區湯島臺宮本町にあつたが、大正十二年九月一日の大震大火災で全燒して再建。江戸名所圖會・卷之五に、「神田大明神社。聖堂の北にあり、唯一にして江戸總鎭守と稱す、祭神大己貴命、平親王將門靈、二坐、社傳曰人皇四十五代聖武天皇の御宇天平二年の鎭座にして其はじめ柴崎村にありし頃、中古荒廢し既に神燈絕えなんとせしを、遊行上人第二世眞教坊東國遊化の砌ここに至り、將門の靈を合せて二座とし、社の傍に一字の草庵を結び芝崎道場と號す、其後慶長八年當社を駿河臺に移され、元和二年又今の湯島に移させられ、其儘舊號を用ひて神田大明神と稱す」。

かんどり これは鹿島かんどりより罷出た事觸でござりや申す（用明天皇） 那須の湯泉大明神かしまかんどり諏訪熱田（加增曾我）

「かとり」（香取）に撥音「ん」の增加したのである。香取神宮は下總國香取郡香取町にありて官幣大社である。祭神は經津主命、武甕槌命、天兒屋根命、姬神。

きうせんざん（國性爺）

〔九仙山〕支那福建閩侯縣城內東南隅にある。

きかい 彼に續くは鬼界十二の島（國性爺）

〔鬼界〕鬼界島をいふ。大隅薩摩の南方にある諸島の稱、古來指す所明瞭でない。長門本平家物語には、「鬼界は十二の島なれや」とある。平家物語にある俊寬が流されたる鬼界島は、硫黃島のことである。謠曲・俊寬の條「もとよりも此島は鬼界が島云云」を見よ。

ききやうがはら 草の細道傳ひ行く、爰ぞ桔梗が原とかや（川中島）

〔桔梗が原〕信濃國東筑摩郡にある原野にして、鹽尻より北、松本に至る四里許の間をいひ、武田信玄の兵が小笠原長時の軍と戰つた所である。

きしのわだ 雜賀屋へ出入致す岸の和田の九兵衞と申す駕籠の者（萬年草）

〔岸和田〕和泉國泉南郡にある町。

きじま（加增曾我）

〔木嶋〕信濃國下高井郡にあつて、飯山町の東。

ぎしやくせん ぎしやく山に雲覆ひ、西は又鷲の御山峨峨として聳えて連れり（釋迦）

「ぎしやくつせん」（耆闍崛山）をいふ、印度摩訶陀國王舍城の東北にある山で、その形が鷲に似てゐるによつて靈鷲山ともいふ。「わしのやま」を見よ。

きせがは この頃手越黃瀨川の龜鶴なんど數多の君に出會ひしが（加增曾我）

〔黃瀨川〕駿河國駿東郡にあつて、箱根・三島の通路にあたる古驛である。

きそのみさか 木曾のみさかの谷風は吹けども袖に寒からで（最明寺殿）

〔木曾御坂〕信州西筑摩郡の南端にあつて、山口（現今中央本線驛）の東なる馬籠（まごめ）（木曾谷の南門に當り、美濃國落合より一里）から三留野（みどの）驛に出る山路馬籠峠をいふ。國花萬葉記卷十一、信濃國州郡名所之部に「木曾の御坂＝まごめ峠といふ、是より深山に入山坂多し」。

きたのしんち 北の新地の料理茶屋（女殺）

〔北新地〕大阪蜆川の北岸曾根崎新地。

きたはま（淀鯉）

〔北濱〕「きたわき」を見よ。

きたむきのはちまんぐう それを賴みに北向の八幡宮の御寶前（卯月紅葉） 爰に北向の八幡宮の燈明も、おのれとしめり行先は（生玉）

〔北向八幡宮〕大阪西高津生玉社の門前南の方蓮池の側にあり、慶長年中、城中の諸士此地に於て射御の稽古をなして、八幡宮を勸請したもの、北向は大阪城守護の謂である。浪花寺社巡、二十二社廻りの條に、「二十。生玉、北向八幡」。

きたわき 北脇邊のよい衆は、大かた火燵に水を入れるげに御座る（重井筒）

〔北脇〕北濱ともいひ、大阪の北部中の島の川南の地で、米穀取引商人の多かつた所である。淀鯉出世瀧德に、心中重井筒のこの所を引いて、「北濱邊のよい衆は、火燵に水を入れまする」と書いてある。

きちじやうゐん（女護島）

〔吉祥院〕南都七大寺の一なる大安寺の東坊をいふ。

きつじ 奈良坂や木辻も戀の札所にて（淀鯉） それ故に木辻では三つ山と付けられし（反魂香）

〔木辻〕奈良の遊女町の名。木辻の名稱については坊目考に、「往年在家無之、草庵有、稱念寺是也、路傍一大樹有、木辻稱其濫觴也、慶長年間民家二三宇造而爲茶店、轉夜發之族ヲ置、竟傾城町成」と見えてゐる。大和名所圖會・二に、「南都の傾城町は木辻鳴川といひて縱横にあり云云」。延寶六年刊の八重櫻に、木辻遊女町の繪が載せてある。

きつちう（三國志）

朝鮮の州名・吉州（Kiljyu）である。

きつねがは よしみよしみの言の葉にばかされゐたる狐川（淀鯉）

〔狐川〕淀の水垂（みづたれ）の南にて淀川に落ちる川。黑川道祐撰・雍州府志・一、山川門、紀伊郡の條

里、眞島、小島田、青木島、東福寺、西寺尾の諸村を包有すれども、戰國時代は交通の狀態、河川の流域等今とは異つてゐるから、しかといひ難い。天文二十三年八月上杉謙信が兵を潜めて夜河を渡り、曉霧に乘じて武田信玄の本營に突入し、劔を揮つて信玄を斫る、危機一髮遂に信玄を逸した古戰場である。

かはらのゐん 河原の院の古道より長講堂の裏筋を追かけ(女護島)
〔河原院〕京都下京區五條の西、鹽釜町より以南八町に亘る、六條坊門以南、西は萬里小路を限り、南は七條坊門に及び、東は京極限り八町。この地河原左大臣源融の邸第の跡である。

かはらまちばし 備後橋はこちこちと、寄せ寄せ濱際の瓦町橋にぞ着にける(今宮)
〔瓦町橋〕攝陽群談卷七、橋の部に、「瓦町橋。西横堀川筋にあり、瀨戶物町より東は濱町に渉る處なり」。

かひづ 敵千曲川を夜の中に渡り、貝津の城の通路を切取り(川中島)
〔貝津〕信濃國埴科郡松代城址を舊貝津城と稱し、甲越の軍戰を交へた地。

かびらゑ かびらゑに共に契りし甲斐ありて、今又汝を相見つる(以呂波)
〔迦毘羅衞〕中印度の國名。釋尊の生れ給うた聖地。

かぶとやま (三國志)
〔甲山〕攝津國武庫郡にある圓錐形の峯の山。

かふろ
「おきのかふろ」を見よ。

かへるやま 越の白山も去歳の綠にかへる山(反魂香)
〔歸山〕還山とも書き、越前國南條郡にある。國花萬葉記、越前國名所之部に、「此山は西東へ還し、海道は南の麓なり」。傾城反魂香のこの文は、綠にかへるに歸山をいひかけたのである。

かぼちや 東蒲塞右衞門(國性爺)
カンボヂア(Cambodja)をいふ。漢字で柬蒲寨、甘字智、眞臘などと書き、印度支那半島の王國で、現今は佛國の保護國である。

かまだむら (冥途飛脚)
〔鎌田村〕大和國北葛城郡下田と當麻との間の村。

かまどやま 御湯を捧げん竈門山(國性爺後日)
〔竈門山〕筑前國筑紫郡御笠村大字內山の東北に峙立せる山で、一名寶滿山といふ。

かみつら 上つら・下つら、ふつ・かつき、浦村里の土民(蛙合戰)
豐後國北海部郡上北津留村のことか。

かみのせき 今日泊りては上の關(女護島)
〔上關〕周防國熊毛郡の村で、舊名を釜戶關といひ、水を隔てて室津港に對す。

かみやがは (蟬丸)
〔紙屋川〕北野の西、平野の東にある川。

かみやのしゆく コレ忝くもおれが親は神谷の宿で隱もない(萬年草)
〔神谷宿〕紀州高野山下一里、山間にある小邑で、高野山に登る者の、學文路(かむろ)より行くものと、高野山より行くものと道ここに會す。

かめがせ 齡も長き龜が瀨の上を歩みて(井筒)
〔龜が瀨〕大和國北葛城郡王子村より大和川の南岸に沿ひ、河內國南河內郡國分村に至る隘路をいひ、龍田越の別道である。

かめやま 庄野に續く龜山は(出世景清)
〔龜山〕伊勢國鈴鹿郡にあり、今龜山町といふ。

かめゐばし 荻野八重桐を龜井橋ぢやとおしやる、心はの、先はおたびの神かけて跡先に又續くものがないはさて(今宮)
〔龜井橋〕現今の大渉橋のあたりにあつた橋の名。攝陽群談・七に、「龜井橋。江戶堀・京町堀・阿波堀川の西、大川筋より南に流れ、橋は東西にあり、元祿年中始て造レ之、東は江之子島西之町、西は戎島の渉り也」。この流に架せる橋は龜井橋のみで、現今の木津川橋は無かつた。「をぎのやへぎり」を見よ。

かも 賴みを賀茂の瑞垣に、玉依姫の其昔、別雷の御神を、御産の紐のやすらかに、あやかる爲の御祈り(女夫池)
〔賀茂〕山城國愛宕郡上賀茂社(別雷山麓御生所地)をいふ。秦氏本系帳に、秦氏女(玉依姫)夫無うして懷姙し、別雷神を生む。上賀茂社の祭神なる由を記してある。

かものさんまい 泣く泣く歩む夏草の、かものさんまい行きなやみ(賀古教信)
〔蒲生三昧〕今の京阪電車の蒲生停留所の南あたりにあつた墓地で、攝津七墓地の一である。「ななばか」を見よ。

かやばら 行先あてどはなけれども、私在所丹波の柏原まで落ちて見るばかり(大經師)
〔柏原〕今・柏原町といひ、丹波國氷上郡にあつて鐵道線路の驛となり、篠山と福知山との中間にある。町の西小丘におさんの森がある、ここにおさん茂兵衞が隱れてゐたと傳ふ。

からこと 都まで響き通へる唐琴は、浪の緒すげて風ぞ彈くらん(浦島)
〔唐琴〕備前國兒島郡西南海岸にある泊である。「みやこまで響き通へる云云」を見よ。

からすがだけ (吉岡染)
〔烏嶽〕大和國宇陀郡八咫烏神社のある山。

からすざき 浮根に鳴くや烏埼、明行く空は白石の(國性爺後日)
〔烏埼〕播磨國明石郡西垂水海岸の名であつて、西は明石、東は舞子浦となる。

からだのいけ 暮れぬ日影や夕陽山、からだの池に駒とめて(釋迦)
〔迦蘭陀池〕大唐西域記・卷九に、「竹林精舍(天竺王舍城ニアリ)北行二百餘步至二迦蘭陀池一、如來在昔、多此說法、水既清澄、具二八功德一、佛涅槃後、枯涸無レ餘」。

かるかやのせき (傾城島原蛙合戰)(天神記)(國性爺後日)

樹にして、その頂上は修驗者攀登修行の場なりしを以て之を禪定と呼ぶ、斷巖絶壁岩窟である。

きれと 丹後の名所が見せましたい、なれ合切戸天の橋立（浦島） きれとのもんじゆの法印樣（大經師）

〔切戸〕丹後國與謝郡吉津村大字文珠の海濱をいふ、もと橋立の南なる狹水道の名で、また其南なる海岸に及ぼして切戸濱といふ。この地に智恩寺ありて、本尊文珠菩薩は梵天帝釋化現の作であると傳へて名高い、里人寺號を呼ばないで切戸の文珠閣といふ。

くがみ のりはかへさん法の人、くがみの寺は何處とも老いたる馬よ道しるべ（加增曾我）

〔國上〕九上と書いてもある、越後國西蒲原郡にある村名。國上寺は北越の最古刹で國上山の中腹に位し、元明天皇和銅二年の草創で、泰澄大師これを再興した、本尊は釋行基作の上品上生彌陀佛である。往昔は盛大を極め文應年間には僧徒千人を越えてゐたといふ。曾我物語・卷十、禪師法師が自害の條に、「諸もこの人人（曾我祐成・時致）の弟に禪坊とて十八になる法師一人あり、故河津の三郎が忌の中に生れたる子なり、母思ひの餘りに棄てんとせしを、伯父伊東九郎養ひて越後の國九上といふ山寺に登せ、伊東の禪師といひける」。謠曲・小袖曾我にも九上と書いてある。

くけん 九軒阿波座の野良鳥（淀鯉） 九軒の町に羽かはす比翼の羽子板欒子も（壽門松） 餅花開く餅搗のにぎにぎはしや九軒町（夕霧）

〔九軒〕九軒町の略、大阪新町遊廓内の町名。寛永年間始めて新町遊廓のできた時に、玉造の九軒茶屋ここに引移つたよりの名であるといふ。「大阪地圖」を見よ。

くさつ 乘おくれじとどさくさ津（丹波與作）

〔草津〕近江國にあつて大津と石部との間、東海道五十三次の一。

くしだ そなた櫛田の眞中ほどで、深き思ひをやれ紫ばうし（丹波與作） 戀の櫛田の眞中中で、深き思ひをやれ紫帽子（國性爺後日）

〔櫛田〕蒂德基編、伊勢參宮名所圖會卷上、飯高郡の條に、「櫛田。本名豐原村なり、俗にくしだといへども、櫛田村は川の五六丁下に有て是古道なり、松坂より一里十八丁」。丹波與作のここの文は、「そなた櫛田の眞中ほどで云云」の條を見よ。國性爺後日合戰のここの文は、「戀の櫛田の眞中中で云云」の條を見よ。

くしだのかみ （蛙合戰）

〔櫛田の神〕筑前博多の南西偏にある鄕社（祭神は天照皇太神、素盞嗚尊、大幡主神）。

くしなじやう 既にくしな城ばつだい河のほとり沙羅双樹の下にて、三界の導師涅槃に入らせ給ふ（釋迦）

〔拘尸那（Kushinagara）城〕中印度にある。釋尊は拘尸那城外跋提河の西畔、沙羅双樹の下で入寂されたのである。

くすは （淀鯉）

〔楠葉〕河内國北河内郡楠葉村。

くずみ うづみ・くずみ・河津の庄（本領曾我）

〔玖須美〕久須美また葛見などとも書いてある。伊豆國田方郡伊東村あたりの鄕名。現今も久須美村の名を存す。戰國時代には多賀村邊までを汎稱した。

くちなしはら （雪女）

〔山梔原〕山城國木幡の里にある。

くちのつ 聲も高旬の與茂十郞、口之津勢を驅り催し（蛙合戰）

〔口之津〕肥前國南高來郡島原南端の村名。

くつがけのしゆく （三世相）

〔沓掛宿〕大和國添上郡田原村沓掛の小邑。

くにしま （二枚繪）

〔柴島〕俗に國島とも書き、攝津國西成郡にあつて淀川に沿ひ、長柄の北に當る。

くはつ 懇な友達は桑津まで迎ひにぢや（女殺）

〔桑津〕攝津國東成郡北百濟村桑津（大阪天王寺の南）をいひ、大和國吉野郡大峯山に登つて（卽ち山上參り）歸る人だちを此の地に出迎へするを坂迎へといふ。

くはな 今の湯あがりは長長の中風病み、なほろも道理桑名の桑（百合若）

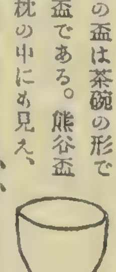
〔桑名〕伊勢國桑名郡の町。近松のこの文は、桑の木の杯で酒を飮めば中風に罹らぬといふ俗說に據つて、かくいうた。

くぼた （丹波與作）

〔窪田〕伊勢國河藝郡大里村窪田。

くまがいむら 熊谷村に盃の、佐野のくくたち肴にて（最明寺殿）

〔熊谷村〕武藏國大里郡にある。熊谷町は中山道屈指の一驛で、現今高崎線鐵道驛がある。「熊谷村に盃」といへるは、熊谷盃をいうたのである。この盃は茶碗の形で此圖の如き盃である。熊谷盃は新好色文枕の中にも見え、また西鶴置土產卷四にも、「熊谷の大ぶりなる金の盃」と見えてゐる。



くまのさん 熊野山のほいほい酒（酒呑童子枕言葉）

〔熊野山〕紀州熊野三山のある巡禮地で、古來修驗者の往來繁き所。「ほい〳〵酒」とは、熊野では葷酒山門に入るを許されなかつた爲、ほいほいと追拂ふ意より附いた酒名か。

くもづ 小萬泣く泣く申すやう、緣は異なものその時に起請一枚書かれども、雲津の川瀨二せ三せ指切りしてのいひかはせ（丹波與作） 借錢の利を一月に二月をどる松坂越えて、くもづの渡で算用（丹波與作）

〔雲津〕伊勢國にある。雲津の渡は津と松坂との間にある。雲津川は壹志郡を流れてゐる川の名。伊勢參宮名所圖會・三に、「雲出川。島貫村今の雲出と須川とを隔て大川なり、かり橋あり水出れば船にて渡す、此下流は上に云雲出が崎なり、此邊すべて雲津ともいへり」。「小萬泣く泣く云云」は、晋曲色酒盛・八百屋お七の祭文に、「お七泣く泣く申すやう、何時ぞや類火にあひし時……逢うて語らん嬉しやと、思ひ定めて夕暮に一わの藁に火を包み、ほほり上げたるばかりにて燃ゆる仔細は候はず……」とあるに據つたのである。

に、「在二與等之西南一、淀川與二木津川一相合所也」とある。「よしみよしみ云々」をも見よ。

きぬがきやま 衣笠山の紅葉ばも、来て見よとてや牡鹿鳴く(三世相)
〔衣笠山〕山城國葛野郡鹿苑寺の西南、仁和寺の東北にある山。

きぬかせやま 「かせやま」を見よ。

きぬばりやま きぬばり山の文覺屋敷(最明寺殿)
〔衣張山〕絹張山とも書き、相州鎌倉にあつて標高百二十五米突。頼朝が政子と共に炎暑を苦しみ、此山に絹を張りて雪景を作り、酒宴を開いたからかくいふとぞ。文覺屋敷はその附近小富士と滑川とに挾まれた地にあつた。

きのめやま 上り登るや木芽山、峠遊に西の空(傘屋)
〔木芽山〕越前國敦賀郡と南條郡との界に跨れる山で、木芽峠は敦賀・福井間の通路に當る。

きのもと 木の下の宿もとさゝぬ世となせし(嫁諍)
〔木之本〕近江國伊香郡の首邑で、賤ケ岳と余呉山との間にあつて、現今鐵道停車驛がある。

きびのなかやま (振袖始)
〔吉備中山〕備中國吉備郡眞金村にある。

きぶね (歌念佛)
〔貴船〕山城國愛宕郡鞍馬村大字貴船に貴布禰神社がある。

きまんこく きまん國の鬼王、はらな國のはくだわう、五天竺の波羅門が摩醯首羅を驅集め(鎌田)
鬼滿國即ち鬼の充滿する國の義か。荻生徂徠著、南留別志に、「世俗に鬼まん國といふ事をいへるは、鬼方を誤れるならべし」。

きやうがしま 清盛の御骸を津の國兵庫の名にし負ふ、經が島にぞ納めける(平家女護島)
〔經島〕今攝津國武庫郡兵庫北濱の地であらう。平家物語卷六に、「骨(清盛)をば圓實法眼首にかけ、攝津の國へ下り經の島にぞ納めける」と見え、「石のおもてに一切經を書きて、つかれたりける故にこそ經の島とは名づけれ」と見えてゐる。

ぎやうき 行基から山田まで召しまして(百合若)
〔行基〕昆陽寺をいひ、攝津國川邊郡稻野村寺本にある。天平五年行基菩薩の開創に係り、俗に行基寺と稱し、本堂には行基菩薩作の藥師佛を安置し、往時攝州第一の名刹であつたが、天正年中火災に罹り、後今の堂を造營す。この地西國街道に當つてゐるので其名夙に著る。

きやうだう 七千餘卷の經堂に(曾根崎)
〔經堂〕攝陽群談・十二に、「四天王寺のうち太子堂の北の陽にあり、大阪順禮第二十一番」と見えてゐる。

きやうばし 京を持つたる京橋に一つ流れの御祓川(鎗權三)
〔京橋〕山城國伏見町にありて宇治川に架せる橋。大阪通ひの川船の乘場。

きやうばし 妙法蓮華きやう橋を越ゆれば(天網島)
・〔京橋〕天滿橋の東方にある橋。攝陽群談・七に、「京橋。大和川筋玉造川にあり、南は金城の下、北は片原西町に渉る京道なり」。

ぎよくけい 玉京・崑閬・藐姑射の山(松風)
〔玉京〕神仙の居處。枕中書に、「玄都玉京七寶山、週迴九萬里在二大羅天之上一」。

きよたき 高野川西に清瀧鳴瀧山(兼好)
〔清瀧〕山城國葛野郡愛宕山井に水尾山に通ずる路に當り、この地を流れてゐる川を清瀧川といふ。

きよみがせき 清見が關明方に興津が原の群千鳥(大職冠物)早くもこゝに清見潟、關のとざさぬ君が代の(鎌田)
〔淸見關〕駿河國庵原郡清見潟の傍にあつた關で、その址は今の清見寺の域内になつてゐるといふ。清見潟今は清水港といひ、興津の南に當る。「關のとざさぬ云云」は、關の戸を鎖さぬ泰平な君の御代の意。

きよみづでら 景清常に清水寺の觀世音を信仰し(出世景清)
〔清水寺〕京都下京區清水町にある。法相宗の中本山で、音羽山と號し、奈良の興福寺に屬してゐる。千手觀世音を奉祀し、西國巡禮第十六番札所である。縁起によれば坂上田村麻呂の創建といふ。現在の伽藍は寛永十年徳川家光の再建にかかり、同十八年朝廷から長橋旋架を賜はつたもので、高尚莊嚴を極めてゐる。

きよみでら 松原はるる膏藥買うて、月を吸ひ出せ清見寺(丹波與作)
〔清見寺〕巨鼇山と號し、駿河國庵原郡興津町にある古刹。清見寺の門前の向ひの家々膏藥を賣る店多く、所謂清見寺膏藥の名高かつた。國花萬葉記卷八、駿河國中名物出所之部に「清見寺かうやく」。井上通女撰・歸家日記(正徳六年刊)上卷に「清見寺の門前より……向ひの家々膏藥賣る所多し」。近松のこの文は、清見寺は月の名所であり、又清見寺膏藥といふ名物があるので、松原(三保松原)晴るるに腫るる(道中の疲れに足が腫るる)をいひかけて、膏藥買うてといひ、その縁で吸ひ出せといひ、月の名所をもきかせたのである。

きららざか (三國志)
〔雲母坂〕山城國愛宕郡にありて、修學院村から比叡山に登る道にある。雲母坂の絶頂は山城國と近江國との堺で字を水飲といふ。(巣林子作の三世相の中にもこの坂が書いてあるが、道順が合はない)。

きりがやつ 二八の春の藤紫、御聲な恐れもなくきりがやつの牢屋形に押込め(千疋犬)
〔桐谷〕相模國三浦郡材木座にある。

きりはら みづの御牧か鳥飼か、信濃に霧原望月か(源義經)
〔霧原〕信濃國西筑摩郡神坂村にあつて往昔御牧の地。霧原一に切原に作る。

きりやまがぜんちやう 軍兵盡きんず其時は高館殿に火をかけて、斷谷が岩谷霧山が禪定へ君を移し奉り(源義經)
〔霧山が禪定〕霧山は陸中國膽澤郡上衣川の西

げんだいふ　さてこそ尊は熱田の明神、源太夫も神となる(井筒)
〔源太夫〕熱田神社域内に源太夫社あるによつていふ。國花萬葉記・卷九、尾張熱田大明神をいへる條に、「源太夫殿とて小社有、これ手摩乳なり云々」。

こうとくじ　これぞなばせのこうとくじ(曾根崎)
〔興徳寺〕攝陽群談・十二に、「東生郡小橋寺町にあり、境内に大坂巡禮十一番の觀音堂あり」。小橋は現今東生郡鶴橋村に屬す。

こうのあみだ
「こふのあみだ」を見よ。

こうもん　樊噲が鴻門の怒れる形も今此處に、奈落へ通れと踏む足に(大織冠)
〔鴻門〕今の陝西省西安府臨潼縣の東にある。樊噲は漢の沛公の臣である、沛公が楚の項羽と鴻門に會合せし時、沛公の危急に及ぶや、樊噲其會合の席に突入し、目を瞋して項王を視る、頭髮上り立ち、目眦盡く裂けてゐたといふ。

こえだのはし　今ぞこえだの橋柱、淀の大橋(女夫池)
〔小枝橋〕山城國紀伊郡上鳥羽小枝川に架し、下鳥羽に通じる橋。

ごかうのみや　市之進は御香の宮、甚平は三栖の里、毎日そんじやうそこそこと(鑓權三)
〔御香宮〕山城國紀伊郡にありて伏見町の東北に當り、神功皇后を奉祀せる宮。雍州府志・三、神社門下(紀伊郡)の條に、「御香宮。在二伏見一、神功皇后之廟也、鎭座年紀不レ分明一、豐臣秀吉公築二伏見城一時、遷二神社於東岳舊御香宮地一、屢依レ爲レ祟、又遷二舊地一」。

こがらしのもり　身をこがらしの森のしたみち(淀鯉)
〔木枯森〕駿河國安倍郡にある。後撰集に、「こがらしの森の下草風はやみ、人のなげきは生ひそひにけり」。

こくぶがはら　國分原に追詰め討取ろ首に候なり(蛙合戰)
〔國分原〕陸前國宮城郡仙臺附近の地で、國分寺がある。

こけなはのしろ　(女楠)
〔苔縄城〕播磨國赤穗郡にあつた赤松氏の城。

こざん　音に聞えし親子の武士今日を限りの死軍と、につこと笑うて出でたるは、獅子と虎とが子を連れて孤山を巡る如くなり(碁盤太平記)
〔孤山〕支那浙江省杭州府西湖のほとりにある山の名。宋時代錢唐の人林逋廬を西湖の孤山に結び、梅を植ゑ双鶴を畜へたといふ。碁盤太平記のここの文は、矢間父子を孤山の双鶴に喩へたのである。

こしごえ　さてこそ御子ましまさず、常に冷えたる腰越より追返されさせ給ひし、九郎大夫の判官源の義經の(雪女)
〔腰越〕相模國鎌倉郡にありて、片瀬の東南に接し、鎌倉の門戸に當る。義經ここより鎌倉に入れられず、爲に賴朝に腰越狀を呈した所である。巢林子のここの文、腰に腰越をかけていうたのである。

ごじふさんつぎ　是こそ五十三次をゐながら歩むひざひざくりげ馬(丹波與作)
〔五十三次〕京都三條橋より江戸日本橋迄、百二十四里餘の間にある傳馬などを次ぐ五十三の驛宿をいふ。

五十三次、里、丁

大津(近江)3.18	草津(近江)3.24	石部(近江)2.32
水口(近江)3.24	土山(近江)2.26	坂下(伊勢)2.13
關(伊勢)1.23	龜山(伊勢)1.18	庄野(伊勢)1.33
石藥師(伊勢).23	四日市(伊勢)1.26	桑名(伊勢)3.08
宮(尾張)7.00	鳴海(尾張)1.27	池鯉鮒(參河)3.13
岡崎(參河)3.04	藤川(參河)1.27	赤坂(參河 2.9
御油(參河)1.6	吉田(參河)2.27	二川(參河)1.16
白須賀(遠江)1.00	新居(遠江)1.10	舞阪(遠江)1.00
濱松(遠江)3.04	見附(遠江)3.07	袋井(遠江)1.18
掛川(遠江)2.16	日坂(遠江)1.29	金谷(遠江)2.00
島田(駿河)1.00	藤枝(駿河)2.00	岡部(駿河)1.26
鞠子(駿河)2.09	靜岡(駿河)(府中)1.18	江尻(駿河)2.25
興津(駿河)1.00	由井(駿河)2,00	蒲原(駿河)1.00
吉原(駿河)2.28	原(駿河)2.16	沼津(駿河)1.18
三島(伊豆)1.18	箱根(相模)3.30	小田原(相模)3.28
大磯(相模)4.00	平塚(相模)2.6	藤澤 相模)3.18
戸塚(相模)2.00	程谷(武藏)2.00	神奈川(武藏)
川崎(武藏)2.18	品川(武藏)2.18	

五所の祕水　その落葉が下こそは五所の祕水と聞くばかり(國性爺後日)
太平記卷七、千劔破城軍の條に、「此の城を拵へけるはじめ、用水の便を見るに、五所の祕水とて、峯通る山伏の祕して汲む水此の峯にありて、滴る事一夜に五斛ばかりなり、此の水いかなる旱にも干る事なければ」と見えてゐるが、五所の祕水の舊蹟今明でない。

ごせかいだう　是を路錢にごせ街道へかかつて一足も早う退かつしやれ(冥途飛脚)
〔御所街道〕大和國南葛城郡御所の街道をいふ。

こそべ　古曾部の能因法師(會稽山)
〔古曾部〕攝津國三島郡磐手村にある。能因法師この地に住んで居たので、世に古曾部入道といふ。

ごづてんわう　南東の門前の牛頭天王に我願ひ(卯月紅葉)
〔牛頭天王〕大阪天王寺の南門と東門との前にある牛頭天王社をいひ、二十二社巡りの第十四番と第十五番。攝陽群談・十一に、「牛頭天王祠。東生郡四天王寺南大門の下にあり、所レ祭祇園ノ神也、(中略)此社は當所の氏神にして、往昔は山鉾を渉し美美敷祭あり、世に土塔宮と稱す」。

こつま　こつま新家の綿車(三國志)
〔勝間〕木妻とも書き、攝津國西成郡の村名で、大阪の南、天下茶屋の西。

ごてんぢく　その昔五天竺に蔓つて(用明天皇)

くものはやし 曉かけて立つ雲の、雲の林の名を賴む（嫗）

〔雲林〕京都市外・紫野・西側、舟岡の東・大德寺の南に雲林院があつた。今は觀音堂に雲林の名を存してゐる。

くらがりたうげ （三世相・女殺）

〔闇峠〕大和と河内との國境で生駒山の南嶺に當り、生駒山の山路辻子越の南なる峠である。近代奈良・大阪間の通路は專らこれによつたものである。

くらはしやま 宿直の兵防ぎ戰ふ力なく、或は逃失せ討死し、帝はやうやう倉梯山まで落ちさせ給ふ（聖德太子）

〔倉梯山〕大和國磯城郡と宇陀郡との交界に橫はる山で、音羽山ともいふ。

くらぶやま 木蔭あやなしくらぶ山（用文章）

〔暗部山〕山城國愛宕郡鞍馬山。或云貴布禰山。

くりのわたし 陸を往けば遠うて迫手の氣遣ひ、九里の渡が近いげな（薩摩歌）

〔九里渡〕大隅國始良郡福山の海濱より、薩摩國鹿兒島に渡る海路をいふ。

くりやがは 磯に手操の厨川（國性爺）

〔厨川〕和名抄に、厨を久利夜と訓んである。筑前國粕屋郡箱崎の地を厨といひ、そこを流れる川をいふ。

くるまおほぢ 車大路の藪蔭より、なうなう和上物申さん（蟬丸天皇）

〔車大路〕京都五條橋を渡りて眞直に行く道。

くるわよすぢ くろわ四筋は四季共に、散ること知らぬ花揃へ（女殺）

〔廓四筋〕大阪新町遊廓をいふ。「よすぢのまち」を見よ。

くろかみやま （振袖始）

〔黑髮山〕備中國阿賀郡新見村の東にある山嶺

くろかみやま （門田八島）

〔黑髮山〕下野國日光山の主峯男體山をいふ。

くろさき 豐前の國の黑崎に上る朝日と打連れて（蛙合戰） 對の揃への黑崎や（日本武尊）

〔黑崎〕豐前の國とあれど、筑前國遠賀郡洞海（くきのうみ）の南岸で今鐵道驛の黑崎町であらう。序云、巢林子は唐津に居たものではあるまいと思はれることは、彼が用ゐる九州北部の地名が甚だしう前後し、その地を知つて書いたとは思はれない。若し彼が唐津に居たことがあるならばからはあるまい。

くろだに 如意が嶽より黑谷の流れは白河に響きて（三國志）

〔黑谷〕山城國愛宕郡八瀨村の東にして西塔の北谷である、溪水北に流れて高野川に注入す。

くわいけいざん （國性爺）

〔會稽山〕支那浙江省紹興府の東南にある山。

くわうかう 唐土の黃岡の二股竹（源義經）

〔黃岡〕今の湖北江漢道黃岡縣であつて、大きな竹の産地。王禹偁の黃州竹樓記に、「黃岡之地多レ竹、大者如レ椽、竹工破レ之、刳二去其節一、用代二陶瓦一、比屋皆然」。

くわざん あや菅笠にて顏隱し、忍び居たりし花山をばまだ夜をこめて出で給ふ（嫗） 花山寺の和尙（酒呑童子）

〔花山〕山城國宇治郡山科村大字花山。この地に花山寺がある。雍州府志・五、寺院門下・宇治郡の條に、「華山寺。或號二元德寺一、又稱二東山寺一、花山院竊出二禁闕一先赴二此寺一、近世妙心寺愚堂和尙再二興之一」。

ぐわんこうじ （女護島）

〔元興寺〕奈良七大寺の一。

くんしこく 慈悲を旨とし、儒道を學んで五倫の道を守り、正直柔和の君子國と傳へ聞く（大職冠）

〔君子國〕日本國の美稱。後漢書東夷傳に「仁而好レ生、萬物柢（ふれて）レ地而出、故天性柔順易二以レ道御一、至レ有二君子不死之國一焉」。續紀・慶雲元年七月甲申の條に、「唐人謂二我使一曰、亟聞海東有二大倭國一、謂二之君子國一、人民豐樂、禮儀敦行」。

けあげのみづ つよきおきめに粟田口、けあげの水に名を流す（大經師）

〔蹴上水〕蹴上は粟田口の東端にある。粟田口は京都三條通の東端で（今も白川橋東から蹴上までをいふ）大津への道。昔の刑場は此道の右方で面積百三十坪許の長方形。雍州府志、九、古跡門に、「蹴躍水。在二下粟田口一、源義經爲二牛若一時、出二鞍馬山一從二賣金商橘次末春一而東行、於レ茲逢二關原與市一、與市美濃國之士也、騎レ馬入二京師一、其從者十人意氣揚揚然列行、誤蹴二斯水一、汚二義經之衣一、義經怒二其無禮一、拔レ刀斬二從者十人一、殺二與市之耳鼻一而放レ之、義經喜以爲二東行首途之吉兆一也、今斯水稱二關淸水一、關淸水在二近江國大津西追分東一」。「つよきおきめに粟田口云云」をも見よ。

けいそくざん 摩伽陀國鷄足山（釋迦）

〔鷄足山〕天竺にある山。大唐西域記に「莫訶河東、入二大林野一、行百餘里、至二屈屈吒播陁山一（唐云雞足）云云」。

けいでんじ （曾根崎）

〔慶傳寺〕攝陽群談に、「東生郡小橋（をばせ）寺町にあり。境内に大阪巡禮十二番觀音堂あり」。

けいひん 我はけいひんの般若三藏なり（以呂波）

〔罽賓〕印度西北境方面の地名であつて、時代によつて指す地を異にす。漢代では專ら今のカーブル河流域の謂であつて、南北朝頃にはカシミールを指す。西域記に、「迦濕彌羅國、舊曰二罽賓一訛也、北印度境」。

けはひざか （百日曾我）

〔假粧坂〕相模國鎌倉郡にある市邑であつて、扇谷より西、深澤・梶原に出る坂路で往還の途に當る。

けふ 窓の雪のあかりにてけふの細布織るとの（源義經）

〔狹布〕中世頃狹布郡と稱したもの今は陸中國鹿角郡の内であるといふ。狹布の地より細布を産出した。奥義抄に、「狹布の細布とはみちの國のけふの郡より出くる布なり、はたはり狹き布なればむねあはずとはいふ也」。

けまや 申し善樣、これお見忘れなされたか、毛馬屋の七兵衛（二枚繪）

〔毛馬屋〕大阪府下の長柄より淀川を隔てて毛馬村がある。よつて屋號に云ひなしたのである。

に、起請誓紙の筆の罰、そなたを除けてと泣く涙(冥途飛脚)

〔譽田八幡〕大阪府南河内郡古市村大字譽田にあり、應神帝及び六神を祀る、境内淸淨にして來拜者四時絕えない。

こんめいち 唐漢の武帝の時、昆明池と云ふ池に朝夕魚を釣る人あり、或時鯉を釣得しに、糸斷れて魚は波に入り云云(隅田川)

〔昆明池〕錦字箋に、「昆明池は雲南省雲南府にあり云々」。三秦記に、「昆明池、昔有ㇾ人釣ㇾ魚、綸絕而去、遂通二夢于漢武帝一、求ㇾ去ㇾ鉤、帝明日戲二于池一、見二大魚銜ㇾ索、取而放ㇾ之、間三三日一、池邊得二明珠一雙一、帝曰豈非二魚之報一耶」。

こんらう 玉京・崑閬・藐姑射の山(松風)

〔崑閬〕神仙の居る所。書言故事に、「崑崙圃、閬風苑、有二玉樓十二立臺九層一、左二瑤池一右二翠水一、環以二弱水九重一、非二飇車羽輪一蓋不ㇾ可ㇾ到」。

さいこく 西國の御利生ヤ三十三所の風景(重井筒)

〔西國〕次條を見よ。

西國三十三所 (重井筒)

京都及その近國三十三ケ所の觀音を奉祀せる寺院の稱。これを巡禮するを西國巡禮といふ。巡禮歌は俗に花山院奉納の勅吟と言ひ傳へ、これ等三十三所觀音の靈場に存し、哀婉の調でこれを唱へる。

第一番　紀伊那智山青岸渡寺(那智如意輪堂)

本尊如意輪觀音

補陀落や岸うつ波は三熊野の那智の御山に響く瀧津瀨

第二番　紀伊紀三井山護國院金剛寶寺

—如意輪—

古鄕をはるばるここに紀三井寺花の都も近くなるらむ

第三番　紀伊補陀落山施音寺(粉河寺)

—十一面—

父母の惠も深き粉河寺佛のちかひ賴もしきかな

第四番　和泉卷尾山仙藥院施福寺(槇尾寺)

—千手—

深山路や檜原松原わけ往けば槇の尾寺に駒ぞいさめる

第五番　河內紫雲山三寶院剛琳寺(藤井寺)

—千手—

まゐるよりたのみをかくる藤井寺花のうてなに紫の雲

第六番　大和壺坂山南法華寺(壺坂寺)

—千手—

岩をたて水をたたへて壺坂の庭のいさごも淨土なるらむ

第七番　大和東光山眞珠院龍蓋寺(岡寺)

—如意輪—

今朝みれば露岡寺の庭の苔さながら瑠璃の光なりけり

第八番　大和豐山神樂院長谷寺(初瀨寺、泊瀨寺)—十一面—

幾度も參るこころは泊瀨寺山も誓もふかき谷川

第九番　大和興福寺南圓堂

—不空羂索—

春の日は南圓堂にかがやきてみかさの山にはるる薄雲

第十番　山城妙星山三室戶寺

—千手—

よもすがら月をみむろとわけゆけば宇治の川瀨にたつは白浪

第十一番　山城深雪山上醍醐寺

—准胝—

逆緣ももらさですくふ願なれば巡禮堂は賴もしきかな

第十二番　近江岩間山正法寺(岩間寺)

—千手—

みなかみはいづくなるらん岩間寺岸うつ浪か松風の音

第十三番　近江石光山石山寺

—如意輪—

後の世を願ふ心はかろくともほとけのちかひ重き石山

第十四番　近江長等山園城寺(三井寺)

—如意輪—

いづいろや浪間の月は三井寺の鐘の響にあくるみづうみ

第十五番　京都觀音寺(今熊野觀音堂)

—十一面—

昔よりたつをもしらぬ今熊の佛の誓あらたなりけり

第十六番　京都音羽山淸水寺—千手—

松風や音羽の瀧は淸水のむすぶ心はすずしかるらむ

第十七番　京都補陀落山普門院六波羅蜜寺

—十一面—

おもくとも五つの罪はよもあらじ六波羅堂に參る身なれば

第十八番　京都六角堂頂法寺—如意輪—

わが思ふ心のうちは六つのかどただまろかれと祈るなりけり

第十九番　京都行願寺(革堂(かうだう))

—千手—

花をみて今はのぞみもかうだうの庭の千草も盛りなりけり

第二十番　山城西山善峯寺(良峯寺)

—千手—

野をめすぎ山路に向ふあめのそらよし峯よりも霽るる夕立

第二十一番　丹波菩提寺(穴太(あなは)寺)

—聖—

かかる世に生れあふみのあなうやと思はでたのめ十こゑ一こゑ

第二十二番　攝津補陀落山總持寺

—千手—

おしなべたかきいやしきそうちじの佛の誓たのまぬはなし

第二十三番　攝津應頂山菩提院勝尾寺

—千手—

おもくとも罪には法(のり)の勝尾寺佛をたのむ身こそやすけれ

第二十四番　攝津紫雲山中山寺

—千手—

野をもすぎ里をも行きて中山の寺へ參るに後の世のため

第二十五番　播磨御嶽山淸水寺(新淸水寺)

—千手—

あはれみやあまねきかどのしなじなになにをか波のここに淸水

第二十六番　播磨法華山一乘寺(法華寺)

—千手—

はろは花夏は橘秋は菊いつもたへなる法の花山

第二十七番　播磨書寫山圓教寺

〔五天竺〕昔時印度をその地勢の上から東・西・南・北・中の五部に分ちての稱。

ことまちのかみ　末にことまちの神の御名さへ嚴めしき（日本武尊）

〔事任神〕國花萬葉記卷八、遠州神社之部に、「事任社、周智郡一宮村、社領九百九十石、祭神天巳貴命也」。

こなたが裏の西の方　（生玉）

さかへ屋の居所大阪伏見坂町柏屋の裏の西方なる千日の刑場をいふ。

こはたのさと　木幡の里の片ほとりに千手太郎忠光といふ者あり（蟬丸）

〔木幡里〕山城國宇治郡大字宇治村小幡の里。

こばやしがう　小林郷の朝比奈屋敷（最明寺殿）

〔小林郷〕鎌倉の鶴岡八幡宮のあたり一圓の地の稱。東鑑・卷一に「治承四年十月十二日[illegible]小林郷之北山、構宮廟、被奉遷鶴岳宮於此所」。

こびきちやう　「さかひちやう」を見よ。

こひづか　（女夫池）

〔戀塚〕山城國紀伊郡にある。雍州府志・十、陵墓門に、「戀塚。在上鳥羽、曾遠藤盛遠誤斬源渡妻之首、携來於茲始見之、大驚且悔、則埋首於斯處、盛遠不堪悲歎、終剃髮爲僧號文覺、時時詣斯塚、築之、依號戀塚、永井日向守直清領攝州高槻、日請林道春使作碑銘、建塚上、然斯所元無塚也、中古此邊有大池、池有巨鯉、作妖怪、十人殺之埋此所、源渡妻塚在此南壇上戀塚寺、然誤建碑於斯處、惜哉」。

こぶくろざか　（最明寺殿）

〔巨福路坂〕相州鎌倉の鶴岡八幡宮の裏門の少し南から西に登る坂で、雪の下から建長寺門前に出る道である。今の小袋坂の南つづきである。

こふじ　伊豫の小富士（嵯峨天皇）

〔小富士〕伊豫國宇摩郡にある。

こふなちやう　江戸小舟町米問屋の爲替銀（冥途飛脚）

〔小舟町〕今も東京市日本橋區にある町名で、江戸橋の北に當る。

こふのあみだ　こふの阿彌陀の影たのむ、其誓願の詞の緣、千貫松にぞ着きにける（丹波與作）

〔國府阿彌陀〕伊勢國鈴鹿郡國府の阿彌陀をいふ。伊勢參宮名所圖會・三に、「國府の阿彌陀。當國鈴鹿郡國府村上寺山の安置なりしを、寺荒廢して尊像雨露に朽ちし事を惜みて、延寶の頃か當寺の境内に移行きしとなり」。

ごべうの　あめのみかどの御廟野よ（蟬丸）

〔御廟野〕山城國宇治郡日岡の東に竊野あり、御廟野と稱して天智天皇の御陵である。

こぼれぐち　今日は河内へ行かうかと、こぼれぐちまで行つたれば（卯月紅葉）　續く命が不思議ぞと、二人が涙こぼれ口、明けぬ間は暫しとて（冥途飛脚）

〔鄙口〕天王寺の東南なる河堀口を俗に鄙口（こぼれぐち）と稱し、平野街道への出口に當る。

こまがた　駒形の船頭まで押すに押されぬ世は金銀（吉岡染）

〔駒形〕東京淺草區駒形町に當り駒形堂あり。元祿頃は物淋しく、螢など飛び交うた。駒形渡は昔時、新吉原に至る通人嫖客の船着場として、屋形舟・猪牙舟の船宿が多かつた。

こまがたごんげん　箱根兩所駒形權現、分身は白和龍王右鵲王左鵲王（會稽山）

〔駒形權現〕神社考に、「伊豆箱根者、本社彥火火出見尊也、又有駒形權現・白和龍王・右鵲王・左鵲王・及客人宮」。

こもがい　小西彌十郎が不敵丸拔けがけの先乘せんと、こもがいをめがけて走らせしが（三國志）

〔熊川〕朝鮮慶尙南道にありて、釜山の西・金海の西南にある地名。熊川を「こもがい」といふは朝鮮の古訓（Komkai）に據つたのである。川上久國撰・高麗陣中作圖（朝鮮征伐のあつた文祿頃の圖）によれば、熊川に「コムデン」と振假名が附けてある。

こや　こやのあしぶき宿もなき（天神記）

〔昆陽〕攝津國河邊郡稻野村大字昆陽をいふ、伊丹町を去ること十餘丁。和名抄に、「武庫郡兒屋鄉」。後拾遺集・卷一、和泉式部の歌に、「津の國のこやとも人をいふべきに、ひまこそなけれ葦の八重ぶき」。

こゆるぎ　敷居一つをこゆるぎの、傳に附いても入られねば（松風）　狩にいにける裝束は、常に一際こゆろぎの、老繋したる冠に（松風）

「越ゆる」に歌枕「小餘綾（こゆるぎ）」をいひかけたのである。小餘綾は相模國の郡名。

ごりやうはつしや　（烏帽子折）

〔御靈八社〕京都の御靈は上四所、下四所あるよりいふ。

ころもかせやま

「かせやま」を見よ。

ころもがは　陸奥に聞えたる衣川にぞ着き給ふ（源義經）

〔衣川〕陸中國膽澤郡衣川村を流れ、北上川に合して海に注ぐ。

ころもでのもり　（娥）

〔衣手森〕松尾と嵐山との中間にある森の名。

ころものせき　（門出八島）

〔衣関〕住昔陸中國磐井郡平泉村にあつた關所の名。現今は平泉村高館以西、上衣川に至る山阜を關山といふ、中尊寺あるによつて中尊寺村の稱がある。源賴朝時代の衣の關は蓋しこの關山・中尊寺の後方にあつたものであらう。

こんさんちや　（三國志）

かかる地名は朝鮮にはない。

こんたいじ　さて金臺寺大蓮寺（曾根崎）

〔金臺寺〕攝陽群談・十二に、「大坂西寺町（世俗下寺町）にあり、境内に大坂順禮二十八番の觀音堂あり」。

こんだう　こん金堂に講堂や（曾根崎）

〔金堂〕攝陽群談・十二に、「四天王寺の本堂、大坂順禮第二十二番、本尊如意輪觀音」。

こんだのはちまん　戀は譽田の八幡

あたりは櫻の名所である。筑波山名跡志に、「櫻川は磯邊明神の社地より濫觴す云々」。「波に花咲く櫻川云々」を見よ。

さくらづか（賀古教信）
〔櫻塚〕攝津國豐能郡豐中村にあつて岡町の附近。

さくらのばば 二の丸の櫻の馬場（鎌權三）
〔櫻馬場〕ここにいへるは、雲州松江城二の丸あたり、櫻樹生茂して馬を調練するに適した空地の稱。この稱のものは方々の城下の地にあつた。

さくらばし 櫻橋から中町下りぞめいたら（天網島） 花のふぶきの櫻橋、梅田のみどり曾根崎の（氷朔日）
〔櫻橋〕大阪蜆川に架せる橋の名。曾根崎新地圖について見よ。心中天網島に、「橋の名さへも梅櫻」とあるも、梅田橋と櫻橋とをいうたのである。

さくらゐ 越中に櫻井（最明寺殿）
〔櫻井〕越中國下新川郡三日市町の邊を櫻井庄といふ。

さくらゐのしゆく 心の花も咲きかくろ、櫻井の宿に着きけるが（女楠）
〔櫻井の宿〕大阪府三島郡島本村大字櫻井にあり、西國街道の要路に當り、楠公父子訣別の處である。（大正二年一大碑を建てて、楠公父子訣別之所と書し、乃木大將（希典）の揮毫、竣功の日閑院宮殿下台臨ありて、御手づから楠樹を植ゑさせ給ふ）。

ざこば 鯉にはあらでざこばの人（淀鯉）
〔雜喉場〕今の大阪市西區江戶堀下通、京町堀上通、京町堀通の各五丁目の西端、百間堀河畔一帶の地をいふ、延寶年間より魚市の立つ所。

ささ ひけやひけや此車、えいさらさらさら、ささの葉にしての旅路の後世(ごぜ)の友（反魂香） 初音の里の我ささに露のしらゆふきりかけて、ひけやひけやこの車（小栗判官）
篠(ささ)に小篠竹塚をきかせたのであらう。木曾路名勝圖會に、「小篠竹塚。青墓にむかし照手といふ遊女あり、此墓なりとぞ」。

ささやきのはし 誠を囁きの橋の蜘蛛手に物思ふ格子叩くを（夕霧）
〔囁橋〕備後國にあるといふ。秋のねざめにある引歌に、「熊野なる音無河に渡さばや、ささやきの橋忍び忍びに」。

さしでのいそ（百日曾我）
〔指出磯〕甲斐郡甲府より東北三里ばかり、釜無川に沿うて小郎のあるあたりをいふ。

さしま 平親王が都と聞く猿島の郷へと急ぎける（懸物揃）
〔猿島〕下野國（今は下總國に入る）猿島郡をいふ、平將門謀反を起して僞宮を造り、大臣以下文武百司を置いた所である。

さだ さだの煮賣を見る事も曲輪(くるわ)でならぬたのしめ野に（淀鯉） 風にひらひら枚方を過ぎ佐太を越え（女夫池）
〔佐太〕佐太は河內國北河內郡守口町の東北にあつて（今蹉跎村といひ、昔佐太郷といふ）佐太天神のある所である。煮賣は煮賣店で、卽ち旅人が食事などちよつと支度して行く腰掛茶屋をいふ。河內名所圖會に、「此所京街道にて茶店貨食屋(れうりや)あり」。ここの文に「たのしめ野」とあるは「誰の占野(しめの)」「點野(しめの)」「樂しみ」をいひかけたのである。（點野は地名部を見よ）。

さど 里は三筋に町の名も、佐渡と越後のあひの手を（冥途飛脚）
〔佐渡〕大阪新町內にある佐渡屋町をいふ。瓢簞町の北隣り東西に通ずる町筋で、西なるを佐渡屋町、東なるを九軒町といふ。冥途飛脚・中卷に「橋がかけたや佐渡屋町、越後は〻主人とて立寄る妓も氣兼ねせず」とある。「通ふ千鳥の淡路町」をも見よ。

さの 雪の寒さのさのみやは、佐野のわたりに着き給ふ（最明寺殿）
〔佐野〕上野國群馬郡佐野村高崎から、山名・藤岡に至る通路に當り、烏川の岸にある。上信日記に、「烏川に至る昔の舟橋の跡とて、その船つなげる榎の木の大なるが一本立てり、今に舟にて渡る」。

ざまのおたび 諸願の種をうへ町の、座摩のお旅(たび)に二十二社拜み納むる袖神樂（卯月紅葉）
「座摩の御旅所」の略、天滿橋と天神橋との間の石町にあつて、座摩神社祭神の神幸し給ふ社。攝津名所圖會・四上に、「石町北獨兵衞町にあり、毎歲六月二十二日神輿を社內の神石に安座し神事執行有」と見えてゐる。

さめがゐ 何時醒が井の水深く、沈みて物を思へとや（小栗判官）
〔醒井〕近江國坂田郡醒井村をいふ。驛は箕浦庄に接し息長川の南岸に沿ひ、磨針峠番場の北一里、柏原の宿より西五十町にある山驛である。

さよのなかやま 小夜の中山無間の鐘撞き當てた福福長者（博多）
〔小夜中山〕遠江國小笠・榛原兩郡の交界にある坂路で、東海道金谷と日坂との兩驛の間にある。この地にある曹洞宗・觀音寺の鐘を無間の鐘といひ、俗に「無間の鐘を撞けば金銀が湧出る」といふ。蓋し無間の鐘とは間斷なく撞き鳴らす鐘といふ意なるを、無間地獄及び無限の金（鐘と訓通じろ）の意にとつた諺であらう。國花萬葉記卷八・遠江國の條に、「小夜の中山＝松立こめしひろき山也、山の中五十町、此山より右の方一里ばかりに高き山見ゆる、ここに觀音寺とて曹洞の小寺あり、古へ此寺に無間の鐘とて有し、いつの比何ものの云初しはしらず、世の福裕財德をねがふ者好みて此鐘をつくに、來世必らず無間墮獄の業をうくるといへ共、現世にはたちまちうとく自在の身となるといひ傳へて、愚惑の輩は後來をおそれずとて、こふて此鐘をつくもの多かりしと也、明應の比此寺の住職此鐘をにくみ、世人顚倒の凶器惡趣のなかだちなりとて、かつは寺院の瑕瑾と思ひ、此鐘を取ていみしくもあたり成ふかき井のそこへうづまれしとかや」。「さよのなかやま年たけぬ云々」（四五四頁）、「むげんのかね」を見よ。

さらら さらら山口一つ橋、渡して救ふ御願力（女殺）
〔讃良〕往時河內國の郡名、交野と茨田の間

—如意輪—

はるばるとのぼれば書寫の山おろし松の響もみのりなるらむ

第二十八番　丹後世野山成相寺（成合寺）

—聖—

なみのおと松の響も成相に風ふききたるあまの橋立

第二十九番　丹後青葉山松尾寺

—馬頭—

そのかみは幾代へぬらむたよりをば千とせをここ（もイ）に松の尾の寺

第三十番　近江竹生島嚴金山寶嚴寺

—千手—

月とも（日もイ）に波間に浮ぶ竹生島船に寶をつむここちして（せよイ）

第三十一番　近江姨綺耶山長命寺

—十一面—

やちとせややなき（はイ）にながきいのち寺はこぶ歩のかざしなるらむ

第三十二番　近江繖山觀音寺

—千手—

あなたふとみちびきたまへ觀音寺遠き國よりはこぶ歩を

第三十三番　美濃谷汲山華嚴寺

—十一面—

よろづ代の願をここにたのみおく（をさめイ）水は苔よりいづる谷汲

今までは親とたのみしおひづるをぬぎて納むる美濃の谷汲

さいじ（嵯峨天皇）

〔西寺〕山城國葛野郡七條村にあつた巨刹で、今その遺址が殘つてゐる。桓武天皇延曆十五年國家鎭護の爲、勅して東寺西寺を建立せられ、弘仁・天長の頃守敏僧都西寺に居て、東寺の空海と對立した。

さいしよがはら　思ふ願ひが叶はずば、西所川原か舟岡へ、直に飛ばうと思ふ氣で、私が爲の修羅出立（反魂香）

〔最勝河原〕十一行本「西所川原」とあれど、最勝河原と書くが正しい。最勝河原は京都三條の西、封疆の外にありて火葬場である。黒川道祐撰・雍州府志、古墳門上（葛野郡）の條に、「最勝河原。在㆓三條西封疆之外㆒、良賤火葬之場也、相傳古最勝寺在㆓斯處㆒、今按誤㆓三條河原㆒者乎、倭俗葬場謂㆓三昧㆒、自㆑古有㆓綸旨及御教書下知狀㆒、職事勤㆑之」。

さいだいじ（女護島）

〔西大寺〕伏見村西大寺にあつて、南都七大寺の一。

さいでうざん　西條山は長尾の陣所、下米の宮は武田の備（川中島）

〔西條山〕信濃國埴科郡松代町より南にある山。

さいねんばう　青布子の西念坊案内なしにずつと通り、……宗味が刻鐘（こくかね）の開眼粗相な非時致します（脊庚申）

〔西念坊〕西念寺の僧。西念寺は大阪高津宮の東方、小橋火屋の北で、本覺寺と西岩寺との間にある。なほこの文は、西念寺に寄進する宗味鑄造の刻鐘開眼供養の案内を、その寺の納所坊主かいうて來たのである。

ざうづせん　峯は木深き象頭山麓に靈河漲りて（釋迦）

〔象頭山〕梵語迦耶尸梨沙山（がやーしーるしや）といふ。中印度迦耶市の西方にある山で、その形象頭に似たるが故にこの名がある。釋尊の修行說法された所である。

さか　一口二口みな口どぢやうなどりこえ、坂へこすのもさい次第（丹波與作）

〔坂〕近江と伊勢との境にある鈴鹿の坂。

さがのおてら（兼好）

〔嵯峨御寺〕山城國葛野郡嵯峨村にある淸凉寺をいふ。巢林子がここの文は謠曲・放下僧にある文に據つたのである。「ほふりんさがのおてら云々」を見よ。

さがのしやか　高きお山を時の間に麓に下るさがの釋迦（女殺）　如何にも如何にも嵯峨の釋迦、毘首羯磨の御作というてもだんないと（生玉心中）

〔嵯峨の釋迦〕山城國葛野郡嵯峨村なる淸凉寺をいふ、本尊は釋奝然の入宋將來する所にして、俗間に三國傳來の佛像として有名である。按ずるにこの佛像は、天監十八年扶南國より梁に獻じ、更に我國に傳はつた。現今の像は、嘗て火災などの爲、頭部・手足の破損したるを補作したのだといふ。毘首羯磨（四一六頁）をも見よ。女殺油地獄のここの文は、下（さが）るの頭韻より嵯峨の釋迦といひつづけた。

さかひちやう　淺草上野の花盛、又堺町木挽町のてんつくてんつくでこのぼう（丹波與作）　木挽町堺町の役者からつりなとる衣紋付（脊庚申）

〔堺町〕貞享元祿の頃、江戸日本橋區堺町（上堺町即ち葺屋町をも含む）には、淨瑠璃又說敎の芝居場軒を連ね、都座も市村座もありて、てんつくてんつくの囃賑しくあつた。木挽町には、對島五郎左衞門、落拔し、後には山村座の建設を見る、實に堺町木挽町は、江戸に於ける劇場の所在地と定められ、以て天保年間に及んだ。

さかまち　ありやありや東の難波燒が坂町通ひ（生玉）

〔坂町〕坂町は伏見坂町にて、道頓堀芝居の南にある町筋。上等でない茶屋女が多かつたのである。

さかもと　坂本の山王へ日參遊ばし（蟬丸）

〔坂本〕近江國滋賀郡にあり、比叡山の東麓で湖水に臨む、この地に日吉山王の祠がある。

さかわ川（扇八景）

〔酒匂川〕相模國足柄郡にある川の名。東海道名所記に、「酒匂川、富士のすそより流る常は歩渡り、冬は土橋をかけらる、此川左のかた一町ばかりにして海に入るなり、追はぎ多し云々」。

さかをり（振袖始）

〔酒折〕備前國岡山の石關町酒折神社のある地。

さぎざか（女楠）

〔勾坂〕遠江國磐田郡岩田村・富岡村に亘れる地名。

さくらがは　波に花咲く櫻川（鎌田）

〔櫻川〕常陸國新治郡眞壁郡を流れる川。この

立江寺(第一九番)同國那賀郡立江村大字立江。
鶴林寺(第二〇番)同國勝浦郡生比奈村。
御崎寺(第二四番)土佐國安藝郡津呂村室戸崎の南端。
津照寺(第二五番)同國同郡室戸村大字室津。
一の宮寺(第三〇番)同國土佐郡一宮村大字一宮。
清瀧寺(第三五番)同國高岡郡高岡町。
蹉跎寺(第三八番)同國幡多郡清松村大字伊佐。
寺山院(第三九番)同國同郡中村町。
佛木寺(第四二番)伊豫國北宇和郡成妙寺大字則。
菅生山(大寶寺)(第四四番)同國上浮穴郡菅生村。
淨瑠璃寺(第四六番)同國溫泉郡阪本村淨瑠璃寺。
石手寺(第五一番)同國同郡道後村大字石手。
三島(光明寺)(第五五番)同國越智郡宮浦村大字宮浦。
佐禮山仙遊寺)(第五八番)同國同郡清水村佐禮山。
國分寺(第五九番)同國同郡櫻井村大字國分。
三角寺(第六五番)同國宇摩郡金田村字三角寺。
小松尾山(大興寺)(第六七番)讃岐國(今阿波)三豐郡辻村大字小松尾。
曼荼羅寺(第七二番)同國仲多度郡吉原村。
白峯寺(第八一番)同國綾歌郡松山村大字靑海。
屋島寺(第八四番)同國木田郡潟元村大字屋島。
八栗寺(第八五番)同國木田郡矢禮村八栗山。
志度寺(第八六番)同國大川郡志度町。
大窪寺(第八八番)同國大川郡大窪村。

獅子が城 甘輝が在城獅子が城へは程もなし(國性爺)

支那浙江省杭縣に獅子峯といふがあるが、こんな處に甘輝の城があるべきでないから、恐らく假作の名であらう。甘輝は實在の人物で、鄭成功の股肱となり、その畫策に參して功多く、大擧して南京を計り、瓜州を破り鎭江を取つて金陵に至つたが、淸將梁化鳳に敗られて捕へられ、屈せないで殺された。時に永曆十三年。

ししくひやばし 序にて作りし惡心の切で、返報のくる時は猪喰屋橋思ひ出す(今宮)

〔猪喰屋橋〕攝陽群談・七に、「完喰屋橋。立賣堀川筋にあり、立賣堀北頬三丁目四丁目の間より、同じく南側西之町と中之町の街に涉る處なり」。

ししこく 南海の火浣布・獅子國の馬肝石(國性爺)

〔獅子國〕印度の南端にある聖蘭島をいふ。(匈奴の分れた郅支單于の國をいふのではあるまい)。

四十八が瀨 柳が瀨憂き瀨つらき瀨の四十八が瀨(案爵)

越中國を流れる黑部川の下流の平野に就くや、諸方に分流して數十の分派を成す、世に黑部の四十八が瀨といふ。

四十六所の神 四十六所の神垣に、和光の燈輝けば(日本武尊)

國花萬葉記卷八、遠州神社之部に、「四十六所明神。社領八十三石、神主宮內」て

しじみがは 蜆川の天滿屋のおはつめとやらと腐り合ひ(曾根崎心中)

堂島新地蜆川(氷朔日)

〔蜆川〕往時蜆川は堂島と曾根崎との間を流れてゐた。蜆川新地にありといへる天滿屋は堂島新地なるをさすのである。曾根崎心中の道行の文によれば、お初・德兵衞は堂島新地なる天滿屋を出で、蜆川に架せる梅田橋を渡つて、曾根崎天神の森に走り此處で情死したのである。當時既に堂島新地に色茶屋があつたことは、元祿十年刊の難波丸にもそのことが記されてゐる。「大阪地圖」を見よ。

しじみばし あのいたいけな貝殼に、一杯もなき蜆橋(天網島)

〔蜆橋〕蜆川に架し、難波小橋と櫻橋とのに間あつて、大江橋筋の北に當り、堂島橋の俗稱である。附錄の大阪地圖を見よ。

しちだいじ (女護島)

〔七大寺〕奈良七大寺をいふ。卽ち東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺をいふ。

しちほんまつ 七本松から跡先にこれまで窺ひ參りしが(反魂香)

〔七本松〕京都上京北野天滿宮の所にある街路に當り、一夜松ともいふ。雍州府志・古蹟門下(葛野郡)の條に、「一夜松。天曆九年三月十二日、菅神託曰、北野右近馬場一夜松千本當ㇾ生、則果如ㇾ託宣ㇾ是號ㇾ一夜松ㇾ今七本松原是也、北野舊名松岡也」。

七里半 若狹口七里半より切つて入れ(女夫池)

越前國敦賀郡愛發村と近江國高島郡劍熊村との間なる有乳山の坂路を七里半越といひ、近江の海津に出る道に當る。

しづはらやま (兼好)

〔靜原山〕山城國愛宕郡にあつて、八瀨から鞍馬へ越す峠で、今市原野中と合して靜市野村といふ。黑川道祐編・雍州府志・一、山川門・愛宕郡の條に、「靜原。在ㇾ大原草生西ㇾ上賀茂葵祭所ㇾ用之葵、今出ㇾ自ㇾ此處ㇾ」。

しどでら (大織冠)

〔志度寺〕讃岐國三木郡志度村の海濱を志度の浦といふ、志度寺は其處にある補陀落山爐盛光院をいふ、本尊は十一面觀世音菩薩である。

しなのざか 旅の姿の品濃坂、白旗の宮伏し拜み(大磯虎)

〔品濃坂〕神奈川縣程ケ谷と戶塚との間にあつて、武藏と相模との國境に近く西にある。國花萬葉記、武藏の卷、程ケ谷より戶塚へ二里の條に「信濃坂」に作る。

しのはら 實盛が鬢を洗ひしはそれは篠原池の水(女楠)

〔篠原〕加賀國江沼郡篠原村をいふ。壽永二年五月齋藤別當實盛が手塚光盛に殺された所である。平家物語に、齋藤實盛の混髮を此所の池水で洗つたら、白髮となつたことが見えてゐる。

しのびのをか 御代長久の岡山を歌には忍の岡とも詠み(女楔)

〔忍岡〕河內國北河內郡中河村岡山をいふ。勅後撰集・法印覺寛の歌に、岡山を忍の岡と詠んである。河內國名所鑑(延寶七年刊)卷五に、「岡山(忍びの岡と古歌によみしは此

にあつて、住道、四條、甲可、田原、豐野、寢屋川の六村あつて、野崎觀音、岡山、山口、一の橋などはこの郡内にあるが、明治二十九年郡となつて北河内郡の内に入る。

さるさはのいけ　道に待受け猿澤の池へ投入れ失ひ給はゞ、誰知る者も候はじ(三世相)

〔猿澤池〕奈良興福寺の南岸下、登大路の北側にある池、天竺の獼猴池に擬して造つたといふ。

さるしま

「さしま」を見よ。

さるばたのしろ　(關八州)

〔猿島城〕相模國にあつて、名越の切通の北方御猿畠山の城をいふ。序云、平將門の據つた城は此處ではなくて猿島(さしま)(その條を見よ)である。

さんけんや　如何なる罪も三軒屋には消えて浮世の榮華町(吉岡染)

三軒屋(難波丸綱目所載)



「三軒屋」今の大阪市西區三軒家上の町下の町に當る。

さんごくさかひのいたばし　橋本の宿はづれ三國境の板橋にこそ着きにけれ(淀鯉)

〔三國境板橋〕八幡の西南にありて京街道に當り、山城・河内・攝津の境界にある三國橋(みくにばし)をいふ。

さんじふさんしよ

「さいこくさんじふさんしよ」、「おほさかさんじふさんしよ」を見よ。

さんじふさんばん　とうからの約束三十三番連立ちませう(卯月紅葉)

〔三十三番〕「大阪三十三所」を見よ。

さんじやうさま　所詮わしが死ぬるかかたはにして下されと、山上樣へ願をかけたれば(生玉)

〔山上樣〕大和國吉野郡にある山上ケ嶽は大峰山脈の北方に位し、吉野群山中第一の靈山である。天智天皇の御宇役小角(役行者)初めて大峰山脈の全嶺を踏破して苦修練行の際、この山上ケ嶽で感得した藏王大權現を小字を建てて創祀し、聖武天皇の御宇行基菩薩本堂を修理し宸筆の經卷を埋め、醍醐天皇昌泰年間理源大師入峯本堂再建、後水尾天皇元和二年本堂大修理、東山天皇元祿四年修繕したるは梁間八間、桁行九間の大伽藍で、現存せるもの即ち是であつて、藏王權現並に役行者を祭る。當山は修驗道極致の靈場として未だに女人禁制で、毎年開山期たる五月八日より九月二十七日までは、兜巾篠懸に身を裝へる山伏姿の信者この靈峯を目指して登山するもの實に十數萬の夥しきに上る。

さんた　昨日の暮方三田から私が父親上られ(今宮)

〔三田〕攝津有馬郡の中央にある地名。

さんづのかは

語釋部(一六一頁)について見よ。

さんとめ　さんとめ八郎(國性爺)

印度東境の地(San Thomas)である。和漢三才圖會に、「佐牟止毋、卽南天竺莫臥爾之近國、人品亦同二于莫臥爾一、夫レ來二於日本一、其土產還維及中華人往往交易來二于日本一」。

さんや　しゆじやか三谷もいかな事(淀鯉)

〔三谷〕山谷とも三野とも書いてある、江戸吉原遊廓の地をいふ。三谷の名稱については、淺茅が原の末なれば三野といひ、或は人煙稀で三戸のみあつたによつて三屋というたともいふ。堀あり三谷堀といふ、橋あり三谷橋といふ。このあたりは遊冶郎が隅田川より來つてここに船を繫ぎ、吉原に至るまでの道に茶屋船宿軒を連ね、明治初年まで絃聲湧くが如かつた。

さんわう　今日は申の日、山王參りもあるべし(娥)

〔山王〕日吉山王權現をいひ、二十一社ある。比叡山の守護神にして近江國坂本村にある。祭典は毎年四月中の申の日に行はれる。

しあんばし　りくぎを糺す芝崎に、思案橋を思ひ出す(今宮)

〔思案橋〕攝陽群談・七に、「思案橋。東横堀川筋にあり、淡路町一丁目瓦町一丁目の間より東は内平野町に涉る處也」。

じうぞう　「じふさう」を見よ。

しがらぎ　伊吹まきもく木曾信樂の良材寄せられずといふことなく(隅田川)

〔信樂〕近江國甲賀郡東南山谷の地で、栗太郡田上谷と連りて大戸川の水源に當る。

しぎたつさは　鳴立澤の歸るさに、禿小三が誰やらが螢を取つて遊びなば(會稽山)

〔鴫立澤〕相模國中郡大礒より小礒に至る間にある叢林。(四五四頁)をも見よ。

しきなのうら　船は備後のしきなの浦汐待ちしてこそ居たりけれ(女護島)

〔敷名浦〕備後國沼隈郡口無浦の別名。

しぎのびしやもん　霞みて見ゆる高嶺こそ信貴の毘沙門にて渡らせ給へ(女楠)

〔信貴毘沙門〕大和國生駒郡にあり、信貴山の東半腹に毘沙門堂あり、歡喜院朝護國孫子寺と稱す。楠正成の母ここに百日詣でて夢想を感じて正成を生んだといふ。

しきみがはら　(大雹)

〔樒原〕山城國葛野郡にある。雍州府志に「樒が原、在二愛宕山西山腹一」と見え、名所圖會には、北麓になつてゐる。

四國遍路(しこくへんろ)(嵯峨天皇)

阿波に二十三所、土佐に十六所、伊豫に二十六所、讃岐に二十三所、合計八十八所の弘法大師の靈地を巡禮することを云ふ。巣林子の書ける筆順によつて其靈地の所在を記せば、

靈山寺(第一番)阿波國板野郡板東村大字板東。

極樂寺(第二番)同國板野郡板東村大字檜村。

金泉寺(第三番)同國板野郡板西村大字大寺。

黑谷寺(第四番)同國板野郡松坂村(舊名犬伏村)大字黑谷。

地藏寺(第五番)同國板野郡松坂村大字矢武。

十樂寺(第七番)同國板野郡御所村大字高尾。

ね」をも參照せよ。

じやが じやが太郎兵衛（國性爺）

ジャバ（Java）を云ふ。マライ諸島の一で、今は和蘭領である。其首都バタビヤの舊名をジャガタラ（Jacatra）と云ふより、同地方をジャガタラと云ふ。この地を經て傳はつた馬鈴薯をジャガタラ芋又は略してジャガ芋といふ。

しやくし なばかしやくしか室の泊か（松風）

「さごし」（佐越）の訛、播磨國赤穂郡佐越村をいふ。

しやむ 暹羅太郎（國性爺）

シャム（Siam）は漢字で暹羅と書き、印度支那の一王國である。現今は東西から佛國や英國に厭せられて、疆域が次第に減じた。

じややなぎ 御廟の橋のあぶなさも、後世の見せしめじや柳や（萬年草）

〔蛇柳〕高野山奥の院境内、一の橋二の橋の間で、右の方溪流のほとりにある柳樹をいふ。その狀大蛇に似る。俗說に蛇身が大師によつて得度し、化して柳になつたといふ。

しやゑいこく 當寺の本尊は聖德太子の前生、舍衛國にて作り給ひし十一面（賀古敎信）

〔舍衛國〕舍衛は梵語室羅筏悉底の訛略で、聞物または好道と譯し、迦毗羅衛城より西北五百里の地。

しゆくつしう 老をかへす良藥、しゆくつしうの反魂樹もこれにはいかで勝るべき（西王母）

〔聚窟州〕十州記に、「聚窟洲在二西海中州一。此土有二大樹一、似二此國楓一、名二反魂樹一云々」。

しゆくむら

〔宿村〕語釋部一八五頁を見よ。

しゆじやか しゆじやか三谷もいかなこと（淀鯉）

〔朱雀〕京都朱雀にある島原遊廓をいふ。堀河之水（元祿七年刊）卷下に、「朱雀の色里、舊は柳町といふ、いにしへ六條にありし時の名なりとかや」。

じゆふくかく 無量無邊のじゆふくかく（女殺）

〔聚福閣〕福聚山慈眼寺の觀音堂をいうたのである。この寺は河內國北河內郡西條村野崎にあり、曹洞宗の寺で俗に野崎觀音といふ、本尊は十一面觀音である。別に藥師堂、阿彌陀堂、羅漢堂、鐘堂等がある。「じげんじしゆじやう」（五六九頁）をも見よ。

しゆみ 須彌大海にもまさりたる重忠公の御親切（虎が磨） まづ天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北州の千年終に朽ちぬ（西王母）

〔須彌〕須彌山のことで蘇迷廬山ともいふ。「そめいろのやま」を見よ。須彌の四州とは須彌の四方にある國、卽ち東弗婆提、南閻浮提、西瞿耶尼、北欝單越をいふ。日本西王母のこの文は謠曲・楊貴妃に、「先天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北州の千年つひに朽ちぬ」とあるに據つたのである。

じゆみやうのまつ

「をかやま」を見よ。

しやうぐんぢざう 或時は勢州に住居、又は濃州信州、折折は京東山、勝軍地藏の隱遁者に因み、詩文など作る由（薩摩歌）

〔勝軍地藏〕山城國愛宕郡白川村の東北に聳えた瓜生山の上にある。石川丈山の舊栖詩仙堂は勝軍地藏の近くにある。黑川道祐著、雍州府志、四、寺院門上（愛宕郡）の條下に云「勝軍地藏堂。在二上粟田白川村東北山上一、自二村中一有二十八町云坂路一、此堂屬二聖護院一、門主入峯之前日登二斯堂一、修二護摩一七箇日、曾桓武天皇都二平安城一時、東山上納二土偶人一、爲二帝都之鎭護一、是號二將軍塚一、勝軍將軍以二其音同一、世人誤二此山一爲二將軍塚一、然將軍塚在二東山上一也、勝軍山上有二佐佐木承禎之城址一」。

しやうじやうでん

〔請誠殿〕語釋部一八八頁について見よ。

勝曼（しようまん） 振返り見る勝曼の愛染樣に、愛敬を祈る芝居の子供衆や（冥途飛脚） あれあれ勝曼參りのよれ樣達、駕籠が戾るといふ中に（氷朔日）

勝曼院を云ふ。大阪四天王寺西門の北西にあつて、本尊は愛染明王である。岡田徯志編・攝陽群談・卷十二、寺院の部に、「勝曼院。西門（四天王寺）より北西に隔り百步を過たり、愛染明王を安置す、太子此道場に於て勝曼經を講讃あり、因つて院名と成れり、每年六月朔日明王の像を開、諸人群を成せり」。「勝曼參り」は勝曼院の愛染明王に參詣することを云ふ、愛染參りとも稱す。每年六月一日は勝曼院の開扉があるので參詣人が群集した。殊にこの日は遊廓の紋日であるによつて、遊女は互に全盛を競うて着飾り、駕籠に乘つて參詣したものであつた。難波鶴（延寶七年刊）に、「六月一日、勝鬘參」。

しらいし 明け行く空は白石の、海や月夜と紛ふらん（國性爺後日）

〔白石〕白石島をいふ、瀨戶內海にある小島で備中國小田郡に屬す。

しらいしがしま（國性爺）

〔白石島〕大隅國大島郡鬼界十二島の一。長門本平家物語に、「俊寬をば白石島にぞ捨置ける、彼島には白鷺多くして白白し、水の流に至るまで波白く見えていさぎよければ、白石島とは云ひける也」。

しらがまち（曾根崎）

〔白髮町〕大阪の町名で（今の新町南通り三丁目邊）大阪巡禮三十一番觀音堂はこの町內にある。攝陽群談・十二に、「大坂巡禮三十一番觀音堂。大坂市中白髮町にあり、云々」。

しらすが（丹波與作）

〔白須賀〕遠江國にある小邑で二川と新居との間にあつて東海道五十三次の一。

しらひげ（天智天皇）

〔白鬚〕白鬚大明神は近江國滋賀郡打下（うちおろし）濱にあつて祭神は猿田彥命。松林の間に朱塗の大鳥居、高燈籠、桃山風の社殿がある

しらみね 讃岐には松山・降り積む雪の白峯（隅田川）

〔白峯〕讃岐國綾歌郡松山村大字青海（あをみ）にあつて、松山の高峯である。謠曲・鞍馬天狗に「四州には白峯の相模坊」。

しわうじ まづ筑紫には彥の山、深

慶の事也と中傳へ侍る)、慶長十九年甲寅年依二大坂御陣一、五月五日秀忠此山御本陣、此山に壽命長久の松の大木あり、見性寺・山號は少林山と號す、本尊は聖觀音聖德太子の御作なり、御長四尺六寸あり、(勅後撰)待人になどかたらはで郭公、ひとり忍びの岡に鳴くらむ　法印覺寛)」。「しわうじ」「をかやま」を見よ。

しはうじ　「しわうじ」を見よ。

しぶかは　地頭守屋殿澁川に城を構へ反逆の思立ち(聖德太子)

〔澁川〕河内國にあつた郡名で、物部守屋大連の別業のあつた所。この郡名は明治二十九年廢して中河内郡の一部となる。物部守屋大連の墳は中河内郡龍華村勝軍寺の東田圃の中にある。

じふごしやのちんじゆ　天王寺には十五社の鎭守を一社と伏拜み、扨十四ばん十五ばん(卯月紅葉)

〔十五社の鎭守〕攝陽群談・十一に、「十五神の社。四天王寺院中にあり、所祭十五座也、第一天照太神、第二住吉の神、第三廣田の神、第四紀伊國熊野三所の神、第五三十川の神、第六白山比咩の神、第七龍守の神、第八生野の神、第九布留の神、第十大泉の神、第十一春日の神、第十二稻荷の神、第十三松尾の神、第十四加茂の神、第十五八幡の神、以上十五神也」。

じふごだいじ　(女護島)

〔十五大寺〕奈良十五大寺をいふ。拾芥抄に、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺、新藥師寺、大后寺、不退寺、超證寺、京法華寺、招提寺、龍興寺、宗鏡寺、弘福寺の十六箇寺を舉げてある。

じふさう　じふさう・國島・北南の長柄で男と言はれたる善次郎ぢや(二枚繪)

〔十三〕攝津西成郡中津村大字光立寺の渡津であつて、淀川の北岸に當る。

じふぜんじ　明明後日の御發足、十ぜんじの馬場先にて互に出逢ひ申さんと(十二段)

〔十禪寺〕山城國宇治郡四宮村にあり二天台宗の寺。黒川道祐著・雍州府志、寺院門下、宇治郡の條に、「十禪寺。在二四宮村一、本尊聖觀音而聖德太子之所レ作也、明曆年中本院依レ有二靈夢告一再二興之一」。

しほじりたうげ　南は甲斐に續きて鹽尻峠、北は越後に隣つて鳥井が獄(川中島)

〔鹽尻峠〕信濃國東筑摩・諏訪の二郡の交界にある坂路にして、立利火山脈と木曾山脈とに連れる山脈を横斷する中山道の一要路である。

しほみざか　さやけき影を汲み入れて、月をやくかと潮見坂、二川越えて三河の國(今川了俊)

〔潮見坂〕遠江國濱名郡白須賀町の東南なる坂をいふ、南は太平洋に面す。

しほみざか　梢にかかる藤代や、岩代峠・汐見坂(反魂香)

〔汐見坂〕紀伊國西牟婁郡にあり、新宮と田邊との間の山深く道狹き難所の坂路を過ぎて、汐見峠に來つて始めて海汐を見るを得らるるが故にこの名がある。

しまだ　さすがに殘す髮かたち、島田の宿にぞ着き給ふ(大磯虎)

〔島田〕駿河國志太郡島田町の地をいふ、大井川の東北岸にして東海道の名驛。

しまばら　(氷朔日)

〔島原〕京都の遊女町。京都地圖について見よ。名所圖會に、「島原傾城町は朱雀野にあり、……傾城廓は萬里小路(今の柳馬場)二條の西方三町にて、……」。貞享三年刊、黒川道祐編、雍州府志、九、古蹟門下(葛野郡)に、「傾城町。朱雀西七條北、俗稱二遊女一專謂二傾城一、言一笑則傾レ城傾レ國之謂也、始在二六條室町西井西洞院中道寺町一、寛永年中移二今處朱雀西一、方二町餘、其内有二三條街衢一、故謂二三筋町一、而外面塗レ壁掘レ溝、東一方有レ門、凡入レ夜則不レ許二妄出二入其内一、當二斯時一也、肥前島原耶蘇徒蜂起、據レ山構レ寨、設レ壁深レ湟、此遊女町粗似レ之、故世俗稱二島原一、中華書淫肆謂二不夜城一、然則城寨之號亦偶相當者乎、於レ今雖二高貴人一間稱二島原一、流風之所レ使レ然乎、始六條外荒神河原口井三條四條之樵木町下粟田口松坂五條及北野等有二遊女町一、近世島原外悉禁レ之」。

しめいのほら　あれこそ日本天台山・四明の洞をうつさろる、麓に山王二十一社(燦靜)

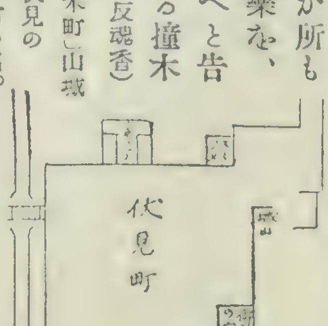
〔四明洞〕天台山を見よ。謠曲・兼平に、「扨あの比叡山は王城より艮に當つて候よのう、……又天台山と號するは震旦の四明の洞をうつせり」。

しめの　佐太の煮賣を見ることも廓でならぬたのしめのに、紅葉たけたけ鍋が茶屋(淀鯉)

〔標野〕河内國北河内郡佐太の東北にありて京街道に接する村である。語釋部「たのしめの」(二二三頁)をも見よ。

しもくまち　伏見に來ての淺香山さすが所も極樂を、願へと告ぐる撞木町(反魂香)

〔撞木町〕山城國伏見の遊廓町の名。



〔しもく町〕

しもつら　上つら・下つら、ふつ・かつき、浦村里の土民(蛙合戰)

豐後國北海部郡下北津留村のことか。

じやうど　市振・淨土・歌の秋(燦靜)

〔淨土〕越後國西頸城郡にあつて親不レ知と市振との間。「歌」といふ地も親不レ知の東にある。

しやうの　庄野に續く龜山は(出世景清)

庄野のふとのお米が俵腰(丹波與作)

〔庄野〕伊勢國鈴鹿郡にあつて、今・莊野村といひ、舊東海道五十三次の一で鈴鹿川の北岸に當る。「ふと(肥滿の意)のお米が俵腰」といへるは、庄野の名物燒米俵の緣によつたものである。井上通女撰・歸家日記(正德六年刊)中卷に「庄野といふ、ここに小さき俵をかしげに結びて、燒米すこし量り入れて、わらはへのもてあそびに賣る、云々」。「ふとのおよ

〔諏訪〕信濃國諏訪郡にある神社、祭神は健御名方命。

すべいで べんがら・あんぼん・すべいで・ぼろねら・なんどいふ外國(國性爺後日)

スエーデン(英 Sweden, 蘭 Zweden)を云ふ。新井君美撰・采覽異言に、「和呼スエウデ、又云スベイデ。東南濱レ海、西北與二諾爾京一地連接、其人類二和蘭一、方物與二第那瑪爾加一同」。新井君美撰・五事略に、「すべいで(日本を去る事一萬三千三百八十里程)、土宜、銅、鐵、石火矢、碇、船の綱、麻宇、ちやん、材木」。

須磨の一木の松 須磨の一木の松が枝に(松風)

謠曲・松風に、「變らぬ色の松一木、緑の秋を殘すことのあはれさよ」と見え、また「ある磯邊に一木の松の候を人に尋ねて候へば、松風村雨の舊蹟とかや申候程に」と見えてゐる。

すみぞめ (鑓權三)

〔墨染〕山城國紀伊郡伏見町の北部欣淨寺のあるあたりの里をいふ。次條を見よ。

墨染の櫻の寺 雪にも同じ墨染の櫻の寺の入相に、宿はなけれど里の名は伏見に行暮れ給ひけり(烏帽子折)

山城國紀伊郡伏見にある墨染寺(欣淨寺のこと)をいふ。黑川道祐撰、雍州府志・五、寺院門(紀伊郡)の條に、「墨染寺。在二同所一(伏見)、日蓮宗也、相傳墨染櫻古在二斯所一。予思仁明天皇崩時、遍昭之所レ詠、深草之野邊櫻志心有者、今年許墨染爾佐計之詠歌、惣指二深草之櫻一而言レ之、非三必謂二一本一也、自レ有二此歌一後、此邊曰二墨染一、此寺偶在二其内一、故稱レ之者也」。

すみやま 此邊は醍醐炭山、百姓一揆怖物(三國志)

〔炭山〕山城國にありて、宇治の御室戸山の東北に當る。

すりばりのたうげ すれつ縺れつ磨針の峠遙に見下せば、今こそ秋に近江路の(艷狩)

〔磨針峠〕近江國坂田郡南箕浦村に屬す、峠内に番場宿がある。

すゑのまつやま 容儀帶佩心ばせ十人並を打超して、末の松山二葉より幾代をこめし中なりし(源義經)

〔末松山〕本居宣長は、末といふ所の松山なるべしというてゐる、されど今は末の松山といふ所、陸中國二戸附近波打峠といふ坂路をいふ。古歌に「しら波の末の松山越すかとぞ見る」(古今集)、「浪越ゆる頃とも知らず末の松山」(源氏物語)、「末の松山浪越さじとは」(百人一首)など見えて、末の松山には、浪越すといふ語を連ねたるものいと多い。されば源義經將棊經のここの文も、「十人並」に「波」をかけて、「波を打超す末の松山」と、陸奥の地名を入れ、松の縁より、「二葉より幾代をこめし」と書きつづけたる、例の巣林子の妙筆にして、靈腕戛戛として聲あるを覺える。

すん すん吉九郎(國性爺)

ウンスン(カルタ)のスンを取つていうた口拍子であらう。國名としては思ひ當らぬ。

ずんかう

〔松江〕「あきかぜに鱸釣る云々」を見よ。

せいあんじ ちやうあん寺よりせいあん寺(曾根崎)

〔誓安寺〕攝陽群談・十二に、「東生郡八町目中寺町東側にあり、境内に大坂順禮十五番觀音堂あり」。「大阪三十三所」を見よ。

せいがうすゐ 西江水の一吸と、引傾けて一息飲み、日を驚かす計りなり(鎌田)

〔西江水〕西湖のこと。「せいこ」を見よ。鎌田兵衞名所盃のここの文は、その前文に「こぼれ近江の水うみを手に傾けし如くなり」といひ、そしてここにその筆法をかへて、「西江水の一吸」というたのである。

せいかんじ なう四つ五つ五文字は歌の中山清閑寺(蟬丸)

〔清閑寺〕洛東歌中山の徑路に當り、清水寺の東南にあり、今・知積院に屬す。黑川道祐著・雍州府志・寺院門上(愛宕郡)の條に、「清閑寺。在二清水山之南一、播州刺史佐伯公行之所二創建一也、今眞言宗僧守レ之」。巣林子のここの文、歌の中の句は五文字なる故に、五文字は歌の中より歌の中山とつづけ、清閑寺は歌の中山にあれば、清閑寺とつづけたのである。

せいぐわんじ 爰こそ彌陀の誓願寺、一七日の大法事めでたかりける(三世相)

〔誓願寺〕京都三條南新京極西にあり、始め南都にありて惠陰僧都の開基、桓武天皇遷都後、城州深草の里に遷して、淨土宗に改め、中世に至つて今の地に遷された。

せいこ 風に目覺す西湖の八景、我が八陣の平沙の落雁、漁村の夕陽魚鱗鶴翼、遠浦の歸帆船軍、瀟湘の夜軍も(唐船噺)

〔西湖〕支那浙江省杭縣城西にあつて三面山を環らし、西湖十景と稱して風景明媚の所である。唐船噺今國性爺に「西湖の八景」といへるは、瀟湘八景(「瀟湘の夜の雨」を見よ)と混同した誤であつて、平沙落雁、漁村夕陽、遠浦歸帆、瀟湘夜雨は瀟湘八景中のものである。

せうしやう

「瀟湘の夜の雨」を見よ。

せうぢ 商賣は袖にして、小路隱れの家出のと、聞く度毎にこの伯母が胸には釘を打つ如く(卯月艶)

〔小路〕昔時大阪には淀屋小路、浮世小路、表張小路、お前小路の四小路があつた。これ等の小路には小色茶屋類のものが建ち並んでゐた。殊に浮世小路は新町通ひの駕籠の立場であつたし、立君の出沒し、手代の隱れ宿も多かつた。さればここに「小路隱れ」といへるは、浮世小路に身を隱して色遊びすることをいうたのである。「うきよせうぢ」を見よ。

せき せきにせきより龜山に(丹波與作)

〔關〕伊勢國鈴鹿郡にあつて、坂下と龜山との間。東海道五十三次の一。

せきでら されば關寺の兒達も、是れな佛の閼伽桶や(蟬丸) 先へ心の關寺に身の衰への恥しさ、今の小町屋惣七は博多小女郎がならし竹(博多)

き頼みにしわうじ（隅田川）

〔四王寺〕原本「しはうじ」とある。筑前國筑紫郡大野山（又云四王寺山）四王院をいふ。四王院は寶龜五年の勅建といふ、現今は山頂に草庵あるのみであるが、なほ四王院といふ。

しんいろざと　知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と賑はしし（曾根崎）

〔新色里〕大阪堂島新地遊廓をいふ。「しんち」を見よ。

しんうつぼ　袖島源治は新靱ちやとおしやる、それなぜに、鹽物町のしたたるたる、然も嚢には骨があるといの（今宮）

〔新靱〕新靱町は今の大阪西區靱中通に當る。新天滿町、新靱町は鹽魚商頗る多かつた。

しんきよみづ　かげもかがやく蠟燭のしん清水に（曾根崎）

〔新清水〕攝陽群談・十二に、「大坂順禮二十五番觀音堂　東生郡四天王寺村清水の地にあり、……在栖山清水寺と稱す（下略）」。難波丸綱目・三に、「天王寺より西安井の北なり、山號有栖川山といへり、（中略）洛陽清水寺の別院におはしませし尊像を此所に安置せるとなり、昔此所に地藏菩薩毘沙門天の堂閣左右にならびてまします、洛陽清水の脇士に表し、此等をも新清水と號せり（下略）」。

しんぐう　新宮の宮居（反魂香）

〔新宮〕紀州熊野三所權現の一なる新宮權現をいふ。

しんくわうじ　信心深きしんくわう寺（曾根崎）

〔心光寺〕大阪高津下寺町にありて順禮二十六番の觀音堂のある寺。攝陽群談・十二に、「大坂西寺町にあり、境内に大坂順禮二十六番の觀音堂あり」。

しんけ　勝間新家の綿車（三國志）

〔新家〕攝津國西成郡勝間村の東に當り、天下茶屋のある所。

しんごりやう　甍ならべし新御靈に（曾根崎）

〔新御靈〕難波丸綱目・三に、「新御靈社。祭神未考、北津村平野町にあり、俗說に鎌倉權五郎景正が靈なりと云傳ふるは非なり」。攝陽群談・十二に、「大坂順禮打留觀音堂。西生郡津村町の地御靈神社境内にあり」。

しんせいまち　この心清町一町のたばれなする年寄（博多）

〔眞盛町〕京都七本松通り今出川下る町名。

しんたん　震旦四百餘州唐の世第二の主太宗皇帝（大織冠）

〔震旦〕唐土をいふ。謡曲・兼平に、「天台山と號するは震旦の四明の洞をうつせり」。

しんち　平兵衞殿と新地へ往て（氷朔日）　新地狂ひに身代あけ、方方の借錢（二枚繪）

〔新地〕大阪堂島新地遊廓。堂島新地は元祿元年に拓け、數年の後に遊廓町も出來、難波小橋から田簑橋あたりまで煮賣屋・色茶屋軒を連ね、南の濱筋から中町、北町、裏町の四筋に分れ、裏町は蜆川を隔てて、曾根崎新地に對してゐる。

しんち　南の風呂の浴衣より今この新地に戀衣（天網島）　新地の天王寺屋小菊殿（女殺）

〔新地〕大阪曾根崎新地遊廓。曾根崎新地は寶永五年に許可されて遊女町となつた。

しんまちばし　時分がら心中の下地か、又義太夫が口の端に、新町橋たかささぎの橋と語りて行く人も（淀鯉）

〔新町橋〕攝津名所圖會・四下に、「西堀北より十二日の橋なり、東は順慶町、西は傾城廓瓢簞町の入口なれば、瓢簞橋ともいふ、四時橋上に市店ありて賑し」。四五二頁を見よ。

しんみち　横に切れ行く道筋の、これ六道の新道と、花屋が辻にしよんぼりと（生玉）

〔新道〕大阪高津の生玉坂に行く道筋に當る。攝陽奇觀卷之六に、「生玉坂へ行新道□□□開きしゆゑ、生玉新道といふ、今の俗新道と斗り唱ふ」。

しんめいぐう　心もさぞや、神佛てらす鏡の神明宮（曾根崎）

〔神明宮〕天滿西寺町の前、曾根崎村領の地にあつて、この神明宮内に祀れる十一面觀音堂は大阪順禮第三番札所。「大阪三十三所」を見よ。攝陽群談・十一に、「太神宮。西成郡曾根崎村にあり、所の祭伊勢に同じ、（中略）大坂順禮觀音堂境内にあり」。同・十二に、「大坂順禮三番、天滿西寺町の前、曾根崎村領の地、神明宮社内にあり」。

じんやうのえ　潯陽の江の生猩猩二匹（大織冠）　それを過ぐれば潯陽の江、これ猩猩の住むところ（國性爺）

〔潯陽の江〕今、九江と稱し、支那江西省の開港場である。謡曲・猩猩に、「今日は潯陽の江に出でて、彼の猩猩を待たばやと存じ候」。

すがたのいけ　髮の結ひぶりなりふり袖もすがたの池の水鏡（三世相）

〔菅田池〕大和國山邊郡二階堂村にある。和州舊跡幽考・卷六に、「菅田池、二階堂村の南菅田村にあり、俗にすがたが池といふ」。

すざかののべ　すざかの野邊の枯るる程歎き暮させ給ひしを（吉野忠信）

〔朱雀野邊〕朱雀は「しゆじやく」「しゆじやか」「すざか」といひ、舊朱雀門朱雀大路（京都二條城西千本通に當る）の村郊であつて、現今は葛野郡朱雀野村と大内村とに入る。

すなば　色に擲つ金銀は土か砂場の西口や（淀鯉）

〔砂場〕大阪新町遊廓の入口であつて、西の大門のある所。攝津名所圖會・四下に、「砂場。新町西口南の町の地名なり」。

すは　諏訪へ踊見がい行く行遊びに（博多）

〔諏訪〕肥前國長崎市西山鄕にある神社。諏訪の祭禮は長崎の古名物の一で、九月七日に大波止場假屋の御旅所に渡御式があつて、年番町の子女綺羅を盡して着飾り、劍戟幢蓋等の寶物を捧げ夥しき行列である、九日は還御の日である、殊に七日九日の兩日は踊最も盛である。「からこをどり」を見よ。

すは　鹿島・三島・諏訪・八幡・愛宕（加增曾我）

〔千本松〕駿河國駿東郡千本松原。

せんりがたけ　出合ふ所は唐土に隠れなき千里が竹にて相待つべし（國性爺）

〔千里が竹〕千里茫茫たる竹藪をいふ。諺に「虎は千里の藪に棲む」など云ふより假作した地名。

そうじやうがだに　巖峨峨たる僧正が谷の木の葉をばつと吹立て（十二段）

〔僧正が谷〕山城國愛宕郡鞍馬山西北にある。黒川道祐著、雍州府志に、「僧正カ谷。在二鞍馬山西北一、相傳、斯山大天狗僧正房、於二斯處一傳二劍術於源牛若一、故斯谷岩面多有二劍撃之痕一云、今見レ之石面條目、自似二刀劍之斫痕一、凡石有二敗品一、方解石以二鐵鎚一破レ之、則大小各其形爲レ方、洛北鳴瀧砥石破レ之、則悉爲レ片、斯谷石亦自然有二條目一、是地氣之所レ使レ然也、何爲二劍撃之痕一乎」と。

そが　直に打てば一里半、廻れば三里、曾我・中村歩ませ行くも身はここに（加増曾我）

〔曾我〕相模國足柄郡下曾我村をいふ。

そでしのうら（振袖始）

〔袖師浦〕出雲國八東郡竹矢村大字馬潟の中の海に面せる海濱をいふ。懐橘談に「袖師とは出雲郷の海邊馬形といふあたりなりと指點して人教へぬ」。

そでのうら　袖の浦の靜屋敷（最明寺殿）

〔袖浦〕相州鎌倉稲村が崎の西に連る海濱をいひ、形袖の如きによつて名付くといふ。靜の屋敷はここにあつたのではないが、靜の舞の袖の縁によつてかくいうたのである。

そでふるやま　天武天皇袖振山にて奏でさせ給ひつる、その韓玉の乙女子が歌の調子に候と（三世相）

〔袖振山〕大和國吉野郡吉野山にあり、天女舞樂の故事ある地。本朝月令に、「五節舞者淨御原天皇（天武天皇）之所レ製也、相傳天皇幸二吉野宮一、日暮彈レ琴有レ興、俄爾之間、前岫之下、雲氣忽起、疑如二高唐神女一、髣髴應レ曲而舞、獨入二天矚一、他人無レ見、擧レ袖五變、故謂二五節一云云」。

そとがはま（日本武尊）

〔外ケ濱〕陸奥國東津輕郡に屬する青森灣西沿岸一帶の稱。

そとのふどう　頼む佛の御名とへば、我をば外の不動様（心中萬年草）

〔外不動〕高野山兒が瀧の上にある。通念集に「本尊阿遮羅明王は昔覺鑁上人の作らせ給ふといへり」と見えてゐる。

そとばたに　心細しやそとばたに、ここな塚はと引留め問へば（萬年草）

〔卒塔婆谷〕紀州高野山刈萱堂の附近。

そねざき　風しんしんたる曾根崎の森にぞ辿り着きにける（曾根崎）　扨六番は曾根崎の宮の木立も、いつごろよりか名立てがましき天滿屋おはつ、よそにきくさへ身にしじみ川（卯月紅葉）

〔曾根崎〕曾根崎にある天神の社を曾根崎の宮といふ、その森を曾根崎の森といふ。「扨六番は曾根崎の宮」とあれども、浪花寺社巡・二十二社廻りの條には、「九番曾根崎村天神社」と見えてゐる。「しんち」「大阪三十三所」をも見よ。



（曾根崎、寶永元年刊・心中大鑑所載）

そのはら

〔薗原〕信濃國下伊那郡智里村の古驛路にあり、旅人救濟の伏屋を設いて、行人を休息せしめた處といふ。「ありとは見えてそのはらや云云」を見よ。

そめいせん　是は去年の取木にて、名も高き屋に劣らぬ色をそめい山、此方の花壇は三國一富士や（浦島）

〔蘇迷山〕「そめいろせん」（蘇迷盧山）の略。次條及び「めいろ」を見よ。

そめいろのやま　一日養育の御恩はそめいろの山よりなほ高しとこそ承はる（卯月潤色）

〔蘇迷盧山〕須彌山をいふ。其高さ八萬由旬、大海中にあつて金輪の際の上に據り、最頂に帝釋天王が居るといふ。「しゆみ」をも見よ。

そめがは　袖は櫻に染川や、筆も及ばば繪に書きて（國性爺）

〔染川〕筑前國筑紫郡にある川で、御笠川の水源をなし逢初川ともいふ。

だいかくじ　さとらぬ身さへ大覺寺（曾根崎）

〔大覺寺〕攝陽群談・十二に、「大坂西寺町（世俗下寺町ノ）にあり、境内に大坂順禮廿七番の觀音堂あり」。「大阪三十三所」を見よ。

だいきやうじ　東はいかに大鏡寺（曾根崎）

〔大鏡寺〕攝陽群談・十二に、「大坂天滿東寺町にあり、境内に大坂巡禮六番觀音堂あり」。

たいすふ　これよりたいす府へ渡らんと（國性爺）

〔台州府〕今の浙江臨海縣（國性爺合戰に見える地名には作者假作のものが多いから、悉くは記さない）。

だいちやうじ　南無あみ島の大長寺（天網島）

〔大長寺〕網島にありて、淨土宗の寺院。大阪圖につきて見よ。攝陽群談卷第十二・寺院の部に、「大長寺、東生郡網島町にあり、淨土宗門黒谷金戒光明寺末院なり」。

だいぶつじま　篠塚太郎左を見る時は大佛島を思出す（今宮）

〔大佛島〕安治川と古川との間、富島町をいふ。攝陽群談・卷五、島の部に、「大佛島。西成郡安治川にあり、始新堀と稱す、元祿戊寅年依二公命一、市店と成て富島と改號あり、此島貞享の始南都大佛殿建立大勸進、沙門龍松院公慶

〔關寺〕昔、近江國滋賀郡逢坂山にあつたが今は無く、清水町及び關寺町のあたりは昔の關寺の境域かといふ。博多小女郎波枕のここの文は、心のせくを關寺にいひかけ、關寺より今の小町屋とつづけ、昔時小野小町が老い衰へて關寺のほとりに住んだこと謠曲・關寺小町などに見えてゐる、以て惣七の末路をきかせたる巣林子の妙筆である。

せきどのゐん　都を隔つる山崎や、關戸の院にぞ着きにける（雪女）

〔關戸院〕山城乙訓郡大山崎の南に在りて古の關址の地。黑川道祐著・雍州府志・九、古蹟門下・乙訓郡の條に、「關戸。在二大山崎南一、傳言、古斯處置二關所一、非常、又征二商賈一、故有二關戸一。古一代主上讓レ位後、構二院於斯處一、故有二關戸院之號一、今處處有二御所内東路等之名一云云」。

せきのしみづ　逢坂の關の清水と聞えしは江州一の名水なり（蟬丸）

〔關清水〕近江國滋賀郡逢坂山の中にある。昔關の清水といはれて歌に詠まれた所は、今はその所定がでないが、大略清水町のあたりといふ。

せきのぢざう　夕ぐれはいそぎの人も呼びとむる、色こそ道の關の地藏（丹波與作）　伊勢もはやとまらぬ關の地藏堂（門出八島）

〔關地藏〕鈴鹿峠の東麓關宿（伊勢國鈴鹿郡關町）九關山寶藏寺（通稱關の地藏院）にあつて、岩窟内に三尺七寸の木彫、禪定の坐像で、行基菩薩の作。この寺は眞言宗で仁和寺の末寺であるが、昔は天台宗であつた。東海道名所圖會卷二に、「九關山寶藏寺地藏院、關驛の中間にあり、本尊地藏尊僧正行基菩薩の作云云」。丹波與作に「色こそ道の關の地藏」とあるは、「關の地藏は親よりまし云云」を見よ。また丹波與作に「關の地藏を誓にかけて」とあるは、「そなた椀田の眞中云云」を見よ。

せきへき　風景聳えし高山は、赤壁とて昔東坡が配所ぞや（國性爺）

〔赤壁〕支那湖北省武昌府嘉魚縣の西七十里、揚子江岸にある赤壁山。（蘇東坡が黃州に貶せられ、赤壁に遊んで前赤壁賦、後赤壁賦を作つた勝地は、湖北省黃州府城の西北漢川門外にあつて、赤鼻山ともいひ、今東坡の祠があるといふ）。圖經に「赤壁在二嘉魚縣一、蘇軾指二黃州赤鼻山一爲二赤壁一誤矣」。

せつせん　上求菩提下化衆生をまなぶ雪山の修行（井筒）

〔雪山〕北天竺にあるヒマラヤをいふ。ヒマラヤは雪山の義である。釋尊は雪山に登つて毘羅梵志仙に仕へて難行された。阿含經に、「此閻浮提雪山北面、頂上有二香山一」。無量壽經鈔註に、「雪山者南州北邊有二九黑山一、黑山之北有二大雪山一、山色白、故譬二白雪一也」。

せと

語釋部「せとの染飯」を見よ。

せとのみしま　此間打つづき夢見惡しく候程に、せとの三島へ參詣仕候（用文章）

〔瀨戸三島〕瀨戸の三島明神をいふ、武藏國久良岐郡金澤にある。

ぜにざ　西に錢座の名のみにて（長町女腹切）

〔錢座〕京都七條河原町にあつて、大佛の西に當る。

せみのをかは　（兼好）（弘徽殿）

〔瀨見小川〕山城國愛宕郡下鴨村の東を流れて糺社の南に至り、賀茂川に入る細流をいふ。

せりふ　山樵も何を思ひに八瀨大原、戀をせりふの里人が（兼好）

〔芹生〕山城國愛宕郡大原の西方、草生・井出の里の古名。ここの文は芹生に臺詞をいひかけたのである。「臺詞」はその條を見よ。

せれふ　せれふしづ原八瀨大原（三國志）

「せりふ」（芹生）をいふ。その條を見よ。

せんぐわんまつ　こうの阿彌陀の影頼む、其誓願の詞の緣、千貫松にぞ着にける（丹波與作）

〔千貫松〕伊勢國河藝郡高野尾の東、豐國野にある錢掛松をいふ。女大名丹前能・五に、「十二三のこめろと見えしがたゞこのみのみ、錢かけ松とはどこぞいなといへば、駕籠の肩指さし、あの松をこそ云なり、むかしより中北迄の道者、太神宮へ奉る散錢一文二文掛置き、いつとなく千貫つもればとて、今は千貫松といへり、いづれ海道の名木、是より津までは今少、云云」。

せんじゆゐ　（女護島）

〔千手井〕比叡山の西谷三所の名水の一で、俗に辨慶水と云ひ、如何なる旱魃でも水涸れないといふ。

ぜんだうじ　偕善導寺りつとうじ（曾根崎）

〔善導寺〕攝陽群談・十二に、「大坂天滿東寺町にあり、境内に大坂巡禮八番觀音堂あり」。

せんだのきのはし　此脇差はせんだの木の橋から川へ、沈む來世は見えぬ沙汰（女殺）

〔栴檀木橋〕攝陽群談・七に、「栴檀の木橋。大和川筋にあり、此所難波橋の下より流水二つに別て、中之島の南北にあり、南を表川といひ、北を裏川と稱す、其表川筋を指て土佐堀川筋と云ふの處也、南は北濱二町目と過書町と號せり、世俗會所町の中間にあり、北は上中之島町の頭に渉る道路也」。難波丸綱目、上四十九の圖參照のこと。

せんにち　お名殘惜しいと申さうか・千日いうても盡きぬこと、其千日が迷惑と、木綿付鳥に別れ行く（冥途飛脚）　すぐに引立て引出す、果は千日千人聞き（女殺）

〔千日〕大阪南區難波河原町千日をいふ、今は繁華熱鬧の地なれど、往時は罪人の刑場墓地で腥風鬼火青く、千日寺の鐘聲陰慘を極めた。

せんぷうばう　宣風坊の北、あらたに栽うる所千金の吟、二葉より馨しく（天神記）

〔宣風坊〕平安京左京永昌坊と淳風坊との間にして、即ち四條大路と五條大路との間にある。宣風坊の北は菅公の生れた地である。「宣風坊の北あらたに栽うる云云」を見よ。

せんぼんまつ　土地の名さへ大時雨、染むる甲斐なきつれなさの、千本松にぞ着きにける（虎が磨）

山停車場から一丁、眞宗高田派の本山であつて專修寺といふ。宗祖見眞大師の開基、本尊は慈覺大師の作、一刀三尊阿彌陀佛である、もと下野國芳賀郡大内庄柳島にあつたのを寛正六年にこの地に移した。第十四代堯秀上人堂宇を再建したもの即ち現在の堂字である。

たかつき 島上郡高槻の家の子(女殺)

〔高槻〕攝州島上郡にある城下の町。高槻の家の子とは、當時の高槻城主永井飛彈守眞清の家臣なるをいふ。

たかとりやま 手に据ゑて見んたか取山(天智天皇)

〔高取山〕大和國高市郡の南境に峙つ山で、一名鷹鞭山といふ。

たかのがは さざれ小あゆののぼりのぼるや高野川、西に清瀧鳴瀧山(兼好)

〔高野川〕大原八瀬の里を過ぎ、叡山の麓を流れて高野村に出て、糺河原にて加茂川に合す。雍州府志・一、山川門・愛宕郡の條に、「高野川。水源出レ自二若狹國一、歷二大原八瀬一、過二叡山麓一、出二高野村一、依號二高野川一、斯川於二糺杜南一合レ流、故糺杜謂二河合一」。

たかまのやま 現在親なよそにのみ、高間の山の櫻染め(加增曾我)

山郭公餘所に見て、高間の山なや過ぎぬらん(國性爺後日)

〔高間山〕高天山とも書く、大和國南葛城郡葛城村高間をいひ、葛城山の上方に當る。この地古來櫻の名所にして、風雅集・巻二、春中部、前中納言匡房の歌にも、「白雲の八重立つ峯と見えつるは、高間の山の花盛りかも」。拾遺集・夏部、「なけやなけ高間の山の郭公、このさみだれに聲な惜しみそ」。

たかやす (井筒)(三世相)

〔高安〕大阪府下中河内郡高安村一帶の地は古の高安の里である。在原業平の高安通ひは伊勢物語などにも出でて名高く、また歌枕の名所である。

たかやすの大明神 高からず安からず、中を取つて河内の國高安の大明神(女殺)

高直と安直とを高安大明神にいひかけていうたのである。「高安大明神」は河内國中河内郡南高安村にある。

たからでら 寶寺かや槌屋のおかれ、打出し突出し新造禿(千疋犬)

〔寶寺〕山城國乙訓郡山崎の寶積寺をいふ。巣林子のここの文は、寶寺の什寶に打出の小槌あるによつて、金を打出す緣で「槌屋のお金打出し突出し」といひ、突出女郎をかけて新造禿といひつづけたのである。都名勝圖會巻四に、「寶寺は觀音寺の南にあり、補陀洛山寶積寺といふ、……、當寺の什寶に打出の小槌あり、聖武帝の御宇龍神捧げしなり」。

たかをやま 太秦戸無瀨高尾山(兼好)

〔高尾山〕山城國葛野郡にある。

たくろく 昔黄帝たくろくの野戰を表しまか大將棊と名づけ(源義經)

〔涿鹿〕支那太古時代黄帝軒轅氏が蚩尤と戰つて之を滅した地。

たけだ 伏見・竹田の賤があきなふ餅求めて(西王母)

〔竹田〕山城國紀伊郡竹田村。

たけのうちたうげ 我から狹き浮世の道、竹の内峠袖濡れて、岩屋越とて石道や(冥途飛脚)

〔竹内峠〕河内國南河内郡駒谷村大字飛鳥から二上山の南を越えて、大和國北葛城郡に出る山路。

たけのした (女楠)

〔竹下〕駿河國駿東郡足柄村の大字、足柄峠の西口で、酒匂川の上流に臨み、小山停車場の西南一里ばかり。

たけべ 近江に建部(日本武尊)

〔建部〕近江國栗太郡勢田村字神領にある建部神社(今官幣中社)。

たざゑもんばし (重井筒)

〔太左衞門橋〕大阪道頓堀に架せる橋。この橋筋にも色茶屋があつたのである。

ただす 折つて手向の賀茂ただす(賀古敎信七墓廻)

ただすの森(弘徽殿)

〔糺〕山城國愛宕郡・下賀茂社を糺宮といひ、其森を糺杜といふ。雍州府志に、「下賀茂社。謂二糺宮一、或作二只洲一、高野川與二賀茂川一於二此社南一合レ流、故或稱二河合神一、又稱二御祖一、或謂レ所レ祭二丹塗矢一、然實所レ祭二大巳貴神一也」。

たちの 武藏に穂坂小野の牧、甲斐にたち野(源義經)

延喜左馬寮式に、「武藏國。石川牧、由比牧、小川牧、立野牧」と見えてゐる。巣林子が「甲斐にたち野」といへるは、武藏の立野の牧を思ひ遣ひしたのであらう。

たちの それに立野の一門中へ祝言が極つて、嫁入道具も出來揃ひ(歌念佛)

〔立野〕現今は龍野(たつの)といひ、播磨國揖保郡にありて山陽鐵路に當る町。

たちばなでら (聖德太子)

〔橘寺〕大和國高市郡にあつて聖德太子の像を安置す。寺傳に聖德太子この殿で誕生されたといふ。

橘(たちばな)の小島が崎 (蟬丸)

宇治川岸にこの名の所があつた。源平盛衰記、高綱宇治河を渡す條に、「橋より引下りて、橘小島に馬を控へ、ここは水は早けれども、遲淺なり、渡せ渡せ」。

たつたがは 濃き紅や薄紅葉、龍田川と疑はる(加增曾我)

〔龍田川〕大和國平群郡にあつて、源を北生駒村に發し大和川に注ぐ。文武天皇この川の紅葉を詠じ給ひてより、龍田川の紅葉の歌古歌に多い。「ならの葉の帝の御目には云々」を見よ。

だつたん 李踏天が引入れにて韃靼夷の奴となり(國性爺)

〔韃靼〕俗に滿洲を韃靼ともいひ、その人を韃靼人とも稱したが、詳しう云へば、韃靼は明の北にある大國(大體今の蒙古の地)であつて、元の亡んだ時その宗族漠北に走り、元の國號を去つて韃靼と稱した。可汗本雅失里(べんやしり)は明及び瓦剌(うえら)に攻められて衰へたが、達延汗(だいえん)立つに及んで國力強くなつて明を苦しめ、清興るや、其諸部皆臣附した。昔靺鞨と稱したもの

上人此島に於て小室を結び從僧(無伯)を露一、西國方より入津の諸船及京大坂堺近郷近里を勸む、檀越之輩毎月子レ是會合して、其功其力を盡て法施を集む、時人號て大佛島と稱す、市店と成るの後、東生郡上鹽町の側に壞移す、誠に故緣の所不廢なり」。篠塚次郎左郎ち篠塚次郎左衞門は正德頃大阪の俳優で大男であり、其藝も賓惡に長じたれば、南都大佛の大きいのと、賓惡の藝を見ては佛の功力を願ふ意をもふくめて、大佛島を思出すといふたのである。

だいぶつでんのくわんじんしよ　命の捨場ぞと大佛殿の勸進所、身を捨つる藪となりにけり(乘非筒)

爰は奈良の東大寺大佛殿の勸進所(脊庚申)

〔大佛殿勸進所〕大阪生玉の馬場先にあつたもので、高津上鹽町卽ち現今の生玉神社から東北、谷町九丁目夕顏寺の南孫墻あたり。この勸進所は貞享の初め南都大佛殿再建勸進の爲に、大佛島に勸進所を建てたが、その地市店となつたので、元祿年間この地に移轉した、その時は上鹽町はまだ田圃であつた。「だいぶつじま」をも併せ見よ。

だいほうじ　此度生玉大寶寺の開帳に築山を飾られたも(脊庚申)

〔大寶寺〕大阪生玉寺町にあつて淨土宗の寺院。攝陽群談卷十二、寺院の部に、「大寶寺。同所(生玉寺町)次にあり、無量山阿彌陀院と號す、開山無學國阿上人、本尊彌陀(三尺五寸)安陀彌の所造也、淨土宗門知恩院末寺なり」。

たいまやま　わたらば中やたい麻山、佛法最初の法隆寺(三世相)

霞絶え絶え當麻山(吉岡染)

〔當麻山〕大和國北葛城郡なる當麻寺をいふ、曼荼羅寺とも稱し中將姬の古跡である。「わたらば中やたい麻山」は、古今集・秋下部の歌の「たつた川紅葉みだれて流るめり、渡らばにしきなかやゝ絶えなむ」の中の句に、當麻山をいひかけたのである。

だいゆうじ　一番に天滿の大融寺、この御寺の名も古りし昔の人も、氣の融の大臣の君が、鹽竈の浦を都に堀江漕ぐ、潮汲み舟の跡絶えず(曾根崎)

〔大融寺〕西成郡北野村にあつて、佳木山と號し、弘法大師の開基で嵯峨天皇の勅願寺である。源融が承和年間鐘樓七堂を建立したによつて、其諱をとつて大融寺といふ。本堂の本尊は千手觀世音で、大阪巡禮第一番の札所である。曾根崎心中のここの文は、第一番の札所大融寺をいうて、其寺に緣故ある融大臣をいひ、「氣の通るを融にかけた。氣の通るとは粹な意)融左大臣が河原院を京都の六條川原に造り、毎月潮三十石を難波より汲み運んで池に入れ、海の魚貝等をすましめ、陸奧鹽竈の浦をうつして海士の鹽屋に煙を立てて、御遊のたよりとされたといふ。「都に」と京都をいひ、「堀江」と難波の地をいひ、「漕ぐ潮汲み舟」といへるも、この故事に據つたのであつて、「舟の跡絶えず」と大阪の繁盛にいひつづけたのである。

たいれい　われ台嶺の雲を凌ぎ(用文章)

〔台嶺〕解釋部「台嶺の雲を凌ぎ云云」を見よ。

だいれんじ　さて金胎寺大蓮寺(曾根崎)

〔大蓮寺〕攝陽群談・十二に、「大坂西寺町(世俗下寺町)にあり、境内に大坂順禮二十九番の觀音堂あり」。

たうのはま　それかと人にたうの濱(嵯峨天皇)

問ふに唐濱をいひかけたのである。唐濱は塔濱とも書き、土佐國安藝郡安田村にある。この地に四國遍路(その條を見よ)第二十七番竹林山神峯寺がある。此邊の山谷に石蛤貝がある。

だうみやうじ　宇陀の郡を立出でて願の道も明けき道明寺へと修行ある(吉岡染)

〔道明寺〕大阪府南河内郡道明寺にある、眞言宗の尼寺で本尊十一面觀世音は菅公の作だといふ。この寺は往古菅公の姨覺壽尼住し、菅公も屢來詣された。現在の寺觀は信長・秀吉の再建にかかり、境内幽靜淨閑である。

たうりん　桃林・赤壁・かれ金山(唐船噺)

〔桃林〕尙書武成篇に「歸ニ馬于華山之陽一。放ニ牛于桃林之野一」とあつて、蔡註に「桃林、今華陰縣潼關也」とある。

たかがをか　(會稽山)

〔鷹岡〕駿河國富士郡の村。

たかくわんおん　竹筒でも致しまして關寺が高觀音へお供して(反魂香)

〔高觀音〕近松寺をいふ。近江國滋賀郡大津の西南、逢坂山の北尾の上にある。

たかさご　名も塔伽沙古島、これ福建の領内にて元の名は大寃國(唐船噺)

〔東寧〕臺灣の異稱。華夷通商考卷三に、「大寃ニ或臺灣、又ニ名アリ東寧、塔伽沙谷」。「臺灣鄭氏紀事卷之上に、「臺灣澳外沙堤名爲ニ崑身一、自ニ大崑身ニ至ニ七崑身一、起伏相望、狀如ニ龍蛇一、復有ニ北線尾鹿耳門一爲ニ臺灣門戶一、我海商之往貿ニ販其地ニ者、占ニ據北線尾一、呼ニ其地ニ爲ニ塔伽沙古一、曾高砂」。

たかしのはま　難波の浦の春風に高師の濱や住吉の(鎌田)

「高師濱」和泉國泉北郡にあり、堺市の南、濱寺臨海の松原をいふ。

たかしま　佐佐木源氏の旗頭高島の屋形とて(反魂香)

〔高島〕近江國にある郡名。

たかしやま　去年十月高師山のお狩場(脊庚申)

〔高師山〕三河國渥美郡と遠江國濱名郡とに跨る丘陵にして、二川と白須賀との間にあつて、古來海道の名勝地として知られてゐる。

たかだち　忠衡が人を遣はし高館を追拂うてのけんずと(源義經)

〔高館〕衣川館ともいふ、陸中國今の平泉驛の北凡六町、金鷄山東北に連る丘上にあつた、今は北上川近く流れてゐれども、その昔は遙東に流れてゐたのである。

たかたのてら　早明方のお八つの太鼓の聲は高田の寺(丹波與作)

〔高田寺〕伊勢國河藝郡一身田村にありて

之本・流黃が島に、「しまは十二島、はじめは白石が島、ちどりが島、硫黃が島云云」。

ちどりがふち （娥）

〔千鳥淵〕山城國葛野郡嵐山の麓、大堰川渡月橋の上手。

ちもり 傾城奉公に身を賣つて、卽ちちもりの色里に小磯と申し候由（三國志）

〔乳守〕堺港南半町の東にあつて、南北に通ずる街の名で、遊廓がある。

ちやうあんじ 菩提の種やうへ寺町のちやうあん寺（曾根崎）

〔長安寺〕攝陽群談・十二に、「東生郡八町目中寺町西側にあり、境內に大坂巡禮十四番觀音堂あり」。「大阪三十三所」を見よ。

ちやうかうだう （女護島）

〔長講堂〕嘉應元年後白河法皇の御建立（律宗）で、舊六條殿內にあつた、後に土御門に移し、現今は京都下京區下寺町にあつて淨土宗。

ちやうふくじ 鷄も一番に長福寺（曾根崎）

〔長福寺〕攝陽群談・十二に、「大坂天滿西寺町にあり、境內に大坂巡禮五番觀音堂あり」。序に云、攝陽群談、及び難波丸綱目の二書共に、長福寺の觀音堂を大阪巡禮五番とすれど、曾根崎心中の觀音廻りのここの文には、二番となつてゐる。「大阪三十三所」を見よ。

ちやぐちう ちやぐちう左衞門（國性爺）

〔漳州〕支那福建省に屬し、今の龍溪縣はその舊地。華夷通商考（寶永五年刊）卷二に、「漳州」に「チヤグチウ」と傍訓してある。

ちやぼ 占城次郞（國性爺）

チアンバ（Champa）を云ひ、漢字で占城と書き、現今の佛領印度支那交趾・首府サイゴン附近の地をいふ。

ちやるなん ちやるなん四郞（國性爺）

印度のチヤウル（刹兀兒）國をきかせたものか。茶字編といふ名はこれから起つたのである。

ちゆうざんじ 「なかやまでら」を見よ。

ちりふ みやへあがれば池鯉鮒へ四里（丹波與作）

〔池鯉鮒〕三河國碧海郡にあつて鳴海と岡崎との間。東海道五十三次の一。

ちよのふるみち 向ふは千代の古道に、續きておろす嵐山（三世相） 治まる千代の古道や、嵯峨の天皇のしろしめす安國（嵯峨天皇）

〔千代古道〕山城國葛野郡嵯峨にある名所。雍州府志・古蹟門下、葛野郡の條に「千代の古道＝在二帶取池西南一是則自レ京所レ赴二上嵯峨一而是道稱二上道一傍レ北所レ行也、藤原定家卿千代古道跡登米氏之詠歌、人所二遍識一也」。

つうてんの紅葉 （女夫池）

〔通天紅葉〕京都東南にある東福寺に、東に惠日山を負ひ溪の兩邊楓樹が多い、此處を通天といふ。秋季の末滿山の紅葉溪に映じて風景絕佳である。

つきかげ 月影の阿佛屋敷（最明寺殿）

〔月影〕相州鎌倉極樂寺の境內の西二三丁離れ二月影が谷がある。この奧に阿佛尼の屋敷跡がある。十六夜日記に「東にて住む處は月影が谷とぞいふなる、浦近き山もとにて風いと荒し、山寺の傍なれば、のどかにすごくて浪の音松風絕えず」。

つきのわ 然らば茱月の輪山の樵路より先を拂つて御供せん（三國志）

〔月輪〕山城國洛東・泉涌寺域及び東福寺の東方なる山谷の名。

つくばね

「筑波嶺の峯より云々」（四四五頁）を見よ。

つくま 髮染むる藥をと仰せに任せ腰元達、思ひつくまの鍋墨を油に溶きて揉み附け（井筒）

〔筑摩〕近江國坂田郡筑摩に祀れる神で、文德實錄に、「仁壽二年二月授二近江國筑摩神從五位下一」と見えてゐる。往昔四月一日に祭禮を行つた。伊勢物語の歌に、「近江なる筑摩のまつりとくせなんつれなき人の鍋の數見ん」とあつて、新釋に、「彼の神の祭には、女の一生のあひだあへる男の數ほど、鍋をかづきてわたるといふことのあればなりけり」と見えてゐる。巢林子のここの文は、思ひ附くに筑摩をいひかけ、筑摩祭に被く鍋に附着せる油烟を油で溶いて揉み附けるとの意。

つげのがはら （非筒）

〔都介野原〕鬪鷄野が原とも書いてある、今の大和國山邊郡都介野村の原。

土山の田村堂（つちやま） 心は鬼神と出たれども、土山の田村堂でつい平らげてのけらるる（丹波與作）

土山は近江國甲賀郡にある。東海道名所圖會卷二に、「田村明神祠。土山の驛の東にあり、驛中東の方の生土神とす」。近松のこの文は、謠曲・田村に「鬼神の上に亂れ落つれば、ことごとく矢先にかかつて鬼神は殘らず討たれにけり」、とあるを應用したのである。「三十三匁が質おいて云云」（四一一頁）をも見よ。

鼓が瀧 （國性爺）

國花萬葉記卷十四下、肥前國中名所之部に「鼓の瀧。古來より和歌に讀まれたるは、かならず此國の瀧の名なり」。

つつみのちやや たつた今堤の茶屋で大阪へ戾り駕籠の咄で聞いた（宵庚申）

〔堤茶屋〕淀川堤の水茶屋。

つづらやま つづら山には辻放下（大織冠）

〔九折山〕奈良の若草山を云ふ。大和名所圖會に「若艸山。三笠山の北にならびたる山也、延寶記曰、ここを皆人つづらを山といふは九折（つづらをり）といふ事にや」。

つなしきのてんじん （天神記）

〔綱敷天神〕筑前國博多郡綱場天神をいふ。

つののまつばら 角の松原陰暗く、暮れぬさきよりまづ暮れて（天神記）

〔角松原〕攝津國武庫郡津門村にある。

つむらのしんごりやう 夢な津村の新御靈（卯月紅葉）

〔津村新御靈〕大阪二十二社の一。攝津名所圖會・四上に、「御靈宮。船場平野町西鑑井町、南は津村町の間にあり」。祭神三座＝天照太神、八幡宮、鎌倉權五郞景政。境內に大阪三

は清の興起した[illegible]より入つてあるか ら、江戸時代には[illegible]同じく のに云はれてゐる。

たどのうら　漸う辿り多度の浦、身の丘亂せし大島毛（隅田川）

〔多度浦〕讃岐國多度郡の北邊海に面する海邊をいふ。多度郡は明治三十二年那賀郡と合併して仲多度郡といふ。

たねがしま（國性爺後日）

〔種子島〕大隅國佐多岬の南東にあつて、大隅群島中で最北最大な島。

たはらもと　生國は大和田原本、幼少で二親に離れ（双[illegible]朝日）

〔田原本〕大和國磯城郡田原本町。

たふのさは　塔の澤とはあれやらん（虎が磨）

〔塔澤〕相模國足柄郡湯本村にある。

たへまやま　「たいまでら」を見よ。

たまがは　木の下露の玉川の、毒の雫も降るならば、身に疵付けず死にたや（萬年草）

〔玉川〕紀州高野山の奥の御廟橋の下を流るる川をいひ、俗に毒水であるといふ。風雅集・卷十六・雜中部の弘法大師の歌に、「高野の奥の院へ參る道に、玉川といふ河の水上に毒蟲の多かりければ、この流れを飲むまじき由を示し置きて後よみ侍りける」と詞書ありて、「忘れても汲みやしつらむ旅人の、高野の奥の玉川の水」。

たまさはむら　煌く露の玉澤村、闇はあやなし梅澤村（會稽山）

〔玉澤村〕伊豆國田方郡錦田村の大字で、箱根山西の幽谷なる三島町の東一里にある。

玉島川（たましまがは）　玉島川にあらねども小鮎さばしるせゞらぎに（大職冠）

〔玉島川〕肥前國松浦郡にある。神功紀に、「夏四月北到二火前國松浦縣一、而進二食於玉島里小河之側一、……因以挙レ竿乃獲二細鱗魚一、時皇后曰二希見物一、故時人號二其處一曰二梅豆羅（うづら）國一、今謂二松浦一訛焉、是以其國女人毎レ當二四月上旬一、以レ鈎投二河中一捕二年魚一、於レ今不レ絶、唯男夫雖レ釣不レ能レ獲レ魚」。「玉島川にあらねども云云」をも見よ。

たまつくり　つらぬく汗の玉造（曾根崎）　あたのくかほにあたる日を、そでてかざしの玉造、稲荷のみやゐここもまた（卯月紅葉）

〔玉造〕大阪城南の郷名、ここに稲荷社ありて倉稲魂神（うかのみたまのかみ）を祭る。城内に大阪順禮第十番の觀音堂がある。攝河泉名勝に、「大阪城の南方の郷名、神代の昔玉祖命此地にて玉を造られしよりの名とも、又聖德太子の四天王寺を營まれし時ここにて瓦を造られしよりの名ともいふ」。攝陽群談・十一・十二に、「玉造稲荷宮。大阪城の南玉造にあり、祭神倉稲魂神、此社地に大坂順禮第十番の觀音堂あり」。

たまみづ　玉水のあたりに着きにけり（雪女）　六郎左衞門高貞やうやうに切りぬけ、玉水のあなたなる筧がもとに着きしかど（三世相）　玉水近き山城の、村は上田に家富みて（[illegible]）

〔玉水〕山城國綴喜郡井手村にあり、奈良街道の一驛で、玉水の井とて有名なる井があつた。

たみのしま（生玉）

〔田蓑島〕「雨に着る田蓑の島」を見よ。

たむのみね（大織冠）

〔多武峯〕大和國磯城郡にあり、談山神社ありて鎌足公の靈を祀る。境内に有名なる十三重塔あり、社殿麗はしく風景絶佳にして關西の日光の稱がある、社殿の後の山を登り行けば奥の院と稱して鎌足公の墓所である。多武峯とは談（たむ）の峯の義にして、中大兄皇子が鎌足公と入鹿誅滅のことをこの所にて談合し給うたによつて起れる名。

たるゐ　刈穗の庵の夕雫、垂井の宿はこれとかや（小栗判官）

〔垂井〕美濃國不破郡にありて、今・垂井町といふ。

だんどくせん（釋迦）（弘徽殿）（吉岡染）

〔檀特山〕印度にある山で彈多落迦（だんたろうか）山の訛。西域記に、「彈多落迦、舊曰二檀特山一訛也」。悉達太子十九歲にして出家し檀特山に入られた。

ぢうぐわんじ　十七番にぢうぐわん寺（曾根崎）

〔重願寺〕攝陽群談・十二に、「重願寺。谷町筋八町目寺町にあり、境内に大坂順禮十七番觀音堂あり」。「大阪三十三所」を見よ。

ちか　唐土船を松浦川、港もちかの浦風に（國性爺）

〔値賀〕肥前國東松浦郡の村名。

ちくしやうもん　法の如く畜生門の刑に行はれば、雨は早速降り申さん（以呂波）

〔畜生門〕京都東寺にあつた土穴の門をいひ、南大門から二十間程東にあつた。好色一代男卷八、一盃たらいで纐里の條に、「今日は東寺の御影供、……、畜生門の邊に暮らさせ」。畜生門の刑は、往昔東寺で破戒僧等に行つた刑罰である。この以呂波物語に、「抑も畜生門の流刑と申すは、科人の衣裳を剝ぎ、別火にて燒棄て、額に犬といふ文字を書させ、東の土門を開いて追ひ拂ふ掟なり」とある。北村季吟撰・菟藝泥封卷二に、「東寺南大門二十間ばかり東の穴門を畜生門といへり、衆徒もし非法のふるまひあるものは、袈裟衣を剝ぎて此門より追放す、佛弟子として破戒無慙のありさま畜生同等といふ心なるべし」。

ちごがたき　今宵散り行く初櫻、稚兒が瀧とぞ涙ぐむ（萬年草）

〔稚兒瀧〕高野山中・花折坂の下一丁餘、一條の瀧斜に翠壁に懸つてゐる。

ちごがだけ　望みは高き百餘丈兒が嶽（嵯峨天皇）

〔兒が嶽〕國花萬葉記卷十四上、讃岐國佛閣之部、八十一番白峯寺の條に、「此寺に兒が嶽といひて百餘丈の嶽あり」。

ちぢわむら　ちぢわ村の數右衞門と幟旗に書き記す（蛙合戰）

〔千千石村〕肥前國南高來郡にある村名、千千石灘の灣頭である。

ちどのしま　南に高く霞かかるはちどの島なり（國性爺）

鬼界十二島の一なるちどりの島のことか。舞

と言うたのである。雍州府志（貞享三年刊）六に「甜瓜。倭俗專賞レ之、所所有レ之、然東寺邊其味爲レ勝、世稱二東寺眞桑一」。水葉（京葉のこと）もこの地の名物である。雍州府志・六に、「水菜。東寺九條邊專種レ之、元不レ用二糞穢一、而引二入流水於畦間一耳、故稱二水入菜一」。

東大寺大佛殿の勸進所 （胥康申）
「だいぶつでんのくわんじんしよ」を見よ。

どうてい 洞庭の秋の月（百合若）
〔洞庭〕洞庭湖は支那湖南省にあつて、長さ二百里、廣さ百里、華陽、南縣、安鄕、漢壽、沅江、湘陰の各縣が之を環つてゐる。方輿勝覽、岳州洞庭湖の註に「在二巴陵西一、西吞二赤沙一、南連二青草一、橫亙七八百里、日月出二沒其中一」。洞庭の秋の月は瀟湘八景の一である。「瀟湘（せうしやう）の夜の雨」を見よ。

とがくしやま 餘吾將軍平の維茂、戸隱山の下紅葉色に引かれて梓弓やたけ心なくみて知る、所は山路の菊の酒何かは苦しかるべき、一樹の緣の假枕夢とも分かぬ鬼女の形（五人ケ弟）
〔戸隱山〕信濃國水内郡にありて裾花川の源に當る。謠曲・紅葉狩に、平維茂戸隱山で上﨟の酒宴せるに遇ひ、共に酒に醉うたが、忽ち今まで女であつた者が鬼神と變じたので、維盛これを退治することを作つてある。舞我五人兄弟のここの文は謠曲・紅葉狩に據つたもので、「所は山路の菊の酒何かは苦しかるべき」とあるも謠曲、紅葉狩にある文である。

ときはのさと （大鏡）
〔常盤里〕京都府下雙岡の西南、今の太秦村に屬し常盤谷をいふ。

ときはのさと （加増曾我）
〔常盤里〕信濃國下水内郡にあつて飯山町の北。

ときはまち 常盤町の從弟が所に預けて置き（胥庚申）
〔常盤町〕伏見立賣町を延寶八年に常盤町と改稱した。大阪東區伏見兩替町と鐘屋町との間にあつて東西に通じ、昔は一丁目から四丁目まであつた。

とくあんつづみ ついでを賴みの乘合船は借切るよりも得菴堤、共に舳を漕付けて（女殺）
〔得菴堤〕鯰川の上流寢屋川の北、得菴村の堤防をいふ。ここの文は「借切るよりも徳」を「得菴堤」にいひかけたのである。「たかやま」の條に載せた地圖に就いて見よ。

とくねぎ 李郞耶兄弟追付き奉り、とくねぎの城攻め取られ（三國志）
倭漢三才圖會卷六十四、朝鮮地圖に「東萊」とあつて、「トクネギ」と傍訓してある。東萊は慶尙南道にあつて釜山の北。

とこのしま （女護島）
〔理髮島〕周防國都濃郡富田町の南にある島。

とこのやま （小栗判官）
〔床山〕鳥籠山とも書き、近江國犬上郡にある。木曾路名所圖會卷一に「鳥籠山＝いさや川の上にあり、俗に鍋尻山とも云」。

とどきのふち 汝は急ぎ若を連行き、松川の奥とどきの淵へ沈めにかけよ（伊豆日記）
「まつかは」（松川）を見よ。

とどろきのごばう （出世景清）
〔轟の御坊〕京都淸水寺にある坊名。黑川道祐著、雍州府志・卷四、寺院門上（愛宕郡）の條に、「淸水寺。寶龜十一年坂上田村丸草二創伽藍一、安二置八尺千手觀音一、大同年中諸堂成、延鎭爲二開基一云云、目代謂二慈心院一、倭俗監吏謂二目代一、俗家借二其名一而稱レ之、慈心院始在二轟橋前一、故或曰二轟坊一云云」。

とどろきのはし 轟の橋とどろかす（天智天皇）
〔轟橋〕奈良東大寺興福寺の間にあつて、雲井坂の南。大和名所圖會卷二、添上郡の條に「轟橋＝東大興福兩寺の中間、押明の門の南にあり」。國花萬葉記・卷三、大和國添上郡の條に「轟の橋＝東大興福兩寺の中間押明の門の南邊に有、同ならびに雲ゐ坂」。

とどろきばし 轟橋の松影より鷹の羽の鎧印（持統天皇）
「とどろきのはし」を見よ。

となせ 太秦戸無瀨高尾山（兼好）
〔戸無瀨〕山城國葛野郡嵐山の下なる淺瀨をいふ。

とびた どうで野枝か飛田ものと（曾根崎） たはぶれながら行く道の、跡は飛田に立つ煙、夢か現か亡き人の（三國志）
〔飛田〕鵄田または鳶田とも書いてある、大阪府西成郡今宮村にありて大阪七墓の一である。四天王寺史に、「鵄田、處在二今宮村之南、天王寺之墓所一、太子所封也」。蘆分船（延寶三年刊）卷二に、「飛田。火葬の煙絕えやらず、白骨は地よりも高く涙の雨はしきりに、古塚の草葉の露と消えにし人人を歎へ見れば誰ありて殘るべき」。攝陽群談・卷九、塚の部に、「鳶田墓所。東生郡今の鳶田地にあり、四天王寺前に近里の諸人死を葬の處也」。

とぶひの （大織冠）（出世景清）
〔飛火野〕奈良縣添上郡春日野の北向荒神の所を云ふ。舊迹幽考に、「飛火野。東大寺の前に北向荒神と云ふ社あり、その所を云ふ」と見えてゐる。

とほざとをの とほざとをのや阿部野の原（三國志）
〔遠里小野〕攝津國東成郡墨江（すみのえ）村の大字。萬葉集に「住吉の遠里小野の眞榛もて」とある地で、今ヲリヲノと訓む。

とまり さぞな呼子の浦過ぎて、誰にとまりの磯なれば（國性爺）
〔泊〕筑前國糸島郡前原村大字泊。

とみのをがは 川音水はしる富の小川を打越えて、斑鳩の御所へぞ參りける（聖德太子）
〔富小川〕大和國生駒郡の北境、北倭村高山より發し、南に流れて佐保川に合す。この川鳥見（とみ）の地を流れるを以二富小川と稱ふ。斑鳩（いかるが）を流れる川。

外山（とやま） （井筒）
「秋篠」を見よ。

とよくの 足も輕輕心もひろき、とよくへ野とこそ樂しみし（丹波與作）
〔豐國野〕伊勢國河藝郡高野尾村の東、窪田よ

十三番觀音堂がある。巣林子のここの文は、夢うつつといふ熟語の夢うつが夢をつに其音似てゐるから、夢を津村にいひつづけたのである。

つるがはし　冬年も鶴が橋のお婆婆へ大きな鏡に目黑添へてすゑられた（夕霧）

〔鶴橋〕今大阪の東郊奈良行電車の鶴橋驛あたり。

つるさき　機織やその藤袴破るなと、鳴くか茨のつるさきに、野飼の駒のやさしくも（用明天皇）（二枚繪）

〔鶴崎〕豐後國大分郡にあつて、大分市の東二里十町、大野川口に當り、今鶴崎町といふ。巣林子のここの文は、茨が蔓のやうに延びるから、茨の蔓というて鶴崎にいひかけ、この少し後の文に「べう」（別府溫泉であつて、べふを犬の鳴聲べうにかけた）といへるも、何れも玉世姫の父眞野の長者の居る豐後の地名を書き込んだのである。

つゑつきざか　杖突坂・小谷・大谷打過ぎて（博多）

〔杖突坂〕伊勢國三重郡内部村にある山路。

てうせんじ　紋に揚羽のてうせん寺（曾根崎）

〔超泉寺〕攝陽群談十二に「大坂天滿東寺町にあり・境内に大坂巡禮七番觀音堂あり」。巣林子のここの文は、揚羽の蝶を超泉寺にいひかけたのである。

てごしがはら　今は夜ごめに引きかへて、てごしがはらはほの暗く（今川了俊）

〔手越河原〕駿河國安倍川の西岸に當り、往時は海道の一驛であつた、

てつかいがだけ　我が爲の鐵枴が嶽鵯越（川中島）

〔鐵枴嶽〕攝津國武庫郡六甲山脈の一にして、源義經が下りて一の谷に攻入りたる鵯越の險がある。攝陽群談・卷三、山の部に「鐵枴峰。俗傳云、鐵枴仙は吐レ氣現二我相一、仙境を出で二暫く此峰に遊歷す、因て鐵枴の名あり、或は勇州剛力の樵夫鐵枴を以て山に入り、歐駄の薪を荷ふ、時の人彼を號て鐵枴と稱す」。

てつゐせん　金剛須彌山・てつゐせん、峰の嵐に落葉して（加增曾我）

〔鐵圍山〕須彌山の外方を繞る鐵山。俱舍論・十一に、「於二金輪上一有二九大山一、妙高山王處レ中而住、餘八周匝遶二妙高山一、於二八山中一前七名レ內、第七山外有二大洲等一、此外復有二鐵輪圍山一、周市如レ輪、圍二一世界一」。

寺・御幸・麩屋・富・柳・堺町・間の東は車、烏丸・雨が室、衣・新・釜・西・小川、油・醒が井・堀川の（堀川波鼓）

京都竪通りの町名を順にいうたのである。寺は寺町、御幸は御幸町、麩屋は麩屋町、富は富小路、柳は柳馬場通、間は間町、東は東洞院、車は車屋町、雨は雨替町、室は室町、衣は衣棚町、新は新町、釜は釜座、西は西洞院、小川は小川町、油は油小路、醒が井町と堀川通。

玉敷の御垣にかこふ五つ緒の車といへるは、車に車屋町をきかせたるにて、他は文飾である。「五つ緒の車」につきてはその條を見よ。

てんがい　てんがい・般若坂（女護島）

〔轘礙〕奈良東大寺西門の邊をいふ。坊目考に「尋尊僧正七大寺巡禮記曰、天平之朝、瑪瑙轘礙在二東大寺食堂厨屋一、是高麗國所レ貢也、謂二其西門一曰二轘礙一、云云」。

天下茶屋　この所に茶店をしつらひ天下茶屋と名付け、往來の旅人に一服の茶を與へ、今日の悦びを末代諸人にあやからせよと御諚ある（三國志）

攝津國東成郡今宮より住吉に通ずる路にある。攝陽群談卷十、古地舊屋の部に、「天下茶屋＝西成郡勝間村の東の新家にあり、豐臣秀吉公堺政所入御の時、此茶店に於て休息し給ひしより世に天下茶屋と稱す、今人地名の如くせり」。

てんじんのもり　神の昔も念力の、示現は今もあら人神、天神の森にぞ着きにける（女楠）

〔天神森〕河内國南河内郡道明寺村土師神社（道明寺天滿宮）のある森をさす。明治十年明治天皇大和行幸の際、長くも駐蹕あらせられ給うた所。

てんじんばし　福德に天滿神の名をすぐに、天神橋と行通ふ（天網島）

〔天神橋〕攝陽群談・七に、「大和川筋天滿橋の西にあり、南は京橋六丁目、北は天滿十一町目に涉り、西成郡南長柄に出る處也」。

てんたいざん　魂は震旦の天台山に逍遙ある（最明寺殿）　あれこそ日本天台山、四明の洞をうつさるる、麓に山王二十一社（簇翻胎内捃）

〔天台山〕支那浙江省台州天台縣の西にあり、隋の智者大師この山に天台宗を唱へた、よりて智者大師を天台大師と呼び、その宗門を天台宗といふ。我國にては傳教大師唐より天台宗を傳へて比叡山に弘敎す、よりて比叡山をまた天台山と稱す。

てんぢくのやま　轉軸の山おろし（萬年草）

〔轉軸山〕天竺山とも書き、弘法大師廟の背後に三峯ある中の西にある山。

でんぼ　八つの太鼓がでんでんでんぼ、あとがやとやの伊丹へいけ田（氷朔日）

傳法であらう。大阪府下西成郡傳法町あたりの地をさす。

てんまばし　この世を捨てて行く身には、聞くも恐ろし天滿橋（天網島）

〔天滿橋〕大阪天神橋の東に架せる橋で、谷町筋に當る。ここの文は、天滿に天魔をいひかけたのである。

てんもくざん　天目山の森の蔭、高坂彈正原五郎左右に別れ（川中島）

〔天目山〕甲斐國東八代郡の東北隅なる山で、南は笹子嶺に連り初鹿野山の支峯である。

とうじ　瓜實顏の旦那殿・東寺から出た人さうな（丹波與作）　東寺の水菜を一走り取寄せ（嵯峨天皇）

〔東寺〕京都東寺あたりは往時瓜の名產地なれば、瓜實顏の緣で、「東寺から出た人さうな」

ト住吉郡住吉村ニアリ、能因法師歌枕攝津國ノ名所ニ比ス」。

なぎさのゐん 禁野を過ぎてなぎさの院(蟬丸)

〔渚院〕河内國北河内郡牧野村大字渚は古の渚院のあつた所であらう。伊勢物語に「今狩する交野の渚の院の櫻殊に面白し」。名所圖會に「渚院は今觀音堂となす、堂前に五本櫻こて枯朽して僅に存せり、歌に渚森と詠ず」。

なこそのせき (門田八島)

〔勿來關〕磐城國石城郡にありて、現今其址は鐵道常磐線勿來驛より十五丁の距離にある。

なごやがやつ (最明寺殿)

〔名古谷谷〕相模國鎌倉郡にある。

なすの (門田八島)

〔那須野〕下野國那須郡中央の曠原の汎名。

なち 岸打つ波は補陀落や那智は千手觀世音(反魂香)

〔那智〕紀州熊野三所權現の一にして、千手觀世音を安置し、西國三十三所第一番の札所である。

なとりがは 呼ばれて粹の名取川、今は手代と埋木の、生醬油の袖したたるき(曾根崎)

〔名取川〕陸前國名取郡を流れる川の名であつて、この所から埋木を産す。觀聞志、名取川の條に「世稱二埋木一者、燒二河中沈木一用レ之、其色紫赤、於二歌詠一亦賞二吟之一者多」。曾根崎心中のここの文は、名取川と云うたから、次に埋木と云うたのである。歌謠部「我が戀路は緣なき三味(しやみ)よ云々」(五一九頁)をも見よ。

ななせがは 都に通ふ鳥羽畷、其片里の七瀬川(女夫池)

〔七瀬川〕山城國紀伊郡深草の西南に在る

ななせのよど 幼遊も睦じく、七瀬の淀に行く水も、昔の影や隱れん坊(國性爺)

〔七瀬淀〕肥前國東松浦郡玉島の小川七瀬の淀のことであらう。萬葉集・卷五・雜歌部に、「松浦川七瀬の淀はよどむとも、我はよどまじ君をし待たむ」、とある松浦川も玉島の小川をさすものだといふ。

七つのみち 七つの道四つの海(三國志)

〔七道〕北海道の設置されない以前、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道をいふ。

なゝのやしろ どう取の祈は四三五六社大明神、八かう七の社(女殺)

〔七社〕近江國滋賀郡比叡山なる日吉神社を山王七(なな)の社と云ふ。二十二社式に「大宮三輪同體、二宮國常立、聖眞子八幡、八王子國狹槌尊、客人菊理姫白山、十禪師天津彦彦火瓊瓊杵尊稻荷、三宮豐斟渟尊、已上七社」。

なゝばか (賀古教信)

〔七墓〕攝津國にある七墓即ち、長柄、蒲(かも)、小橋(をはせ)、梅田、千日、高津、飛田の七墓地をいふ。(七墓廻は後後までも流行しだんだんに弊害を生じたので、天保十三年の御觸に、毎年千日參り七墓廻と稱し、男女の混じ夜間鉦鼓を打つて參詣するを禁じたことが見えてゐる)。

なにはこばし あれ見や難波小橋から舟入橋の濱傳ひ(天網島)

〔難波小橋〕攝陽群談・七に、「蜆川の頭にあり、此所は淀大川筋難波橋の下(しも)、大江橋の上手より北に入り西に下る處也、東西共に堂島新地一丁目の渉にあり」。

なにはのごばう これは難波の御坊の御普請の奉加銀、今此處に有合せた(冥途飛脚)

〔難波御坊〕大阪東區北久太郎町四丁目にある、大谷派本願寺別院にして世に難波御堂或は裏御堂または南御堂といふ、本尊は安阿彌作の阿彌陀佛である。

なにはばし 世は何事も難波橋、よしとあしとの堺筋、中に立つたる賤が身は、不便と思へ備後町(氷朔日)

〔難波橋〕淀川に架せる橋で、天神橋の西。(大阪地圖を見よ)。ここの文意は、世は何事も何やかやと世評にのるといふを難波橋にいひかけ、善評惡評の境界(堺筋にかけた。堺筋は大阪地圖を見よ)の中に立つ與兵衛が身は不便と思へといふのであつて、不便と同韵備後町にいひつづけ、備後町はお龜與兵衛の家のあつた北久太郎町と堺筋との中間にあるによつて、中に立つたるといひ、お龜與兵衛が情死せうとして通つた町である。

なば 夜さの泊はどこ泊ぞ、なばかしやくしか室が泊か(松風)

〔那波〕播磨國赤穗郡那波村をいふ、今・山陽線鐵道停車場がある。

なべがちやや 紅葉たけたけなべが茶屋(淀鯉)

〔鍋茶屋〕河内國北河内郡枚方(ひらかた)の神鍋(かんなべ)山の茶屋をいふ。井原西鶴撰、一目玉鉾に、「枚方は此所母敢の番所、山に御茶屋あり」とありて、その圖を載せてある。

なまづがは なまづ川よりゆらゆらと野崎參りの屋形船(女殺)

〔鯰川〕大阪網島と片町との間を流れる川、(大阪圖を見よ)。昔時大阪より野崎觀音に參詣する者、多くは鯰川より船を浮べて川を上つた。攝陽群談卷三・川の部に、「鯰江川。東生郡大阪市店の東にあり、南は片町東町、北は野田町といふ、所傳、漁者是に網す、鯰魚多きに因れり」。

ならびのをか 太秦戸無瀨高尾山雙の岡(兼好)

〔雙岡〕山城國葛野郡妙心寺の西にある。

なるたきがは (娥)

〔鳴瀧川〕宇多川の上流で、般若寺の南にある急湍をいふ。

なるたきやま 高野川西に淸瀧鳴瀧山(兼好)

〔鳴瀧山〕山城國葛野郡にある。

なるを とどろとどろと遠く鳴尾の海かと聞けば(今宮) なるなざき(三國志)

〔鳴尾〕攝津國武庫郡武庫川口の砂嘴で、昔は灣邊にあつたが、年々沼沙堆積して洲をなし、現今は海まで二十四丁ある。

なれあひ 丹後の名所が見せましたい、なれ合切戸天の橋立(浦島)

〔成合〕丹後國與謝郡府中村の北、世谷山なる

り板本に至る間にあり、此處に鏡掛松があつて太神宮の遙拜所である。

とよらのてら　雲をめぐらす車坂、豐浦の寺は霜降りて（大織冠）

〔豐浦寺〕大和國高市郡飛鳥村にあつた寺で元興寺のこと。

とりかひ　天晴駿足御馬ざふ、いづれの牧より曳かれしぞや、みづの御牧か鳥飼か（源義經）

〔鳥飼〕攝津國三島郡鳥飼村味生村の地は往昔の牧野である。

とりべやま　あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ち去らで、住み果てぬ世の定めなや（兼好）

〔鳥部山〕東山なる阿彌陀峯の麓にあつた火葬場の地。文化增補の京羽二重大全卷四に「鳥部山。愛宕郡蓮花王院の東にあり云云」。徒然草・第七段に、「あだしのの露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住みはつるならひならば、いかに物の哀れもなからむ」。

とりゐがだけ　南は甲斐に續きて鵬尻峠、北は越後に隣つて鳥非が嶽（川中島）

〔鳥居嶽〕信濃國西筑摩郡にある山にして、木曾川奈良井川の分水嶺である。

とをざとおの　「とほざとをの」を見よ。

とをち　龍田の川の卯の花や、十市の里の夏衣（鐵田）

〔十市〕大和國磯城郡にある。もと「とほち」と云ふ。和名抄に「止保知」とある。

とんきん　東京兵衞（國性爺）

〔東京〕トンキン（Tongking）は印度支那の最東北の平野を占める王國で、古の交趾の地に當り、現今は佛國の保護國である。

どんぐりのつじ　どん團栗の辻な出づれば建仁寺（女腹切）

〔團栗辻〕國花萬葉記卷一、山城洛外之町の部に、「どんぐりの辻子　けんにん寺町さがる丁にて、西へ宮川町・石がき丁へ出る」。京羽津根卷二、洛中辻子の條に、「頓栗辻子（どんぐりのつじ）＝建仁寺町四條下西へ宮川筋石垣町へ出る所、この頓栗の辻子中程南行所新道といふ」。京都地圖をも見よ。

とんだばやし　泣くか笑ふか富田林の群鴉（冥途飛脚）

〔富田林〕河内國南河内郡にある町名で、大阪を距る約九里。東高野街道の驛次である。

ないけうばう　其日も既に午の刻限昨日の頃ぞといふ間もなく、内教坊の後より嘶き出づる惡馬の相形（關八州）

〔内教坊〕茶園の南、左近衞の北、大宿直の東にある坊で、女樂及び踏歌を調習する處である。百寮訓要抄に、「内教坊。女の舞人の候所也、今も踏歌の舞妓などは内教坊より參る、女の舞樂せさする所なり」。

ながいけ　漲り渡す長池や（雪女）夜は長池の水の泡、水の淀みに我とても（淀鯉）

〔長池〕山城國久世郡にあつた驛名で大和街道に當る。昔は驛の附近に長池と稱する池があつた。釋白慧撰・山州名跡志卷十六、久世郡の條に、「長池。池の形南北三町餘、東西二町許云云、今埋て田となす」。

なかがは　戀の中川なかむかし、御方違の御幸町（大原問答）

〔中川〕東に賀茂川、西に桂川が流れ、その中間にある京極川を中川といふ。巣林子のここの文は光源氏の昔が方違に中川なる空蟬の家に行き、空蟬と戀仲となつたといふ故事によつたもので、このことは源氏物語帚木の卷に見えてゐる。

なかばし　月は早渡ぞめして中橋や（重井筒）

〔中橋〕今は相合橋といへど昔は中橋といつた。心中重井筒の作られた時は新築中と見えて、心中重井筒の中卷に、「なんと中橋架けたの、欄干渡すばかり、春は町中渡りぞめ」と見えてゐる。

ながほり　是よりすぐに長堀まで參れば（冥途飛脚）

〔長堀〕大阪新町遊廓の南手の川。

なかまち　神祇釋教戀無常、中にこめたる中町や（氷朔日）變る瀨枕沈む淵、思ひ二つの中町や（二枚繪）櫻橋から中町あたりぞめいたら、どこぞでは紙屑ふみにじつてくりよ（心中天網島）中町の方が騷がしう（氷朔日）

〔中町〕堂島新地の中町をいふ。堂島新地は元祿元年に開拓されて程なく遊女町となり、南の濱筋から、中町、北町、裏町の四つの通り筋がある。なほ大阪地圖（元祿頃）に就いて見よ。

なかむら　直に打てば一里半、廻れば三里曾我中村（加增曾我）

〔中村〕相模國足柄郡中村鄕。

なかやまでら　欲生我國の提灯に不取正覺の輿を照して、中山寺へと送りしは宛ら安養寶國に生れつべしと（賀古教信）

〔中山寺〕攝津國川邊郡の中央なる中山（長尾山とも云ふ）の南麓にある有名な寺。賀古教信七墓廻第三に、「抑當寺（中山寺）の本尊は、聖德太子の前生舍衞國にて作り給ひし十一面、運慶湛慶の兩尊語尊、巍巍たる靈地なり」と云へるは、伽藍開基記に、「紫雲山中山寺、用明天皇二年開基、……、殿中安二十一面觀音三像一、蓋本國觀音三十三所之一也、其中尊乃太子先世生二舍衞國一時所レ鑄、毎二一鑄一而三禮者而靈應特甚、左右二尊卽本國名匠運慶湛慶奉二敕命一而造、至レ今儼然遷二于殿上一」と見え、攝陽群談にも伽藍開基記のこの文が引かれてゐる。

ながら　その名は言はじ名を問へば、父はながらの田地持（二枚繪）

〔長柄〕攝津國西成郡豐崎村にあつて天滿の北。淀川の中津川に分流する所に當る。「その名は言はじ云云」（四七七頁）「ながらのはしばしら」（四七九頁）、を見よ。

ながゐのさと　人目づつみの長居の里、浮名流すな河内路に（天智天皇）

〔長居里〕攝津國住吉大明神の南、松の並樹道に沿ふ里。攝陽群談卷九、里の部に「長居里

であるといふ想像の島。按ずるに女護島は八丈島をいうたものであらう、海南風俗志に、「鋸脊譚には八丈島を古は女護島といへり、今も男あれども女子多くして且容色ありといへりとなり」。巣林子も女護島を想像の島としたもので、その作・源義經將棊經に、「是より東九萬里の海上を超え、淨瑠璃世界女護島といふ山に至りしに云云」と書いてゐる。

によにんだう 五障の雲に埋る女人堂にぞ着きにける（萬年草）

〔女人堂〕紀州高野山花折坂を登りつめた處にある堂をいふ、これより高野山金剛峰寺境内となる。高野山は明治五年三月までは五障深き女人禁制の山法であつたが故に、維新までは參詣の女人總てこの堂まで登つて通夜したものである。

にれんぜんが 尼連禪河のあしなしゆと押分け掻分け過ぎ給ふ（以呂波）

〔尼連禪河〕中印度摩揭陀國伽耶城の東を北に流れてゐる河で、釋尊勤苦すること六年の後この河に沐浴された。佛說無量壽經・卷上に、「現二五濁刹一、隨二順群生一、示レ有二塵垢一、沐二浴金流一、天按二樹枝一、得レ攀出レ池」と見えてゐる。金流といひ、池といへるは、尼連禪河をいふ。

仁德帝の宮所（にんとくていのみやどころ） 仁德帝の宮所拜み巡りて（卯月紅葉）

攝津名所圖會・四上に、「上難波仁德天皇皇宮。上難波町あり、社說云、世人博勞稻荷（はくらういなり）と稱するは誤なり、鳥居の額仁德天皇宮、祭神鷦鷯帝」。浪花寺社巡・二十二社廻りの條に、「十二番。博勞町・仁德天皇」。

ぬまづ 花の蒲燒名物の、鰻のはだへぬまづの宿（丹波與作）

〔沼津〕駿河國駿東郡沼津の宿及びその西方新田は鰻の蒲燒名物である。東海道中膝栗毛に、「新田（しんでん）と云へる建場にいたる、爰は鰻名物にて家每にあふぎたつる蒲燒の匂に、二人は鼻のさきをひこつかし云云」。

ねごろやま

〔根來山〕若狹國遠敷郡にあつて、音無川の源をなし、その奧に大地山あつて、江洲朽木谷に跨り、その峻嶺國界となつてゐる。

ねぢいは あはれ佛の御母も女の罪のねぢ岩や（萬年草）

〔捻岩〕高野大門口の路傍にある岩。俗に弘法大師の母が女人の結界を恨んでこの岩を捻ぢたのでこの名があるといふ。

ねものがたり （小栗判官）

〔寢物語〕美濃と近江との境で、柏の東方の寢物語の里。

のえ どうでのえか飛田ものと、誠しやかにいひ散す（曾根崎）

〔野枝〕大阪にある墓地で、刑場のあつた處。好色萬金丹卷二に、「難波津の墓所ここのみにもあらず、小泊瀨・飛田・野枝・曾根崎云々」。

のがみのしゆく 班女は美濃の國野上の宿の傾城のなりあがり（隅田川）

〔野上宿〕美濃國不破郡關が原驛の東で、中山道垂井の間にあつて、中世は名邑で遊女も多く居たが、今は寒村となる。

のざき なまづ川よりゆらゆらと、野崎參りの屋形船（女殺）

〔野崎〕野崎觀音をいふ。野崎觀音堂は河内國北河內郡西條村大字野崎にある慈眼寺をいふ。本尊は行基菩薩手刻の三尺五寸の十一面觀音にして著名の靈像である。堂宇宏壯にして飯盛山系の半腹に位し、攝淡の山水一眸の下にありて春櫻秋楓の美を聚め、四時參詣者多く、野崎參りといふ。三十三所觀音堂あり、福聚閣といふ。域內にお染久松の墓及び江口の君塚がある。女殺油地獄の中に「無量無邊の聚福閣」とあるはこの觀音堂を云ふ。

のちせやま 契りは此の世後瀨山（薩摩歌）

國花萬葉記・大隅名所之部に「後瀨山」。

野中の一つ井戸 世は何の（欠字）ぞや、逢ひそめて早三歲（とせ）、影ばかりの契りにて、夫（つま）は野中の一つ井戸、名は後の世の形見かや（萬年草）

「影」といひて、「野中の一つ井戸」とあるから、姿見の井戸をきかせたものである。姿見の井戸は高野山奧の院中の橋の附近汗かき地藏の東側にあつて、參詣人この井戸に姿を映し、其の影の水に映らない時は、三年の內に生命が危いといふ俗說がある。巢林子のここの文意は、世の無常を何に譬ふべきぞや、逢ひそめて早くも三歲を經過し、如夢幻泡影のはかないはかない夫婦の契りであつて、夫婦同居したこともなく、夫は野中の一つ井戸のやうに寺に一人暮しをなし、情死しての後の名は此の世の形見として殘ることであらうとの意。

ののみや （大覺）

〔野宮〕嵯峨二尊院の南、小倉山の東南、森の中にある。

ばうのつ こやつが宿はばうの津にあるげな（薩摩歌） 尋ねめぐるやはうばうの津（薩摩歌）

〔坊津〕薩摩國川邊郡西南方村に屬し、古來有名な港であつたが、慶長年中長崎を外人來朝の地と定めてより、繁華は漸次彼の地に移つたれど今なほ船舶の出入が多い。

ばうふざん 「望夫山」（五五七頁）を見よ。

萩 （國性爺後日）

長門國阿武郡にある町。「所も萩の唐錦、故鄉の空に翻す」（四七九頁）を見よ。

ばくらう 夢をさまさんばくらうの、ここも稻荷の神やしろ（曾根崎）

〔博勞〕博勞町をいふ、大阪巡禮三十二番觀音は此町の稻荷の社地內にある。ここの文は績に博勞をいひかけたのである。「ばく」をも見よ。

羽黑山（はぐろさん） 羽黑山の隣しらず（酒呑童子・枕言葉）

羽前國東田川郡にある山。山上に羽黑山神社あり、昔時東北修驗道場の第一で、葷酒山門に入るを許されなかつた爲、僧徒に飲む酒の隱語に「隣知らず」といふ。

はこさき 箱崎の松とし聞かば我も急がん（國性爺）

〔箱崎〕筑前國粕屋郡にありて福岡灣に臨み、箱崎八幡宮がある、そのあたりの松林を千代の松原といふ。箱崎宮は官幣中社で應神天皇を祀り、仲哀天皇神功皇后を合祀す。

はしひめ 此社は嫉妬を守る橋姫の丑の時詣これなんめり（蟬丸）

〔橋姫〕山城國久世郡なる橋姫社をいふ。黑川道祐撰・雍州府志・三、神社門下、久世郡の條に、「橋姫。是姬太神而在二宇治橋西一、因號二橋姬一、一說昔有二妬婦一禱二于貴布禰神一、求二生

成合寺の風景を指す、橋立を下瞰し與謝の湖を望み、風景絶佳である。

なんきん 花を見せたる南京の時代ぞ盛り盛んなる(國性爺)
〔南京〕もと金陵と云うた地で、明の太祖ここに都した、成祖の永樂十九年北平に都を遷してこれを北京と稱してより、爾來金陵を南京と云ふ、思宗の崇禎十七年北京は清の爲に陷落したので、今南京を以て首都としたのである。

なんぐう 美濃に南宮(日本武尊)
〔南宮〕美濃國の西部にある南宮山(南麓は養老郡牧田村、東北は不破郡宮代村)にある南宮神社、今國幣中社。

なんざん (聖德太子)
〔南山〕周の都豐鎬の南なる終南山をいふ。「殘んの菊籬のもと云云」(五二四頁)を見よ。

なんせんぶしう (以呂波)
〔南瞻部洲〕南閻浮提の新譯であつて、吾人の住する世界の總稱。

なんだいもん (女護島)
〔南大門〕奈良東大寺南大門。

なんばのいまみや 見たや見せたや難波橋、難波の今宮これからは(卯月紅葉)
〔難波今宮〕今宮の北にある廣田社をいふ、祭神天照太神荒魂。浪花寺社巡「二十二社廻りの條に、十五番、今宮森廣田社」。

なんゑんだう (女護島)
〔南圓堂〕弘仁四年藤原冬嗣の建立で、奈良興福寺にある。本尊は不空羂索觀音で、西國巡禮札所第九番である。圓堂といへども、實は八角の堂である。

にくわつだう (女護島)
〔二月堂〕東大寺にあつて羂索院といひ、天平勝寶年の勅詔によつての造營で、安置の佛像は今國寶となつてゐる。

にしのおほてら 絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳とつられたる西の大寺これかとよ(大織冠)
〔西大寺〕今・大和國生駒郡伏見村西大寺といふ所にあり、稱德天皇の創建にかかる。「いとよりかけて白露を云云」(四三五頁)をも見よ。

西の京 醫者の名もぎえんのもの、始めは西の京の道へんと申す醫者の藥で、どうへんにあつた所を、昨日から三條の元喜と申す醫者でめつきり元氣が見えました(淀鯉)
奈良右京城内の地。(現在の奈良市は左京の地)。(近松のこの文に「三條」とあるも奈良の町名。また「どうへん」は同篇で、同卽ち同樣の義で、病氣容體相變らず快方に向はないことの意にいうたのである。季瓊日錄・延德二年二月十六日の條に「禮部之返答亦同篇也」と見え、太平記卷二十四、依山門嗷訴公卿僉議の條に「山門訴申何篇哉」とある、何篇も何の義で、何の謂れの意である。)

西の洞院 重ねて家根でさかつたら、四つ足括つて西の洞院へ流してくりよ(大經師)
京都の町名(京都地圖を見よ)「西の洞院へ流してくりよ」は、厄拂の詞の「打拂うて西の海へさらりさらり」の口調に據つたのである。

にしのみや 宿な惠美順の神垣や、西の宮にぞ着き給ふ(松風)
〔西宮〕「あしたたぬ神の昔の西の宮」の條を見よ。

にしのをか 有明かたぶく西の岡、樫原の土民の軒(嵯峨天皇)
〔西岡〕山城國乙訓郡の別稱。樫原は丹波街道に當る。

にじふにしやまうで ふるきみやこやなにはがた、二十二社まうでいそがん(卯月紅葉)
〔二十二社詣〕大阪内の二十二社に詣づること。卯月の紅葉の二十二社及び其參拜の順序は、浪花寺社巡又は難波丸綱目等に掲げる所と異同がある。卯月の紅葉のは卽ち、一番―川崎權現。二番―天滿の天滿宮。三番―堀川戎。四番―北野天神社。五番―北野神明宮。六番―曾根崎天神。七番―津村の新御靈。八番―座摩大明神。九番―博勞町仁德天皇の宮。十番―三津八幡。十一番―難波の今宮。十二番―安居天神。十三番―天王寺十五社。十四番、十五番―牛頭天王(天王寺南門と東門とにある)。十六番―生玉社。十七番―北向八幡。十八番―高津社。十九番―朝日神明。二十番―玉造稻荷社。二十一番―内平野町神明宮。二十二番―座摩の御旅所。
浪花寺社巡、難波丸綱目ともに、朝日神明よりはじまりて高津社に終る、又川崎の大權現、天王寺の牛頭天王及び座摩の御旅所を除きて、玉造の森の宮、難波村祇園社及び安倍野海道口の崇峻天皇を加ふ。

にのくちむら もとは大和新口村勝木孫右衛門といふ大百姓の一人子(冥途飛脚)
〔新口村〕大和國磯城郡多村新口にして、三輪町の西一里許。

にのせむら (嵯峨天皇)
〔二瀬村〕山城國愛宕郡にありて、市原の北で、鞍馬道に當る。

にほのうみ (蟬丸)
〔鳰淡海〕中世頃より近江の琵琶湖をいふ。

にほんづつみ 日本堤の茶屋の噂が二度する返事も一度になり(吉岡染)
〔日本堤〕東京淺草區聖天町の北端から西北に約十三町、下谷區三の輪町に終る、所謂土手八町の稱ある所で、吉原遊廓大門前は略その半にある。この堤・嫖人遊客の通路として有名である。

にやくいちわうし 三熊野の九十九所の王子王子、若一王子とたたせ給ふ(孕常盤)
〔若一王子〕紀伊國牟婁郡熊野權現の攝社九十九所の王子中、第一位にあるもの。國花萬葉記・卷十四上、紀伊國中神社部、熊野權現の條に、「若一王子。本地施無畏大士と號して、日本第一大靈驗三所權現といふ」。若一王子は南部神道にて天照大神に充てたものともいふ。

によいがだけ (三國志)
〔如意嶽〕俗に大ノ字山といひ、比叡山と相對して一山脈をなし、京都東山三十六峯の首峯。

によごのしま 女子の島の夢話、男見たるも斯くやらん(孕常盤)
〔女子島〕女護島とも書いてある、女のみ住ん

の森といひ、昔は王子權現と稱し、境内に若宮がある。

はまのみや　遙に出でし濱の宮、鳥居通りの流鏑馬馬場（鑓權三）

〔濱宮〕出雲國松江の北海岸愛宕神社のある濱邊をいうたのであらう。

はやひ　速日の岸高千穗の嶽（薩摩歌）

〔速日〕日向の名所。速日峯は日向國東臼杵郡の西方にある山。國花萬葉記卷十四、日向國名所之部に、「はや日の峯。日本紀に天孫降臨の所也と云」。

はらなこく　はらな國のはくだ王（鎌田）

〔波羅奈國〕波羅奈斯國の略、中印度にあつた國名で、今のペナレスの地に當る。

はりよう　巴陵の水轉た流れて留まらぬ（隅田川）

〔巴陵〕支那湖南岳陽縣にある。有名な洞庭湖はこの所にある。

はんにやざか　てんがい般若坂の棚逆茂木押破り（女護島）　我等は般若坂まで見送り奉らん（三世相）

〔般若坂〕林宗甫撰・和州舊蹟幽考・卷三、添上郡の條に、「奈良坂・般若路の二つの道定かならず、今の大路の其東に伊賀より道路あり、もし是らにや」と見えてゐる。盖し般若寺のあたりの坂をいうたのである。

はんにやじ　奈良の都般若寺の傍に暫く忍び居たりける（以呂波）

〔般若寺〕大和國奈良坂の南にある寺院。

ばんば　（袍狩）

〔番場〕今は馬場ともいふ、近江國坂田郡南番輪村に當り、磨針峠にある山驛である。温故錄に、「番場宿は開剗の跡にて當時番衛の人人居れり、故に番場の名起れり」。

ひうちがじやう　よそめにさこそ山伏の、うつ石の燧が城とかや（傑静）

〔燧城〕越前國南條郡湯の尾村大字燧の城。

ひきがやつ　比企が谷の土佐坊屋敷は金田の頼次（最明寺殿）

〔比企谷〕鎌倉妙本寺のある谷をいふ。

ひくまのいけ　引間の池の池水に曉ごとに祈願の聲（三國志）

〔引間池〕引間は引馬とも書き、遠州濱松をいふ。十六夜日記、二十二日の條に「今宵はひくまの宿といふ所にとどまる、此所のおほかたの名をば、濱松とぞいひし」と見えてゐる。

ひくまのをか　百島太夫と申すめとを具し、春の頃より都に上り、檜隈の岡に屋形をしつらひ（用明天皇）

〔檜隈岡〕大和國高市郡にある。

ひこのやま　天狗達をどつと譽めて招いた、まづ筑紫には彦の山（隅田川）

〔彦山〕豐前豐後筑前の三國に渡れる山。謠曲・鞍馬天狗に、「まづ御供の天狗は誰誰ぞ、筑紫には彦山の豐前坊」。

ひすなんざん　（三國志）

かかる地名も山名も朝鮮にはない。盖し巣林子が唐音まがひの造語であらう。

ひたかのさと　（娵山姥）

〔火高里〕尾張國愛知郡火高の里。

ひとつばし　讃良々山口一つ橋、渋して救ふ御願力（女殺）

〔一つ橋〕岡山（その條を見よ）の南にあつて、野崎觀音は一つ橋の北東に當り、參詣者を乘せて大阪間往復船の發着場で掛茶屋等がある

一つ屋　在所一つ屋の叔母の娘（生玉）

大阪天王寺附近にある地名。

樋の上　樋の上の切荒布、花の都へこんな物お恥かしやと差出す（女腹切）　大坂の名物ひの上の切荒布、蒿高なばかりで錢安なれど（卯月潤色）

大阪道頓堀清津橋西詰の地を「樋の上」といふ。此處に名代の昆布屋があつた。この店から賣出す切荒布を樋の上の切荒布というて大阪の名物であつた。南水漫遊・初の五、錢屋まん頭の條に、「その頃この邊の名物には堺筋薔薇が筆、樋の上の昆布云云」、とありて道頓堀の名物が擧げてある。

ひのをかたうげ　（三國志）（反魂香）

〔日岡峠〕山城國宇治郡にありて、山科から京都粟田口に通ずる坂路。

ひばりやま　救ひ取られて紫の、雲に入るてふ雲雀山（吉岡染）

〔雲雀山〕大和國宇陀郡宇賀志村にある山。中將姫が繼母の讒によつて捨てられたといふはこの山である。

ひびきのなだ　名所は音に響の灘鐘が岬（女護島）

〔響灘〕筑前國遠賀郡の北、長門國豐浦郡の西方にある灘、西は玄界灘に連り、北は川尻岬の邊に至る。

ひむろ　（以呂波）

〔氷室〕山城國愛宕郡大宮村城山の北に當る。

ひむろのやしろ　氷室の社伏し拜み（天智天皇）

〔氷室社〕奈良飛火野北向荒神の西。大和名所圖會卷一、添上郡南都之部に「氷室社＝寛文記曰、北向荒神より西にあり、云云」。

ひめじま　なれも焦るるひめ島や濡れた姿の姫島（女護島）（用明天皇）

〔姫島〕豐後國東國東郡伊美村の北にある島で、豐後から周防灘に入る船の常航路に當る。

ひめのはくさん　加賀に比咩の白山（日本武尊）

〔比咩白山〕加賀國能美郡白山上の比咩神社。

ひらかた　風にひらひらひら方を過ぎ、佐太を越え（女夫池）

〔枚方〕河内國北河内郡にある町で、淀川に沿ひ京阪街道に當る。

ひらきき　誰ひらききの神の氏子の神歌や（薩摩歌）

〔枚聞〕枚聞神社をいふ。薩摩の一の宮、猿田彦神を祀り、薩摩國揖宿郡頴娃村大字十町にある。國花萬葉記・薩摩國神社之部に、「枚聞神社＝又號ニ和多都美明神一、祭神猿田彦命、當國一ノ宮」。

ひらの　（無芽）

〔平野〕平野社は山城國葛野郡にある。黒川道祐編・雍州府志・二、神社門下・葛野郡の條に、「平野社、在ニ天滿宮西野一、所ニ祭之神四座、第一殺名ニ今木社一、源氏祖神而日本武尊也、第二名ニ久度社一、是平氏神而仲哀天皇也、第三名ニ

爲レ鬼、而頂戴鐵輪一、口含炬火一、每二深更一詣二貴布禰一、遂生爲二厲鬼一、是爲二宇治橋姫一、未レ知二然否一」。

はしもと　氣な事ければ性根なとられ、起きつ轉んづ足たたず、橋本の宿はづれ、三國境の板橋にこそ着きにけれ（淀鯉）

〔橋本〕八幡の西南にある驛名、京より河内・大阪に至る街道に當る。山州名跡志・卷十三、綴喜郡の條に、「橋本。在二八幡山西南一、在二人家東西一、中有二大路一河内及大阪街道也、人家地町數十一町あり、此所を號二橋本一、往昔山崎より所渡橋あつて、此所渡口なるを以て也、今號二中町一所其橋東爪也」。

はしらもと　淀柱本の邊まで參りしに（關八州）

〔柱本〕攝津國三島郡三島江の南西にあつて淀川に臨む。攝陽群談卷一下、島上郡の條に、柱本村と見えてゐる。

はしりゐのせき山　逃足早くはしりゐの關山より日は暮れて（三國志）

〔走井の關山〕走井は近江國滋賀郡逢阪の關の清水をいふ。和訓栞に「はしりゐ＝相阪の關の清水をいふ是也」、關山は逢阪の關山である。國花萬葉記卷十、江州國郡名所之部の條に、「相坂の關＝名號、あふ坂の關山」。

はたえだ　市原二の瀨・はたえだや（繁好）

〔幡枝〕山城國愛宕郡岩倉村にあり、みぞろ池の北に當る。

はちけんや　そりや提灯よ釣鐘よ、八つ過ぎちや八軒屋、河内よ堺よ川口よと（卯月紅葉）　數も限らぬ家ないかに名付けて八軒屋、誰とふし見の下り舟（天網島）

〔八軒屋〕天滿橋南詰から天神橋に至る間にある濱邊で、京・伏見通ひの船乘り場である。攝津名所圖會大成卷二に、「八軒屋船岸＝古名を十日宿といふ、古よりの船着なり、天和三年開板の大阪圖にも十日宿八けん屋とあり、浪花奇談云、八軒屋は古へ川に添ひて家八軒ならびありし、其頃は濱側に家なくして、外に類もなき故に八軒屋と號せしとなり、旅籠八軒あるによりて八軒屋と名づぐると云ふは臆斷なり、……、則ちこの地は京師上下の埠頭にして、其通船を三十石と號す、……、當津より城州伏見に至る其流凡そ十里、淀川を往返す、朝に大阪に乘りて夕に着く、これを晝船といふ、夕に乘りて朝に至るを夜船といふ、伏見より下るも亦然り、荷物及び旅客を乘せて通行す」。

はつかしのもり　（酒呑童子）

〔羽束師森〕山城國乙訓郡羽束郷にある森。巢林子作、曾根崎心中に「所體くづをれ、アアはづかしの森で裳裾かはらはらはら」とあるは「恥かし」に「羽束師の森」をいひかけたまでで、この地に關係ない。

はつけんや

「はちけんや」を見よ。

はつせやま　かれも假むや初瀨山（冥途飛脚）

「初瀨山」大和國磯城郡初瀨村にあり、山中に長谷寺の大伽藍がある。

ばつだいが　醫療術をつくせども、こやばつだいがの定業にて扁鵲も匙なげうてり（今川了俊）

〔跋提河〕印度拘戸那掲羅城の南方を流れる川で、釋尊は跋提河畔・沙羅樹下に寂然として入滅された。

はつねがはら　扨御前を下向あり、初音が原をうつて通る（伊豆日記）　比翼の鳥のはつねが原、はや秋ちかく野はなまめきて（大磯虎）

〔初音原〕伊豆國田方郡錦田村大字塚原をいふ。

はとのみね　道明らけき鳩の峯、正八幡の鎭座なる、我氏の神軍神（雪女）

〔鳩峯〕山城國綴喜郡男山の高頂をいひ、海拔一四〇米突あり、山上に官幣大社石淸水八幡宮あり、祭神は應神天皇である。古來朝廷の尊信淺からず、弓矢神として武家の尊崇極めて深い。

はなみづのはし　我を送りし朝の霜、白無垢に單帶してよるの雪、花水の橋に鳴く鳥（扇八景）

「花水橋」相模國淘綾郡の東部を流れる花水川に架せる橋で、長さ二十五間ある。新編風土記に、花水の橋は千種日記に「花水の橋を渡る、昔この川の上に櫻多ありて、花散る頃は爰に流れ來り侍る」とある。寶永六年水路を改め、古川は小流となつた。

花屋が辻　これ六道の新道と、花屋が辻にしよんぼりと（生玉）

大阪高津宮の附近種樹屋吉助の花園ある辻をいふ。攝津名所圖會大成卷四、種樹屋吉助の花園を記して、「前栽には和漢の名木を多く植ゑたり、……、庭中には諸の草木を多く貯へ四時に花の絕ゆる事なく云云」と見えてゐる。

はなれざか　幾重越しても信濃路はまだ谷峠の大井山、人里遠く離れ坂、ちくまの川に渡し呼ぶ聲も（最明寺殿）

〔離坂〕沓掛と輕井澤との間。謠曲・鉢の木に、「吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞうき世を離れ坂、墨の衣の碓氷川」。

はなをりざか　手向の梅の花折坂（萬年草）

〔花折坂〕高野山女人堂の下にありて、稚兒が瀧から一丁餘登つた所にある。昔時參詣人は此所で花を折つて大師に手向けたといふ。現今は古杉老檜繁茂して幽邃を極む。

はばかりのせき

解釋部「はばかりのせきたぐ」を見よ。

はますぢ　近江屋出でて濱筋や（三枚繪）

〔濱筋〕大阪堂島の濱筋。

はまのまち　寺の旦那に濱の町といふ所、芭蕉布屋のおまんと申すは筑紫一番（薩摩歌）

〔濱町〕大隅國始良郡西國分村にある濱の市をいひ、昔の海驛である。

はまのみや　飛鳥の社の濱の宮。王子は九十九所（反魂香）

〔濱宮〕紀州那智川の海に注ぐ所にあつて、渚

〔藤澤〕相模國高座郡藤澤の邑をいふ。藤澤の御寺は卽ち藤澤にある淸淨光寺をいふ。

ふぢしろ 梢にかかる藤代や（反魂香）

〔藤代〕紀伊國にある浦の名。名木の藤あり故に藤代といふ、又老松あり俗に筆捨松といふ。

ふぢつ 大勢は日に立つて、所所の渡海の番所・國の咎恐れあり、夫婦密に藤津の浦より出船すべし（國性爺）

〔藤津〕肥前國藤津郡の海邊をいふ。

ふぢと 佐佐木が藤戸の浦人を殺せしも深き軍法（女夫池）

〔藤戸〕備前國兒島郡にある濱邊で、渡あり藤戸の渡といふ。長門本・平家物語に、「備前備中兩國の境西河智河尻藤戸の渡と云所に押寄せて」。「佐佐木が藤戸の浦人を殺せし云云」を見よ。

藤（ふぢ）の棚（たな） しめてまつはれ藤の棚（曾根崎）

大阪谷町にありて、順禮十六番觀音堂のあるところ。蘆分船・卷二に、「今は昔このあたりに一子をもてるあり、此子十二三歳の折から如何なる宿世にやありけん、此所に池ありしが此池水に溺れ空しくなりにけり、……則彼子の塚をつき其標に一本の藤を植ゑけると也、其藤今は枝葉繁茂して藤の棚といへり、……堂の本尊は長谷寺の觀世音を近きに安置しけると也」。攝陽群談・十二に、「大阪順禮十六番觀音堂、大坂の津谷町の地にあり、……堂前に大樹あり、花の頃猶群を成せり、世俗藤の棚と稱して地名とす」。「しめてまつはれ藤の棚」をも見よ。

ふぢのもり 藤の森の先（さき）ぢや（鑓權三）

〔藤森〕山城國宇治郡にあつて、御香宮から北六七丁。

ふぢのを （蟬丸）

〔藤尾〕近江の國志賀郡にある。

ふぢゆう ふぢゆう江尻にすつとんとん（丹波與作）

〔府中〕今の靜岡のこと、東海道五十三次の一。

ふぢゐでら しなへよしなへ藤井寺（吉野忠信） 里の裏道畦道をすぢりもぢりて藤井寺（冥途飛脚）

〔藤井寺〕河内國南河内郡長野村なる剛琳寺をいふ。眞言宗で、西國三十三所第五番の靈場である。

ふつ 上つら・下つら、ふつ・かつき、浦村里の土民（蛙合戰）

〔布津〕肥前國南高來郡にある村名。

ふどう かかや子供が不動參り、氣の毒や雨に逢はう（氷朔日） 江戶爲替慥に請取りました、不動參りに待ちますする（冥途飛脚）

〔不動〕北野稻荷山の南の眞言宗の不動寺をいふ。「不動參り」とは不動寺に參詣すること。

ふどうざか 情のきづな縛の繩、不動坂にもさし懸り（萬年草）

〔不動坂〕神谷から女人堂に至る途中十七町餘にある峻坂で、四十八まがりあるが故に一名いろは坂ともいふ。ここの文は、不動尊の持つ繩を縛の繩といふにより、情の絆に縛られることを縛の繩というて、不動坂の名にいひつづけたのである。

ふないりばし 難波小橋から舟入橋の濱傳ひ（天網島）

〔舟入橋〕これは橋名ではなく、川から藏屋敷へ舟を通すやうに流れを引入れて、其流れの上に架けた橋をいうためので、太平橋の附近にあつたのをいうたのである。

ふなをかやま いかに岩村源五、かれていひしは合點か、舟岡山へひつたてよ（娥） ともに弘誓の舟岡山、煙の末も一筋に（女楠）

〔舟岡山〕山城國愛宕郡千本の東北で、刑場・火葬所・墓地のあつた所。元祿三年六月刊・眞實伊勢物語・卷三、幽靈の形見の條に、「舟岡山に送りて煙とぞなしける」。元祿三年二月刊・名所都鳥・卷三に、「舟岡（愛宕郡）。都のうちにも日に幾人か鳥部舟岡と書きたる無常所也、紫野大德寺より南に當る、松のくろみたる岡なり、一條よりはいかにも十町ばかりあるべし」。

船（ふね）によせたる里の名 船によせたる里の名の、橋の夕暮來て見れば（鑓權三）

山城國紀伊郡伏見町の南なる京橋あたりの地を、昔は船戶と稱したから、かく云うたのである。

ふはのせきや 葺きも習はぬ苫葺の、苫二三枚足らざれば、鬼王は茅刈りて、覆へど風にふうはふは、不破の關屋の庇かと、葺きさしてこそ休みけれ（扇八景）

〔不破關屋〕關屋は關の番所をいふ。不破の關址は現今・美濃國不破郡關原村大字松尾の大木戶坂にありて、昔時は三關の一であつた。曾我扇八景のここの文、風にふはふはするを不破の關とつづけ、不破の關の荒廢に及んだことは古歌にも見ゆれば、「不破の關屋の庇かと」というたのである。新後撰集・卷四、信實の歌に、「秋風に不破の關屋のあれまくも、惜しからぬまで月ぞもりくる」。

ふもん ふもんりんざう多寶塔引聲堂萬塔院（聖德太子）

〔普門〕普門院をいふ。大阪四天王寺にありて、普賢菩薩・傳敎大師像を安置し、法華三昧堂にして椎寺とも稱し、傳敎大師の建立する所である。

ふるいち 今日の今見て今の間に、馴染は日數ふる市の、里を南に橫折れて（聖德太子）

〔古市〕大和國添上郡東里村の大字にして、古の八島鄕の首里。

ふるかはのべのかみすぎ 十市のをのの初時雨、古河の邊の神杉よ、すぎし昔の春を語らん（三世相）

〔古川邊神杉〕古川は初瀨川のこと。初瀨川は古代よりいひはやされた川なれば、古川といふ。大和國城上郡を流る。神杉は二本杉をいひ、嘗て古川の邊にあつて古來著名である。古今集・旋頭歌、題しらず、「はつせ川ふるかはの邊にふた本ある杉、年をへてまたもあひ見むふたもとある杉」。林宗甫撰・和州舊跡幽考・卷十三、城上郡の條に、「古河野邊。二本の杉は一昔許にやなりけん、絕果て古河野邊の名のみ殘れり」。

古開社、高階氏祖神而仁徳天皇也、第四名ニ比咩神、大江氏祖神而天照大神也、第五乃四姫之摠社也、貞觀元年十一月九日始行ニ祭祀、寛弘元年四月十日有ニ臨時祭、勅使奉幣如ニ賀茂、又有ニ春日社任部社、共攝社也」。

ひらの　（夏途飛脚）

〔平野〕攝津國東成郡平野郷町で今は鐵道車驛がある。

ひらをかのみや　父鎌足は河内の國ひらをかの宮、天津兒屋根の御神に一七日の御參籠（大織冠）

〔枚岡宮〕河内國中河内郡枚岡村大字出雲井にあり、官幣大社にして藤原氏の高祖天津兒屋根大神及び比賣御神を祀り、鹿島・香取の二神を配祀してある。現在の社殿は文政年間の造營に係る。

ひるこのおんやしろ　天の岩戸の暗き世も此處はひるこの御社（烏帽子折）

〔蛭子御社〕「暗き」に對して「ひるこ」といひかけたのである。蛭子の御社は攝津國武庫郡西宮神社をいふ。日本書紀通證に、「諸尊册尊爲ニ夫婦ニ生ニ蛭兒ニ、雖ニ已三歳ニ脚猶不レ立、故載ニ之於天磐櫲樟船ニ而順風放棄、白井宗因曰、蛭子御前西宮所レ祭之一座、世所謂西宮夷是也」。平家物語・劍卷に、「蛭子は三年まで足立たぬ尊とて御座ければ、天石櫲樟舟に乘せ奉り大海が原に推し出して流され給ひしが、攝津國に流れ寄りて海を領する神となりて夷三郎と顯はれ給ひて西宮におはします」。

ひれふるやま　與謝部四七三頁を見よ。

ひろさは　波に色ある廣澤の岸の紅葉な露ながら（松風）

〔廣澤〕山城國葛野郡嵯峨村の東にある廣澤池をいふ。

ふかくさやま　古へ人の浮名立つ、戀の百夜の深草山、あまぎる雪に雲暗く（烏帽子折）

〔深草山〕山城國紀伊郡深草村にある山の名。ここの文は、往昔深草四位の少將が小野小町に懸想して百夜まで通ふことを約し、今一夜となつて死んだといふ故事をとり、深草の少將を深草山にいひかへたのである。

ふかやの宿　深谷の宿の深深と（最明寺殿）

〔深谷宿〕武藏國大里郡の小邑であつて、現今高崎線鐵道驛がある。

ふくしま　櫻山庄左衞門・福島ぢやとおしやる、心ばの、小體なれども張詰めて舞臺一ぱい、觜もあり嚢に身もある、日中のしよりしよりしたる雀鮨（今宮）

〔福島〕大阪の蜆川の北、曾根崎の西南に當り、上福島村・下福村をいふ。雀鮨はこの地の名物である。「櫻山庄左衞門」「雀鮨」をも見よ。

ふくしま　にぎにぎふくふく福島の、賤の妹背の妹は籾磨る（最明寺殿）

〔福島〕信濃國西筑摩郡福島村邑で、木曾谷の村落、上松から二里半。

ふくはら　これより福原の新都へ上らんに三日はかかるべし（伊豆日記）

〔福原〕攝津國神戸市の内、兵庫岡方及び武庫郡林田村の内、長田尻等の地であつたといふ。治承四年六月二日安德天皇福原に遷都されたが、久しからずして車駕京都にかへらせ給はれた、當時の内裡は武庫郡林田村長田の東、輪田の西野であるといふ。

ふくやま　風ふく山の渡守、我思ひはしらずげに舟も潮も引く方に（藤原歌）

〔福山〕大隅國始良郡の海岸にある海驛。

ふくろゐ　袋井の里過ぎ行けば三香野橋（今川了俊）

〔袋井〕遠江國磐田郡にある小都邑。

ふざんかい　日本の兵船數萬艘ふざんかいの磯近く寄すると聞く（三國志）

〔釜山浦〕朝鮮慶尚道にある都會。浦の朝鮮音Kaiである。

ふしみざか　色の勤めの憂き節の、峠を越えて伏見坂、戀のないにもならひとて（生玉）

〔伏見坂〕大阪伏見坂町をいふ、道頓堀の立慶町通りの芝居の裏手である。難波丸綱目に、「元祿十一年に新地と成」とあれば、色茶屋の此處に出來たのも其頃からであらう。

ふたがは　吉田ふた川しらすがちよいと越えて（丹波與作）

〔二川〕參河國渥美郡にあつて吉田と白須賀との間、東海道五十三次の一。

ふたかみじま　（國性爺）

〔二神島〕肥前國北松浦郡大島村の北六海里にある島。

ふたごやま　（扇八景）

〔二子山〕相模國足柄郡にあつて、箱根中央火山の東南端なる山で、雙峰相並ぶ。

ふたつゐど　今宵限りとほりづめや、命二つを二つ井戸、深い緣とて死にたいも（今宮）

〔二つ井戸〕攝津名所圖會・四下に、「二つ井。道頓堀の東堀留町にあり、清泉にして此邊民家の用水とす」。近松のこの文は、二つ井戸が堀留町の角詰にあつたので堀詰といふて、堀に「掘り」をいひかけたのである。

ふたのせ　市原・二の瀨・はた枝や（兼好）

〔二の瀨〕靜原より鞍馬道に出る所で、補陀落山の西北にある。

ふぢえ　浪のうねうね生茂る藤江の里の朝凪に（浦島）

〔藤江〕播磨國明石郡林崎村にある。

ふぢえだ　しなへやしなへ藤枝の、藤の下風かぜにもつるる黑髪の（大磯虎）

〔藤枝〕駿河國志太郡藤枝町。

ふぢがやつ　藤が谷の大伴屋敷（最明寺殿）

〔藤谷〕鎌倉淨光明寺の傍にある。

ふぢさは　浮世の覊絆ざんぎりの、髮も亂るる藤澤や、御寺をさして急ぎける（小栗判官）

島新地内にあつて渡邊橋筋の東に當る。大坂町鑑に、船大工町・中町・渡邊橋筋以東は法華、庄次郎屋敷と見えてゐる。左圖は難波丸綱目に據つた堂島新地の略圖で、これに法華長屋の位置を書入れたのである。

ほふかいじ　あだの悋氣や法界寺（曾根崎）

〔法界寺〕攝陽群談・十二に、「法界寺。西成郡天滿西寺町にあり、境内に大阪巡禮二番觀音堂あり」。攝陽群談、難波丸綱目共に、法界寺の觀音堂を大阪巡禮二番とし、長福寺の觀音堂を五番としてある。されども曾根崎心中の文では、長福寺の觀音堂を二番、法界寺の觀音堂を五番としてある。大阪三十三所を見よ。

ほふぢうじ　拜み巡りて法住寺（曾根崎）

〔法住寺〕攝陽群談・十二に、「法住寺。大阪天滿西寺町にあり、境内に大阪巡禮四番觀音堂あり」。

ほふりゆうじ　去年は和州法隆寺、聖德太子の千百年忌（女殺）

〔法隆寺〕大和國生駒郡法隆寺村にあつて、今は法相宗の大本山である。推古天皇の御宇に、天皇及び厩戸皇太子が用明天皇の遺願を果す爲に建立された。東院は上宮王院と號し、聖德太子斑鳩宮の舊址である。金堂・中門・夢殿・五重塔は我國不造建築の最古の物とされてゐる。「去年」とあるは、享保五年庚子の年に當り、法隆寺で聖德太子千百年忌の大法會が行はれた。

ほふりん　御室法輪嵯峨の御寺（傘好）

〔法輪寺〕山城國葛野郡嵯峨渡月橋の南で嵐山の東部にある寺院。典據部「ほふりんさがのおてら云云」（四一四頁）を見よ。

ほりえ　誰か堀江で水高き、矢を射る如き川の瀨を、戻橋とは付けぬらん（酒呑童子）

〔堀江〕京都の堀川をいふ、北は一條戻橋から京都の西部を南に貫流せる川。

ほりえがは　（堀川波鼓）

〔堀江川〕往時は大阪道頓堀川を堀江川と稱した。

ほりかはのはし　落つる涙に堀川の、橋も水にやひたるらん（天網島）

〔堀川橋〕攝陽群談・七に、「天滿堀川、天滿小橋の次にあり、東西共に堀川町と稱するの渉り也」。

ほりづめ　「ふたつゐど」を見よ。

ほるなん　ほるなん五郎（國性爺）

「ほるなん」といふ國はないが、この音に近いのは「ふなん」か。扶南は今の暹羅あたりにあつた昔の國の名。

ほるねら　べんがら・あんぼん・すゐて・ぼろねらなんどいふ外國（國性爺後日）

Borneo をいふ。新井君美撰・五事略に、「ぼろねを。島也、日本を去ること三千九百里程」。

ほんさんじ　ほん山寺の開帳から平兵衞殿と新地へ往て（氷朔日）

〔本山寺〕攝津國三島郡淸水村大字原の北方山路三十丁にある天台宗の寺院で、文武天皇の元年役小角の開基、本尊は毘沙門天である、元祿年間桂昌院（玉の方）が寺院を修補した。

ほんせいじ　生玉の本誓寺でと伏し拜む（曾根崎）

〔本誓寺〕攝陽群談・十二に、「生玉中寺町にあり、境内に大阪順禮十八番觀音堂あり」。

ほんてんままち　本天滿町河内屋德兵衞（女殺）

〔本天滿町〕今の大阪東區伏見町二三丁目邊。

ぽんとちやう　前には戀の底深き、淵に憂き身をぽんとちやう（女腹切）

〔先斗町〕現今も遊女多き京都の町名（三條橋より四條橋に至る西川岸）である（京都地圖を見よ）。この町名は古くは天和二年刊の好色一代男（西鶴撰）にも見えてゐる。その名の起りは蓋し骨牌の劍先のある繪札の稱より町名にもなつたのである。遊女に關する語の中には骨牌より來れるものが他にも往往ある。その「先斗」と書くは、劍の先即ち點を意味し、これを「ぽんと」と訓むは、葡萄牙語 Ponto（英語 Point）の音によつたものである。

ほんのうじ　旅館は例の如く淸水か本能寺、ひつ續いて攻上り（三國志）

〔本能寺〕織田信長が明智光秀に弑せられた寺で、京都六角の南油小路の東にあり、東西一丁、南北二丁の巨刹であつたが、今は本能寺の町名を殘せるばかりである。

まかだこく　摩訶陀國に邪を防ぎて祇園を構へ（賀古敎信）

〔摩訶陀國〕古代中印度にあつた國名。西域記に、「摩竭陀舊曰摩訶陀、又曰摩竭提、皆訛也」。

まきのしま　「白妙の晒布ほすてふ槇の島」（五一二頁）を見よ。

まきもく　伊吹まきもく木曾信樂の良材寄せられずといふ事なく（嶋田川）吹下す風や霞をまきもくの、檜原が隈に聳えしは（以呂波）

大和國磯城郡纏向山をいふ。

まくずがはら　花一時も今しばし眞葛が原に宥き給ふ（弘徽殿）

〔眞葛原〕京都圓山公園の地をいふ、この地昔は叢茂る山野であつた。

まつえだ　上野に松枝（最明寺殿）

〔松枝〕上野國碓氷郡松井田をいひ、中山道の驛次で、安中と坂本との間にある。名跡志に、「松井田、一に松枝と書し一驛なり」。

まつがさき　まつがさきより二の瀨に續く、二の瀨續きの市原や（三國志）

〔松崎〕山城國愛宕郡下鴨村の北半里許、今松が崎村といふ。雍州府志・山川門・愛宕郡の條に、「松ガ崎。在同所（小川）南、此山背北向東南、故斯處春初櫻花開早、一說古木寂在此邊也」。

まつかは　汝は急ぎ若を連行き松川の奥とどきの淵へ沈めにかけよ（伊豆日記）

〔松川〕伊豆國田方郡にある。秋山章編・豆州志稿・卷六に、「松原川。源東畚の峯より發す、泉川と云、又一溪柏嶺下より發し、山中にして泉川に入る、十足荻村の西を過ぎ、鎌田に至てとどきが淵あり、又の名蜘蛛淵・思ガ淵・兒ガ淵、源武衞の子千鶴を沈めし所也、蘇我

ふるのみやしろ （大織冠）

〔布留御社〕大和國山邊郡丹波市町にある。

へうたんまち 九軒阿波座ののらがらす、月夜はなほか闇の夜も瓢簞町な腰付けに（淀鯉）

〔瓢簞町〕大阪新町遊廓の眞中の筋の町名。攝津名所圖會・四下、「其𥝱（寛永年間新町遊廓のたちし𥝱）木村亦次郎といふ伏見浪人の願によつて、官より花巷の長をつとめさせらる、此者瓢簞の𥝱居印を拜領して常に玄關に餝りし故、通り條を瓢簞町といひ、居宅の町を亦次郎と呼ぶ」。瓢簞町はその最初は現今の伏見町四丁目五丁目邊にあつたが、同町の住人木村亦次郎率先して新地に移轉したので一名亦次郎町ともいひ、又新町通りともいうたのが遂に全廓を總稱して新町といふことになつた。本書所載の大阪圖を見よ。

べきら 汨羅の潭も水あせて沈みも果てず、ながらふる帶刀太郎廣房は（艳狩劒本地） 汨羅に沈んで江魚の腹中に葬らる（雪女）

「汨羅」は江の名。一統志に、「汨羅江名、在二湘陰縣北十里一、源出二豫章一、流經二湘陰一分二二水一、一南流曰二汨水一、一經二古羅城一曰二羅水一、至二屈潭一復合、故曰二汨羅一、西流入レ湘」。巣林子のこの文は、楚の屈原讒に遭ひ江南に遷されて世を嘆じ、汨羅に投じて死んだことあるによつて書いたのである。十八史略・卷之一に、「初屈平爲二懷王所一レ任、以レ讒見レ疏、作二離騷一以自怨、至二頃襄王時一、又以レ譖遷二江南一、遂投二汨羅一以死」。巣林子作・文武五人男に、「此度頸親に世を疎はれ、身を汨羅に沈めんとせし處に」とあるも、屈平が汨羅に投身した故事によつたのである。

へそむら 磨針峠の氣が細うては勝たれぬと、へそ村の上で分別しかへ（丹波與作）

〔綣村〕近江國栗太郡にある村名、草津と守山との間。近松のこの文は臍に綣村をいひかく。

べにがやつ 今ぞ風雅の道までも色をあげたる紅が谷（最明寺殿）

〔紅谷〕鎌倉の補陀落寺の東の谷をいふ、土俗に紅が谷といへども辨が谷又は別が谷の轉訛である。

べるあんだう 遼東大王都を日本に切取られ、べるあんだうに落ちのび給へば（三國志）

朝鮮八道の一なる平安道（Phyong-an）のことであらう。

べんがら べんがら・あんぼん・すべいで（國性爺後日）

北東印度ベンガル州（Bengal）を云ひ、昔はベンガラ（Bengala）といふ。

べんけいやまのまち （女腹切）

〔辨慶山町〕六月十四日京都祇園會に辨慶山を出す町で、卽ち下京區蛸藥師通り烏丸西入町である。堀河之水（元祿七年刊）夏の部に祇園會のことを記せる文中に、「橋辨慶山＝四條坊門室町の東、烏丸の西より出る昇山也、源義經武藏坊辨慶五條の橋上にて武藝を挑みけるすがたをうつせる山なるべし」。

べんざいてん 無常の風も立騷ぐ、辨財天の鰐口の（生玉）

〔辨財天〕大阪生玉社境内・門前北側にあつて、每年正月七日富會がある。

へんみやうゐん ここに高津の遍明院（曾根崎）

〔遍明院〕東高津野中の觀音をいふ。難波丸綱目・三に、「東高津の野中、すこし人家をはなれ九折を登りて南向にあり」。攝津名所圖會・三に、「野中觀音。東高津野中にあり、遍明院と號す」。攝陽群談・十二に、「東生郡南平野町村の東にあり、境内に大阪巡禮十三番の觀音堂あり」。「大阪三十三所」を見よ。

ぼうのつ

「ばうのつ」を見よ。

ぼうふざん

「ばうふざん」（五五七頁）を見よ。

ほうらい 三萬里の蓬萊指顧の中、凡て兜卒に到るが如く（浦島）

〔蓬萊〕海中にあつて神仙の居る山。史記・封禪書に、蓬萊・方丈・瀛洲の三神山は渤海中にありて、人を去ること遠からず、諸僊人及び不死の藥皆在りと見えてゐる。漢書・郊祀志に、「蓬萊・方丈・瀛洲・三神山在レ渤、金銀爲二宮闕一」。

ほうらいじ 餘り嬉しき事ありて、三河國ほうらいじ峯の藥師へ參るなり（五人兄弟）

〔鳳來寺〕「みねのやくし」を見よ。

ほさか 武藏に穗坂小野の牧（源義經）

〔穗坂〕甲斐國穗坂は馬の産地。拾芥抄中、年中行事部に、「八月十七日牽二甲斐穗坂馬一」と見えてゐる。巣林子が「武藏に穗坂」といへるは、甲斐の思ひ違ひであらう。

ほしだに・かがみいし （嵯峨天皇）

〔星谷・鏡石〕四國遍路（その條を見よ）第十九番立江寺と第二十番鶴林寺との間に、星谷岩屋寺があつて、其處に鏡石がある。和漢三才圖會、立江寺の條に、「此間有二岩木村取星寺正安寺一、涉二桂川一、星谷岩屋寺有二鏡石一、慈眼寺有二卒都婆石、胎内潜等一、最靈場也」。

星月夜の淺井 （相模入道）

相州鎌倉十井の一で星の井ともいふ。鎌倉町坂の下市街の西端、極樂寺切通にかからうとする右方にある。

ぼだいじ 珠數につながん菩提寺や（曾根崎）

〔菩提寺〕攝陽群談十二に、「生玉中寺町にあり、境内に大坂順禮十九番觀音堂あり」と見えてゐる。

ほつけじ 玉の臺に法の花、法華寺にこそつかれけれ（三世相）

〔法華寺〕大和國添上郡佐保村大字法華寺にある。明治三十一年にこの寺の十一面觀世音の木造立像一軀國寶となる。

ほつけながや 青葉隱れの鳥の音も、法華長屋の名を立てて、神祇釋教戀無常、中にこめたる中町や（氷朔日）

〔法華長屋〕鶯の啼聲の「ほけきやう」に「法華長屋」をいひかけたのである。法華長屋は大阪堂



法華長屋

の、里は三筋に町の名も、佐渡と越後の間の手を（冥途飛脚）　極彩色の越後町、三筋に三つの春立てば（壽門松）

〔三筋〕大阪新町遊廓をいふ。新町遊廓は其實四筋町〔佐渡屋町、瓢簞町、佐渡島町（越後町）、吉原町〕であるが、その中吉原町を除いて三筋というたのである。蓋し吉原町は下劣な青樓町であるから、繁華な新町遊廓に加へなんだのである。「四筋の町」及び本書附錄の元祿頃大阪地圖につきて見よ。冥途飛脚のこの文は、三筋に三絃をきかせて、越後（その條を見よ）と淡路町との間の道を間の手というて、三絃の緣語合の手（歌聲暫く中絶する時三絃のみを彈じる手）をいひかけたのである。

みすぢまち　里は都の末中なり、通ひても通ひたらぬぞ三筋町、西の洞院中道寺、衣紋が馬場の一方口（反魂香）

〔三筋町〕京都島原の傾城町をいふ、三條の街衢であつたから三筋町といふたのである。この町寛永以前には六條室町西井に西の洞院中道寺町にあつた。「しまばら」を見よ。

みすのさと　市之進は御香の宮、甚平は三洲の里、每日そんじやうそこそこと（鑓權三）

〔三洲里〕山城國紀伊郡にありて伏見町の西南に當り、三洲天王宮のあたりをいふ。雍州府志三、神社門下、紀伊郡）の條に云「三洲天王宮。在二伏見一、祭二牛頭天王一者也、一說天武天皇也」。

みせんのだけ　袂の色の嚴島、彌仙の嶽に照る月の（國性爺後日）

〔彌仙嶽〕安藝國佐伯郡嚴島に在りて北嶺なる彌山をいふ。

みぞろいけ　（三國志）（關八州）

〔御泥池〕山城國愛宕郡上賀茂村の東に當り、京都より鞍馬に通ふ路畔にあつて、周廻十八町あるといふ。

みだう　朝鮮人の饗應御堂へも雇はれ（宵庚申）

〔御堂〕大阪東區北久太郎町四丁目大谷派本願寺別院をいふ。天和二年朝鮮使來聘の時この寺旅館に當てられ、その後享保四年朝鮮人來朝した時にも旅館に當てられた。

みたらしがは　賀茂のみたらし川瀬のなみ、およぎつく程氣もせかれ（女夫池）

〔御手洗川〕下賀茂明神の側を流れてゐる川。謠曲・加茂に、「御手洗や淸き心に澄む水の賀茂の河原に出づるなり」。

みたらひ　阿伏兎、御手洗（女護島）

〔御手洗〕安藝國豐田郡大崎下島を昔は御手洗島といひ、島の東端に御手洗町がある。神功皇后が三韓征伐の途次御船を繫ぎ、御手を洗ひ給うた所といふ。

みつ　直下にみつの難波の里（淀鯉）

〔三津〕大阪をいふ。蘆分船（延寶三年刊）第一に「三つの浦といふこと、蘆津・汐津・難波津といふ人あり、又御津ともいへども、此說いづれか是なることを知らず、予思ふに御津とは、仁德の皇居の津なれば御の字を添へたるか、敷津・高津・難波津といふ、是等に從ふべきか」。巣林子のここの文は、「直下に見つ」に三津をいひかけて、難波の里とつづけたのである。

みつけ　なじみ見つけのとまりと聞けば（丹波與作）

〔見付〕遠江國にありて濱松と袋井との間。東海道五十三次の一。

みつでら　三十番にみつ寺の大慈大悲を賴みにて（曾根崎）

〔三津寺〕大阪三津寺町にあつて、古義眞言宗で本尊は行基作の十一面觀世音。攝陽郡談・十二に、「大坂巡禮三十番三津寺、西成郡大坂の市中三津寺町にあり」。

みつでらのしやうはちまん　仁德帝の宮所拜み巡りて十番に、數も願もみつ寺の正八幡に早つきぬ（卯月紅葉）

〔三津寺正八幡〕今大阪市南區佐野屋橋筋の角にあり、御津宮ともいふ、島の內の鄕社。攝陽群談・十一に、「大坂三津寺町にあり、所レ祭應神天皇也云々」。浪花寺社巡、二十二社廻りの條に云「十三番。島之內三津八幡」。

みづのみまき　みづの御牧の放れ駒、寶に音に聞く津の國の（鎌田）　みづの御牧か鳥飼か、信濃に桐原望月か（源義經）

〔美豆御牧〕山城國久世郡綴喜郡の中にある。（もと木津川の兩岸に亘つてゐたが、今は東北岸を御牧村というて久世郡に入り、美豆は淀町に接して綴喜郡に入る）。古は馬寮の御牧で放飼の地。

みどりばし　あとおい松のみどり橋（天網島）

〔綠橋〕大阪蜆川に架せる橋。本書の大阪圖につきて見よ。巣林子作・心中刄は氷の朔日に、「梅田のみどり曾根崎の」とある「みどり」はこの綠橋をいうたのである。

みなくち　一口二口みな口どぢやう跳り越え（丹波與作）　買うてたもれみなくちの、葛小笠に露もりて（出世景淸）

〔水口〕近江國甲賀郡にある舊驛路で、今・水口村といふ。泥鰌はこの地の名物である。東海道名所記（貞享五年刊）に、水口の宿で泥鰌汁を食うたことが載せてある。葛小笠もこの地の名産である。但貞享頃は既に流行せぬやうになつたと見えて、好色旅日記（貞享四年刊）巻三に、水口の町のことをいうて、「一昔以前はやるつづらがさ今は見ぐるし」と見えてゐる。

南の風呂（みなみのふろ）　南の風呂の浴衣より今此新地に戀衣（天網島）

島の內（大阪南區道頓堀）の風呂屋をいふ。「風呂」を見よ。

みねのやくし　姬君は峯の藥師の申し子にて（十二段）　折しも今日は寅の日の峯の藥師の御緣日（卑常盤）

〔峯藥師〕三河國設樂郡にある鳳來寺をいふ、本尊は藥師瑠璃光如來。

みはら　淺間三原那須野の原あさづまのかりくらより（世繼曾我）

〔三原〕信濃國佐久郡にある。

物語に見ゆ、又松カ枝ノ淵あり、岡村に至て大川と云、松原にて松原川と云、昔は總て松川と稱す、其の海に入る所を大川口と呼ぶ、[illegible]に[illegible]入る[illegible]。

まつちやま 君と寢る夜な眞乳山、我に夫もなき渡る莖邊のたづな玉鶴と（聖德太子）

〔眞乳山〕大和國宇智郡牧野村大字木之原にある。

松と櫻櫚との連理の森 これこそ曾根崎天神の松と櫻櫚との連理の森。昔集めたる言の葉の餘所に聞きしも今は又（二枚繪）

曾根崎の森にあつて、天滿屋お初と德兵衛が情死した所である。巣林子作・曾根崎心中、道行血死期の霜の條に、「涙の絲の結び松、櫻櫚の一樹の相生を連理の契に擬へ、露の憂身の置き處、サア此處に極めんと、上着の帶をとく兵衛も、初も涙の染小袖云云」と見えてゐる。地名部「そねざきの森」を見よ。

まつのを 兼好

〔松尾〕山城國葛野郡松尾村大字上山田の南なる松尾神社をいふ。

まつばがやつ 松葉か谷の佐竹屋敷は城之介泰盛（最明寺殿）

〔松葉谷〕鎌倉安國寺のある處をいふ。

まつほのうら 來ぬ人をまつほい浦の夕凪に（卯月紅葉）

〔松帆浦〕淡路國津名郡にある溜邊。「來ぬ人をまつほ」（四六四頁）を見よ。

まつもと（大原問答）

〔松本〕現今は大津市内の町となつてゐる。

まつらがは 唐土船を松浦川、港もちかの浦風に（國性爺）

〔松浦川〕肥前國松浦郡東松浦を流れる川の名。

まつをやま 無念ながらも小六郎、春姬をかき負ひて松尾山にさしかかり、津の國路へぞ逃げのびける（三世相）

〔松尾山〕山城國葛野郡嵐山の南にある山の名。黑川道祐編・雍州府志・一、山川門・葛野郡の條に、「松ノ尾山。在二嵐山南一、松尾明神社在二山下一」。

まののかやはら 眞野の萱原遙々と余吾の海面見下せば（殘靜）

〔眞野萱原〕近江國滋賀郡眞野村の萱原をいひ、堅田の北方。古歌に「鶉鳴く眞野の入江の濱風に、尾花なみよる秋の夕暮」。

まぶちなはて 馬淵畷を遙々と横ぎる嵐さらさらさら（小栗判官）

〔馬淵畷〕馬淵は近江國蒲生郡鏡山村の西、雪野山の北。

まりこがは 駒の蹴上の鞠子川、衣紋流のアア曲もなや（會稽山）

〔鞠子川〕丸子川とも書く、相模國にある酒匂川の古名。

まれいざん 月をさらすかさらさらさら更に人音まれい山（釋迦）

稀に秣刺耶山をかけて「まれいざん」といつたのである。秣刺耶山は天竺にある。大唐西域記・卷十に、「國南濱海有二秣刺耶山一、崇崖峻嶺、洞谷深澗云云」。

まんだふゐん 萬塔院にともす火は（曾根崎）

〔萬塔院〕攝陽群談・十二に、「萬塔院。四天王寺のうち、十五社の西にあり、千手觀音・四天王・賓頭盧等を安置す、大阪順禮第二十四番」。

みあれのもり みあれの森に酒宴の幕（兼好）

〔御生森〕山城國愛宕郡御生社の森をいふ。花鳥餘情に、「みあれは玉依姬の別雷神を生み給ふ所をいふにや、御生とも書く」。

みえいだう 廻り廻りて室町の絲屋組屋鷺ぎ女に、御影堂の扇折ほれ身をくだきかせげども（百日曾我）見しはかへらで面影の、なほなつかしみ御影堂、きどのがあふぎ召すまいか（百日曾我）

〔御影堂〕京都五條通り寺町の西にありて新善光寺といふ、寺中に尼多く住み、扇を作つて業とした。鹽尻に平敦盛の遺室が尼となつて御影堂に住み扇折を始めた由を記してある。雍州府志・七・服器部に、「今良賤常用之扇、小川井所々有レ之、然不レ及二御影堂之製一也、其寺僧尼共造レ之」。御影堂で製する扇は京都の名産で、何何阿彌と稱する坊舍十五あつたが、明治以後衰廢して今は御影堂扇といふものなく、僅に一二坊を留めてゐるのみである。

みかたがはら 野菊桔梗はおも枯れて色をあらそふ花軍、味方が原の夕景色（今川了俊）

〔味方原〕遠江國濱名郡濱松の北方、引佐郡にわたる原野をいふ。

みかのはら（井筒）

〔瓶原〕山城國相樂郡瓶原村。「みかの原わきて流るる泉川」（四五五頁）を見よ。

みくさがはら 名所教へて敷妙が、御手引く道の力草、みくさ河原に着き給ふ（日本武尊）

〔三草河原〕播磨國加東郡上福田村三草山の南溪なる河原をいふ。

みくに 敦賀では遠山、三國での名は勝山（反魂香）

〔三國〕越前國坂井郡三國町。古來北國有名の港で、三國の遊女は其名高かつた。

みくにさかひの板橋 三國さかひの板橋にこそ着きにけれ（淀鯉）

雍州府志に、「三國橋。在二洞峠麓西南一、是則山城河内攝津之境界也」。洞峠は八幡の南、山城河内兩國の境にある。

みさか 木曾のみさかの谷風（最明寺殿）

〔御坂〕信濃國下伊那郡と美濃國惠那郡との界嶺。

みしま 伊勢・石淸水・賀茂・春日・鹿島・三島（加增曾我） 三島の神主忠明は源氏について由緣ありと（伊豆日記）

〔三島〕伊豆國田方郡三島村にある三島明神をいふ。祭神は大山祇命であるともいふ。鎌倉以後武士の尊崇厚く、武士の起請文には引合ひに出された明神である。

みすぢ 澪標難波に咲くやこの花

あたりといふ事にて渡にはあらずとぞ」。巣林子のこのあたりの文は謠曲・鉢の木に據つたのである。

むくはら 當國向原に伽藍を構へ、佛法流布を待つべしと、稻目の臣にぞ勅諚ある(用明天皇)

〔向原〕大和國高市郡にあり、欽明天皇十三年稻目宿禰が伽藍を建てた地で、これ我國寺院建設の最初である。日本書紀・卷十九、欽明天皇十三年の條に、「稻目宿禰試令二禮拜一、大臣跪受而忻悅、安二置小墾田家一、懃脩二出世業一爲レ因、淨二捨向原家一爲レ寺」。

むくもと 袖には涙梢には木の實こぼろる椋本や(丹波與作)

〔椋本〕伊勢國河藝郡高野尾村の西なる小驛にして、安濃津より鈴鹿關に通ずる路に當る。

むしあけ 月ぞ藻にすむ蟲明の、瀨戸の松風ざんざらめけば(浦島)

〔蟲明〕備前國邑久郡にあり、往昔播磨備前間の一海驛であつた。巣林子のここの文は、月の緣によりて明をいひ、また古今集戀五、藤原直子、「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと、音をこそなかめ世をば恨みじ」、の歌句をとりて以て地名にかけたのである。

むたのよど 六田の淀の春風に、枝垂柳が一揉み二揉み(源義經)

〔六田淀〕大和國吉野郡吉野村の北なる渡津をいふ、吉野川の急流に臨み、水邊に楊柳多い、ここの渡を柳の渡といふ。

むどうじ はや無動寺の夜半の鐘、嵐吹きおろす小笹原(弘徽殿)

〔無動寺〕近江國滋賀郡比叡山の南界にして、西に降れば修學院白川村である。寺は相應和尚の開基の不動堂。

むめだつつみ むめだ堤の小夜烏(曾根崎)

〔梅田堤〕大阪を流れる蜆川を梅田川ともいひ、梅田川の堤を梅田堤といふ。「梅田堤の小夜烏」といへるは、梅田墓地附近の梅田堤で鳴く夜烏をいふ。

むめだばし 「うめだばし」を見よ。

むめつがは (娍)

「梅津川」山城國葛野郡にあつて、梅津村を流れる桂川を云ひ、舟渡しがある。

むやむやのせき 「どやどやどほりのむやむやの關」を見よ。

むらさきの (娍)

〔紫野〕山城國愛宕郡大德寺のある邊をいふ。

むろ なばかしやくしか室が泊か(松風)

〔室〕播磨國揖保郡室津をいふ。

むろど (以呂波)

〔室戶〕土佐國安藝郡津呂村室戶崎。

めいろ 違背申せば勅を背く朝敵と罷成る、お受け申して罷向へば、迷盧八萬の頂よりまされる親に弓を引く(鎌田)

〔迷盧〕蘇迷盧山卽ち須彌山のこと。梵語 Sumeru、妙高山の義である。大海の中にあつて金輪の上に據り、日月これによつて回り、諸天これによつて居る。高さ八萬四千由旬あるといふ。故に迷盧八萬といふ。西域記に「舊云二須彌一、又曰二須彌婁一皆訛、正蘇迷盧、唐言二妙高一、新譯云二蘇迷盧一」。釋氏要覽に「長阿含並起世因本經等云、四州地心、須彌山、梵音正云二蘇迷盧一、此名二妙高一、此山有二八山一遶レ外有二大鐵圍山一、周圍圍繞並一日月回轉、照二四天下一、名二一國土一」。平家物語・烽火の條に「君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の頂よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす」。

めかはむら よくには見えぬ目川村の、馬子共よせて我等がどうを取たの(丹波與作)

〔目川村〕近江國草津と梅木との間。東海道名所圖會・二に、「目川とは村の名なれど、今は名物の菜飯に田樂豆腐の名に聞ひて、何國にも目川の店多し」。

めかりのみやうじん (女護島)

〔和布刈明神〕早鞆明神又は隼人神社とも云ひ、豐前國企救郡にある。祭神は比賣大神・彥火火出見命・鸕鷀草葺不合命・豐玉比賣命・阿曇磯良、(豐前志には「所レ祭之神五座、一曰二玉依姬一、二曰二彥火火出見尊一、三曰二豐玉姬一、四曰二鸕鷀草葺不合尊一、五曰二阿度目磯良一」とある。

めをといけ 名は永き世の女夫池、池の玉藻を亡き魂の、形見に繫ろ蘆眞菰(女夫池) これも此方の島ゆゑぢやと、女夫池で聞いて來て、知らぬかと言はるる故(二枚繪)

〔女夫池〕夫婦池とも書く。攝陽群談卷四、池の部に、「夫婦池。同郡(攝津國西成郡)天滿天神橋筋の北町迯にあり」。蘆分船卷六に、夫が妻に三年間に家に歸るを語つて行商に出たが、夫の遂に歸らぬを妻歎いてこの池に投身した、その後に夫歸つて妻の死を悲み、妻の跡を慕うて亦投身した由見えてゐる。今も大阪北區天滿末廣町あたりを女夫池と稱してその名を存してゐる。

めをとづか 末は淀のや男山、麓に立てる夫婦塚、其二道により風の恪氣爭ひ理をもちて、霜に更けたる女郎花(松風)

〔夫婦塚〕男山の麓に男塚女塚とありて、これを夫婦塚といふ。謠曲・女郎花に、平城天皇の御時に小野賴風と云ふ者男山に住んで京の女と契つた、その女八幡へ尋ね行つて賴風のことを問へば家の者答へて、この程妻を持たれてその許に行かれたといふ。女これを聞いて恨しう思うて放生川に身を投げた。賴風これを聞いて泣く泣く死骸を尋ねて取上げ、山本の土中に葬つた、その塚より女郎花一本生ひ出たので賴風あはれと思ひ、女の跡を慕うて川に身を投げた。かくて男塚と女塚と築かれた由作つてある。

もうる もうろ左衞門(國性爺)

モゴル(Monghol 又は Monghul)を云ふ。漢字で莫臥兒と書き、英領とならない以前の印度帝國をいふ。和漢三才圖會に、「按、莫臥兒、南天竺之中最大國也、人物似二暹羅一而色稍黑、四季同二于暹羅一」。

もちづき 關より西にかくれなき名を望月の引馬や(堀川波鼓)

〔望月〕信濃國佐久郡にある馬の名所で、古昔朝廷に馬を納めた地。千曲之眞砂・前編卷二

みぶでら　乳兄弟の清流は庭に枯木の猿縛、壬生寺の入相も姿の花や散らすらん（弘徽殿）

〔壬生寺〕山城國葛野郡大内村壬生にあつて眞言宗の寺院である、寶幢三昧院と號す、寛弘二年靜照寺となり、承暦元年地藏院の號を受け、正應年間圓覺上人寺院を再興して融通念佛會を修す、これを壬生大念佛といふ。上人この時教化の方便として一種の猿樂を始めた、これを壬生狂言といふ、爾來毎年四月に行ふ。花洛細見圖に、「壬生にて念佛を申し踊る事、先に必ず猿の綱渡りをなす」。案内者（寛文年間刊）三月十四日の條に、「壬生念佛。今日始りて二十四日までこれあり、桶取、猿の狂言など作り、地藏堂の外陣西の方に舞臺をしつらひ、圍座わらうだの大きなる鰐口をつり、白き布にて頬冠したる男大なる撞木にてこれを打つ、また男二人頬冠して鉦鐘を鳴らす、拍子は無滴拍子にて、ははあみだはあみだ佛と唱ふれば、壬生中の子ども舞臺にありて聲を請取り念佛する、その間に狂言あり、されば是は狂言とはいふべからずや、言葉を出し物言ふにこそあらめ、物言はず唯仕形ばかりの事なり、舞といふべきやと或人申されし、桶取の舞、猿の舞、八尾の地藏の舞などいふべきにこそ」。

みみづか　駕籠よ駕籠よと呼ばはれども、無いか聞かぬか耳塚の、西に錢座の名のみにて（女腹切）　今日本に耳塚ありとは唐土までも隠れなし（國性爺後日）

〔耳塚〕京都東山方廣寺大佛殿の門前にある、征韓の役に敵の耳鼻を斬つて送つたのをここに埋めたといふ。雍州府志（貞享三年刊）陵墓門・愛宕郡の條に、「耳塚。在二同（東山方廣寺）大佛殿樓門之外一、豐臣秀吉公朝鮮征伐時、軍士毎レ得二韓人首級一、厭二海陸運漕之煩勞一、斬二耳鼻一贈二日本一、秀吉公悉令レ納二埋斯所一、建二塔於一堆墳上一、是號二耳塚一」。出來齋京土産（延寶五年刊）巻三に、「大佛殿の門前に塚あり、上に五輪を居たり、これを耳塚と名づく、文祿元年豐臣太閤秀吉公高麗國を責打給ふ、小西攝津守・加藤肥後守を大將として數萬騎をつかはさる、遼東の李子を生捕り軍兵多く討取り、其首を日本に渡さんことは大造なれば、ただ其耳ばかりをそぎて討取る異國人の數を記し、桶に入れて日本に送り上す、即ち此所に埋みて耳塚と名づくとなり」。

みむろやま　いざ立寄りて御室山、薄の尾花打枯れて（大織冠）

〔三室山〕大和國平群郡龍田川の西岸、神南村の背後にある。

みめうのはし　渡らぬ先に渡られぬ御廟の橋の危さも、後世のみせしめ蛇柳や（萬年草）

〔御廟橋〕大師廟の前なる玉川に架せる橋をいふ。橋板三十七枚ありて金剛界會の三十七尊の種子を書いてある。此橋を渡るは三十七尊の三昧に結縁するもので、罪障ある者は渡ることができないと言傳へた。

みもすそがは　みもすそ川の濁る世に住むかひなき身なれども（非筒）

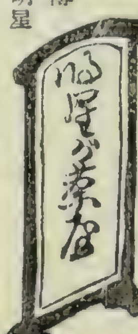
〔御裳濯川〕伊勢大神宮の前を流れる五十鈴川をいふ。神都名勝志に、「五十鈴川、一名御裳濯川俗に大川といふ」。倭姫世紀に、「命河際にして御裳裔長く穢れ侍るを洗ひ給へり、從レ其以來號二御裳濯河一也」。御裳裔の意より天皇の御系統に喩へていふ。

みや　宮へあがればちりふへ四里の（丹波與作）

〔宮〕熱田宮の略、尾張の國にありて桑名と鳴海との間、東海道五十三次の一。

みやうじやうがちやや　明星が茶屋で飲み干すやうな大ぐさり（丹波與作）

〔明星茶屋〕伊勢國多氣郡明星村の茶屋で、伊勢參宮街道に當る。西鶴織留・卷之四に、「明星が茶屋こそをかしけれ、いつとても振袖の女赤根染の裏付けたる木綿着物を黑茶にちらし形付かぬは一人もなし、扨日本に愛の女程白粉を付ける所又もなし」。伊勢講井參宮儀式（貞享四年刊）卷三に、「明星が茶屋。參宮の人に清めの茶をすすむる也、所のいひ傳へには、明星あまくだりここの水を清めあたへたるゆゑ、清めの水にて茶を煎じすすむといへり」とあり、挿圖に、店に「明星が茶屋」の看板を出し、腰を掛けた旅人に女が茶をすすめてゐるのが載せてある。



（店に出せる明星が茶屋の看板）

みやぎの　宮城野の萩の露とぞ消えにける（源義經）

〔宮城野〕陸前國宮城郡にありて、仙臺の東の平原で古來萩の名所である。

みやこのふじ　我立つ杣や都の富士、西坂本にぞ入り給ふ（女楠）　都の富士を動かさず、ここに引寄せ日がかりの（關八州）

〔都富士〕比叡山をいふ。雍州府志（貞享三年刊）一に、「比叡山。斯山王城之艮岳也、其山至高、及レ春有二殘雪一、自レ古稱二都富士一」。

みやじま　年とてもまあ二年下宮島へも身を仕切り（冥途飛脚）

〔宮島〕安藝國嚴島町の別稱。ここの文に「下（しも）宮島へも身を仕切り」とあるは・上方（かみがた）から下（しも）の宮島へも身を仕切替して田舍妓となる意。（竹本筑後掾正本古刊本に「まあ二年下」と「宮島へも」との間に句切の點あるは、謠ふ上の苦節であつて、文章上の句讀點ではない）。

みるがうら　手に取りて見るが浦（國性爺後日）

手に取りて見るに見の島の浦をいひかけたのであらう。國花萬葉記・豐前國名所舊跡の條に、「見の島＝當國かんたと云所の東海上一里許なり、無双の景地也」。

みわ

〔三輪〕解釋部について見よ。

みわがさき　かやうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり（最明寺殿）

〔三輪崎〕大和國礒城郡三輪村大字三輪なる三輪山の尾崎をいふ。倭路記に、「三輪の町を出ではなれて長谷の方へ行くに三輪山の尾崎あり、これを三輪が崎といふ由。又この邊に山より流れいづる小溝あり、土人これを佐野の

やつはし　謎かけ渡す八橋や杜若の一輪にて(井筒)

〔八橋〕三河國にありて昔杜若の名所。伊勢物語に、「三河の國八橋といふ所に至りぬ、そこをやつ橋といふことは、水のくもでに流れ分れて木やつ渡せるによりてなんやつはしとはいへる」。丙辰紀行に、「三河國八橋は杜若の名所なる事在中將の歌にてかくれなし、今岡崎より地鯉鮒にいたる道より北の方一里計に、それなん昔の八橋なりとて所の人道に指をさして敎へ侍る、久しく田となりて今は杜若なし」。

やながせ　柳が瀨憂き瀨(孫醉)

〔柳瀨〕近江國伊香郡片岡の大字で、近江・越前の通路に當り、現今鐵道停車驛がある。

やなぎが浦　(國性爺後日)

〔柳浦〕肥前國北松浦郡柳村の海邊。

やなぎがをか　(加增曾我)

〔柳岡〕信濃國下水内郡飯山の北たる柳原か。

やなぎはら　柳原の法印樣(反魂香)

〔柳原〕京都室町上御靈前の筋下る所の左右近邊をいふ。(四六四頁)を見よ。

やはぎ　(女楠)　やはぎの宿(孕常盤)

〔矢矧〕矢作とも書き、三河國碧海郡の町で、東海道の國道に當り、矢作川の西岸。

やはま　行く先は土佐の海、八濱はま中、八坂坂中さつさつさつ(嵯峨天皇)

〔八濱〕和漢三才圖會、四國遍路第二十三番藥王寺の條に、「自レ是行二土佐東寺一二十一里、內十里當國領分也、有二八坂坂中八濱等名一云々」。

やまざきでら　夜見世の太鼓音絕えて山崎寺の鐘の聲(淀鯉)

〔山崎寺〕山城國紀伊郡山崎の北なる寶寺をいふ。山城志に、「寶積寺、明月記及桃花蘂葉等作二寶寺又山崎寺一云々」。

やましな　(三國志)

〔山科〕山城國宇治郡北方過半の稱で、今の山科村・醍醐村に當る。

やましなでら　(女護島)

〔山階寺〕藤原鎌足が山城國山階に寺院を建立し、山階寺といふ。淡海公の時に山階寺を奈良に移して、堂宇を新にし興福寺といふ。而も舊名を存して興福寺を山階寺ともいふ。

やまだ　駕籠賃は山田までぜにまたぢや(百合若)

〔山田〕攝津國武庫郡山田村の小邑山田をいひ、神戸の北約二里にある。近松のこの文に「ぜにまた」とあるは、行基(その條を見よ)より山田までの駕籠賃をいうたものである。行基から山田まで道程五里許ある。「ぜにまた」(二〇三頁)を見よ。

やまぶきのせ　跡は霞の八重一重、山吹の瀨を我なかの天の川瀨と(雪女)　山吹の瀨に影見えて(淀鯉)

〔山吹瀨〕山城國宇治川の所にある名所。俗に融大臣の別莊がこの地にあつた時、川岸に多く山吹を植ゑたからの名であるといふ。萬葉集・卷九、雜の歌に、「秋風に山吹の瀨のとよむなべ云々」。新拾遺集の歌に、「ちりはつる山吹の瀨に行く春の、花に掉さす宇治の川長」。東海道名所記卷六に「橋の西のつめに橋姬の祠あり、小島が崎、山吹の瀨みなここにあり」。

やまもとのさと　是より十八町あなたに山本の里と申してよき泊の候へば(最明寺殿)

〔山本里〕舊名であつて、戰國頃には根小屋(ねこや)といひ、上野國群馬郡今の八幡村あたりの稱。名跡志に「箕輪軍記に根小屋山本鄕といふ、古は山名村のあたりより此處かけて山本鄕といひしと傳ふ、鉢の木の謠曲に山本の里とあるもここか、川(烏川)を隔てて東は佐野村なり」。巢林子のこのあたりの文は謠曲・鉢の木に據つたのである。

ゆききのをか　縮髮のお六、ゆききの岡に嫁入して(持統天皇)

〔逝回岡〕大和國高市郡高市村の丘陵、市往岡の稱で岡寺のあたり。

ゆきのした　(最明寺殿)

〔雪下〕相模國鎌倉郡にあつて、昔は鶴岡の北麓あたりを云うた。源賴朝の館などは雪の下にあつた。「ひかるげんじ」をも見よ。

ゆせんだいみやうじん　那須の湯泉大明神(加增曾我)

〔湯泉大明神〕下野國那須郡那須村湯本にある鄕社で、祭神は大己貴命、少彥名命、譽田別命。

湯殿山(ゆとのさん)　湯殿山のつま隱れ(酒呑童子枕言葉)

羽前國月山の西南山腹の一部の稱。湯殿山神社あつて今・國幣小社。「つまがくれ」とあるは酒の名。海老屋節、酒盡し心中に「色酒過ぎて幼馴染のつまがくれ酒、隱れあらざる男」。

ゆのをたうげ　湯尾峠の孫杓子、盛りこぼしたる花重(反魂香)

〔湯尾峠〕越前國南條郡今庄驛の北一里、その間の小嶺をいふ。山巓に孫杓子といふ茶屋ありて疱瘡神の守札を出す。井原西鶴撰・男色大鑑・卷之二、雪中の時鳥の條に、「越前の國湯尾峠の茶屋の軒端に大きなる杓子をしるして、孫じやくしとて疱瘡輕き守札を出す」。奧細道菅菰抄に、「湯尾峠は僅なる山にて嶺に孫嫡子の茶屋あり、疱瘡の神の守札を出す、往昔此茶店の主疱瘡神と約して、其子孫嫡嫡はもがさの患なしといひ傳ふる故なり」。傾城反魂香のここの文は、杓子の緣より「盛りこぼし」といひつづけたのである。

ゆふぐれのせき　(薩摩歌)

〔夕暮關〕大隅にある名所。國花萬葉記・大隅名所之部に、「夕くれの關」とある。

ゆめどの　築地ごしに高く見ゆるは夢殿さうな(聖德太子)　上宮太子は夢殿より唐船に法の道(國性爺後日)

〔夢殿〕大和國生駒郡法隆寺にありて、東院又は上宮王院とも稱し、高三丈九尺、徑五丈六尺の八角圓堂で聖德太子が三昧定を修された禪室である、今は特別保護建造物となつて居る。「上宮太子は夢殿より云々」を見よ。

ゆもと　萬能の藥の湯本と聞くからに、四百四病は消えもせん(反魂香)

〔湯本〕紀州熊野本宮の溫泉をいひ、湯の峯にあつて、小栗判官の車坂の舊蹟がある。和漢三才圖會・卷七十六、紀伊の條に、「本宮溫泉(いでゆ)。在二湯峯一、一遍上人於レ是會二癩人一、倡行入二溫泉一、卽病平癒、其所レ休地名二見塚一、俗以爲二小栗判官一者誤也」。

ゆもと　(扇八景)

に、「望月。いまは八幡の驛の上にて陬方山といへるあり、其上にすかたの原といへるあり、長三里あまりある廣き原なり、その下は望月の驛なり、この原のことを云ふ言也、むかしは此邊五六里原野にて大牧なるよし、貢馬も當國の牧は六十疋、ひとり望月二十疋也と延喜式に見ゆ、總じて此邊廣莫の原野にして牧場なり」。國花萬葉記卷十一、信濃國州郡名所之部に「望月の牧＝是も駒の名所云々」。堀川波鼓のこの文に就いては「ゆふづけどり開より西に云々」をも見よ。

もちひどの 此頃は眼病ゆゑ毎日餅飯殿の日醫師の方へ通ひ候(三世相)

〔餅飯殿〕奈良の興福寺附近の町名。林宗甫撰・和州舊跡幽考・第三卷、添上郡の條に「餅飯殿町。もちゐ殿町は舊名福貴畠鄕といふ、是はあめのみかどの御宇に國司和氣利貿卿五月一日に始て藪の供御をささげしより此名あり、其後辨財天を勸請の時餅飯の供具を奉りしより餅飯殿の名あり」。

もとこうぜんまち 本興善町といふ所で(博多)

〔本興善町〕長崎にある町名。諏訪神社はこの町よりも北方にある。

もとめづか 昔の例求塚(今宮)

〔求塚〕昔、津の國に住んでゐた女が二人の男に懸想せられ、詮方なくして水に投じて死んだので、二人の男も亦悲しみ、女のあとを追うて死んだ。詳しくは謠曲・求塚を見よ。大和物語にも出てゐる。名所圖會に、「處女塚又求女塚とも書す、三箇所にあり、一は住吉川の西、御田村の東田畔の中にあり、塚のめぐり百五十間許、一は東明村にあり、塚のめぐり百間許、塚上に松樹二十株あり、一は味泥村の濱手大石村の間にあり、塚のめぐり二百間ばかり、これも塚上に松樹あり、東の塚を西面とし、これを茅渟男とす、土人鬼塚とも呼ぶ、西の塚を東面とし、これを菟原男とす、中の塚を南面として求女塚とよぶ、相隔つこと各十五町許」。

もどりばし やア戻るついでに戻橋の錣は戻つたか(女腹切)

〔戻橋〕京都一條通り堀川の上に架せる橋名。巣林子のこのあたりの文は石見が言葉に、その緣語の地名をいひつづけたる輕妙の筆である。

もりくち やりての杉重に樽のめい酒を守口や(淀鯉)

〔守口〕京都と大阪との間に通ずる京街道の驛の名で、今の河內國北河內郡守口町である。

もりとのだいみやうじん 祐成……眼を塞ぎて心中に、南無伊豆箱根二所の御神、同じく湯本の大權現、生國もりとの大明神荏柄の天神(五人兄弟)

〔森戸大明神〕守殿大明神とも書く、相模國三浦郡杜戶崎にあり、祭神大山祇命。曾我祐成の生國は伊豆國なれば、巣林子のここの文に、「生國もりとの大明神」といへること當らない、但相模風土記に森戸大明神のことを敍して、「緣起によれば治承四年九月八日頼朝三島明神を勸請したるにて、これ頼朝豆州配流の日源家再興の事を三島の神に祈り、遂に志を得たる故なりといふ云々」とあり、治承四年九月は頼朝未だ伊豆の配所にあり、巣林子これ等の記事を見て、森戸大明神を伊豆にあるものと思誤つたのであらう。

もりやま 我等も今日もり山まで參ろ(酒呑童子) もり山の觀音堂で三十三夕が質おいて(丹波與作)

〔守山〕近江國野洲郡にありて、美濃路へ行く宿。觀音堂がある。近江名所圖會・四に、「守山觀音は驛中(守山)にあり、天台宗にして東門院守山寺と號す、本尊(千手觀音、十一面觀音)兩像を安置す、延鎭の作、桓武天皇の勅願にして田村將軍の建立なり」。

もろこしがはら 古鄕へ返せ唐錦、もろこしが原にぞ着きにける(扇八景)

〔唐原〕相模國淘綾郡の東部・花水川の東にある。〈新編〉相模國風土記に、「唐原或は諸越原とも記す、正保國圖に稍平塚に接せし海岸の地を唐ケ原と題す」。

もろはのみやどころ (蟬丸)

〔諸羽宮所〕山城國宇治郡なる諸羽神社をいふ。黑川道祐著・雍州府志・三、神社門・宇治郡の條下に云「諸羽大明神。在四宮村、山階十八鄕內之第四宮也、俗謂蟬丸延喜第四宮也、此社依稱四宮、是謂蟬丸宮者是謬傳也、古諸羽作兩羽、然則大兒屋根命并太玉命而爲左右扶翼之神者也」。

やうしう 十萬貫を腰に付け千載の鶴に乘り、楊州の都に樂める其樂を樂しむも(關八州)

〔揚州〕古來繁華を以て聞えた支那の地。「十萬貫を腰に付け云々」の條を見よ。

やくしだう 湯入りの物を掠めじと藥師堂の誓詞あり(百合若)

〔藥師堂〕攝津國有馬郡有馬溫泉地にある。有馬小鑑抄に「藥師堂＝常喜山溫泉寺と號す、釋行基……等身の藥師を石像に刻み、又如法經を書寫し、共に溫湯の底に埋め、箇一宇を建てて藥師の像を安置す、今の溫泉寺是也、云々」。

やしほのをか 今を初瀨の山越や、八しほの岡にこがれ行く(持統天皇)

〔八入岡〕山城國愛宕郡中村鄕中村八幡宮の北の山尾をいひ、楓樹が多い。

やすゐのてんじん 鬢掻撫づる差櫛の、蒔繪に似たる松原は安井の天神これぞとよ(卯月紅葉)

〔安井天神〕攝津名所圖會・二に、「安井天神。相坂の上にあり、祭神少彥名命(中略)、今天滿宮と稱して菅公筑紫左遷の御時、ここにしばしやすらひ給ふゆゑ此名ありとぞ」。ここの文については「さしぐしの蒔繪云々」を見よ。

やせ (三國志)

〔八瀨〕山城國愛宕郡八瀨村。比叡山の西麓に當り、八瀨川その間を流る。八瀨女とて女子に一種の風がある。

やたてのすぎ

語釋部(三五六頁)について見よ。

やつしちがう (加增曾我)(源義經)(會稽山)

〔谷七鄕〕鎌倉は東は山、西は海、月影が谷、佐佐目が谷、佐介が谷、扇が谷、藥師堂が谷、大藏が谷、大御堂が谷、葛西が谷、比企が谷、松葉が谷、名越が谷、辨が谷あつて、小林、小坂、葉山、津村、矢部、長尾、村岡の七鄕がある。

りやうがへちやう　あたまつきは兩替町、内證は曾我殿(女腹切)

〔兩替町〕京都にある町名で、北は丸太町から南は三條に至る。ここの文は、頭髪の結ひ振りは兩替屋風で、金がありさうに見えるといふ意にその名にちなんだ町名を用ひたまで。

りやうじゆせん　(釋迦)

〔靈鷲山〕中印度摩訶陀國なる耆闍崛山をいふ。その山形鷲に似てゐるとてこの名がある。

りやうぜんがさき　(最明寺殿)

〔靈山崎〕相模國鎌倉郡稻村崎の東北に當れる岬角であつて、由比ケ濱の西つづき。

りやうぜんじやうど　聖德太子の御本地はりやうぜん淨土、三界の敎主世尊の御事なり(卯月紅葉)

〔靈山淨土〕靈山は靈鷲山の略。中印度摩訶陀國にある耆闍崛山をいふ。世尊は現世から姿を隱し給へども、その實は靈鷲山にありて永遠に說敎されてゐるのである。卽ち靈鷲山は寂光淨土である。法華經・壽量品の偈に、「爲レ度二衆生一故、方便現二涅槃一、而實不二滅度一、常住レ此(靈鷲山)說レ法」。

りゆうがへし　龍返の川浪に流れ殘りし若大衆(吉野忠信)

〔龍返〕大和國吉野山谷中にある。花顚居士撰・吉野しをりに、「夢違の先より西の方に見ゆる高き山を舟岡といふ、……西の谷を中院が谷といふ、佐藤忠信橫川覺範を打し所なり、山伏かくし・龍返しなど云岩ありと云ふ」。

りゆうげごえ　敵はや勢多を越ゆると聞き、龍華越より先へ廻つて只今參陣(三國志)

〔龍華越〕山城國愛宕郡大原村大字小出石から近江國滋賀郡伊香立村龍華に通ずる山路。

りようもん

典據部(五五九頁)について見よ。

るすん　呂宋兵衞(國性爺)

〔呂宋〕ルゾン(Luzon)を云ふ。比律賓群島中の最大島で、首府をマニラといふ。今は米領となつてゐる。

ろうのまち

「らうのまち」を見よ。

ろくけんちやう　月は早渡ぞめして中橋や、六軒町のさよ格子(重井筒)

〔六軒町〕南水漫遊に、「島之內六軒町といふは塗屋町(今の玉屋町)なり。重井筒の戯文中の巻に、月は早渡りぞめして中橋や、六軒町の小夜格子とて、娼家の二階窓の竹格子をいふ。寶曆の頃までは兩三軒殘りありしが今はなし。此邊を六軒町といふは元文寬保の頃まで女郎屋六軒あり云々」。

ろくじだう　はや天王寺に六時堂(曾根崎)

〔六時堂〕大阪四天王寺の境內にあつて鐘樓に向つて立ち、六時勤行せるより六時堂と名付く。六時禮讚とは、晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜の六時に彌陀を禮讚すること。

ろくしやのみや　神力を添へ給へと六社の宮に我願ひ(扇八景)

〔六社宮〕相模國中郡國府村新宿にある六所神社をいふ。

ろくはら　(女護島)

〔六波羅〕京都加茂川の東、東山の麓、松原五條通のあたり。平淸盛の邸宅のあつた處で、平家物語(長門本)に「元は方一町なりしを、この相國の時造作あり、家數百七十餘宇に及べり云々」。

ろすゐ　見ぬ唐も思ひ出のそればろすゐの磯枕(天鼓)

〔瀘水〕謠曲・天鼓に、天鼓といふ者が霽妙なる鼓を持つてゐたのを帝に所望されて深く惜み、鼓を抱き山中に隱れたのを探し出されて、違勅の罪により瀘水に沈められたことが書いてある。謠曲拾葉抄に、「瀘水＝大明一統志三十六日、慶陽府瀘水在二寧州境一云々」。

わうじやうゐん　(娥)

〔往生院〕京都小倉山の東麓の尼寺であつて、本尊は彌陀如來。妓王妓女寺と云ふ。

わがたつそま

解釋部(三八〇頁)について見よ。

わかばやし　年は經れども常綠木の若林とはあれならん(今川了俊)

〔若林〕遠江國濱名郡にありて、西は篠原高塚に連り、海岸の地なれば濱松浦といふ。

わしのみね　屋根のむれ鷲の峯ぞと一筋に(重井筒)

〔鷲峯〕「わしのやま」を見よ。

わしのやま　烟は同じ鷲の山(歌念佛)西は又鷲の御山、峨峨と聳えて連れり(釋迦)

〔鷲山〕靈鷲山ともいふ、山形鷲に似てゐるよりの名。釋尊多く此山で說敎されたといふ。法華經科註に、「耆闍崛此云二靈鷲一、……又解山峯似レ鷲、……又解前佛今佛皆居二此山一、若佛滅後、羅漢住、法滅支佛住、無支佛、鬼神住、既是聖靈所レ居、總有二三事一、因呼爲二靈鷲山一」。

わにのみさき　和邇のみさきの堅田の浦よりお船に召されて(蟬丸)

〔和邇岬〕近江國滋賀郡にあつて、堅田の北方和邇川の河口の琵琶湖に突出してゐる岬。

ゐで　ゐでの在所に難產がおぢやりまして(加增曾我)

〔滑堤〕相模國高座郡滑堤鄉。

ゐで　ゐでの里(以呂波)　小判の上にはらはらと、淚はゐでの山吹に、露おき添ふが如くなり(冥途飛脚)

〔井手〕山城國綴喜郡井手村玉水町あたりをいひ、昔は山吹の名所である。古今集・春下部、題しらず・よみ人しらずの歌に、「かはづ鳴く井手の山吹散りにけり、花の盛りにあはましものを」。

ゐなのささはら　ゐなの篠原そよさらに有馬の湯口來て見れば(百合若)

〔猪名野笹原〕攝津國河邊郡猪名野の笹原　小倉百人一首・大貳三位の歌に、「ありま山ゐなのささ原風吹けば、いでそよ人を忘れやはする」。

ゐのうへ　(加增曾我)

〔井上〕信濃國上高井郡須坂町西南にあつて、千曲川の東。

ゐのくま　鳥が鳴けば最往ののゐのくまや、何時かはやあめぐり逢ふ(大原問答)

〔猪隈〕猪隈通り(京都下京區六條北)をいふ、治承年間關白實公の第のあつた地である。

〔湯本〕相模國足柄郡にありて今・湯本村といふ。

ゆゐ　ゆゐかんばらよしはらの(丹波與作)

〔由井〕駿河國にありて興津と蒲原との間、東海道五十三次の一。

よかは　比良や横川の春(兼好)

〔横川〕近江國滋賀郡比叡山中にある横川谷の嶺上なる寶塔を横川と號す。ここに横川といへるは横川谷の邊をいうたのである。巣林子がここの文は謠曲・鞍馬天狗に「比良や横川の遲櫻」とあるによつたのである。

よしだ　よしだふた川しらすかちよいと越えて(丹波與作)

〔吉田〕三河の國にありて御油と二川との間、東海道五十三次の一。

よしだ　(兼好)

〔吉田〕洛東神樂岡の西にありて今吉田町といふ、社あり吉田社といふ。黒川道祐編・雍州府志・卷二、神社門上・愛宕郡の條に、「吉田春日社。在神樂岡、此社與南都春日社爲同體、貞觀中中納言藤原山蔭卿建焉、一條院永延元年始擧官幣、奈良京則春日社、長岡京則大原野、平安城則吉田社、皆近帝闕、而守皇祚、爾當關白道長公造法成寺、崇吉田社以擬興福寺之有春日社」。

よしのやま　竹の内峠を越えて吉野山(吉野忠信)

〔吉野山〕大峯山脈の北端、吉野川三吉野橋邊より青根ケ峯に到る南北二里に亘る細長い峯筋の總稱。

よしはら　ここにくゆるは葭原よ、あれにふすぼる梅田の墓、よその無常の煙を見るも(二枚繪)

〔葭原〕大阪天滿池田町の北のはてなる火葬場墓地。攝陽群談・卷九、塚之部に、「吉原墓。西成郡(攝津國)天滿池田町の北にあり」。

よしはら　ゆゐかんばらや吉原の、花のかばやき名物の、うなぎの肌へ腐ぬまづの宿(丹波與作)

〔吉原〕駿河國富士郡にありて蒲原と原との間、東海道五十三次の一。東海道圖會に、「吉原驛は昔此より東南の方にあり、延寶八年津浪して家屋漂流し、天和二年この地に移す、始の地をば元吉原と名づく」。

よしみね　(娥)

〔良峯〕山城國乙訓郡大原野の西南にあつて、小鹽山の内。

よしゐ　よしやよしゐの渡し舟、これもこがるるたぐひかや(佐々木)

〔吉井〕備前國上道郡御休村大字吉井をいふ。渡し舟とは、この所の東大川の渡し舟をいふ。

よすぢのまち　夜見世を新にお免しと、としや遲しと見に來るは、四筋の町の軒ふかく、ともしび星の如くにて(壽門松)

〔四筋町〕大阪新町遊廓をいふ。大阪新町遊廓は四筋の町より成る、東西に通ずる眞中の通り筋を瓢簞町といひ、その北にある筋を佐渡屋町といひ、瓢簞町の南にある筋を佐渡島町また越後町といひ、そのまた南にある筋を吉原町といふ。本書附錄の大阪地圖を見よ。

よつかいち　都を出て日數さへ、四日市にも程近き追分にこそ着きにける(博多)

〔四日市〕伊勢國三重郡にある町。

よつづか　(女夫池)、(天神記)

〔四塚〕山城國葛野郡にある辻で、西は藪渡(桂川)に向つて斜に馳せ、南は上鳥羽村鴨川まで直路で造道(つくりみち)といふ。倶に攝州に趨る西國街道である。

よつばし　杉山平八を四つ橋とはこれどうぢや(今宮)

〔四橋〕攝津名所圖會・四下に、「四つ橋。西横堀に上繋橋・下繋橋、長堀に吉野屋橋・炭屋橋あり、これを合て四つ橋といふ、二流十文字になりて橋を四方に架すなり」。大阪圖を見よ。

よど　淀柱本の邊まで參りしに(關八州)

〔淀〕山城國久世郡の町で、現今は桂川と淀川と相會する所にあるが、昔はその位置多少異る。

よぶこのうら　さぞな呼子の浦過ぎて、誰に泊の磯なれば(國性爺後日)

〔呼子浦〕肥前國東松浦郡にありて玄界灘の西南海岸に當る村。

らうえいがたに　(女夫池)

〔朗詠谷〕山城國愛宕郡にある。雍州府志・卷一、山川門、愛宕郡の條に、「朗詠谷＝在長谷、四條大納言公任卿閑居斯谷、撰倭漢朗詠集云」。

らうのまち　これぞ此小川通は三途の川、牢の町さへ近付けば(大經師)

〔牢町〕京都下古城町をいふ。本書に載せた京都地圖につきて見よ。京都坊目志に、「下古城町。小川通押小路下るより御池上るまでを云ふ、……廢第後獄舍此地にあり牢の町と呼ぶ寶永五年三月八日の大火に斯獄舍類燒し、尋で六角通大宮の一町西に移轉す」。

らくやう　此處ぞ世界の洛陽と殘らず語り給ひけり(大原問答)

〔洛陽〕洛陽は支那に於て周公の都を營んだ所である、その故事よりして我國の京都のことにいひ、大都會の意にいふ。

らじやうもん　さりながら東寺羅生門の變化を討ち(酒呑童子)

〔羅生門〕京都南朱雀通り(今の千本通り)にありて內裏外郭の總門。謠曲・羅生門に、「東寺の前を打過ぎて九條表に打つて出で、羅生門を見渡せば」。

りうぜんじ　諸宗の僧徒我先にとりうぜん寺にぞ詰めらるる(大原問答)

法然上人が延曆寺の僧侶と一向專念の問難を試みた、所謂大原問答のあつた寺は、山城國愛宕郡大原なる魚山勝林院である。

りさん　驪山の麓楊貴妃の御廟所(國性爺)　驪山の花も一度は散り(弘徽殿)

〔驪山〕支那陝西省の京兆府臨潼縣の東南にある。玄宗皇帝天寶六年十月に溫泉宮を造營して華清宮と稱し、十八の宮殿を建てて寵姬楊貴妃と共に歡樂に耽つたのである。

りつとうじ　さて善道寺りつとうじ(曾根崎)

〔栗東寺〕攝陽群談・十二に、「大坂天滿東寺町にあり、境內に大坂巡禮九番觀音堂あり」。

たり」。近江名所圖會・四に、「小野村道の右の上に石佛地藏堂あり、小町塚といふ、小野村といふより名付しならん、其證いまだ考ず」。

をばせ 見付けられては情なし、なばせの方で死ぬまいかと(重井筒)

昔は生玉天王寺、天滿なばせ川口な終日歩む時もあり(卯月紅葉)

〔小橋〕高津の東で、四天王寺の北にある村名。

をぶち 甲斐にたち野小笠原、なぶちあだちの奥の牧(源義經)

〔尾駮〕陸奥國北郡にありて、往昔牧場のあつた地。

ゐのはなざか（弘徽殿）

〔猪鼻坂〕山城國綴喜郡男山の半腹にある。

ゐりう 流るゝ涙流るゝ血、紅白粉やもろこしの渭流を袖に湛へたり（聖德太子）

〔渭流〕渭水の流れ。渭水は源を支那甘肅省蘭州府渭源縣西北鳥鼠山に發し、陝西省同州府華陰縣の北に至つて黃河に入る。「紅白粉やもろこしの云々」（五二五頁）を見よ。

ゑちご 佐渡と越後のあひの手を通ふ千鳥の淡路町（冥途飛脚）

〔越後〕大阪新町遊廓内の佐渡屋町（九軒町の西隣り）にある揚屋で、主人は女で其の名を清といふ。冥途飛脚・中の巻に「橋がかけたや佐渡屋町、越後は女主人とて立寄る妓も氣がねせず」とある。淡路町の龜屋忠兵衞が梅川と會合する爲足繁く通うた揚屋である。「通ふ千鳥の淡路町」（四三一頁）、「みすぢ」（六二八頁）及び所載の大阪圖を見よ。

ゑびす 此處に惠比壽の松原、松の黑みか雨雲か（今宮）歩みよろよろ足たたぬ惠比壽の森にぞ着きにける（今宮）

〔惠比壽〕大阪の今宮社を云ひ、往時は參詣道松原の中に通じ、社は森の中にあつた。蘆分船・第一に「今宮夷＝此社は天照太神宮・蛭子・素戔嗚の三神也、……蛭子を所の守護神とあふぎ奉る也、抑此御神は伊弉諾尊御子也・月に三歲にならせ給ふまで御脚たたず、……緣日はとしごと孟春十日也、俗に傳へて十日夷と云」。

をかざきむら 京近き岡崎村の分限者（大經師）

〔岡崎村〕洛東岡崎町あたりを昔は岡崎村といふ。山城名所紀行（正德四年刊）卷三、岡崎の條に「日永天明媚、佳期風興催、尋レ萩春欲レ莅、薮レ柳楹將レ開、林巒高樓秀、雪涓幽鳥來、飯數應二昝々一、祭礴坐二莓苔一」と見えてゐる。以て近松當時の有樣が想見される。

をかべ 何心を岡部の宿に只一夜は轉寢（隅田川）

〔岡部〕駿河國にありて藤枝と鞠子との間、東海道五十三次の一。

をかやま 爰は名に負ふ壽命の松、御代長久の岡山を歌には忍の岡と詠み（女殺）

〔岡山〕野崎村の北に當り、北河内郡甲可村にある。河内名所記卷五に「岡山（忍びの岡と古歌によみしは此所の事也と申傳へ侍る）慶長十九甲寅年依大坂御陣五月五日秀忠公此山御本陣。此山に壽命長久の松の大木あり、……。勅後撰、法印慧寛、待人になどかたらはで郭公ひとりしのびの岡に鳴らん。夫木、登蓮法師、見し人を忍びの岡の花すすきなびくは招く心地こそすれ」。「じゆみやうのまつ」「忍の岡」をも見よ。



をぐるす（本朝三國志）

〔小栗栖〕山城國宇治郡醍醐村の地名。

をざさのさか 行者樣を拜む中、雨方共にくわつと開き、小篠の坂を杖もつかずつつと下る（女殺）

〔小篠坂〕大和國吉野郡金峯山藏王權現（役行者開基）より天川に通ずる路に當り、一里許の所にある。

をじかのその 笛に誘はれつま戀ふる、牡鹿の苑の法の導きこれなれや（用明天皇）（二枚繪）

〔牡鹿苑〕鹿野苑（ムリガダーブ・Mrgadava）をいふ。鹿苑・鹿林などともいひ、中印度・波羅奈斯（今のペナレス）城の北東四英里にあつて、現今サールナートフ（Sarnath）と稱する地である。釋尊成道して佛陀伽耶の道場を離れてから、最初に說法された聖地であつて、阿育王所建の古塔や佛像その他の遺物が現存してゐる。法華科註・序に、「波羅痆國都城東北、有レ河、同名二波羅痆河一、河東北十餘里至二鹿野伽藍一、其側大林名二施鹿林一、亦名二鹿苑一、以二古仙所一レ居亦名二仙苑一」。巣林子のこの文は、笛に誘はれて寄る鹿のやうに、草刈笛に誘はれて戀ひ慕ふ夫と妻と相寄る、佛法の慈悲の導これなれやの意。

をしほやま（娥）

〔小鹽山〕山城國乙訓郡大原野にある。

をぜき（蟬丸）

〔小關〕近江國志賀郡にある。

をだえのはし 登れば下る最上川、緒だえの橋の絕えて何時（津戶三郞）

〔緒絕橋〕陸前國志田郡古川町にある小板橋。左京大夫道雅の歌に、「みちのくのをだえの橋やこれならむ、ふみみふまずみ心まどはす」と見えてゐる。往昔の緒絕の橋は磐城國渴本溫泉の附近であつたといふ。

をたぎのてら（娥）

〔愛宕寺〕京都東山五條の末愛宕の里にあつた阿彌陀堂で今は無き舊蹟である。

をなりばし

「おなりばし」を見よ。

をの 武藏に穗坂小野の牧（源義經）

〔小野〕武藏國にあつて、馬の產地。拾芥抄中卷、年中行事部に「八月二十日牽二武藏小野御馬一」と見えてゐる。

をの 比叡の山の麓小野の閑居（井筒）

〔小野〕山城國葛野郡小野鄉。

をののしゆくのこまちづか 大津八町で八百負ける小野の宿の小町塚で九十九文してやらるる（丹波與作）

〔小野宿の小町塚〕寒川辰淸編、近江國輿地志略・卷七十七、坂田郡の條に、「小野村。百百村の南にある村なり、古昔は驛舍にして繁昌の地なり　○小野地藏像。同村（小野村）にあり、近世印行の道中記などに小野小町の像と記す、あとかたもなき虛談なり、近村の土人先祖の廟をつくり建たるにて、今に持主顯然

巣林子作 義太夫本 外題下人名一覧（五十音順）

嘉平次おさが生玉心中
いくまつ（幾松） かへいじ（一つ屋嘉平次） きは ごへゑ（一つ屋五兵衛） さが たけ ちやうさく（印傳屋長作）

今川了俊
かつふさ（大道寺新兵衛尉勝房） さいざう（片桐才藏） さだひろ（駿河守貞廣） たねはる（結城右衛門太夫種春） ちかひら（荒川藏人近平） ちどりのまへ（千鳥前） なかあき（今川左衛門尉仲秋） ふぢつぐ（膏砥五郎藤次） れうしゆん（今川伊豫守源貞世入道了俊）

二郎兵衛おきさ今宮の心中
きさ じろべゑ（二郎兵衛） しろゑもん（菱屋四郎右衛門） たろさぶらう（太郎三郎） ていほふ（貞法） ぼくあん（灘川卜庵） よしべゑ（由兵衛）

以呂波物語
いろはのまへ（以呂波前） くうかい（空海） くままろ（藤原熊麿） しゆびん（守敏）・ただよし（河村金吾忠義） みつてる（藤原光輝） めうしやくぜんに（妙釋禪尼） もりさだ（判官代盛貞）

あとおひ心中卯月の潤色（「ひぢりめん卯月の紅葉」の續）
いま（阿今） かめ（阿龜） じよきふ（助給） ちやうべゑ（長兵衛） でんざぶらう（傳三郎） ふり よへゑ（與兵衛）

浦島年代記
あやおりひめ（綾織姫） あんかうてんわう（安康天皇） おほくさかのしん（大草香臣） くになが（長谷部の國長） たねふさ（葵大臣種房） つぶらのだいじん（圓大臣） つろくに（玄上廷尉之介鶴國） こぐろま（驁） なかしひめ（中蒂姫） はつせのわうじ（泊瀬皇子） はやと（平群隼人） ひさとみ（權祝久富） ひさなが（浦島太郎久壽） へいま（乾平馬） みりんわう（眉輪王） もろかど（阿閇府生諸門） もろむね（阿閇郡領諸宗） わしくに（御藏之介鷲國）

大磯虎稚物語
かげすゑ（梶原景季） かつしげ（小柴掃部勝重） くにひさ（番場の忠太國久） ぐんし（小柴郡司） しげただ（畠山重忠） しづか（靜御前） しらう（磯野四郎） すけなり（曾我十郎祐成） ちかつね（本田次郎近經） ときむね（曾我五郎時宗） とら（虎御前）

源頼義平師氏大掛物十幅一對
ただみつ（邊見唯光） もろうぢ（平師氏） もろひで（平師秀） よりよし（源頼義）

大原問答青葉笛
あつもり（無官大夫平敦盛） きよひめ（清姫） げんくう（源空） すゑしげ（平山武者所季重） たねなほ（熊谷小太郎種直） なほざね（熊谷次郎直實）

賀古教信七墓廻
うのはな（卯花） くまげんだ（熊源太） くわうみやうまろ（光明丸） すまざう（須磨藏） せんじゆひめ（千壽姫） たかふさ（藤原民部少輔孝房） ともかぜ（高梨政太郎友風） とらへいじ（虎平次） のりのぶ（藤原花二郎教信） ひでみつ（中務秀光） ほふみやうしやうにん（法明上人） みやぎの（宮城野） やしちらう（印南の彌七郎）

加増曾我
いぬばうまろ（犬坊丸） おほとうない（大藤内） こじらう（京小二郎） すけかぬ（伊豆二郎祐兼） すけつね（工藤左衛門尉祐經） すけなり（曾我十郎祐成） せうしやう（少將） ぜんしばう（禪師坊） だんざぶらう（團三郎） つな（綱） とらごぜん（虎御前） はこわう（箱王） よしひで（朝比奈三郎義秀）

娥歌がるた
かつより（齋藤左衛門尉勝頼） かるも（刈藻） げんくらう（岩村源九郎） げんご（岩村源五） けんれいもんゐん（建禮門院） しげもり（小松内大臣平朝臣重盛） となせのつぼね（戶無瀨局） むざう（鎌須無藏） もりつぐ（越中次郎兵衛盛次） もろたか（加賀郡司師高） よこぶえ（横笛） よしつぐ（左京之進義次） よりかた（齋藤瀧口頼方）

鎌田兵衛名所盃
かげむね（長田前庄景宗） きちしちごらう（吉七五郎） こんわうまろ（金王丸） さぶらう（濱田三郎） ただむね（長田庄司忠宗） ためとも（鎭西八郎源爲朝） ともやぎ（友柳） まさきよ（鎌田兵衛正清） みだいし（みだ石） みだわか（みだ若） やどりぎ（宿木） よしもと（源義朝） よしひら（惡源太義平） よりとも（源頼朝）

關八州繫馬
いはふぢ（岩藤） いよないじ（伊豫内侍） えいかのひめ（詠歌姫） おしやなの前 おにどうまる（鬼同丸） かねいへ（兼家） きんとき（坂田公時） こてふ（小蝶） こばた（木幡） さだみつ（碓井貞光） すゑたけ（卜部季武） せうに（佐佐目少貳） ただまさ（大宅忠正） ためなり（江亥宰相爲成） つな（渡邊綱） ときあきら（齋明） ともづな（箕田二郎綴） はうしやう（平井保昌） はぎのたい（萩對） ばんのべつたう（伴別當） やすすけ（藤原保輔） よしかど（將軍太郎良門） よりのぶ（源頼信） よりひら（源頼平） よりみつ（源頼光） らんぎく（蘭菊）

傾城懸物揃
きよたき（清瀧） きんつら（村岡六郎公連） しげなり（菱輪彌五郎重成） ただひら（攝政忠平） ただぶみ（常陸大掾藤原忠文） ちやう（大文字長） てつどうまる（鐵銅丸） ひでさと（俵藤太秀郷） まさかど（平親王將門） よしかど（平將軍良門）

傾城島原蛙合戦
かげとき（梶原平三景時） かげひさ（足立右馬允景久） きよしげ（葛西郡司清重） きよはる（源六郎清治） さちゆうだ（獅獅木佐仲太） さらしな（更科） しげただ（畠山重忠） たかひら（七草四郎高衡） ばんらく（手塚番樂） びはのひめ（琵琶姫） むねしげ（富樫左衛門宗重）

佐佐木先陣
かねざね(關白兼實)　こたらう(姉川小太郎)　しぐれ(時雨)　しげただ(畠山重忠)　すけもり(小松中將資盛)　とうだいふ(鹽燒藤太夫)　ときまさ(北條四郎時政)　はぎのまへ(萩の前)　ひろつな(佐佐木二郎廣綱)　ぶんた(北脇文太)　まつよひ(待宵)　もりつな(佐佐木三郎盛綱)

源五兵衛おまん薩摩歌
げんごべゑ(菱川源五兵衛)　こまん(小萬)　さんごへゑ(笹野三五兵衛)　はやし(林)　まん(阿萬)　よそへい(四十平)　らん(阿蘭)

三世相
ころくらう(望月小六郎)　せいさん(靜三)　たかさだ(望月六郎左衞門高貞)　ちてい(知貞)　はるびめ(春姬)　ひろただ(近藤兵庫守廣忠)　もりみつ(狛左京進盛光)　ゆふぎり(夕霧)　やぎの(狹野)

聖德太子繪傳記
あたひこま(東直駒)　いちゐ(跡見赤擣)　いもこ(小野妹子)　うまこ(蘇我馬子)　かずて(敵作散手)　かつうみ(弓削勝海)　かはかつ(秦川勝)　きつしやみ(吉沙彌)　しまぬし(葛木島主)　しやうとくたいし(聖德太子)　せりつみひめ(芹摘姬)　たまつる(玉鶴)　つがわか(都賀若)　つきますごぜん(月益御前)　てうしまる(調使丸)　ひます(日益)　ひろみ(弓削廣海)　まさわか(政若)　もりや(大連物部守屋)　ゆげひ(膳靫負)

釋迦如來誕生會
あららせんにん(阿羅羅仙人)　うだい(烏陀夷)　きちじやうによ(吉祥女)　ぐんばら(倶牟波羅)　けうどんみ(憍曇彌)　しつたたいし(悉達太子)　しやのく(車匿)　だいばだつた(提婆達多)　ばしやらぐん(婆將軍)　はくれうとん(伯了頓)　はんどく(槃特)　まやぶにん(摩耶夫人)　やしゆだらによ(耶輸多羅女)　るりせんぢよ(瑠璃仙女)

出世景淸
あこや(阿古屋)　かげきよ(惡七兵衛景淸)　ひろちか(伊庭十藏廣近)　よしとき(江間小四郎義時)　をののひめ(小野姬)

信州川中島合戰
かつ(阿勝)　かつより(武田四郎勝頼)　からきぬ(唐衣)　こへい(進藤小平)　さねつな(直江山城守實綱)　しんげん(武田大膳大夫晴信入道信玄居士)　てるとら(長尾輝虎)　ときつな(直江大和之介時綱)　はるよし(山本勘介晴幸)　ひやうすけ(横田兵介)　まさとし(原五郎昌俊)　まさのぶ(高坂彈正政信)　よしきよ(村上左衞門義淸)　ゑめんのひめ(衞門姬)

心中重井筒
こいちらう(小一郎)　さんたらう(三太郎)　そうとく(吉文字屋宗德)　たつ(阿辰)　ぢゑもん(治右衞門)　とくべゑ(紺屋德兵衞)　ふさ(阿房)

かみや治兵衞きいの國屋小はる心中天の網島
ござゑもん(五左衞門)　こはる(小春)　さん(阿三)　たへゑ(太兵衞)　ぢへゑ(紙屋治兵衞)　まごゑもん(粉屋孫右衞門)

心中二枚繪草紙
いちろゑもん(長柄の市郎右衞門)　さだ(明石の貞)　しま(阿島)　すけゑもん(長柄の介右衞門)　ぜんじらう(長柄の善次郎)　よし(阿吉)

高野山女人堂心中萬年草
いうべんりつし(祐辨律師)　うめ(阿梅)　くへゑ(岸和田の九兵衞)　くめのすけ(成田久米之介)　さくゑもん(美濃屋作右衞門)　さつ　せんゑもん(伊吹千右衞門)　はなのじよう(雜賀屋花之丞)　よじゑもん(雜賀屋與次右衞門)

心中刄は氷の朔日
こかん　でんない(和田傳內)　へいべゑ(平兵衞)　りゑもん(大文字屋利右衞門)

心中宵庚申
いゑもん(八百屋伊右衞門)　がうざゑもん(坂部鄕左衞門)　かる(阿輕)　きんざう(金藏)　ぐんゑもん(軍右衞門)　こしちらう(山脇小七郎)　たへゑ(太兵衞)　ちよ(阿千代)　はんべゑ(八百屋半兵衞)　へいゑもん(島田平右衞門)

蟬丸
きとうだ(喜藤太)　きよつら(左衞門督三善淸貫)　せみまる(蟬丸)　ただみつ(千手太郎忠光)　なほひめ(直姬)　ばせを(芭蕉)　はやひろ(右大辨早廣)　まれよ(中納言希世)

曾我扇八景
ことうだ(近江小藤太)　すけつね(工藤一﨟祐經)　すけなり(曾我十郎祐成)　せうしやう(少將)　だんざぶらう(團三郎)　つねかげ(井原左衞門經景)　ときむね(曾我五郎時致)　とらごぜん(虎御前)　よしひで(朝比奈三郎義秀)

曾我會稽山
あこやのまへ(阿古屋の前)　おにわう(鬼王)　かげたか(梶原平次景高)　かめきく(龜菊)　こしらう(京小四郎)　ことうだ(近江小藤太)　しげとも(榛谷四郎重朝)　すけつね(工藤一﨟祐經)　すけなり(曾我十郎祐成)　せうしやう(少將)　ぜんしばう(禪師坊)　だんざぶらう(團三郎)　ちかつね(本多次郎近經)　ときむね(曾我五郎時致)　ともゑごぜん(巴御前)　とら(虎御前)　のりより(源範賴)　はちへいじ(白崎八平次)　やすきよ(二宮太郎安淸)

曾我五人兄弟
あふみ(近江)　いぬばうまる(犬坊丸)　おにわう(鬼王)　こじらう(京小二郎)　しげただ(畠山重忠)　すけつね(工藤左衞門祐經)　すけなり(曾我十郎祐成)　せうしやう(少將)　ぜんじばう(禪師坊)　たらう(二の宮太郎)　だんざぶらう(團三郎)　ときむね(曾我五郎時宗)　とらごぜん(虎御前)　やはた(八幡三郎)　よしひで(朝比奈三郎義秀)　わしまる(鷲丸)

曾我虎が磨
かめきく(龜菊)　ことうだ(近江小藤太)　さだいへ(京極中納言藤原定家)　しげやす(秩父六郎重保)　すけつね(工藤左衞門祐經)　すけなり(曾我十郎祐成)　せうしやう(少將)　ときむね(曾我五郎時致)　とらごぜん(虎御前)　やすきよ(二宮太郎安淸)　よしひで(朝比奈三郎義秀)

曾根崎心中
くへいじ(九平次)　くゑもん(久右衞門)　と

傾城酒呑童子

うこん(右近の前)　うぢつな(加藤兵衞氏綱)　ことぢ(琴柱)　せいくわざんてい(花山帝)　せいめい(安倍晴明)　たしらう(柊屋太四郎)　ちやう(柊屋長)　つねこつひめ(恒子姫)　ひろぶみ(北白川の廣文)　やすもり(平安盛)　よこぶえ(横笛)　よしすけ(吉助)　らいくわう(源賴光)

傾城反魂香

いてふのまへ(銀杏の前)　うたのすけ(雅樂介)　うんこく(長谷部雲谷)　かつらぎ(葛城)　さんざ(名古屋山三春平)　しろじらう(狩野四郎二郎元信)　だらけん(不破入道道犬)　でんぜ(傳三郎)　とうがん(等巖)　とほやま(遠山)　ばんざゑもん(不破伴左衞門宗木)　ふぢばかま(藤袴)　まさずみ(修理之介正澄)　またへい(浮世又平重起)

傾城吉岡染

あきさだ(香春大炊之助顯定)　けんばふ(香春久太郎憲法)　ごゑもん(石川五右衞門)　そうま(相越物馬)　とねり(遠坂舍人)　ひさきち(久吉)　ぶがくのまへ(舞樂の前)　またごらう(又五郎)　みんぶざゑもん(醒が井民部左衞門)　よしをか(吉岡)　りん(林)　わごんのまへ(和琴の前)

兼好法師物見車

きやうのみや(卿宮)　きんよし(藥師寺次郎左衞門公義)　けんかう(吉田兼好)　じじゆう(侍從)　たかさだ(鹽谷判官高貞)　またごらう(太秦又五郎)　みんぶ(小林民部)　もろなほ(高武藏守師直)　ろくらう(八幡六郎)

源氏十二段長生島臺

うしわかまる(牛若丸)　じふごや(十五夜)　しやうじ(佐藤庄司)　じやうるりごぜん(淨瑠璃御前)　とうだ(藤太)　ときは(常盤)　のぶたか(三條吉次信高)　ひでひら(藤原秀衡)　ふぢさはにふだう(藤澤入道)　むらはや(村速)　よのすけ(世之介)　れいぜい(冷泉)

源氏冷泉節

じふごや(十五夜)　しゆんほ(春甫)　しゆんらく(春樂)　ふぢのまへ(藤の前)　よしつね(源義經)　よりとも(源賴朝)　れいぜい(冷泉)

源氏烏帽子折

うしわか(牛若)　こんわうまる(澁谷金王丸)　しののめ(東雲)　しろたへ(白妙)　たらう(長田太郎)　ときは(常盤)　むねきよ(彌平兵衞宗清)　もりなが(比企藤九郎盛長)　よりかた(監物太郎賴方)　らいげんほふし(雷玄法師)

弘徽殿鵜羽產家

いなば(因幡)　かげはる(小餘綾新左衞門尉景春)　きよたき(清瀧)　きんとき(坂田公時)　くわざんてんわう(花山天皇)　こうきでんのにようご(弘徽殿女御)　こぶんご(小文五)　せいめい(安倍晴明)　だうまん(蘆屋道滿)　たけ(阿竹)　つな(渡邊綱)　はやみね(按察左大將早岑)　ひさくに(羽倉伊賀介久國)　ふぢつぼのにようご(藤壺女御)　もりしげ(平次兵衞盛重)　よしなが(又五郎義長)

國性爺合戰

あんたいじん(安大人)　うりうこ(右龍虎)　えいりやくくわうてい(永曆皇帝)　がうだつ(剛撻)　かんき(甘輝)　きんしやうぢよ(錦祥女)　くわせいぶにん(華清夫人)　こくせんや(國性爺)　ごさんけい(吳三桂)　こむつ(小睦)　さりうこ(左龍虎)　しそうれつくわうてい(思宗烈皇帝)　じゆんぢたいわう(順治大王)　せんだんくわうによ(栴檀皇女)　ていしりゆう(鄭芝龍)　ばいろくわう(貝勒王)　りうかくん(柳歌君)　りかいはう(李海方)　りたふてん(李蹈天)　わとうない(和藤內)

國性爺後日合戰

あこくしやう(阿克將)　えいきつ(永佶)　えいりやくくわうてい(永曆皇帝)　かんき(甘輝)　きんしや(經錦舍)　ごさんけい(吳三桂)　こむつ(小睦)　じゆんぢたいわう(順治大王)　せきもんりゆう(五府將軍石門龍)　せんだんくわうによ(栴檀皇女)　ちんしはう(陳芝豹)　ていしりゆう(鄭芝龍)　とぶんくわん(杜文官)　はくだつた(伯達多)　ばんれい(萬禮)　ふばてつぺい(駙馬鐵平)　らんぎよく(藺玉)　わとうない(和藤內)

おなつ清十郎五十年忌歌念佛

かんじふらう(勘十郎)　くざゑもん(九左衞門)　げんじふらう(源十郎)　さぢゑもん(佐治右衞門)　さん　しゆん　せいじふらう(清十郎)　なつ(阿夏)

兼好法師あとおひ碁盤太平記

ぎしのめんめん(義士面面)　きんよし(藥師寺次郎左衞門公義)　もろなほ(高武藏守師直)　ゆらのすけ(大星由良之介)　をかへい(岡平)

嫗山姥

おもだかひめ(澤瀉姬)　きのすけ(喜之介)　きんとき(坂田公時)　くわんじやまろ(冠者丸)　こいと(小糸)　こじじゆう(小侍從)　すゑたけ(卜部季武)　たかふぢ(清原中納言右大將高藤)　つな(渡邊綱)　ときゆき(坂田藏人時行)　なかくに(能勢判官仲國)　へいだ(物部平太)　まさもり(右衞門頭平政盛)　やへぎり(荻野八重桐)　よりみつ(源賴光)

最明寺殿百人上臈

くわうべん(大江僧正廣辨)　つねかげ(佐野源藤太常景)　つねよ(佐野源左衞門常世)　てんによまる(天女丸)　ときさだ(北條式部冠者時定)　ときより(北條時賴)　ともひら(宇都宮新庄司友平)　ひろつな(佐佐木廣綱)

嵯峨天皇甘露雨

おほうなばらのわうじ(大海原王子)　かつふぢ(橘判官勝藤)　かまどのだいぶ(竈大部)　くうかい(空海)　くだらのだいなごん(百濟大納言)　こざらし(小晒)　さがてんわう(嵯峨天皇)　しゆびん(守敏)　たじべゑ(太次兵衞)　なかつね(大炊介仲[illegible])　なかなり(惡右馬尉仲成)　はなよ(花代)　はまより(前判官濱賴)　はろくに(多治見左衞門春國)　またじらう(又次郎)　よもさく(與茂作)　ゐあまのむらじ(猪甘連)

相模入道千疋犬

からこと(唐琴)　ぎすけ(里見義助)　じやうしう(安藤左衞門入道聖秀)　すず(阿鈴)　たかしげ(長崎次郎高重)　たかとき(北條前相模守平朝臣高時入道崇鑑)　つるさは(鶴澤)　としゆき(齋藤文治年行)　なかがは(中川)　なりよししんわう(成良親王)　むねしげ(五大院右衞門宗重)　むねふさ(五大院十郎宗房)　やよ梅　よしさだ(新田太郎義貞)　ゑあはせ(繪合)

山崎與次兵衛壽の門松

あづま(藤屋吾妻) かや きく(阿菊) じやうかん(山崎淨閑) ぢぶゑもん(梶田治部右衛門) ひこすけ(藥屋彦介) よじべゑ(山崎與次兵衛) よへい(雛與平)

博多小女郎波枕

くゑもん(毛剃九右衛門) こぢよらう(小女郎) しろざゑもん(奥田屋四郎左衛門) そうざゑもん(小町屋惣左衛門) そうしち(小町屋惣七)

孕常盤

うしわか(源九郎牛若) きさんだ(喜三太) きよもり(平清盛) ごしらかはほふわう(後白河法皇) しげいへ(鈴木三郎重家) しげきよ(龜井六郎重清) しげもり(平重盛) じふごや(十五夜) じやうるりごぜん(淨瑠璃御前) つねとき(雛波十郎經時) ときは(常盤) のぶたか(三條金賣吉次信高) べんけい(武藏坊辨慶) まさくに(梅津源左衛門正國) れいぜい(冷泉)

ひぢりめん卯月の紅葉

いま(阿今) かめ(阿龜) ちやうべゑ(長兵衛) でんざぶらう(傳三郎) ふり よへゑ(與兵衛)

百日曾我

かめきく(龜菊) すけつね(工藤一﨟祐經) すけなり(曾我十郎祐成) せうしやう(少將) ぜんじばう(禪師坊) ただつね(新田四郎忠常) つくらにふだう(津藏入道) ときむね(曾我五郎時致) とら(虎御前) はなの(花野) ゆきうぢ(海野小太郎行氏) よしひで(朝比奈三郎義秀) よりとも(源頼朝)

雙生隅田川

うめわかまる(梅若丸) かげはや(勘解由兵衛景逸) かねなり(淡路前司兼成) からいと(唐糸) ぐんすけ(軍助) たけくに(縣權正武國) としかね(淡路七郎俊兼) はんぢよ(班女) まつわかまる(松若丸) ももつら(常陸大掾百連) ゆきふさ(吉田少將藤原朝臣行房)

孿靜胎内捃

いへなほ(富樫左衛門家直) かげすゑ(梶原源太景季) きさんだ(喜三太) げんざう(犬間源藏) しづか(靜御前) しやうしゆん(土佐坊昌俊) じらう(大津二郎) べんけい(武藏坊辨慶) むねもり(平宗盛) よしつね(源九郎義經) よりとも(源頼朝) れんにんあじやり(蓮仁阿闍梨)

平家女護島

あづまや(吾妻屋) ありわうまる(有王丸) うしわか(牛若) かねやす(妹尾太郎兼康) きよもり(太政入道平清盛) しげもり(小松内大臣平重盛) しゆんくわん(俊寛僧都) ちどり(千鳥) ときは(常盤御前) にゐどの(二位殿) のりつね(能登守平朝臣教經) ひなづる(雛鶴) むねきよ(彌平兵衛宗清) もとやす(丹左衛門尉基康) もんがく(文覺)

堀川波鼓

げんゑもん(宮地源右衛門) さんごへい(政山三五平) たね(阿種) ひこくらう(小倉彦九郎) ふぢ(阿藤) ぶんろく(文六) ゆかゑもん(磯邊床右衛門) ゆら

本朝三國志

かへいじ(松下嘉平次) こいそ(小礒) こまのしん(武知駒之進) じよせい(小西如清) たけ(阿竹) つう(小野阿通) はるただ(城之介春忠) はるなが(平朝臣春長) ひころく(間田彦六) ひさよし(眞柴肥前大領久吉) まさきよ(加藤虎之助正清) みつなり(左馬五郎光成) みつひで(惟任判官光秀) やじふらう(小西彌十郎)

本朝用文章

きくひめ(菊姫) げんゑほふいん(獨清軒玄惠法印) さぶらう(本間山城入道三郎) すけとも(日野中納言資朝) なかはら(石見守中原) ふぢはら(左衛門尉藤原) めうほふばう(那智妙法坊)

本領曾我

あさがほ(朝顔) いちまん(一萬) おにわう(鬼王) かげひさ(股野五郎景久) こじらう(京小二郎) ことうだ(近江小藤太) しげただ(畠山重忠) すけしげ(河津三郎祐重) すけつね(工藤一郎祐經) すけのぶ(曾我太郎祐信) だんざぶらう(團三郎) はこわう(箱王) みさきの前 もんがく(高雄の文覺法師) ゆや(熊野)

松風村雨束帶鑑

ごうじやくそうづ(恒寂僧都) こはむね(伴健宗) ぜんによりゆうわう(善女龍王) たらう(浦島太郎) つかさのまへ(司前) なりひら(在原業平) へんぜう(僧正遍照) まつかぜ(松風) むぐらまる(花宮三位葎丸) むらさめ(村雨) ゆきひら(在原行平) ゆらた(由良太)

源義經将棊經

おとわか(乙若) かいそん(常陸坊海尊) かげたか(梶原景高) くにひら(錦戸太郎國衡) しげいへ(鈴木三郎重家) しのぶのまへ(忍前) じやうるりひめ(淨瑠璃姫) だいそうじやう(鞍馬大僧正) ただひら(泉三郎忠衡) つるわか(鶴若) べんけい(武藏坊辨慶) やすひら(伊達二郎安衡) よいち(人見與一) よしつね(源九郎判官義經)

梅川忠兵衛冥途の飛脚

いへゑ(伊兵衛) きよ(淸) ちゆうざぶらう(忠三郎) ちゆうべゑ(龜屋忠兵衛) はちゑもん(丹波屋八右衛門) まごゑもん(勝木孫右衛門) まん むめかは(梅川) めうかん(妙閑)

艶狩劍本地

うめのゐ(梅の井) きうさく(久作) これもち(上總介平朝臣惟茂) さは(澤) じらう(澤二郎) たまゆら、きみ、[illegible] としつな(金剛兵衛利綱) ひろふさ(廣[illegible]帶刀太郎廣房) ふさわか(房若) もろたふ(伊豫國武者所太宰大貳橘諸任) よつぎごぜん(世繼御前)

日本武尊吾妻鑑

おしくま(外道忍熊) おほうすのわうじ(大碓王子) おぼろづき(朧月) くにひこ(吉備國彦) くゑはや(阿蘇蹶速) げんだいふ(源太夫) こざろまる(小猿丸) ささなみ(漣) しきたへ(敷妙) たかたは([illegible]) たけひこ(吉備武彦) たちばなひめ(橘姫) たなすね(筑波長脚) やそたける(八十梟帥) やまとたけのみこと(日本武尊)

鑓の權三重帷子

いちのしん(淺香市之進) ごんざ(笹野權三)

くでやうゑ(德兵衞)　はつ(阿初)

大覺大僧正御傳記

あまよのまへ(雨夜前)　いつかく(平井一角)　だいかくだいそうじやう(大覺大僧正)　たかのり(兒島三郎高則)　ときひら(鹽谷左京時平)　にちでう(日傳)　はんぺい(高橋半平)　もりひろ(平井大炊介森廣)

大經師昔曆

いしゆん(大經師以春)　さん　すけさく(助作)　すけゑもん(助右衞門)　だうじゆん(岐阜屋道順)　たま　とうがんをしやう(東岸和尚)　ばいりゆう(赤松梅龍)　もへゑ(茂兵衞)

大織冠

ありかぜ(山上次官有風)　いるか(蘇我入鹿)　うんざう(萬戸將軍雲宗)　かまたり(藤原鎌足)　くわげつ(花月)　ざいてん(在天)　たいそうくわうてい(唐太宗皇帝)　のりかぜ(若狹之介則風)　ばうげんれい(房玄齡)　ばしう(馬周)　ふぢてるひめ(藤照姬)　まんげつ(滿月)

唐船噺今國性爺

おうやうかくし(歐陽赫思)　おうやうてつ(歐陽哲)　きんかいだう(金海道)　ごじよう(伍乘)　しえん(紫燕)　しゆいつき(朱一貴)　せいばんねん(齊萬年)　たうみんし(陶民子)　てんちうばう(天仲房)　ばふくわん(馬府官)　りくあんわう(劉乃耶六安王)

當流小栗判官

いけのしやうじ(池庄司)　おにじ(鬼次)　おにわう(鬼王)　かねうぢ(小栗判官兼氏)　きさらぎ(更衣)　くにただ(後藤左衞門國忠)　しげつぐ(橫山三郎重次)　てるてひめ(照手姬)　のぶひさ(橫山郡司信久)　ひたちこはぎ(常陸小萩)　ひやうゑ(山形兵衞)

田村將軍初觀音

いはとのまへ(岩戸の前)　おほたかまる(大高丸)　げんご(鳴瀧源五)　たむらまろ(坂上田村麿)　ながらのつぼね(長良局)　はるひさ(廣川庄司治久)　ひではる(廣川藏人秀治)　へいろく(三谷平六)　やまくに(荒金刑部山國)　ろくざう(たんだら六藏)

丹波與作待夜の小室節

こぢよらう(小女郎)　こまん(小萬)　こよし　さない(鷺坂左內)　さんきち(自然生三吉)　しげのゐ(滋野井)　しらべの姬　はちざう(石部の八藏)　やさざゑもん(本田彌三左衞門)　よさく(伊達與作)

持統天皇歌軍法

あきひろ(橋立左衞門秋廣)　あさぎぬ(淺衣)　かつとら(布引左馬頭勝虎)　かつなり(布引先生勝成)　しげのり(當麻判官重則)　ぢとうてんわう(持統天皇)　てるふさ(布引淀次郎照房)　とりゐのさんみ(鳥居三位)　ながうた(長歌)　なつひとしんわう(夏仁親王)　はるひこのみこと(春彥尊)　まきふで(卷筆)　まんくらう(萬九郎)　ゆきひさ(中臣大納言行久)　らいうん(荒土佐坊雷雲)

後太平記四十八卷目津國女夫池

あきただ(大宮大納言秋忠)　うめがえ(梅が枝)　おほよど(大淀)　かねもり(海上太郎兼盛)　きよたき(清瀧)　くにながさ(三好淡路守國長)　しらぎく(白菊)　ちやうけい(三好修理入道長慶)　ながふさ(冷泉文次兵衞長房)　はつゆき(初雪)　ひさひで(松永彈正久秀)　ふさひら(冷泉造酒之進房平)　ふぢたか(淺川左京大夫藤孝)　よしあき(足利義昭)　よしてる(源朝臣足利義輝)

津戸三郎

いくよ(幾代)　うぢしげ(安西彈正太郎氏重)　ただのぶ(佐藤四郎兵衞忠信)　つぎのぶ(佐藤三郎兵衞繼信)　のりつね(能登守平教經)　はやびめ(早姬)　ひろつな(源八兵衞弘綱)　べんけい(武藏坊辨慶)　ほふねんしやうにん(法然上人)　よしつね(源九郎義經)

天鼓

うめとよ(山路判官梅豐)　おもだかひめ(澤瀉姬)　かなめまる(金目丸)　たらう(宇治太郎)　ちりやくのすけ(德若智略之介)　てぐるまのしんわう(輦親王)　ときかげ(太見縣主時景)　ともゑまる(巴丸)　ぶりやくのすけ(才若武略之介)　みちのくのつぼね(陸奥局)　ゆきえ(吳服中將雪枝)　ゆきなが(吳服小太郎雪長)　ゆふばえ(夕映)

天神記

あつしげ(菅秀才敦茂)　あらとうだ(荒藤太)　いざよひ(十六夜)　かげむら(笠見藏人景村)　かねたけ(秦兼竹)　くりからたらう(倶利加羅太郎)　こうめ(小梅)　しへい(藤原時平)　しろだいふ(白太夫)　はいぶんせき(裴文秾)　ほふしやうばうのそうじやう(法性坊僧正)　みちざね(菅丞相道眞)

天智天皇

いまくに(金輪五郎今國)　うぢなが(松岡權太郎氏長)　うぢひさ(狩野氏久)　うねめ(釆女)　かづらきのおほぎみ(葛城大君)　かはかぜ(竹知川風)　さかめのわうじ(逆目王子)　つぐなは(淡路黨繼)　とみふさ(蘇右大臣富房)　はなてるひめ(花照姬)　やけんじ(天日彌源次)

融大臣

あをやぎ(青柳)　うてなのまへ(臺前)　ちさと(大江千里)　とねりのすけ(駒川舍人之助)　とほる(河原左大臣源融)　ねのひ(子日)　はるぬし(物部宿禰春主)　れいぜいばうのほふいん(冷泉坊法印)　ろくざう(腕六藏)　をりかぜ(中臣折風)

長町女腹切

いはみなにがし(石見何某)　くへゑ(九兵衞)　じんごらう(甚五郎)　たろざゑもん(太郎左衞門)　はな(阿花)　はんしち(半七)

日本西王母

うすぐも(薄雲御前)　かつらみ(眞砂前司勝海)　かつおき(眞砂乙太郎勝興)　こはぎ(小萩)　とよふね(桃園染五郎豐舟)　にゐのひめ(二位姬)　ぶんじ(玉屋文次)　へいだ(磨針兵太)　むらたら(官太村任)　むらまさ(土師別當村正)

日本振袖始

あしなづち(足摩乳)　あまつこやねのみこと(天津兒屋根命)　あめのわかひこ(天稚彥)　いなだひめ(稻田姬)　いはながひめ(岩長姬)　いほはた(五百機)　うけもちのをさ(食保長)　おほやまつみ(大山祇)　こたんしやうらい(巨旦將來)　このはなさくやひめ(木花開耶姬)　しづはた(賤機)　すさのをのみこと(素戔嗚尊)　そみんしやうらい(蘇民將來)　てなづち(手摩乳)　みくまのうじ(三熊野大人)　わにがせ(鰐香背)

巣林子作
義太夫本

人名部

あきさだ 香春大炊之助顯定。因幡國淀山城主の裔にして生來跛者なり。大和國宇陀郡龍門家の息女舞樂の前との婚約成りて其輿入の際、異母弟憲法は龍門家の奸策を豫知し、兄の危急を救ふ爲顯定と佯り、龍門家に來つて祝言の席に臨む。顯定は弟の心を知らずして之と口論せしが、其實を知るに及んで感に堪へず、髻を切つて出家の身となる。後に憲法の子久吉罪なくして石川五右衛門と共に釜煎の刑に處せらるるや、官命じて久吉の償に顯定を本領に安堵せしむ。これより龍門家繁榮することとなる(傾城吉岡染)

あきただ 大宮大納言秋忠。正親町天皇の勅使となり、足利十三代の武將義輝の御所に行き、兩頭の龜を出して之を判じて勅答すべきを命ず(津國女夫池)

あきひろ 橋立左衛門秋廣。丹波國の住人にして宮中南門守護を勤む。持統天皇より夏仁親王捜索の勅命を蒙る。折しも春彦尊に召されて參る途中、布引先生勝成に遇ひ、勝成より春彦尊の命に應ぜぬやう言聞かされ、聽かずして龍田明神に至り、春彦尊の逆心を詰責したる爲搦められて悶死し、其靈魂忽ち尊の魂と入替り、鳳輦を搦めたる繩を切り、萬九郎の縛を解き、尊と一味せる鳥居三位・青根郡司を殺す。かくて後秋廣の魂魄は尊の乘れる馬の手綱を執つて動かせず、以て之を滅すに至る(持統天皇歌軍法)

あくしやう 阿克將。韃靼國順治大王の家臣なり。陳芝豹の密告により明の永曆皇帝及び甘輝を捕縛せんとして攻寄する途中、幽水堤にて甘輝と戰ひ、追詰められて敗死する條は、演義三國志、曹操が馬超に追掛けられた窮狀の飜案である(國性爺後日合戰)

あこや 阿古屋。京都清水坂の遊女なり。惡七兵衛景清と馴染みこいや石・いや若の二子を生む。平家滅亡後景清落ち人となり、畠山重忠を狙ひしが覺られて遁れ、阿古屋を尋ね來つて清水觀音に詣づ。是時阿古屋の兄伊庭十藏廣近が景清を訴人せんとす。阿古屋これを制止せしが景清と情交を結べる小野姫より景清に送れる手紙を見て悋氣に燃え、爲に十藏をして景清の訴人たらしむ。景清捕縛せられて獄に投ぜらるるや、阿古屋深く前非を悔ひ、景清の獄舍に來つて罪を謝し、二子を刺殺して自刄す(出世景清)

あこやのまへ 阿古屋前。工藤一郎祐經の妻なり。鎌倉御所にて鹿論をなして本多次郎近經の妻常夏と口論し、巴御前の爲に引摺り出さる(曾我會稽山)

あさがほ 朝顏。源氏の家人鎌田兵衛正清が郎黨加藤六有衍の娘にして鬼王・團三郎の姉なり。平宗盛の嬖妾熊野の老母の使者と稱して宗盛の館に行き、老母の病氣によつて熊野暇を請ひ急ぎ下るべしとの口上を傳へしが、その携へし文に賴朝・河津などあるを工藤祐經に觀破せられ、これより疑はれて河津祐重に刺殺さる。後に幽靈となりて文覺の庵室に現はれ、股野五郎景久を苦しむ(本領曾我)

あさぎぬ 淺衣。布引左馬頭勝虎の妻にして勝筆の嫂なり、夫の父布引先生勝成が春彦尊に殺されたる時、尊の邸内に闖入し持統天皇を奪還し、飛鳥の里に隱し奉りて忠勤を盡す(持統天皇歌軍法)

あさひのまへ 朝日の前。北條四郎時政の女なり。源賴朝・時政を賴み寄るや、朝日の前・賴朝を慕ひ芭蕉の女と稱して賴朝の寢所に行き、遂に賴朝と契り、八重姫の怨靈に祟られて熱病に罹りしが、文覺の祈禱によりて快癒す(賴朝伊豆日記)

あしなづち 足摩乳。出雲國簸の川上の長者手摩乳の妻となり、稻田姫の母にして蘇民將來の妻賤機の叔母なり。素戔嗚尊が稻田姫の熱病を介抱し給ふを見、厚く禮を述べ且つ語つて曰く、この國に八岐の大蛇ありて每年人身御供に美女を取る。而して人身御供に當る者は其以前熱病に罹るとて深く稻田姫の熱病を氣遣ひ、其病癒ゆるに及んで之を尊の御伽女に奉る(日本振袖始)

あたひこま 東直駒。大連物部守屋の家士なり。聖德太子の妃芹摘姫を其邸に夜襲し、敗れて跡見赤檮に殺さる(聖德太子繪傳記)

あつしげ 菅秀才敦茂。菅丞相道眞の嫡男なり。十二歲の時藤原時平と射藝を競ひて之に勝つ。父が時平に讒奏せられて流罪に處せらるるや、敦茂も連坐して遠き東に追遣らる。後に母に從ひ父を尋ねて筑前太宰府に下る(天神記)

あづま 大阪新町茨木屋の太夫なり。八幡の富豪江戶屋勝二郎に落籍せられ、井筒屋太左衛門に連れられて八幡に行く途中、勝二郎の財産沒收せられて追放せらるるに遇ふ。太郎左衛門乃ち吾妻の身請金二百兩の不足を引請けて吾妻を勝二郎に渡す。これより兩人奈良に落ち行き、吾妻は太郎左衛門に二百兩を支拂はん爲再び娼家山城屋に身を沈め、藤田の藤五郎に落籍せられんとするや、遂に勝二郎と夫婦となられざるを悲觀し、藤五郎を刺殺して二百兩を奪ひしが、忽ち露顯して大騷ぎとなりしを、藤五郎の兄新七の執成によつて事なきを得たり(淀鯉出世瀧德)

あづま 吾妻。大阪堂島新地藤屋の太夫にして、山崎與次兵衛と情交密なり。與次兵衛が藥屋彥介を斬りたりと無實の罪を受けて籠居するや、吾妻その見舞に行き、與次兵衛の妻お菊と逢ひ、與次兵衛と共に出奔せしが、難與平に救はれて與次兵衛の妾となる(壽の門松)

あづまや 吾妻屋。俊寬僧都の妻なり。俊寬鬼界島に流さるるや、吾妻屋は南都の尼寺に隱棲して平重衡を狙ひしが、生捕られて平清盛の前に引出さる。清盛・吾妻屋の容色に迷ひ、己が心に從はしめんとして能はず。或日吾妻屋舞子等と踊りし時、齋藤實盛に清盛の心に靡くやう諭されて峻拒し、尋で能登守教經に諭されて自刄す。後に清盛火の病となり、吾妻屋の怨靈現はれて清盛を苦しむ(平家女護島)

あつもり 無官大夫平敦盛。一の谷の

さゐ じんべい(岩木甚平) ちゆうだへゑ(岩木忠太兵衞) げんつしよう(川側伴之丞) ゆき(阿雪)

雪女五枚羽子枚(ゆきをんなごまいはごいた)

いへはる(藤内太郎家治) かつひで(細川右馬丞勝秀) かうまん(赤沼前司入道幸滿) こあらし(小嵐) たけはる(藤内三郎武治) たまつばき(玉椿) なかがは(中川) ひさつね(一色大炊介久常) みはつきみ(琵琶君) みつはる(藤門四郎光治) もりはる(藤内二郎盛治) よしのり(足利義敎) よしまさ(斯波左衞門義將) わだまき(綰卷)

夕霧阿波鳴渡(ゆふぎりあはのなると)

いざゑもん(藤屋伊左衞門) きざゑもん(吉田屋喜左衞門) さこん(平岡左近) たけ(竹) ばいあん(梅庵) めうじゆん(妙順) ゆき(雪) ゆふぎり(夕霧) れうくう(扇屋了空)

百合若大臣野守鏡(ゆりわかだいじんのもりかゞみ)

くもずみ(別府鄕武者雲澄) くもたろ(別府鄕武者雲足) たちばな(立花) ひでかげ(惡文次秀景) ひでとら(市郎丸秀虎) ひでぬし(府内大夫秀主) まつがえ(松が枝) わだまろ(太宰太郎和田丸)

用明天皇職人鑑(ようめいてんわうしよくにんかがみ)

かつふね(檢非違使勝船) くまへい(楠職久馬平) さよひめ(佐用姬) すくね(伊駒宿禰) たまよのひめ(玉世姬) つちまろ(小野土丸) はなひとしんわう(豐日花人親王) ほうこくこくし(豐國國師) ますら(伊賀留田のますら) まののちやうじや(眞野長者) むねをか(兵藤太宗岡) むまやどのわうじ(廐戶王子) もろしきだいふ(百島大夫) もろいは(五位介諸岩) やまひこわうじ(山彥王子)

吉野忠信(よしのたゞのぶ)

かくはん(横川覺範) かげはや(梶原平次景早) くにとき(三保谷四郎國時) しづか(靜御前) ただのぶ(佐藤四郎兵衞忠信) ときまさ(北條四郎時政) はちらう(片岡八郎) はなむらさき(花紫) べんけい(辨慶) ほふげん(川倉法眼) よしつね(源義經) わかむらさき(若紫)

吉野都女楠(よしのみやこをんなくすのき)

きよただ(坊門宰相淸忠) げんしう(和田新發意源秀) こうたうのないし(勾當內侍) たかいへ(小山田太郎高家) たかはる(小山田前司高春) ながとし(名和又太郎長年) まさしげ(楠正成) まさつら(楠正行) もりなが(大森彥七盛長) よしさだ(新田義貞)

淀鯉出世瀧德(よどごひしゆつせのたきのぼり)

あづま(吾妻) かつじらう(江戸屋勝二郎) きだいふ(紀太夫) しんしち(新七) そうべゑ(惣兵衞) たろざゑもん(太郎左衞門) にさぶらう(仁三郎) はん(阿半) ふぢ(藤五郎) めうけい(妙慶)

賴朝伊豆日記(よりともいづにつき)

あさひのまへ(朝日前) いちまん(一萬) かげひさ(股野五郎景久) くにひで(淺野四郎國秀) しちらう(瀨尾七郎) すけきよ(伊東九郎祐淸) すけしげ(伊東祐重) すけちか(伊東次郎祐近) すけのぶ(曾我太郎祐信) せんづるまる(千鶴丸) とうない(閉の藤內) ときまさ(北條四郎時政) はこわう(箱王) もりなが(藤九郎盛長) もんがく(高雄の文覺上人) やへびめ(八重姬) よいち(眞塚與市) よりとも(源賴朝)

井筒業平河内通(ゐづつなりひらかはちがよひ)

ありつね(散位紀有常) いこまのひめ(生駒姬) おほゐのすけ(大炊之介) こうばい(紅梅) これたかしんわう(惟喬親王) さちわかまる(幸若丸) たかこ(高子) たんないびやうゑ(丹內兵衞) としつな(民部太郎俊綱) なかのり(般若五郎仲則) なとら(紀名虎) なりひら(在五中將業平) ひろくに(荏念香讃國) むねをか(伴大納言宗岡) もとくに(一藤太基國)

女殺油地獄(をんなごろしあぶらのぢごく)

かち きち(阿吉) こぎく(小菊) こへゑ(綿屋小兵衞) さは(阿澤) しちざゑもん(手島屋七左衞門) ぜんべゑ(皆朱善兵衞) とくべゑ(河内屋德兵衞) もりゑもん(山本森右衞門) やごらう(剛毛彌五郎) よへゑ(河内屋與兵衞) ららく(郎九)

衞門の娘なり。兩親を失ひて伯父大炊之介に後見せらる。或日在五中將業平・淸和天皇の御供して來り賴る。生駒・業平と慇懃を通ず。或夜業平・井筒姫の所に至るを知つて生駒嫉妬に燃え、後を追うて家を出で、大炊之介より業平と見誤られて斬殺さる。是に於て生駒の怨靈大炊之介を井に投じて殺す（井筒）

いざよい　十六夜。　博多の白太夫の娘にして小松といひしが、京に上つて舞姫となり十六夜と名乘る。秦兼竹と通じて子を生み、之を菅公の花畠に棄て菅公の室に拾上げられて深く其恩に感ず。菅公大物浦の沖にて笠見藏人景村の爲に害に遭はんとせる際、十六夜乃ち菅公を救はんとして、我子を背負ひ七首を銜へて海に入り、景村に射殺さる。時に二十歲許。是に於て幽靈となつて妹小梅が露竹と祝言する席に現はれ、我死骸の博多の濱邊に打上げられたるを語つて回向を賴み、安樂寺に葬らる。後に荒藤太が父白太夫を害せんとする際にも十六夜の幽靈出でて、荒藤太の髻を掴んで宙に吊上げ、また法性坊僧正の門を敲きて變成男子の祈禱を請ふ（天神記）

いざゑもん　藤屋伊左衞門。　大阪新町九軒町扇屋の名妓夕霧と馴染みて豪遊を極め、七百貫の借財を負ひ家を放逐せられて落魄す。阿波の士平岡左近の妻雪男裝して井筒屋に夕霧を招き痴態をなす。是時伊左衞門隣室にありてこの體を見怒つて夕霧を罵詈す。夕霧・雪に落籍せらるゝや、伊左衞門は夕霧の舁夫となつて我子の源之介に逢ふ。夕霧扇屋に戻つて病革るや、伊左衞門は源之介を伴ひ、扇屋の門に立つて間の山の唱歌を唄うて夕霧と逢ふ（夕霧阿波鳴渡）

いしゆん　以春。　京四條烏丸に住み大經師なり。下婢たまを戀慕して痴態をなし、妻のおさん之を戒めんとして不義に陷り、家騷動となる（大經師昔曆）

いちのしん　淺香市之進。　出雲藩士にして茶道指南役を勤む。主君に從ひて江戶に赴きたる留守中、妻おさゐ・笹野權三と姦通して駈落す。市之進歸國して妻の嫁入道具及び二人の娘を妻の實家岩木忠太兵衞方へ送付け、職を辭して忠太兵衞を訪ひ、暇乞をなして女敵討に出で、山城伏見町京橋の上にて姦夫姦婦に出遇ひて刺殺す（鑓權三重帷子）この作は、月堂見聞集享保二年の條に、七月十七日夜五つ時分大阪高麗橋にて雲州藩士正井宗味が姦婦とよ姦夫池田文次を討取りし實說あるを脚色したるものなり。

いちまん　一萬。　河津祐重の子なり。幼時父祐重が工藤祐經の爲に殺さる。これより一萬は弟箱王と共に父の仇を報ぜんことを忘れず。母・曾我祐信に再嫁するに及び、二子も其家に養はる（賴朝伊豆日記）

十郎祐成の幼名なり。父の非業の死を聞き、弟の箱王と共に赤澤山に駈付けしが、その場にて鬼王・團三郎と格鬪することとなりしを文覺の說諭によつて相和し、互に主從の約を結ぶ。後に二子・母に伴はれて曾我祐信に養はれ、工藤祐經の言上によつて賴朝に惡まれ、由比濱に引かれて將に首を刎ねられんとせしを畠山重忠に救はる（本領曾我）「祐成」をも見よ。

いちろゑもん　市郎右衞門。　長柄の百姓介右衞門の義子なり。大阪堂島新地天滿屋の遊女お島と馴染む。或日お島が明石の貞と云ふ客に連れられ舟に乘りて淨瑠璃を語る。市郎右衞門陸よりその舟の後を追ひ行くを貞に見咎められて罵詈せらる。かくて後弟の善次郎の爲に親の預れる報恩講の金を窃取したりと誣ひられ、遂に死を決して最後の宴を近江屋に張り、天滿屋の戶外より扇を拔きてお島に死別を諷し、長柄の川邊に迷ひ行き、お島の靈魂と相行交ひつつ自殺す（二枚繪）

いちゐ　跡見赤檮。　聖德太子の家士なり。物部守屋の母の日益が佛法を罵るを聞いて怒る。或日赤檮が聖德太子の妃芹摘姫の邸を警固せる際、守屋の部將直駒の夜襲に遭ひ、奮戰して直駒を殺し敵を擊退す。また弓削勝海の兵を破つて島主の死骸を收め、島主の二子政若・都賀若を連れて去る。後に守屋を河內國稻村城に攻めて之を滅す（聖德太子）

いつかく　平井一角。　近衞家の家人にして大炊介森廣の弟なり。兄森廣が月光公を弑する意あるものと疑ひ、兄と格鬪して組伏せしが兄の心中を知つて和睦し、日像に諭されて其弟子となり正覺と法名す。かくて鹽谷左京時平が日像の寺院を襲擊したる際之と奮戰す（大覺大僧正御傳記）

いつき　「しゆいつき」を見よ。

いてふのまへ　銀杏前。　江州高島の館左京大夫顯賢妾腹の女なり。狩野四郎二郎元信の妻となる（傾城反魂香）

いなだひめ　稻田姫。　出雲國簸の川上の長者手摩乳の息女なり。鶺鴒を追うて行き、素戔嗚尊に遇ひて相思の仲となり忽ち熱病に罹る。尊之を介抱し左右の袖下を切裂き、風を入れて病を癒し、大山祇の養女として之を娶り給ふ。然るに稻田姫大蛇の人身御供に當るや、尊之に羽羽斬の寶劍を與へて袖に包ましめて出す。かくて姫は大蛇に吞まれたる際袖なる劍を揮つて大蛇の腹を切裂き、叢雲の寶劍を奪ひて出づ（日本振袖始）

いなば　因幡。　弘徽殿女御の腰元なり。賀茂河原にて安倍晴明と蘆屋道滿と互に祈禱したる事よりして、藤壺女御方の女房と喧嘩し、藤壺女御の御車を押遣る際躓きて倒れ、車轍に引裂かれて死す（弘徽殿鵜羽產家）

いぬばうまる　犬坊丸。　工藤左衞門祐經の子なり。白鹿を獲んとして下人の近江・八幡及び獵夫桐が谷の鷲丸を從へて山に入り、白鹿の虎御前に化けたるに魅せられ、之に戀慕して遂に持來りし小鹿を奪去られ、また曾我十郎祐成に化けたる白鹿の爲に追拂はる（曾我五人兄弟）

工藤祐經の嫡子なり。鎌倉御所にて能樂の催ある最中朝比奈三郎義秀と喧嘩して逃ぐ（加增曾我）

いはとのまへ　岩戶前。　中納言葛野丸の女にして坂上田村麿の室なり。田村麿出征の留守中贋名の艷書を受取り、家老鷹川靱人秀治・荒金刑部山國をして禍引の枕を引かしめ、自らその枕を切つて艷書を差出したる者を吟味し、山國の所爲たること知れ、之を斬らんとして却つて搦められしを秀治に助けられ、秀治・長良局を伴うて鈴鹿山に赴く途中、土山にて山國等に要擊せられ、危き場を遁れて田村麿と會す（田村將軍初觀音）

いはながひめ　岩長姫。　八岐大蛇の化身なり。大山祇の子に生れ木花開耶姫の姉なり。木花開耶姫が參內したるを怒り、これを追うて殿上に昇り、己が姿の神鏡に映るを見て其醜きに驚ける時、木花開耶姫の侍女早苗の局その醜女なるを笑ふ。岩長姫怒つて局を

戰敗れて遁出づる際青葉の笛を忘れて立戻り、御座船に乘らんとして海に入り、源氏の將熊谷直實に聲を掛けられて引返し、これと格闘して死す。後に冥土にて蓮生法師に遇ひて合戰の物語をなし、生前の遺恨を謝して成佛す（大原問答青葉笛）

あふみ　近江。　工藤左衛門祐經の下人なり。主命によりて白鹿を獲んとして犬坊丸と共に山に入り、曾我祐成に化けたる白鹿に打懲さる。後に京小二郎の手引によりて曾我二子を大磯の遊廓に襲はんとして、鬼王兄弟の爲に擒められて曾我二子に首を刎ねらる（曾我五人兄弟）

あまつこやねのみこと　天津兒屋根命。　天津彦火瓊瓊杵尊の重臣なり。素戔嗚尊の臣鰐香背が大山祇と口論したるを叱責す。素戔嗚尊簸山の惡鬼を平定して凱旋し給ふを途に要して其入京を遮り、尊を諫めて出雲國簸の川上の大蛇討伐を思立たしむ（日本振袖始）

あまよのまへ　雨夜前。　月光（ぐわつくわう）の異母妹なり。母が月光を惡めるを苦にして佛道に志し、日像上人に逢うて法華經の功德を聽聞して髮を切り、月光を尋ねて嵯峨の里に行き、兒島三郎高則の舟に乘り、高則夫妻の情にて其家に養はる。後に高則の妻と共に高則の行方を尋ね出で、北野にて時平に捕へられ、家に連れ歸られて將に殺されんとせしを、法華經の靈驗不思議によつて免るるを得たり（大職大僧正御傳記）

あめのわかひこ　天稚彦。　素戔嗚尊の重臣にして勇力衆に超ゆ。簸山に惡鬼と戰うて功あり。後に鰐香背が尊に謀反を勸むるや、稚彦大いに尊を諫め鰐香背を斬つて自刄す（日本振袖始）

あやおりひめ　綾織姫。　葵大臣種房の女なり。御藏之介鶴國に連れられて丹後與謝の里に行き、世を忍びて漁夫となり給へる泊瀨皇子の御伴して歸る。皇子卽位せられて雄略天皇と申す。姫は女御となる。中蒂姫が天皇を繼募せらるるや、綾織姫はこれと爭うて圓大臣の家臣諸宗に預けらる。諸宗・綾織姫に橫戀慕して暴行に及ばんとせしを、姫は諸門に助けられて隣家の鶴國の館に遁れ、鶴國の忠節によりて再び宮中に還り給ふ（浦島年代記）

あらとうだ　荒藤太。　博多の住人白太夫の子、十六夜・小梅の兄にして性兇惡なり。父より讓受けたる田畠を賣拂ひて之を浪費し、なほ父の所有地二反許を强請す。或日白太夫が小梅と遊山せるに遇ひ、父を毆打し妹を蹴倒して宅兼竹に投付けらる。後に父の家に亂入して兼竹等に殺さる（天神記）

あららせんにん　阿羅羅仙人。　印度檀特山の岩窟内に隱栖す。釋尊これに仕へて難行を積み、遂に廓然大悟し給ふ。仙人曰く、我は大通智勝佛劫成世界の契を違へず、阿羅羅仙人と現じ來れりとて光を放つて失す（釋迦如來誕生會）

ありかぜ　山上次官有風。　藤原鎌足の重臣なり。入鹿の惡逆を怒り、唐裝束を着し、子の在天と共に唐の使者に扮して入鹿に近づき、之を刺さんとして却つて組伏せられ、石丸に首を刎ねらる。然るに其首宙に舞ひて石丸の首を喰切り、入鹿を追拂ひて在天の縛を嚙切る（大織冠）

ありつね　散位紀有常。　紀名虎の子なり。惟喬親王を比叡山麓小野の閑居に訪ひ、親王が名虎の骸骨を祭らるるを見て感激の涙に咽びしが、伴大納言宗岡が親王に謀反を勸むるを聞いて席を蹴立てて去る。かくて親王及び名虎の靈魂宮中を襲ふや、有常作り敵に一味するやう見せて竊に天皇を落し奉り、中宮高子を大和國泊瀨寺に隱し參らせしが、この事露顯して有常は親王に召喚せられ、中宮の首を刎ねて差出すべきを命ぜらる。是に於て有常は中宮を害すべき手紙を認め、中に杜若花の一輪を入れて暗に中宮の身代の首を出すべきを諷して己が妻に送る。爲に有常の妻死して中宮の身代となる（井筒業平河内通）

ありわうまる　有王丸。　俊寬僧都に仕へしが、俊寬鬼界島の流人となり、其室吾妻屋は淸盛の邸に幽せらるるや、有王丸は主の仇を報ぜんとして淸盛の邸に亂入し、能登守敎經と格闘して追拂はる。後に有王丸は俊寬赦免せられて歸ると聞き、之を迎へんとして備後敷名浦に赴き、俊寬の歸らざるを聞いて悲歎に沈みつつ、丹左衛門尉基康より俊寬の養女千鳥を預る。是時淸盛の船もこの浦に泊し、鳥羽法皇を海に沈め奉りしを、千鳥海に躍入り法皇を救ひ奉りて有王丸に渡す。有王丸乃ち法皇を負ひ奉り足に任せて落ち行く（平家女護島）

あをやぎ　青柳。　融大臣の室なり。物部宿禰春主が融と青柳の妹子の日と相思の仲なりと讒したるを信じ、嫉妬の間違ひより妹に刺殺され、幽靈となつて融と壺の前との難を救ふ（融大臣）

あんかうてんわう　安康天皇。　不豫にまします上に、中蒂女御懷胎して更に靈氣なきを歎き給ひて、位を泊瀨皇子に讓り給ふ。後に葛城山に入りて御子を尋ねられて眉輪王に弑せられ給ふ（浦島年代記）

あんたいじん　安大人。　明の逆臣李蹈天の侍大將なり。思宗烈皇帝の寵姫華淸夫人を弑す。後に部下の兵を連れて虎狩に出で、千里の竹林中にて和藤內に殺さる（國性爺合戰）

いうべんりつし　祐辨律師。　高野山南谷吉祥院の僧にして寺小姓成田久米之介の念者なり。久米之介が雜賀屋のお梅と密通せること露顯するや、祐辨怒つて久米之介を毆打して放逐す（心中萬年草）

いくまつ　幾松。　一つ屋五兵衞の子にして嘉平次の弟なり。嘉平次放蕩にして父の意に從はず、許嫁の養女おきはを幾松と夫婦たらしめて、之に家督を讓らしめんとす。兄思ひの幾松は兄の不心得を深く憂ひ、不具者となつて家督を相續せざらんとし、山上濠に祈つて眼病となり、姉に連れられて天滿の眼科醫に行く途にて嘉平次に遇ひ、幾松が兄を思へる眞情を姉に吐露す（生玉心中）

いくよ　幾代。　佐藤四郎兵衞忠信の情婦なり。忠信が源九郎義經に從ひ、平家討伐の軍に加はらんとして紫明神に參詣するや、幾代は佐藤繼信に賺され、泣いて忠信の從軍を思止まらしめんとしたり（津戸三郎）

いけのしやうじ　池庄司。　小栗判官兼氏の家士なり。兼氏と共に相模の配所に暮し、後に横山三郎重次の爲に兼氏と共に毒殺せらる。行年十八（當流小栗判官）

いこまのひめ　生駒姫。　河內國高安左

鬪して敵を退く。かくて後牛若は田村社にて平家の侍監物太郎賴方の軍と戰うて之を破り宮巡りをなす（源氏烏帽子折）

京五條の橋上にて千人斬をなし、辨慶と主從の約を結ぶ。母の常盤・淸盛の怒に觸れ酷刑に處せられんとする時、その馬追となりて刑場に赴き、辨慶と共に常盤を救ふ。後に三條金賣吉次信高に從ひて奥州に下る途中三州矢矧宿に泊し、宿の長者の女淨瑠璃御前と契る（孕常盤）

母の常盤が平淸盛の妾となるや、牛若は横笛と稱して其腰元となり、常盤の御髮上雛鶴と共に窗に往來の人を呼入れ、常盤色を以て其者の心を試し、源氏に從はぬ者をば牛若これを殺したり。或日彌平兵衞宗淸頬冠にて入り來り常盤を痛罵す。是に於て牛若・宗淸に斬付く。宗淸これを外し格鬪に及びしが、常盤聲を掛けて牛若を制し、宗淸の好意によつて常盤・牛若・雛鶴の三人淸盛の邸を脫走す（平家女護島）

源義朝の第八男にして幼名を遮那王と稱し、鞍馬山東光坊に學び平家を滅さんとして多聞天を祈念す。或月夜老人に遇ふ。偶老人沓を谷川に落す。牛若その沓を拾上げんとする際大蛇現はれて牛若を追ふ。牛若怖れず沓を拾うて老人に捧ぐ。老人沓を受け忽ち大悲多聞天の姿と變じて虛空に上る。後に牛若・三條吉次信高に遇ひ、相伴うて奥州に下るを約し、また平宗盛等が櫻狩の宴席にて狼藉に及び、危かりしを世之介に助けらる。かくて信高に連れられて奥州に下る途中、鏡川の宿にて常盤の横死體を發見し、名主の家に泊りて夜盜藤澤・村速等を斬つて母の仇を報じ、矢矧宿にて淨瑠璃姬と契り、奥州に下つて藤原秀衡に便り、奥州勢十萬を引率して都に上る途中、矢矧宿に淨瑠璃姬を尋ねて其死を聞き、峯の藥師の笹谷なる姬の墓に詣づ（十二段）

「よしつね」をも見よ。

うすぐも　薄雲御前。 大納言民部卿藤原元方の長女なり。軀幹長大にして容貌夜叉の如し。勅諚によりて桃園染五郎豐舟と婚す。是時妹二位の姬が豐舟に逢うて怨みを述ぶる始終を立聞きし、忽ち嫉妬の相を現じて紛擾を起し、二位の姬を追うて大和路なる郡山に來り、宮の遊女屋長の抱妓を殺し、二位の姬を縊殺して豐舟に斬殺さる。後に薄雲の姿虛空に現じ、我は欲天の惡鬼なりと名乘り、豐舟に飛掛らんとして二天の爲に引裂かる（日本西王母）

うだい　烏陀夷。 我子槃特の愚鈍を憂ひ、之を連れて帝釋天に祈願す。是時伯了頓に遇ひ、其無禮を責めて之を谷底に落し、其落せし文を拾ひて提婆達多等が摩耶夫人を健陀羅山に咒詛せるを知る。後に釋尊降誕の際、憍曇彌・婆將軍亂入せるを追拂ひ、また耶輸多羅女が提婆達多に困めらるる場に遭遇し、直に耶輸多羅女を助け、敵を破つて左倍軍を斷り、耶輸多羅女を連れて檀特山に悉達太子を尋ね、太子の大悟し給へるを見て隨喜の涙に咽ぶ（釋迦如來誕生會）

うたのすけ　雅樂介。 狩野四郎二郎元信の弟子なり。元信の敵雲谷と戰うて痛手を負ふ（傾城反魂香）

うぢしけ　安西彈正太郎氏重。 源九郎義經の家士なり。佐藤繼信・忠信の信任厚きを猜みて不和なり。繼信屋島の合戰に能登守敎經に射られて深手を負ふや、氏重は繼信の首を刎ねて鬱憤を晴さんとし、繼信の郎等鷲尾三郎を追拂ひて手負人の首をかけば、それは繼信ならで敎經の郎等筑紫孫六安國なりしかば、其首を義經に見せて鷲尾三郎を讒せしが、事發覺して辨慶に投飛ばさる。後に津戸三郎及び其妹早姬が繼信を尋ねて屋島に來れるを、氏重要擊して津戸三郎に殺さる（津戸三郎）

うぢつな　加藤兵衞氏綱。 もと武士なりしが浪人となる。娘横笛の行方を尋ねて江州鏡山の遊廓ひらぎ屋に登樓し、計らずも娘と遇ふ。乃ち抱主の長に願ひて之を連れ歸らんと思ひしが、長の邪慳なる有樣を見て斷念し、事情を源賴光に訴ふ。後に横笛がひらぎ屋長の苛責に堪へずして自刄する場に來り、横笛の手を取つて悲憤の涙に暮る（傾城酒呑童子）

うぢなが　松岡權太郎氏長。 粟津が原の片ほとりに住し、繪師狩野氏久の婿にして盲目なり、逆目王子の滅びんことを祈念して歸る途に今國の幽靈に呼留められ、自刎して胴を今國に與へ、以て逆目の王子を滅さしむ（天智天皇）

うぢひさ　狩野氏久。 白髭明神に供へたる飯を食ひ、金輪五郎今國に捕へられて詰問せられたる答に、自分は逆目王子に强請せられて播右大臣富房公の娘花照姬の姿を聽しざまに描きしが、王子はそれを祕密にせん爲、我足筋を切られて此島に棄てられたる由を語る（天智天皇）

うてなのまへ　臺前。 出羽國盟鑑の浦辭の長者の女なり。京に滯在し、冷泉坊の法師に誘はれて一條室町染殿屋吉次方に至り、融大臣と出會へる際、春主に襲擊されて鄕里に歸り、融と共に出奔して京に上り、融の室となる（融大臣）

うねめ　采女。 春日の里の御酒の長の女なり。葛城大君・花照姬の放浪せらるるに遇ひ、相伴うて我家に歸る。其夜葛城大君と祝言の盃を交したる爲に花照姬猿澤池に投身す。采女・姬の跡を追うて走り來り、女の道に背きしを詫び入水して果てしが、天照大神・春日・住吉の大明神老翁となりて現じ給ひ、二人の女をして蘇生せしむ。是に於て葛城大君・花照姬・采女連立ちて三社禮拜に出で、まづ住吉社に詣づ（天智天皇）

うのはな　卯花。 播州總郡代賀古川前主典藤原敎孝の重臣中務秀光の妻なり。敎孝の孫光明丸を脊負ひて賺し機嫌を取れる際、光明丸の妹千壽姬に化けたる蜘蛛に喉笛を噛まれて死し、後に敎信上人の回向によりて成佛の姿を現ず（賀古敎信七墓廻）

うまこ　蘇我馬子。 崇峻天皇の大臣なり。佛法に歸依し、物部守屋の軍を其城に攻めて苦戰に陷る（聖德太子繪傳記）

うめ　阿梅。 神谷宿雜賀屋與次右衞門の女なり。高野山南谷吉祥院の寺小姓成田久米之介と通じ、吉祥院の法印及び久米之介に渡すべき二通の手紙を九兵衞に托せしが、其手違の破綻より久米之介・お梅の密通露顯し、爲に久米之介寺を放逐せらる。この日お梅は親の命によつて美濃屋作右衞門と祝言することとなり、久米之介もお梅も窮して遂に陰曆二月七日の夜高野山女人堂の傍に情死す。行年十八（心中萬年草）

引裂き、なほ御座所近く亂入せんとせしを、兒屋根の命神鏡を捧持して追拂ふ。是に於て岩長姫忽ち狂鬼に化けて素戔嗚尊の寶劍を奪うて與鬼と變ず。尊大に怒り惡鬼と奮鬪し給ひしが、鬼女は遂に岩壁に挾まりて失せたり。されど後遂に尊の爲に出雲國簸の川上鳥上に於て殺さる(日本振袖始)

いはふぢ 岩藤。 渡邊綱の妻なり 源頼信の室伊豫内侍が小蝶の怨靈の爲に惱み給ふや、岩藤乃ち木幡・蘭菊・おしやなの前と相謀りて之を慰めんとし、各松明を點し、東山大文字聖靈の送火につきて歸れやとて回向す。小蝶の怨靈蜘蛛となつて現はれしを岩藤等の四人の女長刀にて之を薙立つ(關八州繫馬)

いへなほ 富樫左衞門家直。 加賀の地頭なり。安宅の關所を警固し、源義經等主從十二人山伏姿に扮して通過せんとするを、義經主從と推知して關の通過を拒みしが、遂に義經主從に同情して其通過を許し、なほ行先の關所通過の證書を與ふ 𦾔錦胎内捃

いへはる 藤内太郎家治。 管領斯波左衞門義將の家來にして笛に妙を得たり。北山御所の門前に立てる際俄に一色大炊介久常に笛を切らる。後に義將に陪して赤沼幸満の家に行き、計らずも妻中川の幽靈に遇ふ。赤沼父子反するや、主と共に之を吉野城に攻めて功を立つ(雪女五枚羽子板)

いへゑ 伊兵衞。 大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衞の手代なり(冥途の飛脚)

いほはた 五百機。 巨旦將來の妻なり。夫の貪慾暴戾を諫めて用ゐられず、巨旦遂に父を弑し、五百機を縛して藁叢の中に押籠めたり。後に巨旦の弟蘇民將來が父の死骸を發掘したる際、巨旦殺父の罪を弟に負はせんとす。是時五百機藁叢より出でて實を語り、脅て巨旦の奪ひたる鬼の手形の守を蘇民將來に返し、夫を諫めて自刃す(日本振袖始)

いま 阿今。 大阪北久太郎町古道具商笠屋長兵衞の妾なり。弟傳三郎をして長兵衞の息女お龜の婿養子たらしめ、よつて以て長兵衞の家督を奪はんとして、傳三郎と共にお龜の夫與兵衞を陷れ、長兵衞をして深く與兵衞を惡ましめたり(ひぢりめん卯月紅葉)お龜の死口を寄せたることよりして阿今・傳三郎の惡行暴露す。長兵衞の姉大に怒り、杖を以て阿今を毆打し、長兵衞に迫つて阿今・傳三郎を放逐せしむ(卯月潤色)

いまくに 金輪五郎今國。 橘右大臣富房公の執權なり。主君に陪從して白髭明神に參詣し、繪師狩野氏久を捕ふ。逆目王子一味の惡黨が葛城大君及び花照姫を奪去らんとする輿に入替りて王子に殺され、粟津原に梟首せらる。是に於て其亡魂・氏久の娟松岡の通れるを呼留め、松岡の胴を藉りて己が首を繫ぎ、王子に恨みを報いんことを誓ひ、首は金輪、胴は松岡なればとて金岡と改名す。住吉の浦にて齊明天皇が逆目王子の爲に遠流せられ給へる船を戾さんとして、社頭の繪馬の白鷺に翼を畫き添ふれば、白鷺忽ち飛び、口に咬へし笠にて船を煽ぎ戾す。金岡奮戰して惡徒を殺し帝を奪返し奉る。かくて後天日彌源次と共に逆目王子の殿内に亂入して王子の首を刎ぬ(天智天皇)

いもこ 小野妹子。 崇峻天皇の大臣にして佛法に歸依す。天皇御不例なるに大連物部守屋の參内せざるを咎む。後に守屋を其城に攻めて苦戰に陷る(聖德太子)

いよないじ 伊豫内侍。 院宣によりて源頼信と婚し、小蝶の怨靈に惱みしが、怨靈去つて病癒ゆ(關八州繫馬)

いるか 蘇我入鹿。 性惡逆暴戾にして專橫を極む。藤原鎌足が唐太宗皇帝と婚姻を結びて、己を滅さんとするを怒つて鎌足を放逐す。後に唐使萬戸將軍の爲に殿上に取押へられ、鎌足に首を刎ねらる。然るに其首宙に舞上り暴行に及ばんとす。是時春日社の方より佛法守護の白羽の矢飛來れるに中つて遂に滅ぶ(大織冠)

いろはのまへ 以呂波前。 桓武天皇の中宮の上童を勤め、左中將藤原光輝に懸想す。光輝遣唐使を拜命せしかば、以呂波の前は別を惜み、之を止めんとして光輝の兄熊鷹に妨げらる。光輝の渡唐中常に光輝を戀侘びしが、光輝歸朝して小川の邊にて兩人邂逅し、互に心中を語り合うて契を結べる際熊鷹に見付けられて罵詈せらる。以呂波の前は熊鷹の捨詞を氣に病み、氷室谷に光輝の母を訪へば、何者かに害せられてあるに驚き、光輝の所爲と疑ひて己其罪を負はんとし、狂人をよそほひて老母の死骸の血を塗り、家人に捕められて河村忠義の邸に幽閉せられしが、忠義夫妻の情によつて死罪を免かれ、忠義夫妻と共に逃れて奈良般若寺の傍に住み、光輝高野山にありと聞き、これを尋ねて神谷宿に至り病を得。この時光輝と遇ひしも其名を語らざるを悲觀して谷に投身し、空海に救はれて蓮葉に乘じ、雲霧を分けて都に上り、西寺の僧守敏に呪詛せられて地に落ちしも、空海の行力よりて再び蓮葉に乘つて去る。後に守敏の讒奏により畜生門の刑に處せられんとせしを、空海の法方によつて守敏滅び、以呂波の前は光輝と共に參内することとなる(以呂波物語)

いゑもん 八百屋伊右衞門。 大阪靱油掛町八百屋の主人なり。淨土宗の信者にして寺參りに餘念なき善人なれども、其妻は邪險の惡婆なりしかば、遂に養子の半兵衞・お千代の夫妻をして情死するに至らしむ(心中宵庚申)

うけもちのをさ 食保長。 巨旦將來の父にして巨旦將來に虐待せらる。或日田畑を見に出でて巨旦將來に殺さる(日本振袖始)

うこん 右近の前。 中納言高房の下婢なり。高房の女三の宮行方不明となりし爲右近を養女となす。平安盛・右近の前をして花山法皇の御伽女たらしめ、且言含めて弘徽殿女御を誘らしむ。是に於て右近の前・弘徽殿女御の繪像を見て、その執念を語つて態と怖ろ。是時弘徽殿の繪像動き出で、右近の前の心と入替つて法皇と爭ひしが、安倍晴明の祈禱によつて弘徽殿の亡魂去り、もとの右近の前となる(傾城酒呑童子)

うしわか 牛若。 常盤の懷に抱かれて母子共に長田庄司に召捕へられしを、澁谷金王丸・藤九郎盛長に救はれ、母に連れらて伏見の里の雪中に寒苦を忍び、長じて十六歲の時京三條烏丸烏帽子折五郎太夫方に立寄り、左折の烏帽子折を購はんとして源氏の公達と覺られて訴人せらる。五郎太夫の娘東雲・牛若に懸想し、元服祝をなして甲冑を訪れる折しも六波羅の捕手の襲撃に遭ひ、土佐坊昌俊力

子一萬箱王の匠付けし場に來合せ、祐重の代りに一萬・箱王を討取らんとして戰へるを、文覺上人に諭されて相和し主從の約を結ぶ。後に名劒友切丸を携へて文覺の庵室を訪ふ途中、股野五郎景久に要擊せられ、奮鬪して景久を殺す（本領曾我）

曾我祐成・時致兄弟の下人なり。源範賴に遇ひて曾我兄弟が親の讐工藤祐經を殺さんとして肝膽を碎ける由を哀訴し、範賴より賴朝の前まで行き得る割符二枚を借りて之を曾我兄弟に渡す（曾我會稽山）

「團三郎」の條をも見よ。

おほうすのわうじ　大碓王子。景行天皇第一皇子なり。王位を奪はんとして筑紫の兇賊八十梟師と通じ惡行多かりしかば、景行天皇の逆鱗に觸れて斬罪に處せられんとせられしを、吉備武彦哀訴して王子の惡心を矯正せんとし、つぐに死を以てせんとするに及んで王子深く武彦の心に感じ、非行を悔悟しこ兩眼を抉り、これより善人となり、武彦の子の田鶴若の死骸を抱きて天皇に謁し給ふ（日本武尊吾妻鑑）

おほうなばらわうじ　大海原王子。嵯峨天皇の從弟なり。生年二十三。惡右馬尉仲成と謀りて反逆を企て空海に看破せらる。また惡僧守敏と共に北岩倉の深山に籠りて大咸德の法を修し、天下を覆さんとして大炊介仲經に追拂はる。後遂に天皇を嵯峨の離宮に幽閉し奉らせ、自ら僭して帝と稱し淫逸驕奢に耽りしが、靈の大部を攻めて利あらず。弘法大師の雩修法の際、嵯峨天皇に飛掛らんとして橘勝藤・大炊介仲經の兩人に刺殺さる（嵯峨天皇甘露雨）

おほくさかのしん　大草香臣。中蒂姫に懸想し、その戀の叶はぬを忿怨して葛城山に籠居し、名を眉輪と改めて安康天皇及び中蒂姫を咒咀し、以て天皇を壁になし姫の懷妊を封ぜしが、國大臣の重臣諸宗に刺殺さる。然るにその魂魄中蒂姫の胎內に入り、袋子となつて出で葛城山に棄てらる。是に於て袋子鬼子となつて眉輪王と名乘り、熊と格鬪して之を斃し、直に安康天皇に飛掛つて弑し奉りしが、雄略天皇の爲に退治せらる（浦島年代記）

おほたかまる　大高丸。勢州鈴鹿山の惡鬼を從へ、變身の術に長ぜしが、遂に坂上田村麿に退治せらる（田村將軍初觀音）

おほとうない　大藤內。備前國吉備津宮の禰宜なり。建久四年五月二十八日の夜工藤祐經の假屋にて酒宴し寢に就きしが、其夜曾我二子に斬殺さる（加增曾我）

おほひのすけ　大炊之介。伊駒姫の伯父なり。惟喬親王の反逆に一味し、親王の命を奉じて歸宅し、伊駒姫が在五中將業平と歌の贈答せるを見て怒り、伊駒姫を虐待し業平を欺いて淸和天皇を奪ひしが、業平の郎等般若五郎仲則の爲に取返さる。また業平を殺さんとして井筒の家を襲擊し、其門前に立てる伊駒姫を業平と見誤つて斬殺せしが、忽ち伊駒姫の怨靈の爲に井戶に投込まれて死す（井筒業平河內通）

おほやまつみ　大山祇。木花開耶姫の父なり。素戔嗚尊より木花開耶姫を所望せられたどもこれを瓊瓊杵尊に奉る。後に素戔嗚尊を出雲國簸の川上の長者手摩乳の家に訪ひ、手摩乳の娘稻田姫を大山祇の養女として素戔嗚尊に奉る（日本振袖始）

おほよど　大淀。京都九條町の遊女なり。足利義輝に落籍せられ、三好長慶の養女としこ義輝の御所に入る。これより義輝益淫逸に耽り暴戾の行多し。然も大淀これを諫むること能はず。淺川左京大夫藤孝を呼止め、己が心底を語らんとして斬られ、心中を打明けて斃る（津國女夫池）

おぼろづき　朧月。吉備武彦の妻なり。夫と共に大碓王子の惡心を矯正せんとせしが、王子更に改心し給はざるにより、夫妻死を以て諫めんとして自刄せんとせる時弟嫁の漣に制止せらる（日本武尊吾妻鑑）

おもだかひめ　澤瀉姫。故三位伶人富士丸の娘なり。父の死後伯父太兒縣主時景に養はる。時景・姫の所持せる天鼓といふ鼓を奪はんと欲し、姫を賺して巳九と共に狐釣に出でしむ。時に能勢稻荷の千年狐現はれて時景の惡心を知らす。是時時景主從公卿に扮して來り、天鼓を奪はんとして澤瀉の家人智略之介・武略之介に追拂はる。澤瀉姫はこれより丹波に下り、能勢稻荷社の宮司松垣藏人興宗を便り、興宗の奸策にかかりて天鼓を奪はれんとせしを山路判官梅豐に救はれ、愛人吳服中將雪枝を尋ねて陸奧局の閑居を訪ひ、案內を乞うて陸奧局に拒絕せられ、憤怨の餘り悶絕して宇治太郎に害せられんとせしを雪枝の家人金目丸に救はる。後に時景も宇治太郎も滅び、姫は雪枝と共に播磨の小次郎狐に誘引せられて螢親王に謁し恩賞を賜はる（天鼓）

（序云、澤瀉姫・陸奧局の二女が雪枝に義理を立つる條は、傾城佛の原（元祿十二年作）に奧州・今川の二傾城が梅永文藏に意氣地を磨くを淨瑠璃に改作したるなり）。

おもだかひめ　澤瀉姫。岩倉大納言兼參卿の女にして、源賴光と婚約あり。然るに賴光は淸原右大將高藤に讒せられて行方不明となるや、姫鬱鬱として暮す。或日煙草賣の源七を呼入れ、三味線を彈かしめて心を慰む。後に賴光高懸山の鬼神を退治して武功を立つるや、澤瀉姫四位に叙せられ、勅命ありて賴光と結婚の日を定めらる（嫗山姥）

かいそん　常陸坊海尊。仙人となつて奧州高館に行き、武藏坊辨慶に逢うて淨瑠璃姫の最期及び姫が女護島に生れて天女となれることを語り、姫より託されたる桃源延命酒・銀の心葉・黃金の盃・瑠璃の壺を渡し、風に乘じて去る（源義經將基經）

がうざゑもん　坂部郷左衞門。遠州濱松の城主淺山氏に仕へて弓頭を勤む。或日城主應將の歸途を招待して饗應す（宵庚申）

がうだつ　剛韃。韃靼王の臣なり。海道の港にて吳三桂の妻柳歌君と戰うて殺さる（國性爺合戰）

かうまん　赤沼前司入道幸滿。足利義教の逆臣なり。節分の夜義教を弑して其印判を奪ひ、また管領斯波義將を罪に陷れん爲に、一色大炊介に命じて義將の家來藤內太郞の携へたる笛を義教の名笛小水龍と誤信してこれを折らしめ、また藤內太郞の妻中川を欺きて義教の太刀を盜ましめ、遂に反して兵を舉げしが、斯波義將等と戰ひ敗れて滅ぶ（雪女五枚羽子板）

かくはん　橫川覺範。大和吉野山の僧な

うめがえ 梅枝。 足利義輝の室の侍女なり。室に陪從して賀茂社に詣づ。後に義輝の邪險の刃にかかりて死し、其怨靈足利義照の夢に現はれ、瞋恚の角を振立て義輝を追ふ（津國女夫池）

うめかは 「むめかは」を見よ。

うめとよ 山路判官梅豐。 吳服雪長の親友なり。松垣與宗が瀧鳥姫の所持せる天鼓を奪はんと欲して、姫及び雪長を欺ける場に駈付け、松垣の奸策を觀破して之を擒め、以て姫等を救ふ（天鼓）

うめのゐ 梅井。 金剛兵衞利綱の妹なり。錦小路中納言の使者と稱して金五將軍惟茂の邸に至り、家老澤瀉二郎に逢ひて世繼御前及び玲瓏君の處置に就き取次を請ふ。澤瀉その返答に窮し遁辭を設けて逃ぐ。梅井承知せずして其跡を追ひ、惟茂より二通の返書を得て歸る（栬狩劔本地）

うめわかまる 梅若丸。 吉田少將藤原朝臣行房の子にして松若丸と双子なり。或日惡漢勘解由兵衞景逸に唆かされて漢武帝の畫ける鯉に點晴せし爲、その鯉生動して庭の池に入る。梅若丸は父に叱られんことを恐れて失踪し、人商人藩根惣太に捕へられて殺され、隅田川畔に埋められて墓標に柳樹を栽ゑらる。行年十二歲（雙生隅田川）

うりようこ 石龍虎。 明の逆臣李蹈天一味の徒にして、南京雲門關の守將なり。國性爺の關門を越ゆるを拒み、戰敗れて死す（國性爺合戰）

うんこく 長谷部雲谷。 江州高島の館左京大夫賴賢の抱繪師なり。狩野四郎元信の畫才あるを嫉み、家老の不破入道道犬等と黨を結び、四郎二郎を苦しめしが遂に流罪に處せらる（傾城反魂香）

うんそう 萬戸將軍雲宗。 唐太宗皇帝の臣にして膂力あり。太宗皇帝の命を奉じ、花原磬・泗濱石・面向不背の玉及び種種の進物を携へて讃州志戸浦に來り、その海にて面向不背の玉を龍宮に奪はれたりと披露せしが、鎌足の智略に服して都に上り、參內して蘇我入鹿の暴逆を目擊し、これと爭ひて遂に取押ふ（大織冠）

えいかのひめ 詠歌姫。 江文宰相爲成の養女なり。源賴信の室となるべかりしを小蝶の媒によりて出羽冠者賴平と婚し、賴平と共に駈落する途中兇賊將軍太郎良門に脅されて遂に其一味となる。後に賴平が渡邊綱の爲に生擒せられて死罪と定まるや、詠歌姫も亦死を決す。後に賴平の罪を赦さるるに及んで詠歌姫も亦その罪を赦さる（關八州繫馬）

えいきつ 永佶。 永曆皇帝の武將なり。五府將軍石門龍の謀反を甘輝に告げ、旃檀皇女を連れて國性爺の行方を尋ね、句容縣にて相遇ふ。是時賊將鐵故山・石運窟の追擊急なり、永佶防戰して斃る（國性爺後日合戰）

えいりやくくわうてい 永曆皇帝。 大明十七代思宗烈皇帝の皇子なり。韃靼國に攻められ、大司馬將軍吳三桂の忠節によつて難を免れ、山中に隱棲すること七年、國性爺の助勢によつて韃靼軍を破り、帝位に卽き永曆皇帝と稱す（國性爺合戰）再び韃靼兵に攻められ、散騎將軍甘輝に助けられて遁れ、雲南道硯石山の麓なる陳芝豹を賴みて身を寄せしが、其夜甘輝に連れられて遁れ、廣東の津より乘船し、東寧島に航して國性爺に身を寄す（國性爺後日合戰）

おうやうかくし 歐陽赫思。 歐陽哲の父にして福建の國守六安王に仕へ、六安王の暴戾にして虐政を行ふを極諫し、怒に觸れて殺され其肉を醢にせらる（唐船噺）（蓋し歐陽凱の脚色か。凱は臺灣總兵を勤め、鳳山に朱一貴配下の將杜君英と戰ひて敗死す）

おうやうてつ 歐陽哲。 征國將歐陽赫思の子なり。父に勘當せられて軍術者伍乘の弟子となり、夜盜を働き朱一貴と力を格して負け主從の約を結ぶ。是時福建の國守六安王の軍朱一貴を蹂躪す。哲乃ち朱一貴と佯り力戰して捕はれ六安王の前に引据ゑらる。哲・六安王を痛罵す。王怒つて哲の父歐陽赫思の肉を食はしむ。哲悲憤の涙に暮れながら其肉を嚥下するや、忽ち大力を出して縛繩を切り、六安王の近習の臣金海道を摑み沸返る釜中に投じて之を殺す。是時朱一貴等來襲す。乃ち相共に六安王を攻め滅す（唐船噺）

おしくま 外濱忍熊。 景行天皇の朝東夷の首領なり。日本武尊を欺いて野原に導き、四方より草を燒立てて尊を弑し奉らんとせしが、遂に尊に殺されて滅ぶ（日本武尊吾妻鑑）

おしやなの前 坂田金時の妻なり（關八州繫馬）「いはふぢ」を見よ。

おとわか 乙若。 佐藤忠信の子なり。幼時母・伯母・鶴若と連立ちて三河國に行き、また義經の假寓せる奧州高館の城に赴く（源義經將棊經）

おにじ 鬼次。 横山郡司信久の家士なり。主君の娘更衣姫の入水を見るに及んで深く主君の無情を恨み、兄鬼王と共に薙髮して藤澤上人の弟子となる。横山三郎重次が小栗判官兼氏を藤澤寺に襲ひし時鬼次之と戰ふ（當流小栗判官）

おにどうまる 鬼同丸。 兇賊將軍太郎良門の部下なり。賴信が鞍馬詣の歸途を市原野に要擊せんとして牛の腹中に匿れ居たるを賴信に怪まれ、渡邊綱に殺さる（關八州繫馬）（序にいふ。近松のこの話は、古今著聞集卷九、武勇第十二、及び前太平記卷二十一、市原野狡童・源賴信の爲に生捕らるる事、賴光朝臣狡童誅戮の事の條に據れり）。

おにわう 鬼王。 横山郡司信久の家士なり。信久より其娘照手姫を相模沖に沈むべきを命ぜらる。是に於て竊に姫をして逃れしめ、石を海に沈めて横山三郎重次を欺きしが、照手姫の妹更衣姫の入水するに及んで主君の無情を恨み、弟鬼次と共に薙髮して藤澤上人の弟子となる。重次・小栗判官兼氏を藤澤寺に襲ひし時鬼王之と戰ふ（當流小栗判官）

おにわう 鬼王。 曾我兄弟の下人なり。主人に從ひて三河國鳳來寺に參詣し、禪師坊が虎御前を戀慕する醜態を見て悲憤の餘り禪師坊を踏付けしが、禪師坊の深意を知つて深く其罪を謝す。また富士の狩場にて京小二郎が河津三郎一代記の辻講釋せるを聞き咎め、曾我兄弟と心を合せて敵討すべきを勸む。後に大磯にて工藤祐經の下人近江・八幡を捕へて曾我兄弟の前に引出す（曾我五人兄弟）源氏の家人鎌田兵衞正淸の郎黨加藤六有村の子にして、朝顏の弟團三郎の兄なり。姉が河津祐重に剌されたるを恨み仇討せんと思へる折から、祐重赤澤山に重傷を負ひ、祐重の二

貧に殺さる（聖德太子繪傳記）

かち　河內屋與兵衞の異父妹なり。兄與兵衞の暴惡放逸を矯正せんとして兄の意に從ひ、病と稱して父母を欺く（女殺油地獄）

かつ　阿勝。　武田信玄の重臣山本勘介晴幸の妻なり。老母に從ひて長尾輝虎の重臣直江山城守實綱の所に至る。阿勝吃にして言語自由ならず、筆にて書き或は琴を彈じて其意を述ぶ。折しも勘介、阿勝の筆跡になる老母大病との書面を得て尋ね來る。然るに阿勝はかかる書面を書かず、實綱の妻唐衣が僞筆して勘助を長尾家に招かんとする苦計なるを恨み、阿勝・唐衣互に拔合ひしが、老母・兩女の間に飛入り義理を立てて死す（信州川中島合戰）

かつうみ　眞砂前司勝海。　播州の武士桃園染五郎豐舟の家臣にして、八十八の老齡なり。土師別當村正・村任の兄弟が豐舟の室二位の姬を脅せる場に來つて、姬の危急を救ひて敵手に斃れしが、姬より西王母の桃を吹込まれて蘇生し二十餘歲の若侍となる。かくて姬の侍女小萩と夫婦となり、主君の行方を尋ねて大和路なる郡山の駕籠舁となる。一日室津の遊女屋長と云ふ者來つて遊女を駕籠に乘せよといふ。勝海通行人を呼んで駕籠の相方を賴めば、その人は我主君の豐舟なるに驚く。是時鬼女薄雲が妹の二位の姬を追跡して來り、駕籠なる遊女及び二位の姬を殺す。豐舟・勝海乃ち薄雲と戰つて之を殺す。長は遊女の殺されたる代償を勝海に迫り、勝海致方なく小萩を代償に渡す。後、小萩を慕うて室津に行けば、主君豐舟の宮城野（小萩の妓名）に戀想する體を見、主君の俯甲斐なきを歎きて毆打す。是時村正等が宮城野を請出さんとして來るに會して村正を殺し、後また醍醐の旅舍にて勝海・勝興の父子協力して村任を殺し、主君豐舟と奈良興福寺南大門にて相會す（日本西王母）

かつうみ　弓削勝海。　大連物部守屋の副將なり。葛木島主等に攻寄せられ、跡見赤擣に破られて身を以て免る（聖德太子繪傳記）

かつおき　眞砂乙太郎勝興。　眞砂前司勝海の子なり。好色の爲勘當されて辻能師となり、市中にて辻能をなせる際二位の姬が官太村任に追はれて來るを遁れしめ、能狂言に紛らして村任の妨をなし、之を捕へて葛籠の中に押籠め、村任の下人唐珂兵太に擡はしめて追拂ふ。後、醍醐の旅舍にて父勝海に邂逅し、父子協力して村任を殺し、父と共に奈良興福寺南大門に來つて主君の桃園染五郎豐舟に逢ふ（日本西王母）

かつしげ　小柴掃部勝重。　三島宿小柴父郡司の子なり。中納言實恭卿に奉公せる際、父郡司が番場の忠太國久に殺されたるを聞き、主家に暇を告げて我家に歸り、大磯遊廓に妹虎を尋ね、相伴ひて廓を遁出で途中に曾我祐成に逢ひ、三人共に箱根の寺に五郎時宗を訪ふ。後、賴朝が御狩場揃の場に赴き、土民に扮して國久に近付き、遂に之を殺して亡父の仇を報ず（大磯虎稚物語）

かつじらう　江戶屋勝二郎。　八幡の富豪なりしが、新町茨木屋の遊女吾妻に馴染みて豪奢を極め、惡手代惣七を信任し、吾妻を請出すことより滅亡の禍機をなして官より追放せらる。乃ち吾妻と共に奈良に落ち憂目を見しも、遂に舊手代新七夫妻等の忠義によつて救はれ、再び家を興すに至る（淀鯉出世瀧德）（序云、大阪北濱淀屋辰五郎闕所事件の脚色）

かつとら　布引左馬頭勝虎。　布引先生勝成の長男にして淀次郎照房の兄なり。持統天皇を幽閉し奉れる牢舍の番を勤めしが、春彥尊より尊の弟の夏仁親王を尋出して弑すべしとの命を受く。是に於て勝虎は持統天皇・夏仁親王を助けまゐらせ、春彥尊を討たんと決し、照房と謀つて合はず互に口論して父より勘當を受く。勝虎の妻淺衣が天皇の御供して行方不明となる。勝虎乃ち天皇の行方を尋ね、飛鳥の里にて天皇及び淺衣に出合ふ。是時尊の部下當麻判官重則攻寄す。即ち戰つて之を斬り、尋で春彥尊を滅す（持統天皇）

かつなり　布引先生勝成。　津の國蘆屋の郡主なり。春彥尊より召されて參上し、其歸途橋立左衞門秋廣に逢ひて尊の逆心あるを語る。勝成の二子勝虎・照房、尊より夏仁親王を尋出して弑すべきを命ぜられ、二子の意見一致せず互に口論したるを勝成聞いて尊を討たんと決心し、若しも成らずんば罪を一身に引受けん爲殊更に二子を勘當したり。偶勝成、尊より蹴鞠の會に召さる。勝成決行の志を堅うし、裝束を改め蹴鞠の懸に出でて尊を狙ひしが、尊に覺られて首を刎ねらる。後、勝成の魂魄・尊の乘れる馬の手綱を執つて動かせず、以て尊を滅すに至る（持統天皇歌軍法）

かつひで　細川右馬丞勝秀。　足利將軍義敎の命によつて斯波左衞門義將の討手に向ひしが、義將の心事を聞いて深く感じ相和して別る。後、赤沼幸滿叛旗を擧ぐるに及び、乃ち義將と共に赤沼父子を攻めて之を誅す（雪女五枚羽子板）

かつひら　津戶三郎勝平。　奧州の浪人なり。源九郎義經の行列に對して禮せず、辨慶その無禮を咎む。義經は津戶三郎なるを知つて之を臣とせんとす。勝平これを辭して出羽國佐藤庄司の子繼信・忠信を推薦す。後、妹早姬と共に繼信を尋ねて屋島に行き、繼信討死せし由を聞いて愁歎せる折しも、かねて繼信と不和なりし安西彈正太郎氏重に攻寄せらる。勝平乃ち氏重を殺す。新黑谷に行きて法然上人を賴んで繼信の追善を營み、法然上人の佛の不思議を見せ給へるに感じ、一念發起し極樂に往生せんとして切腹す。其腹中より善惡二つの玉飛出でて互に勝平の屍を誘ひしが、善の玉遂に惡の玉に勝つて勝平極樂に往生す（津戶三郎）

かつふさ　大道寺新兵衞勝房。　今川伊豫守源貞世入道了俊の家老なり。了俊の長子仲秋に陪して西京に在りしが、了俊病革るや仲秋に隨つて歸國す。了俊の死後了俊の弟の貞匡に大赦を迫られて不同意を唱へ、これを罵つて歸る途に相役荒川藏人近平に出合ひ、貞匡の反心あるを語る。青砥五郎藤次が貞匡に欺かれて自分等を召捕へんとして來るに逢ひ、即ち實を告ぐ。藤次さてはと悟り赤面せる折しも貞匡反旗を擧げたりとの報あり。乃ち三人相約して、勝房は國中に忍び敵情を窺ふ。或夜大磯小磯の境なる松原の辻堂にて二人互に斷結へるを見咎め、之を誰何して荒川近平と青砥藤次なるを知り、互に邂逅したるを喜び合ひ、俱に共に主君を尋ねて三河に行き、結城右衞門太夫種春の義軍に會し、大擧して貞匡の居城駿府を拔き、敵將梶原民部を斬り貞匡を生擒す（今川了俊）

かつふち　橋判官勝廉。　前判官晉嶺の

り。源九郎義經が吉野の奧に遁れ入りたるを討取らんとし、川倉法眼等と共に之を攻めしが、義經の家士佐藤忠信の爲に殺さる（吉野忠信）

かげきよ　惡七兵衞景清。　平家滅亡後頼朝を狙はんとして落人となり、熱田大宮司の家に身を寄せ、南都東大寺建立の人夫に扮して紛入りて畠山の忠を狙ひ、悟られて捕手を差向けらる。景清これと戰ひ遁れて京都に上り、清水坂に妾の阿古屋を訪うて清水觀音に詣づ。阿古屋は景清が熱田大宮司の娘小野姫と情交密なるを嫉妬の餘り、兄十藏をして景清の居所を訴人せしめし爲、江間義時部下を率ゐて清水寺を圍む。景清碁盤を投げ奮戰して東路に遁る。梶原景季父子乃ち熱田大宮司を獄に投じ、小野姫を慘酷なる拷問にかく。景清出でて自ら縛に就く。阿古屋は兄をして景清を訴人せしめたるを悔い、景清の獄前に來つて罪を謝し、二子を刺殺して自刄す。頼朝、佐佐木四郎に命じて景清を三條畷に斷らしむ。是時勿體なくも清水觀音景清の御身代りに立ち給ふ。頼朝爲に景清の罪を赦して日向國宮崎庄に封ず。景清も頼朝を狙ふことを斷念し、不具者となつて觀音經を讀誦して世を終ふ（出世景清）（序云、出世景清は義太夫の爲に新淨瑠璃を作る始にて、出世と冠したるも義太夫の緣起を祝したるなり）

かげすゑ　梶原景季。　源頼朝より畠山重忠と共に義經辨慶等の首實檢を仰付けらる。重忠が鄭重に義經等の首を取扱ふを難じ、義經の首の贋物なるを咎めて重忠と口論し、また館御前を獄に投ぜんとして本田次郎近經に妨げらる。後、頼朝の命を奉じて諸國の名馬を集め、御狩馬揃ありし時、景季の部下番場の忠太國久が曾我兄弟・小柴播部勝重に殺害せらる。景季、敵より呼掛けられたれど恐れて遁去る（大磯虎稚物語）　景季、源頼朝の命を奉じ義經討伐の爲京六波羅に着し、鞍馬山の東光坊を召して靜を隱匿せるかを訊問し、却つて東光坊に罵らる。後、嵯峨野の奧に祇王の庵室を襲ひ、喜三太と戰つて靜を奪去り、鎌倉に赴く途中大津の逆旅にて、靜の分娩したる男子を殺さんとして其の身代と知らで大津二郎の子を殺し、靜を二郎に預けて鎌倉に下る。後、美濃國青野が原にて喜三太と格鬪し、搦められて奧州に引かれ、義經の前にて大津二郎に殺さる（孫靜胎內捃）

かげたか　梶原景高。　梶原平三景時の次男なり。名馬磨墨の足を洗へる際、鶴若に邂逅して罵られたる上にその馬を奪去らる（源義經將棊經）　景高常に工藤祐經に一味し、源範頼が鎌倉御所にて鹿論を取捌く席上、範頼に迫つて狩場の割符を一見せんと請ひ、それは曾我二子に與へし爲にその無きを知るや、これを詰りて自害せしむ。又二宮太郎安清が富士裾野へ注進の早打の命を蒙るや、景高これを祐經の爲に不利なりと思ひ、安清を藤澤に要擊したり（曾我會稽山）

かげとき　梶原平三景時。　源頼朝の寵臣なり。頼朝近習の者を集めて夢を判ぜしめし際、畠山重忠と爭論をなして負く。後、頼朝の代官として奧州征伐の將士の武功を聽取し、葛西郡司清重の武功なきを咎めて自殺せしめ、清重が頼朝より授けられたる金の采配を取上げたり（傾城島原蛙合戰）

かげはや　梶原平次景早。　梶原平三景時の次男なり。源頼朝の命を奉じ北條時政と共に三萬騎を引率し、京都堀川なる義經の討手に向ひしが、武藏坊辨慶の爲に閼の戸を破られ、義經を討取らんとして義經の家士佐藤忠信の爲に殺さる（吉野忠信）

かげはや　勘解由兵衞景逸。　吉田少將藤原朝臣行房の逆臣なり。惡漢常陸大掾百連と相謀り、比良嶽の老樹を伐り、比良山の天狗をして行房の家に祟らしめ、尋で百連と謀つて行房を弑せしが、行房の奴軍介の爲に池に投込まれて溺死す（雙生隅田川）

がげはる　小餘綾新左衞門尉景春。　源頼光の命を奉じ壬生の里に籠居し給へる藤壺女御の番を勤む。一夜疲れて眠れる間に、藤壺女御及び乳母治部卿が我刀にて殺害されてあるに當惑し、自ら其罪を負うて壺中に幽閉せらるること三年。妻は夫既に死せるものと思ひ、羽倉伊賀介久國に再嫁せしが、久國が女御を害せし事明白となつて景春放免せられ、思ひがけなく妻と再會する條哀れなり。後、男山八幡に參詣し、清瀧夫妻等が蘆屋道滿・平次兵衞盛重と奮戰せる場に際會し、盛重と戰つて首を刎ね、花山天皇還幸に陪從して都に上る（弘徽殿鵜羽産家）

かげひさ　股野五郎景久。　伊東次郎祐近の子、祐清の弟なり。亡兄祐重追善の席にて頼朝の臣藤九郎盛長と角力して疵を負ふ。頼朝主從を途に要擊せんとして祐清に妨げらる。後、頼朝に攻められて眞田與市義定に殺さる（頼朝伊豆日記）　景久性陋劣にして平宗盛の嬖妾熊野に懸想し、屢妾女に賜はるやう願へど、熊野は景久を嫌つてその心に從はず。後、景久友切丸の名劍を奪はんとして熊野の隙を狙ひ、みさきの前を襲うて朝比奈義秀に追拂はる。鬼王・團三郎が友切丸を携へて文覺法師の庵室を訪へるを途に要擊して殺さる（本領曾我）

かげひさ　足立右馬允景久。　源頼朝より浪人吟味役を命ぜられ、鶴岡八幡宮に詣でて婚約せる葛西郡司清重の娘琵琶姫と逢ふ。この時清重奧州征伐の軍に從ひて武功なきを梶原景時に詰られて自殺したるを聞き、景久乃ち葛西家と婚するは我家の名折なりとて琵琶姫と緣を絕つ。景久京都に上り禁中を警固して臺合戰を目擊す。折しも吉田中納言經房卿、景久を召して浪人吟味の怠慢を責む。景久乃ち七草四郎の情婦の父手塚幡樂を召喚して四郎の行方を訊問し、四郎を肥前國七草城に攻めて武功を立て、畠山重忠の媒酌にて琵琶姫と婚す（傾城島原蛙合戰）

かげむね　長田前庄景宗。　尾張國內海の長田庄司忠宗の子なり。父と謀り源義朝を殺して平家の恩賞に預らんとし、義朝を濱の茶屋なる藥湯に導きて、之を殺さんとせしが鎭西八郎爲朝に殺さる（鎌田兵衞名所盃）

かげむら　笠見藏人景村。　藤原時平の執權なり。菅丞相の流罪を警固し、大物浦より船に乘せて途中に失はんとして、弓矢を手挾み後を追ふ。この時十六夜が菅公を助けんとして、七首を銜へ泳ぎ行くを見て之を射殺せしが、己は秦兼竹に殺さる（天神記）

かずて　鞍作數手。　大連物部守屋の反逆に組し、守屋が立花の會を催したる日に[illegible]

かねやす　妹尾太郎兼康。　平家の家士なり。平清盛の命を奉じ、鬼界島の流人成經・康頼召還の使者となつて行かんとする途に能登守教經に出合ひ、俊寛をも召還すべしと論されて之を拒みしが、教經より俊寛赦免の自筆狀を得て漸く其命に從ひ、鬼界島に到つて三人を連れ歸らんとす。成經の情婦千鳥乘船を懇請して許されず。是に於て俊寛の代りに千鳥の乘船を請へど、兼康これをも峻拒す。俊寛乃ち兼康に近寄り、俄に腰刀を奪ひて兼康を刺す。兼康痛手を負ひながら俊寛と格鬪して斃る（平家女護島）

かはかぜ　竹知川風。　逆目王子の臣なり。葛城大君・花照姫の輿を奪取つて行く所を金輪五郎今國に殺さる（天智天皇）

かはかつ　秦川勝。　父死して忌中にありしが、親友葛木島主より聖德太子の軍に屬すろやう懇望されたれど、物部守屋に義を立てて肯ぜず、亡父の位牌を二つに割り其一片を渡して、此位牌を接合する時來らば、我孝も武も立つべきを約す。かくて守屋の命を奉じ、公卿の北の方及び島主の妻月益御前を河內國志紀の山館に幽閉して其番をなす。或時月益御前より文を袂に入れらる。川勝これを讀んで戀文と合點し深く月益の不行跡を惡む。折しも垣を破つて闖入する者あり。川勝之を捕へて見れば月益の二子なるにぞ、乃ち月益の不行跡を語つて痛罵す。是に於て月益淚に暮れながら其文を逆に讀上ぐれば、二子を思ふ情切なるものなりければ、川勝感極つて誤解の罪を謝し、今より直に天皇の御味方なりと大呼し、直に囚人を開放し、相番弓削廣海を縛して追拂ひ、位牌の一片を取出して月益の子の政若が携へたる位牌の一片と接合す。是より聖德太子の軍に屬して守屋の據れる稻村城を攻め、敵將弓削廣海を斬り守屋を滅す（聖德太子繪傳記）

かへいじ　茶碗屋嘉平次。　一つ屋五兵衞の子なり。大阪大和橋濱納屋板園の家に陶器商を營む。伏見坂町柏屋の遊女おさがに馴染みて、許嫁の養女おきはと婚するを嫌ひ、父に疎まれたる上に印傳屋長作に商品を詐取されて窮し果て、おさがと共に夜中濱納屋の我家に立寄る。折しも父五兵衞がおきはを伴ひて來り、おきはと祝言の盃をさせんとす。嘉平次當座遁れに猶豫を請うて結婚を誓ふ。五兵衞さらば固めの盃せんとて嘉平次に萩燒の大皿を受けさせ、之に瓢を傾くれば酒にはあらぬ一步銀堆く盛上げらる。祝儀は明日のことと再會を期して別る。然るにこの銀もやがて長作に奪ひ去られ、最早これまでと覺悟を定め、生玉社茶店の側まで迷ひ行きておさがと情死す（生玉心中）

かへいじ　松下嘉平次。　遠州濱松の住人にして眞柴肥前大領久吉の舊主なり。久吉天下掌握の後伏見城に行きて久吉に謁し、己が娘阿通の胎兒は城之介春忠公の胤なれば之を守立て、且阿通をして逆臣光秀に一味せし者の首を取らしむべきを依賴し、久吉を誘うて濱松に歸る。是に於て嘉平次は豫て光秀の反逆に一味の連判したる科により、阿通をして己を銃殺せしめて阿通の手柄となし、以て阿通の子を守立てしめんとしたり（本朝三國志）

かまたり　大織冠藤原鎌足。　鎌足の女藤照姫を唐太宗皇帝の妃となし、兩國の好みを結んで逆臣蘇我入鹿を誅せんとす。唐よりは萬戶將軍雲宗を使者として花原磬、泗濱石、面向不背の玉などの進物を齎して我國に來る。入鹿怒つて帝を幽し鎌足を追放す。鎌足讃州志戶浦に到り若狹之介則風に庇護せらる。折しも雲宗この浦に泊し、鎌足の智略を揣らんとして面向不背の玉を龍宮に奪はれたりと披露す。鎌足乃ち則風の妻滿月をして龍宮に入つて玉を索めしめ、且曰くその玉なきは素より知るといへども、これを明言すれば佛教及び兩國の威信に關する所大なるを憂ひかくなせるのみと、乃ち大聲して曰く面向不背の玉を得たりと、是に於て雲宗・鎌足の智略に服し、相共に都に上る。鎌足盲目の狀をなして入鹿を欺く。雲宗・入鹿の暴逆を責めて取押へたるを鎌足・入鹿の首を刎ぬ（大織冠）

かまどのだいぶ　竈大部。　稻荷大明神の社人にして弘法大師の弟子なり。大師より賴まれて大炊介仲經・橘判官勝藤の兩人を隱まひしが、大海原王子に亂入せられて危かりし時、眞言陀羅尼を念誦して王子等を追拂ふ（嵯峨天皇甘露雨）

かみぢ　「ぢへゑ」を見よ。

かめ　笠屋阿龜。　大阪北久太郎町古道具商長兵衞の女にして與兵衞の妻なり。與兵衞が舅の妾いま及び其弟傳三郎にいぢめられて家出するや、お龜は夫の身を案じて大阪二十二社に詣で、神子町の梓巫女お辻の家に立寄つて夫の口寄を賴み、常に家內不和合の爲に胸を痛め、剩へ傳三郎より挑まれて大に怒り、身の不運を歎ぎて夫と共に死を謀り、五月十七日の夜陰に乘じて家を出で、梅田堤に走つて死す。行年十五（ひぢりめん卯月紅葉）

伯母よりお龜の死口を寄せられて、お今・傳三郎を痛罵し與兵衞の身の上を賴み、またお龜の幽靈大和國平群谷の庵室に助給（與兵衞出家しての名）を尋ねて物語す（卯月潤色）

かめきく　龜菊。　喜瀨川の遊女なり。假粧坂の少將と曾我時致との媒介をなしたるを抱主に憎まれて太夫より端傾城に落さる。或夜朝比奈義秀・秩父重保の袖を捉へて朋輩女郎の虎御前・少將を連れて來るやう懇請したり（曾我虎が磨）

富士裾野の狩場にて工藤左衞門祐經に揚げられ、歸途朋輩女郎の虎・少將に逢うて、曾我兄弟の消息を語る（曾我會稽山）

富士裾野の狩場に招かれて、歸途曾我祐成・時致に逢うて狩場の樣子を語り、曾我兄弟の依賴を受けて、賴朝が工藤祐經の假屋に行かんとするを妨げ、以て二子をして其敵祐經を討果さしめたり（百日曾我）

かや　堂島新地藤屋の鵜老なり。雜與平母子が太夫吾妻に附纏ふを見て之を咎む（壽門松）

からいと　唐糸。　淡路七郎俊兼の妻なり。俊兼零落して人買となつて隅田川畔に住し、主君吉田行房の子梅若と知らずして撲殺したるを悔いて自刄するや、唐糸その罪滅しの爲接待の渡船を營みしが、或日梅若の母の班女を乘船せしめて、梅若の最期を語つて墓前に念佛を唱へ、班女と共に京に上り、吉田家を横領せる常陸大掾百連を滅す（雙生隅田川）

からぎぬ　唐衣。　長尾謙虎の重臣直江山城守實綱の妻にして、武田信玄の重臣山本勘介の妹なり。夫の意を受け勘介をして謙虎に仕へしめんとして、勘介の妻阿勝の筆跡を擬し、老母大病の僞書を認めて勘介を呼寄す。

子たり。瀧口武者所を勤め、右馬屬仲成の娘花世を妻とす。仲成反逆に黨するに及んで、之を斷つて妻を離別したり。後、仲成の子の大炊介仲經を我父の仇と思ひて斷入りしが、その然らざるを知るや直に仲經に降服し、相和して弘法大師の調伏法の場に惡逆の大海原王子を捕へて刺殺す（嵯峨天皇甘露雨）。

かつふね 檢非違使勝船。 豐日花人親王の重臣なり。親王が玉世姫の許に行かれたるを尋ね來て、西島太夫と會談せる際伊賀留田のますらの魔法にかかりて西島太夫と喧嘩す。是時山彥王子が玉世姫を捕へ去らんとするを奪還す。後、花人親王の行方を尋ねて豐後國眞野の長者の家に來る。折しも山彥王子の臣伊駒の宿禰が勝船と詐稱して玉世姫を得んとするを見、勝船乃ち鹿島事觸に扮して宿禰を追拂ふ。これより廐戶皇子に屬して山彥王子を丹州に攻めて滅す（用明天皇職人鑑）

かつより 齋藤左衞門尉勝賴。 平重盛の家士にして齋藤瀧口顯方の父なり。佛法に歸依して法名を西讚と稱す。顯方が建禮門院の侍女橫笛と密通したる惡評を聞き、顯方を叱りて出家せしめ、自らは還俗し、顯方に代つて出仕し、越中次郎兵衞盛次と軋み合ひしが、重盛公より義次の首桶を携へて建禮門院の御所に行き橫笛の首を入れて歸るべしとの命を奉じ、建禮門院の御所に至る。然るに建禮門院は加賀郡司師高よりこの事を聞かれて憤怒し給ふや、勝賴乃ち師高の讒より事起れるものと察し、盛次と和して師高の言動に注意す。かくて建禮門院より橫笛の首桶を受取りて、開き見れば笛を折り土を盛りてあり、而して義次の首桶を開けば義次の髻に石を入れてあるにぞ、深く建禮門院と重盛公との御仁心厚きに感泣す。後、重盛公の命により顯方・義次召還の使者となり、志賀辛崎大明神の邊にて顯方等に逢ひ相共に都に上る（娘歌かるた）

かつより 武田四郎勝賴。 武田信玄の子なり。信州諏訪明神に參詣し、長尾輝虎の女衞門姫と會して相思の仲となりしが、村上義清に妨げられて姫と共に出奔放浪したる後、桔梗が原にて山本勘介に出合ひ陰まひ吳るるやう頼む。折しも義清の手勢に攻寄せられ漸く遁るを得たり。後、天目山にて義清妖怪に扮して信玄を狙ひしを、勝賴之と格鬪してその首を刎ぬ。この功により父より不興を許されて館に歸るを得たり（信州川中島合戰）

かつらぎ 葛城。 京都島原の遊女なり。名古屋山三春平に請出されて其妻となる（傾城反魂香）

かづらきのおほぎみ 葛城大君。 齊明天皇第二皇子なり。東宮に立ち給ひ、橘右大臣富房公の娘花照姫を王妃に定めんとし給ひしが、王兄逆目王子一味の惡黨の爲に捕はれの身となられしを金輪五郎今國に助けられ、花照姫と共に春日の里に落ち行き給ひ、采女の家に泊して采女と祝言の盃を交し給ふ。後、住吉明神に詣で給ひて、逆目王子が齊明天皇を遠流し奉れる船を認め深く悲しみ給ふ。是時金岡來つて其船を引戾し、御母子御對面あり。大君はやがて帝位に卽き給ひ天智天皇と申す（天智天皇）

かなめまる 金日丸。 巴丸の兄なり。吳服中將雪枝に仕へ、雪枝の意を含みて雪枝の愛人還潟姫に雪枝自害したりとの僞を傳へしに、還潟これを聞いて死せんとするに困り果て、遂に雪枝の生存せるを打明く。後、還潟が宇治太郎に搦められて害せられんとする場に馳付け、姫を助けて宇治太郎等を追拂ふ。かくて巴丸と共に鬪合の小坊主狐に誘引せられて葦親王の御前に出で、有難き御諚を賜はる（天鼓）

かなをか 「いまくに」を見よ。

かねいへ 東三條兼家。 一條院の勅命によつて源賴光を召し、禁中變化惡馬の出づるを退治すべきを命ず（關八州繫馬）

かねうぢ 小栗判官兼氏。 流人となりて相模にあり。義心を以て後藤左衞門國忠の危急を救ひ、橫山郡司信久の女照手姫と契りて其兄三郎重次と隙を生ずるに至る。國忠は兼氏の恩を感じ、妻を蟲賣に扮せしめ兼氏を手引して照手姫の局に忍ばしむ。信久は兼氏を婿となさんと思ひしかども重次之を妨げ、兼氏を駻馬鬼鹿毛に乘せて殺さんとして能はず。是に於て橫山一家の者和睦の宴を開くと稱して、兼氏及び其家士池の庄司を招いて毒殺す。かくて後兼氏の靈上野が原の墓中より餓鬼となつて現はる。藤澤上人之を連れ歸つて熊野の藥湯に浴せしめ反魂の法を修す。また照手姫が信心の功德によつて、兼氏本復して本領安堵となり、照手姫と連立つて藤澤寺に參詣す。折しも重次來つて兼氏を刺さんとす。兼氏乃ち重次を殺す（當流小栗判官）

かねざね 關白兼實。 勅命を奉じ源賴朝の子萬壽の元服加冠として鎌倉に下向し、式終りて後、當歲丙午生れの兼實の女を萬壽の御臺所に約す（佐佐木先陣）

かねたけ 秦兼竹。 藤原時平の隨身を勤め、舞姫十六夜と通じて子を設けしが、時平を憚りて其子を菅公の花畑に棄て、菅公の御臺所に拾上げられて愛育せらるるを見て深く其恩に感ず。菅公が時平の讒によつて流罪となるや、時平乃ち鷲見景村・秦兼竹の兩人をして菅公を警固せしめ、且途中に失ふべきを命ず。是に於て兼竹心竊に菅公を助けんとす。大物浦にて景村の爲に菅公危急に及ぶや、兼竹まづ菅公の御臺所を隱す間に十六夜が景村に射殺さる。兼竹怒つて景村を殺し、菅公を慕うて筑前に下り、惡漢荒藤太を打懲し、白太夫の娘小梅と祝言の際十六夜の幽靈に逢ひ、其物語によつて其死骸の所在を知り、愁歎に暮れながら死骸を拾うて矢を拔去り安樂寺に葬る。かくて後、白太夫の家に亂入せる荒藤太を殺す（天神記）

かねなり 淡路前司兼成。 淡路七郎俊兼の父にして吉田少將藤原行房の奧家老なり。行房比良嶽の天狗を刺さんとして誤つて己が妻を刺すや、行房の妻の兄の百適大に怒り暴行に及ばんとす。是に於て兼成が行房の過失を一身に引受けて自害す（雙生隅田川）

かねもり 海上太郎兼盛。 足利將軍義輝の忠臣なり。義輝が三好長慶に誘惑されて九條町の傾城大淀の色香に溺れ、遂に之を請出して御所に入れんとするや、兼盛其輿入の途中を要擊し、三好長慶の重臣岩成主税助重正、弓削馬淵團八郎友澄の爲に毆打せられしが、後岩成を打懲し馬淵の首を引拔きたり。長慶遂に反して義輝を弑するや、兼盛乃ち淺川左京大夫藤孝等と謀りて義兵を催し、足利義昭を將として長慶を朝日の岡に攻めて之を滅す（津國女夫池）

片山源太（片岡源五右衞門の替名）。鑓を提げて討入る。
原鄕右衞門（原惣右衞門の替名）。
堀井彌五郎（堀部安兵衞の替名）。
大星力彌（大石主税の替名）。
奥山孫七（奥田孫太夫の替名）。
須田五郎（矢田五郎右衞門の替名）。
勝田（勝田新左衞門）。
早水（早水藤左衞門）。
東の森（富森助右衞門）。
吉田（吉田忠左衞門）。素槍を提げて討入る。
岡島（岡島八十右衞門）。素槍を提げて討入る。
不破（不破數右衞門）。素槍を提げて討入る。
前原（前原伊助）。素槍を提げて討入る。
立川甚平（稲川勘平の替名）。半弓を持つて討入る。
千崎彌五郎（神崎與五郎の替名）。半弓を持ち高塀を越えて乘込む。
川瀨忠太夫（間瀨久太夫の替名）。半弓を持つて討入る。
蘆野（萱野和助）。大太刀を提げて討入る。
菅谷（菅谷半之丞）。大太刀を提げて討入る。
千馬（千馬三郎兵衞）。大太刀を提げて討入る。
村松（村松喜兵衞）。大太刀を提げて討入る。
村橋傳次（倉橋傳助）。大太刀を提げて討入る。
潮田（潮田又之丞）。長刀を提げて討入る。
赤根（赤埴源藏）。長刀を提げて討入る。
磯川十郎（磯貝十郎左衞門）。十文字鑓を提げて討入る。
遠松甚六（近松勘六）。片鎌鑓を提げて討入る。
杉野（杉野十平次）。縹田の脚絆にて討入る。
木村（木村岡右衞門）。縹田の脚絆にて討入る。
三村二郎、三村次郎左衞門）。縹田の脚絆にて討入る。

堀井彌惣（堀部彌兵衞）。
矢間庄司（間喜兵衞）。
矢間重太郎（間十次郎）。高師直（吉良義央）を討留む。
奥山（奥山定右衞門）。
大星瀨平（大石瀨左衞門）。
岡野（岡野金右衞門）。
中村（中村勘介）。
矢嶋右衞門（矢頭右衞門）。
平賀左衞門（貝賀彌左衞門）。
牧野平次。

ぎすけ　里見義助。　新田義貞の弟脇屋義助が北條高時の部將安藤左衞門入道聖秀の家來となつて里見義助と名乘る。聖秀の娘綸合姫に愛せらる。或日犬奉行齋藤文治年行と口論し、犬を斬殺して五大院宗房等に搦められて獄に投ぜらる。綸合姫獄舍に來つて義助に食物を贈る。宗房その食物を地に投げ蹈付けたるを食はしむ。また義助を大倉が谷に引出し猛犬をして咬殺さしめんとす。義助乃ち猛犬を殺し相模入道を痛罵す。高時大に怒り猛犬白石を差向く。然るに白石は義助を庇護せしかば、義助これに力を得て宗房を殺し、綸合姫を背負うて去る。かくて義助綸合姫と共に聖秀を訪ふ。聖秀・綸合姫の言を聽いて義の爲に自刄するや、義助愁歎に暮る。これより義貞の義軍に屬し、入間川の渡にて成良親王を敵より奪ひ返し、元弘三年五月二十二日義貞と共に鎌倉を攻めて北條氏を滅す（相模入道千疋犬）

（蓋し五大院宗房を護持院隆光に當て、猛犬白石を新井白石に當てて、犬を好みし綱吉將軍の施政を暗に誘れるなり）。

きだいふ　紀太夫。　八幡の神主なり。早飛脚を以て江戸屋勝二郎追放の罪を赦されたるを本人に通知す（淀鯉出世瀧德）

きち　阿吉。　大阪本天滿町油商豐島屋七左衞門の妻、氣立世辭共に好き美女なり。小供を連れて野崎觀音詣の途中、筋向ひの河内屋與兵衞が會津者の郎九と喧嘩して泥土にまみれたるを濯うてやる。享保六年五月節句の前夜夫の不在中與兵衞に銀の借用を迫られ、之を峻拒して殺さる。行年二十七（女殺油地獄）序に云、この阿吉殺しが大阪道頓堀・中座に上演されたのは享保六年六月七日（阿吉三七日逮夜の日）であつて、女殺油地獄下之卷に「油屋の女房殺し、酒屋に仕替へて幸左衞門がするげな、殺し手は文藏憎いげな」とある。

きちじ　「のぶたか」を見よ。

きちしちごらう　吉七五郎。　長田庄司忠宗の下人なり。主命により鎌田兵衞正淸を酒宴の席にて刺さんとし、却つて正淸に組伏せられて殺さる（鎌田兵衞名所盃）

きちじやうによ　吉祥女。　烏陀夷の妻なり。婆將軍が提婆達多を淨飯王の養子に勸むるを難じて提婆達多に虐げらる。釋尊降誕の際憍曇彌・婆將軍亂入す。吉祥女防戰して功あり。釋尊出家の夜耶輸多羅女の供して門前に出で、伯了頓の軍に逢うて力戰し、耶輸多羅女を遁れしめ、伯了頓を斬つてその由を夫に報じ痛手に堪へずして死す（釋迦如來誕生會）

きつしやみ　吉沙彌。　和州橘寺の僧なり。聖德太子の軍に屬し、物部守屋の軍と戰ひ、河内國符都大明神の神主大造を殺す（聖德太子繪傳記）

きとうだ　喜藤太。　博雅三位の僕なり。逢坂山にて蟬丸の敵右大辨早廣の軍と戰つて之を破る（蟬丸）

きのすけ　喜之介。　佐夜の中山の旅人宿菱屋の下男を勤め下女小糸と情交密なり。或夜小糸の亡父の仇物部平太來つて泊す。是に於て小糸と心を合せ平太の首を刎ね、小糸と共に遁れて源賴光に賴り碓井貞光と改名す。淸原高藤・平政盛の追手と戰つて之を破り、山姥の導によつて信州上路の山に分入り、ここに賴光と會し江州高懸山の惡鬼退治に從ひて武功を立つ（嫗山姥）

きは　「かへいじ」の條を見よ。

きやうのみや　卿宮。　後宇多院第八の皇女なり。車に召されて吉田兼好より洛外の風景の說明を聽かる。この時宮は高武藏守師直に懸想されて深く厭ひ給ふ心中を打明け、後また兼好が法師となりて徒然草を書ける庵を訪ひ給ふ（兼好法師物見車）

きよ　淸。　大阪新町遊廓佐渡屋町越後屋の女主人なり（冥途の飛脚）

きよしげ　葛西郡司淸重。　奥州征伐軍の部將となり、四郎高衡を射て負傷せしめたれど遂に之を逸したり。梶原景時が源賴朝の代官となり奥州征伐將士の武功を吟味せし時、淸重功なきを恥ぢ娘琵琶姫をして其由を語らしめしが、景時・琵琶姫を富樫左衞門宗重に嫁せしめよと言ふに至つて、淸重大に怒り景時を罵つて自刄す（傾城島原蛙合戰）

きよたき　淸瀧。　藤壺女御の乳母治部卿の女なり。賀茂河原にて安倍晴明と蘆屋道滿と互に祈禱の論爭よりして、淸瀧は弘徽殿女御の侍女因幡と喧嘩し、按察左大將早岑に陷

勘介來つて其情を察しお勝を責む。お勝乃ち唐衣を恨んで之と決鬪に及びしが、老母即ち兩女の間に飛入り義理を立てて死す（信州川中島合戰）

からこと　唐琴。　新田義貞の部將瓜生判官保の妻なり。元弘三年卯月下旬義貞鎌倉攻の軍評定を開くや、唐琴その席にありて、義貞の弟脇屋次郎義助と和睦すべきを述べて義貞を諫む（相模入道千疋犬）

かる　阿輕。　山城國上田村の農島田平右衛門の女にしてお千代の姉なり。お千代新靫油掛町八百屋半兵衛に嫁せしが、離緣されて歸るや、お千代に意見し且お千代の離緣家の處置について難ず（心中宵庚申）

かるも　刈藻。　建禮門院の侍女なり。平重盛の家士左京之進義次と契り、加賀郡司師高に横戀慕せらる。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、義次と密會せるを師高に知られて逃れしが、物狂となつて浮名立ちし爲宮仕のお暇を願へど、師高に妨げられ舟岡山にて殺されんとせしを、齋藤瀧口頼方に助けられて志賀の里に匿はる。或時夜義次・横笛を伴ひ來つて宿を請ふ。是に於て夫妻相逢ふを喜べる際、横笛寒氣に堪へずして絶息す。刈藻乃ち曾て建禮門院より賜はりたる蘭王香を焚いて横笛を蘇生せしむ。義次と共に辛崎大明神に參詣し、建禮門院より召還の使者戸無瀨の局に邂逅し倶に都に上る（娥歌かるた）

かんき　甘輝。　明の五常軍散騎將軍にして獅子城主なり。妻の錦祥女が義を重んじて自殺するに及んで即ち大義に歸し、國性爺等と共に逆臣李蹈天及び韃靼の兵と戰ひ、李蹈天を殺し韃靼兵を驅逐す（國性爺合戰）
五府將軍石門龍が永曆皇帝に謁して國性爺の逆心あるを奏す。甘輝之を論駁せしも、栴檀皇女と祝宴の席にて國性爺の日本風を好むを意見して絶交するに至る。この夜石門龍反して攻寄す。甘輝乃ち永曆帝を護り血路を開いて遁れ、雲南道硯石山の麓なる叔父陳芝豹に身を寄せしが、陳芝豹の嫁南玉等の心を邪推し之を斬つて逃ぐる（この所は演義三國志、曹操が呂伯奢の家に宿したる條の翻案）途に、幽水堤にて陳芝豹に出合うて之を斬付け、阿克將を殺し廣東の津に落延び、此處より乘船して國性爺の據れる東寧島に航し、城門に至つて國性爺の一子錦舍に逢ひ、陳芝豹の子の萬禮に冠を打落され、國性爺と和睦す。かくて後韃靼兵攻寄せたる際、國性爺と協力して之を滅す（國性爺後日合戰）「獅子が城」（六〇五頁）をも見よ。

かんじふらう　勘十郎。　播州姫路本町米商但馬屋の手代にして惡漢なり。相手代清十郎の父佐治右衛門を騙して主人の娘お夏の嫁入道具の發送を差止めしめて、主人より預れる嫁入道具の支拂金を着服し、主人に讒訴して罪を清十郎に負はしむ。清十郎處刑の場に勘十郎の罪狀暴露して刑に處せらる（五十年忌歌念佛）

きうさく　久作。　鷹巣帶刀太郎廣房の邸に奉公し下婢澤と密通して缺落し、江洲伊吹山の麓に艾商を營む。嘗て廣房より平國の寶劔を預りしが、廣房の妻子寶劔を得んとして尋ね來るや、久作惡心を起し寶劔を惡漢の橋詰任に與へて恩賞に預らんとして澤に諫められ、夜陰に乘じ廣房の妻子を刺さんとし、誤つて我子の萬虎を刺し妻澤を殺し、なほ廣房の妻子を殺さんとして廣房の子の房若に斬殺さる（栬狩劔本地）

きく　山崎與次兵衛の妻なり。山崎淨閑と梶田治部右衛門と將棊をなせる際、その側にありて謝罪金を出して夫の難儀を救ふべきを諷す。後に淨閑の言に從ひ夫を遊女吾妻と共に出奔せしむ（壽門松）

きくひめ　菊姫。　花園大臣の息女なり。八瀨の里に住し豫て日野中納言資朝に思を寄す。或日柴賣となつて出で、資朝に邂逅して我家に連れ歸る。この夜敵攻寄せて資朝を搦め去り佐渡に流す。菊姫乃ち資朝を慕うて佐渡に下り、郡司山城入道三郎に懸想されて言寄られたるを峻拒して縛せられしも、漸く遁れ那智の妙法坊に救はれて京に上る（用文章）

きさ　大阪本町新物店菱屋のお針女なり。同家の手代二郎兵衛と相思の仲となる。菱屋の別家の由兵衛もきさに懸想す。きさ・二郎兵衛が主人に灸する間に主人の鑰を盜み、きさの父がきさを由兵衛に與へんとの證文を引裂かんとして戸棚を明けたるを由兵衛に見られて悶着を起し、きさ惡名を負ひ主家を出されて姉の所に預けらる。是に於てきさ竊に姉の家を脱出て二郎兵衛と會し、相共に今宮惠比須森に走つて情死す。年二十七（今宮心中）

きさらぎ　更衣姫。　横山郡司信久の娘なり。姉照手姫の山雀を取逃したる爲、其機嫌直しに小栗判官兼氏を姉に媒介す。後に兄の三郎重次が姉を入水せしめたりと信じて悲しみ、遂に海に投じて死す（當流小栗判官）

きざゑもん　吉田屋喜左衛門。　新町九軒町吉田屋の主人なり。藤屋伊左衛門落魄して來りしを優遇す。扇屋の名妓夕霧が平岡左近に請出さるる約成るや、夕霧を連れて左近の宅に屆けしも約破れ、夕霧を連れて扇屋に歸る（夕霧阿波鳴渡）

きさんだ　喜三太。　常盤御前の輿に從うて行き、五條の橋上にて牛若に遇うて主從となり、平家の家士經時を殺す。後、源氏の家士龜井六郎重清より常盤の形見品を得て牛若に傳ふ（孕常盤）
土佐坊昌俊が義經を討たんとして堀河の邸を襲ひし時、喜三太防戰して功あり。後、嵯峨の奥なる祇王祇女の庵室に靜御前を尋ねて之と逢へる際、梶原景季に攻寄せらる。乃ち奮戰して之を破り、犬間源藏を捕へ其骨を折つて放つ間に、靜御前が敵に奪去られしかば、之を取戻さんとして其行方を尋ね、美濃國青野が原にて景季と出合ひ、その携へたる義經追討の院宣を奪ひ、景季を搦めて奧州に下り義經に謁す（孃靜胎内捃）

ぎしのめんめん　義士面面。　文和三年冬の半高武藏守師直の鎌倉飯島の屋敷を襲ひて主君鹽谷判官高貞の讐を報じ、主君の菩提所光明寺に引上げて從容刑に就く（碁盤太平記）蓋し赤穗四十七士の作替にして義士戲曲の最初のものなり。
大星由良之介（大石内藏之介良雄の替名）。「ゆらのすけ」を見よ。
岡平（寺坂吉右衛門の替名）。義士討入前に死す。「をかへい」を見よ。
大鷲文吾（大高源五の替名）。掛矢を提げて討入る。
小寺惣内（小野寺十内の替名）。半弓を持つて討入る。
竹森喜多八（竹林唯七の替名）。大長刀を提げて討入る。

きんとき　坂田金時。　源頼光の四天王の一人にして膂力倫に超ゆ。藤壺女御の檢屍に壬生の里に行き、番人小餘綾新左衛門尉景春を詰責し、滿瀧の縛を解き、女御殺害者として景春を縛し連れ歸る。かくて後渡邊綱等と共に按察左大將早岑の城を攻破り、早岑を捕へて首を拔く（弘徽殿鵜羽産家）

坂田藏人時行の魂魄荻野八重桐の胎内に入るや、八重桐忽ち山姥と變じ、信州上路の山中にて金時を生む。幼名を快童丸と云ふ。顏面朱の如く獸類を裂いて食となす。或日源頼光に逢ひ、母の命により荒熊と格鬪して非凡の力量を發揮し、頼光の臣となつて金時と名乘り四天王の一人となる。江州高懸山の惡鬼退治の先導をなし、惡鬼と奮鬪して武功を立つ（嫗山姥）

公時顏面朱の如く膂力絕倫にして氣質荒し。洛中の夜廻りをなして、兇漢齋明の首を引拔き保輔を殺す。また頼光の命によつて頼平の討手に向ひ、箕田二郎猛の頼平を諫めて切腹せし血刀と、懸緒なしの烏帽子とを持歸つて頼光に差出す。かくて後葛城山の土蜘蛛退治に從つて武功を立つ（關八州繫馬）

きんよし　藥師寺次郎左衛門公義。　高武藏守師直の家士なり。師直に陪從して清水寺に参詣し、鹽谷判官高貞の奥方を捕へて師直の意に從はしめんとす。奥方これを峻拒して爲に大事に至らんとす。是に於て公義古淨瑠璃和田義盛酒宴の段を演じて其席を紛らす（兼好法師物見車）

高武藏守師直の茶會に招かれ、遲れ來つて滯在す。この夜鹽谷判官高貞の遺臣大星由良之介等四十七士に襲撃せられて、水門の箱樋の中に潜匿せしを探出されて斬らる（碁盤太平記）

くうかい　空海。　父は佐伯氏、讃州多度の人なり。遣唐使左中將藤原光範と共に渡唐して長安に至り、淸涼山に入つて文珠師利菩薩に遇うて金胎兩部の祕法を授かり、また般若三藏に遇うて黃卷朱軸の經典を授かり、獅子に乘つて朝鮮・琉球を過ぎ日本國中を翔廻る。或日西寺の前を歩行せる時。光範が西寺の僧等の爲に難に遭へるを見て之を助け、己が弟子となして高野山に連れ歸る。光範の妻以呂波の前・夫を尋ねて神谷宿に來り、谷に投身せるを見て空海之を救ひ、以呂波の前と共に蓮葉に乘り雲霧を分けて京に上る。後に朝廷より雨乞の祈禱に召され、西寺の惡僧守敏等と法力を較して之に勝ち、守敏をして悶死せしめて大雨を降らす（以呂波物語）

弘法大師と云ふ。嵯峨天皇の御代逆臣あるを豫想し、闕下に奏して大海原王子の逆心を觀破す。また車大路の藪蔭にて猪甘の連の幽靈に遇ひて說法す。これより玉體安全の祈禱に餘念なかりき。弘仁八年天下大いに旱す。空海これを守敏僧都の法力によるものと知り、爲に雩の法を修し、眞言の法力を以て甘露の大雨を降らす（嵯峨天皇甘露雨）

くざゑもん　但馬屋九左衛門。　播州姫路本町米問屋の主人にしてお夏の父なり。手代淸十郎がお夏と情交を結べるを怒り、また惡手代勘十郎の言を信じ、遂に淸十郎を放逐す（五十年忌歌念佛）

くだらだいなごん　百濟大納言。　大海原王子の逆心に一味し、嵯峨天皇を流し奉らんとして牢輿を押立てて行く途中、空海に遇ひ、其法力によつて苦しめらる（嵯峨天皇甘露雨）

くにただ　後藤左衛門國忠。　親の敵山形兵衛を討たんとして反討ちに遭うて危き場を小栗判官兼氏に救はる。國忠爲に其恩を報ぜんとして、我妻を羞賣となし、兼氏を手引せしめて照手姫の局に忍ばしむ。後に横山三郎重次が兼氏を藤澤寺に襲撃せし時、國忠駈付けて兼氏の爲に戰ふ（當流小栗判官）

くにとき　三保谷四郎國時。　源頼朝の命を奉じ、京都堀川なる源九郎義經の討手に上り、九條北町柏屋に登樓して義經に邂逅し、戀に事寄せて義經に言掛り、義經の家士片岡八郎と首引の爭に負け、頭を柱に打付けて負傷し、義經の歸途を要擊して片岡八郎・武藏坊辨慶の爲に斬殺さる（吉野忠信）

くになが　長谷部國長。　浦島の系圖を盜みて浦島太郎久壽の末孫久富と詐稱し、嚴島大明神の神主となりしが、久壽の玉手箱より紫雲棚引くや、忽ち罪を懺悔し血を吐いて死す（浦島年代記）

くになが　三好淡路守國長。　三好修理入道長慶の子なり。足利義昭が其兄義輝將軍に代りて勅使に謁見したるを咎めて、謀反の志あるものと罵りしが、父長慶に拔討にせられて死す（津國女夫池）

くにひこ　吉備國彥。　吉備武彥の弟なり。神賢姫に從ひて筑紫に下る途中、三草河原にて筑波長脚の兵に要擊せられ、奮戰して之を退く。筑紫三垣の里にて八十梟帥の書狀を携へて大碓王子の所に行く者に遇ひ、之を斬つて其書狀を奪ひ、梟帥の重臣蹤遠を叩殺して武功を立つ。後また日本武尊の東夷外濱忍熊征討の軍に從ひて功あり（日本武尊吾妻鑑）

くにひさ　番場忠太國久。　梶原景季の家士なり。靜御前を捕へ獄に投ぜんとして本田次郎近經に投倒さる。後に三島の宿にて夕立に遇ひ、小柴郡司の家に宿を借らんとし、拒絕せられて怒り郡司を殺害す。また相模川の邊にて近經と口論せしが、頼朝の御狩馬揃の時曾我二子及び小柴掃部勝重に殺さる（大磯虎稚物語）

くにひで　淺野四郎國秀。　伊藤祐近の臣なり。主命により頼朝の子千鶴丸を竹の簀卷にして松川の奥どきの淵に沈む（頼朝伊豆日記）

くにひら　錦戸太郎國衡。　藤原秀衡の長男なり。父の死後鎌倉の命を奉じ、義經主從の首を討取つて送らんとし、內應の手紙を魚腹に入れて鎌倉の飛脚に託せしが、弟忠衡に發見されて兄弟不和となる。國衡常に義經を狙ひしが、母より其不心得を戒められて亡父の遺言を聽かされ、僞つて母の仰に從ふを誓ひ、なほも竊に義經を狙ひ、遂に義經を高館に攻めて之を逸す。後、義經を蝦夷に追擊し戰敗れて死す（源義經將棊經）

くへいじ　油屋九平次。　平野屋德兵衛を欺きて銀二貫目を奪ふ。生玉社の出茶屋にて德兵衛に逢うて其返濟を督促せらる。九平次乃ち我は汝より銀を借りたる覺なしとて德兵衛を罵詈毆打して逃ぐ。後、天滿屋より歸る途にて、德兵衛の叔父久右衛門の爲に毆打され且代官所に訴へらる（曾根崎心中）

くへゑ　岸和田の九兵衛。　猿簸昇な

れられて藤壺女御と共に壬生の里に籠居す。或日高聲に話せるを番人盛重に聞咎められて樹に吊上げらる。此夜藤壺女御及び治部卿殺害せらる。これより清瀧は弘徽殿女御を恨み、白川の館に闖入して弘徽殿女御の首を刎ねんとして、計らずも情人義長と邂逅し、互に心中を語り合うて弘徽殿女御を恨むの非なるを悟る。是時早岑の兵花山天皇を弑し奉らんとして押寄す。清瀧乃ち花山天皇の危急を救うて落し參らせ、奮戰して逆賊を退く。後、弘徽殿女御が桂川に投身せられんとせるを救うて男山八幡宮に隱し置きしを、蘆屋道滿等に攻寄せられ、清瀧夫妻力戰して之を破り、弘徽殿女御を都に移し參らせ、夫と共に早岑の據城を攻む（弘徽殿鵜羽産家）

きよたき 清瀧。 平將門の侍大將村岡六郎公連の妻なり。公連が將門より妻の清瀧を妾に差出せよとの命を拒んで生死不明となる。清瀧これより深く將門を恨んで殺意を生じ、容を繕ひ鐵鋼丸を侍女に仕立てて將門の邸に入り、計らずも獄に繋がれたる夫と逢ふ。夫自刄の後鐵鋼丸と共に將門の部將御廚三郎・大葦原四郎を殺して武功を立つ（傾城懸物揃）

きよたき 清瀧。 冷泉文次兵衛長房の女なり。幼時東寺の四塚の傍に棄てられしを、岩成主税助重正に拾ひ取られ養育されて足利義輝の御臺所の侍女となり、冷泉造酒之進房平の妻となる（津國女夫池）

きよただ 坊門宰相清忠。 後醍醐天皇に仕へ、楠正成が奏上したる謀を難じ、足利尊氏に内應して天皇を幽閉し奉り、後また勾當内侍等が三種神器を捧持して吉野に至る途中を要して、神器を奪ひ内侍を生擒らんとして和田源秀に殺さる（吉野都女楠）

きよつら 左衞門督三善清貫。 蟬丸の愛姫直姫の行方を尋ねて宇治橋姫社の森に至る。折しも蟬丸の北の方及び侍女芭蕉の前が直姫を妬みて、丑の時詣して悋氣講をなせるに逢ふ。北の方は折角の祈願を人に見られて成就せざるを悲しみ、宇治川に投身して其怨靈蛇身となる。清貫は直姫を尋ね、千手入道を訪うて芭蕉の前を殺し、蟬丸・直姫に出合うたるを喜べる際、右大辨早廣の兵に襲はれ、千手入道父子と協力して敵を破る。蟬丸盲目となるや、清貫宣旨を奉じて之を逢坂山に棄て、墨染の衣を着て念佛修行者となり、博雅三位の宅を訪うて直姫に逢ふ（蟬丸）

きよはる 源六郎清治。 葛西郡司清重の嫡子にして琵琶姫の兄なり。京都大番に上り島原の傾城更科に馴染みて零落し、鶴岡に來つて富樫宗重に追跡され足立景久に救はる。是時父の清重が梶原景時を罵つて自刄するや、清治乃ち景時の郎等大河七郎兼任及び其弟大河九郎を殺す。かくて更科の父手塚幡樂の家を訪ひ、亡父の仇四郎高衡と邂逅し、之を討たんとして四郎の姿忽ち消ゆ。後、肥前國七草城を攻めて四郎の首を刎ね、葛西の家を興し、畠山重忠の媒酌によつて更科と婚す（傾城島原蛙合戰）

きよひめ 清姫。 熊谷次郎直實の女なり。弟小太郎植直と共に父の行方を尋ねて迷ひ出で、途中人買の手に捕はれ、赤坂宿にて平山季重に救はる。かくて新黒谷に父を尋ねて不在なりしかば、信濃路に赴き江州粟津の松原にて弟の病篤くなりければ、路傍の庵室に一夜の宿を請うて拒絕せられ、尋で弟絕命す。是に於て庵主（父の直實）の回向を受けて葬送する際季重の通りかかるに逢ひ、貰はれて季重の一子の妻となる（大原問答青葉笛）

きよもり 太政入道平清盛。 後白河法皇を幽閉し奉つて專橫を極め、唐土の醫書鵲天の藥を信じて之を服し、重盛にも與へて服せしめんとす。重盛その藥を鞍馬天狗の所爲なりとして之を斥く。清盛その藥の爲に火の病に罹る。清盛嘗て義朝の寡婦常盤の容色を愛して妾となす。常盤・清盛の胤を孕みたるを歎きて自害せんとするや、清盛大に怒つて常盤を酷刑に處せんとしたり（孕常盤）

平重衡南都の僧兵を攻めて伽藍を燒き僧兵を鏖殺し、俊寛の室吾妻屋を生擒つて清盛の前に連れ來る。清盛・吾妻屋の色香に心奪はれ己が意に從はしめんとす。吾妻屋聽かずして自刄す。清盛暴惡日に長じ、鳥羽法皇に陪從して海路嚴島に參詣する途中、敷名浦にて法皇を海に投じ奉る。蜑千鳥海岸に立つて之を見、直に海に飛入つて法皇を救ひ奉る。清盛怒つて千鳥を殺す。是より清盛火の病に罹り、吾妻屋・千鳥の怨靈に苦しめられ、治承五年閏二月四日悶死す。行年六十四（平家女護島）

きんかいだう 金海道。 福建の國守六安王の侍臣なり。王と心を合せ暴行多かりしが、遂に歐陽哲の爲に沸返る釜中に投ぜられて殺さる（唐船噺今國性爺）

きんざう 金藏。 山城國上田村の百姓なり。同村島田平右衞門の女お千代を慕ひ結婚を申入れしが、お千代これを嫌つて大阪新靭油掛町八百屋半兵衞に嫁し、惡姑に離緣されて實家に歸るや、金藏これを聞き來つて高聲にお千代を冷笑す（心中宵庚申）

きんしや 經錦舍。 國性爺の子なり。父母と共に東寧島に去る途中、勾容縣にて賊將鐵故山・石選窟に追撃せらる。乃ち奮戰して之を殺して東寧島に渡り、萬禮より太平記などの書を學んで日本を慕ひ、竊に城門を越えて日本に渡らんとせるを甘輝に見付けられ、父母より深く戒めらる。一日軍書に疲れて眠る。夢に日本に渡り金剛山に登り諸社を巡り、金銀二つの壺及び素盞嗚尊の冠を授りたるを夢む。目覺むれば己が坐せる工風の間に賊將石門龍・伯達多忍入る。乃ち鉾を摑んで動かせず。後、韃靼主順治大王に使して降を勸め敵中を悠然として去る（國性爺後日合戰）

きんしやうぢよ 錦祥女。 和藤内の異母姉にして獅子城主甘輝の妻なり。鄭芝龍夫妻及び其子和藤内の三人來つて面會を求む。折しも甘輝不在なりしかば、錦祥女樓門に出でて對面す。鄭芝龍告ぐるに明の恢復を以てし、母を質として甘輝の加勢を賴む。錦祥女乃ち約して曰く、事成らば城外の壕中に白粉を流さん。若し成らずんば紅を流さんと。甘輝歸つて鄭芝龍の請を斥く。錦祥女意を決し七首を以て我胸を刺し、義によつて甘輝を說く。甘輝遂に鄭芝龍に從ふ（國性爺合戰）

きんつら 村岡六郎公連。 平將門譜代相傳の侍大將なり。將門より妻の清瀧を妾に差出せとの命を拒みし爲土牢に投ぜらるること半歲に及ぶ。偶清瀧が將門の城内に來れるを見て、既に將門に靡けるものと信じて憤怨せしが、實は將門を殺しに來れる由を聞き、將門の非道を深く悲しみ秀鄉の恩義に感じ、我生くべきにあらずとて自刄す（傾城懸物揃）

んとするを推知し、莞爾として母に對面し、母の命に從ひて髮を梳る間に竊に一通の文を認めて髻の中に結込む。その文に、世の無常をいひ父母の恩を謝し、母御歎きに沈ませられて手を下し給はでは本意ならず。されば態と卑怯の擧動を見せまゐらせ、憎しみを受けて殺され奉る。返す返すも御名殘惜しとの由を記し、白帷子を着て持佛堂の前に坐し、從容として經を念誦す。母歎いて斬ること能はず。是に於て態と臆病の擧動をなして母に斬らる（嫗山姥）

くゑはや　阿蘇蹶速。　筑紫の巨賊八十梟帥の重臣なり。梟師の命によつて貢物を朝廷に奉り、景行天皇第二の姫宮神醫姫の御降嫁を奏請する使者となりて行き、筑波長脚との競馬に勝ち、神醫姫の御降嫁を約して歸り、後に吉備國彦に叩殺さる（日本武尊吾妻鑑）

くゑもん　毛剃九右衞門。　長崎生れの海賊なり。或夜門司か關に泊し、京商人小町屋惣七を我船に乘せしが、己が密輸入を目撃したるの故を以て之を海に投込み、博多に航して柳町遊廓奥田屋に登樓し、偶然再び惣七と相會し、脅迫して仲間に入れ、惣七の馴染遊女小女郎を身請けして惣七に與ふ。後に九右衞門等の惡事露顯して逮捕せられ、死罪一等を減じて追拂はる（博多小女郎波枕）
（序云、この作は長崎奉行所の拔荷御觸書御仕置書に見ゆる享保三年秋海外密輸入長崎者けづり八右衞門を脚色したるものにして、實說は月堂見聞集卷十に見ゆ）。

くゑもん　平野屋久右衞門。　德兵衞の叔父なり。德兵衞を尋ねて天滿屋に來り、遊女お初に淫うて德兵衞がその惡友九平次の爲に銀二貫目を詐取せられ、且罵詈毆打されたるを聞き、直に九平次の邸宅に向はんとせしが、お初に宥められて奥に入る。後、九平次天滿屋に來つて德兵衞を罵詈し、歸途印判のことより德兵衞より銀二貫目を詐取したることの露見せんことを歎きしを、久右衞門竊に其背後にありて聞き、直に聲を掛け匕首を突付けて其言を確め、毆打して代官所に渡す（曾根崎心中）

ぐんし　小柴郡司。　浪人して三島宿の農夫となりしが、紊亂に罹りて將に死せんとせしを、靜御前より靈藥を惠まれ之を服して蘇生す。是に於て其恩を報ぜんとし、靜御前の敵番場の忠太國久と戰うて死す。行年六十八（大磯虎稚物語）

ぐんすけ　軍助。　吉田少將藤原朝臣行房の奴なり。惡漢常陸大掾百連と戰うて其臣猪熊八郎を殺し、百連を追拂ひ、行房の子梅若君を負ひて北白川に遁る。梅若が逆臣勘解由兵衞景逸に唆かされて漢文帝の畫ける鯉に點睛するや、鯉生動して池に入る。軍助即ち水を潜つて鯉を摑み其睛を刺す。是時景逸・行房を弑す。軍助・景逸を池に投じて殺し、梅若君の行方を尋ねて讃州多度浦に下り、天狗に出會ひて斬付けしが、天狗風に捲上げられて吹飛ばさる。後に百連を蹴殺して百連の家來を鏖殺す（雙生隅田川）

ぐんばら　倶牟婆羅。　提婆達多の臣なり。槃特が鳩を殺したるを責め、鳩の重量に等しき槃特の肉を强求す。槃特乃ち我肉を裂きて之を與ふ。倶牟婆羅なほ肉足らずとて許さず。槃特大に怒つて秤を折り倶牟婆羅を追拂ふ（釋迦如來誕生會）

ぐんゑもん　軍右衞門。　遠州濱松の奴なり。濱松の士坂部郷左衞門の小姓山脇小七郎の美貌を慕うて之を挑み、遂に小七郎の兄半兵衞の仲介によつて小七郎の念者となる（心中宵庚申）

けうどんみ　憍曇彌。　摩耶夫人の姉なり。釋尊降誕の場に亂入して吉祥女に追拂はる。後に耶輸多羅が一子羅睺羅を伴ひて釋尊涅槃の場に赴く途中、其袖を捉へて作りし罪を懺悔し、摩訶迦葉に逢うて授戒を受け、比丘尼となりて釋尊涅槃の場に赴く（釋迦如來誕生會）

けんかう　吉田兼好。　卜部兼顯の三男なり。姫君卿の宮に洛外の風景を說明し、宮より高武藏守師直に懸想せられて厭はるる由を聞き、待從といふ女房をして師直に鹽谷高貞の室の美人なるを語らしめて思を轉ぜしめ、且つ自ら師直の艶書を代筆して高貞の室に送る。後に法師となりて徒然草を書ける際卿の宮尋ね來られ、侍從の父太秦又五郎も狂亂して來り、鹽谷高貞の室も師直に追はれて逃げ來る。是時師直の家士小林民部百騎を率ゐて高貞の室を捕へんとして攻寄す。兼好等奮戰して之を破る（兼好法師物見車）

げんくう　源空。　淨土宗の開祖法然上人なり。口唱念佛を稱導し、建久元年三月中旬黒谷のりうぜん寺にて諸僧と宗乘の問答をなし、正法の不思議を見せらる（大原問答）

げんくらう　岩村源九郎。　岩村源五の一族なり、惡漢師高に屬して强盜となり、志賀辛崎大明神にて戸無瀨局を刺さんとして過つて師高を刺し。左京之進義次等に殺さる（娥歌かるた）

げんご　岩村源五。　加賀郡司師高の部下なり。師高の命を奉じて刈藻を舟岡山に連れ行き、之を斬殺さんとして齋藤瀧口額方の爲に追拂はれ、卵塔の蔭に隱れしを、源五の部下ども逃げんとして卵塔に押寄せし爲、卵塔崩れて壓死を遂ぐ（娥歌かるた）

げんご　鳴瀧源五。　荒金刑部山國の家士なり。山國反して主家を橫領し榮花を極むるや、源五乃ち山國に勸めて坂上田村麿を討取らんとし、山國と共に變裝して土山に下り、田村麿の北の方の一行を要擊せしが、遂に馬方六藏に殺さる（田村將軍初觀音）

げんごべゑ　菱川源五兵衞。　薩摩者なり。同所來迎院の小僧となり、濱の町芭蕉布屋の娘おまんと通じ、罪を得て京に上り、但馬城主の京都の邸に奉公し、勸仕女の小萬に挑まれたるより事起り、笹野三五兵衞にその父の仇の居所を敎へ、身は女中部屋に入りたる罪によつて家老礒部與茂太夫に放逐され、薩摩に歸りて事介と替名し、芭蕉布屋の丁稚となりておまんと關係を續けしが、おまんの繼母に追出されて我家に歸る。然るにおまんは源五兵衞を慕ひて尋ね來り、おまんの繼母も其後を追ひ來つておまんを連れ歸らんとす。源五兵衞はおまんを渡すを拒んでおまんの繼母に斬付け、また誤つておまんを斬り、自らも死せんとして割腹せしが笹野三五兵衞に救はる（薩摩歌）

げんざう　大間源藏。　梶原源太景季の郎等なり。景季に從ひて靜御前を詮索し、北嵯峨なる祇王祇女の庵室に攻寄せしが、喜三太と戰うて敗れ、佛壇の中に逃入りしを捕へられ、骨を折られて放たる（靡靜胎內捃）

り。雜賀屋お梅の書状の使せしが、其書状の手違ひよりしてお梅と久米之介の密通暴露し、爲に久米之介吉祥院を放逐せらる。是に於て久米之介・九兵衛の兩人雜賀屋に來り、九兵衛若者を率へつゝ久米之介・お梅を夫婦たらしむべきをいふ（心中萬年草）

くへゑ　西陣の九兵衛。　京都四條石垣町井筒屋の抱妓お花の養父なり。お花を年切增しして二十兩を得んとす。お花養父を恨んで其意に從はず。是時お花の愛人刀屋の手代半七現はれて九兵衛を突除く。九兵衛怒つて半七と格闘し、半七が髻を掴んで引立つ（長町女腹切）

くまげんだ　熊源太。　藤原教孝後妻の弟にして惡漢なり。教孝の嫡子民部丞孝房の僕須磨藏を殺し、孝房の室及び中務秀光等の淡路をさして落ち行くを追擊して孝房の室を害せしが、後遂に印南の彌七郎に捕めらる（賀古教信七墓廻）

くまへい　桶職久馬平。　山彦王子が玉世姫の邸を襲擊したる時、久馬平進出でて花人親王・玉世姫の危急を救ひ、王子の部下の小野土丸を組伏せて之を殺す。後に厩戶皇子の軍に從ひて山彦王子を丹州に攻めて滅す（用明天皇職人鑑）

くままろ　藤原熊麿。　左中將藤原光輝の兄なり。光輝の渡唐中光輝の愛人以呂波の前を口說きて己が意に從はしめんとして能はず。或日以呂波の前の邸内に忍入り、光輝・以呂波の前密會せるを見て痛罵し捨詞を殘して去り、其母に讒ひて光輝を讒せしが、母信ぜずして光輝を庇ひしかば怒つて母を弑し、光輝に斬付けて逃走し西寺の守敏に身を寄せしが、罪惡發覺して畜生門の刑に處せらる（以呂波物語）

くめのすけ　成田久米之介。　成田武右衛門の子なり。十二歲の時鷄合の喧嘩より其友伊吹卯之助を殺し、高野山に登りて南谷吉祥院の寺小姓となり、神谷の宿雜賀屋のお梅と情を通ず。お梅が吉祥院の法印と久米之介とに渡すべき二通の書面を岸和田の九兵衛に託せしが、その書面の破綻よりして久米之介・お梅の密通暴露し、爲に祐辨律師及び伊吹千右衛門等に毆打されて吉祥院を放逐せられ雜賀屋に來る。是時お梅の親、お梅を美濃屋作右衛門に嫁せしめんとして其宴を張る。然るにお梅は其結婚を嫌ひて久米之助を愛し、（着想の妙はこのあたりにあり）この夜兩人相共に遁れ、二月七日の夜高野山女人堂の傍に情死す。行年十九（心中萬年草）

くもずみ　別府鄉武者雲澄。　百合若大臣の郎黨にして別府雲足の弟なり。かねて逆臣を抱く。百合若が蒙古を征服して玄界島に凱旋するや、其熟睡せる間に兄弟相謀りて遺島に流し其跡を橫領す。後、有馬の湯に入浴中府內大夫秀主父子に誅戮せられ身を以て免る。これより蒙古の寇に姿を變へ、百合若を遺島に攻寄せしが敗れて死す（百合若大臣）

くもたる　別府鄉武者雲足。　百合若大臣の逆臣にして別府雲澄の兄なり。百合若が蒙古を征服して玄界島に凱旋し、其熟睡せる間に兄弟相謀りて之を遺島に流し、其跡を橫領して自ら親王と稱し、百官を任じ驕奢を極めしが、內心不安に堪へず深く籠り、櫻葉と云ふ巫女の言を信じて遊山に出で、遂に百合若主從に襲擊せられて滅ぶ（百合若大臣野守鏡）

くりからたらう　倶利加羅太郎。　菅丞相の從者なり。膂力ありて今の噲と綽名せらる。藤原時平が唐使裴文藉と相謀りて菅丞相を延喜帝に讒奏するや、倶利加羅太郎大に怒り裴文藉を捕へて蹈蹂り、時平が放ちたる猛獸と鬪うて之を殺し悠悠として去る。菅丞相流罪に處せらるるや、倶利加羅太郎も罪を得て獄に繫がれしが、脫走して菅丞相の跡を追ひ、筑前に下れば菅丞相は既に天拜山に死せり。是に於て悲憤に堪へず、頭を岩角に打付けて死し、其魂魄雷神となり讒者の一類を鏖殺せんとして內裏をはためき渡る（天神記）

くわうべん　大江僧正廣辨。　名越が谷の法華堂にて神咒を唱へ御籤を引きて、北條時賴の嫡子天女丸を源義經の再誕なりと判ず（最明寺殿百人上臈）

くわうみやうまる　光明丸。　播州賀古川の民部少輔孝房の子なり。祖母に化けたる蜘蛛に掴み去られんとしたるを須磨藏に助けられ、母に連れられて淡路の方へ落ち行く途中熊源太に追擊せられ、漸く免かれて中山寺に赴き、眞如上人の弟子となりて眞光と法名す。人に騙されて遊女宮城野を菩薩と信じて慕ふ。折しも宮城野は愛人孝房の父教孝の配流せらるる罪を贖はんとし、眞光を唆して金を得んとす。眞光乃ち寺に歸り、閻浮檀金の觀音像を奪ひ出づるを上人に見付けられて深く誡めらる。眞光恥ぢて死を決し、飛田墓所に迷ひ行きて縊死す。時に齡十三。然るに叔父教信信心堅固の功德によつて眞光蘇生す（賀古教信七墓廻）

くわげつ　花月。　播州室津の遊女なり。大織冠鎌足の家士若狹之介則風と契りて金松を生み、則風を慕ひて廓を脫走し、藤照姫に變裝し鶉籠に乘つて市中を巡り、則風が金松を脊負ひて唐人行列の給草紙を賣れるに邂逅す。この時蘇我入鹿の兵來つて藤照姫と思ひて花月を奪ひ去る。後に花月・入鹿の館を忍び出で、夫を尋ねて讃州志戶浦に赴き、夫の手にかかりて斬殺さる（大織冠）

くわざんてい　花山帝。　女御忯子姫の死を悼み給ひ、平安盛を召して女御に似たる者を問ひ給ひ、安盛を勅使として中納言高房の女三の宮を召さしむ。然るに三の宮行方不明となりしかば、帝いたく世をはかなみ給ひ、山科の花山寺に入りて落飾し給ふ。安盛乃ち右近の前を御伽女に奉る（傾城酒呑童子）藤壺女御及び弘徽殿女御を御寵愛ありしが、按察左大將早岑の惡逆によりて藤壺女御は害せられ、弘徽女御は憂愁の餘り白川の館に籠居し、尋で行方不明となりしかば、天皇世をはかなみ王宮を出でて花山寺に入り、落飾せんとせられたるを、安倍晴明等の忠勤により弘徽殿女御と御同車にて還幸し給ふ（弘徽殿鵜羽產家）

くわせいふにん　華淸夫人。　大明十七代思宗烈皇帝の寵姬なり。懷姙臨月にて御產の用意ある折から、逆臣李蹈天及び韃靼兵に攻められ、大司馬將軍吳三桂に連れられて海澄港まで遁れしが、敵將安大人に射殺さる（國性爺合戰）

ぐわつくわう　「だいかくだいそうじやう」を見よ。

くわんじやまる　冠者丸。　幼名を美女御前といひ、源滿仲の子にして母を小侍從といふ。母に從ひて能勢判官仲國に養はる。盂蘭盆會の日源賴光の身代となつて母に斬られ

る。廣澤池畔にて猿猴狂言の催ありし際、恒寂其狂言師に交つて行平を狙ひしが浦島太郎に殺さる（松風村雨束帶鑑）

こうたうのないし 勾當內侍。 勅命によつて新田義貞の室となる。坊門宰相清忠に拐められて大森盛長の宅に送らるる途中、櫻井驛にて和田源秀に救はる。かくて後小山田太郎高家の首を新田義貞と稱して梟せる場に狂女となつて來り、高家の妻と爭ひ、また三種神器を捧持して吉野に至る途に坊門清忠に要擊せられしも和田源秀に救はる（女楠）

こうばい 紅梅。 紀有常の重臣桂金吾廣國の妻なり。有常の奧方と共に有常自筆の手紙を受取り、思案しながら封を切つて讀めば、中宮高子の首を刎ねて首桶に入れよとの文言なりしかば、奧方は繼子井筒姬の首を中宮の身代に立つべきを言ひ、紅梅は中宮を斷るべきを主張して、中宮の隱れ給へる泊瀨寺に馳せしが、民部太郎俊綱に縛せらる。奧方死して中宮の身代となるに及んで、奧方の心中を悟り得ざりしを悔ひ、死骸に向つて罪を謝し、中宮の御供して高安の里に在五中將業平を訪ふ（井筒業平河內通）

こうめ 小梅。 博多の白太夫の娘にして荒藤太・十六夜の妹なり。孝心深く老父を牛に乘せ瓢簞を牛角に結付けて遊山に出で、老父より早く夫を持つやう望まれ、心ならずも香椎村の新介・同村の勘作等の袖を引き、荒藤太に蹴倒されしが、陸簾竹に救はれて其妻となる（天神記）

こかん 幼名をおつやといふ。父は播州鷹匠頭に奉公せしが、鷹を逃したる罪によつて浪人となり、こかんは姨の內大阪北野鐵鎚煎餅屋三郎兵衞方へ身を寄せしが、ここも家運衰へ姨病氣となる。こかん之を救はんとして身を賣り、堀江の色茶屋に勤め、轉じて堂島新地中町平野屋の遊女となり、鍛冶職大文字屋の手代平兵衞と馴染む。折しも國元よりこかんを取戾さんとして使者來る。是に於てこかん・平兵衞と別るるを悲しみ、平兵衞に請出されて夫妻たらんとせしが、平兵衞請出金の調達に窮し主家を放逐せらる。こかん身の不遇を歎き、國元の使者和田傳內及び姨に暗に別を告げ、寶永六年六月一日の深夜平兵衞と共に走出て、北野神明宮附近の藍畑にて情死す（心中刃は氷の朔日）

こぎく 小菊。 大阪曾根崎新地天王寺屋の遊女にして河內屋與兵衞に慕はる。會津者に連れられて野崎參りの途に與兵衞と邂逅す（女殺油地獄）

こくせんや 「わとうない」を見よ。

こざらし 小晒。 稻荷大明神の社人齋の大部の娘にして美貌なり。大海原王子亂入せし時これをたらして殺さんとせしが、王子に悟られて危き場を免る（嵯峨天皇甘露雨）

こざらし 小晒。 藤內二郎盛治の妻なり。夫を救ふ爲に金三十兩に身を賣る。また男裝して斯波義將と稱し、義將の許嫁の女琵琶姬の所に行く。姬の兄之を疑ひ斯波家の系圖を尋ぬ。小晒出鱈目を言散して胡魔化す。時に盛治來つて義將に面會を求む。乃ち小晒出でて逢ふ。是時赤沼の軍の襲擊に遭ひ、夫と共に奮闘して敵を退く（雪女五枚羽子板）

こざるまる 小猿丸。 大碓王子の舍人なり。神賢姬の寢殿に忍入つて樣子を窺ひしが、吉備武彥に射殺さる（日本武尊吾妻鑑）

ござゑもん 「ぢへゑ」の條を見よ。

ごさんけい 吳三桂。 明の忠臣なり。右將軍李蹈天の逆心あるを察して帝を諫むれども容れられず。李蹈天遂に反し、韃靼兵を導きて皇帝及び華清夫人を弑するや、吳三桂乃ち皇妹梅檀皇女を妻の柳歌君に託して逃走せしめ、自ら幼皇子を抱きて山中に隱匿すること七年。九仙山にて二仙囲碁によせて國性爺恢復の軍を起すを望見し喜んで之に投じ、遂に李蹈天を捕へて臨刑に處し、韃靼王を追ひ、太子をして卽位せしむ。之を永曆皇帝と云ふ（國性爺合戰）

韃靼王の第六王子駙馬鐵平が永曆帝に謁して幻術を行へる所に吳三桂仙人に化して現じ、順の字を分解して二百八十一となし、明朝創業元年より二百八十一年目の今年明朝滅亡すべしと奏して消失す。梅檀皇女勾容縣にて敵に追擊せられて危急に及べる際、吳三桂再び現はれ皇女を助けて去る。後に國性爺が東寧島にて韃靼王の軍と戰つて之を破りたる時、吳三桂現はれて韃靼の滅亡を語り、梅檀皇女を國性爺に渡す（國性爺後日合戰）

（序に史實を云へば、吳三桂は遼東の人。毅宗帝の命を奉じ李自成を破らんとして、途に既に燕京陷り帝國難に殉せることを聞き、乃ち援兵を淸に請ひ、李自成を破つて雲南に據り、康熙十二年兵を擧げて淸に抗せしが同十七年病歿す）

こじじゆう 小侍從。 源滿仲に仕へ、滿仲の胤を孕みて冠者丸を生む。後に冠者丸を連れて能勢判官仲國に嫁す。偶源賴光來つて身を寄す。仲國夫妻之を厚遇せしが、孟蘭盆會の日小侍從・賴光を饗應する席に侍して哭し、賴光に怪まる。乃ち我身及び冠者丸の來歷を語る。かくて宴終りたる後密に夫に呼ばれて淸原右大將高藤より寄せたる手紙を見せて其心意を尋ねらる。其文意に、「賴光を斷つて內應するに於ては冠者丸を取立つべし」とあり。小侍從思案の末、賴光を討つ由を答へて助勢を賴み、然も心底には冠者丸を賴光の身代りたらしめんとし、冠者丸を持佛堂に招き、經を讀誦せしめて其背後より一討にせんと思ひ定めしが、親子の情に絆されて果すを得ず、感極まつて聲を上ぐ。冠者丸怖れて逃げまどふを母引捕へて首を刎ね、其髻を解けば中に一通の文あり。其文意に、「世の無常を云ひ親の恩を謝し、母御歎に沈ませられて手を下し給はでは本意ならず。されば殊更に卑怯の擧動をなし、憎しみを受けて殺され奉る。返す返すも名殘惜し」との由を記す。是に於て母悲嘆に暮れ自殺せんとして夫の仲國に制止せらる（嫗山姥）

こしちらう 山脇小七郎。 遠州濱松の士坂部鄉左衞門の小姓を勤め、美男なりしかば多くの人人に戀慕せられたれど、兄半兵衞の媒介によりて奴軍右衞門の若衆となる（心中宵庚申）

ごじよう 伍乘。 芙蓉嶽に住み、軍術に長じ門弟子三百人を養ふ。或日陶氏子が六安王の命を受けて天子の寶劍を鍛ふる由を聞き、其宅を訪うて朱一貴を一見し大貴人の相あるに驚く。後に朱一貴を擁して主となし、三萬の兵を率ゐて福建國守六安王を其城に攻めて滅す（唐船噺今國性爺）

こじらう 京小二郎。 曾我二子の異父兄なり。富士の狩場にて河津三郎一代記の辻講

げんざゑもん 「まさくに」を見よ。

げんしう 和田新發意源秀。 楠氏の一族にして容貌魁偉膂力あり。櫻井驛にて新田義貞の室勾當内侍が難儀に遭へるを見て之を救ひ、自ら内侍の駕籠に乘りて大森盛長の宅に行き盛長を追拂ふ。後、内侍等が三種の神器を捧持して吉野に至る途中、荒門宰相清忠等之を路に要して奪はんとするに會ひ、源秀乃ち清忠を追つて之を斬る（吉野都女楠）

げんじふらう 源十郎。 播州姫路本町米商但馬屋の手代なり、相手代清十郎が主人の娘お夏と密通せるを相手代勘十郎に報告し、勘十郎と謀りて清十郎を陷れ、清十郎がお夏より借りたる金を奪はんとする奸策を談合せしが、この夜清十郎に殺さる（五十年忌歌念佛）

けんしん 「てるとら」を見よ。

げんだいふ 源太夫。 尾張の豪農なり。日本武尊を隱まひ娘橘姫を御伽女に奉仕せしめて妻には之を祕せり。折しも東夷の首領外濱忍熊の重臣笑靨縫來つて日本武尊を隱まへるかを取調べ、源太夫に湯起請を申渡せしが、橘姫の美貌を一見して忽ち湯起請を免し、其代りに娘を忍熊に奉らしめんとす。源太夫之を拒みしが妻之を承諾す。是に於て源太夫は妻の承諾したるを怒りしが、其心底を知つて怒解け、相謀りて娘の面に燒鐵を當てゝ醜くし、以て忍熊に與へざらんとして、日本武尊が橘姫と入替つて寐給へるとは知らずして御顏に燒鐵を當て、忽ち天罰を受けて悶絕せしが、尊其罪を赦さるゝに及んで蘇生す（日本武尊吾妻鑑）

けんばふ 憲法。 香春久太郎憲法（みちのり）の異稱なり。放蕩の爲に家を放逐せられ、江戸の本郷に住んで染物業を營み劍道を教授し、吉原の遊女吉岡と馴染みて久吉をまうけしが、財産を蕩盡して行方を晦し、弟子石川五右衞門の合力を受けて京都に放浪す。兄顯定が龍門家に雜入して辱しめを受けんとする噂を聞き、之を救はん爲に自ら顯定と稱して龍門家に至り、尋で兄と口論することゝなり、母に叱られて去る。後に禁中御能の拜觀に出で見物人の中に交りしが、龍門家の重臣舟越惣馬・憲法を見るや、故意に其頭高しとて棒にて毆打す。憲法立退きしが平素の遺恨を晴さんものと、匕首を懷にして引返し、見物人に紛れ惣馬に近寄つて之を刺殺し、直に名乘を上げ害手を斬拂ひて逃走す。これより虛無僧となり大阪三軒屋に來つて妻の吉岡に邂ひ、遊女屋の主人又五郎に談じて抱妓吉野と吉岡との交換を講ひ、吉野を伴うて去る。慶長十五年久吉が五右衞門と共に釜煎の酷刑に處せらるゝや、其場に來つて愁歎に暮れ、官人に對して久吉何の罪あるかを詰り、遠坂舍人を擲んで沸返る釜中に投込む（傾城吉岡染）

けんれいもんゐん 建禮門院。 安德天皇の御母君にましまし仁慈の德に富ませ給ふ。養和元年九月九日侍女戸無瀨局を御使として内大臣重盛へ北山に茸狩の催あるやう申遣はさる。重盛その奉答に齋藤瀧口顯方をして獻上の山雀を持たしめて遣はす。建禮門院の侍女横笛・顯方に戲れたる際過つて山雀を逃す。加賀郡司師高之を咎めて口論となりしを建禮門院出でゝ和らげ給ふ。かくて北山に茸狩の御遊ありし時總ての籠鳥を放たる。また御歌かるたの催ありし時師高奸策を廻らし、重盛公より横笛の首を受取る使者の來れるを言上す。建禮門院これを聞かれて悲歎に沈ませ給ひしか、憤然として起ち横笛を伴うて入御し給ふ。戸無瀨局出でゝ横笛の首を重盛の使者に渡す。其首桶を開けば笛を折つて入れ土を盛つてあり（娥歌かるた）

げんゑほふいん 獨清軒玄惠法印。 後醍醐天皇の御時の學僧なり。北畠に住み、尹大納言師賢の猶子綠丸、日野中納言資朝の子阿新丸等を教授す。或日資朝の重臣石見守中原來り、資朝の命と偽りて阿新丸の薙髮を依賴す。法印其言を信じて剃刀を取上ぐる際、資朝の家士左衞門尉藤原馳付け、中原を罵つて事情を語る。玄惠乃ち阿新丸の薙髮を思止る。後に中原反して驕奢を極め新能を催するや、玄惠其會に紛込み、綸旨を捧讀して資朝の舊臣等をして石見守を誅伐せしむ（本朝用文章）

げんゑもん 宮地源右衞門。 京堀川下立賣に住み鼓の師匠なり。因幡の藩士小倉彥九郎の養子文六に鼓を教授し、彥九郎の妻お種と不義に陷り、かねてお種を橫戀慕せる磯邊床右衞門の爲に言觸さる。後に彥九郎等の爲に堀川橋上にて女敵討に遭ふ（堀川波鼓）

こいそ 小磯。 朝鮮に通商せし島谷道可の女なり。道可の死後零落し、傾城に賣られて堺乳守町の遊女屋に勤む。或日加藤正淸に高島屋に揚げられ、小磯が嘗て父より讓受けたる朝鮮地圖を懇請せらる。小磯乃ち其地圖を正淸に與へて、己が情夫小西彌十郎の推擧を依賴す（本朝三國志）

こいちらう 小一郎。 萬年町紺屋德兵衞・お辰の子なり。お辰・小一郎に踊の鬘を被せて寐せたれば、舅の宗德はそれを見て德兵衞と誤り、德兵衞はお辰の情夫と思うて引据うれば、奴天窓を振りながら母樣怖いと泣く（心中重井筒）

こいと 小糸。 小萩の替名。坂田前司忠時の女にして坂田藏人時行の妹なり。父が物部平太に殺されてより佐夜の中山の旅人宿菱屋の下婢となり、同家の下男喜之介と情交密なり。或夜物部平太來つて泊し理髮を請ふ。乃ち髭を剃りながら竊に喜之介と牒し合せ、忽ち親の敵と名乘るや、喜之介即ち平太の首を刎ね、小糸と共に出奔して源賴光に賴る（嫗山姥）

こうきでんのにようご 弘徽殿女御。 花山天皇の女御弘徽殿・藤壺共に懷胎し給ふ。弘徽殿の伯父按察左大將早岑逆心あり、藤壺女御を殺害し、また帝をも弑し奉らんとす。弘徽殿は伯父の惡逆を憂ひ、宮中を出でゝ白川の館に籠居し給ひ、天皇竊に通ひ給ふ。早岑の暴逆日に長ずるや、弘徽殿その罪を一身に引受けて桂川に投身せんとせられしを、又五郎義長に助けられて男山八幡宮に世を忍び給ふ。蘆屋道滿等來つて弘徽殿を奪去らんとす。義長等奮戰して之を破る。かくて後、天皇・弘徽殿御同車にて都に還り給ふ途中、眞葛が原にて藤壺女御の幽靈に逢ひ、やがて皇男子を分娩し給ふ（弘徽殿鵜羽産家）

ごうじやくそうづ 恒寂僧都。 惡漢なり。在原行平が龍王の子を若宮と稱して養育せるを見、河豚を與へて其子を毒殺せんとし海に釣糸を垂れしが、龍王に其釣針を咬切らる。是に於て行平を讒して勅勘を蒙らしめ、行平の愚者松風を襲撃して遍照等に破ら

の足輕横田兵介も來つて、船を備はんとすれど備ふべき船なし。是に於て兩人口論を始めたり。小平は後に信玄に殺さる（信州川中島合戰）

こへゐ 綿屋小兵衞。 大阪上町の口入業者なり。河内屋與兵衞に銀を貸し其返濟を催促す（女殺油地獄）

ごへゐ 一つ屋五兵衞。 茶碗屋嘉平次の父なり。大阪松屋町九之助橋に住し陶器商を營む。「かへいじ」を見よ（生玉心中）

こまのしん 武知駒之進。 惟任判官光秀の甥なり。光秀と共に反し、平朝臣春長の御臺所を圍み、御臺所の彈ぜる琴を切割りしが、御臺所に斬付けられて斃る（本朝三國志）

こまん 小萬。 肥後熊本の士笹野三五兵衞と婚約ありしが、三五兵衞病死せりと聞いて國を出で、但馬城主の京都の邸に勤仕し、侍女の林を我夫の變裝せるものとは知る由もなかりしが、偶菱川源五兵衞を挑みしことより引いて林の我夫たるを知るに至る。後に夫と共に源五兵衞を尋ねて薩摩に下る（薩摩歌）

こまん 小萬。 伊勢國鈴鹿郡關の宿白子屋左次の内の出女にして、馬追伊達與作と慇懃を通ず。小萬の父貢米滯納處分に遭ふや、小萬これを救はんとし賃苧を績みて其銀を貯蓄す。偶與作が馬方八藏と賭博して負け、八藏は與作の牽ゐる馬を奪はんとす。是に於て小萬父を救ふ爲に貯蓄したる銀を與へて八藏を去らしむ。馬追兒三吉・與作の爲に竊盜して發覺し、尋て八藏を殺して三吉死罪と定まるや、小萬は父を思ひ三吉に同情して憂苦に堪へず、與作と共に死せんとして迷ひ出でしが、しらべの姫及び其乳母滋野井に救はる（丹波與作）

こむつ 小睦。 和藤内（後に國性爺といふ）の妻なり。栴檀皇女肥前國平戸に漂着し、和藤内に逢うて話合ふ有樣を見て嫉妬せしが、其皇女なるを知るに及んで心解け、夫より皇女を托せらる。後、皇女を伴ひて明國に渡る（國性爺合戰）

國性爺・甘輝と不和となるや、小睦は夫に從ひて東寧島に去る途中、勾容縣にて敵將鐵故山・石運龍と戰つて之を破る。小睦の舅鄭芝龍一官法を犯して生獄門に肆さるるや、小睦之を救はんとして夜陰に近寄りしを、萬禮に誰何されて其實を語る（國性爺後日合戰）

こよし 伊勢國鈴鹿郡關の宿白子屋左次の内の出女にして、小萬の朋輩なり（丹波與作）

これたかしんわう 惟喬親王。 清和天皇の異母兄なり。天皇と御位爭に負けて比叡山麓小野に閑居せられしが、伴大納言宗岡より謀反を勸められて同意し、紀名虎が生前のことを思出されて招魂の法を修せらる。親王托鉢修行者に扮して大内に詣り、無理難題を言掛けて帝を追拂ひ、僭して帝と稱せられしが相撲勝負によつて御位爭に負け、暴行に及ばれんとして桂匱國・民部俊綱に搦められ給ふ（井筒業平河内通）

これもち 上總介平朝臣惟茂。 民部卿兼忠の嫡男なり。安和二年春禁中の變化を退治したる功によつて余吾將軍に任ぜられ、平國の寶劍及び宮女世繼御前を賜はる。然るに寶劍世繼御前輿入の際紛失せしかば、惟茂これを尋ねて信州戸隱山に入り、女人に逢うて酒に醉ふ。やがてその女惡鬼に化して消失す。是時還の幽靈現はれて非業の死を遂げし概略を語り、帶刀匱房の一子房若の取立を懇請して劍の本地を述ぶ。惟茂その請を諾して寶劍を得たり。かくて後その寶劍を揮つて戸隱山の惡鬼を退治す（栬狩劍本地）

ころくらう 望月小六郎。 望月六郎左衞門高貞の子にして狛の左京進盛光の家來なり。主人の娘春姫に從ひて北嵯峨なる靜三の庵室に身を寄せし時、近藤兵庫守廣忠の兵に攻められて防戰し、春姫を助けて津の國路へ落延び、春姫と共に荻野の夕霧供養の席に列し、夕霧の墓所に詣づ。後、奈良に行きて其主盛光等と會す（三世相）

ごゑもん 石川五右衞門。 江戸にて憲法に兵法を學び、師と共に流寓して京都に來り、大橋詰鎧屋にて憲法の異母兄顯定の荷物を掠奪せしを手始めに遂に強盜の巨魁となる。吉野川に投身せんとする龍門家の姫君和琴の前を勾引して大阪三軒屋町御手洗屋に賣り、部下を率ゐて御手洗屋に押入り、財物を奪うて捕吏に圍まる。五右衞門數多の捕吏を殺し、憲法の子久吉を背負うて河内國道明寺まで逃延び、攝持の大釜中に潜匿せしを捕へられて釜ながら京に送られ、七條河原にて釜煎の酷刑に處せらる。刑場に於て辭世の歌を詠んで曰く、石川や濱の眞砂は盡くるとも世に盜人の種は盡きせじ。時に慶長十五年なり（傾城吉岡染）

ごんざ 笹野權三。 出雲藩主の表小姓を勤め美男なり。同輩川側伴之丞の妹と慇懃を通じ相會せる際伴之丞來り、權三に對して競馬を挑む。偶岩木忠太兵衞も來り、藩主の若殿祝言の悅によつて茶儀行はるべきを語り、茶道指南淺香市之進不在なるによつて眞の臺子の茶儀を權三及び伴之丞の兩人中に命ず。然るに兩人とも未だ臺子の傳授を受けざるを以て、權三先づ市之進の宅を訪うてその妻おさゐに逢ふ。おさゐ・權三の美貌を愛して行末己が娘のお菊と夫妻たらしむべきを約し、其夜おさゐ・權三數寄屋に入り祕傳の卷を閱讀す。是時伴之丞もおさゐをたらして祕傳を受けんとし、庭中に忍入つて樣子を窺ふ足音に、今まで喧かりし蛙の聲はたと止む。權三怪んで立つ。おさゐは權三の立つを疑つて痴話喧嘩となり、互に帶を奪うて庭に棄てたるを伴之丞に拾はれて姦通の證據物とせらる。是に於ておさゐ・權三不義ならぬ不義となり、相携へて走り、山城國伏見町京橋の上にて市之進に女敵討に遭ふ（鑓權三）（實說は享保二年七月十七日大阪高麗橋上にて女敵討に遭ふ）

こんわうまる 澁谷金王丸。 源義朝の臣なり。主君に從ひて尾張に落ち長田庄司忠致に寄る。義朝が湯の茶屋の藥湯に陪從して出で、義朝の浴衣を取りに行く（鎌田兵衞）

義朝の墓に詣でて藤九郎盛長と邂逅し、互に罵合ひしが相和し、長田庄司の兵と朱雀野に戰うて庄司を斬り常盤・牛若の母子を救ふ。後、土佐坊昌俊と改名し、烏帽子折五郎太夫方にて六波羅勢と戰つて牛若を助け、長田庄司の首を携へて蛭小島に行き賴朝に謁す（源氏烏帽子折）

さいざう 片桐才藏。 駿河守貞廣の家士なり。貞廣が今川了俊の遺蹟を横領せんとして反するや、才藏は了俊の嫡子仲秋を追撃し、三河國岡崎なる松葉川にて仲秋に殺さる（今川了俊）

釋をなし、赤澤山に河津三郎祐重が討たれたることを語つて鬼王兄弟に聞咎められ、曾我二子に一味して父の敵討すべきを勸められ之を罵つて逝ぐ。後に僧衣を着して大磯遊廓に祐成・時宗を訪ひ、二子の擧動を工藤祐經の下人近江・八幡に内通し、また葛籠に入つて二子遊興の場に紛込みしが遂に二子に斬殺さる（曾我五人兄弟）

河津三郎祐重が京に滯在中賤女と通じて生れたる子にして性陰劣なり。石橋山に還されたる箱根權現の寶鏡を盜んで股野五郎景久に捕へられしが、熊野の手にある名劍友切丸を奪うて景久に渡すべきを約して放免せらる（本領曾我）

曾我二子が工藤祐經を殺したる後、小二郎は祐經の下人たりし近江・八幡と謀り、五郎時宗と詐稱して越後國上寺に禪師坊を訪ひ、之を捕めんとして却つて禪師坊に欺かれ、禪師坊・鬼王兄弟に殺さる（加增曾我）

京小四郎に作る。工藤祐經の室に頼まれて間諜となり、曾我家に入込みて祐成・時致の動靜を悉く祐經に密告す。曾我二子が遂に祐經を斬つて父の讐を復したる後、賴朝は小四郎の陋劣を惡み、髮を剃らしめて放逐す（曾我會稽山）

ごしらかはほふわう　後白河法皇。　平清盛の爲に鳥羽の里に幽らせられ給ふ。平重盛の死後頭陀修行に出で給ひ、源氏の家士鈴木三郎重家に逢うて平家追討の院宣を授けて牛若に傳へしめ給ふ（平常盤）

こたらう　姉川小太郎。　佐佐木盛綱の重臣なり。主君の領内備前兒島の民の爭論・公事訴訟を裁決す（佐佐木先陣）

こたんしやうらい　巨旦將來。　吉備國の豪農にして性貪慾暴戻なり。父を虐待し、また弟蘇民將來の子字賀石を養子となすと稱して弟の田地を奪ひ、妻五百機の諫むるを更に用ゐず。弟の妻賤機より惡鬼の手形の御守を奪ひて巨旦大王たらんとす。後に父及び妻と爭論し、過つて鍬にて父を斬殺す。是に於て其屍を弟の田畑中に埋めて、罪を弟に負はせんとして妻の爲に惡事を暴露せられ、遂に蘇民將來夫妻の爲に斬殺さる（日本振袖始）

こぢよらう　小女郎。　伊勢國鈴鹿郡關の宿白子屋左次の内の出女にして、小萬の朋輩なり（丹波與作）

こぢよらう　小女郎。　筑前國博多柳町の遊廓奥田屋の妓なり。京商人小町屋惣七に馴染み、毛剃九右衛門を海賊と知らずして金を借らんとしたるに事起り、小女郎請出されて惣七の妻となる。惣七情に絆されて海賊の仲間となる。後、九右衛門・惣七等の惡事暴露するや、惣七・小女郎相共に伊勢路に遁るる途にて召捕へらる。惣七愧ぢて駕籠の中に自刄す。小女郎は罪を赦されて夫の父惣左衛門に仕ふ（博多小女郎波枕）

こてふ　將軍太郎良門同腹の妹なり。世を傾けんとして源賴光の下婢となり、賴信を戀ひて賴信の室たるべき詠歌姫を賴平に媒して出奔せしむ。賴信・賴平家督定めの時、箕田綴・小蝶の色香に迷うて戯る。小蝶乃ち賴信に他心なきを見せん爲、七首を抜いて瀧の烏帽子懸緒を切つて座中不行跡の者ありと叫ぶ。賴信・伊豫内侍と婚するや、小蝶は内侍の饗膳に蜘蛛を入れて毒殺せんとし、また良門に賴光の内情を密告せる際、賴光の御臺所に聞かれて斬付けられ、保昌に殺さる。即ち怨靈となつて内侍を苦しめ、蜘蛛となつて千筋の糸を懸け、木幡等の侍女と爭鬪せしが名劍膝丸に眞甲を斬られ、遁れて良門と共に葛城山に據りしを保昌等に退治せらる（關八州繫馬）

ことうだ　近江小藤太。　八幡三郎と共に工藤祐經の命を奉じ、赤澤山に隱れて河津三郎祐重を射殺す（本領曾我）

工藤祐經の命を奉じて河津祐重を赤澤山にて射殺したり。井原左衛門經景に陪從して相模寺に行き、井原兵衛の墓地を擴げん爲、その隣りの祐重の石塔を取除かんとして曾我時致に縛せられ、耳鼻を殺がれて追拂はる（曾我扇八景）

建久四年五月富士の御狩の時、犬坊丸に從つて狩に出で、祐經の斃を聞咎め、虎・少將を捕へて殺さんとせしが、是時富士の人穴より暴れ出でたる野猪にかかれて疵を負ひ、尋で曾我五郎時致に殺さる（曾我虎が磨）

二宮安清が富士野へ注進の早打の刻限を誤らしめんとして藤澤寺に登り、寺僧を縛して鐘を撞き、禪師坊と格鬪して共に轉び落ちたるを安清に刺殺さる（曾我會稽山）

ことぢ　琴柱。　北白河の廣文の女なり。朋輩の横笛自刄する場に來り、同情の涙に暮れて共に死せんとす。横笛死に瀕しながら之を制止す。横笛の父氏綱乃ち琴柱を養女となす（傾城酒呑童子）

このはなさくやひめ　木花開耶姫。　大山祇の女にして、彦火瓊瓊杵尊の妃となる（日本振袖始）

こはぎ　小萩。　二位姫の侍女となり、若君稀若を抱き逃げんとして土師別當村正に蹈付けられ若君を奪はる。後に眞砂の前司勝海と夫婦となりて大和路なる郡山に茶店を出せしが、室津の遊女屋長に賣られて遊女となり宮城野と名乘る。勝海の主桃園染五郎豐舟來つて己に戀想するを憤怨し、豐舟を刺して自害せんと決せる際、勝海來つて小萩の擧動を咎む。小萩乃ち實を告ぐ。かくて夫に從ひ奈良興福寺南大門に行きて豐舟等と遇ふ（日本西王母）

こばた　「いはふぢ」の條を見よ。

こはむね　伴健宗。　院宣を奪りて須磨に下り、村雨の鹽屋に泊り、在原行平を見付けて之を捕へしが、在原業平がそれは行平にあらずといふを信じて放免す（松風村雨束帶鑑）

こはる　小春。　大阪道頓堀風呂屋の湯女より曾根崎新地紀の國屋の遊女となり、美貌にして張もありしが、紙屋治兵衛と情死す。「ちへゑ」の條を見よ（心中天網島）

こぶんご　小文五。　小餘綾新左衛門尉景春の子なり。父が藤壺女御を殺害したる嫌疑によつて刑に處せらるるや、小文五は母を尋ねて羽倉伊賀介久國の宅を訪ひ、母に逢うて父の寃罪を歎く。久國これを聞いて感に堪へず、藤壺女御を殺したるは我なりと自白したり。是に於て母子連立つて源賴光の廷に行き、罪なき景春を死刑に處したるを責む。賴光乃ち景春を出して放免するや、これは夢かとばかり喜び、感謝の涙に暮れて退出す。かくて後、花山天皇が花山寺より還幸し給ふに扈從す（弘徽殿鵜羽産家）

こへい　進藤小平。　越後國守長尾輝虎の足輕なり。大津の船宿に來り、主君及び其從者乘用の歐多の船を備ふ。甲斐國守武田信玄

虎を刺さしめ、夫と闘うて殺さる。後、信州戸隱山に幽靈となつて現はれ、余吾將軍惟茂に逢うて己が非業の死を遂げし概略を語り、若君房若の取立を懇請し、劍の本地を述べて手匣の寶劍を渡す（栬狩劍本地）

さは　阿澤。　河内屋與兵衛の母なり。與兵衛放蕩暴戻なるにより、之を懲戒せんとして放逐せしが、親子の愛情にほだされ、豐島屋お吉を訪ひ銀を託して、與兵衛に與ふることを依頼す（女殺油地獄）

さぶらう　本間山城入道三郎。　佐渡の郡司なり。北條相模入道より日野中納言資朝を預る。或日資朝の子阿新丸及び資朝の恩人菊姫が資朝を尋ねて來る。三郎乃ち菊姫に懸想し言寄りて峻拒され、怒つて資朝を殺し、菊姫・阿新丸を縛す。其夜二人縛を切つて遁れ、那智の妙法坊に助けられて船に乘る。三郎船にて追跡せしが、大風に遭ひ其船顛覆して溺死す（本朝用文章）

さぶらう　濱田三郎。　長田庄司忠致の下人なり。主命を奉じて酒宴の席に出で、屏風を倒して鎌田正清を押へ、その上に乘り互に刺合うて死す（鎌田兵衛名所盃）

さぶらう　「しげいへ」を見よ。

さぶらう　「やはた」を見よ。

さよひめ　佐用姫。　佐渡國松浦庄司の娘なり。五位の介諸岩と慇懃を通ず。諸岩は花人親王を助け、佐用姫の兄兵藤太宗岡は花人親王の敵山彥王子の味方となる。佐用姫は諸岩に從ひ、母の手引によつて兄を刺さんとして母を刺す。後、諸岩に連れられて播州尾の上に至り兄と逢ふ（用明天皇職人鑑）

さらしな　更科。　手塚齋樂の娘なり。島原桔梗屋の遊女となり、葛西清治と馴染みしが、七草四郎高衡に請出さるる際、富樫宗重の軍に襲撃せられ、四郎の幻術によりて四郎と共に遁れ去る。後、四郎を欺きて之と別れ、清治に逢はんとして下る途に父を訪ふ。是時父は足立右馬允景久に召喚され、四郎の行方を訊問されて歸り自殺を決心せる折なりしが、更科それとも知らずして四郎と緣を切りしことを語る。父之を聞いて喜びしが、更科忽ち四郎の幻術に惱まさる。かくて後畠山重忠に逢うて辨財天の注連繩を授かり、肥前國に下り四郎の據れる七草城に忍入り、四郎に見付けられて縛せらる。更科縛を切り矢を放つて敵情を清治に通知し武功を立つ。かくて重忠の媒酌によりて清治の妻となる（傾城島原蛙合戰）序云、この淨瑠璃は島原亂を作替へたるものにて、更科が城内に忍入れるは、天草四郎の妹が城中に入つて降服を勸めたる史實により、また矢を放つて敵情を通知したることも、松平信綱の軍から勸降の矢文を城内に向つて放ちたる事實に據れるなり。其他島原桔梗屋といへるも、茨木屋幸齋の子が島原にて桔梗屋を再興したる緣に據りしなり。

さりようこ　左龍虎。　明の逆臣李蹈天一味の徒にして、南京雲門關の守將なり。國性爺の關門を越ゆるを拒み、國性爺と戰うて敗死す（國性爺合戰）

さゐ　岩木忠太兵衛の娘にして、出雲藩主の茶道指南役淺香市之進の妻なり。「ごんざ」の條を見よ（鑓の權三重帷子）

さん　播州姫路本町米商但馬屋の手代清十郎の許嫁の女なり。清十郎罪を犯して失踪するや、おさん比丘尼となりて清十郎を尋ね出でて刑場に逢ふ（五十年忌歌念佛）

さん　京都四條烏丸の大經師以春の妻なり。以春が下婢の玉に懸想するを怨み、以春を窘めんとして玉の寢所と取替へて臥し、手代茂兵衛と思ひがけなき不義に陷り、兩人相共に逐電する途に父母を訪ふ。父憐んで銀一貫目を與ふ。かくて兩人は丹波の柏原に落ち行き、助作に身を寄せしこと發覺し、召捕られて粟田口に刑せられんとせしを黑谷の東岸和尙に救はる（大經師昔暦）

さん　紙屋治兵衛の妻なり。「ぢへゑ」の條を見よ（心中天網島）

さんきち　自然生三吉。　幼名與之助。伊達與作・滋野井の子なり。三歳にして父に別れ五歳にして馬追となり、十一歳の時丹波領主由留木侯の姫君江戸行きの馬追に召され、姫君の前にて道中雙六の戲をなし、母の滋野井に邂逅して深く慕へど、滋野井その母たるを明さず。三吉・姫君の馬を追うて關の宿に泊り、馬士與作に教唆されて姫君の金袋を竊みしを、夜警の侍に見付けられて縛に就き、馬士八藏に蹈まれ、額に疵を負うたるを憤怨して八藏を斬殺す。是に於て三吉の罪死刑と定まるや、滋野井身を以て哀訴し、姫君の命によつて放免せらる（丹波與作）

さんごへい　政山三五平。　小倉彥九郎の妹婿なり。彥九郎江戸詰を終へて歸國するや、三五平鼠苧を贈りて、彥九郎の留守中にその妻お種の不義ありしことを諷す（堀川波鼓）

さんごへゑ　笹野三五兵衛。　肥後熊本の士なり。二歳の時に父武州の色里にて石子久彌に殺さる。三五兵衛長じて之を知り、父の仇を討たん爲女裝して林と名乘り、但馬城主の京都の邸に住込んで小萬の侍女となる。或日菱川源五兵衛と癡情の喧嘩よりして石子久彌の居所を教へられ、遂に親の敵を討取り、其禮を述べんとして小萬と共に薩摩に下つて源五兵衛を訪ふ。折しも源五兵衛切腹せる際なりしかば、直に之を助けて名醫の許に連れ行く（薩摩歌）

さんざ　名古屋山三春平。　六角賴賢の家老なり。同役不破道犬の讒によりて浪人となり、京都島原の遊女葛城と馴染み、道犬の子の伴左衛門を大門口に斬りしが、舞鶴屋の主人傳三の同情によつて殺人犯の罪を免かる。また賴賢妾腹の子銀杏の前を狩野四郎二郎に媒妁す。道犬其黨雲谷と共に山三を訴へ、伴左衛門を殺して其所持金三百兩を奪ひたりとなす。是に於て山三は伴左衛門を殺しし時、其所持金を屍の肺腑中に入置きしを取出して道犬に示す。爲に道犬却つて人を誣ふるの罪に處せらる（傾城反魂香）

さんたらう　三太郎。　紺屋德兵衛の手代なり。德兵衛の馴染遊女房より小粒銀一つを貰うて、房の來れるを口外せざるを誓ひ、また德兵衛の女房辰より銀を貰うて用命を聽く（心中重井筒）

しえん　紫燕。　江南の刀工陶民子の娘にして朱一貴の異父妹なり。福建の國守六安王の部將馬府官等の兵に襲はれて、朱一貴と共に煙筒より遁れ、夜道を辿りて芙蓉嶽に登り軍術者伍乘に便る（唐船噺今國性爺）

しきたへ　敷妙。　吉備武彥の妹なり。日

ざいてん　在天。　山上次官有風の末子なり。七歳にて出家となり多武峰に登る。長じて兄則風の行方を尋ね四國中國を巡る。蘇我入鹿の反逆を聞き父の有風と共に唐の使者に扮し、入鹿に近付き刺さんとして縛せらる。是時斬られたる父の首宙を飛んで入鹿を追拂ひ在天の縛を解く。在天泣く泣く父の首を抱きて多武峰に歸る。後、春日社祭禮の日鎌足の子の淡海公と共に商人に扮して路傍に飲食店を出し、入鹿の郎黨坂熊闘中・同闘下の立寄れるを殺す（大織冠）

さが　扇屋の湯女より伏見坂町柏屋の遊女となり、茶碗屋嘉平次と馴染む。嘉平次雜儀に遭ふ毎にさがも共に憂ひ、互に身の不遇を歎じて生玉社茶店の側に情死す。「かへいじ」をも見よ（生玉心中）
（實說は正徳五年五月五日情死す）

さがてんわう　嵯峨天皇。　大海原王子の逆心に宸襟を惱ませ給ひ、北嵯峨の離宮に移らせ給ふ。前判官清顯來つて離宮を拜せる際、嘗て己が子の勝頼に離別されたる嫁花世に邂逅して互に情に泣く。爲に勅諚ありて花世の家に勇清顯を養はしめ給ふ。後、天皇・弘法大師等御修法の場に行幸し給ふ（嵯峨天皇）

さかめのわうじ　逆目王子。　齊明天皇の第一皇子なり。葛城の大君が皇太子に立ち、花照姫を王妃に定めんとされしを妬み、自ら帝位及び姫を奪はんとし、繪師狩野氏久に命じて花照姫を醜女に畫かしめて齊明天皇に見せ奉り、天皇の不機嫌なるに乘じ、之を惡樣に譏して其姿繪を往來に曝す。また金輪五郎今國を殺して粟津が原に梟首し、遂に帝に迫つて贋造の神器を得。淫樂に耽られしが遂に金岡に害せられ給ふ（天智天皇）

さくらば　「まつがえ」を見よ。

さくゑもん　美濃屋作右衞門。　京都三條烏丸の紙商人なり。神谷の宿雜賀與次右衞門の娘のお梅を慕ひ、之と婚せんとし雜賀屋にて祝宴の席上石打に遭ふ（心中萬年草）

さこん　平岡左近。　阿波の藩士なり。大阪上本町に別宅を構へ、九軒町扇屋の名妓夕霧を慕うて屢之を井筒屋に揚げ、夕霧の子の源之介を我子と信じて之を引取り、遂に夕霧を請出して其乳母たらしめしが、源之介は伊左衞門の胤なること發覺するや、夕霧・源之介を放逐す（夕霧阿波鳴渡）

さざなみ　漣。　吉備國彥の妻なり。大碓王子が筑紫の兇賊八十梟師と通じ給へる狀を携へて、景行天皇に拜謁し大碓王子の反逆を奏上せんとし、吉備武彥に遮られて其狀を引裂かる。是に於て漣は武彥の心を疑ひしが、武彥が大碓王子の惡心を矯正せんとして苦慮の餘り一子田鶴若を刺し、なほ夫妻共に自刄して大碓王子を諫めんとするを見て、漣深く其忠心に感じて兩人の自刄を制止す（日本武尊吾妻鑑）

さだ　明石の貞。　大阪堂島新地天滿屋の遊女お島を伴うて芝居見物に行き、歸途舟に乘りお島をして淨瑠璃を語らしむ。お島の情夫市郎右衞門陸より其舟の後を附け行くを見咎め、口論して之を辱かしむ（二枚繪）

さだいへ　京極中納言藤原定家。　源頼朝の子萬壽君元服して頼家と名乘り四位少將に補せらる。定家その勅使となつて鎌倉に下り、曾我五郎の力業を見たしと所望す（曾我虎が磨）

さだひろ　駿河守貞廣。　今川了俊の舍弟なり。了俊病となるや己れ國政を擅にせんとす。然るに了俊は青砥藤次を土民より拔擢して重臣となし後事を託す。是に於て貞廣の心平ならず。藤次を家臣中に招いて辱かしむ。了俊臨終の時貞廣も招かれて嫡男の仲秋を守立つるやう頼まれ、家臣等と共に起請文を書かせらる。了俊の歿後其起請文を奪返さんとし、正圓坊を召して其旨を語る。正圓坊即ち御意を叶へ申すからは我父の牢舍にあるを赦免さるべきを請ふ。貞廣之を諾し、直に大道寺勝房を召して大赦を迫る。勝房不同意を述べて罵る。是に於て貞廣は仲秋の墓參せるに逢うて勝房及び荒川近平を讒し、遂に反して兵を擧げ了俊の跡を横領して驕奢を極めしが、仲秋の軍に攻められて捕虜となる（今川了俊）

さだみつ　碓井貞光。　源頼光四天王の一人なり。主命により江文宰相爲成夫妻を追拂ふ。葛城山に良門及び土蜘蛛退治の軍に從うて武功を立つ（關八州繫馬）

さちゆうだ　獅獅木佐仲太。　七草四郎高衡の郎黨なり。四郎の邪法を信仰し、京都櫛笥町に住し近隣の者を集めて饗應し、金を與へ佛像を燒拂うて邪法に歸依せしむ。富樫宗重の家士柳瀨權藤六に攻められて防戰し、權藤六を殺して遁るゝ後、四郎と共に肥前の七草城に據り、幕府の軍と戰うて討死す（傾城島原蛙合戰）

さちわかまる　幸若丸。　桂金吾廣國の子なり。惟仁・惟喬兩親王の御位爭の相撲に、惟仁親王方の力士となつて惟喬親王方の力士を倒す（井筒業平河內通）

さぢゑもん　佐治右衞門。　和泉國水間の里の農夫にして滿十郎の父なり。娘おしゆん及び滿十郎許嫁の女おさんを伴ひて大阪見物に出で、滿十郎の相手代勘十郎に逢うて其言に騙され、滿十郎の主人の娘お夏の嫁入道具の發送を差止む。滿十郎これが爲に主人の嫌疑を受け、罪を負うて主家を放逐され、捕吏に縛されて刑場に引出さる。佐治右衞門其場に來つて勘十郎の罪を明にす（五十年忌歌念佛）

さつ　成田武右衞門の女にして久米之介の姉なり。亡父の遺骨を携へて高野山に登り、女人堂にて久米之介お梅情死せんとするに邂逅し、弟と知らずして久米之介の居所を尋ね、萬年草を水に浸して安否を占なふ（心中萬年草）

さない　鷺坂左內。　丹波領主由留木侯の臣なり。由留木侯の女しらべの姫に陪從して伊勢國鈴鹿郡關の宿に泊し、しらべの姫及び其乳母滋野井の命を奉じて與作及び小萬を救ふ（丹波與作）

さねつな　直江山城守實綱。　越後國守長尾輝虎の重臣にして、甲斐國守武田信玄の重臣山本勘介晴幸の妹の夫なり。輝虎の意を受け勘介をして輝虎に仕へしめんとし、妻をして勘介の母・妻を招かしめ、策を用ゐて勘介をも呼寄せて優遇せしが、遂に其意を達すること能はざりき（信州川中島合戰）

さは　澤。　鷹巢廣房の邸に腰元奉公せし時下男の久作と馴染み、駈落して江州伊吹山の麓に艾商を營む。廣房の奧方・子の房若を連れて立寄るや、久作惡心を起し奧方母子を害せんとす。澤舊恩を說きて夫を諫めしが、遂に聽かれざるを見て房若の身代りに我子の萬

行方不明となる由を言上す。是に於て重盛、瀬平兵衛宗清に命じて常盤の擧動を取調べしむ（平家女護島）

しげやす　秩父六郎重保。　畠山重忠の子にして、曾我二子に同情せり。或夜朝比奈義秀と共に大磯遊郎に虎・少將を揚げて遊興し、父の命と稱して祐成に贈る黄金五十枚を虎に依託したり。また頼朝の命により、梶原源太と共に曾我老母の宅を訪うて時致勘當の實否を見屆け、且曰く五郎は父母なき孤子なれば養子にされたしとて、母子の盃を取替はさしめたり（曾我虎が磨）

じじゆう　侍從。　太秦又五郎の女にして吉田兼好に從つて和歌を學ぶ。兼好の言付けにより、鹽谷判官高貞の奥方の美人なるを高師直に語りて、師直が卿の宮に懸想せる心を轉ぜしむ。師直清水寺に詣でて高貞の奥方を見、直に侍從を介して高貞の奥方に口說かしむ。然るに侍從は其命を果さずして遁走せしかば、師直に捕へられて殺さる（兼好法師物見車）

しそうれつくわうてい　思宗烈皇帝。　大明十七代の帝王なり。逆臣李諂天を信じ、遂に李諂天及び韃靼兵に圍まれて弑せらる（國性爺合戰）

しちざゑもん　手島屋七左衛門。　大阪本天滿町の油商なり。五月節句の前夜懸取に出でたる留守中、妻お吉が河内屋與兵衛に害せらる。七左衛門亡妻の三十五日の法會を營める際、鼠暴れて血痕に染みたる紙片を落す。七左衛門之を拾ひ見て殺害人の與兵衛なるを知るに至り、與兵衛を捕へて毆打す（女殺油地獄）

しちらう　瀬尾七郎。　平家に仕へ遠州潮見潟の番所に勤む。文覺を殺さんとして暴風怒濤に吹捲かる（頼朝伊豆日記）

しづか　靜御前。　源義經の妾なり。義經主從の首實檢ありと聞き、畠山重忠に逢うて哀訴す。重忠其心中を憐んで義經の首を渡す。靜喜んで其首を携へ歸る途に梶原の郎黨番場の團久に捕へられしを、畠山の家士本田近經に助けられて重忠の奥方に預けらる。やがて磯野四郎・靜を迎に來る。靜乃ち重忠の恩を謝し暇を告げて歸る途中、また團久に捕へられんとせしを小柴郡司に救はる。是より尼となつて郡司の妻と同棲す（大磯虎稚物語）

義經に連れられて攝州尼が崎大物浦より乘船せしが、暴風に遭ひ吹き流されて住吉浦に漂着し、これより吉野山に分入り、義經と別れて都に歸らんとして道を踏迷ひ、山中の御堂にて花紫・若紫に巡り遇ひ、相共に吉野に引返して義經に逢ひしが、義經に諭されて再び名殘を惜んで別る（吉野忠信）

平大納言時忠の娘なり。平家滅亡後源義經の妾となり、義經に從ひて北野天滿宮に詣づ。この夜土佐坊昌俊に堀河の邸を襲はれ、靜防戰克く力む。義經都を開くや、靜別れて鞍馬山へと志し行く途中、北嵯峨野にて日まさに暮れ、祇王祇女の庵室に逗留中、義經の郎黨喜三太尋ねて來る。是時梶原の兵に襲撃され、捕へられて鎌倉に赴く道に大津二郎の家に泊りて男子を生む。景季その嬰子を殺さんとするを二郎の厚情によつて救はれ、之より二郎に連れられて奥州に下り、藤原季衡の館にて義經に逢ふ（孫靜胎内捃）

しつたたいし　悉達太子。　父は中印度迦毗羅伐窣堵城主淨飯王にして、母は摩耶夫人なり。太子は四月八日王宮歡喜園の産家に於て母體の右脇より生れ給ふ。その時異香薫じ三十二相の尊容備はり、天上天下唯我獨尊、無量生死於レ今盡矣と獅子吼し給ふ。習はずして諸藝に達し、傳へずして六十四部の諸論に通じ、一切智を兼ねられたるによつて悉達太子と名づく。隣邦拘利城主の娘耶輸陀羅女を娶り、一子羅睺羅を設く。太子十九歳にして深く人生の無常を觀じ、二月七日の夜過ぎて丑三つ時車匿をして馬の口取らしめ、竊に王宮を出でて檀特山に至り、此所より車匿を歸し、單身乞食の姿と變じて名を瞿曇沙彌と改め、阿羅羅仙人に就きて難行苦行を積み、遂に廓然大悟し給ふ。それより頭陀して須達長者の家に行かる。須達長者は提婆達多の法を信じて世尊に反對す。世尊乃ち佛法の不思議を示し給ふ。かくて大乘布教五十年、狗尸那揭羅城外跋提河畔沙羅雙樹下に於て最後の遺誡を示し、二月十五日寂然として涅槃に入り給ふ。寶壽八十一（釋迦如來誕生會）

しづはた　賤機。　蘇民將來の妻なり。一子宇賀石を夫の兄巨旦將來の養子に遣はせしが、巨旦の貪欲暴戾なるを怒つて之を取戾す。後、巨旦が其父食保の長を殺したること發覺するや、夫と協力して巨旦將來を殺す（日本振袖始）

しののめ　東雲。　京三條烏丸烏帽子折五郎太夫の娘なり。牛若が烏帽子を購ひに立寄りたるを見て懸想し遂に契る。後、牛若に扮して身代りたらんとせしを、彌平兵衛宗清に救はれて牛若の跡を追ひ、田村の宮居にて牛若と共に平家の將監物太郎賴方の軍と戰うて之を破る（源氏烏帽子折）

しのぶのまへ　忍前。　泉三郎忠衡の妻にして佐藤次信の妹なり。武藏坊辨慶が金の無心に來れるを引見せる際、忠衡外より歸り心ならずも態と義經を痛罵し辨慶を難ず。忍の前は夫の心事を知らず、堪へかねて諫言し怒るに觸れ、花石・乙の姫の二子を連れて追出さるるに至る。かくて後秀衡一周忌に菩提所無量光院新御堂に參詣し、路傍に琴を彈して施物を乞ひ、義經に遇うて其事情を語り夫を憤怨せしが、忠衡討死して始めて夫の心を知り、錦戸太郎國衡の兵と奮戰して本吉四郎を射殺し、尋いで我子の乙の姫を刺して夫の冥途の道連れたらしめ、花石を伴ひて高館に行き義經の軍に投ず（源義經將棊經）

じふごや　淨瑠璃御前の侍女なり。淨瑠璃御前と牛若との情事の媒介をなす（孕常盤）

淨瑠璃御前に從ひて峯の藥師の笹谷に隱れたるを、藤太に見付けられて將に斬られんとせしが三條の吉次信高に助けらる。後、牛若に逢ひ淨瑠璃御前の死を語つて哀悼す（十二段）

淨瑠璃姫の死後佛に歸依して尼となり、姫の冥福を祈る（源氏冷泉節）

じふざう　「ひろちか」を見よ。

しへい　左大臣藤原時平。　菅丞相を猜み、唐使裴文籍に賄賂を贈りて之と心を合せ、道眞を讒姦して陷れしが、後其報により雷神に打たれて死す（天神記）

しま　阿島。　大阪堂島新地天滿屋の遊女なり。長柄の百姓市郎右衛門と馴染む。嘗て明石の貞と云ふ客に連れられて芝居見物に行き、歸途舟に乘りて淨瑠璃を語る。市郎右衛門陸より其舟を注視す。貞之を見咎めて市郎

木武尊に隨行して筑紫に下り、熊襲梟帥と稱して八十梟帥と婚儀を擧げ、臥所に於て梟帥を刺さんとして殺さる（日本武尊吾妻鑑）

しぐれ　時雨。　備前國兒島郡藤戸の浦の賤藤太夫の娘なり。佐々木實綱に擒められしを佐々木盛綱に救はる。盛綱が藤太夫を殺して海に沈むるや、時雨は母・姉と共に狂女となつて藤戸の浦の汐を汲ふ。是時實綱來り盛綱の書付と僞りて時雨の母を奪去る。是に於て姉妹男裝して按摩となり、盛綱に近付いて矢を放ちしが中らず。母を尋ねて由比濱に逢ひ、佐々木高綱の妻となる（佐々木先陣）

しげいへ　鈴木三郎重家。　紀州熊野八莊司の住人にして龜井六郎重清の兄なり。鳥羽の里にて重清の茶店に憩ひ、後白河法皇の順禮修行し給ふに遇ひ、嘗て平重盛より托されたる黄金三千兩を獻ずれども、法皇之を受取り給はず、義經に與へて軍資となすべしとて平家追討の院宣を賜はる。是に於て重清と共に義經を尋ね、三州矢矧の宿に遇うて之を傳ふ（孕常盤）

主君義經及び弟の龜井重清を慕うて奧州に下る途中、三河國矢矧宿にて淨瑠璃御前の絲竹の調を聽き、立寄つて一夜の宿を請ひ、淨瑠璃姫と共に鎌倉に下り、賴朝の御前にて梶原景時・景季と抗論し、義經の寃罪を訴へて泣き且恨みしが賴家より慰められ、奧州に下つて重清に逢ふ。かくて後高舘の戰に死す（源義經將基經）

しげきよ　龜井六郎重清。　源氏の家士なり。菊水兵庫を賣れる際牛若の家來喜三太に遇ふ。また鳥羽の里に茶店を出して兄鈴木三郎重家に邂逅し、相共に後白河法皇の平家追討の院宣を奉じ、三州矢矧の宿に牛若を尋ねて之を傳ふ（孕常盤）

しげただ　畠山重忠。　北條時政が丙午生れの女は男に不祥なりと言ひし時、重忠之に答へて丙午生れの他の女を殺して祟を除くべしと言ふ。かくて後、由比濱に藤太夫の寡婦刑せられんとする場に臨み、丙午生れの女が夫に祟るといふ事の更に根據なきを辨じて、寡婦の娘の待宵・時雨を佐々木盛綱・同高綱に媒妁す（佐々木先陣）

源賴朝より嫡子賴家養育の命を受け、古今の名將を畫きたる繪障子を作りて賴家教育の資となす（曾我五人兄弟）

重忠は智仁勇兼備の良將なり。曾我二子が由比濱に引出されて首を刎ねられんとする場に來つて二子を救ふ。また大場三郎が百騎ばかりを率ゐて文覺の庵室に押寄せたる際、重忠馳付け上使と稱して三郎に閉門を命じ、鬼王兄弟をして股野五郎景久を殺さしむ（本領曾我）

源賴朝より梶原景季と共に義經主從の首實驗を命ぜらる。是時靜御前に遇ひ、其心中を憐んで義經の首を渡し、贋首を首實檢に持出でしが、景季に不審を立てられて之と爭ふ（大磯虎稚物語）

賴朝近習の者を集めて夢を判ぜしめし時、梶原景時進み出でて夢は僞も性もなきものといひしを、重忠備佛の故事を引いて景時の言を駁し、浪人改めをなすやう言上して足立景久を推擧したり。富樫宗重・足立景久の兩人肥前の七草城を攻めて拔くこと能はず。重忠幕命により大軍を率ゐて七草城に向ふ途中、琵琶姫と更科に遇ひ、兩女の懇請を容れて、更科には江の島辨財天より授かりし纐纈の注連繩を與へ、琵琶姫には畠山家相傳の陣笠を與へたり。かくて兩女及び足立景久・葛西清治が七草城を攻めて遂に之を陷れ武功を立つるや、重忠金の采配を清治に與へて葛西家を興さしめ、琵琶姫と景久、更科と清治の婚儀の媒妁をなす（傾城島原蛙合戰）

しげつぐ　横山三郎重次。　小栗兼氏を惡み之を縛して山形兵衞に渡さんとす、兼氏怒つて縛繩を切り、山形兵衞を殺す。重次益兼氏を惡み、駻馬鬼鹿毛をして兼氏を殺さしめんとして成らず。遂に親兄を伴ひ兼氏の館を訪うて之を毒殺す。かくて後親兄を放逐し、藤澤寺に行きて蘇生したる兼氏を刺さんとして殺さる（當流小栗判官）

しげとも　榛谷四郎重朝。　梶原平次景高一味の徒なり。二宮安清が富士裾野へ注進の早打を命ぜらるるや、己之に代り行かんと爭うて朝比奈義秀に毆打せらる（曾我會稽山）

しげなり　蓑輪彌五郎重成。　藤原忠文の郎黨なり。主の智謀淺きを知り、若しも秀郷との智惠競べに負けられし時は、直に秀郷を斬つて自刃なされと勸む。後、百足に變裝して惡事をなしたりしが、秀郷の郎黨鐵鎚丸に殺さる（傾城懸物揃）

しげのり　當麻判官重則。　春彥尊の傅なり。尊に謁して蹴鞠の由來を說き、夏仁親王の御顏に彩色したる鞠を出し、之を蹴て調伏せらるべきを奏す。後、持統天皇を飛鳥の里に襲撃して布引左馬頭勝虎に殺さる（持統天皇歌軍法）

しげのゐ　滋野井。　丹波領主由留木侯の姫君しらべの乳母にして、伊達與作の妻、三吉の母なり。「よさく」「さんきち」を見よ（丹波與作）

しげもり　小松內大臣平朝臣重盛。　賢明仁慈の德に富む。養和元年九月九日建禮門院より北山に茸狩の催あるやう申越され、其奉答使に獻上の山雀を持たせて遣す。或日加賀郡司師高が建禮門院の使者と稱して來り、左京之進義次を死罪に行ふべきを命ず。重盛不審に思へども門院の命令なれば詮方なく、義次を召して奧に連れ行き、義次の髻を切つて首桶に入れ、石を添へて重りとなし、齋藤左衞門尉勝賴及び越中次郎兵衞盛次に其首桶を持たしめて建禮門院の許に遣はす（娥歌かるた）

平清盛の長子なり。父の專橫を憂ひ、死を熊野權現に祈つて病を得。清盛名醫の藥を勸めたれど之を斥けて死す（孕常盤）

重盛病篤し。平家の一門之を憂ひ、相謀りて重盛の心を慰めんとす。重盛乃ち田植の催を所望す。是時熊野本宮の別當來つて重盛に謁し、白木箱を差出して曰く、本宮の社壇內にこの箱を隱してありきと。重盛命じて其箱を開かしむれば、重盛の容貌を畫きて、之を呪ふ賴朝の願文を納めたり。重盛怒つて曰く、我病を得たるは、父の惡心を矯むる能はずんば我命を取り給へと熊野權現に立願せしに由る。然るに我死なば賴朝は願成就と喜ばんことの愚やな。よしよし盛衰は天にあり恨むまじ。時こそ移れ耕作を見物せんと宣ひて田植を御覽あり。早乙女等夫返せ子返せの唄を歌うて挿秧す。重盛之を聞き彼等の心中を糺さる。彼等乃ち我夫或は我子が常盤に呼ばれて其儘

に放逐せらる（國性爺合戰）順治大王再び攻寄せ、大明を破つて都を南京に奠め、舊怨を報ずと雖も、國性爺東寧島に據れるを憂ひ、謀計を廻らせども效無く、東寧島に攻寄せ破れて滅ぶ（國性爺後日合戰）

しゆんぽ 春甫。 伊東の一族等石橋山にて狩を催しし時、楢柴茂れる中より春甫のよろぼひ出でたるを捕へられ、將に撲斬にならんとするを頼朝に助けられ、法眼春樂に救はれて其弟子となる。春樂が伊東祐親の女藤の前を預り、毒藥を服用せしめて之を殺さんとし、其藥の調合を春甫に命ず。春甫之を拒みしが春樂より恩知らずと罵られて意を決し、遂に藤の前を毒殺す。かくて後頼朝より義法と名づけられて其侍醫となる（源氏冷泉節）

しゆんらく 生田法眼春樂。 源氏の臣にして醫師なり。伊東祐親の女藤の前の病氣を診察し、其惡阻なるを知れど頼朝の胤を宿せるものと察し、態と病名を案じて藤の前を預りしが、祐親が藤の前を平家の侍山木判官兼高に嫁せしめんとするや、春樂は源氏の面目を保たしめんとし、弟子の春甫に命じて藤の前を毒殺せしめ、頼朝を助けて北條時政に依らしむ。後、頼朝其忠節を思ひ醫法と名づけて侍醫となす（源氏冷泉節）

じよきふ 「よへゑ」を見よ。

じよせい 小西如清。 堺の藥種商にして小西彌十郎の父なり。眞柴肥前大領久吉住吉詣の時、天下茶屋に茶屋を設け、千の利休をして久吉を犒はしむ。如清、久吉より朝鮮地圖を尋ね出せとの命を受けて、堺乳守の遊女小磯が所持せるを言上す。後、久吉大佛殿を建立して其供養の日、曾呂利・利休と共に咄伽となつて席に臨む（本朝三國志）

しらう 磯野四郎。 靜の弟なり。畠山重忠を訪うて靜を連れて歸る途中、三島の宿にて霍亂に罹る。靜藥を服せしめんとして小柴郡司に湯を請へば、郡司も霍亂に罹れり。四郎乃ち靜をして靈藥を郡司に與へしめ、自らは服用せずして死す（大磯虎稚物語）

じらう 澤潟二郎。 平惟茂の家士なり。禁中の變化退治に從ひて武功あり。或日梅の井が惟茂の邸を訪ふ。二郎引見して用向を問へば、惟茂樣には既に玲瓏君と婚約あるに、その上に世繼姫をもお請けなされしこと合點し難く御返答承りたしとのことに、二郎其取次に窮し遁辭を設けて逃げしを、梅の井に追跡されて惟茂の室に轉げ込む。かくて後、玲瓏・世繼の二姫の供し惟茂を尋ねて信濃に下り、戸隱山の惡鬼退治に武功を立つ（栬狩）

じらう 大津二郎。 盜賊磨針太郎の子なり。幼時壬生小猿と稱し、大盜賊熊坂長範の手下となる。父が義經に殺されてより、壬生小猿は大津二郎と改名して大津松本に住し、矢橋の浦の渡守となる。或日舟中の客僧の話に、己が子の育たぬ所以は父が常盤を害したる罪業の身に報いたるものと聞き、せめても靜を助けて常盤の怨恨を宥めんと思ふ折から、梶原景秀が靜を捕め來つて泊す。その夜靜男子を分娩す。景季其子を殺さんとす。是に於て二郎は我妻の腹を裂いて子を引出し、之を靜の子の身代りたらしめ、靜を連れて美濃國青野が原に至つて、景季の郎黨に出遇ひ、之を斷つて義經追討の院宣を奪ひ、奥州に下つて義經に謁す（孫靜胎內捃）

しらぎく 白菊。 足利十三代の武將義輝の侍女なり。御臺所に陪して賀茂社に詣づ。後、義輝の邪險の刄にかかつて死し、其怨靈足利義昭の夢に現はれ、瞋恚の眼をむいで義輝を追ふ（津國女夫池）

しらべのひめ 丹波の一城主由留木殿の姫君なり。「さんきち」の條を見よ（丹波與作）

しろざえもん 奥田屋四郎左衛門。 筑前博多柳町の遊廓奥田屋の主人なり（博多小女郎波枕）

しろじらう 狩野四郎二郎元信。 狩野祐勢の嫡男なり。文龜年間天滿宮の御告により、奥州武隈の松を畫かんとして越前氣比浦に赴く。時に土佐將監光信の娘光遊女となり遠山と名乘つてこの地に在り。四郎二郎・遠山に遇うて武隈の松の祕傳を授かり且之と契る。後、江州高島の館左京大夫頼賢の家老名古屋山三春平の推薦によつて同家に仕へしが、道犬・雲谷等に憎まれ、弟子雅樂介と共に遁れて、土佐將監光信の弟子又平の宅に潜む。或日春平島原大門口にて道犬の子の伴左衛門を斬る。是時遠山は宮と改稱し遺手となつて島原に在り。春平が四郎二郎の恩人たるを知りて其殺人の罪を救ふ。然るに春平は四郎二郎と宮との情交あるを知らず、爲に四郎二郎をして頼賢妾腹の娘銀杏の前との婚約をなさしむ。宮これが爲に失戀して憂死し、其魂魄留りて元信と契る。大永七年四郎二郎大嘗會の屛風に畫きて從四位下越前守に任ぜられ、光信を推擧して共に繪所に出仕す（傾城反魂香）

しろだいふ 白太夫。 博多に住し、荒藤太・十六夜・小梅の父なり。老眼にして物見えず。小梅を伴ひ牛に乘つて遊山に出で、荒藤太の不孝を歎き、菅丞相の流人となり給へるを悲しみ、小梅に早く夫を持つべきを語りしを、荒藤太に聞かれて毆打せられ姦無竹に助けらる。かくて後荒藤太に殺されんとしたる時、十六夜の魂魄宿つて百人力となり荒藤太を振倒す（天神記）

しろたへ 白妙。 伏見の里に住し、源氏の臣藤九郎盛長の妹にして平氏の侍彌平兵衛宗淸の妻なり。或雪夜常盤御前が三人の子を伴うて立寄り一夜の宿を賴む。白妙之を泊らす能はざるを悲んで愬に斷る。後、義經に屬して平家の將監物太郎賴方の軍を田村社に破る（源氏烏帽子折）

じろべゑ 二郎兵衛。 大阪本町新物店菱屋の手代なり。同家のお針女きさと相愛す。菱屋の別家由兵衛・きさに横戀慕し、きさの親太郎三郎の無筆なるに乘じ、これを欺いて娘を由兵衛に與へんとの證文を代書して之に捺印せしむ。きさ・二郎兵衛この證文を奪はんとし、主人に灼灸する間に主人の鍵を奪うて戸棚に藏めたる證文を破り、由兵衛に見付けられて難儀に遭ひしを、菱屋の隱居貞法の溫情ある說諭によつて改心を誓ひしも、其實かく簡單な戀でなく、且破りし證文をよく見れば、七貫五百目の家質證文なるに當惑し、我運命の拙きを果めて死を決し、おきさと共に今宮惠美須の森に走つて兩人縊死を遂ぐ。（實說は寶永六年秋）。二郎兵衛行年二十一（今宮心中）

しろゑもん 菱屋四郎右衛門。 大阪本町新物店菱屋の主人なり（今宮心中）

しんげん 武田大膳大夫晴信入道信玄居士。 甲州の國守なり。上洛の歸途大津より越後國守長尾輝虎と同船す。折しも甲

右衛門と一悶着を起ししが、お島の斡旋によりて事なきを得たり。市郎右衛門・弟の善次郎の爲に冤罪を負うて雜役の身となるや、お島も共に憂ひ、市郎右衛門と最期の宴を近江屋に張り、歸途善次郎に遇うて怨言を述べ、天滿屋に歸りて暗に別を告げ、夜更けて市郎右衛門の戶外に咳する聲を聞き、窓より鏡を出して星影を映し、無言の中に心中を示し合うて自刄し、男の魂魄と互に相伴うて中有の道に彷徨す（二枚繪）

（序云、寶說は寶永二年十一月十六日情死）

しまぬし 葛木島主。 秦川勝を訪うて其妻に面談し、川勝が天皇の軍に屬するやう懇望せしかど、川勝遂に肯ぜず。是に於て戰場に相見ゆることを約して別れ、聖德太子の軍に屬して物部守屋の副將弓削勝海と戰ひ、奮戰克く勤めしが不幸にして流矢に當る。乃ち政若・都賀若の二子に教訓を遺して斃る。時に歳五十一（聖德太子繪傳記）

じやうかん 山崎淨閑。 山崎與次兵衛の父なり。與次兵衛寃罪を蒙つて家に幽閉せられたる時、淨閑・梶田治部右衛門と將棊す。治部右衛門將棊に託して、淨閑より謝罪金を出し與次兵衛を助くべきを諷すれども、淨閑聽する氣色なし。後淨閑意を決し、與次兵衛を遊女吾妻と共に逃げ走らしむ（壽門松）

しやうじ 佐藤庄司。 源義經に黑毛の名馬を贈り、繼信・忠信の二子をして義經の軍に從はしむ（十二段）

じやうしう 安藤左衛門入道聖秀。 北條高時の部將にして義に厚し。鎌倉將軍成良親王に禮を盡したる爲に五大院右衛門宗重と口論するに至りしが、高時の仲裁にて宗重の嫡子宗房と聖秀の娘繪合姫との婚約をなす。然るに繪合姫が犬興に禮せしを父見咎めて態と怒り、繪合姫を勘當して宗房との婚約を破り、以て暗に里見義助の妻たらしめんとし、自らは病と稱して閑居す。或日家士新五・新六と圍碁して慰める際、繪合姫來つて義貞の手紙及び白旗を差出し、義貞に屬するやう懇請す。聖秀乃ち義を思ひ娘を思ひ、我首を携へ歸つて義貞の引出物になすべしとて自刄す（相模入道千疋犬）

しやうしゆん 土佐坊昌俊。 源頼朝の家士なり。頼朝の命を奉じ、北野天神の神樂堂に隱れて義經を狙ひしを辨慶に捕へられて義經の前に引据ゑらる。昌俊乃ち二心なきを誓うて放免せらる。この夜義經の居所堀河の邸を襲撃して喜三太に破られ、辨慶に捕へられて伊勢三郎に首を刎ねらる（㜕靜胎內捃）

「こんわうまる」をも見よ。

しやうとくたいし 聖德太子。 用明天皇の皇子にして佛法に歸依し給ふ。大連物部守屋の母日益が佛法を罵りし時、太子即ち不思議を見せ給ふ。後、夢殿にて修行せられ、攝州難波の里に大伽藍建立の志ありて、梵王宮を巡りて圖形を見給ふ。かくて和州大峯蘇莫閑嶽に降り、跡見赤檮等を率ゐて守屋を河內國稻村城に攻めて之を滅し給ふ（聖德太子）

じやうるりごぜん 淨瑠璃御前。 三河國矢矧宿の長者の女なり。源牛若が三條吉次信高に連れられて奧州に下るに當り其家に宿る。淨瑠璃御前・牛若を慕ひて之と契る（孕常盤）

侍女と共に琴を彈ずる際牛若の笛の音を聞いて慕ひ、遂に契を結び、藤太に追拂はれて峯の藥師の笹谷に侘住居せしを、藤太に橫戀慕されて口說かれしかども、其意に從はずして斬らる。牛若奧州勢を率ゐて西上の途次姫の墓を弔へば、墓石割れて姫の姿現はれ、瑠璃光如來と變じ給ふ（十二段）

義經と契りし昔を思ひ、二人の中を人形に合せて慰みしことを頼朝に聞えて召出さる。淨瑠璃姫乃ち頼朝等の前にて操狂言に托して、梶原父子の奸佞と義經の二心なきを語る。歿後淨瑠璃世界女護島に生れ天女となる（源義經將棊經）

しやか 「しつたたいし」を見よ。

しやのく 車匿。 悉達太子が爲に王宮を遁出で給はれし時、車匿犍陟駒を牽出し太子を乘せて檀特山に至る（釋迦如來誕生會）

しゆいつき 朱一貴。 江南の太守繼體王の落胤なり。王の病死後母と共に刀工陶民子に養はる。或日道士伍乘來つて朱一貴を一見し、大貴人の相あるに驚く。寶劍のことより父母非業に死するや、朱一貴は妹を拉して遁れ、芙蓉嶽に伍乘を尋ねて上り、伍乘を軍師として義旗を擧げ、福建の國守六安王を攻めて之を滅し、部下に擁せられて順成王と號す（唐船噺今國性爺）

序云、朱一貴は康熙六十年に亂を臺灣に起し、戰敗れて戮に就きし土匪の巨魁なり。これを繼體王の落胤となし、順成王と號したることに云へるは蓋し當時の流傳に據りしなり。

しゆびん 守敏。 西寺の僧にして空海の法敵なり。藤原熊鷹が母を弑して遁れ來れるを庇護して寺內に居らしむ。空海・以呂波の前蓮葉に乘つて飛行せるを見、之を咒詛して以呂波の前を地に落ししが、空海の法力によつて再び蓮葉に駕して去る。守敏はまた朝廷より雨乞の祈禱に召され、空海を咒詛して空海の法力に負け、己が惡事を口走つて悶死す（以呂波物語）

我慢邪欲の惡僧なり。空海の法力に及はぬを猜んで大海原土子の反逆に組し、北岩倉の深山に籠り、大威德の法を修して天下を覆さんとし大炊介仲經に追拂はる。是に於て邪法を以て龍神を水瓶に封じ、天下旱する罪を嵯峨天皇に歸して流し奉らんとして、空海と法力を比ぶることとなり、空海の眞言秘法により龍王の爲に慘死す（嵯峨天皇甘露雨）

しゆん 和泉國水間の里の農夫佐治右衛門の娘にして清十郎の妹なり。清十郎罪を得て遁走するや、おしゆん比丘尼となりて清十郎の行方を尋ね、清十郎の刑せらるる場に巡り遇ふ（五十年忌歌念佛）

しゆんくわん 俊寛僧都。 成經・康賴等と共に平氏を亡さんことを謀りしこと發覺して、成經・康賴と共に鬼界島に流され、配所にあること三年に及ぶ。或日丹左衛門尉基康・妹尾太郎兼康の兩人召還の使者となつて島に來る。俊寛は小松殿・能登殿の情によつて備前國まで歸參するを赦さる。俊寛嬉し涙に咽びしが、是時成經の愛人千鳥同乘を懇請す。俊寛乃ち千鳥の心中を憫み、己の代りに千鳥の乘船を請うて拒絶され、怒つて兼康を刺して俊寛一人島に取殘さる（平家女護島）

じゆんぢだいわう 順治大王。 韃靼國主なり。大明を攻破り思宗烈皇帝及び帝の寵姫華清夫人を殺して南京城に據りしが、國性爺の軍に破られて縛に就き、鞭たれて本國

引かれ佐渡に流さる。佐渡郡司山城入道三郎が資朝の首を刎ねんとするや、乃ち一首の辭世を詠じて從容死に就く（本朝用文章）

すけなり 曾我十郎祐成。 新田四郎忠常に逢うて嘗て虎御前が厚情に預りたるを謝し、不俱戴天の仇工藤祐經を斷らばその後必ず忠常の手にかかつて死すべきを約し、富士裾野の狩にて祐經を射殺さんとして果さず。喜瀬川の遊女龜菊に遇うて祐經のことを尋ね、建久四年五月二十八日の夜祐經の假屋に斬入り、本望を遂げて忠常に討たる（百日曾我）

山中にて犬坊丸・近江・八幡等に攻立てられて、危急の場を祐成に化けたる白鹿に救はる。祐成の姉が二宮太郎と婚禮の時、姉の爲に大礒の遊女より小袖を借りて祝宴の席に飾る。工藤祐經領内の土民に命じ石打に托して祐成を殺さんとせしを、五郎時宗駈付けし爲に漸く危難を免る。かくて後、大礒の遊郎に虎御前と訣別の宴を張り、其夜の夢に京の小二郎を斬殺す（曾我五人兄弟）

大礒の遊女虎御前と慇懃を通ず。虎御前の兄小柴掃部勝重・虎御前を尋ねて來り、父が非業の死を語り、共に仇討せんとし相伴うて遊郎を出奔す。祐成之を見追跡して其心事を知り、三人相共に箱根寺に五郎時宗を訪ふ。時宗母より勘當を受くるや、祐成は時宗の爲に哀訴し、母より二子に烏帽子小袖を與へらるる所哀れを極む。頼朝の御狩揃ありし時曾我二子は勝重と共に土民に扮し、勝重の仇番場忠太國久に近寄つて刺殺す（大礒虎）

大礒の遊女虎御前が曾我老母の閑居を訪へる時、祐成野より草を擔ひて歸り、母の意に從うて母を乳母扱にし、弟の五郎に聞咎められて泣き、母に迫りて五郎の勘氣を免さるるや哀訴し、母より小袖を貰ふ。曾我二子亡父の仇を報ぜんとして富士裾野の狩場に赴き、下人の鬼王・團三郎に託して乘馬に形見の品品を添へて母の許に歸し、建久四年五月二十八日の夜二子・頼朝の假屋に亂入し、亡父の仇祐經を斷つて死に就く（曾我扇八景）

秩父重保・朝比奈義秀が大礒の遊郎にて虎・少將を揚げて遊興せるを見、祐成の心平かならず狼藉に及ばんとせしが、重保より父の命なりとて黄金五十枚を惠まれて其厚情を感謝す。また龜菊の同情によつて虎・少將と相逢へる際、祐經の兵に包圍せられしも義秀の助勢を得て八幡三郎を斬る。かくて後富士裾野の狩場に赴き、虎・少將に逢うて暗に訣別を告げ、建久四年五月二十八日の夜頼朝の假屋に斬入つて亡父の仇祐經を殺し、仁田四郎と戰うて死す（曾我虎が磨）

母の病氣を看病して孝養を盡し、弟時宗が勘氣の赦免を母に哀訴す。かくて建久四年五月富士裾野に赴き、虎御前の手引にて工藤祐經の假屋に入りしが、祐經に覺られて魚の料理を命ぜらる。後時宗と共に忍入り、父の敵と名乘つて祐經を斬殺し、なほ頼朝の御所近く忍入つて殺さる。頼朝・祐成の孝心を激賞し、富士裾野に社を建てて其靈を祀る（加增曾我）

父祐泰が工藤祐經の爲に殺さる。是に於て曾我二子は父の讐を報ぜんとし、建久四年五月二十八日富士裾野の祐經の假屋に忍び入り、團三郎より母大病なる由を聞き、祐經より貰ひたる驛馬に乘り、狩場より引返して母を見舞ひ、母に書置と形見を殘して、再び狩場に赴いて夜頼朝の營中深く亂入し、祐經を斬つて本望を遂げ、なほ十數人を斬りしが遂に仁田四郎忠常に殺さる（曾我會稽山）

すけのぶ 曾我太郎祐信。 姿を變して菩提寺に行き、河津祐重の寡婦が一萬・箱王の二子を連れて墓參したるに近づき、遠からずして頼朝の世とならば伊東家も滅亡せん。貴女若し我意に從はば二子を我子として養育し、祐重の妄執をも晴さんといふ。寡婦其志に感じ、二子を連れて祐信に再嫁す（頼朝伊豆日記）

河津三郎祐重赤澤山にて非業の死を遂げたる後、其寡婦を迎へ其二子をも養育せるを、工藤祐經の爲に頼朝に訴へられ、曾我二子罪せられて由比濱に引出さるるや、祐信深く悲歎に暮れて自らも死せんとす（本領曾我）

すけもり 小松中將資盛。 平家の將なり。備前兒島に陣して源範頼の軍と對抗せしが、範頼の部將佐佐木三郎盛綱の藤戸浦先陣によつて破らる（佐佐木先陣）

すけゑもん 介右衞門。 長柄の百姓なり。報恩講の金を預り、懸硯の引出中に收めて其鍵を置忘る。後その金の無きに驚き、義子市郎右衞門が竊取したるものと思ひ、市郎右衞門を毆打して家を放逐す（心中二枚繪草紙）

すけゑもん 助右衞門。 京都四條烏丸大經師以春の手代なり。相手代茂兵衞の罪を發いて之を呵責し、また下婢玉を縛りて玉の請人赤松梅龍に渡し、梅龍に毆打せらる。かくて後おさん・茂兵衞が縛に就くや、來つて之を請取らんとして捕吏に叱責せられ、梅龍に額を斬付けらる（大經師昔曆）

すさのをのみこと 素盞嗚尊。 木花開耶姫を奪はんとして内裏に赴かれ、惡鬼の化身岩長姫に寶劍を奪はれ給ふ。是に於て惡鬼三熊大人を征服して寶劍の所在を白狀せしめて凱旋の途中、尊の臣鰐香背・尊に御謀反を勸めしかども、天稚彦・兒屋根の臣の諫言によつて御心を飜し、必ず寶劍を取返さんとして八岐の大蛇討伐を思召立たせ給ひ、蘇民將來の家に泊り、別れを惜まれて畔の柳を手折り、之を削つて小札となし蘇民將來子孫也と書付け、惡病の御守となすべしとて之を授け給ふ。かくて尊は出雲國簸の川上に着き給ひ、稻田姫に逢うて相思の仲となり給ふ。折しも姫大熱に犯さる。尊乃ち姫の左右の袖下を裂きて風を入れ、熱氣を漏して病を癒し給ふ。姫・大蛇の人身御供に當るや、尊劍を姫の袖に藏めしめて出し、其後を追うて行き、八甕に酒を湛へて大蛇を屠り、寶劍を奪返して凱旋し給ふ（日本振袖始）

すず 阿鈴。 新田義貞の部將亘利新左衞門の室なり。元弘三年卯月下旬義貞鎌倉攻の軍評定の席に出で、義貞の弟脇屋次郎義助との不和を諫む（相模入道千疋犬）

すまざう 須磨藏。 播州賀古川民部少輔藤原孝房の僕なり。孝房の父教孝の後妻が孝房夫妻及び其子の死を雲が洞に祈るを目擊して、これを孝房の異母弟教信に語る。かくて後變化及び熊源太と力戰して死し、其念力胴に留りて變化を退治す（賀古教信七墓廻）

すゑしげ 平山武者所季重。 源氏の家臣にして一の谷の合戰に武功を立てたり。赤坂の宿にて人買に勾引されたる熊谷直實の子の清姫・小太郎種直を救ひ、また江州粟津の松原にて熊谷入道が種直を葬送する場に邂逅

州より使者來つて、信玄の子勝頼と輝虎の娘衛門姫との情事を告げたることより甲越二家の不和となる。信玄三州牛窪の浪士山本勘介を其草菴に訪ひ、禮を盡して主從の約をなす。之より越後の軍と第一戰に勝利を得。信玄天目山に居を構ふ。家臣高坂政信・原昌俊御前に出でて、勝頼・衛門姫の婚儀を懇請し一議をなす。或夜窃に出でて信玄を害せんとす。勝頼聞出でて之を捕ふれば、かねて恨を抱ける村上義清なりしかば直に其首を刎ぬ。信玄其武功を賞して不興を許し、勘介の忠節によつて輝虎と和す（信州川中島合戰）

じんごろう　甚五郎。　大阪長町に住し、半七の義伯父なり（長町女腹切）

しんしち　新七。　江戸屋勝二郎の手代なり。主人の豪奢放逸を諫め、同僚の惣兵衛に陷られて追出さる。其後も屢勝二郎を諫めて用ゐられず。勝二郎資産を蕩盡して官より追放され奈良に落ち行くや、新七更に忠勤を怠らず。官新七の忠義に感じて勝二郎の罪を赦す（淀鯉出世瀧德）

じんぺい　岩木甚平。　岩木忠太兵衛の子にしておさゐの弟なり。おさゐが不義を犯して逝落したる行方を尋ね、おさゐに横恋慕したる川側伴之丞を斬り、おさゐの夫淺香市之進と連立つて、山城伏見町京橋の上にて女敵討の助勢をなす（鑓權三重帷子）

すぎ　下婢又は遣手の名を普通に杉といひ、鑓權三重帷子、曾我五人兄弟、長町女腹切、心中天網島などの中に見えてゐる。

すくね　伊駒宿禰。　山迹王子の道士なり。玉世姫の邸を襲うて桶職久馬平と戰ひ、また檢非違使時船と偽り豐後國眞野長者の家に行きて勝船に追拂はれ、百島太夫に捕縛せらる（用明天皇職人鑑）

すけかね　伊豆二郎祐兼。　工藤左衛門尉祐經の弟なり。建久四年五月二十八日祐經が曾我二子に殺さるるや、祐兼乃ち曾我二子の思者虎・少將を搦め、朝比奈義秀に痛罵せらる（加増曾我）

すけきよ　伊東九郎祐清。　伊東次郎祐近の子なり。亡兄河津祐重の一周忌に頼朝等を招きて追善を營む。祐近が頼朝を殺さんとするや、祐清乃ち頼朝にその實を語つて北條時政に頼らしめ、八重姫の生める頼朝の子の千鶴丸がとどきの淵に沈めらるるを救はんとして馳付けたれど及ばず。是に於て八重姫に頼朝に逢ふべきを諭して金を與へ、自らは忠孝の義を全うする能はざるを悲んで自刄す（頼朝伊豆日記）

すけさく　助作。　丹波柏原の農夫にして大經師以春の手代助右衛門の從弟なり。以春の妻おさんと其手代茂兵衛とが不義を犯して身を寄すや、助作はおさんの銀八百目を預りて返さず、且兩人を官に訴へたり（大經師昔曆）

すけしげ　伊東祐重。　河津三郎祐重ともいふ。桃節句の日平宗盛の館に伺候し、朝顔の携へたる文よりして工藤祐經・宗盛と一悶着を起し、心ならずも朝顔を刺す。その夜熊野と密會せるを祐經に發見せらる。かくて後、熊野と共に東路に下りしが、赤澤山にて近江小藤太・八幡三郎に射殺さる（本領曾我）
伊東祐近の嫡子なり。赤澤山にて狩獵の歸途工藤祐經の爲に射殺さる（頼朝伊豆日記）

すけちか　伊東次郎祐近。　伊豆の豪族なり。文覺上人を護送して配所に遷し、佛門に歸依して禪門淨心といふ。後室の言を聽いて八重姫の生める頼朝の子千鶴丸を松川の奥とどきの淵に沈め、頼朝をも害せんとしたりしが、後、頼朝に攻められて敗る（頼朝伊豆日記）

すけつね　工藤左衛門祐經。　源頼朝の權臣なり。畠山重忠と共に頼家扶育の命を受け、白鹿の毛にて畫きたる繪は物言ふとて朝比奈義秀と口論す。また婚禮の夜石打に托して祐成を殺さんとして時宗に懲さる。物言ふ繪を義秀に催促されて、乃ち河津三郎と股野との相撲に河津の負けたる繪を出し、其後方に八幡三郎を隱して物言はしめたるを義秀に觀破せらる（曾我五人兄弟）
頼朝に從ひて富士裾野の狩に行き、建久四年五月二十八日の夜曾我二子に其寢所に斬入られて殺さる（百日曾我）
伊藤祐親に所領を奪はれたるを遺恨に思ひ、祐親の子の祐重を敵視したり。偶朝顔が平宗盛の館に來て、宗盛の嬖妾熊野の老母の使者と稱し、老母の病氣に托して熊野の暇を請へるとき、其携へたる文に頼朝・河津などの文字ありしかば祐經之を見咎めて難じ、其夜熊野に欺かれて名劍友切丸を奪はる。かくて後近江小藤太・八幡三郎に命じて伊豆赤澤山にて祐重を射取らしめ、なほ祐重の二子を頼朝に訴へ、二子を捕へて由比濱に引出し、其首を刎ねんとして畠山重忠に阻まる（本領曾我）
非原經景が頼朝より舞鶴の紋を拜領したるを幸に、朝比奈義秀の舞鶴の紋を改めさすべきを言上して義秀と論爭す。經景が舞鶴の紋所披露の祝宴に大磯の遊廓郡郭屋に招かれて、其歸途義秀に脅されしが遂に建久四年五月二十八日の夜、富士裾野の假屋にて曾我二子に殺さる（曾我扇八景）
勅使中納言藤原定家卿が曾我五郎の力量を見たしと望みしを、祐經之を遮つて御所の五郎丸を推擧す。建久四年五月十五日頼朝の御諚と稱して、曾我二子の姉二宮安清の室を鎌倉に召出し、富士の御狩の間曾我の老母と共に人質とせんとせしを畠山重忠に阻まる。この月二十八日の夜富士裾野の假屋にて曾我二子に殺さる（曾我虎が磨）
朝比奈義秀が元服の祝儀を箱根權現にて取行ふや、祐經之に來會し箱王を侮辱し、箱王に下駄・傘を奪はれて口論せるを義秀に罵られ、箱王に下駄にて毆打せらる。かくて後頼朝に從ひて富士裾野に行き、假屋に大磯の遊女虎御前を招寄せ、曾我祐成に魚の料理を命ず。建久四年五月二十八日大藤内と酒宴して寢に就くや、曾我二子に斬入られて殺さる（加増曾我）
建久四年頼朝に從つて富士裾野に狩し、遊女龜菊を宴席に侍せしめ、曾我二子を駻馬に乘らしめて負傷せしめんとしたりしが、其夜遂に曾我二子に殺さる。時に五月二十八日（曾我會稽山）

すけとも　日野中納言資朝。　後醍醐天皇の御謀に參與し、北條相模入道を討滅せんとす。資朝の重臣石見守中原・相模入道に内應し、茶會に托して己が邸に資朝を誘引して弑せんとす。資朝辛じて免れ落ち行く途に八瀬の里にて菊姫に逅ひ、鞍馬路を尋ねて其家に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。資朝奮闘したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

卽ち蓮臺と現じ奮戰して賊を破り、葦舟によつて芹禰姬等を遁れしむ（聖德太子繪傳記）

ぜんしばう 禪師坊。 曾我五郎時致の弟にして父の死後生る。越後の國上寺に登りて僧となり、三河國鳳來寺にて初談義を勸むる際、虎御前に戀慕して醜態をなす。蓋し殊更にこの擧動をなして、母をして時致の勘當を赦さしめんとの深意に出でたるなり（曾我五人兄弟）

曾我二子の弟なり。曾我二子が亡夫の仇工藤祐經を斬つて本懷を遂げたる後、禪師坊は海野小太郎行氏に召捕られて刑に就かんとする時、母來つて悲歎に暮る。禪師坊卽ち三部經を說きて之を悟し、從容として死せんとせる時新田四郎忠常に救はる（百日曾我）

曾我二子討死せば其骨を拾ひ納めんとして、藤澤に來つて石花菜の店を出す。工藤祐經の家來近江小藤太及び梶原景高等立寄る。景高、小藤太に命じて藤澤寺の鐘を撞いて時刻を誤らしめ、以て曾我二子に同情せる二宮安淸の富士裾野へ注進の早打を妨害せんとす。是に於て禪師坊藤澤寺內の岩頭に登り、大音聲にて、これこれ飽相なされな時が違つたと呼ばはり、小藤太と格鬪して轉び落ちたるを、安淸飛掛つて小藤太を刺殺す（曾我會稽山）

越後の國上寺の僧なり。京小二郎が工藤祐經の下人近江・八幡を伴ひ、五郎時致なりと詐稱して來り禪師坊を搦め行かんとす。此時鬼王兄弟來合せ、小二郎の僞露顯す。禪師坊乃ち謀計を以て小二郎・近江・八幡を殺して鎌倉に赴く。賴朝、禪師坊の心を賞し、富士裾野に義經及び曾我二子の社を建てて其社僧たらしむ（加增曾我）

せんじゆひめ 千壽姬。 藤原孝房の子なり。祖母に化けたる蜘蛛に呑込まれ、死して賽の河原に遊ぶ。後、叔父教信及び弟の法明上人の回向の功德によつて極樂に往生し、母に抱かれて臘臈の姿を現ず（賀古教信七墓廻）

ぜんじらう 善次郎。 市郎右衞門の弟にして無頼漢なり。酒色に耽つて借財嵩み、其返濟に窮して父の預れる報恩講の金を盜み、其罪を兄に嫁す。かくて兄の馴染遊女お島に邂逅して怨言を聽かさる。兄遂に自殺するや、我身の非を悔いて兄の屍を納む（心中二枚繪草紙）

せんだんくわうによ 栴檀皇女。 大明十七代思宗烈皇帝の妹なり。逆臣李蹈天が韃靼兵を導いて皇帝及び華淸夫人を弑せし時、皇女は吳三桂夫妻に救はれて、海道の港より船に乘つて肥前の平戸に漂着し、和藤內に救はる。後、和藤內の妻小睦に連れられて明國に渡り、九仙山にて吳三桂に會す（國性爺合戰）

栴檀皇女と甘輝と婚禮の宴席にて甘輝と國性爺と口論を始め兩人不和となる。この夜石門龍反して來襲す。皇女身を以て免れ國性爺の跡を追ふ。敵の追擊急にして勾容縣にて身危くなるや、吳三桂仙人に化して現はれ皇女を救ふ。かくて後皇女は吳三桂に連れられて東寧島に渡り、國性爺に覲ることとなる（國性爺後日合戰）

せんつるまる 千鶴丸。 伊東祐親の娘八重姬と賴朝との中に生れたる子なり。祐親の爲に松川の奧とどきの淵に沈めらる（賴朝伊豆日記）

ぜんによりゆうわう 善女龍王。 浦島太郎と契つて生める子を在原行平に貰はれて若宮になされしが、恒寂僧都等河豚を食はして其子を毒殺せんとして海に釣絲を垂るるや、龍王乃ち其鉤三本を嚙切る。また美女に變じて松風の魂と入替り我子に逢ふ。松風が恒寂等の兵に嵯峨野に圍まれたる際、龍王廣澤の池より現はれ出でて我子を奪ひ、樹枝に登つて去る（松風村雨束帶鑑）

ぜんべゑ 皆朱善兵衞。 河內屋與兵衞の友なり。與兵衞等と共に野崎參詣の途中、遊女小菊を連れたる會津者の郎九と喧嘩す（女殺油地獄）

（皆朱の善兵衞は、皆朱の膳を善兵衞といふ名とし、赤顏にきかせたのであらう）。

せんゑもん 伊吹千右衞門。 伊吹重太夫の子にして、成田久米之介に殺されたる卯之介の兄なり。播州姬路の大名の石塔奉納の使者となりて高野に登り、吉祥院にて久米之介に邂逅す。是時久米之介の女犯暴露して寺を放逐せらるる折なりければ、千右衞門乃ち弟の敵思知れと、刀の背にて久米之介を打懲す（心中萬年草）

そうざゑもん 小町屋惣左衞門。 小町屋惣七の父なり。惣七が海賊の仲間に入れるを推知して大に怒り、惣七の留守宅の家財を捨賣にし、歸り來れる惣七をして早く遁れ去らしむ（博多小女郎波枕）

そうしち 小町屋惣七。 九州通ひの京商人なり。門司が關にて海賊毛剃九右衞門の船に乘合せ、海中に投込まれしも辛うじて一命を拾ひ博多に漂着し、馴染の柳町奧田屋の遊女小女郎を訪うて不運を語り歎く。是時偶然再び毛剃九右衞門等と相會し、脅迫せられて海賊の群に入り不義の富を嵩む。父惣左衞門は惣七の俄分限となれるを怪しみ、惣七を義絕して京の地を遁れ去らしむ。惣七乃ち小女郎と共に伊勢路に出奔せしが、途に逮捕せられて自刄す（博多小女郎波枕）

そうとく 吉文字屋宗德。 紺屋德兵衞の義舅なり。口入業治右衞門の通知によつて德兵衞夫妻が借金せしことを知り、怒つて德兵衞の宅を訪ひ、お辰に會して借金の理由を詰問す（心中重井筒）

そうべゑ 惣兵衞。 江戸屋勝二郎の手代なり。主人の放埓に乘じて許多の金を騙着し、忠義の手代新七を放逐せしが、遂に惡事をたくみしこと露顯し、官より其一味の徒と共に粟田口にて刑せらる（淀鯉出世瀧德）

そうま 舟越惣馬。 大和國宇陀郡薗門家の重臣なり。遠坂舍人等と奸策を廻らし、香春大炊之助顯定聟入の宴席にて、顯定を殺さんとして顯定の異母弟憲法の爲に妨げらる。後、禁中御能の會の警固を勸め、故意に棒を以て憲法の頭を毆打して憲法に刺殺さる（傾城吉岡染）

そみんしやうらい 蘇民將來。 貪保の長の子にして巨旦將來の弟なり。巨旦に田地を奪はれて家貧困となる。或日素戔嗚尊來られて一夜の宿を請はる。卽ち禮を盡して待遇し、出雲に下り給うては手摩乳方に泊り給はんことを請ひ、夫妻別を惜んで尊を見送る。尊其恩を謝し、蘇民將來子孫也と書付けて惡病の御守を授け給ふ。かくて後蘇民將來が我田より父の屍を發掘して驚き、巨旦が父を弑して我田に埋めたるものと知り、夫妻協

し、清姫を己が子の妻として貰ひ受く（大原問答青葉笛）

すゑたけ 初め卜部居武と云ふ。美濃の深山に住み、旅人の首を刎ねて梢に吊す。或日源頼光の通るを呼掛け、其威に服して臣となり、卜部季武と命名せらる。これより主從共に信州上﨟の山に分入りて山姥に遇ひ、江州高懸山の惡鬼退治に從うて武功あり（嫗山姥）源頼光の四天王の一なり。主命によつて江文宰相爲成夫妻を追放す。後、葛城山に良門及び土蜘蛛退治の軍に從ひて武功を立つ（關八州繫馬）

せいさん 靜三。 大阪新町遊廓扇屋の鑓手となつて玉と云ひしが、同家の太夫夕霧の歿後比丘尼となりて靜三と法名し、北嵯峨に庵室を結び夕霧の菩提を吊ふ。偶比丘尼の知貞來り、夕霧の娘春姫も來り、春姫の父狛左京進盛光も來り訪ふ。是時近藤兵庫守廣忠の兵に襲撃せらる。靜三乃ち知貞と共に遁走す。かくて後諸方を巡りて遊女の文を集めて青野の奥に玉章塚を造り、勸進に出でて奈良に至る。盛光の妻も尼となつて靜三の連れとなる。廣忠と道に遇うて靜三・知貞共に縛せられしが盛光に救はる（三世相）

せいじふらう 清十郎。 和泉國水間の里の農夫佐治右衞門の子なり。播州姫路の米問屋但馬屋九左衞門の手代となり、主人の娘お夏と相愛せしが、友手代の勘十郎及び源十郎の奸策に陷れられ、寃罪を負うて主家を放逐せらる。清十郎悲憤に堪へず、勘十郎を刺さんとして誤つて源十郎を殺し、脱走して長崎にて捕へられ、刑場に引出されたる際お夏の來れるを見て喫煙の火を貰ひ、煙管にて咽喉を突破りて自殺す。行年二十五（五十年忌歌念佛）

せいばんねん 齊萬年。 雲南の人にして軍術者伍乘の弟子なり。夜盗を働きしが朱一貫と力を格して負け、主從の約を結ぶ。福建國守六安王を其城に攻めて滅す（唐船噺今國性爺）

せいめい 安倍晴明。 陰陽師なり。花山法皇と右近の前と爭へる場に來つて、右近の前を祈禱して右近の前に宿れる物怪を祓ふ（傾城酒呑童子）藤壺女御の懷胎を賀茂河原に祈禱して、孕み給へるは皇男子なりといふ。後、藤壺女御殺害せられ、其怨靈毒蛇となつて宮中に現はれたるを祈禱によつて平伏したり。弘徽殿女御が其伯父按察左大將早岑の惡逆を憂ひて行方不明となるや、勅命を受けて之を占ひ、式神を遣はして其所在を知り、男山八幡宮に行きて女御に逢ふ。是時平次兵衞盛重等押寄せて女御を奪去らんとす。晴明祈つて小餘綾新左衞門尉景春の姿を出現して盛重等を追拂ひ、弘徽殿女御を都に移す（弘徽殿鵜羽産家）

せうしやう 少將。 假粧坂の遊女なり。宿王を隱まひ相愛して契を結ぶ（曾我五人兄弟）曾我五郎時致と契る。時致亡父の仇工藤祐經を討取らんとして富士裾野に赴きし後、枕邊に殘せる書置を見て直に其跡を追ふ。時致本懷を遂げて刑に就きし後は、髮を切り尼となつて時致の菩提を吊へり（百日曾我）假粧坂の遊女にして曾我時致と契る。井原左衞門經景が工藤祐經を上客として宴を大礒遊廓那郭屋に張るや、少將乃ち此機に時致をして祐經を討たしめんとして、時致の下人の團三郎が遊廓の夜番となれるを自ら之に代り、團三郎をして曾我二子に祐經の動靜を通知せしむ。後、虎御前と共に富士裾野の假屋に曾我二子を訪ひ、また曾我老母・虎御前と連立ちて時致の捕へられたる處に赴く（曾我扇八景）或夜虎御前と共に秩父重保に揚げられたるを、祐經一味の多勢に包圍せらる。少將乃ち辯舌を揮つて之を退去せしむ。後、虎御前と共に曾我兄弟の跡を慕ひて富士の狩場を彷徨ひ、近江小藤太に咎められて殺されんとせしを、人穴に逃入りて仁田四郎忠常に助けられ、祐成に逢うて訣別し、また時致が五郎丸に捕縛せられて引かるる場に赴く（曾我虎が磨）假粧坂の遊女なり。髮結の綱の宅に於て宿王を見て戀慕し、元服の祝儀として櫛を贈り慇懃を通す。曾我二子敵討の翌日、少將は伊豆二郎祐兼に捕へられて頼朝の前に引かれしが、頼朝及び朝比奈三郎の憐憫によつて曾我二子の首を見、泣く泣く御前を退出す。かくて後曾我二子の弟禪師坊が頼朝の意を受けて曾我二子の祉を富士裾野に建立するや、虎・少將は西國四國の戰場の繪馬を捧げて祭典を擧行す（加增曾我）

せうに 佐佐目少貳。 源頼平の乳母にして渡邊綱の伯母なり。老爺に扮して佐佐目少貳と假名し、源頼光に面會を求めて頼平の死罪を諫止す（關八州繫馬）

せきもんりゆう 五府將軍石門龍。 明の永曆帝の逆臣なり。韃靼主に内應し、國性爺逆心ありと讒奏し、遂に反して甘輝を攻破り、國性爺の據れる東寧島の工風の間に闖入して經錦舍に捕へられ國性爺に斬殺さる（國性爺後日合戰）

せみまる 蟬丸。 延喜帝第四の皇子なり。琵琶に妙を得。木幡の里にて右大辨早廣の兵に襲撃されしも、千手入道父子の忠勤によつて免るるを得たり。蟬丸もとより美男なりしかば、數多の女より戀慕され又恨みられもして盲目となる。是に於て父帝の勅命によつて逢坂山に棄てらる。或日直姫との情事を思出して逢坂山の歌を詠じ、計らずも直姫に遇ひ、また人麿、赤人の靈に遇ふ。早廣平定の後、安居院の小聖をして蟬丸の北の方を供養せしむ。是に於て女の怨靈去つて蟬丸の兩眼忽ち開く（蟬丸）

（序云、蟬丸は音曲家の祖として古來敬はる。竹本義太夫が筑後掾藤原博教と受領したる祝儀にこの題を撰んで新作したるなり）

せりつみひめ 芹摘姫。 聖德太子の妃にして膳穀貢の妹なり。守屋の家士東直駒の軍に圍まれしが、跡見赤檮防戰して直駒を斬り、其部下を追拂うて妃を遁れしむ。妃は侍女の玉鶴を連れて奈良手向山の邊に落ち延び、鉢開坊主の家に泊り給ふ。折しも調使丸來つて太子梵天宮へ參向せられたる由を物語れる際、守屋の部將弓削廣海來襲す。鉢開坊主

鎌倉に攻寄せたる際、高時をして東勝寺に退かしめ、敵軍と奮戰して死す（相撲入道千疋犬）

たかとき　北條高時入道崇鑑。北條九代の執權なり。犬を愛して政務を怠る。或日大倉が谷に闘犬の會を催し、里見義助を引出して猛犬に噛殺さしめんとして成らず。元弘三年五月二十二日義貞の軍と鎌倉に戰ひ敗れて死す（相模入道千疋犬）（序云、徳川綱吉の犬を愛護したる事を北條高時の犬を愛せしことに假托して、綱吉の失政を諷罵したるなり）

たかなは　笑高綱。東夷の首領外濱忍熊の重臣なり。源太夫の家に來り、日本武尊を隱まへるを疑ひて源太夫に湯起請を命ぜしが、源太夫の娘橘姫の美貌を一見して忽ち湯起請を免じ、其代りに橘姫を忍熊に奉らしむべきを約して去り、翌朝橘姫を受取らんとして來つて日本武尊に追拂はる（日本武尊吾妻鑑）

たかのり　兒島三郎高則。備前の住人なり。嵯峨の奥に隱栖して忠節を立つる時を待つ。或日舟に棹して釣に出で、雨夜の前に遇うて之を家に連れ歸りて厚遇す。また日像の寺に参詣して、計らずも鹽谷左京時平の兵の寺院を襲撃せるに際會し、卽ち奮戰して敵を破り、尋で高橋判平に欺かれて日像・月光等と共に舟に乘せられ、播磨沖に沈められんとせしを法華經の功力によつて難を免かれ、日像等を我家に伴うて保護し、日像と佛法の問答をなし、妙法の不思議に感じて深く法華信者となる（大覺大僧正御傳記）

たかはる　小山田前司高春。我子の高家が新田義貞の恩に感激し、其身代りとなつて大森彦七に斬らる。尊氏其首を見て疑ふ。高春一見して我子の首なるを知りしが、一旦獄門にかけて義貞か否かを正すべきをいひて其首を梟す。高家の妻も勾當内侍も來つて其首を見て泣く。高春乃ち高家の妻より高家が義の爲に義貞に代つて死したることを聞き、其行爲を褒め且つ曰く、義貞を助けたる子の親は尊氏には不忠となるとて自刎す（吉野都女楠）

たかひら　七草四郎高衡。奥州仙北の城郭に據り、葛西郡司清重と戰つて右の膝口を射られしが、幻術を行ひ雲霧に紛れて遁れ、京都に潜みて青物行商人となり、邪法を以て衆を惑はす。また島原の傾城更科を愛して之を請出さんとして富樫左衞門宗重の兵に圍まる。四郎幻術を行ひ、更科を連れ蛙に化して飛去り、更科の父手塚嶋樂を訪うて邪法を勸むる際、葛西清治に襲撃せられて姿を消す。後、筑紫の七草城に據り、近郷の土民を集めて死守し、寄手の部將富樫宗重を殺ししが、清治等の軍に攻められて城遂に陷る（傾城島原蛙合戰）（序云、この作は天草の亂（寛永十四年）を仕組みたるものにして、七草四郎高衡は其實天草四郎時貞を脚色したるなり）

たかふさ　藤原民部少輔孝房。播州の惣郡代賀古前令吏藤原致孝の長男なり。大内修造の命を蒙つて京に滯在中、九條の遊女宮城野の色香に溺れて御普請料を浪費し、世には熊野浦に難船して溺死せりと偽つて海人の笘屋に潜匿す。後、宮城野が神崎の遊女に轉ぜるを尋ね行きて、計らずも我子の眞光の行方を尋ぬることとなり、飛田の墓地を彷徨して弟の教信等に邂逅す。是時賀古郡主より大内獻上の擧柱を引來ることなどありて、孝房遂に本領安堵となり、賀古の庄に伽藍を建立す（賀古教信七墓廻）

たかふぢ　清原中納言右大將高藤。天曆帝の御宇驕奢を極む。諸國を遊覽して佐夜中山に來り、源頼光の宿せるを追拂ひて菱屋に泊す。折しも平政盛來つて物部平太の同宿を請ひ其保護を依頼す。高藤之を諾す。此夜平太・喜之介に斬らる。是に於て喜之介を捕へんとして頼光の宿舍を襲うて渡邊綱に破られ、都に歸つて頼光を讒奏す。また部下の者を岩倉大納言兼冬卿の邸に遣し、澤瀉姫を奪はんとして果さず。後罪を獲て鬼界島に配流せらる（嫗山姥）

たけ　一つ屋嘉平次の姉の内の飯焚女なり。嘉平次の姉の供して行く途に嘉平次の自分に對する痴話を明かす（生玉心中）

たけ　阿波の士平岡左近の下婢なり。奴の槌右衞門と契り、夫の放埒を忍んで親切を盡すを左近の室に聞かれ、其心をめでられて錢百匹を惠まる（夕霧阿波鳴渡）

たけ　松下嘉平次の下婢なり。眞柴肥前大領久吉が以前嘉平次に奉公せし時之と慇懃を通ず。久吉天下掌握の後、お竹は嘉平次の伴して久吉に逢ひ、舊馴染を語つて戯れかかる。また嘉平次の命を受けて岡崎町へ飲食物を買ひに行く（本朝三國志）

たけ　小餘綾新左衞門尉景春の妻なり。夫が藤壺女御を殺害したる嫌疑を受けて刑せられて後、羽倉伊賀介久國に奉公して阿竹といひ、慇懃を通じて遂にその妻となる。或日我子の小文五訪ひ來て互に身の上を歎く。久國聽いて感に堪へず、藤壺女御を殺せるは我なりと自白す。是に於て母子連立つて源頼光の廷に出で、冤罪によつて景春を刑したるを詰る。頼光乃ち景春を出して放免するや、これは夢かとばかり喜び、且つそれとも知らで敵の妻となりしを歎いて自刄せんとせしを貞光等に制止せらる（弘徽殿鵜羽産家）

たけくに　縣權正武國。吉田少將藤原行房の重臣なり。山王權現二十一社の修造に精勵せしが、常陸大掾百連に其用材を雜ぜられて大に怒る。行房が勘解由兵衞景逸に弑せらるるや、武國乃ち行房の妾班女を伴ひて大理廳に訴へ、吉田家相續につきて奏請す。後、行房の子梅若の行方を尋ねて東路に下り、隅田川畔にて故舊淡路七郎俊兼に遇ひ、主家の事情を語つて梅若の行方を問ふ。俊兼大に驚き、さては梅若君と知らずして殺したるを自白して自刄す。武國・主君の敵と呼ばはつて俊兼の死骸を拔討にし、百連を攻めて之を破る（雙生隅田川）

たけはる　藤内三郎武治。太鼓・鼓の藝人なり。兄盛治の意見に從はず、叛臣赤沼幸滿に屬して斯波義將を古川櫓頭清氏の邸に攻めて捕縛せらる。後、前非を悔い盛治と和して赤沼父子を攻む（雪女五枚羽子板）

たけひこ　吉備武彦。吉備國彦の兄なり。大碓王子暴戻なりしかば景行天皇の逆鱗に觸れ、斬罪に處せられんとせしを武彦申請けて我邸に伴ひ歸り、其惡心を矯正せんとして深く心を碎きしが、王子遂に改心し給はず、是に於て武彦は失望の餘り一子田鶴若を刺し、なほ妻と共に死を以て諫めんとするに及

力して巨旦を殺し、大山祇に伴うて出雲に下り、手摩乳の宅を訪うて素戔嗚尊に謁す（日本振袖始）

そろり　鞘師曾呂利。　眞柴肥前大領久吉に仕へ滑稽に長ず。嘗て奥小姓羽川寬三郎か久吉秘藏の鉢植の松を預りて之を枯したる時、曾呂利一首の和歌を詠じて久吉を祝す。久吉其歌をめで褒美を與へんとして欲する物を言はしむ。曾呂利乃ち紙袋に只一杯の米を拜領したしと述べ、幅五間長さ十四間の紙帳を倉廩に打被せ一座をして笑ひ興ぜしむ。久吉大佛殿を建立して其供養の日、曾呂利まづ登り大佛殿の屋上に腹這ひて煙草を喫し、鼻穴より煙を指して飛下る（本朝三國志）

だいかくだいそうじやう　大覺大僧正。　近衞經忠公の子にして月光と云ふ。幼にして両親を失ひ叔母に育まれ、亡父の菩提を弔はんとして嵯峨の大覺寺の僧となりしが、日像の德に感じて法華經の行者となつて宗意を究む。或日鹽谷左京時平の兵に寺院を襲はれ、また勅命と偽り日像等と共に舟に乘せられ播磨沖に沈められんとせしが、法華經の功力によつて難を免かれて兒島三郎高則の家に養はる。かくて勅命によつて日像と共に祈雨の修法をなして雨を降らす。爲に叡感によつて宗祖を日蓮大菩薩、日像を菩薩號、大覺は大僧正の號を賜はる（大覺大僧正御傳記）

たいそうくわうてい　太宗皇帝。　唐第二世の皇帝なり。大織冠鎌足の娘藤照姫を迎へて后妃となさんとし、萬戸將軍雲宗を使者として結納の進物を携へて日本に遣はす（大織冠）

だいそうじやう　鞍馬大僧正。　鞍馬山の大天狗なり。嘗て義經と師弟の契をなす。義經高館の戰に破れて蝦夷に赴くや、大僧正は老翁と變身して釣絲を垂れ、義經に逢うて戒むる所あり。錦戸太郎國衡等が義經を蝦夷に來襲せる時、大僧正乃ち義經を助けて敵を鏖殺す（源義經將棊經）

だいばだつた　提婆達多。　釋尊の法敵なり。十二歳にして一丈五尺四寸の身長を有し膂力あり。淨飯王の養子たらんとして得ず。また耶輸陀羅女を横戀慕す。釋尊出家の後、左倍軍・右倍軍と共に恒河橋畔に耶輸陀羅女を要撃して奪はんとせしを烏陀夷に破らる。釋尊成道の後までも害を加へんとせしが、遂に德に服して佛門に歸依し天王如來となる（釋迦如來誕生會）

だうけん　不破入道道犬。　六角左京大夫頼賢の家老なり。頼賢の抱繪師雲谷等と黨を結んで、狩野四郎二郎及び名古屋山三春平を放逐す。春平浪人となつて道犬の子伴左衞門を京都島原遊郭の大門口に斬殺す。道犬怒つて春平を竊盜殺人罪に訴へしが、却つて人を誣ふる罪に處せらる（傾城反魂香）

だうじゆん　岐阜屋道順。　大經師以春の妻おさんの父なり。おさん・手代茂兵衞と思ひがけなき不義に陥つて駈落する途に道順を訪ふ。道順憐んで銀一貫目を與へて遁れしむ。後に兩人捕吏に召捕られて刑場に引かるゝや、道順悲歎に暮れ身を以て罪を請ふ（大經師昔曆）

だうまん　蘆屋道滿。　花山天皇の頃の陰陽師なり。弘徽殿女御の御懐胎を賀茂河原に祈禱して安倍晴明と論爭す。藤壺女御殺害に遭ひ、其怨靈毒蛇となつて宮中に現はれたるを道滿祓除けんとして行方竭く。また弘徽殿女御を按察左大將早岑の邸に誘ひ出さんとして失敗し、清所の瓜茄子に魂を入れ加持して歸り、早岑と謀りて花山天皇を弑し奉らんとして遂に成らず。男山八幡宮に隱れ給へる弘徽殿女御を奪はんとして平次兵衞盛重と共に襲撃せしが、戰敗れて又五郎義長に殺さる（弘徽殿鵜羽產家）

たうみんし　陶民子。　江南の刀工なり。康熙五十七年二月福建國守六安王の命を奉じて寶劍を鍛へ、妻をして合鎚を打たしめしが、打納めの合鎚の時に妻の入髪ゆるみて鬢目より拔け落つ。陶民子これを見て密夫の爲に髪を切れるものと疑ひ拔打にせんとす。妻一室に駈込んで障子を閉づ。陶民子益怒り妻を目懸けて寶劍を投ぐ。妻直に其劍を拾うて莚下に隱し、他の劍を己が腹に突立つ。劍奉行馬府官は腹に突立てたる劍を奪ひ、寶劍と信じて持ち歸る。是に於て妻は夫に謝し、妾はもと明の皇族鑑鑑王に仕へ、連子の朱一貫は王の胤なるを語り、朱一貫を世に出さん爲己が髪を切つて朱一貫の髭に紵合せたることを明かす。陶民子は妻のこの言を聽いてさてはと驚き、己が短慮なりしを謝して決意す。是時馬府官の軍押寄せ、寶劍を取替へたるを詰つて陶民子を搦め去らんとす。陶民子自刄す（唐船噺今國性爺）

たかいへ　小山田太郎高家。　足利尊氏に仕へ怒に觸れて浪人となり、貧困に生活す。其妻・新田義貞の畑の作物を掠めて縛せられしが、義貞の同情によつて赦され、且粮を惠まれて歸る。高家其鎧を着し尊氏の軍に屬して出陣し、西の宮にて義貞と戰つて組伏せらる。義貞將に高家の首を刎ねんとして、其鎧を見憐んで之を助く。是に於て高家深く感激し、爲に其恩を奉ぜんとす。義貞戰敗れて窮せる時、義貞の身代りとなつて大森彥七盛長に斬らる（吉野都女楠）

（序云、この作は太平記巻十六、小山田太郎高家青麥を刈る條を脚色したるもの）

たかこ　高子。　淸和天皇の中宮なり。惟喬親王に奪去られんとせしを、在五中將業平に助けられて紀有常に預けらる。この事惟喬親王に知れ、親王乃ち有常を召喚して中宮の首を刎ぬべきを命ず。是に於て有常の室死して中宮の身代りとなり、中宮は紅梅に連れられ、淸和天皇を尋ねて高安の里に下る（井筒業平河内通）

たかさだ　鹽谷判官高貞。　高貞の室淸水觀音に詣づ。高武藏守師直その美貌を眺めて戀慕に堪へず、藥師寺公義をして口說かしむ。高貞之を見て大いに怒り、師直の膝に乘懸つて之を苦しむ。されど之が爲に師直より將軍家に讒奏されて切腹することとなる（兼好法師物見車）

（序云、鹽谷判官高貞は其實赤穗城主淺野内匠頭をかく言替へ脚色したるなり）

たかさだ　望月六郎左衞門高貞。　狛左京進盛光の家士なり。主君の娘春姫が繼母に虐待せられ、奈良猿澤池畔にて繼母及び其密夫の近藤兵庫守廣忠に殺されんとする場に出逢ひ、直に春姫を助けて廣忠等と戰ひ、山城伏見の南玉水の筧が下まで落ち延び、春姫に對ひ、惣に靜三比丘尼を尋ねて便らるべきを語り、痛手に堪へずして斃る（三世相）

たかしげ　長崎次郎高重。　北條高時の部將なり。元弘三年五月二十二日新田義貞等

たね　阿種。　因幡の藩士小倉彦九郎の妻なり。夫が江戸詰留守中養子文六の鼓師匠宮地源右衞門を饗し、强飲して夜に及ぶ。彦九郎の同役に礒邊床右衞門と云ふ者あり。かねてお種に懸想す。この夜竊に來つてお種を挑む。お種欺き明夜を約して歸らしむ。源右衞門隣室にありて之を聞き、謠に託して諷刺す。お種愧ぢて源右衞門に他言せざらんことを請ひ、醉狂の過より不義に陷る。床右衞門再び來つて兩人姦通の證を捉ふ。彦九郎歸國し妻の不義を傳聞して大に怒る。お種悔悟して持佛堂に自刄す（堀川波鼓）

たねなほ　熊谷小太郎種直。　熊谷次郎直實の子なり。年十三。姉の淸姫と共に父の行方を尋ねて迷ひ出で、途中人買に勾引され、赤坂の宿にて平山季重に救はる。かくて後新黑谷に父を訪うて不在なりしかば信濃路に赴き、江州粟津の松原にて病死す（大原問答靑葉笛）

たねはる　結城右衞門太夫種春。　三河國岡崎なる松葉川の橋守なり。或日今川仲秋及び千鳥の前來つて橋を渡り、其橋代二錢を出したるに、これを請取る際過つて其一錢を川中に落す。是に於て人夫を傭ひて水底を探し、其禮に三百文を與ふ。これより仲秋に賴まれて追手の兵十餘人を殺し、義兵を集めて四萬餘騎を得たり。時に嘉吉元年霜月下旬なり。荒川近平・大道寺勝房・靑砥藤次も來會し、大擧して貞廣の據れる駿府城を攻めて之を拔く（今川了俊）

たねふさ　葵大臣種房。　綾織姫の父なり。安康天皇御病身にて御讓位の御心あるや、種房乃ち帝位を泊瀨皇子に傳へ給ふべきを奏上す。後、雄略天皇玉體を罪し給ひて入牢しますを見て、種彦深く悲歎に沈む（浦島年代記）

たへゑ　太兵衞。　大阪靱油掛町八百屋伊右衞門の妻の甥なり（心中宵庚申）

たへゑ　太兵衞。　伊丹の商人なり。紀の國屋の妓小春を慕ひ、友と連立つて揚屋河庄に小春のゐるを見て立寄り、己に靡かしめんとして小春の愛人紙屋治兵衞を罵詈して出で、再び戻つて治兵衞が格子に縛せられたるを打擲し誹謗して、武士に聞き咎められて投付け蹈付けらる。後に太兵衞・小春を請出す契約成つて、小春・治兵衞と情死す（心中天網島）

たま　大經師以春の下女なり。以春たまに懸想して屢挑めども應ぜず。以春の妻おさん・手代茂兵衞と不義を遂ぐ。たま其媒介をなせるものとされ、助右衞門に縛せられて梅龍に預けられ、梅龍の手にかかりて死す（大經師昔曆）

たまつばき　玉椿。　本阿彌右衞門太郎淸祐の娘なり。藤内二郎盛治に羽子を拾はれて話合ひ、盛治に名刀を得させんとして之を屋内に引入る（雪女五枚羽子板）

たまつる　玉鶴。　物部守屋の女小性を勤め、膳綴負と慇懃を通ず。綴負・守屋に殺されしかば、玉鶴は其首を携へて聖德太子の妃芹摘姬を訪ひ、守屋の部將東直駒に攻寄せられしを、跡見赤檮に助けられて芹摘姬と共に奈良手向山に落ち行き、鉢開坊主に遇ひて其家に泊す。聖德太子の馬丁調使丸訪ひ來て、太子梵天宮へ參向せられたるを語る。是時守屋の部將弓削勝海來襲す。鉢開坊主やがて蘧麿と化現し奮戰して敵を破り、葦舟によつて芹摘姬及び玉鶴を遁れしむ（聖德太子繪傳記）

たまゆらぎみ　玲瓏君。　京都錦小路中納言冬通卿の娘にして美女なり。余吾將軍平惟茂と契る。或日門外にて金剛兵衞利綱と橘諸任の郎等との喧嘩より、惟茂が世繼御前と婚するを知つて憤り、我先に婚せんものと利綱を供に連れて輿入の際、諸任の郎等に奪去られしを利綱に取戻されて其家に養はる。世繼御前と共に惟茂より手紙を得て嫉妬せしが遂に心解け、共に倶に惟茂を尋ね、近江路を經て信州に下り、戶隱山にて惟茂と逢ふ（栬狩劔本地）

たまよのひめ　玉世姬。　豐後國眞野長者の娘なり。百島太夫を伴うて大和國檜隈岡に住み、花人親王を招待して慇懃を通ず。是時山彦王子に襲はれ、親王と共に西國に遁れんとして風波に流され、佐渡島に漂着す。後、豐後國に歸り、繼母に虐められて墮胎藥を呑み、却つて男子を生む。之を厩戶の皇子と申す（用明天皇職人鑑）

たむらまろ　坂上田村麿。　平城天皇の御宇大納言右大將たり。勢州鈴鹿の惡鬼退治の勅命を受け、戰勝を淸水寺に祈り、鈴鹿權現に祈願を籠め、遂に鈴鹿山の大高丸及び惡鬼を退治して京師に凱旋す（田村將軍初觀音）

ためかつ　「つるさは」の條を見よ（相模入道千疋犬）

ためとも　鎭西八郎源爲朝。　平治の亂に父爲義に屬して平淸盛・源義朝と戰つて武功を立つ。後、獵夫に扮して尾張に下り、濱の茶屋の藥湯に入浴せんとして、長田前庄景宗等が源義朝を騙討にせんとする陰謀を察知し、敵を追拂うて義朝の危難を救ふ（鎌田兵衞名所盃）

ためなり　江文宰相爲成。　詠歌姬の義父なり。賴平・詠歌姬の夫妻兇賊良門の一味となるや、爲成連坐の罪によつて、官位を削られ追放せられしが、後赦さる（關八州繫馬）

たらう　浦島太郎久壽。　龍宮の善女龍王と契りて設けたる子を在原行平に與へ、龍王より形見として貰ひたる玉手箱を携へて丹後水の江の浦に歸り、浦島塚を築きて村民に追立てられしが、龜彦の庄司に救はれて其奴となる。庄司が松風を殺さんとするを察知し之を刺す。荏丸の下人瀨見九郎玉手箱の蓋を開けば、紫雲棚引き浦島太郎忽ち白髮の老人となる。是時荏丸に亂入されて之を殺す。かくて後綴猿狂言の場にて恒寂僧都を殺す。武功をめでて網の明神の號を賜はる（松風村雨束帶鑑）

丹後國與謝郡水の江の浦里の人なり。圓大臣の家士乾平馬が漁りし大龜を貰ひて海に放ち、また平馬が泊瀨皇子を狙へるを見て之と戰へる際、太郎の妻海に投込まれて死す。大龜即ち太郎の妻に化け、太郎夫妻皇子に陪從して都に上る。然るに妻祝宴の酒に醉ひて眠れる際、平馬の來るに目を覺し、平馬を神殿に閉籠めて太郎をして討取らしめ、妾はもと龍宮の龜の化生なるを語り、忽ち龜となつて龍宮に歸る。かくて後太郎は雄略天皇に從うて葛城山に眉輪王を退治し、大島沖にて圓大臣を殺し、龍宮に赴きて乙姬に逢うて逗留すること三百五十五年。乙姬より形見の玉手箱を貰ひて嚴島に歸り、玉手箱を開きて七世の孫久富の難儀を救ひ、旱天に雨を降す。而し

んで、王子始めて武彦の心に感激し、前非を悔いて心を改め給ふ（日本武尊吾妻鑑）

たじべゑ　太次兵衛。　山城國西の岡樫原の土民なり。朋輩等と共に又次郎を訪ひ、又次郎の飼牛の主を見たりと稱して其祝の宴を勸め、精進料理を出されたるを怒りしが、又次郎より其理由を聽いて心解く（嵯峨天皇甘露雨）

たしらう　柊屋太四郎。　江州鏡山の遊郭柊屋長の子なり。屢父の邪慳狂暴を諫む（傾城酒呑童子）

ただつね　新田四郎忠常。　曾我の下人鬼王の妹より虎御前を助け下さるやう頼まれて、海野小太郎に捕へられたる虎御前の難を救ひ、また富士野の狩に入りもてあましたる大猪を刺殺す。頼朝その武勇を賞して名馬の松島月毛を與へんとせしを工藤祐經に阻まる。忠常怒つて祐經を殺さんと思へる折しも、曾我祐成が、祐經は祐成の爲には亡父の仇なれば何卒我に討取らせ下されたし。我本懷を遂げたる後は我首を討つて功名となし給へとの懇請を容れて別る。かくて後祐成は祐經を討つて忠常に斬らる。曾我二子の弟禪師坊の刑せられんとする時、忠常己が高名に代へて頼朝に請うて之を助く（百日曾我）

ただのぶ　佐藤四郎忠信。　源九郎義經の家士なり。義經が九條北町相屋の抱妓若紫の色香に迷へるを諫止せんとして勘當を受く。是に於て三非寺邊に忍び隱れしが、或日忍妻の花紫と途に遇ひ、また貞順尼と姿を變へたる若紫に遇ふ。時に梶原平次景早が義經を討取らんとして追ひ行くを見て之を斬り、忍妻と訣別して義經の跡を慕ひ行きて吉野山に逢ふ。是時山法師に闘難せらる。忠信乃ち踏止りて義經等を遁れしめ、奮戰して横川覺範・川倉法眼等を殺す（吉野忠信）

出羽國佐藤庄司の子にして繼信の弟なり。源九郎義經に仕へ、平家追討の爲に屋島に向ふ。兄繼信が義經の身代となつて能登守教經の矢を受留め深傷を負ふや、忠信は義經の命を奉じ、繼信を尋ねて連れ歸る（津戸三郎）

ただひら　泉三郎忠衡。　藤原秀衡の三男なり。亡父の遺命を守つて義經を奉ずること厚し。偶鎌倉の飛脚に遇ひ、その携へたる文を奪うて、兄錦戸太郎國衡等鎌倉に内應して義經を狙へるを知り、これより兄弟不和となる。忠衡心に義經を高館に置いては危險と思ひ、早く遁去らしめん爲に、辨慶が金の無心を言ひしを態と峻拒して義經を罵倒し、妻忍の前堪へかねて諫言するを、心ならずも怒つて妻子を追拂ふ。忠衡の心中萬斛の涙あり。かくて後、亡父の菩提所無量光院新御堂て行きて兄弟等の謀を窺へるを覺られて襲撃せらる。忠衡力戰し弟五郎を刺して自刄す。行年二十八（源義經將棊經）

ただひら　忠平。　朱雀院御宇の攝政なり。勅命を奉じて俵藤太秀郷と藤原忠文との兩人に智惠競べを命じ、七人の美女を出し、其中より錦木の前を言當てたる秀郷に、平將門討平の將軍宣下と錦木とを授く（傾城懸物揃）

ただぶみ　常陸大掾藤原忠文。　平將門討平の將軍宣下を得んとして、俵藤太秀郷との智惠競べに負く。これより將門と通じ、將門に美女を薦めて歡心を得んとして、京九條の遊女屋大文字長を語らひ、相共に將門の居城に赴く途中、將門の亡父良將の幽靈に遇うて非を諭され、まづ秀郷を討取らんとして秀郷に殺さる（傾城懸物揃）

ただまさ　大宅忠正。　源頼光の家士なり。佐佐目少貳來つて頼光に面談を求めたる際、取次に出で少貳の驕傲なる振舞に怒り、武力を以て追返さんとしたり（關八州繫馬）

ただみつ　邊見判官唯光。　若狭小濱の住人なり。源頼義の便り來れるを優遇し、名畫十幅を陳列して邊鄙假寓の徒然を慰む（大掛物十幅一對）

ただみつ　千手太郎忠光。　元は名ある武士なりしが、浪人となりて木幡の里あたりに住し狩獵に日を送る。或日深草山にて兎を射んとし誤つて蟬丸の袖を射る。忠光乃ち蟬丸に深く謝して其臣となる。これより蟬丸の敵右大辨早廣と轉戰して功あり。辻談義に身を僞して早廣を殺す（蟬丸）

ただむね　長田庄司忠宗。　尾張國内海の豪族なり。源義朝等來り便れるに乘じ、義朝等を殺して平家の恩賞に預らんと思ひ、悴景宗と謀つて義朝の家士鎌田正清を殺し、義朝を溜の茶屋の藥湯に導いて殺さんとして惡源太の爲に縛せられて殺さる（鎌田兵衛名所盃）

ただよし　河村金吾忠義。　北面の武士なり。以呂波の前が夫の身を案じて冤罪を蒙るや、忠義これを預りて深く同情し、愈死刑執行の日以呂波の前と稱して己が妻を刑場に引き、之が首を刎ぬる振して俄に太刀取判官代盛貞の首を刎ね、妻及び以呂波の前を連れて遁走し、奈良般若寺の傍に忍びしが、以呂波の前の夫藤原光輔を尋ねて神谷の宿に至り、空海と遇うて都に上る。西寺の僧守敏に陷れられて刑せられんとせしを空海の法力によつて救はる（以呂波物語）

たちばな　立花。　平城帝の御宇宮中第一の美女なり。勅命によつて百合若大臣と婚す。百合若蒙古征伐に赴きて行方不明となりしかば、立花愁歎して死す。是に於て立花の携へし綠丸と云ふ鷹の矢の精立花の姿に化して遠島に來り、百合若と同棲して四年の春秋を送りし中一子還城丸を生む。或日母子共に八幡に詣で、忽ち鷹の本性を露はし、雉子を攫んで引裂きしより遂に百合若に己が素性を打明く。是時別府雲濟蒙古の寇に扮して來襲す。綠丸の精乃ち翼を以て還城丸を保護し、都を指して飛んで百合若の船を導く（百合若大臣野守鏡）

たちばなひめ　橘姫。　尾張の豪農源太夫の娘なり。日本武尊來つて便られたる際御伽女に召さる。後、神樂乙女に扮して尊を尋ね出で、侍女を伴うて清見關を通過せんとし、關守細目太口に見咎められて通過を拒まる。姫乃ち飛掛つて關守を刺殺し、尋で日本武尊と逢ふ（日本武尊吾妻鑑）

たつ　阿辰。　大阪萬年町紺屋の女にして德兵衛の妻なり。子を伴うて鎗屋町なる姉を訪うて歸れば、夫は留守にして懸硯明けたる儘に夫婦の印判取散してあるに驚ける折しも、舅來つて口入業治右衛門より阿辰夫婦が借金したる理由を詰問す。お辰良人の惡性を押包み體よく誤魔化して歸らしめ、夫の歸るを待受け其改悛を促して泣く。この夜夫出でて歸らねば、或は馴染遊女の房と情死もやせんと案じて其行方を尋ね出づ（心中重井筒）

ず。或日今川了俊の墓に詣でて樒の枝に文を結付くる際、仲秋の來るに遇ひ、青砥五郎藤次の媒妁にて婚儀披露を相談せる折しも貞廣の襲撃に遭ひ、仲秋と共に身を以て遁れ三河國岡崎なる松葉川まで落ち延び、橋守の結城右衞門太夫種春に助けらる（今川了俊）

ぢぶゑもん　梶田治部右衞門。山崎與次兵衞の妻お菊の父なり。與次兵衞冤罪を蒙つて籠居するや、其父藩邸を訪ひ、將棊に託して謝罪金を出し與次兵衞を助くべき意を見し、また與次兵衞の爲に吾妻を請出さんとして井筒屋に赴き、難與平に邂逅し協力して葉屋彥介を縛す（壽門松）

ぢへゑ　紙屋治兵衞。大阪天滿宮前町の紙商なり。曾根崎新地紀の國屋の遊女小春と馴染む。伊丹の太兵衞も小春を慕ひて戀の敵治兵衞を罵詈す。而も小春は深く治兵衞を慕ひて太兵衞を憎む。治兵衞の妻おさんは夫の放蕩を苦にし、窃に書を小春に送つて治兵衞との絕緣を懇請す。小春泣いて之に從ふ。治兵衞の兄孫右衞門も治兵衞の身の上を憂慮し、武士に假裝し河內屋に小春を揚げて其心を探る。小春は治兵衞を思ひ切ること能はざるに太兵衞に請出されんとするを悲んで死を決すと雖も、曾ておさんの手紙に應へし詞の義理を重んじ、心ならずも孫右衞門に對して我身の治兵衞と疎遠になるやう賴む。治兵衞外にあつて之を立聞きし、小春の無情を憤慨し匕首を引いて小春に擲つて中らず。孫右衞門直に起つて治兵衞の手を捉へて格子に縛し、暫くして其縛を解いて改心を諭す。治兵衞乃ち小春の薄情を痛罵毆打し、曾て小春より貰ひたる誓紙を投返し、兄をして己が小春に與へたる誓紙を取返さしむ。かくて後おさん、小春の太兵衞に請出さるるを知るや、更に小春の身を氣遣ひ、曾て手紙を送つて治兵衞との絕緣を小春に懇請したる實を夫に打明け、小春の死を救はんとして所持金衣類全部を提出し、夫をして小春を請出さしめんとす。是時おさんの父五左衞門來つて治兵衞の放蕩を詰り、おさんの離緣を迫つて拉し去る。是に於て治兵衞死を決し、小春に逢うて大和屋に最後の宴を張り、兩人相携へ夜陰に紛れて網島に走り情死す。治兵衞年二十八。小春年十九（心中天網島）
（實說は享保五年十月十四日情死す）

ちやう　大文字長。京都九條の大文字と云ふ遊女屋の主人なり。藤原忠文の言付を聽き、忠文と共に傾城の懸繪を携へて將門の居城に赴く途中、忠文は俵藤太秀鄉に殺されてより、長・秀鄉の命を奉じ、將門の館に入つて九條の遊女の懸物の繪解をなす（懸物揃）

ちやう　柊屋長。江州鏡山の遊廓柊屋の主人なり。豪奢狂暴を極め抱妓を虐待せしが、遂に源賴光の四天王に縛せられて重科に處せらる（傾城酒呑童子）
（序云、これは大阪新町の茨木屋幸齋が豪奢を極め、享保三年九月所拂となりし事件を脚色したるなり）

ちやうけい　三好修理入道長慶。足利義輝を誘惑して京都九條町の遊女大淀に溺れしめ、且己が陰謀の發覺せんことを慮り、我子淡路守國長を斬つて忠實らしく佯り、遂に反して義輝を弑し、朝日の岡に館を構へて日夜酒宴に耽りしが、永祿十二年仲夏下旬足利義昭及び義輝の遺臣に襲撃せられて敗死す（津國女夫池）

ちやうさく　印傳屋長作。大阪西國橋に住す。茶碗屋嘉平次より價格十五六兩許の陶器を取寄せ、之を他に賣却して其代金を橫領し、嘉平次より催促されて既に支拂へりと稱して罵詈を極む。後また無賴漢を伴ひて嘉平次の宅に侵入し、財物を奪ひて遁走す（生玉心中）

ちやうべゑ　笠屋長兵衞。大阪北久太郎町の古道具商なり。妾いまの言を信じて養子聟與兵衞を疎み離緣せんとす。これが爲に娘お龜死するに至る（卯月紅葉）
長兵衞等連立ちて養子與兵衞を河內なる其親元に預けて歸る途に、神子町の梓巫女お辻の宅を訪うてお龜の口寄せを賴む。お龜乃ちお辻の口を藉りて今等の惡行を語る。長兵衞の姉之を聽いて大に怒り、長兵衞に迫りて今等を放逐せしむ（卯月潤色）

ちゆうざぶらう　忠三郎。大和國新口村の農夫にして龜屋忠兵衞の故朋輩なり。忠兵衞大阪藏屋敷の侍の委托金を橫領して遊女梅川を落籍し、相伴ひて忠三郎の留守中其家に立寄る。忠三郎歸宅し、捕吏の追求急なるを告げ、兩人をして直に御所街道へ遁走せしむ（冥途飛脚）

ちゆうだべゑ　岩木忠太兵衞。出雲藩士にして進物番を勤め、淺香市之進の妻おさゐの父なり。笹野權三及び川側伴之丞に遇うて、藩主の若君の祝言の悅によつて茶儀行はるべきを語り、茶道指南役淺香市之進不在なる故、眞の臺子の茶儀を行ふべき者を兩人に命ず。おさゐ・權三と不義に陷るや、市之進怒つておさゐの嫁入道具及び二人の娘を送付く。忠太兵衞深くおさゐの不行迹を悲しみ、其諸道具を門前にて燒拂ふ（鑓權三重帷子）

ちゆうべゑ　龜屋忠兵衞。大和國新口村の農夫勝木孫右衞門の子。大阪淡路町飛脚商龜屋の養子なり。大阪新町遊廓槌屋の遊女梅川と馴染み、之を落籍せんとして丹波屋八右衞門の爲替金五十兩を私消す。八右衞門爲替金の交附を迫るに及び、忠兵衞泣いて具に情實を告げ其猶豫を懇請す。八右衞門之を諾す。忠兵衞の義母妙閑はかかることとは知らず、忠兵衞をして八右衞門に爲替金を渡さしめんとす。是に於て忠兵衞鬢水入を包み小判金の如く見せて之を渡す。八右衞門窃ら忠兵衞の行末を案じ、遊女をして忠兵衞を疎ましめんとし、新町遊廓越後屋に赴き鬢水入を示し、誇りかに忠兵衞の窮狀を揚言罵詈す。是時忠兵衞藏屋敷の侍の委托金三百兩を懷にして越後屋に來り、外に立聞きして大に怒り、八右衞門と口論して五十兩を投付け、梅川をも落籍して鄉里新口村に伴ひ、舊友忠三郎の宅に立寄る。時に捕吏の追求急なるを知り、御所街道に遁走せんとして途に捕縛せらる（冥途飛脚）（實說は寶永七年極月五日死刑）

ちよ　阿千代。山城國上田村の農夫島田平右衞門の娘なり。大阪靭油掛町八百屋半兵衞に嫁す。夫の留守中姑より離緣を迫られて實家に歸る。半兵衞之を知らず、遠州より歸る途に平右衞門方に立寄り、始めて事情を聞き、お千代を伴うて大阪に歸る。お千代其後も姑の虐待に堪へず、遂に夫と共に享保六年四月五日宵庚申の夜家を出でて生玉の勸進所にて情死す。行年二十七（心中宵庚申）

ちりやくのすけ　德若智略之介。才若武略之介の兄にして故三位倫人富士丸の家

て自らは玉手箱を開きし爲忽ち白髪の老人となる（浦島年代記）

たらう　長田庄司太郎。　常盤及び牛若を捕へて護送する途中、朱雀野にて金王丸・盛長に殺さる（源氏烏帽子折）

たらう　宇治太郎。　太見縣主時景の嫡子なり。父と心を合し瀧渦姫の天皷を奪はんとして之を搦め、且姫の愛人呉服中將雪枝を覊ひしも、陸奥局及び金日丸に欺かれて追拂はる。また姫の檀那寺なる堺の大寺に押寄せて天皷を守れる獺介狐を殺し、審親王に謁せる際獺左衞門狐に摂伏せられて首を拔かる（天皷）

たろさぶらう　太郎三郎。　三田村の農夫にして、大阪本町新物店菱屋の下女おきさの父なり。「じろべゑ」を見よ（今宮心中）

たろざゑもん　太郎左衞門。　京都四條石懸町娼家井筒屋の主人なり（長町女腹切）

たろざゑもん　太郎左衞門。　大阪新町井筒屋の主人なり。茨木屋の太夫吾妻を送つて八幡に赴く途中、江戸屋勝二郎追放せらるるに遇ふ。是に於て吾妻の身請金二百兩の不足を引請けて吾妻を勝二郎に渡す（淀鯉出世瀧德）

だんざぶらう　團三郎。　曾我二子の下人なり。三河國鳳來寺に参詣し、禪師坊が虎御前に戀慕する醜態を見て悲憤に堪へず、之を蹈付けしが、其深意を知るに至つて無禮の罪を謝す。富士野の狩場にて京小二郎が河津三郎一代記の辻講釋せるを難じ、曾我二子に一味して敵討すべきを勸む。後、大磯にて工藤祐經の下人近江・八幡を捕へて曾我二子に渡す（曾我五人兄弟）

源氏の家士鎌田兵衞正清の郎黨加藤六有村の子にして、朝顏及び鬼王の弟なり。「おにわう」を見よ（本領曾我）

曾我二子の下人なり。百介と稱して大磯遊廓の夜番を勤めしが、遊女少將より工藤祐經の消息を聞いて直に之を曾我二子に報告す。後、鬼王と共に富士裾野より曾我二子の形見の品品を持ちて曾我の里に歸る途中、適に富士裾野の狩場に松明鯨波手負人を運ぶ混雜に事變起れる有樣を想見す（扇八景）

團三郎は箱王に、箱王は團三郎に扮して箱根權現に詣る。曾我二子死せし後、兄の鬼王と共に越後の國上寺に禪師坊を訪ふ。折しも京小二郎が禪師坊を訪ひて時宗なりと僞り、禪師坊を欺きて搦め去らんとするに遇ふ。是に於て團三郎は禪師坊と心を合せ、謀計を以て小二郎・近江・八幡を殺して鎌倉に赴き、源賴朝に召されて恩賞に與かる（加增曾我）

大磯に假裝して富士裾野の狩場に入る所を、工藤祐經の家來八幡四郎に捕へられて祐經の前に引出さる。是時曾我二子の來るを見て、團三郎頓智を以て曾我の老母大病の由を語り、二子をして母を見舞に歸らしむ（曾我會稽山）

たんないびやうゑ　丹内兵衞。　伴大納言宗岡の家臣なり。惟喬親王の命を奉じて清和天皇の中宮高子の首を受取る使者となり、首桶を携へて紀有常の留守宅に赴き、中宮の首を獲んことを迫る（井筒業平河內通）

ちかつね　本多次郎近經。　畠山重忠の家士なり。梶原景季の郎等番場忠太國久が靜を引立てて獄に投ぜんとするや、近經乃ち國久を投倒して靜を救ふ。後、相模川に曾我二子を伴うて川逍遙せる際、國久に遇うて口論す。源賴朝が御狩馬揃せし際、近經竊に曾我二子及び小柴掃部勝重を導きて國久を討取らしむ（大磯虎稚物語）

曾我兄弟が亡父の仇を報ぜんとして富士裾野の狩場に入込みし時、近經・曾我兄弟に同情して工藤祐經の所在を敎ふ（曾我會稽山）

ちかひら　荒川藏人近平。　今川伊豫守源貞世入道了俊の重臣なり。了俊の嫡子仲秋に陪從して京に在りしが、了俊の病革るや、仲秋と共に歸國す。駿河守貞廣に呼ばれて行く途に同役大道寺勝房に遇うて貞廣の叛心あるを聞き、直に勝房と共に富士權現の別當正圓坊の許に赴き、之を搦めて歸る途に青砥五郎藤次が貞廣に欺かれて自分等を召捕へんとして來るに遇ひ、卽ち實を告ぐ。是時貞廣叛旗を擧ぐとの報あり。是に於て三人相別れ、近平は都に上りて世評に意を注ぐ。或夜大磯小磯の境なる松原の辻堂に眠れる際、夜盜の雨具を盜むに氣付き、直に起上りて斬結びしが、折しも通りかかれる大道寺勝房に誰何せられて、夜盜と思ひしは青砥五郎藤次なりしかば、三人邂逅したるを喜び、相共に主君を尋ねて三河に行き、結城右衞門太夫種春の軍に合し、貞廣の據れる駿府城を攻めて之を拔く（今川了俊）

ちさと　大江千里。　融大臣の媒介によりて子の日と逢ふ際、子の日誤つて融の室青柳を刺殺す。是に於て千里・子の日共に死せんとしたるを冷泉坊の法師に諭されて思ひ止まる。千里勅使となり、融を尋ね奧州に下る途に、羅の長者・融夫妻に邂逅し、共に都に上る（融大臣）

ちてい　知貞。　遊女屋に鴇老（やりて）を勸めしが、事に感じて比丘尼となり、北嵯峨に靜三の庵室を訪ふ。是時近藤兵庫守廣忠に襲撃せられて靜三と共に遁る。後、靜三と共に遊女の文を集めて吉野の奧に玉章塚を作り、勸進に出でて奈良に至り、廣忠に縛せられしも狛左京進盛光に救はる（三世相）

ぢとうてんわう　持統天皇。　義子春彥尊の暴戾を惡んで、位を二の宮の夏仁親王に讓り王妃を定め給はんとして、諸國より孝女を召し、國栖の阿嫗の娘長歌が美貌にして孝心深きを愛でて王妃に定め給ふ。かくて天皇は春彥尊の逆謀によつて幽閉せられ給ひしが、淺衣に救はれて飛鳥の里に蒙塵し給ふ。尋で布引勝虎兄弟等の忠節によつて尊の軍を破り、春過ぎて夏來る泰平の世となる（持統天皇歌軍法）

ちどり　千鳥。　鬼界島の漁夫の娘なり。鬼界島にて丹波少將成經と契り、俊寬の養女となる。平家の家士丹左衞門尉基康・妹尾太郎兼康の兩人鬼界島流人召還の使者となつて來り、成經・康賴・千鳥を乘船して備後國敷名浦に至り、俊寬の下人有王丸が俊寬を尋ねて下るに遇ふ。基康乃ち千鳥を俊寬の形見として有王丸に渡す。是時平清盛の船もこの浦に泊し、鳥羽法皇を海に沈め奉る。千鳥直に海に躍入り水を潛つて法皇を救ひ奉りしが、自らは清盛に熊手を打立てられて無慙の死を遂げ、其怨靈瞋恚の業火となつて千鳥の死骸より現はれ、清盛の頭上に舞ひくるめく。是より清盛火の病に罹つて死す（平家女護島）

ちどりのまへ　千鳥の前。　野宮中納言公通の娘なり。今川左衞門尉仲秋と戀慕を通

なり。足輕二三十人を率ゐて夜廻をなし、五條の橋上にて牛若・辨慶を討取らんとして、牛若の家來喜三太に殺さる（孕常盤）

つねよ　佐野源左衞門常世。　佐野政常の子なり。叔父常景に知行を横領せられて浪人となる。鎌倉勢揃ありと聞き、妻に馬の口を取らせて赴く。「ときより」の條を見よ（最明寺殿百人上臈）

つぶらのだいじん　圓大臣。　媛中蒂姫を安康天皇の女御に奉り、家臣諸宗等と共に惡行多かりしが、遂に零落して海賊的の漁夫となり、浦島太郎久壽の船を大島沖に要擊して殺さる（浦島年代記）

つるくに　玄上延尉之介鶴國。　葵大臣種房の家臣にして性剛直なり。雄略天皇の命を奉じ中蒂姫を預りて鄭重に護侍す。或日綾織姫逃げ來られ、尋で諸宗攻入る。鶴國奮戰して諸宗を殺す。後、雄略天皇に陪從して葛城山の狩に出で、眉輪王を退治す（浦島年代記）

つるさは　鶴澤。　新田義貞の郎黨名張八郎爲勝盲目と佯りて琵琶法師となり、鶴澤と名乘つて成良親王が桐が谷に幽閉せられ給へるに仕ふ。或日狂女やよ梅來つて踊廻る。鶴澤逃げ迷ひて大般若の唐櫃中に隱れしを、やよ梅その唐櫃に錠を下す。是時番所の大將大場の前司來襲す。鶴澤唐櫃を破つて出で、大場と鬪うて之を追散し、成良親王の落ち行かるるに追付き、入間川の渡にて追擊し來れる敵と戰ひ島戶太郎を生捕り、義貞等と會す（相模入道千疋犬）

つるわか　鶴若。　佐藤次信の子なり。年少の時・母・叔母・乙若と連立ちて三河國に赴き、梶原景高が名馬磨墨の足を洗へるに遇うて其馬を奪ひ、義經の假寓せる奧州高館の城に赴く（源義經將棊經）

ていしりゆう　鄭芝龍一官。　明の忠臣なり。佞臣を斥くべきを言上して逆鱗に觸れ、去つて日本に來り肥前國平戶に住し、名を老一官と改め、平戶の漁夫の女を娶つて和藤內を生む。是時明朝は逆臣李蹈天及び韃靼兵に攻められて滅亡に瀕す。鄭芝龍乃ち妻子を伴うて明に渡り、獅子城主甘輝に頼つて明朝の恢復を圖る。されど年老いて爲すなきを慨ち、單身南京城に赴き、李蹈天と決鬪せんとして生捕られしも、國性爺・吳三桂・甘輝に救はる（國性爺合戰）

鄭芝龍東寧島に渡り、土民をして駙馬鐵平の幻術を信ぜしめて其收得金の上前を取り、國性爺の部下の者に捕められて生獄門の刑に處せらる。國性爺いかにもして鄭芝龍の罪を赦さんとするや、鄭芝龍理非を說き、土民の罪を赦すべきを切言して自刎す（國性爺後日）

（序云、簡傳—鄭芝龍字は飛黃。明泉州府南安縣人。天啓三年平戶の田川氏を娶つて成功及び七右衞門を設く。崇禎元年明國亂る。芝龍乃ち清兵と戰つて屢之を破る。後、太祖の末裔華釗を奉じて南方に據り、臺灣を根據として海盜となりしが、勢衰へて清に降り永曆十五年殺さる）

ていせいこう　「わとうない」を見よ。

ていほふ　貞法。　大阪本町新物店菱屋の隱居なり。「じろべゑ」の條を見よ（今宮心中）

てうしまる　調使丸。　聖德太子の馬丁なり。太子・調使丸に別を告げて梵天宮に登らる。調使丸は太子の妃芹摘姫の行方を尋ね、奈良手向山にて姫に遇ひ、太子の梵天宮に赴かれたるを語る。是時弓削薩海の兵に攻圍せられしが、達磨の助を得て敵を追拂ふ。かくて後聖德太子の軍に屬して、物部守屋を河內國稻村城に攻めて滅す（聖德太子繪傳記）

てぐるま　輦。　阿閇郡領諸宗の妻なり。夫が玄上廷尉之介鶴國に斫付けられて危きを見、助太刀せんとして夫に叱らる（浦島年代記）

てぐるましんわう　輦親王。　萬歲樂の催ありし時、太見縣主時景より故三位伶人富士丸の娘還潟の才色比なきを聞召され、還潟を召して宮仕せしめ、且還潟が家寶の天鼓を獻上せよとの御諚あり。後、和州三笠山の麓に御殿を造り乞巧奠の音樂を催せらる。時景父子の惡行暴露して彌左衞門狐に殺さるるや、親王は時景に苦しめられし吳服中將雪枝等を憐に思召されて有難き御諚あり（天鼓）

てつどうまる　鐵銅丸。　俵藤太秀衡の家士なり。琵琶湖の化物に變裝して惡事をなせる菱輪彌五郎重成を殺し、清瀧の侍女に扮して將門の居城に入り、廐の隅に臥し、將門の下人どもが女と思うて言寄るを投付け、豫て俵の中に隱し置きたる伏兵と共に將門の軍を破り、清瀧を保護して武功を立つ（傾城懸物揃）

てなづち　手摩乳。　出雲國簸の川上の長者にして、素盞嗚尊の妃稻田姫の父なり（日本振袖始）

てるてひめ　照手姬。　橫山郡司信久の娘なり。小栗判官兼氏と慇懃を通じ、兄の三郎重次に殺されんとせしを鬼王に助けられて遁走し、美濃の宿萬屋長に買はれ、常陸小萩と名乘つて水仕女となる。或日藤澤上人の供養の車を挽きしが緣となりて兼氏と邂逅し、夫妻相伴うて藤澤寺に參詣す（當流小栗判官）

てるとら　長尾輝虎。　越後の國守なり。もと長尾景虎と云ひしが、上洛して足利將軍義輝に謁し、輝の字を貰ひて輝虎と改め、歸途大津にて甲州の國守武田信玄と同船す。是時信州の國守村上義淸の使者來り、音物を出して輝虎の娘衞門姬を所望す。輝虎其無禮を怒つて音物を返す。また越後より使者來り、信玄の子勝頼と衞門姬と駈落したるを報ず。輝虎烈火の如く怒り、信玄に對し信州を戰場として甲越の兵雌雄を決せんことを約す。かくて信玄と初度の戰に敗れて諸將と謀る。諸將曰く、敵の軍略は山本勘介より出づるならんと。輝虎曰く、直江實綱の妻は勘介の妹と聞く。實綱何故に勘介を我に薦めざりしと責む。實綱まづ勘介の母を靡けんとして既に使者を出せりと言ふ所に、實綱の妻來つて勘介の母・妻の來れるを告ぐ。乃ち之を殿內に導き、輝虎手づから配膳するを、勘介の母無禮の言動をなして其膳を蹴飛ばす。輝虎怒つて刀に手を掛けしが、實綱の詫によつて事無きを得たり。輝虎なほ勘介を臣とせんと思ひしが、勘介の母死を以て義を立つるや、其心に感じて斷髮し法名を謙信と名乘る。甲州食鹽の缺乏に苦しむを聞き、輝虎乃ち食鹽を送る。而も甲越の兵結んで解けず、四度の合戰互に勝敗あり。永祿四年九月十日五度目の戰に謙信車掛りの陣法にて信玄の麾下に肉薄し、信玄を斫付けし際、別に一信玄ありて名乘り出づ。先に斫付けられしは勘介が主君に扮せしものなるを知るに至つて、謙信深く其忠節

臣なり。年頭の祝儀に大内にて萬歳樂を奏し、津の國の福神に參詣して歸る途に、富士丸の姫君還禍が太見縣主時景に襲撃せらるるに遭ひ、直に時景を追拂ひて姫君を救ふ。後、姫君及其夫人は服中將實枝の行方を尋ね、木津の渡にて彌介狐に遇ふ。大和狐に誘はれて舊親王の御前に出で忝き御諚を賜はる(天鼓)

ぢゑもん 治右衞門。 大阪堀江の口入業なり。「とくべゑ」を見よ(心中重井筒)

ちんしはう 陳芝豹。 散騎將軍甘輝の母方の叔父なり。雲南道硯石山の麓に住す。或日阿克將より利を以て誘はる。其夜甘輝永曆帝と共に來り倚る。陳芝豹これを阿克將に密告して歸る途中、幽水堤にて甘輝に斬付けられ、惡心を懺悔して阿克將の人相を教へ、甘輝をして阿克將を殺さしめて絕命す(國性爺後日合戰)

つう 小野阿通。 松下嘉平次の娘なり。惟任判官光秀の養女となり、春長の息春忠の妻となる。春忠阿通を伴うて花見に愛宕山に赴くや、光秀反して春長・春忠を弑す。阿通乃ち春長父子の首を携へ、春長の御靈所を訪うて入城を拒絕せられ、遠州濱松の父の許に歸る。或日嘉平次・眞柴久吉を連れて歸り、已嘗て光秀反逆の一味として加判したるの故を以て、阿通をして己を銃殺せしめて阿通の武功となし、阿通の胎内の子は春忠の胤なれば久吉をしてこれを守立てしめんとす。然るに阿通は父を銃殺するを拒み、俄に滿氣つきて分娩す。阿通はなほ父に强ひられて銃を請取るや、驀て我胸に當て銃聲一發死を遂ぐ(本朝三國志)

つかさのまへ 司の前。 在原行平の室なり。行平と松風と情交あるを嫉妬して、兄の荏丸に憤懣を明せしが、後、行平を尋ねて西の宮に來り、獨樂を剡して宿を借り、行平に遇うて嫉妬したるを詫ぶ(松風村雨束帶鑑)

つがわか 都賀若。 葛木島主の子にして政若の弟なり。十三歲の時政若と共に父の許に馳來つて、物部守屋邸に内裏を攻破つて公卿の室を捕へ去れることを注進す。父之を聞いて、味方の軍の意氣沮喪せんことを恐れ、佯り怒つて二子を勘當す。二子相共に守屋の副將弓削勝海の軍を攻めて、役の熊王・六田の岩切を殺ししが、この戰に父流矢に中つて死す。二子は母の月益御前を救はんとして秦川勝に捕へられ、母の繼文を見せられて憤怨す。然るに其繼文は下より上に逆讀して二子を思ふ情の切なるを訴ふるものなりしかば、川勝感に堪へずして味方となり、二子と共に守屋を河内國稻村城に攻めて之を滅す(聖德太子繪傳記)

つぎのぶ 佐藤三郎兵衞繼信。 出羽國佐藤庄司の子にして忠信の兄なり。源九郎義經に仕へ、平家追討の爲屋島に向ふ途に鷲屋三郎に遇ひて源平兩軍の樣子を聞く。かくて屋島の合戰に義經の身代りとなり、能登守敎經の矢を受留めて死す(津戸三郎)

つきますごぜん 月益御前。 葛木島主の妻にして政若・都賀若の母なり。物部守屋に捕へられて志紀の山館に幽閉せらる。或日監視秦川勝の袂に艷書を入る。川勝之を披見して月益の不貞を卑しむ折しも、垣を破つて闖入する者あり。之を捕ふれば月益の二子なりければ、月益の不義を語つて之を痛罵す。月益淚ながらに述べて曰く、若し落ち散つても艷書は妾一人の不義と繼文のやうに書きしかども、これには二樣の讀方ありとて、下より上へ逆讀すれば、二子を思ふ情の切なるを訴ふるものなりければ、川勝感に堪へずして誤解の罪を謝し、心を飜して天皇の御味方となる(聖德太子繪傳記)

つぐなは 淡路繼繩。 逆目王子の臣なり。葛城大君・花照姫を奪ひ、金輪五郎今國に追擊せられて輿を捨てて遁る。後、王子の殿中にて今國に首を捩切らる(天智天皇)

つくらにふだう 津藏入道。 曾我の下人鬼王の父なり。海野小太郎行氏に捕へられ、伴つて熊野別當辨眞なりと稱す(百日曾我)

つちまる 小野土丸。 山彥王子の道士なり。玉世姫の家を襲擊して桶職久馬平に組伏せられて殺さる(用明天皇職人鑑)

つな 渡邊綱。 源賴光の四天王の一人なり。按察左大將早岑が藤壺女御の御車に暴行を加へんとするを制止し、また壬生の里に藤壺女御の檢屍に行く。羽倉伊賀介久國を其宅にて搦捕り、按察早岑の居城を攻めて之を滅す(弘徽殿鵜羽產家)

源賴光に陪して佐夜の中山に赴き、宿舍のことより平政盛と口論す。其夜小糸・喜之介の兩人物部平太を斬り、遁走して來り賴る。綱之を助けて淸原右大將高藤・平政盛と戰うて勝つ。美濃路を通り山姥に導かれて、信州上路の山に分入り賴光と會ふ。これより江州高懸山の惡鬼退治に從ひて惡鬼を生擒し、高藤・政盛の罪惡を奏訴して政盛及び惡鬼を殺す(嫗山姥)

坂田公時と共に洛中夜廻をなし、兒漢齋明・保輔を殺し、市原野の戰に鬼同丸を斬り、源賴平を生擒す。また葛城山に土蜘蛛退治の軍に從うて武功を立つ(關八州繫馬)

つな 綱。 もと池田宿に熊野と名乘つて遊女を勤め、平宗盛に請出されて其妾となりしが、後髮結となつて綱と云ひ、箱王元服の髮を結ひ、河津祐重より貰ひたる弓懸を與ふ。曾我二子が工藤祐經を斷つて死するや、綱鎌倉に召出され墨染衣を着て行く。賴朝其志に同情して領地を與へ、曾我二子の菩提を弔はしむ(加增曾我)

つねかげ 佐野源藤太常景。 梶原景時・景季の惡行を惡み、箙の梅を折つて蹈みにじりしが、忽ち梶原の死靈に祟らる。また時定征伐の議に逆櫓の說を立て、天女丸に冷笑せられて大に怒り、これより時定の一味となり、天女丸を殺さんとして伊豆の御崎に陣を構へしが、戰敗れて房州探題に殺さる(最明寺殿百人上﨟)

つねかげ 井原左衞門經景。 下野の住人なり。鶴を捕へて賴朝に獻じたる恩賞に舞鶴の紋所を許さる。然るに朝比奈義秀の紋も舞鶴なれば、義秀と口論して馬より蹴落さる。また相模寺の亡父の墓に詣で墓地を擴げん爲、河津祐重の墓碑を取除かんとして曾我時致に追拂はる。かくて後紋所披露の宴を大磯遊廓揚屋に張り、工藤祐經を上客として數多の廓下を招待す(曾我扇八景)

つねこのひめ 恒子姬。 大納言藤原爲光の娘にして弘徽殿女御と申す。花山天皇の寵遇を得給ひしが、數多の宮女に嫉妬され、病を得て早世し給ふ(傾城酒呑童子)

つねとき 難波十郎經時。 平氏の家士

に來り、强盜藤還入道・村遂等に捕へられて殺さる（十二段）

源義朝の妾なり。義朝殺されて後平清盛の妾となり、病と稱して朱雀御所の閨深く籠り、腰元横笛・妾上雛鶴の兩人をして往來の人を招き入れしめ、色を以て心を試し、源氏に從はぬ者をば横笛をして斬殺さしむ。或日彌平兵衞宗清頬冠にて入り來れるに抱付いて痛罵せられ、深く恥ぢて實を語る。是に於て宗清の情によりて横笛・雛鶴と共に清盛の邸を脱走す（平家女護島）（序云、朱雀御所での濫行は、吉田御殿の俗說〔五〇九頁、柏屋通れば云々の條を見よ〕を脚色したるものなり）

ときひら 鹽谷左京時平。 近衞家の養子となり、養母と心を合せて月光を殺さんとし、月光の師事せる日像の寺院を襲擊して兒島三郎高則に敗られ、尋で日像・月光等を舟に乘せて播磨沖に沈んめとして成らず。また雨夜の前に遇うて口說けども意に從はざるを怒り、遂に養母を弑して佛罰を受く（大覺大僧正御傳記）

ときまさ 北條四郎時政。 伊豆三島明神に參籠して、夢中に源頼朝を助けて宸襟を安めまゐらせよとの告を蒙り、其歸途頼朝に遇うて我館に伴ふ。時政の娘朝日の前・頼朝と通ず。時政敢て咎めず心窃に喜ぶ。かくて後頼朝を助けて平家討伐の兵を擧げしむ（頼朝伊豆日記）

源頼朝より堀川の邸なる義經討伐の命を蒙り、自ら宿の中に身を隱し、義經と馴染める九條北町柏屋の抱妓若紫の手紙を添へて義經の邸に昇込ましめ、義經に對面して謀叛の實否を訊したる上、懇に西國落を勸めて都を開かしむ（吉野忠信）

丙午生れの女子を娶るは男子に不祥なりとて、關白兼實の女と萬壽との婚約に異議を主張す（佐佐木先陣）

ときむね 曾我五郎時致。 海野小太郎行氏が津藏入道を囮として鬼王及び花野を捕ふ。時致傾城屋と佯りて傾城請狀を讀み、海野を誑して其捕へられたる者を取戻す。また喜瀨川の龜菊に逢うて、頼朝が工藤祐經の假屋に行かんとするを思止まらしむるやう頼み、其恩報じとして、祐經を斬つて本懷を遂げたる後は龜菊の手にかかりて死すべきを約し、建久四年五月二十八日の夜富士野の狩場に亂入して祐經を討ち果し、龜菊と見誤つて女裝せる五郎丸に生捕られ刑に就く（百日曾我）

幼名を箱王といひ、十郎祐成の弟なり。工藤祐經が石打の祝儀に托して祐成を殺さんとせしかば、箱王・兄を助けて祐經を懲し、母に叱られて勘當を受く。また箱王出家を嫌ひ、少將に隱まへられて之と契り、元服して五郎時致と稱す。禪師坊の執成しによつて母より勘當を赦され、愈不倶戴天の仇を報ぜんとして少將等と訣別の宴を大磯に張り、其夜の夢に京小二郎を殺す（曾我五人兄弟）

母の意に從つて箱根の寺に登りしかども、僧となるを嫌ひ窃に寺を脫走して元服し、母より勘當されて自害せんとす。是に於て母勘當を赦して小袖を與ふ。而して時致亡父の仇を報ぜんとする決心益固し。頼朝が御狩馬揃する場に祐成・勝重と共に馬を牽き來り、祐成の外舅の仇番場忠太國久を殺す（大磯虎）

出家を嫌ひて箱根の寺を忍び出で、亡父の廟所相模寺に參詣し、母に遇ひ僧とならざるを叱られて勘當を受く。是時井原左衞門經景が河津祐重の墓を取除かんとするを見、怒つて經景の僕十餘人を殺し、近江小藤太を捕へて耳鼻を殺ぎ、經景を追拂ふ。かくて後亡父の仇工藤祐經を大礒遊廓扇屋に狙ひしが、朝比奈義秀に遮られて其意を果さず。祐成・虎御前の執成しによりて母より三日間の勘氣を赦され、且小袖を貰ふ。かくて後富士裾野に赴き、下人鬼王・團三郎に託して乘馬に形見の品品を添へて母の許に歸し、（形見の品品は舞之本・夜討曾我に出づ）勘氣の日延を懇請し、後世の祈禱に三部經を讀誦せんとして虎・少將に怪まれ、傾城三部經を讀んで笑ひに紛らす。建久四年五月二十八日の夜曾我二子・頼朝の狩場に亂入し、祐經を斬つて亡父の仇を報じ、時致は五郎丸に捕へらる。頼朝深く曾我二子の志に感じて曾我の家族に領地を授く（曾我扇八景）

河津三郎祐重の次男にして幼名を箱王と云ふ。僧となるを嫌ひて老母より勘氣を受け、窃に北條時致の館にて元服し、北條の供廻を連れて馬に鞭ち、曾我の里に歸る途中、女乘物に暴行を加へしが中に老母あるを見て仰天し、後悔して匿る。時致常に勘當の憂苦に堪へず、曾我の里に行き、門内より奧を見入りし折しも、老母が祐成の祝儀に粽を作りて端午を祝はんとして臼を挽きけるが、立つて奧に入りし隙に飛入つて、母の手助けにもと力任せに臼を挽廻す音に母に見付けられ、恐る恐る逃去らんとするを呼留められ、勘當は眞意にあらざる旨を言聞かさる。是時秩父重保・梶原源太入り來る。母は心ならずも時致を叱責して勘當の實を見せしが、重保の執成によつて母子盃を交はす。かくて後時致富士裾野の假屋にて近江小藤太を斬り、其夜頼朝の假屋に亂入して亡父の仇工藤祐經を殺し、なほ頼朝の寢所近く亂入して五郎丸に捕縛せらる。然るに五郎丸の言語驕傲なるを怒つて縛繩を切り、朝比奈義秀に搦められんことを請ふ。頼朝・時致の孝心勇武に感じ、縛を解いて自刄せしむ（曾我虎が磨）

兄祐成と共に建久四年五月二十八日の夜、富士裾野の假屋に亂入して亡父の仇工藤祐經を斬り、小舍人五郎丸に捕へらる。頼朝・時致の孝心意氣を愛して自ら手を下し縛す。「すけなり」の條を見よ（曾我會稽山）

ときゆき 坂田藏人時行。 坂田前司宗時の子なり。荻野屋の遊女八重桐と馴染みて父より勘當を受く。父が岉部平太に殺されしより平太の行方を尋ねて仇を報ぜんとし、八重桐と離別し源七と名乘つて煙草賣となり、澤瀉姬の侍女より三味線の一曲を所望せられて之を彈じ、八重桐と邂逅し其意見に感じて自刄せしが、其魂魄火焰の轉風となつて八重桐の胎內に宿り、金時となつて再生す（嫗山姥）

（序云、煙草屋源七の名は、大内煙草と呼んで有名だつた煙草屋源七に因んだものである。浪花靑樓志（寶曆九年刊）大内蒻の條に「佐渡島町二丁目北横町蒻屋源七といふ者瓢簞町貳丁目街頭小店を構、匂ひ入りの蒻を賣、元來煙色好く金絲纏の如し、世人大内煙草と呼び世に發行す、大坂中大内蒻の權輿なり、享保の末元文の初まで當所に住せしに、諸店大内蒻賣るやうになる故にや、當所を退きて今の住所不詳」）。

ときより 北條時頼。 祝髮して最明寺道

に感じ、甲越兵を解いて相和す（信州川中島合戰）

てるふさ　布引滝次郎照房。 布引先生勝成の子にして左馬頭勝虎の弟なり。兄と共に持統天皇を幽閉せる牢舍の番を勤めしが、眷彦尊より夏仁親王を尋出して弑すべしとの命を受く、是に於て照房は夏仁親王を助け奉らんとし、兄と口論して父より勘當せらる。これより照房は親王を尋ねて笠置山に入り、人家を求めて宿を借りしが、此家の主人は萬九郎と云ひて山賊を働き、我妻の卷筆を殺したることを知り、格鬪して萬九郎を刺ししが、この時夏仁親王出でて照房を叱り給へるに驚き、直に萬九郎を引起して罪を謝し、相共に義兵を擧げ、夏仁親王を擁して飛鳥の里に赴き、持統天皇の軍と合して眷彦尊の軍を攻破つて之を滅す。時に大寶元年四月上旬（持統天皇歌軍法）

てんざ　傳三郎。 京都島原遊廓舞鶴屋の主人なり、名古屋山三春平が不破伴左衞門を斬つて捕吏の取調を受くる際、傳三郎は鴇老（やりて）のお宮と共に春平を辯護して之を助く。また狩野四郎二郎祝言の五日後に其宅を訪つてお宮の死を語つて悲しむ（傾城反魂香）

てんざぶらう　傳三郎。 大阪北久太郎町古道具商笠屋長兵衞の妾お今の弟なり。長兵衞の娘お龜に戀想し、長兵衞の家督を奪はんとして奸策を廻し、お龜の夫與兵衞を陷る（ひぢりめん卯月紅葉）お龜の死口を寄せて、傳三郎等の惡事暴露するや、長兵衞の姊大に怒り、杖を以て傳三郎等を毆打し、長兵衞に迫つて傳三郎を放逐せしむ（卯月潤色）

てんちゆうばう　天仲房。 福建國守劉乃耶六安王近習の臣なり。甕灑せうほが池を渫乾す奉行を勸めて池中より大鼎を引上ぐ。また六安王と心を合せ暴戾の行多かりしが、遂に朱一貫に滅さる（唐船噺今國性爺）

でんない　和田傳內。 播磨の人にして幼名を石松と云ひ、こかんの乳兄妹なり。こかんを連れ歸らんとして大阪に來り、こかんが堂島新地平野屋の遊女となれるを聞き、和泉屋にこかんを招き、こかんの歸國を嫌ふを諫めて意見す（心中刃は氷の朔日）

てんによまる　天女丸。 北條時賴の嫡子にして時宗の幼名なり。大江僧正廣辨より源義經の再誕なりと言はる。宇都宮新庄司友平を師範として文武の道を勵む。北條時定叛して伊豆の御崎に據るや、天女丸其討手に向ひ、蜑に淺瀨の案內をさせて海を渡つて之を破る（最明寺殿百人上臈）

とうがん　等巖。 六角左京大夫賴賢の抱繪師雲谷の弟子なり。雲谷と共に土佐又平を攻めて敗績す（傾城反魂香）

とうがんをしやう　黑谷の東岸和尙。 おさん・茂兵衞不義の罪によつて刑せられんとする時、馳付けて兩人を救ふ（大經師昔曆）

とうだ　藤太。 淨瑠璃姬の母の甥にして無頼漢なり。淨瑠璃姬と牛若との祝言を聞いて嫉妬し、六波羅よりの使者と伴りて姬を追捕ふ。峯の藥師の笹谷にて姬を捕へて口說きしが、己が意に從はざるを怒つて之を殺し、姬の侍女をも殺さんとして三條吉次信高と戰ひ、遂に樵夫に撲殺さる（十二段）

とうだいふ　藤太夫。 備前國兒島郡藤戶浦の鹽燒なり。娘の待宵・時雨が佐佐木三郎盛綱に救はれたる禮に藤戶浦の淺瀨を案內せしが、また人に敎へもやせんと思はれて盛綱に殺されて海に沈めらる（佐佐木先陣）

とうない　關藤內。 北條時政の詰所に詰め、八重姬を殺して所持金を奪ひしが、怨靈に祟られて死す（賴朝伊豆日記）

ときあきら　齋明。 藤原保輔の子にして性凶惡なり。父と共に兇賊將軍太郎に一味し、江文宰相爲成の邸に闖入し、繫馬の幕を掠奪せんとして渡邊綱・坂田公時に殺さる（關八州繫馬）

ときかげ　太見縣主時景。 聲親王の御意を受けて故三位伶人富士丸の家人智略之介・武略之介の兄弟を召し、大內にて萬歲樂を奏せしめ、故富士丸の娘還潟姬の才色比なきを言上し、親王より還潟姬及び其家寶の天鼓を所望せらる。時景家に歸り妻の言を聽いて心變じ、己が娘夕映をして還潟に代へて宮仕せしめんと思へど天鼓なきに窮し、還潟姬を賺して巴丸と共に狐釣に出でしめ、奸策を以て天鼓を奪はんとして成らず。堺の大寺に押寄せ、還潟に化けたる彌介狐と格鬪し、天鼓を奪うて之を聲親王に奉る。親王天鼓を取つて打ち給へども更に其音出でず。折しも丹波の稻荷社の千年狐人に化けて現はれ、時景父子の惡行を罵つて之を摑殺す（天鼓）

ときさだ　北條式部冠者時定。 北條時賴の弟なり。時賴が禪定三昧に入るを見て、佐野源藤太常景と謀り、伊豆の御崎に據りて叛し、天女丸と戰うて敗績し、佐佐木廣綱に射殺さる（最明寺殿百人上臈）

ときつな　直江大和之介時綱。 越後の國守長尾輝虎の家士にして、直江山城守實綱の弟なり。主君の娘衞門姬に陪從して信州諏訪明神に參詣す。姬・武田勝賴と共に陷り、村上義清に橫綴蔡せられて行方を失す。時綱乃ち姬を尋ねて上州黑髮山に赴かんとする途中雨に遭ひて辻堂に宿り、腰なる瓢を傾け醉うて臥す。其傍に臥せる男瓢を奪うて飲み盡す。時綱怒つて斬合はんとせしが、よく見れば知合ひの武田信玄の家士の高坂彈正政信なりしかば、これはとばかりに心打解く。是時適に兵火を認めて各馳け赴く。これより甲越の戰結んで解けざりしが、遂に和睦となり、時綱・姬君の御供して目出度く局を結ぶ（信州川中島合戰）

ときは　常盤御前。 梅津源左衞門正國の女、源義朝の妾なり。義朝殺されし後、子を助けん爲に淸盛の妾となり、窃に重盛の短命を淸水觀音に祈り、その下向道に五條の橋上にて牛若と遇ふ。後、淸盛の子を孕みて切腹せんとす。淸盛大に怒つて酷刑を命ず。是に於て常盤刑場に引かれしが、牛若・辨慶に救はる（孕常盤）長田庄司に召捕られて護送せらるる途中金王丸・盛長に奪返され、三幼兒を伴うて大和路に落ちんとして、雪中伏見の里に行暮れ、家を求めて一夜の宿を賴みしも、斷られて其軒下に臥し、三子交も衣を脫いて母をいたはる。宗淸に追拂はれてまた雪の中を迷ひ行く（源氏烏帽子折）牛若丸が鞍馬山東光坊の許を去りたることを聞き、その行方を案じて、乳母千種を伴ひ京七條朱雀の住家を出で、牛若を尋ねて鏡の宿

とほる　河原左大臣源融。　愛人青柳が殺されてより追慕に暮れ、怏怏として樂まず。冷泉坊の法印の媒介によりて、青柳に似たる靈の前を見そめ、その跡を追うて鹽竈の浦に下り、鑑の長者に雇はれて潮汲となり、靈の前と共に出奔し、大江千里等に邂逅し、相伴うて歸洛し、鹽竈の風景を都六條河原院の庭內に摸して、裕福に世を終ふ（融大臣）

ともかぜ　高梨政太郎友風。　高梨吉內左衞門友重の養子なり。友重一族の者と所領爭ひに、坊門中納言資雄が非道の裁判せしを恨んで資雄を殺害したり。是に於て友風は養父が敵討に遇はんことを慮り、其身代りにならんとして自ら友重と名乘りしが、病に罹り氣晴に櫻塚に赴きて、櫻祭文を聽き居たりしが、資雄の子の教信より敵討の聲を掛けられ、敵より病身を討つは本意にあらずとて、全快の上勝負を決せんことを約す。これより友風深く攝養す。偶中務秀光等が熊源太等に追擊せられて遁れ來り、女・子供を隱まはれんことを懇請す。友風告ぐるに、我は人より預れる命なれば不慮のことありては申譯なしとて懇請を拒絕せしが、熊源太等の暴戾を見るに忍びず、秀光に助太刀せんとして病身の爲に斃れ、中山寺に葬送せられしが、是時熊源太等の爲に橫死を遂げたる藤原孝房の室の亡魂友風の死骸に入る（賀古教信七墓廻）

ともづな　簑田二郎纜。　渡邊綱の從弟なり。源賴信・賴平の家督定めの時、小蝶の色香に迷ひ裳に縋つて戲る。小蝶卽ち七首を拔いて纜の烏帽子懸緖を切つて、座中不行跡の者あるを叫ぶ。纜深く愧ぢて自刄せんとせしが、賴平の處置によりて事なきを得たり。かくて後賴平・兇賊將軍太郎に一味して、渡邊綱に縛せられ死罪と定まるや、纜死を以て賴平の改心を促して之を救ふ（關八州繫馬）

ともひら　宇都宮新庄司友平。　北條時賴の嫡子天女丸の師範となり、義經の御狀を讀んで天女丸を教訓す。北條時定叛して伊豆の御崎に據るや、天女丸と共に之を攻めて破る（最明寺殿百人上﨟）

ともやぎ　友柳。　長田庄司忠宗の下人なり。鎌田兵衞正淸の酒宴の席に出で、銚子を正淸に投付けてむずと組みしが、正淸に引伏せられて刺殺さる（鎌田兵衞名所盃）

ともゑごぜん　巴御前。　木曾義仲の妾なり。義仲死したる後和田義盛に嫁して朝比奈三郎義秀を生む。鎌倉御所にて阿古屋の前と常夏とが鹿論せる時、巴御前兩女を摑んで引出す（曾我會稽山）

ともゑまる　巴丸。　吳服中將雪枝の家人なり。鳥追となつて太見縣主時景の家に忍入り、雪枝の愛人澤潟姬を奪はんとして覺られ、また時景の奸策にかかつて澤潟姬と共に狐釣に出づ。この時能勢稻荷社の千年狐出でて、時景惡心にて澤潟の家寶の天鼓を奪はん爲に汝等を狐釣に出したるを告ぐ。折しも時景主從公卿に扮して來り、親王の御使と偽つて天鼓を奪はんとして、澤潟の家人智略之介・武略之介の兄弟に妨げらる。後、巴丸は盟合の小坊主狐に誘引せられて蠶親王に謁し、有難き御錠を賜はる（天鼓）

とよふね　桃園染五郎豐舟。　天曆年中播州法華山觀音寺の西王母が桃を大內に獻ぜんとして都に上る途中、大納言民部卿藤原元方の次女二位の君と遇うて相思の仲となる。豐舟が西王母の桃を獻じたるを嘉して、元方の長女薄雲の聟となつて元方の家督を嗣ぐやう綸旨あり。かくて其祝言の時豐舟は薄雲の醜女なるを見て逃出さんとして二位の君に遇ふ。薄雲嫉妬に燃えて紛擾を起す。これより豐舟は放浪の身となり、大和郡山にて家來の眞砂勝海に邂逅す。この時二位の姬・薄雲に追はれ來つて縊殺さる。豐舟怒つて薄雲を殺し、身の不幸を嘆いて剃髮し、勝海の妻小萩が室津の遊女となれるを訪うて、客に誘出されんとする由を知り、態と己が小萩に懸想せるやうに見せて、客の心を損ぜしめ以て之を救はんとし、却つて勝海に毆打せらる。然して身請の客といふは敵の土師別當村正なりしかば之を斬殺す。かくて後梨壺の五歌仙の教にて心開け、二位の姬の形見品を燒けば、其烟中に二位の姬の髣髴たる姿を現ず。これより奈良興福寺に詣で、南大門にて我子の稚若及び勝海等に遇ひ、尋で梨壺の五歌仙の勅使となつて來るに遇うて本領本官に復することとなり、寶藏の中よりは二位の姬が播州法華山觀世音の美女と現じて佛力を語る（日本西王母）

とらごぜん　虎御前。　大磯の遊女にして曾我祐成と契る。祐成が亡父の仇工藤祐經を殺さんとして富士裾野に赴きし後、枕邊に殘せる書置を見て直にその跡を追ふ。曾我二子本懷を遂げて刑に就きしを二子の弟の禪師坊に知らせんとして旅に出で、松江の里にて禪師坊が海野小太郎に召捕られたるを聞き、詮方なく引返し、髮を切り尼となつて祐成の菩提を弔ふ（百日曾我）

小柴郡司の子にして幼名をよし姬と云ふ。大磯に賣られて遊女となり虎と名乘り、曾我祐成と慇懃を通ず。或日兄の小柴勝重・虎を尋ねて來り、父の非業の死を告ぐ。是に於て兄妹・父の仇を報ぜんとして廓を脫走する途に祐成と遇ひ、三人共に箱根なる五郎時宗を訪ふ（大磯虎稚物語）

曾我二子が亡父の仇工藤祐經を殺さんとして富士裾野に赴くや、虎乃ち祐成の母及び少將と連立つて其跡を慕うて迷ひ出で、朋輩妓龜菊に遇うて營中の狀を尋ね、今夜雨降らば賴朝の出發延引する由を聞き、虎心中に今夜曾我兄弟をして仇討を遂げしめん爲に、法華經普門品を念誦して雨を乞ひたる驗ありて俄に大雨となる。時に建久四年五月二十八日（曾我會稽山）

鶴岡八幡宮に詣で、愛人祐成が首尾能く敵討を遂げんことを祈念す。後、朋輩妓の少將と共に三河國鳳來寺に參詣し、禪師坊の談義を聽聞し、上着を脫ぎて禪師坊に捧ぐ（曾我五人兄弟）

曾我の里に曾我二子の老母を訪ひ、時宗の勘氣を赦さるるやう懇請す。後、少將と共に富士裾野の狩場に曾我兄弟を尋ね行き、時宗が亡父の仇を報じて捕へられたる場に臨む（曾我扇八景）

或夜朋輩妓の少將と共に秩父重保に揚げらる。其夜工藤祐經一味の多勢に包圍せられ、虎舌を揮つて之を退去す。後、少將と共に曾我兄弟の跡を慕うて富士裾野の狩場を彷徨し、近江小藤太に遇うて殺されんとせしを、人穴に逃入りて仁田四郎忠常に助けられ、祐成に逢うて永別を悟さる。かくて後祐成が首を携へて時致が召捕られて引かるる場に臨む（曾我虎が磨）

建久四年五月風雨烈しさ日祐成を慕うて富士裾野に赴き、曾我老母に邂逅し、尋で曾我兄

業といふ。宇都宮新庄司友平を嫡子天女丸の師範となし、弟時定に政務を委ね、自ら禪定三昧に入ると稱し、微服して諸國行脚の途に上り、佐野の里にて大雪に遇うて、佐野源左衛門常世の妻の優遇に預る。後、御靈所が鎌倉勢揃ありて常世夫妻も馳せ赴く。時頼・夫妻を招きて嘗て厚遇に預りしを謝し、その返禮として常世の父の仇常景の首を見せ、且本領安堵に梅田・櫻井・松枝の三箇の庄を添へて之を授く（最明寺殿百人上臈）

とくびやうゑ 徳兵衛。 大阪内本町醤油商平野屋久右衛門の手代なり。主人は徳兵衛の叔父にして徳兵衛に妻の姪を娶らせて家業を讓らんとし、銀二貫目を徳兵衛の母に與へて其婚約の證となす。然るに徳兵衛は堂島遊廓天滿屋のお初と馴染みて叔父の意に從はず。婚約の證銀二貫目を主人に返濟せんとして母より請取りしも、惡友油屋九平次に欺かれて奪はれたる上に、羣衆毆打せられて憤懣に堪へず、遂にお初と共に身の不幸を悲んで曾根崎の森に情死す。徳兵衛年二十五（曾根崎心中、實說は元祿十六年四月七日の情死）

とくべゑ 河内屋徳兵衛。 故主人の妻阿澤の夫となりて主家を嗣ぐ。阿澤其子與兵衛の放蕩無頼を怒つて放逐するや、徳兵衛は筋向ひの豐島屋お吉を訪うて、與兵衛を憂慮する旨を告げ、錢三百を出して我とはなしに與兵衛に與へ下さるやう頼む（女殺油地獄）

とくべゑ 徳兵衛。 大阪萬年町紺屋の入婿なり。遊女お房に馴染み、お房の難を救はんとして堀江の口入業治右衛門より丁銀四百目を借りしも、妻お辰の貞實に感じて我身の非を謝しその金を妻に渡し、井筒屋に行きてお房と密會し、互に身の上を歎けるをお房の抱主に悟られて、火繩責めの苦を受けて益世をはかなみ、お房と共に家を忍び出で、高津上鹽町大佛殿勸進所に走つて、寶永四年十二月十六日朝まだきに情死す（心中重井筒）

とこなつ 常夏。 本多次郎近經の妻なり。工藤祐經の妻阿古屋の前と應論をなす（曾我會稽山）

としかね 淡路七郎俊兼。 淡路前司兼成の子なり。主君吉田少將行房の金一萬兩を預りて、之を遊興に浪費して追放せられ、猿島惣太と名乘つて人商人に零落し隅田川畔に住す。或日勾引したる男兒を毆打して死に致す。是時故舊の縣權正武國來つて吉田家の悲運を語り、若君梅若丸の行方を尋ぬ。俊兼聞いて大に驚き、さては己が撲殺したる男兒は梅若君なるを知り、深く非を悔いて自刄し、其魂魄天狗と化し、嘗て比良天狗に攫み去られたる行房の子松若を探し得て、之を松若の母の班女に渡す（雙生隅田川）

としつな 金剛兵衛利綱。 京都錦小路中納言冬通卿の家人なり。冬通卿の門前にて播磨諸任と喧嘩して馬より引下す。姫君玲瓏の惟茂將軍に輿入ある際、利綱其供となつて行き、まづ惟茂の邸内の樣子を伺はんとして輿の側を離れたる間に、諸任の郎等に襲はれて姫君諸共に輿を奪去らる。利綱輿の行方を尋ねあぐみし折しも暗中輿を舁ぎ來る者あり。即ち飛掛つて其輿を奪へば世繼御前の輿なり。さてもこれはと驚く時しも十三夜の月出で、諸任の郎等ども玲瓏姫の輿を舁ぎ來つて、世繼御前の輿と取替へんといふ。利綱怒つて郎等を殺し、輿ごめに二人の上臈を擔ひて我家に歸る。後また諸任等に襲撃せられしも澤瀉二郎と協力して之を退け、玲瓏君・世繼御前の供をして惟茂を尋ねて信州に下り、戸隱山の惡鬼退治に武功を立つ（栬狩劒本地）

としつな 民部太郎俊綱。 散位紀有常の奴なりしが、妹・有常の寵となるに及んで俊綱重く用ゐらる。俊綱の不在中、妹が中宮高子の身代りたらんとして泊瀬寺に赴きしを、俊綱歸つて其由を聞き、直に泊瀬寺に馳せて介錯し、妹の首を桶に收めて山を下る際、同僚の桂金吾廣國に詰られて格鬪に及びしが、其心知れ合ひて即ち和す。かくて後惟喬親王が清和天皇と御位爭の相撲勝負に負けて暴行せんとせらるるを、廣國と協力して親王を擒む（井筒業平河内通）

としゆき 齋藤文治年行。 北條高時に仕へて犬奉行を勤む。或日犬輿に附隨して行く途に、里見義助が繪合姫の輿に陪して行くに出會ひ、犬輿に對して下馬せざるを咎めて喧嘩す（相模入道千疋犬）

となせのつぼね 戸無瀬局。 建禮門院の侍女にして加賀郡司師高の姉なり。養和元年九月九日建禮門院の御使となりて平重盛の邸に至り、北山に茸狩の催あるやう御意を傳ふ。後また建禮門院の御代參として志賀辛崎の大明神に參詣し、師高の强盜となれるに擒められしが、左京之進義次に助けられて相共に都に上る（娥歌加留多）

とねり 遠坂舍人。 大和國宇陀郡龍門家の次女和琴を妻となして以て龍門家を奪はんとし、龍門家の重臣舟越惣馬等と奸策を廻して遂に龍門家を奪ひしが、石川五右衞門が釜煎の刑に處せられたる場に於て憲法の爲に沸返る釜中に擲込まれて慘死を遂ぐ（傾城吉岡染）

とねりのすけ 物川舍人之助。 融大臣の家の子にして十八歳、白馬に曲乘して女の手筥を拾ふ（融大臣）

とぶんくわん 杜文官。 明永曆皇帝の武將なり。五府將軍石門龍・鍛炮に內應して反するや、杜文官之を甘輝に報告し、梅檀皇女を助けて國性爺の後を追ひ勾容縣にて相逢ふ。時に賊將鐵故山の追撃急なり。杜文官防戰して斃る（國性爺合戰）

とほやま 遠山。 土佐將監光信の女にして幼名を光と云ふ。越前氣比の遊女となりて遠山と名乘る。狩野四郎二郎元信この地に來り、奧州武隈の松を畫かんとして松の名木を尋ぬ。遠山・四郎二郎に遇うて其祕傳を授け、且慇懃を通ず。遠山はかくて復諸方に流轉し、越前三國町にありては勝山と云ひ、伏見にては淺香山と云ひ、奈良の木辻にては三つの山と云ひ、京の島原にてはお宮と稱す。四郎二郎の恩人名古屋山三春平が不破伴左衛門を島原の大門口に斬り、お宮の辯護によつて殺人の罪を免る。而も春平固よりお宮が四郎二郎を愛して辛苦を嘗めながらも夫妻となる期を待てるを知らず。爲に六角左京大夫の妾腹の女銀杏の前を四郎二郎に配して其媒妁をなす。お宮失戀して憂死し、其魂魄留りて四郎二郎と夫婦となり、靈魂相伴うて紀州熊野權現に詣づ（傾城反魂香）

とみふさ 橘右大臣富房。 齊明天皇の勅使となりて白鬚明神に詣で、繪師狩野氏久を捕ふ。また伊賀越の際馬驚きて進まず、尋で天智天皇に遇ふ（天智天皇）

しが、この時も藤原に妨げられて果さず。八瀨里に資朝を襲ひ搦めて六波羅に送り、相模入道より莫大の恩賞を得て驕奢を極め、奈良に新能を催せし際、阿新丸及び資朝の遺臣に襲はれて殺さろ（本朝用文章）

ながふさ　冷泉文次兵衞長房。　古朋輩の駒形一學兼綱の後妻に横戀慕し、兼綱を暗殺して其後妻及び兼綱の前妻の子造酒之進房平を我家に引入れて妻子とせしが、淸瀧を生むや之を東寺の四塚の傍に棄て、福島に閑居して丸綿などの小賣商を營みしが、或日足利將軍義輝の室及び房平・淸瀧の三人尋ね來る。「ふさひら」の條を見よ（津國女夫池）

ながらのつぼね　長良局。　坂上田村麿の室岩戸の前の乳母なり。荒金刑部山國反するや、岩戸の前に陪從して勢州鈴鹿に下る（田村將軍初觀音）

なつ　阿夏。　播州姬路の米商但馬屋九左衞門の娘なり。龍野の某家に婚約あり。然るにお夏手代の淸十郎を愛して龍野に嫁するを肯ぜず。淸十郎主家を放逐せらるゝや、お夏狂亂となり淸十郎の跡を慕ひて家を出で、熊野修行となつて淸十郎の許嫁の女おさん等に遇ひ、（この所笠物狂の妙文）相共に淸十郎の刑場に赴く。お夏埒外に狂奔して死を共にせんことを請ひ、一服の煙草を吸付けて淸十郎に呑ませ、淸十郎の自害を見て、お夏は捕吏の鎗を奪うて咽喉を突きしかども死せず、尼となつて淸十郎の菩提を弔ふ（五十年忌念佛）

なつひとしんわう　夏仁親王。　持統天皇の皇子にして、春彥尊の異母弟なり。天皇・春彥尊の暴戾を憎みて位を夏仁親王に讓らんとし給ふや、親王乃ち兄を踰えて位に卽くは弟の道にあらずとして、宮殿を出でて吉野の奧に迷入り、風月と名乘つて紙漉萬九郎の家に出入り給ひ、萬九郎の妹長歌と慇懃を通じ給ふ。是時惡僧雷雲等に襲はれ、辛じて長歌と共に春日山に落ち延び給ひしが、敵の追擊急にして危險御身に逼りし時、春日明神鹿に化して示現し親王を救ふ。かくて親王・長歌相共に笠置山の窟に忍ばれて萬九郎に養はれ給ひしが、萬九郎・淀次郎照房の忠節により遂に飛鳥の里にて持統天皇の軍に合し、春彥尊を滅し給ふ（持統天皇歌軍法）

なとら　紀名虎。　惟喬親王と共に畫策する所ありしが病に罹つて死す。親王王　繼承の爭に負けて比叡山麓小野の里に閑居し、名虎の髑骨を祭りて招魂の法を修せらる。名虎蘇生して親王と共に謀反を企て、淸和天皇の殿中に現はれて暴行に及びしが、在五中將業平が差向けたる神鏡に照されて忽ちもとの髑骨となる（井筒業平河內通）

なほざね　熊谷次郎直實。　武藏の住人にして源氏の家臣なり。壽永三年正月下旬一の谷の合戰に敦盛を呼返して格鬪し、首を刎ねんとして憫然の情に堪へず、之を助けんとして味方より罵られ、是非なく討果す。然るに我子の小次郎直家もこの戰に疵を負ひて死す。是に於て直實深く人生の無常を觀じ、落飾して法然上人の弟子となり、蓮生法師と法名して念佛三昧に入る。法然上人論議の席に侍して口唱念佛に反對する者を怒りしが、重源和尚に悟されて和ぐ。江州粟津の庵室にある時、淸姬・種直の二子來つて一夜の宿を請ひしを我子と知らずして拒絕し、種直の病死を見て我子なるに驚きしが遂に父たるを名乘らず、一片の回向をなして葬送する際、平山武者所季重來つて蓮生の心中を察し、淸姬を貰ひ受けて去る。蓮生死して鬼に責められしが、念佛の功力によつて淨土に往生す（大原問答青葉笛）

なほびめ　直姬。　蟬丸と契りて子を生みて棄て、右大辨早廣の亂を避けて小幡の里千手入道の家に隱れ、早廣の來襲に遭ひしも千手入道父子の忠勸によつて免る。蟬丸盲目となりて逢坂山に棄てられたるを直姬尋ね行きて之と逢ふ（蟬丸）

なりひら　在原業平。　院宣を蒙りて須磨に下り松風の鹽屋に泊る。伴健宗を欺いて行平の難を救ひ、行平と共に歸京して藏人頭となる（松風村雨束帶鑑）郎黨の般若五郎仲則を召具して中宮高子の邸に至り、高子を連れて宮中に歸る。是時惟喬親王及び紀名虎の幽靈來襲し天皇・中宮を奪去らんとす。業平神鏡を名虎に差向けて之を退治し、天皇に供奉して修行僧に身を俏し、歌念佛を唱へて河內國高安の里に落ち行き、伊駒姬の家に便る。惟喬親王兵を擧げ、淸和天皇の軍と戰はんとする際、業平戰を止めて其勝負を相撲によつて決せらるべきを言上す（井筒業平河內通）

なりよししんわう　成良親王。　後醍醐天皇の第四皇子なり。十五歲にして關東將軍となり鎌倉に下り給ふ。十六歲の時元弘の亂起り、北條高時の爲に桐が谷の牢獄に幽閉せらる。或日村上彥四郎の妹やよ梅狂女となつて來り親王をして遁れしむ。かくて親王落ち行き給ふ道に大庭前司の追擊に遭ひ給ひしが、名張八郎爲勝に助けられ、尋で新田義貞に迎へられ給ふ（相模入道千疋犬）

にさぶらう　仁三郎。　奈良の遊廓吉田屋の主人なり。藤五郎の爲に吾妻を請出す周旋をなし、吾妻に腰刀の身を奪はれたるを氣付かず（淀鯉出世瀧德）

にちざう　日像。　日蓮宗の高僧なり。月光の異母妹雨夜の前に逢うて法華題目を提唱す。平井兄弟格鬪せる場に遇ひ、兩人を諭して弟子となす。かくて後鹽谷左京時平の兵に寺院を襲はれ、また勅命と作られて月光等と共に舟に乘せられ播磨沖に沈められんとせしが、法華經の功力によつて難を免かれて兒島三郎高則の家に養はれ、高則と佛法の問答をなして高則の疑を解き、妙法の不思議を見せて日蓮宗に歸依せしむ。かくて後勅命によつて月光と共に祈雨の修法をなして雨を降らす（大覺大僧正御傳記）

にゐどの　二位殿。　太政入道平淸盛の室なり。淸盛火の病に罹るや、二位殿の夢に獄卒火車を挽きて淸盛を連れに來るを見て、之を能登守敎經に語り愁歎せらる。是時平家に叛いて源氏に屬し兵を擧ぐる者多きを聞かれ、また瞋恚無明の二つの火焰閃き轟いて淸盛の臥所に飛入るを見られ、驚怖氣絕して侍女等に助けられ給ふ（平家女護島）

にゐのひめ　二位姬。　大納言民部卿藤原元方の次女なり。播州玉屋の旅舍にて播州の武士桃園染五郎豐舟と契つて稀若を生む。然るに豐舟綸旨によりて二位姬の姉薄雲と婚することとなり、其祝言の時に薄雲の醜女なるを見て逃出す。薄雲この時豐舟と二位姬との情交を知りて嫉妬に燃ゆ。尋で二位姬は土師別當村正・宮太村任に脅され、稀若を奪はれ

弟に逢ひしが、是時夜廻の者に誰何せられて原上臺と偽りて通る。工藤祐經の假屋に招かれ、祐成を手引きして內に入る。曾我兄弟が敵討の後、祐經の弟伊豆二郎祐兼に捕へられて賴朝の前に引出され、曾我二子の首を見て泣いて死を請ひしが、賴朝及び朝比奈義秀に宥められて泣く泣く退去す。かくて後曾我二子の弟の禪師坊を越後の國上寺に尋ねて下る。賴朝・禪師坊に命じて曾我二子の社を富士裾野に建てしむるや、虎・少將願主となり、西國四國の戰場の繪馬を掲げて祭典を擧行す（加増曾我）

とらへいじ　虎平次。　熊源太の弟なり。兄と共に藤原孝房の室及び中務秀光等の淡路の方へ落ち行くを追撃し、孝房の室を殺害するなど惡行多かりしが、遂に印南彌七郎に搦めらる（賀古教信七墓廻）

とりゐのさんみ　鳥居三位。　龍田明神の神主なり。春彥尊に一味して王妃長歌を搦めしが、橋立左衞門秋廣の魂と入代りたる春彥尊に殺さる（持統天皇歌軍法）

なかあき　今川左衞門尉仲秋。　今川伊豫守源貞世入道了俊の嫡子なり。京都に在勤中父の危篤の報に接して歸國し、父の枕邊に侍して、制詞條目一卷を讓り受く。いたく父の死を悲しみ、青砥藤次を伴うて亡父の墓に詣で、愛人千鳥の前に遇ふ。是時叔父貞廣來つて荒川近江・大道寺勝房反心ありと稱して仲秋を欺き、尋で反噬を擧ぐ。仲秋・千鳥の前虎口を遁れて三河國岡崎なる松葉川に落ち延び、橋守の結城右衞門太夫種春に助勢を請へる際、貞廣の家士片桐才藏に追撃せられ、奮戰して才藏を殺し、大擧して駿府城に貞廣を攻めて陷れ、了俊の跡を相續す（今川了俊）

ながうた　長歌。　吉野郡の紙漉國栖の阿惣の女にして、母に仕へて孝なり。夏仁親王の王妃に選ばれ、龍田明神にて裝束始の儀式を行へる際、春彥尊に一味せる神主鳥居三位に搦められしが、秋廣の魂と入代りたる春彥尊に助けられ、吉野の里に歸つて風月と契を結ぶ。風月は夏仁親王なり。是時雷雲法師等に襲撃せられ、風月・長歌相共に春日山に遁る。かくて後夏仁親王と共に笠置山の窟に隱れて萬九郎に養はれしが、遂に惡人滅んで泰平の御代となる（持統天皇歌軍法）

なかがは　中川。　足利將軍義教御臺所の侍女にして、藤內太郎家治と慇懃を通ず。赤沼入道幸滿反心あり、將軍義教を己が家に饗して其印璽を奪ひ、また中川を欺きて義教の刀を奪はしめて、中川を雪中に凍死せしむ。中川時に歲二十、乃ち幽靈となつて斯波義將及び家治に逢ひ、赤沼の反心及び己が最期の悲惱を告ぐ。赤沼父子反して吉野の城に據るや、中川の幽靈再び現はれ、赤沼父子を引立てて義教の前に突出す（雪女五人羽子板）

なかがは　中川。　新田義貞の部將畑六郎左衞門時能の妻なり。元弘三年卯月下旬義貞鎌倉攻の軍評定を開くや、中川其席にありて、義貞の弟脇屋義助と和睦せらるべきを述べて義貞を諫む（相模入道千疋犬）

なかくに　能勢判官仲國。　美濃國の住人にして源氏の家士なり。源賴光の來れるを厚遇し、種種の燈籠を飾りて其心を慰む。盂蘭盆會の日賴光と酒宴の後竊に妻を呼び、滿原右大將高藤の差出したる封書を見せて其心中を問ふ。妻思案の後賴光を討ち奉らんといふに同意し、次の間に隱れて其樣子を窺ふ。然るに妻は我子の冠者丸を斬つて賴光の身代りたらしめ、尋で自刄せんとす。仲國乃ち妻の自刄を制止して賴光を落し參らす（嫗山姥）

なかしひめ　中蒂姬。　阿閉府生諸門の女にして、圓大臣の養女となり、安康天皇の女御となつて懷胎せられしも年を經て產氣なし。雄略天皇御祝宴の時、かねて中蒂姬に戀慕せし大草香の臣の魂魄、姬の飲まるる盃の中に入るや、俄に心亂れて雄略天皇を戀慕せらる。よつて勅を下し姬を玄上刑部之介鶴國の館に預けらる。阿閉郡領諸宗・鶴國の館に亂入して姬を奪ふ。諸門の妻・姬の腹を裂きて袋子を出す（浦島年代記）

ながすね　銃波長脚。　外濱忍熊の重臣なり。忍熊の使者となつて貢物を朝廷に奉り、以て景行天皇第二の姬宮神賢姬の御降嫁を奏請し、同じ目的にて來朝せる八十梟師の使者阿蘇瑕速との競馬に負け、暴言を放つて退去す。後、神賢姬を三草河原にて奪はんとして殺さる（日本武尊吾妻鑑）

なかつね　大炊介仲經。　父惡右馬尉仲成の逆心を諫めて勘當せられ、山城國西の岡墨原の土民となり又次郎といふ。多治見春國に欺かれて牛を牽き北岩倉の深山に入り、大海原王子等の反逆を見て大に怒り、力戰して敵を破り春國を殺して我家に歸る。かくて亡父の仇橘勝藤を狙へども行方知れず。よつて勝藤の父道賴を奪去り、我子を殺して妻の乳を與へて厚遇しながらも、外面佯つて道賴を殺したる高札を立て、勝藤の斬入るを待受けて格鬪せしが、その心を知つて相和し、共に大海原王子を狙ひ弘法大師等御修法の場に刺す（嵯峨天皇甘露雨）

ながとし　名和又太郎長年。　出雲國の住人にして忠臣なり。飲食物行商人となり又六と稱して、坊門清忠が後醍醐天皇を幽閉し奉れる番所に來る。折しも小山田高家の妻比丘尼に扮して番人に酒を勸め醉はせて眠らしむ。其間に又六塀を破り天皇の御供して大和路を指して逃ぐる途に楠正行母子に遇ひ、相共に天神森に據つて義旗を擧げ、寄來る敵を破り、天皇に供奉して吉野に急ぐ（吉野都女楠）

なかなり　惡右馬尉仲成。　猪甘の連の末孫なり。大海原王子の逆心に一味せしも雖病に罹りて死し、猪甘の連の魂魄と結んで蘇生し、大海原王子と共に嵯峨天皇を攻めんとして橘判官勝藤に刺殺さる（嵯峨天皇甘露雨）

なかのり　般若五郎仲則。　在五中將業平の家臣にして膂力あり。伴大納言宗岡の家來基國が中宮高子の君を奪はんとして來れるを扼殺し、業平に陪して河內國高安の里に至り生駒姬の家に身を寄せしが、姬の伯父大炊之介が惟喬親王に一味して淸和天皇を奪ひ去らんとするや、仲則・大炊之介と格鬪して天皇を奪ひ返す。後、惟喬親王・淸和天皇と御位爭ひに負け、宗岡等と共に暴行に及ばんとせられしかば、仲則乃ち宗岡に飛付きて首を引抜く（井筒業平河內通）

なかはら　石見守中原。　日野中納言資朝の重臣なり。逆心を抱き竊に朝敵相模入道に內應し、資朝の跡を絶たんとして、玄惡法印に資朝の一子阿新丸の薙髮を頼みしが、資朝の家の子左衞門尉藤原に妨げられて果さず。また茶會に託し資朝を招いて弑せんとせ

なり頼光家督定めの使者となつて賴信・賴平の邸を訪ふ。賴信伊豫内侍と結婚の夜兇賊將軍太郎と格鬪し、また葛城山に土蜘蛛を退治して武功を立つ（關八州繫馬）

はぎのたい 萩對。 江文宰相爲成の室なり。繫馬の幕を奪はんとして闖入せる藤原保輔等と格鬪す。爲成官位を削られて追放せらるるや、萩對乃ち詠歌姬をして源賴平を殺さしめんとす（關八州繫馬）

はぎのまへ 萩の前。 佐佐木三郎盛綱の妹なり。待宵・時雨の姉妹が男裝して、蘆賣り狹賣りとなつて來れるを見て戀慕す。後、由比濱にて待宵・時雨の母刑せられんとする場に赴き、身を以て之に代らんとす（佐佐木先陣）

はくだつた 伯達多。 韃靼人にして忍術を好くす。五府將軍石門龍と共に國性爺の據れる東寧城工風の間に闖入して經錦舍に鋒を擒まれ、國性爺等に殺さる（國性爺後日合戰）

はくれうとん 伯了頓。 婆將軍の郎等にして提婆達多の黨類なり。提婆達多の用命を帶びて憍曇彌を訪ふ途中烏陀夷と鬪うて谷底に落さる。後、耶輸陀羅女を宮門に要擊して吉祥女に斬殺さる（釋迦如來誕生會）

はこわう 箱王。 曾我五郎時致の幼名なり。幼時父の祐重が工藤左衛門祐經に殺さる。是に於て箱王は兄の一萬と共に常に父の仇を報ぜんことを思ふ。母・曾我祐信に再嫁するや、連れられて其家に養はる（賴朝伊豆日記）

「いちまん」の條を見よ（本領曾我）

曾我十郎祐成の弟にして、長じて五郎時宗と稱す。母の僧となさんとするを嫌ひ、綱を額みて結髮し、綱より亡父の形見の弓懸を貰ふ。是時假粧坂の遊女少將に慕はれて樒を貰ひ慇懃を通ず。また下人團三郎の草鞋取に變裝して箱根權現に赴き、工藤祐經の下人と喧嘩して非凡の力量を發揮し、朝比奈義秀と力爭し、また祐經の下駄・傘を奪ひて、祐經の下人と口論し祐經を下駄にて毆打す。曾我老母この事を聞き、時宗の身を案じて勘當を申渡す。時宗泣入つて其儘眠り、兄祐成が大磯遊廓にて祐經の郎黨に包圍されて危急に及べるを救ひ、母より勘當を赦されたるを夢みて目覺むれば、勘當もとの如くなるに深く悲しみ、和田秩父を賴まんとして泣く泣く立去る。かくて後兄と共に富士裾野の假屋に工藤祐經を斬つて亡父の仇を報じ、なほ賴朝の寢所近く斬入り、遂に捕はれて殺さる。時に建久四年五月二十九日なり。賴朝・曾我二子の孝心に感じ、富士裾野に社を建てて義經と合祀す（加增曾我）

ばしう 馬周。 唐太宗皇帝の中書令たり。日本に贈らんとする花原磬・泗濱石・面向不背の玉に就いて意見を述ぶ（大織冠）

ばしやうぐん 婆將軍。 淨飯王右の司なり。提婆達多を憍曇彌の養子となし、以て淨飯王の太子たらしめんとして吉祥女に毆せらる。後、釋尊降誕の場に亂入して車匿に虐げらる（釋迦如來誕生會）

ばせう 芭蕉。 千手入道の女にして女院の水仕女なり。蟬丸に懸想し、蟬丸の愛人直姬を妬みて宇治の橋姬社に丑の時詣をなし、三善淸行に見らる。後、父の家の門前にて淸行に斬らる。歲十七（蟬丸）

はちざう 石部の八藏。 馬士なり。朋輩與作と賭博して勝ち、與作の牽ゐる馬を奪はんとして喧嘩し、與作に投飛さる。また馬方三吉が竊盗したるを憎んで踏躙り額に疵を負はしむ。爲に三吉に恨みられて斬殺さる（丹波與作）

（序云、八藏は馬士の通稱なり）。

はちへいじ 白崎八平次。 二宮太郎安淸の家士なり。安淸が妻を離別する使者となつて行く（曾我會稽山）

はちらう 片岡八郎。 源九郎義經の家士なり。義經と共に京九條北町の遊郞柏屋に登樓し、三保谷四郎國時と首引の爭に勝ち、歸途國時に要擊せられ、辨慶と共に奮戰して國時を殺す。後、義經に陪從して吉野山に分け入る（吉野忠信）

はちゑもん

「ちゆうべゑ」の條を見よ（冥途飛脚）

はつ 阿初。 大阪堂島新地（堂島北濱通り）天滿屋の遊女なり。田舍客に連れられて大阪三十三番の觀音を廻り、生玉社の出茶屋にて愛人平野屋德兵衛に遇ふ。德兵衛主人の妻の姪と婚するを拒絕したるを話合へる際、九平次の來るを見て時貸銀の返濟を督促して喧嘩となる。お初は德兵衛の身を思ひ跪けども、强ひて駕籠に入れられて歸る。朋輩妓等お初に德兵衛の惡評を語る。是時德兵衛來つてお初と逢ふ。九平次も來り德兵衛の居るを知らずして之を罵詈す。德兵衛憤怨に堪へず、喋して覺悟をお初に知らせ、其夜相共に曾根崎の森に走つて情死す。お初行年十九（曾根崎心中）

はつせのわうじ 泊瀨皇子。 安康天皇の皇弟なり。世を遁れて丹後國與謝の漁夫となり給へるを、綾織姬黨國等に迎へられ、都に還りて帝位に即き雄略天皇と申し奉る。中帶姬の濫行を憂ひ、玉櫛を罪して入牢し給ふ。後、葛城山の御狩に出でられ、逆賊眉輪王を誅し給ふ（浦島年代記）

はつゆき 初雪。 足利義煇の室の侍女なり。室に陪從して賀茂明神に參詣す。後義煇の邪險の刃にかかつて死し、其怨靈足利義昭の夢に現はれて義煇を追ふ（津國女夫池）

はな 阿花。 京四條石懸町の娼家井筒屋の遊女なり。刀屋石見某の手代半七と馴染み、半七の伯母と僞りて刀屋に半七を訪うて會談せる際、半七の伯母も訪ひ來る。是に於てお花の僞り露顯す。石見怒つて半七・お花を毆打せしが、伯母の執成しによつて事なきを得たり。お花の養父九兵衛井筒屋に來り、お花の勸めの年期を延ばして二十兩を得んとす。お花養父の意に從はずして毆打せらる。坊主客に連れられて西石藏の色茶屋に行き、朋輩妓と阿彌陀の光といふ遊戲をなし、探闇に當りて豆腐買に出でて半七に逢ひ、相携へて大阪長町なる半七の伯母を訪ふ（長町女腹切）

はなてるひめ 花照姬。 橘右大臣富房の女なり。逆目王子の奸策によつて我姿を醜く畫かれて往來に曝されたるを見て悲しみ給へる際、愛人葛城大君と邂逅し給ふ。是時逆目王子一味の惡黨に包圍せられしを金輪五郎今國に助けられ、葛城大君と共に春日の里に落ち行かれて釆女の家に宿らる。其夜葛城大君が釆女と祝言の盃を交し給へるを嫉妬せられて猿澤の池に投身せられしが、天照大神・春日・住吉の大明神老翁に化現して姬を蘇生せしむ。葛城大君・花照姬・釆女連立ちて三社禮拜の爲まづ住吉に詣でらる（天智天皇）

こ川中に沈めらる。豐舟の家士眞砂勝海來つて二位姫の危急を救うて敵手に斃る。二位姫乃ち西王母の枕を吹込みて之を蘇生せしむ。かくて落ち行く途中村任に追撃せられしが、勝海の子の勝興に助けられて山城國美豆御牧に遁れ、狐川の堤より舟に乘る。この川に正八幡菩薩老翁に化現して釣糸を垂れ、淀鯉を釣り其口より稀若を引出して二位姫に授く。後、二位姫は大和路の郡山にて薄雲に絞殺さる（日本西王母）

ねのひ　子日。　賀茂社の巫女なり。大江千里を戀慕し、藤大臣の媒介によつて千里と相逢ふ際、嫉妬の間違ひより青柳を刺殺し、申譯なしとて千里と共に熊野の森にて死せんとして、冷泉坊の法印に諭されて思ひ止まる（藤大臣）

のぶたか　三條吉次信高。　金賣商なり。鞍馬山に牛若を尋ねて藤原秀衡の手紙を渡し、相伴ひて奥州に下らんことを約して別る。かくて牛若を伴うて奥州に下り、其歸途峯の藥師の笹谷にて、藤太が淨瑠璃姫を殺し其侍女をも斬らんとするに際會し、藤太と斬合ひしが、樵夫の通掛るを見て之に金を與へて藤太を殺さしむ（十二段）牛若を連れて奥州に下る途中、三州矢矧の宿に泊る（孕常盤）

のぶひさ　横山郡司信久。　伊豆相模を領し、太郎・次郎・三郎・照手・更衣の五子あり。信久・三郎の言を聽いて小栗判官兼氏を毒殺す。後、三郎に放逐せられて前非を悔い、蘇生したる兼氏を藤澤寺に訪うて謝罪す（當流小栗判官）

のりかぜ　若狹之介則風。　山上有風の嫡子なり。播州室津の遊女花月に馴染み、親より勘當を受けて零落し、花月との間に設けたる子金松を負ひて唐人行列の繪草紙を賣る。是時藤照姫に扮せる花月と邂逅し、尋で入鹿の追手來つて花月を奪ひ去る。則風讃州志戸浦に赴き、五郎介と稱して浦の蜑滿月と契る。藤原鎌足・入鹿の難を避けてこの浦に來る。則風乃ち鎌足の命を奉じ、龍宮に至つて面向不背の玉を得んことを滿月に賴まんとする際、前妻の花月尋ね來る。則風怒つて花月及び金松を斬り、滿月をして海底を潛つて玉を探らしむ（大織冠）

のりつね　能登守平朝臣教經。　俊寛僧都の室吾妻屋・平清盛に捕へられて其意に從はず。是に於て教經・吾妻屋に逢ひ、汝の貞節は我之を立てて取らすべし、汝は清盛の詞の立つやう返辭すべしとて暗に自害を諷す。吾妻屋乃ち自刃す。教經其首を包みて清盛に見す。是時俊寛の下人有王丸・清盛の邸内に亂入す。教經之を殺すを憫んで追拂ふ。丹左衛門尉基康・妹尾太郎兼康の兩人清盛の命を受け、鬼界島の流人成經・康賴召還の使者となつて行かんとす。教經乃ち俊寛をも召還せしめんとし、重盛の命と稱して俊寛赦免狀を認めて之を渡す。治承五年閏二月千鳥及び吾妻屋の怨靈現はるゝや、教經矢を放つて之を調伏し、二位殿に逢ひて平家衰運に傾けるを夢みたるを語る。是時諸國の武士平家に叛きて源氏に應ずる者多しとの注進あり。教經乃ち宗盛と談合し討手の手分せんとす（平家女護島）屋島の合戰に教經兵船を敵陣近く漕寄せて名乘を揚げ、義經を狙ひて射殺さんとせしを、佐藤繼信進み出て義經の身代りとなつて教經の矢先に立つ。教經乃ち繼信を射殺す（津戸三郎）

のりのぶ　藤原花二郎教信。　坊門中納言資雄の子なり。幼時母に連れられて藤原教孝に養はる。長じて己が實父は高梨吉内左衛門友重に殺されたるを知り、亡父の仇を報ぜんとして變裝し、津の國櫻塚にて祭文を語り、友重に遇うて敵討の聲を掛けしが、そは友風が養父友重の身代りとならんとして友重と名乘れるを聞き、且病身なるを見て、全快の上勝負を決せんことを約して別れしが、友風病死して中山寺に葬送せらるる由を聞き、其實否を確めんとして中山寺に赴き、友風の死體に我嫂の亡魂の入替れるとは知らずして生ける者と思ひ、其卑怯を罵りしが、其實を知るに及んで人生の無常を歎き、これより發心して教信（けうしん）法師と法名し、嫂の末子を佛門に入れて補佐し、七墓地を巡りて飛田墓所に縊死せる甥眞光を蘇生せしめ、賀古の庄に寺院を建てて回向の大導師となる（賀古教信七墓廻）

のりより　源範賴。　賴朝の弟なり。伊豆の修禪寺にて落飾し法名を源雄と云ふ。曾我の下人鬼王に遇ひ、曾我二子の爲に富士裾野の營中に入り得る割符二枚を與へて幕府に出頭し、鹿論の捌をなせる際、梶原平次景高より割符を穿鑿せられて口論し、怒つて景高を斬らんとして果さず、其家來八幡三郎を斬つて自刃す。行年三十五（曾我會稽山）

ばいあん　梅庵。　醫師なり。扇屋の名妓夕霧の病氣を診察し、病篤くして醫藥も效なきを語る（夕霧阿波鳴渡）

はいぶんせき　裴文籍。　唐土の照宣皇帝の勅使と稱して渡來し、延喜帝に謁見して菅丞相の學徳を賞揚せしが、藤原時平の賄賂を受けて菅丞相を讒す（天神記）

ばいりよう　赤松梅龍。　岡崎村に住し、太平記講釋師にして、大經師以春の下婢たまの伯父なり。以春の妻おさん・手代茂兵衛と不義に陷るや、たま其媒介をなせるの故を以て、手代助右衛門に縛せられて梅龍に預けらる。梅龍は助右衛門がたまを縛したるを怒つて之を毆打し、又たまに理非を說いて之を殺し、玉の首桶を携へておさん・茂兵衛の刑場に赴き、たま一人を罪しておさん・茂兵衛を救はんことを請うて拒絶せられ、心錯亂して傍觀しゐたる助右衛門に斬付く（大經師昔曆）

ばいろくわう　貝勒王。　韃靼主順治大王の鎭護大將なり。韃靼主の使者となり、明に朝して貢物を献じ、華淸夫人を請ふを口實として、明の逆臣李蹈天と謀つて明を滅さんとし、遂に韃靼兵を率ゐて來襲せしが、九仙山の戰に敗れて吳三桂・鄭芝龍に殺さる（國性爺合戰）

ばうくわん　馬府官（はふくわん）の誤。福建國守劉乃耶六安王の臣なり。陶民子が寶劍を鍛ふる鍛奉行となり、陶民子の妻に寶劍を摩替へられたるを知らずして持歸り、その欺かれたるに氣付くや、兵を率ゐて陶民子を襲うて朱一貴及び紫燕と屋上に格鬪して投飛ばさる。（唐船噺）

ばうげんれい　房玄齡。　唐太宗皇帝の臣なり。日本に贈らんとする花原磬・泗濱石・面向不背の玉に就いて意見を述ぶ（大織冠）

はうしやう　平井保昌。　源賴光の家士

五歳にして母と死別して盛光に養はる。十三歳の時眼病に罹り、醫師の許に行く途に繼母と其情夫近藤兵庫守廣忠の爲に猿澤の池に投込まれんとせしを、忠義の家來翌月六郎左衞門高貞に助けられて、夕霧の故舊靜三と云ふ比丘尼の庵室に身を寄せ、計らずも父盛光に遇ひしが、廣忠の追手急にして父と別れ、高貞の子小六郎に助けられて大阪に下り、新町遊廓にて夕霧の妹女郎の荻野に遇ひ、扇屋の夕霧供養の席に列して夕霧の昔語りを聞き、下寺町淨國寺なる夕霧の墓に詣で、其側に眠りて亡母が地獄に墮して苛責に苦しめるを夢む。かくて後奈良に行きて父と遇ふ。父出世するに至つて春姫も五位に叙せられ、薄霧の局と稱して宮女に召さる（三世相）

はるよし　山本勘介晴幸。　三州牛窪の浪人なり。母に孝養を盡さん爲樵夫となつて世を送る。桔梗が原に柴刈に出でて武田勝賴・衞門姫に出遇ひ、身を隱し吳るるやう賴まれしを斷り、村上義清の手勢の追擊急なるを見て、勝賴夫妻の身を案じて振向く際、野豬に飛掛かられて左足と一眼を失ふ。後、信玄の三顧の恩に感激して其軍師となり、甲越の戰に偉功を立て、遂に甲越をして和解せしむ。「てるとら」の條をも見よ（信州川中島合戰）

はん　阿半。　江戶屋勝二郎の手代新七の妻なり。勝二郎の豪奢放逸を諫めて用ゐられず。爲に深く主の身を憂慮し病を得て死す（淀鯉出世瀧德）

ばんざゑもん　不破伴左衞門宗末。　不破入道道犬の嫡子なり。父と謀りて狩野四郎二郎元信を放逐す。京都島原の遊女葛城を請出さんとし、大門口にて名古屋山三春平に斬殺さる（傾城反魂香）

はんしち　刀屋半七。　京都下立賣刀屋石見某の手代にして井筒屋の遊女お花と馴染む。お花・半七の伯母と僞り刀屋に半七を訪うて逢へる際、半七の伯母來る。石見主人これを見て、さては以前の女は娼婦と知つて大に怒り、お花・半七を毆打す。半七・伯母より信國作の刀の細工を賴まれて、之を賣り下阪作の刀に買替へて金二十兩を着服してお花を訪ふ。是時お花の義父九兵衞井筒屋に來つてお花の年期を增さんとす。半七乃ち九兵衞と喧嘩し、懷にせる二十兩を其面に抛ち、お花と相携へて大阪長町なる伯母を訪ふ。伯母の夫甚五郎は下阪の刀に取替へられたるを知らずして武家に屆けしかば忽ち惡事露顯す。情深き伯母は雄々しくも其罪を引受けて切腹し、以て半七・お花を遁れしむ（長町女腹切）

はんぢよ　班女。　美濃國野上宿の傾城なりしが、吉田少將藤原朝臣行房と契りて梅若・松若の孖子を生む。然るに松若は比良天狗に摑み去られ、梅若は失踪し、行房は逆臣勘解由兵衞景逸に弑せらる。是に於て班女は吉田家の重臣縣權正武國を伴ひて、大理の廳に吉田家相續を願ひ出で、惡漢常陸大掾百連と口論し、精神錯亂して狂女となり、梅若の行方を尋ねて隅田川に至り、渡守唐糸より梅若最期の樣を聞いて悲歎に沈み、墓前に念佛を手向くる折しも天狗雲霧の中に現はれて松若を返す。これより班女・唐糸・松若相伴うて京に上り、東國女に變裝して百連を襲ひ銃殺す（雙生隅田川）

はんどく　周梨槃特。　烏陀夷・吉祥女の子なり。資性愚鈍十歳にしてなほ父母を知らず。鷄足山にて鷲に攫去られしを、獵師林丹鷲を射て槃特を救ひ我子として養育す。後計らずも烏陀夷が耶輪陀羅女を伴ひて此家に來る折しも槃特鳩を殺す。倶牟婆羅來つて槃特の鳩を殺したるを責めて鳩の重量だけの槃特の肉を得んとす。槃特乃ち己が肉を裂きて之を與ふ。倶牟婆羅なほ肉足らざるを責む。是に於て槃特大に怒り、秤を折つて倶牟婆羅を追拂ふ。後、釋尊に歸依して佛果を得たり（釋迦如來誕生會）

（序云、槃特が鳩を殺したる贖に己が肉を裂きて秤にかけたるは佛典の故事を應用せるなり。「鳩の秤にかかる智惠」（五六五頁）の條を見よ）。

ばんのじよう　川側伴之丞。　出雲の藩士なり。同輩笹野權三と途に遇ひ競馬を挑みて負く。偶岩木忠太兵衞來つて、藩主の若殿祝言の悅に茶儀行はるべきを語り、眞の臺子の茶儀を權三と伴之丞の兩人中に命ず。是に於て伴之丞は茶道指南役淺香市之進の妻おさゐを色を以て誘うて茶儀の祕傳を得んとし、夜中四斗樽の鏡を拔いて枳殼垣の中に突込み、其中を潛り窃に庭內に入つて樣子を窺ふ。折しもおさゐ・權三數寄屋にて痴話喧嘩し、互に帶を奪うて庭に投棄つ。伴之丞直に之を拾うて兩人の姦通を揚言して逃げ、おさゐの弟岩木甚平に斫殺さる（鑓の權三重帷子）

ばんのべつたう　伴別當。　一條天皇御宇の卜博士なり。勅命を蒙つて參內し、禁中變化惡馬の出づるを易を以て占ふ（關八州繫馬）

はんぺい　高橋半平。　鹽谷左京時平の意を受け、勅使と僞りて日像・月光等を舟に乘せ、播磨の沖に沈めんとせしが、妙法の奇特によつて佛罰を受けて溺死す（大覺大僧正御傳記）

はんべゑ　八百屋半兵衞。　遠州濱松の士山脇三左衞門の子なり。大阪靱油掛町八百屋伊右衞門の養子となり、實父十七年忌串の爲濱松に赴き、弟小七郎の主人坂部鄕左衞門方にて城主饗應の料理方となり、小七郎をして奴軍右衞門の若衆たらしむ。かくて遠州より歸る途に妻お千代の實家に立寄り、お千代が姑にいびられて歸り居るに遇ひ、之を連れて大阪に歸りしが、姑よりお千代の離緣を迫られて意を決し、卯月庚申の夜お千代を離別すと稱して共に家を出で、生玉の勸進所に行きて情死す（心中宵庚申）

（實說は享保六年四月六日朝の情死）

ばんらく　手塚幡樂。　島原の遊女更科の父なり。江州志賀の里に隱遁せしが、更科が七草四郎高衡と共に失踪するや、幡樂は足立右馬允景久に召喚せられ、高衡・更科兩人の行方を訊問せられて更に知らぬ由を答へ、見付け次第訴人すべきを約し、家に歸りて其由を妻に語り、持佛堂の前に坐し經を讀んで自刄せんとす。この時更科・高衡及び更科の愛人葛西淸治訪ひ來つて一悶着を起す。幡樂邪法を嫌ひ更科を淸治に托して自害す（蛙合戰）

ばんれい　萬禮。　陳芝豹の子なり。東寧島にて國性爺に仕へ、國性爺の子經錦舍を敎育す、島內の土民に韃靼主第六王子駙馬鐵平の幻術を信仰し、鐵平より金を貰ふ者ありと聞き、それ等の惡徒を搦めて生獄門の刑に處す。或夜女子が惡徒の刑場に近寄るを見て、

はなの　花野。曾我二子の下人鬼王の妹なり。仁田四郎忠常に逢ひて、曾我殿原は大磯に馴染の遊女ありと聞けば、若し其遊女の腹に子あらば何卒助け下されよと頼んで猛虎の生爪を贈る（百日曾我）

はなのじよう　雑賀屋花之丞。高野山南谷吉祥院の寺小姓にして白痴なり。妹お房と朋輩成田久米之介との密通を朋輩仲間に語つて戯る（心中萬年草）

はなひとしんわう　豐日花人親王。敏達天皇異腹の御弟なり。山彦王子外道を信じて其流布を主張し給ひし時、親王は佛法を主張して互に法力を較べ、花人親王の勝となる。親王・玉世姫の邸に行かれて姫と慇懃を通じ給へる際山彦王子に襲はれ、姫と共に遁れて西國に落ちんとして乘船し、吹流されて佐渡に漂着し、諸岩に助けられて播州に至り、兵藤太宗岡が梵鐘を海より引上ぐるに際會し、豐後に落ち眞野の長者の草刈に雇はれて山路と稱し、玉世姫の繼母の命を受けて五種の毒草を刈り給ふ。かくて後都に還りて帝位に卽き用明天皇と申し奉る（用明天皇）

はなむらさき　花紫。佐藤四郎兵衛忠信の忍妻なり。鳥羽畷に住みけるが忠信久しく訪れなきより、之を尋ねて九條北町に行く途に忠信に遇ひ、また貞順尼と姿をかへたる若紫に遇ひ、夫と訣別して二女相共に吉野に赴き、御堂にて靜御前と邂逅す、此時山法師に圍まれしを若紫、三人共に遊女なりと陳じて女郎名寄を語り放免せらる（吉野忠信）

はなよ　花代。惡右馬尉仲成の女にして橘判官勝藤に嫁す。父逆心を懷き大海原王子に一味して勝藤の敵となる。勝藤乃ち仲成を殺して妻を離別す。是に於て花代果物賣となり、嵯峨の離宮に行きて舅の濱額に邂逅し、伴らて我家に歸り孝養を盡ししが、不在中に何者にか舅を奪去られ、其行方を尋ねて狼谷に至り、高札を讀んで兄の大炊介仲經が舅を奪ひて殺したるを知り、兄を殺さんと決心したる際勝藤に邂逅して相共に兄の宅に斬入りしが、深き事情を知つて兄の心に感じて我身の輕忽を謝し、仲經の妻と共に四國八十八の札所を經巡りて都に上る（嵯峨天皇甘露雨）

ばふくわん　「ばうくわん」を見よ。

はまより　前判官濱額。橘判官勝藤が父なり。歳九十三に及び嵯峨の御所に赴きて拜する際、勝藤が離別せし嫁の花代に邂逅し、互に情愛に咽び、遂に花代に連れられて其家に行き介抱せられしが、大炊介仲經に奪去られて厚遇せらる。勝藤が仲經を父の仇と信じて斬入りし時、濱額進出でて仲經の義心を談じて勝藤を諭す（嵯峨天皇甘露雨）

はやし　「さんごへゑ」を見よ（薩摩歌）

はやと　平群隼人。國大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとして阿閇郡領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる（浦島年代記）

はやびめ　早姫。津戸三郎勝平の妹にして佐藤三郎兵衛繼信の妻なり。繼信が源九郎義經に從ひて平家討伐の軍に加はらんとし、紫明神に參詣するや、早姫は佐藤忠信に賺されて、泣いて繼信の從軍を思ひ止まらしめんとす。繼信・義經の軍に從ひて屋島の合戰に赴くや、早姫は夫の身を氣遣ひ、子の繼若を抱き勝平と共に夫を尋ねて屋島に渡り、鷲尾三郎の姉の家に立寄りて微睡せし間に、夫に逢ひて戰爭の物語を聞くを夢み、覺めて夫の討死したるを知り愁歎に暮る。これより新黑谷に赴きて法然上人を賴み、夫の追善を營みて菩提を弔ふ（津戸三郎）

はやひろ　右大辨早廣。蟬丸の室の兄なり。蟬丸を襲擊して千手入道を殺し、忠光と戰うて敗る。また逢坂山に蟬丸を襲ひしがこの時も忠光に敗らる。かくて後忠光が辻談義せる所を通りかかり、忠光に追掛けられて斬殺さる（蟬丸）

はやみね　按察左大將早岑。弘徽殿女御の伯父なり。藤壺女御の御車に暴行を加へんとして渡邊綱に制止せられしが、遂に藤壺女御を壬生の里に幽閉し、羽倉伊賀介久國をして藤壺及び乳母治部卿を殺害せしめて、其罪を源賴光の臣小餘綾新左衛門尉景春に嫁し、弘徽殿女御の孕める御子を帝位に卽かせて外戚の權を振はんとし、蘆屋道滿と謀りて花山天皇を弑し奉らんとして成らず、惡逆愈長ぜしが、源賴光の軍に攻寄せられて滅ぶ（弘徽殿鵜羽產家）

はるくに　多治見左衛門春國。大海原王子の臣なり。勅使と伴りて又次郎を欺き、其飼牛を牽かせて北岩倉の深山に連れ行きしが、又次郎に斬殺さる（嵯峨天皇甘露雨）

はるただ　城之介春忠。平朝臣春長の嫡子にして王城の守護を勤む。蒙古征討の勅命を蒙りしかども、小野お通の色香に溺れて心蕩け、お通を伴ひて愛宕山の花見に出でたる際、左馬五郎光成反して春忠を攻む。春忠防戰克く勤めしが、流矢に中り痛手に堪へずして自刄す（本朝三國志）

はるなが　平朝臣春長。近江に城を構へて正二位右大臣たり。勅使三條前内大臣の命を奉じ、眞柴肥前大領久吉に蒙古征討軍の統率を命じて、惟任判官光秀を其部下となす。光秀之を喜ばず。春長怒り近習の者をして光秀を毆打せしむ。春長また嫡子春忠の放埒を戒めんとして、京都に上り本能寺に次す。光秀反して本能寺を圍む。春長衆寡敵せずして自殺す（本朝三國志）

はるぬし　物部宿禰春主。子の日に懸想してつれなきを怒り、融大臣と子の日と相思の仲なりと讒し、融を一條室町に襲擊し、冷泉坊の法印と戰うて逃げ、又融を美濃國札の辻あたりに要擊せんとして、馬方腕の六藏等に搦め捕らる（融大臣）

はるひこのみこと　春彦尊。持統天皇の一の宮にして日蝕の日に生る。皇太子となるを得ざるを憤り、龍田明神の神主鳥居三位等と逆謀を企て、王妃長歌の參詣を要擊して橘立左衛門秋廣を殺ししが、忽ち秋廣の魂と入替り、鳳輦を搦めたる繩をちぎり、一味の鳥居三位・靑根郡司を殺し、軈て本心に立返り、憤怒して館に歸り暴惡益長じて遂に持統天皇を幽閉し僭して帝と稱せしが、飛鳥の里にて尊の軍敗れて滅ぶ（持統天皇歌軍法）

はるひさ　鷹川庄司治久。鷹川藏人秀治の父なり。主君田村麿の留守中邸内の騷動を聞きて馳付けしが、舞にして家老職荒金刑部山國の言聞えず、山國乃ち秀治の罪惡を壁に書して之を欺きしかば、治久深く子の不忠を歎きて自殺す（田村將軍初觀音）

はるびめ　春姫。狛左京進盛光の女にして、母は大阪新町遊廓扇屋の名妓夕霧なり。

ふぢばかま　藤袴。　銀杏の前の侍女なり。五十餘歳の醜女なるが狩野四郎二郎を慕ひて抱付く（傾城反魂香）

ふぢはら　左衛門尉藤原。　日野大納言資朝の家士なり。資朝の重臣石見守中原が北條相模入道に內應し、資朝の跡を絶たん爲に資朝の一子阿新丸の出家を玄惠法師に依賴せるを、藤原其場に馳付けて中原と論爭し阿新丸の出家を止む。また中原が茶會に托して資朝を招き弑せんとするや、藤原は資朝の供となつて行き主君の危急を救ふ。かくて後、中原遂に資朝を擒めて六波羅に送り、相模入道より莫大の恩賞を得て驕奢を極め、奈良に薪能を催せし際、藤原は妙法坊と共に中原を襲擊して之を捕へ、阿新丸をして中原の首を刎ねしむ（本朝用文章）

ふばてつぺい　駙馬鐵平。　韃靼主第六王子なり。明に人質となりて行き幻術を行ふ。後また東寧島にて幻術を行ひて島民を信仰せしめ、金を與へて之を懷けんとし、東寧城を襲ひ幻術を以て敵を惱さんとして國性爺等に殺さる（國性爺後日合戰）

ふり　大阪北久太郎町古道具商笠屋長兵衛の下女なり。長兵衛の娘お龜の供して神子町黑格子辻の宅に立寄る（卯月紅葉）お龜非業の死を遂げたる後、長兵衛の供して神子町を通り、お龜のことを思出して泣く（卯月潤色）

ぶりやくのすけ　才若武略之介。　德若智略之介の弟にして、故三位伶人富士丸の家臣なり。年頭の祝儀に大內にて萬歲樂を奏す。丹波に下りて歸る途に富士丸の娘澤瀉姬が太見縣主時景主從に襲はるるに遇ひ、直に時景等を追拂ひて姬を救ふ。後、姬及び其愛人吳服中將雪枝の行方を尋ね、木津の渡にて彌介狐に遇ひて天鼓及び澤瀉姬のことを聞き、また京都六條左近狐に誘引せられて聾親王の御前に出で忝き御諚を賜はる（天鼓）

ぶんじ　玉屋文次。　攝津國昆陽の旅人宿玉屋の主人なり。桃園染五郎豐舟と二位姬とこの旅舍にて契を結ぶ（日本西王母）

ぶんた　北脇文太。　備前の惣名主なり。藤太夫の寡婦及び其娘待宵・時雨が狂女となりて、藤戶の浦の汐を渫へ鹽燒の妨げするを訴へ、領主佐佐木盛綱の命によりて其狂女を預り優遇す。然るに佐佐木廣綱が盛綱の命と詐りて藤太夫の寡婦を捕へ去る。文太怒つて鎌倉に下り、藤太夫の寡婦の牢輿に入替り、由比濱の刑場にて廣綱を突倒す（佐佐木先陣）

ぶんろく　文六。　因幡の藩士小倉彥九郎の養子なり。鼓を宮地源右衛門に學びしが、義母お種・源右衛門と姦通したること露顯して自刄す。是に於て義父等と共に源右衛門の宅を襲ひ、其逃ぐるを追ひ堀川橋上にて斬殺す（堀川波鼓）

へいだ　磨針兵太。　官太村任の下人なり。眞砂乙太郎勝興に苛まれ、村任を押籠めたる古葛籠を擔はされて追拂はる。後、村任と共に桃園染五郎豐舟を殺さんとして其行方を尋ね、醍醐にて勝興に遇うて殺さる（日本西王母）

へいだ　物部平太。　坂田前司忠時を殺して平政盛の家來となる。或日佐夜の中山の旅人宿菱屋に淸原右大將高藤の保護を賴みて同宿し、下女の小糸が忠時の女なるを知らずして蓬髮を剃らせ、小糸より親の敵と聲を掛けられて、小糸の情夫喜之介に殺さる（嫗山姥）

へいべゑ　平兵衛。　大阪備後町鍛冶職大文字屋利右衛門の弟子なり。堂島新地平野屋の遊女こかんと馴染む。或日大文字屋の內儀等と北野不動に詣で、堂島新地の遊廓見物の案內して歸る。折しもこかんの伯母來れるに遇ひ、國元よりこかんを連れ歸らんとして來れる者ある由を聞き、早くこかんを請出さんとして、穢多より請合ひたる雪踏の裏金を調へて其代金を身請金にせんとせしを、主人より拒絕せられ爭うて放逐せらる。是に於てこかんに逢ひて共に死を決し、寶永六年六月一日の夜中北野神明宮附近藍畑に走つて情死す（心中刄氷朔日）

へいま　乾平馬。　圓大臣の臣なり。龜の生血を得んとして丹後國與謝郡水の江の浦に來り、大龜を獲得せしを浦島太郎久壽に奪はる。平馬怒つて久壽の妻を海に沈め、泊瀨皇子を狙ひしが久壽・鷲國等に追拂はる。後、飛鳥の都にて久壽に刺殺さる（浦島年代記）

へいろく　三谷平六。　荒金刑部山國の家士なり。山國主家を橫領して榮花を極む。平六乃ち山國に勸めて坂上田村麿を討取らんとし、主從變裝して土山に下り、田村麿の室を要擊して馬方六藏に殺さる（田村將軍初觀音）

へゑもん　島田平右衛門。　山城國上田村の農なり。女お千代大阪新靱油掛町八百屋半兵衛に嫁せしが、夫が濱松行の留守中姑に離緣を迫られて歸る。半兵衛遠州より歸る途に平右衛門方に立寄る。時に平右衛門病床にあり。お千代に命じて平家物語祇王の段を讀ましめて之を評し、以て半兵衛に諷諫す。是に於て半兵衛始めてお千代の事情を知り、乃ち離別せざるを誓ひ、之を連れて大阪に歸る。平右衛門喜んでお千代の姉に門火を焚かせて之を送る（心中宵庚申）

べんけい　武藏坊辨慶。　熊野別當辨眞の子なり。書寫山の僧となつて暴行多かりし爲に捕へられて淸盛の前に引出さる。淸盛之に牛若の討手を命ず。辨慶乃ち五條の橋上にて牛若と戰ひ、力及ばずして主從となり、常盤酷刑の場に赴きて之を救ふ（孕常盤）義經の使者となりて泉の館に行き、泉忠衡の室忍の前に面會して三千兩の無心を請へる際、忠衡歸つて其請を峻拒して罵詈せしかば、辨慶怒つて去る。辨慶高館の城外にて常陸坊海尊に遇ひ、桃源延命酒・銀の心葉・黃金の盃・瑠璃の壺を得て之を義經に渡す。また錦戶太郎國衡の軍と戰うて苦戰に陷り、衣川に流れ來れる新御堂の仁王を拾ひて之を身代りとなし血路を開いて遁れ、義經を追うて蝦夷に渡り、鞍馬大僧正に邂逅して其助を得、追擊し來れる錦戶等と戰うて之を殺す（源義經將棊經）源義經の臣なり。屋島の合戰に數多の敵の首を刎ね誅戮繁きにして軍功を立つ。安西彈正太郎氏重が鷲尾三郎を讒したるを怒つて氏重を投飛ばす。また佐藤繼信の屍に引導して取らせんとて辨慶一流の陀羅尼を讀上ぐ（津戶三郎）義經が九條北町柏屋よりの歸途を三保谷四郎國時に要擊せられ、辨慶破れる菅蓑を捲つて躍出て、片岡八郎と共に力戰して三保谷を殺す。義經が北條四郎時政に意見せられて都を開くや、辨慶無念の餘り中途より引返し、老爺の鬘を被つて梶原平次景早の固めたる關門を破り、小早川彌藤太を殺す。かくて義經に

生甲斐なし、早く久作より寶物を取返して惟茂に渡せよとて後事を託し、妻に介錯せられて自刄す（栬狩劔本地）

ひろぶみ　北白川の廣文。加藤兵衛氏綱の女横笛が賀茂の安樂花に參りたるを勾引して、江州鏡山の遊廓ひらぎ屋長に賣る。横笛・長の苛責に堪へずして自刄するや、廣文其場に來つて前非を悔い、我元は常陸介平安盛の重臣にて八郎稚員秀圖と云ひしが、主君の勘氣を蒙つて浪人となり、遂にかかる非行をなしたるを懺悔して自刄す（傾城酒呑童子）

ぶがくのまへ　舞樂の前。大和國宇陀郡龍門家の女にして和琴の前の異母姉なり。繼母に惡まれて、談者香春顯定と祝言の席上にて顯定諸共に殺されんとせしを、繼母・顯定の母の善心に感じて惡心を飜し、舞樂の前も發心し、繼母諸共に河内國道明寺の尼となる。或日石川五右衛門・憲法の子の久吉を背負ひ、寺内に逃込みて大釜の中に潛匿せしを官人追及して捕縛す。是に於て舞樂の前は道明寺の老尼等と諸共に五右衛門の刑場に至り、久吉の爲に哀訴す（傾城吉岡染）

ふさ　房。大阪六軒町の娼家重井筒屋の遊女なり。紺屋徳兵衛と馴染み、親に送るべき金の調達を賴み、徳兵衛と共に其家に行き、其妻たる振して口入業治右衛門に會ひて、徳兵衛に丁銀四百目を貸さしめして歸り、朋輩と火廻の戯をなせる際飛脚來る。房未だ託すべき金なくして苦悶す。後、徳兵衛と逢うて互に身の上を歎けるを抱主に覺られて火燵責の苦を受け、徳兵衛と共に高津上鹽町大佛殿勸進所に走つて情死す（心中重井筒）

ふさひら　冷泉造酒之進房平。淺川左京大夫藤孝の臣なり。三好修理入道長慶酒色を以て足利將軍義輝を誘惑し終に之を弑す。是に於て房平は妻の淸瀧と共に義輝の室を護つて福島に落ち行き、己が親冷泉文次兵衛長房の家に賴る。是時房平・淸瀧と兄妹なるを聞き、それとは知らで契りたるを恥ぢて死なんとせるを、長房制止し歎いて曰く、淸瀧は我子なれども、房平は駒形一學兼綱前妻の子なり、己兼綱の後妻に懸想し、爲に兼綱を暗殺して其妻子を引入れたるものなれば、我は房平の爲には其父の仇にして、我妻の爲には其前夫の仇なれば、疾く首を討取れといふ。房平討ちかねたり。母乃ち前夫の仇と聲を掛けて斬付け、妻として長く愛せられたることを謝し、直に池に投身す。長房も其並びの池に身を投ず。房平夫妻愁歎に暮る。かくて後、藤孝と共に義兵を催し、三好長慶を朝日の岡に攻めて之を滅す（津國女夫池）

ふさわか　房若。鷹巣帶刀太郎廣房の子なり。父の死後母に連れられて江州伊吹山の久作を尋ね行き、店に並べたる艾を掴みて久作の子の萬虎に毆打せらる。其夜久作に斬られんとして之を殺し、母と共に迷ひ出で柞原にて世繼御前等に遇ひ、相共に惟茂を尋ねて信州に下り、惟茂より小太郎廣文と名付けられ、戸隱山にて橘諸任を殺して武功を立つ（栬狩劔本地）

ふぢ　阿藤。小倉彦九郎の妻お種の妹なり。彦九郎江戸詰の留守中お種宮地源右衛門と姦通す。お藤は姉の不義を彦九郎に聞知せられんことを憂ひ、自ら艶書を彦九郎に送り、戀慕せる如く思はせて其妻となり、以て姉を離別せしめて之を救はんとして成らず。お姉悔悟して自刄するや、お藤は彦九郎と共に源右衛門の宅を襲ひ、其逃ぐるを追うて堀川橋上に殺す（堀川波鼓）

ふぢ　龍田の藤。實名を藤五郎といひ、江戸屋勝二郎の元手代新七の弟なり。遊女吾妻を請出して勝二郎に與へんとして吾妻に刺殺さる（淀鯉出世瀧德）

ふぢさはにふだう　藤澤入道。夜盜の首魁なり。鏡の宿にて常盤及び其乳母千種を慘殺して財物を奪ふ。後、鏡の宿の名主の家を襲ひて牛若丸に殺さる（十二段）

ふぢたか　淺川左京大夫藤孝。足利將軍義輝の忠臣なり。足利義昭が義輝に代つて勅使に謁せしを三好國長に罵らる。藤孝乃ち國長と口論す。藤孝鳥羽畷の片里七瀨川に檢屍に行き、松永彈正久秀が屍體を將軍の室なりといひしを、藤孝よく見その然らざるを知つて久秀の陰謀を察知す。義輝が遊女大淀の色香に溺れ、之を御所に引入れ暴戾を極むるに及んで、藤孝その諫むべからざるを知つて大淀を斬る。三好長慶反して義輝を弑するや、藤孝諸國の義兵を募り、義昭を將として長慶を朝日の岡に攻めて之を滅す（津國女夫池）

ふぢつぐ　靑砥五郎藤次。靑砥左衛門藤綱の子なり。今川伊豫守源貞世入道了俊に拔擢せられて後事を託せらる。駿河守貞廣深く藤次を惡んで之を辱かしむ。藤次の妻夫の意氣地なきを歎いて離別を迫る。藤次乃ち大義を說きて妻を宥め、了俊の嫡子仲秋が京都よりの歸國を迎へて貞廣一味の者の底意を語る。かくて了俊の歿後仲秋に陪して墓參し、貞廣に欺かれて荒川近平・大道寺勝房を斬らんとせしが、二人より實情を聽取して其欺かれたるを覺つて恥づ。是時貞廣反すとの飛報を得て三人相約し、藤次は主君を尋ねて三河に赴く途中、大磯小磯の境なる辻堂に雨宿して、傍に眠れる旅人の雨具を盜まんとして覺られ互に斬合ひしが、折しも來合せたる大道寺に誰何せられて互に名乘合へば、計らずも皆朋輩なり。是に於て三人邂逅したるを悅び合ひ、相共に三河に赴きて結城右衛門太夫種春の軍に合し、貞廣の據れる駿府城を攻めて之を拔く（今川了俊）

ふぢつぼのにようご　藤壺女御。花山天皇の寵愛を得て懷胎せられ、按察左大將早岑に陷れられて壬生の里に籠居し、夜中羽倉伊賀介久國に殺害せらる。是に於て其怨靈毒蛇となつて宮中に現はれしを安倍晴明に祈祓はる。かくて後、天皇・弘徽殿女御同車にて還幸せらるる途中、眞葛が原にて三尺許の螳螂となつて出現し、早岑の惡黨を追拂うて消え、忽ち藤壺の姿に化現し、誤つて弘徽殿女御を恨みしことを謝し、弘徽殿をして皇男子を分娩せしむ（弘徽殿鵜羽産家）

ふぢてるひめ　藤照姫。大織冠鎌足の女なり。乳母を伴ひて父を尋ね、奈良の都を出で讃州志戸浦に赴く（大織冠）

ふぢのまへ　藤の前。伊東祐親の女なり。賴朝と通じて懷妊するや、祐親怒つて之を醫師法眼春樂に預け、其生める子を松川の水底に沈め、藤の前を平家の侍山木判官兼高に嫁せしめんとす。是に於て春樂は源家の爲に弟子春甫に命じて藤の前を毒殺せしむ（源氏冷泉節）

く見れば知人の長尾旗虎の家士直江時綱なりければ互に打解く。是時遙に兵火を望んで甲越の軍村上義淸を攻むるものと思ひ、各我軍へ馳け行く。甲越の戰長く結んで解けざりしが遂に和解となるや、政信等勝頼の供して萬歳を高唱す（信州川中島合戰）

まさもり 右衞門頭平政盛。 淸原右大將高藤に從ひて佐夜中山に赴き、高藤と共に菱屋に同宿せんとして渡邊綱と喧嘩し、高藤に物部平太の保護を依頼して去る。其夜平太が喜之介・小糸に殺さる。是に於て政盛怒つて喜之介を賴光の旅舍に襲ひ、渡邊綱と戰うて敗る。後に賴光の四天王に訴へられて斫罪に處せらる（嫗山姥）

まさわか 政若。 葛木島主の子にして都賀若の兄なり。「つがわか」を見よ（聖德太子繪傳記）

ますら 伊賀留田ますら。 外道を信じて山彥王子の師範なり。王子が花人親王と外道と佛道との法力を比べて負けらるるや、ますら聞いて大に怒り、魔術を行ひて己が兩眼空虛に飛出で、花人親王の樣子を見屆けて歸り、百島太夫と檢非違使勝船とをして喧嘩せしむ。後また其一眼玉世姬の繼母の魂に入替りて惡事をなせしが百島太夫に平げらる。是に於て山彥王子と丹州大江山の城に據り、廐戶皇子の軍と戰うて滅ぶ（用明天皇職人鑑）

またごらう 太秦又五郎。 侍從と云ふ女の父なり。侍從が高師直の氣に入りたるを喜び、近隣の者を集めて祝宴を開ける際、侍從は既に師直に斬られて、其死骸を駕籠に乘せて持來る。又五郎愁歎して心亂れ、走つて吉田兼好の庵室に投ず。是時師直の家士小林民部百騎を率ゐて兼好の庵室を襲撃す。又五郎奮闘して敵を破り小林民部を殺す（兼好法師物見車）

またごらう 又五郎。 大阪三軒屋町御手洗屋の主人なり。虛無僧來つて懇請するを容れて抱妓の吉野と吉岡とを交換し、後にて其虛無僧こそ官より尋ね人となれる憲法なるを知り、捕へて恩賞に預らんものと其跡を追掛く。其夜强盜石川五右衞門に押入られて多くの財物を奪ひ去らる（傾城吉岡染）

またじらう 「なかつね」の條を見よ（嵯峨天皇甘露雨）

またへい 浮世又平重起。 土佐將監光信の弟子にして吃なり。家貧しく大津繪を畫きて口を餬す。土佐の名を望み光信に懇請して拒絕せらる。又平失望して自害せんとし繪像を畫く。然るに其繪石を穿つ。光信感じて光起の名を授く。又平また銀杏の前を助け、雲谷等と戰ひて之を破る（傾城反魂香）

まつがえ 松枝。 豐後國濱の市の遊女を勸めて惡文次秀景と馴染み、秀景の貧困を救はんとして有馬の池の坊の湯女となる。或日秀景に浴客の刀を盜ましめんとして、計らずも其浴客の己が舅なるを知るに至る。是時逆臣別府雲澄が湯入の客となりて滯在せるを聞き、秀景と協力して雲澄の入浴中を襲擊して逸す。これより櫻葉と名を替へて僞盲の巫女となり、別府雲足に招かれて雜問に答へ、態と火焔燃上る中に落ちて盲目なるを信ぜしめ、雲足に遊山を勸めて、秀景と共に謀つて遂に雲足を滅す。朝廷其功を嘉して松枝に猪奈野の名を賜ふ（百合若大臣野守鏡）

まつかぜ 松風。 須磨の蜑なり。須磨に謫居せる在原行平と契り、また若宮の乳母となり、龍王の魂と入替る。嵯峨野にて恒寂僧都の軍に襲はれしを僧正遍昭に助けらる。かくて後行平が龍宮に奪ひ去られたる日の御座の御劍を取戾さんとし、妹の村雨と共に海中を潜るを夢みて寶劍を得て、妹と共に四位に叙され播州の鹽濱を知行す（松風村雨束帶鑑）

まつよひ 待宵。 備前國兒島郡藤戶の浦の鹽燒藤太夫の女なり。佐々木二郞廣綱に搦められしを佐々木三郞盛綱に救はる。然るに盛綱が藤太夫を殺して海に沈むるや、待宵その母・妹と共に狂女となり、父の死骸を得んとして藤戶の浦の汐を漂ふ。時に廣綱・盛綱の命と僞りて待宵の母を捕へ去る。是に於て待宵・妹と共に男裝して蘆賣となり、盛綱を狙ひて矢を放つ。其矢傍の水鉢の石に立つ。母を尋ねて由比濱に下り、盛綱の妻となる（佐々木先陣）

まつわかまる 松若丸。 吉田少將藤原朝臣行房の妾班女の子にして梅若と孖子なり。母に連れられて行房の邸に至り、梅若に逢うて喜びしが行房の室に叱らるる際、比良天狗・松若丸を攫み去る。行房の舊臣淡路七郞俊兼自刄して其魂天狗となり、松若を得て隅田川畔にて之を班女に渡す。かくて松若は母に連れられて京に上り、吉田家を相續す（雙生隅田川）

まのちやうじや 眞野長者。 豐後國の富豪にして玉世姬の父なり。上方騷動の由を聞き、玉世姬を連れ歸らんとして上り、歸途播州尾上にて兵藤太が梵鐘を引上ぐる場に來り、花人親王なるを知らずして山路と名付けて連れ歸る（用明天皇職人鑑）

まやぶにん 摩耶夫人。 淨飯大王の后にして憍曇彌の妹なり。四月八日右脇より悉達太子を生みて崩御せらる（釋迦如來誕生會）

まれよ 中納言希世。 延喜帝の綸旨を奉じ、三善淸貫と共に行いて蟬丸を逢坂山に棄つ（蟬丸）

まん 大阪淡路町龜屋忠兵衞の飯焚女なり（冥途飛脚）

まん 阿萬。 鹿兒島濱の町芭蕉布屋新兵衞の女にして、菱屋源五兵衞と懇懃を通ず。然るに繼母はお萬を他に嫁せしめんとせしかば、お萬乃ち源五兵衞と共に走らんとして裏塀を越えしが、帶松枝に懸りて吊下る。お蘭その有樣を見てお萬を助く。かくて後お萬・源五兵衞を尋ねて相逢へる際、お萬の繼母來つてお萬を連れ歸らんとす。源五兵衞怒つてお萬の繼母を斬り、又誤つてお萬を斬る（薩摩歌）

まんくらう 萬九郞。 王妃長歌の兄なり。龍田明神にて春彥尊に搦められしが、是時橘立左衞門秋廣の魂魄尊の心に入替つて萬九郞の縛を解く。かくて萬九郞は吉野の里に歸り紙漉業に從事せる際、雷雲法師來襲して長歌を奪ひ去らんとせしかば、卽ち奮闘して雷雲を搦め、老母を負ひ夏仁親王を慕うて春日山に赴く。これより親王・長歌を笠置山窟に隱しまゐらせ、之を養ひ參らん爲に山賊となり、山中にて卷筆を殺し、其衣類を剝ぎて家に歸れば、淀次郞照房我家に泊れるを見て、之をも殺さんとして組敷かる。折しも親王の仰によつて相和して義兵を擧げ、飛鳥の里にて持統天皇の軍に會し、大擧して春彥尊を滅す（持統天皇歌軍法）

陪して攝州尼が崎大物浦より乘船せしが、難風に遭ひて住吉浦に漂着し、これより吉野に分入る（吉野忠信）

源義經に陪して北野天神社に參詣し、土佐坊昌俊か神樂堂の蔭に隱れて義經を狙へるを搦出して義經の前に引据う。其夜昌俊部下を率ゐて義經の堀河の邸を襲撃するや、辨慶奮戰して昌俊を捕ふ。かくて義經都を開き、辨慶等と共に主從十二人修驗者の姿となつて安宅關にかかり、富樫左衞門家直の警固嚴しき由を聞き、辨慶まづ關所に至つて家直に揃められしが、家直・義經主從に同情して一行の通過を許可す。是に於て義經主從無事に奥州に下つて藤原秀衡に頼る（飜靜胎內捃）

へんぜう　僧正遍照。　皇子の病氣平癒を祈る。後、宮參內する途中嵯峨野にて松風の難儀を救ひ、恒寂の軍と戰うて之に勝つ（松風村雨束帶鑑）

ほうこくこくし　豐國國師。　播州尾上にて諸岩の先妻尾上の鐘を被きて失せたる時、國師五大明王五龍神の祕法を行ひて祈禱す（用明天皇職人鑑）

ぼくあん　澁川卜庵。　大阪本町新物店菱屋の主人四郎右衞門に灼炙す（今宮心中）

ほふげん　川倉法眼。　大和吉野山の僧なり。源義經か吉野の奥に逃入りたるを横川覺範等と共に之を討取らんとして、義經の家士佐藤忠信に殺さる（吉野忠信）

ほふしやうばうのそうじやう　法性坊僧正。　延曆寺の座主にして菅丞相の師なり。或夜十六夜の靈來つて變成男子の祈禱を依頼す。尋で菅丞相の靈來つて、雷祈禱の爲に內裏より召さるとも行かぬやう請ふ。法性坊答ふるに、宮中より御召三度に及はば則ち行くを以てす。菅丞相の靈怒つて柘榴を口に銜んで吐懸くれば火焔となつて燃ゆ。僧正咒詛して之を消す。かくて雷鳴の爲內裏より召さるること三度に及ぶ。法性坊乃ち參內して雷被除の祈禱をなす（天神記）

ほふねんしやうにん　法然上人。　新黑谷の高僧なり。津戸三郎勝平等に賴まれて佐藤繼信追善供養をなす。勝平が佛法に歸依して自刄するや、法然乃ち佛法の不思議を見せて之を極樂淨土に往生せしむ（津戸三郎）

ほふみやうしやうにん　法明上人。　藤原民部丞孝房の末子なり。母が虎平次に殺されたる時、其肋の疵より生れ出で、中山寺の眞如上人の弟子となり、叔父教信法師に從ひて七墓を巡り、飛田の墓地に來つて兄眞光の縊死を發見し、教信と協力して之を蘇生せしむ。後、賀古の庄の伽藍に住して亡母亡姉の菩提を弔ひ、衆生の利益を祈る（賀古教信七墓廻）

まきふで　卷筆。　布引淀次郎照房の妻なり。夫勝成が春彥尊を刺さんとして蹴鞠の會に出でたる跡を慕ひ行き、勝成が首を拾ひて歸る。後、持統天皇の勅を奉じて夏仁親王を尋ね行き、山中にて山賊萬九郎に刺殺さる（持統天皇歌軍法）

まごゑもん　勝木孫右衞門。　大和國新口村の農夫にして、大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衞の父なり。「むめかは」の條を見よ（冥途飛脚）

まごゑもん　粉屋孫右衞門。　紙屋治兵衞の兄なり。「ぢへゑ」の條を見よ（心中天網島）

まさかど　平將門。　朱雀院の承平二年十月反逆を企て、猿島に皇居に擬して邸宅を造り、僭して王と稱し女色に耽り、同じ姿の七人に化現せしが惡運盡きて秀郷に刺殺さる（傾城懸物揃）

まさきよ　鎌田兵衞正清。　源義朝の重臣なり。主君に從ひて尾張に落ち行き、妻宿木の實家長田庄司忠宗を便り、酒宴の席にて忠宗に騙討に遭うて殺さる（鎌田兵衞名所盃）

まさきよ　加藤虎之助正清。　眞柴肥前大領久吉の供小姓を勤む。平朝臣春長の命を奉じて惟任判官光秀の頭を毆打し、久吉に叱られて蒙古征伐軍の留守居を命ぜらる。光秀反して春長を本能寺に弒するや、正清遲れ馳に馳付け、敵中に飛入り春長の首を拾ひて、其事變を春長の嫡子の春忠に報告し、敵軍と奮戰して光成の首を刎ぬ。後、久吉朝鮮征伐を思立つや、正清乳守の里に遊女小磯を訪うて其所持せる朝鮮地圖を懇請す。是時小磯の情夫小西彌十郎其地圖を奪はんとして正清と格鬪せしが、小磯の仲裁によつて和解し、相共に朝鮮征伐の軍に從ふ（本朝三國志）

まさくに　梅津源左衞門正國。　常盤の父なり。常盤が清盛の妾となつて怒に觸れて、捕へられて正國の門前にて磔刑に處せられんとする際、俄に産氣付きて清盛の子を生む。正國・清盛を怨んで常盤の生める子を殺す（孕常盤）

まさしげ　楠木正成。　足利尊氏西國の兵を率ひ海陸より都へ攻上る。正成謀を獻し、暫く天皇吉野に幸し給ひ、敵をして恣に京師に入らしめ、然して後河を塞ぎ糧道を絕ち、敵の疲るるに乘じ四方より攻めて之を破らんことを奏せしが、坊門宰相清忠に妨げられて用ゐられず。是に於て正成死を決し湊川に出陣する途中、櫻井驛にて子の正行を前に招き教訓して故郷に歸し、湊川にて尊氏と決戰して利あらず、退いて民家に入り、弟正季に謂つて曰く、吾子何處にか魂を託せんと欲する。正季曰く、願くは七度人間に生れて國賊を滅さんと。正成欣然として死す（吉野都女楠）

まさずみ　修理之介正澄。　土佐將監光信の門弟なり。元信の畫きたる虎生動せるを正澄畫虎を抹殺し、光信より土佐光澄の名を賞ふ（傾城反魂香）

まさつら　楠木正行。　幼少の時足利尊氏と戰はんとして走出でて母に制止せらるる際、名和長年が後醍醐天皇を守護して來るに遇ひ、相謀りて天神森に陣して朝敵を破り、長年と共に天皇に供奉して吉野の內裏へ急ぐ（吉野都女楠）

まさとし　原五郎昌俊。　甲斐國守武田信玄の家士なり。信玄に陪して浪人山本勘介晴幸を草廬に訪ふ。後、勝頼の不興を宥め衞門姬との婚儀を懇請して聽かれず。勝頼武功を立て甲越和解するに及んで、昌俊等勝頼を誘引して婚儀を擧ぐ（信州川中島合戰）

まさのぶ　高坂彈正政信。　甲斐國守武田信玄の重臣なり。勝頼に陪して信州諏訪明神に參詣す。勝頼途に長尾輝虎の娘衞門姬に遇ひて相思の仲となり、村上義清に橫戀慕されて妨害せらる。是に於て政信・義清相爭へる際勝頼の行方を失し、之を尋ね行きて路傍の辻堂に宿る。折しも一人の男來つてここに憩ひ、腰にせる瓢を傾け一二杯飲んで眠る。政信其瓢を盜みて飲み盡し、誰何せられて能

り、志賀辛崎大明神にて戶無瀨の局を搦めて掠奪せんとして、一物も獲られざるを怒つて戶無瀨を刺さんとし、過つて師高を刺し、京之進義次・齋藤瀧口頭方に殺さる（娥歌加留多）

むねきよ 彌平兵衞宗清。 平家の侍なり。伏見の里に住す。或夜常盤三幼兒を伴うて來り軒下に雪を凌げるを見、早く去るべきを諷刺し、雀を追拂ふと稱して空弓を鳴らして去らしむ。源氏の臣藤九郞盛長來つて常盤を勞はり去らしめたるを謝す。宗清また班蒼の雀來れりと稱して、然も暗に義兵を擧ぐべきを諷す。宗淸これより官職を辭して閑日月を送りしが、牛若に變裝せる東雲の急を救うて牛若の跡を追はしめ、牛若の追手監物太郞を道に要して其追ひ行くを妨ぐ（源氏烏帽子折）

藤九郞盛長の妹を娶り、松が枝といふ女を設けしが、妻子を離別して平重盛の家士となる。重盛の命を受けて常盤の行跡を視察せんとして、行旅の賤武士に變裝し、頰冠にて常盤の閨中に入る。常盤は宗清と心付かずして抱付きしかば、宗清乃ち常盤を罵詈しながらも同情を寄せ、常盤・橫笛・雛鶴の三人をして竊に淸盛の邸を脫走せしむ（平家女護島）

むねしげ 五大院右衞門宗重。 北條高時の佞臣なり。安藤左衞門入道聖秀が成良親王を禮遇したるを罵りしが、高時の仲裁にて聖秀の娘綸合姬と宗重の嫡子宗房と婚約をなす。然るにこの婚約も聖秀によつて破らる。元弘三年五月二十二日新田義貞の軍に鎌倉を攻められて戰利あらずと見るや、乃ち高時の首を刎ねて義貞の軍門に降を請ひ、猛犬白石に嚙附かれて死す（相模入道千疋犬）

（序云、綱吉將軍に生類を憐むべきを勸めたる護持院隆光を惡みてかくいひなしたるにて、猛犬白石も新井白石にあてたるなり）

むねしげ 富樫左衞門宗重。 源頼朝より浪人吟味の役を命ぜられ、鶴岡の宮にて源六郞淸治を捕へ、足立右馬允景久に欺かれて之を赦す。かくて京に上り島原遊廓に遊び、遊女唐琴のかねて戀慕せる琵琶姬なるを見て其奇遇を喜び、直に請出さんとす。唐琴之を悅ばず。宗重怒つて唐琴を毆打し、更科の情夫七草四郞高衡に蹴飛ばされて歸り、部下を率ゐて四郞を襲ひたれども之を逸し、四郞の據れる筑紫の七草城を攻めて討死す（傾城島原蛙合戰）

（序云、これは天草一揆を攻めて戰死したる板倉重昌を脚色したるなり）

むねふさ 五大院十郞宗房。 五大院右衞門宗重の長男なり。里見義助を搦めて獄舍に投ず。或日綸合姬獄舍を訪うて義助に食物を贈る。宗房怒つて綸合姬を搦め、其食物を地に棄て蹈付けて之を義助に食はしむ。また義助を大倉が谷に引出して、猛犬をして嚙殺さしめんとして、義助に投飛ばされて死す（相模入道十疋犬）

むねもり 平宗盛。 源氏の兵に捕へられ、元曆元年五月下旬頼朝の前に引出さる。宗盛死罪を免れんとして平大納言時忠に罪を歸し、哀訴する所ありしが遂に首を刎ねらる（殘齡胎內捃）

むねをか 兵藤太宗岡。 佐渡國松浦の人なり。山彥王子の花人親王討滅の令旨を奉じて歸りしが、之が爲に母死することとなり、法師となつて播州高砂尾上の松樹下に佛道を修行し、海底の梵鐘を引上げんとして往來の者に勸進を求めし折しも、花人親王・佐用姬・諸岩に邂逅す。かくて後厩戶皇子の東上を明石にて出迎ふ（用明天皇職人鑑）

むねをか 伴大納言宗岡。 惟喬親王を比叡山麓小野の閑居に訪ひ、美人を描ける扇を出して暗に惟喬親王に謀反を勸む。是より惟喬親王と心を合せ、暴逆の行多かりしが、遂に般若五郞仲則に殺さる（井筒業平河內通）

むまやどのわうじ 厩戶王子。 父は用明天皇、母は玉世姬なり。生れながらにして佛德を具し給ふ。山彥王子を丹州に攻めて之を滅す（用明天皇職人鑑）

むめかは 梅川。 大阪新町遊廓槌屋の抱妓なり。大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衞と馴染む。忠兵衞藏屋敷の侍の委託金三百兩を橫領して梅川を落籍す。梅川一時喜びしが其請出金か委託金なりしを知るに至つて、深く歎きながら忠兵衞に連れられて大和國新口村に赴き、忠兵衞の故舊忠三郞の家に立寄る。折しも忠兵衞の父孫右衞門鎌田村の寺院に參詣する途中、下駄緒を切つて泥田に轉び込みたるを見、走り行きて懇に勞はる。孫右衞門その樣子を熟視して梅川なるを察し、銀子一枚を與へて忠兵衞と共に御所街道に遁れしむ。かくて兩人其途上捕吏に取押へらる（冥途飛脚）

むらさめ 村雨。 須磨の浦の蜑にして松風の妹なり。在原行平と契りて姉と戀を爭ひ、互に行平が龍宮に奪はれたる日の御座の寶劍を取返さんとして、海中を潛るを夢みて寶劍を得たり。これによつて行平の罪赦されて京に還ることとなり、松風・村雨も四位に叙し、播州一國の鹽濱を知行するに至る（松風村雨束帶鑑）

むらたう 官太村任。 大納言民部卿藤原元方の舊臣にして土師別當村正の弟なり。豫て元方の次女二位姬を戀慕せるに、二位姬が桃園染五郞豐舟と契りて稀若を生むや、村任大に怒り、二位姬の姉薄雲及び兄村正と相謀り、稀若を川中に投じ、二位姬を捕へんとして眞砂乙太郞勝興に妨げられて古葛籠に押込めらる。また豐舟を殺さんとして其行方を尋ね、醍醐の旅籠屋にて勝海・勝興に殺さる（日本西王母）

むらはや 村速。 夜盜なり。藤巖入道等と共に鏡の宿にて常盤及び其乳母千種を殺して財物を奪ふ。後、鏡の宿の名主の宅を襲ひて牛若丸に斬殺さる（十二段）

むらまさ 土師別當村正。 大納言民部卿藤原元方の舊臣なり。元方の長女薄雲及び官太村任と心を合せて二位姬を脅し、二位姬の侍女小萩に暴行をなし、其抱ける二位姬の子稀若を奪ひ、眞砂前司勝和を毆打して絕息せしむ。後に小萩が宮城野と名乘りて室津の遊女となれるに戀慕し、之を請出さんとして桃園染五郞豐舟に斬殺さる（日本西王母）

めうかん 龜屋妙閑。 大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衞の義母なり。「ちゆうべゑ」を見よ（冥途飛脚）

めうけい 妙慶。 奈良の遊廓吉田屋の主人仁三郞の母なり。遊女吾妻が客の藤を殺さんとして夜中目を覺せるを、其心を知らずして來つて話掛く（淀鯉出世瀧德）

めうしやくぜんに 妙釋禪尼。 藤原熊鷹・藤原光輝の母なり。後世を願ひ氷室谷に閑居して念佛に餘念なし。或日熊鷹來つて

まんげつ　滿月。　讃州志度浦の漁夫戸次の女にして賤なり。大織冠鎌足の臣若狹之介則風の妻となり、鎌足の命を奉じて、龍王に奪はれたる面向不背の玉を取戻さんとして惡龍毒魚の爲に喰まれて絶命す。鎌足乃ち滿月の左の脇腹を切りて、孕める子を引出し養子となす、長じて之を房前大臣といふ（大織冠）

みくまのうじ　三熊野大人。　簸山に棲む惡鬼にして鬼神の首領なり。素戔嗚尊と戰ひ敗れて取押へられ、寶劍の所在を詰問せられて、出雲國の川上島上の巓に棲む八岐の大蛇の奪ひ取りたることを自狀し、尊に降服して眷族等と共に誓紙に捺印して姿を消す（日本振袖始）

みさきのまへ　和田義盛の娘にして朝比奈義秀の姉なり。花見の宴席にて熊野と花一枝の奪合をなす、宴終りて名劍友切丸を預りて歸る途中、京小二郎の母木蔭より出でて其劍を奪はんとす。是に於て兩人斬結んで互に痛手を負ふ（本領曾我）

みだいし　彌陀石。　鎌田兵衛正清の子なり。七歳の時に兩親が長田庄司忠宗に殺さる。みだいし兄みだ若と共に忠宗を恨みて追廻せしが、惡源太義平に連れられて源義朝に逢ふ（鎌田兵衛名所盃）

みだわか　彌陀若。　鎌田兵衛正清の子なり。九歳の時に兩親が長田庄司忠宗に殺さる。みだわか弟みだいしと共に忠宗を恨みて追廻せしが、惡源太義平に連れられて源義朝に逢ふ（鎌田兵衛名所盃）

みちざね　菅丞相道眞。　延喜帝の御宇右大臣となり、才學勝れ仁慈の德に富む。左大臣藤原時平、唐使裴文藉、藤原菅根等に讒奏せられて勅勘の身となり筑前太宰府に流さる。その都を出づる際京童二三百手手に梅枝を捧げ、門前に來つて別を悲しむ。太宰府に着きて後、博多の白太夫が十六夜の死骸を安樂寺に葬送する際、白太夫の宅を訪うて荒太夫に斬付けらる。菅丞相卽ち庭上に飛去り、一首の歌を詠じ神變不思議を見せて其姿消ゆ。荒藤太が秦兼竹に刺殺さるる際菅公の姿現はれ出づ。菅公遂に歸洛を赦さるる勅勘なきを悲しみ、筑前國天拜山に登りて一通の告文を文杖に挾み、梵天帝釋に雷神となつて君邊の姦臣を取殺さんことを祈り、延喜三年二月二十五日五十九歳にて、天拜山上にて生けるが如くにして死す。同年六月二十五日雷神となり、多くの眷族を率ゐて内裏の上に鳴りはためき、時平、菅根等を取殺せしが、法性坊の法力によつて祈伏せられ、正一位太政大臣南無天滿大自在天神の勅號を賜はる（天神記）

みちのくのつぼね　陸奥局。　宮中第一の美女なりしが、吳服中將雪枝と情を通じ罪を得て里住ひせし所に雪枝訪ひ來る。尋で雪枝の愛人澤潟姫も雪枝を尋ねて來る。陸奥之を拒絶して忽ち澤潟の魂と入替る。是時宇治太郎が雪枝を殺さんとして來襲す。陸奥乃ち雪枝をして遁れしめ、其寄手の一人を刺殺す。後、富田林の與九郎狐に誘引せられて董親王の御前に出でて有難き御諚を賜はる（天鼓）

みつてる　藤原光輝。　藤原熊鷹の弟なり。桓武天皇の御代遣唐使となつて渡唐し、周易の研究を遂げ、其註釋書などを携へて歸朝す。朝廷其功を嘉して中納言左大將に任ず。或日釣竿を携へて出で、小川の邊にて以呂波の前に逢うて情を通じ、以呂波の前を横戀慕せる熊鷹に見られて罵詈せらる。後、熊鷹が母を弑するや、光輝は熊鷹と戰つて斬付けられしも屈せず、其逃ぐるを追うて西寺の門前に至り、下僧等に搦められんとせしを空海に助けらる。光輝これより空海の弟子となつて高野山に登る。高野山腹の神谷宿にて以呂波の前が己を尋ね來るに邂逅し、我名を語らずして哀れを極む。後、都に上り守敏に陷れられて畜生門の刑に遭はんとせしを空海の法力によつて守敏及び熊鷹滅び、光輝及び以呂波の前は朝廷に召されて官祿を賜はる（以呂波物語）

みつなり　左馬五郎光成。　惟任判官光秀の子なり。父と共に反して主君城之介春忠を愛宕山花見遊山の場に襲ひ、春忠をして自刃せしめしが、この戰に光成も眞柴肥前大領久吉の家士加藤虎之助正清に殺さる（本朝三國志）

みつはる　藤内四郎光治。　藤内太郎家治の弟にして鼓の藝人なり。足利將軍義教に從ひて叛臣赤沼入道父子を吉野城に攻めて軍功あり（雪女五枚羽子板）

みつひで　惟任判官光秀。　平朝臣春長の臣なり。春長より眞柴久吉の部下となつて蒙古征討の軍に從ふべき命を受けて、之を悦ばず。春長大に怒り近習の者に命じて光秀を毆打せしむ。是に於て光秀反し、春長を本能寺に襲擊して之を弑し、春長の室を圍み、室の彈琴の音に士卒の心蕩然となれる折しも久吉の軍に攻破らる。光秀水拔の纖樋の中を潛りて落ち行き、小栗栖の里にて宿を借らんとして春長父子の幽靈に惱まされ、夜中山崎を越えて本國に落ちんとせしが、土民の爲に竹槍に貫かれて死し、其死骸を日の岡に逆磔にせらる（本朝三國志）

みや　「とほやま」を見よ（傾城反魂香）

みやぎの　宮城野。　京都九條の遊女なり。藤原民部丞孝房と馴染む。後に神崎の遊女となり、孝房の父教孝の配流せらるる狀を見て、其罪を贖はん爲に眞光を唆して金を得んとす。然るに眞光これが爲に失踪するに至りしかば、宮城野は遊廓を脫走し孝房と共に眞光の行方を尋ねて飛田の墓所を彷徨す（賀古教信七墓廻）

みりんわう　「おほくさかのしん」を見よ（浦島年代記）

みんぶ　小林民部。　高武藏守師直の家士なり。主命により鹽谷判官高貞の奥方を捕へんとし、手兵を率ゐて吉田兼好の庵室を圍んで敗れ、太秦又五郎の鐵にかかりて殺さる（兼好法師物見車）
（序云、吉良義央の味方にて奮鬪せし小林平八郎をかくいひしものならん）

みんぶさゑもん　醒井民部左衞門。　夜廻の物頭なり。大阪三軒屋町御手洗屋に强盜石川五右衞門が闖入せしを取押へんとし、身仕度して飛入つて五右衞門に斬殺さる（傾城吉岡染）

むぐらまる　花室三位葎丸。　在原行平の室司の前の兄にして恒寂僧都一味の惡人なり。勅使と僞りて龜彥の庄司に行平と關係ある者を皆殺すべきを命ず。尋で庄司の家に亂入して浦島太郎に投殺さる（松風村雨束帶鑑）

むざう　鎌須無藏。　師高手下の强盜とな

將に從つて赤沼父子を吉野の城に攻めて滅す（雪女五枚羽子板）

もりひろ 平井大炊介森廣。近衞家の家人にして一角の兄なり。故主君經忠の後室より繼子月光公を殺すやう賴まれて之を諫めしが、弟に心を疑はれて格鬪して負け、日像に諭されて兄弟和睦し、日像の弟子となり智覺と法名す。かくて鹽谷左京時平が日像の寺院を襲擊したる際之と奮戰す（大覺大僧正御傳記）

もりみつ 狛左京進盛光。南都の樂人なり。權大納言頭の中將勅使として春日社に詣で、盛光を取立てて關東に下さんとして連れ歸る。かくて盛光京都滯在中比丘尼靜三を北嵯峨の庵室に尋ね行き、ここに計らずも娘の春姫と邂逅せしが、折しも近藤兵庫守廣忠に襲擊せられ、奮戰して圍を破り丹波路に落つ。後に奈良にて廣忠が靜三等を縛せる場に出遇ひ、直に靜三を助けて其縛を解き、廣忠姦通の罪科を守護職に訴ふ。これより盛光再び用ゐられて正四位に叙せらる（三世相）

もりや 大連物部守屋。崇峻天皇に仕へ、常に佛法を排斥したり。母より立花(りつくわ)は天の祭と聞いて立花の會を催し、遂に反逆を謀り、膳穀負を斬らんとするや、母乃ち守屋に意見して自殺す。守屋益怒つて穀負を殺し、東直駒に命じて聖德太子の妃芹摘姫を攻めしめ、自ら內裏を圍みて帝及び公卿の北の方を奪ひ去り、秦川勝・弓削廣海に命じて公卿の北の方等を河內國志紀の山館に幽閉せしめ、尋で斬罪に處せんとせしが、川勝心を飜して天皇の御味方となりし爲、守屋の勢頓に挫け、遂に聖德太子の軍に河內國稻村の據城を攻められて滅ぶ（聖德太子繪傳記）

もりゑもん 山本森右衞門。河內屋與兵衞の伯父にして高槻藩の徒士頭を勤む。高槻藩の小性逢の出頭小栗八彌に陪從して外出したる途に、與兵衞・會津者の郎九と喧嘩して、郎九に投げたる泥土狙を外れて八彌の馬に中る。森右衞門無禮を怒つて與兵衞を毆打し將來を戒めて放免す。後、與兵衞が豐島屋お吉を殺すや、森右衞門は捕吏と共に與兵衞の行方を搜索して之を捕縛す（女殺油地獄）

もろいは 五位之介諸岩。檢非違使勝船の弟なり。勅勘を蒙りて佐渡の島の流人となり、松浦庄司に仕へて京雀と綽名せらる。偶花人親王・玉世姬佐渡の島に漂着し給ひしを助け參らせ、己が妻は親王の敵生駒の宿禰の女なるの故を以て離別し、松浦庄司の女佐用姬を妻となして花人親王に從ひ、播州にて兵藤太宗岡が梵鐘勸進の場にて前妻と邂逅す。かくて後明石潟にて厩戶王子を迎へて山彥王子討伐の軍に從ふ（用明天皇職人鑑）

もろうぢ 平師氏。朝日將軍に補せられ、源賴義を辱かしめんとして賴義の家臣に辱かしめらる。是に於て賴義を讒して追討の勅命を受く（大掛物十幅一對）

もろかど 阿閇府生諸門。主君圓の大臣の惡事を諫めて怒に觸れ浪人となる。義子諸宗が綾織姬を預りて虐待するを見、妻と共に綾織姬に諷して姬を鶴國の館に遁れしめ、鶴國と諸宗と格鬪するを傍觀して諸宗を助けず。また妻をして中帶姬の腹を割いて袋子を出さしむ。雄略天皇其忠節を嘉して舊官に復し給ふ（浦島年代記）

もろたか 加賀郡司師高。戶無瀨局の弟なり。建禮門院の侍所を勤め、門院の侍女橫笛及び刈藻を橫戀慕す。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、橫笛は賴方に、刈藻は義次に密通せるを探知し、賴方等と口論し、また刈藻を捕へて口說けども、其意に從はざるを怒り、奸策を廻して刈藻・橫笛・義次を殺さんとして、師高の罪惡露顯し、追放せられて岩村源九郎・鎌須無藏と共に强盜となり、志賀辛崎大明神にて姉の戶無瀨局を搦めて掠奪せんとして、義次等と戰ふこととなり、搦められて輿に押込められたるを源九郎・無藏に刺殺さる（娥歌加留多）

もろたふ 伊豫國武者所太宰大貳橘諸任。宮女世繼御前を戀慕し、また平國の寶劍を望みたりしが、平惟茂禁中の變化退治の武功によつて、余吾將軍に任ぜられて世繼御前及び平國の寶劍を賜はる。是に於て諸任憤怨し、世繼御前より惟茂への贈物に對して暴行を加へんとして金剛兵衞利綱に追拂はる。かくて屢惡行をなせしが戶隱山にて房若に斬殺さる（花狩劍本地）

もろなほ 高武藏守師直。足利尊氏の重臣なり。卿の宮を戀慕せしが、侍從といふ女より鹽谷判官高貞の室の美人なるを聞き、侍從をして高貞の室の淸水觀音に參詣するを途に要して口說かしむ。然るに侍從は高貞の室が其意に從はざるを察して逃ぐ。師直怒つて侍從を捕へて殺し、高貞を將軍家に讒奏して切腹せしめ、家來の小林民部に命じて高貞の室を捕へしむ（兼好法師物見車）文和三年冬霰散り亂るる夜鎌倉飯島屋敷に茶會を催す。其夜鹽谷判官高貞の遺臣四十七士に襲擊せられて滅ぶ（碁盤太平記）
（序云、吉良義央を師直、淺野長矩を高貞に替へてかく作りかへたるなり）

もろひで 平師秀。平師氏の子なり。家臣大木戶八郎國俊、吉見二郎盛時、惡五郎教定、涌泉九郎行治と六萬餘騎を率ゐて、源賴義が北陸に落ち行くを長坂に追擊し、戰敗れて殺さる（大掛物十幅一對）

もろむね 阿閇郡領諸宗。圓大臣の子なれども諸門の娘と替へられて諸門の子となる。圓大臣の重臣となりて惡行多し。仙人の生血を得んとし、葛城山中に入つて大草香の臣を殺す。また綾織姬を預りて橫戀慕し、姬が己の意に從はざるによつて虐待したりしが、遂に鶴國に刺殺さる（浦島年代記）

もんがく 高雄の文覺。流人となりて伊東次郎祐近に護送せられ、津の國渡邊川より乘船し、遠州潮見潟にて暴風に遭ひしが、文覺祈念して風靜まる。伊豆に下りては賴朝・朝日の前に祟れる八重姬の怨靈を祓除け、懷中より義朝の髑髏を取出して、賴朝に見せて旗上げを勸め、自ら福原の新都に上りて院宣を請ひ、歸途夜盜に遇ひて之を縛し、賴朝に院宣を傳ふ（賴朝伊豆日記）
（序云、文覺流人となり、海上にて法力を以て暴風を靜めるまでは、舞之本・文覺にあるを脚色したるなり）
源賴朝に心を寄せ、賴朝の爲に平家追討の院宣を下し賜はつて、伊豆に下る途中遠州池田の遊女町を過り、熊野の狐つきといふ雜病を治し、狐より義朝の髑髏を貰ふ。赤澤山にて一萬・箱王と鬼王・團三郎と互に斬結ばんとする場に馳け付け、四人の子供を教訓して主從たるを約せしめ、且成人の後工藤祐經を討取るべきを諭し、また股野五郎景久を捕へ、鬼

光輝を讒す。禪尼其言を信ぜず、却つて光輝を庇護せしかば、熊鷹の邪險の刄にかかつて死す（以呂波物語）

めうじゆん　妙順。　藤屋伊左衛門の母なり。伊左衛門の馴染める扇屋の名妓夕霧の病重篤なると聞き、金二千兩を贈りて之を請出し、且見舞に行く（夕霧阿波鳴渡）

めうほふばう　那智妙法坊。　修驗者なり。日野中納言資朝の愛人菊姫及び資朝の子阿新丸が佐渡郡司山城入道三郎の館を忍出で、塀を越えんとするに際會し、之を助けて我家に伴ひ匿まひしが、妻歸つて樣子を見て、遊女若衆を引入れしものと邪推して痴情喧嘩せる時、山城入道の兵來つて菊姫等の行方を搜索す。妻乃ち夫の惡性を辱しめんとして菊姫等の隱所を指示す。妙法坊力戰して敵を退け、菊姫・阿新丸を連れ船に乘つて遁れ、山城入道の追及するを數珠押揉んで祈禱すれば、大風俄に起つて山城入道の船を覆す。かくて妙法坊は二人を連れて京に上り、左衛門尉藤原に逢ひ、相謀りて石見守中原を奈良薪能の場に襲ひて殺す（本朝用文章）

もとくに　一藤太基國。　伴大納言宗岡の家來なり。主命により清和天皇の中宮高子を奪はんとし、犬の皮を被りて高子の邸内に闖入する所を般若五郎仲則に見付けられて殺さる（非商業平河内通）

もとやす　丹左衛門尉基康。　平家の家士なり。妹尾太郎兼康と共に平清盛の命を奉じ、鬼界島に赴きて成經・康賴・千鳥の三人を船に乘せて歸る途中、備後國敷名浦にて俊寛の下人有王丸に逢ふ。折しも此浦に清盛の船泊す。乃ち千鳥を有王丸に預け、清盛の船に行きて成經・康賴を連れて歸れることを報ず（平家女護島）

もへゑ　茂兵衛。　大經師以春の手代なり。以春の妻おさんに頼まれて銀を調達せんとして主人の印判を盗みしを、相手代の助右衛門に見付けられて毆打せらる。この夜茂兵衛かねて已に戀慕せるたまの恩を晴させんものと寢にたまの閨に入り、計らずもおさんと不義に陷り、相共に逐電して丹波國柏原に落ち行き、新六と變名して助作に便ろ。助作これを官に訴へし爲、捕吏に縛せられて刑場に行き、黑谷の東岸和尚に救はる（大經師昔曆）（實說は、天和三年九月二十二日茂兵衛・さん磔刑、玉は獄門、大經師意俊の家は斷絶す）

ももしまだいふ　百島太夫。　玉世姫の傅なり。伊賀留田のますらの魔術にかかりて檢非違使勝船と喧嘩し、山彦王子が花人親王を捕へ去らんとするを奪還す。後に豐後國に歸り、山彦王子の道士伊駒宿彌を捕縛し、旣戶王子の軍に屬して山彦王子を丹州大江山に攻めて之を滅す（用明天皇職人鑑）

ももつら　常陸大掾百連。　吉田少將藤原朝臣行房の室の兄なり。山王權現二十一社修造の奉行を勤め、行房の丹誠して集めたる木材を雜じ、行房の臣勘解由兵衛景逸と共に奸策を廻し、遂に吉田家を橫領して遊興に耽りしが、北白川にて酒宴の席上行房の妾班女に銃殺せらる（雙生隅田川）

もりさだ　判官代盛貞。　夫を恕うて冤罪に陷れる以呂波の前を刑場に引かしめ、其首を刎ねんとして後に廻れる際、俄に河村金吾忠義に拔討にせらる（以呂波物語）

もりしげ　平次兵衛盛重。　按察左大將早岑の家來なり。壬生の里に籠居せる藤壺女御の番を勤め、清瀧の高聲に話すを聞咎めて樹に吊上ぐ。其夜羽倉伊賀介久國を導きて藤壺女御及び其乳母治部卿を殺害せしめ、また花山天皇を弑し奉らんとして白川の邸に押寄せしを又五郎義長に追拂はる。かくて後男山八幡宮に隱れたる弘徽殿を襲ひ、戰敗れて小餘綾新左衛門尉景春に殺さる（弘徽殿）

もりつぐ　越中次郎兵衛盛次。　内大臣平重盛の家士にして、左京之進義次の兄なり。義次が建禮門院の侍女刈藻と密通したる惡評を聞きて義次を幽閉す。盛次當番の日齋藤左衛門尉勝賴と軋み合ひしが、重盛公より建禮門院の侍女横笛の檢死を命ぜられて建禮門院の御所に至る。然るに建禮門院は加賀郡司師高よりこの事を聞かされて憤怨せらる。盛次乃ち師高の讒より事起れるものと察し、勝賴と和睦して師高の行動に注意す。かくて建禮門院より横笛の首桶を出されしを開き見れば、笛を折り土を盛りてあり。義次の首桶を開けば、義次の髻に石を入れてありしかば、深く建禮門院と重盛公との仁心深きに感泣す。かくて後重盛公の命によりて頼方・義次召還の使者となり、志賀辛崎大明神の邊にて義次等に遇ひ相共に都に上る（娥歌加留多）

もりつな　佐々木三郎盛綱。　備前兒島の戰に先陣をなさんとし、藤戸の浦の鹽燒藤太夫に藤戸の海の淺瀬を教はりしが、之を祕密にせん爲に藤太夫を殺して海に沈む。盛綱は先陣の功によつて備前の領主となり、藤太夫の死を憐みて之を供養し、其妻子を努はり、遂に藤太夫の女待宵を妻となす（佐々木）

もりなが　比企藤九郎盛長。　源氏の臣なり。義朝の墓に詣でて澁谷金王丸と邂逅し、互に罵り合ひたる後和して相共に長田庄司と朱雀野に戰つて常盤母子を救ふ。また伏見の里にて常盤が彌平兵衛宗清の同情にあづかりたるを感謝し、伊豆蛭小島に下つて賴朝と侘住居せしが、義經が敵を破つて宮巡する由を聞いて之を迎に上る（源氏烏帽子折）源賴朝に從ひて河津祐重追善の席に列し、股野五郎景久と力を角す。祐近が賴朝を殺さんとするや、賴朝と共に遁れて北條時政に賴る。賴朝の平家追討の軍に從ひ、伊東祐近の館を攻めて祐近の妻女を殺す（賴朝伊豆日記）

もりなが　大森彦七盛長。　足利尊氏の臣にして勾當内侍に戀慕す。和田源秀女裝して駕籠に乘り來れるを内侍と思ひ、其手を取りて源秀に追拂はる。また新田義貞が西の宮に敗れて退くを追撃し、小山田高家の首を討ちて義貞の首と思ひ、尊氏に見せて恩賞にあづからんとす。かくて後勾當内侍が三種神器を捧持して吉野に至るを道に要して奪はんとせし時、忽ち神器奇特を顯はして盛長を追拂ふ（吉野都女楠）

もりはる　藤内二郎盛治。　藤内太郎家治の弟なり。三郎武治が叛臣赤沼幸滿に從はんとするを意見す。盛治家貧なり。本阿彌右衛門太郎清祐の刀を得んとし、清祐の女玉椿を唆して屋内に入り、賊名を負ひしが妻の身賣金三十兩を出して漸く免るるを得たり。かくて後斯波義將が琵琶姫と婚するを聞き、義將が敵の術中に陷らんとするを憂ひ、尋ね行きて面會を求むれば我妻の小晒なるに驚く。是時赤沼の軍來り襲ふ。盛治夫妻奮戰して之を退け、琵琶姫を伴ひて走る。かくて斯波義

藤の寄手を追拂ひ雲を分けて去り、山姥となつて信州上路の山に棲息し快童丸を生む。偶源頼光に遇うて我身の上を語り、快童丸を頼光の家來となし、暇を告げ山を廻りて行方知れずなりぬ（嫗山姥）
（序云、この名は當時の俳優荻野八重桐に因みたるなり）

やへびめ　八重姫。　伊東次郎祐近の女なり。源頼朝と契りて千鶴丸を生む。祐近平家の聞えを憚りて千鶴丸を殺し、なほ頼朝をも害せんとす。頼朝逃れて北條時政に頼る。八重姫・頼朝の後を慕ひ行きて、北條時政の番所詰開藤内・黒塚與市に刺殺さる。是に於て八重姫の怨靈頼朝、朝日の前に祟りしが、文覺上人の祈禱によりて退治せらる（頼朝伊豆日記）

やまくに　荒金刑部山國。　坂上田村麿の家老なり。出仕して福引の枕を隱川藏人秀治と引合ふ。田村麿の室岩戶の前其枕を切つて己に匿名の艶書を送りし者を吟味す。山國乃ち秀治に寃罪を負はしめしが、己が清水觀音の寶藏の壁に書きし筆蹟よりして己が罪惡發覺するや、直に岩戶の前を捕め暴行に及ばんとして秀治に追拂はる。後に己が部下と共に變裝して土山に下り、岩戶の前の一行を要撃し、戰敗れて殺さる（田村將軍初觀音）

やまとたけのみこと　日本武尊。　景行天皇第二の皇子なり。御兄大碓王子暴戾なりしかば、父の天皇・尊を皇子として育てなば、遂には大碓王子に害せられんことを懸念せられて、神賢姫と名付け女のやうに見せて育てらる。筑紫の首領八十梟師・神賢姫の御降嫁を所望す。是に於て神賢姫は吉備國彥及び國彥の妹數妙を連れて筑紫に下る途中、三草河原にて筑波長脚の軍に要撃せらる。尊卽ち奮戰して賊を破り、筑紫に下りては數妙をして神賢姫と稱せしめ、尊は其從者となり八十梟師に近付いて梟師を斬る。梟師痛手に堪へず、尊の勇武を賞歎して日本武尊の尊號を奉る。また尊は東夷征伐を思立ち給ひ、尾張に下つて源太夫の家に頼られ、源太夫の女橘姫と契り給ふ。尊駿河に至られし時、東夷の巨賊外濱忍熊・尊を欺きて野原に導き奉り、四方より草を燒立てて尊を弑せんとせしを、尊劍を拔いて草を薙拂ひ、賊を滅して凱旋し給ふ（日本武尊吾妻鑑）

やまひこわうじ　山彥王子。　敏達天皇の同母弟なり。外道の法を信じ、其流布を獻策して、花人親王が佛法流布を主張せらるるに反抗し、互に法力を比べて負け給ふ。是に於て外道の道士伊賀留田のますら等と謀り、花人親王を玉世姫の家に襲ふ。後、丹州大江山の麓に土城を築きて據られしが、厩戶皇子の軍に攻められて滅ぶ（用明天皇職人鑑）

やようめ　村上彥四郎義光の妹なり。狂女を裝ひて成良親王が桐が谷に幽閉せられ給へるを訪ひ、親王をして竊に遁れしめ、名張八郎爲勝と共に大庭前司の兵と戰ひ、親王の跡を慕ひ行く（相模入道千疋犬）

ゆかゑもん　磯邊床右衞門。　因幡の藩士なり。相役人小倉彥九郎の妻お種に懸想し、之を挑みて拒絕せらる。後刻再びお種の父忠太夫と名乘つて來る。其夜お種・宮地源右衞門と不義に陷る。床右衞門兩人の袂を摑む。源右衞門袂を切つて逃ぐ。床右衞門兩人の袂を奪ひて不義の證となし、お種が己の意に從はざるを意趣にお種・源右衞門の姦通を言觸らす（堀川波鼓）

ゆき　雪。　阿波の士平岡左近の妻なり。男裝し左近と名乘つて、扇屋の名妓夕霧を井筒屋に揚げて其心を試し、夕霧の生みし子を養ひ、夕霧を請出して其乳母たらしめんとして遂に成らず。かくて後に夕霧の病革る際金を贈りて之を請出さんとす（夕霧阿波鳴渡）

ゆき　阿雪。　川側伴之丞の妹なり。出雲藩主の表小姓笹野權三と慇懃を通ず。權三に遇うて結婚を迫り、また心を籠めて縫ひたる帶を贈る（鑓權三重帷子）

ゆきうぢ　海野小太郎行氏。　源頼朝の臣なり。武藏坊辨慶の父辨眞と名乘る老入道を捕へ、其賞として頼朝の名馬松島月毛の拜領を請ひて仁田四郎忠常に妨げらる。また大磯の遊君虎御前の懷胎を詮議して忠常に誑さる。かくて何か功名せんものと思ひ、辨眞を囮にして鬼王兄弟・花野を捕へて吟味するを、曾我時致に誑されて皆殺す。曾我二子亡父の讐を報じて刑に就きたる後、曾我二子の弟禪師坊を捕へて頼朝の前に引く（百日曾我）

ゆきえ　吳服中將雪枝。　宮中の美女陸奧局に密通して勅勘を蒙り、故三位伶人富士丸の娘澤瀉姫と通ず。或日堺大寺なる富士丸の墓に詣でて我身の罪深きを感じ、澤瀉をして己を思切らしめん爲、家人金目丸に自害したる由を言含めて之を澤瀉に傳へしめ、諸方をさまよひて陸奧局の閑居と知らずして立寄り、互に奇遇を喜んで往時の戀物語をなせる際、澤瀉・雪枝を尋ねて來る。宇治太郎・雪枝を殺さんとして來れるを、陸奧局の機轉によつて雪枝を逃す。かくて後宇治太郎等滅び、雪枝は播磨姫路の小次郎狐に誘はれて輦親王の御前に出で、勅勘御免ありて本領に安堵し澤瀉姫と結婚の式を擧ぐ（天鼓）
（序云、雪枝が陸奧局と往時の戀物語するは、傾城佛の原（元祿十二年作）第一に、梅永文藏が昔馴染の傾城奧州に其人と知らずして、諸諷交りに戀物語するを淨瑠璃に改作したるなり）。

ゆきなが　吳服小六郎雪長。　吳服中將雪枝の弟なり。笛を吹きつつ京中を步き、太見縣主時景の女夕映と戀仲となり、夕映より雪枝及び其愛人澤瀉姫の行方不明となれるを聞き、其行方を尋ねて松垣藏人興宗方にて澤瀉と逢ふ。松垣夫妻狐となつて澤瀉の天鼓を奪はんとせしを山路判官梅豐に助けられ、之より雪長・澤瀉姫・夕映の三人雪枝を尋ね行く。かくて後雪長は江州月の輪小左衞門狐に誘引せられて輦親王に謁し忝き御諚を賜はる（天鼓）

ゆきひさ　中臣大納言行久。　夏仁親王の妃長歌に陪從して龍田明神に詣で、神主鳥居三位に追拂はる（持統天皇歌軍法）

ゆきひら　在原行平。　日の御座の劍を龍宮に奪はれ、また龍王の子を若宮と稱せしかば罪を得て須磨に謫居し、その地の蜑松風と契る。また松風の妹の村雨を慕ひ寄れるを伴健宗に見付けられて捕へられしを、業平によつて免るるを得。松風・村雨が龍宮より寶劍を取返せしかば行平の罪を赦され、中納言兼民部卿に任じ、廣澤池畔に猩猿の狂言を興行して龍神を慰む（松風村雨束帶鑑）

ゆきふさ　吉田少將藤原朝臣行房。　山王權現二十一社修造の勅命を奉じ、家來の

王・團三郎をして之を殺さしむ（本領曾我）

南都の僧兵に交りて、平家の討手難波・妹尾の軍を惱まし、また平家追討の院宣を申受け、源義朝の髑髏を携へて賴朝に謁せんとして、伊豆國蛭か小島に下る途中駿州宇都山にて居眠り、源氏が平家を討滅したるを夢む（平家女護島）

やげんじ 天目彌源次。 繪師狩野氏久の倅なり。藤右大臣富房公の馬方となり、伊賀越にて金岡に出遇ひ、相共に逆目王子の殿中に亂入して王子を滅す（天智天皇）

やごらう 刷毛彌五郎。 河内屋與兵衛の友なり。野崎觀音參詣の途中、遊女小菊を連れたる會津者の郎九と喧嘩す（女殺油地獄）

（刷毛は、刷毛長〔俠客などに流行した結髪〕をきかせた渾名である）

やざゑもん 本田彌三左衛門。 東の高家入間殿の與家老なり。丹波領主由留木侯の女しらべの姫を迎に來り、姫に陪從して歸る途に、伊勢國關の宿にて馬追三吉竊盜して捕へらるるや、しらべの姫の乳母滋野井の愁歎を察して三吉の罪を赦す（丹波與作）

やしちらう 印南彌七郎。 賀古川民部少輔藤原孝房の家士なり。賀古に歸つて孝房熊野浦にて難船に遭ひ溺死したることを報告す。かくて後惡漢の熊源太兄弟と闘つて之を搦む（賀古教信七墓廻）

やじふらう 小西彌十郎。 堺の藥種商小西如清の子なり。放埒なりしかば父より勘當せらる。彌十郎乳守の遊女小礒と馴染む。或日加藤虎之助正清が小礒を高島屋に揚げ、小礒の所持せる朝鮮地圖を懇望せるを聞き、彌十郎その地圖を奪はんとして正清と格闘せしが、小礒の仲裁によりて兩人相和し、正清の推擧によりて眞柴肥前大領久吉の部將となり、正清と共に朝鮮征伐の軍に從ふ（本朝三國志）

やしゆだらによ 耶輸多羅女。 阿私大臣の女にして才色秀絶なり。十七歳の時悉達太子に嫁す。或日太子と共に蝴蝶の戯るるを見て懷姙す。太子出家するや、耶輸多羅多女は吉祥女を伴ひて其跡を追はんとして、門前にて伯了頓の難に遭ひ、恒河橋上にて提婆達多の火攻めに遭ひ、烏陀夷に救はれて相共に太子を尋ねて檀特山に赴く。釋尊大悟し給ふを見て隨喜の涙に咽ぶ。摩訶迦葉より授戒を受け、子の羅睺羅と共に剃髮して比丘・比丘尼となり、釋尊涅槃の場に至る（釋迦如來誕生會）

やすきよ 二宮太郎安清。 曾我兄弟の姉聟なり。建久四年五月富士狩の時鎌倉の留守役を命ぜられ、高櫓を作りて見張中、二十八日の深更富士裾野の方に提灯松明頻に馳違ふ樣を望見して見屆の使者を出す。折しも鬼王・團三郎が曾我兄弟の形見の品品に文を添へて持ち歸る。安清の室直に其封を切らんとす。安清之を制して己が心中を語る。是時使者歸つて、曾我二子が其亡父の仇工藤祐經を殺したるを報ず（曾我虎が磨）

源賴朝が富士狩に出でたる留守中、源範賴の自刄及び曾我二子が富士野の狩場に紛れ込みし注進の早打を命ぜらる。榛谷四郎重朝野心を抱き、安清の妻は曾我の緣者なれば、安清を使者たらしむべからずと主張して己其使者たらんとす。是に於て安清は妻を離別する狀を書きて之を白絲八平次に渡して出發し、藤澤の驛にて梶原景高等に妨害せられしが、禰師坊の盡力によつて事無きを得たり。かくて曾我祐成假屋に亂入せしを、刄を石にて叩潰したる刀にて格闘す（曾我會稽山）

やすすけ 藤原保輔。 平井保昌の弟なり。源賴光に見棄てられて素浪人となり、兇賊將軍太郎良門に一味し、江文の宰相爲成の邸に闖入して、駿馬の幕を奪はんとして坂田公時に殺さる（關八州繫馬）

やすひら 伊達二郎安衡。 陸奥守藤原秀衡の次男なり。兄錦戸太郎國衡等と謀り、鎌倉の命を奉じて義經を討たんとす。然るに弟泉三郎忠衡義を守つて其意に從はざりしかば、まづ忠衡を襲撃し之をして自刄せしめ、進んで義經を高館に攻破り、義經・辨慶が蝦夷に落ち延びたるを追擊し、戰敗れて死す（源義經將棊經）

やすもり 平安盛。 常陸介となり平家の將なり。花山帝に中納言高房の女三の宮を勸め、宸筆の御書を携へて三の宮を迎に赴き、戻橋にて渡邊綱と戰ひ、金時に毆打せらる。安盛また右近の前に弘徽殿女御を誘るやう言含めて、之を帝の御伽女に奉る。然るに安盛が右近の前に言含めたること發覺して帝の逆鱗に觸れ、渡邊綱に縛せられて源賴光の前に引出さる（傾城酒呑童子）

やそたける 八十梟師。 筑紫の首領にして王命に從はず。重臣阿蘇蹶速を使者として景行天皇第二の宮神賢姫の御降嫁を奏請し、吉備國彥の妹敷妙を神賢姫と信じて結婚の式を擧げしが、敷妙が己を狙へるに氣付き之を刺して第二の宮に斬付けらる。梟師痛手に堪へず、宮の武勇を歎賞して日本武尊の御名を奉り、今より我は尊の臣下なりと語つて自刎す（日本武尊吾妻鑑）

やどりぎ 宿木。 長田庄司忠宗の女にして鎌田兵衛正清の妻なり。正清主君源義朝に從ひて尾張に下り忠宗を便る。然るに忠宗平家の恩賞に預らんとして子の景宗と謀り、義朝及び正清を騙討にせんとす。宿木障子を隔てて之を聞きて深く悲しむ。かくて忠宗が正清を饗する酒宴の席に出で、態と醉狂せるやうに見せて、泣きながら暗に夫に注意を促し、酒を飲ましめざらんとすれど正清覺らず、遂に忠宗の術中に陷つて殺さる。宿木狂亂となり。二子に忠宗の惡逆を語つて忠宗に殺さる（鎌田兵衛名所盃）

やはた 八幡三郎。 工藤左衛門祐經の下人なり。主命により白鹿を獲んとして犬坊丸と共に山に入り、曾我十郎祐成を見付けて之を捕へんとして、祐成に化げたる白鹿に打懲さる。また河津三郎が股野に投付けられたる狀を描ける繪の後に隱れて河津を罵詈して朝比奈義秀に投付けらる。後に京小二郎の手引によつて曾我兄弟を大礒の遊廓に襲はんとして、鬼王兄弟に搦められ曾我兄弟に首を刎ねらる（曾我五人兄弟）

やへぎり 八重桐。 荻野屋の遊女なり。坂田藏人時行と馴染みて夫婦となる。時行亡夫の仇を報ぜんとして夫婦離別す。或日八重桐・澤瀉姫の邸前を通りかかりて三味線の音に耳を澄し、尋で時行と邂逅し、澤瀉姫の問に應じて我身の上を語り、時行の薄情を語りて意見す。時行身を恥ぢて自刄し、其魂魄火焔の轉風となつて八重桐の胎内に入る。八重桐之より飛行通力の女となり、清原右大將高

て、市郎右衛門の妹なり。天滿屋の遊女お島より市郎右衛門に送りたる手紙を受取りて父に奪はる（心中二枚繪草紙）

よしあき　足利義昭。足利將軍義輝の弟なり。大宮大納言秋忠勅使として義輝の邸に來る。時に義輝は九條町の遊廓に流連して不在なりしかば、義昭兄に代りて勅使に謁せし、を三好國長に罵られ、更に野心なきを言明し、髻を切つて遁世の身となる。かくて後、三好長慶反逆を企て義輝を弑す。義昭夢に室町千疊敷に遊ぶ。是時義輝の遺臣淺川左京大夫藤孝等諸國の義兵を催して來會し、三好長慶を朝日の岡の館に襲擊して之を滅す（津國女夫池）

よしかど　平將軍良門。平將門の父なり、幽靈となりて忠文に逢ひ、將門の爲に已が死骸の兩眼を抉出され、耳鼻舌を切られて草葉に包まれ、多身通の法を行はれしによつて魔道に墮し、將門と共に七人の同じ姿と變じて苦患を受く。眞の將門は顳（こめがみ）の蜂谷に筋脈あれば、それを目當に將門を誅めよと語つて消失す（傾城懸物揃）

將軍太郎良門と稱し、相馬二郎將門の子なり。同腹の妹小蝶と諜して賴信の邸に闖入し、平井保昌等と鬪ひて逃げ。八瀨に行く岐路にて顯平・詠歌姫に遇ひ、之を脅迫して味方となし、賴信主從鞍馬詣の歸途を市原野に要擊して敗れ、遂に季武・貞光に捕はれしが、遁れて葛城山に立籠り、保昌等に攻められて滅ぶ（關八州繫馬）

よしきよ　村上左衛門義淸。信州の國守なり。長尾輝虎の女衛門姫を橫戀慕し、粕尾玄蕃を使者として輝虎上洛の歸途を大津に待受け、音物を出して衛門姫との婚約を申込んで峻拒せらる。義淸甲州に食鹽を送るを禁じ、自ら妖怪に變裝して天目山に信玄を狙ひしが、勝賴に斬られて滅ぶ（信州川中島合戰）

よしさだ　新田義貞。青麥を刈り盜む二十餘歲の女を捕へて、その女の言に感じ鎧を與へて放免す。生田森の戰に小山田太郎高家を組伏せ、其着たる鎧の嘗て女に與へたるものなるを見憐んで之を助く。かくて後に吉野の內裏に至り、尊氏と和睦することとなる（吉野都女楠）

清和源氏の正嫡にして上野國に住す。後醍醐天皇の綸旨を奉じ、元弘三年卯月下旬北條高時誅滅の義兵を擧げて軍評定を開き、唐琴・鈴・中川等の諫言を容れて弟の脇屋次郎義助と和睦し、義助の妻の綺合姫を使者として手紙と白旗を安藤入道聖秀に贈り、以て義貞の一味となるやう勸誘す。かくて後に入間川の渡にて成良親王を敵より奪ひ返し、元弘三年五月二十二日大擧して鎌倉を攻めて北條氏を滅す（相模入道千疋犬）

よしすけ　吉助。右馬之允といひ、北白川の廣文の子なり。幼時西國商人の養子となり、江州鏡山の遊廓柊（ひらぎ）屋の抱妓白妙と馴染む。白妙病篤き時禿の橫笛に導かれて白妙を見舞ふ。白妙これが爲に抱主より慘酷なる苛責に遭ひて自刄す。吉助怒つて抱主を毆打せんとして幇間等に撲り据ゑらる。是時廣文來つて、橫笛を勾引して抱主に賣りたる前非を悔いて自刄す。吉助悲歎の淚に暮る（傾城酒呑童子）

よしすけ　「ぎすけ」を見よ。

よしつぐ　左京之進義次。平重盛の家士にして越中次郎兵衛盛次の弟なり。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、建禮門院の侍女刈藻と密會せるを、加賀郡司師高に探出されて惡評を立てられ、兄の盛次に幽閉せられ、師高の奸策によりて死罪に處せられんとせしが、重盛の仁慈によつて救はれ、僧となつて嵯峨の奧に住む。或日橫笛・顯方を尋ねて來る。是に於て相共に顯方を尋ねて雪中にさまよひ、一家を見付けて宿を請へば、これぞ顯方と刈藻の住所なりしかば、互に奇遇を喜び、連立つて志賀辛崎大明神に參詣し、戶無瀨局の難を救うて師高を搦め、師高の郎下岩村源九郎・鎌須無藏を斬る。是時盛次等重盛より召還の使者となつて來れるに遇ひ、相共に都に上る（娥歌加留多）

よしつね　源九郎義經。源賴朝坂東八國の兵を率ゐて都に上ると聞き、奧州勢十萬餘騎を率ゐて來會する途中、三河國峯の藥師に參詣し、淨瑠璃御前の侍女の冷泉・十五夜等に逢うて淨瑠璃御前の死を聞きて其卵塔に水を手向け、法華經提婆品を讀上ぐれば、卵塔忽ち碎け光明赫灼として淨瑠璃御前成佛の相を現ず（源氏冷泉節）

兄賴朝と不和となりて奧州に下り藤原秀衡に賴る。秀衡死して一周忌に其菩提所に參詣し、秀衡の後室尼公に遇うて身の不遇を歎ず。また忍の前に遇うて、忍の前が夫泉三郎忠衡に追出されたる事情を聞く。錦戶太郎國衡等鎌倉の命を奉じて義經を高館に襲ふや、義經奮戰して血路を開き、蝦夷に落ち延びて鞍馬大僧正に邂逅し、其助勢を得て辨慶と共に國衡等追擊の兵を破り、仙となつて淨瑠璃の居る淨瑠璃世界女護島長生殿に入る（源義經將棊經）

京都九條北町柏屋の遊女若紫の色香に溺る。三保谷四郎國時・義經の討手として京に上る。兼房等之を察して義經を諫めて用ひられず。是に於て佐藤忠信・若紫の客となりて、若紫を義經の席に出さず。偶國時も柏屋に登樓し、計らずも義經・忠信・國時顏を合す。義經は忠信を邪推し、勘當を申渡して堀川の邸に歸る途中國時に要擊せられ、辨慶・片岡奮戰して之を破る。かくて後義經は北條時政の言に從ひて都を開き、大物浦より乘船し西國に渡らんとして暴風に遭ひ、住吉浦に漂着す。之より吉野を指して分入り、辨慶の言に從ひて、靜御前に形見の品を與へて京に歸す。吉野山の大衆義經が山中にあるを知つて之を圍む。佐藤忠信踏止り九郎判官と名乘つて戰ひ、以て義經主從をして遁れしむ（吉野忠信）

梶原平三景時の讒によつて兄の賴朝と不和となり、京都堀河の邸に住して平時忠の女靜御前を妻となす。或日靜・辨慶等を伴ひて北野天神社に詣で、神樂堂の蔭に隱れたる土佐坊昌俊を見付けて之を訊問し、起請文を書かしめて放免す。其夜昌俊に堀河の邸を襲擊せられ、義經の部下奮戰して敵を破り昌俊を殺す。これより義經都を開き、靜と別れ奧州の藤原秀衡に賴らんとし、主從十二人修驗者の姿となり、安宅關を通過せんとして關守富樫左衛門家直に咎められしも其同情によつて無事に通過し、藤原秀衡に賴る（靜胎內捃）

奧州より平家討伐に上る途に佐藤庄司の二子繼信・忠信を臣となす。屋島の合戰に繼信が義經の身代となり、能登守教經の矢を受留めて斃るや、義經深く哀悼し、新黑谷にて繼信

縣權正武國と共に熱心に木材を集めしが、普請奉行常陸大掾百連に讒ぜられ、また百連に同心せる行房の逆臣勘解由兵衞景逸が比良嶽の材木を伐出せし爲、天狗の祟を受けて行房の室影の病に罹る。行房・天狗を刺さんとして誤つて己が妻を刺す。かくて後妻の斑女と共に舟を泉水に浮べて遊びし際景逸に刺殺さる（雙生隅田川）

ゆげひ　膳靱負。　聖徳太子の妃芹摘姫の兄なり。大連物部守屋の立花の會に遲れて行き、守屋より反逆に一味するやう諭されて拒絶し、散作數手を斬つて守屋に殺さる（聖徳太子繪傳記）

ゆふぎり　夕霧。　大阪新町九軒町の遊廓扇屋の名妓なり。藤屋伊左衞門と馴染みて源之介を生む。伊左衞門親の勘當を受け、放逐せられて落魄するに及び、夕霧乃ち源之介を平岡左近の胤なりと稱して左近に養はしむ。左近の妻害が夕霧を請出して源之介の乳母となさんとして、源之介は伊左衞門の子なること發覺し、源之介と共に左近の邸を放逐せられて扇屋に復歸す。夕霧病篤し。伊左衞門・源之介を伴ひて扇屋に夕霧を見舞ふ。是時伊左衞門の母妙順金二千兩を贈りて夕霧を請出す（夕霧阿波鳴渡）

大阪新町九軒町の遊廓扇屋の名妓なり。南都の樂人狛左京進盛光と馴染んで春姫を生み、延寶六年正月六日二十二歳にて病歿す（年齡歿年など事實に據れり）。後に夕霧の妹女郎の狹野に供養せられ、梓巫女の口寄にかかつて、死後地獄道に墮して苛責に苦しむことを語り、我子の春姫を慕ひて失す。春姫下寺町淨國寺なる夕霧の墓に詣でて回向して墓側に眠り、夕霧が惡鬼に攻められて劍の山に登るを夢む。帝・夕霧のことを聞召され、京都壽願寺にて夕霧の供養を行はせ給ひし時觀世音となつて出現す（三世相）

ゆふばえ　夕映。　太見縣主時景の女なり。雛遊の節句に吳服小六郎雪長と逢ひて戀仲となり、相共に吳服中將雪枝及び澤潟姫の行方を尋ね出づ。後に富田林の與九郎狐に誘はれて鸞親王に謁し、忝き綸旨を賜はる（天鼓）

ゆや　熊野。　遠州池田宿の遊女たりし頃河津三郎祐重と馴染みしが、平宗盛の嬖妾となり、股野五郎景久に懸想せられて其意に從はず、祐重と共に東路に下り、再び池田の遊女町にて全盛を張りしが、狐つきといふ難病に罹りしを、文覺上人の祈禱によつて平癒す。和田義盛の室に招かれて花見の宴に赴き、曾我內室の不貞を罵る。是に於て內室肌衣を脫ぎて五條の袈裟を見せ、妾が心は尼法師なりといふ。熊野も肌に着たる寀の素襖を見せて其心底を現はし、友切丸の劍を出して之を士産に贈らんとす。是時景久に所望せられて舞を舞ひしが、景久が友切丸を奪はんとするを察し、劍舞の亂拍子を以て景久を追拂ふ（本領曾我）「つな」をも見よ。

ゆら　小倉彥九郎の妹なり。彥九郎の妻お種が宮地源右衞門と姦通せるを語り、彥九郎に其證を詰られて礒邊床右衞門より得たる兩人の袂を出して之を見す。お種悔悟して自刄す。ゆら乃ち彥九郎等と連立ちて源右衞門の宅を襲ひ、其遁ぐるを追ひて堀川橋上に斬殺す（堀川波鼓）

ゆらた　由良太。　龜彥庄司の子なり。蛩の松風を連れて歸り、葎丸に奪はれて之を破り、また伴健宗と戰うて之を殺す。功を以て菅川の庄三百餘町に封ぜらる（松風村雨束帶鑑）

ゆらのすけ　大星由良之介。　鹽谷判官高貞の臣にして八幡六郎と云ひしが、高貞が高武藏守師直に讒せられて切腹したる後、浪人となりて大星由良之介と名乘り、京に閑居して圍碁などの遊興に耽り、主君の仇討の事を忘れし如く裝ふ。或日盤上に碁石を列べて岡平より敵の屋敷の樣子を聞く。由良之介の母妻は由良之介の放埒を意見し、主君の仇討を勸めて自刄す。由良之介鎌倉に下り、文和三年の冬同士四十七人と共に高師直を鎌倉飯島の屋敷に襲ひ、師直を斬つて主君の仇を報じ光明寺に引上げ、從容刑に就く（碁盤太平記）「ろくらう」をも見よ。

（序云、大石良雄をかく作かへたるなり）

ゆりわかだいじん　「わだまる」を見よ。

よいち　黑塚與市。　北條時政の番所詰を勸め、八重姫を殺して金を奪ひしが、八重姫の怨靈に祟られて死す（賴朝伊豆日記）

よいち　人見與一。　北條の家臣なり。三河國矢矧宿に行きて淨瑠璃姫に會ひ、鎌倉にて人形藝を演ずべしとの賴朝の命を傳ふ（源義經將棊經）

よこぶえ　橫笛。　加藤兵衞氏綱の女なり。賀茂安樂花（やすらひばな）の見物に行き、北白川の艶文に勾引されて江州鏡山の遊廓柊（ひらぎ）屋長に賣られて禿となる。或日父の尋ね來れるに遇うて身の不幸を嘆ず。長が能樂を催せる際竊に遊女白妙の病氣を見舞ひ、白妙の愛人吉助を導き白妙と逢はしめたるを、長に見付けられて苛責を受け、悲憤に堪へずして自刄す（傾城酒呑童子）

よこぶえ　橫笛。　建禮門院の侍女にして、平重盛の家士齋藤瀧口賴方と相思の仲なり。或日賴方が重盛の使者となり來つて山雀を建禮門院に獻ず。橫笛之を取次いで賴方と戲れ、過つて山雀を籠より逃して加賀郡司師高に罵詈せらる。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、賴方と密會せるを師高に見付けられ、師高の奸策によりて死罪に行はれんとしたりしを、建禮門院の仁心によりて救はる。これより賴方の行方を尋ね、嵯峨の奥なる庵室に至りて、賴方の朋輩左京之進義次に遇ひ、相共に賴方を尋ねて雪中にさまよひ、漸く家を見付けて宿を請へる間に橫笛凍死す。然るにこの家は賴方の宅なりしかば、賴方等愁歎に暮るる際、刈藻が燻べたる宰王香によつて橫笛蘇生し、志賀辛崎大明神に參詣して、建禮門院より橫笛等召還の使者戶無瀨局に遇ひ、相共に都に上る（娥歌加留多）

よさく　伊達與作。　丹波領主由留木侯に仕へ、登用せられて奏者役番頭千三百石に取立てられ、侯の侍女滋野井と戀仲となつて子與之助を設く。後に江戶の邸に勤仕し、放蕩の爲に改易を命ぜられ、落魄して馬追となり、關宿の出女小萬と馴染み、馬方八藏と賭博し負けて喧嘩す。時に馬追兒三吉・由留木侯の女しらべの姫君の馬を追うて關宿に泊し、與作に教唆せられて姫君の金袋を奪ひ、夜廻の侍に見付けられて捕へらる。是時與作は三吉が我子の與之助なるを知り、愁歎に暮れ小萬と共に死せんとして迷ひ出でしが、滋野井・しらべの姫君に救はれて士籍に復す（丹波與作）

よし　阿吉。　長柄の農夫介右衞門の子にし

月二十餘日。戸隱山にて惟茂と逢ふ(栬狩)

よのすけ 世之介。 牛若丸が遮那王と稱して鞍馬山にありし時、鞍馬の大天狗僧正坊其色香に迷ひ、姿を變じて遮那王の奴となり、世之介と名乘つて衆道の緣を結ぶ。平家の公達鞍馬山に櫻狩の宴を張りし際、遮那王宴席に入つて狼藉に及び、既に危からんとせしを世之介忽ち僧正坊と變じて平家を追拂ひ、遮那王に三略の祕書を授け、名殘を惜みながら雲井に飛去る(十二段)

よへい 難與平。 父は難波屋與左衛門と云ひて富豪なりしが漸く衰運に傾く。與平貧困の中に成長し、藤屋の遊女吾妻を戀慕し、吾妻の好意に感激し、吾妻の情夫山崎與次兵衛の敵薬屋彥介を斬付けて江戸に行き、大金を儲けて吾妻及び與次兵衛を救ふ(壽門松)

よへゑ 河内屋與兵衛。 大阪本天滿町河内屋德兵衛が故主人の遺子なるによつて、繼父は兎角遠慮し、又實母澤は夫に隱れて庇護するにより、我儘增長して遂に放恣無頼の徒となる。野崎觀音參詣の途中、遊女小菊を伴へる會津者の郎九と喧嘩し、郎九に投げたる泥土過つて武士小栗八彌の馬に中り、八彌に陪從せる與兵衛の伯父山本森右衛門に毆打せらる。また妹おかちに言含めて病人の眞似をさせて親より金を奪はんとし、事露はれて自棄となり、亂暴して家を放逐せられ、口入業綿屋小兵衛より日ぎりの借金の督促を受け、享保六年五月四日の夜、筋向ひの油商豐島屋お吉に無心を懇請して拒絕せられ、遂にお吉を殺して金を奪ひしが、捕吏に縛せられて千日の刑場の露と消ゆ(女殺油地獄)

よへゑ 笠屋與兵衛。 大阪北久太郎町古道具商笠屋長兵衛の女お龜の聟養子なり。養父の妾お今及び其弟傳三郎に窘められ、養父に惡まれて家出せしが、お龜を慕ひて立寄るを長兵衛・お今に見付けられて益惡まれ、遂に寶永三年五月十七日の夜お龜と共に梅田堤に走りて、情死せんとし妻は死し、己は里人に助けらる(卯月紅葉) お龜の死後三十五日、お龜の死口を寄せられたることよりお今等の罪惡露見し、與兵衛は長兵衛等に勸められて僧となり、助給と名乘りて大和國平群谷の庵室に籠り、亡妻の菩提を弔ふ。或日幻に亡妻に逢うて物語をなし、目覺めて愁歎に暮れて死を決し、大阪の伯父・伯母、在所の親に書置を殘して自刃す。時は寶永四年四月十七日の夜。行年二十二(卯月潤色)

よもさく 與茂作。 山城國西の岡樫原の土民なり。朋輩九郎右衛門、太次兵衛等十五六人と共に又次郎を訪ひ、又次郎の飼牛の玉を見て目出度しと云うて饗應せしめんとせしが、又次郎の亡父の因果話を聽いて己等が亡父の菩提を葬ず(嵯峨天皇甘露雨)

よりかた 監物太郎賴方。 平家の臣なり。義經を追擊する途中、彌平兵衛宗淸に話掛けられて妨げられしが、田村宮にて義經と戰うて敗る(源氏烏帽子折)

よりかた 齋藤瀧口賴方。 平重盛の家士にして、齋藤左衛門尉勝頴の子なり。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、窃に建禮門院の侍女橫笛と山中に密會せるを、加賀郡司師高に見付けられて惡評を立てられ、父に叱られて遁世の身となり、西俊と法名して嵯峨の奧往生院に引籠り、夜な夜な洛外三味を巡りしが、或夜舟岡山にて刈藻が岩村源五に斬られんとする場に出遇ひ、源五を欺きて刀を奪ひ、源五等を追拂ひ、刈藻を連れて去り、志賀の里に小庵を結びて刈藻及び其幼兒を養育せしが、或雪夜左京之進義次・橫笛を伴ひて來る。是に於て互に奇遇を喜び、志賀辛崎大明神に參詣し、師高に出遇うて之を擒め、義次と協力して師高の部下岩村源九郎・鎌須無藏を斬る。是時父の勝頴等重盛より召還の使者となつて來れるに邂逅し、相共に都に上る(娥歌加留多)

よりとも 源賴朝。 保元亂に父の義朝と共に後白河天皇の軍に屬し、崇德院方の兵と戰ひ、崇德院方の大將となれる祖父爲義に逢うて、我首を刎ねて祖父が功名となされたしといひ、爲義は敵手にかからんよりは孫に斬らるるこそ幸なれと互に言合ひしが、是時義朝攻寄せ賴朝を連れて去る(鎌田兵衛名所盃) 伊豆の住人伊東次郎祐近に預けられ、祐近の女八重姬と契つて千鶴丸をまうく。祐近平家の聞えを憚りて千鶴丸を殺し、賴朝をも害せんとす。賴朝遁れて北條時政に賴り、時政の女朝日の前と契る。文覺上人・賴朝を訪ひ、義朝の髑髏を見せて旗上げを勸めて、平家追討の院宣を渡す。賴朝・時政の助を得て兵を擧げ、まづ千鶴丸の意趣によつて伊東の館に攻寄す(賴朝伊豆日記) 曾我兄弟の神靈を拜し、其社殿に揭げたる三十六歌仙の繪に就いて物語る(百日曾我) 平治の亂に敗れ、捕へられて伊豆の伊東祐親に預けらる。伊東の一族賴朝の心を慰めんとして、酒宴を催し狩をなし、楢柴茂れる中より齡二十許の痩男の蠢き出でたるを捕へて樣斬にせんとす。賴朝之を憐んで助く。祐親の女藤の前・賴朝と通じて孕む。祐親怒つて藤の前を法眼春樂に預け、其生みし子を松川の水底に沈む。賴朝遁れて北條時政に賴る(源氏冷泉節) 元曆元年五月下旬召捕人平宗盛を引見し、義經が平時忠の女靜を妻とせるを聞いて大に怒り、土佐坊昌俊に命じて義經を討たしむ。然るに昌俊却つて義經に殺されしかば、梶原源太景季に命じて義經を討たしむ(孫靜胎內捃)

よりのぶ 源賴信。 河内守となり、源賴光の弟なり。院宣によりて伊豫內侍と婚す。鞍馬詣の歸途を兇賊將軍太郎良門等に市原野に要擊せられて之を破る(關八州繫馬)

よりひら 源賴平。 多田滿仲の三男にして賴信の弟なり。出羽冠者と稱す。小蝶の媒により、詠歌姬と契り駈落の途中、兇賊將軍太郎良門に脅迫せられて其一味となり、賴信主從の歸途を市原野に要擊して敗れ、渡邊綱に捕へられて死罪に處せられんとせしを、綱の伯母及び箕田二郎繼に救はれて改心し、賴信・保昌等と共に良門・土蜘蛛を葛城山に攻めて之を退治す(關八州繫馬)

よりみつ 攝津守源賴光。 濱松のあたりに紫雲靉靆せるを目當に寶劍を尋ね、家士渡邊綱を伴うて佐夜中山に泊す。時に齡十八。其夜小糸・喜之介が亡父の仇物部平太を斬り、遁走して來れるを助けて、淸原右大將高藤・平政盛の寄手と戰ひ、竊に美濃路を指して落ち行き、高藤に讒奏せられて勅勘の身となり、美濃の能勢判官仲國に身を寄せ、美濃路をさまよひて名も知らぬ深山に迷入り、山賊に遇うて之を家來となし、信州上路の山中にて山姥に遇うて身上話を聽き、其子快童

の追善をなし、繼信が生前望みし名馬大黑を手向く（津戸三郎）

よしてる　足利義輝。足利十三代の武將にして左大臣從一位征夷大將軍たり。京都九條町の遊女大淀の色香に溺れ、大淀を請出して邸内に引入れ、日夜盃盞に耽りて政務を顧みず、目屋の行多かりしが、遂に三好修理入道長慶に弑せらる（津國女夫池）

よしとき　江間小四郎義時。五百餘騎を率ゐて景清を清水寺に襲撃す（出世景清）

よしとも　源義朝。保元亂に平清盛と共に後白河帝の御味方に馳參じて崇德院の軍と戰つて之に勝つ。而して父の爲義が清盛に捕へられたるを赦免を請ひて清盛に遮られて無念に堪へず、清盛を討取らんとして勝たず、鎌田兵衞正清等と共に尾張に落ち長田庄司忠宗に身を寄す。忠宗・義朝を殺して平家の恩賞に預らんとし、義朝を浴の茅屋の浴湯に導きて之を刺さんとす。是時鎭西八郎爲朝來合せて義朝の危難を救ふ（鎌田兵衞名所盃）

よしなが　又五郎義長。禁中衞士を勤め、藤壺女御の侍女清瀧に懸想し、浪人となりて近江國に居りしが、藤壺女御の殺害せられたるを聞き、清瀧の歎を思遣り、都に上りて按察左大將早岑の普請人足に雇はれ、窃に清瀧の行方を聞かんとす。折しも早岑より花山天皇を弑し奉るやう頼まれて辭し難く、坂田金時に變裝して白川なる弘徽殿女御の邸に赴き、蘆屋道滿が呪禁の瓜茄子の變化を退治す。是時刀を提げて闖入する者あるを近寄り見れば、清瀧なりしかば互に奇遇を喜びて心中を語り、天皇の御味方となりて黑壁權大夫等を追拂ひ天皇を救ひ奉る。また弘徽殿女御が桂川に投身せんとするを救ひて、男山八幡宮の寶殿の東の間に隱し置き、重箱を携へて見舞ひ安倍晴明に邂逅す。時に蘆屋道滿等に襲撃せられ、奮戰して道滿を殺し、弘徽殿女御を都に移し、伊賀介久國を連れて按察左大將早岑の城下に赴き、久國をして敵を欺かしめ、源頼光の四天王と共に早岑を攻めて滅す（弘徽殿鵜羽産家）

よしの　「わごんのまへ」を見よ。

よしのり　足利義教。足利六代將軍なり。赤沼幸滿の逆心を覺らず、招かれて其邸に行きて印判を預け、斯波義將に諫められて大に怒る。幸滿反し、義教亡命して斯波義將等に救はる（雪女五枚羽子板）

よしひで　朝比奈三郎義秀。新開荒四郎が名馬松島月毛を牽きて新田忠常を訪ふ途に義秀其馬を奪ふ。忠常が頼朝に請ひ、高名に代へて禪師坊を助けたる時、義秀喜んで松島月毛を忠常に返す（百日曾我）

膂力あり。工藤祐經が物言ふ繪を畫かしむべしと言へるを聞いて口論し、後に繪の後に隱れて物言へる八幡三郎を摑んで投付く（曾我五人兄弟）

和田義盛の子にして膂力あり。井原經景が頼朝より拜領したる舞鶴の紋所に就いて、經景及び工藤祐經と口論し、經景と途に遇うて馬の足に掛けて蹴落す。經景舞鶴の紋披露の祝宴を大磯の遊廓邯鄲部屋に張る。義秀乃ち經景の歸途を要撃せんとして曾我時宗に遮らる（曾我扇八景）

御所の五郎丸と腕力を格して投飛し、和田義盛に其粗暴を叱責せらる。或夜秩父重保と共に大磯遊廓に虎・少將を揚げて遊興す。折しも曾我祐成が工藤祐經一味の多勢に襲撃せらるるを見て、遣手に變裝して之を追拂ひ、祐成をして八幡三郎の首を刎ねしむ。後に曾我時致が五郎丸に捕縛せらるるや、義秀乃ち時致を褒めて五郎丸を撲殺す（曾我虎が磨）

能樂の最中に犬坊丸と喧嘩す。また元服の式を箱根權現にて行ひ、箱王と騎馬の引合ひをなして箱王の力量に驚き、且深く同情す。箱王が工藤祐經と口論せるを聞きて祐經を辱かしむ。祐經の弟伊豆二郎祐兼が曾我二子の愛人虎・少將を擒め行かんとするに出遇うて祐兼を辱かしむ（加增曾我）

よしひら　惡源太義平。源義朝の長男なり。保元亂に父と共に後白河帝の御味方となりて崇德院の兵と戰ひ、爲朝と格鬪して勝負決せず。後に尾張に下つて長田庄司忠宗を捕縛し、鎌田正清の二子いや石・いや若を伴うて義朝に逢ふ（鎌田兵衞名所盃）

よしべゑ　由兵衞。大阪安堂寺町に住し、菱屋別家の主人なり。大川に舟遊びせる際、菱屋の手代二郎兵衞に礫石を投付けられて怒り、二郎兵衞を毆打せんとして過つて侍に無禮を加へ、侍よりいたく毆打せらる。「じろべゑ」の條を見よ（今宮心中）

よじべゑ　山崎與次兵衞。藤屋の遊女吾妻と馴染む。葉屋彥介も吾妻を戀慕して與次兵衞を惡む。彥介・雛與平に斬られしを與次兵衞に斬られたりと叫びし爲、與次兵衞冤罪を蒙りて家に幽閉せられしが、吾妻と共に出奔し、雛與平に救はる（壽門松）

よしまさ　斯波左衞門義將。管領職を勤む。足利將軍義教の身を氣遣ひて赤沼幸滿を訪ひ、中川の幽靈に遇ひて赤沼父子の逆心を知り義教を諫む。義教大に怒り細川勝秀に命じて義將を討たしむ。義將自刄せんとす。勝秀之を制して其心事を聽き相和して別る。かくて後に義將・勝秀共に赤沼父子を攻めて之を誅す（雪女五枚羽子板）

よじゑもん　雜賀屋與次右衞門。紳谷宿の商人にして、花之丞・お梅の父なり。お梅を京都三條烏丸美濃屋作右衞門に嫁せしめんとして祝宴を張る（心中萬年草）

よしをか　吉岡。貧家に生れ、母の病氣を救はん爲身を賣りて江戸吉原遊廓三浦の内の遊女となり、憲法と馴染みて久吉を生む。吉岡は父と共に久吉を連れて京都に來り、憲法財産を蕩盡して行方不明となりしかば、憲法を尋ねて三人路頭にさまよひ、三味線を彈じ唄を謠ひて惠を往來の人人に乞ふ。偶朱雀にて憲法の母に遇ひ、また大阪三軒屋町にて憲法に邂逅し、やがてこの町の御手洗屋に身を賣ることとなる。其夜石川五右衞門押入り、吉岡をして遁れしめしが捕吏に召捕られ、五右衞門捕縛に就くに及んで放免せらる。五右衞門・久吉を脊負ひたる儘釜煎の刑に處せらるるや、吉岡刑場に來つて愁歎に暮る（傾城吉岡染）

よそへい　四十平。但馬城主の京都の邸に仕へ、中間頭の寄親となる（薩摩歌）

よつぎごぜん　世繼御前。勅命によりて平朝臣惟茂と婚することとなり、鷹巢帶刀太郎廣房を伴ひて輿入の際、誤つて金剛兵衞利綱に要撃せられて其家に養はる。或日惟茂より玲瓏君と共に手紙を得て、互に嫉妬せしが心解け、相共に金剛兵衞・澤瀉二郎を連れ、惟茂を尋ね近江路を經て信州に下る。時に九

遊廓扇屋の主人にして、名妓夕霧の抱主なり。夕霧病篤き際、藤屋伊左衞門の母妙順及び平岡左近の妻雪より夕霧を請出さんとして金を送り來る。了空其金を私せずして夕霧に與ふ（夕霧阿波鳴渡）

れうしゆん 今川伊豫守貞世入道了俊。 病篤きに及び、靑砥五郎藤次を土民より拔擢し、之を重用して後事を託し、子の仲秋及び舍弟貞臣等を呼集めて懇に遺言し、連判起請文を書かしめ、之を富士權現の寶殿に納めしめて逝去す（今川了俊）

れんにんあじやり 蓮任阿闍梨。 鞍馬山東光坊の僧なり。梶原景季に呼出されて靜御前を隱匿せるかの訊問を受けて、隱匿せざることを陳述して景季を罵詈し、憤然として去る（孫靜胎内捃）

ろくぞう だんだら六藏。 馬方なり。田村將軍の室及び其乳母長良局を馬に乘せて土山を行く際、荒金刑部山國に要撃せられ、奮戰して山國の部下鳴瀧源五・三谷平六を殺し、田村將軍に從ひて、鈴鹿山の惡鬼退治に偉勳を立て、軈て千手觀音と化現し光明を放つて虛空に去る（田村將軍初觀音）

ろくざう 腕の六藏。 驛路の馬方なり。美濃國札の辻にて醉ひ臥せる間に、春主來つて馬を奪ひ、已が衣服と着替へて走る。六藏目覺めて馬なきに驚き、雛の郡司・冷泉坊法師等と何れも思ひ違ひして鬪ひしが、其實を知るに及んで相和し、共に春主の行方を尋ねて搦め捕り都に上り、朝廷より御廐の長從六位府生を授けらる（融大臣）

（序云、六藏は馬士の通稱なり）。

ろくらう 八幡六郎。 鹽谷判官高貞の臣なり。主君切腹の後、主君の奧方を助けて吉田兼好の庵室を訪ひ、侍從といふ女の首を高貞の奧方の首のやうに見せて師直の追手小林民部を欺きしが、敵其實を知つて兼好の庵室を包圍す。六郎奮戰して之を破る（兼好法師物見車）

（序云、赤穗城主淺野内匠の臣大石内藏介良雄をかく作かへたるなり。（「ゆらのすけ」の條と併せ見よ）

ろくらう 「しげきよ」を見よ

わかむらさき 若紫。 京都九條北町柏屋の遊女なり。源義經と情交密なりしが、佐藤忠信に賴まれて其意に從ひ、心ならずも義經の席に出づるを避けて義經に罵られ、世上のままならぬを嘆きて尼となり、貞順と法名す。忠信が其妻花紫と途に逢うて遊女の浮薄を罵るを、若紫蔭で立聞きして忠信に怨みを言ひ、花紫と共に大和路をさまよひ、吉野の御堂にて靜御前に遇ふ。この時山法師等に包圍せられて義經の所在を詰問せらる。若紫乃ち我等皆九條の遊女なるを語り、女郎名寄を讀んで免るるを得、山中にて義經主從に邂逅せしが、義經に論されて名殘を惜みつつ別る（吉野忠信）

わごんのまへ 和琴前。 大和國宇陀郡龍門家の女にして、舞樂の前の異母妹なり。母が姊を惡むを悲んで家をしのび出で、吉野川に投身せんとせるを石川五右衞門に捕はれて、大阪三軒屋町御手洗屋に賣られて遊女となり吉野と名乘る。或日憲法來つて吉岡と交換せられて、河内國道明寺に連れ行かれ、尋いで母及び姊に遇ふ。是時石川五右衞門幼兒を背負うて寺内に逃入り、大釜の中に隱れしを捕吏追及して縛し去る。是に於て和琴の前は道明寺の老尼等と共に五右衞門の刑場に赴き、幼兒の赦免を哀訴す（傾城吉岡染）

わしくに 御藏之介鷲國。 葵大臣種房の臣にして、玄上廷尉之介鶴國の弟なり。泊瀨皇子を尋ねて丹後國與謝郡水の江の浦里に行き、乾平馬等を追拂ひ、泊瀨皇子に陪從して都に上る。後、雄略天皇に從ひ、葛城山に眉輪王を退治して功あり（浦島年代記）

わしまる 鷲丸。 桐か谷の獵夫なり。未だ乳離れぬ春兒の白鹿を捕獲して犬坊丸に見せ、大磯の虎御前の下駄にて作れる笛には鹿寄ることを語り、其笛によつて親鹿をも獲べしとて犬坊丸を手引して山に入る（曾我五人兄弟）

わだまる 太宰太郎和田丸。 平城天皇の御宇豐後國の旗頭なり。宮中に召されて蒙古征伐の勅宣を蒙り、百合若の姓を賜はりて大臣に列し、香取丸といふ矢を授けられ、且凱旋の曉には宮中第一の美女立花を妻となすべしとて天盃を賜はる。是に於て百合若出征に上る途次牛頭天王社に詣でて戰勝を祈り、遂に宇佐八幡宮に武運長久を祈り、其夜家士の別府雲足・雲澄兄弟の反逆を夢む。かくて後蒙古征伐に大功を立てしが、別府兄弟の反逆によつて遠島に月日を送ることとなり、綠丸と云ふ雌鷹の矢の精の化けたる立花と同棲して子の還城丸をまうけ、親子三人孤島に暮すこと四年間。或日我子の武運を祈りて放ちし矢、計らずも百合若を尋ねて來る秀虎の船に命中して秀虎と逢ふ。かくて船に打乘つて本國に歸らんとする際、別府雲澄蒙古の寇に變裝して來襲す。卽ち戰つて之を殺し、都の方へ飛ぶ鷹を目當に船を走らす。歸國の後別府雲足を誅す。朝廷其武功を嘉し給ふ（百合若）

（舞之本・百合若大臣を脚色せる所多し）

わとうない 和藤内。 鄭芝龍一官の子なり。逆臣李蹈天及び韃靼兵の爲に明國亂れ、皇妹栴檀女肥前の平戶に漂着するや、乃ち皇女を妻の小睦に托し、父母に連れられて明に航し、獅子城主甘輝によつて恢復の軍を起し、延平王國性爺といひ鄭成功と號す。進んで雲門關を越え五十餘城を拔く。吳三桂と九仙山に會し、共に進んで南京城に迫り、李蹈天を捕へて酷刑に處し、韃靼王を撃退して太子を立つ。之を永曆帝と云ふ（國性爺合戰）

國性爺日本風を好み、永曆帝の宮殿を日本式に造營せんとす。また栴檀皇女を國性爺の子の名義にて甘輝の後妻たらしめ、其祝宴の席上甘輝より國性爺の日本風を好むを意見せられ、怒つて甘輝と絕交し、官を辭し、妻子及び手飼の虎を連れて東寧島に去る途中、勾容縣にて敵將鐵故山・石運龍の襲擊に遇うて之を破り、東寧に渡つて其島守となる。或日島民に駙馬鐵平の幻術を信じて金を貢ふ者あるを聞き、萬禮に命じてそれ等の者を捕へて生獄門に謀せしが、刑人中に父の鄭芝龍あるを見て、之を赦さんとして思案に暮る。甘輝・永曆帝を連れて城門に來る。國性爺乃ち甘輝と和して永曆帝を保護し、韃靼軍の來襲を擊破す（國性爺後日合戰）

（序云、和藤内は朱成公なり。父を鄭芝龍と云ひ平戶に寓し田川氏を娶つて朱成公を生む。崇禎十一年明に渡り、唐王より忠孝伯に封ぜられ、國姓朱を賜ひ名を成功と改めしむ。世呼んで國姓爺と云ふ。成功・永明王を奉じて淸に抗す。永明十二年延平王に封

丸の非凡の力量に感じて之を家來となし、坂田金時と命名して四天王の一に加へ、金時を先導として江州高懸山の悪鬼を退治す。功を以て鎭守府將軍に任ぜられ、勅諚によつて岩倉大納言兼冬卿の女漣漪姫と婚す（嫗山姥）

多田滿仲の嫡子なり。勅命を受けて相馬二郎將門が執念、變化靈馬を射る。家督相續を賴信と定む。賴平が兇賊將軍太郎良門と一味せるを捕へて死罪に處せんとせしが、賴平の乳母及び箕田二郎綱の深く賴平を思へる心を憐んで罪を赦し、賴信・賴平・保昌等をして葛城山に良門・土蜘蛛を攻めて之を退治せしむ（關八州繫馬）「らいくわう」をも見よ。

よりよし 源賴義。性硬直なりしかば平師氏の讒に遭ひ、勅勘の身となりて自殺せんとせしが、家臣平井淸春等に諫められて思止り、渡邊武綱、坂田公時、平井淸春等を從へて、京師を出で落ち行く途中、平師秀の兵に長坂に要撃せられて之を破り、若狹國小濱に赴きて逸見判官唯光に便る（大掛物十幅一對）

らいうん 荒土佐坊雷雲。吉野坊主なり。綿瀧萬九郎の宅を襲ひ、萬九郎の妹長歌を奪ひて春彥尊に奉らんとして搦めらる。後、夏仁親王を春日山に襲撃し、親王に化けたる神鹿を斬りて味方の兵に搦めらる（持統天皇歌軍法）

らいくわう 源賴光。武將なり。加藤兵衛氏綱來つて、其女橫笛が北白川の艷文といふ浪人にかどはかされて、江州鏡山の遊廓ひらぎ屋長に賣られたることを訴ふ。是時賴光勅命によりて大江山の酒吞童子を退治し、其歸途四天王と共にひらぎ屋に行きて長を捕へ、其暴戾を責めて重罪に行ふ（傾城酒吞童子）「よりみつ」をも見よ。

らいげんほふし 雷玄法師。源義經の愛人東雲の叔父なり。平家の將監物太郎賴方と共に義經を追撃し、田村の宮に戰つて死す（源氏烏帽子折）

らうく 郞九。奧州會津者なり。大阪新地料理茶屋の女主人お龜・同じく天王寺屋の妓小菊を連れて野崎觀音に詣で、口三味線でうかれ行く途中、一つ橋のあたりにて、河內屋與兵衛及びその友達等に悋氣喧嘩を仕掛けられて、與兵衛の友を蹴飛し、與兵衛と摑ち合ひ組み合ひて共に川に轉落し、泥土を摑んで投げ合ふ、與兵衛誤つて通行の武士に無禮を加へて咎めらるる間に、郞九は川を渡つて參詣の諸人中に紛れ込み、小菊等を連れて去る（女殺油地獄）

（郞九の名は、その國元會津の名物の「らふそく」（蠟燭）の「そ」を略していうたもの）。

らん 阿蘭。但馬城主の京都の邸に仕へてお摘上げを勸む。或夜小萬の媒介によつて菱川源五兵衛と契る。後、比丘尼となりて薩摩に下り、芭蕉布商琉球屋に來り、源五兵衛に刀を投げられて怪我す。琉球屋の娘お萬が源五兵衛の後を追うて裏塀を越えたる際、帶松枝に懸りてぶらさがる。お蘭乃ち布を松枝に投懸けて之を助く（薩摩歌）

らんぎく 蘭菊。卜部季武の妻なり（關八州繫馬）「いはふぢ」をも見よ。

らんぎよく 蘭玉。萬禮の妻なり。阿克將より舅の陳芝豹を誘ふ書狀と賄賂を得て、其賄賂を返し、書狀を隱さんとせるを陳芝豹に見付けられて羊に食はしむ。陳芝豹これを不義の文と疑ひ、羊を割きて其書狀を讀む。其日甘輝・永曆帝に從ひ來り訪ふ。蘭玉之を饗應せんとして庖刀を研ぐを甘輝に疑はれて斬付けらる。後に萬禮の跡を慕うて東寧島に渡る。或日甘輝尋ねて來る。蘭玉舅の仇と呼はつて甘輝と格鬪す（國性爺後日合戰）

りうかくん 柳歌君。明の大司馬將軍吳三桂の妻なり。逆臣李蹈天が韃靼兵を導きて帝及び華淸夫人を弑するや、柳歌君卽ち栴檀皇女を連れて海道の港に遁れ、敵の追擊軍と戰つて其將闘婎を殺し、皇女を舟に乘せて遁れしむ（國性爺合戰）

りかいはう 李海方。李蹈天の弟なり。兄と共に反して韃靼に內通し、明を滅さんとして吳三桂に殺さる（國性爺合戰）

りくあんわう 劉乃耶六安王。福建の國主なり。性暴戾にして苛政を行ふ。臺灣國せうほが池中より引上げたる大鼎を潰して寶劍を作らんとし、刀工を集めて刀を作らしめ、其利鈍を試すに無辜の民を斬り、歐陽赫思が極諫せるを怒つて之を殺し其肉を醢にす。朱一貴兵を擧ぐるに及んで其臣歐陽哲を捕へ、醢を出して汝が父の肉なるを告げて之を食はしむ。是時朱一貴の軍福建城に來襲す。六安王戰敗れて滅ぶ（唐船噺今國性爺）

（知府「臺灣長官」王珍政を怠り苛税を課し、民心離叛したるを傳聞脚色したるなり）

りたふてん 李蹈天。明の右將軍となりて反逆を企て、韃靼兵を導きて思宗烈皇帝及び皇后華淸夫人を弑し、皇族忠臣を亡して自ら國王となる。後、南京城に於て國性爺等に襲擊せられて敗れ、捕へられて酷刑に處せらる（國性爺合戰）

りゑもん 大文字屋利右衛門。大阪備後町の鍛冶職なり。手代平兵衛かねて惡所狂ひをなすを知つて棄ぜる際、平兵衛が穢多の雪路の裏金を請合へるを怒りて之を放逐す（心中刃は氷の朔日）

りん 林。河內國道明寺の老尼なり。或日虛無僧來り和琴の前を預けて去る。尋いで龍門家の後室及び舞樂の前來つて此寺の尼となる。是時石川五右衛門幼兒を脊負ひて寺內に馳込み、大釜の中に隱れしを官人追及して縛し去る。是に於て林は龍門家の後室等と共に刑場に行き、幼兒の赦免を哀訴す（傾城吉岡染）

るりせんぢよ 瑠璃仙女。林丹の妻なり。須達長者の下女となりしが、佛法を信ずるの故を以て放逐せらる。羅睺頭陀の道に遇うて貧の一燈を挑げ、遂に佛果を得（釋迦如來誕生會）

れいぜい 冷泉。淨瑠璃御前の乳母なり。淨瑠璃御前と牛若との情事につきて斡旋す（孕常盤）

淨瑠璃姫の侍女なり。姫と牛若との情事に就いて斡旋す。後、姫に從ひて峯の藥師の笹谷に隱れたるを、藤太に見付けられて斬られんとしたるを三條の吉次信高に助けらる。また牛若に逢うて淨瑠璃姫の死を語つて悲しむ（十二段）

淨瑠璃姫の歿後、十五夜と共に尼となつて姫の墓に詣でて冥福を祈る（源氏冷泉節）

れいぜいばうのほふいん 冷泉坊法印。大江千里と子の日の死せんとするを諫して之を救ひ、融と臺の前との見合を取持ち、融に仇する春主と鬪うて之を破る（融大臣）

れうくう 扇屋了空。大阪新町九軒町の

巣林子作中に見える古代法

現代から見て往時はかうであつたかと、心付いた儘を摘出してその概要を叙說するに過ぎぬのであるが、また以て元祿—享保年間上方地方に行はれた法則の一斑を窺はれよう。

(一) 治安維持に就いて

(イ) 五人組

女殺油地獄に、「借つた金は二百匁、明日になれば手形の通り一貫匁で返す約束、それよりも悲しいは親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ先樣からことわる筈」と見えてゐる。五人組の名稱は何時代から始まつたか詳でないけれども、天文頃に既にこの稱があつた。盜賊・掏摸・辻斬などが頻にあつたので、治安維持の方法として五人組合團結の制を定め、組合相警めて罪惡を犯さないやうにし、若し罪惡を敢てする者があつたならば、その組合から告發せしめたものである。かくて五人組は德川時代治安擔保の機關として完備せる發達を遂げた。そして切支丹の禁止や浪人取締や、また組合中から罪惡人を出さぬやうに警戒したのである。

(ロ) 町年寄及町會所

淀鯉出世瀧德に、「遣ひ潰すの身持が惡いのと一門一家町年寄庄屋まで觸れ歩いて、藏藏に封を付けさせて阿房者にしてくれた」と見えてゐる。町年寄は略して年寄とも云ふ、町內の公用雜事を掌る役である。町內の町人中で德望あり資產ある舊家の者を公選し、總年寄がこれを任命し、其任期は多くは三年で名譽職である。町年寄は何れも本業あれば、實際の町務は町代を置いて之に代らしめた。大阪舊時の町年寄は每町一人で、小町は隣町の年寄が兼務したのである。町年寄はその町の會議をなし、又每月判形と云うて町內に住居せる者に戶籍帳に捺印せしめる時などに出頭する家を每町に設け、これを町會所又は會所と稱した。

其他治安維持に關して自身番(その條を見よ)辻番所(つじあんどうを見よ)などの設けがあつたことが見えてゐる。

(ハ) 仲間組合

冥途飛脚に、「若し盜賊か切取か道からふつと出來心、萬々貫目取られても十八軒の飛脚宿から辨へ、芥子程も御損かけませぬ」と見え、「親父の代からこの家に金一匁催促得ず、終に仲間へ難儀をかけず、十八軒の飛脚屋の鑑と言はれたこの龜屋」と見え、また「今の小判は堂島のお屋敷の急用金、此金を散らしては身の大事は知れたこと、……八右衞門が面付すぐに母にぬかす顏、十八軒の仲間から詮議に來るは今の事、地獄の上の一足飛び、飛んでたもや」と見えてゐる。飛脚商などは同業組合を作り、若し組合員の中に不屆者ある時はこれを制裁告發するやうにし、顧客には損を掛けぬやうに組合から辨償したものである。

(二) 刑罰に就いて

(イ) 强盜殺人罪を犯した大賊石川五右衞門は、三歲の人の子と共に沸返る油の中に釜煎の酷刑に處せられたことが傾城吉岡染に見えてゐる。幼兒に罪はなけれども連坐の處刑を受けたのである。

(ロ) 鑓の權三重帷子に、笹野權三と淺香市之進の妻さゐとが姦通ならぬ姦通の罪に陷つた條に、「ええ是非もない、最早この二人は生きても死んでも廢つた身。東に御座る市之進殿女房を盜まれたと、後指を指されては御奉公は愚か人に面はあはされまい。とても死ぬべき命なり、只今二人が間男といふ不義者に成り極めて、市之進に討たれて男の一分立てて進ぜて下されたら、なら忝からうと又伏沈むばかりなり」と見えてゐる。人妻との姦通が內濟にされないで其噂が立つては、姦夫姦婦ともに生きてゐられないのである。これが公沙汰になつては姦夫姦婦一緒に縛られて馬に乘せられ、市中を引廻されて刑場の露と消え、其首は獄門に梟せられるのである。大經師昔曆におさん・茂兵衞が姦通の罪を犯して悲しむ條に、「つくづく物を案ずるに、我は劍の金性の刄にかかる約束か、わしは土性墓の土何とて墓に埋まれず、遂に木性の木の空に屍を曝し名を晒し、なんど小歌に作られて强きおきめに粟田口、蹴上の水に名を流すおさん茂兵衞が新精靈」とあるは卽ちその嚴刑を受けねばならぬことをいうたのである。ただここに死なないで濟む法は姦夫姦婦ともに失踪して探出されなかつたらそれまでだが、さもなければ兩人共に早く僧尼となることである。堀川波鼓に小倉彥九郞が己が妻お種の姦通事件を聽取つて、お種の自害に止めを刺した後、身內の者どもの愁嘆に對していへる言葉に、「さほど母姉兄嫁を大切に思ふ程ならば、など最前に衣を着せ尼にせんとこ、命をばなぜに貰うてくれざりし」と見えてゐる。心中萬年草にも、「假令親の敵でも出家は格別、在家となれば見逃しおかれぬ弟の敵」とあるやうに、僧尼寺院は人命を繋ぐ上にも利用された一種の安全地帶であると思はれないでもない。紀州高野山、相州緣切寺などは、こんなことに關して面白い史話を持つてゐる。

序云、さゐが姦通ならぬを姦通と見咎められた上は、眞の姦通となつて死なうとするのであるが、何故にその姦通でないことを立て通さないのか、それはさゐの言葉に「跡に我我名を淸めては、市之進は女敵を討誤り二度の恥といふもの」といふ理によつたのである。金に窮して死ぬる者がなほ金ては死なぬといふ程の、とかく義理にかこつける元祿—貞享の世はこんな變態義理も通用したのである。

(ハ) 大經師昔曆に、大經師以春の手代助右衞門が、相手代茂兵衞と旦那の妻おさんと姦通した其媒介をした下女玉の罪を玉の請人の赤松

ぜらる。大軍して南京を襲うて敗れ、海に航して臺灣に據り、父の反銜を諌めて聽かれず、遂に父を奪って明に款し、清の聖祖皇帝康熙元年（永明十六年）齢三十九歳にて病歿す）

（國姓爺合戰は近松の當時最も歡迎せられたり。蓋し場面の變化も人物の配合もよく、支那の風俗生活、我が國人和藤内の剛勇とお國自慢など、總て見物人をして喝采せしめたるによるなるべし）

わにがせ　鰐香背。素盞鳴尊の臣なり。大山祇の女木花開耶姫を尊に奉らしめんとして大山祇と口論す。嬪山に惡鬼退治の軍に從ひ惡鬼に恐れて逃ぐ。後、尊に謀反を勸めて天稚彦に殺さる（日本振袖始）

ゐあまのむらじ　猪甘連。四百年前顯宗天皇蒙塵し給ひし際、御糧を乞はれしを惜んで斬殺されき。後に弘法大師行道の時、車大路にて猪甘の幽靈現はれて罪障消滅を請ふ。大師爲に說法し外五鈷智拳印を結べば、有難やと叫んで其姿忽ち五輪の石塔となり、幽魂惡右馬尉仲成の體内に入りて橋判官勝藤に殺され、また藤原の牛の腹に宿りて守敏僧都に殺され、また大炊介仲經の一子と生れて餓鬼道の苦患を受けて殺され、遂に龍王となつて天上の果を得（嵯峨天皇甘露雨）

ゑあはせ　綺合姫。安藤左衛門入道聖秀の女なり。五大院十郎宗房と婚するを嫌うて病を得、里見義助を供に連れて箱根に湯治に赴く途に、齋藤文治年行が犬輿を昇かせて來るに遇ふ。義助犬輿に禮せずして咎めらる。綺合姫乃ち犬輿に禮して年行に謝罪す。これを目撃したる聖秀は犬に禮せるは不都合なりとて綺合に勘當を申渡す。義助捕められて獄に投ぜらるるや、綺合食物を携へて義助に逢ひ、悲嘆に暮るるを宗房に見付けられて捕められしが義助に助けらる。かくて後新田義貞の使者となり、夫義助と共に義貞の手紙と白旗を携へて父を訪ひ、義貞の義軍に一味するやう懇請す。聖秀乃ち意を決し、綺合を議して自刄す。綺合悲歎に暮る（相模入道千疋犬）

ゑもんのひめ　衛門姫。越後國守長尾謙虎の女なり。信州諏訪明神に參詣し、武田勝頼に逢うて相思の仲となり、信州國守村上義清に横戀慕せられて勝頼と共に失踪し、諸方に放浪したる後勝頼の父信玄と天目山に逢ふ。甲越の戰解くるに及んで勝頼と婚儀を擧ぐ（信州川中島合戰）

をかへい　岡平。平索無箭といひながら、三度飛脚より高師直の文を受取つて返事を認む。大星力彌之を見て敵に内通するものと疑つて岡平に斬付く。是時由良之介外より歸る。岡平・由良之介に語つて曰く、自分は寺岡平藏の子の寺岡平右衛門なり。鹽谷家の恩顧を蒙りたる者なれば、師直に僞を傳へて油斷せしむ。片時も早く下つて主君の仇を報じ給へと師直の邸内を說明し、痛手に堪へずして死す（碁盤太平記）

をぎの　荻野。大阪新町遊廓扇屋の太夫夕霧の妹女郎なり。夕霧の娘の春姫に遇うて傾城戀物語をなし、春姫を伴うて夕霧供養の場に列す（三世相）

をだまき　紵卷。足利義教の奥方の侍女なり。奥小姓一色大炊介久常と密通し、屋根を傳ひて逃る（雪女五枚羽子板）

をののひめ　小野姫。熱田大宮司の女にして惡七兵衛景清の妻なり。父が景清を庇護したる罪により捕へられて六波羅の獄に投ぜらる。小野姫は父を尋ねて京に上り、梶原景季に捕へられて景清の行方を白狀せしめんとして慘酷なる拷問にかけらる（出世景清）

をりかぜ　中臣折風。融大臣の傅なり。白馬を牽きて融に謁す。後に惡人春主が融を一條室町染殿屋に襲撃したる際、春風防戰して斃る（融大臣）

（・・・）

以上、近松が用ひたる人物の多くは、時代物に於ては傳説或は史實に據つて脚色され、又世話物に於ては其の當時の巷說或は事實に基いて脚色されたるものなり。これ等のことは其傳中に一言述べたるもあれども、その煩に堪へずして略したるもあり。

ひんしやん行過ぐる。所がらとて人に馴れ、エ氣輕いやつと打笑ひ」と見えてゐるやうに、武士が無禮を加へられても笑うて濟すは遊廓內であるからである。

（三）旅行に就いて

舊幕時代旅行するには其所在地の名主五人組の手判を得て、關所の番人にそれを見せて通過を許されたものである。丹波與作に、「白須賀ちよいと越えて、手判ござるか振袖に、ヤこのこの新居・今切」、とある手判は卽ちこれを云うたものである。次に記したのは、寶曆年間に書集めた關所留書一件の古寫本中に見える手判である。

二月幾日
幾日渡　何町何丁目誰店
箱根　誰
今切押切印也
同
幾日渡　何町家持
根府川　誰

（四）相續に就いて

相續といふは家名・家産を相續することで、主人の長男が法定の相續人である。生玉心中に、「幾松は嘉平次が羈縮にありとも氣もつかず。エエ曲もない兄きの心、今ならでは申さぬが私が眼病もあの人ゆゑ。聞いて下されある事か、おきはと其方と夫婦になれ、其代に家屋敷・商の株共に親父の跡を繼がする、合點せいせいと、道ならぬこと耳かしましく、所詮私が死ぬるか不具にして下されと、山上様へ願をかけたれば御利生でこの病」と見えてゐる。これは一つ屋五兵衞の長男嘉平次が法定の相續人であるが、さて相續するならば養女おきはと夫婦にならねばならぬを厭うて、弟の幾松に相續を讓らうとする。兄思ひの弟は兄の不身持を深く憂ひ、神に祈つて不具者とならうとするのである。

養子相續については心中重井筒に、紺屋の入聟德兵衞が口入業の治右衞門を招いて金を借らうとし、德兵衞の僞女房ふさが口を添へる條に、「ヤア治右衞門樣かお這入りなされ。御免といひて通りける。あれ女房ども、內內の治右衞門樣・そなたの判なら銀貸さうと仰しやる。お目に懸つて禮きやといへば言合せてやかの女。これはまあまあ御懇親な。尤も家も商賣も私の物とは申しながら、子なかなしたる仲なれば、もう今では屋財家財皆主の物で御座りまする。からお目にかかる上からは私が請合、深しい事こそこの家屋敷相應に三貫目や五十兩は貸して遣つて下さいやせ」と見え、大經師昔曆に、岐阜屋道順の女おさんが大經師以春に嫁いで、以春の手代茂兵衞と姦通したのを道順が悲しむ條に、「道順不覺の淚にくれ、ハア道順が未來も早知れた。獨り娘の事なれば聟を取つて家をつがする筈なれど、近年諸國の銀もすまず家屋敷をも人手に預ける逼塞の身、この跡を娘に渡し苦勞さするかはいさに、一代切に家を捨て嫁入させた親心」と見え、卯月紅葉に、古道具商笠屋長兵衞の養子與兵衞が舅の妾いま及びいまの弟傳三郎にいぢめられ、傳三郎の計略に罹つて舅の書納めた讓狀を奪去つたのを舅が怒る條に、「與兵衞めが在所へは戻らいで、町の會所の帳箱に入納めた讓狀、身が使と僞つて取つて行んだと年寄からことわりがいうて來た。彼奴に讓る讓狀取つて何になる事ぞ。家を棒に振りをるか但はどうぞ公事だくみか」と見え、與兵衞の返答に「エエ恨めしい親父樣、あの家屋敷家財まで私夫婦へ讓りの約束なれば親子と存する故不祥の事も堪忍して、心一ぱい働けども何をするのもお氣に入らず」と見え、長兵衞その返答に、「おのれを町へ弘めしてすぐに出いた讓狀、身が目の塞がぬその內は、年寄行事も封を切らぬ書置を傳三が知らう筈がない。……ヲヲ成程身が判封の儘。只今披くこれ聽け。……北久太郎町心齋橋表口五間半、裏ゆき町並貳拾間、家財殘らず娘お龜・聟與兵衞夫婦に讓り申し候。家外より違亂少しもなし如件。これ見よ」と見え、冥途の飛脚に、飛脚宿龜屋の養子忠兵衞のことをその友中の島の八右衞門がいふ條に、「尤千兩二千兩人の金をことづかり暫時の宿を貸すけれども、手金とては家屋敷家財かけて十五貫目、二十貫目に足らぬ身代。大和の親が長者でも龜屋へ養子にこすからは高の知れた百姓」と見えてゐる。これらを綜合して考ふれば、(1)聟養子は家名を相續し、そして家産は妻の家女が相續し、(2)或は聟養子と家女との夫婦共同で家名家産を相續し、(3)或は養子が家督を相續するものであつた。そしてまた長町女腹切に、半七の叔母が三代に祟る信國の脇指を左脇に突立てて半七を勵ました條に、「刄物の祟も三代濟む。行末目出度う出世して親祖父の名字を繼ぎや」とあるやうに、我國古來の國民思想として、家名は家産よりも重く視られてゐる。また家の主がその相續を死後に讓らうとする讓狀は、家の主自身が判封を施して之を町內の會所に寄託し、その死後町內の町年寄行事等立會の上で封を開いたものである。

（五）緣組と離緣に就いて

聟養子に來るときは嫁入と同じやうに持參金をしたもので、卯月紅葉に、「在所に隱し親もあり、敷金してあの下種めに使はれう筈はない」と見え、冥途の飛脚に、「この忠兵衞をそれ程たはけと思やるか。この金は氣遣ない八右衞門も知つて居る。養子に來る時大和から敷金に持つて來て、餘所へ預置いた金身請の爲に取戾した」と見えてゐる。敷金とは嫁づく時に齎す金である。

妻は如何なる事情場合でも夫に離緣を迫ることは倫理の道に反することとして出來ないのであるが、義父は聟養子をも離緣する權能を有してゐるのである。卯月の紅葉に、古道具商笠屋長兵衞が聟養子與兵衞を放逐する條に、「日の內は外聞惡し表をしめて追出せと、蔀おろして情なく引出せば伯母・お龜、なう今暫しと取付くをもぎ放し、門より外へ押出し潛戶をはたとさしければ、內には妻の叫ぶ聲外に夫の忍び泣き、淚に曇る十七夜月に別れて出でにけり」と見え、心中天の網島に、舅五左衞門が治兵衞・おさんの夫婦の緣を切る條に、「非人の女房には猶ならぬ、去狀書け。おさんが持參の道具衣類數改めて封付けい」と見えてゐる。

離緣の時は結婚の時に持參した諸道具・敷金をも附けて返し、子ある時は男の子ならば父親に附け、女の子なら女親に附けて返すのである。鍵の權三重帷子に、淺香市之進の妻おさゐが姦通罪を犯したによつて、おさゐの嫁入道具及び娘おすて・お菊を附けておさゐの實家岩木忠太兵衞の宅に送返す條に、「岩木忠太兵衞玄關前、淺香市之進方より小袖簞笥

梅龍に話す言葉に、「旦那外より歸りの門口、擦り違うて手代の茂兵衛めが内儀おさん女郎たそそのかし走り出で、やれやれといふ内に行方が知れぬ。内を詮議すれば玉めが寢所におさん女郎と茂兵衛が寢た體にて、玉めはおさんの寢間に入りかはつて寢てゐた。然れば主人の内儀の間男の媒介した玉めなれば同罪は遁れぬ」といひ、また赤松梅龍が玉を諭して覺悟を極めさす言葉に、「間男といふ浮名が立つた二人の中へ、媒といはるる其方と三人寄つたそぶりなりとも人に見られては、そりや一つ穴のいたづら狐一所に寄つたは扨こそ、いひ立てられては彌科が重らなる、ここをよう合點せい、つれなう當るはお爲ぢやぞ。この事故にそちも憂き目の恥にあひこの如く預けられた。然れば同罪は遁れ難い」と見えてゐる。姦通の媒介をした者も姦通と同罪に取扱はれて、酷刑に處せられたのである。

(ニ) 卯月の潤色に、おかめ・與兵衛の女夫が情死を謀り、おかめは死して與兵衛は生殘つた。おかめの伯母がおかめの死を悲しみ、梓巫女を頼んで死口を寄せて語る言葉に、「心中の作法にて死損ひし片片は試物になると聞く。與兵衛が疵を養生し本腹したる其後に、試物になるならば伯母は何とならうぞや」といひ、おかめの死口の答に、「いやなう世間の心中とそれは違ひがあらかねの、金銀づくの勤の身奉公人や主ある人、娘子などの添はれぬ仲、うろたへ死なぬ心中は、人殺と同然の罪に沈むも世の作法。幼馴染のこち女夫比翼連理の仲はよし、何に不足はなけれども内では誰が點を打つ、大鎌の犬めらに懲り果てて死ぬる身をいはば、面面自害とも心中の外の心中ぞや。町衆在所世間へもこの歎きを言ひわけて與兵衛樣の命を助け、道心出家させまして朝晩回向が受けたやなあ」と見えてゐる。情死を企てて生殘つた片割は斬罪に處せられるのであるが、面面の自害となれば敢て其罪は問はれなかつた。

(ホ) 外國の物品を密輸入する者は死刑に處せられるのである。博多小女郎波枕に、「斯る所へ檢非違使の某眞先立ち、此處役處に召捕つたる海賊獲傾城交り繩付ども一度に彼處へ引來る。檢非違使一札押開き、囚人どもに申聞する趣有難く承れ。一、沖がかりの大船に通路を求め、波を潜り水底を拔け船へ近付き諸色を奪取りし事、國法を背く大罪武士に仰せて死罪あるべき所、當今御即位の御悅によつて死罪一等勅免なり」と見えてゐる。これは密輸入者毛剃九右衞門一味の者どもが召捕られて、死刑に處せらるべきを大赦によつて死一等を減ぜられたのである。

(ヘ) 年貢滯納者は水牢に入れられて苦しみを受けるのである。丹波與作に、「小萬はらはら涙にて、勤の身にもおぢやれの身は下の下といふはここのこと。傍輩衆へも言はなんだ、横田村の父樣二石二斗の未進に詰り六十六で水牢。男にも娘にも子とてはこの身ばかりなり。しよざいこそ出女なれ、お大名へも知られた關の小萬が父親を水牢では殺されず、參官するとて暇もらひ女子の身で代官所を秋納まで請合うて、牢を出しは出したれども何をあだてになんとせう」と見えてゐる。これは小萬の父が滯納處分を受けて水牢に入れられたのを、小萬皆納の保護に立つて猶豫を願ひ、父を水牢から引出しはしたものの、さて秋納の期日は追追近付けども、皆納されようもなきを歎き悲しんだのである。

(ト) 町人輩が莊麗な邸宅を構へ豪奢を盡すは、禁制を犯した過分の所爲として、種種な口實をまうけて用金を調達し、家産の沒收・追放・闕所などの刑罰を加へたものである。淀鯉出世瀧德に、「江戸屋勝二郎というては石火矢でも崩れまい長者の家」と見え、「八幡の住人江戸屋の勝二郎殿替名は鯉樣、十萬兩遣うてもこちとが百歳落いたとも思はぬ程の身代」とありて、大富豪なるを示し、「鯉が欒を飛んで出て、日頃馴染の茨木屋の吾妻をとんと請出し、明日はすぐに八幡へ、今宵廓の名殘ぢやと井筒屋で大振舞、なんぢやは知らず井筒屋の庭から門まで長持で通られぬ。今夜の物入りざつと積つて二百兩、扨も金は片行な、ある所にはあるものか」とあるは、その江戸屋勝二郎が遊女吾妻を請出す豪奢の樣を示し、「科は何ぢや知れぬが、勝二郎は追放で八幡は煮える、おれや見て來た。百兩や五十兩はあれでも取つて退かうか。なんのいの編笠さへ被せぬもの。請出された吾妻とやらはどうなる事ぞあつたらもの」と見え、「時に向の堤の上大勢人の喚く音、追放の人の作法とて八幡公文所の役人數多手んでに割竹大地を叩き、勝二郎を先に立て兩手を引張り、聲をかけて追拂ふはいまいましくもすさまじし。憂き事知らぬ和子樣の氣を奪はれ性根を取られ、起きつ轉んづ足立たず、橋本の宿外れ三國堺の板橋にこそ着きにけれ。あらけなき聲聲にて、サア此所よりおつ放す。京大坂淀伏見堺をそへて住居は叶はず。背くに於ては見合次第討棄て、何方へも失せ居れと口口罵り歸りしは、硫黃が島に捨てられし俊寛僧都もかくやらん」、とあるはいふまでもなく江戸屋勝二郎追放の有樣をいうたものである。

(チ) 元祿—貞享時代の遊女町は一種の金融と交際場裡の歡樂地であつた。官からも寬大に取扱はれ、治外法權のやうな觀を呈してゐたので、階級制度嚴で官權の壓迫に恐れてゐる町人等は、遊里に於て思ふ儘に心を伸ばしたはけの限を盡し、金錢を水のやうに散布して遊樂したのである。そして巨額の金を消費する者が粹樣ともてはやされて幅を利かす外には、武士でも町人と同じやうに扱はれ、多少無禮な行爲があつたとても、治安に害なき限り敢て咎めず默許されたのである。心中天の網島に、「太兵衛が念佛怖くば南無あみ笠を貰うたと、引ずり入れたる姿を見れば大小くすんだ武士の正眞、編笠越しにぐつと睨めたる眞丸目玉の蔽鉦、念とも佛とも出でばこそ、ハアアといへどもひろまぬ顔。なう小春殿、こちは町人刀さいた事はなけれど、おれが所に澤山な新銀の光には少少の刀も捻歪めうと思ふもの。塵紙屋めが漆漉程な薄元手で此身すがらと張合ふは慮外千萬。櫻橋から中町くだりぞめいたら、何處ぞでは紙屑踏躙つてくりよ、皆おちやおちやと、身振ばかりは男をみがく町一杯にはばかつてこそ歸りけれ。所がら馬鹿者に構はず堪へる武士の客」と見え、女殺油地獄に、「手に嵩高な文持つて西の方からくる禿。これこれ物問はう、備前屋と申す傾城屋はいづかた、其御内に松風殿と申す傾城御存じならば教へてたべ、願入るとぞかたくろし。フウ仔細らしい物のいひ樣。備前屋はこの家、西の端に戸のさいた客のある局が松風樣でござんす。コレお侍樣左の足上げさんせ、ソレソレ又右の足も上げさんせ。ヲヲよう上げさんした、いかい世話のと、なぶつて

殿はこなたかと、年配なる人體なり。ヤア治右衞門樣かお這入りなされ。御免といひて通りける。あれ女房ども、内内の治右衞門樣・そなたの判なら銀貸さうと仰しやる。お目に懸つて直きやといへば言合せてや彼の女。これなまあまあ御懇親な。尤も家も商賣も私の物とは申しながら、子なかなしたる仲なれば、もう今では屋財家財皆主の物で御座ります。からお目に懸る上からは私が請合、深しい事こそこの家屋敷相應に三貫目や五十兩は貸して遣つて下さいやせと、つまづま合せる辯舌に口入食うた顔付にて、アアアこれには及ばぬ事ながら、德兵衞殿は入家と聞く、から致せば後のため又も用を聞からため、サア判をなされよと手形を出せば、德兵衞懸硯引寄せ、これそなたの判。さらばまづ私と互に印判明白なり。丁銀四百目包の通り吟味なされと受取り渡し、もう暮れまするお暇申そ。ちとお盃致しましよ。重ねて重ねて頼けます、さらばと言ひてぞ歸りける」と見えてゐる。當時は借用證文も貸主が書いたもので、借主はそれに印判を捺して渡せばよいので、まことに印判が物云ふ世の中である。家屋敷を二重に抵當に入れるを二重家質といひ、嚴禁されたもので、これをなした者は犯罪人となつて牢獄に投ぜられたのである。大經師昔暦に、「父樣の方に面倒なことが出來て來て談合したいといふこと。恥をいはねば理か聞えず。知りやる通りの御身代、下立賣の居屋敷を町衆の加判で一昨年三十貫目の家質に入れたげな。それでも昔の株の家、物入續いてこの春父町へも隱し、内證で八貫目の質に入れたを前の銀方が聞付け、それとはなしにこの月の三日限りに家渡すか銀立つるか、返事次第に五日には目安上げると、足もとから鳥の立つやうに俄に町へ屆けたといの。いとしや父樣の家渡すも大事ない、目安つけるも構はぬが、家一軒を兩方へ質に入れたが顯れてはこの岐阜屋道順が一分か廢るとてほろほろ泣いてござるげな」と見えてゐる。「それとはなしに」とある詞に二重家質を内濟にする意が知れるが、心中重井筒には父親がお房を二重質にしたことを記して、「私が京の父樣よしない者の請に立ち、明日限りに銀立てねば私をやるとの判ぢやげな。私は爰へ身を賣つて先から連に來た時は二重賣二重判、牢舍は鏡にかけた事」と見えてゐる。大經師以春の家に姦通から起つた大悲劇も、お房・德兵衞の情死も、蓋しこの二重家質・二重賣がその一大原因をなしたものである。

以上は巢林子中に見える古代法の概略を記したに過ぎないが、なほ精細に調べれば面白く思はれるものが少くないのである。

箱葛籠長持、其外嫁入道具一式積重ね、不義人の諸道具返納と呼ばはり散して歸りけり」と見え、忠太兵衞夫婦これを受取つて愁歎に暮れる條に、「葛籠箪笥鋏箱引散し打砕き、海士の焚火と燃上り、……殘つたは長持一つ取分けて燃やと、聞く二人の孫娘姉妹抱合ひ泣きゐたり。祖父も祖母も夢心地、やれやれ危なや命冥加な孫どもや。若し火を付けたらよいものか。……虎次郎はなぜ越されぬ。娘を母に附けるは離別の作法」と見え、心中天の網島に、舅五左衞門によつておさん・治兵衞夫婦の緣を切られ、おさんが勘太郎・お末の二愛子を置いて去る條に、「生れて一夜も母が肌を放さぬもの、晩からは父樣と寢ねしやや。二人の子供が朝ぶさ前忘れず、必ず桑山飮ませて下され、なう悲しやといひ捨つる、跡に見捨つる子を捨つる、藪に夫婦の二股竹永き別れと」と見えてゐる。これは淺香市之進・おさゐのそれとは異り、舅五左衞門の怒によつて急遽におさん・治兵衞夫婦の離別を迫られたのであるから、おさんの嫁入道具に封付けた儘、二人の子も夫の許に其儘置去りて、これが處置に就いては未了である。

當時は聟養子でも入嫁でも假令夫妻仲が好くても、舅から離緣を申渡されれば遂に之を拒むことが出來なかつた。また夫婦仲が惡くても、夫からは去狀も書かず、舅からも離緣を迫らなかつたならば、妻から夫を離緣するわけに行かないのであるから、こんな場合はどうしたらよいのか、これに就ては不十分ながらも生玉心中におきはの詞に、「エエ情ない嘉平次樣。いやなもの私が無理に添はうといふにこそ。お前の心が不定で外を家になさるる故、親仁樣の御苦勞一つ屋の家を立ちませぬ。心さへ据つて家を踏へる覺悟なら、おさが樣を呼入れてとかくお身の立つやうに。わしや在所へ戻つて尼になりともなりまする」、とあるやうに夫の所を遁れて尼になるか、さもなければ面白うない夫婦關係を續けるより他に取るべき道は無かつたのである。

（六）手附に就いて

手附とは多くの場合に、契約を保證するに契約高の幾分かの内金を先拂ふことである。心中重井筒に、「南の兄御の方に、廓から出た好い奉公人を抱へて、手附銀が遣りたい」とある手附銀は、奉公人を雇入れる契約の手附銀である。心中刃は氷の朔日に、「先度手附に一貫文渡し、今三兩三分相場は金六十目、錢十五匁合二百四十目、仕かけの代に引がない、此方の方にはこれが得。ちよつと一筆請取して出來た分下され」と見え、「手附取つて手形して、渡す段に變改して職人が立ちますか樣子があらばあるまで」、と見えてゐる手附は雪踏の裏金の手附金である。手附の效力は契約を確實にする爲であつて、手附を取りながら契約を違背するはその人の信用を甚しく損ずるのである。手附を取つた以上は契約物に對してその所有者の自由處分權を制限するものであるが故に、手附には日限があつて、その日限までに手附出金者が契約を履行せねば、契約は解除されたものとして手附金は流れるのである。心中天の網島に、「それとても何とせん、半金も手附を打ち繫留めて見るばかり。小春が命は新銀七百五十匁皆まさねばこの世に止むる事ならず」と見えてゐる。これは小春を請出す新銀七百五十匁の才覺が出來ぬ限りは、今よしや半金も手附を打つて小春請出の契約を確實に保證したところで、それは契約の日限まで繫留めるに效力あるまでのことで、日限を過ぎれば契約解除となつて手附損をするばかりで、詮方なきを歎いたのである。

（七）添狀に就いて

添狀とは爲替の添手形のことで、卽ち爲替證書または爲替證文である。冥途の飛脚に、「江戸若旦那より御狀が來た。これお聞きやれと押開き、來月二日出の三度に金子三百兩差上せ申すべく候。九日十日兩日の中その地龜屋忠兵衞方より右三百兩請取り、內內申置候事ども埒明け申さるべく候。則ち飛脚の請取證文この度上せ候間、金子請取次第この證文忠兵衞に渡し申さるべく候。これこの通り仰下された」と見え、「中の島丹波屋八右衞門から來ました。江戸小舟町米問屋の爲替銀、添狀は屆いたが銀はなぜ屆きませぬ。この中文を進じても返事もござらず、使を遣れば酢の蒟蒻のと何時屆けさつしやるぞ。此者に渡して人を附けて下され、手形戻そと申さるる。サア金子請取らうと立はだかつて喚きける」と見えてゐる。「飛脚の請取證文」といひ「手形」といへるも添狀のことである。添狀には必ず受取人名宛の支拂約束か或は支拂委託の文言が記載してある。爲替金額の支拂はその添狀と引替に行はれるのであつて、これも冥途の飛脚に、「丹波屋の八右衞門請取るに仔細はないこれお袋、江戸爲替慥に受取りましたと、立つ所を妙閑誠と思ひてや、これ忠兵衞、仕切爲替の作法は金と手形と引替へ。若し御持參なきならば一筆ちよつと書かせましや。物は念ぢやと言ひければ」と見えてゐる。三度飛脚問屋は飛脚業者連帶責任の仲間組合を作り、その仲間の飛脚業者が添狀に對して支拂をなさぬ時は、仲間組合からこれが詮議を遂げて、その支拂をも仲間組合が負擔したものである。このことも冥途の飛脚に、「若し盜賊が切取か道からふつと出來心、萬萬貫目取られても十八軒の飛脚宿から辨へ、芥子程も御損かけませぬお氣遣あられな」と見え、「親父の代からこの家に金一匁の催促得ず、終に仲間へ難儀をかけず、十八軒の飛脚屋の鑑といはれたこの龜屋」と見え、「今の小判は堂島のお屋敷の急用金、この金を散しては身の大事は知れた事。隨分堪へて見つれども、友女郎の眞中で可愛い男が恥辱を取り、そなたの心の無念さを晴し度いと思ふより、ふつと金に手をかけてもう引かれぬは男の役、かうなる因果と思うてたも。八右衞門が面付直に母にぬかす顏。十八軒の仲間から詮議に來るは今の事。地獄の上の一足飛、飛んでたもやとばかりにて縋附いて泣きければ」と見え、「畿內近國に追手かかり、中にも大和は生國とて、十七軒の飛脚問屋或は順禮・古手買・節季候に化けて、家家を覗の機關・飴賣と、子供に飴をねぶらせて口をむしるや罠の鳥、網代の魚の如くにて遁れがたなき命なり」と見えてゐる。

（八）家質及二重家質附二重賣

家質とは家屋敷の抵當證文を入れて金を借ることであつて、その約定期限までに借用金とこれに契約の利息を加算して返濟すればよいのである。若し返濟しない時はその家屋敷は質流れとなつて、その占有と所有權は貸主に移るのである。心中重井筒に、「紺屋の德兵衞

は只の下女の給分の倍額である。

冥途飛脚（正德元年三月上演）に、「手金(てがね)とては家屋敷家財かけて十五貫目、二十貫目に足らぬ身代」。

金一兩に銀五十六匁替として、銀十五貫目は金二百六十八兩弱、銀二十貫目は金三百五十七兩强である。

同書に、「八右衞門水入取上げ、これも買はば十八文、如何に相場が安いとて五十兩を二分五厘替、神武以來ない事」。

この文に據れば錢十八文と銀二分五厘とは等しいのであるから、金一兩は銀五十六匁弱替であらねばならぬ。（蓋し金は元祿金、銀は元祿銀のことである）。

長町女腹切（正德二年秋上演）に、「寶買高いこの節二貫目近い二十兩」。

四寶銀は惡質であるから乾字金一兩に銀八十匁替と見て、金二十兩は四寶銀一貫六百匁に當るが故に、「二貫目近い二十兩」といふたのである。「寶買高い」といふ詞は心中天網島・中卷にも、「寶買高い世の中でも金とたはけは澤山なと色色の評判」とありて、四寶銀の惡質下落より金の騰貴したことをいうたのである。享保五年頃は四寶銀は新銀（享保銀）と共に通用してゐた。

同書に、「三百貫の折紙代一倍增し、二百十兩に買求め」。

刀劍鑑定書の額面（折紙代）錢三百貫文の倍增六百貫文が金二百十兩に當るといふのだから、金一兩は錢三貫文弱替である。即ち正德二年頃流行した乾字金はこの相場であつた。

博多小女郎波枕（享保三年上演）に、「狩野(かの)の三幅對、表具ばかりも百貫に編笠提灯」。

享保金一兩に錢四貫文替と見て、百貫は新金二十五兩に當る。即ち三幅對の表具代だけでも新金二十五兩を要したといふに、釣合はぬ譬にいふ諺、「百貫の質(かた)に編笠一蓋」「提灯に吊鐘」の語句を應用した文である。（この諺は俚言集覽にも見えてゐる）。

心中天網島（享保五年十二月上演）に、「問屋の仕切にさへ追はるる商賣、十貫目近い銀出して請出すの根引のとは蟷螂が斧でござる」。

享保小判金一兩に新銀（享保銀）五十匁七分替と見て、銀十貫目は金百九十七兩餘に當る。

同書に、「小春が命は新銀七百五十匁呑まさねば此世にとどむる事ならず、今の治兵衞が四つ三貫匁の才覺打みしやいでも何處から出る」。

享保小判金一兩に新銀（享保銀）五十匁七分替と見て、新銀七百五十匁は金十四兩三分餘に當る。また新銀は四寶銀の四倍の價値あるにより、新銀七百五十匁は四寶銀（即ち四つ）三貫目に當る。

女殺地獄（享保六年刊）に、「秩より重く茶の錢の八九文、四分に重く五分には輕々しげ」。

新銀（享保銀）は良質なるにより五十匁餘に錢四貫文替の價値あれども、四寶銀は惡質なるにより新銀の四分の一程しか價値がないのであるから、錢の八九文は四寶銀に換算して、四分には重く五分には輕々しげといふたのである。

同書に、「新銀五百八十目、財布の錢も戸棚へ入れて錠卸しや」。

享保小判金一兩に新銀（享保銀）五十匁七分替と見て、新銀五百八十目は金十一兩及び新銀二十二匁三分に當る。新銀は良質なるにより、近松はこの事を後文に「戸棚にひつたり引出す打飼袋、上銀五百八十匁宵に聞いたる心あて」と書いてゐる。

（ロ）物價

堀川波鼓（寶永四年刊）に、「子墮藥一服七分」。

心中刃氷朔日（寶永六年刊）に、「紺繻子の女子帶五十六匁、緋縮緬八尺三十五匁」。「提燈が出來ました。二つて四匁四分ぢや」。

百合若大臣野守鏡（寶永七年刊）第二に「駕籠賃は行基から山田まで錢股ぢや」とある。即ち道程約五里の駕籠賃は二百文である。「ぜにまた」（二〇三頁）、「やまだ」（六三三頁）を參照せよ。

冥途飛脚（正德元年刊）に、「燒物の鬢水入の價十八文」。

吉野都女楠（正德元年刊）に、「女が日がな一日たま綿くつて、錢二十取るや取らぬもの」。「丹後鰆の一番三十八文」。「又五郎は一日が百づつの輕い命」。

大織冠（正德元年刊）に、「繪草紙上下にて六文、一冊にて三文」。

持統天皇歌軍法（正德五年刊）に、「杉原紙一束十二匁」。

心中天網島（享保五年刊）に、「鳶八丈、京縮緬のあすは無い夫の命白茶裏、娘のお末が兩面の紅絹(もみ)の小袖に身をこがす、これをまげては勘太郎が手も綿も無い袖無しの、羽織も交ぜて郡内の始末して着ぬ淺黃裏、黑羽二重の一ちやうら定紋丸に蔦の葉の、退きも退かれもせぬ中は内裸でも外錦、男飾りの小袖までさらへて物數十五種、内端に取つて新銀三百五十匁よもや貸さぬといふことはない」。

以上絹布の古着十五種を入質して借りられる見積高は享保銀三百五十匁、即ち金僅七兩弱である。以上これらの記事によつてその當時の物價をほぼ知られる。

貞享―享保に於ける金・銀・錢貨相場、米價、物價の大勢略表

年號	金銀錢	物價	出典
貞享元年	慶長金銀錢通用	米一石代 銀四〇匁	大阪市史
元祿四年		同 銀四一―五三匁三	同
同六年		同 銀五二―六〇匁	同
同七年		同 銀六五―六九匁三	同
同八年	元祿金銀貨鑄造、通用	同 銀七〇―八〇匁	同
同九年		同 銀一〇五匁	同
同一〇年		同 銀八五―九〇匁	同
同一三年	金一兩＝銀六十匁替＝錢四貫文替		月堂見聞集等
同一四年	金一兩＝銀五十八匁替＝錢三貫九百文替		江源記錄
		米一石代 銀八〇―九三匁	大阪市史

元祿―享保年間の私經濟　金銀貨相場、物價等及附錄

自元祿至享保金貨概表

鑄造年	種類		名稱
元祿八年	大判金 値十兩 重量四四匁一分	小判金 値一兩 重量四匁八分	元祿金
寶永七年	小判金 値一兩 重量二匁四	一分判金 重量六分以上	乾字金
正德四年	小判金 値一兩 重量四匁七分六	一分判金 重量一匁一分九	武藏金
享保元年	小判金 値一兩 重量四匁八分	一分判金 重量一匁二分以上	享保金

自元祿至享保銀貨概表

鑄造年月	種類		一〇〇分中銀銅含量	名稱
元祿八年八月	丁銀 重量三四匁六分	粒銀 重量六匁三分	銀六四分 銅三六分	元祿銀又は元字銀
寶永三年六月	丁銀 重量三九匁	粒銀 重量三匁二分以上	銀五〇分 銅五〇分	寶字銀又は二寶銀
寶永七年三月	丁銀 重量四七匁八分	粒銀 重量二匁八分	銀四〇分 銅六〇分	永字銀又は中銀
寶永七年四月	丁銀 重量三二匁八分	粒銀 重量七匁五分	銀三二分 銅六八分	三寶銀
正德元年二月	丁銀 重量四一匁	粒銀 重量四匁二分	銀二〇分 銅八〇分	四寶銀
正德四年五月	丁銀 重量三七匁三分	粒銀 重量三匁五分	銀八〇分 銅二〇分	享保銀

(イ)金銀貨相場

元祿―享保年間には歷金銀貨の改鑄があつた爲、其種類多くして錯綜してゐる上に、時時價格の上にも變動があるので、從つて其時代を通じて精細に換算して、物價を知ることは容易なわざでない。

一兩の四分の一が分であり、また一貫目は千匁である。(金一兩の現今相場約二十圓)

概して金一兩は銀六十匁替であれども、銀貨の質によつて相場に高低がある。即ち元祿以前は金一兩に錢で四貫文、銀で五十匁替。元祿十三年十一月頃には金一兩に錢で四貫文、銀で六十匁替。寶永二年十一月頃には金一兩に銀五十八匁替の定であつた。

四寶銀は其質惡いによつて乾字金一兩に銀八十匁替である。享保銀は其質良くして四寶銀の四倍の價値があり、享保小判金一兩は新銀(享保銀)五十匁七分替であつた。

巢林子作中に見える物に就いての換算の例

心中重井筒(寶永五年春上演)に、「三貫目や五十兩は貸してやつて下さいやせと」。

金一兩に銀六十匁替として、銀三貫目は金五十兩に當る。

同書に、「丁銀四百目包の通り吟味なされと」。

丁銀四百目は金貨に換算して六兩餘。

丹波與作(寶永五年上演)に、「十六貫何で濟す合點ぢや、抵當も無うてはいやぢやといふ。此方も引かれぬいひかかり、是此馬を知つたか、池鯉鮒の市で九兩一分、親方の物なれど、十六貫の代りに五百目の馬ならしてこい」。

金一兩に錢四貫文替として、錢十六貫文は金四兩に當る。またこの後の文に「相場は十三もんめん巾着云云」とあるより見て、金一兩に銀五十二匁替として、銀五百目は九兩餘に當る。

同書に、「ここに百三十匁、命がはりの金なれども男の爲ぢや惜しうない、是で濟して下されと取出すをひつたくり、必ず跡も濟せよ、錢の値段はどうせうぞ。ハアテそこらは構はぬ、そなたの勝手にしてたも。そんならこれで拾貫分、相場は十三もんめん巾着捻込んでこそ歸りける」。

銀十三匁に錢一貫文替といふのであるから、錢四貫文は銀五十二匁替であり金一兩に當る。銀百三十匁は金二兩半であり錢十貫文に當る。

心中萬年草(寶永五年四月上演)に、「年年の殘銀九貫五百匁、百六十兩で帳消して」。

銀の相場は金一兩に銀五十九匁三七五よりも少額のものであることが知れる。

心中刃は氷の朔日(寶永六年夏上演)に、「先度手付に一貫文わたし、今三兩三分、相場は金六十目、錢十五匁、合二百四十匁」。

(金といひ錢といひ、いづれも銀のこと)。

金一兩は四分であり、錢で四貫文替、そして銀六十目替とあり、既に一貫文(即ち金で一分)は手付に渡し、殘額三兩三分は銀相場に換算して、$60\times3\frac{3}{4}=225$ 即ち二百二十五匁であり、これに十五匁を加へて二百四十匁となる。されば雪駄の裏鐵代金は四兩一分であつて、手付金一分を引去つた二百四十匁は四兩の拂である。

今宮心中(寶永七年一月上演)上卷に、「二百目近い給分を只の女子にかこうか」。

「かこうか」は「かからうか」で「掛けようか」の訛。金一兩に銀六十匁替として、銀二百目は三兩と銀二十匁に當る。下女きさは裁縫が上手であるから年額二百目近い給分を取らすれども、只の下女にはかく高い給銀は掛けないとの意。

武士方の這出の奴奉公の一人扶持米二合半(銀に換算して一年給額五十四匁)、又は下部の一人扶持米五合に比して二百目は頗る高額である。また好色萬寶節用集に「町方の下女奉公、半季に纔四十匁か漸う五十匁取銀で」とあるから、きさの二百目近い給分

附錄として遊女遊客に關するものを次に集める。

（い）遊女に身賣りする價額

大阪堂島新地中町平野屋の遊女こかんは、堀江の茶屋に三年を十二兩で身賣して鞍替したもの（心中刄氷朔日）

淀鯉出世瀧德に、大阪新町遊廓茨木屋の太夫であつた吾妻が奈良木辻遊廓に身を賣ること を叙して、「中年四年二百兩命がらりに身を賣りて」とある。また長町女腹切に、京都四條石垣町遊廓井筒屋の遊女お花の年切增を叙して、「がらり二十兩ま一年切り增し」とある。「がらり」とは、身賣り金全額を前渡しすることの意。

（ろ）遊女の身請け金額

大阪堂島新地中町平野屋の遊女こかんは六兩（心中刄氷朔日）

大阪新町槌屋の見世女郎梅川は百六十兩（冥途飛脚）

大阪堂島新地藤屋の大夫吾妻は三百兩（壽門松）

博多柳町奥田屋の大夫小女郎と他に遊女六名を加へて總額千四百五十兩（博多小女郎波枕）

大阪曾根崎紀の國屋の遊女小春の身請け金額を太兵衛はおほげさに十貫目近いと言うてゐれども、治兵衛の言の半金の手附新銀七百五十匁と見て、四貫銀六貫匁は金十四兩三分餘（七一九頁を見よ）の倍額（心中天網島）尤も請出すとなれば別に祝儀など多額の費用を要する。「みうけ」（三三五頁）を見よ。

（は）情死者の動產

大阪萬年町紺屋德兵衛は丁銀四百目金貨で六兩餘の才覺に窮し、六軒町井筒屋の遊女お房と情死した（心中重井筒）

大阪備後町鍛冶職大文字屋の弟子平兵衛は、堂島新地平野屋の遊女こかんの身請に關する四兩二分の調進に窮して情死した（心中刄氷朔日）

大阪天滿宮前町紙屋治兵衛の動產は、新銀四百目（四貫銀で四四の一貫六百匁）と、古着類の見積賣價新銀三百五十匁（四貫銀で一貫四百匁）で、それ以上餘り多くはなかつた（心中天網島）

（序に、冥途飛脚にある忠兵衛は情死者ではないが、この者の財產は八右衛門の言に、「手金とては家屋敷家財かけて十五貫目、二十貫目に足らぬ身代」とある。金一兩に銀五十六匁替として忠兵衛の財產は、三百五十七兩に足らぬものである）。

（に）遊興費

辻君を買ふ價額は十文（五十年忌歌念佛）。端女郎を買ふ價額は三匁（心中二枚繪草紙）

（備考）好色貝合（貞享四年刊）に、「抑端に品品あり、三匁、二匁、一匁なり、京に三匁どりはなし」。諸國遊里好色由來揃（元祿年刊）京島原由來附名女揃の條に「太夫揚錢五十八匁、外に引舟とてきはまつて鹿戀女郎一人づつ連るる故、此代十八匁、合て七十六匁、正月買より年中の物日の入目を考ては又高き物なり、天神上せん三十匁、鹿戀あげせん十八匁、つぼね女郎二匁或は一匁、是化契なり、端茶屋に揚れば常は十一匁、物日は是に四匁の增、局あそびは六匁、それより下つかたは五分をかぎり、世に此道ほど甲乙のある物はあらじ、太夫に耳あれば夜發に目もあり、手あれば足あり、一つもかはる所あらねど、位は七十六匁と二分五リン、以爲はいづれもおなじかるべし、よくよく分別してふかいりせぬが粹なるべし」、と見え、また澪標（寶曆七年刊）に新町遊女の價諸分の條に、「太夫六十九匁、天神四十五匁、此二位の女郎あげや計へ出、茶屋へは行ず、小天神三十三匁、右小天神半夜賣といふ時は、朝より午時まで十五匁、午時より暮まで十五匁、暮より亥刻仕舞かぎり太鼓迄二十二匁、見世天神二十七匁、鹿子位二十四匁」と見えてゐる。

同一五年		米一石代　銀一〇〇—一一〇匁	大阪市史
同一六年		同　銀九二—九三匁	同
寶永元年		同　銀四五—五〇匁	同
同　二年	金一兩=銀五十八匁替	同　銀四一匁	同
同　三年	寶字銀鑄造	同　銀四五—五〇匁	同
同　四年	寶字銀通用	同　銀一二〇—一五〇匁	同
		子隨棄一服代七分	堀川波鼓
同　五年	金一兩=銀五十二匁替=錢四貫文替		丹波與作
		米一石代　銀七〇—八〇匁	大阪市史
同　六年	金一兩=銀六十匁替=錢四貫文替	紺繻子の女帯五十六匁。掛縮緬八尺三十五匁。提燈二個四匁四分。	心中刄氷朔日
		米一石代　銀六〇—七〇匁	大阪市史
同　七年	乾字金、永字銀、三寶銀鑄造	同　銀六七—八六匁	同
正德元年	四寶銀鑄造	同　銀六八、五—七三匁	同
		米九斗代金一兩(江戸表)	金銀談
	元祿金一兩に元祿銀五十六匁弱替	燒物の鬢水入の價十八文	冥途飛脚
		女が終日たま綿の繰賃約二十文。丹後鰤の一番價三十八文。又五郎の一日の勞働賃百文。	吉野都女楠
		繪草紙上下二冊六文、一冊は三文	大織冠
同　二年	乾字金一兩=四寶銀八十匁替=錢三貫文弱替		長町女腹切
		米一石代　銀八一、五—九〇匁	大阪市史
同　三年		同　銀一五五匁	同
同　四年	武藏金、享保銀鑄造。而して永字銀、三寶銀、四寶銀の通用普及す		
	慶長古金一兩は只今通用の金二兩に用ゆべし		大成令
		米一石代　銀二〇一、八匁	大阪市史
同　五年		同　銀二二〇—二三〇匁	同

享保元年	享保金鑄造	杉原紙一束代十二匁	持統天皇歌軍法
	金一兩=錢三貫文替		一話一言
同　二年	新金一兩に乾字金二兩替		泰平年表
		米一石代　銀一三〇—一五八匁八	大阪市史
同　三年	新銀(享保銀)通用	同　銀三三匁	同
同　四年		同　銀四二匁二	同
	四寶銀一貫目に新銀二百五十匁替(四寶銀と引替1/4に極り)		治國雜記
同　五年		米一石代　銀五三、八—六八匁二	大阪市史
	享保金一兩に新銀五十匁七分替		心中天網島
同　六年		米一石代　銀七〇—八〇匁	大阪市史
同　七年		同　銀四四—七二匁	同
同　八年		同　銀四一—四二匁	同
同　九年		同　銀四三匁	同
以上			

商人が得意先を掛乞(取掛)に歩く(卽ち掛の支拂日)は晦日、及び盆・節句の物際である。心中二枚繪草紙・中卷に、「掛は負うたれども、節季でもある事か、月ともない今日に限り、このやうにせがむのは」と見え、生玉心中・上卷に「扇風呂のさがともいはれた身が、晦日節季は前垂掛けで、裏屋脊戸屋けんどん屋三界掛取に歩くやうな勤するも」と見え、また同書・中卷に「晦日前物際は武士の虎口ぞい」とあるのも、取引決算の忙しい時なるをいうたのである。また女殺油地獄・下卷に「節季に寄らぬ金の過ぎて寄つた例はない、今日暮れてから渡さうと詞番うた、つい一走り往て來う」とあつて、手島屋七左衞門が掛金を集めに廻つたのも五月四日、物前卽ち節季である。

遊廓などでは二日を以て支拂日にきめてゐた。傾城反魂香・中卷に「正月しまへば節句朔日、今日は二日の拂日なり、……ほんにほんに物日なかに痩せたわいな」とある。(西鶴撰・日本永代藏卷三、高野山借錢塚の施主の條に「九軒(新町遊廓内の町名)の二日拂ひの用にも立ち、道頓堀の座拂ひのたよりともなる」と見えてゐる)。

次に下女下男の給金は如何程であつたか、これは巢林子の文中に參考になる材料がないが、享保初年頃の刊行と察せられる好色萬寶節用集に、「町方の下女奉公、半季に纔四十匁か漸う五十匁取銀で」とあるから、薄給のものであつたことが知れる。(七一八頁、今宮心中引證の文を參照せよ)

魴鮄。鮠（柳、鯈）。はかたわう。貘、白鷗。白象。はくたわう。鵠、箸鷹。鯊。機織蟲。蠑螈。蜂（土蜂、山蜂）。拔目鳥。鳩（白鳩、山鳩）。蠅。蛤。鮍。鰣。はやぶさ。腹赤。蟾蜍。茅蜩。翡翠。鶲。羊。燈蛾。雛鶴、雲雀。雲雀毛馬。姫貝。白狐。白象。白龍。鵯。氷魚。蛃。蜉蝣。鱶。生替雀。河豚（かとん、鯸鮧）。脹雀。梟（ふくろ）。豚。斑駒。佛法僧。鮒。鰤。豹。蛇（蟒蛇、大蛇、蝮、青蛇）。鵬鳥。孑孑蟲。鳳凰。車渠。螢。杜鵑（別都頓、宜寄）。眉畫鳥。老海鼠。鯔。螺貝。摩睺羅。猿（ましら）。斑犬。斑牛。松蟲。松雀。螟。三毛猫。獮猴。雎鳩（しよきう）。鷦鷯（さざい）。蛟。水鳥。簑蟲。蚯蚓。木兎。都鳥。海松食。蜈蚣。尨犬。椋鳥（大椋鳥、小椋鳥）。偃鼠（えんそ）。鼯。無常鳥。馬（うま）。室鰺。命命鳥。日黑。繡眼鳥。日高。鯧。

百舌鳥。諸子。野干。八聲鳥。柳鮠。藪蚊。山犬。山姥。山雀。山鴉。山鳥。山蜂。山鳩。やんま。ゆふつけどり。葭切（行行子、吉原雀）。夜鷹。淀鯉。呼子鳥。鎧蟲。羅刹。鸞。鸞鳥。栗鼠。龍（蛟龍、青龍、白龍、黃龍、龍王龍神の名は略した）。龍馬。麟。

翠雀（大瑠璃、小瑠璃）。連雀。連錢葦毛馬。驢。黃龍。若鷹。和犬。鷲。忘貝。鰐。われから。猪。ゐもり。鷾雀。鴛鴦（をしどり）。猿猴。牡犬。牡鹿。鴛鴦（ゑんあう）。雄蝶。尾花葦毛馬。

巣林子作中に見える植物

藜。茜草。赤松。あかりも。麻。牽牛花。槿花。淺黃櫻。朝日櫻。薊（鬼薊）。葦。あしな樹。小豆（大納言小豆）。梓。粟。樗。葵。甘蔓。甘海苔。菖蒲。荒布。有明櫻。阿梨樹枝。ありのみ。藍。青瓜。青山椒。青葛藟。青菜。青梨。青海苔。青柳。杏子。菴摩羅迦。毬栗。柞。伊勢櫻。虎杖。盆覆子。

無花果。櫟。銀杏（ぎんなん）。糸櫻。糸萩。犬櫻。稻（遲稻、米、中稻、早稻）。岩根。岩躑躅。岩梨。いはますげ。茨。伊吹木。芋（芋莖）。萍。浮藻。五加木。薄櫻。雲珠櫻。烏頭。靱草。獨活。優曇華。卯花。姥櫻。梅（むめ、好文木、紅梅、小梅、櫻梅、白梅、一重梅、豐後梅、八重梅）。梅擬。裏白。瓜（ふり、青瓜、白瓜、姫瓜、眞桑瓜）。

江戸櫻。榎。槐。鬼老松。翁草。遲稻。乙女櫻。鬼薊。山核桃。鬼醜草。鬼百合。澤瀉。萬年青。思草。海棠。柑子（かんじ）。楮。香附子。好文木。かがち。柿（木醂、祇園坊、御所柿、木練、西條柿、君遷子、澁柿、八王子、筆柿、熟柿）。杜若（顏佳、一花）。樫。柏。檞。莪朮。かたのり。かたばみ。かため。蒲黃。桂。葛草。樺櫻。川竹。川苣。檉。蕪。楓（紅葉、若楓）。顏佳花。蒲。冬瓜。榧。茅（刈萱、尾花、薄）。蚊屋吊草。辛子。芥子菜。烏麥（茶引草）。枳殼。唐桃。刈萱。寒菊。甘草。甘棠。寒竹。寒天。寒梅。岩菲。黃菊。桔梗。菊（翁草、寒菊、黃菊、白菊、骨牌菊、野菊、八重菊）。木耳。木醂。黍。伽羅木。桐（梧桐、唐桐）。霧島。祇園坊。金柑。金銀花。銀杏。金鳳花。蓮。樟。葛。山梔。香橙。桑。熊谷櫻。隈笹。胡頹子。栗（毬栗、小栗、柴栗）。胡桃（山胡桃）。吳竹。倶蓮陀花。慈姑。花櫚。

巣林子作中に見える動物

鸚鵡。赤貝。赤蛙。赤熊。赤螺。赤猫。惡魚。惡魔。惡龍。揚羽蝶。葦毛馬。鯵(室鰺)。惡鬼。阿防羅刹。鮑。家鴨。虻。雨蛙。天斑駒。黄牛。あめだ牛。鮎(汲鮎荒鮎)。蟻。青蛙。白駒。鮟鱇。斑鳩。鱊。石龜。鶍。伊勢海老。鼬。いたら貝。稻負鳥。蝗。犬(えのころ、狛犬、白犬、すいけん、唐犬、斑犬、尨犬、牝犬、和犬、牡犬)。芋蟲。刺蟲。鰯。魚。鸚哥鳥。鵜(島津鳥)。鶯(經讀鳥)。鼹鼠。兎(白兎)。牛(黄牛、あめだ牛、斑牛)。牛鬼。牛舌。蛆蟲。烏鵲。鷽。空背貝。空蟬。鶉。善知鳥。鰻(瀬田鰻)。獨角獸。蟒蛇。馬(葦毛馬、天斑駒、白駒、鹿毛馬、糟毛馬、川原毛馬、黄川原毛馬、栗毛馬、黑栗毛馬、駒、鍋月毛馬、白鵯毛馬、騅、月毛馬、土佐駒、雲雀毛馬、めかすげ馬、驄、尾花蘆毛馬)。馬追。蠵。えつさい。狗兒。海老(伊勢海老、しらさ海老、車海老)。偃鼠(むくらもち)。鐵漿蜻蛉。追川。

狼。大椋鳥。大瑠璃。大蛇。蚊(藪蚊)。鵝。鮫人。寄生蟲。蛟龍。牡蠣。餓鬼。鷽鳩。鹿毛馬、蜉蝣。烏鵲、蝸牛。樫鳥、黄鶏。糟毛馬。鹿、かつぼう鳥。松魚。蟹。河獺、蛙。蝙蝠。河伯。川原毛馬、貝(赤貝、赤螺、空背貝、櫻貝、螺、蠑螺、蜆、小蝶子、鹽貝、曝貝、朧貝、膳所貝、蛤、ほら貝、わすれ貝)。迦賓闍羅鳥、蛙(赤蛙、雨蛙、青蛙、かはづ、蝌、蝦蟇、どろがへる、ひきがへる)。蝌。蝦蟇。蟷螂。梭魚。龜(石龜、蓑龜)。鴨。鷗(白鷗)。烏(山烏)。唐猫。雁(かりがね)。迦陵頻迦。迦樓羅。鰈。寒苦鳥。閑子鳥。黄川原毛馬。雉子(きじ)。菊戴。鬼女。狐(野干)。行行子(葦切、吉原雀)。經讀鳥。切蛆。蟋蟀(こほろぎ)。麒麟(麟)。金魚。銀魚。緊那羅。孔雀。國栖魚。家鶏。蝮。鯨。轡蟲。水鶏。狗賓(天狗)。熊(赤熊、黒熊)。鵰。汲鮎。蜘蛛(ささがに、女郎蜘蛛)。海月。

栗毛馬。車海老。黒熊。黒栗毛馬、曠野虎。蝸牛。鯨。鯢。鼷鼠。鵙、蚰蜒、毛蟲。螻蛄。鯸鮧(河豚)。金亀子。小雀。黒鼠、獄卒、こけ猿。小國。五十雀。小雀。特牛。胡蝶。鰶。このり。胡馬、鯉(淀鯉)。戀教鳥。蟋蟀。駒。狛犬、駒鳥。鯷。小椋鳥。鮴、小瑠璃。五位鷺。金翅鳥。犍陟駒。象(白象、六牙白象)。鷺(五位鷺、白鷺)。櫻貝。櫻鯛。鮭。鶺鴒(みそさんざい、斥鷃)。榮螺。篠蟹。さしば。鯖。荒鮎。錆月毛馬。鮫。猿(猨、猩獼猴、猿猴)、鄉螺。小牡鹿。鯑。鹿(小牡鹿、すがる、牝鹿、牡鹿)。土蜂、鷸。獅子。四十雀。蜆、小螺子。死出田長。十二雀。鹽貝。島津鳥。蛇、青蛇。猩猩。青龍。麝香猫。赤熊。鷓鴣。鯱。暹羅。曝貝、しらさ海老。白鷺。白犬。白兎。白鴾毛馬、白鼠。白鳩、眞珠貝。すいけん。蠃。介黨鱈。鱸。鈴蟲。

雀(小雀、ふくら雀)。簾貝。鼈。鯣。精衞。せう。斥鷃。鶺鴒(戀教鳥、庭來鳴鳥、庭叩鳥)。尺蠖。膳所貝。瀬田鰻。蟬(空蟬)。玳瑁。唐犬。唐丸。蟷螂。鷹(えつさい、鶻、このり、さしば、せう、つみ、朝鮮鷹、箸鷹、はやぶさ、若鷹)。たから蟲。蛸。龍。田鶴。鱮。狸。鯛(櫻鯛)。玉蟲。鱈(介黨鱈)。千鳥。矮鶏。女郎蜘蛛。鴆。月毛馬。鶫。土蜘蛛。燕(つばくら)。妻戀鳥。つみ。鶴(田鶴、雛鶴)。朝鮮鷹。蝶(揚羽蝶、雌蝶、雄蝶)。貂。天狗。天馬。蜥蜴。蠹魚。常節。土佐駒。老來。泥鰌。嫁教鳥。駑馬、鳶(とんび)。飛魚。虎(曠野虎)。泥蛙。どんぼ。蜻蛉(海蜻蛉、鐵漿蜻蛉、やんま)、鯰。名吉。庭來鳴鳥。鶺鴒。庭叩鳥、鶏(かしは、くだかけ、小國、暹雞、唐丸、ちやぼ、八聲鳥、ゆふつけどり)。螺。鳰。人魚。鵺、鵺子鳥。繫螽。猫(赤猫、唐猫、麝香猫、三毛猫)。猫また。鼠(鼹鼠、白鼠、栗鼠、野鼠)。野鼠。蚤。

枝垂柳)。八重菊。八重櫻。八重梅。山櫻。山空木。山葛。山草。商陸。山芋。山吹。山松。柚子。櫻桃。楪。夕顔。百合(鬼百合、小百合、姫百合)。葭。嫁菜。蓬。鎧草。蘭(紫蘭、女蘭、男蘭)。龍眼肉。林檎。龍膽。

靈芝。蓮華。蓮根。若布。山葵。萱草。忘草。早稻。棉。蕨(早蕨)。吾木香。牛膝。女萎。蘞芋。烏帽子櫻。荻(寢覺草、濱荻)。小笹。尾花。男松。女郎花。男蘭。折見草。

巣林子作中に見える鑛物

銅(どう)。天川珊瑚珠。青梅石。砂礫。石(青梅石、砂礫、岩、巖、燕石、鞍馬火打石、栗石、崑崙石、白川石、砂、大磐石、野面石、馬肝石、盤石、眞砂、御影石、小田原石)。岩。巖。硫黄。燕石。閻浮檀金。金(閻浮檀金、黄金、紫金、紫磨黄金、砂金)。銀(しろかね)。鞍馬火打石。栗石。鐵(こつ、南蠻鐵、鑌)。黄金(わうごん)。琥珀。胡粉。紺瑠璃。崑崙石。珊瑚(天川珊瑚珠)。紫金。紫磨黄金。淨玻璃。砂金。硨磲。朱。白川石。白銀。眞珠。砂。水晶(淨玻璃、玻璃)。地澀。大磐石。土。泥。鉛。南蠻鐵。野面石。鋼。馬肝石。玻璃。磐石。眞砂。御影石。瑪瑙。琅玕。瑠璃(紺瑠璃)。小田原石。

その他に貝殼、骨、灰などの動植物からきたものもある。

巣林子作中に見える色彩

赤(せき)。茜。朱(しゆ)。淺黄。淺葱。淺黑。淺緑。淺紫。小豆色。綾藍。青(眞青)。煮海老。鶯茶。鬱金。薄淺葱。薄柑子。薄柿。薄紅(うすべに)。薄紅梅。薄紫。うつぶし色。卯花染。卯花を黄に返す。臙脂。朧染。朧花色。織色。柿(薄柿、濃柿、火照柿)。褐(かついろ)。鹿子斑。樺。樺茶。韓紅。黄。黄鬱金。黄枯茶。枯梗染。麴塵(きぢん)。狐色。黄粉色。黄蘗。黄紫紺。雲母。禁色。金紋紗。絞染(しぼり)。山梔。朽葉。桑色。栗色。紅(韓紅、濃紅、眞紅、べに、もみ)。紅末濃。黑。黑茶。黄纐纈。花田。憲法染(吉岡染)。濃柿。濃紅。濃茶。濃鼠。紅梅。五色。御所染。琥珀。胡粉。郡山染。濃紫。紺。金色。紺青。紺瑠璃。櫻色。紫金色。絞。猩猩緋。赤熊、朱。白茶。白。眞紅。煤竹。蘇枋色。墨。青黄。宗傳茶。底赤光。空色。卵色。丹。膽礬色。茶。橡。木賊色。礪茶。鳶。中黑。鈍色。鼠色。練色。鐵漿。縹色。花紫。黄櫨。緋。鶸鹿子。鶸櫻。檜皮色。深緑。二藍。藤色。藤鼠。碧。紅。紅鬱金。紅鹿子。火照柿。本紫。眞青。水淺葱。水色。緑(深緑、若緑)。海松茶。村濃。紫(濃紫、若紫)。紫鹿子。紫裾濃。萌黄。萌黄裾濃。萌黄匂。木蘭色。紅。紅葉色。桃色。ひやうもん。やなぎ、柳煤竹。山藍。山鳩色。山吹色。雪色。吉岡染。瑠璃。緑青。若緑。若紫。女郎花。

その他に馬の毛色などもある。

桂木。荊棘。桂仙花。鶏頭。紫雲英。瞿栗。欅。玄圃梨。紅梅。小梅。五葉松。鼠麹草。小栗。苔(こけ)。牛膝(ゐのこづち)。御所柿。御所櫻。小菅。胡椒。小雪團。梧桐。木練。兒手柏。牛蒡(ごんぼ)。小萩。戀草。辛夷。胡麻。駒繋。米。米櫻。蒟蒻。昆布(こぶ)。西行櫻。虎杖。西條柿。榊。逆手櫻。相良布。三枝。櫻(淺黄櫻、朝日櫻、有明櫻、伊勢櫻、絲櫻、犬櫻、薄櫻、雲珠櫻、姥櫻、江戸櫻、乙女櫻、樺櫻、熊谷櫻、御所櫻、米櫻、西行櫻、逆手櫻、枝垂櫻、鹽釜櫻、泰山府君、瀧櫻、兒櫻、手毬櫻、虎尾櫻、彼岸櫻、掛櫻、一重櫻、弱櫻、普賢象櫻、楊貴妃櫻、八重櫻、山櫻、烏帽子櫻)。櫻桃。柘榴。笹(隈笹、根笹、姫笹、小笹)。杭子。大角豆(十八大角豆)。莎草。杜鵑花。早苗。五味子。澤桔梗。小百合。猿腰掛(猿木、蹈)。早蕨。山椒(青山椒)。樒。齒朶(穗長、山草)。枝垂櫻。枝垂柳。紫檀。紫竹。君遷子。篠(篠竹、長間竹)。忍草。長間竹。芝。柴栗。柴椎(椎柴)。椎。椎茸。死人花。澁柿。十八大角豆。鹽釜櫻。玉章。繡線花。生薑(はじかみ)。商那。菖蒲。蝴蝶花。

赤栴檀。石南花。芍藥。沙羅双樹。熟柿。椶櫚。蓴菜。松露。白菊。白菅。白萩。紫蘭。白瓜。紫苑(鬼醜草)。菅(すげ)。杉。杉菜。薄。蘿蔔(大根、土大根)。菘。蘇芳。相撲取草。菫(相撲取草、菫菜、力草)。すもの草。杏。西瓜。水仙。末摘花(紅花)。芹(根芹、深芹)。川芎。栴檀(赤栴檀、白栴檀)。曾我菊。蕎麥。大根。泰山府君。大納言小豆。唐辛。當歸。唐桐。筍。瀧櫻。竹(川竹、寒竹、呉竹、紫竹、しの竹、長間竹、淡竹、二股竹、若竹)。橘。蓼。烟草(忘草、服部烟草、松葉烟草、吉野烟草)。玉柏。多羅樹。蒲公英。茅。力草。兒櫻。茶。丁子。長春。茶引草。地黄。沈丁花。月草。月見草。土筆。江浦草。黄楊。蔦葛。土大根。躑躅(岩躑躅、霧島)。鼓草。椿。茅花。壺菫。露草。蔓葡萄。定家葛。朝鮮人參。鐵線花。手手打栗。雪團(小雪團)。手毬櫻。

籐。燈心草。燈臺草。時見草。木賊。常夏(瞿麥)。葛藷。石花菜。鶏冠菜。橡。虎尾櫻。中稲。椰。梨(ありのみ、青梨)。茄子(なすび、なす)。菜種。鉈豆。蕪。棗。瞿麥。奈乃利曾。弱竹。楢(柴楢)。瓠瓜。南天。錦木。肉桂。庭櫻。韮。人參(朝鮮人參)。胡蘿蔔。大蒜。白膠木。根笹。寢覺草。鼠尾花。根芹。葱(ひともじ)。野菊。海苔。防風。萩(絲萩、小萩、白萩、眞萩、宮城野萩)。柏。白梅。麥門冬。蘩蔞。黄櫨。生薑。榛。淡竹。蓮(はす、芙蓉)。八王子。芭蕉。二十日草。初茸。初見草。蒲黄。盧橘。花柚。ははき木。母子草。濱荻。波羅密華。半夏。三白草。反魂樹。斑枝花。射干。稗。蘿葛。彼岸櫻。緋櫻。瓢。菱。鹿尾菜藻。美人草。一重櫻。一文字。美男草。檜。檜葉。枇杷。柊(ひらぎ)。姫瓜。姫笹。姫百合。白朮。柏槙。白梅檀。白檀。雛櫻。頻婆果。檳榔。深芹。深見草。蕗(蕗、姑)。茯苓。普賢象櫻。葡萄(蘡薁、葡萄)。二股竹。藤。藤袴。富貴草。筆柿。芙蓉。瓜。豐後梅。分陀利花。瓢。絲瓜。紅茸。紅花。鳳仙花。菩提樹。牡丹(二十日草、深見草、富貴草)。佛座。佛手。穗長。酸漿(かがち)。神馬藻。摩訶分陀利花。摩訶曼陀羅華。槇。林。眞桑瓜。眞菰。柾。正木蔓。松(赤松、老松、翁草、五葉松、時見草、女松、山松、若松、男松)。松茸。馬手葉椎。眞萩。榲桲。曼珠沙花。萬年草。蜜柑。溝萩。水菜。水蕗。宮城野萩。海松(海松布)。無憂樹。麥。椋。槿(あさがほ)。葎。木欒子。梅。榁。茗荷。女松。女蘭。藻(浮藻)。木芙蓉。木香。木斛。物見草。樅。紅葉。桃。楊貴妃櫻。楊梅。藥王木。柳(青柳、川柳、

巣林子の略歴と著作

其一、略　歴

姓を杉盛、名を信盛、通稱を平馬といひ、巣林子、不移山人、散人不移子、または平安堂と號し、作者名を近松門左衞門といふ。承應二年に生れた。出生地は古來諸說あつて詳でない。竹豐故事には京都といひ、淨瑠璃譜には、出生は近江國高觀音近松御坊にて、出家をきらひ京都に落したといひ、南水漫遊、嬉遊笑覽、橘庵漫筆、卯花園漫錄、蓑笠雨談には、越前又は北越の產とし、一說に三州ともいふと見え、戲財錄には、唐津の近松寺に遊學し、衆生化度の爲大悟還俗したといふ說が議つて居り、これから推測して唐津の生れといひ、或は唐津の近松寺で修行したものだともいひ、大田南畝の平安堂近松翁墓碣の文稿に、按翁本姓杉盛、諱信盛、字平馬、長門萩人と見え、聲曲類纂にも萩の生れといひ、增補和漢書畫一覽には、出雲國大原郡近松村の生れといひ、戲曲小說通志には、周防國山口の生れといひ、其他長門國大津郡深川村の產といひ、或は淀藩士の杉森家より出たものといひ、これ等の諸說何れも的確の證據なく、推測に過ぎぬ。私の考では、巣林子の全作品を通じて生粹な上方言葉が巧妙に運用され、上方氣質がありありとしてゐるので、近松は幼少より上方に育ち、竹豐故事にいへる如く、京都若しくは其の地方の產であると思ふ。家柄に就いては、彼が生前に書いたといふ辭世の文が傳はつてゐて、その中に「代代甲冑の家に生れながら武林を離れ」と見え、その辭世の文とても別種のものもあつて、さて近松が眞にこれを書置にしたであらうか、疑はれないでもないが、近松の作品を通じて、武士の精神が濃やかに表現されてゐるから、なるほど武士の家庭に育つたのであらうと首肯されないでもない。十九歲の頃、「しら雲やはなき山の恥かくし」の句を詠んで、山岡元鄰編の寶藏追加に載り、二十四歲の頃、正親町從一位に仕へたといひ、或は阿野家の雜掌であつたともいふ。戲曲に筆をそめたのもこの頃である。二十五歲の時は、都萬太夫座の爲に、藤壺の怨靈が藤の花から大蛇に變ずる趣向を凝して喝采を博し、三十四歲の時から竹本義太夫と提携し、義太夫の旗揚を祝して出世景清を作り、寶永六年(五十七歲)霜月名優坂田藤十郞の死より歌舞伎との緣薄くなり、享保九年霜月七十二歲で歿した。墓碑は攝津河邊郡久久智村廣濟寺と大阪谷町法妙寺と肥前唐津近松寺とにあつて、法名を阿耨院穆矣日一具足居士といふ。子あり多門といふ。要するに近松は陋巷にあつて、貧賤にも心を煩はさず、淨瑠璃作者として刻苦練磨五十年間、その樂しみを改めなかつたといふの外、その傳は今なほ模糊として疑問多きを遺憾とする。嗚呼この文豪や、襟度常に寬平で、天下自ら險側の人情なく、十惡を犯す罪の子にも人性の善をほのめかして、慈悲の眼に萬斛の涙を灑ぎ、淪落な女にも情愛の極美を發して、運命の拙きに泣く、彼が道德觀によつて美化され詩化される、その學識は國學儒佛萬卷の書に亘つて渾然融和し、その靈腕は國語の運用を極度に發揮し、俗耳に入り易うする爲には猥雜な詞をも忌まず、衆生と共に活き共に住んで、淸濁併せ呑むの雅懷を示し、分段同居の塵に交つて、人生の行路は至善と大悟に止まるを暗示するものの如く、吾人の琴線に觸れて、生命に共鳴し共感し歡喜する。偉なるかな巣林子や。人は死し時は過ぎ世は歷ても、彼の命毛長へに、不朽の生命を宿して不變の唄に、泡影の世から超越して、美の極致に誘ふのである。

其二、巣林子著作目次

	淨瑠璃 及歌舞伎狂言	刊年又は初上演年月
1	瀧口橫笛	延寶四年十一月
2	花山院后諍	延寶五年？
3	念佛往生記	延寶六年？
4	赤染衞門榮花物語　後年修訂して*大原問答青葉笛と改題す	延寶八年一月
5	鳥羽戀塚物語　元祿十一年修訂して一心五戒魂と改題す	天和元年以前
6	徒然草	天和元年以前
7	東山殿子日遊	天和元年一月
8	世繼曾我	天和三年九月
9	*以呂波物語	貞享元年三月？
10	百夜小町（本狂言）	同　元年
11	夕霧七年忌（本狂言）	同　元年
12	大名なぐさみ曾我（本狂言）	同年七月？
13	*津戸三郎　門出八島と大同小異	同　初年？
14	凱陣八島	同　初年？
15	千載集　後年修訂して薩摩守忠度と改題す	同　二年？
16	盛久　後年修訂して主馬判官盛久と改題す	貞享二年？
17	*出世景清	同　三年二月
18	*三世相　夕霧三世相ともいふ	同　三年五月
19	*佐佐木先陣　題簽云、佐佐木大鑑	同三年七月
20	今源氏六十帖（本狂言）	元祿元年一月
21	*本朝用文章	同　初年？
22	*天智天皇	同　二年三月
23	忠臣身替物語　題簽云、今樣かしは木	同二年八月
24	烏帽子折　元祿十二年一月修訂して*源氏烏帽子折と改題す	元祿三年一月
25	水木辰之助餞振舞（本狂言）	同三年春
26	*十二段　元祿十四年九月源氏十二段長生島臺と改題す	同　三年秋
27	*大覺大僧正御傳記　女人即身成佛記を修訂せるもの	同　四年十一月？

巣林子作中に見える病名

胝。あくち。生靈の祟。疱。陰虛火動。瘧病(わらはやみ)。咳氣。影の病。風引(風邪、感冒)。纏腹。眼病。氣癪。狐附。疵。狂氣。驚風。氣病。虛勞。霍亂。外癰。外損。血塊。痃癖。戀病。瘤。濕瘡。痿痺。凍瘡。癪。腫物。死靈の祟。水腫。寸白。石淋。疝氣。癋膚。卒中風。痰火。血の道。疔。脹滿。中風。痞。頭痛。惡阻。爪孚。內損。熱病。血瘍。疱瘡。痲疹。流行病。腫(腫物)。火の病。皸。白虎歷節風。白癩。腹痛。心鬱病。骨疼。菊石。水腫。水膨。齲(むしくば)。胸痛。目病(めくら、めしひ、まうもく)。眩暈。疫病。癰。歷節風。黃疸。

その他に兎唇、聾、啞、跛、德利子などの不具者もある。

巣林子作中に見える藥名・藥草

胝膏藥。茜。あかりも(燈心草)。透頂香。追出藥。墮胎藥。香附子。膏藥。莪朮。甘草。漢藥。炙(やいと)。桑山。熊膽。牛膝(ゐのこづち)。粉藥。牛蒡。さんとらにいよう。楷。生薑。生薑酒。正氣散。末摘花(紅花)。西王母の桃。石藥。川芎。煎藥。橙實。當歸。定齋。地黃。陳皮。鴆毒。てれめんていな。屠蘇酒。人參(朝鮮人參、寵人參)。鼠尾花(溝萩)。練藥。敗毒散。麥門冬。ばじりこん。二十日草。鍼。三白草。反魂樹。白朮。茯苓。藤丸膏藥。萬病圓。木香。艾。藥王香。和中散。

114	*日本振袖始	同	三年二月
115	同（狂言本）	同	三年夏？
116	*曾我會稽山	同	三年七月
117	*博多小女郎波枕	同	三年十一月
118	*本朝三國志	同	四年二月
119	*平家女護島	同	四年八月
120	*傾城島原蛙合戰	同	四年十一月
121	*井筒業平河內通	同	五年三月
122	*雙生隅田川	同	五年八月
123	*日本武尊吾妻鑑	同	五年十一月
124	*心中天の網島	同	五年十二月
125	*津國女夫池	同	六年二月
	後年改題して室町千疊敷といふ		
126	津國女夫池（狂言本）	同	六年春
127	*女殺油地獄	同	六年七月
128	*信州川中島合戰	同	六年八月
129	*唐船噺今國性爺	同	七年一月
130	*心中宵庚申	同	七年四月
131	*關八州繫馬	同	九年一月

以上*を附したのは義太夫正本。其の他筑後掾追善の爲に、彼の略歴や語り物の外題を作り込んだ「音曲百枚笹」（正德四年十月上演）の短篇がある。

これ等の他に巣林子の作であらうと疑はれるものに、江州石山寺源氏供養、舍利、三社託宣、助六心中蟬のぬけがら、牛若千人斬、葵の上、薩染川、惟喬惟仁位諍、十六夜物語、平安城、龜谷物語、京わらんべ、（以上延寶、天和頃の作）、甲子祭、賢女手習井新曆、源三位頼政（扇の芝）、頼朝濱出、巴太鼓、大原御幸、信濃源氏木曾物語、辨慶京土產、花洛受法記、自然居士、柏崎、都の富士、ひら假名太平記、弱法師、多田院開帳、佐藤忠信二十日正月、當麻中將姫、義經東六法、傾城淺間嶽、文武五人男、信田小太郎、ゑがらの平太、甲賀三郎、（以上貞享頃より寶永初年までの作）などがあり、また門左衞門添削のものに、猫魔達（元祿頃）、善光寺御堂供養（享保二年）、右大將鎌倉實記（享保九年）などがある。他にまだ珍書愛藏者の篋底に祕めて、目新しい近松ものがあるであらうが、私が今までに知り得たものはこれだけである。

28 *日本西王母　同　五年秋
南大門秋彼岸と大同小異
29 佛母摩耶山開帳(本狂言)　同　六年三月?
30 *松風村雨束帯鑑　同　七年?
31 *融大臣　同　七年八月?
32 *釋迦如來誕生會　同　八年四月
33 *鎌田兵衞名所盃　同　八年十月
34 傾城阿波鳴門(本狂言)　同　八年?
35 曾我七以呂波　題簽云、義經追善女舞　同　九年九月?
36 *頼朝伊豆日記　同　十年七月
37 *百日曾我　同　十年十月
團扇曾我の修訂
38 *當流小栗判官　元祿十一年二月
39 傾城江戸櫻(本狂言)　同　十一年二月
40 一心二河白道(本狂言)　同　十一年三月
41 傾城佛が原(本狂言)　同　十二年一月
42 阿彌陀池新寺町(本狂言)　同十二年秋
43 根元曾我　不詳
44 *今川了俊　不詳
45 姫藏大黑柱(本狂言)　元祿十二年十一月
46 *浦島年代記　同　十三年一月?
47 *天鼓　元祿十四年春
48 傾城富士見る里(本狂言)　同十四年春
49 *蟬丸　同　十四年五月

50 *大掛物十幅一對　同　十四年九月
51 *曾我五人兄弟　同　十四年十一月
頭巾北國落の修訂
52 傾城壬生大念佛(本狂言)　同　十五年春
53 *大磯虎稚物語　同　十五年五月?
54 *賀古教信七墓廻　同　十五年七月
55 傾城若紫(本狂言)　同　十五年?
56 *最明寺殿百人上﨟　同　十六年春
57 傾城三つ車(本狂言)　同　十六年春
58 *曾根崎心中　同　十六年五月
59 辛崎八景屛風(本狂言)　同十六年秋?
60 *薩摩歌　寳永元年一月
61 吉祥天女安產玉(本狂言)　同　元年秋
62 *雪女五枚羽子板　同　二年春
63 *用明天皇職人鑑　同　二年十一月
64 *源義經將棊經　同　三年一月
65 *田村將軍初觀音　同　三年春
66 *本領曾我　同　三年三月
67 *心中二枚繪草紙　同　三年三月
68 *加增曾我　同　三年夏
69 *兼好法師物見車　同　三年五月
70 *碁盤太平記　同　三年六月
71 *卯月の紅葉　同　三年夏
72 *曾我扇八景　同　三年七月

73 *吉野忠信　同　四年一月
74 *堀川波鼓　同　四年二月
京都で上演の時「堀江川波鼓」と改題す
75 *卯月の潤色　同　四年夏
76 *酒呑童子枕言葉　同　四年九月
第三段以下を修訂し、*傾城酒呑童子と改題して享保三年上演す
77 *心中重井筒
お房德兵衞の情死は寳永四年十二月十六日未明なるにより、この初上演は寳永五年春なるべし。
78 *傾城反魂香　同　五年春
79 *心中萬年草　同　五年四月
80 *丹波與作待夜の小室節　同　五年六月
正德二年再演の時丹波與作と改題す
81 *淀鯉出世瀧德　同　五年末?
82 傾城金龍橋(本狂言)　同　五年十一月?
83 *五十年忌歌念佛　同　六年一月
84 御曹司初寅詣(本狂言)　同　六年一月
85 *心中刄は氷の朔日　同　六年六月
86 *栬狩劍本地　同　六年九月
87 *曾我虎が磨　同　七年一月
88 *今宮心中　同　七年春
89 *百合若大臣野守鏡　同　七年一月
90 *孕常盤　同　七年八月
91 *源氏冷泉節　同　七年秋

92 *冥途の飛脚　正德元年三月
93 *吉野都女楠　同　元年九月
94 *大職冠　同　元年冬?
95 *夕霧阿波鳴渡　同　二年春
96 *傾城懸物揃　同　二年三月
97 *弘徽殿鵜羽產家　同　二年五月
花山院后諍の改作。
98 *嫗山姥　同　二年七月
99 *長町女腹切　同　二年秋
100 *傾城吉岡染　同　二年十一月
101 *天神記　同　三年二月
102 *燦静胎内捃　同　三年五月
103 *相模入道千疋犬　同　四年四月
104 *娥歌かるた　同　四年八月
105 *嵯峨天皇甘露雨　同　四年十月
106 *大經師昔暦　同　五年一月
後年改題して戀八卦柱暦といふ
107 *持統天皇歌軍法　同　五年八月
108 *生玉心中　同　五年八月
109 *國性爺合戰　同　五年十一月
110 *國性爺後日合戰　享保二年二月
111 *鑓の權三重帷子　同　二年八月
112 *聖德太子繪傳記　同　二年十一月
113 *山崎與次兵衞壽の門松　同三年一月

「猿蓑集」成る

元祿六　「雨夜三盃機嫌」「野郎評判」出づ　巢林子（四十一歲）　井原西鶴歿す

元祿七　「炭俵」「風流源氏」出づ　巢林子（四十二歲）　松尾芭蕉歿す

元祿一一　巢林子（四十六歲）　木下順庵歿す

元祿一三　「水滸傳」成る　巢林子（四十八歲）　德川光圀薨ず

元祿一四　淺野長矩が吉良義央を殿中に傷く　竹本義太夫が筑後掾藤原博敎の官名を受領す　巢林子（四十九歲）　釋契沖寂す

元祿一六　江戸大地震大火　大石良雄等に死を賜ふ　「松の葉」出づ　巢林子（五十一歲）　釋淨嚴寂す

寶永元　錦文流この頃小說作者として其名高し　巢林子（五十二歲）　市川團十郎（初代）歿す

寶永二　竹本義太夫が竹本座主を竹田出雲に讓る　「風流文選」出づ　巢林子（五十三歲）　伊藤仁齋歿す　北村季吟歿す

寶永三　「若綠」出づ　巢林子（五十四歲）　荷田在滿生る　戸田茂睡歿す

寶永四　富士山噴火して寶永山を生ず　巢林子（五十五歲）　榎本其角歿す

正德元　中御門天皇御宇　將軍德川家宣　巢林子（五十九歲）　宇治加賀掾歿す

正德三　「河内國姥が火」「讀史餘論」成る　巢林子（六十一歲）

正德四　將軍德川家繼　巢林子（六十二歲）　竹本筑後掾歿す　貝原益軒歿す　菱川師宣歿す

正德五　「大日本史」成る　巢林子（六十三歲）

享保元　將軍德川吉宗　「折焚く柴の記」成る　巢林子（六十四歲）　尾形光琳歿す　坂田藤十郎歿す

享保九　大阪大火　巢林子歿す（七十二歲）　英一蝶歿す

附　記（概略表）

桃源集　明曆元年刊　二卷

まさり草　虛光菴眞月居士撰　明曆二年刊　二卷

催情記　明曆三年刊　一册

ねごと草　寬文二年刊　二卷二册

糸竹初心集　中村宗三編　京都　寬文四年刊　三卷

たきつけ草上卷　もえくゐ中卷　けしずみ下卷　泉州堺住人撰　延寶五年刊

色道諸分那爾葉鉦　西水菴無底居士撰　延寶八年刊　六卷

元祿七年に「好色堅氣鹿子」と改題し、後更に「諸分店顏」と改題す。

色道大鏡　畠山箕山撰　延寶年中成（寫本）

古今若女郎衆序　天和元年刊

好色一代男　井原西鶴撰　大坂　天和二年刊　八卷

貞享四年刊の江戸版もあり。

（やまと繪の根元　菱川師宣畫　江戸　二卷）

（日本ふうぞく繪　菱川師宣畫　江戸　二卷）

當世風流戀慕水鏡　山八撰　天和二年刊　五卷

新御伽婢子　天和二年刊　六卷

小夜衣　茅屋子撰　天和三年刊　五卷

風流嵯峨紅葉　山八撰　天和三年刊　四卷

吉原の草紙　道之撰　天和三年刊

下り竹齋　天和三年刊　三卷

花の名殘　江戸、京都　貞享元年刊　五卷

好色二代男諸艷大鑑　井原西鶴撰　江戸　貞享元年刊　八卷

宗祇諸國物語　貞享二年刊　五卷

好色增鏡　貞享二年刊　四卷

大幣　貞享二年刊

椀久一世物語　井原西鶴撰？　貞享二年刊　二卷

諸國はなし（一名、大下馬）　井原西鶴撰　貞享二年刊　四卷

近代艷隱者　井原西鶴撰　大坂　貞享三年刊　五卷

好色三代男　京都　貞享三年刊　五卷

（好色江戸紫　石川流宣撰　貞享三年刊）

本朝二十不孝（一名、新因果物語）　井原西鶴撰　大坂　貞享三年刊　五卷

貞享四年刊の江戸版もあり。

古今百物語評判　貞享三年刊　五卷

好色一代女　井原西鶴撰　大坂　貞享三年刊　六卷

好色五人女　井原西鶴撰　大坂　貞享三年刊　五卷

後摺に「（新板繪入）當世女容氣」と改題す。

好色訓蒙圖彙　吉田半兵衞撰　貞享三年刊　三卷

好色伊勢物語　京都　貞享三年刊

好色諸國心中女（後に貞女白無垢と云）　貞享三年刊　五卷

好色旅日記　京都　貞享四年刊　五卷

男色大鑑（一名、本朝若風俗）　井原西鶴撰　大坂　貞享四年刊　八卷

諸國敵討武道傳來記　井原西鶴撰　江戸　貞享四年刊　八卷

色の染衣　松月堂不角撰　貞享四年刊　四卷

好色破邪顯正　白眼居士撰　貞享四年刊　三卷

好色貝合（好色訓蒙圖彙後編）　吉田半兵衞撰　貞享四年刊　二卷

男色十寸鏡　好善居士序　貞享四年刊　二卷

懷硯　井原西鶴撰　貞享四年刊　五卷

（吉原五十四君　東國太郎（其角）撰　貞享四年刊）

新竹齋　京都　貞享四年刊　五卷

（梅のかほり　夢遊軒序、菱川師宣畫　江戸　貞享四年刊　五卷）

好色年八卦　貞享年中刊　四卷

元祿五年に「三島暦」と改題し、又後に「傾城文反古」と改題す。

好色四季ばなし　井原西鶴撰？　貞享年中刊？　四卷

元祿六年に「浮世榮花一代男」、元祿十一年に「好色堪忍記」、正德三年に「浮世花

巣林子時代略年表及附記

巣林子時代略年表

巣林子時代は清新の風に滿ちた諸道の名匠を驅使して、我が文壇を飾れる百花爛漫の世であつた。殊に京阪地方では軟文學書の刊行も多く、これ等は巣林子生存中に於ける世相文化を知る參考となれば、その概略表を附記して置いた。

承應二年
後光明天皇御宇
將軍德川家綱
「つるぎのまき」「愛宕地藏之物語」の丹緑本出づ

巣林子生る
俳人 嵐雪生る
畫師 英一蝶（二歳）
音曲師 竹本義太夫（三歳）
畫師 菱川師宣（九歳？）
俳人 松尾芭蕉（十歳）
儒者 林鳳岡（十歳）
小說作者 井原西鶴（十二歳）
國學者 釋契沖（十四歳）
釋滑巖（十五歳）
音曲師 宇治加賀掾（十九歳）
儒者 貝原益軒（二十四歳）
國學者 戸田茂睡（二十五歳）
德川光圀（二十六歳）
儒者 伊藤仁齋（二十七歳）
國學者 下河邊長流（三十歳）
儒者 木下順庵（三十三歳）
俳人 西山宗因（四十九歳）
國學者 北村季吟（五十三歳）
俳人 松永貞德歿す

明暦三
後西天皇御宇
江戸大火
「誰が身の上」出づ

巣林子（五歳）
新井白石生る
儒者 林信勝歿す

萬治元
江戸大火
「東海道名所記」出づ

巣林子（六歳）
儒者 室鳩巣生る
畫師 尾形光琳生る
小說家 青木鷺水生る

萬治三
「ゆきをんな物語」出づ

巣林子（八歳）
俳優 市川團十郎（初代）生る

寛文元
「をぐら物語」出づ

巣林子（九歳）
俳人 榎本其角生る
俳優 坂田藤十郎（二代）生る

寛文三
靈元天皇御宇
「楊貴妃物語」の丹緑本出づ

巣林子（十一歳）
小說家 北條團水生る
淨瑠璃作者 紀海音生る

寛文四
國史館を置き本朝通鑑を積修す
「二人比丘尼」「戒殺物語」「糸竹初心集」出づ

巣林子（十二歳）
小說家 八文字屋自笑生る？

寛文五

巣林子（十三歳）
小說家 西澤與志生る

寛文六
「伽婢子」出づ

巣林子（十四歳）
儒者 荻生徂徠生る

寛文七
「青葉の笛の物語」出づ

巣林子（十五歳）
小說家 江島屋其磧生る

寛文一〇
「本朝通鑑」成る。
「判官都はなし」出づ

巣林子（十八歳）
儒者 伊藤東涯生る
國學者 荷田春滿生る

寛文一二

巣林子（二十歳）
俳人 山岡元隣歿す
石川丈山歿す

延寶二
西鶴住吉社頭に俳句二萬吟を詠ず
「枕草紙春曙抄」出づ

巣林子（二十二歳）
畫師 狩野探幽歿す

延寶四
「萬葉集代匠記」成る

巣林子（二十四歳）

延寶五
山本角太夫土佐掾を受領し、宇治嘉太夫加賀掾を受領す。

巣林子（二十五歳）
儒者 祇園南海生る

延寶六
赤本「初春のいわひ」出づ、「色道大鏡」成る

巣林子（二十六歳）
畫師 西川祐信生る

延寶八
德川綱吉將軍となり內大臣に任す
「本朝書史成る」

巣林子（二十八歳）
儒者 太宰春臺生る

天和二
「ざんげ物語」出づ

巣林子（三十歳）
西山宗因歿す
儒者 山崎闇齋歿す
儒者 朱舜水歿す

天和三

巣林子（三十一歳）
儒者 服部南郭生る

貞享三
西鶴の好色本流行す
芭蕉正風體を創作す
巣林子が義太夫の爲に「出世景淸」を作る
「古今百物語評判」「薄雪物語」出づ

巣林子（三十四歳）
下河邊長流歿す

元祿元
東山天皇御宇
音曲江戸半太夫節の名この頃最も高し
「四書直解」新刻成る

巣林子（三十六歳）
俳優 市川團十郎（二代）生る

元祿四
將軍綱吉湯島聖堂に臨み釋奠を行ふ
林信篤大學頭となる。
俳優水木辰之助京より江戸の市村座に入る

巣林子（三十九歳）
熊澤蕃山歿す
淺井了意歿す

好色夕顔利生草　寶永元年刊　五卷
心中大鑑　書方軒撰　京都　寶永元年刊　五卷
筆の初染　今西鶴撰　寶永二年刊　五卷
傾城武道櫻　西澤與志撰　京都　寶永二年刊　五卷
棠大門屋鋪　錦文流撰　大坂　寶永二年刊　五卷
風流今爺好　錦文流撰　寶永二年刊　五卷
（御伽人形　苗村松軒撰　江戸　寶永二年刊・五卷）
寶永千歳記　田村榮秀撰　京都　寶永二年刊　五卷
御前獨狂言　西鶴撰　寶永二年刊　五卷
傾城太太神樂　大坂　寶永二年刊　六卷
　好色萬金丹（元祿七年刊）の燒直し。
長者機嫌袋　福富言粹撰　寶永二年刊　六卷
（風流武道色八景　桃の林紫石撰　江戸　寶永二年刊　五卷）
世の是沙汰　西樂撰　京都　寶永三年刊　五卷
當世乙女織　錦文流撰　大坂　寶永三年刊　七卷
新色三つ巴　西澤與志撰？　寶永三年刊　六卷
熊谷女編笠　錦文流撰　江戸等　寶永三年刊　五卷
（御伽百物語　白梅園青木鷺水撰　江戸　寶永三年刊　六卷）
京縫鎖帷子　森本東烏撰　京都　寶永三年刊　四卷
うちかぶと　舟月撰　寶永三年刊　五卷
新武道傳來記　北條團水撰　京都等　寶永三年刊　六卷
宇津山小蝶物語　森田吟夕撰　京都　寶永三年刊　八卷
若緑　繪雲閣主人編　京都　寶永三年刊　五卷
本朝濱千鳥　永井正流撰　京都　寶永四年刊　六卷
（男色比翼鳥　東の紙子撰、奥村政信畫　江戸　寶永四年刊　六卷）

晝夜用心記　北條團水撰　京都　寶永四年刊　六卷
伊達髪五人男　西澤與志撰　京都　寶永四年刊　五卷
千尋日本振　團粹撰　寶永四年刊　六卷
傾城播磨石　京都　寶永四年刊　六卷
（風流吳竹男　飯山錦窓撰　江戸　寶永五年刊　五卷）
野傾友三味線　西澤與志撰　寶永五年刊　五卷
茶傾腹立顔　西澤與志撰　大坂　寶永五年刊　三卷
好色手柄咄　錦文流撰　寶永五年刊　五卷
美景蒔繪松　市中軒撰　寶永五年刊　五卷
傾城伽羅三味線　西澤與志撰　寶永五年刊　五卷
鎌倉比事　月尋堂撰　京都　寶永五年刊　六卷
　享保三年に再摺
（本朝新堪忍記　青木鷺水撰　寶永五年刊　七卷）
（關東名殘の袂　忍岡やつかれ撰　江戸　寶永五年刊　五卷）
（風流遊貴の衣司香　江戸　寶永五年刊　五卷）
今様二十四孝　月尋堂撰　寶永六年刊　六卷
當世誰が身の上　斧丸撰　寶永六年刊　六卷
本朝諸士百家記　錦文流撰　大坂、江戸　寶永六年刊　一〇卷
風流御前二代曾我　西澤與志撰　寶永六年刊　六卷
子孫大黑柱　月尋堂撰　江戸等　寶永六年刊　六卷
本朝桃陰比事　寶永六年刊　七卷
傾城玉子酒　八文字屋自笑撰　寶永六年刊　八卷
西鶴筆の初染　寶永六年刊
兄弟善惡車　月尋堂撰　寶永六年刊　六卷

（風流鏡が池　江戸　寶永六年刊　六卷）
風流曲三味線　八文字屋自笑撰　京都　寶永七（一？）年刊　六卷
寛濶平家物語　八文字屋自笑撰　京都　寶永七年刊　六卷
野白內證鑑　八文字屋自笑撰　京都　寶永七年刊　五卷
傾城難波みやげ　寶永七年刊　五卷
男色今鑑（風流金魚袋）　寶永七年刊　五册
傾城傳授紙子　八文字屋自笑撰　京都　寶永七年刊　五卷
增補松の落葉　大木扇德編　京都　寶永七年刊　六卷
御入部伽羅女　嵐水序　寶永七年刊　六卷
忠義太平記　京都　寶永八年刊　六卷
新好色文枕　醉盲軒宸蛇堂撰　寶永八年刊　五卷
傾城禁短氣　八文字屋自笑撰　江戸　寶永八年、明和二年刊　初編六卷、次編五卷、三編五卷
魂膽色遊懷男　八文字屋自笑撰　刊年未詳　五卷
衆道戀慕櫻　西澤與志撰　刊年未詳　三卷
（高名太平記　青木鷺水撰　刊年未詳　九卷）
野傾百物語　西澤與志撰　刊年未詳　五卷
男傾城文枕　西澤與志撰　刊年未詳　五卷
好色入子枕　正德元年刊　五卷
御前義經記　西澤與志撰　大坂　正德二年刊　八卷
　元祿十三年刊の後摺。
一夜船　北條團水撰　大坂　正德二年刊　五卷
文武さざれ石　石別子撰　大坂　正德二年刊　五卷
當世智惠鏡　林義端撰　正德二年刊　五卷
傾城盃軍談　八文字屋自笑撰　正德三年刊　五卷

日本新永代藏（一名、近世長者鑑）　北條團水撰　大坂　正德三年刊　六卷
本朝智惠鑑　北條團水撰　京都　正德三年刊　六卷
百姓盛衰記　八文字屋自笑撰　正德三年刊　四卷
金銀座色町脊　松月堂桃雨撰　京都　正德三年刊　六卷
當世信玄記　落月堂撰　正德三年刊　五卷
今川一睡記前編　八文字屋自笑撰　京都　正德三年刊　五卷
本朝二十四貞（一名、本朝女二十四孝）　正德三年刊　四卷
商人職人懷日記　大坂　正德三年刊　五卷
手代神算鑑　正德三年刊　五卷
西海太平記　八文字屋自笑撰　京都　正德三年刊　五卷
近代長者鑑　落月堂操巵撰　京都　正德四年刊　五卷
都ひながた　江島屋其磧撰　京都　正德四年刊　三卷
四民乘合船　紀海音撰　大坂　正德四年刊　四卷
國家諸士鑑　雫齋散人撰　京都　正德四年刊　六卷
女男伊勢風流　八文字屋自笑撰　京都　正德四年刊　三卷
風枝の卷　正德四年刊　二卷
數疊百八十疊　江島屋其磧撰　正德四年刊　三卷
世間息子氣質　江島屋其磧撰　京都　正德五年刊　五卷
義經風流鑑　八文字屋自笑撰　京都　正德五年刊　五卷
風流誂平家　八文字屋自笑撰　京都　正德五年刊　五卷
新小夜嵐（舊名、院久二世物語）　正德五年刊　二卷
艶道通鑑　增穗殘口撰　正德五年刊
野傾旅葛籠　八文字屋自笑、江島屋其磧撰　京都　正德五年刊　五卷

鳥風月」と改題す。（また後年「好色四季咄」とて無名傳撰、京都出水通大宮西へ入ル町和泉屋三郎兵衛板行、四卷ある別種の好色本あり）。

好色しなの梅　貞享年中刊　四卷

諸國色里案內　空也軒一夢撰　貞享年中刊　三卷

武家義理物語　井原西鶴撰　元祿元年刊　五卷

貧人太平記　元祿元年刊　三卷

人倫正月揃　北條團水撰？　京都　元祿元年刊　六卷

色里三所世帶　元祿元年刊　三卷

日本永代藏　井原西鶴撰　大坂　元祿元年刊　六卷

新可笑記　井原西鶴撰　大坂　元祿元年刊　五卷

好色盛衰記　井原西鶴撰　元祿元年刊　五卷

元祿十四年に「西鶴榮花咄」と改題す。

好色注能毒　元祿元年刊　三卷

好色通變占　元祿元年刊　三卷

本朝櫻陰比事　井原西鶴撰　大坂　元祿二年刊　五卷

好色床講義　元祿二年刊　六卷

好色法のともづな　讀貝捨若撰　元祿二年刊　五卷

新吉原つねづね草　井原西鶴撰？　大坂　元祿二年刊　二卷

眞實伊勢物語　京都　元祿三年刊　三卷

好色染した地　松月堂序　元祿四年刊　五卷

日本好色名所鑑　（題簽、日本名所好色大鑑）藤木盛庸撰　京都　元祿五年刊　五卷

好色錦木　元祿五年刊　五卷

世間胸算用　井原西鶴撰　大坂　元祿五年刊　五卷

狗張子　淺井了意撰　元祿五年刊　七卷

諸國百物語　俳林子撰　元祿五年刊　五卷

當流風俗男色子鑑　九思軒鱗長撰　元祿六年刊　五卷

延享三年に「和國小性氣質」と改題す。

西鶴置土產　井原西鶴撰　京都　元祿六年刊　五卷

元祿七年江府書林志村孫七開板、「（西鶴）ひがんさく羅」五卷五册は西鶴の肖像など少し改めたる外同版なり。

好色萬金丹　大阪　元祿七年刊　五卷

西鶴織留　（本朝町人かがみ）井原西鶴撰　京都　元祿七年刊　六卷

好色慰草　（一名、好色手打笑、また好色名物揃と云）元祿七年刊　五册

（好色赤烏帽子　桃林堂蝶麿撰　江戶）元祿八年刊　五卷

香のかほり　九思軒鱗長撰　元祿八年刊　三卷

好色十二人男　舍衣軒撰　京都　元祿八年刊　六卷

俗徒然　井原西鶴撰　京都　元祿八年刊　五卷

忘花　如醉撰　京都　元祿九年刊　五卷

好色小柴垣　醉狂庵撰　元祿九年刊　五卷

好色ざんげ咄　元祿九年刊　五卷

（好色艶虚無僧　桃の林蝶麿撰　江戶）元祿九年刊　五卷

萬の文反古　井原西鶴撰　京都　元祿九年刊　五卷

（玉箒子　林義端撰　江戶　元祿九年刊　六卷）

林義端には「武家堪忍記」の作もあるといふ。

古今武士鑑　難波一雪撰　京都、大阪　元祿九年刊　五卷

好色酒呑童子　（後に好色榮花女と云）元祿十年刊　五卷

賢女明野の夢　沈水撰　元祿十年刊　二卷

西鶴冥途物語　泡影撰　元祿十年刊　五卷

（好色大福帳　桃の林紫石撰　江戶）元祿十年刊　五卷

好色飛鳥川　元祿十一年刊　五卷

（そくむらさき　石川流宣撰　江戶　元祿十一年刊　五卷）

新色五卷書　西澤與志撰　大坂　元祿十一年刊　五卷

小夜嵐物語　元祿十一年刊　十卷

籠耳　元祿十一年刊　五卷

好色井戶車　（後に新姬かがみと云）元祿十二年刊　五卷

好色文傳授　由之軒政房撰　京都　元祿十二年刊　五卷

西鶴名殘之友　北條團水序　元祿十二年刊　五卷

好色川念佛　如水軒撰　京都（書林木村氏）元祿十四年刊　五卷

好色百物語　櫻花軒撰　元祿十四年刊　五卷

傾城色三味線　八文字屋自笑撰　元祿十四年刊　五卷

寬濶曾我物語　大坂　元祿十四年刊　十二卷

御前伽婢子　都の錦撰　元祿十四年刊　六卷

女大名丹前能　西澤與志撰　元祿十五年刊　八卷

遊里櫓太鼓　西澤與志撰　元祿十五年刊　六卷

風流神代卷　都の錦撰　大坂　元祿十五年刊　六卷

五箇の津餘情男　都の花風撰　京都　元祿十五年刊　五卷

清少納言犬枕　元祿十五年刊　三卷

都女品定　如水軒撰　元祿十五年刊　三卷

好色智惠袋　元祿十五年刊　五卷

風流大和莊子　都の錦撰　元祿十五年刊　五卷

諸藝太平記　（卷頭、元祿太平記）都の錦撰　京都　元祿十五年刊　八卷

東海道敵討　都の錦撰　京都　元祿十五年刊　六卷

風流好色十二段　元祿十五年刊　六卷

沖津白波　都の錦撰　京都、大阪　元祿十五年刊　五卷

好色大振袖　好色軒園水撰　元祿十六年刊　五卷

遊興新平家物語　一聲子撰　元祿十六年刊　八卷

傾城仕送大臣　京都　元祿十六年刊　六卷

風流今平家　西澤與志撰　大坂　元祿十六年刊　十卷

風流夢浮橋　雨滴庵松林撰　大坂　元祿十六年刊　六卷

風流敗毒散　大坂　元祿十六年刊　五卷

風流源氏物語　都の錦撰　元祿十六年刊　六卷

男色木目漬　湊屋闇齋自然坊撰　元祿十六年刊　六卷

松の葉　秀松軒編　京都　元祿十六年刊　五卷

立身大福帳　唯樂軒撰　京都　元祿十六年刊　七卷

（好色江戶むらさき　江戶　元祿年中刊　五卷）

（好色若えびす　鳥居清信畫　江戶　元祿年中刊　三卷）

好色錦木　元祿年中刊

諸國此比好色覺帳　京都　元祿年中刊　四卷

（好色濡萬歲　桃の林紫石撰　江戶）元祿年中刊　五卷

好色產毛　雲風子林鴻撰　京都　元祿年中刊　五卷

島原吉原新町諸わけ姥ざくら　元祿年中刊？

拾遺御伽婢子　柳糸堂撰　寶永元年刊　七卷

忠孝永代記　森木東烏撰　寶永元年刊　八卷

風流連三味線　風吾堂撰　寶永元年刊　五卷

誰袖の海　由之軒政房撰　寶永元年刊　六卷

落葉集　（題簽、松の落葉）大木扇德編・京都　寶永元年刊　七卷

近松妙文集　小林豊次郎編　東京　明治三十六年刊　一冊
國姓爺合戰（袖珍名著文庫）　關根正直校　東京　明治三十七年刊　一冊
近松門左衛門（近代文學叢書）　藤井乙男撰　東京　明治三十七年刊　一冊
近松世話淨瑠璃詳解　重井筒・淀鯉・夕霧　高野辰之撰　東京　明治四十年刊　一冊
巢林子評釋　曾根崎心中・冥途の飛脚・つれづれ草　藤井乙男撰　東京　明治四十一年刊　一冊
新譯插圖近松傑作全集及索引　水谷弓彥校註　東京　明治四十三年刊　四巻五冊　改訂本もあり。
近松戲曲集　國民文庫刊行會編　東京　明治四十三年刊　三巻三冊
近松脚本集（演劇叢書）　高野辰之・南茂樹校　東京　明治四十四年刊　二巻二冊
瓦全遺稿　女殺油地獄註釋　明治四十五年刊　一冊
近松全集　三木竹二、水口微陽校　東京　明治三十九、大正元年刊　三巻三冊　改訂本もあり。
近松淨瑠璃集（有朋堂文庫）　忠見慶造校註　東京　明治四十五、大正二、三年刊　三巻三冊
世話淨瑠璃名作集（文藝叢書）　饗庭與三郎校　東京　大正三年刊　一冊
近松傑作集　近松研究會編　大正六年刊（五版）　一冊
近松世話淨瑠璃集成　小林榮子編　東京　大正八年刊　一冊
近松時代淨瑠璃集成　小林榮子編　東京　大正十年刊　一冊
近松戲曲新研究　加藤順三撰　東京・京都　大正十一年刊　一冊
近松淨瑠璃選　藤村作編　東京　大正十三年刊　一冊
近松門左衛門全集　高野辰之、黒木勘藏編　東京　大正十一至十三年刊　十巻十冊
國語と國文學　大正十三年十月特別號・同十四年八月號等　藤村作編　東京　刊本
大近松全集　木谷正之助校註　東京　大正十一至十四年刊　十六巻十六冊
近松研究の序篇　前島春三撰　東京　大正十四年刊　一冊
近松戲曲全集　森田秀雄編　東京　大正十四年刊　一冊
近松淨瑠璃讀本　尾崎久彌編　大正十四年刊　一冊
標註近松名作選　關根正直註　東京　大正十四年刊　一冊
早稻田文學　明治三十九年四月號、大正十五年十一月近松研究號等　早稻田文學社編　東京　刊本
國姓爺合戰、百合若大臣野守鏡（袖珍名著文庫）　關根正直校　大正十五年刊　一冊
詳註近松世物語十種選　吉澤義則、宮田和一郎校註　京都　大正十五年刊　一冊
近松名作集（日本名著全集江戸文藝之部）　日本名著全集刊行會編　東京　大正十五、昭和二年刊　二巻二冊
鑓の權三重帷子、曾我會稽山、心中天の網島、國性爺合戰（岩波文庫）　和田萬吉校　東京　昭和二年刊　二冊
近松歌舞伎狂言集　高野辰之校　東京　昭和二年刊　二巻二冊
近松傑作選集　蘇武利三郎編　東京　昭和二年刊　一冊
近松門左衛門集（近代日本文學大系）　通口慶千代校註、笹川種郎編　東京　昭和二・三年刊　二巻二冊
近松全集　藤井乙男校註、大阪朝日新聞社編　大阪　大正十四至昭和三年刊　十二巻十二冊
近松名作集　近松秋江校註　刊本　一冊
元祿文學辭典　佐藤鶴吉撰　東京　昭和三年刊　一冊　改訂本もあり。
近松世話淨瑠璃集（帝國文庫）　守隨憲治校　東京　昭和三年刊　一冊
近松世話物全集（國文學名著集）　藤井乙男編　京都　昭和三年刊　一冊
近松門左衛門集（新譯日本文學叢書）　内海弘藏、物集高量編　東京　昭和三年刊　一冊
詳註全譯近松傑作集第一・二巻　若月保治撰　東京　昭和三・四年刊　二冊
近松世話淨瑠璃選　野村宗朔編　昭和四年刊　一冊
The battles of Kokusenya. (Tales from old Japanese dramas, by Asataro Miyamori. N. Y. and Lond. 1915. p. 359-403.)
Masterpieces of Chikamatsu the Japanese Shakespear. Tr. by Asataro Miyamori. N. Y. and Lond. 1926.
Sonezaki shinju, Der Liebestod. Chikamatsu Monzaemon. (Japanische Dramen, von Wolfgang von Gersdorff. Jena. 1926. s. 37-59)

（右昭和四年まで）

以上の外に部分的のものは、演劇書類、或は雜誌に論ぜられ、或は中等高等諸學校の教科書中にも採られ、かくて近松文學は益々學者に研究され國民一般の誦讀に上ることになつた。

（終）

愛樂毬八代物語　森田吟夕撰　京都　正德五年刊　四卷

世上智恵袋　正德頃刊？　三卷

今源氏空船　西澤與志撰　享保元年刊　五册

西鶴傳授車　天狗堂轉蓬撰　京都　享保元年刊　五卷

續小夜嵐　刊年未詳　六卷

（武道繼穗の梅　石川流宣撰　江戸　刊年未詳　五卷）

契情あやめ草　享保元年刊　五卷

分里艶行脚　八文字屋自笑撰　京都　享保元年刊　五卷

當世名代男　江島屋其磧撰　京都　享保元年刊　五卷

浮世親仁形氣　江島屋其磧、八文字屋自笑共撰　京都　享保元年刊　五卷

世間娘氣質　江島屋其磧撰　京都　享保元年刊　六卷

風俗傾性野群談　八文字屋自笑撰　京都　享保二年刊　五卷

忠義太平記大全　吉川盛信撰　京都　享保二年刊　十二卷

和漢遊女容氣　江島屋其磧撰　京都　享保二年刊　五卷

國性爺明朝太平記　江島屋其磧撰　享保二年刊　六卷

野傾咲分色孖　八文字屋自笑撰　享保二年刊　五卷

野傾髪透油　八文字屋自笑撰　京都　享保二年刊　五卷

諸國武道容氣　享保二年刊

女敵討高麗茶碗　享保二年刊　三卷

雲州松江の鱸　享保二年刊？　三卷

猿源氏色芝居　九思軒鱗長撰　享保三年刊　六卷

寛濶大臣氣質　一洞撰　京都　享保三年刊　五卷

諸士興廢記　九思軒鱗長撰　享保三年刊　八卷

けいせい新色三味線　其跡撰　享保三年刊　六卷

亂脛三本鑓　西澤與志撰　享保三年刊　六卷

後室色縮緬（一名、色縮緬百人後家）　西澤與志撰　京都　享保三年刊　五卷

（序云、後家とは寡婦の稱なるが、後には寡婦姿の私娼をいひ、これに狂ふを後家狂ひといふ）。

傾城竈昭君　八文字屋自笑撰　京都　享保三年刊　五卷

町人袋　西川忠英撰　享保四年刊　七卷

役者色仕組　八文字屋自笑、江島屋其磧撰　京都　享保五年刊　五卷

徒然時勢粧　錦文流撰　大坂　享保六年刊　七卷

薄紅葉　享保七年刊　五卷

手代袖算盤　八文字屋自笑撰　享保七年刊　五卷

商人家職訓　江島屋其磧撰　京都　享保七年刊　五卷

櫻曾我女時宗　江島屋其磧、八文字屋自笑撰　京都　享保八年刊　五卷

風流七小町　八文字屋自笑撰　京都　享保八年刊　五卷

以上は巣林子在世中のものである。近松研究に緣の薄き江戸物には（・）を附した。

近松研究資料

近松を徹底的に研究するには古正本に據らねばならぬことは申すまでもないが、その中には稀覯書も尠くなく、且古風の平假名で書き續けてあつて、通讀しにくい上に難語難句の多い爲、讀者の便を計つて假名遣を正し漢字を宛てはめて讀本とし、又は註釋を施した先人の努力になれる研究資料刊行書目を次に列記する。

（淨瑠璃文句評註）難波土産　穗積以貫撰　元文三年刊　大阪　五卷五册

上田萬年校定本、水谷弓彦校定本等あり。

近松物ではお初天神記・國性爺合戰の評註がしてある。

瑠璃天狗　賽笠翁撰　文化三年序　五卷五册

近松物では壽門松（新町の段）・嫗山姥（二段目切）・信州川中島合戰（配膳の段）・松風村雨束帶鑑（教猿の段）の註解がしてある。

近松著作全書　七種　早矢仕有的（丸屋善七）編　東京　明治十五年刊　二册

第一册――近松門左衞門傳　百日曾我　戀八卦柱曆　けいせい反魂香　第二册――本朝三國志　重井筒　嫗山姥

兼好法師物見車　碁盤太平記

鑓の權三重帷子（我自刊我書）　甫喜山景雄編　東京　明治十六年刊　一册（和裝）

明治二十二年には（洋裝）一册出版さる

近松世話淨瑠璃　二十四種（武藏屋本）　早矢仕民治編　東京　明治二十二至二十五年刊

近松時代淨瑠璃　二十四種（武藏屋本）　早矢仕民治編　東京　明治二十二至二十五年刊

早矢仕民治は丸善書肆創業者早矢仕有的の店員より身を起し、東京神田區宮本町五番地に武藏屋叢書閣と號して出版書肆を創めた人で、近松物では明治二十二年天智天皇などの刊行を始めとして、一種又は二　三種を假綴洋綴本一册づつにして出した。

當時近松を研究した寫本に「延葛集」（自明治二十三年五月至二十六年頃）十一册がある。これは坪内逍遙・水谷不倒・金子筑水・紀淑雄・前田林外・奧泰輔の六氏の研究に成り、世話物に限られ、殊に人物の評論をしたもので、「延葛集」は雜誌「早稻田文學」の前身をなし、ついで「早稻田文學」に近松の研究論文が掲載されるやうになつた。明治三十三年刊の「近松之研究」はこの「早稻田文學」から轉載されたものが多い。都の西北早稻田の森にこれ等の諸先輩が、近松研究に盡力されたその昔を想見して感慨深きを覺える。

天鼓　平家女護島　艶狩劔本地（文學資料）　吉田靄作編　東京　明治二十四年刊　三册

（校訂）近松時代淨瑠璃（帝國文庫）　饗庭與三郎校　東京　明治二十五年刊　一册

丹波與作評釋（早稻田文集第二卷）　饗庭與三郎撰　東京　明治二十六年刊　一册

近松門左衞門（拾貳文豪）　塚越芳太郎撰　明治二十八年刊　一册

評註近松著作集（日本淨瑠璃叢書）　山田武太郎校註　東京　明治三十年刊　三卷三册

（校訂）近松世話淨瑠璃（帝國文庫）　饗庭與三郎校　東京　明治三十年刊　一册

（校訂）續近松淨瑠璃集（續帝國文庫）　水谷弓彦校　東京　明治三十二年刊　一册

近松之研究　坪内雄藏、綱島榮一郎編　東京　明治三十三年刊　一册

（近松評釋）天の網島（近代文學評釋）　佐佐政一撰　東京　明治三十四年刊　一册

評釋博多小女郎波枕　山田武太郎撰　東京　明治三十五年刊　一册

巣林子撰註（文學叢書）　饗庭與三郎註　東京　明治三十五年刊　一册

鑓の權三重帷子　心中天の網島　夕霧阿波の鳴渡（袖珍名著文庫）　饗庭與三郎校　東京　明治三十六年刊　一册

檢出し難いものの索引

あ

う

い

え

お

け

こ

古今集十戒の和歌　四五三
國城妻子　五六九
ごくに立たぬ　四八九
五月五日の一夜さた　四五〇 四八九
ごけ　七三四
虎溪を出でし賢人　四二二
苔衣着たる巖はさもなくて　四一四
轉けても土を攫んで起きろ　四八九
五穀を棄てたる罪業は五逆に
　まさる　五七七
ここな子は幾つ、十三七つ　五一〇
爰な塚はと引留め問へば　五三九
ここの木の下　四五〇
ここは竹田か夜は何時ぞ　五一〇
心あてに折らばや折らん　四三九
心ある人に見せばや　四四六
心づくしの秋風　四二〇
心は鬼神と出たれども　四一一
心は闇にあられども　四四七
心のゆくところ志　五四七
心を種として和歌に和らぐ日
　の本　四三九
呉山にあらねども笠の雪の重
　さよ　四一〇
こしかた　四一五
こしきげんらいけうわうきやう　五七七
伍子胥が餘風　五三〇
五十歩を以て百歩を笑ふ　五四二
腰なは何ぞ　四七六
こしふをん　五六二
ごしやう　四〇七
五尺いよこの手拭　五一〇
こじりがつまる　四八九
こしをよぢらすとも　四八九
こしんのみだ　四〇一
五星の天度十二周天二十八宿　五五一
悲勢弓力は格別　四八九
呉道子が繪主の僧を惱ませし　五五四
ごちのほうくわん　三九五
こちふかばにほひおこせよ　四三三
東風吹く風に飛梅の　四三三
五重唯識の紅葉葉は　四一三
ごぢんろくよく　三九九
五條あたりの軒の端　四三四
胡敵の一ぞく　四三六
胡蝶となつて牡丹花に戯る　五二六
五天到る日頭白かるべし　五二七
五人組　七一三
來ぬ人をまつほ　四六六
この三界の衆生は皆是吾子と　五六九
木の下陰の落葉かくなるまで　四〇九
この婆娑はじまりて　五六二
このたびはぬさ　四六六
木花開耶姫の御神木　四〇五
この日いつか喪びん予汝と　五三五
此世の名殘夜も名殘　四五一 五一〇
牛蒡も身祝ひ　四八九
小萩がもとを思ふにも　四三四
子は子なりけり鶯の　四七六
子は三界の首枷　四一八
木幡の里か馬はあれど　四五〇
木幡山　四七六
胡馬北風に嘶ふ　五四四
乞ひ得ぬ時は惡心また狂亂の　四〇八
こひぐさ　四四八
戀草の力くらべ　四七二
御祕藏の常世の松は　四五三
戀しき時は烏羽玉の　四三九
戀しくは尋ね來て見よ　四七六
戀せずば人は心のなかるべし　四七六
戀ぞつもりて　四四七
戀路の闇の暗り　五一〇
戀に朽ち果てん　四四六
戀の櫛田の眞中中で　五一〇
戀は曲者　五一一
子程の寶　四七二
氷玉盤に落ちて　四五九
氷に臥して魚を得　五五四
氷は水より出でて水よりも寒く　五三四
氷を歩む御差足虎の尾を踏む
　心地にて　五三五
駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし　四一五
獨樂廻し歌　五〇五
小萬泣く泣く申すやう　四五一
小湊口の梅林に舟を乗り捨て　五五四
こむ長刀　四〇四
子守歌　五〇五
ごや　五七七
こゆな　三六二
越ゆる小夜の中山　四五四
暦なき山住　五五四
こらいまれ　五三九
こらんにふ　四〇四
これなる山水の落ちて　三九五
これに懲りよどうさいばう　四八九
これにつけても後の世を願ふぞ　四〇八
これはこの國の傍に下種奉公　四〇九
是は東國方より出でたる僧に
　て候　四一三
是は院の御所に仕へ申す命婦　四一一

し

せ

す

そ

た

て

と

に

な

み

や

ゆ

り

る

れ

ろ

わ

假名遣の不明な時は、この表によつて類似音のいづれにも當つて檢索すること。

						長音ウ					長音フ		
ア		イ	ヰ(ヒ)	ウ	(フ)		エ	ヱ(ヘ)	オ	ヲ(ホ)(フ)	アウ アフ	オフ ワウ	ヲウ
カ	クワ								コ		カウ カフ	クワウ コフ	
ガ	グワ								ゴ		ガウ ガフ	グワウ ゴフ	
キャ				キュ		キウ キフ			キョ		キャウ ケウ	ケフ	
ギャ				ギュ		ギウ ギフ			ギョ		ギャウ ゲウ	ゲフ	
サ									ソ		サウ サフ	ソフ	
ザ		ジ	ヂ	ズ	ヅ				ゾ		ザウ ザフ	ゾフ	
シャ				シュ		シウ シフ			ショ		シャウ セウ	セフ	
ジャ	ヂャ			ジュ	ヂュ	ジウ ジフ ヂウ			ジョ	ヂョ	ジャウ ゼウ	ゼフ ヂャウ	デウ デフ
タ									ト		タウ タフ		
ダ									ド		ダウ ダフ		
チャ				チュ		チウ チフ			チョ		チャウ テウ	テフ	
ナ									ノ		ナウ ナフ		
ニャ				ニュ		ニウ ニフ			ニョ		ニャウ ネウ	ネフ	
ハ									ホ		ハウ ハフ	ホフ	
バ									ボ		バウ バフ	ボフ	
パ									ポ		パウ パフ	ポフ	
ヒャ									ヒョ		ヒャウ ヘウ	ヘフ	
ビャ									ビョ		ビャウ ベウ	ベフ	
マ									モ		マウ マヲ		
ミャ									ミョ		ミャウ メウ		
ヤ				ユ		イウ イフ ユフ			ヨ		エウ エフ	ヤウ ヱウ	
ラ									ロ		ラウ ラフ		
リャ				リュ		リウ リフ			リョ		リャウ レウ	レフ	
ワ	(ハ)												

わがころもでと諸共に 四六七
わが衣手の御製 四四七
わがせこが來べき宵なり 四一一 四一二
わが立つ杣の比叡山 四〇二
我か夫の雲井を出てしは卯月の空 四一八
我が手の内に雀あり生きたるか 五八一
わかの浦にしほ滿ちくれば 四七三
和歌は天地を動かし 四四四
我が身はもとの身なれども 四三三
若紫の武藏野や 四四四
別れを天外に求むれば 四八二 五五九
別れを歎き悲みて 四八二
わぎもこ 四七三
わくや 四〇八
わくわうどうぢん 四六〇
和國の天子の勅の使 四二四
轍の鮒の水をこふ憂きめ 五〇三
渡つた渡つた光る君の渡つた 五一九
和田のそこづつを 四四五
渡らば中や絶えなん 四四四
わびぬれば身をうき草の 四四四
わらをたく 五〇三
われおちにきと 四四一 四四四
我が戀路は絲なき三味よ 五一九
我遁世の昔より衰老の今に至つて 五六〇
我ならなくに 四二三
我には辛き葛城の 四〇一
われはまた賤の男が 三九五
我も木蔭にいざ立寄りて 四二一
われ世の中にあらん限はただ賴め 四一六

ゐ

遺愛寺の鐘は枕をそばだてて 五四一
井の中の蛙 五〇三
渭濱に釣せし太公望 五三二
遺龍 四七六

ゑ

ゑいゑい鴉がな 五一九
ゑいゑい山崎山崎 五一九
ゑいゑいゑいゑい、紺屋の 五一九
ゑいゑい〳〵〳〵、紙屋の 五二〇
醉うたとさ醉うたとさ 五二〇
衞士の焚く火は 四六七
ゑしやぢやうり 五六六 五八一
越鳥南枝に巣をかけ 五四四
繪の事は素きを後 五四八
烏帽子の懸緒を切る 五三六
ゑんいつこんて 五七二
圓々極々 五六〇

を

をかざきぢよろしゆ 五二〇
小笹に露のたまられぬ 四五七 五二〇
をじかのその 四五二
牡鹿の鳴く音は 四一七
教へずして殺すを虐といひ 五四八
伯父が甥の草を刈る 五〇三
をちこちのたづきも知らぬ 四四四
夫を慕ひ石になつたる女もある 五五九
男でもくひでもない 五〇三
男と女郎花 四四四
男は當つて碎けいぢや 五〇四
男は裸百貫 五〇四
男山からこいこいと 四四一
男山さかゆく 四四四
男山をみなめし 四四四
男女の中を和らぐる和歌 四四四
一昨日來い 五〇四
小野とはいひて薄生ふ市原野 四〇三 四八二
斧の柯も自らとや朽ちぬべし 五五九
をばうちからす 五〇四
をばをからす 五〇四
をひれ 五〇四
折らば落ちなん萩の上の露 四三五
をりみぐさ 四四九
尾を見せる 五〇四
をんざ 五〇四
をんぞうふく 五六六
女嫌やる高野の山になぜに 五二〇
女さかしうして牛賣らぬ 五〇四
女婆と三輪の神 四二三
女とも見えず男なりけり 四二八
女に餘んの布あり男に餘んの粟あり 五四三
女に家なし 五〇四
女の猿智惠 五〇四
女の履ける足駄にて 四六四
女は相見互ひ 五〇四
女は氏なうて玉の輿 五〇四
女を娶る時必ず父母に申すと 五一三

（終）

昭和五年五月十日印刷
昭和五年五月二十日發行

「近松語彙」奥書

特價金七圓五拾錢

著者　東京市小石川區駕籠町百六拾壹番地　上田萬年

著者　東京府北豐島郡巣鴨町上駒込九百七拾五番地　樋口慶千代

發行者　東京市神田區通神保町九番地（假營業所麹町九段坂下）　合資會社冨山房
右代表者　合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　大橋光吉

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　共同印刷株式會社

發行所　東京市神田區通神保町　明治二十九年六月創立　合資會社冨山房

電話九段（一九二一・一九二二）（一九二三・一九二四）番　電信略號（ヤマフ）　振替貯金東京五〇一番



